
**【WEB版】氷剣の魔術師が世界を統べる～世界最強の
魔術師である少年は、魔術学院に入学する～**

御子柴奈々

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

【WEB版】氷剣の魔術師が世界を統べる〜世界最強の魔術師である少年は、魔術学院に入学する〜

【Nコード】

N2501FV

【作者名】

御子柴奈々

【あらすじ】

【原作小説1〜7（講談社ラノベ文庫）】【コミックス1〜11（講談社コミックス）】発売中。

マガポケにてコミカライズ連載中。毎週水曜日更新です。

アニメ放送中です！（2023・1〜3）

・あらすじ

アーノルド魔術学院。そこは、世界中からあらゆる魔術師が集う世

界最高峰の魔術学院。魔術の真髄を極めようと、数多くの魔術師がその世界に足を踏み入れる。

そして、その学院にレイ＝ホワイトもまた入学しようとしていた。しかし彼は、学院始まって以来の一般家庭出身の魔術師。魔術師の家系でもなければ、もちろん貴族でもない。そんな彼を周りの者は侮蔑し、見下した。だが皆は知らなかった。彼こそが、世界七大魔術師の中でも最強と謳われている【氷剣の魔術師】であることを。

規格外の天才による王道学園ファンタジー、開幕。

・ランキング最高順位【総合：日間1位、週間1位、月間4位、四半期9位、年間56位、累計281位】

6章からはWeb版と書籍版で内容が異なりますので、ご了承ください。

コミカライズとアニメはこのWeb版ではなく、書籍版が準拠となっております。

第1話 ようこそ、アーノルド魔術学院へ

「おお……ここがそうか……やはり、でかいな」

門の前に立つ。

俺はやつと辿り着いたのだ。あの、アーノルド魔術学院に。

世界で魔術を学んでいる者ならば、この学院に入学することは夢であり、通過点でもある。世界で活躍している魔術師は、そのほとんどがこのアーノルド魔術学院出身である。そのため、偉大な魔術師になろうとする者はここへの入学を望む。

そうして俺、レイ・ホワイトもまたこの学院に入学することが可能となった。

試験はまあ……俺は実は免除されての入学だ。決して裏口入学ではないが。

実際の試験は筆記と実技の両方らしいが、この学院の基準はかなり高い。それこそ貴族も多く、それ以外にも魔術師としては名家の子どもが数多く入学するからだ。

その中でも俺は、唯一の一般家庭出身の魔術師らしい。

母も父も、それに祖父も祖母もまた魔術師ではない。家系に誰一人として魔術師はいないのだ。

稀に起こるらしいのだが、突然変異というやつだ。俺はこの家系始まって以来の魔術を行使できる人間だった。そうして俺は紆余曲折あつて魔術師を目指すようになり、今に至る。

「いいことレイ。つらい時は、帰ってきてもいいのよ」

「母さん。大丈夫だよ。俺だつて、もう魔術師の端くれだ。覚悟ぐらいは出来ている」

「そうなのね……立派になったわね」

「そうだな。父さんも嬉しいぞ」

「お兄ちゃん！ 来年は私が行くから！ 待つててね！」

「ああ。もちろんだ」

今の家族の後押しもあつて、俺はたった一人でやってきた。田舎の家からたった一人で俺は……この学院に……！

実は途中で何度も道に迷つたのは秘密だ……。

そうして俺はこの門をくぐる。周りからはチラチラと見られているが、そんなことは気にしていない。うん……おそらく自意識過剰だろう。それは間違いない。

グレーを基調とした真新しい制服に身を包み、長めだったこの青みかった黒い髪も、入学に際して少しだけ整えた。容姿も特に変な所は無いはずだ。

「ねえ……あれって……」

「うん……噂のアレじゃない？」

「ああ。アレね」

「アレよ……間違いないわ……」

ヒソヒソと話し声が聞こえるが、そのまま歩みを進める。

「えーっと……道はこっちであっているのか？」

生徒手帳に付随している地図を見る。この学院は本当に広い。普通に歩いていれば迷ってしまういそうなほどに。もちろん人の波に沿って進めば目的地には辿りつけるのだろうが、一応自分の頭でも把握しておきたい。

そうして立ち止まってじっとそれを見つめっていると、後ろからドンッ！ と衝撃がやってくる。

「チッ……気をつけろよ」

「すまない。少し地図を見ていてな」

もちろんすぐに謝罪する。今回は人が歩いている中で急に立ち止まった俺が悪いだろう。素直に頭を下げる。

「ん？ お前……まさか、レイ^{II}ホワイトか？」
「おお！ 俺のことを知っているのか？ それは心強い。田舎から出てきて知り合いもないんだ。これから仲良くやってほしい」

と、俺はその男に右手を差し出すも……。

バンッ！ とそれは払い除けられてしまう。

「は……テメエ、この学院始まって以来の一般^{オーディナリ}人出身だろう？」
「そうだが……何か問題でもあるのか？」

その男、加えて他の取り巻きもまたニヤニヤと俺を見つめる。

「分かっていないのか？ ここでまともに生活したいなら、最低でも魔術師の家系が条件だ。それこそ、貴族であることが望ましい」
「むむむ……？ どういうことだ？ すまない。魔術師の世界にはまだ疎くてな。詳しく教えてもらえると助かる」
「はっ……そんな面倒なことするわけねえだろ。ま、せいぜい頑張れや。期待してるぜ、一般^{オーディナリ}人よ」

そうして彼らはスタスタと歩みを進めてしまう。

俺としては早く友人をゲットしたかったのだが、こればかりは仕方がない。相手にその気がないのならば、無理強いするのも悪いというものだろう。

「ね、君さ……」

「ん？ 何か用か？」

「その、話し声が聞こえてきてさ……あ！ その前に自己紹介ね。

私はアメリカンローズよ」

「ミス・ローズ。これはどうも。俺はレインホワイト。気安くレイで構わない」

「私もアメリカでいいわ。同じ新入生だしね」

「そうか。ならよろしく頼む、アメリカ」

「さて、と。ここで立ち止まっているのも、よくないし。話しながら行きましょう」

「ああ助かる」

俺はアメリカと共に歩みを進める。

アメリカンローズ。

長い紅蓮の髪が特徴的で、さらに灼眼しゃくがんのその双眸はどこまでも透き通っており、純粹に美しいと形容すべき容姿をしていた。

また、女子生徒の制服は赤を基調としており彼女のその容姿には良く似合っている。

それに見るからに活発そうなのはすぐに理解できた。プロポーションもよく、女性にしては背が高い。俺が180センチ弱だから……170センチはあるのか。

魔術の発達により、人はその体にも影響を受けるのか、昔より

も平均身長は高くなっている傾向にある。それを踏まえても、彼女は高い方だろう。

スラッとした身長もそうだが、何よりもその立ち振る舞いに気品というものを感じる。

そういえば、ローズという名前には聞き覚えがあるが……。

「あなたこの学院始まって以来の一般人らしいわね」
オーディナリー

「そうだ。突然変異の一種らしくてな」

「へえ……そうなんだ。これから困ったことがあったら、何でも相談してね」

「それは助かるが、アメリカは親切だな」

「ちなみに私のこと、知らない？ 実是有名人なんだけど……？」

「いや申し訳ない。君のことは先ほど初めて知った。浅学で申し訳ないが、教えてもらえると助かる」

「そうなんだ。でも、一般人に浸透していないのは当然かもね。えつと……で、魔術師の中に貴族がいるのは知っているよね？」

「ああ」

「その中でも三大貴族って聞いたことない？」

「！ピンときた。まさか、君の家がそうなのか？」

「そう。ローズ家は三大貴族筆頭。ちなみに私はこの学年の首席よ」

「おお！ そんな英傑とこうして相見えることができるとは……サインをお願いしても？」

「いいけど……レイって変わってるよね……」

「そうか？ まあ、とりあえずこの色紙に頼む。あと妹の分も……」
「意外と主張激しいわね。ま、いいけどね。悪い気はしないし」

そうして俺は持参していた色紙にサインを書いてもらう。こんな
時のためにサイン色紙とカラーペンを忍ばせていてよかった。

「はい。どうぞ」

「おお！　すごい！　達筆だ！」

「まあ一応有名人だからね」

アメリカも満更でもないようで、少しだけ鼻が高い様子だった。

「それにしても、あなた……大丈夫なの？」

「ん？　何がだ？」

「さつき、嫌がらせされてなかった？」

「？　いや別に。ただ挨拶は拒まれたがな。いや、都会の挨拶はな
かなかに難しいな。やはり俺の作法が間違っているようだな……う
ん、勉強になる」

「レイが気にしていないならいいけど……くれぐれも気をつけてね」
「何がだ？」

「この学院は派閥争いが激しいの。それこそ、どの派閥に所属する
かで卒業できるかどうかが決まるように。だから三大貴族は特に優
遇されるの。自分で言うのもなんだけどさ。そんな事情だから、一
般人ディナリのあなたはきつと……大変だと思う」

「ま、そんなことはいいさ。派閥だろうが、なんだろうが、俺はこ
の学院生活を謳歌したいと思う」

「前向きね。それとも能天気なだけかしら？」

「ふ……後者に一票だな」

「ふふ、何それ！　あはは、ちょっとあなたのこと気に入ったかも」
「そうか？　田舎から出てきて友人はまだいない。アメリカが学院

での初の友人になってくれると助かる」

「そう言われると、ちょっと照れるけど……そうね。これから友人としてよろしく」

「ああ」

今度はがっしりと握手を交わす。

「そういえばレイは知ってる？」

「ん？ 何をだ？」

「氷剣^{ひょうけん}の魔術師の噂」

「……いや存じないな。詳しく聞いても？」

「数年前に現れた、天才魔術師。特に氷魔法に長けていてついた二つ名が、氷剣^{ひょうけん}の魔術師。既に、世界七大魔術師の一人とも言われているわね。曰く、氷魔術の真髄を極めているとか……」

「……そいつがどうかしたのか？」

「実は今年の新入生の中にもっていう噂なの。でもありえないよね。そんな人がわざわざ学院に来るとは思えないし」

「……そうだな」

そうして俺たちはその後も適当に雑談を繰り広げながら、入学式が行われる講堂に向かうのだった。

第2話 入学式

「ようこそ、アーノルド魔術学院へ」

講堂に入り、空いている席に適当に座ってしばらく時間が経過して……とうとう入学式が開始となった。アメリアとは別れている。彼女は主席として学年代表挨拶があるらしく、前の方の席にいる。

ちなみに俺は真ん中付近の席についている。

「さてこの魔術学院へ入学した諸君に残念なお知らせだ。君たちの約8割はおそらく大した魔術師にはなれないだろう」

そう語るのはこの学院の長である、アビー・ガーネットである。オレンジがかった髪の色が特徴である。

あまり魔術師の世界を知らない俺でも、その名前は知っている。というのも彼女はこの世界の魔術師の頂点である、世界七大魔術師の一人だからだ。

世界七大魔術師。

魔術協会が定めた、世界の中でも七人しか存在しない魔術師の頂点。その名の通り、それは魔術の真髄を極めた者の総称である。

魔術師にはランクが存在し、ブロンズ銅級 シルバー銀級 ゴールド金級 プラチナ白金級 グランド聖級となっている。その聖級の頂点七人を、尊敬と畏怖を込めて世界七大魔術師と評する。

世界最高峰の魔術師。それは皆が憧れ、そしてその頂きを目指そうとする場所。魔術師になったからには、魔術の真髄を極めたいと思うのは至極当然。特に貴族はその傾向が強いらしい。

そして、アビー・ガーネットの二つ名は……灼熱の魔術師。

名前の通り、炎魔法を極めている彼女にぴったりの名前だ。

「これは統計として明らかになっている事実だ。学年の中でも上位2割、1割の年もあるな。君たちは確かにこの学院に入学を認められた才能ある魔術師だ。しかし、その中でもさらにふるい篩にかけられる君たちの8割は銀級の魔術師にもなれず、ブロンズ銅級で卒業を迎える。しかし、残りの2割は聖級グランドに至る者がいた年もある。魔術の真髄を極めようとする若者よ。努力せよ。それこそ、血の滲むような努力だ。自分には才能がないと嘆く者は必ず出てくる。だが能力とは、才能、努力、環境で成り立つものだ。いくら才能があろうとも、腐っていった魔術師を私は数多く見てきた。故に改めて、こう告げる。

努力せよ、と」

そう締めくくって学院長の話は終わりを告げた。

彼女は理想を語りはしなかった。ただただ、現実を突きつけるだけ。でも魔術師とはそういうものだ。俺たちはそういう世界に足を踏み入れたのだと、自覚する必要がある。

学院長が壇上から下りていく際、チラッと彼女がこちらを見る。そして俺が軽く礼をすると、ニヤツと笑う。

彼女とは実は旧知の仲であり、色々あったのだが……それは今は割愛しておこう。

「それでは新入生代表挨拶」
「はい」

凜とした声が講堂に響き渡る。

新品の制服だというのに、それは完全にアメリカに馴染んでいた。彼女は俺とあった時と変わらずに背筋をしっかりと伸ばし、そのまま毅然とした様子で壇上へと登る。

その灼けるような双眸は、どこを見据えるのか。

そうして彼女はスツと息を吸って、その口を開いた。

「新入生代表、アメリカ・ローズです。由緒あるこのアーノルド魔術学院に入学できたことを誇りに思います。しかしここは始まりであり、到達点ではありません。私たちの行く手にはきっと、多くの困難が待ち受けていることでしょう。しかしこの生徒であるからには、その困難に立ち向かっていく所存です。先ほど学院長がおっしゃったように、事実として学年の上位2割しか大成しないという現実もまた知った上で、進まないといけません。それこそが、魔術を極めようとこの学院に入学した、私たちの使命なのですから……」

純粹に上手い、と思った。

カリスマ性もあるだろうが、何よりもその話し方は妙に説得力がある。おそらく話す内容はあらかじめ暗記しているのだろうが、アドリブで学院長の話も取り入れた上で上手く話を続けている。

別にこれは魔術師としての能力になんの関連性もないが、きっと彼女は人を集めるような人望のある魔術師になるのだろう。

そんな感想を俺は抱いた。

「さてと……クラスは……」

入学式が終了し、次に行くのは各自の教室だ。

俺は学院の門の前に張り出されている大きな紙を見つめる。そこにはズラツと生徒の名前が書いてあり、俺は自分の名前を遠目から探す。

「……あつた！　なるほど……Aクラスか」

レイ・ホワイトの名前は、Aクラスにあつた。ちなみに学年には200人の生徒がいて、それが40人ずつA～Eクラスまでにふり分けられている。それと他の生徒の名前を確認したが、アメリカの名前もあつた。

初めてできた学院の友人が同じクラスで心底良かったと思う。

満たされた学院生活に友人は必須だからな。

「……」

そうして俺は教室に入る。すでに黒板に座席は名前と共に書いてあつた。俺は窓際の奥の席。一番後ろというのは何かと気が楽でいいのだが、その対照的な場所には彼女がいた。

「アメリカ様、ご挨拶素晴らしいかったです！」

「本当に私も素晴らしいと思いました！」

「流石はあのローズ家の長女です！」

と、すでに彼女は囲まれていた。

でもその人気には納得だ。あの容姿に、カリスマ性。家柄も良いとすれば、それこそ人も集まるものだろう

さて俺も少し挨拶に行くか。

「アメリア、同じクラスになったようだな」

「レイ。良かったわ、あなたも同じクラスで」

その喧騒を裂くようにして、俺は彼女に挨拶をする。だが他の生徒は、こいつは誰だ？ と言わんばかりの視線で俺を射抜いてくる。そしてその視線に好意がないことは流石の俺でも理解できた。

「おーっす。席つけよー」

女性の声が教室内に響き渡る。

それと同時に立ち上がって談笑していた生徒たちは、蜘蛛の子を散らすように席に着席。俺もまた、同じように自分の席に戻るのだった。

「さて。私は担任のヘレナ・グレイディ。呼び方は、グレイ先生で構わない。さて、入学初日にガイダンスとはダルいがまあ……これも仕事なので、やっていくしかない」

ショートヘアの髪に、ラフな服装。だが、メイクは最低限されており女性としての美しさはしっかりと表われていた。

グレイ教諭か。いかにもダルそうな雰囲気醸し出しているが、大丈夫なのだろうか。少し足元もふらついているし、おそらく昨晩は深酒でもしたのだろう。俺はある経験からそう結論づけた。

まあしかし、別にここの教師に教師らしい振る舞いなど求めている者はいないだろう。

アーノルド魔術学院の教師とは、ただの教師ではない。それは魔術の専門家であり、教師というの^{エキスパート}は一面的なもので研究者としての側面の方が強いからだ。

「んじゃとりあえず自己紹介から。そっちから適当にやってくれー」

投げやりな感じでそう告げる教諭。

俺は新しい友人を確保するために一人一人の名前をしっかりと聞く。皆はこの家庭出身か、またはどこの貴族であるかなどと言っていた。

なるほど。貴族の生徒もいるのか。これは是非とも仲良くなって

おきたい。交友の幅は大事だからな。

そうして最後にやってきたのは俺だった。もちろんここでヘマをするわけにはいかない。ファーストインプレッション第一印象は大切だからな。

「レイ、ホワイトだ。知っている人もいるかもしれないが、オーディナリー一般人出身だ。この学院始まって以来の一般人らしいが、魔術師として粉骨碎身努力していく所存である。よろしく頼む」

シン、と静寂が広がった瞬間に少しだけクスクスと笑い声が聞こえた。ギャグを言ったつもりはないが、受けたのなら良しとしよう。

俺は満足げな顔で着席すると、グレイ教諭はそのまま淡々と話を
して今日のところは解散となった。ということで、俺は次に宿舎に
向かう。

第3話 魔術の真髄

この学院は全寮制だ。長期休暇の際は実家に帰ることもできるが、それ以外は基本的にはこの学院での生活になる。

俺は案内を見て、少し離れた場所にある寮にやってきていた。

「うん……ここもでかいな」

なにぶん、この学院の建物はでかい。生徒の数に対してもその比率はおかしな気もするが、まあ……でかくて悪いことはないだろう。俺は中に入ると、張り出されている紙をじっと見つめる。そして自分の部屋となる場所を認識すると、そのまま迷うことなくそこに向かう。

「……失礼する」

とりあえずソックをして、俺は室内に入る。寮は一部屋二人で構成されており、誰かとペアになって生活することになる。俺はすでに誰かがいると仮定して、ドアを開けた。

「ん？ お、俺と同室はお前か」

「ああ。よろしく頼む……というよりも、君は同じクラスのエヴィ
「アームストロングだな。よろしく、ミスター・アームストロング」
「エヴィでいいぜ。俺は実はお前のこと……レイのことは気に入っ
ているんだぜ？」

「ほう。それは嬉しいが、どうしてだ？」

室内に入るとすでに一人の男がソファーに腰掛けていて、俺に話しかけてきた。思ったよりも広く、二人で生活するのは十分すぎるほどだ。家具も揃っているし、俺が送った荷物もすでに届いているようだった。

エヴィは荷解きの途中なのか、今は休憩している様子だった。

そんな彼は俺よりもはるかに大きい体躯に、刈り上げた茶髪がよく似合っている男だった。

そういえばアームストロングか……まさか、いや……きっとそうだろう。思えば、エヴィは彼によく似ている。そういうことなのだろう。

オーディナリ

「俺は別に一般人だからって、貴族連中のように軽んじたりはしねえ。むしろ、魔術師の家系でもないお前をすごいと思っているんだ」

「む？ 軽んじている？ 俺は軽蔑されているのか？」

「気が付かなかったのか？」

「むむむ……すまない。俗世には疎くてな。このような学校という組織も、15歳にして初めてなんだ」

「そうか……ま、人生いろいろあるよな。でも俺は歓迎するぜ。これからよろしく頼む、レイ」

「ああ。こちらこそ」

ガシッと握手を交わす。エヴィの手は分厚く、そして何よりも鍛錬しているのがよくわかった。

そうして俺たちはその日は何事もなく、適当に雑談をしてから眠りについた。

こんな生活も悪くはない。そう思った。

「さて今日の授業だが、まずは基礎だ。お前たち一年は基礎から学んでもらう。もちろんすでに魔術は使えるだろうが、確認だ。しかし基礎を侮るな。たとえどれほどの魔術師、そうだな七大魔術師であつても、それは例外ではない」

次の日の最初の授業は、早速魔術に関する話だった。

グレイ教諭は今日は真面目なのか、スーツを着て授業をしていた。

「さてここで少し聞いてみるか。ローズ、魔術とはなんだ？」

「はい。魔術とは、第一質料を再構築する技術のことです」

「プリママテリア」
「よろしい。その通りだ。では少し実演だ……」

《第一資料》プリママテリアルエンコーディング《物資コード》マテリアル

《物資コード》マテリアルディコーディング《

《物質コード》マテリアルプロセッシング《

《エンボディメント》マテリアル《物資》

俺はその処理がなされるのを直感で感じ取ると、グレイ教諭の目の前には氷の薔薇がコロン、と現れた。

「これが魔術だ。知っている通り、これは魔法ではない。魔法とは秩序なき、体系化もされていなかったただの超常現象。だが魔術は違う。魔術とは、術理を元に生み出される理論的な現象である。そうして体系化されることで、魔術は世界に広まり、こうして学ぶものも増え、世界では魔術師の存在が大きなものとして認知され……今に至るといふことだ」

彼女のいう通り、魔術とは術理の上に成り立つものだ。ただ、イメージしてなんとなく生み出す魔法とは違う。そこには体系化された技術が存在しているのだ。

「さて。では、黒板にまとめる。魔術の根幹をなす、コード理論を」

The Theory of Code:コード理論

- 1 Encoding:コード化
- 2 Decoding:コード復元
- 3 Processing:処理
- 4 Embodiment:具現化

魔術発動プロセス

プリママテリア

第一質料 コード化 コード復元 処理 具現化 物質 or 現象。

「ざっとこんなものだ。エンコードでコード化した情報をデコードの段階で、余分なものを削ぎ落とす。そして、そのコードを処理の過程に移行させる。複雑かもしれないが、一番重要なのは、第一質料だ。これは万物の根幹をなす物質。私たちの身体も、そこにある机も椅子も、そしてこの氷の薔薇も全ての根幹には第一質料が存在する」

プリママテリア

グレイ教諭はさらに言葉を続けていく。ノートをとる生徒も多いようで、後ろから見れば皆が懸命に学んでいるのがよくわかった。

プリママテリア

「そして、第一質料を物質に変換するとき使用するのが、コード理論だ。まず、コードとは情報の形態、内部表現形式のことだ。そして、第一質料をそのコードに変換し物質、または現象を具現化することを魔術という。一見すると無から有を生み出しているように見えるが、それは違う。コード変換には必ず質量保存の法則が適用される。つまりは、消費した第一質料に^{プリママテリア}応じて生み出せる物質、現象の規模は変化すると言うことだ。まあ、この例外もあるが……それは知らなくても大丈夫だ」

俺はその話を聞いて、自分が過去に学んだことを思い出す。

『感覚ではない。魔術とは術理を元に行使せよ』とよく教えられたものだ。

「コード化した情報を復元し、その後、処理することでコードに情報を加えたり削ったりする。そして、最後に具現化だ。私が、氷と薔薇と言うコードを付け加えたのは処理の過程だ。まあ、これは慣れとセンスだな。そして、最後に……自分で作り出した物質は……」

次の瞬間、グレイ教諭が手を触れることもなく突然氷の薔薇が粉々に砕け散る。霧散した氷の破片はまるで雪のようにその場にパラパラと落ちていく。

「このように消し去ることも可能だ。以上が魔術の発動プロセスとその応用。他にもまだまだ技術や深い知識はあるが、今はここまでにしておけ。よし、それでは質問を許可する」

「はい先生」

「ローズか。いいだろう」

アメリカはスツと立ち上がると、凜とした声で質問を投げかける。

「第一資料が再構築するものに制限はないのですか？」

「うむ。いい質問だ。厳密に言えば、制限はない。と言っても、そ

れは本人の技量次第だがな。しかし、それを言うときりがないから基本的なことを話そう。魔術は主に、物質または現象を生み出す技術だ。そして、その物質は4つの要素に分類できる。固体、液体、気体、そしてプラズマだ。何を生み出すにしても、この4つのどれかに辿り着く。それ以外だと、現象……ということになるな」

「はい。ありがとうございました」

そうして次の生徒が手を上げて、教諭に質問をする。俺はその様子を黙って見つめていた。

なるほど。学校で学ぶとはこういうことなのか、と納得しながら。

「先生が先ほど使用したのは……アンチマテリアル対物質コードですか？ だからこそ、氷の薔薇が分解されたのでしょうか」

「なるほど。その手の質問、出ると思ったが……答えはノーだ。私アンチマテリアルに對物質コードは使えない。ちなみに二重コード理論についてはここでは扱わない」

二重コード理論。それはコードには物質コードマテリアルというものが必ず付随するのだが、もう一つのコード……アンチマテリアル對物質コードが三年前に発見されたのだ。エインズワースという研究者によって。

「エインズワースの二重コード理論は、ドクターレベルの内容だ。学生の際は理解しなくとも良い。それだけだ。以上で終わる。あとは実践してみることだな。知識を得て、実践する。これが全ての基本だ。では解散」

そういうと同時にチャイムがなり、教諭はそのままスタスタと外に出ていく。

「レイ、なかなか濃い授業だったな。理解できたか？」

「……」

「おい、どうかしたか？」

「ああすまない、エヴィ。ちょっと考え事をしていたな」

「なんだ？ 大丈夫か？」

「ああ。魔術の概論に関してはすでに理解している」

「そっか。それならいいが」

エインズワースの二重コード理論。

黒板に書かれたそれを、俺はじっと見据えるのだった。

第4話 魔術剣士

「さて、ここに集まった生徒は魔術剣士も卒業後に視野に入れている。そう思っていていいね？」

午後の授業は選択制になっている。その中で俺は、魔術剣士のための授業を選択した。この中には見知った顔もいて、アメリカにそれに隣にはエヴィのやつもいる。

ちなみに現在は外の演習場に出てきていて、服装もまた軽装になっている。

「おつとその前に自己紹介だね。僕はエリオット・アークライト。みんなにはライト先生と呼ばれているよ。ちなみに白金級の魔術師だ。よろしくね」

にこりと微笑むその姿は、同性ながらもきつと魅力的なものであると理解した。

「さて、と。魔術師と魔術剣士の違いはわかるかな？」

「はい」

「えつと君は？」

「アメリカ」ローズと申します」

「なるほど。君が今年の首席だね。それでは、違いの説明をお願いしようか」

「魔術師とは主に魔術を行使する者です。その一方で魔術剣士は剣戟に魔術を組み込む剣士のことです」

「では本質的には何が違うかな？」

「速度です」

「いいね。続けて」

「魔術師は後方支援、大規模な魔術など術式構成に時間をかけることができます。一方で魔術剣士は速度が何よりも重要。何故ならば、超近接距離の戦闘はリアルタイムの判断が求められるからです」

「パーフェクト。ミス・ローズの言うとおり、魔術剣士は速度が重要だ。それこそ一秒以下……ゼロコンマの世界で戦っていると言ってもいい。だからこそ君たちが初めに身につけるべきは、剣技の型と高速魔術だ。さてここで、高速魔術について説明しよう」

ライト教官は生徒に少し距離を取るように言うと、まずは普通の魔術を行使する。

「まずはこれが普通の魔術……」

すると彼の右手には、炎が燃え上がる。時間にしても二秒近くかかっているだろう。しかし、高速魔術はその名の通り高速で魔術を使うことだ。

「そしてこれが高速魔術だ」

瞬間、先ほどとは比べ物にならない速度で炎が燃え上がる。時間にして一秒にも達していないだろう。出力は先ほどよりも劣るが、それでも十分なほどだった。

流石のその技量には生徒たちも感嘆の声をあげる。

「高速魔術のポイントは、コード理論を省略しないことだ。例年の生徒を見ても、無理やり高速魔術を使おうとして、まともに魔術が発動しない生徒がいる。大切なのは調整だ。感覚としては、出力を抑えるって感じだけど……そうだね。蛇口の水をゆっくりと細く流していく感じかな。では、みんなも実践してほしい」

教官がそう言う生徒たちは一斉に高速魔術の練習を始める。すぐにできても出力が足りない者、それに逆に発動すらない者。多種多様な生徒が数多くいた。

かく言う俺は……。

「おお！ レイは器用だな！」

「そうだな。これは嫌というほど教えられたからな……」

「ん？ 誰にだ？」

「まあ俺のことはいい。で、エヴィはどうなんだ？」

「俺か？ まあ見てろ……」

そう言つと瞬く間に彼の手にも炎が舞い上がるのだった。魔術の構成要素は全てがコード理論に基づいているが、やはりそれでも理論を知っているのと、実際に使つと言つのはそれなりに隔たりがある。

特に初めは、コード理論を意識せずに感覚でやってしまうことが多いので、俺はよく叱られていた。今となつては懐かしい思い出だ。

「実はこう言つ繊細なのも得意なんだぜ？」

「そうか。よく似ているな」

「なんの話だ？」

「いやその……なんでもない」

エヴィと二人でそう話していると教官が俺たちの方へと向かつてくる。

「二人はできたのかな？」

「はっ！ 教官殿！」

「えつと……その、君の名前は？」

「レイ」ホワイトであります。教官殿」

当たり前前の礼儀として、俺は敬礼をする。その後は手を後ろに組んで、少しだけ足元を開く姿勢を維持する。

「ああ！ 君が学院始まつて以来の一般入出身の生徒だね」
オーディナリー

「は。その通りであります」

「それにしてもなんと言うか……」

「なんででしょうか？」

「いや15歳とは思えない振る舞いだね。以前は普通の学校に通っていたのかい？」

「いえ……自分は学校というものはこの学院が初めてでして……これ以上は詮索しないで頂けると助かります」

「おつとごめんね。踏み込みすぎたようだ。どうにも君に興味が湧いてね」

「は。恐縮であります」

それから先は、剣術の訓練になった。

全員が木刀を持って、各自相手と剣戟を交わす。一人の相手に対して時間は二分ほど。それを様々な生徒でローテーションして進めていく。初めは型の練習をしようと思ったが、ライト教官は実戦を重視する人のようだ。

見た目が若いということもあり、きつと柔軟な思想を持っている人なのだろう。

「おい、一般人」
オーディナリー

「君は入学式の朝に出会ったな。確か同じクラスで……名前はアルバート・アリウム。ミスター・アリウムと呼んでも？」

「は、流石に貴族への礼儀はなっているようだな」

「そうだな。貴族に限らず、誰に対しても礼節は持っておきたいものだ」

「でもあれは失策だったな」

「あれ、とは？」

「アメリカ・ローズに取り入ろうとしたんだろう？ ま、気持ちはわからんでもないがな。でも一般人の^{オーディナリ}お前には高嶺の花だな」

「取り入るとはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。お前はこの学院で後ろ盾がない。入る派閥も、何もかもがない。だから三大貴族に縋ったんだろう？」

「いやそれはない。そもそも俺はアメリカが三大貴族とは当初は知らなかったからな」

「は、戯^ざれたな。まあいい。とりあえずは、相手してやるよ」
「よろしく頼む」

俺を心配してくれているのか、ミスター・アリウムは俺に色々と忠告をしてくれたようだ。やはりこの学院は初めに聞いていたよりもいい人が多いようで、俺も一安心だ。

「オラッ！！」

「む……ッ！」

「……これはどうだッ！！」

「むむ……ッ！」

ミスター・アリウムはどうやら攻撃的な性格の持ち主のようだった。今までの生徒ならば少しはその剣の動きに迷いが出ていた。それはたとえ木刀であろうとも、人に剣を向けるということは普通は怯えるものである。だがしかし、彼はそうではないようだ。流石は貴族といったところだろうか。剣筋も決して悪くはない。

しっかりと努力しているのが見て取れる。

俺はそんな彼の剣戟を真正面から受け止める。いや、受け止めるだけではない。時には受け流し、その攻撃を全て捌いていく。

「……く、どうなってやがるッ!？」

「……ミスター・アリウム。少し直線的だな。時折フェイントを混ぜるといいかもしれない」

「うるせえッ!」

さらにムキになってくるが、感情的になればなるほど人間というものは直線的になってしまう。

『魔術師は冷静に努めなければならない』、それは俺が教えられた教訓の一つである。

「はい。じゃあ次の人にいつてね」

教官殿がそう告げるので、俺は木刀を引いて彼に対して礼をする。

「いい練習になった。ありがとう。君の剣には努力の足跡がよく見えた」

「は……うるせえよ。いい気になるなよ？ 防御が得意だからって

……」

「忠告、痛み入る。そうだな。俺もまだまだだ。精進したいと思う」

「は、言ってる……」

最後にそう告げて彼は次の相手の元に進んでいく。

なるほど。学友と切磋琢磨する。これは経験したことのないものだ。正直言えば、この程度の技術ならば俺は朝飯前であるが……せっかくこの学院に生徒として入学することができたのだ。

自分を見つめ直すという意味合いも込めて、まずはまた基礎からしっかりと積み上げていこうと思う。

ミスター・アリウムだけでなく、アメリアやエヴィのような意識の高い生徒も多い。俺はきっと、ここで満足した生活を送ることができるだろう。

そんな未来に想いを馳せながら、俺はさらにこの授業に集中して取り組むのだった。

第5話 Long time no see

「さて、と。席は……」

教室内に入る。今日の午後の授業は魔術概論に出席してみることにした。

ここは大教室のようで、後ろに行けばいくほど席の位置が高く、先頭の列が一番低いところになっている。いわば、階段形式のようなものだ。

俺は今回は友人も知人もないので、一人で授業を受けようかと考えていた。しかし、先頭の方でポツンと座っている生徒がいる。

これはいい機会だ、同席しようじゃないか。

「すまない。隣、いいだろうか」

「え……！？ その……え、っと……その、どうぞ……」
「ありがとう」

俺は持ってきたノートと教科書、それに筆記用具を机に置くと早速隣にいる女生徒に話しかけてみることにした。

「お初にお目にかかる。俺の名前は、レイ＝ホワイト。突然の相席、許可してくれて嬉しく思う」

「あ……その……私は……エリサ＝グリフィスです……」

「なるほど。よろしく頼む、ミス・グリフィス。ちなみに俺のことはレイで構わない……」

「あ、その……私もエリサで……いいよ……？」

「そうか。ならエリサ、よろしく頼む」

「うん。こちらこそ……」

少したどたどしいが、しっかりと会話をしてくれる。やはりこの学院にはいい人が多い。オーディナリ一般人の俺にも真正面から応じてくれるのだから。

前評判とは違った意味で裏切られて、俺は心底安心する。

「あの……」

「なんだろうか」

「同じクラスですよね、レイくんは……」

「む？ 同じクラスだと？」

「はい……そうです」

「申し訳ない。俺としたことが、まだ全員の顔と名前を覚えきれていないようだ。謝罪する……」

素直に頭を下げる。

あの自己紹介の際に全員分の顔と名前は把握していたつもりだったが、自分の認識の甘さが出てしまった。

「え……！？ その、わざわざ謝らなくても……私、影が薄いですし……」

「そんなことはないだろう」

「え？」

「そのフードはよく目立つ。しかしどうして被っているんだ？」

「それは……」

止むに止まれぬ事情があるのか。

それとも別の何かか。

しかしここで無遠慮に突っ込んで話を聞くほど俺は礼儀知らずではない。まだ初対面だ。適切な距離を保っていこう。どうやら彼女は内向的な人物らしいからな。

「あの……私はその……」

「言っても大丈夫なのか？」

「はい……ここで勇気出さないと、ダメだと……思うから」

そう言ってエリサはフードを下ろす。

すると、セミロングの髪が舞う。それは翠みどりがかった色をしており、どこまでも透き通るような、それこそ絹のような髪の毛だった。そ

れに横目から見ても、彼女の顔立ちはよく整っているのがわかる。

スツと通った鼻に、程よく血色のいい唇。その双眸もまた、まつ毛が綺麗に上を向いていた。それはこれでもかと彼女の大きな目を目立たせる。

しかしそれよりも、俺はある一点に目がいった。

「エルフ？ いや、ハーフエルフか……」

「うん……私はお母さんがエルフで、お父さんが人間なの」

「そうか。それでその耳か……」

「変、かな……？」

そう。彼女の耳は少しだけ尖っていた。

俺はエルフに会ったことがあるが、彼らはもう少し耳が尖っていた気がする。それに髪の色ももう少し深い翠であった。その経験から、俺はハーフエルフと推測したが当たりだったようだ。

亜人とのハーフは近年珍しくはない。特にエルフは魔術適性が高く、貴族の家柄はエルフとの混血の子どもを作ろうとしているのは有名な話だ。

そんなエリサは心配そうに俺を見つめる。もちろんそれには毅然とした態度で応じる。

「変？ 至って普通だろう」

「え……だけど、昔はこのせいで……イジメられていたから……」

「ふむ……確かに人間とは、異質なものを排除したがる傾向にある。それはたとえ大人であっても然りだ。幼い子供なら、なおさらだな。きつと人間や動物などには、生まれつきそのような性質があるのかもしれない。だが俺は、それを揶揄したりしない。とても綺麗な耳で、そしてとても美しい翠の髪の毛だ。惚れ惚れするさ」

「え！？ そ……そ、そう思う？」

「俺は嘘はつかない。いや、偶につくこともあるが今回は本音だ。俺はエリサは美しいと思う」

「そっか……そう言ってもらえると、嬉しいかな。えへへ……」

「うん。笑った顔も綺麗だ。君には笑顔が似合っている」

「……うにゃ！？」

「うにゃ？ どうした？ 発作か？ 今すぐ医務室に」

「だ、大丈夫！ 大丈夫だから！」

と、慌てた様子で否定するエリサ。目の前でブンブンと手を振っているが、顔は真っ赤になっているし、大丈夫なのだろうか。

そうしていると、俺はある一冊の書籍が目に入る。それは彼女の目の前に置かれていた。

「その本……」

「あ。ちよつと授業まで時間あるから、読んでたんだ……」

「エインズワースか」

「うん……私ね、研究者に……なりたくて。憧れなの」

「二重コード理論を専攻するのか？」

「うん……私も、コードにはとても興味があるの」

「ということは学院を卒業しても、先に進むのか」

「うん。バチエラー、マスター、そしてドクターまで進みたいと…
…思ってるの……」

「素晴らしいな」

「え？」

「この年齢でそんな大きな目標があるなんて。俺は尊敬する」

「そんな私は別に……」

「いや、謙遜しなくてもいい。だが……なるほど。この学院は確かに選りすぐりの人間が多いようだな」

「……けど、貴族の人はもっとすごい、と思う……よ？」

「貴族か……だが、エルフの魔術適性もかなり高いだろう」

「……私は落ちこぼれで、ね。魔術はあまり……上手くないの」

「そうか……しかし、人には得手不得手がある。得意な部分を伸ばしてあげないと、俺は思うぞ」

そう言葉を告げると、エリサはクスツと笑う。

だがそれは嘲笑の類ではなく、純粹に心から楽しいと思っている笑いだっただ。

「ふふ……」

「どうした？」

「なんだかレイくんて、先生みたい」

「そうか？」

「うん。同じ年には……思えない」

「そうか……しかし実はそれ、よく言われる」

「まあそうだろうね……私も……そう思うし……」

「はは、言っじゃないか」

「ふふ。そうだね」

「さて改めてだが、俺と友人にならないか？」

「友人……だけど私は、今まで友達もいなくて……その……よく分らないし……」

「俺と、そしてエリサが互いに友人と思えば友人だ。勝手気ままにすればいいのさ。それに友情とは、論理や理屈を超えた先にあるものだ。そんなに気負う必要はないさ」

俺はスツと手を伸ばす。

そうして恐る恐る彼女も手を伸ばしてくると、俺の手を握り返してくる。薄くて、儚い手だ。だが彼女は自分の意志で俺と友人になると決めてくれた。それが何よりも嬉しかった。

「これからよろしく頼む」

「うん……こちらこそ……」

その後、すぐに教諭が来てそのまま授業となった。

俺たちは隣り合ったまま、真面目に授業を受けるのだった。

授業も終了し、俺は校舎内を歩いていた。すでにエリサとは別れていて、俺はある場所を目指している。

そうして目的の場所にたどり着くと、コンコンコンとノックをす

る。

「レイ」ホワイト。やってまいりました」

「……入って構わない」

「失礼します」

俺はそつと扉を開けて、そのまま自らの手でそれをゆつくりと閉める。

目の前にいるのは七大魔術師が一人、アビー「ガーネットその人である。つまりここは学院長室であり、俺は密かに呼び出しを受けて、こうしてこの場に立っている。

彼女は椅子に座っており、後ろから差す夕焼けの光が、その灼けるような真つ赤な髪をさらに照らしている。

「やあ、レイ。極東戦役以来だな」

「は。お久しぶりであります、大佐殿」

「よしてくれ。私はもう、退役の身だ。それに君も……っと、これは詮無いことだな」

「失礼しました。ではなんとお呼びしましょう?」

「……アビーちゃん、でどうかな?」

「は。では、アビーちゃんとお呼びいたします。これからよろしくお願いします。アビーちゃん」

「……ふ。ははは! もちろん、「冗談さ! 相変わらずだな、レイ」
「もちろん、心得ています。ではそうですね……アビーさん、でいかがでしょうか?」

「ああ。いい響きだ。しかし君に大佐と呼ばれないとは、少し寂しいがね……だが、仕方のないことだ」

「これからは後進の育成に力を注ぐのですか？」

「そうだな。まあだが、まだ現役の七大魔術師だからな。やることは他にもある」

「また赴かれるのですか？」

「可能性はあるな。まあ最前線での戦いはないだろうが。しかしそれは君も同じだろう、レイ・ホワイト。君こそ私なんかよりも、極東戦役では成果をあげたではないか」

「いえ。私の場合は少佐が……いえ、師匠がいましたから」

「そうか……だが、あの幼い君が『氷剣の魔術師』を継ぐとはな。時間が早く経過するのも、当然だな」

「アビーさんは当時から変わらぬまま、美しいです」

「はは、あいつの教育の賜物だな」

「は。女性はずは容姿を褒める。それが鉄則と、この体に嫌という程刻まれておりますので」

「ふふ……そうか。いやはや、懐かしいものだ。あの戦場は地獄そのものだった。だが、レイを含め、仲間がいたからこそここまで生き残ることができたと言うものだ」

「恐縮であります」

「さて……昔話もいいが、少し君に依頼がある」

「は。謹んでお受けいたします。アビーさんには入学の際に便宜を図ってもらったので」

「別にそれと交換条件というわけではないのだがね……」

アビーさんはポケットの中から一枚の封筒を取り出す。そうしてそれを、俺に向かって渡してくる。

「拝見させていただきます」

目を通す。

そして俺はすぐに理解すると、それを彼女に返すのだった。

「なるほど。アーノルド王国に帝国の密偵の可能性あり……ですか」
「そうだ。この学院の中に潜伏している可能性もある。もちろん教員には通達してあるが、レイも何か分かれば教えて欲しい」

「は！ 了解致しました！ して、発見した場合は生かして捕えるのがよろしいでしょうか？」

「ああそうだな。間違つても殺すと面倒だからな。いや、君の場合は殺した方が早いだろうが……なにぶん、政治的な問題があるからな」

「それは十分に理解しております」

「ではよろしく頼む。それとこれは別件だが、どうだね。学院での生活は」

「非常に満足しております。学友にも恵まれているようで。このような機会を頂けて、感謝の念に堪えません」

「そうか……あの約束を果たせたようで良かった。まあここでしっかりと養生してくれ」

「は。ここでまた、一から自らを見つめ直そうと思う次第です」

「ふふ、堅いな相変わらず。だがそれが君の魅力だ。ではまた会おう、レイ」

「は。それでは、失礼致します」

もう一度敬礼をして、俺はそのまま部屋を辞する。

この学院の生活は今の所、平和である。極東戦役のような怒号も、悲鳴も、叫び声も聞こえない。平和な場所だ。だが俺はのちに知ることになる。決してこの場所もまた、安全ではないのだと……。

第6話 邂逅

世界七大魔術師。

それは聖級グランドに至る魔術師の中でも、上位七人を総称してそう呼ぶことになっている。もちろん誰かがそう決めているわけでもない。それは自然と、尊敬と畏怖の念を込めて呼ぶようになったのが起源らしいが……諸説は色々とある。

仮に、七大魔術師になるにはどうすればいい？

という問いがあつたとしよう。

俺ならばこう答える。そんな方法など、ないと。

七大魔術師には成るのではない。気がつけば、成っているものであると。俺はそう教えられた。

聖級グランドの魔術師は化け物の巣窟である。そこはもはや、人の領域を外れている。その事実だけは間違い無いだろう。俺はその話を師匠に嫌というほど聞かされたからだ。

金髪碧眼。その容姿は10人中10人が振り向くほどだ。俺もはじめ見たときは天使がこの世界に降臨したと勘違いしたほどだ。でも師匠と暮らし始めて知った。彼女はかなりズボラで掃除もしないし、料理もしない。家事のスキルは完全に終わっている。作る料理

といえば、揚げられた謎の塊である。曰く、『揚げればなんでも美味い』とのことだった。

そういうわけもあり、俺は家事全般は全て一人でやっている。

そうしていつものように掃除をしていると、唐突に師匠が話かけてくる。

「レイ。聖級グランドの魔術師になるにはどうしたらいいと思う？」

「簡単です、師匠。条件は聖級せいきゅう魔術が扱えること」

「その通りだ。他の階級と異なり、面倒な試験は必要はない。筆記試験、実技試験、魔術協会の定めたそんなものはどうでもいい。ただ純粋に、魔の術すべを極めればいい。それだけだ。聖級グランドとはいいが、実際は頭の狂った連中の巣窟だ。知っているか？ 年に数回、聖級グランドの魔術師には招待状が送られてくる。それは魔術協会でのパーティーとかなんとかだが、行く者はほとんどいない。頭のイカれた奴らに外向性などない。奴らにあるのは、魔術の真理を探求するという狂気じみた欲望のみだ」

「でも師匠も……聖級グランドではないですか？」

「私はちゃんとしていていかな、パーティーに」

「でもこの間はそれは無料タダで飯が食えるからって……」

「このアホ！」

「痛っ！ 何するんですか！？」

バシツと頭を叩かれる。この人は子どもにも容赦がない。訓練の際も、かなりボコボコにされているのは記憶に新しい。

「いいか。聖級グランドの魔術師になるのなら、細かいことは気にするな」
「ええ……矛盾してますけど？」

「は、んなこたあどうでもいい。ただレイ、覚えておけ。お前が進むのは、そういう道なんだ」

「はい……」

「さてここでさらに質問だ」

「なんでしようか」

「氷剣の魔術師の本質は何だ？」

「氷魔術でしょう。師匠はそれに長けているではないですか」

「このアホ！」

「痛っ！」

「私がホイホイと真髓を見せるとでも思っているのか？」

「ええ……理不尽すぎる……」

この人はいつもそうだ。何事にも理不尽。言っていることがすぐに矛盾するのは当たり前。俺がそれを指摘すると、頭をバシッと軽く叩かれる。ちなみに避けようと試みるのだが、避けられた試しはない。

「氷剣の魔術師。文字通り、それは氷の剣を使うことに長けている魔術師だ。しかしそれと同時に、その本質は別のところにある。そもそも、馬鹿正直に自分の得意分野を語るのは子どもまでだ。その名前には必ず意味がある。表面上ではわからない、何かがな……」

「それはなんですか……？」

「感じ取れ」

「え？」

「お前がこれから知って行くんだ。魔術の本質とは何か、そして魔術師とは何か、をな」

「……そうですか」

話半分に聞いていても、時折こつして目が覚めるようなことも言ってくる。

そうして俺は師匠である……リディア・エインズワースの言葉をしっかりと受け止めるのだった。

「朝か……」

懐かしい夢を見ていた気がする。でも今となつては、どんな夢を見ていたのかあまり覚えていない。

確か師匠の夢を見ていた気もするが、その具体的な内容までは覚えていない。

「ぐ……ぐつぐつお……おおおお……」

エヴィのイビキはかなりうるさい。でも俺は爆音の中であつたとしても、睡眠は取れるように訓練されている。この程度ならば、熟睡するのは容易だった。

現在の時刻は朝の五時。起きるには早すぎるほどだ。

はつきり言って七時に起きれば余裕で授業には間に合う。それは朝食を含めてもだ。だが俺はすでにこの時間に起きるのは習慣になっている。

「よし……」

着替えるのは制服ではない。運動のしやすいように軽装に着替える。そして軽くストレッチをすると、そのまま寮を出る。

季節はもう春になっており、日が出るのも少しだけ早くなっている。と言ってもこの時間はまだ暗いのだが。

俺はそうして、外に出るとランニングを始める。

朝起きて走る。それだけのことを繰り返していた。もちろん毎日こうしているわけでもないが、大体はこの習慣を繰り返している。

「はっ……はっ……はっ……」

学院の中を走って行く。ここは土地が広いということもあり、ランニングするには丁度いい場所だった。俺はただ無心になって走り続ける。すると視界の中に、女子生徒の姿が見える。

こんな朝早くからどうしたのだろうと思うも、話しかけるほどでもないと考えそのまま通り過ぎようとするが……。

「あら？　こんなに朝早くから、すごいですね」

俺は話しかけられたので、ゆっくりとスピードを落として彼女の前に立ち止まる。

真っ黒な髪はとても艶やかだった。それこそ、光の反射で綺麗な輪が頭に見えるほどに。それに右目の泣きぼくろが妙に魅力的だった。話し方もおっとりとしていて、それが妙にマッチしている。

またプロポーションも抜群だ。あまりまじまじと見ては失礼だが、その豊満な胸と腰つきには少しだけ目線がいつてしまう。

そしてその雰囲気から先輩と判断した俺は、もちろん敬語で対応する。

「新入生の方ですか？」

「は。レイ＝ホワイトと申します」

「あら。あなたがあの……」

「私をご存知なのですか？」

「ええ。学院始まって以来の、オーディナリ一般人出身。とても有名ですよ？」

「恐縮です」

「……」

「何か？」

じっと見つめてくるので、俺は思わずそつ尋ねてしまう。

「いえ。わざとそう話していると思いましたが……違うみたいです
ね」

「何か失礼をしましたでしょうか？」

「いえいえ。そんなことはありません。とても丁寧ですよ。感心し
ますね」

「は。恐縮です」

「そうでした。自己紹介がまだですね。私はレベッカ・ブラッドリ
イです。私のことは気安くレベッカ先輩、と呼んで下さい」

「分かりました、レベッカ先輩。まだまだ浅学の身の上。これから
色々この学院のことをご教授いただければ幸いです」

「……もしかして、知らないのですか？」

「？ 何をでしょうか？」

「私、これでも三大貴族なんですよ？」

「！ ということは、アメリアと同じなのですね」

「あら。アメリアさんのことは知っているの？」

「はい。同じクラスの友人です」

「なるほど。そうでしたか……それにしても、あまり魔術師の世界
には詳しくないのですね」

「……申し訳有りません。少し事情がありまして」

「それは一般人と関係があるのですか？」

「まあ……そう考えてもらって、間違いはありません」

「そうですか。それにしても……あなたはともしっかりしていま
すね。後輩とは思えないほどに」

「そういえば、レベッカ先輩は何年生なのですか？」

「私は三年生です。最上級生と思いましたが？」

「はい。四年生かと。とても美しく、大人の魅力に溢れていたので」

「あらあら、まあまあ。口が上手いんですね。ふふ……」

にこりと微笑むレベツカ先輩。

ちなみにこの学院は四年制だ。と言ってもストレートで上がれるとも限らないのだが……。毎年上の学年に上がれないで、留年するものは必ずいる。でもこの人は、三大貴族ということもありきつとストレートで進んでいるのだろう。

「あら、もうこんな時間ですか」

彼女は腕時計を見ると、そう告げる。

「では私はこれで。さようなら、レイさん」

「はい。また機会があれば、よろしく願いします」

「そうですね。でもきつと、また会えますよ。近いうちに」

「それはどういう……？」

「では。御機嫌よう」

俺の言葉に返答はなく、そのまま寮の方へ歩みを進める先輩。

まあ仕方ないか、そう思って俺はランニングを再開するのだった。

第7話 魔術概論と蔑称

「さて今日は、魔術の基本的な派生に関して話そう」

午前。今は共通授業である魔術概論の授業だ。

担当教諭はグレイ教諭だ。ちなみに今日はラフな格好で髪も乱れている。おそらく昨日はアルコールを飲んでいたのだと勝手に推察する。

「さてここは…… ホワイト。魔術の基本技能を説明してみせろ」

「了解しました、グレイ教諭」

指名されたので、俺は席から立ち上がってその問いに答える。

「魔術は主に、下級魔術、中級魔術、上級魔術、せいぎゆう聖級魔術に分類されます。またさらにそこから、クイック高速魔術、リモート遠隔魔術、チェイン連鎖魔術、イレイ遅延魔術、マテリアルシフト物資変化、エクステンシブ大規模魔術、エクステンシブチェイン大規模連鎖魔術に分類されます」
「ホワイトの言う通りだ。よく勉強している」
「は。恐縮です」

その言葉と同時に俺は着席する。

「今言ったように、魔術にはこれだけの派生がある。例えば、下級魔術である火球ファイヤーボールを使うとしよう。これを発動する際に、もちろんコード理論に従うのだが、処理の段階でどの方法で発動させるかは異なってくる。速度を重視して高速魔術クイックを使うか、それとも意表をつくために遠隔魔術リモートを使うこともできるな。それに連鎖魔術チェインを使って、その数を増やしてもいいし、遅延魔術デレイでその発動をあえて遅延することも可能だ。このように、今までの魔法というものではこれらの技術は成し得なかったわけだ」

グレイ教諭の言う通り、魔術はコード理論によって大幅にアップデイトされた。今まではただイメージするだけで発動する魔法という現象が暴かれ、そこに術理が生まれた。そうして人間はその中に意味を付け加えた。同じ発動する魔術でも、今言ったようにかなりの派生が生まれる。

クイック
高速魔術は以前やったように発動を早める魔術。

リモート
遠隔魔術は魔術の発動位置を通常よりも遠くにするもの。だがこれは中々に厄介で、普通魔術とは座標指定などしなくても大体は目の前に出現する。それは無意識のうちに俺たちがそう指定しているからだ。

リモート
だが、遠隔魔術は空間を3次元的に捉えた上で任意の場所に魔術を発動させなければならぬ。これはかなりの技量がいる。まあ、慣れてしまえば高速魔術クイックとの組み合わせも可能だ。

チェイン
連鎖魔術は簡単に言えば、コード理論を重ねることで連鎖するよう
に魔術が発動できるものだ。連鎖する数はその魔術師の技量にも
よる。5つが限界の者もいれば、100程度出せる者もいる。

デイレイ
遅延魔術は文字どおり遅延する魔術。これは戦争においては地雷
のような役割を果たす。発動する条件はそれこそ、魔術師の技量次
第だ。振動によって発動するものもあれば、時間やその他の条件を
コードに付け加えるものもある。

高位の魔術師になればこれらを組み合わせることもできる。それ
こそ可能性の幅はかなり大きい。特に戦闘において魔術を使用する
際には、そのバリエーションがかなり重要となってくる。ただ上級
魔術が使えるだけでは、優秀な魔術師とは言えない。重要なのは、
バリエーション。中には下級魔術の組み合わせだけで、金級ゴールドの魔術
師になったものもいる。

このように魔術とは、コード理論の体系化によって文字どおり世
界が変わった。それによって魔術は生活に欠かせないものとなり、
今に至るというわけだ。

「では軽く実践しようか。今回行うのは、マテリアルシフト物資変化だ」

グレイ教諭がさういうと、彼女の目の前に水が出現。それはその
まま重力に従って、床に落ちると思われたが……違った。

そうその水はそのままパキパキと音を立てながら、氷へと変化していく。そうして教卓の上には氷の柱が出来上がっていた。

なるほど。確かにこの技量はすごい。その速度はほぼ高速魔術に匹敵するだろう。だというのに、無駄がないし構成物質が崩壊することもない。技量がない魔術師が物資変化を使うと中途半端な結果、例えば水と氷が混ざるなど、になることもあるのだがそれが全くない。淀みがないのだ。流石は、アーノルド魔術学院の教諭というところか。

と、俺は勝手にその技量に感嘆するのであった。

「このように物質はコード理論に物資変化という処理を加えれば、変化させることも可能だ。しかし実際のところ、これは後からの事象改変も可能だが……それはかなりの高難度となる。例えるならば同時に二つのコードを走らせるという感じだな。高位の魔術師はそれを平然と行うが、まあそれはいいだろう。まずは一つのコードを走らせる基礎が大切だ。では軽く実践するか。全員、演習場に移動だ」

俺たちは物資変化の実践のために外の演習場へと赴く。今回は制服のままの移動になっている。

「なあレイ」

「なんだ、エヴィ？」

「俺ってこれ、苦手なんだが……」

「大丈夫だ。何事も反復と練習。それに尽きる」

そうして演習場にやってきた俺たちは、そのまま物質変化の練習を開始する。

「よし。それでは各々、始めていいぞ」

その言葉を聞いて、次々と生徒が実践するも中々上手くはいかない。この技術はそれなりの技量がないと扱うことができないからだ。でも何事にも例外というものは存在する。

現在、全員の目はある一人の生徒に注がれていた。

「うむ。ローズは流石だな」

「ありがとうございます」

三大貴族であるアメリカの技量は誰もが知りたいところだ。そうして彼女は大衆に見られるというプレッシャーの中で、いとも簡単にそれを成し遂げた。大量の水を生み出すと、それを一気に氷へと物質変化させていく。

だが特筆すべきはその物質変化の技量だけではない。彼女の目の前にある氷は、小さな木の形を成していた。

それが何を意味するのか、分からないものはいないだろう。つまりアメリカは、発動した魔術の中に木を形成するコードを処理の過

程で組み込むほどの余裕があるのだ。

「……なるほど、アメリカは魔術容量キヤパシティが大きいんだな」

「ん？ レイなんだそれは？」

独り言のつもりだったがエヴィが反応してくるので、俺は解説をすることにした。

「魔術師はコードを走らせる必要があるだろう？」

「ああ」

「もちろん、脳内で処理されるコード理論は個人によって違う。その中でも、多くの第一資料プリママテリアを取り込み、コードに多くの情報形式を組み込めることを魔術容量キヤパシティが大きいというんだ。ま、略して容量キヤバが大きい、ともいうがな」

「へえ〜。そうなのか」

「ああ」

「レイは物知りだな」

「知識はあつて困ることはないからな」

とまあ、蘊蓄うんちくを垂れ流している場合ではない。

俺もやってみる必要があるな。

そうして俺はコードを脳内で走らせる。

《第一資料プリママテリアⅡエンコーディング》

《エンコーディング》マテリアル《物質コード》

《物資コード》マテリアル《ディコーディング》

《物質コード》マテリアル《プロセシング》

《エンボディメント》マテリアル《物資》

プリママテリア
第一質料が水という液体に変換されそこから氷を成型しようとするが……俺は上手くいかなかった。バシャ、と目の前に水が滴り地面に吸収されていく。

「レイ、俺はできたぜ！ ちょっと不恰好だけどな……って、あれ？ どうした？」

「うむ。上手くいかない」

「もう一度挑戦してみろよ！」

「ああ。何事も反復と挑戦だからな」

それから幾度となく魔術を発動するも、俺の目の前にはただ水溜りができるだけだった。そうして他の生徒が成功させていく中で、俺だけが残ってしまった。

「ふむ。時間だな。ホワイトはまあ……これからしっかりと練習しておけ。人には向き不向きもあるが、これは基礎だ。しっかりとな」
「は。了解しました！」

そうして授業は終了して、そのまま全員が校舎へと戻っていく。

そんな中、俺は視線を感じていた。中にはクスクスと笑う者もいるようだった。

今の状態では、マテリアルシフト物資変化も難しいか。まあこれは今後の課題だな。

と俺は勝手に結論づけてそのまま歩いていくも、目の前にずっとミスター・アリウムと他の人間が現れる。

「よう。オーディナリ一般人」

「ミスター・アリウム。今日もいい授業だったな」

「ははは！マテリアルシフトお前は物資変化程度もできなかったようだなあ？」

「そうだな。もっと精進したいと思っている」

「ククク、とうとう化けの皮が剥がれたな……進級できるといいなあ？オーディナリなあ一般人」

「うむ。留年は俺も避けたいところだ。特に退学などでは目も当てられないからな」

「ククク、そうだなあ……そこで、俺から一つ提案がある。悪いものじゃないぜ？」

「なんだろうか？」

「俺たちの奴隷になるなら、派閥に入れてやってもいい。先輩たちも色々と便宜を図ってくれるぜ？ 留年は最悪でも避けられるだろうなあ」

「なるほど。魅力的な提案だが、奴隷とはどういう意味だろうか？」

「はあ？ そのままの意味に決まっているだろう」

「なるほど。では却下だな。王国に限らず、奴隷制は数百年前に終わりを迎えている。その提案を承諾するわけにはいかないな」

「ははは！ 聞いたか、お前ら！ これは最高に笑えるなあ！」

「ん？ ギャグは披露してないつもりだが？」

「ククク、いいよお前。いい性格してるぜ。でもな、一つ言っておく。魔術の世界は才能だ。その血が全てを決める。血統なんだよ、

血統。オーディナリ一般人にはここはお似合いじゃない。大人しく田舎に帰るんだな」

「それは無理だな。俺には義務と使命がある。それに才能は重要なファクター要因であるが、絶対条件ではないと思うが……」

「は。言ってる、雑魚。じゃあな」

そう言って彼らは去っていく。

そうして翌日から俺はこう囁かれるようになる。

ウィザード
枯れた魔術師、と。

それはダブルミーニングになっている。

魔術師を示す名詞の『ウィザード』と、枯れたという形容詞を示す『ウィザード』の意味を含めてのものだ。だが示したいのは、枯れているという点だろう。

ろくに魔術も使えない、すでに枯れている魔術師。

その蔑称を俺は背負うことになるのだった。

第8話 枯れた魔術師

「ねえ見て。あれが……」

「うん……そうだね」

「ウィザード枯れた魔術師……」

「物資変化も出来ないらしいよ?」

「まじ? いやいよ本当の落ちこぼれじゃん」

「ま、これが一般人の限界かもね。でも良く頑張ったと思うよ。ここに入学できただけでさ」

「それ、裏口って噂あるらしいよ?」

「ええ……? いやいよ本当にやばいやつじゃん」

朝。寮から歩いていると、そんな声が耳に入ってくる。

なるほど。俺もこの学院内で一端の有名人になったようだ。

そんなことを考えながら教室に向かっていると、後ろからタタタと走ってくる音が耳に入る。

「レイ!」

「む? アメリアか。おはよう。今日もいい天気だな。ほら見てみる、花が咲いている。こうして生命の息吹を見ているとなんだか世界の美しさに気がつかないか? 当たり前前の景色に楽しみを見出せる。俺はそれはとても大事だと思うんだ」

「そうね……って、そんな場合じゃないでしょ!？」

「うおっ……どうした、そんな大声を出して」

「知らないの!？」 枯れた魔術師^{ウイザード}って馬鹿にされてるんだよ!」

「もちろん耳に入っている。いやぁ……そのネーミングセンスには脱帽だな。まさかのダブルミーニングだな。きつと付けたやつは余程のセンスに溢れているに違いない。俺にはないものだ。素直に称賛だな」

「いやいや! 脱帽して、称賛してどうするの!？ 悔しくないの!？」

「どうして君がそこまで熱くなる？ 当事者でもないのに」

「だってそんな……こんな差別みたいなの……許せないじゃない……」

アメリカは下を向いて、ぼそりと呟く。

俺は今まで大人と接することが多かった。それこそ人間関係でも色々あったし、こんなものが可愛いと思えるほどの中にいたこともある。だからこそ、ただ言われるだけならどうということはないのだが……。

そうか、アメリカは正義感の強いとてもいい人間のようなのだ。

「そうだな。差別、侮蔑、軽蔑。それらは良くはないものだ。でも人間にはそのような悪性が備わっているのも真実。それは純然たる事実だ。動物だってイジメという現象があるほどだ。きつとそれは、環境的な問題で、きつと生物の宿命なのだろう。今回はその対象が俺になったというわけだ」

「そう……そうだけどさ……そんな理屈で割り切れないじゃない!」

「大丈夫だアメリカ。みんなきつと俺のことが珍しいだけだろう。それに人の噂も75日。すぐに噂も収まるさ」

「……悔しくないの?」

上目遣いでじつと射抜いてくる。そこには確かな怒りというものが見て取れた。もちろんそれは、俺に向かってではない。義憤。その一言に尽きる。正義感の強い女性だと俺は素直に感心する。

「そうだな……軽んじられるのも全く何も思わないことはないが……まあ事実だしな。今の俺にはそれほど高い魔術の技能はない。でもそれをバネに努力を重ねればいい。能力とは、才能、努力、環境の三要素によって構成されている。環境はこの学院の中にいれば十分すぎるほどだ。ならばあとは、足りない才能を努力で補えばいい。そうだろうか?」

「はあ……そうだけど……あなたって、本当に大物ね」

「ごく当たり前の思考と思うが?」

「正論だけど、普通はそんな風にはなれないわよ」

「そうか。普通とは難しいな」

その後はアメリカと並んで教室に向かったが、やはり降り注ぐ視線はそれなりに厳しいものだった。

「よ、レイ。飯行こうぜ」

「エヴィ。そうだな」

午前の授業も終了し、俺たちは学食へと向かう。

すでに何度か利用しているが、ここの学食はマジで美味い。俺が今まで食べていたものは何だったのか……というほどに美味い。流石は世界最高峰の魔術学院だ。環境的な面でのサポートもかなり充実しているようだった。

「なあレイ」

「ん？ どうした？」

学食に行き、まずは席を取った。その後、食事を窓口でもらうと俺たちは席に戻って食べ始める。そんな矢先、エヴィがそう尋ねてくる。

「あの噂だけだよ」

「ウィザード枯れた魔術師か」

「ああ。大丈夫なのか？」

「精神的な問題はない。ただ……」

「ただ？」

「物理的な暴力とかで来られると困るな」

「それは流石に……ないと思うが……暴力沙汰は最悪退学だ。枯れウィザードた魔術師とかほざいている連中にそこまでの気概はないと思っぜ？」

「そうか。それなら構わない。口で言われるだけなら、実害はないからな」

「何というか……」

「どうした？」

「お前って、大人びているというか……ちょっと同世代的な思考じゃないよな」

「うむ……そうだな……」

スプーンを置いて、思索に耽る。

確かに俺は変わっていると言われるし、同い年と思えないと言われている。その原因は分かりきっている。それは俺の育った環境にある。普通の魔術師の家庭で生まれ、魔術師になるべく育てられたわけでもない。俺が魔術を使うようになった理由は、きっとここにいる生徒と同じではない。

でもこれはある程度予想の範疇の話だった。いきなりこのような状況に放り込まれれば流石に慌てるが、俺の場合はそうではなかった。

「レイ。学院に入学する際に、注意点がある」

「何でしょうか。大佐殿」

これは極東戦役が終了した直後に、アビーさんと話した内容である。

「君の出身は、オーディナリー一般人だ」

「は。心得ております」

「戦場では家柄など関係ない。強い魔術師が生き残り、弱い魔術師が死ぬ。それだけだからだ。でもな、君が行こうとする場所は家柄が何よりも重要視される」

「なるほど……勉強になります」

「貴族連中は特にその傾向が強くてな。私も昔、苦勞した記憶がある」

「大佐が苦勞する……ですか。人間関係とは難しいものですね」

「そうだ。学院には多くの同世代の魔術師と絡むことになるだろう。だからこそ、きつとお前もまた色々と苦勞すると思うが」

「は。ご忠告、感謝いたします」

「……まあそれは案外、杞憂かもな」

彼女は前もって、俺に対して忠告をしてくれていたのだ。そのため、今回のようなケースになっても、彼女の言う通りになったな……くらいの認識しかない。

それに俺の話題もきつといつかは尽きるだろう。同じ話題をずっと続けるほど、人間は我慢強くはない。この世は有為転変。常に変化するものだからだ。

「ま、過去の話はいいさ。レイにも事情があるだろうしな」

「そういつて貰えると助かる」

「でもやばい時は言えよ？ 俺もその時は力になる」

「……ふ、俺は本当にいい学友に恵まれたようだ」

「へへ。照れるぜ。でも、当然のことだろ？ ダチが困ってたら助けることは」

「ああ。至極もってその通りだ」

二人でそう話していると、俺は視線を感じるも……それは侮蔑、軽蔑の類ではないことを悟った。何か遠目から探っているような、迷っているような視線。俺はそちらに目を向けると、立っていたのはエリサだった。

「エリサじゃないか。うむ……一緒にどうだ？」

「え……いいの？ でも二人で楽しそうに……話してるし……」

「エヴィ。いいだろう？」

「もちろんだ。俺は気にしないぜ？」

「そ、それじゃあ……お邪魔します……」

トレーを持ってゆつくりとこちらに歩いてきて、空いている席に座るエリサ。そうして彼女はニコリと微笑んでいく。

「その……二人とも……ありがとう……」

「構わない。学友との食事の時間は大切だからな」

「そうだぜ！ おっと俺は自己紹介がまだだな。エヴィ＝アームストロングだ。エヴィでいいぜ？」

「私は……エリサ＝グリフィス……です。私も……エリサで……いいよ？」

「おう。よろしくな、エリサ」

「よ、よろしく……エヴィくん……」

と、二人は握手をして自己紹介を終える。

「その……なんのお話をしていた……の？」

「ん？ ああ。俺が枯れた魔術師と呼ばれていることだ。蔑称にしても、ウィットに富んでいると思わないか？」

「え……その……いや、でも……レイくん、バカにされているんでしょう？ 私も気持ち……わかるから……その、大丈夫なの？」

「大丈夫さ。エリサも、エヴィも、俺をそんな風に思わないだろ？」

「もちろんだ！ お前は何かを秘めている。そんな感じがするからな！」

「わ、私も……！ そのレイくんはすごいと思う……全然気にしていないみたいだし……すごい！ と、って……同じことだね。あはは……」

「うむ。信頼できる仲間がいるのなら、俺はそれで十分さ」

奇しくもアビーさんの予想通りになったが、この通り俺には仲間がいる。戦場でも仲間がいたように、学院でもかけがえのない友人ができた。

まずはそれを祝福しようじゃないか。

周りの目など気にせず、俺はやるべきことを成すだけだ。この学院に來た目的を果たすためにも。

第9話 実技演習

「さて、諸君達も噂に聞いていると思うがそろそろあの時期だ」

朝一番。グレイ教諭が教壇の前で今日も明快にそう告げる。

そうしてその言葉と同時に、教室内がざわつき始める。

一体何があるのだろうか。俺はイマイチこの世界に疎いところがあるので、ピンと来ていない。

「カフカの森での実技演習。先輩に聞いている奴もいるかもしれんが、今年も例年通り行っことになった」

カフカの森、か。

それは知っている。この学院のさらに北にある広大な森である。魔物が出ることもあり、一般人は滅多に近寄らない。それに魔術師であっても、実戦経験がない者は行かないと聞いたが……そうか。そこを使つての実技演習で生徒の実力を測るということか。

ふむ……これは軍事教練に似たものと俺は認識すると、グレイ教諭の話をしっかりと聞く体勢に入る。なにぶん、この学院では遅れ

ている身だ。せめて態度くらいはしつかりとしたいものだ。

「改めて概要を説明しよう。まずこの学院では優秀な魔術師を育てることを目的としている。学院長はまあ大げさに8割の学生は大成しないと言っているが、それでも基本的な能力はこの学院の生徒ならば必要とされる。これから先、魔術剣士を目指して軍に入る者、それに研究者として大学に進む者など様々な進路が考えられる。もちろん早いうちにその目的を決めて、専門領域で努力するのも重要だ。しかしこの学院では、一年から二年の間は共通教育科目の履修が義務付けられている。今回のこれも、その一環だ」

なるほど。今回の実習は実戦に強い魔術師に有利と思うが、意外にそうではないのかもしれない。ただ軍事演習のように身体を鍛えるのではなく、心身ともに教育という観点から魔術師を育てる……ということか。

確かに学院出身の魔術師の知り合いは多いが、皆がその实力だけでなく聡明さも兼ね備えていた。その片鱗を見られたようで、俺は妙な満足感を味わっていた。

「では概要を説明する。カフカの森。それはここより北にある広大な森のことだ。知っている者も多いだろう。もちろんそこは魔物も出るうえに、下手をすればそいつに殺される危険性もある。もちろん当日は、教師と上級生によるバックアップが入るが魔物との戦闘は必須だと考えておけ。今回が初の実戦授業になるが、助けは求めるなよ？ それは成績に反映されるからな。下手をすれば留年の原因にもなりかねん」

黒板にカフカの森の全体図を描いていくグレイ教諭。

なるほど……地形自体はそれほど難しいものではないようだ。

「そして目的はカフカの森の中央にたどり着くこと。制限時間は四十八時間以内だ。それ以降は失格となる。もちろんその条件をクリアできた者は成績に反映されるし、逆もまた然り。さてここで問題となるのは、これがパーティーを組んでの実習になるということだ。一蓮托生。仲間が失敗すれば、自分も失敗する。その状況下で今回の実習に当たってもらう。そしてパーティーは四人一組。もちろんこちらで指定はしない。好きな者と組み、実習に臨め。ではあとは資料を配るので、それをしっかりと確認しておけ」

そうして前の方から資料が回ってくる。

グレイ教諭が言及したことがそのまま載っている感じだが、より詳細なことも書かれている。

ふむ……なるほど。

今回のこれはなかなか楽しいものになりそうだ。俺は勉学も好きだが、実際に身体を動かすことも決して嫌いではない。それに今回のようなケースならば、俺の魔術も役には立ちそうだ。

「では今日の授業の残りは、クラス内でパーティーを組むことに使

つていい。もちろん他のクラスを使ってもいい。これは一年全体で行われるからな。こういうところで人脈を作っておくことも、大切だ。では私はこれで失礼する……」

グレイ教諭が教室から去っていくと同時に、生徒達は一斉に立ち上がって他の人間に声をかけ始める。

それもそうだろう。より優秀な人間と組むことができれば、有利になる。それこそ自分の能力が劣っていたとしても、だ。しかし現実はその甘くないだろう。優秀な人間がわざわざ、劣っているものと組むなどとは考えにくい。きっと、全体的なパーティー構成は拮抗した実力の者になると俺は予想していた。

俺はそんな中、どうするかと思っていると目の前にエヴィのやつが現れる。

「レイ、組もうぜ」

「エヴィ。いいのか？　俺が魔術が得意ではないのは周知の事実だが」

「へへ。それくらい、俺に任せろ。でもお前は体動かすのは得意だろ？　いつも剣を使った訓練ではいい動きしてると思うぜ」

「そうか……それなら、組もうか」

「おう！」

よく見ている。そう思った。

俺はある事情により魔術がうまく使えない。それは一般人出身と
オーディナリー
かではなく、別の事情なのだが……。だからこそ、俺は全ての魔術を上手く使えないが、その他の技能は失われていない。使える魔術

もあるし、基本的な体の動き、それにその他の知識はまだ確かに残っている。

それは生き残るために、必要だったから。

剣技の訓練ではある程度抑えつつやっていたが、エヴィのやつはしっかりとした目を持っているようだ。俺はそれがなぜか妙に嬉しかった。

「さて。残りはどうする？ 枯れた魔術師ウィザードのいるパーティーはかな

り厳しいと思うが？」

「自虐はやめろよ。でもまあ……確かにレイの評判は良くないからなあ」

「ふ。言うじゃないか」

「ま、事実だしな。でも俺は信じてるぜ」

「何をだ？」

「お前はきつと何か違うつてな。俺の第六感が反応してるんだ」

「まあ……正直言つて、森や特にジャングルでの経験はある。食べられる食料から、食べられない食料。淡水の確保から、火を起こす技術もある。サバイバル関連は正直、十八番おはこだな。これも田舎の森で培った技術だ」

「おお！ やっぱりそうか！ なんかそうかな〜と思っていたんだ！ 今回の実習分かつてるだろ？ 魔術の技量だけじゃない。四十八時間もタイムリミットがあると言うことは、それなりに厳しいものになるって俺は思った。だからこそ、そう言う知識も重要と思うぜ」

「エヴィ。図体はでかいのに、なかなか繊細な思考の持ち主だな」

「へへへ、だろ？ って、図体がでかいのは余計だ！」

二人でそう話している間、俺は一人の生徒がオロオロしているのが見えた。

「エヴィ」

「なんだ？」

「エリサはどうだ？」

「おお。いいんじゃないか？　ハーフエルフの優れた魔術は当てにしたいところだな」

「では誘いに行こう」

「おうよ！」

そうして俺たちは煩雑としている教室の中を進んでいき、対面にいたエリサに声をかける。彼女はじっと座って下を向いていたが、俺の顔を見るとハッと嬉しそうな表情をするも……すぐに陰が差す。

「エリサ。一緒にどうだ？」

「あ……でも、その……嬉しいけど……私は足手まといだし……」
「大丈夫だ。それに俺は枯れた魔術師だぞ？　ウィザード 評判だけで言えば、俺が一番足手まといだろう」

「でも……レイくんは運動得意でしょう？」

「まあ人並みには」

「今回の実習には、そういう……能力もいると思うから……でも、私は一番ダメダメで……」

「エリサ」

「きゃ………！」

俺は彼女の下を向いている顔を無理やり持ち上げる。そうして両手でエリサの顔を固定すると、その美しく煌めく双眸をじっと見据えてこう告げた。

「いいかエリサ。謙虚なのは美德だ。しかし、何事も行き過ぎればそれは毒にもなる。君はもっと自分に自信を持つ方がいい。でも決して楽観的に、ポジティブになれと言っているのではない。現実的に、足元を見据えて進んで行こう。自分にできること、自分にできないことを知るんだ。そして、仲間に足りないものをサポートしてもらい、逆に君がサポートする。今回のこれは、自己と向き合う意味でもきつとエリサのためになる。だから、俺たちと一緒に頑張ろう」

「……レイくん」

その双眸に徐々に生氣が戻ってくる。

もはや、陰ってなどいない。

少しだけだが、彼女のやる気に火がついた。そんな気がした。

「へへ。レイの言う通りだ！俺もエリサのことは頼りにしてるし、サポートもする。だから一緒に行こうぜ！」

「うん……ありがとう、二人とも……」

ニコリと微笑むその姿は、誰が見てもきつと魅力的だと思うだろう。そうして3人目のメンバーを獲得して、あと一人はどうしよう

かと考えていると……まさに、青天の霹靂が訪れた。

「ローズさん！ 私たちと！」

「いいえ。ぜひ、わたくし達と！」

「いいや。俺たちといかがですか！ ローズさん！」

三大貴族筆頭のローズ家の長女、アメリカ「ローズ」。

その才能はすでに誰もが認めるところだ。アメリカがこうして引っ張りだこになるのは自明の理。だが彼女はそれをすべて断ると、ある方向に進んでいく。

「ごめんなさい。先約があるので……」

と、やってきたのはまさかの俺たち3人の方だった。

「あと一人、空いているかしら？」

「もちろんだ。君の席は初めから空いているとも」

「ふふ。レイってば、妙にやる気じゃない？」

「君がいるのは心強いからな。それに最高のメンバーが揃ったんだ。
滾るのは当然だろう？」

ニヤツと笑いかけると、彼女もまたニヤリと人の悪そうな笑みを返してくる。

そして今回の演習のパーティーメンバーが決定するのだった。

第10話 カフカの森へ

放課後。俺たちは明日のカフカの森での実技演習に向けて、作戦会議と自己紹介を兼ねて空き教室に残って話をするようになった。

「知っているかもしれないけど、アメリカ＝ローズよ。みんな、よろしくね」

まずはアメリカから自己紹介をする。

今は四人で机を囲うようにして座っている。そしてその左隣にいるエヴィが口を開く。

「俺はエヴィ＝アームストロング。レイと寮の部屋が同室だな。みんな、よろしく頼む」

その次はエリサだった。未だにモジモジとしているが、彼女はすぐに自己紹介を始めた。

「あ……えっとその……エリサ＝グリフィスです……ハーフエルフです……！　そ、その……よろしく願います！」

最後は俺の番だ。

「レイ」ホワイトだ。オーディナリー一般人出身で、魔術に関して色々と問題があるが……まあ、よろしく頼む」

全員の自己紹介が改めて終わったことにより、早速俺たちはカフカの森の攻略に関して話し合うことになった。

「それだけで……カフカの森。かなり広いわね。先輩に聞いた話だけど、例年クリアできるパーティーはかなり少ないそうよ。何よりも問題なのが、方向を狂わせる魔術が森全体に発動しているとか」「なるほど。森自体に魔術が定着しているパターンか」「ええ。そうみたい」

アメリカの話に、俺は同調した。

この世界にはその土地に魔術が定着してしまっている現象がある。それが迷宮やその他の特殊な場所を生み出しているのだ。

しかし、カフカの森は方向感覚を狂わせるか……それに加えて魔物のケアもしなければならぬし、ずっと歩くわけにも行かない。少なくとも一晩は過ぎすと仮定しても、かなりの厳しいものになりそうだ。

俺は今までの経験的にもっと過酷な場所、それこそジャングルなどでも寝ずに3日程度は活動できる自信があるが……流石に他のみんなはそうもいかないだろう。

「そうだな……まずは森の地形を把握したいが、このもらった地図だけでは把握しにくいな……。これは現地に行って実際に把握するしかないとして……皆の得意な魔術を整理しておこう」

「私は炎系なら割と得意よ」

「俺は身体強化だな！」

「私は……その……得意なのは……水とか風……かな？」

「なるほど。ちなみに俺はエヴィと同じで、身体強化系なら得意だ」

今の状態でも……と付け加えることはなかった。

何故、俺が身体強化を得意としているのか。いや、得意という形容は厳密には正しくはない。他に比べれば、まだ使える……という意味合いが正しいだろう。

というのも、外部干渉ではなく内部干渉ならば、コード理論は適用しやすいからだ。

「そうね……それなら、前衛はレイとエヴィがいかしら？ 私が遊撃で中衛で、後衛がエリサとか？」

「いや中衛は任せてほしい」

「そう？」

「ああ。この手の訓練には心得がある。状況はおそらく俺が一番的確に把握できるだろう。アメリカはエヴィと共に前衛を任せたい」

「わかったわ……でも、この手の訓練に心得があるって……あなたやっぱり……」

「まあそれは、田舎の森で色々とな」

そう言つとアメリカはすぐに話を切り替える。

「そつか……まあいいわ。レイのことは色々頼りにしてるから。

実際に剣技の訓練とか、体を動かすやつはかなり得意みたいだしね」

「おお！ アメリカも同じ意見か！　だよなあ……レイのやつ、妙に動きが様になっているというか……親父に似てるんだよなあ……」

「あら。エヴィのお父様？」

「ああ。軍人をやっているんだが、妙に雰囲気似ていてな」

「ふーん。そうなんだ……」

じつとアメリカが見つめてくる。詮索したいのはわかるが、今はスルー安定だ。俺は最後にエリサの意見を聞いてみることにした。

「エリサ。勝手に決めてしまったが、いいか？　君の意見も貴重だ」

「あ……その……私は確かにどちらかといえば、魔術の方が……いいから……前衛だと動けないし……頑張ってみんなをサポートするね……！」

「うむ。その調子だ」

「うん……！」

エリサのやつは妙にやる気になっていた。俺の発破が効いたのなら、嬉しいのだが。

「それにしても、あのローズ家の長女が来るとはな。意外過ぎるぜ……」

そついうのはエヴィだった。まあ確かに、アメリカはもつといいパーティーを選択することはできたろう。でも、わざわざ俺たちのところを選んだのはどうしてだろうか。

「私、血統とか嫌いな」

「む。そうなのか？ ローズ家は確か三大貴族筆頭なのだろう？ 誇らしくはないのか？」

「誇らしくないわけじゃないけど……その……何でもかんでも血で説明されるのは嫌なの。私は努力もして、今の私になったのに……まるで才能だけの魔術師と言われるのが、ね」

「……なるほど。貴族も色々あるようだな」

血統が嫌だ。その話は初めて聞いたが、貴族の中にはそのあまりの血統主義に嫌気が差す者もいると言うが……アメリカはどうやらそっち派だったようだ。

確かに血統主義は何よりも、その血を重んじる。つまりは……才能だ。でも俺は以前言ったように、能力とは才能、努力、環境の3つが適切に絡み合うことで発揮される、と考えている。これは師匠の言葉なのだが、それは真理だと思う。

才能だけでも足りない。努力だけでも、環境だけでも然り。

俺はそれを嫌というほど、教えられてきた。確かに血は大切だ。

でもそればかりに囚われていては前には進めない。実際のところ、世界七大魔術師もまた全員が貴族出身というわけでもないのだから。

その後は全員で改めて話し合い、解散することになった。

ということで翌日。俺たちはカフカの森の目の前に来ていた。目の前にはただ生い茂る森しか見えない。その奥を見通すことは不可能なほどに。

この演習には一年生の生徒が全員参加だが、初期位置はパーティーごとに決められていて俺たちは指定の場所に立っていた。

「うつうつうつ……緊張します……」

「大丈夫よ、エリサ。私たちがいるから」

「うつ……アメリカちゃんは優しいですね……うつ……」

「もう。元気出してほら！」

と、女性陣は二人で戯れていた。

一方の俺たち男性陣といえば……。

「レイ、緊張はしていないようだな」

「もちろんだ。むしろ久しぶりの感覚だな」

「久しぶり？」

「ま、まあ田舎出身だからな。森や山を駆け回っていたのさ」

「ふーん。そうなのか」

ここ数日。アメリカとエヴィの視線が時折厳しいものになっているのを俺は知っている。まあ確かに俺の素性は簡単に明かせない事情があるのだが、嘘をつくのもなかなか辛苦ようになってきた。師匠、俺はどうしたらいいのでしょうか……。

「……師匠」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや……何でもないさ」

空を見上げる。もう夏も近づいて来て、空がとても澄んでいる……そんな気がした。この青空のもと、俺は今日も進んでいこう。

「さて、と。二人とも準備はいい？」

「おうよ！」

「ああ。大丈夫だ、問題ない」

「うつつ……頑張る……！ 私……頑張る！」

そうして腕時計を見ると、そろそろ指定の時刻である午前6時になる。

ちなみに今回の演習で持ち込み可能なのは時計、携帯食料、水筒、あとはナイフや剣である。残りのものは現地調達になる。色々と厳しい訓練になるだろうが、俺は存分に経験を生かしたいと思う。

「それでは、始めてください」

どこからともなくそんな声が聞こえると、俺たちは一斉に駆けっていく。何も先の見えない、木々で溢れた森へとそのまま突っ込んで行くも……どうやら、俺たちのスタート位置はそれほど良くなかったらしい。

「魔物!?!」

ヒュージビィ

「巨大蜂か。みんな、隊列を組めッ!　いくぞ!」

『了解ッ!!!』

俺たちのカフカの森での戦いが、幕を上げるのだった。

第11話 初実戦

「二人とも、羽を狙うんだッ！」

「ああ！」

「わかつているわッ！」

カフカの森に入ったとほぼ同時に、巨大蜂ヒュージビーに遭遇。大きさは、個体差もあるが今回のやつは人間よりも少し大きい程度である。それに運良く一匹しかない。

いや……魔物の生態を考えると独立行動しているとは考え難い。つまりは……これは意図的に用意されたものであると推測。

おそらく生徒の力量を測りたいのだろう。学院に入学してから今までに学んできた成果を発揮しろということか……。

そうしてアメリカとエヴィは最前線で高速魔術クイックを使用しながら、果敢にその巨大蜂ヒュージビーに向かっている。だが素早い動きで飛び回る巨大蜂ヒュージビーはなかなか攻撃を当てさせてはくれない。

「エリサ」

「う……うん！」

「俺が合図したら、魔術を頼む」

「いいけど……何をしたら？」

「それは……」

俺はエリサに魔術の指定をすると、彼女はぐっと手を握って了承してくれる。微かに手は震えているものの、そこにはしっかりと意志があつた。

「……アメリカ、エヴィ！ 加勢するッ！」

声を上げると、脳内でコードを走らせる。

《ブリママテリア第一質料マテリアル＝エンコーディング＝物資コード》

《マテリアル物資コード＝ディコーディング》

《マテリアル物質コード＝プロセシング》

《インサイドエンボディメント＝内部コード》

今回のそれは、普通の魔術ではない。エヴィも言っていたが、魔術には身体強化できるものもある。これは通常の人間の動きをさらに強化してくれるもので、もちろんそれは、力そのものを高めるものもあれば、速さに特化したものもある。

俺はインサイド内部コードを使用して、今回バランスよく自らの身体能力を引き上げる。まだ完全に大丈夫というわけでもないが、それでもな

んとかやれるだろうという感覚があった。外部干渉は叶わずとも、内部にコードを適用するのなら……いけるという感覚があったからだ。

体内に流れている第一質料プリママテリアが俺の体を一気に強化すると、そのまま低い姿勢を保ちながら大地をグツと踏みしめて、駆け抜けた。

「フウッ!」

肺から一気に空気を吐き出すと、そのまま地面を思い切り蹴って飛翔。俺は縦横無尽に飛び回っている巨大蜂ヒュージビーに向かって、一閃。それは致命傷にならないものの、脚を一本斬り飛ばすことに成功。

なるほど。久しぶりだがコードの馴染みは、悪くないようだ。

「……ギイイイッ!」

と、脚を切断された巨大蜂ヒュージビーが鳴き声をあげる。

俺はそのままスタツと地面に降り立つと、さらに暴れまわる奴の動きを見極める。

「レイ。どうするの?」

「ああ。お前の指示に従うぜ？　どうやら俺の目に狂いは無かったようだな」

アメリカと、そしてエヴィがニヤツと笑ってそう言葉をかけてくる。

「とりあえずは三人で奴の進路を塞ぎつつ、攻撃を繰り返そう。羽さえ落としてしまえば、こちらの勝ちだからな。あとはあの腹部に気をつける。刺されるだけではなく、毒を振りまいてくることもある。酸性が強くて、人間の皮膚をドロドロに溶かすからな」
『了解！』

今度は三人で改めて距離を詰めて、宙を飛び回る巨大蜂ヒュージービーの攪乱していく。相手も嫌がっているのか、先ほどから動きがかなり雑になって来た。今までは攻撃も視野に入れているのがわかったが、今は逃げることで手一杯という印象だった。

そろそろか。

そう判断して、俺はエリサに向かって声を上げる。

「エリサッ！　今だッ！」

「……うんッ！！」

その刹那、ゴウツと大きな音を立てて風が吹き荒れる。エリサに

は綿密にコードを組み立てて、出来るだけ威力のある風を起こして欲しいと頼んであったのだ。

エリサが選択したのはどうやら中級魔術の暴風^{ストーム}だった。なかなか難しい魔術だが、彼女はそれを十分な威力で成功させた。

「……ギイイイイイッ！」

巨大蜂^{ヒュージビー}も流石にその中ではまともに飛ぶことはできない。

フラフラとしているところを、俺は決して逃しはしなかった。すぐさま大地を蹴って跳躍すると、そのまま勢いを殺すことなく……。

一閃。

先ほどとは異なり、縦に剣を振るうとそのまま綺麗に巨大蜂^{ヒュージビー}の脳天を切り裂く。そして、その勢いのまま回転して踵を振り下ろし、奴を地面に叩き落とした。

「……よし。こんなものだな」

ドオンッ、と音を立てて地面に落ちる巨大蜂^{ヒュージビー}。俺はそのまま重力に従って、地面に降り立つ。

どくどくと流れる体液。頭をかち割られた巨大蜂^{ヒュージビー}はすでに絶命していた。俺は持っている剣を悠然と収めると、そのまま死骸を見つ

める。

「レイ！　すごいわね！」

「ああ！　片鱗は見えていたが……ここまでとはな！」

「まあ……田舎の森で魔物とはよく出くわしたからな。この手の対応には慣れている。害虫駆除みたいなものだ」

「ふーん……田舎の森ねえ」

「ああ。さぞ危険な森だったんだろうなあ……」

ニヤニヤと笑いながら、アメリカとエヴィはそう言うてくる。

ぐ……くそ……。『田舎の森万能論』は通じないのか！？

話が違うではないか、師匠！

と、心の中で悪態をつきながら俺は死骸のそばで腰を下ろす。

「さてと。どうする？　こいつは一応食べられる部位も存在するが？」

「えええ……食べられるの、こいつ？」

「アメリカ。何事も経験だ、と言いたところだが今は携帯食料もある。それに人は別に2週間程度なら食料はなくても死ぬことはないし、水も……2、3日程度なら大丈夫だ。今回は水などは魔術で簡単に生成できるから……嫌悪感があるのなら、やめとこう。別にサバイバル訓練ではないしな。アメリカ、燃やしてもらっても？」

「わかったわ」

俺は周りの木々に火が移らないように少しか死骸の位置を動かすと、彼女の魔術によってその死骸を燃やしてもらう。

その様子を見てみると、俺の後ろにはエリサが立っていた。彼女は何かを言いたそうにモジモジとしているが、すぐに口を開いた。

「あ……その……レイくん。すごいね！……」

「ん？ いや、俺は別にいつものことだからな。でもエリサは実戦は初めてだっただろう？ 震えていたしな」

「……その……私、怖くて……あんな大きな魔物……知ってはいたけど、実際に見ると……怖くて！……でも、レイくんが教えてくれたから……」

「そうか……エリサは魔術が苦手なんだったか？」

「う、うん……」

「でも今回の魔術はすごかった。なあ、二人とも」

「ええ。すごかったわよ、エリサ」

「ああ！ 俺には真似できない芸当だな！」

アメリカ、それにエヴィのやつも同調してくれる。

俺は別に同じパーティーメンバーだから、学友だからそう言っているわけではない。実際にエリサの魔術はかなりのものだった。魔術とは時間をかければかけるほど、誰でも簡単に威力のある魔法を放つことができるわけではない。

それはコードを複雑に絡み合わせるようにして、処理の過程を行う必要があるからだ。それこそ、集中力が途切れてしまえばコード

理論は破綻する。

でもあのプレッシャーの中で、エリサはやりきったのだ。それは素直に称賛すべきことだと思ったから、俺はそう口にしたただけだった。

「あ……ありがとうみんな……」

「エリサ、少しは自信が持てたか？」

「……う、うん！　ちよつとだけど、魔術の使い方も……わかってきたかも！」

「そうか。それは素晴らしい進歩だ」

俺がニコリと彼女に微笑みかけると、エリサは真っ赤になって下を向いてしまう。

その様子を見て、俺はあることが脳内によぎった。

「どうした？　何かあったのか？　まさか！？　毒でももらったのか！？　医療班を呼ばなければ！　メディックはいないのか！？

メディイイイイックッ！！」

「だ……大丈夫だから！　違うから！」

「そうよ、レイ。エリサは嬉しくて照れてるのよ」

「……アメリカちゃん！」

「ふふ……ごめんなさいね。エリサ。でもレイはしっかり言わないとわからないみたいだから」

「そつだよな。こいつ、妙に察しが悪いところがあるよな」

「む……すまない。しかし、それならよかった。俺は本心を書いて

いるだけだからな。これから一緒に精進していこう、エリサ」
「……う、うん！」

とりあえずは第一関門であろう魔物の撃破は成功した。

しかし問題というよりも……この森の本質は魔物ではないだろう。すでに全員で話し合って共有しているが、問題なのはこの森が方向感覚を狂わせるということだ。おそらく、まっすぐ中央に向かったところで辿り着きはしない。

この森に存在している魔術自体をどうにか攻略しなければ、きつと中央にはいけないのだ。

「さて、とりあえずは進もうか」

「そうね」

「ああ」

「う……うん！」

俺たち四人は改めて歩みを進める。

微かに光が差すものの、木々の影で暗くなっている不気味な森の中を……真っ直ぐと。

第12話 探索と異変

左腕の時計を見る。

現在の時刻は午前九時。この演習の開始時刻は午前六時だったの
で、三時間ほど経過したというわけだ。

俺たちは森の中をそれだけの時間進んでいくも、全く進んでなど
いなかった。

「見る。さっき傷をつけた木だ」

「本当ね」

「うお、まじか。まっすぐ歩いているように思えたが」

「……す、すごいね……本当に森全体に魔術が……」

俺たちは木に目印としてナイフでわかりやすいように傷をつけて
いた。そうしてまっすぐ進んでいるつもりが、同じところに戻って
きてしまっていた。

俺は改めて地図を広げる。

「ふむ……」

「何か分かるの？ レイ」

「いや。完全に座標は不明だ。現在の場所も、どちらに進めばいい

かも不明。だが一つだけはっきりしていることがある」

「それは？」

「魔術の影響を俺たち全員が受けているということだ。すなわち、この森にはコード理論が働いている……だが第一質料は無限ではない」

「ああ。ということは、この攪乱の魔術もずっと継続しているわけではないってことね」

「そうだ。永久機関はまだ成し遂げられていない難問の一つだ。もちろん、エインズワースがコード接続コネクという理論を発表しているが……」

「でもそれは……まだ仮説だった……よね？」

「流石にエリサは知っているか」

「うん……エインズワースの論文には……目を通すようにしてるから……」

「なるほど。さて、話を戻そうか。問題は今は魔術が行使されている時間帯ということだ。つまりなすべきことは……休憩だな」

そう結論づけて俺たちは休憩をすることにした。

初めに巨大蜂ヒュージビーと戦闘をしてそのまま歩きっぱなしだったのだ。俺はその仮説を言う前から、休憩は提案しておこうと思っていた。

俺は慣れているし、アメリカにエヴィはまだ得意そうだが、やはりエリサには少しきついようだ。

そうして俺たちは持参している水筒から水分補給をするのだった。

「ふむ……ここからどうするか」

敢えて独り言を呟いて、思考を整理する。はっきり言えばこの魔術を解除する方法はある。それもごく簡単な方法によって。でもそれはダメだ。俺たちは今はパーティーで行動しているし、そんな抜け道のようなことをするわけにもいかない。

それに俺の身体が保つかどうか、と言う問題もあるしな。

「レイくん……」

「エリサか。そう言えば、大丈夫か？」

「その……ありがとう」

「どうしてだ？」

「私に気を使ってくれたんでしょ？」

「わかっていたか。聡明だな、君は。でもわかってほしい。謝ったりはしないでくれ」

「……やっぱり分かる？」

「ああ。俺と、それにみんなに謝罪をしようとしたのだろう？」

「そうだけ……」

「気にやむことはない。もともと休憩は適宜入れていく予定だった」

「でも……私じゃなかったら、もっと早く!……」

「急がば回れ、と言うだろ。あれはある種の真理だ。何事も急いでいてばかりでは仕方がない。こうして腰を落ち着けるのも、思考が整理できていいものだ」

「そっか……そうだね。ありがとう、レイくん……」

「礼には及ばない。エリサの力になれたのなら、嬉しい限りだ」

そうして全員で改めて今後の方針を立てて歩き始める。

しかし俺にはある懸念があった。もちろんそれはすぐに、歩きながら共有する。

「思えばこの実習だが……」

「どうかしたの？」

「他のパーティーと出くわした場合、協力はあるのか？」

「……別に違反とも記述されていないし……いいんじゃない？」

アメリアが反応し、次にエヴィがボソリと呟く。

「あ……そうか」

「わかったか、エヴィ」

「ああ。と言うことは妨害もありと言うことだな？」

「そう言うことだ。俺としてはそろそろ接触してもおかしくはないと思っている。この時間帯、おそらくほぼ全てのパーティーが彷徨っていることだろう。もしかすると、これもまたこの実習にも含まれるのかもしれない」

俺はなにぶん、嫌われている。そして俺とよくつるんでいるエヴィやエリサもいい目では見られていないことは知っていた。

アメリアはそうでもなかったが、俺たちのパーティーに加わる際に不快に思った生徒もいたことだろう。

なぜ三大貴族筆頭のアメリアが、枯れた魔術師のパーティーに加わるのかと。だからこそ、どこかのパーティーと出会った時には少

し軋轢を生むかもしれない。

「む、あれは？……」

スパイダー
「蜘蛛ね」

「でも数が多いと言うか、どこかに向かっているのか？」

「うん……なんか急いでいるみたい……」

感じる。これは特有の感覚だ。別に魔術的な知覚でもなければ、何か証拠があるわけでもない。でもこれは確かに……何かまずいことが進行していると直感が告げていた。

「すまないッ！ 先に行くッ！」

「ちょ、どうしたの！？」

「後から追いついてくれッ！」

俺はそう告げると、すでに幾度となく発動した身体強化の魔術を体に重ねるようにして発動。そうしてそのままその蜘蛛スパイダーの群れを追いかけるようにして、大地を駆けるのだった。

地面に対してやや垂直にするように剣を滑らしていく。そうして地面に大量に発生している蜘蛛スパイダーの群れを切り裂いていくも、それは殲滅を目的とした行動ではない。

この先にはきつと何かある。

そんな予感から俺は蜘蛛スパイダーの後を追いかけるようにして、駆け抜けていく。木々を躲し、スピードを殺すことなく進んでいくと……見えた。

「ひひひひひひッ！」

「こっちに来ないでよ！」

「い、いやああああああッ！！！」

「く、くそッ！ どうなつてやがるッ！！？」

そこには四人の生徒がいた。中には見知った顔……そう、ミスター・アリウムもいたのだ。全員が隅に追いやられていて、完全にパニック状態だった。

しかし無理もないだろう。いくら小さい魔物とはいえ、これだけの蜘蛛スパイダーがいるのだ。それにすでに糸に捕らわれているのか、それを懸命に剥がすことに魔術を使っている。

今先頭に立つて戦っているのは、ミスター・アリウムただ一人。

でもそれはすぐに決壊してしまいそうだと俺は理解していた。

「助太刀するッ！！！」

「な！？ 枯れた魔術師だと！？」

俺はざっと全体の総数を把握する。およそ百に近い数だが……
これだけ纏まっているのなら、殲滅するのはこの剣一本でも容易い。

ここまで来た時には主に移動するために身体強化をしていたが、俺は魔術領域に慣性制御のコードを加えると、そのまま一気にコード理論を走らせる。

「……まずは十、だな」

駆け抜ける。それと同時に、俺の過ぎ去った後には死骸の山が出来る上がつていた。

「……え？」

呆然とする声が聞こえるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。俺はそのまま慣性によって流されることなく直角に曲がると、さらに一閃。そうして薙いだ剣の動きの慣性も制御すると、俺は次々と連続攻撃を重ねていく。

スパイダー
蜘蛛たちも俺に注目しているのか、一気に飛びかかってくる。しかしそれはこちらの思うツボだった。

「これで、五十……」

さらにその柔らかい体を切り裂くと、間髪入れずに移動して斬る。そうしてそれから一分ほどした頃だろうか、俺は全ての蜘蛛を殺し尽くしていた。

「大丈夫だろうか。ミスター・アリウム」

体液がべつとりとついた剣をヒュツと振るうと、それを全て地面に払い落とす。そこからゆっくりと剣を収めると、俺はそう話しかけた。

彼は呆然としていたようで、まだピンと来ていないようだった。

「お、俺一人でもどうにか出来たんだ!!」

「そうだったのか？ 何か秘策が？」

「あ……ああそうだ！ お前に出来て、俺に出来ないわけがない！」

「そうか。それは失礼したな……む？」

すると、目の前にいたミスター・アリウムだけではなく他の生徒の姿も、まるで霧がかかっていくようにして消えていく。

これが本当に実習として用意されたものなのか。

それにしても、やりすぎではないだろうか……正直言って、俺の助太刀がなければ一人くらいは奴らの餌になっていたと思うが……。

それにあの霧は……。

「レイ！」

「おい！ 早すぎるだろー！！」

後ろを振り向くと、アメリカとエヴィが大声をあげていた。そのさらに後ろからは、懸命にエリサがついて来ていた。

俺は釈然としないまま、みんなと合流するのだった。

第13話 終着

「うわっ！ 何この死骸の山！」

「うげえ……これはちよつとすごいな……」

「うつつ……これは……ちよつと……」

後から追いついて来た三人。妙に気持ち悪がっているが……？

ああそうかと、得心した。地面を見ると、そこには無残にも転がっている蜘蛛スパイダーの死骸。バラバラになった体とそれに体液が飛び散っている状態。確かにこれは慣れていなければ、気分を害してしまうだろう。

「レイ、一人で全部やったの？」

「ああそうだが……」

「どうかしたの？ 浮かない表情かおしてるけど」

「先ほど、ミスター・アリウムたちのパーティーが襲スパイダーわれていたんだ。この蜘蛛たちに」

「え……本当に？」

「ああ。助太刀したのだが、妙な霧が出てきていなくなっちゃった」

「それがこの森の魔術の一種なのかもね」

「……しかし解せない。あの蜘蛛スパイダーの量はおかしい。この演習は教員によって管理されているはずだ。生態系のコントロールもある程度

なされているとみてもいいだろう。だがアレは明らかにやりすぎだ。正直言つて、一人くらいはこいつらの餌になっけていてもおかしくはなかった」

「……この演習、何かあるのかしら」

「……そうかもしれない」

考察を重ねる。

俺は先ほど自分でも言及したように、あれは学生の手には余ると感じた。それは蜘蛛スパイダーの群れが移動をしている時から感じていた直感のようなもの。奇しくもそれは的中したのだが、どうしてこんなことをするのだろうか。

生態系が少し狂ってしまい、想定外の出来事……ということならばいいのだが……果たして杞憂で終わるかどうかが。

「レイくん……」

「エリサどうした？」

一人でそう考え込んでいると、エリサが近寄ってくる。ちなみに今はエヴィが死骸を中央に集めて、アメリカがそれを処理することになっている。

「その服……」

「ああ。すまない。気持ちのいいものではないな」

俺の服には少しだけだが、蜘蛛の体液が付着していた。エリサはそれをじつと見つめると、魔術を行使する。

「おお！ 付着した液体だけを発散したのか！」

「う……うん。うまくできたなら……いいけど」

「いや本当に助かる。エリサは細かい魔術が得意なようだな。というよりも、コードの扱いが上手いようだな」

「そう……かな？」

「ああ。今まではきつと、コードの処理に脳が追いついてなかったのだろう」

「なるほど……レイくんは……やっぱり博識だね」

「ふ、勉学は嫌いではないからな」

今は嫌いではない、が。俺は一時期嫌いになっていたこともあった。それもこれも、師匠による教育のせいなのだが……まあ今となつてはいい思い出だ。

「レイ。終わったわよ」

「ふう……なかなか疲れたな」

「すまない。処理を任せて」

「戦闘の後で疲れてるでしょ？ それくらいは任せてよ」

「おう！ 助け合い、だろ？」

「ああ。その通りだな。ありがとう」

まだ出会って一ヶ月と少ししか経過していないというのに。俺はこんなにも良い仲間に出会えてよかった。そう思うと同時に、やはり心のどこかで考えてしまう。

自分の過去、そしてそれを隠しつつ過ごす日々。そろそろ師匠の『田舎の森万能論』も怪しくなってきた頃だしな。

しかし、本当のことを話しても……いいのだろうか。

迷い。焦燥。それらが少しだけ、脳内をよぎる。

決して、今彼らと接している俺は虚像ではない、だがいつか現実と向き合う必要がある。

そんな予感がしていた。

俺たちはそれからも進み続けた。

出て来る魔物を倒しつつ、彷徨わないように森の魔術の周期を考
えながら。俺たちは気がついたのだが、三時間程度に一度この森の
第一質料が薄くなる時間帯がある。
プリママテリア

おそらくそれが、この森の魔術が弱まっている時間だ。その時間
を縫うようにして、俺たちは確実に前に進んでいた。もちろん途中
で休憩を挟みながら。

「今日はここで休もう。睡眠時間は……六時間ほどにしよう」

現在は一日目の夜零時。演習開始から十八時間が経過。睡眠の六時間を加えると、ちょうど残るのが丸一日。あとはこの時間でクリアしなければならぬ。もちろん、睡眠を取らずに進むことも可能だろう。みんなも無茶をしそうな雰囲気は漂っていた。

でも疲労、それに睡眠不足というのは馬鹿にならない。

身体能力の低下ももちろんだが、何よりも魔術行使が困難になるのが問題だ。魔術とは脳の中でも主に前頭葉を使ってもたらず現象だ。その場所のことを魔術領域^{パーヒート}というのだが、無理をし過ぎれば魔術領域暴走^{オーバート}が起きてしまう。だからこそ、入念な休息は何よりも大切なのだ。

「外で寝るなんて、初めてだわ……」

「俺は経験あるけどな！ まあその時はテントがあつたが……」

「わ、私も……」

「すまないが、今からその手のものを作るのは困難だ。草を下に敷いて横になるのがいいたろう。汚れなどは……仕方がないと割り切ってもらうしかないな」

「レイはやっぱり慣れているわね」

「ああ。外で寝ることは多かったからな」

「ふーん。そうなの」

アメリカはそう淡々と告げるも、やはり俺のことを怪しいと思っているようだった。

でもそれはそうだ。一般人出身で魔術がうまく使えないのは分か

オーディナリー

るが、戦闘技能に関しては普通の魔術師よりも上、というのは妙にちぐはぐだと思うだろう。そんな時、俺は師匠の言葉を思い出していた。

「レイ。お前はこれから学生になる」

「はい」

「だが氷剣の魔術師であることを絶対に隠し通せと言いはしない」

「でもバレると問題なのでは……？」

「そんなものは魔術協会の都合だ。七大魔術師は素性をオープンにしている者もいるからな。でもお前の場合は事情が特殊だ。それに学院というのは意外と閉鎖的な空間でな。噂の類はすぐに広まる。

学院生活を謳歌したいのなら、四年間は隠すことに努めた方がいいだろう。しかし私もお前もすでに軍人ではないしな、別に何をするのも自由だ……ただ、それは一応肝に銘じておいてくれ」

「は。了解しました！」

「だがな、本当に心から信頼できる仲間ができたのなら……打ち明けてもいいかもな。お前の過去も、語るべき時が来るかもしれない」

「……」
「忌まわしい記憶だ。私にとっても、お前にとっても。だが人は一人では生きてはいけない。必ず人と交わることになる。だからこそ、信頼できる人間には誠実であれ、レイ」

「……師匠。貴重なお言葉、ありがとうございます」

入学前に俺はこんなやり取りをした。当時はただ、言葉の意味を表面的に理解していただけだった。でも入学して一ヶ月で既に、俺には信頼できると思える仲間ができた。

俺はどうするべきなのでしょう、師匠。

そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「ヤベエ……つれえ……」

「う……うう……足が……」

朝起きて、俺たちは再び歩を進める。容赦ない日差しが差し込み、体から水分を奪っていく。それをなんとか水分補給と休憩で補いながら進むも、そろそろ俺以外のメンバーの疲労がピークに近づいてきた。

睡眠時間をもっと取るべきだったか？　しかしあれ以上はギリギリになる可能性もあった……判断を誤ったか？

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「エリサ、腕をかせ」

「え、でも……」

「俺がサポートする」

この中でも一番危ういのはエリサだった。だからこそ俺は、後方へ戻りエリサに自分の肩を貸す。

「密着することになるので、申し訳ないが」

「うっん……全然構わないよ。でも……その……ありがとう」

「ああ。助け合いの精神は大事だからな」

そんな様子を、エヴィとアメリアも見ていたが二人が文句を言うことはなかった。エヴィはぐつと親指を立ててニカツと笑い、アメリアは優しそうな表情で微笑む。

みんなわかっているのだ。俺たちパーティーがどうするべきか、と言うことを。それにエリサには魔術関連のサポートをよくしてもらった。水の生成や、その他にも魔物と対峙する時には彼女の魔術が役に立った。おそらく魔術の使用回数で言うならば、エリサが最も多い。

肉体的な疲労だけでなく、精神的な意味でも疲労しているのは間違いないかった。

そして、その魔術でのサポートは今の俺には決してできないことだ。だからこそ、その恩に報いる時だろう。

「あー！」

「おい見ろよ、レイ！ あれって……」

「ああ。間違いないな」

「うん……やつと……」

そこは森の中央だった。丁寧に目印も置いてある。それにグレイ教諭とライト教官の姿もチラリと見えた。あそこが終着点なのだろう。

「おっしやああああ！」

と、疲れはどこに行ったのかエヴィが走っていく。アメリカもそれに続き、俺とエリサは二人三脚のような形で進んでいくが……俺は感じ取った。

これは……魔術の気配だ。

「エヴィッ！ アメリカッ！ 止まれッ！！ 遅延魔術だッ！」
デイレイ

「おっと……」

「え……！？」

忠告が間に合ったのか、エヴィとアメリカはその場にピタッと止まる。

「エリサ、少し待っていてくれ」

「う、うん……」

俺はエリサをその場に下ろすと、近くにある石を拾って目の前にヒョイと投げた。すると……。

「うおっ……」

「きゃっ……」

瞬間、衝撃に反応したのか遅延魔術デイレイが発動。地面から鳥かこのようなものが出現した。

「やはりか……なかなか性格の悪いトラップだ」

「レイ、よく気がついたな」

「ええ。本当にそうね」

「第一質料に淀みがあったからな。あれは遅延魔術デイレイ特有のものだ。
さて、行こうじゃないか」

俺はエリサを担ぐと、そのまま全員でたどり着いた。

「おめでとう。お前たちが一番乗りだ」

「うんうん。今年の生徒は優秀だね。歴代最速じゃない？」

そこにはグレイ教諭とライト教官がいて、そう言ってくる。

時刻は……現在、十七時半か。と言うことは、四十一時間程度かかったのか。

「おお！ やったなみんな！ 一番乗りだぜ！」

「ええ！」

「うん……！」

「ああ。みんなで協力した成果だ」

色々あったが、俺たちはトップという形で実技演習を終えるのだった。

第14話 環境調査部へ行く！

実技演習の翌日。俺たちのパーティーはトップで通過したということ、割と話題になっていたのだが……やはりその評価はアメリカに向かっていた。

「はあ……もう嫌になるわ」

「お疲れだな」

「ええ……」

現在、俺、アメリカ、エヴィ、エリサの四人で学食で食事をとっている。アメリカも貴族との付き合いに疲れたとのことで、俺たちのところに来たらしい。

「だって、流石ローズ様！　しか言われないんだもの。みんなの協力でクリアできたのに、なんだか嫌になっちゃう」

「まあ……言わせておけばいいさ。俺たちの功績は、俺たちで知っていていればいい。だろ？」

「そうだぜ！　俺も別に色々と言われるのは慣れてるからな！　主に、レイのおかげでな！」

「ははは……それは、違いないなエヴィ」

「ふふ、だろ？」

「わ……私も……みんなでクリアできたのが……嬉しかったし……私も役に立ってるって……わかって、嬉しかった……！」

「ああゝ。もう、エリサってば本当に可愛いわね」
「うわっー!!」

隣に座っているエリサに思い切り抱きつくアメリカ。

ストレスでも溜まっているのだろう。貴族間のやり取りは知らないが、きっとアメリカにとって良いものではないということだけはよく分かった。

俺たちはそのまま、束の間の休息を楽しむのであった。

「ふっ……ふっ……レイ、本当にいいのか？」
「ああ。今が頃合いだろう……ふっ……ふんっ！」
「そうか……ふっ……ふっ……」

夜。俺たちは寮の一室で互いに声をあげながら会話をしていた。もちろん、ボクサーパンツを履いているだけであとは何も着ていない。こんなぼろの状態で何をしているのか……それは……。

筋トレだ。

筋肉を信じ、筋肉を崇めよ、さすれば救われん。

これこそが師匠の教えの一つでもある。今は衰えたが、当時は師

匠も女性にしては異常なほどの筋肉を蓄えていた。俺はその教えを、こうして学生になった今でも実践している。

そうして俺はあることのために、こうして自らの筋肉を鍛えていた。

「いろいろと見て回ったんだろ？」

「ああ。でもやはり、選ぶなら……環境調査部と園芸部だな」

「……意外な組み合わせだが、俺はいいと思うぜ」

二人での合同筋トレを終了し、今はほぼ裸のままプロテインを補充する。筋肉には何よりもプロテインだ。

ちなみに今している話は、部活動である。

アーノルド魔術学院に限らず、魔術学院には部活動が存在している。俺はそんなことは全く知らなかったが、強制ではないものの、入学してから多くの学生は部活動に精を出すのだという。それは娯楽目的から実用的なものまで、様々だ。

俺はこの約二ヶ月間は部活動の様子を見に、放課後の時間を使ったりしていた。あまりいい顔をされないこともあったが、こうして俺は決めたのだ。自分が何部に所属するのかを。

掛け持ちは許されているので、数ある中でも環境調査部と園芸部に決定した。

「俺は普通に入部できたが、レイは苦勞するかもな」
「任せておけ。俺はこれでも……これを持っている」

スツと近くの机から取り出すのは、とあるカード。一見すれば普通のカードだが、それは見るものが見ればわかる代物だ。

「は！？ まじかよ！」

「ああ。実は一年前に取得してな」

「……はは。そりゃあすげえな。きつと部長も喜ぶと思うが、それは後にとっておくといいぜ」

「どうしてだ？」

「その方が面白いだろう？」

「ふふ、だな」

互いにニヤリと微笑む。

そうして俺たちはすぐに眠りにつく。筋肉にとって休息は大事だ。夜更かしなど、もつてのほかだからな。

「さてレイ。俺はお前を紹介しない」

「ああそれはわかつている」

「自分の力で切り開く、だろ？」

「俺がいい始めたことだからな。一般人、オーディナリー枯れた魔術師。ウィザードその先入

観を拭うためにも、俺は自分で切り開くさ」

「じゃ、部室で待ってるな」

「了解した」

放課後。

エヴィとそう話して、俺は彼の背中を見送った。

「よし……行くか」

環境調査部に入るには、いろいろとクリアすべきことがある。それに人間同士の付き合いになるのだ。悪い関係は育みたくはない。だからこそ、俺は積んで来た。エヴィと共にこの二ヶ月の間……な。

「ふふ……俺の大胸筋も笑っているようだな」

と、自分の大胸筋を触りながら俺は部室へと向かうのだった。

「……頼もっツ！」

そう言って、コンコンと扉をノックする。部室がある棟にやって来て、俺は『環境調査部』と書かれている部屋の扉の前に立っている。

る。

「……誰だ？」扉を開いて男が尋ねる。

「レイリ ホワイトと申します」

「……例の一般人か。オーディナリで、何の用だ？」

「入部希望であります。部長」

「ほう……俺の顔は知っているようだな」

「は。入るからにはある程度のリサーチはしているので」

「……いいだろう。話は聞いてやる」

「失礼します」

その場で礼をすると、俺は室内に案内される。

中にはホワイトボードと、それに各部員が使っているらしきロッカーが存在した。

そして中には部員がいた。数はそれほど多くはない。エヴィ、部長も含めて七人。俺を含めれば八人がこの場にいることになる。

「さてお前ら、入部希望者だ。こんな時期に……な」

そう部長が告げると、一人を除いて鋭い目つきで俺を見てくる。

そこにいるのは筋骨隆々の屈強な男たちだ。

環境調査部。それは森、山、川、果ては氷河地帯まで冒険をする部活動だ。あらゆる環境を調査するという目的を果たすために、彼、

彼女らは日夜環境と戦っている。そうして環境調査をする者のことを総称して、ハンターという。卒業後にはハンターを目指す者もあり、この部活はそういう人間の集まりである。

ちなみに補足だが、今は女子部員はいないらしい。

「ほう……」

「細いようだな」

オーディナリー

「一般人を考慮しなくても、このバルクはちよつとね……」

「確かに線が細いな……」

と、部員たちにはそんな反応をされる。もちろんエヴィは何の反応もしない。

「さて、脱げ。まずはそれで見極めようじゃないか」

黒髪で刈り上げている一番身長が高く、一番筋肉が厚い生徒。それが部長だった。現在は四年生らしく、ゴールド金級のハンターライセンス免許を持っているらしい。つまりは、ゴールド金級ハンター。魔術師の階級と同じで、ハンターもまた階級に分かれている。

その中でもトップのハンターは日夜この世界を駆け回っていると…… なんとか。

「了解しました」

俺は脱げ、と言われるのは知っていた。それはエヴィがすでに経験していたからだ。だからこそ、俺は全身の筋肉を鍛えていたのだ。

俺は躊躇などなく、ボクサーパンツ以外の全てをその場に脱ぎ去った。

そして自身の身体を見せつける。この筋肉で覆われた圧倒的なボディを。

「……な!？」

「何だ、あのバルクは……!？」

「でかいッ! 着痩せするタイプだったのかッ!?!？」

「ほう……なるほど」

部長は驚きの声を上げずに、ただじつと俺を見つめていた。

「レイといったな……」

「はい。部長」

「いい筋肉だ。大胸筋、上腕二頭筋、大腿筋^{だいたいきん}、僧帽筋^{そうぼうきん}、バランスが
いいが……貴様、やっている側だな？」

「……わかりますか？」

「俺を誰だと思っている。ゴールドハンターだぞ? それは実用的な筋肉だ。決して魅せるためではない。実際に体を動かして身につけた筋肉も含まれているな」

「流石ですね。脱帽です……実は、私の実家はドグマの森の近くで

して。よくそこを駆け回っていたのです」

ニヤリと笑うと、さらに他の部員が反応する。

「なあ……！？ ドグマの森……だと？」

「難易度指定、S級の森だよな！？」

「な……なるほど……それで、あのバルクなのかッ……！」

そうして部長もまた、ニヤリと笑ってこう告げる。

「いいだろう。第一次試験は合格だ。あとは……実技を見ようではないか」

「は。了解しました！」

「今日は全員でカフカの森に向かう。全員、準備をしろ」
『了解！』

ということで俺たちはカフカの森に向かうことになった。

八人でカフカの森にやってきた。もちろん俺はまだエヴィとは話をしていない。合格のその瞬間まで、喜びは分かち合わない約束だからだ。

「レイ」

「はい部長」

「あれを見る」

ヒュージスネーク

「……巨大蛇ですね。危険度、B級の」

「あれを処理しろ」

「一人で、ですか？」

「そうだ。それくらいの実力はいる。今年はエヴィしい奴がいなかったからな。お前には期待しているぞ？ そのバルクが偽物でないことを示せ」

「……御意」

俺はすぐに内部コードを体に走らせると、そのまま一気に距離を詰める。持ってきているのはブロードソード。一般的な剣の一種だ。そして俺は巨大蛇に感知される前に駆け抜けて……一閃。

その首を薙いだ。

だがこれで終わりではない。俺はすぐに刎ねた頭を潰すと、そのまま残った胴体の処理に移る。巨大蛇の特徴は、頭を落としても動き続けることだ。そのため、油断したハンターがその残った胴体に絞め殺されることもある。

「よし……これでいいでしょうか？」

すぐに胴体も串刺しにして、その処理を終える。

頭と胴体。適切な処理をできた俺は自負する。

「ほう……なるほど。ドグマの森での経験は本当のようだな」

「はい。そしてここで、皆さんに差し入れがございます」

「何だそれは？」

「エインズワース式、秘伝のタレです」

俺はニヤリと笑うと、そのまま他の部員に火を起こしてもらってすぐに調理に入る。胴体の一部をナイフで掻っ捌くと、皮を剥いで、分厚い身の部分を取り出す。それを八人分用意して、そのまま蒲焼の状態にして串に刺して焼いていく。

その際に使用するのがエインズワースの秘伝のタレだ。

師匠は料理はできない。が、こういった調味料を生み出すのは天才的だった。俺が調理して、師匠が調味料を提供する。その経験がこうして生きているのだ。

「出来上がりました」

「ほう……」

「おお！」

「すげえ！ めっちゃうまそうだ！！」

全員共に、ハンターの端くれ。こうして蛇を食べることに抵抗などないようだった。

「む……！」

「う……うまい……！」

「何だこれは……ッ！？ 悪魔的だぞッ……！！？」

その反応は予想した通りだった。

「レイ」

「はい部長」

「貴様、もしかして……持っているな？」

「流石の慧眼。実は私も……」

そうしてポケットから取り出すのは、ゴールドの……ハンター^{ライ}免許^{センス}だった。

「なあ……！！？」

「部長と同じ、ゴールド……だと！？」

「まさか！？ 一般人が^{オーディナリ}ゴールドだと！？ しかし、それだと得心がいく……このスキルは只者じゃないッ！ こいつには確かな凄みが……あるッ……！」

ニヤリと笑うと、部長もまたニヤリとほほ笑い返してくる。

「そうか。レイもまた、あの課程をクリアしたのか」

「はい。中々に過酷でした」

「俺がゴールドになったのは去年だ。お前はいつ取ったんだ？」

「私も去年です」

「……逸材、だな。ここまでくれば、文句はないな。なあ、そうだろう……お前たち！」

部長が声を上げると、蛇の蒲焼を食べているみんなが声を上げる。

「もちろんだ！」

「ああ！ オーディナリ一般人なんか関係ない！」

「そうだ！ オーディナリそもそもうちの部には貴族もないからな！ それこそ、一般人なんて関係ないぜ！」

「レイ……だったな？ よろしく頼むぜ！！」

どうやら俺は入部を許可されたらしい。

「ふ……お前がこの環境調査部の柱になれ」

「は。謹んで、お受けいたします……」

恭しく礼をして、ちらつと見るとエヴィもまたグツと親指を立てていた。

とりあえず、環境調査部には入部できそうだった。

さて次は女性の花園である……園芸部に向かおうか。

第15話 園芸部へ行こう！

「頼もう！」

その声とは裏腹に、優しくコンコンとドアをノックする。

今回の場所には『園芸部』と書かれている。俺は以前から園芸には興味があった。園芸部とは植物を愛で、育てることを目的とした部活だ。しかしここは男子禁制と言わんばかりに、女子ばかり。別にそういった規約はないのだが、自然とそうなっているらしい。

特に園芸部にはあの人がいる。

それはレベツカ先輩だ。

色々と極秘の調査を独自にしてみると、どうやらレベツカ先輩は同性から人気が高いらしい。そのため、彼女を囲うようにして出来ているのが今の園芸部。

別名、花園だ。

そこに近寄る男子などはいない。

でも俺は入部したかった。昔から俺は植物、特に花には興味があった。まだ勉強不足なため、知識はそれほどない。でもそれはこれからしっかりと学んでいきたいと思っている。

男子でも入部できないことはない。

俺はこの学院に来たからには自分のやりたいことを徹底してやりたいと思っている。極東戦役を経験し、そして退役して学生になったからこそ……できることがあるのだから。

「あら？ レイさんですか？ 私に用事ですか？」

「いえ。入部希望です」

「えっと……その、園芸にご興味が？」

「はい」

「そうですか……まずはお話を聞きましょう」

「失礼します」

レベツカ先輩の後を追うようにして、室内に入る。

中には様々な植物が置いてあった。花ももちろんだが、見たことのない植物もある。あれは確か……食虫植物だったか？ なるほど……非常に興味深いな。

「ではそちらに、どうぞ」

「は。失礼します」

もちろん、中にいる女子生徒の視線はきついものだった。

なんだこいつは？ と言わんばかりの視線だ。

「それで、入部希望なのですか？」

「はい」

「園芸にご興味があるとか」

「そうですね。私はこうして懸命に生きている植物に関心があるのです。たとえどれほどひどい環境であつても……それこそ、戦場であつても一輪の花は存在します。私はその儂げな存在に心を打たれ、この学院では園芸部員として活動したいと考えております」

「男子部員はいませんが……大丈夫なのですか？」

「は。女子生徒の方々とコミュニケーションを取るのには苦ではありません」

「そうですね……みなさんはどうですか？」

「私は反対です……！」

パンツ、と机を叩いて立ち上がったのは一人の女子生徒だった。

茶髪のショートヘアでいかにも活発そうな人だった。

「どうせこいつはレベツカ様が目的に決まっています」

「む……それは勘違いです。えっと……お名前は？」

「ディーナ＝セラ。三年よ」

「セラ先輩。改めて、私はレベツカ先輩を暗殺し、部長の座を頂くつもりなど毛頭ありません。部長に叛逆をなすなど、もつてのほかです。一新兵として、活動する所存であります」

「は？ 暗殺？ 部長の座？」

「目的の話ですが……？」

キョトンとしているので、俺はすぐに返答をする。

「んなわけないでしょ！ 常識でものを語りなさい！」

「なるほど……暗殺は常識ではないと……勉強になります……」

「ふん。で、あんた。園芸は知っているの？」

「いえ。まだ浅学ですが……一応、ある程度の知識は」

「言ってみなさい」

「は。まずは道具ですね。花苗に培養土にプランター。あとは薬剤、肥料など……それと、スコップ、手袋、ジョウロなどがあると便利だと書物で学びました。私としては、マーガレットが好きなのですがまだ季節ではないですよ。いやあ……早く秋になってほしいものですねえ……」

「ふん……ふん。ま、勉強はしているようだけど……私は仮入部で様子を見るべきだと思います！」

そういうと、他の女子生徒もウンウンと唸っている。

「そうですね。では、レイさんの件はディーナさんにお任せしても？」

「え！？ 私ですか？」

「はい。あなたの一存にいたします。彼が相応しくないと思っのなら、入部を拒否しても構いません」

「わかりました。ふん。どうせ数日で化けの皮が剥がれるに決まっているわ」

「……よろしく願いいたします、セラ先輩」

「ふん……」

ブイツと横を向かれてしまう。

なるほど、これが花園……か。

男には厳しい世界。しかし俺には目的がある。あの戦場で見た花

を、自分でも育ててみたい。だからこそ、頑張ろう。そう改めて誓うのだった。

「おはようございます！ セラ先輩！」

「ふん……いい心がけね。集合十分前に来るなんて」

「しかし先輩の方が早いようで。申し訳ありません」

「ふん。別に……オーディナリ一般人に気を使っているわけじゃないわ。勘違いしないでよね！」

「は。勘違いはしません」

「……なんか調子狂うのよね、あんた。ま、いいわ。これから一週間、朝と放課後にここを耕しなさい。いいこと、ちゃんと見に来るからね」

「ここを、ですか？」

「そうよ」

「なるほど。新しい庭を作ろうと計画中なのですね」

「新しくスペースを学院から貰ったからね。でも雑草は生えているし、まだ土も整っていないし、まだまだね。そこであなたに一週間以内で仕上げてほしいの」

「得心がきました。これが入部試験、ですね」

「ええ。でも一人でやるのよ？ 道具とかは借りてもいいけど」

「は。了解しました！」

「じゃ、頑張つてね」

最後に去り際に、「どうせ、できるわけないわ」と聞こえた。

なるほど。ならばそれを覆させてもらおうか。

フハハ！

DAY 1

「まずは雑草を抜くか」

一日目。俺は雑草を抜くことから始めた。こればかりは魔術ではどうにもできないし、俺には魔術をうまく使う技能もない。ここは地道にやっけていくべきだろう。その日はひたすらに雑草を抜いた。これまた足腰を鍛えることにつながる。環境調査部の人は、今日も筋トレに励んでいるだろう。俺も、地道にやっていこう。

DAY 2

「今日は掘るか……」

フツと一人でほくそ笑む。俺は肩にスコップを担いでいた。ちなみにこれは、環境調査部の部長に借りた。俺が園芸部に対しての熱い想いを語ると、「流石はレイだな。こいつを使え」と気前よくいスコップを貸してくれた。

こうして俺は今日の早朝と放課後は一人で黙々と掘る作業を続けるのだった。

DAY 3

「うむ。いい調子だな」

全ての土を掘り返して、あとは土台となるベースを構築して……
残りはそうだな。枠取りが必要だな。これもまた、環境調査部の部長に相談した。すると、レンガ一式とセメントなども貰えた。「レイ。順調なようだな。こいつを使え」と、すでに用意してあったらしい。やはり部長は偉大だ。

俺は書籍で学んだ通りの手順を踏む。

まずはレンガを水に軽くつけて、その後は縁取りをスコップで描く。

「うむ……この程度だろうか」

その後は路盤材を引いてセメントを重ねてレンガを置いていく。レンガ用のコテでセメントを伸ばしては引いていく。そしてその上にレンガを重ねて、同じ作業を続けていく。

俺は無心になって続けた。こうなったら、やれるとこまでやろうと。

DAY 4

「よし。完璧だ」

終わった。昨日にはほぼ全ての作業を終えており、今日は仕上げだけだった。自分としても納得のいくものできたと思う。

フハハ！ いいものができたぞ！ これなら、大丈夫かもしれない！

さて、セラ先輩に報告を……。

と、思った矢先にひょこつとセラ先輩が姿を見せる。

「出来たみたいね」

「見ていたのですか？」

「ええ。ずっとね」

「なるほど。魔術を使って隠れていたのですね？」

「……！ わかったの？」

「気配はありましたから。ご心配いただき、ありがとうございます」

「べ、別に心配とかじゃないけどッ！！ で……頑張ったじゃない」

「は。環境調査部の部長に道具一式と、書物をお借りして自分なりに仕上げてみました。試験はいかがでしょうか？」

「……よ」

「は？ 今なんと……？」

「だから合格よって！」

「おお！ それはありがたいお話です」

「ふ、ふん。別にあんたがレベル先輩を狙ってないことは証明できてないのよ？ でも、一人でよく頑張ってるなって……思って……」

「……一般人とか関係ないというか、私もムキになって悪かったというか……」

「なるほど……色々と思うところはあるかもしれませんが、今後ともよろしく願います。セラ先輩」

「ふん……！」

ということ、俺は園芸部に入部できることになったらしい。そのまま怒りながらセラ先輩が去っていくとちょうど入れ替わりで、レベル先輩がやって来た。

「レイさん」

「レベツカ先輩。見ていたのですか？」

「ええ。どうやら、上手くやったようですね」

「は。これから宜しく願います」

「私はもともと、あなたがちゃんとした動機を持っていたのは分かっていました。でも他の部員が納得いかないと、ね」

「はい。理解しているつもりです。女性部員の方が不快にならないように、気を配りたいと思います」

そういうと、彼女はいつものようにニコリと微笑んでくれる。

「ふふ。きっとレイさんなら、できますよ。それにしても……立派なものを作りましたね」

「は。素人ですが、最大限努力はしたつもりです」

「ではここに新しい花を植えましょう。そして秋になったら、マーガレットを植えましょうね」

「はい！」

俺の部活動への入部は、こうして二つとも無事に成功するのだった。

やったぞ！ フハハ！

第16話 師匠の元へ

「すいません。お願いします」

「わかりました」

週末となり、休日がやって来た。俺は外出届を提出して、ある場所を目指していた。

「……ふう」

アーノルド王国。ここは東西南北に広がる王国だ。特に北側は森や山が多く、学院もあるのはその近くだ。一方の東と西は居住区域。南は農地などが多い場所だ。

ちなみに中央はもちろん一番栄えている場所で最も人が多い。特に休日はかなりの人でごった返しになっている。

俺はそのまま悠然と歩みを進めると、馬車に乗って西の奥の方へと進んでいく。

「これでいいだろうか？」

「あいよ」

料金を支払うと、俺は馬車を降りてさらに奥へ進んでいく。森とまでは言わないが、木々が生い茂っていて自然に溢れている場所だ。よくみると野生動物もいるのか、ウサギがぴよこつと顔を出している。

微笑ましい光景だ。

俺はフツと微笑を漏らすと、見えてきた洋館を視界に捉える。

「……」

コンコンと軽くノックする。訪問の時刻は知らせているので、すぐに出ると思うが……。

「これはこれは。レイ様、ご無沙汰しております」

「カーラさん。こちらこそ、ご無沙汰しております。師匠は？」

「中でお持ちしております。どうぞ」

「失礼します……」

恭しく礼をして、俺は室内に入る。天井にはシャンデリアが飾つてあり、それに室内の装飾もやはり豪華なものとなっている。光に照らされて輝く装飾品。それを横目に見ながら、俺はある一室へ招かれた。

「どうぞ。私は紅茶とお菓子を持って来ますので……」

「いつもありがとうございます。カーラさん」

カーラさんとの付き合いはちょうど三年ほどになるのだろうか。
メイドとして師匠の元でずっと働いているようだが、表情を一つとして変えない。ものすごく寡黙な人である。もともと、仕事はしっかりとできるということから師匠に雇われているのだろうか。

「……失礼します」

「ん？ おお！ レイか！ 久しぶりじゃないか！ 背、伸びたかな？」

「伸びてませんよ、師匠」

「そうか。だが、今やお前を見上げる方が多いからな。昔と違って、な」

「そうですね。師匠も変わらず美しいままで」

「ふふ、だろ？」

「ええ。以前よりも柔らかい印象です」

「ま、もう軍人ではないしな。研究者として生きるのに、あの苛烈さはもう必要あるまい」

「……そうですね」

俺の口調も、彼女の前ではどこか柔らかいものになってしまっ。昔からの付き合いなので、当然といえば当然なのだが。

そして、その視線は俺よりもだいぶ低い。ちょうど俺の腰ぐらいの位置だろうか。それはもちろん、師匠の背が異常に低いと言っているのではない。

なぜならば、リディア＝エインズワースこと俺の師匠は……車椅子

子に座っているからだ。

「お身体は大丈夫ですか、師匠」

「ああ……最近はいぶ良くなったが、だがここはやはり……まだだな」

パンパンと足を叩く。師匠は極東戦役での戦いで、両脚を失ったわけではないが下半身が麻痺で動かなくなってしまったのだ。そのため、彼女は三年前からこうして車椅子で生活をしている。

「まあ、レイ。座るといい」

「失礼します」

そう促されて俺は目の前のダイニングテーブルに備え付けられている椅子に腰を下ろす。師匠とあったのは……入学する前が最後だから、二ヶ月近く会っていなかったのか。改めて、ずっと一緒だった人と違う場所で生活していると言っるのは変な感じがした。

「さて改めて健勝か、レイよ」

「はい師匠。ですが、やはり……」

「そうか。そっちはまだか。ま、私の見立ててだが五年近くはかかるだろうからな。だが……」

「わかっています。アレの使用は厳禁、ですよね？」

「その通りだ。だがいざという時は、いいだろう。お前は私の跡を継いだ『氷剣の魔術師』なのだからな」

「心得ております。師匠の教えは全て叩き込まれておりますので」
「ふふ……そうだな。懐かしいものだ」
「エインズワース式ブートキャンプ。今では懐かしいものです」
「あはははは！ あれをお前は子どもでクリアしているからな！！
ああ……当時は私も大笑いしたものだ。軍の中にいる屈強な男どもでさえ、ギブアップしていく中、お前は最後まで食らいついていたからな」
「それだけが、取り柄でしたので……」
「あの幼かったレイが、今や学生か……時間が経つのも早いものだ」
「それはアビーさんもおっしゃっていました」

そういうと、さらに師匠は声を上げる。

「あははは！ そうか！ そういえば、あいつも学院長をしているんだっただな！！」
「はい。しっかりとやっておいでですよ」
「ふふ。そうか……変わったな。あの部隊にいた全員が、今やこうして別々の道に進んでいるのだからな」
「そうですね。時間が経つのは早いものです」
「退役してどうだ？ 学院は楽しいか？」
「軍の中にいないのは……少し違和感を覚えますが……そうですね。学院は楽しく過ごしています」
「ふふ、そうか」

にこりと微笑む師匠。かつては長かった金髪を、肩ぐらいのセミロングにしている。雰囲気も柔らかくなった。少佐として軍人をしていた頃からは考えられないほどに。それにその碧色の双眸もまた、

変わりにはなかった。師匠はやはり、師匠のままで……美しい姿のままだった。

と、話している間に、カーラさんが紅茶と茶菓子持って来てくれた。いつものように、アールグレイにパウンドケーキだ。特にカーラさんの作るケーキはとても美味しく、俺はこれを楽しみにしている側面もある。

「しかし学院では枯れた魔術師ウィザードと言う蔑称もつけられましたが」

「お！ 早速やられているのか！？」

「はい。どうやら一般人はいい顔をされないようでして」

「ははは！ そうか！ どうせ貴族あたりにだが疎まれているんだろうな！ お前は何を言っても通用しないからな」

「は。しかし、やはりまだ魔術はうまく使えないので、彼らの主張もその通りかと」

「ふふ……それにしても、枯れた魔術師ウィザードか。ダブルミーニングだろ？」

「はい。魔術師と、枯れているをかけているようで」

「流石の貴族様だな。嫌がらせの才能があるな。ぷ、ククク……」

「師匠、笑いすぎですよ」

彼女はとうとう腹を抱えて笑い始めてしまった。その様子を見て、俺は懐かしいと思うと同時に、どこか心地いい感覚があった。やはり師匠と一緒にいると、心が落ち着くものだ。

「ははは………すまない。私の時も同じような感じだったからな……ククク……」

「師匠の時も、ですか？」

「ああ。私も魔術師の家系とはいえ、血統としては全く優秀ではない。底辺も底辺の出身だったからな」

「ああ……そういえば、そんなことをおっしゃってましたね」

「ククク……私も当時は貴族に同じことをされたもんさ。奴らのいじめの技術は一流だったからな」

「して、師匠はどうしたのですか？」

そういつと今度は、ニヤリと不敵に笑うのだった。

「ん？ もちろん蹴散らしたさ」

「ふふ、そうですか。容易に思い描ける図です」

「レイもやってみるといい」

「いえ。私は平穏な学院生活を望んでいるので」

「そうか……ま、その程度のいじめなど無視しておけ。いずれ飽きる。特にお前を弄れるのは私しかないからな」

「ふふふ。そうですね」

二人で談笑していると、師匠は本題に入るのか急に目つきが鋭くなる。

「さてレイ。少し真面目な話をしようか」

「はい。師匠」

「最近、ある噂が研究者の中で広まっている」

「噂ですか？ それも師匠が気にするほどの」

「そうだ。それは、記憶痕跡エングラムに関してだ」

「記憶痕跡……ですか？」
「ああ。説明しよう」

俺は師匠にその記憶痕跡エングラムとやらについての話を聞く。

「さて、まずは少し遡ろうか」

師匠はそう言うと、悠然と紅茶に口をつけてそれをゆつくりと流し込む。その姿はとても様になっており、まるでどこかの令嬢の優雅な午後のひと時と言う印象を受けた。

大雑把な性格だが、師匠のこう言うところは変わらないと懐かしい感覚に浸る。

「二重コード理論を発見した時のこと、覚えているか？」

「はい。ですが元々極東戦役の最中から、仮説は立てていたんですよ？」

「そうだ。すでに理論自体は組み上がっていたからな。あとは終了と同時にテキストに論文にして、発表しただけだ」

「流石ですね」

俺の師匠は天才だ。俺などは足元にも及ばないほどの才能を持つ。氷剣の魔術師として戦闘技能が高いのはもちろんだったが、彼女はエインズワースという研究者名で魔術の研究も行なっている……まさに非の打ち所のない天才なのである。

「それと、記憶^{エングラム}痕跡？　ですか。何の関係が」

「私は昔から思っていたのさ。それこそ、学院生のころからな」

「それは……なんですか」

「皆は魔術の研究というと、魔術そのものに焦点を当てるだろう？」

「そうですね。コード理論の解析や、新しいコードの発見。それにコード理論の4つのプロセスに新しいプロセスは組み込めないかなど……でしょうか」

「さすがは私の弟子だ。よくわかつているが……私はそこに焦点を当てなかった。だからこそ、二重コード理論を発見できたのだ」

「では師匠はどこに、関心を……？」

師匠とは付き合いが長い。それこそ10年以上にもなるが、彼女のルーツ的な話は全て知っているわけではない。特に軍人としての師匠は知っているものの、研究者としての顔はあまりよく知らない。まあそれは俺が研究者ではない、という理由が大きいのだろうが。

そうして、トントンと頭を叩く師匠。

「ここだよ」

「頭……いえ、脳でしょうか」

「そうだ」

さらに話は、続いていく。

第17話 記憶痕跡

師匠は真面目な目つきで、俺に問いかけてくる。

「魔術は脳のどこで発生している？」

「前頭葉では？ 前頭葉は人間の理性的な部分を司る器官です。そこからさらに発達して、そこでコード理論が使用されている……いわゆる魔術領域のことですね」

「その通りだ。でも考えてみる。前頭葉でコード理論により、コード……つまりは内部情報形式が処理される。それはいいだろう。でも、そのコード理論を使うためには魔術を記憶として保持しなければならぬ。それこそ、一種のメンタルモデルとしてな。そうしなければ人は魔術をすぐに忘れてしまう。私も脳という観点に立ち返って二重コード理論を生み出したからな。さて、私が脳という部分に着目して研究したことが明らかになると……この世界のムーブメントは、魔術そのものではなく、脳に行き始めた。今や、魔術と脳は密接な関係にあると言ってもいい」

その話を聞いて、得心がいった。俺は頷くと、さらに師匠と話を続けていく。

「なるほど……そこで、エンゲラム記憶痕跡の登場なのですね」

「ああ。神経細胞の中に魔術を記憶として蓄えるものが発見された。」

それこそが……」

「記憶痕跡エングラムというわけですね」

「ああ。記憶痕跡エングラムとは魔術記憶と表現してもいい。脳の回路、神経細胞に存在するものは何か。突き詰めると、一体魔術とは何か、脳とは何か、そして……人間の根源とは何か。それこそが、今の研究の流行なのだが、ここで問題が発生した」

俺はその話を聞いて師匠が何を言いたいのか、おおよその答えを得ていた。

人の脳を研究するのが、魔術の解明につながる。

ならば、その脳の研究はどうすればいい？ どうやって脳を調達すればいい？

答えはやはり……予想した通りだった。

「非人道的な実験をするものが出たのですね？」

「そうだ。奴らは魔術で脳内を読み取るよりも、直接切り開いていじる方がいいと判断したのだろう。しかしそれは……人の尊厳を奪う危険な思想だ。私とて、未だに聖級の魔術師であり、自分が異常者だという自覚はある。しかし、超えてはいけない一線は弁えているつもりだ。そんな時だが、私にある連絡が来た」

そういうと、師匠はポケットから手紙を取り出した。

「それは？」

「手紙だ。何でも、私を勧誘したいらしい。組織名は優生機関だ」
ユーゼニクス

「優生機関……文字通り、優生思想に染まっているのですか？」

優生思想。それは生物の遺伝構造を書き換え、より優秀な遺伝子を残し、劣勢なものは排除していくという危険な思想だ。その考えの前では、全てが遺伝子で決まる。つまりは、人間に人権など存在しなくなるということだ。

それを掲げている組織が立ち上がるとは……馬鹿げていると思う反面、それも人間の性質の一種。ある種これは、時代の流れなのかもしれないと俺は思った。

「ああ。最高の環境を提供すると書いてあるが、こんなものは無視だ。人の尊厳無くして、人類の発展はあり得ない。それこそ、その先に待っているのは、暗黒郷ディストピアでしかない。ま、奴らにとっては理想郷ユートピアなのだろうが……」

「……なるほど。そんな組織が台頭しているんですね」

「そうみたいだ。そこで奴らは、ダークトライアドシステムなるものを完成させたらしい。噂程度の話だが」

「ダークトライアドシステム？ 人間の暗黒面の話でしょうか？」

ダークトライアド。

それは人間の心理の暗黒面。それは3つに分類され、ナルシズム、マキャベリズム、サイコパシーと呼ばれている。

「その通りだ。ナルシズム、マキャベリズム、サイコパシーの3

つを魔術的に応用したらしい。ま、詳細は知らんが決して良いものではないだろう。魔術の真理がどうか言っているが、奴らは正真正銘の狂人だ。とまあ……色々と言ったが、実は七大魔術師にも声がかかっているらしい。キャロルのやつがそう言っていたからな。つまりは……」

「俺にも声がかかると?」

「そうだ。だからこそ、忠告だ。耳を傾けるなよ、奴らの言葉には」
「もちろんです。師匠。そんな非人道的な実験に加担するほど、俺は落ちぶれてはいません」

「ま、そうだろうな。お前は私の一番弟子だからな。でも、弟子を心配する気持ちもわかってくれ。今となってはもう、私にレイを守ってやれる力はないのだから」
「……はい」

師匠は話を終えて疲れたのか、背もたれにグツと背中を預けるとそのままフォークをパウンドケーキに刺して口に運ぶ。

俺もまた今は糖分が欲しい気分になったので、同じような所作を行う。

うん。美味いッ！

やはりカーラさんのケーキの腕前は王国一だと思う。ここにきて良かったと思える一つでもある。

しかし魔術の真理を極めようとする集団か……一応、気にかけておくか……。師匠の言葉にもあるように、俺はもう自分の身は自分で守る必要がある。今までのように、師匠に守ってもらうことはできない。

それは、車椅子に座っているその姿が如実に物語っている。

だからこそ俺は、これからは守ってもらうのではなく、守る側になりたいと思った。

「少し外に出ないか？ 今の時間だと、森林浴が心地いいんだ。今日はレイと一緒にいきたい」

「わかりました。師匠」

「外出用の車椅子はこっちにある」

「はい」

俺は室内の隅にある外出用の車椅子を持つてくる。

そして師匠の体を抱きかかえると、そのままそっちの車椅子に移動させる。もちろん抱きかかえる際に体は密着するので、色々思うところはあるのだが、瞬間フワツとした香りが鼻腔をつく。

「香水、つけてるんですか？」

「ああ。今日はレイに会うからな。特別だ。それに服装も、髪型もイケてるだろ？」

「ええ。初めはどこかの令嬢と思いましたよ。師匠は容姿はいいですから」

「あ？ 容姿は、って何だ？」

「い……いえ。性格も美しいですよ？」

「だよな〜？ 分かってるじゃないか」
「はい……」

とまあ、頭が上がらないのはいつも通りだ。

そうして俺はカーラさんに外出してくると伝えたと、外に出ていくのだった。

「おお……気持ちいいですね」
「そうだろう？」

車椅子を押しながら、俺たちは森の中を進む。昔はただ見上げるだけだった背中が、今はこうして上から見下ろすほどになってしまった。

本当に時の流れとは早いものだ。

「ああそつえば……そろそろ6月だろう？」

「はい」

「魔術剣士競技大会が近いな」
マギクス・シュバリエ

「えっと、確か3つの魔術学院が競い合う魔術剣士の、大会……ですよね？」

「そうだな。一対一の正々堂々とした戦いだ。私はちなみに、4連覇だぞ？ 真正正銘の無敗だ」

「流石ですね、師匠」

「レイも出れば絶対に、連覇できると思うが……」

「無理でしょうね」

「だろうな。あれはトーナメント戦で、しかも連戦になることもある。今のお前では無理だろう」

「はい。しっかりと養生したいと思いますが……友人がきつと出ると思いますので、そちらの応援を」

「お、それは誰だ？」

「アメリカ・ローズと言つて、三大貴族筆頭のローズ家の長女です」

「ああ……見たことあるぞ、そいつ」

「そうなのですか？」

「ちよつとしたパーティーでな。でもそうか、同い年の友人ができたか。お前は年上に囲まれてばかりだったからな」

「そうですね。まだ友人は少ないですが、一人一人との関係を密にしていこうと思います」

「ふむ……では、これを渡しておくか」

師匠はそういうと、胸元に手を入れてある資料を取り出した。

「これは？ って……見覚えがありますね」

「そうだ。エインズワース式ブートキャンプ。学生にも使えるように、アレンジバージョンもある」

「そ、そうですね……」

「お前はきつと、そのアメリカとやらの力になるんだろう？ その時は使えばいいさ」

「機会があれば……参考にしたいと思います」

「ふふふ、そうだな」

そうして俺と師匠は木漏れ日の降り注ぐ、森の中を歩いていく。悠然に、そして優雅に。あの在りし日々を思い出しながら、こんな

日がずっと続けばいいと。

そう願った。

第18話 相談

「では、これで授業が終わるが……ホワイト。少し時間いいか？」
「なんでしょうか。グレイ教諭」

今日も魔術概論の授業が終了して、学食で食事でも取ろうかと思っていた矢先にグレイ教諭がそう話しかけて来た。

「まあちよつとした雑談だ」
「……わかりました」

釈然としないが、ここで無遠慮に断る理由もない。

そうして俺は彼女の後についていくのだった。

「さて、学院での生活はどうか？」
「私としては非常に満足しておりますが」

俺は学内に存在している相談室というところに招かれた。その名の通り、進路など様々なことを相談する場所だ。俺としては相談することなど特には無かったが、教師としては何か俺に思うところが

あるのだろうと理解した。

小さな机を挟んで、互いにソファアに座って向かい合っている状況。ちなみにグレイ教諭はコーヒを淹れてくれた。ブラックでお願いしたが、なかなか美味いと俺は感じた。

「枯れた魔術師ウィザードと揶揄されているのは知っているよな？」

「もちろんです。しかし、一過性のものかと」

「メンタルは大丈夫なのか？ 正直言つて、お前のことは心配している。学院始まって以来の一般人出身もそうだが、あまり魔術がうまく使えないようだし……な。いじめの対象になりやすいのは、道理だろう」

「そのご指摘はもつともですが、仕方のないことです。ここで私が下手に暴れて反抗しても、火に油を注ぐだけでは？」

「教員の介入はいらないと？」

「別に悪口を言われるだけでしたら、構いません。と言っても、暴力などで来られると困りますが」

「……そうだが、と、思い出したがお前のことを褒めていたぞ」

グレイ教諭は優しく微笑みかける。

「？ その方は？」

「エリオットだ」

「なるほど。ライト教官でしたか」

「ああ。なんでも、体を動かすのは得意らしいな」

「そうですね。田舎の山を駆け回っておりまして。魔物との戦闘経験も少しはあります」

「なるほど……な。まあ、ホワイトにもいい面がある。全てを満遍なく伸ばせとは言わない。学院を出た先に求められるのは、スペシヤリストだからな。何か一つに特化するのも、また人生だろう」

「は。わざわざお言葉、ありがとうございます」

「いや。構わないさ。私は過去に退学していった生徒に何もできなかった過去がある。今度ばかりは後悔はしたくないものでな」

「なるほど……教師の鑑ですね」

「そんな立派なものじゃないさ。それならば、退学する生徒など出してはいないさ」

どこか遠くを見るような目つきをして、コーヒーをズズズと飲むグレイ教諭。この学院は退学して去る者も少なくはないと聞く。それはこの学院がそれだけ厳しいということを示している。

「では今日はここまでだ。時間を取らせて悪かったな。どうやら、お前は私が思っているよりも大物なようだ」

「は。恐縮であります」

「ふ、態度も立派だしな。では失礼する」

立ち上がると、彼女は目の前にあったコーヒーを片付けてそのまま出ていく。

なるほど。このレベルの学院になると生徒へのサポートも充実しているようだ。やはり師匠の言う通り、この学院に来てよかったと思った。

「……むぐむぐ」

外にあるベンチで一人で食事をとる。あれから俺は、今更学食に行っても遅いと判断して売店でサンドイッチと水だけを購入した。

そして、外にある空いているベンチで食事をとっていた。

目の前に俺が作った花壇もあって、その美しく咲く花を見つめる。

さらには今日のこの広々とした青空も視界に入れて、自然を楽しみながら俺は食事をとっていた。

「あら？ レイさんですか？」

「む……これはレベツカ先輩。ご無沙汰しております」

すぐに咀嚼して、水を流し込むと立ち上がって挨拶をする。俺も学んだが、別に軍ではないので敬礼は必要ないらしい。普通にお辞儀をするだけで十分だと、理解した。俺もまた、この学院に馴染んでいる証拠である。

「お隣、失礼しても？」

「はい。構いません」

「では失礼して……」

さらさらと流れる髪の毛からはフツと椿の香りがした。そして彼女は手に持っているサンドイッチを取り出すと、その小さな口で頬張り始める。

「あら？ レイさんもフルーツサンド、好きなのですか？」

「そうですね。こちらの学院に来て初めて食しましたが、思ったよりも美味しくて。割とリピートしています」

「そうですね。それでしたら、何よりですね。これは私が入れてもらうように掛け合ったのですから」

「そうなのですか？」

「ええ。これでも私、会長なんですよ？」

グツとワザとらしく胸を張るレベッカ先輩。その様子は少しだけ子どもらしくて、なんだか微笑ましい気持ちになった。

「会長だったのですか……それはすごいことですね。この学院の長ですか」

「そうですね。だからもつと褒めてもいいのですよ？」

「それはすごいですね……それにしても、会長とは美しい方かなるんですね。勉強になります」

俺はよく学院のシステムをまだ知らないのだが、思ったことを口にする。

「え……えっと、別にそう言うわけでは、ないのですけれど……」

「どうしたんですか？ 少し顔が赤いですが……？ 体調を崩しましたか？ 今はちょうど季節の変わり目。お気をつけください」
「ええ……そ、そうですね」

と、妙に歯切れの悪い様子で彼女はそう答えた。

「そういえば、学院の生活はどうですか？」
「満足しております」

「……でも、色々と大変だとか」
「ああ、耳に入っているんですね。大丈夫です。自分は気にしていません」

「そうですか……でも、何かあれば頼ってもいいですよ？ これでも三大貴族ですから」

「ありがとうございます。あ、そういえば……」
「なんですか？ この会長になんでも聞いていいですよ？」

ニコニコと微笑みながら俺に笑顔を向けてくる。

俺はそのまま思いついたことを尋ねて見ることにした。

「三大貴族のもう一人は、この学院にはいないのですか？」
「ああ。ローズ家、ブラッドリイ家、そしてオルグレン家。これが三大貴族ですが、オルグレン家は代々別の学院に通っているんですよ。ここは確かに世界でも最大規模の学院ですが、それでも他にもいい学院はたくさんありますから」

「なるほど……それと、もう少しでマジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会が近いとか」

「確かに、もうその季節ですね。7月に代表選考戦を始めて、8月の夏休み頭から二週間で最強の魔術剣士を決める戦いですね。一年生は新人戦で、二年生以上は本戦で試合をするのですよ。ちなみに私は去年の覇者です。えへん……！」

「なんと！ それはすごいですね！ と言うことは学生の中でも最強の魔術剣士、と言うことでしょうか？」

「うーん。そう言いたいところですけど、実際にはライバルもいますので。去年は運よく勝てましたけど、今年はわかりません。優勝したのは去年が初めてですし……ね」

「なるほど……やはりトーナメントという性質上、安定した勝利は難しいですね。ジャイアントキリングなどもあるでしょうし」

「レイさんは選手として興味ないのですか？ なんでも、実戦は強いという噂がありますけど……？」

色々と俺に関する噂が流れているのだな……と思うも、俺はすぐにそれを否定する。レベルカ先輩の視線もいつものように優しいものではなく、少しだけ鋭いものになる。

「いえ。自分は参加するつもりはないです」

「あら？ そうなのですか？」

「はい。実戦に自信がないわけではないですが、なにぶん体力がないものでして」

「体力、ありそうですね。体も服の上からでもわかるほどに、鍛えているようですし……」

「まあ……それとこれとは話が別……といったところですね。今年観戦したいと思っています。それに……」

「それに……？」

「きつとアメリカが出ると思っているので、応援したいと思います」

「ああ。アメリカさんはすでに新人戦で優勝候補ですよ？ でも、今回はオルグレン家の長女も一年生で別の学院に入学してますし…事実上、その二人が優勝候補ですね」

「なるほど……すでに、色々と情報は錯綜しているようで」

「ええ。マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会は注目度も高い大会ですし、いい成績を残せば進路も色々とはよくなるというのは有名ですから」

「……なるほど、勉強になります」

その後は二人で適当に雑談をしていると、チャイムがちょうど鳴り響く。

「あら、もうこんな時間。レイさんとは話が合うようで、つい……」

「こちらにも有意義な時間でした。またの機会があれば」

「ええ。では、ご機嫌よう」

「はい。失礼します」

そのままお辞儀をしてから、俺は教室に向かうのだった。

でもどこかから見られている……そんな感覚があったのは、間違いないかった。

第19話 交流

「……ふっ……ふっ……！」
「ふん……！ ふん……！」

夜。俺たちは自分たちの部屋でいつものように筋トレを繰り返していた。

ポタ、ポタポタポタと汗が滴るもそれもまた一興。俺は今もスクワットをしており、徹底的に下半身を鍛えている。

ちなみにもちろん、ボクサーパンツのみを着用して。

「……よし、これで1000回だな」
「俺も終わりだぜ……！ ふう……さて、例のアレ、いくか？」
「ふふ……そうだな」
「ふふふ……」
「ははは……」

俺とエヴィがこうして仲良くなるのは互いに必然だったのかもしれない。俺たちは入寮した初日には互いの裸を見ている。それは、お互いがおもむろに服を脱ぎ去り、筋トレを呼吸のように始めたからだ。

そして……悟る。

こいつは同じ仲間なのだと。

余計な言葉など……必要なかった。

ただそのバルクさえあれば……俺たちは語り合えるのだから。

「ククク……今日はどうしてやろうか……」

「ふふ……レイも悪い表情するじゃねえか……」

「ははは、それもまた一興……だろ？」

「だな？」

と、ほぼ裸の男二人がキッチンにてそんな会話を繰り広げる。はつきり言って、この学院の寮は破格だ。豪華という一点に尽きるし、何よりも広い。実は5年前に改修工事が入ったとかで、まさにほぼ新品のものばかり。

もちろんそれだけではないが、この学院の人気を高めているのはその一面もあるのは疑いようのない事実だった。

そして俺たちはそんなキッチンで何をするのか……それはもちろん、プロテインの作成だ。

互いに質のいいプロテインは当たり前のように持ち込んでいる。街に行って定期的に購入もしている。

だが俺たちがそこで止まることはなかった。このプロテインにさ

らに何かを混ぜれば……最高の栄養補給ができるのではないかと。

それは完全に深夜テンションでの話だったが、今こうしてその作戦が実行されようとしている。

「エヴィ。今回はこいつを混ぜる」

「な……それは、まさかッ！！？」

「そうだ……鶏胸肉だッ！！」

ペロンと冷蔵庫から取り出すのは、鶏胸肉。脂質も少ないし、何よりもたんぱく質が豊富。そして安い。学生にとって、この安さはあるがたい。多くの筋肉を愛好する者にとって、これはもはやバイブルと形容しても遜色はないだろう。

「まさか……そいつを使うとは……王道……しかし、あまりにも未知数。レイ、お前は修羅の道を行くのか？」

「ああ……何事もチャレンジだろ？」

俺はまな板を取り出して、その既に加熱処理した150グラムの鶏胸肉を包丁で丁寧に細切りにしていきもはや原型が残らないほど、ぐちゃぐちゃにしていく。その後はしっかりと熱を通して、それをプロテインの中に混ぜる。

かき混ぜ、そして俺は……味をみる。

すると……！！？

「…………ん!!?」
「ど、どうだった……!!?」
「これは……間違いない……不味いなッ!!!」
「あゝやっぱりかあゝ」
「ということで、残りはエヴィにやろう」
「え!? まじかよ!」

そう言いつつも、しっかりと俺の残した分を喉に流し込んでいく。

「ウヘエ……不味いなあ……」
「ああ。まあ実際のところ、俺も無理だとは思っていた」
「ま、だよな」
「さてこの4年間で最高のプロテインを見つけようじゃないか」
「おうよ!」

ということで、俺たちの飽くなき探究心は続いていく……。

休日。今日は特に用事もないので、エヴィとどこかに行こうかと思っていたが……そういえば、今日は実家にちよつと顔を出すとかで不在らしい。早朝だというのに、すでにその姿はなかった。

そうして、俺はいつものようにランニングをしていると、ちょう

どばったりとエリサに出会ったのだった。

「おお！ エリサじゃないか！」

「あ……レイくん。おはよう」

「おはよう。どこかにいくのか？」

「今日は中央の図書館とか、本屋さんに行こうかなって……」

「む！ それは素晴らしいな……俺も同行してもいいか？」

「え……？」

「実は暇を持て余していてな。ダメだろうか？」

「い、いや……全然ダメじゃないよ？」

「じゃあ校門の前で待ち合わせしよう。俺は戻ってシャワーを浴びるから……30分ほどでどうだろうか？」

「う、うん！ 私もちよつと着替えてくるね……！」

「ん？ そうなのか？ その格好で行くのでは？」

「その……レイくんと出かけるから……」

「なるほど。得心がいった。では、心待ちにしていよう」

「じゃ、また後で……」

「ああ」

あえて言葉にする必要はなかった。

俺と出かけるということ、それなりに自分の身なりに気を遣いたいということだろう。師匠にはそこらへんも教育されているので、俺はすぐに理解した。

「お……お待たせ！」

「大丈夫だ。俺も今来たところだからな」

校門に着いたのは、俺が先だった。ちょうど門の前で腕を組んでじっと待っていると、エリサがパタパタと走ってやってくる。

ふむ……なるほど。

彼女が着ているのはシンプルなワンピースだった。確かにもう季節としてはちょうどいい頃合いだろう。それに真っ白なワンピースは彼女に本当によく似合っていた。それに加えて、髪は右耳にかけてようにして上げておりそれもまた妙に大人っぽく見える。挿している青色のピンもまた、それに一役買っている。

「エリサ」

「う、うん……」

「とても可愛いと思う。ワンピースはもちろんだが、特にその髪型がいいな。いつもは下ろしているが、偶にはそうして上げてしつかりと顔が見えるのもいいと思う」

「……あ、ありがと！ そ、その……レイくんもかつこいいよ？」

「そうか？ シンプルにシャツとジーンズだが」

「うん……いいと思う」

「そうか。ありがとう」

二人でそう話してとりあえずは、街に繰り出すことにした。まず目指すのは図書館だ。この王国の中央区にある王立図書館は歴史のある場所で、それこそ膨大な数の書籍がそこに並んでいる。

俺もたまに行くこともあるが、あそこはその静謐せいひつな雰囲気もあり、とても落ち着く場所である。

「エリサ、俺はここで本を読んでいる」

「うん……わかった。私も読みたい本、持ってくるね」

「ああ」

小声でそう話して、俺はすでに入り口で手にしていた本を持って着席する。

ふと、上を見るとそこは吹き抜けになっておりこの建物の広さを改めて痛感する。

現在は午前9時。

そうして俺は隣にエリサが座る気配すら忘れて、本の世界に没頭するのだった。

「む……もうこんな時間か……」

「あ……その、どうする……?」

「食事でも行くか?」

「レイくんがいいなら……私もいいよ?」

ということであれは近くの店で食事を取ることにした。店に入って席に着く。すぐに注文をすると、そのまま談笑を始めるのだった。

「エリサ、学院はどうだろうか？」

「えっとその……楽しいよ？」

「そうか。それは良かった。俺もエリサを含めて、いい学友に出会えて本当に良かったと思っている」

「私も……昔から友達がいなかったから……この学院に来る前は不安だったけど……みんなと出会えて、本当に嬉しい……よ？」

「俺もそうだな。初めは不安もあったしな……」

「え？ レイくんもそう思ってたの……？」

エリサはキョトンとした顔でそう尋ねてくる。

自分のことを開示するのは……少しだけまだ戸惑いがある。でもエリサを含め、仲のいい友人には話したい気持ちがあったからこそ……話してみることにした。

「俺は学校というものに通うのが初めてでな」

「え……そうなの？」

「ああ。色々あってな。それで、初めは楽しみであったと同時に、不安な面もあった。だがそれは杞憂だったな。こうしてエリサとも友人になれたしな」

「そ……そういつてもらえると、私も嬉しい……」

「ああ。だからこれからも、よろしく頼む」

「……うん！」

それから食事をとって、解散することになった。なんでもエリサは学院の方で、色々と用事があるらしい。

一方の俺の方はまだ暇なので、街をブラブラしようと思っていた矢先……見知った顔が目の前に現れた。

「アメリカ？」

「レイ？ どうしてここに？」

ちょうど馬車から降りてきたのは、アメリカだった。今日はいつよりも、髪型も服装もしっかりとしている印象だった。言うならば、フォーマルな感じだろうか。そこから察するに、家の方で何かあったのかと推察した。

「今日は暇でな。ちょうど街に出ていたんだ」

「そうなの。私はちよつと実家にね」

「ああ……なるほどな」

「ええ。貴族の付き合いってやつでね。本当に嫌になるわ」

二人でそう話しながら、周囲をブラブラすることにした。なんでも、アメリカは話したい気分だと……そう言っていた。

「貴族の付き合いは大変なのか？」

「そうね……三大貴族は特にねえ。私も、もう結婚はどうか言われていてね……」

「結婚か。確かに優秀な魔術師は結婚するのが早い、というよりも

子どもを作るのが早いな」

「ええ。やっぱり魔術の才能に血統が関係している側面はあるからね」

「そうだな。俺もそれは否定しない」

血統は確かに要素としては重要だ。しかしアメリカは、それが妙に気に入らない……という印象を受ける。

「はあ……それに、そろそろ魔術剣士競技大会もあるしね。今回も挨拶回りで大変そう」

「そうか……大変だな。貴族というのも」

「あ、ごめんなさい。愚痴ばかりで……」

「いや構わない。こうして誰かに話すのも、時には重要だろう」

「……そう言ってもらえると、助かるけど……」

「学友の力になれるのなら、俺としても嬉しい限りだ」

「ふふ……」

「どうした？」

「いや……あなたはそういう人間よね、と思って」

「そうだろうか？」

「ええ。そういうところ、とても好感が持てるわ」

「俺もアメリカのことは本当に好感を持っているが」

そういうと、アメリカはちらつと盗み見るようにしてこちらを見ってくる。少しばかり顔が赤いのは、気のせいかもしれない。

「……そ、そう？」

「ああ。君のように美しくて、聡明で、自分をしっかりと持った人

間はそういない」

「ふ、ふーん。そうなんだ」

くるくると真っ赤な髪を弄るアメリカ。

俺はそうして、いつものように思ったことを口にする。

「これは初めてあった時から思っていることだ。その評価は、変わりはしないさ」

「……そ、そうなの……それならいいけどっ！！」

アメリカはそのままなぜか走り出してしまった。

俺はそんな様子を微笑ましく眺めながら、その後を追いかけるのだった。

第20話 模擬戦

「では今日はここまで、としたいところだけど……今回はちょっとしたことをしようと思う」

魔術剣技の授業の最中、ライト教官がそう告げた。

現在は高速魔術クイックと剣技の型の確認をしており、ちょうどそれが終了したところだった。ちなみに全員が学んでいるのは、アーノルド流という基本的な剣技の型だ。これはあらゆる剣技の基礎となるもので、二年次以降は別の流派に行くか、それともアーノルド流を極めるのかと選択肢が存在する。

またアーノルド流は数多くの派生流派を生んだ剣術の源流であり、魔術との相性も良くさまざまな魔術学院で今も採用されている背景から主流として重視されており、この学院ではアーノルド流の基礎を学ぶ事から始められている。

そして一年の間はこれをマスターすることに専念するため、今はこうしてアーノルド流を練習している……といったところだ。

「もう6月になって、そろそろ魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエが近くなってきた。7月からは校内予選が始まって、7月下旬には代表選手が決まる。君たち一年生は新人戦、つまりは一年生だけと戦うことになる。も

ちろん他校の選手とね。一応、同じ学院の生徒は序盤では組み合わせないようにはしてある。それを踏まえて……模擬戦をしようと思うけど、誰かしたい人はいるかな？ 自薦、他薦は問わないよ」

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会か。

師匠にも話を聞いたが、一年生は新人戦。二年生以降は本戦に参加することになっている。俺は師匠との話でもしたが、出れそうにないので今回は静観しようと思っていたが……話は思わぬ方向に進むことになる。

「はい。やらせてください」

「お。アルバート」アリウムくんだね。君は筋がいいから期待しているよ。それで、彼の相手は……」

「レイ」ホワイト。来いよ」

「む？ 俺か？」

「ああ」

その見据える双眸は怒りが宿っているのか、それとも純粹に熱くなっているのか、妙に滾っている気がした。しかし妙だ……いくら俺が一般人だからと言って、ここまで挑発的になるものだろうか。

オーディナリ

いや、貴族の体質だと言われればそれまでだが……俺は何か別の意志が絡んでいる気がしてならなかった。

「ホワイトくん。君も優秀な剣士ではあるけど……受けるかい？」

「ご指名をもらったのならば、そうですね……やらせていただきま
す」

瞬間、周囲がざわつく。

「貴族と枯れた魔術師か……」
ウィザード

「でも彼って、いい動きしてるわよね」

「うんうん。魔術はあまり上手くはないけど……剣技はちょっと違
うわよね」
オーディナリー

「一般人も意外にやるしな……」

と、意外にも好意的な意見も聞こえてきたりした。そんな中、俺
の近くにはアメリカとエヴィがやってくる。

「レイ、頑張つてね」

「俺も期待してるぜ！」

「ああ。全力は尽くそう」

そうしてライト教官の立会いのもと、俺はミスター・アリウムと
向き合う。

「この前のあれ、偶然だつてことを教えてやるよ」

「この前のアレ……？ ああ。カフカの森のことだろうか」

「俺でもやれたんだッ！　そして、俺はお前よりも強い。貴族が一
般人オーディナリーに負けるわけがないッ……」

「ふむ……なるほど。まあ勝負は蓋を開けてみるまで分からない。正々堂々と勝負をしよう」

そついうとさらにキツと厳しい目つきになる。

彼は血統というものを重視している。でもそれは彼というよりも彼の環境がそうさせているように思えてならなかった。貴族の体質とはやはり環境的な要因が大きいと俺は思っている。幼い頃から、血統を重視して、才能を重んじる。それが全て悪いとは言えないが、それだけではやはり……足りない。

七大魔術師に至った今だからこそ、俺はわかるが……それはきつと、辿り着いた者にしか分からないのだろう。口で言っても、もはや無駄だと悟る。

ならば、この剣で白黒つけるべきなのだろう。

まあ……今回は木刀だが……。

「ルールは木刀の使用と魔術は身体強化のみで。今回は高速魔術は無しだ。まだ君達は扱い慣れていないからね。勝敗はどちらかが敗北を認めるか、僕が判断する。危ないときは止めに入るからね」

「分かりました」

「は。了解しました」

その言葉を聞いて距離を取る。

この演習場には、他の生徒が俺たちを取り囲むようにしている。
そして俺と彼が真っ直ぐ向き合う。

「では……始めッ!」

その言葉を認知したと同時に、俺たちは互いに地面を駆け抜ける。
もちろん、走りながらの魔術の行使は忘れない。

《第一質料^{プリママテリア}〓エンコーディング^{マテリアル}〓物資コード^{マテリアル}》

《物資コード^{マテリアル}〓デコーディング^{マテリアル}》

《物質コード^{マテリアル}〓プロセシング^{マテリアル}》

《エンボディメント^{インサイド}〓内部コード^{インサイド}》

身体中にコードを適用する。そうして身体強化が互いに終了すると、彼は上段から思い切り木刀を振り下ろしてくる。

「オラあああああッ!」
「む……ッ!」

俺はそれを受け止める。

重い。重い剣だ。

彼は自分の実力に自信があるようだが、それはあながち間違いでもない。この一年生の中で言えば上位10人には入るほどの腕前だろう。魔術剣士としては将来有望だろうが……俺もここで簡単に負けるわけにはいかない。

何と言っても俺もまた、負けず嫌いな一面があつたりするからだ。

互いに競い合うならば、勝ったほうが気分がいいのは誰だって同じだ。

「ぐ……どうなってやがるッ！！　一般^{オーディナリ}人のくせにッ！　枯^{ワイザ}れた魔術師^{イト}のくせにッ！」

繰り返される怒涛の連続攻撃。

よほど自信があるのか、彼は縦横無尽に木刀を振るう。でもそれは……ただ感情任せに、身体強化によって力任せに木刀を振るっているに過ぎない。

そこに術理はない。剣技もまた、魔術と同じ。コード理論は存在しないものの、冷静かつ論理的に剣技を行使すべきである。

「……ミスター・アリウム」

「ああ!!?」

「終わりだ」

「あ……!」

彼が再び大振りの上段を繰り出そうとした瞬間、俺は彼の手首を跳ねるようにして木刀を振るう。そうしてクルクルと木刀が宙を舞い、そのままカランカランと地面に落ちる。

勝敗は決した。

「決まりだね。勝者は、レイ!! ホワイトくんだ」

どよめきが広がる。

「マジかよ……」

「意外とあっさりだったな」

「でも…… 本^{オーディナリー}当に一般人が勝つとは……」

皆、驚いているようだが、そんな中アメリカが俺をじっと見つめているのを感じる。それは勝利を祝福するというよりも、なんだか何かを求めているような…… そんな視線。そうしてアメリカはこちらに近づいてくると、俺の方ではなくライト教官の方に向かった。

「先生」

「ん？ ローズさんか。どうしたんだい？」

「次は私がレイとやってもいいですか？」

「彼が承諾するなら構わないけれど……」

「自分は構いません」

俺はすぐに承諾した。

なるほど。アメリカは俺と戦ってみたかったのか。

そうして呆然としながらミスター・アリウムがトボトボと皆のいる方向へ向かうと……今度は俺とアメリカが対峙することになった。

「レイ。あなたは不思議な人ね。魔術はうまく使えない。でも剣の技術は非凡で、それにカフカの森でも実戦には強かった。その時から、あなたとは戦ってみたかったの」

「なるほど……それは嬉しい言葉だ。ともに切磋琢磨しようではないか」

「ふふ……そうね」

互いに構える。

そうして再び、ライト教官の声が上がる。

「では……始めッ……！」

先ほどと同じように、コードを再び走らせて身体強化をするも…

「む……ッ！!?」

「はあああああああッ!」

疾^{はや}い。

アメリカの速度はミスター・アリウムのそれを優に上回っていた。それは純粹に魔術の構成もあるだろうが、これはコードの処理速度もまた彼女は一流なのだろう。容量^{キャパ}も大きい、それに処理速度も速い。

こればかりは才能的な面が大きいので、彼女は大きな才能を持っていると断定するしかない。

俺はそんな彼女の剣戟を真正面から受け止める。

重くはない……だが、速いッ!

俺が受け止めた瞬間にはすぐに次の攻撃に移っている。俺もまたその間を縫うようにして、攻撃を重ねるも……完全にギリ貧。彼女のそれは俺の剣戟をわずかにだが、上回っていた。

今のままでは無理か。しかし、ここで……。

と、少しだけ思案して俺は自分の能力の枷が少しだけ外れてしまうことに気がついた。熱くなってしまった。彼女のそのあまりにも美しい剣戟に、俺もまた本気で向き合いたいとそう思ってしまった。

「…………え？」

ぽかんとしたアメリカの声は、もう意識の中にはなかった。

そして俺の剣は吸い込まれるようにして、彼女の喉元に向かっていくが……。

「ぐ……ッ！」

痛みが脳内に走る。そして、その攻撃は途中で勢いを失って、そのままアメリカに木刀を跳ね飛ばされてしまう。

「勝者は、アメリカンローズさんだね。でもホワイトくん……君は……………」

「いえ。自分は純粹に負けただけです」

俺はすぐに痛みをこらえると、アメリカに握手を求める。

「アメリカ。君はすごいな」

「…………最後の」

「ん？」

「最後のアレ、何？ 私……見えなかった……………」

「いや、あれは……」

「あなたは一体、何者なの……？」

アメリカのその問いに、俺が答えることはなかった。

第21話 世界の広さを教えよう

翌日。

俺の噂は色々と聞いていたが、その風向きが少し変わってきたようだった。

「聞いた？ 一般人が貴族に勝つたらしいよ？」
オーディナリー

「噂によると、なんでもあの三大貴族のローズ様といい勝負もしたとか」

「へえ……そうなんだ。意外とやるのかもね、一般人も」
オーディナリー

といった声が少しだけ耳に入ってきた。

「おー。レイの噂も少しは緩和してきたのか？」
「そうだといいがな」

現在はエヴィと一緒に寮を出てきて、教室へと向かっていた。そんな矢先にその声が聞こえてきたのだ。

意外と俺に対する評価もすぐ変わるのかもしれない。自分としてはそこまで気にしていないが、それでもやはり悪評はない方が今後の学生生活は素晴らしいものになるだろう。

「でもかし……」

「どうした？」

「やっぱりお前の戦闘技術はすごいよな。どこで学んだんだ？」

昨日の件。ミスター・アリウムとの試合はまだしも、アメリカの件は見る人が見れば俺の異常な動きは分かっってしまうだろう。エヴィもまた何かを感じ取っているようだった。

どう答えるべきか迷う……が、ここは正直に答えることにした。

「俺には師匠がいるんだ」

「師匠？ 剣術のか？」

「いやそれに限らない。人生の師匠だな。魔術、剣技、そして人としての在り方。色々と教えてもらったもんだ」

「へえ……そうなのか」

「でもまあ……過酷だったかな」

「そんなに厳しいのか？」

「そうだな。ここでの生活が天国と思えるほどには」

「ウヘエ……そいつはヤベエな。で、その師匠は今？」

「今は王国の東の外れの森に住んでいる。いつかエヴィにも紹介しよう」

「え……もしかして、シメられたりしねえか？」

「大丈夫だ。見た目は麗しい女性だからな」

「女の人なのか……でも、見た目はってことは……」

「まあ……性格は色々と問題があるが、悪い人ではない」

「ま、それはレイを見ればわかるがな！」

「ふふ……そうか」

そうして俺たちは雑談を繰り広げながら、あっという間に教室にたどり着く。

「おはよう」

「ウィーっす」

挨拶をして各自、自分の席に向かう。すると俺の席にはエリサとそしてアメリカもやってくるのだった。

「おはよう。二人とも」

「おはよう、アメリカ」

「お……おはよう……！」

昨日。俺は少しだけ熱くなっしまい、能力の一部を解放してしまった。そのことに關して、アメリカから言及されたが俺は逃げるようにしてその場から去っていった。

あの一撃。おそらく他の生徒はまだしも、当事者であるアメリカとそれにライト教官は色々と感じたのかもしれない。

だがアメリカはそんな様子を微塵も出さずに、いつものように話しかけてくる。

杞憂だといいのだが……あの子のアメリカは妙に危うい雰囲気纏っていた気がする。純粹に俺の剣技に驚いただけというわけでもなく、何か灼けるような、焦がれるような……そんな視線を俺は感

じ取っていたのだ。

まだみんなとの付き合いは短い。

だからこそ、知っているようでまだ知らない側面があるのだと思
った……それは互いに……。

きっと俺もまた、アメリカの心の内を知る日が来るのかもしれない。
い。

そうして今日もいつものように1日が始まるのだった。

「……おい」

「む？ ああ。ミスター・アリウムか。なにか用事だろうか？」

「お前のせいで……俺はッ……俺はッ……！ 貴族が一般人に負け
オーディナリー
るという屈辱を……ッ……！」

なるほど。これはただ事でないと俺は思った。

それに彼の後ろには、数人の生徒がいた。きっと彼の友人なのだ
ろうが、楽しく談笑……という雰囲気でもなさそうだった。

ちょうど放課後になり、図書館に寄っていて少し帰りが遅くなっ
た現在。

俺は廊下を歩いて、寮に帰ろうとしていたところだった。

生徒もあまりいなく、夕日が心地よく差し込んでいるも……彼の視線はまさに殺意に満ちていた。よく知っている、よく見てきた双眸だ。

ならば、彼が提案する話は……おおよそ読めていた。

「俺がお前に負けるわけがないッ！ 魔術剣士として、総合力を競うなら……俺は、絶対にお前には負けないッ！」

「なるほど。昨日の模擬戦では、十分な力が発揮できなかったと？」

「そうだッ！ 魔術を組み合わせることができれば、身体能力だけのお前に負けるわけではないッ！！」

「……そうか。それで、決闘の申し込みだろうか？」

「分かってるじゃねえか……」

「ふむ……」

こうなることは、いつか来ると思っていた。明らかに俺のことを目の敵にしていたし、あの模擬戦での戦いがきつと響いたのだろう。それに今朝の噂、彼にとっては不名誉なことこの上ないのだろう。

だからこそ……憎しみ。

ここで受けないという選択肢も存在するが……きっとそれでは彼の気が収まることはない。

ならば……俺が取る選択肢は一つだった。

「分かった。付き合おう」

「真剣を使って、魔術行使もありだ」

「魔術剣士として戦うということだな」

「そうだ……それじゃあ、付いてこい」

俺たちは誰かに遮られる訳でもなくそのまま演習場に移動するが……チラッと後ろを見ると、エヴィ、アメリカ、それにエリサまでもがジーツとこちらを見つめていた。

どうやら付いて来るようだが……心配してくれているのだろうか。

でも、心配はいらない。この手の輩の対処は心得ているからな。

「おらよ」

と、ミスター・アリウムは真剣をこちらに投げて来る。

演習場にやってきた俺たちだが、なぜか見物の生徒が数多くいた。これはすでに見世物として、広めていたのだろうか。それとも、貴族には貴族なりのプライドがあるからこそ……なのだろうか。

パツと周囲を見るに、確かに貴族の生徒が多いような気がした。流石に全員の名前までは把握していないが、一般^{オーディナリー}人の俺に対していい印象を持っていないのは明らかだった。

「ミスター・アリウム、ルールは？」

「敗北を認めた方が負けだ」
「なるほど」

俺は投げ寄越された剣を拾う。カフカの森の演習でも使用したが、一般的なブロードソードそのものだった。

片手用のやや長めの剣。刃渡りは70から80センチ程度。またこれはサーベルとは異なり、反りが^そない真っ直ぐな刃をしており、先端部は両刃になっている。

そしてミスター・アリウムが持っているのもまた同様である。

この戦い……昨日と似たような形だが、明確に違う。

木刀ではないし、それに魔術の行使はなんでもありだ。

それこそ本当の魔術剣士同士の戦い……といったところだろうか。

じつと彼を見つめる。その双眸はとくに殺意に染まりきっている。貴族として一般人に^{オーディナリー}苦汁を嘗めさせられたことが気に入らないのだろう。俺も軍にいた時は色々と言われたものだった。その度にこうして争いごとになったのも、つい昨日のことのように思い出せる。

実際のところ、俺は極東戦役が終了してから……つまりは3年間、実戦経験はない。でもその間に何もなかったわけではないし、この学院でも努力は重ねている。ならば、今の俺ができる最大を持って彼に相対しようではないか。

「おらあああああああああッ!!」

合図はなかった。しかしそれは承知の上。

審判などいない。

互いに凌ぎを削り、相手に敗北の二文字を刻み込めば勝利となるのだ。それこそ、戦場に近い感覚だ。おそらく彼は俺を殺すような気概で来るのだろう。腕一本ぐらいなら刎ねても構わないと……思っているほどに。

「むッ……!!」

「オラオラ、どうしたあああああああッ!!」

以前とは違い、魔術の制限はない。彼は高速魔術クイックで火球ファイヤーボールを生み出して、さらには身体強化も重ねて俺の方に攻めて来る。

確かに彼の言うことも一理ある。あの木刀での戦いでは、彼は自分の能力を発揮できていない。むしろ、この魔術による攻防こそが真髄なのだろう。

魔術剣士はバランス型、魔術型、剣技型と3つの種類に分類される。魔術と剣技をバランスよく使う者もいれば、魔術に特化したもの、剣技に特化したものの、そのスタイルは各個人によって異なる。

見る限り、彼は魔術型なのは自明だった。だからこそ、この条件で決闘を申し込んできたのだろ。魔術が使えるのならば、負けることはない……と。

「……」

だが、それを含めてもまだ足りない。届きはしない。

俺のいる領域は彼のさらに上だ。それはもう、この一連の攻防で掴んでしまった。

依然として感情が先行しているのか、ミスター・アリウムは怒涛の攻撃を仕掛けて来る。高速魔術クイックによる攻撃も素晴らしいものだ。そしてそれを縫うようにして、俺に剣戟をぶつけて来る。

合理的かつ、判断のいい戦い方だ。

だが……まだ余計なモノが入っている。

それは感情。怒り、憎しみ、など戦闘には不要。確かに一時的に能力が底上げされることもあるが、総じてそれは余分である。

そんな彼を見て、俺は師匠に感情は切り捨てろと教えられたことを思い出していた。すでに師匠は側にはいない。10年近く共に過ごしてきたが、この学院には彼女はいない。でもその教えはずっと俺の心に刻まれている。

ならば、いつものようにその教えを俺は徹底して実行するだけで

いい。

「防御だけかッ!? ああッ!!?」

「……」

彼は優勢とと思っているのか、さらに攻撃を重ねて来る。縦横無尽に繰り広げられる剣戟。そしてその間には高速魔術クイックが入り込んで来る。これこそが、魔術剣士による本当の戦い。

その一方で俺は自らの意識を……沈める。まるで海底に沈み込んでいくかのように俺は意識を集中させて、落とし込んでいく。彼は知らない。感情など、戦闘には不要であり、余計なものでしかないと。

本当の戦場では、感情的になった瞬間に死が待っているのだから。

「あ……は……?」

刹那。俺は眼前に迫る、彼が発動した火球をブロードソードで切り裂いた。ファイヤーボール

ありえない出来事に彼は呆然となり、間拔けな声をあげる。それはこの戦いを観戦している生徒も同じだった。

魔術を剣で切り裂く。そんな芸当、軍人ならばまだしも学生には不可能だと思われる。しかし……そんな道理は俺には関係ない。

そして俺はブロードソードを中段に構え直すと、こう告げた。

「ミスター・アリウム。世界の広さを教えよう」

「ほざけええええええええええええええええええええええッ！
！！」

俺はそうして、改めて彼と対峙するのだった。

第22話 予兆

駆ける。

俺は地面をしつかりと踏みしめて、彼の攻撃を見据える。

クイック
ファイヤーボカッパ
高速魔術で火球と火柱を駆使しながら彼は攻撃を続けて来る。それはもはや、絨毯爆撃にも等しいものだった。

クロスレンジ
彼はすでに超近接距離での戦闘は自分の方が劣っていると理解しているのか、完全に長距離からの魔術攻撃を選択したようだ。

「おらあああああああああああああッ！！！」

雄叫びを上げる彼を見据える。

クイック
チエイン
それと同時に、俺は感じ取った。それは高速魔術と連鎖魔術を組み合わせた魔術。それこそその量は莫大なものになる。

ミスター・アリウムもまた、決して弱くはない。むしろ魔術師としては優秀である。それは今までの攻防を見ればすぐにわかる。が……それは学生の中ではと付け足す他ない。

チエイン
そしてその連鎖魔術による攻撃は、20ほどのコードを連鎖させたものであった。

降り注ぐ火炎の世界。すでに演習場は完全に紅蓮の世界と化していた。そして地面は融解と叫ぶまでも、完全に焼け焦げるほどになっていた。

だがもちろん、その炎は永続的に続くわけでもない。

彼が狙っているのは直撃だった。

でも今の俺には……届き得ない。

「……」

黙って攻撃をかわし続ける。剣は低く構えて地面と平行にして、次々とくる魔術の波の中を縫うようにして、駆け抜ける。

俺は先ほど、自分の限界を少しだけ取り払った。ここまで来てしまえば、完全に出し惜しみをしている場合ではないだろう。

もちろん、『氷剣の魔術師』として覚醒することはないがその片鱗はすでに見せつつあった。

「何……あれ？」

「どうなっているんだ？」

オーディナリー

「あいつは本当に一般人なのか？」

いものは火属性を内向性の高いものは氷属性を得意とする傾向もある。特に彼の場合は前者であり、この魔術によほど自信があるのだろう。

重ねていく攻撃の規模は徐々に増していく。すでに地面は灼けている箇所がないほどに、この場は紅蓮の炎に支配されていた。

でも俺は、ある魔術を使いながら躲していく。もちろんそれは、身体強化の内部コードインサイドではない。

この魔術を適宜発動しているからこそできる芸当。

おおよそ、他の魔術師が見れば俺はこの炎の雨の中を掻い潜り、さらには炎の海の中を進み続けているようにも見えるだろう。

「どうしてだッ！！？　なんで当たらねえんだよおおおおおおおおおおッ！！」

感情により暴発した魔術は確かに数は多い。でもその質は落ちる。コード理論の中に淀みが生じてしまうからだ。おそらく、コード理論の中のプロセスが狂い始めているのだろう。それは魔術という現象として、この世界に顕在化するも……すぐに掻き消えてしまう。地面にはくつきりとその足跡は残るが、俺にダメージを与えることは決して叶わない。

『コードの構成術式が甘い』

師匠がこの場にいれば、そう言っていたに違いなかった。

「……さて、様子見はここまでだな」

俺は改めてそう呟く。すでに底は見えた。

おそらく彼の一番得意としている魔術も予測できている。俺が次に取る行動から、彼が何をするかまで、脳内でのイメージ化は完了している。

瞬間、ダツと地面を思い切り蹴ってそのままミスター・アリウムの方へと直線的に駆けてく。すでに彼は剣を捨てており、魔術の構成に全てのリソースを割いている。

そうして全ての攻撃をことごとく躲して迫る俺を見て、彼が取る行動は一つ。

間違いなく、切り札を出してくるだろうと。

「へへへ……もう知らねえ……どうなっても、知らないからよおおおおおおおおおッ……！」

依然として叫び続けるミスター・アリウムが選択したのは、大規^エ模^ク魔術^ス。
魔術^{テン}。

それは名前の通り、魔術の中でも大規模なものを指し示す。それこそ、コード理論の中に膨大な魔術の術式を書き込み、この世界に具現化するものだ。

「フェブリスドラコ
火炎龍オオオオオオオオオオオオツ！！！！」

彼が両手を空に掲げると、顕現するのは炎の龍。

それが天から大地を駆け抜けるようにして俺に向かって、降り注ぐ。それは今までの比ではない。ちょうど俺を覆うようにして向かってくる龍。その魔術のコードはおそらく幾重にも重ねがけてあり、一見しただけでもその技量の高さが容易に分かるほどだ。ミスター・アリウムは決して弱くはない。だが……まだ未熟だ。それはあの極東戦役を生き抜いてきた俺だからこそ、分かる。それは驕りではなく、純然たる事実。

そしてバツクリと口を開るようにして、そのまま俺を飲み込もうとしてくるも……。

ああ、知っている。知っているとも。

上級魔術。エクステンシフその中でも、大規模魔術に属する魔術。それが火炎龍。フェブリスドラコ
プリママテリア対象の第一質料を捕捉して、追尾し続ける炎の龍だ。それこそ、この担い手はあまり多くはない。特に学生でこれを使用できるのは、破格の才能と言っていいだろう。

しかし、才能だけに驕ってしまえば魔術師の限界はすぐに見えてしまう。俺よりも才能のある師匠でさえ、自分に異常なまでの、それこそ強烈な努力を強いていた。一つだけあればいいのではない。複数の要素を絡み合わせることで、魔術師とは大成するのだ。

「……懐かしいな」

そう呟く。

あの戦場ではこの規模の魔術はむしろ普通だ。俺はそんな中を駆け巡り、戦ってきたのだから。

だからこそ、対処法などとつくに心得ている。

「フウッ」

頭上を見据えると、そのままある魔術をこの剣に組み込む。実際に、魔術を元から存在している物質に組み込む技術は存在している。

この技術の名前は、トランス転写。

それは魔術を物質に転写するものだ。

そして俺はそのままこの自分の持っている剣を、その巨大な炎の龍に向かって薙いだ。躊躇なく、何の恐れもなく、ただ当たり前

の所作としてそれを選択した。

たとえば自分を飲み込み、灼きつくす紅蓮の龍であっても俺の中に躊躇という言葉は存在しない。あまりの勢いにその熱波が身体を容赦なく灼いていこうとするが、この程度ならば自制はできる。直接炎で灼かれている訳ではない。

またこの魔術を目の前にして剣ごときで対応するなど、非現実的。多くの者がその話を聞けば、笑ってしまうだろう。でも今の俺ならば、そんな到底ありえないことさえも、できてしまう。七大魔術師は人の外にいる存在だ。それこそ、化け物と形容してもいい。そうでなければ、世界の頂に立つことなど……できないのだから。

「……こんなものか」

ブンツ、と剣を振り直すとその炎の龍は完全に雲散霧消。

文字通り俺は、フェブリスドラマコ上級魔術……それも大規模魔術である火炎龍を切り裂いたのだ。フェブリスドラマコ火炎龍が通過した跡は、その魔術の規模の大きさを物語っている。焼け焦げている地面に、僅かに融解している箇所もある。才能と努力。その二つがあつてこそ、この領域にたどり着ける。ミスター・アリウムは怒りと憎しみという感情を起因にしたとはいえ、この大規模魔術を制御したのは称賛に値するだろう。エクステンシブ

フェブリスドラマコだがその火炎龍は完全に雲散霧消し、パラパラと舞う火の粉は完全に彼の敗北を意味していた。

「な……あ……は……！！？」

魔術の過度の行使により欠乏症になっているのか、彼は地面に手をついてそのまま後ずさる。その目には信じられないものを見たという恐れがあった。まるで、同じ人間とは思えない……それこそ化け物でも見ているような双眸だ。それを見て、今更何も思うことはなかった。

自分が化け物であるということは、とうに自覚しているのだから。

「く……くるなッ！！　くるなあああッ！！」

スタスタと、そのまま悠然と歩みを進める。焼け焦げた地面をしっかりと踏みしめるようにして、彼の魔術を全てねじ伏せた証拠を刻むようにして、俺は彼の元へと向かっていく。

すでに決着はついた。彼の心は打ち砕かれ、俺に勝てないと心に刻まれたのだ。

「レイッ！！　危ないッ！！！」

「レイッ！！」

「レイくんっ……！！！」

それは3人の声だった。ちょうど皆の対角線にいる生徒が俺に対して魔術を行使したのだ。それこそ、第三者による妨害と言ってい

いだろう。でも俺は別にこのことを予想していないわけではなかった。ここにいるのは、アメリカ、エヴィ、エリサを除いて俺が気に入らない貴族ばかり。ならば、このような状況になれば卑劣な手段に出ることは可能性として考えていた。と言っても、俺からすればそんなものはただ甘いものでしかないのだが……。

「……大丈夫だ。この程度でどうにかかなりはしない」

余裕を持ってそう呟くとその魔術を視界に捉えることなく、剣を後ろに向かつて薙ぐ。現在この空間はミスター・アリウムが使った魔術によって第一質料が溢れている。特に火属性のコードを組み込んでいたため、今この空間は火属性の魔術が比較的容易に使用できる。

だからこそ、俺に向かってきたのは火球だファイヤーボールだったが、そんなものは俺には通用しない。彼にしたようにブロードソードで切り裂いて対処した。

「なあ……！？」

その声は、その魔術を放った人間のものだろう。

感覚の研ぎ澄まされた俺にはすでにある一定の領域の魔術の流れ……具体的に言えば、魔術の根幹である第一質料プリママテリアの奔流は完璧に把握できる。

完全に全盛期の力を取り戻したわけではないが、それに限りなく近い俺は淡々とした双眸で彼の前にたどり着く。

妨害をしてきた生徒も、他の生徒たちも啞然としたのかもう何もしてこないようだった。

「ひッ……！」

剣をスッと向ける。

そして俺は、こう告げた。

「ミスター・アリウム。俺の勝ちでいいだろうか？」

「ああ……お、俺の負けで構わない……と……でも言うと思ったか
ああああああああああああああああああッ……！」

その刹那、^{クイック}高速魔術で^{ファイヤーボール}火球が発動。時間にして1秒にも満たないそれは、完全に用意していたのだらう。怯える振りをして、俺をおびき出して油断したところを狙う。

非常に合理的かつ、有効な手段だ。感情に支配されてはいるものの、どうすれば俺を倒せるのかとよく考えられている行動だ。

それこそ、この戦いに明確なルールはない。卑怯な手段など、むしろ褒められるべきものだが……。

「な……はあ……消え、た……だと……!?!？」

剣を握っていない、左手をスツと横にズラすとその魔術は掻き消える。先ほどの現象と同様に、この世界からは魔術が雲散霧消する。

「魔術の無効化……！！？ そんな技術、聞いたことないぞツ！！？」

「厳密に言えば、無効化ではない」

「じゃあ……分解なのかツ！！！！？」

「いいや分解でもない。言っただろう、世界の広さを教えると。君の見ている世界は全てではない。そして俺もまた世界の広さを教えると言ったが、俺自身もまだその広さの前にただ圧倒されている者にすぎない。互いにまだ、途上の身の上だ」

「どうしてツ……お前ツ！！ 本当は、貴族なんだろうツ！！？」

三大貴族の隠し子だろうツ！！ オーディナリー ああツ！！！！！！？」

「違うさ。生まれは間違いなく、一般人だ。でも、一般人であつても魔術は使えるし、俺はこうして……戦うことができる。生まれは大事だろう。でも、それが全てではない。不遜な言葉で申し訳ないが……ミスター・アリウム、君はそれを知ればもっと成長できると思う」

「……俺は……俺は一体……」

もう抵抗する様子もない。

ただ生気が抜けたように、その場に伏せるミスター・アリウム。そうして彼は地面に伏したまま慟哭とうきくに浸る。

「うあああああああああああッ！！！」

悔しいのだろう。

見下していた一般人に完敗を喫した。彼は優秀な魔術師だからこそ、理解できたのだ。俺との間に存在する、明確な隔たりを。それは彼が追いつけるのかすらわからない大きな差だ。

でもそれを認識できるのなら、いい。

その悔しさをバネに、君はまた戦える。学ぶことができる。

一度の敗北が、死に繋がる戦場ではないのだから。

だから今は……慟哭によって涙を流すのも、必要な時だろう。

「レイツ！ 大丈夫なの！？」

「お前、あの炎の龍を切り裂いたよな！！？ どうなってやがる！！？」

「レイくん……あなたは、一体……？」

遠目から見ていた、アメリカ、エヴィ、エリサがやってくる。

……ここまで見せたのなら、もう隠す必要はないのかもしれない。もうよかった。別にバレてもいい。俺は仲のいい3人がある種騙して、生活をしていた。でもそれはきつと破綻する。ずっと前からわかっていた。もちろん全校生徒に公開する気は無いが、この仲間た

ちになら……俺の全てを知ってもらってもいい。そう思えるほどに、大切な人ができた。

だから俺は……自分の素性を明らかにしようとするも……。

「なッ！！？」

「きゃっ！！」

「うおっ！！」

「……えっ！！！？」

その重圧は、普通の魔術師は耐えきれないだろう。すぐに俺以外の全員はその場に叩きつけられるようにして、地面に伏せる。周りにいた貴族の生徒もすでに気を失っているのか、バタバタと地面に倒れていく。

今この場で意識があるのは、ミスター・アリウムを含めて俺たち5人だけだった。

するとどこからともなく、まるで影の中から現れたかのように、聞き覚えのある声が入ってくる。

「ははは……素晴らしいな。いや、素晴らしいとも。いい友情だ。しかし、君たちはこれから生贄になるんだ。いや決して悲観することはない。偉大な魔術の発展に貢献できるんだ。誇らしいとは思わないか？ そうだろう？ なあ、レイ＝ホワイトよ」
「あなたはッ……！！！」

この状況下で、動けるのは俺だけだった。

そして感じ取る。これはもはや……尋常では無いのだと……。それと同時に懐かしい感覚に浸る。それこそ、極東戦役の戦場と同等の圧力。これは死の臭いだ……。

「さて、さて。君たちはどう処理しようか……まあ、でもとりあえずはレイ＝ホワイトをどうにかしないと。お前はなぜか動けるようだしな……ふふ……」

スツと眼を細める相手。それを見て悟る。こいつはもう……普通ではない。明らかな殺意が込められた視線。それはミスター・アリウムの比ではない。何度も目撃してきた……これはすでに、殺戮に慣れている者の双眸だ。

「グレイ教諭……あなたが、そうでしたか」

「ふふ。心踊るだろう？ さあ存分にやりあおうではないか」

グレイ教諭。彼女のその姿は、あの教室で見えていたものとは天と地ほどの差がある。それはその不敵に微笑む顔を見ればすぐに理解できた。

解放するしか、無いのか……。

『冰剣の魔術師』

その真価を、本領を発揮しなければならない時が来てしまったようだ。経験からわかる。これは真正銘の本気でないと、俺は負けるのだと。そうしてこの場にいる生徒たちは彼女に蹂躪される。すでにこの場は戦場と化した。それはこの場の雰囲気だけでよく理解できてしまう。

師匠。申し訳ありません。ここは、使えない場面です。引くわけにはいきません。ここにいる全員を守るために俺は……あの全盛期に少しばかり、戻るしかないようです。

そう師匠に内心で謝罪すると、俺はこう告げた。

「クロノスロック
体内時間固定、解除」

約3年ぶりに、冰剣の魔術師がこの世界に出現する。

第23話 アトリビュート

吹き荒れる第一質料プリママテリアの奔流。それは俺を中心にして起こっている。
この体から溢れ出てくるのは、青白い第一質料プリママテリア。

それを感じ取ると共に、徐々に自分の体に変質していくのを感じる。元々青みがかった黒髪だった俺の髪は、その色を変質させ、肌の色もまたどこまでも透き通ったような純白へと変化していく。

「レイ……その姿は……？ それに、その髪は……？」

アメリアは呆然とそう呟く。俺以外の4人は意識はまだあるものの、すでに立ち上がるだけの気力はない。ただ地面を這うようにして、俺をじっと見つめている。

あの瞬間、俺はとつさに防御障壁を構築していた。そのおかげでか近くにいた4人はなんとか意識を保っていた。

ミスター・アリウムも欠乏症だというのに、この重圧の中でまるで俺の存在を心に灼きつけるような……それこそ、怒りや憎しみとは異なる双眸で俺のことを見つめていた。

そしてアメリアの指摘の通り、髪はどこまでも白く変質し……そして、少しだけ青みがかった色調を帯びる。

この姿になるのも、3年ぶりなのか。

と、少しだけ懐かしく思う。あの過酷な戦場を想起して、決して気分はいいものではないが……学友たちを守るためならば俺は意を決してこの姿と向き合う覚悟である。

「すごい……プリママテリア第一質料が……レイくんの周りに……」

「ああ……視える。どれだけ濃いんだよ……可視化なんて現象、普通はありえねえだろう……」

エヴィの言う通り、俺の周囲にはすでに青白いプリママテリア第一質料が可視化できるほどになっていた。もちろん第一質料は目に見えないし、色もない。ただ俺という魔術師を媒体として、この世界に青白い粒子として可視化されているだけだ。

「俺のことは……これが終われば話そう。もう隠し事はしない。誠心誠意、謝罪をしよう。だが少しだけ、待っていてほしい。俺はどうやら、グレイ教諭と……戦う必要があるらしい」

そう告げると、そのまま悠然と歩みを進める。

俺がその歩みを進めるたび、パキパキパキと地面が凍りついていく。先ほどの紅蓮の世界がまるで嘘のように、周囲はまさに氷の世

界と化していた。

ここにいるのは、正真正銘の七大魔術師の一人である…… 冰剣の魔術師だ。

「ほう…… やはり、お前は只者ではなかったか」
「それはあなたと同じですよ。そして、得心がいきました」

ニヤツと嗤っているその姿はいつもの彼女ではない。

だがグレイ教諭は俺の話に興味があるのか、まだ攻撃の姿勢はみせない。どうやら、話には応じるつもりみたいだ。そして俺はそのまま言葉を紡ぐ。

「いいだろう。最後の講義といこうではないか。では、君の憶測を話してみたまえ」

「……すでにその存在は知っています。あなたは、ユーゼニクス優生機関の所属だ」

「続ける」

「その目的は記憶痕跡。エングラムつまりところは、魔術師の脳だ。そして、あの相談の時に言及していた停学、退学の生徒は……」

先の言葉の前に、彼女はそれをかき消すようにして高らかに笑い始めた。

「ククク……アハハハハハハハハハ！！　ああ、よく知っているなあー！　そうだとも、正解さ。レイ^{エングラム}ホワイト。私は聡い人間は嫌いではないよ。さて、君の記憶痕跡^{エングラム}にも非常に興味が出てきたようだ」

「……そして、カフカの森での実習。あれは事故に見せかけて、生徒を誘拐しようとしたね？　あの森に在中していたのも、魔物を操作するため……」

「ククク……そこまでわかってしているのか。あの演習は毎年うってつけでなあ……　どうしても言い訳がつく。そして私は嘆くのだ。悲劇のヒロインとしてな……　ああ、どうして私の生徒が……とな？　ククク、いやあ本当にこの学院は最高だよ……　ふふ……　若い脳はいい。まだコードに馴染みきつていないし、それこそ記憶痕跡^{エングラム}も容易に抽出できる……　ふふ、ふふふふ。毎年一年の担任をしているのも、そのためさ……　ククク……　ああ、本当にガキどもは御しやすくて助かるよ」

容貌を歪めながら問答に応える彼女に、俺は怒りに支配されそうになるも、それをグツと堪えてさらに言葉を紡ぐ。

「それに、ミスター・アリウムも様子がおかしかった。他の生徒もそうです。あなたが焚きつけたんですね？」

「ククク、馬鹿な連中さ。プライドばかり高くて、実力が伴わないゴミども。だが、こうして質のいい魔術師がこの場に揃ったのは僥倖^{ゴミ}だなあ。特に、三大貴族がいるのは、な……　ククク、全て思い通りさ……　ふふふふ、あははははははは！！　ああ……　本当に素晴らしいなあ……　これだけあれば、優生機関^{ユージェニクス}での地位も上がると言うものだ」

「……俺に対する相談も、偽りだったのですね」

「……ククク、当たり前だろう。お前には感じる場所があったからなあ……興味のある生徒はあゝして、事前に相談に乗るふりをするのさ……面倒見のいい先生としてな？　なあ、私はうまく演じることができていただろう？　ククク……」

凄惨に嗤う。

それは不敵な笑みだ。

こいつは生徒を確保して、殺して、その脳だけを切り開いている正真正銘の人の道を外れた魔術師だ。彼女は面倒見のいい教師として学内でも有名だった。それこそ、この学園唯一の^{オーディナリ}一般人である俺にもケアをしてくれるほどに。

でもそれは、全て偽物だった。

情などない。ただ、魔術の真理を追究できれば……人間の命など、どうでもいいのだろう。それこそ、こいつらは平然と人間の命を消耗品として扱う。

それに、意識を残す生徒が居る上でここまで饒舌に話すと言うことは、決して生かして帰す気は無いのだろう。全員がただの実験するための道具として扱われる。人としての尊厳などなく、ただ蹂躪されるだけ。

こんな輩は極東戦役で数多く見て来た。目的は違えど、その殺戮に快楽を覚える異常者。グレイ教諭の表情はすでに愉悦に浸っているのがよく分かる。おそらくすでに事は済んだと思っているに違い

ない。

俺を戦闘不能にすれば、彼女はここにいる生徒の脳を全て確保できる。

しかし、そんな非道を許しはしない。

だからこそ、俺のやることは一つだった。

「……腕の一本や二本は覚悟してもらいます。グレイ教諭」

「ほづ……まだ私を教師と呼ぶか。しかも、殺すのではなく生かして捕らえる気か。いいよ……レイ」ホワイト、お前は面白い。しばらくは生かしたまま、その脳内の記憶痕跡^{エングラム}を観察してやろう」

その言葉が、合図だった。

「ハアツ！！！」

地面を踏みしめて、距離を詰める。しかし先ほどの俺の戦い方を知っていたのか、グレイ教諭はすぐに俺から距離を取るうとする。

^{クロスレンジ}

超近接距離での戦闘が俺の真価だと理解している。今までの会話も、それこそあの相談の時にライト教官が褒めていた……と言っていたのも、リサーチの一環。俺に対して警戒していたからこそ、グレイ教諭はあの場を設けたのだ。

そしてそれはまさに的中しており、彼女はさらに後方へと距離をとっていく。

「ふふ……知っているとも。お前は近接に特化した魔術師だろう？
オーディナリー
プリママテリア
一般人だというのに、その第一質料の保有量、それに溢れ出る氷は謎だが……懐に入れなければ……並み以下の魔術師さ……ククク

……」

クイック
チェイン
高速魔術と連鎖魔術を掛け合わせて、彼女が生み出したのは、炎の蛇だ。先ほどのミスター・アリウムが生み出した魔術を踏み台にして、火属性の魔術が最もこの場で効果的と弾き出したのだろう。

非常に合理的な判断だ。それこそ、彼女は感情などに支配されていない。ただ淡々とこの戦闘という作業をこなしているだけだ。

そして生み出したのは、中級魔術である炎蛇。ファイヤースネークそれは、不規則な軌道を描きながら対象に絡み付こうとする炎の蛇。

こいつに一度捕まってしまうえば、その体は焼け焦げ、朽ち果てるまで離れることはない。いわゆる、殺戮に特化した魔術だ。それに厄介なのはその数だ。さすがはこの学院の教師なのか、その量は視界に入るだけでもすでに200は超えているだろうか。

地面を滑ってゆく炎蛇は不規則に、かつ高速で移動しながら、対象となっている俺を取り囲むようにして迫ってくる。

「くっ……!!」

能力を解放したとはいえ、俺はまだ完全には馴染みきってはいない。この姿になるのは約3年ぶり。感覚が追いついてきてないため、まだ本領を発揮するには時間がかかる。

だからこそ、今は距離を取りつつ逃げるしかない。

「ほらほら、どうしたあッ！！ 逃げてばかりでは、どうにもできないぞッ！！！！ レイ！！ ホワイトよッ！！！！」

その数はすでに、300に迫る。彼女は依然として不敵に嗤いながら、俺が逃げる様をニヤニヤと凝視する。さしずめ、狩りでも行っている感覚なのだろう。

また幸いなことに、その対象は俺だけなので他の生徒から距離を取るようにして、炎蛇を一箇所に集中させる。
ファイヤースネーク

そして彼女のその表情をチラリと見れば、愉悦に浸っているのがよくわかる。

人を殺し、その脳を調べ、魔術の真髄を極めようとする危険な集団。そんな奴をここで野放しにすること、さらには……そんな非道は許されてはならない。

「……ッ」

ギリッと齒を食いしばる。

あの戦場でもそうだった。どうして、どうして人を殺すことに悦びを見出せる。どうして、何も思わない。なぜだ……と、思い悩んだのはとうの昔だ。その答えもすでに得ている。

人間とは、そういう性質も兼ね備えている生き物だからだ。

全員が聖人であることなど不可能だ。だからこそ人は争い、戦争というものも生まれてしまう。

それはある種の宿命。だからこそ俺は……それに立ち向かうしかない。ここにいる全ての生徒を、そして学院でできた大切な友人を守るためにも……俺は……。

「は、つまらんな。ではこれで……どうだ？」

ファイヤースネーク

彼女がさらに生み出した炎蛇が狙うのは、アメリカたちだった。彼女たちはまだかろうじて意識がある。そんな中、目の前から何百という炎の蛇が食らいつこうとしてくる。

敢えて意識のある者を狙うその神経には、怒りが再び沸き上がるが……沈める。今成すことは、彼女を無力化することだけ。不要な感情は切り捨てろ、と自分自身に刻み込む。

「……師匠。使わせていただきます」

もう出し惜しみをする暇など、なかった。

それに俺の状態は完全にハマった。それはまるで最後のパズルのピースが当て嵌まるような……そんな感覚だった。

刹那、脳内でコードを走らせる。その感覚は一言で言えば、懐かしい。ここ3年間はまともに行使してこなかったコード理論。インサイド内部コードは使ってきたが、この世界に物質または現象を具現化する外部アウトコードを使うのは……実に3年ぶり。

だというのに、人間の身体とは不思議なもので、まるで全盛期と同様に俺は魔術を行使した。

《プリママテリア第一質料〓マテリアルエンコーディング〓物質コード》

《マテリアル物資コード〓マテリアルデコーディング》

《マテリアル物質コード〓マテリアルプロセシング》

《マテリアルエンボディメント〓物質》

「きゃっ……!!」

「うおっ……!!」

「うわっ……!!」

「なッ!!?」

そうして、4人の目の前には氷の壁が生成されていた。その氷壁に炎蛇が次々とぶつかっていくも完全に消失していく。

もちろん、迂回するようにして迫る炎蛇は俺が対処していく。次々と氷柱を生み出すと、炎蛇を突き刺すようにして無力化していく。

不規則に動き回る蛇たちだが、完全にこの領域内の第一質料を感じ知っている俺は、ピンポイントでその炎の蛇を掻き消していく。

精密なコードの組み上げ、それに座標認識が必要となる超高度な技術だが……そんなものは、もはや無意識化で行えるほどに俺の感覚は戻りつつあった。

これならば、アレも使えるかもしれない。

「む……? お前、魔術が使えるのか? というよりも、なんだそれは? その規模の魔術を高速魔術で使える? それに、その精度……白金級の魔術師でもそれは……なんだ……なんだそれは……まさか、お前は……」

呆然としているグレイ教諭の声など気にならなかった。

俺の周囲はさらに凍てついていく。完全に地面は俺を中心にしてパキパキパキと凍りつく。この空間は完全なる氷の世界へと変貌し

ていく。

焼け焦げた地面の後も、ミスター・アリウムとグレイ教諭が使用した魔術の痕跡も、全てを塗り替え、侵食するようにして俺の漏れ出す第一質料はこの世界に顕在化する。

もはやこのブロードソードなど必要なかった。持っているそれを凍りついている地面に突き刺し……。

こう呟いた。

「
アイシクルブレイズ
冰千剣戟」

一気にコードを脳内で走らせると、空中に固定されるようにしてこの世界に顕在化するのは。

ひょうげん
冰剣。

空中に浮遊する冰の剣は俺を囲むようにして、この世界に具現化する。さらに右手をバツと横に広げ、その冰剣を一行に整える。

そして俺は、宙に浮かぶ冰剣を一本だけ右手で掴み取る。

ああ……この感覚だ。この手に残る確かな冷たさ。それは、俺にあの頃の記憶を呼び起こさせる。

そして流石にこの現象がただ事ではないと理解したのか、グレイ

教諭は口を開く。

「お、お前まさか……いや、氷剣の魔術師は極東戦役で引退したはずだッ！！こんな場所に……それこそ、一般人のお前が氷剣のわけがないッ！！」
オーディナリー

氷剣の魔術師がこんなところに存在しているわけがない、というのも理解できる。七大魔術師の素性は明らかにされていない者の方が多い。むしろ、俺が当代の氷剣の魔術師であることを知っているものは限られている。

だが、俺は間違いなく師匠の後を引き継いだ氷剣の魔術師である。

それは何よりも、この氷剣がそれを悠然と物語っている。

「その通りです。しかし、氷剣の魔術師は引き継がれていた……ある一人の少年に……」

「バカな……バカなッ！！バカなッ！！バカなッ！！バカなッ！！あり得るはずがないッ！！そんな戯言をほざくなああああああああッ！！」

炎系の魔術を大量に放ってくるが、それは全て氷剣で切り裂いていく。もはや、この手に持つ必要性すらない。この空間に顕現する氷剣はすでに、俺の意のままに操作することができるからだ。

「……………」

見据える。

グレイ教諭の攻撃は確実に俺を追いつめるようにして発動させていく。

ファイヤーボール、ファイヤービーム、ファイヤーレイン

火球、火柱、火雨。発動こそ、学生でもできるがそれは数えるのも馬鹿らしいくらいのものだった。

形容するならば、炎の世界と氷の世界の衝突。

だが俺は氷剣を使用して、全てを切り裂く。その炎が俺の世界を侵食することはない。

縦横無尽の剣戟。もちろん、この手に持つ氷剣もそうだが俺は全ての氷剣を高精度で操作できる。さらに砕け散るうが、その砕け散った氷を媒介として新しい氷剣を生み出すのも自由自在。

この圧倒的な手数こそが、アイシクルブレイズ氷千剣戟の強みだ。

懐かしい感覚だが……………まだ、俺も衰えてはいないようだった。

「クククク……………氷剣がどうした……………七大魔術師であろうとも、こいつは……………防げまいッ……………」

瞬間、膨大な第一質料プリママテリアが彼女に集まっていく。まだ微かにだが、火属性の残滓さんしが残った第一質料プリママテリアは存在している。それを掻き集めるようにして、グレイ教諭はコードを走らせる。

俺は、その彼女の魔術に真正面から対峙する。

「煉獄龍オオオオオオオオオオオオオオッ！！」
カサルティリオドラコ

顕現するのは、煉獄の龍だった。それはもはや、ミスター・アリウムフェブリスドラコが使用した火炎龍の比ではない。

大規模魔術エクステンシフに属する聖級魔術であり、その名の通り煉獄を纏う龍。赤黒い炎によって構築された身体。それが真っ直ぐ俺に向かって、大地を進んでくる。

地面が灼け焦げるなんて規模ではない。完全にそれは融解を起こすほどの規模の魔術。それに加えてある程度距離があるこの場であっても、肌が灼やかれるような感覚があるほどだ。

幸いなのは今の彼女は俺しか見据えていないことだった。だからこそ、他の生徒は火傷を負うだろうが、死に至ることはないだろう。

「…………ふう」

深呼吸。

もちろん、この振りまかれる熱波は魔術である程度は防御できるものの……それを踏まえた上でも、聖級魔術はやはり尋常ではない。

使える魔術師はそれこそ、^{グランド}聖級の魔術師に限られる超高難度の大^エクステンシブ規模魔術。

だがそんなものに今更圧倒されるなんてことは、あり得なかった。

なぜならば、今の俺は魔術師の頂点の一人である　　冰剣の魔術師なのだから。

そして俺が行使するのは、冰剣ではない。この規模の魔術ならば、冰剣で対処するよりもさらに効果的な魔術があった。

それはこの世界で俺だけしか使用できない魔術だ。

そうして脳内でまた別のコードを走らせる。

「……どうやら、使っしかないようだな」

発動するのは^{アンチマテリアル}対物質コード。

それは3年前に師匠が発見した新しいコード。^{プリママテリア}第一質料が物質に変換されるコード理論の中に実は存在していたのが、^{アンチマテリアル}対物質コード

だ。それは物質コードマテリアルと相反するようにして存在している。

言うならば物質や現象には物質コードマテリアルと対物質コードアンチマテリアルが同時に存在している。

だが、顕在化するのは物質コードマテリアルだけであり、対物質コードアンチマテリアルは潜在化している。

だからこそ普通は対物質コードアンチマテリアルが発動することはない。しかし今の俺は、その対物質コードに干渉して潜在化しているそれを顕在化させることができる。

コードへの内部干渉。それは俺が得意としている技術の一つだ。師匠に徹底的に鍛えられたそれは、今の俺の中に確かにこうして残っている。

そして煉獄龍に座標を指定。そのコード、つまりは内部情報形式カサルティリオドラコを読み取ると、内部に残存している対物質コードアンチマテリアルを活性化させる。

アンチマテリアル レストレーション
《対物質コード：還元》

マテリアル アンチマテリアル
《物質Ⅱ 対物質コード》

マテリアル レストレーション
《物質：還元Ⅱ 第一質料》

「 アンチマテリアル アクティベート
対物質コード、起動」

瞬間、聖級魔術である煉獄龍が完全に掻き消える。それは僅かな火の粉すら残らない。完全に魔術としてこの世界に具現化している現象を元の第一質料に戻したのだ。

ミスター・アリウムに言った言葉の意味はこれだった。

厳密に言えば無効化ではないし、分解でもない。

アンチマテリアル
対物質コードの本質は『戻す』ことにあるのだ。

プリママテリア
第一質料が物質または現象に変化するコード理論を逆転させることこそ、この対物質コードの真価である。

「は……あ……？ な、ん……だと……？ なんだ、なんだそれは……」

塵すら残らない現象を目の前にして、ただただ啞然とするグレイ教諭。

アンチマテリアル
無理もないだろう。対物質コードは完全に論文の中のものであり、実際に存在していることは確認されていても、使い手はいなかったのだから。

そして俺は改めて、淡々と告げる。

「冰剣はアトリビュートであり、本質ではない」
「何を……何を……言っている？」

アトリビュート。

それは言い換えれば、シンボル、象徴ともいうことが出来るだろう。

だがそれは、本質ではない。冰剣はアトリビュートに過ぎないのだ。

冰剣の魔術師。

それは、決して冰剣だけが使える能力ではない。

師匠の後を引き継ぎ、俺は知った。その本質というものを。

そして俺がなぜ今まで自分の能力を引き下げ、固定できていたのか。

それもまた、この本質が根幹にあるからこそ。そしてそれは冰剣にも繋がっている。

ある3つの本質を軸に、冰剣の魔術師とは成り立っているのだ。

「あなたに、冰剣の魔術師の本質を見せよう」

真の意味で、氷剣の魔術師が顕現^{けんげん}する

。

第24話 氷剣の魔術師

「何を、何を言っている……？ お前は一体……？」

呆けた表情で俺を見つめるグレイ教諭。

完全に理解できないという顔である。だがそれもそのはずだ。普通ならば、到底理解することは不可能だろう……この能力の本質と
いうものは。

「う、うわあああああああああッ！！！」

「……」

もう言葉はいらなかった。互いに魔術を発動する。彼女は物質コ
ード、一方の俺は対物質コードを発動する。
アンチマテリアル

彼女はもう……恐怖心しか抱いていなかった。

氷剣の魔術師がこの場にいるわけがない。しかし、目の前に顕現しているのは間違いなく氷剣である。それを見て、認めるしかないのだ。

レイ＝ホワイトは真正正銘の氷剣の魔術師であると。

それに……彼女は目撃している。自分の魔術が完全に無効化されてしまったのを。

「くるなッ！！　くるなああああああああああッ！！」

慌てて大量の魔術を行使するグレイ教諭。

脳内に過ぎる可能性を払拭できないのだろう。慌てて行使するその魔術はもはや、魔術と呼ぶのも烏滸がましいものだった。

それは完全にコード理論が破綻しかけている魔術だ。

クイック、リモート、チェイン、ディレイ、マテリアルシフト、エクステンション、高速魔術、遠隔魔術、連鎖魔術、遅延魔術、物資変化、大規模魔術、大規模連鎖魔術のどれにも属さないような、それこそただコードを流しただけの乱雑な魔術。

その程度のものは、俺の対物質コードの前では無意味に等しい。

アンチマテリアル
《対物質コード：還元》
レストレーション

マテリアル アンチマテリアル
《物質＝対物質コード》

マテリアル レストレーション
《物質・還元》第一資料

もはや呼吸に等しいそれを、なんの違和感もなく実行する。

瞬間、その無秩序な魔術は完全に第一資料に還元される。パラパラと宙に舞う青白い粒子は、完全に可視化されるほどに濃度が濃いものだった。

「あ……ああ……うわあああああああああ……！」

とうとうグレイ教諭は逃げ回り始める。背を向け、怯えるようにしてその場から駆け出し始めた。もちろん、それを逃すような俺ではない。

プリママテリアル
《第一資料》エンコーディング《物質コード》

マテリアル
《物質コード》デコーディング

マテリアル
《物質コード》プロセッシング《ディセレーション》減速《固定》

マテリアル
《エンボディメント》物質

「
アイシクルブレイズ
氷千剣戟」

減速の工程を組み込んで改めて発動するのは、氷剣。しかしそれは先ほどとは異なり、より細かくコードを組み込んだ。

大まかに言えば、温度とは分子の振動で決まる。氷魔術が得意な魔術師は、結局のところこの減速の扱い方次第だ。ディセレーション

しかし多くの魔術師はそれをコード理論の工程に組み込めない。減速、というものを完全に無意識の中で処理をしてしまい、普通の魔術師はただそれを氷魔術として使用しているに過ぎないが……。

氷剣の魔術師の真価は、その先にある。

緻密なコード構築、そしてそれによって生み出される氷剣。つまるところ、魔術の技量とはコード理論にどれだけの細かいコードを組み込めるのか……という事に尽きる。

そして俺はコードの中に減速と固定を組み込み、それを処理の過程で造形を描いて、氷千剣戟ディセレーション
アイシクルブレイズを発動。

「……グレイ教諭、覚悟を」

手掌で氷剣を操作すると、その無数の氷の剣氷の剣は容赦なくグレイ教諭を襲う。

彼女はその攻撃に気がついたのか、すぐに炎魔術で相殺しようとするも………すぐに対物質コードを発動。

プリママテリア
その魔術を第一質料へと還元する。

アンチマテリアル レストレーション
《対物質コード・還元》

マテリアル アンチマテリアル
《物質Ⅱ対物質コード》

マテリアル レストレーション
《物質・還元Ⅱ第一質料》

さらに俺は魔術を重ねる。

プリママテリア
《第一質料ⅡエンコーディングⅡ物質コード》
マテリアル

マテリアル
《物資コードⅡデコーディング》

マテリアル
《物質コードⅡプロセッシングⅡ固定》
ロック

フェノメノン
《エンボディメントⅡ現象》

フレームロック
「座標固定」

固定する座標はグレイ教諭の脚に指定した。

固定。この魔術もまた、俺の得意としているものだ。対象を選択し、それに対して第一質料を凝固させるように集中させ……そのままそれを固定する。

プリママテリア

別にこれは冰剣のような物質だけでなく、人体に対しても有効だ。

もちろん人体に対しては介入する要素が多いため難易度は上がるものの、冰剣の魔術師にとってそれは些事に等しい。

この場所を3次元空間として再定義して、固定座標を指定。

そして、グレイ教諭はその場に固定されてしまい……冰剣が容赦なくグレイ教諭の元に迫る。

「きゃあああああああああッ……！」

悲鳴。

無数の冰剣は、無慈悲にも彼女の脚を貫いた。完全に貫通しており、その場に大量の血液が舞い散る。突き刺さっている冰剣にもまた、彼女の血がべつとりとこびりつく。

ポタ、ポタポタポタと滴る灼けるような紅蓮の血液を見ても、動揺などはしない。

「……」

もはやその場に伏せるグレイ教諭を見て、俺は何も感じない。自分の魔術が彼女を貫いても、冷静にそれを見つめて……歩みを進める。

冰剣の魔術師の本質。

それは今、俺が行使した魔術に集約される。

減速、固定、還元。

能力名として示すのならば、ディセレーション減速、レストレーション固定、還元。

冰剣とはその中でも、ディセレーション減速、レストレーション固定を主軸にして生み出している魔術だ。

レストレーションマテリアル還元は対物質コードを使ってコード理論を逆転させ、プリマ魔術を第一質料に戻す技術。

この3つこそが、冰剣の魔術師の『本質』だ。

それこそ、冰剣とはただのアトリビュートに過ぎない。

全ては応用だ。この3つを主軸にして魔術を行使するのが、当代の冰剣の魔術師。

それを完全に解放した俺は……もはや、誰にも止めることなどできはしない。

「さて、と」

「ひ、ひいいいいい……お、お前は本当に……あの氷剣なのか……ッ!!?」

貫通したのは主に脚だ。彼女の動きを封じるために、その脚を狙ったのだ。

その痛みは確に残っているのか、顔からは汗が大量に滲み出てきていた。

「そうだ。初めに言っただろう。俺こそが、氷剣の魔術師であると」
「う……あ……ああ……」

もはやその双眸からは、先ほどのような強い殺意はない。

今までは狩る側だったのだろう。その過程を楽しみ、人を殺し、脳を弄ることに悦を見出していた。しかし今となっては、自分こそが狩られる側であり……氷剣の魔術師には決して届きはしないと、本能に刻み込む。

「やめろ……まで、わかった。お前も優生機関ユーゼニクスに紹介しよう！ そうだ！ それがいい！ なあ、だから今回は見逃してくれ！ 私の研究はここで終わるわけにはいかないんだッ!!」

ズルズルと這うようにして、俺の足元に近づいてくるが……それ
はもちろん罠。彼女はすぐに、俺の顔面めがけて高速魔術で火球を
生み出した。

しかし……そんな姑息な手に引つかかるほど、俺は経験がないわ
けではない。すぐに対物質コードで無力化する。時間はそれこそ、
1秒も必要ない。

「どうした？ 続けないのか？」

「ひ……ひいいいいいい……！！」

絶対的な実力差。それをハッキリと彼女に突きつける。

七大魔術師の中でも、近接戦闘最強と謳われる『氷剣の魔術師』
には……決して敵いはしないのだと。

「う……ああ……ああ……」

「終わりだろうか、グレイ教諭」

スツと氷剣を右手に顕現させると、それを握りしめて彼女の喉元
に突きつける。

「ククク……ああ……凄いよ……認めるさ……白金級であつても、
聖級には届きは……しないのだと……しかも、七大魔術師の中でも
近接戦闘最強の氷剣には……ははは……勝てはしないさ……ハハ、

ダークトライアドシステム。

それは師匠が告げていた言葉だ。人間の暗黒面の3つを総称したもの。

ナルシシズム、マキャベリズム、サイコパシー。

それらを魔術として体系化して、コード理論に組み込んだものだと予想するが……その能力までは完全に未知数だった。

そして、その第一^{プリママテリア}質料の奔流が収まるとその場に現れたのは……
^{いぎよう}異形そのものだった。

「ふふ……フハハ……アハハハハハハハハハハハハハハッ！
！！！！！！」

それはもはや、人間と形容していいのか分からなかった。身体中には赤黒いコードが可視化できるほどに流れており、さらにはその双眸もまた灼けるような深紅に染まっていた。

またあれは骨なのだろうか……身体中の至る所から、白い鋭利な棒状のものが完全に剥き出しになっていた。

「私にここまで使わせたんだ……今までの研究の成果全てを……お前には道連れになってもらうぞ……？　なあ？　氷剣の魔術師よ……ククク、アハハハハハハハハハハハッ！！！！」

両手を広げて、高らかに嗤うその様子は完全に狂っているとしか思えなかった。

そもそも、人間の肉体を変質させる魔術など聞いたことはない。
もちろん、内部コードの一種なのかもしれないが……普通の身体強化でも、あそこまで異形になり得る現象など聞いたこともない。

エングラム
記憶痕跡、ダークトライアドシステム。

人間がその倫理の枷を外して、たどり着いたのが……人間の外の生物だともいうのか。

極東戦役でも、ここまでの第一質料の濃度は見たこともない。それこそ、七大魔術師に匹敵するか……それ以上の……。

「……さあ、楽しませてくれよ？ 氷剣……」

スツとその手を掲げると、俺は感じた。

自分の真下を起点にして、
ファイヤーピラー
火柱が出現するのを。

もちろんそれは高速魔術での発動だが……威力は今までの比にならない。

俺はそのまま後方に下がりつつ、氷剣をさらに展開して相手の様子を見ようとするも……。

「ぐッ!!」

「ほらほら、どうしたあッ!!!! 氷剣よおおおおおおお
おおおおおおおッ!!!!」

すでに彼女の姿は目の前にはなかった。

瞬間移動とでもいうべき速さで、後方に回り込んでいたのだ。そして俺の眼前で魔術を発動しようとするも、すぐに対物質コードアンチマテリアでそれを第一質料プリママテリアへと還元し……それを踏み台にして俺はさらに氷剣を生み出す。

対物質コードアンチマテリアで第一質料プリママテリアに還したものは、通常のモノとは異なる。

それは元は魔術としてこの世界に具現化したものだ。そこには師匠の言っているところである記憶痕跡エングラム……魔術痕跡というものが存在する。

そのため、通常よりも速くさらには質の高い魔術を行使できる。
これこそが、対物質コードアンチマテリアの強みである。

今まではそれを無意識に行っていたが、俺はそれを改めて意識してより明確にコードを走らせて、魔術を行使する。

「フウッ!!」

肺から一気に空気を吐き出すと、そのまま大量に出現している氷剣でグレイ教諭の身体を切り裂いていく。もはや、この氷剣で切り裂くことに躊躇いなどなかった。

これは真正正銘の……魔術師同士による殺し合いなのだから。

俺はそんな感覚を無意識に懐かしいと思うも、そんな余裕はすぐに失せる。

「ハハハハハハハハハハ！！！！　ここまできても、届きはしないのか！！！！　楽しいぞ！！　氷剣！！！！　さすがは世界最強の魔術師だッ！！！！！！！！」

意識を落としていく。

沈む。

深海に沈んでいくように、あの頃の感覚に戻るように…… 研ぎ澄ませる。感覚を…… 己の全ての神経を、こいつを殺すことだけに集中させる。

アイシクルブレイズ
「冰千剣戟」

改めて、冰剣を次々と生み出していくが、ここで新たに別のコードを処理の過程に組み込む。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝デコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセッシング＝物質変化マテリアルシフト》

《エンボディメント＝物資マテリアル》

走らせるコードは、物質変化マテリアルシフト。俺は自分の手に握りしめる冰剣だけは、刀の形状に変化させる。

物質変化は何も、固体を液体に、液体を気体に変えるだけではない。その形状を変化させることもまた、物質変化マテリアルシフトに含まれるのだ。

「
冰刀ヒョウボ」

この手の中に顕現させるのは、冰刀。

冰剣の魔術師は、剣に属するものならばその全てを思いのままに冰を媒体として具現化できる。今回はその中でも、冰刀ヒョウボを選択した。

そうして俺は改めて冰刀ヒョウボを構えて、蹴き苦しんでいるグレイ教諭を見据える。勝利への道筋は既にイメージできている。あとはそれを実行するのみ。

「う……ぐうううう…… あああああああアアアアアアア
アアあああああああ あアアアアアアアアッ！！！！！」

明らかにそれは苦痛に跪き苦しんでいる姿だった。

体を腕で押さえ込み、流れ出る血液を拭う暇さえない。地面に溜まっていくその深紅の液体は、彼女の過酷な状況を如実に物語っていた。

終わらせないといけない。

あんな人から外れた姿を保つのは……それこそ、地獄のような苦痛なのかもしれない。

だからこそ……ここで引導を渡すッ！！

「はあああああッ！！！」

駆ける。

すでに彼女を覆う漆黒の第一質料の奔流はまるで嵐のように吹き荒れる。完全にそれは、コード理論など無視をして荒れ狂うものに

アビス
深淵により生まれたその漆黒の手はすでに、100は優に超えているだろう。それは俺の身体を掴もうと幾重にも重なり合うようにして、迫ってくる。

アンチマテリアル
それを対物質コードで局所的に打ち消し、さらには後ろに控えている氷剣を操ることで対処する。

死が視える。

きつと、あれに捕まってしまうえば俺の命はそこで終わるだろう。それだけの感覚が確かにあった。身に迫る死。それは生物の本能として当たり前のものだ。

だが、師匠の教えによって俺には刻まれている。

死を無理やり抑え込むことはするな、と。

無視をすべきではない。見ないふりをするべきではない。

やるべきなのは、その死を見据えた上で戦う意志を持つことだ。

否定するのではなく、許容する。

そうすると、身体の震えが止まりさらに感覚は鋭くなっていく。

「グウウウウ……あああああああああッ！！」

近づけば近づくほど、その濃度は濃くなっていき攻撃も激しくなっていく。

俺はその中を進み続ける。立ち止まることなど許されない。

ここで、この一撃で、仕留める必要があるからだ。

そうして俺は……とうとう射程距離に入る。

アンチマテリアル

対物質コードと氷剣の同時使用により、俺の身体もまたすでに悲鳴をあげている。皮膚には薄いヒビが入り、そこから出血。さらには眼球からも溢れ出るその血は、止まることはない。

だが視界が赤く染まろうとも、この一撃は絶対に……当てるッ！！

俺はそして、こう呟いた。

「
ひよつかりょうらん
氷花繚乱」

一閃。

その吹き荒れる漆黒の第一質料を真横に切り裂く。

しかしながら……ひやう氷刀の刀身部分は完全に碎け散ってしまっていた。フリマメテリアそれは、相手の第一質料の奔流に氷刀が耐えられなかったからだ。

そしてパラパラと舞ういけ氷のカケラは、漆黒の中へと吞のまれていく。

「ふ……フハハハハハハ！！！！　いくら、氷剣であっても……これは突破できまいッ！！！！！！！！！！」

まだ意識があるのか、俺の攻撃を完全に防いだと思っている彼女はそんな声を上げた。

その氷この刀は、この漆黒を切り裂くために生み出したとおきのもの。きっと彼女はそう思っていることだろう。しかしそれは、あやま過ちだということにまだ気がついていない。

「さあ……死んでもらうぞッ！！！！」

大量の漆黒の手が俺を包み込むように迫るも……もう既に、事は済んでいた。眼前で急停止するその漆黒の手を見つめながら、俺は淡々と告げる。

「いいや。既に決着はついた」

「な……は……あ……ああ……？」

ひょうかりよつらん
氷花繚乱。

その真価は、連鎖魔術チェインと遅延魔術デレイにある。

この技は、氷で構成されている刀身を連鎖魔術チェインと遅延魔術デレイで再構築し、指定した座標に氷の花を幾重にも重ねるようにして発動するものだ。

砕け散ったのは、わざとそうしたからだ。

元々これは、切り裂くことを目的としたものではない。相手を油断させ、そして再構築した氷でその対象の全てを包み込むことこそが、この技の真価である。

敢えて冰刀を選んだのは、刀の方が耐久性が低く再構築が容易に実行できるからだ。

さらに心的イメージをコードに組み込む場合、それは脳内で明確にイメージできる方が良い。そのため、この技に採用されたのは花だった。

そして連鎖魔術チェインにより数多くの氷花ひょうかが生み出され、遅延魔術デレイによってそれが花開くようにして彼女の体を覆い隠していく。

「な……なんだこれは……どうなっているッ！……！！？」

「グレイ教諭。そこで、しばらく眠るといい」

「ああああああああああああああッ！……！！！」

パキ、パキパキパキとその体は完全に氷の花々に包まれてしまい……。

目の前には彼女を包み込むようにして、巨大な氷花ひょうかが生まれた。パラパラと零れ落ちる氷の残骸は、まるで雪が降っているかのような幻想的な光景だった。

「はあ……はあ……はあ……」

その場に膝をつく。

すぐに減速ディセレーションによって能力を引き下げ、体内時間固定クロノスロックによって自身の能力を封じ込める。

「レイッ！！」

「大丈夫なのか……！！？」

「レイくんッ！……！！！」

立ち上がれるようになったのか、3人ともに俺の方へとやってくる。

ああ……俺は守ることができたのだ。今回は誰も失うことはなかった。

だからもう……休んでもいいですよね。

ねえ、師匠？

第25話 新たなる始まり

「う……うう……」

目が覚める。

すると視界に入ってきたのは天井。それを認識すると、今の自分の状況を確認する。

俺はベッドに横たわっており、窓からは心地よい夕焼けが差し込んでいた。

「レイ、起きたのか？」

「……師匠？　ここは……？」

「学内の医務室さ。一応、手当などは全てアビーがやってくれていたようだな」

ベッドの左側には、車椅子に座った師匠がいた。その後ろには力ーラさんが控えていて、隣にはアビーさんもいた。

「使ったようだな」

「申し訳ありません。あの場面では、あれが最適解だと思ったので

……」

「いや、構わないさ。私も仮にお前の立場だったら、同じことをしていたらう」

「そういつて貰えると、恐縮ですが……」

「それと、魔術領域暴走の件なら気にするな。今回は解放してしまったが、あの程度の時間なら問題はない。今後とも養生すれば、いつかは体内時計固定は必要なくなる」

「そうですか……」

ふう、と息を吐き出す。

あの戦い。結構ギリギリなところまで自分の性能を引き出していたが、特に後遺症なども残らなくてよかった。

「そういえば、みんなは……？」

「全員無事だ。軽い欠乏症になっているだけだった。少し休めば回復する程度だ。よくやったな、レイ」

「はい。ありがとうございます、師匠」

ポンポンと頭を軽く叩かれる。

これをされるのも、本当に久しぶりな感覚だ。

「それであれから何時間が経過したのでしょうか？ それと、グレイ教諭は？」

「それは私から説明しようじゃないか」

スツと、前に出てくるのはアビーさんだった。師匠もそれを横目に見て、何か言いたそうにするも黙っておくみたいだ。

「レイが倒れてから1日が経過した。そして、ヘレナ「グレイディは確保したさ。お前のアレを溶かすのは苦勞したがな」

「お手数おかけしました……」

「いや、殺していないのは助かった。あいつからは今後とも情報を引き出す必要があるからな」

「彼女は帝国の密偵ではなかったのですか？」

「ああ。所属は優生機関ユゼニクスであり、各国との関係はなかった。というよりも、優生機関ユゼニクスそのものが国との繋がりはない……という結論に至っている。かの機関は完全に国から独立していて、優秀な研究者や魔術師を引き抜いているらしいが……まだ全貌はつかめていない」
「なるほど……そうですか」

そつか……俺が出る幕はここまでだろう。

後の処理は専門の人に託すべきだ。

チラツと外を見る。もう夕方なのか、灼けるような真っ赤な夕焼けの光が、室内に差し込んでくる。それを見て改めて、終わったのか……と思った。

あの戦いで、俺は成すべきことを成せた。その実感は未だにこの手の中に確に残っていた。

「さて、そろそろ行くか。リディア」

「そうだな。アビーのいうとおり、あとは若い者に……な。レイ、しっかりと向き合えよ。じゃあ、また会おう」

「？ それはどういう？」

そういうと、アビーさんが部屋を出て行き、さらには師匠もカーラさんに車椅子を押してもらって形で行ってしまった。

そしてそれと同時に、扉の横からぴょこんと髪の毛が一房だけ出ているのが見えた。それは真っ赤な色をしており、見覚えのあるものだった。

「みんな……」

室内に入ってきたのは、3人だった。

アメリカ、エヴィ、エリサ。みんな妙に心配そうな表情をしている。

「レイ！ 大丈夫なのかッ！！？」

「エヴィ、心配してくれてありがとう。現状では特に何も問題はないそうだな。俺自身も、違和感を覚えていないしな」

「そうか……そりゃあ、良かったが……」

分かっているとも。エヴィが聞きたいのは俺の体調のこともあるだろうが、本題は別。それは、アメリカとエリサの表情かおを見てもよく分かった。

「レイ……あなたは本当は……」

「アメリカ。そこから先は、俺が言おう」

3人の方に姿勢を少しだけズラして、まずは頭を下げた。

「すまなかった。俺は君たちを騙していた。いや……何か悪事を働こうと思っていたわけではないが……それでも、嘘をついていたんだ」

「レイくん……それって……」

「ああ。もう分かっていると思うが、俺が世界七大魔術師が一人、『氷剣の魔術師』だ」

「そう……やっぱりそうなのね……」

アメリカは妙に納得した様子だった。エヴィとエリサも同じようだった。

この3人には話してもいいだろう。俺の過去は忌まわしい記憶だ。忘れられるものなら、忘れてしまいたい。でも、俺は氷剣の魔術師として能力を見せてしまったし……この掛け替えのない学友には誠実でありたかった。

だからこそ、俺は意を決して口を開いた。

「少し……過去の話でしょう。俺の生まれは東の小さな村でな。それこそ、魔術師などいなかった。両親も他の人たちも皆が一般^{オーディナリー}人だった。だが……俺たちは極東戦役に巻き込まれた……」

極東戦役。それは初めて魔術が本格的に導入された戦争。

それこそ、魔術は生活の質、インフラを高めるために欠かせないものになったが……それはあくまで一面に過ぎない。

人はどうしても、争ってしまう生き物である。ならば、その手段として魔術を使い始めるのは時間の問題だった。魔術は人殺しの道具としても有用なのは、誰の目にも明らかだったからだ。

「そして俺は村のみんなを失い。戦争孤児となった。そこで初めに拾われたのが、少年兵を管理している組織だった。俺はそこで人を殺す技術を磨いた。生きるために……もちろん、この手で殺しをしたのも未だに覚えている。しかし俺たちの組織は王国の軍によって壊滅に追いやられ……そこで師匠と出会った」

「師匠というと……さっきの車椅子に座っていた、美人さんか？」

ちょうど先ほどすれ違ったのか、エヴィがそう尋ねてくる。

「ああ。そのとおりだ。そして俺は何の因果か、師匠に拾われたのを機に魔術師としての才能が開花した。もともと片鱗はあったが、俺はそれを磨くことにした。師匠や、他の軍人は本国に預けるべき

だと言っていたが当時はそんな余裕もないほど戦況は悪化していた。だから俺は……自分の意志で師匠の部隊と一緒に戦うことにした。強いられとかは、なかった。ただ死に場所を求めて、俺は戦場を彷徨っていた。別に、いつ死んでもいいと思っていたからな。戦争に本格的に参加するのは、怖くなかった……ただどこか……自分のたどり着ける場所を、求め続けていたんだ……」

どこか虚空を見つめるような目で、俺は過去を語る。

それは昨日のことのように思い出せる記憶だ。あの怒号も、悲鳴も、全てが脳内にこびりついているような感覚。それを想起しながら、俺は言葉をさらに紡ぐ。

「しかし俺は師匠に、それに他の人たちに歓迎され……人の心を徐々に取り戻していった。それと同時に、魔術師としての才能は爆発的に伸びた。それはきつと、戦争という環境がそうさせたのかもしれない。だが俺は最終戦で、師匠が下半身を撃ち抜かれた瞬間に……感情を爆発させた。そして俺は……魔術領域暴走を引き起こした。そこから先のことはよく覚えていないが、起きた時には極東戦役は終了していて、師匠は下半身が動かなくなっていた……」

3人も俺の話をじっと黙って聞いてくれている。俺はそのまま話を続ける。

「それから先、魔術領域暴走オーバーヒートしたとは言え、俺にはまだ能力が残っていた。そして俺は『氷剣の魔術師』の座を引き継ぐと決めた。師

匠はいい顔をしなかったが、それでも了承してくれた。あとは師匠の紹介で、王国の田舎にある師匠の姉の家で養子として過ごすことになった。軍も退役して、俺は魔術領域暴走をどうにかするためにそこで過ごしていたが……ある日、師匠に魔術を全く使わないのも良くない、と言われ学院への入学を勧められた。魔術領域暴走を制御しているのは、俺の魔術だからな。そして師匠は年相応の経験をさせてやりたいと……そう、言っていた。その言葉は初めはよくわからなかったが……こうして俺は入学して、今に至るというわけだ」

大筋だけだが、俺は自分の過去を語った。俺の魔術領域暴走は未だに続いている。そのため、満足に魔術を使用することはできない。出来たとしてもそれは、一時的にしか解放できない。氷剣の魔術師の本質である、減速と固定を応用してそれを無理やり制御しているのが今の俺だ。

でも、別に特別なことなどありはしない。戦争に巻き込まれた少年が生き残って、学院に通うようになったというだけだ。

氷剣の魔術師という地位を引き継いだことなどもあるが、それでも俺は決してその過去を特別視していない。

なるべくしてなった。偶然でも、必然でもない。

ただあるがままを受け入れているだけだ。だから……それを悲観することなど、なかった。

「そうか……レイ、お前にはそんな過去が……」
「レイ……」

「レイくん……」

軽蔑するだろうか。俺は心のどこかでやはり恐れていたのかもしれない。自分の過去を知られてしまうことが。

学院で学生生活を謳歌しようにも、俺がしてきたことは無くならない。殺戮を重ねに重ねてきた事実は、確かにこの両手に残っているのだから。

そしてチラッと顔を上げると、アメリカが急に抱きついてくる。

「うお……っ!!」

「レイは……凄いわ……本当に、本当に……」

その様子を、エヴィとエリサも見つめてくれている。その視線には恐怖や怯えはなかった。むしろ全てを包み込むような、そんな……優しい目をしていた。

「でも俺は……多くの命を……この手で……」

「私は今のレイしか知らない。たとえ過去がどんなものであっても、あなたに変わりはないわ。それにあなたが優しい人だって、みんな知っているわ」

「そうだぜ！ やっぱレイはすげえやつで、それで……俺の最高のダチってことはよく分かったからよ！ 今更どうにかなるか思ったか？ そんなことじゃあ、俺との熱い友情は断ち切れないぜ！ これからも一緒に筋トレしようぜ!」

「わ……私も……！ これからもずっと、レイくんと一緒にいたい……！ お友達なのは……変わりないよ……！」

その言葉を聞いて、俺は自分の双眸から一筋の涙が自然と零れ落ちるのを 感じた。

「ああ……そうか……そういうことだったのか……」

村で大切な人を亡くし、戦争でも大切な人を亡くした。

守れたものもあつたが、同時に失うものもあつた。その度に後悔し、嘆いた。

でも止まることは許されなかった。仲間の死を嘆く暇などない。そんな時間があるのならば、その分だけ敵を殺す必要があつたからだ。

だから俺は進み続け、彷徨^{さまよ}い続け……この学院にたどり着いた。

初めは師匠に言われたから、リハビリついでに学生でもしようかという気持ちの方が強かった。言うならばちよつとした観光気分。初めての学校に心は踊つたが、それはあくまで表面的なもの。

この心の奥底に残る闇は、決して晴れることはなかった。

だがこんなにも大切な友人に恵まれ、こうして自分の感情を吐露（とろ）することなど思っではみなかった。

でも師匠、分かりましたよ。どうして貴女が、俺にこの学院に行くように勧めたのか。きっと、師匠のことですから分かっていたのですね。

俺にも……大切な友人ができるのだと。そしてそのことが、俺の心を癒してくれるのだと。ただ、魔術師としての能力を取り戻すだけでなく、人としての在り方も……ここで俺は改めて学んでいくでしょう。

今までも、そしてこれから、大切な仲間と共に　。

「ふん……！　ふん……！」

「おお！　いいな、レイ！　気合入ってるじゃねえか！！」

「ああ！　体調はもう完璧だからな！」

あれから数日。

俺はすっかり元どおりになり、早朝からエヴィと筋トレをしていた。今日もいいカットが出ており、バルクが衰えていることはなかった。

「さて、そろそろ教室に向かうか」

「おう！！」

こうして新たな日常が始まるうとしていた。

「……」

教室に着くと、俺は自分の席で読書をする。朝のこのわずかなひと時は、本当に素晴らしいものだ。

今日は放課後に環境調査部に行く予定だし、明日は園芸部にも足を運ぶ。そろそろ新しい花を育ててみたい気持ちもあるしな。

俺は知った。この学院での生活は決して無駄ではないと。

きつと俺の人生にとって、掛け替えのないものになる。だからこそ、存分に謳歌しようではないか。大切な学友たちと共に。

「聞いたか？」

「うん。先生、諸事情でやめたんだったね」

「それで新しい人が来るらしいが……」

教室内の生徒がそう噂をしている。

グレイ教諭はもういない。ならば、別の教師がやって来るのは自明。その人とも、いい関係を築いていきたい。何も学生生活は生徒同士だけのものではない。教師との関係性も重要だと思っているが……。

と思っていた瞬間、俺は本を落としてしまう。

「あ……あいつは……」

知っている。

胸元が派手に開いた服装に、何よりも特筆すべきは……その桃色の派手な髪。それを綺麗にかつ、緩やかに縦に巻いている姿。それに右目の下にある泣きぼくろ。

美人というよりは、可愛いと形容すべきその異様な姿を……俺は、俺は知っている。

「はろはろ　ちゃろ　みんなさーんっ！！　私が新しいこのクラスの担任の、キャロル＝キャロラインですっ！　気軽に、キャロちゃんとか、キャロキャローとか、キャロちゃん先生って呼んでね　キャピ」

バチン、と音が聞こえてきそうなほどにウインクをするのは……。

キャロル＝キャロライン。

俺の知り合いでもあるが……それもそのはずだ。

なぜならあいつは七大魔術師が一人、『幻惑の魔術師』その人なのだから。

七大魔術師の中でも一番素性をオープンにしているあいつが、どうしてこんなところに……。

こうして俺の学生生活は、まだまだ波乱万丈なものになりそうだと……。

そう思った。

第25話 新たなる始まり（後書き）

・追記

原作小説1～7巻（書き下ろし多数、6巻からWeb版と内容が異なります）、コミックス1～11巻発売中です！
こちらにもよろしく願います！

・あとがき

第一章 氷剣の魔術師 終

第二章 空に舞う鳥 続

一章終了です。いかがでしたでしょうか？

少しでも楽しんでいただけたのなら、作者としても嬉しい限りです。

また、下にスクロールすると【 】という欄があり、最大で5つまで入れることができます。

是非、での評価にて応援して頂ければ幸いです。皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければお願いいたします

それとツイッターもやっていますので、もしよければフォローお願いします！（御子柴奈々（みこしばなな）【ID:@mikoshibanana】で検索すれば出ると思います）

第26話 登場人物とその他設定（前書き）

現時点での情報をまとめました。少しネタバレもありますが、物語に差し支えはありません。参考までに、どうぞ。

興味のない方は読まなくとも、大丈夫です。このまま二章にお進み下さい。

また、あくまでweb版の設定なのでそこはご理解下さい。

第26話 登場人物とその他設定

主要登場人物

レイⅡホワイト（男性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：黒髪短髪。身長は180センチと高いものの、全体的には細く見える。ただし、脱いだらすごい（筋肉が）。氷剣の魔術師に戻った時は、青みがかった白髪に変貌する。

プロフィール：当代の氷剣の魔術師。出身は大陸の東にある小さな村だが、極東戦役に巻き込まれそのまま戦争孤児に。それから紆余曲折を経て、リディアⅡエインズワースに引き取られることに。極東戦役において魔術領域暴走を引き起こし、現在はそれを自らの魔術で引き下げ固定している。また、氷剣の魔術師としての本質は『減速』『固定』『還元』の3つである。性格は生真面目だが、常識に欠けている部分もあり、なんとか学院に馴染もうと奮闘している最中。ちなみに、金級のハンターゴールド免許を有しているライセンス（師匠に無理やり取るように言われた）。

アメリカⅡローズ（女性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：紅蓮の髪に、双眸は灼眼。身長は170センチ弱。プロポーションは平均よりやや上。全体的に引き締まっている印象。

プロフィール：三大貴族筆頭、ローズ家の長女。しかしその実、貴族の血統主義の体質を嫌っており、色々と悩んでいるようだ……？ レイとの出会いを機に魔術師としての在り方を考えるようになる。魔術師としてはかなりの才能を持っており、努力も重ねている。

ため現在の一年生では名実ともにトップに君臨している。

エリサ・グリフィス（女性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：セミロングのやや翠がかった髪。身長は155センチだが、実際に胸の大きさは作中一番である。本人は意外とそれを気にしている……。

プロフィール：ハーフエルフであり、やや耳が尖っている。そのことを気にしているがレイとの出会いにより意識に変化が生じた。将来は研究者になりたいと思っているため、コード理論に関する見識は深い。その他の学業的な面でも優秀。実践は苦手だが、かなり博識である。

エヴィ・アームストロング（男性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：茶髪の髪を刈り込んでいる。身長は190センチ。筋骨隆々としている。レイとは異なり、着痩せはしない。

プロフィール：筋肉を愛し、筋肉に愛された男。レイと寮では同室だが、互いの筋トレへの情熱から親友へと発展する。最近は大胸筋のカットが気になるため、主に上半身のトレーニングを重ねている。好きな種目はデッドリフト。将来はハンターになりたいと思うも、まだ迷っている。

アルバート・アリウム（男性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：真っ青な色をした短髪。身長は175センチ。体はそれなりに鍛えているのは、厚みは多少ある。

プロフィール：上流貴族アリウム家の長男。血統主義こそすべてと思ひ込み、今まで育ってきた。そのため貴族でないもの、貴族であっても下流貴族は蔑む傾向になる。ただレイとの戦い、そして彼が

氷剣の魔術師であることを目撃して色々と思うところがあるようである……。

レベッカ・ブラッドリイ（女性）

年齢：17歳。三年生。

容姿：黒髪ロングで、絹のように綺麗な髪質をしている。右目には泣きぼくろがある。身長は165センチ。プロポーションは抜群だが、他の部位よりも胸が少し大きい。

プロフィール：三大貴族、ブラッドリイ家の長女。おっとりとしている性格で、話し方も穏やか。魔術師として破格の才能を有しており、すでに白金級の魔術師である。^{ブラチナ}その性格とは裏腹に実戦能力はかなり高く、^{マキウス・シュバリエ}今年の魔術剣士競技大会の本戦の覇者。ちなみに園芸部部长、生徒会長もしているカリスマ性にも溢れている完璧な人間と周囲には評されている。

部長（男性）

年齢：18歳。四年生。

容姿：黒髪を刈り上げている。身長は195センチで、筋骨隆々。その体軀は学内でもトップ。

プロフィール：環境調査部の部長。現在は金級のハンター^{ゴールド}免許を有している。レイにはハンターの素質があると見抜いており、そのバルクからもレイを認めている。実家は農家で、最近はどうもこしの育成にはまっているらしいが……。

ディーナ・セラ（女性）

年齢：17歳。三年生。

容姿：茶髪のショートヘア。身長は160センチ。体は細身で胸がないことを実は気にしている……。

プロフィール：園芸部の副部长。レベッカを崇拜しており、花園（園芸部）の実質的リーダー。男子禁制（別に制度上禁止ではないが）

の花園にやって来たレイを毛嫌いしていたが、園芸に対する熱意は本物だと認めている。また、二人で買い物に行ったりなど、実はいい後輩として気に入っている。

リディアⅡエインズワース（女性）

年齢：29歳。

容姿：金髪碧眼。身長は173センチ。現在は肩にかかるぐらいのセミロングにしている。レイには『見た目は』天使と見間違っただと評されている。

プロフィール：アーノルド王国軍、実戦機動部隊元所属。階級は少佐で退役。以前の氷剣の魔術師である。ただし、レイとは異なり対物質コードは発見しただけであり、実際には使用できない。そのため、極東戦役では『減速』『固定』の魔術を主軸とし活躍した。現在は最終戦での負傷により、車椅子での生活を余儀なくされているが、研究者としての生活が性に合っているのはそこまで気にしていない。弟子には厳しいが、実際には甘々でレイをかなり大切に思っている。

カラⅡヘイル（女性）

年齢：32歳。

容姿：黒髪ロングで、細身の女性。身長は157センチ。

プロフィール：リディアの世話をしているメイド。あまり喋らず、寡黙な印象だがリディアと二人の時は意外とよく話す。レイのことは気に入っており、やって来るたびに腕によりをかけてお菓子や料理を振る舞う。また、リディアの世話もまた好きでやっているためメイドになってよかったと思っている。

アビーⅡガーネット（女性）

年齢：29歳。

容姿：オレンジの長い髪を、後ろで一つにまとめている。身長は172センチ。目つきは少しだけ鋭いものの、美人という範疇に収まる程度。

プロフィール：アーノルド王国軍、実戦機動部隊元所属。階級は大佐で退役。七大魔術師の一人であり、『灼熱の魔術師』の異名を有している。その名の通り、火属性の魔術を得意としているが、その本質は『加速』。レイとは対照的な魔術師である。現在はアーノルド魔術学院で学院長をしている。

ヘレナ「グレイディ（女性）」

年齢：27歳。

容姿：黒髪ショートで、いつも服装はラフなものが多い。身長は164センチ。

プロフィール：3年前にアーノルド魔術学院で教師をし始め、生徒に面倒見がよい教師として評価されていたが……その実は優生機関ユージェニクス所属の研究者。今まで生徒を誘拐し、その脳を解剖していた。今回もそれを行うつもりだったが、レイに敗北し現在は尋問を受けている。

エリオット「アークライト（男性）」

年齢：32歳。

容姿：茶髪で、男性にしては髪が長い。身長は177センチ。その体は服の上からでも、よく分かるほどに鍛えている。

プロフィール：学院で剣術を教えている教師。実際に、実戦能力は高く元軍人であり、魔術剣士としてはかなり優秀。最近はレイの技量に驚きを覚え、彼が只者ではないと認識している。

世界観に関して（主にアーノルド王国に関して）

魔術が完全に生活に組み込まれている世界観。衣食住だけでなく、インフラにも魔術は溢れている。また、魔術発祥の地はアーノルド王国とされており、そのため魔術を学ぶならアーノルド王国という考えが定着している。現在は3つの魔術学院が王国内には存在している。その中でもアーノルド魔術学院が最高峰だと評されている。

世界全体としてみると大陸は、西大陸、中央大陸、東大陸に分かれており、アーノルド王国は西大陸の最北部に存在している。

また、アーノルド王国という名だが、完全な王政は採用していない。政治形態は立憲君主制。つまりは君主の権限は法によって規制されている。実質、王室の者たちは偶像に過ぎない。確かにこの国をここまで繁栄させてきたのは王室の家系だが、現在の国の統治は首相及び内閣に委ねられている。だが、王室の人気は未だに根強い。彼らの動向は逐一、ニュースでも取り上げられ、国民の関心は非常に高い。

地形としては、特に北側は森や山が多く、学院もあるのはその近くだ。一方の東と西は居住区域。南は農地などが多い場所だ。北区は学生街としても栄えている。まだ、西区には港もあり、そこは貿易の拠点となっているためかなり栄えている。中央区は王国の中でも最も栄えている区域であり、繁華街もある。また王城があるのも中央区である。街に出る、といえば中央区に行くことを言う。

それに加えて、アーノルド王国が最先端なのは魔術だけではない。形式科学、自然科学、社会科学、人文科学、応用科学もまた世界最高峰。その中でも魔術は自然科学に分類されている。そのため、国内では特に自然科学が発達している傾向にある。設立当初は、魔術の研究とその知識を提供することが目的であり、自然科学系の学

問しか学ぶことができなかった。しかし、最近ではあらゆる学問が研究されるようになった。全ては知の探求が目的。学びを求める者にとってここはまさに樂園であるのが、この王国である。

またインフラや衣食住には魔術が組み込まれており、すでに魔術は人々にとって欠かせないものになっている。

魔術師に関して

魔術師にはランクが存在し、ブロンズ銅級 シルバー銀級 ゴールド金級 プラチナ白金級 グランド聖級となっている。その聖級の頂点七人を、尊敬と畏怖を込めて世界七大魔術師と評する。七大魔術師は現在、『氷剣』『灼熱』『幻惑』が有名な存在である。この3人は表舞台で主に活躍しているため。ただし、素性が明らかになっているのは『灼熱』『幻惑』のみ。その他の七大魔術師の素性は非公開であり、知っている者はほとんどいない。

また魔術師は魔術適性が高いものは、身体が発達しやすい傾向にある。年齢の割に、女性の割に、身長が高く体が成熟している者が多いのはそのため。これは内部コードインサイドの影響とされているが、あくまで傾向的な話であるため絶対ではない。身体があまり発達していない魔術師でも、魔術が堪能な者は存在している。

三大貴族に関して

魔術師の中でも一番上に位置している貴族。ローズ家、ブラッドリイ家、オルグレン家が存在している。特にローズ家がその中でも一番の力を持っている。血統主義なのに変わりはないが、実際のところ七大魔術師になった者は少ない。その事実を目を伏せつつ、その権力を使用している。ただし決して腐っているわけでもなく、ただ

権威がある存在として認知されている程度。

ユージェニクス 優生機関に関して

優生思想を掲げる謎の組織。魔術の探求のためならば、人間の命など道具に過ぎず、非人道的な実験を繰り返している……という噂が存在する。現在は各国の優秀な魔術師や研究者を勧誘して、その勢力を広げようとしている。もちろん、各国が対処に当たっているがその全貌は謎。現状では国から完全に独立している組織と評されている。

エングラム ・記憶痕跡

別名、魔術記憶。脳内には魔術を記憶する神経細胞が発見されており、それを記憶痕跡エングラムという。理屈としては記憶痕跡エングラムの操作によつて魔術を他者に植え付けるといふ技術も可能。もともと魔術は獲得するものだが（もちろん適性などは存在する）、記憶痕跡エングラムの移植が可能になれば先天的な要素（才能）や後天的な要素（努力）など関係なく誰でも魔術を使えるようになる。それこそ、聖級魔術であつてさえも。

・ダークトライアドシステム

ダークトライアドとは、ナルシズム、マキヤベリズム、サイコパシーの3つの総称である。その人間の暗黒面を魔術に組み込み、体系化した魔術の一種。それは内部コードインサイドの一種と考えられているが、全貌は謎。しかし驚異的な能力を手に入れることができる……という噂がある。

オーバーヒート 魔術領域暴走に関して

魔術師には、前頭葉にコード理論を行う魔術領域というものが存在

している。普通の魔術師は魔術領域が暴走することはないのだが、魔術の過度の使用、感情の暴走など、様々な要因が原因となり魔術領域^{ハイビット}暴走というものを引き起こす。これは文字通り、魔術領域が暴走している状態であり一時的に尋常ではない規模の魔術を行使できるが、最悪の場合は脳が焼き切れる現象も確認されている。しかし今のところ、明確な治療法は確立されていない。

魔術に関して

魔術とは、^{プリママテリア}第一質料を再構築する技術のことである。そしてその再構築する過程をコード理論と呼ぶ。また^{プリママテリア}第一質料とは万物の根幹をなす物質である。人体も、机や椅子も、動物であってもその根幹には^{プリママテリア}第一質料が存在する。

この技術はもともとは符号化、言い換えると記銘というものから派生して作られたものである。その記銘というものを魔術に応用し、体系化したものが現代魔術の始まりとされている。

コード化しただけでは余分なものが含まれているので、^{アンチマテリアル}デICODEイングによりコードから余分なものを取り除き処理の段階に移行する。また^{アンチマテリアル}デICODEイングの段階では対物質コードを潜在化させている。^{アンチマテリアル}デICODEイングは余分な情報を取り除きつつ、対物質コードを活性化させないという目的もある。

^{デICODE}デICODEイングはコードをより深く理解（解読）し、余分なものを削ぎ落とすという調整段階としての意味もある。

The Theory of Code:コード理論

1:Encoding:コード化

2:Decoding:コード解読（調整）

3: Processing: 処理

4: Embodiment: 具現化

魔術発動プロセス

プリママテリア

第一質料 コード化 コード解読 処理 具現化 物質 or 現象。

魔術は、難易度によって下級、中級、上級、聖級に分類される。またそこから以下のような分類に派生する。

クイック

リモート

高速魔術、遠隔魔術、連鎖魔術、遅延魔術、物資変化、大規模魔術、

エクステンシブチェイン

大規模連鎖魔術。

インサイド

アウトサイド

また魔術は内部コードと外部コードにも分類できる。身体強化、または五感拡張をする際は内部コード^{インサイド}。その他の、外界世界に関して魔術を発生させる場合は外部コード^{アウトサイド}を使用する。

コード変換には必ず質量保存の法則が適応される。つまりは、消費した第一質料^{プリママテリア}に応じて生み出せる物質、現象の規模は変化する。また魔術は物質または現象を生み出す技術だが、その物質は4つの要素に分類できる。固体、液体、気体、プラズマに分類される。

・基本属性に関して（物質魔術、現象魔術に關しても）

魔術の基本属性は、水、氷、火、電氣に分類される。そしてこれらは主に二つに分類される。それは物質魔術と現象魔術である。水は液体であり、氷は固体である。そのためこれらは、物質魔術に分類される。火と電氣は物質を組み合わせる生じる現象のため、現象魔術に分類される。

難易度としては、現象魔術の方が難易度が高い。それは、現象を生

み出すには物質を生み出すことを前提として、現象を組み込まなければならぬため。つまりは、物質魔術よりもプロセスが多くなるのである。現象錬成はその過程の一つのメンタルモデルとして貯蔵するため、魔術領域を圧迫するとも言われているが……その真偽はまだ確定された情報ではない。

・基本外属性

魔術には基本属性以外にも別の属性が存在する。現在発見されているのは、無属性魔術、精神干渉系魔術、概念干渉系魔術。無属性魔術はまだしも、その他の二つは扱う者があまりにも少ないためまだ十分なデータは集まっていない。現在は研究者が目下研究中である。

・二重コード理論に関して

リディア^{II}エインズワースが提唱した新たなコードの概念。あらゆる万物のコード（内部情報形式）の中には、相反する二つのコードがあるという考え。その二つがバランスを取り、恒常性^{ホメオスタシス}を形成していると言われている。具体的には以下になる。

コード（内部情報形式）には物質コード^{マテリアル}と対物質コード^{アンチマテリアル}が存在する。物質コードは第一質料^{プリママテリア}を具現化する過程の情報体。対物質コードは具現化したものを第一質料に戻す情報体のことを示す。その二つは相反するように存在しており、通常は対物質コードのみが潜在化している。しかしそれが活性化した時、魔術だけでなく第一質料が存在している物質または現象は第一質料へと還元される。そのため、理屈としては人体すらも第一質料^{プリママテリア}へ還元できるとされているが、物質や人体は質料領域^{マテリアルフィールド}と呼ぶべき特殊な領域が存在しているため、干渉するのは難しい。

・クオリア

現在研究者の間で話題の物質。それは、コード理論の中でも処理の際に適応されるとされている謎の物質。主に4種類にそれは分類さ

れる。

クオリア（コード処理の際に使用される）

形式クオリア（エイドス）

構成クオリア（ヒュレー）

目的クオリア（テロス）

主体クオリア（アルケー）

ただし、まだ新しい研究概念のためその全貌は謎である。現在は名称をつけて、研究を進めている最中。

第27話 籠の中の鳥

籠かごの中の鳥。

アメリカ「ローズを形容するならば、それが一番適切だろう。

私のことは、誰よりも私が知っている。

決して籠から出ることは叶わず、翼を挽もがれ、ただ地面に伏せるだけ。

でもそんな私は、周囲から賛辞の声だけを受け取っている。

「さすがはアメリカ様！」

「アメリカ様は美しい上に、聡明で素晴らしいお方だ」

「さすがは三大貴族筆頭ローズ家の長女ですね。本当に素晴らしい」

そんな言葉は聞き飽きた。

私を褒めている人間は、アメリカを褒めているのではない。三大貴族という血統を褒め、尊び、そしてそれが純粹で素晴らしいものだ……そう思っている。

貴族の体質は変わりはない。それはもう、幼い頃から知っていた。他の貴族の子ども、それに三大貴族の子どもたちも自分たちを

特別な存在だと思っている。いや、思い込まされている……私にはそうとは思えなかった。

三大貴族筆頭のローズ家。

この家に生まれて私は一度も不満を抱いたことはない。容姿にも優れ、頭脳も明晰、特に魔術の技量はすでに白金級プラチナの魔術師に至ると言われているほどだ。

でも私には何もない。空っぽな自分をずっと今まで見つめてきた。あまりにも空虚で、がらんどろ。それが今の私……この学院に入学した時思っていた。どうせ私には何も得るものはない。ただ周りに賛美され、栄光の道を登っていくだけだと。

全てが決まり切ったレール。その上を走って、走って、走り抜けるだけ。達成感など、ありはしなかった。

でも私は出会った。とても不思議な男の子で飄々としていて、しっかりと自分を持っている彼に。

「アメリカ。どうした？」

「いや……別に、何でもないわ……」

「そういえば、そろそろ予選だな。出場するんだろう？」

「ええ。三大貴族筆頭だからね、新人戦は優勝を目指すわ」

「そうか。応援している。君なら、できるさ」

「うん、ありがとう」

仮面を貼り付けている自分が嫌になる。

私は知った。

彼こそが、世界七大魔術師の一人である『氷剣の魔術師』である。でも彼はそれだけではない。その在り方そのものが、私には眩しかった。

確かにその過去は悲惨なものだったのだろう。でも彼はそれを乗り越えて、ここにいます。

憧れる。そして、その存在に焦られる。

私とは違う。

大空に飛び立てる翼を持っているのだ。今はその能力が制限されているとしても、レイはきつともっと偉大な存在になる。私にはそんな予感があった。

でも、私は籠の中の鳥。それも翼を挽がれ、飛び立つことは叶わない……哀れな鳥だ。

だから今日も懸命にその籠の中で過ごそう。仮面を貼り付け、ローズ家の長女として振る舞おう。皆が求めているのはアメリカではない。アメリカ＝ローズという三大貴族の少女なのだから。

私が私である必要はない。私は血統であり、それを引き継ぐ存在だ。

だから、今日も仮面を貼り付ける。

きつと何者にもなれない私へ。

私はそこにいますか　？

「…………アビーさんッ！！」

パンツと音を立てるのを気に止めることなく、俺は学院長の部屋に入っていく。今回はかりはとても許容できるものではない。

俺は午前の授業が終了し、昼休みになると同時にすぐにこの部屋にやってきた。

「ん？　どうしたレイよ。そんなに慌てて」

「どうしたではありませんッ！！　どうして…………どうしてあの女がッ…………！？」

「ああ、キャロルのことか。ちょうど暇をしているというのだな。それに、あの件もあったしな…………学院の内部を安全に保つのも、私

の仕事だ」

「それでしたら、自分も尽力しますッ！！　ですからどうか……あの女だけは解雇に……ッ！！」

「えゝ。レイちゃんってばゝ、そんなこと言うのゝ？　お姉さん寂しいなあ……キャピ」

「ひ……ひiiiiiiiiiiii！！」

俺がアビーさんに直談判をしに来ているのを知っていたのか、後ろからはちょうどキャロルのやつが現れる。

今思えば、この空間に3人も七大魔術師がいるのは異常なことなのだが……それよりも、俺はこの女をどうにかしなければならなかった。

キャロルⅡキャロライン。

別名、『幻惑の魔術師』。

名前をオープンにし、素性なども完全に公開している魔術師。おそらく、七大魔術師の中で今最も知名度があるのはこいつだろう。メディアもまた、こいつの容姿とキャラクターにつられて特集記事を組んだりしている。

そんなキャロルの本職は研究者だ。師匠と同じだが、キャロルは師匠とは違い根っからの研究者だ。特にコードの扱いでは、こいつの右に出る者はいないと思う。

といっても、その魔術の性質から実戦もこなせるオールラウンダーではあるのだが。

その中でも、師匠とアビーさんとこいつは3人とも同期で親友らしく……俺も幼い頃に出会ってはいるのだが……。

やはり、あの恐怖だけはまだ拭い去ることはできていなかった。

自分でもいうのも何だが、少々的事では動じない性格をしていると自負している。だが……こと、キャロルのことになる俺はダメなんだ……。

本能がこの女は危ないと警告しているのだ……主に、性的な意味で……。

「ふふ……レイちゃんつてば、大きくなっただねえ」

「待て、止まれ。とりあえず、そこから先は近寄るな……」

「えゝ？ 久しぶりなんだしいゝ、抱きしめたらダメなのゝ？」

「ダメだ……絶対にダメだ……」

「あの時のことは謝るからさあゝ、ね？」

「とか言つて、同じことをするつもりだろう？」

「うふ。うふふふふ 分かっちゃう？」

「あの時と同じ目つきをしているからな……」

「だって、こーんなにもいい男になったんだよ？ やっぱり、小さい頃に目をつけていた私は大正解！ って感じじゃない？ キヤピ」

そう。俺は幼い頃に、この女に襲われかけている。

師匠の家で眠ってる際、この女はあろうことが夜這いをかけて来たのだ。

当時の俺は自分が本当に食べられてしまうのだと恐怖し、すぐに師匠に泣きついた。もちろんそのことを知った師匠に怒られるキャラルだが、この能天気な性格の通り、全くそんなことは気にしない。

俺はしばらく夜が満足に眠れないほど、キャラルにはトラウマを植え付けられているのだ。

もちろん女性らしい存在であり、褒めるのは当然だ。でも何事にも例外は存在する。俺にとってのそれが、このキャラル「キャラライン」である。

「まあ、レイも落ち着け。キャラルはその魔術の性質からしても、使い勝手がいいからな。我慢してほしい」

「ええ……キャラルが俺たちの担任だと……？」

「そうだよ。よろしくね、レイちゃん！」

「……」

初めてこの学院に来て、退学したいと思った瞬間だった。でも今更そうするわけにもいかないので、俺はここはぐつと堪えておいた。

「さて、レイ。そろそろ魔術剣士競技大会が近いのは知っているな。出ないのか？」

「いえ自分は……前の件もありますし。それに限定的に能力は解放

できるとはいえ、また暴走しないとも限りませんから」

「えゝ、レイちゃん出ないのゝ？ 新人戦なら余裕で優勝できるのにゝ？ もっと目立ちたいとかないのゝ？」

「お前と違って俺は普通に学生生活を送りたいんだ……」

「えゝ？ そうなのゝ？ ま、私はそれもいいと思うけどね キヤピ」

う……うぜえ……。

七大魔術師は癖のある魔術師が多いが、この女は中でもトップクラスのウザさだと思っている。基本的には誰であっても敬意は払うが、どうしてもキャロルにだけはそうもいかなかった。

こればかりは……やはり変えようがないものだった。

「なるほど。まあ……リディアにもレイのことはくれぐれも頼まれているからな。無理強いはできまい」

「そうなのですか？」

「ああ。あいつは弟子バカだからな」

「ははは……」

苦笑いするも、俺はそれがあゝ種本当のことなので、否定することとはなかった。

「ま、キャロルの件は諦めてくれ。こんな性格と言動でも、優秀な魔術師なんだな」

「はい……」

「ひどーい！ アビーちゃんもそんなこと言っのー？ もうぷんぷんがー！ だよっー！」

ああ……さらば、我が平穏な学院生活……。

第28話 マギクス・シュバリエ

魔術、と言うものがこの世界に定着して100年以上が経過した。

それまではあらゆる超常現象は魔法と表現されていたが、魔術の始祖がコード理論を発見し、そこから魔法を魔術へと体系化した。それから先は早いもので、すぐに魔術は生活に応用された。

インフラやその他の生活雑貨、それに衣食住にすら魔術は食いつんでくるようになり、もはや人間にとって魔術は必要不可欠なものになった。

そしてそんな魔術の発祥の地は、アーノルド王国だった。世界の西に位置している巨大な大陸の上に成り立つ王国。それは長い歴史を持つ、伝統的な国であるが、そんな国も魔術によって変化することになった。

そして、王国の中に3つの魔術学院を設立。

そこから数多くの優秀な魔術師を今も生み出している……というのが王国の現在だ

「ふむ……」

「どうした、レイ？ 寝ないのか？」

「すまない。もう少し読書させてくれ」

「はいよ。じゃ、俺は寝るぜ」
「ああ」

寮の一室。

俺はそこでこの世界の歴史についての本を読んでいた。別段知らないわけではないのだが、改めて勉強しようと思い王立図書館から借りて来たのだ。まあ別に、この学院の図書館でもよかったのだが、エリサと行ったついでに……という感じだ。

「なるほど……」

改めて、本に目を通す。

アーノルド魔術学院、ディオム魔術学院、メルクロス魔術学院。

この3つが世界三大魔術学院と評され、それらが全てこのアーノルド王国の中にある。

アーノルド魔術学院は総合力に秀でている。学術研究、それに魔術剣士といった実戦魔術の両方ともに高水準の教育を施し、世界最高峰の魔術学院として名を馳せている。

ディオム魔術学院は実戦に特化した魔術学院だ。総合力ではうちの学院に劣るものの、その魔術剣士の育成と実戦能力はうちよりも

秀でている面もあるらしい。

メルクロス魔術学院は学術研究に特化した魔術学院。ここに入る生徒は、その多くが将来は研究者になるなど、それ系統の道に進む傾向にある……とか。と言っても、魔術剣士競技大会^{マギクス・シュバリエ}で優勝者が出ていないわけでもない。

それぞれ特色があり、各学院が一強というわけでもなく拮抗しているのが現状である。

そうしてこの3つの魔術学院同士がぶつかり合う、魔術剣士競技大会^{マギクス・シュバリエ}がもう少しで始まるうとしていた。

「はあーい。みんなー、おはよう　キャロキヤロだよー？　今日はねー！　魔術剣士競技大会^{マギクス・シュバリエ}についてお知らせだよー！」

正直いって、キャロルの顔を見るのは本当に嫌なのだが……まあこれも仕方ないと思って俺はすでに諦めた。

確かに今のところ別に問題も起こしていない。

その派手な服装と、派手な髪と、普通ではない言動をどうかして
くれれば文句はないのだが……。

「みんな知ってると思うけど、改めて説明ねえ。魔術剣士競技大
会は3つの魔術学院が競い合う魔術剣士の大会だよ？ それでえ
っと……一年生みんなは新人戦に参加することになるね！ それ
で、各学院から選抜して……合計16人が魔術剣士競技大会で戦い
ますっ！ で、新人戦の去年の優勝者はうちの学院なので、6人だ
けが魔術剣士競技大会に参加できますよ？ 他の学院は5人ずつ
で、これで合計16人だねっ！ キヤピ」

もはやその言動にみんな慣れているのか、それとも七大魔術師に
対する尊敬なのか、突っ込むものなど誰もいない。

それにしても……なるほど。優勝者がいる学院は枠が増えるのか
……昨年はレベルカ先輩も優勝していたから、本戦の方も6人の枠
になるな。

ちなみに魔術剣士競技大会の優勝者の数はうちが一番多い。わず
かに劣っているのが、ディオム魔術学院。次いで、メルクロス魔術
学院とくるが、各学院に優勝者はそれなりに存在する。

メルクロス魔術学院は一番の弱小と思っ込んでいる者もいるが、
実際は剣士の技術よりも、その卓越した魔術によって優勝している
者も過去にいらっしゃる……とのことだった。

「じゃあ、参加したい人は今日の放課後に手続きを済ませてね」
そ・れ・と、ボランティアになるけど、運営委員に参加したい人はいるかな？ 校内予選の運営と、魔術剣士競技大会でも他の学院と協力して運営活動をしてもらいたいんだけど？ いらないかな？ かなかな？ 一人だけでいいんだけどかな？ いないとキャラちゃん困っちゃうかな？ かな？」

キヨロキヨロと周囲を見渡すキャラル。

だが拳手するものはいない。ほぼ全員がキャラルから目を逸らすようにして、下を向いている。

ふむ……運営委員か。実際のところ、何をするのかはよく知らない。でもアメリカは魔術剣士競技大会に出場するといっていたし、彼女ならきつと校内予選を突破して新人戦にも出場するだろう。

ならば……裏から支えるのも、悪くはないな。

そして俺はスツと手を挙げた。

「お！ レイちゃんやってくれるの？」
「はい。私がやりましょう」
「ありがとー！！ あとでお礼、す・る・か・ら・ね？」
「いえ。お気持ちだけで結構です。キャラライン教諭」
「ぶー！ レイちゃんが冷たーい！」

ちなみに俺とキャラルの関係性はバレていない。というよりも、バレたくはない。このアホは何かと俺に教室でも絡んでくるのだが、普通に距離をとって対応している。本当はこいつを教諭と呼ぶのも嫌なのだが、キャラルと呼び捨てにすると更に面倒なことになるので、俺は耐え忍んでいる。

「……よし」

改めて心を入れ替えると、俺は運営活動に力を入れると誓った。つた。

「それにしても、意外だったわね。レイが運営に回るなんて」

「それは俺も思った！」

「わ……私も……誰がやるんだろうって……」

昼休み。

この4人で昼食をとることはすでに当たり前のことになっていた。ちなみに俺に関する噂もかなり収まってきた。一般人、オーディナリー枯れた魔術師。ウィザー

それは俺の蔑称として定着していたが、ミスター・アリウムとそれにアメリカと剣を交えて以来風向きが変わったらしい。

なんでも実戦能力だけなら、学院の中でもずば抜けているとか……なんとか……という噂が今度は立っているらしい。ちなみにこれはエヴィに聞いた話だ。

「ああ。俺も実際のところ、どうしようかと思ったが……アメリカが参加するようだし、少しでも力になりたくてな」

「え、そういう動機だったの？」

「ああ。でもそうだな。俺は選手としては参加できないから、別の形で関わりたい……という気持ちもあったかもしれない」

「レイは結局でないの？ 受付の締め切りは今日の放課後までだけど？」

アメリカだけではない。エヴィもエリサも、じつと俺を見据えてくる。

確かに俺に『氷剣の魔術師』としての能力がなんの問題もなく使えるのなら、参加していたかもしれない。でも未だに俺は、魔術領域暴走を自分の魔術で抑え込んでいるので精一杯だ。

一戦ならまだしも、連戦は無理だろう。

「残念だが無理、だな。俺はまだ完治していない。でもこの4年間の中でいつかは出場できたらいいと思う」

「う……あなたが出ると、優勝間違いないでしょ」

「いやわからないさ。まだ俺も途上の身の上だ。それに試合とは最後まで分らないものだろう？」

「それはそうだけど……」

と、アメリカは釈然としない様子だったがすぐに話題を切り替える。

「そういえば、ルールはどうなっているんだ？　俺はまだ詳しく把握していないが……」

「胸にある薔薇を……散らすか……場外に落とすか……だよね？」

「そうね。エリサのいうとおりよ。基本的には薔薇を散らすのが一番効率がいいわね。それに危ないときは教師の介入もあるし……毎年負傷者は出るけど、死者は出ていないわ」

「なるほど……確かに戦闘不能になるまで戦うとなると、それは殺し合いになりかねんからな……」

「でも俺は去年の魔術剣士競技大会を見てるが……まあ、かなり過酷な戦いになるのは間違いないなあ」

「む。そうなのか、エヴィ？」

「ああ。それぞれ学院の名前を背負っているからな。色々と対抗心とかで盛り上がるみたいだぜ？」

「……それは楽しみだな」

ということ、俺は魔術剣士競技大会に運営委員として参加することになり、校内予選が開始されるのだった。

第29話 ツインテールのお嬢様

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会の運営委員としての仕事。それは俺には皆目予想がつかない。今までこのような仕事に従事したことはないからだ。

マギクス・シュバリエ

だが、魔術剣士競技大会はこの王国内のイベントの中でもかなり巨大なもので、それこそ他の国からの観戦も来るほどに。王国内で盛り上がりは最高潮にもなるらしい。

だからこそ、運営委員の仕事は重要なものになるだろう。と言っても、正規のスタッフは存在しているようだ。その中でも人数が足りない部分などを補うためにこうして学生からボランティアを募っている……らしい。

俺はそのことを頭に入れて、早速集合場所となる教室に向かっていった。

「……………うきゃー！」

瞬間、背中にドンツと衝撃がやって来る。それはあまり強くはないものの、確かに何かがぶつかってきたという感覚はあった。

それに、うきや？ という声も聞こえた。それは猿に近いものだったが……まあ普通に人だろう。

そう思っ て後ろを振り向くと、ちょうど一人の女子生徒が倒れていた。

絹のような美しい金色の髪を左右の高い位置で結^ゆっており、いわゆる……ツインテールというやつだろう。その双眸もまた、同じ金色をしていた。また、身体にそこまで厚みはなく身長もそこまで高くはない。

俺はおおよそ、同じ一年生だろうと予測を立てて話しかけることにした。

「君、大丈夫だろうか？」

「い、いてて……」

「立てるか？」

手を差し伸べると、それをバシッと横に払われてしまう。

「あんたねえ！ 危ないでしょ！」

「む……それはすまない。だが、俺は普通に歩いただけだが……？」

「私はちよつと遅刻しそうだったから、走つてたの！ だから避けなさいよ！」

「ふむ……」

正直言って理不尽極まりないと、俺は思ったが……ここで変に口論をするよりもすぐに謝ったほうがいいだろう。

「申し訳ない。今後は精進したい所存だ」

「……からかつてるの？」

「いや、全く。誠実に対応したいと思っているが……？」

「ん？ あんたの顔、どこかで見たことあるのよね」

ジロジロと俺の顔を見てきた、彼女は急にハツとした表情^{かお}になる。

「あ！ もしかして、あんたが一般^{オーディナリ}人！？」

「そうだな。レイ＝ホワイトという。以後、よろしく頼む」

「ふんっ！ 私はクラリス＝クリーヴランドよ。誇り高き、クリーヴランド家の長女よ？」

ふふん、と胸を張るようにして得意顔をする彼女。その姿は鼻につくということはなく、どちらかと言えば妙に微笑ましいというか、懐かしいというか、そんな感覚があった。

しかし、誇り高きクリーヴランド家とやらは寡聞にして存じない。申し訳ないが、ここは素直に言っておくか……。

「なるほど。クリーヴランド家は存じ上げないが、これからも仲良くしてくれたらうれしい。ミス・クリーヴランド」

「え……知らないの？ 私の家……」

「ん？ ああ。すまない。貴族事情には疎くてな。申し訳ない」

「そっかー。うん、まあいいけどね……うん……割と有名な貴族の家なんだけどなー。そっかー。知らないかー」

と、なぜか死んだ魚のような目をして呆然としているので俺はすぐにフォローをする。

「クリーヴランド家は知らないが、君の家系はきつと美しいものが多いのだろうな」

「え！？ 分かつちゃう……！？」

「ああ。君を見れば一目瞭然だろう。その凛とした顔立ちに、綺麗な双眸。俺としては特にそのツインテールがチャーミングで素晴らしいと思う」

「あんた……」

ガシツと肩を思い切り掴まれる。身長は彼女の方がだいぶ低いので、少し無理をしているようだが。

「このツインテールの素晴らしさを理解できるなんて……分かつてるじゃない！！」

「そうだろうか？」

「そうよ！ 特別に私のことはクラリスって呼んでもいいわよ！ 私もレイって呼ぶから！」

「おお！ それは嬉しい提案だ。よろしく頼む、クラリス」

「ふふん。よろしくされちゃうかな。えへへ」

あどけない表情で笑う姿はどことなく、妹を想起させた。

なるほど……あいつに似ているからどこかシンパシーめいたものを感じていたのか……。

そう納得して俺たち二人は会議室へと向かう。どうやら話をしてみると、クラリスも俺と同じでクラスを代表して運営委員になったのだと言う。

「ゴクリ……」

「どうした、クラリス？」

「え……！？　べ、別に？　知り合いがいないから緊張してるとかじゃないわよ……？　違うんだからねっ！」

「？　そうか。まあ入るうではないか」

「あ……ちょ……！」

俺はそのまま躊躇なく集合場所である会議室の扉を開けた。すると室内にはすでに多くの生徒が揃っていた。

中には見知った顔……環境調査部の部長とそれに園芸部のセラ先輩もいるようだった。どうやら先輩達も俺に気付いた様で此方を向いたタイミングで軽く会釈し、二人共が見て取ってくれた証としてか各々に腕を挙げながら頷きを返してくれたので、室内を見た俤に何やら固まっている隣の彼女を促す事にした。

「とりあえず席に着くか」

「う、うん……」

「どうしたんだ？ さっきの威勢の良さがないが？」

「べ……別に知らない人ばかりで緊張しているわけじゃないのよ？」

「そうなのか？ とてもそうは思えないが……」

「私がそう言ってるなら、そうなのっ！」

「ふむ……まあ、今回は出会ったのも何かの縁だ。隣に座っても？」

俺がそう提案すると、クラリスの顔はまるで夏に懸命に咲き誇る
ひまわり
向日葵のような、快活な笑顔をみせた。だがそれはすぐに陰りを見せる。というよりも、プイツと逆方向を向いてしまうのでよく見えなかった。

「ど、どうしてもって言うならいいけど……？」

「うむ……そうだな。どうしても、だ」

「ならいいけど！ 私の隣、光栄に思ってたよねっ！」

「そうだな。新しい学友と出会えたことはとても光栄だ」

「と……友達？ わ、私たち友達なの……？」

「む……すまない。いきなり距離を詰め過ぎただろうか。クラリスとは妙に会話が弾む気がしてな。勝手にそう思ってしまったが、不快だっただろうか？」

彼女は下を向いて、少しだけ震えている。

やはりまずいことを言ってしまったのだろうか。そう俺が思っていると、バツと顔を上げる彼女。

「べ……別にいいけど……っ」

「ん？ すまない。声が小さくて、上手く聞き取れなかった」

「だからいいってば！ 友達で……っ！」
「そうか……それは良かった」

俺もまた、先ほどの彼女と同様に最大限の笑顔をクラリスに向ける。すると、再び下を向きながら「やった……初めての友達よ……やった……！」と聞こえたのはきつと気のせいだろう。

こんなにも魅力的で、コミュニケーション能力の高いクラリスに友人がいないはずはない。

このような調子で周囲の生徒も雑談をしているようだったが、教卓を軽く叩く音がすると先ほどまでの喧騒が嘘だったかのように静まり返る。

「全員揃ったわね。今年の魔術剣士競技大会のアーノルド魔術学院マギクス・シュバリエは私が取り仕切ります。一応自己紹介しておくけど、ディーナ」セラ。三年よ。よろしくね」

これも縁なのか、どうやら運営委員を仕切るのはセラ先輩なようだ。それはこちらとしてもありがたい。あの一件以来、セラ先輩と
はいい関係を築けている気がするからだ。

ついこの前も街に花苗を購入しに行く際に、二人で一緒に行ったのは記憶に新しい。俺の主観だが話は意外と盛り上がったし、セラ先輩もよく笑っていたかのように思える。

「さて今回の運営委員はペアで動いてもらうわ。その方が何かとフォローし合えるしね。では各自自由に組んでいいわよ」

セラ先輩がそう言うと同時に、周囲の生徒たちは瞬く間にペアを作って行く。特に上級生はすでにこの学院で少なくとも一年以上は過ごしているので、見知っており顔も多くすぐにペアが生まれて行く。

ふむ……俺はどうしようか？

「あわわ……わああ……あわわ……」

ちらりと横を見ると、妙に慌てていると言うか、面食らっているクラリスがいた。先ほど出会ったのもきつと何かの縁なのだろう。それに学友は多いに越したことはない。だからこそ、俺はクラリスにペアにならないかと提案するのだった。

「クラリス。俺とは、どうだろうか？」

「え……！？ い、いいの……！？ あんたってその……意外と知り合い多いと言うか、コミュニケーションにあるし……その……」

「いいに決まっているだろう。むしろ、俺からお願いしたい」

「そ……！ そうよね！ なら、特別に許可してあげるわ！ 感謝してよね……！ 本当は私は大人気なんだから……っ！」

「そうか。それでは最大の感謝を込めて、君とペアになることにしよう」

「ふ、ふん！ 別に私は感謝なんかしていないんだからね……っ！」

と言うことで、俺はクラリスとペアになり魔術剣士競技大会の運営の仕事に勤めることになるのだった。

第30話 クラリスの夢

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会の校内予選が開始されようとしている。

ルールはもちろん、実際の大会と同じで胸にある薔薇を散らすか、場外に落とすかと言うシンプルなルールである。

参加者の生徒は7月上旬の午後の時間を全て使って、総当たりのリーグ戦を行う。その中でも上位6名を魔術剣士競技大会の出場者とする。

そして俺たち運営委員もまた、午後の時間は校内予選の運営に当たることになっている。と言っても今はそれほど仕事はなく、ただ試合の結果を記録するのみだ。試合の審判は学院の教師がするので、まだ仕事はそれほどない。

マギクス・シュバリエ
一番の大仕事は魔術剣士競技大会の時であると、セラ先輩には説明をもらった。

ちなみに一年生の俺たちは新人戦の担当である。

「ねえレイ……」

「ん？ どうかしたのか」

「その……あなたはなんで、運営委員に参加したの？」

二人で演習場で準備をしている最中、クラリスがそんなことを尋ねてきた。

「ふむ……アメリカは知っているか？」

「有名じゃない。三大貴族筆頭のローズ家長女、アメリカ・ローズでしょ？」

「そうだ。彼女とは仲のいい友人でな。その力になりたいと思っての参加……と言ったところだ。あとは純粹に、運営委員という仕事に興味があった。こうした祭り事に参加するのは初めてでな。正直、心が踊っている」

「……色々と突っ込みたいけど、あの噂は本当だったのね」

「噂？」

「ええ。アメリカ・ローズが貴族とじゃなくて、一般人のグループオーディナリと仲良くしてるって」

「噂か……まあでも概ね正解だな。アメリカはどうにも貴族の體質を嫌っているらしい」

「どゆこと？」

「貴族は血統主義だろう？」

「ああ……まあ、そうね。確かにその一面はあるかも」

うんうん、と頷くクラリス。もちろん二人で作業をする手は止めない。と言っても、今はただ演習場の周りなどを箒ではいたり、掃除をしているだけなのだが。

「それがどうにも嫌みたいだ」

「そうなんだ。珍しいわね」

「クラリスは違うのか？」

「ん？ まあ血統も大事だとは思うけど……努力とか環境とか他にも要因があるじゃない？ うちのお父様は特に努力を重ねる貴族の中でも珍しい人だから、自然と私もそう思うようになったわね」

「ふむ……やはり、君の家は素晴らしいようだな。是非ともいつかはその父上ともお話をしてみたいものだ」

「……え！？ うちに来たいの！？」

「ん？ まあ友人の家に遊びにいくという機会はなかったからな。

夏休みは実は色々と計画をしている最中さ……ふふふ……」

「あんたってその……なんかイメージと違うのね……」

「どういう意味だろうか」

「その一般人^{オーディナリー}だけど、実戦は強くて、立ち振る舞いも大人っぽくて……とか色々言われてるけど……実際に話してみると、意外に普通な面もあるんだなって……」

「なるほど。そう評価してもらえるのなら、嬉しい限りだが」

そういうとクラリスは急に顔を赤くして、俺をキツと睨みつけてくる。

「べ、別に勘違いしないでよねっ！！？ あ、あんたのことを好意的に思ってるとか……そんなんじゃ……！！ あ……でも別に嫌いつてわけでも……あーっ！ もーっ！ とりあえず、勘違いしないことねっ！ クリーブランドの女性は気高いからね……」

「ああ。それはクラリスをよく見ればよくわかるかも」

「ふん……！」

プイツとそっぽを向くが、俺はあることが気になっていた。別に

尋ねても構わないだろうか……と少しだけ躊躇するも、思い切って聞いてみることにした。

「クラリスはどうして運営委員に参加を？ 選手として参加しないのか？」

「……それは、その……」

「もしかして実戦は苦手なのか？」

「べ、別に苦手じゃないけど……その……」

「言いづらいことであれば、無理をすることはない。余計なことを言ったようで、すまなかった」

すぐに頭を下げる。どうやら、この手の話題は良くなかったらしい。俺もまだまだ精進しなければならない。そう思っていると、クラリスがあたふたしながら言葉を発するのだった。

「あ……！ べ、別に謝らなくてもいいけど……！ その笑わない？」

「笑う？ そんな失礼なことをするわけがないだろう。どんな理由であれ、俺は真正面から受け止める所存だ」

「それならいいけど……」

と、胸に手を当てて深呼吸する彼女。

そして意を決したのか、クラリスは俺の問いに対する答えを紡ぐ。

「その……運営委員になつたのは、色々あつたからだけど……選
手として参加しないのは……その……魔術剣士とかよりも……私は、
将来ハンターになりたくて……！」

「ハンター？ 環境調査に興味があるのか？」

「う……うん！ そうなの！ でも女性のハンターって少ないでし
よ？ それに貴族の娘がやることじゃないって……一般的に言われ
ているのも知っているし……」

「……」

その言葉を聞いて、俺は得心した。確かにゴールドのハンター免
許センスを持つている俺からすればその実情はよく理解できる。確かにハ
ンターの女性の人口は少ないだろう。その中でもハンターだけで生
計を立てている者となれば、さらに人数は絞られる。

それにこの学院の環境調査部を見ても、女性部員はいない。それ
こそ、筋骨隆々の男性ばかりだ。それはそれだけ、ハンターになる
ことが過酷だということを示している。

それは男の方が体力に優れ、女性は体力や筋力という面では劣つ
てしまうという生物的な差だ。もちろん俺の師匠のような例外もい
るが……ちなみに師匠はプラチナのハンター免許ライセンスを持っている。曰
く、暇だったから取ってみた……とのことだった。

でも、クラリスがハンターになりたいというのなら俺は反対は
しない。結局のところ、人間とは自分で決めたことにしか従えない
他人がとやかく言っても、自分がそうと決めたのなら進むしかない
のだ。

「クラリス」

「な……何よ？　あなたもバカにするの？　貴族の娘がそんな……ハンターをするなんて……馬鹿らしいって……」

「馬鹿にする？　そんなわけがないだろう。俺は女性にしてプラチナのハンター^{ライセンス}免許を持っている人を知っている。ちなみに俺はゴードルのハンターであり、この学院の環境調査部の所属だ」

「え……！？　ほ、本当なの……！？」

「ああ。ハンターに関しては多少心得がある。だからこそ言うが、その夢を諦めたくないのなら、追い続けるのもまた選択肢だ。俺は決して否定はしない。そもそも俺は^{オーディナリー}一般人出身だ。そんな道理は関係ないさ」

「そ……その実はね！　私……昆虫とかに興味があつて……っ！　小さい頃から虫取りとか好きで……その延長で、世界中の昆虫をこの目で見てみたいと言うか……！」

彼女の顔は晴れやかなものだった。

きつと今までこうして打ち明けることができる者がいなかったのだろう。ならば俺が話を聞くだけでも楽になるのかもしれない。

友人の悩みが少しでも緩和されるのなら、俺も嬉しい限りだからな。

「昆虫か……俺も昔はジャングルに潜っていたことがあつてな。色々と見たことがある」

「ジャングル……！？」

「それに俺の実家はドグマの森の近くだ。よく森に潜っては様々な生物と触れ合ったものだ」

「ドグマの森……！？ レイってば……やっぱり只者じゃないのね……」

「そうだ、夏休みに二人で探検にでも行かないか？ 別に虫取りでもいいが。実際のところ、俺は夏休みは割と暇だな」

「え……！？ 本当に！？」

「ああ」

「行く！ 絶対に行く！ ど、どこの森に行く！？」

「ここら辺ならば、カフカの森でいいのではないだろうか？」

「そうね！ あー、今から楽しみだわっ！！」

と、夏休みの予定を一つ確保したところで俺たちはさらに雑談を続けた。しかし今の主な仕事は校内予選の運営である。そのことを忘れずに、今後ともしっかりと仕事に励んで行こう。

そして数時間後にはついに校内予選が幕を開けるのだった。

第31話 やさしい午後

校内予選。

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会の校内予選では、本戦がトーナメント戦に対し、リーグ戦が採用されている。参加を登録した生徒全てと戦い、上位6名だけが魔術剣士競技大会へと進める。
マギクス・シュバリエ

ちなみに一年生は新人戦にしか出られないので、戦うのは同じ一年生だが……上級学年に行くとその、学年という枠はなくなる。二年生から四年生までの中で選別される上位6人を決めるという過酷な戦いになることから、選抜戦とも呼称されているのだ。

そのため試合日程も間がなく、体力面で脱落して行く生徒もいるというのだとか……。

そして俺とクラリスは早速、試合の様子を見ていた。

「この試合、どっちが勝つと思う？」

「名前は存じないが、女子生徒の方だろう。そもそもコード術式の構築速度と精度が段違いだ。相手の男子は剣戟で無理やり押そうとしているが、まだ拙い。総合力という観点を見れば、彼女に軍配が上がるな……っと、終わったようだな」

「ちよつと引くんだけど……」

「何がだ？」

「何がだ？　じゃないわよ！　試合が始まって数秒で勝ち負けまで見えるあんたが異常なの！！」

「む……そうなのか？　しかし技量の差は歴然。それこそ、このレベルであれば5秒以内の攻防でおおよその結果は分かるものだが……」

現在は次々に行われる試合の記録を取っていた。審判はもちろん学院の教師がしてくれるので、俺たちは後ろの方に控えて雑談でもしながら、その結果を逐一紙に記入していた。

毎試合ごとに、クラリスが「どっちが勝つと思う？」と聞いてくるので、俺の所感を交えた結果予測をその都度話しているのだが……どうやら、それが彼女には異常に思えるらしい。

まあしかし……クラリスはハンター志望の学生だ。そこまで戦闘に特化した技術は必要ないため、別に分からなくてもいいのだが……。

ハンターに必要なのは生存力だ。だからそれを磨けばいい……というのだが、どうやらクラリスは色々俺のことが気に入らないというか、文句があるらしい。

「ねえ」

「どうした」

「本当に一般人なの？
オーディナリー」

「それは間違いない。出身は貴族ではないし、家系に魔術師がいたという記録もないはずだ」

「あんたってほんと謎よね。今は噂も枯れた魔術師よりも、実は巨大な力を秘めた三大貴族の隠し子とかあるし……」

「おお……俺の噂も変わったものだな」

「……うん、知ってた。レイのことだから、別に噂とか気にしてないって……うん……」

「お……それよりも、来たぞ。大本命だ」

「アメリカ＝ローズね」

次の試合はアメリカだった。

紅蓮の髪を靡かせ、その灼けるような双眸には確かな意志が宿っていた。

しかし、この試合。すでに勝利はアメリカのものだろう。それは彼女の前に立つ男子生徒の姿を見ればわかった。完全に萎縮している。アメリカ＝ローズという少女の生い立ちを知らない者はいないとの話を、クラリスに聞いた。

俺は詳しく知らないが、幼い頃から魔術師としての才能を発揮し、すでに金級の魔術師である彼女は破格の存在と言ってもいいだろう。

むしろ、新人戦に出ることがおかしい……という声を聞くほどだ。実際に本戦に出せという声もあるほどだ。

「あ……終わったわね。流石にこれは私でも分かったわ」

「10秒以内か。流石はアメリカだが……」

「どうしたの？ 何かあった？」

「いや……」

敢えてクラリスの前では言及しなかった。

この試合。アメリカが速攻で勝利してしまったが、その瞳は凍りつくような……それこそ、深淵を覗いているかのような感覚がした。

勝利など当たり前、そう思っているわけでもなく……ただ淡々と作業をこなしているような。そこに彼女の意志は介在しておらず、何か別の者がいるような……そんな印象を俺は抱いた。

翌日の昼休み。

すでに学内はマジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の話題で持ちきりだった。一年生の新人戦、それに二年生以上の本戦。その校内予選が始まり、皆がそれぞれ誰が上がるのかと予想をしている様子だった。

中には賭け事をしている人もいるほどに、この学院内は活気に溢れていた。流石にこれは俺も少しだけ面食らってしまう。

だが、悪くない気分だった。祭り事の雰囲気当てられ、俺は改めて学生生活を謳歌しているように思えたからだ。

そんなふうに思いながら、食事をトレーに置いて移動していると……ちょうど偶然にもクラリスと出会う。

「あ！ レイじゃない！ 奇遇ね……っ！ あゝ、本当に偶然ねっ！」

「クラリスか。食堂で会うのは初めてだな」

「そ、そうね。それで……べ、別に一緒に食べてあげてもいいけど……っ！？ 他に友達がいらないわけじゃないからね！ 特別よ、特別っ！」

「む……なるほど」

「……ど、どうかしたの？」

そっという彼女の表情はどこか不安そう^{かお}なものだった。

「いつも昼食は友人たちと取っているからな。今も席を取ってもらって、待ってもらっている」

俺は視線だけでその場所を示すと、すでにエヴィ、アメリカ、エリサが食事を取っていた。

「あ……そうなんだ……じゃ、私は……他のところ行くね……」

人間の感情の機微には疎いと自覚している俺にもわかる。クラリスはがっかりしている。シュンと頭を下げて、トレーを持ったまま空いている席に一人で着こうとしている。が、ここで彼女を一人にするわけにはいかない。

何故ならば、クラリスもまた、俺にとって掛け替えのない大切な友人だからだ。

そんな彼女の腕を軽く掴むことで、引き止める。

「……え？ なに？」

「一緒にどうだろうか。みんなには俺から紹介しよう。クラスは違えど、君は大切な友人だ」

「……いいの？ 私、邪魔じゃない？」

「そんなわけがないだろう。それに全員素晴らしい人格の持ち主だ。きっとクラリスを受け入れてくれると思う」

「……そ、それじゃあ」

あまり気乗りはしないのか、それとも人見知りなのか、クラリスは黙って俺の後についてくる。

「おー、遅いじゃねえかレイ……って、後ろにいるのは？」

「ああ。紹介しよう」

エヴィ、アメリカ、エリサの視線がクラリスに集まるも……彼女
は少しだけ震えながらその口を開いた。

「ク、クラリスス・シュバリエ、クリーヴランドよ……その……レイとは魔術剣マギク
士競技大会の運営委員で一緒になって……それでその……レイのお
友達よっ……！」

胸を張りながらそう答える彼女を見て、全員がそれぞれ挨拶をし

ていく。

「なるほど。初めましてだな。俺はエヴィー・アームストロング。エヴィでいいぜ？」

「次は私ね。知っているかもしれないけど、アメリカ・ローズよ。私もアメリカでいいわ」

「……えっとその……エリサ・グリフィスですっ！　ハーフエルフやってますっ！　私もエリサ……でいいよ！」

エリサの自己紹介は緊張しているのか、妙に謎な部分があったがそれでも全員が拒否することなく受け入れてくれるようだった。

そして近くにある椅子を持ってくると、5人で一つのテーブルを囲む。

「あ……そのっ！　私も……クラリスでいいわ……よろしくね、みんなっ！」

そうして自己紹介が終わり、俺たちは昼食を取り始める。すると、アメリカがクラリスに質問を投げかける。

「クラリスはレイと運営委員で一緒なのよね？」

「う、うん。その今回の運営委員はペアを組むことになって……それでレイと一緒にになったの」

「ああ……それで昨日は一緒にいたのね」

「見えてたの？」

「チラッと視界の端にね」

「や、やっぱり三大貴族しゅごい……」

と、なぜかプルプルと震えるクラリス。まあ一瞬だけ視線はこっちに来ていたしな。それで気がついたのだろう。

「で、クラリス。レイとはどうなんだ？」

次にその声を上げるのはエヴィだった。

「……レイって変わってるわね」

「ああー」

「確かに」

「……それは、そうだよ……ね」

え、普通に全員肯定しているんだが……？

俺は至極当たり前の常識を兼ね備えた人間だと思っているのだが……どうやら他の人の認識と自分の認識は大きく乖離しているようだった。

「クラリス」

「どうしたの、レイ？」

「みんないいやつだろう？」

「う……うんっ！ だ、ただ勘違いしないでよねっ！ べ、別に

あんたのこと評価し直したとか……優しくてかつこいいとか…思っ
てないんだからねっ！」

「ああ。わかっているとも」

「で、でもっ！」

「どうした？」

「あ、ありがとっ！ それにみんなも……これからよろしくねっ
！！」

そう笑うクラリスの笑顔は、今まで見てきた彼女の表情の中でも
一番魅力的なものだった。それこそ、俺の好きな花々に引けを取ら
ないぐらいに、とても可愛らしくて、美しいものだった。

そして俺たちは、このささやかな午後を過ごす。

新しい友人と共に　。

第32話 訓練開始

あれから校内予選はスムーズに進行していき、すでに魔術剣士競技大会への参加が確定になった生徒も出始めてきた。

その中にはもちろんアメリカもいた。

今のところ、全戦全勝。

試合時間は1分にも満たないものがほとんど。唯一、ミスター・アリウムとの戦いは5分程度かかっていたが、それでも勝利を悠然ともぎ取った。

残りの試合は出場しなくとも、アメリカの魔術剣士競技大会への出場は確定。だが、やはり俺には懸念があった。

アメリカは焦っている……のかもしれない。

焦燥感。いや、別の何かかもしれないが……それを感じながら、彼女は戦っている。自分の強さとは何なのか、一体どうすればもっと強くなれるのか……そんな疑問を抱きながら戦っているように思えた。

ならば……友人としてできることが、俺にはある。

余計なお世話かもしれないが、話だけはしてみることに関心俺はアメリカを待ち構えていた。

「……レイ、どうしたの？ そんなところで」

今回の試合もいつも通り勝利して、すぐに引き上げようとするアメリカ。そんな彼女を俺は待合室に通じる通路の前で待ち構えていた。

腕を組み、壁に寄り添うようにして……横目でアメリカを見つめる。

「おめでとう。今回も勝ったようだな」

「ええ。もう魔術剣士競技大会への参加も決まっているけど、手を抜くことはできないわ」

「しかし……手応えがない。焦っている。自分はこのままでもいいのか、この道が正解なのか……そう思っていないか？」

「ッ」

息を呑む。

その様子だけで、俺の指摘がおおよそ当たっていることは間違いなかった。

「……強くなりたいのか？」

そう言葉を告げる。

すると、目の前に現れるのは……いつものアメリカではなかった。

彼女は俺と同様に何かを心の内に秘めている。それは容易に理解できた。そして求めているのは……強さだと、俺は思った。

マギウス・シュバリエ

「……魔術剣士競技大会での新人戦、きつと三大貴族のオルグレン家の長女が出てくるの。そして彼女は……私よりも、強い……」

「なるほど……だから焦っていたのか……」

「……ええ」

鋭い視線。

それは俺でなければ恐怖心を抱いてしまうほどに。いつものような表情ではない。そしてその答えが彼女の全てではないことも、なんとなく理解できた。

アメリカ「ローズとは三大貴族筆頭のローズ家の長女であり、人格と魔術共に高潔な存在である……そう評されているらしいが、きつと俺たちはまだ知らない。彼女の心の奥底に、何が秘められているのか。

でもそれは彼女が開示するまで待つつもりだ。無理矢理こじ開けるものではない。そしてだからこそ、俺は強さに関してならば力になることができる。

「……魔術剣士競技大会の新人戦まで残り一ヶ月を切っているが……」

「俺がコーチをしてもいい」

「いいの？　だってあなたは……」

「いいさ。別に指導するだけなら、能力の開放は必要ない。それに師匠にこれも預かっている」

「……それは？」

「エインズワース式ブートキャンプのメニューだ。俺はこれによって、今の能力の基盤を築いた」

「……あなたの原点、ってこと？」

「そうだ」

「……それを教えてくれるの？」

「ああ。しかし、これは修羅の道だ。大人の中でも、あの屈強な軍人達ですら逃げ出すような過酷な訓練だ」

「でもレイは乗り越えたんでしょ？」

「俺はすでにこれを幼い頃に修了している」

「やるわ」

「ほう……いい心意気だ。ならば、付いてくるがいいアメリカ。これから先は修羅の道。だが、それを乗り越えれば君はきつと強くなれる。今よりもっと、な」

「……わかった」

アメリカの雰囲気は変わらず張り詰めたものだ。でも彼女には何か強い渴望があるのだけは理解できた。ならば、俺は力になるうではないか。

友人が困っているのなら助ける。それはきつと、当たり前のことなのだから。

虚しい。

この勝利に意味などあるのだろうか。

私はただ淡々とこの試合とも呼べない作業を繰り返していた。

全員が戦う前に、私に対して畏怖を込めた視線で見つめてくる。

戦う意志はあるも……それはすでに戦う前から敗北を認めているのがよくわかった。

怯え、恐怖、焦り、手に取るように分かってしまう。

だが、もちろん私も手を抜くことはない。ただひたすらに、無慈悲に、勝利に勝利を重ねるだけだった。

そうして私は、すでに魔術剣士競技大会への出場を決めた。途中でアルバート・アリウムはレイの戦いを見て思ったことがあるのか、以前よりも練度が上がっていた気もするが……それでも難なく退けた。

おそらく、このまま全勝で終わるのだろうか。

それは当たり前のことだった。ローズ家の長女ならば、当たり前のことだ。幼い頃からずっと言われてきた。ローズ家は魔術師の頂

点に立つ家系なのだと。

だから、常に余裕を持ってその頂点にいるべきだと。

血統を重視するのは構わない。

でも私は言いたかった。

今の貴族の中で、七大魔術師はいるのですか？

と。

答えは得ている。七大魔術師は三大貴族、それに大きな貴族の中にはいない。もしそうなっていれば高らかに公開するはずだ。

貴族の血は尊く、全ての魔術師の頂点であると。

でも今の七大魔術師で素性をオープンにしているものは、ほとんどいない。噂でも貴族がその地位に就いているとは、聞いたこともない。その頂点に立てもしないのに、何が貴族の誇りなのだろうか。

私はそう吐き捨てたかった。

「アメリカ。お前は優秀だ。今回の魔術剣士競技大会、期待しているぞ」

「はい。お父様」

父の書斎に呼び出され、私は魔術剣士競技大会の出場が決定したことを報告した。でも、褒められることなどなかった。ただそれは当たり前だろうと言わんばかりに、父は淡々と告げる。

「そう言えば……アメリアはオルグレン家のアリアーヌ嬢には、実戦では負け越しが多かったようだ」

「今回の魔術剣士競技大会で、今度こそ引導を渡します」

「……その意気だ。決して負けるな。お前は三大貴族筆頭ローズ家の長女。それを自覚しろ」

「……はい、お父様」

アリアーヌ「オルグレン」。

三大貴族が一つ、オルグレン家の長女。彼女もまた、私と同様に三大貴族の重圧を背負っている。でも……決定的に違うことがある。アリアーヌはそれを誇りと思っており、自分の力に変えている。

傍若無人、と評することもできるが私には彼女が空を自由に飛び回る鳥のように思えた。

でも私は籠の中の鳥。決してこの籠から出ることは叶わない。哀れな鳥。

だから今日も、仮面を貼り付けて　この貴族という籠の中で、
蹲る

一人の愚者として　。

「……レイ、どうしたの？ そんなところで」

試合が終わった矢先、通路を歩いて寮に戻ろうとしていると……そこには彼がいた。

レイ「ホワイト。」

オーディナリー
一般人出身であり、学内では枯れた魔術師と蔑称で呼ばれているも……本人はそんなことは全く気にしていない。

少しだけ青みがかった黒髪に、端正な顔立ち。どちらかと言えば、中性的に思えるそのマスクは女子生徒の間でも実は人気がある。身長も180センチあり、体つきは細身だが、実際は脱ぐとすごいという噂もある。

オーディナリー
初めは一般人ということに敬遠されていたが、彼の性格とそれを実戦に強い魔術師ということで、徐々に彼は認められつつあった。でも周りが思っているのは、オーディナリー
一般人にしては良い魔術師であるという認識だ。

でも……彼はただのオーディナリー
一般人ではなかった。

そう。レイこそが、七大魔術師の中でも近接戦闘最強と謳われている……。

『氷剣の魔術師』だった。

その実力ははつきりとこの目で見た。自由自在の氷剣に、魔術を完全に無効化するあり得ない魔術を有する、規格外の魔術師。その強さは、近接戦闘最強と謳われているのも納得できる……いや、彼以上に強い魔術師などいないと思ってしまふほど、圧倒的だった。

そして彼の過去を知って……思うところがあるも、私は純粹に彼が眩しかった。

彼もまた、自由な人間の一人だった。私とは違う……どこまでも羽ばたいてゆける翼を持つ人間の一人だ。

そんな彼と今話すのは……少しだけ辛かった。

だってそれは、自分の不甲斐なさを真正面から突きつけられているようにしか、思えないから……。

「おめでとう。今回も勝ったようだな」

「ええ。もう魔術剣士競技大会への参加も決まっているけど、手を抜くことはできないわ」

「しかし……手応えがない。焦っている。自分はこのままでもいいのか、この道が正解なのか……そう思っていないか？」

「ッ」

全てを見抜いているわけではないが……概ね、正解だった。

私は焦っている。魔術剣士競技大会で本当に勝つことができるのか。あの、アリアーヌⅡオルグレンに勝利することができるのか。ただただそれが不安で、不安で、たまらなかった。

だから試合ではそれを隠すようにして、戦い続けたが……脱帽だ。

レイにはそんな私の動揺が簡単に見て取れたのだろう。

「……強くなりたいのか？」

その言葉を聞いて、少しだけ迷った。

私は強くなりたいたいのだろうか？ でも彷徨い続けている私には、ただ進むしか道は残されていなかった。

強さの先に、本当の自分があると信じて　。

いつか、この籠から出る日が来るのだと信じて　。

私はレイの提案を受け入れるのだった。

「さて、アメリカ」

「何をするの？」

演習場に行くと思いきや、私たちはなぜか校門に立っていた。それになぜかレイは軍服ではないものの、カーキ色をしたやけにポケットの多い服を身につけていた。いや……もしかすると、軍での訓練用の服装なのかも……。

それに首からはホイッスルも下げている。さらには、隣にはバツクパツクまで置いてある。

一体何をしようというのだろうか……？

「君にはエインズワース式ブートキャンプを行ってもらう。だがこれはあまりにも過酷だ。言ったと思うが、軍人でさえもこれを前にしてはただの無力な人間と化してしまう。それでもやるか？」
「ええ。やるわ」

迷いはなかった。

ただ私は、立ち止まりたくはなかった。

だから、彼が協力してくれるのなら……それを受け入れようと思う。

レイはいつだって真面目で、仲間思いで、大切な友人だ。そんな彼が力になってくれるのなら、拒否する理由などなかった。

「そうか……アメリア。ここから先は、俺は教官だ。そして君は訓練兵になる。返事はレンジャーだ。いいな？」

「え……？ それってどういう……？」

「返事はレンジャーと言っただろうツ！！ アメリア訓練兵ツ！！」

「ッ！！？」

雰囲気ガラリと変わった。

その顔つきは本当に軍人のように鋭く、普段の彼とは大違いだった。

え？ え？

一体何が起こっているの……？

と思うも、彼は容赦なく言葉を浴びせてくる。

「返事はどうしたツ！！」

「れ、レンジャーッ！！」

「よし。では、まずは外周を周りカフカの森へと入っていき、ここに戻ってくる。軽く20キロほどのランニングになるだろうが、身体強化は使っちなよ？ わかったか、アメリア訓練兵」

「……し、身体強化なしで20キロもツ！！？」

「返事はレンジャーだと言っているだろうツ！！」

「……れ、レンジャーッ！！」

ということでは訳の分からぬまま、私は彼と共に学院を飛び出して行くのだった。

「はあ……はあ……はあ……やばい……私、死ぬ……かも……」
「アメリカ訓練兵、水分補給だ」

ちょうど20キロのランニングを終えて戻ってくると、レイはスツと水筒を渡してくれた。なぜバックパックを背負っているのかと思っていたけど、色々と準備をしているのか……と少しだけ感心してしまう。

でも、なぜ彼はそれを背負って走っているのに、ほぼ息を切らしていないのだろうか……身体強化を使った形跡もないというのに……。

「ん……うく……うく……」

美味しい。水とはこんなにも美味しいものだったのかと思っていたら、そのまま私たちは演習場に移動。そこから先は、さらに地獄だった。

「ヘイ！！ カモン、カモン、カモン！ ワンモア！！ いける、いける、いける！！ ヘイ、ヘイ、ヘイ！！ カモン、アメリカ！！」

「ん~~~~~ッ!!!」

そこから先は筋トレ地獄だった。ひたすらに全身を痛め続ける作業。今はレイに足を持つてもらって、腹筋100回を3セット繰り返し返していた。そして最後の一回を終えると、その場に大の字になって広がる。

「よし……今日はここまでだな」

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「アメリカ訓練兵、挨拶ッ!! 起立しろッ!!」
「れ、レンジャーッ!!」

氣力を振り絞って立ち上がると、私はレイに向かって敬礼をする。

「よし、これで今日の訓練は終了だ」

「ね、ねえ……これって意味があるの……はぁ……はぁ……」

訓練も終わって、雰囲気が柔らくなつたレイに尋ねてみることにした。

今の彼なら、あんまり怖くないし……。

「もちろんだ。いいか、魔術剣士による戦闘はやはり基本的な身体技能がベースになっている。多くの魔術師は、身体強化などの魔術に頼ろうとするが、やはり最後に重要になってくるのが肉体の鍛え方だ。あまり根性論的なモノは言いたくないが、気持ち的な面でも

全身を鍛えることは重要だ。どれだけ強い思いがあろうとも、体がついてこないと意味がないからな。俺も初めに師匠にそこは徹底された」

「そ……そういうことね……」

確かに肉体の強化という観点は今の学院、それに貴族の間では広まっていない。それはやはり、魔術というものに主眼を置いているからだろう。

でも彼は違う。実際に軍人として戦場に立ち、戦ってきた人間。だからこそ、こと戦闘においてはスペシャリストだ。間違いなく、その経験が今の私の教えにつながっているのだろう。

「さて、アメリカ。今日は軽いメニューだったが、明日から本格的にやるぞ？」

「え……！？ これで軽いメニュー……！？」

「返事はレンジャーだと言っただろうッ！」

「れ、レンジャーッ……！」

こうして、過酷な日々が幕を開けるのです……。

私、もしかしたら死ぬかも……主に筋肉痛で……。

第33話 前進と逃亡の果てに

アメリカとの訓練を始めた翌日の早朝。

俺は彼女の部屋へと向かっていた。女子寮は男子禁制。それは公に禁止されているわけでもなく、暗黙の了解……ということらしい。

もちろん、男子寮も女子禁制。

それでも、人の目を縫うようにして逢瀬を重ねる者もいる。

ということを噂で聞いていたので、俺は普通に女子寮に真正面から侵入する。男子寮から比較的近くに存在するので、すぐに女子寮にたどり着くとアメリカの部屋へと向かう。すでにアメリカの部屋は独自の調査で把握している（エリサに聞いた）。

ちなみに、アメリカは一人部屋らしい。三大貴族だからそのようなになっているとか言っていたが、今回ばかりはちようどいい。

「アメリカ訓練兵ッ！！ 起床時間だッ！！ 1分以内に支度を整えろッ！！」

ピーイイイイイイッと笛を鳴らして、さらには左手に持っているフライパンの底を右手で持っているおたまでカンカンカンッ！！と鳴らし続ける。

この金属音とホイッスルの音、実はかなり効く。

実際にエインズワース式ブートキャンプに取り組んでいる時は、皆はこの音がトラウマになる程だった。もちろん俺もその一人だった。だがしばらくすると、人間とは不思議なもので反射的に起きることができるようになるのだ。

「う……うつん……まだ5時前だけど……？」

「何を寝ぼけているッ！！ 返事はレンジャーだと言っただろうッ！」

「う……ん……ん……え……？ えっとその……？ え……？」

小さなクマのぬいぐるみを抱え、至る所に星が散りばめられた可愛いパジャマを着ているアメリカが、目をこすりながら出てきた。ちなみに頭にあるナイトキャップもパジャマとお揃いだった。

いつもならば、その愛らしさを褒めるのが礼儀だろう。

『アメリカ。そのクマのぬいぐるみは可愛いな。それにそのパジャマもとてもキュートだ。特にナイトキャップがいいな』

と、言いたい気持ちはある。

だが俺は教官であり、アメリカは訓練兵なのだ。

強さを求めるとはそういうことなのだ。過酷な訓練に身を費やし、自分自身と向き合う必要がある。そのため俺は……大切な友人だか

からこそ、非情になる必要があった。

「何をしているッ！！ ハリーアップッ！！」

「ッ！ れ、レンジャーッ！！」

状況を理解したのか、アメリカはすぐに自室に戻るとドタバタと着替えを始める。そして約3分後……アメリカは室内から、慌てて出て来る。

「……遅刻だな」

「だ、だって……早朝からやるとは聞いてなかったし……」

「返事はレンジャーだと言っただろうッ！！」

「れ、レンジャーッ！！」

「さて、と。早朝は軽く20キロ走るだけにしよう。大丈夫だ。俺がペースメーカーとして並走する。では、行くぞッ！！」

「れ、れんじゃー……」

「覇気が足りんッ！！」

「レンジャーッ！！」

ということで、今日も今日とて俺たちは訓練を続ける。

あれから寮に戻って来た俺は、女子寮の寮長であるセラ先輩に捕

まっつてしまい、そのまま相談室に連れ込まれてしまった。

それにしても、セラ先輩は色々と掛け持ちしているのだな……と感心しているとドンツと机を叩いて問い詰めて来る。

「で、どゆこと？ あの奇行は？」

「奇行、ですか？」

「そうよ。女子寮に堂々と侵入しただけでなく、金属音とホイッスル鳴らすし…… 大事件よっ！！」

「む……確かに周りへの配慮が足りませんでしたね。本日の夜にでも、女子寮の全ての生徒に謝罪をして回ろうかと思います」

「……その誠実な態度はいいけど、今後はやめなさい。アレ」

「エインズワース式起床法を、ですか？」

「名称はどうでもいいのよ！ とりあえず、女子寮に入るのをやめなさい！！ 一応、暗黙の了解でダメなんだからっ！」

「しかしひっそりと逢瀬を重ねるのはいいのですか……？」

「それはまあ……伝統だから。それに周りに迷惑かけないことが大切なのよ。今後は何かするにしても、寮の外で待ち合わせなさい」

「……そうですね。こればかりは自分の配慮が足りなかったようです。申し訳ございませんでした」

深々と頭を下げる。

どうにも師匠の真似をしようと思って、少し暴走してしまったようだ。ここは軍ではなく、学生が生活をする魔術学院なのだ。完全に配慮が足りなかったのは、俺の失態だろう。

「べ……別に分かればいいけど！」

「はい。今後は別のアプローチにて、アメリカに対処いたします」

「ふーん。面倒みてあげてるのね。あんたが三大貴族のコーチをしているのは、色々と思議だけど……」

「まあ……そうですね。強さが欲しいと言っていたので」

「ま、マジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会は特別だしね。それと、今度の休日だけど……新しい花でも買いに行かない？」

「む……休日ですか……」

セラ先輩とは休日に出かける仲になった。意外と話も合うし、色々とお世話になっているも……今の俺は教官なのだ。ここはアメリカ訓練兵に集中すべきだろう。

「申し訳ありません……マジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会終了までは色々と立て込んでいて……」

「あんたも運営委員だし、忙しいわよね……」

「しかし夏休みでしたら、時間は十分にあります。その時でどうでしょうか？」

「……ふん。ま、その時でいいわよ。でも時間は空けときなさいよ？ 園芸部の初の男子部員なんだから、色々と勉強してもらってから」
「了解しました」

最後に再びお辞儀をして、俺はセラ先輩と別れた。

これで夏休みはクラリスと虫取りに行くのと、セラ先輩と花を買いに行く予定ができた。

うむ……これは学生らしいのではないのか？

フハハ！

「……む、あれは？」

昼休み。今日はちょうどみんな用事があるということで学食に集まることはなかった。

ちなみにアメリカ訓練兵は逃亡を図っているので（午前の授業終了時に、俺をチラ見しながら出て行った）、あとで確保する予定だ。

そんな俺は購買で昼食を買って、たまには屋上で食事をするか……
……と思って来たのだが、ちょうどそこには……ミスター・アリウム
が一人で空を見つめるようにして立っていた。

「……」

別に無視することもないだろう。彼としては思うところがあるかもしれないが、俺は思い切って話しかけてみることにした。

「やあ。ミスター・アリウム。いい天気だな。今日は雲ひとつない

晴天だ」

「……お前か」

「一人なのか？　いつもは友人といえるようだったが……」

「たまには一人になりたい時もあるさ」

「そうか。それもそうだな」

彼の隣に立つと、俺は自分の食事を始める。

すると彼はチラッと俺の方を見ると、頭を下げて来た。それは深々としたもので、本当に謝罪の気持ちがあるのだとすぐにわかった。

「……すまなかった」

「あの件のことだろうか？」

「ああ。先生に色々と言われたとはいえ、俺はとんでもないことをしてしまった。謝って済むことではないが……本当に申し訳なかった」

「謝罪を受け入れよう。俺も少し大人気ないところもあった。お互い様というものだ、ミスター・アリウム」

「……アルバートでいい。呼び捨てで構わない」

「なら俺もレイでいいさ」

「わかった……」

再び沈黙。彼は俺の能力を目撃しているし、それにあの騒動の後に俺が氷剣の魔術師であることは伝えてあった。そのときに、そのことは黙っておくと約束したきりで彼に会うのは久しぶりだった。

「なあ、レイは出ないのか？」

「マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会にか？」

「ああ……お前なら……」

「話したと思うが、俺は無理だな。オーバーヒート魔術領域暴走が、な」

「そうだったな……なあ、お前でも世界の果てにはたどり着いていないのか？ 魔術の真理には……」

「そうだな。まだまだ俺は途上だ。そしてそれは他の七大魔術師も同じだろう。魔術師の頂点であっても、魔術を完全に把握し、理解しているわけではないさ。あくまで人間という枠での話に過ぎない」
「……なあ、俺はどうしたらいいんだ？ 今まではこの貴族の血統こそが全てだった。でも……実際はそうじゃなかった。俺はただ、貴族という狭い世界でただ驕っていた……愚か者だった……」

そんなことを思っていたのか。

彼は何かを考えながら、校内予選を戦っているのは知っていた。今までのように驕るのではなく、ただ堅実に前に進もうという気概が見て取れた。だからアメリカとの試合でも健闘できたのだろう。

だが、アルバートはまだ迷っている。

だから俺は……自分の思っていることを伝える。

「アルバート。君は強くなる。今よりもっと。その事実を認識して、自分自身と向き合えばもっと先に行ける」

「……本当にそうだろうか？」

「ああ。俺が保証する。マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会も出場が確定しただろう？ 君なら行けるさ」

「そうか……また一から進むしかないようだな」

「そうだ。この学院は何度だってやり直せる場だ。……些細な傷で尊厳はおろか命も失われる戦場とは違うのだから。故に、俺はアルバートのことも応援している」

「……そうか。いや、お前はそういうやつなんだな」

そういうと彼は俺に向かってパックの牛乳を投げて、そのまま屋上から去っていく。

「これは、いいのか？」

「ああ。俺には必要ない。ちょっとした礼の気持ちだ」
「そうか。受け取っておこう」

まだ完全に前を向いているわけではない。

その心には迷いが生じている。

でもきつと、彼もまた俺と同じように苦しみながら、蹴きながら、前に進み続けるのだろう。

そして俺はこの晴天を見上げながら、この時間を一人で過ごす。

しかし俺にはまだやることがある……ということ、手早く昼食をすませると早速アメリカの確保に出かけるのだった。

「ふむ……」

アメリカの痕跡を辿ろうにも、この煩雑とした学内をしらみつぶしに探すのは非効率極まりない。

だからこそ俺は……少しだけある能力を解放する。

そうして記憶しているアメリカの第一質料プリママテリアを追いかけると、ちょうど校舎の一番奥にある空き教室にたどり着いた。

ガラツと扉を開けると、ひっそりと奥で昼食をとっているアメリカを発見。

「ど……どうしてここに！？　いくら何でも早過ぎないッ！！？」

「少し能力を使った」

「え……！？　そこまでするの！？」

「逃亡した訓練兵を確保するのも、教官の務めだ」

「あ……ははは……いや、逃げる気は無かったのよ？　ただちよつと一人でご飯食べたいな、なんて」

「返事はレンジャーだッ！！　さて、今日は逃亡した分のペナルティも追加だ。明日も筋肉痛になるが、頑張ってくれ」

「い、いやだあああああッ！！　う、うわあああああんッ！！！」

アメリカは教室の後ろの扉から逃げようとするので、すぐに距離を詰めて手をしっかりと握る。

「あ……」

「さて行くのではないか。この手は演習場にたどり着くまで離さないからな」

「いやその……恥ずかしいんだけど……」

よく見るとアメリカの顔が赤くなっていた。しかし手を離してしまえば、再び逃亡を図るだろう。目立つかもしれないが、このまま行かせてもらうしかない。

「我慢してくれ。では行くぞ、アメリカ訓練兵ッ！！　ハリーアッ
ブッ！！」

「う、うわああああああああんッ！！」

「返事はレンジャーだと何度言えば分かるッ！！」

「れ、れんじゃあああああああッ！！」

そうして嫌がるアメリカの手を引いて、俺たちは演習場に向かうのだった。

第34話 You can do it!

今日もいつも通り、目覚まし時計が鳴る前に目が覚める。

「う……うう……眠い……いい……」

正直なところ、私はあまり朝が強くない。だと言うのに4時30分起床を強いられている。何故ならば……レイの訓練は未だに続いているからだ。

あまりの過酷さに、一回だけ昼休みの訓練をサボろうと逃げ出したことが……その後は普通に確保され、説教をされ、倍のメニューをこなすことになった……。

もうあんな経験は嫌なので、私は今日も今日とて頑張って起床する。

集合時間は校門前に5時だ。ちなみにもうあの金属音とホイッスルの音は響いていない。曰く、女子寮の寮長に怒られたとかなんとか……。でもあれは本当に体に悪いので無くなって良かった。

そして最低限の身だしなみを整え、歯磨きもサツと済ませると、軽装に着替えてそのまま外にでる。

「…………ふう」

一息つく。

すでに日は昇りつつあって、それに虫も鳴いている。もう本格的に夏が近づいてきたのだと、私は思った。

でも夏は嫌いだ。だって、夏には貴族のパーティーが集中しているから。夏休みだと言うのに、全く休んだ気にならない。

でもこの学院に来てからは少しだけ違う気持ちになっていた。

初めは前の学校と同じように、貴族の友人で周りを固めるのか……とそんなことも考えていたが、私はなぜかそうしなかった。気がつけば、レイ達と一緒にいた。彼を中心にして構成されているそのグループは私にはとても眩しかった。

いつもならそこに入ろうとはしない。

ただ羨ましいと思って、外から見ているだけ。籠の中からそっと見つめているだけ……だったのだが、なんの因果か私は今、彼らと一緒にいる。

レイもそうだけど、エヴィもいい人だし（筋肉すごい）、エリサは超可愛い（もふもふで可愛い）。おっぱいも大きいし、いつか一緒に風呂に入りたい。もちろん、水着でも可！！

それに最近はクラリスも一緒になることが多く、妙にツンツンし

ているも時々デレつとした顔になるのが超可愛い（ツインテール可愛い）。

と、こんな感じで私は何気に満たされた学生生活をしている気がする。

今までは学校なんて大嫌いだった。

だって、そこには私はいないから。

そこにいるのは、ローズ様と呼ばれる私ではない何かだから。

でも今は……まだ不安なこともあるし、迷っているし、焦燥感もあるけど……ほんの少しだけ満たされているような、そんな気がした。本当に心から信頼できる友人というものを初めて持った気がする。

「……私も変わってきてるのかしら」

なんて独り言を呟いてみる。

変わりたい。籠の外に出たい。自由な大空に羽ばたきたい。

そんな気持ちで私は今こうしてレイからの訓練を受けている。彼の強さの秘密を知りたかった。それに自分自身ももっと高みへ、もっと成長したかった。決して私は血統だけではなく、後天的な努力によって成長できるのだと。

アメリカとして生きることができると、実感したかった。

だから私は今日も、前に進む。

「……十分前行動。素晴らしいではないか、アメリカ訓練兵」
「は。恐縮であります」

と、敬礼を試みる。

ここまできたらもう自棄だ。^{やけ}そう思って、私も自分を完全に訓練兵だと思い込ませロールプレイ紛いなことを試みる。

すでに噂が立っているのは知っている。

あのローズ家の長女がご乱心だとか何とか。^{オーディナリー}一般人に教えを請うなどあり得ないとか色々噂が広まっているらしい。

別に乱心などしていない。私は、私の生きたいように生きるだけだ。だからもう今は、そんな外聞など気にしてはいなかった。

それに少し嬉しいのは、レイの評価が変わってきていることだった。

「なあ聞いたか」

「あの件か？」

「ああなんでも、一般人があのアメリカ^{オーディナリー}のローズの指導をしているとか……」

「逆じゃないのか？」

「でも目撃情報も多いんだよな。俺も実際に見たし」

「ということは、あいつはもしかしてすごいやつなのか？ 実戦はかなり優秀って聞いたけどな。その通りなのかもな」

「ああ。意外にあいつもやるのかもしれない」

そんな話を耳にしたのはつい最近だ。

レイは別に噂など気にしていないも、友人がバカにされているのは私も聞きたくはない。だからそんな噂がいい方向に変わってきて、私は嬉しかった。もう学内で枯れた魔術師^{ウィザード}という声は聞かなくなっ

た。

確かに彼は今の状態ではうまく魔術を使えない。でも、出来ないこともあるが、出来ることもある。それを正當に評価してもらえるのは、なんだか自分の事のように嬉しいが……でもやっぱり、羨ましい気持ちもあった。

彼は、レイ＝ホワイトとして見られている。

私のような血統とは違う。

そんな彼の眩しさに手を伸ばし、ここまでやってきたが……。

まあ……今は本当に苦労している。いや……本当に……。

「よし……では点呼を取ろう。番号 ツ！」

「い ちっ……！」

「うむ。全員揃ったな」

うん。一人なのに全員とはこれ如何に、^{いか}と思うがもう慣れてしまった。

これもまた儀式みたいなものだ。それに意外とこの形式とは大事なもので、こうして大きな声を出して点呼から始まると妙に気分が高ぶる気がする。

私も意外にハマってきているのかもしれない。彼とこうして訓練することに。

筋肉痛は本当に嫌だけど……。

「ではいつものコースを行くぞッ……！」

「レンジャー……！」

ということで、今日も二十キロコース行ってきます。

「…………ふう」

学院に戻ってきた。レイがいつも全く息を切らしていないのは当然だが、私もまた少しだけ改善されたような気がする。以前までは終わった後にこの世の終わりのような気分だったが、今は少しずつ楽になっている……そんな気がした。

「アメリア。体力がかなりついてきたようだな」

と、朝の訓練は終了したのでレイが普通に話しかけてくる。

「そうね。自分でも驚きだわ……」

「いやもともと君は努力を重ねていた。それが今こうして顕著に表れているということだろう」

「そうだといけれど」

マギクス・シュバリエ

「さて、もう魔術剣士競技大会も一ヶ月を切ったな」

「そうね。あと一ヶ月もないのよね……」

「そろそろ切り替える時だな」

「え？」

「肉体強化の訓練も並行するが、そろそろ魔術に関して訓練をしていくべきだろう。しかしここまでよくついてきたな。素直に感心する」

「ええ……しばらくトレーニングは嫌になるほどに、ね」

「一度逃げ出しているしな。実は逃走回数はもっと多いと予想していた」

ニヤツとレイが笑うと、私もそれに対して笑って返答してしまう。

「ふふ……そうね。あれはまあ……ちょっと逃げたらどうなるのかなーと思って」

「懐かしい記憶だが……そろそろ魔術訓練も開始しよう。今後は肉体強化と魔術強化を行い、一定基準を超えたとみなしたら最後に卒業試験を課して修了だ。で、魔術はどうだ？」

「魔術……ね」

「アメリカは得意な魔術はないのか？」

「得意な魔術か……」

得意な魔術、と言われても私にはいまいちピンときていない。というのも、私は三大貴族筆頭のローズ家であることから幼少期より家庭教師をつけてもらって、魔術を満遍なく学んでいた。

そのため特に不得意なものもないが、これが突出している……というものは持ち合わせていない気がする。

「ない、かも。いや気がついてないだけかもしれないけど……私は自分の認識でこれが得意……というのではないわね」

「なるほど……自覚はなし、か」

「どういうこと？」

「君には火属性の魔法の適性があると、俺は思っている。今までの授業を見てきてな」

「そうかしら？」

「ああ。でも……本当に火属性を極めるとなるとやはり……加速が重要になってくるな」

「加速？」

「大雑把にだが、温度が分子の振動によって決まるのは知っているだろう？」

「まあ……常識程度ぐらいだけど……」

「俺も氷剣を使用するときは、減速をコードに組み込んでいる。これを覚えるだけでも、魔術の幅は広がる。より詳細なコードを組み込めるのは、絶対的な強みになる。だからこそ、アメリカには加速を覚えてもらいたい」

「……加速、ね」

「ああ。そうすれば君の火属性の魔術は飛躍的に向上するだろう。実際に、灼熱の魔術師であるうちの学院長である、アビー・ガーネツトの本質は加速にあるからな。同じことをしるとは言わないが、この短期間で目指すべきはそこだろう。それにコード理論の処理の過程でより多くのプロセスを組み込めるのは魔術師として絶対的な強みになる。今後のためなら、ここで取り組んでおいて損はない。それにアメリカは容量キャパが大きい。きっと出来るはずだ」

「……そっか。なら……頑張ってみようかしら！」

「おお！ その意気だな！」

はつきり言って理屈的な問題は、後回しにするとして……今はただ前に進みたい気持ちがあった。

今まではただ課されることを淡々とこなすだけだった。この作業はいつ終わるのだろう……そんな気持ちで魔術を使っていた。でも私には才能があるおかげか、なんでも器用にこなすことができた。

そうすると、みんな褒めてくれる。賛美してくれる。

幼い頃は嬉しかった。でも成長するにつれて、それは虚しくなっていた。誰も私に厳しいことは言わない。

ただ当たり前のことのように、私を褒めるだけだった。

でもレイは違った。彼は私に容赦などしなかった。本気で私の気持ちと向き合ってくれているのがよく分かった。

まだ私は自分の本当の気持ちを吐露していない……でもいつか、私も彼のように……みんなに話せる時が来るのだろうか？

そんな未来に思いを馳せながら、私は今日も進んでいく。

大切な友人と共に。

「あ、ちなみに魔術の訓練は肉体強化に比べて楽と思っていないか？」

「え……違うの？」

え……違うの？

声と内心が一致する。私はやっとこの過酷さから解放される喜びに実は打ち震えていた。もうあの筋肉痛とはおさらばできるのだと……そう思っていた。

「訓練の厳しさで言えば、魔術の方が過酷だ。肉体ではなく、脳を酷使するのだからな。まあ安全マージンは保つが、楽になるとは思わない方がいいだろう。俺も実際にこのエインズワース式ブートキ

ヤンプを経験しているが、魔術の方が大変だった」

「……ちよ、ちよっとお腹が痛いかな。今日は体調不良で無理かな」

少しずつ後ずさると、私はその場から駆け出そうとするも……右手にはしっかりとレイの手が伸びてきていた。

「うむ。もう逃走は許しはしない。さて、アメリカ訓練兵ツ……魔術訓練に移行するぞツ……ついてこいツ……」

「う、うわあああああん……もっと過酷とか無理iiiiiiiiツ……」

「返事はレンジャーだツ……」

「れ、れんじゃあああああああツ……」

結局のところ、この訓練の間は私の心が休まる暇などないようだった……。

とほほ……。

第35話 閃き

夜。俺とエヴィは寝る前に軽く雑談をしていた。

「レイ、お前大丈夫なのか？」

「ん？ なんのことだ」

「運営委員の仕事に、それにアメリカの特訓にも付き合ってるんだろ？」

「ああ」

「大変じゃないのか？」

「まあ……割と大変かもな。正直自由時間があまりない。読書の時間が減ったな。筋トレは最低限しているが」

「だよな。部屋に戻ってくるのも最近遅いしな。何か手伝えることはないか？」

「……ふむ。いや、大丈夫だ。また何かあったら頼らせてもらおう
「おう！ その時は任せとけ！」

自分たちの部屋でそう話して、俺たちはベッドに横になる。そして明かりを消すと、真っ暗な空間がこの部屋を支配する。だが今日は夜でもよく晴れているのか、月明かりが心地よく差し込んでいた。

思えば、学生として生活を送るのは初めてなのだが……割と最近
は充実している気がした。運営委員としての仕事はいわゆる雑用であるが、それでも嫌という気持ちはなかった。誰かの力になるのに、魔術を行使しないというのは変な感覚だったが、それでも確かな充実感があった。

それに、アメリカとの訓練も彼女の力になれるのなら、それだけで嬉しかった。彼女が心のうちに何かを抱えているのは知っている。でもそれを打ち明けるかどうか迷っているのも、わかっている。

アメリカ「ローズは容姿端麗、頭脳明晰、カリスマ性も備えている完璧な人間とされている。でもその実、俺との訓練を逃げ出したりもするし、よく笑うし、よく泣き言を言ったりもする。

俺としては普通に仲のいい友達という印象の方が強い。

この間の訓練も

「ヘイ！ アメリカ！ ワンモア！ ワンモア！ いけるいける！
！ やれる！ いけっ！！ ハリー、ハリー、ハリー！！」

「ん~~~~~！！ む、無理iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

「やれるって！！ アメリカならいける！！ ヘイ、カモン、カモン、カモン！！」

「んにゃああああああああああ！！」

身体強化週間。

エインズワース式ブートキャンプをアレンジしたものをアメリカには課しているが、この時は満遍なく全身を鍛えることをしていた。毎日部位を変えて筋トレを行い、それを限界まで追い込む。徹底して行われるそれは、軍人でさえも逃げ出してしまうほどだ。

アメリカは泣き言も言うし、逃亡もするが、それでも最後までついてこようと努力している。だからこそ俺も、そんな彼女に報いたいと思っている。

「う……はぁ……はぁ……はぁ……もうだめ、私死んじやう……はぁ……はぁ……」

「大丈夫だ、アメリカ」

「あ……今日は、もう終わりなのね！ やったー！」

「いや腹筋が終わったからな。次は脚にいこう。さて休憩時間は終わりだ。行くぞッ！ アメリカ訓練兵ッ！！！」

「もう嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

「返事はレンジャーと言っただろうッ！！！」

「れ、れんじやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

というように、この手のやり取りは日常茶飯事だった。

別に俺もアメリカを痛めつけたいわけではないが、力を手にしたいのならそれ相応の代償が必要となる。手輕に何かを大きなものを得ることなどできないのだから。

でもアメリカならきつとできる。

俺はそう信じている。まだ付き合いは短い。彼女のことを完全に把握しているわけでもない。それでも俺は……アメリカのことを信じきっていた。別に根拠などはないが、友人としての直感……いや、純粹に俺はアメリカを人として素晴らしいと思っている。だから信じたいのだらう。

そして、彼女ならば魔術剣士競技大会の頂点に立てると……そう
思いながら、睡魔に身を任せるのだった。

すでに一学期も終わりを迎えようとして、今はテスト期間も終わりに近づいていた。もちろんその間も魔術剣士競技大会の校内予選は進んでいくので、俺は運営としての仕事をこなしていた。

午後になると、クラリスとともに演習場を清掃して、周囲の環境をチェック。そして教員立会いのもと行われる試合の結果を本部に報告し、各選手の戦績を管理する日々。今はもうほぼ新人戦に出る生徒は確定しており、あと数試合もすれば魔術剣士競技大会の出場者が確定するところだった。

ちなみにこれは、本戦も同様である。そしてレベツカ先輩も魔術
剣士競技大会への出場を確定させたようで、セラ先輩が喜んでいた。

新人戦と異なり、本戦は二年生から四年生の中でたった6人しか残れない。それは一年生に比べれば、尋常ではない競争率だろう。たった一度の敗北で、後々にかなり響いてくる可能性もある。そんな中で、すでに出場が決定しているレベツカ先輩はやはり伊達に昨年の覇者ではないのだろう。

「む？ あれは？」

今日は午前中に一度だけテストがあり、午後の時間まで暇だったので図書館で勉強しようと思っていたのだが……ちょうどそこにはエリサとクラリスがいた。そこは図書館の入り口付近にある共有スペースで私語も許されている場所だ。

私語厳禁なのは、さらに奥のスペースであり俺はそこに行こうと考えていたが、友人がいるのなら話は別だ。

「お邪魔してもいいだろうか？」

「あ……レイくん……」

「ん？ ああレイね。別にいいわよ」

「では失礼する」

3人で向かい合うようにして座る。するとどうやら、エリサがクラリスに勉強を教えているようだった。

「クラリスはエリサに教わっているのか？」

「そうだけど、悪いっ！？」

「いや別に悪くないが……妙に焦っているな」

「成績が悪いとお小遣いが減らされるのよ……それにママに怒られるし……」

「なるほど。それは切実だな」

「レイは妙に余裕そうね……」

クラリスは真っ赤な目を俺にじっと向けてくる。いつもキマって

いる美しいツインテールも少しだけ垂れている気がするし、真っ赤な目もそうだが、肌も少し荒れている気がする。察するに、あまり寝ていないのだろうか。

それにトレードマークのツインテールがしょんぼりしているので、俺はすぐに異変に気がついた。

「寝ていないのか？」

「そうよ……もうなりふり構ってられないのよ！！くそ、エリサが頭いいのはわかるけど……どうしてこの脳筋も賢いのよ！！」

ひどい言われようである。

ちなみに俺は別にもう勉強することなどあまりなかった。この一学期での授業内容は適宜復習をしていたし、元々師匠には勉強関連のことも叩き込まれている。だから別に改めて学院で勉強する習慣を身につけるのは、全く苦ではなかった。

おそらく、今回のテストはほとんど終了しているが、満点の科目もいくつかあるだろう……と思えるほどにはよくできたと自負している。

「エリサは駆り出されたのか？」

「う……うん……クラリスちゃんが急にきて、勉強教えて……っていうから。お手伝いしてるの」

「なるほど。エリサは自分の勉強はいいのか？」

「うん……もうだいたい終わってるし……レイくんもでしょ？」

「ああ」

「あーもーっ！！　なんであんなにそんなに余裕なのよーっ！！」

「日頃の研鑽だな。クラリス、君は復習をろくにしなかっただろう」
「うぐ……」

「授業を一度受けるだけで全てを覚え、理解できる天才と呼ばれる者が稀に存在するのは確かだが普通は無理だ。だからこそ、地道に重ねるしかない」

「ぐ……ぐうの音も出ない……」

「今日も午後からは運営委員として仕事がある。それまで頑張るといい」

「うわあああああつ！！　もうっ！！　運営委員なんてやるんじやなかったあああああつ！！」

頭をかきむしりながら叫ぶクラリス。おそらくよほど切羽詰まっているのだろう。いつもの可愛らしいツインテールがボサボサになってしまふ。

「もう。ダメだよ。クラリスちゃん……こんなにもボサボサになっ
て……！　もうっ！　私が直してあげるからっ！」

「う……ごめんなさい、エリサ」

「ごめんじゃなくて、お礼がいいな……？」

「あ、ありがとうっ！　こ、これでいいっ！？」

「……うんっ！」

エリサは立ち上がると、一度そのツインテールを解くと櫛で梳かし直して再びその長い金髪を結っていく。慣れているのか、すぐにいつものような神々しいツインテールになる。

ふむ……なるほど。参考になるな……。

と、別の視点でその様子を眺めているとクラリスがため息をつく。

「はぁ……運営委員じゃなかったら、もっと勉強できたのに……」

「俺としてはクラリスと出会えて良かったがな。そういわれると、少し寂しいな」

「う……いや、べ、別にそういう意味じゃないわよっ！ 勘違いしないでよねっ……！」

ふいっと顔を反らすと、クラリスはそのままノートに顔を向けてガリガリとペンを走らせる。

「エリサ、俺は何かまずいことでも言ったのだろうか？」

「んー。えっと……まあ、レイくんっていつもそうだよ……でもいいと思うよ……うん……」

「そうだろうか？」

「うん……レイくんはそのまま、いいと思うよ……」

「そうか。そう言ってもらえると安心だ。そういえば、エリサは魔^マ術剣士競技大会は観戦に来るのか？」

「……もちろんっ……！」

ずっと体をこちらに寄せてきて、妙に頬も赤くなっている気がした。いつもは一定の距離感を保っているが、今回ばかりはかなり近い。それだけ、特別なことなのだろうか。

それに、ここまでテンションの高いエリサは初めて見るな……。

「じ……実は毎年、魔術剣士競技大会は観戦してるの！」
マギクス・シュバリエ

「おお。そうなのか」

「うん！ それで今年はアメリカちゃんも出るし……応援したいな
っ！ と思つて！ 有名な選手には応援団もあるし……すごい盛り
上がるんだよっ……！」

「おお……それはすごいな。運営としての仕事もあるが、俺も楽し
みにしておこう」

「うんうんっ！！ それがいいよ……！！」

「空いている時間は一緒に観戦しよう。もちろん、みんなだな」

「……う、うんっ！！ お友達と一緒に観戦するのも、きつと楽し
いよねっ！」

エリサは依然として興奮しているようで、かなりテンションが高
いままだった。一方のクラリスは集中力が限界突破でもしているの
だろうか、ぶつぶつと言いながら勉強に励んでいた。

しかし、ふむ……なるほど。

閃いたぞ ……！！

ということで俺はその閃きをすぐに実行に移すのだった。

第36話 結成の時

「部長ッ!!」

バンツと扉を開ける。

環境調査部の部室。俺は今日も部活ということやってきたのだが、今回はある願いが俺にはあった。

「どうしたレイ」

「部長……いえ、皆さんにお願いが」

「いいだろう。次期エースのお前の話だ。言ってみろ」

「はい実は……」

意を決して俺は言葉を紡ぐ。

「アメリカ応援団を、結成したいのですッ!!」

刹那、ざわめきが部室内に広まる。

「……アメリカ!! ローズか」

「あの三大貴族筆頭か」

「しかし応援団を作ってもいいのか？」

「ああ。三大貴族はデリケートだから」

「でもかなり美人だよな。俺、実はちょっとファンで……」

「お前もかよ！ 実は俺も……」

部員の方々の反応は、あまり悪くないようだった。

「なるほど。で、なぜ俺たちを頼った？ 俺は運営としての仕事もある。でもそれはレイも同じだろう？」

その圧倒的な筋肉がまるで俺を包み込むようにして、問いかけて来る。

そう……すでに俺たちは衣服を脱ぎ去っていた。それはもはや意識内での行動ではない。無意識に、この身体に刷り込まれている潜在意識が、そうしろと語りかけてきたのだ。

この圧倒的な空間では衣服など邪魔でしかない。

俺たちは自然と、このバルクで語り始めていた。

「応援……それは気持ちも大事ですが、やはり声量も重要だと思うのです」

「続ける」

「そしてさらには、応援にはその圧倒的な存在感もまた、重要なフアクターだと考えました」

「なるほど……」

「応援してくれる者の存在感を感じて戦える。それは大きな強みです。そしてその存在感こそ……筋肉だと理解しました」

「……」

「宇宙の心は、筋肉なのです」

もはや自分でも何を言っているのか、意識などしていない。ただ心にあるこの情熱を、言葉という形で具現化しているに過ぎない。

「……ふ。そうか、そういうことか」

「この学院の中でも最高峰のバルクを備える私達ならば、最高の応援ができると思うのです」

「おい、お前ら……この話、乗って見ないか？」

部長がチラツと後ろを見ると、部員たちもそれに賛同してくれる。

「もちろんだ！！」

「ああ！！ 最高のバルクで応援してやろうぜ！！」

「アメリカ応援団か……へへ、最高じゃねえか！！」

「よっしゃあ！ やったるぜえ！！」

やはり言ってよかったな……俺はそう思っていた。

どうやら改めて調べてみると、このように各選手に応援団なるものは存在しているらしい。その中でも一大勢力を築いているのはレベッカ先輩の応援団らしい。それはもはや学院の枠すら超えているとか……。やはりレベッカ先輩は偉大なお方のようなようだった。

そしてそれを率いているのはセラ先輩。彼女は何かと掛け持ちをしているが、それが生き甲斐だと言っていたので、それも生き方の一つなのか……と妙に納得した。

俺はそれらに触発されて、こうしてアメリカ応援団を設立しようと考えたのだ。

「さて、レイよ。まずは形からだ」

「形……ですか？」

「ああ。つまりは……応援団の制服を作ることからだな」
「なるほど……勉強になります」

部長は圧倒的なバルクを見せ付けながら、そのままカーテンのある窓側へと歩いていく。そしてくるっとこちらを向くと部員全員に告げるのだった。

「いいか……俺たちがやるからには、半端は許されないッ……」
『おうッ……！』

「アメリカ応援団、いいじゃないかッ……」
魔術剣士競技大会でマギクス・シュバリエ見せつけるぞッ……俺たちの圧倒的なバルクをッ……」
『おうッ……！』

と、いうことで俺たちは早速その作業に入るのだった。

「うお……っ！！？　なんだこれっ！！」

それから少し遅れて、エヴィがやってきた。しかし部室の扉を開けた途端、妙に驚いているようだった。

「え……何してるんだ、これ？」

「エヴィ。俺が説明しよう」

「レイ……どうなってるんだ、こりゃあ？」

「ハチマキと法被^{はっぴ}、それに団旗を作成中だ」

「いや……それはそうなのかもしれないが……なんでやっているんだ？」

「アメリカ応援団、結成だ」

「アメリカ応援団？　文字通りの意味か？」

「そうだ。アメリカを応援する団体を結成した。主に環境調査部がメンバーだ。エヴィも参加するだろう」

「ふっ……なるほどな。愚問だ。もちろん俺もやるぜ！」

「ふふふ……よし、ということでエヴィにも手伝ってもらおうか」

「おう！！」

現在は全員で縫い物をしている。ハチマキにペンで『アメリカ応援団』と書くことなどしない。

手縫いである。

なぜか部長は裁縫セット、それに大量の布を持っていた。しかも、服を作った経験もあるということで型紙作成からデザインまでやってくれるという。

また他の部員もこの作業には慣れているのか、屈強な男たちが集まってそれぞれ細やかな作業を行っていた。

これも全て日頃の筋トレの成果だろう。

そうして俺たちもまた、その作業に従事する。

「失礼しまーす……」

「お……邪魔します……っ！」

それからまた数分後、やってきたのはクラリスとエリサだった。二人にはすでに内容を伝えてあり、了承してくれている。あまり男性ばかりでも仕方ないので、アメリカ応援団には二人も参加してもらうことになった。

ちょうどアメリカの応援をしたいとのことだったので、いい機会だと二人も言っていたしな。

「おお！！二人とも、よくきてくれた！！」

「ちょ……！？あんた裸じゃない……！？ていうか、みんな服着てないの……！？」

「……え！？え！？」

「慌てるな二人とも。ボクサーパンツは履いている」

「そんなことはどうでもいいのよっ！　女子二人が来てるんだから、ちゃんとしてよねっ！！」

「む……すまない。部長、ということらしいです！！」

俺が大きな声をあげてそう伝えると、縫い物をチマチマとしている部長が顔を上げる。

「ん？　ああ、すまないな。普段はこの格好が普通だな。おい、お前ら一年生の女子が来たんだ！　各自、制服を着用だ！」
『おうつ！』

ということで、クラリスとエリサには少しだけ外に出てもらい俺たちは改めて制服を着用。全員がそうして作業を再開すると、二人を再び部室へと招き入れる。

「すまないな二人とも。ささ、入ってくれ」

「もうつ！！　気をつけてよねっ！！」

「筋肉……筋肉がいっぱいだよ……」

改めて、環境調査部全員とクラリスとエリサを加えてアメリカ応援団は本格的に始動するのだった。

「はあ……はあ……はあ……」

「アメリカ訓練兵。今日はここまでにしておう」

「れ、レンジャーッ!!」

今日も今日とて、アメリカとの訓練を行なっていた。現在は身体強化はほぼ終了し、次の段階である魔術強化の週間に入った。エインズワース式ブートキャンプの真の過酷さは実はここから。もちろん、身体強化を図る期間もかなり大変だが……この魔術強化の週間こそ最も過酷。

それは主に、コード理論の中でも処理の過程を徹底的に訓練するからだ。

現在、アメリカの目の前には様々な形の氷細工が置かれていた。

そして俺が指定したものを生み出すと、それを指定時間以内に溶かしていく。もちろん、爆破などで粉々にするのは論外だ。内部からじわじわと熱で溶かす……つまりは内部の分子を振動させて、熱を発生させるという過程をコードに組み込んで、魔術を行使するのだ。

元々思っていたことなのだが、アメリカは魔術容量キャパシティが大きいために、コード理論の中でも処理の過程を大雑把にってしまう傾向にあった。

むしろ、魔術容量キャパシティが小さい魔術師の方が処理の過程は丁寧に行う傾向にあるが……やはり、魔術容量キャパシティが大きいからこそ細やかな処理が必要となる。

アメリカは今まで有り余る才能でそれを補って来たが……もう、

それは通用しない。

魔術剣士競技大会に関して独自の調査、特にアメリカと対戦する
マギクス・シュバリエ
だろう生徒のデータを集めたいところだが、誰もがかなりの技術を
有している為に対象を絞り込むのは難しい。だからこそ、ここから
先はより繊細な魔術の技量が要求されるのだ。

「水分だ」

「あ……ありがとう……」

水筒を渡すと、アメリカは一気に喉に流し込んでいき、残りを頭
へと流していく。恐らくは魔術領域暴走まではいかないまでも、か
なり発熱しているのだろう。それにこの天候だ。夏の灼熱は容赦な
く、俺たちを照らしつける。

「どうだ？ 調子は？」

「今まで自分がどれだけ適当に魔術をやってきたか、思い知ってい
るわ……」

「正直言つて、アメリカは雑すぎるな。学生レベルならいいが、魔
ギクス・シュバリエ
術剣士競技大会でのレベルはかなり高い。それにオルグレン家の長
女はなかなか手強そうだ。これぐらいの技量は基本になるだろう」

「アリアーヌのこと調べたの？」

「ああ。アリアーヌはオルグレン。身長は175センチで何よりも
手足のリーチがかなり長い。これは戦闘においてかなりのアドバン
テージになる。さらに特筆すべきは、その魔術の繊細さ。聖級魔術
も使用できるらしいな。しかし、魔術剣士競技大会では高速魔術、
マギクス・シュバリエ
クイック
連鎖魔術、遅延魔術が重要になる。だがそれは相手も承知の上だろ
ディレイ
う。と言ってもこれは誰にでも集められる情報だ。そこで、明日俺
はディオム魔術学院に潜入する」

そう告げると、アメリカの表情は驚愕の一色に染まる。

「……え！？　せ、潜入……！？」

「そうだ。任せておけ。この手のスニーキングミッションには慣れている。敵地、敵施設への潜入、破壊工作、諜報活動は一通り経験があるし、師匠にも叩き込まれている。必ずや、最高の成果を手に入れよう」

「……それって大丈夫なの？」

「もちろんだ。俺を信じろ」

「そういう意味じゃないけど……どうせ止めても行くからいいけど……明日の休日はいつもの訓練をすればいいの？」

「ああ。自主練で頼む。流石にサボったりはしないだろう？」

「もちろん！　まあ……レイも頑張ってね……」

「ふ、任せておけ」

俺はアメリカのためには最大限のことをしてやりたい。そのため
マギクス・シュバリエ
に、魔術剣士競技大会の新人戦に参戦する優勝候補のデータは集めるに限る。

とりあえずは各学院の制服を入手して、素知らぬ顔で校内を闊歩
かっぽ
するか……学院という条件ならば、これは意外にも効果的だ。逆にスニーキングをするのもいいが、それは状況に応じて使い分けるか……。

そして俺は明日のミッションに向けて、色々と準備を始めるのだ
った。

第37話 俺による乙女の方法

「今日はいいいお紅茶が入りましたの」

「そうなのですか？」

「ええ」

「みなさん、楽しみですわね」

「そうですわね」

「はい。とってもいい香りですわ」

早朝。今日は休日だが、朝から園芸部での集まりがあつた。もちろん俺は予定通り、この後にディオム魔術学院に調査に行く予定だ。

かのアリアーヌ「オルグレンのリサーチをするとアメリカにも約束したしな。」

だが気がついただろうか。実は今の会話の中に……俺がいたことに……。

そうして園芸部のみんなで紅茶とスコーンを楽しんでいると、セラ先輩が慌てた様子で入ってくる。

「も、申し訳ありません……！ 遅れてしまいました……！」

「大丈夫ですよ、ディーナさん。後1分ほどあります」

「そうですか。良かったです」

レベツカ先輩にそう言われてホツとするセラ先輩。

彼女はいつもの席に座ると、そのまま紅茶をもらっているが……ふと、視線が俺と重なり合う。

「あら？ レベツカ様。新入部員の方ですか？」

「いえ。レイさんです」

「は？」

ぽかーんとしているようなので、俺は改めて挨拶を交わす。

「セラ先輩。ご無沙汰しております。レイ〃ホワイトでございます」
「な……は……！？ いやいや……冗談でしょう？ だって、声も見た目も女の子じゃない！！」

そう言われてしまうので、俺は自分の声を元の男の状態に戻していく。

「ん……ん……はい。これでいかがでしょうか、先輩」

「うわっ！ そんな見た目でいつもの声出さないでよっ！！ こわっ！！」

「では、戻しておきますね？」

「……レベツカ様、これは……」

「実は……」

ということで、レベッカ先輩が概要を語ったが……別にそれは大したことではない。ただ単純に俺が女装をして、この園芸部の集まりにやってきたというだけだ。もちろん、この後に控えているミッシヨンのためにも。

それに俺の女装技術が衰えていないか、確認もしたかった。すでに声変わりをしてから、あまりこの手の技術は使っていない。念のために自分の部屋に忍ばせていた、化粧道具を使ってメイクをし、さらには各学院の女子の制服も新品で揃えた。

これも実は、部長に相談すると……。

「なるほど。任せておけ」

と言われ、翌日には俺のサイズぴったりの女子用の制服が用意されていたのだ。なかなか高身長なため、このサイズの女子の制服は集めるのは大変だっただろうに……部長はいとも簡単にそれをこなす。

もしかすると、部長は只者ではないのかもしれない……。

「……わかりました。百歩譲って、女装が似合うことは認めましょう。もともと、ちょっと中性的な顔で線も細いから……でも、声よ……！！ どうやってその声出してるのよっ！！？ それに骨格！ 骨格がおかしいし、筋肉もなんか減ってるし、あんたそれはおかしいでしょ！？」

「男性でも女性の声はトレーニングすれば出せますよ、先輩？ 骨格と筋肉は内部コードインサイドの応用です。潜入捜査の訓練を受けている者なら、肉体の変化はある程度できるべきですが、私は少々……得意と言ったところでしょうか？ まあさすがに身長までは無理ですけど」

「そ、そうなの……？」

「はい。私も血の滲むようなトレーニングを重ねて、できるようになりましたので」

「まあそれはいいけど……どうして、女性の声を出す必要があるのよ」

「潜入調査では、性別を変えたほうがいい場合もありますので」

「……うん、わかった。あんたのことは深くは聞かないことにしておくわ……」

ということで俺は完全に女子生徒の格好をしていて、女性の声を出して対応している。

栗色をした綺麗な茶髪のロングのウィッグをかぶり、さらには化粧も一通りこなした。ただし、あまり濃いと学生には見えないので最低限に。あとは胸に詰め物を入れて、完成。

師匠に女装技術を叩き込まれていたのだが、ここで役に立つとは。

やはり師匠は偉大だと俺は改めて思うのだった。

「レイちゃん、可愛い〜」

「うんうん。ずっとその格好でいなよ！」

「男の子の時はかっこいいけど、女の子はすごい可愛いね〜」

「ほら、お菓子食べる？ 紅茶もどうぞ？」
「みなさん。ありがとうございます」

なぜか俺の女装は大好評で、このように先輩方には大受けだった。

これは確かな手応えがある。

どうやら、俺の技術も劣ってはいないようだな。

そう再確認すると、スッと椅子から立ち上がる。

「先輩方、私は少し用事がありますので……」

「そうですか。レイさん、またいらしてくださいね」

「はい。またお花の話をしにきますね。では、先輩方……失礼します」

恭しく礼をすると、俺は部室から出ていく。

「レイってば……まじで可愛いわね……」

最後にセラ先輩がぼそりと呟く声が聞こえ、俺は反射的にガッツポーズを取るのだった。

先ほどはアーノルド魔術学院の制服だったので、俺は今度はディ
オム魔術学院の制服へと着替えるために自室に戻ってきていた。す
ると、ちょうどエヴィも起きたのかあくびをしながら、室内をうろ
ついていた。

「おー、レイか。いつもランニングとはすげえなあ……ん？ いや、
誰だ？」

「私……じゃない。ごほんっ！ 俺だ」

声を調整して、すぐにいつもの男の声に戻る。

「……は？ お前、レイなのか？」

「いかにも。レイ〃ホワイトは俺だ」

「で、でもよ……女じゃん!!」

「ちよつとした事情でな。今からミッションに向かうために女装を
している」

「いや待て……待ってくれ……頭の整理が追いつかない……」

「大丈夫だ。あるがままを受け入れろ」

そんな風に話しながら、俺はサッツとディオム魔術学院の制服へ
と着替える。そして姿見で改めて自分の容貌を確認する。

胸まで伸びる茶色の髪に、透き通るような白い肌。またその唇は
血色がよく見える程度で、決して濃いものではない。まつ毛も綺麗
に上を向いており（ビューラーで上げた）、シワひとつ、シミひと
つない完璧な女子生徒が生まれていた。

「よし、完璧だな。では行ってくる。帰りは夕方から夜になる」
「あ……ああ」

釈然としない様子だったが、まあ仕方ない。みんな初めは驚くものだったからな。

そうして俺はこの学院を出ていく前に……アメリアの様子だけは確認しておきたかった。別に信じていないわけではないが、今日も今日とて訓練に励んでいるのだろうか……。

そして俺は、いつもの演習場に向かうのだった。

「む……やっているな。しかしあれは……エリサとクラリスだろうか？」

アメリアはどうやら俺が課した訓練を早朝からこなしているようだった。でも今回は隣にエリサとクラリスもあり、どうやら訓練を手伝っているようだった。生み出した氷を自分で溶かす単純作業だが、実際に準備や後の処理は面倒なので……それをエリサとクラリスでやっている……ということか。

素晴らしい友情だな……と思いつつ、いつものように俺は教官の気分でアメリアに話しかける。

「アメリカ訓練兵ツ！！　よくやっているようだなツ！！」

「レンジャーッ！！　今日も訓練に励んでおりますッ！！　うん…

…？　え……？」

「え、今の声って……」

「レイくんだけど……え？　え？」

全員がポカーンとしている中で、俺はそのまま会話を続ける。

「エリサとクラリスも手伝っているのか。素晴らしいな。ただアメリカ訓練兵よ。集中力は切らすなよ？　友人がいるからと言って、弛緩してはならない」

「れ、れんじゃー？」

きょんとした様子で俺を見つめてくるので、すぐにネタバラシをする。

「ああ……すまない。今からミッションに行くのでな。その際に女装の方がいいと判断したので、こんな格好をしている」

「…ええええええええええ！！…？」

全員の声が、重なるようにしてこの場に響いた。三人ともに驚愕しているようで、エリサに至っては口を抑えている。しかし、そこまで驚くことなのだろうか。一応、原型は残っていると思うのだが……。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！！　あんた……まじでレイなの？」

「ふ……どうだ、クラリス。俺の女装もイケているもんだろう?」
「いやイケてるとかレベルじゃないけど!? そこらへんの女子よりも可愛いけど……っ!?!」

「う……うん、私も……ちょっと驚き……いや、ちょっと怖いかも……っ」

「……ええ。二人のいうとおりね。私もにわかには信じがたいわ……あのレイがここまで変わるなんて……」

「ふ。それなら良かったものだ。バレてしまっただけは意味がないからな」

今回のミッション、実は普通に男子生徒として潜ることも考えたが……「アリアーヌ」オルグレンに近づくには、異性よりも同性の方がいいだろうと判断したのだ。どうやら、彼女は周りに取り巻きのようなものを作っているらしく、男子生徒はあまり寄せ付けないのだとか。

だからこそその女装。

唯一、身長が高いのはどうしようもないので、そこはもう活かすようにしてみた。スカートは少し短めでスラッとした脚が目立つように、さらにはソックスも丈の短いものを選択している。こうすれば、この脚の長さが一番目立つ。

これはどこからどう見ても、女性にしか見えないことだろう。

もちろん、ムダ毛の処理は完璧だ。今日は起きてからすぐにシャワーを浴びて、全て丁寧に剃ったからな。

「あ！ でも、あんた声はどうするのよ？」

「クラリスさん。これでいかがでしょうか？」

「こわっ！！ え！？ どうやって出してるの！！？」

「男性が女性の声を出す技術はすでに確立されていますよ。喉仏を押さえ込んで、こうやるんですが……感覚的な問題なので、一概には言いにくいですね。練習あるのみ、ですよ？」

首をちよつと傾げて、敢えて女性の仕草を出してみる。向こうに行ってしまうば、男の声に仕草は封印しないといけないからな。今のうちから染み込ませておこう。

「う……うわぁ……なんか私よりも声が可愛いんだけどっ！　しかも偽物だけど、胸大きいのも、なんかム力つくっ！」

「……私も、ちよつと自信なくす……かも……」

「レイ、あなたは一体どこにいくつもりなの……？」

三者三様の反応だが、いい手応えだ。アメリアは完全に異形のものを見るような目つきをしているが……まあ、上々の反応だ。

さて。ではそろそろ向かうか。

「アメリア。期待していてくれ。必ず、アリアーヌ＝オルグレンの情報を入手してくる！！　では、みんなさらばだ！！」

ということで、俺はこの女装姿のまま意気揚々とディオム魔術学院へと向かうのだった。

我が女装に一片の悔いなし！

フハハ！

第38話 乙女である俺の周囲

「ふふ……」

完璧だ。今の俺は完全に女子だった。

それは街を歩いていく中で、視線を集めているのを感じているからこそその自負である。

「ねえあれって……」

「制服着てるけど……モデルかな？」

「うおっ……すげえ、美人だな」

「ああ……あれはやべエな……」

女性も男性も、俺の姿を見るたびにそんな声を上げている。

フッフ……フハハ！

大変に、気分がいい。

やはり俺の女装技術は衰えてはいなかった。師匠と……それに、アビーさんとキャロルにも色々と仕込まれたからな……それがこうして学生になっても活かせる日が来るとは。俺はこの状況に少しだけ感動していた。

ちなみに今はディオム魔術学院に向かっている。アーノルド魔術学院は王国の北区の中央にある。北区の西にあるのがディオム魔術学院で、逆の東にあるのはメルクロス魔術学院だ。

だが同じ北区といっても、それなりに距離はあるので俺はディオム魔術学院に通じている馬車に乗ろうと今は歩みを進めている最中だが……。

「げ……」

思わずの素の声が出てしまう。

そう。俺の視線の先にいたのがキャロルだったからだ。

一応有名人だからか、サングラスをしているも完全にあいつだと理解できた。それこそ、その認識には一秒も必要なかった。

いつものように胸元が大きく開いた服装に、スカートも妙に短い。今日はロングブーツを履いているようで、一見すればあいつこそ本当のモデルに見える。

そして桃色の髪もいつものように、緩やかに縦に巻かれていてオイルでもつけているのか、微かに艶やかに見えた。

まあ……実際にその仕事もしているので、あの容姿にも納得なのだが……。

「……」

さつさと逃げよう。流石にあいつも、過去の俺の女装ならまだしも、今の俺には気がつかないだろう。そうしてベンチに座っているキャロルの前を通り過ぎようとする。

なんの意識もせずに。まるであいつが風景に溶け込んでいるような、そんな感覚。

実際は、これは手に汗握る攻防である……。

いや、別に戦ってはいないのだが……どうにも、こいつの周囲にいることに俺の遺伝子が拒否反応を示しているように思えてならない。

「……ふう」

一息つく。

無事に突破した……かに思えたが、俺は後ろから声をかけられる。

「ん？ ちょっとその美人さん、お話いいですか？ キャピ」

いつものように甲高い猫撫で声でそういつて来るも、俺はそれを断固として拒否する。

「申し訳ありません……私、急いでいるものでして……」

「ん？ あ！ やっぱり、その見た目と声！！ レイちゃんですよ！ いや、リリーちゃんかな？」

「ッ……！」

刹那、俺は有無を言わさない勢いで脱兎のごとく逃げ出した。

流石のキャロル。今の俺の女装でも難なく見破るのか　ッ！！

だがこのケースを想定していない俺ではない。バレた時は、本気で逃げる。それに限る……が、今の俺はいつもの自分ではないし、この女性の体つきとそれに靴も新品で履き慣れていない。

その一方でキャロルはいつも通りだし、こいつは研究者で引き籠りがちに思えるのだが、実際は運動神経抜群。というよりも軍の教練も一通り終えているやつだ。

そんな二人が競い合えば……もちろん、負けるのは俺だった。

「っかまえたっ！！ くふふ、レイちゃんってば……何してるの？ お姉さんに、話してみて？　ね？」

「……」

あっけなく確保された俺は、ここで拒否をしても一向に解放されないのは知っていた。だからもう、素直に話すことにした。とりあえず早く解放してくれと、祈りながら……。

「へえ〜！ 面白いねえ！ 潜入調査かあ〜！ 実際にこの時期はこうしたことが起こるし、暗黙の了解になってるけど……まさかの女装かあ〜。レイちゃんレベルだと、絶対に気がつかれないねっ！」

「そうですね。だから早く解放してくれませんか？ 急いでいますので」

「え〜。もっと一緒にいたい〜」

「駄々を捏ねないください。あなたもお仕事があるのでしょう？」

「うん……この後、取材があるから……」

「でしよう？ ではここで別れましょう」

「その前に……っ!!」

キャロルがポーチから取り出したのは、化粧道具だった。

「ちょっと崩れてるし、デイトールも少し甘いから……整えるね」

「……助かります」

流石の本職なのか、キャロルの手によって俺の化粧はさらに磨きがかかった。一見すれば差異は理解できないかもしれないが、その些細な違いが大きな変化をもたらすこともある。

結果として、こいつに捕まったのは良かったのかもしれない。今日は運がいいことに、すぐ解放されるようだしな。

「それじゃあ、レイちゃん。頑張つてね」 応援してるよ
キャピ」

「はい、ありがとうございます。それでは行ってきますね」

すでに完全に口調が女性と化している俺はキャロルにお礼を伝えて、今度こそディオム魔術学院に向かうのだった。

馬車に揺られて数十分。

やってきたのはディオム魔術学院。大きさ、というよりもアーノルド魔術学院とは基本的な構造が一緒なので、そこまで差異はないものの……俺は感じ取っていた。

この学院は明らかに生徒の質が違う。

この場合の質は、纏っている雰囲気という意味だ。それこそ、噂通り実戦に重きを置いているのがよく分かる。外から見ても、生徒の鍛え方はよく理解できる。男子生徒はその筋肉量が制服越しでも判りやすいが……女子生徒も侮ることはできない。

スラッと伸びる脚に、長い腕。背筋もしっかりと伸びており、歩き方も美しい。

そのような特徴から、やはりこの学院の生徒は侮れない……と思

いながら俺は、潜入を試みる。

「よし……行くか」

もちろん校門から堂々と入るわけにもいかない。この時期は警戒しているだろうし、そんなリスクの高いことはしない。

俺は近くの塀をスツと登ると、無事に敷地内には潜入したが……やはり魔術的なトラップが置かれているのは間違いなかった。パツと見るに、遅延魔術デレイの類だが……そんなものに引つかかる俺ではない。巧妙に隠されているも、第一質料が微かに漏れ出ている。プリママテリア

そしてその遅延魔術デレイを避けながら進ん……だが、いきなり生徒に遭遇してしまった。

「ん？ 今動いてたような……ま、気のせいかな」
「……！」

じつと動きを止める。

しばらくすると、その生徒はこの場から去って行く。

何故俺が素通りされたのか……それは俺が、ダンボールの中にもいるからだ。師匠曰く、ダンボールは持ち運びに優れ、隠れるのにも適している。もちろん、ただダンボールが変な場所にあつてはおか

しいが、今回は茂みの中にあっても素通りされた。

普通人間は、おかしいものがあっても触ろうとするものは少ない。

ん？ ああ……ダンボールか。

程度の認識で終わりだ。そうして俺は無事に、遅延魔術^{ディレイ}が設置された茂みの中を抜けると無事に校舎近くに出てくるのだった。

「ふう……ひとまずはクリアか」

ダンボールから出ると、それを器用にたたんでから茂みに隠しておく。そうして髪を軽く靡かせると、ディオム魔術学院の調査を開始する。

目標はアリアーヌ^{II}オルグレン。

その容姿は特徴的で、白金^{プラチナ}の髪色をしているのだが、それをこれでもかと縦に巻いているらしい。いわゆる縦ロールというやつだ。これはキャロールが昔やっていた髪型なので、容姿で発見出来るだろう……。

そう思って、校舎に入ろうとしたが……俺は目の前にいた小さな女の子に目がいった。

「うわああああんっ！ おねええええちゃん、どこおおおおっ！ うあああああんっ！」

泣いているのは子どもだった。まだ幼い……それこそ、5歳か6歳くらいだろうか。別に休日の学院に家族が来ることはおかしくはないのだが……あの女の子は一人でやってきたのだろうか。

ブラチナ

白金の髪が肩まで伸びており、幼いからかその肌はとても綺麗なものであった。鼻筋も綺麗に通っているし、目もぱっちりしている。きっと将来は、美人になるだろう……なのだが、今は泣いてその顔が台無しだ。

任務を優先するならば、ここは無視だ。周りにいるわずかな生徒たちも静観を決め込んでいる。

本当ならばここで声をかけるのは得策ではない。俺の今回の目的はアリアヌール・オルグレンの情報を入手すること。だからこそ、あまり目立つ行動はしたくないが……泣いている子どもをそのままにしておくのは……俺の主義に反する。

これでバレることに繋がっても、それもまた運命だろう。

ということで、特に悩むことなく声をかけることにした。

「お嬢さん、大丈夫？」

躊躇なく地面に膝をつけて、目線を合わせる。そうして頭を撫でて落ち着かせながら、とりあえず話を聞く体制に入る。

「うつ……ぐすつ……お姉ちゃんが……お姉ちゃんが、いなくてえ……」

「なるほど。じゃあ、一緒に探しましょうか？」

「……えっ！ 本当……っ!？」

「ええ。構いませんよ」

にこりと微笑みかける。ついでに涙と鼻水で顔がひどいことになっていたので、ティッシュでそれを拭ってあげる。

「私は、リリイー〓ホワイトと言います。あなたのお名前は？」

「わたしは、ティアナ〓オルグレンっていうのっ!！」

「……そう。じゃあ一緒に行こうか、ティアナちゃん」

「うんっ！ ありがとう！ リリイーお姉ちゃん!！」

俺は彼女の小さな手を握って、そのまま校舎内へと侵入していくが……気がついていないわけではない。

この少女は間違いなく、アリアーヌ〓オルグレンの妹だ。念のため、家族構成も調べていたが、確か年の離れた妹がティアナという名前だった。

果たして俺はスムーズにアリアーヌ〓オルグレンに接触できるのか……。

第39話 お姉様がみてる

なんの因果か、アリアーヌ^{II}オルグレンの妹であるティアナ^{II}オルグレンと手を繋いで校内を歩いていた。

現在は休日なのであまり人はいないようだが、こちらの学院も魔^マギクス・シュバリエ^{ギクス・シュバリエ}術剣士競技大会の予選は行われている。

おそらく午後になればもっと人が増えると思うが……。

その前にはなんとかアリアーヌ^{II}オルグレンとは接触しておきたい。そして出来れば、午後にある試合も見ておきたいところだ。

しかし見れないとしても、実際に本人を見るだけでも得られる情報はかなり大きい。得意な魔術、戦闘スタイルはすでに噂で広まっているからこそ、もっとプライベートな情報が欲しいところだ。

「ねえ、リリーお姉ちゃんって背が高いね!」

「そうですね。女性にしては高い方だと思います」

「あしもスラーツとして、すごく綺麗!!」

「ふふ。ありがとうございます。ティアナちゃんも可愛いですよ?」

「ほんと!?!」

「ええ。将来はきつとすごい美人さんになります」

「わーい!」

背が高いのはもともと男性だからだ……と言えるはずもなく、俺はティアナ嬢と手を繋いで校内を歩いて行く。時々すれ違う生徒にギョツとされるも、そのままスルーされて行くのは逆にありがたい。

だがやはり……自分の容姿と少女が歩いているのは、些が目立つだろう。

早いところ、アリアーヌ嬢を見つけないところだが……。

「お嬢さん、どちらへ？」

二人で仲良く話しながら歩いていると、男子の集団に遭遇する。そして先頭にやってきて話しかけてきたのはいかにも美形……という感じの生徒だった。その立ち振る舞いからしても、貴族なのは間違いないだろう。

「少し人を探してまして」

「ほう。なるほど。美しいお二人のために、我々が力になりましょうか？」

「いえ。ご迷惑をかけるわけには……」

「そんなことはございません。あなたのような、この学院に咲く一輪の可憐な花のためならば、我々は全力を尽くしましょう」

「……そうですか。ありがとうございます」

にこりと微笑むと、その場にいる男子生徒の顔が一気に真っ赤に染まっていく。

大変に気分がいい。

なんというか、開けてはいけない扉を開きつつあるような感じだが……自分の女装の技能が完璧だという自負がさらに裏付けられていく。

そうしてさらに会話を続けようとした矢先……次に現れたのは女子生徒の集団だった。

「ちょっと男子！ お姉さまが困っているでしょ！」

「む……お姉様……だと？」

「あんたたちは引っ込んでいなさい！」

女子生徒の集団は男子たちを蹴散らすようにして、こちらに近づいてくる。そして俺の手をそっと取ると、柔和な笑みでこう告げる。

「お姉様、お名前は？」

「リリー＝ホワイトと申します」

「リリーーお姉様……」

その瞳は完全に俺の虜になっていた。しかし異性だけでなく、同性も魅了してしまうとは……ふ、俺の美貌には困ったものだ。

と、内心でやれやれと思っていると俺はふとあることに気がつく。

「あなた、タイが曲がっていますよ」

そう言いながら、少しだけずれているそれを直すと……さらにその女子生徒はその場に倒れこむようにして感謝を示すのだった。

「リリィーお姉様……なんて尊いの……！」

「素晴らしいお方ですわ！」

「それにこの美貌……！ ああ、あの美しい脚で踏まれてしまいたい……」

うん……まあ、少しやりすぎたか。

今までの振る舞いを反省していると、くいくいつとティアナ嬢が袖を引っ張ってくる。

「リリィーお姉ちゃん、モテモテだね！」

「そうですね……罪な女、ですね」

「つまなおんななの……？」

「はい。しかしティアナちゃんのお姉さんを探さないといけませんね」

ここで時間を割く暇はないということで、男性陣にも女性陣にも丁寧に挨拶をしてその場からさっていく。

「なんと可憐な……」

「ああん！ お姉様あ……っ……！」

その声は聞こえなかったことにした。

まあ……うん……少し俺も張り切りすぎたようだった。

反省しよう……。

「あ！ お姉ちゃんだ！！」

ティアナ嬢はそういうと、そのまま手を解いてタタタ、と走って行く。

視線の先にいたのは、テラスでサングラスをかけながらお茶をしている女性だった。

それはサングラスで全体が見えないまでも、彼女こそがアリアーヌⅡオルグレンなのだと理解できた。

ブラチナ
白金の髪をこれでもかというほどに縦に巻いており、その特徴的な姿はかなり目を引く。それにパツと見た限り、プロポーションもいいのか出るところは出ていて、締まっているべきところは締まっている。

あの体型を生み出すには、それ相応の努力が必要だとわかっているからこそ、俺は感嘆の意を示す。

そうして校舎の外へと走っていく、ティアナ嬢の後に続いて俺もまた校舎外へ出ていき……そのテラスに腰掛けているアリアーヌⅡオルグレンのそばへと近寄って行く。

「まあ！ どうしたんですの！？ ティアナがここにいるなんて！」
「えへへ、来ちゃった」
「お父様とお母様は知っているのですか？」
「ひみつで来たよ！」
「はあ……あなたは本当に活発な子なのですねえ」
「お姉ちゃんのしあい、見たいから！ おうえんに来たの！ あ！
それとね、あのお姉さんが助けてくれたの！」
「お姉さん……？」

アリアーヌ嬢の腰でピョンピョンと飛び跳ねて騒いでいるティアナ嬢が、そう言って俺を指差す。そしてアリアーヌ嬢の視線もまた、俺の方へと向く。

ファーストインプレッションは重要だ。

俺はぺこりと頭を下げながら、彼女たちのそばへと近寄り自己紹介する。

「初めまして、リリィ＝ホワイトと申します」
「あなたが連れて来てくださったの？」
「はい。校門の前でティアナちゃんが泣いていましたので。一緒にここまで来ました」
「まあ！ これはどうもご丁寧に……うちの妹がお世話になりましたわ」
「いえいえ。全然大丈夫ですよ。ティアナちゃんもすごくいい子だったので」

アリアー又嬢は迷わず俺に対して頭を下げて来た。

なるほど……別にそこまで高飛車なお嬢様……というわけでもないのかと分析していると、彼女はあることを提案してくる。

「お礼もしたいですし、一緒にお茶でもいかが？」

「いいのですか」

「もちろんですよ。ティアナをここまで連れて来てくれたお礼に、私をご馳走しますわ」

「それではお言葉に甘えて……」

そして同じ席に着くと、アリアー又嬢はわざわざ飲み物をすぐ近くの売店から買って来てくれた。いつもは取り巻きの人間がいて聞いていたが……今日は彼女は一人らしい。

だがこれはまずいな……。

何故ならばこうして直接話してしまえば、女装がバレしてしまう危険性上がるからだ。元々は取り巻きの中に紛れて、遠くから情報収集でもしようかと思っていたのだが……。

でもあの時にティアナ嬢を助けるという選択をした時点で、これは覚悟していた。それにここで何処かへ行くのも、不自然。

まあ、ここでバレてしまっても最悪つまみ出されるだけだろう。

そう思っていると、彼女が戻ってくる。

「紅茶でよろしかった？」

「はい。ありがとうございます」

そうして紅茶をもらうと、俺は軽く口をつけるも……アリアーヌ嬢の視線が少しだけ鋭くなるのを感じた。

「ティアナ。少しだけそちらで遊んでいてちょうだい。魔術の練習をしてもいいですよ」

「本当に！？」

「ええ。でもお気をつけてね」

そういうとタタタと、少しだけ離れた場所にティアナ嬢は走っていつてしまう。

「さて。単刀直入に聞きましょうか。あなた、うちの生徒ではありませんわね？」

ズバリの中。

ただのお嬢様ではなく、それなりに頭もキレるようだと、その情報インプットする。

「……いえ、実は病弱であまり学院に来ていなくて……」

「いいえ。嘘ですわ。あなたの歩き方、それに立ち振る舞い方、とても病弱とは思えません。それにあなたほどの美貌を持つ女性がこの学院にいるのでしたら、私が知らないはずがありませんわ」

「……聡いんですね、アリアーヌ様は」

「ええ。全てを兼ね備えているのが、このわたくしですから。あま

りアリアーヌ^{ブラチナ}「オルグレンを舐めないでもらいたいものですわ」

さらつと白金の髪を後ろに流すその様は、本当に自信に溢れているのだと思った。アメリカとは対極的だ。

アメリカにはまだ迷いがある。それはここ数週間、トレーニングを重ねている中でも見て取れた。

だがこのアリアーヌ^{ブラチナ}「オルグレンは違う。全ての言動が自信に溢れている。それはきつと慢心の類ではない。彼女は純然たる事実として、それを示しているのだ。三大貴族のオルグレン家の長女としての在り方を理解している。

いい意味で貴族らしい彼女をこれ以上騙すのも……無理かと悟り、俺は素直に打ち明けることにした。もちろんこのケースも想定していたので、あまり躊躇^{ためら}いはなかった。

別にこの手の潜行行為は、伝統的に行われているものらしいので……彼女も理解があるのだろう。

普通に追い出されて終了だ。

ティアナ嬢に出会わなければ、もっとスムーズにいったが……これも運命だろう。あそこで助けないという選択肢はなかったのだから。

「それで、どこの学院の人ですか？ 最近はこの手の輩が多いですが……わたくしは逃げも隠れもしません。だからあなたも、正直に

なるべきだと思いますわよ」

「ああ。そうさせてもらおう。申し訳なかった、騙すような真似をして。アリアーヌ^{II}オルグレン。あなたは本当に気高い人だ。素直に尊敬する」

女性の声をやめて、いつも通りのレイ^{II}ホワイトとして振る舞う。だが俺が男性の声を出した瞬間にアリアーヌ嬢はポカーンとした表情で、俺のことを見つめてくる。

「……は？」

「どうした？」

「い、いやその……こ、声が……」

「ん？ ああ。すまない。先に言うのを忘れていた。アーノルド魔術学院に通っている、レイ^{II}ホワイトだ。性自認は男性なので、そこはよろしく頼む」

「だ、男性……？ ちょっと待ってくださいまし……あなた、確かに身長はかなり高いようでしたが……骨格や筋肉のつき方は女性そのものでは……？」

「これは内部コードの応用だ。まああまり長くは持たないが」

「こ……声！ 声はどうしてますの！？」

「これは別に魔術ではない。現代では男性が女性の声を出す技術はすでに確立されている。この喉仏のコントロールがコツなのだが……」

……

「は……はあ……いえ、その……本当に男性、なんですか？」

「いかにも。女装しているのは身分を隠すためだったが……ティアナ嬢のためにも、致し方なかったな。本当はここまで真正面から接触する気は無かった」

「そ、それは感謝しますけど……あ！」

そして、急に声をあげるアリアー又嬢。

それはまるで、何かを思い出したかのようだった。

「……レイ＝ホワイト。名前は知っていますわ。確か、学院初の^{オーディナリー}一般人だけでも戦闘技能は高い……と噂で聞きましたわ」

「おお。まさかこの学院にまでそんな噂が。これは少し照れるな……」

「ちよつとその容姿とその声にギャップが大きすぎて……頭がおかしくなりそうですわ……」

「ではこれでいかがでしょう？」

「……すぐに女性の声も出せるのですね。あなた何者なんですの？」

「一般人であり、そして魔術^{マギクス・シュバリエ}剣士競技大会の運営委員でもあります」
「なるほど……それ以上でも、それ以下でもない」と

「はい」

「少し面食らいましたが……あなた、気に入りましたわ。今までの他の学院のスパイはこそそし過ぎでしたが、妹のためにここまでオープンにしてくれたあなたに感謝の意を込めて……この後の試合、観戦してもよろしくてよ？ ああ。もちろん、ティアナとは一緒にいてくださいまし」

「それはこちらとしても嬉しいご提案です。でもいいのですか？ 試合まで見せてしまっても」

「構いません。そもそも、リサーチされた程度で負けるのならそれまでの実力ですわ。王者の風格というものを、見せてあげましょう」
「それは楽しみですね」

その雰囲気はまさに王者の風格ともいうべきなのか。

微かにアリアー又嬢の身体から第一^{プリママテリア}質料が漏れ出しているのを、

俺は感じ取っていた。

この性格に、噂で集めた情報を分析しても……間違いなく、彼女は優勝候補筆頭なのだろう。アメリカが超えるべき相手は俺の予想以上に、手強いのだと理解した。

俺はアリアーヌⅡオルグレンの実力をこの目で実際に見るようになる。

まあそれと……改めて思うと、あまりにも久しぶりの女装で少々やりすぎた感はないが……結果オーライということにしておく。

第40話 高貴な彼女

あれからアリアー又嬢は、試合のために演習場へと単身向かって行った。その一方で俺は観戦してもいいと言われたが、ティアナ嬢のことを頼むとも言われたので、もちろん幼い彼女のことは俺が面倒を見るつもりだ。

「お姉ちゃんはねー。つよいんだよー!!」

「そうなのですか？」

「うんっ！ 三大貴族の強さをおしえてさしあげますわっ！ ってよく言ってるよっ！」

「ふふ。アリアー又様らしいですね」

「あのね。だからね。私もお姉ちゃんみたいに、強くて、カッコよくて、優しい人になりたいのっ！」

「ええ。きつとなれます。ティアナちゃんなら、きつと」

「ほんと!?」

「はい。私、これでも見る目はあるんですよ？」

「へえ〜！ リリィーお姉ちゃんもすごいんだね〜」

現在は二人で手を繋いで移動中で、そんな会話をしていた。妹のティアナ嬢の可愛らしさは既に語り尽くしたが、アリアー又嬢もまた気品に溢れた貴族らしい人だった。

でも彼女は貴族の体質をいい意味で表現しているようにも思えた。

俺が一般人と明かしたときも、見下すような態度は見られなかつ

オーディナリー

たし、普通に対等な存在として話をしていた。

貴族としての誇りはある。だが、それは決して驕りではない。

自分がどうあるべきか、というのをこの年齢で体現しているのは流石の貴族なのか。アメリアが警戒するのもよくわかった。

そんな二人は対極的だった。

アリアーヌ嬢が太陽ならば、アメリアは月と喩えら^{たと}れるだろうか。

そして、アメリアはそんな自分に葛藤を抱いて前に進んでいる。その一方でアリアーヌ嬢は自信を持って更に前へ、前へと進み続けている印象だ。

でも俺はそんなアメリアもまた、成長できる余地があると思って。だからこそ、この試合はこの目に焼き付ける必要があるだろう。

「あ！ お姉ちゃんだ！」

「出てきましたね」

演習場にたどり着くと、試合をするであろう二人はすでに対峙するところだった。

アリアーヌ嬢の相手は男子生徒だが、いかにもパワーがありそうな感じである。身長は百九十センチを優に超えており、その筋肉も服の上から容易に理解できる。同じ筋肉を愛する者として相通づる

ものがありそうな、あのバルクはなかなか身につくものではない…。

そんな相手と比較すると、アリアーヌ嬢は華奢に見えてしまう。

いや決して鍛えていないわけではない。彼女もまた、しっかりと鍛錬を行なっているのはわかるが……やはり、男性と女性では明確な差が出てしまう。

この差を埋めるには、魔術的な要素が大きくなるのは自明だ。

さて……この戦いどうなるのか……。

「あつー！ 始まったっ！！ お姉ちゃんっ！ 頑張れーっ！！」
「……」

隣でピョンピョン跳ねて声援を送るティアナ嬢だが、俺はその試合を真剣な目つきで見つめる。

「うおおおおおッー！！」

先手必勝。男子生徒の方が、体格からは想像の及び難い勢いを以て一気に距離を詰めてアリアーヌ嬢に斬りかかる。やはりあの見た目からして、近接戦闘が得意な剣技型か。

魔術剣士は剣技型、バランス型、魔術型の三種類に分類されるが、

男性の方が剣技型になることが多い。それはやはり肉体のスペックを十分に活かせる上に、内部コードインサイドを主に使うので魔術的な負担も少ないからだ。

もちろん、どの種類が一番良いということはない。

それは相手によっても変わってくる上に、本人の性格的な面も絡んでくるためだ。

「さあ、私の前で踊りなさい？」

微かに呟かれた声が耳に入ってくると、アリアーヌ嬢はその剣戟を真正面から受け止める。受け流すのではなく、受け止めたのだ。それは相手と同等の力が、それ以上のものを持っていることを示している。

やはり、内部コードインサイドも実戦レベルで用いられるのか。しかしこの技量だと、アリアーヌ嬢は剣技型なのか？ 女性にしては珍しいが……。

そして二人の剣戟は互いにさらに激しさを増していく。もはや魔術が介入する要素などないほどに、その速度も徐々に疾さはやが増していく。

「ふふ……」

激しい応酬の中に在ってアリアー又嬢が、ニヤリと微笑を浮かべたのが俺には見えた。そして次の瞬間、彼の足には無数の氷が絡みつくようにして出現。咄嗟のことに相手は対処できず、そのままバランスを崩して倒れ込んでしまう。

もちろんそれを逃す彼女ではない。すぐに距離を詰めると、胸に固定されている薔薇の飾りを縦に切り裂いた。

『おおおおおおおつ！！』

勝負が決まった瞬間、周りから感嘆に満ちた歓声上がる。彼女は名実ともに有名なようで、周りへ手を振りながら余韻の残るその場から去っていく。旋靡たなびくその白金の髪はとても美しいものに見えた。そして自分の振る舞い方をよくわかっている、そんな感じの印象を改めて抱く。

「すごーいつ！！ お姉ちゃん、あんなに大きい人に勝ったよつ！！」

「ええ。すごいですね。ティアナちゃんのお姉さんは、とてもすごい人だと思います」

「へへーん！ そうだよつ！ お姉ちゃんはすごいんだから！」

と、その小さな胸を張るティアナ嬢。

俺が口にしたのは、別にリップサービスでもない。ただ純粹に、彼女の技量は学生の中でもトップレベルだと判断したのだ。あの剣

戦の中に在ってあれだけの魔術を使用できるのは素直に脱帽だ。一見すれば、ただの高速魔術クイックにも見えるが……あれはそうではないようだしな。

あの戦いの中で、アリアーヌ嬢は魔術を用いる余裕があった。相手はそんな余裕もなく、ケアすることも頭になかったのだろう。

これこそが、アリアーヌ＝オルグレン。

きっとその真価はまだ隠されているだろう、その片鱗だけでも垣間見ることができたが……今のアメリカが勝てる未来は、俺には思い描くことはできなかった。

「先程はありがとうございました。ティアナも無事に帰ることが出来たようで」

「いや別に構わない。俺としても、ティアナ嬢が満足して帰ったのなら嬉しい限りだ」

現在いるのは、アリアーヌ嬢の自室。室内はうちの寮とあまり変化はないが、そこは三大貴族だからなのか一人部屋であるし、室内の間取りもかなり広い。装飾はあまり派手ではないものの、綺麗に保つてあるようだっただ。

あの後には、実家に連絡を取ったらしくティアナ嬢には迎えの人が来て、そのままその人と帰宅していった。

「バイバーイ！ またねー！」

と、ブンブンと手を振ってニコニコと笑いながら去っていった。

ちなみに俺の口調も部屋で二人きりということで男性のものに戻している。先ほどは女性にしてくれと頼まれたが、もう男性でもなんでも良いとのことだった。

半ば呆れ気味に彼女は言っていたが。

「ティアナ嬢はとても良い子だな。きっと将来は君のような美人で人格者に育つのだろう」

「……」

「どうした？」

俺が思ったことを率直に口にする、その真っ白な肌は少しだけ朱色に染まっていた。顔も俯けており、俺の方を意図的に視ないようにしている。

む……これはまさか、何かしてしまっただろうか。

そう思っていると、彼女はすぐに口を開いた。

「べ、別になんでもありませんわっ！ あなた……いつも女性にそんなことを言っているんですの？ 慣れているようですけど……」

じーっと見つめてくるので、俺は再び素直に答える。

「当たり前だろう。女性とはにかく褒めると、教育されているからな」

「……そうですか。ま、わたくしの美貌は当然のもですわ」

「ああ。そうに違いはない」

「……調子狂いますわね」

そしてテーブルに置かれている紅茶に口を付けると、一息ついてアリアーヌは語り始めた。ちなみに、互いにファーストネームで呼び合うようになっている。

曰く、「あなたのことは気に入りました。特別ですよ？」とのことらしい。

「それで、レイはどう思いました？ わたくしの戦いを」

「……そうだな。相手の剣戟を真正面から受け止める技量。内部コ

インサイド

ードの扱いはかなりすごいな。だが特筆すべきは、あの発動した魔術。あの剣戟の中で魔術を使う余裕があるとは驚きだが……実際、

ディレイ

あれは遅延魔術だな。おそらく、剣戟が始まった瞬間には既に地面には魔術が発動状態で臥せられていたはずだ。後は獲物をおびき寄せるようにして、指定の位置に移動させて……終了、と言ったところだな。戦術が組み込まれた頭のキレる巧者の戦い方だ」

「お、驚きました……そこまで見えていたんですの？」

ディレイ

プリママテリア

「遅延魔術の場合は第一質料の流れに癖が出るからな」

「はあ……それはまたすごいすわね。というよりも、あなたは出

ないんですの、魔術剣士競技大会に」
マギクス・シュバリエ

「諸事情あつてな。今は運営委員として活動中だが、その傍らでアメリカの訓練にも付き合っている」

「アメリカ？ あのアメリカ「ローズ」？」

「ああ。アメリカとは友人だ」

「……そうでしたか。では、アメリカのためにこの学院に来て、私の調査に来たと」

「そうだ」

アリアーヌは少しだけ目を見開いて、驚いたような表情かおをしていた。

そんなに意外なのだろうか。

しかもそれは、俺が魔術を見抜いたことよりも、アメリカの友人と言った瞬間の出来事だった。むしろ魔術の時は軽く驚いたくらいだが、今回は本当に心から驚いている……そんな印象を抱いた。

幼い頃から顔見知りであるはずの二人。そんなアリアーヌがアメリカのことを知らないわけがない。だからこそ、その反応は少し気になるものだった。

アメリカの過去か。ここでアリアーヌから聞くこともできるかもしれない……だがそれはできない。アメリカがいつか自分の口から話すまで、俺は待つべきだと考えている。それが友人というものだと、俺は思っているのだから。

「……そうですか。アメリカにもあなたのような友人ができたので

すね」

感慨深そうに、それこそどこか虚空を見つめるような形でそう告げる。それはきつと過去を想起しているのだろう。

そしてアリアー又は少しだけ間を置いて、軽く微笑みながら話を続ける。

「でもまあ……わたくしは女装姿しか知りませんけど。ふふ」

「当日は男性として会うことになるだろう。運営委員としての活動もあるしな」

「はあ……あなたって本当に変わっていますのね」

「そうだろうか？」

「そうです。得てして、変人とは自分のことをそう思っていないものです。けど……あなたと友人のアメリアに少し嫉妬してしまいますわね。あなたはとても面白い人ですから」

にこりと微笑む。

俺はお世辞でもなく、純粹な彼女の気持ちだということはその美しい微笑みを見れば容易に理解できた。

「大丈夫だ。俺はもう、アリアーとも友人でいるつもりだ。違うか？」

「ふう……まあ、そういうところも含めて……レイは規格外ですわね。普通は三大貴族を前にしたら、萎縮するものですよ？」

「そうなのか……しかし俺は対等な友人として、付き合っていきたい所存だ」

「ふふ。なら、わたくしも友人ということでこれからよろしく願いますわ」

微笑みながら、テーブル越しに握手を求めてくる彼女。かすかに揺れる縦に巻かれた白金の髪から女性特有の甘い匂いが鼻腔に広がる。

もちろん俺もまた、それに応じる。

「アメリカは強くなる。そして新人戦で優勝するのは、彼女だ。残念ながら、アリアーヌには敗北の味を知ってもらうことになる」

「ふふふ……楽しみですわ。そしてその言葉、そっくりそのままご返却致しますわ」

互いに敵対しているも、そこには別に敵意はなかった。

ただ競い合うライバルとして、俺たちは見詰め合っていた。

アリアーヌ「オルグレン。彼女を超えるのは並大抵のことではないが、アメリカならきつと彼女を打ち破れるだろう。エインスワース式ブートキャンプは切っ掛けに過ぎない。アメリカに足りないのは自信。その揺るぎない自信を獲得できれば、彼女はもっと先へ行ける。」

そして、アメリカはもっと大きな空に羽ばたいてゆける。

俺はそう信じているのだから。

第41話 大天使エリサ

放課後。

今日はアメリカの訓練は久しぶりに休みということで、俺は環境調査部の方に顔を出していた。もともとアメリカの応援団を発足させたのは俺なのだから、色々忙しいとはいえしっかりと活動すべきだろう。

活動している場所は環境調査部ではあるものの、いつもの部室ではない。いつもの方は男子用であり、実は隣に女子用の部室があるのだ。

そこは女子部員がいないため使われていなかったが、今はアメリカ応援団の本部として機能している。

「エリサ。早いな」

「うん……ちょっと早めに来ちゃった」

中に入ると、エリサが一人で応援団用の法被はっぴを縫う作業をしていた。なんでも縫い物は得意らしく、率先してやってくれている。本当にエリサには頭が上がらない。

午後はそれぞれ受けるテストも違うので、ここに来る時間はまばらになると予想はしていたが……それを考慮しても、エリサは早い

と俺は思った。

「エリサ。テストはどうだった？」

「えと……よくできたと思うよ？」

「そうか。まあエリサのことだから、心配はしていないが……問題はクラリスだな。結局一夜漬けで臨んだようだ」

「うん……本当はダメだよーって言いたいけど、仕方ないよね」

「ま、これを機に反省してくれたら良いけどな」
「そうだね」

ニコリと微笑むエリサ。

初めてあつた時とは打って変わり、エリサはよく話すようになったし、よく笑うようになった。俺としても友人がこの学院での生活を楽しく送れているのなら嬉しい限りだ。

「よし……これでいいかな」

「できたのか？」

「うん。ほとんど完成しちゃった。部長さんと、それに部員の人たちとか……エヴィくんも、クラリスちゃんも手伝ってくれたから。」

それにレイくんも忙しいのに、頑張っ来てくれたし」

「いや、元々は俺が立ち上げた話だというのに……エリサにかなり任せることになって申し訳ない」

頭を下げる。

運営委員としての仕事、それにアメリカとの訓練と潜入調査。またテスト勉強の時間も必要で、俺はエリサが任せて欲しいと言った言葉に甘えてしまった。きっと大きな負担をかけてしまっただろう。その意味も込めて、謝罪するがエリサはブンブンと手を振ってそれを否定する。

「うっん！ 全然いいよ。私ね、ずっと一人ぼっちだったから……
魔術剣士競技大会も毎年一人で観戦してて……今年も一人だなあ、
マギクス・シュバリエ
って思ってたけどね。レイくん、それにみんなに出会えて……自分から色々やってみようと思ったの。それにアメリカちゃんのた
めなら、私は喜んでやるよ！ 私はレイくんみたいにアメリカちゃんを強くはできない……だから、こういう形でサポートできたらなあ……と思つて」
「……うっう、エリサあ……」
「ど、どうしたの……!?」

俺は目頭を押さえて、溢れ出る涙を拭う。

なんとということだ。エリサはそんな想いからこの活動に参加してくれていたのか。

申し訳ない……という気持ちよりも、俺は純粹に感動していた。

こんなにも心清らかな人間が、この世界にいたのかと。

エリサはまさに天使だった。いや、大天使だ。

俺の師匠は見た目は天使だが、中身はゴリラみたいな人だ。

その一方で、エリサは容姿も中身もその全てが天使そのものに見える。いや思うのではない。エリサは、天使そのものなのだ。

大天使エリサだ。お似合い過ぎる。

さあ、崇めようではないか。大天使エリサのその尊さを……！

俺はそんな風に彼女の尊さを噛み締めると、こう告げた。

「エリサ。謝罪ではなく、君には感謝を伝えよう。ありがとう。そして、アメリカへの最大限のサポートをしようではないか！！」
「……うんっ！」

もうエリサの顔には陰りなどあるはずがなかった。

「よし……全員集まったな」

改めて、この本部に全員が集合した。

メンバーは部長と、部員の方々。加えて、エヴィ、エリサ、クラリス、俺だ。

全員がそれぞれ真ん中に置かれている長机の前にある椅子に座ると、部長がそう告げた。

「今年はアメリカ応援団での活動もあるが……一年生たちには伝統のアレもやってもらう」

「アレ、とはなんでしょうか。部長」

俺はそう尋ねた。今日は重要な話があるということで、全員集合になったが……一体なんだろうか？

マギクス・シュバリエ
「魔術剣士競技大会では出店が並ぶのは知っているな？」

「はい。そうらしいですね」

「そこで俺たちは、毎年焼きトウモロコシを出している。俺の実家が農業にも手を出していてな……そこで、夏はトウモロコシを売ることになっている。もちろん、うちの実家の人間もやってくる。俺たちはそのサポートと言ったところだ」

「なるほど……そうでしたか」

焼きトウモロコシの販売か……。

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会は王国内でも最高峰の規模のイベント。それならば、出店があるのは当然のことだが……やはり売るのがなら最高の成果を出したい。

「やってくれるか？」

「もちろんです」

俺がそういうと、エヴィ、クラリス、エリサもそれに続く。

「おうよ！」

「ま、まあ……やってあげてもいいけどっ！」

「や……やります……！ あ、でも試合の時間とかは大丈夫ですか……？ 被ったりしたら、アメリカちゃんの応援が……」

「大丈夫だ。俺たちが働くのは主に試合の前だ。試合中は観戦してもいいと、家族には許可を取ってある。そこまで君たちを拘束するつもりはない。それに給金もしっかりと出す予定だ」

ということで、俺たちはアメリカ応援団としての活動もすることになったが……出店での販売か……。

ふむ……。

「部長」

「どうした、レイ」

「焼きトウモロコシですが、あのタレを塗って販売するのはどうですか？」

俺がそう告げると、周囲がざわつき始める。

「な……！？」

「そうか！ あのタレならば！」

「ああ！ きつと悪魔のトウモロコシになるッ！」

「レイ、やはり天才かッ！！」

そして部長もまた、フツと笑うのだった。

「それは俺も提案しようと思っていたところだ」
「それでは早速、試食でもしましょうか」

俺はそういうと、元の部屋に置いてあるエインズワース式秘伝のタレを持ってくる。そして全員が外に出ると、部長が持っているトウモロコシにそのタレを塗って、各自が魔術で炙って食べることになった。

俺は魔術がうまく使えないので、それはエリサにやってもらった。

「はい。レイくん……どうぞ」
「ありがとう、エリサ」

そしていい感じにタレが炙られたそのトウモロコシにかぶりつく
と……。

「……は!!!?」

な……なんだと……?

意識が飛んでいた……。そして気がつくと、俺の手の中にあつたトウモロコシは綺麗になくなっていた。残っているのは芯だけ。だが、口内には確かな美味さが未だに広がっている。

いや、美味しいなんてものではない……これは、まさに悪魔のトウ

モロコシッ!!

そしてそれは、他の人たちも同様だったみたいだ。

「お、おいしー！ ちょっとこれどうなってるのっ!!?」

「う、うん……すごい美味しいねっ!」

初めてあのタレを食す女性陣もまた、かなり絶賛していた。そして全員がぺろっとトウモロコシを食べると、部長が俺の方へと近づいてくる。

「レイ。このタレを主軸に、トウモロコシを売るが……量産は可能か?」

「そうですね……生産元に問い合わせてみます。でもきっと大丈夫ですので、この方針でいきましょう」

「……よし。了解した」

焼きトウモロコシの方針は固まった。しかし俺にはまだ残しているカードがあった。

「部長。さらに提案なのですが……」

「なんだ? なんでも言ってみろ」

「売り子はどうします?」

「いつもは適当に俺たちがやっているが……」

「ここには可愛い女子が二人もいます……いや、きっと当日は三人になるでしょう」

「まさか……そこまでののか？」

「ええ。やるなら徹底的に……でしょう？」

「ふ。流石は我が部のエースだな」

売り子というものは重要だ。これ以前師匠に聞いたが、やはり何かを売るなら女性がその場にいた方が雰囲気もよくなるのかなんとか……。だからこそ、俺は最善を尽くすべきだと思った。

それに俺の女装は制服だけではなく、他の服装でもまた輝きを増すということを示すべきだろう。今回はかりは心置きなくできそうだしな。

フハハ！

「レイまじかよ……アレを出すのか……まじで本気だな……」

「ま……まさかレイ。あなた、アレで出るの？」

「レイくん……あの姿を……解放するの……？」

まるで化け物を見るかのような目つきで、三人ともに俺を見つめる。

「もちろんだ。さて、エリサとクラリスもいいのだろうか？」

「まあ……トウモロコシ焼けて言われても……よくわかんないし

……」

「あ！ 私、実は……その……衣装をいくつか持っていて……」

「何！？ それは本当か！？」

「う……うん！ お洋服とか好きで、自分で作ったりとか、市販のものを買って参考にしてるから……実は割と持っていて……」

「派手なものはあるか？」

「ある……けど……その、恥ずかしいかもよ？」

「そんな羞恥心は既にある。ならば、それで行こう」

「う、うん……！」

「え！？ 私も恥ずかしいやつ着るの……！？ ちょ、私の意見は……！？」

ということで、俺たちの魔術剣士競技大会は大いに楽しそうなものになりそうだった。

運営委員に、アメリカ応援団、それにトウモロコシの販売に加えて売り子の仕事。

さらに、俺の女装はまだ二段階残っている。そして女装するたび、この美貌は増す。つまりは……この意味がわかるな？ 俺は最強の女装戦士になるのだ……！

やることは多いが、存分に楽しもうではないか！

フハハ！

第42話 師匠、再び

「……」

「……」

「元気出してっ！ クラリスちゃん、アメリカちゃん……っ！」

昼休み。

昼食をいつものように五人で取っているのだが……アメリカとクラリスは机に頭をつけて撃沈していた。

二人ともに頭から煙が出ているような感じで、もちろん比喻だが、全く動きはしないし、食事も購入すらしていない。

アメリカは訓練による疲労。魔術訓練はかなり過酷で、その上にテスト勉強もあったので、本当に死にそうになっている。もちろん安全マージンは保っているので、精神的な意味なのだが。

クラリスの方は無事にテストは爆死。赤点の科目もあり、夏休みには補習もあるという。残念ながらこればかりは仕方ない。この反省を是非とも次回に活かしてほしい。

そんな様子をエリサはハラハラと見つめ、俺とエヴィは普通に食事を摂っていた。

「二人とも大変だな」

「エヴィは大丈夫だったのか？ テストの方は」

「ん？ 平均よりもちよつと上ぐらいだな。まあ……レイ、アメリカ、エリサには敵わないが……個人的には満足してるな」

「なるほど。しかし、もう一学期も終了か」

「あつという間だったな」

本日の午前中に終業式が行われ、一学期は無事に幕を閉じた。

テストも滞りなく終了し、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の校内予選も無事に終了。

もちろん、明日からは夏休みという長期休暇に入るので、届け出を出せば実家に帰省してもいいことになっている。

しかし、今の段階で帰省するものはほとんどいないという。それはマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の新人戦と本戦が控えているからだ。校内での盛り上がりは最高潮になり、すでに他の学院でも出場者が確定している。

新人の校内予戦ではアメリカは全戦全勝で抜けたが、アルバートもまたアメリカに一敗を喫したものの、それ以外は全勝。新人戦への出場を確定させている。あれから色々とおったものの、彼もまた前に進んでいるようだ。それにアルバートとはあの場所でもよくあつて話しているからな……。

そして、学内に存在する新聞部はすぐに号外と言って、今回のマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の優勝候補を挙げた。

本戦の大本命はやはり昨年の覇者である、レベッカ先輩。

そして新人戦の優勝者予想は……アリアヌ^{II}オルグレンだった。
アメリアは準優勝だと予想されていた。

俺はそれを見た瞬間、自身の血が滾るのを感じた。大会というものは、予想通りでは面白くないだろう。常にダークホースなどがい
るからこそ、予想通りにいかないからこそ、華があるというものだ。
だからこそ、アメリアには勝って欲しい。

あのアリアヌ^{II}オルグレンを打ち破って、魔術剣士競技大会の
新人戦の覇者になるのはアメリアだと、俺はそう信じている。

「さて、明日からは1日時間が取れる。運営委員の仕事も魔術剣士
競技大会まではあまりない。つまりは、アメリアを存分に鍛えるこ
とができる……ということだ」

俺がそういうと、隣に突っ伏しているアメリアの身体がビクッと
反応する。髪の毛も天を衝くようにピンと上がる。

「と……言いたいところだが。みんな、明日は時間があるだろうか」
「私は……大丈夫だけど……」
「俺も大丈夫だぜ？」

突っ伏しているアメリアとクラリスも右手をスッと挙げて、大丈

夫という意志を示してくれる。ならば、明日することは決まっている。

「いい機会だから、是非ともみんなを師匠に紹介したいと思ってな」
「師匠って……あの天使みたいな人か？」

「まあ……見た目はそうだな。それで、いいだろうか」

「そうだな。俺は全然大丈夫だぜ！」

「私も……ちよつと緊張するけど……」

アメリカとクラリスもスツと再び右手を上げる。

よし、ということと明日はみんなで師匠に会いに行くことになった。これはもともと考えていたことだが、是非とも俺は師匠に伝えなかった。俺はこの学院で、こんなにも大切な仲間に出会うことができたのだと。

きつと師匠は心配しているに違いない。

師匠は確かに厳しい人だ。俺はそれはもう、厳しく育てられた。それは魔術的な意味でもそうだが、人間としても俺は師匠にたくさんのものを教えてもらった。そんな中でも、師匠の教えには愛情があった。全ては俺のためになるように……という意志を感じ取れた。

だからこそ、俺はそんな彼女を尊敬している。

そして俺たちは翌日に、師匠の元に向かうのだった。

翌日の昼。

俺たち五人は師匠の家に向かっていた。

そんな中でも一番ウキウキしていたのは、アメリカだった。

「うわぁ……みて、みて！　すごい！　景色が綺麗！」

「西の方には来ないのか？」

俺は馬車の中でそう尋ねてみた。

「うん。あまりこっちの方には来ないわね。それに森の方になると特にね」

「それにしても、今日は楽しそうだな。訓練が休みになって嬉しいのか？」

「当たり前じゃない！　もう本当にあの訓練は地獄だわ……」

瞬間、アメリカの目が死んだ魚のようになるが……まあわからなくてもない。エインズワース式ブーツキャンプの過酷さは俺も身をもって体験しているからな。と、色々とみんなで会話を繰り広げていると馬車が指定の場所に到達。

料金を支払うと全員で森の中を進んで行く。

夏真っ最中で、周囲の木々には数多くの蝉が止まっている。その

鳴き声が森の中で反響するも、それは決してうるさいと感じるほどではなかった。むしろちょうどいいくらいだろう。

しかし、ククク……アメリカのやつは完全に訓練が休みになったと思い込んでいるようだ。連日訓練が休み？ そんなわけがないだろう。アメリカ訓練兵もまだまだのようだ。もちろん、この先に待っているのは訓練に決まっている。と言っても、もう訓練も佳境。

大会も近いことから、あまり激しく追い込むことはしないが……それでも、この場所ならではの方法で鍛えようと思っている。

ふふふ……アメリカのやつ、きっと驚くぞ……ふふふ……。

「ふふふ……」

「う、うわ！ どうしたのレイ？」

「いや、なんでもないさアメリカ。いい休日になるといいな」
「うんっ！」

心からの笑顔である。

しかし数時間後、これは歪んでいることになる。俺は決してアメリカを追い込みたくはない。でも仕方ないことなのだ。俺も訓練時代は師匠に休みだから出かけよう、と言われなぜかジャングルでサバイバルをしていたこともあった。

そう。世界とは非情なのである。

こうして油断している時が一番危険なのだと、教える必要がある。

「ククク……」

「だから、それは何なの！」

そうして五人で歩みを進めていると、見えた。

師匠の住んでいる洋館へと俺たちはたどり着いた。すでにあらかじめ今日の昼にやってくることは伝えてあるので、俺は扉をコンコンとノックする。

すると、十秒もしないうちに扉がギイイイと音を立てて開いた。

「レイ様。それにご友人の皆様も……よくおいでくださいました」

「カーラさん。ご無沙汰しております」

「はい。すでに主人は中でお待ちになっています」

「わかりました。みんな、行こう」

そういうと、アメリカはこの手の屋敷に慣れているようで緊張している様子はなかったが、それ以外のメンバーは少し緊張しているようだった。

「大丈夫だ。師匠はいい人さ」

玄関を抜けて、奥の方にある部屋に向かう。そして車椅子に座った師匠が俺を見つけると自分で車椅子を動かしながら、俺の方へとやってくる。今日は機嫌がいいのか、すでに満面の笑みを見せていた。相変わらず、見た目だけは麗しい人だ。

「レイ！ 元気だったか！」

「はい。師匠」

「おお……また背が伸びたか？」

「いつも言っています、伸びてませんよ」

「ははは、そうだな。で、今日は友人を連れてきたんだろう」

「ええ。学院でできた、掛け替えのない友人たちです」

そうして俺は師匠にみんなを紹介するのだった。

第43話 自己紹介

師匠は今日も今日とて、美しい。

今日は夏服を着ており半袖から見える腕は、真っ白でまるで透き通るようだった。それに髪もアップにしており、後ろの方で綺麗にまとめている。はつきり言って、かなりの美貌だ。美貌だけは……まあ、すごい。

しかし……絶対にこれは師匠ではできないので、カーラさんにやってもらったのだろうが。

そんな師匠はとても機嫌がいいようだった。こんなにもニコニコと微笑んでいる師匠は、本当に久しぶりだろうか。でも俺が大切な友人を連れて来たということで、こんなにも喜んでくれるのなら俺としても嬉しかった。

あの時も思ったが……師匠はやはりわかっていたのだ。

俺にとって学院が掛け替えのないものになると。極東戦役での負傷は、未だに残っている。それは肉体的な面でもそうだが、精神的な面でも同様だ。

でも、俺はこの友人たちと共に、これからも学んでいく。

そしてきつと、師匠の教えとはまた違った人としての在り方を、もう一度学ぶのだろう。

と、そんなことを改めて思いながら俺はみんなを紹介するのだった。

「じゃあ、エヴィから頼む」
「おう！」

そう言っただけ前に出ると、エヴィは大きな声で自己紹介をする。

「エヴィ＝アームストロングと言います！ レイとは寮で同室で、仲良くさせてもらっています」

「私は、レイの師匠のリディア＝エインズワースだ。しかし……ほう……お前があのエヴィか。でかいな……」

「わかります？」

「ああ。私もレイは徹底的に鍛えたが……お前もまたいい筋肉を持っているようだ。これからも励め。そしてレイの良い友人となっほしい」

「もちろんです！」

どうやらエヴィは気に入ってもらえたようだった。

師匠は今となつては車椅子での生活を余儀なくされているが、過去には女性とは思えないほどの筋肉を蓄えていた。もちろんそれは男性と比較すれば劣ってしまうが、彼女は他人への厳しさよりも……自身への厳しさの方が苛烈だった。

だからこそ、エヴィのトレーニングの成果を認めているのだろう。

そして次は、エリサの番だった。

「あ……その……え、エリサ＝グリフィスです！　そ……そのハーフェルフです……！」

「なるほど……でかいな……違った意味で……」

「……え？」

「いや。なんでもないさ。しかしハーフェルフか……レイの善き友人になってほしいが……まあ、お前は合格でいいだろう」

「え？　え？」

「ふ。天然なところも加点だな」

「そ、そうですか……？　あ！　あとその……お聞きしたいんですが……」

「どうした？」

エリサにしては珍しく、もう少し踏み込んだ会話をしてみるようだった。彼女は人見知りなので、師匠との自己紹介は早めに切り上げると思っていたが……エリサは一冊の本を取り出すと、それを師匠に見せながらこう尋ねるのだった。

「さ、さっき……お名前をお聞きましたけど……エインズワース……」

「ああ。なるほど。お前は研究者としてのエインズワースのことを聞きたいのか？」

「は……はいっ！　も、もしかして……？」

その目には明らかに期待の色があった。

そういえば、エリサは研究者のエインスワースのファンだと言っていたのを、俺は思い出していた。そうか……それなら先に言っておけばよかったな。最近は色々と忙しくて完全に失念していた。

それでピンときたのが、エリサは思い切って尋ねることにしたようだ。

「二重コード理論なら、私が発見した。そして今も、エインスワースという研究者名で活動している」

師匠がそう言った瞬間、エリサの目が大きく見開かれる。そして今までよりも大きな声で、さらに会話を続ける。

「……！！こ、この本も書いたんですか……！！」

「ん？ ああそうだな。懐かしいものだ。しかしそれは論文を適当にまとめたものだが……学生でよく読もうと思ったな。内容としてはドクターに近いが……」

「そ……その！これ！す、すごくて……！！えっと、その……ファンです！！サインください！！」

エリサはとうとう頭を下げて、その本を師匠に手渡し始める。

すると師匠はふふ、と微笑みながらカーラさんに声をかける。

「カーラ。ペンはあるか？」

「はい。ここに……」

師匠はいつのまにかカーラさんが用意していたペンを持つと、その本のページ目にサインをさらさらと書いていく。なんでも師匠のファンは一定層いるようで、学会に行くとサインを求められることも多々あるらしい。

「エリサ」グリフィスであっているか？」

「は……はい!!」

「よし。では、貴重なサイン本をやろう。私は天の邪鬼でな。サインをしない時の方が多いが……今日は大変に気分がいいので、特別だぞ?」

「ふ、ふわあああああああ!!」

サイン入りの本を受け取ると、エリサは全身が痺れてでもいるのかブルブルと震えて、そのままぺこりと頭を下げて後ろの方に下がっていった。そしてそのサインを食い入るようにして、じっと見つめ続けている。

なんというか……エリサの意外な一面を見れたな……。

「こ、この後で自己紹介ってやりにくいわね……」

そう呟きながら前に出るのはクラリスだった。緊張している様子で、ツインテールにも少しだけ元気がないようだが……。

意を決して彼女は口を開く。

「く、クラリス＝クリーヴランドでっしゅ!!」

(あ、噛んだ)

全員の心のうちが完全に一致した瞬間であつた。

「ふふ……面白いな、お前」

「そ……そうですか!？」

「ああ。そのツインテールもよく似合っている。それにクリーヴランド家の当主とは実は知り合いでな」

「え!？ そうなんですか？」

「ああ。お前の父親はあれだな。娘にべつたりだな」

「ははは……まあそうですね……」

「で、ハンターになりたいのか？」

「え……なんでそれを……？」

クラリスがこちらをチラッと視るが、俺は首を横に振る。

ちなみにクラリスには俺の師匠に関してあまり詳細を説明していないが、特に彼女が尋ねてくることはなかった。彼女にもまた、機会があれば俺の過去を話したいと思っているが……。

また逆に、クラリスのことも別に師匠には伝えていない。別のルートからその情報を入手したのだろう。察するに、そのクリーヴランド家の当主から。

「あいつから相談を受けたことがあったのさ。娘がハンターになりたいと言っている……とな」

「そ……そうでしたか」

そして、クラリスのツインテールはしゅんと下を向いてしまう。

おそらく家族にはすでに反対されているのだろう。だからこそ、師匠にも否定されてしまう……そう思っているに違いない。

「女性でも白金プラチナのハンターになっている奴を知っているか？」

「レイが言っていましたけど……もしかして？」

「それは私だ」

師匠はその豊満な胸の間に挟んでいたカードをスツと取り出す。

何故そんなところに……と言いたところだが、まあ野暮というものだろう。

「え……！？ ほ、本当に……！？」

「そうだ。今はこんな姿だが、昔はハンターとしても活動していた時期があつてな。ちなみにレイは私が育てた」

「ふふえええええ……」

目が点になるというのはこういうことを言うのだろう。クラリスは完全に呆然としている。声も「ふふえええええ……」としか出ていないようだしな。

「それを踏まえて言うが……貴族の娘だから、女だからと言って、ハンターになれない道理はない。お前には選択肢がある。ハンターになるのか、ならないのか。別にそれ一本で生きていく必要もあるまい。ハンター免許ライセンスを取るだけでもいい。大事なのは、その一步を踏み出すことだ」

「一步を踏み出すこと……」

「幸い、お前にはレイがいる。あいつは私が徹底的に育てた。学院で色々と聞いてみるといい」

「……わ、わかりました!!」

ぺこりと頭を下げると、嬉しそうな顔でこちらに戻ってくるクラリス。どうやら師匠との対面がいい機会になったようで、俺としては嬉しかった。

そして最後はアメリカだが……そういえば、師匠と面識があるのかないとか……。

「アメリカ＝ローズです。ご無沙汰しております」

「ああ。パーティーで何度か顔を合わせたな」

「はい」

「……ふむ。前よりも陰は薄くはなっているが……まあ、若いな」

「? 何のことでしょうか?」

本当に心当たりがないようで、アメリカはきょとした様子で師匠にそう尋ねる。

「いや。別にいいさ。それはお前が向き合うことだ。さて、最近は

エインズワース式ブーツキャンプに励んでいるようだな」

「……はい」

そう聞くと、アメリアは苦虫を噛み潰したような顔になる。しかしまあ……絶賛継続中なので、嫌な記憶が想起されたのだろう。

この後も……ククク、アメリアの歪む顔がありありと浮かんでくるようだ。

ふふふ……フハハ！

いや、別にアメリアをいじめたいわけではない。ただ驚く顔が見てみたいだけだ。それだけだ。決して他意などはない。あの当時の師匠の気持ちがわかるなど、思ってはなない。

そして師匠にはニヤリと笑いながら、アメリアにこう告げる。

「ふふ……どうだ？ きついだろう？」

「正直、死ねます……」

「ははは！ そうだな！ しかしレイは8歳であれをこなしているぞー！！ ははは！」

「……やばいですね……」

「ああ。最高にイカれているとも……ククク」

なぜか俺が非難されているようだが……アメリアと師匠の会話が弾むのなら別に良かった。

そしてアメリアと師匠はなぜか別室に行くと、俺たちはこのリビングでカーラさんの手料理をいただくことになった。

第44話 きつと何者にもなれない私

私は誰なのか。

そんな問いをずっとしてきた。

みんなが求めるアメリカンローズを幼い頃から演じてきた。

私は物心がついた時から、自分は特別な人間だと知った。

周りは私を持て囃す。それは幼い自分にはとても気持ちが良かった。褒められて、褒められて、褒められて、私はそのまま育っていった。

でも私はなぜか……他の貴族の子どものように傲慢に育つことはなかった。

幼い頃から過るのは、ある疑問だ。

どうして、どうして私は褒められているの？

不確かなそれを突き詰めると、私自身ではなく、この血統こそが対象なのだと理解してしまった。

決してアメリカが重要などではなく、ローズ家の長女としての私が重要なのだと……空漠たる思いと共にそう理解した。

でも、それでも、他の三大貴族であるレベツカさんや、アリアー又はそれを受け入れた上でのびのびと成長している。決して驕ることもなく、ただ現実を見つめて、三大貴族の在るべき姿を体現するかのよう。

私は焦った。

だって、私にはそんな風に振る舞うことはできないから。

どうしても、自分を偽ってしまう、取り繕ってしまう、仮面をつけてしまう。埋めようのない寂寥感を感じてしまうのだ。

それはもうどうしようもなかった。だから、私は何かを求めて二人の見様見真似をし、親や友人が求めるような貴族を演じてきた。

礼儀作法、習い事、勉学、魔術。

その全てを完璧に熟^{こな}してきた。だって、そうしないと私が私で無くなりそうだから。

そもそも、自分を偽っていると言っても、本当の自分などいない。

本当に自分の欲するものなど分からずに、ただ偽物を演じている、それ以上でもそれ以下でもない何か。

それこそが、アメリカ「ローズ」だった。

「アメリカ訓練兵ッ！　よくやっているようだなッ！」
「レンジャーッ！」

いつものように敬礼をしてから、彼との訓練に励む。

この訓練が始まった当初は、まだ良かった。だって私に悩む暇などなかったから。それほどまでにこの訓練は過酷だった。

剩りにも過酷で逃げ出す時もあった。
あま

でも私は結局戻ってきた。

それは逃げてはいけない、前に進むのだから……という気持ちもあったが、私は別の感情もあったことを知っている。

私は、見捨てられなかった。

彼に置いていかれたくなかった。

そんな後ろ向きな気持ちで、レイと訓練に励んでいたのだ。

「よしッ！ 休憩とつてよし！」

「レンジャーッ！！」

夏の日照りが容赦なく私を照らす。すでに蝉の鳴き声も大きくなり、本格的に夏がやってきた。透き通るような青い空に、どこまでも澄んだ空気。そして私を焦がすように照らしつける日差し。

「……………」

レイから離れて、トボトボと蛇口のある場所へと向かう。

じつと地面を見つめると、日差しが強いからか、いつもよりも濃い影ができていた。そしてそれを見て思った。

彼は太陽で、私は影に過ぎない。

レイは眩しい。伸び伸びと、自分の思う壺に生きている。どこまでも自由で、眩しい存在。

一方の私は貴族、血統という鎖に縛られた存在。貴族とは斯く^か在るべきだと、この身で示しているも……それはそうせざるを得ないからだ。決して自由などなく、ただ機械的に生きているだけ。そんな私は影に過ぎない。

だからレイを見ていると、私の影は一層色濃くなっていく。でも影は光がないと成り立たない。そして影も光になれるのだと、夢を見る。

籠の中の鳥に過ぎないのに、そんな不遜な夢を見て……そのまま灼け落ちていく。偽物は結局偽物で、本物にはなれはしない。

それでも夢を見てしまう私は愚かなのだろう。

いつか彼のように為りたいと、夢を見てしまう。

「……ふう」

頭から冷水を浴びて、少し冷静になろうとする。

この暑さの中での冷水はとても気持ち良かった。そしてタオルで水気を拭き取ると、その場に座り込む。

自分の手を見ると、震えていた。その震えは、迫っている魔術剣士マギクス・シュバリエ競技大会へのものだ。今までは自分という存在をここまで誇示するものはなかった。でも、魔術剣士競技大会では私という存在が浮き彫りになり、勝敗という形で魔術師として格付けられる。

敗者になるわけにはいかない。

だって私は、アメリカンローズなのだから。

でもやっぱり、頭によぎるのは自信などではない。ただただ、不安という恐怖が私を支配する。

負けたらどうしよう。

レイに訓練してもらったのに、負けたらどうしよう。

レイはきつと、私に失望する。

いやレイだけじゃない。

エリサも、クラリスも、エヴィも……そしてこの学院の全員が失望する。

アメリカンローズはその程度でしかない……と。

そんな不安からか、最近をよく手が震える。でもそれをぎゅっと握り締めると、私はレイの元へと戻っていく。

「よし。戻ってきたな。続き、いくぞッ!!」
「レンジャーッ!!!」

そんな心を知られないためにも、私は今日も仮面を貼り付ける。

だってそうすれば、私は私のままでいられるから。

みんなの求めるアメリカで、私は。

「その……話ってなんでしょう？」
「ん？ まあとりあえずは座れ。話はそれからだ」

あの後、私だけがリディアさんに呼ばれて彼女の書斎に通された。他のみんなはリビングで食事をしているみたいだけど、私はなぜかちよっときて欲しい、と言われた。

別にそれほど面識はない。今まで会った時も、レイの師匠など思っただけだったので普通にいつものように形式的な挨拶をしていただけだ。

そして、彼女は机の上にある書類の山を端に退けると私の目をじっと見つめてこう告げた。

「頑張っているようだな」

「……なんのことですか？」

「さっきも言っただろう。訓練のことだ。レイのことだから、色々
と無茶をしていると思うが……そこは大局に見て欲しい。と言っ
ても、絶対に無茶はさせてないだろう？ あいつは優しいからな」

「それは……はい。そうですね……」

要領を得ない。こんな話をする為だけに、私を呼び出したのだろ
うか。でもそんな私の考えはすぐに無意味なものとなる。

「さてアメリカ＝ローズよ。どうやら、悩んでいるようだな……」

「なんのことですか？」

とぼける。知られてはいけない。仮面を、仮面を貼り付けるのだ。

私はアメリカ＝ローズであって、みんなの求めるアメリカを装^{おそ}う。
今までは貴族が求めるアメリカを演じてきた。でも今は、仲のいい
皆の求めるアメリカを演じるのだ。レイ、エヴィ、エリサ、クラリ
ス。みんなが求める私は、強くて、気高くて、そして余裕を持つて
いる人間だ。

だから私は今日も道化を演じる。

「これだ」

「それは？」

「手紙だよ。レイからのな。あいつはこうして時折手紙を寄越す。
最近はただの近況報告だったが……君との訓練を始めてからどうに
も、な」

「どうにも……とは？」

「アメリカが何かを隠しているのは分かっているが、踏み込んでい

「い
ッ」
「いか分からない……とのことだ」

息を飲む。

まさかレイがそんなことを考えていたなんて。いや、彼が何かを感じているのは分かっていた。でもまさか、そんな風に考えていたなんて夢にも思っていなかった。せいぜい、訓練で疲れて大変だろうとか、もっと強さを求めたいとか、そんなことだろうと思っ
たから。

「レイの過去は聞いただろう？」

「……はい。極東戦役に巻き込まれたとか」

オーディナリー

「そうだ。あいつの家系は調べたが、正真正銘、一般人の家系だ。

でも、あいつには才能があった。私など優に上回る、いや、この世界でも最高の才覚を有していた。あいつは世界最高の魔術師になる
と……私はそう期待して育てた。しかし、レイは私のせいで魔術領
域暴走を引き起こして……今に至る。私の唯一の失敗は、あいつに
人の心を十分に教えることが出来なかったことだ」

「人の心、ですか……」

まみ

「ああ。初めて見えた時のレイはこの世の全てを諦めたような少年
だった。でも徐々に人としての心を取り戻したが……まだ足りな
かった。やはり、私たち軍人では教えることのできる範囲が限られ
てくる。それこそ、あいつは妙に大人っぽいというか、浮いている
だろう？」

「それはまあ……そうですが……」

レイは会った時からちょっとおかしい……というか、本当に軍人
みたいな人だった。妙に固い感じだし、礼節もしっかりとしている

が、どこかちぐはぐな感じで……。

「それが限界だった。私たち大人の……な。だから私はレイに学院に入ることを勧めた。そこで人の心を、そして大切な友人を作って欲しいと。そう思っていた。でも心配だったさ。あのアホがまともに友人が作れるのか？　そう思っていたが……杞憂だったな。あいつは立派に、掛け替えのない友人を見つけたようだ。そして、そんなあいつが人の心の機微を感じ取っている」

「……」

「アメリカ・ローズ。君の心のうちに何があるかなど、私は知らない。いやそれはきつと誰も知らない。君以外はな。決してそれを曝け出せとは言わない。ずっと心のうちに秘めたまま、一生を終えるのもまた、選択肢の一つだ。でも、悩み、苦しみ、解放されたいと今の自分ではない何者かになりたいと願うのなら……友人を頼れ。まあ……余計なお世話だが、心に留めといてくれ」

「……はい」

そう言われて、私は呆然としたまま書斎から出ていく。

私もいつか、この気持ちを、この内心を、吐露できる日が来るのだろうか。

そんな日がやってきていいのだろうか。

私はみんなが思っているほど、強くはないし、気高くもないし、貴族らしくもない……臆病者で、とても、とても弱い人間だ。

臆病で、愚かで、弱虫で、ずっと怖がっている……そんなどうしようもない人間だ。

「あの……お手洗いは……」

「ここをまっすぐ行つて、突き当りを左に進んだ先にございます」

「……ありがとうございます」

途中で出会った侍女の方にそう聞いて、私はお手洗いを目指す。

「……」

そして中に入ると、壁に頭をこつんと預ける。

友人を頼れ。

その言葉は心に刺さり続けている。

この想いを、この不安を吐露できれば、どれだけ楽になるのか。解放されたい……もう、こんな自分は嫌だ。今の友人たちなら、それに……レイならきつと受け止めてくれるはず……そう思うも、私の身体はやはり震えていた。

レイは言った。自分の手は血で染まり、多くの人間を殺してきたのだと。その過去を全て聞いた瞬間に、私は彼に抱きついた。でもそれは、決してその過去に同情したからという理由だけではなかった。

私は、その過去を語れる彼の心の強さが欲しかったのだ。

だから反射的に、その強さに惹かれた。

私も、レイのように……自分の想いを吐き出したい。でも、みんなきつと失望するに違いない。いや、そんなことは……ないと信じたい。

そんな矛盾がさらに私を奈落の底へと引き摺り込んでいく。

結局人間は、自分のことしか理解できない。どれだけ心の距離が近い友人であっても、その本当の心は理解できない。そこには、明確な隔たりが存在する。

だから、私がみんななら大丈夫と思っているだけで……本当はそうじゃないのかもしれない。

三大貴族の私が、弱い人間だと知れば離れていってしまうかもしれない。

それだけは嫌だった。今の関係が好きだった。みんなの前なら、私も少しは自分らしくいられる気がするから。今までの自分とは違う、別の可能性を夢みることが出来るから。

だから、壊すことはできない。

仮面を貼り付けて、虚像を作って、演技続けよう。

それだけが今の私にできる全てなのだから。

「ああ……本当に、私はどうしようもない……本当に……」

鏡に手をついて、自分を見つめる。

そこに写っているのは、一体誰なのか。

きつともう私は、何者にもなれないのかもしれない。
。

第45話 圧倒的、感謝ッ

アメリカは師匠と何やら話していたようだが、二人が時間差で戻ってくるとそのままみんなで食事を楽しんだ。

カーラさんは何も、ケーキだけが得意なわけでは無い。あらゆる家事に関して完璧。だからこそ、この昼食も普通の学食とはレベルが格段に違い、本当に美味しく頂くことができた。

「ふう……美味かったな」

「マジでやばいな！こんなに美味しい料理は初めてだぜ！」

エヴィが興奮している中、エリサとクラリスも満足そうに食事について語る。

「ま、まあ……美味しかったわねっ！」

「うん……すごく美味しかったね！」

そんな中、アメリカはどこかぼーっとしており、俺は少しだけ心配だった。

「アメリカ？ 体調が優れないのか？」

「あ！ いや、その……訓練の疲れがね？」

「なるほど。それは仕方ないな」

「でも大丈夫よ！ だってこの後は……」

そう。この後に待っているイベントは皆が楽しみにしているあれ

だ。いや、クラリスは何かと文句を言っていたが、きつといざ始めれば楽しんでくれるに違いない。

ということで俺たちは外に出ていくのだった。

「おお！ 気持ちいいな！」

「ああ。この夏真っ盛りの中で、この水の冷たさは嬉しいな」

俺とエヴィは水着に着替えて、近くにある川にやってきていた。

今は浅いところで、水の中に足を入れているだけだ。奥の方では滝が流れており、さらに深いところではしっかりと泳ぐこともできる。

そして中には魚もいるのか、この川の水はとても澄んでいるように見えた。それに木々の木漏れ日もちょうど良い感じ差しており、まさに水遊びするには絶好のタイミングだった。

「しかしエヴィ…… 今もキレてるな」

「ふ…… レイもいい感じじゃねえか。あの細身からは想像もできないバルクだぜ」

「ふふふ……」

「ふふふ……」

俺たちは自然と向き合ってボーリングを取っていた。それはもち

ろん、そうすることでパンプアップするのも目的としている。筋肉を愛する者として、やはり見栄えは気にするからな。

ちなみに俺とエヴィは今日に際して水着を購入したのだが、二人ともにブーメランパンツだ。なぜならば普通の水着など着用してしまつては、脚のカットが隠れてしまう。筋肉を愛するものは、この全てを表現しなければならない。

だからこそ、この逆三角形のブーメランパンツを水着として採用。互いに迷う暇などなかった。

ふむ……今日もいいカットが出ている。

と二人で筋肉での対話をしていると、女性陣も続々とやってくる。

先頭には車椅子をカーラさんに押してもらっている師匠の姿が見えた。師匠はパレオタイプの水着で、上のビキニは真っ青なもので、下のパレオは水玉のものを着用していた。

一方のカーラさんは、なぜか競泳用のものを着ていた……いや、美しいのだが、まさか競技経験者なのだろうか。いつもクールな人なので、相変わらず謎に包まれている……。

「おー！ 二人とも、キレてるようだな！」

「は。師匠も美しいようで」

「俺もとても綺麗だと思います！」

「ふ。当たり前だな。しかし、レイとエヴィが並ぶと壮観だな。まさに筋肉の彫刻だ」

褒められて嬉しくなり、俺たちはさらにポーシングを続けていくも……後ろからはクラリスの大きな声が聞こえる。

「は！？ え！？ マジでレイなの！？」

「いかにも」

「エヴィはわかるけど……あんたってマジで身体どうなってるの？」

「ふ。着痩せするタイプだからな」

「いやいやいや！ 着痩せってレベルじゃないでしょ！ 筋肉やば過ぎ！」

「それはありがとう。そして、クラリスもよく似合っているぞ……」

「う……嫌味？」

「いや。純粋な賛辞だ」

「それならいいけど、ふんっ！」

ぶいっつと横を向くと、それによって彼女の華麗なツインテールもまた綺麗に靡く。

クラリスはいわゆるスクール水着を着ていた。紺色のそれは確か、学院で指定されているものだ。

急な誘いで用意できないとかなんとか言っていたが、それでもクラリスの水着姿は美しかった。

スッと伸びる脚に、身長割には長い四肢。それに肌は真っ白で、日焼けの跡など一切残っていなかった。

おそらく、毎日のケアを欠かしていないのだろう。

女性のこういう面は純粹に尊敬する。

そして次にやって着たのは、エリサとアメリカだった。

「ううう……恥ずかしいよお……」

「大丈夫よ、エリサ。超可愛いから！　ぐへへ……」

「私はアメリカちゃんが一番怖いよー！」

「だ、大丈夫……ちよつと、ちよつとだけだから。先っばだけだから！　ぐへへ……」

「うわああああーん！　怖いよおおおっー！」

鼻の下が伸びきったアメリカを振り切って、俺たちの方へやってくるエリサ。

翠の髪をアップにまとめ、上着を羽織っているものの……彼女のビキニタイプの水着は走った際によく見えた。上下ともに真っ白色のもので、まるでそれはエリサの純白な内面を示してるようだった。形容するならば……まさに大天使だ。

だが一つだけ。一つだけ、圧倒的な存在感を放っているものがある。

それはあまりにも偉大すぎて、直視することなどできない。

が、どうしてもこの視線が吸い寄せられるような……感覚。俺であってしても、この誘惑には勝てない……エリサのそれはもはや暴

力であり、戦争を引き起こせるものであった。

何が、とは敢えて言及しない。

男がそれを口にしてしまえば、それこそ無粋の極みというものだろう。だからこそ、俺とエヴィが行う動作は同じだった。

「
……」

拝む。

そして、祈りを捧げる。

ただただ、礼拝をする。

この世に感謝を。 エリサという大天使を生み出してくれてありがとう。

そんな賛辞を込めての、礼拝。

直立不動のマツチヨ二人が、その圧倒的な存在に心を奪われたのだ。俺たちのこのバルクもまた、この存在の前ではただの塵にすぎない。

エリサのそれは、それこそ……全てを無に帰す。

戦争を起こし得るものでありながら、戦争を終結させるものでもある。

そんなコントラディクションを内包している、ラグナロクであり、アポカリプスでもあり、ディストピアでもあり、ユートピアでもあるそれはもはや……神そのものであった。

いや、大天使エリサはこの宇宙そのものであった。

「え！？ ど、どうしたの……！？」

「神はここにいたようだ……」

「だな……」

慌てている大天使エリサもまた、素晴らしい。そしてその微かな動きで揺れてしまう、『その圧倒的な存在感』に俺たちは改めて感謝……。世界よ、大天使エリサをこの世界に顕現させてくれて……ありがとう。

少しかだけ涙が出てきた……。ああ、生きてきて本当に良かった……。

そんな風にエヴィと二人で拝んでいると隣にいるクラリスがじつとエリサを見つめる。

「でかい……」

「え……？」

「でかいのよ！！ ちょっと私にも分けなさいよ！」

「ふええええ……」

あまりの出来事にキャパオーバーしたのか、エリサはただただ「ふええええ……」と言っただけになってしまった。しかしそれもまた

一興。大天使エリサの前では、全てが善。この「ふええええ」もまた、大天使の息吹なのだ。それこそ、どんな傷でも瞬く間に癒してしまうほどに。

「ふふ……くふふ……エリサも可愛いし、クラリスも可愛い……ああ、なんて素晴らしいのかしら……ぐへへ……」

一人でぶつぶつと言いながらやって来たアメリカは、紅蓮の髪をお団子にしてまとめており、そのしなやかに伸びている四肢が彼女の体のバランスの良さを際立てる。プロポーションも最近の訓練で鍛えているからか、無駄のない筋肉がバランスよくついていた。ある種の究極でもあるアメリカ。髪の毛と同じ色をした、紅蓮の色をした水着はとても美しい。そのビキニタイプの水着、特に上半身は大天使エリサに負けず劣らずの素晴らしいさである。

そして、俺とエヴィはアメリカに対しても再び礼拝。

この世全ての水着に感謝する。

感謝。圧倒的、感謝……ッ！

その存在感を放つものに対して、俺たちは尊敬と畏怖の念を込めて……ただただ祈る。

「ちょっと男ども！ 私にはそれが無いんだけど……！」

クラリスがツインテールを天に上げながらそう怒号をあげるので、

ちらりとそつちを向くと俺とエヴィはそんな彼女を優しくフオロ―する。

「大丈夫だ、クラリス。成長は人それぞれ。焦ることはない」

「そうだな！　きつといいことあるぜ！」

「いやそこはポーズでもいいから私も拝みなさいよ！」

「クラリス……」

「な、何よ……ちょっと筋肉がすごいからって、私はビビらないわよっ！」

俺はスツとクラリスに近づいて、その小さな肩に手を置く。

「それはできない。なぜならば、これは心からの賛辞の時しかできないからだ。嘘であっても、それは許されない。だから俺たちは君の成長を祈っている。きつとクラリスも将来はさらに素晴らしい女性になっている」

「……ま、まあそういうならいいけど！　べ、別に気にしていないけどねっ！」

顔を真っ赤にしながら、プイツと横を向くクラリス。すると後ろからひっそりと忍び寄っていたアメリカがそんな彼女に抱きつく。

「ちょー！？　アメリカ！？　どうしたの！？」

「ぐへへ……クラリスの身体もいいですなあ……」

「えー！？　だ、誰なの……！？」

「ぐへ、ぐへへ……ふふふ……」

「い、いやあああああー！　何か危機をつ！　危機を感じるううううううっ！ー！」

明らかに別人と化したアメリカが容赦なくクラリスを襲う。

ベタベタと体を触っていき、クラリスが逃げようとするも俺が教えた体術で完全にクラリスを固めてしまつとそのままニヤニヤと笑いながらその肢体を堪能している。

まあ……同性だからセーフだろう。

「ふむ……どうやらアメリカは女性の体に興味があるのか」

「う……うん……私もいっぱい触られたよお……」

「なるほど。しかしエリサ。君は美しい。その天使のような美しさを前にすれば、異性同性はきつと関係ないのだろう」

「……あ、ありがと……」

エリサもまた、顔をだけでなく全身を真っ赤にして下を向いてしまつ。そうしていると、師匠が大きな声をあげてくる。

「おいレイ！ 私も褒める！ 私も綺麗だろ！」

「まあ……師匠は綺麗ですが」

（中身がゴリラなので、大天使エリサと比較するのもおこがましいだろう）

と、小声でそう呟くと師匠は俺に向かって魔術を行使してきた。それはまさにノータイムであつた。

《第一質料^{プリママテリア}＝エンコーディング^{マテリアル}＝物資コード》

《物資コードⅡディコーディング》
マテリアル

《物質コードⅡプロセシングⅡ減速Ⅱ固定》
マテリアル
ディセレーション

《エンボディメントⅡ物質》
マテリアル

結構マジなやつで、俺の脳天を貫くようにして巨大な氷柱がこの場に顕現する。とっさにその魔術に使用されたコードを理解する。これは本気のやつである。先代の氷剣の魔術師の実力をフルで発揮している。

これは、避けるべきかッ！？ いや、アンチマテリアル対物質コードかッ！？

が……間に合うわけがない。否、これは 死。

そして俺は自身の内部コードを本気で走らせて、川に飛び込むようにして、飛び退く。ギリギリ。本当のギリギリのところで、その攻撃を回避する。

冷や汗と髪から大量の水滴を垂らしながら……じっと師匠を見つめる。

「は？ 誰がゴリラだ？ 殺すぞ……あ？」

「師匠は裏表のない美しい人です！」

「だろう？」

「はいっ！」

ニカッと歯を見せて、今まで生きてきた中でも最高の笑顔を生み出す。きつと俺は生涯、この作り笑顔を超えることはできないだろ

う……そう自負するほどに、俺は身の危険を感じていた。

そして俺たちは、川辺でのひとときを楽しむ。

ちなみに師匠のあれはマジで当てる気だった。いや……まじで……。これからは余計なことを言うべきではないと改めて心に誓うのだった。

第46話　そして、訓練へ……

その後、全員で川でのひとときを過ごしていると師匠があることを提案してくる。

「おい。レイ」

「はい。何でしょうか？」

「ちよつと来い」

「？　わかりました」

ずっと微笑ましく、俺たちが川で遊んでいるのを見ていた師匠だが、なぜか俺を呼び出す。そして耳打ちして、あることを伝えるのだった。

「なるほど……しかし、師匠も人が悪いですね」

「ふふ……まあ、お前が教えているとはいえ間接的な私の弟子みたいなものだからな」

「ふ……わかりました。みんなに伝えましょう」

俺はそういうと、みんなの方へと戻って行く。

「おい。みんなで滝のある場所に行かないか？」

「滝があるのか？」

「ああ。エヴィも浴びてみたいだろう？　まさに滝行だ」

「おお！　それは面白そうだな！」

エヴィはテンションが上がっているし、エリサとクラリスもハイ

になっているのか妙にニコニコと笑っていた。

「滝！ いい響きね！」

「う……うん！ 私もちよつと興味あるかも……！」

一方のアメリアは妙に難しそうな表情をしながら、顎に手を当てて考え込んでいる。

「滝……滝ね……」

「どうしたアメリア」

「いえ別に……何もないけど……なーんか、嫌な予感がするのよね」
「それは気のせいだろう」

君のような勘のいい……と内心で思うも、とりあえずは全員で滝の方を指して進んで行く。と言っても川の上流の方にあるので距離はそれほど遠くはない。

師匠達もまた、隣で並ぶような形で俺たちについてくる。

そしてやってきたのは、大きな滝の目の前。天からまるでバケツをひっくり返したように降り注ぐ水は、距離があってもこちらに大量の水しぶきが飛んでくるほどであった。

「よし。いくかエヴィ」

「おうよー！」

ということで、俺とエヴィはそのまま滝に打たれようと歩を進める。そして滝のちょうど真下に置いてある岩の上に座ると、そのまま全身で圧倒的な勢いの滝を浴び続ける。

頭、肩、背中、主にそこに集中して大量の水が俺たちに降り注ぐ。それはまさに修行のそれだった。しかし、心頭滅却すれば火もまた涼し。つまりは、心を落ち着かせればこの滝もまた、ただの水に過ぎない。

「
……」

日頃から筋トレによってメンタルも育んでいる俺たちはスツこの滝と一体化するようにして、この水を受け止める。今の俺たちはそう……この自然と一体化していた。自然の中にある、一部の生命体。それが水を受け止めている……それだけの、それだけのことだった。

「ふう……」

「かなり気持ちよかったな！俺の筋肉も喜んでるぜ！」
「ふう。そうだな、この火照ったバルクにはちょうど良いものだった」

しばらくして俺とエヴィが戻ってくると、女子三人は驚いたような目で俺たちを見つめていた。

「え……二人とも平気なの？」

そう尋ねてくるのはクラリスだった。彼女はツインテールをしょぼんと垂らしながら、そう聞いてくる。おそらくやってみたい気持ちはあるも、不安なのだろう。

「ああ。気持ちいいぞ？」

「そうだな！ 意外と気持ちいいぞ！」

「う……」

未だに恐れているのか、クラリスが躊躇していると……前に出てきたのはエリサだった。妙に男前な顔をしているのは、覚悟の表れなのだろうか。

「クラリスちゃん……」

「エリサ、まさか！」

大天使エリサはその圧倒的な存在感を放って前に出てくる。あまりの圧倒的な存在感に俺とエヴィも思わずたじろいでしまう。

「む……エリサ……やるな」

「へへ……俺の筋肉も震えてるぜ……」

何、とは詳しく言及しないがその圧倒的な存在感を放つエリサはクラリスと手を繋いでそのまま俺の中へと向かっていく。一方のアメリアはそんな様子を深刻そうな顔で見つめていた。

「あ、エリサ」

「どうかしたの？ レイクン？」

「水着、固定したほうがいいぞ」

「あ……そ、そうだね」

顔を真っ赤にして照れながら、エリサは魔術によって水着を固定する。そうしなければ、俺の勢いによって水着は剥がされてしまうだろう。そんなことになれば、この世界に待っているのは……ラグ

ナロク。神々によってエリサを求めて争う終末戦争が始まってしま
う。俺はそうならないためにも、エリサに忠告しておいた。

どうやら、俺は世界を救ってしまったようだ……。

「……なんで、私には何も言わないのよ」

「いやその水着のタイプからして、大丈夫だろう」

「……なんか、あんた達さあ……いやらしい目線というよりも、
エリサのことをすごい尊敬の目で見ているのが腹たつ！」

「……」

「……」

俺とエヴィはクラリスの指摘に対して、黙秘権を貫いた。

的を射ている。俺たちがエリサに抱^{いだ}いているのは、性的なニユア
ンスを超えたものだ。まさに大天使エリサを最上の存在として崇め
るような……そんなものである。

俺とエヴィは特にそのことについて会話をしたわけではない。

が、男たるものこれぐらいは言葉などなしでもコミュニケーション
ンは取れる。それに俺たちには筋肉もある。もはや、肉体で会話を
するなど朝飯前だった。

「……」

「あばばばばばば……」

そして二人ともに滝に打たれ始めた。

エリサはなぜか男前な面構えで、じつと目を瞑ってその滝を体で受け止めている。一方のクラリスは「あばばばばば！」と言いながらも、徐々に慣れてきたのかスツと目を閉じて自然と一体化していく。

「
……」

二人ともに自然を感じ取っているのか、完全に一体化していた。

もちろんそれを見て、動かない俺たちではない。俺とエヴィの太胸筋がピクリと反応すると、俺たちもまた二人に並ぶようにして滝の中へと再び進んでいく。

「
……」
「
……」
「
……」
「
……」

俺たち四人はまさに自然だった。世界だった。いや、宇宙そのものだった。この大自然そのものを身体に宿していた。目を瞑ると広がるのは、広大な宇宙。そして大天使エリサがその中にある地球を抱きとめるようにして、微笑んでいる。

そうか。宇宙の心は、エリサだったのか。

と、滝に打たれることで謎の悟りを開く俺であった。

「ふう……気持ちよかったな」

「ああ！」

「う……うん！ やってみてよかったよ……！」

「意外といいものね！」

と、四人で滝に打たれることの楽しさを共有する。だが一人足りていない。その残り一人といえば……よく見ると、魔術によって師匠に拘束されていた。

「レイ、脱走兵を確保しておいたぞ」

「ありがとうございます。師匠」

師匠は下半身が麻痺しているとはいえ、まだ魔術は現役だ。そして師匠の本質は、『減速』と『固定』。アメリカをその場に捕縛するようにして、固定するなど容易なことだった。というよりも、軍人時代はこうして脱走する兵士を大量に確保していた。

久しぶりに見たな。と懐かしい気持ちになるも、今はプルプルと震えているアメリカの方に近づいていく。

「さてアメリカ訓練兵」

「ひ……ヒイイイイイイ！ に、人間はあんな滝に打たれた

ら死んじやうわよっ！」

「返事はレンジャーと言っただろうッ！！」

問答無用と言わんばかりに、俺はいつものように声をあげた。心にすでに刻まれているようで、アメリカは反射的に返事をする。

「れ、れんじやあああああー！！」

「ということで、俺と一緒に心頭滅却するためにも一時間の滝行だ」
「い、いやあああああああ」

そして、ズルズルと引きずるようにして、アメリカ訓練兵を滝の元へと連れていく。そしてその際に、じっと見つめている三人に助けを乞うような目線を向けて、声を荒げるアメリカ。

「み、みんな助けて……！」

「大丈夫よ！ 意外となんとかなるものだから！」

「く、クラリスう……」

「そうだな！ 気持ちいいもんだ！」

「その筋肉だとそうでしょうねえ！ でも私はか弱い乙女なのよ！」

クラリスとエヴィに一蹴されてしまい、最後に求めるのは大天使エリサの慈悲。

だが天使もまた、いつも優しいとは……限らないのだ。

「え、エリサ……あなたなら……優しいあなたなら助けてくれるわよね……？」

「アメリカちゃん……」

真面目な顔つきになっているエリサが、フツと微笑みながらアメ

リアに告げる。

「な、なに？」

「女には、いくしかない時も……あるんだよ」

「な、何の扉を開いたの！？」

「大丈夫だよ！ きつと楽しいから！」

「嘘よおおおおお！」

アメリカの助けを求める声は虚しく響き、そのまま彼女は俺に引きずられて行く。

「アメリカ訓練兵。大丈夫だ、安心しろ。きつとすぐに気持ちよくなる」

「うわあああん！」

そして、エヴィ、クラリス、エリサが俺たちに向かって敬礼をしてくるので俺もまた敬礼を返して、そのまま滝の中へと向かっていく。

「あばばばばばばばばばば！――」

アメリカの悲痛な声も、それはもう響きに響いた。

だが、もちろんこんなところで終わりはしない。真の訓練はここから始まるのだ。せつかく、川に来たのだ。ならばこれを活かさない手はない。

「よし。では、50キロ遠泳するか。川の長さは短いが、往復すればなんてことはないだろう。深さも十分にあるし、川の流れもいい負荷になる」

そういつとニヤニヤと笑いながら近づいて来た師匠が、さらなる提案をしてくる。

「いやレイ。ここは100キロだろう」

「む……なるほど、流石は師匠。ではアメリカ訓練兵。100キロ遠泳行くぞッ!」

「もうやめてええええええ!! 師弟で私をいじめないでええええ!!
!! う、うわああああああん!」

ということで、アメリカは今日も無事に訓練に励むのであった。

第47話 修了試験

早朝。現在の時刻はちょうど五時。何時もならばアメリカと訓練をしているが、今日はこの時間ではなかった。指定した時刻は五時四十五分。そこでアメリカといつもの場所で会うことになっている。

俺は普段通りにスツと目を覚ますと、少しだけストレッチをして体をほぐす。そして軽くシャワーを浴びて、覚醒を促すといつものように訓練着に着替える。

そのまま洗面所に行ってから歯磨きをして、寝癖を適当に整えて完成。

「よし……後は……」

俺は二人分のウエストポーチを用意する。いつもならこんなことはしない。しかし今日やる訓練は、レンジャー訓練の修了がかかっているのだ。正式なものでは無いとはいえ、アメリカはエインズワース式ブートキャンプを短期間でかなり仕上げてきた。

脱走したり、サボろうと試みたり、嫌がったりなど……色々あったが、彼女はここまでついてきたのだ。

正直言って、途中で彼女が挫折してしまつことも視野に入れていた。その時は訓練メニューを軽くして、マジクス・シュバリエ魔術剣技競技大会へ臨むつもりであった。

でもアメリカは俺の訓練を完全にやりきったと言っても良いだろう。肉体強化の訓練も無事に修了した上に、魔術強化の訓練もほぼ終えた。

残りは俺が最後に課す修了試験だけだ。すでにマギクス・シュバリエ魔術剣技競技大会も一週間後に迫っている。それぞれの出場者はきつと、今は調整の期間に入っていることだろう。

だがもちろん、ここで手を抜くことなどはしない。アメリカには本気でやってもらうし、俺もまた本気で臨む。

俺は知っていた。アメリカは悩んでいると。そして、師匠の家から帰るときに去り際に師匠にこう言われた。

「レイ。アメリカ「ローズ」に対してどうするべきか……と、手紙で書いていたな」

「はい」

「それはお前にしか決めることのできないものだ」
「……」

淡々と告げる事実。

俺は今まで、師匠に沢山のことを教えてもらった。だから今回も何か助言を貰おうとそう思っていたが、師匠が告げるのは今までとは違う言葉だった。

「もう私ごとにかく言うべきではないだろう……お前は、自分の考えで全てを決めていいんだ」

「師匠……」

「レイ。私はお前が学院に入学することで、純粹に楽しんで欲しか

った。この世界はあの戦場だけでは無い。醜く、残酷で、凄惨な争いだけが世界では無い。この世界には、美しく思えることもあるのだと知って欲しかった」

「……」

「そして、お前は掛け替えのない友人を得た。私も今日、全員と話してみte思ったよ。ああ、レイは学院での生活を楽しんでいると。

確りと学生生活を送れていると。嬉しかったさ。お前は私の子のようなものだからな。その成長を喜ばずにはいられない。でもな、もう……自分で考えていいんだ。今までのように、命令をされたことをただ淡々とこなすだけではない。自分の意志で、生きていいんだ」

「……はい」

「だからお前が思うことを成せ。アメリカ・ローズは過去のお前だ。境遇は違うが、それでも根幹はおそらく同じだろう。だから、私がしてきたように、お前も、彼女にできることをやってやれ。自分の意志で、そうしたいと望むのなら」

「……分かりました」

その場で礼をする。

これは今までのように上官にするようなものではない。

ただ純粹に人間として、尊敬している師匠へ、敬意を示しているのだ。

俺は、彼女に何をしてあげることができるのだろうか。

この短期間でアメリカは確実に強くなった。肉体的な意味でも、魔術的な意味でも。

しかしこの期間で彼女が別人のように成長したと言うことはあり

得ない。アメリカは依然としてアメリカのままだ。その心の内に宿る、彼女の葛藤までは変えることはできていない。

俺は迷っていた。彼女のその心に触れていいのか、と。

それは繊細で、まるで零れ落ちるガラスのように、触れるだけで粉々に砕け散ってしまうかもしれない。

アメリカが過去の俺と言うのなら、当時の俺はきつと……この心に無理矢理踏み込んでくるようなことは拒絶するだろう。

そして、きつとまた自分の殻に閉じこもってしまう。

他人は誰も信じられない。この世界は醜さで満ちている。美しい場所などありはしない。信じられるのは、自分だけ。でもその自分でさえも、理解できない。だから、人と触れ合うことなど、必要ない……そう思っていた。

そんな俺が師匠達に心を開いたのも、結局は自分からだった。そして、みんなはそんな俺のことを待ってくれていた。

ならば……俺も待とう。彼女がその手を伸ばしてくるまで。

結局のところ、アメリカもまた誰かの意志ではなく、自身の意志で、その足で進む必要があるのだから。

そして仮に、アメリカが助けを求めてくるのなら、全身全霊を持って力になろう。それが友人としての、俺の答えなのだから。

「点呼　！」

「い　ちっ！」

「うむ。今日も全員揃ったな。さて、今日の訓練だが……今日でのレンジャー訓練は終わりだ。エインズワース式ブートキャンプの行程を、俺が計画した通りに全て熟した^{こな}。アメリカ訓練兵、君には最大の賛辞を送ろう」

「レンジャー！　ありがとうございます！」

「しかしッ！　訓練はまだ続く。これをクリアすれば、君には私特製のレンジャー記章を送ろう」

「レンジャー！」

「うむ。さて、最後の訓練だ。今後は修了試験と呼称するが、まずはこれを受け取れ」

そう言つと俺は、彼女の分のウエストポーチを渡す。アメリカはそれを受け取ると、じっと見つめながら中に入っているものを確認する。

「これは……？」

「修了試験は、カフカの森で俺と戦ってもらつ」

「え？」

「返事はレンジャーだッ！」

「れ、レンジャー！」

完全に戸惑っている表情^{かお}だった。そしてアメリカはそのウエストポーチを腰に巻きつけると、再び俺の目をじっと見つめてくる。

「アメリカ訓練兵には上半身に大会で使用されるものとはほぼ同じ造花である、この薔薇をつけてもらつ」

「……」

「その数は10だ。制限時間は、ちょうど朝の六時から夕方の十八

時の十二時間。薔薇を一輪でも守りきつたら、アメリカ訓練兵の勝利。全て散らせば、俺の勝利だ。魔術剣技競技大会では、場外に相手を落とす、戦闘不能に言った方法での勝ちもあるが、最も効率がいいのは、胸にある薔薇を散らすことだ。相手もそれを狙ってくるだろう。つまりは、その薔薇は自分の命と同じ。実際の試合でも、それをどう守り抜き、どう相手の薔薇を散らすのが鍵になる」

「レンジャー！」

「安心しろ、今回は能力を解放しない。全て俺は内部コード^{インサイド}だけで相手をするが、油断するなよ？俺はゴールドのハンターでもある。森の中での戦いは熟知している。だからこそ、薔薇の数は10に指定した」

「……」

「多すぎる、と思ってる顔だな。しかしそれが今の俺のアメリカ訓練兵に対する評価だ。それを覆したければ、実力を示してもらおう」

「レンジャー！」

「では、森に先に向かうといい。時刻六時ちょうどに俺もカフカの森に入り、アメリカ訓練兵の薔薇を全て散らしに行く。準備はいいな？」

「レンジャー！」

そしてアメリカは俺から受け取ったウエストポーチをギュツと力強く腰に巻き直すと、そのまま森の中へと入っていく。

十二時間という非常に長い時間設定は彼女の心を試すものだ。

俺はこれから、アメリカの心を削りに削って、そして折りに行く。

しかしもし……もし仮に、彼女がこれに耐え切ることができれば、

きつと……アメリアはまた一つ大きく成長できると……俺は信じている。

アメリアの去って行くその背中には自信に満ちているのか、それとも別の何かか。

彼女はただ真っ直ぐ、真っ直ぐ歩いてその森の中へと姿を消して行く。

アメリア。君ならばきつとできる。ここまで頑張ってきた成果を発揮すれば、必ず俺を打ち負かすことができる。

もちろん、これは俺との戦いでもあるが……それと同時に、これは自分自身との戦いでもある。

アメリア。君の潜在能力はそんなものではない。ポテンシャルその先にきつと……辿り着けると信じている。

だから俺もまた、全身全霊を持って挑もう。

いつかあの日の自分が何を欲していたのか、俺は知っているのだから。

レイに概要を聞いた。

これが本当に最後の訓練になるらしい。

今まで本当に辛かった。筋肉痛にずっと苛まれ、さらには魔術訓練でも連日過酷な訓練を課された。レイの言う通り、魔術訓練の方が辛かった。繊細なコード理論の構築は今まで徹底してはこなかった。いや、やるにはやっていたがあそこまでやるのか……と思うほどには大変だった。

それと同時に驚いた。きっと氷剣の魔術師としてのレイはあれをいとも簡単に、それこそ呼吸するのと同然にこなすのだろうと。

そんな彼に近付きたくて、私は食らいついていた。レイにここまでしてもらって、今更投げ出すわけにはいかなかった。

彼のように、レイ＝ホワイトのようになりたい。それに、彼に見捨てられたくはなかった。だから私は……そんな歪んだ想いでここまで来た。

でも光に群がる蝶は、その光に灼き尽くされてしまうのかもしれない。

それでも私は、前に、前に進んできた。確かな何かがあると信じて。

この先に一体何があるのだろうか？

この訓練を乗り越え、マギクス・シュバリエ魔術剣技競技大会にたどり着いた先には、何があるのだろうか？

そう考えても答えなど出ない。

今の私にはその答えを得るだけのものは、何もない。まだ空虚で、何も手にしてはいないただの少女なのだから。でも私はもしかしたら……と少しだけ考えてしまう。そう思うほどには、私はこの修了試験を特別なものとして認識していた。

「ふう……」

レイから受け取った十個の薔薇。

それを上半身に固定して、カフカの森の中を進む。

「……後、三分か」

レイからもらった腕時計をちらりと見ると、時刻は五時五十七分。後三分もすれば、レイがこの森の中に入って来て私の薔薇を散らそうと行動を起こすだろう。

制限時間は十二時間。その時間でこの薔薇を守りきれば、私の訓練は修了となる。仮にここで失敗したとしても、特に影響はないだろう。何か罰があるわけでもないのは知っている。

でも……私は成功して終えたかった。

私はどうしようもない偽物だと、いや偽物にすらなれない、有象無象だと知っている。仮面を貼り付け、他者の望む自分を勝手に描いて、それをロールプレイしているに過ぎない愚か者。

そう……そう思っていたのに、私はみんなと出会うことで自分らしさというものを掴みつつあった。演じるのではなく、本当の自分

のようなものが、時折垣間見えるのを感じていた。

きつと何者にもなれない私へ。私はそこにいますか。

そう問い続けて来た。そして私はきつと今、岐路に立っている。
この分岐点で私は、私になれるかどうかが決まる……そんな予感がしていた。

だから私は、この修了試験を無事にクリアして……マギクス・シュ魔術剣技競技
バリエ大会に臨むのだ。

誰のためでもない、自分のために。

「……始まったわね」

瞬間、ピピピピと腕時計から音が鳴る。おそらく六時と十八時に鳴るようにレイが設定していたのだらう。

私はちょうどカフカの森の中央あたりに来ていた。

と言っても正確な地形は把握していないので、あくまでおそらく……という感じだ。でもここにくるまで、私は遅延魔術ディレイを数多く仕掛けていた。

もちろんこの場所に来るように仕掛けては、居場所がバレしてしまうので、ランダムに設置してある

そして私は隠れて待つ。最悪、レイに出会うことなく終わること

もある。

でもそんな楽観視はしない。彼は規格外だ。だからこそ、接敵すると仮定して、私は思考を続ける。

また、私はこの十個の薔薇というものを決して多いとは思っていなかった。

訓練と一緒に今までしてきたが、レイ＝ホワイトという魔術師が規格外なのは間違いなかった。もちろん、氷剣の魔術師としての真の実力を訓練中に見たわけではない。

私が見たのは、彼の基本的な肉体の性能と内部コードインサイドの扱いだけだ。曰く、能力を封印している今はそれだけが使える技量らしいが……。

レイはそれでもきつと、今の私よりも強いと思っていた。

完全な遠距離からの魔術戦に持ち込めば話は別かもしれないが、彼は魔術などには臆さない。

その心の在り方が、私なんかとは違う。

恐れなどない、震えなどない、迷いなどない。

あの双眸そんめいが見据えるのは、その遙か彼方なのだから。

だから私は、そんな彼に対して油断することなどなかった。

「ん……？」

五分くらいした頃。何かガサガサと音が聴こえた。私は音がした方を注視するも、その先には何もいない。と思いきや、出て来たのは魔物だった。あれは巨大蛇だ。ヒュージスネークでも基本的にここの魔物は別に何もしなければ襲っては来ない。

だから私は自分が気を張り過ぎていたせいだと思っていた。そしてホッと心に安心感を抱いた瞬間、上から声がして私は自分の心臓が跳ね上がったのを感じる。

「……油断大敵だ」

「え？」

ボソツと頭上から声が聞こえたと思いきや、私の胸にあった薔薇が一気に3つも散ってしまふ。それは木の上にいたレイが、石の礫つぶてを投げることによって的確に私の薔薇を撃ち抜いたのだ。

「……くっ!!」

そのことをすぐに認識すると、私はすぐに魔術を発動。

《第一質料プリママテリア〓エンコーディングマテリアル〓物資コード》

《物資コードマテリアル〓デコーディング》

《物質コードマテリアル〓プロセシング》

《エンボディメントフェノメノン〓現象》

発動するのは、中級魔術である風切。ウインドカッターそれを高速魔術で発動する。クイック

も、すでにその場にはレイはいなかった。彼はすでに移動を始めていて、私の魔術の間合いを完全に把握しているのか、そのまま背を見せつつ移動して行く。

「……待てッ！」

レイは接近戦に持ち込んで来て、一気に薔薇を散らすつもりだと私は思っていたが……。

そのまま彼は木から木へ跳躍することで移動していき、あっという間に姿が見えなくなってしまった。

「逃げた……いや……？」

レイがただ考えもなしに逃げたとは考えにくい。むしろこれは彼の策略なのだろう。

「落ち着け……落ち着くのよ、私」

敢えて声に出すことで自分を落ち着かせる。

分析するに、私の遅延魔術ディレイは全てスルーされてしまったのだろう。だってそれは、全てを地面に設置していたから。

レイはそれを読んだ上で、木から木へと跳躍することでそれを回避して、巨大蛇ヒュージスネークがいる場所で物音を立てた瞬間に、私の真上の木へと移動。そして、手にしている石で一気に薔薇を3つ持っていたのだろう。

はつきり言って、予想していなかった。

彼の使える魔術、そしてあの肉体性能からして、一気に距離を詰めて来て持っているその剣によって薔薇を全て散らしていくものだと思います。

でもその思い込みを逆手に取られて、私は遠距離からの攻撃という選択肢を無意識に捨てていた。

彼が残っていた事実はただ一つ。

そこらに落ちている石であってさえも、的確に薔薇を狙って投げれば撃ち抜けてしまうのだ。

これはきつと彼からの忠告だ。

この薔薇は狙い撃ちされてしまえば、たとえなんの魔術的な要素もない、石の投擲によって散ってしまうのだと。レイはこの訓練の中で、実際の試合を想定して色々と私に教えてくれるのだろう。

そんな彼の思いやりを私は感じ取った。

「ふう……」

改めて、冷静になることに努める。

大丈夫だ。落ち着け。私は冷静に思考できている。大丈夫……大丈夫と自分の逸る心を落ち着かせる。

思い出せ。

きっと、私が成すべきことは彼が全てもう教えてくれている。

今回の件だってそうだ。『常にあらゆる状況を想定しておけ』『魔術師は冷静であることに努めろ』と、そう言われていたのを思い出していた。私にはまだ経験が足りない。だから、レイの奇襲も思い描くことができていなかった。

あまりの訓練の過酷さに、その時はあまり意識していなかったが、これはまさに集大成。

私はその教えを全て活かして、レイ＝ホワイトに向かっていくべきなのだろう。

「よし……！」

私は自分の頬をパンパンと思い切り叩いて、意識を改める。

そして再び、森の中を駆けて行くのだった。

第48話 零れ落ちる蝶

「はあ……はあ……はあ……！！」

現在の時刻は正午ぴったり。

ちょうどあれから六時間ほど、つまりは半分ほど経過したことになるが、私の残っている薔薇はすでに4個になっていた。

レイの作戦はシンプル故に強力だった。

それはヒットアンドアウェイを主軸とし、狙える時は接近してその剣によって私の薔薇を散らす。だが決して無理な強攻はしてこない。薔薇を散らせば欲を出さずに攻撃は重ねず、すぐに退いて行ってしまう。

この戦闘に劇的なものなどない。ただ淡々と、私の心を少しずつ削るように、レイは同じ作業を続けるだけ。一方で、私はそれに耐え続けなければならない。その圧倒的な存在感を前に逃げることも許されず、たった一人で立ち向かい続けなければならなかった。

思えば、この試験はよく出来ている。彼は私の薔薇を散らせば、そこで終わり。制限時間内に終わることもあるだろう。でも、私のクリア条件は十二時間の耐久が必須となっている。十二時間、耐え切ることができなければ……そこで終わりだ。

おそらく、十二時間程度であればレイの集中力が途切れることは

ないだろう。すでにこの森は熟知しているのか、彼にとってはもはや自分の庭に過ぎないのだろう。私は、木々や茂みなどの至る所に遅延魔術^{ディレイ}を仕掛けていたが、引っ掛かることはなかった。

レイは傷一つすらついていない。対して今の私は、もうボロボロだった。何度投げ飛ばされ、何度この地面に叩きつけられたのかなど覚えていない。

ただ無我夢中に薔薇を守りつつ、彼を撃退することを考えていた。

だがきつと、レイとの訓練を受ける前ならばもう終わっていただろう。基本的な体力、それに魔術を行使できる時間。その基礎的な部分の底上げ。それがなければ、私はきつとすでに全ての薔薇を散らされていたに違いない。

自分の成長……とも考えられるが、私は決してそこで満足はしていなかった。

「はあ……はあ……はあ……！」

もうどれほど、彼と接敵したか覚えてない。

レイがいなくなって、ホッとして薔薇の残っている数を数える暇もないほどに……私は気を弛めることも出来ずに追い詰められていた。

冷静に、冷静にならないと……そう思ったびに、上手く自分の身体が動かない。まるで鎖で縛られたかのように、私の動きは鈍ってしまう。

「
……」
「……ぐッ!!」

レイはただ淡々と毎回の戦闘をこなしていく。その双眸にはなんの光も宿ってはいない。いつものような明るさも、破天荒なことをしている際の笑顔も、全て消え失せている。

これこそが、冰剣の魔術師としての彼の片鱗なのだと、私は改めて知った。

「う……わっ!!」

思わずそんな声が漏れてしまう。

レイは剣で薔薇を散らすと思いきや、一気に距離を詰めて来てそのまま私の腕を捕えて一本背負い。私は彼に教えてもらっていたおかげで、なんとか受け身を取るも次の瞬間、レイのその手が私の薔薇へと伸びていた。

けど……ッ!!

「やらせないッ!!」

声をあげる。

もう形振り構っていらなかった。ただ今はこの薔薇を、この残っている薔薇を死守するのだ。そんな想いからなんとかレイの腕を弾き飛ばすと、今度は私が彼に体術を仕掛けようと試みる。

この距離なら、魔術を使うよりもこっちの方が早いッ！！

レイとの訓練がなければ、こんなことはしなかっただろう。きっと私は魔術に頼っていたに違いない。でも、この肉体さえも武器になるのだ。それは彼が教えてくれたから、できることだった。

だから私は、なんだって、やれることは全てやるんだッ！！

そして彼を設置した^{ディレイ}遅延魔術の位置に誘き寄せるも……レイはそれを視界で知覚することなく、難なく躲してしまう。^{ディレイ}遅延魔術は魔術の中でも、トップクラスにコード構築が細くなる。

そのため、私は今まで敬遠してたのだが、レイによってこの技術もまた徹底的に鍛えられた。でもやはり、私のことをよく知っている彼にはどうやら通用しないようだった。

私は自分の周囲にはすでに幾重にも重なるようにして、^{ディレイ}遅延魔術を張り巡らし結界のようなものを構築している。だというのに、レイはそれを全て知覚しているのだろう。難なく躲しながら私と相対する彼は、まさに化け物だった。

これが、これこそが、七大魔術師の片鱗なのだと知る。

「……」

そして彼は再びこの場から去っていく。

「はあ……はあ……はあ……やった……」

初めて。初めてなんの被害もなく^{しの}凌いだ。私の胸には、まだ4個

の薔薇が残っている。残り時間はあと、五時間半。前半のペースでいけば、私はきつとこの試験をクリアできない。

でも……私は最後まで諦めない。私だって、やればできるのだとそう証明したかった。他の誰のためでもない、自分自身のために。

今までは、レベツカ先輩やアリアーヌの後を追いかけるだけだった。

そしてその二人を模倣して貴族らしく振舞っていた。でも、私はどこかそんな自分に見切りをつけていた。

どうせ、自分はあの二人には劣るのだと。

どうせ、自分は何もできないのだと。

どうせ、自分は偽物でしかないと。

そう勝手に決めつけて、その可能性を狭めていた。人の努力や苦しみを見ることなく、その上澄みの綺麗な部分だけを理解した気になって、自分に絶望している。

それがアメリカンローズの本質だった。

でも……きつと違うんだと思う。

二人とも自由に生きている。貴族の重圧を受け止めた上で、それを驕りにするのではなく、誇りにして、その道を進んでいる。

去年はレベツカ先輩のマギクス・シュバリエ魔術剣技競技大会での決勝戦を実際に見て、そして勝利した姿を見て、これこそがあるべき三大貴族の姿なのだと……そう思っていた。

でも、後から調べてみるとレベルッ力先輩は新人戦では二回戦負けをしているようだった。

きつと努力したんだと思う。自分に見切りをつけないで、まだ先に進めると信じて、一年後にその頂を勝ち取ったのだ。いたなき

また、私はアリアーヌとは同い年だった。だから、魔術剣技競技マギクス・シユ大会では敗北するしかないと思い込んでいた。彼女にはずっと劣等感を覚えていたから。

昔は仲が良かった。親友だった。でも、違和感を覚え始めた私は距離を取るようになった。アリアーヌのその姿に、嫉妬してしまうから。

自分は貴族としての在り方も、魔術師としての在り方も、アリアーヌよりも劣っていると分かっていたから。

あの自信を持った姿に憧れた。自分も彼女のようになりたいと、そう焦がれた時もあった。だが私は決して彼女になることはできなかった。

次いで、レイの様になりたいと願った。

でも……私は私でしかなく、何者になることもできない。

今の私ならば……それがどうしてか、よくわかった。

そして……私もやれるのだと、あのレイ＝ホワイトの攻撃を防いだのだと、その自信が私の中に目覚めつつあった。

残り時間は五時間半。

やれる。私は、やれる。

そう思って、ぐちゃぐちゃになった髪を再び適当にヘアゴムで結びつけて、顔に付着した泥を軽く払う。

ここまで来てしまえば、自分の体裁などどうでもいい。ただこの薔薇を守りきる。それだけだ。それだけが、今の私の成すことだ。

そして私は再びこの森の中でレイと相対し続ける。

制限時間が終わりを迎える、その時まで。

「はあ……はあ……はあ……！！　う……ぐ……はあ……はあ……はあ！」

どれだけの魔術を使ったのだろう。どれだけの気力を振り絞ったのだろう。

もうすでに日は暮れつつあり、たそがれとき黄昏時の光が私たちを支配する。

もう汗で体はぐちゃぐちゃだ。髪の毛も泥まみれで、この身体中は傷だらけ。出血をなんとか抑えるも、この痛みが止まることはない。それにレイに投げ飛ばされた時の痛みも、まだ鈍痛のように残っている。おそらく内出血をしているのだろう。レイは容赦などし

なかった。全身全霊を持って、私たちは相対している。

そして彼は……ただ淡々と、私の心を削るように行動を繰り返す。
分かっているのだろう、私のその心の弱さを。

見抜いているからこそその戦い方だ。

でも私はなんとか食らいついて行く。今では無事に戦闘を終えることも多くなっていた。おそらく問答無用な殺し合いならば、一瞬で終わっている。でも私はこの薔薇を守りさえすればいい。徹底して護りに徹すればいい。

攻撃もするが、それは牽制。私がすべきことは、無事に制限時間を迎えることなのだから。

そしてレイの目に焦りがあるのも、少しだけ分かってきた。

でもそんな私は……満身創痍だった。もう諦めても誰も文句は言わないだろう。ここでおとなしく残りの薔薇を散らされても、私は満足していただろう。

ここまでやったのだから、もう十分だ。今までの私なら……そう、思っていただろう。

「……」

「はあ……はあ……諦めない……絶対に諦めないッ!」

振るい立たせろッ!

己を鼓舞しろッ！

肉体は限界じゃない。私はまだ動ける。でも、この心が負けを認めればそこで終わってしまう。だから私は振り絞る。自分の心を奮い立たせる。

もう時間はどれだけ残っているのか分からない。最後の一時間を切った瞬間から、レイの攻撃が止むことはなかった。

私に残っている薔薇は2つ。これを守り抜けば、私は無事にこの訓練を終えることができる。

ここまで来て諦める？

そんなバカなこと、できるわけがなかった。

もう……もう、自分に見切りはつけない。

変わりたいと願った。

この学院に来て私は掛け替えのない友人と出会い、そして本物になりたいと願った。

だから私はそれになる。いつかこれからではなく、今のこの瞬間に私は生きているのだから。

「ッ！」

「……終わりだ」

瞬間、彼の手が私の胸に伸びてくる。本当に最後の最後の攻防。惚けていたわけではない。でもこの時間帯になっても、レイのスピードは依然として変わることはなかった。確実に仕留めるために、その右手で私の薔薇をもぎ取ろうとしてくる。

どうする？ どうすればいい？ 高速魔術？ いや、間に合うわけがない。それにもう魔術を使うだけの気力もほとんど残っていない。

体術？ いやそれもこの距離まで来てしまえば……無理だ。

どうすれば、私はどうしたらいい……負けるのか？ ここで私はいつものように……自分に屈してしまうのだろうか。

そんな思考が過ぎるも、その刹那……不思議なことが起きた。

「む……」

「え……」

ふと見ると、蝶が……1匹の蝶がふわふわと浮いていた。でもそんな存在は今までなかった。でも私とレイの間には、間違いなく赤く燃えるような一匹の蝶がいた。唐突に、意識の間を縫うようにして現れた存在。

まるで時が止まったような感覚。

私とレイはただ止まった時間の中で、それを見つめていた。

第49話 きつと私は、ここにいます

時が止まったかのような感覚。

いや、それは比喩表現に過ぎない。だって、その蝶は私たちの間を悠然とひらひらと飛んでいたのだから。黄昏時の光に照らされて、真っ赤な蝶はその色をさらに濃くしていく。

これは一体なんだ？ 何が、何が起こっている？

これがこの森に生息している蝶だとは思えなかった。それはレイが静止していることから明らかだろう。それに彼は私の動きをじっと見極めている……そんな感じがした。

ならばこれは、チャンス好機だッ！！

だがそう思ったのは、私だけではない。レイの右手は再び私の胸に迫る。この距離感で、このスピード。あの蝶のことは分からないが、レイの取る行動は迷いがなかった。このままでは……挽き取られてしまう。残っている二つの薔薇が彼の手に渡ってしまう。

今のままでは……間に合わない。

レイに教えてもらった体術も、魔術も、どちらも間に合うことはない。

「……うわあああああああッ！！」

その時取った私の行動は自分でも意識してのことではなかった。

ただ負けたくないという想いから私は……レイの右手に噛り付いていたのだ。私が取るべき行動は、なんとか時間を……時間を引き延ばすことだけだった。だから今はこうするしかない、私の無意識が判断を下したのだ。

「ぐッ……！！」

そう声を漏らすレイ。流石にこれは予想していなかったのか、レイの反応は遅れてしまう。もちろん私も噛み付いたこの右手を離すわけにはいかない。それに次にやってくる左手のカバーもしなくてはならない。

「んんんんんんんッ！！！！」

無我夢中だった。

そしてその蝶がひらひらと私とレイの間に再び飛んてくる。

これはきつと……。

そして次の瞬間、その蝶が爆ぜた。

私はなぜかそのことを理解していたので、とっさに体を庇うようにして後方に吹っ飛んでいく。受け身を何とか取りながら、そのままゴロゴロと転がって行く。

一方の流石のレイも防御は間に合わなかったのか、後方へと吹き飛ばされていく。しかし流石に受け身を取るのは早い。焦げ付いている体など気にせず、互いのその双眸が交差し合う。

もうあの蝶はいなかった。あれは一体なんだったのか。

でも、そんなことはどうでもいい。時間よ、早く、早く過ぎてッ！！

タンパク質が焼けた特有の匂いが鼻腔を刺激してくる。おそらく私の髪の一部が焼けたのだろう。でもそんなことはどうでもいい。今はただ、レイの姿を見失うわけにはいかなかった。

そう集中していると……。

ドクン、と心臓が跳ねる。

それは何なのか。徐々に私の身体は熱に支配されていく。

熱い。ただ、ただ、熱い。

身体を内側から灼かれていくような感覚。

でもどうしてだろう。痛覚はなかった。

そして次の瞬間、大量の真っ赤な蝶たちが顕現する。それは、私の周りを飛び交っている。ふわふわ、ヒラヒラと揺蕩たゆたうように飛んでいる。

これは、私が生み出したのか？

でもこれは一体……何なのだろう。

その時の私は完全に惚けていた。もちろんそれを見逃すレイではない。彼はそのまま大地を駆けてくると、一閃。

ああ。そうか。

結局、負けちゃったか。

でも不思議と後悔はなかった。私は全力でやり遂げた。今持てる自分の全てを持って挑んだ。諦めたくはない。絶対に負けたくはない。そう思っではいても、現実是非情だ。どれだけ想いが強くても、届かないことは、叶わないことはあるのだ。

そして彼の振るうその剣が、私の薔薇に達しようとした刹那……それは起きた。

「え……」

そう。それは、ありえない現象。理解できない現象。でもそれは目の前で起こっている。

私の胸の薔薇はまだ散ってはいなかった。ただ身体から溢れ続ける真っ赤な蝶がそれを防いだのだ。何百匹という蝶がまとまり、その剣戟を受け止める。

ツーンと、鼻血が垂れる。でもそれを拭うことなく、ただ意識を落としていく。深海の底に沈むような感覚。深く、深く、この意識

が沈んでいく。

私の世界は暗闇に支配されていく。でもそれは、悪いものではないと直感的に理解していた。これに身を委ねればいいと、分かっていたから。

「あ……」

そして、私は自分の能力の片鱗なのだと唐突に理解した。そこから先は彼と互角、いや私が圧倒する時間がやってきた。

ただただ、二人で舞う。

この森で、この黄昏の光に身を包まれながら、私たちは戦い続けた。先程までは早く、早く終わって欲しいと願っていた。でも今は終わらないで欲しかった。

今、この世界にいるのは彼と私。たった二人で、世界の中で舞踏を舞っていた。舞い続けていた。まるでこの世界にいるのは、私とレイだけのように、二人でお互いの演舞を披露し合うかのように戦い続ける。

ああ。そうか、そういう事だったのか。

悟る。そして、私は自分が至るべき場所を理解した。そうか。レイが示していた場所はすぐそこにあったのだ。

そして、永遠に続くとも思われた時間は、終わりを迎える。

「……アメリカ。おめでとう、時間だ」
「え……？」

そう言われて、私はピピピピという機械的な音になっているのに気がついた。

いつの間に……？ レイが言わないと気が付かなかった。それほどまでに、私は最後の攻防に没頭していたのだ。

「お……終わったの？」

「……ああ。終了だ。そして君の胸に残った二つの薔薇。それが成果だ」

よく見ると、レイの手には私の歯型がくつきりと残っていて、そこからはポタ、ポタポタポタと血が滴ってくる。地面に滴るそれを見て、私は自分が何をしていたのか、改めて理解した。

そうか。私は最後にレイに噛み付いていたのか。そして互いに焼け焦げた服に、髪も少し焼けている。おそらく、この顔も酷いものになっているだろう。それはレイを見ればわかった。咄嗟とつさに防御することもなく、あの爆発をともに受けたのだ。

我ながら、ものすごいことをしたものだ……。

「あ……その……む、夢中で……ご、ごめんなさい……」

「いや構わない。お互い様だ。それにあの蝶もな……」

「あ……う……うん……でも、ちょっと……その無意識の行動で……」

あの蝶……という彼の声はかろうじて聞こえる程度だった。今の私はそれはどうでもいいと思って、さらに会話を続ける。

「……俺はアメリアの心を折るつもりで行動していた。初めから薔薇を大量に奪うのではなく、じわじわと追い詰めるようにして最後の戦いまで持つて来た。アメリアを今まで見てきた俺は、確実に勝てる戦いを仕掛けていた。俺としては十七時あたりには決着をつけることができると思っていたが……完敗だ。俺は今出せる全力で挑んだ。でも、勝ったのはアメリア。君だ」

「あ……え……う……そ、その……」

うまく声が出ない。

そしてホツとしたのか、腰が抜けてしまう。

思えばどうしてここまで頑張ることができたのだろう。

心が折れそうな時も幾度となくあった。何度も何度も、折れそうになった。でもその度に自分を振るい立たせていたのは、自分でもよく分らない。

だがそれは、レイに見捨てられたくない。失望されたくないという後ろ向きな気持ちではなかった。

ただ全力でこの戦いに向き合っていただけだった。

自分に負けそうになりながらも、挫けそうになりながらも、私は……ここまで来たのだ。もう嫌だった。自分に失望し続けるのは。

ここまで色々な葛藤を抱えてきたのだから、最後までやりきって

みたい。そう思い始めて、最後はもちろん……意地だった。

ここまでできたのだから、何が何でもクリアしてやると。レイと過ごした時間は決して無駄ではなかったのだと。脱走する時も、嫌がりながらやる時も、叫び声を情けなくあげることもあった。

でもその日々は、私と彼の本物の日々であつたと。

私は証明したかった。

自分のためだけではない。私のために尽くしてくれたレイのためにも、私は……この修了試験をクリアしたかった。

決してそれは後ろ向きな気持ちではない。レイに見捨てられたくないのではない。

レイの努力に報いたいと、そして自分もまた変わりたいと……ずっとそう願いつけてきたのだから。きっと私は、レイがいなければここまでたどり着くことはできなかった。

表面上では、自分に辟易していた。でもレイと出会って、自分も彼のように……レイそのものになるのではなく、彼みたいに強くなれるのだと。

アメリカとして、その場所にたどり着くのだと。

そう願った果てが、今だった。

ふと振り返って考えてみると、私はここまで来ていた。こんなところまで来ていた。短い期間だった。

でも私にとっては、今までの空虚な時間に比べれば、人生の中でも最も濃密な日々だった。彼と過ごした日々は……私にとっての、本物だったのだ。

そんな私は……やり遂げることができたのだろうか。

「さてアメリカ訓練兵。最期の時だ」
「……れ、レンジャー！」

私はそう言われて、もう何度目か分からないその言葉を言いながら、なんとか立ち上がる。その際には、レイが手を貸してくれた。彼のその分厚い手を握って、私は知った。

本当に……本当に私は、やり遂げたのだと。今まで色々あった。本当に色々な気持ちが混ざり合って、葛藤して、ぐちゃぐちゃになりそうになりながらも、ただ光を求めて走り続けて来た。

別に偉大な何かを成し遂げたわけでも無い。ただ一人の愚かな少女が、何かを手に入れただけ。別に、この広大な世界にとっては特別なものではない。

でも今の私の中には、確かな充実感があつた。

私にとってのこの戦いは、今までの努力は、今。たった今。特別なものになったのだ。

過程が結果を決めたのではない。結果が、私の過程を色鮮やかな

ものに変えたのだ。

二人で過ごした日々が、彩り鮮やかに変化していく。

そんな不思議な感覚に、私は浸る。

ああ……私は、たどり着けたのだろうか。

「アメリカ訓練兵ッ！ エインズワース式ブーツキャンプ修了であるッ！」

「レンジャーッ！」

「そしてこれがレンジャー記章だ。もちろん正規なものではないので、俺の手作りだが」

「ありがたく頂戴いたしますッ！」

そして私はそのレンジャー記章を受け取る。

薔薇をモチーフにした、真っ赤なバッジだ。ちょっと歪なところもあって、レイが色々と考えて作ってくれたのだと分かった。本当にどこまでも優しい人だと、私はそう思った。

それを受け取ると、私はそれを胸につける。

レイはそんな私の姿をじっと見つめると、フツと笑う。その顔は先ほどまでの、戦っていた時の冷たい表情ではなかった。いつものように、暖かさのあるレイの顔だった。

そして彼は、優しい声音でこう告げる。

「おめでとう。アメリカ」

「うん……うん……」

「よく頑張ったな」

「うん……」

ポロ、ポロポロと涙が溢れてくる。

「辛いこともたくさんあっただろう」

「うん……大変だったよお……辛かったよお……」

そして決壊する。

私は完全に涙を流していた。それに、鼻水も大量に出て来ている。ぐちゃぐちゃだった。もう私の顔は完全に涙と鼻水で塗^{まみ}れている。焼け焦げた服に、髪。泥だらけの顔に、涙と鼻水でそれが混ざる。

みつともない。ああ……本当に情けないとも。

でもそんなことを気にするほど、今の私は冷静ではなかった。

ただただ、嬉しかった。そこには確かな達成感があった。

この心が満たされる感覚はなんだろう。私は自分の求める私にたどり着くことができたのだろうか。

「改めて言おう。おめでとう、アメリカ。万全を期して、魔術剣技^{マジクス・シュバリエ}競技大会に臨んでほしい。大丈夫だ。これほどの過酷な訓練をこなしてくる生徒などいやしない。自信を持っていい」

「うん……うん……」

涙でもう前はよく見えない。でもレイは今まで見てきた中で、一番優しそうな表情をしてこう告げる。

「……アメリカ。君は自分が思っているよりも強い。俺はずっと信じていた。期待していた。そして、アメリカはこの訓練を乗り越えた。だからもつと、自分を誇っていい。肯定していいと……俺は思う。君が過ごしてきた日々は、本物だったんだ……」

そう言つと、レイは私の両手を包み込むようにしてギュツと握ってくれる。その確かな暖かさを感じて、もう我慢など……出来なかった。

「うん……うん……！　うわああああああ！　私、私やったよおおおおおおおおお！！　頑張ったよおおおおおおお！！」
「ああ……よくやったとも。アメリカはすごい……素直に脱帽だ。だから、今日は泣いてもいい。俺が全てを受け止めよう……」
「うわああああああああああん！！」

私はレイに抱きついて、そのまま外聞など気にせずじただただ泣いた。

涙を流し、鼻水を垂らし、情けなく声を上げる。でもそんな私を、レイは優しく包み込んでくれる。

人生で初めてのことだった。今まで涙すら出ることにはなかった。ただ無感情に、どうしようもない自分に辟易していただけだ。

でも私も、ほんの少しかもしれないけど……前に進み始めたのかもしれない。

この短かったようで長かった訓練を私は乗り越えた。

諦めたい日も、全てを投げ出したい日もあった。後ろ向きな気持ちで続けていたけれど……でも今は、人生で初めて自分で何かを成し遂げたという嬉しさと胸がいっぱいだった。

まだ私は、籠の中の鳥だ。

でも、それでも、少しだけ立ち上がることはできたのかもしれない。今まではただその籠の中で蹲^{すくま}るだけだった。でも今は……今の私はやっと、立ち上がることができていた。

そして前を向いて、この広大な世界に向き合って行くのだろう。

きっと何者にもなれない私へ。私はそこにいますか。

うん。私はここにいる。彼の暖かさを知りながら、自分の涙の暖かさを、私はもう……知っているのだから。

きっと私は、ここにいます。

確かに、ここに、この場所に、存在している。

友人たちと、そしてレイが生み出してくれたアメリカンローズという存在を、この心に刻みつける。

私は進み始めた。

今日この瞬間に、たった一歩だけ、進んだのだ。他の人に見

れば、些細な、どうでもいいような、ごく当たり前の一步かもしれない。

でもそんな些細な一步が、私にとっては本当に大きな一步になった。

こんな私でもちゃんと前に進めるのだと。今日、たった今、知ることができた。

だから、自信を持って挑もう。

多くのライバル達が待っている、魔術剣技競技大会に。マギクス・シュバリエ

その先にある、本物の自分を求めて私は進み続ける。

彼が与えてくれたものを、この心に刻みながら。

第50話 マスキュラーモンスターズ

アメリカとの訓練も終了し、俺は少しでも自分の時間を持てるようになっていた。もちろん、運営委員とアメリカ応援団、それに売り子の件はすでにできることは終わっている。

そんな俺がやってくる場所は、ただ一つだった。

「
……」

俺とエヴィは、ある場所を目指していた。今日は魔術剣士競技大会^{マギクス・シュバリエ}を三日後に控えた日だ。

また夏休みでもあるが、学院はいつものように賑わっており、食や購買なども機能している。

そんな中で俺とエヴィが向かうのは、もちろんあの場所に決まっている。

「レイ、それにエヴィも来たか」

「はい」

「お世話になります」

更衣室の前で、部長が腕を組んで体を壁に預けていた。

その圧倒的なバルクは何よりも目立つ。そして俺たちは更衣室に

入り込むと、環境調査部のみんなと合流する。

『…………』

全員黙って、黙々とトレーニングユニフォームへと着替えを済ますと、部長がこう告げた。

「よし、今日もいけるな？」

『おうっ！』

野太い声を全員であげると、俺たちは肩で風を切りながら聖地を目指すのだった。

「おい、この気配…………」

「ああまさか…………」

「来たのか…………」

「ゴクリ…………奴らか…………」

室内に入り込む。そこは学院の中でも一番新しい施設。それはちよつと夏休みが入ったと同時にできた場所。

それは…………ジムだった。そこにはあらゆる筋トレのための器具が備えてある。自重でのトレーニングはやはり負荷に限界がある。より高みへのバルクを目指すのなら、専用の機械でのトレーニングは欠かせない。

ということで、部長が生徒会長に去年直談判したらしい。

数多くの署名を集め、筋肉を愛するトレーニーのために、この場所を作り上げたのだ。俺たち環境調査部の部員は、その場所を尊敬

と畏怖を込めて『聖域』と呼んでいる。

「圧倒的なバルクだ……」

「やはりこの学院の頂点は違うな……」

「ああ、流石は圧倒的筋肉集団だ」
マスキュラーモンスターズ

俺たちが中に入ると、そんな声が聞こえてくる。

俺たちはちょっとした有名人のようで、この場所では特に素晴らしい。そして環境調査部のメンバーのことを圧倒的筋肉集団と呼称しているらしいが……ふ、悪くない響きだ。

「やあ部長」

「どうも。お世話になります」

部長が握手をするのは、このジムを取り仕切るトレーナーの一人だ。なんでも元環境調査部出身らしく、部長のコネでここにいるのだとか。

そして部長に負けず劣らずの圧倒的なバルク。そのはち切れんばかりの大胸筋。肩には丸々とメロンがそのままあるようであり、脚のカットもとてつもない。

ゴクリ……と生唾を呑み込む。

ここはライトな層もくるが、俺たちのような本気の層もやってくる。それに今は、魔術剣士競技大会間近。マギクス・シュバリエということ、出場する選手が調整などに使ったりもしている。

「よし。各々トレーニングを開始しろ」
『了解っ！』

俺たちはそのまま蜘蛛の子を散らすようにして散開。

そして俺とエヴィが目指すのは、ベンチプレスである。昨日は徹底的に脚を二人で鍛えたので、俺たちは今日は上半身の日となっている。

「よし、今日はどれくらいでいくんだ。エヴィ」

「まずは軽く100でもいくか」

「了解した」

ベンチプレスは、ベンチに寝た状態で上にバーベルを上げる種目である。主に、大胸筋、上腕三頭筋、三角筋などを鍛えることができる。そして念のために、俺が補助に入る。

二人でバーベルに重りを追加して行くと、100キロのバーベルが完成。

「……ふんっ！！」

それをエヴィは難なく持ち上げる。

「いけるー！ いけるよー！」

「ふんっ！！ ふんっ！！」

「へい！ カモ、カモ、カモ！ ワンモアー！！」

「ふんっ！！ ふんっ！！」

「オッケイ、ラストー！」

「ふんっ!!」

エヴィはあつという間に十回三セットをこなす。上腕と大胸筋もパンプアップしているようで、彼の筋肉ははち切れんばかりになっていた。

「ふう……さて、レイもやるか？」

「ああ」

「重さは？」

「俺も100でいこう」

「オッケ」

エヴィが使い終わったベンチをタオルでささと拭くと、俺はそのままそこに寝そべる。すると他の生徒が俺の方をじっと見ているのがつく。何やら話しているようだが、詳細までは聞こえないが……。

オーディナリー

「おい、あれって一般人だろ？ あんな細い体で100なんかいけるわけないだろ」

「馬鹿野郎!!」

「……え？」

オーディナリー

「一般人ではない。あれはこの学院のバルクの頂点に立つ、圧倒的筋肉集団の一人だぞ」

マスキュラーモンスターズ

「ま、圧倒的筋肉集団……？ ゴクリ……」

オーディナリー

「そうだ。彼はもう、枯れた魔術師でも一般人でもない。トレーニの極地である、圧倒的筋肉人なのだから」

マスキュラーモンスター

「そ……そうなのか？」

「見ている。その真価がこれから発揮される」

なにやら盛り上がっている二人の生徒がいるようだが、俺はすで

に準備に入っていて、完全にその声は聞こえなかった。

「あ、レイ。お前脱いだほうがいいだろ」

「ああ……そうだったな。このままだと服が破れかねない」

俺はベンチからスツと退くと、そのまま上半身の服を脱ぎさる。

「なあ……！？」

「理解したか？ あれが、マスキュラーモンスター 圧倒的筋肉人たる所以だ」ゆえん

「何……だと……？ あの圧倒的な筋肉を隠していたのか……？」

「だがまだ細身であることに変わりはない。一見すれば、細マッチョだが……」

「まさか、まだ上が？」

「そうでなければ、マスキュラーモンスター 圧倒的筋肉人になることは不可能だ」

体を軽くほぐすと、再びベンチに寝そべって……エヴィの補助の元、俺は一気にその100キロを超えるバーベルを悠々と持ち上げる。

「ふんっ！！ ふんっ！！」

「お、いいぞー。でもゆっくりな。レイは慌ててやる癖があるからな」

「おつとすまない。そうだな。より大きな負荷をかけるためにも、ゆっくりやるとしよう」

エヴィに注意されてしまったので、俺はゆっくりとこの100キロのバーベルを持ち上げるが……ふむ。やはり少し重量が足りないか。今度はもっと重いものから始めよう。

「なあ……！？ 何だあれは……！？ でかい、でかいぞッ！！」

「そうだ。あれこそが、マスキュラーモンスター圧倒的筋肉人。その中でも異彩を放っているのがレイマスキュラーモンスターⅡホワイト。圧倒的筋肉集団の中で、最も華奢きやしゃなアイツがなぜ……？ と疑う者もいる。しかしあれを見てしまえば、納得するだろう。奴は圧倒的に着痩せするタイプ。さらに、筋トレを開始すると異常なまでにパンプアップする特異体質。いや、それは本人曰く魔術的要素もあるらしい。その魔術の名は、メタモルフ・オレイザイド変態。内部コードを極めた到達点らしいが……真偽は謎だ。なんでも自由自在に肉体を変化させることができるのか……な」

「お……恐ろしい……この学院にこんな化け物がいたのか……」

「ああ……あのまま、ウィザード枯れた魔術師や一般人オーディナリーとバカにし続けてみる」
「……まさか」

「ああ。ペシャンコさ。彼が缶ジュースを捨てる際に、それを片手で圧縮したのは有名な話だ。いや、指先で潰したとか何とか……それにまだまだ、ポテンシャル潜在能力はあるようだ……」

「なるほど……これはとんでもない……化け物だな……」

「ああ。だからこそ、ウィザード枯れた魔術師や一般人なんて名称でくるべきではない。あの圧倒的なバルクは全てを凌駕する。だからこそ、マスキュラーモンスター圧倒的筋肉人という称号が与えられているのさ……」

「レイⅡホワイト……只者ではなかったか……俺も認識を改めよう」

そしてエヴィと二人で交互にベンチプレスを行い、今日のノルマを達成した。途中でなにやら熱弁している二人がいたようだ、その視線はなぜか熱いものに変わっていた。

まあ、筋肉を愛する者に悪い奴はいない。きっと、俺たちのバルクの噂でもしてたのだろう。

そして二人で持参した水筒で水分補給をしていると、ちょうどこの場にやってきたのは……アルバートだった。

「ベンチ、いいか？」

「アルバート。久しぶりだな」

「ふ、レイも圧倒的なバルクのような」

「ああ。しかし、魔術剣士競技大会の前に追い込んでいいのか？」

「魔術剣士競技大会の前だからこそ、ルーティーンを崩すわけには
マギクス・シュバリエ
いかない」

「そうか。エヴィ、二人で補助をしないか？」

「お！ いいぜ！」

「ふ……助かる」

アルバート「アリウム」。

以前は色々であったものの、最近は親交が割とある。そんな彼は迷っていた。魔術剣士競技大会の校内予選を勝ち抜き、どうすべきかと迷っていた時に……俺はこの場所で彼と出会った。

そして俺は自分のこの圧倒的なバルクを彼に見せると、アルバートはこういった。「そうか……俺に足りないのは筋肉だったのか」と。

俺はそこから力説した。魔術剣士競技大会で勝ち抜くためには魔術的な要因も大事だが、基本的な身体能力も上げる必要があると。

彼はその言葉を噛みしめるようにして頷いていた。

他人のアドバイスをしっかりと聞けるようになり、彼は今となつてはそれなりのバルクを手に使っていた。もちろん、歴の長い俺とエヴィにはまだ届かないが……きっと彼もまた、いつか圧倒的筋肉集団に匹敵するほどの筋肉をつけるのかもしれない。

「アルバート、何キロでいく？」

「そうだな…… 80で頼む」

「おうよ！」

そして俺とエヴィでささつと重りを再度調整すると、アルバートの筋トレの補助を開始する。

「ふんっ！」

「いいぞ！ カモ、カモ、カモ！」

「ふんっ！」

「へい、ワンモア、ワンモア！ いける、いける、いける！！！」

「ふんっ！ ふんっ！」

「よし、おっけいー」

ガシャとセーフティーバーにバーベルを乗せるとちょうどいい具合にアルバートの大胸筋と上腕筋がパンプアップしていた。

「ふ…… 今日もいい筋トレだった」

「そうだな。期待しているぞ、アルバート。大会当日はその筋肉の成果を見せてくれ」

「ああ」

「俺も期待してるぜ！！」

「レイ、エヴィ。いつも助かる」

そして俺たち三人はすぐ隣の休息所へ向かうと、それぞれが飲み物を手に語り合う。

「アルバート、調子はどうだ？」

俺がそう尋ねると、彼はフツと笑いながら答える。

「正直なところ……震えが止まらないな……」

向かい合うようにしてベンチに座っている俺たち。そして彼の手は震えていた。俺とエヴィはなんて言葉をかけるべきか分からなかった。でも……ここは何かを言うべきだろう。そう思っていると、エヴィが口を開く。

「俺は知ってるぜ。アルバートは、ここが開いてから毎日来ていただろう？」

「ああ。エヴィに世話になったことも多かったな」

俺は色々と他にもやることがあったので、頻繁にこのジムに顔を出していないが……どうやら、二人はすでに交流があったらしい。

「強さを求めて、ここまでできた。だが俺につきまとうのは、不安と焦燥だ。レイの強さを知って俺は……自分の世界の狭さを、自分の底の浅さを知った。でもどうしたらいい？ どうすれば、俺は前に進める？ そんな想いから俺はトレーニングに励んだ。もちろん筋トレもしたが、魔術的な訓練も欠かさなかった。そのお陰か、俺は校内戦でもあのアメリカ「ローズ」に一敗するだけで、あとは全勝だった。でもな……この不安感はまだ拭えないんだ……」

出場する選手の気持ちは、俺にはわからない。それはエヴィにもわからないだろう。皆が皆、それぞれの想いを持ってこの大会に臨もうとしている。

昨日のアメリカの時もそうだが、アルバートも同じだった。

彼もまた、自分に疑問を抱きながら……それでも前に進もうとしているのだ。

「アルバート。月並みな言葉になるが、その迷いもまた強さに変わる時が来る」

「……レイ。お前もそうだったのか？」

「ああ。俺も迷い、葛藤し、焦燥感に惑いながらも……ただ前に進むしかない時期があった。今のアルバートの気持ちがすべて分かるとは言わない。でもそれを飲み込んだ上で進んでこそ、辿り着ける場所もある」

「……そうか。いや、お前の言葉はやはり重みが違うな」

「俺も言わせてほしいが、この筋肉を身につけるのに……俺も色々と遠回りをして来たもんだ」

「エヴィ、そうなのか？」

アルバートは少しだけ体を前のめりにして、エヴィの話を聞く。

「ああ。アルバートの姿を見て思ったが、俺も迷って悩んで、ここまで来た。俺は別にレイほどの過去はない。でもな、それでも努力することの重要性は理解できる。だからこそ、俺は信じてる。お前の筋肉は裏切らないってな！」

「そうか……いや、二人ともに……感謝しかない。こんな戯言たわごとに付き合ってくれるとは……」

「いや、構わないとも。友人とこうして話すのもまた、重要なことだ」

「そうだぜ！ それに俺たちの友情は、この筋肉に詰まっている。そうだろ？」

「ふ……そうだな。ああ、そうだとも」

気がつくともアルバートの震えは止まっていた。

別に特別なことなどありはしない。それぞれが、人並みの悩みを持って、悩みながら、不安を抱えながら、進んでいるだけだ。

でも俺たちはそれを共有できる。一人ではない。孤独にそれに立ち向かう必要はない。

なぜならば、俺たちは友人なのだから。

「大会当日は、その姿を焼き付けよう。アルバートの勝利をな」

「ああ！ 楽しみにしてるぜ！ 俺たちはちゃんとその努力を知っている。だからこそ、ぶちかましてこい！ その筋肉に自信を持って！」

「ああ……そうだな。では、また当日に会おう」

スツと立ち上がると、彼は軽く手を上げながら去っていく。

「変わったな、アルバートも」

「そうだなあ。レイに噛み付いてた時とは大違いだ」

「ああ。そして、人は変われることができる。アルバートだけではない。自分がその意志さえ持つことができるのなら」

「……ああ。そうだな」

そして俺とエヴィもまた、この場を去っていく。

大切な友人に教えられることは多い。そして俺たちはこのようにして、成長していくのだろう。互いの心に触れ合いながら 其の先に進む。

第51話 大会当日、早朝

「……………」

スツと起床する。現在の時刻は、ちょうど五時前。

俺たちはとうとうマジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会への会場入りを開始する。本日より二週間に渡って行われる、学生の中で最強の魔術剣士を決める戦いがやって来る。

アメリカは……自分自身と向き合えるのだろうか。

俺はアメリカに出来るだけのことはした。最善を尽くしたと言ってもいいだろう。でもそれは、やはり肉体面と魔術的な面でしかない。その心の内は、まだ知らない。

彼女は最後の修了試験を終えると、ただただ泣いた。

その慟哭の理由を俺は聞くことはなかった。彼女は前に進んでいる。それでもまだ、その心は何かに支配されているような……そんな気がした。だから、このマジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会で……アメリカもまた人として成長してくれたら……なんてことを考える。

彼女に踏み込むのは、それからでも遅くはない。

自分から進まなければ、意味などないのだから。

「……よし」

制服に着替えると、俺はさらに荷物をまとめる。今日の全体の流れとしては、まずは朝六時に運営委員たちで集合して、その後は会場入りして準備を整える。

そして九時より入場開始となり、十一時より開会式、十二時より試合開始となる。

さらにはその入場時間の間に、部長たちとともに焼きとうもろこしを販売することになっている。商品名は『悪魔のとうもろこし』。

俺は師匠の家に赴いた際に、大量の発注をお願いしてそれを持って帰ってきてから、部長に全て渡した。師匠も当日は観戦に来ると言っていたので、是非ともあのとうもろこしを楽しんで欲しい。

「……いい天気だな」

俺は自室を早めに出ることにした。今日は自分で作ったあの花壇の花々に水をあげてから来ようと思っていたからだ。

そうして背中に大きなバックパックを背負いながら、歩みを進めていると……その花壇の前には見知った人がいた。

艶やかな黒髪を靡かせながら、少しだけ微笑んでじつとそこにある花を見つめているのは……レベツカ先輩だった。

「レベツカ先輩、おはようございます。いい天気ですね」

「レイさん。おはようございます。そうですね、とても澄み渡った

……美しい天気です」

にこりと微笑むその姿は毅然としていて普段と変わりはない。

確かレベツカ先輩は、今日の第三試合に出場する予定だ。だからこそ、別にもう少しゆっくりしていいと思うのだが……。

「先輩は、早いですね」

「……まあ目が覚めてしまひまして」
「なるほど」

「実はちよつと緊張してまして……今まで魔術剣士競技大会には二度参加していますが、この緊張感だけは慣れません」

「なるほど……そうなのですね」

「ええ」

その絹のような黒髪をさつと後ろに流すようにして、彼女は微笑む。

いつもと変わりはない。ただ美しく、静謐に、そこに存在しているようにも思える。だがそんな人でも……緊張はするのだという。

そしてよく見ると微かに体が震えていた。

レベツカ先輩は三大貴族で、園芸部の部長も、生徒会長もしている。おおよそ、非の打ち所のない人だが……アメリカやアルバートを見て思った。やはり、魔術剣士競技大会に出場するということは
プレッシャー
大きな重圧なのだろう。

それはたとえ誰であっても、同じなのかもしれない。

「あ……あはは……ごめんなさい。ちょっと緊張というか、不安で……みつともないですね……」

「先輩。それは人として当然の反応です……ですから」

俺はゆっくりと近づくと、レベッカ先輩の両手を包み込むようにして握る。

「あ……」

「大丈夫です。運営委員でずっと先輩の試合は見てきました。月並みな言葉になりますが、あなたなら再びあの頂点に立てると……俺は信じています」

「……そう、でしょうか？」

「はい。こうして期待されるのは重圧になるかもしれませんが……」

でも俺はたとえ勝っても負けても、その姿を灼きつけますよ。だから、頑張ってください」

「レイさんは……優しいですね」

「優しい……ですか。自分も昔は、不安な時はこうしてもらったので」

「親御さんにですか？」

「いえ。自分には師匠がいるので。その方に……ですね」

「そうなのですか」

ソッと手を離す。

もうレベッカ先輩の体は震えていなかった。

空をふと見上げると、そこにはどこまで澄んだ空が広がっていた。夏特有の、どこまでも澄んでいる……そんな空だ。

それに今日は雲ひとつもない。絶好の大会日和と言って差し支え

ないだろう。」

「そ、その……一つだけ、ワガママ言ってもいいですか？」

レベツカ先輩は上目遣いで、じつと俺の双眸を見抜いてくる。顔も少しだけ赤くなり、恥ずかしがっているのがよくわかるが……一体、ワガママとはなんだろうか。

「いいですよ。なんでも言ってください」

そう言つと、髪の毛をくるくると指に巻きつけながら彼女はこう言った。

「う……腕を触ってもいいですか？」

「腕、ですか？」

「力を入れてもらえるとその……嬉しいです……」

「構いませんよ」

ギュツと腕に力を入れると、おずおずと手を伸ばしてきて俺の腕に優しく触れる。

「うわぁ……やっぱりすごい筋肉ですね……」

「もしかして、筋肉に興味が？」

「あ……その……レイさんはすごいって皆さんが言っていたので、実は興味があったのです……」

「そうですか。それならいくらでも触ってください」

その要望に応えるべく、俺はさらに筋肉に力を入れる。パンプアップさせ、制服がはち切れない程度にはこのバルクを肥大化させる。

「わわっ……！　すごいです……！」

「ふふ……　そうでしょう？」

「レイさんって、やっぱり面白いですね」

「そうでしょうか」

「ええ。とっても元気出ちやいました！」

レベツカ先輩は俺の腕から目を離すと、ニコツと笑いながら自分でも力こぶを作る。もちろん、彼女の筋肉量は多くはないので目立つようなものではない。でもそう振る舞うことで、俺に心配することはないと言外に示してくれているのだろうか。

「先輩、可愛いですね」

「え！？　そ、そうですか……？」

「はい。とても可愛いらしいと、率直に思いました」

「あ……　ありがとうございます」

その振る舞いが、俺は純粹に可愛いらしいと思った。そして先輩は再び顔を赤くするも、嬉しそうに微笑むのだった。

「では、自分はこれで……」

「はい。運営委員の仕事、頑張ってくださいね」

「はい！　それと、会場の前で入場開始頃にとうもろこしを販売するので、もし良ければご賞味ください」

「あら。それは楽しみです」

「自分も気合を入れて、売り子をします」

「……　ああ、なるほど。それでその荷物なのですね。それはそれで楽しみです」

互いに別れの言葉を交わして、俺は学院の正門へと向かうのだっ

た。

レベツカ先輩と会話していたとはいえ、まだ時間は五時三十五分。すでに集まっている運営委員の人もいたが、今はほとんどいない。そんな中で、俺は幾度となく見てきたツインテールを発見した。

今日は緊張しているのか、透き通るような美しい金色のツインテールがぴょんぴょんと揺れ動いている。

「クラリス、おはよう」

「あ、おはようレイ……って、何よその大荷物」

「ん？ ああ着替えとか、その他諸々だ。あとはこれから二週間はむこうに泊まり込みになるだろう？ そのために準備だな」

「あ、そう……あんたっていつも色々と規格外よね……」

「まあ備えあれば憂いなしというだろう。ちなみにこの中にはクラリスの衣装も入っている。安心してほしい」

「ああ……そうだったわね。一応サイズは合わせてあるけど……うん……」

「向こうに到着したら、早速渡そう」

「うん……まあ、そうね……うん……」

ツインテールがしゅんと下を向く。

俺、クラリス、エリサは売り子としてトウモロコシの販売を手伝うことになっている。その際にはエリサと色々と協議を重ねて、ある衣装を3つ製作した。もちろん俺も手伝った。クラリスも渋々……という形ではあったが、納得してくれた。その際にはスペシャルアドバイザーとしてある人物にも協力を仰いだ。

そして完成した衣装は……完璧なものになった。

これは本当に期待できるものになるだろう。魔術剣士競技大会も楽しみではあるが、俺はこちらの方も非常に楽しみにしていた。

「なんだか、楽しそうね」

「……む。分かってしまうか？」

「そりゃあ、あれだけウキウキしてたらね。今も目が輝いているし」「このような祭りは初めてで……正直、心が踊っている」

「なるほどね」

「クラリスは楽しみではないのか」

「いや……べ、別に楽しみにしていないわけじゃないけど……」

どうにも煮えきらない態度だ。何かあったのだろうか。

「何かあるのか？」

「いやその……友達とこうして、何かするのって初めてで……よく分かってないというか……」

「初めてなのか？ 友人は多いと言ってたが……」

「あ……そ、その……いや、もういいか……」

クラリスはふうと息を吐くと、俺の方をじっと見てこう告げた。

「……私はね、今まで友達という友達がいなかったの」

「そうなのか？」

「上流貴族のクリーヴランド家っただけで敬遠されて……私もこんな性格だし……ちょっと拗れちゃって……だからその……私も初めてのことなのよ！」

「……なるほど。見栄を張っていたのか……」

見栄を張っていた。確かにクラリスは色々と思地っ張りというか、あまのじやくなところがある。しかしそれを率直に言ってくれて、俺は純粹に嬉しいと思った。俺もいつか、彼女にも自分の過去を語るべきだろうと……その素直さにしつかりと向き合っべきだろう。

そしてクラリスはキツと俺の顔を見上げながら、こう告げた。

「わ、悪いの!!?」

「いや。本当のことを話してくれて嬉しく思う。そして俺たちは一緒だな、互いに初めてと言う点でな」

「まあ……ね。そのレイには色々と感謝してるけど……」

最後の方は完全に独り言なのか、その声はかすれるようなものだった。しかし俺は目と耳は比較的好い方なので、その声をしっかりと拾った。

「そうか。それは嬉しい限りだ」

「小声で言ったのに、聞こえたの!?!」

「耳はいいからな」

「うー……恥ずかしい……」

真っ赤になった顔に、ツインテールもピンと上を向いている。俺はそんな彼女に向けて改めて、こう言うのだった。

「クラリスと出会えたおかげで、今回のマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会はもっと楽しめそうだ」

「ふ、ふん! べ、別に勘違いしないでよね! わ、私は別に……別に……」

「別に?」

「いやその……私も楽しみなのよ！ 悪い！？」

「悪くないとも。では、一緒に楽しもうではないか！」

「う、うんっ！」

「よっしゃ、いくぞー！」

「おー！」

と云うことで、俺たちは早速、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会が行われる会場へと移動していくのだった。

第52話 準備はいいか？ オレはできてる

マジクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会が行われるのは、中央区にある闘技場である。
別名、円形闘技場。
コロッセオ

そこでは観客が囲むようにして、中央で行われる戦いを観戦する……という構図になっている。観客席は一番前が低く、後ろに下がるほど高くなっていく。

そして、一番前の観客席は抽選倍率がかなり高く、その席を確保するのは中々に骨が折れる……というのは、魔術剣士競技大会フリークのエリサの意見だったが、なんと今回は……俺たちアメリカ応援団は、一番前の席を確保できた。と言っても全員が一番前ではなく、前から三列分を確保している形だ。

もちろんこの功績は、部長のおかげだ。「何？ 席の心配だと？ ふ……任せておけ……」ということで、アメリカ応援団の分のチケットがすでに手配されていたのだ。

そうして俺とクラリスは無事に会場入りをして、現在は各学院の運営委員が集まりセラ先輩が全てを取り仕切るということで、その話を聞いていた。

ざっとまとめると、外部の人間の誘導をする係、試合の記録をする係、選手への案内をする係、試合が終わるたびの闘技場の清掃をする係などなど、思いの外色々な役割に分けられている。その中で

俺とクラリスは清掃係に選ばれた。

いや実際には、選ばれたのではなく……俺がセラ先輩に頼み込んだのだ。当日は売り子としての仕事やアメリカ応援団の活動があるため、清掃係が一番適していると。

先輩はそんな俺のわがままを聞き入れてくれたので、晴れて俺とクラリスは清掃係になった。もちろん全ての試合ではなく、清掃をする試合もすでにローテーションが組まれている。

特にアメリカの試合は絶対に応援したいので、様々な生徒の要望を加味した上でスケジュールを組んでいるとか……。

本当に先輩には脱帽する。

夏休み明けに花を買いに行く約束をしたが、その時は俺がしっかりと労おうと思っている。本当にセラ先輩にはお世話になっている。

「よし。運営委員の方はバッチリだな」

「ええ、そうねえ」

「ロックス」

円形闘技場内での運営委員の打ち合わせが終わると、俺とクラリスはある場所を目指していた。

俺たちの運営委員としての出番は、試合が始まってからなので七時である今はだいぶ余裕がある。開場は九時からで、十一時から開会式で、十二時から試合だ。

しかし俺たちにはまず、やるべきことがあった。

「はあ……なんだか、気が重いんだけど……」

「大丈夫だ。今回に際しては、プロを雇ってある」

「プロお？」

「ああ」

「あんたのことだから、きっとすごい人を雇ってるんでしょね…

…」

「いや、クラリスもすでに知っている人だ」

「え、誰よ……」

「それは着いてからの楽しみだ」

そしてクラリスと集合場所にたどり着くと、その場に環境調査部のみんながすでに設営を始めていた。

屋台を設置し、そしてダンボールに入った大量のとうもろこしに、エインズワース式秘伝のタレ。もちろん、脚付きタイプのバーベキューコンロも用意してある。

また、環境調査部だけではなく、部長の家族と思われる人もすでに準備を始めていた。

俺はすぐに近寄ると、挨拶を交わす。皆さんとてもいい人で、俺たちを歓迎してくれるようだった。ちなみに部長と同じでその体躯はかなりのものだった。

そして俺は改めて部長と会話する。

「レイ」

「はい、部長」

「これを渡そう」

「ありがとうございます」

「時間はどれくらいかかる？」

「一時間あれば、戻って来れます」

「よし。では、頼むぞ。今年の売り上げはきつと過去最高になる。そしてその流れは、お前たちが作るのだ」

「御意……」

恭しく礼をして、その場から去って行く。そして俺の隣には、クラリスとエリサが付いてきている。

「うつうつ……き、緊張するよお……」

「エリサも？」

「うん……クラリスちゃんは……？」

「わ、私もちよっと……ね。こういうのは慣れていないから……」

「大丈夫だ、二人とも。そのうち慣れるさ」

「あんたはなんでそんなに落ち着いているのよっ！」

「ふ……愚問だな。俺は次のステージに登るからだ」

「もう……あんたに突っ込むのはやめとくわ……」

ということで、俺は部長からとある紙をもらった。それはこの円形闘技場のすぐそばにある宿舍の予約チケットだ。そこは主に選手や大会関係者が泊まり込むのだが……俺たちはあることのために、その一室を確保してもらったのだ。

もちろん、それは売り子としての準備をするためである。

「あ、レイちゃん！ それに、二人とも。ヤッホー！ キヤピ」

巨大な宿舎の中に入り、そのエントランスで待ち受けていたのはキヤロールだった。いつもならば、俺は恐れ慄おののいて逃げ出しているだろう。だが今回は違う。それは俺がキヤロールに依頼をしたからだ。

俺たち三人のメイクを担当してほしいと。

「え？ キヤロール……先生」

「ああ！ レイの言ってた人って先生だったのね。でも、あんた先生と仲よかったの？ それに七大魔術師で超有名人なのに……」

エリサの方は俺の事情を知っているので、納得するのは当然なのだが……クラリスの方は妙に不思議がっていた。

まあ、そのことはいつか話す予定だ。だが、今は時間が差し迫っている。早く準備をしなくては。

そしてすぐに受付で例の紙を見せると、すぐに一階にある大きな一室に通してもらったことになった。

「さあ〜と！ みんな可愛くしちゃうぞー キヤピ」

「ああ。よろしく頼む」

部屋に入って、俺は背負っていた大きなバックパックを下ろす。

そしてその中からは準備した衣装を次々と取り出してはベッドにそれを広げて行く。また、キヤロールに用意しろと言われた化粧品の類も全て準備してある。

「じゃあ、レイちゃんは一……ある程度、自分でできるよね？」
「もちろんだ。ちなみに今回のテーマは、わかっているな？」
「もちろんだよ。ふふふ……そのメイクは私の本領だからね」
「任せてちょうだいっ！」

このアホ女ことキャラル「キャラライン」。

基本的にはアホな言動しかしないのだが、今回ばかりは本当に使える。有能そのものである。何事も適材適所だ。

これを依頼するにあたって、もちろんキャラルのやつが金銭を要求してくることはなかった。

しかし……あることを交換条件にしたのだが……俺はそれを受け入れていた。全ては、この魔術剣士競技大会を盛り上げるため。そして、みんなで楽しむために。

それならば、俺は喜んでこの悪魔に魂を売ろうではないか。

身体は絶対に売らないが……。

そして俺はすぐに化粧を始める。下地を重ねるようにしていき、ある程度整った後はビューラーで睫毛を上げてからの、マスカラを丁寧につけて……そのまま化粧の行程を続けていく。

エリサとクラリスは化粧の経験がほとんどないということとで、その全てをキャラルに任せている。

そして、俺の方は最後に綺麗にリップを引いていく。唇にしっかりとそれを塗り……ベースは完成した。後は最後にキャロルに仕上げをしてもらって終了だ。

「キャロル。俺は終わった。衣装に着替えておくぞ」
「オッケー　レイちゃんのもあとで見るね」

と、鏡の前から立ち上がり、そのままベッドにある衣装に手を伸ばす。

「ねえ、レイ」
「どうした？」
「うわっ！　す、すごい……本当に自分で出来るのね……」
「もちろんだ。この手の技術は潜入工作に欠かせないからな」
「あ、そう……うん……もう突っ込まないわよ……」

現在はキャロルはエリサのメイクをしていて、クラリスは待機している状態なので手持ち無沙汰なのだろう。そうして二人で話しながら、俺は今着ている制服を脱ぎ始める。

「う、うわっ！　急に脱がないでよ！」
「む、すまない。しかし水着の時に見慣れているだろう」
「そ……そうだけど……あ！　そういえば、女装の時の体って……あんだ筋肉と骨格を変化させる……のよね？」
「そうだが？」
「見てもいい？」
「構わない」
「ゴクリ……一体どんな風になるのかしら」

クラリスは俺の肢体ををじっと見詰めている。

ふ、俺の筋肉に惚れ惚れするのはわかるが……ここは手早くアレをしなければならぬ。

この技術は内部コードインサイドを極めたものがたどり着く一つの究極。

その魔術の名称は、メタモルフォーゼ変態。

その名の通り、生物が変態することが名前の由来だ。

そして俺は内部コードインサイドを脳内で走らせる。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コードマテリアル＝デコーディング》

《物質コードマテリアル＝プロセシング》

《エンボディメントインサイド＝内部コード》

「メタモルフォーゼ変態、発動」

刹那、俺の体がバキバキと音を立てながら変化していく。もちろんすでに女性の体へのフォーマットはコード理論の中に組み込んである。後はこの変態が終わるのをじっと待つだけだ。

そして十秒もしないうちに……完成。俺の体は女性のものに完全

に変化していた。

「う……うわぁ……」

「どうだった、クラリス？」

「なんかね……キモかった」

「ふ。そうか……」

傷ついてなどいない。

この技術は実は聖級魔術に分類されており、その中でも担い手はほとんどいない。レア中のレアな魔術。これを会得するのには膨大な時間と、血の滲むような努力がいる。でも、それは俺が言っているだけで、別にクラリスは気持ちわるいと感じたのなら……仕方ないだろう。

ああ……仕方のないことだ……ぐすん……。

「さて、と」

そうして衣装を着込んでから俺は今度はウィッグをつける作業に入って……完成した。最後はキャロルによる修正も入るが、概ねこれで終わりだ。おおむ

「ふ、ふええええ……」

「どうだ、クラリス？」

「いや、マジで……すごいわね……絶対に男だと分かんないわ……」

「ふふふ……そうでしょう？」

「うわっ！ 声変わったし！ うーん……こうなると、マジで可愛い女の子ね。というか今回は前とちょっと違うのね。普通の美人というよりも……」

「ああ。今回のテーマはギャルだ。だからこそ、可愛い系で攻めるのが定石だろう」

ということで、ギャル三人衆がトウモロコシを売ることになるのだが……果たして、その結果や如何に。

いや、結果などとうに決まっている。

俺たちの大勝利で終わるのは明白だろう。

フハハ！

第53話 ヲトコ*ドメイン

「うわゝ、みんな超可愛いよおおおお」

キャロルによるメイクが終わり、さらにはヘアメイクも完了した。そして衣装も着替えた俺たちは三人で横一列に並んでいた。

「うっ……は、恥ずかしいよお……」

「ど、どうしてこんなことに……」

「ふむ。予想以上にいい出来だな」

俺たち三人の衣装はほぼ同じだ。ロングブーツに、フリルが大量に装飾されているワンピースタイプの衣装。これは今巷で流行っている、ゴシック&ロリータというものらしい。略してゴスロリだとか。偶然、その衣装をエリサが持っていたのでそれを持ってキャロルの元に押しかけて、三人分の衣装を特注で発注してもらった。

キャロルの服飾関係の人脈はかなりのもので、今回は俺は存じ上げないがプロの中でもトッププロと呼ばれる人材に頼んだらしい。

この衣装の生地はかなり上質だとか。確かに自分で触ってみても肌触りがいい。それに今の季節はかなり日差しが強いということで、一部をメッシュ生地にしていてらしく通気性も抜群だ。

デザインはもちろん白と黒を基調として大量のフリルで飾っているが、それは決して数が多いものではなく適切な量感に調整されている……とのことだ。さらにはこのロングブーツとスカートの間に

見える生脚の部分を『絶対領域』というらしく、ここの範囲もまた厳密に設定されているとか、どうとか。

とりあえず、キャロル監修の元、完璧な三人の売り子が誕生したので。

「エリサ。大丈夫だ。いつもとは違うが、可愛いと思う。いや、可愛すぎるな……そういうメイクも素晴らしい。よく似合っている」

「ほ……ほんと？」
「もちろんだ」

俺たちのメイクはいつもよりも濃い目になっている。

今回は悪魔のとうもろこしという名前で売り出すので、それに合わせて俺たちも悪魔の衣装とまでは言わないが、少しダークな路線にしている。それぞれのメイクも濃いめになっており、特に目元はしっかりと強調するようになっていく。いわゆる、ギャルメイクもどきらしい。

だが、あまり濃すぎると印象が悪くなりすぎてしまうとのことで、そこはキャロルの技量によって可愛いの範疇に収めてもらった。

ちなみにエリサの頬にはハートマークが書き込まれており、それは俺とクラリスも同様である。クラリスに至っては右の頬にハート、左の頬に星とかなり派手めに変貌を遂げている。

だが……ふむ。自分のメイクは見慣れているので、今更どうとも思わないが……あのおとなしいエリサが本物のギャルに見えてくるのは、すごいと思う。

「うつ……どうしてこんなことに……うつ……」

と、次はクラリスが落ち込んでいるというか、緊張しているのが見て取れたので俺はすぐに励ましの声を掛けた。

「クラリス」

「な……何よ」

「大丈夫だ。君もよく似合っている。というよりも、クラリスはその路線だと本物みたいだな」

「誰が本物のギャルよっ！」

「いや俺は純粹に褒めている。いつものクラリスもとてもいいが、今日は最高に映えているな」

「さ、最高の……？」

「ああ。もちろんだ」

「ほ、本当に……？」

「ああ」

「べ、別にどうだっていいけどねっ！　ほんとよ？　そう言われても嬉しくないんだからねっ！」

ブイツと横を向いてしまうクラリス。その際にいつものようにツインテールが靡くも、今日のツインテールは一味違う。

それは毛先が綺麗に巻かれているのだ。緩やかに巻かれたそれは、どこか大人っぽい印象を演出している。ちなみにエリサは髪が短いので、全体的に緩やかなカールを入れている感じだ。

一方の俺はといえば、前と同様に栗色をしたロングのウィッグをかぶっているが、今回はそれをツーサイドアップに結っている。

以前の女装はベーシックなものであり、いわゆるプレーン状態。しかし今の俺は、段階を一つ上げた。つまり……言っている意味がわかるな？ 俺の女装はさらに輝きを増している……ということだ。

フハハ！ 完璧な布陣ではないか！！

と内心でテンションが上がってしまうのも致し方なし。それほどまでに、今回のこれは気合が入っているのだ。

「それにしても……あんた、どこまで可愛くなるのよ」

「う、うん……その、レイくんすごいね」

「ごほん。この状態の私はリリーとお呼びください。リリー」
ホワイト。それが私の名前です」

「うわっ！ マジで本当にそういう人に見えてきたわ……」

「そ、そうだね……なんか女として自信なくすかも……いや別に私はそんなにないんだけど……これはちょっとね……うん……」

三人で色々と話している間にも、もういい時間になっていた。

「ではキャロル。世話になったな」

「うん　でも、や・く・そ・く忘れちゃダメだよ？」

「ああ……それは必ず果たそう」

「やったー　じゃあみんな頑張ってね」

そしてキャロルに別れを告げると、俺たち三人は出店の場所に戻っていく……いや、出陣していくのだった。

「部長」

「ん？」

「ただいま戻りました」

「な……」

「どうしました？」

「……本当にレイ……なのか？」

「はい。ちなみにこの状態の俺のことは、リリーーとお呼びください。リリーー＝ホワイトです」

そして俺は声の調整も兼ねて、声色を変化させる。

「ごほん……声はこのように調整できますので、安心してください」

「あ、ああ……了解した」

すでにこの周囲はかなりいい匂いが充満しており、タレで焼いたとうもろこしが大量に並んでいた。ちなみに俺たちはこの二週間ほぼフルに出る予定なので、消臭対策などもしているし、終わった後は魔術による洗浄もして、次の日に望むことになっている。

だからこそ、今回は全力で売り子として活躍しようではないか！

「なあ……！？」

「ば、バカな……！？」

「あ、あり得るのか……そんな、そんなことが……！？」

「あの長身のウルトラ可愛い子ちゃんが、レイ……だと……？」

「ゴクリ……やばい。俺は新しい扉を……」

「やめろ！ 戻れ！ その先は地獄だぞ！」

と、部員の方々も大騒ぎであるし、部長の家族の方も目を点にして俺たち三人のことを見つめている。

大変に気分がいい。

これは間違いなく、トップクラスの売り上げを出すことができるだろうと俺は確信していた。

「レイ……」

「エヴィ、どうした？」

「お前……すごいな……俺の筋肉もちよっと驚きだぜ……」

「ふ、そうだろう？」

「ああ。でも三人とも可愛いから、これは完璧だな！」

「ああ！」

ちなみに俺は堂々とした振る舞いをしている一方で、エリサとクラリスはまだ恥ずかしいのか、ずっと下を向いているが……そろそろ開店の時間だ。

すでに観客と思われる人々がかなりの数存在している。そして、その人たちはこの匂いにつられて、さらには俺たち三人の装いに驚いているようだった。

集客効果は抜群のようだった。

あとは俺たちの気の持ちようである。

「エリサ、クラリス」

「う……うん」

「何よ……」

「大丈夫だ。最高に可愛い。いいか復唱しろ」

「う、うん！」

「私たちは、最高に可愛い！」

「私たちは、最高に可愛い！」

「もう一度！」

「私たちは、最高に可愛い！」

「ラストは全員で行くぞ！　せーのっ！」

「私たちは最高に可愛いっ！！」

二人の可愛い声の中に、一人だけ野太い声が入るが……俺はスツと自分の声色を再び変化させる。

「では行きますよ！　エリサ、クラリス！」

「うん！」

ということで、俺たち三人の初陣が始まった。

「いらつしゃいませ」

「とっても美味しい、とうもろこしはこちらです」

「美味しいですよ」

「コッセオ」

円形闘技場への入場が開始した午前九時。とうとう店が開店した。

それと同時に押し寄せるのは人の波。圧倒的な数のそれを、なん

とか整理して捌きつつ、俺たち三人は笑顔で接客をする。

声色も三人ともに、いつもよりもワントーン高めだ。

今はかなりの行列になっってきたのか、後方がすでに見えないほどになってきている。そのため列を二重にして対処している様子だった。ちなみに列整理は他の人がやってくれている。

なぜなら、俺たちには別の重大な使命が残っているからだ。

「え、Aセットください！」

「Aセット、まいど！ リリー、出番だー！」

「はぁい リリーちゃん、行きまぁす」

部長にそう言われるので、俺はすぐに悪魔のとうもろこしを持ってその購入した男性の元へと向かう。そして……。

「はい、あゝん」

「あ、あゝん」

「美味しいですかあゝ？」

「は、はい！ とても美味しかったです」

「よかったあゝ。それでは、またのご来店お待ちしておりますねえ」

「ひゃ、ひゃい！」

俺は購入した男性にあゝんを一口だけ行くと、すぐに持ち場に戻る。

そう。この店の販売しているメニュー。それは悪魔のとうもろこしだけではない。ドリンクなどもあるのはもちろんだが、特殊なメニューが存在する。

それは、A、B、Cセットと呼ばれている。その値段はなんと、普通のとうもろこしの五倍。もはや違法なのではないかと思うのだが、一応許可は出ているらしい。

そしてAセットは俺があぐんをして、Bはエリサ、Cはクラリスだ。

そしてメニュー表には、こう表記されている。

『Aセット：長身美少女が甘々に癒します』

『Bセット：ちよつとたどたどしいけど、天使の癒しを捧げます』

『Cセット：至上のツンデレをあなたに……（ツンとデレの量調整できます）』

俺たちはこの通りのキャラクターを演じる必要がある。発案はキヤロルのやつなのだが、これが存外上手くハマっているようで客足が止まることはまだまだないようだ。

「あ……その、あぐん。お、美味しいですか？」

「べ、別にやりたくはないけどっ！勘違いしないでよねっ！ふんっ！でも……そ、その……あんたにだけ特別よ？」

今のところ、俺への注文が一番多いが、順調にエリサとクラリスへの指名も入っている。

うむ……いいことだ。

しかし予想以上の客足、さらにはこの違法とも思える特殊セットを注文する客が多く、俺たちは休まる暇が全くなかった。

だが、今のところは全てが順調だった。

よし、俺もさらに頑張ろうではないか！

「いらっしやいませ〜 と〜っても美味しい、とうもろこしは
いかがですかあ〜」

第54話 純白のスール

「いらつしゃいませえ」

大きな声を上げながら、俺たちは集客と接客を続ける。

一番売れ行きがいいのは、Aセットだ。ということで三人の中では俺が一番働く形になっている。もちろん現在は大量のとうもろこしが出ているので、部長たちの作業量も半端ないことになっている。

魔術によつて、溢れ出る煙を何とか後ろの方に邪魔にならないように流しながら、全員で懸命に作業を続けている。そろそろ汗もすごいことになってきたが、タオルでふき取りながら笑顔は絶やさない。

なぜなら俺たちはプロフェッショナルだからだ。

俺の女装はすでに口コミで広がっており（もちろん女装とはバレていない）、それにエリサやクラリス目当ての客も増えつつある。

もはやこの行列が止まることはない。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会の開会式はあと一時間を切った。だというのに、客足が止まることはない。むしろその勢いを増すばかりだ。おそらくこのまま行けば、今日の分の在庫切れになることは間違い無いだろう。

灼熱の日差しが容赦なく肌を照らしつける。だが我慢だ。美は我慢。キャロルにそう言われた俺たちは、耐え続ける。エリサもクラリスも我慢して続けているのだ。

ここで俺が引つ張らないでどうする……！

「お、応援してます！」

「ありがとうございますう」

なぜか俺は、現在売り出し中のアイドルかモデルと勘違いされ、別れ際になぜか『応援してます！』と言われることが多くなった。

俺も殊更いっしょに否定して回転率を落とすわけにもいかないので、そのまま感謝を伝えて終える。そんな中、列の中に目を引く人物がいた。

日傘を差している女性。全身は黒を基調としているワンピースの様相だが、腕と足は黒の保護スリーブで覆われていることから念入りに日焼け対策をしているのが伺えるうかが。素肌が見えている部分は、顔以外ではほとんどないほどだ。

女性としては肌に対する保護は重要なのだが……俺はなぜその女性がそこまで念入りに日焼け対策をしてるのか理解した。

そうか。これはきつと……。

接客をしながら、俺はチラッとだけその女性を再び見る。

おそらく、先天性白皮症。別名、アルビノとも呼ばれている。こ

れは先天的にメラニン色素が欠乏してしまうもので、肌だけではなく髪の色もまた純白。そして、その双眸は真紅の灼眼。

まるで、空想の世界から出てきたかのような……そんな美貌を有していた。

最近では、魔術的な要因によりアルビノが増えているという学説もある。それは内部コードインサイドが原因と言われたり、外部コードアウトサイドもまた使えば使うほど脳に定着していくので、コード理論そのものに原因があるとか、ないとか……。

実際のところ、その真偽は未だに謎である。しかし、確実に昔よりは数は増えているので珍しいといえは珍しいが、特別何か思うことがあるわけではなかった。

むしろ、この暑い中、それに日差しがきついという中でわざわざ並んでくれて、こちらとしては感謝しかない。

「ねえ、お姉さん可愛いねえ」

「うんうん。後でいいところかない？」

と、その女性の前にいる男たちがナンパ紛いのことをし始める。

その女性は……よく見ると、幼い顔立ちをしている。その風貌と真っ白な肌に、純白の髪。その姿はまさにこの世界から完全に分離しているかのように思えた。

髪型は前下がりのセミロングであるものの、前髪は斜めに切られ

て片目だけが見えている状態だ。それに髪を耳に掛けている方には、大量のピアスが目立つ。それは耳たぶだけでなく、軟骨の部分にまで及んでいる。

かなり派手な印象だが、実際には少し顔つきは大人しい印象を俺は抱いた。

そんな彼女に声をかけなくなるのもわかるが、少しでも日傘を持つ手が震えていた。ならば俺がする行動は一つだろう。

「お・きや・く・さ・まあゝ」

俺はニコニコと微笑み声を掛け、男たちはぎょつとした顔をして俺の方を向く。そしてその間に挟まるようにしてその女の子を男達の視線から遮れるように動く。

「こちらにどうぞおゝ ささ、お早くお選びくださあゝい」

「あ……はい」

「う……うん」

その二人の男性客の手を引くと、否応無く注文を促す。一方の女の子はキョトンとした表情で呆然としていた。

そして二人は俺の動きにビビったのか、エリサとクラリスを指名次にやってきたのは、その女の子だった。

「いらっしやいませえゝ ご注文、いかがいたしますかあゝ？」

「あ……あの……」

「いかが致しました？」

「あ……ありがとうございました……！」

「いえいえ。全然大丈夫ですよ」

バツと顔を上げて、そのままぺこりと頭を下げる。

そして互いの視線が交差すると共に、妙な感覚に陥る。確かにアルビノの人は珍しいのだが……誰かに、知り合いの誰かに似ている気がするのだ。

「あ……あの！ お名前聞いても……いいですか？」
「リリー」ホワイトですっ

キラツと歯を見せながら、にこやかに微笑む。そうすると、彼女の顔が真っ赤に染まる。純白の肌をしているため、その変化はとてもわかりやすかった。

「あ。じゃあ……その……Aセットで……」

「はぁーい ご指名ありがとうございます！ Aセット、入りまぁーす！」

「あいよー！ Aセットねー！」

そうしてこちらに悪魔のとうもろこしが来ると、俺は彼女の口元に向けてそれを運ぶ。

「はい、あーん」

「あ、あーん……」

パクリと彼女はそれを食べる。すると、顔がバツと花開くように綻ぶ。それはまるで一輪の花。しかしこの笑顔……どこかで見たことがあるような、そんな気がしていた。そうだ。今朝、どこかで見たような……。

「お……美味しいです!」

「そうですか? よかったですう」

今までならここで会話を終了して次の接客に向かうのだが……彼女は最後に自分の名前を告げてきた。

「あ……その、私! マリア・ブラッドリイと言います!」

「ブラッドリイ……? もしかして?」

そうだ。

言われてみれば似ている。

確かに肌色と髪の色と、その双眸の色だけをみればわからない。しかしその顔の造形をよく見ると……似ているのだ。

俺がよくお世話になっている、レベツカ先輩に。

そしてブラッドリイという姓からして間違いなかった。彼女はレベツカ先輩の妹だ。

「もしかして、レベツカ先輩の妹さんですか?」

「え!? 姉をご存知なのですか?」

「はい。私は今年度入学した一年生なのですが、とてもお世話になっていますよ」

「そ……そうですか……」

驚いたのかと思いきや、少しだけ顔に暗い影が差す。

ふむ……そう言えば、レベツカ先輩に妹がいるという話は聞いていなかった。もしかして仲があまり良くないのだろうか。しかしここで詮索するほど、俺は無粋ではない。

「あ……あの！」

「はい。どうかしましたか？」

「お、お姉様と呼んでも？」

「そうですね……構いませんよ。私もマリアさんとお呼びしても？」

「は……はい！ リリィーお姉様……」

羨望の眼差しで見つめて来るマリア嬢。この熱気からなのか、それとも別の要因なのか、彼女の頬には朱色が差していた。

「私、決めました！ 来年はアーノルド魔術学院に行つて、お姉様の後輩になります！」

「ふふ……そうですね。楽しみにしてますねっ！」

そしてニコニコと満面の微笑みを表情に乘せて、彼女は軽く手を振りながら会場へと向かつていく。

「お姉様ー！ また来ますねー！」

「はーい！ またのご来店をお待ちしておりますー！」

しかし残念ながら、来年入学してもリリィー「ホワイトはいないだろう。いや、女装する機会はまたいつかあるかもしれないが……」彼女の幻想は壊したくない。この事は心に秘めておこう。

「ねえ……」

「どうしましたか、クラリス」

「あんたって罪な女ね……」

「ふふ。そうでしょうか？」

「ええ。あの子きつと、来年の入学を楽しみにしてるわよ」

「それはまあ……仕方ないですね……」

「うん……でも儚い幻想だったわね……」

クラリスが近寄ってきてコソツとそう言っ
て来るので話に応じていると、エリサが珍しく声を上げる。

「ちょっと二人ともっ！ 忙しいんだから、雑談はダメだよっ！」

「あ、ごめん……」

「ごめんなさ〜いっ！」

「……あんたが可愛く言うのなんかムカつく！」

そして、その後暫くしてやって来たのはなんと、アリアーヌとティアナ嬢だった。アリアーヌは以前と同じように、学院の制服を着て綺麗な白金の髪を縦に巻いていた。

そしてティアナ嬢もまた今日はアリアーヌと同じ髪型だ。それに真っ白なワンピースを着ており、とてもよく似合っている。

「リリーーお姉ちゃん！ Aセット、ふたつくださいっ！」

「まあ！ ティアナちゃん！ お久しぶりですね！」

「うんっ！ リリーーお姉ちゃんは、前とちよつとちがうねっ！」

「ええ。今日はギャル仕様ですよ！」

「ぎゃる？」

「そうですね。派手で可愛い人のことですよ」

「へえ〜！ でもそうだね！ みんな可愛いねっ！」

「ふふ。ありがとうございます！」

ティアナ嬢とそう会話をしていると、アリアーヌもまた俺に話し

かけてくるのだった。でもその顔は完全に辟易しているというか、呆れているようだった。

「レイ、次会うときは……」

「……しーっ！ ティアナちゃんがいますから！」

「あ……そうですね。というよりも、私はあなたが本物の女性にしか思えませんのすけど……」

「そうですね。今はリリーちゃんですので」

「そ……そうですね。いつか本物のあなたに出会えることを願いますわ……」

そして二人にAセットを堪能してもらい、俺たちはさらに作業に勤しむ。この暑い日差しの中で休憩なしに客を捌き続ける。しかし今は、Aセットに注文がかなり殺到しているのでなんとかエリサとクラリスも頑張ることができている。

一方の俺はこれぐらいでは倒れることもないので、そのままニコニコと微笑みながらAセットを売り続ける。

そうしていると……俺はある女性を発見する。

メイド服の女性に車椅子を押してもらっているその人は……師匠だった。今日の師匠の服装は半袖のシャツにロングスカートとラフな服装である。そして、列が消化されていき、ちょうど俺の目の前にやって来る。

「レイに会いに来たんだが……もしかして、いないのだろうか？」

「師匠、私ですよ」

「……あ、は？」

「リリー＝ホワイトです。師匠に頂いた名前ですよ？」

「お、お前が……レイだと？」

「今はリリーとお呼びください」

「ば……バカな……お前のそれは……どうなっている……」

師匠の驚いた表情は本当^{かお}に久しぶりに見る。それも、本当に心から驚いているようで師匠は呆然となっていた。一方のカーラさんは俺のそんな姿を見て、ニコニコと微笑んでいた。

いつもは無表情なので、とても珍しい。それに視線は俺を見た後に、作業をしている部長たちの方にも向いていた。カーラさんの知り合いでもいるのだろうか。

そして俺はリリーのまま、師匠と会話を交わす。

「キャロルにお世話になりましたのでっ！」

「そ、そうか……しかし、変態^{メタモルフォーゼ}も上手くできているようだな……いや、出来すぎだろう……」

「今の状態でも、内部コード^{インサイド}はある程度は使えますのでっ！」

「そ……そうか。いや、第二次成長期を迎えた後のお前のそれは初めて見るが……まじか……そんなところまで、お前は天才なのか……一体どこにいくんだ……でも、そうだな。ふふ、楽しそうだなよりだ」

師匠がニコリと微笑みながらそう告げるので、俺もまた真剣な声でそれに応える。もちろん女性の声のままであるが。

「……師匠、私はあなたのおかげでこの学院生活を楽しめています。だから今後も掛け替えのない友人と共に、この学院生活を謳歌しようと思います」

「そうか……いや、レイはそういうやつだったな。どこまでも真面

目で、優しい人間だからな。私としても、楽しそうなレイの姿が見れて嬉しいさ。是非、頑張ってくれ」

「……はいっ！」

Aセットを注文したカーラさんと師匠にそれぞれあぐんをすると、カーラさんは非常に満足そうに、師匠も嬉しそうな表情かおをしてそのまま会場に向かって行った。

ふ……どうやら俺のこの技術も、師匠の予想を上回るほどになったのか。

感慨深いなど、そんな思考に耽ふけりながらさらに仕事を続ける。

「お姉様！ Aセット10個お願いします！ 上限いっぱい！」

「お姉様あ……私も、私も上限いっぱいをお願いしますう……！」

「ふ、踏みたい……っ！」

「リリーさん、僕はあなたを学院で見た日から、また会える時をずっと焦がれて待ち続けていました！」

と、ディオム魔術学院で出会った人も、噂を聞いたのか俺の元にやってくる。俺はもちろん、最大級の笑顔で接客を続けていく。

そしてそれから一時間後……。

「これで最後です。本日は完売です！ ありがとうございます
たっ！」

「「ありがとうございます！」」

と、売り子三人で挨拶をすると、『売り切れ、御免』の札を掲げる。驚異的なスピードで悪魔のとうもろこしは売れて行き……なん

と販売を始めて数時間で今日の分が捌けてしまったのだ。

「レイ」

「はい。部長」

「最高の成果だ。また明日も頼む。そちらの二人もよろしく頼む」

そのあまりにも大きな体躯が俺たち三人にお辞儀をしてくる。もちろんそれに応じないわけではない。

「任せてくださいっ！」

「う……うん！ 私も頑張りますっ！」

「しょ、しょうがないから、やってあげるわっ！」

こうしてのちに伝説となる、悪魔の屋台が生まれるのだった。

曰く、悪魔的な美味しさと、悪魔的な可愛さで客を中毒にするとか、なんとか……。その真相はその両方を味わった当人しか、理解できないという……。

そして俺たちは思っていた。この成功は、きっと後世に残るものである。しかしこの時はまだ知らなかった。上手くいき過ぎるのも、考えものだという……。

第55話 開会式

俺、クラリス、エリサはすぐに宿舎に戻って化粧を落としてから、制服へと着替えた。

ちなみに俺は部屋の浴室で着替えをしている。流石にクラリスとエリサと一緒に着替えるわけにはいけないので、配慮してものだ。

そして化粧を落としてから、衣装を脱いで制服に着替える。それから上に羽織るのは……アメリカ応援団の法被^{はっぴ}だ。もちろんこれはアメリカを応援するために作成されたものなので、基調としているのはアメリカを象徴する色である紅蓮の赤だ。

さらに、手縫いでアメリカ応援団という文字を背中にでかかど載せている。

スツと袖を通すと、なぜか氣力が満ち溢れて来る気がする。

そうか……これが仲間を応援したいという気持ちなのか……。

俺は準備も終わったのでここから出ようと思うが、その前にクラリスとエリサに確認を取るべきだろう。

「二人とも、いいだろうか？」

「いいわよ」

「う……うん！ もう大丈夫だよ！」

浴室から出るとすでに化粧を落として、制服を着ている二人がいた。もちろん俺と同様に制作をした法被を着ている。

「なんかレイは様になってるわね……」

「うん……なんかすごいね」

「それは嬉しいが、二人ともよく似合っている。大丈夫だ。俺たちはアメリカ応援団に相応しい格好をしている。自信を持って挑もうではないか！」

「まあ……あの格好を経験すれば、今更よね」

「私ももう慣れちゃった……」

そうして三人で早速、部長たちと合流しに行くのだった。

「部長。先ほどはお疲れ様でした」

「いや、こちらこそ助かった。とてもいい売り子が三人もいてくれたから、今年はおそらく一番の売り上げを叩き出すだろう。今日だけでも相当なものだからな。家族は早速明日の補充に出かけている」
「なるほど。そうでしたか」

コロッセオ

円形闘技場の入り口の側に集まって、全員が法被を着ているアメリカ応援団の衣装に扮している俺たちは、もちろん周りから注目を帯びている。

また、俺の視線の先には別の選手の応援団もいるのが見えた。

セラ先輩を中心としたレベル先輩の応援団もすでに集まっていた。それを見て、俺たち全員は自然と士気が高まって行く。

「ふ……なるほどな。他の応援団も、中々の気合いだ。しかし……」

「ええ、部長。俺たちにはこれがありますから」

ふ、と微笑むとアメリカ応援団の全員が一気にそのバルクを解放する。

「なあ……！？」

「な、なんだあいつらは……？」

「アメリカ応援団……！？ まさか、アメリカ「ローズ」の応援団は……アーノルド魔術学院の環境調査部なのか……！？」

環境調査部の全員がそれぞれ一気にパンプアップをする。そしてはち切れんばかりの筋肉によって、圧倒的な威圧感を放つ。こうする理由も特になかったのだが、すでに勝負は始まっていると言っているだろうか。

選手の士気を左右するのに、きっと応援団の力は欠かせないものとなる。だからこそ、俺たちはこの圧倒的な筋肉威を持ってアメリカを応援すると決めているのだから。

「う……うわあ……」

「す、すごいね。みんな……」

クラリスとエリサはそんな俺たちの様子をじっと見ていた。二人はアメリカ応援団の中でも数少ない女性陣だ。暑苦しい男ばかりでは華やかさに欠けるからな。それにきつとアメリカも、仲のいい友人に応援してもらって嬉しくないということはないだろう。

「よし。じゃあ行くか、お前ら」

『おう！』

そして俺たちアメリカ応援団は、中へと向かって行くのだった。

「コロッセオ」

円形闘技場の中を進んで行き、指定された席の場所に全員で向かっている途中……タイミングが良かったのか俺はちょうど彼女を見掛けた。

「部長申し訳ありません。少し知り合いと話をしますので、先に行っていてください」

「ああ、そうか。了解した」

全員がそのまま進んで行くと、俺は早速彼女に声をかける。

「アリアーヌ、奇遇だな」

「?…えつと、その……どちら様でしょうか？ わたくし、覚えがなくて……」

「俺だ。レイ＝ホワイトだ」

そしてこちらに近づいてくると、俺の顔をじーつと見つめてくる。彼女は理解したのか、パツと顔が綻ぶ。

「レイ？ ああ！ もしかしてレイですよ！」

「こちらの姿で会うのは初めまして……だな」

「先ほどはとんでもない美少女でしたから……ちょっと意外といつかなんというか……男らしいですね」

「そうか？」

「ええ。でも今まで見てきた女性の姿が焼き付いているからかもしれないわ……特に今日のはショックでしたから……」

「ふ、最大の賛辞だな」

そう。俺が出会ったのは、アリアーヌ＝オルグレンだ。以前会っ

た時と同じように、いや、今日は前よりも気合の入っている様子だった。

化粧を軽くしているのか、綺麗に整っている顔立ちに、トレードマークの巻き髪もかなりキマっている。

「それにしても、今日は以前にも増して美しいな。よく似合っていると思う」

「……分かりますの？」

「もちろんだ。大会に際して気合を入れてきた……というところだろうか」

「もちろんですわ。わたくし、アリアーヌ＝オルグレンは新人戦の優勝候補。いえ、わたくしは優勝するつもりでいますから……それ相応の身形みなりも準備していますのよ？」

「優勝か……それはどうかな……」

彼女にそう告げると、アリアーヌは気負いの様な雰囲気はないが、真剣な目つきで俺のことを射抜いてくる。

「アメリカのことですの？」

「ああ。アメリカは完全に仕上がった」

「そうですか……まあ、楽しみにしていますわ。今の私に届くかどうか、この目で見極めさせてもらいますわ」

「ふ、そうだな。しかしアリアーヌとは当たるとしたら……決勝だな」

すでにトーナメント表は発表されており、なんの因果かアメリカとアリアーヌは別の山になった。そしてぶつかるとしても、それは決勝戦しかありえない。

「わたくしはもちろんそこまで行きます。アメリカにも伝えてくださいまし。わたくしは、決勝であなたを待っている」と

「流石の自信だな」

「ええ。わたくしは自分に誇りを持っていますから」

それは慢心の類ではない。

アリアーヌ＝オルグレン。彼女は自分のことをよく理解している。だからこそ、この自信と振る舞いなのだろう。

「わかった。アメリカに伝えておこう。では、また会おう」

「ええ。また会える時を、楽しみにしていますわ」

俺はそこで、アリアーヌと別れた。

アメリカが立ち向かうべき相手は、改めて強敵だと俺は知っていた。

「選手入場です」

俺がみんなのいる席に向かうと、開会式がまさに始まったところだった。ちなみに魔術剣士競技大会では、実況と解説がつくらしく、実況は選ばれた学生が担当し、解説は教員がやるということが伝統となっているらしい。

そんな中で今は実況の生徒がこの開会式を進行をしている様だ。

そして大会に出場する選手が闘技場内へ続々と入場してくる。新人戦参加者が十六人、本戦参加者が十六人。合計して、三十二人の選ばれし選手たちが列をなしてやってくる。

その中にはもちろん、アメリアもいた。真面目な顔つきで、この数多くの観客が見守る中で彼女はしっかりとした表情かおをしていた。

アメリアのあの涙の理由を俺はまだ知らされてはいない。

それでも彼女はきつと、自分の中に何か大切なものを見つけたのだろうと思えている。

だからきつとアメリアならば……大丈夫だ。数多くの強敵ライバルたちを打ち破り、きつとその頂点に立つことができる……俺は信じている。

そうして参加選手達が入場を終えると、アビーさんが壇上に上がり開会の宣言を告げる。

「さて、今年も迎えた魔術剣士競技大会だが……ここにいる選手たちで優勝できるのはたった一人だけだ。新人戦で一人、本戦で一人、たった一つの頂を目指して、君たちには戦ってもらおう。学生最強の座をかけて、な。近年では魔術剣士の技量は非常に上がっており、この大会で見られる戦いも非常にレベルの高いものになっている。学生レベルを優に上回っているものもあるな。だからこそ、私は期待している。学生諸君、魔術を極めようと思うのなら……才能と努力だけではなく、切磋琢磨する環境もまた重要な要素となる。その意味で、この大会はきつと君たちの大きな糧となるだろう。それでは、存分に振るって欲しい。己おのが力を全力で、な……以上だ」

そう言葉を残して、壇上を降りていく。

そのまま開会式は恙^{つつがな}無く進行して行き……終了。

現在の時刻は、十一時二十分。四十分後には、ここで第一試合が開始される。本日の日程は本戦の一回戦と新人戦の一回戦が二試合ずつ行われる。

その中でも今日の最後の試合。そこがアメリアの初陣となっている。

俺たちはそこで全身全霊を持ってアメリアを応援しよう。

彼女の力になるためにも。

第56話 その先で、待ってる

夢を見る。

それはレイとの訓練を終えた時の夢だ。

あの時の光景が、幾度となくリフレインする。

レイに抱きついて、私はただ情けなく……泣いた。

そんな私を、レイは受け止めてくれた。ただ優しく包み込むようにして、彼は私の存在を受け入れてくれた。それが堪らなく嬉しかった。

私は……私になれるのかもしれない。

まだ籠の中の鳥だけど、きつと羽ばたいてゆけるのだと。そう……思っていた。

だがやはり、私と言う人間の本質はそう簡単に変わりはしなかった。

「……」

震える。今はちょうど開会式の前だった。とうとうこの場所までやってきた。魔術剣士競技大会の新人戦。マギクス・シュバリエきつと多くの人は、私がこの場所にいるのは当然だと思っていることだろう。

でも、それは違う。私は自分がここにいることを当然だと思わない。

私はこうしてここに立つことができているのは、他でもないレイのおかげだ。それでもこの手の震えが止まることはない。

右手をじっと見つめる。

ああ……どうして、どうして私はこんなにも弱いのだろう。大舞台の前に怖気付いている……そんな哀れな少女がアメリカ・ローズの本性だ。

みんなが出店を出して、楽しそうにお店をやっているのを遠くから見ていた。私は初めは挨拶に行こうと……そう思っていたけど……進むことができなかった。

あの場所は私には眩しすぎた。

それに私が歩みを進めようとした瞬間、現れたのはアリアーヌだった。

アリアーヌ「オルグレン。」

会うのはいつ以来だろう。いや、毎年パーティーで会っているけど、彼女はずっと成長していた。三大貴族として、アリアーヌはずっと進んでいる。その高みへとずっと進んでいる。

でも今の私はどうだ？

彼女は遙か高くまで飛び立つのに、私は籠の中にいる。

こうしてマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会という場所で会々と、よく分かってしまつ。きつと彼女こそが、この大会の主人公なのだと。私はただ……そこにいるだけ。何の気概も、何の誇りもなく、迷い続けている愚者が立ち尽くしているだけ。

私はそんなふうを考えながら、みんなの元を去っていく。

とても可愛いエリサ、クラリスに、それに女装したレイと話をしたかった。笑い合いたかった。きつと私は三周して、それぞれのセツトを全て堪能するだろう。でもそれは……出来なかった。

「レイ、次会うときは……」

「……しーっ！ ティアナちゃんがいますから！」

「あ……そうですわね。というよりも、私はあなたが本物の女性にしか思えませんのですけど……」

「そうですね。今はリリーちゃんですので」

「そ……そうですか。いつか本物のあなたに出会えることを願いますわ……」

どうしてだろう。周りの喧騒で声なんか聞こえるはずがないのに、私ははつきりとレイとアリアーヌの会話が聞こえていた。

ああ……眩しい。

二人はお似合いだった。どこまでも輝く双眸を持つ二人。迷いなどない、惑いなどない。二人の歩みには、何の翳かげりなどない。

その刹那、胸にチクリと刺さるような痛みが走る。

これは何だろう。今まではただこんな状況に辟易するだけだった。でも今は、別の感情が……心に宿っているような気がした。

だが私はそれに向き合いたくはなかった。何か嫌な予感がしたから。

そうして私はその場を去っていくのだった。

「アメリカ。お久しぶりですわね」
「アリアーヌ……」

開会式の直前。

各選手は入場待機していたのだが……そこでちょうどアリアーヌと出会う。こうして会話をともに交わすのは……本当に久しぶりな気がする。

私は彼女に負い目があった。

昔は親友と言っていたいほどに、仲が良かった。

でもいつからか、私は自分に違和感を覚えて、アリアーヌの眩しさに嫉妬するようになった。いやそれは本当に嫉妬なのだろうか分

からないけど……ともかく、アリアーヌの近くにいることを拒んだ。

別に彼女が何かをしたわけではない。

アリアーヌが伸び伸びと成長する姿に、私は焦燥感を覚えたのだ。

だから……離れた。

彼女と比較するのは、比較されるのは、嫌だったから。

アリアーヌはそんな私の心情を察していたのか、その距離感を受け入れていた。幼い頃は日が暮れるまで遊んでいたと言っのに、私たちの道は二つに分かれた。

そんな私達が今ここで、こうして会話をしているなんて……少しばかり不思議な感じだった。

「先ほどレイに会いましたわ」

「レイに？」

「ええ。アメリカは仕上がったと。そして、私を打ち負かし……きつと優勝するのだと」

「そう……そうなんだ……」

どうしてだろう。

また胸に鋭い痛みが走る。でも今は少しだけ違う。ただ暖かい何かもまた、私の胸に広がっていた。

「レイは規格外ですわね。それに見ました？ あ的女装技術は本当

に驚きで……」

「はは、まあ。そうね……確かにあれはちょっとすごいかも」

二人でレイについて話した。その間はどうか、いつも通りに振る舞うことができた。いつもはアリアーヌに対して怯えるような素振りをしていたが、何故か普段通りに話すことができた。

「……アメリア、少し変わりましたの？」

「……そう、そうかな？」

「ええ。それに、友人が……できたのでしょうか」

「うん。そうね……レイだけじゃなくて、仲の良い友人ができたよ。私にも」

「そう。そうですか」

知っているとも。

アリアーヌは優しい子だ。とても、とても優しい子だ。だからずっと人と一定の距離感を保っていた私を心配していることもずっと前からわかっていた。

でも私はそんな彼女を寄せ付けずに、自分の殻に閉じこもるだけだった。

そう。今までは。

だけれども、レイに……それにみんなと会ってから私は少しだけでも変わったのかもしれない。

そんなアリアーヌはニコリと微笑んでいたが、急にスッと厳しい目つきに変わる。

「アメリカ。わたくしは負けませんわ」

「……私も、負けるつもりなんて……ない」

その言葉は自然と出てきた。

怖い。震える。逃げたくなる。この大舞台を前にして、私は……
圧倒されている。

でも私は、レイとの日々を、あの訓練の日々を乗り越えてきたのだ。きっと私は今、みつともなく震えているだろう。

そんな私は何とか拳を握りしめて、それに耐えている。

その一方で、言葉は自然と零れ落ちてきた。

負けたくない。

アリアーヌに負けるわけにはいかないと、私はそう思った。

「戦うとしたら……決勝ですわね」

「うん……」

「わたくし、覚えているですよ」

「……？ 何を？」

「アメリカと競争したことを、ですわ」

幼い頃、よくアリアーヌと競争をしていた。それはかけっこからお絵描きまで、二人で些細なことまでも競い合っていた。あの時は純粋に優劣など考えずに、ただアリアーヌと一緒にいることを……
楽しんでいた。

「そっか……そんなこともしていたけど……」

「実はわたくしとアメリカは引き分けですの。だからここで決着をつけましょう」

「……決着、か」

「ええ。私は逃げも隠れもしません。だからアメリカも、真正面からぶつかってきなさい。このアリアヌ^{II}オルグレンが全てを受け止め、そして打ち負かしてあげますわ」

そう、高らかに宣言する。

ああ……なんて、なんて優しいのだろう。

それと同時に自分がちっぽけな存在に思えてくる。アリアヌの本当の想いを理解できるからこそ、自分の矮小さが理解できてしまう。

今までの私ならば、ここで怖気付いて終わりだろう。そのあまりの偉大さに、美しい心の在り方に押しつぶされるだけだっただろう。

しかし今の私は……振り絞れる。この勇気を、レイに与えてもらった心が、今の私には……あるのだから。

「アリアヌ。決勝で会いましょう。私は絶対にこの魔術剣士競技^{マギクス・シューバリエ}大会で、頂点に立つわ」

「ふふ……いい表情ですわね。アメリカ、待っていますわ」

そうして私たちは改めて握手を交わす。

暖かい。

アリアーヌに触れたのはいつ以来だろうか。

思い出す。あの幼き在りし日々を。

私たちは別々の道を歩んでいた。いやそれは私が勝手に逃げ出しただけだ。でもアリアーヌはずっと待っていてくれたのだ。

私がいつかきつと、戻ってくると信じて。

ああ……本当に敵わないなあ……と思いながら、その双眸を見据える。

互いに成長した。

もう体も大人に近い。それに心もまた、成熟しつつある。

そんな中でも変わらないものが一つだけあった。

それは、私とアリアーヌが好敵手ライバルであるということだ。

そうして私たちは、開会式の会場へと歩みを進める。大歓声の中、選手たちが進んでいく。

光に飲まれていく彼女のその姿は、誰よりも眩しかった。

願わくば、私もまた……その光になりたいと。

そう願った。

第57話 アメリカ、初戦

「さて、やってまいりました！ 本日の新人戦初戦です！ 解説のキャロライン先生はどうみえますか？」

「うーんとね、とりあえず楽しみなかな」

「はい！ 当たり障りのない回答ありがとうございます！ 試合は十分後に開始予定ですので、お待ちください！」

会場ではそんなアナウンスが流れていた。

現在は本戦の一回戦が二つ終了し、今からは新人戦に入る。

全体的な魔術剣士競技大会のスケジュールとしては、四日間で本戦、新人戦共に一回戦をこなす。その後は一日の休息日を挟んで再び、二回戦を四日間で終わらせる。そして準決勝を二日間で終わらせ、再び休息日を一日ほど挟み、最後に三位決定戦を行なった後に、決勝戦が開始。

これでちょうど二週間のスケジュールとなる。

今日は一日目だが、アメリカの試合はなんと新人戦の初戦……ということで、かなり注目を集めていた。観客も満員なのはもちろんだが、あのローズ家の長女が出場するということで、ここに来る間も色々な人がアメリカの話をしていた。

また、魔術剣士競技大会では実況と解説の二人が試合を進行する形になっている。マギクス・シュバリエ

実況はアーノルド魔術学院の二年生の、ナタリア・アシュリーという女子生徒が行なっているらしい。曰く、アイドル活動もしていて去年の実況の評判が良かったので今年も採用されているとか。

解説の方は日程によって変わるが、今日はキャロルの日だった。

あんなやつでも七大魔術師であることに変わりはないので、普通に魔術的な解説はできるし、俺は理解できないがキャロルは人気のある魔術師でもある。

キャロル目当てで来ている人もいるほどだ。

「部長。やりますか？」

「そうだな。ちょうど良いタイミングだ」

そして部長の鶴の一声によって、俺たちは応援団としての活動を始める。

「予定通りだ。行くぞ！」

『おう！』

応援団の活動は選手が入場し終わるまでも良いことになっている。もちろん試合中に声を上げてはいけないわけではないが、応援団としてまとまって応援するのは試合前だけと決まっているのだ。

そして俺たちはアメリカの入場を迎えるためにも、練習した通り

に応援を開始する。

「ピィィィィィッ！ とホイッスルを部長が鳴らすと、まずは三三七拍子から入る。全員で訓練されたそれは、一部のズレもない。完璧にこなす。俺たちのそれはもはや、芸術の域までに高められているのだから。」

「よし、全員完璧だな。次行くぞ！」
『おう！』

ということで、俺たちは次の行動に入る。

「勝者は誰だ！」

『アメリカ！！ローズだ！』

「優勝するのは誰だ！」

『アメリカ！！ローズだ！』

「そうだ！！ マジクス・シュバリエ 魔術剣士競技大会新人戦で優勝を飾るのは……」

『アメリカ！！ローズだッ！！』

「アメリカ、バンザイ！！」

『アメリカ、バンザイ！！』

部長の掛け声を元に、俺たちはこれでもかと声を張る。環境調査部の部員の圧倒的な筋肉を披露しながらも、かなりの声量でそのまま応援を続ける。

ちなみに団旗を振っているのはエヴィで、残りのメンバーはハチマキとアメリカ応援団特製のうちわも用意して、応援の限りを尽くす。

エリサとクラリスの声は俺たちの声量には負けてしまつも、女性の応援が確かに聞こえる程度には、二人ともに一生懸命な表情かおをしながら大声をあげていた。

俺たちは一体となっていた。アメリカを応援するために、全員が全力を尽くしていた。

マギクス・シュバリエ

「お！ 魔術剣士競技大会では応援もまた醍醐味の一つですが、ローズ選手の応援団はものすごく気合が入っていますね！ これはレベッカ・ブラッドリー選手並みの応援団かもしれません！」

「うんうん！ みんなすごいね！ 私もやっちゃおうかな？ キャピ」

「先生は特定の選手に肩入れせずに、公平に解説してくださいね」

「えー。まあ仕方ないかあ、キャピ」
「……」

実況と解説の二人からも注目を集めながら……ついに選手が入場してくる。

それと同時に俺たちは応援を終了する。しかしここから、個人で声をかけるのは許されている。だからこそ、全員でアメリカに対して俺たちはここににいるという意味も含めて、声をかけるのだった。

「アメリカー！」

「アメリカちゃん！ 頑張ってー！」

「アメリカー！ キレてるよー！ キレてる、キレてる！」

「アメリカー！ お前なら勝てる！ 自分を信じてーっ！」

応援団全員でその声をかけると、アメリカはニコリと微笑みなが

ら右手をこちらに向かってあげてくれる。

その立ち振る舞いは、余裕があるからこそなのか。アメリカはどうにも自信に溢れているように思えた。

そして、ついにアメリカの試合が幕を開ける。

「審判は私、アビー＝ガーネットが務める。ルールは場外に相手を落とすか、胸にある薔薇を散らすか、または戦闘不能になった方が負けとなる。またこれ以上の戦闘が出来ないと私が判断すれば、その時点で試合終了だ。二人とも、良いな？」

「はい」

「わかりました」

アビーさんがそう告げて、とうとう二人の選手が指定の位置につく。アメリカの初戦の相手はディオム魔術学院の男子生徒である、テオ＝ジラルという選手だ。しかし実は俺は彼の試合を見ていた。

それは、彼がアリアヌと戦っているのを俺は女装して潜入している際に目撃しているからだ。

アメリカにはすでに伝えてある。相手の特徴、そしてアメリカはどう戦うべきなのかを。もちろん事細やかに伝えているわけではない。戦況というものは、状況によって大きく変化する。重要なのは相手の基本的な情報を入れつつも、臨機応変に対応する柔軟さだ。

そして、アビーさんが声を上げる事で……試合の幕が、切って落とされた。

「では……試合開始ッ!!」

その刹那、相手の選手が一気にアメリカの方へと駆け出していく。

「おおおつと!! ジラール選手、先手必勝か!? 一気にアメリカ選手の元に向かっていきますっ!!」

すでに内部コードインサイドは走らせているのだろう。彼はそのまま尋常ではない疾さで、アメリカへと迫って行く。近距離特化の選手ということはアメリカも重々承知のはずだ。

そして彼女が取った選択は……。

「避けましたッ!! アメリカ選手、ジラール選手の攻撃を避け続けます!! しかし、受けはしないのですね……これについてどう思いますか、キャロライン先生」

「うーんつとねー。アメリカちゃんはきつと、あの重い剣を受け止めるだけのパワーがないから避けるしかないんだね。でもアメリカちゃんはその素早さを活かして、うまく避けてるね。きつと、内部コードインサイドの技量はアメリカちゃんも劣ってないと思うよ」

「なるほど! パワーで押すジラール選手に、スピードで躲し続けるアメリカ選手……これは、長い試合になりそうか!? 均衡はいつ崩れるのでしょうか!!」

「うーんつとねー、もう終わるかな」

「えっとそれは……どういう意味でしょうか?」

「見てればわかるよ。キャピ」

流石はキャロル。

あいつもすでに理解していたようだった。アメリカは一見すれば避け続けている。いや、逃げ続けているようにも見えるだろう。側から見れば、ジラル選手が圧倒しているようにも思える。アメリカはまだ、一度も攻撃していないのだから。

しかしこの攻防の間で、アメリカはしっかりと準備をしていた。

そして、アメリカがついに動き始める。彼女は右手に握っている剣をそのままカウンターを入れるようにして振るうと、彼はその攻撃にたじろいで一歩だけ後ろに下がってしまう。

しかしそこには……アメリカが設置した遅延魔術デレイがあつたのだ。

瞬間、地面から天を衝くようにして炎の柱が上がる。もちろん彼も一撃目は躲す。アリアーヌにやられている戦法だ。すでに対策はある程度立てていたのだろうが……アメリカの遅延魔術デレイの数は十を優に超えていた。

一つの遅延魔術デレイが発動したと同時に、一気に全ての魔術が解放される。

「あああああつ……？ 遅延魔術デレイですが、この数はすごいです！！しかも、完全にジラル選手の胸に迫るようにして次々と炎の柱が上がっていきます！！アメリカ選手、いつの間にこんな数の遅延魔術デレイを設置していたんだーっ！！」

そして、それはピンポイントにジラル選手の胸の薔薇を掠めていき、その薔薇は一気に燃えていくと……そのまま灰になってしまふ。

胸からパラパラと落ちる灰色の欠けら。あまりにもあつけない終焉。けれども、アメリカはたった一度の攻防で相手の薔薇を完全に燃やし尽くしたのだ。

その灰色になった薔薇の残骸は、アメリカの勝利を示していた。

「勝者、アメリカローズ」

アビーさんがそう告げると、一気に大歓声がこの円形闘技場^{「ロムネオ」}に響き渡る。

「し、試合終了おおおおお！　なんと！？　たった一度の魔術で完璧に仕留めてしまいました、ローズ選手！　しかも難易度の高い遅延魔術^{デレイ}をあそこまで精密に制御するとはっ！　相手も一撃目までは読んでいましたが、彼女はそれを優に上回りましたっ！　圧勝、圧勝ですっ！！　これが、これが三大貴族筆頭の力なのかああああっ！　では、キャロライン先生、総評をどうぞっ！」

「はいはい。そうだね。あの遅延魔術^{デレイ}がいつ設置されたかっこことだけで、試合開始直後だね。つまりは、アメリカちゃんは初めの剣戟を行う前から、あれをもう考えていたんだね。でもあの数は、避けながら設置していたのもあるね。いや、すごいね。」

「これは元から相手の情報を持っているからこそできることだし、でもね、遅延魔術^{デレイ}って奥が深くてね。下手な人はずっと、下手なまま。コード理論の構築の問題なんだけど、まずは処理の過程で遅延魔術^{デレイ}の構築する要素に……」

「はい！　キャロル先生ありがとうございましたっ！」

「ちよっと！　ナタリアちゃん、ひどいよ。　まだ話してる途中でしょー！　ぶんぶんがおー、だよっ。」

「先生の話はかなり長くなると前の試合で理解したのでっ！　それでは、引き続き新人戦の一回戦を行いますので、観客の皆様はお待ち。

ちくださ〜い！」

そう告げると、アメリアはその紅蓮の髪をなびかせて悠然とこの会場を後にする。

この戦法は、アリアーヌが使っていたものだ。だがアメリアのそれは完全にアリアーヌのものを上回っていた。何よりも特筆すべきは、緻密なコード理論の構築。あれだけの数の遅延^{デレイ}魔術を、相手をピンポイントで狙うなど卓越した技量がなければ不可能。

しかもそれを戦闘の中で行う、技量と精神力。

また、それを敢えて使って見せたということは……これは宣戦布告。

俺は別にアメリアに指示はしていない。ただ、アリアーヌはこうして戦っていた……ということを伝えただけに過ぎない。

この大舞台で冷静にそこまで魔術を使用できるアメリアをきつと、他の選手はマークしたに違いない。

そしてアリアーヌもまたそれは同様だろう。いやきつと、アリアーヌなら笑っているに違いない。

来るなら来い、真正面から叩き潰してやると。

あの彼女なら、アメリアの宣戦布告をそう受け取るだろう。

「すごい！　すごい！　アメリアちゃん！　圧勝だよー！」

ぴょんぴょんとエリサが跳ねながら、クラリスと手を握り合って喜びを分かち合っている。

「うん！　すごいわね、アメリカっ！　これはきつと優勝間違いなしね！」

二人で喜んでいる姿を微笑ましく見つめていると……俺は瞬間、後ろから鋭い視線が向けられるのを感じ取った。

「……？　どうしたレイ」

「いや何でもない。それよりも、エヴィは団旗を振るっているが、疲れてないのか？」

「へへ。これもいいトレーニングになるからな！　ちょうどいいぜ！」

「ふふ、そうか」

今の視線。特に違和感はないものだ。それこそ、俺が女装をしている時に向けて来るものに近い。もしかして、俺が女装していたことに気がついた人間がいたのか？　まあ……いたとしても不思議ではないのだが。

それとも……。

これは杞憂になればいいと思いながら、俺はアメリカがすっかりとした足取りで去って行くのを最後まで見つめるのだった。

第58話 きつと誰もが、途上である

「ふう……運営委員って色々とやること多いわね」

「こればかりは仕方ないだろう。しかし俺たちは融通を図ってもらったのだから、今回ばかりは感謝しないとな」

アメリカの試合も無事に終了し、俺たちは運営委員としての仕事を行なっていた。

俺とクラリスが行うのは主に清掃作業だ。

戦うフィールドは四角形の石畳なのだが、もちろん魔術によってそれは壊れることも多々ある。それを教員が魔術で一箇所に集めるので、俺たち運営委員はそれを地下一階にある部屋にまとめておく作業を引き受けた。

それに加えて、選手の控え室の清掃なども行う。もちろんそれほどゴミが出たりはしないが、選手にとって良い環境を提供したいということで毎試合ごとにこの作業も行なっている。

これは意外と大変なもので、俺とクラリスは初めての作業ということもあり、割とあたふたしていたが……しばらくしてやっと慣れてきたところだ。

「よし……これでいいわね」

「ああ。それにもう次の試合が始まっているらしい。次は控え室に

入って清掃をした後に、試合の観戦だな」

「……ふう。なんだか、私たちって超忙しくない？」

「どういう意味だ？」

「いやだって、朝は売り子としての仕事でしょ？ それで次はこうして運営委員の仕事……まあ私たちは掃除がメインだけど。で、そのあとはアメリカの応援でしょ？ なかなかにハードスケジュールだと思ってる……」

「確かに言われてみればそうだが……もしかして辛いのか？ ならば俺が仕事を少し多めにやるが……」

「いや、別にそういう意味じゃなくて……っ！ ただふと思っただけというか……」

現在は地下一階から上の階へと上がり、そのまま選手控え室に向かっている途中だった。

その最中に、クラリスがそんな話をしてくるので俺も応じるのだが……もしかして色々と負担をかけてしまっているのだろうか、と考えてしまう。

思えば、運営委員の仕事はまだしも、売り子とアメリカ応援団は俺が無理やり誘ったようなものだ。

これらのせいで負担になっているのは、本当に申し訳ないと思っただが……どうやらクラリスが言いたいのは、そういうことではないようだった。

「そ、その……さ」

「もしかして、何か言いたいことが？」

「その……私がないで、運営委員に立候補したか……話してないわ

よね？」

「それは……そうだったな」

クラリスが選手として参加しない理由は聞いている。

彼女は魔術剣士よりもハンターになりたい……というものだったが、なぜ運営委員に立候補したのかまでは聞いていなかった。あの時は深くは聞かなかったが、どうやら彼女は話してくれるようだった。その理由を。

「その……レイにはもう言ったけど、私って昔からこんな性格でさ。それにクリーヴランド家ってそれなりの上流貴族なのよ」

「……なるほど」

「それで、まあ……友達という友達がなかなかできなくて。と言っても、きっと私の性格的な問題が大きいと思うんだけど……その、この学院に入っても、ちょっとクラスで浮いててさ。だから、運営委員に立候補して少しでも多くの人と関わりを持ってみたかったの」

「……」

「それでその……レイと、それにみんなにも、あなたのおかげで出会ったことができたから……そのいつもは恥ずかしくて言えないけど……レイには本当はすっごく感謝しているというか……その……あ、ありがとう」

顔を少しだけ下に向けながら、彼女はそう言った。その頬には朱色が差していて、真っ赤とまではいかないも、恥ずかしがっているのは見て取れた。しかし……そういうことだったのか。

クラリスもまた、変わりたいと願って自分から行動をしたのだ。

彼女の詳しい過去までは知らないが、きっと色々な葛藤があったに違いない。だというのに見栄を張って、弱みを見せないように振る舞っている。きっといつものツンツンしているところは、彼女なりの処世術なのかもしれない。

そうすることで人との距離感を一定に保とうとする。でも、クラリスは変わりたいと、何かきっかけが欲しいと思って、運営委員に立候補して今に至る……ということか……。

なんと……なんと、健気なことだろうか……。

俺は胸にジーンと暖かいものを感じると、思わず自分の目を拭う。

「う……ううう、クラリス……君もまた、天使の一人だったか……」

「ちょ！？　なんで泣いてんの……！？」

「う……ぐす……すまない。年だろうか。そのあまりの美しい心の在り方に、そしてクラリスの一步踏み出した勇氣に、つい感動してしまつてな……」

「いやいや、年ってそんな……同い年じゃないっ！　でもその、レイには本当に感謝してるから……そ！　それだけはちゃんと覚えておきたくてっ！　あ、でも勘違いしないでよねっ！　いやその……勘違いでもないけど……っ！　あーもー、普通に恥ずかしい……」

クラリスは両手を頬に当てると、その頬は依然として真っ赤に染まっていた。

エリサもそうだが、クラリスもまた自分なりの葛藤をどうにかして克服しようと、なんとかしようと思つて……進んできたのだ。

おそらく、誰だってそうなのだろう。

俺たちはきつと、誰もが途上だ。色々な悩みを抱え、葛藤しながら、前に進み続けるのだ。でも今の俺たちには友人がいる。掛け替えのない友人が。だからこそ、俺は本当にこの学院に来て良かった、心から思うのだった。

「ほら。これハンカチとティッシュ」
「すまない」

俺はその二つを受け取って、自分の情けない顔を拭いた。最近はどうにも涙腺が緩い気がするが、これほどの健気さを前にして俺は感動しないという心を持ち合わせていないので、仕方ないだろう。

「そういえばさ、ずっと思ってたんだけど」
「ああ」

「……アメリアって大丈夫なの？」

「どちらの意味だ？」

「ああ……ということはレイも気がついてるのね」

クラリスは少しだけ真剣な顔つきで、そう尋ねてきた。

「肉体的な面、魔術的な面に関していえば、彼女は万全だ。エインズワース式ブーツキャンプを乗り越えたのは伊達ではない」

「……あれは悲惨だったわね。あのアメリアがあそこまでビビって逃げ出すんだもの……側から見ていて、マジで怖かったわ……」

「しかしそれ乗り越えた彼女なら大丈夫だと……俺はそう言いたい、クラリスが言いたいのはそういうことではないのだろう？」

「うん。アメリアってその……時々無理してるというか、なんか別人みたいになる時、あるじゃない？」

「そうだな」

アメリカの件、俺だけではなくどうやらクラリスも感じていたようだ。そうして彼女はツインテールを少しだけしょぼんと垂らしながら、話を続ける。

「私ね。アメリカのことは小さい頃から知ってるの。もちろん、三大貴族の人は全員よく知っている。レベッカ先輩に、アリアーヌ、それにアメリカのことも。三人はね、よく比較されていたわ。三大貴族でも誰が素晴らしいとか、ね。貴族はそういうのにうるさいから。それでね、アメリカはちょっと……他の貴族に色々と言われていて……三大貴族筆頭のローズ家の長女なのに、レベッカ先輩とかアリアーヌよりも劣っているって。もちろん、他の貴族に比べればアメリカはすごいと思う。でも実際に、あの二人はもつとすごいから」

「なるほど……そんなことがあったのか……」

「ええ。それで、私はアメリカのことをパーティーとかで遠くから見たの。話しかける勇氣はなかったけど、その……綺麗だし、可愛いからつい目がいつて。でもね、アメリカは笑ってるようで、笑っていないの。ずっとそれは小さい頃から……変わっていないと思う」「しかし俺は……今のアメリカは、少しだけ自分を取り戻しているようにも思えるが……」

アメリカは時折、本当に心から笑っているような時があった。それはその眩しい笑顔を見ればすぐにわかった。

でもそれにはすぐに翳りが差す。

まるで、自分はこうあってはいけないと悟っているかのように、アメリカはすぐに壁を作ろうとするのだ。

「うん。それはね、私も思う。特に、レイと一緒に訓練してる時のアメリカはちょっと自分らしいというか、心から笑っている時があるように思えるの。もちろん、私たちという時もそうだけど。でもやっぱり……レイといると、アメリカは何かを探るように、何かを求めるような、そんな目をしている気がするの」

「……なるほど。クラリスにはそう見えていたのか」

「うん……私ね、貴族の重圧プレッシャーってわかるの。この血統を証明するためにも、周りからも色々あることないと言われて。幸い私は、家族がそういうことを重視しない人だったし、こんな性格であまり周りの声は気にしないけど……アメリカは昔から私が想像もできない重圧プレッシャーの中で生きて来たのを知ってるからその……」

「心配なんだな？」

「うん……」

きつと俺やクラリスだけではない。

エヴィもエリサも、俺たちの訓練をハラハラしながら見つめていた。アメリカのことを心配していたのだ。

それにアメリカ応援団を結成した時も、環境調査部のみんなも、アメリカのことを想って色々な衣装を作成した。

アメリカが進む先は、本当に過酷で辛いものなのかもしれない。だが、そんな彼女の力になりたいと願っているのが俺たちなんだ。そんな彼女の後押しになればいいと思って……俺はここまでできたが……。

俺は本当に、アメリカの力になれているのだろうか。

未だに俺は迷う。本当にこれでよかったのかと。

過去のように、また過ちを犯していないかと。時折、ふとそんなことを考えてしまう。

だが……俺はそれでも前に進むと決めたのだ。かつての師匠が、そうしていたように。

「クラリス。アメリアのその心の内は彼女にしか分からない。きつとこの大会で、彼女は大きな壁にぶち当たるかもしれない。でも俺たちが支えよう。たった一人であの大観衆の中で戦う彼女を、俺たちが支えるんだ」

「う……うん！ そうね！ レイってやっぱり、いいやつねっ！」

「そう、だろうか……」

「うん！ ちょっと変なところもあるけど、みんなに優しいし！ だから一緒に応援しましょ！ 私も気合入れて頑張るわっ！」

「ああ。そうだな」

二人で微笑み合うと、俺たちはそのまま仕事を続ける。

優しい……か。

俺はきつと彼女を自分に重ねているのだ。それは、過去の孤独な自分を見つめているようだったから。そう思っているからこそ、俺はアメリアの力になりたいと思ってここまで来た。

いつか過去の自分が欲していたものを、アメリアに与えることができるなら……そう思っただけで行動してきた。

それが優しさだというのなら、俺も人並みの心を取り戻せている
ということなのだろうか。

俺もまた、師匠やあの時の皆のように、誰かの支えになることが
できるのだろうか。

独りよがりではなく誰かに寄り添うことが、俺にも……できるの
だろうか。

そんなことを考えながら、俺はクラリスと共に進んで行く。

第59話 アリアーヌの真価

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会、四日目。

ついに今日で一回戦が終了する。本戦、新人戦共に波乱は特になく、そのまま順当に予想通りの選手が勝ち上がっていると言う感じだ。

レベツカ先輩は二日目に行われた本戦の一回戦で難なく勝利。そしてアルバートは昨日行われた新人戦の一回戦を勝利。彼の魔術的な要因もそうだが、やはり筋肉が偉大なのだろう。その内部コードインサイドを使用した、剣術は卓越したものだった。

そして順当に選手が勝ち上がっていく中で、本日の注目度はかなり高いものだった。今日の一番初めの試合は、新人戦一回戦の最終試合。それだけでも、ある程度の注目は集めるのだが……今回はそれだけではない。

出場してくるのは、アリアーヌⅡオルグレン。

新人戦の優勝候補筆頭であり、さらには三大貴族オルグレン家の長女である彼女に、注目が集まらないわけがない。

そんな彼女に相對するのは、メルクロス魔術学院のエルマⅡカルスという女子生徒だ。俺は生徒の情報はすでに頭に入っているので、この生徒のことも知っている。

メルクロス魔術学院の生徒は傾向として、魔術型の生徒が多い。剣を有してはいるが、それは自衛的な側面が大きく、魔術を主体として戦う。このカルス選手もまた、もれなくそのタイプだ。

「アリアーヌ」オルグレンか……レイ、確か知り合いなんだろう？」
「ああ。アリアーヌとは友人だからな。それに戦っている姿もすでに見ている」

「じゃあ、どっちが勝つと思う？」

「それは始まってみるまで分からないが……アリアーヌが負ける姿は、今のところ想像できないな……」

現在はエヴィと二人で後方の席で、試合が始まるのを待っていた。アメリカ応援団としての活動がある日は、部長によって席を確保してもらっているが、アメリカの試合のない日はこうして自分たちで席を取っている。

そのため、後ろの方の席になっているのは仕方ないことだ。本当は最前列でその戦いを焼き付けたいが、こればかりはどうしようもない。

ちなみにエリサとクラリスは、現在は店で売り子をしてくれている。そのあとは俺が入れ替わるようにして、二人には休憩に入ってもらう予定だ。あまりに弱い二人に労働を強いるのは、俺としても悪いと思っているからな。

この試合が終われば、再び存分に働く所存だ。

「お……出てきたな」

「ああ。さて、アリアーヌの初戦……どうなるか」

二人の選手が入場してくると、実況と解説によるアナウンスが入る。

「二人の選手が入場してきました！！ 今回の対戦は新人戦の一回戦、最後の試合となります！ メルクロス魔術学院の一年生、エルマ・カルス選手対ディオム魔術学院の一年生、アリアーヌ・オルグレン選手の試合です！ さて、ついにやってきましたね！ 三大貴族であるオルグレン家の長女、アリアーヌ・オルグレン。その注目度は高く、すでに優勝候補筆頭ですが……、ガーネット先生はどう見ますか？」

「ふむ……そうだな」

実況はいつも通り、ナタリア・アシュリー先輩がしているが解説は毎日変わるので、今日はキャロルではなくアビーさんの日だった。キャロルの日は色々と盛り上がるのだが、盛り上がりすぎて逆に進行が大変そうなのが、よく分かる。

しかしアビーさんは礼節があり、分別を弁えた人のできている大人なので、あのアホピンクのようににはならないだろう。

「カルス選手は魔術型だな。まあ、メルクロスの魔術学院の典型的なタイプだ。しかしだからと言って、侮れることもできない。魔術型の選手が一切相手を寄せ付けずに、完封した大会もあったからな。しかし……オルグレン選手はバランス型ではあるが、どちらかといえば剣技型。近接戦闘を得意としているタイプ。勝敗はきっと、互いの領域に相手を入れるか、入れないのか……ということになりそうだな。面白い試合になるだろう」

「素晴らしい解説ありがとうございます！ いやあ、学長は聡

明で素晴らしいです！ はい！ 進行もしやすいというものです！」

そして互いの選手の紹介が終了すると、審判であるキャラルが二人に声をかける。いつものようにルール説明だろう。ちなみにキャラルだが、審判をできるほどの実力があるのか……と思う人間もいる。

しかしキャラルのやつはアホピンクなのは間違いないが、実戦技術もずば抜けている。研究者としての肩書きもあるが、あいつは実は……本当に優秀な魔術師でもある。そうでなければ、七大魔術師になることなど、できはしないのだから。

まあ……魔術の技量と性格が比例しないのは、どうしようもないことだ。

「それでは、試合開始……だよ」

キャラルのその声がマイクにより会場内に響き渡ると、試合が始まった。

「あああああつと！ カルス選手、剣を一切抜きません！ それどころか、そこから一步も動かずに魔術を行使しようとしていますっ！」

「おそらく……遅延魔術デレイを敷いているのだろう……いやしかしこれは……上級魔術である大規模連鎖魔術エクステンシブチェインの、深紅爆裂クリムゾンノヴァか……ここまで難易度の高い魔術を使うか……」

「え、大規模連鎖魔術ですか！？」

「ああ。しかし解せないな。オルグレン選手は全く動かない」

「確かに！ どうして、オルグレン選手は動かないんでしょう！
このままでは、大規模連鎖魔術エクステンシブチェインが発動してしまいます！」

そう解説が入るが、俺も至極持つてその通りだと思った。仮に俺がカルス選手と戦うならば、魔術型という情報は持つていたので、すぐに接近戦に持ち込むだろう。正直言つて、超近接距離クロスレンジに持つていけば勝ちも確定。

しかしアリアー又は不敵に微笑みながら、その様子をじつと見ている。

まるで相手の魔術の構築が終わるのを待つているかのように。大規模連鎖魔術エクステンシブチェインは威力は高い魔術ではあるが、発動までに時間がかかる。それを発動させないのが、普通なのだが……アリアー又は何を考えている？

「なあレイ。なんで、アリアー又「オルグレンは動かないんだ」
「さて……俺にも図りかねるが、彼女のあの表情からして自信はありそうだな。それにあの大規模連鎖魔術エクステンシブチェインに対処できる何かがあるのか……」

「あれってどういう魔術なんだ？」

「深紅爆裂は地面に大量の爆破領域を設置するものだ。遅延魔術デレイにも近いが、その規模の大きさから大規模連鎖魔術エクステンシブチェインに属する魔術だ」

「つまり、すげー広範囲の地雷原ってところか？」

「その認識で間違い無いだろう」

「え……それってやばくねえか？」

「やばいな。正直言つて、発動されるとかなり厄介だ」

俺もまた全てを理解できるわけではない。勝つという一点にこだ

わるのならば、アリアー又はすぐに動くべきだった。

そして、エクステンシブチェイン大規模連鎖魔術の設置が終わったのかカルス選手は、そこから高速魔術クイックによって魔術をアリアー又に向けて放つが……。

「こ、これはどういうことだああああ！？ オルグレン選手、突っ込みました！！ 突進です！ インサイド内部コードで身体強化をしたのでしよう！ ものすごい勢いで突っ込んでいきますー！」
「なるほど……これは……」

そして俺は悟った。アリアー又がどうして、このような戦い方をしてくるのかということに。そして彼女はやはり……きっとアメリカの最大の敵になると俺は理解した。

「うお……あれって大丈夫なのか？」
「まあ見ていれば分かるさ」

アリアー又はそのまま深紅爆裂の中へと突っ込んでいく。それはさながら、自ら地雷原に突っ込んでいる愚か者にも見えるだろう。

そして次々と深紅爆裂クリムゾンノヴァが発動していく。物質魔術と異なり、現象魔術はそれなりの技量があるが、その威力は申し分なかった。エクス大規模連鎖魔術テンシブチェインをここまで扱える技量は素直に脱帽である。

おそらく、これをまとも食らってしまえば薔薇が散ってしまうところか、意識が絶たれてしまうであろう威力。

まるで至る所で薔薇の花が咲き誇るように、次々と爆破が生じていく。

上から見るとよく分かるが、それはまさに圧巻。次々と連続して爆発が起きて、黒煙が会場内を支配する。まだアリアーヌの姿は見えないが、きっと彼女がここで終わるわけがない。

それに……すでに決着はついただろう。

「すごい、すごい、すごい！ 爆発の連続！！ これは流石のオルグレン選手でも、厳しいのかっ！！？」

「いや……勝負あったな」

「という……？」

「見てみる」

「あ！ な、な、なんと！！ オルグレン選手！！ 健在です！！ その体には一切の傷がついていません！！」
すでに二人の距離は五メートルありません！ すでに距離は超近接距離クロスレンジですッ！！

そうしてアリアーヌはそのまま一気に相手の胸もとに入り込んでいくと、低い姿勢のまま下段から上段へとその剣を振った。その瞬間、カルス選手の薔薇が綺麗に二分されて地面にポトリと散る。

試合終了だ。

「き、決まったああああ！！ なんとということでしょう！ オルグレン選手、あの爆破の海の中をいとも簡単に通り過ぎていくと、そのまま一閃！ 試合終了です！ 勝者は、アリアーヌ！！ オルグレン選手だああああ！！」

会場が湧く。この声援は今までの中でも最も大きなものだろう。

アリアーヌはこの拍手喝采に、悠然とその右手を上げて応じる。

その振る舞いは王者の余裕とでもいうのだろうか。

さらに特筆すべきは、アリアー又は全く傷ついていないどころか、焼け焦げた跡すら残っていないのだ。

「う……うわあ……ま、まじかよ……あの中を突っ込む精神力もだが、無傷とは……」

「おそらく、原理としては第一質料を身体中に覆っていたんだろう。それを防御壁のようにして突破して、一閃。しかしやはり……あの技量、それにそれを実行する精神力。見事だな」

「アメリアは勝てるのか……？」

「勝てるさ。俺はそう信じている」

これはアリアー又の宣戦布告。アメリアもまた、アリアー又に示したが今度は逆に彼女がアメリアに示したのだ。

エクステンブチエイン

大規模連鎖魔術だろうが、なんだろうが、自分は真正面からそれを打ち破るだけの力があると。

そうアリアー又は誇示したのだ。

彼女の性格を反映した、ある意味でアリアーらしい戦いだった。

こうしてついに新人戦の一回戦は終わりを告げるのだが……俺たちはこの後の本戦に出てくるダークホースとも呼ぶべき存在に、その心を奪われるのだった。

第60話 ダークホース

「し、試合終了おおおお！！ しかしこれは……前代未聞です
つ……なんと試合時間は……二秒！！ これは長い歴史を持つ魔術
クス・シュバリエ
剣士競技大会の中でも歴代最高のタイムです！！」

圧巻。

いや、この試合はそんな言葉だけでは表現できない。

おそらくこの場にいた魔術師で、この試合をまともに説明できる者はほとんどいないだろう。俺もまた、見逃すところだったが……何とか理解していた。そして、この本戦に突如現れたノーマークの選手。

その選手こそが、この大会の本命であると誰もが分かってしまった。

単純明快。ただその一刀のみで試合を決めてしまったのだ。これほど分かりやすいものはないだろう。

「勝者は……ルーカス＝フォレスト選手！！ なんと、メルクロス魔術学院の二年生ですっ！！ 優勝候補に上がっていない、ノーマークの選手でしたが……ここでダークホースが現れましたあああっ！！！」

ルーカスⅡフォルスト。

名前だけは一応頭に入っている。メルクロス魔術学院の二年生であり、剣ではなく刀を使う珍しい魔術師であると。その戦闘スタイルから剣技型、中でも超近接距離クロスレンジでの戦闘は得意だと思っていたが……まさかここまでとは、誰も思いはしなかっただろう。

すぐに持っているパンフレットでその選手を改めて確認する。大会では出場選手のリストがパンフレットになって配布されているが、それはやはり注目度の高い選手ほどその枠が大きくなる。

その中でも、ルーカスⅡフォルスト選手の枠が一番小さいものだろう。ただ一行だけ紹介が載っている程度だ。

身長は百六十五センチとそれほど高くはないが、その甘いマスクはきつと多くの女性を魅了するだろう……というのは、事前の情報でも男性にしては中性的で美しい選手として評判だったからだ。

長い黒髪を後ろで一本にまとめ、顔つきも激しさはないがその中には確かに男性らしさも残っている。そんな彼は、刀を鞘にしまうとそのまま一礼をして会場から去っていく。

「なあレイ。見えたか？」

「かろうじてな」

「俺は全くだぜ……何をしたんだ？」

「単純だ。内部コードインサイドで身体強化をして、接近し……一閃しただけだ」

「マジで……それだけなのか？」

「ああ。特筆すべきものはない。シンプル故に、強力だな。対策も立てるのは難しい。あそこまで超近接距離クロスレンジに特化していれば、どうしようも無いだろう」

「マジかよ……確か、さっきの相手は……」

「レベツカ先輩と去年決勝を戦った相手だな。この魔術剣士競技大会マジクス・シュバリエ、本戦の優勝候補であつたが……まさか、大会最速で敗れるとはな……」

「……ああ。マジでこういうことって、あるんだな」

幸いなことに、レベツカ先輩にあたるとしたら決勝だ。そしてそれはおそらく現実のものになるだろう。果たして、レベツカ先輩は彼に対してどのように戦うのだろうか。

こうして大会は大きな波乱を呼びながらも、進行していく。

「アルバート？」

「レイか……」

「奇遇だな」

「ああ。そうだな」

「一回戦突破おめでとう」

「ありがとう。だが……」

あの後、運営委員としての仕事があるために移動をしている最中、俺はバツタリとアルバートに出会う。

そうか確か次の試合は……彼の試合だった。

一回戦は無事に突破して、これから二回戦。俺も清掃活動が終われば、運営委員として一階にある待機室で観戦することになっている。

そして、俺は早めに移動しようと心掛けていたので、こうして足早に地下に向かっているわけだが……少しだけ雑談する時間はあるそうだった。

「そうか。確かアルバートの山には……」

「……アリアーヌ^{エクステンシブチェイン}とオルグレン。彼女が待っている」

「アリアーヌか……強敵だろうな」

「ああ。俺も試合を見たが、選手としてあれほど嫌なタイプはいない。なんて言っても、小細工が通用しないからな」

「彼女の性格からしても……それはそうだろうな」

アリアーヌの第一試合。

あれはすでに観客だけでなく、選手の間でも大騒ぎになっているらしい。なんとと言っても、大規模連鎖魔術である深紅爆裂を真正面から打ち破ったのだ。

アリアーヌの本質はそれで理解できた。彼女はバランス型に思えたが、その実、剣技型。その中でも超近接距離^{クロスレンジ}を得意としている魔術師だろう。

この超近接距離^{クロスレンジ}を本領としている魔術師の厄介なところは、対策という対策が立てにくいことだ。あるとすれば、懐に入れないこと。しかし、このタイプの魔術師は内部コード^{インサイド}の扱いが抜群だ。それこ

そ、近距離戦に持つて行く戦い方は熟知している。

「アリアーヌは、超近接距離を本領としているが……」

「……そこから先は言わなくてもわかつている。彼女に対して、対策など今更立てようも無い。それに俺も近距離での戦いを得意としている。詰まるところ、戦うとしたら力と力のぶつかり合いになる……わかつているさ」

「そうか、すまない。余計なお世話だったな」

「その気持ちはありがたいけどな。さて……俺は行く」

「ああ。健闘を祈る」

アルバートと俺はがっしりと手を握り合つと、フツと微笑んで互いにすれ違うようにして逆方向に向かって行く。

アルバートの手は分厚いものだった。どれだけの修練を重ねたのだろうか。俺との戦いを経て、現実を知り、それでも足掻き続ける。そして目の前にはアリアーヌ。オルグレンという強敵が立ちほだかっている。

二人ともに負けて欲しくはない。しかし俺は、アルバートの努力が実って欲しいと……そう願った。

そして俺はクラリスと共に清掃活動をした後に、アルバートの試合を見た。二回戦の相手はディオム魔術学院の生徒だった。相手はバランス型だったが、途中でいきなり近距離戦に持ち込んできて……アルバートは面食らってしまったが、それでもなんとか対処して勝利をもぎ取った。

こうしてアルバートはついに準決勝にコマを進めることになった

が……やはり先ほどの会話でしたように、次に来るのはアリアーヌだろう。果たして、試合はどうなるのか……。

「押さないでください！」

「慌てず、ゆっくりと退場ください！」

試合終了後。人手が少しばかり足りないということで、俺とクラリスは退場する人の整理を行っていた。と言っても、注意を促すだけなのでそれほど大変では無いが……夏の日差しが容赦なく俺たちを照らし続ける。

そんな中俺は取材を受けている、とある選手を見つけた。

それは今、最も大会を沸かせている存在と言ってもいいだろう。

ルーカス＝フォルスト。

腰には刀を差したままで、彼はただ無表情にその質問に答えていた。取材陣の数はそれはもう尋常では無い。俺は微かに人の隙間から彼の表情が見えたが、それは全く読めない。まるで感情という感情が抜け落ちているような。それこそ、精巧な人形では無いかと思う容姿だ。

「……」

一瞬。ほんの一瞬だけ、視線が交差する。

間違いなく、彼は俺のことを見つめていた。偶然視線があつたの

ならば、すぐに逸らせばいい。だというのに、彼は俺の双眸を見据えるように……じっと見つめてきたのだ。

どうして俺を見る？

俺はこの大会ではなんの知名度もない、ただの運営委員だ。もしかして、俺が以前に感じた視線は彼だったのか……？

しかし彼ほどの魔術師がどうして俺を気にする。まさか知っているのか。

俺が七大魔術師の一人である……氷剣の魔術師であることに。そう考えると辻褄が合うのだが、彼はすぐに俺から視線を逸らす。

やはり、考えすぎだろうか。

「ちょっとレイ！ ぼーっとしないでよっ！」

「あ、ああ……すまないクラリス……」

「？ どうしたの？ もしかして体調悪い？ 大丈夫？ それなら私が救護室に付き添うけど？ この暑さだと、熱中症もあり得るから」

「いや大丈夫だ。心配かけてすまない」

「ふーん。ならいいけど、あんまりぼーっとしないでよねっ！ 心配するんだからっ！」

「ああ。今後は気をつけよう」

そうして俺たちは仕事に精を出すのだった。

あれからマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会は恙無く進行していき……ついに新人戦、本戦共に準決勝まで選手が出揃った。

ベスト4の人間が揃うことで、今残っている選手は、新人戦と本戦を合わせて八人だ。

アメリカ、アリアーヌ、アルバートは順当に残り、レベツカ先輩も……そしてルーカスⅡフォルストもまた残っている。

果たして、新人戦、本戦共に優勝するのは誰になるのか。

そんなことを考えるが、俺にはある懸念があった。

それはこの魔術剣士競技大会が始まってから、アメリカと会話をしていないということだ。いや、試合はずっと見ている上に、応援団としての活動も欠かさず行っている。

アメリカはいつもニコリと微笑みながら、少しだけ気恥ずかしそうに俺たちに手を振ってくれている。

翳^{かげ}りは見えない。

だがアメリカは隠すのが上手い。その本心では、何を思っているのか……俺には分からない。彼女が話してくれるまでは、分からないのだ。アメリカはこういう人間だと思ってはいても、俺は俺が勝手にそう思っているだけ。

俺は……怖かった。

彼女のその心に触れていいのか。アメリカが進む先に何があるうとも、俺は絶対に助けたいと思っている。でもそれは彼女のためで

もあるが、自分のためでもあった。

俺もまた、みんなと同じように途上だ。七大魔術師の中でも最強と謳われている氷剣の魔術師ではあるが、まだ未熟な存在だというのは承知している。

今はもう、隣に師匠はいない。

俺は自分の意志で前に進まないといけない。

みんなと、アメリアと共になら……俺もまた進めると、そう思っていた。しかし果たして本当にそうなのだろうか。

俺の選択は間違っていないのか？

「アメリア……」

ボソツと彼女の名前を告げる。

今は無性に、アメリアの声が聞きたかった。

第61話 前兆

俺は一人で円形闘技場の内部を調査をしていた。一応は腕に運営委員の腕章を巻いているので違和感はないはず。それに念のためにセラ先輩には見回りをしたいと言っている。

その理由は治安維持だが、話を聞くと……セラ先輩はこう言うのだった。

「変な視線？」

「はい。少し怪しいと思ひまして。考え過ぎかもしれませんが」

「うーん……」

「信じられませんか？」

「いや、実は毎年ね……この大会は色々あるのよ」

「色々、と言うと？」

「確か数年前は、生徒の勝利を賭博にしている……その勝者を調整するために、相手の選手を傷つけて不戦勝を狙ったり……とかね。流石に裏ですぐに処理されたけど、世界的にも注目度の高い大会だからねえ。まあ流石に魔術協会から、そのための人員はすでに派遣されているけど……一応、上にも話を通しておくわ」

「はい。ありがとうございます」

「で、レイはどうするの？」

「もう少し見回りをしようかと」

「別にいいけど。危ないときは逃げなさいよ？ちゃんと戦闘に特化した魔術師は派遣されているから、荒事はその人たちに任せておきなさい。腕章もつけているから、きつとすぐに分かるはずよ」

「了解しました。ご忠告、感謝します」

「うん。じゃあ、気をつけてね」

俺はセラ先輩にそう報告して、今に至る。もちろん上に話を通してもらっているんで、俺としては別にすることはないのだが……念のため、できる限りの事はしておきたかった。

この大会は、みんなの想いが詰まっている大会だ。

レベツカ先輩も、アルバートも、アリアヌも、それに……アメリカにとっても、今回の大会への意気込みはかなりのものだ。でもそれもそうだろう。世界最高峰の魔術学院からたった三十二人が選抜され、戦うのだ。それもかなりの注目を浴びる中で。

それは自分の強さを証明するための戦いでもある。

きっとこの戦いの中で、何かを見出す者もいるのかもしれない。

だからこそ、俺はこの大会を無事に終了させるためにもできる限りの事を尽くす。別に今日はそれほど疲れてはいない。時間も今は二十時近くで完全に陽は暮れているが、活動自体はまだまだ余裕だ。

「……戻るか」

そうボソツと呟く。

今は地下一階にある倉庫から、円形闘技場の一階にある控え室に行こうと、通路を進んでいる最中だ。左右にある明かりが、わずかにこの暗闇を照らしつけている。しかしこの時間になると明かりがあるとはいえ、少しだけ不気味な雰囲気漂っていた。

今日の試合も無事に終了し、今は運営委員の人たちが明日の日程を確認しているところだろう。

きつと、セラ先輩も、それに部長も確かそっちの業務に運営委員として携わっているはずだ。と言うことで、最後に先輩方に挨拶をしていつも通り宿舎に戻ろうとするが……俺はその刹那、後ろから殺気を感じ取った。

「ッ！」

躲す。

その攻撃は短刀による一閃。しかしその先端には紫色の液体が滴っている。確実にそれは毒物であるのは自明。

相手の容貌は全身に黒いローブのようなものを羽織っており、顔も仮面によってほぼ完全に隠れている。目元がわずかに見える程度しか相手の素顔は見えない。真っ白な仮面の左右には、赤黒い模様が走っており、それは妙に不気味なものだった。

また、その両手には毒を塗った短刀がしっかりと握られている。おそらく麻痺系のものだろうか。しかし死に直結する類の可能性もある。今回は距離感をしっかりと保つ必要があると、俺は認識した。

それに短刀を振るった際に、飛び散った液体が付着するケースも考えられる。流石に皮膚に触れたら死に至る……というものではないと思うが、警戒度は最大限にまで引き上げる。

「……オマエ、ツヨイナ？」

「……」

その声は、機械的なものだった。いや実際には人間の声なのだろうが、わざと認識できないように魔術でも発動しているのだろう。

相手の力量からして、それなりの手練れと把握。それに毒物を持つている以上、俺も能力を解放せざるを得ないだろう。

そうして俺は、コードを一気に走らせる。

《第一質料プリママテリア〓エンコーディングマテリアル〓物資コード》

《物資コードマテリアル〓デコーディング》

《物質コードマテリアル〓プロセシングロック〓固定リリース〓解除》

《エンボディメントフエノメノン〓現象》

「
体内時計固定クロノスロック、限定解除リミテッドリリース」

刹那、俺の周囲の領域が凍りついていくが……それはすぐに収まる。代わりに俺の右手にはたった一本の氷剣ひょうけんが握られていた。

体内時計固定クロノスロックを完全に解放はしない。今は様子見も含めて、限定解除リリースに留めておいた。これは文字どおり、能力の一部を限定的に解放するものだ。今は、『減速』と『固定』だけを部分的に解除して氷剣を生み出した。

俺の体もまた、何が起こるか分からない。完全開放した時から、時間はそれほど経っていないため、今回は限定解除を選択した。

「……」

相手もまた、この隙を逃すわけがなかった。敵は一気に走り始めると、地面から壁へと進行方向を変える。だがそいつは地面に降りてくることはない。そのまま壁に対して垂直になった状態で、俺に迫ってくるのだ。

重力制御。それに相対位置の座標を適宜移動させているのか。器用なやつだ。コードの処理能力、それに容量はそれなり……といったところか。

まずは相手の能力を分析する。相手が何ができて、何ができないのか。それを把握するのは、最重要である。

そして一気に壁を蹴ると、そいつは俺の首元めがけてその短刀を振るう。それを素早く屈むことによって躲すと、そのから空きの胴体に一閃。

握っている冰剣を容赦なく振るった。もちろん、胴体を切断するわけにもいかないので、浅めにしたが……手応えが完全になかった。

「……オマエ、ツヨイ。イマハ、ブガワルイ……」

そいつは完全に気配を消して、闇の中へ消えていった。俺との戦いで不利だとすぐに理解したのだろう。引き際が早く、いい判断だと褒めたいが……実際のところ、こちらとしては厄介だった。

「……逃げたか」

おそらく、幻惑系の魔術だろうか。俺もまた、ここから追いかけるのは不可能と判断して能力を元に戻す。

あの手の輩は極東戦役時にも戦ったことがあるが、何よりも生存能力が高い。戦闘も一流だが、何よりも逃げに徹すると驚異的な能力を発揮する。

おそらくは……どこかの暗殺部隊の所属だろうか……知らないな。

と、一人で思案に耽っていると俺は再び後ろから気配を感じ取るが……それはよく見た顔だった。

「あなたは……」

「レイ、やりあったようだな」

「はい……」

そう。そこにいたのは部長だった。

しかし見られていたのか……？

戦闘中とはいえ、俺は視線があれば気がついていたはずだ。部長の魔術……だろうか。それにしてもその技量は感嘆すべきだ。今は戦闘中ということもあり、かなり感覚が鋭敏になっている。

だというのに、俺は全く気がつかなかった。見られていたということとを考慮すると、距離感はそのほど離れてはいないだろう。

どうすべきだ？ 説明するのか？ だが、誤魔化すのも難しいだ

ろう。それに俺は氷剣を使ってしまっている。今更何を言っても、誤魔化すことはできないと悟る。

さて、どう話すべきか……と考えていると、さらに後ろからやってきたのはなんと師匠だった。もちろんその後ろには、車椅子を押しているカーラさんもいた。

「し、師匠……？ それにカーラさんも？ これは一体……」

その闇の中からさらに現れたのは、見慣れた二人。だがどうして、部長の後ろから二人がやって来るのだろうか……。

こうして俺は、この大会で何が起きているのか知ることになるのだった。

第62話 明かされる真実

「レイ。そのことについてだが……まあ、ざっくり言つと……レックスはカーラの弟だ」

「お、弟……？」

そう言われて、俺は思い出していた。

確か部長の名前は、レックスⅡヘイル。そしてカーラさんの名前は、カーラⅡヘイル。確かに同じだが……似ていないと言つのもあるし、弟にしては年齢が離れすぎているが……。

「ま、こいつらの家庭環境は察してくれ。それで、だ。今は宿舎に一室借りていてな、詳細はそこで話そう。アビーとキャロルもすでにいる。元々大会の前から話はしようと思っていたが、色々あってな。遅くなつてすまないが、少し付き合ってくれ」

「……了解しました」

そして、その部屋に向かうことになるのだが……俺は部長の隣を歩きながら、話を聞いてみることにした。

「部長……」

「どうした？」

「もしかして俺のこと、知っていましたか？」

「氷剣の魔術師のことか」

「やっぱり……知ってたのですか」

「ああ。お前のことは、リディアさんから頼まれていたからな。力になってほしい、と」

「そうでしたか……」

「ま、そのことも含めてあとで話そう。そしてこの大会で何が起きているのかもな」

部長は確かに今まで俺に助力してくれていたが、この人の正体は一体……そんなことを考えながら、俺は歩みを進める。

「さて、レイ。入ってくれ」

「……失礼します」

宿舎の最上階にある一番広い部屋へと通される。なんでもこの宿舎の中でも一番高価な部屋であり、かつVIP待遇される人物でないと予約できないらしい。

中に入ると、そこにはアビーさんとキャロルがソファアに座ってワインを嗜^{たしな}んでいた。いやよく見ると、奥の方には部長の家族の方も控えていた。

七大魔術師が三人、それに先代の氷剣である師匠も含めてこの部屋に揃っているのは、まさに魔術界最高峰の魔術師たち。

また先ほどの話を聞くと、カーラさんは部長と家族であるということは、ここにいるのは部長の家族と七大魔術師になるのだろうか。ということはやはり、部長たちは只者ではないのだろう。

「座っていいぞ」

「はい。失礼します」

俺が空いているソファーに腰掛ける一方で、カーラさんと部長はその場に直立。座る様子はないようだ。

そうして師匠が口を開く。

「まずはそうだな……ヘイル一族について話そう。端的に言えば、王国の諜報機関を担っている一族だ。実は極東戦役時代から私は個人的な繋がりがあってな。それで今はカーラに世話をしてもらっている」

「そうでしたか……しかし、部長は……」

「ああ。レックスの件は偶然だな。と言っても、お前が入学する先にいるのは知っていたからな。もちろん、レイを宜しく頼むと言っ
てあったさ」

「そうなのですか、部長？」

視線の先にいる部長に話しかけると、彼はフツと微笑んで会話に参加する。

「そうだ。リディアさんは昔からの知り合いでな。俺も昔はエインズワース式ブートキャンプで世話になったことがある。しかし、レイのことは話にしか聞いたことはなかった。まだ十代の少年が、リディアさんの後を継いで、氷剣の魔術師になるとは思いもしなかったが……それは、実際に会ってみて納得したな」

「あの時の、環境調査部での出会いは……」

「偶然だ。しかし俺は、リディアさんに頼まれていなくとも、レイが氷剣の魔術師でなくとも、きっと今までと同じように力になっていたさ。俺はお前のことは気に入っているからな。先輩として、俺は純粋にレイとこれからも交流していきたいと思っている。それだけさ」

「ぶ、部長……」

そうだったのか。

思えば、気になるところはたくさんあった。部長は入部初日に、何かあればなんでも相談しろと言ってくれた。その言葉に甘えて色々相談してきたが……そういう背景があったのか。

それにたとえ頼まれていなくとも、先輩として部長は変わりなく接してくれていたと……そう言ってくれた。その言葉は純粹にとっても嬉しいものだった。

師匠の心配性にも、部長のなんでもこなせる器用さには驚くばかりだが、俺は本当に恵まれていると……そう思った。

「そして俺が毎年、運営委員に立候補していることや毎年行っている出店もまた、治安維持を兼ねたものだ。日中はそちらで活動をし、夜は独自に動いている。ここから先の話は、リディアさんたちに聞くといいだろう」

部長はそう告げると、恭しく一礼をしてそのまま下がっていく。

「師匠、詳しく聞いても？」

「ここはアビーから聞いたほうがいいだろう。アビー、頼む」
「ああ」

次はアビーさんが話し始める。現在はいつものようにスーツを着ているが、それを着崩している上に、いつも後ろで一つに結んでいる髪を解ほどいている。顔も少し赤くなっていて、アルコールが回っているのが伺えた。

「そうだな。まずは魔術剣士競技大会は世界的な大会だ。その認識はいいな？」

「はい」

「ということは、世界的に注目が集まるということだ。そしてこれを悪用する輩もいる。数年前は生徒の勝敗で賭け事をしているアホがいてな。そいつらが勝敗を意図的に操作しようとしたこともあった。それに、貴族のアホなメンツで相手の選手を妨害しようとしたり、毎年この手のものは枚挙に暇がない。そこで、表舞台では魔術協会が派遣した魔術師によって対応をして、裏では王国随一の諜報機関に所属しているヘイル一族が対応をしてくれている。だが、今年は少し様子が違ってな」

「というところ……？」

アビーさんはもう一杯だけワインを啣^{あお}ると、さらに話を続ける。

「以前、帝国の密偵が潜入していると話したな」

「確か……入学直後の話でしたか」

「ああ。あれは優生機関のことかと思っていたが、それはどうやらエイウエル帝国の暗殺組織……死神が魔術剣士競技大会に侵入しているらしい」

「死神、そんな大物が……来ているのですか……？」

「ああ。間違いない情報だ。それに既に、貴族の生徒が何人か行方不明になっていると届け出が出ている。おそらく、奴らの仕業だろう。こちらとしても、警備は完全に行っているが……流石に奴らが相手だと、少々手こずっていてな」

エイウエル帝国。

そこは世界最高峰の軍事力を持つ大国である。この世界の中で、アーノルド王国とエイウエル帝国がその力を二分している。そして

その国は、極東戦役の被害を拡大させた過去がある。

元々極東戦役は、小さな国の些細な争いから始まったものだ。それが次々と広がっていき、アーノルド王国も参加せざるを得なかった。

何故ならそれは、初めての魔術を用いた本格的な戦争だったからだ。だからこそ、鎮圧できるのは世界的な魔術大国であるアーノルド王国しかなかった。

帝国といえば、表向きは沈黙していたが戦争に参加した者なら裏にその存在があったのは分かっている。魔術技術を悪意を込めて流出させ、戦争を長引かせているのは自明だった。

そして、極東戦役はアーノルド王国の勝利で幕を閉じたが……かの帝国はあの時と同様に、再びあのような地獄を生み出すつもりなのか……。

そう考えると、心に暗い感情が灯りそうになるがそれをぐっと飲み込む。

今は、グリムリバー死神のことを考える必要がある。

「実は先ほど接敵したのですが、赤黒い模様が走った仮面をつけ、全身をローブで覆っていました。また、武器は短刀。それには毒物が塗ってありました。おそらく暗器の類はまだまだ有していると思います。そして自分と戦闘をするとすぐに逃げて行きました」

グリムリバー
死神。

それは帝国に存在している暗殺を専門とした組織の名前だ。裏の世界でもそうだが、表の世界でも畏怖の象徴として名前が通っている。

暗殺技術は世界最高峰。そして殺人という技術に関していえば、七大魔術師に匹敵する者もいると噂されている。何も世界七大魔術師は、実戦能力が高いという観点で選ばれるわけでもない。

俺や他の魔術師のように、確かに実戦能力が著しく高い者もいるにはいるが、研究者としての功績から七大魔術師になっている者もいる。キャロルはどちらかと言えば、そちらの方だ。

つまりは、魔術による戦闘技術という観点で言えば、世界最強は七大魔術師に限らない。その中でも死神は魔術を組み合わせた殺人技術は世界最高と評されている。

「……なるほどな。レイの実力を把握して退いたのだろうか……今回は三大貴族か、上流貴族狙いだろうな。この大会は貴族が一度に集まる。それに今回は運が良いのか、悪いのか、三大貴族がちょうど全員出場している。タイミングとしては最高だな」

「やはり……貴族の人間を狙って？」

「ああ。暗殺、または誘拐かもしれないが、王国のこれから有望となる魔術師を削りたいのかもしれない。そこで、レイ」

アビーさんがじつと俺の双眸を見据えてくる。

そして彼女はこう告げた。

「お前にも、警戒していてほしい。もちろんこれは私たち大人の出る領分だ。しかし学生を狙っているのなら、その近くにいるレイの

方が接敵する可能性が高いかもしれない。一応、胸に留めてほしい」
「なるほど。そういう事情でしたら、自分も全力で協力させていただきます」

「いつもすまないな。本当に助かる。一応、学生の方はレックスに任せているからな。あとは二人で協力してほしい。もちろん、私たちがメインで担当するからサポート程度で構わない」

「了解しました」

部長の方をちらりと見ると、軽く頷いてくれる。部長がいるのなら俺としても心強い。

そうして話も終わり、雰囲気も完全に弛緩していたので、俺はそろそろ戻ろつかと動き始めると……アビーさんが思い掛けないことを口にする。

「あ、そうだ。レイ」

「？　なんでしょか」

「お前今、女装で売り子をしているだろ？」

「はい」

「あれ、来年から禁止な。店がいいが、あの女装は自重しろ」

「は！？」

な！？　何を言っている……！？　どういうことだ。これからという時に、一体何が！？

縋るようにして部長の方を向くも、部長はその首を横に振った。まるで全てが終わったかのように、俺から目を逸らしてしまう。

あまりにも驚いて思わず立ち上がってしまいが、俺はそのまま話を聞く。

「お前たち、やりすぎだ。売り上げがお前たちの店に集中しすぎて、他の店からのクレームが尋常ではない。まあ……今年の大会では継続してもいいが……来年からは少し考えてもらおう。それに販売しているメニユーも色々とギリギリだしな……そのアホピンクも絡んでいるんだろう?」

と、扉からそーっと逃げ出そうとしているキャロルがビクツと体を震わせる。

「あ、あはは、あ、アビーちゃん……違うんだよ? キャロキヤロは、レイちゃんたちのためを思って……」

「いいや。お前はいつもそうだ。人の助言も聞かずに好き勝手ばかり……レイはまだ子どもだからいいが、お前はもう十分な大人だろう。いい加減、分別を覚えろ。さて、今日も説教だな……っ!」

「い、いやあああああ! た、助けてみんなあああああ!」
「ど真面目貧乳ちゃんに襲われるううううう!」

「は? キャロル……お前は言ってはならないことを言った……殺す……」

アビーさんにいつの間にか簀巻きにされ、彼女の脇に抱えられたキャロルが俺たちに向かって手を伸ばすが……それぞれ全員、無視をして扉に向かっていた。

実はアビーさん。説教をするとかかなり長い。それに酔っているのも相まって、きっと夜を明かす勢いだろう。俺、師匠、キャロルはよく昔は怒られたものだが……今回の矛先はどうやらアホピンクに向かっているの、俺と師匠はそそくさと退散する。

こればかりは長年で培った師弟の阿吽あうんの呼吸が発動。師匠が俺の

目を射抜くと、その意図を理解してすぐに車椅子を押して出て行く。そしてヘイル家の方々もまた、会釈をしながら颯爽と去っていく。キャロル、お前の犠牲は無駄にはしない……いや別に何かするわけでもないが、人柱に出来るならそうすべきだろう。

ドンマイ、キャロル。

ま、日頃の行いの差だろう。素直に諦めてくれ。と心の中で俺はそう告げる。もちろん口に出すと後々面倒なので、言葉にはしないのだが。

「キャロル。大丈夫だ。例の約束は守る……が、その件はお前に任せる。ではまた！」

「レイちゃんの薄情者おおおおおおおおおっ！」

キャロルは最後までジタバタと暴れて、こちらに腕を伸ばしていたが、それを無視してそのまま扉を無情にもボタンと閉じる。

すると、隣にいる師匠が大きな声で笑い始める。

「クククク……アハハハハ！ ククク……あのアホピンクは懲りないなあ……いやあ……実に面白い……クク……」

「昔はいつも三人で、アビーさんに怒られていましたね。でもまあ、アレは二度とゴメンですね……本当に長いですから……」

「ああ。懐かしいものだ……」

ひとしきり笑った後、師匠は真面目な声の調子で語りかける。

「さてレイよ。先ほど言った通りだが、くれぐれも気をつけるよ。
グリームリバー
死神の能力は私もよく知らない。お前なら大丈夫だとは思うが……
立ち会うことになれば、油断はしないことだ。それに奴らは恐らく
暗闇での戦闘を得意としている。使うならアレも準備しておけ」
「了解しました。肝に銘じておきます」

この大会に想いをかけている選手が多いことは知っている。だからこそ、この大会に介入させるわけにはいかない。

それと同時にアメリアのことを考える。

彼女がここまでくるのに、どれほど努力をし、自分自身と戦ってきたと思っている。アメリアにとってこの大会はきつと特別なものになる。それだけは間違いない。

彼女がさらに飛躍できると信じて、俺たちはこうして応援に来ている。

だからこそ、俺は誓う。

絶対に邪魔などさせない。この大会は無事に終了させてみせる。

氷剣の魔術師の名にかけて。

第63話 何度だって立ち上がる（前書き）

今回は三人称視点です。

今後は主要キャラクター視点は一人称、それ以外は三人称にしますのでよろしくお願ひします。と言っても、一人称メインに変更はありませんので。

第63話 何度だって立ち上がる

「……」

控え室。

アルバートはそこで心を落ち着けていた。

ただ一人、人工的な光に照らされながら彼はじつと椅子に座っていた。ここ数試合はずっと同じことを繰り返している。いや、この^{マギクス・シュバリエ}魔術剣士競技大会だけではない。校内予選の時からずっとそうだった。

思えば彼はここまで自分と向き合ったことはなかった。

今まではただ、この血統にさえ従えばよかった。周囲にもその才能を認められ、家族や友人にもその才能を賞賛される。

その環境で彼は思った。

魔術師の世界は、この才能こそが、この血統こそが、全てなのだと。

そう幼い頃に理解した。

だからこそ世界最高峰の魔術学院であるアーノルド魔術学院に入学するのは当然だし、その学院での才能を発揮するのは当然だと……

…そう、思っていた。

しかし彼は知った。いや、知ってしまった。この世界には血統だけでは、才能だけでは説明できない領域があるのだと。

レイ＝ホワイト。

アーノルド魔術学院に入学してきた、初めての^{オーディナリー}一般人。もちろん、アルバートは彼を見下した。なんの血統もなく、ただの偶然で入学してきた場違いな生徒だと。

しかし、レイは当代の『氷剣の魔術師』であった。

彼が一生かけても届き得ないと考えていた、七大魔術師の地位に同じ年齢でたどり着いている。その事実を知って……アルバートは心が折れそうになった。

俺の、俺の才能はなんだったのか……。

そう問い始めて、彼は……迷いながらも立ち上がることにした。

自分の立ち位置は理解した。才能に驕り、血統に溺れていた、ただの愚者であったと。

そう理解したからこそ、アルバートは進むことにした。

そこから先は、今までの友人との関係を断ち切り、ただ孤独に自分と向かい合った。

短期間ではあるがゼロからまた始めようと、そう考えて進んでき

た。その途中で、エヴィやレイは力を貸してくれた。

以前はあれほど彼は最低なことをしたと言うのに、二人は進んで協力してくれた。

アルバートは、自分とは違いどれほど器の大きい人間なのだろうと……そう思わざるを得なかった。

そうして紆余曲折を経て、ついに魔術剣士競技大会の準決勝までやってきた。

おそらく以前の彼だったならば、すでに敗北しているだろう。

この世界は全て才能で決まっていると思いついていたアルバートならば、ここまで泥臭い努力などしてこなかったのだから。

「……アルバート、いるか？」

「ああ。レイか……と言うことは」

「そうだ。時間だ」

「分かった」

運営委員として活動しているレイがアルバートを呼びにやってくる。そしてアルバートは椅子から立ち上がると、腰に差している剣を改めて確認して、胸に固定する薔薇も入念に確認する。

「健闘を祈る」

「ああ。では、行ってくる」

それ以上の言葉はいらなかった。

そうしてアルバートは眩い光の中に包まれていく。

「ふう……」

息を吐き出す。

すでに魔術剣士競技大会も準決勝まで来た。残っている生徒は四人だが、先ほどの試合でアメリカが順当に決勝に上がった。

こちらの方では……アリアーヌⅡオルグレンこそが順当に上がっていくだろうと、そう評されているのはアルバートも分かっている。血統も実力も、そして努力も、何もかも足りないのは承知している。

彼が才能に驕り、努力をしない時間もアリアーヌはずっと努力を重ねてきているのは……よく分かっている。

だが戦う前から諦めると言う選択肢は、彼にはなかった。

アルバートは毅然として、アリアーヌⅡオルグレンに相對する。

せめて、この心だけは負けまいとそう思っ

「アルバート。まさか、あなたがここまでくるなんて、思いません

でしたわ」

「アリアーヌ……そうだな。以前の俺だったならば、ここまでくるのは不可能だった」

「何かありましたの？ 随分とその……変わった感じがしますわね」

アルバートとアリアーヌは貴族のパーティーで何度も顔を合わせ、そして会話もそれなりにする仲であった。しかし、アリアーヌは彼の血統主義に偏りすぎる思想に辟易していた。

だと言つのに今はどうだろう。

まるで憑き物が落ちたかのように、精悍な顔つきになっている。

そして真剣な双眸で、じっとアリアーヌを射抜く。

「レイに……レイ＝ホワイトに出会って、俺は知った。この世界の広さをな」

「そう。また、彼なのですね。本当に何者なのでしょうね……」

アリアーヌのそれは独り言に近いものだった。

三大貴族であるアメリカを指導し、そして上流貴族であるアルバートすら変えてしまう存在。彼がただの一般^{オーディナリー}人出身の魔術師だとは、彼女には到底思えなかったが……。

今は、集中すべきだ。

そう考えて、アリアーヌは腰にある剣にそっと触れる。

アリアーヌもまたある想いを抱いてこの場にいる。だからこそ、負けるわけにはいかない。

「二人とも、準備はいいか？」

アビーがそう告げる。

そして二人ともに黙って頷くと……試合が始まった。

「では、試合開始だッ――！」

駆ける。

それはほぼ同じだった。その中でもわずかに速いのは……やはりアリアーヌだった。互いに内部コードインサイトを走らせると、そのまま超近接距離クロスレンジでの戦闘を繰り広げる。

二人は理解していた。

お互いに剣技型。その中でも、超近接距離クロスレンジをもっとも得意として
いる。だからこそ、これは力と力のぶつかり合いであると。

そうして交わされる剣戟。

「……ぐッ――！」

声を上げるのはアルバートだった。

イ この剣戟の最中、アリアーヌは氷を主軸とした高速魔術クイック、遅延魔デイレ

術の二つを連鎖魔術チェインで繋げることとで、たった一度の攻撃が幾重にも重なるように発動する。

その中で彼女は剣を振るう。それこそ、魔術を使っている時と、使っていない時の差などないかのように。

くそッ！ やはり化け物かッ！！

内心でそう不平を漏らすも、アルバートは冷静に対処していく。体に攻撃は受けるも、致命的な箇所は第一質料を分厚く覆うことで、それを緩和させる。

肉体的な性能だけで言えば、高いのはアルバートだ。だからこそ、そのアドバンテージを活かさないわけにはいかない。幸いなことに、戦闘は超近接距離で行われている。クロスレンジ

我慢比べならば、絶対に負けないと……アルバートはそう思っていた。

彼の魔術的な本領で言えば、本来は大規模魔術エクステンシブなどの大規模なものが得意だった。しかしこの戦闘では、そんなものを使う暇はない。

基本的な内部コードインサイドと外部コードアウトサイド、さらには高速魔術クイック、遅延魔術ディレイ、連鎖魔術チェインの三つを使って戦うしかない。

この二系統三種こそが、超近接距離での戦いの基本。クロスレンジしかしアルバートはそこまで仕上げることはできなかった。何も短期間で劇的に変わることなどありはしない。

アリアーヌのように幼い頃から謙虚にひたすら研鑽を重ねている

相手には、圧倒的に不利だと言うことは試合の前からわかっていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

すでに満身創痍。

アリアー又は傷の一つもついていない。だと言うのに、アルバートは全身が傷だらけ。流れ出ている血を拭くと、彼はさらに剣を構える。

技量は劣っている。魔術的な面でも、剣技的な面でも。

ここにこうして立っているのは、ただ我慢強く、負けるわけにはいかないと言う意志があるからこそだ。

一方のアリアー又は剣をスツと振るうと、付着した彼の血液を地面に払う。そうして上段に剣を構え直すと、淡々と告げる。

「負け、認めませんか？　これ以上は……危ないですよ？」

「はぁ……はぁ……あぁ……分かってるさ。今までの俺ならば、とつくに諦めているだろう……でもな……心が負けを認めないんだ。これは、心を摘む戦いだ。俺は絶対に倒れないし……薔薇も散らさない。さぁ、我慢比べと……行こうぜ？」

肩で息をしながら、ニヤリと微笑むアルバート。

本領である魔術はろくに使えず、剣技でも完封されている。

観客の中にはそんなアルバートを情けないと思っている者もいた。貴族ならば、引き際くらい分らないのかと。これ以上の無様をこの魔術剣士競技大会で晒すのかと。マギクス・シュバリエ

しかし二人のこの世界に、そんな無粋な思考はない。

すでに観客の声も、実況と解説の声も消えた。

見据えるのは、互いの誇り高き姿。

もう決着は決まっている。アルバートは数分後には、審判に試合を止められるだろう。今も流れ出る血液に、凍りついている体の節々が如実にそれを物語っている。

それに、すでに感覚はほとんどないはずだ。

だと言つのに、その双眸は燃えている。燃え上がっている。

それを見て、アリアーヌもまた理解した。

今までの攻防では決して諦めはしないのだと。

これは彼が言った通り、心を摘む戦いだ。そして互いに心は折れない。ならば……これで引導を渡そうと、アリアーヌは考えた。

「そうですか。アルバート……あなたは本当に成長したのですね。心から尊敬しますわ……でも、あなたは私には届かない。それを、教えて差し上げます」

瞬間、アリアー又は剣を捨てた。

もちろんその馬鹿げた行動を惚けて見ているほど、アルバートは愚かではない。それを見た瞬間、彼は今までの中でも最高速を出しながら地面を駆けていく。

すでに痛覚も、触覚も限りなく無くなっている。

今彼を動かしているのは……負けたくないと言っ意志だった。

もう未来は決まっている。だが、ほんの少しの可能性があるのなら……進みたかった。

「うおおおおおおおおおッ!!」

雄叫び。

奮い立たせるッ!! 俺はまだ、まだ、負けていないッ!! 痛覚が、感覚が失せようが、身体は動くッ!!

その時、いつかレイに聞いた話がふと……想起される。

俺も迷い、葛藤し、焦燥感に惑いながらも……ただ前に進むしかない時期があった。今のアルバートの気持ちすべて分かるとは言わない。でもそれを飲み込んだ上で進んでこそ、辿り着ける場所もある

その言葉を思い出して、アルバートは思索に耽る。

俺もまた、辿り着ける場所があるのだろうか。いやきっと、あるに違いない。

俺はだから今この瞬間も、そしてこれからも進んでいく。

だから……俺は、俺はッ！！

そうしてアルバートの剣撃が上段からアリアーヌに襲いかかる。すでに剣を捨てた彼女に防御する術はない。すでに避ける段階にもない。

必中。

だが彼は、目の前で発動する魔術の気配を確かに感じ取っていた。

《第一質料^{プリママテリア}＝エンコーディング^{マテリアル}＝物資コード^{マテリアル}》

《物資コード^{マテリアル}＝デコーディング^{マテリアル}》

《物質コード^{マテリアル}＝プロセッシング^{マテリアル}》

《エンボディメント^{インサイド}＝内部コード^{インサイド}》

「^{オーガ}鬼化[」]

ぼそりとアリアーヌがそう呟く。

そして瞬間……アルバートの剣は受け止められていた。

「な……あ……」

もう声にならない声しか出なかった。

そう……アリアーヌはその剣を両手で挟み込むようにして掴んでいたのだ。

真剣白刃取り。

これには、観客も最高潮に沸く。実況の声もまた、さらにヒートアップしていく。それほどまでに卓越した技術。いや、胆力とでも言うのだろうか。

「アルバート、覚悟しなさい。じゃないと……死にますわよ?」

彼女の四肢は、赤黒いコードが幾重にも重なるようにして走っていた。そして異常なまでに灼けるように発光する腕を使つて、アルバートの持つその剣を素手で叩き折ると、そのまま容赦無く拳を彼の鳩尾へと叩き込む。

「ぐつぐつぐつぐつ……アアアアアア……ッ!!!!!!」

呻き声を上げながら、転がっていくアルバート。しかし諦めては

いない。とつさにした防御は間に合っている。まだ、まだ戦える。

だが無情にも、受け身をまともに取る暇もなかった彼はそのまま場外へと叩き出されてしまった。

そうして試合終了のコールが告げられる。

「勝者、アリアーヌ^{II}オルグレン」

それと同時に、会場はさらに盛り上がりを見せる。

「し、試合終了おおおおおおお！　なんと、なんと！　あれはアリアーヌ選手の奥の手でしょうか！　あのアルバート選手を場外へと一気にふっ飛ばしましたっ！！」

「……あれはきつと固有魔術^{オリジン}だね。おそらく、四肢に内部コード^{インサイド}を集中させていると思うけど……あのレベルはちよつと学生のものを超えているね。ちなみに、汎用的な魔術ではなく、特定の魔術師だけが使用できる魔術のことを固有魔術^{オリジン}って言うんだよ」

「なるほど。毎年本戦では、固有魔術^{オリジン}は見ますが……新人戦では珍しいですね」

「そうだね。しかもあれだけ物理特化したのはちよつと、すごいかもね。これは決勝が楽しみだね、キャピ」

負けた、と言う事実を受け止めると観客の大歓声も、実況と解説の声も自然と耳に入ってきた。

アルバートは、ただ地面に大の字になって……空を見上げていた。

ああ、そうか。今日はこんなにも綺麗な青い空だったのか。

今更、そう理解する周りの状況。完全にアルバートは試合に没頭していたからこそ、気がつくことはなかった。

悔いは……なかった。ただ全身全霊を持って、戦うことができたと思う。アルバートには彼女のような切り札がなかった。

でも敗因はそこではない。

積み重ねてきた努力の年数が違う。ここに至るまでの時間の濃度が圧倒的に違う。

その才能に驕らず、謙虚に積み重ねてきたのがアリアーヌ「オルグレン」だと分かった。よく分かってしまった。

敗北の味は、いつも慣れない。レイに負けた時も、アメリカに校内予選で負けた時も、アリアーヌに準決勝で負けた今も、ただただ苦しい思いが胸中に纏わりつく。

そうして空を見上げていると、耳元で足音が聞こえてくる。それが彼のそばで止まると、声が耳に入ってくるのだった。

「わたくし、決勝まであれば使わない気でしたのよ？ だから誇ってもいいですわ。このアリアーヌ「オルグレン」に、本気をわずかも出させたことに」

「……負けた、か」

「あの攻撃を受けて意識があるだけでも、賞賛に値しますわ」

「ああ……」

「……悔しいんですの？」

「ああ……」

「ならば、努力なさい。決して驕ることなく、自己に向き合い、研鑽を重ねることしか、わたくし達にはできないのですから。魔術師として大成したいのなら、そうするしかありませんわ」

「ああ……」

「だからその涙は、きつといつか……未来のあなたの力になりますわ」

「そう……そうだな……」

「ええ。では、ご機嫌よう」

傷一つ付いていないアリアー又は、そのまま悠然と翻り……この会場を去っていく。

一方のアルバートは涙を、ただただ無表情のまま涙を流していた。顔を歪めることもなく、ただじっと空を見つめて涙を流すだけだった。

そうして周りの救護班の人間がやってくるのを感じた。もう完全に動けないアルバートは治療魔術をすぐにかけないといけないほどに、ひどい負傷だった。

彼はただじっと、この広い空を、青く澄み渡る空を見つめる。

ああ。世界はこんなにも、広いのか。

アルバートは知った。

自分はレイにも、アメリカにも、アリアーヌにも届くことはないのだと。

でもそれは今の話だ。まだ自分は途上である。いつか努力を重ねた先に、自分もその領域にいるのかもしれない。

「う……ぐう……ううう……」

時間が経ったせいか、彼は改めて自分を敗北を理解する。そして右腕で自分の歪んだ顔を隠して、そのまま涙を流す。

嗚咽を漏らしながら、ただただ情けない敗北を心に刻む。

溢れる涙は、止まることはない。今までは誰かに負けても、自分の才能が届かないから、相手の方が才能があつたからと、割り切っていた。だから悔しがることはなかった。

でも今は……無性に悔しかった。

敗北とは、こんなにも苦しいのか……苦しい、とても苦しいが……きっとこれは、俺には……必要なものなのだろう。なあ、そうだろう……？

悔しさを覚えたアルバートはこれからも進んでいく。幾多もの敗北を、幾多もの苦しみを知りながらも、彼が歩みを止めることは……ない。

アルバートは何度だって立ち上がる意志を、もう持っているのだから。

医務室。

アルバートはそこに運ばれ、ちょうど治療されている最中だった。現在彼の意識はなく、ただベッドに横たわるのみ。そこでは医療魔術を専門としている二人の男女の魔術師が、彼の治療を担当していた。

「彼、大丈夫？」

「ええ。大丈夫ですよ。この程度でしたら、すぐに治療できます」

「じゃ、お願いできる？」

「分かりました」

女性の魔術師に頼まれて、男性は魔術によってアルバートを治療しようと試みるが……。

瞬間、ニヤリと男性が微笑む。

それと同時に、アルバートの真下に黒い影が広がるように出てくると……そのままドボンとまるで水中に落ちていくかのように、彼は音もなく沈む。

「クク……ククク……」

そうしてアルバートもまた、行方不明者のリストに加わることになってしまう。

裏から忍び寄る脅威は、確実にこの魔術剣士競技大会を侵食していく……。
マギクス・シュバリエ

第64話 打ち碎かれる、その刹那

「ローズ選手、一言ください！」

「決勝戦に向けての意気込みを！」

「あのオルグレン選手にどう立ち向かいますか！？」

「オリジン固有魔術についての対策は……！？」

うるさい、うるさい、うるさい、黙れ、黙れ、黙れ、と私は心の中で思っていた。

大量の取材陣の人間が、私を取り囲む。

そして矢継ぎ早に質問をしてくる。ただ私のコメントが欲しいという一心で。今の私が、何を思っているのかも知らずに。

だが私は、表面上は毅然とした態度でそれに応じる。

「そうですね。全力を尽くしたいと思います」

「勝てる自信はありますか！？」

「……アリアーヌ」オルグレン選手は強敵です。だからこそ私もまた、全力で挑む所存です」

私は仮面を貼り付けて、ただ淡々と数々の質問に答える。でもそれは、取り繕ったものでしかない。全力を尽くすなど、当たり前のことだろう。そんなことも理解できないのか、と目の前にいる記者に言いたくもなるが……この感情の行き場はそこではない。

いや、私の感情の行方など、どうでもいいのだ。

ただいい言葉を引き出したいと、そう思っている集団なのだから。

私は準決勝を終えた時は、純粹に嬉しかった。

「……私も、私もなんとかここまで来れた……できる。私はちゃんと進める……」

会場から控え室に戻るとき、そんな独り言を呟きながら自分の勝利を噛み締めていた。

とうとう決勝戦だ。

私はここまでできることができた。きっとレイとの日々がなければ、私はここまでたどり着くことはできなかっただろう。

けれど……そんな彼とも、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会が始まってからは会話をしていない。

アメリカ応援団なるものを作って、みんなで私を応援してくれる中で、彼の声を聞いているだけだった。みんなとも、ろくに会話をしていない。

それは戒めだった。

きつと話をしてしまえば、私は自分の意志が揺らいでしまうと分かっていたから。そしてレイに会ってしまえば……きつと^{すが}縋ってしまふ。だから遠ざけた。

私は弱いから。まだ、弱いまだから。

だから進む時は一人でいい。

そうして優勝した時に、笑顔で迎えてもらおう。そう思って私はついに決勝戦までたどり着いた。やっとここまでできた。

私はみんなに会えると。心から祝福してもらおう未来をイメージしながら、もう一つの準決勝を見た。

「すごい……二人とも……」

二人の試合を一番近くから見ると。選手控え室から通じる通路の先、そこで私はアリアーヌとアルバートの戦いに見入っていた。

押しているのは圧倒的にアリアーヌだ。だと言うのに、彼は折れない。ずっと耐えに耐え続けて、その猛攻を凌いでいる。もう負けを認めても、誰も文句は言わないだろう。だと言うのに、鬼気迫るアルバートの表情を見れば決して諦めることはないのだと分かった。

身体中は傷だらけ、それに節々が凍りついている。きつともう……まともな感覚も残っていないに違いない。だと言うのに、それでも食い下がる。諦めない。

彼もまた、レイとの戦いを経て変わった。

純粋にそれはすごいことだ。今までの自分を否定して、そこから進み続けることの過酷さを私は知っているから。

だが私は次の瞬間、自分の自信が、今まで積み上げてきた自信が、打ち碎かれるのを感じた。

それはまるで、ガラスが粉々に碎かれるような感覚。私の構成している全てが、壊れていくような気がした。

「な……何……あれ……？」

アリアーヌの四肢は赤黒く変色していた。その四肢は赤黒いコードが幾重にも重なるようにして描かれており……アルバートが振った剣を真剣白刃取り。そしてそれを……あるうことか、握り潰したのだ。

そこから先はあまりよく覚えていない。

アリアーヌが彼の腹部に拳を振るうと、まるで人ではない何かを吹っ飛ばしたかのように、地面を転がっていく彼の姿を見て……私はイメージしてしまった。

あれはきっと、次の試合の私だ。

はつきりと理解できる。

あの魔術は、固有^{オリジン}魔術である。きつとアリアーヌが努力に努力を重ねて、才能のあるものが努力を重ねた先にたどり着ける……その極地。それこそが、固有^{オリジン}魔術だ。

唯一無二の魔術。

それはレイの氷剣と同じだ。あれもまた、彼にしか扱うことのできない魔術であり極地。

結局やっぱり……アリアーヌはそちら側の人間だった。

それだけの、それだけのことだと言うのに、前からずっと分かっていたのに……私は拍手喝采を浴びて、その手を振るうアリアーヌに恐怖した。

どうやって……どうやって勝てばいい？

あの固有魔術オリジンに対抗できるだけの魔術が私にあるのか？

アリアーヌの真価は、超近接距離クロスレンジだ。でも同じ距離感で戦っても、あの圧倒的な固有魔術オリジンを前にやられてしまう。なら、距離を取るべきなのか？ いや、それは無理だ。あの固有魔術オリジンは四肢に発動していた。つまるところ、腕力だけでなく脚力も同様に強化されているに違いない。

遠距離を保つだけの魔術は私にはない。

私の魔術師としての技量は確かに高水準かもしれない。それはレイにも褒めてもらった。でも切り札がない。だからこうして相手に切り札を出されると、対処できない。

レイもそれは懸念していたが、結局は間に合うことはなかった。

「私は……どうやって、戦えばいいの……？」

呆然と私は見つめる。

やっぱり世界は非情だ。

どうして私はこんな気持ちになるのだろう。こんな気持ちを知るぐらいなら、決勝戦に辿り着きたくなかった。

勘違いをしていた。

籠の中から飛び立てるかもしれないと言う幻想など、見るべきじゃなかった。自分の身の丈にあったことを、想いを、抱くべきなのだ。

震える……体が震え続ける。

どう足掻いても、あのアリアヌに勝てるイメージが湧かない。ただ圧倒され、アルバートのように地面を転がるだけになってしまっているのではないかと。

でも私には彼のように粘り切ることもできない。

だってもう、この心は負けを認めているのだから。

ああ……やっぱり私は、弱い。

どうしてこんなにも弱い私が優勝できるなどと、思ってしまったのだろうか。

「……………」

取材を受けた後は、足取りが重かった。今はただ、何も感じたくなかった。ただ一人でいたかった。幸いなことに、明日は休みだ。それに、決勝の前に新人戦と本戦の三位決定戦がある。

私が出場する決勝戦は、午後からだ。

まだ、まだ時間はある。

私は自分の宿舎の部屋に戻ると、まずはノートを広げてみた。アリアーヌに対してどう戦うべきか……そう考えるつもりだったのに……浮かび上がるのは、敗北の二文字だ。

いつだってそうだ。

肝心な時に何もできない。

私は思い上がっていただけだ。どうすることもできない。

ただアリアーヌに圧倒されて、試合は終わりだ。

その日は、震えるようにして、体を小さくして寝た。幸いなことに体は疲れていたので、眠ることができた。そして思った。

もう、目を覚ましたくはないと。

現実など、見つめたくはないと。

「……朝、か」

そして目が覚める。残酷にも時間は過ぎる。でも今日は、休日で

はない。今日は……決勝戦の日だった。昨日はただ、無為に過ごした。アリアーヌに負ける姿を脳裏に刻みながら、ただ部屋の隅っこでじっとしていた。

そして適当に食事をとって、また眠った。

そうして何も出来ないまま……魔術剣士競技大会、最終日を迎えた。

今日この日に、全てが決まる。

でもすでにわかっている結果がある。

それは、新人戦の優勝はアリアーヌが勝ち取るということだ。

それだけは間違いない。だって今の私には、勝てるイメージもないし……戦うだけの気力もないのだから。

「……」

呆然と歩みを進める。

取材陣にバレないように移動して、私は早めに控え室にたどり着く。現在は、もうすでに三位決定戦が始まっていることだろう。観客の歓声も、実況と解説の大きな声もよく聞こえる。

でも今は、そんなものは聞きたくはなかった。

私は部屋の隅っこで、ただ自分の膝を抱えて……頭を伏せる。

みんなの期待に応えたい。応援団のみんなはきつと、決勝戦でも信じているのだろう。

私が優勝するに違いないと。

今まではそれが力になっていた。だから戦えていた。でも今は…それが何よりの枷になっている。

いやみんなだけではない。決勝戦はきつと最高の注目度になる。そんな中で、私は醜態を晒すのだ。本当は逃げたい。でも逃げる勇気もなければ、まともに戦う勇気もない。

籠の中の鳥は、立ち上がったと同時に……その翼を挽がれたのだ。

あまりにも呆気なく、その圧倒的な力を目の前にして心が折れてしまった。アリアーヌはやっぱり違う。才能もそうだし、努力の量も違う……そしてその在り方が私なんかよりも、圧倒的に優れている。超越している。

やっぱり私は血統でしかないのだ。

籠の中に大人しくいればいい。そうすれば、こんな想いはしなくても良かったのに……。でもそう考えると同時に、それは……否定したかった。だって、私とみんなとの日々は……本物だったから。

そんな矛盾を孕んだ思考に支配されてしまう。

部屋の隅で縮こまり、葛藤して、自分に負けそうになる。

それが、アメリカンローズの本質だ。

みんなに会いたい。レイに……彼に会いたい。話したい、この心の内を。曝け出してしまいたい。もう全て投げ出してしまいたい。

でも誰もここには来ない。

そう分かっているからこそ、私は……さらに心を闇に落としていく。結局は変わることなど、できないのだ。だから私は……。

そう何度目か分からない思考を繰り返すと、控え室の扉が開いた音がした。でも時間はまだのはずだ。

だというのに、どうして扉が……？

けど……どうだっていい。どうせ誰かが掃除に来たとか、その程度だろう。すぐに出ていくに違いない。そう思っていたのに、私は頭上から……懐かしい声が聞こえた気がした。いや、懐かしいなんて表現は大げさだけど、今の私はもうずっとその声を聞いていない気がした。

「アメリカ」

「……」

幻聴が聞こえる。

そんな訳ないのに。レイは運営委員の仕事もある。ずっと忙しそうにしていた。それに、売り子の仕事もあるだろう。だからこんな場所にいるわけがない。

これは弱い心が生み出した幻聴だ。

ああ……私という存在はどこまで愚かなのだろうか……。でも、この手にそつと触れる彼の手は、確かに温かいものだった。

幻想などでは、なかった。

「アメリカ……ここにいたのか……」

「どう……どう、して……ここが……？」

「……訓練の時から、アメリカの逃げる場所は熟知しているさ」

「そ、そんな……だって……だって……私は……」

そつと触れてくるその手を、乱暴に振り払う。

今はレイにだけは、見られなくなかった。

会いたいと願ったけれど、こんな情けない姿は見られたくはなかった。

そう思っていた私は気がつく。よく見ると、レイの手もまた……震えているのだ。

「アメリカ……俺は……俺は怖かったんだ……」

「え……？」

何を言っているのだろうか……？

聞き間違いだろうか……？

そう思って顔を上げると、そこにはいつものような自信に溢れた顔ではなく、何か迷っているようなそんな表情が目に入る。

「レイ……」

そうして私たちは、試合前の最後の言葉を交わす。

私は知る。彼の本当の想い、そして自分の本当の想いを。
。

第65話 重なり合う心

「あれは……オリジン固有魔術か……」

俺、エヴィ、エリサ、クラリスの四人で準決勝を見ていた。今はアメリカの試合も終わったのだが、次の試合はアリアーヌ対アルバートということで、引き続き同じ席でその試合の行方を見つめる。

だが……もうすでに、勝敗は明らかだった。

この試合は、アリアーヌが勝つ。アルバートは確かに努力を重ねてきた。しかしアリアーヌに届く程には至らなかった。

それはきつと戦っている彼が一番理解しているだろう。

分かっている。もう敗北は必至だと、アルバートは理解しているが……決して諦めない。

その表情は、その双眸は、彼の不屈の意志を表していた。

そのあとは、フツとアリアーヌが微笑むと……彼女はあろうことか、剣を捨てた。もちろんアルバートはその隙を逃しはしない……が、アリアーヌが発動した固有魔術オリジンの前に敗北してしまった。

剣を素手で叩き折り、ただ拳の一振りで防御に専念したアルバートをあっけなく場外まで運ぶ腕力。しかもそれは、おそらくまだ本気ではない。

おそらく、真の実力の片鱗でしかないだろう。

「おいレイ……あれって……」

「固有魔術オリジンだな。それも、物理特化したものだ」

「そ……そうだよな……」

エヴィの声は微かに震えていた。

確かにあの魔術を見れば、圧倒されるのは当然だろう。アリアーヌの四肢は赤黒く染まり、そこにはコードが走っているのが可視化されるほどだ。第一質料プリママテリアの可視化にコードの可視化、という現象は珍しいものではあるが、確かに存在する。

でもそれは、限られた魔術師しか起こせない現象。

それをあの若さでたどり着いているとは……素直に脱帽せざるを得ない。

アリアーヌ＝オルグレン。その自信は決して虚勢などではない。あの能力があるからこそ、彼女はあそこまで自信を持って振る舞っていたのだ。

でもアメリカは……大丈夫なのか。

今のアメリカに、彼女に立ち向かえるだけの能力があるのか。

そう問われてしまえば……ない、としか言えない。

いや戦うだけの技量はある。圧倒されるかもしれないが、勝ち筋

が完全に消えたわけではない。

それに固有魔術^{オリジン}は第一質料^{プリママテリア}の消費が激しい。持久戦に持ち込めば、勝ちに見える。

そうアメリカに伝えたいが……俺は、今の彼女に何かをいうべきなのか。

避けられているのは知っている。だからそつとすべきなのではないのか。そう思ってしまう……。だが俺は本当にそれでいいのか？
アメリカをこのままずっと、放っておいてもいいのか？

そんな葛藤が生じる。

だがその時は、答えは見つかることはなかった。

次の日は休日だ。

そして明日には、ついに決勝戦が始まる。とうとうこの魔術剣士^{マジクス・シュバリエ}競技大会も終わりが近づいてきた。今の所は、表向きは何の問題もなく進行している。

だが、死神の介入^{グリムリパー}がいつあるかも分からない。警戒はしておくべきだろう。

「……………」

ベッドに寝て、天井を見上げる。

今日は朝からいつものように、売り子の仕事をした。そしてその仕事も今日で終わりだった。売り上げは尋常ではないものとなり、無事にその役目は幕を閉じた。

あとは明日の試合での運営委員としての仕事と……アメリカの決勝戦が待っている。

アメリカは大丈夫なのだろうか。

今日は、ずっとそのことばかりを考えていた。時折仕事が手につかなくなり、エリサとクラリスに注意されたほどだ。

アメリカはあの試合を見て……打ち拉^{ひし}がれているかもしれない。

俺は分かっている。アメリカと同等か、それ以上に彼女の能力のことを理解している。打開策はある。戦えるだけの技量もある。

でもその心が負けを認めてしまえば、全てが無駄になる。

アメリカは……あの圧倒的な固有魔術^{オリジン}を前にして、立ち向かうことができるのか。

友人ならば、ここで一声……かけるべきだと、俺は思う。でもこの体は動かなかった。ただただ、その心に触れていいのか……迷うばかりだった。

「アメリカ……君は……」

そうして考えるうちに、朝がやってきていた。彼女のことを心配するあまり……一睡もできなかった。

だが一日くらい寝なくとも、俺のパフォーマンスは落ちることはない。

いつも通り仕事をこなそう……そう思って、扉を開けようとするそこには、エリサ、クラリス、エヴィの三人がいた。

どうしてこんな朝に……。

そう思うと同時に、全員の表情が真剣なものであると気がつく。

「レイくん……その……」

そう口を開いたのは、エリサだった。

「……どうかしたのか？」

「その……実は、ね。みんなでアメリカちゃんのところに行こうと……そう思ってたんだけど……やっぱり、これはレイくんがすべきだと……思ってる」

「……俺が？」

そう告げると、クラリスとエヴィは静かに頷いて口を開いた。

「レイがね、迷ってるのは分かってるわ。アメリカのところに行っているのか、昨日からずっと考えていたんでしょ？」

「珍しくレイが仕事に集中できていなかったからな。それは俺も気がついたぜ」

ああ。

そうか。そういうことだったのか。

どうやら、友人たちには俺の葛藤などお見通しだったようだ。

これは素直に認めるしか、ないだろう。

そうして俺はポツリと、まるで溢れ出る一筋の雫のように、自分の心を曝け出す。

「……やはり隠し事はできないな。正直に言おう……俺は、怖かったんだ。彼女の心に踏み込むことが。アメリカがずっと悩んでいるのは……分かっていた。でも俺は……踏み込んでいいのか、迷っていた。その心に触れていいのか、壊してしまうことになるのではないかと……そう考えていたんだ。自分の選択肢は間違っていないかと、ずっと問い続けて……逃げていたんだ。アメリカと向き合うことに……」

話してしまえば、この想いは自然と言葉にできた。

いつだって一人ではどうすることもできない。師匠と出会った時も彼女に助けてもらった。

そして今は、友人に助力を求めている。

今までの俺ならば、この行為すら否定していただろう。

でも今は……この信頼できる仲間の前だからこそ、自然と想いを

口に出来た。

そう想いを曝け出すと、エリサがソツと俺の手を包んでくれる。

「レイくん……きつとね今、アメリカちゃんの心に触れることができるのは、レイくんだけだよ。私たちがみんなで行っても、アメリカちゃんはまた取り繕う。そして無理して笑って、そのまま決勝戦に行っちゃう……でもね、レイくんが私たちに言ってくれたように思っていることを口にすれば……届くと思う。アメリカちゃんは、待つてるよ。ずっとずっと、レイくんのことを待つてる。私たちもこのことをずっと見て見ぬ振りをしてきたけど、今じゃないと……きつと間に合わない。そしてそれができるのは……レイくんだけだよっ……！」

「そうね。エリサの言う通りよ。レイ、あなたが行くべきよ。大丈夫、きつとアメリカは心を開いてくれると……私はそう信じてる……」

「……俺があまり言えた義理じゃねえが……レイ。お前もまた、悩んでいるのは知っていた。同室だしな。でも、ここしかねえと思う。あのアリアーヌ＝オルグレンに立ち向かうのは、きつと怖えと思う。でもだからこそ、お前は力になれる。お前が俺たちを信じてくれているように、アメリカもきつとレイを信じていると思うぜ」

ああ。そうか。

やはり、俺の選択肢は間違っていなかったようだ。

俺の言葉はアメリカに届く。いや、届かせる。

俺は怖かった。自分の心の内を曝け出して、否定されるのを。

でもみんなは信じてくれている。

それにアメリアは求めているのだ。

きつと、彼女のことだ。今頃、部屋の隅っこで、一人で縮こまって泣いているかもしれない。

俺は分かっていた。

アメリアは三大貴族筆頭のローズ家の長女であると同時に、ただの十五歳の少女であると言うことに。

特別なことなどありはしない。普通の人間と同じように、彼女にだつて弱い面はある。

だからそれに寄り添ってもいいのだと。

昔、師匠にしてもらったように、アメリアにできることが俺にもあるのだ。

もう自分に言い訳はしない。もう待っているのは、終わりだ。

俺は進んでいいんだ。この選択は、間違いじゃない。

それはみんなが証明してくれた。

だからあとは……思うままに、俺はアメリアの力になればいい。

「みんな……ありがとう。行ってくる。そして、アメリアに伝えて

くる。俺の想いを」

「うん……っ！」

「行ってきなさいっ！」

「レイ……頑張れようっ！」

エリサ、クラリス、エヴィの間を抜けるようにして俺は走り出した。

今はただ、アメリカに、早く彼女の元にたどり着きたいと……俺はそう願いながら……この宿舎から出て行くのだった。

「アメリカ……ここにいたのか……」

「ど……どうして……ここが……？」

「訓練の時から、アメリカの逃げる場所は熟知しているさ」

「そ、そんな。だって……だって……私は……」

見つけた。色々なところを探し回った。これだけ人の多い場所では、アメリカの痕跡だけ追うのは難しかった。

でも俺はきつと、彼女はここにいるのだと……思った。

アメリカは逃げはしない。でも、内心ではきつと逃げたいのだろう。

アリアーヌのあの固有魔術オリジンを見てしまえば、恐怖するのは当たり前だ。だからアメリカは、この場所で一人で嘆いているだろうと考えてここまで来た。

そして膝を抱えているアメリカに近づいていくと、俺もまた腰を下ろす。視線をアメリカに合わせて、その震えている手を……握りしめる。

「アメリカ。俺は……俺は怖かったんだ……」
「え……？」

俺の手もまた、震えていた。

情けないとも。こうして向き合つと覚悟を決めたのに、未だに俺の心は怖がっている。

人に向き合つのは……こんなにも怖いのかと改めて思う。

でも、それでも……告げる。

それが俺がここにきた意味なのだから。

「俺は分かっていた。いや、俺だけじゃない……ここに送り出してくれた、エリサ、クラリス、エヴィのみんなも……アメリカが悩み苦しんでいるのは分かっていた……」

「そう……そうなんだ……みんな、分かってたんだ……あ、あはは。その……がっかりした？ 三大貴族のローズ家の長女ひまがこんな様だなんて、わ、笑っちゃうよね……？」

アメリカは無理やり笑顔を作りながら、涙を流していた。

いやそれは、笑顔にもなっていない。ただ顔を歪めながら、俺の顔を伺うように……じつと見つめてくる。涙を流しているというのに、中途半端な笑顔を作って、取り繕おうとしている。

あまりにも痛々しいその姿。

俺はそんな彼女の手に指を絡ませるようにして、再び握り直すと……さらに言葉を続ける。

「アメリカ。話してほしい。俺は君の心が知りたい……俺は触れ合いたいんだ、君の心に。もう、逃げたくはない。後悔はしたくないだから、正直に……話してほしい。もう取り繕う必要も、仮面をつける必要も、ないんだ」

「そっか。やっぱり、レイは分かっちゃうんだ。そっか。あーあ、本当に私って……どうしようもないね……」

それからアメリカはポツリ、ポツリと、自分の過去を語り始める。今まで何を想って生きてきて、どうしてここにたどり着くに至ったのかを。

「私はね。ただずっと、周囲の願うアメリカをね、演じてきたの……勝手に他人が思う自分を想像して、振る舞って……ローズ家の長女にふさわしい自分になるためにね。ずっとそうだった。周りと比較して、レベツカ先輩もそうだし、特にアリアーヌとはずっと……ずっと比較されてたの。それで、ずっと頑張って、頑張って、頑張っ……て、頑張っ……て、ここまで来た。でも、ははは……レイの過去に比べれば、こんなのって本当にどうしようもない……ことだよね？本当に些細なこと、あなたの悲惨な過去と比べれば私なんて……」

呆然と、ただ下を向いてそう告げるアメリカ。

零れ落ちる涙が、地面に広がっていく。

そんな様子を見て、俺はさらに言葉を紡ぐ。

「アメリカ。自分の過去と、俺の過去を比較しても意味はない。俺の過去に比べて、自分の苦しみが軽いと思って……君は楽になったのか？」

「それ、は……」

「そうだ。そんなことはない。その苦しみは、誰かと比較しても……癒されはしない。分かっているさ、俺も経験したことだから。人の悩み、苦しみとは、絶対的なものだ。だから、比較しても意味はないんだ。アメリカはずっと苦しんできた。そうだろう……？」

「そう。その、通りだよ。ずっとね。ずっと辛かったの……苦しかった。どうして、こんな思いをしてまで、生きていくんだらうってずっと、ずっと思ってたの……」

「……」

「みんなと出会って、レイと出会って、何かを掴めると思った。この大会で優勝できれば、私はきっと何者かになれると。そう、私は考えてたけど。ははは……結局、アリアーヌには勝てないよ。いつまで経っても、私は……籠の中の鳥でしかない……ねえ、レイ。どうして、どうして私は生きているの？ 偽って、自分を演じて、理想の姿を体現している。それでも彼女に届かない。届くことは、ない。こんな私の人生に、意味ってあるの……？ ねえ、教えてよレイ……私は、どうして……生きているの……？」

重なり合わせる手と手。

いや、今重ねているのは俺とアメリカの心と心だ。

やはりアメリカはその内に抱え込んでいた。何か過去に劇的なものがあつたわけではない。だがアメリカの苦しみは、ずっと十数年にも渡つて続いている。その苦しさは相対的なものではない。アメリカしか知り得ない、絶対的なものだ。

そこに踏み込む以上、俺は……彼女に伝えるべきことを伝えたいと思う。

きっと俺は上手く言葉にできないのかもしれない。

でも、それでも、彼女の心に触れたいと願つた俺は……いつかの自分がしてもらつたように……誰かを救えるのだと。

俺は命を奪うだけではなく、誰かを救つてもいいのだと、そういう生き方を選びたかつた。

だからこの想いを、言葉にすればいい。

「アメリカ。人間に、生きる意味なんて……ないんだ」

「それって、どういう……」

「……俺たちに、人間に意味などない。人の生み出すものは、全てが先に目的がある。その目的という願いを元に、人は多くのものを生み出した。でも俺たちは、その目的の前に存在がある。俺があの戦争を経験するしかなかったように、アメリカも貴族という枠から出ることは、できない。俺たちに、崇高な意味などないからだ。生きる意味など、ない。俺だって、そんなものは、分らない……」

「そ、そんな。でもそれなら、私は。私はどうしたら、どうしたら

いいの……？ レイにも分からないのに、意味もないのに、どうして生きるの……？ ねえ、どうして……？」

俺は抱きしめた。もう外聞などどうでもいい。ただただ、感情のまま行動を起こした。その縋るような双眸を、絶望に染まる彼女を、俺はただただ救いたいと思ったから。

思えば……ここまで感情的になることなど、なかった。

それは怖かったからだ。この感情を晒した先に、何が待っているのか。

拒否されてしまうのではないかと、考えてしまうから。

でもそれはアメリカも同じだった。だからこそ、俺はこの感情を……今だけは曝け出す。

想うことを、ただ想うままに言葉にするのだ。

そして、力の限りアメリカの体を抱きしめて……さらに言葉を紡ぐ。

「でもアメリカ。俺たちは、人間は、生きる意味を……見出せる。生まれた意味はない。生きる意味も、初めから存在などしていない。でも、俺たちは意味を見出せる。自分の人生は、自分で意味を作るべきなんだ……だから俺は、君と一緒に探していきたい……そして、みんなと一緒に探していこう。俺だって弱い。人間はそういう生き物だ。完璧な人間など、存在しない。誰だって弱い面がある。

だからこそ、こうして触れ合って、心と心とを重ねるんだ。それじゃ、ダメか？　一緒に意味を探すのは、君の生きる意味に、ならないか……？」

ずっとこれを伝えたかった。

誰かの借り物の言葉ではなく、俺は心から想うことを彼女に……
こうして伝えたかったのだ。

俺は共に進みたいと願っていた。

互いに寄りそって、前に進んでいきたいと。そう言葉にするのが、こんなにも難しく、怖くて、これほどまでに時間がかかるなんて思ってもみなかった。

だが、一度覚悟を決めると自然と伝えることができた。

アメリアの心に俺の心が触れるような、そんな感覚を覚える。

そして、彼女はしばらく黙ったまま……涙を流して、再び言葉を紡ぐ。

「う……ううう。う……いい、の……？　私が、こんな私が……そばにいても？　こんな、にも……弱虫で、泣き虫な、私でも、いいの？　みんなのそばに、レイのそばにいても……いいの？　もう偽らなくても、そのままの私でも、弱い私の儘ままでも……いいの？」
「当たり前だろう。君はいい。生きていい。だから一緒に生きていい。探していい。俺もアメリアも、まだ途上だ。だから

ら、行こう。一緒に、進んでいくんだ。苦しみながらも、悲しみながらも、みんなと共に生きていこう。一緒に、生きる意味を探そう。その弱さを、みんなで支え合いながら、生きていこう。俺は君と一緒に、進みたい……」

「うん……っ！ うん……っ！ うわああああああああああああああああああああっ！！」

アメリカは嗚咽を漏らしながら、ただただ泣いた。

そして俺もまた右目から、一筋だけ涙を零した。

そうだ。

俺たちは誰もが探しているんだ。生きていく意味を。

でも一人ではきつと、心が折れてしまう。

だから触れ合うのだ。求めるのだ。他人の心というものを。

そして言葉を交わすことで、心と心を重ねていくのだ。

本当の心の内など、言葉にするまで分からない。だからこそ、俺たちはこの溢れ出る想いを言葉にして、触れ合っていくのだろう。

そうして成長していくのだろう。

魔術師としてだけでなく、人間としても。

アメリカ。もう、大丈夫だ。君のそばには、友人が……そして俺

がいる。だから一緒に生きる意味を探して、生きていこう。これから先も、一緒に進んでいこう。

その先の彼方へと。

第66話 守るべきもの

「アメリア、落ち着いたか？」

「うん。そ、その……ありがとう、レイ」

「俺としても、君の力になれたのなら嬉しい」

「う、うん」

顔を真っ赤にしながら俯く彼女は恥ずかしいのか、俺から視線を逸らしながらそう言葉にする。

その一方でアメリアと俺は依然として指を絡ませるようにして、手を握っていたが……どうやらもう、そういうわけにもいかなかった。

というのも、本戦の三位決定戦が終了したからだ。また新人戦の方は、表向きはアルバートが負傷のため不戦敗となっている。そのため、時間は予定よりも前倒しになっている。

そして試合が終了したのは弛緩した雰囲気と、大歓声によって理解できた。

俺たちは、試合前の最後の会話を交わす。アメリアの背中を押すためにも。

「アメリア。ついに決勝だ」

「うん」

「アリアー又は強いだろう」

「……うん。そうだね」

「あの固有魔術^{オリジン}に立ち向かうのはきつと、怖いと思う。あれは完全に物理特化したものだ。少しでも防御を緩めれば、一気に持つていかれる。でも俺との戦いを乗り越えた君なら、活路は見出せる」

「……うん」

「アメリアなら、戦える。立ち向かえる。俺は君に全てを教えた。それに……」

「それに？」

「いや、ここから先は至る者にしか分からない。その時が来れば、俺の言葉の意味が理解できるだろう」

「……そっか。うん。レイが言うならそうなんだろうね」

よく見ると彼女の手はまだ震えていた。

俺はそんなアメリアの震える手を再びそつと握りしめる。優しく包み込むようにして、彼女のその手を握って熱を伝える。

「大丈夫だ。アメリア。俺は見ているから。それに、俺との特訓の日々は絶対に君の成果になっている。だから、信じている。きっと君なら勝てる」と

「うん……っ！」

その顔は涙の後で真っ赤になっているも、もう……翳^{かげ}りは見えなかった。まるで憑き物でも落ちたかのように、晴^{かお}れやかな表情をしていた。

「ッ」

瞬間、気配を感じる。本当にごく僅かな気配。いやこれは殺気。それこそ、俺にしか分からないようにしているのか……アメリカは気がついていないようだった。

しかしこれは誘っているのだろうか。いや、そうとは思えなかった。

なるほど、このタイミングで来たということか……。

そして俺は同時に、昨日の部長との会話を思い出していた。それはこの大会の裏に潜む死神の件についてだ。

「アルバートが行方不明ですか？」

「ああ。医務室に運ばれてから、その行方を追えなくなったらしい。これにより確実になったのは、明らかに貴族を狙っていると言うことだな」

「そうですか……アルバートが……」

あの試合の後に医務室に運ばれ、そこで誘拐されたのか。

俺はただただ許せなかった。どれだけの想いで、気力で、戦っていると思っている。その想いを踏みにじるかのように、魔術剣士競技大会に害をなしている存在は到底、許容できるものではない。

だがここで感情に任せても仕方ない。まずは冷静に対処していくべきだ。それに師匠たちも動いているのだ。それを信頼すべきだろう。

まずは自分に何ができるのか、その確認だ。

「レイいいか。落ち着いて聞け。おそらく、誘拐された生徒たちはまだこの会場のどこかにいる。一箇所に集められている可能性が高いな。そして大会終了に紛れてそのまま連れ去っていく予定だろう。まあこちらは学院長たちが対応している」

「はい」

「だからこそ、俺たちが対応すべきは、今後の被害を防ぐことだ。おそらく……現在一番危ないのは、三大貴族とクラリス、クリーヴランドだろう」

「クラリスですか？」

「ああ。上流貴族の中でも、クリーヴランド家は最も三大貴族に近いとされている上流貴族だ。実はアメリカ、ローズとクラリス、クリーヴランドにはかなりの数の護衛をつけている。だがレイは彼女たちと接する時間が多いだろう？」

クラリスの家の話は、師匠の家に行った時に詳細を聞いた。

それは俺が予想しているよりもはるかに大きい貴族の家らしい。

曰く、三大貴族の次点にはくるとか。と言うことは、クラリスもまたアメリカと同様に大貴族のお嬢様なのだ。狙われる理由はそれだけでも十分だという話だった。

「はい」

「だからこそ、お前にも警戒してほしい」

「了解しました」

「ああ。レイのことは信頼している。よろしく頼む。俺たちも裏で動くが、一応警戒は怠るなよ。何かあるかは分からないからな」

「は。了解しました」

昨日の会話からするに、間違いなく死神による介入だろう。明らかに誘っているとは思えない場所に飛び込むのは……危険が伴う。しかし、ここで行かないという選択肢は存在しない。

ここから先は決勝戦だ。

選手達も、観客達も待ち望んでいるのだ。

行かないわけには、行かない。

そう考えると、俺は彼女に改めてこう告げる。

「アメリカ、すまない。君の試合……どうやら、少しだけ遅れていくことになりそうだ」

「？ 運営委員の仕事？」

「ああ。そんなところだ。でも絶対に、見に行く。その勇姿を焼き付ける。だから待っていてくれ」

「ふふ……レイが来る前に、勝っちゃうかもよ？」

微笑む。

それは今までのものとは違う。アメリカの本当の心からの笑顔だった。

純粹にそれは美しいと、俺は思った。

「そう言えるのなら、大丈夫だな」

「そう……かな？ 私、大丈夫かな？」

上目遣いで、じつと俺のことを見つめて来るアメリカ。それは何かを欲しているようにも思えた。そうして彼女はしばらく黙っていると、意を決したのか……こう言葉にした。

「もう一度。もう一度だけ、抱きしめてもらっても……いい？」
「もちろんだ」

互いの距離を詰めると、今度は優しくアメリカを包み込むようにして互いの体を抱きしめ合う。熱が伝わる。鼓動が聞こえる。その全てが伝わってくる。

今、俺たちは確かに生きている。こうして感じ合うことができている。言葉を交わすことなく、俺たちはその存在を互いに刻み込む。

そして、ほぼ同時にスッと体を離す。

「行つて来るね」

「ああ。優勝してくれ、アメリカ」

「そうね。きつとそうなると思うわっ！」

「今のアメリカなら、きつとたどり着けるさ」

「うんっ！」

ニコリと微笑むと、アメリカは悠然とこの場から去っていく。その背中は今まで見た彼女の中でも、一番大きなものに見えた。

それは自信に満ち溢れた、そんな人間の姿だ。

だからきつと大丈夫だ。

アメリカ、君なら……きつとたどり着ける。その場所にきつと。

君はもう、籠の中の鳥じゃない。飛び立てるだけの翼を、もう持っているのだから。

「ふう……さて、と」

俺も行くしかないようだな。

そう覚悟を決めて、俺は違和感を覚えた地下へと向かうのだった。

「……」

地下室へ向かう道の途中。そこは明らかに死の匂いがした。特別何か魔術的な要因があるわけではない。ただ俺の今までの経験からして、ここには死を纏わり付かせた何かがいると感じ取ったのだ。

すでに能力はある程度解放してある、あとは接敵するだけだが。

慎重に歩みを進めていると……視線の先に見慣れた顔が見えた。

「クラリスッ！？　どうして、ここにいるッ!？」

クラリスには護衛がついているはずだ。それは事前に部長とも確認した。だと言うのに、今は完全に一人だ。今まで後方に潜んでい

たはずである護衛の魔術師の気配は、完全になくなっていた。

まさか……敵にすでにやられてしまったのか……？」

そう思案するも、クラリスはいつものように話しかけてくる。彼女自体は、この異常事態に気がついていないようだった。

「レイ！ アメリアは大丈夫だったの……？」

「ああ。それは大丈夫だ。先ほど、無事に決勝戦に向かった」

「そっか。それなら、私も安心したわ」

「でも、どうしてこんなところにいるんだ。運営委員の仕事はないはずだろう」

「え？ 急な運営委員の仕事があるって、先輩に聞いたからよ。ちよつと地下に行ってくれないかって。そのすぐに終わるからって、言われて……」

「……なるほど。そういうことか……」

確実にこれは誘っているのだろう。だが解せない。どうして俺に気がつかれるような真似をした。今までのように潜んでいればいいものを。このタイミングでどうして……。

と思案する暇もなく、俺は魔術の気配を感じ取る。

それはこの地下空間を覆うように広がっていき、完全に閉じてしまふ。

「広域干渉か……仕掛けて来たな」

「えー？ え……！？ 急に薄暗くなっただけどっ！？ 停電！？」

「クラリス……俺の側から絶対に離れるな」

「う、うんっ！ だけどこれって……もしかして魔術？」

「ああ。広域干渉系の魔術だろう。すでにこの空間は外界から隔離された」

「外界から隔離っ！？ そんな魔術ってあるのっ！？」

「ある。だが今は静かにしてしてくれ……」

「う……うん……」

彼女もこの雰囲気から尋常ではないものを感じ取ったのか、そのまま黙ってついてくる。

本当ならば、クラリスはここから逃がすべきだった。だが話している間にも、相手の広域干渉系の魔術が発動。間違いなく、俺とクラリスが合流したのを見越しての行動だろう。

また外界から隔離されているのは、外にある第一質料プリマテリアが感じ取れなくなったことから明らかだった。

そしてさらに奥に進んでいくと、開けた空間に出た。

ここはいつも作業をしている場所である。

見慣れた空間。

でも今はその中央に立った一人だけぽつんと立っているのに気がついた。

周囲は暗くなっているも、まだ点灯している微かな明かりでその相手を認知する。

身長は百六十センチ前後だろうか。それにフード付きの大きな口

ーブを羽織り、さらには仮面。その赤黒い模様の走った仮面には見覚えがあった。

「……キタナ」

「何が目的だ」

「……オマエヲ、コロス」

「俺が目的か……」

「ソツチノオンナハ、ツレテカエル……」

「なるほど。やはり俺たちが狙いか」

まるで人形が話しているかのような、声。その不気味な声に怖がっているのか、クラリスは震えていた。

「ど、どうということ……レイを殺して……私を連れて帰るって……」

感じ取っている。相手が振り撒くその殺気をクラリスもまた、理解しているのだ。

「レイ、逃げないっ！ 私たちがどうにかできる相手じゃないわっ！」

俺の腕を引っ張って、すぐに後に戻ろうとするクラリスだが……すでにここは相手の領域が展開されている場所だ。

固有名称までは理解できないが、外に逃げるのは骨が折れるだろう、もちろん、アンチマテリアル対物質コードを使えば可能だが……クラリスがいる今は逃げる方が逆に困難になるだろう。

だからもう、戦いを避けることはできない。

「クラリス。すまないが、応戦するしかないようだ」

「で、でもっ！」

「大丈夫だ。任せておけ」

「レイが強いのは知ってるけど、これはやばいわよっ！ 分かるのっ！ だから早くっ！」

「クラリス。俺は負けない。それにこいつをここで逃すわけにはいかない」

瞬間、俺は体内時計固定を完全に解除する。

その間を縫うようにして相手は短刀を投げてきた。

俺が完全に戦闘態勢に入る暇すら与えないつもりなのだろうが、すでに準備は済ませてある。あとは適切に事を運ぶだけだ。

本当はクラリスはこの場で待機しておいて欲しいが、敵の特徴なども考えて一人にしておくのはかなり危険だろう。

「きゃっー！」

「クラリスッ！ しばらく喋るなよッ！！ 舌を噛み切るぞッ！！」

左腕だけで彼女を抱き上げると、そのまま俺は一気にコードを走らせる。

《第一質料^{プリママテリア}〓エンコーディング^{マテリアル}〓物資コード^{マテリアル}》

《物資コード^{マテリアル}〓ディコーディング^{マテリアル}》

《物質コード^{マテリアル}〓プロセシング^{ディセレーション}〓減速^{スロウ}〓固定^{ロック}》

《エンボディメント》マテリアル物質

「
アイシクルブレイズ
冰千剣戟」

右手に顕現させるのは、冰剣。それをしっかりと握り締める。

そして敵が投擲してくるその短刀を、冰剣によって叩き落としてそれを凍らせていく。これは漏れる毒性の液体が体に触れないようにするための処置だ。

身体の動きは、悪くない。それにコードも以前よりも良く走る。

自分の現状を冷静分析して、俺はそのままクラリスを抱きかかえたまま大地を駆ける。

この暗闇の中、おそらく有利なのは敵の方だろう。だが俺もまた夜戦は経験している。

投擲してくる場所からその位置を逆算して割り出す。もちろん適宜移動しているので、その音も頼りにして、薄暗い空間の中で戦闘を繰り返す。

冰剣を右手に握りしめたまま、宙に浮かんでいる別の冰剣を相手に向かって放つ。その数はすでに五十を超える。今の俺なら、おそらく百程度ならば戦闘しながらでも操作することができる。

「……クッ！」

完全にヒットしたわけではないが、微かに当たったようだ。そこから俺はさらにコードの中に物質変化を追加して、一気に氷剣を巨大な氷塊へと変化させるが……。

流石にそれは避けられてしまい、その場に氷塊が生まれるだけになっちゃった。しかしこの場合はすでに、俺が魔術で生成した数多くの氷で埋め尽くされている。

それが示すのは、敵がどこにしようともその氷の周囲にいれば第一質料をさらに感じ取ることができるということだ。人間からも、微かに漏れ出るそれを逃しはしない。

「そこか」

後方、上空。

そこにいた敵の顔面に、俺は容赦なく氷剣を突き刺した。が、その仮面はやはり魔術的な強化が施されていたのだらう。仮面が破壊されて、相手の額から血が滴るだけに止まってしまう。

「ぐっ……うっう。ごほっ……やはりお前は、氷剣のようだな……」

その声は、先ほどと異なり機械的なものではなかった。おそらく仮面に音声を変化させる魔術を組み込んでいたのだらう。それが破壊されてしまい、今は完全に素の声になっている。

「やはり、ということは知っていたのか。死神^{グリムリバー}」

「クク……ククク。俺のことも知っているか。しかし……この大会、

別に俺としてはどうでもよかったのさ。その女は上の命令だから、確保するが……ただ、七大魔術師が四人も、それに最強の氷剣がいるんだ。ククク……殺さずにはいられないだろう……ククク。滾る^{たぎ}、血が滾る。ククク……」

得心する。あの時の視線。それは間違いなく、こいつだったのだ。おそらく大会の開始直後から俺のことは把握していたのだろう。そうして俺が出るしかない状況を作り出して、今に至るということか。

そして、敵は持っているその短刀を軽く払う。

その仕草を見て、こいつは殺しに慣れていると判断した。

だが……四人目の七大魔術師？ この場には、氷剣である俺、灼熱であるアビーさん、幻惑であるキャロル、その三人しかいないはずだが。もう一人とは誰だ？

と、疑問は尽きないがやるべきことは一つだ。

「それ相応の覚悟はしてもらおうか、死神^{グリムリパー}」

「クク……クククク。世界最強は誰なのか、ククク……教えてやる」

俺の腕に抱かれているクラリスは、その会話を聞いて完全に呆然としていた。「そんな……レイが氷剣？ 七大魔術師の……あの氷剣なの？」と呟いているが、今はその問いに答える暇はなかった。

完全にこれは死闘なのだから。たった一度のミスが死につながる。こいつはそれを決して逃しはしないだろう。躊躇など、容赦などなく殺人を行うのは自明。

懐かしい感覚だと思うが、今はそんなことを感じている場合ではない。

「あれは……」

俺は相手の取り出した武器を見て、ある一つの仮説を抱く。禍々しい第一質料が絡みついたそれは、魔剣の類ではないかと。

それは、剣そのものに魔術的な能力が付与されており、それが継続的に発生するという古代から存在する代物。普通は道具などに魔術は付与できるが、道具そのものに魔術を定着させることはほぼ不可能だ。

未だに解明できていないそれは、俺もまた見るのは久しぶりだが短刀の魔剣は知らない。

どのような能力なのか、まずはそれを冷静に見極める必要がある。

「クク。ククク……クク……」

反響。

相手の声が、反響する。そして俺は完全に方向感覚を失う。どちらが前で、どちらが後ろなのか。いや、左右もわからない。自分が立っているのか、地面に座っているのか、それすらも分からない。

クラリスを抱きかかえている感覚は残っているが、分かるのはそ

れだけだ。

すでに明かりは全て消え去った。

何も見えずに、そして相手の魔術が発動している中で、俺は対物^{アンチマテリアル}質コードは発動できなかった。魔術を発動するには、座標指定が欠かせない。もちろん、座標を指定しなくとも発動はできるが、そうになった魔術はただ無秩序にすぐに消え去っていくだけ。

この暗闇の中で、まともに魔術を使うことなど……普通はできない。

だがきつと、相手はそれを可能としている。元々あの世界最高峰と名高い暗殺組織である死神^{グリムリパー}の所属なのだ。

暗闇の中での戦闘はむしろ、奴としては望むところなのだろう。

「死ね」

その声がどこから聞こえたのか、俺には分からない。反響しているこの領域では、音に頼っているは何も理解できない。五感に頼ることは不可能。ならば、五感に頼らなければいいだけだ。

俺はそして、新しいコードを走らせる。

《第一質料^{プリママテリア}＝エンコーディング＝物資コード^{マテリアル}》

《物資コード＝ディコーディング^{マテリアル}》

《物質コード》^{マテリアル} プロセシング ^{ディセレーション} 減速 ^{レステーション} 固定 ^{リターン} 還元

《エンボディメント》^{フェノメノン} 現象

「^{アンチマテリアルフィールド} 絶対不可侵領域」

第67話　きっと君は、大空に羽ばたく

俺は絶対不可侵領域を展開。
アンチマテリアルフィールド

「そこか……」

相手の場所を認識すると、すぐさまその場所に次々と氷剣を突き刺していく。もちろん敵はそれを躲して、壁を疾走していくが……その様子は手に取るように知覚できる。

俺は移動する先に回り込むようにして、氷剣を突き刺すとそれを起点にして、氷花繚乱ひょうかりょうらんを発動。氷剣はその姿を花の形へと変化させる。

次々と咲き誇る氷の花。それは相手を囲むようにして、発動していく。

逃げ場所などない。

俺の領域は完全にあいつを捕捉し続けているのだから。

「ど……どうなっている……見えているのか……!？」

「いや。見えていないさ」

「くそ、くそ、くそ、くそッ!」

その焦りは本物だった。俺はその苦痛に歪む表情ですら、感じ取ることができていた。

そして苦し紛れに放ってくる短刀の数々。その全ては毒が塗つてあることも、把握済みだ。インサイト内部コードを走らせることによって、放たれたそれは尋常ではない速度だが……。

アンチマテリアルフィールド
絶対不可侵領域の領域に入ると、それは全て掻き消されていく。

「……落ち着け。大丈夫だ……俺は、俺は勝てる……」

ボソリと呟きながら、戦況を立て直そうとする。

流石に殺しを生業としているプロだ。すぐに感情を抑え込んで、現状を打破しようと考えているが……すでに遅い。

この領域を展開した時点で、お前の負けは確定しているのだから。

その後、俺の冰剣は容赦無く相手を切り裂き続ける。致命傷には至らないものの、確実にダメージを与えていく。

「……シッ!!」

切り裂かれた箇所から溢れる血液がその魔剣へと集まってくと、それは棘のように変質し、大量に放たれる。

しかしそれは領域内に入ると、全て掻き消える。おそらく、あの魔剣は血流操作ができるのだろう。血流からコードへと干渉して、そこから意のままに血液を操る。いや、血液だけではない。液体という条件であれば、いいのかもしれない。

だが、今はそんなものはどうでもいい。

決着をつけるべきだろう。

「ッ」

相手はハッと息を飲むと、自分の展開している広域干涉系の魔術を解除。すると、わずかな光が戻ってくるが……今さら光など必要はなかった。

なるほど。解除したということは、完全に逃げに徹する気か……しかし、逃すわけがない。

駆ける。

敵は出口に向かってそのまま一直線に進んでいくが、俺はそこを封じるようにして氷花繚乱ひょうかりょうらんを発動。

相手は苦し紛れに俺にさらに短刀に加えて、魔剣によって血液を操作して生み出された短針を放ってくるが、それは全て掻き消える。

「……無駄だ。お前の攻撃は、もう届きはしない」

アンチマテリアルフィールド
絶対不可侵領域。

それは、知覚領域と還元領域の二つから成る領域だ。

知覚領域は半径五十メートルまで伸ばすことができ、領域内にあ

プリママテリア
る第一質料を五感を通じることなく脳で直接知覚する領域だ。それはたとえ生物でなくとも、第一質料が存在しさえすればいい。

還元領域は、まずは『減速』で俺が指定していない物質または現象を低下させ、そこから『固定』して一気に対物質コードアンチマテリアルを活性化、そして完全に全ての物質と現象を『還元』する領域。

どちらもまた、発動した瞬間に全てが自動で処理されるため俺はただ、感じ取る儘ままに行動すればいいだけだ。

正直言つて、これを使うのは躊躇したが今は魔術領域暴走も起こる兆候はない。

このまま終わらせてもらっつ。

「ぐ……くそッ!」

「大人しくしろ。お前の負けだ。理解しているだろう?」

「ッ!」

「おっと。自害する気だろうが……もう遅かったな」

見た目に変化はない。だが、相手はもう体を動かすことは敵わないのか、そのまま呻き声をあげるだけになる。

「あああ……アアアアア……アアア……ッ!」

「既に身体機能は奪い取った。もう体は動かせない」

そうして敵はそのまま地面にバタリと倒れ込んだ。俺の絶対不可侵領域ルファイールドに入った瞬間から、俺は敵の魔術にあるコードを混ぜていた。

魔術名称は、ダイヤモンドダスト細氷昇華。

それは体内に細やかな氷を発生させ、内側から侵食する俺の固有^{オリ}魔術。相手の魔術を絶対不可侵領域によって、分析。そこから相手の魔術を辿っていき、そのコード内に自分の魔術を組み込んでいたのだ。

相手が素早くかつ、こうして逃げると予想していたので、この魔術を既に展開していたがどうやら上手くいったようだ。

「うっ……すごい……密度ね……うっうっ……」

腕の中にいるクラリスは、俺たちの第一^{プリママテリア}質料の密度に当てられたのか、地面にそっと下ろすとフラフラとしてそのままゆっくりその場に座り込む。

「大丈夫か、クラリス」

「ええ……な、なんとかね。でもその……レイ、あなたは……」

「そうだ。俺こそが、当代の氷剣の魔術師だ」

「そっか。まあでも……言われてみると、納得しちゃうわね……レイってば、七大魔術師だったのね。そっか……」

「……すまない。言うのが遅れてしまって」

「みんなは、知ってるの？」

「アメリカ、エリサ、エヴィは既に知っている。それと、師匠は……」

「俺の前の氷剣の魔術師だ」

「はあ……なんか、今までの言動とか考えると只者じゃないって……思ってたけど……そうだったのね」

クラリスは、少しだけ辛そうに胸を押さえつける。

「酔ったのか？ 大丈夫か？」

「ええ……ごめんなさい……プリママテリア第一質料に当てられて……少しだけ、
休むわね……」

「ああ」

様子を見るに、命に別条はない。ただあまりにも密度の濃い第一プリママテリア質料に当てられてしまったのだろう。

そうしてクラリスをそつとその場に寝かせると、俺はまた別の人間に気配を感じ取るが……それはよく知った人のものだった。

「レイ、終わったのか」

「部長……はい。無事に終わりました」

「すまない。広域干渉が展開されていたようだな……遅れてしまったが、やったのか？」

「はい。しかし、殺してはいません」

「そのようだな。さて、後処理は俺たちに任せろ。お前はいくべき場所があるだろう。アメリカ「ローズ」はまだ戦っている。今ならまだ、間に合うはずだ」

「本当ですか……！？」

アメリカはまだ戦っているのか。あのアリアーヌにまだ立ち向かっているのか。その事実を知って俺は自分の心が震えるのを感じる。

「部長。クラリスのこと、よろしくお願いします」

「ああ。大丈夫だ。この程度ならば、すぐに回復するだろう。行ってこい、レイ。アメリカには、お前が必要なはずだ」

「はいっ！！」

そして俺は走り始めた。

ただ懸命にアメリカに会いたいと、その姿をこの目に焼き付けた
いと、思いながらただ疾走していく。

今、彼女はどんな想いで戦っているのだろう。アメリカは……ど
うしているのだろうか。

全身全霊を持って駆け出した。そして僅かな光が見えて来て……
俺は観客席の上段、そこへやって来た。

フィールドを見下ろすと、そこには……地面に伏せているアメリ
アがいた。

全身は焼け焦げているのか、真っ黒な跡が目立ち、そして出血も
している。それでも、アメリカは目の前に立ちはだかるアリアーヌ
から視線は逸らさない。

それにアリアーヌも無傷ではなかった。彼女もまた、焼け焦げて
いる跡が目立つ。

互いに傷つき、ここまで戦って来たのだ。でも、アメリカのその
双眸は僅かに諦めの色が見えている。

闘志が、戦う意志が、薄れている。

きつとここまで、懸命に戦ったのだろう。

たった一人、この大観衆の中で、懸命に、直向きに、あの最強と
謳われているアリアーヌに立ち向かったのだ。

心が折れそうでも、それでも自分を奮い立たせてアメリカは……戦っていたのだ。

戦う前はあんなにも震えていたと言うのに、アメリカは諦めず、ここまでたどり着いたのだ。これはアリアーヌとの戦いでもあり、自分との戦いでもある。アメリカは、自分に負けずに……懸命に戦い続けていた。

だから

俺がすべきことは

一つだけだ

「アメリカアアアアアアアアアアアアアッ！！ 立てえええええええええええええええええッ！！」

俺のありつたけの想いを込めた声は、会場の静寂を切り裂いていく。

そして、アメリカのその双眸に……戦う意志が戻ってくる。

彼女の背中から溢れ出る灼けるように赤い、紅蓮の蝶たち。それ

は螺旋を描きながら、天に昇っていく。その光景は、幻想的で現実離れたものだったが、とても美しいと心から思った。

灼けるように真っ赤に燃え上がる無限の蝶は、君の今までの努力の結晶だ。

決して偽物なんかじゃない。彼女は……ずっと偽ってきたんじゃない。ただ、迷っていただけだ。俺と同じように。

偽りではない、それは……いつか本物になるという過程だったのだ。

でも、もうその時は終わりだ。

アメリカ、君は籠の中の鳥なんかじゃない。この大空へと飛び立てるだけの、翼を持っているのだから。

だから今の君なら、きつと 自由に、そしてどこまでも高い空へ飛び立てるはずだ。

瞬間。どこからともなく一羽の鳥が、この大空へと飛び立った。

第68話　きっと私は、大空に羽ばたく

私はただ、誰かに認めて欲しかった。

たったそれだけのことだった。

でも、それだけのことが今まで出来なかった。

だって私は怖かったから。他人に、本当の自分を心を晒すのがどうしようもなく怖かった。だから逃げて、偽って、取り繕って、アメリカンローズというものを演じてきた。

そんな中で求めてきた自分。

でも本当の自分なんて……いなかったんだ。

私は、私のままでよかったのに、今まで認めることができなかった。

だから私は、今の自分を偽物と定義して……悲劇のヒロインであると……そう思い込んでいただけ。

生きる意味などなく、自分のたどり着く場所などないと……ただ機械的に生きるだけが私の人生だと……そう絶望していた。

でもみんなは……レイは、私を認めてくれる。

今のままの、私でいいと。

そしてレイは、私と一緒に探してくれと言った。

そうだ。レイだって、完璧な存在ではない。私と同じように苦しんで、悩んで、葛藤した先に今の彼がある。そんなレイとだからこそ、私は寄りそっていける。

彼と一緒になら、みんなと一緒になら、私はきつと……辿り着ける場所があるのだから。

「……」

ゆっくりと歩みを進める。

会場は最高に盛り上がっていた。観客の声、それに実況と解説の声。それに、アメリカ応援団のみんなの声。全部がただクリアに聞こえる。

ふと空を見上げると、今日は晴天だった。

いやずっとこの空は晴れ渡っていた。でも私は、こんな美しい空を見上げる余裕がないほどに、今までは苦しみながら戦っていた。この戦いの中で、何かを見つけることができると思っていたから。

でも私はもう……見つけた。

私の答えは戦いの中にはなかった。その答えは、すぐ側に……自分の中にあつた。それはレイのおかげで見つけることができた。

私は、私のままでいい。そしてみんなと、彼と共にこれからも生きていこう。

答えを見つけるその道筋こそが、私の生きる理由なのだから。

「アメリカ、来ましたわね」

「アリアーヌ……」

「どうやら、憑き物は落ちたようですわね」

「レイに、助けてもらったから」

「そうですか……やはり、私ではダメだったのですね。いや、私だからきつとダメだったのですね」

「アリアーヌ……」

視線を逸らして、彼女はそう告げた。

きつとアリアーヌの中にも葛藤はあつたのだろう。悩み続ける私に対してどうするべきか、アリアーヌもまた悩んでいた。

それはどうしてだろうか。今の私なら、よく理解できた。

今日はよく見える気がする。それに感じ取ることができる気がする。

今までと同じ世界を生きているはずなのに……まるで別の世界に生きているようだった。

「さて、アメリカ。決勝ですわね」

「ええ」

「勝つのは私ですわよ」

「いいえ。私よ」

「そうですか。ならば、決着をつけましょう。どちらが、この魔術マジック剣士競技大会の覇者にふさわしいのか」

「ええ」

向かい合う。

そして私たちは互いを見据えながら、所定の位置につく。

ああ。もうすぐだ。もうすぐ始まってしまう。

よく見ると、アリアーヌはすでに剣を持っていなかった。おそらく試合開始と同時に、あの能力を使ってくるのだろう。準決勝で見たからこそ、出し惜しみはしないということか。

彼女らしい戦い方だ。

一方の私といえば、策はない。ただ無策のまま、私はこの場にやっ

きっと今までの私なら……ここで震えて、蹂躪されるのを受け入れていただろう。

でもどうしてだろう。

こんなにも、心が高ぶるのは。

こんなにも、心の内側が熱くなるのは。

ああこれはきつと、レイのおかげだ。彼のおかげで私はこうして向き合える。アリアーヌに、そして自分自身に。

その刹那、彼の顔が思い浮かぶ。それを脳裏に焼き付けて、私は微笑む。

ねえレイ。私はきつと、勝つから。

今日だけは、この日だけは、この戦いだけは、この勝利をあなたのためだけに捧げるわ。

それがきつと私にできる、最高の恩返しだと思うから。

「試合開始ッ!!」

その声を互いに知覚したと同時に、アリアーヌの四肢は燃えるように、灼けるように染まっていく。赤黒いコードが一気に生み出されて、瞬間その姿が爆音と共に消えた。

彼女がいた地面は抉られ、そして眼前にその姿が現れる。

瞬間移動ではない。ただ物理的なスピードを極めたそれは、私の知覚を優に超える。

「はああああああッ！！！！」

雄叫び。

アリアー又は声を上げると、一気にその拳を振るった。狙いは私の鳩尾だった。過ぎる。準決勝で見た、あの壮絶な最後が私の脳内で再生される。

でもその軌道を直感で読むと、スツとそのラインに合わせて私は剣を縦に構える。

「ぐ、ぐうつうつ……ッ！！」

何とか力の限りを尽くして踏ん張ってみるが、私はそのまま後方へと吹っ飛ばされてしまう。

もちろん今の一撃だけで剣は砕け散ってしまった。

今のアリアー人には、ただの剣は効かない。それは分かっていることだった。

しかしこうもあつさりと防御を破られてしまうのかと思うと同時に、私は何とか受け身を取りながら視線を逸らしはしない。

ガードは間に合った。

もちろんダメージは入っているけど、まだ戦える。転がった際に擦り傷がいくつもできるけど、こんなものは些事だ。

今はただ、この高速で動き続けるアリアーヌから目を逸らしてはいけない。

だが視界に捉えているはずのアリアーヌは、忽然と姿を消す。

どこに行った……！？

と、考えるとほぼ同時に後ろから微かに吐息が聞こえた。

「スウ」

「……後ろッ！！？」

と、私は声を上げた瞬間にその圧倒的な圧を持ってアリアーヌの拳が放たれた。

すでに剣はない。

だから私は魔術で彼女に対抗するしかなかった。

そして、クイック高速魔術とチェイン連鎖魔術を組み合わせると、その場に重なるようにして幾多もの氷壁を生み出す。

物理的な攻撃には、物理的な防御をするしかないと思っての選択だったが……瞬間、目の前にある氷壁が一気に碎け散る。そしてその中から出て来たのは、アリアーヌの右腕だった。

でもこれは囨だ。

私はもう知っている。あの時の、自分の能力の意味を……今の私

ならば、扱うことができる。

そして私は新しいコードを走らせる。

《プリママテリア第一質料〓エンコーディング〓マテリアル物資コード》

《マテリアル物資コード〓デICODEING》

《マテリアル物質コード〓プロセシング〓アクセラレーション加速》

《フェノメノンエンボディメント〓現象》

顕現するのは、紅蓮の蝶。真つ赤に染まるそれは、大量に私の周囲に溢れ出てくると一気にアリアーヌの腕を覆い尽くして……爆ぜた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

激しく痛む頭を右手で押さえながら、私は後方へと一気に転がっていくアリアーヌを見つめる。

絶対に視線は逸らさない。油断はしない。

今のアリアーヌによって、距離など関係ない。

たった一步で、私との距離を詰めることができるのだから。

そして私は碎け散った氷の破片を払うと、周囲に顕現する蝶々を

改めて意識する。

レイとの戦いで得たこの能力。

爆発する蝶は、意のままに操ることができる。

これが私の固有^{オリジン}魔術だ。

きっとレイに会っていないければ、あの時に彼と言葉を交わしていなければ……この能力を発動することはできなかっただろう。

でも……体の中は未だに熱い。

ドクン、ドクン、ドクン、と心臓が高鳴る。私の体は示しているようだった。まだ、まだ私には先があると、この先に私はたどり着けると……体がそう教えてくれているようだった。

「ふ、ふふふ……そうでしたの……アメリカも……固有^{オリジン}魔術を隠していたのですね……」

その黒煙の中から現れるのは、身体中に火傷を負ったアリアヌだった。

おそらくあの能力を発動している最中は、他の箇所の防御が手薄になるのだろう。四肢は依然として赤黒く染まっているが、他の箇所は確実にダメージが入っているのが伺えた。

「アメリカ……わたくしもさらに本気で……正真正銘の全力で、い

かせてもらいますわ……」

それはきつと、独り言の類だろう。

かろうじて聞き取ることができたが、その双眸はまるで虚空を見つめているかのように……じつと私を見据えていた。

「
オーガ シンティラ
鬼化：雷電」

その隙を狙って、私はさらにその蝶たちを操って一気に迫っていく。それと同時に、大量の高速魔術クイックで中級魔術である氷針アイシクルピアスを発動すると、それを全て彼女の胸にある薔薇目掛けて放つが……それは、一筋の光によって全てが掻き消されてしまう。

「……電気？」

ボソリと呟く。

そう。その四肢は、バチッ、バチッと音を立てながら絡みつくようにして帯電していた。

悠然と立ち尽くすその姿。純粹にそれは、美しいと思った。

アリアー又は完全にその電気を支配下に置いていた。帯電し、発光するそれは、彼女の気高い意志を示しているようにも思えた。

そうか……あの能力は、四肢に属性を付与できるのかと理解する。

「さあ、アメリカ。貴方が立ち向かうのは、最強。心してかかって来なさい」

「私は、私は……絶対に、負けないッ!!」

そうして互いに再び大地を駆ける。

『あああああああああッ!!!』

声が重なる。互いにすでに、かなりダメージを負っている。私はその圧倒的な腕力に、そしてアリアー又は私の生み出す蝶たちに、互いに完全に対処できているわけではなかった。

無限に生成される蝶は、その圧倒的な数で彼女を覆い尽くす。

でもアリアー又はその全てを破壊して、私に何度も向かってくる。その度に私は手掌でその蝶たちを操って次々と爆ぜさせる。

爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。

だが黒煙の中からは、アリアー又は確実に現れる。

互いの心が折れることはない。いつになればこの戦いは終わるのか。いつになれば、相手は倒れるのか。そんなことを意識する暇もなく、ただ私たちは戦い続けた。

その戦いの最中、^{さなか}私は改めて、コードを走らせる。

《第一資料》エンコーディング《マテリアル物資コード》

《マテリアル物資コード》デコーディング》

《マテリアル物質コード》プロセッシング》

《

《エンボディメント》

》

違和感を覚える。

魔術は、私の固有オリジン魔術である爆ぜる蝶は依然として発動している。
でも違和感を覚える。まるでそこに空白があるかのように、私はまだこの能力に先がある気がしていた。

そして無限かと思える時間も、そろそろ終わりを告げる瞬間がやってくる。

「あ……はあ……あ……あ……ごぼっ……」
「う……あ……はあ……はあ……はあ……」

すでに互いに満身創痍だった。

アリアー又は全身を真っ黒にして、一方の私は完全に魔術を酷使しすぎた。脳が焼き切れるように痛い。でも……アリアー又はまだ立ち上がろうとする。

最後の攻防。

彼女は捨て身で一氣に迫ってくると、そのまま突撃を仕掛けて来た。アリアーヌもまた私がダメージが及ぶ範囲、つまりは超近接距離^{クローズレ}ではその蝶を爆破しないと考えていたのだろうか。

だが、私に躊躇^{ちゅうしゆ}などなかった。

最低限だけ体を第一質料^{プリママテリア}で覆い尽くすと、胸にある薔薇を庇いながら……私は自爆した。

そうして私たちは後方へと吹っ飛んでいき、そのまま転がっていく。

だが、互いの胸の薔薇は散っていないし……まだ戦う気力は残っている。

地面に這いつくばっているが、この心はまだ負けを認めない。

「うつうつ……ああ……あ……ああ……」

声が、声が掠れる。

動け、動け、動け。

そう願うけれど、私の体は力がなかなか入らない。

立ち上がろうとするが、踏ん張りが効かないのか……立ち上がることさえ困難だ。

その一方で、アリアーヌはふらふらと立ち上がる。

互いに何がそこまで自分を駆り立てるのか。

これはきつと自分自身の証明だ。

この戦いを通じて、私は、私たちはこの自分という存在を証明する。

だから止まることはない。

この体が言うことを聞かなくなるまで、私たちの心が負けを認めるまで……戦い続ける……はずだったが……とうとう私の体は限界がきてしまったようだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

アリアーヌは完全に肩で呼吸をしてる、でも体は動くし、その心はまだ立ち向かう意志がある。

ああ……そうか。

私、負けちゃったか……。

悟る。

ここで私は敗北するのだと。

でも、私は頑張ったよね？　頑張ってここまでこれたよね？

きつと今までの私なら、そう励まして終わりだっただろう。奮闘した自分を褒め称えて、そこで終わっていたに違いない。

でも今は……　負けたくない。

絶対に、絶対に負けたくない。

その想いが先行する。

体は動かない。ただ地面に這いつくばって、ゆっくりと迫ってくるアリアーヌを見つめているだけだった。

こんな無様で、負けが確定している今だったとしても……。

私は、私は負けたくないッ！！

絶対に、絶対に勝ちたいッ！！

そう願うけれど……　現実是非情だ。もう私には何も残されてはいない。どれだけ心が強く願っても、この体が動かないのなら……　どうしようも無い。

そして私が敗北を認めようとした瞬間、この色も音も失われた静寂で無機質な世界に……　鮮やかな存在が入り込んでくる。

「アメリアアアアアアアアアアアアアアッ！！　立てえええええ

ええええええええええええええええええええええッ！」

色も、音も完全に失せた世界に……彼の声が……レイの声が、私の世界に入ってくる。

瞬間、この世界は鮮やかな色を、美しい音色を、取り戻す。

ああ、どうしてだろう。

こんな時に思う浮かぶのはみんなの顔だ。

エリサの優しい微笑み。少し引つ込み思案なところもあるけど、とても一生懸命で頭のいい優しい女の子。

クラリスのツンツンしている姿。でも、時折顔を真っ赤にしながら優しい表情になる。物言いはきつい時もあるけど、本当はとても優しい女の子だ。

エヴィのニカツとした表情。それはみんなに向ける明るい笑顔。筋肉に対するこだわりはレイと同じかそれ以上。そして、体は大きいけど周りに細やかな気配りができる素晴らしい人だ。

そして、レイの澄んだような美しい双眸^{そうほう}。

彼の目には何が映っているのか。

あまりにも過酷な人生。それはきつと私なんかが想像できるものではない。

それを乗り越えて、彼は私と同じ場所において、私に寄り添ってくれた。

そしてレイもまた私と同じように怖がっていた。

人の心に触れ合うということに。

でも私たちは、心と心を通い合わせた。

そうして共に生きると、一緒に生きる意味を探していくと誓った。

そうだ。

私は……生きていくんだ。彼と一緒に、みんなと一緒に、この道で……生きる理由を探していくんだ。

人生に意味などない。だから自分自身で見つけるしかない。

『一緒に、生きる意味を探そう。その弱さを支え合いながら、生きていこう。俺は君と一緒に、進みたい』

レイの言葉がリフレインする。

そして彼の優しい笑顔が浮かぶと同時に……心臓が跳ね上がる。それはきつと今までの中でも一番の高鳴り。

ドクン、ドクン、ドクンと心臓はその鼓動をさらに加速していく。
そして唐突に脳内にあるイメージが浮かんでくる。

籠の中にいる鳥は立ち上がり、閉ざされていた扉にかかっていた鍵はガチャリと音を立て、その扉は開かれる。その目の前には、どこまでも透き通った大空が広がっていた。そうして鳥は、ゆっくりと歩き始めると、その出口で真っ青な空を見上げた。

瞬間、私は理解した。

ああ……そうか、そう言うことだったのか。

レイが言っていたのは、こういう意味だったのか。

腑^ふに落ちる。得心する。理解する。

私の能力は、本質は……ここに、この場所にあったのだ。

そうして私は、あの空白を埋めるようにして、完全に新しいコードを一気に走らせる。

《第一資料^{プリママテリア}＝エンコーディング^{マテリアル}＝物資コード》

《物資コード^{マテリアル}＝デコーディング》

マテリアル
《物資コードⅡプロセシングⅡ四原因説Ⅱ質量因Ⅱ形相因Ⅱ作用因
テロス
Ⅱ目的因》

コーザリティ
《エンボディメントⅡ因果律》

その刹那、私の背中からは今まで以上の……いや、数え切れない
ほどの真っ赤な紅蓮の蝶が天へ昇るようにして顕現する。

それは螺旋を描きながら、空へ、空へと昇っていく。

可視化できるほどの真っ赤な第一質料をパラパラと撒き散らしな
がら、その紅蓮の蝶たちは空の彼方へと駆け上がっていく。

私は、そのままゆっくりと立ち上がる。

右手をスツと横に薙いでその蝶たちの列を縦ではなく横一列にピ
タリと揃えると、そのまま指をパチンと鳴らして一気にそれを解放
する。

ヒラヒラと舞い散る蝶は、私の周りをぐるぐると囲むようにして、
螺旋を描きながら顕現し続ける。

そんな無限に増え続ける紅蓮の蝶の中で、私は静謐に立ち尽くす。
せいひつ

そして、その中から一匹の蝶を指先に止めると私は、真の能力名
を冷然と告げる。

「
バタフライエフェクト
因果律蝶々」

籠の中の鳥は、大空へと解き放たれた
。

第69話 愛する自分と共に

私の固有魔術は、爆発する蝶などではなかった。

オリジン

それは私の本質から零れ落ちる欠けら。

本当の能力は、本質は、全く別のところにあつたのだ。

ああ、どうしてだろう。

世界がどうしてこんなにも、はっきりと眼に映るのだろうか。

私は知った。この覚醒した能力の本質を。これこそがきっと、私のたどり着く場所だったのだ。

レイとの日々は、きっと……ここにたどり着くためにあつたに違いない。

「……アメリカ、あなた……それは一体……？」

呆然とした様子で、そう告げるアリアーヌ。だがその問いに答えることはない。

私が告げるのは、たった一つの真実。

もう覆すことのできない、その非情な現実をアリアーヌに突きつける。

「アリアーヌ。もうあなたは、私には届かない」

「何を、何を言っていますの……？」

「分かるの。この能力のことが、よく分かる。だからもう、終わりにしよう」

「……わたくしは、絶対に、絶対に負けませんッ！」

駆ける。

アリアーヌは、私の能力の全貌は理解できていない。それは彼女の驚愕に染まった表情を見てよく分かった。

アリアーヌはそれでも、果敢に攻めてくる。

その気力を振り絞って、大地を踏みしめて駆けてくる。

赤黒い四肢は未だに健在だ。それにその雷撃もまた、発動している。きつと互いに、もう魔術を解いたほうが楽になれる。

だがそんなことはしない。できるわけがない。

私たちは、自分の、この誇りのために戦っている。

自分自身の証明のために、戦う。

でももう、決してアリアーヌは私には届かない。

それはただの妄想でも、虚言でもない。

純然たる、事実なのだから。

「……」

見据える。

ただ私は囲まれる紅蓮の蝶の隙間から、彼女の動きを見極める。

アリアーヌは一気に大地を駆け抜けると、その拳を私の身体めがけて振るってくる。

必中。

そのあまりのスピードに避ける暇などない。防御も間に合うことはない。

だがもう、アリアーヌの攻撃は当たらない。それはこの世界に定着した、因果なのだから。

「こつちよ」

「え……？ ど、どうなってますの……そんな、ありえない。ありえないですわ……こんなこと……」

空振り。

アリアーヌが振るった拳の先には、私はいなかった。

今の私は、アリアーヌの後ろに位置している。

依然として羽ばたく紅蓮の蝶たちは、ヒラヒラと私の周囲を飛び続けている。

パラパラと舞う真つ赤な第一質料プリママテリアの欠けら。

今までそれは、ただの火の粉だった。その蝶は、炎を蝶の形に模倣したものに過ぎなかったのだ。

でも今のこれは、私の魔術を以って完全に第一質料プリママテリアで構成されている。

溢れ出る灼けるように赤い、紅蓮の第一質料プリママテリアの残滓ざんし。

それは、レイが以前の戦いで見せた時と同じ現象だった。溢れ出る第一質料プリママテリアが完全に可視化できるほどまでの濃度。

彼の場合は、青白い第一質料プリママテリアだが、私は対照的に真つ赤に灼けるような色をした第一質料プリママテリアだった。

そして満身創痍だった私は、その気力を完全に取り戻す。

今の私は、もう……誰にも止めることはできない。

「う……うわあああああああッ!」

アリアーヌは再び突撃してくる。その身体に纏わりつく雷撃を巧みに操作しながら、超近接距離での格闘戦を仕掛けてくる。

でもその拳が、その脚が、その雷撃が、私の元に届くことはもう……絶対にない。

そして私は、脳内で幾重にも重ねるようにして大量のコードを走らせる。この魔術領域の容量を最大限に使用して、アリアーヌの一挙手一投足に合わせて因果律蝶々を発動し続ける。

プリママテリア
《第一質料》エンコーディング《物質コード》

マテリアル
《物資コード》デコーディング《

マテリアル
《物資コード》プロセッシング《四原因説》質量因《ヒュレー
テロス
《目的因》
アイディア
エイドス
エフィシェン

コーザリテイ
《エンボディメント》因果律《

バタフライエフェクト
因果律蝶々。

それは、蝶を起因としてこの世界の因果律を操作するという概念

干渉系の固有魔術^{オリジン}。

発動条件は四原因説^{アイディア}という四つのプロセスを踏む必要がある。

質量^{ヒュー}因とは因果の材料であり、この因果律蝶々^{バタフライエフェクト}の大元である蝶を生成することである。

形相^{エイドス}因とは言うならば設計図であり、発動したい因果律の心的イメージを組み込む。

作用^{エフィシエン}因とは因果律を操作するための行動（起因）であり、それは蝶の行動（羽ばたき、移動、爆破）に設定してある。

目的^{テロス}因とは発動する因果律そのもの。この三つのプロセスを踏み、最後にその『結果』をこの世界に定着させる。

私はこの四つのプロセスを一つのメンタルモデルとして魔術領域に貯蔵し、因果^{コイザリテイ}律をこの世界に具現化しているのだ。

寸分の狂いも許されないコード構築。

蝶の動き全と、アリアーヌの行動全てを組み込み、因果^{バタフライエフェクト}律蝶々を発動し続ける。

因果律を操作する、あまりにも強力すぎる固有魔術^{オリジン}は、この緻密なコード構築こそが真髄である。

私はこの四つのプロセスを、正確に構築して発動する。

どうしてだろうか、今の私にはこの能力の全てが理解できていた。

「はあ…… ああ…… はあ…… ああ、ううう…… はあ」

アリアーヌはこの能力を前にしても、諦めなかった。

すでに因果律は成立している。

アリアーヌの行動が原因となって、私に攻撃を与えるという結果を私は操作し、それを完全に破綻させている。

因果律の操作。

それこそ、この因果律蝶々^{バタフライエフェクト}の真価。

因果律、つまりはこの世界に存在する因果性という概念そのものに介入するのだ。だからこそ、本来この世界に顕現するはずだった因果関係に介入し、破綻させ、さらにそれを別の因果に繋げて、上書きする。

アリアーヌの攻撃は私にはもう届くことはない。

それはどう足掻いても、蝶の行動を起因として『私に当たらない』という結果を生み出してしまうからだ。

そして、私は淡々と彼女に告げる。

「アリアーヌ、もうあなたは私には勝てない。この世界の因果は、

もう成立しているから」

「わたくしは……この程度で諦めることはありませんのよ。アメリカ……本気で、本気でかかってきなさいッ！！ わたくしはその全てを打ち砕いてあげますわッ！！」

それは虚勢の類ではなかった。

もう勝ち目などない。でもそれは絶対ではない。

だからアリアー又は最後の可能性にかけている。

その可能性を信じている。信じきっている。それは燃え上がるような意志が込められたその双眸を見れば、明らかだった。

だから私も……それに応じよう。

今までは防御に回していたこの因果律蝶々を、バタフライエフェクト攻撃に転用することにする。

《第一質料プリママテリア》エンコーディングマテリアル《物資コード》

《物資コードマテリアル》デコーディング

《物資コードマテリアル》プロセッシングアイディア《四原因説テロス》質量因ヒュレー《形相因エイドス》作用因エフィシエン

《目的因》

《エンボディメントコーザリティ》因果律》

一匹の蝶を指先に顕現させると、私はそれを眼前で爆発させた。

一見すれば、ただ自爆してるように思えるだろう。

だがその爆発は私に当たることはなく、アリアーヌに直撃する。

「ぐ……う……う……ああああああッ!!」

爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。

その爆発は私の周囲で起こっている。私の周りを飛んでいる紅蓮の蝶たちは、次々と爆発していく。アリアーヌには絶対に届き得ない距離。

でも、『爆発が当たるという結果』を私は彼女に指定している。

アイディア
四原因説によって構築されたコードは、この世界に因果律を定着させる。

だからどこでそれが爆発しようが、
バタフライエフェクト
因果律蝶々は確実にアリアーヌを起点にしてその結果を導き出す。

私に対する攻撃は因果律を破綻させ、私の攻撃は確実にその因果律を発生させる。

もはや、アリアーヌには成す術など残されていない。

「……」

そして私が冷静に、逃げ回るアリアーヌに座標を指定する。

私は手掌で因果律蝶々バタフライエフェクトを操作し続ける。

大量に浮かぶその蝶たちを、次々と爆破させていく。するとそれはアリアーヌを起点にして、まるで紅蓮の花が咲き誇るようにして爆破が生じる。

彼女はその圧倒的なスピード、それに第一質料プリママテリアを全身に覆うことで爆破に対処しているが……避けるという選択肢は存在しない。

この因果律蝶々バタフライエフェクトの前では、全てが必中。

それはアリアーヌが私の因果律蝶々バタフライエフェクトの有効範囲にいる限りは、絶対に逃れることはできないのだから。

この因果律蝶々バタフライエフェクトの有効範囲はこのフィールドを優に超える。

つまりは、この空間では私の攻撃は絶対に必中。また、逆にアリアーヌの攻撃はもう絶対に当たることはない。私がこの因果律蝶々バタフライエフェクトを解除しない限り。

実戦での戦いならば分からないがこの大会の条件ならば、因果律蝶々バタフライエフェクトは確実に発動する。

そうして大量の爆撃によって生まれた黒煙の中から、アリアーヌは颯爽と出てきた。

その体に電撃を纏わせて、そのまま一気に大地を駆けってくる。

すでに彼女は限界に近いのだろう。その赤黒い四肢も、今はもうほぼ解除されつつある。

これは最後の攻防。

私はただ冷静に、こちらに向かって走ってくるアリアーヌを見つめるが……。

「う、うほっ……」

吐血。

この能力の負担はかなりのものなのか、吐血に加えて鼻からは大量の血が垂れてきて、それに双眸からも血が溢れ出てくる。おそろく、脳に……魔術領域にかなりの負担がかかっているに違いない。

魔術領域暴走オーバーヒートに限りなく近い状況。

でも今は、そんなことはどうでもいい。

ただアリアーヌの本気に、私もまた真正面から向かい合うだけだ。

大量の血が溢れようと、この脳が焼き切れようと、今はこの
バタフライエフェクト
因果律蝶々を発動する。

思えば、ここまでたどり着くのに……本当に、本当に時間がかかった。自分には価値がなく、どうしようもない愚か者でしかないと……そうずっと思っていた。

アリアーヌに届くことはない。

彼女に勝つことなど、夢のまた夢だと。

その誇り高い存在には、手が届くことはないのだと……そう思っていた。

でも私は、アメリア＝ローズはここにいます。

私は、ここにいてもいい。

この能力が発動したのもきつと……私が変わることができたからだ、自分自身を認めることができたからだ、確信している。

みんなが、レイがいなければ絶対にこの場所に至ることはできなかった。

それにアリアーヌという強敵ライバルがいなければ、私は……絶対にここまで自分を奮い立たせることはできなかった。

私は、一人では生きていけない。

一人では何もできない。

でもみんなとなら、これからもきつと……この道を歩んでいける。

みんなと、レイと一緒に私は進んでいくのだ。

「……アリアーヌ、ありがとう。だからもう、終わりにしましょう」

そして私は、この試合最後の因果律蝶々を発動。

バタフライエフェクト

幾度となく発動したこの能力は、完全に私に支配下にある。だから私は、改めて因果律を操作する。

「アメリアアアアアアアアアアアッ！！」

駆ける。駆ける。駆ける。

そしてアリアーヌの拳が、私の眼前に映る。

「バタフライエフェクト
因果律蝶々」

瞬間、アリアーヌが死守し続けた薔薇を起点にして爆破が生じる。

今まではピンポイントでそこまで狙うことはできなかった。

しかし今はもう……完全に能力は私に馴染んだ。

だから容赦無く私はその場所を起因に設定して、バタフライエフェクト因果律蝶々を発動させたのだ。

そうして、不可避の攻撃を受けたアリアー又は宙を舞って、そのまま地面に落ちていった。

静寂。

「勝者、アメリカンローズ」

告げられる勝者の名前。それは私のものだった。

その数秒後、会場は湧く。湧き立つ。そうして大歓声と拍手が私たちに降り注ぐ。

「し、試合終了おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！ 勝者は、新人戦の優勝者は……アメリカンローズ選手ですッ！！ しかしあの能力はなんだあああああ！！？ 彼女の新能力は、その固有魔術オリジンは理解不能ですッ！！ キャロライン先生、解説をお願いしますッ！！」

「……すごいね。あれは概念干涉系の固有魔術オリジンだよ……使い手は世界でもほばいないね。概念干涉系の魔術は、現存するものでもごく少数だから。それにおそらく、カオス理論セオリーのバタフライエフェクト

が起源だろうけど……あれは、因果を直接結びつけている……いや、因果の切除も可能なのかな？ おそらく、カオス理論セオリーが関係していると思うけど……本当に、これだけ実用的で世界の概念そのものに干渉できる魔術は……一つの到達点かもね……魔術師の……」

「え、えつとその……つまり……？」

「……はっ！ と、とにかくすごい能力だよ！！ 優勝おめでとう、アメリカちゃん！！ それにアリアーヌちゃんもすごかったねっ！ 二人とも、すごかった！ おめでとう！」

「そ、そうですね！！ ということで、皆さん盛大な拍手を！ 優勝したアメリカンローズ選手に拍手をつ！！ そして最後まで戦い抜いたアリアーヌ・オルグレン選手にも拍手をつ！！」

大歓声に、溢れんばかりの拍手。

これは全て私に注がれている。

いや、私だけではない。最後まで戦い抜いた、アリアーヌへの賛辞も込められているだろう。

そして私は、このフィールドに大の字で寝そべっているアリアーヌの元へ近づいていく。

互いにもうボロボロだった。ポタ、ポタポタと血が地面に滴る。それでも私はゆっくりと歩きながら、彼女の元へと向かう。

今はただ、アリアーヌと話がしたかった。

「……アリアーヌ」

「あ、アメリカ。ふふ……ひどい顔ですわね。それに体も火傷だらけですわよ……？」

「……それは、あなたと同じでしょう？」

「ふふ……そうですわね……」

私は溢れ出る血を拭くと、彼女のそばにそっと座り込む。

アリアーヌの手をギュッと握ると、彼女は優しい声音で言葉を紡ぐ。

「ねえアメリカ……」

「うん……」

「とっても、強くなったの……ですね」

「うん。私ね、強くなったよ……」

「ええ。本当に、本当に、すごいですわ……」

「うん……うん……っ！」

アリアーヌにそう言われて、涙が溢れてきた。

彼女にそう言われて、アリアーヌとこうして話ができて、認めてもらえることが……何よりも嬉しかったから。

ずっと私は、アリアーヌと同じ場所に立ちたかった。彼女を追いつつ越すだけでなく、一緒に進み続けるような……そんな関係を求めていたのだ。

「どうして、あなたが……泣くんのですの？ 優勝したのですから、このわたくしに……勝利したのですから。もっと、誇っても……いいんですよ？」

「わ、私はね。みんなのおかげで……ここまで来れたの。学院で

きた友達に……レイにもいっぱいお世話になったよ。でもね、アリアヌのおかげでもあるの。あなたがいたから、ずっと私の先に貴女がいたから、私は、私は……ここまで来れた。だからね、ありがとうって。今はそう言いたい……」

溢れ出る涙が止めることはない。

私がそう告げると、アリアヌの双眸からもまた、涙が溢れ出てくる。

ツーツと頬を伝い、それは地面にポタリと零れていく。

やっと、やっと私はアリアヌに心を……自分の心を曝け出すことができた。

「ばか。ばかですわね……アメリア。そんなことを言うために……わざわざ私の側に来たんですの？ それにこの大衆の中で、涙を流すなんて、みっともないですわ……うう……ぐすつ……」
「……そうだけど……でも、アリアヌも、泣いているじゃん……うう……うう」

「これは……心の汗ですわ……っ！ う……ううっ……」

二人して、涙が止まらない。

止まることはない。

ただただ、涙を流して二人で嗚咽を漏らす。

そしてアリアー又はなんとか上半身を起こすと、ギュツと私を抱きしめてくれる。

「アメリカ、ごめんなさい。幼い頃に、あなたを見捨ててしまっただけなの……」

「そんな……私は、私はただ自分で勝手にそうなっただけなのに……」

「わかっていたんですの。あなたが貴族の在り方に、自分の在り方に悩んでいることは……でもわたくしはどうしていいか、本当に声をかけてもいいか……悩んでいて。だからその……アメリカの模範になれるように、そう思ってたわたくしは誇り高い貴族を、目指していたんですの……」

「わ、私のために……」

知らなかった。

アリアー又がそんなことを考えていたなんて。

やっぱりそうだ。

私たち人間は、言葉にしなければ分からない。そうしなければ、こうして心を触れ合わせることはできない。

言葉にして初めて、人の心と心は触れ合っていくのだ。

「ええ。あなたのために、わたくしは戦っていました。この大会は……誰よりも、アメリカのためだけに。もちろん、優勝したいと言う気持ちはありましたのよ？ でもそれと同じくらいに……アメリカの成長がとっても、とっても嬉しい……心から嬉しい……」

さらに涙を流すアリアーヌ。それを見て、私は心が締め付けられるような感覚になり、さらに涙が溢れてくる。

「アリアーヌ……」

「でもだからこそ、わたくしは全身全霊で、全てを持ってアメリカとの戦いに臨みました。そして、敗北しましたの。だから悔いは……ありませんわ。おめでとう、アメリカ。魔術剣士競技大会の新人戦、優勝ですわっ！ 本当に心から、おめでとうですわ……アメリアっ！」

「あ、ありがとう、……うう……ああああああっ……！」

全てが決壊するように、私はただアリアーヌを抱きしめて、さらに涙を流した。

今までの苦勞が、悩みが、惑いが、この心の葛藤が全て氷解していく。

その全てが溶けていき、全てが流れていく。

レイと心を通い合わせたように、私はアリアーヌとも心を通い合わせた。

そうか。

ずっと目標にして、アリアーヌのようになりたいと……私は思っていた。でもそれは、彼女が私のためにずっとしてくれていたことだったのか。

それを知ると、もう……外聞など気にすることなく、ただただ泣いた。

私たちはこの大観衆の中で、二人で抱き合って……涙を流し続けた。

でもそれは、悲しみの涙ではない。

それは全てに感謝し、この世界の美しさを、人の心の美しさを知ったからこそその涙だった。

瞬間、空に一羽の鳥が大空に舞った。

もう私は、籠の中の鳥ではない。

私もあの鳥のように、この大空に羽ばたいてゆける。

私は、一人ではない。

かけがえのない友人たちが、私にはいるのだから。

きつとこれからも辛いこと、苦しいこと、悲しいことはあるに違いない。

これで全てが解放されるなんて、人生の全てが楽になるなんて、楽観的なことは考えていない。

でも私は

みんなと一緒に、進んでいける。

みんなと一緒に、立ち向かってゆける。

みんなと一緒に、生きる意味を探することができる。

私はもう、籠の中の鳥なんかじゃない。

大空を自由に飛び立てる翼を、私も手に入れたのだから。

私はきつとこれから、自分の生きる人生を愛するだろう。そして
自分の愛する人生を生き続ける。

みんなと一緒に、この先もずっと　　。

第70話 終焉（前書き）

三人称視点

第70話 終焉

ついにやってきた、魔術剣士競技大会最終戦である本戦決勝。注目度は新人戦決勝よりも高く、すでに立ち見もかなりの数が出ているほどだ。

何よりも本戦決勝は、あのルーカス・フォレストがいる。

本戦の最大のダークホースとして注目を集め、この本戦決勝に至るまでなんと全ての試合でたった刀一振りだけによって勝利を重ねて今に至る。

「……」
「……」

二人は黙って向かい合っていた。

ルーカス・フォレストが寡黙なのは知っている。あれほどのメデアによる取材の中でも、彼はただ淡々と話すだけであった。試合の前にも選手と言葉を交わすことはない。

いつものように長い黒髪を後ろで一つにまとめ、その腰に差している刀に触れている。その刀はいわゆる太刀というものであるが、それは刃渡り百センチを超えており、かなり長い。さらにルーカスの男性にしては小さな身体からしても、異様に長く見える。

レベッカはそんな彼をじっと見つめる。

だがそうして見ていると、ルーカスもまたその美しいレベッカの双眸を見据える。

「……レベッカ♡ブラッドリィさん。戦えるのを、楽しみにしていました」

「それは、私もです」

「……あなたならきっと、僕を楽しませてくれる」
「……」

それだけ言うと、ルーカスは腰にある刀の柄へと手を伸ばす。

すでに完全に臨戦態勢に入っている。

こうして話しかけてくることに少しだけ面食らうが、レベッカもまた試合に意識を向ける。

「それでは……試合開始ッ!!」

アビーがそう告げると、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の最後の試合が幕を開けた。

刹那、眼前に迫るのはルーカスのなび靡く美しい黒髪。その靡く艶やかな黒髪を見つめながら、レベッカの瞳にはまばゆ眩く煌めく閃光が映り込む。

「……やりますね」

そう呟くのは、ルーカスだった。彼は血の付着した刀をヒュッと振るうと地面にそれを散らす。

一方のレベッカは、後方に下がりつつ右肩を左手で押さえていた。浅く切り裂かれた右肩からは、ジワリと真つ赤な跡が広がっていく。

「はあ……あ……はあ……あ……はあ……はあ……」

避けた。避けることができたけど……。

この圧倒的な刀捌き^{さば}。傍^{はた}から見ると、実際に攻撃を受けるのは天と地とのほどの差があった。

それでもレベッカは避け切った。

そんな彼女の双眸は、金色^{こんじき}に変化していた。また彼女の双眸の周辺には、黄金の第一質料^{プリママテリア}の残滓^{ざんし}がパラパラと舞っていた。

「やはり……持っていましたか、魔眼^{まがん}を」

ルーカスがボソリと呟く。

そう。

レベッカは魔術師の中でも珍しい異能を獲得していた。その中で

も魔眼と呼ばれるものを有している。

魔眼とは、魔術的な要因によって発生した異能。それがその双眸に定着したものである。

それは後天的に獲得することはほぼできないと言われている。先天的に受け継がれている魔眼は、ブラッドリイ家の特徴である。

魔眼を有する家系で有名なのが、このブラッドリイ家だ。しかし、魔眼を持っているからと言って、必ずしも戦闘で有効に使えるとは限らない。中にはその魔眼の強大な力に吞まれてしまう魔術師もいるほどだ。

レベツカは中でも、十代にして魔眼の能力を最大限に引き出し、完全に支配下に置いている。それこそが、マギクス・シューバリエ 今年の魔術剣士競技大会の覇者であるレベツカの本領。

魔眼が、この未来予知眼がなかったら……絶対に避けることはできませんでしたね……。それに、未来予知眼があつてやつとついていけるなんて……恐ろしい。この魔眼でも完璧に捉えることができないなんて……。

レベツカの真価。

それはこの魔眼を駆使した戦闘である。フレイクシオン 未来予知眼は文字どおり、未来を見通す魔眼。

それはコンディションにもよるが、二秒から五秒程度先の未来が見える。そのため、バランス型ではあるレベツカは超近接距離クロスレンジであっても戦闘を行うことができる。

「……ふう」

ヒュと刀を振るうと、ルーカスはそれを鞘に戻す。

そして腰を深く落とすと、再びジッとレベッカの姿を見据える。

何を、何を考えているの？

そうレベッカが思案していると、ルーカスはぼそりと呟く。

それは独り言かもしれないが、レベッカの耳には確かに届いていた。

「あなたになら、これを出しても良さそうだ」

「……」

間違はなく、何か切り札を……出そうとしていますね。

もちろんレベッカの魔眼はそれすらも読み切ることができる。未来予知眼はレベッカの切り札であり、絶対的な能力だ。だからきつと……次も躲すことができると、そう思っていた。

「……視えた」

視えた未来。

それに対応するために、レベツカは次々と氷壁を生み出していく。それは相手の攻撃を防御するため。超近接距離クロスレンジに入れさえしなければ、まだ戦える。

しかしレベツカのその考えは、打ち碎かれることになる。

「こつちですよ」

「ッ！！」

ありえない。そんなわけがない。私の未来予知眼フレイクシヨンの見た未来が変わるなんてッ！！

彼女の未来視では、ルーカスはこちらにいるはずはなかった。だと言うのに、今は後ろに彼がいた。レベツカはバツと後ろに振り向いて、そこから未来予知眼を最大出力で解放するが……。

彼女が最後に聞いたのは、ルーカスの微かな声だった。

「第八秘剣、残照暗転」ざんしょうあんてん

抜刀。

ルーカスはその刀を躊躇なく、抜いた。

そうしてレベツカに映った未来は、眩しい光と漆黒の間。

その二つが同時に彼女の視界に現れると、レベツカは宙を舞って

いた。そして、胸に固定されていた薔薇が綺麗に真っ二つに切断される。

まるで、時が止まったかのような感覚。

観客も実況と解説もまた、全員が吞まれていた。

その圧倒的な刀捌きに。

「……………ありがとうございました」

抜刀した刀をゆっくりと鞘に戻すと、ルーカスは一礼をして……踵を返した。

それと同時に、会場は爆発的な音量に包まれる。

「け、決着ですっ……！ 一瞬の出来事でしたっ……！ 魔術剣士競技大会本戦の優勝は……！ ルーカス・フォレスト選手ですっ……！ ついにダークホースと評された彼が、この魔術剣士競技大会の頂を勝ち取りましたっ……！」

実況がそう言った瞬間、溢れんばかりの拍手と声援が会場を包み込む。

レベツカはただ呆然とその場に座り込んで、切り裂かれたその薔薇を信じられない……という表情で見つめる。

一方でルーカスは、いつものように無表情のままに会場から去っていく。

だがこの試合を見ていた者の中には気がついた者もいた。

その秘剣を扱う魔術師の、その正体に……。

「皆さんっ！ 盛大な、盛大な拍手をつー！」

新人戦優勝は、概念干涉系の固有魔術オリジンを獲得したアメリカが優勝。

本戦優勝は、最後までその圧倒的な強さを誇ったルーカスⅡフォ
ルストが優勝。

魔術らしい魔術も使うことなく、ただ内部コードインサイドと剣技のみで
優勝した、前代未聞の優勝者。

こうして今年度の魔術剣士競技大会は最高の盛り上がりを見せな
がら、無事に幕を閉じる。
マギクス・シュバリエ

そう。表向きは 。

「さて、と。そろそろだねー あーあ。この大会も終わりがあー」

「このアホピンク、マジでうるさいな。本当によく学院の教員として雇ったなアビー」

「もっつ！ リディアちゃんはいっつも、キャロキャロにそんなこと言うんだから」でも本当はキャロキャロのこと、大好きなんだよね」このツンデレさんっ！」

「アビー、このアホピンク……殺していいか？」

「抑えろ、リディア。今はそれどころじゃないだろう」

「ま、そうだな……」

アビー「ガーネット。

キャロル「キャロライン

リディア「エインズワース。

なぜこの三人が一緒にいるのか。

今は三人で、レイが先ほど戦闘を繰り広げたさらに地下である、最下層の地下三階にやってきていた。

ちなみにカーラは別件の処理があるため、今はアビーに車椅子を押してもらっている。

「それにしても、久しぶりだね」三人で集まるのっ！嬉しいな、ふふふ」

「キャロル。少し黙っている。そろそろだ」

そうアビーが言うと、キャロルはニコリと笑いながら返事をする。

「はいっ！」

辿り着いた場所。そこは薄暗い明かりが灯っているだけで、あとは物置として使われている場所だ。

しかし……ここに目標がいることはすでに確認済みだ。

「キャロル、もういいぞ」

「はい」

キャロルがパチンと指を鳴らすと、一人の仮面を被った人間がその側に現れる。

「揃ってる？」

「はい。こちらに……」

と、膝について男がそう話すと一気にこの場に衝撃が走る。影に潜んでいた魔術師たちはあまりの動揺にその姿を晒してしまう。

「な……！？」

「ど、どうして……ボスが……！？」

「な、何が起こっている……！？」

「……り、理解できない……」

影の中から現れるのはさらに四人の仮面。大きめのローブを羽織り、それぞれが模様違いの仮面をつけていた。しかしなぜ彼らがそんなに慌てているのか……それは、ボスとも呼ばれる存在が急にキャロルの元に向かったからだ。

本来であれば、ここで七大魔術師を討ち取る、またはすぐに逃亡する予定だった。戦闘準備はすでに完了している。この場所にして

いる仕込みも完璧。遅延魔術ディレイによる結界も構築済み。

だと言っのに、予想外のことが起きて死神たちには動揺が走っていた。グリムリーパー

「ふんふん。確かに言った通りだね　よくできましたっ！」

「は。ありがたき幸せ」

「よし。と言っことで、あとはみなでやっちゃいましょうっ！
キャピ」

キャロルの視線はその四人をじっと射抜く。

口調も言動も依然として、ふざけたものに思える。だが、その双眸だけはまるで何の光も映さない闇のように、ただじっと相手を視線で射抜く。

「……やはり、キャロルは使えるな。リディア、いけるか？」

「誰にものを言っている。すでに終わった」

「ふ。私が領域を展開するまでもなかったか」

「だから言っただろう。アビーは来なくともいいと」

「ま、私は一応な。さて、キャロル。いけるな？」

「はいはい」

異常な雰囲気を感じ取って、仮面の四人はすでに逃げる体勢に入っていた。元々はボスに従って、ここに確保していた生徒たちを大会終了に紛れて連れて帰る予定だった。

しかし、裏切っているとしか思えないボスの存在。

グリームリーパー

また、ここにいる死神たちは分かっていたのだ。この三人にはどう足掻いても……勝てることなど、ないと。情報は持っていた。事前準備もしていた。相手の魔術も理解している……つもりだった。

だが、その本当の実力は……こうして対面するまで分からなかった。肌を感じ取る威圧感。すでに三人ともに戦闘体勢に入っており、溢れ出る第一質料プリママテリアの密度はかなりのものだ。

だからこそ、逃げの一手。

彼らは戦闘もプロ中のプロだが、逃げると言う技術もまた得意なはずだったが……すでに全員共に、その場に固定されてしまったのだ。

「ぐ……！」

「なんだこれは……！」

「う、動けないっ！」

「まさかこれは……っ！」

リディア「エインスワース。

彼女は確かに『氷剣の魔術師』を引退したが、別に魔術が使えないわけではない。むしろ、その本質である『減速』と『固定』は依然として使用することができるため、相手をその場に固定するなど容易であった。

グリームリーパー

それがたとえ、死神と言う世界的な魔術師の集団であったとしても。

世界最強と評されていた氷剣の魔術師だったリディアの能力はま

だ、現役に限りなく近いものなのだから。

「リディアちゃん、本当に引退したの？　すごい手際だね。」

「まあ……全盛期に比べれば、劣っているな。しかしこの程度の雑魚、造作もない。」

「ふふふ、そうかもね。」　さて、と。みんな、キャロキャロに見せてね……その中身を、さ……」

動けない四人は意識を手放すこともできずに、自害することもできずに、キャロルの接近を許してしまうが……瞬間、後ろからキャロルの首元めがけて短刀が放たれた。

しかしそれはそのまま彼女を通り抜けると、地面に突き刺さる。

「あはゝ　そこにいたんだあゝ」

にこりと微笑みキャロル。それと同時に、その短刀を放った魔術師は体を固定され、動くことはもう……できない。

「さて、と。これで全員かゝ　あっさり終わったねっ！」

「はあ……全くこのアホピンクは言動を改めれば、引く手数多だろうに」

「まあ言うなりディア。この有能さを扱えるのは、私だけだからな。だからこそ、学院に招いたんだ」

「レイは嫌がっているだろうがな……」

「ま、それを差し引いてもキャロルは世界最高の魔術師だからな。使わないのは世界の損失だ」

「それはそうだが……このイかれた言動はどうにかならんのか」

「諦める。もう長い付き合いだろう」

「それもそうだな……」

「えー！ 二人ともツンデレさんだなあ」

グリムリバー
死神たちは、その場で雑談を繰り広げる三人にただただ、啞然と
していた。

彼らの目的は、アーノルド王国の優秀な魔術師を帝国に連れ去ることだった。そのために、入念な計画を立ててここまでできた。

計画は全てが順調だった。

途中で一人、当代の氷剣と戦いたいが為に、暴走した愚か者もいたが……それを考慮しても、全てが完璧だった。

だと言うのに、目の前で起こっている現象は何だ？

そう考えざるを得なかった。

「よし。では、キャロル。あとは頼む」

「はいはい」

キャロルがパチンと指を鳴らすと、コードを一気に走らせる。

プリママテリア
《第一質料ⅡエンコーディングⅡ物資コード》
マテリアル

マテリアル
《物資コードⅡデコーディング》

マテリアル
《物質コードⅡプロセッシングⅡ支配》
ヘルシャフト

《エンボディメント》現象フエノメノン

「キャラル・イン・ワンダーランド
とつても可愛い私の不思議な世界」

するとその場にいた六人の死神は全員がまるで糸が切れた操り人形かのように、パタリと倒れ込んでしまう。意識はすでにキャラルの世界へと呑み込まれていつてしまった。

キャラル＝キャラライン。

彼女は、世間では研究者であり、幻惑の魔術師という異名を有していることで有名だ。七大魔術師の中で、最も有名な存在。そのため、キャラルは幻惑という魔術を得意としていられると思われているが……それは違う。

キャラルの本質は、コードによる魔術領域への干渉にある。

魔術的に定義するならば、『ヘルシャフト
支配』。

そもそも幻惑というのは、相手の魔術師の魔術領域そのものに干渉して発生させるものだ。そのため、相手に幻覚を見せること、それに洗脳することさえも可能。

キャラル・イン・ワンダーランド
とつても可愛い私の不思議な世界は精神干渉系の固有魔術であり、これをまともに喰らえば……あとは文字通り、操り人形になるしかないのだ。

魔術師の魔術領域全てを支配し、その意識にすら介入する魔術こ

そ、キャラルの本質。

これこそが、七大魔術師の中でも限りなく最上位に位置する、キャラル「キャラライン」の実力である。

「しかしこのアホピンク、大会初日にはボスを支配していたんだろっ？」

「そうだな。私も流石にその報告には驚いたな……ただ……」
「ああ……アレか……」

「こいつはそのことを忘れて、私に説教されている最中にやっと思いで出して報告したのだから……」

「そ、それは何度も謝ったじゃーんっ！ ゆ、許してよー、アビーちゃんっ！」

そう。実はキャラルはレイたちの女装を手伝った後に、明らかに不審な魔術師がいたので捕らえていたのだ。

もちろん、ヘルシャフト支配を使っ。しかしあることが、適当に宿舎の部屋に放り込んだ儘で忘れていたのだ。

その後、この事実が発覚した後は、グリムリバー死神のボスを操って、残りの死神をこうしてこの場に全員集めて一網打尽にした、というのが事の顛末である。

攫った生徒たちは生け捕りにして、傷つけることなく連れて帰るのが条件だと発覚していたので、グリムリバー死神を泳がせて……今に至るといっわけだ。

途中でレイが死神の一人と戦うことになるなど、イレギュラーはあったが、概ねアビーの計画通りに終了した。

そう話していると、いつの間にか三人の後ろに立っていたカーラが声をかけてきた。

「皆様、後の処理はこちらでやりますので……」

「おお。カーラか。では、任せるか」

ちょうどカーラに加えて、ヘイル一族がタイミングよくやってきたので彼女たち三人は後処理を任せる。

「えっへん！ キャロキャロ、超役にたつでしょ」

「魔術は確かに世界最高峰だが……よく本当に、学院に入れることができたな。このアホピンク、かなりの気分屋だろう。何か頼んでも、基本的に断るしな」

「そこは色々と条件を、な。でもレイがいるとわかると、すぐに了承したかな」

そもそもキャロルを学院に招いて、こうして魔術剣士競技大会に参加させていたのも、この能力が圧倒的に強力すぎるからだ。

実際のところ、キャロルの本質を知るものは世界に十人もいない、そのため、初見で戦えば敗北は必至。魔術を発動された時点で、キャロルに抗える魔術師はこの世界にはほばいない。

キャロル⇨キャロライン。

言動に難ありだが、その実力は七大魔術師の中でも最上位に位置するのは間違いなかった。

だがやはり……この言動だけは誰にも制御できないのもまた、間違いないものである。

「さてと。これから本格的に夏休みだね　じ・つ・は・キャラクタ、レイちゃんとデートするのですっ！　約束しちやいましてっ！　てへ」

「は！？　お前、まさかつ！！　私のレイに手を出すのか……！？」
「もう、リディアちゃんのものじゃないもっんっ！　合法だもっんっ！」

「き、貴様っ！　合法的なわけがあるかつ！　ここで氷漬けにしてやるうか……？」

レイのことになると我を忘れるリディア。彼女はすぐにキレると、そのままキャラクタを本気で睨みつける。

だがここで引くわけにはいかないキャラクタ。今まではリディアのガードが硬すぎたが、今はかなり緩和している。と言うことで、レイとの交換条件は一日デートをしようものだった。

「ふんっ！　負けないもんっ！　レイちゃんの童貞は、私のものだもんっ！」

「なんだと……？　レイは私が認めたやつとしか交際を許さんぞっ！　お前みたいなアホピンクなどに渡せるものかつ！」

「アホピンクじゃないもっん！　超絶可愛い、キャラクタだもっん！　レイちゃんもきつと大人の魅力に気がつくもっんっ！」

「は？　もう三十歳に近い若作りババアが何を言っているんだ……殺すぞ……？」

「かつちゅん……もう怒ったもんねっ！　リディアちゃんがレイち

やんのことちよいちよいストーカーしてるのバラすもんねっ！」

「はあ……！？ ストーカーではないっ！ これは愛情だっ！」

「あゝやだやだ。いつまでも過保護な親は嫌だよ。ほんと、リディアちゃんって……ポンコツだよ。レイちゃんのことになるとさ。ぷぷぷ……！」

「殺す……絶対に殺す……」

「かかってきなよっ！ 返り討ちにしてあげるよっ！」

と、二人は本格的に魔術での戦闘を繰り広げ始める。

現七大魔術師であるキャロルと、前七大魔術師とはいえ全盛期並みの力を持つリディア。この二人はよくケンカをしていたものだが、こうして魔術で争うとなると周囲に多大な影響が出るのは間違いなかった。

「はあ……やれやれ……」

その後、本気でキレたアビーに二人が数時間も説教されたのは、言うまでもなかった。アビーにだけは頭の上がない二人は、その場で正座をしながら嫌々ながらも説教を甘んじて受け入れていた。

こうして真の意味で、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会は無事に幕を閉じるのだ。
った。

第71話 空に舞う鳥

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会が終わりを告げた。

本戦決勝。

レベツカ先輩は今までのルーカスⅡフォルストの試合とは異なり、ただ刀の一振りだけで敗北することはなかった。

しかし……レベツカ先輩であつても勝利することは叶わなかった。

俺は知っていた。先輩が未来予知の魔眼を有していることに。それは今までの戦いを見れば容易に理解できた。

魔眼持ちは、今までの経験の中で幾度となく戦ったことがある、もちろん、未来予知の魔眼を持っていた魔術師とも戦ったことがある。だからこそ、レベツカ先輩のそれは、かなりの高水準のものだった。……やはりルーカスⅡフォルストの方が上手^{うわて}だった。

最後に彼が見せた剣技。

俺はそれを見て、ハッキリと思い出した。もともと兆候はあった。意識の中に可能性はあった。

だがあの技は……あの秘剣を使えるということは、そうなのだろう。

「あなたが……当代の氷剣ですよね？」

「……」

本戦決勝が終わった後、一人で控え室の清掃をしていると現れたのはルーカスⅡフォルストだった。

俺には予感があった。彼がきつと、俺の元にやってくるであろうと。

「まさか、絶刀^{ぜっとう}の魔術師も引き継がれているとは」

告げる。

その事実を、淡々と。

そう。ルーカスⅡフォルストの正体は、七大魔術師の一人である絶刀^{ぜっとう}の魔術師だ。

魔術師という名称は有しているものの、それは飾りにすぎない。その本質は、ただ圧倒的な剣技。中でも秘剣と呼ばれる特殊な剣技を十ほど有しているのが、絶刀の魔術師。

絶刀^{ぜっとう}の魔術師は表舞台に出てくることはなく、知っている魔術師もおそらく上位の魔術師だけだ。

それに俺は先代の絶刀^{ぜっとう}に会ったことがあるが、世間での関わり合いを嫌う人だった。五十代の男性で、彼と同じように長い黒髪を後

ろでまとめていた。

秘剣もいくつか見たことがあるが、それは間違いなく今回の本戦決勝でルーカス・フォルストが使ったものと同じだった。

ニヤリと不敵に微笑む彼は、わずかに殺気を漏らしていた。

「やっぱり分かりますか？」

「ああ。あの秘剣を見て、気がつかないわけがないだろう」

「ふふ…… やっぱりそうだ。あなたなら、気がつくと思いましたよ」

「どうして大会に出た？ 絶刀の魔術師ならば、この魔術剣士競技大会に用はないだろう」

「見せたかったんですよ、あなたに」

「どういう意味だ？」

その男性とは思えない美しい顔は、急にスッと表情を失う。

そして彼は冷淡に告げる。

「僕は、氷剣と戦いたい」

「……」

「最強の魔術師は絶刀であると、示したいんです」

「それだけか？」

「ええ。それだけです。だから今年の魔術剣士競技大会の頂は僕がもらいました」

「来年、俺に出場しろと？」

「そうです。ですが、魔術領域暴走……オーバーヒートしっかりと治してくださいね」

「……」

「じゃないと、本気で戦えませんか」

絶刀は言いたいことは言ったのか、そのまま踵を返す。

「ではまた来年。この魔術剣士競技大会で待ってますから」
マギクス・シュバリエ

去っていくその姿を、俺はじっと見つめていた。

絶刀の魔術師。

その実力は近接最強格とも評されている。

だが、やはり……魔術師の中で最強なのは氷剣だと言われている。

師匠が作り上げたその功績は、有無を言わせない。だからこそ俺は思った。

この師匠の功績を無為にしないためにも、最強の座は譲らないと。

「来年か……」

ボソリと呟く。

来年、俺の魔術領域暴走はどうなっているのか。それは俺自身もわからない。でも願わくば……俺もまた、この魔術剣士競技大会で皆のように、戦ってみたいと。

そう願った。

翌日、閉会式が行われた。

俺たちはそこで、アメリカが表彰されるのを見ていた。どうやら魔術での治療でも完治はできずに、包帯を至る所に巻いているが……アメリカの表情は晴れやかなものだった。

そして優勝者、準優勝、三位となった選手が表彰される。

ちなみにアルバートはアリアヌとの戦いの負傷により、戦うことは困難で不戦敗と表向きはなっていた。

その実は死神に囚グリムリパーわれていたが……もうすでにその件は解決していた。

実は昨日の夜にアビーさんに以前と同じ部屋に呼び出され、事の顛末を聞いた。ちなみにキャロルと師匠はなぜかいなかった。曰く、反省中だとか何とか。

「レイ、すまないな。また急に呼び出して」

「アビーさん、ここに自分を呼ぶということは……終わったのですか？」

「ああ。無事に事は済んだ。お前の手も煩わせてしまい、すまなかったな」

「いえそれは大丈夫ですが……囚われた生徒は……」

「全員、無事だったさ。奴らの目的は殺人ではなく誘拐。生徒には傷一つなかった」

「そう、ですか。安心しました」

「今回ばかりはキャラルの能力が役に立ってな」

ヘルシャフト
「支配、使ったのですか？」

「ああ。やはりあいつは魔術師としては世界最高峰に変わりはないからな」

「そうですね。それは自分も認めるところです」

「ま、夏休みのデート？ は頑張れよ」

「……あれは悪魔との取引でしたが、約束は守ります」

「ま、リディアも色々心配していたが……レイもいい歳だ。自分で責任を取るべきだな。あいつはお前のことになる和我を忘れるかな。昨日も暴走する二人を説教してな」

「は、ははは……そうでしたか」

どうやら師匠とキャラルは、アビーさんにつてりと絞られたらしい。その後は死神の件の詳細、後始末の件など細い話を聞いて終了。

そして俺が部屋を出て行くとき、アビーさんは優しい声音で俺に質問を投げかけてきた。

マジクス・シュバリエ
「レイ、魔術剣士競技大会は楽しめたか？」

「はい。最高の思い出になりました。また来年も、みんなと一緒に楽しみたいです」

「そうか。変わったな、昔に比べると」

アビーさんが見せる微笑みは、心から嬉しそうにしているように見えた。

「そう、でしょうか？」

「ああ。レイは昔からそうだが、もっと優しい人間になったな」

「……きつとそれは、友人たちに俺は教えてもらったからだと思います。そしてこれからもきつと、みんなと共に進んでいきます」

「ああ……そうだな。では今後とも、学院での生活を楽しくぐれ、身内みうちびいき鼻屑になるが、困ったことがあればなんでも言つて欲しい。力になるう」

「ありがとうございます」

そうして一礼をして、俺はその場から去つて行く。

昨夜の件はこれで終わり、今は閉会式をみんなで見ている最中だ。

アメリカの隣には、さらにボロボロになったアリアーヌがいた。

彼女は閉会式に出るのは困難とされていたが、アメリカの手を借りてこの場に出てきていた。二人ともに包帯を巻いており、側から見れば痛々しい姿だ。

だが俺はそんなことは思わなかった。

ただ二人は壇上で、笑い合っている。何を話しているかは分からないが、その笑顔は心からのものだとよく理解できた。

「アメリカ、おめでとう!!」

「アメリカちゃん! おめでとう!!」

「おめでとう、アメリカー!!」

「おめでとう!!」

応援団のみんなが、彼女にそう言葉をかける。

するとこちらに気がついたのか、アメリカはニコリと微笑みながら俺たちに向かって手を振ってくれた。

そうして新人戦の表彰が終わると、次は本戦の表彰に移った。三位から表彰されていき、次はレベツカ先輩の番だった。

ルーカス・フォルストに敗れたとはいえ、先輩は最後まで懸命に戦った。傷もどうやら浅いものだったらしいので、そのまま閉会式に出てきている。レベツカ先輩は晴れやかとはいかないが、毅然とした様子でその場に立っていた。

「……」

一方でただ無表情に、その場に立ち尽くす絶刀の魔術師であるルーカス・フォルスト。彼は笑顔の欠けから見せずに、そのまま表彰を受けていた。

そして最後に、アビーさんの言葉で大会を締めくくることになった。

「マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会、無事に全日程終了だ。新人戦優勝は、アメリカ・ローズ。本戦優勝は、ルーカス・フォルスト。二人とも優勝おめでとう。二人ともに素晴らしい戦いだった。だが、それ以外の試合もまた素晴らしいものだった。学生という立場にありながら、非常にレベルの高い試合を見せてもらったよ。そして、この魔術剣士マギクス・シュバリエ競技大会に参加した全員に、運営の方々に、そして観客の方にも感謝を。今回の大会も非常に素晴らしいものとなった。それでは、また来年。この場で会えることを楽しみにしている」

こうしてマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会は終わりを迎えた。

この大会に至るまで、そして大会の中で俺は数多くのことを成して……大切なものを手に入れた。

友人とともに、大会を楽しみ……そしてアメリカと共に進んで行くこと決めた。彼女の心に触れ……俺は自分の弱さも、受け入れることができた。

人は一人では生きていけない。

だから支え合って生きていく。

今までも、そしてこれからも、俺は大切な人たちと共に進んでいく。

籠^{かご}の中の鳥。

アメリカ＝ローズを形容するならば、それが一番適切だろう。

私のことは、誰よりも私が知っている。

決して籠から出ることは叶わず、翼を挽^もがれ、ただ地面に伏せるだけ。

でも私は……その籠から飛び立つことができた。

それはみんながいてくれたから。

それに……レイが私の心に触れてくれたから。

生きる意味を、自分で見出すその意味を、教えてくれたから。

だからもう私は、アメリカ・ローズは、もう籠の中の鳥ではない。貴族という檻の中にいるのではなく、この大空に、この世界という枠で私は……みんなと一緒に生きていくんだ。

そんな私は今、日記を書いている。それはこれからの自分を、今までの自分を記録するために始めたものだ。

今はちょうど、大会が終わった後のことを書いている。

『アメリカ（ちゃん）、優勝、おめでとーっ!!』

祝勝会。

ということで、街の中にあるレストランで私はみんなから祝ってもらっていた。アメリカ応援団のみんなが、クラッカーを手にとって賑やかに祝ってくれる。今日は貸し切りらしく、環境調査部の部長さんが手配してくれたとレイが言っていた。

「ささ、アメリカ！ いっぱい食べよっ！」

「うんうん！ すこかったよ、アメリカちゃんっ！」

「ああ！ アメリカもすげえ筋肉だったなっ！」

「いや……私に筋肉は関係ないと思うけど、その……みんな、あり

がとう」

にこりと微笑む。

それは今までのような作り物の笑顔ではない。

レイとの話で知ったけど、みんな……分かっていたのだ。私が偽っていることなど。でも何もいうことはなく、今はただお祝いしてくれている。

本当に、本当に感謝しかない。

と、そう考えると涙がポロポロと溢れてしまう。ああもう、本当に最近泣いてばかりだ。でも今回のものは、嬉し涙だった。

「う……ぐす……みんなあ……ありがとう……」

感極まって泣いていると、隣に座っているレイがハンカチを渡してくれる。

「アメリカ。使うといい」

「うん……ぐすっ……ありがとう……」

いつものように話しかけてくれるレイ。でも私はどこか……気恥ずかしかった。彼の方はいつも通りだけど、やっぱりなんというか……妙な気持ちになるのだ。不思議だけど、今はそうとしか言えない。一体これは何なのだろう？

「アメリカちゃん、凄かったね！」

エリサが目を輝かせながら、そう言ってくれる。

「うんっ！　ありがとう！」

そこから私は、色々とみんなに話した。決勝戦での戦い、それにアリーヌと戦うことがどれだけ大切で、彼女に勝ったことがどれほど嬉しかったのかを。

その全てを……自分の全てを、話すことができた。

みんなには謝罪もした。今まで信頼できないと思っていたことを、でもそれを、笑って受け入れてくれた。

本当に私は……私は、素晴らしい友人を持つことができた……そう思った。

「アメリア。ここにいたのか」
「レイ……」

今は店内でみんな大騒ぎだった。

途中でお酒でも入ったのか、なぜかクラリスが酔っ払い。次にはエリサ、エヴィ、それに環境調査部の人もなぜか酔い始めたのか、大騒ぎになってしまった。途中でエリサが暑いと言って脱ぎ始めた時は、内心ではやった！　と思ったけど男性陣もいるので死守していた。

あのおっぱいは私のものだからっ！ 誰にも渡さないっ！

ちなみに夏休みにはお泊りしようか、なんて話も出ている。その時に絶対に一緒にお風呂に入るので、ぜひ堪能したいと思う。ぐへへ……。

と、そんな余談はいいとして。

今はなんとなく……外に涼みに来ていた。ちょうどレストランの二階にはベランダがあったので、そこで冷たい風に当たっていた。そんな矢先にレイがやってきた。

「アメリカ、改めて優勝おめでとう」

「うん。ありがとう」

暫しの沈黙。

でもそれは嫌じゃなかった。

ただレイといるだけで私は落ち着くことができた。

でもその……あの時のことを思うと……その、すごく恥ずかしいというか……あれって今思うと、こ、こ、告白みたいというか……それすらすっ飛ばして、婚約の言葉というか……。

いや分かっているわ。もちろんあれは、友人としての言葉だと。レイにも私にも、そんな感情はなかった。ただこれからみんなで一緒に進んでいこうと、そう誓ったのだ。

でもあれからレイの顔を見ると、妙に体が熱くなるのは気のせいかしら……いや、その……きつと気のせいよ！ うん！

ということで私は極めて冷静に、そう、それこそ友達と話すように、彼に話しかける。うん。冷静にね、冷静に。

体が熱いのはきつと、みんなの熱気に当てられたせいだ。

「あ、そういえば……レイは私の能力、分かっていたの？」

「いや、厳密には分からなかった。ただ、あの訓練の際……君には莫大な才能が……固有魔術オリジンが眠っていると思っていた」

「そっか……でも、さ。その才能は確かに先天的なものかもしれない。けど、私が頑張った結果だよね……？」

「当たり前だろう。固有魔術オリジンはなんの努力もなしにたどり着ける領域ではない。それは、アメリカがずっと頑張ってきたことの証明だから、おめでとう。心から祝福する」

「ありがとう、レイ。本当に、本当にありがとう……」

レイがいなければ、私はずっと籠の中の鳥だった。

でも彼のおかげで私は、私になることができた。

だから本当に、レイには感謝しかない。

「ねえ、レイ」

「どうした？」

自然に私はそつと彼の手を握る。これ以上の言葉は必要なく、彼

もそれを受け入れてくれる。

…私たちは互いの体温を、ここに生きていることを確認しながら…
…私は束の間の幸福感に浸る。

「その、さ」

「なんだ？」

「夏休みだけど、うちに来ない？」

「アメリカの実家に？」

「うん……その、ね。お母様に話したの、レイのこと。あ、氷剣のことは話してないよ？ でもその……仲のいい友達ができたって言うと連れて来なさいって言うから……その、私も来てくれたら嬉しい」

「もちろんだ。夏休みはまだ予定も空いている。是非、行かせて欲しい」

「うんっ！！」

もう私は一人じゃない。

そう改めて思う。

ふと空を見ると、一番星が輝いていた。

私もこの星のように……この世界の下で、煌めくような人生を送りたいと　そう願った。

「アメリカちゃんっ！」

「アメリカー！」

「アメリカ！」

「おーいっ！ アメリカー！ いくぞーっ！」

「うん！ ちょっと待って！」

もつと書きたいことはあったけど、これで十分かな。

瞬間、窓から風が入ってくる。

それはパラパラと、ページをめくり……日記が閉じてしまう。

そしてそこには、空に羽ばたく大きな鳥の絵が描かれていた。

この日記を買う際に、私はこのデザインだからこそ買うことにした。

もう私は籠の中の鳥じゃない。

この大空に飛び立つ鳥なのだと、そう分かっているから。

窓越しに空を見上げる。

夏らしい、澄んだ美しい空だ。蝉の鳴き声も、この茹だるような暑さも、全てこの夏を構成しているものだ。

今まで夏は嫌いだった。それに、自分も嫌いだった。大嫌いだった。

でも今は、この夏も、自分も大好きだ。みんなことも、大好きになった。

「アメリカーっ！ 置いていくぞーっ！」

レイの声が聞こえる。

今日はみんなで街に遊びにいく約束をしていた。数日後にはみんな実家に帰り始めるから、ちょうどいい機会ということですうしたのだ。

「待ってー！ いま行くからっ！」

そうして私は、みんなの待っている方へと向かう。

瞬間、鳥の鳴き声が聞こえた。

後ろを振り向くと……窓越しに一羽の鳥が、この大空に舞うのが見えた。

きっと私も、あの鳥のように……これからこの大空へと飛び立っていくのだろう。

籠かごの中の鳥は、自由に羽ばたく翼を手に入れ、この大空をどこまでも高く、高く、飛んでいく。

第71話 空に舞う鳥（後書き）

・あとがき

第二章 空に舞う鳥 終

番外編 Summer Vacation 続

二章終了です！

さて、二章はアメリカの物語でしたが、いかがでしたでしょうか？

二章はギャグ回、女装回、筋肉回、アメリカの成長、マギクス・シュバリエなど……盛り沢山で、10万字で終わる想定を大幅に上回り、二章だけで20万字を超えました……二倍ですね（汗）。少し暴走気味でしたが、やりたいことは終えることができました。冗長だったかもしれませんが、少しでも楽しんで頂けたのなら、私としても嬉しい限りです。

また、下にスクロールすると【 】という欄があり、最大で5つまで入れることができます。

是非、での評価にて応援して頂ければ幸いです。皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければお願いいたします

それでは、今後も本作をよろしく願います！

第72話 二章 登場人物とその他設定（前書き）

二章の設定資料です。ただ本編に出た情報をまとめただけなので、読むのは必須ではありません。すぐに番外編に進んでも、問題ありませんので……！ よろしく願います。

第72話 二章 登場人物とその他設定

二章 新登場人物

・キャロル＝キャロライン（女性）

年齢：29歳。

容姿：桃色の派手な髪。それを綺麗にかつ、緩やかに縦に巻いている。右目の下には泣きぼくろがある。身長は163センチ。

プロフィール：アーノルド王国軍、実戦機動部隊をサポートする形で作戦司令部で活動していた。現在は退役しており、研究者として活動している。と言っても割と暇だったので、アビーに頼まれ学院の教師もすることに。レイとは旧知の仲だが、彼に嫌われているのを意外と気にしているので本気でアプローチをしようとしている様子。七大魔術師の一人であり、異名は『幻惑の魔術師』。その本質は『支配』。魔術名称は『支配』^{ヘルシャフト}。魔術師としての実力は世界屈指だが、性格に難ありということで他の魔術師、魔術協会には敬遠されている。今はレイとのデートが楽しらしい。リディアとは仲が悪いかと思いきや、意外と仲がいい。ちなみに、アビーには頭が上がない。

・クラリス＝クリーヴランド（女性）

年齢：15歳。一年生。

容姿：金髪ツインテール。そのツインテールに並々ならぬこだわりがあるとか。身長は154センチで、体の厚みはあまりない。気にしていないふりをしているが、体操などで改善を試みているのは秘密。

プロフィール：上流貴族、クリーヴランド家の長女。ツインテール

を愛し、ツインテールに愛された少女。今まで友人もいなく一人であることが多かったが、レイ達と出会うことで初めての友人ができる。普段はツンツンしているも、根は優しい女の子。将来の夢は、ハンターになること。今は色々と悩んでいるが、そのうちレイに相談しようかと思っている。夏休みはみんなとたくさん遊べたらいいな、と思っている。

・アリアーヌ^{ブラチナ}オルグレン（女性）

年齢：15歳。一年生

容姿：白金縦ロール。身長は175センチと高め。プロポーションは抜群であるも、それは天性のものではなく後天的なものである。実はジャンクフードが大好きだが……自制している。チートデイがとても楽しみらしい。

プロフィール：三大貴族、オルグレン家の長女。アメリアとは幼馴染だが、離れていく彼女を見捨ててしまったという想いがあつた。そこから先はアメリアの模範となるような、そして自分自身に誇りの持てる貴族になれるように努力を重ねてきた。新人戦では準優勝だったが、アメリアの優勝を心から祝福している。最近、アルバートとアメリアを変えたレイの存在が気になっている。女装も含めて、只者ではないと思っているようだ……。

・ティアナ^{ブラチナ}オルグレン（女性）

年齢：8歳

容姿：白金縦ロールとアリアーヌを模した髪型をしている。身長は125センチ。フリフリの服が最近好き。

プロフィール：アリアーヌの妹であり、オルグレン家の次女。最近はかなり活発になってきたのか、一人でよく出歩く。家の人間は心配しているも、冒険と称して色々なところに行ってしまう。最近はリリーのことを気に入っており、いつかまた会いたいと願っている。また魔術の素質は十分にある。将来はアリアーヌに匹敵する魔

術師になるとも言われている。

・マリア「ブラッドリィ（女性）」

年齢：14歳。

容姿：身長は172センチと、姉のレベッカよりも高い。髪型は前下がりのセミロング。前髪は斜めに切られており、片目だけが見えている状態。両耳に掛けている方には、大量のピアスがある。それは耳たぶだけでなく、軟骨の部分にまで及んでいる。ピアスは本人の趣味らしいが、実家では色々と反感を買っているようだ。

プロフィール：レベッカ「ブラッドリィ」の妹。ただ容姿は彼女とはかけ離れており、真つ赤な双眸に純白の髪と肌をしている。魔術的な要因と言われている先天性白皮症である。ただ健康的に問題はなく、日焼けが厳禁くらいである。現段階でレベッカとの仲はそこまで良くはないが、魔術剣士競技大会はレベッカの試合は、実は全試合応援に来ていた。魔術剣士競技大会で出会ったリリィに一目惚れし、お姉さまと慕うように。来年はもとも別の学院に行こうと思っていたが、絶対にアーノルド魔術学院に入学すると決めている。

・レックス「ヘイル（男性）」

年齢：18歳。四年生

容姿：黒髪を刈り上げている。身長は195センチで、筋骨隆々。その体躯は学内でもトップ。

プロフィール：環境調査部の部長。だがその実は、王国の諜報機関を担っている一族の一員。今までは影からレイを支えていた。と言っても、本人は彼が氷剣ではないとしても、先輩としてよくしたいと思っていたようだ。ただ彼があらゆる物資をすぐ調達できるのは、未だに謎らしい。

・ルーカス「フォルスト（男性）」

年齢：16歳。二年生。

容姿：黒髪の長い髪を後ろで一つにまとめている。身長は165センチ。顔は中性的で、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会では女性の圧倒的な人気を集めた。

プロフィール：メルクロス魔術学院の二年生。その圧倒的な刀捌きから、初出場の魔術剣士競技大会本戦にて優勝。その正体は、七大魔術師である当代の『絶刀の魔術師』であった。冰剣と戦うことを願い、今年はその実力を誇示するために出場して来た。十を有する秘剣を持っており、現在は第八秘剣：ざんしょうあんてん残照暗転のみが公開されているが、その真の意味を知るものは誰もいない。

第二章 魔術に関して

・固有魔術オリジン

汎用的な魔術ではなく、特定の魔術師だけが使用できる魔術のことを固有魔術オリジンと呼称する。これは広域干渉、物理干渉、概念干渉、精神干渉の4種に分類される。

広域干渉、物理干渉オリジンの固有魔術は、基本的に普通の魔術と同じように二系統七種類の魔術に分類することもできる。

二系統：内部コードインサイド、外部コードアウトサイド

七種：高速魔術クイック、遠隔魔術リモート、連鎖魔術チェイン、遅延魔術デレイ、物資変化マテリアルシフト、大規模魔術エクステンシブチェイン、大規模連鎖魔術エ

一方で概念干渉、精神干渉は完全に異質な魔術であり、保有する魔術師が少ないため固有魔術オリジンに分類される。

マテリアフィールド
・ 質料領域

人間に存在する第一質料で覆われた領域。それは人間に対して薄い膜が覆うようにして存在する。一般人にもあるが、魔術師の場合は質料領域が濃い（分厚い）傾向にある。それは上位の魔術師になればなるほど、濃くなる。この質料領域が存在するため、人間そのものを対象として魔術を発動するのは通常よりも困難になる。

マテリアフィールド
質料領域の具体例

レイも対物質コードを人間を対象にして、人の存在そのものを還元するのは理論上は可能（人間もまた第一質料で構成されているため）。しかし、質料領域による干渉があるため実質的には不可能。

また、アメリカの因果律蝶々も魔術師を対象としてそのプロセスに組み込む場合は、質料領域への介入が必要なので、さらにコード構築の難度が跳ね上がる。おそらくそれは、この世界に存在する魔術の中でも最高峰に複雑なコードである。

そのため、魔術師を対象に組み込んだ因果律蝶々は魔術領域への圧迫が尋常ではなく、すぐに魔術領域暴走へと至る。

バタフライエフェクト
・ 因果律蝶々の概要

主に生み出した蝶の行動を起因として、因果律を操作する概念干渉系の固有魔術。因果律、つまりはこの世界に存在する因果性という概念そのものに介入する。本来この世界に存在するはずだった因果関係に介入し、破綻させたり、さらにそれを別の因果に繋げて、上書きすることも可能。物理干渉系の魔術には圧倒的な強さを誇る。有効範囲はアメリカのコンディションに大きく左右される。現在は原因から結果を生み出す因果律にしか干渉できないが、因果逆転も理論上は可能。元々、因果律蝶々は因果律全てを操る固有魔術であるため。ただし、今のアメリカにはそれは不可能。

発動プロセスは四原因説アイディアという四つのプロセスを踏む必要がある。

ヒューレ
質量因とは因果の材料。この因果律蝶々の大元である蝶を生成。
エイドス
形相因とは設計図。発動したい因果律の心的イメージを組み込む工程。
エフィシエン

作用因とは因果律を操作するための行動（起因）。それは蝶の行動（羽ばたき、移動、爆破）である。

テロス
目的因とは発動する因果律そのもの。この三つのプロセスを踏み、最後にその『結果』をこの世界に定着させる。

この四つをコードに組み込むため、魔術領域はかなり圧迫されてしまう。アメリカほどの魔術容量キャパシティがあつて初めて成立する固有魔術オリジンである。

・因果律蝶々の詳細

また、因果律蝶々は因果律を操作できる概念干涉系の固有魔術ということもあり強力だが、燃費が激しく悪い。持つてギリギリ五分。魔術師を対象とした質料領域への介入も含めると、さらに発動時間は短くなる。因果律蝶々は酷使すると、魔術領域が暴走して自壊アボトシスを起こしてしまう。それは、四原因説アイディアという処理はそれだけ複雑なため。

バタフライエフェクト
因果律蝶々は概念に干渉する魔術だが、あくまで第一質料プリママテリアを使用した魔術のため、レイの対物資コードならば無効化できる。アメリカが仮にレイの絶対不可侵領域を前にすれば、発動する因果律を彼に指定してもそれは成立しない。

バタフライエフェクト
攻撃に関しては、因果律蝶々は蝶を必ず経由する必要がある、攻撃自体は爆破など小規模のものに限られてしまう。そのため、強大な

魔術を必中にすることは不可能。それは、他の魔術を入れるだけの容量がないため。ただし、防御に関しては、あらゆる攻撃を『当たらない』という結果に結びつけることができるため。ほぼ無敵である。戦闘に関して言えば、防御の方が真価を発揮する固有魔術である。

アンチマテリアルフィールド
・絶対不可侵領域。

レイ・ホワイトが使用する固有魔術。自身を中心にして、半径五メートル以内の指定していない、物質または現象を減速と固定で停止させ、還元よって無効化する領域。

二重領域であり、知覚領域と無効化領域に分類される。

知覚領域は最大で半径五十メートルまで拡大できる。本人が相手の魔術、または物理的な攻撃などを知覚する必要はなく自動で全て処理される。そのため、死角は存在しない。たとえ暗闇の中からの奇襲であっても、全てが無効化される。通常の還元と異なるのは、還元は座標指定と、対物質コードの活性化をする必要があるため、局所的な魔術には対応できるが、全てをカバーできるわけではない。そのため、この領域ではそれを補うために生み出された魔術である。

ディセレーションシールド
減速、固定、還元のプロセスを一つのコード理論にまとめ、それをメンタルモデルとして脳内に保持して、常時魔術を発動するため負担はそれなりのものとなる。

・鬼化

周囲にある第一質料と体を覆っている質料領域を四肢に集中させ、

身体能力を著しく強化する固有魔術^{オリジン}。完全に物理特化しているため、破壊力は抜群である。ただし、四肢以外の防御面が弱くなるため立ち回りが重要となる。

・鬼化^{オーガ}：雷電^{シンティラ}

身体中にまといつている第一質料^{プリママテリア}を電気に変換する。内部コード^{インサイト}で身体能力を底上げ、そこから身体中を外部コード^{アウトサイト}でオーラのように包み込む。オーラは属性を付与できる。現在アリアーヌは雷電^{シンティラ}のみが発動可能。

・第八秘剣^{ざんしょうあんてん} 残照暗転

絶刀の魔術師が所有する秘剣が一つ。現時点では詳細は不明。

・魔眼

魔眼とは、魔術的な要因によって発生した異能。それがその双眸に定着したものである。それは後天的に獲得することはほぼできないと言われている。魔眼には多くの種類があるも、全てが網羅されているわけでもなく未だに謎とされている魔眼も存在する。レベル力が有する未来予知眼は保有者は少ない上に、制御が難しく一生を眼帯をつけて過ごす者も過去にはいたとか。ただし、世代を重ねるに連れて人間は魔術に対する適性が上がっているため、レベル力は十代にしてその魔眼を完全に支配下に置いていく。

第73話 野球しようぜ！

「野球しようぜ！」

扉を開けると、そこにいたのは……誰だ？

いや、誰かは分かっているし、把握している。

いつも一緒にいるからな。

でもなんというか、妙におかしいのだ。この相手はこんなことをするはずはないし、こんなことも言わない。

きつと疲れているのだろう。

魔術剣士競技大会では色々あったしな。
マギクス・シュバリエ

とりあえず冷静になりたいので、俺は扉をそつと閉じる。

「どうした、レイ？ ランニングに行かないのか？」

「いや……幻覚の類かもしれない……もしかすると、魔術的な攻撃
ヘルシャフト

……幻惑か？ まさかキャロルの支配……？ もしかして、とつて
キャ
ロル・イン・ワンダーランド

も可愛い私の不思議な世界が発動しているのか？ だがそんな兆候
は……」

「は？ 何、言っただ？」

「いや。俺の気のせいだろう」

そして俺は再び扉を開けた。

「野球しようぜ！」

そう。そこにいたのは、紛れもなくアメリカだった。

だが様子がおかしい。

制服をいつものように着用しているが、野球帽を被って親指をぐっと上げながらそんなことを言ってくる。

やはり疲れているのだろう。

そう思っただけで再び扉を閉じようとする、ガツとアメリカがそれを阻止してきた。

「ちょ！ ちょっと待ってよっ！」

「ふむ。なるほど。本物が……どうやら、キャロルの仕業ではないのか」

「本物よっ！」

「で、どうしたその格好は」

「野球をしよう！ みんなで！」

「いや待ってくれ。順序立てて話して欲しい」

「それもそうねっ！」

ということで、テンションが異常に上がっているアメリカはどうして野球をしようと誘っているのか、その詳細を語り始める。

「実はね、レベッカ先輩に頼まれたの」

「先輩に？」

「うん。実はね、なんかいま野球部がグラウンドを使う時間を無理に伸ばしていて、レベツカ先輩が生徒会長として注意しに行ったらいいの」

「なるほど」

「それで、なんか野球部の方がすごい不遜な態度だったから、レベツカ先輩に付き添っていたセラ先輩が怒っちゃって」

「ふむふむ」

「で、なぜか野球で決着をつける話になったらしいの。でも今は帰省している生徒も多くなっているから、レベツカ先輩たちもなかなか人を集めることができなくて……それで偶然その話を聞いた私が勧誘してるのっ！もちろん、レイとエヴィも参加するわよねっ！

ちなみに試合は明日よっ！」

「……だ、そうだが。エヴィどうする」

「俺は構わないぜ！ やったことあるしな！」

「ふ……野球か。いいだろう。俺とエヴィは参加だ」

「やったっ！じゃあ、次はエリサとクラリスを誘いましょう！」

ということ、俺たちはなぜか野球をすることになった。もちろん軍人時代に野球というか、スポーツの類は一通り経験しているので問題はない。

一時期師匠が変化球を投げるのにハマっていた時期があったので、俺はひたすらキャッチャーをやっていた。もちろん、俺も師匠に色々球種を教えてもらっているのでピッチャーもこなすことができる。

でも先ずは、メンバーを集めることが優先だろう。

今のところ、俺、アメリカ、エヴィ、レベツカ先輩、セラ先輩の五人だ。

つまりはあと四人必要ということらしい。

「よし、クラリスの部屋はここね！」

三人で歩みを進め、クラリスの部屋の前にやってきた。ちなみに今は生徒もあまりいないので、女子寮に来るのはそこまで咎められない。

アメリカも普通に男子寮にやってきていたしな。ちなみに部屋の場所はセラ先輩に教えてもらったらしい。セラ先輩は以前に一度、園芸部の用事で俺の部屋に来ていたから覚えていたのだろう。

そして、野球帽を被ったアメリカが意気揚々と、ノックすると……反応がない。

今は朝の七時だ。まだ寝ている可能性もある。

そう思っていると、室内から音がして……ドアがゆっくりと開いた。

「あい……クラリス＝クリーヴランドです……起きてます……あい」

中から出てきたのは非常に眠そうにしているクラリスだった。ナイトキャップにパジャマ姿。腕にはぬいぐるみを抱えている。言葉遣いも少し怪しいというか、今もこっくりこっくりと首をふらつかせている。

今はいつもと異なりツインテールは解かれていて、綺麗で艶やかな長い髪が腰近くまで伸びている。

なるほど、下ろしている姿も可愛らしいな……と思っている矢先、アメリカが行動に出る。

「野球しようぜ！」

「あい……またね……」

アメリカが俺にしたように笑顔でサムズアップするものの、寝惚けている様に見えるクラリスのボソツと呟かれた一言に一蹴されてしまう。そして、ゆっくりと扉を閉じていった。

「ちょ！ ちょっとクラリス、私よ！ アメリカよ！」

ドンドンドン、と叩くとクラリスが再び出て来る。

「え……？ って！ アメリカ！？」

「そつよ！ 私よ！」

「レイにエヴィもいるじゃないっ！ 着替えるから待ってて！」

パンツ、と勢いよく扉が閉じられて室内からドタバタと音が聞こえてきて……五分が経過。

中からはあ、はあ、と息を荒くするクラリスが出てきた。いつものように整えられた華麗なツインテールがよく似合っている。意識は完全に覚醒したようで、彼女はいつものように話し始める。

「で、何の用なの？」

「野球しようぜ！」

「ねえレイとエヴィ。これはアメリカなの？ キャラが違くない？」

アメリカを気に掛けずに、クラリスが此方へそう尋ねてくる。

「みんなと野球したいらしいぞ。それだけだ」

「……そうなんだ。別にいいけどさあ……で、私、未経験だけいいの？」

「大丈夫！ 私が教えるから！」

「アメリカは経験者なの？」

「壁当てと素振りはずごいやっていたわ！ いつか友達とできるよ
うに！」

「あ……うん」

「大丈夫だクラリス。俺たちは経験者だ」

「そっか。ならいいけど……」

ということで、彼女もまたメンバーに加わって、クラリスに経緯
の詳細を伝えながらエリサのところへ向かった。

「あれ？ みんなでどうしたの？」

「野球しようぜ！」

「あ、アメリカちゃん……？」

と、まったく皆と同じ反応をしたエリサだが、普通に了承してく
れた。

ということと今のメンバーは七人。あと二人なのだが、どうしよ
うかと考えている矢先、俺は閃いた。

「残りのメンバーは俺に心当たりがある」

そう言うと、俺たちが向かったのは学内にあるジムだった。そこにはちょうどお目当の二人がいた。

「アルバート。それに部長。おはようございます」

「レイか。どうした？」

「実は……」

そして詳細を語ると、部長が了承してくれる。

「なるほど。いいだろう。野球は経験がある」

ちなみに、アルバートは誘拐された時の記憶はなく、こうして今は無事に体を鍛えている。曰く、準決勝で敗北したのは筋肉が足りなかったからだということで、今はこのジムで部長に色々と教えてもらっているらしい。

「野球か……それはいいな」

「アルバートは経験があるのか？」

「外野ならある」

「なるほど、それは頼もしい」

アルバートは外野に決定だ。ちなみに部長はキャッチャーの経験があるということで、これも決定。

そしてその後は生徒会室にいる、レベッカ先輩とセラ先輩と合流。

こうして九人揃った俺たちは、野球部へと挑む！

「あーもう！ あの野球部、絶対に廃部に追い込んでやるわっ！
ボコボコにしないと気が済まないっ！」

「まあまあディーナさん。落ち着いてください」

「これが落ち着いていられますか！ レベツカ様を馬鹿にしたんですよ！ これは重罪です！」

グラウンドに全員で集まる俺たち。ちなみに全員ユニフォームを着て、グローブも持っている。

このことは予期していないはずなのに、全員分のユニフォームと道具を持っている部長は、やはりこの王国の諜報組織の一員だけはあるということか……。

しかし、レベツカ先輩を馬鹿にしたという話は俺も聞き捨てならない。

「セラ先輩。それはどういうことでしょうか」

「レイ、それが聞いてよ。あの野球部の連中、こっちはあなたと違って結果を出しているって言ったのよ。魔術剣士競技大会の^{マギクス・シュバリエ}ことを引き合いに出してくるなんて……殺すっ！」

「それは魔術剣士競技大会で準優勝に終わったレベツカ先輩、という意味での揶揄でしょうか」

「そうよ！ 野球部は最近調子いいからって……殺す！」

「なるほど……それは許せませんね」

「で、みんな。ポジションと打順はどうするの？ ちなみに一番大事なのはピッチャーだけど、誰がやる？」

「ピッチャーですが、俺がやりましょう」

「レイが？」

「はい。キャッチャーは部長が経験したことがあるらしいです」

「ふーん。とりあえず、レイの球を見てみましょうか。いいこと、あの野球部を本気でぶっ潰すのよ？ それなりのものを期待してるわよ？」

「もちろんです。レベツカ先輩を馬鹿にした罪は必ず償ってもらいます」

セラ先輩、それにレベツカ先輩にそう告げるが、当の本人であるレベツカ先輩はユニフォーム姿の俺をじっと見ていた。

「どうかしましたか？」

「レイさん……改めて、いい筋肉ですね」

「わかりますか？」

「ええ。ここにいる男性の方はとてもいい筋肉をしているので参考になります。ふむふむ……」

「そういえば、以前もそのようなことを……確か大会初日でしたか。もしかして、先輩もトレーニングに興味が？」

「あ！ いやその……あはは……なんでもないですっ！ そうだ！ しっかりと私の無念を晴らしてくださいね、レイさん！」

「御意に……」

そうして俺はマウンドへと向かっていく。

そして全員がネットの後ろに控えて、防具をつけたキャッチャーである部長がやってくる。

おそらく球種の確認だろう。

「レイ。球種は？」

「ストリート、カーブ、スライダー、シュート、ツーシーム、カットボール、シンカー、チェンジアップ、フォーク、スプリット、パーム、ナックル、ナックルカーブ、それに縦のスライダーもいます」

「……」

「どうかしましたか？」

「いや、本当に全部いけるのか？」

「はい。師匠に叩き込まれたので。魔術師たるもの、これくらいの球種は持っておけと」

「なるほど……リディアさんらしいな。ではサインはこうだ」

と即席で決めたサインを互いに共有して、部長はベースの後ろで大きなキャッチャーミットを構える。

部長の筋骨隆々な身体だからこそ、俺もまた投げやすさを感じていた。

そして、俺は振りかぶって……部長の構えた、ど真ん中にストリートを投げる。

『……え？』

部長のミットの中に収まる、俺の渾身のボール。それはパァンッ！と音を鳴らし、シューウウウと微かな音を漏らしながら完全に収まっていた。

なるほど、さすが部長だ。

ボールの勢いを完全に殺して完璧に捕球している。それにその巨

大な体躯のおかげでかなり投げやすい。これは本当に頼りになる。

「ちょ！？ ちょっとタイムっ！」

「え？ 何か問題が？」

セラ先輩がそういうと、俺のそばに走ってやってくる。そして彼女は、俺に向かって大声をあげてくる。

「レイ！ 今の何キロよ！？」

「さあ…… 150キロは超えていると思いますが。もう少し肩を温めれば、160もいけると思います」

「内部コードインサイドは使っていないのよね？」

「はい。確か魔術的な身体強化は禁止ですよね？」

「ええ、そうだけど。ふふ…… これはいけるわっ！ とりあえず、持っている変化球全部投げて！」

「了解しました」

その後、俺は持っている球種を全て投げ込んだ。

部長はそれを全てしっかりと捕球してくれた。途中でコントロールが狂ってショートバウンドしてしまうものもあったが、部長はその体躯でしっかりとボールを前に落としてくれた。

特にフォークとスプリットは落ちる変化球なので、パスボール（後ろにそらしてしまうこと）が多いのだが、これなら大丈夫そうだ。

「よし！ よし！ レイ、完璧よ！ あなた最高ね！」

「ありがとうございます。セラ先輩」

ぺこりと頭を下げると、周りにいつものメンバーがやってくる。その中でもクラリスが前に出て、大きな声をあげてくる。

「レイ！ ちょっとっ！」

「どうした、クラリス」

「あんたプロなの！？ 素人の私に分かるくらいに、やばかったわよっ！」

「まあ……師匠に仕込まれているからな」

「まじで規格外ね……」

ということで、俺たちはその後、練習に励むのだった。

あのレベッカ先輩を貶めたと云う野球部は俺も絶対に許すわけにはいかない。申し訳ないが、本気でいかせてもらおう。

こうして俺たちは、明日の試合へと挑むのだった。

レベッカ先輩の無念、必ずや晴らしてみせるッ！

第74話 試合開始！

あれから俺たちは練習を重ねて、と言っても数時間程度だが、次の日の野球部との対決に臨むことになった。

ちなみに、スターティングメンバーはこんな感じだ。

一番 ショート アメリカ
二番 セカンド レベツカ先輩
三番 キャッチャー 部長
四番 ピッチャー 俺
五番 ファースト エヴィ
六番 センター アルバート
七番 レフト セラ先輩 キャプテン
八番 サード クラリス
九番 ライト エリサ

基本的に経験者は上の打順にして、クラリスとエリサは未経験なので下位の打順となった。ちなみにアメリカが一番なのは、「私は一番ショートねっ！」と高らかに宣言したからである

あとはセラ先輩と相談してこの打順となった。

「ククク……きたぜ、即席の寄せ集めチームが」

「この王国屈指の野球部に勝てると思っているのか……？」

「ふふふ、これで生徒会をひれ伏せさせて、名実ともにこの学院のナンバーワンだ……ククク……」

メンバー表を交換していると、ニヤニヤとしながら野球部たちがそう言ってくる。キャプテンとしてスタメン表を交換に来ているセラ先輩は、去り際にこう言った。

「……殺す」

ということで、ついにプレイボール。審判は野球部から派遣してもらった。

攻撃はこちらのチームから。ちなみにチーム名は、『レベルッカ様親衛隊』だ。これには有無を言わせないセラ先輩の提案によって、そのまま採用。

まあ、俺たちは別にチーム名は気にしないのでいいのだが、妙にレベルッカ先輩が照れているのが印象的だった。

そしてこちらの攻撃ということで、バッターボックスの前にはアメリアが待機していた。

ユニフォームを着こなし、ヘルメットを被った彼女は軽く素振りをしてまずは相手の球筋を観察している。

持っているバットは持参したものらしく、金属バットが主流だというのに木製のバット。それにそれはかなり細いものであった。曰く、「私のマイバットが火を噴くわよっ！」ということらしい。

「プレイ！」

ついに始まった俺たちの攻撃。

アメリカは右投げ左打ちらしく、左のバッターボックスに入る。そして構えはなんと……振り子打法だった。体を内側に絞りつつ、ふらふらと揺れながらタイミングを取っている。

なるほど……経験者というのは、確かに頷ける。それは確かに様になっていた。

相手のピッチャーはそんなアメリカに容赦なく、全力でストレートを投げて来た。

「ストライクっ!!」

第一球はストライク。相手も王国屈指のピッチャーということで、かなりいい球を投げる。右投げの速球派ということで、初期から全力で投げてきている。球速は、145キロ程度だが、マックスは150オーバーまでいくらしい。

そして第二球を相手のピッチャーが振りかぶり、投げたっ！

「もらったわっ!!」

アメリカはそう言いながら鋭いスイングで、二球目のスライダーを捉える。それは、外からストライクのアウトコースへと内に入ってくる中々の難しい球だったがアメリカは綺麗に流し打ちをする。

そして球は綺麗に三遊間を抜けて、レフト前ヒット。

「どんなもんよっ!」

一塁ベースにたどり着いて、高らかにそう言うアメリカはとても嬉しそうだった。

「アメリカ、ナイスだ!」

「アメリカちゃん! すごいよー!」

「ナイスバッティングー!」

と、みんなで褒めるとアメリカは照れているようで頭を掻きながらその声に応じていた。

そして次はレベツカ先輩の打順だ

「よろしくお願いします」

ぺこりと一礼をしてから、バッターボックスに入る先輩。先輩は右投げ右打ち。バッティングフォームも美しく、お手本のようなフォームだ。

しかし、先輩はここでバントの構えを見せる。

送りバント。

こうすれば先輩はアウトになってしまうが、アメリカを二塁に進めることができる。ちなみにサインはセラ先輩が出している。だがこのサインは……。

「調子に、のるなよっ!」

そう言って相手ピッチャーが中々の球速の球を先輩のインコースへと躊躇なく投げ込むが……。

レベツカ先輩はスツとバットを引くと、そのままヒッティングに切り替えてキーン！ と甲高い音が響く。

それは綺麗なセンター返しだった。

ライナー性の球は、そのままセンターへと抜けて行く。その間にアメリカは二塁にたどり着いて、ノーアウトランナー一、二塁。

三番は部長。

その体軀はあまりにも大きく、バットの方が短く見えるほどだ。

「……」

部長はじつくりと相手を見つめると、そのまま悠然とバットを構える。

セラ先輩からのサインは、ヒッティング。ここは送ることはせずに、大きく出ることにしたようだ。

だが相手のバッテリーは部長の圧倒的な筋肉にビビったのか、敬遠を選択。そしてついにノーアウト満塁。

一回表から、幸先上々である。

「タイム！」

相手のキャッチャーがそういうと、ピッチャーの元へと向かう。そこで軽く話し合うと、こちらに戻ってくる。

そして俺がバッターボックスに入ると、野球部のキャッチャーがボソツと呟いてくる。

「たかが^{オーディナリー}一般人が四番か。カモだな」

俺は黙ってその言葉を聞いていた。特に反論することもない。今はただ、このバットで黙らせるだけだ。

右打席のバッターボックスに入ると、俺はバットをスツとを構える。

今までの投球の傾向からいって、相手はストレートとスライダーしか投げていない。だが他にカーブとフォークも持っているのは事前に情報として入手している。だがここは下手に配球を読むことはない。

ただ来た球を、思うが儘^{まま}に打つだけだ。

「お……らッ!」

ピッチャーの手元を離れた球はアウトコースへと向かって行く。俺はそれに向かってバットを出す、瞬間それはわずかに沈み始める。

俺はそれにすぐに反応して、バットの軌道をズラす。下から掬い上げるようにして、その球を真芯で捉えたとその勢いのままバット

を思い切り振り切る。

キン ツ！

と、甲高い音が響き渡るとそのボールは遥か彼方まで飛んで行く。

「……行っただか」

そしてその場にバットをゆっくりと寝かせると、俺は悠然と走って行く。

「ホ、ホームランッ！！」

審判がそう言いながら、手をぐるぐると回す。

そう。俺が打った球は、このグラウンドを超えて遥か彼方のカフカの森方向へと消えて行った。手応えはバッチリだった。流石にフオークが来ると思っていなかったが、反応できた。

これも師匠との特訓の日々のおかげだ。

曰く、魔術師たるものホームランくらい打てないといけないらしい。あの時の訓練がこうして生きているとは……やはり師匠の教えは偉大だ。きっとこのような時をすでに見越していたのだろう。

「すごい、すごい！ ホームランよっ！」

「レイさん！ すごいですねっ！」

「流石だな……」

ホームに戻ってくると、アメリカ、レベッカ先輩、部長が待って

くれていて、みんなとハイタッチをしていく。

これで一挙に4点を確保した。

その後は流石に相手も王国屈指の野球部なのか、あっという間にスリーアウトまでとってチェンジ。

「レイ、サインは打ち合わせ通りだ」
「分かりました」

部長がそのまま戻って行くと、一番バッターが打席に入る。

「くそ……調子にのるなよっ!!」

俺をキツと睨みつけながら、一番バッターの人間がそう言うてる。

しかしここで油断する俺ではない。

むしろ、得点した後だからこそしっかりとしなければならぬ。

俺は部長のサインに頷いて、アウトコースに思い切り全力でストレートを投げ込む。

「す、ストライクっ!!」
「あ……は……?」

相手のバッターは完全に放心していた。

ふむ……まだ150キロ程度しか出ないか。もう少し肩を温

めるべきだったな。

その後、俺はストレートとカーブのみで三者三振。

いいスタートを切った。

「ねえレイ」

「どうしたクラリス」

「なんかね。蝶が見えたんだけどさ……」

「蝶？ まあ夏だからな。いても不思議ではないが」

「うん……でもなんか変っていうか……私、昆虫には詳しいけどその……知らない種類みたいなの？ でもすぐに消えるのよね」

「そうか。しかし気のせいじゃないのか？」

「そうよね！ じゃあ、打ってくるわねっ！」

その後、こちらのチームもなかなか得点できなかった。流石は王国一の野球部なのか、完全に本気で挑んできているようだった。

俺のボールもまた、前に飛ばされるようになっていた。しかし運のいいことに、全てが内野ゴロ。というよりも、何故かショートゴロが多い気がする。

そして再び俺のストレートが捉えられると、ボールはサードを守っているクラリスの方へと向かって行く。

「クラリス！」

「わ、分かってるわよ！」

彼女は素人ながらも、運動神経がいい。ゴロの処理もある程度

はできるが、クラリスの周囲に現れる一匹の紅蓮の蝶を俺は見逃しはしなかった。

そして次の瞬間、ボールは何故か軌道を変えて三遊間へと転がっていく。イレギュラーだと言えばそれまでだが、ボールはまるでひとりでに転がって行くように方向を変えたのだ。

アメリカはそのボールに完璧に反応しており、ギリギリのところまで逆シングルでボールを取る。だが完全に体はサード方向に流れてしまい、ここから投げるのは厳しい。

そう思っていると、あるうことがアメリカはそのまま流される勢いを使ってジャンピングスローでファーストへとボールを投げる。

そのボールは、ショートの後方からそのままエヴィの持つファーストミットへとまるで矢のように走っていき……アウト。

「やった！　どんなもんよ！」
「……」

ガッツポーズをするアメリカ。ナイスプレーだが……。

ある可能性が脳内に過ぎる。

いや、流石にそんなことはないだろう。

うん。きっとそうに違いない。今のはただのイレギュラーだ。間違いない。流石にそんなバカなことはあり得ないだろう。

脳内に過ぎる可能性を無視して、次のバッターに向かい合う。

「……」

だが先ほどから気がついていたが、相手チームはどうやら魔術を使っているようだった。内部コードインサイドを発動しているのは分かっているが、指摘するには難しいラインだった。

それに試合には不正をしないように魔術を探知する道具、通称魔道具と呼ばれるものが設置されているが、あれはおそらく野球部側に都合がいいように設定されているようだ。

俺に対して内部コードインサイドを使っていないか、と言う抗議があった矢先に相手は魔術を使って来た。おそらく俺が本当に魔術的な強化なしで投球しているとは信じられないのだろう。

しかし、俺には魔術的な反応がない。だからもう、相手はなりふり構ってられないようだ。

だからこそ俺はさらにギアを上げて、相手をこの球でねじ伏せるッ！！

そして俺たちの試合は後半戦へと突入する。

第75話 やりすぎですよ、アメリカさん

現在の得点は、四対一。

俺たちの方がリードしている形だ。一点の失点は外野フライがライトのエリサの方に飛んでいき、そのまま彼女のエラーによって失点。

しかしこればかりは仕方がない。

素人では落下地点を正確に見極めることも難しいからな。もちろん俺たちはそんな彼女を責めるわけもなく、大丈夫だと励ますのだった。

「ご、ごめんなさい……」

「大丈夫よ、エリサ！ 私たちがまた打ってくるから！」

「……ありがとう、アメリカちゃん」

「任せなさいっ！」

ということでのこの回も意気揚々とアメリカがバッターボックスに向かう一方で、クラリスが俺に話しかけてくる。

「ねえ、レイ」

「ん？ どうした？」

「さっきの蝶のことだけど……」

「ああ。何か進展が？」

「うんその……なんかね、守備をしてる時にちらちらと見えるの。」

いつもじゃないけど、その時々。あれってもしかして、相手の妨害魔術とかじゃないの？」

「蝶の魔術か。いや、まさかな……」

ここ最近見た蝶の魔術といえば、アレしかない。むしろあれ以外を想起するのは無理だろう。

可能性がないわけではない。それに、クラリスはアメリアの決勝戦を実際には見ていない。そのため、伝聞での情報しかなく、思いつかないのも無理はないが……。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会の新人戦で優勝して以来、アメリアが明るくなったのはみんなも知るところだ。

以前と大きく変わったということはないが、本当によく笑うようになったし、表情もとても豊かになった。

その一方で、アメリアはどこかテンションがおかしいというか、今回も野球帽を被ってメンバーを集めるということをしていた。

いや、その行動自体はおかしくはない。だがやはり言動は今までと違う。

今回の試合もかなり張り切っているが、まさか……？

これはもしかしたら、もしかするのかもしれない。

ということで、サードとショートの後ろに位置しているレフトを守っているセラ先輩にも、話を聞いてみることにした。

「セラ先輩」

「どうかしたのレイ。何か用？」

「守備の最中に蝶を見ませんでしたか？ 赤い蝶です。クラリスの周りに飛んでいるみたいですが……」

「見てないわね。守備の時はずっとセカンドのレベッカ様を見るから。それにしても、可愛いと思わない？ ああ……ユニフォーム姿もよくお似合いだわ……」

「そ、そうですか……」

早々に空気が変化するのを感じ取って、俺はすぐに離脱。以前にレベッカ先輩の偉大さと尊さを語るといふものに付き合ったのだが、あの時は3時間も拘束されてしまった。

流石に今回はそこまでいかないだろうが、こうなつたセラ先輩は止められないので俺はすぐにクラリスの元へと戻る。

「クラリス、どうやらセラ先輩は見えていないらしい」

「そつかあ……私の勘違いかな？」

「もし、次見た時は試合中でも教えてくれ」

「うん。わかつたわ」

その後、俺たちの守りとなつたが……。

エラーなどが重なつてしまいワンナウトランナー三塁の状況となり再びピンチとなった。俺はセットポジションから、右バッターに對してアウトコースにスライダーを投げた。

するとそれは真芯で捉えられたわけではないが、センターへと大きなフライが上がってしまう。

「センター！」

と、俺が大きな声あげる。

センターにいるのはアルバートだ。そしてこの状況は、タッチアップの条件が揃っている。アルバートが捕球した瞬間、三塁ランナーはホームへと走ってくるだろう。打球の飛距離も十分だ。

つまるところ、ランナーの足の速さとアルバートの肩の強さの一騎打ちになる。

アルバートは捕球位置のわずかに後ろから徐々に前に出てきて、その前進する勢いを乗せて捕球。

それと同時に三塁ランナーは、一気にホームへと駆け出した。

「う、おおおおおおおおッ！！」

ここからでも聞こえるほどの雄叫びをあげて、アルバートはセンターの後方からホームに向かってボールを……投げたッ！

もちろん俺はアルバートの肩を把握していないので中継に入ろうとするが、彼が放ったそのボールは、ほぼ落下することなくまるでレーザービームのようにセンターから綺麗に部長のキャッチャーミットへと収まる。

「あ、アウトおおおおおおおおッ！！」

ギリギリというわけでもなく、十分に余裕を持って捕球した部長

はそのままサードランナーをタッチしてアウト。これで一気にツィアウトを取ったので、スリーアウトでチェンジだ。

「アルバートっ！　すごいな！　まるでレーザービームだ！」

「ああ！　すごいな！」

俺とエヴィがそう言うのと、アルバートはフツと微笑んだ。

「これも筋肉のおかげだな」

「そうだな！」

「ああ！　そうに違いねえ！」

ベンチに戻ると、みんなワイワイとアルバートを迎えてくれる。

「すごいすごい！　レーザービームじゃないの！」

「う……うんっ！　私もびっくりしちゃった！」

「ナイスよ！　アルバート！」

それぞれ女性陣が褒めると、アルバートはニコリと笑ってそれに応える。

「期待に応えることができたのなら、嬉しい限りだ」

そして、七番のセラ先輩からの攻撃となった。

「よっしゃー！　きなさいー！」

高らかに声を上げると、セラ先輩はバットを構える。今までは凡打でヒットを打ってないが、今度こそ打ってやると言う気概が感じ取れた。

「ふんっ！」

セラ先輩はなんとかボールを当てるが、それはふわふわとした勢いのままセンター方向へと上がっていく。

みんな、このとき思っただろう。間違いなくアウトになると。

しかしここで起きたのは、お見合いだ。

これは、センター、ショート、セカンドの三人が譲り合ってしまったそのままだがフライが地面に落ちてしまうことだ。そうしてセラ先輩は過程はどうにせよ、記録上はセンター前ヒットを放った。

「よっしゃー！　どんなもんよー！」

一塁で喜ぶセラ先輩。

そして次の打順は、八番のクラリス。

その小さな体であるボールを前にするのは怖いだろうが、それでもクラリスは意気揚々とバッターボックスへと向かう。

「よし！　次こそ打つわよっ！」

クラリスは勢いよくバットを振るう。それは間違いなくフルスイングだ。

だがその勢いに反してそれは、ボテボテのゴロとなりサード方向へと転がっていく。

「クラリス！ いける、走れッ！！」
「んにゃああああああああっ！」

と声をあげながら、クラリスはなんとヘッドスライディングをしてそのままズサーと頭からファーストベースに手を伸ばす。

そして土煙に包まれたクラリスに告げられたのは……。

「せ、セーフ！！」

セーフだ！

と言うことで下位打線でまさかのノーアウトランナー一、二塁。
ここで回ってきたのは大天使エリサだ。

「エリサー！ 気負わなくていいぞ！」

「エリサー！ 頑張れー！」

「う……うんっ！」

今まですべて三振のエリサが打席に向かう。エリサは運動が得意ではない。だと言うのに、こうしてしっかりとした顔つきで彼女は打席に向かう。

エリサはとても優しい人だが、ちゃんと芯も持っている人間だ。そのやる気は、ありありと見て取れた。

「よしっ！」

そう声をあげて、エリサはバットを構える。完全に素人そのもの

だが、一生懸命にピッチャーを見つめる。ここでセラ先輩が出したサインは、バントだ。

素人は迫り来るボールすら怖い。それこそ、140キロを優に超えるボールなど、普通は無理だろう。

だがエリサはこくと、頷くと改めてピッチャーに対峙する。

「う、うわっ！」

そう声を上げながら、なんとエリサはバントを成功させたっ！
迫り来るそのボールの勢いを殺して、サード方向にコロコロとボールが転がっていく。

「エリサ！ 走れ！」

「うんっ！」

そのままファーストに駆けていくも、エリサはアウト。しかし送りバントは成功ということで、これはかなり大きい。

「エリサ！ ナイスバントよっ！ あとは任せなさいっ！」

「アメリカちゃんっ！ 頑張っ！」

バットをぐるぐると振りながら、アメリカはバッターボックスへと入っていく。

しかし、流石に相手も王国屈指のピッチャー。アメリカはフォアボールで出塁したが、レベッカ先輩はアウトとなってしまう、そのまま部長に打席が回ってくる。

「……」

ツアウトラナー満塁。部長はただ静かにバットを構える。

相手は初球にフォークを投げ、それはギリギリストライクの低めに収まるも……次の瞬間、俺は部長のバットの軌跡を追うことができなかった。

「え……は？」

相手のピッチャーは呆然としていた。

そして、異常なまでの打球スピードでボールは遥か彼方へと消えていった。

「ほ、ホームラン！」

さすが部長。その圧倒的な体躯から繰り出されるホームランは、まさに圧巻だった。

その後、俺はヒットを放つも、次のエヴィがアウトになりチェンジ。

でも今は、八対一になった。これでかなり有利になっただろう。

ということで俺は油断することはないように、気を引き締めてマウンドへと向かう。

「よし……絶対に失点はしない」

六回裏がやってきて、俺たちの守りの回が始まる。

流石に上位打線は俺の球を見極めてきたのか、前に飛ぶことが多くなっていた。と言っても俺はスロースターターであるため、肩も暖まりそろそろ本領も発揮できそうだ。

俺は前の回よりも鋭くなった変化球に、球威の増したストレートを投げていく。

あつという間に一人を三振にすると、次のバッターにストレートを投げ込むが……コントロールが狂ってしまい、ど真ん中へと球がいつてしまう。

球威はあるもののここまで甘いコースだと流石に打たれてしまい、打球はセンター方向へと転がっていく。

「レベツカ先輩！」

「任せてください！」

セカンドのレベツカ先輩の方が近いということで、彼女が声をあげて捕球に行くが……次の瞬間、俺は目撃した。

そう。その球は忽然と姿を消すと、次の瞬間にはアメリカのグロ―ブの中に収まっていたのだ。

「よし！ これでツーアウトね！」

彼女はそのままファーストへボールをサイドスローで綺麗に投げると、アウト。

ツアウトになったが、俺は見逃していなかった。アメリカの後ろに隠れている、紅蓮の蝶を。

「タイムっ!!」

俺がそう声を上げると、内野の守備陣がマウンドに集まる。

そして俺は、アメリカに確認を取ることにした。

「アメリカ」

「なに？ どうしたのレイ。早く次にいきましょう！ ツアウトよっ！ バッチ来いよっ！」

「アメリカ」

「は……はい」

「あの蝶はなんだ？」

「えっとその……なんのことかなあ？ ひゅ、ひゅ」

ひゅと下手な口笛を鳴らしながら、明後日の方向を向くアメリカ。しかしこの場にいるクラリス以外の人間はすでに気がついていた。

「……アメリカ。因果律蝶々を使っているな？」

「え！？ な、なんのことかなあ？」

「アメリカ訓練兵ッ!!」

「れ、レンジャーッ!!」

染み付いた習慣は消えないのか、アメリカはすぐに敬礼をする。俺は有無を言わせない声で、淡々と告げる。

「アメリカ。もう一度聞く。因果律蝶々を使っているな？」

バタフライエフェクト

「だ、だつて……！」

「だつて？」

「相手も魔術使ってるじゃんっ！」

「いやしかしだな。限度というものがあるだろう。概念干涉系の固有魔術は普通にダメだろう」
オリジン

「ガーン！ レイに普通って言われたっ！」

ということでは何のことはない。

アメリカは因果律蝶々バタフライエフェクトを使って、打球を自分のグローブに収まるように因果律を操作していたのだ。ちなみに能力の詳細は、相談という形でアメリカから聞いていたが……まさかここまでするとは、予想外だった。

「え？ つまり、どういうことなの？」

クラリスが一人でポカンとしているので、俺は簡単に説明する。

「アメリカが概念干涉系の固有魔術オリジンで打球を操作していたんだ」

「え！？ そんなことしてたの！？ ていうか、できるの！？」

「だ、だつて……活躍したいから！ そ、それに別に打つ前からはやってないよ？ アウトにできそうな打球だけ、私の方にそっつと寄せているだけよっ！ もともとアウトなんだから、変わりはないわよっ！ ギリギリセーフでしょ！？」

「アメリカ」

「な、なに？」

「退場だ」

「い、いやだあああああああああああ！ もつと野球したいいいいいいいいいいい！ うわあああああああん！」
「こっちに来い」

「うわああああああん!!」

ということで、駄々をこねるアメリカをズルズルと引きずって行き、俺は相手チームのキャプテンに事の詳細を伝えた。しかし、相手も魔術を使っていたという事で、仕切り直しになった。

アメリカの抜けたところは、環境調査部の人に来てもらうことになった。

一方のアメリカはベンチで、『私はズルをしました』という紙を頭に貼り付けて正座をしている。反省を示すために、試合が終わるまではこのままだ。

シクシクと泣いている素振りを見せるが、慈悲はない。

「ううう……野球したいよお。みんなとしたいなあ……ぐす……うう……チラっ」

それに先ほどから泣き真似をして、俺の方をチラチラと見てくるがそんなものには応じない。アメリカに容赦などしない。

「アメリカちゃん」

「アメリカ……」

「マジかよ、アメリカ」

「アメリカさん……変わったんですね」

エリサ、クラリス、エヴィ、レベツカ先輩がそんな様子のアメリカに対してドン引きしていた。冷たい視線をただただ全員がアメリカに送る。

「だ、だって！ あ！ そのっ！ あ、あれよっ！ 私の能力ってまだ制御が利かないから特訓をしてたのよっ！ 特訓！」

「アメリカ……」

「ひい！ レイってば顔が怖いよ……？」

「そうだな。今日はこの試合が終わった後は、二人で特訓だな。久しぶりにエインズワース式ブーツキャンプを再開しよう。特訓したいんだろっ？ 俺が付き合ってやろっ」

「え！？ いやそれは違うかなあゝって思っけど……？ 嘘だよね？ ねえ？」

「俺は冗談は言わない。覚悟しておけ、アメリカ訓練兵」

「い、いやだああああああ！ あれだけはいやだあああああああああああ！ うわああああああん！」

そう言いながら、アメリカはついに駆け出した。インサイド内部コードを使うことで身体強化を行い、そのまま彼女はグラウンドを尋常ではない速さで疾走していく。

だが脱走兵を捕らえる術など、とうに心得ている。

「フレームロック
座標固定」

俺は一時的に能力を解放すると、アメリカをその場に固定する。

「ふんっ！ 今の私を舐めてもらっちゃ困るよっ！」

瞬間、アメリカの背中から大量の紅蓮の蝶が顕現するが……。

アンチマテリアル
《対物質コード：還元》
レストレーション

マテリアル アンチマテリアル
《物質Ⅱ対物質コード》

マテリアル レストレーション
《物質・還元Ⅱ第一質料》

その蝶全てに座標を指定すると、俺は対物質コードアンチマテリアルを発動。その蝶たちは、第一質料へと還元され、その場にパラパラと真つ赤な残滓が舞い散る。

「え……は……？」

「因果律蝶々は厄介だが、発動までに時間がかかる。コード構築はかなり複雑だから。これなら、俺の方が早い。まだ練度が足りない、アメリカ」

ということとでそこから重なるようにして、座標固定フレイムロックを発動。アメリカの体をその場に固定した。すでに因果律蝶々が発動できないように、魔術領域も固定しておいた。

今のアメリカに為す術はない。

彼女は流石にもう逃げられないと分かったのか、青ざめた表情かおで懸命に語る。

「あ……そ、その……逃げるつもりはなかったのよ？ ちょ、ちょっとランニングしたいかなあって！」

「試合が終わるまで、その状態で待機している。アメリカ」

「ちょ！？ 私、今は割と間抜けな格好なんだけど！？ 走ってる途中だったし！」

「……」

「無視！？ み、みんな助けて～！ 見捨てないでよ～！ エリサ、クラリス、エヴィ、アルバート、先輩たちっ！」

「……」

「み、みんな！？ 無視なの！？」

ということで、固定したアメリカをベンチの後ろにそつと置いておくと俺たちは彼女を無視してもう一度試合を再開した。

アメリカを完全にいないものとして扱うと、円陣を組んで改めて全員で気合いを入れ直す。

「絶対勝つぞー！」

「おーっ！」

その声に被さるようにして、アメリカの声もまた響き渡る。

「う、うわああああん！ ごめんなさああああああああい！」

その後、試合は無事に勝利。

野球部も俺たちに負けたということで、素直にレベッカ先輩に謝罪をして今後はグランドの使用時間を守ってくれると誓った。まあそれはセラ先輩の脅しがいまにも恐ろしかったので、半ば恐怖による支配だが。

そして俺はアメリカの方へと近づいていく。

「アメリカ訓練兵。では今から三十キロのランニングだ」

「さ、三十キロ!? 死んじゃうよっ!」

「ちなみに因果律蝶々^{バタフライエフェクト}は俺には効かないからな。もし許可なしに少しでも発動したら、ペナルティだ」

「え、じよ、冗談だよね? レイは優しい人だよね?」

「返事はレンジャーだと言っただろうッ!」

「れ、レンジャーっ!」

「ではいくぞっ!」

「うわーんっ!」

「レンジャーと何度言えばわかるッ!」

「れんじやああああああああああ!」

ということで、その後はアメリカに非常に厳しい訓練を課すのだ。
った。

第76話 クラリスと虫取り

本格的に夏休みに突入。

今、寮にはほとんど人はいない。

エヴィも実家に帰って、この部屋には俺一人だけだ。

それにいつものメンバーも野球をした翌日から続々と帰り始めた。

俺もまた、実家に戻る予定である。

しかし、日程的にはかなり後の方に数日だけ戻る予定なので暇をしているはずだったが……今回の夏休みは色々と予定をすでに入れている。

今日は前々から約束していた、クラリスとカフカの森で虫取りをする予定だ。ということで俺は今まさに準備をしているところだった。

現在の時刻は四時半。

クラリスとの待ち合わせは、森の前に六時ということになっている。俺は早起きをして、こうして準備を整えている。迷彩柄の上下の服に身体を通して、入念にストレッチをする。

虫取りか……師匠とジャングルでよくやった記憶が呼び起こされ

る。あれをクラリスもやりたいというのだから、彼女の向上心は見上げたものだ

「よし……」

準備を整えた俺は大きなバックパックを背中に背負うと、カフカの森へと出発するのだった。

「レイっ！ おはようっ！ って……え？」

「おお。クラリス、おはようっ！ まだ集合時間の十分前だというのに、早いな」

「いや、それは良いんだけど……」

「どうかしたのか？ それにしても、軽装だな。大丈夫なのか？」

そう。向こうからやってきたクラリスはあまりにも軽装だった。

真っ白な無地のシャツに、短パンを履いており、靴もサンダル。また麦わら帽子をかぶるために、今日はいつもより低い位置でツインテールを結っていた。絹のようなサラサラとした左右の髪が微かな風によって、僅かに靡く。

いつもと印象は変わるが、とても可愛らしいと思う。

それに右斜めに虫かごを下げていて、丈夫そうな虫取り網を右手に持っている。背中には小さなリュックサックを背負っており、横にあるポケットには水筒が二本入っているのが見えた。

あまりの軽装に俺は驚いてしまうが、彼女なりの考えがあるのだ

ろうか。

と、思っているとクラリスが大きな声を上げる。

「いやいや！ 虫取りよね！？ 今からするのは！」

「そうだが？」

「いやいやっ！ そうだが？ じゃないのよっ！ それは完全にサバイバルをする感じでしょっ！」

「何ッ！？ 虫取りとはサバイバルの一環ではないのか！？」

「いや普通に虫取りよっ！」

「ば、バカな……俺は師匠に虫取りとはサバイバルの一環だと教えられたのだが……どちらが多くの昆虫を確保できるか競っていたのに……」

「ちなみに、あんたのいう昆虫って？」

「巨大蜂、ヒュージビートル、ヒュージアント、ヒュージバタフライ、巨大蟻、巨大蝶などだな」

「巨大系は分類的に魔物でしょうがっ！ それは魔物狩りでしょうっ！ ハンターの仕事じゃないのっ！」

「いや師匠にはサイズなどあってないようなものだ、ガハハ！ と教えられたのだが……違ったのか」

「ああ。あんたがどうしてそんな風になったのか、理解したわ……」

そうして俺はクラリスの想定していた虫取りを聞いたが、それは実にシンプルだった。昆虫を虫取り網で捕まえて、カゴに入れるだけだという。

俺はてっきり、昆虫型の魔物と戦闘を繰り広げて、その命を取り合うものだと思っていたのだ。

こうしてクラリスと話すことで勉強になった。

今日はその本当の意味での『虫取り』とやらをしていこうではないか！

「で、その荷物どうするの？」

「一応持っていこう。今日はあつちの虫取りだから野宿もいると思つてな。色々と準備してきたんだが」

「の、野宿……！？　どんな規模よ……っ！」

「とりあえずは、クラリスのいう虫取りをしよう。浅学の身の上だ、色々と教えて欲しい」

「しょ、しょうがないわね！　じゃあ行くわよっ！」

「望むところだ！」

そして俺たちは二人で並んで、カフカの森へと入っていくのだつた。

「……あつついわね」

「夏だからな」

「でもこの暑さも、虫取りの醍醐味なのよ！」

「なるほど。勉強になる」

「あ！　みて、クワガタよ！」

クラリスは近くにいたクワガタにタタタツと近づいて、そのままジリジリと歩みを忍ばせるようにしてさらに進み……虫取り網をサツとかぶせた。その所作は素人の俺でも慣れている人間のものだとわかった。

どうやらクラリスはこの道の玄人のようだな。

「やった！ ノコギリクワガタよ！」

「おお……なかなか良いフォルムだな」

「でしょ！ かつこいいわぁ……さて、と」

クラリスはふかふかの土をすでに敷いているカゴに、捕まえたクワガタを入れると、次は隣の木にいたカブトムシに目をつけるが、クラリスが手をつけることはなかった。

「以前調べたけど、ここの森のカブトムシはなかなか厄介よ……！」

「どうしてだ？」

「実は、カブトムシとクワガタによる大規模な戦争があつたのよ。この森で」

「なんと……！ クラリスにはわかるのか？」

「ええ。それぞれの個体の傷跡、それに木の傷み具合、それと事前に調査した時にこの目で目撃したから……」

雄弁に語り始めるクラリス。

人には得手不得手がある。クラリスは学院での基本的な勉強は苦手なようだが、こうして自分の専門領域ではスラスラと言葉を紡いでいく。

俺は自分の知らない新しい知識を聞けるので、彼女の話に真剣に耳を傾ける。

「なるほど。で、勝者は？」

「カブトムシの方だったわ。特にヘラクレスオオカブトの猛攻はすごかったわ。かのパラワンオオヒラタクワガタとギラファノコギリ

クワガタが二匹でいっても、ヘラクレス一匹で勝ったのよ。あのしなやかな長い黒光りする角^{つの}で、二匹を寄せ付けることなく、圧勝。後ろに控えていたコーカサスオオカブトが出ることなく、カブトムシ勢力が勝ったのよ。そこからどうやら、この森で幅を利かせているのはカブトムシの方。だからクワガタはこんなにあっさり取れたけど……」

「……これが本当の虫取り。事前のリサーチが重要ということか」
「ええ。特にカフカの森は魔術的な要因もあってか、昆虫の動きが機敏だし、膂力^{じりよく}もあるわ。他にも蜂、バッタ、蝶、とかもすごいわね。普通の個体と比較すると」
「すごいな。まるで昆虫博士だな」

褒めたつもりだが、クラリスは本当に謙遜しているようで淡々と話を続ける。その目つきは真剣そのもの。クラリスのこのような姿は初めて見るので、俺は少しだけ圧倒されていた。

「私が博士なんて、本当の博士に笑われるわよ。さて、もっと奥に行きましょう」

「このカブトムシはいいのか？」

「ええ。この森を総べている、ヘラクレスを捕獲しないことには、始まらないわ。今日の目標は、実はヘラクレスなの」

「しかし、それはボス的な存在なのだろう？ 今日中に確保できるのか？」

「実はそれも考慮して、今日は友達の家泊まると言っているの。だからレイの野宿は無駄じゃないわね。きっとこれは長い戦いになるわ……」

「なんと……！ 図らずしも、俺の努力は無駄ではなかった、ということがあるか」

「ええ。それじゃあ、いくわよっ！」

「おう！」

俺はクラリスの後ろついていくようにして、このカフカの森をさらに進んでいくのだった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「クラリス」

「何よ……」

「少し休憩しよう」

「それも、そうね」

俺とクラリスはあれから、さらに森の奥へと進んで行った。途中で出会う昆虫の解説などはとても興味深いものだった。クラリスは昆虫に関してはかなり造詣が深く、その知識は本当に感嘆すべきものだった。

また魔物に遭遇したりもしたが、それは俺が処理しておいた。今回はサバイバルナイフも携帯している上に、内部コードでの身体強化も常時展開中だ。

もともと本格的なサバイバルのつもりで来ていたので、準備は万端だった。

しかし流石にクラリスは体力がきついのか、少し辛そうだったので休憩することにした。

「ふう……疲れたわね」
「ああ。よく歩いたな」

二人で並んで木陰に座ると、タオルで汗を拭き取って水分補給をする。

改めて思ったが、クラリスは女性ということを考えても、やはりサバイバル的な素質がある。普通の人間だけでなく、魔術師ならばとうに音をあげてるところを彼女はそう言わないし、黙々と進み続ける。

それはクラリスの昆虫に対する情熱がそうさせるのだろうか。

それに、もともと身体能力は高いと思っていたが、やはりクラリスのポテンシャルはかなり高い。エインズワース式ブートキャンプをしたあのアメリカにも、基本的な肉体の性能は匹敵するほどだ。

おそらく、影で色々和努力しているのだろう。

「クラリス」

「ん？　どうかした？」

「これを舐めておけ」

「何これ？」

「塩だ。夏は汗からの脱水もそうだが、塩分がかなり出てしまう。補給しておくといい」

「……ありがとう」

袋に詰めて来た塩を彼女に渡すと、クラリスはぺろっとそれを舐める。そして俺はクラリスにその件のことを話すことにする。

「それにしても、クラリスは素質がある。いや、努力もしつかりとしているようだな」

「え、なんのこと？」

「ハンターのことだ。なりたいたらどう？」

「それはそうだけど……」

「受けないのか、試験。師匠の伝手で、ハンター試験を受けることは可能だが？」

「私って、ハンターになれると思う？」

自信がなさそうな目つきで、俺の顔をじっと見上げるクラリス。その瞳は僅かに揺れているように見えた。もちろん俺は、思ったことを冷静に告げる。

「思う。ゴールドハンターの俺がいうんだ。間違いない」

「……ほんとっ！？」

「ああ。基本的な肉体の性能も悪くない。よく努力している」

「筋トレとか、ランニングとかはその……こっそりしてるから」

「どれくらいだ？」

「もう五年以上かも」

「なんと……その継続力は感嘆すべきものだ。よし、次の試験は確か……年明けだったな。そこでブロンズのハンター試験を受けよう。大丈夫だ。俺がサポートする。しかし問題は筆記試験だな、クラリスの場合は」

「馬鹿で悪かったわねえ……！！」

キツと睨んで来るが、おそらくクラリスの場合は勉強の仕方というか興味のあることしか勉強してこなかったのだらう。根本的に頭が悪いというわけではなく、ただバランスの問題だと俺は思っている。

「いや、きつと勉強の仕方の問題だろう。前はテストで一夜漬けをしていただろう？ あれはダメだからな。学校のテストでは通じて、ハンター試験の筆記では無理だ」

「う……」

「それと……いや、これは最後に言おう」

「？ まあいいけど……」

「ではいくか！」

「うん！」

俺とクラリスは立ち上がると、この灼熱に支配されたカフカの森の中を進んでいく。

瞬間、ヒュウツと風が吹き抜ける。それはとても涼しく、火照った俺たちの体にはとても気持ち良かった。

その際にクラリスの綺麗な金色の髪が靡く。それをチラッと見てみると、彼女は何かを言いたそうにしていた。

クラリスはしばらく躊躇ちゅうちゆしたあとに、その口を開いた。

「その、さ」

「どうした？」

「今日は付き合ってくれて……ありがと。それにその、ハンターのことも覚えてくれていて、嬉しかったというか……」

「どういたしまして、と言いたいところだが……これくらいならいつでも付き合っさ」

「で、でも別に勘違いしないですよ！！ 感謝してるだけなんだから……っ！ その……いや、その……勘違いしないでよー！！」

いつものようにそういう彼女は、顔を真っ赤にしていた。でもクラリスが素直になれないことなどとうに理解している。こうして言葉にしてくれるだけでも、俺は嬉しかった。

勘違い？ ああ、するとも。クラリスは俺といて楽しいのだと、そう勘違いをしよう。でもきっとそれは、クラリスも同じことを思っているはずだ。友人とこうして遊ぶだけでも、俺たちはこんなにも満たされるのだから。

今日は本当にここにやってきてよかったと、心から思う。

「ははは。そうだな」

「なに笑ってるのよっ！ もうっ！」

「なんでもないさ。ただクラリスはいつも通りだと思ってな」

俺はそう言いながら軽く走り始める。背中に背負っているバックパックの重さなど気にしていないかのように、軽やかにその場から駆け出す。

「いくぞ！ クラリスっ！」

「ムキーっ！ 待ちなさ〜いっ！！ 私よりも先に行かないでよねっ！」

「ははは！」

「だから笑うなっ！」

そうして俺たちは互いに笑い合いながら、このまま虫取りを継続するのだった。

第77話 クラリス、前進する

「今日はここで野宿しよう」
「レイのことだから万全なんでしょうけど、ちょっと怖いかも……」
「大丈夫だ。クラリスがしっかりとくつろげるように、準備はある」

そうして俺はバックパックを地面に下ろすと、慣れた手つきでテントを組み立て始める。

まずは骨格を作る作業から始めて、それぞれ地面に接する箇所を金具で止めるとその上に布をかぶせて完成。それにクラリスのために下に敷くマットはふかふかなものを用意してある。

これできつと大丈夫だろう。

「よし、こんなものだな」

「おお！　すごいわね！　あ、でも……」

「ん？　どうかしたか？」

「いやその……男の子と一緒にテントって。別にレイのことが嫌なわけじゃないけど！　その……やっぱり気になるって言うか……」

「なるほど。俺は外で寝てもいいが？　慣れているしな。むしろ立つて睡眠を取ることも可能だ。クラリスは一人で中で寝てもいいぞ。もちろんそれは想定内だ」

「いやいや！　それは薄情すぎるでしょ！」

「……ではどうする？」

「まあちよつと恥ずかしいけど、レイならいいわよ。変なこともしないだろうし……」

「すまない。後半が聞こえなかった。もう一度いいか？」

「だから！一緒に寝てもいいって！」

「うむ。それではよろしく頼む」

「う……うん！」

まずは寝る前に食事を取ることにした。

俺はここにくる途中で、巨大蛇を確保していたのでそれを以前と同じ要領で蒲焼きにした。もちろん最後に塗るのはエインズワース式秘伝のタレだ。これを塗って焼けば、大概何でも食べることができる。

火はクラリスに魔術で起こしてもらった。そこらへんにある乾燥している木を拾って、それを火にくべる。

そうして俺とクラリスはその火の前に座って、蛇の蒲焼きを食する。加えて、飯盒炊飯で飯も炊いてある。

これだけでもちよつとした夕食になる。

「うわっ！うっま！」

「だろう？それにご飯にもよく合う」

「思ったけど、レイってその……元軍人なのよね？」

「そうだ」

「その時に学んだの？」

「そうだな。軍人時代に師匠に生きるための術は全て教えてもらった。魔術だけでなく、サバイバルの知識、それに人としての在り方もな」

「そつか……」

ここに来る道中で、クラリスには改めて俺が氷剣の魔術師であることは話してある。魔術剣士競技大会で襲われた時から、彼女と二人で話す機会はなかったもので、今になってしまったがクラリスはそれを真面目に聞いてくれた。

「でも、レイは只者じゃないと思ってたけど……まさか氷剣だななんてねえ……」

「驚いたか？」

「そりゃあ、驚くわよ！　だってあの氷剣でしょ！？　貴族の間でも、七大魔術師最強の氷剣はすごい噂になってるわよっ！」

「その噂は師匠の功績だな。俺はそれを継いだに過ぎない」

「でもあなたの師匠とあの後ちよつとだけ話したんだけど、レイは私を凌ぐ天才だって言ってたわよ？」

「何？　それは本当か？」

師匠とクラリスが二人で話しているとは初めて聞いたので、俺は少しばかり驚いてしまう。

「ええ。病院で治療している時に来てくれて、そう言っていたわ」

「そうか。昔から師匠は俺を面と向かって褒めはしないからな。厳しい人だが、とても優しい人でもある」

「そうね、それはよく分かったわ。その時に、レイの過去は聞いたけど……その大変だったのね。こんなこと言うのは、月並みな言葉かもしれないけど……」

「なるべくしてなった。それだけだ。当時は色々と思うところはあったが、今はこうして学生として生活できて、満足している。それに魔術領域暴走も少しずつ良くなっているしな」

そう言つと、クラリスはキョトンとした様子で質問をして来た。

「オーバーヒート魔術領域暴走つて、よくなるの？ 聞いたことはあるけど、症状はよく知らなくて」

「まあ魔術を使うことをやめれば良くなるな。俺の場合は少し特殊だが、完治するのも遠くないだろう」

俺がそのように答えると、クラリスは真剣な声色でさらに質問をしてくる。

「レイは将来はどうするの？」

「……軍人に戻ることはないだろう。そうだな。意外とアメリカを教えるのが楽しかったから、教師になるかもな」

「レイが教師……！？ 意外に似合ってるけど……ちょっと未知数ね」

と、その後は色々雑談をした。クラリスとこうして二人きり話をするのは久しぶりだったが、かなり盛り上がってしまい寝るのが遅くなった。

そして就寝する際。クラリスはちらつと俺の方を向くと、こう告げた。

「変なことしないでよ………？」

「もちろんだ」

「……」

「どうした？」

「別にっ！ おやすみっ！」

「ああ。おやすみ」

そして俺たちはそのまま、睡魔に身を任せるのだった。

早朝。

朝の日差しで目が覚めた俺たちは、今日はあのボスであるヘラクレスオオカブトを捕獲するという目標を達成するつもりだ。

すでに行動を起こしており、俺はクラリスの後を追うようにして移動している。彼女の動きに迷いはなく、クラリスはそのまま歩みを進めていく。

すると、クラリスは近くにある木に近づいて、そこにある跡を指先でなぞる。

「ここで争った跡があるわね。間違はなく、あいつよ……」

「何？ 奴が近くににいるのか？」

「ええ。間違いないわね」

普段とは打って変わってかなり真剣な顔つきでそう告げるクラリス。彼女のその表情はまるでプロそのものだった。

そしてクラリスは冷静に告げる。

「じゃ、行きましょう」

「ああ」

そのまま森の奥に進むこと、一時間。ついに俺たちは例の目標を発見する。

「見つけた。静かにね……」

「……了解だ」

よく見ると、かなり太い木から漏れている樹液に群がっているカブトムシの群れがあった。その中にはヘラクレスオオカブトにコーカサスオオカブトなど、大物が確かにいた（種類はクラリスに教えてもらった）。

「……レイは待ってて。私が取ってくるわ」

「ああ……」

クラリスは慎重に、ゆっくりと進んでいく。決して足音を立てないように、ジリジリと迫っていく。虫取り網を掲げて、その華麗な金色のツインテールをわずかに揺らすこともなく、対象との接敵を図る。

しかし次の瞬間、クラリスの顔面めがけてヘラクレスオオカブトを筆頭にカブトムシたちが飛んで来たっ！

その黒光りした巨大な角をクラリスにめがけて直進。羽根を羽ばたかせ、そのまま宙を舞うように飛んでくるカブトムシたち。まさに先制攻撃だ。

カフカの森にいる虫は活発だと聞いていたが、まさか群れで攻撃してくるとは。俺はすぐに加勢しようと思うが……

次の瞬間に目撃したのは、クラリスの華麗なる演舞だった。

「……ふっ！」

彼女はその場にしゃがみこむと、なんとその虫あみですぐにヘラクレスオオカブトを確保。その後は次々と他のカブトムシを虫あみの中に入れていく。すでに確保しているカブトムシを逃すことなく、確保していくその姿はまさに圧巻。

それは芸術的な舞だった。

左右のツインテールを揺らしながら、しかし決してバランスは崩すことなく次々と冷静に一匹ずつカブトムシを捕獲していく。

クラリスの実力は、もはや圧倒的。この技量を前に、流石のカブトムシの集団も為す術などなかった。

俺は流石に虫取りというものに、芸術性があるとは思っていなかった。なので素直に感心する。

そして、数分後。

クラリスはついにそのカブトムシの群れを全て、虫取り網の中に確保する。

それを一匹ずつカゴに入れると、金色の双眸を輝かせて確保したカブトムシたちをカゴ越しに見つめる。

「うわぁ……やっぱり圧巻ね！　すごい大きいっ！」

「クラリス。今の動きは？」

「ん？ まあ虫取り業界では常識よ！」

「なるほど……凄まじい技術だな」

そう感嘆しているとクラリスはカゴをパカッと開けてしまう。すると、次々と確保したカブトムシたちが森へと帰っていく。

「いいのか？ あれほどの個体ならかなりの市場価値があると思うが」

「いいのよ。別に虫をお金にすることは否定しないけど、どうせならこの森で自由に生きて欲しいと思うの」

「そうか……優しいな、クラリスは」

「べ、別にそんな大したものじゃないわよっ！ ただ……好きだからこそ、自由に生きて欲しいって言うか……」

プイツと別の方向を向いてしまうクラリス。

次々と解放されていくカブトムシたちは、クラリスを襲うことはなかった。ただ自由に、この森へと戻っていった。

だが例のヘラクレスオオカブトだけはクラリスの頭にちょこんと着地する。先ほどと異なり敵意はなく、クラリスの頭上でじつと静止している。

「んにゃ！？ なんか頭にきたんだけど！」

「すごいな。気に入られたんじゃないか？」

「そうかもしれないわね……」

彼女はその小さな手に、大きなヘラクレスオオカブトを乗せる。

逃げていく様子もなく、ただクラリスの手の中に収まっている。

その大きな角でクラリスの指を撫でているように見えるのは気のせいではないだろう。

「飼育したらどうだ？」

「うーん。でもなあ……いま家にいる昆虫たちの中に入れてもいいのかなあ……かなり大物だし」

「きつとこいつもそれを望んでいると思うぞ」

「そつか。そうよね。じゃあこの子の名前は、ジークフリートにしよっ！」

「おお！　なんだか強そうだな！」

「ええ！　超強そうでしょ！　ということでもよろしくね、ジークフリート！」

よしよしと撫でると、その角を高らかに天に掲げるジークフリート。よほどクラリスのことが気に入ったのだろう。角を何度も上下にブンブンと振っている。

その後は二人で森を散策して、様々な昆虫と触れ合った。クラリスの昆虫に関する造詣は深く、とても有意義な時間だった。

そして俺は最後の別れ際に、クラリスにある話を持ちかけてみた。

「あー！　楽しかった！　家に帰るのがちょっと勿体無いわね！」

「ここから遠いのか？」

「うーん、まあそんなに時間はかからないわ」

「そつか。俺も楽しかった。また行こう」

「うん！」

「それで、ちょっと話は変わるが……」
「どうかしたの？」

頭にジークフリート乗せているクラリスがキョトンとした表情で俺を見つめる。ちなみにジークフリートはどう足掻いてもクラリスから離れる気は無いらしく、虫かごに入れる必要はないみたいだった。彼女の頭が定位置となっていた。

「クラリス。環境調査部に入らないか？」

「……それはその、思ってたけど。私が入ってもいいのかな？ この環境調査部ってかなり有名じゃない？」

そう。俺は後で知ったが、アーノルド魔術学院の環境調査部はハントーの間ではかなり有名らしい。というか、実は師匠も学生時代には所属していたとか。そのような理由で、クラリスは入部に躊躇していたのだ。

黄昏の光に照らされるクラリス。

サラサラと流れる金髪のツインテールが、その光を眩く反射している。

そんなクラリスの瞳は僅かに揺れていた。

ぎゅっと両手を前で握りしめて、俺の双眸をじっと見つめてくる。

「クラリス。きつと君なら、部長の課す試験を突破できる。昨日と

今日、二日に渡って森と一緒にいて思ったが、クラリスならきっと立派なハンターになれる」

「……本当に？」

「ああ。俺を信じろ」

「レイがそう言うなら……わかったわ。私、入部してみろっ！」

「その意気だ。きっと大丈夫さ。何事も行動あってこそだ」

「うんっ！」

その数日後。

クラリスは無事に部長の課す試験を突破して正式に環境調査部の部員となった。

「クラリス〓クリーヴランドですっ！　これからよろしく願いますっ！」

ぺこりと頭を下げるクラリス。

彼女はいつも以上にニコニコと笑っていた。その目指す夢に一步だけでも近づくことができて嬉しいと、そう言っていたからだろう。

こうして環境調査部は数年ぶりに女子部員が入り、本格的に活動していくことになる。

「クラリス、これから一緒に頑張っていこう」

「うんっ！」

友人が夢に進むその姿を、俺はこれから焼き付けることになる。それはとても眩しくて、尊くて、美しいものだ。後に知ることになる。

願わくば、クラリスの夢がどうか叶いますように。
。

第78話 エリサと謎の視線

午前五時。

俺は園芸部に向かうと、まずはそこにある花と植物に水を与える。それに加えて、薬剤と肥料も入れ替える。こうした地道な作業が何よりも大切と言うことで、俺は課された役目を淡々とこなす。

実はなぜ俺がこうしているかと言うと、水やり当番を引き受けたからだ。

園芸部の方々は上流貴族の人がほとんどなので、夏休みは挨拶回りなどで忙しいらしい。

俺としては実家に戻るのは後になっても良いので、こうして引き受けている次第だ。今日も朝日を浴びながら、俺はいつものように水をあげる。

こうして少しずつ成長する植物、それに花を見るととても心が落ち着く。

「次は外だな」

俺は外に向かうと、入学当初に自分で設営した場所に向かう。そこには多くの花が咲いているが、そろそろ俺の好きなマーガレットの季節になる。

咲くのがとても楽しみだ。

「さて、と」

全ての作業を終えると、街に向かう準備を開始。

今日の予定はエリサと二人で街の本屋を巡ることになっている。

元々はみんなで行こうという話もあったのだが、なかなか予定が合わずに断念。特にアメリカとクラリスは貴族の集まりが何かと多く、大変らしい。

エヴィはそもそも、学院からかなり離れた場所に実家があるので距離的に集まるのは難しい。

ということで、比較の実家から街に来るのが容易なエリサと二人で遊びに行くことになった。

エリサとは本の趣味や勉学的な面でかなり話が合うので、俺としても非常に楽しみにしている。

「少し早すぎたかもな」

夏真っ盛りということで、俺はシンプルに真っ白な無地のシャツにパンツはジーンズを選択。

それと師匠にいただいたシンプルなシルバーのブレスレットもつけている。曰く、「相手が誰であっても、身だしなみには気をつけ

る」ということなので、俺は服装や髪型にはそれなりに気を使っている。

それに、エリサはきつと時間をかけて準備をしてくれているに違いない。

師匠とアビーさんは割とあっさりしているのだが、キャロルにいかん女性の大変かということに幼い頃に力説された時から俺は、女性にはある種の感嘆の念を抱いている。

化粧はそれこそ一時間以上はかかるらしい上に、服装を選ぶのもまたかなり時間がかかる。

靴もまた実用性よりもデザインを重視するため、靴擦れを起こして足が痛むこともよくあるらしい。

男性では想像もできないような苦勞が女性にはあるからこそ、俺はいつも褒めるように努めている。

それだけで報われると、キャロルだけでなく師匠にも教えられているからだ。

まあ……師匠は褒めないと本気でキレるが……。

そして街の真ん中にある噴水の前で待ち合わせしているので、俺はそこで佇んでいる。

だがやはり、少しばかり早すぎたようだ。待ち合わせは十一時。だが今は十時半だ。三十分前に着いたが、まあ……良いだろう。遅

れるよりはマシだからな。

と、一人で待っていると俺は女性の二人組に話しかけられる。

「あ、あの〜」

「はい。なんでしょうか？」

道にでも迷っているのだろうか。

この王国は観光で来る人も数多くいる。そのため、時折街では道を聞かれることも度々ある。

だから俺は道を尋ねられると構えていたが、どうやらそうではないようだった。

「お、お一人なんですか……？」

「今はひとりですが」

「きゃー！ 一人だって！」

「ちょ、ちよつと静かにして！」

「……？」

二人で何やらコソコソと話しているが、ピンとこない。

結局、一体なんの用事だろうか。

俺はこの二人とは面識はない。

それに妙に大人っぽいので、おそらくは二十歳は超えている女性の方だろう。

こんな俺みたいな学生に何の用だろうか。

「……その、私たちと一緒に買い物でも行きませんか？」

「なるほど。そういうことでしたか。申し訳ありません。心苦しいのですが、実は先約がありました」

「あ……そ、そうですね。こんな人が、フリーでいるわけないですよね……」

そう話すと、隣にいるもう一人の女性が口を開く。こちらの女性は活発そうな印象で、ハキハキとした声で俺に話しかけてくる。

「その！ お名前だけでも！」

「レイ＝ホワイトと申します。アーノルド魔術学院の一年生です」

「え！？ あの魔術学院の生徒！？ それに一年生！ す、すごい！ 本当に！？」

「はい。そういえば……九月下旬には、学院で文化祭が開かれるのです。私のクラスもきつと催し物をするので、その時にまたお会いできれば」

「そっかー！ じゃ、またその時にね！」

そうして二人の女性はそのまま去って行く。

「バイバイ！ またねー！」

それからさらに十分後。なぜか女性に声をかけられることが多いのだが、俺は視線の端にエリサの姿を捉える。

ちょうど道の曲がり角から顔をチラッと出しており、どうやら俺の様子を伺っているみたいだった。

「エリサ！ こっちだ！」

「ご、ごめんね。遅くなっちゃって……」

「いや俺も先ほど来たところだからな。大丈夫だ」

「そ、そう？」

「ああ」

「でも……その、たくさん話しかけられていたよね？」

「ん？ まあそうだな。でも今日はエリサと二人で遊びに行くのを
楽しんでいたんだ。もちろん全て断ったさ」

「美人な人が多かったけど……？」

「俺はエリサが一番可愛いと思う。よく似合っている」

「あ……ありがとうっ！」

少しだけその顔に朱色が差す。

そんなエリサは真っ白な半袖のフリルのついたブラウスに、スカ
ートは真っ青なフレアスカートを履いていた。これは朝顔のように
広がったスカートという意味で、綺麗に波打つそれはとても芸術的
だ。

また、髪の毛も軽く上げておりいつもとまた印象が違う。持って
いる小さなカバンもいい皮を使っているのだろっ。上質なもののな
は間違いない。

それに少し化粧もしているのか、いつもよりも顔が明るく見える。

やはり俺の予想通り、かなり時間をかけてくれたのだろっ。だか
ら俺がいつべき言葉は、エリサを褒めることに尽きる。

「レイくんもよく似合っているし、その……カッコいいよっ!」
「ありがとう、エリサ。では行こうか」
「うんっ!」

二人で並んで歩き始める。

隣で歩いているエリサに歩調を合わせて、俺はいつもよりもゆつくりと歩みを進める。

「エリサはここまでどれくらいかったんだ?」

「うーんと……四十分くらいかな。実家はここから西の方にあるから」

「なるほど。西区の方が」

「うん。でもみんなで行けたら良かったのにね」

「仕方ない。みんなも色々と予定があるらしいからな。それに俺は、エリサと二人きりでも嬉しい」

「あ……そ、その……私もレイちゃんと二人で嬉しいよ! レイくんは、今まで会ってきた男の子の中でもすごい話し易いから……っ!」
「そうか?」

「うんっ! 今までは友達もいなくて、それに特に男の子と話すのが苦手だったけど……レイくんはちょっと違うの」

「なるほど。俺は女性の中で育ったようなものだから。それがあるのかもしれない」

「えっと……リディアさんとか?」

「ああ。師匠、アビーさん、キャロルの三人にはとても世話になったからな」

「そう聞くと……全員七大魔術師なんだよね? すごいね……」

「そうだな。今思うと、贅沢なメンバーだったな」

エリサと他愛のないことを話す。出会った当初は少し距離感があった感じがしたが、こうして夏休みを迎えた今はかなり距離感が縮まった感じがする。

彼女もとてもよく笑うようになった。そして、二人で会話に花を咲かせながら歩みを進める。

そんな矢先、俺は元々考えていたあることをエリサに告げる。

「エリサ。本屋に行く前に、昼食でもどうだ？」

「うん、いいよ。でも、どこに行くの？」

「それは予約してあるから、任せてほしい」

「え……予約？」

ぽかんとしているエリサを連れてやって来たのは、この王国内でも屈指のレストランだ。曰く、王国が認める最高峰の三つ星レストランだとか。

ここはアビーさんに紹介してもらったのだが、エリサには魔術剣士ス・シュバリエ競技大会の際してかなりお世話になったので、俺はそんなエリサにお礼がしたいと思つての行動だった。

本当はみんなで来たかったが、ちょうど夏休み期間中はレストランの空いている日が今日しかないということで、俺とエリサの二人で来た次第だ。

「あわわ……あわわわ……」

「どうした？ 入ろう、エリサ」

「でも、ここって王国でも一番のレストランじゃ……？」

「ああ。その通りだ」

「私、お金ないよっ……！ ど、どうしよう……」

青い顔をして、慌てているエリサ。だが俺がここでエリサに金を出させることはない。何故ならば、今回は全て俺の奢りだからだ。

「俺の奢りに決まっているだろう。大丈夫だ。軍人時代にまとめた金をもらって、未だにほとんど使っていないからな。ここのレストランの二人ぶんくらい、訳ない」

「ええ……！？ レイくんがご馳走してくれるの！？」

「俺が勝手に予約して連れて来たんだからな。それにエリサには本当に今まで世話になった。魔術剣士競技大会でのアメリカ応援団の準備、それに……あの時、背中を押してもらった。本当はみんなも招待したかったが、こればかりはタイミングの問題だな。だから今日はエリサだけでも、お礼をしたいのだが……ダメか？」

「う……それなら、お言葉に甘えて……その、ご馳走になります」

「ああ。それでは行こう」

俺はそうして渋るエリサの手を優しく握って、中に入っていくが……。

「ん？」

「どうかしたの？ レイくん」

「いや、なんでもない」

中に入る際、誰かに見られているような気もしたが……おそらく気のせいだろう。これだけ人がいるんだ、誰かが偶然見えても不思議ではない。

そしてその視線のことを忘れて、俺たちは改めて歩みを進めるの

だ
っ
た。

第79話 大天使エリサと忍び寄る影

「注文はコースでいいだろうか？」

「う……うんっ！」

二人でランチにやって来た。俺は以前に師匠、アビーさん、俺の三人で入学前に何度か利用していたので慣れているが、エリサは妙にソワソワとしていた。

ここは俺がリードしなければならない。そして俺はエリサに優しい声音で話しかける。

「大丈夫だ。礼儀作法もそこまで気にしなくてもいいさ」

「う、うん……でもその、レイくんってこう言うところは慣れてるの？」

「まあ昔から師匠に色々と連れまわされていたからな」

「……そうなんだ。そのリディアさんって、その……研究者として今も活動してるんだよね？」

「そうだな。今はクオリアの研究に取り組んでいるとか。俺はよく知らないが、エリサは知っているか？」

「クオリア……一応知っているけど、その……まだ仮説でしかないと思う。コード理論の中でも処理の過程では、クオリアという物質が働いているとかどうかって話だけど……コードにさらなる過程があるとか、ないとか」

「やはりエリサは聡明だな。いつか師匠を超える研究者になるかもしれない」

「そ……そんな私なんて！ まだまだだよっ！」

手をブンブンと自分の前で振るエリサ。でも俺は決してそれが大言壮語なことだとは思っていなかった。

「いや師匠も言ってたが、あの二重コード理論の本を理解しているんだ。素質は十分にあると思うぞ」

「そうかな？」

「ああ」

と二人で話していると、次々に前菜から運ばれてくる。

俺たちはそれに舌鼓を打つと、最後にデザートを食べてランチを終える。

「エリサ、お気に召しただろうか？」

「う、うんっ！ あのね、すごく美味しかったよ！ ありがとうレイくん！」

「いやこちらこそだ。あの時の謝礼ができたのなら、俺としても嬉しい」

エリサは終始にニコニコとしており、よく笑っていた。彼女もまた、楽しんでくれているのなら俺も奢り甲斐があるというものだ。

そして会計で俺が全のお金を支払うと、エリサはレストランを出た矢先、ぺこりと頭を下げてくる。

「レイくん、ご馳走様でした。とっても、美味しかったよっ！ ご馳走してくれてありがとうっ！」

「うう……エリサあ……」

「ど、どうしたの！？」

俺は思わず目頭を押さえ、溢れ出る涙を堪える。

昔は、「おい、レイ。お前のおごりで寿司行こうぜ!」「おい、レイ。お前の金で肉いこうぜ! 肉だ!」「おい、レイ。最近お前もかなり金が入っているだろ? 師匠に酒でも奢らないか?」などと、師匠にかなり集^{たか}られたものだった。

もちろん、師匠は弟子の奢りでも謝礼は言わない。ただ「美味かったな。ガハハ!」と笑ってさらに酒を追加するだけだった。俺が注意しても、睨みつけて有無を言わせない。

それがどうだ。

こうしてご馳走しただけなのに、丁寧にお礼を言って頭を下げてくれる。

まさに大天使エリサだ。

本当にゴリラの師匠と比べるまでもなく、俺はそのエリサの神聖さに当てられて思わず涙を流していた。

あの時の日々が浄化されていくようだ……。

そしてその話をすると、エリサは苦笑いをする。

「あ、あはは……レイくんも大変だったんだね」

「ああ。エリサはエインズワースとしての師匠はよく知っているとと思うが、あの人は実際はゴリラみたいなものだからな。魔術以外は本当にダメな人で……」

その瞬間、俺は殺気を感じた。

バツと後ろを振り向く。だがそこには誰もいない。しかし今の間違いなく、誰かが俺を殺しに来ていた。魔術の兆候……特にあの極東戦役でも中々お目にかかることはない……七大魔術師レベルの第一質料リミマテリアが流れていた気がしたのだ。

しかし、いない。

俺の気のせいか？ いやこれはもしかして……と思うと、ちょうど曲がり角から出てくるのはアビーさんだった。

「アビーさん？ どうしてこんなところに？」

「レイとエリサ＝グリフィスか。いや、先ほどナンパにあってな。そこの路地裏でシメていたところだ。少し殺気が漏れてしまったがな」

「なるほど。アビーさんのものでしたか。驚きましたよ。この白昼堂々、あのような殺気が漏れるのですから」

「くそ……リディアのやつ……これは貸しだぞ……」

ボソツとアビーさんがそういうが、何と言っているのか聞こえなかった。

「アビーさん？ どうかしましたか？」

「いや。なんでもない。レイはデートを楽しんでくれ！ ではな！」

珍しくなぜか焦っているように見えたアビーさんはそのまま髪を靡かせて、颯爽と去って行ってしまった。

「さて、と。エリサ行こうか」

「え……！？ あ、うん！」

「どうした顔が赤いが？ もしかして熱中症か！？ 気をつけろ、この夏の日差しは馬鹿にならない。休むか？」

「べ、別に大丈夫だよ！ 行こうっ！」

「そうか？ 体調が優れないのならすぐに言って欲しい」
「う、うんっ！」

顔を赤くしているエリサと一緒に進んで行こうとするが、どうやら人がかなり多くなってきた。このまま進めば簡単に逸^{はく}れてしまいそうだ。

「エリサ」

「どうしたのレイくん」

「手を繋ごう」

「手を繋ごう！？」

「ああ。このままでは逸れてしまうからな」

「あ……う、うん……はい」

エリサの左手を握ると俺たちは本屋へと向かった。

この王国の中央区には数多くの本屋があるので、俺たちは色々なところに向かった。エリサのオスメのところ、それにエリサのオスメの本も色々と教えてもらった。俺もまた、自分の好きな本をエリサに紹介したりなどして二人で束の間の時を楽しんだ。

そして夕暮れ時。

黄昏の光に包まれながら、俺とエリサは近くの公園のベンチに二人で座っていた。

あれからエリサとは本の話、それに彼女は俺が使う対物質コードアンチマテリアルに興味があるらしく、俺は色々と言った。

そもそも対物質コードアンチマテリアルは師匠は存在を発見しただけで、使うことはできない。

この世界で今の所、対物質コードアンチマテリアルを実際に使えるのは俺だけだ。

ということで、二重コード理論に多大な関心のあるエリサとの会話はとても盛り上がった。それは気がつけば日が暮れそうになっているレベルだった。

「エリサ、飲み物だ」

「ありがとう。レイくん」

飲み物を買ってきたので、それをエリサに渡す。

「今日は楽しかった。ありがとうエリサ。貴重な夏休みの一日を使ってくれて」

「私もその……すごく、楽しかったよっ！ レイくんとの話はその……すごく面白いから！ それに二重コード理論の話もとても参考になったよっ！ まさかレイくんが世界で唯一使える魔術師だなんて、私は恵まれているなあと思って。そんな人に話が聞けるなんて、その……夢にも思ってたから。改めてありがとうっ！」

「この話ならいつでも聞かせよう。エリサのためになるのなら、俺は喜んで協力する所存だ」

そう俺がいうとエリサはカバンの中から小さな紙袋を取り出した。

「それは？」

「その実はね。クッキー焼いてきたの……お昼ご飯はレイくんがご馳走してくれたから、お昼のお菓子にでもって……でも、ははは。もう夕暮れ時だけど、その……食べてくれる？」

「もちろんだ！ いただきます」

俺はエリサの焼いたクッキーをもらって、口に運ぶ。そして、再び涙が溢れてきた。

「うふう……うまい。美味いよ、エリサ……」

「え……！？ 泣くほど美味しかったの……！？」

「いやエリサの優しさに、な。いつも本当に君の優しさには泣いてばかりだ」

「ははは……レイくんはよく泣いてるよね……」

「ああ。エリサの前ではその暖かさに当てられてな。あのゴリラの師匠との日々を思い出すと、ついな」

「そ、そうなんだ……でもその……よかった。美味しかったなら、私も作ってきた甲斐があったよっ！」

「ああ。ではエリサ。また会おう」

「うん！ レイくん、今日は楽しかったよっ！ バイバイ！」

二人で立ち上がると、俺たちはそれぞれ帰路に着く。

ちょうど逆方向なので、エリサとはここでお別れだが、とても良い時間を過ごせた。

俺は気分がいいので、鼻歌でも歌っているとちょうど見慣れた人

たちが曲がり角から出てくる。

「うお……！　って、師匠にカーラさん？　こんなところで奇遇ですね」

「おお！　レイじゃないか！　偶然だな！　ああ！　ものすごい偶然だな！」

「？　まあ偶然ですが、どうしたんですか。こんなところに何か用事でも？」

俺がそういうと、それにはカーラさんが答えた。

「本日は街に買い物に来ていましたので、そのついでに散歩をしていたのです」

「そうですか。奇遇ですね」

「よし！　ということで、飯でも行くかレイ！　もちろん今日は私の奢りだ！」

「もちろん私の奢りだ……？　師匠、どうしたんですか？　頭でも打ちましたか？　いやもしかして、変なものでも食べましたか？

いつものように俺に集らないなんて、おかしいですよ」

「ほうう……お前が私をどう思っているのか、改めてよくわかったな」

「師匠は裏表のない美しい人です！」

「よろしい。では行くか」

「はいっ！」

ということで俺たちは三人で夕食を食べに向かうのだった。

ちなみに今日は本当に珍しく、師匠に奢ってもらえたが……どうしてなのか、俺には最後まで分からなかった。

第80話 買い物と奇妙な先輩

「やつほ、レイ。おはよ」

「おはようございます。セラ先輩」

ぺこりと頭を下げる。

今日は約束をしていたセラ先輩との買い物に赴いていた。

その目的はガーデニングショップで新しい種苗、肥料、栄養剤などの購入だ。俺たち二人は園芸部を代表してこうして定期的に買い物に来ている。

セラ先輩も上流貴族で何かと忙しいらしいのだが、今日は午前中だけならということで二人で早速王国内のガーデニングショップに向かっている。

「はあ。本当はレベツカ様も一緒に来れたら良いんだけど……」

「そうですね。しかし、三大貴族の方々は忙しいのですね」

「そうなのよ。私でさえ色々あるのに、三大貴族はもっと大変よ。確か数日後に魔術協会でのパーティーがあるとか」

「なるほど」

ちなみにその魔術協会のパーティーだが、俺も招待されている。今までは行っていなかったのだが、流石に当代の『氷剣の魔術師』として参加しておくと師匠に言われたからだ。会長も俺に会いたいと言っていたらしい。ちなみに師匠も付いて来るようだった。

俺はもういい歳なので別に大丈夫です、と言ったのだが、何かと理由をつけて付いて来ると言うことだった。

こうしてずっと俺のことを心配してくれる師匠には本当に頭が上がらない。

「ちなみに今日は何を買うんですか？」

「肥料と培養土。それに秋の花もそれなりに揃えておかないとね」

「了解しました。そういえば、セラ先輩は今まで一人でこれをしていたのですか？」

「ん？ まあそうね……私が副部長になってからは一人でやってるわね」

「なるほど。これからはいつでもお呼びください。荷物持ちは幾らでもします。力がありますので」

「まあそうね。実は割とレイには助けられているからね。これからもよろしく頼むわ」

「はい！」

そんな話もしながら、俺たちは進んでいく。そして王国内で一番大きいと言われているガーデニングショップに来た。店の前にはすでにたくさんの種苗が陳列されており、それに色々な種類の花もあった。

「奥の方に行きましょう」

「わかりました」

セラ先輩の後についていくと、店の奥の方に進んでいく。

「どうも、こんにちは」

「おお！ ディーナちゃんじゃないかい！ 久しぶりだねえ！」
「はい。」ご無沙汰しております」

店の奥にいたのは、女性の人だが割と若く見える。俺の予想では、30代前半といったところだろうか。

また、セラ先輩と昔から顔なじみらしく色々とサービスしてくれるらしい。曰く、店長だから気にしなくて良いのよ、とのことだった。前回来た時、俺は会うことはなかったので今日が初顔合わせになる。

「あ、店長。こちら後輩です」

「レイ」ホワイトと申します。まだガーデンングに関しては浅学な身の上ではありますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します」

深く頭を下げ、俺は一礼をする。

初対面。それに俺はまだまだ幼く、一年生という身分だ。だからこそここは、しっかりと挨拶しておく。何事も礼儀は大切だからな。

「あらまあ。しっかりとした子ねえ……もしかして、ディーナちゃんのことかい？」

ニヤリと笑う店長。一方のセラ先輩は慌てながらその言葉を否定する。

「ちょ！ 違いますよ！ 私はレベツカ様一筋ですから！」

「ふーん。ま、そういうことにしておこうかねえ……でもよく男子

の入部なんて許したわねえ。確か昔は一蹴してたんでしょ？」

「それはレベツカ様を狙った下賤な人間だったからです。でもレイはしっかりしてますので。園芸部の活動も一番真面目に取り組んでいます」

「なるほどねえ……」

そしてセラ先輩は今日買う分を注文すると、かなり大量の袋がズラツと用意された。

「ちよつと多いわね……」

「これだけになるけど……大丈夫？ 運べる？」

先輩と店長が尋ねて来るが、この程度ならば全然問題はない。

「大丈夫です。任せてください」

そういうと俺はその場にある袋を全て持つと、セラ先輩と一緒にお礼を述べる。

「いつも多めにもらってるみたいで、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人で頭を下げると、店長も笑いながら答えてくれる。

「いいのよー！ ディーナちゃんはお得意様だからねえ」。それにいい後輩ちゃんもできたみたいで」

「は。恐縮であります」

「それでは、店長。また来ますね」

「失礼します」

二人で頭を下げると、俺たちは店の外へと出ていく。

今の時間はもうすでに十時半。

セラ先輩は午後から用事があり、今から戻らないといけないためすぐに向かったほうがいいだろう。俺はこの荷物を学院まで運ぶ必要があるが、一人でも大丈夫な量だ。

「先輩はどうぞ戻ってください。後の荷物は俺一人で持って行きますので」

「え……でもそんな、悪いわよ」

「時間にあまりゆとりがないのは分かっています。それに先輩も知っているように、俺は力には自信があります。この程度、どういふことはありません。むしろいい負荷です」

「そつか。レイはほんといい後輩ね。じゃあこれ」

セラ先輩がポケットから取り出すのは、鍵だった。

「これは？」

「部室の鍵。合鍵だけど、あげるわ」

「いいのですか？」

「ええ。いちいち職員室に行って借りるのも面倒でしょ？ 本当は部長か副部長が持つておくべきなんだけど、夏休みはレイに頼りっぱなしになるから。本当はもっと早くこうすべきだったんだけど」

「いえ。自分のようなまだ部員として日の浅い人間に任せて頂いて恐縮です」

「もう！ 何言ってるの！ あんたはもう、立派な園芸部員よ。みんなそれは認めてるから」

「そう、ですか。園芸部の皆様にはお世話になりっぱなしで」

「いいのよ、別に。それにレイのことはみんな気に入ってるしね。」

もちろん、女装の方も含めて」

「あはは……そうですか。確かに女装の時はみなさんの反応が良かったですね」

そう雑談をしていると、セラ先輩を意を決したような顔でこう告げる。

「その……私のことも、名前で呼んでもいいわよ……」

「いいのですか？」

「ええ。レイのことはこの一学期でよく分かったし。こうして買い物にも付き合ってくれたし」

「分かりました。では、ディーナ先輩とこれからは呼びいたします」

「ええ！　じゃあまたねっ！」

「はいっ！」

先輩は大きく手を振りながら、そのまま去っていく。

思えば、園芸部に入る時はセラ先輩……ではない。ディーナ先輩には初めは嫌われているのは分かっていた。でも今はこうして信頼されているようで俺としては本当に嬉しい限りだ。

この鍵はきつと、信頼の証だ。

ならば俺も、この園芸部のためにもつと尽くそう。先輩方のためにも、この伝統ある園芸部員として……。

そして一人で難なく大量の荷物を運び、俺は部室の前に到着。鍵をガチャリと回して、中に入ろうと改めて荷物を持つとすると……

…中で大きな音が聞こえた。

まさか……賊の類か?!?!

この神聖なる園芸部の部屋に入り込むとは、到底許せるものではない。

俺は半ばドアに体当たりをする形で中に侵入。そのままゴロゴロと前転して、受け身をとると、中にいるであろう賊に向き合うが…。

そこにいたのは、よく知った顔の人だった。

艶やかな長い黒髪に、右下にある泣きぼくろ。その端正な顔立ちは、異性同性を問わず魅了する。だが今は、そんな彼女は慌てているのか妙に驚いている様子だった。

「レベツカ先輩でしたか」

「あ……ははは……れ、レイさん？　ど、どうしてここに？　それに鍵は……」

「今日はディーナ先輩と買い物に行っておりまして。その帰りで、荷物をこの部屋に運びに来たのですが。レベツカ先輩はどうしたのですか？」

「え！？　い、いやその……ちょっと忘れ物というか……！」

「しかし鍵がかかっていましたよ？　それに机に何か置いているのでしょうか？　後ろに何か見えますが……」

「べ、別に気にしないでください！　ということで私は失礼しますねっ！　またお会いしましょう！　レイさんっ！」

そしてレベツカ先輩は何かを腕に抱えると、そのまま颯爽と走り

去ってしまっ。

まあレベツカ先輩のことは信賴しているの、何か悪巧みをしているのではないだろうが、妙に氣になつてしまつた。

流石にあの言動は普通ではない。何かを隠しているのは、明白だつた。

しかしあまり人の事情に土足で踏み込むものではないだろう。それこそ、人には知られたくないことなどもあるだろうから。

「運ぶか」

俺はぼそりと呟くと、部室内に荷物を運んでいく。その際に見つけた黒い沁み。それは机の上に広がつていた。

「インクか？　しかしどうして……？　何か書類作業でもしていたのか？」

おそらくこれはレベツカ先輩がしていた何かだろう。

「ま、いいだろう。あとで机も拭いておくか」

その後、所定の場所に荷物を置くと雑巾を絞つて机の上を拭いておいた。それに加えて、室内を軽く掃除をする。

「こんなものか」

作業を終えた俺は鍵を閉めると、部室を後にする。ちょうどその時は、レベツカ先輩の言動はすっかり忘れていた。

だが俺はこの夏の終わり頃。レベツカ先輩がこの場で何をしていたのか。その真相を知ることになるのだが……今はまだ、知る由もなかった。

第81話 キャロルとのデート（死闘）

「……」

「やつほぐ、レイちゃぐんっ！」

「……」

「どうしたの？ 今日元気ないの」

「……」

「それにしてもカッコよくなったねえ。キャロキャロの目は間違
いなかったよっ」

「……」

「話してくれないと、イタズラしちゃうぞっ」

「……お前が過去にしたことは、俺は忘れていないからな」

「もうー！ そんなこと言ってー！ 過去のことは水に流そ、ね？」

王国の中央区。

そこにある噴水の前で待ち合わせをしていたが、今日ほど憂鬱な
日はなかった。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会での出店のためとはいえ、俺は悪魔と取引をし
てしまった。しかしここで約束を守らないというのも、道理に反す
る。ということで俺は本当に心から嫌々ながらも、ここにやってき
た。

キャロルはいつものように派手な服装で、肩が完全に出ているフ

リル付きのワンピースを着ていた。それは赤を基調としており、ポイントで花の刺繍が入っていた。

髪型もいつもよりも気合が入っているのか、綺麗に巻かれており微かに艶が出ていた。おそらくオイルを軽くつけているのだろう。

それにこの日差しだからか、サングラスをしているがまあ……よく似合っている。

加えて、微かに香る柑橘系の匂いが鼻腔に抜ける。

キャロルがここに来るまでにどれだけ時間をかけているのか、俺にはよく分かった。だからこそ俺は、気は進まないが言うべきことは言っておく。

「その……」

「え？　どうかしたの、レイちゃん」

「いや……よく似合っている、と思う」

「レイちゃん……」

キャロルはウルウルと目に涙を溜めると、ガバツと俺に抱きついてきたっ！

「うおー！？」

「もう、大好きー　レイちゃん、嬉しいよあー　ありがとー

！　頑張ってオシャレしてきてよかったあ……っ！！」

「は、離れろっ！」

「もう！　師弟揃ってツンデレさんなんだからっ！」

俺はへばりつくキャロルをなんとか引き剥がすが、一方のキャロ

ルは本当に楽しそうにニコニコと微笑んでいた。

まあ……実際のところ、キャラルとこうして二人きりで話すのは久しぶりだ。幼い頃はよく話していたが、極東戦役が終わった後はほぼ会っていない。そのため、キャラルの反応も理解できるがこいつは俺のどこをそんなに気に入っているんだ……？

「じゃ、いこつ！ レイちゃんっ！ はいっ！」

「はいって、どういう意味だ？ それにその差し出した手は？」

「今日はなんでもいうこと聞いてくれるんでしょ？ そういう約束だよな」 レイちゃんは約束を守る人だよなえ？」

「ぐ……う、く……」

俺はキャラルの左手を握る。

それは女性特有のもので、とても薄い手だった。そしてあろうことか、このアホピンクは指を絡めてきたのだ。だが俺に抗う術はない。自分でそう約束したのだから。

「へへへ！ カップルみたいだねっ！」

「おい！ それはやりすぎだろう！」

「な・ん・で・も、だよな」

「ぐ、ぐううう……」

悪魔との取引はこういうことなのだ。俺はもちろんこの未来を分かっていた。キャラルもまた、俺が分かっていることを理解している。だからこそその行動。俺が文句を言いつつ、受け入れてくれると分かっているのだ。

キャラルは言動はイかれているが、実際はかなり頭がキレる。そ

れこそ魔術師の中でも屈指の頭脳の持ち主だ。師匠もまた、研究者としてのキャロルを認めているほどに。

そんな彼女はすべて分かった上で、俺にこのような行動をしているのだ。

「じゃ、行こうかつ！」

「ああ……」

「なんだか昔を思い出すね」

「ああ……」

そうして俺たちは街の喧騒の中へと消えていく。

ああ……願わくば、今日という日が無事で終わりますように……。

「カップルなんで、このカップルメニューでお願いしま〜す」

「まあ！ 美男美女ですね！ とてもよくお似合いですっ！」

「えへへ〜 ねえ、レイちゃん！ お似合いだって！」

「……もう、好きにしてくれ」

二人で入った喫茶店はあるところか、カップルメニューというものを導入していた。それを注文して店員もまた俺たちがお似合いだと言ってくる始末。

ああ……もう本当に、色々と諦めた。しかしこの一日を耐えきれば、大丈夫だと言い聞かせて俺はなんとか精神を保つ。

腕を絡ませてきているキャラルは、なぜか向かいの席ではなく隣の席で依然として腕と手を絡ませてきている。

俺はもうどうにでもなれと、半ば諦め気味に虚空を見つめる。

「こちら、カップルパフェになりま〜す」

「わ〜 美味しそうだね〜」

「ああ……」

そしてキャラルはパフェをスプーンで掬うと、俺の方に向けてくる。ニコニコと笑いながらも、それは有無を言わさない。絶対に食べるという意志がキャラルの双眸には宿っていた。

「あ〜ん」

「……」

「レイちゃん、あ〜ん」

「……あーん」

俺はキャラルによって運ばれたそれを口に入れると、とりあえず飲み込む。

今の俺に、拒否権は……ない。

「美味しいよね〜」

「ああ……」

味などしなかった。ただただ無味だった。俺はあまりの精神的なダメージにより、すでに味覚を失っていた。

その後もキャロルと運ばれて来るものを食べながら話していると、彼女は急に俺の腕から離れて向かいの席に座り始める。

その様子は今までと異なり、張り詰めた雰囲気醸し出されていた。

「ね、レイちゃん」

「どうした、急に」

「その、さ。あ後は、元気だった？」

「……極東戦役の後か？」

「うん。本当はね、もっと早くレイちゃんに会いたかった。でもね、その……最後の作戦は私が立案したから……さ。その……ね」

「キャロル。いや、そんな……」

極東戦役での最後の作戦。あれはまさに地獄だった。キャロルは作戦指揮官として優秀だった。だがあの時は、敵に裏をかくれてしまい完全に包囲されたのだ。キャロルに非はない。あの戦況は誰であつても予想不可能だった。それがどれほど優秀な指揮官であつたとしても。

そして俺と師匠、それに他の魔術師たちでその地獄のような戦場を戦い抜いた。犠牲も多く出た。数というものは戦争において圧倒的だ。そしてついに師匠が下半身を撃ち抜かれた瞬間、俺は魔術領域暴走を引き起こしてしまい……今に至るということだ。

キャロルはその負い目から俺に会うことはできなかったと、そう言っているのだ。

「もちろんね。真っ先にリディアちゃんには謝ったの……でもその、

レイちゃんには会う勇気がなくて……ごめんね。そうだったのは私のせいなのに……その……ずっと、ずっと謝りたくて。だからね、今日は来てもらったの。ごめんね、時間がかかって。本当に、本当にごめんね……」

「キャロル……」

見ると、キャロルはポロポロと涙を流し始めていた。

あの戦争で俺たちは多くのものを失った。でも、失わずに済んだものもある。

それに俺は別に魔術領域暴走を誰かのせいにする気などない。

これは全て、俺の未熟さが招いたことだ。

あの時に感情を爆発させ、全てを殺し尽くすという殺意に飲み込まれた俺の責任だ。

思えば、キャロルはずっと会いに来なかった。養生している間は、ずっと今の家族と師匠と会っていた。たまにアビーさんには会ったりもしたが、キャロルとは会うことはなかった。

しかし、そういうことだったのか……と俺は得心する。

キャロルはいつもおかしい言動をしているが、それは決して感情を抱いていないというわけではない。

彼女もまた、あの戦争での古傷を残したままなのだ。

「キャロル。あれは俺の責任だ。俺が未熟だったから、魔術領域暴

走を起こしたただけだ。だからもう泣かないでほしい。俺はキャロルのせいだなんて、思っではいいない」

「うん……レイちゃんは優しいね。ずっと、そうだった……」

「キャロル。俺もお前も多くのものを失った。でも今はこうして生きている。俺はそれだけで十分だ」

「うん……うん……そうだね。ありがとう、レイちゃん」

溢れ出る涙を拭いにこりと微笑むキャロルは、少しだけいつもより魅力的に見えた。

「うん……ん……ん？　ここはどこだ？」

目が覚めると俺はベッドの上にいた。

なぜだ　？

なぜ俺はここにいます？　そもそもあの喫茶店を出て、キャロルと二人で買い物してからディナーをとった。その後は、各々自宅に戻るはずだったが……。

いや待てよ、思い出すと……そう言えば、キャロルのやつがホテルに行こうと言い始めたのだ。

もう夜もいい時間だからと、ちょっと休んで行こうと。

流石にそれはヤバいと思って俺は逃げ出したはずだが…… そうだ。思い出した。

あの瞬間にはとつても可愛い私キャロル・イン・ワンダーランドの不思議な世界が発動したのだ。

アメリカといい、キャロルといい、こんなに気軽に固有魔術オリジンを使うなど言いたいところだが…… キャロルがいない。

それに俺もまだ頭痛がして、満足に体を動かすことができない。

「……この音は？」

聞こえるのは水の音だ。きっとシャワーを浴びている音に違いない。そしてキュッと音がして、水の音が消え去ると扉が開いて誰かが俺の元へと近づいてくる。

薔薇の香りを漂わせながら、その圧倒的な存在が俺のそばへとやってくる。

「レイちゃん……」

「あ……は！？ お前、まじか！？ まじなのか！？」

「あの時は無理やりだったけど、今日はその……いいよね？ レイちゃんも私を受け入れてくれるんだよね？ なんでも、だよね？」

「おいおいおいおいっ！？ なんでもとは言ったが、流石にこれはマズイだろうっ！？ 教師と生徒だぞっ！！」

「もう、ツンデレさんなんだから それに禁断そその関係も、唆るよね？」

と、ベッドに足をついて俺の胸へと体を預けてくるキャロル。バスタオル一枚だけを身につけ、その豊満な胸は今まさに溢れそうな

ほどであった。

女性特有の匂いが鼻腔を抜け、さらにはそのしつとりとした肌が触れる。完全に密着している状態だが、力が入らない。おそらく、イン・ワンダーランド キャロル・とつても可愛い私の不思議な世界の効力が残っているのだろう。

クロノスロック 体内時間固定を解除している状態ならばまだしも、今の俺はキャロルの固有魔術に抗う術はない。流石に思考の誘導まではしていないようだが、完全に身体が言うことをきかない。

これは非常に、過去最高にマズイぞっ！！

いつもの戯けた様子とは違い、完全にその身に大人の色香を宿しているキャロル。確かにキャロルは美しい女性ではあるが、これでもかと異性であることを意識したのは初めてだった。

いや、この状況になってしまえば意識しない方がおかしい。

そして妖艶に微笑みながら、俺の耳元にその赤い唇を近づけてこ
う告げる。

「レイちゃん、ね？ 卒業したところ？ 私が優しくしてあげるから、さ……」

「ぐ、うううううう、動けええええええっ！！」

「レイちゃん……」

「う、うわああああああああああっ！！」

う、動かないっ！

迫り来るキャロルの唇を拒むことができないっ！ それに完全に

バスタオルを脱ぎ捨てたキャロルは、一糸もまとわない姿のまま俺を押し倒してくる。豊満なそれは俺の体に密着し、その美しい造形の顔が徐々に迫ってくる。

お、終わった……。ああ。俺はきつと今日ここで、全てを終えるんだ……。

そう覚悟を決めている最中、ドアがものすごい勢いで吹っ飛んだ。それは窓ガラスに突き刺さり、パラパラと破片が室内に零れ落ちる。

「間に合ったようだなっ！ 大丈夫かつ！ レイ！」
「し、師匠っ！！」

そこにやってきたのは、師匠だった。しかし今日はカラーさんはいなく一人で車椅子を押してきたようだが……俺は思わず嬉しくて涙を流していた。

いつもはゴリラにしか見えない師匠だが、今日ばかりはその姿は英雄としか思えなかった。

「……リディアちゃん。もう、いいところだったのにい。今日はレイちゃんも受け入れていたんだよ？ 合法だよ？」

「嘘つけっ！ 嫌がっているだろうっ！ レイ、待っている。このアホピンクは私が殺す！」

「ふんっ！ 絶対にレイちゃんの童貞は私がもらっもんっ！」
「フハハ！ 振り返ちにくれるわっ！」

そしてキャロルと師匠が本気で魔術戦を繰り広げる。

この部屋が崩壊するなどというレベルではなく、このホテルそのものが壊れるのではないかという勢い。

俺は身動きが取れないベッドの上でそのあまりにも過酷な死闘を、震えながら見つめていた。

その後、通報があったのか、やってきたのは魔術協会の治安維持を担当している人間とアビーさんだった。

俺は手厚く保護されると、そのままこの場はアビーさんが鎮圧した。いかにキャロル、それに師匠といえどもアビーさんの魔術の前ではなす術もなく二人は大人しくなった。

「あ、アビーさあん……」

「よしよし、怖かっただろうレイ」

俺はアビーさんに抱きつくつと、そのまま頭を撫でてもらう。

一方で、キャロルは全裸のまま頭からベッドに突き刺さり、師匠は地面にうつ伏せに寝転んでいた。二人ともすでに意識はなく、完全に気絶している様子だった。

「さて、と。レイ。お前は帰るといい。私はこのアホ二人を叩き起こして、説教をするからな」

「はい。助けてくださり、ありがとうございました」

「気にするな。さて、こいつらはどうしてやるつか……」

その後、キャロルと師匠がどうなったのか。俺は知らない。

本日の教訓。

安易な約束は、決してしてはならない。

第82話 魔術協会へ

魔術協会。

そこは世界中の魔術師を管理している組織。ほぼ全ての魔術師はこの魔術協会の会員であり、それぞれが魔術師としての地位を保証されている。

と言っても、協会に所属していない魔術師も当然いる上に、所属していたとしても顔を出さない者の方が多い。むしろ協会の集まりにやってくるのは上位魔術師、または貴族の人間が多いとのことだ。

俺は今まで一度もこの魔術協会にやってきたことはないのだが、当代の『氷剣の魔術師』ということで会長に招待されていた。ちなみに会長とはすでに顔合わせはしているので面識がある。

七大魔術師はこうして毎年夏と年末のパーティーに招待されるらしいが、全員が揃うことはない。

アビーさんやキャロルはよく出席している一方で、師匠は面倒だということと来ないことの方が多かった。しかし、今回は流石にそろそろ顔を出した方がいいだろうということで、今は師匠、それに彼女の車椅子を押しているカーラさんと共に俺は魔術協会に向かっていた。

「魔術協会に行くのは初めてですが、実際はどうなんですか師匠」

「……まあ面倒だな。特に貴族が多くやってくる。あいつらは協会に色々と金を出しているから。だがまあ……別にお前が氷剣だと周りに言う必要もあるまい。会長とその他の奴らにテキトーに挨拶をしておけばいいさ。あとはうまい飯を食うだけだな」

「なるほど。勉強になります」

「ま、レイは大人の中は慣れているだろうから心配していないがな」
「そうですね」

また、今の俺の服装は学院の制服だった。

其れなりの服装をせねば成らないのだろうと気負っていたところ、学生の正装は制服だろうと、師匠が珍しくまともなことを言ったからだ。

師匠はラフにシャツとロングスカート。髪は今日はカーラさんにしてもらったようで、後ろで三つ編みに結ったものを円状にまとめられている。カーラさんはいつものようにメイド服を着ている。

魔術協会は王国の中央区にある。その中でも、一番中央にある王城のやや北のほうに位置している。建物自体はかなり大きく、王城ほどではないがこの王国内で二番目に大きな建物だろう。

真っ白な外壁がよく目立つ場所だ。

そして俺たちは魔術協会へ続く通りに入ると、周りには疎^{まば}らだが魔術師の数が増えてきたように思える。

「そういえば師匠は昔からよく参加していたのですか？」
「ん？ まあ……それこそ気分次第だな。アビーに絶対に来いと言われた時は行っていたが、後は行かないことの方が多い。それに七

大魔術師は来ないやつの方が多いからな。アビーのようにほぼ毎回出席しているやつの方が珍しい」

「……確かに七大魔術師の面々は、こういう集まりには顔を出しそ
うにありませんね」

「だろっ？ あいつらは軒並み頭がおかしいからな。来るはずない
だろう」

「……」

「おい、レイ。なんだその目は？」

「いえ！ なんでもありません！」

「そうか……ならいいが」

じつと半眼で俺の双眸を射抜いてくる師匠。その様子は明らかに、俺の内心を疑っているものだが口にしなければ問題は無い。そう……
ないのだ。

軒並み頭がおかしいのは、師匠も同じでは？ と言いたところ
だが俺はぐっところえた。

口は災いのもと。

余計なことは言わないに限る。師匠は自分のことを割と常識人だ
と思い込んでいる節があるので、下手に真実は告げない方がいいだ
ろう。

普通に考えれば、常識的な魔術師は街の中で魔術戦を繰り広げな
い。

この前のキャロルと起こした戦闘はすっかり頭から抜け落ちてい
るのだろうか？ 犠牲者こそ出なかったとは謂え、宿に多大なダメ
ージを与えて、ちょっとした騒動に成ったと思うのだが。

と、そんなことを考えながら進んでいると後ろから俺は思い切り抱きつかれる。

背中に柔らかい二つの球体が押し付けられると同時に、この柑橘系の香水をつけている人間の心当たりは一人しかいなかった。

「レイちゃん！ やっほー リディアちゃんもやっほー」

「キャラルか」

「おいキャラル！ 私のレイから離れる！」

「はいはい」

キャラルはそういうと、すぐに俺の隣に来て一緒に歩みを進める。

「キャラル、お前どうして来た？ 今年は仕事があると聞いていたが？」

師匠がそう尋ねると、キャラルはニコニコと笑いながらそれに応える。

「今年はレイちゃんが初めて来るということで、先輩として来ちゃいました」 でも流石、リディアちゃん！ 過保護だね」

「過保護ではないっ！ これは正當なものだ。私はすでに七大魔術師ではないとは言え、正式に招待されているからな」

そして師匠はおもむろに胸の中に手をつ込むと、招待状をキャラルにしたり顔で見せつける。いつも思うが、師匠はどうして胸元に色々と入れているんだろうか。そう考えて前に聞いたのだが、「便利だから」らしい。

男性の俺には分からない感覚だ。

「なるほどね〜 あくまでレイちゃんの付き添いは、つ・い・で
なんだね〜」

「そ、そうだつ！ 仕方なくついて来ているだけだつ！」

「え？ でも俺は一人でも大丈夫と言いましたか？」

「……お前がついて来て欲しいと言ったんだろ？ レイ、なあそ
うだろう？」

「……は！ そうでした！」

有無を言わせない視線で俺を見つめる師匠。それは、「正直に言
ったら殺す」と如実に物語っていた。

この時ばかりは逆らつてはいけないと、俺の本能が知っている。

俺はそうして普通に嘘をつくと、キャロルもこれ以上は何も言わ
ないのか急に話題を変える。

「あ！ そう言えばさ〜、レイちゃんのお友達でさ〜、アメリカち
やんいるじゃない？」

「ああ」

「彼女、多分次の七大魔術師の候補だね〜 三大貴族から七大魔
術師が生まれるのは久しぶりかも〜」

「アメリカ＝ローズか。レイがこの前に連れて来たときに会ったが、
まさか概念干渉系オリジンの固有魔術を有しているとはな。しかもあれは、
カオス理論セオリーのバタフライエフェクトが起源だろう。因果律に干渉す
る魔術は、これで二つ目か？」

「リディアちゃんのいう通りだね〜 概念干渉系オリジンの固有魔術がま
た出て来るなんて、すごいよ〜」

二人がそう話しているのを聞きながら、俺は思い出していた。

そうだ。確か因果に干渉する魔術を持っている魔術師はもう一人いる。俺はまだ直接会ったことはないが、七大魔術師の一人であるはずだ。

しかし、確かに……アメリアの因果律蝶々バタフライエフェクトはそれだけのポテンシャルはあるだろう。今はまだ早いと思うが、二十代になる頃にはアメリカも七大魔術師として名を連ねているかも知れない。

まあまだ未熟なところはあるので、俺もそれはサポートしていきたいと考えているが。

「さて、と。到着　じゃあ、リディアちゃんはキャロキャロと行こうね」

「は！？　どうしてだ！？　レイを一人にしてどうするつもりだっ！」

「私たちは軍人時代の縁で挨拶があるでしょ　それにレイちゃんも一人で大丈夫だよな？」

「もちろんだ。では師匠、キャロル、それにカーラさんも。また会いましょう」

「うん！　バイバーイ！　レイちゃん！」

「れ、レイっ！　気をつけろよっ！」

「レイ様。失礼します……」

そうして師匠達は先に協会の建物内に入ると、別のところに向かってしまったので俺はとりあえず流れに従ってパーティー会場へ向かう。

内装を見ると真っ白な壁は新しいようで、百年以上前から存在しているとは思えないほどだ。

おそらく、ここ数年の間で大幅な内装工事でもあったのだろう。

俺はそんな現代的な内装に少し感動しながら一人で案内を見て進んでいると、見知った二人の顔を見つけた。

黒髪ロングの艶やかな雰囲気の女性。それと美しい純白の髪を持つ女性。そう、その二人とはブラッドリー姉妹だった。

「レベツカ先輩。それに、妹のマリア嬢も一緒でしたか。これはこれは、ご無沙汰しております。二人とも麗しいお姿で」

「レイさん、こちらこそお久しぶりです。それにしても、レイさんもご招待されていたのですか？」

「ええ。ちょっとした伝手がありました」

「そうでしたか。あら？ でも、どうしてマリアの名前を？」

「あ、えつとその……お二人は三大貴族として有名なので、以前から存じておりました！」

「なるほど。そうだったのですね」

今更思うが、俺は一般^{オーディナリー}人出身なのでここにいるのは場違いだと思われるだろう。

レベツカ先輩には俺が氷剣の魔術師であると言っていないしな。別に伝えてもいいのだが、ここでは問題があるな……と考えて今回はぐらかしてしまう。

そして、レベツカ先輩の後ろにササッと隠れたマリア嬢が俺のことをじっと見て来る。

「マリア、ご挨拶して下さい。あなたの先輩になる人ですよ」
「……」

そう言えば、俺は以前にマリア嬢に出会っているので普通に知り合い感覚で話しかけてしまっていたが……そうか。あの時は俺はリリース＝ホワイトとして出会っていたのだ。つまり、マリア嬢はレイ＝ホワイトのことは知らない。

だからこんなにも警戒した様子なのだろう。

「……マリア＝ブラッドレイ」

ブスツとした顔で俺と目を合わせずにそう言って来るマリア嬢。

なるほど、いつもはこのような感じなのか。

そして俺も挨拶を交わす。

「レイ＝ホワイトだ。レベッカ先輩には大変お世話になっている。マリア嬢とも是非、仲良くできたらいいと思っている所存だ」
「……ふんっ！」

プイツと横を向いてしまうマリア嬢。それを見て、レベッカ先輩は苦笑いをしながら俺に謝罪をする。

「もう、マリア。ちゃんとしないとダメですよ。申し訳ありません、レイさん」

「いえ。自分は気にしておりませんので」

「あ！ そう言えばちょっと用事があるのを思い出しました。すい

ません、少し席を外しますね。もし良ければ、マリアとお話して
て下さい」

「わかりました」

レベツカ先輩は何か思い出したようで、タタタと逆方向へ走り去
ってしまふ。

そこで残された俺たち二人。

パーティー会場に二人で向かってもいいが、マリア嬢はなぜか俺
の顔をじつと見つめていた。

「あんたさあ……」

「なんだろうか」

「お姉ちゃんのこと、狙ってないの？」

「狙う？ なんのことだ。俺は暗殺の類は考えていないぞ」

「は？ んなわけないじゃん。バカなの？ 私、知ってるの。お姉
ちゃんがめちゃくちやモテるの」

「それはそうだろう。レベツカ先輩はとても魅力的な人だ。異性同
性ともに人気があるのは俺も知るところだ」

「……ふーん。なんか、あんたは違うのよねえ……男って大体お姉
ちゃんに色目使うけど、あんたはそれがないっていうか……もしか
して、恋人でもいるの？」

「いやいないが」

「それであの態度なの？」

「ああ。レベツカ先輩は俺の尊敬する素晴らしい先輩。敬意を持っ
て接しているだけだ」

「ふーん……それに、私の容姿にも全く驚いていないし」

以前会った時のように、相変わらずマリア嬢の純白の髪と真っ赤な双眸は美しいままである。耳にしているピアスも敢えて見せているようで、とてもお洒落に気を使っているのが伺える。

「まあ知り合いにもいるからな。それに君の純白のその姿はとても美しい。特にそのピアスは自分でやっているのか？ よく似合っていると思う」

「は？ 私に色目使ってるの？」

「いや、純粹なる感想だ。女性のお洒落は手間と時間をかけているのは理解している。それを褒めるのは当然だろう。特にピアス関係は化膿する可能性などもあるから、管理が大変だろう。それだけの数を維持しているのは感嘆すべきものだ」

「なんか……変わってるね、あんた」

「よく言われる」

「……そう言えばさあ、なんか見覚えあるのよねえ。妙に親近感あるというか……」

「……」

冷や汗が垂れる。きっと彼女が見据えているのは、女装した俺ことリリーのことだろう。そしてマリア嬢は得心でもしたのか、「あ！」と大きな声を上げる。

「待つて！ もう一度名前教えて！」

「……レイ＝ホワイトだ」

「！もしかして、リリーお姉様の兄妹！？」

「……そ、そうだ」

俺は咄嗟にそう嘘をついてしまった。

今はこうするしか方法はない。

先ほどまでとは打って変わり、マリア嬢の声はワントーン上がり、その双眸も輝きを増しているからだ。

こんなに嬉しそうな顔をしているのに、あれは俺が女装している姿などと誰が言えるだろうか。そんな夢をぶち壊すような真似は俺にはできない……。

「お、お姉さまの兄ってこと？」

「ま、まあそうだな……リリーはその、双子の妹だ。ただ病弱な面があつてな。あまり外には出ることができないんだ」

「へえ……そうなんだあ。お勞しいわね、お姉様」

「ま、まあ気持ちだけは受け取っておこう」

「それで妙に似ていると思ったのよねえ！ それならそうと早く言いなさいよっ！」

急に距離を詰めて来ると、笑いながら背中をバシバシと叩いて来るマリア嬢。先ほどとはまるで別人のように、彼女は俺に対して一気に距離を詰めて来る。

「男は嫌いだけど、特別にマリアって呼ぶことを許可するわっ！

私もレイって呼んであげるから！」

「ああ。だが君はその……いや、マリアはあれだな。レベツカ先輩とは全く逆の性格のようだな」

俺がそついうと、彼女の顔には少しだけ陰が差す。

「ん？ まあ、お姉ちゃんはお淑やかだよな。腹黒くもないし、本当にいい人だと思うよ。でも私はね。お姉ちゃんと比較されてき

たからね。それにこんな容姿だしさ。性格歪むのも仕方ない？」

あはは、と自虐気味に笑いながらそう告げるマリアはどこか寂しそうな雰囲気を漂わせていた。そして俺は同情からではなく、純粹に思ったことを口にする。

「いや、容姿は神秘的で美しい上に、性格は正直でいいと思うが。

何も問題はないだろう。逆と言ったのは、純粹な意味だけで別に揶揄してはいないさ。姉妹揃って外見も内面も美しいと思っただけだ。レベツカ先輩に似て、マリアもとても魅力的な人だと俺は思う」

「……あっそ！　じゃ、行きましょっ！」

「ああ」

プイツと顔を背ける彼女は少しだけ顔が赤くなっていた。それは純白な姿をしたマリアだからこそ目立つものだが、純粹に俺は微笑ましいと感じた。

こうして俺たちは、パーティー会場へと進んでいくのだった。

第83話 まさかの邂逅

マリアと一緒にパーティー会場に入る。

中に入った印象としては、やはりそれなりに豪華な装いになっているなと思った。

それぞれ複数のテーブル席が用意されており、そこにはすでに食事と飲料が用意されていた。また内装は赤を基調とした絨毯が敷かれており、シャンデリアが天井から吊るされている。

俺はこのような席は初めてなのだが、やはり貴族たちが集まるといのは普通ではないと理解した。

「なかなか豪華だな」

「ま、こんなもんよ。じゃ、私は別に挨拶回りがあるから」

「また会えることを楽しみにしている」

「ふん……っ！ くれぐれも、リリーお姉様によろしくねっ！

いい！？ 私のことをしっかりと褒めて伝えとくのよっ！」

「あ……ああ」

マリアはそう言うと、会場の隅の方へと向かってしまう。うーむ。そのリリーは俺なので、すでに全て筒抜けなのだが……まあ仕方ないだろう。

さて、俺は誰か知り合いでもいれば挨拶をしたいが……。

まだパーティーは本格的に始まっていない。ということで中にいる魔術師はまだ少ないが、その中で一人テーブルの前でワインを嗜んでいる男性を見つけた。

あの人は。いや、間違いなくそうだろう。

俺は早足に近づいていくと、意を決して声をかけることにした。

「ファーレンハイト大佐。お久しぶりです」

「ん？ すまない。どちら様であろうか」

ポカンとした表情を浮かべる男性。

ワイングラスをテーブルに置くと、そのまま俺の方へと体を向ける。

そして俺は、自分の名前を告げるのだった。

「レイ＝ホワイトです。ご無沙汰しております」

「レイ？ いや、待てよ……あのレイなのか!？」

「はい。お久しぶりです」

「おお！ あのレイがまさか学生をやっているとは！ いや話には聞いていたが、こうして実際に見てみると印象がかなり違うな！ 元気にやっているのか？」

「はい。大佐殿も、ご健勝そうでなによりです」

「ははは！ まだ若い奴らには負けていられないさ！」

握手を交わす。

真っ黒な髪を刈り込んでおり、その体軀はそれなりの厚みがある。身長は俺と同じくらいで、顔にはシワがいくつかが刻まれている。それに右の頬には大きな傷跡も残っている。

しかしもう五十代に差し掛かろうと言うのに、大佐はまだまだ元気そうであった。

ヘンリック「ファールンハイト大佐。

俺が軍人時代にお世話になった魔術師の一人だ。極東戦役では同じ部隊に所属し、幾多もの戦場を共にした。もちろん魔術師としての技量は抜群であり、七大魔術師の次点には来るであろうお方だ。

ファールンハイト大佐にも、とてもお世話になったのはもう懐かしい記憶だ。それほどまでに時間が経過してしまった。

会ったのは俺が退役してから、つまりは三年ぶりになる。

誰かしら知り合いに会えると思っていたが、まさかファールンハイト大佐に出会うことができ俺は心から嬉しかった。

「どうだ、レイ。学院での生活を謳歌しているか？」

「は。友人にも恵まれ、満足のいく生活を送っております」

「そうか…… あんなにも小さかったレイがもう、学生か」

「その節は大変お世話になりました」

頭を下げる。

すると大佐はふふ、と微笑みながら俺のことを微笑ましい表情で見つめてくる。

「いや、こちらもレイには世話になった。しかし、魔術領域暴走はオーバーヒートどうなんだ。良くなっているのか？」

「魔術領域暴走はわずかにですが、良くなっています。時間はまだかかりそうですが。それに当時と比べれば、能力も戻りつつありますね。しかし自分の場合は、魔術領域暴走オーバーヒートだけでなくアレもありますので」

「ああ。誓約か……それは仕方ないな。だが……そうか。それはよかった。レイのことは……色々心配していたからな。それにリディアのこともある」

「……ご心配ありがとうございます。師匠も元気です。それに、最近はよくキャロルと喧嘩をしてアビーさんに怒られているようで……」

「ははは！ 変わらんなあ、あの三人も」

その後は軽く雑談をしてから、大佐は別に挨拶があると言ったこと
でここで別れることになった。

それに周りからの視線も気になり始めた頃だ。一介の学生に過ぎない俺が、どうして軍人……その中でも今となって極東戦役で成果を上げ、有名となっているファールンハイト大佐と言葉を交わしているのかと。

それを大佐も理解しているようで、最後に言葉を交わす。

「レイ、また会えることを楽しみにしている」

「自分もです。それでは、失礼します」

「ああ。ではな」

その場で一礼すると、大佐は右手を軽く上げて別の場所へと移動していく。

あの人も変わらないな。

そう懐かしさに浸っていると、後ろから聴き慣れた女性の声が聞こえた。

「レイ！ どうしているのっ！？」

幾度となく見慣れた制服姿のアメリア。今日は髪をアップにしているようで、後ろの方で長い髪を低い位置で結っている。彼女が髪を上げているのは初めて見るので、いつもと印象が違うがよく似合っている。

そんな彼女の顔は驚愕に染まっていたが、どこか嬉しそうに俺の側へとやって来る。

「アメリア。その髪型、よく似合っているな」

「あ、ありがとう……っ！ それよりも、何でここにっ！？」

「まあ今年は顔を出しておけと言われてな。一応、師匠と一緒にやってきた次第だ」

「あ、そっかあ……レイって……」

氷剣だもんね、とアメリアは口にはしなかった。

そう言うつもりだったのは分かっていたが、流石にこれだけ大勢の人がいる中では誰かに聞こえるかもしれない。それを考慮して、

アメリカは言わなかったのだ。

「アメリカは毎年来ているのか？」

「うん、そうだね。毎年ものすごく面倒だけど、今年はその……嬉しいというか、楽しいというか……」

「どうしてだ？」

「それはその、レイに会えたから……かな？」

上目遣いで俺の様子を伺うようにして、その紅蓮の双眸が俺を見据えてくる。

そうか。確かにここで友人に会えることはあまりないからな。きつと俺と同じ気持ちなのだろう。

「そうか。俺もここで友人と出会えて嬉しいと思う」

「……はあ」

あからさまにため息をつくアメリカ。そんな様子を見て、俺はどうしてため息をつくのか理解できなかった。もしかして、この後に嫌なことでも待っているのだろうか。

「ん？ どうした？」

「いや、なんでもないですよー」

不機嫌になったのは理解できたが、その原因がわからない。これだけ仲のいいアメリカでも分からないことがあるのだ。俺もまだまだだな、そう考えているとさらに友人がこちらにやってくる。

「レイ！ どうしてここにいますのっ！？」

「アリアーヌ。久しぶりだな」

アリアーヌ^{II}オルグレン。

彼女もまた、驚いた様子で俺たちの方へとやってくる。

アリアーヌもまた、アメリアと同様に今日は髪をアップにしておめている。彼女は三つ編みにした髪を左右にまとめているようだったが、やはりよく似合っている。

「ええ。でもその……あなたは一般人出身でしょう？ その、こう言っては失礼ですけど、どうしてここに？ それに先ほど、ヘンリック^{II}ファールンハイト大佐と楽しそうに談笑していましたけど……？」

「あー。その、まあ……色々と伝手があつてな」

「伝手、ですか？」

「あ、ああ……俺の保護者のような人が元軍人でな。その繋がりだ……」

「ふーん。そうですねえ……ふーん。元軍人ですか……」

じつとアリアーヌに射抜かれる俺はとても居心地が悪かった。アリアーヌは完全に俺のことを疑っているようだった。

別にアリアーヌに俺が氷剣であることは言ってもいいのだが、場所が場所だ。

今後の学生生活のためにも、まだ氷剣であることは極力知られたくはないのでこの場はなんとか誤魔化すしかない。

「アルバートの件といい、アメリアの件といい、それにあの卓越し

た女装技術……レイってば、何者ですか？ 本当は一般人ではない、とか？」

「いや誓って俺は一般人出身だ。魔術師の家系ではない。突然変異的な存在だな」

「そうです。でも、まだ何かある気がしますのよねえ……」

「ぐ、うう……いや、その……」

流石の俺もアリアーヌの追及に圧倒されていると、アメリカが助け舟を出してくれる。

「アリアーヌ、あんまり人の過去を詮索したらダメよ」

「アメリカ……そうですわね。レイ、申し訳ありませんわ。謝罪いたします」

「いや。別に構わないさ」

その後は三人で他愛のないことを話した。

特にアメリカとアリアーヌはこうして仲睦まじく話すことがとても久しぶりということで、二人でとても盛り上がっていた。その際に、互いの昔の恥ずかしい話などを聞いていたが、純粹にそれは微笑ましいと思った。

そしてこのままパーティーも、恙無く進行していくと思っていたが……。

「レイ？ もしかして、レイなの！？」

会場内に響き渡る一人の若い女性の声。

それは明らかに俺の名前を呼んでいた。そして俺はその声に聞き覚えがあった。いや、俺だけではないだろう。この王国内でも屈指の有名人の彼女は、おそらくこの場にいる貴族ならば誰もが認知しているに違いない。

「レイ！ やつぱりレイだ！ やつとボクに会いに来たのっ！ そうだよなっ！」

「……いえ。今日はその、所用で来たのですが」

「？ もしかしてリディアの付き添い？」

「むしろ、師匠が自分の付き添いというか」

「？ あ！ あっちの件か！ 理解した！」

「はい。流石は聡明な、オリヴィア王女ですね」

「ふふーん！ もつとボクのことを褒めてもいいんだよ、レイ？」

「オリヴィア王女は聡明ですね」

「ふふ、そうでしょ？」

俺の背中にもたれかかるようにして、抱きついてくる彼女。そんな様子を、アメリカとアリアー又はぱかんとした様子で見ている。

しかしそれも無理はない。俺がいま言ったように、このお方はアーノルド王国の王族。

オリヴィア＝アーノルド第二王女なのだから。

王族との接点がなぜ俺にあるのか。

端的に言ってしまうば、過去にオリヴィア第二王女が誘拐された事件が生じた際に出会った。

それは表沙汰にはなっていないが、裏ではもちろん大騒ぎ。その時に、師匠の従姉妹の家で療養していた俺が、紆余曲折ありその事件の解決に一役買ったのだ。

それ以来、オリヴィア王女は俺に懐いているというか………なんというか。

実は前々から、彼女から王城に来て欲しいと招待状が送られているのは知ってた。だが時間が合わないというか、色々と都合が悪く今まで先延ばしにしていたのだ。

「えへへ。久しぶりに会えて、ボクも嬉しいよっ！」

ついには俺に完全に抱きついてペタペタと体を触ってくる始末。王族と言うこともあり、失礼な態度を取るわけにもいけないので俺はあるがままを受け入れる。

そんなオリヴィア王女は、言動は少し幼く見えるが、俺たちよりも一歳だけ年下である。

その銀色の胸まである艶やかな髪は、シャンデリアの光を綺麗に反射していた。

また、その碧を基調としたドレス姿はとてもよく似合っている。

オリヴィア王女は何と言っても、その対称的な顔が特徴的だ。人間は必ずと言っていいほど、歪みがある。だがオリヴィア王女は完全に対称的な顔をしている。

そのパツチリと開く双眸も、スツと通る鼻も、僅かに厚みのある

女性特有の艶やかな唇も、全てが左右対称。

王族は例外なく、圧倒的な美貌を兼ね備えているがその中でもオリヴィア王女は間違いなくズバ抜けていた。

「よし！ レイは今日からうちで暮らそう？　ね？　ボクと一緒にさっ！　もちろん、部屋は一緒だよ？」

「それは以前もお断りしたはずですが……」

「いやーだー！ レイと一緒にいいー！」

駄々を捏ね始めるオリヴィア王女。背中をバシバシと叩いてくるが、俺はただ受け入れるしかなかった。いつもそうだが、オリヴィア王女の対応は中々に骨が折れる。

俺はどうしたものかと思っていると、恐る恐るアメリカが尋ねてくる。

「あゝ、もしかしてレイとオリヴィア王女はお知り合いで？」

「お！ アメリカとアリアー又じゃないか！ ボク、気が付かなかつたよ！」

「あ、ははは……」

「で、その質問だけど……」

これは、まずい……と思ったが時すでに遅し。

オリヴィア王女の口からとんでもない発言がこの場で飛び出てしまふ。

「レイとボクは将来を誓い合った仲なんだよっ！」

「えええええええええええええええええ！？」

ああ……またいつものやつか、そう俺は辟易しながらパーティーは続いていくのだった。

第84話 彼と彼女の事情

「ええええええええええええ！？」

響きわたる二人の声。

それはこの喧騒けんそうの中でもはつきりと周囲に聞こえるほどであった。

「オリヴィア王女っ！ それは！」

「ええ。ボクとレイは将来を誓い合った仲でしょ？　ねえ？」

じつと俺の双眸を射抜いてくるオリヴィア王女。

この人は一見、能天気に見えるかもしれないが、これは全て計算尽くである。

オリヴィア王女は流石王族とでも言うべきなのか、人心を掌握する術はこの齡にして獲得している。それに、カリスマ性もある。オリヴィア王女には兼ね備えられた気品というものが存在する。

そしてそんな彼女が、この場で敢えて声を高らかにして宣言した
 ということは、そういうことなのだ。

つまりは、ここでアピールすることで既成事実に近いものを生み出そうとしている。

もちろん周りの人間は、オリヴィア王女のその言葉を聞いてざわ

つき始める。

「オリヴィア王女の、婚約者？」

「そんな人間がもっていたのか？」

「相手は？」

「誰だあれは……？」

「知っているか？」

「いや知らないな。アーノルド魔術学院の制服を着ているようだな……学生か」

「学生がオリヴィア王女の婚約者？ それに貴族でも見たことはないが……」

「貴族……なのか？」

「いやあれは……まさか、オーディナリー一般人じゃないか……」

周囲の人間が俺を見つめてそう言うてくるので、すぐにオリヴィア王女を捕まえると彼女を会場の隅の方へと連れていく。

「……オリヴィア王女」

「ん？ どうしたの？ ボク、何かした？」

「分かっているでしょうに……」

「ふふふ、レイがいつまでもボクのことを無視するからだよ？」

その相貌は妖艶な雰囲気纏っていた。不適に微笑む彼女は、ニヤニヤと俺の反応を伺ってるようだ。

これだからオリヴィア王女の相手は本当に大変なのだ……。

そう辟易しても起こってしまったことは仕方がない。

俺はオリヴィア王女にとりあえず釘を刺すことにする。

「……一応、俺が氷剣ということは伏せておいて欲しいのですが」「うんうん。それは分かってるよ?」

「それなら、あそこで婚約者というのはまずいでしょう。一介の学生が、オリヴィア王女の婚約者というのは」

「そうだね、まずいよね。ボクもそう思うよ? うんうん」

依然として、他人事のようにニヤニヤと笑いながらそう言うオリヴィア王女。

それはまるで、好きなおもちゃで遊んでいるかのような様子だった。

出会った時からこのような性格であることは把握していたが、まさかここまでしてくるとは予想もしていなかったので、俺はとりあえず事態の収集を図る。

「これからは手紙にもお返事しますので、どうかこの場では無茶なお言葉は言わないでください」

「ええ、本当にい? 本当にボクのこと無視しない?」

「はい。手紙も必ずすぐに返しますので」

「婚約は了承してくれないの?」

あからさまな上目遣いでそう尋ねてくるオリヴィア王女。だがそうされても、互いに譲れない一線というものがある。

互いの立場はそれほどまでにデリケートなものなのだ。

七大魔術師である氷剣と王族の第二王女。

公になつてしまえば、それはそれで問題になるだろう。

「それは……自分だけでなく、そちらの事情もあるでしょう」

「まあそうだけどさあゝ。レイのことは割と本気で気に入ってるんだよ？ それに氷剣なら誰も文句は言わないと思うけどなあゝ。ま、仮に文句言う奴がいたら……ボクが言わせないようにするけどね。ふふ」

妖艶に微笑むその姿は、まさに王女の裏の顔とでも言うべきか。

一見すればその愛らしい姿に惑わされてしまつたろう。だがオリヴィア王女は賢いお方だ。本当に他人に文句を言わせない術を心得ているに違いない。

本当に心の内が読めない人だ……そう思っていると、オリヴィア王女はさらに言葉を続ける。

「ま、いいや。ごめんね、レイ。ボクは久しぶりに君に会うことができ舞い上がったちゃったんだ。許してくれる……？」

「……」

瞳を濡らし、ウルウルとしたその双眸で下から見上げてくるオリヴィア王女。

これもまた計算ということは理解しているが、無下にするわけにもいかなないので俺はすぐに言葉を返す。きっと彼女も、俺が言う言葉は理解しているのだろう。

「分かりました。今後はくれぐれも、このようなことがないようにお願いします」

「はいはい！」

右手をスツとあげると、俺とオリヴィア王女はアメリカとアリア
ーヌの元へと戻っていく。

「あはは！　びつくりした？　冗談だよ、冗談〜！　レイとはちょっとした知り合いでね。驚かせたくて言っただけさ〜」

「じよ、冗談ですか……？」

アメリカがそう言うのと、オリヴィア王女はニコニコと笑いながら
それに応じる。

「うん！　今は、ね……」

「そ、そうですか……」

アメリカのことを半眼で見つめるオリヴィア王女。だがアメリカ
もまた、そんな彼女から目を逸らしはしない。と言うよりも二人の
雰囲気はただならぬものを感じるが、一体何かあったのだろうか。

「じゃ！　ボクはこれでっ！」

「で、では……わたくしも失礼しますわ」

その場で翻ると、オリヴィア王女はこの場から颯爽と居なくなっ
てしまう。それに伴って、アリアーヌも戸惑いながら移動していく。

いつも思うが、本当に嵐のような人だな……。

そして俺がそんなオリヴィア王女から視線を切ると、アメリカが
俺の近くに寄って来て、肩を乱暴にぶつけてくる。

「どうしたアメリカ？ そんな乱暴に」

「ベ・つ・に？ レイが誰と婚約してしようが、どうでもいいけど……ねえ！」

バシバシと肩を叩いてくるアメリカ。その声もまた、怒気が込められている気がした。

「ご、語気が強いと言うか……その俺は何か気に触ることをしたのだろうか……？」

「別に、ふんっ！」

アメリカの機嫌はそれはもう、最高に悪かった。今まで一緒にいた中でも、と言ってもまだ数ヶ月だが、アメリカは明らかに不快感を露わにしている。

こ、こんな時はどうすればいいのか……。

そんな風にオロオロしていると、一人。麗しい姿をした女性がこちらに近づいてくる。

ふと視線が交差する。その女性は紅蓮の髪をしており、その双眸もまた同じ紅蓮。一見すれば、若く見えるがその纏っている雰囲気は確かに年齢を重ねている人間にしか出せないものだとなった。

でもこの人は、そう……アメリカによく似ていた。

「あなたが、レイ〓ホワイトさんですか？」

「は。レイ〓ホワイトは自分であります」

「そうでしたか。ふふ、私はエレノラ〓ローズと申します。アメリカの母です」

「アメリカのお母様でしたか。いつもお世話になっております」

その場で恭しくお辞儀をする。周囲の視線がこちらも向き、さらに注目を集めてしまうが今更だった。こうなってしまうば、仕方ないだろう。

主に、あのオリヴィア王女のせいだが……。

「いえいえ。こちらこそ、娘が本当にお世話になっているようでねえ、アメリカ？」

「お、お母様！」

そして、握手を交わす俺とアメリカの母上。

アメリカとは異なり、物腰がとても柔らかい人だが、その見た目はかなり酷似していた。それは一見するだけで、血の繋がりがあるのが分かるほどに。しかし、この艶やかな雰囲気は大人にしか出せないものだろう。

「それで、なるほどねえ……あなたがアメリカの……」

「は。友人として学院では共に時を過ごさせていたでおります」

「見た目、それに振る舞いは合格ですね。でも、あなたは一般人出身なのですよね？」

「は。自分は魔術師の家系ではなく、一般人出身なのは間違いありません」

「そうですか。いえ、それはもともと知っていたのです。だと言うのにどうしてアメリカがあなたのことをそこまで褒めるのか。実力で言えば、うちの娘の方が優れているのは明白。アメリカはこれでも、魔術師の中では破格の才能を持っていますから。だからこそ……あなたの存在はどうにも、違和感を覚える。それで申し訳ないの

ですが、レイ＝ホワイトさん。あなたのことを調べさせてもらいました」

淡々と告げる、アメリカの母上。

それは感情が全くこもっていないく、ただ冷静に事実を述べているだけのよう思えた。

「……理解はできます。大切なご家族の周りに誰がいるのか、それを調べるのは重要でしょう」

「ええ。それで、分かったのですが……あなたが当代の」

「……」

「氷剣、なのですね？」

その言葉は俺とアメリカに聞こえる程度に、小さな声だった。

そしてアメリカの母上はそう告げると、依然として優雅な所作で微笑む。

「お母様、それは！ その……！」

「アメリカ。いいさ。いずれ、このような時が来ると分かっていたからな」

アメリカが何とか庇ってくれようとするが、それはもう無理だろう。

いずれにせよ、俺が当代の氷剣であることは分かることだ。別に絶対に隠し通すべきものではないしな。今はただ、平和な学院生活を送るためにそうしているだけだ。

貴族。

その中でも三大貴族にバレてしまうことは、時間の問題だと思っていた。元々上位の魔術師には俺の存在はすでに知られている。

つまりは俺が当代の氷剣であると言うことは、ある程度この魔術の世界に通じている人間ならば、調べてしまえば出てくる。

だからこそ、俺は毅然とした態度でアメリアの母上に応じる。

「改めて自己紹介を。当代の氷剣の魔術師である、レイ＝ホワイトと申します」

「ふふ、なるほど。いいですね。私、あなたのことをとても気に入りました。アメリアにも言っておりますが、是非ともうちの家でもっと詳しくお話を聞かせていただきたいのですが……よろしくて？」

「それはアメリアにも以前からお誘い頂いていたので、自分としても是非ともご招待に預かりたいと思っております」

「……ふふ。そうですね。ではまた会いましょう。レイ＝ホワイトさん」

「はい。それでは、またお会い出来るのを楽しみにしております」

その場で深く一礼をすると、この場には俺とアメリアだけが残った。

だがどうにもアメリアは顔を真っ赤にして、俯いている。どうかしたのだろうか。

「アメリア。いい母上だな」

「えー？ ま、まあそうだけど……そのちょっと恥ずかしいって言うか、お母様ってば……すごい上機嫌で」

「上機嫌？ 確かに不機嫌ではないみたいだったが、そうなのか？」

「……ええ。レイのこと、気に入ったみたいね」

「それは嬉しい限りだ」

「う……それが問題なんだけどね……」

「？ どう言う意味だ？」

「……いや、何でもないのよ」

俺とアメリカもまた、この場で別れることになった。アメリカの実家に向かう日はすでに決まっているので、次に会うのはその時になるだろう。

そして、俺はこのパーティーで最後に挨拶すべき人の元へと向かう。

第85話　いつかその先の未来

パーティー会場のさらに奥にある扉。俺はそれを軽く三回ほどノックすると、室内から声が聞こえてきた。

「入って構わない」

「失礼します」

中から男性の声が聞こえると、ゆっくりと扉を開けてそのまま室内に入っていく。

こちらはパーティー会場とは異なり質素な雰囲気だった。長めのテーブルを挟むようにして、ソファアが向かい合うように並んでいる。

テーブルの上には二人分のティーカップが置いてある。それはこの鼻腔を微かに抜ける匂いから、紅茶だとわかった。

そしてそのソファアに座っていた男性はスツと立ち上がると、俺の方を向いて顔を綻ばせる。

「レイ！　久しぶりだな！」

「会長。申し訳ありません。協会に赴くのが遅くなってしまって」「いやいや、構わないさ。もともと、七大魔術師は来る方が珍しいんだ。こうしてレイが来てくれるだけでも、私は嬉しいよ」

黒と白が混ざった灰色の髪をオールバックにまとめ、黒を基調と

したスーツを着た男性。身長は175センチほどだが、まだ体にはしつかりとした厚みが残っている。そんな俺を出迎えてくれるのは。

魔術協会、会長。

名は、グレッグ・アイムストーン。

三大貴族の家系でこそないが、上流貴族に名を連ねる方で、俺は過去に何度か交流があった。その時に色々とお世話になったのだが、こうして実際に会うのは数年ぶりだ。

「さてレイ。七大魔術師として、どうだ？　もう三年にもなるだろう」

「そうですね。もう三年も経過したのだと思うと、時間の経過が早く感じますね」

「そうか……当時は氷剣を継ぐ魔術師がいる、とリディアに言われた時は驚いたものだ。まだ十二歳の子どもが、七大魔術師を継ぐとは前代未聞だったからな。もともとレイの存在は、裏ではまことしやかに囁かれていた。あの氷剣に弟子ができたとな。それがまさか、今となつてはあの氷剣になつているとは……」

「懐かしい話です。私としては、よく協会が認めてくれたものだ」と

俺がそう言うと、会長は少しだけ思案するポーズをしてさらに会話を続ける。

「あの当時は、そうだな。リディアが負傷したことで、氷剣は七大魔術師から外すべきかと言う声が上がっていた。しかし、新しく七大魔術師になることができる魔術師はいなかった。七大魔術師は象徴だ。魔術師の頂点に立つものとして、欠けることは許されない。」

そこで、リディアからある提案がなされた」

「それが自分だった……ということですね」

「そうだ。元々、存在は知られていた。リディアが極東戦役で助けた少年を手元に置いているという話は協会の方にも来ていたからな」
「……」

当時のことを思い出す。

七大魔術師の引き継ぎ。それは今まで行われなかった前代未聞の事態だったからだ。

そもそも七大魔術師は引き継がれるものではない。それは七大魔術師の能力とは唯一無二のものであり、模倣するなど不可能と考えられていたからだ。

そのため七大魔術師が入れ替わる時は、自ずと全く別の魔術師になる。

そのような背景があるのに、あの氷剣が引き継がれるという前代未聞の出来事。

当時、師匠はそのことでかなり上から色々と言われたらしいと聞いている。そして俺は今の実家で会長を含めた、魔術協会の魔術師たちと会うことになり、そこからその能力を見極められて今に至る……ということだ。

「いや懐かしいものだ。あの時の少年が今はこうして学生をしているとはなあ……今となったから言えることだがね、当時の私は全くレイのことを信用していなかった、と言うよりもリディアは極東戦役で頭もやられてしまったのかと思ったものだ。元々、あいつはお

かしなところがあつたからな。そんな私は渋々向かつたのだが……君の存在は、魔術師の存在意義を覆すものだった」

「……恐縮です」

「いや、それほどまでに我々は驚いたのだよ。魔術師の家系でもなく、三大貴族でもない、一般^{オーディナリ}人出身である十二歳の少年が……まさかリディアの能力を全て引き継いでいるだけでなく、全く新しい魔術すら会得していたのだからな」

^{アンチマテリアル}「対物質コードは、師匠の教えがあつたからこそですが」

「だが、リディアは使えない。あれはこの世界でもレイだけの魔術だ。それは素直に感嘆すべきことだろう」

「いえ、自分は……」

「いや謙遜しなくてもいいさ。だが、レイ。今は学生ということでは氷剣のことはできるだけ伏せておくが、この先はどうするんだ？」

「この先、ですか」

「ああ。君の行く道は、我々にとっても無関係ではないからな」

思案する。

俺はこの先どうしていくのだろうか。

七大魔術師はそれぞれ自由奔放に生きているのは、師匠やキャラルを見ればよく分かる。アビーさんのように真面目な人もいるが、そちらの方が稀だ。

そのようなことを踏まえて、俺が思うのは……あの時にクラリスに話した内容だった。

「きっと自分は仮にこの魔術領域暴走が完治しても、軍人に戻ることはないと思います。魔術を自衛のために使うのは理解できます。しかしやはり……この手は、血に染まり過ぎています」

「……」

俺が淡々と語る言葉を、会長は真剣な眼差しで見つめてくれている。だからそのまま俺は、自分の想いを言葉にする。

「だからこそ思つのです。今度は、自分は魔術によって人を傷つけるのではなく、人を守り、そしてその成長を見守る立場になりたい。自分が師匠にしてもらったように、自分も誰かにとっての師匠のような人間になればいいと……そう思つのです」

「ならば、教師の道に進むのか？」

「今のところはそうですね」

「立派な心がけだ。レイは本当に素晴らしい人間に育ったようだ」
「師匠や、それに数多くの素晴らしい人が自分の周りにはいましたので」

「そうか……レイは恵まれたな」

「はい」

互いに一息ついて、紅茶に口をつける。

芳醇な香りが鼻腔を抜ける。俺はそのまま紅茶を流し込み喉を潤してから、カップを机の上に戻す。

そして、会長は新しい話題を切り出してくる。

「そうだ、レイ。一つだけ頼みたいことがある」

「なんででしょうか？」

「アメリカンローズについてだ」

バタフライエフェクト

「……因果律蝶々についてでしょうか」

「そうだ。すでにあの能力の詳細はこちらにも上がってきているが

……あれはいま確認されている魔術の中でも、世界最高峰のものだろう。それこそ、きょこう虚構と同等のな」

「自分も同じ認識です」

バタフライエフェクト
因果律蝶々

それは、この世界の因果律に干渉することができる固有魔術オリジン

今のアメリカの技量ならば、まだ脅威には値しないが……問題なのは、その制御だ。

あの圧倒的な能力を持つ固有魔術オリジンが暴走してしまえば、この世界にどのような影響が出てしまうのかが分からない。アメリカには自覚は薄いかも知れないが、それほどに強力な魔術だ。

俺もまた、自分自身の制御を失い魔術領域暴走を起こしてしまっオーバーヒートたが、アメリカには同じ轍を踏んで欲しくはない。

あれは成ったものにしか理解できないが、術者本人にも慢性的な痛みが伴い、地獄のような苦痛が続く。オーバーヒート俺も魔術領域暴走を発症した直後は、そのあまりの痛みは何度も気絶を繰り返し、堪え難い痛みにずっと耐えていた。

強力過ぎる能力には、それ相応の代価が伴う。

アメリカにはまだそのことについて詳しく言及していないが、いや恐らくは会長の口から語られるのだろうが、問題は彼女の日常的な生活の方だろう。

ということでは俺は会長が何を言いたいのか、すぐに理解した。

「それで、だ。レイは学院ではアメリカ「ローズと同じクラス。さらには友好的な関係を築いていると聞き及んでいる」

「その通りです」

「彼女が道を外してしまわないように、見守っていてほしい。おそらく数年後には、彼女もまた七大魔術師の候補に上がっている可能性が高いからな。ここで優秀な魔術師を失うのは惜しい」

「は。了解しました」

「すまないね。本来は我々のする仕事なのだが」

「いえ。自分も友人のサポートが出来るのでしたら、嬉しい限りです。率先して任務に当たります」

「いやこれは任務ではない。個人的なお願いさ」

「……そういうことでしたら、そのように理解しておきます」

「ああ。それでは時間を取らせてすまなかったね。また会おう、レイ」

「はい。本日は有意義なお話ができて、自分も楽しかったです」

二人同時に立ち上がると、握手を交わす。

そうして俺は恭しくその場で一礼をすると、この部屋を去っていくのだった。

パーティーは既に終わりを迎えそうだが、まだ談笑をしている魔術師は数多くいた。

そんな中、俺が協会を出ようと扉の方へ向かうと……いくつかの

視線が交錯する。

注目を集めているのは、間違いなかった。

今日の予定としては、目立つつもりなど無く、すぐに会長に挨拶をしてから帰る予定だった。そのために、会長には別室での面会を希望したのだ。

大佐との会話も、まだ人がほとんどいなかったので良かったのだが……問題はやはり、オリヴィア王女のあの発言。それにその後、アメリカの母上とも会話を交わした。あの場所で、魔術界でも有名な人物たちと交流したのは流石に目立つ。

既に、俺がただの一介の学生では無いと思っているものがほとんどだろう。

「……」

だが敢えて、俺は何食わぬ顔で歩みを進める。

その途中で俺の進路に出てくるのは一人の男性。

中背中肉であり髪は少しだけ白髪が混ざっているが、顔つきはまだ若そうに見える。そんな彼は、ニコリと微笑みながら話しかけてきた。

「君が、レイ＝ホワイトくんだね」

「はい。初めまして、レイ＝ホワイトと申します」

「私はブルーノ＝ブラッドリィ。ブラッドリィ家の現当主だ」

「これはご丁寧にありがとうございます。ご息女のレベル力様には

大変お世話になっております」

「はは。聞いているとも。面白い後輩がいると、娘がね」

その鋭い視線は、明らかに俺を探っているものだった。

おそらく貴族もまた一枚岩では無い。この様子からすれば、きっとレベツカ先輩の父上は俺のことを調べたのだろう。だが、まだ核心には……俺が氷剣という事実にはたどり着いていないのだろうか。

今の俺は、彼の真意を図りかねていた。

その人の良さそうな顔からは何も読み取れない。どうしてここで俺に接触してきたのか、その意図は不明だがここは最低限の挨拶はすべきだろう。

「なるほど。しかし、自分はまだ浅学な身の上。今後も精進していきたい所存であります」

「……まあ今日はそうしておこうか。また会えるのを楽しみにしているよ」

「はい。では失礼します」

悠然と歩みを進める。

それと同時に悟る。

三大貴族とは、明らかに他の魔術師と一線を画しているのだと。周りには俺のことを伺うような視線を向けている者がいた。しかし、レベツカ先輩の父上……ブルーノ氏が道を譲ることでその視線も徐々に外れていく。

まだ貴族の派閥関係は分からないが、確実に裏で何か大きな意志が蠢いている気がしていた。

「レイ、終わったか？」

「師匠。それにカーラさんも」

協会の外に出ると、待っていたのは師匠とカーラさんだった。カーラさんはいつものように一礼をするので、俺も返しておく。

一方の師匠は、疲れたような顔をしていた。

「師匠、お疲れですか？」

「ん？ まあ、な。久しぶりに来たからな。積もる話もあったが、面倒なので切り上げてきた」

「はは、師匠らしいですね」

「で、どうだった？」

並んで歩き始める。

車椅子に乗っている師匠はそう尋ねてくるので、俺は感じたことをありのままに話す。

「勉強になりました。ファーレンハイト大佐、会長にも久しぶりに会えて良かったです。しかし……」

「ブルーノに話しかけられただろう？」

せいてん へきれき
青天の霹靂。

この場合は、そう形容すべきだろうか。

俺は純粹に驚いていた。

師匠はあの場にはいなかった。だというのに、俺がブルーノ氏に話しかけられたのを知っていたのだ。

「師匠、なぜそれを？」

「最近は貴族の動きが怪しいらしくてな。派閥争いか、それとも別の何かか……分かつていることは、その渦中の中心にいるのは三大貴族の当主ということだ。三大貴族筆頭はローズ家。だが、ブルーノはブラッドリイ家の地位をさらに一段階上げようとしている……そんな噂がある」

いつに無く真剣な声で語る師匠。

その言葉を聞いて俺は内省する。

あの時の邂逅は、当然だが偶然では無いということか……。

「ま、氷剣であることはバレていないはずだがな」

「そうなのですか？」

「ああ。お前の情報は、カーラたちヘイル一族に任せてある。だが、あのローズ家のエレノーラには悟られたがな。全く、とんでもない魔女だ」

「……そうだったのですか」

「別に知られてもいいけどな。キャロルやアビーはオープンにしているし。しかしやはり、時と場合による。特に七大魔術師は、その一人だけで情勢を変えるだけの影響力がある。ま、そろそろ頃合いだな」

「……つまり？」

「お前も、覚悟を決める時だ。魔術師として生きるには、もっと世界を知る必要がある。強いだけじゃ、生きていけない。ということ、今から私の家に来い。そのことにに関して、色々教えよう」

「それはありがたいですが……」

「だがまあ、申し訳なかったな。本来なら、もっと早くにいうべきだったが……悠長に構えすぎたな。貴族と七大魔術師の関係は、実はかなり面倒なんだ。特に三大貴族から七大魔術師が出ていない現状はな」

「なるほど。学ばさせていただきます」

そして俺は師匠の家に向かい、そこで魔術師の内情を聞いた。だが、三大貴族のことはその深部までは分からないらしい。

それは諜報を生業としているヘイル一族であっても、知ることができないらしい。

師匠は言った　魔術師の世界は深淵に似ている、と。

知れば知るほどその闇に吞まれていき、その闇を抱えた上で生きていくしかない。と師匠は語った。

この先、俺は知ることになる。

強さだけでは立ち向かうことができないものが、この世界には存在しているのだと。

第86話 リディアの日常（前書き）

86話～88話まで三人称視点になります。

第86話 リディアの日常

「うつ……うつうん……」

リディア「エインズワースの朝は早い。

彼女の元々は完全な夜型である。研究の作業をするにも、夜の方が捗るのは自他共に認めるところだ。」

本来ならば情眠を貪り、そのまま昼まで寝ることを彼女は厭わない。だが、今年の四月からリディアは朝八時には目を覚ますようにしている。

それはとある理由からなのだが……。

「リディア様。起床する時間でございます」

「あと十分……」

「いつもそう言って、引き伸ばそうとしますがダメですよ」

カーラ「ヘイル。

リディアの元に住み込みで働いているメイドだ。カーラがこうしてリディアの元で働くようになったのは、ちょうど二年ほど前からだ。その際には色々あったのだが、カーラは現状に非常に満足して生活を送っている。

「うつ……ん……ねむ、眠い……」

「レイ様のところに行くのが遅れてしまいますよ」
「！」

魔法の言葉。

それをカーラは持ち合わせていた。

そう。それは、レイのことを口にすればいいだけだ。リディアは頑なに否定するが、実際のところレイのことが愛おしくて仕方がないのである。

今まではずっと一緒にいたので、割とレイのことを集^{たか}ったり、テキトーなこと言ったりなど、粗雑に扱ってきたのだが、こうしていざ離れてみると寂しさと言うか……愛おしさが募るのだ。

愛とは障害がある方が盛り上がるというが、リディアの愛はまさにそれだった。

いつも会えていたレイと離れ離れになったことで、彼女はレイに会えない日はそれはもう寂しそうに一人で書斎で研究に励んでいる。

だがリディアは思ったのだ。そうだ。会えないのなら、会えばいいではないかと。

ということ、彼女は四月から実は学院に度々顔を出してレイのことをじつと見つめていたのである。

レイほどの魔術師ならば、その視線に絶対気がつくはずだ。

しかし諜報に長けているカーラとリディアの技量はレイのそれを

かろうじて上回る。時折、バレそうになることもあったが今の所まだレイは気がついていない。

そしてその際には、よくアビーの元で世話になっている。

「なありディア」

「なんだ？」

「いい加減、子離れしろ」

「はあ！？　べ、別にそういうわけじゃ……！　ただレイが心配というか、なんとというか……！」

「はあ……　お前のために色々と便宜を図る私の身にもなってくれ」

「う……それはすまないと、思っているが……」

あれからすぐに支度を整えたリディアは、カーラに車椅子を押してもらいこの学院まで来ていた。もちろん、リディアの家からはそれなりの距離はある。しかし魔術を使うことで、カーラとリディアはその移動速度を上げているのだが……それは色々と公には公開できない魔術を使ったりもしている。

そして学院にやって来たリディアはレイが普段通り過ごしているのを確認すると、アビーのいる学院長室へと移動していた。

いつものルーティーンでは、ここでお茶でも飲んで帰るところなのだが最近アビーが妙に小言を言うようになったので、リディアとしては居心地が悪い。

と言っても、ここに居座っているリディアが悪いのだが。

「レイなら大丈夫と言っているだろうに」

「だが貴族によるイジメが……！」

「それはとうの昔にどうにかなった。今はかなり緩和されている」
「うっ……それは、そうだが」

実際の所、入学した当初にレイに対して行われた差別はリディアの耳にも入っていた。

その時は、レイを馬鹿した生徒を全員氷漬けにしてやると豪語していた彼女だが、アビーの説得によりなんとかそれが行使されることはなかった。

アルバートたちは奇しくも、リディアに氷漬けにされるのを回避していたのである。

「来るなどと言わないが、そろそろ自覚しろ。レイはもうお前の元を巣立ったんだ」

「……」

「どうした？」

急に黙るリディア。

そして、拗ねたようにプイッとアビーから視線を逸らすと彼女はこう口にした。

「だ、だって！ レイのことが心配なんだもん！」

「はあ……」

額に手を当てて、やれやれと言わんばかりに首を左右に振るアビー。
！。

アビーは学生の中から知っているが、リディアは時折こうした幼

い一面が出ることがある。リディアがアビーに頭が上がらないのはそのためだ。同じ年齢ではあるが、実際はアビーが姉でリディアが妹と言う立場だ。

そしてアビーの方も、そんなリディアを見捨てることができない……というのが二人の関係性ともいうべきか。

リディアはわなわなと震えながら、さらに言葉を続ける。

「も、もしかしてレイに彼女でもできたらと思うと……」

「思うと？」

「そいつを氷漬けにしたくなるんだ……っ！　これが親心なのかっ！」

「はぁ……なんだ。それならレイは誰とも結婚できないじゃないか。というよりも、レイほどの魔術師が結婚しないわけがないだろう」

「う……！　でもそういうことなら、アビーもそうだろうが！」

「う……！　でも、お前もそうだろうが！」

「う……！」

「……」

二人で傷口を抉り合うのはやめよう。会話をすることもなく、その内容を打ち切ることにした。

リディアが結婚できないのは、完全に性格に難ありとレイに対する過剰な愛情のためだが、アビーはそうではない。

彼女は立派な大人であり、常識を兼ね備えている上位魔術師の中では稀有な存在だ。そして何よりも優秀。加えて、容姿端麗、頭脳明晰。

男が放っておくわけがないと思うが、そうではない。

問題は優秀すぎることにあるのだ。

男性たちは、アビーのその圧倒的な優秀さに怖気付く。そのような背景があり、二人とも三十歳を目前にして未婚。完全に行き遅れてしまったのが悲しい現状である。

「アビーちゃん！ お昼ご飯いこー ってあれー？ またリディアちゃんもいるのー」

ノックをすることもなく、無遠慮に扉を開けるのはキャロルだった。

いつものように胸元が大胆に開いた派手な服装に、桃色の艶やかな髪は緩やかに巻かれている。実際の所、性格に一番問題があるのはキャロルだが、学生には人気がある。主にその、妖艶な容姿的な意味で。

「キャロルか。私がいたら問題なのか？ ああ？」

すぐに喧嘩腰になるリディア。

リディアとキャロルは犬猿の仲、とまでは言わないが仲は良くない。いや実際には十年以上の付き合いなので仲は良いのだろうが、本人たち、特にリディアはそれを認めない。

アビーからすれば、二人ともいつも喧嘩してばかりで本当に飽きないな……と辟易している。

「いや〜？ 問題ないけど〜 でもいい加減、子離れしたら〜？
キャロキャロもレイちゃんはもう一人の立派な大人だと思うよお
」

「おい。アホピンク。私は知っているんだぞ。お前がまだ、レイの
童貞を狙っていることをな……」

「ええ！？ そんなことないよー 心外だなあ……今のキャロキ
ヤロとレイちゃんは教師と生徒。そんなイケない関係だなんて、ぽ
……」

その雪のような真っ白な頬が桜色に染まり、キャロルはわざとら
しくその頬に手を当てる。

始めのうちは否定しようと思ったのだが、教師と生徒の禁断の関
係というものを想像して最後には自分で頬を赤らめる始末。

流石のその態度には、リディアもマジギレしてしまう。

本当に堪え性の無い彼女である。

「貴様あ……レイに手を出したら、ただじゃ済まさんぞ……！！」

「えー！？ でもいつか誰かはもらうものじゃーん！ なら、大人
が正しく導いてあげるものじゃないかな〜」

「黙れっ！ それは私が見極めるっ！」

「ならリディアちゃんがしちやいなよ」

急にスッと一歩引くようにして、キャロルは冷然とそう告げた。

「は？」

「リディアちゃんがレイちゃんの童貞、貰えばいいじゃ〜ん はじめて
それなら文句ないんでしょ〜？」

「はあああああああああああ！！？」

響き渡るリディアの声。

それは昼休みである今でなければ、間違いなく騒ぎになっていた
だろう声量。

そしてそんな当人は、顔を真っ赤にして慌てふためいている。

「わ、私はその……っ！ そんなつもりじゃっ！ れ、レイはその
……かつ、カッコいいけど、ち……違うって言うか、そのっ！
うう……うううっ……は、恥ずかしい……」

顔だけでなく、身体中を真っ赤にして否定するリディア。それは
まるで、何の汚れも知らない乙女そのもの。初^{うぶ}すぎると言うか、生
娘でももう少し冷静に対応すると思うのだがリディアはそうではな
かった。

そんな様子を見たアビーとキャロルは同じことを思う。

可愛いつ！

二人は昔からリディアの恥ずかしがる姿を目撃しているが、その
たびに思うのだ。

ただただ、可愛らしいと。

こんな姿を知っているからこそ、アビーとキャロルはリディアに
対してどこか優しいというか、寛大な心で接するところがある。

この姿をレイも見れば、師匠にも可愛いところはあるのか、と思うだろうが当人の前では絶対にそんな姿は見せない。

純粋な乙女のような女性らしさをレイに見せるのは、リディアにとつてかなり恥ずかしいのだ。それは今まで勇ましい態度をレイに見せているからこそである。

「ま、リディア。お前も頑張れよ」

「うんうん。そうだね」 頑張つてねっ！ リディアちゃんっ！」

「時々、優しそうに見るお前らのその目は嫌いだあああああああああっ！！」

そして一人で車椅子を爆速で押していくと、そのままリディアは室内から消え去ってしまう。

「それでは、私も失礼します」

今までずっと沈黙を貫いていたカーラはそう告げると、ロングスカートを翻して颯爽と主人であるリディアを追いかけるのであった。

「可愛いねえ……リディアちゃん」

「からかうのも大概にしておけよ。あいつがマジでキレると、抑えるのが大変なんだからな」

「はいはい！」

「じゃ、昼飯でもいくかキャロル」

「はい」

そうしてアビーとキャロルは二人で昼食をとるため、この部屋を後にするのだった。

リディアが自分の気持ちと向き合うのは、果たしていつになるのか。

第87話 アビーの日常

「ふう……」

目を覚ます。

アビーは朝型であり、寝坊は人生の中で一度もしたことはない。

彼女はスツとベッドから起きると、そのまますぐに脱衣所へと向かう。手早く下着を脱ぎさると、シャワーを浴びてからさらに意識を覚醒させる。

その後、自分でコーヒーを淹れる。

ここまですが彼女のルーティーンである。

今日は久しぶりの休みということでアビーはどうしようかと考えていた。

魔術剣士競技大会も無事に終了し、マジクス・シュバリエと言っても裏で死神の処理などはあったが、久方ぶりの休暇を満喫しようと思っていた。

だがやはり習慣とは恐ろしいもので、いつものように仕事に向かう時間に目が覚めてしまった。

現在の時刻は、午前七時。

「さて、どうしたものか」

朝食を取り、淹れたコーヒーも全て飲み干したアビーは思索に耽る。^{しきふけ}

午前中は積んでいた本を読み、午後からは街に出るか。

特に買うものはないが、それでも一日中家にいるというのは流石に暇なので街をブラブラしようかとアビーは思った。

「よし……」

机の上に置く三冊の本。

それは全て恋愛小説だ。この歳にもなって……と自分では思ってしまうのだが、好きなものはどうしようもない。

いつか自分も身を焦がすような素敵な恋をしたいと思い描きながら、アビーは物語の世界へと没入していく。

「おっと。もうこんな時間か」

顔を上げると、すでに時刻は正午に近くになっていた。

壁にある時計の針を刻んでいる音が、やっと彼女の耳に入ってくる。

あれからアビーは完全に没頭し、すでに三冊ともに一気に読破し

てしまった。

「さて、そろそろいくか」

アビーは立ち上がると、クローゼットを開ける。

今日は特に誰かと会う予定もないので、シンプルに白のシャツに、パンツスタイルの服装で出かけることにする。

スカートは持つてはいるが、それでもアビーの性格上あまりスカートは好まない。こうして自由に選択していいのなら、彼女は迷わずにパンツスタイルを選択する。

そしてアビーはバッグも持たずに、ポケットに財布を入れるとそのまま扉を開けて外に向かうのだった。

中央区。

今日は休日ということで、人がかなり多い。アビーは人混みには慣れているので、今日のような日でも街を歩くことが億劫になることはない。

そして本屋に行って、新しい本でも調達しようかと思っていると彼女は見つけてしまった。

それはリディアとカーラだった。

しかしその様子からして、レイをストーキングしているのは間違いなかった。

はあ、またやっているのか。

そう辟易しながら、アビーは二人の元へと向かう。

「おい、リディア。またか」

「アビーか。今は忙しい。後にしてくれ」

いつになく真剣な様子。

リディアはじつとその双眸を開いて、ある一点を注視していた。アビーもまた、その視線を追うと……ああ、と得心する。

「レイがいるのは分かっていたが、まさかデートか」

そうアビーが口になると、リディアは視線を全く逸らすことなく一気に捲し立てるようにして話し始める。

「エリサ＝グリフィス。頭はかなり良いな。あの年齢で二重コード理論を理解している頭脳は感嘆すべきものだ。将来はおそらく、良い研究者になるだろう。だが、問題は……アレだ。あの儚さなのだっ……!」

物陰から買い物をする二人を忌々しそうに見つめながら、拳をギョツと握るリディア。

アビーは全く何のことかわからないので、素直に尋ねてみることに

にした。

「儚さって、どういう意味だ？」

「あの守ってやりたくなる、あどけない表情。時折見せる綺麗な笑顔。それにレイを見つめる視線も、まだ色はない。純粹なまでに友人に徹しているエリサは私からすれば満点に近い」

「良いじゃないか。レイも楽しそうにしているし」

ちらりとレイとエリサの方を見ると、二人は笑い合いながら本屋で談笑をしていた。側から見れば、カップルにしか見えないだろう。

完全に釣り合っているし、よくお似合いだ。

だがどうやら、リディアにとってはそれが問題らしい。

「ぐぬぬ……どうすれば、私はどうすれば……」

「ま、早く子離れすることだな」

そう言って去ろうとするが、アビーはその後もしディアの愚痴に付き合わされ、拳句には生贄いけにえにされてしまった。それは、レイがリディアのことを『ゴリラ』などと形容した瞬間に起こったものだった。

「ちょ、殺気！ リディア！ レイが気がついたぞっ！」

「はっ！？ ついやってしまった！ アビー頼むッ！」

「はあっ！？」

そんなやりとりをして、アビーは路地裏から無理やり叩き出され

てしまう。そしてちょうどぱったりとレイと遭遇する形になる。

「アビーさん？ どうしてこんなところに？」

「レイとエリサ＝グリフィスか。いや、先ほどナンパにあってな。その路地裏でシメていたところだ。少し殺気が漏れてしまったがな」

「なるほど。アビーさんのものでしたか。驚きましたよ。この白昼堂々、あのような殺気が漏れるのですから」

怪訝そうな表情をして、そう尋ねてくるレイ。アビーは咄嗟に適当なことを言って何とか辻褄を合わせようとするが、レイが追求してくることはなく内心ホッとする。

「くそ……リディアのやつ……これは貸しだぞ……」

思わず漏れる愚痴。

どうして何もしていない自分が、あの親バカのフォローをしなければならないのか。まあ仕方ないか。いつものことだしな。

いつものことなので慣れてしまっているアビーもまた、相当毒されているのにまだ気がついていない。

「アビーさん？ どうかしましたか？」

「いや。なんでもない。レイはデートを楽しんでくれ！ ではな！」

高らかにそう声をあげると、アビーはそのまま戦線を離脱。

もうリディアに関わりたくない彼女は、そのまま喧騒の中に消えていった。

その後、自分の買い物済ませたアビーは一人で黄昏の光に包まれながらボーツとその夕焼けを見つめていた。

公園のベンチに座り、今日一日を振り返る。

「はぁ……あいつらはどうなったのか」

あれからきつとレイはデートを続けたらう。しかし、リディアの方は大丈夫だったのだろうか。やはり世話焼きということが起因して、アビーは心配していた。

もちろんレイのこともそうだが、リディアはショックを受けるとすぐに不貞腐れる。落ち込んでいないと良いのだが……。

なんだかんだ言っつて、リディアのことが心配なアビーはそう考えていた。

「はぁ……今日はあつという間だったな」

すでに夕日は完全に沈もうとしていた。

彼女の隣には、本屋で手に入れた新しい小説がある。

それをそつと撫でながら、少しだけ過去を想起する。

「もう、三年も経ったのか」

何でもない日常。

それを当たり前のように享受できる今。

過去のあの時……極東戦役に参加していたときには考える余地もない未来。

アビーはずっと自分は軍人であるのだと、そう思っていた。いや、彼女だけではない。

リディアも、キャロルも、ずっと同じ軍人として進んでいくのだと……そう思っていた。

でもそれぞれが違う道を進み始めた。

確かに以前と距離感は変わらない。それでも、進んでいる道は変わってしまった。

あの戦いを経て、アビーもまた多くのものを失い……そして、自分の人生を改めて考えることでアビーは今の地位にたどり着いた。

「さて、と」

パンパンと臀部の埃を落とすと、彼女は本の入っている紙袋を腕に抱えて帰路へと着く。

その際に、仲睦まじく歩いていくレイ、リディア、カーラの姿が

見えた。

その姿はいつかあの時の過去を想起させるが、今はあの時のように悲壮感などない。

ただ笑い合いながら進んでいく姿を見て、アビーも微かに笑みを浮かべると悠然と黄昏の光に包まれながらまっすぐ歩を進めていくのだった。

後日。

「う、うわああああああっ！ アビーっ！ どうしよう！ レイが、レイがああああああああっ！」

早朝から自宅に押し付けてきたリディアを見て、アビーは「はあ……」とため息を付いた。

でも、こんな日常も悪くはないか。

そんなことを思って、彼女はリディアを部屋の中に招き入れる。

アビーもまた、今のささやかな日常を楽しんでいるのだった。

第8話 キャロルの日常

「んにゃ！」

奇妙な声を上げて、起床するキャロル。

どちらかと言えば朝型なので、起床するのが億劫だと思ったことはない。だが彼女の場合は普通の人間よりも早起きしなければならない理由がある。

「ふんふんふん」

現在は朝の六時。

キャロルは起きた後は絶対にシャワーを浴びる。その後、彼女に待ち受けているのはメイクとヘアセットの時間だ。それは両方ともに合わせて、一時間は超えてくる。

それをほぼ毎日続けるキャロルだが、美とは我慢も必要だと理解している彼女は、その儀式とも呼ぶべき行動を毎日行う。

全ては、美しい自分であるために。

鏡を見て入念に自分の顔を確認する。下地を作ってから、その上にまるでキャンバスに絵の具をのせていくように化粧を重ねていく。

レイと出会う前は濃い化粧がふつうだったのだが、最近は割と抑

えめである。路線としては可愛さも取り入れつつの清楚系。キャラルはレイの言動からそれがいいと判断したのだ。

別にそれは、彼が清楚系の女性が好きと言ったわけでは無いが……。

「レイちゃん、気に入ってくれるかな……」

それは心機一転したいという気持ちもあった。

今までは、戯^{おも}けたり、ふざけたりしてレイへアプローチをしていた。

でもそれは、不安の裏返しだった。

本気でアプローチをかけて、拒否されてしまったらどうしよう。

そんな思考が、キャラルの誠実な行動を妨げていた。

ずっと負い目があった。極東戦役の最後の戦い。そこで、自分が作戦を失敗させてしまったから、レイは今も魔術師として不自由な生活を送っている。

本当は彼は、もっと羨望を浴びるべき存在だと言うのに。

キャラルもまた認めていた。レイこそが現在の世界では、最高峰の魔術師であると。

そんな彼を苦しめているのは、他でも無い自分自身であると……キャラルはそう考えていた。

「うん！　こんなものかな」

そして、キャラルは一時間以上の時間を費やしてレイとのデートに備える。既に今日の服装も決めており、それに袖を通す。

後は、覚悟を決めて進むだけだ。

今日こそは、罪滅ぼしの意味も込めて彼の童貞はこめてをもらうのだと。また、キャラルの胸の内には別のある想いもあった。

それはなんと形容すべきなのか。

強いて言うとなれば、それは母性と呼ぶべきものなのかもしれない。

キャラルは昔からレイのことが愛おしかった。

壮絶な過去を持ち、誰も信じることができない空虚な姿をしていた時からレイを知っているキャラルからすれば、今のレイはとても魅力的だった。

だからこそ、絶対にその童貞はこめては自分がもらうのだと。

キャラルはそう考えていた。

「ふふっ」

今日のレイはどんな姿なのだろうか。

ああ、早くレイちゃんに会いたいなあ。

そんなことを考えながら、キャロルは家を出ていくのだった。

待ち合わせ場所にいたレイ。

その佇まいは、昔と違ってもう大人そのものだった。シャツにパンツとシンプルなスタイルだが、それが逆によく似合っていた。

キャロルは絶対に、彼は将来はカッコよくなると、良い男になると確信していたが、まさかここまでとは思っていなかった。

服装もそうだが、髪の毛もいつもとは違ってセットをしているようで前髪がわずかに上がって爽やかな印象だった。

それが全て自分のためにしているのだとわかると、胸がきゅんと締め付けられるような感覚に陥る。

そんな彼の様子に胸を打たれながら、キャロルはいつものように話しかける。

そしてレイはどこか太々しい感じだが、じっとキャロルのことを見つめてこう口にした。

「その……」

「え？　どうかしたの、レイちゃん」

「いや……よく似合っている、と思う」

「レイちゃん……」

レイちゃんが褒めてくれた！ 嬉しいっ！ とっても嬉しいっ！

キャロルはレイに嫌われているとまではいかないまでも、距離を置かれているのは知っている。それは過去に暴走したせいなのだが、今日は真剣に向かい合ってくれている。

もうそれだけで、キャロルの心は十分に満たされていた。

そして彼女は、思い切りレイに抱きつく。その豊満な胸を押し付けることに躊躇などせず、ただただ愛おしい彼を抱きしめる。

「うお！！？」

「もう、大好き！ レイちゃん、嬉しいよぉ！ ありがとー

！ 頑張ってオシャレしてきてよかったぁ……っ！！」

「は、離れるっ！」

「もう！ 師弟揃ってツンデレさんなんだからっ！」

その後、キャロルは自分の内心をレイに打ち明けた。

今日は元々、これが本題だった。

彼女には負い目があった。

極東戦役での最終戦。

そこで自分が立案した作戦が失敗してしまった。だが、誰もキャロルを責めることはなかった。アレはたとえ誰であっても、予想できない事態だったのだから。

それでも、多くの仲間……それに、リディアとレイに大きな傷跡が残ってしまった事実は残り続けている。

リディアに対しては昔馴染みということもあって、すぐに謝ることができた。といっても、病院でリディアに謝ると「は？ 思い上がるなよキャロル。これは私の失態だ。お前のせいなどではない、決してな。この傷は私が未熟だったから受けたものだ」と、彼女は口にした。

リディアはそう言ってくれた。

でもレイにだけは、会う勇気を持つことができなかった。

まだ幼い彼を、あんな風にしてしまった一因は自分にもある。

そんな罪悪感から、三年。

キャロルはやっと、レイに向き合うことができたのである。

「キャロル。あれは俺の責任だ。俺が未熟だったから、魔術領域暴走^トを起こしただけだ。だからもう泣かないでほしい。俺はキャロルのせいだなんて、思っ**て**はいない」

「うう……レイちゃんは優しいね。ずっと、そうだった……」

「キャロル。俺もお前も多くのものを失った。でも今はこうして生きている。俺はそれだけで十分だ」

「うん……うん……そうだね。ありがとう、レイちゃん」

自分の罪を、その想いを告白するとレイはそう言った。

そうだ。ずっとそうだった。

この師弟は本当によく似ている。その在り方が、美しい人としての在り方が似ているのだ。

そしてキャロルは、レイが別の意味でも受け入れてくれたのだと勘違いして次の行動に出ることにした。

「いっぱい買い物したね」

「そうだな。でも、存外悪くはなかった」

「……本当に？」

少しだけ不安そうに尋ねるキャロル。

今は荷物は全てレイが持ってくれているのだが、それは彼がそうすると言ったからだ。買い物をしている最中は、二人で他愛のない話に花を咲かせていた。

それはまるで長年の親友のように。

レイとキャロルは、実は話が合う方である。

いつもおかしい言動をとってしまうが、それは照れ隠しの側面もあった。

しかし今日は、彼が受け入れてくれたとと思っているので、レイに

対して普通に向き合うことができていた。

そんな矢先に、その言葉を聞けてキャロルは胸がいつぱいだった。

そしてギュツと自分の胸を押さえると、キャロルは言葉を紡ぐ。
まるで、何かを確かめるようにして。

「レイちゃんは、さ。その私のこと……苦手、だよな？」

「……まあそうだな。いや、そうだったと言っべきか。だが、今は
そうでもないかもしれない。実際に今日一日を一緒に過ごしてみ
て、悪くなかった。むしろ俺も楽しませてもらった。ありがとう、キャ
ロル」

「レイちゃん……」

脳裏に過る（おも）のは、彼と結ばれるシーンだ。

これは間違い無くイケる。いや、むしろここで行かずにいつ行く
のか。

レイの誠実な言動は、確実にキャロルを悪い方向へと導いていた。

彼はリディアの教育によって、誰であつても誠心誠意に向き合っ
ことができる。それは女性だけでなく、男性であつても。

それが今回ばかりは裏目に出してしまう。

もう止まることができないキャロルは、彼をさりげなく誘導して
いく。

「ねえ、レイちゃん……」

二人がいま歩いているのは、ホテル街。だがここは、ただのホテルが並んでいる場所ではない。周囲の街灯はどこか怪しいピンク色をしたもので、妖艶な雰囲気醸し出している。

なぜこんなところにいるのか。

それはキャロルが自然とこの場所にレイを導いたからだ。

そのことに気がつかなかったレイは、ハッと悟るが……すでに時は遅かった。

「は！？ いつの間にこんなところに！？」

「ねえ……今日はいいんだよね？ ね、レイちゃん……？」

「な、なんの話だ？」

互いの距離をじりじりと詰める。

レイは後方に逃げるように下がっていくが、キャロルは逆に壁に追い詰めるようにして迫っていく。

「はあ……はあ……はあ……」

完全に興奮している。呼吸は荒くなり、胸の高まりが収まることはない。レイとやっと結ばれるのだと考えると、いても立ってもいられなくなってしまうキャロル。

そして壁にバンと手を当て、レイを追い詰めるとキャロルは勢い余って固有魔術^{オリジン}を発動してしまう。全ては、愛故に起きた悲しい事故^{オリジン}でも言っべきか。

レイは自分の言動を振り返って、勘違いさせてしまったのだと理解するも……全てはもう遅かった。

「ちょ！？ キャロルお前っ！」

「キャロル・イン・ワンダーランド とっても可愛い私の不思議な世界」

「う、うわあああああああああ！」

躊躇なく、キャロルは固有魔術である
オリジナル 不思議な世界を発動。

キャロル・イン・ワ とっても可愛い私の不

その後、キャロルはリディアに邪魔されることで、レイとの情事に失敗してしまうのだが……彼女は満足だった。

あのレイと再び、言葉を交わせるだけでもキャロルは嬉しかったのだから。

ねえレイちゃん。今日は一緒にお出かけできて、とっても楽しかったよ。やっと自然に笑うことができるようになったんだね。私は嬉しいよ、レイちゃんが元気で楽しそうに生きているだけで……。でもいつか、その童貞は私が貰うよ？ はじめて だからそれまで、ずっと元気でいてね。ねえ、レイちゃん。

アビーに気絶させられる前に、キャロルはそんなことを思った。

そんなキャロルの日常もまた、まだまだ波乱万丈なものになりそうだ。

第89話 実家へ帰ろう！

「ふう……」

馬車に揺られながら、外の景色を見つめていた。しかし馬車と言っても、今は車輪が自動で動くようになっていて。これは魔術によって、車輪をほぼ永続的に作動させる術式がかかっているからだ。

あくまで馬は補助に過ぎない。

もしかすると将来は、車輪だけでよくなる時が来るのかもしれない。

ということと、ついに夏休みも終盤に突入。俺はこれまでみんなと一緒にこの夏休みを満喫してきた。それは今までの人生では考えることもできなかった程の楽しさだった。

俺もまた、学生らしい生活を送れているようで嬉しい限りだ。

あの戦争の傷跡はずっと残っている。いや、きっとそれは永遠に残り続けるのだらう。だがそれでも、それを背負って俺は前に進むことができる。かけがえのない、友人と共に。

しかし友人だけではない。今の俺には、家族がいる。

それは三年前に出会った人たちで、その人たちもまた俺にとって掛け替えのない人である。

「よし。歩くか」

馬車から降りて、俺は田舎道を進んでいく。

このアーノルド王国は、世界でも最大規模の国である。都会であることは間違いないが、それは中央区付近などに限られる。つまりは、東の方は比較的田舎なのだ。その中でも、俺の実家は東の果ての果て。

この王国の一番東に位置している。

周りは森と山が多く、移動するのも大変だ。しかし自然の風景はこの王国の中でも屈指だろう。俺はそんな実家が大好きだった。

森に囲まれ、自然に囲まれ、そして大切な人に囲まれる。そんな家に帰るのが楽しみでたまらない。

「……ふう。暑いな」

汗が滴る。

背中にバックパックを背負って、俺は歩を進める。すでに景色は自然だけになった。左右には向日葵畑ひまわりが広がっており、その間にできている獣道を進んでいく。

真っ青な空に、照りつける太陽。左右一面に広がる、天にその身を伸ばす色鮮やかな向日葵ひまわり。

その景色はとても美しい。

都会は確かに便利で住みやすいのは間違い無いだろう。だがやはりどうしてもだろうか、この自然に触れ合うことはとても落ち着く。

そして一人で黙々と歩いていると、見えた。

視線の先にある、大きな屋敷。白を基調とした建物で、二階建てだ。

懐かしいな。

そう思っで、俺は再びその歩を進めるが……瞬間、隣にある向日葵畑の一部がガサガサと動く。

「まさか？」

そういつと、中から出てきたのは人だった。

でもその人は、よく見覚えがある。

「どーんっ！！」

そう言葉にしながら、俺の体に抱きついてくるのは……妹のステラだった。

「お兄ちゃん！ お帰りなさいっ！」

「ああ、ただいま。ステラ」

「えへへ。お兄ちゃんの匂いだあ」

グリグリとその頭を俺に押し付けてくるステラ。そしてそんなステラの頭を優しく撫でる。幾度となくした所作だが、本当に懐かしいと感じる。

ステラ「ホワイト。」

栗色をした綺麗な茶色の髪をポニーテールにまとめている。その表情はニコニコと笑みでいっぱいなようで、本当に嬉しそうだった。

そんなステラは一歳年下の俺の妹である。

と言っても、義理の妹なのだが今となっては本当の妹のように接している。

三年前に俺はホワイト家に引き取られた。そこは師匠の姉の家庭であり、養子として暮らすことになったのだ。

当時は、極東戦役の傷……それは肉体的にも、精神的にもかなり辛いものがあつたが今の家族が支えてくれた。

もちろん師匠も他の方々も、お見舞いに来てくれたりはしたが……一番お世話になったのは、この家族だった。

その中でもステラはずっと俺のことをお兄ちゃんと言って慕ってくれている。

出会った当初はどう接して良いのか分からなかったが、今は仲睦まじい兄妹である。

「ねね、お兄ちゃん」

「どうした？」

「学校楽しい？」

「ああ。友人もたくさんできたぞ」

「おお！ やっぱりお兄ちゃんはすごいね！」

「ふ。それほどでも無いさ」

「ククク、私も来年は乗り込んでやるのです。ククク……首を洗って待っている、お兄ちゃんっ！」

「ふふ、そうだな。俺はステラのことを待っている、あの学院でな」
「うんっ！ やっぱりお兄ちゃん大好きーっ！」

二人で歩みを進めながら、俺たちはそんな会話をする。

ステラもまた、来年度にアーノルド魔術学院に入学するつもりである。もちろん、入学試験を受けて合格する必要があるのだが俺の妹は聡明だし、魔術の技量も中々のものだ。

決してそれは身内鼻唄で言っているのでは無い。

いや……まあ、少しばかり、ほんの少しだけ身内鼻唄になっているのは認めるところだが、それでもきつとステラなら大丈夫だろう。

そして家の前にやってくると、ステラが扉を開けてそのままドタと室内へと入っていく。

「おかーさん！ おとーさん！ お兄ちゃん帰ってきたよー！
！」

「それは本当かつ！？」

「あなた、早くいきましよう！」

「ああ！」

俺は玄関にバックパックを下ろして、一息ついていると……やつて来たのは父さんと母さんだった。もちろん二人とも血が繋がっているわけでは無い。付き合いもまだ三年程度だ。

それでも、みんなは俺を本当の家族として受け入れてくれている。

心から、感謝しかない。

「レイっ！ お帰りなさいっ！」

感極まって抱きついてくるのは母さんだった。母は師匠の姉ということで、金髪碧眼。一方の父さんは茶髪で身長は俺よりも少し低い程度だ。

そして母さんが離れると、次は父さんと抱擁を交わす。

「レイ、元気だったか？」

「父さん。そうだな……色々あったが、元気だったよ」

「そうか……それはよかった」

家族と約半年ぶりの対面を果たすと、俺は自分の部屋へと向かう。

俺の部屋は二階にあり、それほど広くは無いが、それでも俺はこの場所を気に入っていた。室内にあるのはシンプルに、机と椅子。それにベッドに本棚。

家を出た時と変わらないこの場所は、とても懐かしい。いや、実際は懐かしいと感じるほどの時間は経っていないのだが……どうしてか俺はそう思った。

そして持つて来たバックパックを下ろすと、扉の方からステラの声が聞こえた。

「お兄ちゃんっ！ 汗いっぱいいたでしょ？ 一緒にお風呂入ろっ！」

「そうだな。久しぶりに入るか」
「うんっ！」

ステラと一緒に風呂に入るのは珍しいことでは無い。父さんと母さんも、仲が良いのねえと言ってくれる。

でも一度だけ、師匠に目撃された時は色々と言われたのは記憶に新しい。

「は！？ ステラと一緒に風呂に入っているのかっ！？」

「はい。兄妹ですし」

「で、でも義理だろう！？ それはギリギリだろう！」

「？ ダジャレですか？」

「違うわ、ボケっ！ まあ意識していないなら良いが……」
「？」

と、終始よく分からないことを言っていた。

師匠は一体何を言いたかったのだろうか。兄妹で風呂に入るのは、別に普通だと思うが。家族なんだしな。裸の付き合いというのは大切だろう。

「お兄ちゃん、私は先に入ってるね」
「ああ」

ぽいぽいと衣服を脱ぎ去ると、ステラは浴室へと消えていく。俺もまた、すぐに衣服を脱ぎ去って妹の後を追う。浴室はかなり広くて、二人で入るには十分すぎるほどだ。

「お兄ちゃんっ！ 背中流してあげるっ！」
「おお。それは助かる」

ということで俺はステラに背中を流してもらうことにした。

タオルを石鹸で泡だてて、ゴシゴシとステラに背中を洗ってもらう。

家を出る前は、ほぼ毎日していたことだ。久しぶりに、妹と一緒に風呂に入ることができて、俺は本当に嬉しかった。

「よし！ 次はお兄ちゃんがやって！」
「任せろ。誠心誠意、その背中を磨いてやる」
「やったーっ！」

そして俺たちは互いの体を洗うと、二人で一緒に浴槽に入る。俺の上にステラが座る配置で、二人でこの熱いくらいのお湯に浸かって一息つく。

「「ふう〜」」

声が重なる。

ここまでの道のりはそれなりに時間がかかった。だからこそ、このささやかなひと時は本当に癒した。そして、顔を俺の方に軽く向けるとステラはいつものように話しかけてくる。

「お兄ちゃん」

「ん？ どうした？」

「私、おつきになったと思う？」

「ああ、思うとも。半年前とは見違えるほどだ」
「本当っ！？」

「もう立派なレディーだと思う。成長したな、ステラ」
「やったー！ 私もレディーなんだねっ！」

二人でそんな風に他愛のない話を繰り広げる。

実家に帰って来た俺は、こうしてささやかな時を享受するのだった。

第90話 ステラと遊ぼう！

「う……うん……」

「むにゃ、むにゃむ……にゃあ……お兄ちゃん……」

「ん……？ ああ、そうか今は」

実家にいるんだっとな。

改めてそう認識する。ちなみにこの一人用のベッドには、隣に妹のステラが寝ている。久しぶりに帰ってきたという事で、一緒に寝ることにしたのだ。

幸せそうに、寝ているその姿はとても微笑ましかった。

きつと、楽しい夢でも見ているに違いない。

壁にかかっている時計を見ると、時刻は朝の六時。

そろそろ起きる時間か……。

そして俺は、隣で寝ているステラの体を優しく揺する。

「ステラ、朝だ。今日は一緒に遊ぶんだろう？」

「む……むにゃ……んん……」

ゴロンと俺の方に体を向けると、ガバツと抱きついて来た。でもその挙動は明らかに寝ぼけているものではない。俺は半身を起こす

と、ステラに話しかける。

「ステラ起きているんだろう?」

「む……流石お兄ちゃんだねっ!」

ガバツと起き上がるステラは飛び上がるようにしてベッドから飛び降りた。

身体のパネがしつかりとしており、流石ステラだ。どうやら、鍛錬は怠っていないようだっただ。

「お兄ちゃんの筋肉を堪能しようと思ったけど……それはまた今度だねっ! それじゃあ、準備しよう!」

「おう! そうするか!」

ということで二人揃って下の階に降りると、すでにそこには朝食が用意されていた。

両親は二人ともに働いているが、姿はなかった。

実は、父さんと母さんは魔術協会の支部に勤めている。本部は中央区にあるが、こちらの東区の支部の方で二人とも働いている。

いつもはこんなに早くないらしいが、今日はちょっと用事があるということで既に姿はない。

そしてステラと一緒に食事を取ると、洗面所へと向かって二人で並んで歯磨きをする。

「よしっ! 準備完了だねっ!」

「ああ」

その後、俺たちは外出用の服に着替えると早速外へ出る。

今日もまた、日差しが強く油断してしまえば熱中症になりそうな程だった。もちろんその対策に水分と塩はバックパックに備えている。

二人で並んで、森へと向かう。

俺の実家は、ドグマの森という最高危険度の森が近くにある。といつても、もちろん魔物が漏れてこないように魔術によって構築された柵などで対策はされてあるので、常日頃から危険があるわけではない。

この森に入るには、ゴールド以上のハンターライセンス免許を持っている人間の同行が必要となる。

そして俺は森の前にある検問所で、手続きをする。

「ん？ レイじゃないか！ 帰ってきていたのか？」

「はい。お久しぶりです」

「おじさん！ ヤッホーっ！」

検問所にいるのは、この森を管理しているトムおじさんだ。年齢は五十二歳でもうそれなりの年なのだが、この人は実はプラチナライセンスのハンター免許を有している。

そのため、この危険なドグマの森を管理できている……という次第だ。プラチナハンターは伊達ではないのである。

「今日はステラちゃんと行くのかい？」

「はい。二人分の許可、もらえますか？」

「もちろんさ。レイと二人なら、安心だな」

「うんっ！ お兄ちゃんは超強いからねっ！」

そして書類に俺とステラの名前を書き込むと、そのまま門を開いて中に進んでいく。

セミの泣き声が響いている。それが反響して、この夏の風物詩を改めてこの身で理解する。

それに加えて、魔物の気配もそれなりのものだった。蠢く魔物たちは、俺とステラを遠くからじっと見据えている。

カフカの森も難度はそれなりだが、このドグマの森は別格だ。それこそ、プラチナのハンター試験にも使用されるほど。それに、死者もそれなりの数出ている。まだここが危険区域に指定されていない頃は、呪われた森と形容されていたほどだ。

そして木々を縫うようにして、木漏れ日が差し込む。

ただただ熱気に支配され、茹だるような灼熱が俺たちを照らしつける。

「ステラ、水だ」

「うん！」

二人でまずは水分補給をすると、そのまま進んでいく。

「ステラはいつぶりだ？」

「えつとね、三日ぶりかな」

「最近は一人でも来ているのか？」

「うんっ！ 実は私も最近ゴールドハンターになったんだよっ！」

「ふ、流石俺の妹だな」

「そうだよ！ お兄ちゃんの妹は、なかなかやるのですよ？ ふっ、ふっ、ふっ！」

小さな胸を張って、自慢げに語るステラ。だがそれは確かにすごいというか、もはや偉業レベルである。おそらく、史上最年少に限りなく近いのではないかと思う。

ちなみに、今のハンターのレコードは全て師匠が獲得している。確かに師匠は、十五歳にして最高の地位であるグランドハンターになった規格外の人だ。

曰く「なんか受かったわ。ガハハ！」とのことだ。

意味不明である。

そんな師匠と血の繋がりがああるステラもまた、破格の才能を有している。

俺が今の実家で過ごしていた時は、二人でよくこの森に遊びに来ていた。そして俺は、ステラにハンターのノウハウを色々教え込んだものだ。

ステラは別にハンター志望ではないが、この森に興味があったらしいので二人でよく朝から晩まで走り回ったものだ。

「む……あれは」
ヒュージスコーピオン
「巨大蠍だね」

見つけたのは、巨大蠍。全長は人間の数倍はあろうかというほどに大きい。それにその尻尾は天にそそり立つようにして伸びている。ここの生態系は他の森よりも異常で、数多くの魔物が存在する。

専門家曰く、ここは魔物の宝庫であるらしい。

そのため研究者もよく上位ハンターを雇ってここに来訪してくるらしい。俺もまた、過去にその仕事をしたことがある。

「……キイイイイイ！」

金切り声を上げる。

それは普通の人間が見れば怖気付いてしまうが、俺たち二人は淡々とその様子を見つめる。

「さて、やるか」

「待ってお兄ちゃん」

「まさか……ステラ、一人でいくのか？」

「ふふ。成長した私を見せてあげるよっ！」

「わかった。ここは任せよう」

そしてその場から駆け出していくステラ。その右手には、小さなナイフを持っているが……ステラは大丈夫なのだろうか。

そう思うが、それは全くの杞憂だった。

瞬間、その場に巨体を沈ませる巨大蠍。
ヒュージスコービオン

見るとステラの持っているナイフが既に脳天に突き刺さっていた。彼女は付着した血をヒュツと払うと、俺の方を向いて笑みを向けてきた。

「お兄ちゃん！ やったよ！」

「おお……すごいな」

ただただ、感嘆する。

もちろんただのナイフによる一刺しではない。魔術を行使したもののだが、やはりステラには破格の才能が宿っている。それに魔術の兆候からして、師匠によく似ている。

「よし、じゃあこの調子で行くか」

「うんっ！」

その後、俺とステラはドグマの森のさらなる深部へと迫る。

二人で様々な場所に向かい、そこで魔物と対峙する。といっても片っ端から殺戮しては生態系が狂ってしまうので、間引く程度に抑えておいた。いつもはこの作業を、管理者であるトムおじさんがしているのだが、今日は俺が来ているということで実はこの役目を引き受けているのだ。

役目をこなしていく内にたどり着いたのは、湖。

そこは以前来た時と同じように、水がとても澄んでいる。そして、

この湖を前にして何もしないわけではない。

「ステラ水着は？」

「実は下に着ているのでしたーっ！」

バツと服を脱ぎ捨てると、ステラは下に紺色のスクール水着を着用していた。

「よし、泳ぐぞーっ！」

そのまま飛び込むようにして湖に入ると、ステラは勢いよく泳いでいく。それはまるで魚のように、自由自在に水中を進んでいく。

俺もまた、水着に颯爽と着替えると飛び込んでステラの元へと泳いでいく。

「お兄ちゃん、競争しよっ！」

「ああー！！」

その後も、俺たちはこの森で様々なことをした。流石にキャンプをする予定はないが、縦横無尽にドグマの森を駆け巡るのだった。

「いっぱい遊んだねー！」

「そうだな。楽しかったな」

「えへへ！ やっぱりお兄ちゃんと遊ぶと楽しいねっ！」

抱きついてくるステラの頭を優しく撫でる。すでに日は暮れつつあり、俺たちは自宅へと向かっていた。二人で手をつなぎながら、

過去と同じように帰路へと着く。

久しぶりにステラと遊んだが、本当に楽しかった。これほど充実した時間は久しぶりかも知れない。なんと言っても朝から晩まで森の中にいたんだからな。

「ね、お兄ちゃん」

「ん？ どうした？」

「また一緒に遊ぼうね。約束だよ？」

「もちろんだ」

「やったーっ！ わーいつ！」

そして二人で仲睦まじく話しながら、歩を進めるのだった。

「うう……お兄ちゃんああああああん！ 嫌だよおおおおお
おー！ お別れなんてええええええ！ うわああああああん！」

あれから五日ほど滞在して、俺は学院の寮に帰ることになった。

元々日程は伝えていたのだが、ステラは俺に抱きついて離れようとはしない。ギュッと俺の体を掴み、逃すまいと懸命にしがみついてくる。

「レイ、元気でね。また帰ってきてね」

「もちろん。母さんも元気で」

「レイ。何かあったらいつでも頼ってくれていいからな」

「父さんも、ありがとう」

両親とそう言葉を交わすと、最後にステラと向かい合う。視線を彼女の高さに合わせると、優しくその頭を撫でる。

「ステラ。またすぐに会えるさ」

「ほんと？」

「ああ。今度はステラが遊びにくるといい」

「行ってもいいの!？」

「父さんと母さんの許可が出てからな」

「うんっ！ お兄ちゃん、来年は絶対に私も学院に入るから……っ！」

「ああ。じゃ、行くよ」

三人に別れを告げると、俺は来た道に戻っていく。

獣道を進みながら、左右に伸びている向日葵畑の間を進んでいく。

今日もまた、快晴。

夏特有の、灼熱の日差しが俺を照らしつける。影はいつもよりも濃く、漆黒の影が俺を起点にして後方に伸びている。

ふと空を見上げると、珍しく雲一つなかった。

改めて、この自然の美しさに心を打たれる。

ああ、やっぱり綺麗だな。また帰って来よう、絶対に。

そして、一人バックバックを背負いながら俺はこの大地を踏み締

めていくのだった

。

第91話 環境調査部強化合宿

夏休みも残すところわずか。

しかし俺にはまだ最後の予定が残っていた。

それは待望の環境調査部の強化合宿だ。強化合宿と言っても、日数はそれほど残っていないので一週間山に籠るなどはしないらしい。ちなみに、クラリスが入部したのは記憶に新しいが実はアルバートもまた環境調査部に入部した。元々は、部長に筋トレを習っていたそうだが、その流れで部長に勧誘され、夏休み中に入部したということらしい。

「エヴィ、久しぶりだな」

「レイ！ そうだな！」

カフカの森の前に集合と言うことで、俺たちは早速集まっていた。

全員がそれぞれ迷彩柄の服を着用。もちろん、袖はしっかりと長いものである。肌を容易に露出してしまえば、かすり傷などから化膿することもある。

そのため、今回の強化合宿ではこの茹だるような暑さでもこの服装だ。

「お、あれは……」

その視線の先にいたのは、アルバートだった。背中に大きなバツクパックを背負ってこちらの方へと向かってくる。

「アルバート。野球以来だな。調子はどうだ？」

俺がそう話しかけると、彼は微笑を浮かべる。

「レイ、それにエヴィも久しぶりだな。調子は……まあ、そこそこだな」

「しかしそのバルク……この夏に相当仕上げてきたようだな」

「ああ！俺もこれには驚きだな！」

そう。アルバートのその体軀は確実に大きくなっていた。劇的な変化ではない。しかし、その胸の厚みと四肢の太さ。それは服の上からでも俺たちならば容易に理解できた。

おそらく、かなりのトレーニングを積んだのだろう。

アルバートの成長は著しい。

俺との戦いを経て、彼は大きく変わった。

傲り、慢心を捨て、愚直に自分と向き合うようになった。

もともと才能はあった、それに努力もしていた。

だがアルバートに足りないのは、その才能に傲ることなくさらに努力を重ねることだった。

決して魔術師の優劣は血統だけで決まるものではないと知った彼は、ひたすらに自己と向き合い……そして手に入れたのだ。

その圧倒的な筋肉を。

俺とエヴィはトレーニング歴が長いので、流石にアルバートよりはバルクはある。

だがそれでも、俺たちは感嘆していた。

それはこの筋肉を手に入れるために、彼が血の滲むような努力を重ねてきたと分かるからだ。

「アルバート。素晴らしいバルクだな」

「ふ、まだレイやエヴィ……それに部長の足元には及ばない。だがこれから愚直にトレーニングに励む次第だ」

爽やかに微笑むアルバートは、以前と比べて雰囲気が柔らかくなったと言いか接しやすくなったと俺は感じていた。実際に女子生徒からの人気もあるとか。

俺たちは三人は、そうして互いの筋肉を褒めあっているとさらにもう一人……一年生の部員がやってくる。

絹のような艶やかな金色の髪を高い位置で結っている人物。

まさにツインテールを愛し、ツインテールに愛された少女。

クラリスだ。

彼女はその小さな体よりも少しばかり大きいバックパックを背負ってこの場にやってきた。

クラリスもまた、以前のように半袖短パンではなく、迷彩柄の作業を着用していた。頭には麦わら帽子……それに、よく見ると帽子にはなんとヘラクレスオオカブトであるジークフリートもいた。

「クラリス。元気だったか？」

「ええ。レイ、久しぶり。それに、エヴィとアルバートも」

「ああ！ 久しぶりだな！」

「俺も夏休み中に環境調査部に入った。よろしく頼む」

「ええ、そうね。新人同士、頑張りましょ」

握手を交わすクラリスとアルバート。

これで揃った今年の一年生部員。

そんな中、クラリスの頭にいるジークフリートに突っ込まない二人ではなかった。エヴィとアルバートはそれぞれ、クラリスに尋ねる。

「なあそれって……」

「ああ。ヘラクレスカブト、だろうか？」

「あ！ この子はジークフリートって言うのっ！ よろしくね！
はい、ジークフリート。挨拶して」

クラリスが麦わら帽子にくっ付いているジークフリートにそう言

うと、その巨大な角を上下にブンブンと振って挨拶をする。

なるほど。かなりクラリスに懐いているようだな。流石、クラリス。いいハンターの素質がある。

「うお！　すげえな！　言葉を理解してるのか？」

「ああ……これは興味深いな。もしかして、調教でもしたのか？」

「うん。えつとその……」

と言うことでクラリスはその詳細を話した。

俺と夏休みにこの森に虫取りに来て、確保したのだと。そして逃す際に、なぜか自分のところに来てきたと。

その後の話は俺は知らなかったが、今は家でもずっとクラリスの側にいるらしい。曰く、寝る時も一緒らしいとか。他の昆虫とは異なり、知性があるのか最低限の言葉は理解しているみたいだ。

確かに、カフカの森の昆虫は知性が高い。それこそ魔術的な要因によって、成長した生物は予期しない変化をする。元々魔物も、生物が凶暴に変化したものだからな。

おそらく、ジークフリートもその類なのかもしれない。

「良いハンターは、生き物に好かれる……きっとそのヘラクレスも、クラリスのハンターの素質を見抜いているのかもしれない」

いつの間にか背後に立っているのは部長だった。

その低い声でクラリスのことを褒める。クラリスはその言葉を聞くと、嬉しそうに微笑むのだった。

「あ、その……ありがとうございます、部長っ！」

「ふ……今年の一年は粒揃いだな」

その後、他の部員の方たちも集まり俺たちは早速森の中へと入っていく。

その際に部長から告げられた今回の合宿の目的。

それは、スタンビード集団暴走を鎮静化するというものだった。

スタンビード
集団暴走。

それは、魔物たちが集団で暴走することを指す言葉だ。カフカの森など、このようにさまざまな魔物がいる場所で時折起こるのが、スタンビード集団暴走だ。

それは自然現象であり、定期的にかかる。サイクルとしては、カフカの森は毎年夏の終わりに集団暴走が起こるらしいので、それを鎮静化するのが今回の合宿の課題としているらしい。

そして現在は、先輩たちとは別行動となり一年生だけで行動している。

オーソドックス フォーマンセル
基本的な四人一組。前衛はクラリスとアルバート。後衛は俺とエヴィだ。

なぜこのような構成になっているかと言うと、既にハンター免許ライセンスを有している俺とエヴィは集団暴走の対処には慣れているからだ。

ちなみに、エヴィはシルバーのハンター免許ライセンスを有している。

今は経験を積ませると言う意味合いでクラリスとアルバートが前衛で魔物と対峙するような構成になっている。

そして四人で動いていると、奥の方からガサガサッと音がし、それがいきなり爆音に変化すると巨大系の魔物ヒュージが大量に飛び出してきた。

「う、うわっ！」

「む……数が多いなっ！」

クラリスとアルバートは、当然飛び出してきた巨大系の魔物ヒュージにたじろいでしまう。

俺はすぐにそんな二人に声をかける。

「二人とも、内部コードインサイドを走らせろ！」

「了解ッ！！」

そうして始まる戦闘。

今回の相手は巨大蜘蛛ヒュージスパイダー。

甲虫種の魔物で、全長は約三メートル。個体差もあるが、おおよそそのサイズだ。繁殖周期は普通の蜘蛛と同じだが、一度にあまり多くは出産されない。そのため、全体的な魔物の数で言えば少ない

方だ。

だが、厄介なのはその粘着性のある糸だ。しかもこれはただの糸ではなく、麻痺毒も練りこまれているとんでもない代物だ。一度捕まれば、そこで終わり。あとは無残にも捕食されてしまう。

ハンター界隈でも、中々の曲者として認識されているのが巨大蜘蛛だ。ヒュージスパイダー

もちろん俺とエヴィはこの程度の相手ならば余裕で相手ができるので、互いに二人のサポートに入る。

「エヴィ。打ち合わせ通り、アルバートを頼む」

「ああ。そっちはクラリスだな」

クラリスの側に近寄ると、俺は彼女の肩に右手を優しく置く。

「良いかクラリス。ヒュージスパイダー 巨大蜘蛛はあの糸が厄介だ。知っていると思うが、麻痺毒が練りこまれている」

「ええ……」

「と言うことは、あの糸に捕まることは許されない。基本的な対処法は、まずは足を凍らせて身動きを止めることだな。人にもよるが、魔術に長けているクラリスはそれが良いだろう」

「わかったわ！」

クラリスは周囲の第一質料プリママテリアをかき集めると、それをコード理論に従って変換し魔術を発動。

眼前に迫る巨大蜘蛛ヒュージスパイダーの足を、一気に凍らせていく。

魔術の精度も悪くない。それに、これだけの相手に怖気付くことなく魔術を発動できる精神力は素晴らしい……やはりクラリスは良いハンターになれる。

俺は冷静にクラリスの現状を分析する。

男性、女性に限らず巨大系の魔物に圧倒されて、まともに魔術を発動できない魔術師は数多くいる。むしろ、学院でもこの大量の巨大蜘蛛を前に、ここまで冷静に魔術を使える者は少ないだろう。

クラリスはそんな事実があるにもかかわらず、初見でやってのけた。素直に感嘆すべきだろう。

「よし、あとは俺がやるっ」

あとは身動きの取れなくなった巨大蜘蛛を短刀で処理していく。

集団暴走と言うこともあり、かなり興奮しているようで巨大蜘蛛たちは呻き声を上げながら俺たちに迫ってくるも……一閃。

次々と処理していく一方で、エヴィたちの方も順調なようだった。

「お、らあああああッー！」

エヴィはその四肢に第一質料を集中させると、そのまま豪快に素手で巨大蜘蛛を殴ることで処理していく。それに伴い、アルバートも持ってきているブロードソードで淡々と処理し続ける。

「やるな、二人とも」

俺はクラリスと協力しながら、こちらの巨大蜘蛛^{ヒュージスパイダー}を全て倒し尽す。

「俺の筋肉が燃えるぜえええええッ！」

エヴィはそれはもう豪快に暴れ回っていた。

あれはアリアーヌの魔術と基本原理は同じ魔術だろう。ただし、エヴィの場合は圧倒的な筋肉があるため内部コード^{インサイド}による強化はさほど必要ではない。

彼らしい、素晴らしい戦い方だ。他者の魔術を自分なりにアレンジして応用する。エヴィもまた、魔術師として上位に位置しているのは間違い無いだろう。

あの剛腕はきつと、巨大蜘蛛^{ヒュージスパイダー}にとっても厄介だろう。

その後ろで目立つことはないが、アルバートも奮闘していた。彼はただ冷静に、目の前の巨大蜘蛛^{ヒュージスパイダー}に怖気付くことなく淡々と処理していく。

汗を滴らせながら、アルバートは縁の下の力持ちと言わんばかりにエヴィの漏らした巨大蜘蛛^{ヒュージスパイダー}を薙ぎ払っていく。どうやら、立場が逆になっているようだが、しっかりと機能しているので良いだろう。

それから十分後。

俺たちは無事にこの区域の集団暴走^{スタンピード}の沈静化に成功した。

「はぁ……はぁ……お、終わったわねっ！」

「ああ。そのようだな」

「はあ……疲れたあ……」

「クラリスはやはり、素質がある。あの集団暴走スタンビードの中で、あれだけ冷静に魔術が使えるんだからな」

「そ、そう？」

「ああ」

「ふ、ふん。別に嬉しく無いけどっ！？　で、でもレイがそういうならそうなのかもねっ！　ふんっ！」

プイっといつものように目を逸らすクラリス。その頬はわずかに朱色が差していた。

そうして四人で集まると、その後は部長たちとも合流。誰一人として欠けることなく、今年の集団暴走スタンビードもまた俺たち環境調査部の手によって終焉を迎えた。

その後は、もちろん全員で筋トレに励んだ。

森の中でやる筋トレもまた、清々しいものだった。

「う、うにゃあああああっ！」

その中でクラリスは唯一の女性、それもそこまで筋肉量はないが懸命にトレーニングに励んでいた。

俺たちはその後、森で二日ほど過ごして今回の合宿は終了。

清々しい疲労感と共に、俺たちは森を出ていく。

「いやあ、楽しかったな！」

「ああ。エヴィもかなり張り切っていたな」
「おう！　しかしあの二人は……」

チラツとエヴィと同時に振り向くと、そこには死にそんな顔をしたクラリスとアルバートがいた。

「二人とも、大丈夫だろうか？」

「ああ……俺は問題ない。後は休むだけだからな」

アルバートは大丈夫そうだったが、一方でクラリスはフラフラだった。頭にいるジークフリートも心配しているのか、クラリスの頭をその角で優しく叩いている。

「クラリス、大丈夫か？」

「いや、ヤバイわ。マジでやばい……合宿やばいよお……体が痛いよお……うん、ちょっと泣きそうかも……ぐすっ」

流石に本格的なトレーニングをしていないクラリスは女子という事もあるって、ちょっとだけ泣いていた。

なるほど。これは俺が最後まで見送るべきだろう。

「エヴィ、アルバート。先に行ってくれ。俺はクラリスを自宅まで送る」

「ああ」

「わかった。ではまたな」

と、二人と別れを告げると俺はクラリスの側に近寄って、その小さな体を背中に乗せて歩き始める。

「わわっ！ ちょっと何するのっ!？」

「自宅まで送ろう」

「いや、そんな別にっ!」

「しかし歩くのも辛いだろう?」

「うん……筋肉痛が……」

「慣れるまでは辛いだろうが、頑張っていこう。俺もサポートするから」

「……その、いつもありがと。レイにはその、お世話になってばかりで」

いつもと違い、落ち着いた声でそういうクラリス。初めはジタバタと抵抗していたが、その体重を諦めて預けてくる。

「いや構わないさ。友人ならば、助け合いが大切だ」

「その……もし、レイが何か困ったら。私もその……助けるからっ! だからすぐに言いなさいよっ! あんたは結構抱え込みそうなタイプだから!」

「ああ。その時はよろしく頼む」

「うん……よろしくされてあげるわ!」

そして俺たちは、そのまま帰路へと着く。

「ではクラリス。また学校で」

「うん。送ってくれてありがと。バイバイっ!」

「ああ。また会おう」

クラリスがその小さな手を振ると、頭にいるジークフリートもまた角を大きくぶんぶん振っていた。

その後、俺が学院に戻ると待ち受けていたのは……部員のみんな

だった。

「レイ、戻ったか」

「部長……それにみなさんも、どうして」

「まだやっていくんだろう？」

部長がニヤリと笑うと、他の人たちも同様に微笑む。

「……そうですね。最後にやらせていただきます！」

ということで俺たちこと、マスキュラーモンスターズと評されているメンバーはジムへと向かい、筋トレによって清々しい汗を流すのであった。

この合宿での結論。

やはり筋肉は偉大であるっ！

第92話 ローズ家へようこそ

俺は現在、王国の中央区にいる。

右手には招待状を持ちながら目的地に向かう。

「さて、と」

立ち止まって改めて招待状に目を通す。

二日前、俺のところにアメリカの実家から招待状が届いた。それはローズ家からの正式なもので、俺としては驚きだった。

アメリカの母上が手配してくれたのだろうが、これほどまでに手厚く歓迎されているとは考えてもみなかった。

氷剣としての価値をそれほどまでに高く評価している……ということだろうか。

師匠に魔術師の世界について話はある程度聞いているが、それはあくまで表面的な部分。特に三大貴族の詳細は師匠たちでさえ、持ち合わせていない。

だからこそ俺は、この身一つでその渦中に飛び込んでいく必要がある。

本来ならば、そんなことをする必要はないのかもしれない。自らそんな世界に飛び込むなどという危険な真似は。

だが俺は既に三大貴族の人たちと交流を持っている。

皆それぞれ、素晴らしい人格を持ち合わせた人たちだ。そんな彼女たちと今後も付き合っていくためには、俺もまた冰剣として生きる覚悟を決めるべきなのだろう。

「……そろそろか」

ボソリと呟く。

今日もいつも通り、制服でアメリカの実家へと向かっていた。スーツなどは実は持ち合わせているのだが、学生ということで協会に赴いた時と同じ装いだ。もちろん、最低限の身嗜みは整えてある。

俺が向かうのは、あの三大貴族筆頭であるローズ家なのだから。

朝ということもあり、まだ日差しはそこまで強くない。わずかに汗ばんでいるほどだ。

俺はポケットに入れているハンカチで軽く汗を拭くと、視線の先に大きな屋敷があることを認識する。

貴族街。

俺が今いるのはそこだ。

王国の居住区は主に東と西。

しかし貴族たちが住んでいる場所は中央区寄りの南区である。南区は奥に行けば、主に農地などしかないが、その手前は全て貴族の土地となっている。その広大な土地を余すことなく使い、豪華な装いの屋敷を作り出している。

そんなローズ家は最も目立つ場所にあり、南区に入った瞬間に捉えることができた。ちなみに左右の隣は、ブラッドリイ家とオルグレン家。

三大貴族の屋敷は横一列に並ぶようにして存在している。

そして、俺はそのまま歩みを進めるが……そこにちょうど友人であるアリアーヌが立っているのが見えた。

「アリアーヌ、久しぶりだな」

「レイ、ですか？ 来るとは聞いていましたけど、早いんですね」

「ああ。遅れては失礼だからな。早めに来た次第だ」

アリアーヌは流石に夏休みであっても、装いがしっかりとしている。白いワンピースを着ているが、ポイントである刺繍はそれが上質なものであると主張しているようだった。

それに艶やかな白金の髪も、いつものように綺麗に縦に巻かれている。
ブラチナ

「アリアーヌ、よく似合っているな。今日も美しい」

「え……？ そ、そうですか？」

「ああ。私服は初めて見るが、よく気を使っているのが窺える」

「あ、ありがとうございます」

髪をくるくると指に巻きつけて、少しだけ頬を朱色に染めるアリアヌ。

二人でローズ家の門の前に立つと、すぐにメイドの方がやって来て敷地内に入れてくれる。

門の先には噴水があり、その先に屋敷がある。豪華な屋敷とは聞いていたが、実際に目にとするとアメリカは本当に貴族のお嬢様なのだと思ってしまう。

そして、俺とアリアヌはそのメイドの方の後ろについていくようにして歩みを進める。

「レイ。一つだけ忠告しておきますわ」

「なんだ？」

「エレノーラ様にはお氣をつけくださいまし」

「アメリカの母上か。どうしてだ？」

「きつと会えばわかりますわ。それにしても……」

じつと半眼で俺を見上げてくるアリアヌ。

「あなた、やっぱり只者ではありませんわよね？ オィディナリー 流石に一般人が

三大貴族の家に招待されるなど、前代未聞ですわ」

「……そうだな」

「認めますの？」

「俺が オィディナリー 一般人出身であることに変わりはない。だがそうだな。魔術師としては、異例というか特別な存在であることは間違い無いだろう」

「ふん。ま、今はそういうことにしてあげますわ」

「すまない。折を見て、アリアーヌにもいつか話そう」

俺が氷剣であるということは、別にアリアーヌには話してもいいと考えている。

だが問題なのは、その背後の三大貴族の関係性だ。

学生的身でありながら、七大魔術師の一人である俺という存在が貴族にどのような影響を与えるのかは未知数。

だがきつとそれは師匠曰く、貴族たちにとっては晴天の霹靂。さらには、俺は一般^{オーディナリー}人出身。普通は許容できるものでは無いという。

妬み、嫉み。そして、また別の感情によって俺に何が起こるか分からない。ということで今は様子を伺うべきだと、師匠に忠告されている。

「レイ！ それにアリアーヌも、いらっしやいつ！」

玄関から中に入ると、そこに広がっていたのは広大な空間。屋敷の大きさから予想はしていたが、やはり内装もしっかりとしている。赤を基調とした壁に、それに絨毯も同様である。

そんな中、玄関で出迎えてくれたアメリアはいつもと装いが違った。

髪は部分的に三つ編みしてそれを他の髪に馴染ませるようにして流しており、また服装はフリルのついた真っ白なブラウスに、真っ赤なスカートを身に付けていた。

しかしそのスカートは妙に丈が短いというか、これが今の流行なのだろうか。

アメリカのそのしなやかで綺麗な脚がほぼ全て露わになっている。

「アメリカ、あなた……ちょっと気合入りすぎじゃありません？
いくらレイが」

「わ、わあああああーっ！」

アリアーヌがその言葉を全て言う前に、アメリカが慌てて口を塞ぎにかかる。そして二人は隅のほうで何かを話すと、俺の方へと戻ってくる。

「どうかしたのか、二人とも」

「なんでも無いよっ！」

「……釈然としませんが、まあなんでもありませんわ」

「そうか。それにしても、アメリカの私服を見るのは久しぶりだがよく似合っている。綺麗な脚がよく見えて魅力的だと思う」

「ほ、本当につ！？」

「ああ。嘘など言うはずがない」

「そっか。えへへ……」

そう言って笑みを顔に広げるアメリカは、本当に変わったと思う。今のアメリカは心から笑っている。俺はそれを、感じ取ることができた。

その一方でアリアーヌはため息をつく、こう言った。

「はあ……レイのそれは天然ですね」

「なんのことだ？」

「いえ。それもまた美德。しかしいつか、大変なことにならないように祈りますわ」

「よく分からないが、忠告感謝する」

三人でそう談笑していると、メイドの人が声をかけてくる。

「レイ＝ホワイト様」

「はい。なんでしょうか」

「奥様がお待ちになっております。先に、面会して欲しいとのこと
です」

「わかりました」

アメリカの方を見ると、どこか気まずそうにしていたが……ここ
で断るわけにもいくまい。俺は素直に了承しておいた。

「では、アメリカとアリアーヌ。また後で会おう」

「うん。気をつけてね、レイ」

「まあ頑張ってくださいまし」

そして俺はそのまま屋敷の奥へと案内されると、大きな扉の前に
やってきた。そこでメイドの方が「こちらになります」と告げる。

俺は貴族の家、その中でも三大貴族筆頭のローズ家の魔術師に会
うと言うことでノックを四回ほどゆっくりとする。

すると中から、とても綺麗な声音で「どうぞ」と聞こえてきた。

「失礼します」

その場で恭しく一礼をすると、アメリカの母上が優雅に微笑みながら俺に対して挨拶をしてくれる。

「レイ＝ホワイトさん。お待ちしております」

「本日はお招き頂き、ありがとうございます」

「いえいえ。それでは、お座りください」

「は。失礼します」

応接室ということで、内装はシンプルなものだった。魔術協会で会長と話した時と同じように、長机に向かい合うようにしてソファ―が二つ。

そしてソファ―に腰を下ろすと、数人のメイドの方たちがテーブルに茶菓子と紅茶を置いて室内から去っていく。

その手際は鮮やかなもので、あっという間にこの場が整う。流石はローズ家のメイドといったところか。

「さて、まずは改めてご挨拶を。エレノーラ＝ローズ。現当主の妻です。よろしく願います」

「レイ＝ホワイトと申します。こちらこそ、よろしく願います」

「ふふ。私のことは、ノーラとお呼びください。親しい者はそうします」

「では、ノーラさん……とお呼びしても？」

「ええ。かまいません。私もレイさんとお呼びいたしますね」

「はい」

そついうとノーラさんは紅茶に角砂糖を一つほど入れると、かき混ぜてからそれを口にした。

優雅な所作でカップを元の場所に戻すと、彼女はにこりと微笑みながら会話を始める。

「アメリカがあなたのことをとても褒めていたんですよ？」

「恐縮です」

「少しばかり、昔話になりますが……あの子是不憚な子でした」

「……」

「三大貴族の長女ともなれば、その期待は計り知れないものになります。普通の魔術師に比べれば、破格の才能を持ち、努力も重ねてきました。そんなアメリカは自慢の娘です」

「……」

「しかし、オルグレン家のアリアーヌさん。それにブラッドリイ家のレベツカさん。あの二人はずっとアメリカの先を行っていました。そして他者と比較していく内に、アメリカは自分を見失いつつありました」

「そうでしたか……」

「ええ。でも親が介入すべきなのか。主人にも相談したのですが、アメリカならきつと乗り越える、の一言で済みますのですよ？ もう、私はずっと心配しているのに」

「少しだけ戯ける^{おど}ようにして、声の調子を変えるノーラさん。そんな彼女はどこか楽しそうに話を続ける。

「私も結局、母親であるというのに……あの子に何もしてあげることができませんでした。見守っていた、といえば聞こえがいいですけど……結局、あの子から逃げていたのだと思うのです。でも、アメリカは変わりました。他でもない、あなたのおかげで」

「……いえ、アメリカは自分で変わったのだと思います。自分はきつかけに過ぎません」

「謙虚なのですね。しかし、アメリカがあればほとまでの固有魔術^{オリジン}を手に入れたのは、あなたの教えがあったからでしょう?」
「……」

どうやら調べはついているようで、きつとあのレンジャー訓練のことを言及しているのだろう。隠し事の類はできないようだ。

彼女の鋭い眼光が獲物を狩るような動物のように、俺を射抜く。

「自分は彼女の力になりたくて、そうしたまでです」

「ええ。友人思いの素晴らしい方ですね。でもだからこそ、私は不思議に思ったのです。アメリカを指導できる人間はこの世界でも限られています。あの子は、破格の才能を持っているのは間違いないかった。そこで調べてみると出てきたのが……氷剣の魔術師でした」

その言葉に熱が帯び始める。そしてノーラさんはまるで自分の世界に入り込んでいくようにして、さらに言葉を紡ぐ。

「リディア・エインスワースが極東戦役で負傷したことは聞いていました。しかし、表向きは治療に専念しつつもまだ氷剣を続けると……そうなっていました。おそらく、他の貴族たちも未だに七大魔術師最強の氷剣は彼女だと思っているでしょう。しかし深く調べてみると、まあこれは私独自の方法なんですけど、どうやら氷剣は受け継がれていた。ある一人の少年に」

俺は間髪入れず、それに答える。

「それが自分です。間違いありません」

「その年齢で七大魔術師、しかもかの氷剣に至るとは……レイさんの過去までは調べていませんが、きつと壮絶なものなのでしょう。」

七大魔術師は伊達や酔狂で辿り着ける場所ではありませんから。そこは魔術師の果ての果て、常人では決して至ることはできない。誰よりもその地位を目指した私はよく分かります。だからこそ、あなたの存在は規格外過ぎる。本当になんと言っているのやら……」

「恐縮です」

そして、こほんと軽く咳払いをするとノーラさんはさらに真剣な顔つきになる。

「そこで、そんなレイさんに提案なのです」

「为什么呢うか」

俺は冷静にそう告げた。

本題はきつとこれだろう。

彼女は一体、何を言ってくるのだろうか。

「アメリアのことを導いて欲しいのです」

「……それは魔術師として、という意味合いでしょうか」

「ええ。あの子の固有魔術オリジンは強力過ぎます。身内贗品になるかもしれませんが、あの虚構にも匹敵する魔術師になる可能性もあります」

「それは自分も同意見です。因果に干渉する魔術はあまりにも強力です、そして危険です」

「そう。使い方を間違えれば、それこそ……魔術領域暴走を引き起こして、廃人になってしまうほどに。あなたなら、よくお分かりでしょう？」

「はい」

「どうやら、魔術領域暴走オーバーヒートのことまで知っているようだ。やはり彼

女は悔ることができない。

「お願いできますか？」

「元よりそのつもりです」

「そうでしたか。いえ、分かっていたのですが。念のため……というか、まあ親心ですね。こうしてレイさんに任せてしまうのは申し訳なく思いますけど。その代わりと言っては何ですけど、これから困ったことがあれば私に仰ってください。流石にローズ家としては難しいですけど、私個人としてお力になれるのなら協力いたしますので」

「ありがとうございます」

その場で頭を下げる。それと同時に緊張感が弛緩していくのが分かった。

どうやら、ノーラさんの本題は今のもので終わりだったみたいだ。

本当に娘思いの方なのだろう。俺は純粋にそんな感想を抱いた。色々と懸念していたが、杞憂なようで本当によかった。

「ああ。それとこれはちょっとした話なのですが」

「何でしょうか」

「アメリカのこと、どう思っていますか？」

「良き友人だと思っております。自分も彼女から学ぶことが多く、これからも互いに高めあってゆけたらと」

「今日、あの子は割と気合の入った装いをしていますけど……それについては？」

「自宅でも客人が来るということで、しっかりと気の使える素晴らしい女性だと思います」

ノーラさんはどこかがつかりしたような表情を見ると、ため息をわざとらしくついた。

「はあ……そうですか。なるほど、なるほど。どうやら、嘘は言っていない様子。あの子も大変ですね」

「? どういう意味でしょうか?」

「いえ。特に意味はありません。私の独り言ですので」

釈然としないが、どうやら話はここで終わりみたいだった。

「では本日は我が屋敷で寛いでいてください。あとはアメリカとメイドに任せますので」

「は。それでは失礼します」

ソファからスッと立ち上がると、俺は改めてその場で一礼をした。

そうして俺はノーラさんとの会話を無事に終えるのだった。

しかし最後に、まとわりつくような視線を背中に送られているような気がしたのはきつと気のせいだろう。

「さて、アメリカとどうやって……させるかが、問題ですけど……」

ノーラさんの声が遠ざかっていく。

俺はその声を特に気にすることもなく、屋敷の中を進んでいくのだった。

第93話 それはきっと、美しい写真となる

ノーラさんとの面会を終えた俺は、メイドの方に再び案内されていた。挨拶はすでに交わしており、俺はミアさんと呼んでいる。呼び捨てで構わないと言うが、互いに譲歩し合った上でそう呼んでいる。

彼女はこのローズ家の中でも地位が高いメイドらしく、主にアメリカの世話をしているのだからか。

行先はアメリカの自室。

そしてノックをした後に、ミアさんが口を開いた。

「お嬢様。お客様をご案内いたしました」
「入ってもらって」

室内からアメリカの声が聞こえてきた。

「それでは、レイ様。どうぞ」
「はい。ここまで案内していただきありがとうございます」
「いえ。それでは私はここで失礼いたします」

簡素な会話を交わして後に、俺はアメリカの自室へと入っていく。

「あ……その、いらっしやい」
「ああ。失礼する」

室内はやはり、かなり広かった。俺たちの暮らしている寮の一室の倍はあるだろうか。内装はそこまで派手なものではないが、隅々まで手入れが行き届いている印象だ。

テーブルと椅子。それに天蓋付きの大きなベッド。あとはクロ―ゼットに家具全般。部屋の隅には大きな本棚が並んでおり、アメリカもまたそれなりに読書をするのだと分かってどこか親近感が湧いた。

「えっとその……す、座ってもいいよ？」

「では、ここに」

「うん」

そう言っただけで俺は、テーブルの前に置かれている椅子に腰を下ろす。それと時を同じくして、ミアさんが室内に紅茶と茶菓子を持ってきてくれる。

「それでは、ごゆっくり」

そう言っただけで彼女は下がっていくのだが、妙に顔がにやけているというか……わずかにアメリカの方を向いてからアイコンタクトを送っていたような……まあ、考えすぎだろうか。

そして、俺とアメリカは向かい合うようにして座る。

「そういえば、アリアーヌはどうしたんだ？」

「借りてた本を返しにきただけだから、すぐに帰ったわよ」

「そうか。残念だな」

「……」

「ん？ どうした？」

じつと半眼で俺のことを見つめてくるアメリカ。

何か気にでも触ってしまったのだろうか。

「……アリアー又がいた方が良かったんだ」

「久しぶりに会ったからな。でもそう言う理由なら仕方ないさ。アメリアと二人でも俺は嬉しい」

「そ、そっか……」

「本当はみんなもいれば良かったが……」

「それは仕方ないね。予定がなかなか合わなくて」

実は今日、アメリカの実家にやってくるという話はいつものメンバーにもしていた。しかしやはり、全員の予定を合わせることは叶わなかった。ということで、ちょうど暇だった俺だけがこのローズ家にお邪魔しているという形だ。

「それでその……お母様との話はどうだったの？」

「それは……」

少しだけ思案する。

別に本人に言っただけはいけない……と言う話は出ていない。

しかしここでありのまま話してしまえば、プレッシャーになってしまうかもしれない。だからここは、要約した内容を話すことにした。

「アメリカをよろしくと言われた」

「へ！？」

「どうした？」

「そ、それってどう言う意味で？」

その真っ白な肌を桜色に染めていくアメリカは、恥ずかしそうに俺のことを見上げてきた。

なるほど。やはり、自分の親と友人が話すと言うのは恥ずかしいもののか。これは確か文献で言うものだと言ったことがある。

「もちろん、友人としてだ」

「……うん、知ってた。うん……」

色を失った目で虚空を見つめ始める彼女は、茫然とそう呟いた。

最近よく思うのだが、アメリカのことがいまいち掴みきれない時がある。しかしまあ……乙女心は複雑怪奇であると師匠に教わっている。

男である俺がここで無遠慮に尋ねるべきではないのだろう。

「あ、そういえばさ」

「どうした？」

「噂程度の話なんだけど、実は年末に団体戦が開かれるとあって」

「団体戦？ それは魔術剣士競技大会に類したものなのか？」

「えっと……まだその、よく分からないけど今年から導入されるかもって聞いたの」

団体戦か。

しかし魔術師を育成する目的ならば、悪いものでは無いだろうと俺は思っていた。

「なるほど。魔術師育成のためには、確かに団体戦というものは経験しておいて悪いことはないだろうな」

「そうなの？」

マギクス・シュバリエ

「魔術剣士競技大会は完全な個人戦だろう？　だが、やはり集団で魔術戦をするとなると勝手はかなり変わってくる。もしかすると、その一環なのかもな」

「へえ。そうなんだね」

その後も二人で他愛のない話をしていると、後ろの方でドサッと何かが落ちる音が聞こえた。

「ん？　何か落ちたが？」

「あ、ごめんね。ちょっとアルバムが」

「アルバム？」

「えっとその……見たい？」

それを拾って胸に抱えるようにして尋ねてくるアメリカは、どこか不安そうと言うか、期待もしていると言うか、そんな印象を抱いた。

「もしかして、幼少期のアメリカが写っているのか？」

「あ、うん。その……恥ずかしいけど、レイになら見せてもいいよ

……？」

「おお！　それは非常に興味がある！　是非とも、見せて欲しい！」

「じゃあ、一緒にみよう？」

「ああ！」

互いの体を寄せ合うようにして俺たちは一つのアルバムを見つめるが……その際に、わずかに植物系の香料の香りが鼻腔をくすぐる。

「アメリカ、香水をつけているのか？」

「あ？ ごめんね。ちよつとキツかったかな……」

「いや大丈夫だ。今日のアメリカはとても魅力的だと思う」

「う……うん。ありがと、頑張った甲斐があつたかも。えへへ……」

あどけない笑顔を浮かべる。

本当に変わったものだ。きつとこの笑顔を生み出すのに、どれほどの葛藤を乗り越えてきたのだろうか。あの魔術剣士競技大会で、俺たちは互いに進んでいくと決めたからこそたどり着いたと思うと、俺はどこか自分のことのように嬉しかった。

「お、アメリカ小さいな！ これは何歳だ？」

「三歳くらいかな？ 私もよく覚えていないけど」

「なるほど。しかし今の面影がしっかりと残っているな」

「そう？ 自分だとピンとこないけど」

そこに写っているアメリカの写真は、この家の庭でニコニコと笑いながらピースをしているものだ。しかし、まだ上手くピースの形が作れていないようで少しばかり歪だ。

「ピース。上手くできていないな」

「こ、この時はそうだけど……！ ほら、次からはちゃんとしてるから！」

そして次のページでは、アメリカ、アリアヌ、レベッカ先輩の

三人が写っていた。三人とも笑いながら、写真に写っていた。その中でもアメリカとアリアー又は寄り添うようにしてピースをしていた。

この時の写真は、アメリカの言った通りしっかりと指の形は整っていた。

「おお。アメリカ、アリアーヌ、レベツカ先輩か」
「うん。この時は、まだ仲が良かったから……」

そう言う彼女の声音はどこか暗いものだった。チラッと横顔を見ると、アメリカは悲しそうな顔をしていた。

そして黙ってページをめくっていくと、徐々にアメリカの顔からは笑顔がなくなっていく。厳密に言えば、笑顔の写真はあった。しかし、それはやはり作り物。どこか貼り付けたようなものでしかなかった。

暫しの静寂。

それを切り裂くようにして、アメリカは口を開いた。

「その、ね。私はずっと悩んできた……でも、その！ レイに出会って、もうこの私とは決別したの。だから改めて今日は、お、お礼が言いたくてっ！」
「アメリカ……」

俺は黙ってそんな彼女の手を握りしめた。不安そうにしているからこそ、自発的にそうしたくなったのだ。

「ひゃっ！」

「アメリカ。こちらこそ、感謝を伝えよう。あの魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエでは俺もまた、人として成長させてもらった。みんなが、アメリカがいなかったら俺は……人の心に触れるのをまだ怖がっていただろう。だから、ありがとう」

「うん。私も、ありがとう」

と、その瞬間コンコンと部屋のドアがノックされた。

「お嬢様、準備が整いました」

その言葉はどう言う意味だろうか。

そう思っていると、アメリカが俯きがちに説明してくれる。

「あのね。今までの私はずっと暗い顔で写真に映っていたけど、その……今日からもつと笑顔の私でいたい。だから、一緒に映ってくれない？ このアルバムのページにレイと一緒に、そしてこれからはみんなとの写真もたくさん載せたいなって……」

その言葉を聞いて、拒否するわけなどなかった。俺は颯爽と立ち上がると、アメリカの手をとって一緒に部屋の隅の方へと移動していく。

「もちろんだ。記念すべき、初めての写真だな。俺たちの」

「う、うん……！」

ミアさんは恭しく礼をして、大きな脚立付きの写真機を持ち込んでくると、それを俺たちの前に設置して彼女はにこりと微笑む。

「お二人とも、もつと近くに並んでください」

「ええ……！？ もつと近く！？」

「はい。お嬢様はもつとこう、腕に抱かれるような形で。レイ様はそれを受け止めるような形でお願いします」

「分かりました」

「……分かりました！？ いいの、レイ！？」

「もちろんいいに決まっているだろう。アメリカは別の構図がいいのか？ 俺は合わせるが」

「いや、これでいい……けど」

そして少しだけ遠慮しながらも、アメリカは俺の体にそっと自分の体を寄せてくる。俺もまたそれを受け入れるようにして、そっと腰に手を回す。

「では撮りますね。はい、チーズ」

瞬間、眩い光が俺たちを包み込んだ。

その写真に映っている俺たちは、しっかりと笑っているのだろうか。

いや、きっと最高の笑顔で映っているに違いない。

だって俺たちはもう、心から笑い合える最高の友人なのだから。

第94話 レベツカ先輩の秘密

園芸部へと向かう。

夏休み中はほぼ全ての管理を俺がやっていた。部員の方々は貴族として忙しいようなので、率先して引き受けたのだ。

俺が実家に帰っている間は、ディーナ先輩、それにレベツカ先輩も水やり、肥料を変えるなどの作業をしてくれていた。

現在は、夏休みも終わりに近いがまだ寮に帰ってきていない園芸部の方たちも多い。

ということで、いつものように鍵を開けて植物の管理と室内の清掃を行う。

清掃の方は別にこの部屋はいつも清潔に保たれているので、毎回する必要はないとディーナ先輩に言われたが、それでも最低限のことはしておく。

箒ほうしを手にとつと、わずかに残っている塵や埃を一か所に集めてそれを塵取りに入れてからゴミ箱に捨てる。

ゴミ箱の袋の口を閉めると、それをゴミ捨て場に持っていき今日の活動も終了か……と思っていたら、俺は何か違和感を覚える。

本棚の位置がずれている？

それはただの直感に近いものだ。

本来ならばこんなことは気にしないし、普通に無視しておくだろう。だがどうしても気になってしまったので、その本棚の前に立ってみる。

「……位置は変わっていない」

と、俺はその場にしゃがんでみる。するとそこには、引きずったような跡が微かに残っていたのだ。

それにインクの染みの痕跡もそこにはあった。

「待てよ、これは……」

敢えて声に出すことで、思考を整理する。

本棚の下にある引きずった跡。それにインクの痕跡。

しっかりと綺麗に拭き取ってあるが、至近距離で見ればそれはインクが溢れた跡こぼだというのは理解できた。

そして思い出すのは、レベツカ先輩の言動。

先輩は、あの日……俺が室内に入ると慌てて何かを隠すようにして出て行った。そして残ったのは、インクの痕跡。

「やはりこれは、何かあるな」

俺はさながら探偵の如く、この謎を解くために行動を開始した。

まず気になるのはこの本棚だ。そもそもどうして引きずった跡がある？ 引きずるということは、この本棚を動かしている人間がいるということ。

もしかすると、これは……。

俺が自分の過去の経験から思い出されるのは、隠し扉の類だ。極東戦役の際に、任務中に隠し扉の類を発見したことは多々ある。そして本棚の後ろに隠し部屋が広がっている……その可能性もゼロではない。

ということで、俺はまずは力づくでこの本棚を動かしてみることにしたが……。

「……動かない、か。何かで固定されているのか？」

本気を出せば、というよりも破壊するつもりでやればいいのだろうが、流石にそうする訳にもいくまい。ということで俺は本棚にある本をいくつか取り出すと、その中を確認する。

しかし仮に誰かがこれを日常的に使っているとすれば……男性の線は消えるだろう。今現在は園芸部に入ることができる男は俺だけ。

つまりは、女性の身長から考えて中を調べれば……。

「あつた。なるほどな」

棚の上ではなく、中央の右の隅に魔術の痕跡を発見。それは、六

芒星の形をしていた。おそらくは、第一質料を流し込めば、起動するだろう。プリママテリア

そして俺は少量の第一質料を流し込んでみると……。

ゴゴゴゴゴ　と音を立てて、本棚が回転し始めた。

「階段？」

本棚の後ろに隠れていたのは、階段だった。それも地下に続く階段。その先には闇しか広がっておらず、普通ならば入るのは躊躇するだろう。

しかし今の俺は好奇心が先行している上に、もしかすると危険なものである可能性もある。

園芸部の先輩方を危険に晒すわけにはいかない。

俺はある種の使命感を抱きながら、その階段を降りていくのだった。

「明かりはあるのか、どうやらかなり薄暗いものだが……」

階段を降りていくと微かに明かりが灯っている。間違いなく誰かが日常的に使っているのだろう。そして俺はすぐに、行き止まりにたどり着く。

だが行き止まりと言っても、扉があるのだ。どうやら鍵穴は存在しているようで、もしかすれば鍵がかかっているのかもしれない。

「まずは……」

とりあえずダメ元でドアノブを回してみる。

するとガチャリと音を立てて、扉が開いた。鍵はかかっていないようだ。

そして俺の視界に入るのは 。

「あら？ デイーナさんですか？ 今日は来ない予定で……は？ え？」

室内は明るい。

薄暗い階段とは違い、しっかりと明かりが灯っていた。それに加えてそこにあるのはL字型の長机と複数の椅子。

机の上には書類が広がっており、そしてその目の前には……女性
がいた。

俺のよく知る、とてもお世話になっている先輩が。

「レベツカ先輩、ですか？」

なぜ、疑問形で尋ねているのか。

それにはもちろん理由がある。

なぜならば、先輩はラフな赤い寝巻きのような服装をしていて、いつもはかけていない眼鏡をかけていたからだ。

髪は乱雑に後ろにまとめて、おおそいつも美しく身なりを整えているレベツカ先輩とはかけ離れていた。

それでも原型はしっかりと残っている。

目の前にいるのは、間違いなくレベツカ先輩だ。

しかしどうして、こんなところに……？

そしてポカンとしているレベツカ先輩はガタツとおのの慄くようにして椅子から立ち上がると、その際に一枚の紙が俺の手元へと流れるようにして落下。

それを拾って、目を通すとそこには……。

「カートゥーン？ いやこれは、漫画ですか？」

活版印刷の登場により、本が世界的に広まったのは有名な話だ。しかし昨今、確か……漫画なるものが世間に登場したことは記憶に新しい。

曰く、絵を書いてそれにセリフをつけるのだとか。俺はいまいちにそちらの文化に詳しくないが、確かキャロルが何冊かその手の本を持っていた気がする。

そして、そこに描かれていたのは、二人の男性が絡み合うようにして抱き合っているものだった。それにセリフも書いてある。

「俺はお前のことを、ずっと前から愛してるぜ……？ レベツカ先輩、これは？」

「う、うわあああああああああああつー！！」

レベツカ先輩は、俺の方へと必死に走ってくるとその紙を乱暴に奪い取った。

「はあ……はあ……はあ……」

呼吸が荒い。それは別に走っただけが原因では無いだろう。明らかに、動揺しているのが分かる。

「先輩、これはどういうことですか？ この部屋も、レベツカ先輩がしているのもしかして……？」

「うっ！ ち、違っんですよレイさん！ これには理由が、理由があつてっー！！」

「なんででしょうか？」

「あ……えっとその……うっう……ここまで来たら、話すしかないようですね」

レベツカ先輩は肩を落として、椅子に屈折くせつれる様にして再び座る。そして先輩は残っている椅子に座るように促してくるので、俺も示された椅子に座る。

「まずはそうですね……どこから話しましょうか」

「この部屋は一体？」

「この部屋は、そうですね。実は昔からずっとある隠し部屋だそうですね。と言っても、初代園芸部の部長がこっそりと栽培したい植物があったから作ったものみたいですが……」

「なるほど。それで今は、レベツカ先輩が活用しているの？」

「そ、その……はい。そうですねが……」

顔を真っ赤にして、俯いている先輩。それは顔だけでなく、耳まで真っ赤に染まっていた。それほどまでに恥ずかしいことをしていたのだろうか。

俺としては芸術活動を嗜んでいるレベツカ先輩にはただただ尊敬の念を覚えるばかりなのだが……。

「この部屋は代々園芸部の部長が引き継ぐというか、そんな感じのもので……でも今までは特に使われていなかったんです」

「しかしどうして、レベツカ先輩はここを使用しているのですか？」

「そ、それはっ――！」

「もしかして、ここにある漫画の作業をするために？」

「う……そ、そうですね……」

「自宅ではないのですか？　漫画を書くならばここよりも、そちらの方がいいでしょう」

「それはその……恥ずかしいので。それにきつと家族にバレるとその……問題になりそうなので。こっそりやってます……はい……」
「なるほど。そうですねですか」

諸事情があるのだろう。俺はなんとなくその背景を悟った。確かに自分の創作したものを見られるというのは、ある程度の羞恥心を伴うのかもしれない。

そう考えながらも、俺はレベツカ先輩の手元に寄せ集められてい

る紙に目が吸い寄せられる。

「み、見ちゃダメですよっ！」

慌てた様子でそう言うレベツカ先輩。しかし、どうしても見てみたかった。あのページだけでは、気になってしまう。

「ダメですか？ 先ほどの絵は大変素晴らしいものでした。先輩はすごいですね。芸術活動にも通じているとは。本当に尊敬します」

「そ、その……良かったですか？」

「はい。大変素晴らしいものでした。芸術には疎い自分ですが、それでも心打たれるものがありました。絵画を鑑賞することはありますが、漫画というものにはあまり触れることはなかったのです。あれをレベツカ先輩が描いていると思うと、自分は感嘆するばかりです」

「へ、へえ……その実は、恋愛をテーマにしているんですけど」

「なんと！ 恋愛ものの漫画ですか！ 恋愛小説は読んだことがあります、恋愛漫画は読んだことはありません。是非、拝見させていただきます！」

「あ、えつとその……ちょっとばかり問題があるのですが」
「なんでしょうか？」

先輩は体をソワソワと僅かに揺らしながら、俺の顔を上目遣いでじつと射抜いてくる。

そしてレベツカ先輩はその瞳を潤ませながら、こう言葉にした。

「だ、男性同士の恋愛なんですっ！」

「男性同士、ですか？」

「は、はい。そのへ、変ですよ？ あはは……ごめんなさい。これは聞かなかったことに」

「先輩」

「ひゃいつ！」

俺は不安そうにしている先輩の手を、そつと優しく包み込む。

「同性愛には理解があります。以前所属していた場所では、同性愛者の方もいましたので。それに、人の趣味を変と思うわけがありません。レベッカ先輩は好きなのでしょう？ 人の好きなものを頭ごなしに否定するわけがありません。それに恋愛をするのに、性別は些細なことです。そこに確かな愛があれば、いいのではないでしょうか？」

「れ、レイさん……」

その瞳はまだ揺れている。でもそれは、先ほどのような不安には染まっていない。どこか期待するような、そんな色が込められている気がした。

「分かりましたっ！ では、読んでみてくださいっ！」

先輩は手元にある紙の束を俺に渡してくる。その手は未だに震えていた。

俺はニコリと微笑みながらそれを受け取る。

「拝見させていただきます」

ペラっと、ページをめくっていく。

静寂。

圧倒的な静寂がこの空間を支配する。

俺は真剣にレベツカ先輩が描いたという漫画を読み進めていく。それは話に聞いた通り、男性同士の恋愛ものだった。だが俺は理解した。性別は確かに男性同士ではあるものの、ここにあるものは間違いなく純愛だと。

互いに好きだというのに、その性別が故に踏み切れない。

だが最後には想いを伝えあつて結ばれる。様々な葛藤を乗り越えて、たどり着いたその結末。

俺はその物語と素晴らしい絵に浸ると、最後のページまで読み終わった。

「ふう……」

「ど、どうでしたか？」

両手をギュツと握りしめて、そう尋ねてくるレベツカ先輩。

俺はもちろん、正直な感想を彼女に伝える。

「素晴らしいですっ！」

「え？」

「これはすごいですよ先輩っ！ 感動しましたっ！ 文字だけの小説とは違う、新たなエンターテイメント！ 漫画ではキャラクターの表情なども可視化されているので、理解しやすい！ 先輩、これはすごいですよ！」

これが俺の感想だった。

レベツカ先輩は絵も素晴らしく上手い。それに、話の構成も素晴らしいものだった。レベツカ先輩はきつと、この芸術世界において頂点に立つお方だと俺はすぐに理解した。

「ほ、本当ですか？」

「はい！ すごいですよこれは！ 絵も上手いですが、話の構成が素晴らしい！ 人物の葛藤がうまく表現できているというか……素人の自分が評価するなどおこがましいですが、ただただ感動しました」

「え、えへへ？ そ、そうですか？ よかったですか？」

「はいっ！ 出版しましょう！ 今から直談判ですっ！ 任せてください。交渉には自信があります！」

完全に興奮している俺は、意気揚々とこの地下から出て行こうとするがレベツカ先輩にグイッと襟元を掴まれて止められてしまう。

「ま、待ってください！」

「おっと……申し訳ありません。興奮しすぎてしまったようで……」「いえ。その、とっても嬉しかったのでいいんですけど。実は、これとは別のものなんですけど、製本はしてあつて……簡単なものですよ」

「なんと！ そうでしたか！」

「それで実は明日、即売会が王国内でありまして……完全予約制の秘密のものののですが……一般公開はされていません」

「ふむふむ、なるほど」

「それでよかったですら、なんですけど……お手伝いしてくれませんか？」

「！ それは販売の手伝いをすればいいということでしょうか？」

「はい。実は明日はディーナさんも来れなくて、元々私一人で行く

予定だったんですが……やっぱり不安で」

「任せてください！ 自分がお手伝いさせていただきます。先輩の素晴らしい芸術活動に協力できるなど、嬉しい限りです」
「本当ですかっ！？」

瞬間、レベツカ先輩の顔に満面の笑みが広がる。

今まで微笑んでいる先輩は見たことはあるが、ここまで嬉しそうに破顔するのは見たことがない。きっと、余程嬉しいのだろう。

ならば俺は、最大限の協力をしようではないか。

尊敬する先輩のためならば、俺はなんだってしよう。

「レベツカ先輩！」

「はいっ！」

「二人で頑張りましょう！」

「そうですねっ！ では、えいえい……」

「「おーっ！」」

そして俺たちは、この王国で秘密裏に行われる漫画の即売会に赴くことになるのだった。

第95話 初めての共同作業

「レイさん。すみません、お待たせしてしまいましたか？」

「いえ。自分もいま来たばかりですので」

「ふふっ……」

口元に手を当てて笑うレベッカ先輩。

そんな先輩は大きなトートバックを肩にかけて、服装はシンプルに真っ白なワンピースだった。特にフリルや刺繍などの装飾はなく、無地の白いワンピース。

それがこんなにも似合っているということは、それほどまでにレベッカ先輩が美しいということだろう。

それに髪型も今日は低い位置でツータールにまとめている。

いつもよりも少しだけ幼く見えるが、それが逆に先輩の魅力を引き立てている。

「その、なんだかデートみたいだなあ……って思いました」

「そうですね。言われてみれば、その通りですね。光栄です」

「……そ、そうですね。ちょっと照れますね、あはは」

そして俺はいつも通り、その容姿を褒める。これは師匠に徹底されておき、常に女性にはそうしろと言われているからだ。

「髪型も服装も大変よく似合っています」

「あ……その、そうですか？ 一応、販売をするということですね。それなりの格好はしてきたつもりですけど……ちゃんとしていますか？」

「はい。可愛らしいかと」

「……」

「どうしました？」

「いえ。なんでもありませんよ。ではいきましょう！」

「はい！」

中央区の噴水の前に集合した俺たちは、そのまま目的の場所へと向かっていく。

なんでも話によると、この手の即売会は三年ほど前から開催されているようで、レベルカ先輩はそれに全て参加しているらしい。ちなみに売る側になるのは、今年が初めてらしいが。

そして二人でやってきたのは、変哲もない建物の前。一階には飲食店が入っており、二階には雑貨屋がある建物だ。しかしここには、別の入り口があるらしく……。

その建物の裏口にやってくると、扉があった。そこを開くと、あの園芸部の部室にあった隠し扉のように地下へと伸びる階段が続いていた。

「行きましょうか」

「はい」

俺たちはその階段を降りていって、地下の扉を開ける。そこは薄暗い場所で、どうやら受付をしているのが伺えた。

室内にいるのはほぼ女性で、それに大人の女性が多いように思えた。どうやら学生らしい人間の姿は今は見えない。

「これを」

「はい。受け取りました」

そしてレベツカ先輩が何か紙のようなモノを渡す。ここは完全予約制らしく、買い手であろうと、売り手であろうと、そのチケットがないと入ることができないらしい。

受付の方がレベツカ先輩からそのチケットを受け取るが、俺はその受付の人に妙に覚えがあるというか……完全にあの人ではないだろうかと、疑問が生じる。

「あの、もしかしてカーラさんですか？」

「え？」

「やっぱり。雰囲気が少し違いますね。でもよくお似合いだと思いますよ」

「……レイ様。少しよろしいでしょうか」

「はい。構いませんが」

カーラさんにそう言われて、俺は室内の隅の方へと連れて行かれる。レベツカ先輩には、「少しだけ待っていてください」と伝えておいた。

「レイ様。どうしてここに？　ここは男性が来るような場所ではないですよっ！」

「しかし、男の方もいるようですが」

「あの人たちは例外ですっ！」

「はぁ……そうなのですか。それで、カーラさんはどうしてここに

「？」

「う……」

いつもは無表情で無感情なカーラさんが、今日は普段と違ってものすごく感情的である。それにすごく焦っているような、そんな気がした。

「実はこの即売会の……運営をしております」

「おお！　ということは、カーラさんも芸術を愛する方なのですね！」

「ん？　認識に齟齬があるような……ここはどのような書籍を売るかご存知で？」

「レベツカ先輩のものは、漫画ですね。男性同士の恋愛を描いたものですが」

「そうです！　ここはそういう場所なのですっ！　だから早くお帰りくださいっ！　そしてくれぐれも、このことは主人には内緒にしてくださいだけと……」

その目が俺の双眸を射抜いてくる。さらには、カーラさんの表情は必死だった。しかももちろん、俺は誰の趣味にでも理解を示す所存だ。

「分かりました。師匠には絶対に口外しません。カーラさんにも事情があるようですから」

「それは……助かります」

「しかし、今回の即売会には参加します」

「どうしてですか！？　だってここはその……男性同士の恋愛を好む人が来る場所なのですよっ！」

「ふむ……なるほど、そういうことでしたか」

「そういうことです……ですから、今日のことは忘れて」

「いえ。自分はレベツカ先輩の手伝いをする決めたので。それに、何が好きでも俺は軽蔑などしません。だから参加させてくれませんか？」

「う……うう……わ、分かりました……でも、くれぐれもご内密にお願いしますよ？」

「了解しました」

会話はそこで終了し、俺はレベツカ先輩の元へと戻っていく。

それにしてもカーラさんとあそこまで話したのは初めてというか、彼女にもあのような一面があると分かって俺は少しだけ得した気分だった。

「レイさん。お知り合いの方でしたか？」

「はい。すいません、お時間取らせてしまったようで」

「いえいえ。では行きましょうか」

「はい」

さらに奥の方に行くと、そこには広々とした空間があつた。長机がいくつか置かれており、すでに他の女性の人たちが机に書籍を置いて販売の準備をしている。

「え、男性？」

「男の人？ どうして？」

「珍しい……でも、カッコいいけど……」

「もしかしてこっち系の人？」

「えーなにそれー。でも、ちょっと良いわねそれ……ふふふ……」

ふむ。男性の俺が珍しいということ、色々と騒がれているようだが別に気にすることもないだろう。今日やるべきことは一つなの

だから。

「では、私たちの場所はここなので。準備しましょう」

「はい。お手伝いします」

俺たちは指定された箇所に行くと、用意されている椅子を後ろの方にズラしてまずは立ち作業で本を並べていく。

レベツカ先輩はトートバッグの中から薄い本を取り出すと、それを積み重ねるようにして並べる。一冊は見本誌と書かれており、それを目立つように立てておく。その後ろには支えるための板を立てておく。

約五分程度で準備は完了した。

「先輩」

「はい。なんででしょうか？」

「これは何冊くらいあるのですか？」

「その初めてなので……二十冊くらい刷ってきました」

「二十冊！ お値段は？」

「一冊、五百アルドです」

「なるほど。勉強になります」

「でも売れるかどうか、心配ですね……」

「レベツカ先輩」

俺は隣で不安そうにしている先輩を見つめる。肩を落として小さくなっているようで、少しだけ震えていた。

俺には理解できない気持ちだ。創作活動をして、ましてやそれを売ろうなどとは夢にも思ったことがないからだ。

しかし、レベツカ先輩が不安がっていることはわかる。

だから、以前のようにそつと両手を包み込むようにして先輩を励ますことが、俺に今できることだ。

「絶対に大丈夫とは言いません。しかし、自分は先輩の本に心を打たれました。きっと他の方の心にも響くはずです。そう信じています」

「レイさん。その……あ、ありがとうございます。いつも励ましてもらって」

「いえ。この程度のことでしたら、いつでも」

そしてついに販売する時間となり、先輩の初陣が始まることになった。

「一冊ください」

「ありがとうございますっ！ レイさんっ！」

「五百アルドになります。確かに受け取りました。こちら、商品になります」

「ありがとうございますーっ！」「」

二人で頭を下げる。

レベツカ先輩の心配はどうやら杞憂だったようで、開始一時間にして半分は売れてしまった。見本誌を見た女性は、買わない人もいたがどちらかといえば買う人の方が多かった気がする。

「先輩、売れ行き良いですね」

「そ、そうですね……ちょっと信じられなくて……でも、嬉しいですっ!」

「この調子で最後まで頑張りましょう!」

「はい!」

二人でソワソワとしながら待っていると、次のお客がやってきた。だがそれは、まさかの人物であり俺は少しだけ喜びの声を上げてしまふ。

「エリサ! エリサじゃないかつ! 奇遇だな!」

「え……れ、レイくん……え?」

ポカンとしているエリサ。

完全に停止しているが、大丈夫だろうか。

と、エリサはすぐに意識を取り戻したようで俺の方に顔を寄せて小声で話しかけてくる。

「ど、どうしてここにいるのっ!?」

「同じことを聞かれたが、先輩の手伝いだ」

「先輩?」

エリサは俺の隣に座っているレベッカ先輩をチラッと見ると、慌ててその場でお辞儀をする。

「あ! レベッカ先輩! お久しぶりですっ!」

「エリサさん、お久しぶりですね」

「も、もしかして先輩が本を出しているのですか?」

「はい。レイさんはちょっと色々あって、お手伝いをしてもらっ

ています」

「……レイくんは、ここがどういう場所か理解しているんですか？」

「はい。彼は理解がある人ですよ」

「そ、そうでしたか……」

エリサは再び俺の方を向くと、恥ずかしそうにこう告げてくる。

「レイくん……みんなには内緒にしてね？」

「ああ。もちろんだ」

「じゃあその……一冊ください」

「毎度ありっ！」

その後、エリサはペコペコと何度も頭を下げて俺たちがいる場所から去っていった。

「エリサさんは同族の匂いがしていましたが……やはり、私の直感
はあっていたようですね」

「なんと！ そんなことも分かるのですか！？」

「ええ。同族の方はなんとなく理解できます」

「さ、さすが先輩です……尊敬します」

「ふふん。そうですね？」

と、珍しく胸を張って自慢げにそう語る先輩。

そんなレベツカ先輩の新しい一面を見ることができて、俺は嬉しかった。

先輩は一見すれば、なんでもできる完璧な人のように思えるが実際にはお茶目なところもあるのだと。それを知れただけでも、今日は来た甲斐があった。

その後は貴族の令嬢や、奥方などがやってきて挨拶を交わしてから本を購入してもらった。意外とこのような場所にも貴族の方々はやってくるのだと、大変勉強になった。

そして無事に全ての書籍を売ると、本日の即売会がちょうど終了になった。

「はあ……緊張しましたけど、良かったです。まさか全部売れるなんて！」

「先輩の力だからこそですよ。やはり、あの本は素晴らしいものでした」

二人で帰り道を進む。すでに今は黄昏時。日が暮れそうというところで、俺は先輩を家まで送ることにした。アーノルド王国は犯罪率が低いものの、ゼロではない。何かに巻き込まれることも考慮して、俺は先輩を自宅まで送っていく。

「……そう言ってもらえて嬉しいですけど。でもやっぱり、レイさんがいてくれて心強かったです。本当は一人で来る予定でしたので、不安で……それに、お誘いできるお友達もいなくて……はじめは恥ずかしかったですけど、レイさんに知ってもらえてよかったです」

「そう言ってもらえて、恐縮です」

二人で今日の感想を話し合っていると、先輩の自宅に到着してしまった。楽しい時間は経過するのが早いというが、今日は本当にあっという間だった気がする。

そして、レベツカ先輩は屋敷の門を開けると、そのまま恭しく一礼をして別れを告げる。

「レイさん。また新学期にお会いできることを楽しみにしています」
「はい。自分もまた先輩に会えることを心より楽しみにしています。また何かお手伝いできることがありましたら、いつでもお呼びください」

「いえ。実は、最初で最後だったのです……楽しい思い出を、ありがとうございました。レイさんと一緒に、本当に嬉しかったです」

先輩は微笑んでいる。だがその雰囲気はどこか、哀愁が漂っていた。夕焼けの光に照らされながら、突風が吹いた。先輩は靡く髪を押さえながら、悲しそうに俯いてしまう。

顔は見えないが、地面に滴の跡が残る。もしかして、涙を流しているのだろうか。いや、間違いなくそれは涙だった。ポタ、ポタポタと地面にその跡が生まれる。

「それはどういう」

意味でしょうか。

と、言葉にするのを遮る様に先輩は身を翻して屋敷へと向かってしまう。

「レイさん。また、新学期に……」

「はい……」

どこか様子がおかしい。先輩は涙を拭くと、そのまま去っていく。俺はその際に、ある言葉が聞こえた気がした。でもそれはあまりに

もか細く、俺の気のせいかもしれない。

きつとここで引き止めて、声をかけるべきなのだろう。しかし、先輩の雰囲気は全てを拒絶するようにして……まるで、触れるなど言わんばかりに扉の先に消えていつてしまう。

結局俺は、なんて声をかけて良いのか……分からなかった。

こうして、俺の夏休みは釈然としないまま終了した。

そして夏休み明けの学院では、ある噂が広がっていた。

「ねえ、レイ！ 聞いてよっ！」

今日は長期休暇が終わったばかりということ、来ている生徒はまだ少ない。エヴィも少しだけ遅れていくと言っていた。

そんな中、教室でアメリカに会々と彼女は俺の机の方に詰め寄ってくる。

「どうした、アメリカ。何かあったのか？」

「レベツカ先輩が、婚約したらしいのよっ！」

「婚約……？」

新しい日常がやってくる。

それと同時に、これが波乱の幕開けになることを 俺たちはまだ知らない。

第95話 初めての共同作業（後書き）

・追記

ページ最下部にて、書籍版の情報を公開しています。イラストの担当は【梱枝りこ先生】になります。講談社ラノベ文庫様より、書籍2巻が11月2日（月）に発売です！ また、コミックス第1巻は11月9日（月）に発売です！

文庫サイズでお求めやすいお値段となっておりますので、よろしく願います！

・あとがき

番外編 Summer Vacation 終

第三章 麗しき花嫁 続

この度は、読者の皆様に重大なお知らせがあります。

本作【氷剣の魔術師が世界を統べる】ですが、【講談社ラノベ文庫様より書籍化！】&【講談社マガジンポケット様（少年マガジン公式漫画アプリ）にてコミカライズが決定！】しました！

さらに、すでにイラストレーターの方も決まっております。イラストレーターはなんと……【こじえ梱枝りこ先生】です！ ライトノベルのイラスト、さらにはPCゲームのイラストなども数多く手掛けてきた超有名イラストレーターさんです！ まさかのご縁で、本作を担当して頂けることになりました。すでにキャラデザも上がっており、

本当に素晴らしいものでして……（泣）

ということで、【書籍化】【コミカライズ】【イラストレーターは
榎枝りこ先生に決定】の三点が重大なお知らせになります。

また新しい情報などがあれば、最新話あとがき、活動報告、ツイッター（フォローよろしくです！）などで共有しようと思います。

【Twitterアカウント名：御子柴奈々（みこしばなな）。ID：@mikoshibana_nana】

最後に謝辞を。本作がこれまでの作品になるとは、連載当初は夢にも思っていませんでした。これもひとえに、読者の皆様おかげです。改めて、感謝を。本当にありがとうございます！

書籍化作業などもありますが、Web版更新はまだまだ続けていきますので！ 明日から三章開幕です！

また、下にスクロールすると【 】という欄があり、最大で5つまで入れることができます。

是非、での評価にて応援して頂ければ幸いです。皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければお願いいたします

それでは、これからも本作をよろしく願います！

第96話 蠢く意志

夜の帳が下りた。静謐なる闇の刻が、この世界を支配する。

梟たちは怪しげに声を上げ、満月がこの闇の世界を照らしつける。今日の夜は、雲ひとつない美しい満月の夜だった。

そんな月明かりの元、一人の男性が優雅に歩みを進める。

着用している服装は、一見ただけで貴族の装いだと理解できた。黒いスーツを身に纏い、右手には上質な皮で作られた鞆を下げている。

茶色の短い髪。その前髪を綺麗に掻き上げて型をつけている。

その相貌はいかにも仕事ができる男性、という印象である。

「失礼します」

恭しく礼をしてから門を通り抜けていく。メイドの後についていくようにして、男はそのまま悠然と歩みを進める。コツコツとなる靴の音は、この静かな空間に響き渡る。

「こちらになります」

「ありがとうございます」

そして案内されたのは、書斎。コンコンコンと三回ほどノックす

ると、室内から渋い男性の声が聞こえてきた。

「入って構わない」

「失礼します」

再び恭しく礼をしてから、彼は室内に入る。その空間は書斎とは言いが、本当に壁面全てに本が敷き詰められていた。

一見ただけでも、この部屋の主人は本を収集することが好きなのだと理解できるほどだ。

「さて。かけてほしい」

「失礼します」

男は妖艶に微笑むと、その場にあるソファーに腰を下ろし、それから鞆を地面に置いた。

そして彼の目の前にいる男性、ブルーノ・ブラッドリイもまた対面に座る。

長机を挟み、二人は向かい合う。

「すまないね、こんな深夜に」

「いえ。僕としてはこの時間の方がありがたいので」

「そうかね？」

「ええ。活動は夜の方がしやすいので」
「なるほど」

壁面にかけている時計を見ると、現在の時刻は二時四十分。まさに二人が言及しているように、深夜と形容すべき時間だ。

そんな二人がどうして深夜に密会をしているのか。

それはとある理由からなのだが……。

「さてご依頼の通り、進行してもよろしいでしょうか？ ブラッド
リイ家当主、ブルーノ」ブラッドリイ様」

「ああ」

「なるほど。では、こちらの誓約書にサインを」

男が鞆から取り出すのは、一枚の書類。

そこには契約内容が記されており、一番下に記名する欄と印を押す場所が明示されている。

「……分かった」

数秒だけ思案するが、ブルーノは自身の持っている万年筆でサインを書く。さらにここから、やるべきことが二人にはある。

シンウオレオ
契約。

それは魔術による契約の名称。互いの血を契約の証として残し、
絶対遵守

の効力を魔術的に発動するものだ。血の中に混ざる個人の第一質
料^{リア}を媒介として、契約を結ぶ。

普通ならば、こんな契約などはしない。互いに契約内容を了承し
ていたとしても、契約は強力過ぎる。
シンウオレオ

この契約は本来は非法なもの、さらには奴隷制の際に使用されていたものだ。と言っても、現在は奴隷制は廃止されているが。

「では、血を」

「……ああ」

ブルーノは懷にしまっている短刀を取り出す。その鞘を机に置くと、短刀の刀身が煌めくようにして現れる。まるで鏡面のように反射するそれは、確かな斬れ味を有している。

そして彼は、躊躇することなく親指を軽く裂いた。

ポタ、ポタポタポタと流れ出る血液はまるでその紙に吸収されていくようにして消えて無くなる。その後、その書類に現れるのは赤い紋章。

「では僕も失礼して」

男もまたそう言うと、右手の親指をナイフで軽く裂くことで血を滴らせる。

瞬間、その書類はわずかに発光すると……ここに、契約が交^{シンヴォレオ}わされた。

「契約は完了しました。それでは、僕は依頼を実行します」

「……よろしく頼む」

頭を下げるブルーノ。

彼は三大貴族の当主の一人だ。頭を下げられることはあっても、

自分自身が下げることなど滅多にない。

そもそもそれは、彼の誇りが許しはしない。しかし今は何の迷いも無く、ただ頭を下げる。

そして若い男性はニコリと微笑む。

それは決して嘲笑の類ではない。人の良さそうな笑みを浮かべて、彼はこう告げた。

「ご息女のレベツカ様の件は計画通りに進めます」

「ああ。娘にも、それに周りの貴族にもすでに伝達している」

「……これは一個人としての懸念ですが、良かったのですか？」

「こうするしか、手段はなかった……」

苦悶の表情を浮かべるブルーノ。拳を握り、行き場のない怒りが彼の中に現れるもそれをグツと堪える。今更喚いても仕方がない。

それは他でもない、ブルーノ自身が理解しているからだ。

「では、【僕ノ私】は失礼して……と、おっと。申し訳ありません」

「いや構わないさ。君の事情は理解している」

「ありがとうございます。それでは、僕は失礼します」

「ああ」

立ち上がると、男はその書類を丁寧に鞆へとしまふ。そしてスツと立ち上がると、一礼をして最後に一言だけ残す。

「僕の裁量で仕事はさせていただきます。改めて、ご理解頂きますよう。ご息女の件も理解してください」

「……背に腹は変えられない」
「理解のある方は好きですよ」

再びニコリと微笑むと、その男はメイドの見送りを制止すると一人でこのブラッドリイ家の屋敷から出ていく。

妖艶に微笑みながら、蠢く意志が進み始める。

「戻ってきたか。どうだったんだ？」

「ブラッドリイ家の件は進めています」

「じゃあ、あれは本当なのか？」

「ええ」

スーツのネクタイを解くと、男はそれを乱雑に椅子にかけてからジャケットを脱ぎ去る。ラフな状態になってから、目の前にいる別の男の前に腰掛ける。

すでに机にはワインが置かれており、何の断りもなく男はそれを飲み干した。

「レベッカ＝ブラッドリイの婚約発表はいつだ？」

「明日です」

「なるほどな」

目の前にいる男。筋骨隆々であり、黒い髪をフェードにして深く刈り上げている。

一見ただけで、その体躯に圧倒されてしまうほどに大きな身体。そんな彼もまた、自分で用意したワインを飲み続ける。

「しかし本当なのか？」

「間違い無いでしょう。あの魔術剣士競技大会での兆候からして、レベッカ・ブラッドリィは器になり得る存在ですよ」

「にわかには信じがたいがな……」

「ま、こればかりは僕を信じてください。それに損はさせませんよ」
「お前のことは気にいらねえが、実績だけは信じているからな。ま、せいぜい稼がせてもらうぜ」

「そうしてください」

ニヤリと人の悪い笑みを浮かべる大男。

彼はそんな様子を淡々と見つめて、さらにワインを飲む。

アルコール特有の感覚。

喉を通り抜ける熱に、彼はどこか酔いしれる。元々、アルコールには強い。酔うことがないほどに。

しかし彼は好きだった。酒は飲むだけで、その雰囲気には酔えるのだから。

「しかし問題は、他の魔術師の介入でしょう」

「……優生機関で手を回せないのか？」

「優生機関も一枚岩ではありません。あそこは常に派閥争いがあり、

わずかな椅子を争っている。僕の今回の仕事も、その一環です。これを制することができれば、あのレベルカ「ブラッドリィを真の意味で手にすることができれば、僕の目標は達成です」

「なるほどあ……で、算段はついているのか？」

「もちろん。僕の仕事に抜かりはありません。しかし問題はあります」

「何だ？」

彼は胸のポケットにしまっていた、小さく折り畳んだ紙を乱雑に机に撒いた。そこにあるのは、三人の魔術師のプロフィールだ。

「灼熱の魔術師、幻惑の魔術師、そして氷剣の魔術師。今回の仕事は、おそらくこの三人と相對することになります」

「ほあ……七大魔術師か。これは大物だな。灼熱と幻惑がアーノルド魔術学院にいるのは有名だが、氷剣は引退したんじゃないのか？」

彼は光を宿さない瞳で、じつと虚空を見つめるようにして話を続ける。

「噂では、氷剣は引き継がれているとか」

「引き継がれている？ 七大魔術師は世襲制なのか？」

「いえ。七大魔術師はその唯一無二の魔術から抜擢されている魔術師の特異点でもある存在。世襲など不可能です。たとえばそれが子であつても、実例はない」

「つまりどうということだ？」

「例外が出た、と考えるべきでしょう。しかし私たちでもその正確な情報は掴めていない」

「情報規制か？」

「おそらく、王国の諜報機関が……意図的に何かしているのです。う。かなりの手練れです」

「ほお……俄然やる気になってきたな。で、殺していいのか？」

「殺せるものなら、殺してください。僕の目標はレベッカ・ブラッドリイなので。しかし七大魔術師には、【アトリビュート】の他に【本質】があります」

「アトリビュート？ 本質？」

大男はポカンとした表情を浮かべる。それを見て、やれやれと言わんばかりに彼は説明をする。

「七大魔術師の名前は【アトリビュート】に過ぎません。つまりは象徴。その【本質】から漏れ出たものを抽象化して、名称として定着させているだけです。相対するのならば、その名前だけに気を取られないことです。魔術剣士競技大会では、かの死神が敗北していますので」

グリムリパー
「あの死神か？」

「ええ。特に戦闘に特化している【灼熱】と【氷剣】にはお氣をつけください」

「七大魔術師でも上位の二人かあ……ああ、早く殺してえなあ……」

「【氷剣】は特に危険ですよ。かの極東戦役での活躍は知っているでしょう？」

「ああ、有名な話だ。【氷剣】はたった一人で大規模な局面を変えられることができる。世界最高の魔術師つてのは、俺も知ってるぜ？」

「しかし当代の【氷剣】は、かのリディア・エインズワースを凌いでいるとか」

「あ？ それはマジなのか？」

「あくまで噂程度ですが。しかし、油断ならないのは間違い無いでしょう」

「ははははは！ いいじゃねえか！ 最高だなあ、七大魔術師つてのはよお！ ああ……早く、殺し合いてえ……ッ！」

大男はあまりの興奮に、持っているグラスを握り潰すようにして割ってしまう。

パラパラとその場に零れ落ちるグラスの残骸。

普通ならば、そんな男の手からは血が滴っているはずだが……そんなことはなかった。

大男の手は無傷。そして軽く手を振るって、その残骸を払う。

それと同時に、細身の男がこう告げた。

「さあ、争奪戦の始まりです」

思惑が、加速し始める。

第97話 その笑顔とは、裏腹に

レベツカ先輩の婚約発表。

アメリカから聞いた話だが、内容はこうらしい。

まず発表は夏休みが明けた直後から。そして相手は上流貴族の中でも三大貴族の次点の貴族である、ベルンシュタイン家の長男。

エヴァン＝ベルンシュタイン。

アメリカも過去にも親交があるらしく、曰く魔術の技量もかなり高い上に人格者であると。

すでに二十五歳にして、白金の魔術師。ブラチナ容姿もまた優れており、レベツカ先輩との婚約に際して、家柄、魔術師としての力量、容姿、人格において見劣りすることは決して無いということだ。

俺も師匠から聞いた話で、優秀な魔術師は早婚そうこんの傾向にあると聞き及んでいる。

これは遺伝子を、つまり魔術の才能を引き継ぐという意味では重要なことであり、少なくとも貴族は二十代のうちにはほとんどが結婚して子どもを作るのだという。

俺は決して血統主義を嫌っているわけではない。

問題なのは、何事もバランスだ。

血統だけに偏るのも、努力だけに、環境だけに偏るのもナンセンス。すべては絶妙なバランスの上で魔術師とは成り立っていると考えている。

まあこれは、師匠の受け売りなのだが。

そんな中でも、貴族の娘が早期に婚約するのは珍しく無いと聞くが……流石に十代は早すぎるというのがアメリカの見解だ。

早くとも、二十代前半というのが今の主流らしい。

現在は昔よりも早婚の傾向は薄れ、徐々に結婚の年齢期は下がってきているらしい。なぜアメリカがそこまで詳しいのか分からないが、きっと貴族の令嬢としては当然の知識なのだろう。

「そうか。そうだったのか……」

「私も驚いちゃった。まさかレベツカ先輩が、ね」

まだ人もあまり来ていない教室で、俺とアメリカはそう話していた。その後、続々と同じクラスの生徒が教室内に入ってくるがやはり話題は……レベツカ先輩の婚約の話でも持ちきりだった。

「以前から噂などはなかったのか？」

「うーん……聞いたことはないかなあ。私だって、そんな話はまだ出てないし」

「なるほど……」

思索に耽る。

あの時、夏休み終了間際。俺はレベル力先輩と書籍の即売会へと赴いた。

その時はこれから先輩はその芸術活動が続けていくのだと思っていた。だが、レベル力先輩は最後にどこか哀愁を漂わせながら、もうこれで最後だと……そう告げた。

その時の表情は今でも鮮明に思い出せる。

その日は今までに見たことのないくらい先輩は笑っていた。その存在感全てが、楽しさを表していた。

自分の作ったものが人に買ってもらえることがこんなにも嬉しいなんて、先輩はそう笑顔で語っていた。

その時とは対照的に、先輩は俺の言葉を拒絶するような形で最後に別れた。

きつとあの時の言葉の意味はそういうことだったのだろう。

もう婚約するからこそ、このような活動は続けていくわけにはいかない……先輩はそう言いたかったのだろうが、やはり俺はそれでも気になっていた。

「レイ？ どうしたの？」

「少し行く場所ができた」

「え？ もうチャイム鳴るけど……レイっ

」

アメリカの声を最後まで聞くことはなく、俺はそのまま教室を飛び出していった。

まずは先輩の教室に行ってみたが、いなかった。教室の中にいるクラスメイトに聞いても、まだ来ていないと言われた。

その後は園芸部の部室へと走った。しかし、いない。

思い当たる場所は全て行った。だがレベッカ先輩の姿はなかった。

もしかして、登校していないのかもしれない。

そんな考えが頭によぎるが、俺は最後にあの場所に向かってみることにした。

階段を登る。

それは屋上へと続く階段だ。それを素早く駆け上がっていくと、乱暴に扉を開ける。

瞬間、視界に入ったのは靡いている髪を抑えながら、物思いに耽っているような表情をしているレベッカ先輩。

いつもは人の良さそうな笑顔で笑っているが、今はただただ無表情だった。

これまで俺はレベッカ先輩のいろいろな表情を見てきた。でも今のものは、本当にどこか寂しそうに思えた。

「先輩。ここにいたんですか」

「レイさん……ですか」

そう言葉を交わしたと同時に、チャイムが鳴った。

すでに朝のホームルームは始まっていることだろう。俺は今まで一度たりとも遅れたことはないのだが、今日ばかりは仕方がない。

「レイさん、チャイムが鳴りましたよ？」

「レベツカ先輩こそ、戻らないのですか」

「偶にはこうしてサボりたくなる日もあるものです」

「……そうですか」

ゆっくりと歩みを進めて、俺は彼女の隣に立つ。

「……」
「……」

ただ無言で、この青空を流れていく真っ白な雲を見つめる。

もう九月になった。しかしこの暑さはまだ健在。残暑とはいうが、今は夏と遜色が無いくらいには暑かった。

風が吹く。

それがいい塩梅となって、この火照る体を冷やしてくれる。そうして一分か、二分ほど経過したのち、レベツカ先輩が先に口を開いた。

「聞いたのですね」

「はい」

顔を合わせることなく、互いに正面を向いたまま話を続ける。

「夏休み明けに正式発表する予定でしたから、きつともう噂になっていると思っていました」

「……そう、ですね。今はレベッカ先輩の婚約の噂で持ちきりです」「そうですか。それで、どうしてレイさんは私のところに来たのですか？」

レベッカ先輩がこちらに顔を向けてくるので、俺もまた彼女と向き合う。いつもとは違って真剣な表情。

その漆黒の瞳が俺を射抜く。

そこにはある種の覚悟のようなものが宿っているような気がした。

「先輩。夏休みの最後の日のこと、覚えていますか？」

「はい。覚えていますよ」

「あの日の言葉は、こういう意味だったのですか？」

「そうです。もうすでに私は婚約の身。あのようなことに現^{うつ}を抜かしている暇はないのです」

「あのようなこと……？　しかし先輩は本当に楽しそうに」

「いいのです。私は三大貴族の長女である、レベッカ「ブラッドリイ。元より覚悟はしていました」

「些か早すぎるのではないでしょうか」

「それはその通りです。しかし別に数年の違いでしょう。問題はありません」

「……」

まるで俺との問答の答えをあらかじめ用意していたような、機械

的な答えだった。

何の意志も感情もないような、そんな答え。

それがレベツカ先輩の口から語られているとは、到底信じることはできないが……それは真実だった。

改めて思う。

結局のところ、人間は本当の意味で他者を理解などできないのだと。

勝手に自分が相手をこういう人間だとレッテルを貼り付けて、勝手に定義している。その心のうちは本人にしか理解できない。

それでも俺はあの日の笑顔が嘘だとは思えなかった。

だからもう少しだけ、話を続けてみる。

「婚約しても、結婚して子どもができたとしても、趣味で続けることはできないのですか？」

「……それは許されません」

「どうしてですか？」

「それが三大貴族の長女であるからです」

「厳格な存在であるという意味ですか？」

「そうです。この魔術師の世界を引っ張っていくのが、三大貴族なのです。私のこの身に流れている血は、優秀なブラッドリイ家のもの。その血統を後世に引き継ぐのは当然のことです」

「……なるほど。差し出がましい振る舞いをしました。申し訳あり

ません。改めて、この度は婚約おめでとうございます、先輩」

その場で頭を下げる。

俺は素直に謝罪し、祝いの言葉を述べる。

だが、まだ完全に納得したわけではなかった。

俺がここに来たのはただ、あの趣味を続けて欲しいという意味合
いだけではなかった。

その本当の目的は、ただ心配だったのだ。

レベツカ先輩は危ういと……そう感じていた。

アメリカはずっと迷っていた。その進むべき先が分からなかった。
だから俺は一緒に進んで行こうと彼女に言った。

一方のレベツカ先輩に迷いなどない。惑いなどない。

三大貴族の長女として、ただその役目を果たそうとしている立派
な人だ。素直に尊敬する。

それだけなら、俺は先輩の元へと来ていなかった。

俺が先輩の元にやって来たのは、どうしても、どうしても脳裏に
過るからだ。

あの日の先輩の表情が。
かお

だってそれは、助けを求めているように思えたから。

助けて、と。

そう言葉にした気がしたから。言葉それ自体は聞こえてはいない。

だが、その唇は確かにその文字を刻んでいた気がした。

記憶違いかもしれない。ほんの一瞬、わずかな瞬間の出来事だ。

もしかしたらそれは俺が作り上げている妄想の類かもしれない。

だがどうしてもそれが、脳裏に焼き付いて離れないのだ。

と、そう思っていると先輩が優しい声音でいつものように話し始める。

「レイさん顔を上げてください。そんなにあなたが気に病むことではないですよ？ ふふっ……レイさんはとても真面目な方なのでね」

顔を上げるといつものレベル先輩がそこにいた。

先ほどのような肌がひりつくような雰囲気は纏ってはいない。ただ、いつものようにニコニコと俺に微笑みかけてくれる。

「レイさん。婚約すると言っても、ちゃんとこの学院は卒業します。二学期は文化祭もあります。私たち生徒会が頑張って運営します。是非初めての文化祭を楽しんでくださいね」

「おお！ それは楽しみです！ 文化祭、楽しみにしています！」

「はいっ！ それでは今後もよろしく願いしますね」

「はい。こちらこそ、よろしく願いします。先輩」

レベツカ先輩が握手を求めてくるので、俺は優しく包み込むようにしてその手を取った。

ニコリと笑う先輩の笑顔はとても魅力的だ。

ただただ、美しい。

そんな美しい笑顔とは裏腹に、レベツカ先輩の手がまるで氷のように冷たいのは……気のせいなどでは、なかった。

第98話 文化祭準備、始動

「メイド喫茶を提案する」

『え

っ!?!』

俺がそう提案した瞬間、クラス内では女子生徒たちの悲鳴が上がる。

「ちょっと、どう言うこと!?!」

「そうよ! どうしてそんなメイドの真似事なんて!」

「どうせ、いやらしい目的なんだろう!」

「ほんと。男っていやらしいんだからっ!」

「そうよ! そうよ!」

「これだから男子はっ!」

非難轟々である。

現在、起立して発言をした俺に対して、全ての非難が集中する。

その一方で、アメリカは神妙な面持ちで黒板の前に立っており、男子生徒もまた黙ってその成り行きを見守っている。

エリサも覚悟を決めたような表情で俺のことをじっと見つめている。

これは全ての計画通りである。

ある種のパフォーマンスであり、俺はその非難を全て受け入れる。そんな様子を、他の男子生徒が羨望の眼差しで見つめているのを感じ取る。

まるで、「無茶しやがって……」と言わんばかりの表情だ。

さてここからが本番だ。

任務を達成するために、手段など選んではいけないのだから。

と言うことで、どうしてこのようなことになっているのか。それは昨日に遡ることになる。

無事に新学期が幕を開けた。

次にやってくる大きなイベントと言えば文化祭だ。ある程度リサーチをしてみると、色々と分かった。

まずはクラスによる出し物。さらに各部活も出し物をして良いように、どちらともに生徒会への申請を通る必要がある。

企画書の段階で申請をもらうことが出来なければ、クラスや部活での出し物は許可されない。

それは個人での出し物も同様だ。

例年、学内にある講堂で個人や有志団体でパフォーマンスをする生徒などもいるらしい。

残りはミスコンテストとフィジークコンテストだ。これは自薦、他薦による参加でこのアーノルド魔術学院の生徒ならば誰でも参加できる。

ミスコンテスト。

通称ミスコンは女子生徒の美貌を競うもので服装、髪型は自由。昨年はレベッカ先輩が優勝していると記録が残っている。

フィジークコンテストは男子生徒が参加できるものだが、これは主に身体のバランスやボディラインを競う大会だ。重要なのは逆三角形の上半身。

下半身はボディビルと異なり、サーフパンツを履くので脚はボディビルほど審査対象にならない。

ちなみにこちらは部長が三連覇を果たしており、圧倒的な優勝をもぎ取っている。今年も優勝するとの呼び声が高い。

そして最後には後夜祭ということで、夜にキャンプファイヤーを囲むようにして、ダンスパーティーを屋外で開いて終了。

ここでカップルができることが多いとか、どうとか………というのがこのアーノルド魔術学院の文化祭と言うものらしい。

「ふむ。なるほど……」

図書館でその情報を手に入れた俺は、とりあえず全体の概要を把握した。

と言つても、やるべきことはクラスの出し物と部活での出し物だ。

部活の方は先輩たちが主導でやるだろうし、クラスの方はきっとアメリカがリーダー的な存在なので彼女が仕切ってくれるだろう。

新学期が始まった時に、アメリカが文化祭実行委員になったのもありそれは間違い無い。

俺以外の生徒はみんな以前の学校で経験があるだろうから、クラスの方で俺の出る幕は多くはないだろう……そう、思っていたがどうやら事は大きく変化していくことになる。

「レイ！ いた！ ここにいたのね！」

「アメリカ、どうした？」

放課後。

すでに夕暮れ時となった。日が暮れる時間も徐々に早くなつてきており、それに涼しくもなつてきている。

秋が近づいている証拠だ。

それと同時に、文化祭が迫っている証拠でもある。文化祭まであと一ヶ月程度だからな。

そして後ろから声をかけられたので振り向くと、肩で息をしているアメリカがいた。黄昏に光に照らされながら、彼女はゆっくりと近づいてくると思いがけないことを口にした。

「ちょっと街にまで行かない？」

「今からか？ 時間はいいのか。門限もあるだろう」

「大丈夫よ！ それに学内では話しにくい内容なの。お願い……」

懸命にそう言ってくるアメリカの願いを無碍にできるわけなどなかった。

俺はすぐにその提案を了承する。

「了解した。それに、そうだな。日が暮れても、俺がアメリカを女子寮まで送り届けよう」

「うん。そ、その……ありがと……って！ 危ない、危ない……とりあえず、早くいきましよう！」

俺はアメリカに手を引かれながら、街へと繰り出していくのだった。

「で、内容は？」

「その……えつと……」

中央区。

そこにある小さな喫茶店にやってきていた。すでに注文した品は届いており、俺はブラックコーヒーでアメリカは紅茶を頼んだ。目

の前にはカップが並び、わずかに湯気を立てていた。

アメリカはどうにも渋っているようだったので、まずは俺がそう口にした。

「文化祭の出し物で相談なんだけど……」

「む。しかし俺は初参戦だ。他の生徒、それに先輩に相談した方が適任だと思うが」

「いや、実は……提案する出し物は決まっているのよ」

「なら何が問題なんだ？」

「その実は……め、メイド喫茶をしてみたいなって！」

「メイド喫茶？ それはメイドが喫茶店で働くと言う意味合いで間違いないだろうか？」

「そう！ そうなのよ！ 聞いて。昨今、メイドの服装に注目が集まっているのは知っているわよね？」

「いや存じ上げないが」

「なるほど。一から説明する必要があるようね」

彼女は優雅な手つきで紅茶を口に含むと、一度だけ間を置く。その雰囲気はなんと形容すべきなのだろうか。

だが、一つだけ確かなものがあつた。

それは、アメリカは間違いなく本気でこの文化祭に取り組もうとしていることだ。

その目つきはいつもとは異なり鋭くなり、表情にも緊張感が如実に現れている。

ここまで本気のアメリカは、マジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会以来だな。

そして彼女は持っていた鞆から紙を取り出すと、それを俺に渡してくる。

「これは？」

「参考資料よ。それに今日の打ち合わせの予定」

「なるほど。では、拝見しよう」

目を通すと、どうしてメイド喫茶を企画するに至ったのか。また、それを実現するための予算と課題。アメリカはしっかりと下調べはしているようで、概ね実現できそうな内容であった。

だがもう一枚紙をめくると、そこには【超重要課題】と書かれている記述があった。

一番の問題は、メイド喫茶を実現するまでの過程にあると。

具体的には、女子生徒の反発。これをいかに切り抜け、メイド喫茶を俺たちのクラスの出し物にするか……とすることが目下の課題だった。

「アメリカ。目を通したが、俺はいいと思う。しかしどうして女子生徒の反発が起これるとわかる？ 男子は反発しないのか？」

「……」

背筋が凍るような緊張感。

アメリカはテーブルに両肘をついて、手を顔の前で組むような形で静止している。

それをゆつくりと解くと、彼女はその重い口を開いた。

「……私たちのクラス、貴族の子が多いじゃ無い？」

「ああ」

「貴族の人間がメイドの真似事なんてしたいと思う？」

「なるほど……得心した」

つまりは、メイドになりきるとは言えその立場になるのはプライドが許さない……と言ったところだろう。俺は貴族への理解が浅いため、すぐには理解できなかったがそう言うことか。

しかし、その理論でいけば男性も女性も関係ないだろう。

どうしてアメリアは女子生徒だけに絞っている？ 俺が見えていない何かが見えているのだろうか。

「アメリア。概要は理解した。しかし、どうして男子は反発しないんだ？」

「いつだって男性は、メイドが好きだからよっ！」

高らかに宣言するアメリア。それは今までの緊張感をぶち壊すものだった。彼女は意気揚々と立ち上がると、早口で捲し立てるようにして語る。

メイドと言う存在の、その魅力を。

「いいレイ。メイドはね、とっても魅力的なのよ！ いつも従順でいると思いきや、時折見せる妖艶な表情！ それにあの服装も素晴らしい！ 派手さはないものの、最低限の美しさがそこにあるっ！ 私の提案としては、クラスでのメイド服はスカートの丈を短くし

ようと思うの！　きっとこれは次のトレンドになるわっ！　あーもー！　自分の天才性が恐ろしいわ……！　儚く主人の一步後ろに存在するメイドが、ついにその存在感を示すのよ！　これは滾る、滾るわっ！」

「……」

「はっ！？」

アメリカはハツとして、顔を真っ赤にしながら着席する。

「ご、ごめんなさい。ちょっと感極まって……」

「……」

「れ、レイ？　な、何か言ってるよお」

「　　素晴らしい」

「え？」

「アメリカ。君は本当に天才だったようだな。これはイケる、イケるぞ！　俺もまた言われてみてその魅力に気がついた気がする」

「本当！？」

「ああ！」

「そ、そうよね！　それにうちのクラスは可愛い子が多いし、きっと映えると思うのよっ！　ぐ、ぐへへ……」

「間違い無いだろう。旧態依然とした体制に風穴を変えるのは、いつだって天才の存在だ。アメリカ。微力ながら、協力したいと思う」
「じゃ、じゃあこうしましょう」

その後、俺たちは時間も忘れて打ち合わせに没頭する。

これは、このアーノルド魔術学院始まって以来の【伝説のメイド喫茶】が誕生するまでの軌跡を、追いかけたものである。

第99話 男の熱き友情

アメリカとの入念な打ち合わせをした後、俺は早速行動に出る。この任務は時間が重要である。すでにクラスの出し物を決める刻限は一刻と迫っているからだ。

俺は寮に戻るとすぐに自室へと向かう。

まずはエヴィと、それにアルバートへ相談してみることにした。

確か予定では今日はタイミングがいいことに、アルバートが俺たちの部屋に来ることになっていた。主に筋トレをするために。

「ふん……っ！」

「ふっ……ふっ……ふっ……！」

自室に戻ると、そこではエヴィがダンベルを上げ、アルバートがスクワットを行っていた。滴る汗が煌めいており、俺もすぐにトレーニングに参加したいが今はそれどころでは無い。

「二人とも、トレーニング中にすまない。話がある」

「レイ。今日は遅かったな。どこか行ってたのか？」

筋トレを続行しながら、エヴィがそう尋ねてくる。

「ああ。アメリカとクラスの出し物について打ち合わせをしていた」
「なるほど……で、俺たちに相談か？」

「その通りだ」

そう会話をする、二人はそれぞれの器具を所定の位置に戻してからタオルで汗を拭き取る。そしてシャツを着込むと、俺たちはテーブルに集まる。

「まずは資料だ」

アメリカからもらった資料は余分に貰っていたので、それを机の上に広げる。

エヴィとアルバートは資料を受け取ると、興味深そうに目を通す。

「……メイド喫茶か。視点は悪く無いが、この懸念は至極当然のものだな」

冷静に資料内容を吟味した上で、そう話し出すアルバート。

彼もまた、上流貴族の人間。アメリカと同様にこの出し物の懸念事項には、深い理解があるようだった。

「アルバートの言う通り、アメリカとの話でもそれは議題に上がった。問題は女子でもあるが、俺の今の任務はまずは男子達をまとめることにある。アルバート、イケると思うか？」

「……」

顎に手を当てて、熟考する。

その間を縫うようにして、エヴィもまた声をあげた。

「仕事の分担は？」

「全体としては、調理係、接客係、さらには宣伝などの総合係の3つに分担する予定だ。主に懸念事項となっているのは、接客時の服装だ。メイド服、それも完全に新しいもので、デザインは資料に書いてある通り。これを元にメイド喫茶を展開する予定だ」

「なるほどなあ……俺は別に全然アリだと思うが。やっぱり、上流貴族の反発は出るだろうなあ……」

エヴィもまた同じ意見。

さて、どうやってこの任務を進行していくべきか……。

そう三人で考えていると、アルバートがこう提案してくる。

「まずは男子の件だが……俺が説得しよう」

「いいのか、アルバート？」

「ああ。クラスの男子の中でも、俺は貴族の階級としては一番上だ。俺が賛同しているとすれば、了承しやすいだろう」

「それはありがたい話だが、アルバートはいいのか？」

「ん？ 何の話だ？」

俺の言っている意味が分からないようで、アルバートは聞き返してくる。

言いたいことはただ一つだった。もちろん、エヴィは賛同してくれると思っていた。

しかし、アルバートまではわからなかった。最近は親交こそあるものの、やはり彼は上流貴族であるからだ。だがこうして彼は、さも当然かのように行動を起こしてくれている。

俺はそれが気になっていたのだ。

アルバートとは今となつては良き友人だ。以前までは別の貴族達のグループに所属していたが、今は俺たちと一緒にいることが多い。そんな彼は上流貴族としてのプライドを失つたわけでは無いだろう。

やはりどこか、思うところがあるのでは無いだろうか。

そんな趣旨の話を俺は彼に投げかけた。

すると、アルバートはフツと優しい笑みを浮かべる。

「貴族としてのプライドか……そうだな。仮に以前までの俺ならば、反対していただろう。だが何事も挑戦だ。やってみる価値があるだろう。思えば、貴族のプライドなど肥大化し過ぎて何の役にも立ちはしなかった。だからきつと俺は、新しい風が必要だと思う……それに」

「それに？」

俺はそう、問いかける。

「メイド服が嫌いな男子など、いないだろうか？」

ニヤツと賛同を求めるアルバートの顔はどこか少年めいたものだった。そして俺とエヴィもまた声を揃える。

「「そうだな！」」

そして俺たち三人は、早速次の行動を開始する。

時刻は夜の十時半。すでに就寝している生徒もいることだろう。
だが俺たち三人は、いや三人だけでは無い。

Aクラスに所属している男子生徒が全員、この夜の教室に集合しているのだ。

三人でそれぞれのクラスメイトの元を訪れ、頼み込んでここに来てもらった。きっと俺だけの力ではこうはいかなかっただろう。未だに一般人である俺に対して、反感を持っている生徒はいるだろうからな。

そして勝手に夜の教室で会議を開く俺たちは、どこか緊張感を纏っていた。

微かな明かりを魔術によって行使して、それを魔石に蓄積するこ
とで中央で小さな明かりを照らす。

その明かりの元に集まって、俺たちは会議を開始した。

「さて諸君。集まってもらったのは他でも無い。今回は、文化祭の

「クラスの出し物について話し合いをするために集まってもらった」
『…………』

エヴィとアルバート以外の全員が訝しい目で見てくるが、そのまま話を続ける。

「現在、水面下で進んでいるのは…………メイド喫茶という案だ」
『…………な!?!』

瞬間、衝撃が走る。それはまるで水面に広がる波紋のように、周囲に浸透していく。

「おいおい。マジかよ」

「この伝統ある学院でメイド喫茶？　メイドをメインに据えるのか？」
「？」

「ああ。それってやばいんじゃないのか？」

「またホワイトが変なことをしてるって思われるぜ？」

「その通りだ。俺は賛同しかねるな」

それぞれの意見が始めるが、それは想定した通りのものだった。俺はそこで、禁じ手を繰り出すことにした。ちなみにこれは、アメリカの許可を取ってあるものだ。

「諸君。メイド喫茶でのメイド服…………気になるだろう？」
『…………』

ゴクリと生唾を飲む声が聞こえた。渋っているようだが、やはり気になるものは気になるようで全員が神妙な面持ちで、俺が持ち出した一枚の紙を見つめる。

「そ、それは？」

そう一人が尋ねてくるので、俺はここぞとばかりに声音を真剣なものに変えてこう告げた。

「メイド服のデザイン。しかしこれは、革新的なものだ。なんと言つても、フリルの装飾が増えている上に、スカートが短い。つまり……脚がよく見えるということだ。ここで一つ、いい情報がある」
『ゴクリ……』

「アメリカの脚は、美しいものだった」

瞬間、この教室が阿鼻叫喚に支配される。

「ああああああ！！ そうだったのかあああああ！」

「マジか！？ マジでホワイトはローズさんを落としたのか！？」

オーディナリ

「一般人と三大貴族の禁断の愛なのか！？ やっぱり唆るのか！？ 禁断の関係はイイのか！？」

「最近妙に仲がいいのは、そういうことだったのかあああああああ！？」

「あああああ！ 愛しのローズ様があああああ！ 難攻不落のアイドルだと思っていたのにiiiiiiii！」

む。どういうことだ。この切り札を使えば、「きつと男子もイチコロよっ！ まあ、ちょっと恥ずかしいけど……背に腹は変えられないわっ！」と豪語していたのはアメリカだったはず。

自分を犠牲にしたその精神に俺は感動していたのだが、思っている反応と違うようで困惑してしまう。

「おい、お前ら落ち着けって！」

「そうだ。大丈夫だ。レイとアメリカはまだそんな関係には無い」

エヴィとアルバートがそういうと、男子達は徐々に冷静になっていき、取り敢えず静まってくれた。

「よし。状況を整理しよう」

そう言ったのはアルバートだった。そして彼は俺に落ち着いた声音で質問を投げかけてきた。

「レイ。アメリカの脚を見たとは、どういうことだ？」

「アメリカの私服姿を見たときの話だ。その時はかなり短いスカートを履いていてな。その際に美しい脚がよく見えていた。それだけだ」

「だ、そうだが。みんな」

全員に改めてそう問いかけると、再び騒めきが広がっていく。

「そっか……まだそこまではいつていないのか」

「いや待てよ。それってむしろ、かなり進んでいるのでは？」

「ああ。どうでもいい男子に、生足なんて見せないだろう」

「間違いない。しかし、ホワイトなのかあ……いやでも、こいつ顔はイケてるからな。魔術は上手くねえが、実戦は拔群。一般^{オーディナリー}人じゃなければ、かなりの優良物件だよなあ」

「思えば、ホワイトはどこか普通じゃ無いっていうか……ただの^{オイ}一般人とは思えないというか……」

「ま、でも悪い奴じゃ無いよな」

「それは俺も思った。硬いけど、普通にいいやつだよな。真面目だし。まあ、真面目すぎるけどな。ははは」

その言葉を皮切りに、ドツと教室内が沸き始める。

俺は今まで、まだクラスメイトと距離感があると思っていた。遠目に見られているのはずっと感じていたし、俺についての噂は収まったがそれでもまだ友人と言える仲ではなかった。

だが男子のみんなはどうやら、俺を受け入れているようだった。俺はその事が、たまらなく嬉しかった。

「う……うう……みんな、ありがとう。俺はどうやら……幸せ者だったようだな……」

「おいおい泣くなよ!」

「ははは、男泣きかよ!」

「変わってるなあ……」

「でもそこがいいやつの証拠だろ?」

「ああ。^{オイデナリ}一般人でも、いいやつに変わりはないな」

と、暖かい声をかけてくれるみんな。

そして改めて、アルバートが指揮を取ってくれる。

「よし。では男子の賛同は得られたということでもいいな?」

『おう!』

「ふ……レイ。お前の誠実な行動が、みんなの心を図らずとも動かしていたんだ。俺も変わった。そして、みんなも実は一生懸命なレイの姿は見ていたさ。魔術剣士競技大会を通して、クラスの奴らはレイを見ていたんだ」

「そ、そうなのか？」

「ああ。初めは、ただの興味本位だった奴が多いはずだ。でもやはり、レイは愚直で真面目で、そして熱い奴だとみんな理解したんだ」

周りを見ると、全員がうんうんと頷いてくれている。

「そうだぜレイ！ お前の筋肉はみんなに伝わっていたんだ！」

エヴィが上腕二頭筋をパンプさせると、再び笑いが起きる。

「おいおい、またエヴィの筋肉談義か？」

「でもホワイトも筋肉すげえよな？ ジムで見たけど、エヴィばかりにあったぜ？」

「マジか！ マスキュラーモンスターの噂はマジなのか！」

「ああ。それにこの学院のあの環境調査部にも所属しているんだ。やっぱり、ホワイトは只者じゃねえ……それに、こいつは何より面白い奴だからな！」

思わず笑みが漏れてしまう。

初めは針の筵むしりのような状態だった。そこから仲の良い友人を作って、生活を送っていたが……俺はいつかクラスメイトとも打ち解けたいと思っていた。

それがどうだ。

実際は、クラスメイトのみんなは俺のことを見てくれていたのだ。そしてこうして、認めてくれている。

ああ、師匠。俺はまた、大切な仲間を手に入れたようです。

「なるほど。みんな……ありがとう。俺には感謝することしかできない。よし、その感謝をこの文化祭で表現しようでは無いか。まずはメイド喫茶を成功させるっ！　それも、クラス全員で協力してな！」

『おうっ！』

そして俺たち男子は集まって、今後の作戦を立てていくのだった。

最後の方は騒ぎすぎたようで、警備の人に見つかりかけたが全員で必死に寮まで逃げた。もちろん、全員で笑いながら。

その時、改めて俺たちはクラスの団結力を認識した。

きっとこのクラスならば、最高の出し物を披露できるに違いない。

改めて、そう思った。

第100話 文化祭へ臨め！

男子たちとの結束を確かなものにした俺は翌日、エリサの元へと向かっていた。

彼らの賛同を得ることはできた。

その次に女子たちの賛同を得るには、次のホームルームで仕掛けるしかないが、その前にしっかりと下準備をしておくべきだろう。

それにきつと、俺たちならばクラスの女子たちも説得できると確信している。

ということで翌日の放課後。

俺とアメリカはエリサを以前行つた喫茶店へと招待する。そこで、今後についての会議を開くのだった。

「エリサ、よく来てくれたわね」

「う……うん。でも、アメリカちゃんとレイくんはその……なんの用事で私をここに？」

「それは私から話すわ」

アメリカが真剣な面持ちで、クラスの出し物について語り始める。その声音は既に熱を帯びており、彼女の本気の度合いがよくわかった。

「エリサ。私たちのクラスは、メイド喫茶をしようと思っているの」
「え！？　メイド喫茶！？」

「そうよ」

「それって、メイドが喫茶店をするって意味で……いいよね？」

「ええ」

「で、でも……クラスの子は貴族の人が多いし、反対する人が多いと思うけど……？」

エリサもまた、自分の意見をしっかりと伝えてくれる。だがその意見は既に対策はしてある。アメリカはさらにエリサに対して話を進める。

「男子の方はどうにかなったわ」

「え？　そうなの？」

「レイがやってくれたの」

「ああ……なるほど。レイくんならやってくれそうだね。うん」

そして俺もまた、その会話に入っていく。

「うむ。男子全員の賛同は得ることができた。問題は女子だが、こちらはアメリカと既に作戦を練っている。それで、エリサに頼みたいのは……」

俺はアメリカの方を向いてから、アイコンタクトを送る。

すると彼女は軽く頷いてから、改めてエリサの方へと顔を向ける。

「エリサには衣装を担当してほしいの」

「衣装……？」

「デザインはこれよ」

スツと机の上に取り出す資料。

そこにはアメリカがデザインしたメイド服が描かれていた。装飾はフリルが多めで、さらにはスカートの丈が普通のものよりもだいぶ短い。

その分、布の消費は少なくなるだろうが……やはりこれを制作するのは難しいのだろうか。

そう思っていると、エリサがその資料を手にとるとじっとそれを見つめる。まるで職人が何かを思い描いているような、そんな表情。

エリサもまた、入学してから本当に変わったと思う。初めはあらゆることに自信がなさそうだったが、今はこうして自信を持って話してくれる。

そしてエリサは、その資料を一度テーブルに置くと所感を述べる。

「^{パターン}型紙引いて、一からやるとなると……あんまり数は用意できないかも……ただ、既製品を弄るのなら話は変わらと思う」

「つまり、エリサはできるの？」

「うん。一人では難しいけど、手伝ってくれる人がいるなら大丈夫だと思うよ」

「よしっ！」

パンツ！ とアメリカとハイタッチをする。

元々無理だとは思っていなかった。エリサはあの^{マギクス・シュバ}魔術剣士競技大会でも衣装を制作してくれていたのだ。

きつと彼女ならやってくれるに違いなかった。

「一応メイド喫茶だけど、円滑に接客するために男子が担当する執事も入れようと思うの。それは既製品に頼るけど、やっぱりメイドは花形だからね。エリサが許可してくれてよかったあ」

背もたれに寄りかかるようにして、体を伸ばし切るアメリカ。

彼女はここ数日、絶対にメイド喫茶を成功させるという目的のためにかなり奔走していたらしい。

というのも当日は衣装だけではなく、フードメニューとドリンクメニューも必要だからだ。例年、屋台や喫茶店などを開くクラスはあるのでそれを参考にすればいいが、メイド喫茶はそれ自体は初の試み。

何が起こるか分からない為、アメリカはそのために全力を尽くしてくれている。

「で、もちろんエリサも着てくれるわよね？」

「え！？ 私も着るの！？」

「当たり前じゃない！ こんな可愛い服なのに、エリサが着ない道理はないわっ！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ これってその脚がよく出るし……それに胸もちよっと目立つし……は、恥ずかしいよっ！」

顔を真っ赤にして抗議するエリサ。

だがアメリカが止めることはない。

彼女の情熱シビラーはそんなエリサの抗議を圧倒的な勢いで潰しにかかる。
顔は真剣そのもので、その熱意は本物である。

「エリサ大丈夫よ。私も着るからっ!」

「いやいや、そういう問題じゃないよ……っ!」

「ぐへへ……エリサのメイド服姿、楽しみねえ……」

「レイくん! なんとかして! アメリアちゃんがやばいよお!」

必死な顔つきで助けを求めてくるが……。

すまないエリサ。俺は既にアメリア側の人間だ。

それに俺もまた、エリサの愛らしい姿は見てみたいのだ。

そして、エリサの助けを一蹴しアメリアの援護に入る。

「エリサ。俺も君の美しい姿に興味がある。是非、披露してくれないか?」

「ひゃっ!」

俺はスツと手を伸ばすと、エリサのその両手を握る。さらに、その目を互いに合わせる。逃さないように、じっとその美しい瞳を覗き込む。

「エリサ。君は自分が思っている以上に、可愛い。それは俺が保証しよう。だから、着てくれないか?」

「う……うう……」

「だめか?」

「わ、わかったよ。レイくんがそこまでいうなら……いいよ……?」

よしっ！

と心の中でガッツポーズを取ると、隣に座っているアメリカが俺の足を蹴り飛ばしてきた。

「どうしたアメリカ。痛いじゃないか」

「別にっ！ 分かってたけど、分かってたけどっ！」

「？ まあエリサも着てくれるということで、あとの問題は……」

そして俺たちは、ついに運命の日を迎えることになる。

「では、今日のホームルームでは文化祭の出し物を決めます。誰か意見のある人！」

アメリカが黒板の前に立つ。

その言葉が合図だった。

このクラスにいる男子生徒、アメリカ、エリサは既にこちら側の人間。

残りは女子生徒を納得させるだけでいい。

その重要な役目は俺に任された。

ならば、俺はその任務を全うするだけだ。

ちなみに教室の隅でニコニコと笑いながら俺たちの様子を見ているキャロルもまた、既にこちら側である。キャロルには衣装の調達に協力してもらおうと思っているからな。

そして俺は、この静寂を切り裂くようにしてスツと右手を勢いよくあげる。

「はい。じゃあ、レイ。どうぞ」

「メイド喫茶を提案する」

その言葉を認識した女子たちは、一斉に声を上げた。

『え

っ!?!』

そこから先は俺に対する罵詈雑言。圧倒的な罵倒が、俺に降り注ぐ。

しかしそれは想定内。後はここから援護射撃が入るからな。

「ちょっと、どう言うこと!?!」

「そうよ! どうしてそんな侍女の真似事なんて!」

「どうせ、いやらしい目的なんですよ!」

「ほんっと。男っていやらしいんだからっ!」

「そうよ! そうよ!」

「これだから男子はっ!」

甲高い声が教室を支配している中、低音の音がそれを跳ね返すようにして響きわたる。

「俺はいい提案だと思うが」

その声はアルバートだった。

ここで男子全員が賛同しても、ただのいやらしい目的に同調するということになってしまう。しかし、このクラスでもアメリカにいついでの上流貴族であり、さらには硬派な印象で通っているアルバートがそう述べた事で、この情勢は大きく変化することになる。

俺とアルバートは視線を交わすと、フツと微笑を浮かべて予め用意していた会話を繰り広げる。

「レイ。お前はどのような意図で、メイド喫茶を提案したんだ？」
「このクラスには可愛い女子、美しい女子が多いだろう。それを最大限に活かすためには、これしかないと考えた次第だ。何も全員に強制したいわけではない。だが、俺はうちのクラスの素晴らしいメイド喫茶を通じて表現したいだけだ。それに、メイド喫茶はまだこの学院の歴史の中で誰も行っていない。俺たちのクラスが、そのムーブメントを作れたらいいと考えている」

その後、アルバートがクラスメイトの女子一人一人の名前を挙げてから、俺がその一人一人の素晴らしいさを述べた。と言ってもその内容は俺が感じるままに述べていいとのことだった。

その指示に従って、俺はクラスの女子全員の美しさとメイド喫茶が素晴らしい相性だということを話した。

ただ今まで思っていたことを、あるがままに伝えた。

「なるほど。だ、そうだが。女子たちはどうだ？」

既にアルバートが仕切っているこの場は先ほどに比べて、静かになっている。そして反発していた女子たちが、再び声を上げる。

「ま、まあそこまで言われて悪い気はしないけど？」

「べ、別にそんな可愛いとか思っていないけど？ 言い過ぎじゃ無いのっ？」

「ホワイトのことだから、そんなことだろうと思ってたけど……」

……

「別に、嬉しく無いけど？ まあそう思うのはいいんじゃない？ うん。まあやつてもいいかなあって……」

と、風向きが変わってきたところでトドメと言わんばかりにアメリカがその口を開いた。

「いいんじゃない？ 私はレイの提案に賛成だわ。接客はやりたい子がやればいいと思うし、メイド喫茶なら給仕以外の仕事もある。いいと思うわ」

さも初めて聞いて、俺の提案に賛成しているようなアメリカだが、実際は彼女が発端となって始まった企画である。

ある種のマッチポンプのようなものかもしれないが、今回ばかりは仕方ないだろう。印象に付いては嘘を伝えたつもりもない。

全員の意志が一致してこそ、最高の文化祭になるのだから。

「じゃ、メイド喫茶に反対の人」

アメリカが決を取る。もちろん、この流れで反対する人間などいなかった。

「おゝ 決まったねゝ いやゝ、いいと思うよう？ キャロキヤロは皆ならきつと、とゝつても可愛いメイドさんになると思うよう！ うんうんっ！」

キャロルが拍手をしながら立ち上がり、クラスの担任の了承も得ることができた。それに従って、みんなもまた拍手によって賛成の意を示す。女子もまた、賛成しているようで本当に良かった。

こうして計画通りに事を進めた俺たちは、メイド喫茶という企画を持ってこの文化祭に臨むのだった。

第101話 闇夜の意志

闇。

この世界がまるで黒く塗りつぶされたような闇の世界で、二人は敵と相対していた。

「おつらああああッ!!」

雄叫びを上げ、その拳を振るう。相手はそれを腰を低くして交わすと、大男の懷に潜り込んだ。そして、脚をバネのようにして拳をその顎^{あご}目掛けて繰り出した。

その動きは完全に普通の人間の知覚を超える。

^{インサイド}内部コードを使っている魔術師だからこそその挙動である。

だが、もちろん大男もまた魔術師。それを防ぐ手段など考えるまでもなかった。

「はっ」

大男は鼻で笑う。

まるでその攻撃が単調すぎて、いや予定調和すぎて何の楽しみもないと思いつながら、相手の男の腕を手刀で刎^はね飛ばした

鮮血。

ポタ、ポタポタポタと地面に血が滴る。

相手の男の腕が宙を舞い、大男はそれをすぐに掴むとボールを投げるものと同じ要領でその腕を相手に投擲。

闇夜を切り裂くようにしてその腕が飛翔すると、ちょうどそれは苦悶の表情を浮かべていた相手の顎にクリーンヒットした。

「う、ぐ……ああ……ああ……」

声にもならない声を上げて、相手は地面に倒れ込む。

腕を切断されたことによるショックでまともに反応することができなかった。

そして無様にも、その場で意識を手放してしまう。

広がる血溜まり。

それを淡々と見つめる大男はゆっくりと歩みを進める。

「おい。モルス、こっちは終わったぞ」

「トドメは？」

「まだだ」

「いいですね。そのままにしておいて下さい。こちらもすぐに済ませるので。」

モルス、と呼ばれた中背中肉の茶髪の男もまた敵と戦っていた。

相対しているのは、五人の敵。

それを彼はたった一人で捌いていた。

相手もまた、手練れ。魔術師のランクで示すならば、最上位に分類される白金の魔術師相当。^{ブラチナ}

その中でも戦闘技術に長けている五人を、彼はたった一人で圧倒する。

「ぐっ……！」

「どうなってやがる……！」

「こいつ、なんでだ!？」

と、声を上げる相手の男たち。

どうしてそのような言葉を口にするのか。

それは確実に当たっていると思っている魔術が全てすり抜けてしまっからだ。それは接近してナイフなどで物理的に切りつけても同じだった。

ニヤリと微笑みながらモルスはその攻撃を受け続ける。

悠然と、ただただその攻撃を受け続ける。もちろん、無傷で。

相手の男たちもまた、魔術による殺し合いなど今まで幾度となく行なってきた。

しかしこれは、あまりにも異質過ぎた。

たとえどんな魔術師であっても、その能力の根幹である本質はある程度見抜くことができる。

その自信が、この五人にはあった。

だがしかしどうだ、今の現状は。

元々、この二人を殺すためだけに派遣された刺客。その数は、十人を優に上回っていた。いつもの通りの他愛ない仕事。

殺して、報酬をもらって終わり。それだけだと、全員が思っていた。

相手の素性も全てリサーチしている。

なんてことはない、ただの魔術師。ただし裏で非合法的なことを行なっているとだけ情報があつた。互いに、その手を闇に染めている存在。

魔術協会などに所属するわけもなく、裏の世界で生きている魔術師たち。

そんな彼らでさえも、これほどの闇には出会ったことがなかった。

「さて、と。そろそろ準備完了ですかね」

それこそ、人の良さそうな笑みで五人を見つめると彼は初めて相手に向かって魔術を行使した。

瞬間、その五人はまるで糸が切れたかのようにその場にひれ伏してしまう。

何が起こった？ 魔術の兆候すら、見えなかった。第一質料プリママテリアの流れが……全く見えない……だと？

その場にひれ伏す中で、男たちはほぼ同じことを思った。

魔術を行使する際に第一質料プリママテリアが収束するのはごく自然な現象である。

手練れの魔術師ならばその兆候から、発動する魔術を一瞬で理解できる者もいる。

だが、モルスの魔術にはその兆候がなかったのだ。

ただただ啞然とするが、もう全ての決着は付いてしまった。

「さて、パラさん。こちらも終わりました」

「いつも思うが、お前の魔術は気味が悪いいな」

「お褒めいただき、恐縮です」

「は。別に褒めちゃいねえよ。で、いつもの感じでいいのか？」

「ええ」

その場に転がっている十三人の男たち。

パラ、と呼ばれた大男にやられた相手は四肢欠損や体にダメージは残っているものの、まだ意識は辛うじて残っていた。

一方でモルスが倒した相手はまだ完全に意識があった。

体を動かせないというだけで、まだ意識そのものはしっかりと残っている。

「見ていかないのですか？」

「別に興味はねえよ。俺は一服する」

「はい。領域は展開したままなので、あまり離れすぎないように」
「ああ……」

パラは懷から一本の葉巻を取り出すと、それを魔術によって火をつけてそのまま去っていく。

一方のモルスが懷から取り出すのは、一本のナイフ。いやそれはナイフと形容するにはあまりにも短い上に、細い。

その実、それはメスと呼ばれる医療の際に使用される道具だ。

どうしてモルスがそれを取り出したのか。

それを理解してしまった相手の男たちは、ゾクリとした。

モルスのその恍惚とした笑みに。メスをまるで愛撫するようにして、撫でると彼はまずは近くにいた男の元にしゃがみ込む。

「さて、と。新鮮なものは、早く取り出さないと」

「な……何を……」

「おお！ 僕の魔術を受けてまだ話すことができるなんて！ 今回は本当に質の良い魔術師のようですね。これはどこかの誰かに感謝しないといけませんね」

その声音を聞くだけでは、モルスはどこにでもいるような優しい男性のように思える。

その甘いマスクも相まって、初見の人間ならば彼に対して警戒心を抱くことはないだろう。

だが、魔術の真髄に触れている者ならば理解できる。

この溢れ出る漆黒の第一質料。プリママテリア

まるでそれは深淵そのもの。

男たちは改めて理解した。

手を出すべきでは、なかったと　　。

「さて、まずは一人目ですね」

「あ、あああああああああああああああッ!」

響き渡る絶叫。

それは想像を絶する苦痛が入り混じったものだった。

そう。モルスは躊躇なく、その男の頭を切り開いたのだ。

メスを魔術的に強化した上でまるで柔らかいものを切り裂くようにして頭を切開する。その所作は明らかにやり慣れている者の手つきだった。

「……ふう。さて、残りの人間もやりますかね」

その後、この場には絶望という言葉で生温いほどの……地獄の惨劇が繰り広げられた。

「終わったか？」

「ええ。無事に」

パラが一服終えて戻ってくると、そこには血の惨劇が繰り広げられていた。男たちはすでに絶命している。その顔を苦悶の表情に染めながら。

溢れ出る血液は、まだ灼けるような鮮血であった。血液は時間が経過すれば黒く凝固してしまう。しかし今は、瑞々しいまでに綺麗な赤色をしていた。

王国内の路地裏で起こった惨劇。

深夜ということもあり、今はよく見えないが……奇しくも今日は月明かりがとても綺麗な日だった。

そして照らし出される、惨状。

それを見て、パラが思うことなど何もなかった。ただいつものように仕事を行っただけ。それだけだ。

「で、こいつらは結局誰なんだ？」

パラがそう尋ねると、付着した血をハンカチで拭っているモルスは優しい声音でこう答えた。

「他の派閥による刺客でしょう。現状、一番進んでいるのは僕らですから。ま、こうして新しい脳を確保できた僕としては、嬉しい結果ですけど」

「……優生機関ユージェニクスも一枚岩じゃねえってのは、こういうことか」

「ええ。でも現状、僕らを魔術で止めることができる者は限りなく少ないでしょう。上層部は別の仕事で忙しいですし、今は下の方での争いですよ」

「は。そうかよ。まあ、俺としちゃあ金さえ出ればどうでも良いがな」

「もちろん。報酬はお約束したものをお支払いします。目標が達成できれば、ですけど」

「……前金だけでも十分にもらっているがな。しかし俺たちの世界では信用こそが一番重要だ。仕事は最後までこなすさ」
「ありがとうございます。パラさん」

その体を鮮血に染めながら、モルスは微笑む。

二人が出会ってから、まだ日は浅い。モルスはある目的のためにパラを雇ったのだ。

この魔術の裏の世界で、名を馳せている彼を。曰く、その実力は七大魔術師にも匹敵するとか。

否。

殺しの技術だけで言えば、パラはすでに世界最高峰の魔術師に数

えられるだろう。ただ殺すただけに磨かれた魔術という技術。

魔術とはあくまで道具であり、人の生活を豊かにする反面で人を殺す上で最良の道具にもなり得てしまう。

また、モルスとパラの名前は互いに偽名だ。仕事用に使っているものでしかない。だが二人にとってもはや、名前など記号でしかない。呼ぶときに便利だから、その程度のものでしかない。

モルスは目標を果たすことができれば良い。

パラは依頼された仕事をこなすだけで良い。

それが二人を結びつけているものだった。

「さて、そろそろレベッカ・ブラッドリーの件も進めましょうか。他の人間が気がつかないうちに」

「ま、そっちは任せる。俺は依頼をこなすだけだからよ」

「ええ。それと、復讐の方も進めます」

「……やれるのか？」

「それだけのために、この数十年の間……潜伏していたのです。相手もまた、それを分かっている上で誘っているようで」

「は。そうかよ。せいぜい頑張りな」

「はい。そうさせて頂きます」

王国の裏では、確実に闇夜の意志が進行していく。

第102話 生徒会でお手伝い

俺たちのクラスの出し物はメイド喫茶に決定した。すでに本格的に作業を開始しており、アメリカ主導の元、クラスメイトたちが丸となって作業に精を出している。

そんな中、放課後となった現在。

俺はクラスの出し物の企画書を提出しようと、生徒会室へと向かっていた。

生徒会室は校舎の三階の西側にある。今まで一度も行ったことはないが、大体の位置は把握している。

「もう秋も近いな……」

九月の中旬。

まだ残暑特有の暑さは残っているものの、日が暮れるのが早くなってきたようだ。まだ完全な夕暮れ時ではないが、徐々に日が沈みつつある。

そして一人で企画書を手にしてやって来たのは生徒会室。

確か、生徒会長はレベツカ先輩で副会長がディーナ先輩だ。

会計と書記の方は存じないが、この二人と面識があるというだけ

で俺は生徒会室にやってくるのは特に億劫と覚悟することはなかった。そもそも、忙しそうにしているアメリカに対して俺が提出してこようと言ったのだしな。

コンコンコン、と三回ほどノックすると室内から綺麗な澄んだ声が聞こえてきた。レベツカ先輩のものだ。

「入っていただいて、構いませんよ」
「失礼します」

扉を開けてから、その場で丁寧に一礼をすると室内に入っていく。

内装はシンプルなもので、普通の教室と変化はない。あるとすれば、ホワイトボードに貼られた大量のメモ用紙と、文化祭の進行予定が書いてあるという点だ。

チラッと横目でそれを見ると、一番奥の机の方でレベツカ先輩が俺に向かってニコリと微笑んでくれている。それに、その隣の机にいるディーナ先輩もまた、俺に声をかけてくれる。

「レイじゃない。久しぶりね」
「ディーナ先輩。ご無沙汰しております」
「今日はクラスの企画書を持ってきたの？」
「はい。こちらです」

俺は両手でそれを渡すと、ディーナ先輩が受け取って軽く目を通す。

「え？ メイド喫茶？」

「はい。我がクラスは、メイド喫茶での参戦です」

「……内容はざっと見た限り問題がないけど、よくクラスメイトが承認したわね。確か、Aクラスは貴族が多かったように思えるけど？」

「そこはなんとか了承してくれました。それに、全員がメイドの装いをするわけではないですから」

「ふーん。まあ、レイがいるから……きっとそのおかげかもね」

「？　どう言った意味合いでしょうか？」

「なんでもないわ。じゃ、企画書は受け取ったから戻っても良いわよ」

「分かりました。失礼します。レベツカ先輩も、自分はこれで」

「ええ。では、レイさんまたお会いしましょう」

声が疲れていると言うか、様子がおかしいと思った俺はその顔を注視する。

と、レベツカ先輩の目元をじっと見つめると俺は気がついた。

化粧で隠しているが、レベツカ先輩には確かに隈くまが残っている。それはディーナ先輩も同様だった。おそらく、ファンデーションを重ねるようにして隠しているのだろうが、二人が疲労を面へ出さない様に気に掛けているのは、気付ければ間違いなかった。

「質問なのですが、他の生徒会役員の方は？」

「……素直に戻っていれば良いものを。本当にレイめいってば、目敏めんとくいと言うか、なんというか」

はあ、とあからさまにため息をつくディーナ先輩。

やはりこれは何かあるのだろうか。

「レベツカ様。レイになら、話してもいいと思いますけど」

「そうですね。まあ、一応ご質問に答えると……他の役員三人は、おそらくここには来ないでしょう」

「どうしてでしょうか？」

「……私の婚約がきつと、原因でしょうね」

「それはどういう……？」

「元々、そのお三方はある貴族の派閥に所属する家柄でした。その中のお一人が、今回私が婚約した方と元々は婚約する予定だったとか……私も後で聞きましたが。要約すると、私のことが気に入らないので手伝ってはくれない……ということですね。ですから今はデイナーさんと二人でなんとか生徒会の運営をしているのです」

「そうでしたか……」

ここで明らかになってくる貴族の内情。

それは決して大人の世界だけではない。俺たちのクラスは比較的平和だ。入学当初は色々あったが、今はクラスメイトが分け隔てなく一般人の俺に接してくれている。
オーディナリ

しかし、それはあくまで俺たちのクラスの話だ。貴族も決して一枚岩ではない。こうして、レベツカ先輩たちもまたその貴族の派閥争いに巻き込まれている……ということか。

それで無理をして二人で今は生徒会を回している。

ホワイトボードにある進行中と書かれている文字に、レベツカ先輩とデイナー先輩の机には山の様に積み上げられた書類が並んでいる。おそらく企画書のチェック、それはクラスだけではなく、部活動の方もある上に他の催しなどもある。

二人でその全てを処理するなど、正気の沙汰ではない。

知り得たのなら俺がやるべきことは一つだ。迷いなど、なかった。

「分かりました。この文化祭での生徒会の業務、自分にもお手伝いさせて下さい」

「はあ……レイにバレるとそう言うと思っていたのよ。だから早く戻るように促したのに……」

「レイさん。でもそれは……あなたもクラスでの活動などがあるでしょう」

「兼任できます。私は今回は宣伝係と給仕のヘルプに、調理担当だけですので。それにスケジュール管理はアメリカと入念に行っております。ここに生徒会での業務を手伝わせていただいたとしても、パフォーマンスを落とすことなく両立できます」

これは決して虚勢の類などではない。

と言うのも、実は事務作業を幼い頃からこなしている経験からだ。

それは師匠が本当にその手のことができないので俺が全てやっていた、と言う悲しい背景ではあるが。

軍人の頃は書類での手続きなども多く、それなりに対応する必要があった。それを師匠の分も含めて俺がやっていたのだ。

「レイ」。なんか書類が来た」

「レイ！ また来たぞ！ これはあいつらの陰謀だ！ 私は事務系はダメなのに！」

「はあ……めんどくさ。レイ、よろしくな！」

「またかよ。ほらよ、レイ」

思い返してみれば当初は有ったのかも知れない遠慮も、最終的には遠慮無く俺にポイントと投げ捨ててくる始末。

正直言つと、師匠は魔術師として大成していなければ普通にダメ人間だと思う。いや、今もそれはギリギリだが……。

と、過去の実績がある俺は必ず二人の役に立てると思っている。日頃から園芸部で色々とお世話になっているのだ。そのお返しに、俺もまた手伝いたいと思っている所存だ。

「でもレイさんにご迷惑が……これは私の事情ですから。ディーナさんにも、ご迷惑をおかけして……」

「レベツカ様！ それは言わない約束ですよ！ 私はたとえどんな状況であっても、レベツカ様をお助けすると心に誓っているのですから！」

「ディーナさん……」

「レベツカ先輩。自分も同じです。入学以来、お二人にはいつもお世話になってきました。敬遠されていたらしい男である自分に園芸部での活動を許して頂いて、それに色々な植物に関して教えていただきました。ここで自分にその恩を返させてください。後輩である自分へそんなに気を遣われずとも結構ですよ。自分はただ、お二人の力になりたいと心より願っているだけですから」

「レイさん……」

「レイ……」

よく見ると、二人の目は潤んでいた。

きつとかなりの心労があつたに違いない。物理的に二人で終わる

わけのない量の仕事を、ずっと夜遅くまで懸命にこなしていたのだらう。

だから俺は絶対にそんな二人の助けに成りたいと、そう思っている。

「もう……あなたは本当に、良いやつなんだから。レベツカ様。頼りましょう。きっとレイがいれば、どうにか回せる様になります。ここは私からもお願いします」

ディーナ先輩が、頭を下げるので俺もまたレベツカ先輩に向けて頭を下げた。

「レベツカ先輩。どうか、お願いします。自分にも手伝わせて下さい」

「……ディーナさん。レイさん」

その声はどこか、震えているような気がした。

俺がこうして手伝いたいと言っているのは、実は別の考えもあった。それはやはり、以前の出来事だ。

あの日の、夏休み最後の……あの表情の真相を突き止めたい。

俺はレベツカ先輩には何か隠し事があると考えている。

婚約したことに付随した何か、または全く別の事情。

踏み込むべきなのかどうか、それはもしかすると余計なお世話なのかもしれない。

だが俺はもう、後悔はしたくない。

あの極東戦役での失ったものから得た教訓を、ここで活かさずどこで活かすのか。それにきつと、失った仲間もまた今の俺を見ている。

だから俺は後悔だけはしない選択をするつもりだ。

「お二人とも、顔を上げてください。分かりました。レイさん。どうか、文化祭が無事に終わるその日までよろしくお願いしますね」「はいっ！」

黄昏の光に反射され、その逆光でレベッカ先輩の表情はよく見えなかった。

でも先輩は、どこか嬉しそうに微笑んでいる。そんな気がした。

第103話 アメリカさんと犠牲になるクラリス

生徒会室の件で了承を取るために教室に戻ると、すでに下校時刻も近い上に日も落ちていているということでは誰もいなかった。

だが俺はアメリカが残っていると思って教室に入ってみると、そこには一人で紙を前にして唸っている彼女がいた。

「うーん。これは、ここで良いけど。あっちの方がなあ……」

「アメリカ」

「レイ、遅かったわね。ちゃんと提出してくれた？」

「もちろんだ」

「……なんか真剣な表情かおしてるけど、何かあったの？」

「今から話そう」

そして、アメリカの対面の席に座ると俺は後ろを向いて彼女と向かい合う。

「クラスでの役割はこなす。それと同時に、俺は生徒会を手伝いたいと思っている」

「生徒会？ どうしてまた？ もしかして……ああ。そういうことね」

「分かるのか？」

「今の生徒会のメンバーを考えると、ね。レベッカ先輩の婚約が原因でしょ？」

「そうだ。残りのメンバーが仕事を放棄して今はレベッカ先輩とデ

イーナ先輩の二人で回しているらしいが……あのままだといずれ、どこかで二人とも倒れるだろう。だから俺が手伝いたいと申し出た」「そっか。まあそれなら仕方ないかな……今回のメインは女子たちだから、レイにやつてもらうことも少ないし……別に良いわよ」「そうか。感謝する」

頭を下げる。

本当はクラスの方に全力を注ぐべきなのだろう。しかしあの惨状を見てしまえば、無視することなどできなかった。

アメリカもそれを理解してくれたのか、すぐに了承してくれた。

「じゃあレイの方は私でちよつと調整するわね。教室に出る日と、生徒会にいく日を決めちゃいましょう」

「ああ。よろしく頼む」

俺とアメリカはそうして、今後の日程について話し合った。

今のところ順調にスケジュール進行は進んでいるようで、アメリカの本気度が伺える。

しばらくして打ち合わせが終わると彼女は体を椅子の背もたれに預けてから、グツと背筋を伸ばす。

「うーん。はあ……今日も疲れたあ」

「お疲れ様だな。アメリカ」

「良いのよ。私がやりたくてやってるんだし。今まではただ惰性でやってきた文化祭だけど、今年からは自分も楽しもうって決めたの。その……みんなが、レイがいてくれたから……ね？」

その瞳はわずかに揺れていた。

アメリカは変わったとはいえ、まだ手探りで進んでいる。そんな感じが俺にはあった。でも俺たちは互いに支え合っているからこそ、彼女もまた自分の意志で進むと決めたのだろう。

俺だってそうだ。

こうして初めての文化祭を楽しもうと、そう思っている。

「でも！」

じつと見上げるようにして俺の顔を鋭く見つめてくるアメリカ。そして人差し指を立てると、俺に向かってこう言った。

「あんまりレベッカ先輩にもちよっかい出しちゃダメよ？ そりゃあ先輩にも色々と事情はあるんだろうけど、レイはその……無自覚にやらかしちゃうんだからっ！」

「む？ どういうことだ？ ちょっかい？ 手伝うのがダメということだろうか……？」

「いやそうじゃないけど……！ もうっ！ 分からないなら良いけどさあ……はあ。でもこういうレイだから、私は」

「私は、なんだ？」

「……まあ良いわ。じゃあレイ、帰りましょう」

「ああ。そうしよう」

俺とアメリカは閑散とした教室を去っていくのだった。その去り際、教室内を見つめる。

きつと当日は華やかな教室になっていることだろう。

そうだ。最高の文化祭になることに間違いない。

そんなことを願いながら、俺はアメリカと共に帰路に着くのだった。

翌日。

昼休みになり、いつものように学食で食事を取ることに。

今となつてはこのメンバーにアルバートも加わり、割と大所帯になつてきた気がする。

「そう言えば、クラリスのクラスは何をするんだ？」

俺がそう尋ねると、クラリスはツインテールをぴよこつと動かすと得意げな顔をする。

「ふっ、ふっ、ふっ……私たちのクラスは……お化け屋敷よ！」

「お化け屋敷？ それは文字通りの意味か？」

「そうよ！ がおーって、怖がらせちゃうんだからっ！」

「なるほど……恐怖心をエンターテインメントに昇華させると言うことか。興味深いな」

ふむ……なるほど。

文化祭の出し物はある程度リサーチはしていたが、学校という場所では様々な催しがあるものだと感じしていると……クラリスは急に俯いて、ボソツと呟いた。

「お化け屋敷は楽しみだけど……私もみんなと一緒にクラスで、文化祭……楽しみたかったなあ」

そう。

俺、エヴィ、アルバート、アメリカ、エリサは同じクラスだ。しかしこのメンバーの中で唯一クラリスだけが違うクラス。

彼女はそのことを憂^{うれ}いているのだ。

こればかりはどうしようもない。来年度のクラス替えの時に期待するしかないのだが、そんな落ち込んでいるクラリスをアメリカがガバツと抱きしめる。

「んにゃ！？ な、何！？」

「もっつ！ クラリスってば可愛いっ！ 大丈夫よ、私たちの友情はクラスが違ってても変わりはないからっ！」

アメリカはそう言うと同時に、クラリスの体を艶かしい手つきで触り始める。それはまるで、熟練の技術そのもの。俺には実際のところ、その技量は分からないがアメリカが相当のテクニックを有していることだけは知っている。

そしてクラリスは絶望に染まった顔で、俺たちに助けを求める。

「んにゃあああああああつ！ た、助けてみんな！ 発作よつ！
アメリカの例の発作が始まったわっ！」

『…………』

「む、無視！？ え、エリサ…………！ 隣にいるんだから、アメリカを止めてっ！」

「…………」

「ぐへへ…………クラリスは相変わらず良い体してるわねえ…………小さいのもまた、乙なものね…………ぐへへ…………」

「ぎゃあああああつ！ お、お嫁にいけなくなるうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ！！」

と、俺たち四人は二人から少し距離を取るとそのまま昼食を取り続ける。

この手のアメリカの暴走は決して止まることはない。一度、俺とエヴィで止めようとしたがアメリカがまるで獰猛な動物のように威嚇してくるのだ。

それを機に、俺たちの間ではもっぱらこの暴走が始まったらソツとしておくのが暗黙の了解となった。

ちなみにエリサは、最近は上手いこと回避している。まあ、その分クラリスが犠牲になっていることに思うところは有る様なのだが、エリサもまた背に腹は変えられないようだ。

「そう言えば、エリサ。服装の方は進んでいるのか？」

「うん。今はデザインをちょっと調整しようと思って、みんなで相談しているよ？ それにアルバートくんが割と知識があつて、助か

ってるの」

「そうなのか、アルバート？」

アルバートはどこかは悲しげにフツと微笑を浮かべると、悲痛な声で過去を語る。

「……ああ。昔、姉の付き添いでデザインとパターンの勉強をしたことがあってな……俺はその際に色々の実験台にされたものだ……まあ今こうしてその技術が活かしているのには感謝しかないが」
「なるほど。俺とエヴィは、この調子だと調理メインになりそうだな」

「そうだな。ま、でもクラス内にしつかりと料理できるのは、俺とレイとエリサくらいだからな。貴族が多いところなることは分かっていたが、中々に大変だぜ」

エヴィの言葉通り、俺たちは調理を担当することになっている。紅茶などは他の生徒でも煎れることはできるが、包丁を使って調理したことのない生徒がほとんどで、消去法的に俺とエヴィが調理を担当することに。

当日はエリサも折を見て、ヘルプに入ってくれることになっている。

だが実際には、メニューもそれほど多くはなく、あくまで売りはメイドによるサービスがメインとなるので俺たちにそこまでの技量は要求されない。

切って、焼く。

そのシンプルな工程ができれば大丈夫だ。

仕入れなどはアメリカが手配してくれているので、きっと大丈夫だろう。

そして四人で色々と文化祭について話していると、やっとクラリスは解放されたようだが……机に頭を突っ伏したまま動かない。

ツインテールも完全に元気をなくし、まるで枝垂れ柳しだのように垂れ下がっている。

「ふう……今日もいいエネルギー補給ができたわ」

一方のアメリカはどこか達成感で満ち溢れていた。

こうして俺たちの文化祭は順調に進んでいくことになる。

そう。表向きは　。

第104話 貴族会議

貴族会議。

それは定期的に貴族たちによって行われる会議である。議題は毎回変わるが、共通するのは魔術師の世界に関して主に会議は行われると言ったことだ。

この魔術師の世界は貴族が牽引している。

その自負が貴族たちにはある。

しかしここ数年は、その自負も少し陰りを見せている。それは七大魔術師の存在だ。

七大魔術師。

魔術師の中でも最上位の魔術師である、グラント聖級の地位から選ばれし七人の魔術師。

貴族の子どもならば、親にそこにたどり着くように命じられるのは至極当然のこと。むしろ、魔術師として大成すべきことこそ至上であると教えられる。

特にその傾向は下流から中流貴族に多い。

その一方で、一部の上流貴族と三大貴族は気が付き始めていた。

魔術師の能力とは、血統だけでは説明できない部分が大きくなっているのではないかと。今までは貴族はその血統を重んじることさえしていれば、自ずと魔術師として大成していた。

だが、どうだろうか。

今の七大魔術師は、上流貴族の者や三大貴族はいない。

むしろ貴族出身ではない者でさえいる。

そんな状況を憂いたのか、まずは三大貴族当主が集まり会議が開かれることになった。

「ふう……さて、何から話しましょうか」

「ブルーノ。例の件は良いのか」

「娘の婚約ですか？」

「ああ」

「そちらは事前に通達した通りです。滞りなく進んでいますよ」

「……他人の家に口出しする気はないが、早いのではないか？」

「私の家も事情がありますので」

「そうか……」

三大貴族の会議は魔術協会の一室で行われることが多い。本日は会長は所用で出席できないと言うことで、三大貴族当主の三人による会議が行われる予定だ。

ローズ家当主。クロード＝ローズ。

ブラッドリイ家当主。ブルーノ＝ブラッドリイ。
オルグレン家当主。フォルクハルト＝オルグレン。

その三人が一堂に会するのは、半年ぶり。ちょうどそれぞれの学院の入学式前に集まった時以来だ。その時はこの一年の予定の確認、さらには魔術界の情勢について話し合い、それを他の貴族に通達した。

そして今回の会議。

これは緊急性があるものではないが、それぞれの当主が懸念を抱いているのは間違いなかった。

ユーゼニクス
優生機関の台頭。

それは貴族の中にも確実に侵食していた。魔術の真髄を極めるために、倫理の枷を外してさらなる真理にたどり着こうとする思想に取り憑かれる貴族もいた。すでに嚴重注意、さらには処分されている貴族すら存在する。

この動きを鑑みて、今回の会議に至ったのだ。

「おお！ クロードにブルーノ！ 久しぶりだな！」

「フォルク。一分の遅刻だ」

「はあ……全く、クロードは堅くて叶わん。もう少し柔軟性が欲しいところだが、そう思わんか。ブルーノよ」

「ええ。クロードさんは些か堅いお方です。しかし私はそれも美德だと思いますよ」

「ははは。言いおるわ、若造が」

「恐縮です」

それぞれが円卓へと着く。

クロード＝ローズ。年齢は五十代に最近入ったばかりだ。その紅蓮の髪はローズ家特有のものであり、それは短めに切り揃えてある。顔もまた、まだ五十代とは思えないほどに若々しい。

ブルーノ＝ブラッドリイ。年齢は四十代前半。この三大貴族の中では一番若い。艶やかな黒い髪を後ろで一つに束ねている。最近は心労なのか、わずかに白髪が目立つ。

フォルクハルト＝オルグレン。年齢はクロードと同じ。二人は魔術学院では同級生であり、旧知である。そのため、二人で個人的に会ったりなど仲はいい。フォルクはこの三人の中でも、一番分厚い体をしておりその巨体をこれでもかと目立たせる。服の上からでもわかる圧倒的な筋肉を兼ね備えている。

それは二十代の頃から衰えを見せないのだから、もはや異常と形容すべきものだ。もちろん趣味は筋トレである。

白金の髪を刈り上げ、爽やかな印象。他のものからは、フォルクと呼ばれている。

そして三人は本題へと入る。

「さて、私が確認した情報ですと……王国内で不審な動きがあるとか」

「不審な動きだと？」

「ええ。以前と同様に、ユーゼニクス優生機関関連かと」

「なるほどな……」

「優生機関め。あいつらのせいで、どれだけの魔術師が流れて行ったか……これも人間の業（ごう）かもしれない」

そう呟くフォルクはどこか神妙な面持ちだ。顎の髭を撫でながら、ボソリと呟くようにして言葉を発する。

その後、三人はさらに優生機関（ユーゼニクス）の件について話し合い次は魔術剣士競技大会（マギクス・シュバリエ）の話に移行する。

「おお！ そういえば、魔術剣士競技大会でアメリカがうちのアリーヌに勝ったようだな！ あれは凄かったな。なあクロード」

「うちの娘は以前から才能はあった。それが開花したに過ぎない」

「はっはっはっ！ しかし、次はアリーヌが勝つぞ？ うちの娘は何度だって立ち上がるからな！ ガハハ！」

「アメリカさんですか。確かにあの固有魔術（オリジン）は素晴らしかった。クロードさん。あれはきつと、七大魔術師に至る能力ですよ」

「……分かつている。因果干涉系の固有魔術（オリジン）。あれは虚構の魔術師に匹敵するほどのものだ。ただ、強力すぎるが故にあの能力と付き合っていくのはかなり骨が折れるだろう」

「対策は大丈夫なのですか？」

「……ああ」

ほんの少しだけ間があったのを、ブルーノは逃さなかった。

「クロードさん。正直に話してください。彼が関わっているのでは？」

「すでに抑えていたのか……」

「ええ」

ブルーノは元々その情報を持っていた。だからこそ、彼はすぐにクロードの発言に対して言及する。

ブルーノは今回の会議では、これを一番の議題に上げようと思っていたのだ。むしろ、ユージェニクス優生機関の件は前座に過ぎず、目的はこの話題。

当代の【氷剣の魔術師】について、語り始めようとしていたのだから。

「当代の【氷剣】ですが、どうやらアメリカさんと仲がよろしいようです……」

「……そこまで知っているのか」

「はい。と言つても、調べるのはかなり苦労しましたが」

ブルーノもまた、レイの存在は知っていた。始まりはマギクス・シ魔術剣士競技大会。ユバリエその時に、噂は入ってきていた。かのローズ家の長女が、オーディナリー一般人の教えを受けているとか。

それは本当に偶然だった。

ブルーノが耳にしたのは、貴族たちが辟易するようにして噂をしていたからだ。三大貴族の長女であるアメリカが、オーディナリーどうして一般人などと関係を持っているのか。全く嘆かわしいことである、と。

入学当時は話題になった存在ではあるが、今となつてはその噂もパタリと止んだ。まるで、誰かが意図的に情報操作しているように。

それから、アメリカは覚醒した。

それも因果に干渉すると言う固有魔術オリジンを伴って。

流石に違和感を覚えたブルーノはレイのことを調べ始めた。しかし、調べれば調べるほどレイオーディナリー ホワイトと言う魔術師の底が見えないのだ。三大貴族の情報網があれば、ただの一般人を調べることなど造作もない。だというに、掴めない情報。

そこから躍起になり、ブルーノはようやくたどり着いた。

レイオーディナリー ホワイトの正体が、当代の【氷剣の魔術師】であることにさらには、ローズ家がすでに彼にアプローチをかけていることもブルーノは知ったのだ。

「十代にして最強の【氷剣の魔術師】に至り、さらには史上最高の魔術師と名高い、リディアオーディナリー エインズワースを上回っているとか。本当ならば、破格の才能です。それこそ、世界を揺るがしかねないほどの。もちろん貴族たちは彼が貴族社会に入るのを拒むでしょう。しかし、それを考慮してもその才能は圧倒的。私もまた、彼の血が手に入るのなら多少の無茶はしても良いと思っています。まあ、仮の話ですが……」

視線が交差する。

ブルーノとクロード。

その緊張感は張り詰めたものになる。

「……レベツカ嬢は婚約したばかりだろう」

「妹のマリアがいます」

「……外聞は気にしないと？」

「それよりも彼の才能は価値があります。十代で【氷剣の魔術師】に至る。それは既に世界最高の魔術師である証明です。三大貴族の地位をさらに高めるには、象徴が必要とは思いませんか……？」

と、二人でそのように会話を繰り広げていると、今まで黙っていたフォルクがバンツと机を叩く。

「二人とも。そこまでだ。三大貴族に七大魔術師の血を取り入れたいの分かる。だが、人間をそんな風に扱うものではない！」

フォルクハルト「オルグレン。彼は三大貴族でありながら、人情に熱い男だった。そのため、魔術師を血としか見做^{みな}していない発言に苛立ちを見せたのだ。

「すまなかった……」

「申し訳ありません」

頭を下げる二人。

共に熱くなったのを認め、素直に謝罪をする。二人は別に他の貴族ほど血統主義ではない。素直にこの時代の流れに対応するだけの柔軟な思考を持ち合わせている。

だがやはり、若い上に七大魔術師という破格の才能を逃すわけにはいかなかった。

その後、フォルクもまた概要を聞いた。アーノルド魔術学院に通

「オーディナリー」
う、一般人である少年が当代の【氷剣の魔術師】であることを。

「しかし面白いのお……そう言えば、娘が言っていた気がするわ。
面白い魔術師がいるとな。ふむ……いつか会ってみるか」

ニヤリと笑うフォルクもまた、レイに興味を持ったようである。

「……しかし、その件は公開しない方がいいでしょうね。他の貴族
が混乱しますから。それにきつと、これほどの情報規制。彼の背景
には、リディア・エインズワースを含めて上位の魔術師が控えてい
るのは間違い無いでしょう。下手に手を出すべきでは無いかと。少
なくとも、今は。貴族とは違う派閥が、あちらにはありますから。
七大魔術師を敵に回すのは、些か私も怖いですからね」
「ブルーノの意見には賛成だ。私もそう考える」

そしてその後は、改めて別の話題を話してから貴族会議が終了。

レイの存在はこうして、三大貴族当主に認知されることになるの
だった。そしてそれは、新たな波乱の幕開けでもあった。

第105話 いつかあの日の戦場

鮮明に描かれる、真つ赤な戦場。

悲鳴、怒号、爆音がいたるところで飛び交う。

灼ける身体。弾ける四肢。飛び出す双眸。碎ける頭蓋。爛れる皮膚。

灼ける戦場に立ち尽くしながら、彼は自身の身体を巡る痛みを受け止めていた。身体には無数の切り傷、焼け跡、打撲、内出血もしているのか青く滲んでいる箇所もある。

作戦は成功した。だが、相手だけでなくこちらにも多大な被害を及ぼした。先ほどまで隣にいた仲間が無残にも形容し難い何かとなつて散つていった。

その姿を目の前にして見た彼は恐怖した。と同時に、強い殺意に駆られた。だが、否が応にも戦場では感情的になつては生き残れないとすぐに悟らされることになった。

必要なのは極めて合理的な行動。心を押し殺すことで彼は望まぬ高みへと昇華されていった。

決して終わることのない繰り返される日々。いつまで経っても終わりなど見えはしない争い。それどころか勝っているのか、負けて

いるのかも不明瞭だった。

もしかしたらこれは悪夢なのかもしれない。自分は覚めることのない夢の中にいるだけで現実ではないのかもしれない。

だが、そんな逃避が許される余地はない。ただただ生きる為に逃げてはならない。

少年はそんな戦場を駆け抜けている。

「はあ……はあ……はあ……っ!!」

もうどれほど進んだのか覚えなどない。

少年はたった一人で、腰に据えたナイフをギュツと握り締めながら戦場を駆け抜けていく。

魔術が初めて本格的に導入された戦争。

後に極東戦役の名称で呼ばれるこの戦争は、徐々に規模を拡げつつあった。

「寒い……寒い……」

彼の長い髪はすでに赤い液体でベトベトだった。滴る赤い液体は殺した相手の血だろうか。

彼は滴るその血を拭うことなく、岩場に潜むとその場に座り込んだ。

一人で膝を抱えて、じつと……ただじつとその場で蹲うつむる少年。

人を殺した感覚は決して消えること無く残り続けている。ただその手にずつと残り続ける感覚。初めての殺しを経験した後は、ろくに眠れることはなくなつた。

浅い眠りを繰り返し、ただ戦場を逃げ回るだけ。

村を追われた後は彼はそうやってずっと生き続けていた。食料は自力で見つけ、それを確保してなんとか生活とも呼べないものを送っている。

もうどこにも自分の居場所など、生きる場所などないのだと、そう幼いながらに考え、少年はひたすらにこの戦場と云う名の顕現された地獄を彷徨い続ける。

「……」

もはやその瞳には、何も灯していない。

生きることなどにまるで興味がなくなっているような瞳。

しかし彼を駆り立てているのは、生きるという本能だった。

生きるべきだと。

自分は生きなければならない。

そんな本能に駆り立てられ、彼はひたすらに戦場を走りつづけている。

その先にきつと、理想の世界があると信じて。

しかしそんなものはこの世界にあるわけがないと、少年は後に知ることになる。

「はっ！ はあ……はあ……はあ……」

汗が滴る。

腰付近まである長い髪の内側は大量の汗を吸い込み、ポタリポタリとベッドのシーツに広がる汗の跡。

ブラッドリイ家。

その中でも場所はレベッカの自室。広い部屋の中にある天蓋付きのベッド。

彼女はいつものように睡眠を取っていた。

現在の時刻は午前三時三十分。

こんな深夜にレベッカが起床することなど、ほとんどない。

それも、こんなに壮絶な夢を見た後には。

「い、今は……？」

問いかける。

しかし、その問いに答える者などいない。

よく見ると、ベッドのシーツには汗だけが滴っているわけではなかった。

その染みの中には赤いものが混ざっていた。

「え……？」

そつと自分の顔に手を当てる。

すると、レベッカの右目からはまるで涙が零れ落ちるかのように真っ赤な血液が流れていた。

ツーっと流れるそれを拭くと、鋭い痛みが両目に走る。

「う……うう。これは、一体……？」

理解ができない。

そんな様子で彼女は一人、茫然とこの状況を見つめる。でも今はこの流れている血をどうにかしよう。

そう考えてレベッカは一人で洗面所へと向かう。

電気をつけ、鏡の前で蛇口を捻るといつものように水が流れ出てくる。まずは血の付着した両手を洗って、その後は鏡で自分の両眼を確認する。

するとそこには、発動しているわけがない魔眼が発動している様子が映り込んでいた。

「魔眼？ でもこれは……」

レベル力は思った。

金色に変化しているこの両目は確かに魔眼の発動兆候である。しかし、未来など見た覚えはない。見たのは、記憶……だろうか。はっきりと覚えているわけではない。

ただ覚えているのは、たった一人の少年が戦場らしき場所を駆け回っている様子だけ。

夢、と言えばそうなのだろうが……それは妙に現実感があった。

まるで誰かの記憶を追体験しているかのような。

そんな感覚。

「……」

じっと自分の両眼を見つめ続けると、次第にその金色の眼はいつも通りの黒色へと戻っていく。

それと同時に出血も止まったようで、ホッとするレベッカ。

頬にある血の跡も拭くと、彼女は自室に新しいシーツを自分で持っていく、汚れたものと取り換える。

そして汚れたものを洗濯するためにもう一度洗面所へと向かうと、ちょうどばったりと妹であるマリアと出会でくわしてしまう。

「あ……あれ、お姉ちゃん？　こんな時間にどうしたの？」

「あ、いや。その、なんでもありませんよ……はい」

「でもそれ。血で汚れてるけど？」

「これはちよつと鼻血が出てしまつて」

「鼻血？」

「ええ。鼻血です」

「ふーん。お姉ちゃんにしては珍しいこともあるんだね」

「ははは。昨日は少しばかり、チョコレートを食べ過ぎたみたいで」

レベッカは愛想笑いを浮かべつつ、一方のマリアはブスツとした表情をしていた。そしてマリアは話の内容を別のものに変える。

「お姉ちゃんさ。婚約のことは、良いの？」

「……別に構いません。それが三大貴族の務めですから。それに、私は長女なのです。でも……マリアには自由を選ぶ権利が少しくらいはあると思うから、貴女は良い恋をしてね」

「お姉ちゃん……」

マリアはどこか寂しそうな目で、レベッカのことを見つめる。

以前は仲睦まじい姉妹だった。

でもいつからか、その距離感は明確に開いてしまった。思えば、マリアのピアスを開ける癖もまた、一種の自傷行為であり両親や周りへの貴族に対する当て付けのようなものだった。

貴族だから、ああしなさい。こうしなさい。お姉ちゃんを見習いなさい。

そんな言葉を幼少期の頃からずっと浴びてきたマリアは、思春期に入ると同時に髪型を奇抜なものにして、大量のピアスを自分で開けた。

そんな様子をただレベツカは呆然と見つめることはなく、毎日懸命にマリアに話しかけた。

一蹴されることも多かった。それでも、マリアが以前のアメリカのように仮面をつけることなく生活を送れたのは、間違いなくレベツカのおかげだった。

彼女が側にいるせいで辛いこともあった。それでもやはり、マリアは姉であるレベツカのことがかつた。誰よりも尊敬して、そして誰よりも美しい人。その存在そのものが、高貴であると。

劣等感の対象でもあり、憧憬こころざしの対象でもある。

そんな倒錯した気持ちを姉のレベツカに抱いているマリアは、今回の婚約の件はどうにも気に入らなかった。父にも母にも問い詰めたが、それがブラッドリー家の務めと言われまともに取り合ってくれなかった。

だからマリアは今こうして、話しかけてみた。

だがそこにあっただのは、自己犠牲としか思えない姉の悲しい表情だった。

「では、マリア。私は失礼しますね」

「お姉ちゃん。待って」

レベツカはマリアの呼び止める声を見做す形で、自室へと戻っていく。ただ早足で、懸命に戻るとベッドで横になって涙を流した。

「う……うう……う……」

婚約の件は、すでに確定している。

それがたとえどんなものであっても、受け入れる覚悟だった。

しかし、現実はいくらにも非情だった。

レベツカは夏休みに魔術協会に行った際に知ってしまった。

その婚約者の、本当の顔というものを……。

そのことを思い出したせいか、レベツカは先ほど見た夢のことはすっかり忘れてしまっていた。後にそれが、重大なものになるとも知らずに。

第106話 託す願い

本格的に文化祭の準備をする期間がやってきた。

部活動も必ず出る必要があるわけでもなく、今はクラス内での企画を進めることを優先しても良いということだ。

ちなみに俺が所属している環境調査部は特に何かをすることもない。それは曰く、全員がフィジークコンテストへの調整でかなり忙しいからだ。俺はクラスでのメイド喫茶の準備とそれに生徒会の手伝いで手一杯なので、今年は見送ることにした。

本来の俺は、生徒会での手伝いを買って出なければ出場していただろう。

この学院の文化祭のフィジーク大会はかなりレベルが高いと聞き及んだ。俺の太ももも大腿四頭筋も、僧帽筋もきつと出たかったに違いないが今年ばかりは仕方がない。

また、エヴィはすでにその話をどこかで聞いたようで、俺に話しかけてきた。

「レイ。フィジークに出ないらしいな」

「ああ。少し優先するべきことがあって、な」

「……もしかして厄介ごとに巻き込まれているのか？」

「いや、そういうわけではない」

筋トレの終わった後、俺たちは互いにプロテインを補給しながらそんな話を交わす。

滴る汗をタオルで拭い去り、ちょうど寝る前のリラックスしている時間だ。俺たちは向かい合うようにして椅子に座って一息つく。

「レイ。何かあれば、頼ってくれよ？」

「……しかし、エヴィは大会への調整で忙しいだろう」

「ま、そりゃあそうだが。でもこの大会に出るか、それともダチが困っているとき助けるかどうかだったら……俺は断然後者を選ぶぜ。だからレイ。本当に困っているときは遠慮なく言えよ。俺たちももう、ソウルメイトだからな！」

「ふ……ああ、そうだな！」

互いの大胸筋を震わせながら、俺たちはさらなる友情を育む。

いつかエヴィにも、あの話ができたら良いと……そんなことを思った。

そして次は園芸部での文化祭の予定だ。こちらもまた、特に何か大きなことをする予定はない。例年の如く、今まで育ててきた花や植物を展示するだけらしい。

そのため数日前から配置を変えて、見栄えが良く成る様に整え直すだけな様なので、そこまで大変なものではないらしい。

こちらもすでに話し合って、先輩方とどのようにしていくのかという話し合いは済んでいる。

「はあ……疲れた。でもレイってば、本当に優秀なのね。驚いたわ」

「ディーナ先輩。これくらいならば、いつでも頼ってください。事務作業は徹底的に鍛えられたので」

「……うん。本当にレイって謎よね。いや、もう慣れたから良いけどさ……うん……」

ということで現在は三人で生徒会室にて作業を行っている。

すでにクラスごとの企画に関しては承認をしたので、今は部活動や有志団体での企画に関する書類をチェックしている最中だ。

一度俺とディーナ先輩が手分けして書類を見て、その後にレベルカ先輩が確認してから承認するという流れだ。

その作業もほとんど終わり、今日の分の仕事は早く終わることになった。

「レイさん。本当にありがとうございます」

「いえ。これぐらいでしたら、いつでも」

「ふふ。本当にあなたは不思議な人ですね」

「恐縮です」

「レイさんってば、一人で何人分もの作業しちゃうんですから。本当に驚きましたよ？」

「レベルカ様のいう通りね。あんたのあの高速の書類捌きは逆にちよつとキモい領域まで来てたわ……。うん……。しかも、あの速度でしっかりとチェックできてるし……。もう規格外すぎて」

「慣れていますので」

その際に想起するのは、師匠が家に大量の書類を酔っ払いながら

持って帰ってきたことだ。

あの日は飲み会で遅くなると言っていたが、なぜかダンボールを抱えて帰ってきた師匠。玄関でそれを受け取ると、なんでも今まで溜めてきた仕事をアビーさんに「良い加減やれっ！」と怒られたらしい。

「レイ」。よろしく」

「え！？　ちょ、師匠！」

「私は寝るよ〜ん……明日までらしいぞ」

「え！？　明日まで！？」

ダンボールに詰め込まれた大量の書類。

これを明日までにやれというのか？　正気の沙汰じゃない……流石に無理だ、と言おうとすると師匠はすでに玄関で寝ていた。幸せそつに、「むにゃ。むにゃ……もう食べられないよお……」と言いながら。

その後、師匠をベッドに放り投げると俺は徹夜で書類作業に励んだ。

ちなみにこの出来事は複数回あった。そのため俺のこの処理能力はその時に半ば無理やり生まれたものだ。

当時は師匠を恨んでいたが、今となるとあれがこうして活かされているのだから人生とは分らないものである。

「ディーナさん。クラスの方、行ってきてはどうですか？」

「そつ……ですね。今は時間もありませんし」

「こちらの方は私がやっておきますので。レイさんもそうして良いですよ」

「了解しました」

その場で自分の手元にあった書類を綺麗にまとめると、それをレベツカ先輩の机の元に置く。そして俺とディーナ先輩は、レベツカ先輩に挨拶をしてから生徒会室を後にするのだが……。

「レイ。ちよつといい？」

「なんでしょうが。先輩」

生徒会室から少し離れたところで、ディーナ先輩の顔つきが真剣なものになる。

「レイは教室に戻らないとまずい？ クラスの進行具合は？」

「今は自分がいなくても回っています。そのようにローテーションを組んでおりますので。もとより、今日もずっと生徒会室にいるつもりでした」

「そう……ちよつと頼みごとがあるんだけど、良い？」

「はい。何なりと」

「……内容くらい先に聞きなさいよ」

「ディーナ先輩の頼み事を、自分が断ることなどありません」

「無茶言つかもよ？」

「先輩はそんな人ではありません。自分はそう思っています」

「はあ……全く、もう。レイは本当に良い子なんだから」

優しくふつと微笑むと、俺の頭を撫でてくる先輩。それはまるで、子どもをあやすようなものであったが悪気はしなかった。

「レイ。聞いてるわよね、婚約の件」

「はい」

「あれは思っている以上に根が深いわ」

「と、言うത്？」

「エヴァン＝ベルンシュタインには何かあると思うの」

「何かとは？ 具体的に分からないのですか」

「それが分からない。でもこの時期にこんな急に婚約なんておかしいと思わない？ 私も貴族の一員だからわかるけど、特にレベッカ様とはずっと一緒にいたのに……私が把握していないうちに婚約が決まっていたの。これはおかしいわ」

「なるほど……」

『私が把握していないうちに婚約が決まっていたの』と言う言葉には少し突っ込みたいところもあったが、ディーナ先輩がレベッカ先輩のことを誰よりも大切に想っていることは入学直後から知っている。

ディーナ先輩本人は熱心なファンだと言うが、実際二人は親友だと俺は理解していた。

いつからそうなったのかは知らない。

だがディーナ先輩は、そんな親友であるレベッカ先輩のことが心配なのだろう。それは声音と、その表情を見れば分かる。

その言葉を聞いて、俺もまたあのときの先輩を思い出す。

助けて。

と呟いたと思ったあの日。悲しそうな表情で哀愁を漂わせながら、

そうレベツカ先輩が言った気がしていた。

俺はあの日の違和感を払拭するためにも、こうして生徒会へ手伝いに来ている。

「レイ。私とレベツカ様は近すぎる。だから詰め寄っても、彼女は何も話してくれない。私を大事に想ってくれているからこそ、私たちは決してこれ以上近寄れない……でも、あなたならきっと何かできると思う」

「……自分はそんな大層なものではありません。しかし、ディーナ先輩はそれでも自分にレベツカ先輩のことを頼みたいと。そう仰るのですか？」

「そうよ。レイ、あなたのことは本当に信頼してる。入学当初は一般人^{ディナリー}でそれに男だからって理由で、あなたのことを勝手に先入観で嫌っていた。その時のことは謝るわ。本当にごめんなさい……それで都合がいいかもしれないけど、レベツカ様の側にいてくれない？時々、辛そうな表情^{かお}をするの。特に最近は。レイのことは、レベツカ様も気に入っているし……側にいてくれると私も安心できる……」

辛そうな表情^{かお}で俺の両手をギュツと包み込みながら嘆願してから、ディーナ先輩は頭を下げた。

「お願い、レイ。私も自分でもっと調べてみるけど、今は近くにいない方がいいと思うの。だから……」

「……先輩」

夕焼けに染まる俺たち二人。

そして俺が言うべき言葉は、すでに決まっていた。

「先輩。任せてください。その願いは、自分が果たします」

「……ありがとう、レイ。本当にあなたに会えて良かったわ」

その後、俺はディーナ先輩と別れると生徒会室へと戻っていくのだった。

一体、レベッカ先輩に何が起きているのか。

俺はもうこの歩みを止めることなど、できなかった。

第107話 先輩の婚約者

あれから俺はすぐに生徒会室に戻った。

レベツカ先輩もまたすぐに帰宅すると言っていたが、おそらくそれは嘘だろう。きつとまだ仕事をしているに違いない。

そう思って生徒会室の扉を開けると、予想通りそこには眼鏡をかけて集中しながら書類を読んでいるレベツカ先輩がいた。

「レイさん？ どうして戻ってきたのですか……？」

顔を上げる先輩はどこか気まずそうな顔をしていた。

「先輩が心配だからです」

「あはは……いや、ちよつとだけやる事しておこうと思ひまして」
「では自分も手伝います」

「え……いや、でもすぐに終わりますから」

「今回の件に関しては、レベツカ先輩のことは信用しておりませんので」

「がーんっ！ まさかの事実ですっ！」

「ということ、自分も失礼して」

レベツカ先輩はどこか戯おもけてごまかそうとしているようだったが、彼女の元に行くと明日やるべきだった書類が積み上げられていた。

きつと俺とディーナ先輩が去った後に、これを一人で全てやろう

としていたのだろう。

「あ……」

先輩が何か声を上げるが、問答無用で書類の束を取ると俺はそれをいつものように目を通して不備がないか確認する。

「先輩は印鑑だけ押してくれたら良いので」

「分かりました……」

俺が真剣な声で言ったのが伝わったのか、レベツカ先輩は大人しく従ってくれた。普段ならば、こんな強引なことはいらない。

だが、ディーナ先輩に頼まれた上に最近の先輩はどこか様子がおかしいのも理解していた。

まるで何かに追い詰められているような感じ。

それを忘れるために仕事に没頭して逃避でもしているような……
そんな感覚。

あくまで俺の主観に過ぎないが、どこか危ういと感じているのはディーナ先輩も同じだ。

だからこそ距離感の詰め方を誤ってはいけない。

何かを抱えているのは分かっているからこそ、無理やり聞き出すようなことはしてはならない。

いま俺にできるのは、先輩が無理をしないように支えることだけ

だ。

そうして完全に日が暮れ、外の景色が真っ暗になった頃……ちょうどやるべき作業が終了した。

「ふう……」

「お疲れ様でした。レイさん」

レベツカ先輩はいつの間にか紅茶を淹れてくれていた。カップを俺の元にそっと置くと、ニコリと微笑んでから自分の席に戻っていく。

「……」

じっとカップの中の液体を見つめる。

ゆらゆらと揺れるそれに、自分の顔がわずかに映り込む。どうやら今日は少しばかり無理をしてみたようだ。体に疲労感が蓄積しているのがわかる。でもこれを表に出すわけにはいかない。

俺はいつものような慣れた所作で紅茶に口をつける。

「うん。美味しいですね。やはり、レベツカ先輩の淹れる紅茶は最高のものです」

「あはは、ありがとうございます。茶葉自体はそんなに高級なものではないですけどね」

「それはきつと、先輩が淹れてくれたからこそですね」

「そ、そうですね？」

「はい。誰かに淹れてもらうだけで、それは途端に美味しくなると自分は思います」

「ふふ。やっぱりレイさんはとても眩しい方ですね」
「眩しい、ですか？」

ふと先輩の方を見ると、彼女はどこか寂しげな雰囲気を纏っていた。

「私もレイさんみたいに　いえ。詮無いこと言いました。忘れてください」
「……」

その言葉に対して言及はしなかった。

今はただ二人でこの生徒会室でわずかな余韻に浸っていた。そしてしばらく時間が経過した後、俺たちは帰る準備を始める。

「ではレイさん。私が鍵閉めなどは行いますので、先に帰ってもらって結構ですよ」

「いえ。そういう訳にはいきません。自分も手伝います」

「……何だか、今日のレイさんは強引です」

「嫌でしたか？　もしそう感じたのであれば、申し訳ありませんでした」

「いえ、そんなことは。ただちょっと頼もしいと、そう思っただけです」

生徒会室の明かりを落とす、鍵を閉めてから俺たちは帰路へと着く。

しかし、レベッカ先輩は女子寮の方ではなく、そのまま学院の門へと進んでいく。

「私は今日は実家の方に帰りますので。それでは、ここで失礼します」

「送りましょう」

「……そう仰るかなと思っていましたが。ふふ、やっぱりそうでしたね」

「この暗い中、先輩一人で帰るのは危険かと」

「そうですね。では、お言葉に甘えて」

「はい」

二人で街灯の灯る道を進んでいく。

中央区へと抜けて、そこから少し南に進めばレベッカ先輩の自宅にたどり着く。今は夜ということもあり、馬車が運行している時間は終了しているので歩いて行く。

と言っても一時間もかからずに到着するので、そこまでの距離では無い。

「レイさん」

「はい」

「文化祭の準備は楽しいですか？」

「そうですね。初めての事で色々と戸惑いますが……楽しいです。それにうちのクラスはメイド喫茶をしますので、今から心が躍ります」

「あらあら。まあまあ。それは一体どう言う意味なのですか？ もしかして、可愛い女の子が見たいとか？ レイさんもそう言うことに興味があるのですか？ ふふっ」

顔を覗き込むようにして、人の悪い笑みを浮かべる先輩。

もちろん俺は飾る言葉などなく、ただ純粹にこの想いを伝える。

「そうですね。自分のクラスは可愛い女子生徒が多いので。きっとメイド服は映えると思います。今から楽しみです」

「……なるほど。レイさんのことが、なんだかもっとよく分かった気がします」

「？　どう言う意味でしょうか？」

「純粹な瞳でそう言われたら、私もからかうことはできませんね」

「そうですか？」

「ええ。それにしても、よくメイド喫茶を提案しましたね」

「元々はアメリカの案なのです」

「え……そうなのですか？」

「はい」

ポカンとした表情を浮かべるレベツカ先輩。今までこんな表情は見たことがなかったので、新鮮に思えた。

しかしまあ……それも無理はないと思う。

俺も出会った当初は、アメリカは三大貴族らしい気高い貴族だと思っていたからだ。いや、別に今も気高くない……と言っているわけではないが、彼女の可愛いものに対する情熱は些か常軌を逸している。

特にクラリスとエリサに対してはセクハラ紛いのこと繰り返しているしな。

あの時のアメリカの表情は……あまり表に出してはいけないと、俺は思っている。

「アメリカは女子の可愛い姿が好きなようで。メイド服のデザインも、自分で考えたとか」

「ではあの上がつてきたデザインは、アメリカさんが考えたものだったのですか」

「はい」

「なるほど。一番初めのデザインはスカートの丈が短すぎるので、却下しましたが……そのあとはギリギリのラインを攻めてきたので許可しましたが、そうですね」

「アメリカの情熱は、それはすごいものです」

「意外ですけど……でも、どこか納得しちゃいますね」

「そうですね？」

「レイさんの周りは、とても眩しいからです。周りにいる人は、みんな笑顔になっていく。アメリカさんもきつと、レイさんが側にいるからそのように振る舞っていると思いますよ？」

「そうですね？」

「はい。私が言うのですから、間違いありません。えっへん！」

と、わざとらしく胸を張って自慢げにそう言うレベッカ先輩はどこか幼く見えた。

そしてレベッカ先輩の自宅に着く直前、俺たちはある人物とばったり出会うことになる。

「レベッカ。今帰りなのかい？」

「あ……はい。エヴァン様……」

途端に先輩の表情が曇る。それはまるで、相手のこと嫌がっていると云うか……恐れているような、そんな印象を抱いた。

「もしかして君が送ってくれたのかい？」

「はい。レイ＝ホワイトと申します。レベッカ先輩の後輩で、アーノルド魔術学院の一年生です」

「なるほど。僕はエヴァン＝ベルンシュタイン。彼女の婚約者だよ」
人の良さそうな笑みを浮かべて握手を求めてくるベルンシュタイン氏。

中背中肉。茶色の髪は全体的に短く、前髪を綺麗に上げてしつかりと崩れないように型をつけている。その相貌はいかにも仕事ができる男性、という印象である。

印象は決して悪くはない。レベッカ先輩の、あの表情さえなければ。

「さて、ホワイトくん。見送りはここまでで結構だよ。僕はちょうどブラッドリー家に用事があったのでね」

「はい。それでは自分は失礼します」

頭をその場で下げてから、俺は翻って来た道に戻るとする。

その際に、俺は一瞬だけ後ろを振り向いた。

レベッカ先輩を抱き寄せるようにして、密着した状態で進んでいく二人。側から見れば、仲睦まじい様子に見えるだろう。でもどこか、先輩は萎縮しているのか体が小さく見えた。

もしかして、彼がその原因なのだろうか。

……ここ最近、様子がおかしいレベッカ先輩の原因となっているのがエヴァン＝ベルンシュタイン氏なのか？

そう考えると同時に、ディーナ先輩の言葉が脳裏に過ぎる。

『エヴァン＝ベルンシュタインには何かあると思うの』

何かある。その言葉がずっと脳内でリフレインする。

ここから先は俺の余計なお節介だ。でも、その懸念を払拭しなければ俺は前に進むことはできない。

そして俺は自分の寮ではなく、すぐに師匠の元へと進路を変更するのだった。

第108話 急遽、師匠のもとへ

師匠なら何か知っているかもしれない。

そんな思いから、俺はすぐに師匠の家へと向かっていた。いつもはアポイントメントを取ってからいくのだが、今回ばかりはそうも言ってられなかった。

今は内部コードインサイドを使用して、疾走している最中。

馬車が動いている時間は既に終了しているため、俺は魔術を使用して大地を駆けていく。

そして時間はそれなりに経過したと思うが、あっという間に師匠の自宅へとたどり着いた。

「ふう……着いたか」

少しだけ深呼吸をして、状態を整える。割と急いで来たので、まだ体から第一質料プリママテリアが抜けきっていない。

「よし……」

コンコンコンと三回ほど扉をノックすると、カーラさんがいつものようにメイド服姿で扉を開けるが……その顔は少しだけ驚いているようだった。

「レイ様？ 本日はお越しなられるご予定でしたか？」

「いえ。ただ師匠と話したいことがあります」

「承りました。主人に伝えてきます」

カーラさんは家の中に戻っていく。

一方で俺は、この綺麗な星空を見上げていた。

今日は少しだけ曇っているが、月明かりが相変わらず綺麗な夜だった。

ただ慌てて来てしまったが、やはり迷惑だっただろうか。ふとそんなことを考える。と、そうしていると再びカーラさんが扉を開ける。

「レイ様」

「はい」

「応接室にてお待ちください」

「分かりました」

「少し準備がありますので」

「準備？」

「はい。女性はいつだって、綺麗に見られたいものですから」

口元に人差し指を持っていくと、少しだけ妖艶に微笑むカーラさん。今までは無表情で無感情な人だと思っていたが、夏の一件以来、距離が僅かに縮まった気がするのには気のせいではないのかもしれない。

俺は応接室に案内されると、そこで一人ソファーに座って待っていた。すると、十分くらいした後師匠が入って来た。後ろでは力

ーラさんが車椅子を押しながら。

師匠は前髪を軽く手で梳きながら、俺と向かい会う。

「それでは私はお茶の準備をして来ますので」

カーラさんが下がると、早速本題に入る。

「師匠。夜分遅くに失礼します」

「いや別にいいさ。でもまあ……急にレイが来るのは珍しいな。何かあったのか？」

「実は」

そして俺は話をすることにした。

レベッカ先輩の様子が、あの夏の終わりからどうにもおかしいと。さらにはディーナ先輩の証言も話しておいた。

師匠は口元に右手を持っていくと、しばらく思索する体勢に入る。

「紅茶です」

「ありがとうございます」

カーラさんが俺と師匠の分の紅茶をテーブルに置いてくれると、彼女は師匠の後ろに回ってその場で静止する。

「ブラッドリー家の婚約にエヴァン」ベルンシュタインの裏の顔、か……私も早い婚約程度にしか考えていなかったな。だがエヴァン」ベルンシュタインは会ったことがある」

「師匠の印象はどうでしたか」

「ま、いかにも貴族の魔術師って感じだな。それも悪い意味ではなく、良い意味でだ。優秀だと聞いている」

「なるほど。ではレベツカ先輩との婚約は不自然ではないと」

「まあ……ベルンシュタイン家は上流貴族だ。貴族的な地位としても、本人の魔術師的な資質からしても釣り合いは取れているだろうな。でも確かに、些か早い。そう思うのは当然だな……カーラ、何か知らないか？」

師匠が後ろにいるカーラさんにそう言うと、彼女は淡々と事実を述べる。

「今の所は私も悪い噂は聞きません」

「そうか……調べてもらうことはできるか？」

「一週間ほどあれば十分かと」

「なるほど。ではよろしく頼む」

「承りました」

ロングスカートを軽く摘んで広げると、その場で頭を下げる。諜報機関を担っている一族とは聞いているが、実際のところ師匠が雇っているくらいなのだから……かなり有能なのだろう。

俺は黙って情報が提供されるのを待つことにした。

「しかしレイ。お前がそこまで気にかけるとは……もしかして、アレなのか？ ローズ家のアメリカではなく、ブラッドリイ家のレベツカがいいのか？ しかしまあ……レベツカは良い女だよな。気立てよし、性格良し、何よりも清楚だ。美しさも十分。ぐぬぬ……なんだかムカついて来たな」

「し、師匠？ 何の話をしているのですか？」

「ん？ ああ……いや何でもない。で、レイはレベツカを助けない

のか？」

「もし困っているのだしたら、力になりたいと」

「……そうか。いや、レイももうそんな年齢になったのか。会ったときはあんなに小さかったのになあ……今はもう、誰かを助けたいと思うほどになったのか。人の成長とは早いものだな」

師匠はどこか感慨深そうな声を発しながら、紅茶に手をつける。そう言われて、俺もまた時間が経過するのは本当に早いと思った。

師匠に出会い、みんなと出会い、戦場では数多くの別れを経験した。

あの時はずっと誰かに助けてもらってばかりだった。そんな俺が今こうして、誰かの力になりたいなどと願っているのは本当に不思議なものだと思う。

「で、文化祭は何をするんだ？ レイのことだからまたやらかすんだろう？」

ニヤニヤと笑っている師匠。

もちろん俺はあるがままを伝える。

「メイド喫茶です」

「メイド喫茶あ？」

「っ！」

師匠は怪訝な表情をするが、一方のカラーさんの反応は大きなものだった。その目を大きく見開き、びくつと震える。

「メイドが喫茶店をするのか？」

「はい」

「それって何がいいんだ？」

「アメリカ曰く、メイドが嫌いな男性はいないと」

「……ほう。レイも好きなのか？」

「好きか嫌いかの二択でしたら、きっと好きなのだと思います。カーラさんのメイド服もよく似合っていて自分は好きなので」

「「えっ！？」」

「どうかしましたか？」

師匠はカーラさんの方をじっと見つめ、当の本人は顔を真っ赤にしていた。あのカーラさんが顔を赤くする日が来るなど、本当に珍しいこともあったものである。

「れ、レイ様お戯れを……」

「いえ。自分はメイド喫茶をすると言われた時は、真っ先にカーラさんのことを思い浮かべました。確かにメイド服には惹かれるものがあると自負しています」

「うっ……！」

「レイ、慌てるなっ！ それはまやかしだっ！ いや、待てよ……私もメイド服を着ればいいのか？」

「師匠がメイド服？ はははは！！ 面白い冗談ですねっ！！」

思わず想像すると面白すぎて、腹を抱えて笑ってしまう。

師匠がメイド？ ははは、ゴリラにメイドはできないだろうっ！ と心の内で思わず考えてしまうが次の瞬間には目の前に氷柱が生成されていた。

「あ？ 殺すぞ？」

「……大変申し訳ありませんでした」

素直にその場で土下座を敢行した。

命は大切だ。

どうやら調子に乗ってしまったようだ。師匠の目はマジだった。まじに殺す気がある目だった。と言うことで、俺は素直に例の如く土下座をしておいた。

「しかしメイド喫茶かあ……お前たち、面白いことを考えるなあ」

「アメリカの案ですが、自分も良いと思っています」

「アメリカか……マークしているが、まさかそのアプローチに切り替えているのか？ それとも純粋な趣味なのか？ これは見極める必要があるな……」

師匠は後半は何やらボソボソと言うので何といったのか、よく聞こえなかった。

「師匠。いま何と……？」

「いや何でもない。文化祭当日は私とカーラも行く。楽しみにしてるぞ。それと例の件はこっちでも調べておく」

「ありがとうございます」

その後、俺は晩ご飯をご馳走になり寮に戻るようになった。

一人で帰路に着くと、再びふと空を見上げてみる。

綺麗な空だ。しかしそれは、どこか不気味なような……そんな気

がした。

この王国で進んでいる悪意。俺はまだこの時は、全く気がついていなかった。

第109話 彼女との遭遇

師匠の家から寮に戻る途中。

すでに門限は過ぎているので、折檻を受ける覚悟はしている。そのため俺は特に急ぐことはなく、今までの情報を整理するためにゆっくりと歩きながら寮へと向かっていた。

西区を抜けて、現在いるのは中央区。もう少し歩けば北区へ通じる坂が見えてくる頃だ。それを登り切れば、アーノルド魔術学院にたどり着く。

時間は九時を回っており、暗闇が支配する時間帯だ。わずかに街灯は灯っているものの、やはり薄暗い雰囲気はどこか不気味さを感じる。

そんな中、一人の少女が前を進んでいるのが視界に入る。

セミロングの綺麗な銀色の髪を微かに靡かせながら、どこか跳ねるようにして上機嫌に歩みを進めている。

見覚えがある……というか、あの人にしか思えない。

しかしアーノルド魔術学院の制服を着ているし、そんなことはないだろう。

他人の空似。

ただ俺が勝手にそう思っているだけ。きっとそうに違いはない思っている、目の前の女子生徒が俺の足音に気がついたのか、チラッと後ろを見てくる。

視線が交差する。

そしてそれは、まさかの予想していた人だった。

「え！ レイじゃないか！ どうしてここに！？ もしかしてボクのこと追いかけてっ！？ これって……運命？」

「え……は……？」

それは間違いなく、オリヴィア王女その人だった。

ニコニコと笑いながら俺の元に近寄ってくると、いつものように思い切り抱きついてくる。顔を俺の胸に埋め^{うず}て来ると、バツとその顔を上げる。

「ど、どうしてこんな時間にこのような場所に？」

「だって明日は休日でしょ！」

「はぁ……そうですが？」

「だから手紙を書くんじゃないで、ボクが遊びに行けばいいかなって！」

「……」

まじか……まじなのか。

というよりも仮にもこの人は王女なのだ。こんな無用心に外に出ていい人ではない。護衛の人はいないのか、と周りを軽く見渡すと

確かに何人かの護衛の人がいた。

「お一人できたのですか？」

「そうだよっ！ ふっふっふっ。何とかあの護衛たちを撒^まいてきたのさ！ ボクもやるもんでしょ？」

「……」

いや、完全に撒けてはいないが。というよりも、思い切りその後に着いて来ているが。

そう言ってもよかったが、視線を軽く合わせると頭を下げてくる護衛の一人の女性。

どうやら今回は王女の好きにさせてあげている……ということだろうか。

俺はとりあえず何となくその背景を読み取ると、今後の予定を考える。

「ちなみに、オリヴィア王女のご予定は？」

「レイの部屋に泊まるうかなって」

「……自分は相部屋で、もう一人いますが」

「なら今日はボクに譲ってもらってことでっ！」

ふん、と鼻から息を出して胸を張るオリヴィア王女。エヴィに説明すべきか？ いやしかし……とそこで俺はあることを思い出した。

そういえば、アメリアは寮で一人部屋だったはず。それに部屋の広さもそれなりの規模のものだったはず。

ここは彼女に頼むべきか……。

「アメリカの部屋に泊まるべきでは？ 一応、その方が安全かと」

「え。何でよ。ボクはレイと同じ部屋がいいんだけどっ！」

「しかし……」

「ねえ……お願いだよお……ボクだって、無茶を言っているのは分かっているんだよ？ でもレイがずっと手紙無視するし……夏以降は返してくれるけど、やっぱり会えないのは寂しいよお……」

「う……」

俺の体に寄りかかって、上目使いで見上げてくるオリヴィア王女。そんな風に頼まれると、妹のステラを思い出して何でも言うことを聞いてしまいたくなる。

くそ……俺は年下の頼み事には弱いのだ。まさかそれを知っているの行動なのか？ 読めない。ステラと違って、ある種の賢さを備えているこの人は本当によく分からない。

まあとりあえずは、部屋に向かうべきか……。

「とりあえず、行きましようか」

「うんっ！」

本当は真正面から戻って、遅刻したことを報告しようと思ったのだがそういうわけにもいかなかった。

俺は窓から寮の自室に戻ることにした。と言っても、俺たちの部屋は三階にある。普通ならば、そこから戻ることなど不可能だ。

「レイ、どうするの？」

「こうしましょう」

軽く小さな石を窓に当て続けると、しばらくしてエヴィが窓を開けて顔を覗かせる。

俺はジェスチャーで下がるように促すと意を読み取ってくれた様なので、その場にいるオリヴィア王女を“失礼”と声を掛けてから横抱きに抱え上げると……一氣に内部コードを走らせて、跳躍した。

「うわっ……！」

「っと。よし、上手くいきましたね」

窓に向かって一氣に跳躍すると、俺たちは無事に室内に侵入することに成功。それと同時に、俺は後ろから何か投擲されるのを感じ取る。振り向くことなく、それを指の間に挟むようにして受け取る。

「……？ これは」

それは折り置まれた一枚の紙だった。広げてみると、そこに書いてあったのはオリヴィア王女についてだった。

『明日のお昼頃にはお迎えにあがりますので、オリヴィア王女のことをよろしくお願い致します。謝礼は後日お送りしますので』

そう書いてあった。

護衛の人も色々とあるようだ。

そんな風に考えていると、エヴィが驚いた様子で恐る恐る尋ねてくる。

「レイ。中々帰って来ねえと思っていたが、どうしたんだ？　しかも窓からって……女の子を抱えているしよお」

「実は、彼女と途中で出会ってな……」

「どうも、オリヴィアです！」

「……オリヴィア第二王女だ」

「はあ！？　第二王女！？」

「静かに……これはバレてはまずい」

「まあ。そりゃあそうだが……」

と、エヴィと二人で話しているとオリヴィア王女は勝手に室内を見て回っていた。

「おお……ここがレイの暮らしているところかあ」

感慨深そうにそう言いながら、部屋を見ている彼女はどこか嬉しそうだった。

「なるほど。レイ、もしかして厄介ごとだな。しかし……いや、皆まで言うな。俺はこのことは誰にも言わない。そして今日はアルバートの部屋に泊まってくる。もちろん、アメリカたちにも言いはない。レイも色々あるもんな。うんうん」

と早口で何かを語り始めるエヴィ。一体何を言っているのだろうか……。

「エヴィ」

「じゃ、俺はこれで！　レイ。うまくやれよっ！」

何か勘違いをした彼はそのまま颯爽と姿を消してしまった。

「あれ？ レイの友達は？」

「気を利かせたのか、別の友人の部屋に泊まると」

「おお！ それはある意味好都合というか……ふふふ。二人きりだね？」

「まあそうです」

「何だよもう。もう少し恥じらいとかないの？ このボクの魅力にドキドキするとかさあ」

「いえ。特には」

「はあ……まあいいけどさ……」

オリヴィア王女はため息を吐くと、近くにあるソファへ倒れ込むようにしてダイブする。

「それで、本当の目的は何でしょうか？」

俺は真剣な声色でそう尋ねる。

まさか本当にただ遊びに来たいという動機で来たわけではあるまい。きつと何か重要な案件があると思っていたが……どうやらそれは俺の考え過ぎだったようだ。

「え。別に。本当にレイの顔が見たいだけ。それに学生してるレイに興味があつてさあ」。えへへ……」

頬を掻きながら、照れているのか少しだけその顔には朱色が差していた。

なるほど……本当に今日来たのは偶然だったのか。

まあいいだろう。明日の昼まで相手をすればいい。それに、以前から手紙ですつと会いたいと言われていたのだ。無碍にするわけにもいくまい。

「そう言えば、オリヴィア王女はレベツカ先輩の婚約の件は知っていますか？」　「むう……他の女の話？」

「少し気になることがあります。ご容赦ください。婚約相手であるエヴァン＝ベルンシュタインのことはご存知ですか？」

「レベツカもエヴァンも知ってるよ。まあ……お似合いなんじゃない？　でもそうだなあ……ちょっと早いよね。最近は学生の時に婚約なんてしないのにねえ。そこはボクも気になってたかも」

「やはりそうですか……」

「もしかして、レベツカの婚約が気に入らないとか？　嫉妬なの？　ジエラシーなの？」

「いえ。自分は普通に祝福していますが……」

「何かあるの？」

「実は」

という事で俺は、その内情に詳しそうなオリヴィア王女に軽く聞いてみることにした。もちろん、レベツカ先輩が夏休みの最後の日に助けを求めていたことなどは言及しなかった。

ただ、エヴァン＝ベルンシュタインという人間に関して興味があるということ話を話した。

「あ、そう言えば……」

「何か？」

「エヴァンだけど、ちょっとした噂があつて」

「噂？」

「うん。何でも魔眼に興味があるというか、大学でも専攻はそれ系

「統だとか」

「なるほど……」

その後、俺はさらにオリヴィア王女と話を続ける。

彼女は「どうしてそんなこと聞くの？」と言っていたが、適当にはぐらかしておいた。

こうして俺は少しずつ真実に近づいていくことになる。

第110話 修羅場

「ねえ、レイ」

「はい」

「どうして一緒に寝ないの？」

「年頃の男女が一つのベッドで寝るのは問題でしょう」

「……」

「どうかしましたか？」

「レイからそんな常識な発言が出るなんて、ボクは驚いたよっ！」

「……自分も最低限の常識は兼ね備えております」

「へえ」。成長したんだね」

嘘である。

俺は実際のところ、数日前までは年頃の男女でも一つのベッドで寝ることに対して何か思ったことはない。ステラとは何度も寝ているし、夏休みにはクラリスとも寝た。

隣合わせで寝るくらいならば別にいいだろう。別にそこには男女の差などないのだから。

今までは俺の認識はそうだったのだが、数時間前に師匠の家に行った際にきつく二人に忠告されたのだ。

「レイ。あの王女とはどうなんだ？」

「オリヴィア王女ですか？」

「そうだ」

「手紙を早く返してほしいと」

「ほお……」

「これは自分の不手際のせいですね」

「レイ」

「はい。何でしょうか」

「オリヴィア王女は狡猾だ」

「それは、そうですね。聡明な方だと思います」

「つまり、既成事実^{既成事実}に気を付ける」

「既成事実ですか？」

「そうだ」

師匠だけではない。後ろにいるカーラさんもまた、うんうんと頷いている。

また師匠の視線はかなり鋭いものになっていた。これほどの緊張感を漂わせ、真剣な顔つきをする師匠は久しぶりだ。

「いいか。狡猾な女の武器は、既成事実だ」

「はあ……」

「つまり絶対にその体を許してはならない」

「なるほど」

「肉体関係にでもなってみろ。レイ、お前はめでたく第二王女と結婚することになるだろう」

「いやいやそんな。まさか……」

流石にこの王国の王女である彼女が、七大魔術師の一人である【^{オーディナリィ}氷剣の魔術師】とは謂え、一般人の俺にそんなことはしてこないだろう。

しかし、依然として師匠の顔つきは真剣そのものだった。

「……え、本当なのですか？」

「間違い無いだろうな。なあ、カーラ」

「はい。私もそのように考えます。レイ様。油断してはなりません。女とは時に、冷酷な一面を見せる時もあるのです。努努^{ゆめゆめ}、お忘れなきよう……」

「……なるほど。勉強になります」

「レイ。その件に付随してだが、今後は不用意に女と一緒に寝るのはやめておけ。もちろん、流石にもうやっていないと思うが」

「え」

「「え？」」

声が重なる。

師匠はさも当然かのように、俺がすでに誰かと一緒に寝ていることとはないだろうと言ったが……実際のところは違う。

俺はそのことについて正直に話すことにした。

「実家に帰った際には、ステラと一緒にお風呂に入って一緒にベッドで寝ました。それにクラリスとも、同じテントで寝ましたが……何か問題がありましたか？」

「「……」」

その後、俺は師匠とカーラさんに延々と説教をされた。いくら気を許している仲とは謂えども、そのようなことはあってはならないと。そのように言われた。

まあ、師匠に説教されるのは慣れているが、なぜかカーラさんも

今回は饒舌だった。というか普通に怒られた。「レイ様は女心を分かっていてようで、分かっておりません。一番、性質たちが悪いです」と言われた。

地味にシヨックだった俺は二人の忠告をしっかりと胸に留めて、今こうしてオリヴィア王女と向かい合っているところだ。

きっと二人の忠告がなければ、まあ一緒に寝るのもいいか……な
どと思っただろう。

しかし人間とは成長するものである。

俺もまた、一般常識をしっかりと身に付けつつあるのだ。

「ではオリヴィア王女。良い夢を」

「はいはい。おやすみ」

明かりを消す。

俺は結局、ソファで寝ることにして、オリヴィア王女は俺のベッドで寝ることになった。彼女は一緒に寝ると駄々をこねたが、俺のベッドで寝てもいいと言うと途端に落ち着いた。「えへへ……レイの匂いだあ」と言いながらベッドにダイブ。

自分の匂いをそんな嗅がれるのはちょっと複雑な気分だが、背に腹は変えられない。

という事で、師匠とカーラさんの忠告をしっかりと守った俺は、どこか満足感にひた浸りながら眠りに落ちるのだった。

コンコンコン、とドアが三回ほどノックされた音で目が覚める。
現在の時刻を確認すれば朝の五時半。

もしかしてエヴィが帰ってきたのだろうか。

そう思って俺は軽く体を伸ばしながら、扉へ向かう。

「はい。どちら様でしょうか」

そして扉を開けた先にいたのは、アメリアとエリサだった。

二人ともに目が真っ赤で、おそらく徹夜したのだろう。今日は休日ということもあり、別にいいのだがどうして徹夜明けに俺のところに来たのか……。

と、俺はアメリアの持っている服に目がいく。

「レイ……ついにできたのよっ！」

「レイくんっ！　できたよっ！！」

誇らしげな声で二人は詰め寄ってきた。

そして、恐る恐るそれを受け取り、広げみると……それは。

「おお！　ついに完成したのか！！」

「ええ。試行錯誤を重ねて、エリサと入念な調整をして完成したのよっ！ ふふふ……もちろん、スカートの方もバッチリよっ！」
「何と……この短期間で仕上げてくるとは……感嘆すべき事だ。二人とも、本当に凄いと思う」

「えへへ……」

「ふふん！ そんなもんよっ！」

朝にしてはテンションの高い二人。

しかしそれも仕方がないだろう。これほどのものが出来上がったのだ。自ずと気持ちも昂るというものだろう。

フリルなどの装飾が増え、さらにはスカートの丈は普通のメイド服よりもだいぶ短い。それに白と黒を基調としているが、そのコントラストがはつきりとするように至る所に小さな装飾が足されていた。

これを作るのに、どれだけの苦勞をしたのだろうか。

そう考えると、俺は胸がどこか熱くなるような感覚に陥る。

なるほど。これが、みんなで文化祭を行うということか……。

そして三人でこの偉業を喜んでいる最中、俺はすっかり忘れていた。

昨夜、オリヴィア王女が俺の部屋に泊まっていることを。

「レイ？ どうしたの……朝からそんなに騒いでさ。ボク、目が覚めちゃったよお……はあ……ねむ、ねむ……」

「……」
「……」
「あ……」

アメリアとエリサは無言。

俺は思わず、「あ……」という声が漏らしてしまった。

完全に失敗してしまった。オリヴィア王女がいることは秘密にすべきことだ。それは他でもない、俺がよく知っている。王族の間がお忍びで魔術学院の寮に、それも男子寮にいるのは何かと外聞が悪いだろう。

しかし不幸中の幸い。

アメリアとエリサならば、きっと理解してくれるだろう。そう思っ
て俺は弁解をしようと試みる。

「アメリア。エリサ。これは」
「これは？」

俺が言葉を言い切る前に遮るようにして、アメリアはただ冷静に
そう言った。いや、別にいつものアメリアと変わらないはずだ。

表情にはなぜかニコニコとした笑顔が浮かんでいる。だというの
に、その冷たい目は俺をじっと射抜いてくる。その目は、完全に笑
ってはいなかった。

それにエリサもまた、まるで感情が抜けて落ちたかのようにじっ

と俺を見つめてくる。

震える。

まさか、これが恐怖とでもいうのか？

今まで数々の修羅場を潜り抜けてきた。それこそ、生死の境を彷徨う戦場で俺は戦い抜いてきた。だというのに、この圧力はなんだ？
プレッシャー

俺の本能が警鐘を鳴らしている。

ここで言葉を間違えれば、死が待っている。

「へえ……レイくんってば、私たちが頑張っている間にそっか……女の子を連れ込んでいたんだね……しかもすごく可愛い人だねえ」
「いや待ってほしいエリサ。これは」

「ふふふ……そうです！ レイに連れ込まれちゃいましたっ！」

「ちょ！？ オリヴィア王女！ お戯れは良してください！」

「えゝ？ 昨日はあんなにも激しい夜だったのに？」

「いえ。普通に別々に寝たのに、激しいも何もないはずです……が？」

俺の腕にぴつたりと寄り添うオリヴィア王女。それを見たアメリカは、震えるような声で会話を続ける。

「ふふ。ふふふ……レイのことは信用してるし、信頼してる。うん、レイがそんなに器用なことは出来ないって分かってるわ。つまりは、オリヴィア王女が押しかけてきた、そうでしょ？」

「おお！ アメリカ、その通り……だが？ え？」

アメリアはその冷徹な視線の対象を急に俺からオリヴィア王女へと移した。

それはまるで敵対している二人。エリサもまた、なぜかオリヴィア王女を見つめている。

彼女達にはまるで俺の存在がここにないと言わんばかりに。

「オリヴィア王女。本日は少しお話があります」

「ふふん？ いいけど？ まあアメリアが何を言ってきたても、ボクは気にしないけどね」

「あ……え、ちょっと」

そして三人は室内に入っていくと、俺は締め出されるような形で内側から鍵をかけられてしまった。

あ、あれ……ここは俺たちの部屋なんだが？

その後、その話し合いは数時間に渡って行われた。もちろん俺はそこで何が話し合われたのか、全く知る由もなかった。

第111話 レイのいない教室

文化祭準備期間、真つ最中。

現在はちょうどレイが出て行った後の教室で、全員が作業をしていた。

放課後ということもあり、すでに帰宅しても良い時間ではあるが誰一人として帰ろうとはしない。

このクラスの良いところは、三大貴族と上流貴族である生徒が女子と男子ともに一人ずついたことである。

アメリカが女子生徒をまとめ、アルバートが男子生徒をまとめる。

そうすることで全員が纏まることができ、こうしてしっかりと機能している。

しかし、普通のクラスでは地位の高い貴族があるだけではこうはいかない。

やはりその中心にいるのは、レイ＝ホワイトであることは全員が認めるところだ。

入学当初は、一般人ということではほぼ全員が敬遠していた。普通に接していたのは、アメリカ、エリサ、エヴィくらいのものだった。いじめ紛いのことをしていても、咎める生徒はその三人以外にはい

オーディナリ

ない。

身の程を知るべきだと。

このアーノルド魔術学院はたとえ一般人で魔術を使える稀有な存在でも、血統には敵うわけがないと。そう思っていたのだ。

だがクラス全員がレイのことを違う意味で気にかけて始めたのは、アルバートがレイとの一騎打ちで敗北した後だ。

「おい。アルバート……」

「今は一人にしておいてくれ……」

「……」

今までアルバートと共にいた仲のいい男子生徒は、かける言葉も見つからなかった。それはこの目ではつきりと見てしまったからだ。

レイがアルバートを圧倒するところを。

あれは一般人などオーディナリーと言っている領域の話ではない。自分たちが決してたどり着くことはない、高次元の魔術師による戦闘。確かにアルバートは破格の才能を有し、実力もあった。

だからこそ、他の男子生徒もアルバートに媚を売るような形で一緒にいたのだ。血統が上の貴族には、逆らうべきでは無いと幼い頃から知っていたから。血統こそが、魔術師の能力を決めるのだとこの年齢になれば誰でも理解できた。

しかし、現実は違った。

レイはアルバートを圧倒。それに、レイが本気を出してすらいなのは彼らでも理解できた。

一体、あの一般人は何者なのだろうか、と思い始めていた。

そんなアルバートの敗北は学院内に広まり、それを嘘だという者や信じられないという者はいたが……クラスメイトだけは感じ取っていた。

この一般人は普通ではない、と。
オーディナリー

そしてクラスメイトたちはレイを観察してみることにしたのだ。図らずとも、全員がほぼ同時に……。

「アルバート」
「アリウム君」
「なんだ、どうかしたのか？」

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会の校内予選が終わり、本戦への準備をしている期間。そこでアルバートの友人たちがやってきた。縁を切ったわけではない。だがアルバートは以前よりも一人でいる時間が多くなっ
たし、何よりも変わった。

ただ愚直に努力するようになり、その顔つきも精悍せいかんなものになった。

噂に晒され、嫌な思いもしているだろうに……。

と、思っていた彼らだったが実際は違った。

アルバートはそれは事実ということまで全てを受け入れていた。そして未熟な自分をもっと成長するには、レイのあの高みに到達するにはもっと努力が必要だと理解したのだ。

確かにアルバートは驕っていた。しかし、決してずっと愚かなままではない。

きつとレイから受けた衝撃が小さいものならば、ここまでアルバートは成長しなかっただろう。

片鱗であっても、魔術師の頂点を感じ取ったアルバートは悟る。

あそこにたどり着くには、決して才能に驕って停滞している様では至ることすら出来ない領域なのだと。

「その、魔術^{マギクス・シュバリエ}剣士競技大会出場……おめでとう」

「うん！ 本当にすごいよ！」

「そうだな。やっぱりアルバートくんは一年の中でもかなり強いよな！ あのアメリカさんにも、もう一度やれば勝てるんじゃないかな？」

「……」

褒められていること自体には嬉しさはある。

だがアルバートはそんな称賛を一蹴する。

「俺は、まだまだ未熟だ。それにきつとレイが出ていれば、彼が優勝候補筆頭になっているのは間違いない」

「そんな……」

「でもあいつは一般人で……」

「そうだよ。アリウム君が負けたのは、偶然だよ！」

「本当にそう思うのか？」

「う……」

アルバートの眼光が鋭いものになり、言い募っていた友人はアルバートの鋭い眼光を受けて怯む。

分かっていた。レイ・ホワイトの勝利は決して偶然ではないと。あの魔術師としての技量、いや戦闘力は学生の範疇に収まっていな
いと。

只者ではないのは理解している。だが、感情がその理解を拒む。

たかが一般人と侮っている心が、まだ残っているからだ。

「たかが、一般人。まだそう思っているのなら、改めたほうがいい」

「う……」

「いやそれは……」

「でも……」

「こんなことは俺が言えたものではないが、言わせてもらおう」

アルバートは立ち上がると、彼らと視線を合わせる。

その双眸が見据えているのは、彼らであってそうではない。彼の目にはずっと、レイのあの姿が映っている。

【氷剣の魔術師】としての姿が。

「一般人だからと言って、侮る理由にはならない。彼には力がある。それは俺たちが誰よりも知っているはずだ。まずは認めよう。レイ

は強い。きっと、この学院の誰よりも。それを知った上で、彼を見
てみるといい」

それだけ言うと、アルバートは教室から去っていく。その後ろ姿
は以前よりも大きく見えた。もちろんトレーニングにより物理的に
大きくなったのもあるだろう。しかし、それを踏まえてもアルバー
トは精神的にも大きく見える。

確実に成長している彼を見て、友人たちはどうするべきか迷う。

と、その中の一人が教室に残っていたエヴィに話しかける。

「なあ、エヴィ」

「ん？ どうした？」

相変わらずの筋肉量。その体躯は同級生のものと理解していても、
慄いてしまうほどだ。エヴィは別に貴族でもなければ、オーディナリー一般人でも
無い。そのため、クラスでは中立的な立ち位置にいる。

そんな彼だからこそ、話しかけやすいと言うのは間違いなかった。

「レイ」ホワイトと同室だったよな？ それに仲もいいようだが」

「なんだ。レイのことが聞きたいのか？」

「ああ。さっき、アルバートくんにそう言われて……」

「そうか。あいつも変わったな」

エヴィは二カつと歯を見せて笑うと、レイについて語り始める。

「レイはすげえやつだ」

「具体的に言うത്？」

「筋肉がヤベエ……あれは流石の俺でもビビったぜ……」

「は？」

「え？」

「でも、ホワイトって線が細いよな？」

三人ともにポカンとしてしまう。レイの筋肉がやばいなんて、エヴィから出るとは思っても見なかったからだ。エヴィが褒めるなど、理解はできないが……それでも彼らは最後まで聞いてみることにした。

「あいつはな、脱いだらすげえ。着痩せするタイプっていうのは存在するが、レイは別格だな。あいつの体はまるで鋼のように仕上がっている……俺みたいにデカさを目的とした筋肉じゃあねえ……あれは、戦うための筋肉だ。一度、レイの筋肉を見ればわかるぜ。あの彫刻のような筋肉は、生半可な努力じゃあ手にできねえ。お前たちも、レイの実力はもう知っているんだろう？」

「まあ……」

「見ていたしな」

「うん……」

レイが氷剣とまでは知る機会が無かったが、アルバートが敗北したところまでは目撃しているのだ。そんな彼らは、エヴィからの話を聞いてさらにレイに対する認識を改め始めていた。

「それにレイは環境調査部の次期エースだ。ここだけの話、あいつはゴールドハンターなんだぜ？」

「なっ！？」

「学生でゴールドハンター！？」

「ま、まじかよ……あり得ないだろう……」

驚くのも無理はない。

ハンターの中でもゴールドハンター以上は別格の存在として認知されている。それは魔術師の間でも有名な話だ。確か、現在の環境調査部の部長が学生の段階でゴールドハンターであることは知る者は知っている。

だがまさか、レイがあのゴールドハンターに至っているとは夢にも思わなかった。そしてさらに、増していく疑問。

あの一般人は、^{オーディナリー}一体何者なんだ……と。

「お前たちに限らず、レイを^{オーディナリー}一般人で括ってみるやつは多い。でもな、一度レイ〃ホワイトという人間だけを見てみるよ。そうすればきっと、得るものは多いと思うぜ？ 何も好きになれとか、嫌いになるな、とか言ってるんじゃない。貴族にも色々あると思うしな。でも、レイは真面目で愚直で……何よりも信頼のできる男だ。お前たちも、あの筋肉も見ればいつか分かるさ」

エヴィはニヤリと笑うと、そのまま去っていく。

取り残された三人は何を思っのか。いや、その三人だけではなかった。クラスにも残っていた生徒はほぼ全員がその会話に耳を傾けていた。

あのレイ〃ホワイトとは何者なのだろう。

エヴィの言った通り^{オーディナリー}一般人ではなく、レイ〃ホワイトそのものを見てみる……その言葉に従ってもいいのではないか。

少しずつだが、クラスメイトたちの認識はレイの知らないところ
で変わりつつあったのだ。

第112話 それはまるで、波紋のように

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会でのレイの奇行を上げると数えきれないが、やはりクラスメイトたちに取っての一番の驚きは……アメリカに対する訓練だろう。

「うわああああん！ もう嫌だあああああ！」

「アメリカ訓練兵！ 何をしている。さっさと行くぞッ！」

「嫌だああああ！ もう筋肉痛は嫌なのよおおおお！」

そうしてアメリカはレイにずるずると引きずられるようにして、教室の外へと連行されていく。初め、クラスメイトたちはこの行動にかなり驚いたものだった。

というのも、三大貴族筆頭のローズ家長女にあのような振る舞いをすればどんな制裁が待っているのか……そう考えてしまうからだ。

貴族にはいくつか派閥があるが、その中でも三大貴族は別格である。派閥のさらに上に君臨する絶対的な存在。

クラスの中にはアメリカを幼い頃から知っている者もいるが、全員が彼女に対してどこか一歩引いているような……そんな接し方をしてきた。

決して本音で語り合うことはなく、アメリカに気を使うような接し方を幼い頃からしてきたのは、やはり親に三大貴族に対してはどんな無礼も許されないといい聞かされていたからだ。

しかしここ数日、目の前で繰り広げられるのは想像を絶する光景。無知とはいかに愚かなものなのか、クラスにいる殆どがそう思っていた。

「なあ……あれって大丈夫なのか？」

「嫌がっているけど、どうなんだろ」

「でも、ローズさんがホワイトに頼んだって噂だぜ？」

「まじ？ それにしても、あれはちょっとすごいよな……」

「うん……ローズさん、本当に嫌がっているというか。二人で特訓してるって話だけど……実際はどうなんだろ……」

□
•
•
•
•
•
└─┘

やはりクラスメイトたちは気になってしまう。

その時思い出していたのは、アルバートとエヴィの言葉だった。

オーディナリー

レイを一般人という表面的な部分ではなく、レイ＝ホワイトそのものを見てみる。

そしてクラスメイトたちはこっそりとレイたちの特訓を見に行くことにしたのだった。

「ヘイ！ アメリア！ ワンモア！ ワンモア！ いけるいける！」

「やれる！ いけっ！！ ハリー、ハリー、ハリー！！」

[illegible]

「やれるって!! アメリアならいける!! へい、カモン、カモ

ン、カモン！！」

「んにゃあああああああああ！」

演習場で見たそれは、やはり到底受け入れることのできる光景ではなかった。

『…………』

啞然とする。

よく見ると筋トレでもしているのか、レイがアメリカの足を押さえて腹筋をしている最中だった。アメリカは苦悶の表情を浮かべながらも、なんとか食らいついていた。

その一方でレイもまた、真剣な表情でアメリカと向っていた。

そんな二人の真剣な様子を見て、馬鹿にできる者など一人もいなかった。

ただ二人は、来るべき魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエに対して真剣に準備をしているのだと。そう理解したからだ。

そうして二人の特訓が終了すると、ついに魔術剣士競技大会の本戦がやってくることになった。

「なあ、あれって……」

「ああ。すごいな」

「流石、アリウム君だよ。でも、オルグレン家の長女は流石に強か

ったみたいだね」

決着がついた。

アルバートはアリアーヌに真正面から立ち向かって、そして負けた。地面に寝転がり、空を見上げているアルバートへ彼らはじっと見入っていた。

幼い頃から付き合いがあるからこそ、三人は分かっってしまう。

レイに敗北してからのアルバートはまるで人が変わったかのように、努力に努力を重ねるようになった。

今までは魔術師の世界は才能が全てであり、血統こそが至高であると語っていたあのアルバートが、ここまで泥臭く戦うなど予想はしていなかった。

観客たちは試合の途中で、アリアーヌの勝利を確信していた。そのため罵倒を浴びせる者、野次を飛ばして嘲る者、拳げ句の果てには途中で席を立つ者も中にはいた。

しかしこの三人だけではなく、クラスメイトでこの試合を見ている者は誰一人として席を離れることはなかった。

ただアルバートのその偉大な姿を心に焼きつける。そして同時に思った。きっとアルバートはレイ「ホワイトと向き合って変わったのだと。

全員の心の中ではすでに、レイの存在はただの一般人オーディナリーではなくなっていた。

そしてついにやってきた魔術剣士競技大会新人戦決勝。アメリカとアリアー又は文字通り、死闘を繰り広げていた。

クラスメイトたちはアメリカの努力を知っている。レイとアメリカのあの日々を間近で目撃していたのだから。

「頑張れ!!」

「ローズさん頑張ってっ!」

「負けないでっ!」

「くそっ! オルグレン家の長女、強すぎだろっ!」

「頑張れえええええっ!!」

クラスメイトたちは自然と集まるようになり、観客席ではアメリカを応援するためにほぼ全員が集まっていた。この場にはいないのは、アメリカ応援団のメンバーと行方をくらましているアルバートだけである。

その他の全員はこの新人戦の決勝と一緒に応援したいという気持ちで集まり、アメリカを応援していた。

それは今までの三大貴族のローズ家長女に媚びるようなものではない。

ただ純粹にあの努力が報われて欲しいと。

みんなは、そう願っていたのだ。

「あ……」

「も、もう……」

「くそ。ここまでのなのかつ!？」

「ちくしょう……やっぱり届かないのか……っ!」

悲痛な声を上げる。

すでにアメリアは地面に這いつくばっている。一方のアリアーヌは傷ついてはいるものの、しっかりとその歩みを進めている。

すでに勝敗は決した。

全員が、ここにいる観客全員が黙り込み、最後の結末を見届けようと。せめて最後までその勇姿を見ていようと。

そう思った瞬間、聞き慣れた声がこの静寂を切り裂いた。

「アメリアアアアアアアアアアアアアアッ!! 立てえええええええええええええええええええええええッ!!」

それは他でも無い。

レイ＝ホワイトの叫びだった。

今までは最前列で大きな声で応援していた彼がいなかったことをクラスメイトたちは不思議に思っていた。決勝戦だというのに姿を見せない彼はどうしたのだろうか。

頭の片隅でそう思っていた矢先、レイがやってきた。

その瞬間、アメリアの背中から瞬く間に大量の紅蓮の蝶が顕現し……そして彼女は勝利を収めた。

勝った。勝ったのだ。

あの最強と謳われていたアリアヌ＝オルグレンに勝利したのだ。

「勝ったのか？」

「勝ったよね？」

「間違いない。ローズさんの勝利だっ！！」

『うわあああああああああああああああ！！！！』

アメリアの勝利の際、クラスメイトたちもこの観客席の片隅でその喜びを爆発させていた。それと同時に、彼、彼女たちはレイの存在が間違いなくアメリアの勝利を導いたのだと。そう思った。

何か明確な根拠があるわけではない。

でもあの二人は特訓を重ね、最後にはレイの声によってアメリアは覚醒したのだ。

もうそれ以上の根拠などいらないだろう。

そして、クラスメイトたちはレイ＝ホワイトという人間を認めることになる。どこか不器用で、愚直ではあるが、真っ直ぐな芯を持った人間であると。

入学当初の噂など気にもせず、ただ自分の道を進んでいく彼に憧れた。

しょうけい
憧憬。

オーディナリー
一般人であっても、レイがレイであることに変わりはない。だからきっとこれからは、彼に対してもっと真摯に接したいと。確かに彼は貴族では無いし、その血統だけ見れば到底釣り合うものではない。

しかし、世界はそれだけでは無いのかもしれない。

レイ「ホワイトという規格外の存在が周りを変えていく。

それはまるで水面に広がる波紋のように、広く、広く、どこまでも遠くに伸びていく。

そうしてついにやってきた文化祭。

「メイド喫茶を提案する」

いつものようにただ真面目な顔で、淡々と話すレイを見て全員は思った。

ああ。きっとまた面白い日々がやってくるのだと。

レイのいない場所で、彼は確かに認められていた。彼は別にいつも通り、自分の進むべき道を自分で切り開いてきたただけだ。

それは、師匠であるリディアの教えのおかげだ。

入学前に言われた言葉。

きつと貴族たちによく思われないと。辛いことがあるのかもしれないと。

リディアはそう言った。

しかしレイは軽く微笑むと、優しい声音でリディアに告げた。

「師匠。きつと俺はまた迷うかもしれませんが。でも……学院でもまた、師匠のような優しい人たちに出会うことができればいいとそう願っています」

図らずとも、それは現実になった。

しかし、それはレイ自身の行動によって手に入れたものだ。

彼はそんなことも知らずに、今後はクラスメイトとの絆を深めていくのだった。

きつとそれは一生の宝物になるに違いない。

第113話 乙女たちの恋話

文化祭準備も本格化し、放課後の学院はそれぞれの教室がかなり賑わっている。そんな中、レイたちのクラスは男女に分かれて作業をしている。

レイたち男子は看板を作りいき、のこぎりで板を切ったり、ペンキで塗装する作業をするので外に。

女子たちは主に内装やメイド服の製作を担当するので教室内に残っている。

そんな中、女子だけが集まれば始まるのはもちろんアレである。

そう。恋話である。

「ねえねえ。ローズさんって、やっぱりホワイトとできてるの？」

「へ!？」

それぞれが内装を装飾するために小さな飾りやリボンなどを製作している最中、一人の女子生徒がアメリカに尋ねた。その瞬間、女子たちは急にその近くに集まってきてアメリカに詰問し始める。

エリサは近寄らずにいたが、彼女はエルフ特有の長い耳を上下に激しく動かしながらその会話を懸命に聞こうとしていた。

「い、いやその……別にレイとはなんでもないっていうか……ただ

の友達だし……」

「でも夏休みにホワイトが遊びに行っただって噂を聞いたよ？」
「う……」

しまった。そうか、あの時の件か……。

と、アメリカはそう思うが、時すでに遅し。

おそらくそれは男子側から漏れた噂だろう。男子を説得するとき、レイに夏休みに会った際の服装について言及してもいいと言ったがそれがここで裏目に出てしまう。

彼女もまたそこまで頭が回らず、こうして注目的になってしまっている。

「……レイとは普通に仲がよかったけど？」

「本当にいい？」

「え、ええ……」

あくまで否定するアメリカ。

しかし、アメリカは最近自分の気持ちどこおかしいことに気がついた。彼女は現在、自分がレイが好きだという気持ちにはつきりと気がついていないわけではない。

ただ、気になる男性としてちょっと意識しているだけなのである。

夏休みの時の服装も、気になる相手によく見られたいと思っているものだった。もちろん、アメリカの母は既に娘の気持ちに気がついているのだが。

そんなアメリカは時折、嫉妬しているような言動を見せるが自分でもどうしてそんなことをするのか……やっぱり自分はレイのことが と考えることが多くなってきた矢先に、この質問。

顔は赤くなり、言葉では誤魔化しているものの、側から見ればそれは素直に答えているようなものだった。

「ふーん。じゃあ私がホワイトに声かけようかな？」

「え？」

「あ、じゃあ私もっ！」

「私も！ だつてあいつちよつとかっこいいもんね。愛人というか、学生時代に少し付き合うならありかな。私の家は貴族でもないし」
「あ。ずるゝい。なら私も」

女子たちが急にそんなことを言うてくるので、アメリカは訳がわからずおろおろと周りを見てしまうが、みんな声はさらに高まるばかり。

ちなみにエリサもまた、しっかりとこの会話を聞き取っていた。

「れ、レイは！ そんな一筋縄じゃないわよっ！ なんて言っても天然なんだからっ！ 確かに優しくて、カッコ良くて、辛いきに助けてくれて、すごくいい人だけど……気持ちには鋭いと思いきや、天然で鈍感なんだからっ！」

「……………」

言外にレイを相手にすると苦労すると言いたかったのだが、アメリカは悟る。周りにいる女子がニヤニヤと笑っていることに。

は、ハメられたっ！

そう。これは全員が即興で合わせた嘘である。彼女の反応を引き出すためにそうしたのだが、思いの外上手くハマってしまった。

「あ……うう……」

「で、ホワイトがどうかしたの。ローズさん……」

「うう……いやだってその……私もまだこの気持ちがよく分からないし」

『詳しく！』

ということでアメリカの恋愛相談が始まってしまふのだった。

三十分後。

「うわ……それはやばいやつ」

「ホワイトかつこいい……あの天然イケメンがそんなことしてくれたら惚れちゃうわあ」

「うんうん。これは罪な男だね。それも三大貴族長女のローズさんを狙うなんて。いやはや、狙っての行動ではないだろうけど、やっぱりねえ……」

「愛人としてならアリなんじゃない？」

「かもね。まあ一般人とオーディナリー三大貴族なんて、どこかの物語みただけど……アリかもね」

アメリカは話してしまった。流石に魔術剣士競技大会で起こったことを全て話したわけではない。その概要をさらっと語るだけだった。しかしそれでも、レイの行動は女性にとっては刺さるものであり、何よりも人として美しい在り方だった。

人を助けるために、そこまでする彼を女子たちはかなり高く評価し始めていた。

それに、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会新人戦決勝での覚醒の件。あれもまた、学内では噂になっていた。

曰く、恋の力がアメリカを覚醒させたのではないかと。

「ねえねえ。新人戦決勝でホワイトの声を聞いた瞬間、どう思ったの？」

「う……それは……」

「やっぱりアレがあったから、勝てたとか？」

「その……あの時は正直、アリアー又に負けると思ってたけど。レイの声が聞こえてくると、急に世界が色付いたというか……今までは何の音も色もなかったのに、レイの声が全てを変えてくれてそれで……新しい魔術も使えるようになって……その」

『きゃー!!』

湧く。

女子たちは甲高い声を上げると、アメリカが言及した内容に関してかなり興奮する。

「それってマジなやつじゃん！」

「それも魔術剣士競技大会でっ！」
マギクス・シュバリエ

「うわ……それはもう、間違いないよ！」

「伝説だよ……もはやそれは伝説っ！」

「甘い。甘いよー！ 口から砂糖が出るよーっ！」

その反応はからかっているというよりも、純粹にその甘さに驚い

ているというか何というか。

そんな中、アメリカがボソリと呟いた。

「でもレイ。最近は何よりも私に構ってくれないというか」
『…………』

ピシリ、とまるで空気が凍りついた雰囲気になる。

「レイってその、誰にでも優しいから。それに男子の友達もいるけど、妙に周りに女の人が多いというか。やっぱりレイが魅力的な人だから集まってくるのかな？ 最近レベルカ先輩とちよつといい感じみたいだし。あ……そういえば、夏休みに確か……別の子とも遊んでいたような」

アメリカの何の感情もない淡々とした声を聞いた瞬間、エリサは苦笑いを浮かべながら颯爽と教室を去ろうとするのだった。

「あ……ちよつとお手洗いに……」

「待ちなさい？」

「ひ、ひiiiiiiiiい！」

エリサ、確保。

アメリカは内部インサイドコードを走らせると、逃げようとするエリサの肩を掴んだ。その後は、周りの女子たちもニヤニヤと笑いながらエリサを囲んでいく。

「ふ、ふええええ……」

ということで、エリサとアメリアが対面する形となった。その二人を囲むようにして、他の女子たちも改めて会話を繰り広げる。

「で、エリサ。あなたは夏休みに確か、レイとデートをしたわよね？」

「い、いや……アレは二人で遊び行ったというか何というか。レイくんとは別に何も無いよっ！」

「男女が二人で遊びに行ったらデートよねえ……」

アメリアがそういうと、他の女子も声を上げる。

「間違いないよね」

「うわ。ホワイト、エリサちゃんにまで手を出してるのか」

「でも可愛いもんね。エリサちゃん」

「うんうん。絶対にいい奥さんになるよ」

「それにおっぱいも大きいし。男子の人気も高いよね」

と、その言葉を聞くとアメリアの表情はさらに冷たいものになっていく。

「ねえ。エリサ」

「う、うん……」

「私はあなたのことをとっても大切な友人と思っているわ」

「うん。あ、ありがとう……」

「でもここは、ちゃんと話し合うべきじゃないかしら？」

エリサは自身の体から冷や汗が垂れてくるのを感じた。アメリアの表情と声音は本気のものだった。

ここままではまずいと考えたエリサは、思考をフル回転させてあ

る言葉を導き出した。

「あ！　そういえばクラリスちゃんも、レイちゃんと遊んだって聞いたよ。それに確か……二人でお泊まりをしたとか」

『お泊まり！？』

その後、驚愕した女子たちがクラリスのクラスに乗り込むとそのまゝ愛らしいツインテールを有している彼女を捕獲。

[illegible]

ごめんね。クラリスちゃん……ごめんねえ……。

と内心で謝るエリサだったが、最近ではクラリスを犠牲にすることを厭わなくなっているのは間違いなかった。

こうして本日の女子たちの作業は、**ほぼ進まない**のであった。

果たして、彼女たちの恋愛はどうなっていくのだろうか。

第114話 迫る文化祭

文化祭開始まで、残りあとは二週間程度。

実際のところ、休日なども挟むので二週間も残ってはいない。

そしてここ数日の放課後は、それぞれの教室が騒がしい。それはもちろん、出し物の準備をしているからだ。そんな中でも俺たちはメイド喫茶を開くことになっている。

その噂は既に学内中に広がっているだけでなく、外部でも話題だとか。

ちなみに、アーノルド魔術学院の文化祭が行われた一週間後に、メルクロス魔術学院の文化祭、さらにまた一週間後にディオム魔術学院の文化祭が行われる。

日程が被らないため、他の学院の生徒が文化祭にやって来ることは当たり前らしい。それは視察なども兼ねているらしいが、毎年これはローテーションされており、今年はずいの学院が一番初めに文化祭を開くことになっている。

「よし……こんなもんか？」

「おお。レイ、いいんじゃないか？」

ということで俺たち男性陣は外で作業を行っていた。女性陣はクラス内でメイド服の作成と内装の準備をしている。一方の男子たちは、主に力仕事担当ということで外で看板作りに励んでいる。

もちろん、ここで手を抜くことはしない。

まずは俺とエヴィがノコギリで板を適当な形に切った後に、他の男子たちがヤスリでその表面と角を削っていく。看板は一枚だけでなく、クラス内に展示するものに、外の宣伝用に作るものと複数用意する必要がある。

「では俺は文字を刻もう」

スツと立ち上がって、仕上がった看板に文字を刻もうとする。目立つように、一度彫刻刀で文字の外枠を刻み、その上からペンキを重ねる。そうすることで、看板を仕上げていく。

「おい来るぞ」

「ああ……」

「ホワイトの文字はすげえからな」

「これは見ものだぜ……」

と、男子たちが見つめて来る中、俺は彫刻刀を手にとると……まずは俯瞰して看板の全体図を見る。

イメージする。自分が今から刻む文字の外観を。

そうして俺はイメージングを完了すると、躊躇なく彫刻刀で文字を刻んでいく。

「うおっ！」

「躊躇ねえな……！」

「でも仕上がりは」

「完璧なものになる」

「ククク……これはうちのクラスの勝利は間違いないな……」

俺はただ一心不乱に彫刻刀を振るう。この手の作業は、実は得意なのだ。まあ、いつものごとく師匠に鍛えられたというか、そうせざるを得なかったという悲しい歴史があるのだが……。

「よし。こんなものだろう」

一枚の看板を仕上げると、全員が「おお！」と声を上げる。

「すげえ！」

「これは、もはや芸術だろう」

「マジか……なんか絵も描いてるしな」

「しかもホワイトのやつ、ペンキで塗るのも職人だよな」

「マジでこいつのスペックどうなってんの？ オーディナリ一般人とか関係なく、ヤバすぎだろ……」

そして俺がひと作業終えて一息ついていると、アルバートが近寄ってくる。

「レイ。さすがの仕上がりだな」

「ふ……しかし、デザインはアルバートのものを興しただけさ」

「それはそうだが……この再現度は俺の予想を上回っているな」

「それこそ、最高のデザインがあったからこそだ」

「そうか。それは俺も嬉しい」

二人でそう讚え合っていると、エヴィもまた板を切る作業が終わったのかこちらにやって来る。

「おお！ レイ、流石だなっ！」

「エヴィ。まあいつも通りだ。で、こいつを頼めるか？」

「お。ペンキ塗りか？」

「ああ。俺もやるが、こちらをやってほしい」

「へへ。任せとけ！」

俺とエヴィは二人で並ぶようにして、看板を目の前にする。

風は……ない。今ならばしっかりとペンキを塗ることができるだろう。

「おい。来るぞ」

「次はペンキ作業か」

「しかしこれはホワイトだけじゃねえ……」

「ああ。あの筋肉ダルマのエヴィが、まさかのあんな繊細さを持ち合わせているとはな……」

「あれには俺もビビったぜ……」

そう。実はエヴィは細かい作業が得意なのか、ペンキ塗りではその真価を遺憾なく発揮している。というよりも、マジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会に際して環境調査部での活動の時からその片鱗はあった。

あの時からエヴィの繊細さには目を見張るものがあつたが、ペンキ塗りは実家でもやったことがあるということでは任せてみると……それは本当に最高のものが仕上がった。液だれや指定の範囲から色が漏れ出すことはない。

全て計算し尽くされた上での、塗装作業。

それはある種の芸術なのは、間違いなかった。

そして筆入れ。俺は大きめの看板を担当しているので、割と大雑把に初めは塗っていくがエヴィは違う。彼は俺のものとは違い、クラスの前に置く小さな看板だ。

それこそ、エヴィの巨体を前にしてしまえばその看板は圧倒的に小さく見える。

だが彼もまた、真剣な様子で塗装作業を行なっていく。

よし。俺も集中するか……。

「こんなものか」

「うし。これでバッチリだな」

俺とエヴィが看板を仕上げると、男子たちが集まってきて感嘆の声を上げる。

「うお……」

「マジか……」

「おい。この花の造形はどうなってるんだ？」

「それにこのメイド服の可愛い女の子はホワイトが描いたのか？」

「いやそうだろう。見ていたしな」

「マジかよ……」

「これはうちのクラスの天下だろ……」

驚きというよりも、全員はこの完成度に少し引いていた。看板にはアメリカとエリサをイメージしたメイドを二人ほど描いておいた。

もちろん二人には許可を取ってある（エリサに関してはアメリカが強引に言い聞かせた）。

アメリカのデザインしたメイド服、さらにはレベツカ先輩の漫画のキャラクター造形を元に描いてみた。それに加えて、日頃から見ている二人をイメージして俺は筆を取ってみたが……なるほど悪くはない。

そして全員で改めて距離を取ってその看板をしてみるが、やはり上出来だった。

「さて。最後の仕上げはみんなに任せよう」
『おう！』

ということに残りの男子生徒たちが、魔術でペンキを乾かしている。風を起こしながら、その中にわずかに熱を混ぜていく。それこそ、この作業もまた一寸の狂いも許されない。そして全員が集中して担当している部分を仕上げると、看板作業が終了した。

「よし。終了したな。では、俺は生徒会室の手伝いに行つて来る」

全員にそう告げると、俺はそのまま急いで生徒会室へと向かうのだった。

「レベツカ先輩。お待たせしました」

「あら？ レイさん。今日はこちらに来る日でしたか？」

「いえ。しかし、少し時間ができたのでお手伝いしようかと」

「もう……いつもそんなことを言って、手伝いに来るんですから」

「慣れてください。先輩が心配なんです」

「……助かりますからいいですけど。くれぐれも、クラスの方を優先してくださいね？」

「はい。分かっております」

いつものように所定に位置につくと、俺は早速書類に目を通す。と言っても現在はそれほど量は多くない。あとは当日のスケジュール確認と食料のチェックなどだ。

「そつえば、レイさんは今日は何を？」

「看板を作っていました」

「看板ですか？」

「はい。ああ、確か今ならちょうどベランダから見えるかもしれないですね」

「？ そうなのですか？」

二人でベランダに出て、そこから下の方を見つめる。そこでは多くの生徒が作業をしている最中だったが、中でも一際目立つ看板に数多くの生徒が引き寄せられていた。

「え……あれをレイさんが作ったのですか？」

「はい。と言っても、クラス全員で協力しました」

「あのアメリカさんとエリサさんのような女の子は、誰が描いたのですか？」

「自分です」

「ええ……ちょっと待ってください。あれを下書きなしで？」

「はい。元々イメージは頭の中にあっただので。それに、アルバートにも事前にデザインは相談していたので」

「……レイさんは人のことを言えないと思います」

「え？」

「私の同人誌を褒めてくれましたが、レイさんも凄い芸術の才能を持っているようですね」

「そうですね？」

「ええ。そうですね……本当は、二人でいつか作業をしたかったですね」

「先輩……」

横顔しか見えなかったが、それはほんの少しだけ寂しそうな声だった。

「よし、では今日も残りのお仕事頑張っちゃいましょう！」

「はいっ！」

いつものように元気な先輩。

でもだからこそ、俺はどこか不安を抱いていた。

そんな中、アーノルド魔術学院の文化祭が……もうすぐ始まるっ
としていた。

第115話 アリアーヌが征く

「うっ……うっん……」

アリアーヌの朝は早い。いつもは五時に目を覚まし、そのまま彼女はずぐに支度に入る。

「よし。これでいいですね」

軽装に着替えた後、その美しい白金の髪をポニーテールに纏めるブラチナと階段を降りていく。

貴族のパーティーが昨夜にあったので、今日は平日だが実家に戻っていたアリアーヌ。そして、このままディオム魔術学院の寮へと戻る予定だ。

しかし、毎朝彼女にはやるべきことがあった。

「お父様。おはようございます」

「お！ アリアーヌか！ おはようっ！ ふんっ……ふんっ……ふんっ……！」

オルグレン家の王都別邸内一階に設けられているある広めの一室。そこに入ると、アリアーヌの父であるfolkハルト＝オルグレンがスクワットを行っていた。もちろん両手にはダンベルを抱えて、負荷を増やしている。

汗^{あせ}を
すす^{すす}る。

すでに五十代だというのに、その巨^{きょく}軀は依然として維持されている。もちろんそれは生まれつきのものでもあるが、フォルクの場合はその上からさらに圧倒的な筋肉の鎧に覆われていた。

高位の魔術師になると、老化が遅くなる現象が確認されている。もちろん全ての魔術師ではないが、フォルクはその典型。そのため、その筋肉もまた五十代のものとは思えないほどの筋肉量がある。

「ではお父様。わたくしも失礼して……」

「うむ。今日も励むといいつ！ ガハハっ！！」

オルグレン家は筋肉に侵食されている。

そんな揶揄を言った貴族が中にはいるそう。しかしそれは的を射ている。

アリアーヌもまた、物心ついた時には体を動かすことが好きだった。それこそ、アメリカと一緒によくかけっこをしたのは彼女もよく覚えていてる。

幼い頃から筋トレもしてみたかったのだが、まだ体ができていないから今はダメだ。と、フォルクに言われアリアーヌはずっと我慢して来た。

そして現在。

すでに体も完全に成熟しきった彼女は毎日筋トレに励んでいる。

質実健剛。

その家訓を元に、アリアーヌもまた汗を流す。

「ふっ……ふっ……ふっ……！」

一人で淡々と、父親の隣で筋トレを行うアリアーヌ。昨日は背中を鍛えたので、今日は脚の日である。フォルクが用意しているダンベルを両手に掴むと、アリアーヌはスクワットを開始する。

両脚に乳酸が溜まり、筋肉が悲鳴を上げる。それでもアリアーヌはやめない。この研鑽の日々は確かに辛いことも多い。楽なことなどありはしない。

でも今の彼女には目標があった。

「今度こそ……ふっ……負けませんわ……ふっ……ふんっ！」

今度こそ負けない。

それはマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会新人戦決勝のことを指している。アメリカが優勝したのは嬉しい。彼女はずっと迷い、惑い、自分を探し続け……そしてやっと自分の居場所を見つけたのだから。

それでもやはり、負けは負け。全力で戦い。砕け散った事実はいえはしない。その敗北は心に永遠に刻まれる。

試合後の夜は、アリアーヌは涙で枕を濡らした。でも翌日には切り替えていた。

今度はわたくしが追いかける番になっただけですわ。だからいつものように、研鑽の日々を重ねる。それでいいんですわ。

アリアーヌはタフだった。それは肉体的な意味でもそうだが、精神的にも強かった。

そして今日も今日とて日課の筋トレに励む。急激に変わることでありはしない。日頃の小さな積み重ねこそが、自分を遠くまで連れて行ってくれると分かっているから。

健全な精神は健全な筋肉に宿る。

父の教えに従いながら、彼女はそのまま筋トレを続行するのだった。

「ふう……」

「アリアーヌ。今日もよく頑張ったな」

「お父様」

「ふう……我が娘ながら、よくやるものよ」

「わたくしもたどり着きたい場所がありますから」

アリアーヌとフォルクは仲がいい。母は筋トレに熱中する二人によく苦言を呈しているが、それは仕方がない……と割り切っている。

普通は思春期の娘は父親を毛嫌いするものだが、アリアーヌはそんなことはなかった。ただその圧倒的な筋肉を蓄えている父に憧れた。

周りの女の子がお洒落に興味を持つ前に、彼女は筋肉に興味を持った。もちろん三大貴族として最低限の身嗜みを整えるだけの技能はあるし、勉強もしている。それでもやはり、体を動かすことの方が彼女は好きだった。

「して、アリアーヌよ」

「なんででしょうか？」

「レイ＝ホワイト。知っているか？」

「レイですか？ もちろんですわ。お友達ですけども、それが何か？」

「何！？ 友人なのかっ！」

「ええ」

父がこの手の話題を出すのは珍しい、とアリアーヌは思った。いつもは学校のことなど、特に友人関係は今まで話したことがないからだ。

「ごほん。そうだな……いつかうちに招待しなさい」

「うちの屋敷に、ということですか？」

「ああ」

「どうして？」

「ああ……えーっとそれは……うーん……」

逞しい胸の前に逞しい両腕を組んで何やら考え始めるフォルク。

質実剛健。愚直なまでにまっすぐな彼は、嘘が苦手だった。そのためレイを一目見たいと思っていたが、どのような理由で連れて来るかまでは考えていなかったのだ。

するとアリアーヌが「あ」と声をあげた。

「まさかお父様……」

「な、なんだ？」

明らかに挙動不審なフォルク。しかしそれを全く意に介していないのか、アリアー又は顔を綻ばせる。

「レイの筋肉のことをご存知でしたのっ！」

「へ？」

「アメリカに聞いたんですの。レイは脱いだらすごいって……あの細い体の下には圧倒的な筋肉があると……でもよく考えれば、あのアーノルド魔術学院の環境調査部に所属しているんですもの。生半可な筋肉では、活動は不可能。でもレイはそこにいる。そのことで連れて来て欲しいと。そういうことですね？」

得意げな顔でアリアー又はそう言った。

まるで、「お父様の考えていることはわかっているんですのよ？」と言わんばかりに。

もちろんそれに乗らないフォルクではない。

「ああ！ 流石、我が娘！ そ、そうだ。かのレイ＝ホワイトの筋肉に興味があつてなあ……で、実際のところすごいのか？」

その話を聞いて、フォルクは気になっていた。まさか、あの会議で出た史上最年少の七大魔術師であるレイの筋肉がすごいなどとは聞いていなかった。

当代の【氷剣の魔術師】が面白そうとは思っていたが、フォルク

はさらにレイに対して興味が唆られていた。

「ええ。アメリカ曰く、物理的にあり得ないとか……」

「何？ 物理的にあり得ない筋肉量という意味か？ むむむ……見てみたい……」

「分かりましたわ。お父様。レイには声をかけておきます。彼はとっても紳士なので、来てくれると思いますわ」

「おお！ よろしく頼むぞ、我が娘よっ！」

「ええ。任せてくださいまし」

ということで、なぜか二人の話は最終的に噛み合うことになりレイを招待することが決まった。

「さて、どうしましょうか……」

ディオム魔術学院に向かう道中、アリアー又はいつレイを誘うべきか……と考えていた。その時、ふと最近アメリカと話したことを思い出す。

「私たちはメイド喫茶をやるのよ！」

「め、メイド喫茶？」

「そう！ ふふふ……みんな超可愛くなるから、アリアーもぜひ来てねっ！」

「は……はい」

アメリアの目は爛々とし、両手を握ってブンブンと上下に思い切り振って来る。変わったのは間違いないが、本当に明るくなったものだ。アリアーヌは思いながら、どこか戸惑っていてもいた。

「でも……アリアーヌのメイド服姿も見てみたかったなあ……」

ぞくり。

背筋が凍るとはこのことか。

アリアーヌは彼女の視線に思わずたじろいでしまう。それはまるで、獲物を捕らえようとする肉食動物そのもの。滅多なことで恐怖心を抱かないアリアーヌだが、この時ばかりはその視線に恐怖した。

「そうそう。実はレイの女装も計画してるから、ぜひ来てね！ 人にはまだ言っていないけど、レイのメイド服も作ってあるのよ……ふふふ……あの美貌を逃すわけにはいかないわ。うふふ……」

と、アメリアの顔が貴族の令嬢とは思えないものになったのは記憶に新しい出来事だ。

「そうだ。わたくしが行けばいいんですわ」

思えば、レイとの出会いも彼が調査ということまでディオム魔術学院へやってきたのが始まりだった。ならば、自分もまた真正面から行けばいいと。

アリアーヌはそう思った。

それにかのメイド喫茶がどのように進行しているのかも興味がある。自分たちの文化祭の方にも、もしかしたら参考になるかもしれない。

ということで彼女はその日の放課後、一人でアーノルド魔術学院に向かうのだった。

第116話 アリアーヌの冒険

本日の授業が終了となった。

放課後。

アリアーヌは意気揚々とディオム魔術学院の門から出ていき、たった一人でアーノルド魔術学院に向かっていた。

思えば、レイが女装してやってきたのはつい最近のことのように思える。今回のアリアーヌはもちろん、真正面から入る気ではない。もともと学外の生徒が入ってはいけないという理由もない。

部活動で交流があったり、または交際をしているものが密かに逢瀬を重ねたりなど、別の学院の生徒がやって来るのは不思議ではない。

と言っても、文化祭の準備期間にやって来るのは些か不思議なタインングではあるが。

「ふんふんふん」

アリアーヌは弾むように歩みを進める。

レイを誘いに行くついでに、アメリカたちがどんな出し物をするか興味があったのだ。それに他の学院に行くのはこれが初めて言うことで、彼女は非常に楽しみにしていた。

「さて。着きましたわね」

そしてしばらくして、アリアー又はアーノルド魔術学院の正門の前にたどり着いた。受付で学内に入る手続きをしてから、胸を張ってそのまま敷地内に入っていく。

まるでここにずっと通っているかのように、彼女の足取りに迷いはなかった。

するとアリアー又は、自分の目に映ったものに驚愕する。

「え……？ あれは？」

よく見ると、校舎の前で作業をしている男子生徒たちがたくさんいた。それは別に珍しい光景ではない。

では何に驚愕したのか。

それは立てかけてある大きな看板だ。乾かしているのだろうか、そこに描かれているのは「ようこそ、メイド喫茶へ！」とデカデカと書かれた看板。さらには、メイド服を着た女性の姿も描かれていた。

しかしそれは間違いなく、アメリカそのものだった。

一体、アメリカたちは文化祭で何をやらかそうと言うのか。

そう思っていると、アリアー又はちょうど視界にレイの姿を捉えた。すぐに彼のもとに近づくと、早速話しかける。

「レイ！ これはなんですよ！」

「ん？ アリアーヌか。どうしてここに？」

「……偵察ですわっ！」

他にも生徒がいるので、ここはそう言っておくアリアーヌ。するとレイはフツと軽く微笑む。

「なるほど。以前の俺と同じか。しかし、流石だなアリアーヌ。真正面から堂々と来るとはな」

「ふふ。オルグレン家の長女はいつでも真っ向勝負ですよ！」

と、話が少し逸れたところでアリアーヌは改めて追及する。

「それで、この看板はなんですよ！？」

「メイド喫茶の看板だ。昨日一枚仕上げて、今日ももう少し増やす予定だ」

「アメリカの言った通りやるんですね……それにしても、些か規模がすごいような気がしますけど」

「アメリカ主導のもと、俺たちは動いている。これももとはアメリカの案だしな」

「そうですよ。アメリカが……」

そう言われて、アリアーヌは胸が暖かくなるのを感じた。

ずっと一人で孤独に過ごしていたアメリカがこの文化祭を心から楽しんでいるのは理解できた。でもそれはきっと、彼が一緒にいるからだろうと彼女は思った。

「レイ。あなたは不思議な人ですわね」

「？ 何のことだ？」

「いえ。こちらの話です。それで、アメリカは？」

「教室にいると思うぞ」

「分かりましたわ」

ここでは人目に付くので、とりあえずはレイと別れることにした
アリアーヌ。そして彼女は去り際に、レイの耳元で囁いた。

「後でお話がありますの。二人つきりで」

「……なるほど。では、後で裏門の前に来てくれ」

「分かりましたわ」

レイも察しがいいのか、すぐに場所を指定してくれた。そしてア
リアーヌはアメリカの元に向かうのだった。

「うわぁ……すごいすわねえ……」

校舎内を進んでいくアリアーヌ。基本的な構造はこの魔術学院
も同じなため、迷うことはない。そんな中、彼女はクラスで準備し
ている装飾などを見つめる。

それぞれのクラスが協力して、準備をしている姿はこの学院も
同じだ。でもやはり、それぞれの学院ごとに特色があるのか、ア
ノルド魔術学院はどこか派手な印象があった。

たどり着いた教室。

そこでアリアーヌは扉をノックをした後、思い切り教室の扉を開
けた。

「アメリカっ！ わたくしが来ましたわよっ！」

バンツ、と高らかにその大きな胸を張りながらそう宣言するアリアヌ。その声はどこか嬉しそうなものだった。

「え？ アリアーヌ？」

ポカンとした表情でそこにいるアメリカ。だがその服装は制服ではなかった。

紛れもなく、メイド服を着ていた。それに、それは普通のもではなかった。スカートはやけに短い上に、フリルなどの装飾も多い。明らかにそれは、主人の元に寄り添うメイドではなく、大胆に前に出ていくメイドの姿であった。

「……アメリカ。それは？」

「メイド服よっ！ 超可愛くないっ!？」

「ええ……まあ、可愛らしいですけど」

「でしょっ！ えへへ」

パタパタと走ってきて、アリアーヌの前でクルクルと回るアメリカ。その際にスカートがふわりと浮いて、下着が少しだけ見えてしまっ。

「ちょっと！ 見えてますわよっ！」

「ありや。流石に短いと、危ないね」

「はあ……全く。また凄いものを作ったものですね」

「ふふん！ クラスのみんなで頑張ったんだからっ！」

アメリカがメイド服姿でそう言うと、どこかおかしな気もするが

アリアー又は優しく微笑みかける。

「そうですの。楽しそうですわね、アメリカ」
「うんっ！」

あの魔術剣士競技大会を経て、アメリカは大きく変わった。その姿がこうしてしっかりと見る事ができただけで、アリアー又は満足だった。

と言つても、レイを誘う約束は忘れていないが。

と、そんな風に満足感に浸っているとアメリカの口からとんでも無いことが提案される。

「そうだ！ アリアーも試しに着ていきなよっ！ 試着、試着っ！」
「……え？」

瞬間、アリアーの周りにはクラスの女子たちが現れる。

「うわゝ。可愛い」
「三大貴族のオルグレンさんよねっ！ やっぱり胸大つきいゝ」
「それに見て、この腰っ！」
「くびれすごいゝっ！」
「脚もすごいっ！ ああ……三大貴族ってどうしてこんなにも綺麗なのゝ？」

アリアー又の体をペタペタと触りながら、感想を述べる女子たち。普通ならば、三大貴族の長女にこんなことはしない。

しかし、アメリカが暴走した一件を経て三大貴族に対するイメージが変わったのか、それともアメリカと同様に可愛いものに対して目覚めたのかは定かでは無いが、とりあえずアリアーヌは完全に逃げることはできなかった。

そしてふと視界に入るのは、机に突っ伏している一人の女子生徒。メイド服を着たまま、まるで意気消沈しているかのように沈んでいる様子。

それはエリサなのだが、実は先ほどアメリカたちに色々と弄り回されてダウンしていた。因果応報とでも言うべきか。最近はクラリスを犠牲にし過ぎたので、エリサはそれ相応の報いを受けることになった。

と言っても、クラリス本人の復讐は文化祭で行われる予定なのでエリサの苦難はまだまだ続くのだが……。

「さあ、アリアーヌ。おめかし、しゅましょ？」

「い、いやああああああああああああっ!!」

アリアーヌのメイド服姿は、それはもう魅力的過ぎたと後にアメリアは語る。

「アリアーヌ。来たか」

「ええ……」

「どうした？ 元気がなさそうだが」

「なんでも無いんですのよ……」

「そうか？」

「……ええ。それにしても、アメリア。変わりましたわね」

「ああなるほど。もしかして、メイド服でも着せられたか？」

「はい……」

「文化祭期間中のアメリアはどこか暴走気味だからな。事前に言っておけばよかったな」

「いえ。いいんですのよ。アメリアも楽しそうでしたし」

「そうか。でも気になっていたんだろ？ アメリアのこと。わざわざ会いにきてくれて感謝する。きつと彼女も喜んでいただろう」

「まあそうですわね。ちょっと暴走してましたけど……」

レイと話しているとなんだかとても落ち着く気がした。と言ってもそれは、先ほどのアメリアが本当に凄かったというか、形容し難い状態だったせいなのだが。

「それで、話があるんだろう？」

「はい。時期はいつでもいいですが、うちに来ませんか？ お父様が会いたがっているそうです」

「……オルグレン家の当主が？」

「はい」

「何が目的なんだ？」

「レイの筋肉が気になるらしいですわ」

「筋肉？」

「ええ」

「……なるほど」

ある意味二人とも天然なために、ここで腹の読み合いなどは発生しなかった。レイも三大貴族に対して以前よりも気にかけているが、それよりも彼はオルグレン家そのものよりも、アリアーヌ^{II}オルグレンという人物を信頼していた。

また、アリアーヌも父の言葉を鵜呑みにしているし、レイのことは信頼している。まだ付き合いは短いが、どこまでも愚直で真っ直ぐなレイの言動に好感を抱いているのは間違いない。

というよりも実際のところ。

レイ^{II}ホワイトという人間と、オルグレン家の人間は愚直で真っ直ぐという性質において気が合うのは間違いなかった。

シンパシー
共感とでも言うべきだろうか。

「分かった。今は文化祭などもあって忙しいが、近い内にお邪魔させてもらおう。その時はまた、アリアーヌに連絡しよう」

「ありがとうございます。お話を受けてくれて」

「友人の頼みを無碍に断りはしないさ」

「ふふっ…… 本当にあなたは不思議な人ですわね」

そして二人は別れて、アリアーヌは学生寮へと戻っていった。

とても満足そうに、ニコニコと笑いながらアリアーヌは少しだけスキップを織り混ぜながら帰路へと着く。

レイとの出会いをきっかけに彼女の学生生活もまた、きっと華や

かなものになるのは間違いなかった。

第117話 美しき姉妹の軌跡

マリア「ブラッドリイは姉が大好きだった。幼い頃からずっと、姉の後ろを追いかけていた。姉であるレベッカがいなくなるとすぐに泣いてしまう彼女は、一時たりともレベッカから離れようとはしなかった。

「えへへ。お姉ちゃん大好きっ！」

「もうマリアは甘えるのが上手ね」

「うんっ！」

そんなマリアは他の貴族から疎まれていた。血統だけならば素晴らしいものを有している。ブラッドリイ家は三大貴族なのだから。

しかし彼女はどのようなわけなのか、生まれた時からその肌も髪色も全てが純白だった。さらに、その双眸は灼けるように真っ赤なもの。

魔術師の間で稀に起こる、^{アルビノ}先天性白皮症。

ブラッドリイ家の次女であるマリアは、アルビノとして生を受けた。

もちろんそんな彼女に待っているのは、イジメとまではいかなかったが周りからは敬遠されることが多かった。

そんな時、隣にはずっとレベッカがいてくれた。

「お姉ちゃん。私って変なのかな？」

すでに物心ついた頃には、マリアは周りとの差を感じ始めていた。今まではずっと、姉のそばにいればよかった。

でも時折聞こえてくる声がある。

『あの子って、真っ白で気持ち悪いよね』

それは幾度となく聞こえてきた言葉。

中には綺麗と言ってくる人もいたが、それでもマリアを遠目に観察するような人間がほとんどだった。まるで奇妙な動物を見ているかのような視線。

三大貴族ということもあり、周囲の人間はマリアから距離を取った。

そんな中でもレベッカだけはずっとそば居続けてくれた。

「そんなことないよ。マリアはとーっても可愛いんだからっ！」

「本当？」

「ええ。この真っ白な肌も、真っ白な髪も、それに真っ赤な目もとっても綺麗。周りの人は色々と言うかもしれないけど、お姉ちゃんはずっとマリアのことを可愛いって思ってるよ？」

「お姉ちゃん……」

ギュッと抱きしめてくれるレベッカ。

まだ幼い二人。

それでも支え合って生きている。すでに三大貴族としての圧力は感じ取っていた。パーティーに出席するたびに、期待していると声をかけられる。

魔術師として大成してほしいと、そう言われるたびに、二人は笑ってそれに答える。頑張って立派な魔術師になりますと、高らかに宣言する。いや、そうせざるを得なかった。

そして、幼いながらも理解できた。周りの大人は、自分たちをブラッドリイ家の血統として見ているのだと。

「マリア。お姉ちゃんはずっと側にいるからね」

「うん……っ！　ありがとう、お姉ちゃんっ！」

レベッカ「ブラッドリイとマリア」ブラッドリイ。

二人の姉妹の絆は永遠のものだと、二人はそう信じていた。しかし、現実はその上手くはいかなかった。

「マリア。とっても美味しいお菓子があるの。一緒に食べない？」

「……いい。いい。」

「そっか……」

あれから二人は成長した。それは肉体的にも、精神的にも、さらには魔術師としても成長していった。それと同時に、残酷な現実に向面する。

それは、明確になる差。深い隔たりとでも言うべきか。

レベツカは全てにおいてマリアよりも上だった。勉強も運動も礼儀作法も、そして何よりも……魔術師としての力量も。

パーティーに行っても周りの貴族はレベツカの周りに集まる。

容姿、性格、魔術師としての実力。

その全てを兼ね備えた完璧な存在である姉に、マリアは劣等感を抱いていた。

「う……痛ったあ……」

鏡の前で、自分の耳に穴を開けていくマリア。初めてした時は、何か達成感のようなものがあつた。

別にピアスをしてオシャレをしたい訳でもなかった。ただ、貴族とはかけ離れた自分になりかっただけ。

今まではレベツカと同様に、その髪を伸ばしていたがそれを機に奇抜なものにした。片目が隠れるような斜めになった前髪に、後ろは少しだけ刈り上げている。

おおよその容姿は貴族のものではない。

もちろん家族には色々と言われた。父であるブルーノは特に何も言わなかったが、母はマリアに対して怒りをぶつけた。

仮にも貴族の娘がする格好ではないと。

そんな時、情動を押さえきれずにマリアはこう言った。

「じゃあさ。私をこんな風に生んだお母さんに責任はないの？　こんな真つ白で、ろくに日の下も歩けなくて……この両目も真つ赤でさ。お姉ちゃんはいいいね。だって綺麗だもん。奇抜じゃなくて、すつごく清楚。お母さんも誇らしいでしょ？　お姉ちゃんのこと。だから私のことはほつとしてよ。もう私は嫌なのっ！　私はどうせ、出来損ないなんだからっ！」

「待つて。マリアっ……！」

ピアスはまだ上手くつけることはできず、耳からは血が流れていた。消毒もろくにせず、化膿しているところもあった。マリアはレベツカとは違い、不器用だったから。

そんなマリアは逃げるようにして、自室へと走っていき……そして枕を涙で濡らした。

その時、コンコンコンとノックの音が鳴った。

返事はしない。ただ静かに涙を流しながら、マリアは慟哭たうきゅうに浸る。

どうして私はこんな姿なの？　どうして私には才能がないの？　どうして私はお姉ちゃんみたいになれないの？　どうして、どうして？

そんな自問自答を繰り返すも、答えなどない。

今のマリアには、その答えにたどり着くことは叶わない。

そう。一人では。

「マリア」

その優しい声音は、姉であるレベッカのものだった。

母が来ていれば、マリアは拒絶していただろう。無理やり部屋から締め出していただろう。でもレベッカに対しては、そんなことはできなかった。

確かに劣等感はある。あんな姉がいなければ……と思ってたこともある。

それでもやはり、マリアはレベッカのことが大好きだったから、拒絶などできなかった。

「お姉ちゃん……」

涙で濡れた顔を上げて、マリアはレベッカと向き合う。

レベッカは彼女の側に近付いてくると、ベッドに腰を下ろす。そしてマリアと視線を合わせないようにして、レベッカは話し始めた。

「私のせいでごめんなさい……と言うときとマリアは傷つくと思う。でも、私はずっと昔から……マリアの側にいたいと思うの」「……」

側にいると、苦しい。苦しいけど、レベッカは自慢の姉であることは間違いなかった。

誰よりも誇らしいお姉ちゃん。

レベッカがずっと影で努力してきたことを、マリアは知っている。マリアもまた頑張ってきたのは間違いない。それでもレベッカのものと比較すると、やはり劣ってしまう。

誰よりも努力家で、それを決して表には出さない。

そんな謙虚なレベッカだから、マリアは心から彼女を嫌いになることはできなかった。

外見だけではない。その在り方までもが、美しいのだ。

そんな姉を嫌いになるなど、あり得なかった。

「お姉ちゃん……」

涙を流し、レベッカの横顔を見つめるマリア。

ああ。やっぱりお姉ちゃんは綺麗だなあ……。

そう思わずにはいられない。整った容姿は生まれ持ったものだ。でも髪の手入れも、肌の手入れも、体型を維持するための努力もしているのは知っている。

そんなレベッカは人として眩しかった。

そしてレベッカがゆっくりとマリアの方を向くと、視線が交わる。

「あ……」

それはマリアの声だった。何故そう声に出したのか。それは、レベッカもまた涙を流していたからだ。

ツーツと頬を伝う涙。

レベッカもまた、悲しんでいた。自分のせいで、マリアを追いつめてしまった。本当はずっと仲の良い姉妹でいたいのに、周りの環境がそうさせてくれない。

貴族という環境。それにマリアの容姿。さらには、二人の間に存在する才能の差。努力の差。あらゆる状況が、二人の関係を引き裂いていく。

感情だけではどうにもならないと知って、レベッカは涙を静かに流す。

「もう。マリアってば、こんなにピアスを開けて……」

「ごめん。ごめんね……お姉ちゃん」

「いいのよ。マリアもオシャレをしたかったのでしょう？ 私はそのピアスも、髪型も好きよ？」

優しく髪を撫でるレベッカ。

マリアは自分の心臓が締め付けられるような感覚に陥ると、正直に自分の心情を曝け出す。

「……お姉ちゃん。私はやつぱり、お姉ちゃんに劣等感を覚えちゃう……でもね、いつかきつと乗り越えるから……待っててくれる？」

「もちろん。マリアのことをずっと待ってるから。今は側に、ずっと近くにいることは難しくても……私は待ってるから」

「うん……うんっ！」

二人で抱き合って涙を流す。

何かが劇的に改善した訳ではない。依然として劣等感が残っている。レベッカもまた、下手な励ましは逆効果だと理解していた。

今は距離を取るしかない、二人とも分かっている。

でもマリアは、すぐには無理でもきつと向き合える日が来るとそう言った。

マリアのことを両親は弱い子だと言うが、そんなことはない。

レベッカは知っている。マリアは芯の強い子で、ちゃんと乗り越えることができる、そう信じているのだから。

それから二人は、依然として適度な距離感を保つようになった。家の中にいても、必要以上に会話はしない。

でも確かに二人には姉妹の絆がまだ残っている。

「よし……」

準備完了。

黒を基調としたワンピース。さらには日傘を持って、素肌の見え

る部分は黒いスリーブで覆う。サングラスも必須だ。夏は特に、気をつける必要がある。でもそれも慣れてしまった。

マリアは魔術剣士競技大会に出場するレベツカの応援に向かう。
マギクス・シュバリエ
去年はなんと優勝したレベツカ。そして今年もマリアは期待していた。

お姉ちゃんならきつと、今年も優勝してくれるはずっ！

成長し続けるレベツカをずっと下から見上げるマリア。やはりそれには、劣等感を覚えてしまう。

そんなマリアでも、魔術剣士競技大会で優勝したレベツカを見た時は心が昂った。
マギクス・シュバリエ

おめでとこの言葉も、不器用ながらに伝えることができた。

そして今年も頑張ってほしいと、マリアは伝えることができた。実家に戻って来た際に、少しだけ会話をしたのだ。

レベツカは「マリア。今年も頑張ってくるね」とニコリと笑いながら家を後にした。

「いつてきますっ！」

珍しく家を出るときにそう言葉を出して、マリアは魔術剣士競技大会へと向かうのだった。
マギクス・シュバリエ

姉の勇姿を、その目に灼きつけるために。

第118話 マリアの想い

「あつっ……」

一人でとぼと歩きながら、マリアは会場へと向かっていく。本当ならば、こんな格好はマリアもしたくはない。

灼熱のように茹だるこの夏を快適に過ごしたいと思うが、アルビノである彼女は仕方なく対策をするしかないのが現状だ。

そして会場に到着すると、そのまま中に入ろうとするが……一箇所だけ行列ができている売店があった。

「何あれ……やば」

ボソリと呟くマリア。

しかし、それもそのはず。

その行列は一列だけでは並び切れないのか、四列にまで膨れ上がっていた。しかも、かなりいい匂いが漂っていたりする。

人間とは思議なもので、行列ができていてただそこは人気なお店なのだと思ってしまう。中にはサクラを雇ってそうしている店もあるのだが、こればかりは規模が違う。

「美味しかったねー！」

「うん。それに超可愛いよね！？ 誰が良かった？」

「私はやっぱり長身の美人さんかな」

「私はツインテールの子かな。でも、大人しい子も超可愛かったし

……いやあ、あれは本当にすごいよねえ」

「うんうん！ また行こうね！」

と、話をしている人たちがマリアの横を通り過ぎていく。

ふと左手首に巻いている小さな腕時計を見る。

「時間はまだある……か」

席はすでに予約済みなので、時間自体はそこまで前もっていく必要はない。

そんなマリアは惹かれるようにして、そのまま列に並ぶ。この暑さの中であっても、ちよつとした興味が湧いた。

今まで何度もマジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会にはやって来ているが、こんな行列は見たことがないからだ。

そうしてマリアが並んでいると、どこか浮ついた男の二人組がマリアに話しかけてくる。

「ねえ、お姉さん可愛いねえ」

「うんうん。後でいいところ行かない？」

またナンパか……はあ、本当にダルいわあ……。

マリアのことを敬遠する者は確かにいる。しかしその逆に、あま

りにも神秘的な容姿の彼女に惹かれる者も当然いる。

元々姉のレベツカに似て、顔立ちは整っている。それがこの純白の容姿と相まって天使に見えなくもない。中には彼女のことを【三大貴族の天使】と呼ぶ人間もいるほどだ。

そんなマリアは内心では強がっているが、こうして初対面の、それに男性に迫られてしまうとやはり怖がってしまう。

やば、どうしよ……。

日傘を持つ手が震える。

このような時、周りの人間はほとんどが見て見ぬふりをする。それは経験済みだからこそ、彼女は理解している。

「お・きや・く・さ・まあゝ」

その間に割って入って来たのは、レイだった。いや今はレイではない。この店の看板娘である、リリーだった。

その姿を眼にしたマリアは心臓を撃ち抜かれたような感覚に陥る。自分を颯爽と助けてくれた、長身の美女。

その容姿が美しいのはもちろんだが、何よりもこうして助けてくれたことが、何よりも嬉しかった。

そして少しだけ会話をすると、マリアは名前を尋ねた。

「あ……あの！ お名前聞いても……いいですか？」

「リリー＝ホワイトですっ」

リリー＝ホワイト。

もちろん偽名なのだが、その名前をマリアはすぐに記憶した。

「あ……あの！」

「はい。どうかしましたか？」

「お、お姉様と呼んでも？」

「そうですね……構いませんよ。私もマリアさんとお呼びしても？」

「は……はい！ リリーお姉様……」

もはや虜だった。美しい上に、自分のような人間も助けてくれる。元々、アルビノだと言うのにジロジロと見たりはしなかった。ただ他の人と同じように接してくれる。

それだけで、マリアがリリーのことを気に入るのは十分な理由だった。

その後、レベッカの後輩だと知ったマリアは覚悟を決めた。元々は劣等感から、そして比較されることは間違いないため、アーノルド魔術学院に入学する気はなかった。

しかし、リリーがいると言うことでマリアはアーノルド魔術学院に入学すると決めるのだった。

そうして運命の出会いを果たしたマリアはその後、レベッカの試合を毎試合必ず観戦した。暑い中、日傘を他の人の迷惑にならないようにして差しながら、彼女はギュッと拳を握りこむ。

「頑張れ……頑張れ、お姉ちゃんっ！」

数年前から寮暮らしになったレベッカとはさらに会う機会が少なくなっていた。

それでもマリアは、姉のことが好きだった。時折帰って来て、少しでも話をする。その時間が何よりも好きだった。

まだ苦手意識はある。それでも少しずつレベッカに対しての想いを整理しつつあったマリアは、レベッカの活躍を心から応援していた。

そしてついにやって来た、本戦決勝。

相手はルーカス・フォルスト。この魔術剣士競技大会でその名前を知らしめた今大会最強と謳われている魔術師。レベッカの敗北が濃厚であると、すでに囁かれて^{ささや}いるのは知っている。

だが、マリアは応援し続ける。

レベッカだって辛いはずなのだ。だと言うのに、ここまでやって来た姉に対してマリアは本当に誇らしかった。そんな姉が、誰よりも自慢だった。

「あ……」

敗北。

レベツカは奮闘はしたものの、あっさりと負けてしまった。

「お姉ちゃん……」

会場の隅から倒れている姉を見つめるマリア。

でも同情はしない。

ただ一人、ひっそりと拍手を送ると、彼女は姉のその勇姿を心に
焼きつけるのだった。

それから夏休みに入り、レベツカが実家に帰って来た。もちろん
会話は最低限だけ。そんな中でも、マリアは久しぶりにこうして会
えることがどこか嬉しかった。

その後は、魔術協会のパーティーや他の貴族が主催するパーティー
に出席するなど多忙を極めた。

そして、ついにその日がやって来た。

「お姉ちゃんが婚約!？」

「そうだ」

「お父様、どう言うこと!？」

「言葉通りだ」

「お母様も本当なの!？」

「ええ……レベツカはエヴァン＝ベルンシュタインと婚約したのよ。
結婚は卒業してからだけど、ね」

「そんな……それって早すぎない！？　それにお姉ちゃんの気持ち
はっ！？」

「……マリア。聞き分ける。三大貴族の長男、長女とはそう言う存
在なのだ」

「でもっ！」

「これ以上話すことはない」

ある日、書斎に呼ばれるとそこにいた父と母は神妙な面持ちで、
ただ淡々とその決定事項を告げた。

マリアも今は反抗している時期であるが、三大貴族の令嬢なのに
変わりはない。だからこそ、受け入れることはできるはずだった。

でも……あの魔術協会のパーティー以来、レベツカはずっと落ち
込んでいた。勇気を振り絞って、話を訊いたがはぐらかされてしま
う。そして気がつく。

レベツカはこの事で落ち込んでいたのだと。

それと同時に気がつく。

お姉ちゃんがあんなに露骨に落ち込んでいるなんて、何かお
かしい。普通に婚約するだけなら、受け入れるだけでいいのに……
どうして、お姉ちゃんはある風……。

幼い頃からレベツカと一緒にいたからこそ分かる。

きつとレベツカは婚約自体は覚悟していたはずだ。相手が誰であ
っても、受け入れるに違いない。だと言うのに、ここ数日はずっと
疲れた顔を懸命に隠している気がする。

それはただの直感。

だがマリアはその直感を信じた。

「お姉ちゃんっ！」

書斎からレベツカの部屋に向かうと、そこでは机にノートを広げて勉強に励んでいる彼女の姿があった。

「マリア……そっか。知っちゃったのね」

「お姉ちゃんいいの！？ 婚約って……っ！」

「いいのよ。元々覚悟はしていたから……」

「私に何か隠してない？」

「……」

目をスツと逸らすレベツカ。きつと目を見て話してしまえばバレてしまう。そう思つての行動だったが、もちろんそれは裏目に出してしまう。

「やっぱり……ただの婚約なら、お姉ちゃんがこんなに落ち込むわけないもん。何があつたの？」

「あなたには関係ありません」

毅然とした態度でそう告げると、レベツカはマリアを無理やり扉の外に押し出していく。

「ちょっと！ お姉ちゃんっ！」

「マリア。もうその件は終わった事なのです。だから、私はいいの」「待って！ お姉ちゃんっ！」

ばたりと閉められるドア。そして中からガチャリと鍵をかけられてしまう。

「お姉ちゃん……」

あんなに弱っているレベッカをマリアは今まで見たことがない。

きっと何かあるんだ。話せない何かが……っ！

それは正義感なのか。それとも別の感情なのか。

それはきつと、姉妹愛と形容すべきだろう。

ずっと支えて来てくれた姉を、今度は自分が支えてあげたいと。マリアはそうに考えていた。

そしてマリアもまた、独自にレベッカのために行動を始めるのだった。

第119話 意外な組み合わせ

寮に戻ろうとしている途中のことだ。

ちょうど今は文化祭の準備と生徒会の手伝いが終わって、寮に戻ろうとしていたところ。

そんな時、正門に立っている人間に俺は見覚えがあった。

どこまでも透き通る純白の髪を斜めに切り揃えており、両耳にはこれでもかと大量のピアスが刺さっている彼女。

間違いなくそれは、レベツカ先輩の妹であるマリアだ。

レベツカ先輩に会いに来たのだろうか。

そう思っていると、ちょうど彼女と視線が交わる。するとマリアは、手招きをして俺を呼び寄せてくる。

些か疑問は残るが、素直に彼女の元に歩みを進めて行く。

「マリア。久しぶりだな」

「レイ。そうね、久しぶり」

「レベツカ先輩に会いに来たのか？先輩は先ほど女子寮に戻って行ったが、呼んできた方がいいだろうか」

「いや今日はお姉ちゃんに用があるわけじゃないの」

「では誰に？」

「あんだよ」

「……俺？ どうして？」

「まあそれも含めて、顔を貸してよ」

「……構わないが」

釈然としないが、俺は素直にマリアの後について行く。そして二人で向かう先は、少しだけ値段の高いレストランだった。二人で入ると、マリアはすでに予約をしていたのか名前を告げると窓際の席に案内された。

「晩ご飯まだでしょ？」

「そうだな。ちょうどいいところだ」

「今回は私の奢りだから」

「いやそうはいかない。ここは俺が出そう」

「いやいや。私が連れて来たんだし」

「レベツカ先輩の妹に、それに来年後輩になるマリアにお金を出してもらおうわけにはいかない」

「……はあ。なんとというか、絶対に譲りそうもないわね。じゃあ今回**は**よろしく」

「もちろんだ」

女性との食事では俺は**ほぼ**必ず自分から金を出すようにしている。

師匠と外食した時は、**集**^{たか}られていると言ったほうが正しいのだが。

実際のところ、軍人時代にまとまった金をもらっているの**で**それほど気にはしていない。それに大元の貯金は、ホワイト家に預かってもらっている。

二人で料理を注文する。

ここはステーキが美味しいということなので、俺はマリアと同じようにミディアムレアのステーキを注文。

注文した品がやって来て、ナイフとフォークを入れて食べ始める俺たち。

そんな最中、マリアが不思議そうに俺のことを見つめてくる。

「どうかしたのか？」

「あんたって、不思議よね」

「なんのことだ？」

「確か、一般人よね。しかも、学院始まって以来の、オーディナリー一般人出身の魔術師」

「いかにも」

「学院で貴族に虐められたりしないの？」

割と直球で聞いてくるものだな。でもそこがマリアの魅力的なところでもあると俺は思っている。

「そうだな。一学期は風当たりが強かった。でも、二学期からは普通だな。文化祭も順調に進んでいるし」

「へえ……意外ね。で、レイのクラス、何するの？」

「メイド喫茶だ」

「は？」

「メイド喫茶だ」

聞こえていないようなので、もう一度はっきりと言葉にする。

「いや、聞こえていないわけじゃないのよ。クラスに貴族がいないわけじゃないでしょ？」

「全員了承してくれた」

「ええ……」

どこか引いているというか、驚きよりも戸惑いの方が彼女の顔には浮かんでいた。この手の話題は初めてではないが、やはり貴族にとってはあり得ないことらしいと、改めて理解する。

「あっ！」

そして思い出したかのように声を上げるマリア。

それと同時に俺は思った。きっと彼女が次に出す話題は、アレに違いないと……。

「リリーーお姉様って、同じクラスよね？」

「あ、ああ……」

「お姉様のお姿も見れるの!？」

「ちょ、調子が良ければなあ……うん。いや、最近はまた体調が悪いからな。分からないな。前向きに調整する方向で、整えているのは間違いないが……彼女も色々とあってだな……」

後半は自分でも何を言っているのか分からないが、とりあえず誤魔化しておく。

「そっか……お姉様ってば、大変なのね」

「ああ。だからそつとしておいてくれ。マリアの案じる気持ちはしっかりと伝えておこう」

「うん。よろしくね。でもそっか……文化祭の日には会えないのか

あ……」

間違いない。

マリアは絶対にリリーがメイド喫茶で接客することを楽しみにしている。ここではどうすべきか……姿を晒さないほうが、バレる危険性はない。しかし、彼女は楽しみにしているのだ。

ぐ……俺は年下に弱い。

そんなしゅんとした様子で落ち込んだ姿を見ると、期待に込めてしまいたくなる。これはアビーさんに直接交渉に行くべきなのか……とそんなことを考えていると、二人ともに食事が終わり今はデザートを食べている。

「ねえレイ」

「どうした？」

「最近お姉ちゃんはどうなの？」

「……元気にやっているが」

「そっか。レイも気がついてるのね」

聡い。

俺はほんの一瞬だけ、詰まってしまった。本来ならばそこはスムーズに言葉を出すべきだった。しかし、嘘をつこうと反射的に考えてしまい反応が鈍った。そのわずかな間をマリアは逃さなかった。

「知ってるの。レイが最近、お姉ちゃんのことを手伝っているって」

「レベツカ先輩に聞いたのか？」

「ううん。ディーナちゃんに聞いたの」

「デイナー先輩に？」
「うん」

それから俺はマリアの話を黙って真面目に聞いた。

昔からレベツカ先輩と親しいデイナー先輩は、マリアとも仲が良いのだという。そして最近、ばったりと街で出会った際に、俺の話を聞いたらしいのだ。

「まあ、あんたっていい奴よね」
「恐縮だ」

「うん……まあ、変わってるけど。それで、貴族には色々あるのよ、これが」

「そうらしいな。今回の婚約に関係して、他の生徒会役員がボイコットをしているみたいだな」

「ま、それなら可愛いほうだけだね」
「そうなのか？」

マリアはフォークをピツと上にあげると、俺の方にそれを向けてきた。行儀作法としては良くないものだが、フォーマルな食事でもないのに特に何かを言うことはなかった。

「それこそ嫌がらせとか、いじめ紛いのことがあっても私は驚かないわ。流石に……三大貴族にそんなことをする馬鹿はいないけど」

「なるほど。貴族社会も大変なようだな」

「そんな中、平然と手伝えるレイはスゴいと思うけど。いやまじで貴族のことは気にしないの？」

「レベツカ先輩を助けることが最優先だ」
「そっか……お姉ちゃんも本当にいい後輩を持ったんだね」

今までと違って、どこか優しい声音。

それに表情もいつもはツンとしているが、柔らかくなっている。

そうか。マリアはこのような表情もできるのか。

「とても魅力的だな。マリアは」

「は？ 何言ってるの？」

「レベツカ先輩のこと、大切に思っているんだろう？」

「それはまあ……そうだけどさ。それと私になんの関係があるの？
口説いてるの？ もしかして玉の輿狙い？」

ニヤニヤと笑っているが、俺は素直に思ったことを口にした。

「いつもはどこか壁があるイメージだが、レベツカ先輩の話になるとマリアはそんな優しい表情かおをするのか……とってな。純粹に美しいと思ったまでだ」

「……ねえ。それって誰にでも言ってる？」

じつと半眼で見上げてくるマリア。それは詰問をしているかのようだった。

「師匠には思ったことは素直に言えと教育されたからな。特に女性に関しては。ただ素直が長所であり、それが逆に欠点と言われている」

「あんたの師匠は知らないけど、いつか刺されそうね」

刺されるか……しかし、俺の軍人時代の経験は伊達ではない。

魔術戦だけではなく、ナイフを使用した近接戦闘も得意ではある。

むしろ、師匠にはそちらの方が重点的に教えられたからな。

「大丈夫だ。護身術、それにエインズワース式ブートキャンプの過程において近接戦闘術は学んでいる、素手であっても、ナイフに対応するだけの技量は兼ね備えている」

「はあ……なんかレイのこと、わかって来たわ。うん」

と、話が少しだけそれたところで本題へと話を戻す。

「こほん。で、話を戻すけど」

「ああ」

「お姉ちゃんの婚約、何かあると思わない？ 正直に言って欲しいの」

「……」

その目は何かを求めているようだった。

「ここではぐらかすのは、きっと違う。決定的に何かを間違えてしまっ

だから俺は素直になることにした。それがきつとマリアのためになることだと信じて。

「……思う。レベツカ先輩の様子は、婚約に際してどこかおかしいと感じている」

「やっぱりね」

「マリアも気がついていたのか？」

「夏休みの時にね。でもお姉ちゃんは何も話してくれない。だからこそ、私は何かあると思っているわ」

「実は俺も少し独自に調べている」

「そうなの？」

「ああ。レベツカ先輩は俺にとっても敬愛すべき人だ。余計なお世話だろうが、調査を頼んでいる人がいる」

「そっか。やっぱりディーナちゃんという通り、レイに会いに来てよかったわ」

ニコリと笑うマリア。やはりいつも無愛想というか、不機嫌な顔をしているが笑うとよく似ている。レベツカ先輩の優しい微笑みに姉妹と言うこともあり、酷似していると言ってもいいかもしれない。

そうして俺たちは、さらにそのことについて詳しく話すのだった。

第120話 接触

二人での話は予想以上に長引いてしまった。

レベツカ先輩の幼い頃からの話をマリアが延々と語るからだ。もちろん俺はそれを全て聞いた。レベツカ先輩の話をしている時のマリアは、いつも以上に輝いて見えた。

しかし、その話が先に進むにつれてその顔に陰が差す。

「お姉ちゃんはスゴいの。もう本当に……っ！」

「ああ。それは今までの話からよく分かった」

マリアはふと、不思議そうな表情を浮かべる。

「……どうしてだろ。レイにはなんか色々と話せちゃうのよね」

「それは嬉しい限りだ。でも、その先は話したくないのか？」

「え……なんで分かるの？」

「顔に出ているからな」

マリアの話は幼少期が進むにつれて、何か隠していると言つか、敢えて言わないと言つか、そんな感じだった。俺はそんな彼女の繊細な機微を感じ取っていた。

「そっか……でも、私も誰かに聞いて欲しいのかもしれない。いやきつとそうなのね……」

「俺はなんであつても、受け止める次第だ。それに他言もしない」

「じゃあ、話してみようかな」

マリアはその純白の髪を少しだけ掻き上げると、その耳にあるピアスを見せてくる。

「このピアス。どうしてこんなにあると思う？」

「好きなのだろう？ 俺の知り合いにもピアスの収集を趣味にしている人がいる」

「まあそれも一理あるけど、やっぱりこれは反抗の証なの」

反抗の証。マリアのその言葉に、俺は素直に反応する。

「反抗？ 何に対して」

「貴族の在り方。それにやっぱり親かな」

「……」

「お姉ちゃんは優秀だった。誰よりも努力家だし、才能もあった。それに見た目も性格も良い。そんなお姉ちゃんと私はずっと比較されてきた。お姉ちゃんに負けないように頑張りなさい。それを呪文のようにいろいろな人に言われた。だから私がこんな風になるのも、時間の問題だったわけ」

「貴族とはかけ離れた容姿をすることで、反抗したかったと？」

「まあ……そうね。それに元々、私はかけ離れてるしね」

その言葉が指しているのは、その真つ白な姿のことだろう。アルビノになる要因は未だに不明だ。何か魔術的な要因があるのかもしれないが、研究もそこまで進んでいない。

貴族社会は閉ざされていると師匠に聞いた。新しいものを許さずに、伝統に固執していると。そんな中、マリアのような容姿の子どもがいれば、それは排除の対象になり得るのかもしれない。

そして、レベツカ先輩と比較されて育つ。

それは俺が考えもしない、苦労と悲しみがあつたに違いない。

「私はお姉ちゃんのが大好き。でもそれと同時に、劣等感をどうしても覚えてしまう。だから奇抜な格好をしているのはせめてもの抵抗。いや、私が私らしくあるためにこうしているの」

「そうか……そうだったのか」

「ま、その程度の話よ。ただ姉と比べて劣っている妹がグレしているだけ」

「……マリアの話はよく分かった。俺も何か慰めの言葉をかける気はない。だがこれだけは言わせて欲しい」

「何よ？」

強気な物言いだ、それはどこか不安そうだった。だから俺は、安心させるような言葉をかけたいと。そう思っていた。

「……俺には、その苦労や悲しみは完全には理解できない。でもマリアは、自分らしくあるうとしてきたのだろう？ それは称賛すべきことだ。だから俺は今のマリアはとても美しいと思う。その髪型も、そのピアスも君らしいものだ。だからそれは誇ってもいいと、俺は思うが」

「……べ、別にそんなこと言われても」

下を向いてしまうマリア。その顔は真っ白な肌だからこそ、赤くなるのがよく分かった。

「今まで相談できる相手がいなかったのだろう？」

「まあね。でも良いのよ。ある程度は割り切ってるから」

「そうか。でも今度から、何かあれば俺に話して欲しい。聞くだけならいくらでも使って欲しい」

「……レイってさあ。女の子にはみんなそうなの？」

「いや。男性女性に限らないが？」

「あつそ。人たらしってわけね」

プイッと横を向くマリアはどこかぶっきらぼうにそう言った。でもそんな仕草もどこか可愛らしいものだった。

「少しだけ俺の話もしようか」

そして俺もまた、彼女が話してくれたからこそ自分のことも開示しようと思えた。それは信頼の証とでも言うべきだろうか。

「レイの話？　そう言えば、オーディナリ一般人なのに魔術戦闘は得意って噂があるけど……」

「俺は戦争孤児でな」

「え……」

表情が固まるマリア。彼女は呆然とした様子で、俺のことを見上げて来る。

「極東戦役。知っているだろう？」

「う、うん。初めて魔術師が本格的に導入された戦争だって……それも死者はすごい数だって……」

怯えているのが分かる。その声は震えていたからだ。

「俺はその最前線にいた。もう死んでもいいと、幾度となく思った。だがある女性に俺は救われた。師匠と呼んでいるが、師匠は俺にこ

の世界の醜さだけでなく、美しさも教えてくれた。そして俺も悩んでいる時期があった。だからこそ、誰かの助けになりたいと。そう今も、願っているんだ」

簡潔にだが、話をしてみた。今までならきつと俺は、相手の気持ちを勝手に推し量って話すことはなかっただろう。

だが、魔術剣士競技大会でアメリカと心を通い合わせて、俺もまた前に進もうと決めたのだ。

自分の過去を打ち明けたのは、俺の成長の証。

そうなればいいと思っている。

「……そつか。いや、レイはどこか只者じゃないと思ってたけど。そうなのね」

「ああ。互いのこの感情は完全に分かり合うことはできない。でも俺は、それを知識として知っている。だから今後も、俺は誰かの助けになりたいと。そう思って、過ごしている」

「はあ……何というか、大物ね。レイは」

「そうだろうか？」

「ええ。でも、どこか親近感が湧くというか……私たち、似たもの同士かもね」

「そうかもしれないな」

マリア「ブラッドリィ」。

彼女もまた、迷っている人間の一人だった。

姉であるレベッカ先輩と比較されて、劣等感を抱いて生きている。

でも彼女には強さがあつた。そこで折れるのではなく、外見を変
えることで自分を保つてきた。

俺と彼女は似ている。それはきっと、この人生に対して抗い続け
ていることを指しているのだろう。だからこそは、彼女もまた似て
いると表現したに違いない。

またマリアの力になれば良いと。俺はそんなことを思った。

「お姉ちゃんのこと、何か分かったら教えてね」

「ああ。もちろんだ」

「私も何か分かり次第伝えるわ」

「助かる」

「良いのよ。それに一人だけじゃやっぱり、詰まっちゃうから」

「そうか。またいつでも相談して欲しい」

「うん。そうさせてもらうわ」

既に日は暮れており、外は真っ暗だった。街灯が照らしつける道
を二人で歩いていく。マリアは一人で帰るから良いと言ったが、俺
は絶対に送ると告げた。すると彼女は「はあ……」とため息をつい
て了承してくれた。

「別に近いから送ってくれなくても良いのに」

「女性をこの暗い中一人で帰すわけにはいかないだろう」

「あっそ。まあ……いいけどさ」

しばらく黙って二人で歩みを進める。

その際にふと、目の前から歩いてくる人間に視線がいく。身長は
かなり高く、その体は分厚い筋肉に覆われている。もしかしたら部
長に匹敵する体躯かもしれない。

真っ黒な髪をフェードで深く刈り込んでいて、目つきも鋭い。

と言っても相手をあまりジロジロと見るのも悪いので、すぐに視
線を逸らす。

そして互いにすれ違う。

その際に、相手の男性がハンカチを落としたのが視界の端に映っ
た。

「あの。落としましたよ」

俺はそれが地面に落ちる前にサッと拾うと、その男性に話しかけ
る。

翻る。

そして交差する視線。

するとその男性は、ニコリと微笑みかけてくれる。

「申し訳ない。乱暴にポケットに突っ込んでいたもので」

その容姿に反して丁寧な人だと思った。別に見た目で全てを判断するわけではないが、意外といえば意外。そして丁寧にお辞儀をして感謝を告げると、彼はそのまま去って行く。

特になんてことはない出会い。

ただ俺は何か違和感を覚えていた。

「レイってば、親切ね」

「ああ……」

「どうかしたの？」

マリアが顔を覗き込んでくる。

きつと俺が呆然と彼の姿をじっと見つめているからだろう。

そしてすぐに視線を切ると、俺もまた踵を返す。

「いやなんでもない」

「そっか。じゃ、行こうか」

再び、マリアと二人で並んで歩みを進める。この薄暗い道に何か特別なことがあるわけではない。いつも通り、なんの変哲もない道だ。

街灯に照らされながら俺はそのままブラッドリイ家の前に辿り着く。

「送ってくれてありがとう」

「こちらこそ。有意義な話だった」

「じゃ。バイバイ」
「失礼する」

軽く手を振るマリア。俺もそれに答えて、一礼をすると寮へと戻って行く。

思い出す。この門の前で、レベツカ先輩と別れたことを。夏の終わり。蝉たちの声がまだ響き渡っていた時。茹だるような暑さは、もう無くなっていた。それはどこか郷愁を覚える。

それと対照的に、この夜は静かだった。

すでに少し肌寒いくらいだ。

ふと、空を見上げる。今日はここ最近では珍しく、曇っていた。それもかなりの曇り空だ。かすかに見える月明かりも、微かにこの世界を照らしている。

瞬間。ポツ、ポツポツポツと地面に雨の跡が残っていく。

まだ勢いは強くないが、俺は足早に移動する。傘は持ってきていないため、少しばかり濡れてしまいが仕方がないだろう。

「……？」

立ち止まる。

見られていた？

そんな視線を感じた。だがそれはすぐに消えていく。気のせいと

いえば、気のせい。特別、殺気などが籠もっていたわけではない。
レベツカ先輩の件もあって、神経質になっているのだろうか。

俺はまだ知らない。

レベツカ先輩を中心に、大きな意志が蠢いていることを。

大きな転機となる文化祭は、もうすぐ始まるうとしていた。

第121話 暗闇の中で

地下室にいる一人の男。それはモルスであり、彼は酒を喉に流し込んでいた。決して高い酒ではない。ただ彼は、アルコールを飲む時の特有の感覚が好きなのだ。

そして、僅かに灯る明かりの元で彼はノートを広げて情報を整理していた。

そんな時だった。扉が開くと、中に入ってきたのは巨体の男。

パラが帰ってきたのである。少しだけ雨に濡れており、それを軽く払う。そしてテーブルに着くと、彼もまたグラスを持ってきてからテーブルにある酒を注ぐ。

ノートから視線を外すと、向き合って座っているパラの方に顔を向ける。

「どうでしたか？」

「俺はまだ信じられねえな」

モルスが尋ねると、吐き捨てるようにパラは言った。

それと同時に、グラスを乱暴にドンツとテーブルに叩きつける。幸いなことに、力加減はしたのだらう。グラスにはヒビなどは入っていないかった。

「……情報は確かなものとは思いますが」

「別にお前のことを疑っているわけじゃあない。ただ俺には、普通のガキにしか見えなかった」
「そうですか」

モルスの情報。

それはレイ＝ホワイトこそが【氷剣の魔術師】であると言つものだ。

かなり嚴重な情報規制が敷かれていたが、それを何とか突破して手に入れた情報。使い捨てにした人間は、数知れず。だが彼はそのことに対して何も思うことはない。むしろ、自分のために使われてよかっただろう……程度にしか思っていない。

そしてその情報をパラに伝えたと、彼は早速レイのことを探りに行つたのだ。

先ほどすれ違つたのは、偶然ではない。故意にレイのことをつけていたからこそ。その後も、後を追いつけて今こうして帰つてきたと言つのが現状だ。

「ただ」

「ただ？」

「あのガキが只者じゃねえのは分かる」

「ほう……」

息を漏らすモルス。そしてパラは所感を述べる。

「俺は一見すれば、相手の技量は理解できる。漏れ出る第一質料の

プリママテリア

質で理解できるからな。だがあいつの底を見ることはできなかった。それに身のこなしと俺の視線に気が付く技量。何もねえただのガキの可能性もある。ただ、その逆もあり得る。まだ確信はねえが、あいつが氷剣の可能性はゼロじゃねえ。そう思っている」

「なるほど。素晴らしい分析です。僕もあの少年のことは目撃していますが、確かに尋常ではない雰囲気を感じていると思っていました」

「はっ。世界は広いよなあ……あんなガキが【氷剣】かも知れないんだぜ？」

「そうですね。まだまだ、世界とは広い。そしてその真理にたどり着くこともできていない」

二人で語り合う。

百戦錬磨の二人がそう評価するのだ。

間違いなく、レイ・ホワイトが氷剣であると少なくともモルスは睨んでいる。そして彼はその戦力を決して過小評価しない。

なぜならば、氷剣とはそれほどの魔術師だからだ。

リディア・エインズワースは、ユージェニクス優生機関の中でも最重要人物。彼女のために、上のポストはまだ空いているほどには、リディアは評価されている。

魔術師としての実戦能力に加えて、研究者としての実績も超一流。そんな彼女は表の世界でも有名であり、裏の世界でも有名だった。それこそ、誰もがそんなリディアを欲した。

だが彼女は一筋縄ではいかない性格。そもそも、ユージェニクス優生機関の思想

に染まるような人間ではなかったのだ。

そんな彼女が育てたと言う、当代の【氷剣の魔術師】。

噂はすでに全てかき集めた。

学院に潜入していた、ヘレナ^{リバー}・グレイディを完封し、さらには死^{グリム}神にも完勝している。おおよそ、学生とは思えない実績。しかしそれは、【氷剣の魔術師】ならば可能と思ってしまう。

それと同時に思う。彼は^{オーディナリー}一般人だ。

だが本当に、^{オーディナリー}一般人がそこまでの領域に辿り着けるのか。世界最高峰の才能があるのは、間違いない。疑いようがない。

だからこそモルスは考える。レイ^{オーディナリー}・ホワイトは異質であると。

「レイ^{オーディナリー}・ホワイト。最大の障害になるかも知れません」

「……灼熱や幻惑よりもか？」

「当代の氷剣はあまりにも異質すぎる」

「相手は俺がしてもいいか？」

「……いいのですか？」

「ああ。元々お前は、あいつの相手をする予定だろ」

「そうですね。助かります」

そつと触れる胸元。

その下に眠っているのは、傷跡。大きく縦に裂かれたであろうとそれは、普通の人間が見れば卒倒してしまうに違いない。

「十年。十年も経ちました」
「……」

独り言のように語るモルス。

そんな様子をパラはただ、黙って見守る。酒を飲みながら、その狂気に染まる表情を見つめる。

「もう少しで、僕は成し遂げることができます」

十年。

モルスの因縁は、十年前に始まった。

そしてそれは奇しくも、レベッカ＝ブラッドリイを中心に始まっている。

「レベッカ＝ブラッドリイ。彼女の覚醒も、近い」

「そうなのか？」

「はい。すでに確認済みです」

「ま、俺はそっちはどうでもいいが。興味はあるな。確か名称は…

…」

「アーカーシャ」

「そうだ。それだ」

モルスはその問いにノータイムで答えた。

「ブラッドリイ家だけが持つそれは、世界を変革するにふさわしいものです」

「それはそれで楽しみだな」

ニヤリと笑うパラ。

彼もまた滾っていた。今回の仕事の依頼は正直言って、割りに合うかどうか分からない。はっきり言えば、どれだけ金を積まれても見合うかどうか不明。

七大魔術師が三人も出て来るとは、流石のパラであっても躊躇してしまう。ではなぜ、彼がその仕事を受けたのか。

それは好奇心。

この世界は単調すぎる。彼はそう思っていた。協会所属である魔術師をやめ、裏の世界に身を落とした。始めは刺激的な日々だった。魔術で殺しを重ねる日々は、最高だった。

そして彼は、魔術師としての技量を高めていく。

殺すことを目的とした魔術は、まだ天井知らず。彼はただ、求めていた。この渴きをどうにかするために、この仕事を受けた。

その中でも、パラが求めているのはただ一人。

【氷剣の魔術師】

彼は、リディア・エインズワースと実は極東戦役で戦ったことがあった。その時はあえなく敗北。命を拾ったのは奇跡と言ってもいいだろう。

そして知った。七大魔術師とは、世界最高峰とは、この場所なの

だと。焦がれ続けるその想い。パラもまた、モルスと同様に目的があったのだ。

「ははは……ヤベエ。手が震えてきやがった」

「武者震いですか？」

「わからねえ……もしかしたら、あの時のことを思い出しているかもな」

「極東戦役ですか？」

「ああ……あれはまじでヤベエ戦争だった。そしてその中で戦果を上げ続けていた、あの女は化け物だった」

「リディア＝エンズワース。今は療養していると聞きますが」

「でもいいさ。俺が相對するのは、最強じゃなくちゃならねえ……」

もう一度、震える手で酒を飲む。

モルスとパラ。

二人にはそれぞれの因縁があった。それは奇しくも、アーノルド魔術学院に集中していた。

迫る文化祭。

それはちょうどいいタイミングだった。レベッカ＝ブラッドリイのことを知り、ブラッドリイ家の秘密を握ったモルス。そして過去の因縁を持つ、二人。

それはまるで誰かが意図的に用意したかのような舞台。

その幸運に、モルスは感謝していた。

自分は運がいい……と。そう思っていた。

十年前のあの日から、彼はずっと失意の底にいた。この魔術師の世界の最底辺、いやそれは闇とも形容すべきか。そこで彼はひたすらに足掻き続けて、やっとここまでたどり着いた。

もう少し。

もう少しだ。

後もう少しで、たどり着くことができる。

そしてあいつに復讐を果たすのだと。

モルスはそう誓ったのだから。

「……さあ。行きましょうか」

迫る悪意。

蠢く意志。

アーノルド魔術学院での文化祭。それは大きな転機になる。

レイ＝ホワイト。

レベッカ＝ブラッドリィ。

マリア＝ブラッドリィ。

そしてモルスにパラ。さらには、ブラッドリイ家。

舞台は完全に整った。お膳立ても全て終了している。

準備は万全だ。あらゆるケースを想定して、失敗がないように下見も重ねた。

そこに隙などありはしない。

モルスはこの計画の成功をすでに確信していた。だが驕ることはない。彼は謙虚さもまた、兼ね備えていたのだから。

こうして、運命の文化祭が幕を開ける。

第122話 彼女に似ている

寮に戻っていく最中、雨に打たれながら俺は考えていた。それはクラスで行うメイド喫茶のことだ。

色々と懸念事項はある。だが、それでもクラスのみんなと行う文化祭を心から楽しみたいと思っているのも事実。

「……」

立ち止まる。

俺はまだ、真の意味で全力を出していない。なぜならば、俺たちのメイド喫茶には彼女がいないからだ。

その存在はきっと、メイド喫茶を成功させるのに大きな要因になる。

以前までの俺ならば、きっとこんな行動はしない。目上の人間に命じられて、逆らうことなど絶対にあつてはならない環境で育ったからだ。しかし俺はそれでも、みんなと共に楽しみたいと。全力を尽くしたいと思った。

寮ではなく再び中央区方面へと走り出す。

雨に打たれる髪はすでに大量に水分を含んでいる。この制服も同様だ。

そしてたどり着くのは、中央区にある一軒家。高級住宅街でもあるこの場所に住んでいるのは、アーノルド魔術学院の学院長である彼女だ。

「レイ……？ どうした。びしょぬれになって」
「お話があつてきました」

そう。そこはアビーさんの自宅だった。今まで何度か来たことはあるが、一人で住むにはかなり広いと愚痴っていたのは記憶に新しい。それによくキャロルのやつが泊まりにくるとか。

「そうか。入ってくれ」
「失礼します」

室内に入ると、まずは衣服を全て脱いでからタオルで体を拭くように言われた。世話焼きなアビーさんにそう言われると、なんだか昔を思い出す。

また、何故か俺のサイズにぴったりの服がいくつか置かれていた。曰く、師匠が念のためだ、と言って置いていたらしいが……その真相は不明だ。

そのままリビングへと通されると、彼女はソファーに腰をかける。それと同時に、俺は土下座を敢行。

頭を床につけて、じっと静止する。

「……なんだレイ。どうして土下座を？」

その声は戸惑っているようだった。

それもそうだろう。家にやってきたと思いきや、土下座を実行するのだ。訝しく思うのは当然。もちろん俺は、そのまま頭をつけたまま懇願する。

「アビーさん。後生です。どうか、リリイーの解禁を許してください」

「……確かお前たちのクラスは、メイド喫茶だったよな？」
「はい」

頭を地面にピタリとつけながら、話を続ける。

「リリイーが出たら、また魔術剣士競技大会の二の舞になるだろう」
「……そこをなんとか！」

きつとリリイーのことを楽しみにしている人間は多い。マリアはもちろんだが、お世話になった先輩方も密かに楽しみにしていると耳に入っている。

今まで、アビーさんや師匠に言われた命令は絶対だった。魔術剣士競技大会では納得して受け入れた。
ス・シュバリエ

だがどうしても今回ばかりは、譲れなかった。

「うーむ。だが、レイが文化祭を本気で楽しもうとしているのを咎めるのは、良心にくるな……」

「では……譲歩していただけないでしょうか？」

「ほう」

声を漏らす彼女。そして視線は僅かに鋭くなる。

「一日二時間で構いません」

「……一時間だ」

「分かりました。一時間をお願いします」

「いいだろう。一日の営業時間の中で、一時間だけ許可する」

「感謝します」

頭を上げると、アビーさんは優しく俺に微笑みかけてくる。それは師匠が時折見せてくるものとほぼ同じだった。

懐かしい。例えば、アビーさんとの付き合いも長い。こうして教師と生徒としての立場になるなど、夢にも思っていなかったほどに。

「なあレイ」

ふと、どこか遠くを見つめるようにして、優しい声音で語りかけてくる。

「はい」

「学院は楽しいか？」

「はい。本当にこの学院にやってきて良かったと思います」

「そうか……いや、それなら良かった。お前も変わったな。以前なら絶対に、そんなことはしなかっただろうに」

「そう……ですね。自分でも少し戸惑っています」

そしてアビーさんはフツと自嘲気味に笑うと、思いがけないことを口にする。

「実は私は、レイの学院への入学は反対していたんだ」
「……そうなのですか？」

初耳だった。確かに俺は、師匠に言われて学院に入学することになったが……その際に便宜を図ってくれたのがアビーさんだった。

だから、賛成してくれていると思っていたのだが……。

「私はレイにはもつと休息がいると思った。それに学院は血統主義の連中が多い。軍で生活を送り、多くの死に触れ、そして何よりもお前は一般人だ。その事實は、絶対に覆しようがない。だからきつと不幸になると思っていた。周りの人間と軋轢あつれきを生むのは間違いないからな」
「……」

俺は黙ってその話を聞く。

「私はレイの良さを知っている。でも、周りの魔術師はそう思わない。絶対に辛くて悲しいことになる、そう思っていた。だがな、リディアが土下座をして懇願してきたんだ。師弟揃ってよく似ている」

「師匠が土下座を……？」

にわかには信じ難い。

他人に土下座を強要することはあれど、自分からする姿など想像できない。

師匠は誰よりも自分に厳しい人だ。だからそんな懇願するような

真似をするなど、到底信じられない。

「下半身が動かないせいで、まともにはできない不格好な土下座。普段のあいつかからは想像も出来ない姿だ。それでも、ただじっと……頭を床につけてな。こう言っただんだ」

息を呑む。そしてアビーさんから、その時の言葉を聞いた。

『レイは強い。私たちが思っている以上に、強くて優しい子だ。だからこそ、レイはもう……私たちの元にこれ以上ではいけない。あいつはもつと世界の広さを知るべきなんだ。アビーの懸念もわかる。だが、後生だ……っ！　どうかレイを、レイを学院に入学させてくれっ！　頼む……っ！　レイはこれから絶対に、幸せになるべきなんだっ……！』

その言葉を聞いて俺は、自分の胸を押さえた。

歓喜に震えるとは、きつとこのことを言うのだろう。幸いなことに、涙を流すことはなかったが……それでも、この心は大きく揺れていた。

「どうだ。意外だろう？」

「はい。師匠がそんなことを言うなんて……いやでも……」

愛は感じていた。でもそれは言葉で示されるものではなかった。ただその態度から感じ取っていただけだ。

そして、それが今につながっている。

なんと言っただろうか。やっぱり俺と師匠は、師弟なのだと再

認識した。

「結果として、リディアの言う通りだった。レイは学生生活を楽しんでる。私が心配していることをしっかりと乗り越えて。やっぱり、あいつは特別だな。レイのことをよく分かっている。それはやはり……愛、だろうな。私もお前を愛している。でもリディアのそれは、きっと特別なものだ。師弟の絆、というべきだろうか。少しばかり嫉妬してしまうな……」

そう言うが、彼女の表情は依然として優しいものだった。

「……はい」

「レイ。これからも、学生生活を楽しんでくれ。そして幸せになってくれ。それが私たちの願いだ」

「……はいっ！」

最後に一筋だけ、涙が流れた。

「レベツカ先輩。失礼します」

「レイさん。いつもありがとうございます」

生徒会室にやってくる。

すでに文化祭まで一週間を切った。現在は月曜日であり、今週の金曜日、土曜日、日曜日の三日にわたって行われる。

主に舞台を使った活動などは、土曜日と日曜日に行われる予定だ。
各教室や部活動の出し物は、日曜日の夕方まで開かれて、夜には
ダンスパーティーを開いて終了。概ね、例年と変化はない。

「あら。レイ、早いわね」

「ディーナ先輩。どうも」

ペコリと頭を下げる。

ディーナ先輩もまた、放課後すぐに生徒会室にやってきていた。

「後もう少しね」

「はい」

「それにしてもレイがいてくれたおかげで、だいぶ楽になったわ。
いや、本当に助かったわよ」

「恐縮です」

「レイたちは、文化祭の準備はもう終わったの？」

「そうですね。ほぼ終了しています。あとは文化祭の直前に、内装
を整えるだけで終わりです」

「そっか。時間があったら行ってみようかな」

「是非来てください」

「あ、そういえば……」

ディーナ先輩は何かを思い出したかのように、ポツリと呟いた。

「あんた、あれで出ないの？」

「あれ、ですか？」

「女装のことを言っているのではないですか？」

その会話にレベルカ先輩も入ってくる。最近は生徒会での活動に余裕ができたおかげか、レベルカ先輩は調子が良さそうだった。

「女装ですか……実は魔術剣士競技大会の時にやりすぎまして、学院長に封印するように言われております」

「ありや。それは残念ね。レイの女装……リリーだっけ？ いれば絶対に繁盛したのにね」

「私もそう思います。レイさんのあの姿はとも見目麗しいものでしたから」

先輩たちに褒められて悪い気はしない。

そして俺は今回の文化祭に際して、本気で臨むと決めている。クラスメイトのみんなも張り切って頑張っている。それに売り上げ一位になれば、なんと表彰される上に金一封が出るとか。

もちろん個人にそれぞれお金を配るのではなく、打ち上げの会場を別に用意してくれるらしい。それは王国内でも屈指のレストランで。

そのため俺たちのモチベーションは最大になっている。

そして昨日許可をもらった事を先輩方に教える。

「その件ですが、実は一日一時間だけ許可をいただきました」

「え？ まじ？」

「はい」

「それはとても楽しみです！ でも一時間ですか……短いですね」
「仕方ありません。しかしその一時間で最大限の成果を上げたい」

と思います」

「そうですか。レイさん。私もお邪魔したいと思いますので、その時はよろしくお願いしますね」

「はいっ！」

そして三人で改めて当日の予定を確認する。

実は今回の運営は三人だけで足りるわけではない。そこで園芸部のお姉様方にも協力してもらっている。全員ともに、貴族の令嬢ではあるがレベツカ先輩と対立するような派閥でもないので、普通に了承してくれた。

むしろどうして早く言ってくれなかったのかと、少しだけ怒っているほどだった。

「お邪魔しま〜す」

「あ。レイくんだ〜。本当に生徒会室にいる〜っ！」

「ねね、レイくん。あの女装は出ないの？」

「わあ。レイくんだ！」

三人で打ち合わせをしている最中、クラスでの準備がある程度終了した園芸部の先輩方が生徒会室にやってくる。

「皆さん。ご無沙汰しております」

立ち上がって、その場で一礼をする。園芸部のメンバーが生徒会室に集まるのはなんだか不思議な感じだが、俺はやはり嬉しかった。

レベツカ先輩の周りには、助けてくれる人がこんなにもいるのだと分かったから。

先輩もまた、俺の時と同様に遠慮していたが……最後には受け入れてくれた。

レベツカ先輩は素晴らしい人だ。その見目麗しい容姿だけでなく、心も綺麗な人だ。でも欠点を挙げるとすれば、一人で抱えすぎるどころだろうか。

実は今回の件。俺がお姉様方に相談したのだ。

どうかレベツカ先輩の力になって欲しいと。

そして全員が集まってくれたことには、感謝しかない。

「よし。それでは、皆さん。当日の日程の確認をしましょう。それと役割分担なども。それと、最初に言っておきますね」

レベツカ先輩は立ち上がると、座っている俺たちをじっと見つめる。

「この度は、皆さんの協力でここまですることができました。本当にありがとうございます。園芸部の皆さんがこうして協力してくれることに、私は……その、ちょっと感動してしまいました。おかげで今年も、無事に文化祭を開くことができそうです。それでは、残り数日ですが頑張っていきましょう！」

『おー！』

俺たちはその後も、日が暮れまですっと打ち合わせを続けるのだった。

文化祭が開催される三日間。

無事に終わればいいと。俺はそう願っていた。

第123話 無力な自分

「はあ……」

自宅に戻って来たレベツカ。乱暴にカバンをベッドに投げ置くと、そのまま自分もまたそのベッドに横たわる。

天蓋付きのベッドで、ただじっと天を見つめる。

文化祭まであともう少し。だというのに、その心は全く躍っていない。ただ淡々と、同じ日々を繰り返しているだけ。クラスでも婚約のことを機に、距離を取る人間も出てきた。

別にそのことは良かった。

それはある程度予想していたことだから。

「どうしてだろ……」

ボソリと呟く。

最近、どうしても考えてしまう。

それは、ある一人の少年のことだ。

「レイさんはどうして」

レイ＝ホワイト。

入学当初に出会ったのは、本当に懐かしく思える。

初めは一般人だからきつと、この学院での生活は辛いことになるに違いない。オーディナリー私が先輩として導いてあげないと。そんな風に彼女は思っていた。

マリアと距離を取っていたレベツカは、元々誰かを世話にすることに飢えていたこともあった。ともかく、レイに対して親切でありたいとそう願っていた。

でも、彼は本当に規格外の人物だった。

ウィザード枯れた魔術師と馬鹿にされることもあったが、今となってはその噂も聞かない。むしろ、只者ではないという評価の方が大きいほどだ。

レベツカもそう思う。それに彼は、何か隠している。そんな気がしていた。

「……」

ベッドから起きると、彼女は自分の机に置いてある日記をめくる。

そして夏休みに行われた魔術協会でのパーティーのことを思い出す。どうして彼があのようにいたのか。

それに軍人と話していたし、あのオリヴィア王女とも親しそうに会話をしていた。

何よりも、自分の父親がレイに話しかけていた。学生に話しかけるなど、今までのパーティーでは目にしたことはなかったのに。

その疑念は日に日に膨らんでいく。

彼は一体、何者なんだろう。

どこまでも愚直で、真っ直ぐな少年。そして彼はどこまでも眩しかった。周りにいる人間は、みんな彼を中心に笑っている。それはやはり、羨ましいものだった。

別にレベッカに友人がいらないわけではない。園芸部の人たちはみんな友人である。でもどこか、レベッカに対して距離を取っているのは間違いない。

思えば、そんな寂しさを埋めるために創作活動を始めたのかもしれない。

そして思い出す。レイが褒めてくれた、あの夏の出来事を。

『これはすごいですよ先輩っ！ 感動しましたっ！ 文字だけの小説とは違う、新たなエンターテインメント！ 漫画ではキャラクタ―の表情なども可視化されているので、理解しやすい！ 先輩、これはすごいですよ！』

そう言われて、レベッカは本当に嬉しかった。

今までは人に見せるのが恥ずかしかったそれを褒めてくれるレイを見て、レベッカは心が温かくなるのを感じた。

どこか大人びていると言うか、年下とは思えないレイ。だがふと
見せるその幼い面は本当に微笑ましいと思っている。

それから二人で同人誌を売ったことは一生の思い出になるに違
ない。あの日で、もうこれは終わりにしよう……そう考えていた
のだから。

「そっか……もうずっと前のことのように感じるなあ……」

そう呟いてみると、彼女の瞳からは涙が零れ落ちる。

楽しかった日々。

レイが来てから園芸部での活動も華やかさを増した。他の部員た
ちも彼を受け入れて、より一層良い部活動ができていた。毅然とし
た態度だが、親しみを持てる彼。そんなレイを中心にして、園芸部
はさらに華やかになった。

その時は、ずっとこんな日々が続けばいいと。そう思っていた。

「レベツカ」

扉の先から母の声が聞こえてきた。

「はい。お母様」

「彼がいらしたわよ」

「分かりました」

そしてレベツカはすぐに制服から着替えた。家の中にいるとは言

え、来客ということで装いもそれなりのものにする。ブラウスにロングスカート。シンプルだが、そこまで華美にする必要もないので、彼女はそれを選択。

日記を閉じる。

そこにはずっと昔からの思い出が詰まっている。

マリアと過ごした日々。友人と過ごした日々。そして、レイと過ごした日々。

それをまるで断ち切るようにして閉じると、レベッカは扉を開けて出ていくのだった。

「やあ。レベッカ」

「エヴァン様。ようこそ、いらっしやいました」

エヴァン＝ベルンシュタイン。

最近によくブラッドリイ家に訪れるようになった。婚約を機に、周りにアピールをしたいのだろうか。と、レベッカは勘繰っていた。

「失礼します」

向かい側のソファアーに腰を下ろすと、メイドが紅茶と茶菓子を持ってくる。そして二人つきりになると、エヴァンは人の良さそうな

笑みを浮かべて話しかけてくる。

「そう言えば、そろそろ文化祭だね。順調に進んでいるかい？」
「はい……そうですね。今のところは、滞りなく進んでおります」
「なるほど。当日は僕も行く予定だから、楽しみにしているよ」
「私もエヴァン様がいらっしゃるのを楽しみに待っております」

嘘だった。

レベッカはエヴァン＝ベルンシュタインのことを歓迎してはいない。

むしろこの婚約自体が嫌で嫌で仕方がない。それだけではない。エヴァンとレベッカの父であるブルーノは結託している。

そのことを彼から聞かされた日、レベッカは目の前が真っ白になった。

以前から顔見知りであつたし、婚約自体も今まで通りの彼だったならば普通に受け入れていただろう。

だが彼には目的があつた。

それはブラッドリイ家を支配した上で、三大貴族を支配するといふものだった。そして彼は……魔眼収集家でもあつた。非合法に集めている魔眼を、その手に集めることに悦びを覚えるのだという。

貴族の頂点に立てば、都合が良いのだと。そう言っていた。

ブルーノとエヴァンの密会を偶然目撃したレベッカは思った。

こんな人と婚約してはいけない。ブラッドリイ家を守らなくては
いけない。

しかし、父は何も言わない。母も何も言わない。

マリアには言えるわけがない。

それに彼女は脅されていた。もし、そのことを外部に漏洩すれば
マリアに手をかけると……そう言われていた。まさか、と思うがそ
の狂気に触れてしまえば、それが本気だとわかった。

それにレベツカの魔眼自体にも興味があるのだと言う。

既に婚約の話が成立した時点で、彼女だけではなく、ブラッドリ
イ家は堕ちていたのだ。すでに彼女個人にできることなど、残って
はいなかった。

だから彼女はあるがままを受け入れる。微かに残っている正義感
と揺れながら、レベツカは誰にも助けを求めることができなかった。

おそらく何も知らないのはマリアだけ。それ以外の人間はこのこ
とを許容していた。父も母も、歳の離れた聡明な兄も……誰にも頼
ることができなかった。

そんなブラッドリイ家に対して、彼女は絶望していた。

「さて。今日も見せてもらおうか」
「はい」

決まってエヴァンがやってくるのはこのためだ。

そしてレベッカは魔眼を発動する。すると彼は身を乗り出して、その双眸をじっと見つめる。不敵に嗤いながら。

「ははは……やっぱり君のその魔眼は一級品だ。でも、まだ足りない。真の輝きに至るには、もう少しかかる。だからレベッカ。君はこれから精進するといい。その魔眼に見合う人間になれるように大丈夫。代わりの目は用意するさ。それに……」

手を握ってくるエヴァン。そしてレベッカの瞳をじっと覗き込む。

びくつと体が震えるが、我慢するしかなかった。

「このことはブラッドリイ家の総意だ。ブルーノ氏とは契約をしている。彼もまた、三大貴族の頂点に立つことに躊躇いはない。言うならば、僕たちはビジネスパートナー。その手伝いをする代わりに君の目をもらう約束をただけ。それは彼も了承している。だから怖がることはない。ただ君は、今まで通りに過ごせばいいだけだから」

「……はい」

そしていつものように、彼女の魔眼を観察し終わるとエヴァンはまるであらゆる感情が抜け落ちたかのような表情で、ボソリと呟いた。

「十年……十年だ」

その意味はレベッカには分からない。でも今はそんなことはどうでもよかった。この男の奇行など、気にしてはキリがないとレベッ

力は思っていたから。

ただ彼女は許せなかった。

父の暴挙も、この男の思考も、何もかもが理解できない。

そんなことをして何になるのか。レベツカには何も理解できない。

このまま黙って蛮行を見逃すべきなのか、どうなのか。

レベツカはただ揺れ続ける。このことを他の三大貴族に言っ
てしまえば、きっと楽になれる。

でもそうになったら、この家はどうなる？ それに誰よりも愛し
妹であるマリアは……どうなってしまふ。

愛ゆえに、身動きが取れないレベツカ。

そんな中、レベツカは彼のことを考える。

レイさん。私は……。

ここでレイのことを考えるのはおかしいことは彼女も理解してい
る。彼にはこの状況を覆す力などないことは承知している。

でも……それでも、なぜか今まで過ごしてきた日々を省みると、
レイに頼りたくなってしまふ。

そんな考えに自己嫌悪を覚えながら、レベツカは今日もまた一人
で涙を流し続ける。

第124話 性別を超越せし者

「レイ。本当にいいの？」

「構わない。このために俺は、交渉をしたのだからな」

「それにしても……一日一時間だけか。惜しいわね、本当に」

「仕方がない。許可が下りただけでも、上出来だ」

空き教室で最後の打ち合わせをする。

アビーさんに許可をいただき、俺の女装は解禁されることになった。もともとそれは、アメリカに懇願されたからこそ許可を求めたのだ。

それはちょうど今から数日前の話である。

「ねえレイ。ちょっと相談があるんだけど」

文化祭準備もほぼ終了し、寮の自室へと戻ろうとした時。アメリカが声をかけてきた。

「どうしたアメリカ」

「その……単刀直入に言うけど、レイに女装してほしいのっ！」

その話はいつかくると思っていた。しかし俺は、アビーさんにあの姿はあまりにも目立つために自制しろと言われていた。

それは文化祭でも同様だ。

だからこそ、半ば諦めていたのだが……アメリカは真剣な目で見つめてくる。

「お願いっ！ レイが出てくれば、きつともっといいメイド喫茶になると思うのっ！」

頭を下げるアメリカ。

彼女は可愛いものが好きであり、メイド喫茶もその延長みたいだ。それでも、全員が楽しめるようにとずっと頑張ってきたのは知っている。

アメリカ自身も言っていた。

今までは心から楽しむことはできなかったけれど、今年こそは楽しんでみたい。みんなと一緒に……と。

その願いを叶えてあげたい。

頭を下げるアメリカを見て、思った。彼女のひたむきな姿勢に俺もまた、諦めるのではなく真正面から向き合っべきではないかと。

「頭を上げてほしい」

頭をあげて、俺のことを潤む瞳で見上げる。揺れているのがわかる。きつと不安に違いない。

断られるかもしれないのは、彼女も分かっている。

だが俺は改めて、アメリカに報いたいと思い始めていた。

「女装の件は以前も言ったように、学院長に自粛するように言われている」

「そっか……そうだよな」

「しかし」

落ち込んだように頭を下げていたアメリカが、バツと顔を上げる。

「何もせずに諦めるのは、俺も嫌だと……そう思う」

「じゃあ……」

「ああ。学院長に直談判してこよう」

「いいのっ!？」

「文化祭、成功させたいんだろう?」

「う、うんっ!」

「ならば俺も、最大限の努力をしよう。少しでも譲歩できないか、話してみる」

「お、お願いねレイっ!」

「任せておけ」

実は俺は最後まで迷っていた。自分の言葉に嘘はつきたくないが、それでもあの雨の日まで延ばしてしまったのが葛藤の現れだ。

最終的に、自分の意志で動いた。もう誰かの命令を待つ必要はないのだから。

そんなやりとりをして、俺はアビーさんからわずかな時間だが許可をもらった。

そして今日。文化祭前日である今は、俺の姿をクラスメイトに確

認してもらったことになった。当日にいきなり出て行っても、驚かせてしまうからな。

「よしっ キャロキャロ、頑張っちゃうよぉ！」

メイクをしてくれるのはキャロルだった。俺は自分で出来るから結構だと言ったのだが、どうしてもやらせて欲しいということでキャロルに任せている。

もちろん、今回は交換条件で……ということはない。

俺からは懇願していないからな。もうあの日の過ちを繰り返すことは、決してしてはならない。

「今回はアメリカちゃんの言う通り、清楚路線でいっちゃうねえ」

「そこは任せる」

「うわ……先生、上手ですね」

「ふふ……キャロキャロの技術は伊達じゃないからね」

得意げな顔をしながら、キャロルは化粧を続けていく。

彼女が言ったように、今回は清楚路線でいくようだ。それはアメリカとキャロルが相談した上で決定したらしい。

また、キャロルもかなり乗り気なようで、いつも以上にはしゃいでいる。

いや、乗り気なのはいつもどおりか。

しかし、当日はメイド服を着る生徒のメイクはキャロルはしてはならない……とアビーさんに言われているので、今回だけはやらせて欲しいとキャロルに懇願されたのが真相だ。

少しでも手伝いたいと、キャロルもそう思っているのだろうか。

依然としてこのアホ女のことはよく分からないが、最近はそんなキャロルの良さも少しだけ分かってきた……気がする。

「うんっ！ いい感じだね」 ウィッグは黒髪ストレートにしてみたよっ！」

「なるほど。 いいチョイスだ」

そしてメイクが終了した俺は、ウィッグを被ってからメイド服に着替えた。

「わっ！ ここで着替えるのっ！？」

「すまない。 アメリアがいたな。 少し後ろを向いていてくれ」

「え…… 先生はいいの？」

「キャロルは昔馴染みだから、別に気にしないというか」

「だってレイちゃんとキャロキヤロは、一緒にお風呂に入った仲間もんね」

「お風呂っ！？」

その言葉にアメリアが大袈裟に反応するが、それは十年近く前の話だ。 キャロルも余計なことを言わないでいいものを……。

「キャロルが言っているのは十年ほど前の話だ。 真に受けないでほしい」

「でも、キャロキヤロは今でもいいけどね」。むしろ、今がいいの

にっ
」

「とりあえずお前は黙っている。アホピンク」

一悶着ありながらも、俺は着替えを進める。

ガーターベルトをつけると、そのまま黒のストッキングをそれで固定する。そこからエリサが主導して作ったメイド服を着用。サイズもぴったりで、いつの間に用意していたのかと思っていたほどだ。

アメリカ曰く、初めから用意するつもりだったらしい。何故か身長と肩や腰まわり、それに全体のサイズを聞かれたときはまさか……と思っていたが、やはりこういうことだったらしい。

このメイド服のスカートは短く、少しスースーするが……こればかりは機能性よりもデザインを優先しているので仕方がないだろう。

くるっと回って全体のバランスを姿見で確認する。

フリルが多く、さらにはスカートも短いということで見える限りかなり挑戦的なデザインだ。しかし……悪くはない。

最後に、頭飾りであるホワイトブリムを頭に載せて完了。

どこからどうみても、メイドにしか見えないだろう。メタモルフォーゼ変態で全体のバランスも整えてある。完璧な仕上がりだ。当日はこれを再現するだけでいい。

目安が分かっただけでも、今日試着した甲斐がある。

「……」
「……」

そんな俺の様子を、アメリカとキャロルは呆然と見ていた。アメリカにいたっては、僅かに口が開いていた。

「二人とも、どうかしたのか？」

そう話しかけると、キャロルはその場でぴょんぴょんと飛び跳ねて、アメリカは虚ろな目で俺を射抜く。

「レイちゃんっ！　すごいよこれはっ！　新境地だよお」
「……」

キャロルはキャピキャピと騒ぎながら、俺に抱きつこうとしてくるがもちろん拒む。頭をがっしりと掴み込んで、それ以上近づかないようにする。

戒めとして、指に力を込めるが……全く効いていない様子。キャロルはさらに迫ってくる。昔から師匠と喧嘩をして、アビーさんにボコボコにされているのは伊達ではないらしい。

一方で、アメリカは完全に硬直していた。

「アメリカ。大丈夫か？」

「……いい」

「ん？」

「可愛いっ！　やっぱり、私の目は間違いなかったっ！　ぐ……ふへへ……レイってば、可愛いわねえ……いや、リリーちゃんね……ぐへへ……」

「ちょ！？ ま、まじかつ！？」

キャラルを抑えている俺は、アメリアへの対処が間に合わない。
そして彼女は容赦無く、俺の体を弄ってくる。

こ、この手つきは……犯罪的だろうっ！

完全に我を失っているアメリアは、女装した俺に夢中だった。

しかしキャラルも抑えないといけない俺は、アメリアの進行をどうすることもできなかった。

「あ！ アメリアちゃんずる〜いつ！」

「はぁ……はぁ……やばい。レイが可愛い。可愛い……っ。新しい扉が、新世界がきたのよっ！」

「う、うわああああああああっ！」

エリサとクラリスの気持ちだが、痛いほどよく分かってしまった……。
もうお嫁に行けない。ぐすん……。

「なあ。ホワイトの女装ってどうなんだ？」

「確か話題にはなってたよな」

「誰か知らないのか？」

「私はみたけど、確かに超可愛かったよっ！」

教室内では俺の女装を心待ちにしているクラスメイトがいた。そして俺たち三人は、そのまま教室の中へと入っていく。

え？

ほぼ全員の声が重なり合う。

スタスタと迷いなく進んでいくと、黒板の前に立つ。そして全員に向かって感想を聞いてみることにした。

「レイ＝ホワイトだ。感想はどうだろうか？」

その瞬間、教室内に爆音が広がる。

[illegible]

なるほど。悪くはない気分だ。

それほどまでに、この女装のクオリティが高いということだろう。

大変に、気分がいい。

「ま、まじ！？」

「いやいや骨格が違っただろうっ！？」

「別人か!？」

「でも声が……っ！」

「ああ……もう俺、別に男でもいいかもしれない……」

「待て！ その先は地獄だぞっ！」

「いやしかし……あの魅力は性別を超えているだろう……っ！」

男子たちの評価も上々。そして、女子たちは俺の周囲に集まってくる。

「うわ！」

「超可愛い！」

「声出して、声っ！」

そう言われるので、リクエストに答えることにする。今回はいつものように、男の声を出す。

「これでいいだろうか」

そして女子たちはさらに湧き上がる。互いに手を取り合って、その場で先ほどのキャロルのように、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。

「きゃー！」

「本当にホワイトじゃんっ！」

「可愛い！ これは可愛い！」

「犯罪的じゃないっ！ これは確かに時間制限を設けられるのも納得だわっ！」

そして全員が盛り上がっている中、アメリカがこんなことを言うてくる。

「レイ。女性の声も出せるのよね？ ついでにあれもやってみてよ」

すでに俺を堪能したアメリカはどこか落ち着いていた。その肌は妙に艶々としていたが……。

彼女の指示に従い、声チューニングを調整。整ったところで、ポーズ付きでこ

う告げた。

「いらっしやいませ」　「ご主人様」

キヤロルに倣って、少しだけ派手な声を出してみた。すると、さらに教室内は湧き上がる。もはやお祭り状態だった。と言っても、実際に明日からその祭りが開催されるのだが。

「もう俺はいいや……」

「ああ……間違いないぜ……」

「あれは女性だ。史上最高に可愛いな。うん。もう俺は、諦めた。可愛いなら、性別など些細なことだっ……」

「ま、待てよ！　さっきよりも増えてやがる！」

「きゃー！」

「もうずっとそれでいなよー！」

「可愛い！　まじでイケてる！」

その後も、教室内が収まることはなく俺の女装姿は全員の目に焼き付けられることになった。

すでに内装も完了し、食料の準備、それにメイド服の試着も終了。

最後はクラスで当日の流れを共有して、解散することになった。

ついにやってくる文化祭。

俺はこの心が昂るのを抑えることができなかった。

こうして様々な思惑が交錯することになる、運命の文化祭が幕を上げる。

「ククク……」

夜の帳が下りた。

そして一人の女子生徒が、暗い部屋の中でじつとノートを見つめている。

「これでエリサも……ククク……」

不適な声を漏らす。そこにいるのは、彼女だ。

ツインテールを愛し、ツインテールに愛された女。

クラリス＝クリーヴランド。

机の上にはホットミルクとノートが置いてある。そして、ズズズとミルクを嘍ると改めてクラリスは計画を確認する。

「……ふふっ」

自分の計画の素晴らしさに、彼女は感嘆を覚えずにはいられない。クラリスは頭は良くないが、決して馬鹿ではない。それに今回は復讐なのだ。

今までエリサのことは、一緒にアメリカの犠牲になることもあり、

どこか親近感があった。

言うならば、共に苦樂を乗り越える戦友。とも

それにエリサはとても優しい。聖母のような慈愛に満ちていると……あの時まで、そう思っていた。

「んにゃああああああつ！ た、助けてみんな！ 発作よつ
アメリカの例の発作が始まつたわつ！」

⋮

「む、無視！？ え、エリサ……！ 隣にいるんだから、アメリカを止めてっ！」

⋮

「ぐへへ……クラリスは相変わらず良い体してるわねえ……小さいのもまた、乙なものね……ぐへへ……」

「ぎゃ あああああっ！ お、お嫁にいけないるうっうっうっう」

必死に助けを求める。以前に一度だけ、レイとエヴィがクラリスを助けようとしてくれたが、アメリカの必死の抵抗により二人は諦めた。

そしてエリサと誓ったのだ。二人で助け合っていくと。エリサはそれに同意してくれた……はずだった。

だと言うのに、エリサはクラリスのことを見捨てた。

そのことがクラリスの心に復讐心を芽生えさせたのだ。

もちろんエリサは後で、ひたすらクラリスに謝った。あの鬼気迫るアメリカをどうにかできるとは思えなかったからだ。

しかしそれは、彼女には関係ない。表面上はニコニコと笑って許しつつも、内面では絶対に復讐してやる……と誓ったクラリス。

「このお化け屋敷で、エリサをたくさん怖がらせてやるわっ！」

その復讐は、クラスの出し物でやるお化け屋敷でエリサを集中的に怖がらせるというものだった。そして入念に計画を立て、今に至る。

だが実際のところ……復讐というよりは、みんなに楽しんで欲しいと。そう思っているクラリス。クラスが違うからこそ、みんなに楽しんでもらいたい。そして自分は、メイド喫茶を楽しもうと。寂しい気持ちはあるが、それは仕方がない。

だから、そうしようと実際は思っているが……素直になれないのは、生まれつきなのか……。

「……ククク。アハハハハッ！」

その後、あまりにうるさいため、隣から壁をドンツと叩かれてしまいシユンとなるクラリス。高ぶるツインテールは、一気に枝垂柳のように垂れてしまう。

「よし。もう、寝よ」

午後十時。いつもの寝る時間になったので、クラリスは就寝する。
文化祭を楽しみに待ちながら。

第125話 ささやかな時

ついにやってきた文化祭。

俺はいつものように、目が覚める。現在の時刻は、朝の五時。すでにこの学園は、祭りの当日ということでかなり盛り上がっている。

前日も内装を整え、さらには正門には大きな装飾がなされている。正門から校舎へと続く道には、屋台もすでに用意されており、準備は万全。

「ふう……いい天気だな今日も」

今日はランニングはせずに、一人で散歩をしていた。

俺は純粹に興味があった。祭りごとに参加するのは初めてだ。書物を読むことで知識としては知っているが、体験するのは初ということで心が躍らずにはいられない。

クラスでの準備。それに生徒会での準備も万端。

出来ることは全て行った。全力を尽くしたと言ってもいいだろう。

そして俺が向かうのは、自然とあの場所だった。この祭りが始まる学内を進んでいくと、辿り着いたのは俺が一学期に作成した小さな庭だ。

今日は水を与える当番の日なので、やってきた次第だ。部室から持ってきた如雨露に水を溜めて、それを花々に与えていく。朝日と相まって水滴が綺麗に反射され、照らされる。

だがその朝日は、もう夏のような強さはない。

秋特有の、優しい光とでもいうべきか。そして水やりを終えた俺は、まだ時間があるなと思って目の前あるベンチに腰掛けると、自作したサンドイッチを取り出す。

なぜだろうか。今日はふと、ここで朝食を取りたかったのだ。

「レイさん……どうしてここに？」

「レベツカ先輩」

右手側を見るとそこにはレベツカ先輩が立っていた。まるで信じられないものでも見たかのような表情。それは俺も同じだった。

偶然にもこのタイミングで先輩に出会うことなど思っても見なかったからだ。朝起きて、なんとなくした行動。

本当にこれは偶然とでもいうべきだろう。

だがそれと同時に、レベツカ先輩とよくここで一緒に昼食を取っていたことを思い出す。もしかすれば、無意識のうちに考えていたのかもしれない。

レベツカ先輩が、ここにやってくるかもしれないと。

「自分はそうですね。水やり当番のついでに、朝食でも取ろうかと

思いまして」

「え……？　本日は私の日ではなかったですか？」

ポカンとした顔になる先輩。だが俺の記憶が正しければ、今日の当番は俺のはずだ。

「お言葉ですが。確か今日は自分の日だと思います」

「……そ、そうですか。すみません。間違えてしまったみたいで」

髪の毛を忙しく触りながら、そう謝罪する。もちろん俺がそれを咎めることはない。

「先輩も座ってはどうですか？」

「そうですね。折角きたのですから。失礼します」

俺の隣に腰掛ける際に、フワッと柑橘系の香りが鼻腔を抜けていく。おそらくそれは、先輩が使用している香料。とてもいい香りだ。

また、いま座っているベンチはちょうど二人用なので、距離が近い。それこそ、肩が触れそうな程に。

そして俺は、隣にいる先輩に自分の持ってきたサンドイッチを渡すことにした。一人で食べていても仕方ないしな。

「朝食はまだですよね？」

「はい」

「ではこちらを」

「これは？」

「サンドイッチです。作ってきました」

サンドイッチ。レタスとチーズ、さらにはスクランブルエッグを挟んだものだ。それにパンの表面もカリッとする程度に焼いてあるので、きつと気に入ってもらえると思う。

「……レイさんの手作りですか」

「嫌でしたか？」

「いえっ！ それでは、いただきますね」

視線が交差する。そして、破顔する先輩。

そこに陰りなどなく、いつものように美しい笑顔だった。でも俺は図りかねていた。マリアとの件を経て、レベツカ先輩に何かあるのは間違いない。

それを隠し続けている先輩。踏み込むタイミングを逸すれば、間違えてしまえば、全てが終わる。

だからこそ俺は慎重に先輩との距離感を測り続けていた。それにカーラさんからの情報も、もう少して手に入る。行動を起こすのはそれからだろう。

「……んっ！ 美味しいですね！」

「ふふ。それは自分の中でも得意な料理の一つなので。と言っても料理と言うには簡素すぎますが」

「いえ。十分素晴らしいものだと思いますよ？」

「恐縮です」

二人で並んで、朝日を浴びながらサンドイッチを頬張る。それは先輩との在りし日々を思い出させる。

最初は確か、レベツカ先輩が座っていて一人で食事を取っていたのだ。そして、ともに同じフルーツサンドを頬張っていた。

それから半年近くが経過し、また同じ場所で同じように共に過ごす。レベツカ先輩と過ごす時間は、とても落ち着いていて心地良かった。

「文化祭」

レベツカ先輩が声を漏らした。それは俺に声をかけたと言うよりも、独り言に近いものだった。

「楽しいものになるといいですね」

「きっとそうなります。自分は今年が初めてなので、楽しみにしています」

「ふふ。そうですね。それじゃあ、絶対に成功させないといけませんね」

「はいっ！」

文化祭。絶対に成功させたい。クラスでもみんなで協力して全力を尽くした。きっと満足するものに仕上がっているだろう。

「自分のクラスはメイド喫茶をやりますので、絶対に来てください」「あの姿で出るんですよ？」

「はい。一日一時間だけですが、あの姿で出ることにしています」

すでに俺が出ることは噂で流している。

それは意図的にそうしているのだ。アメリカ曰く、絶対に集客効果があると言っていた。彼女の熱量は尋常ではない。きっと心からこの文化祭を楽しみたいと思っているのだろう。

「レイさんの女装はもはや、芸術の域ですからね。私も楽しみにしていますよ?」

サンドイッチを食べ終わり、軽く叩いてからハンカチで手を拭くレベツカ先輩。

そして、いつもの優しい笑みとは違う、どこかニヤリとしているような笑み。先輩の表情もたくさん見てきたものだ、少しだけ感傷に浸る。

「ありがとうございます。それにマリアも楽しみにしているようで」
「マリア……ですか?」
「実は……」

俺はレベツカ先輩にマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会のことを話した。

すると、納得したのか「ああ……なるほど。そうだったのですかと声を漏らした。」

「この前にマリアにリリーお姉様はどうしているのかと聞かれましたが……そうだったんですね。幸いにも、はぐらかしておきましたけど」

「マリアにはいつか折を見て、いつか言えたらいいのですが……」
「リリーお姉様ですか。本当のお姉ちゃんは私なのに……ふふ。本当にレイさんは面白い人ですね」

クスクスと声を漏らす。

俺はどこか申し訳ない気持ちだった。それはマリアとレベツカ先輩の確執をすでに知っているから。

マリアはレベツカ先輩に対して劣等感を抱いている。そんな彼女が、リリーお姉様と慕うのはそれも関係しているのかと考えてしまふ。

「それにしても、いつの間にマリアと仲良くなったのですか？」

再び視線が交差する。

その瞳の奥で、何を考えているのか俺には分からない。

「……厳密にいつ、と言うと難しいですが。マリアとはここ最近ですかね」

「そうですか。あの子は男性を毛嫌いしているのですが……」
「そうなのですか？」

先輩は俺から目を逸らして、正面を向く。そして、どこか遠くを見据える。

「はい。あの見た目のことで、過去に色々あったもので」
「……なるほど」

「しかしレイさんには心を許しているのですね。良かったです。あの子の交友の幅が広がっているようで」

「自分もマリアとは気が合うようで。仲良くさせていただいてます」

レベツカ先輩は立ち上がってから翻る。スカートがフワリと浮か
び、それが重力に従って落ちていく。

瞬間、風が吹いた。

摩く先輩の艶やかな黒髪。それを抑えることなく、先輩は俺の双
眸を覗き込むようにして鋭く見つめてくる。

「マリアのことよろしくお願いしますね」

「先輩……」

「私は婚約した身です。上の兄が家を継ぐので、私は出る形になり
ますね。だからきつとマリアと過ごす日々はもつと減るでしょう。
それにあの子は、私のことが苦手なようですから。だからレイさん、
マリアのことをよろしくお願いします。ちよつとぶつきらぼうで、
口も悪い子ですが、根は良い子です。とても優しい子なのです」
「はい。でもレベツカ先輩は……」
「私は良いのです。だからこれからも、あの子と仲良くしてください
い」

踵を返す。

先輩は軽く一礼をすると、そのままこの場から去っていく。

どうして。どうしてなんだ。

どうしてあなたは、悲しそうな表情かおでそんなことを言うんだ。一
体何があるというんだ。

その場に一人残された俺は、あの夏の終わりのレベツカ先輩と今
の先輩がどうして重なって見えてしまう。

そしてついに、文化祭が始まった。
。

第126話 みんなと共に、進んでいこう

文化祭初日。

ついに、この日を迎えた。俺は午前中は主に調理を担当し、正午から一時にかけてリリーとして活動することになっている。

華やかな内装と鮮やかな色彩が広がる空間。テーブル席も用意して、すでに準備は万端だ。

「エヴィ。そっちはどうだ？」

「概ね大丈夫だな」

「了解した。俺のほうも大丈夫だ」

エヴィと二人で調理器具を確認する。食中毒があってはいけないので、衛生面はかなり気を使っている。基本的に生のは出していない。加熱処理した食材を出すことがこの文化祭での規則だ。

メニューとしてはオムライスにサンドイッチ各種。サンドイッチに使う具材も、基本的に加熱処理したものを使う。具体的に言えば、タマゴサンドなどを提供することになっている。

オムライスに際しては、予めチキンライスを用意してそこから卵を巻いていく予定だ。さらにはアルバートもまた、今日の午前中の調理に参加してくれる。

「アルバート。練習の成果は出せそうか？」

比較的料理の得意な俺とエヴィはすぐにマスターしたが、アルバートは時間がかかった。上流貴族である彼は、料理などしたことはない。しかし彼は自ら志願して、文化祭当日まで練習を重ねた。

今となつては、彼も十分な戦力である。

「そうだな。レイとエヴィに教えてもらったが、すでに要領は掴んでいる」

「アルバートは飲み込みがいいからなっ！俺も驚いたぜ！」

「ふ……成長したな。アルバート」

男三人で簡易的に設立された調理場で、手を重ねる。

「初日の午前中。ここは気が抜けない。ロコミなども重要になるかな。もちろん、女子たちのメイドによる接客も重要だ。しかし、俺たちの料理もまたこのメイド喫茶の成功を大きく左右する。最善を尽くそう」

『おう！』

そして俺は調理場を後にすると、そこには……すでにメイド服に着替えた女子たちが並んでいた。

今日のシフトでは、アメリカとエリサが終日出てくれることになっている。正午からの一時間は俺が入る予定だが、それでもたった一時間。残りの時間は、女子たちに任せるのが現状だ。

「アメリカ。それにエリサ。とてもよく似合っている」

二人の側に近寄っていく。

するとアメリアは、くるっとその場で回転してからスカートを少しだけ広げると、自慢げにその装いを見せてくる。

「どうつ！ 可愛いでしょっ！」

「ああ。間違いない」

普通のメイド服ではなく、フリル装飾が多くさらにはスカートが短い。膝が僅かに隠れる程度の丈。それに、ストッキングを止めるためのガーターもまたよく見えるようにデザインしてある。

やはりアメリアのデザインは抜群のものだった。もちろんそれをメインで製作したエリサの技量も感嘆すべきものだ。

「エリサもよく似合っている」

「あ……ありがとう」

髪の毛を忙しく触るエリサ。どこか落ち着かない様子。しかしそれも無理はないだろう。露出はある程度抑えてあるものの、それでも目立つのは間違いない。

彼女に至っては何よりも、ある部分がよく目立ってしまう。それを目立たせるのは、エリサとしても嫌だったろうが……最終的にはクラスのために頑張りたいと言うことで了承してくれた。

「でもその……やっぱり恥ずかしいね。はは」

「エリサ、大丈夫だ。君は美しい。それは自信を持ってい」

「……う。分かってるけど、レイくんは率直に言われるのは照れるね。あはは」

依然として顔は赤いままだ。だが、緊張が解れたのか笑顔を見せてくれる。

「……」

「どうしたアメリカ」

半眼でじっと見つめてくる。

そんなアメリカは、何か不服を抱いているようだった。

「エリサは特に褒めるのね……」

「アメリカも美しいが」

「気持ちがいもってない」

ブスツとした顔でそう言うので、俺はすぐさまフロアに入る。

「アメリカの場合は、その美しい脚が魅力的だ。スツと伸びる綺麗な脚線美。さらに程よくしまっているウエスト。アメリカは何よりもバランスがいいと思う」「……べ、別にそこまで詳細に言わなくていいけどっ！」

今度は褒めると何やら怒られてしまった。

一体今の正解はなんだっただろうか。

と、そんなやりとりをしていると周囲からヒソヒソと声が聞こえる。

「またやってるなあ……」

「ああ。ホワイトの天然が炸裂してるな」

「でもそこが、らしいというかね」
「うん。もう慣れたよね」

そして改めて、クラスメイトたちが全員集合する。役割分担としては、接客係、調理係、宣伝係にその他サポート。臨機応変に対応できるように、シフトは組んである。

俺は知っている。アメリカがこの文化祭にどれだけ懸けているのかを。それは毎日遅くまで残っている彼女を知っているから、よく分かる。

アメリカだけではない。エリサも、アルバートもエヴィも……それにクラスの全員が一丸となって協力することができた。

俺もまた、最善を尽くすことができたと思う。

だから絶対に、このメイド喫茶は成功するに違いないと……そう確信している。

「みんな。ここまで付き合ってくれてありがとう。本当に……私のわがままに付き合ってくれて、感謝しかないわ」

頭を下げるアメリカ。そんな真摯な姿を見て、俺たちは彼女の想いを改めて実感する。

「今日から三日間。たった三日間だけど、きっと大変なこともあると思う。でも私は、みんなと一緒に乗り越えることができると思うの」

真剣な姿。

それを見て、クラスメイトたちもじつとアメリカを見つめる。思えば、一学期の初めの頃はまだバラバラだったクラス。一般^{オーディナリ}人である俺の存在、それに三大貴族であるアメリカ。上流貴族であるアルバート。ハーフェルフであるエリサ。普通の魔術師の家庭出身である、エヴィ。

それぞれが違う立場だった。

でも今は、それを超えて一つの意志を持っている。

やはり俺はここにきて良かった。

確かに世界は醜いところもある。俺はそれを嫌と言うほど見てきた。どうして人間はこんなにも愚かなのかと。そう思わざるを得なかった。

だが、美しい世界もあるのだと。焼き尽くされた戦場に咲く一輪の花のように、どれだけ過酷な環境の中でも確かに育つものがある。

それをきくと、いま俺は実感しているのだろう。

「じゃあ。最後に、レイから言葉をもらおうかしら？」

「俺……でいいのだろうか」

別に俺は今回のクラスの出し物に関して、中心になっていたわけではない。生徒会にも顔を出していたこともあるからだ。

ふと、全員の顔を見る。

そしてみんな頷いていた。まるで、俺がここにいていいと。俺からの言葉を心待ちにしているのだと。そんな雰囲気だった。

もう拒絶するような空気はない。

オーディナリ

一般人である俺は、歓迎されていなかった。だが、どうだ。その表情を見れば、みんなの気持ちが分かる。分かってしまう。

笑顔で俺のことを、見つめてくれている。その優しい表情に胸が熱くなる。

この光景を、俺はきっと一生忘れはしないだろう。

「レイ。みんな分かっているのよ。やっぱりあなたが中心になっ
ているって」

「……そう、なのだろうか」

と、周囲から声が上がる。

「ま、なんだかんだ。ホワイトがいたのは大きいよな」

「うんうん。私たちがまとまったのも、あなたがいたからよ」

「それにあの女装もあるしなっ！」

「ああ。間違いないっ！」

瞬間、ドツと教室内が湧き上がる。

俺は軽くフツと微笑むと、アメリカと入れ替わるようにして円の中心にやってくる。

何を言っべきだろうか……いや、言っべきことはただ一つしかないだろう。

「この文化祭。俺にとっては初めての文化祭だ。だからまだ慣れていないことも多い。だが一つだけ。たった一つだけ思っていることがある。今回のメイド喫茶はここにいる全員がいなければ、成し遂げることができなかったと……俺は思う。月並みな言葉になるが、成功させよう。俺はみんなと一緒に、この文化祭を楽しみたい」

思ったことを口にしてみた、そしてニコリと微笑むアメリカが最後にこう言ってきた。

「レイ。最後に掛け声よろしく」

「そうだな……」

「絶対に一位をとるぞっ！」

『お　　っ！』

全員でその拳を天高く突き上げる。

そしてついに、メイド喫茶が開店することになった。

第127話　メイド喫茶へようこそ

「いらつしゃいませ」

「二名様入りまゝすっ！」

ついに始まった文化祭。

初の試みであるメイド喫茶は噂が噂を呼んでいたのか、初日の午前中からそれなりの数の人がやってきていた。

しかしそれはあくまで、興味というか、怖いもの見たさなところがあるかもしれない。

その印象を良くし、さらにサービスを受けた客がいい噂を流してくれることも考慮して、サービスには当然のことだが気合を入れている。

そちらはアメリカが主導でやっているので、問題ないだろう。

一方の俺たちと言えば……。

「三番。ティーセットねっ！」

「四番はオムライス二つ！」

「一番はサンドイッチ二つよっ！」

と、メイド服を着た女子たちが注文札をその場に貼り付けていく。そして俺とエヴィ、それにアルバートは分担してその調理にあたる。

「俺がオムライスをやろう。エヴィはサンドイッチ、アルバートはティーセットで頼む」

『了解っ！』

客の足が止む事はない。

接客をしているアメリカたちもそうだが、俺たちも休む暇はない。

そして俺はオムライスを調理していく。あらかじめじん切りにしておいた、野菜、それに粗く細切れにしたチキンをフライパンに投入し、それをライスと混ぜる。

最後にケチャップを適量注いで、チキンライスはあつという間に完成。問題はここからだ。

うちのオムライスの売りは、『半熟トロトロオムライス』という名前の通り、半熟の卵を載せなければならない。これはかなりの技術が要求されるが、俺にとっては朝飯前である。

「よつと……」

片手で卵を二個ほど割ると、そのまま箸でかき混ぜるようにして卵を溶いていく。ほどよく熱が通ったところで、上に持ち上げるようにして巻いていく。そして火加減を最大に注意しながら、巻き終わる。

そして細い筒状になったそれを、成形したチキンライスの上に載せると、包丁の先端の方を使ってスツと線を入れる要領で切り裂く。

すると、綺麗にパカッと割れた卵はチキンライスを包み込むようにして広がる。卵も綺麗に半熟で、誇大広告ではない。

間違いなくこれは、『半熟トロトロオムライス』だ。

我ながらいい仕上がりに思っているが、自画自賛している場合ではない。素早くそれを盛り付けると、待機しているアメリカにそれを渡す。

「オムライス。上がった」

「おっけーっ！」

アメリカが颯爽とオムライスを持っていくと、それを次々と客のもとに出していく。俺は厨房から、チラリと食べる様子を窺う。

「うまつ！」

「このオムライス、半熟具合がいいなっ！」

男性客二人は、満足気にオムライスを頬張っていた。そんな様子を見て、俺は口元が僅かに緩んでしまう。

「ふっ……」

だが余韻に浸っている暇などなく、際限なくやってくる注文。

「や、ヤベエなこれ……」

「確かに。かなりの注文だ。予想の倍はいつている」

エヴィとアルバートはそう声を漏らす。確かに、まだ材料は足りるが思ったよりもペースが早い。これはメイド喫茶という新しい出

し物に、寄せられた客が多いと考えた方がいいだろう。

その後、何とか午前中の分の調理を終了した俺は……ついにあの瞬間を迎えることになる。

「レイくんっ！ もう行った方がいいよっ！」
「了解した、エリサ」

ある程度作り置きもしておいたので、俺はエプロンをサツと取り外すと、空き教室へと向かう。そこには俺の化粧道具と、メイド服がすでに準備されている。

「エヴィ。アルバート。後は頼む」

「任せとけっ！」

「レイも頑張ってくれ」

「ああ！」

現在の時刻は、午前十一時二十分。リリーの登場は、十二時から一時までと決まっている。宣伝でも、『伝説のメイドが一時間だけ現れるっ！？』と新しい看板を用意した。

それがどれだけの効果になるか不明だが、それなりの集客はあるに違いない。

と、教室を出ていくと俺はその前で待っていたマリアとばったり出会う。いつもより気合が入っているようで、メイクもしている様子。

髪の毛もオイルをつけているのか、椿の良い香りがする。それに僅かに艶やかに光る純白の髪はとても綺麗だ。

「マリアじゃないか」

「ん？ ああ、レイか。やつほ」

手をひらひらと軽く振ってくるマリア。

そんな彼女の隣では次々と教室内に客が入っていくのに対して、マリアはなぜか隣で一人で待機していた。

まさかこれは……。

「入らないのか？」

「私はこれ待ちだから」

顔の前に出してくるのは、『伝説のメイドが一時間だけ現れるっ！?』という広告のビラだった。確か今日の朝から配り出したものだが、マリアは分かっているようだ……。

これは気合を入れないといけない。

「これってリリィーお姉様でしょう？」

「そ、そうかもしれないな……」

「ふふ。私は記念すべき第一号なのよ。ふふ……」

不適に微笑むマリア。その顔は人の悪笑みか、それとも心から楽しみにしている笑みか……。

ともかく、心待ちにしているのは間違いない。だからこそ俺は、全力を尽くすべきだろう。

「そうか。きっと楽しめると思う。では俺は所用があるので、失礼する」

「うん。またね」

奇しくも、数十分後には顔を合わせることになるが、マリアは知る由もない。

そして俺は、空き教室へと走っていくのだった。

「よし……」

女装セツトはすでに揃っている。扉に鍵を閉めて、早速女装に取り掛かる。

今回のメイド喫茶に当たったのテーマは『清楚』だ。魔術剣士競^{マギクス・シ}技大会に際しては、派手な装いになったがアメリカの提案により今回は清楚路線でいくことになった。

そのため、メイクも最低限で済ませる。

下地を塗って、その上から次々と重ねていく。そしてアイラインも綺麗に整えると、睫毛^{まつげ}をしっかりと上にあげてから、ブラシで軽く整える。最後に唇^{リップ}に一筋の薄いピンク色のラインを引いて完成。

鏡で自分を改めて確認する。

うむ。間違いなく、清楚系だ。

最後にウィッグを被る。地毛をネットの中にまとめると、それをしっかりと固定してその上から黒髪ロングのウィッグをかぶせる。

さらさらとした艶やかな毛が、パラパラと落ちるように流れていく。

「なるほど。我ながら、完璧だな」

キャロルに用意してもらったものだが、やはりかなり上質なものだ。この手のことに関しては、本当に頼りになる。後は最後にメイド服を着れば準備完了だ。

「……」

じつとそのメイド服を見つめる。ここには、みんなの思いがこもっている。

アメリアのデザイン。それにそれを製作したエリサ。それに加えて、他の女子生徒たちも手伝ってくれたと聞く。

みんなが協力して、一丸となって、メイド喫茶を進行している。

だから俺もまた、その成功に協力したいと……そう思っていた。

感慨深い。あの時の俺が、今こうしているとは……人生とは分からないものだ。

そして、黒いストッキングを丁寧に履くとガーターベルトを取り

付けて、それでストッキングを固定する。

重ねて、みんなの想いがこもったメイド服に……ついに俺は袖を通した。

教室の隅に置かれてる、姿見の前に歩を進める。

「……ああ。完璧だ」

完璧だ。全てがオールグリーン。

最善は尽くしたと言っていいだろう。そしてきつと、クラスでのメイド喫茶の成功は俺だけにかかっている……と、大言壮語なことは言いはしない。

しかし、俺の奮闘によって、変化は起こる。それは大きな奔流。

現状をさらによくしていければいいと思う。

「……」

ふと、自分の右手を見つめる。

あの頃からもう十年近く経過した。この手はずつと血に染まっているはずだった。しかしどうだ。今の俺は、この文化祭を心から楽しもうとしている。

自分には幸せになる価値などない。

ずっと、そう思っていた。

でも、この学院で多くの人に出会った。かけがえのない仲間ができた。

師匠、アビーさん、キャロル。それ以外にもたくさんのお大人にお世話になった。だがいつまでも大人に助けられている場合ではない。

俺はもう……自分の意志で進んでいけるのだから。そして、隣に立つ仲間がいるのだから。

「よし。頑張ろう。みんなのために」

そうして俺は、一人のメイドとして戦場^{きょうじょう}へと向かうのだった。

プロであり、スペシャリストとして。

第128話 伝説のメイド、爆誕

「ええ……あれは伝説だったわね」

これは伝説のメイドを追いかけた取材の一部。その存在をいち早く知り、一番初めにサービスを受けたマリア。彼女は伝説のメイドである【リリィー】をこう語る。

「元々そのポテンシャルは理解していたわ。だって、お姉様なもの」
それは自信に溢れていた。まるで、自分の実績のように語るマリアはどこか嬉しそうだった。

サービスの質は、いかがでしたでしょうか？

その質問に対して、ハッと鼻で笑うマリア。

「サービスの質？ そんなこと愚問でしょ。最高よ。最高。リリィーお姉様のそれは……まさに、史上最高のものだったわ」

純白の髪をサラッと掻き上げて、彼女は冷静に語る。

しかしそれはどこか熱を帯びているというか……そんな雰囲気のマリアから醸し出されていた。いつもの彼女らしくはない言動だ。

伝説のメイド。リリィーに関して、以前からご存知だったとか。

「もちろんよ」

まるで自分こそが最古参のだと、誇張するようにしてその小さな胸を張る。厚みはない。でも彼女の存在はどこか大きく見えるのは錯覚ではないだろう。

「あれは、夏真つ盛りの日だったわ。魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエの会場前で、やけに盛り上がっているお店があつてね。ふらつと寄ってみたのよ。すると……」

すると？

「天使がいたわ。いや。あれはもはや、そんな言葉で形容すべきではないのかもしれないわ。リリーお姉様は、その時から全てを超越していたもの」

徐々に興奮してきたのか、呼吸が荒くなる。さらには、その頬も微かに赤く染まっている。マリアは思い出していた。魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエで出会ったリリーのことを。

それはまさに運命の出会い。

彼女は心からそう思っていた。

なるほど。それで、三日ともに一番初めにサービスを受けた感想は？ 日にちによって質の変化は？

「ない……といたいところだけど。実際はあつたわ」

それは、サービスの質が低下した……という意味でしょうか？

「ばっか。そんなわけないわよ。リリィーお姉様のサービスは、日を増すごとに増していったわ。最終日には、恥ずかしいけど鼻血も出しちゃったし」

マリアはその裏事情を知っていないが、リリィーはマリアに対しては妙に熱のこもった接客をしていたのだ。

もちろん客によってサービスの質を大幅に変えることはないが、人間とはやはり、感情が絡むとどうしても変化してしまうものである。

マリアに対しての接客は、リリィーなりの思いやり。それは慈愛……と言ってもいいかもしれない。愛情を持って接してくれたリリィーを、マリアはさらに敬愛するようになったのだ。

それではここで終わりとさせていただきます。取材を受けてくださり、ありがとうございました。

「別に……ただ、リリィーお姉様のことちゃんと書いてよね」

後にマリアは、リリィーのファンクラブを設立することになるのだが……それはまだ、先の話である。

「いらつしゃいませ」

教室に戻った俺は、さっそく接客に入る。この教室に来る際に、かなりの注目を集めてしまったがそれもまた良し。いい宣伝になったのなら、俺としても嬉しい限りだ。

そして、リリーアの接客を受けたいと言うことでずっと待機していたマリアが一人でソワソワとしながら教室内に入ってくる。

キヨロキヨロと周囲を見渡し、わずかに俯いている。さらに彼女の頬は赤く染まっていて、照れているのだろうか……と想着しまふ。

「マリアさん。ご無沙汰しております」

「あ……ひゃ、ひゃいっ！ ご無沙汰してますっ！ お姉様……っ
「！」

マリアを席に案内して、そう声をかけた。

どうやら緊張しているようなので、解きほぐすためにも少しだけ会話をした。マリアがどんな想いで、それもたった一人でやってきているのか、俺はよく知っているからだ。

「わざわざ待っていてくださったんですね。ありがとうございます」

ペコリと丁寧な頭を下げる。

「あ……！ その……お、お姉様に会えるのなら私はいつまでも待

ちますよっ！ あれ？ でも今日は髪の色が以前とは違うような……」

「今回は文化祭なので、ウィッグを被っているのですよ。お気に召しませんでしたか？」

「い、いえっ！ 以前とその……雰囲気がとても変わっていて驚きました、とても美しいです！ 流石はお姉様っ！」

今度はしっかりと視線が交差する。マリアのその瞳は、真剣そのもの。きつとリリィに会うことを心待ちにしていたに違いない。

「ふふっ……ありがとうございます。それでメニューはいかがいたしますか？」

「え、えっと……」

メニュー。

そこにはオーソドックスなメニューしかないと思うだろうが、違う。リリィが登場した時だけ存在する裏メニュー。それはメニュー表の正午より、一時間限定と書かれているものだ。

「こ、この……『萌え萌えオムライスセット』っていうのは？ お姉様がいらっしゃる時間だけ限定？ いや、リリィお姉様限定って書いてありますけど」

流石、お目が高い。

それは俺が提案して取り入れた独自のメニュー。あらゆる文献を読み込んだ上で、閃いたのだ。今回の文化祭では無理を言っ、リリィを解禁してもらった。ならば、それ相応のサービスを提供するべきだろう。

アメリカもやってみたいと言っていたが、こればかりは他の生徒に止められた。

これに限っては、俺にしかできないからだ。

満を持して、プロフェッショナルの実力を見せる時が来たようだ。

「それは、私が出勤している時間のみの特別メニューです。注文しますか？」

「は……はいっ！ お願いしますっ！」

「かしこまりました」

マリアから『萌え萌えオムライスセット』の注文を受けて俺は、それを厨房へと通す。

「『萌え萌えオムライスセット』、一つ入りました」

「了解した……」

「ついにきたか……」

「ヤベエよ…… ついに出るのか……」

厨房にいるアルバート、エヴィ。それに俺と入れ替わりで入ってくれた男子生徒たちが神妙な面持ちで調理に入っていく。

「よし。上がったぞ」

アルバートから差し出されたオムライスとサラダ。それに飲み物もつけて、一つのプレートに納めてからマリアの元へと運んでいく。さらに、ケチャップはまだかけてはいない。

「お待たせしました」 『萌え萌えオムライスセット』 になります」

「あ、ありがとうございますっ!」

俺はそこから、このメニューの説明に入る。

「さてこちらのメニュー。召し上がっていただく前に、私が魔法をかけちゃいます」

「……ま、魔法ですか？ 魔術ではなくて？」

「ええ。とっておきの美味しくなる魔法です」

そして、ケチャップをハートの形にして描くと俺は気合を込めて……伝家の宝刀を抜いた。

「美味しくなあれっ！ 萌え萌え、きゅん」

しなやかに伸びる綺麗な右脚を曲げるようにして、高く上げ、両手をハートの形にして注ぐ想い。それはきつと、マリアに届くに達しない。

このポーズにするに至っては、恥ずかしさなどはない。

なぜならば、俺はプロでありスペシャリストだからだ。

これが俺の提案した『萌え萌えオムライスセット』である。

リリーにしかできない芸当だ。まずこれをするにあたって、恥ずかしさを見せてはいけない。至極真面目な顔で、本気で取り組む必要があるからだ。

「
ッ!」

そしてそれを受けたマリアは……途端に鼻を押さえ始めた。

「大丈夫ですか？　どこか優れないところでも？」

不安になり、声をかけるがマリアは俺に向かって静止するように手をスツと上げた。

「だ、大丈夫です、お姉様。つい、感極まってしまいました……」

「そうですか。それならよかったのですが」

「お姉様」

「はい。なんでしょうか」

笑みを浮かべる。

今の俺はレイ＝ホワイトではない。メイドの一人である、リリー＝ホワイトだ。

そして、マリアにメイドとして向き合う。きっとこれが、少しでも彼女の癒しになればいいと……そう思っているからだ。

「とっても美味しそうなオムライスになりましたっ！　本当にありがとうございましたっ！」

頭を下げるマリア。そんな彼女に向かって俺はこう告げた。

「そう言ってもらえて、私も嬉しいです。それでは失礼します」

「お姉様。三日間、全が一番乗りできますっ！ 朝から並びますっ

！ だから明日も、よろしくお願いしますっ！」

「……ふふ。ありがとうございます。マリアさん」

くるりと翻ると、わずかにスカートがふわりと浮かぶ。

マリアに向かって最高の笑みを浮かべると、俺は次の接客へと移行する。とりあえずは、滑り出しは好調。

この調子で、残りの時間も最善を尽くす！

第129話 さまざまな来客

「いらつしゃいませ」

マリアの接客を終えた後、次々と知り合いの方々がやってきた。

と言うのも、二日目からは噂でさらに客の数が増えるだろうと予測されるため、知り合いの人には初日にぜひ来て欲しいと声をかけてあったのだ。

「おお。やっているようだな」

「やほやほ　みんな頑張ってるね」

「ここがレイのいる教室か……感慨深いな」

「……」

視界に入る四人。それは、アビーさん、キャロル、それに師匠。車椅子の後ろにはカーラさんもいた。俺はすぐに、近寄って声をかける。

「四名様でよろしいですか？」

ニコリと笑みを浮かべると、アビーさんがニヤツと笑う。

「……楽しそうだな。レイ」

俺もまた小声かつ、男性の声でそれに応える。

「……はい。機会をいただけしたこと、本当に感謝しております」
「いや、いいんだ。実際のところ、リディアも楽しみにしていたよ
うだしな」

そして四人ともに席に案内すると、師匠は周囲をキョロキョロと
見始める。何か探しているのだから。

「リディアちゃんどうしたの」 そんなにキョロキョロしてさー
」

「いや、レイがいないと思ってな。この時間にきて欲しいと言った
のはあいつだろうに……全く」

「レイちゃんならそこにいるじゃーん」

「は？ ばかなこと……いう……な？」

「……ま、まさか。レイ様……なのですか？」

アビーさんとキャロルは事前にこの姿を見せているので、俺が誰
と言うことは把握している。一方で、師匠とカーラさんはポカンと
した表情を浮かべる。

確かに、^{マギクス・シュバリエ}魔術剣士競技大会の時とはイメージが逆。^{マギクス・シュ}魔術剣士競技
大会の時は、派手なギャル路線だったが、現在は清楚な姿になって
いる。髪色も違うし、化粧の方向性も違う。

すぐに理解できないのも無理はない。しかし、身長に変化はない
ので気がつくと思っていたが……。

「はい。師匠もカーラさんもこの前ぶりですね」

女性の声で話を続けるが、二人とも気がついたようだった。

「ば……ばかなっ！ レイ……お前はさらに進化しているとしても言うのかっ！？」

「ふ。私の姿は自由自在。今回は清楚路線です」

「そ……そうか。いや、お前は天才だと思っているが……こっち方面でもその才能を遺憾なく発揮するとは……いや、まじで何処に向かっているんだ？」

「師匠。私の向かう先はただ一つです。みんなでこの文化祭を成功させる。それだけです。と言うことで、ご注文お願いしますっ」

元気よくその声を上げると、師匠は「あ、ああ……」と言ってまだ驚きが抜けていないようだった。

「では、『萌え萌えオムライスセット』4つですね！ 少々お待ちくださいっ！」

四人ともに、『萌え萌えオムライスセット』を選択。

抜かりはない。四連続など、余裕である。

「お待たせしましたっ」

そして左右のトレーに四人分の『萌え萌えオムライスセット』を載せて運んでくると、それをテーブルの上に置いていく。

そして、「こほん」と一度だけ咳払いをして俺は伝家の宝刀を抜いた。

「美味しくなあれっ！ 萌え萌え、きゅん」

しなやかに伸びる右脚を曲げるようにして高くあげ、両手をハートの形にしてそれぞれのオムライスに俺の想いを注ぐ。すると、キヤロルとアビーさんはそれを褒めてくれる。

「うわゝ　　とっても可愛いよぉゝ　　流石、リリーちゃんだねっ！」

「そうだな。さらにオムライスが美味そうになった」

一方の師匠とカーラさんは……。

「あ、あわわ。わ、私のレイは……一体どこに？」
「清楚系の女装……？　むむ……閃きましたっ！」

と、師匠は呆然としており、カーラさんは何かを閃いたみたいだった。

そして四人ともにオムライスを食べると、教室を後にしていく。

その際に、俺は師匠に声をかけた。もちろん声は、周りの視線もあるので女性のままだが。

「師匠」
「……どうした」

妙に疲れている様子だが、どうせ昨晚も徹夜でもしたのだろう。

「うちのクラスはどうでしたか？」

「……楽しそうで何よりだ」

「はい。改めて、ここに来てよかったと思っています」

「ふ。そうか。レイ、三日間。頑張れよ」
「はい」

軽く手をあげると、師匠は去っていく。その後ろ姿を俺は、どこか嬉しそうに見つめる。

師匠に見せることができて良かった。俺はこのクラスでしっかりやれていると。大切な仲間と一緒に、進むことができていると。

その姿を、見せたかったのだから。

「おお！ ここがお兄ちゃんの教室かぁ……」
「僕たちは二人です。案内お願いしまーす！」

次によってきた知り合いは……なんと、我が最愛の妹であるステラだった。

それにもう一人は友達だろうか……？ 今日父さんも母さんも仕事でステラ一人で来ると言っていたが……。

そしてよく見ると、その大きめのメガネをかけた人物は……見覚えのある人だった。

「いらっしやいませっ！ ご案内しますねっ！」

近寄っていき、改めて気がつく。これは間違いなく、オリヴィア王女だった。

いつどこで、どうやってステラと知り合ったのか知らないが……

妙に仲が良さそうだった。

それに俺と視線があった際に、ニヤリと不適に笑っていたのは……
…気のせいではないだろう。

「あの……」

二人をテーブル席に案内すると、ステラがもじもじとしながら尋ねてきた。

「お兄ちゃん……じゃなくて、レイ」ホワイトはいませんか？」

「……ステラ。俺だ」

妹に女装姿を見せることに抵抗はない。俺はプロだからな。

だが隣にいるオリヴィア王女がどうしても気になってしまふ。しかし、どうすることもできないので素直にステラに俺の正体を明かす。

「お、お兄ちゃんっ!？」

「ああ……こほん。まあ、そう言う事情でして」

途中で女性の声に切り替えると、ステラは「はわわ……」と口元を押さえながら慌てている。

「お兄ちゃんは、お姉ちゃんだったの？」

「今回ばかりは……そうですね。お姉ちゃんです。リリーーお姉ちゃんと呼んでください」

「リリーーお姉ちゃん!？」

「はい」

「わーい！ お兄ちゃんがお姉ちゃんになった！ 私は幸せ者だねっ！」

「ええ。そうですね」

ステラはその場で大はしゃぎだった。

流石、愛すべき我が妹。順応性は抜群である。

「ふん。レイってば、妹ちゃんと仲がいいんだね。僕としては意外というか、なんと言うか……」

じつと半眼で見上げ来るのはオリヴィア王女。

果たして、この人はどうしてステラと一緒にだったのか。問い詰める必要がある。しかし、時間も時間。今は来客も増えてきて、先ほどのように雑談する時間は……ない。

「では、ご注文をどうぞっ！」

仕方なく、注文を取ると俺はいつものように伝家の宝刀を抜くのだった。

去り際に、「これは貸しひとつだからね？」とボソッと呟いたオリヴィア王女。

俺は冷や汗をたらしながら、二人を見送るのだった。

そして次にやってきたのは……意外な人物だった。

「お一人様ですかっ？」

「……なにをやっているんだ。氷剣……」

やってきたのはなんと……ルーカス＝フォルスト。

別名、絶刀の魔術師。

長い髪を後ろで一本にまとめ、中性的な顔立ちはあの夏に見たものと同様だった。

俺の姿を一瞬で見抜いたその慧眼は、流石……と言っべきだろう。

また、どうしてこの学院に、そしてうちのクラスにやってきたのは謎だが……俺は毅然とした態度で応じる。

「……文化祭でメイドをしている最中だ」

「……そうか」

彼を席に案内すると、注文したのは『萌え萌えオムライスセット』。

もちろんここで渋ることはない。俺はプロであり、スペシャリスト。相手が誰であっても、これは全力でこなす。絶対にだ。

「美味しくなあれっ！ 萌え萌え、きゅん」

いつもの掛け声とポーズを決めると、ルーカスはただその様子をじっと真面目に見つめていた。

「そうか……なるほど。いや、いいと思う。うん」

ペロリとオムライスを食べ終わると、彼は颯爽と去っていく。

一体、何をしに来たのだろうか。

「あー！ リリィー姉ちゃんだあつー！」

ドンツと腰に抱きついてくるのは、ティアナ嬢だった。久しぶりだが、どうやらとても元気なそうで嬉しい限りだ。

「こら、ティアナ。礼節はあれほどしつかりしなさいと……」

その後ろからやってくるのは、ついこの前会ったばかりのARIA
ー又だった。やれやれと言った様子で、ティアナ嬢を俺から引き剥
がす。

今日は二人ともにお揃いで、ポニーテールにしていた。互いに同
じ白金の艶やかな髪を、後ろで一つにまとめている。きっと、ティ
アナ嬢のものはARIAー又がやったのだろう。

「……ふふ。ティアナちゃん。お元気そうですね」

「うんっ！ 元気だよっ！」

「それではご案内しますね」

「ありがとうっ！ リリィーお姉ちゃん！」

可愛い。

その圧倒的な愛らしさに、心を打たれるが今は仕事に集中しなけ

ればなるまい。

アリアーヌとティアナ嬢を席に案内すると、注文するのはもちろん『萌え萌えオムライスセット』だ。

「美味しくなあれっ！ 萌え萌え、きゅーん」

伝家の宝刀を抜く。すると、ティアナ嬢は嬉しいのか、楽しいのか、わいわいと騒ぎ始める。

「わーいつ！ 萌え萌えきゅーん！」

俺を真似てか、彼女もまたオムライスにハート型に手を形作る。とても喜んでいるようで、俺としてもやった甲斐があるというものだ。

「あ……えっと。レ……じゃない。リリー、あなたは一体どこに向かっているんですの……？」

訝しい目で見上げてくるアリアーヌだが、もちろん毅然とした対応をみせる。

「私はプロなので」

「ぶ、プロですか？」

「スペシャリストでもあります」

「は……はあ……」

「では、ごゆっくり」

アリアーヌはまだ戸惑っているようだが、ティアナ嬢と二人でオムライスを頬張り始めた。

とまあ……色々と知り合いと出会い、最後には彼女がやってきた。

「うわぁ……繁盛していますね」

「あ！ あれってレイ？」

「うわ！すごい綺麗ですねっ！」

「いえ。レベツカ様にギリギリ届かないくらいかと。ええ」

そこにいたのは、レベツカ先輩とディーナ先輩。初日最後の接客は、この二人になりそうだった。

第130話 誰よりも優しいあなた

「いらつしゃいませ」

この一時間で、かなりの数の接客をこなしてきた。『萌え萌えオムライスセット』の売り上げもきつとそれなりのものになっているだろう。

しかし残念ながら、もう時間が迫っている。

そんな時にやってきたのは、レベツカ先輩とディーナ先輩のお二人だった。

見回りのついでにやってくると言っており、来れない可能性の方が高いと聞いていたが……こうしてわざわざ足を運んでくれたのだ。

最後かつ、先輩方だからこそ、最高の接客をしようではないか。

「オススメはありますか？」

二人を席に案内して、レベツカ先輩がメニューを見ながらそう尋ねてくる。もちろん答えは、アレしかない。

「そうですね……『萌え萌えオムライスセット』がオススメです」

高く、可愛い声で俺はそう告げた。

「ではそれを二つで」

「え！？ 私もですか！？」

「ではディーナさんは別のものにしますか？」

ディーナ先輩にも注文して欲しいところだが、ここは俺から強いるわけにもいかない。

レベツカ先輩のアシストを期待するしかないが……。

「ま、まあ……レベツカ様がそういうのでしたら……」

了承してくれたディーナ先輩。そして俺は注文を受けると、すぐに厨房に向かう。

「『萌え萌えオムライスセット』二つ入りました。今日のラストです」

と、そこにはちょうどアメリカがいた。ずっと接客しているにもかかわらず、まだ疲れは見えない。

「あら。これでラストなの？」

「ええ」

一応、客にも聞こえる距離感なので女性の声はキープしておく。

「……何だかレベツカ先輩と最近仲がいいみたいだけど？」

コソツと小さな声でアメリカがじつと見つめてくる。俺としては、何もやましいことはないので淡々とそれに答える。

「そうですね。以前より、距離は縮まったと思いますが……」

「ふーん。ふーんっ！」

「でもまだ……先輩の本当の心は見えませんか」

すると、アメリカはスツと表情が落ち着き……冷静なものに変わる。

「先輩。悩んでいるの？」

「ええ。間違いないですね」

「そうなんだ……やっぱり、婚約の件。何かあるの？」

「だと思います」

「そっか。なら、やっぱりあなたが必要ね」

柔らかい笑みを浮かべ、俺の肩をトントンと叩いてくるアメリカ。

「ねえレイ。あなたはきっと　いや、なんでもないわ。じゃ、私はいくわね」

「はい」

何かを言いかけた彼女は、厨房から料理を受け取るとそのままテーブルの方へと戻っていく。

「レイ。上がったぞ」

「ありがとうございます」

そして、アルバートから『萌え萌えオムライスセット』を受け取ると、俺はいつものように……伝家の宝刀を抜く。

「美味しくなあれっ！　萌え萌え、キューン」

もちろん二つ注文があったので、二回やっておいた。するとレベルッ力先輩は、パチパチと拍手を送ってくれる。

「うわぁ。すごいですっ！　すごく可愛いですねっ！」
「恐縮です」

一方のディーナ先輩は、難しそうな表情をしていた。

「先輩。どうかしましたか？」
「……いや、可愛いけどさ。超絶可愛いけどさ」
「ありがとうございます」

その場で丁寧に、お辞儀をする。

「この元があれって考えると、ちょっとね……」
「もうっ！　それは言わない約束ですよっ！」

と、わざとらしくそう言ってみるが……相変わらず、ディーナ先輩は複雑そうな表情をしていた。まあ……こればかりは仕方がない。

その後、オムライスを召し上がった二人は教室を去っていく。

「リリーさん。とても美味しかったです。それにとても可愛かったですよ？」

「ありがとうございます」

「お疲れのところ悪いけど、この後よろしくね」

「ディーナ先輩。了解いたしました」

そして俺は、二人を送った後はすぐに次の仕事が入っている。

「アメリカ。俺はこれで上がる。すまないが、あとはよろしく頼む」
「十分すぎるほどよくやってくれたわよ。他の子もかなり休憩に入ることが出来たし。一人で何人分もの仕事を本当にしちゃうんだから」

「わがままを言っているからな。当然だ」

「じゃ、行つてらっしゃい」

「ああ。行つてくる」

教室の隅で、そう話すと俺は颯爽とその場から去る。向かうのは、着替えに使用した空き教室。そこで素早く女装からいつもの姿に戻ると、改めて姿見で自分の容姿をチェックする。

化粧の落とし忘れなどあつてはいけなからな。

「うむ……大丈夫だな」

そして俺は空き教室を出ていくと、向かう先は生徒会室。

「レイ＝ホワイトです。失礼します」

ノックを三回ほどして、俺は室内に入る。そこには、レベツカ先輩とディーナ先輩が待機していた。

「レイさん。早いですね」

「遅れがあつてはいけないので」

そしてディーナ先輩は立ち上がると、俺の方に近寄ってくる。

「レイ。頼んだわよ」

「……はい」

レベツカ先輩には聞こえないようにいうと、俺と入れ替わるようにしてディーナ先輩が出ていく。

実は彼女とは、昨日あることを話していたのだ。

「レイ。明日の一時過ぎからの見回りだけど」

「はい」

「レベツカ様と行動することを許可するわ」

「……元々はディーナ先輩がする予定では？ それに男性の自分と二人で見回りをするのはよくない、というお話を聞いていましたが」

そう。レベツカ先輩はすでに婚約の身の上。男性と二人きりなのは外聞が悪いということで、先輩と人の多い場所で二人きりになるのは遠慮していたのだ。

そのような背景もあり、文化祭が開催される三日間はレベツカ先輩と二人きりになることはない……と思っていたのだが、ディーナ先輩は俺に小さなブローチを渡してくる。

「これは？」

「認識障害の魔術を組み込んであるわ。少量の第一質料プリミティブを流せば、起動するから。一応手作りだけど、問題ないはずよ」

「……なるほど」

俺はじつと、そのブローチを見つめる。小さな向日葵ひまわりを模したブローチ。しかし認識障害の魔術をこれに組み込むなど、それなりに高い技術が要求される。

だというのに、ディーナ先輩はこれを自作したという。

それが意味するところは……。

「よっぽど近距離に寄らない限り、男子生徒とは思われないはずよ。周りからは女子生徒に見えるように設定してるから」

「そんな高度な魔術を……どうして俺に？」

「レベルカ様はやっぱり、この文化祭を楽しむべきだと思うの」

真剣な声色。

そして先輩は話を続ける。

「私は去年、レベルカ様と楽しんだし。それに……今はちょっとね。でも、レイになら任せてもいいかなって。前も言ったでしょ？ あんたのことは信頼してるって」

「先輩。しかし、自分でいいのでしょうか……」

少しだけ不安を吐露してしまう。

レベルカ先輩とディーナ先輩は幼い頃からの親友であり、その間に俺なんかが入ってもいいのかと……そう考えてしまう。

それを分かっているのか、先輩は俺の側に近寄ってくるとギョッと両手を包み込んでくれる。

「レイもそんな不安そうな顔をするのね。意外だね。いつも毅然としてるから」

「……俺はまだ、人との距離感を測りかねています。その心に触れ

るのが、怖いというべきでしょうか」

「そつか。レイも色々と過去にあったみたいね」

「……はい」

先輩は俺の過去を聞かない。ディーナ先輩にならば、話してもいいと思っっている。でも先輩は、俺のことを気遣って何も聞かないのだ。

分かっていた。

彼女はずっと、優しい人だと。

俺が園芸部に入ろうとした時、反発したのはレベツカ先輩のため、それに他の部員のためだった。自分から嫌われ役を買って出たのは、後になって理解した。

俺はそんな優しいディーナ先輩のことが大好きだった。

だから先輩の前では、つい……不安が溢れてしまった。今までなら、それを抱え込んでいた。

だが、先輩になら言ってもいいと。受け止めてくれると。

きつと無意識に、そう考えていたのかもしれない。

「私はね。レベツカ様のことが大好きで、いつも彼女のことを考えている。その苦労は、三大貴族の辛さは、目の前で見えてきたから。でもね。レイのことも最近は大好きなのよ」

「……そうなのですか？」

「ええ。どこかぶっきらぼうで、愚直で、真っ直ぐな後輩。レイの

悩みは分らない。けど、レベツカ様と触れ合うことでレイも成長できるかなって。それにもう、私じゃあ届かないしね」

そう笑うディーナ先輩は、どこか寂しそうだった。

本当は俺の役目を自分でやりたいだろう。でもレベツカ先輩と、俺のことを考えてそうしない。

本当にディーナ先輩は優しい人だ……。

そして俺は、その場で丁寧に一礼をした。頭を深くさげ、その想いを無駄にしないためにも。

「先輩のご好意。無駄にはしません」

「うん……よろしくね。レベツカ様のこと」

「はい」

そして今に至る……というわけだ。

「レイさん。では行きましょうか」

「はい」

レベツカ先輩に促されて、俺は一緒に肩を並べて生徒会室を後する。

ディーナ先輩がすでにレベツカ先輩にこの事は伝えてあるらしい。

そして俺は、ポケットから向日葵のブローチを取り出すと、第一
マテリア
質料を流し込む。
フリマ

それを丁寧に胸元につけると、二人で見回りに向かうのだった。

第131話 先輩とデート？

「それにしても」

二人で校舎内の見回りを行う。

レベッカ先輩は訝しそうな顔で俺のことをじっと見つめてくる。

「この距離ですと普通に見えますね」

「そうなのですか？」

「はい。でも……」

スススと移動すると、先輩は俺から距離を取る。

「ちょっと離れると、ディーナさんのような……？ 生徒に見えますね」

「おお……なるほど。流石はディーナ先輩ですね。見事な魔術の腕前です」

「そうですね。彼女は昔からこのようなものを作るのが得意で……」

どこか懐かしそうに、先輩はしみじみと呟く。

レベッカ先輩とディーナ先輩。この二人の関係性もまた、少しずつ変化しているのだろうか。

人は変わらずにはいられない。月日が経てば 必ずではないが 変化することも多いだろう。幼い頃からずっと同じままではい

られない。そんなことも起こり得るのは知っている。

俺だって、そうだったから。

そして先輩に改めてディーナ先輩のことを尋ねてみる。

「ディーナ先輩とは、いつからの仲なのですか？」

「そうですね……物心ついた時には、パーティーで顔を見るようになっていました。彼女の家であるセラ家は、上流貴族なので自ずと会う機会が多くなり……そこからですかね」

「なるほど」

「当時、私は同い年の友人などいませんでした。三大貴族の子どもはほぼ例外なく、敬遠されます。アリアーヌさんのように活発な子もいますが、私とアメリカさんはその中でも……ちよつと浮いていましたね」

先輩の過去は詳しくは知らない。

アメリカには本人には、彼女の心の内を聞いているが……レベツカ先輩はいつもどこか一步引いているようなそんな印象を抱いている。

レベツカ先輩は聡明で、美しく、麗しいお方だ。アメリカとは異なり、その立ち振る舞いに迷いはない。ただ、どこか距離感がある。

確かに仲良くはなったと……自分でも思うが、それでも大きな分厚い板のような隔たりがあるような感覚がある。

「そして私は、ディーナさんに会いました。初めはとても穏やかで、引っ込み思案な子だと思いました」

「……それは意外ですね」
「でしょう?。」

ふふつと、口元に手を持っていき微笑を浮かべる。

「でもある時から、彼女は変わりました。私を守ってくれたためか……その真偽は定かではないですが、とても強い人になったと思います」

「……先輩にとって、ディーナ先輩は特別な人なのですね」

そう言葉にすると、先輩がその場に立ち止まる。

俺は振り返ると、周囲の喧騒に吞まれるようにして、ポツンとレベッカ先輩の姿が際立ってみる。

周りの生徒たちは文化祭を楽しんでいる。出し物をしている生徒たちも、この文化祭にやってきて人たちもみんなが、楽しそうに笑っている。

そんな中で、俺と彼女は向かい合う。

まるでこの世界の時が止まってしまったかのように。

そして先輩は、俯いたと思いきや……ボソリと呟いた。

「レイさんには、そう見えますか?。」

その声は今まで聞いた中でも、一番自信のなさような……声色。不安が入り混じっている、感情のこもったものだ。

そして初めて、先輩が弱さを見せたと……俺は思った。

ギュッと両手を握りしめて、俺のことを見上げてくる。

交差する視線。それは微かに、熱を帯びているように思えた。

「はい。お二人はとても仲がいいのだと、そう思っています」
「そうですか」

ニコリと微笑む先輩。安心したのか、雰囲気が少しだけ柔らかくなる。

「でも、ディーナさんも心配症というか……」

「この魔道具ですか？」

「はい。でも、その……レイさんと文化祭を一緒に回ることができて、嬉しいですけどね。あなたにはこの文化祭を楽しんでほしいと思っていましたから」

「そう思っていたのですか？」

「はい。生徒会の件で、ただでさえご迷惑をおかけしたのです。そう思うのは至極当然です」

「……なるほど。先輩は優しい人ですね」

「ありがとうございます」

そしてその後は、二人で色々な場所に回った。今のところ、何も問題はなく恙無く進行している文化祭。むしろ、本格的に多くの行事が始まるのは二日目からだ。

事前に一日目は特に何もないだろうと聞いていたので、特に驚いてはいないが、それでも多くの人を楽しんでいるようで自分のことのように嬉しく思う。

俺はそんな人の様子を、きつと笑って見つめているに違いない。

感慨深さに浸りながら、人の喜びで溢れているこの場所が、何よりも好きだと思った。

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会もそれなりに楽しいと思ったが、文化祭はまた一味違う。方向性が違うと言えいいかもしれない。

文化祭は、いつもいるこの校舎で行われる。いつもの場所が、そんな風に変化して俺はやはり……どこか郷愁めいたものを感じる。

「レイさん？　どうかしましたか？」

「いえ。それよりも先輩。お昼は食べましたか？」

「まだですけど……？」

「では、二人で軽く食べましょう」

「えっと……一応、お仕事の途中ですけど……」

「ディーナ先輩に言われているのです。適度に休憩は取っておけとそれにレベツカ先輩は無理をするから、あんたがしっかりしなさいと」

「もう……ディーナさんったら……」

ブスツとした顔で、小声で不満を漏らす。

今日は先輩の色々な顔が見ることができて、とても新鮮だ。

俺たちは外にやってくると、校舎から正門へと続く真っ直ぐな道で開かれている店で食事を買うことにした。

選択したのは、たい焼き……と言うお菓子だった。俺は初めて食

べるのだが、先輩曰くとても美味しいとか。なんでも、数年前に東洋から輸入され始めた品らしい。

鯛という魚を模した、お菓子らしいが……なかなか香ばしい匂いが漂ってくる。

「先輩は何味にするんですか？」

「そうですねえ……むむむ。迷います……」

じつと商品を真面目に見つめる。それは本当にどれを食べていいのか迷っている……そんな真剣な表情だった。

「では、私はカスタードをお願いします」

「自分はいんこで」

と二人で注文すると、すぐに紙に包まれた温かい焼きをもたらす。

少しだけ肌寒くなって季節にはちょうどいいかもしれない。

そして二人で人気の少ない^{ひといけ}場所に移動すると、ベンチに座って早速たい焼きを食べてみることにする。

思えば、先輩とこうして二人で並んで食事をするのも慣れたものだ。

「では失礼して……」

俺は頭の方からパクリとそれを頬張る。すると、あんこの甘さと生地の手触りが上手く合わさり、綺麗なハーモニーを奏でるように調

和を保つ。

「うん！ 美味しいですね、先輩っ！」

「ふふ。そうでしょう？ では私も、失礼して」

小さな口を開けると、はむと頬張る先輩。そして彼女もまた、すぐに幸せそうな表情を浮かべる。

「う〜んっ！ 美味しいですねえ……っ！ やっぱり私はカスタードが好きです！」

カスタードか。

確かに、この生地にはあんこだけではなく、カスタードもいい感じにマッチするだろう。

そう思っでじつと先輩の手元を見つめていると、彼女はそれ俺の方へと向ける。

「その……ちょっと食べますか？」

「おお！ いいのですか？」

「はい。そんなに食べたそうに見つめられると、あげないと可哀想ですから」

「はは。すみません。ちょっと味を想像してしまいました」

レベツカ先輩は左手で髪を耳にかけるようにして掻き上げると、俺に渡してくるのではなく、ズイッと口元にそれを運んでくる。

「……あ、あ〜ん」

「では失礼して」

先輩の食べかけの部分をパクリと頬張る。そして口の中で、その味を楽しむことにした。

なるほど……やはりカスタードも抜群の美味さだな。このたい焼きとやらを発明した人物は、それは偉大な人物に違いない。

と、考察しているとレベッカ先輩もどうやら俺のものを食べたそうにしていた。

「自分のも食べますか？」

「え……！ いいんですか？」

上目遣いでじつと見上げてくる。

こちらが一方的にもらっておくのは悪いだろう。そして先輩と同じように、それを口元に運ぶ。

「はいでは、どうぞ」

「失礼して……」

はむと俺の食べかけの部分を頬張る。すると、ふにゃつと緊張が解けたような雰囲気になる。

「はあ……あんこも美味しいですねえ」

「思ったのですが、先輩は甘いものがお好きなようで」

「それはもちろん！ 女性としては、甘味は押さえておくべきですからっ！ 常識ですよ？」

「そ、そうですね……」

豪語するが、俺の周りにいる女性はそこまで甘味は好んでいない。師匠はもっぱらアルコールとそのつまみだし、アビーさんは辛いものの、キャロルはなんでもよく食べる。キャロル曰く、甘いものを食べるのはあくまで流行を押さえるためと言っていた。

と言っても、それをここで言うのは野暮というものだろう。

「先輩。楽になりましたか？」

「あ……」

その声を漏らす。

どうやら、緊張は完全に解けたようだった。

「あはは……実は生徒会長として、文化祭をちゃんと運営できるか心配でして……レイさんには見抜かれていたようですね」

顔を赤くして、先輩は髪をクルクルと指に巻きつけていた。

「いえ。緊張は誰にでもあることかと」

「そう言ってもらえると助かります。それでは、今日も残りの時間はしっかりと見回りをしましょうっ！」

「はいっ！」

そして先輩と二人で、再び文化祭の喧騒の中へ進んでいく。

第132話 文化祭初日、終了

「ではレイさん。お付き合いいただき、ありがとうございました」
「いえ。では、自分はこれで失礼します。明日以降もよろしく願います」
「はい」

レベツカ先輩と別れる。

あれから二人で校舎の外、それに校舎の中を見回ったが特に何も起きることはなかった。

現在の時刻は午後三時。あと二時間もすれば、文化祭初日が終了する。

そして俺は、自分の教室へと歩みを進める。

その際にふと、振り返ってみる。

そこにはレベツカ先輩が悠然と逆方向に歩いていく姿が見えた。

二人で見回りをしている時は、楽しそうだったと……思う。

もちろん仕事をしているので、楽しみかどうかは二次なのだが……俺は考えていた。レベツカ先輩がみんなに文化祭を楽しんで欲しいと願っているのは分かる。

だが先輩はどうなんだ？

肝心の彼女は心からこの文化祭を楽しむことができているのか？

そんな先輩の後ろ姿は、あの夏のように……どこか郷愁が漂っているような……そんな気がした。

「アメリカ。ヘルプに入る」

「レイ？ 今日にはもう戻ってこないはずじゃ？」

「時間ができたのでな。残り時間は手伝わせてもらう」

教室内に戻ると、すでに人はかなり少なくなっていた。

俺がリリーの時は並んでいる人もいたのだが、今は閑散として
いる。

それでもまだ客がいるということで、クラスメイトたちはメイド
喫茶を回していた。

本当はあの後、生徒会室で後日の打ち合わせをする予定だったの
だが、それは明日の朝になった。今日は想定していたよりも、文化
祭が落ち着いていたということでの判断だ。

俺としてはレベッカ先輩が無理をしないか心配なのだが、そこは
ディーナ先輩とカバーしていこうという話になっている。

「アルバートにエヴィ。二人とも、休憩は取っているのか？」

「……ん？ レイ。戻ってきたのか？」

「エヴィ。少し疲れが出ているのでは？」

「こんなもんなんともないぜ！　と言いたいところだが、そうだな……　ちよつと疲れているかもな」

エヴィはずつと調理をしていたわけではないが、それなりに疲労感が溜まっている様子。それはアルバートも同様だった。

「アルバートも疲れているだろう。あとは俺に任せてくれ」

「……しかし」

「今は客も少ない。十分、一人で回せる」

「そうか。助かる」

厨房　もちろん簡易的なものだが　に入ると、俺はエプロンを巻いてさつそく調理に入る。ついでに明日の作り置きも、少しだけしておこうと思い俺は包丁を手にとると、一心不乱に調理を開始

その間に、アメリカから時折注文が入ってくるのでそれに適宜対応しつつ……時間が進んでいくと

本日の文化祭が終了する時間になった。

「はぁ……　つつかれたぁ……」

教室の扉を閉めて、中に客がないのを確認するとアメリカは椅子にぐったりと座り込む。

唯一このクラスでアメリカだけが、今日一日働き尽くめだった。

俺としても、それはやめた方がいいと言ったのだが初日はどうしても頑張りたいということで、止む無く了承したのだ。

やり切った彼女は、椅子にぐったりとメイド服姿のまま座り込む。

「アメリカ。紅茶だ。アイスがよかっただろう？」

「え……でもこれって」

「奢りだ。材料費は俺が出している別のものだ。遠慮せずに、飲んで欲しい」

「あ……ありがとう」

その顔は、まだ赤いままだった。おそらくずっと働いた疲れが残っているのだろう。綺麗に整えた髪の毛もわずかに、崩れ始めていた。

クラスメイトたちは颯爽と片付けを始めて、明日の準備を始める。俺もまた、手伝おうとしたのだが……みんなにこう言われてしまった。

「ホワイトはいいって」

「ああ。お前、今日はめっちゃ頑張っただろ？」

「それに生徒会の仕事もしてるんでしょ？ 私たちに任せなって！」

「うんうん！ リリーちゃんにはまだ出てもらわないと困るしね！」

その言葉を聞いて、俺は素直に従うことにした。本当にいい仲間を持ったと、心から思う。

「お疲れだったな。アメリカ」

「レイも頑張ったでしょ？」

「そうだが……俺は休憩も入っていたしな。生徒会の手伝いは意外と暇だな」

「ふん。で、誰と今日は一緒だったの？」

疲れているアメリアだったが、アイステイーを飲んで元気になったのか背筋をスツと伸ばす。

「レベツカ先輩だ」

「二人きりで？」

「見回りをしていた」

「ふゝん。ふゝんっ!!」

半眼で俺の目をじつと射抜いてくると、プイッと横を向いてしまふ。

「ど、どうした？ 何かあったのか？ もしかして疲れが」

「そうじゃないけどっ！ その……まあ、いいけどね。レイが生徒会を手伝うって言った時から、思ってたし。でも！」

トントンと俺の胸元を指で突いてくる。

「レイってば、無自覚なところがあるんだから……変なことしちゃダメよ？」

「もちろんだ。変なことなどしない」

「……認識に齟齬があるけど、まあ……いいや。今日は頑張ってくれたし。それに言っても直らないと思うし」

アメリアはアイステイーを飲み干すと、その場に立ち上がった。

「じゃ、着替えてくるから」

「わかった。クラスメイトは全員残しておいた方がいいだろう？ 明日の打ち合わせもあるしな」

「そうね。お願い」

そうして彼女は、教室を後にするのだった。

「今日の売り上げだけど……」

教室内に全員が集まり、今はあの喧騒も束の間。

静寂が場を支配していた。

「なんと、予想を上回っていました！ みんなありがとう！ この調子だと、きっと優勝できるかも！」

『おお……！』

全員が感嘆の声を漏らし、拍手をするクラスメイトもいた。俺もまた、大きな拍手をみんなに送る。

「みんな！ すごい！ これはすごいぞ！ きっとこれは優勝できるに違いないっ！」

俺はあまりの大きな成果に、テンションが上がっていた。拍手をしながら、みんなに向かってそういうと全員ともに満更ではない顔をしていた。

「そっか……俺たち頑張ったよな！」

「ああ！ 間違いねえ！」

「そっよ！ よくやったと思うわ！」

「うんうん！ 初めての試みにしては、すごいんじゃない！？」

水面に波紋が広がっていくように、徐々に声が大きくなっていく。

達成感。

俺たちは予想を上回る仕事をしたことができたのだ。それは何よりも、称賛すべきことだろう。

だが、アメリカはまだ油断していなかった。

「みんな静かに。ここからが大事なの」

トントンと黒板を叩いて、全員の注目を集める。そして手元にある資料を見ながら、アメリカは話を続ける。

「今日レイに、リリーとして出てもらったけど……きっと噂が噂を呼んで、明日は倍のお客さんが来ることになると思うわ。これは想定内だけど、まだ油断しちゃダメよ」

真剣な声音で現状と、そして今後の展望を語るアメリカ。

その瞳には、しっかりと今後の未来が見えているのだろう。

「食料もまだ十分だけど、みんなの疲労とかもあると思う。今日は初日だったしね。それに、最終日に行くにつれて、お客さんは増えるわ。ピークは三日目のお昼。それまで、みんなで頑張っていきましょう」

『おー！』

改めて、このクラスはしっかりと団結していると……そう思った。

「レイ。ちょっといい？」

「どうした、アメリカ」

解散となり、寮にみんなが戻っていく最中、アメリカに声をかけられた。それに隣には、エリサもいた。

「リリーーだけど。明日もいける？」

「もちろんだ。準備は万端だ」

「レイくん……！ リリーーちゃん、すごく可愛かったよっ！」

「ありがとうエリサ。でも、エリサも可愛かったぞ？ それに接客もすっかりと出来ていたようだな。苦手と言っていたが、本当にすごいと思う」

「え。えへへ……ありがとう」

微笑みを浮かべるエリサ。

そしてもちろん、すかさずアメリカにも声をかける。

俺は学習し、それを活かすことができるということを証明しよう。

「アメリカ」

「な、何？」

クルクルと紅蓮の髪を指に巻きつけている。これは彼女の癖だと最近気がついたが、妙に可愛い。

「アメリカも本当によく頑張ったと思う。今日はずっと働き詰めだったんだろう？」

「そうだけど……」

「明日も頑張っていこう。最高の文化祭にするために」

俺が笑顔を浮かべると、アメリカとエリサはポカンとした表情を浮かべる。

「どうかしたのか？」

「いや。最近、レイってば……よく笑うようになったって」

「う……うん。でも、すっごくいいと思うよ！」

「そうか……いや、これはきつとみんなのおかげだと思う」

俺は自然に笑うことができるようになっていたとしたら、それはきつと……みんなのおかげに違いない。

師匠たちと出会い、この学院で友人と出会い、心から笑えるようになった。

俺はきつと人として大きく成長していくことができたのだろう。いやきつとこれからも、俺は成長していく。みんなと共に。

明日の文化祭も頑張っていこう。

改めて、そう誓った。

第133話 交差する世界

「ふう……」

ベッドで一息つく。

すでにエヴィは眠ってしまったようで、微かに寝息が聞こえてくる。

俺はこの暗闇の中、文化祭のことを振り返っていた。

概ね、初日は成功と言っていいだろう。メイド喫茶はかなり繁盛した。それに、リリーとしての役目も十分に果たすことができた
と自負している。

しかし、アメリカの言うとおり、まだ油断してはならない。むしろ、これからが本番なのだと自分にしっかりと言い聞かせる。

「……」

クラスでのことに懸念はない。

あるとすればそれはやはり、レベッカ先輩のことだ。最近比以前に比べて、調子が良いように思える。それでも時折、顔に陰が差すのを見逃してはいなかった。

今日も二人で見回りをしてる時は、普通そうに見えた。

だがそれはきつと、普通に見えるように振る舞っているから……
だと思っている。

そして俺は今後のことも考えながら、微睡みの中へと落ちていく。

「レイ。レイどうした？」

「師匠……？」

夢。

夢を見ていた。

これははつきりと夢だとわかる。こうして過去のことを思い出すのは、久しぶりだ。

「お前が昼寝なんて、珍しいな」

「はい。疲れているのでしょうか」

これは、確か……極東戦役が本格化する前のことだっただろうか。
今となつては、この記憶を思い出すのも遙か昔のように思える。

「ふう……」

「またお酒ですか？ 大佐に怒られますよ。それにキャロルもうるさいですし」

「ばっか。お前。飲んでないとやってられないんだよ……」と言いた

いところだが、そうだな。今日はやめておこう」

師匠はアルコールを飲むのをやめて、代わりにじっと窓越しに空を見つめる。椅子の背もたれに体を預けて、ただじっとその先を見据える。

「葬式」

「……はい」

「明日だ」

「……分かりました」

「なら良い。私は少し寝る」

「はい」

師匠はそう言っ、寝室に向かった。

彼女が言った葬式、というのは部隊の仲間の葬式である。先日の作戦で、その命を戦場で散らしてしまった……仲間の葬式。

俺は葬式に参列するのは初めてだった。村で失った人々を弔うことはできなかった。両親もどうなっているのか、もう知らない。ただ、死んでいるということだけは知っている。

そして俺は師匠と出会い、数多くの大人たちに出会ってきた。

みんな優しい人ばかりだった。

それでも、戦場で死んでしまう人もいた。昨日まで一緒にいたのに、あんなに仲睦まじく話していたのに、もういなくなってしまうた。

どうしてだろう。どうして俺は、また失ってしまうのか。

そうして翌日。葬式の日がやってきた。

喪服に身を包んで、教会に並ぶ。今日は不幸なことに、雨が降っていた。それも土砂降りだ。これはきつと、俺たちの慟哭の表れなのだろうか。

「……」

葬儀が始まった。

棺桶の中にいる彼に、花を載せる。この花の名前は知らないが、とても綺麗な花だった。戦場で一輪の花が咲き誇っていたのを思い出した。

そして、彼の体にはたくさんの真っ白な花が置かれる。

涙を流し、嗚咽を漏らす声が聞こえる。

ふと、隣に立っている師匠を見上げる。師匠はただ、淡々と彼のその死体を見つめていた。

彼は眠っているだけで、また起き上がってきそうだ。そう思うほどに、綺麗な顔だった。

いつものように、俺とポーカーなどカードゲームをして遊んでくれそうだった。でも、そうすることは二度とない。彼はもう、死んでしまったのだから。

涙は戦場に置いてきた。別れは戦場で済ませてきた。

俺は、彼の最期を見届けた唯一の人間だ。

その言葉も、すでに聞いている。

「レイ……お前は生きろ。俺は先に、この空の果てでお前の成長を見守っているさ。達者でな、レイ。お前と会うことができて、俺は本当に幸せだった。ありがとう、レイ」

その言葉を聞いて、俺はひたすらに涙を流し続けた。

ただただ悲しかった。どうして彼が死ぬ必要がある。どうして、どうしてなんだ……と考えるも、答えなどない。そこに意味などないからだ。

もう帰ってくることはない。

その事実だけが、残っているだけ。

改めて、俺は戦場の非情さを知った。

「うっ……うっ……ぐすっ……うっ……」

キャロルが隣ですっと涙を流している。いつもはお調子者であるが、キャロルは情に厚かった。仲間が死んだ時は、誰よりも涙を流す。

そして、埋葬。

雨が降り注ぐ。まるでバケツでもひっくり返したかのような、土砂降り。

そんな中、師匠とアビーさんは傘を差さなかった。じつと何かを思っているかのように、この強烈な雨に打たれる。

俺は泣き崩れるキャロルのそばで、彼女の背中を撫でる。今はなんとなく、こうすべきだと思った。今の俺にはこんなことしか出来ないから。

「……」

傘を退けて空を見上げる。

曇天。零れ落ち続ける、雨。

この世界の醜さを改めて、心に刻む。

人はいつか死んでしまうものである。いつかきつと、絶対に。だから俺はこれからも、数多くの死に触れていくのだろう。

そんなことを思いながら、埋葬される彼の姿を俺は心に灼きつけていた。

彼との思い出は、俺の心に残り続ける。

そしてその無念も、俺が背負う。そうすることで、その死は無駄

にはならないと、師匠に教えてもらったから。

「う……うう……っ」

キャロルは落ち着いてきたのか、嗚咽を漏らす事が少なくなっていた。そして、互い視線が交差する。キャロルの双眸から、止めどなく溢れる涙。

俺はそんな彼女と向き合う。

「レイちゃん……ありがとうね」

「いや。別に……いいよ」

「レイちゃんは、いなくならないでね」

「……うん」

キャロルにギュッと抱きしめられる。俺はそれを受け止める。もうすでに、傘は手放していた。

そして、キャロルから離れると師匠とアビーさんの元へと向かう。

二人とも黙っていた。

でもよく見ると、ただ静かに涙を流していた。

それは、土砂降りの雨によって流されていく。しかし、間違いない……二人は涙を流していた。

そうだ。

誰だってそうなのだ。

悲しい。

大切な人がなくなれば、悲しい。

心が苦しい。痛い。ずっとそれは、慢性的な病のように、心を蝕んでいく。それを背負って、俺たちはこれからも進んでいかなければならない。

ふと俺は、後ろを振り向く。これは夢だと分かっている。でも、なぜか後ろから視線を感じたのだ。

「レイさん……？」

そこにいたのは、レベツカ先輩だった。いつものように学院の制服を身につけていて、呆然とこちらを見つめている。俺の姿もまた、幼いものでは無く今の姿になっていた。

この世界に入り込んだ異質な存在。

俺とレベツカ先輩は、この夢の世界を共有していた。

「レベツカ、先輩？ どうしてここに？ いやこれは夢……のはずだ」

「レイさん。あなたは……一体、何者なのですか？」

「……」
これは夢だ。

答える義理などないし、会話が成立しているのも、俺の脳内が勝手にそうしているだけ。だが、正直に答えてみることにした。

夥しい量の雨に打たれながら、俺はボソツと呟いた。

「先輩。俺は」

「……夢、なのか？」

目が覚めた。

体はびっしょりと汗をかいていた。それと同時に、右目からツットと流れる液体。それは涙ではない。血液だった。

流れる血。

それを拭くと、俺は洗面所へと向かう。

手に付着した血を洗い流し、自分の目を確認する。どうやら血はもう止まったようで、痛みもない。

だが、あの夢のことがどうして脳内に過ぎる。

あまりにも生々すぎる夢。

夢自体は、珍しいものではない。特に、仲間の死んだ瞬間と、葬式はよく夢に見る。極東戦役が終わった直後は、酷いものだった。

問題は、最後に出会った先輩だった。

あの時代に、レベツカ先輩とは会っていない。それに先輩の姿は、今と同じままだった。

妙に現実感のある夢。

俺はどうしてもそれが、ただの夢とは思えなかった。

外を見ると、すでに朝日が差し込んでくる時間になっていた。

こうして文化祭二日目が幕を上げようとしていた。

第134話 私の心はどこに

文化祭二日目がやってきた。

初日は何の問題も起きることなく、無事に終了。

しかし二日目は、フィジークコンテストにミスコンが控えている。それは午後から講堂で行われる予定だが、すでに客の入り具合は昨日よりも多い。

エヴィはフィジークに出るために今日は午前中から筋肉の調整に入っているらしい。「打倒、部長だぜ！」と豪語していたのだが…果たして、あの圧倒的な巨躯を有する部長に勝てるかどうか。

一方で俺は、昨日と同じように午前中はキッチンで調理をしている。

アメリカの予想通り噂が噂を呼んだのか、明らかに昨日よりも客の入りが多い。午前中だと言っのに、この数は少し予想外だ。

「レイ。オムライス三つね！」

「了解したっ！」

アメリカから注文が入り、俺は手際良くオムライスを準備する。すでにかなり慣れてきたようで、あっという間に準備をしてオムライスを三つ渡す。

今は俺とアルバート、それに二人の男子生徒を加えて四人で回している。この人数でも割と余裕がないので、今の状況は本当にかなり大変だ。

果たして、俺がリリィーとして出ていく時にはどうなっているのだろうか。

そして時刻が十一時二十分になったところで、俺は昨日と同じ教室に向かい、女装をする準備を始めた。

教室から出て行き、颯爽と走っていくと……ちょうどぼったりとレベッカ先輩と出会う。

「あ……レイさん。どうも」

「レベッカ先輩。おはようございます。見回りの最中ですか？」

「は、はい……そうですね」

歯切れが悪い。俺の顔を見た瞬間、スッと視線を逸らしたのは間違いではないだろう。

その瞬間、俺は思い出していた。

今朝、見た夢のことを。

しかし、いや……まさか、そんなことがあるわけがない。

云うならば意識の共有。そんな現象は現代魔術では確認されていない。師匠にも、そんな話は聞いていない。

だがどうして、先輩はそんな態度をするのか……。

そう思って俺は尋ねようとしてみるが

「で、では私はこれで失礼しますね」

ペコリと頭を下げると、颯爽と先輩はこの場から逃げるように去っていく。

その後ろ姿を俺は、ただ呆然と見送るしかなかった。

俺もまた、触れていい話題なのか最後まで分からなかったからだ。

「はあ……はあ……はあ……」

逃げる。

できるだけ、レイさんから離れようとして私はその場から駆け出していた。

彼の顔を見た瞬間に、思い出してしまった。

朝方見た、夢のことを。

でもそれは、夢と云うにはあまりにも生々しいものだった。

葬儀。あまりにも大きな悲しみに包まれたそれは、その場の雰囲気

気だけで感じ取れた。

レイさんはまだ幼く、その中にはキャロライン先生や学院長もいた。それに一人だけ、よく目立つ綺麗な金色の髪に碧色あおいろの綺麗な瞳をした女性が、レイさんと話していた。

土砂降りだった。

曇天。そして、降り注ぐ雨。

冷たさは感じなかった。その時、私はこれが夢だと理解した。

明晰夢めいせいむ……というものかもしれない。

そして、その葬儀を遠くから見守っていた。

レイさんはまだ幼い。身長も今の半分くらい。

そんな彼は今とは違って、陰鬱な雰囲気を纏っていた。その双眸には闇しか映っていないような姿。私の知る彼とは、大きくかけ離れていた。

それと同時に私は思い出していた。

今まで見てきた夢の数々を。

彼は戦場で戦い続けていた。最前線で、仲間と共に、戦場を駆け抜けていた。相手の血に塗れ、自分の血に塗れ、悲鳴と怒号の支配する凄惨な戦場で戦っていた。

極東戦役だと分かったのは、その夢を見てしばらく後だった。

でもどうして、私はこんな夢を見るのか。それが不思議でたまらなかった。

だってそれは、夢にしてはあまりにも現実味を帯びていたから。

私は思ってしまう。これが、レイさんの過去なのだとしたら、彼の今の言動も理解できてしまう。彼の全ての行動に辻褄が合う。

「レベツカ先輩。これからよろしく願います」

頭を下げる彼を見て、初めは丁寧な人なんだと思った。

でも、どこか毅然としていて硬い雰囲気というか……そうだ。

彼は知り合いの軍人の方に似ている。

その時は、そう感じ取った。父の付き合いで、軍の方が家に来ることは何度かあった。その時に話した人の雰囲気と、酷似しているのだ。

でもそんなわけがない。

彼はまだ、一年生だ。ということは、それよりも前に軍にいたなどありえない。

この夢を見る時まではずっとそう思っていた。

そして、今朝見た夢でそれは確信に至った。

「レイさん……？」

思わず声をかけてしまった。すると彼の姿は幼いものではなく、
今と同じものへと瞬く間に変わる。

「レベツカ、先輩？ どうしてここに？ いやこれは夢……なはず
だ」

「レイさん。あなたは……一体何者なのですか？」
「……」

尋ねる。

彼の出自が一般人の家庭オーディナリーということを知っている。けれど、それ
だけではない。レイさんには、何か秘密があるのだと分かった。

「先輩。俺は」

言葉を続ける。

雨に打たれながら、私たちは互いの視線を交差させる。

そこから先、なんて言ったのか聞こえることはなかった。

悲しそうに、そして淡々と口を動かすレイさんの姿を心に焼き付けながら、私は目を覚ましたのだ。

「はぁ……はぁ……どうして逃げたんだろ」

ボソリと呟く。

先ほどばったりと出会ったレイさんから逃げ出してしまった。それはやはり、彼の過去がああ同じだと思ってしまっただろう。極東戦役を最前線で経験し、そしてあの金髪の麗しい女性に出会い、彼は成長していった。人として、魔術師として、大きく育っていく。

ふと思い出すと、あの女性はどこかで会ったことがあるような気がする……そう思いながら歩いていると、私はちょうど曲がり角で人とぶつかりそうになる。

ボーッと考え事をしていたせいだ。

すぐに頭を下げる。

「申し訳ありませんっ！ その、私の不注意でして……」

「いや構わないさ。こちらには何も被害はないからな」

「あ……」

「どうした？ ん……もしかして、レベッカ＝ブラッドリイか？」

きつとこれは運命の悪戯だ。

だって目の前にいるのは、その夢の中で見た女性その人だったから。

いや、この人のことは貴族のパーティー、それに魔術協会のパーティーで何度か見たことがある。

稀代の天才魔術師。リディア・エインズワース。

研究者としての実績も尋常ではないが、彼女は確か……【氷剣の魔術師】だったはずだ。

つまり、そんな彼女の元で育ったレイさんは……彼女の子ども？
いやそれにしても、年が近い。それに、彼は一般人だ。オーディナリー辻褄が合わない。

脳内で、様々な考えが巡る。

「大丈夫か？ 顔色が悪そうだが……」

「あ、いえ。その……申し訳ありません。えっと、お話しするのは初めてですが、リディア・エインズワース様ですよ」

「その通りだ。それにしても、大きくなったな。私が見た時は、まだもう少し幼かったが」

硬い口調だが、優しい声音で話す。

しかし、過去と違うところが一点だけある。

それは、彼女が車椅子に座っているということだ。

悟る。

レイさんの記憶の、あの戦いの最後を……私は知っているのだから。

全ての疑問が、夢で知った断片的な記憶が繋がる。それと同時に、私のある考えは有機的な意味を有する。

そして、私は好奇心でつい、尋ねてしまった。

「レイさんは……極東戦役で戦っていたのですか？」

そう言った瞬間、彼女の表情が強張り、鋭い目つきに変化する。

「レイに聞いたのか？」

「いえ……」

「では、どうして知っている？」

それは恐怖と呼ぶべき感情だ。私はその雰囲気の変貌に、足が震えていた。

怖い。怖いけれど、合っていたのだ。

私が夢で見て、彼が駆け抜けていた戦場は、本物。

レイさんは……あの極東戦役を本当に経験していたのだ。あらゆ

る悲しみを、悲劇を背負って彼は……この学院にやってきた。

私はついに、知ってしまった。

「ゆ、夢で……見たのです。レイさんが戦場を駆け抜け、そしていつも隣にはあなたがいました」

「続ける」

「そ、それで……最後にレイさんが、魔術領域暴走を引き起こしました。そこから先は、知りません。でも！ 夢で見たのですっ！」

信じて欲しい。そう思って私は語りかけてしまった。

本当はこんなことをすべきではないと、分かっているのに。私は求めてしまった。

レイさんの本当の姿が、知りたいと。

彼のことを理解したいと、なぜか思ってしまった。

「夢……意識の混濁か？ それにしては的確すぎる……何か魔術的な要因が絡んでいる？ まさかあの件と……そうか。いや、そう考えれば話はつながる。なるほど……これは思ったよりも根が深い話のようだ……」

独り言をぶつぶつと言っているが、私にはその内容が意味するところはない。

「レベッカ＝ブラッドリイ」

「は……はい」

「この文化祭が終了した後、私の家に来い」

「えっとその……」

「詳しくはレイに伝えておこう」

「は、はい」

「では失礼する。それと、くれぐれもその夢の話。他の誰にも言うなよ。絶対にだ」

「……わ、分かりました」

彼女は一人で車椅子を押していくと、私の視界から消え去ってしまふ。

壁に体を預けてズルズルとその場に座り込む。

呆然と、天を仰ぐ。

一体私は、そして彼は、何者なんだろう……。

第135話 二日目、開始

昨日と同じように、リリーと化した俺は接客を続ける。

「いらっしゃいませ」

リリー目当てに訪れて来る客が多いのか、昨日の倍近くの間がある。もちろん注文するメニューは、『萌え萌えオムライスセット』だ。

つまりこの一時間は、伝家の宝刀であるあのポーズと掛け声をやり続ける必要があるということだ。

クラスメイトには、流石に無理があるのではないかと……と心配の声も上げられたが、心配無用。

プロである俺は、一時間程度ならば卒なくこなしてみせる。

そして、宣言通り今日もまた一番乗りだったマリアの接客を終え、しばらくすると……やってきたのはカラーさんだった。

「いらっしゃいませ　お一人様ですか？」

「はい」

いつものように淡々と答えるカラーさん。そして彼女は席に着く直前、俺に紙をソッと周囲に見られないように渡してくる。

「ご注文はいかがいたしますかあ〜？」

「昨日と同じで」

「かしこまりました！」

厨房へと向かう途中、その紙に少しだけ目を通す。そこに書いてあったのは、暗号。これは軍人時代に使っていたものだ。それをすぐに読み解くと、なぜ彼女がここに一人でやってきたのかを理解した。

そして、カーラさんに『萌え萌えオムライスセット』を渡し、いつものようにポーズを決めた後、ボソツと呟いた。

「……それでは、よろしくお願いします」

「またのご来店を、お待ちしております」

あくまでリリーとして接客を続けた。

その内心、俺はあまり冷静ではいらなかった。そこに書いてあった情報は、このようなものだった。

『エヴァン＝ベルンシュタイン氏の情報を掴みました。今日の十九時に、アビー＝ガーネット氏の自宅にいらしてください』

とのことだった。

カーラさんは一週間で、彼の情報を掴んだのだ。そして、この文面と彼女の雰囲気から察するに……やはり彼には何かある、というのは間違い無いのかもしれない。

その後も、俺はパフォーマンスを落とすことなく、リリーとしての活動が続けるのだった。

「行つてきなよ!」

「うんうん。あとは私たちでやるからさ!」

「でも……」

ピークの間帯が過ぎ、教室内で揉めているわけでは無いが、話し合っているアメリカたち。

今日の午後からは、エヴィが出場するフィジークコンテスト、それにミスコンが開催される。

この日のために、シフトは調整しており、俺、アルバート、エリサ、それにクラリスも一緒にその勇姿を見に行くことになっている。

だがアメリカは、教室を離れるわけにはいかないと行って来る予定はなかったのだが……クラスメイトに行つて来るように言われているみたいだ。

妙に女子たちが熱のこもっている声で話しているのは、きっとアメリカのことを想っているからだろう。

「ここで逃すと、取られちゃうかもよ?」

「……え!?!」

「うんうん。ちゃんと見張っておかないとダメだよ?」

「そ、そうよね……! 見張っておかないとダメよね!」
「うんうん!」

何の会話をしているか不明だが、どうやらアメリカもまた俺たちについて来ることになったようだ。

それにしても、取られる、見張っておく、という言葉の意味はわからないがきつとそれはアメリカにとって重要なかもしれない。

そしてアメリカが制服に着替えると、四人でクラリスの教室へと向かう。

するとそこには、いつものように金色の美しいツインテールを靡かせた彼女が立っていた。

「あ……!」

俺たちの姿を認識すると、破顔してこちらに近寄って来るクラリス。

「も、もう! 遅いじゃ無いっ! って……あれ? アメリカは来れないんじゃないっけ?」

アメリカの姿を見て、不思議そうな表情を浮かべるクラリス。

「あはは……まあ、色々とあってね。来れるようになったの」「そっか! それなから良かった……って、別にみんな一緒に安心したとか、嬉しいとか、そんなわけじゃ無いのよ? ただ、アメリカもないといつも感じがしないなあ」と思って」

なぜか忙しくツイントールをびよこびよこと動かしながら、言い訳めいたものをするクラリス。

いつも思うが、あのツイントールはどうやって動いているのだろうか。

魔術的な要因なのは、間違いないだろうが……。

「クラリスは嬉しく無いのか？」

「……え!？」

「俺はアメリカと一緒に来れて、嬉しいと思うが」

「ま、まあ別に……? 嬉しく無いわけじゃ無いけど……もう!

レイは黙っていなさい!」

「……」

理不尽である。

久しぶり、というほどでもないが、クラリスは通常運転だった。

四人で改めて歩を進める。女子たちは三人で何やら盛り上がっており、俺はアルバートと今回のコンテストについて議論を交わしていた。

「やはり、本命は部長だろうか？」

「そうだな。アルバートの言う通り、部長の優勝が一番可能性が高い」

「しかし、エヴィもまたかなりトレーニングを重ねていたが」

「ああ。エヴィも今回のためにかなり積んでいる。これはわからないかもしれない」

エヴィの今回のコンテストへの意気込みは、なかなかのものだった。文化祭での活動をこなしつつ、毎日のトレーニングを怠ることはなかった。

食事制限もしっかりとこの日のためにこなし、今はおそらく最高の状態で待機しているに違いない。

「二人とも、ミスコンには興味ないわけ？」

と、その会話に入って来るのはクラリスだった。俺とアルバートの間にスツと入って来ると、ツインテールを揺らしながらそう尋ねてきた。

「うむ……正直言つて、フィジークの方が気になるな」

「レイと同じで、俺もフィジークの方が気になるな。今回は環境調査部の先輩が多く出場している。それに、他の部活の筋肉自慢が集まるらしい。見ものだな」

「ああ。間違いない」

アルバートと二人で、そういうとクラリスはあからさまに「はあ……」とため息をついた。

「これだから脳みそまで筋肉のやつは……いや、思えば三人ともに筋肉ばかり……」

「で、クラリスはミスコンが楽しみなのか？」

「え？ いや別に」

しれつと答えるクラリスは毅然としていた。

俺とアルバートは間違いなくこう思った。

ならなぜ聞いてきたのか、と。

「まあ……私もどつちかというところ筋肉の方が楽しみよね。それに、先輩たちが出るんだもの」

「そうか……」

「でも今年のミスコンは、色々とすごいらしいわよ！」

「どういう意味だ？」

「わかんないけど、みんなそう言っていたわ」

「ほお……」

ミスコンに関しては、ほぼ何の情報も入っていない。

誰が出場するのか、優勝候補は誰なのか。

そんなことさえも俺は知らない。

レベツカ先輩やアメリカなどが出るのならば、もう少し興味があつたのだが二人とも辞退している。俺は流石に、この学院の生徒を全て知っているわけではないが、この二人の美貌を超える人物が果たしているのだろうか。

特にレベツカ先輩は、色々と超越しているお方だ。

アメリカは最近どこか様子が変わるので、俺としては美しい人というよりも、友人としての側面が強い。

一方で、レベツカ先輩は麗しいままである。

きつと先輩が出れば、優勝間違いなしだと思うが……。

そして、俺たちはついに講堂にたどり着いた。すでに中には大勢の人間が座っており、その喧騒の中を進んでいき、空いている席に座った。

今回のコンテストに関しては、レベツカ先輩とディーナ先輩。それに他の園芸部の先輩方が運営をするらしい。俺は流石にそこまでしてもらうのは悪い、ということこそちらには参加していない。

「お……いよいよ始まるのか」

明かりが落ちると、壇上だけに照らされるライト。

そして、レベツカ先輩が舞台袖から出て来ると丁寧な頭を下げる。

「それでは、毎年恒例のコンテストをこれから行います」

こうして、ついに文化祭の目玉イベントでもあるコンテストが開催されるのだった。

第136話 コンテスト開始！

「それではまず、男性のフィジークコンテストから行います。選手の皆様、ご入場ください」

レベツカ先輩がそう言葉にすると、舞台袖から次々と屈強な男たちが入って来る。全員ともに、上半身は裸で下にはサーフパンツを身につけている。

このフィジークコンテストにおいては、上半身の筋肉のみに注目されがちだが、やはりバランス。そしてポージングなども重要になってくる。

審査員の人は、毎年専門の人を五人ほど呼び、採点してもらうのだという。

学生の規模にしてはかなり気合が入っているが、これがアーノルド魔術学院の伝統。

そしてその選手の中には、エヴィだけでなく、部長や他の部員の方々もいた。それに加えて、他の部活の人もなかなかいいバルクをしている。

これは一概に、誰かが一番良いとは決めがたいが……。

「レイ。どう見る？」

アルバートは真剣な面持ちで、舞台を見つめていた。

「部長とエヴィが、優勝候補だろうな。しかしあの二人の優劣、なかなか難しい」

「俺も同意見だ。圧倒的な筋肉量。それにカットもよく出ている。おそらく、今日に向けて入念な調整を行ってきたのだろう……しかし、部長は流石だな。あのデカさは、凄まじいものがある」

二人で考察を交えて、会話をする。

周囲の人間もまた、ザワザワとしているがそれは全員ともに、舞台に立っている人の筋肉を評価しているのだ。

ミスコンこそが本命、と言われることもあるが違う。このフィージークコンテストもまた、文化祭の本命になり得るものである。

この学院は新たに設置されたジムにより、筋肉に対しての意識が以前よりも高まったと部長から聞いた。

そのため、今年は盛り上がるだろうと聞いていたが……やはりその通りだった。

「では、順番にポーシングをお願いします！」

レベッカ先輩の進行のもと、競技が進んでいく。

エヴィの番号は三番。部長の番号は一番最後の十二番。

これはどのような勝負になるか、まだわからないな……。

そして、軽快な音楽の元で彼らはボーシングをしていく。眩しい筋肉が迸り、それぞれ全員が声を上げる。

「二番キレてるよー!」

「でかいよでかいよー!」

「キレてるきれてるー!」

と、応援する声上がる。

「ねえ、レイ」

「どうしたアメリカ」

右側を見ると、アメリカだけでなく、クラリスとエリサも俺のこを見つめていた。

「掛け声ってどうするの?」

「番号で呼ぶのと、そうだな。キレてる、とかでかいなど言えはい」

「そっか……なるほど」

うんうんと三人ともに頷いていると、ついにエヴィの番がやって来た。

「三番、キレてるキレてるッ!」

「いいカット出てるぞーッ! 三番でかいよッ!」

俺とアルバートが先陣を切って、大きな声でエヴィに応援の声をかける。すると、二カつと白い歯を輝かせてボーシングを続けていく。

流石のエヴィだ。前の二人と違って、ポージングもとても綺麗だ。何よりも、自分の筋肉がどうすれば映えるのかよく理解している…
…そんな感じだ。

「いいよー！ おっきいよー！」

「キレてるキレてる！」

「三番いいよっ！」

アメリカ、クラリス、エリサの三人もまた明るい声援を送る。野太い男の声ばかり響くと思いきや、このフィジークコンテストは女子の声もよく通る。性別問わず、皆がその筋肉に魅了されているのだ。

その後、順調に進んでいくと……ついに大本命である部長の番がやって来た。圧倒的な巨躯がステージに進んでくると、音楽と共にポージングを開始。

「で……デカすぎる……」

「な、何だあれは……？」

アルバートと二人で呆然とする。俺たちは、掛け声をあげること忘れて……ただ啞然としていた。元々でかいのは知っている。しかし、ポージングを取るとさらに威圧感というべきだろうか。

その圧倒的な存在感に、俺たちは慄いていた。

この会場の全ての人間が、戦慄する。

そしてついに、審査の段階に入ったが……これはもう確定だろう。

「二位はエヴィィームストロングさんです！ ということは……優勝は、レックス・ヘイルさんに確定しましたっ！ みなさん、選手に大きな拍手を送ってくださいっ！」

レベツカ先輩が順位を発表するが、やはりこうなったか……という印象だった。エヴィもまた、笑ってその声援を受けて、がっしりと部長と握手を交わしていた。

あれだけの努力をしても届かない領域。

部長は晴れて、このアーノルド魔術学院の在学期間において、伝説の四連覇を果たすのだった。

「次は、ミスコンだが……全く知らないな」
「ああ。俺も知らない」

大白熱のフィジークコンテストが終了し、次はミスコンに移ることになった。可愛い女子のナンバーワンを決めるとのことだが、これは審査員はここにいる全員である。観客もまた、エントリした人間を一人選び、そこから集計をとって一番票数の多い人間が、優勝となる。

「それでは、続いてミスコンを開始します！」

レベツカ先輩も慣れてきたようで、声がよく通る。

俺はふと、あることを思い出してアメリカにこう尋ねた。

「アメリカは出る予定はなかったのか？」

「え、どうしてそんなこと聞くのよ」

「アメリカならば、優勝できるだろう」

「え！？　そ、そう思う……？」

「ああ。アメリカはよく映えるからな。舞台上ではその輝きがよく映ったと思うが」

そういうと、アメリカは少しだけ難しそうな顔をする。

「うーん。でも今回は、クラスの方に力を入れたかったからなあ……」

「なるほど。それは仕方がないな」

「来年はレイがそういうなら、出ていいかも……？」

チラッと俺の顔を見るアメリカ。俺はそれに、いつものように答える。

「それは楽しみだ。来年は、期待しておこう」

「う……うん」

そして恙無く進行していくミスコン。

「そういえば、こちらの優勝候補は誰なんだろうな……」

ボソッと呟くと、それにはエリサが反応した。

「ゆ、優勝候補は二年生のナタリア＝アシュリーさんだよっ！」

「そうなのか。エリサ」

「う……うんっ！ 魔術剣士競技大会でも実況をしてたし、この学院ではアイドル的存在なんだよっ！」

「おお……全く知らなかった。そうか、なるほど……」

エリサからの情報をもらうと同時に、その彼女がやって出て来た。

「では、お名前を教えてください」

レベツカ先輩が尋ねると、アシュリー先輩はニコツと笑って言葉を紡ぐ。

「ナタリア＝アシュリーです」

右目の横で、横向きにピースをするとこの会場にいる男性陣の「おお……」という声が響いた。

なるほど。この学院のアイドルというのは、どうやら本当のようだ。それは男性陣の反応からすぐにわかった。

「では、アピールポイントや特技を教えてください」

「うーんとねっ」

口元に指先を持っていき、洪る彼女を見て思った。

あれはキャロルと同じ系譜であると。

間違いなく、俺が苦手になっている部類の女性だ。

「やっぱりいゝ、この可愛い容姿かな？　かなあ？　特技は歌とダンスでゝすっ！　またライブやるので、来てくださゝいっ」

バチン、という音が聞こえそうなほどのウイंक。

あの人には絶対に近寄らないでこつ。そう誓って、そのステージを見守る。

そしてついに、最後の人になつたが……。

「では最後の方は……ってあれ？　レベッカ「ブラッドリィ？　え、私エントリーしてませんか？」

ポカンとした表情で渡された紙を見つめるレベッカ先輩。

すると、ディーナ先輩がやって来てニコニコと笑いながらレベッカ先輩から紙とマイクを強引に奪う。

そして彼女をステージの真ん中に追いやりながら、ディーナ先輩はこう告げた。

「ということで、喜ばなさい。男子ども。レベッカ様がエントリーしてくださつたのよ！」

『う、うおおおおおおおおおおおおおっ！』

それは今日の中でも、一番の歓声。この講堂が揺れ動く錯覚するほどの、大音量。いや、錯覚ではないかもしれない。間違い無くこの振動は、熱狂的な人間の声によって生じている。

流石はレベッカ先輩。その人気は屈指なものなようだ。

その中で、レベッカ先輩はステージでオロオロとしていた。

「え……え？ エントリーしてくれた？ これは、どういうことなのですか……？」

ついにミスコンの最後の一人としてレベッカ先輩の番がやってくるのだった。

第137話 核心へ

「え……ちょっと、その……っ！」

ということで、半ば強引な形だがレベツカ先輩が壇上の中央に押されるようにしてやって来た。

あの様子からして、事前に打ち合わせなどはしてないのだろう。

レベツカ先輩は、戸惑いの表情を浮かべながら周囲をオロオロと見回している。

「それでは、恒例の質問タイムいくわよっ！」
『おおおおおおおっ！』

ディーナ先輩がさういうと、最前列に集まっている男子たちが湧き上がる。いつの間にあんなにも多くの男子生徒が集めたのかは分からないが、異様な盛り上がりを見せていた。

「ではレベツカ様。趣味は何でしょうか？」
「しゅ、趣味ですか……？」

レベツカ先輩もこの状況を受け入れたのか、質問には答えてくれる様子。

先輩の趣味となると……なかなかこれは難しい質問だ。ディーナ先輩も知っているだろうが、先輩の趣味は漫画を書くことだ。

しかし、レベツカ先輩はそれを公開したくはないだろう。それは、夏のあの時と一緒に過ごして分かっている。先輩はどのように答えるのだろうか……とっていると、おずおずと口を開いた。

「えっと……お花を育てること、甘いものを食べること、それに芸術活動……ですかね。絵を書いたりするのが好きです」

俯きがちに答えるその姿は、何か心にくるものがあつた。

そんなレベツカ先輩の壇上での様子を見守っていると、妙にハラハラするというか助けてあげたくなるというか、この感情は初めてのもので俺も少し戸惑っていた。

「聞いたわねっ！ レベツカ様の趣味は高尚なのよっ！」

『お、うおおおおおおおおおおおっ！』

さらに湧く男子たち。もはやこれはミスコンなのか、何なのか分からなくなつて来た。

むしろ、レベツカ先輩の特別ステージというか……。

でも、その周囲には笑顔が溢れていた。

ディーナ先輩も微笑みながら進行をして、周囲の生徒も笑っている。

熱狂的なファンもいるようだが、それは温かい雰囲気に取り込ま

れていた。

そしてその中央にいるレベッカ先輩もまた、顔を赤くしながらも微かに微笑んでいる。

もしかしたらこれは、ディーナ先輩からの贈り物なのかもしれない。

少しでも、この文化祭を楽しんでくれるようにと願っての。

いやそれはきっと……間違いないだろう。

俺はディーナ先輩の想いを知っている。だからこそ、サプライズのような形でレベッカ先輩を巻き込んだ。

遠くからこの文化祭を眺めるのではなく、その中に入っていけるようにと……きっとそう願っているに違いない。

そこから今までと同じように、質問が行われ……ついに、最後の質問にやって来た。こればかりは、鬼門だろう。

なぜならばそれは、好きな人を尋ねるものだからだ。

「ではレベッカ様。最後の質問になります」
「は、はいっ！」

レベッカ先輩も慣れて来たようで、受け答えがしっかりとできてきたみたいだ。

「現在、好きな人はいますか？ もちろん恋愛対象として……です」
「あ……う、えっと……その……」

再び俯く。それと同時に、先輩はチラッとステージからこちら側を見た。きっとこれは偶然なのだろうが、俺と視線が交わった気がした。

「……もちろん私は、婚約しておりますのでエヴァン様のことをこれから愛していければいいなと思っております」

毅然とした態度でレベッカ先輩はそう告げた。

今まで湧き上がっていた男子生徒たちも今回ばかりは、静まっていた。そして、ついにレベッカ先輩の番が終了し、ミスコンの優勝者発表となった。

それぞれの生徒が投票箱に紙を入れて、それを運営の人たちが数える。その作業は、手際がいいのかあっという間に終了。

そして、壇上が上がって来たレベッカ先輩がペコリと頭を下げると、ついに発表となった。

「では、今年のミスコンの優勝者を発表します。優勝者は……」

ペラっと折り畳まれている紙を開いて見ると、レベッカ先輩はその場でわなわなと震え始める。

顔をその紙で隠し、こちらからは様子が窺えない。

だが、その反応で誰が優勝したかは明らかだった。

そうしていると、ディーナ先輩が舞台袖からやって来てレベッカ先輩からその紙をスツと奪い取った。

「はい。じゃあ分かってると思うけど、今年の優勝はレベッカ様よっ！ 喜びなさいっ！」

『うおおおおおおおおおおお！』

『きゃあああああああああああああああ！』

今回は野太い声援だけでなく、黄色い声援も聞こえて来た。

レベッカ先輩には男性だけでなく、女性のファンも多いのだと改めて理解した。

まあ……俺も今回はレベッカ先輩に投票したしな。

「ねえレイ」

「どうしたアメリカ」

隣にいるアメリカは、ただじっとレベッカ先輩のことを見つめていた。それは、優しい表情だった。アメリカもまた、レベッカ先輩を見て思うところがあるのだろう。

「レベッカ先輩さ」

「ああ」

「楽しそうだね」

「間違いない」

みんなに祝福されるレベツカ先輩は、依然として顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。「もう、みなさんやめてください！ 怒りますよっ！」と、本気で抗議している様子だが、それもまた逆に可愛いというか……そんな彼女に、この場にいる生徒は魅了されていた。

そうだ。

やっぱりレベツカ先輩は、魅力的な人だ。

人を集め、その人たちに慕われる、そんな優しい人。

改めて俺は、レベツカ先輩の魅力に気がつくのだった。

こうして、文化祭二日目もまた終了。

色々と波乱めいたものはあったが、きっとレベツカ先輩にとっていい思い出になったに違いない。

夕刻が過ぎ、日暮れの間帯となった。

俺は外出届を提出して、街に繰り出す。

一応名目としては、メイド喫茶に関して食料をもう少し補充しておきたい、という事にしておいた。

それは決して嘘ではないが、あくまで二次的なもの。

俺の目的は、アビーさんの自宅に向かう事だった。

学院からの坂道を降りて、街の中央区へと向かう。

ふと、夜空を見上げる。

最近多いのだが、今日もまた綺麗な夜空が広がっていた。星々も輝かしく瞬き、この夜の世界をその明かりで照らしていた。

こんな夜も、悪くはない。

そう思いながら一人で歩みを進めて、アビーさんの自宅へとたどり着く。

扉に付随している、鳥型のドアノックカーをコンコンコンと三回ほど叩くと、室内からはカーラさんが出て来た。

「レイ様。すでに全員集まっております。どうぞ、中へ」
「失礼します」

その場で軽く一礼をすると、中にはすでに俺の見知った人たちがいた。

師匠、アビーさん、キャロル、カーラさん、それに部長もいた。
その他には、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の時に顔を合わせた部長の家族の方も隅の方に直立していた。

「レイ。来たか」

「師匠もいらしていたのですね」

「もちろんだ。今回の件は、色々ときな臭いからな……」

すでにこの場は緊張感が漂っていた。キャロルも俺に会うつ、何かと理由をつけてスキンシップを図ろうとして来るのだが今回はそれが無い。

ただ静かに、ソファーに座って紅茶を楽しんでいるようだった。

キャロルも静かにしていれば、いい女だろうに……と思っても仕方がない事だろうな。

俺は空いている席に座ると、カーラさんがスツと前に出てきて本題に入る。

「レイ様から依頼を受けていました。エヴァン・ベルンシュタイン氏の正体が判明いたしました」

その口ぶりからするに、間違いなく彼には裏の顔があるのだと理解した。

「彼は、裏で魔眼を非合法に収集していた、有名な魔眼収集家です」

「それはつまり、狙いはレベッカ先輩の魔眼だと……？」

俺はすぐに口を挟んだ。その内容からするに、予想するのはそれしかない。だがカーラさんは、少しだけ表情を歪める。

「……そう思うのが至極当然です。しかし、この件。不可解な点が

多過ぎます」

「というと……?」

カーラさんは淡々と話を続ける。

「この情報を入手したのも、あまりにも容易過ぎました。まるで、早く知ってくれと言わんばかりに」

「……」

情報を秘匿するのに、必死ではない……ということか?

しかしこの情報は知られてはまずいはずだ。

あまりにも外聞が悪い上に、間違いなくその身柄は拘束され、婚約は解消になるだろう。エヴァン氏が投獄される可能性は限りなく高い。

それを隠す気がない……?

どういう事だ……?

それにレベツカ先輩はこのことを知っているからこそ、身動きが取れなかった……?

錯綜する状況。

そして俺たちは徐々に真実に近づいていく。だがそれは、思いもよらないものであるとのちに知る事になる。

この王国の裏で蠢く意志は、さらに大きく膨れ上がっていく。

第138話 迫る真実

「カーラ。情報は容易に入手できたんだな？」

「はい。あまりにも容易でした。正直、拍子抜けするほどに」

師匠が尋ねると、カーラさんは率直に答えた。

「非法な手段で魔眼を収集する。それは、間違いなく犯罪行為であり、絶対に隠しておきたいものだ。だというのにどうして、ベルンシュタイン氏はその情報の漏洩を許したのか……」。

単純に、彼にそこまでの能力がなかった？

とは考えにくいだろう。

そして、今まで隠し通してきて、このタイミングでそれを許すとなるとやはり

「誘っているんだろうな」

そう言ったのはアビーさんだった。脚を組み、じっと正面を見据えながら彼女は現在の状況をそう分析する。

「アビーの意見には私も同意だな。カーラ。今まで、魔眼収集に関する噂はなかったんだろう？」

「はい。魔眼収集家がいる、ということは分かっていたましたが、具体的に誰が……という特定には至っておりません」

俺としては、カーラさんたちヘイル一族の情報収集能力を詳しく知っているわけではない。だが、師匠たちが手元においているということは間違いなく優秀なのだろう。

そんな彼女たちが、特定するに至らず、このタイミングで相手がわかるとなると……俺も同意見だが、誘っているとは思えない。

「しかし」

俺もまた、この議論に加わる。

「誘っていると言っても、誰を？ 相手はこちら側のことを理解した上で、そうしているのでしょうか」

「……レイちゃんのいうとおり、これはちょっと難しい問題かもね」

キャロルは冷静にそう分析する。

いつもは戯けているが、今は軍人時代に見せていたときのように、真剣な顔つきをしている。

「仮に、私たちを相手にするって分かってるんならよっぽだと思ふよ？ こっちは、氷剣、灼熱、それに私を含めて幻惑の魔術師もいる。七大魔術師を三人も相手にできるのは、それこそ残りの七大魔術師を集めないといけない。でも、それは流石にありえないと思う……けど」

言葉を濁す。

確信には至っていないキャロルの話だが、俺も相手が残りの七大

魔術師だとは思えない。

残りの人間のパーソナリティを完全に把握しているわけではないが、ここまでのリスクをとるとは考え難い。

それこそ、七大魔術師は魔術師の頂点であり、最も真理に近い存在とされているが、倫理を超えることはない……という点では弁えているはずだ。

少なくとも、優生機関ユージェニクスとの繋がりを持つような存在は、いないはず。

と、俺は考えるが果たして……この真相は何なのか。

「エヴァン＝ベルンシュタインは優生機関ユージェニクス所属ではないのか？」

アビーさんの指摘は、道理だろう。今回の件からして、優生機関ユージェニクスの介入は考えるべきだ。

「今のところ、そのような情報は手に入れておりません。しかし、疑った方がいいのは間違いないかと」

「そうか……しかし、そうなるとやはりブラッドリー家の真意が気になるところだ。もし仮に、何も知らずに婚約をしていれば、不幸なことだが……分かっているのならば……」

思い出す。

夏休みの終わりのレベツカ先輩の、あの表情を。

あれはきっと、あの段階で分かっていたのではないか。

エヴァン＝ベルンシュタインが非法に魔眼を集めている事に。
そして、レベッカ先輩は魔眼の所有者だ。

つまりは、彼の狙いはレベッカ先輩の魔眼？

だが、それを知っていてどうしてブラッドリイ家は婚約をした？

一気に思考を巡らせて、俺は再び発言をする。

「……ブラッドリイ家のことですが、自分に心当たりがあります」
「何だレイ。何でもいい、言ってみろ」

師匠がそう促してくるので、今までの流れを俺は話す。

「夏休み、最終日のことです。自分はレベッカ先輩と二人で遊びに行っていました」

「ほお……」

瞬間、師匠の目つきがさらに鋭いものになる。どうやら真剣に聞いてくれているようだった。

また、カーラさんもいつものように無表情だが、少しだけそれが歪む。

そうか。そういえば、あの時はカーラさんもあの場にいたが……別に言及することはないだろう。

「その別れ際のことです。先輩は、涙を流していました。悲しそうに、自分は婚約するのだからこのように遊ぶことは二度とできない

と。そして、二学期が始まり、レベッカ先輩はずっと調子が悪そうでした。おそらく、すでに夏休みの段階で、エヴァン＝ベルンシュタイン氏の正体を知っていたのでは？」

さらに言葉を続けるが……ここから先は、あまり言いたくはなかった。

「……しかし、ブラッドリー家が婚約破棄することはありません。そこからするに、ベルンシュタイン氏とブラッドリー家は結託しているのでは、ないでしょうか……」

その指摘に、全員が神妙な面持ちで黙り込む。

俺がたつたいま言及した可能性は、最悪のものである。

つまりは、ブラッドリー家とベルンシュタイン家は結託した上で、何か大きなことを成し遂げようとしている。

だがそれは、ある種の叛逆行為^{はんぎやうゐゐ}。

この魔術師の世界を揺るがしかねない、裏切りと言ってもいいだろう。

そしてレベッカ先輩は、その渦中にいる。

いや……犠牲にされている、といえいいのか？

ブラッドリー家を継ぐのは、長男だ。長女ではある先輩は、その人柱にされた？

それをレベツカ先輩が知った上で今までずっと過ごしてきたと思うと……全てに辻褄があってしまう。

これは、憶測に過ぎない。

しかし、どうしてもそこに有機的な意味を見出してしまふ。

しばらくして、師匠が口を開いた。

「それを含めて、状況を進める必要があるな。カーラ、説明を」「はい」

再びカーラさんが何かを説明するようだった。

「今晚ですが、この王国にあるホテルの一室でどうやらブルーノ・ブラッドリイ氏とエヴァン・ベルンシュタイン氏の会合が行われるようです」

ということとは、今からそこに向かう……ということだろうか。

「すでにホテル側は抑えてあります。今すぐにでも、向かえるかと」

俺が招集されたのは、むしろこちらの方がメインだったみたいだな。

「レイ。明日も文化祭は行われる。だが、来るか？ お前はここで引いてもいい」

「いえ、師匠。自分にとって、レベツカ先輩は敬愛すべき先輩です。学院で出会ったかけがえのない人なのです。自分は彼女の力になり

たいと……そう思います。もう誰かを失うのは、嫌ですから」
「……そうか。分かった」

その場に全員が立ち上がると、玄関へと向かう。カーラさんが先導する形で、俺たちはその会合が行われるホテルへと歩を進める。

俺は師匠の車椅子を押しながら、ただ冷静にこの件に当たろうと
していた。

だが相手がこの可能性を考慮していないわけではない。

氷剣の能力を開放しようかと迷っていると、師匠がボソリと呟いた。

「今回はアビーとキャロルに任せろ」

「しかし」

「知っているだろう。少なくとも、私はあの二人が本気を出して負けるところは想像できない」

「それは……そうですが」

「万が一のために、制限は一段階だけ取り払っておけ。私が許可できるのはそこまでだ」

「……了解しました」

師匠のいうとおり、確かにアビーさんとキャロルがいれば問題はないだろう。魔術戦において、キャロルほど厄介な相手はいない上に、アビーさんは真正面からの物理的な魔術戦においては最強格の一人だ。

あの戦場で積み上げてきた実績は伊達ではない。

そして俺たちは、ホテル内へとたどり着く。

中は閑散としていた。

それもそうだろう。今はシーズンでもないからだ。

どうやら、営業は通常通りしているみたいだが、すでにホテルの人間はこちらの事情を把握している様子。

俺たちは難なく侵入すると、最上階を目指す。

最上階にあるスイートルーム。そこにいるのは、ブルーノ・ブラッドリイ氏とエヴァン・ベルンシュタイン氏。

果たして二人は、俺たちを本当に誘っているのだろうか。

「……」

扉の前に到着。

マスターキーを所有しているカーラさんは、それをキャロルに渡した。

扉を開けた瞬間に、魔術戦になる可能性はある。

それを考慮して、先頭はキャロルが進むことになった。

彼女の魔術ならば、奇襲にも対応できるからだ。

そして、ガチャと音がするとゆっくりと扉を開ける。

俺たちがそこで見た光景は、まるで優雅なワンシーン。

この王国の明かりを背景にして、食事をしている二人がいたのだ。
ブルーノ＝ブラッドリィ氏とエヴァン＝ベルンシュタイン氏。

その二人が、ただ食事をしている光景。

そして、ベルンシュタイン氏はこちらを見ると、人の良さそうな笑みを浮かべてニコリと微笑んだ。

「やあ。どうも皆さん。予定よりも少し早いですね。さて、やっとこの盤上も大詰めになってきました。どうぞ、お掛けください。真相をお伝えしましょう」

殺気はない。

だが、急に仕掛けてくる可能性もある。

俺たちはその場から動かない。

相手の発言を鵜呑みにするような人間はこの場にはいない。

すでにキャラルとアビーさんの周囲には、大量の第一資料が収束
フリママテリア
していた。

それを見て、エヴァン氏はニコリと微笑む。一方で、ブルーノ氏はこちらを見ようとはしなかった。どこかバツが悪そうに、その視線を逸らしている。

「……まあ、そうですね。流している情報だけですと、僕のこと信用できないのは当然。しかし、これではどうですか」

啞然とする。

俺だけではない。この場にいる全員が、それを見てただただ立ち尽くす。

そして俺たちは知る。この王国の裏で起こっていた、出来事を。

第139話 文化祭、最終日

朝だ。

いつものように、朝がやってきた。

いつもはこの朝日に包まれる時間が好きだった。だと言うのに、今日は全く心が踊らない。

「……もう、朝か」

カーテン越しに、外の光を見つめる。眩い光が、わずかに室内に差し込む。

この輝かしい光が、今日はどこか燦んで見える。それは別に、身体に異常があるわけではない。

ただ俺の心が、そう感じるだけでいいだけだ。

文化祭、最終日。

みんなとの文化祭も、これで最後の日だ。また来年、文化祭は行われる。だがこの瞬間に行う文化祭はこれで最後なのだ。だから、俺は心から楽しみたいと……昨日のあの瞬間までは思っていた。

「……」

ベッドから出ていき、朝の準備を開始する。今日はメイド喫茶で午前中はキッチンに入り、午後からはリリーとして活動する。

文化祭最後の夜である今日は、後夜祭が待っている。

全ての準備は万端。生徒会の手伝いの運営も、俺はしっかりとやるつもりだ。

「ふう……」

鏡に映る自分の姿を見る。

そこにはいつも通りの、俺の姿が写っている。

そつと鏡に手を当てる。

俺は、俺たちは真実を知った。その全てを知ってしまった。

心を殺すのは慣れている。自分を殺し、我慢することは慣れ切っている。

だが、やはりどうしても……感情というものが残ってしまう。

自分を抑えつけることはできても、その感情が反発する。

「どうして俺はまた……」

こんな選択しかできないのだろうか。

俺は上手くやれるのか。

俺はしっかりとできるのか。

俺は、レベツカ先輩を壊すことができるのだろうか。

それは使命。今回の件で俺に課された使命だ。

先輩を助けたいと、そう願っていた。だが、状況は俺が考えているよりも、遥か上をいくものだった。

ブルーノ＝ブラッドリイ。

エヴァン＝ベルンシュタイン。

その二人と話をすることで、俺は自分の役割を知った。

先輩を助けるためにも、俺は……自分の使命を果たす。それだけだ。

「レイ、どうした？ ボーツとしてよ」

じつと鏡に映る自分を見つめていると、エヴィが怪訝そうな表情をしていた。

「いや。何でもない。エヴィ、最終日だ。頑張っていこう」
「おう！ もちろんだぜ！」

そして、ついに文化祭最終日が幕を上げた。

「ククク……今日こそ、絶対にやってやるわ」

教室内で不適に微笑む一人の少女。

今日もいつものように、金色の髪を左右の高い位置でまとめている。しかしそれはどこか、いつもよりもキマッている感じだ。

金髪ツインテールがトレードマークであるクラリスは、今日のこの日を心待ちにしていたのだ。

「ねえエリサ」

「どうしたのクラリスちゃん」

これはクラリスが、エリサを自分のクラスに誘ったときの話である。

「うちのクラスはね。お化け屋敷をやるの」

「えっと……その、私はお化けとか怖いけど……いいと思うよ？
うん」

「すっごい、いい出来なの」
「う、うん……」

エリサは、鬼気迫る表情で話しかけてくるクラリスが怖かった。いつもと違って、ぐいぐいとくるので流石のエリサも戸惑っている。

「だからね、エリサにも楽しんで欲しいなあって」

「え、でも……そのやっぱり怖いし……」

「大丈夫よ。エリサ」

「え、あんまり怖くないの？」

「レイを連れてきてもいいから」

「レイくんと？」

ポカンとするエリサ。

しかしこれは、クラリスの作戦。すでに、レイに話はつけてあるのだ。エリサと一緒に、最終日にお化け屋敷に来て欲しいと。

本当は、いつものメンバーで来て欲しかったが、シフトの関係でレイにしか頼むことができなかったのだ。

と言っても、レイもかなり多忙なのだがクラリスの頼みを無下に断る彼ではない。すぐに了承した。

「うん。レイと一緒になら、怖くないでしょ？ 私はね、エリサ」

ギュッとエリサの両手を包み込む、クラリス。

そして聖母のような、慈愛に満ちた表情を浮かべる。

「あなたにクラスの出し物を楽しんで欲しいの。だって私たちは、友達でしょう？」

「クラリスちゃん……」

瞳が潤むエリサ。だがそれは、大女優クラリスの演技である。

全てはエリサへの復讐を果たすための。

ククク……これでやっと復讐が果たせるわっ！　ククク……。

そしてついにやってきたこの日。

エリサとレイは休憩時間を使って、クラリスの教室にやってきた。

二人とも、すでに噂では聞いている。

このクラスのお化け屋敷はレベルが違う、と。

例年、お化け屋敷はよくある出し物なのだが、クラリスたちは魔術をメインで構成し、その雰囲気はかなり高めている。

青い火の玉や、動く骸骨、口裂け女、などなどあらゆるギミックの全てが高水準。

ここもまた、レイたちのクラスに匹敵するほどの客入りを果たしている。

その客足は、最終日でも衰えることはない。

「エリサ。大丈夫だろうか？」

「う……うんっ！　何とかっ！」

行列に並んでいる二人。エリサはもうすでに怖がっているようで、レイの制服の端をギュッと掴んでいる。脚も微かに震えて、怯えているのがよく分かる。

レイは、クラリスの野望を知っている。それに全面的に協力する

わけではないが、エリサとクラリスが楽しむことができればそれでいいと思っている。

しかし、エリサは楽しみよりも恐怖が勝っている気がする。

これは流石に、無理ではないか……と思って、レイはエリサに声をかける。

「エリサ。怖いなら、あまり無理をしなくても」

「だ、大丈夫だよっ！ 怖いけど……でもやっぱり、クラリスちゃん頑張ってるんだもん！ それに、楽しんで欲しいって言われたから！ が、頑張るよ！」

グツと大きな胸の前で拳を握って、大丈夫というアピールをするエリサ。

レイはそれを見て、微かに笑みを浮かべる。

「そうか。俺が側にいる。だから、安心して欲しい」

「あ、ありがと……」

俯いて顔を赤らめるエリサ。

そんな様子を、クラリスは教室の中からチラッと覗き見ていた。

「ククク……来たわね、エリサ。心底怖がらせてあげるわ……ククク……」

と、一人で不適に笑っていると、クラスメイトに話しかけられるクラリス。

「その……クリーヴランドさん？ 大丈夫？」

「あ、うん。だ、大丈夫よっ！ ちゃんと今日も頑張るからっ！」

「うん。よろしくね」

そしてレイとエリサの番がやってきた。

レイはいつものように毅然としているが、エリサはレイの腕にべったりとくっついていて、いつもならば、エリサはきつと恥ずかしさの方が勝るが……今は恐怖心でそれどころではなかった。

「では、お二人ですね」

「ああ。二人でよろしく頼む」

「それでは、お楽しみくださいっ！」

受付を済ませて、二人は教室内へと入っていく。

すると、中に広がるのは墓地だった。温度も低く、肌は冷たさをしっかりと感じるほどだ。魔術で再現されているのは理解しているが、それでもこの空間は現実と相違がないほどに、質が高いものだった。

なるほど。どうやら、幻術系の魔術が得意な魔術師がいるのか。キャラルが得意そうなものに似ているな。それに、質も高い。すごいな……。

と、このクラスの出し物に感心して、冷静に分析しているレイだが……一方のエリサは、もうカップルと言われても疑問を持たないほどにレイにべったりとくっついていた。

豊かな胸をギュツと押し付けて、ブルブルと震えながら歩みを進める。

レイとしては、少しは思うところはあるのだが……今回は何も言わなかった。エリサが恐怖心で一杯なのは分かっているからだ。

「う……うう……すごいリアルだよ……」

「大丈夫だ。しっかりと俺に掴まっている」

「う……うん……」

本来ならば、顔を赤らめるところではあるが、エリサの顔は真っ青になっていた。

「あ……誰か倒れてる。大丈夫かな？」

「む。急患だろうか。すぐに手当てを」

二人は腹部を抑えて蹲っている人間を発見。レイとエリサは心配になり、声をかける。

「あの。大丈夫ですか？ どこか具合が悪いんですか？」

エリサがそう話しかけると、その女性は振り返った。すると、そこには……血で塗れ、顔の右側が白骨化した顔が映っていたのだ。

「ああ……すみません。右目、落としてしまって。どこにいったか知りませんか？」

「申し訳ない。あなたの右目は見ていないな」

「そうですか……それでは、私はこれで……ククク……」

不適な声を漏らしながら去っていく、人をレイは見送る。

今のはクラリスだな。化粧といい、声色といい、よくできている。クラリスは演技が上手いようだな。

レイがそう考えている一方で、エリサは……。

「エリサ？」

「」

「大丈夫か？」

「」

完全にフリーズしていた。あまりにも驚き過ぎて、叫ぶ余裕すらなかったのだ。

この時のエリサの表情を見た、クラリスはそれはもう……大満足な顔をしていた。

その後、意識を取り戻したエリサは度重なる恐怖にずっと足が震えていた。

ペロンと首筋にこんにやくが触れた時は、それもう大きな悲鳴を上げた。

「きゃ

っ！」

「う、うわああああああああっ！」

「ひ、ヒイイイイイイイイイイっ！」

「え。あれって、ううわああああああああん！」

その度にレイはエリサのことをしっかりと支えていた。そして度重なる、恐怖を乗り越えて……エリサは教室の外へと出てくる。

レイはしっかりと背筋を伸ばして、キビキビと歩いているが……
エリサは背中を丸めてまるで老婆のようにとぼとぼ歩いていた。

「お疲れ様でした〜！ またのご利用をお待ちしております〜すっ！」

と、教室内から満足そうなクラリスの声が聞こえてきた。

そして珍しく、エリサは怒声を上げた。

「もう二度と来ないよっ！ もうっ！」

クラリスの作戦は無事に成功。

エリサはそれはもう、怖がりに怖がった。

だがレイは知っていた。

クラリスは、エリサを楽しませようとしていたことを。

驚かせる時に、クラリスの影がずっとエリサのことを追っていた。

それに、前評判と聞いていたよりも、驚かす程度が下がっている
ことをレイは分かっていた。

エリサが楽しめる範囲で、お化け屋敷を運営していたのだ。

それはきつと、クラリスなりの贈り物なのかもしれない。

レイはそんなクラリス、そして隣で憤慨しているエリサを見て、

改めてこの学院のささやかな日常を享受するのだった。

「もうっ！ 絶対に後でクラリスちゃんに文句言っんだからっ！」
「ははは……ほどほどにな」

窓越しに、空を見つめる。

今日もいい天気。澄み渡っている、美しい青空だ。

しかし、ささやかな時は……もう終わりを迎えようとしていた。

第140話 突きつける真実

文化祭が終了し、ついに各クラスでの出し物の売上が決定した。

俺を含めて、生徒会組で集計を出してそれをランキング形式にしていく。一足先にメイド喫茶が上がった俺は、生徒会室でその集計を手伝っていた。

この手の作業は、特に計算に関することは得意なので、ディーナ先輩と分担して、集計し……終了。

それを表にまとめると、俺は椅子の背もたれに体を預ける。

「ふう……」

「レイ。よく頑張ったわね」

「ディーナ先輩」

一息つくと、先輩が飲み物を渡してくれる。

それは水だったが、今は水分が補給できれば何でもよかった。

俺は水を一気に喉に流し込むと、ディーナ先輩に一礼をする。

「先輩。ありがとうございます」

「いいのよ。それに本当に、レイはよく頑張ってくれたしね」

そう言うと、他の園芸部の先輩方も同じように俺を称賛してくれ

る。

「そうだよ!」

「うんうん」

「レイくんは本当に頑張ったと思うよ!」

「本当に、レイくんは何でもできるんだから」

「そうだね! お姉さんたちも感心しちゃった!」

その声を聞いて、俺は自分の胸が温かくなるのを感じる。

「先輩方……」

正直言つて、涙が溢れそうだった。俺は、クラスメイトだけではない。部活動の先輩も、本当にいい人たちに出会ったことができたかった……改めて思った。

だが、俺にはまだ使命がある。やるべきことがある。

だから、涙を流すことはできない。

「レイさん」

レベツカ先輩が近づいてくる。

そしてスッと、握手を求めてくる。

「あなたのおかげで、文化祭は成功に終わりました。厳密に言えば、後夜祭が残っていますが……今年も無事に三日間を終えることができました。本当にありがとうございます」

その薄くて小さな手を握ると、レベツカ先輩は頭を下げた。真っ黒な艶やかな髪が、さらりと流れる。そんな先輩の様子を見て、俺は……顔に出ないように努める。

知られてはいけない。

気取られてはいけない。

騙せ。

彼女を騙せ。

己が心を殺せ。

いつものように、先輩に対して振る舞え。

呪詛のように自分にそう吐き捨てると、仮面をつけて先輩に接する。

「いえ。こちらこそ、先輩のお手伝いできて良かったです。本当に最高の文化祭を経験することができました。感謝します。レベツカ先輩」

「ふふ。レイさんってば、本当にあなたは不思議な人ですね」

クスツと手を口元に持つていくと、他の先輩方も優しい笑みで俺を見つめる。本来ならば、ここで感謝の言葉を改めて述べたい。

だが俺の心情はそれどころではなかった。

レベツカ先輩の置かれている状況を知り、そして……それに拍車をかけなければならない。

これは俺にしかできない。

だから自分の心を押し殺して、いつものように笑う。

きつと仮面をつける感覚は、このようなものなのだろう。改めて、自分の醜さに嫌気が差す。

「では皆さん。講堂に移動しましょう。最後の発表の時間です」

レベツカ先輩の後を、全員がついていく。

そんな中、俺はただ一人立ち尽くしていた。

この生徒会にいた期間はまだ短い。しかしここには、思い出が詰まっている。

ディーナ先輩、それに他の先輩方だけではない。レベツカ先輩との時間も、ここには残っている。

彼女の笑顔も、少し拗ねたような顔も、怒った顔も、悲しそうな顔も、見てきた。この目に焼きつけてきた。

だからこそ俺は……先輩を壊さなければならない。

全ては、先輩を救うために。

講堂での発表は、ディーナ先輩とレベッカ先輩が行うということ
で俺は壇上では無くクラスメイトのもとにやってきていた。

「レイ！ 戻ってきたのね！」

アメリカだ。

メイド喫茶をやり切って、その類は興奮しているみたいで赤くな
っていた。

あの達成感は最高のものだった。俺もまた、やり切ったという自
覚がある。

「ああ。無事に集計は終了した」

「ということは、順位はもう……知っているのよね？」

「そうだが……それは言わないことになっている。発表の時まで、
待っていて欲しい」

「そうよね……うわゝ、ドキドキしてきた！」

俺の話を他のクラスメイトも聞いていたようで、全員ソワソワと
している。

みんなの様子を微笑ましく見つめる。

そつだ。全員でやり切ることができた。だから今は、喜ぼう。

みんなと達成できた喜びを俺は、享受すればいい。

仮面を貼り付け、そのように振る舞えばいい。

「それでは、順位を発表していきます」

レベツカ先輩の澄んだ美しい声が聞こえてくる。

だが今は、彼女の声は聞きたくはなかった。その顔も、見たくはなかった。

先輩に感情移入すればするほど、自分の覚悟が鈍ってしまう気がしたから。

本当に人の感情とは御し難いものだ。

いつそのこと、無くなってしまうばいいと思った時もあった。

こんなに苦しい想いをするくらいならば、感情など……いらない。

でも、俺は知った。この世界には醜さと同時に美しさも確かに存在しているのだと。それはこの感情があるからこそ、享受できるのだと。

極東戦役を経て、この学院での日々を経て、俺は多くのことを学んだ。

だから今度こそ、俺は上手くやる。

もう絶対に、誰も失いたくはないのだから

『うわあああああああああああああああ！！』
『きゃあああああああああああああああ！！』

その声が周囲から湧き上がるのを感じ取って俺は、ついに一位の発表が行われたのだと分かった。

「やった！ やった！ レイやったわ！」

「レイくんやったね！」

「レイ！ 一位だぜ！ おい！」

「やったな。レイ……」

アメリカ、エリサ、エヴィ、アルバートがそれぞれ俺に向かって
そう声をかけてくる。

俺は知っていた。自分たちのクラスがぶっちぎりで一位だったことを。

そしてみんなは湧き上がっている。この時に、俺一人が喜んでいないのはおかしいだろう。俺はすぐに、その盛り上がりには溶け込むように努める。

「ああ！ やったな！ みんなの協力のおかげだ！！ みんな、ありがとう！！」

大きな声で、声を上げる。

もちろんそれは、嘘ではない。

嬉しいに決まっている。

このクラスで、達成できたことに最高の喜びを覚えている。

初めは色々であった。

オーディナリィ
一般人であり、
ワイザード
枯れた魔術師と揶揄され、この学院の多くの人間に距離を取られていた。

だが今はこうして、全員で纏まって最高の瞬間を迎えることができた。

だから俺はこの瞬間だけでも、心から喜ばうとそう思って全員と抱きしめあった。

しかし、ふと壇上に目がいつてしまう。

そこでは、穏やかに微笑んでいるレベッカ先輩がいた。

視線が交差する。

その瞬間、俺は……一瞬だけ自分の表情が曇ってしまうのを他人事のように理解する。

やはり俺は、器用に生きることができないようだ……。

「レイ……どうしたの？ 何かあった？」

周囲のクラスメイトたちが未だに騒いでいる中、アメリアは俺の

ことを心配そうに見つめてくる。

ただじっと、俺の瞳の奥を見るように、彼女は近くに寄ってくる。

やめてくれ。

今は、君の顔を直視することはできない。

覚悟が、自分の決死の覚悟が揺らいでしまうから。

アメリカ。そんな表情で、近寄って来ないでくれ。

そう言えることもなく、俺ができるのはただ顔を俯かせることだけだった。

「レイ。何があつたの？　あなたがそんな風になるなんて……」

アメリカだけが、すぐに俺の状態を知った。

だがここで、全てを話してしまうわけにはいかない。

俺は強い人間だ。いや、強く在るべき人間だ。

「アメリカ。俺は……」

「……言えないのよね？」

「……すまない」

察してくれているのか、彼女は優しい声音でそういった。

そして俺の両手をギュッと包み込んでくれる。

「終わったら、全部話してもらおうから」

「ああ。約束しよう」

「うん。レイは強いけど、やっぱり弱いところもあるよね。でもね、それって人間らしいと思うの」

喧騒の中、俺たちは互いの姿しか見えていなかった。

周囲の声も、状況も、何も目に入らない。聞こえない。

ただ俺は、アメリアの美しい姿に見惚れていた。

「レイ。ありがとう。私はあなたと出会えたから、ここまで来れた。文化祭を心から楽しむことができた」

「ああ……」

「だからね、レイはとっても良い人よ。あなたはとっても優しく、とっても綺麗な人。何があったかは、知らない。でもきっと、レイならできると信じてるから」

「……アメリア。俺は、しっかりと進めるだろうか」

「馬鹿ね」

そしてアメリアは、俺のことをギュッと抱きしめてくれた。

「あなたならできるわ、きっと。だってレイは、私だけじゃない。あなたのおかげで、みんな変わったんだもの」

その抱擁を、解くとアメリアはそっと視線をみんなの方に促す。

「おいおい！ 見せてくれるねえ！」

「熱いねえ！ お二人さん！」

「ヒューヒュー！」

「ホワイ、やったな！ お前のおかげだ！」

「ホワイくん！ ありがとう！ あなたがいたおかげで、一位を取れたわ！」

クラスメイトたちは、なぜか俺に向かって感謝の言葉を述べる。

なぜ、ではないか……。

俺は知らないうちに、みんなにとって何かをすることができていたのだろうか。

「ねえレイ」

「……」

「この光景はね。みんなで作上げたもの。そして、その中心にはあなたがいたの。もう分かっていてでしょう？」

「そうか……いや、そうだったのか」

悟る。

俺は自分で思ってたよりも、周りに影響を与えることができていたのか。

ただ真っ直ぐに、愚直に、我武者羅に進んできた人生だった。

振り返ることはなかった。

その凄惨な人生に、向き合うことなどしたくはなかったから。

顔を上げる。するとそこには、みんなの笑顔が浮かんでいた。

この中心に俺がいるなんて、不思議なものだ。

でも、人生……何が起るかなんて決して分かりはしない。

その未来を正確に予測することなんてできない。

ただ毎日を懸命に進んできただけ。その到達点が、今だった。

今、この瞬間のために俺は……あの凄惨な日々を駆け抜けてきたのだと。

そう思った。

「レイならきつとできる。それに……あなたが魔術剣士競技大会で私を奮い立たせてくれたように、私もあなたにとってそんな存在になりたい」

ああ……アメリカ。

君は本当に強くなったのだと。

あの時の面影は、もう見えない。

アメリカは俺以上に大きく見える。

その姿が美しく見える。

「……アメリカ。ありがとう。そうだな、俺はもう手に入れていたんだ。大切なものをずっと前から」

ボソリと呟く。

そうだ。俺はできる。

果たすことができる。

そして、この光景をレベッカ先輩にも見せたいと。

これは俺だけではない。アメリカだけでもない。クラスメイトだけではない。

レベッカ先輩もいたからこそ、成し遂げることができたのだと。

俺は伝えたい。

「みんなありがとう！ 最高の文化祭だった！」
『おおおおおおおおおおおおおおおお！』

全員で拳を突き上げる。

ああ。

もう覚悟は決まっている。

俺は先輩を救う。それだけだ。

それだけが俺の使命なのだから。

「レイどうしたの。こんな所に呼んでさ」

屋上。

すでに日は暮れつつあり、学院の生徒たちは後夜祭を今か今かと待ち望んでいる。

だが俺は、それには参加できない。

やるべきことがあるから。

「マリア。君に大事な話がある」

「……えっと、もしかしてあの件？」

「そうだ」

淡々と、冷静にマリアに話しかける。

ちょうど講堂の外にいたマリアをつかまえると、俺は彼女を屋上へと招いた。

全ては、レベッカ先輩のために。

これに関しては、マリアにも協力してもらわなければならないからだ。

レベツカ先輩にとって、マリアはかけがえのない愛すべき妹。

ならば、マリアを使わない手はない。

「その前に、一つ。俺の素性を明かしておこう」

「素性……？ 極東戦役のこと？」

「いや、今のことだ」

「今って、ただの学生じゃない。知ってるけど？」

緊張感が漂う。

マリアもそれを感じ取っているのか、額に微かに汗が滲んでいる。

「俺は、【氷剣の魔術師】だ」

「……え？」

瞬間、突風が吹いた。

互いに靡く髪の毛。

それは抑えることなく、俺は自分の素性を明かす。

交差する視線を逸らすことなく、マリアに現実を突きつけるのだ

つ
た。

第141話 崩壊する世界

「そ、それって……どういう意味なの？」

「言葉の通りだ」

「う、嘘だって……オーディナリーレイは一般人で、そんなわけが」

おぼつかない足取りで、後方にズルズルと下がる。

一方で俺は、マリアの方へと歩みを進めていく。

そして、告げる。

どうして俺が、自分の正体を告げたのか。さらには、今の状況を。

マリアが考えていた疑問は全て氷解するだろう。その、残酷な事実によって。

しばらく俺は話を続けた。その際に、アトリビュートである氷剣も見せた。これこそが、氷剣の魔術師の象徴であると。

マリアはその魔術を見て理解してくれた。彼女も、三大貴族が一人。この魔術の、練度の片鱗はわかるようだった。

そうして、全ての真実を、彼女に伝えた。

「う、嘘……そんなことって」

「事実だ。そして、マリア。君は協力してほしい」
「な、何を？ 私に何をさせる気なの？」

マリアは怯えていた。

それもそうだろう。こんな話、信じたくはない……というのは理解できる。だが、あまりにも証拠が残り過ぎている。これは間違いなく、真実なのだから。

「それは」

言葉にした。

その瞬間、彼女は怯えから怒りに感情が変化した。

「そんなっ！ そんなことってないわ！ 私にそんなことができるわけがないっ！ 私の気持ちを知っているのに、そんなことを言うのっ！？」

「するしかない」
「でもっ！」

一気に距離を詰めると、俺はマリアの両肩を思い切り掴む。

怒りに支配されているその双眸をじっと見据える。

美しく煌めく真っ赤な瞳。それは、怒りに燃えていた。

誰よりも愛する姉にそんなことができるわけがないと、マリアはそう訴えていた。

俺だってそうだ。

レベツカ先輩を傷つけることなど、したくはない。

だが、するしかない。

彼女を救うには、彼女を壊すしかない。

これまでの苦しみから解放するためにも、俺たちは己が心を殺すしか無いのだ。

「マリア。俺たちは共犯者だ」

「共犯者……？」

俺は顔を俯かせ……改めて覚悟を決める。右の拳を、心臓において自分の鼓動をしつかりと確かめる。

そして、バツと顔を上げ、もう一度マリアと向き合う。

「……分かってる。俺だって、こんなことは言いたくはない。こんなことなど、したくはない。マリアと同じだ。だがしかし……すでに状況は動いている。そして、レベツカ先輩を救うためにも俺だけじゃない。君の力も、必要なんだ」

「……」

「これは罪だ。先輩を救うためとは言え、絶望に陥れるのは……心苦しい。でも、二人ならそれを背負っていける。マリア、どうか協力してほしい」

「……」

俺の手は震えていた。

こんな時に思い出すのは、レベツカ先輩との思い出だ。

入学してしばらくした時、先輩はランニングをしている俺に声をかけてくれた。

オーディナリー
一般人だと分かっているのに、彼女は俺と同じ目線で話してくれた。

それから同じ部活に所属することになり、先輩には本当にお世話になった。

夏休みのあの時は先輩の秘密を知って驚いた。

レベツカ先輩が、同性愛をテーマとした漫画を描いているなど夢にも思ったことがないからだ。

その中で、先輩の真剣な表情を初めて見た。芸術活動に取り組む先輩は、いつもよりも輝いて見えた。

それから、あの瞬間がやってきた。

別れる際、先輩は涙を流していた。

今はその真相が分かっている。

しかし、俺はきつとこれから、もっと悲しい思いをレベツカ先輩

に強い。

だから覚悟は……とっくに決まっているつもりだというのに、やはりこの手の震えは止まることはなかった。

「レイ……」

マリアは俺の名前を呼ぶと、そつと震えている右手に触れてくれる。

「そう。そうよね……レイだって、お姉ちゃんにそんなことをしたいって思っわけないわよね」

「ああ……」

「私だってそう。お姉ちゃんにもう、辛い思いはして欲しくない」
「……俺だってそうだ」

俯く。拳を握りしめて、その痛みに耐える。この心は、今にも壊れてしまいそうだった。

「でも、しなくちゃいけないの？」

「それしか方法は……ない」

「そっか……」

風が吹く。

互いの髪が、再びサラサラと摩く。

夕焼け。

黄昏時の光が、俺たち二人を包み込む。

ただじつと、二人で視線を交わす。

マリアのその瞳は揺れていた。

いや、彼女だけではない。俺の瞳もまた、揺れている。

この感情は揺れ続けている。

ずっとそうだ。だが、これを制御して、レベツカ先輩に相對しなければならぬ。

それが先輩を救うために、必要なことだから。

「ねえ……レイはずっと戦ってきたの？」

ふとマリアが俺の過去について聞いてくる。

「そうだ。俺の師匠は、『氷剣の魔術師』だった。そして、極東戦役が終わると同時に……その後を継いだ」

「正真正銘の七大魔術師って……わけ？」

「ああ。すまない。今まで隠していて……」

「ばっか。そんなこと、簡単に言えることじゃないって分かるわよ」
「そうか……」

暫しの沈黙。

マリアはただじつと、この暮れていく太陽を見つめていた。

俺はそんな彼女の横顔を見つめる。

真っ白な髪と肌が、夕焼け色に染まる。

その光景はどこか現実的ではない、幻想的な光景のように思えた。

「お姉ちゃんを助けるために、必要なのよね？」

「そうだ」

「絶対に助けることはできるの？」

「……誓おう。絶対に、彼女を助けると」

「うん。そっか……分かったわ。協力してあげる」

こちらを向いて、マリアは儚気に微笑む。

こんな役目を、マリアに押し付けたくはない。

俺が一人で全て背負い込んで仕舞えばいいと、そう思っていた。

だが、レベッカ先輩と向き合うにあたってマリアは絶対に必要だ
と思った。

全てを盤石にするために、マリアは必要だった。

「私とレイは共犯者ね」

「そうだ」

「ふふ……」

「どうかしたのか？」

「……なんだかレイとはずっと前から一緒だったような気がして」

マリアはそんなことを言うが、実際に俺たちが出会ったのはここ数ヶ月の間。特に過去にあった記憶などはない。

「そうなのか？」

「ええ。レイはやっぱり、魔術師としても特別だけど……なんだか親近感が湧くの」

「そうか……」

それから再び、沈黙の時間がやってくる。

屋上から下を見ると、すでに後夜祭の準備は始まっている様子だった。

レベッカ先輩のことは、手紙でこの場所に呼び出してある。

後は二人で、彼女を待つだけだ。

すでに師匠たちも動いているのだろう。

それに、ブルーノ^{ビース}ブラッドリイとエヴァン^{シナリオ}ベルンシュタインもまた……全ての駒が動き合い、それぞれの目標に向かって前進する。

いわば、俺たちはこの筋書きに踊らされている。

そうなるように、強いられている。

でもそれで良かった。

言いたいことは山ほどある。

もっと他の方法はないのかと、問い詰めたい気持ちもある。

だが、現状ではこれが最適解だ。

それに仮に、俺が早く状況を知っていたとしても……これ以外の方法を見つけることができたかと問われれば……自信はない。

結果として、俺はこれを選んだ。

提示され、それを自分の意志で選択したのだ。

悔いはない。

ずっと後悔ばかりの人生だった。

過去を憂い、仲間の死を悔いて、ただ悲しみを背負いながら生きていた。

しかし今度こそ、後悔はしたくない。

だから俺は……レベツカ先輩と、覚悟を持って向き合う必要がある。

「マリア。詳細は」

そして俺は、マリアと話し合った。

今後の段取りについて。二人で意見を出し合い、決まった。

「はぁ……なんだか私って、いつもそんな役回りばかり」

「すまない……」

「もう。そんな深刻な顔しないでよ」

「しかし……」

「いいのよ。どうせ、こうでもしないと私たち姉妹は向き合うことはできないと思うから。いい機会よ……」

「そう言ってもらえると、助かるが」

「レイもシャキツとしなさい！ もうすぐ時間でしょ？」

「ああ。そうだな」

二人でこの屋上で、レベッカ先輩のことを待つ。

すでに日は暮れつつある。

黄昏時の光も、もう微かにしか見えない。

そしてついに……夜の帳が下りた。

校庭では後夜祭のために、キャンプファイヤーが設置されている。その火の明かりが、この屋上からはよく見える。

すると、下の方から……コツ、コツと足音がする。

等間隔で響くそれは、間違いなく足音だった。

しばらくして、扉が開く。

そこにいたのは、レベッカ先輩だった。

「マリア……？ どうしてここに？」

この状況が理解できていないレベッカ先輩は、ただ啞然としていた。

基本的にこの場合は、マリアに流れを任せることにしている。

どうせなら自分に任せて欲しいと、彼女が言ったからだ。

そして、マリアは俺の腕に自身の腕を絡めるところ、告げた。

「お姉ちゃん。私ね、レイと付き合っことにしたわ」
「え……？」

始まる。

俺たちは共犯者。

今から共に、罪を重ねる。

レベッカ先輩の心に、絶望を刻むために。

第142話 誰よりも愛おしいお姉ちゃん

私はものごころついた時から、お姉ちゃんが大好きだった。

「お姉ちゃん大好きっ！」

「もう……マリアったら」

お姉ちゃんは誰よりも綺麗だった。誰よりも心が美しかった。

私にとって、お姉ちゃんは全てだった。

だが私は知る。自分がこの世界とは、決定的にズレていることに。

「ねえ見てアレ……」

「真っ白……」

「気味が悪いわ……」

周りの大人にそう言われているのに気がついた時、自分の容姿の異質さに初めて気がついた。

真っ白な髪の毛に、真っ白な肌。それに、この瞳は真っ赤だった。

お姉ちゃんだけじゃない。お兄ちゃんも、お父さんも、お母さんも、みんな黒い髪の毛をしていた。

その中で、私だけが真っ白だった。

もしかして私はこの家の子どもじゃないのかもしれない。

そう思って母に聞いてみたが、私は間違いなくブラッドリー家の子ども。

当時はあまりよく理解していなかったが、いわゆる突然変異というやつらしい。

「ねえ、お姉ちゃん……」

「ん？ どうしたの、マリア」

二人で遊んでいる時に、聞いてみた。

私は気持ちが悪いのかと。周りと違うから、変な子と言われてしまうのかと。

「私って変なのかな……？」

「そんなことないわ。マリアはとっても綺麗よ」

「でも真っ白で、目も真っ赤で……お姉ちゃんとは違う」

俯く。

出来ることなら、お姉ちゃんのように美しく生まれたかった。

普通に生まれたかった。

その艶やかで絹のように流れるサラサラな黒い髪を、私も持っていたかった。

お姉ちゃんと顔は似ている。だから姉妹なのは間違いない。

でもどうしてこんなにも、お姉ちゃんを遠く感じてしまうのだろう。

「マリアは、ウサギさんみたいでとっても可愛いわ」

「ウサギさん？」

「そうよ。真っ白でふわふわで、目も真っ赤。マリアと同じで、とっても可愛いウサギ」

「……本当にお姉ちゃんはそう思う？」

「もちろん！　だってマリアはこんなにも綺麗なんだから」

私の揺れているこの真っ赤な瞳を、お姉ちゃんはじっと見つめてから、ニコリと微笑んだ。

嬉しかった。

周りと違うことは、仕方がない。

私には、お姉ちゃんがいる。

理解してくれる、優しいお姉ちゃんがいる。

だからずっと私たちはずっと仲睦まじい姉妹でいることができる
と……そう思い込んでいた。

「……」

改めて、お姉ちゃんの有能さを私は知ることになった。

彼女はなんでもできた。勉強、お稽古、あらゆる習い事、礼儀作法、それに魔術。

三大貴族の中でも、お姉ちゃんは魔術師として優秀だった。いや、優秀過ぎた。

その姉と比較されるのは、時間の問題だった。

「見てアレ」

「真っ白……」

「レベツカ様の妹なんでしょ？」

「全部姉に吸い取られたんじゃないの？」

「ふふ。そうかもね」

心ない言葉が、聞こえてくる。

パーティーにあまり行かなくなったのは、多分その声を聞き始めた時だったと思う。

容姿のことは仕方がない。割り切っているつもりだった。

でも、容姿だけでなく、他の面でも優秀なお姉ちゃんと優劣をつけられるのは、堪らなかった。

自分の存在意義が揺らぐ。

どうして自分は生まれてきたのかと、問い続けたこともあった。

でもそこに、答えなどなかった。

自分はただ、この容姿で生まれ落ちて、姉よりも劣っている妹。

それだけが、私に残っている事実だった。

勉強も、魔術も、頑張ってきた。

でも、お姉ちゃんは私と同じか、いやそれ以上に頑張る。

才能を持っているのに、努力をされてしまったら……凡人にはどうすることもできなかった。

だから、私が自分を見限るのに……そんな時間はかからなかった。

「ふう……」

耳が痛い。

ピアスを空けたばかりの耳は、よく血が流れる。それに化膿することもあった。その度に自分で消毒をして、ケアをする。

髪も奇抜な髪型にしてもらった。

きつとそうしなければ、自分を保つことができなかったから。

「マリア……」

「……」

お姉ちゃんからは自然と距離を取るようになった。

私はお姉ちゃんが大好きだ。でも、お姉ちゃんが嫌いだ。

そんな矛盾をはらんだ感情を抱いたまま、私は成長していった。

「……マリアァブラッドリィ」

「レイィホワイトだ。レベツカ先輩には大変お世話になっている。

マリア嬢とも是非、仲良くできたらいいと思っている所存だ」

「……ふんっ！」

魔術協会のパーティーになんて、来たくはなかった。ただ今回は、どうしてもお姉ちゃんが言うから付いてきただけ。

そこで出会った不思議な人。

私とレイの初めての出会いだった。

身長は高くて、ちよつと線の細い印象。顔は悪くはない。まあ……

……それなりにイケてると思う。髪の毛ちゃんと整えて、見た目の印象は悪くない。

ただなんと言うか……立ち振る舞いが、どこか変というか。

とにかく、私はレイに対して初めは良い印象を持っていなかった。

そもそも私はあまり男を信用していない。いつもからかってくるのは、男ばかりだったから。女はヒソヒソと言うが、男は直接からかってくる。

それに、気味が悪い視線で見てるのは、男ばかりだった。

だからどうせ、男なんてどいつもこいつも同じだろうと……そう思っていた。

でも彼は私に似ていた。親近感を覚えた。

それから街でばったりと会ったディーナちゃんと、こんな話をした。

「マリア、元気だった？」

「うん。ディーナちゃんは？」

「私も元気よ。でも、マリアはまだ……」

「まあ色々とあつて、ね……」

ディーナちゃんは幼い頃からお姉ちゃんと仲がいい。それに、私ともよく遊んでくれた。でも私は勝手に距離をとって、二人から離れた。

パーティーで会った時に会話をするくらいの仲。

そして、街で一人で買い物していると話しかけられて……二人でカフェに入って久しぶりに会話をする。

「そういえば、レイ〓ホワイトって知ってる？」

私はレイのことを聞いてみることにした。

有象無象のようにお姉ちゃんを狙っているわけではないようだが、少しだけ気になっていたのだ。

「レイ？ 園芸部の後輩だけど」

「え……園芸部って、女子だけの花園って呼ばれてるんだよね？」

「そうね。部員もレイ以外は女子しかないわ」

「そ、その中によく入ろうと思ったわね……やっぱり、変わってるわね。あいつ……」

「うーん……確かにそうね。レイは変わっているわ。でも」

グラスの中にある氷をストローでカラカラと混ぜると、ディーナちゃんはどこか懐かしそうな表情をしてレイのことを語った。

それは、初めてみる表情^{かお}だった。

「……なんか憎めないのよね。初めは私も、一般人^{オーディナリー}つてことで敬遠してた。どうせ、レベルカ様を狙ってると思ってた。でもね。あいつは、真っ直ぐなの」

「真っ直ぐ？」

「ええ。愚直で、前しか見えていない。そして、自然と周りに人を集めてしまうような不思議なやつ。本当に頼りになるわ」

「そうなんだ……」

ディーナちゃんは男に厳しい。特にお姉ちゃんに近寄る男には。

そんな彼女がそこまで言うのだ。きっと彼は、本当に良いやつなのかもしれない。

その後、私はレイにお姉ちゃんのことを聞いてみることにした。すると、レイも気がついていたようで、真剣に話を聞いてくれた。

それに私に気を使うだけでなく、褒めてくれた。

胸が温かくなった。

こんな感情になるのは、お姉ちゃん以外では初めてだった。

ディーナちゃんの言っていたことは、本当だった。

彼の周りに人が集まるのも、なんとなく理解できた。

一方で私は、一人のままだった。

「……帰ろうかな」

文化祭最終日。

私はお姉様のメイド喫茶を満喫して、お姉ちゃんの姿も満足にみることができたので、自宅に帰ろうとしていた。

そんな時に、レイに声をかけられた。

「マリア」

「レイ……どうしてここに？」

「君を探していたんだ」

「私を？」

もしかして、あの件かもしれない。それは、レイの真剣味を帯びた雰囲気から分かった。こんな様子の彼は、初めて見る。

そしてレイに大事な話があると言われて、屋上について行った。

そこで彼に告げられたのは、信じられない話だった。

レイが【氷剣の魔術師】ということにも驚いた。

でもそれ以上に、彼が今からしようとすることは理解ができなかった。

その後、その背景を説明された。

とにかく状況を整理するので手一杯だった。

理解できたのは、お姉ちゃんを助けるために……私たちはお姉ちゃんに酷いことをしなければならぬと言ったこと。

そんなこと、望んでなどいなかった。

お姉ちゃんのことは大嫌いだ。いつも私の前に立って、その眩しさで自分が焦げ落ちて、見えなくなってしまうから。お姉ちゃん存在によって、私はいつも劣等感を覚えてしまう。

でもそれ以上に、私はお姉ちゃんが大好きだった。

だからお姉ちゃんを助けたいと。身勝手にもそう思っていた。もちろん、レイの提案など、受け入れる訳にはいかなかった。

私はレイに対して怒りを向けた。

そんなこと、出来るわけがない……と。

しかしよく見ると……レイもまた震えていた。

そうだ。レイだって、お姉ちゃんのこと大好きなのだ。そんなこと、したいわけじゃない。

だから二人で誓った。

共犯者になろうと。

でもその罪は、私が背負うべきだろう。

今までずっとお姉ちゃんから逃げて、目を背けて、見ないようにしてきた。

しかし、お姉ちゃんを救うのなら、私は本当の意味で向き合っべきなのだ。

この十年以上の因縁を自分で断ち切るべきなのだ。

だからレイに言った。

「私に任せて欲しい。レイは状況に合わせて話してくれたらいい」

「しかし……」

「いいの。これはやっぱり、姉妹の問題で……それにレイの条件を満たすなら、きっと私が言った方がいい」

「……そうか。マリアの覚悟、しっかりと受け取った」
「ええ」

そうして私はお姉ちゃんと向き合う。

まるで理解できないと、どうして二人が一緒にいるのかと、そう思っている表情だった。

姉妹だからよく分かる。

そして、お姉ちゃんの心を揺さぶるにはどうしたらいいか、私はよく知っている。似ているのは、その心もきつと同じだから。

隣にいるレイの腕をギュッと掴むと、私は淡々とお姉ちゃんに言った。

「お姉ちゃん。私ね、レイと付き合うことにしたわ」
「え……？」

始まる。

私たちは共犯者。

今から共に、罪を重ねる。

お姉ちゃんの心に、絶望を刻むために。

第143話 誰よりも愛おしいマリア

私はものごころついた時から、マリアが大好きだった。

「お姉ちゃん大好きっ！」

「もう……マリアったら」

マリアは誰よりも綺麗だった。誰よりも心が美しかった。

私にとって、マリアは全てだった。

だが私は知る。この世界の残酷さというものを。

「見て」

「綺麗……」

「本当に美しいわ」

「ブラッドリー家の姉の方はよく出来た子ね」

「妹はちよっと……ね」

パーティーでそんな声を聞いた。

その時のマリアの表情は、よく覚えている。私と比較され、その肌と目から敬遠されていた。

マリアはこんなにも美しい。

本当に綺麗だ。

透き通るような純白の肌と髪。灼けるように赤い瞳。それらが相まって、マリアは本当に天使のように綺麗だ。

私の自慢の妹だ。

誰よりも美しいマリア。

でも、周りはマリアを敬遠する。

幼い頃は思った。どうしてこんなにも綺麗なマリアを、敬遠するのかと。

そして私は知った。人間とは、異質なものを排除しようとするのだと。

そんな中、私は称賛される。

美しく、頭も良く、性格も良く、何よりも魔術に長けている……と。

一方のマリアは私よりも劣っていた。何をするにも、遅くて上手くできない。

でも時間をかければ、マリアはちゃんと出来る。だというのに、周りはそれを評価しない。親も兄も、マリアと私を比較する。

「マリア」

「……お姉ちゃん。いいの私は、いいの……」

マリアは自然と私から離れていった。

ずっと仲の良い姉妹でいると思っていた。けれど、変わらずには
いらなかった。

この血統を重視し、異質なものを排除する社会は、私たち姉妹に
とって枷でしかなかった。

それでも私は、ブラッドリイ家の長女として努力する必要がある
た。私が使い物にならないと分かれば、次はマリアがその苦勞を背
負うことになってしまいかもしれない。

マリアのためにも、私は【お姉ちゃん】をしなければならない。

しっかりとその道を進まないといけない。

たとえそれが、マリアを傷つけることになったとしても。

私にできることは、それしかないのだから。

「……」

「マリア。今日は一緒に出かけない？ 本当によい天気なのよ」

「別にいい」

「そう……じゃあ、一人で行ってくるわね」

「……行つてらっしゃい」

マリアは変わった。

髪型は奇抜。前髪を斜めにして、片目しか見えない。後ろは刈り

上げるほど短い。

両耳には大量のピアス。時々血を流していて、痛々しく見える。

私ともあまり話さなくなってしまった。

マリアは変わった。でもそれでいいと思った。

だって、その本質は変わっていない。マリアは私のことを応援してくれているのは知っていた。

魔術剣士競技大会にはいつも応援に来てくれる。
マギクス・シュバリエ

知っている。私が出場している試合には、絶対にマリアがいた。

あまり会話を交わすことはないが、マリアは昔からずっと優しいままだった。

同時に私は、マリアが羨ましいと思った。

彼女も辛い思いをしているのは、分かっている。でもそんな風に自由に振る舞えるのは羨ましい。私は三大貴族の長女として、振る舞い続けないといけない。

別にそのことは、割り切っている。今の自分も決して嫌いじゃない。

幸せだとは……思う。

それでもやっぱり、姉妹だから比較してしまう。

マリアは自由でとっても綺麗だ。でも私は……変わることは、できないのだと、そう思ってしまう。

「あれは……？」

ある日。

それは、生徒会での活動が終わった時だった。文化祭の準備をして、今日も疲れたと思って自室で休もうと思っていた矢先。

マリアがいた。学院の門の前で、誰かを待っている様子だった。

もしかして、私に会いにきたのだろうか。

と、そう考えているマリアが声をかけたのはレイさんだった。

「え……？」

戸惑う。

いつの間に、あの二人はあんなにも仲良くなったのか。

ギュッと胸の前で両手を握り締める。

こんなにも胸が痛いのは、どうしてだろう。

私はこんな胸の痛みを知らない。でもこんなにも、切ないのはどうしてなんだろう。

レイさんは出会った時から変わった人だった。彼は真っ直ぐな人だった。

私と違って、ものすごく真面目で、そして美しいひとだ。

彼の周りは、いつも人で溢れている。

みんな笑っている。

その輪の中に、私は入れない。だってそれは、あまりにも眩しいから。

夏休み。その時に、私の趣味を認めてくれて、レイさんとは距離が近づいた。嬉しかった。私の書くものを認めてくれて、本当に心から嬉しかった。

だが私は、どうすることもできない。

あの婚約者を、ブラッドリイ家をどうかしたいと思う。でもどうすることもできない。ちっばけな私では、どうすることも……。

「で」

「そ　なのか？」

「ええ」

途切れ途切れ、二人の声が聞こえる。それを隠れて見守っていた。

そしてマリアは笑う。レイさんも優しく微笑む。

二人のその姿を見て、今度は心に暗い感情が灯る。

こんなにも、私はこんなにも苦しんでいるのに、どうしてそんな風に二人は楽しそうなのか。

「……ッ」

手が痛いほどに、拳を握り締める。

「ああ……」

手を開く。すると、血が流れていた。爪が食い込んで、皮膚を少し破ってしまった。流れる血を見て私は、どうしようもない気持ちを抱き続ける。

これはきっと、身勝手な嫉妬だと分かっている。

マリアには私と違って、幸せになって欲しい。

でももし。もし、仮に。

マリアがレイさんとお付き合いをするとする。そして、彼と結ばれて結婚するとして。

私はその時、心から祝福できるのだろうか。

いや、きっと私は

「……戻ろっ」

ボソリと呟いて、私は寮の自室へと向かっていく。

ふと、後ろをちらりと見るとマリアは笑いながらレイさんの肩を叩いていた。二人が仲良くなるのは嬉しい。マリアのことも、レイさんのことも、大好きだから。大好きな二人が結ばれるのは、いいことだ。

「……ッ」

この心に宿る、黒い感情を無視すると私は走っていくのだった。

全てをの感情を振り払うようにして。

「手紙……？」

生徒会室に戻ると、手紙が置いてあった。宛名は、レイさんからだった。

今更、どうして手紙なんか。

口頭で言ってくれたらいいのに。

そう思って私は手紙の封を切った。

そこには簡潔に

『屋上で待っています』

と書かれていた。

「屋上？」

どうして屋上に？ 確かに今は、後夜祭の準備も終了し、もう私の出番はない。残りは後片付けをするくらいだ。

でもどうせなら、レイさんと二人で過ごしたいと思っていた。

彼にはとてもお世話になったから。お礼を改めて言いたい。

そして私は屋上への階段を登る。

レイさんと会う時間だけが、今の私の楽しみだった。

彼と過ごすのは、とても心が落ち着く。今の状況の中であっても、レイさんとの時間は私を癒してくれた。

「ふふ……」

少しだけ思い出し笑いをする。

彼のおかしな言動を思い出して、笑ってしまう。本当にいい思い出ばかりだ。

本当……ああ、本当に……。

でも何か、嫌な予感がする。

この先に進んではいけないと、本能が告げる。

けれど、レイさんが待っているの、進まないわけにはいかない。きっと待たせてしまっている。私はその警鐘を無視して、屋上への扉を開けた。

突風が吹く。

流れる髪を押えて私が見た光景は、受け入れがたいものだった。

「マリア……？ どうしてここに？」

尋ねる。尋ねるしかなかった。

どうして？

どうして二人が一緒にいるの？

鼓動がドクドクと打たれる。胸に手を当てる。

信じられない。どうして、どうしてなのマリア？

嫌だ。嫌だ。嫌だ。聞きたくない。

そんな顔をしないで。聞きたくない。聞きたくないッ！！

そして、マリアがギュッとレイさんの腕に、自分の腕を絡めると

……残酷な現実を私に突きつけてきた。

「お姉ちゃん。私ね、レイと付き合うことにしたわ」
「え……?」

始まる。

私は知ってしまう。

今からきつと知りたくない現実に向面する。

そして、それはきつと……私の黒い感情を再び呼び起こしてしまう。
う。

第144話 私たちの想い

「お姉ちゃん。私ね、レイと付き合うことにしたわ」
「え……？」

始まった。

この場はマリアに任せている。自分に任せて欲しいと、覚悟を決めた瞳でそう言ったからだ。

俺は静かに、この場を見守る。

「……そ、それは本当に？」

レベツカ先輩は、マリアではなく俺にそう尋ねてきた。

もちろん、頷く。それが嘘だと分かっている、そうするしかなかったから。

「ごめんねお姉ちゃん。一応報告しておこうと思って、さ」
「そう……そうなのですか……」

肩を落として、俯く。

だがすぐに笑顔を作ると、いつものようにレベツカ先輩は振る舞い始める。

「お、おめでとうございます！ その……マリアにはずっといい人がいないかと思っていたので、嬉しいです！ レイさん。これからマリアをよろしくお願いしますね？」

「はい。もちろんです」

先輩が動揺しているのは分かっていた。

しかし、俺にできるのは……この状況に流されることだけだ。

「ま、レイが一般人^{オーディナリー}つてことに突っ込んでくる奴もいると思うけど。別にいいわ。だって私たちはこんなにも愛し合っているんだから」

ギュッとマリアが俺の体を抱きしめてくる。

俺もまた、彼女と同じようにその体を抱きしめる。

その姿を見た先輩はギュッと拳を握り締めると、踵を返す。

「では私はこれで、失礼します……」

その瞬間。マリアはさらに言葉を続けた。

「お姉ちゃんはいいいね。私が持っていないものをずっと持ってた。だから私は、幸せになる。自分の意志で、自分で選んだ幸せを手に入れる。でもいいよね？ だってお姉ちゃんは、なんでも持つてるから。婚約者は自分では選べなかったけど、あの人もいい人だし、家柄も問題ない」

「……」

初めて見た。

レベツカ先輩のその瞳には、怒りが含まれていた。

瞳だけではない。その相貌は怒りによって、歪ゆがんでいる。

とても歪いびつに。

先輩はずっと優しい人だと思っていた。でもそれはやはり……勝手にそう思っているだけだ。人間には喜怒哀楽がある。

怒っていても、不思議ではない。

しかしそれでも、先輩の怒りは尋常ではなかった。

憤怒。

先輩の怒りは、まさにそれだった。

「何？ 文句でもあるの？」

煽る。

俺から離れると、マリアはズカズカと歩みを進めてレベツカ先輩を見下すようにして、声をかける。

「お姉ちゃんは今昔からそうだった。私が欲しいものを、ずっと持つ

てる。だからいいよね？　ねえ、なんとかいいなよ
「……」

先輩は俯いて震えている。

その雰囲気は、あまりにも危うい。

怖い、とも感じる。

マリアはそんなレベッカ先輩に対して、真正面から向き合う。

「私がッ！！　私がどんな想いで過ごしてきたか、知らないくせに
ッ！！」

怒声。

声を荒げる。

いつもの先輩は、ここにはいない。

怒りに身を任せて、マリアに罵声を浴びせる。

「は？　知るわけないじゃん。だからなに？」

「あなたはいつもそうッ！ 私の影に隠れて、逃げているだけじゃないッ！！」

「なにそれ。私も辛かったんだけど？ お姉ちゃんずっと比較されて、さ」

「それは私も同じよッ！ 辛かったッ！ ずっとずっと、ずっと辛い思いをしてきたッ！ でもそれは、マリアの為だと思ってッ！ そう思っていたのに……そんなことを言うなんて、信じられないッ！」

ふう、ふう、と呼吸を乱すレベツカ先輩。

瞬間。

パシンと頬を叩く音が聞こえてきた。

「え……？」

それはマリアが、レベツカ先輩の頬を右手で叩いたのだ。

「そんな感情的になって、ばっかみたい。自分で勝手にしてきたことでしょ？ いまさら私にそんなこと言われても、困るんだけど？」

「……このッ！！」

レベツカ先輩も、マリアの頬を躊躇なく叩いた。

真っ赤に腫れ上がる互いの頬。

マリアは冷静に見つめる。感情によって昂っている先輩を。

だが足りない。まだ、届かない。

俺は苦しかった。こんなことを望んでいたわけではない。こんなことをしたいわけではない。

でも、さらに先輩を追いつめないといけない。

苦しい。俺も、どうにかなってしまいそうだ。

そして、拳をギュツと握り締めるとその間に割って入る。

「やめてください先輩」

「レイさん？ どうして……？ あなたはずっと私の味方でいてくれたのに……」

すが
縫るような瞳。

それは、信じられないというショックを受けた表情が浮かび上がっていた。

「マリアから聞きました。マリアはずっと辛い想いをしてきたのです。そんな風に暴力を振るうなんて、最低です」

「あ……で、でもっ！」

サアッと顔が青ざめるレベッカ先輩。

一方で、マリアは俺に抱きついてくる。

「ねえ見てよ、レイ。痛いよお……お姉ちゃんにぶたれたよお……」

うるむ瞳で、見上げてくるマリア。俺はそんな彼女の頭を撫でる。受け入れる。

レベツカ先輩のことは責めて、マリアの言動は受け入れる。

先輩からすれば、耐えられることではないだろう。

俺が今まで先輩に対して誠実に接してきたことが、こんなことに役に立ってしまうなんて、耐えられるものではない。

マリアは痛いほどに、俺の腕を掴む。

レベツカ先輩だけではない。

ここにいる三人ともに、胸が痛い。苦しい。

真実を知っている俺とマリアは、ただただ辛かった。でもレベツカ先輩は、もっと苦しいだろう。俺たち二人に、裏切られたように思っているだろう。

その苦しみは、想像などではない。

「ねえ、お姉ちゃん」

「な、何……？」

「お姉ちゃんが苦しいのは分かったよ」

「え……？」

「本当はお姉ちゃんがいま怒ってるのって、多分」

マリアがそう言う前に、レベツカ先輩は再び手を上げた。

先ほどと同じように、マリアの頬を叩いたのだ。

はぁ、はぁと声を漏らし、先輩は憎悪のこもった目でマリアを睨みつける。

「……知ったような口を、聞かないでッ！ なにも、なにも知らないくせにッ！！」

「分かるよ。姉妹だもん。ごめんね、お姉ちゃん」

ニヤツと笑う。

それは明らかに、レベツカ先輩を煽り、挑発しているものだった。

「う、うわあああああああああああッ！！」

感情を抑えきれなく無くなったのか、レベツカ先輩はついにマリアに殴りかかった。

二人でその場に倒れ込み、頬を叩いて、馬乗りになるレベツカ先輩。

はぁ、はぁ、と呼吸を乱しながらマリアに怒声を浴びせる。

「私のことなんて、何も知らないくせにッ！！」

「お姉ちゃんはいつもそうッ！ 言いたいことは言えればいいじゃん！！」

「言えるわけがない！！ 私はずっと我慢するしかないのッ！」

「そうやって溜め込んでいるから、自分の本心から逃げているからッ！ 後悔するのよッ！」

「うるさい、うるさい、うるさいッ！！ マリアのことなんて、嫌いだった。ずっと、ずっと嫌いだったッ！ 守られているばかりで、いつも可哀想で、悲劇のヒロインぶっているあなたが嫌いだったッ！ 自由に振る舞えるマリアがずっと嫌いだった！！」

「私だってそうッ！ 私と違ってみんなに褒められて、綺麗でお淑やかなお姉ちゃんが嫌いだったッ！ 嫌い、嫌い、大嫌いッ！」

互いにもう、心身ともにボロボロだった。そして、涙で顔は歪んでいた。

レベッカ先輩も、マリアも、涙を流す。

俺は止めるべきだった。しかし、止めることはない。ただ同じように、この状況をじっと見つめるだけ。

「なら、初めからそう言えばいいじゃんッ！！ 私のことなんて嫌いで、いなくなればいいと思ってるってッ！ お姉ちゃんもずっと思ってたんでしょッ！ 私なんて、いらないうってッ！ ブラッドリー家に必要ないってッ！」

悲痛な叫び。

マリアは涙を流して、レベッカ先輩にその想いを告げた。

「そんな……そんなことって……」

レベツカ先輩は勢いを失って、ただ呆然とその場に座り込む。

制服もボロボロで、その顔からは止めどなく涙が溢れる。

「私は……私は」

レベツカ先輩は震える声で、話を続ける。

マリアと俺は、そんな様子をただじっと見つめる。

「マリアがいなくなって欲しいなんて……思ったことはない……大嫌い。嫌いなところもあるけどッ！！ けど、マリアのことは大好きなのッ！！ そんなことを、そんな悲しいことを言わないでッ！」

悲痛な叫びを、レベツカ先輩もまたマリアに向ける。

「……お姉ちゃん」

ほつれる髪の毛を整えることなく、マリアは真剣な表情で先輩の様子を見守る。

その瞬間。

先輩の様子が、どこかおかしくなるのを俺は感じ取った。

「マリアは……マリアは大事な妹。それに、レイさんも。みんなも……あ、頭が……痛い、痛い、痛い、うわああああああああッ
ああああああああああああああああああああッ
……」

プリママテリア
溢れ出る第一質料の奔流。

やはり、彼女の言うていたことは本当だったのだ。

「マリアッ！！ 下がるぞッ！！」
「う、うん！！」

その小さな体を抱き抱えると、俺とマリアは後方に下がる。すでにこの領域内には、結界を張っておいた。

【氷剣の魔術師】としての力は戻してある。それに妙な感覚だ。いつも以上に、感覚が馴染んでいる気がする。

やはりこれは……先輩との、共鳴なのだろうか。

「マリア。そこで待っている」
「お姉ちゃんを、よろしくね……」
「ああ」

歩みを進める。

プリママテリア
溢れ出る第一質料が止まることはない。

真つ赤な第一質料が渦を巻くようにして、先輩の周囲に留まっている。俺はそれを減速と固定で抑え込んでいく。

レベルカ先輩にはいま、魔術領域暴走オーバーヒートが起きている。

それは過去に経験したからこそ、分かる。

そして俺とマリアの目的はこれだった。

人為的に、レベルカ先輩の魔術領域暴走オーバーヒートを引き起こす。

それが、俺の役目。

魔術領域暴走オーバーヒートは魔術の過度の使用もあるが、感情が昂りすぎると、生じてしまう現象でもある。

先輩の場合は特殊だが、それを引き出し、抑え込むのが俺がここにいる理由だった。先輩の持っている力は、封印しなければならな
いから。

そして、この魔術領域暴走オーバーヒートに対処できるのは俺しかない。

「先輩」

「れ、レイさん……？」

前もよく見えていないだろう。

レベルカ先輩はその渦の中心で、ただ蹲ひづりっていた。

「私……私はマリアに酷いことを……あんなふうにするべきじゃないと、分かっていたのに……私は、とても醜いですね」

「……」

「はは……幻滅、しましたか？」

先輩の第一質料を抑え込みながら、涙を流す彼女と向き合う。
プリママテリア

「そんなことはありません。人間誰しも、抱えているものです。だから俺は、先輩は今でも尊敬しています」

「でも……」

「それに、先輩に辛い思いをさせてしまった……」

悔いる。

本当はもつと別にいい方法があつたのではないか。

だが俺は、彼女の提案したままに実行した。これこそが、最善だと思つたから。それに方法はこれしかなかった……。

それでも、この心に残るのは、先輩への懺悔だ。

「それは、どう言う……？」

「これが終われば、全てを話します。だから今は、眠ってください」

先輩の身体を優しく抱きしめる。

全てを包み込むようにして、その身体を優しく、ゆっくりと包み込む。

そして俺は、コードを走らせる。

《第一質料プリママテリア⇨エンコーディング⇨物資コードマテリアル》

《物資コードマテリアル⇨デコーディング》

《物質コードマテリアル⇨プロセシング⇨減速ディセレーション⇨固定》

《エンボディメント⇨現象フェノメノン》

「
体内時間固定クロノスノック」

発動した魔術は、体内時間固定クロノスノック。

先輩の特定の魔術領域を固定した。

すると、周囲の第一質料プリママテリアが収束していき……レベッカ先輩は意識を失った。

「……お姉ちゃん。大丈夫なの？」

「ああ。成功だ」

「良かったあ……」

マリアはその場に座り込む。

安心したのか、完全に気が抜けているようだった。

「マリア。その……」

「いいのよ。思っていたのは本当だったし、いつかお姉ちゃんとは向き合う必要があると思ってたから。でも、あはは……お姉ちゃんがこんなに殴ってくるとは考えてもみなかったけど。私も本気で殴っちゃった」

「……すまない。俺は、見ることでできなかった」

「だーかーらー！　いいってば！　もう、シャキツとしてよね」
「ああ。そうだな」

レベツカ先輩の身体を抱きかかえて、師匠たちと合流しようかと思っていると……後ろから声が聞こえた。

「おっと。そいつは置いていってもらうぜ？」

振り向く。

そこにいたのは、あの日に会った人。

だが、これは予想どおり。

きつとこのタイミングで来るだろうと思っていた。

「マリア。レベツカ先輩を見ていて欲しい」

「……分かったわ」

すでにここで戦いになるかもしれないと、マリアには説明してあった。

そうして、俺は向かい合う。

自分の能力を完全に解放して。

溢れ出る青白い第一質料。^{プリママテリア} それを見て、相手はニヤリと不適に嗤^{わら}う。

「やっぱり、お前が氷剣だったか」

「はい。あなたは、暴食でしよう？　裏では有名とか」^{バトロコ}

「ほう……パラまでは知っている奴は多いが、そこまで知っているのか。なるほど。どうやら、裏にいるのはあいつみたいだな」

「ええ。そして俺とあなたがここで戦うのは、用意されたシナリオだ」

「ははは！　ああ。分かっているさ！　でもな、当代の氷剣と戦えるとはなあ……ははは！　高ぶってきたぜ！！」

巨軀。

あまりにも大きなその体は、エヴィや部長の比ではない。それに、纏っている第一質料の質も違う。^{プリママテリア}

その雰囲気を見れば分かる。こいつは、血で塗れ、殺戮を重ね続けている魔術師。

俺と同じだからこそ、分かる。

そして、コードを走らせると魔術を発動。

顕現した氷剣を、両手で握り締める。

い
く
ぞ
」

望むところだぜええええええええええッ！！」

微かな月明かりに照らされ、俺たちは戦いを始めた。

第145話 十年ぶりの邂逅

文化祭。

アーノルド魔術学院の文化祭が始まったと同時に、二人の男が敷地内に侵入する。

「よう、モルス」

「……パラさん。それは？」

モルスにパラ。二人は来るべきの日のために、こうして下見にやって来ていた。

「あ？ 焼き鳥に、とうもろこしだが？」

「……美味しそうですね」

「お前も食うか？」

焼き鳥を一本だけ差し出されて、モルスはそれを受け取る。

「ありがとうございます」

パクリと一口。

タレの豊潤な風味と、少し焦げた焼き鳥の旨味が広がる。あつという間にそれを全て食べると、串を近くにあったゴミ箱に捨てる。

「なるほど。美味しいですね」

「だろ？」

ニヤリと笑うパラ。彼は大量に買い込んだ食料を食べ続ける。と言っても、二人がやってきた目的は別に文化祭を楽しむことではない。

これは下準備。

最終局面は、この学院で起こることは分かっている。いや、それはモルスが相手の思惑に乗っている……とでもいうべきか。

そのために、二人は文化祭を利用してこの学院の地形を改めて把握しようとしているのだ。

「さて、と」

「お。どこに行くのか？」

「レイⅡホワイトを見にいきましょう」

「どこにいるのか知っているのか？」

「ええ」

モルスがポケットから取り出すのは、一枚のチラシ。それを見たパラは、怪訝な表情を浮かべる。

「は？ 伝説のメイドが現れるって……なんだそりゃ」

「この伝説のメイドが、レイⅡホワイトらしいですよ。調べた情報によると」

「……ははは！ 冗談きついで！ なんだ女装でもするのか？」

「それを確かめに行きましょう」

パラは一蹴した。

どうせ、子どものお遊び程度だろうと。彼はそう思っていた。一方のモルスは、手に入れた情報を確かめるためにも……レイ達の教室へと向かう。

もちろん、中には入らない。不用意な接触は、避けておきたいからだ。

そして二人がそこで見たのは……。

「おいおい。一人だけ、とんでもねえ美人がいるじゃねえか。モデルか？」

「いえ。あれがレイ」ホワイトです。名義は、リリーだとか」

「は？」

プリママテリア

「第一質料を探れば分かりますよ」

じつと目を凝らして、リリーから漂う第一質料をプリママテリア一瞬だけ補足。

パラはその直後、顔が引きつるのだった。

「ま、まじなのか？」

メタモルフオーゼ

「ええ。彼は、変態の使い手のようです」

メタモルフオーゼ

「……変態？ まさか……」

「はい。聖級魔術です」

「……マジかよ」

魔術の中でも最高峰に位置する聖級魔術。

メタモルフオーゼ

変態は肉体を変化させる魔術だが、その使い手はほとんどいない。

メタモルフオーゼ

そのため、分類としては変態は聖級魔術に分類される。

またこの魔術は、求められるスキルが異常に高い。変質、という点においてもかなりの難度だがそれを固定しておくのはさらに難しい。

レイは、冰剣の本質である固定を利用しているのだが、やはりそれは【冰剣の魔術師】である彼だからこそ、出来ることである。

といっても、その変態の異質さを理解できるのは最上位の魔術師に限られるのだが。メタモルフォーゼ

「……行きましょう。とりあえず、視察は終わりです」

「レベツカ」ブラッドリイはいいのか？」

「そちらはいいでしょう。当日になれば、あちらが準備しているでしょうから」

「は。敵も随分と甘い奴だな」

「……そうだといいいのですが」

二人は学院での視察を終えると、いつものように隠れ家に向かう。

「で、当日の予定は？」

夜の帳が下り、暗闇の時刻となった。二人はいつものように地下室に向かうと、そこで酒を飲む。

モルスは適量だが、パラはいつものように大量にアルコールを摂取する。

「当日、パラさんはレイ」ホワイトの対処をお願いします」

「タイミングは？」

「レベッカ」ブラッドリーの封印後で構いません」

「邪魔するのは無しなんだよな？」

「ええ。彼女は今のままでは使い物にならないので。氷剣の能力でおそらく、封印するつもりなのでしょう。向こうの筋書きとしては」
「なるほど。なら、封印後に氷剣を殺して、レベッカ」ブラッドリイを確保すればいいんだな？」

「はい」

モルスは酒を呷る。

トン、とグラスをテーブルに置くと目つきがさらに鋭いものになっていく。

「あちらの思考は読めています。これはいわば、チェスと同じです。この王国という盤上でそれぞれのピースを動かせばいい」

「だが、あっちの方がピースの数は上だろう？」

「ええ。しかし、それは私とあなたで十分に補える。それに奴は、絶対に私との直接対決を望んでいます」

「その理由は？ まだ聞いてなかったよな」

彼は過去を少しだけ想起する。どこか焦点の合わないような目で、遠くを見据える。

「因縁……なのですよ」

「十年前のか？」

「はい。私は彼女と恋人でした」

「は、なんだよ。痴情のもつれか？」

「いえ。そんなものではありません」

モルスは語る。その過去を。

どうして相手との因縁が十年にも亘って続いているのか。

そのすべてを語り尽くした。

パラはそれを黙って聞いていた。モルスの感情的になる姿は、初めてだった。そして悟る。その復讐心は本物であると。決して、ただの痴情のもつれなどではない。その因果は決して、千切れることはないのだと。彼は理解した。

「……以上になります」

「そっか。そういうことか。お前がそこまで固執する理由も理解できた。あとは、俺とお前がそれぞれの仕事をこなせば、こっちの勝ちか」

パラは冷静にそう言った。

この手のものは別に珍しいことではない。ただっしだけ、モルスの気持ちを理解することができたのだ。

「はい。そうなります」

「先代の氷剣、それに灼熱と幻惑対策は？」

「そちらは物量に任せようかと。大丈夫です。どちらも一対一の舞台を用意しています。相手もそれは分かっているはずだ」

「そうかよ」

「では、幸運を」

そこでモルスとパラは別れた。

全ての情報は共有した。

この作戦の最後まで道の筋は、すでに明確に、はっきりと見えている。

あとは実行するだけ。

そうして、パラは地下室を出ていき、モルスは震える手でグラスを掴む。

ここまで、やっとここまで来た。

彼女にたどり着くために、十年前の因縁を果たすために、やっとたどり着いたのだ。そして絶対に、奴を殺す……と。

そう改めて誓うと、モルスもまた地下室を後にするのだった。

反響。

コツコツと地面をブーツで踏み締める音が響き渡る。

アーノルド魔術学院には非常用の通路として、膨大な地下空間が広がっている。この情報を知るのには、この学院の教員とその他の上位魔術師のみ。だがそれはもともと、非常用に使ったものではない。

地下空間の上に、学院を後から作ったという方が正しい。

ここに入るには、特殊なキーを必要とするのだが、モルスはそれを所持していた。いわばそれは、彼女からの贈り物だった。

彼は難なくこの場にやってくると、真っ直ぐ前を見据えてただひたすらに進む。

現在の時刻は、二十時を回っている。

パラもまた、きつとすでに冰剣と戦っているに違いない。彼はそう思いながら、進んでいくと……影が見えた。

それは人影。

知っている。

知っているとも。

モルスはその姿を知っている。

なぜならばそれは、彼と全く同じ姿をしているのだから。

「久しぶりだね。今はモルス、という名前だったかな？」

「……」

相手が彼に話しかける。

まるでこれは雑談と言わんばかりに、陽気な姿でそう語りかけてくるのだ。

モルスはただ、まるで何も映っていないかのような暗い瞳で相手を見据える。

「いや、こういうべきだね。久しぶり、エヴァン^{……}＝ベルンシュタイン^{……}」

「ああ。十年ぶりだ。リーゼロッテ＝エーデン。いや、こう言うべきか？」

一瞬だけ間を置くと、モルスことエヴァンはこう言った。

「^{きょこつ}虚構の魔術師」

ニヤリと笑った瞬間、その場に溢れるのは第一^{プリママテリア}質料の奔流。エヴァン＝ベルンシュタインに成り代わっていた、リーゼロッテはその姿を元のものに戻す。

「【僕／私】がこの姿になるのは、いつぶりかな？ さて、エヴァン。改めて、久しぶりだね」
「……」

その姿は、全くの別人のものになっていた。

真っ黒なロングコートに、ロングブーツ。雪のような真っ白な肌と、純白の長髪は腰まであり、それがサラサラと流れている。

その弾んでいるような声とは裏腹に、その表情はまるで人形そのもの。

そして、彼女はニコリと微笑む。

「じゃあ、殺し合おうか。十年前みたいにさ」

夜。

二人以外には、誰もいない地下空間。

ここでついに、十年前の因縁が果たされようとしていた。
。

第145話 十年ぶりの邂逅（後書き）

三章はこのミスリードを狙ってずっと書いていました。

伏線は、82話、85話、92話、96話、101話、104話、107話、121話、138話などにあります。再読すれば面白いかもしれませんので、一応提示しておきます。

第146話 あの日之夜に

「おらあああああッ！！」
「……………」

屋上で戦闘を繰り広げる。

俺は両手に冰剣を握り、相手は素手でそれに対抗してくる。

微かな月明かりの元で戦う。

しかし今は、光に頼って戦闘はしていない。

すでに、現在は絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドを展開している。

「オラオラ、どうしたあああああッ！！ ああ！？」
「ッ」

絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドを展開はしているが、この相手には還元領域は通用しない。

還元領域は、まずは【減速】で物質または現象を低下させ、そこから【固定】して一気に対物質コードアンチマテリアルを活性化。

完全に全ての物質と現象を還元する領域だ。

しかしそれは、全ての魔術に適用できるわけではない。

特にこの、暴食相手では。
バラトロコ

「……マテリアフィールド 質料領域の質が、桁違い過ぎるな」

ボソリと声を漏らす。

そう。俺の還元領域が通用しない理由。

それは、相手のマテリアフィールド 質料領域があまりにも分厚いという一点に尽きる。
マテリアフィールド 質料領域とは、プリママテリア 第一質料で覆われた領域。

それは人間に対して薄い膜が覆うようにして存在するもので、上位の魔術師になれば、それを自由自在に操ることができる。

そもそも、バラトロコ 暴食は超近接距離での打撃戦を得意としている。そのため、その身体に第一質料を分厚く覆い、それを攻撃手段に用いている。

アンチマテリア 対物質コードで還元すること自体は不可能ではない。

だが、あくまで還元できるのは、表層のみ。たとえ全力であつても、俺にはおそらくこのマテリアフィールド 質料領域を突破することは叶わないだろう。

「こんなもんか!? 冰剣よおおおおおおおッ!」

シンプルな徒手格闘戦。

相手は情報通り、百戦錬磨なのは間違いない。

その練度は、所属していた部隊の中でも類を見ないほどだ。それこそ、師匠に匹敵するほどの技術。

さらに圧倒的なのは、この巨軀から繰り出される圧倒的な速度を兼ね備えた重量のある攻撃。

それに加えて、身体強化によるスピードは、すでに目では追いつけないほどになっている。

それに対抗するために、絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドの知覚領域で補完しながら俺はこの氷剣を振り続けている。

「脆い、脆い、脆いぜええええええッ！！」

すでに氷剣は両手だけではなく、空中にも展開してその全てを相手に向けている。しかしそれは、着弾する直前に破壊されてしまう。

三百六十度、その全てに死角がないような動き。

おそらく俺と同様に、視覚だけに頼って戦闘していないのは明白。パラパラと舞う氷の欠けら。

それを媒介して、さらなる冰剣を生み出し続ける。現在は重要なのは、物量ではない。質だ。

改めて、冰剣の構成をコードで再定義する。

《^{ブリママテリア}第一質料〓^{マテリアル}エンコーディング〓物資コード》

《^{マテリアル}物資コード〓^{マテリアル}デコーディング》

《^{マテリアル}物質コード〓^{ディセラーション}プロセシング〓^{マテリアル}減速〓^{マテリアル}固定》

《^{マテリアル}エンボディメント〓^{マテリアル}物質》

「^{アイシクルブレイズ}冰千剣戟」

両手に持つ冰剣だけは、特にその強度を上げる。今までは、拳と脚に当たるたびに砕けていた冰剣。

だがついに、冰剣は砕けることなく相手の攻撃を弾く程度にはなってきた。

「ハハハハハハ！！ここにきて、再調整できるのかよッ！！流石だなぁッ！！」

相手の動きを見据える。

フェイントを織り交ぜながら、繰り出される拳。

その拳を防いだ瞬間には、右側から脚が飛んでくる。おそらく視界に頼っていれば、見えないであろう攻撃。

一撃一撃が、必殺であり、この境地にたどり着いている魔術師がいることに俺は恐怖する。

魔術を殺人の技術として高めた魔術師の頂点、とでもいうべきか。

極東戦役でもこの手の輩と戦ったことがあったが、ここまで質の高い魔術師に出会ったことは数回しかない。

それも、その時は全て師匠が相手をしていた。

俺はただ見た、という経験しかない。

だがそれでも……俺は相手の戦力を、彼女から聞いていた。

そして、思い出す。あの夜のことを。

彼女とは、【虚構の魔術師】である　リーゼロッテ＝エーデンだ。

俺は虚構と出会うのは初めてだった。

一方で、師匠、アビーさん、キャロルはあの夜、その姿を虚構に戻した彼女とは面識があったらしい。だが、三人ともにその表情は曇っていた。

まるで、出会いたくはない人間と出会ったしまったかのような。

そこで俺は、全てを聞いた。

今回の件は、【虚構の魔術師】が用意したシナリオだと。

そしてそれは、ブルーノ・ブラッドリイが彼女に依頼したことから始まったという。娘であるレベッカ先輩を救うために、彼は【虚構の魔術師】に依頼。

【虚構の魔術師】である彼女は、俺たちの動きも含めて、この舞台を用意したのだという。

「氷剣。君にしかできない仕事がある」

「……なんでしょうか」

その姿を、女性のものに変貌させたリーゼロッテ・エーデン。

そもそも、ベルンシュタイン氏は彼女が有している【^{ピース}顔】に過ぎないらしい。

本物こそは、この王国の裏で【モルス】という名前で暗躍していると聞いた。

真っ黒なロングコートを羽織り、同じように漆黒のロングブーツを履き、マリアと同じかそれ以上に純白の肌。また腰まで伸びる、雪のように白い髪。

それを右手でサラリと流すと、彼女は立ち上がってコツコツと靴の音を鳴らしながら、俺の正面にやってくる。

身長はちょうど同じ程度。

そして、互いの視線が交差する。

「君には、レベッカ・ブラッドリィを壊して欲しい」
「……どういう意味でしょうか？」

怒りを込めて、俺は視線を向ける。だが、相手の中に悪意がないことはすぐにわかる。

ただ純粹に、その言葉通りに受け取るべきなのか……？

「夢を見ただろう？ その中に、彼女がいたはずだ」
「……どうしてそれを？」

「私の研究テーマでもあるからね。私の専攻は、意識。厳密に言えば、クオリア。ま、そんなことはいいさ。そうだね、ここから先は彼に説明してもらおうかな」

彼女は視線を、ブルーノ氏に向けた。

すると彼もまた立ち上がり、俺の方へと向かってきた。

「レイ」ホワイトくん。久しぶりだね」

「はい」

その顔はやつれていた。心労かもしれないが、夏に会った時とは印象がかなり違う。

伸びきった無精髭に、頬は瘦こけている。隈くまもかなり濃く、疲れているのが見て取れた。

「……ブラッドリイ家には、ある伝統がある」

彼は淡々と、話を始めた。

「それは？」

「何百年かに一人、特別な人間が生まれる。その人間は、一見すれば魔眼を有しているように思える」

「ように……とは？」

言外の意味があるのは、間違いなかった。

「しかし、実際はそうではない。魔眼は二次的なものに過ぎない。その根幹にあるのは、真理世界アーカシヤへ接続する魔術領域だ。そして、それを有するものを聖人クロイツと呼ぶ。ブラッドリイという名は、聖人クロイツを大量の血を流して争った故に付いたものだ。君なら、理解できるだろう？」

「なるほど……そういうことでしたか」

俯く。

そして、師匠たちの方へと視線を向ける。

俺は極東戦役の最終戦において、自分のルーツを知った。それが今こうして、レベルカ先輩と繋がっているとは……なんという、因果なのだろうか。

そう思わざるを得ない。

まるでこれは、運命の悪戯だ。

「アーカーシャ真理世界には世界の記録が残っている。厳密に言えば未来の記録もすでに残っていると言われている。だが、ブラッドリイ家に生まれたクロイツ聖人の行く末は、悲惨な末路しか残っていない。例外はない」
「……………」

分かっている。

分かっているとも。

その話を聞いて、俺はこのシナリオの全てを知ってしまった。

どうして虚構の魔術師が、俺に依頼をするのか。

そしてその依頼内容は何なのか……理解してしまった。

「クロイツ聖人はいずれ、オーバーヒート魔術領域暴走を引き起こし……死に至る。私の予想だが、レベルカは二十歳まで保たないだろう……マリアがアルビ

ノとして生まれたのは、その残滓が残っていたと私は思っている。
しかし、マリアには今のところその兆候はない。そしてこのことは、
ブラッドリー家の当主しか知らない」

「……オーバーヒート人為的に魔術領域暴走を引き起こして、自分に封印しろと？
アーカーシャ真理世界へ接続できる魔術領域を……」

背筋を伸ばし、じっとブルーノ氏を見つめる。

確かに彼は、その疲れが顔に出ている。だがその瞳には、まだ確
かな力が残っていた。レベツカ先輩のことを、本当に案じているよ
うだ。

「……そうだ。そのために、レベツカは辛い思いをしている。そし
てそれは、今もなお続いている……」
「なるほど……オーバーヒート魔術領域暴走の発動条件は、過度の魔術の使用。ま
たは」

俺が続きを話そうとすると、虚構が会話に加わる。

「感情の暴走、だね。エヴァンとして、私はレベツカ嬢を追
い込み続けた。そして仕上げは、氷剣。君に任せたい」

視線を向ける。それは怒りを込めた視線。

そんなこと、レベツカ先輩にするなど……俺は理解はできても、
感情はやはり拒んでしまう。

「……あなたは心が痛まないのか。レベツカ先輩に、そんな仕打ちをして……」

「氷剣、勘違いをしないで欲しい。私は依頼されて、最善を尽くしている。心が痛いかどうか、と問われれば痛くはない。私の共感性は著しく低い。他人がどうなるうが、どうでもいい。サイコパシーが高いのは否定しない。だが、楽しんではいないさ。だから最後は、君に任せるんだ。これは私からの譲歩だ」

「……」

「君が引導を渡すといい」

虚構の魔術師である彼女はただ冷静にそう告げると、話は終わったと言わんばかりに、席に戻っていく。

一方で隣にいたブルーノ氏は俺に対して、頭を下げた。いやそれはもう、土下座だった。地面に頭をつけて、懇願した。

「……私の代で、^{クロイツ}聖人が出るとは予想していなかった。今までのブラッドリー家はそれを受け入れていた。だがッ！ 私はッ！ 愛するレベツカを、失うわけにはいかないッ！ 都合がいい願いなのは、分かっている。それでも、レイ・ホワイトくん。君が娘を救ってくれるのなら、私は全てを君に捧げるつもりだ。まだレベツカには、明るい未来が待っているのだから」

その様子を、俺を含めて全員が見つめる。

すると師匠が隣にやって来たが……その表情は、怒りに満ちていた。

「おい。魔術領域暴走を防ぐ際に、レイがどうなるのか知っているのか？」

顔を上げる。

ブルーノ氏は目を逸らしつつ、最後には師匠の目をじっと見据える。

俺はこれが演技だとは思えなかった。

ただ娘のために、最善を尽くしている父親の姿なのだと思う。

「……もちろんだ」

「そうか。分かっていて、レイにそれを押し付けるのか」

「……そうだ」

覚悟は決まっている。

そんな表情をブルーノ氏はしていた。

そうか。俺のことも、少しは把握しているみたいだな。

「師匠。ご心配いただきありがとうございます」

「レイ。しかし……」

「もう俺は、あの時の自分ではありません。それにきつとここで、レベッカ先輩を諦めてしまえば、俺は前に進むことはできません。やります。俺はレベッカ先輩を助きたい」

「……レイ。お前は　いや、もう何も言つまい」

そして次に、アビーさんがやってくると俺を優しく包み込んでく

れる。

「レイ」

「はい」

「お前はもう、自分の意志で進めるんだな」

「はい」

「じゃあ、頑張ってこい」

そつとその体を離すと、目の前には泣きそうなキャロルがいた。

そして、次の瞬間。

ポロポロと涙を零し始める。

俺はそんな彼女を、優しく抱きしめた。

「レイちゃん……」

「大丈夫だよ、キャロル。俺はちゃんと戻ってくるから」

「でも……！ あの時みたいになつたら……ッ！」

キャロルは極東戦役の最終戦のことを言っているのだろう。

だが、大丈夫だ。

俺はもう、あの時のように未熟ではない。

しっかりと、仲間と共に成長してきたのだから。

だからきつと……成し遂げることが、できるはずだ。

「さて、と。では詳しい話をしようか。相手の情報も教えよう。それと、それぞれの役割もね」

こうして俺たちは、【虚構の魔術師】の元で作戦を練ることになる……これがあの夜の出来事。

改めて俺は誓う。

絶対にここで、終わらせるのだと。

レベツカ先輩のためにも。

第147話 最愛の姉妹

微睡^{まどろ}みに落ちるように、私の意識は沈んでいく。

その最中、私は記憶を見た。

それはいつものように、彼の記憶。

どうしてレイさんの記憶を見るのか、私にはよく分からない。

でもずっと、それを追体験するように目撃してきた。

極東戦役で戦い、多くの死に触れて、嘆き、慟哭し、それでも自分を奮い立たせて彼は進んできた。

そして、この学院にやってきた。

その中には私も出てきた。

自分を客観的に見るのはおかしな感じだが……本当によく笑っていると思う。

例えば、レイさんと出会うまで私は……どこか閉塞感を覚えていた気がする。

別に現状に不満があるわけではない。

友達はいるし、園芸部の人たちも優しい。距離感はあるけど、デイーナさんはいつも寄り添ってくれる。

けど私は、やっぱり自分は三大貴族の娘で、接するのも貴族の人たちばかり。

他の人たちは、私を敬遠していく。

中でも、マリアとまともに話していないのは、堪えた。

でもあの子も私のせいで辛い思いをしていると考えたと、不必要に触れるわけにはいかなかった。私たちに今必要なのは、離れると言う時間なのだから。

「レベツカ先輩。おはようございます」

一礼。

レイさんはとても礼儀正しい人だった。初めて会った時から思っていたけど、彼は年下とは思えないほどに達観している気がした。

彼が作った花壇の前で、よくお話をしたのは記憶に新しい。

水やり当番は決まっているのだが、私は実はズルをしていた。

それは意図的にレイさんと自分の当番を重ねていたのだ。

当時は、ただ興味本位で彼ともっと話がしてみたいと。

オーディナリ

一般人であり、貴族でもなければ、魔術師の家系でもない彼の存在に興味を持ったのだ。

それから時は巡る。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会では負けてしまったけど、自分では全力を出し切ることができたと思う。

「アメリカ。優勝おめでとう」

「あ、ありがとう……」

「おめでとうアメリカちゃん！」

「アメリカ、凄かったな！」

「おめでとう！」

アメリカさんは新人戦で優勝を果たした。

凄まじい魔術^ンだった。あれは間違いなく、因果に干渉する固有魔術^{オリジン}。

そんな能力を発現するなんて、やっぱりアメリカさんは三大貴族筆頭のローズ家の血を継いでいる、ということなのかもしれない。

その中で私は、遠くから彼女ではなく、レイさんを横顔を見つめていた。

いつも硬い表情をしている彼が、あんなにも嬉しそうに笑っているなんて、新鮮だった。

「……」

自分の胸を押さえつける。

ズキッと痛みが走る。この痛みは何だろう。

その痛みを押さえつけたまま、私は考える。

やっぱりレイさんは、特別な人間だ。

オーディナリー

一般人であり、ウィザード枯れた魔術師と揶揄されているというのに、それでも毅然と振る舞い、自分の進む道をただ真っ直ぐその姿に憧れた。

憧憬。

願わくば、彼のようになりたいと……そう思うのは、傲慢なのか
もしれない。

今はその過去を知っている。その壮絶な過去を。

極東戦役を乗り越えてきた彼だからこそ、今のレイ＝ホワイトに
なっているのだ。

その上澄みだけをみて、彼になりたいなんて……おい鳥澁がましいに
もほどがある。

「私は……」

ボソリと呟いて、自分の手を胸に当てる。

その時の感情の名前を、私はまだ知らなかった。

そして私はついに、エヴァン＝ベルンシュタインと出会う。そこで彼の目論見を知り、ブラッドリー家の真意を知る。

それから私は、頑張っていつも通り振る舞っていたけど、マリアやレイさんにお見通しだってことは分かっていた。

でも、話すことはできなかった。

その後、マリアとレイさんが二人で仲良くしているところを目撃して、嫉妬してしまった。

それは私が苦しい思いをしているのに、彼と笑いあっているマリアにではない。

私はきつと……別の意味でマリアに嫉妬していたのだ。

記憶はさらに巡る。

レイさんはこの王国の裏で行われている出来事を知り、マリアに協力するように持ちかけた。

二人とも、苦しそうだった。

とても、とても、辛そうだった。

私のために、私を傷つけるという行為が、許せない。

けれど、しなければならぬ。二人のその葛藤を垣間見て、私は涙を流す。

私はずっと一人だと思っていた。

でも二人はこんなにも、私のことを想ってくれている。それに、お父様も、私のことを思って、選択をした。全ては私のために。

全てを知って、思ったのは……許せないという感情ではない。

ただただ、安心した。

その全ては杞憂だったのだと。

そしてそれらは、私のためにしてくれていたことだと。

瞬間。

ふと、レイさんの微笑む姿を思い出す。彼と過ごした日々が、走馬灯のように過ぎ去っていく。

ああ。そうか。そうだったのか。

やっと。やっと分かった。

きっとこの感情は……『』と呼ぶのだろう。

「ま、マリア……」

目を覚ます。

どうやら私は、マリアの膝で寝ているようだった。そして彼女は懸命に、魔術を行使していた。

溢れ出る大量の第一質料。
プリママテリア

チラツと横を見ると、そこではレイさんが大きな体をした男性と闘っていた。

それは死闘、というべきだろう。

もはや、私くらいの魔術師では、その戦闘の異常さを理解できない。文字通り、次元が違う。

でもそれもそうだろう。

だってレイさんは、七大魔術師が一人。

【氷剣の魔術師】なのだから。

「う……ぐううう……うううううううッ!!」

マリアは懸命に私を守りながら、防御障壁を張っている。決して魔術は上手くはない。あの二人が巻き散らす第一質料の片鱗を^{ブリママテリア}かるうじて、防ぐことができる程度。

おそらくもっと距離が近ければ、すでにマリアは倒れているだろう。

それでも齒を食いしばって、汗を流して、懸命に魔術を使っている。

そんなマリアの姿を見て思う。

ああ……本当に、成長したんだなと。

だからお姉ちゃんである私がすることは、それを助けてあげることだ。

「……マリア。よく頑張ったね」

私はコードを走らせて、マリアの魔術に自分のコードを組み合わせ、より強固な障壁を生み出す。これなら、マリアもずっと魔術を発動していなくても良い。

「お姉ちゃん!? 無理しちゃダメだよ!!」

魔術の介入で気がついたのか、マリアは真剣な声で私に怒鳴ってくる。

「ははは……マリアも、そんな声が出るのね……」

「ばかッ！！ 安静にしてないと、ダメでしょ！ まだ絶対に無事とは限らないんだからッ！！」

「ねえ……マリア」

そつと、その頬に手を添える。

私が感情的になってぶってしまったことで、真っ赤に腫れ上がっていた。それに私らしくもなく、身体も一杯殴ってしまった。髪も引っ張ってしまった。

ボロボロだった。

マリアはそんな姿でも、美しいと……私はやはり、思ってしまう。

「ごめんね……ずっと、ずっと……ごめんね」

「ッ……」

瞬間。マリアの顔が強張って、さらに怒声をあげる。

「いまさら！ いまさらそんなことを言わないで！！ 私だって、お姉ちゃんに謝りたいことが一杯あるッ！！ 私のために頑張ってくれてたのも、知っているッ！！ だから、そんな風に謝らないでッ！！」

「……マリア」

肩を上下させ、マリアはそう言った。

あの時の喧嘩は、私たち姉妹の初めての喧嘩だった。

姉妹で喧嘩なんて、するわけがないと思っていた。

だって私もマリアも、本心を隠し続けていたから。

その心にずっと、ため込んでいたから。

分かってる。

あれは私の感情を煽るためでもあったけど、本心であったと。

だから私は……マリアにごめんと言ってしまった。

けど、マリアは私が思っているよりも……ずっと、ずっと、強く
なっていた。

言つべき言葉は、ごめんではない。

私は、震える喉を懸命に動かしてこう言った。

「……マリア。今までずっと、ありがとう。お姉ちゃんね、マリアのことが大好きだよ」

言えた。

やっということができた。

ずっとそう伝えなかった。

幼い頃は簡単に言えたのに、どうして年を重ねるごとにその言葉から離れていってしまうのだろうか。

やっぱり私は愚か者だ。

けど、やっと言うことができた。

ああ。私の可愛いマリア。

やっぱりあなたは、とても綺麗で、美しい。

「そんな……私だって！ 私だってッ！」

互いに涙を零す。

溢れ出る涙は、もう留まることを知らない。

私も、マリアも、きっと酷い顔をしている。

互いに赤く腫れた顔に、溢れ出る涙。それに、鼻水だって出てしまっている。

本当に無様な顔だと思う。

けど、マリアはそれでも綺麗だ。とっても、とっても、綺麗だ。

「お姉ちゃんのことはずっと大好きだったッ！　昔からずっと、変わるわけがないッ！―」

抱きしめる。

体を起こして、マリアの体に触れる。

ああ。マリアはこんなにも大きくなったのかと、感慨深い気持ちに浸る。

私たち姉妹はよく似ている。

本当に、どうしようもないくらいに、よく似ている。

見た目は確かにかけ離れている。でも私たちは、やっぱり姉妹だ。

その心の在り方が、よく似ているのだ。

「マリア……ありがとう。今までずっと、ありがとう。私のことを応援してくれていて、ありがとう。生まれてきてくれて、ありがとう」

「ばっか。バカだよ、お姉ちゃん。私だって……ぐす……同じに

決まってるのに……」

「そうね……ずっと、ずっとすれ違ってきた。でもこれからはこちらと話し合いましょう。二人でちゃんと、ね……」

「うん……」

頭を撫でる。

体は大きくなったけど、やっぱりマリアは小さな可愛い妹だ。

よしよしと、優しく頭を撫でるのも本当に久しぶりだった。

「お姉ちゃん……」

「どうしたの……？」

「お姉ちゃんの気持ちが分かっていて、あんなことしてごめんなさ

い……」

「……」

分かってる。

だって私たちは姉妹だから。

マリアがどうしてあんなことをして、どうして私があんなにも動揺したのか、分かっている。

ああ。本当にバカだなあ……。

姉妹揃って、同じ人に『

』なんて。

「良いのよ……マリア。許してあげるわ……」
「うん……うんッ!!」

改めて、ギュッと互いの体を抱きしめて、その体温に触れ合う。

「マリア」

「うん」

「レイさんは、【氷剣の魔術師】だったのね」

「うん……そうだよ。レイはね、ずっと頑張ってくれた。お姉ちゃんのために」

「……うん。知ってる」

そして、二人で見つめる。

懸命に、その血を流しながら、闘っている彼の姿を。

それはもう……幾度となく見た姿だった。

今の彼は昔と違って、あの危うさはない。そんな気がした。

巧みに氷剣を操って、相手と対峙するその姿は純粹に綺麗だと思っ
てしまう。

レイさんはやはり、特別な人だった。

いや、違う。その言い方は正しくない。

彼は、私にとって特別な人だった。

それだけだ。

「レイさん……」

マリアの手をぎゅっと握ると、私たち姉妹はその戦いの行く末を見守る。

もう私たち姉妹を、分かつものなど……ありはしなかった。

第148話 真紅に染まる

「……冰剣。その程度か？」
「……」

距離を取る。

互いにまだ、一撃は当たっていない。

しかし、今の攻防でおおよその実力は理解できていた。

それは拮抗する実力だからこそ分かる。

今の俺では、奴には届きはしないのだと。

「おいおい。拍子抜け過ぎだろ。先代の冰剣はもっとヤバかったぜ？」

会話に応じる義理はない。

だがどうやら、彼は俺の返答を求めているようだった。

殺戮に悦を見出すのではなく、魔術師同士の戦闘に悦びを覚えるタイプの魔術師。

そして俺は、視線と緊張感を切らすことなく、その言葉に答える。

「師匠を知っているのか？」

「リディア「エインズワース」だろ。もちろんだ。あいつとは、一度だけ……過去に戦ったことがある」

「……」

「初めてだった。勝てない、と思った魔術師は。まさに修羅。あの領域に至るために、俺は積んできた。この震えを止めるために、俺は戦ってきた」

「……」

よく見ると、その拳は震えていた。拳だけではない。その強靱な脚もまた、震えが止めることはない。

師匠の過去、出会う前のことは知らない。

ただ彼女が修羅の如き強さを誇っていたのは間違いない。

アビーさん、それにキャロルに聞いた話だが、師匠の全盛期は魔術師の頂点にふさわしいものだったらしい。

俺と出会った時も、全盛期ではあるが真の意味で最強だったのは俺と出会う少し前だという話だ。

バトロゴ

つまりは、暴食が師匠と出会ったのはその全盛期の時。そして彼は、師匠に恐怖心を刻み込まれた。

覚えている。

あの深淵でも覗いているかのような双眸。

その果てには、何もない。

伽藍堂。
がらんどう

冷酷な師匠の姿は、今思い出してもゾツとする。

「お前は、あいつを超えていると聞いている。リディア＝エインズワースをな。どうなんだ、実際のところよお……」

肩をすくめて、両手を広げてそう尋ねてくる暴食。
バラタロム

「……俺は師匠を超えたとは、思っていない」

「はっ。そうかよ」

「しかし、魔術師としての潜在的な能力であるのなら……俺の方が上だろう……」

「ハハハハハハハハ！　思い切ったことを言うなあ！　おい！
ハハハハハハハハ！」

顔を歪めて、事実を告げる。

決して俺は魔術師として、師匠の上に立っているとは到底思えない。

だが、純然たる事実がある。

俺と師匠に存在する、明確な差。

その時、俺は師匠の言葉を思い出していた。

「レイ。お前はきつと、私を超える魔術師になる。全盛期の私など、遠く及ばない存在にな」

腰まである長い金色の髪を揺らしながら、師匠は俺に向かってそう言った。

「そんなことは……ありません」

否定する。

俺が師匠を超える？

そんなこと、あり得るはずがなかった。

「気がついていいるだろう？ お前は、特別なんだ。魔術師の頂点に立つ器だ」

「それは……」

気がついていた。

自分の内側に眠る存在に。

「……なあ、レイ」

腰を落とす。

師匠は視線を合わせてくると、感情を込めて助言をしてくれる。

「私もお前も、才能があつた。だがな、その才能とは努力がなければ引き出せない。そして能力とは、自分が支配してこそ能力たり得るんだ」

「……はい」

「見てきただろう？ 才能に溺れ、自ら堕ちて行く連中を」

「……はい」

「だからな、レイ。力を手にすることは、それ相応の責任が伴うことなんだ。きつといつか、お前にも分かる日が来る」

ふっと、遠くを見据えて、師匠は戦場を見つめる。

赤く染まり切ったこの戦場で、彼女は何を思ふのか。

俺は最後まで師匠の心の内は理解できなかった。

だがその教えは、今もこうして心に刻まれている。

「本気で行くぜ……がっかりさせるなよ？」

瞬間。

バラストロコ

プリママテリア

暴食の周囲の第一質料が収束する。それは、魔術剣士競技大会で

マキウス・シュバリエ

アリアーヌが使用していた魔術。

オーガ

鬼化。

オリジン
固有魔術の中でも、物理攻撃に特化した魔術。

正直言って、アリアヌのものは属性を付与しているからこそ、完全に物理特化しているとは言い難い。

だが、暴食バラトロゴのものは違う。

その四肢は赤黒く染まっていき、完全に変色する。

そしてニヤリと笑った瞬間　その姿が、忽然と消えた。

「……おっと。これはついてこれるのか」

後ろを見ることなく、氷剣で受け止める拳。

俺の氷剣もまた、かなり強度を上げている。にもかかわらず、その一発の拳を受け止めただけで、氷剣にヒビが入り……砕け散ってしまう。

「楽しませてくれよ？」

そこから先、言葉は要らなかった。

本気の戦闘。

魔術師同士の殺し合い。

その感覚に身を任せるのは、本当に懐かしい。

グレイ教諭との戦闘、死神との戦闘。グリムリーパーどちらともに、死闘であるのは間違いなかった。

しかし、間違いなくその中でもこの暴食は格が違バトロコう。

おそらく戦闘という一点においては、世界でも上位に入るであろう逸材。

その圧倒的な巨躯。類稀なる格闘センス。それを理解した上で、自分の魔術を戦闘に特化して、磨き上げている。

極東戦役でも、数多くの魔術師見てきたが、これほどの魔術師が……まだ存在しているとは……。

世界は、本当に広い。

「……」

知覚領域を使用して、相手の位置を補足し続ける。

視覚に頼っていても、確実に遅れる。

「……グッ！」

ついに一発、相手の攻撃をもらってしまふ。

知覚はできている。

相手の位置は補足できている。

しかし、身体がついてこない。この反応速度に、自分の体が反応してこない。

そこから先は、一方的だった。

ただ俺は防御するのに精一杯だった。

急所を外し、一撃で殺されないように、戦うことで手一杯。

その四肢から繰り出される攻撃を完全に防ぐ術を、今の俺は持ち合わせていない。

「う……ごほっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

内臓をやられたのか、吐血する。

肋骨も折られてしまい、それに右腕と左脚も骨折している箇所がある。

満身創痍。

いくら氷剣があろうとも、相手に当てることのできるだけの技量がなければ意味がない。

「もう終わりか？」

「……」

黙って、パルトロ暴食を見つめる。

その顔は、失望したと言っているようなものだった。

「ふう……氷剣と言っても、ガキだとこの程度か」

「……」

そして俺はついに、目を閉じた。

その時に聞こえてきたのは、レベッカ先輩とマリアの声だった。

「レイさん！ 逃げて!!」

「レイッ!! もういいわよッ！ 逃げてッ!!」

その声は震えていた。

この場にある第一質量濃度は、プリママテリア限りなく濃い。それこそ、並の魔術師では卒倒してしまうほどに。

二人はその中で、自分ではなく俺の心配をしてくれている。

きつと、二人だつて早く逃げたいだろう。

だと言うのに、自分を奮い立たせて懸命に声をかけてくれる。

大丈夫だ。二人とも。

なぜなら、この戦いは、始まった瞬間に、終わりを迎えているも……同然なのだから。

「諦めた、か」

近寄ってくる。

バラストロコ
暴食は俺が諦めたと思ったのか、ゆっくりと近づいてくる。

しかし、その足は急に止まる。

「て、テメエ……何をしゃがった？」

目を開ける。

全ての準備は整った。

バラストロコ
暴食はギリギリ理解したようだが、すでに時は遅い。

これに気がつくのならば、戦闘が始まった瞬間でなければ意味がない。

着々と積み上げてきたコード。

俺は戦闘が始まった瞬間から、魔術領域の殆どを使い緻密なコードを組み立てていた。

肉を切らせて骨を断つ。

死なない程度に、自分のリソースを残して暴食と相対する。バラストロコ

これは気が付かれては意味がない。

これほどの時間をかける魔術は、エクステンシブ大規模魔術、エクステンシブチエイン大規模連鎖魔術に限られる。それはどちらにせよ、相手に知覚されてしまうのは間違いない。

溢れ出る第一質料プリママテリアを抑え込むことなど、普通は不可能なのだから。

だが仮に、エクステンシブ大規模魔術またはエクステンシブチエイン大規模連鎖魔術を完全に漏らすことなく制御できたら？

その仮説を基に、新しい魔術を師匠は生み出した。

俺はその仮説を実行するだけだ。

《第一質料プリママテリア〓エンコーディングマテリアル〓物資コード》

《物資コードマテリアル〓デコーディング》

《物質コードマテリアル〓プロセッシングディセレーション〓減速コンプレッション〓固定〓圧縮》

《エンボディメントピクノグラム〓魔術圧縮マテリアル〓物質》

「バンドラ赫冰封印」

刹那。

真紅に染まる、緋色の氷こほりが世界に顕現した。
。

第149話 人の心を私は知りたい

「やっとだ……やっとここまで来た……」

殺意を込めた視線で、リーゼロッテを射抜くエヴァン。

二人の出会いは、学生の頃だった。

互いに性格が合う。それに魔術に対する適性も高いので、魔術の話も弾む。

容姿も互いに美男美女。

自然と惹かれ合うのは、時間の問題だった。

「ねえ、エヴァン」

「どうした。リーゼ」

アーノルド魔術学院に存在する地下空間。ここは、ある鍵が必要なのだが、リーゼロッテはそれを教師からくすねていた。それを彼女の魔術で複製すると、エヴァンにもそれを渡した。

ここは、二人にとっての秘密の場所だった。

恋人となった二人は、そこで逢瀬を重ねていた。周囲の視線が鬱陶しいため、ここは最適の場所だったのだ。

エヴァンは学生の頃から、人を集めるカリスマ性があつた。周囲の人間から頼られ、確かな人望を築いていた。

一方で、リーゼロッテは孤高だった。

魔術師として、すでに学生にして白金級^{プラチナ}。この魔術学院では、彼女に話しかける者はいない。エヴァンを除いて。

魔術師としての実力もそうだが、その容姿と性格もそれに拍車をかける。

真っ白な肌に、真っ白な髪の毛。サラサラと流れるその長髪に真っ赤な瞳は、不気味と思う生徒の方が多かった。

彼女はアルビノだった。

魔術師の中に稀に現れるアルビノ。それに彼女は寡黙な人間だった。お喋り自体は好きなのだが、相手がいなくとも毅然と振る舞える。寂しいと思ったことは、一度もない。

それも相まって、リーゼロッテは孤独だった。

だが、彼女は受け入れていた。その全てを、今の状況を、受け入れていた。

そんな時に現れたのが、エヴァンだった。

彼はそんな孤高な彼女に惹かれた。どこか神秘的な雰囲気兼ね備えている、リーゼロッテに恋をした。

そして二人は、恋人になった。

「魔術には、まだ先があると思うんだ」

「また魔術談義か？」

「うん。私はね、コード理論にはまだ秘密があると思っている」

「俺には皆目、見当もつかないが」

「だから私は、研究者にでもなるのかな」

「進路、か」

「エヴァンはどうするの？」

見つめる。

リーゼロッテは、何の感情も宿っていないような瞳でエヴァンを見つめる。

彼女は基本的に無感情だ。喜怒哀楽が薄く、他人の感情を読み取ることも難しい。

限りなく、サイコパシーが高く、彼女は完全なるサイコパスだった。

だからこそリーゼロッテは、人の心を理解したいと思うのだ。

エヴァンと付き合っているのも、自分の心確かめるためだった。

自分はちゃんと彼に惹かれていて、恋をしているのだと。

「……俺は、大学に進む。が、その先は家を継ぐだろうな」
「そっか」

「今は見合いの話も出ている……」
「うん」

分かっていた。

この関係は、一時的なものであると。

いつかきつと、別々の道を歩んでしまうと。

言葉にはしないが、二人は知っていた。

上流貴族。それも、優秀な魔術師となれば自由恋愛は難しい。これは学生時代の中の、夢のようなものである。

リーゼロッテもまた、優秀な魔術師。貴族の家柄ではないが、それでも周囲は優秀な彼女の遺伝子を求めるだろう。

「ねえ。エヴァン……」
「リーゼ……」

歩みを進めて、彼にゆっくりと近づいていく。

そしてリーゼロッテは、優しく口づけを交わす。

それは互いにとって、初めてのキスだった。

しかし、二人のキスはそれが最初で最後になった。

彼女は知りたかった。自分の心を、人の心というものを。

私は、恋をしている……そう思いたい。

この時、彼女はまだ知らなかった。

エヴァンの視線の中に、嫉妬と憎悪が混じっていることに。

時は巡る。

リーゼロッテは魔術師としての技量をさらに上げる。そしてついに、彼女は七大魔術師の地位に至ることになった。

【虚構の魔術師】

それが、彼女の二つ名。

因果律に干渉する初めての魔術師。

魔術師たちは、手放して彼女を褒め称えた。出向いたパーティーでは、リーゼロッテは数多くの貴族に手厚く迎えられた。

髪をアップにして、真っ赤なドレスを着て、化粧も不器用ながらに頑張り、魔術協会主催のパーティーに珍しくやってきた。

本当はならば、彼女はこのような場所にはやって来ない。それは

言い寄ってくる人間が鬱陶しいからだ。

しかし今回やってきたのは、エヴァンに会うためだった。

きつと彼なら、祝福してくれるに違いない。

今はもう恋人ではない。だが、手紙でのやりとりはしていた。

今日のこの日も、来ると手紙に書いてあった。

だが……エヴァンが姿を現すことは、なかった。

「エヴァン……」

ボソリと呟く。

そしてリーゼロッテは、彼の家に向かうことにした。

南区にある貴族街。そこにエヴァンの家はあったはずだと、リーゼロッテは自分の記憶を呼び起こす。

夜になり、月明かりが世界を照らす。

街灯はあるが、この周囲は光は小さく、かなり薄暗い。それは普通の人間ならば、不気味と思うだろうが彼女は何の迷いも無く、そのまま進んでいく。

リーゼロッテは、ドレス姿のまま一人でやって来た。

今は無性に彼に会いたいと、思っていたからだ。

「……いない？」

呼び鈴を鳴らしても音がしなかった。

それに部屋の中は暗いままで、人の気配もしない。

家のドアの鍵も開いたままだった。

リーゼロッテは、恐る恐る室内に入る。すると、足元からべちゃ
と言う水音がした。

下を見る。

水でも溢れているのだろうか。

初めは彼女はそう思っていたが、よく見るとそれは……。

「……血？ どうして？」

驚くことはなかった。

リーゼロッテはそれよりも、疑問を抱いた。

無用心に鍵が開いたままで、家に明かりは灯っていない。

それに部屋に漏れている血液。

可能性としては、強盗の類が入ったのか。

しかし、彼女がその先で見たのは信じがたい光景だった。

「……エヴァンなの？」

ある一室。

そこには家族と思われる人間の身体があった。地面に横たわり、血溜まりの中にいる。

一方でその前にいるエヴァンは、ただじつと虚空を見つめている。

「どうしたの？　もしかして、それは……」

この状況。

それに、ここにはエヴァンのものと思われる、プリママテリア第一質料の残滓があった。

リーゼロッテは悟る。

これは全て、エヴァンの仕業であると。

「……リーゼ？」

振り向く。

その双眸は、虚空のように真つ黒な闇を映していた。

髪も乱れ、いつも綺麗に容姿を整えているエヴァンとは程遠い姿だった。

「……エヴァンどうして？」

改めて、尋ねる。

すると不適に嗤いながら、彼は声を上げる。

「どうして、だと？ それをお前が言うのか？」

「……え？」

「……ずっとお前が憎かった。僕の先を進み続けて、ついには七大魔術師に至った。初めは確かに、恋をしていた。でもそれは、憎しみに変わっていった。僕は、上流貴族であるベルンシュタイン家の長男だ。もっと高みへ、行かないといけないんだ……」

知らなかった。

彼女は、そう言われて初めて気がついた。

自分の何気ない言動が、彼を傷つけてしまっているなど思いもし

なかったから。

しかし、やはり彼女の心は動かない。

まるでこの物語をどこか遠くから見つめているような、そんな感覚。

明確な殺意を向けられ、憎しみを向けられても尚、リーゼロッテの心は動かない。

そんな自分に、彼女は。

「僕は優生機関ユーゼニクスに誘われた。魔術の真理を探求するために」

「……あの組織に？ 馬鹿げている。そんな……」

もちろん、彼女にも誘いはあった。

だがそれは到底、許容できるものではない。

あらゆるものを犠牲にして、倫理という枷かせを外した先に待っているのは、暗黒郷ディストピアしかありえない。

リーゼロッテは分かっているからこそ、断った。

それをまさか、エヴァンが受け入れているとは……思いもしなかった。

自分が。

自分のせいで、こうなってしまったのか。

それは彼女が初めて抱く、後悔だった。

「なあ、リーゼ。お前さえいなければ、僕は幸せに生きることができた……その才能に、嫉妬することもなかった」

「……」

「だから死んでくれよ」

始まった。

魔術戦。

それも、エヴァンは殺すという意志を明確に持ってリーゼロツテに挑んだ。

だが現実是非情である。

どれだけの感情があろうとも、すでに七大魔術師の地位にたどり着いているリーゼに届くことは決してなかった。

その実力は、もはや子どもと大人というレベルではない。

天と地ほどの差が、そこにはあった。

その現実をリーゼロツテは突きつけた。何の感情もなく、淡々と。

「ぐ……う……がはっ……」

吐血。

顔には大きな傷ができ、出血している。骨も何本か折っている。

手加減しても、この程度なのか。

淡々と、心の中で分析をする。

手加減してこの程度。

リーゼロッテはそして、エヴァンに告げる。

「エヴァン。ダメだよ。その程度の力で、真理にたどり着けるわけがない」

「うるさいッ！！ お前は全てを持っているから、そんなことを言えるんだッ！！ 才能を、能力を持っているやつに、僕の気持ちなど理解できるはずはないッ！！」

瞬間。

煙幕が室内に展開される。

それと同時に、もう一人誰かが室内に入ってくると、エヴァンを連れて消え去ってしまう。

もちろん彼女は追跡する。この程度で振り切られる彼女ではない。

たどり着いた先は、アーノルド魔術学院にある膨大な地下空間。

「エヴァン……」

血を追ってここまで来た。綺麗にまとめた髪は崩れてしまい、ドレスも乱暴に走ったせいで、所々裂けてしまっていた。

そして、ここでもまたもう一人の魔術師によってうまく攪乱されてしまう。

おそらく相手はこの手の逃走に関しては、自分よりも上なのだろう。

リーゼロッテはそう考え、そこで追跡を諦めることにした。

「……そっか」

そつとしゃがみ込み、彼の血を指先でなぞる。

自分で傷つけたというのに、リーゼロッテは特に感じることはなかった。

ふと、考える。

人の心が分らない。

ならば、自分がその人になりきってしまえば、いつか理解できる日が来るのかもしれない。

そう思い、リーゼロッテはそれから自身の魔術を他者に成り変わることに使い始めた。

こうして、彼女は人の心を追い求め続け始める。

いつかこの先、人の心が理解できるのだと信じて　。

第150話 虚構の魔術師

リーゼロッテはエヴァンが失踪した後、その真相を魔術協会に伝えた。

そして彼女は会長である、グレッグ・アイムストーンにある提案をした。

「君が代わりになると？」

「はい」

「しかし……」

「私の魔術でしたら、代用可能です。それに……」

「それに？」

「今、上流貴族が優生機関ユージェニクスに流れたと知られたら、問題でしょう？」

「……」

グレッグは腕を組んで考える。

確かに今回の問題は、かなり特殊であり、世間に広まるとかなり問題だ。

リーゼロッテの魔術ならば、それを隠蔽することも可能。基本的には体調不良ということにして、あとはパーティーに適宜顔を出してもらえばいい。家族のことも、彼女と同じような魔術を使えるものを時折使えばいいか……。

そう考えて、グレッグは彼女の提案を許可した。

全ては魔術師の世界に平穏をもたらすために。

そこから先、リーゼロッテは自分でいる時間がさらに少なくなつた。エヴァンに成り変わるだけではなく、他の人間にも成り続けた。

彼女は人の心を知りたかった。

確かに、リーゼロッテは人の気持ちが理解できないため、優生機^{ユージェニクス}関に流れていてもおかしくはない人材。

だが、彼女には決定的に違うものがあつた。

それは……他人^{ひと}を知りたいという想いだつた。

人の心は分からない。けれど、人の心を分かりたいと願つたのが、リーゼロッテだつた。

「こんにちは」

「俺はそう思いますけど」

「いや、それはどうですかね」

「私はいと思います」

「あはは！ 確かにその通りだ！」

「えゝ？ それってどうなの？」

あらゆる人間を演じた。

自分の想像する人間を、ずっと演じ続けた。

また彼女は、小説を書くことにした。

人の心をもつと知るためには、人の心を描けばいいと思ったからだ。

「……こんなものかな」

人の心は分からない。だから、人の心を描く物語を誰よりも上手く書くことができた。

それは他の誰よりも、人の心を想像できたから。焦がれることが、できたから。

リーゼロッテが書いた恋愛小説は、たちまち王国で話題になり、世界的なベストセラーになった。

人間は虚構を信じて生きている。

分からないから。

分からないからこそ、彼女の願いは、本物を超えた。

だから人々は、彼女の虚構に魅せられた。

「……」

だがやはり、その心が完全に満たされることはなかった。

空虚で、伽藍堂。がらんどう

その本質は、どれだけ人の心を求めても……変わることはなかった。

それからまた数年が経過した。

彼女は魔術の研究に取り組み、ときおり魔術協会の依頼をこなすことで生活を送っていた。

そんな時に耳に入った噂。

曰く、この王国の裏に魔眼収集家がいるとか。

「まさか……エヴァンが、帰ってきたの？」

情報を整理し、たどり着いた真実。

彼はレベルカッブラッドリイが聖人だクロイツと気がついた。それを利用して、優生機関ユーゼニクスにおいて地位を向上しようと……そう目論んでいた。

それはいわば、エヴァンからの挑戦。

彼は明確に、リーゼロッテに突きつけていた。

十年前の因縁を果たす……と。

その時にちょうど、ブラッドリイ家から依頼が入った。

ブルーノ・ブラッドリイが娘であるレベッカ・ブラッドリイを助けて欲しい……と。

そしてリーゼロッテは、まるで小説を書いたときのように今回の流れを作った。

レベルカを追いつめ、最終的にはレイ・ホワイトを使って、その魔術領域を封印すればいい。魔術領域暴走オーバーヒートに関しては、感情を揺らせばいい。

相手もまた、そうだったレベルカを求めている。今のままでは、壊れてしまうのは自明。

おそらく、封印した上で解剖したい……という算段なのだろう。

それを敢えて、相手にやらせるというエヴァンの策。

チェスでもしているかのような攻防。顔は見えないけれど、お互いの思惑は進行する。

互によく知っているからこそ、その攻防はうまく噛み合う。

そうしてついに……邂逅。

二人は向かい合う。

リーゼロッテは人形のような表情で、エヴァンは憤怒に支配されている表情で。

「リーゼ。やっとだ、やっとここまで来た」

「エヴァン。あなたは……」

「リーゼ。死んでくれよ、なあ？」

「……」

「お前がいると僕はダメなんだ。ずっとお前が、心を支配する。その存在が、俺をかき乱し続ける。だから……死ねよ」

「……エヴァン。私は」

対話を試みよう。

そう思っていたけれど、もう自分の心は届くことはないのだと、リーゼロッテは悟った。

「
ダークトライアドシステム、アクティベート起動」

戦闘が始まる

エヴァンはダークトライアドシステムを起動。

周囲にあふれる漆黒の第一質料。プリママテリア

この時に際して、リーゼロッテは囚われているグレイからその情報を引き出していた。

だから、その対処法は既に心得ている。

「死ねえええええええええええッ！！」

異形と化したエヴァン。

グレイの時とは異なるが、その体は全体が紫黒に染まり切っていた。そして、漆黒の第一質料^{ブリママテリア}を操作して、リーゼロッテの命を刈り取ろうとする。

知っているよ。エヴァン。ダークトライアドシステムのこと
は。

人間の暗黒面を増長して、魔術領域を一時的に膨張させる能力。
だがそれは、諸刃の剣でもある。使用すれば、元に戻る保証はない。

いわば、人為的に魔術領域^{オーバーヒート}暴走を引き出す異能。

それこそが、ダークトライアドシステムの真価。

「……」

リーゼロッテは、変わり果てた元恋人を見つめる。

その瞳は、わずかにも揺れない。

ただじっと、感情の揺らぎもなく、彼と戦い続ける。

だが残念ながら……決着は既についている。

リーゼロッテ⇨エーデン。

天才魔術師である彼女には、倫理の枷を外して、ダークトライアドシステムに縋ったとしても……届くことは決していないのだから。

《第一質料⇨エンコーディング⇨マテリアル物資コード》

《物資コード⇨デコーディング》

《物質コード⇨プロセシング⇨シナスタジア共感覚》

《エンボディメント⇨フェノメノン現象》

「アポトシス魔術領域自壊」

エヴァンの魔術領域に直接座標を指定すると、リーゼロッテは魔術を発動。

もはや、本質を使うまでもない。因果律を操作するまでもない。

ダークトライアドシステムの弱点は露呈している。

おそらくこれは、ユーゼニクス優生機関の中でも最新の技術……というわけではないのだらう。実験するに際して、生まれた副産物だらうか。

リーゼロッテはそう分析するが、それは的を射ていた。

「う……う、うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああ！」

絶叫。

發動した魔術は、
魔術領域自壊。
アポトーシス

マテリアフィールド
質料領域を突破し、
直接魔術領域に作用させる魔術。

自身の有する、崩壊因子を共感覚によって、共有する魔術。

元は、知覺を變化させる魔術であつたがそれを応用し、さらに昇華させた。

ダークトライアドシステムのためだけに、その魔術を生み出したのだ。

全ては……彼との因縁に決着をつけるために。

「う…………ぐああああああああ…………あゝ、あああ…………」

その場に伏せるエヴァン。

そのあまりにも無様な様子を、彼女は冷静に見つめる。

同情はしなかった。

ただじつと、^{もが}踠き苦しむ姿を見つめる。

エヴァンは既に、ボロボロだった。魔術領域は、既に焼き切れる寸前。

この十年。エヴァンは自身の魔術領域を酷使し続けた。地獄のような日々を送ってきた。

全てはリーゼロッテを超えるために。

しかし、それが仇となってしまうた。魔術領域に直接作用する魔術を、リーゼロッテは有していたのだから。

「エヴァン」

「う……あああああ……リイiiiiiiii……ゼエえええええええー！」

這う。

かるうじて動く両腕を使って、彼女のもとに這ってくるエヴァン。

鮮血。

両目、耳、鼻、口、その全てから血が溢れ出てくる。だが止まる

ことはない。

この憎しみは、自分が受けた絶望は……ここで終えるわけにはいかない、エヴァンは強烈な痛みの中で願う。それはもはや、妄執だ。

元々、死は近いとエヴァンは分かっていた。

だから最後に、リーゼロッテに復讐を果たそうと……そう思っていたが、届くことはなかった。

その才能の壁は、あまりにも大きすぎた。

倫理の枷を外して、非人道的な道に進もうとも、七大魔術師の足元にも及ばない。

「こ……これが、最強の魔術師……虚構の魔術師……な、の……か
……ぐっ……ごほっ……！」

ボソリと呟く。

エヴァンは常々思っていた。

最強は氷剣などではない。リーゼロッテこそが、七大魔術師の頂点である。

だが、彼女はそれを否定する。

首を振って、**事実を突きつける。**

「違うよエヴァン。最強は、氷剣だよ。それも、当代の【氷剣の魔術師】であるレイⅡ ホワイトは、格が違う」

「な……何を……？」

「仮に、この世界を支配する魔術師がいるとしよう。私はそのような質問があれば、こう答えるよ」

—
瞬。

一呼吸置くと、リーゼロッテは告げた。

「冰剣の魔術師が世界を統べる、とね」

彼女は自身の知っている事実を淡々と述べた。

レイ＝ホワイトは七大魔術師の枠に収まる存在ではないと、知っていたから。

「な……何を……？」

「まあでも、彼の本当の能力を知る者はほとんどいないからね。仕方ないよ、エヴァンが知らなくとも」

「りい……ぜえ……ええええええええええ！」

喉がヒューヒューと鳴る。既に虫の息。

エヴァンが死ぬまでもう時間はないだろう。

引導を渡すことができた。

彼女はそう思っているが、この胸にある感情はなんだろう。

そう考えながら、そっと近づいてエヴァンの体を抱きしめた。

「もう、おやすみ。エヴァン」

「あ……リイ……ゼエ……お、れ……は……」

そして……エヴァン＝ベルンシュタインはそこで命を終えた。

リーゼロッテに嫉妬し、身を墮とし、魂を売ったというのに……届くことは最後までなかった。

その人生は無駄だった。仮に真つ当な魔術師として生きていれば、彼は優秀な魔術師として生きることができただろう。

七大魔術師の地位にたどり着くことはなくとも、安定した人生を送ることができたに違いない。

だが、彼はその人生を想像して……絶望した。

そんなものは、人生ではないと。魔術を探求してこそ、その頂点に立ってこそ、自分は魔術師として生きることができるのだと。

それはもはや、呪いだった。エヴァンは固執し続け、その末に…
辿り着いたのは、何も残らない人生。

後悔をする暇もなく、エヴァンはその人生をそこで終えた。

だがエヴァンは確かに、大切なものを一つだけ残して逝った。

リーゼロッテはそっと、人差し指で彼の目蓋まぶたを下ろす。

瞬間。

一筋だけ、彼女の真つ赤な双眸から涙が零れ落ちた。

「ねえ、エヴァン。私は、やっぱりあなたを……」

紡ぐ。やっと知ることのできた、本当の想いを。

「
愛していたよ」

第151話 良き人生を

「
バンドラ
赫冰封印」

顕現するのは、赤く染まる冰剣。

それらが地面から生成されると、相手に集まるようにして、三百六十度全ての角度から迫る。

量は決して多くはない。せいぜい、二十本程度。先ほどの冰剣ならば、軽くあしらわれてしまうだろう。

しかし

「ぐ……」ほッ……！」

鮮血。

鮮やかな血液が、宙に舞う。

なんとか防御はしているみたいだが、もはやそれは無いに等しい。この魔術の前では、全てが無意味になってしまうのだから。

プロセスの過程に、
コンプレッション
圧縮を加え、魔術を圧縮。

今回圧縮したのは、本来は大規模連鎖錬成に匹敵する膨大なコード。
エクステンシブチェイン

それを圧縮し、ヒクノグラム魔術圧縮という新しい種類の魔術によって顕現したのだが、この赫冰封印。バンドラ

マテリアフィールド質料領域すら貫通する、絶対不可避の冰剣。

そして、バンドラ赫冰封印で生成した冰でバラストロコ暴食の体を徐々に包み込んでいく。

近寄る。

右手には、一本の赤く染まった冰剣。

それは真紅に染まっている。俺の血液を媒介として生まれたそれは、どんな防御も通用しない。

極東戦役の最終戦で手にしたこの力を、こうして使用できるのはやはり……レベツカ先輩の件があるからなのだろう。

「……終わりだ。バラストロコ暴食」

互いに身体中から滴る血液。

俺はそれを拭うことなく、相手に真紅の冰剣を突きつける。

「ハハハハハ！　そうだったのか！！　ああ……分かったぜ……お前がどういう存在なのかなあ……！！　アハハハハハハハ！」

もう決着はついている。

もう数分も経過すれば、暴食はこの赫冰封印バントロコに飲み込まれてしま
うだろう。

殺すつもりはない。こいつには、然るべき罰を受けてもらう。

「冰剣、お前は最高だなあ！！　ハハハハハ！！　これは確か
に、先代の冰剣が敵うわけもねえか！！　ハハハハハ！！」
「……」

睨み付ける。

こいつは、知っているのか。

いや……どうやら知っているみたいだった。

「お前がどんな道をこれから歩いていくのか……」

「……」

「楽しみにしてるぜ？」

その巨体は、真紅の冰に飲み込まれていった。

依然として嗤ったまま、暴食は完全バラストロコに凍りついた。

終わった。終わったが……自分の手を見つめる。真紅の冰剣を手

放して、今の自分の状態を確かめる。

「……そうか。そういうことだったのか」

見上げる。

ちょうど雲が流れていき、空には満月が現れる。

月明かりが、この屋上を照らしつける。

前のように、意識を手放すことはなかった。

どこまでも思考はクリアだ。魔術領域も、正常。いつものように抑え込むことができた。

思っていた。この学院にきてから、妙に魔術領域暴走の治りが早いと。グレイ教諭と戦い、死神と戦い、暴食と戦い、普通ならば魔術領域暴走が悪化していても、おかしくはない。

だが俺は、逆に良くなってきた。

限りなく、あの極東戦役の最終戦の状態に近づいている。

間違いなく喜ばしいことだ。完治するのは、素晴らしいことだ。

しかし、ある懸念が過ぎる。俺は、あの時の自分になった時、どのような道を進むのか。

そんなことを、ふと考えてしまう……。

「レイ……」

「レイさん……」

隅でじっとしていた、レベッカ先輩とマリアの元に向かう。どうやら、レベッカ先輩は意識を取り戻したようだった。

今はマリアの膝に頭を乗せて、じっと俺のことを見つめてくる。

「レイさん……」

「はい」

「やはり……あなたが、【氷剣の魔術師】だったんですね……」

「はい。今まで隠していて、申し訳ありませんでした」

膝をつくと、先輩の顔を覗き込む。

まだ、クロノスロウ体内時間固定をしてから、時間はそれほど経っていない。

先輩は弱々しい声で、話を続ける。

「そんなに血塗れになって……頑張りすぎです……」

「止血は終わっていますので。派手に見えるだけです」

「大丈夫なですか……？」

「はい。問題はありません」

すると先輩は、俺の頭に手を伸ばしてきて……優しく撫でてくれる。

「ありがとう。今までずっと辛かったでしょう……私のために……」
「そんな自分は……」

「マリアもありがとう。二人とも、本当にありがとう」

そして俺たちは、その場で三人で泣いた。

静かに涙を流した。

でもこれは、もう悲しみの涙ではない。

俺たちには、確かな未来が待っているのだから。
あした

「レイ。元気か？」
「師匠」

一応念のために入院した俺は、ベッドで読書をしていた。入院と
いつでも、明日には退院する予定だ。

それと聞いた話だが、文化祭は後夜祭も終えて、今年も無事に終
了したようだった。

そして、今日はカーラさんはいなく、一人でやってきた師匠。

その顔はいつものように凜としていた。

「自分は大丈夫です。お伝えしたと思いますが」

「ま、一応顔だけは見ておこうと思ってな」

「……その後、どうなりましたか？」

ハラッロ

暴食は殺してはいない。生かした上で、捕らえてある。

だが、本物のベルンシュタイン氏は……。

「エヴァン＝ベルンシュタインは、虚構が殺した」

「……そう、ですか」

「あの二人の因縁は、詳しくは知らない。だが、奴は淡々と語っていたよ」

「……今回の件、これで良かったのでしょうか」

「こればかりは、私たちにはどうすることもできない」

「……そうですよね」

王国の裏で起きていた出来事。

それは全て、エヴァン＝ベルンシュタインとリーゼロッテ＝エーデンが中心となって起きていたものだった。

師匠たちは、俺が戦っている間に、エヴァン氏が送り出してきた優生機関ユーゼニクスの刺客と戦っており、それも無事に収束。

全ては、【虚構の魔術師】のシナリオ通りに決着した。

「では、私はこれで失礼する。魔術領域の件も大丈夫みたいだしな」

「はい。師匠、また近いうちに」

「ああ」

軽く手を振るうと、師匠は去っていった。

それとほぼ同時に、病室のドアがコンコンコンと丁寧なノックされる。

「どうぞ」

「失礼するよ」

あの夜見たものと同じ姿。

真っ黒なロングコートにロングブーツ。それに、純白の長髪。それを微かに靡かせながら、やってきたのは 【虚構の魔術師】である、リーゼロッテ・エーデン。

真っ赤な双眸で俺のことをじっと射抜いてくる。

そして彼女は、側にある椅子に腰掛けると、ニコリと人の良さそうな笑みを浮かべる。

「体調はどうか？」

「……明日には退院できるかと」

「そうか。それはよかった」

暫しの沈黙。

俺はその静寂を切り裂くようにして、先ほど師匠に聞いたことを尋ねてみた。

「ベルンシュタイン氏は……」

「殺したよ」

「……そうでしたか」

「ああ。彼はもう、手遅れだった。魔術領域は侵食され切っていたからね。せめてもの手向^{たむけ}だ。私が終わらせたよ」

「……今回の件。あなたのシナリオだったのは理解しています。しかし、これで良かったのですか？」

「ああ。あのことが」

あの夜に聞いていた。

エヴァン＝ベルンシュタインとは恋人であつたと。

だから彼は、自分に任せて欲しいと……そう言ったのだ。

それはきつと……その時にはもう、殺す覚悟はしていたのだろう。

「エヴァンとは、そうだね。恋人だった。けど、私には愛というものが分からなかった。それを求めていたから、彼と恋人になった」

「……」

「でも、エヴァンが死んで分かったよ。やっぱり私は、彼を愛していたのだと」

「そう、ですか」

「皮肉なものだよ。死んでから、こうして自覚するなんて。私は本当にどうしようもない、人間だ」

その作り物のような綺麗な顔で語る彼女は、どこか寂しそうだった。

「しかし、エヴァンが異常なまでに私に固執して、おかしくなってしまったのは……彼の弱さだ」

「……弱さゆえに、力を求めてしまったと？」

「そうだ。でも、私や君は持っている側の人間だ。その気持ちは想像はできて、永遠に分かりはしない」
「……」

確かにそうだ。

その気持ちは想像はできる。

だが決して、その人の気持ちを完全に理解できることはない。

「私はね。思うんだ」

今度は優しい声音で、彼女は話を続ける。

「何をですか？」

「他人を理解した、と思うのが人間の傲慢ではないかと……ね。暴力と言ってもいい」

「……一理あるとは思いますが」

「他者は理解できないから、他者たり得るのだと。私は今まで生きてきて、そう思ったよ。それに今回の件で、それがよく分かった。私たちは結局、想像することしかできない」

「……」

リーゼロッテ「エーデン」。

虚構の魔術師は、噂ではなんの感情もなく、まるで人形のような人物だと聞いていた。

確かにその印象は、ある。その精巧な顔と、純白の髪に、真っ赤

な双眸。それに、淡々と話す姿はそう思っても仕方がない。

だが、俺には……葛藤を持って生きている、人間らしい人だとも思った。

「レイ＝ホワイト。君の悩みは知っている。しかし、君がどう進むのか。それは自分にしか決めることはできない。人は結局、自分の決めたことにしか従えないのだから」

「はい」

「君は私のようにならないでくれ。しかし、それは杞憂だろう。君の周囲には、素晴らしい人間が多いからね。リディア先輩もいることだし」

「そうですね。それに関しては、恵まれていると思います」

師匠のことを先輩、と呼ぶ。そのことに関して、言及はしなかった。師匠たちは、彼女に対して何か思うことがありそうだったから。

そして、彼女は俺の手元にある本をじっと見つめる。

「それ。読んでいたのかい？」

「はい。恋愛小説は、この作者のものが好きで」

ルナ＝エテル。

有名な小説家だ。もともとはアビーさんに教えてもらったのだが、登場人物の感情が丁寧に描写されていて、好きな作家の一人だ。

世界的にも大ベストセラーになった恋愛小説を、俺は擦り切れるほど読み込んでいた。

「それは嬉しいね」

「嬉しい……？ それはどういう？」

「作者は私だよ」

「……え」

「ははは！ 君もそんな顔をするんだね！」

高らかに笑う。

だってそうだ。まさか、作者が目の前にいるなんて……夢にも思わないだろう。

「人には人の顔がある。そして私の物語には、私の想像した顔が描かれている。人は良くも悪くも、顔を使い分けているからね。私はそれを、小説で表現したかったんだ」

コートの内側に手を伸ばすと、胸元からペンを取り出す。

「サインしてくれるんですか？」

「ああ。滅多にすることはないが、特別にね」

ウインクをすると、俺の名前付きで、サインを書いてくれた。

それを渡してくると、さらに言葉を紡ぐ。

それはまるで、自分自身に言い聞かせているようでもあった。

「人々は虚構に魅せられている。でも、それが人を人たらしめる要因にもなり得る。私は、物語を書くことで自分の世界を広げている。そして、世界中の人々と同じ虚構に魅入られることで、自己を確立している。存在証明、とでも云うべきかな？」

人々は虚構に魅せられている、か。

それは、そうだろう。人は見えないものに、意味を見出す。

分からないからこそ、知りたいからこそ、虚構を信じて生きていくのだ。

それがたとえ、本物ではないと分かっている、人は虚構に魅入られる。

だから人は、共同幻想の中に生きている。そうすることで、自己を認識する。

きっとそのように言いたいのだろう。

分からない話ではない。俺も、同じように葛藤していた人間だから。

その気持ちは、確かに共感できるものだった。

「……すごいですね」

「いや。そんな大したものじゃない。ただ手探りで、この人生に抗あらがっているだけの……一人の矮小な人間に過ぎないさ。ま、所詮は年

寄りの戯言。聞き流してくれてもいい」

「いえ。依然として若いままで、お綺麗かと。それに、とても勉強になりました」

「ははは、言うじゃないか。年甲斐もなく、照れてしまうね」

大袈裟に表現するが、その頬は全く染ってはいないし、表情も真顔に近いままだった。

やはりこのようなところを見ると、どこか浮世離れしているように思える。

そして、彼女は立ち上がると、踵を返す。

「氷剣……いや、レイ」ホワイト。君の人生も、私の物語のように、希望と光に満たされるといいね。そう、願っているよ」

少しだけ間を置くと最後にとっても美しい、綺麗な笑顔でこう告げた。

「良き人生を」

人形でもなければ、機械でもない。

リーゼロッテ「エーデン」。

虚構の魔術師である彼女は、確かに人間らしいと俺は思った。

それはその笑顔が、如実に物語っている。

「はい。ありがとうございます」

俺が頭を下げると、彼女は悠然と歩みを進める。

そして、その雪のように真っ白な髪を揺らしながら、この部屋を後にした。

窓越しに空を見上げる。

夏とは違う、秋特有の澄んだ空。

もうすぐ冬が近づいてくる。

季節が巡るように、俺たちの人生もまた巡っていくのだろう。

そんな風に、俺は思った。

第152話 二人だけの後夜祭

翌日。

俺は無事に退院した。入院といっても、泊まりで検査をするだけなので、それほど時間は取られなかった。

そして訪れるのは、ブラッドリイ家。ブルーノ氏に招かれて、今日はこの屋敷にやってきた。

現在の時刻は二十時半。すでに日は完全に暮れている。

夏休みの終わりは、先輩とこの門で別れた。しかし今は、その時と違って哀愁はなかった。

屋敷の扉をノックすると、ゆっくりと開く。

「レイ＝ホワイトです」

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」

メイドの方の案内で、ある一室に通される。

「失礼します」

丁寧に一礼をすると、室内に入っていく。

そこにいたのは、ブルーノ＝ブラッドリイ氏。以前あった時は、

無精髭もあってやつれていたが、今日はしっかりと身なりを整えている。髭を剃り、やつれた頬も幾分か良くなっている。

「久しぶりだね。レイ＝ホワイトくん」

「ブルーノさん。その節はどうも」

「まずはかけてほしい」

「はい。失礼します」

ブルーノさんの向かいのソファに腰かけると、すでにテーブルには紅茶が二人分置いてあった。淹れたてのようで、湯気が立っている。

「この度は、娘のために……本当にすまなかった」

頭を下げる。

それも、膝につきそうなほどに深く。

彼が行ってきたことは、全てレベツカ先輩のためだった。だから俺は、その行動を責める気にはなれなかった。

大切な人を守りたいという気持ちは痛いほど分かるから。

「頭を上げてください。自分は、成すべきことを成しただけです」

「……そうか。いや、本当に感謝する。君がいなければ、レベツカはきつと……いつか壊れていただろう」

「オーバーヒート魔術領域暴走の件でしたら、大丈夫かと。制御はしっかりとしていますので」

「感謝する……本当に」

改めて、ブルーノさんは頭を下げた。

俺はそれを受け入れる。

今まで守れたものより、失ったものの方が多かった。しかし、今はこうして大切な人を守ることができた。それだけで俺は、満足だった。

「さて。謝礼だが……なんでも言ってほしい。最善を尽くそう」

「いえ。自分はそのために、先輩を救ったわけではないですから」

「しかし……」

「いいのです。あなたも娘のために最善を尽くし、自分も敬愛すべき先輩のために最善を尽くした。その事実だけがあれば、自分は十分です。何も必要はありません」

「……立派だな。君は」

「いえ。まだまだ浅学の身の上です」

一息つく。

ブルーノさんは、ふっと微かに微笑んだ。

それは優しい笑みだった。

「それと、レベッカの件だが……今はおかげさまで、異常もないようで退院している。家にいるが、会っていくかい？」

「いいのですか？」

「ああ。娘もそれを望んでいるだろう」

打って変わって真剣な表情になる。

そして彼は、語り始める。

「少しだけ、昔話をしようか。上の兄は、歳が離れているため特に下の娘たちには影響はなかった。だが、レベツカとマリアは違った。二人はあまりにも仲が良く……そしてよく比較された」

「……」

「私はどうするべきか、分からなかった。娘たちにどう接していけばいいのか、見当もつかなかった。そうして迷っている間に、レベツカは淑女に成長し……マリアは荒れてしまった。私は、いつも娘を前にすると厳格な父でいようと思って……厳しくなってしまう。ははは、不器用なものだよ」

「いえ。そんなことは」

きつとそれは、愛ゆえに……だろう。

娘との接し方がわからない。だが、三大貴族の当主として厳格な姿を見せ続けないといけない。

ブルーノさんはきつと、父親と当主の二つの狭間で彷徨^{ウロウロ}っていたのではないかと思う。

「レベツカのことを知った時は、動転したよ。まさか自分の娘が、そうなるとは……夢にも思っていなかったからね。そこで、急遽になるが、虚構の魔術師に依頼して、君を巻き込む形になってしまった」

「そう……でしたか」

「レベツカはよくできた娘だ。本当に、私は何もしていない。ただ健やかに、幸せになって欲しいと。子どもたちにはそう思っている」「きつといつか伝わると思いますよ」

「はは。そうだといいいのだね」

その苦笑いは、どこか親しみがこもっているような気がした。

子どもを深く愛しているのが、些細な所作から感じ取れる。

「婚約の件は、どうするのですか？」

「……卒業と同時にでも、破棄するさ。色々と理由をつけて。もともとは、虚構の案だったからね。私としては心苦しい選択だったが……今となつては、致し方あるまい」

「そうですね」

「さて。年寄りの話はこれまでだ。娘の部屋には、メイドに案内させよう」

「分かりました。失礼します」

立ち上がり、部屋を去ろうとするとブルーノさんは最後に何かを言おうとした。

「レイ＝ホワイトくん。もし君が良ければ……いや、これは当人たちの選択に任せるべきか。何でもない。またいつか、君と会えることを楽しみにしているよ」

「はい。それでは、またいずれ。失礼します」

その場で丁寧に一礼をすると、ドアの前に立っていたメイドの方に案内されて、先輩の部屋へと向かう。

「こちらになります」

「ありがとうございます」

部屋に案内され、ノックをしようかと思っていると……中からはレベッカ先輩とマリアの声が聞こえて来た。

「だーかーらー！ こっちの方がいいって言ってるでしょ！？」
「マリアはいつも身勝手！ 私はこっちがいいの！」
「自分から聞いてきたくせに！ じゃあ聞かなきゃいいじゃん！」
「他人の意見は大事です。でも、マリアとは感性が合いません！」
「あっそ！」

パンツと扉が開くと、マリアは呆然とした顔で俺を見つめる。

「あ……そっか。レイ、来てたんだね」
「ああ。喧嘩か？」

「それがさあゝ。聞いてよ！ お姉ちゃんが、自分の漫画について意見を聞きたいから、意見したらさあゝ。なんか逆ギレしてさあゝ」
「ちよっとマリア！ レイさんにおかしなことを言わないでください！」

二人の関係は、変わった。それはきつと、良い方向に。

先輩とマリアは本音で話せるようになったみたいだ。

この二人に関しては、喧嘩するほど仲がいい……というのは間違い無いだろう。

「じゃ、私はこれで失礼するわ。お姉ちゃん」
「な、何？」
「私はお邪魔だから、失礼するね」
「もう！ からかわないで！」

飄々とした様子で、手をぶらぶらと振ると去っていくマリア。

そんな様子を横目で見てみると、先輩と視線が交差する。

「あ……その。入りますか？」

「はい。失礼します」

室内に入り、椅子に座る。そうして改めて、先輩と向かい合う。

「その……今回の件ですが」

「はい」

「本当にありがとうございました」

ペコリと丁寧に頭を下げる先輩。

感謝されるのは嬉しい。だが俺は、先輩のためとはいえ……その心を傷つけてしまった。だから、素直にその感謝を受け取ることはできなかった。

「いえ……自分は、先輩を傷つけてしまったので……」

「必要なことだったのでしょう？ 父から全て聞きました」

「……そう、でしたか。それでも、傷つけたのは事実です」

と、申し訳ない気持ちでいっぱいだった俺がそう言うと先輩は逆にこう言ってきた。

「じゃあ、責任……とってくださいるか？」

上目遣いで、顔を微かに赤く染めながら。

それはどこか妖艶というか、今まで見たことのないレベッカ先輩だった。

「責任でしょうか」

「はい」

「一体、何をすれば……？」

「そうですね。今から学院に行きませんか？」

「今から……ですか。しかし、もうかなり暗くなっていると思いますが」

「だからこそ、です」

先輩の提案を受け入れると、俺たちはさっそく学院に向かう。

今日は文化祭の振替休日。それに時刻は、ブルーノさんの予定に合わせたので、夜遅い。と言ってもまだ、二十一時前だが。

学院へ伸びる坂を、二人で登る。

そんな中、文化祭での思い出を語る。

先輩は嬉しそうに色々と話してくれた。中でもミスコンのことは、今でも怒っているらしい。きっとディーナ先輩はレベッカ先輩に怒られてしまうのだろうか……それもまた、いい変化なのだろう。

そして、たどり着いた学院。

校庭には後夜祭の痕跡は何も残ってはいなかった。

心残りがあるとすれば、後夜祭に出ることができなかったことだろう。

そんな風に思っていると先輩が手を差し出してくる。

「先輩？」

「後夜祭。出ることはできませんでしたね」

「はい。残念です」

「だから今ここで、二人きりで後夜祭をしましょう」

ニコリと微笑む。

月明かりに照らされている先輩は、やはりいつものように麗しい。

「具体的には何を？」

「踊りましょう」

「ダンスですか」

「はい。できますか？」

「そうですね……人並みには」

「それは、良かったです。では、お手を」

「はい」

先輩の手を取る。

その薄くて柔らかい手を、しっかりと握る。

そして二人で、何の音楽もなく、明かりもない校庭でダンスを踊る。

そこにあるのは、いつものように綺麗な月明かりだけ。

ステップを合わせながら、先輩の手を取って、クルクルと回り続ける。

「レイさん」

「何でしょうか」

踊っている最中に、レベッカ先輩が話しかけてくる。

「あなたはやっぱり、とても不思議で……そして、誰よりも優しい人ですね」

「恐縮です」

「それに、氷剣の魔術師だったのは……本当に驚きました」

「……そうですね。無理もないかと」

「もしもの話ですが」

先輩は少しだけ顔を俯かせるが、すぐに顔を上げる。その瞳は少しだけ潤んでいて、いつもよりも大人びていた。

「また私に何かあれば、助けてくれますか？」

その目は、何かを求めているようだった。

もちろん、その問いの答えは決まっている。

「当たり前です。先輩は自分にとって、尊敬すべき素晴らしい人ですから」

「……」

下を向いて、ボソツと何かを言っただけだが……よく聞こえなかったなので、聞き返す。

「すみません。今、何と？」

「……何でもないですっ！ さ、もっと踊りましょうー！」
「うわっ！」

先輩にリードされて、俺たちは回り続ける。

この月明かりのもとで、くるくると。

世界は回り続ける。

そして俺たちもまた、回り続ける。

この素晴らしい人生を、巡るように。

「あ。レベツカ先輩。おはようございます」

ペコリと頭を下げるアメリカ。彼女は今日は日直のため、早めに登校していた。そんな時、ばったりとレベッカと出会う。

レベッカはレイが入部する際に作った花壇で、花に水やりをしていた。

「アメリカさん。おはようございます」

相変わらず、綺麗な人だね。

朝日に照らされるレベッカを見て、アメリカは純粹にそう思った。

「今日は水やり当番です。朝からお花に水をあげているのです」

「そうでしたか」

「はい。レイさんが作ってくれた花壇ですよ」

「へえ……レイってば、何でもできますよね」

「ふふ。そうですね。彼ってば」

と、レベッカはレイとの思い出をアメリカに語り始めた。

するとアメリカの顔は徐々に歪んでくる。

「へ、へえ。前から思っていましたけど、仲がいいんですねえ」

「そんなことは。アメリカさんには敵いませんよ。ええ」

「いえいえ。謙遜しなくとも」

ニコニコと笑っているが、その目が笑っていないことにアメリカは気がついていった。

「あ。でも実は、昨日……レイさんと二人きりで夜を過ごしまして」

「え！？」

「ふふ。二人で手を取り合いながら、ダンスに興じました。とても楽しかったですよ？」

ニコリいつものように人の良さそうな笑みを浮かべる。

だがその目は依然として決して、笑ってはいない。

いうならばこれは牽制。すでに乙女同士の戦いは、始まっているのだ。

「わ、私だって！ 魔術剣士競技大会の時には、抱きしめてもらいましたし！？ 一緒に生きていこうって言われましたし！？」

「なるほど。なるほど。それはとても、素晴らしい友情ですね」

敢えて友情、という言葉を使ったその意味を分らないほど、アメリアは察しが悪くない。

半眼でじつとレベツカを見つめる。

「……苦労しますよ。レイって意外にモテますし」

「ええ。でも、それを受け入れる器が重要なのでは？」

互いに睨み合う。が、アメリアはスッと右手を差し出した。

「負けませんよ」

「私もです。こう見えて、負けず嫌いなので」

しっかりと交わす握手。

別に互いに相手のことは嫌いではない。

これからは、恋敵^{ライバル}として戦っていくのだと二人はそう思っていた。

そんなアメリカとレベツカの表情は、晴れやかだった。

そうして、アメリカは頭を下げてその場から去っていく。

「では、失礼します」

「ええ。ご機嫌よう」

レイを巡る戦いもまた、密かに幕を上げる。

きっとそれは、いつか大きな波乱を巻き起こすことになるのは…
…間違いなかった。

秋。

本格的に秋がやって来た。

制服も夏用から、冬用へと切り替わりすっかりと肌寒くなった。

今はちょうど紅葉が綺麗な時期で、近いうちに散歩でもして見に行こうかと思っている。

周囲の木々は葉を落とし、落ち葉を踏みしめることが多くなった日々。季節の巡りをはっきりと感じるこの王国は、やはり美しいと思う。

そうして、放課後。

俺はいつものように、部活をしてから寮に戻ろうとすると……正門に見知った人間が一人、ポツンと立っていた。

長い白金の髪を後ろで二つにまとめている。いわゆる、ポニーテールというやつだ。彼女のその姿を見るのは、新鮮だった。

「アリアーヌ。どうした、こんなところで」

「レイ！ 待っていたんですよ！」

「俺に用事か？」

「厳密には、レイとアメリカですわね」

「して、その用事とは？」

そう尋ねると、アリアーヌは高らかに声を上げた。

「わたくしと一緒に、大規模魔術戦に出て欲しいんですよ！」
マギクス・ウォー
「……大規模魔術戦？」

再び新しい日々が、幕を開けようとしていた。

第152話 二人だけの後夜祭（後書き）

・追記

ページ最下部にて、書籍版の情報を公開しています。イラストの担当は【梱枝りこ先生】になります。講談社ラノベ文庫様より、書籍2巻が11月2日（月）に発売です！ また、コミックス第1巻は11月9日（月）に発売です！

文庫サイズでお求めやすいお値段となっておりますので、よろしく願いたいします！

・あとがき

三章 麗しき花嫁 終

四章 友情の果てに 続

三章無事に終了いたしました！

以下、長文になります。ご容赦下さい。

三章は始まったのが1月23日なので、連載期間は約2ヶ月ですね。相変わらず、書き過ぎる癖は治らないようで……。

冗長な面、拙い面なども多々あったかとは思いますが、少しでも三章を楽しんでいただけたのなら、作者として嬉しい限りです。

さて、軽く三章を振り返ります。

やはり一番やりたかったのは、エヴァンとリーゼロッテのミスリードですね。年末年始に思いついて、上手くできたかと思えます（バ

れないかと、ヒヤヒヤしていましたが（笑）。ただもう少し伏線を綺麗に撒けたらなあ……と反省中です。他にも反省点は多々あるのですが、そこは自分で振り返っておきます……！（ここまで書籍化すれば、色々と修正すると思います）

そして、ブラッドリィ姉妹の和解もやりたいテーマの一つでした。きっとレベッカとマリアはこれから、新しい関係を築いていくのでしょう。昔と違い、喧嘩も多くなると思いますが（笑。こちらも無事に終えることができて良かったです）。

レイに関しては、さらに謎が深まった感じですね。それは後々回収していきます。女装回はまたやってしまいましたね（笑。四章は流石に自重しますが！ いや、自重しますよ……？

それと書いていて、リーゼロッテのキャラが個人的にかなり好みになったので、四章でも出そうかと考え中です。彼女は虚構の中で、きつとこれからも自分を探していきます。レイたちと会うことで、リーゼロッテにも変化が出ればいいのですが。

最後に、アメリカとレベッカは互いに気持ちを自覚して、乙女の戦いを繰り広げていくようですが……果たしてどうなることやら。

さて、四章ですがタイトルは【友情の果てに】で、メインはアリアーヌです！ しかし、今回はもう一人のキャラにも焦点を当てますので、そちらもお楽しみにしていただければ。

今回は二章とは違って、団体戦。もちろん二章との差別化は図っていきます。さらに、レイもついに表舞台に出てくる予定なので、ご期待ください！

また、改めて読者の皆様に感謝の言葉を。現在は、毎日約一万人の読者の方が更新を追いかけてくれているようで、本当に感謝しかありません。改めて考えると、本当に多くの方に読んでいただいているようで……。

応援のコメント、ポイント評価、誤字脱字報告、などなど皆様の協力があつたからこそ、私も毎日こうして書き続けることができます。本当にありがとうございます。気がつけば、5ヶ月で65万字も書いていました 笑。

ちなみに毎日更新の最中、書籍化作業はほぼ終了し、店舗ごとの特典もすでに仕上げました（まだやることは、多いですが 汗）。発売日などいずれ報告しようと思います。コミカライズの方も進行していますので、近いうちにTwitterなどで共有できればと！（是非、フォローお願いします！）Twitterアカウン
ト名【御子柴奈々】【@mikoshibanana】

長々となりましたが、今後もWeb版の毎日更新は続けていきますので（もはや、ライフスタイルの一部に 笑）、本作をよろしくお願いします！

それと、毎度のことながら非常に恐縮ですが……下にスクロールすると【
】という欄があり、最大で
を5つまで入れることができます。

『三章面白かった！』『四章期待してる！』……などなど思われて、まだ評価していない方は、是非
での評価にて応援して頂ければ幸いです。

皆様の応援が、四章執筆への大きなモチベーションになりますので、
もし良ければお願いいたします

それではまた四章で！

第153話 番外編&三章 登場人物とその他設定

番外編&三章 新登場人物

・ステラⅡホワイト

年齢：14歳

容姿：栗色をした綺麗な茶色い髪。長さは胸くらいまで。身長は160センチ。体の厚みはあまりなく、最近はやよつと気にしているらしい。

プロフィール：レイⅡホワイトの義理の妹。とても明るい性格で、周囲に人を集める。初めて出会ったときは、レイのことを敬遠していたが、あることをきっかけに仲良くなった。今はレイがいない寂しさが募り、来年度は絶対にアーノルド魔術学院に入学すると決意している。

・オリヴィアⅡアーノルド

年齢：14歳

容姿：胸まである白銀の髪に、年相応の体のボリューム。左右対称になっているその容姿は、王族の中でも群を抜いて美しいと言われている。

プロフィール：アーノルド王族の第二王女。活発な性格と思いきや、裏では意外と腹黒い。目的のためになれば、基本的には手段を選ばない。レイとの出会いは、誘拐されたときに救ってもらった時。それ以来、彼に好意を寄せている。今は断られているが、いつか絶対に確保すると心に誓っているらしいが……。また、ステラとはレイに接触するために、文化祭時に近づいたが普通に仲良くなっている。

・ヘンリック・ファールンハイト

年齢：48歳

容姿：真っ黒な髪を刈り込んでおり、その体躯はそれなりの厚みがある。身長は182センチ。右の頬には大きな傷跡が残っている。プロフィール：アーノルド王国軍、大佐。極東戦役時には、リディアたちの部隊の指揮官をしていた。その際に、レイと知り合った。面倒見のいい性格で、軍の中でも人気は高い。実戦からは遠退いているが、指揮官としても優秀。極東戦役を機に、軍を退役した者はいるが彼は未だに残っている。レイのことは、子どものように気に入っている。

・グレッグ・アイムストン

年齢：45歳

容姿：灰色の髪をオールバックにまとめている。身長は175センチ。体はまだ厚みが残っているが、最近はかなり衰えてきているらしい。

プロフィール：上流貴族アイムストン家出身。現在は、魔術協会で会長の座についている。魔術師の中でも、全ての七大魔術師と交流を持つ稀有な存在。レイとの出会いは三年前にリディアに紹介されたから。そこで彼の技量を見極めて、当代の氷剣の魔術師に任命した。基本的には善人だが、目的のためには非情な判断も辞さない。

・エレノラ・ローズ

年齢：42歳

容姿：アメリカと同様に、紅蓮の髪に真っ赤な双眸をしている。身長は168センチ。プロポーションは抜群。その見た目も、二十代と遜色がないほど。

プロフィール：ローズ家当主であるクロードの妻。情報収集に長けており、その能力は三大貴族の中でも随一。過去には七大魔術師を目指したこともある。子育てに関しては基本的には放任主義。最近

はレイとアメリアの関係をどうか画策しているが……。

・ブルーノ・ブラッドリイ

年齢：42歳

容姿：黒髪短髪。身長は172センチで、中背中肉。髪には微かに白髪も混ざっているが、若く見える。

プロフィール：ブラッドリイ家当主。厳格な人間に見えるが、娘たちに対しては接し方を未だに掴めていない。レベルカが聖人クローツと知り、虚構の魔術師にその対処を依頼。子どもを愛しており、そのためには犠牲も辞さない。現在はもっと娘と歩み寄ろうかと考えている。

・クロード・ローズ

年齢：50歳

容姿：紅蓮の髪を短く切り揃えている。身長は178センチ。筋肉質ではあったが、今は加齢と共に衰えている。

プロフィール：ローズ家当主。三大貴族当主の中でも、最も厳格な人間。悪く言えば、頭が固い人間である。アメリアのことも、悩んでいるのは知っていたがそれを持ち越えることこそが、三大貴族の定めと考えている。愛妻家として知られているが、妻のエレノラには頭が上がらない。

・ファルクハルト・オルグレン

年齢：50歳

容姿：白金の髪をかなり短く刈り上げている。身長は187センチ。五十代とは思えない、圧倒的な巨躯を有している。

プロフィール：オルグレン家当主。筋肉を愛し、筋肉に愛された男。基本的には、筋トレをしておけばどうにかなると思っている。アリ・ヌとは仲が良く、一緒に筋トレをする仲。貴族会議でも話題になったレイに興味がある。特に、その筋肉を一度拝んでみたいとか……。

・エヴァン＝ベルンシュタイン

年齢：29歳

容姿：茶色い髪をしており、前髪を綺麗に上げている。身長は175センチ。体は細く見えるが、実際は筋肉質。

プロフィール：十年前に家の人間を全て殺し、優生機関ユージェニクスに行った。

リーゼロッテとは恋人だったが、その才能に嫉妬し、全てを犠牲にしても彼女よりも先に進みたかった。そのために十年と言う歳月を、臥薪嘗胆の思いで過ごしてきた。全ては、リーゼロッテを超えるために。だが、その全てを犠牲にしても、人間としての良心を捨てたとしても、虚構の魔術師であるリーゼロッテには届くことはなかった。そして最後は、リーゼロッテに殺害された。享年29歳。

・リーゼロッテ＝エーデン

年齢：28歳

容姿：雪のような真っ白な肌に、純白の長髪。灼けるように赤い紅蓮の双眸。いわゆる、アルビノである。

プロフィール：七大魔術師が一人、虚構の魔術師。ブルーノから依頼をされ、レベッカを救うためにシナリオを描いた。その際にエヴァンの思惑を知り、彼と決着をつけるためにそのシナリオを実行した。人の感情が分からなく、完全なるサイコパス。しかし、人の感情を知りたいという思いはあるため、結果的に善人となっている。エヴァンを殺したことで、自分が彼を愛していたことを自覚する。それを機に、自分もまた人間なのだと理解した。今までは他者になり変わる時間の方が多かったが、これから先は、自分らしく生きたいと思っている。魔術師としての本質は、現時点では不明。

・ 真理世界
アーカーシャ

世界の過去、現在、未来の全てを記録しているとされる空間。実際に目にしたものはいないが、存在は確認されている。曰く、魔術の真理もそこにあるとか。

・ 聖人
クロイツ
アーカーシャ

真理世界に接続できる魔術領域を有する魔術師の総称。現在は、ブラッドリイ家にランダムな周期で出てくるとされている。しかし、世界にはブラッドリイ家以外にも聖人は確認されている。また、真理世界に接続できる魔術領域は高負荷過ぎるために、二十代半ばにして亡くなることが多い。

・ 魔術圧縮
ビクノグラム
エクステンシブ

大規模魔術、大規模連鎖魔術などの大規模なコードを必要とする魔術を、プロセスの過程で圧縮することで、最小限のコードで大規模魔術、大規模連鎖魔術を実行する新しい魔術。元は、レイが極東戦役の最終戦で発現した能力。それをリディアが体系化して、一ヶ月前に理論を発表した。現在の魔術師で可以使用するのは、レイⅡホワイトのみ。

・ 赫冰封印
バンドラ
ビクノグラム

魔術圧縮によって、発現するレイの固有魔術。自身の血液を媒介として、減速と固定の中に特殊な第一質料を組み込む。赫冰封印によって生み出された冰剣はどれだけ分厚い質料領域であつても、貫通する。現在の世界で、赫冰封印を防御する術はない。ただし、魔術師にはかなりの負担がかかるため、諸刃の剣である。

・ 魔術領域自壊
アボトシス

リーゼロツテⅡエーデンだけが使用できる固有魔術。オリジン質料領域を突破し、直接魔術領域に作用させる魔術。

自身の有する崩壊因子を、プロセスの工程に共感覚を組み込むこと
シナスタジア
によって、共有する魔術。元は、知覚を変化させる魔術であったが
それを応用し、さらに昇華させた。天才であるリーゼロッテだから
こそ、使用できる魔術である。魔術領域が正常な魔術師には効果
がないが、疲弊している魔術師には死を招くほど強力なものである。

・ダークトライアドシステム

人為的に魔術領域暴走を引き起こす能力。魔術領域暴走の状態にな
オーバーヒート
れば、魔術師にもよるが、通常の五倍から十倍の魔術領域を使用
できる。そのため、書き込めるコードが多くなるので、一時的により
強大な魔術を使用できるようになる。また、ダークトライアドシ
テムを使用した後は、廃人になることが多い。リーゼロッテはこ
レはいかの副産物であり、優生機関が生み出した技術の真髄は他にも
ユージェニクス
あると考えている。

七大魔術師に関して

・現段階で判明している七大魔術師

- 1 レイ＝ホワイト【氷剣の魔術師】
- 2 アビー＝ガーネット【灼熱の魔術師】
- 3 キャロル＝キャロライン【幻惑の魔術師】
- 4 ルーカス＝フォルスト【絶刀の魔術師】
- 5 リーゼロッテ＝エーデン【虚構の魔術師】
- 6 現時点では不明
- 7 現時点では不明

第154話 覚悟と想い

「ふ……ふ……ふっ！」

アリアーヌ「オルグレン。

現在は、その美しい白金ブラチナの巻いてある髪を、後ろで一つにまとめている。

彼女はいつものように、トレーニングに励んでいた。

もちろん魔術的なものではなく、筋トレ。

魔術も重視しているが、今は何よりも己が体を鍛えたかった。

ディオム魔術学院での文化祭も無事に終了し、二学期も半分が経過しようとしている。

残すところ、大きなイベントといえば12月25日にある、せい聖歌祭さいくらいものだ。

アリアーヌはそう思っていたのだが……今年に限っていえば、それは違う。

彼女は、父であるファルクハルトからある話を聞いた。

「アリアーヌ」

「どうしましたの。お父様」

上半身裸。

その圧倒的な筋肉に負荷をかけながら、彼は告げる。

「今年の十二月。聖歌祭の前日。そこで、新しい催しが導入されることになった」

「……それは、貴族社会にのですの？」

「いや、学院での話になる」

「学院……？」

ピンとこない。

アリアー又は腕を組んで考えると、ある噂を聞いていたのを思い出す。

「もしかして……団体戦のことですか？」

「さすが我が娘だな！ ガハハ！」

大きな声を出して笑うフォルクハルト。

そう。今までは、この王国の学院生にとっての大きなイベントと
い**え**ば魔術剣士競技大会がメインだった。
マギクス・シュバリエ

だが、貴族会議。さらには、魔術協会などの会議で合意に至り、
決定したのが……。

「名称は、マギクス・ウォー大規模魔術戦」

「大規模魔術戦………ですか？」

「うむ。三人一組で戦う。詳しいことは、後日発表になるはずだ」
「なるほど……そうでしたの。でも残り、二ヶ月程度しかありませんわね」

「そこはこちらとしても、早く発表したかったが……なにぶん、魔術師の世界も色々としがらみがあるもんでな……」

「お察ししますわ」

伊達に三大貴族の長女ではない。

アリアー又はもちろん、この魔術師の世界に関してはそれなりに知識があつた。特に貴族社会に関しては。

何か新しいことを始めようにも、前例がない……と言われて反対意見が出るのは自明。

おそらく、今回の件も裏で色々とあつたのだらうと彼女は察していた。

「その中で、一番重要な話がある」

「一番重要……？」

「いったい、なんででしょうか？」

そして、彼は娘に向かってこう告げた。

「今回の大会。今後は分からぬが、今年に限って三人一組のチームを組むのに学院での縛りはない。これはアーノルド魔術学院の学長、アビー・ガーネット氏の提案だが、無事に可決された」

「灼熱の魔術師が、そのような提案を？」

「そうだ」

ポカンとした表情を浮かべるアリアヌ。

というのも、今まで各学院は敵対とまではいらないが、お互いにライバル視することで、切磋琢磨してきたからだ。

それに、その学院に所属している一体感というものも重視していた。

その話を聞いて、今回の件に関して色々と察するアリアヌ。

保守的な考えを持つ魔術師は、きっとこの大会のルールには反発するだろう。

魔術剣士競技大会と同じように、同じ学院内でチームを組むべきだと。そう主張するはずだからだ。

だが、結果として残ったのは学院での縛りはなし。

つまりは、三つの学院で自由にチームが組めるということだ。

「ど……どうしてそのような話に？」

「彼女だけではない。我々もまた、ずっと思っていた」

いつにもまして、フォルクハルトは真面目な顔つきになる。

筋トレをいったん止めると、遠くを見据えるようにして語り始める。

「今まで、各学院は良い意味でも、悪い意味でも、一つの場所に止とどまる。

まりすぎた。だからこそ、それぞれの学院に特色が生まれた。バランスのアーノルド、物理のディオム、魔術のメルクロスとな。だが、ここで新しい風が必要と考えた。自分の持っていないものを持つている魔術師と組んでこそ、新しく見える景色があるからだ」

「……はい。確かに、それには同意しますわ」

「どうだ。アリアーヌよ。心が踊らないか？」

一呼吸置く。

どちらかといえば、アリアーヌは保守的な人間ではない。

その自由な在り方から、彼女は革新的な人間だった。

そして何よりも、新しいものを好む。

「もちろん！ さいつこうに、心が躍りますわー！！」

高らかに宣言。

マギクス・ウォー

大規模魔術戦の話聞いたときは、同じ学院で誰と組もうか考えていたアリアーヌ。

だが今は違う。

彼女はすでに、別の学院の人間と組みたいと……そう思っていた。

もちろん、相手は決まっている。

「ふ……さすが我が娘。期待しておる」
「はいっ！」

こうしてアリアーヌは、新しい自分を手に入れるために意気揚々とトレーニングを再開するのだった。

「ふ……ふ……は……！」

一室。

そこでトレーニングを重ねているのは、アルバートだった。

室内に滴る汗。それを拭うことなく、彼は淡々といつもものルーテインを続ける。

上流貴族である彼は、寮では一人部屋だ。そのため、こうして自室でトレーニングを重ねても誰にも文句を言われることはない。

文化祭を無事に乗り切り、今後は特に大きなイベントはない。

それでもアルバートはトレーニングを欠かさない。

レイに敗北し、前に進むと決めたその日から鍛錬を続けているからだ。

「……よし」

いつものトレーニングを終了すると、椅子に座ってから水分を補給する。

アルバートは、初めは不安を感じていた。

このトレーニングをしても、本当に成長できるのか。もっと大きなことをしなければならないのではないか。そんな思いから、様々な人間にアドバイスを求めた。

レイに部長、エヴィ、その他の魔術師に話を聞いて回った。

だが一貫して、彼らが言うことは同じだった。

劇的に、急に成長することなど、あり得ないと。

毎日の小さな研鑽こそが、自分を遠くにまで連れて行ってくれるのだと。

今日という一日を無駄にしないからこそ、振り返ってみるといつの間にか成長しているものだ。

アルバートは数多くの話を聞いて、そう結論付けた。

焦ることはない。

ただ愚直に、まっすぐ進めばいい。

不安はある。焦燥感もある。

だからこそしっかりと今日という一日を積み重ねるのだ。

その思いから、彼はトレーニングを続けていたが……今日だけは感情がどうしても昂ってしまふ。

「……マギクス・ウォー
大規模魔術戦か」

彼もまた、公式発表がある前にすでにその情報は手に入れていた。

三人一組で戦う魔術戦。それが、マギクス・ウォー
大規模魔術戦。

形式は、マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会と同じで予選があり、本戦はトーナメント形式。

そして何よりも、チームメンバーは同じ学院の生徒には限らない。

アーノルド魔術学院。
ディオム魔術学院。
メルクロス魔術学院。

その垣根が完全に取り払われたのだ。

彼としては、驚きだった。まさか、ここにきてそのような決断をするとは……と思わざるを得ない。

本来ならば、レイとそれにエヴィと組んで出てみたいと思っていた。

きっと二人ならば、了承してくれるとも思っている。

だがアルバートは考える。

「……本当にそれでいいのか？」

自省。

自己を省みる。

確かに、仲間と共に出場するのはいいだろう。魔術の特性も分かっている上に、連携もしっかりと取れる自信を彼は持っていた。

だがそれは、ただの甘えではないだろうか。

考える。

自分の成長にとって、決して今の仲間が必要ない……ということではない。

ただ、その環境にいてしまえば自分はきっと甘えてしまう。

アルバートにはそんな予感があった。

それに何よりも、彼が思っているのはこの一点だ。

「またレイと……戦えるのかもしれないのか」

レイと戦う。

一対一の対決ではない。以前のような、私情に塗れた決闘ではない。

その可能性はある。最近、調子もいいとレイから聞いているアルバート。出場してくる可能性も、ゼロではないと思っていた。

「……はは。全く俺は、情けないな」

レイと戦うことを意識すると、手が震える。

あの時のことを思い出すと、やはりレイは別次元の存在なのだと認識せざるをえない。

あの年齢にして、七大魔術師……それも最強の氷剣に至っているのだ。

その才能は魔術師の世界でも最高峰。

それだけは、間違いない。それにレイは、努力もできる。しっかりと研鑽を積んでいるのは、アルバートも知るところだ。

でもだからこそ、アルバートは……。

「戦ってみたい。またレイと……」

そう思っていた。

怖さはある。だがそれを受け入れた上で、またレイと戦ってみた
いと。

今の自分がどこまで届くのか。

それを彼は知りなかった。

こうして、それぞれの想いが再び交錯することになる、
術戦^{ウォー}が幕を開けようとしていた。大規模魔^{マギクス}

第155話 チームを組みますわ！

「わたくしと一緒に、マギクス・ウォー大規模魔術戦に出て欲しいんですの！」
「……え？」

唐突なアリアーヌの言葉。

そして彼女は、とある資料を俺に渡してきた。

「これは……？」
マギクス・ウォー
「大規模魔術戦の資料ですわ。実際は、明日から公開ですけど」
「拝見しよう」

その資料に目を通す。

まず開催される時期は、二ヶ月後。聖歌祭の前日になる。

チームは三人一組。

チーム戦では、拠点占有と攻城戦を採用するらしい。フィールドは拠点占有に関しては、カフカの森。攻城戦に関しては、王国の北の最奥にある古城を使うとか。

確かにあれは今まで放置されていたものだが……これを機に、利用しようということみたいだ。

さらに特筆すべきものは……チームを組む際に、学院での縛りは

ないということだ。

これは流石に、俺も驚いてしまう。

「アリアーヌ……」

「なんですの？」

「学院での縛りが無い。本当なのか？」

「ええ。間違いありませんわ」

「そうか……」

にわかには信じがたい話だ。

俺もこの学院にやってきて半年以上が経過した。

それに、貴族社会についても師匠にある程度は話を聞いた。

その上で、このような革新的な案を採用するとは考えがたい……いや、言い過ぎかもしれないが保守的なこの社会で、新しいイベント。

さらには、新しいルール。

もしかすれば俺の知らないところで、色々な思惑があるのかもしれない。

「なるほど。概要は理解した」

そう言って俺は、その資料をアリアーヌに渡す。

彼女はキラキラとした瞳で、俺のことを見つめてくる。

心なしか、その白金の髪もまた艶々としているような気がした。

それに今日はポニーテールにまとめていて、いつもと印象が違って活発的に見える。おそらく学院までは走ってきたのだろう。髪が微かに乱れているので、間違いはない。

「わたくしとレイ、それにアメリアでいきますよ！ 目指すは優勝ですわ！」

「少し、待ってほしい」

とりあえず興奮しているアリアーヌを落ち着かせる。

「？ なんですの？ とりあえずアメリアのところに向かいますわよ！」

と、意気揚々と女子寮に向かうアリアーヌだが、俺はその肩を掴んでその場に止める。

「……どうしたんですの？」

「アメリアの参加は理解できる」

「はい」

「どうして俺なんだ？ 特に実績もないが」

彼女は俺が【氷剣の魔術師】ということとは知らない。

オーディナリー
一般人である俺を、誘うのは……どうしてだろうか。

もしかしてアリアー又は、何か知っているのか？

「レイにはアメリアを導いた実績がありますわ！」

高らかにその大きな胸を張って、そう宣言する。

「今回の件に当たって、レイのことは聞いて回ったんですの。アメリアをどうやって鍛えたのか」

「ほう……」

まずは話を聞いてみることにした。

アリアー又は悪い人間ではないが、三大貴族の令嬢。気をつけておいて、損はないだろう。

「聞けば、かのエインズワース式ブーツキャンプを実行したとか」

「そうだな。ある程度は調整したが、アメリアはあの訓練を乗り切った」

「ふふふ……やっぱりそうでしたのね。そして、レイの実戦能力は随一とも聞きましたわっ！」

じつと俺のことを見据える。その顔は、どこか得意げだった。

「レイが只者じゃないのは、もう分かっていますのよ？」

ニヤリと笑うアリアーヌ。

そして俺は、軽く肩をすくめる。

「敵わないな。アリアーヌには」

「ふふっ……でしょう？」

今度はにこりと、とても魅力的な笑顔をさせる彼女はとても美しかった。

回りくどいことはせずに、ただまっすぐそう言ってくるアリアーヌの性格は、やはりとても好感のもてるものだ。

「それで、参加してくれますの？」

考える。

俺は、参加しても良いのだろうか。

今の状態としては、正直に言って悪くはない。

先輩の件を経て、俺の能力は確実に戻りつつある。

今までではただ静観しているだけだった。しかしあの魔術剣士競技マギクス・シュバリエ大会を観戦して、俺もまた戦ってみたいと思ったのは間違いない。

師匠にも少し相談してみるが、今のところ前向きな返事をしてもらえないかと思った。

「そうだな……少し相談したい人がいるが、俺は参加してみたいと思っている」

「なるほど。レイにも色々と事情があるようですわね。良いですわ。とりあえずは、仮ということではいかがでしょう？」

「ああ。それでよろしく頼む」

俺たちは握手を交わす。

その後、二人でアメリカの自室へと向かう。おそらくこの時間は、寮にいるはずだ。

「その。どうしてレイが部屋の場所を知っていますの?」

怪訝な表情で、アリアーヌがそう尋ねてくる。

「魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエの時には、早朝に迎えに行ったことがあったかな。と言っても、朝からうるさいということですぐに禁止されてしまったが」

「ふふ。レイらしいですね」

そんな会話をしていると、アメリカの部屋にたどり着く。

女子寮に入るのは基本的には禁止されているが、ディーナ先輩に事情を話すと「今回は特別に良いわよ。でも、他の生徒にバレないようにしなさいよ」と、言われた。

そのため、細心の注意を払ってこうして歩みを進めている。

「ここだ」

「では、わたくしが。アメリカ、わたくしです。アリアーヌですわ」

アリアーヌそう言いながらノックをすると、中からドタバタと物凄い音が聞こえてきた。

「む？ 何か問題が？」

「いえ。きつと、読書でもしていたのでしょ。わたくしには、覚えがありますので」

「読書をしていて、どうしてあんな音が出るんだ？」

「それは……まあ、乙女にも色々あるんですよ」

「そうか……」

いまいち釈然としないが、とりあえずは納得しておく。

師匠にも、女性のことは深く考えるな……と言われているしな。やむに止まらない事情があるのだろ。

そうして待っていると、バンつと勢いよくドアが開いた。

「お待ちせ！ って……あれ？ レイもいるの？」

「ああ」

「ふーん。今度はアリアー又なの？」

「なんのことだ？」

「別に！ まあ……入ってよ」

アリアー又と二人、アメリアの自室へと入る。

基本的には寮の部屋に変わりはないが、アメリアは一人部屋なので広々としている印象だった。

「二人とも座って。どうせあのことでしょ」

と、座るように促されるので席につく。

そしてアメリアが三人分の紅茶を淹れて持ってきてくれる。

それをテーブルに置くと、三人で話し合いを始める。

「単刀直入に言いますわ。わたくしたちと、大規模魔術戦に出て欲しいんですの！」
マギクス・ウォー

アメリカはその言葉を聞くと、少しだけ考える素振りを見せる。

「私は別に良いけど……その。ここにレイがいるってことは……」

「師匠に相談する予定だが、俺は出たいと思っている」

「調子はいいの？」

「個人的な所感だが、悪くはない」

「そっか」

二人でそんなやりとりをすると、アリアーヌがそれに入ってくる。

「レイはどこか調子が悪いんですの？」

「それは……ねえ、レイ。もしチームを組むなら、アリアーヌにもちゃんと説明しておいたら？ 色々と事情はあるかもしれないけど、周りにバラすような性格じゃないと思うし……」

「そうだな……」

アメリカが言っているのは、俺の過去のこと。

とりわけ、今は【氷剣の魔術師】であることだろう。

確かにチームを組む上で、俺の素性は話しておいた方がいいとは思っ……。

あまり広がるのは困るが、アリアーヌは人の秘密を安易に広める

ような人間ではないだろう。アメリカもそう言っているし、俺も彼女のことは信用している。

そして俺は決断した。

今までの件を経て、友人には誠実に向き合いたいと思っているからだ。

「そうだな。ちゃんと話しておくべきだろう」

「？ なんの話ですの？」

俺は隣にいるアリアヌの方に顔を向けると、その美しい瞳を見つめながら、こう言葉にした。

「アリアヌ。俺は、当代の【氷剣の魔術師】だ」

「え……は……？」

ポカンとした表情を浮かべるアリアヌ。

そうして俺は、彼女に自分の過去を語るのだった。

第156話 勝負ですわ！

「…………え？」

ポカンとしているアリアーヌ。

しかし無理もないだろう。誰だってこんなことを言われれば、同じ反応になるに違いない。

「ちょっと待ってくださいまし。わたくしの聞き間違いかもしれませんので、もう一度お願いしますわ」

「俺が当代の【氷剣の魔術師】だ」

「…………」

「信じられないか？」

そういうと、アリアーヌはチラッとアメリアの方を向いた。

「アメリアは知っていましたの？」

「私はその。知ったのは偶然だったけど」

「いつ頃ですの？」

「一学期の終わりくらい。魔術剣士競技大会の前かな」
マギクス・シュバリエ

「…………ですわ」

ボソリと何かを呟いたアリアーヌだが、俺とアメリアはそれを聞き取ることができなかった。

「すまない。アリアーヌ、もう一度言ってくれ」

と、俺がそういつのと同時にアリアー又はその場に勢いよく立ち上がった。

「ずるいですわ!」

アメリアを指差して、彼女は一際大きな声で糾弾を始める。

「アメリアがレイと訓練していたのは、噂に聞いていましたわ。でもどうして、レイに教えを請うたのか。わたくしはそれがずっと、ずーっと、気がかりでしたが、そういうことなら納得しましたが…改めて言います。ずるいですわ!」

「えっとその……ごめんね?」

たじろぐアメリア。

一方のアリアー又はかなり興奮していた。

そして彼女はさらに声を荒げて糾弾を続ける。

「七大魔術師の中でも、最強と名高い氷剣。そんな魔術師に教えを請うとは……それはわたくしもアメリアの成長に納得しました。しかし! それはずるいですわ! 七大魔術師に教えてもらうなど、普通はありえないことですのに!」

「あはは……その。レイも乗り気というか、あの日を思い出すと……ちよっと吐き気がするけど」

アメリアが思い出しているのは、きっとエインズワース式ブーツ

キャンプのことだろう。あの時は、何かと理由をつけて逃亡を図っていたからな。

思えば、あれからもう数ヶ月が経過するのか。

文化祭も終了し、時間が過ぎるのはあつという間である。

「アリアーヌ」

「なんですの？」

「少し、俺の過去の話をしよう」

そうして俺は自分の過去をアリアーヌに語った。

きっとそれは、今までの俺だったら決してできないことだった。

だが……この学院にきて、少しずつにはなるが、変わることができた。

自分の過去とも、向き合つことが今ならできている。

数十分だが俺は自分の過去を語ると、アリアーヌはその場で涙を流し始めた。

「レイ……あなたは、そんな辛いことが……うう……なんていうことでしょう……ぐす……」

その反応を見て、なんて言えばいいのか分からなかった。

しかし、アリアーヌがとてもしいい人間だということは改めて分かった。

「極東戦役は初めて魔術を実戦に投入した戦争。それも史上最悪の戦争だと聞いていますわ。その最前線に幼い頃からいたなんて……」

「……仕方がない。俺は巻き込まれて、生きるのに精一杯だった」

「それで、終戦と同時に冰剣の座を継いだんですの？」

「ああ。能力は魔術領域暴走でまだ全てを引き出せるわけではないが、冰剣としての地位を俺は継ぐ事になった」

冷静に話を続ける。

今となつては、こうして他者に語るのも慣れてきた。

「そうでしたの……レイのことは、ずっと思っていたんですの。――^オ一般人でありながら、その噂は大きなものばかり。それに、魔術協会のパーティーに夏休みのあの時に来ていたのも……」

「そうだ。七大魔術師の一人として、俺は招待されていた」
「なるほど……分かりましたわ」

うんうんと頷いて、アリアーヌは腕を組み始める。

一方でアメリカはそんな様子を黙って聞いてくれていた。

そして、アリアーヌはその場に再び立ち上がった。

「レイ！ 勝負ですわ！」

高らかに宣言する彼女に反応したのは、アメリカだった。

「え？　ちょ、ちょっとどうしてそうなるの！？」

「アメリカ。これは乙女の宿命ですの」

「乙女の宿命？」

キリツと表情を締め直すと、アリアー又は次のように語る。

「強大な相手がいれば、乙女は自分を試さずにはいられないのですわ
！！」

「ええ……それって、乙女っていう括りをするには大きすぎない……
…？」

「いいのです！　それで、レイ。受けてくれますの？」
「……」

別に殺し合いをしようってわけではない。

アリアー又は純粹に知りたいのだろう。

【氷剣の魔術師】の実力というものを。

「分かった。構わない」

「では、早速やりますわよ！」

ということで俺たちは、三人で移動する事になった。

日が暮れるのが早くなり、今はすでに夕暮れ時。あと一時間もすれば、日は完全に沈んでいるだろう。

肌寒い風が吹いて、冬がもうすぐやってくるのだと感慨深くなる。

冬にはいい思い出はない。だがきつと、この学院にいいことのでき
になれるのかもしれない。

俺たちがやってきたのは、カフカの森の前に広がっている草原。

学院との間にあるそこは、この時間帯には誰もいないのでうつて
つけた。

「ルールはどうする？」

「参った、と言ったほうが負けですわ」

「なるほど」

柔軟体操を始めるアリアヌ。

それをみて、俺もまた自分の体の状態を確認する。

「アメリカ。審判を頼めるか」

「いいけど……その、あんまり無茶しちゃダメよ？ 最近はその、
レベル先輩の時に力を使ったんでしょ？」

「ああ。今回は能力は解放しない」

「え……解放しないで、アリアヌに勝つつもり？ それはいくら
なんでもレイでも……」

「ま、やってみないと分からないさ」

そうして互いに準備を終えると、アメリカが開始の言葉を宣言す
る。

「じゃあ……始めッ！！」

勢いよく右手をアメリカが振りかぶった瞬間、アリアーヌの姿がその場から消えた。

「はあああああああッ！！」

雄叫びをあげながら迫ってくるアリアーヌの四肢は赤黒く変化していた。

オーガ
鬼化。

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会で彼女が見せた、物理攻撃に特化した固有魔術。

拳が眼前に飛んでくるが、それを躲すと次の瞬間には、かかと落としが迫ってきていた。

これは流石にガードが間に合わないので、俺はそれを真正面から受け止めた。

「うっわ……！！」

と、声を漏らす彼女は流石に真正面から受け止められると思っていなかったのだろう。

俺はその脚をしっかりと掴むと、思い切りアリアーヌを投げ飛ばした。

もちろん彼女の實力ならば、すぐに受け身を取ることができるのは想定済み。

投げ飛ばした瞬間、俺は地面を駆けていた。勢いよく踏み締めると、すぐに内部コードインサイドを足に集中させる。

駆ける。駆ける。駆け抜けるッ！

視線の先には、すぐに体勢を整えようとするアリアーヌの焦る表情。彼女も理解している。すぐに対応しなければ、俺の攻撃が先に触れるのだと。

周囲の景色が見えなくなるほどに、加速をしていく自身の身体。魔術の通りは、今まで以上によくなっている。軽くコードを流しただけでも、これだけの性能を発揮できるほどに。

彼女が自分の体制を完全に整える前に、その喉元に手刀を突きつける。

アリアーヌの眼前を起点として、風が起きる。

刹那。フワツとその白金の髪プラチナが後ろに靡く。それがゆっくりと重力に従って降りてくると、彼女は自分の敗北を認める。

「……ま、参りましたわ」

「ありがとうございます」

その場に尻餅をつく彼女の前で、俺は丁寧に一礼をした。

「……何か特別な魔術を？」

「いや。内部コードインサイドでの身体強化のみだ」

「う、嘘ですわ！ 内部コードインサイドだけで、あんな動きは！ それこそ、わたくしの鬼化オーガを上回るほどなんて……！」

「分かっているだろう？ 事実だと」

「……！ まあ……そうですわね。完敗、ですわね」

明らかに落ち込んでいる様子。おそらくは、もっと肉薄した戦いができると思っていたのだろう。

しかし、蓋を開けてみればアリアーヌの完敗。

もちろんそれは、俺が彼女の弱点に気がついているからだ。ただ真正面から力任せにぶつかっていれば、俺の敗北もあり得た。

魔術マジクス・シュバリエ剣士競技大会での試合を通じて、すでにその弱点は露呈していた。だからこそ、ここまで完封できたと言ってもいい。

「アリアーヌ。君には、まだまだ伸び代がある」

「本当……ですか？」

手を差し伸べる。

グツとその体重を支えると、アリアーヌはその場に立ち上がる。

互いの視線を交わす俺たち。

「ああ。強くなりたいか？」

「もちろんですわっ！」

「いいだろうならば……」

一呼吸おいて、俺はあの夏の時のようにこう言葉にした。

「エインズワース式ブーツキャンプ。それも特別メニューを二人に課そう」

すると、近寄ってきていたアメリカがビクツとその体を震わせる。

「れ、レイ？ う、嘘でしょ？ 私は修了したからいいよね？ あの夏に終わってるよね？ アリアー又だけだよね、やるのは……」

「アメリカ訓練兵。エインズワース式ブーツキャンプには、まだ先がある」

「さ、先……？」

「ああ。今のアメリカ、それにアリアー又ならきつとできる。アリアー又はもともかなりのトレーニングを積んでいるようだしな。強化版をしてもいいだろう」

アメリカは依然として怖いようだったが、アリアー又は目を爛々と輝かせていた。

「エインズワース式ブーツキャンプ。名称だけは聞いたことがありますわ。なんでも……軍人でも逃げ出す、地獄のトレーニングだとか」

「そうだ。マギクス・ウォー大規模魔術戦に向けて、まずは体力作りから始めよう。

大丈夫だ。俺がついている。それと返事は、レンジャー！ だ。分かったか、アリアー又訓練兵」

「レンジャーッ！ ですわッ！」

「いいだろう」

ビシッと敬礼をするアリアーヌを尻目に、アメリカはあの日のように逃亡を図ろうとしていた。

しかし、逃亡兵を逃す俺ではない。

「アメリカ訓練兵！ 何をしている！ 返事はレンジャーだと言っただろう！ 逃亡にはペナルティだぞ！」

「あ…… ああ…… あ…… あ…… レイ。お願い、私は、私だけは許して？ ね？」

すぐにその肩を掴むと、彼女は潤んだ瞳で見上げてくる。

その目は完全に絶望に染まっているが、仕方がない。別にアメリカを虐めたいわけではない。しかし、俺は心を鬼にするしかない。あの夏の時のように。

なぜならば俺は、二人を導く教官なのだから。

「アメリカ訓練兵」

両手をギュッと握りしめて、懇願するような仕草を見せるアメリカだが…… 現実とは非情なのだ。

「な、何……？ 許してくれるの……？」

「アリアーヌと共に頑張っていこう」

「そうですわ！ アメリカ、一緒に頑張っていきますわよっ！」

「いやあああああああ！ 脳筋が二人になったよおおおおお！
うわあああああん！」

懐かしい悲鳴を聞くと、俺たちは早速トレーニングに励むのだった。

第157話 力を求めて

いつものようにトレーニングに励むアルバート。

「ふ……ふ……ふん！」

現在はエヴィにサポートしてもらい、学院内のジムで汗を流していた。

すでに話は聞いている。

マギクス・ウォー
大規模魔術戦。

学院と学年の壁を超え、誰とでもチーム組むことができるそのルールは、生徒たちの間に大きな反響を呼んでいた。

もちろん、同じ学院同士で組むことも可能。

現時点では、他の学院の生徒と組もうとする方が少数派。

そのような状況下で、アルバートは耳にしていた。

レイ、アメリカ、アリアーヌの三人がチームとして出場すると。

間違いなく優勝候補筆頭。

マギクス・シュバリエ
今年の魔術剣士競技大会新人戦の優勝と準優勝。

特にアメリカに至っては、因果律に干渉できる魔術を使用できる。

それだけで反則級だというのに、その中に混ざるのは……【氷剣の魔術師】であるレイ＝ホワイト。

マギクス・ウォー

大規模魔術戦において、その存在はもはや語るまでもないだろう。

知っている者は知っている。

レイの实力は、すでに世界屈指。特に白兵戦においては、満足に魔術が使えなくとも学生レベルなどにとどまる存在ではない。

だからこそ、アルバートは思うのだ。

レイと再び……戦ってみたいと。

「エヴィ」

「どうしたアルバート」

「レイたちに勝つには、どうすれば良い？」

「……あの三人が組むとなれば、どうにもいかなえかもな。正直いつて、お手上げだぜ。ただ……」

「ただ？」

エヴィは言い淀む。

そして彼は、勝てる可能性を一つ提案した。

マギクス・シュバリエ

「魔術剣士競技大会本戦で優勝した、ルーカス＝フォルスト。それ

しか可能性はないだろうな」

「……なるほど。それは確かに、そうだろうな」

考える。

アルバートは彼の試合を全て見ているわけではないが、その実力は折り紙付き。

レイたちに対抗するならば、それぐらいのカードは用意すべきだろう。

「よし。交渉に行こう」

「良いのか？ 他にも実力者はいるだろ？」

エヴィもまた、今回の大会に参加する予定だ。

アルバートとエヴィ。そして、残り一人。

後一人を探していたが、エヴィの提案によりアルバートは決めた。

何事も挑戦してみないと始まらない。ということで、二人はすぐにメルクロス魔術学院に向かった。

「ここか？」

「ああ。話では、ここでよく鍛錬をしているとか」

アーノルド魔術学院からは、それほど遠くはないので二人はあっという間に辿り着いた。

そこで話を聞くと、ルーカスは演習場で一人、よく鍛錬をしているとのことだった。曰く、そこはもはや彼専用の場所になっているとか。

「お、あれじゃねえか？」

「……間違いないな」

二人の視線の先に映るのは、刀を構えているルーカスだった。

目を瞑り、ただじつと刀の柄^{つか}を握っている。

姿勢は低く、その研ぎ澄まされた雰囲気を感じ取って、容易に声をかけてはいけないと二人ともに悟った。

そして、一閃。

虚空を切り裂いた刀を収めると、ルーカスは悠然とそれを鞘に収める。

まるで女性のような中性的な容姿。髪も長く、一見すれば女性に見える。だがその鋭い雰囲気は、男性的なものでもあった。

まるで幾千の戦場を切り抜けてきたかのような、そんな雰囲気。

「で、僕に何か用かな？」

振り向く。

ルーカスはすでに、二人が後ろにいるのは感じ取っていた。

「自分はアルバート・アリウムと言います」

「エヴィ・アームストロングです」

まずは挨拶をして、丁寧に一礼をした。自分たちは後輩。それに、頼みに来ている立場なのだ。礼儀はしっかりとしておくべきだと、二人とも心得ていた。

そのあとは、アルバートがルーカスに語りかける。

「フォルスト先輩にお願いがあつてきました」

「君たちも、僕とチームを組みたいと？」

「はい」

「そっか。なら、勝負だ」

演習場の隅に置いてある木刀。それを持ってくると、ルーカスはそれをアルバートとエヴィに向かって投げて渡した。

「その手の勧誘はすでにたくさんあった。その度にこうして、その力量を測った。僕が認めれば、君たちのチームに入っても構わない」
「……分かりました」

木刀を構える二人。

一方のルーカスは、刀を構える素振りはない。

すでに実力差は明白。ならば、ルーカスが測ろうとしているのは一体何なのか……。

そうして、アルバートとエヴィが同時に地面を蹴った瞬間に戦いは始まった。

「はああああああッ！！」

駆ける。

アルバートは今までは魔術ばかりに注力を割いていた。それこそが、貴族の在り方だと思っていたからだ。だが今は基本的な身体技能もトレーニングによって、かなり向上している。

「……………いいね」

ボソリと呟くルーカス。

アルバートの動きは、荒削りだがその動きは彼が良いと認めるほどのものだった。

そうして……………一閃。

アルバートの攻撃をバックステップだけで避けると、その背後には……………すでにエヴィが迫っていた。

「おっ、らあああああああッ！！」

振り下ろす。

エヴィは巨体ではあるが、敏捷性がかなり高い。今の一瞬の間で、ルーカスの後ろを取ると、木刀を一気に振り下ろした。

その時のルーカスは、笑っていた。

そうしてアルバートもまた追撃をかけようとするが、二人の攻撃は素手で止められてしまった。

「な……！？」

「マジか！？ 素手で止めたのかよっ！！」

インサイド
内部コードで強化した二人の攻撃を、ルーカスは何の魔術を行使せずに受け止めた。

プリママテリア
それは、第一質料の兆候がないことから二人ともにはつきりと分かってしまった。

「いいよ。合格だ」

木刀を取り上げると、ルーカスは淡々とそう告げる。

「え……？」

「は……？」

呆然とするアルバートとエヴィ。それもそうだろう。

この勝負は完全なる敗北。何もいいところはなかったはずだ。

真正面から挑み、完膚なきまでに敗北を喫した。

だが、ルーカスはどこか上機嫌だった。

「良い。二人ともによく鍛えているのが分かる。実戦的なことは、

そうだね。僕が指導しよう」

「い、いいんですか？」

アルバートは恐る恐る尋ねる。

まだ彼は、合格と言われたことに現実感が伴っていなかった。

「もちろん。まだ荒削りだが、よく鍛えている。正直いって、僕は魔術戦よりも白兵戦の方が好みだからね。ちょうどいいよ。二人は」

学院では寡黙で通っているルーカスだが、二人の動きを見て思わず饒舌になってしまう。

「それに……レイ＝ホワイト。出るんだろ？」

レイ＝ホワイト。

それは、ルーカスが求めている相手だ。

「はい。そのはずです」

アルバートがそういうと、ルーカスは微かに微笑む。

「彼とは、来年の魔術剣士競技大会で戦うことが目標だったけど……その目で確かめるのもいいかもしれない。もちろん、今回は僕は彼とは戦わない。僕が求めているのは、一対一の場合だからね。それよりも君だろう。彼を求めているのは」

「……はい」

ルーカスは見抜いていた。というよりも、情報を持っていた。レ

イの戦いを経て、成長している魔術師がいることを。

「レイ＝ホワイト。その实力は、一生かけても君がたどり着けない領域だろう。それでも、その高みを目指す覚悟があるか？」

「はい」

「その先に待っているのは、挫折と苦悩だけだとしても？」

「後悔は後からできます。今はただ、全力であの背中を追いかけた
い、と」

「……いいよ。気に入った。アルバート、だったね？ それにエヴィ。僕のことは、ルーカスで構わない」

そして、アルバートとエヴィは改めて頭を下げる。

「よろしくお願いします。ルーカス先輩」

「ルーカス先輩。俺も、レイとは一度ガチでやりあってみたかったです。ご指導、よろしくお願いします」

その様子を見て、後輩を持つのも悪くはないな……と思う彼であった。

「さて、じゃあ早速トレーニングをしようか。彼に勝つなら、それこそ最低限の戦闘技術は身につけないといけない。ついてこれるか
い？」

「「はいッ！！」」

大きな声で、気合の入った返事をする。

ルーカス＝フォルスト。孤独にして孤高。誰も近寄せないことで有名な彼がどうして、別の学院の後輩と組むことにしたのか。

しばらく学院の中では、その噂が大きく広まることになる。

こうして、アルバートたちも大きく前進するのだった。

第158話 乙女の戦い

「レイさん。おはようございます」

「おはようございます、レベツカ先輩。本日もありがとうございます」

「いえ。私なりのお礼なので」

早朝。

最近は今折こうして、レベツカ先輩と朝食を共にすることが多い。

俺が一学期に作った花壇の水やり当番は、レベツカ先輩と同じになることが多い。というよりも同じではない日はほとんどないのだが。

例の件を経て、レベツカ先輩は俺に対して何かお礼がしたい……ということ、で、当番の日にはこうして先輩手作りの朝食をいただくことになっている。

俺は別に構わない、と言っただが先輩がどうしても……と潤む瞳で懇願してくるので断ることはできなかった。

年下の女性と同様に、俺は女性の涙には弱いのだ。

「今日もいい天気ですね」

「はい。清々しい秋晴れです」

二人で花壇の植えられている花に水をやる。

秋。それもかなり深まってきている。

朝は微かに肌寒いほどだ。冬がもうすぐやってくるのは、間違いないだろう。

「では、朝食にしましょうか」

「いつもありがとうございます」

「いえいえ。私が勝手にしていることなので」

ニコリと微笑むその表情は、もう陰りなどはない。

むしろレベツカ先輩は最近はとても明るいし、何よりももっと綺麗になった気がする。

きっとあのことがよほどのストレスだったのだろう。

しかし、今はこうして笑ってくれるのだから俺としては本当に安心している。

「じゃーん！ 今日はこの前の、レイさんのサイドイッチを参考に
して、たまごサンドを作ってみました」

「おお！ 美味しそうですね！」

バスケットから取り出すのは、たまごサンドだった。

まだ作り立てのようで、微かに温かさを感じる。それに、パンの表面もこんがりと焼かれていて、食欲をそそる。

わずかに見える色鮮やかなスクランブルエッグも、とてもいい感じだ。

「では、失礼して」

「はい。どうぞ」

パクリと一口。

サクつとするパンの表面、それにもちつとするパンそのもの、それに合わさる少しだけ塩気のあるスクランブルエッグ。

その全てが調和して、口内に広がるハーモニー。

間違いない。これは、美味いッ！

「ん！ 美味しいですね！」

「……本当ですか？」

「ええ！ 自分が作ったものとは、比べ物になりません！」

「そ、それはちよつと言い過ぎというか……でもその、嬉しいです。ありがとうございます」

顔を俯かせて、少しだけ赤くなっているレベッカ先輩。

そして俺たちは、この秋晴れの下でサンドイッチを楽しむ。

「そういえば、先輩」

「はい。何でしょうか？」

「体調のほうは、いかがでしょうか」

「そうですね。魔術はまだちよつとうまく使えないですけど、そこまで支障はありません。数ヶ月もすれば、治ると聞きました」

「そうですか……よかったです」

先輩の一部の魔術領域は、俺が体内時間固定で封じている。それは、俺の一部のものを先輩に譲渡したという形になっている。

俺のものは、それなりに良くなっているが先輩はまだ魔術領域暴走^{オーバーヒート}を起こして、日が浅い。

まだ何が起こるか分からない為、先輩にはこうして時折、異変がないか聞くようにしている。

「レイさんのおかげで、延命できているとなると……本当に頭が上がりませんね」

「いえ。当然のことをしたまでです」

「……その」

「はい。何でしょうか？」

サンドイッチを食べ終わると、先輩はズイッと体をさらに寄せてくる。

近い。

というか、近すぎる。その柔らかい身体がピッタリと触れる。

ほぼ俺の体に密着して、先輩はこう尋ねてきた。

「レイさんが私を助けてくれたのは……その」

その柔らかい部分を、敢えて意識しないようにしていると、遠くから大きな声が耳に入る。

「ちよつとーっ！ 二人で何やってるのーっ！」

それは幾度となく聞いた、アメリカの声だった。

紅蓮の髪を靡かせながら、彼女は懸命にこちらに向かって走ってくる。

「……チッ」

隣で先輩が舌打ちをしたような気がしたので、改めてレベッカ先輩の方に顔を向ける。

「？ どうかしましたか、レイさん」

「いえ……自分の気のせいようです」

そうだ。

麗しくて、美しい先輩が舌打ちなどするわけがないじゃないか。

おそらく疲れているのだろう。

今回はそのように、納得することにした。

「はあ……はあ……はあ……レベツカ先輩。何をしているのですか？」

「何って、レイさんとお食事ですけど？」

「それにしても距離が近いような……」

じつとアメリカはレベツカ先輩を睨み付ける。

何だ。

何なんだ。この剣呑な雰囲気は。

しかし、この雰囲気には妙に覚えがある。

それと同時に、俺は師匠の言葉を思い出していた。

「いいか、レイ」

「はい。師匠」

「女の喧嘩には口出しをするな」

「……止めるのも、ダメなのですか？」

「そうだ」

「なんと……そうなのですか」

車椅子に座った師匠は、窓越しに空を見上げながらそう言った。

「女は大概、面倒な生き物だ。特に、喧嘩をしている最中は危険だ。その時は、沈黙して、その場の流れを見極める。最善なのは、その場から離脱することだ。適当な理由をつけてな」

「勉強になります」

「もし、その喧嘩に巻き込まれることがあれば……」

「あれば？」

「どちらの意見も肯定してはならない」

真剣な表情で、師匠は語る。それはいつになく、熱の入った言葉だった。まるで実体験から話をしているようだった。

「ど、どうしてのですか？」

「どちらかに肩入れすれば、間違いなく暴発するからだ。そこは肉を切らせて骨を断つべきだ」

「つまり……？」

「曖昧に答えて、怒られておけ。それは致し方のない、犠牲だ。大人しく受け入れとけ」

「……なるほど。流石は師匠。よくご存じで」

「キャロルのやつが同じ感じだからな。さて、今日も訓練するか」

「はい！」

そのようなやりとりを過去にしたことを俺は思い出す。

師匠。あの時の助言は、この時の為だったのですね。

そんな風に感慨深いと考えながら、俺はアメリカとレベッカ先輩の口論を聞き流す。

俺は、石。いや、水。否、風である。

この風景に溶け込むことこそ、今なすべきことだろう。

そうして離脱のタイミングを窺っていると、俺の方にも話が飛んでくる。

「ねえレイ！ レイも迷惑してるよね！」

「レイさん。そんなことはありませんよね？」

選択。

ここは濁しておくべきなのが、最善。

流石は師匠の教えだ。

そして俺は、こう言葉にした。

「迷惑はしていません」

そういうと、レベッカ先輩がアメリカに対して勝ち誇ったような顔を見せる。一方のアメリカは、「ぐぬぬ……」と声に出して不満を露わにしている。

「しかし、先輩の貴重な朝の時間を奪っていると考えると、心苦しいのも事実です」

そして俺は、逆の意見も口にする。

今度はアメリカが勝ち誇った顔をして、レベッカ先輩が「ぐぬぬ……」と唸っている。

一体二人ともに、何が不満なのかいまいち理解できないが……うまく乗り切ることができたはずだ。

ありがとうございます。師匠。

「ふん！ レベッカ先輩。今日はここまでにしてあげます」

「それはこちらのセリフですよ？ ふふふ……」

視線が交差する。

アメリカは少し興奮しているようだが、レベッカ先輩は笑顔だった。

だがその笑顔は、今までに見たことがないような圧を放っていた。

ふと、自分の手を見つめる。

「……」

震えていた。俺は間違いなく、今のレベッカ先輩の笑顔に恐怖していた。

どうしてだ？ この笑顔はいつものように美しいのに、どうして震えが止まらないんだ？ この圧倒的な圧力プレッシャーは極東戦役でも経験したことのない、異質なものの。一体、これは……？

「では、レイさん。本日はこれで失礼します」

「私もこれで。レイ、ちゃんと気をつけるのよ？」

そうして颯爽と去っていく二人。

その一方で、俺は未だに何かの恐怖に対して震えている……。

これはまた、師匠に相談しにいくべきだろう。

女性に対する謎は、さらに深まるばかりだった。

第159話 にゃんにゃん

木漏れ日が差す日中。

王国の西区にある森の中、一人の女性が歩みを進める。

現在は秋も深まってきており、落ち葉が大量に地面に落ちている。

といっても、まだ完全には落ちきっていないが、それでも木々は痩せ細っているように見える。

クシャ、とその落ち葉を踏みしめながら彼女は迷いなく足を動かす。

栗色の茶色い髪に、シンプルにブラウスとロングスカートでまとめている彼女はとても清楚に見える。その艶やかな髪は、後ろで一つにまとめられており、爽やかな印象だ。

「さて、ここかな」

辿り着いたのは、豪華な洋館。

彼女はドアを三回ほどノックする。

すると、中から出てきたのはカーラだった。

「はい。どちら様でしょうか」

毅然とした態度でカーラは応じる。決して敵視しているわけではないが、初対面の人間ということである程度は警戒しているのだ。

「リーゼロッテが来たと、リディア先輩に伝えてもらえれば」
「……かしこまりました」

そう。

この場にやってきていた女性は、リーゼロッテ＝エーデン。

現七大魔術師の一人であり、二つ名は【虚構の魔術師】。

そんな彼女がどうして、リディアのもとにやって来たのか。

それはとある理由からだった。

元々リーゼロッテは他者との関わり合いを持たない。十年前にエヴァンと別れてからは、ずっと他者に成り変わっていたからだ。

だが、エヴァンを自らの手で殺し、レイと出会うことで彼女の心境には変化が生じていた。本当の姿で、人と話してみたいと。

そのような背景から、リーゼロッテは遙々この場所にやって来たのだ。

「主人から確認が取れました。どうぞ、お入りください」
「失礼します」

そう言って入ると同時に、その容姿は純白の長髪、真っ赤な双眸、

いつもの漆黒のロングコートに、ロングブーツの装いに变化する。

今まで容姿を変えていたのは、街中では何かと目立つからだ。

だがその頭には、奇妙なものが載っていた。

「こんにちは。リディア先輩。この前ぶりですね」

「それは……なんだ？」

「ネコミミ、というものらしいです。世間で流行っているとのことなので、購入してみました。にゃんにゃん。可愛いですか？」

ネコミミをつけたまま、手を丸めて猫の手のポーズを決める。それにわざわざ「にゃんにゃん」と言葉にする姿を見て……リディアは額に手を当てる。

無表情。声にも感情はこもっていない。

どうやら、こいつは勘違いをしている、とリディアは内心で思う。

「……無表情な上に、無感情でやられても、反応に困るだけだ。お前にはまだ早い」
「そうですか」

スツとネコミミを取り外すと、それをコートの内側にしまう。

彼女としては全く気にしていないようだった。

「……リーゼ。こうしてまともに話すのは、数年ぶりだな」

「はい。この前は、他にも人がいましたからね」

「まあかける」

「失礼します」

リディアは決して歓迎していないわけではなかった。

二人は机を挟んで向かい合う。それとほぼ同時に、カーラが紅茶を運んでくる。

「紅茶になります」

「ありがとうございます」

ニコリと微笑むリーゼロッテは、すぐに紅茶に口をつけた。

「美味しいですね」

「恐縮です」

そしてカーラは、リディアの後ろで控える。

リーゼロッテは席を外してほしい、とは言わなかった。それは別に、カーラに話を聞かれても問題ない……と判断したからだ。

「で、何のようだ？」

「先輩のもとに遊びに来ては行けませんか？」

「今までお前は、私の元に遊びに来たことがあったのか？」

「いえ。ありません」

真顔で告げるリーゼロッテだが、そんな様子をリディアは訝しげに見つめる。

「ならば、用事があって来たと考えるべきだろう」

「はは。それもそうですね、先輩」
「……」

やれやれ、と言わんばかりにリディアは首を振る。

元々二人が出会ったのは、軍の中が初めてだ。年齢は、一つだけ離れている。

リディアが二十九歳。リーゼロッテが二十八歳。

互いに飛び級をして、アーノルド魔術学院に入っているが、実際の学年は三年ほど離れている。

リディア、アビー、キャロルの三人は早期に飛び級を選択した。

一方のリーゼロッテはギリギリまで飛び級を選択しなかった。最後は両親の説得、それに学院の教師の説得によって、仕方がなく飛び級で入学した……というのが彼女の場合である。

そして、唯一被っている一年間の間でリーゼロッテはリディアたちとは関わりを持たなかった。当時は、それほど人に興味がなかった上に、リディアたちも四年生ということで学院にはあまり来ていなかったからだ。

そしてリディアたち三人が軍人となり、リーゼロッテが研究者となった時、初めて出会った。

当時から彼女は思っていたが、リーゼロッテはどこかおかしいと……そう感じていた。

基本的には無感情。だが、急に誰かに成り変わったような振る舞いを見せる。

それに、容姿も魔術で変えていることが多く、彼女の本質を掴むことはできなかった。

それが今こうして、本当の姿で来ているのだから多少なりとも驚いているのが実際のところだ。

「リーゼ。その姿でいてもいいのか？」

「はい。私も、心境の変化がありましたので」

「エヴァン＝ベルンシュタインのことか？」

「……そう、ですね」

齒切れが悪い。

だが、すでに割り切っているリーゼロッテはそのまま話を続ける。

「今まで私は自分には何の感情もない、ただのサイコパスだと自覚していました。しかし、エヴァンが死んで思うのです。この胸に空いてしまった、穴は何だろう……と。もしかしたらこれが、寂しい……という感情なのかもしれません」

「そうかもしれないな」

「ははは。馬鹿ですよ。今さら、こんな感情に気がつくなんて。でも、やっぱり涙は出なかった。愛する人を自分で殺したというのに、涙は出ません。悲しみよりも、寂しいという気持ちの方が募るのです」

その表情は、リディアが初めて見るものだった。

掴みどころがなく、何を考えているかわからない。

虚構の魔術師と出会った者は皆が口を揃えてこのように言う。

薄気味悪い、人形のようにだと。

だが今の彼女は、人間らしく思える。リディアはそう感じていた。

「……お前も成長しているみたいだな」

「そうだといいですけどね」

「で、私にそれを話しに来たのか？」

「それもありますが、問題は彼のことです」

「彼？」

リディアは眉を顰^{ひそ}める。

「レイ＝ホワイト。大切に育てているようですね」

「……レイはやらんぞ」

「ははは！ やっぱ先輩は面白いなあ……」

レイの話になった途端、視線を鋭くした彼女を見て笑い声を上げるリーゼロッテ。

だが、それは本物の殺気。オーディナリー一般人だけでなく、きっと並の魔術師でさえも震え上がってしまうその殺気を、笑って受け流す。

「彼、出場するそうですね」

マギクス・ウォー

「大規模魔術戦の話か？」

「はい。私が気になるのは、彼を表舞台に出していいのか……ということです」

「……それは」

迷う。言葉を選ぶリディアはしばらく沈黙する。

だがレイが相談に来た時に、好きにしろと言ったリディアはすぐに言葉を続ける。

「レイはもう、自分で進むことができる」

「……」

「裁量に関しては、完全に任せている。助言は確かにする。だが、最後に決めるのはレイ自身だ」

「……羨ましいですね」

リーゼロッテは、ふっと顔を緩ませる。

「彼は愛されている。それも、先輩だけじゃない。数多くの人に。きっと、人を引き付ける何かがあるんでしょうね」

「……それは否定しないが」

「どうかしましたか？」

リディアの顔が若干歪む。それを見て、リーゼロッテはただ事ではないかもしれないと感じ取る。

「あいつの周り、女がちょっと多すぎやしないか？」

「……」

珍しく、いや人生で初めてリーゼロッテは呆けてしまう。まさか

あの厳格なりディアからそんな話が出るとは、思ってもみなかったからだ。

「おい。何だその呆れたかのような顔は」

「いえ。親バカだな、と思っただけです」

「ほお……言っじゃないか」

ポキポキと手を鳴らすので、とりあえず彼女は否定しておいた。流石にある程度は空気というものは読むことができる。

「嘘ですよ。で、それが何か問題でも？ 男性であろうと、女性であろうと、人に囲まれているのは良いことでは？」

「いや……しかし……」

「しかし？」

「レイのことを狙っている奴が、多いかもしれないんだっ！」

再び呆れた顔をするリーゼロッテだが、それに気がつかずにリディアは独り言のように話を進める。

「最近レベッカ＝ブラッドリィも怪しいと思っている」

「はあ……」

「レイは確かに、私が育てただけあってかなり優秀だ」

「……そうですね」

「性格は少し真面目すぎるが、それを踏まえても素晴らしい男だ」

「……まあ、はい」

「何だ？ うちのレイに文句があるのか？」

「いえ。ご指摘の通りかと」

「何！？ まさか、レイを狙っているのか！？ 許さんぞ……」

内心で思う。

めんどくさすぎる……と。

リディアがレイを弟子として愛しているのは知っている。しかし、まさかここまでとは予想もしていなかったので、流石に面食らってしまう。

「それでレイが……」

その後、数十分に亘ってレイの話を聞き続け、彼女はまた新しい感情を学ぶのだった。

第160話 過去との決別

リディアが饒舌にレイの話をする最中、再び屋敷の扉がノックされる。

カーラが対応するために玄関に赴くが、その顔を見ると彼女は直ぐに二人を招いた。

「やつほ　遊びにきたよ、リディアちゃんっ！」

「失礼する」

顔を出すのは、キャロルとアビーだった。といっても、この二人も特に約束をしているわけでもなく、ただ暇だったから遊びに来ただけである。

「あれ？　リーゼちゃんもいるじゃん！」

「キャロル先輩に、アビー先輩ですか。お久しぶりです」

キャロルは駆け足で近づくと、ギュッとリーゼロッテを抱きしめた。

「リーゼちゃん！　あの時ぶりだねえ」

「そうですね」

「あの時はスキンシップできる雰囲気じゃなかったけど、今はいいよね」

「はい。構いません」

キャロルはよしよしとリーゼロッテの頭を撫で回す。一方のリーゼロッテは特に顔色を変えることもなく、キャロルにされるがままである。

そんな様子を、ため息まじりに見つめていたアビーは空いている椅子に腰を下ろす。

「リディア。邪魔だったか？」

「いや。リーゼも勝手に来ただけだしな」

「そうか。それにしても、珍しいな」

「まあ……そう思うよな」

と、二人の視線がリーゼロッテに向くので彼女はただ事実を伝える。

「私も心境の変化があったので。お邪魔でしたか？」

「いや構わないさ。一応、お前は後輩だしな」

アビーは学生時代に、少しだけリーゼロッテと交友があった。もちろん特別仲がいいというわけでもなく、軽く話をしたことがある程度。

実際には、軍人時代の方が会話をしている。

アビーとしては、リーゼロッテのことは嫌いでもないし、苦手意識もない。

エヴァン＝ベルンシュタイン。それに、レベッカ＝ブラッドリイ

に関してはあれが最善かと言われれば、納得いかない部分もあるが……アビーは彼女の実力を認めている。

しかし……七大魔術師になったからといって、幸せになれるとは限らない。

軍人時代の中から、リーゼロッテの危うさを感じ取っていた。

孤高で、孤独。

誰も寄せ付けず、常に他人に成り変わっている。

本当の姿を見る機会など、ほとんどなかった。

だが今は、その姿をこうして見せている。

そんなリーゼロッテの変化にアビーは少しだけ安心した気持ちになっていた。

世話焼きなのは自覚しているが、こうして後輩が成長しているのを見るとどうしても嬉しくなってしまうのだ。

「ねえ。リーゼちゃん」

「なんでしょうか。キャロル先輩」

キャロルは真剣な声音で語りかける。

「リーゼちゃんは、ちょっと変わったよね」

「そう……でしょうか？」

「うん。だから、リディアちゃんのところに来たんでしょ？」

「そうだと思います」

「今までなら絶対に来ないし、こうして本当の姿にもならないですよ？」

「はい」

キャロルもまた、アビーと同じだった。

ずっとリーゼロッテのことは心配していたのだ。普段はお調子者に見えるが、キャロルも大人だ。それに彼女は特に、周りのことに気を使える。

感情の機微に鋭い、というべきだろうか。

「何か見つけることができたの？」

優しく、包み込むような声。

それを聞いて、リーゼロッテは素直に自分の気持ちを話すことにした。

「エヴァンを殺して、私は彼を愛していたのだと知りました。人の感情を、やっと少しは知ることができました」

「うん」

「だからこれからは、他人に成り代わって他人の気持ちを考えるのではなく……自分ともしっかり向き合いたいと……そう思うのです」

「そっか。良かったね、リーゼちゃん」

そうしてキャロルは急に立ち上がる。

「よし！　ということで、新生リーゼちゃんのために髪の毛を切ります！」

「「「え？」「」」

リディア、アビー、リーゼロッテ。三人の声が重なる。

それもそうだろう。

なんの脈絡もなく、髪を切ると言われれば驚くしかない。

「おい。アホピンク。どうしてそうなる」

「ふふ〜ん！　リディアちゃんは分かっただいねえ

女の子は変

わりたい時には、髪を切るもんなんだよっ！」

「そうなのか、アビー？」

「いや、人によると思うが……」

「ということで、キャロキヤロが特別に切ってあげま〜すっ！」

持ってきている小さな鞆を探ると、キャロルはポーチの中から櫛とハサミを取り出した。

「いいんですか？　キャロル先輩」

「もちろんだよっ！　リーゼちゃんもしかして、嫌だった？」

「いえ。髪型にこだわりはないです。今までずっと、他者でいる時間の方が長かったですから……あまり自分のことは、考えたことはないです。でも、その……」

リーゼロッテは少しだけ俯く。

だが、変わりたいと願っている気持ちは本当だった。

キャロルの云うとおり、形から入るのも悪くはない。

彼女はそう思っていた。

そして、顔を上げるとキャロルに頭を下げる。

「その。よろしく願います」

「ふふんっ！ キャロキヤロはプロ級だからね！ 任せてよっ！」

カーラに頼んで、首回りを覆う紙を持ってきてもらつと、椅子に座ったリーゼロッテの後ろにキャロルが立つ。

リディアとアビーはそんな様子を、どこか微笑ましそうに見つめていた。

「うわゝ。すっごい綺麗な白い髪だね」

「そうですか？」

「うん！ これはおしゃれすると、もっと良くなるよ」

「それは楽しみです」

「したい髪型とかある？」

「お任せします」

「それじゃあ、キャロキヤロが最高に可愛くしちゃおうかなっ！」

ハサミを入れ始めるキャロル。

その手つきは完全に慣れているようで、スムーズに進行していく。

リーゼロッテの髪は腰まであり、かなり長い。キャロルはその髪

を、一気に肩ぐらの長さまでバツサリと真横に切り落とした。

リディアとアビーはキャロルの腕前を知っているの、というよりも、実際にたびたびキャロルに切ってもらっている。その技量は知っているが……流石にその思い切りの良さには驚いてしまう。

「うお……あいつ、めっちゃいったな」

「リディアも極東戦役後には、バツサリいっただろう」

「ああ……そう言われると、そうだな」

過去を懐かしむ二人。

そうしている間にもキャロルのハサミは軽快に動いていく。

「ん〜。外ハネと内巻き、どっちがいいとかある〜」

「いえ。キャロル先輩が可愛いと思う方にしてください」

「りょうかいっ！」

キャロルとしては、リーゼロッテの雰囲気と顔立ち、それに性格も考慮して外ハネを作りやすいようにカットするつもりだった。

しかし、逆に新しい彼女を見てみたい……という気持ちもあった。

いうならば、心機一転。

ということでキャロルは、内巻きのボブスタイルで可愛さを前面に出すことにした。

元より、リーゼロッテは精巧な人形のように、綺麗な顔立ちをしている。

可愛さを重視したとしても、似合うのは間違いなかった。

そして、内側の毛の毛量を少なくし、外側を重めにする事で、内巻きにしやすいように細かい調整に入る。

その技量はプロ顔負け。というよりも、キャロルはおそらく髪を切ることに關してはエキスパートにすら劣らない。

美に關しては妥協をしない。

その信念の元、自分でも髪を切れるようになったのがキャロルだった。

またその背景には軍人時代もある。それは、髪を切りに行く暇がない隊員が多かったので、キャロルがそれを担当していたのだ。

今となつては昔の話ではあるが。

「よし！　こんなものかなっ！」

そこにいたのは、完全に生まれ変わったリーゼロッテだった。

今まではロングストレートの純白の髪。腰まであるそれは、確かに美しいものではあるが、まるで人形のようにも思えた。

彼女は特に手入れもしないし、伸ばしっぱなしだったからだ。

だが今は違う。

街にいるおしゃれな女性のように、流行りの髪型をしている。

綺麗に内側に巻かれているボブスタイル。

キャロルはささっと髪を払うと、鏡をリーゼロッテに渡す。

「どう？　可愛いでしょ」

自信のある声。もちろん、キャロルの仕事は完璧だった。

「……はい。見違えました」

リーゼロッテは今まで長くなり過ぎたら適当にハサミでバッサリと自分で切る、ということを繰り返していた。

それが今や、全く異なる見た目になっている。

大人っぽくはあるが、可愛さも確かに残っている感じである。

髪型が違えば、こうも変わるのかとリーゼロッテは感嘆していた。

「おお。よく似合っているな」

「ああ。流石はキャロルだな」

リディアとアビーもまた、それを褒める。

二人が見ても、それは素晴らしい出来栄だった。

「じゃあ、服装も変えちゃおうっ！ リディアちゃん。ちょっと漁るね」

「お、おいっ！」

と、キャロルは勝手に家の中を物色して、リディアの服をリーゼロッテに着せる。リディアもまた渋々ながら、それを許可するのだった。

真っ青なフレアスカートに、薄いピンクのブラウスを選択。それに靴は茶色のローファー。

少し長めのボブスタイルの髪と相まって、ただの街娘のように見える。髪と目の色が浮世離れしているのは、仕方のないことだが。

姿見で、自分の全身を確認するリーゼロッテはいつもは無表情だが、今回ばかりは目を見開いて、驚きを露わにする。

「す、すごいですね……まるで別人です」

「でしょ？ おしやれはキャロキヤロに任せてよねっ」

彼女はキャロルに対して、再び丁寧に一礼をする。

「ありがとうございます。キャロル先輩」

「全然いいよ　また切って欲しい時は言ってねっ！」

その言葉を聞いて、彼女はゆっくりと頷く。

今までは自分から歩み寄ることなどなかった。

ただ彷徨うように、自分の人生を探し続けていた。

だが、自分から動き始めると世界はこんなにも変化するのだとリーゼロッテは知った。

彼女は進む。

これからきつと、もっと多くの感情を知っていくのだろう。

第161話 大規模魔術戦：概要

昼休みがやってきた。

しかし、今日はいつものメンバーは揃っていない。

アメリカは今日は実家の方で用事があるとかで、学校を欠席している。

アルバートとエヴィも昼休みは少し用事があるらしく、いない。
まだ二人から直接聞いたわけではないが、きっと大規模魔術戦に出
マギクス・ウォー
場するのだろう。

それは、雰囲気でなんとなく理解できた。

そして今は、俺、エリサ、クラリスの三人で食事をとっている。

「そっといえばさあ……」

と、口を開いたのはクラリスだった。

いつものようにツインテールがしっかりとキマっており、その艶やかな金色の髪はどこか神々しく見える。

クラリスの調子は、顔色よりもツインテールを見れば分かるので、今日はとても調子良さそうだった。

「レイは大規模魔術戦に出るのよね？」

「ああ。そのつもりだ」

「でも、大丈夫なの？」

エリサもまた、その会話に入ってくる。

「……そうだね。だってレイくんは」

二人ともに俺の事情は知っている。

確かに俺は、当代の【氷剣の魔術師】である。しかし、その能力は自分自身で封印している状態だ。一時的に解放できたとしても、それはあくまで一過性のもの。

まだ完全に魔術領域暴走は完治していない。

しかし、確実に良くなっているのは間違いない。

自分でも詳しい原因は理解できていないが、といってもおおよその見当はついているのだが、今回のような大会に関してならばきつと大丈夫だろうと思っている。

「魔術領域暴走オーバーヒートに関しては、まだ完治はしていない。だが、今回の大会……大規模魔術戦マギクス・ウォーに限っては、俺でも大丈夫だろう」
「どう言うこと？」

クラリスは食べる手を止めて、キョトンとしている。

エリサもまた興味深そうに俺のことを見つめてくる。

そこで俺は、今回の大会の性質に関して話をすることにした。

「今回の大会は団体戦だろう？」

「そうね」

「しかも、試合はカフカの森を使う。加えて、北の最奥にある古城も使うらしい」

「へえ……そうなっているのね」

「魔術がうまく使えなくとも、今回は俺の経験が活きると考えている。魔術剣士競技大会と異なり、今回は団体戦。^{マギクス・シュバリエ}しかも、勝敗を決めるルールに関しては複雑だ。勝機はある」

「そういえば、ルールってどうなってるの？」

クラリスのその質問に、俺が答えようとするがエリサが折りたたみである資料を取り出すと、それを読み上げてくれる。

「えっと……チームは三人で組むこと。それで、予選と本戦があるけど……予選は、カフカの森で拠点を取り合う試合みたいだよ」

「へえ。拠点を取り合うねえ……^{プリママテリア}具体的には？」

「特定の場所に、時間ごとに第一質料が溢れる場所を用意するんだって。その場所で、魔道具に一定値の第一質料を貯めた方が勝利……って書いてあるね」

「……？　つまり、どゆこと？」

クラリスは依然として概要をつかめていないようなので、俺がさらに詳しく説明する。

「カフカの森に、ランダムに拠点が設置される。そこは六分が経過すると、拠点の位置が変わる。その拠点の中に、魔道具を持つて入ることが重要だな」

「……えっと。一人は、魔道具で第一質料を^{プリママテリア}貯めて、残り二人でそ

の人を守るってこと？」

「そうだ」

「なんだか大変そうね……」

ボソリと呟くが、確かにこのルールはなかなか複雑だ。

魔道具に第一質料ブリママテリアを蓄積する。それは、拠点ごとに設定されていて、ランダムに拠点は移り変わる。

つまりは、三人で移動しながらの戦闘になるということだ。

また拠点を占有しているときは、防御しなければならないが、拠点を占有されているときは、攻撃をしなければならない。

防御に関しては、一人が拠点占有。二人が防衛。

攻撃に関しては、三人で同時に攻撃できる。

つまりはこれだけ見れば、攻撃側の方が有利だ。

攻防としては余程の実力差がない限り、一方的な試合にはならないと予想している。おそらく、拠点での移り変わりが激しい試合になるだろう。

「そうだな。しかも、拠点では魔道具は1つしか作動しない」

「ってことは、絶対に相手を拠点から押し出さないとイケないのね」

「ああ。そして、一定値まで貯めるか、制限時間が切れるときに多くの第一質料ブリママテリアを保有していた方の勝ちだ」

「制限時間は？」

「予選は一試合三十分だ」

「はあ……なんだかすごいわねえ」

クラリスのツインテールはぴよこぴよこと忙しく動いていた。きつとそれは、彼女の感情を表しているものなのだろう。もう慣れてしまったので、特に新鮮に感じることはない動作だが。

「レイくん。すごいね。もうちゃんと覚えてるんだ」

「出場するからには、ルールは叩き込んである。しかし、拠点占有よりも……問題は攻城戦（じうきせん）だな。これは本戦からになるらしいが」

「えっと……」

俺がそういうと、エリサはもう一度じつと資料を見つめる。

「攻城戦は、初めから攻めと守りに分かれてやるんだね」

「そうだ。攻め側は城の中に置かれているフラッグを奪って、外の所定の位置に持っていけば勝利。守り側は、制限時間内で守り切れれば勝ち。制限時間は二時間だな」

「……これって、どっちが有利とかあるのかな？」

その質問に対する答えは、俺はまだ明確なものは持っていない。こればかりは、試合をしてみないと分からないかもしれない。

「そうだな……一概にはいえないだろう。こればかりは、チームの構成によるとしか言えない。それに、攻めと守りは試合前に代表者がくじを引くことで決まる。つまりは、不確実な要素が多い。どちらにも対応できるように、バランスよく訓練しておくべきだろうな」

「そっかあ……なんだか、やることが多いね。レイくんたちは、大丈夫なの？」

「……でも、大丈夫なんじゃない？ だってレイだし」

「それもそっかもね。あはは」

クラリスの言葉に、エリサは微笑を浮かべる。

しかし、今回の大規模魔術戦は俺も油断はできないと考えている。マギクス・ウォー

三人のチームの構成。得意な魔術、不得意な魔術。さらには、この大会の性質上、身体能力があるに越したことはない。

マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会では一対一の戦いで、特に移動などの要素はなかった。

ただ真正面からぶつかればいいだけだった。

一方で、今回の大規模魔術戦は、拠点占有と攻城戦という特殊なルールだ。マギクス・ウォー

移動しながらの戦闘。それに、戦闘をするか、離脱を選択するか、適宜対応が求められる。何もずっと真正面から戦っていればいいわけでもない。

あらゆる戦略を考慮した上で、戦うのがこの大規模魔術戦。マギクス・ウォー

このルールを考えたのは、おそらくアビーさんだろう。

それは軍人時代を振り返れば明らかだった。もちろん、俺はこの手の訓練には覚えがあるので有利なのは間違いない。

だが、今回は団体戦。残りの二人である、アメリカとアリアーヌはこのような魔術戦の経験はない。そのため、しっかりと訓練を積んだ上で、連携も適宜確認した上で大会に望む必要がある。

やはり……どれだけ考えても、一筋縄ではいかないようだ。

「いや、俺一人ならばどうにかなるが……今回は団体戦だ。仲間との連携が大事になる。安心はできないだろう」

「そういえば、レイは誰と出るの？ アメリアは聞いてるけど」

「アメリアとアリアーヌだ」

「え……あの、アリアーヌはオルグレン？」

「そうだが、何か問題でもあるのか？」

少しだけ驚いたような表情を見せるクラリス。それは何を思っているものなのだろうか。

「いや……でも思うと、あんたとアリアーヌって相性良いわよね」

「クラリスはアリアーヌのことを知っているのか？」

そう尋ねるが、クラリスはこれでも上流貴族。おそらく、以前から交流があるのだろうと理解する。

「まあ、パーティーとかで会っし、何度か会話したことあるけど……熱血よね」

「……それは間違いないな。アリアーヌは熱いな。その魂が」

「あんたたち二人に挟まれるアメリアはきつと大変でしょうね……」

「ふ。そこはアメリアに頑張ってもらっしかないな」

「あの魔術剣士競技大会の訓練を知ってるから、きつと今回もすごいことになるんでしょうね」

と、その言葉を聞いた瞬間。

エリサもまたボソツと呟く。

「ああ……あれは凄かったけど……そっか。アメリカちゃん。大変だねえ」

「そうよねえ。ま、私たちがフォローしてあげましょ！　ね、エリサ！」

「うん！　そうだね。色々とサポートしてあげようよ！」

女子二人は妙にやる気だった。

確かに、男性の俺ではアメリカのサポートを完璧にできるわけではない。同性の方が話しやすいこともあるだろうしな。

そんなことを考えながら、二ヶ月後に迫る大規模魔術戦に向けて俺はさっそく、準備を開始するのだった。

マギクス・ウォー

第162話 作戦会議

午後の授業も終了し、放課後になった。

これからほぼ毎日、放課後は作戦会議と訓練に時間を当てることになっている。部活動は事情を話して、しばらくは休みにしてもらった。もちろん、顔を出せる時は行く予定だ。

レベツカ先輩がとても残念そうな顔をしていたのは、大変心苦しかったが……こればかりは仕方がない。

「やってきましたわ！」

アリアー又は放課後になると、すぐにやってきた。体力強化も兼ねて、身体強化をして走ってきているのだとか。そして、休日の前日はアメリカの部屋に泊まるらしい。

今回の大規模魔術戦に際して、学院の生徒が他の学院に移動するのは許可されている。もっとも、いつも厳しいかと言われたらそうでもないのだが。

出場する他学院の生徒が、この学院にいることは割と目撃する。

「レイ！ 早速やりますわよ！」

今日は髪をツインテールにまとめていた。一見すれば、クラリスのようにも見えるがそれは違う。

クラリスのツインテールは細めだ。曰く、一番それがいいバランスとのことだった。流石は、ツインテールを愛し、ツインテールに愛された女性だと感心したのは記憶に新しい。

一方のアリアーヌは、クラリスと比較すると太めのツインテールだった。

おそらく何かを意図しているわけではないのだろうが、とてもよく似合っている。

「アリアーヌ」

「どうしたんですの？」

「その髪型、よく似合っている」

「ふふ。レイはお目が高いですわねっ！」

「恐縮だ」

と、二人でそんなやりとりをしながら、まずはアメリアを探す作業から始める。

「あら？ 今日から訓練開始なのに、アメリアはいませんか？」

学内を進む俺たち。

アリアーヌはまるで理解できないと言わんばかりに、その言葉にする。

「……逃亡した可能性があるな」

「逃亡？」

「ああ。魔術剣士競技大会の時も、アメリカはよく脱走していた」
マギクス・シュバリエ

「……そうでしたの。アメリカもおてんばなところが意外とありますから……まあ、理解はできますわ」

「しかし、大丈夫だ。特定の魔術師を搜索するなら、俺の得意分野だ」

「そうですの？」

「まあ、見ていてくれ」

瞬間。

アンチマテリアルフィールド
俺は絶対不可侵領域を展開。

プリママテリア
アメリカの第一質料はもとより記憶している。そうして探つていと……発見した。

「なるほど。第二校舎、三階。女子トイレの一番奥の個室だな。調子でも悪いのかもしれないな」

アリアーヌに特定した情報を伝える。

すると、彼女はポカンとした表情を浮かべるのだった。

「え……今の一瞬でわかりましたの？」

「そうだ」

「……なんと言つか、本当に七大魔術師ですね」

「力はまだ完全ではないがな。ま、とりあえず行こう」

「わかりましたわ」

移動を始める。

そうして、第二校舎の階段を登っていくと……女子トイレの前に
辿り着く。

「わたくしが呼んできましようか？」

「いや俺も行こう」

躊躇なく女子トイレの中にアリアーヌと共に侵入する。

「アメリカ訓練兵！ 訓練の時間だッ！！」

その声と同時に、先ほどまでしていた人の気配が限りなく薄くな
っていく。

「ふむ。隠れるつもりか？ しかし、そこにいるのは分かっている
ッ！」

「アメリカ！ 大丈夫ですか？」

「体調不良か？ ならば申告して欲しい」

そうしてしばらく待っていると、キィイイと扉が開く。

「う……ごめん。その訓練のことを考えると、ちょっとお腹が。で
も、もう大丈夫」

本当に調子が悪かったのか、アメリカは少しでも顔色が悪かった。
訓練はしっかりとアメリカの体調を考えてやるべきだな。

「それは良かった。では行こうか」

アメリカは洗面台で丁寧に手を洗い、そのまま外へと出ていく。

そして俺は、その手をしっかりと掴み取る。

「アリアーヌ。そちらの手も握ってほしい」

「？ わかりましたけど」

アメリアを中央にして、左右から俺とアリアーヌで手を握る。

「ねえ。何これ……？」

怪訝な表情でそう尋ねてくるので、すぐに返答する。

「アメリアの逃亡対策だ」

「……別に逃げないけど？」

その顔は少しだけ赤くなっているような気がした。

「念のためだ」

「まあ……別にいいけど」

その一方で、アリアーヌはどこか嬉しそうと言つか、上機嫌だった。

「よし！ では、早速やりますわよ！」

「その前に、今回の大会に関して確認しておこう」

実は事前にキャロルに申請して、放課後の空き教室を利用できることになっている。

三人で空き教室に入ると、最前列にアメリアとアリアーヌが座る。

俺は黒板の前に立って、チョークを手に持ち壇上で今回の大規模
魔術戦に関する説明を始める。
魔術戦

「では、大規模魔術戦に関して説明をしよう。チームでの共有は大
切だからな」

まずはルール確認ということで、予選の内容から触れていく。

「予選ではリーグ毎の総当たり戦となる。各リーグはA～Gまで。
上位二チームが本戦に出場となる予定だ」

黒板にささつと概要を書いていく。

「予選では、拠点占有というルールで戦うことになる。場所はカフ
カの森。特定の場所に、時間ごとに第一質料が溢れるポイントが出
現。その場所で、魔道具に一定値の第一質料を貯める、または試合
終了時により多くの第一質料を貯めた方が勝利となる」

予選のルールを説明する。もちろん、アメリカとアリアーヌとも
に知っているだろうが、念のために確認だ。

そして、アリアーヌが手を上げる。

「質問よろしいのです?」

「もちろんだ」

「拠点占有では、ポジションはどうしますの?」

「……俺はアリアーヌの能力は、まだ全てを知っているわけではな
い。だが、おおよその作戦は考えてある。拠点占有では、アメリカ
に拠点に入ってもらっ」

「え、私なの？」

ポカンとした顔で、アメリカは自分のことを指差す。

思ってもみなかったという感じだが、俺はこれが最善であると判断した。

「そうだな。まず理由はいくつかある」

チヨークを一旦置くと、その理由の説明を始める。

「拠点占有だけでなく、攻城戦でも言えることだが今回の大規模魔術戦では接近戦がかなり多くなるだろう。と言っても、後方でコードを構築する時間はあるだろうが、それでも俺たちのメンバーで考えれば前線での戦闘は俺とアリアーヌが最適解だろう」

そういうと、アメリカも自分の魔術特性は理解しているので、頷いて理解を示してくれる。

「まあ……レイとアリアーヌに比較すれば、私の近接戦闘は劣るか
らそれは正解ね」

「しかし、アメリカには役目がある」

「何をすればいいの？」

その目つきは真剣そのもの。

自分の役割をしっかりと知っておきたいという気概を感じ取れた。

「拠点占有に関しては、二人が防御。もう一人が拠点で魔道具に第一質料を貯め続ける必要が有る。そのため、防御に特化した魔術は

いくつか練習しておいて損はないだろう」

「……因果律蝶々バタフライエフェクトを使えば、絶対防御になるけど？」

アメリカがあオリジンの因果に干渉する強力な固有魔術　因果律蝶々
をずっと制御下におこうと努力しているのは知っている。

会長にノーラさん、その二人に頼まれたこともあるが、一番の理由はアメリカのためだった。強大な魔術に吞まれてしまえば、待っているのは廃人になる未来だけ。

脳の魔術領域は焼き切れてしまい、まともに生きることとはできなくなる。

そのことを踏まえて、アメリカがずっと努力してきたのは知っている。

だから、ここで使ってみたいという思いも理解できるが……。

「予選では、因果律蝶々バタフライエフェクトを使うのは許可できない」

「でも……」

「分かっているだろう？　使い過ぎれば、魔術領域暴走オーバーヒートを引き起こす」

「それは……」

俺はその話を、アリアーヌにも振る。

「もちろん、アリアーヌもだ」

「わたくしもですよ？」

「ああ。予選では、固有魔術オリジンは禁止。本戦でも限られた場面でしか使うことは許可できない。今回の大会は、おそらく連戦になること

もある。それを踏まえて、理解してはもらえないだろうか」

オーバーヒート
魔術領域暴走の後遺症。

それは決して、馬鹿にはできない。俺の場合は、運が良かっただけだ。もう少しで、死んでいる可能性もあったし、廃人になっていた可能性もあった。

オリジン
固有魔術を学生のうちに発動した、若くして才能のある魔術師が、その強大すぎる魔術に潰されてしまったこともある。

そのような背景もあり、勝ちには拘りたいが……まずは二人のことを第一に考えたいと俺は思っていた。

「わかったわ」

「わたくしも理解しました」

「ありがとう。それに、魔術師は強大な魔術を使えることだけが全てではない。何事も、基礎からの積み重ねだ。まず予選は、基本的な魔術と動き。その二つを徹底して、強化していこう」

「「おー！」」

ということで、俺はさらに話を続けるのだった。

第163話 訓練に向けて

「拠点占有に関しては、先ほど話した通りの分担でいこう。後は訓練時に適宜確認していくことにする」

「分かったわ」

「了解しましたわ」

続いて俺は、攻城戦についての説明をする。

拠点占有に関しては軍人時代の知識が役に立つが、攻城戦に関しては俺もまだ手探りなところがある。

こちらもしっかりと、全員で意識を共有していきたい。

何よりも今回の団体戦はチームワークが重要とされるからだ。おそらく、もともとそのようにルールを作り上げたのは間違い無いだろう。

「さて、攻城戦について話を進めよう」

黒板に攻城戦の詳細を書いていく。

「攻城戦は、攻めと守りに分かれて行う。ここで重要なのは、自分たちのチームがどちらサイドが強いか、ということを実感することだ」

「わたくしたちはどちらですか？」

「……一概には言えない。が、俺としては攻める方が強いと思って

いる」

「その根拠はありますか？」

アリアーヌの質問に対して、すぐに応じる。

「まずは俺とアリアーヌの存在だな。性格的にも、攻める方が性に合っているだろう？」

「それは否定はしませんわ」

パーソナリティの問題は、魔術にも如実に現れる。それを考慮した上で、俺はそう判断している。

「加えて、俺たちはサポートにアメリカがいる」

「私？」

「ああ。アメリカの魔術は繊細なコード構築が真髄だろう。そうではないければ、バタフライエフェクト因果律蝶々は使用できない。俺の持っている魔術でも、バタフライエフェクト因果律蝶々に匹敵するものはそうそう無い。だからこそ、俺とアリアーヌで攻めつつアメリカが適宜サポートする。シンプルだが、これが最も効果的だろう」

黒板に城の絵を描いて、そこに三つのピースが攻めていく様子を書いていく。

視覚的に情報を共有したほうがいい、というのはキャロルが昔からよく言っていた話だ。

作戦会議の時は常にキャロルが話を進めていた。その際に、彼女は絶対に図や絵などを加えて作戦を説明していた。

そのおかげで作戦をスムーズにこなせた経験から、俺はすっかり

と図示することで意識の共有を試みる。

「もし、防御側に回ったらどうしますの？」

「俺が先陣を切って守りに入ろう。アメリカとアリアー又はフラッグの防御だな。ただしここで、おそらくアメリカの因果律蝶々対策だろうが、あるルールがある」

そう。

攻城戦はフラッグを持ち出して、所定の位置に置くことで攻め側の勝利が確定する。一方で、防御側は二時間きっちり守る必要がある。

そして、『フラッグには直接魔術を作用させてはならない』……というレギュレーションが存在している。

「フラッグに直接魔術を作用させてはならない。これは、アメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトならばフラッグを『取ることはできない』という結果を生み出し続ければ、完全防御になるからな」

「そっか……確かに、私の因果律蝶々バタフライエフェクトなら可能ではあるわね……まあ、体力の問題はあるけど」

口元に手を持っていくと、アメリカは微かに頷く。

彼女の因果律蝶々バタフライエフェクトに関しては適宜相談を受けている。現状では、あの夏の魔術剣士競技大会よりも制御できているのは知っている。

「アメリカ。現在、因果律蝶々バタフライエフェクトの使用時間は？」

俺はすでに知っているが、アリアーもいるということとでここで

聞いておくことにした。

「そうね……出力次第だけど、おおそ一分かしら。それ以上は、ちよつと厳しくなってくるわね」

「了解した。では、本戦では絶対にその一分を守ってほしい」

「分かったわ」

「特に、防衛に関してはアメリカの因果律蝶々が鍵になってくるだろう。使うタイミング次第では、かなりの脅威になる」

そうしてさらに、フォーメーションやポジションなどを確認。

こればかりは、実際に体を動かして覚える必要があるので口頭で大まかな説明に留めておく。

そして最後に、俺は一番マークしておくチームについての情報を話す。

「それで最後になるが、現在はまだ出場してくるチームが全て揃ったわけでは無いが……おそらく、優勝候補筆頭はルーカスⅡフォールストの率いるチームになるだろう」

「……魔術剣士競技大会本戦の優勝者。あの剣技は正直、ゾツとするものがありますわね。それにしてもやはり、出てくるのですか……」

アリアーヌもまた、あの魔術剣士競技大会でルーカスⅡフォールストの試合を見ていた。

思い出すのは、あの圧倒的な剣技。

本戦決勝まで、たった一振りで快勝してきたその実力はすでに学

院の生徒ならば誰もが知るところだ。

「それで、残りの二人は誰なの？」

と、アメリカがその間に入ってくる。

放課後前に部長から教えてもらった情報を、公開することにした。

「アルバートとエヴィだ」

「……え！！？」

流石に予想していなかったようで、二人ともに驚きの声を上げる。

俺もその情報を手した時は驚いたものだった。部長にその話を聞いたのは、偶然だったのだが早めにそのことを知ることができて良かったと思っている。

ルーカスⅡ フォルスト。

メルクロス魔術学院では孤独で孤高。誰も近寄らせることはなく、一人で淡々と鍛錬をこなしているらしい。演習場も、気がつけば彼専用のスペースができているとか。

そんな彼が誰かと組むことは考え難い。そのような背景もあり、ルーカスⅡ フォルストは出場を見送るのでは無いか。そんな噂も立っていたが、まさかのアルバートとエヴィと組むとは……流石にそれは、予想していなかった。

「……アルバートですの。それにエヴィというのは、二人のお友達ですわよね？」

「ああ」

「そうね」

「それにアルバート……彼は確かに、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会で戦ったときに変わったと思いましたが。思えば、それもレイの影響ですの？」

俺はアルバートの件をアリアーヌに話すことにした。

すると彼女は額に手を当てて、「はぁ……」とため息をついた。

「なんというか……以前のアルバートならやりそうなことですわね」
「しかし、彼は成長している。自分の立ち位置を正確に把握し、努力に努力を重ねている。だが、まさかルーカスⅡフォルストと組むとはな……」

その意味が分からないほど、俺は鈍感では無い。

アルバートとエヴィ。

その二人が声をかけるのなら、まずは俺に来てもおかしくは無い。
これは少し自意識過剰かもしれないが、俺たちは仲の良い友人だ。

アリアーヌではなく、先に声をかけられていれば了承していただろう。

しかし、敢えて二人はルーカスⅡフォルストのところに行った。

それが意味するところは……。

「やっぱり、レイと戦いたいんでしょうね」

アメリカの凜とした美しい声が、教室内に通る。

「ふふ。やっぱり、燃えますわね！ これは宣戦布告ですよ、レイ」

「……やはり、そういうことだろうな」

友人だからといって、馴れ合うわけではない。

俺たちは、切磋琢磨できる友人であると。

二人はそう言いたいのだろうか。

それにルーカス＝フォレストは、俺と戦いたいと言っていた。

団体戦で一騎討ちを申し込んでくる、またはそのような状況に引きずり込んでくる可能性もある。

マギクス・ウォー
大規模魔術戦。

どうやら一筋縄ではいかないようだ。

「戦力的にはどうなのでしょう。わたくしたちの方が有利に思えますが」

「俺が全力で戦えるのなら、有利だとは思うが……魔術領域暴走の件がある。おそらく俺は、内部コードがメインになる。インサイド一方で、相

手は全員が全力で戦える。不利だろうな。何よりも、ルーカス＝フォレストの存在が大き過ぎる」

「そっか……でも、レイのことだから考えがあるんでしよう?」

「そうだな。何も真正面からぶつかり合う必要はない。やりようはあるさ」

まだ予選も突破していないが、おそらく俺たちも、彼ら三人も予選は突破できると考えている。

本戦で戦うことをすでに想定しているのも、本当だ。

しかしそれはきつと……ある意味で辛い戦いになるのは間違いないかった。

「よし。では、情報の共有はこれで終了だ。今からすぐに訓練に入る」

「レンジャー！　ですわ!」

「うむ。アリアー又訓練兵は返事がいい。その調子だ」

そして俺はアメリアの方を向いて、じつと視線を送る。すると彼女はビクツと体を反応させる。

「れ、レンジャーっ!」

「うむ。アメリア訓練兵もいい返事だ」

あの時の記憶が残っているのか、アメリアもすぐに声を上げて敬礼をする。

「では、いくぞ!」

「レンジャー！」

「ということで、マギクス・ウォー大規模魔術戦に向けて本格的な訓練を開始するのだった。」

第164話 それぞれの動き

「はあ……はあ……はあッ！」

「くそ……どこに行ったッ！！？」

メルクロス魔術学院の近隣に存在する森林。

カフカの森ほどの規模はないが、それなりの広さを持つ場所である。

そこで現在、アルバートとエヴィは訓練をしている最中だった。

「……こっちだよ」

ボソリと音が上から聞こえると、その瞬間容赦ない攻撃が二人に降り注ぐ。

もちろん咄嗟に防御はしているので、後方に吹っ飛ぶだけで済んでいる。と言っても、これで何度目かは覚えていない。二人の体はすでにかなり痛めつけられている。

ルーカスが課した特訓。

それは、攻撃をもらわないようにするという簡単なものだった。

制限時間は三十分。その中で、一度も攻撃をもらうことがなければ

ばクリア。次の訓練に移行する。

一方で、一撃でもくらって仕舞えば時間はリセットされる。その度に、やり直し。

根気と体力のいるこの訓練を、連日こなしている二人は流石に疲れているのか……いや、そんなことは決してなかった。

「くそ……またもらっちゃったか」

倒れ込んでいるエヴィに、アルバートが手を差し伸べる。

「ほら。次だ」

「ああ」

グツとそのエヴィの体重を支えると、その場に立ち上がって体に付着した土などを払う。

「さて、どうしたもんか……」

「エヴィ。ルークス先輩の動きは追えているか？」

「いや。俺には無理だな……声が聞こえたときに、咄嗟に防御するので精一杯だ」

「そうか」

「アルバートは見えているのか？」

「かろうじて、な。だが、エヴィよりも反応がわずかに早い程度でほとんど同じようなものさ」

ルークスが課しているのは、森の中での戦闘に慣れる。というものだった。

拠点占有では、カフカの森がフィールドとして設定されている。

そのため森での戦闘は必至。だが、森は様々な木々がある上に第^{リマテリア}一質料も乱雑に放出されている。

そのため、気配を特定するのは至難の技。

知覚感知系の魔術、それこそレイの絶対不可侵領域^{アンチマテリアルフィールド}があれば、そんなものは些事に過ぎない。

だが、誰もが彼のような魔術を有しているわけではない。

慣れるまで続けるしかない。これはあくまで感覚的な話。それを一度身につけてしまえば、あとは無意識にでも反応できるようになる。

重要なのは、折れない心。愚直に繰り返す精神力。

ルーカスが求めていたのはそれだった。その心の強さがなければ、大規模魔術戦で勝ち抜くことなど不可能なのだから。^{マギクス・ウォー}

「よっしゃ。じゃあ、次にいくか！」

「ああ」

グツと体を伸ばして、気合を入れ直す。

そうして二人は、木漏れ日の差す森の中を進んでいくのだった。

二人が求めているのは、レイ＝ホワイト。

そして彼の實力は知っている。グレイとの戦闘をその目でしっかりと目撃しているから。

あの領域にたどり着けるとは、アルバートとエヴィは思っていない。思っていないが、その片鱗に届くことぐらいは、魔術師としての人生の中であり得るかもしれない。

目標は大きければ大きいほど、人はその圧倒的な大きさの前に心を打ち碎かれてしまう事もある。しかし、毎日の小さな積み重ねこそが、その目標を達成する唯一の方法。

二人はそれを心得ている。

だから今日も、彼らは戦う。

他でもない。自分自身と。

「あれ？ 今日はずっと何もなかったのに、なんでお姉ちゃんがいるの？」

ブラッドリー家。

マリアは学校が終了し、部活動にも入っていないため、いつもすぐに帰宅する。

そうして彼女はリビングにやってくると……そこにはなぜかレベ

ツカがいたのだ。

真剣な表情をして行っているのは……縫い物だった。

「……マリア？」

「ただいま」

「お帰りなさい」

と、一度だけ顔を上げてマリアにそう告げると、再び作業に没頭する。

マリアは乱暴にカバンをソファアの隅に投げると、レベツカの隣に座る。

「……何それ？」

「お守りよ」

依然として作業は続ける。マリアの方を見ることなく、ただ一心不乱に縫い物をする。

「誰にあげるの？」

そう言った瞬間。

レベツカの手が止まる。そして徐々に顔が赤くなっていく。それは横顔だけでなく、その耳を見れば明らか。

マリアはそんな姉の様子を見て、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべる。

「あゝ。もしかしてそれって、レイにあげるんでしょ？」
「わ、悪いっ！！？」

姉の恋心をよく知っているマリアは、まずは牽制とばかりにか
かい始める。

「レイが^{マギクス・ウオー}大規模魔術戦に出るからあげるの？」

「そうよ。レイさんはいつも無茶をするから。だから、こうしてお
守りを作ってるの。私は出場はできないから」

少しだけ寂しそうな声で、レベツカは話す。

本来ならば、レベツカも出場したい気持ちはあった。だが、レベ
ツカの魔術領域は一部が封じられている。医者にも魔術の使用はし
ばらく控えた方がいいとも言われているのだ。

自粛するのは当たり前。

しかし、何もしないというのはレベツカとしては心配というか…
…手持ち無沙汰なので、こうしてお守りを作っているのである。

「ん？ そういえば、どうしてレイさんが出場することを知ってい
るの？」

きょとんとした表情で尋ねるレベツカに対して、マリアは率直に
応える。

「いや、本人から聞いたから」
「いつ、どこで？」

声色はすぐに真剣なものに打って変わる。これは質問ではない。すでに詰問に変わっていた。

「一昨日、偶然中央区で会って……」

「へえ……」

「お、お姉ちゃん……か、顔が怖いけど……」

「あら、失礼」

じーっとマリアの顔に迫っていたレベッカだが、すぐに距離を取る。

「思えば、マリアとレイさんって仲がいいよね」

「まあ……気が合うというかね」

「友人の範疇で収まっておくことをお勧めするわ」

「ど、どうして？」

つい聞きたくなってしまった。友人の範疇を超えた先に、何が待っているのか興味本位で知りたくなってしまったから。

「……それは、きっと良くないことが起きるわ」

「良くないこと？」

「戦争」

「ん？ 戦争？」

「はい。巻き込まれたくは、ないでしょ？」

ぞくり。

背筋が凍るとはこのことか。

マリアは初めて、その言葉の意味を自分の体を持って学んだ。

レベッカはいつものように、麗しい顔と美しい声音で、話をして
いる。

だというのにどうしてだろうか。

マリアがこんなにも恐怖心をいだいてしまうのは。

思えば、兆候はあった。以前から溜め込んでいた反動なのか、レベッカは意外と負けず嫌いな上に、容赦がない面もある。

優しい顔が目立つだけで、実際はそのようなところもあるとマリアは知っていた。

「ま、まあ……気をつけるよ」

「はい。いい心がけね」

ニコリと微笑むその姿は、まるで天使のようだった。

そしてマリアは思い切って、話題を変えることにした。

「でもさ、手作りって重くない？」

「……」

ポトリとその場に縫い物を落としてしまう。そうしてしばらくフリーズしていると、ガツとマリアの肩を掴み始める。

「く、詳しく！」

その顔は真剣そのもの。というよりも、焦っている感じだった。

「いや。私の意見だけど。まあ……レイが拒否るなんてあり得ないと思うから、いいと思うけどさ」

マリアはそこから、レイの物真似を始める。

「レベッカ先輩。ありがとうございます。本当に恐縮です……とか言いそうじゃない？」

「……まあ、そうよね。レイさんはきっと喜んでくれるわよね！」
「うん。そうだと思うよ」

「よし！ もっと頑張ろうっと！」

ブラッドリィ姉妹。

レベッカとマリアの関係は変わった。

だがそれはもちろん、いい方向に。

お互いの率直な意見を交わせることができるようになった。

しかし、その弊害なのか……二人の喧嘩が多くなっていくのは、まだ先の話である。

第165話 宣戦布告

昼休みになったが、俺はいつものように学食に向かうことはなかった。

それはある誘いがあつたからだ。

寮で目を覚まし、朝の準備をしているとエヴィに言われたのだ。昼休みに、屋上に来て欲しいと。

それはきつと、大規模魔術戦についてだろう。
マギクス・ウォー

俺は屋上へと続く階段を上がっていく。

そうして最上階にたどり着くと、ゆっくりとドアノブを回す。

ギィィと音を立てて開く扉。それと同時に、外からは風が入ってくる。

その風を全身で浴びながら、前に進んでいくと……アルバートとエヴィがそこにいた。

「レイ。来たか」

二人と対峙する。

別に敵対しているわけではない。

しかし、二人からは闘志のようなものを感じる。

「して、用件はなんだろうか」

まずは俺から話を進める。

その内容は分かり切ってはいるが、これは一種の通過儀礼のようなものだろう。敢えてそうすることで、スムーズに進行するようにするために。

「俺たちは、マギクス・ウォー大規模魔術戦に出場する」

アルバートの顔つきは、今までになく真剣味を帯びていた。

「そうか」

「メンバーは、俺とエヴィ……そして」

そこから先の言葉は、すでに情報として手に入れている。

特別驚くことはなかったが、こうして直接それを示してくる意味が分からないほど、俺は鈍感ではない。

「ルークス^{II}フォルスト先輩だ」

「……マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会本戦の優勝者。あの剣技は圧倒的だった。なるほど。彼とチームを組んだのか」

「そうだ。初めは、レイを誘うという意見もあった。しかし」

すると、エヴィが前に出てくる。

いつも陽気で、俺たちのムードメーカーでもある彼だが、アルバートと同様に真剣な顔つきをしている。

「レイと戦ってみてえ。俺たちは、そう思ったんだ」

「そうか」

「レイは確かに、この世界の魔術師の頂点だ。でもな、だからこそ……俺たちはその背中を追いかけていきたい。いつまでも、レイの後ろにいるわけにはいかねえからな」

白い歯を輝かせながら、エヴィは笑う。

その笑顔は、真正面から俺とぶつかりたいという意志の現れなのだろう。

アルバートからはそんな意志を感じとっていたが、エヴィも同じように考えていたのは流石に分からなかった。

「俺はハンター志望だから、別に大会とかは出る気はなかった。でも、レイとアルバートに感化されてな。へへ……」

少しだけ恥ずかしそうに、鼻を擦るエヴィのその姿は新鮮なものだった。

「ということだ、レイ」

アルバートの雰囲気はあの時とは、もう違う。

思えば初めの頃は、彼は俺のことを目の敵にしていた。しかし、

俺と決闘をして完敗。そこから、自己を見つめ直してアルバートはここまで来た。

人の成長速度は、当たり前だが人による。

だが重要なのは、受け入れること。

今の自分の立ち位置を知ること。

そうしなければ、人はまっすぐ進むことはできない。

その意味で、アルバートは俺との明確な隔たりを意識した上で、努力に努力を重ねて、俺ともう一度戦いたいと……そう、意志を示した。

その姿を見て、俺は過去の自分を思い出す。

ずっと俺は師匠のようになりたかった。あの背中を見て、ずっと育ってきたから。

しかし、気がつけばもう……俺は師匠の背中を追いかけてはいない。

師匠を追い越した、という意味ではない。

その背中を追いかける以外の意味を、俺は人生に見出しているからだ。

そしてきっと、アルバートとエヴィはそんな俺に感化されて成長し続けている。

それも、【絶刀の魔術師】とチームを組むというではないか。

そんな状況に俺は心が踊っていた。

魔術剣士競技大会では、ただ見ていることしかできなかった。
マギクス・シュバリエ

だが今こうして、俺がマギクス・ウォー大規模魔術戦で戦いたいと思っているのはみんながいたからこそだ。

みんながいたから、俺もまた切磋琢磨したいと……そう思うようになった。

「レイ。次こそは、負けない」

「こちらにも、負けるわけにはいかないな」

スツとアルバートが手を伸ばしてくる。

そして俺たちは、がっしりと握手を交わす。

厚い。分厚い手だ。

彼の努力の足跡が容易に見て取れるほどだ。

「レイ」

「……エヴィ」

巨体が迫る。

文化祭では、部長に惜敗してしまったエヴィ。だが彼は、トレー

ニングを今でも続けている。入学時よりも、少しだけ大きくなっている。

すでに完成に近い肉体だというのに、研鑽を怠ることはない。

純粹にその姿勢は、尊敬に値するものだ。

「俺はレイと出会っていなかったら、こんな風に努力はしていなかったと思うぜ」

「そんなことは、ないだろう」

「いやきつとそうだ。同室になったあの日、お前は真っ先に筋トレを始めたよな？」

「そうだな」

懐かしい記憶だ。

あの時は確か、いつものようにルーティーンをこなそうとしていたはずだ。

「そのとき思ってたんだ。こいつは、すげえ奴だつて。まあその鍛え抜かれた体を見ればわかるが、その行動に俺は感動してな。今までそんな奴は、見たことがなかった。そしてレイと筋トレして、学生生活を過ごしてきて、俺も思うのさ」

じつと視線を交差させ、彼の声には確かな熱が宿っていた。

「俺もレイと、戦ってみてえと。レイはいろんな意味で、俺の目標だからな」

「そうか……ならば、真正面から受けてたとう」

「おう！」

エヴィとも、握手を交わす。

その圧倒的な手の大きさ。それをがっしりと握る。少し痛いぐらいに握手を交わすと、二人は颯爽とこの場から去っていく。

「レイ。俺たちと当たるまで、負けるなよ？」

「そうだぜ！ その時は、笑ってやるからな！」

「ふ。それはこちらのセリフだ」

ああ。

俺は本当に、恵まれている。

この学院でかけがえのない友人と出会うことができた。

だが、友人だからといって手加減はしない。

俺たちは友人であり、強敵ライバルでもあるのだから。

「 ということがあったな」

放課後。

訓練を開始する前に、入念に柔軟体操をしながら俺は昼の出来事を話した。

すると、アリアー又はその目を爛々と輝かせる。

「……熱い」

「少し肌寒いくらいだが？」

「そうではありませんの！ そのやりとりが、熱いと言っているんですの！ まさに男同士の戦い！ 滾る、滾り^{たぎ}ますわ！ そして、そこに颯爽と介入する乙女のわたくし！ これは燃えてきましたわね！」

いつものように大きな声で、高らかに宣言するアリアーヌ。一方でアメリアは、死にそうな顔をしていた。

まずは改めて体力づくりということで、二人には過酷なハードワークを課している。もちろん、二人の限界ギリギリを見極めてそうしている。

アメリアはいつも訓練の前と、終わった後は死にそうな顔をしているが……アリアーヌがいい感じに支えてくれている。

「アメリア！ あなたもそう思いますわよねっ！」

「……まあ思うけど。でも、また走り込みとなると……ちょっと憂鬱で」

「何を言いますの！ 二人で乗り越えていきますわよ！」

「そ、そうね……」

そして俺は首から下げているホイッスルを、ピーツ！ と鳴らしてから点呼に入る。

「点呼 ツ！」

「い　　ちッ！」
「に　　ッ！　　ですわッ！」
「よし全員揃ったな」

俺の前で待機している二人に向けて、今日の訓練の内容を説明する。

「今日はいつもと同じように、身体強化なしでカフカの森を走る。もちろん魔物と接敵した際は、戦う。いいな？」

「レンジャーッ！！」

「うむ。二人ともいい返事だ。ではいくぞッ！」

「レンジャ　　ッ！！」

そうして俺たちは、いつものように訓練に励むのだった。

数時間後。

「はあ　　はあ　　はあ　　おえっ　　死ぬ　　マジで、ヤバイ……」

「う　　ぐ　　はあ　　はあ　　これは、本当にとてつもないですわね　　はあ　　はあ　　……」

「ふう　　よし。二人ともよくついてきたな」

目の前には、大の字に転がっているアメリアと膝に手を当てて震えているアリアーヌがいた。

「いかに自分が魔術に頼り切りになっているか、わかるだろう？」
「そう、ですわね　　はあ　　はあ　　はあ　　わたくしも、ここまで追い

込むとは……はあ……はあ……予想もしていなかったですわ……これが、エインズワース式ブートキャンプ……はあ……はあ……」

「しかし、アリアーヌは流石だな。これについてこれるとは」

「もちろんですわ！ 乙女たるもの、これくらいは当然ですわっ！」

と、アリアーヌが声にすると寝転がっているアメリアは小さな声で「そんなわけ……ないでしょ……」と突っ込んでいた。

訓練後は、流石のアメリアも元気がないようだった。

と言っても、逃亡しただけで彼女は本当に成長しているとは思っている。おそらくは、アリアーヌに負けたくない……という気持ちがあるのだろう。同じチームとは言え、二人は強敵ライバルでもあるのだから。

「よし。では、次のメニューに移行するぞ！」

「レンジャー！ ですわっ！」

「れ、れんじゃ〜」

「アメリア訓練兵！ 声が小さいぞ！」

「うわああああああん！ やっぱりつらいよおおおおおおお
！！」

いつものように駄々をこねるアメリアを叱りながら、俺たちはさらなるトレーニングを重ねていく。

マギクス・ウォー
全ては、大規模魔術戦で優勝するために。

第166話 アリアーヌの軌跡

アリアーヌ「オルグレン。」

三大貴族、オルグレン家の長女。上には歳の離れた兄がいるが、家を出ているため滅多に会うことはない。そのため、彼女は一番上の姉として振る舞う必要があった。

アリアーヌは幼い頃から活発な人間であった。

「アメリア！ 行きますわよ！」

「ま、待ってよぉ」

アメリアと幼馴染みである彼女は、二人でよく遊んだ。それこそ、日が暮れるまで外を駆け回っていた。時折、あまりにも帰ってくるのが遅く、叱られることもあった。

もちろんその後は、アリアーヌは門限をしっかりと守るようになった。

三大貴族。オルグレン家の長女として、振る舞う必要がある。

そんなことは、当時のアリアーヌは考えていなかった。

アメリア。そして、レベッカが同じような悩みにぶつかった時、彼女だけは特に大きな変化はなかった。

貴族社会はこのようなものと割り切ることが、幼いながらにできていたからだ。

だが、人は変わらずにはいられない。

まず変わったのはアメリカだった。

「アメリカ！一緒に遊びましょう！」

学校から帰ってくると、すぐにアメリカをいつものように遊びに誘う。ボールを持って、ニコニコと笑いながらアリアーヌは彼女を待つ。

しかし、返ってきた言葉はおおよそ、信じられるものではなかった。

「私は、もう遊ばない……」

それを聞いて、その場にボールを落としてしまう。

「ど、どうしてですか？」

「私は、アリアーヌとは違うから……」

踵を返す。

その背中を追いかけようとするが、アメリカはすぐに扉の向こうに行ってしまう。そして扉が完全に閉まったと同時に、アリアーヌは放心してしまう。

アメリカが悩んでいるのは知っている。

パーティーで時折、深刻そうな表情を見せていたからだ。

アリアー又はそれでも、アメリカなら大丈夫だと思っていた。自分と同じように、割り切ることができるのだと。そう考えていたからだ。

しかし、この件を機に彼女は理解した。

この世界の全ての人が、自分と同じような考えを持っているわけではないのだと。

瞬間。突風が吹く。

長い白金の髪が、乱雑に靡く。

ふと空を見上げると、雨が零れ落ちてきた。

どうすればいいのかわからないアリアー又は、この日を機に……アメリカと大きな溝ができてしまうのだった。

「わたくしは、どうすればいいのでしょうか？」

ボソリと呟きながら、彼女は雨に濡れながら帰路へと着く。

数年後。

「ふん……ふん……ふん！」

ディオム魔術学院の入試に合格したアリアーヌは、トレーニングに励んでいた。ついに父であるフォルクから許可が降りて、筋力トレーニングが解禁された。

そこから彼女は、毎日トレーニングを重ね続けていた。

それは、父でさえも感嘆を覚えるほどに。

「アリアーヌ」

「お父様」

「よく頑張っているようだが……何か、目標でもあるのか？」

フォルクは尋ねる。

上の兄も、一番下の子であるティアナもフォルクには似ていない。だが、アリアーヌは違う。彼女はフォルクに似ていた。トレーニングに勤しむこともそうだが、何か目的を持って進んでいる。

父として、何かできることはないだろうか。

そう思って、娘に話しかけたのだ。

「……そう、ですね」

トレーニングを中断して、父と向き合う。

「わたくしは見せたいのです」

「何をだ？」

「わたくしのこの姿を。そうすればきっと、いつかアメリカも……」
「そうか……得心した」

その後、フォルクは何かを悟ったようで特に何もいうことはなく部屋を出て行った。

アメリアと交友がほとんどなくなった日から、自分にできることは何か……それを考え続けていた。

そこで得た答えは、アメリアの先に進み続けるということだった。

彼女ならきつと、追いかけてくれる。自分の背中を見て、何かを感じ取ってくれる。

そうアリアー又は信じていた。ずっと、ずっと信じていた。

そしてそれは、思いがけない形で実現することになる。

「それで、どこの学院の人ですか？ 最近はこの手の輩が多いですが……わたくしは逃げも隠れもしません。だからあなたも、正直になるべきだと思いますわよ」

「ああ。そうさせてもらおう。申し訳なかった、騙すような真似をして。アリアーヌ^{マギクス・シュバリエ}オルグレン。あなたは本当に気高い人だ。素直に尊敬する」

初めての出会いは女装姿だった。

見たことのない生徒。魔術剣士競技大会に際して調査にきた学生ということを見抜いた。しかし、流石にそれが女装とまでは見抜くことはできなかった。

彼は、女性よりも女性らしい容姿をしていたからだ。

その出会いはアリアーヌにとって、大きな変化をもたらすことになる。

レイ＝ホワイト。

調べれば調べるほど、その存在が只者ではないと考えてしまう。

出身は魔術師の家系ではない。魔術学院始まって以来の一般^{オーディナリー}人出身の魔術師。

しかし、実戦ではかなりの強さを誇り、さらにはあのアメリカを指導したという話も噂には聞いている。

アメリカに惜敗したアリアーヌは、少しずつレイに興味を持つようになった。

アメリカは変わりました。でもそれは、きっとレイがいたから。彼は一体、何者ですの？

それから魔術協会のパーティーで出会ったり、文化祭で再び女装を目撃したりなど、レイに対する興味は尽きなかった。

そして、やって来た^{マギクス・ウォー}大規模魔術戦。

その話を聞いた瞬間に思いついたのは、レイとアメリカと組むこ

とだった。

知りたいと。アメリカの変化もそうだが、何よりも彼のことをもっと知りたい。そして、アリアーヌは知る。

レイ＝ホワイトこそが、当代の【氷剣の魔術師】であることを。

「まさか……レイが……」

寮のベッドで寝ようとするが、なかなか寝付くことができない。

「お父様が言っていたのは、こういうことだったのですね」

フォルクがレイを連れてきて欲しいと言ったのは、彼が【氷剣の魔術師】だったからだ。

それにレイの過去を聞いて、その壮絶な戦いの片鱗を知っただけでもやはり……彼は普通ではなかったのだと納得する。

「はあ……」

天井を見上げる。

アメリカに敗北して、今度は自分が追いかける番になったと。そう思っているが、最近はどうにも焦燥感が募る。

それは、自分の限界がついに見えてきた……ということが起因している。

アリアーヌは努力に関しては、魔術師の中では随一と言っている

だろう。筋トレもちろんだが、魔術の訓練も欠かすことはない。

だが、あっさりとアメリカにひっくり返されてしまった。

発現した固有魔術^{オリジン}は、因果に干渉するもの。

おそらくきつと、アメリカは七大魔術師になるかもしれない。

「ですが、わたくしは」

自分がそこにたどり着くイメージが湧かない。

別に七大魔術師に固執しているわけでもない。しかし、停滞だけはしたくはなかった。

ふと考える。

どうしてわたくしは、進み続けているのでしょうか。

今まではアメリカのためだった。彼女のために、戦い続けてきた。

でも今は？

今は何のために、進んでいるのだろう。

それが分からない。分からないからこそ、アリアー又は求めた。

レイ＝ホワイトという存在に自分も触れてみたいと思った。

アメリカを変えた彼ならば、きっと何か知っているに違いない。

【氷剣の魔術師】ならば、きっと……。

「アリアーヌ。早いな」

「もちろんですわ!」

朝練もついに開始となった。アーノルド魔術学院への移動は、走つての移動だ。もちろんそれは、トレーニングも兼ねている。と言っても全力で走ればそれほど時間は掛からないので、アリアーヌとしては一石二鳥だと思っている。

「アメリアはどうしたんですの?」

「……逃亡か? いや、まだ集合時間の三十分前だからな。気長に待とう」

「分かりましたわ」

二人で並んで、柔軟を始める。

その際にチラリとレイの横顔を見る。

精悍な顔つきで、いつも冷静沈着。一方でユーモアを兼ね備えている魅力的な人間である。魔術師としての力量は言うまでもないだろう。

アメリアが惹かれるのも、分かりますわ。

「って、わたくしは何を考えていますのっ!」

思わず動転してしまい、声に出してしまう。

「どうかしたのか？」

レイが顔を覗き込んでくる。その瞬間、アリアー又は自分の考えていたことが恥ずかしくなり顔を真っ赤に染めてしまう。

「……な、何でもないですわっ！」

「そうか。では続けよう」

「ええ！」

逸る心臓の高鳴りを何とか抑えながら、彼女は自分を落ち着かせる。

きつとレイについていけば何か掴めると信じて、アリアー又は今日も訓練に励むのだった。

第167話 にゃんにゃんにゃん

日曜日の早朝。

俺はいつも通りに目を覚ます。

「……」

エヴィはまだ寝ているようで、大きな寝息を立てている。彼を起こさないように、そっとベッドから降りるといつもと同じように、朝のルーティーンを行う。

そうして時刻が七時になった頃。

今日は一人で街に出かける予定だ。というのも、これからの訓練に際して必要なものを揃えておこうと思っているからだ。

そして、俺は颯爽と寮を後にするのだった。

「もう、冬も近いな……」

周囲を見て、そう呟く。

アーノルド魔術学院から中央区へと通じる坂を下っている際に、両側に植えられている木々が視界に入る。

葉はかなり散ってきており、木々は完全に痩せ細って見える。

それに地面に落ちている落ち葉の数を見れば、それは明白。

いよいよ本格的に、冬が近づいてくる。

それと同時に、マギクス・ウォー大規模魔術戦も迫っている。

現在は身体強化週間ということで、アメリカとアリアーヌを徹底的に鍛え抜いている。

マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会とは異なり、ルールは拠点占有と攻城戦。それに連戦することもあるだろう。

そのことを踏まえれば、必要以上に体力をつけておくのは悪くないと考えている。

これは極東戦役での経験なのだが、どれだけ卓越した魔術の技量があつたとしても、身体が付いてこなければ話にならない。

師匠にも始めは徹底して、基本的な身体能力をあげてことを命じられた。

そうしてそれを、今はあの二人に教えているということだ。アメリカは相変わらず、逃亡を謀ろうとするがアリアーヌの説得もあり、二人で頑張っている。

そんな様子を微笑ましく思いながらも、俺は教官として厳しく接し続けている。

「……？ あれは？」

純白の髪色した人が、前を歩いている。

間違いなくアルビノだろう。魔術師の世界でも珍しいその存在は、特にこの街中では目立つ。

一瞬、マリアだろうかと思ったが……マリアにしては髪が長い。それに身長も彼女よりも高い。

きっと別人だろう。そう思って歩みを進めると、その女性がかかるりと振り返る。

「ああ。やっぱり、その足音は君だよ。おはよう。レイ＝ホワイ
ト」

「えっと……その、もしかして？」
「そっか……そういえば、この姿を見せるのは初めてだったね」

淡々と無表情で彼女は話を続ける。

そう。目の前にいたのは、リーゼロッテ＝エーデン。【虚構の魔術師】である。

だが以前は、腰まであるロングストレートの髪に、黒いコートとロングブーツを履いていた。

しかし、今はどうだ。

薄いピンクのブラウスに、真っ青なフレアスカート。靴は茶色いローファーで、手首にはブレスレットをつけている。

間違いなく、流行りに合わせているおしゃれな女性にしか見えな
い。

髪型も肩先まである、少し長めの内巻きのボブスタイル。

「えっと……エーデンさん」

「リーゼで構わないよ。君と私の仲じゃないか」

「では、リーゼさん」

「なんだい？」

「……その。とてもよくお似合いです」

「ふふつ。ありがとう」

その笑みは、あの時……病院で見たときと同じものだった。

無表情で、無感情。

まるで精巧な人形のような存在。それが魔術師の間で評されてい
る、【虚構の魔術師】だ。

だが今のリーゼさんは、完全に街娘のようにしか見えない。

そして俺たちは、並んで歩みを進める。

「実はキャロル先輩に切ってもらったんだ」

「……なるほど。キャロルは上手いですからね。俺も軍人の時はお
世話になっていました」

「それにこの服は、リディア先輩にもらったものでね」

「え……師匠がものをくれたのですか？」

「そうだね」

「珍しいですね……」

基本的に師匠は、人にものを与えない。

他人に厳しい上に、自分にも厳しい。極東戦役で見てきた師匠は、苛烈という言葉を具現化したような人だった。

それが、こうも変わるのか……と驚嘆を覚えずにはいられない。

「私もそうだし、リディア先輩も、そして君もそうだろう?」
「何の話ですか?」

少しだけ感情のこもった声で、リーゼさんは言葉を紡ぐ。

「人は、変わらずにはいられないものだよ」

それを聞いて、やはり彼女には敵わないな……と思った。師匠や他の大人たちは、俺に色々と教えてくれた。そして、リーゼさんにも学ぶものがとても多い。

「そう、ですね。人は良くも悪くも、変化していくものですね」

「ああ。私の変化も、きっと必然だったのさ。停滞している時間は長かったけどね」

「なるほど」

「それで、これはどうだい?」

「え……っと」

話をしている途中、急に立ち止まると……どこからともなく取り出した、ネコミミを頭に装着する。

確かあれは……以前に、キャロルが街で流行っているからといっ

て俺に無理やりつけようとしてきたもので もちろん、返り討ちにしたが 記憶にしっかりと残っている。

それを今どうして、このタイミングでつけるのか俺には全く理解できなかった。

「にゃんにゃんにゃん」

瞬間。衝撃が走る。

手を丸めて、猫の手のようにしてポーズを決める姿を見て……俺は思った。

これは、メイド喫茶でのあの伝家の宝刀に通ずるものがあると。

「どうだい？」

「リーゼさん」

「……可愛かった、かな？」

「もう少し、手の角度を変えましょう」

アドバイスをする。俺の中にある、プロであり、スペシャリストである血が騒ぎ始めてしまった。

「まずは、右手の位置はもう少し高く……」

「こう？」

「グッド。そして、左手の位置は対角線上に……そう、そこです」

「おお！」

「そして、右足を軽くあげてください」

「こうかな？」

「エクセレント。その形を忘れないでください」

その場でパチパチと拍手を送る。

今のリーゼさんは間違いなく、魅力的な猫そのものだっただ。

街ゆく人たちも、そんな彼女の姿に見惚れているようだ。

「レイ＝ホワイト。君はどうやら、そっちの才能があるようだね。勉強になったよ」

スツと猫耳を外すと、彼女は軽く頭を下げる。

「いえ。自分は当然のことをしたまです」

「リディア先輩に見せた時は、まだ早いと言われたけど……これなら、しっかりと披露できそうだね」

「間違いありません。今度一緒に、師匠の元に行きましょう」
「ふふつ。それもそうだね」

口元に手を持っていき、微笑を浮かべる。

何だかリーゼさんとはとても話が合う気がした。あの病院で出会った時よりも、親しみやすいというべきか。

そして俺は、元々彼女にはあるお願いがあった。

今日、出会うことができたのは偶然だが、ここはそれに感謝して頼み事をしたいと思っている。

「リーゼさん。お時間あるのであれば、少しいいですか？」
「構わないよ」
「では、あちらの店に」

二人で入るのは、早朝から開店しているカフェだった。

モーニングセットを注文すると早速、話題を切り出す。

「単刀直入にいいいます。アメリカのことを、指導してはもらえないでしょうか」

「アメリカ＝ローズか。なるほど。因果律蝶々バタフライエフェクトだね」
「はい」

今までは俺が適宜指導はしていたが、やはり限界がある。俺は因果に干渉することのできる固有魔術オリジンは有していない。

そのため、指導になると基本的な魔術の話をするしかできない。

身体強化週間が終了すれば、本格的な魔術の訓練に入る。そこで、少しでもリーゼさんに頼めないかと思っている。

「……確かに、因果に干渉する固有魔術オリジンは強力過ぎる。実は、会長にも一度見てやってほしいと頼まれているんだ」

「でしたら？」
「引き受けてもいい。けど、一つ条件がある」
「何でしょうか？」

人差し指をピツと立てると、このように条件を提示してきた。

「また私と一緒に、こうして同じ時間を過ごしてほしい。君といると、何か掴めそうな気がするんだ」

「そんなことでしたら、お安い御用です」

「ふふつ。君の周りは、本当に面白いからね」

「気がついていたんですか？」

「当たり前だろう。伊達に、七大魔術師じゃないさ」

と、その場から立ち上げるとカフェの一角に歩みを進める。

「やあ。少女たち。大人の密会を覗くなんて、いい趣味をしているね」

話しかけるのは、三人の人間。

アメリカ、アリアーヌ、レベツカ先輩。

その三人が俺たちをつけているのは、初めからわかっていたのだ。

あの人もそこでそれを追求するとは、人が悪い。

そんなことを思いながら、その三人とも合流するのだった。

第168話 乙女たちの集い

「う……ん、苦しい……ですわ……」

早朝。

アリアーヌはいつものように目を覚まそうとした。いや、意識自体は覚醒している。では何が問題なのか。

「う……ん。えへへ……」

それは隣で寝ているアメリカが、ギュッと思い切りアリアーヌを抱きしめているからだ。

今日は休日。

折角の機会ということで、アリアーヌはアメリカの部屋に泊まることにした。幼い頃はよく一緒に寝たものだったが、成長してから一緒にこうして寝床を共にするというのは初めてだった。

もちろん、互いに積もる話があり夜通しとまではいかないが、かなりの時間まで話をしていた。

アリアーヌはそのような場合であっても、いつものように早朝に目が覚める。

ここからすぐにトレーニングをしたいと思うが、流石に連日の訓

練により、体は悲鳴をあげている。

エインズワース式ブーツキャンプ。

決して軽んじていたわけではないが、かなり過酷なものだとアリ
ー又は知った。アメリカが逃げ出すのも、理解できるほどには彼
女もまたその厳しさを痛感していたのだ。

「アメリカ。離してくださいまし」

揺する。

その体を何度も揺すったり、叩いたりしてアメリカの拘束を解こ
うとするが……一向に起きる気配はない。

「あつ……レイってば、そんなところ……あつ……だ、ダメだつて
ば……えへへ……」

「……」

アメリカが性に対して興味津々なのは知っている。

三大貴族は抑圧された環境で育つため、アリアーヌも別にそのこ
とに対して何か言いたいわけではない。

だがこうも間拔けな顔で、ちょっとはしたないであろう夢を見て
いるというのは……少しだけ、引いてしまう。

「アメリカっ！ 起きなさいっ！」

「……ふぎゃっ！」

おおよそ、貴族の令嬢とは思えない声を上げる。

鼻を思い切りたたかれることで、アメリアは否応なく起床することになった。

「い、いてて……ちょっと、何するのっ！」

「今の状況。ご自分で確認してみては？」

「……はっ！」

気がつく。自分が思い切りアリアーヌに抱きついているということに。

そして、今までみていた夢を照らし合わせることで……アメリアは顔を朱色に染める。

「あ、えっと……その、ごめんね？」

「別に構いませんけど」

ベッドから出ていくと、ストレッチを始めるアリアーヌ。

別に気にはしていないが、ここ最近のアメリアはどうにも浮かれているというか……何というか。

その件に関しては、昨晚語り尽くしている。

それを踏まえて改めて思う。

恋は盲目。よく言ったものですわ。

あのアメリアがここまで変わるとは、と思わざるを得ない。

「さて、と。今日はどうしましょうか」

「あ。久しぶりに一緒に街にでもいかない？」

「いいですわね」

お互いにパジャマから普段着へと着替える。アリアーヌは今回の泊まりに際して、着替えなどの衣服はしっかりと持ってきていた。

「よし、じゃあ行こうか」

「そうですわね」

まだ筋肉痛で体は思うように動かない。しかし、久しぶりに二人で出かけることができるのだ。

二人ともに、それに異論などあるはずがなかった。

そうして外に出て行き、目指す場所は中央区。そこでショッピングでも楽しもうと考えていた矢先、アリアーヌは彼を見つける。

「あら？ あれはレイではありませんの？」

「本当だ。レイも街に出てきてたんだ」

「合流しますの？」

「まあ……アリアーヌがどうしても、っていうならいいけど？」

紅蓮の髪を指先に巻き付けながら、チラッと見つめる。

素直じゃない、というか昨日の晩に散々その気持ちについて語り合ったのに……恋する乙女とは本当に面倒なものである。

そんなことを考えながら、口を開こうとするアリアーヌだったが

……。

「あら？ レイはもしかして、待ち合わせしていたのかもしれないわね」

「え……あれって……？」

そう。

二人が目撃したのは、レイとリーゼロッテが出会った瞬間だった。

レイにとっては偶然の出会いであるし、リーゼロッテとはまだ付き合いは短い。

だが、第三者が見れば話は違う。

仲睦まじく話しているように見える二人は、まるで長年の付き合いに思える。

さらに特筆すべきは、リーゼロッテのその美しさだ。

レイも決して悪くはないが美という観点に焦点を当てれば、リーゼロッテに軍配が上がるのは自明。

というよりも、あんな美人の知り合いがいることにアメリカは慄いていた。

「あ……あれは、えっと」

「恋人とかではないと思いますが……」

「よし。調査しよう」

二人で路地裏に隠れると、そつと顔だけを覗かせてレイたちの様子を伺う。

すると後ろからどこからともなく、別の人間の声が聞こえてきた。

「そうですね。それがいいと思います」

黒い髪を靡かせ、ニコリと微笑む麗しき人。

「れ、レベツカ先輩？ どうしてここに……？」

アメリカが何とか声を絞り出す。一方のアリアーヌは驚きすぎて、放心状態になっている。

「レイさんと一緒にお出かけしようと思っていたのですが、思わぬ伏兵と出会ったので。ここで待機しました」

「えつと……知っているんですか？ あの人のこと」

「ふふ。知りたいですか？」

勿体ぶる。

そして、人の悪い妖艶な笑みを浮かべるレベツカを見て、アメリカは「ぐぬぬ」と内心で唸る。

「し、知りたいです……」

自分よりもレイのことを知っている、と暗に言っているようなものでアメリカは今回は大人しく敗北を認める。

「リーゼロッテ＝エーデン。虚構の魔術師ですよ」

「「きよ、虚構の魔術師！！？」」

アメリカとアリアーヌの声が重なる。

【虚構の魔術師】は、七大魔術師の中でもほとんどの者が存在を知らない魔術師だ。噂では、本当に実在しているのかも怪しい……というものもある。

そんな人物が、まさかレイとあんな風に仲睦まじく話しているなど、予想できるはずもなかった。

「しかし、彼女はレイさんには興味がなさそうな感じでしたが……むむむ。これは分かりませんね」

口元に手を当て、真剣な目つきで話をしている二人を見つめる。

この中で、アリアーヌだけが浮いているというか……置いてけぼりだった。

彼女はすでに、アメリカとレベツカの気持ちを知っている。

アメリカの気持ちは本人から、レベツカの気持ちは昨晚、アメリカに聞いている。大部分は、愚痴というか……レベツカが相手ということと萎縮していたのだが、そのことを踏まえて、この場で冷静なのはアリアーヌただ一人だった。

それにしても、二人とも熱心ですわね。

確かにレイはいい男性だと思う。

だが、アメリカとレベッカがここまで熱中する理由は分らない。

彼女は学院が違うということもあり、まだレイとの交流が浅い。彼の人間性がある程度は把握しているが、それはあくまで表面的なものに過ぎない。

そして、アリアーヌは知りたくなった。

この二人をここまで変えた、レイ＝ホワイトという存在に少しずつ興味が出てきたのだ。

「よし！ では、三人でつけますわよ！」

高らかに宣言。すると、アメリカとレベッカはすぐに頷いてくれた。

思えば、こうして三大貴族の長女で揃うのは幼少期以来。

それが、レイを中心としてまた集まっているのだから、きっと彼には何かあるに違いない。

【氷剣の魔術師】であること以上に、人間としての何かが。

アリアーヌはそうに分析をしていた。彼女としても、ここまで一人の人間に興味を持つのは初めてのことだった。

そうして三人は、レイとリーゼロッテに気がつかれないように細心の注意を払いながら、こっそりとストーキングを開始する。

と言っても、伊達に七大魔術師ではない二人。

自分たちに並々ならぬ視線が注がれていることは、すでに気がついているのだった。

第169話 合流

「あはは」

「失礼しますね」

「お邪魔しますわ」

アメリカ、レベツカ先輩、アリアーヌの三人と席を共にする。

配置としては、俺の隣にリーゼさん。

対面には三人が座っているものとなっている。

だが何というべきだろうか。妙に空気が重いというか……大きな
プレッシャー
圧力を感じるのは俺の気のせいなのか？

そして、全員がそれから注文した品が揃う。

「さて、と。いやはや、美しい友情だね」

依然として無感情な声色だ。しかし、顔はわずかに緩んでいるよ
うな……そんな気がした。

「自己紹介でもしようか。そちらの二人は初めて出会っからね」

すると、リーゼさんは周囲に音が漏れないように結界を展開する。
街中での魔術の使用は原則禁止だ。しかしそれはあくまで、気がつ
かれてしまうのがよくない……ということである。

今回の使用は、暗黙の了解だろう。

「七大魔術師が一人。【虚構の魔術師】である、リーゼロッテ＝エーデンだ。気安くリーゼで構わないよ」

続いて、アメリアから順に自己紹介を続ける。

「アメリア＝ローズです。よろしくお願いします」
「アリアーヌ＝オルグレンですわ」

そして、最後にレベッカ先輩の番がやってくる。

「以前お会いしましたが、レベッカ＝ブラッドリイです」
「レベッカはそうだね。この前、少しだけ話をしたね。あとは、アメリアにアリアーヌ。うん。しっかりと覚えたよ」

一人一人を指差して、名前を確認する。

これは以前聞いた話なのだが、リーゼさんは人の名前を覚えるのがとても苦手とのことだった。

複雑な魔術におけるコードの構成などは一瞬で覚えるし、学術系のことに関しては瞬間記憶に近いらしい。

だが、名前はこうしてしっかりと確認しないといけないというのは……なかなか大変だろう。

それでもしっかりと向き合っているのは、彼女なりの成長なのだろうか。

互いに人生を彷徨っている身の上だ。

その中で、彼女はまずは見た目を変えることで前に進もうとしている。俺はそんな変化が、まるで自分のことのように嬉しかった。

「それでなのですけど」

レベツカ先輩は半眼で、じっとリーゼさんのことを見つめる。

「この前とはとても装いが違いますね。何か心境の変化があったのでしょうか？」

すると、紅茶を飲む手をいったん下ろしてから……彼女はとんでもないことを口にした。

「女が変わる理由なんて、一つしかないだろう？」

「……？ それは？」

ポカンとするレベツカ先輩だが、次の瞬間。

この場の空気が完全に凍りつく。

「彼に出会ったからさ。レイ＝ホワイトにね」

と、俺の腕に絡みついてきて頭を右肩に乗せてくるのだった。

流石にこの動作は予想していなかったので、俺も驚いてしまう。

「ちょ……！？」

「ふふ。ごめんね。でも、なるほど……ね。おおその関係性は理解できたよ。やはり人の感情とは面白いものだね」

ふと正面を見つめると、アメリアは厳しい顔つきになっており、レベッカ先輩はなぜかニコニコと笑っていた。

その笑顔はいつもの二割増しに輝いて見えるが、やはり……あのときのような圧倒的な圧力プレッシャーがあるのは間違いなかった。

一方でアリアー又は、額に手を当てて「なるほど。そういうことですのね……」と呟いていた。

一瞬の攻防。否、この錯綜を俺は理解できていなかった。

やはり女性の人間関係とは完全なる理解は不可能。後日、改めて師匠に相談しに行くとしよう。

「さて。あまり年寄りがこの場に長居するのは、よくないね。今日はアメリア＝ローズを借りて、失礼しようかな」

「え！？ わ、私ですか？」

アメリアは驚きの声を上げる。

おそらく、俺が先ほどお願いしたことをすぐに実行してくれるのだろう。

「バタフライエフェクト因果律蝶々。まだ完全に制御下に置いていないだろう？」

「そ、それは……」

「特別に私が見てあげよう。同じ因果に干渉する魔術師としてね」
「えっと……いいのですか？」

「ああ。レイと特別な約束をしたからね。支払いは彼がしてくれる
ようだ」

「「へえ……」」

と、アメリカだけでなくレベル力先輩も俺のことをジッと睨みつけてくる。

う……流石に二人分だと、なかなか堪える。

「では行こうか」

「え？ 今からですか？」

啞然とした表情を浮かべる。

「もちろん。訓練はすぐにすべきだろう」

「えっとその……今日は疲れているかな？なんて」

「ははは。そんな道理は私には通用しないよ。それに知っているよ。
今までは身体強化に重点を置いていたんだろう？ 今日は魔術に集中するからね。大丈夫さ」

「だ、大丈夫ではないと思いますけど」

「……ごちゃごちゃとうるさいから、さっさと行こうか」

「わ……ちょー！？」

リーゼさんは財布を取り出すと、その場に多めのお金を置いていくしてくれる。

そしてそれと同時に、アメリカをスツと肩に担ぎ上げるのだった。
見た目とは裏腹に、力はかなりあるようだった。

「支払いは任せたよ」

「う、うわああああああん！ どうしていつも、私はこんなのおおおおおおおお！！」

すっかり聞き慣れてしまったアメリカの悲鳴だが、それはどこか安心感というか、妙な感覚を覚えてしまう。

そして、残った俺たちも食事を終わると外に出て解散するのだった。

「では、私はこれで失礼しますね」

丁寧にその場で一礼をするレベッカ先輩。すると、アリアーヌの耳元で何かを囁いた。

「それではまた学院で」

踵を返して、颯爽と去っていく彼女を俺たちは見送る。

「アリアーヌ。何を言われたんだ？」

「い、いえ……レイは知らない方がいいですわ……」
「そうか？」

少しだけ顔が青ざめているのは気のせいではないだろう。

「よし！」

パンパンと自分の頬を叩くと、彼女はいつものように大きな声をあげる。

「レイ！ わたくしの家に向かいましょう！」

「オルグレン家の本家か？」

「はいっ！ 文化祭前に約束しましたわよね？」

「ああ。今日は時間もあるしな。伺わせてもらおうか」

「もちろんですわっ！」

そして俺たちは中央区から、南区にある貴族街へと歩みを進めていく。

思えば、アリアーヌとは学院が違うので会うことは少ない。初めて会ったときは、俺が女装していた時だがそれもはや、懐かしいと思ってしまう。

「レイは、あれですわね」

「あれ、とは？」

「周囲に面白い人たちがいるんですのね」

「……そうだろうか？」

「ええ。とっても魅力的な人が集まっていますわ」

「そうか。でもそれは、アリアーヌも同じだろう。君もまた、十分に魅力的だ」

そう褒め返すと、アリアーヌは珍しくその頬を朱色に染める。

「な、なるほど……こういうことですね……」

「どうした？ 体調でも優れないのか？」

「いえ！ 乙女たるもの、体調管理は万全ですわ！」

その豊かな胸を張ると、ニカッと歯を見せて笑うアリアーヌはやはりとても魅力に溢れている。

その性格から、彼女もまた周囲に人を集めるような人間だと俺も思っている。

「それにしても、七大魔術師は変わっている人が多いみたいですね」

「……そうか？」

「まあ、当の本人が自覚がないみたいですけど」

「俺は比較的、普通だと思っているが……」

「変わっている人はみんなそう言いますの。それに、リーゼロッテさんもちよっとお茶目というか、二人をからかっているようでしたし」

「やはりそうか。そんな人ではなかったみたいだが、色々と心境の変化があつたみたいだ」

「アメリカは任せて大丈夫ですか？」

俺としてはリーゼさんとの付き合いはかなり短い。

だが、彼女は信用に足りうる人間だと……直感にはなるが、そう思っている。

「ああ。きっと、彼女ならば力になってくれる。それに、アリアー又は俺が付きつきりで指導しよう」

「本当ですよー!!?」

その声色は、急にトーンが上がる。

そんなに嬉しいものなのだろうか。

「七大魔術師でも最強の存在に指導してもらえるなんて、とっても

嬉しいですね！」

素直な気持ちをぶつけられて、俺もまた少しだけ照れてしまう。

「それは光栄だ。ビシバシ鍛えていこう」

「レンジャー！　ですわっ！」

そうして俺たちは、オルグレン家へとさらに歩みを進めるのだった。

第170話 ぶつかり合う筋肉

「それにしても、少し肌寒くなってきましたわね」
「そうだな」

秋も深まりを感じてきて、もうすぐ冬がやってくるのだろう。

今思えば、去年の今頃はこのような生活をするなどとは夢にも思っていなかった。

確か、去年の夏から春にかけてはずっと勉強漬けの毎日だった気がする。俺は軍人時代に、魔術に関する知識などは豊富になったが、一般教養などはさほど教えられてはいない。

極東戦役でそのような知識は必要なかったからだ。

それでも、師匠、アビーさん、キャロルなど周りの大人たちは色々と教えてくれたものだったが。

それから一年。

俺はかけがえのない友人たちができて、こうして毎日の生活を送っている。

本当に人生とは、分らないものだ。

「どうかしましたの？」
「いや。何でも無いさ」

その後。

アリアーヌと他愛のない話をした。アメリカの話だったり、【氷剣の魔術師】の話だったり、話題は尽きなかった。

そうして話しているうちに、南区の貴族街に入った。

思えば、三大貴族の内、すでに二つの家にはお邪魔させてもらっている。そして最後は、オルグレン家。

聞けば、当主のフォルクハルト「オルグレンは厳格な人間だと聞く。

「では、案内しますわ」

「よろしく頼む」

門を潜ると、広がるのは噴水が中央に置かれた広い庭。左右には木々や花々が植えられているが、夏のような元気さは見えない。

季節が変わっていることを、それを見て改めて認識する。

「レイ。オルグレン家へようこそ、ですわっ！」

彼女はそう言って、扉を開いた。

造りとしては他の三大貴族のものとは遜色がない。おそらく、同時代の同時期に同じ建築士が設計した家なのだろう。

室内は、古めかしさを感じつつも、どこか現代的な要素も取り入

れられている。

俺はアリアーヌの後ろへとついていく。

途中、彼女の帰宅を知ったメイドが案内を替わると言ったが、それを断ってアリアーヌに案内してもらっている。彼女らしい振る舞いである。

辿り着いたのは、おそらく書斎だろう。

コンコンコン、と三回ほどノックする。

「お父様。急な訪問になりますが、レイを連れてきましたの」

と、その言葉を聞いた瞬間……室内から「……何っ!？」と大きな声がこちらまで響いてきた。

バンつと扉が開くと、そこに現れるのは……巨躯。

白金の髪を刈り上げ、爽やかな印象ではあるが……やはり特筆すべきは、その圧倒的な筋肉量だろう。

話では、五十代に入っただばかりらしいが、それでもこの体を維持しているのは素直に感嘆すべきことだろう。

「お初にお目にかかります。レイ＝ホワイトと申します」

「おお！ 君がそうか……！ 私はフォルクハルト＝オルグレン。娘の友人なんだ、是非フォルクと親しみを込めて呼んで欲しい」
「では自分も、レイとお呼びください。フォルクさん」

スツとその分厚い手を伸ばしてくるので、俺もそれに合わせて自分の手を伸ばしてしっかりと握手をする。

「ふ……噂に聞いていた通りの、好青年だな。まあ、入ってくれたまえ」

「失礼します」

「お邪魔しますわ」

書斎……ではある。本棚が敷き詰められているここは、書斎と形容して間違いないだろう。

しかし、一点だけ他の三大貴族の家と異なる点がある。

それは綺麗に揃えられたダンベルやバーベル。それにタオルなども用意されている。

「さて、かけて欲しい」

「はい。失礼します」

机を挟んで、ソファに座る。俺の隣にはアリアヌ、正面にはフォルクさんが座る。

「ふむ……なるほど」

じろり、と見られるので俺は何か粗相でもしてしまったのかと考える。

「何か失礼なことをしてしまったでしょうか？」

「ふむ……いや、そんなことはないが……うむ。とりあえず、脱いでもらおうか」

「なるほど。得心いたしました」

これは、あの時と同じだろう。

一学期に部長が俺の体を見定めた時のように、フォルクさんも俺という人間を測りたいのだろう。

筋肉を愛するものにとって、お互いの筋肉を見ることは時に言語以上の情報を伝える。それは、熟練したトレーニーの間では有名な話だ。

筋肉でしか分からないこともあるからな。

「レイ。別に無理をしなくても、いいんですよ？」

「いや。構わないさ」

颯爽と衣服を脱ぎ去る。

流石にアリアーヌがいるので、下まで脱ぐわけにはいかないが俺は上半身裸になると、その場に立ち尽くす。

「まあ……っ！」

「なんと……ッ！」

日頃は線が細いとよく言われる。しかし、その下に眠っているのは圧倒的な筋肉量。

俺は着痩せするタイプであり、さらには^{メタモルフォーゼ}変態の使い手。

自分自身の体を意のままに操作することなど、朝飯前である。

特に、筋肉のボリュームに関してはそれなりに自信がある。

今日は特に大胸筋の調子が良く、二人とも驚いているのが良くわかる。

「あ、圧倒的なその筋肉量……ふふ……ふははは！ なんといいとだ！ アリアー又見ているか！」

「も、もちろんですわ！ これは生半可な努力では到達できない領域……！ 少し、触ってもよろしいのですの？」

「もちろんだ」

ゆっくりと近づいてくると、アリアー又はまず大胸筋に触れる。

「……ふわっ！ なんとという分厚さなんでしょう！ お次は……」

次に移るのは、腹筋だ。綺麗に六つに分かれているそれに、なぜかのようにしてその細い指が触れる。

「……ふわわっ！ この腹筋も……すさまじいですわね……ふう。堪能しましたわ」

と、アリアー又が触り終わると同時に目の前には……同じように、上半身の衣服を脱ぎ去ったフォルクさんが立っていた。

互いに見つめ合う。

もう言葉などいらなかった。

俺たちはそのまま近づいていくと、がっしりと握手を交わす。

筋肉に国境はない。互いの体を見れば、どれほどの努力をしているのか容易にわかってしまう。

俺も自分の筋肉に自信はあるが、フォルクさんのものも相当な筋肉量。

なるほど。オルグレン家は、武闘派だとは耳にしていたがそれは間違いなさそうだった。

その後、落ち着いた俺たちは衣服を着てから再び向き合う。

「ふむ。レイ」ホワイト。いや、【氷剣の魔術師】で間違いは？」
「ありません。自分が当代の【氷剣の魔術師】です」

三大貴族の当主には、すでに知られているとは思っていた。そのため、俺は特に焦ることはなかった。

「その筋肉を見れば、七大魔術師なのも納得がいくというものだ……
…保有されている、第一質料も^{プリママテリア}桁違いだ」
「分かるのですか？」

「ふ。相手の筋肉を見れば、おおよそな」

ニヤリと笑うその姿は、悪巧みをしているというよりは、悪戯をしているようなものだった。

しかし、筋肉を見ることで相手の^{プリママテリア}第一質料の保有量がわかるか。
なかなかの特殊技能ではある。

そんな人には、今まで出会ってきたことはなかったからな。

「さて。それで今回は、アリアーヌと大規模魔術戦マギクス・ウォーに出ると話は聞いている」

「はい。アメリアも同じチームです」

「アメリア嬢か。なるほど。悪くない選択だ」

腕を組んで頷く。そして彼は、思いがけないことを口にするのだ。
った。

「娘のことだが、よろしく頼む」

頭を下げる。

流石にこの行動は予想していなかったので、俺は焦るが……それよりも、アリアーヌが慌てていた。

「ちょっと！ お父様！？ それはどういう意味ですのっ!？」

「む……もちろん、大会に際して鍛えて欲しいという意味合いだが？」

「あ……そうでしたの」

赤くなっているアリアーヌだが……何かと勘違いしたのだろうか？

「もちろんです。しかし、三大貴族の当主ともあろうお方が、一般オーディ人である自分に頭を下げるなど……」

「構わぬ。そもそも、我々は血に縛られ過ぎている。凝り固まった伝統に、血統主義という悪き習慣。大規模魔術戦マギクス・ウォーも意識改革の一環。我々は、次の世代のためにやるべきことをなすだけだ」

打って変わって真剣な声色。

気さくな人だと思っていたが、そこは流石の三大貴族当主。貫禄が違ふ。

それに彼は、伝統を重んじるよりも革新的な思想を持っている人のようだ。

「……分かりました。娘さんのことは、お任せください」
「うむ。君に一任しよう」

改めて、握手をする俺たちだがアリアーヌは隣で「あわわ……これは、アメリカとレベッカ先輩には絶対に言えませんか……」とボソリと呟いていた。

こうして俺たちはその後、アリアーヌの部屋に移動するのだった。

第171話 停滞と前進

フォルクさんの書斎から、俺たちはアリアーヌの部屋へと移動した。

「そう言えば、レイはアメリカとレベッカ先輩の家にも行ったことが？」

「あるな。二人の部屋にも、お邪魔させてもらった」

「そ、そうですの……」

「どうかしたのか？」

彼女は急に顔色が悪いというか、焦っているような様子になる。

「レイ。今日うちに来た話は、特にその二人に話してはいけませんわ」

「？ 何か理由でも？」

アリアーヌの家に訪問したことを、アメリカとレベッカ先輩に言っ
てはいけない理由。

もしかすると、彼女は何か大きな秘事でもしているのだろうか。

「これは乙女からの忠告ですよっ！」

廊下にいるにもかかわらず、彼女はズイッと顔を寄せると人差し指をトントンと俺の胸に当ててくる。

その様子が本気なことから、特に理由は不明だが、了承することにした。

「忠告、感謝する。よく分からないが、二人には黙っておこう」
「ええ。それがいいですわ」

踵を返す。

その後を追いかけるようにして、辿り着いた。

「では、どうぞ」
「失礼する」

軽く一礼をして、アリアーヌの部屋に入っていく。

初めの印象としては、簡素な部屋。というものだった。

アメリカやレベツカ先輩はある程度は内装にもこだわっていた。決して派手ではないが、そこは確かに貴族の令嬢らしい部屋だった。

一方でアリアーヌの部屋は質素だった。ベッドにテーブル。それに、クローゼットがあるくらいで、特筆すべきものは何もない。

強いていうならば、部屋の隅にあるダンベルなどの筋トレ道具が目立つ。

だがそれも、この部屋を華やかにしているわけでもない。

アリアーヌはどちらかと言えば、派手な印象だがあまり内装には

こだわっていないだろうか。

「意外と質素だな……という顔をしていますわね」

「すまない。顔に出ていたか？」

「いいんですの。わたくし、自分に関してはしっかりとオシャレな
どはしますが、部屋は別に寝ることができたらいいと思っています
ので」

ニコリと優しく微笑む。

アリアーヌⅡオルグレン。

俺は彼女を知っているようで、まだよく知らないのだと改めて認識した。

「では、かけてくださいまし」

「失礼する」

テーブルを挟むようして、俺たちは向かい合う。それと同時に、
ドアが丁寧にノックされる音が響く。

「入っていいですよ」

アリアーヌがそう言うと、扉が静かに開く。

「失礼します。お嬢様方、お紅茶とお菓子を持ってきました」

その場で丁寧に一礼をするメイド。

彼女はテーブルに紅茶とアフタヌーンティースタンドを置く。そ

して、そのスタンドに綺麗にお菓子を盛り付けていく。

ケーキにクッキー。それに、俺の知らない小さなお菓子もある。

「それでは私はこれで失礼いたします」

再び一礼をして、この場から去っていく。

「では少しいただきましょうか」

「ああ。ありがたく、頂戴しよう」

アリアーヌとこうして、ゆっくりと過ごすのは初めてだった。

軽く彼女の方を見ると、とても優雅な所作で紅茶を飲み、お菓子にも手をつけている。

三大貴族の令嬢は伊達ではなく、おそらく教育がしっかりとされているのだろう。

今日のアリアーヌは、いつもよりもお淑やかでとても魅力的な女性に思えた。

「？ どうしたんですの？ わたくしのことをじっと見て」

まずい。

少し見惚れてしまっていたか。

ここは素直に謝罪をする。

「すまない。あまりにもアリアーヌの所作が優雅でな。見惚れていた」

「……なっ！」

ポロつとその場にクッキーを落としてしまう。

そんな彼女は少しだけ桜色に頬が染まっていた。

「……レイ。あなたは誰に対しても、そうなんですか？」

「もちろんだ。誰に対しても、誠実でありたいと思っている」

「はあ……あの二人が苦労するのも、分かりますわ……」

「あの二人？」

「こちらの話ですわ」

その後、ささやかなティータイムを過ごすと、アリアーヌはとある話題を切り出してきた。

「レイ。少し相談がありますの」

いつになく真剣な様子。

その双眸はジッと俺のことを射抜いてくる。

「話を聞こう」

それからしばらくの間を置いて、彼女はこのように切り出してきた。

「わたくしは……その。まだ成長の余地が、あるのでしょうか？」
「……」

潤む瞳。

それは確かに揺れていた。

アリアーヌに成長の余地があるのは、俺の目から見ても明らかだった。しかし、このような質問をしてくると言うことは……本人は成長を感じることができていない、と思っているのだろう。

「ある。アリアーヌはまだまだ途上だ。俺だってそうだ」

「……あなたが途上なのでしたら、ほぼ全ての魔術師は途上だと思いますけど」

「そうだ。完成されている魔術師などいない、と俺は思っている」

「……そうですの」

「もしかして、アメリカのこと……いや、因果律蝶々バタフライエフェクトだろうか？」

単刀直入にアリアーヌの悩みの原因を尋ねてみる。

参ったと言わんばかりに両手をあげると、自嘲気味にアリアーヌは笑う。

「ふふ。お見通しみたいですのね。少しだけ、過去のお話をしまし
ようか」

ふと、窓越しに外を見つめる。

そして、アリアーヌはその過去を語り始める。

「わたくしとアメリカは、歳が同じと言うことで昔からとても仲が良かったんですの。でもアメリカは、貴族の在り方に悩みを持って

……わたくしから離れていってしまった。どんな言葉も、届くことはなかったんですの」

「……」

俺は黙って、その話を聞く。

「それからわたくしは、アメリアのために努力するようになりました。彼女の目標であり続けることが、自分にできることだと信じて」

「……そうか」

「しかし、いざこうしてアメリアが自分の先に行ってしまうと……わたくしは、ちょっとだけ挫折そうになってしまいますの。ああ……きつと、アメリアが感じていた想いはこれだったのだと……最近になって気がつきましたの」

俯く。

その行動は、いつもの彼女らしくはなかった。

初めてみるアリアーヌの弱さ。しかし俺はそれを、決して馬鹿にしたりはしない。

人はみな、弱い生き物だ。たとえ七大魔術師であろうとも、それに変わりはない。

今まで多くの人の心に触れてきたからこそ、俺はそれが正常なことでとわかる。そして自分も、さまざまな人に助けてもらってきた。

だからきつと俺は、それに報いるためにもこれからは誰かを助けていきたいと　そう思っている。

「わたくしはただ、熱く、前に進むだけでいい。それが正しいと分かっているのに、どうしても迷ってしまう。このままでいいのか？ このままでわたくしは成長できるのか？ 早熟な魔術師の話も、耳にしました。幼い頃は天才。しかし、成長するにつれて凡庸になる。わたくしはそれがたまらなく怖いのです……」

自分の肩を抱き、わずかに震えている。

三大貴族の令嬢たちと触れ合ってきて、思うのは……彼女たちは大きな圧力プレッシャーに常に晒されていると言うことだ。

彼女たちは、三大貴族として在るべき姿というものを求められているのだろう。

それは、アメリアやレベッカ先輩を見てきて感じたことだ。

アリアーヌもまた、まだ迷っている。自分を信じて、進んでいても、いつかは立ち止まってしまう時が来る。

それは俺にだって、あったことだ。

「アリアーヌ」

立ち上がる。

そして、彼女の側に近寄ってそっとその両手を包み込む。

「誰にだって、そのような時はある。俺にだって、停滞する時はあ

ったさ」

「そう、ですか？」

「ああ。しかし、その時には周りに助けしてくれる人たちがいた。だから俺は、『氷剣の魔術師』という地位にたどり着くことができた。人は、一人では生きてはいけない。だから、俺はアリアーヌの力になろう」

「……………いいんですか？」

揺れている瞳を、見つめる。

俺は毅然とした態度でアリアーヌに応じる。

「もちろんだ。今回の大規模魔術戦で俺たちとチームを組みたいと言ったのは、そのためだろう？」

「そう……………ですわね。アメリアの秘密を知りたかったんですの。どうして、あんなにも成長できたのか。そこでたどり着いたのが、レイでした……………」

「そうか。ならば、優勝を目指そう。きっとその先に、アリアーヌの求めているものがあるはずだ」

「そう……………でしょうか？」

「ああ。間違いない。俺を信じろ」

改めてギュッとその両手を握りしめる。

するとアリアーヌは、その場に勢いよく立ち上がる。

「よしっ！」

パアンと自分の頬を思い切り叩く彼女を見て、俺は少しだけ驚いてしまう。それは間違いなく、手加減などしていなかったから。

見ると、頬は赤く腫れ上がっていた。

「もう、ウジウジするのはやめますわ。レイについていきますの。だからわたくしを導いてくださいまし。よろしく願いしますわ」

アリアーヌはそうして、深く頭を下げてきた。

もちろん俺は、それを受け入れる。

「こちらこそ、改めてよろしく頼む」
「ええ」

握手を交わす。

その目には、強い意志が宿っていた。

きっと俺という人間は、これからも多くの人の想いに触れていくのだろう。その度に、他者と心を通い合わせて、共に成長していく。

やはり思う。

人は、一人では生きていけないのだと。

第172話 因果干涉

アメリカを半ば強引な形で連行したリーゼロッテは、自宅を目指していた。今は流石に担いでいたアメリカを降ろしているが、彼女は妙にソワソワとしていた。

「あの……」

「どうかしたのかい？」

無表情かつ、無感情。

その顔の作りもまた、人形のように精巧である。

まるで本当の人間ではないかのような振る舞いに、アメリカは少しだけ戸惑いを覚えてしまう。

「その、わざわざありがとうございます」

「いや。別に構わないさ。もともと、君には会いたいと思っていたからね」

「それはどういう……？」

「ついたよ」

アメリカの質問に答えることなく、二人はたどり着いた。

中央区の西側にある建物。煉瓦造りで、モダンなテイストである。曰く、この建物全てがリーゼロッテの所有物だという。

「さ、入ってくれ」
「失礼します」

ペコリと一礼をすると、アメリカは室内へと入っていく。リーゼロッテの後をついていくと、そこに広がっていたのは……。

「……えっと、机だけですか？」

「ん？ まあね。研究室は地下にあるから、基本的には他の部屋は使ってないよ。ちなみに来客は君が初めてだ」

「そ、そうですか……」

戸惑う。

というのも、この広々とした部屋の中央にポツンと置かれているのはテーブルと椅子だけ。他には何もなく、閑散としていた。

あまりの異質な空間に驚いてしまうが、とりあえずは椅子に座ることにした。

「最近はいーセットを買ってみたんだ。紅茶を淹れるから、待っていて欲しい」

「分かりました」

少しだけ弾むような声で、リーゼロッテはそういうとキッチンに向かった。最近はい心境の変化もあり、色々なことに挑戦しようとしている。

ティーセットもその一環である。

もともとはそんなものは買う必要などなく、日頃はもっぱら水ば

かりを飲んで生活をしていたが、紅茶を自分で作ってみるのも興味深いかもしれない……ということで購入したものだった。

だが、次の瞬間。

陶器が床に落ちて、パリンと割れる音が室内に響き渡る。

「え、大丈夫ですか？」

流石に驚いたアメリカは立ち上がると、キッチンの方へと向かう。

そこには、バラバラに砕け散ったカップがあった。

「ふむ……紅茶を淹れる、というのはなかなか難しいものだね」

と、割れたカップの前で腕を組んでうんうんと頷いている彼女を見て、アメリカは内心で思う。

やっぱり、とても変わっている人だわ……。

あの喫茶店であった時から思っていたが、どこか浮世離れしているというか、なんというか。アメリカの第一印象は、概ね外れてはいなかった。

「私がやります」

「いいのかい？」

「はい。紅茶を淹れるのは、慣れてますから」

アメリカは三大貴族の令嬢。自分で紅茶を淹れる、または調理をすることなどないと思われるが、エレノーラの教育により最低限の

ことはこなせるようになっていた。

アメリカはお湯を沸かすと、残っているカップを温める。その最中に、茶葉から紅茶を作り出していく。慣れたもので、あっという間に紅茶の準備ができた。

そこから気をつけながら、ティーポットとカップをテーブルに運ぶと二人分の紅茶を注ぐ。

「はい。どうぞ」

「おお！ アメリカはとても家庭的だね。将来はいい妻になるに違いない」

「……えっ！ そ、そう思いますか？」

「ああ。素直にそう思うよ」

ニコリと優しい笑みを浮かべる。

アメリカがその時の言葉を聞いた時、相手に誰を思い浮かべたのか……それは明白だった。

「さて、と。本題に入ろうか」

脚を組み直すと本題に入る。

「バタフライエフェクト

「因果律蝶々。発現したのは確か……マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の時だよ

？」

「はい」

「それから過度な使用は？」

「していません。レイに止められていましたから」

「それは良かった。因果律に干渉する魔術は、負担が大きすぎる。私も滅多に使うことはないからね」

「そうなのですか？」

「ああ。私のアトリビュートは虚構。その本質を少し見せよう」

トントン、と机を叩くと、あるうことがカップをその場に倒してしまう。カップは横になり、テーブルの上に紅茶が溢れてしまう。

「え……ちょ、溢れてますよ！」

慌てるアメリカだが、それと同時に魔術が発動する兆候を感じ取った。

プリママテリア
《第一質料》エンコーディング《物資コード》
マテリアル

マテリアル
《物資コード》デコーディング《

マテリアル
《物資コード》プロセッシング《歪曲》
ディストーション

コーザリティ
《エンボディメント》因果律《

コラプス
「因果崩壊」

小さな声で、その名称を呟く。

「溢れている？ もう溢れてはいないだろう」
「え……」

ポカンとした表情を浮かべるアメリカ。

それもそのはず。

その場に横になって、中の紅茶を垂れ流していたカップは元に戻っていたのだ。

まるで時間が巻き戻ったかのように。

「時間が戻った……？」

「厳密には時間の逆転現象ではないけどね。現代魔術では、まだ時への干渉は不可能だよ」

人差し指を上げると、もう一度カップをその場に倒す。溢れ出る紅茶は机に広がっていく。だが……。

「ほら。もと通りだ」

「因果を結びつけるのではなく、結果を発現しないようにしているのですか？」

「おお！ 流石は因果律の魔術を発動しただけはある。直感で理解できているようだね」

彼女にしては珍しく、声を弾ませる。

もともと、因果律に干渉できる魔術はリーゼロッテだけのものだった。しかし今は、アメリカもまた二人目の因果律に干渉できる魔術師だ。

自分と同じ存在、ということでアメリカに対して親近感を抱いていた。

「私の本質は歪曲。^{ディストーション}この世界の全てを歪曲させる。物質、現象。そして、それがたとえ、因果律であってもね。虚構はその結果に付随して生じる結果に過ぎないのさ」

「なるほど……つまりは、私とは逆の能力なんですね」

「そうだね。ただし、魔術には干渉力というものがある。アメリカ。試しに、因果律蝶々でカップが倒れるという結果を生み出すといい」

「分かりました」

微かに頷くと、すぐに魔術を発動させる。

《第一質料^{プリママテリア}⇨エンコーディング⇨物資コード^{マテリアル}》

《物資コード⇨デコーディング^{マテリアル}》

《物資コード⇨プロセッシング^{マテリアル}⇨四原因説^{アイティア}⇨質量因^{ヒュレー}⇨形相因^{エイドス}⇨作用因^{エフィシエン}テロス

⇨目的因^{テロス}》

《エンボディメント⇨因果律^{コーザリテイ}》

「因果律蝶々^{バタフライエフェクト}」

顕現するのは、一匹の蝶。その蝶が舞い上がると、目の前のカップが勝手に倒れ始めた。まるで、そのカップが意志を持っているかのように。

「因果崩壊^{コラプス}」

と、アメリカの因果律に介入するリーゼロッテの魔術。互いに因

因果律に干渉した時。どちらの魔術が成立するのか……。

その答えは、明白だった。

目の前には、元通りになっているカップがそこにあった。

そして、アメリカの発動した因果律蝶々から生じた蝶は第一質料バタフライエフェクトは第一質料プリママテリアへと戻ってしまう。

その場には、パラパラと真つ赤な粒子が溢れる。

「理解できたかな？」

「発動はしました。でも、結果だけを切除されたような……そんな感覚です」

「いいね。君はやはり、魔術適性が高い」

「あ、ありがとうございます」

七大魔術師に褒められたということで、アメリカも少しだけ嬉しかった。もつとも、手放して喜ぶことはない。それは、強大な魔術にはそれ相応のリスクが伴うことを理解しているからだ。

「因果律に干渉する。しかし、因果律などこの目で捉えることはできない。では我々は因果律と定義している何かに干渉していることになる。それはなんだと思う？」

「因果律と定義している、何か……ですか」

「そう。君も私も、無意識のうちにそこにアクセスしている。これは私の仮説なのだがね」

紅茶に軽く口をつける。

そして、少しだけ間を置くとその仮説を語り始める。

「アーカーシャ世界真理。おそらく私たちは、そこに干渉している」

「アーカーシャ世界真理と言え、世界の全ての記録があるという場所のことでしょうか？」

名前自体はアメリカも知っていた。それはおとぎ話で聞いたことがあったからだ。

「よく知っているね。そう。アーカーシャ世界真理は空間であり、存在であり、概念でもある。ま、要するによく分からないということだ。でも、過去の文献から登場しているそれは、魔術師にとって重要なものだ。曰く、魔術師はそこにある情報を書き換えることで、世界に魔術という現象を起こしているとか」

「アーカーシャそれでは、全ての魔術師が世界真理に干渉できるということですか？」

「そうなるね」

アメリカは口元に手を持っていく。

そのような話は、初めて聞いた。レイからも聞いたことはないものだ。

しかし、そう考えると色々辻褄が合う気がするのだ。あくまで直感的な推測に過ぎないが。

「魔術師の力量とは、詰まるところ……アーカーシャ世界真理に対する干渉力ではないか。それが私の仮説だ。そして、アーカーシャ世界真理には因果律も存在している。この世界に生じる、原因と結果。アーカーそれを私たちは世界真理を通じて操作しているのかもしれない」

「なるほど。興味深い話です」

「まあ、まだ仮説に過ぎない。それに論文にもまとめていないしね。まだまだ集めるべき情報は多いよ」

「レイはこのことを……？」

「知っているさ。というよりも、おそらくこの世界で世界真理への干渉力は随一。彼の右に出るものはいないよ」

アーカーシャ

レイ＝ホワイト。

アメリカは友人として接してきているが、思えば彼はおかしな点が多すぎる。

オーディナリー

一番は、一般人だというのに七大魔術師に至るほどの魔術適性があるということ。

今回の話を聞いて、思う。

レイにはもしかして、まだ秘密があるのかもしれない。

そう考えるのは、必然だった。

「彼のことは……そうだね。私の口から言つべきではないだろう。本人から聞くといいさ」

「はい。分かりました」

第173話 鬼ごっこ

肉体強化の訓練も大詰めになってきており、エインズワース式ブートキャンプもかなり進んできた。

夏にアメリカを鍛えた時には、学生用に師匠がアレンジしてくれたものを使用し、負担としては比較的軽いものになっていた。と言っても、今まで訓練などしたことのないアメリカには本当に苦痛だったようだが。

今回の大規模魔術戦マギクス・ウォーに関しては、その時のものよりもより軍人に近いものにしてある。内容としては、基本的なランニングに加えて、筋トレ。さらには、内部コードインサイドで強化した身体を、限界まで追い込む。

内部コードインサイドを使用した際には、疲労感は通常のもの倍以上になるだろう。それは、肉体的な疲労だけではなく魔術領域もかなり酷使用するからだ。エインズワース式ブートキャンプの真髄はここにある。

魔術と肉体を同時に鍛える。これを徹底してこそ、白兵戦などにも魔術を活かすことができる。それに加えて、魔術師にはメンタルの問題も必ずつきまとう。心の状態が不安定になってしまえば、魔術もまた不安定になってしまう。

心技一体。それこそが、師匠がよく俺に教えてくれたことだった。

「二人ともッ！ まだいけるぞ！」

「んにゃあああああああッ！！！」

「ですわあああああああッ！！！」

悲鳴に近い声を上げる二人。

現在はカフカの森の中を、疾走している。二人の後ろから発破をかけている俺だが、アメリカとアリアーヌ共に限界に近いのは間違いないだろう。

それでも氣力を振り絞って、二人は走り続けている。

「これ以上のトレーニングは、嫌だあああああッ！」

「絶対に逃げ切ってみせますわあああああッ」

必死な様子で走っているが、今回の訓練は鬼ごっこを課していた。

一時間という制限時間の間で、捕まることがなければ本日の訓練は終了。一方で、捕まればさらなるトレーニングが待っている。

その話をした時、アメリカの顔は青ざめ、アリアーヌの顔も引きつっていた。

また、アメリカとアリアーヌの二人には内部コードインサイドでの身体強化を許しているが、俺は魔術の使用はしない。

この肉体のみで二人を追いかけている。

この程度のハンデは必要だからな。というのも、二人はジャンゲルなどには慣れていないからだ。

「アメリカ、二手に分かれますわよっ!!」

「ひいひいひいひい！ 私の方に来たらどうするのっ!？」

「その時はその時ですわっ!」

散開。

アリアー又は右に、アメリカは左に進行方向を変える。

「どちらを狙うか……」

ぼそりと呟くが、どちらを狙うにしても悩みどころだ。アリアー又はその圧倒的な身体能力を活かして、逃げている。一方のアメリカはアリアー又はは劣る。

だが、彼女はこの森のことを熟知している。あの夏の時、よくここで訓練をした結果だろう。

「こっちなだ」

狙うのはアメリカだった。順当にいくならば、アメリカを確保した後アリアー又はに行くべきだろう。

彼女の経験を踏まえても、この森での逃亡はアリアー又はに軍配が上がる。俺としても、先に楽な方を済ませておきたい。

「ヒイヒイヒイヒイヒイ！ こっちにきたぁあああああッ！
」

アメリカは絶叫しながら、颯爽と森の中を駆け抜けて行く。しかしスピードは流石に、魔術で強化しているアメリカの方が上だ。

いくら動くのが得意とはいえ、魔術なしでは追いつくことは叶わない。と言ってもそれは、森の中ということならば話は変わる。

森の中では、ただまっすぐ進めばいいというものではない。

木々を避けながら、さらには現在は落ち葉が大量に落ちている。それに足を取られないように、走り続ける必要がある。ここでわずかな差が生まれる。もちろん俺は、その差を徐々に縮めて行く。

「んにゃあああああああああつ！！」

全力疾走。全てをかなぐり捨てるようにして、疾走するアメリカだが……。

「あ……」

あまりにもガムシヤラに走り過ぎたため、落ち葉に足を取られてしまう。ズルツとその場で横転すると、アメリカが倒れないようにそつと抱き止める。

「捕まえたぞ、アメリカ」

「あ……う、うん……」

横抱きする形になってしまったが、仕方がないだろう。アメリカも打って変わって、なぜか落ち着いているようだしな。問題はないだろう。

「では、森の外に出ていてくれ。アリアーヌを確保した後、アメリカには別のメニューを課す」

そう伝えたと、俺は颯爽とその場から離脱。

その際に後ろからはアメリカの「もう、やだあああああああ
ああっ！」という叫び声が聞こえて来た。

「さて、アリアーヌを探すか」

アンチマテリアルフィールド
絶対不可侵領域を使用すれば、位置を特定することなど造作もないのだが、今回、俺は魔術を使用しない条件だ。

ということは、自力で逃げたアリアーヌを発見する必要がある。

まずはアメリカと別れた場所に戻ると、そこから走って行った方向へと進んで行く。地面を見ると、誰がか走った跡がしっかりと残っているが……それが急に、途中で消えたのだ。

「上か……」

そして俺は、上を見上げると木へと飛び移った。

「……なるほど」

アリアーヌもなかなか考えたものだが、プリママテリア木の上にもわずかな痕跡は残る。それに、魔術を使っている為に、第一質料は残存してしまっ

彼女の第一質料プリママテリアの跡を追いかけてながら、木々を飛び移るようにして移動すると……岩陰から、白金プラチナの髪がわずかに出ていた。

見つけた俺は、木から飛び降りるとそのまま大地を駆け抜ける。
アリアーヌが気がつく前に、捕まえてしまいたいが……。

「……もう来たんですの!!?」

流石に降りる際に大きな音を立ててしまったので、気がつかれてしまう。

バツとその場から立ち上がると、アリアーヌは再び俺からの逃亡を図る。

アメリカとは違い、アリアーヌの身体能力は魔術を込みという点で考えれば、学生の中でもトップクラスだろう。

おそらく、軍人にも匹敵するほどの身体能力をすでに兼ね備えている。

そんな彼女を確保するのは、至難の技ではあるが……俺とは違い、彼女には森での経験が浅い。アメリカと同様に、つけ込むならばそこしかないだろう。

「逃げ切ってみせますわっ!」

駆ける。

それと同時に、俺は手首につけている腕時計をちらりと見る。残

り時間は、十五分。かなり短いが……すでにアメリカは確保している。残りのリソースを全てアリアーヌに費やせばいいので、勝算はある。

そして俺たちは、最後の鬼ごっこを開始するのだった。

「はあ……はあ……はあ……うっ……ギリギリ負けましたわあ……」

「ふう。本当に、ギリギリだったな」

勝敗は、俺の勝利。

残り時間は、十秒。

そこでアリアーヌはわずかにバランスを崩してしまい、そのよめいた瞬間に俺は彼女にタックルを仕掛けた。走っているのはギリギリだと思つての行動だったが、なんとか間に合った。

今は、俺がアリアーヌに被さっている状況だ。しかし、俺も疲労がかなり蓄積しているのですぐに息を整えるのは難しかった。

「すまない。抱きしめるような形になってしまった」

「え……？ ああ。ま、まあ別にそんなに気にしませんので……」

ぼそりと、「アメリカに見つかったらまずいですけど……」と言っていたのは聞き間違ではないだろう。おそらく、自分の敗北した姿を見せたくないのだろう。

アリアー又らしい言動だ。

「さて、戻るか」

「ええ」

呼吸も整ってきたところで、立ち上がると彼女に手を差し伸べる。

グツと体重を支え、アリアー又がその場に立ち上がる。一見すれば、アリアー又は体重があるように思えるが、とても軽い思った。

「レイは魔術を使っていないんですね？」

「ああ」

「凄まじいですわね……」

並んで歩みを進める。アリアー又はかなり驚いている様子だった。

「いや。俺としては、二人ともにすぐに捕まえられると思ったが……ここまでギリギリになるとは思ってもしなかった」

「そうですか？」

「ああ。だから誇ってもいい」

「レイにそう言われると、嬉しいですね」

汗をかいて、髪は乱雑に乱れているが、その中でもアリアー又の笑顔は輝いて見えた。

そして二人でカフカの森の外に出ると、アメリアがこちらに駆け寄ってくる。

「あ！ ど、どうなったの！」

「わたくしの負けですわ」

「と言っても、残り時間は10秒だったからな」

「……やっぱりアリアー又はすごいわね」

割と始めの方にあっさりと捕まったアメリカは、本当に賞賛しているのだらう。それは、その声色からはっきりと分かった。

「さて。では、二人にはペナルティを課すか」

「望むところですよっ！」

と、アリアー又が大きな声を上げている後ろで、そおくと移動しているアメリカが視界に入る。

「アメリカ訓練兵！」

「れ、レンジャー！」

条件反射で、彼女はビクツとその場で敬礼をする。

「逃亡は重罪だ」

「い、いやあくちよつと休憩でも……と思って」

「アメリカには時間があつただらう。その一方で、アリアー又はすぐにでも次の訓練に移行する気概がある。見習うべきだ」

そう言われて、アリアー又はその豊満な胸をグツと張る。

「ふふん！ アメリカ、わたくしのことを見習ってもいいんですよ？」

「いや……二人は脳筋だし……」

「ということ、次に行くぞ！」

「レンジャー！ ですわ！」

「れんじゃ」

「声が小さい！」

「レンジャー！」

そうして俺たちは次のメニューへと移行するのだった。

もちろん、アメリカの悲鳴はその後、森の中で反響するのだった。

第174話 見守る人たち

マギクス・ウォー 大規模魔術戦

すでにエントリーは全て終了し、一週間後にはそれぞれの組み合わせが発表されることになっている。

もちろん各学院では、どのチームが優勝するのかという予想が始まっていた。

魔術剣士競技大会とは異なり、今回は団体戦。ということで、予想は今まで以上に困難を極めていた。

「レベツカ様はどこが優勝すると思います？」

生徒会室。

レベツカの婚約はまだ解消されておらず、貴族の派閥問題はまだ残っている。

そのため、以前のように他の生徒会役員がその役割をしない……ということにはなっていないかった。そこは、ディーナが他の役員の元に取り込み、半ば強引に説得したのだ。

貴族の派閥の問題は確かにある。しかし、自分の仕事を疎かにするのは貴族としてどうなのかと。

そのように問い詰めると、まだわだかまりはあるものの、あれからは生徒会はいつものように運営されることになった。

また、最近は生徒会役員選挙が行われたが、そこでレベッカとディーナは再び生徒会役員として抜擢された。

他のメンバーは、役員選挙を最後の仕事として、辞めていくことになった。その際に、新しいメンバーには一年生も加わることになったが、そこにはアメリカが入ることに。

といっても、マギクス・ウォー大規模魔術戦が控えているので、アメリカは生徒会にはあまり顔を出せていないというのが現状だ。

「それはもちろん、レイさんのところに決まっていますでしょう?」

「……いや、でも他のチームもなかなか手強いですよ?」

「いえ。レイさんのチーム以外は、ありえません」

「……そうですか」

レベッカとディーナの関係も、少しずつだが変わってきていた。

元々は二人には距離感が多少なりとも存在していたのだが、それが今やかなり近くなってきている。

レベッカもディーナも互いの意見をしっかりと言うようになった。しかしそこで、ある問題が発生しているのだ。

「ディーナさん」

「はい。なんでしょうか」

「聖歌祭ですが、女性から男性を誘うのは、はしたないでしょうか?」

少しだけ顔を赤らめながら、レベツカはそう尋ねた。

そう。問題とは、レベツカがレイのことを好きになってしまった……ということだった。

ディーナとしては、これは非常に複雑な問題である。仮に、レベツカがこの馬の骨とも知れない男に惹かれているのならば反対していただろうが……相手がレイとなつては、彼女も反対することはなかなか難しかった。

仮に、レベツカを任せることができる男性がいるとすれば、レイしかない。そう思うほどに、ディーナは彼のことを評価しているのだ。

「そうですね。聖歌祭は^{マギクス・ウォー}大規模魔術戦の翌日。それに、当日は貴族のパーティーもあります。誘うとしても、時間が合うかどうか」
「そこはどうにかします」

キツパリと言い張るレベツカだが、そこには不屈の意志があつた。間違いない、彼女は時間を作り出そうとしているに違いない。

「正直言つて、女性から誘うのは私も少し遠慮しますが……相手がレイとなると、難しいかも知れません」

「……ですよ」

「はい。ここははっきりと、言ったほうがいいかも知れません」

「なるほど……やっぱり、そうなりますよね」

複雑な気持ちではある。

しかし、ディーナが願っているのは何よりも、レベッカの幸せである。そのため、助言をするのは彼女としても本望だった。

「よし！ では、近いうちに行動を起こします！」

「応援しています。レベッカ様」

「何を言っているんですか？ ディーナさんも手伝ってください！」
「え！？」

ということで、ディーナは今後レベッカに色々と振り回されることになるのだった。

「ククク……これで揃ったわね……」

「うん。そうだね」

ニヤリと微笑む彼女。

金色のツインテールを弾ませるように動かしながら、クラリスとエリサはある資料を見つめる。

それは大規模魔術戦マギクス・ウォーに参加する選手を二人で纏めたものだった。

初めは、魔術剣士競技大会の観戦が大好きなエリサが、大規模魔術戦マギクス・ウォーでも選手のことを知りたい……と思って始めたことだった。

その作業をしていると、クラリスも暇だから手伝う……ということとで二人で出場選手について独自にまとめていた。

また初めは、その資料をレイ達にも渡そうと思ったが、今回はアルバートとエヴィ達も出場するということで誰にも渡さないことにしたのだ。

どちらかに肩入れしないと、二人で決めたのだから。

「それにしても、改めて見るとレイ達の異質さが際立つわね……」
「そうだね。レイ君たちは、珍しいよね」

二人が何に関して珍しい、と言っているのか。

それは……。

「三大貴族二人の中に、一般人オーディナリーがいるなんてねえ……」

レイ＝ホワイト。

すでにエントリーした選手は、全て閲覧できるようになっている。その中でももっとも異質な存在はレイだった。

魔術学院の中では、彼は悪い意味で有名だ。

クラスメイトや友人たちは彼を認めているが、その他の人間は彼をよく知らない。そのため、一般人オーディナリーという表面的な部分だけで判断してしまう。

そんな彼が、オルグレン家とローズ家の長女とチームを組めば、話題になるのは当然だった。

現在は、ルーカス・フォルスト率いるチームが優勝候補筆頭とされている。アルバートとエヴィは無名の一年生ではあるが、それを考慮してもルーカスの実力は圧倒的だからだ。

その一方で、話題性でいえば間違いなく……チーム：オルグレンが一番の話題だ。

また、チーム名は代表者のファミリーネームを採用することになっている。

「レイくんたち、大丈夫かな……」

「大丈夫よ。アメリカとアリアー又は分からないけど、あのレイよ？ 全く気にしてないわよ」

「はは……それもそうだね」

苦笑いを浮かべる。

エリサの懸念は当然のものではあるが、当の本人たちはその噂をほとんど聞いていない。

三人ともに、訓練に励んでいるからだ。特にアメリカとアリアー又は連日の訓練の疲労により、噂などを聞いている暇はない。

いかに訓練を乗り切るのか。

そのことを毎日考えているのだから。

「で、エリサは誰を応援するの？」

「それはもちろん、みんなだよ！」

「そうね。でも、決勝はお互いにぶつかるかもしれないわね」

「それは……仕方ないね」

エリサとクラリス。

二人とも、みんなに頑張って欲しいと思っている。しかし、勝敗というものは明確に残つてしまう。

どちらかが敗者、または勝者になる。

そればかりは避けようのない事実だつた。

「でも他のチームも侮れないわよね」

「うん。他のチームは上級生だけで組んでいるところもあるからね」

二人で資料に目を通す。

レイたちや、アルバートたちは主に一年生で構成されているチームだがそれは珍しい。

ほとんどのチームは三年生や四年生だけで構成されている。

そこから導き出されるのは、上の学年の方が熟達している可能性があると言っことだ。確かに、一年生はそれぞれが魔術師として突出しているが……今回は団体戦である。

一人だけが、強くても意味はない。

各チームの総合力が試されるのが、この大規模魔術戦なのだから。

マギクス・ウォー

優勝候補はチーム：フォルスト以外にもある。その中に、レイた

ちのチーム名はない。つまりは、世間的な評価はそう言うことなのである。

「みんな頑張つて欲しいわね」

「うん！ そうだねっ！」

二人が出場することはない。しかし、自分たちに行き届くことをしよう。その思いから、二人は自分たちに行き届くことを少しずつ進めていくのだった。

友人たちが戦い合うのは、見ていてハラハラする。

だが魔術師たるもの、切磋琢磨して成長するものだ。

だからこそ、二人は大会を心待ちにするのだった。

第175話 アリアーヌとの特訓

放課後になったが、今日はいつものようにアリアーヌがやってくるのを待つてはいない。

いま俺は、ディオム魔術学院に向かっている最中だ。

今日はどうしても学院で外せない用があると言つので、俺が出向くことにしたのだ。

また、身体強化週間は終わっていないが、少しずつ個別指導にも移行している。アメリカの方はリーゼさんに任せているので、俺はアリアーヌを担当することになっている。

「着いたな」

合流するのは時間がかかる、と言われたので比較的ゆっくりと歩いてやってきた。

それからあるものを寮の人に預けると、待ち合わせ場所であるディオム魔術学院の正門の前でじっと待機しておく。

その際に、チラチラと通り過ぎていく生徒がこちらを見てくる。おそらくそれは、気のせいではないだろう。

これはエリサとクラリスから聞いた話なのだが、俺たちのチームは何かと有名らしい。それも、悪い方向に。

三大貴族の令嬢二人の中に混ざるのは、一般人であるレイオーディナリ!! ホワイトという異質な存在。

しかしその程度の注目は、一学期からずっと浴び続けている。今更そんなことには動じることはないが……流石にこれだけジロジロと見られると、少しだけ気分も悪くはなる。

と、そんなことを考えながら待機していると、彼女がパタパタと焦っている様子で走ってきた。

「レイ! お待たせしましたわっ!」

「いや。いま来たところだ」

「そうですの?」

「ああ」

嘘であるが、女性との待ち合わせはそう言うっておけ……と師匠に教育されている。

「では、いきましようか」

「了解した」

アリアーヌと共に進むのは、ディオム魔術学院にある演習場。マギクス・ウォーすでに大規模魔術戦に出場する生徒が、占有している場所もあるがなんとかスペースを彼女が確保してくれたらしい。

そして、互いに動きやすい軽装に着替えると改めて訓練へと入る。

「アリアーヌ訓練兵!」

「レンジャー! ですわっ!」

「本日より、個別訓練に入る」

「レンジャー！」

「よし。いい声だ。まずは、君の実力を改めて測りたい」

互いに身体強化をした上での徒手格闘戦を提案。

すると、再び「レンジャー！」と大きな声で敬礼をする。周りの生徒は何事かとこちらを見ているが、そんなことは気にしてはいられない。

「では、制限時間は十分だ」

腕時計で制限時間を設定すると、互いに向かい合う。

殺気、とまではいかないがアリアーヌには確かな闘気が宿っている。それは、周囲に溢れている第一質料プリムテリアを見れば一目瞭然だった。

「では、開始だ」

瞬間。

先手必勝と言わんばかりに、アリアーヌは突撃してくる。

「はあああああああッー!!」

その勢いを乗せて、右の拳をそのまま俺の鳩尾めがけて振るう。それをしっかりと認識すると、バックステップのみでその攻撃を躲すが……。

「まだまだ、ですわあああああッー!!」

アリアーヌは左足をぐつと踏み込むと、そのまま右足を高らかに上げる。

そのまま、俺の頭上からかかと落としをしてきたのだ。

避けてもいいが……ここは、真正面から受け止めることにした。

「ふっ……！」

「なあ……っ！！？」

流石に止められるとまでは考えていなかったのか、啞然とした声を漏らしている。

俺はそのまま、以前したように彼女の脚を掴むとそのまま遠方に投げようとするが……流石に学習しているようで、器用にそのしなやかな脚を俺の右腕に絡めてくると、そのまま寝技に持ち込んでくる。

「今度こそ、負けませんわっ！」

「ふ……いいだろう」

真正面から、寝技を受け止める俺だが、なかなかどうしてアリアーヌの寝技は熟達している。こちらが逃げようとしても、それを先回りするようにして腕と脚を使って器用に関節を決めてくる。

その柔らかい体がギュツと押し付けられるが、そんなことを気にしている暇はない。

ついにアリアーヌの技が決まってしまい、俺はそのまま首を締め

上げられる形になるが……。

「なるほど。生粋の近接格闘タイプだな」

今までの戦闘での総評をボソリと口にする、俺は決められている関節を一気に外す。

そして、まるで蛇のように抜けて出していく。

その後は外した関節を再び元に戻して、トントンと地面を靴で軽く叩く。

「……本当に化け物ですわね。わたくし、寝技は得意中の得意なのですわよ?」

「そうみたいだな。しかし、本当の寝技というものを教えてやろう」
「望むところですよ!」

再び俺たちは、戦闘を開始するのだった。

「ぐ……ぐえ……ギブ、ギブですわあ……」

完璧にキメられているアリアーヌは、そう言いながら地面をタツプした。それを合図に、ゆっくりと寝技による拘束を解除していく。

流石に本気でキメたりはしていないが、それでも絶対に抜けるこ

とはできないように要所要所は完璧に押さえつけていた。

何も力だけが全てではない。技術もまた、こうした戦闘には必要になるのだから。

「はあ……はあ……はあ……本当に、強いんですね……はあ……勝てるビジョンが、全く浮かびませんわ……はあ……はあ……」

その場で大の字になって寝転がっているアリアーヌのもとに、近寄っていく。

「いや。アリアーヌはかなり筋がいい。これはきっと、将来はどんなでもない魔術師になるかもな。近接戦闘に限っていえば、すでに学生ではトップレベルだろう」

「……お褒めいただき、光荣ですわ」

スツと右手を上げてくるので、それをぐっと掴んでその場に彼女を起こす。その際に、わずかにバランスを崩してしまうので、倒れないようにしっかりと抱きとめる。

「あ……その、申し訳ありませんわ」

「いや、疲れているようだしな。大丈夫だ」

それから今回の戦闘に関しての反省会を開いた。

「そうだな。筋はいい。しかし、アリアーヌは直線的すぎるな」

「もっとフェイントを混ぜたほうがいいんですの？」

「あまり極端にやりすぎると、せっかくの良さが消えてしまうが……その良さを活かすために、いくつかバリエーションを持たせておくのが最善だろう。それこそ、戦闘に特化した魔術師は一つのこと

を極めている人もいるが、それを活かすために別の魔術を覚えたりもする」

「そうなんですの……なるほど。それは考えたことは、なかったですわ」

アリアーヌの強みは、もちろんその近接格闘術にもあるだろう。

だが俺は、彼女の一番の強みはその精神力だと思っている。そもそも、超近接距離で戦うことは恐怖が付きまとうものだ。

普通は物怖じしてしまうのも、無理はない。

アメリアもまた、初めはその恐怖心に打ち勝つのに時間がかかった。

一方でアリアーヌは常に攻めの姿勢を忘れずに、猪突猛進に攻めてくる。おそらくこれは、天性のものだろう。

その才能、さらにはそれに適応する性格。

その全てが噛み合って、今のアリアーヌが構成されていると考えたほうがいい。

「よし。ここから先は、食事でもしながら話すか」

「食事……？　一緒にするのは構いませんが、どこで食べるんですの？」

「俺が振る舞おう。アリアーヌの部屋には、キッチンはあるよな？」

「まあ……使っていないですけど、ありますわ」

「そうか。では、行こうか」

「え……材料はわたくしの部屋にはありませんけど……？」

「実はすでに用意してある。寮の人に預けてあるんだ」
「はあ……用意周到ですわね」

呆然としているようだが、俺としては一緒に食事を取るといふことも重要だと思っている。

コミュニケーション。

チームで戦う上で、互いの信頼関係を築くというものは欠かせないものである。軍人時代も、初めはバラバラだったが後に互いを知ること、俺たちはまとまることができた。

その経験から、アリアーヌとはもっと距離感を詰めていきたいと考えている。

「よし。では、行こう」

「分かりましたわ。でも、何を作るんですの？」

「ふ。ここは相場が決まっている。カレーだ」

「カレー！ それは美味しそうですねっ！」

「だろ？ 任せろ。俺のカレーは抜群に美味い。師匠にも太鼓判をもらっているからね」

彼女は隣で、「カレー、カレー、晩ご飯は、カレーですわ」
と歌いながら楽しみにしているようだった。

これは、気合を入れて振舞う必要があるな。

第176話 タこ飯を、一緒に

「失礼する」

軽く頭を下げて、アリアーヌの部屋に入る。寮の作りは、基本的にはどの学院も同じだ。それに、女装して潜入した際には彼女の部屋に一度だけ入っているので、どこか懐かしい気分だった。

「それで、カレーを作るんですのよね？」

「そうだ」

すでに袋に入っている材料は回収してある。

中には各種野菜や、肉などが入っている。しかし俺が作るカレーの中でも、一番重要なのはこれだろう……。

「そのビンはなんですか？」

「ふ。流石の慧眼だな」

ニヤリとした笑みを浮かべて、袋からそのビンを取り出す。

これはエインズワース式秘伝のタレをビンに詰めたものだ。

この師匠が開発している謎の調味料はもはや万能である。それは、マジクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の時に売り出した、『悪魔のとうもろこし』の売上を見れば一目瞭然。

その中でも、軍人時代に俺がよく作っていた　というよりも、
師匠たちに作らされていた　カレーを彼女に振る舞おうと思っ
ている。

「これは、エインズワース式秘伝のタレだ」

「……確か、夏のとうもろこしに塗っていたとお話していました
けど」

「そうだ。こいつはカレーにも合う。いやむしろ、カレーにこそ本
領を発揮すると言ってもいいだろう!」

いつになくテンションが上がってしまう。

最近は学食で食事を済ませてしまうことが多いので、こうして自
分で調理するのは久しぶりだ。まあ……文化祭では調理をしていた
が、直接目の前で振舞うのは思えば学生になってからアリアーヌが
初めてだろう。

「……いつになく、テンションが高いですね」

「学生になってから、こうして個人的に目の前で誰かに振る舞うの
はアリアーヌが初めてだからな。気分も上がるものだ」

「え……そうなの?」

明らかに、まずい……といった表情をするが、何か問題でもあつ
たのだろうか。

「レイ」

「どうした?」

真剣な顔つきになると、彼女は冷静に言葉を紡ぐ。

「改めて今日のことは、決して他言してはなりませんわよ」

「……？ どうしてだ？」

「乙女には色々とありますの！ 特にアメリカとレベッカ先輩は特につ！ わたくしが死んでしまいますわっ！」

ズイッと体を近づけると、右手の人差し指を俺の胸にトントンと当ててくる。

その顔は少し怖いくらいだった。

なるほど……乙女には色々とある、か。

ここは深く言及しておかない方が、いいと判断する。

「わかった」

「……くれぐれも気をつけてくださいまし」

そして、話を切り上げたところで早速キッチンに移動する。

普段は使っていないということ、綺麗なままだった。特に汚れなどはない。そして俺は、バックパックから持参した調理器具を取り出していく。

「なんだかたくさん持ってきていますのね……」

「ああ」

「わたくしに手伝えることはありませんの？」

「……」

迷う。

ここはおそらく、俺が一人で調理した方が手際がいいだろう。しかし、今回はコミュニケーションを取るためにこの場を設けたのだ。

一緒に調理することで、より近づけるかもしれない。

「そうだな。では、野菜の皮を剥いてもらおうか」

「分かりましたわっ！」

腕まくりをすると、その瞳を輝かせる。

聞けば、昔から料理などには興味はあったのだが、なかなか踏み切りが付かずに機会を逸していたという。曰く、「今回は良い機会ですわっ！」と彼女は嬉しそうに話していた。

「
……」

話すこともなく、淡々と互いの作業に集中する。

アリアーヌはペティナイフで皮を懸命に剥いており、俺はその間に肉をぶつ切りにしていた。もちろん調味料も用意して、下味を整えていく。

チラッと、彼女の方を見る。

やはり慣れていないようで少し苦戦しているようだった。

「アリアーヌ」

「む……すみません。ちょっと手間取ってしまっ……」

俺は彼女の後ろに立つと、抱きしめるような形でその両手に触れる。

「いいか。野菜の皮を剥くときは、何も力任せにナイフを動かしてはいけない」

「そうなんですの？」

「ああ。表面を滑らせる感じだな」

「なるほど。勉強になりますわ」

その柔らかい手を包み込むと、実演するような形で野菜の皮を剥いていく。まずは体に覚えさせることが大事だからな。俺もこうして教えてもらったものだった。ちなみに料理は師匠ではなく、主にアビーさんとキャロルに教えてもらった。

「……ひゃっ！」

瞬間。

俺の吐息がアリアーヌの耳に触れてしまった。

「す、すまない。夢中になっていてな」

「い、いえ……わたくしも夢中でしたから。その、もう自分でできますわ」

「ああ。そうだな」

そつと離れると、確かに一人でしっかりとできるようになっていた。まだぎこちなさは残っているものの、飲み込みが早い。

料理などの家事は、おそらく三大貴族の令嬢ということでしたことはほとんどないのだろう。メイドに任せるのが、一般的な貴族の

在り方だからな。

だというのに、彼女は一生懸命に取り組んでいる。

そんな姿に、どこか過去の自分を重ねてしまう。

「どうしたんですの？」

「ん？ 何の話だ」

「レイが微笑んでいるなんて、珍しいので」

そう指摘されて、自分が初めて微笑んでいることに気がついた。

そうか。幼少期に一生懸命だった自分を見ているようで、俺はおそらく……懐かしく思ったのだろう。

「小さい頃を思い出してな」

語る。

別に隠すようなことでもないの、俺は素直に話すことにした。

「小さい頃……ですの？」

「ああ。その時は、誰かに料理を振る舞うことなどするつもりもなかった。ただ、師匠に促されていやいや作っていたものだが……他の大人に教えてもらいながら」

過去を思い出しながら、俺は手際良く調理を進めていく。

「しばらくして、誰かのために何かをする……その行為自体に意味があったのだと分かった。師匠はきつとそれを分かっていたんだろ

うな」

「そうですの……」

そして、ある程度の調理が終了し、あとはカレーを煮詰めるだけになった。

「よし。こんなものだな」

最後にエインズワース式秘伝のタレを垂らして終了。

その後、アリアーヌと他愛のない話を続けているとちょうど完成した。カレーの横では二人分のご飯も炊いておいたので、今日はライスカレーにしようと思っている。

「完成、だな。皿はあるか？」

「ええ。一応、おいてありますわ」

彼女から平皿を受け取ると、それに白いご飯とカレーを注いでいく。

「とってもいい匂いがしますわね」

「だろう？」

「はい。食べる前から、美味しいと分かりますわっ！」

その両眼を輝かせて、皿を受け取る。

二人でそのままテーブルへと向かうと、水も用意してからさっそく食べることにした。

「よし。では、いただくか」

「ええ！」

「いただきます」

スプーンをでルーを救い、口へと運ぶ。

互いに同時にパクリとそれを食べた瞬間……口の中には豊潤な味わいが広がる。あらゆる調味料が最高のバランスで絡み合う。今回はアリアーヌが甘口がいいということなので、スパイスは抑えめにしておいた。

「うん。美味しいな」

予想通り、美味しくできている。俺の腕もどうやら衰えてはいないようだった。

「ん~~~~~っ！」

一方のアリアーヌと言えば、頬を左手で押さえながらその場で呻き声を上げていた。

「美味しいか？」

「ええ！ とっても美味しいですわっ！」

溢れ出る笑顔。自分の料理を食べて、ここまで笑顔になってくれる。それだけでも、今日はわざわざ作りにきた甲斐があったというものだ。

「レイは本当になんでもできますのねっ！」

「なんでも……というわけではないが、一通りのことは教育されたからな」

「ふふつ。本当にあなたは不思議な人ですわ」

微笑を浮かべながらも、彼女の手が止まることはなかった。

もちろんおかわりする分もあるのだが、あっという間に食べてしまつと、アリアー又はすぐに二杯目を食べ始める。

そのペースは俺よりも圧倒的に早いものだった。

「はっ！ わたくしつたら、つい食べ過ぎてしまったようで……っ！」

気がつけば、彼女は三杯ほどおかわりしてルーがなくなってしまう。俺は一杯だけで納めておいた。今日はアリアー又に振る舞うために作ったからな。

「いや。構わないさ。またいつか、一緒に食事を取ろう」
「ええ！」

元気よく声を上げるその姿を見て、俺は少しだけ笑みを浮かべるのだった。

あの頃を、思い出しながら。

第177話 彼の過去

「はあ……はあ……はあ……」

「やっと……終わったか……」

エヴィとアルバートはその場に倒れ込む。すると、二人の側にルーカスが近寄ってくる。

持っている刀を納刀。そして淡々と事実を伝える。

「二人とも、合格だ」

そう。エヴィとアルバートはついにルーカスの課す第一試験を突破したのだ。

あまりにも過酷な日々。だが、諦めることはなかった。

愚直に立ち向かう精神力もそうだが、決してがむしゃらに進むだけではない。

ルーカスの攻撃を躲すためにはどうすればいいのか。この森で戦うためには、何をすべきか。最善の行動とは、何か。

二人で議論を重ね、その末に第一関門を突破したのだ。

また現在はカフカの森が大会への調整のために使用禁止になっているので、三人でやってきているのは……ドグマの森だった。

危険度は最高難易度のS級。

魔物の危険度は最高。それに、森の構造も複雑。多くのハンターたちも敬遠するこの場所で訓練をしているのだ。

これはルーカスもまた、レイと同様に金級のハンターゴールドライセンスを持つているおかげである。

「短時間でここまで仕上げるとは、正直驚いているよ」

「はあ……はあ……恐縮です……」

「はあ……そう言ってもらえて……はあ……嬉しいです」

依然として、二人はその場で大の字になって寝転んでいる。最後の五分。このままでは突破されると理解したルーカスは、限りなく本気に近い能力で二人に迫った。

縦横無尽に森を駆け抜け、背後を突き、魔術を駆使して、攪乱。

それでも、エヴィとアルバートは肉薄したのだ。

この成長は確かに努力の足跡が見える。

その一方で、並の魔術師ではそこにたどり着くことなどこの短期間では不可能。

それを可能とした二人の才能はルーカスの予想を遥かに上回っていた。

なるほど。これは僕の予想以上だ。もしかすると……。

そう思つほどには、二人のことを評価していたのだ。

「さて、と。今日はよく頑張った。ということで僕が夜の準備をしよう」

現在は土曜日の夜。ルーカスたちは、泊まり込みでドグマの森で訓練をしていた。また、近くにレイの実家があることを三人ともにまだ知らない。

その後、ルーカスは食すことのできる魔物を調達すると、軽く火で炙つて三人で食事を取ることにした。

環境調査部に所属しているエヴィとアルバートは、嫌がることなく、むしろ嬉しそうに食事を楽しむ。久しぶりの食事は、とても美味であつた。空腹は最高の調味料であるとはよく言つたものである。

中央に火を灯し、それを囲むようにして三人で静かに食事を取る。

そうしていると……ルーカスがふと自分のことを語り始める。

「二人には、僕のことを少し伝えておこうか」

ルーカス＝フォルスト。

その存在に関して、しっかりと知っている人間は多くない。その中でも、彼が七大魔術師である【絶刀の魔術師】ということを知っているものはほとんどいない。

しかし、彼はそれを躊躇なく伝える。

「僕は七大魔術師が一人。【絶刀の魔術師】だ」

「え……？」

「は……えつと……？」

啞然とするのは無理はないだろう。確かにルーカスの技術は卓越している。それでも、まさか七大魔術師の一人だとは……夢にも思っていないかったからだ。

だが、ルーカスのその表情と声音からそれが嘘とは思えなかった。

むしろこの短い間の付き合いで、彼が無意味な嘘をつくとは思えなかった。そしてそこから導き出されるのは……。

そして、アルバートが口を開く。

「もしかして、レイが【氷剣の魔術師】だと？」

「もちろん、知っているとも。彼が魔術領域暴走で上手く魔術が使えないことも、知っている」

「そうなんですか……しかし、そう言われると納得がいきます」

隣でエヴィも頷く。

只者ではないと思っていた。その卓越した刀捌きは、超一流。そもそも、魔術師の中で刀を使うものは少ない。それはもともと、東で扱われていた武器だからだ。西の方では、扱うとしても剣が主流である。

そんな中で、学生の中でその刀一本で魔術剣士競技大会を優勝した実力は、七大魔術師と言われると納得がいくものだった。

「でも、どうして魔術剣士競技大会に？ ルーカス先輩が【絶刀の魔術師】なら、学生の大会なんて楽勝と思うけどなあ……」

エヴィの疑問はもつともである。

ルーカスが出るとなれば、魔術剣士競技大会は所詮学生規模の大会でしかない。

それでも、どうしてルーカスが今年になって……わざわざ出場したのか。

「……僕は氷剣に見せたかったのさ。自分の実力をね。七大魔術師も一枚岩ではない。それぞれの魔術師同士で、確執が存在する場合もある。その中でも、先代の氷剣と絶刀はどちらが最強の座にふさわしいか争っていた。いや、そうだね。僕の師匠が、一方的に固執していた……というのは分かっているんだ」

その話を黙って聞く。

ルーカスは悲壮感を漂わせながら、過去を語る。

「僕の師匠は【絶刀の魔術師】として、長い間……魔術師の頂点に立ち続けた。リディア・エインズワースが出てくるまでは、絶刀こそが最強と言われていたからね」

その話は、魔術師の間では有名な話である。ある周期を迎えると、七大魔術師は一新される。それは誰かが意図しているわけではない。だが、自然とそうなるのだ。あるタイミングを機に、入れ替わるのだ。

その中でも、【絶刀の魔術師】は異質。

周りの七大魔術師が入れ替わる中で、絶刀だけは最強の名を維持し続けた。

だが、リディア・エインスワースの台頭は、【絶刀の魔術師】の名を一瞬で風化させるほどの存在だった。

まだ十代で七大魔術師にたどり着いた、史上初の魔術師。

天才の中の天才。その才能は魔術の歴史の中で最高。

時代を超越する、真の天才が到来した。魔術師の世界は、彼女を歓迎した。それと同時に、絶刀が最強というのは過去の栄光となった。

「そして、師匠は歳の影響もあって……僕を拾った。次なる絶刀を育てるためにね。師匠は妄執に囚われていたよ。絶対に氷剣を打倒すると。僕はその時に思った。この人はきっと過去に生き続けていると。決して現在いまを生きていないと」

「……」

まさかそのような話を聞けるとは思わずに、驚きの表情を浮かべる二人。

パチツ、パチツと燃えている炭化しつつある木々が炸裂する。そこから伴う火の粉が、少しずつ天に舞っていく。

まるで月明かりに溶けるようにして、その火の粉は消えていく。

その微かな明かりのもとで、ルーカスはさらに言葉を紡ぐ。

「別に僕には関係のないことだ。正直言って、そんな妄執は僕にはどうでもいい。でもどうしてだろう。あの人が死んでしまってから最後の想いくらいは叶えてあげようと思ってね。レイ＝ホワイトに勝って、【絶刀の魔術師】の名前を師匠に恥じないようにしようと思っているんだ」

その言葉聞いて、アルバートとエヴィは何を思っのか。

「……そうだったのですか」

「ま、今回の大規模魔術戦では譲るよ。僕は来年の魔術剣士競技大会マジクス・シュバリエにしか興味がないから」

「ということは、仮にレイと戦うことになれば……」

「そうだ。アルバートとエヴィが立ち向かう」

求めているのは一対一の場合だ。そこは魔術剣士競技大会こそがふさわしい。もとより、エヴィとアルバートがいなければ大規模魔術戦マジクス・ウオーには出場するつもりなどなかったのだ。

そして、いざ明確にそう言葉にされると……二人が震えるのはどうしようもなかった。

魔術師の頂点に立つ存在。魔術領域暴走という最大のハンデがあ

ったとしても、アルバートとエヴィは届きはしない。

その頂の片鱗すら見ることはできない。

それでも前に進み続けているのはきつと……彼の存在が、眩しいからだ。

その光に群がり、消えるのではない。

その光に近づけるような存在になりたいと、彼らは思っているのだ。

「へへ。レイと戦うのか……」

「ああ。そうなると、勝負は俺たちにかかっているな」

「そうだね。おそらくはレイ」ホワイトも気がついていいるだろう。仮に戦うことになれば、僕はアメリカ「ローズとアリアヌ」オルグレンの二人を相手にすることになるだろう」

その分析は的を射ていた。

レイもまた、戦うならばそのような戦況になると予測しているのだ。

七大魔術師同士でぶつかるのではなく、それぞれが二人を相手することになると。

「三大貴族が二人。その中でも、アメリカは……」

「ああ。アルバートの言う通り、因果律蝶々は厄介だ。バタフライエフェクト僕でも相対するのは、難しいだろうね」

「策はあるのですか？」

口元に手を持っていくと、ルーカスは自分の考えを述べる。

「まずはアメリカンローズを倒すべきだろう。しかし、相手も彼女が切り札なのは理解している。その壁になるのは、アリアンヌオルグレンだ。こればかりは、時間との勝負としか言えないだろう。もちろん、レイ・ホワイトもそのことは理解しているからね。ま、これは僕の問題だ。二人は彼のことだけを考えればいい」

その後、三人で討論を開始する。

初めは誰もがバラバラの存在だった。こうして同じ時間を共有するとは思ってもいなかった。しかし今、同じ目標を目指して戦っている。

きっとこの時間は、三人にとってかけがえないものになるだろう。

夜が明けるその時まで、三人は議論に議論を重ねる。

全ては大規模魔術戦で優勝するために。
マギクス・ウォー

第178話 羨望と憧憬

アリアーヌ「オルグレン。」

わたくしは、オルグレン家の長女として生を受けました。三大貴族の長女。それが特別な存在であるということは、すぐに理解できました。

それでも自分はありのままの自分でいるのだと。

ずっとこの自分は変わりはしないのだと……そう、思っていました。

「アメリア！一緒に遊びましょう！」

「いい……私はもう、遊ばないから……」

アメリアはある時を機に、わたくしから離れていってしまいました。物心ついた時から一緒にいて、ずっとお友達だと思っていたのに離れ離れになってしまふ。

ポツンと一人で立ち尽くした時、ある感情が芽生えました。けれど、わたくしはそれを見ない振りをして、隠すようにして、そこから先に進むようになりました。

初めはアメリアの目標になりたいと。直接声が届かないのなら、模範となる姿を見せることができたらいいなと、そんな動機で自分磨きを始めたのです。

でもわたくしも結局は一人だった。

三大貴族の長女ということで、周りの子供たちはわたくしを崇めるような目で見つめてくる。

「流石はアリアーヌ様！」

「オルグレン家の長女は流石ですね！」

「アリアーヌ様！　素晴らしいです！」

それに応え続ける日々。アメリアが磨耗していくのも、わかりますわ。これは本当に耐え難いと……わたくしもまた、そう思ってしまうのです。

しかし、そんなことは気にせずにはわたくしは自己と向き合い続けました。

たった一人で努力に努力を重ねて。

オルグレン家の長女として相応しい振る舞いをするために、毎日の生活を送ってきました。

別にオルグレン家に不満はありませんの。

お父様とお母様。お兄様も素晴らしい人たち。それに、しばらくして出来た妹のティアナはとっても可愛い。目に入れても痛くないくらいに。

けれど、どうしてこんなにも心に穴が空いたような感覚になるのでしょうか。

そんな感情に気が付きたくはなかったから、努力を続けました。何かに一生懸命に取り組んでいるときは、忘れることができるから。

三大貴族の令嬢であり、周囲の期待に応えるという圧力を少しでも忘れることができるから。

本当は気がついていましたの。

アリアーヌ＝オルグレンは本当に努力家だと。そう言われているけれど、ただわたくしは現実に向き合いたくないだけなのだ。

逃げて、逃げて、逃げた末が今のわたくしなのだ。

でもアメリアがいれば……わたくしは大丈夫。きっと二人で、支え合って生きていける。今は離れ離れになっているけど、いつかアメリアはわたくしを求めてくれる。

そんな彼女の支えになれるように、頑張っていたのに。

そう……願っていたのに。

アメリアは彼と出会って変わってしまいました。

「ぐへへ……アリアーヌも成長したわねえ……」
「ちょ、ちよっと！ 何するんですの！？」

お泊まり。

レイとの訓練も終了し、アメリアの部屋に泊まることになりました。久しぶりに二人で過ごすということで、一緒にお風呂に入っているのですが……アメリアが容赦無く身体をペタペタと触ってくるのです。

「おお！ やっぱり大きくて柔らかいわねえ……！ ぐへへ……」
「ま、待ってくださいまし！」

その手つきは百戦錬磨。いつの間にそんな技術を身につけたのかと問い詰めたくなりますが、やはり彼女は変わりました。

とても明るくなって、自分に素直になったような感じでしょうか。

それもこれも、きっとレイのおかげなのでしょう。

お風呂から上がった後は、二人でベッドに入ります。少し狭いですけれどこれくらいの距離感がちょうどよかった。今はアメリアの近くにいたいから。

「ねえ。アメリア」

「ん？」

「レイのどこに惹かれたんですの？」

「うえええっ！！？」

変な声を上げるので少し驚いてしまいましたが、わたくしは気がついていました。アメリアは、レイ＝ホワイトに恋をしているのだと。

「その……わ、分かりやすい？」

「まあ少なくとも、わたくしは気が付きましたけど。でもレイはどこか抜けているので、気がついてないと思いますわ」

「だ、だよね……あはは」

乾いた笑いを漏らしますが、アメリカは情熱的にレイのことを語ってくれました。彼のおかげで、自分は変わることができた。これから一緒に、生きる理由を見つけていくのだと。

そう……嬉しそうに、話すのです。

ああ。胸に刺すこの鋭い痛みはなんなのでしょう。

「だからね。私はレイのことが……」

その顔はわたくしの見たことのない、アメリカの表情でした。それを引き出しているのは、わたくしではない。

いつかアメリカの支えになろうと思っていたのに、その役目はわたくしではなかった。

けれど、思ってしまうのは仮にレイではなく自分がその役目になったとしたら、レイのようにアメリカをこんな風に変えることはできたのでしょうか……と。

いえ。おそらく、わたくしでは無理でしたわ。

同じ痛みを、同じ感情を共有できるからと言って、救いになるとは限らない。

そして、レイならばできてしまう。そう思わせるほどの風格が彼にはあるのです。

「ねえ。アメリカ」

「ん？」

「よかったですわね」

「そう……そうだね。でもね」

そういつと、小さな手でわたくしの手をギュッと握ってくれるのです。

「レイだけじゃないよ。みんないてくれたから。アリアーヌもいてくれたから、私は少しずつ変わってきてるんだと思う」

「……」

「だから、ありがとう。私のそばにいてくれて」

「もう……ばかですわね」

アメリカの方に背中を向ける。

きっと、今あちらを向いてしまえば泣いてしまおうと思ったから。

複雑な感情が胸中に渦まく。

でもおそらく、わたくしはアメリカが羨ましいだけなのですわ。

周りに多くの友人ができて、何よりも好きな人ができた。それだけでアメリカは輝くような存在になった。

そんな彼女が羨ましかった。憧れた。憧憬の対象になった。

自覚するのは、自分は今までアメリカは同じ存在だと思い込んでいたこと。でもそんなことはなかった。人は、みんな違うのだ。同じ存在など、存在はしない。

同じ境遇はあれど、行き着く先はこんなにも違うのだから。

「すう……すう……すう……」

寝息が聞こえてきます。話し疲れたようで、アメリアは気がつけば寝息を立てていました。

一方で、わたくしはとても疲れているはずなのに……妙に目が冴えています。

思い出すのはレイのこと。

彼は何が違うのか。

確かに【氷剣の魔術師】という時点で、他者と違うのは間違いがない。しかし、決してそれだけとは思えません。

彼には、もっと何かがある。

そうでないと説明がつかない。だからわたくしは、レイの元へとやってきた。自分もまた、アメリアのように変わりたいと願ったから。

今度はわたくしが追いかける番なのだから。

「アメリア……」

そっと、眠っているアメリアの前髪に触れる。全く起きる様子はなく、静かに寝息を立てて眠っています。

こうして一緒に寝るのも、幼少期以来。

互いにずっと一緒だと思っていた。ずっと、同じ道を進んでいくのだと思っていた。

きつとアメリカはわたくしの前に進んでいるのではない。

全くの別の道を進み始めたのです。

ではわたくしは？ わたくしは、次はどこに進めばいいのでしょうか？ アメリカの先ではない、道をわたくしは見つけることができるのでしょうか？

「わたくしは……」

ボソリと呟く。

自分のたどり着く先は、一体どこなのか。

この大会の中で、それを見つけることができるのか。

そんな不安に苛まれてしまいます。

わたくしは、弱い人間です。精神力が強く、気高い存在なんて言われますが、そんなことはない……… 思いますの。

ただ、そのように振る舞っているだけに過ぎないのです。

でも、それも自分の強さになると信じてわたくしは………。

しばらくすると、アメリカと同じように微睡みの中へと落ちていきます。

願わくば、わたくしも自分の道を進めますように。

第179話 共に実家へ

「う……おえっ……吐きそう」

「はぁ……はぁ……はぁ……今日も、疲れましたわぁ……」

ついに11月に突入。今は秋と言うよりも、もはや冬にふさわしい気候だ。そんな中、俺たちは放課後にいつものようにトレーニングを続けていた。

エインズワース式ブートキャンプ。

それを二人には課していたが……そろそろ頃合いだろう。

「はぁ……はぁ……」

「……」

汗の滴る髪を軽く掻き上げるアリアヌに対して、アメリカはその場でうつ伏せになってびくともしない。

側から見れば、打ち上げられた魚のようだった。流石に心配になるので、その体を優しく揺する。

「アメリカ。大丈夫か？」

「う……うん……口の中すっぱいけど……大丈夫……」

なんとかその場に座り込む。ギリギリまで追い込んだが、なんとか突破できたようだ。

そして二人には、ここで伝えることにした。

「二人とも。大事な話がある」

「はぁ……はぁ……なんですか？」

まだアリアーヌの方は返事をするだけの元気があった。アメリアは手を軽く上げて、聞く意志はあることを示してくれる。

「身体強化週間だが、今日で終わりにしようと思う」

「……本当にっ！っ！？」

と、先ほどまで虫の息だったアメリアがガバツと体を起こす。

「本当だ。ここから先は、各自個人トレーニングに励んでもらう」

「……待つて。言うことは、私はリーゼさんに？」

「ああ。アリアーヌは俺が付きつきりでコーチングする」

「……ふうん」

半眼で俺を見つめた後、アリアーヌの肩をぽんぽんと叩くアメリアは耳元で何かを囁いた。その途中、アリアーヌの体がビクツと反応したのは気のせいではないだろう。

一体、なんの話をしているのか……まあ俺が聞くのは野暮というものだろう。

「それでは、明日からは個別訓練に入るッ！！」

「「レンジャーー！！」」

その日はこれで解散となった。

そして俺はアリアーヌには明日の準備をしてくるように伝えて…
…翌日。

「む。早いな」

「レンジャーっ！ ですわっ！」

彼女はバックパックを背負ってやってきたが、時刻は五時半。集合時間よりも三十分ほど早い。

「集合時間は六時だが」

「あはは……ちょっと早起きしましたわ」

恥ずかしそうに頬を掻く。その仕草を見て、俺は微かに笑みを浮かべる。

「まあ早いに越したことはない。では行こうか」

バックパックを背負って移動する俺たちは、さっそく目的地へと向かう。

アリアーヌが隣にタタタと小走りして並ぶ。彼女には、まだ目的地については伝えていない。

「それで、どこに行きますの？」

「明日からは連休だろう？」

「そうですね。三連休ですけど」

「俺の実家に向かう」

「え……？ レイの実家ですのっ!？」

「ああ。俺の実家はドグマの森の近くにある。この連休中は、その森で訓練を……って、どうした？」

その場で立ち尽くして、わなわなと震えているが何か問題でもあったのだろうか？

俺は彼女のそばに近寄っていくと、心配になって声をかける。

「どうした？ 体調不良か？」

「い、いえ……ちょっとびっくりしただけですわ」

「大丈夫だ。俺の家族は、全員が素晴らしい人だ」

「そ、そうですか？」

「ああ。父と母。それに妹もいるが、本当に明るい家庭だ。心配はしなくとも大丈夫だ」

「まあ……そういうことではないのですけど……」

そうして俺たちは、王国の西の奥にある実家へと歩を進めていく。夏には一人で帰った実家だが、こうして誰かと一緒に向かうことになるとは……そう考えると、とても不思議な感じがした。

しばらくすると、左右に向日葵畑が広がる獣道に入った。すでに向日葵は季節ではないのである夏のようになやかに咲き誇っていない。

そして歩を進める中、俺は気配を感じた。

これは間違いなく……。

「どーんっ……！」

腰に衝撃がやってくる。もちろんそれを、優しく受け止める。

栗色の艶やかな髪を揺らしながら、突撃してきたのはステラだった。

「ステラ。久しぶりだな」

「お兄ちゃんだあ！ やったー！ 本当に帰ってきた！」

「はは。まあ、三連休の間だけな」

「それでも嬉しいよー！」

グリグリと頭を押し付けてくるので、俺はその頭を優しく撫でる。

そんな様子をアリアー又は茫然と見つめていた。

「あ……えっと」

「あ！ こんにちは！ 初めまして！」

「これはご丁寧にどうもですわ」

ステラは俺からパツと離れると、その場で深く一礼をする。

「私はステラ。ホワイトですっ！ お兄ちゃんの妹です！」

「アリアー。もうオルグレンですわ。レイの友人です」

「ステラって呼んでください！」

「わたくしもアリアー。もういいですわ」

握手を交わす二人。

そしてステラはその両眼を輝かせながら、彼女の髪をキラキラとした瞳で見つめる。

「アリアー又ちゃんは、髪が綺麗だねっ！」

「この髪の素晴らしさがわかるんですの？」

「うん！　くるくるで艶々で、とても綺麗だよっ！」

「ふふっ。ステラはなかなか、見る目がありますわね」

「ふふん！　伊達にお兄ちゃんの妹じゃないからねっ！」

ステラは小さなその胸を、思い切り張る。自慢げに語っているが、そんな様子を見てやはり思うのは懐かしい……という感覚だった。この前帰ってきたばかりだが、やはり実家はいいものだ。

それにアリアー又にはティアナ嬢という妹がいるからなのか、ステラとの相性は良さそうだった。

「よし！　じゃあ早くお家にいこっ！」

ステラが俺たち二人の手を引いて、目の前に見える家に向かうように促してくる。

「おーい！　早くー！」

ステラはそのまま駆けていくと、実家の前でその手をぶんぶんと思ひ切り振っている。

「可愛い妹さんですわね」

「だろう？」

「ええ。とても和みますわ」

「そうだな。俺もステラに救われたからな」

「それは……」

「まあ。過去の話だ。行こうか」

「分かりましたわ」

彼女がそれ以上言及してくることはなかった。

「アリアーヌ」オルグレンと申します。以後、お見知り置きを」

実家に辿り着くと、リビングでは両親が待っていた。

「あらあら。ご丁寧ありがとうございます」

「流石は三大貴族の令嬢だ。こちらこそ、よろしく頼むよ」

うちの両親と挨拶を交わす。アリアーヌはやはり、三大貴族の令嬢ということで挨拶はしっかりと丁寧に行っていた。

普段は友人として過ごしているのだが、このような一面を見るとやはり彼女はお嬢様であると思う。

その後、アリアーヌを含めて家族みんなで食事を取ることになった。

彼女はいかに俺が破天荒なのか、という話をしていて、その度にみんな笑っていた。俺としてはごく普通に過ごしているつもりなのだが、みんなから見るとそうではないらしい。

しかし、このような談笑の時に俺のことで笑ってくれるのなら…
…それもいいと思った。

「おにーちゃん！ 一緒にお風呂に入ろっ！」

「そうだな」

着替えを持っていき、ステラといつものように風呂を共にしようとするが……アリアーヌがそんな俺たちの様子を驚いた様子で見つめる。

「ちょっとお待ちなさい」

「うおっ！ どうした？」

服の襟首をぐいっと思いい切り掴まれてしまう。そして俺は、彼女と向かい合う。アリアーヌは半眼でじっと、訝しそうに俺に尋ねてくる。

「もしかして、ステラと一緒に風呂に入りますの？」

「無論だ」

「そっだよっ！ いつも一緒に入ってるよっ！」

「……」

その言葉を聞いて、アリアーヌは目を閉じて天を仰ぐ。そして、カツと開眼した瞬間。その声を思い切り上げるのだった。

「許せませんわっ！ いい年の男女がお風呂を共にするなどっ！ レイっ！ ステラがお嫁に行けなくなったらどうしますのっ！」
「む………どういうことだ？」

そして俺はアリアーヌから、年頃の男女が一緒にいることの危険性を伝えられた。もちろんその事実を知って、その場で震えて立ち尽くす。

俺は今まで、そんな危険なことをしていたのか……？

「ば、バカな………そんな弊害が？」

「可能性の話ですけど、しっかりとしないといけませんわっ！」

アリアーヌの言葉は家族全員に伝えられた。両親もそろそろ問題かも……と実は思っていたらしい。

そして、渋々ステラと別々に風呂に入ることになった。

その代わり、アリアーヌがステラと一緒に入ってくれるらしい。

「お兄ちゃん！ 離れ離れになっても、私たちの関係は変わらないよっ！」

「ああ！ 勿論だとも！」

ガッチリと握手をしてから、抱擁も交わす。その様子を見て、アリアーヌは再びため息をついた。

「はあ……なんというか、似たものの兄妹ですね……」

それはきつと褒め言葉だろう。

ステラとは血は繋がっていないが、似たものの兄妹と言われて俺とステラはにこやかに笑うのだった。

第180話 頑張りますわっ！

「えへへ……お兄ちゃん……」

「う……ん……」

既視感がある朝。

あら、わたくしは確か……？

そうして意識をしっかりと覚醒させていくと……徐々に自分の様子がわかってきましたの。

「ああ……そういえば」

レイの家に泊まりにきているんですね。

思えば、本当にこんなことになるかと予想していなかったのですが、とても焦ったものです。

彼はなんとというか、本当に破天荒でまあ……そこが魅力的な部分でもありますけど。

でもステラと一緒にまだお風呂に入っているのは、許せませんの！ だからしっかりと叱りつけると、レイはしゅんと落ち込んでいました。

頭を下げて、目を伏せて申し訳なさそうにしていました。

意外と可愛い部分もあると……って、わたくしは何を考えてますのっ!?

こほん。まあ、いいですよ。とりあえず、起きることにしましょう。

「ステラ。起きてくださいまし」

「う……ん……」

わたくしの胸に顔をうずめているステラを軽く揺らすと、彼女は意識を覚醒させたようで、少しホツとしました。

アメリカは朝が弱いので起こすのに苦労しましたが、ステラはどうやらそうでも無いようです。

「あ。アリアー又ちゃん、おはようっ!」

「おはようございます。ステラ」

昨日はレイと一緒に風呂に入る、一緒に寝るという年頃の淑女がしてはならないことをしているようでしたので、お説教をしました。

分別はしっかりとつけるべきですから。

二人ともに、そして両親も納得してくれたようで必要以上の接触は控えるように言いましたが……まあ、ステラはレイのことが大好きなのでそれも効果があるかどうか。

でも、レイには特にキツく言い聞かせましたから。

彼は誰かがはっきりと言わないと、ダメなようなので。

アメリカとレベツカ先輩は、恋は盲目……という状態に入っているであてにはなりません。

わたくしがしっかりとしませんとっ！

「私、お兄ちゃん起こしてくるねっ！」

「レイは多分起きていると思いますけど？」

「それでもいくのっ！」

タタタと走っていくのでわたくしはそれを見送りました。

まあ……別にいいでしょう。ステラも久しぶりにレイが帰ってきたということで、とても嬉しいと寝る前に言っていましたから。

そうしてわたくしは、いつものルーティーンに入ろうとしますが……そっか。

ここはいつもの場所ではありません。

どうしたものか。そう考えていると、ステラがすぐに戻ってきました。

「アリアー又ちゃん！ お兄ちゃんが今日は朝から訓練するって！ 準備してきてだっ！」

「なるほど。分かりましたわ」

いつもは朝起きてからすぐに筋トレなどをしますが、今日は訓練にすぐに入るということで訓練用の軽装にすぐに着替えます。

パジャマを脱ぎ捨て、その場で下着姿になって……姿見で自分の姿を見つめる。

うん。今日も悪く無いですわ。

「よしっ！　じゃあレッツゴーだよ！」

「ええ。って、ステラも来ますの？」

流石にステラは一緒には来ないだろうと思っていますが……まさか？

「もちろん私も一緒だよっ！」

「しかし、ドグマの森は最高難度に指定されています。危険ですよ」

「大丈夫！　いつもお兄ちゃんと一緒に行ってるから！」

「え……？」

その言葉に驚いてしまうのは、当然でしょう。

ステラはわたくし達よりも、一歳年下。だというのに、最高難度の森にいつも行っている……？

これはきつとレイのせいだと思って、わたくしは走って玄関に向かいます。

するといつものように精悍な顔つきで、彼が立っていました。後ろにはバックパックを背負って。

「来たか。では、向かおう」

と、背を向けて歩みを進めてようとするので、わたくしは彼の肩をガシツと掴んでその歩みを止めます。

「む…… どうかしたのか？」

「ステラと一緒に来るなんて、大丈夫ですのっ!？」

「ああ。すまない。説明をしていなかったな」

踵を返す。

そして、隣にいるステラの頭をポンポンと叩くと、レイはとんでもないことを言いました。

「ステラはドグマの森には何十回と行っている。それに実力的には^{ゴールド}金級ハンターに相当するだろう。森での戦いならば、おそらくアリアよりも強いはずだ」

「……」

「どうかしたか？」

そう尋ねてきますが、まあ…… なんとというか。本当に、似たもの兄妹ですね……。

「あなた達兄妹はなんというか、規格外ですね……」

「恐縮だ」

「恐縮だよー!」

血は繋がっていないことは知っていますけど……。

しかし、まあ……よくもここまで似たものだと思ってしまうの。

いや、レイに影響されてステラがおかしくなってしまったのかも……？

とまあ……色々考えますが、このホワイト家の異質さに真正面から付き合っているのは体力が持ちませんわ。

ということを受付を済ませて　ホワイト兄妹はほぼ顔パスみたいなものでしたわ　わたくしたちは森の中へと入っていきます。

もうすでに冬も近くなっていて、木々は痩せ細っているため、いつもよりも視界が開けているとレイは言っていました……どこか不気味な印象を抱きます。

それはカフカの森とは違う、異質さ。

しかし二人は、その中を意気揚々と進んでいくのですが……まあきつと慣れているのでしょう。

そして、三人で歩みを進めるとさっそく魔物と遭遇。

「よし。ステラ。いけるな？」

「うん！　任せてよ！」

レイはあろうことが、ステラ一人に任せるようです。

しかし目の前にいるのは、ヒュージスコレピオン巨大蠍。砂漠地帯にいる有名な魔物ですが、この森にいるとは……流石に難度S級の森ですわね。

それにしてもあのサイズの魔物、しかもその鋭利な尻尾は天にそり立つようにして上がっていて……初めて見たわたくしはそんな魔物に怖気付いてしまいましたが。

「うりゃあ！」

ステラがそのまま森の中を颯爽とかけていくと、ヒュージスコービオン巨大蠍もまた彼女を捕捉。

その大きなハサミと尻尾を高らかに上げて、威嚇をしてるみたいです。

もちろん、ステラはそれを恐れることなくそのまま突っ込んでいくと……。

「よしっ！ 終わったよ！」

「……え？」

流石の手際にわたくしも啞然としてしまいます。今は魔術の兆候が見えなかったような？

それこそ、物理的に殴っただけのような？

「ふむ。やはりステラの技術は一流だな。俺と師匠が教えただけはある」

「えつとレイ。今のは？」

「今のはただ殴っただけだ」

「魔術は？」

「使っていない」

ま、魔術を使わずに魔物を倒す……？ そんなバカなことがありますの……？

「使わずにパンチひとつで倒したと？」

「ああ。ステラは生物の急所を見抜くのが得意だな。それに魔術強化なしの体術だけで言えば、俺を凌ぐのはそう遠くはないだろう。ステラは格闘のスペシャリストだからな」

「……」

人は見かけにはよらない、とはこういう時にいうものですね。

ステラはいつもニコニコとしていて、とても愛嬌のある可愛らしい子ですわ。

それこそ、わたくしの妹のティアナもこのような成長をするのかと期待するほどに。

しかし今見たものは、そんなイメージとはかけ離れたもの。

レイの妹。血が繋がってはいないとは言え、色々と規格外だとは思っていましたけど……まさかこれほどとは。

「アリアーヌちゃん！ 私、強いでしょ！」

えっへんとその小さな胸を張る姿を見て、思わず尋ねてしまいました。

「ステラはその……レイに鍛えてもらったんですの？」

「んーん。お兄ちゃんと、リディアさんだよー！」

「先代と当代の氷剣の魔術師ですか…… なんとというか、物凄い英才教育ですわね」

レイもまたステラが褒められて嬉しいのか、いつもよりも少しだけ饒舌に話をするようです。

「ああ。ステラは俺と師匠で鍛え上げたからな。魔術戦闘。特に、ジャングルなどではステラはすでに魔術師の中でも屈指だろう」

「なるほど。思えば、もしかして実家に戻ってきたのは？」

「そうだ。ステラにもアリアーヌの訓練を手伝ってもらおうと思っ
てな」

「そういうことだったんですの」

それを聞いて初めて得心がきました。

わざわざ実家に連れてくるのだから、この森で戦うこと以外にも理由があると思っていましたが…… まさか妹であるステラに協力を仰ぐとは。

「ではこれから訓練に入る！」

「レンジャー！ ですわっ！」

「レンジャー！ だよっ！」

わたくしがビシツと敬礼を決めると、隣でステラも大きな声で掛け声を上げます。

こうしてわたくしの訓練が本格的に始まることになりました。

第181話 三人での特訓

「ですわああああああああっ！」

「あはははー！ 逃げろ逃げろー！」

ドグマの森。

その中で訓練を開始した俺たちは、アリアーヌの背中を追いかけていた。

三日あるうちの一日目は、ひたすら鬼ごっこをすることにした。

これはエインズワース式ブートキャンプにも採用されているものだが……これは遊びではない。

訓練である。それも、地獄と呼ばれる訓練の一つでもある。

この鬼ごっここの質の悪いところは、捕まり続ける限り永遠に逃げることを強いられることだ。それに、圧倒的な圧力をかけて追いかけてくる鬼から逃げるのは……メンタル強化にもうってつけだ。

思えば、師匠が鬼の時はそれこそ地獄絵図が出来上がったものだ。

これでもかと圧力を撒き散らしながら、ゴリラが突撃してくるのである。大人でさえも、泣いてしまうことは多々あった。それがたとえ、軍人であっても。

そして、今回は俺だけでは^{プレッシャー}圧力が足りないということでも手伝ってもらっている。

アリアー又は自己評価が低いようだが、その実力はすでに学生の中では屈指だろう。それも伸び代はまだある。だからこそ、こうして追い込むことでその限界をさらに引き出そうとしているのだ。

「お兄ちゃん！ 私は左からいくね！」

「了解した。俺は右から行こう」

以前と同様に、俺とステラは魔術の使用はなし。一方で、アリアー又は^{インサイド}内部コードによる身体強化がありという条件下での訓練になっている。

今回の大会に際しては、アリアー又は俺に比肩する実力になってもらいたいと思っている。それは制限を取り払っていない状態の俺、という意味合いだ。

元々ポテンシャルは十分。

あとは森での戦闘を叩き込み、残りはしっかりと魔術での戦闘技術を教え込めば彼女はさらに飛躍的に伸びると思っている。

それに何よりも、アリアー又は気持ちが強い。確かに焦燥感や惑いなどはあるのだろう。しかし、それを全く見せずにこうして訓練に励んでいる。

本当にアリアー又は尊敬に値する人物だと思う。

「右……いや、左に流れるつもりか」

縦に巻かれた白金の髪ブラチナの毛を揺らしながら、彼女は颯爽と森の中を駆け抜けていく。

どうやら俺が右から迫りつつあるのを知ってか、左に逃げているようだった。

アリアーヌの選択肢としては、まっすぐ走り続けるか、左右のどちらかに逃げるしかない。

その中でも左を選択したのは、ステラならば突破できると判断したからなのか。

それとも、真正面からステラとぶつかってみたいと思っただけなのか。

それは彼女の表情などを見ることができないので、俺にはわからない。しかし、その背中からは闘志のようなものを感じる。

決してただ消去法的に逃げているわけではなさそうだ。

「もらったよっ！」

と、木を移動していたステラはアリアーヌに上から飛びかかる。だがそれを視界で認識することなく、スッと移動して躲すと彼女は疾走していく。

「ステラ。声を出す必要はない」

「あ……そっか。えへへ」

走りながら頭をかき、恥ずかしそうに照れるその姿。思わず頭を撫でてしまいたくなるほどの可愛いさだ。

しかし、今はそんな場合ではないだろう。

俺たちは並走しながら、次の作戦を練る。

「お兄ちゃん」

「どうした？」

「アリアー又ちゃん。すごいね」

「ああ。アリアー又は誰よりも努力家だ」

「そっか。なら、私も本気出しちゃおうかな！」

「魔術は使うなよ？」

「もちろん！」

その後。文字通り、本気を出したステラに何度も捕獲されることになったアリアー又だが、決して諦めの色は見えなかった。

制限時間は一時間。その間を逃げ切れれば彼女の勝利だが……ついに今日の訓練は、夜に突入することになった。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……！」

駆ける。

駆け抜ける。この暗くなった森の中を、微かな月明かりをもとに疾走し続ける。すでに体はピークに近いだろう。それはアリアー又だけではなく、こちらも同様。

この中でもおそらく一番体力のある俺でさえも、今は疲労感を覚

えている。

そして、魔術を行使し続けているアリアー又はきつと……一番辛い思いをしているだろう。

だが、情けはかけない。俺もステラも、いま持てる全力でアリアーを追いかける。^{ブレスチャー}圧力を緩めることはない。二人で森の中を駆け抜け、絶対に捕まえてやるという意志を示し続ける。

「負けません……絶対に負けませんわああああッ……！」

走っている先から、大きな声が聞こえてくる。

鼓舞。

それはきつと、自分を奮い立たせているに違いない。すでにこの鬼ごっこは何時間も継続して行われている。

さらには、途中で出現する魔物も回避しながら逃げる必要がある。夜ということもあり、アリアーの心労は尋常ではないものになっている。

俺とステラはこの森を完全に熟知している。また、俺に至っては夜戦の経験もある。夜の戦闘には慣れているのだ。

一番経験がないであろう彼女は、それでもただ懸命に逃げ続けている。

「ステラ」

「うん……まずいね」

今も並走しているが、俺たちは焦り始めていた。ステラも今までのような明るさはなく、ただ真剣な表情で走り続けている。

残り時間は十分。

身体強化に慣れてきたのか、それとも限界を突破したのか、アリアヌのパフォーマンスが上がっているような気がするのだ。

「お兄ちゃん。次のアタックで逃げられたら、終わりだよ」

「分かっている。俺が上から行って、注意を引く。ステラが下から確保しろ」

「了解だよ」

散開。

俺は上から。ステラは下から奇襲をかける。

颯爽と木々を飛び移っていく中で、アリアヌの位置は補足し続けている。それは視界だけではなく、彼女の気配そのものを追いかけているのだ。

魔術的なものではなく、訓練で身に付けた経験からくるものだ。

そうして、徐々に距離を詰めていき……俺はそのまま上からアリアヌの体へと抱きつくようにして襲い掛かる。

「……来ると思いましたわっ!!」

流石に何度もくらっているんで、彼女は俺の飛びかかるをギリギリで躲す。しかし、その逃げた先にはステラが控えている。

「ステラ！ 今だ！」

「分かってるよっ！」

低い姿勢で、タックルするようにアリアーヌへと思い切り飛びつくステラ。一方で、その攻撃を知覚したアリアーヌは懸命に体を動かして躲そうとする。

一瞬の錯綜。

アリアーヌは判断を誤ればここで捕まってしまう。だが俺は分かっていた。彼女には、唯一の逃げ道があるということ。

「んにゃああああああああああつー！！」

その雄叫びはアリアーヌのものだった。

そう。ステラのタックルはおそらく疲れのせいなのだろうが、今までよりも飛ぶ位置が低いものになっていた。

これまではしっかりと腰を狙っていたが、今はその下あたりに飛びついている。

アリアーヌはただ、その場で飛ぶようにして躲せばいいだけ。ステラもそれを分かっているようで、何とか彼女の体を掴もうとするが……。

瞬間。俺の腕時計が、音を鳴らす。

「終了か」

最後の攻防。

勝利したのは、アリアーヌだった。彼女はなんとかその場でジャンプをすると、くるりと綺麗にステラの突撃を躲したのだ。

そして、ボロボロになった体を地面に投げ捨て、大の字になって呼吸を整えようとする。

「はぁ……はぁ……はぁ……わたくし……はぁ……はぁ……勝ちましたの？」

「ああ。アリアーヌの勝利だ」

「うわーん！ 悔しいよおおおおおっ！」

ステラといえば、その場で本気で泣きじゃくっている。そんな妹の頭を優しく撫でる。

ステラは負けず嫌いで、負けるとよくこっして泣いたものだったが……どうやら、まだそれは変わらないようだ。

「はぁ……はぁ……おえっ……はぁ……う……今回はちょっと、本気で……死にかけましたの……」

「そうだな。今までの中でも、最も過酷な時間だっただろう。しかし、よく乗り越えた」

「はぁ……ここで、負けては……乙女が廃りますわ」

ニヤツと笑うだけの元気はあるようだ。しかし、体はいうことを聞かないのは間違いないだろう。

「よつと」

「うわっ！」

俺はアリアーヌを自分の背中に背負うと、そのまま歩みを進める。

「ステラ。帰るぞ」

「ぐす……うん……」

まだ泣いているステラだが、自分で歩くことはできるようだった。

「ねえレイ」

「ああ」

「わたくしは強くなれていますか？」

「もちろんだ。今日のこれを使い越えたのは、誇っていいだろう。

俺たち兄妹を躲すことができたのは感嘆すべきことだ」

「そう……そうですの」

後ろから涙を啜る音が聞こえてきた。それはステラのものではなく……きっと。

月明かりに照らされながら、俺たちは自宅へと戻っていくのだった。

第182話 乙女の会合

「ああ……本当に疲れた……死ぬわ。まじで……」

とぼとぼと歩みを進めているのは、アメリアだった。最近はいーゼロツテと訓練することが多く、それはまさに地獄だった。

レイとの訓練もまた、地獄と形容するのにふさわしいものだったが……それでも彼は、アメリアのことをしっかりと考慮してギリギリのラインで訓練を課していた。

彼には師匠であるリディアの教えがしっかりと残っているからだ。リディアは厳しい人間ではあるが、愛情を持ち合わせていた。

一方で、リーゼロツテは博識であり、七大魔術師でもあるが教えることに関しては素人に近い。

そのため、アメリアの様子を伺うことなく毎日淡々と作業とも呼ぶべきトレーニングを行わせ続けていた。それに加えて、何よりも彼女の心を悩ませているのは……レイとアリアーヌのことだった。

今頃は二人でトレーニングをしているに違いない。

羨ましいと思う感情と、トレーニングの過酷さを考えると、その葛藤で頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

それに……アメリアはマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の訓練においてレイに対

して恋心を抱くようになった。

もしかして、アリアーヌも……？

そう考えるのも、無理はなかった。

何よりもレイは誰に対しても誠実に接する。相手の気持ちを推し量るのは得意ではないみたいだが、誰にでも思いやりを持って接してくれる。

そんな彼に惹かれるのは……理解できてしまう。

その危機感は果たして、現実のものになってしまうのか。

「はあ……ただいまあゝ」

寮の扉を開けて、誰もいないがそうやってみた。そうして自室へと向かっている途中で、曲がり角から金色の髪がわずかに出ているのが見えた。

「あれ？ クラリス？」

「あ！ アメリアじゃない！」

話しかけられると、クラリスはパタパタと走って近づいていく。その後ろにはエリサもいた。

二人とも、会うのは久しぶりだと思いつつ……アメリアは疲れた顔のまま話を続ける。

「ぐ、偶然ね！」

「まあそうね」

明らかに挙動がおかしかった。クラリスの目はキョロキョロと忙しなく動いているし、表情も硬い。そう思っていると、エリサが後ろからニコリといったものように優しい笑みを浮かべる。

「もう。クラリスちゃん。それだと不審者みたいだよ？」

「ぐ……こればかりは、その通りだわ……」

「？　もしかして、待ってくれてたの？」

現在は三連休。

実家が近いものは、帰っている生徒もいる。閑散とはしていないが、寮にいる生徒はいつもよりも少ない。

そんな中で、エリサとクラリスが待っている理由とは……。

「うん。アメリカちゃん。最近とっても、疲れてるでしょ？」

「あはは……まあね……」

否定はしなかった。

正直言つて、かなり辛い。いくら大会のため、そして自分自身の魔術を制御するためとはいえ、連日の訓練はかなり堪えていた。それは心身ともに。

「だからその。私たちで、おもてなしできないかなって」

「おもてなし？」

「うん！　今日は私がお料理を作って、マッサージとかするよ！」

瞬間。

アメリカは自分の鼻をなんとか抑え込むことに成功。

幸いなことに、鼻血は垂れていなかった。

「もしかして、二人がなんでもしてくれるの？」

「うん！ アメリカちゃんのために頑張るよっ！」

「ま、まあ……最近はあるまり話もできてなかったし、いい機会になった。か、勘違いしないでよ！ 別にその、私が寂しかったからとかじゃないんだからねっ！」

エリサはいつものように大天使。

クラリスもいつものように、ツンデレを発揮している。

そんな二人がなんでもしてくれる……？

もちろんアメリカの脳内では、邪な考^まえが過りまくっていた。

「よし！ じゃあ私の部屋に行きましょうー！」

先ほどまでの疲れはどこに行ったのか。アメリカは意気揚々とその言葉にすると、三人でアメリカの自室へと向かうのだった。

「ん〜！ おいしいっ！」

パクリと一口食べるそれは、エリサの作ってくれたシチューだった。野菜がたくさん入っており、何よりもクリーミーで美味しい。

クラリスも野菜を切るのを手伝ってくれたようで、そんな二人の気遣いが心よりも嬉しかった。

「エリサ！ あなたは将来、お店を開けるわ！」

「あはは。ありがとう、アメリカちゃん」

はつきりと言われるので、エリサは頬を赤く染めて感謝の言葉を述べる。

こうしてゆつくりと食事を取るのはいつ以来だろうか。

今までは心身ともに休める時間もなかったなので、アメリカはいつも以上にはしゃいでいた。

「ふん。ま、まあ……美味しいんじゃない？」

「そんなこと言うクラリスちゃんには、おかわりは上げませーん」

プイッと横を向いて拗ねる仕草を見せる。エリサもまた、明るくなったものだとアメリカは内心で思っていた。

「え、エリサ！ そんな！」

「じゃあちゃんと言って？」

「ぐ……！」

ツンデレの血がそうさせるのか、はつきりものを言うことにはまだ慣れていないクラリスだが……彼女も少しずつ変わろうとしているのは間違いなかった。

「お、美味しいわよ！ とっても美味しいわっ！」

「ふふ。ありがとう。クラリスちゃん」

そんな二人の仲睦まじいやりとりを見て、アメリカは微かに笑みを浮かべる。

「アメリカちゃん」

「ん？　どうかした」

「元氣、出たかな……？」

「そうね……」

二人がここまでしてくれたのだ。元氣が出ない、なんてことはあり得なかった。

「もう元氣いっぱいよ！　本当にありがとう。二人ともっ！」

欲を言うならば、みんなと一緒に過ごしたかった。いつものみんなで、同じ食事を共にする。そして些細なことで笑い合い、かけがえのない時間を共有する。

しかし、今はそうも言ってられない。

今回の大会では、それぞれの人間の想いがかかっていることをアメリカは知っているからだ。

「「ごちそうさまでした」

「「ごちそうさまでした」」

三人で手を合わせて食事を終える。

もちろん食事を終えた後にすることといえは……。

「よし！ みんなでお風呂に入りましょう！」

「「え……！？」」

声が重なる。

確かにこの寮は大浴場がついているが、今はちょうど時間も過ぎ
てしまった頃だ。つまり、アメリアの発言が意味するのは……この
部屋にあるお風呂と一緒に入ろうということだ。

一人にしては大きな浴場だが、流石に三人となると手狭になる。

それをわかっているからこそ、エリサとクラリスは声を上げたのだ。

そして、そのアメリアの言葉が意味するところを……そのいやら
しい表情から理解してしまった。

「あはは……私はちょっと用事が……」

「エリサ。ここは覚悟を決めるべきよ」

「で、でもっ……！」

「話し合ったでしょう。こうなることも覚悟しておくべきって」

何やら二人で話しているが、アメリアにはすでにそんな声は聞こ
えてなかった。と言うのも、彼女はあるうことかその場で服をばい
ばいと脱ぎ始めてしまっていたからだ。

貴族の令嬢ではあるが、今は一人の少女。

何よりも、アメリアは興奮しており、ニヤニヤと笑いながら裸で
浴場へと向かっていく。

「よし！ じゃあ行きましょう！」

有無を言わせないアメリカの言葉に、二人は従うしかなかった……。

「ふう……いいお湯だったわね！」
「……………」

テカテカとアメリカの肌が光っているのは、気のせいではない。その浴場での出来事は、いくら同性とはいえずいものでは？ 一線を超えているのでは？ と、思うほどに過酷なものだった。

「うう……胸が痛いよう……」
「私も……………」

自分の胸元を抑える。果たして、そこでは何が繰り広げられたのか……それは当人達しか知る由はなかった。

その後は、とても機嫌の良いアメリカが食後のデザートというこ
とで残しておいたフルーツの盛り合わせを振る舞ってくれた。

本当は夜食用に保存していたのだが、一人で食べるよりはずっと
いいと思ってみんなで食べることにした。

そうして時刻が0時を回った頃、そろそろ寝ようかという話にな
ったが……。

「よし！ 二人とも泊まって行きなさい！」
「「え……………！？」」

その後、再び繰り広げられた惨劇は……果たしてどうなったのか。

この日、エリサとクラリスは、ある意味で地獄を見るのだった。

第183話 二日目の訓練

訓練二日目。

俺とステラの猛攻を掻い潜ったアリアー又は、森での戦い方を学んだのか、体の動かし方が今までとは段違いに良いものになっている。

「アリアー又訓練兵！ 今のは右に移動するべきだ！」
「レンジャー！ ですわ！」

今日もまた、森での戦闘を繰り返す。

今回は俺とステラがローテーションで、魔術ありで徒手格闘戦を繰り返している。制限時間は一人三十分。休憩時間は十分。

その休憩も、俺からのアドバイスを聞く必要があるため、彼女には実質的な休憩はなかった。

だがそれでも、文句を言わずに懸命に食らいついてくる姿を見て俺は内心では感嘆を覚えていた。

いつか心が折れてもおかしくはない。その時はしっかりとサポートしようと思っているのだが、そんな気配はない。

ボロボロになりながらも、前に進み続ける姿は……いつかの自分を思い出させる。

そして俺との戦闘が終了し、休憩時間となった。

タタタとこちらに走ってくると、今の戦闘を振り返る。

「最後はどうして、左に避けた？」

「それは……体が勝手に動いてしまったんですの……」

「魔術による防御に頼り切りになっているからだ。あの時の最善は、右に避けつつ木の裏に隠れるべきだった」

「むう……難しいですね」

どうやら、彼女なりに受け止めている様子だった。

「戦闘をしている最中でも、周囲の情報は視界に入れる必要がある。それこそ俯瞰的な視点が欠かせないだろう。俺も戦闘中は適宜サポートするが、最低限は自分で動いてもらう」

「レンジャー！　ですわ！」

そう。

カフカの森で行われる拠点防衛では、俺とアリアーヌが主軸になって戦う必要がある。

おそらく二人の完成度が大きく影響を及ぼすのは間違いない。決してアメリカが必要ないわけではないが、防御と攻撃の両方をこなす必要のある俺たちには、最低限の戦闘技術は必要だ。

しかも、戦いの舞台は森の中。

つまりは木々を壁にしながら、相手と対峙するのだ。

魔術の射線管理、さらには近接戦闘。加えて、拠点に入っている
アメリカの防御も念頭におく必要がある。

ただ闇雲に戦えばいいというわけではない。

戦闘クス・ウオーにおいて、かなりの頭脳戦も要求されてくるのが今回の大規
模魔術戦。

これ考えた人はおそらくアビーさんだろうが、本当にあの人ら
しいルール設定である。

「よし！ では次はステラとやってみよう！」

「レンジャー！ ですわ！」

「レンジャー！ 私も頑張っちゃうよー！」

次はアリアー又ステラということで、俺は客観的に戦いを見る
ことができる。

「では制限時間は三十分。始めッ！」

と、声を上げた瞬間に動き始めていたのはステラだった。

アリアー又は俺との一戦があるので、まだ微かに疲れが残ってい
る。一方のステラはこれが初戦なので、フレッシュな状態だ。

しかし、アリアーも中々に成長しているようだった。

「む……やるね！」

「負けませんわ！」

ステラの近接戦闘技術は俺と師匠が教えたこともあり、すでになりのレベルに仕上がっている。それこそ、以前のアリアーヌと比較するならばステラの方が強いと俺は思っていたが……。

今は完全に実力が拮抗している。

驚くべきはアリアーヌのその成長速度だろう。もともと荒削りな才能ではあった。だが、こうして指導をしてみると実力がかなり伸びていることが窺える。

ステラもまた理解しているのか、完全に攻めあぐねている。体格ではアリアーヌの方が圧倒的に有利だが、ステラにはその小さな身体ゆえに敏捷性がかなり高い。

気がつけば背後に回られている……なんてことは、ざらにあることだ。

しかし、アリアーヌはステラの攻撃を完全に捌いている。ステラもなんとか攻撃しようと、攪乱を試みるが……それも完封。

互いに拳、そして蹴りを繰り返す。

アリアーヌが拳を繰り出し、それを屈んでステラが躲すと、脚をバネのようにして思い切り腰に抱きついて寝技に持ち込もうとするが……それもまた、あっさりと流されてしまう。

その二人の戦いを俺はじつと見つめる。

まずは分析。俺が先ほど教えた通りにアリアーヌは動いているの

か。

こればかりは、やはり慣れの部分が大きくなってくる。人間は頭では理解できていても、咄嗟の判断では本能的な行動に出てしまう。幾度となく繰り返すことで、頭ではなく反射で最適解を出せるように訓練するべきなのだが……。

こればかりは、どうやらもう少し時間がかかるようだった。

「よし。そこまでだ」

二人に終了を告げると、互いに丁寧にその場で一礼をする。

「今のはどうでしたの？」

「そうだな。悪くはない。だが、ステラの敏捷性を恐れて弾き過ぎたな。あの距離感での戦闘になると決定的な攻撃はできないだろう」
「ぐ……まさにその通りですわ……」

苦虫を噛み潰したような顔をするが、本人も自覚しているのだろう。だが、不必要に飛び込んでしまえば、ステラの返り討ちに合うのは自明。

その葛藤の中で戦っているのは、俺も理解していた。

「アリアー又ちゃん！ マジで強いよ！ お兄ちゃんの次にはやばいかも！」

「そ、そうですもの？」

「うん！」

一方のステラといえば、素直に褒め言葉を口にしていた。今となつては、すっかりアリアーヌに懐いてしまったようだ。俺としても嬉しい限りなのだが。

「よし。では次は俺の番だな。あらゆる敵を想定して、俺は戦闘スタイルを変えていく」

「え……そんなことができますの？」

「ああ。だから気合いを入れて臨むと良い」

「レンジャー！　ですわ！」

その日もまた、俺たちは日が暮れるまで訓練に励むのだった。

「はあ……はあ……はあ……」

「よし。では今日はここまで」

そういうと、アリアーヌとステラはその場で敬礼をする。

「レンジャー！　ですわ！」

「レンジャー！」

今となつてはステラもまた、完全に訓練に参加して今日もへ口へ口になるまで体を動かしていた。

まずはステラを背中に背負うと、アリアーヌの腕を俺の方に回して寄り添う形で歩みを進める。

「う……レイ。申し訳ありませんの……」

「気にするな。動けないくらい追い込んだからな。家に戻ったら、食事をとって風呂にでも入ると良い。明日も訓練だからな」

「れんじやく、ですの……」

完全に意気消沈している。

今日といえば、ひたすらに俺とステラと戦い続けたからな。その度にアドバイスをされて、修正しつつ戦闘を行い続ける。

ただ体を動かせば良いというものではなく、適宜自分の立ち位置なども確認した上での戦闘。

加えて魔術も使用しているのだ。その疲労はとんでもないことになっているだろう。

「すう……すう……すう……」

背中から寝息が聞こえてくる。

「ステラは寝てしまったようですね」

「どこでも寝ることができるからな。きっとかなり疲れていたんだろっ」

ギュツと俺に抱きついているが、ステラは完全に眠っていた。そして、隣でなんとか歩みを進めているアリアーもその声から疲労感が伺えた。

「レイはずっとこのような日々を？」

「そうだな。師匠に拾われてからは、生きるために必死だった。幼少期からこの手の訓練は日常茶飯事だった」

「……とんでもないですね。でも……」

「? どうかしたのか？」

少しだけ間を置いて、アリアー又はこちらに顔を見せずにこういった。

「レイのことが少しだけ分かってきたような気がしますの」

それは優しい声音だった。今までの中でも一番、何か感情がこもっているような……そんな声色だった。

「そうか？」

「ええ。レイってば、ちょっとおかしな人と思っていましたけど……やっぱりあなたはとつてもすごい人ですわ」

「恐縮だが、おかしな人は言い過ぎだろう？」

「ふふつ。そんなことはありませんことよ」

と、さらに体を俺の方に寄せてくる。その際に、女性特有の甘い香りが鼻腔を抜けていく。そして、柔らかい体がギュツと押し付けられる。しかしまあ……疲れているのだろう。

俺は彼女の体もしっかりと支えながら、共に歩みを進める。

「レイ。勝ちましょうね」

「もちろんだ」

俺たちはきつと優勝してみせる。改めてそう誓い合っただった。

第184話 上流貴族のお嬢様

「おーっほっほっ！！ これは私たちのチームの勝利よ！」

午後。優雅にティータイムを楽しんでいる一人の生徒。

メルクロス魔術学院。ここは、三つの学院の中でも最も魔術に主眼を置いている場所だ。

そのため、他の学院よりも血統主義の貴族が多い傾向にある。

魔術こそが全て。血統こそが全て。

そのように教育され、この学院でもまた同じように序列が決定される。

三大貴族は現在に通っており、現在このメルクロス魔術学院のトップに君臨するのは……上流貴族である【ハートネット家】だ。

しかし貴族社会の序列でいえば、アルバートの【アリウム家】とクラリスの【クリーヴランド家】には劣る。

そのため、ハートネット家の人間はその二つの家の人間よりも秀でていることが求められる。

そして、そんなハートネット家の長女。

シャーロット＝ハートネットは誰よりもその血統にこだわる人間に育った。

幼い頃から彼女は劣等感に苛まれてきた。それは他の上流貴族もそうだが、何よりも三大貴族に対して強いコンプレックスを抱いている。

アメリカ＝ローズ。
レベッカ＝ブラッドリイ。
アリア＝オルグレン。

昔からパーティーでよく顔を合わせているが、その三大貴族で当たり前という表情が気に入らなかった。

自分は誰よりも麗しくて、こんなにも美しく気高い。

綺麗な色素の薄い青色の髪。スタイルも抜群で、胸はしっかりと出ており腰はキュッと引き締まっている。加えて、身長も175センチと高い方だ。

だというのに、どうしてあの三人よりも下というレッテルを貼られているのか。

そんな彼女は傲慢ではあったが、才能があった。

魔術の才能が貴族の中でもトップクラス。それは三大貴族に肉薄するほどに。

だが、今年の魔術剣士競技大会ではレベッカにあっけなく敗北を
してしまい……彼女は復讐を誓った。来年こそは、あの頂点に立つ
のは自分だと。

そんな矢先に入ってきた大規模魔術戦の話。それに飛びつかない
シャーロットではない。

彼女はすぐに、チームを組んだ。そして、現在は発表された各リ
ーグを見て高らかに笑っているのだった。

「見なさい！ ケイシー、キャシー！ チーム：オルグレンがいる
わ！」

「「そうでございますね。お嬢様」」

胸にわずかにかかる綺麗な青い髪を後ろに流しながら、シャーロ
ットは喜びの声を上げる。

その後ろに控えているのは、メイドの二人。

姉である、ケイシー＝シャーリエ
妹である、キャシー＝シャーリエ

一卵性双生児であり、その見た目は完全に酷似している。唯一の
違いといえば、ケイシーは右目のしたに泣き黒子ほくろがあり、キャシー
は左目のしたに泣き黒子がある。

身長は165センチ、胸の大きさ、体重、全体の体のバランス。
さらには得意な魔術から苦手な魔術まで酷似している。

シャーリエ家は代々、ハートネット家に仕える一族である。

この三人は年齢も同じで、幼馴染ではあるが主人とメイドという一線は常に保たれていた。

「うふふふ！ あのオルグレンとローズがいるなんて！ でも……許せないのは……」

グシャと発表されてリーグ表を握り潰す。

Aリーグには、チーム：オルグレンとチーム：ハートネットが入っていた。その他にもチームは存在するが、シャーロットは誰よりもチーム：オルグレンに固執していた。

それは、アメリカとアリアーヌの存在もあるが……彼女はその二人よりも許せない存在があった。

「レイ＝ホワイト。この存在だけは許すことはできません」

さらにギュツと紙を握り潰すと、ぱいっとそれをケイシーに向かって投げ捨てる。

「で、調査はしたの？」

「はい」

「教えなさい」

すると妹であるキャシーが前に出てきて、調べたことを伝える。

「レイ＝ホワイト。オーディナリー一般人出身。魔術師としては並以下です」

「ふ……本当に笑いだわ。そんな存在が、魔術学院にいるなんて……」

血統を重んじるシャーロットにとって、レイの存在は入学当時から目の敵のようなものだった。

しかし、学院は違う。

大人しくしているならば、シャーロットも不快だが、何かをすることはなかった。だというのに、彼は大規模魔術戦マギクス・ウォーに出場してきた。そのことが何よりも、許しがたいものだった。

身の程を弁えない一般オーディナリー人。

今こそ、神の鉄槌を下してやろうと。

同じリーグになったからには、必ず戦いになる。

そこで三大貴族の二人を下して、さらには一般オーディナリー人にも身の程を思い知らせる。

こんなにも心が踊らないことはなかった。

「しかし……」

「何かありました?」

キャシーは言い淀むが、すぐに言葉を続けた。

「レイ〃ホワイト。他にも噂があるので」

「言ってみなさい」

「まずは三大貴族の令嬢と仲が良い。加えて、あのアメリカ〃ローズ嬢の魔術剣士競技大会新人戦優勝に貢献したとか。また、近接戦

闘が得意。などなど、おおよそ^{オーディナリー}一般人ではありえない噂があるので
す」

「ふん。どうせ、そんなものは嘘に決まっているわ。自分を大きく
見せるために、そんなことをほざいているのよ」

「そして……ちよつとカツコ良かったです」

キャシーは素直に自分の感想を述べた。

というのも、あの精悍な顔つきは実は女子の間では人気があつた
りするのだ。おそらく、一般人ではなく^{オーディナリー}貴族の出身だったならばレ
イは今以上にモテていることだろう。

「……それは、本当に？」

血統を重んじるシャーロットではあるが、男性の顔を重視するの
も当然。何よりも、彼女は面食いと呼ばれる部類の女性だった。

自分よりも格下の男に惚れるなんてことはありえないが、自分の
下につくというのならば、飼ってやってもいい。そう思っているほ
どには、彼女は高飛車であつた。

「はい。ねえ、ケイシー」

「キャシーと二人で調査しましたが、お嬢様好みの顔かと。それに
体つきも悪くありません。これを機会に、お嬢様が飼うのもよろし
いかと」

「うふふ。それは楽しみが増えましたわねえ……」

ニヤリと人の悪い意味を浮かべる。

大言壮語なことを言っているが、実際に今までケイシーとキャシ

ー以外を下に従えたことなどない。

ましてや、男性に対しては免疫のないシャーロットである。

しかし、興味はある。これを機会に、レイ＝ホワイトを自分のものにしてもいいと思っている。

それに、三大貴族の令嬢と仲がいい……というのは噂では聞いていた。

あの三人から彼を奪う。そのシナリオもなかなか楽しいものだと思うと、愉悦で顔が歪む。

「お嬢様。ブサイクですよ、お顔が」

「ちょ！ 主人に向かってその言葉はどうなの！？」

「申し訳ございません。つい、お口が滑ったようで」

「しかし、今は私もなかなかブサイクかと思いました」

淡々と答えるキャシーとケイシー。

主人とメイドという関係ではあるが、三人は生まれた時から一緒に育ったのだ。ある意味、親友でもありこのように辛辣な言葉をメイドの二人がいうのは日常茶飯事だった。

もともと、そんな関係をシャーロットが気に入っているもあるが。

「全く。二人は後でお仕置きね。で、勝てるの？」

「もちろん」

「お嬢様と私たち二人が揃えば、無敵です」

それは決して虚勢ではない。

ずっと一緒にいた三人は、互いのことを全て知り尽くしている。シャーロットがベッドの下にいかがわしい本を隠していることまで把握しているほどに。

つまりは連携という一点においては、今回の大会では随一。

レイ達もすでに彼女達の存在は認知しており、警戒しているほどだ。

傲慢で高飛車ではあるが、その実力は間違いなく学生屈指。

「して、お嬢様」

「何よ？」

「そろそろ周囲の視線が厳しいのですが」

ケイシーとキャシーが交互に言葉にしたのは、実はメルクロス魔術学院の中庭に勝手にテーブルとイスを持ち込み、勝手にティータイムをしているからだ。

教師達もその愚行には呆れ果て、もはや注意もしなくなった。ただ、この学院の名物として語り継がれているものになっている。

中庭でポツンとティータイムを楽しむ上流貴族。

それが、シャーロットとハートネットだと。

「私たちは恥ずかしいので、そろそろ失礼します」
「失礼します」

と、二人はそのままスタスタと校舎へと向かってしまう。

「ちょ！？ 主人を置いて行くなんて、馬鹿なの！？」

マジクス・ウオー
迫る大規模魔術戦。

果たして、チーム：オルグレンとチーム：ハートネットの戦いは
どうなるのか。

第185話 燃え上がる乙女ですわっ！

三連休の最終日がやってきた。

夕方には学院に戻るために移動しなければならないので、今日のメニューは正午過ぎには終了する予定だ。

「ですわああああああっ！！」

疾走する。

森の中を縦横無尽に駆け回るアリアーヌを俺は追いかける。今回は以前とは異なり、全員が魔術を使用している。

だが、追いかけているのは俺一人であり、アリアーヌはステラと仮想チームという想定で森で戦っている。

今回の訓練のルールは、ステラとアリアーヌの二人で俺の胸にある薔薇を散らすことだ。限りなく本番に近いルールで行う戦闘。また、ステラはあくまで補助に過ぎない。

アリアーヌが主軸となって俺に立ち向かう必要があるのだ。

いうならば、俺は仮想ルーカスⅡフォルストと言ったところだろうか。

「なるほど……そうきたか」

現在は、アリアーヌが突っ込んできたのでその相手をしているが、木の上からステラが虎視眈々と機会を狙っているのも把握している。

「まだまだですわあああああつ！」

この短期間で、その近接格闘の練度はかなり上がっていつている。それに、森の中での戦いもかなり熟知してきている。足を取られないように、^{プリママテリア}第一質料の配分を体全体にバランスよく施している。

本当にアリアーヌの飲み込みの速さには感嘆を覚える。

捌く。捌く。捌く。

そして、ついにアリアーヌは俺の腰に向かってタックルをしてきた。

その瞬間。

ステラがここぞとばかりに、俺にしがみ付いてこようとす。

おそらく流れとしては、ステラが俺を拘束してアリアーヌがどめを刺すと言う算段なのだろうが……。

「うわっー!!」

上から突撃してきたステラの腕をがっしりと掴むと、思い切り放り投げる。もちろん、空中でも受け身のとれる彼女はくるっとその場で反転すると綺麗に受け身をとる。

と、次は意識の外からアリアーヌが尋常ではない速さで迫ってきていた。

後方。完全に死角ではあるが、俺はその場に思い切りしゃがみ込む。

「なあ……っ！！？」

空振り。

タイミングを完全に逸した彼女は、胸がガラ空きになっていた。もちろんここで躊躇するような俺ではない。

「アリアーヌ。腹に力を入れるよ？」

せめてもの手向けとして、そうアドバイスを送る。

そして、俺は内部インサイドコードを存分に走らせた拳を躊躇いもなくアリアーヌの腹部へと叩き込んだ。

「ぐ、ううううううううっ！！」

落ち葉を撒き散らしながら地面を無造作に転がっていくが、しっかりと受け身は取れているようだった。

そうしていると、二人の気配が消える。

おそらくは体勢を立て直す気なのだろう。

「さて、どうするか」

足をトントンと地面につけて、思い切り体を伸ばす。

二人が次はどんな攻撃で来るのか。俺はそれを、心待ちにするのだった。

「う……ぐう……」

「アリアーヌちゃん。大丈夫？」

「な、なんとか……」

あ、危なかったですわ。

あの攻撃。レイの言葉がなければ、きっと気を失ってしまったの。
自分の腹部に第一質料を収束させて、なんとか防御できましたが……
……レイのあの拳はとんでもない威力。

もう少しで、意識が飛ぶところでしたが……なんとかステラと二人で体勢を立て直します。

「で、次はどうするの？」

真剣な表情で、ステラが次の指示を尋ねてきますが……次にすることは決まっています。

「鬼化^{オーガ}を出しますの」

「いいの……？ 使用は一回きりだよね？」

「ええ。でも、ここでタイミングを逸すると次の機会はありませんわ」

「わかった。じゃあ私が攪乱するから、なんとかお兄ちゃんを倒してね」

「任せてくださいまし」

自分の胸に手を当てる。

レイ＝ホワイト。

こうして何度も立ち向かっているからこそ、分かります。使用している魔術は、内部コードインサイドのみ。だというのに、その圧倒的な強さ。

わたくしレベルの魔術師では、到底届かない存在だと分かっています。決して諦めたりはしませんわ。

乙女たるわたくしが、ここで折れるわけにはいきません。

それにレイはずっと教えてくださいました。まだまだ未熟である自分に多くのものを与えてくれて……だから、それに報いるためにもここは絶対にレイに勝ちたいと。

そう思っのはきつと、彼に出会えたから。

わたくしもきつとアメリアのように変わることができるなんて信じて、この先も戦いますの。

「アリアーヌちゃん。がんばろうね」

「ええ。よろしく願いますわ」

ステラがギュツとわたくしの手を握ってくれます。この三日という短い期間でしたが、彼女にはとてもお世話になりましたの。いつもニコニコと笑っているけれど、こうして戦っているときの姿はレイにそっくり。

血の繋がった兄妹ではありませんが、二人は本当によく似ていて、兄妹とは決して血のつながりだけではないと知りました。

そんなステラにも、わたくしは報いる必要がありますの。

今まではずっと一人で、努力に努力を重ねて進んできました。いつかアメリカと和解できると信じて、前に前にただ愚直に。

でも、人生はもつと長いものだとなりました。

きっと彼との出会いはわたくしの今後の人生の指針を決めるような、そんな大きなものになると予感していますの。

こんなことを言えば、アメリカとレベツカ先輩に怒られてしまうかもしれませんが……今となつては、レイに惹かれるのもよく分かっています。

心の中に何か芽生えているような……そんな感覚が胸の奥に残っています。

「では、次会うときはレイに勝利する時ですわ」

「うん！ お兄ちゃんに勝とうねっ！」

そんな約束を交わす。

最後に入念にステラと作戦を練ると、わたくしたちは森の中をさらに駆け巡っていくのでした。

「はぁ……はぁ……はぁ……！！」

呼吸が荒い。体が痛い。間違いなく、全身が悲鳴を上げていますの。

でも、止まることはない。止めることなどできるわけがない。

自分という存在を証明する。わたくしもアメリカのように、前に進めるのだと。そう信じてレイについできた集大成が、きっと今だと思うのです。

我慢するのは慣れている。けれど、この森での戦闘という未知はわたくしに容赦なく襲いかかりました。

心が折れそうな時もありました。でも、なんとかギリギリのところで耐えて、耐えて進んできました。

周囲の評価は自由奔放。誰よりも気高い存在だと評価されているのも、知っています。

でもわたくしは、そんな大した存在ではありませんの。

正直言って、魔術師の才能はアメリカやレベツカ先輩よりも劣っているのは知っていました。わたくしには魔術師らしい才能よりも、インサイト内部コードという魔術に適性が高かった。

しかし、貴族社会では身体能力が高く、実戦能力が高いということとはあまり評価されません。評価されるのは、華々しい魔術。それこそ、アメリカの因果律蝶々やレベツカ先輩の魔眼などはその最もたるものでしょう。

知っていますの。

アリアーヌ^{バタフライエフェクト}とオルグレンは戦うしかできない、愚か者であると評価されているのも。オルグレン家のその適性は、貴族らしくはないと。そう噂されているのは、幼い頃から知っていました。

でも、魔術師らしいって、なんですか？

自分らしいって、なんですか？

そんなものはきっと、ないんですね。それは、自分自身で定義しないといけない。

だからわたくしは、自分の中にある【理想の乙女】を求め続けているんですわ。

乙女たるもの、ここで負けるわけにはいきませんのっ！！

「いましたわ……」

レイの姿を確認。

しかし、木の上からわたくしが覗いている事はお見通しなようで、彼はすぐにわたくしに視線を向ける。

それと同時に、鬼化^{オーガ}を発動。

今回は一度だけ使用を許されているので、ここで彼に肉薄しなければ全てが終わってしまう。

いえ、そんな気概ではダメですわ。

彼に勝つ。

そう心に刻みつけます。

今こそ、乙女としての自分が燃え上がる時なのですからっ！！

そう覚悟を抱いて、わたくしは木から飛び降りるとそのまま思い切り駆け抜けていきます。

「はああああああああっ！！」

軽い。

身体はここ数日の訓練で悲鳴を上げている。それは自分のことだから良くわかります。

けれど、どうしてでしょうか。こんなにも、自分の血が湧き立つような感覚になるのは。

見据える。

その黒い双眸が、わたくしの姿をしつかりと捉える。

レイにとって、わたくしの切り札である鬼化^{オーガ}は対処できる範囲の魔術。それは以前の経験から知っていますが、それでも諦めたりはしませんわ。

彼は言ってくれた。わたくしには、まだまだ伸び代があると。ならば、今までの特訓で絶対に自分は成長していると信じてそのまま突撃。

「ぐ……っ!!」

振り抜いた拳をガードされますが、それは承知の上。ここからは手数が勝敗を決める。わたくしは、ありったけの力を込めてレイと戦い続けます。

森の中を縦横無尽に駆け巡りながら、互いの位置を入れ替えるようにして、めくるめく攻防を続ける。

圧^おしているのは、わたくしなのは分かっています。しかし、決め手にかける。レイもそれは理解しているようで、攻撃よりも防御に専念しています……いや、というよりもカウンターを狙っているような。

脳内に過る。

思えば、今まではただ愚直に攻めるだけだった。でも彼の教えによつてわたくしは多彩な攻撃パターンを覚えて、駆け引きというものを覚えました。それに、森には数多くの木々がある。

魔術による射線を切りながら、適宜攻撃を繰り返していく。

その基本に忠実に従って、攻める。攻める。攻めるっ！！

鬼化^{オウガ}を使用しているため、四肢は赤く黒いコードが可視化できるほどに走り、徐々に痛みが増していきます。

その痛みを受け入れながら、わたくしは攻撃を続ける。ここで攻撃をやめて仕舞えば、全てが終わってしまう。

だからわたくしはずっと待っていた。

ステラが待機しているその位置に、レイが後ずさっていくことを。

「ステラ！ 今ですわっ！！」

「了解だよっ！！」

と、彼女が出てくるのはいつものように木の上からではなかった。そう。ステラは、地面に潜って待機していたのです。

曰く、「一時的にならお兄ちゃんに感知できないくらいには、気配を消せるよ」とステラがいうので木の上ではなく、奇襲も込めて地面に潜るようにわたくしが提案したのです。

「ぐ……そっちかつ！？」

レイも流石に慌てているようで、ステラの体がレイに巻きつくようにして拘束に入ります。その瞬間をわたくしも逃すわけはなく、全力でレイの胸にある薔薇に手を伸ばしますが……。

「うわっ……！！」

「ふんっ!!」

あろうことが、レイはそのまま自らの体を地面に叩きつけたのです。その瞬間に、ステラも思い切り潰されてしまい、拘束が解けてしまいます。

「あ……」

啞然とした声が漏れる。

全てがスローモーションのように……見える。

完全に機会を逸してしまった。ステラが作ってくれたチャンスを、逃してしまった。

ここから先、勝てるイメージなど湧くはずもなかった。

ああ。結局わたくしは、あの時のように負けるしかないのでしょうか？

ここまで頑張ってもレイに届く事はない？

いえ。違いますわ。

そんな弱気になるわたくしは確かに存在している。

でも、彼は言った。

人は誰もが弱い生き物であると。

ならばわたくしは、そんな自分を受け入れるしかない。

魔術師らしい魔術師になれなくてもいい。

ただ、これが自分らしいと思える自分になるのだと。

そう焦がれてたどり着いた瞬間がきつと、今なのです。

ならばここでわたくしが諦めていい道理などありませんわ。

きつとこれはちっぽけな自分との、矮小な自分との、戦い。世界から見れば、アリアーヌ「オルグレンの存在など塵にも等しいに違いない。

しかし！

乙女たるわたくしは、自分の理想の乙女にたどり着くんですわっ
！！

今のわたくしは、燃え上がる乙女なのですわっ！

ドクン。ドクン。ドクン。

心臓が高鳴る。

愚直にただ進んできた人生。けれど、省みる事はなかった。それは過去と向き合うのが怖かったから。自分の立ち位置を知ることが怖かったから。

わたくしは同じだった。アメリカと同じかそれ以上に、貴族としての自分の在り方を恐れていた。

だから、前向きで明るい振りをして、そんな過去と決別をした。

けどアメリカが向き合ってきたように、わたくしも自分に向き合うべき時なのだと。

彼女がそう、教えてくれましたの。

そうして　　レイに立ち向かっていきました。

乙女として、全身全霊をかけて　　。

後のことはよく覚えていません。ただ、わたくしの体から溢れんばかりの雷撃が走り、気がつけば手の中に焼け焦げた薔薇がありました。

「え……？　わたくしは……？」

意識が現実に戻ってくる。

すると目の前に広がっているのは、見渡す限りの氷の世界。地面だけでなく、木々も完全に凍りついています。

まるで凍てつく氷の世界に迷い込んでしまったような。

そして地面には大量の氷剣が突き刺さっていました。

「はぁ……はぁ……はぁ……戻ったか。アリアーヌ」

「……レイ。わたくしは？」

「無我夢中だったようだな。最後は氷剣を出してしまったが、遅かったようだ。君の勝利だ」

「……そう。そうですの」

あまり実感がありませんの。

夢の世界から自分を眺めていたような……そんな気がする。そしてわたくしは、新しい力と共にレイの課す試験をクリアしたようです。

「あら？ あらあらあら？」

ポロポロと涙が零れ落ちる。

決して悲しくはないのに。まるで、感情と体が解離しているみたいに、わたくしの両目からはたくさんの涙が零れ落ちてきます。

「おめでとう。アリアーヌなら、きっとできると思っていた」

「……わたくしは、成長できましたか？」

「ああ」

「わたくしは、自分と向き合えましたか？」

「その結果が今だろう」

「……そう。そうですの……」

そしてゆつくりとレイが近寄ってくると、優しくわたくしの頭を撫でてくれます。

「今までよく頑張ったな。本当にアリアー又はすごい女の子だ」

「う……ぐすつ……」

「だから今日は泣いてもいい。俺もそれを受け止めよう」

そんな優しい声をかけられたら、決壊してしまいますわ。

でもきつと、ここでわたくしは泣きじゃくりながらレイに抱きついてしまうのは違うと思うのです。

理想の乙女たるわたくしは、もっと気丈に振る舞えるはずですわ。

「レイ！　ありがとうございます！！」

涙を流しながら、頭を思い切り下げます。

そして、顔を上げるととびきりの笑顔で彼に笑いかけるのです。

涙が溢れて、みっともないとしても、これが今のわたくしなのですわ。

「こちらこそ。本当に素晴らしい成果だ」

「乙女たるもの、これくらい当然ですわっ！」

胸に手を当てて、思い切り自慢げに胸を張ります。

そう。これは、当然のことなのです。

だからわたくしはきっと、これから先も進んでいくのでしょう。

理想の乙女を求め続けて　。

第186話 立ち向かう漢たち

「うおおおおおおおっ!!」

「おらああああああっ!!」

森の中を駆け抜けるアルバートとエヴィ。その視線の先には、ルーカスが姿勢を低くして疾走していた。

木々を躲し、足元を取られないように注意しながら、最高速度で駆け抜けていく。周囲の木々を意識することなく、無意識下で把握しながら二人はルーカスの背中を追いかける。

三連休最終日。

三人もまた、このドグマの森で最後の訓練に励んでいた。

またレイたちとは偶然なことに、出会うことはなかった。それは、レイたちがいるのは主に森の西側で、ルーカスたちは東側で訓練をしていたからだ。ドグマの森はあまりにも広大なためそうなる。

そして、現在はルーカスに対してアルバートとエヴィが一撃を入れる……という訓練をしている。

アルバートが後衛から魔術による支援。エヴィはその巨躯と持ち前の身体強化の魔術を活かして肉薄しているが、ルーカスは伊達に七大魔術師ではない。

さらにレイとは異なり、その能力に制限はない。遺憾無く発揮できるその実力は、到底二人では追いつけるものではない。だが、そんなことは承知の上だった。それを踏まえた上で戦っている。

またハンデとして、ルーカスは魔術を使用しない。

全て基本的な身体能力で相対しているにもかかわらず、アルバートとエヴィの二人がかりでもギリギリ届くかどうか。いや、二人は気がついていていた。わずかにだが、ルーカスの方が上であると。

「アルバート。どうする？」

「……俺が仕掛ける。その瞬間、エヴィが突っ込め」
「了解だぜっ！」

アルバートは一気にコードを走らせる。そして緻密なコードを構築した上で発動させるのは、暴風^{ストーム}。

中級魔術ではあるが、一瞬で発動まで持っていくと、ルーカスを起点にして発動。

「……ぐっ！」

声を漏らすのはルーカスだった。

彼を中心にして起こるのは荒れ狂う暴風。流石に魔術が使えないということ、足元がぐらついてしまう。しかし、ここで完全に風に流されないのは流石の技量と言ったところか。

そして、ちょうどその風が止むと同時に……エヴィは全力疾走し

てルーカスに迫っていた。そのまま勢いに任せて、その拳を振るう。

「おっらあああああっ！」

だが、片手で器用にそれは払われてしまう。一方のエヴィは、この程度で諦めはしない。彼にこうして簡単にあしらわれるのは、百も承知。そして、エヴィはさらに右脚から蹴りを繰り出す。

ルーカスはそれを軽く飛ぶことで避けるが、後ろにはアルバートが迫っていた。

発動するのは、氷礫。アイシクルピアスこれもまた、中級魔術ではあるが発動が早い魔術の一つだ。アルバートはそのコードを重ねるようにして、大量の氷礫を生成。アイシクルピアス

そして、一気に発射した。

「……そうきたか」

ボソリと呟くルーカスは、すぐに行動に移る。

腰に差している刀をスツと抜くと、あろうことかルーカスはそのまま魔術を切り裂いたのだ。しかしそれは、魔術を行使して切り裂いたのではない。

物理的に、刀のみでその氷を打ち砕いたのだ。

これには一瞬だが、二人の動きが止まってしまう。

そう思いきや……エヴィの方はすぐに攻撃に移っていた。

「まだまだあああああああつー!!」

そうしてこの日もまた、残念ながら二人は敗北を喫するのだった。

「じゃあ、僕は食料でも探してくるよ。二人はゆっくりと休んでいい」といい

ルーカスはそう言うのと、後ろで一つにまとめた黒髪を揺らしながら森の中へと消えていく。

一方のアルバートとエヴィは、ボロボロになった体を治療していた。今日もまた、いいところまで行ったが敗北。

あともう少しで手が届きそうなのだが、まだ届きえない。

「なあ。今回はどこかダメだったと思う?」

「そうだな。まずは俺が一瞬でもあの時に、呆けたのが良くなかった。すぐにエヴィのカバーをするべきだったな」

「あー。あれか。刀で氷を切り裂いたやつな。あれは俺もビビったぜ……」

「でもエヴィはすぐに動くことができただろう?」

「ま、咄嗟にな」

肩を竦めて、そう答える。

エヴィとしてはあれは意識しての行動ではなかった。ただ体が勝手に動いた。そう言うしかない行動だった。

「俺はダメだな。努力を続けているが、まだまだ先は長い」

「それって、いいことだと思うぜ？」

「どう言うことだ？」

素直に尋ね返す。すると、白い歯を二カつと輝かせる。

「まだまだ先は長い。でも、成長する余地がそれだけあるってこと
だろ？」

「……前向きだな」

「へへ。これしか取り柄がないからな」

照れているのか、エヴィは軽く微笑む。

思えばアルバートはそれほどエヴィについてまだ知らない。互いにこうして語り合ったことはないからだ。いや、エヴィだけではない。

アルバートは今まで自分だけでなく、誰かと向き合うことなどなかった。

だから彼は、思い切って疑問をぶつけることにしてみた。

「エヴィ。どうして、今回の大会に出る気になったんだ？」

「ん？ まあ……そうだな。俺はハンター志望だから、別にこう言った大会は興味なかったな。魔術剣士競技大会も別に今後も出る気はねえしな。でも、一度くらいレイと戦ってみたい。それはちよつと思つてたんだ。あいつつてスゲエだろ？」

「ああ。間違いない」

レイ＝ホワイトという存在が規格外なのは、二人ともに知ってい

る。けれど、エヴィはさらにレイについて語り始める。

「あいつと同じ部屋になって、ずっと過ごしてきたが……本当にストイックなやつでな。ちょっと世間知らずなところはあるが、情に厚いし義理堅い。それに、努力を絶対に欠かさない。そんな姿を毎日見てきたんだ。俺だって、触発されるってもんだ」

「そうか。確かにレイと同じ部屋だと、色々と刺激は受けそうだな」「それに……」

「？ まだ何かあるのか？」

エヴィは、ふとどこか遠くを見るような目つきになる。

「あいつは親父に似てる」

「確か……軍人だったか？」

「ああ。レイは言わねえが、親父と知り合いだと思ってる」

「エヴィの父上と、レイが？」

「ああ。でも俺は、親父のことがあんまり好きじゃない。それももしかして、知っているのかもな」

「……そうか」

初めて聞く話だった。それをアルバートは冷静に受け止める。

人には人の人生がある。今までは、自分しか見えていなかった。

だが、こうして友人と語り合うだけで世界はこんなにも広いのだと改めて自覚する。

「親父は軍人ってことで、あんまり家にいなかった。母さんと俺の二人でずっと暮らしていたようなもんだった。母さんはいつも寂しそうだった。そして、親父は極東戦役に参加した。元々、距離があ

ったのがさらに開いた感じがした。そこから、俺はろくに親父に会ってない。けど、今ならちよつとは話せる気がするんだ」

かなりプライベートな話を聞くことになったが、アルバートは嬉しかった。誰かとこのように共有できることが、今まではなかったことだからだ。

「そうだな。家族は大切にすべきだな」

「おう！　で、アルバートはどうなんだ？」

「俺か？」

自分のことは聞かれるとは思っていなかったなので、少しだけ間が空いてしまう。

「俺は家を継ぐだろう」

「アリウム家は上流貴族だったよな？」

「ああ。長男である俺は、当主になるだろう」

アリウム家の長男であるアルバートは、幼い頃から当主としての自覚を持つように育てられた。その弊害もあって、不遜で傲慢な貴族に育ってしまったが……レイと出会うことで変わりつつあった。

それは、魔術師としてではなく、人間としても。

「そっか。そりゃあ大変だな」

「そうかもしれない。けれど、今までのように後悔したくはない。レイと出会って、俺は変われそうな気がするからな」

「へへ。あいつは本当に不思議なやつだよな。気がつけば、みんなレイの側にいる。そして、変わっていく。全く、すげー男だぜ」

その場に大の字に寝そべると、木々の溢れ日を存分に浴びる。

小鳥のさえずりが耳に入り、もう冬だというのに今日は少しだけ暖かい気候だった。

「勝とう。レイに」

しばらくの沈黙の後に、アルバートは真剣な声音でそう告げた。

「おう！ 戦う前から負ける気はさらさらないぜ！ 俺たちの力見せてやるうぜ！」

「ああ」

コツンと拳を合わせる。

それぞれの想いがかった大規模魔術戦は、マギクス・ウォー目前となっていた。

第186話 立ち向かう漢たち（後書き）

男二人の語らいでした。良い友情ですね。

エヴィの父親とレイの関係は、五章の過去編で明らかになる予定です。お楽しみに！

【皆様へのお願い】

下にスクロールすると【 】という欄があり、最大で5つまで入れることができます。

『面白かった！』『続きが気になる！』『更新早く！』……などなど
と思われた方は、是非 での評価にて応援して頂ければ幸いです。
皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければ
お願いいたします

第187話 因果律少女

「う……ぐう……んっ！」

「ほらほら。それだと、倒れないよ」

リーゼロッテの自宅。その地下室で、アメリアはこの三連休は泊まり込みで訓練に励んでいた。

長机に座り、互いに中央にチェスのクイーンの駒を置いてそれを倒すか、元に戻すか。

互いに因果律で干渉し合うということを行っていた。

二人の周囲には無数の真っ赤な蝶がひらひらと舞い上がっている。

一見すれば、地味な訓練に過ぎない。

だが、あまりにも熱中するアメリアからは鼻からツーツと血が垂れ始めていた。

因果律に干渉し合うということは並大抵のことではない。魔術領域は常に、魔術領域^{オーバーヒート}暴走の危険性がある。それは因果律という高度な概念に干渉しているためである。

一方のリーゼロッテは、手元に論文を置いて片手間にアメリアの相手をしている。集中力を綺麗に分散させ、研究に取り組みながら魔術を発動している。

そうして、しばらくすると……クイーンの駒が元の位置に戻ってしまう。

バタフライエフェクト
因果律蝶々により生み出しているのは、【駒が倒れる】という結果である。

逆にリーゼロッテが発動しているのは、【駒が倒れる因果を破壊する】というものである。

実際の魔術の難度で言えば、アメリアの因果律蝶々の方が上なのは間違いない。しかし、何事も難度が高ければいいというものではない。

必要なのは練度と精度。

それが今のアメリアには全く足りていなかった。

「よし。少し休憩にしようか」
「……はい」

再び休憩を取ると、リーゼロッテは黙々と研究資料に目を通し始める。

アメリアといえば、背もたれに体を預けてティッシュで鼻血を拭く。そして、ボーツと虚空を見つめると、スツと目を閉じる。

瞑想。

休憩時間はこうして瞑想をする事にしている。それはリーゼロッテ

テのアドバイスだった。

魔術領域を落ち着かせるのは、瞑想するのが適していると。それは彼女の経験則と、研究の結果辿り着いた結論。

脳に存在しているデフォルトネットワークなるものを、静止させるのが目的などと言っていたが、アメリカには理解できなかった。

今はただ、ゆっくりと休んでおきたい。

そう思って、じっと無心に浸る。

「……ふう」

地下の薄暗い空間。日の光は入らず、人工的な明かりが二人を照らし続ける。

今頃、レイたちは頑張っているのかしら。

瞑想の途中だというのに、ふとそんなことを考えてしまう。今日は三連休の最終日。明日からはレイたちと合流することになっている。

しかし、アメリカには自分が成長しているという実感が全くないほどない。

リーゼロッテの干渉力に敵うことは一度たりとてありはしなかった。

そんな彼女が、自信をなくすのも無理はない。けれど、アメリカ

はもう過去の彼女ではない。レイと出会い、みんなと出会い、前に進んでいくのだと決めたのだ。

だからこそ、諦めることは決してなかった。

「さて、休憩は済んだかな？」

「はい」

改めて向き合う。

視線はリーゼロッテではなく、机の上にあるクイーンの駒。この三日間、嫌になるくらい見てきたその駒はいつもと同じように直立している。

これを倒すことこそが、アメリアの目的。

そうして再び魔術を発動しようとするが、リーゼロッテはふと何かを話し始めた。

「アメリア。君は、アイディア四原因説を元にしてバタフライエフェクト因果律蝶々を発動しているだろう？」

「はい。そうですけど」

「はつきりいつて、それは君の才能だ。私の魔術領域では、おそろバタフライエフェクトく因果律蝶々に耐えうることはできない」

「え……そうなんですか？」

まさかそんなことを言われるとは思っていなく、呆然とした声を漏らす。

「ああ。魔術領域は後天的な要素ではない。それはほとんどが、先

天的なものであり、才能だ。君のそれは、おそらく魔術師の中でもトップレベルだろう。七大魔術師にも匹敵し得るほどの、ね」

「でも……」

その先の言葉を言うべきか迷った。

いくら七大魔術師に匹敵し得る魔術領域を持っているのだとしても、それを扱うことができれば意味はない。

端的に言ってしまうえば、宝の持ち腐れではないか……と、アメリカは感じていた。

「質量因。^{ヒュレー} 形相因。^{エイドス} 作用因。^{エライシエン} 目的因。^{テロス} そのすべてを成立させてこそ、因果を統べる蝶がこの世界に具現化する。後はその蝶の行動が起因となって、望む結果が生まれる。カオス理論を踏襲しているであろうそれは、おそらくこの世界にある魔術でも最高峰のものだろうね。私の意見としては、上から三つ目に珍しい魔術かな」

「三つ目ですか。あ、でも上の二つは？」

「他の七大魔術師が持っているね。【比翼の魔術師】。聞いたことは？」

七大魔術師が一人 【比翼の魔術師】。名前だけ知っている者が多く、リーゼロッテと同様に表舞台に出てくることはない魔術師だ。

アメリカもまた、【比翼の魔術師】とは会ったことはない。知っているのは、名称だけだった。

「名前だけです」

「まあ、彼女は滅多に表舞台に姿を表さない。知らないのも無理は

ないね」

リーゼロッテは身につけているメガネを外すと、それを布で綺麗にしてい_く。彼女は普段はメガネをかけていないが、研究の時はこうして身に付けることにしているのだ。

曰く、その方が気分が乗るらしい。特に視力を矯正する意味合いでつけているものではない。

「でも、【比翼】は上から二番目だね。一番は【氷剣】だよ」
「レイですか？」

「そうだね。私は世界を統べることができる魔術師を一人あげるとすれば、彼を真つ先にあげるだろう。彼は一つの究極だから。そもそも、七大魔術師という同じ括りになっているのも烏_{おこ}澁がましいよ。彼の前では、全ての魔術師が無に還る」

リーゼロッテの声音はいつになく感情的なものだった。

彼女は一体、レイについて何を知っているのか。アメリカとしては、気になって仕方がなかった。

【虚構の魔術師】。その实力は、こうして目の前で否応なく感じている。しかし、そんな彼女でもレイの前では無力だと、格が違うのだと言_うのだ。

本当に一体彼は何者なのか……。

そう思_うのは、当然だった。

「レイは……何者なんですか？」

再度、尋ねてみる。しかし、アメリカが望む答えを彼女は持ち合わせてはいない。

「何者、か。それは私にも分からない。そもそも、私たちは自己の認識すら曖昧だ。魔術だってそうだ。魔術を発動するプロセスに名前をつけて、さもそれが当然のように振る舞っている。しかし、その謎の現象を本当の意味で説明しているものはいない。この世界は、理解できないことだらけだ。何者か、と問われれば我々は皆……その答えを持ち合わせてはいないだろうね」

「難しい話ですね……それにしても、魔術も分からないことなので
すか？」

「そうだね。魔術もまた、まだまだ説明されていないことが多い」

そう言うと、トントンとリーゼロッテは机の上を叩く。

「今の音。聞こえたかい？」

「はい。聞こえましたけど」

「でもそれは、過去に過ぎない」

「過去……？」

「人間の知覚というものは、タイムラグがある。それこそ、音が鳴って届くまでにはわずかな時間が存在する。その他の五感だってそうだ。我々は、見ているもの、感じているものを全てだと思っている。しかし、人間はどうしようもなく過去に生きている生き物だ。

それは人の性質上当たり前。魔術という現象も同じだよ。塗り替えた現象を知覚するのは、少なくともタイムラグがある。私たち魔術師は、世界の過去を塗り替えているといってもいい」

「……過去ですか」

リーゼロッテの話をすべて理解しているわけではない。しかし、どうしてだろうか。彼女の話が、アメリカにとって妙に腑に落ちるのは。

それは共鳴とも呼ぶべき現象なのかもしれない。

互いに因果に干渉する魔術師。

そこから同じような感覚を共有している様な……そんな感覚をアメリカは感じ取っていた。

「魔術師とは、世界に干渉する者の総称だ。これはまだ憶測だが、^{アーカシーヤ}世界真理に接続している最中は、きっと時間から切り離されているのだと思う」

「時間から？」

「そうだね。そして、私たちはこの世界に不可思議な現象や物質を生み出す。高位の魔術師にとって、時間とは些事に過ぎないのかもしれない。この因果干渉だってそうだろう？ 一見すれば、時間が巻き戻っているようにも見える。おそらく、時間そのものに干渉できる魔術師もいつか出るだろうね。ま、詰まるところ魔術とは、万能の力なのさ。極める者が、極めればね」

「それがレイだと？」

かなり遠回りな話になったが、リーゼロッテが言いたいことはそれであると理解した。

「そうだね。でも、私が知っているのは私の中の知識だけに過ぎない。この世界がどこまで広がっているのか。自分の限界が、結局は世界の限界なのさ。そもそも、^{アーカシーヤ}世界真理など存在するのか。全ては

憶測だよ。私たちはそれを、勝手に信じているだけだ」

「……そうですか」

「雑談はここまでだ。続きをしよう」

「はいっ！」

元気よく声を上げる。

結局のところ、何かをしつかりと理解できたわけではなかった。

それでもアメリカにとってこの時間が、将来の彼女にとってかけがえのない時間になることは間違いなかった。

第187話 因果律少女（後書き）

七大魔術師まとめ

- 1 氷剣（レイ＝ホワイト）
- 2 灼熱（アビー＝ガーネット）
- 3 幻惑（キャロル＝キャロライン）
- 4 絶刀（ルーカス＝フォルスト）
- 5 虚構（リーゼロッテ＝エーデン）
- 6 比翼（現時点では不明）
- 7 現時点では不明

第188話 秘めた想い

無事に三日間の訓練が終了しましたの。

わたくしとしても、少しは前に進むことができた、そう思っています……しっかりと大会で実力をはっきりさせることができるのでしょうか。

そして、帰る準備をしていると外からザアアアアッと大きな音が室内に響いていきます。

「雨、ですの？」

「そうみたいだな」

レイと一緒に外に出ると、大雨が降っていました。まるでバケツをひっくり返したような大雨。いえ、これはもはや滝ですね。流石にこの中を傘をさして帰るというのは……。

「ふむ。これは帰るのは厳しいな」

「どうしますの？」

「早朝に帰るとするか。雲を見ても、すぐに止むとは思えない」

「では、もう一晩お泊まりですの？」

「そういうことになるな。構わないか？」

「ええ。大丈夫ですわ」

ということで、わたくしたちはもう一晩だけ止まることになりました。

でもその……なんというか。

チラッとレイの横顔を見てしまいます。

その精悍な顔つきがなんというか……その……。

いつもよりも惹きつけられてしまうのは、気のせいでしょうか。

「えっ！ 今日泊まっていくの！？ わーい！ やったー！」

ステラが思い切りレイの腰に抱きつきます。

この三日間でよく分かりましたけど、ステラはブラコンでレイはシスコンですの。二人ともに、本当に互いのことが大好きというか。

何よりも驚いたのが、ステラの前だとレイはいつもよりも優しい雰囲気になります。

普段は張り詰めた雰囲気ですが、それが緩和されているみたいで。

それにしても、今思えば……わたくしはアメリカとレベツカ先輩が知らないことをたくさん知ることになりましたが、大丈夫でしょうか？

二人はレイのことになると、本当に怖いので……。

「ん？ 父さんと母さんはどうした？」

「おにーちゃん！ 朝言ってたじゃん！ 今日魔術協会に泊まる

って！」

「ああ。そうだったか」

「ということで、私が晩ご飯を作ります！」

「いや、ステラ……それは……」

ああ。そういえば、朝方にご両親とはお別れの挨拶を済ませておきました。今日はなんでも、魔術協会の方でどうしても外せないお仕事があるとかで。

ん？　ということは、今日は三人だけということですか？

ま、まあ……ステラもいることですし。大丈夫でしょう。

それにレイのことですから、別に変なことは……。

って、わたくしはなにを考えていますのっ！！

「アリアーヌ？　どうかしたか？」

「はっ！　べ、別に変なことは考えてませんのよ！」

「そうか？」

「ええ！」

「で、晩ご飯なんだがハンバーグにしようと思う。ステラの好物でな」

「ハンバーグですよ！　それはわたくしも大好きですわ！」

「ふふ。なら、腕によりをかけて作ろうではないか」

レイはニヤツと笑います。彼の笑顔はあまり見ることはありませんけど、こうした人の悪い笑みにもちよつと慣れてきましたわ。

そうしてレイはエプロンを巻いて、キッチンに立ちます。

わたくしとステラも手伝えることはないかと言って、レイの側に行きますが……。

「二人は風呂にでも入っていてくれ。準備は俺一人でしよう」

そう言いますが、流石に悪いと思っています。

すると、レイはわたくしに耳打ちをしてきました。

「……頼む。ステラを料理に関わらせないでくれ」

「……どうしてですか？」

「ステラは……やばい。料理を灰燼かいじんにする」

「え……そんなにですか？」

「ああ。だから、風呂に連れて行ってくれ」

「わ、分かりましたわ」

どうやらレイの目的は、ステラを料理から離すことのようにでした。ということ、ステラを連れてお風呂へと向かいます。

すでに帰ってきてからお湯は張っているようで　いつの間にか、レイがしていましたの　ステラと一緒にお風呂に入ります。

「よし！　今日は洗いっこしよ！」

「そうですわね」

わたくしたちは交互に互いの背中を洗います。ステラも慣れているようで、鼻歌を歌いながら背中を流してくれます。

その後は、二人で一緒にお湯に浸かりますが……その視線はじっ

とわたくしの胸に注がれます。

「……アリアー又ちゃん。おっぱい大きいよね」

「ま、まあ……そうですけど。そんなにいいものでもないですよ？」

「そうなの？」

「ええ。何より重いですし、汗とかかくと大変ですし。この形を維持するのも、なかなか大変で」

「へえ……色々とあるんだねえ」

そう言いながら、思い切り触ってきます。でももう慣れてしまったので、いいですわ。

「それにしても、アリアー又ちゃんは強くなったね！ 私は驚いたよ！ お兄ちゃんから一本取れる人がいるなんてっ！」

「そうですの？」

「うん！ お兄ちゃんはまじで超強いからね！ 伊達に七大魔術師じゃないよっ！」

「まあ……確かに、レイは規格外ですね」

レイ＝ホワイト。

その存在は今までも規格外だと思っていましたが、この三日間でその評価がさらに変わることになりました。

魔術師としての格が違う、とでもいうべきでしょうか。

何よりも、戦闘技術が段違い。しかしそれは、戦場で磨かれたもの。彼のその技術は戦争で戦うために必要だったものと思うと、少しだけ悲しくなってしまう。

戦うしかできなかった。

彼は以前、そう言っていました。

そうしてステラと一緒に風呂から上がると、リビングのテーブルにはすでに晩ご飯が準備されていました。

「おお。上がったか。二人とも」

「うん！ それにしても、美味しそうだね！」

「ふふふ。今日は腕によりをかけて作ったからな」

再びニヤツと笑うレイですが、どうやら本当に腕によりをかけて作ったようです。

ハンバーグにはデミグラスソースがかかっていて、その上には生クリームが少しだけかかっています。それに付け合わせの、にんじんと艶々としていても美味しそうです。

その隣には、コンスープも準備されています。

以前、カレーをいただいた時も思いましたが、レイはとても料理が上手です。そもそも、料理はメイドや女性がするべきものであって、男性が料理することはとても珍しいはずです。

だというのに、彼はとても料理が上手で……本当に、レイには苦手なものがあるのでしょうか。

「では、いただきますか」

わたくしたちは三人で一緒にご飯を食べ始めます。

「いただきます」

そして、ハンバーグをパクリいただきます。

すると……。

「んんんんん。美味しい！ 美味しいですわ！」

「んにゃあああ！ お兄ちゃんのハンバーグは世界一だよっ！」

「ふふ。恐縮だ」

美味しい。美味し過ぎますわ！

王国の三星レストランの料理よりも、正直美味しいですわ……っ！

この豊潤なデミグラスソース。程よい酸味と甘さが綺麗に引き立っていて、それが上手にこのお肉の良さを引き出していますのっ！それに、肉汁もしっかりと閉じ込められていて、お肉自体も美味しいっ！

それにつけ合わせのにんじんは甘くソテーされていました。これはおそらく、蜂蜜とバターを絡めて作ったもの。

ハンバーグを食べた後に、これを食べると口の中が幸せでいっぱいになりますの。

レイ……恐ろし過ぎますわ。

これはお嫁に欲しくなってしまうスキルですわ……まさか、アメ

リアとレベツカ先輩はこれを知っている？

いえ、確かレイはちゃんと目の前で振る舞うのはわたくしが初めてと言っていました。

ということは、わたくししか知らないということでしょう。

でもなぜだが、そのことが妙に嬉しく感じてしまうのです。

「「「ご馳走様でした」」」

綺麗に全て食べ終わると、気がつけばステラが眠そうにまぶたを擦っていました。

「ステラ。ちゃんと歯磨きしてから寝ような」

「あい……」

そうしてレイに連れられて、洗面所で歯磨きをするとステラはすぐに自分の部屋で寝てしまったようです。

「ステラは寝ましたの？」

「ああ。疲れていたみたいだな」

「そうですね。無理ありませんわ」

と、レイはテキパキと片付けをしまつので、わたくしも慌てて手伝います。

「俺一人で大丈夫だが」

「食事を振る舞ってもらって、なにもしないのは乙女の恥ですわっ！」

「そうか。では、お言葉に甘えよう」

二人でキッチンに並んで、お皿を洗います。

なんだか……こうして二人で並んでいると、その……夫婦のような……。

い、いえ！ わたくしはそんな経験はないので、分かりませんが！

ええ。で、でもどうしてこんなことを考えてしまうのでしょうか。

そして、またチラッとその横顔を見ると……どうしてでしょうか。いつもよりもその……カッコよく見えてしまうのは。

「どうかしたか？」

「な、なんでもありませんわっ！」

わたくしがこの感情の正体に気がつくのは、もう少し先のことでした。

第189話 探る乙女たち

「バイバーイ！ 大会！ 私も見にいくからねえー！」

ブンブンと両手を大きく振りながら、ステラは大きな声で別れを告げる。

俺とアリアーもまた、後ろを振り向くとそれに答えるようにして手を振るう。

「ステラー！ またなー！」

「バイバイですのー！」

早朝。

今から移動すれば、ギリギリ今日の授業には間に合うだろう。

雨もすっかり止み、薄暗い明るさが徐々に世界に広がっていく。

そんな中、俺たちは歩みを進めるが……このままでは間に合うかどうか、ギリギリになってくるだろう。

というのも、実はアリアーが寝坊してしまったのだ。

俺も早く起こせばよかったのだが、起きているものだと思って自分だけ準備していると……彼女は幸せそうにまだ眠っていたのだ。

また、ステラもすっかり懐いたようであるで本当の姉妹のように、抱き合って寝ていたのだ。

そしてなんとか慌てて起きたアリアー又が準備をして、今に至る……ということになっている。

「も、申し訳ありませんの……そのぐっすりと眠ってしまつて……」
「いや。仕方ないだろう。それほどまでに、この三日間は過酷な訓練だったからな」

「でも、レイまで授業に遅れるとなると……っ！」
「任せておけ。こんなこともあるつかと、俺は準備をしていた」

その場に立ち止まると、柔軟を始める。

そして、内部コードインサイトを発動。それを全身に巡らせると、アリアー又の荷物も自分で背負う。

「え……？ 何をするつもりですか？」

「俺が全力で走って戻る」

「走って間に合わせる気ですかっ！！？」

驚くのも無理はないだろう。

実家から学院までの距離を考えれば、全力で走って戻っても間に合うわけがない。普通はそう考える。

だが、俺は学院までの裏道を知っているし、それに……俺が全力で走るとなればどうなるのか。アリアー又はまだ知らない。

「もちろんだ。任せておけ」

「って……うわっ！」

時間も惜しいので、有無を言わず彼女を横抱きにする。

アリアーヌの体重はそれほど重くはないので、余裕で抱き抱えることができる。

「しっかりと俺に手を回しておけ。かなりスピードが出る」

「でも……これって、お姫様抱っこというやつでは？」

「嫌だったか？」

「……べ、別にいいですけど。その、恥ずかしいですが……間に合わせるためなら、仕方ありませんわっ！ ええ。仕方ないですわねっ！」

と、顔を微かに朱色に染めて目線をそらしながら、俺にギュッと抱きついてくる。

「では、いくぞ」

「って……う、うわあああああ！ 早過ぎですわあああああ
あああああああああっ！！」

そうして俺は、久しぶりに全力で大地を駆け抜けていくのだった。

「よし。着いたぞ」

「も、もう着いたんですの……？」

「ああ」

ディオム魔術学院の校門に到着。まだ、早朝ということで、生徒はいなかった。

途中からアリアー又はずっと目を瞑って耐えているようだったの
で、周囲を見る余裕がなかったのだろう。

俺としても、朝からいい運動ができて清々しい気分だ。

「降ろすぞ」

「ええ」

その場にゆっくりと降ろすと、彼女に荷物を渡す。かなりスピードを出してしまったが、荷物は無事だ。俺としては、割と加減をして走ったからな。

と言っても、王国内を爆走したのがバレてしまえば色々と問題なのだが、今回はバレていないので良しとしておこう。

「では、今日の訓練は休みだ。明日から再開する」

「分かりましたわ」

「それでは失礼する」

そう言っ、踵を返そうとすると……アリアー又がギュツと俺の
右手を握ってくる。

「そ……その！　ありがとうございますっ！　レイのおかげで、
わたくしは進めている気がしますのっ！」

「そうか。それはよかった」

自然と笑みが溢れる。

すると、アリアー又もまたにこやかに微笑むのだった。

今まではこうして笑い合うことなどできなかった。しかし、いつしか自然と笑うことができるようになった。これもまた、みんなと出会うことができたからだろう。

そして、アリアーヌもまた成長していることが俺は嬉しかった。

「ふう……」

まだ時間には余裕があったので、寮の自室へとゆっくりと戻っていく。

と、その際に校門に立っている一人の女子生徒を発見。

それは見間違いない。レベツカ先輩だった。

「レベツカ先輩？ どうしてここに……？」

「あ！ レイさん！ お帰りなさいっ！」

その顔を綻ばせながら、レベツカ先輩がタタタと近寄ってくる。いつにも増して、機嫌が良さそうだった。

「昨日帰ると聞いていたのですが、帰ってこないの。早朝に戻ってくると思って、待ってました」

「それは申し訳ありませんが……その、自分に何か用事でも？」

レベツカ先輩から、何か用事があるという話は聞いていない。だが、俺が聞き漏らしていた可能性もある。

最近は大会への準備で忙しかったからな。

「いえ。でも、用がないと会いにきてはいけませんか？」

じつと上目遣いで見つめてくる。それはどこか、妖艶に思えた。いつもより大人っぽいというか、最近の先輩は妙に美しくなっている気がしている。

「そんなことはありません」

「それはよかったです！ ささ。一緒に朝ご飯を食べましょう！」
「おお！ それは良いですね！」

俺たちはいつものベンチへと移動する。

そうして一息ついて、先輩が持参してくれたサンドイッチを頬張る。

「む……っ！ いつにも増して、美味しいですね」

「ふふ。レイさんのことを想って、作りましたから」

「それは恐縮です」

「それで、この三日間はとうでしたか？ アリアーヌさんと特訓をしていたとか、お聞きしましたが」

素直にそのことを話そうとする。

しかし、どうしてだろう。

先輩はいつものように、にこやかに笑っている。笑っているのだ

が、その瞳の先には何か別の意志があるように感じてしまうのだ。
まあ……気のせいだろう。

ということで、アリアーヌと過ごした三日間について詳細に話すことにした。

もちろん、アリアーヌに言うなと言われた事は避けておいた。

「まあ！ それはそれは。大変だったみたいですネ」

「いえ。彼女もよく頑張ってくれたようで」

「それにしても、レイさんの実家ですか」

「アリアーヌも家族と打ち解けたようで。特に妹のステラとは、とても仲がよくなったみたいです。本当の姉妹のようでした」

話をするに連れて、レベツカ先輩の笑顔の輝きが増していく。

とてもニコニコと笑っていて、やはり先輩とこうして話す時間はとても楽しいと思う。

「そうですか。とても良い時間を過ごしたようですね」

「はい」

「それで、次は私もレイさんの実家に伺っても？」

「うちにですか？」

「ええ。だめですか？」

再び、上目遣いで、じっと見つめられる。それは懇願しているような瞳だった。

なるほど。先輩も今の話を聞いて、純粹に遊びに来たいと思ったのだろう。

もちろん、特に断る理由もなかった。

「構いませんよ。そうですね。冬休みにお時間がある時にでも」
「ええ。そうしますね」

そうして先輩はスッと立ち上がる。

「それではレイさん。大会。頑張ってくださいね」
「はい。きつと優勝します」
「期待してますね」

去り際に、「あつちも警戒すべきだったみたい……」と聞こえてきたが、何を警戒するのだろうか。

先輩は大会に出る事はないと言うのに。

いまいちその言葉の意味は理解できなかったが、とりあえずは今日もいつものように一日を過ごすのだった。

「レイ！ 久しぶり！」

教室に向かうと、アメリカが元気そうに挨拶をしてくれる。

「アメリカ。そうだな。なんだか久しぶりだな」
「で、どうだったの！？」

思い切り詰め寄ってくるので、何事かと思ってしまう。

「どう、とは？」

「アリアーヌとの特訓よ！」

なるほど。やはりアメリカもチームのことをよく考えてくれるようだ。すぐにアリアーヌの成長を確認しにくるとは……彼女もかなり意識が高まっているみたいだ。

そうして、レベルカ先輩にしたようにアメリカに俺たちの特訓を話すことにした。すると、見る見るうちに顔が難しいものに変化していく。

「……ということだ。アリアーヌはしっかりと成長している」

「うん……なるほどね。まさか実家に一番乗りが、アリアーヌだなんて……」

「ステラとも仲良くなったみたいだな。まるで本当の姉妹のようだった」

「しかも、家族とも仲良くなる……やっぱり、油断できないわね」

「そうだな。大会に際して、油断はできない。いくら成長したとはいえ、まだまだ課題は多い」

「そうね。課題はまだまだ多いわ」

真剣な顔つきになっているアメリカは、どうやらチームのことを本気で考えてくれているようだった。

もうじき、マギクス・ウォー大規模魔術戦が開催される。俺たちは残りの少ない日々もまた、訓練を重ねていくだろう。

全ては優勝するために。

第190話 お嬢様との出会い

十二月に入り、本格的に冬がやってきた。

はあ、と吐息を漏らせば白くなるほどに寒くなってきた。

木々も完全にその葉を散らし、痩せ細っているものが目立つ。それに雪はまだ見ていないが、そろそろ降ってきてもおかしくはない季節だ。

「朝か」

目が覚める。すっかりと寒くなってきたが、ベッドからいつものように出ていく。カーテンを開けると、清々しい朝日が室内に差し込む。

冬の光は、夏とは少しだけ違う。

なんと形容すべきか分からないが、俺は冬の朝も好きだった。

エヴィといえは、まだ寝ているようで寝息を立てている。

最近では帰りも遅く、かなりのトレーニングを積んでいるようだ。
室内では他愛のない雑談はよくするが、互いに大規模魔術戦^{マギクス・ウォー}については触れない。

それは暗黙の了解のようなものだった。

しかし決して気まずいわけではなく、互いにライバルとして意識しているというべきか。

今日は休日ということで、街に出かけようと思っている。最近は訓練などもあって、自分の時間を取ることができなかったが今日は久しぶりの休日だ。

アメリカとアリアーヌもかなりいい感じに仕上がってきている。

特にアリアーヌの成長は顕著であり、俺との連携も極まってきた。バタフライエフェクトいる。アメリカは、因果律蝶々の制御に苦労しているようだが、リーゼさんとの訓練により成長はしているようだ。

最近特に、コード構築の質が格段に上がっている気がする。

このままいけば、将来的にはアメリカは七大魔術師になるのではないかと思っている。

「よし」

軽くシャワーを浴びて、私服に着替える。今日は気温もかなり低いということで、黒のロングコートを羽織る。それは師匠にいたいたものであり、冬にはよく使わせてもらっている。

外に出ると、しっかりと冷たさを感じる。

しかし俺は体温が比較的高い方なので、冬はそれほど苦ではない。

学院から中央区へと伸びてる坂を下っていき、そのまま真っすぐ

街へと進んでいく。

左右に生えている木々は、もう一枚の葉も残っていない。それに地面の雑草には、わずかに霜が積もっている。

そんな季節の風情を楽しみながら、俺が向かうのは本屋だった。

最近は持っている本を全て読み終えてしまったので、新しいものを買うに行こうと思っていたのだ。

それに、数日前にルナ「エテルの新刊が出たということ」で王国内では話題になっている。俺はそれがリーゼさんだと知る前からのファンだったので、もちろん今回の買い物に際して彼女の最新刊も買うつもりだ。

「お、あるな」

本屋にたどり着くと、山積みの新刊が置いてあった。それに迷わず手を伸ばすと、隣の女性とタイミングよく手がぶつかってしまった。

「と……申し訳ありません。大丈夫ですか？」

「ええ。こちらこそ、申し訳ありません」

その女性は、とても美しい人だった。おそらく、貴族の方だろうか。

綺麗な色素が薄めの青色の髪に、身体のバランスもしっかりと整っている。スツと通る鼻に、わずかに朱色に染まっている唇。まつ毛も綺麗に上を向いており、化粧も素材を引き立てるようにしてまとまっている。

また、その後ろには双子だろうか。

メイドが彼女の後ろに立っていた。

「ファンなんですか？」

と、尋ねてみることにした。これも何かの機会だと思ってそういうと、女性ははにかみながら答えてくれる。

「はい。ルナⅡエテルの書籍は全て持っていて、何度も読み直したものです」

「自分も同じです。彼女の本はとても素晴らしいですね」

「はい！ この前の本も」

そして、二人でその場でルナⅡエテルについて盛り上がってしまった。彼女とは本の趣味がよく合うようで、好みの作者がかなり被っていた。

「あ、その自己紹介が遅れました。私は、シャーロットⅡハートネット。上流貴族、ハートネット家の長女です。メルクロス魔術学院の三年生でもあります。後ろの二人は、メイドの……」

視線を後ろに逸らすと、メイドの方がその場で丁寧に一礼をする。

「姉の、ケイシーⅡシャーリエでございます」

「妹の、キャシーⅡシャーリエでございます」

そうして、俺もまた自己紹介をするのだった。

「レイ＝ホワイトと申します。アーノルド魔術学院の一年生です」

その言葉を発した途端、彼女の顔がみるみるうちに曇っていく。

「レイ＝ホワイト？」

「はい」

「……まさか、あの一般人の？」
オーディナリー

「そうですね。確かに自分は、一般人ですが」
オーディナリー

あからさまに雰囲気が先ほどのものと変わる。だが俺もまた、その名前を聞いて思い出していた。

チーム：ハートネット。

構成メンバーは確かこの三人だと記憶している。

シャーロット＝ハートネット

ケイシー＝シャーリエ

キャシー＝シャーリエ

俺たちのグループリーグの中では一番の敵になるだろうと思っている相手だ。すでに得意な魔術などの情報は手に入れていたが、容姿まではまだ把握していなかった。

それがまさかこんなところで、出会うことになるとは。

「……あなた、自分が恥ずかしいとは思わないの？ 神聖なる大会に、一般人が参加するなど言語道断よ」
オーディナリー

その口調は丁寧なものから、急にきついものになるが……そうか。

彼女はどうかや、上流貴族の中でも血統主義よりの人間。

俺を敵視するのも、無理はないだろう。最近は学院ではこの手の人とは関わっていなかったが、どこか懐かしいと思ってしまう自分もいた。

「いえ。恥ずかしいなどとは、思っていないません。参加する資格は、学院の生徒なので。自分はそれを満たしています」

「ふふふ……あははは！ 二人とも聞いた！ 恥ずかしくありません！ っ！」

高らかに笑う。

それは明らかに嘲笑の類。

しかし俺としては特に反論する気もなかった。相手がそう思っているのならば、別に仕方のないことだ。

「そうですね。お嬢様」

「はい。その通りでございます。お嬢様」

メイド二人も、その言葉を肯定する。といっても、この二人は俺を軽んじているような視線を感じない。ただ冷静にじっと、この場にいるような感じだ。

「私と本の趣味が合うのは素晴らしいことです。しかし、一般人は身の程を弁える必要が……って。ちょっとお待ちなさい？」

オーディナリー

ガシツと肩を思い切り掴まれる。

これ以上この場にいる意味もないので、ささっと本を買って出ていこうと思っているのだが……完全に止められてしまう。

「自分は本を買いたいのですが」

「あ。じゃあ、先に買ってしまったでしょう」

「はい」

ということで、二人で黙って並んで本を購入する。

そして本屋の前の通路に出て、別れの挨拶をする。

「ハートネット先輩。自分はこれで失礼します」

「ええ。ご機嫌よう」

ニコリと微笑んで、優雅な所作で手を振るう。俺はペコリと頭を下げると踵を返すが……。

「ちょ、ちょっとお待ちなさい？」

「何か？」

「あなた……意外とやりますわね……」

「？ 何のことでしょうか」

すると後ろの方で、メイドの二人がボソツと声を出す。

「お嬢様がポンコツなだけです」

「まあそうよね。ポンコツはお嬢様よね」

「ちよっと！ その二人！ 聞こえてるわよー！！」

大きな声を出して注意すると、二人は知らん顔をしてプイッと別

の方向を向いてしまう。

「仲がいいんですね」

「ま、まあメイドとはいえ幼馴染だし？」

「なるほど。それにしても、三人ともに美しいですね。貴族の家柄は皆こうなのですか？」

「……ッ！」

急に顔を真っ赤にするハートネット先輩。女性と何か揉め事があれば、とりあえず褒めておけばいいと師匠に言われている。

俺は早く次の店に行きたかったので、とりあえずは褒めておいてからの離脱を図るが……。

「も、もう一度ちゃんとおっしゃいなさい？」

「お綺麗だと思います。髪の毛もしっかりと手入れをしているようですし、化粧もよくお似合いです。流石は上流貴族の令嬢だと思います」

「ふ……ふん。ま、まあよく分かってるじゃない？」

髪を後ろに靡かせて、ソワソワとしている様子だった。どうやら、機嫌はすこぶる良くなったようだ。

「それでは、自分はこれで」

「ええ……って、待ちなさい！ あなたには伝えることがあるのよ！」

再びガシッと肩を掴まれる。

後ろの方では、口元を抑えてメイド二人が完全に笑いを堪えてい

た。

「私たちは、絶対にあなたたちに負けないわ!!」

胸を張って、そう宣言する。もちろん俺たちもまた、負けるわけにはいかない。

「いえ。勝つのは自分たちです」

「ふん！今のうちはそう言っておけばいいわっ！一般^{オーディナリ}人が貴族に敵うわけがないということを教えて差し上げますっ！」

「なるほど……試合、楽しみにしています」

「ッ」

すると、また顔を真っ赤にしてわなわなと震えているみたいだった。

今回ばかりは、一体何が原因でそうなっているのか。俺には全く分からなかった。

「それでは。今度こそ、失礼します」

肩を掴まれることはもうなかった。

ただ後ろからは、ボソツと声が聞こえた気がしたが……俺はそのまま、去っていくのだった。

「うう……」

その場にしゃがみ込む、シャーロット。彼女はレイとのやりとりを経て、色々と感じるところがあったのだ。

「お嬢様。いかがいたしました？」

「お腹が痛いのですか？ 朝から食べ過ぎですよ」

と、メイド二人に若干煽られるのだが、彼女はその場に立ち上がると急に大きな声を出す。

「あ、あんなにカッコいいなんて聞いてないわっ！」

そう。シャーロットはレイの見た目が完全にストライクだった。

女性の中には、レイは少し雰囲気鋭すぎて苦手なものもある。

一般的に言えば、容姿は整っているが好みは分かれるといったところか。

ただ、シャーロットはレイのような男らしい人間が好みだったのだ。あまり筋肉質だと物怖じしてしまうが、彼ぐらいの体格、それに精悍な顔つきは非常に好みだったのだ。

本の趣味が合うと分かった時は、実は内心ではものすごく嬉しかったのだ。

ただし、その後にレイ＝ホワイトだと発覚して、気丈に貴族らしく振る舞ってみたが……それも、本人的には上手くいっていない様子。

「まあ。確かに、お嬢様の好みですよね」

「ベッドの下にある本に、彼のような男性がよく出ていますし」

さらつとシャーロットの秘密をバラすが、本人はそれどころではなかった。

「……くっ！　ぜ、絶対に勝ってやるわ！　そして、彼を私のものにするのよ！　ええ。私が貴族の素晴らしさというものを教えてやるんだからっ！」

果たして、シャーロットたちはどのようにレイたちと戦うのだろうか。

第191話 大会前日

「よし！ 本日で訓練は終了とするっ！」

「レンジャーっ！！」

大会二日前。

ついに、訓練は終了を迎えることになった。

アメリカとアリアーヌともに、ボロボロの姿ながらも綺麗な敬礼を見せてくれている。

疲労はまだ残っているだろうに、元気そうな表情をしている。二ヶ月という短い期間ではあったが、二人とも本当によく頑張ったと思うている。

「二人とも。よく頑張ったな」

素直に褒め言葉を口にする、アメリカはニコリと微笑む。

「マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の時に比べたら、頑張ることができたわっ！
今回はアリアーヌも一緒だったしっ！」

ギョツと思い切り抱きつくが、アリアーヌは少しだけ嫌そうな顔をする。

「ちょ！ 今は汚れているので、抱きつかないでくださいまし！」

「えへへ……いいじゃん」

二人の距離感もグッと縮まったようだ。

特に始めからよそよそしいわけではなかったが、さらに仲良くなつたというべきだろうか。

チームの連携も限りなく高まった。後は、二日後の大会に備えてしっかりと休息を取るべきだろう。

「アメリカ。アリアーヌ。絶対に優勝しよう。きっと俺たちなら、勝てる」

「ええ！ そうねっ！」

「そうですね。わたくしたちは、絶対に勝ちますわっ！」

三人で手を合わせる。

そうして、最後に誓いを立てるのだった。

「絶対優勝するぞっ！」

「「お　　っ!!」」

アメリカの能力も、アリアーヌの能力も底上げすることができた。辛い日々であつただろうに、よく着いてきてくれたものだ。

だからこそ俺は、そんな二人の努力に報いるべきだろう。

ふと、自分の手をじっと見つめる。

今まではこの手は血で汚れているだけだと思っていた。

しかし、俺もまた……人に何かを与えることができるような存在になっているのかもしれない。

過去は決して消えはしない。

けれど、未来は自分の手で掴み取ることができる。そんな当たり前のことを、俺は改めて認識する。

「……」

空を見上げる。

もうすっかり冬になった。後二日もすれば、マギクス・ウォー大規模魔術戦が開催される。

自分がこのような催し物に参加するのは、やはり心が躍る。

友人と共に、何かを成し遂げる。

それは文化祭でも味わったものだが、やはり何度経験してもいいものだと思う。

瞬間。風が吹く。

冷たい、冬特有の風だ。しかし今は、それがどこか心地よかった。

きっと大会は熾烈を極めたものになるだろう。それは大会のメンバーを事前にリサーチした今だからこそ分かる。

自分たちの所属するAリーグもそうだが、その先の本戦でも多くのライバルたちが待っているに違いない。

そうか。やはり俺は、楽しんでいるのだ。今の状況を、限りなく楽しんでいる。

ならば、この大会を満足するものにしよう。

みんなのためにも、そして……自分のためにも　。

もう日も完全に暮れており、女性が一人で歩いて帰るのは危ないということでアリアーヌを学院まで送っている。

アメリアの部屋でシャワーを浴びた後、こうして夜道を二人で進んでいる。

アメリアもついてくると言っていたのだが、気がつけばソファアで眠っていたらしい。アリアーヌはそつと彼女をベッドに寝かせると、静かに部屋を出てきたのだとか。

思えば、あれは訓練後に興奮しているだけで実際はかなり疲れていたのだろう。

「アリアーヌ。調子はどうだ？」

街灯に照らされる俺たち。

その中で、彼女は淡々と自分の現状について語る。

「そう……ですわね。悪くはないと思っています。しかし、緊張しますわね」

「アリアー又は緊張しないタイプと違っていたが、違うのか？」

「うーん。魔術剣士競技大会の時は大丈夫でしたが、今はちょっと違いますわね。何よりも、新しい能力のことが心配で……」

そう。アリアー又は、あの三日間の特訓の最終日に新しい固有魔^{オリジン}術を獲得している。

それを制御することも含めて、残りの時間は訓練に当てた。

しかし、完全に制御することはついに叶わなかった。

元より固有魔術^{オリジン}とはそういうものだ。発動したからといって、それを完璧に初めから制御できる魔術師などほとんどいない。

むしろ、発動したが最後。その圧倒的な魔術に喰われてしまう魔術師だつて存在する。

強大過ぎる力は、それ相応のリスクが伴うものだ。

何も魔術はただ巨大なものが使えればいいというわけではない。どんな魔術も、魔術師の力量によって左右されるものだからだ。

「思えば、アメリアはかなり制御できるようになっていましたわね」「そうだな。発動したばかりの時と比較すれば、かなり違うな」

バタフライエフェクト
因果律蝶々。

現存する魔術の中でも、トップクラスに強大な魔術だろう。あくまで俺の知る範囲だが……。

アメリカはリーゼさんに何を教えてもらったのか、詳しくは聞いていない。それは、アメリカ本人もよく分かっていないようだったからだ。

しかし、バタフライエフェクト因果律蝶々の精度はかなり上がっている。

大会に際して、アメリカに関していえばあまり心配はしていない。

「わたくしは、また遅れていますのね……」

「アリアーヌ。それは違う」

立ち止まる。

街灯に照らされるその顔をじっと見つめる。

互いの視線が交差する。

「他者と比較しても、どうしようもないことだ。人には人のペースがある。俺は、アリアーヌは今のままの成長速度で十分だと思う。いや、正直予想以上のペースで成長している」

「本当ですの……？」

不安そうに、上目遣いでじっと俺のことを見上げてくる。

もちろんここで嘘は言わない。正直に思ったことを、彼女に伝える。

「嘘ではない。アリアー又はしっかりと進んできている。それに、その固有魔術オリジンの発現が、何よりの証だ。改めていうが、この二ヶ月間。本当によく頑張ってきたと思う」

すると、彼女は胸の前でギュツと手を握りしめる。

その声は少しだけ震えていた。

「レイ。本当にあなたには、お世話になりましたわ」

「いや、こちらこそ色々と勉強になった。それに、人にものを教えるということは楽しいからな」

「そうですの？」

「ああ。将来は、教師になりたいと思っているんだ」

「え……」

ポカンとした表情を浮かべるが、何か変なことでもいったのだろうか。

しかし、この話をするの大抵は意外だと言われることが多い。きっと彼女も同様だろう。それに、自分の過去については話してきたが、将来のことを話すのは今まであまりなかった。

なぜだろうか。今はそのことを、自然ということができる気がするの。

「意外だったか？」

「え……ええ。レイからそんな話を聞くとは思ってなくて……でも、

お似合いだと思えますわ」

「それは嬉しいな」

ニコリと笑みを浮かべる。

まだ自分の将来については、明確に考えているわけではない。教師になりたいと考えてはいるが、もしかすればまた軍に戻る可能性もある。

実はすでに声はかかっているのだ。

魔術領域暴走^{オーバーヒート}が完治すれば、ぜひ戻ってきて欲しいと。階級もそれなりのポストを用意するとも言われている。

おそらくは、佐官にはすぐにたどり着くことのできる地位を。

師匠から經由して来た話ではあるが、そこは自分で考えろと言われた。

もうお前は、自分の意志で生きるべきだからな……と。

迷ってはいる。自分の能力を最大限に活かすならば、軍に戻ったほうがいいのは自明だろう。俺が手にしている強大な力は、国防には大いに役立つとはわかっている。

しかし、俺は教師として人を導きたいと思っているのも事実。

きつといつか、選択する未来^{とき}が来るのだろう。

「ねえ、レイ」

「どうした？」

「星が綺麗ですわね」

「ああ……確かにそうだ」

二人で夜空を見上げる。

今日は雲ひとつない、綺麗な夜空が広がっていた。

星々が綺麗に瞬き、その光の元で俺たちは再び歩を進める。

「では、ここでお別れですわ」

「ああ。また明後日、大会当日に会おう」

「ええ。そ、その……最後に、握手をしてもらってもいいのですの？」
「？ 構わないが」

その意図はよく分からないが、スッと手を差し出す。するとアリ
アー又は両手で俺の右手を優しく包み込んできた。

小さいが、とても暖かい手だった。

「レイ。絶対に勝ちましょう」

「そうだな」

「それでは、おやすみなさい」

「おやすみ。アリアーヌ」

彼女はその場で丁寧に頭を下げると、寮へと向かっていく。

一方で俺は、アリアーヌの姿が見えなくなるまでじっとしていた。

そしてその姿が見えなくなると、星が瞬くこの空の下を再び歩い

ていくのだった。

今日はやけに、星が綺麗に見える。

いやきつとそれは、俺の在り方が変わったからそう見えるのだから。あの頃は、空を見て余韻に浸る暇すらなかったのだから。

世界は変わる。

それは、自分の変化と共に。

ああ。願わくば、どうか　このまま世界が美しいままであるように。

そう思いながら、俺は夜道を一人で進んでいく。

第192話 大規模魔術戦、開会式

大会当日。

俺たちは魔術剣士競技大会の時と同様に、マギクス・シユバリエ円形闘技場コロッセオに集まっている。

本日の予定は、十時に開会式が開始。その後、十二時からさっそく試合が開始される。

また、試合の様子は投影魔術によりコロッセオ円形闘技場に設置されている巨大なモニターに映されることになっている。

投影に関しては、上空から鳥の視界を共有して映すという技術が使われるらしい。

これはキャロルの魔術であり、支配した鳥から視界を共有する形で投影するようだ。

基本的にキャロルは魔術師として本当に優れている。それは、極東戦役の時から思っていたことだがこうして役立っているのを見ると……何だか感慨深い気持ちになる。

といつても、あの性格は相変わらずだが。

「レイ！ おはようっ！」

「おはようございます。レイ」

二人がこちらに向かって、走ってやってくる。

アメリカとアリアーヌ。顔色は良く、気力は十分なようだった。

それに俺たちの試合は……なんと、大会の初戦なのだ。つまりは、開会式が終了してからすぐにカフカの森へと移動になる。

「おはよう。二人とも」

俺もまた今日の試合に向けて、体調は完璧に調整してきている。それに、今回の相手はシャロットⅡハートネット率いるチーム：ハートネットだ。

白兵戦はおそらくこちらの方が上だろうが、魔術の技量は侮ることはできない。

事前のサーチでそれはすでに把握している。もちろん、今回の大会に際して他のチームの情報は三人で共有しているし、完璧に選手の魔術特性を把握している。

おそらくだが、Aリーグでの試合は全勝することができると思っている。しかし、油断は禁物。どの試合に関しても全力で取り組む必要があるだろう。

「調子はどうだ？」

「ふふん！ とても調子いいわよっ！」

アメリカは胸を大きく張ってそういうが、確かに調子が良さそう

だ。そして、アリアーヌもまた、アメリカと同様に声を上げる。

「わたくしもバッチリですわっ！ それにわたくしたちは初戦！ 勝利を飾りますわよっ！！ 燃える乙女ですわっ！」

そうして俺たちが、会場の前で話し合っていると……ふと、あの人と視線が合うのだった。

「おーっほっほほ！ レイ＝ホワイト！ お久しぶりですわね！
！」

そう。やってきたのは、シャーロット＝ハートネット先輩。それ以後ろでは、メイドのケイシー先輩と、キャシー先輩も控えている。

「お久しぶりです。ハートネット先輩」

「おーっほっほほ！ お久しぶりですわねっ！」

「今日は初戦でぶつかるといことで、よろしくお願いします」

丁寧に頭を下げ、握手を求める。すると、顔を少しだけ逸らしながら握手に応じてくれた。

「ま、まあ……よろしくしてあげるわっ！ でも勝つのは絶対に私たちよっ！」

すると後ろの方で、メイドのお二人がヒソヒソと話をしていた。

「見て。照れているわよキャシー」

「そうね、ケイシー。一丁前に照れているわね」

その声を聞くと、ハートネット先輩は怒声を上げるのだった。

「ち、違っわよっ！ これは試合の前で興奮しているだけ！ 決して男性と握手したのが初めてで、照れているわけではないわっ！」

そんな様子をボーツと見てみると、トントンと肩が後ろから叩かれる。くるりとそちらを向くと、アメリカがニコニコと笑っていた。

それはいつもよりも二割増しで輝いて見えた。

「シャーロット先輩と知り合いなの？ レイ」

「ああ。この前、街で偶然出会ってな」

「ふん。なんか、仲が良さそうだけど……」

じつと半眼で睨みつけてくるが、おそらくは相手と馴れ合うことを心配しているのだろうが、それは杞憂だ。

全く、アメリカの意識の高さには脱帽である。

本当に徹底しているようだ。

「いや。俺は一般^{オーディナリー}人ということで、嫌われているらしいが」

「ふん……嫌われてるねえ……」

アメリカとそう話している間に、気がつけばハートネット先輩は去ろうとしていた。

「試合！ 楽しみにしていなさいっ！」

「はい。楽しみにしています」

後方に控えているメイドの二人がペコリと頭を下げ、去っていく三人。

相変わらず愉快な人だと思っていると、アリアーヌがあらさまにため息をつく。

「はあ……レイってば、相変わらずですね……」
「何の話だ？」

「シャーロット」ハートネット。血統主義で有名な方で、レイはとも嫌われていると思っていましたが……何をしたんですの？」

アメリアは依然としてじっと俺を見上げ、アリアーヌは呆れたような顔をしている。

よく分からないが、ここは素直に答えていくことにした。

「街の本屋で偶然出会ったときに、本の趣味が合つてな。といっても、俺の名前を聞いた途端、オーディナリ一般人は嫌いだと豪語していたが」
「……はあ。ま、レイのことですから何かしたんでしょうね」
「もう嫌だあ……ライバル多いよお……」

確かに、ライバルは多い。

しかし、ライバルがいるからこそ俺たちは前に進めるのだ。

「アメリア。ライバルは確かに多いだろう。しかし、この大会でそのライバルたちとぶつかるからこそ、成長できるというものだ」

「……うん。完全に勘違いしてるけど、いいや……大会はもちろん頑張るわよっ！」

そうして俺たちは、ついに会場入りすることになり、開会式が始されることになるのだった。

「それでは選手入場です」

選手たちが入場していく。どうやら観客は満員のようで、この大規模魔術戦^{ギクス・ウォー}がかなり盛り上がっているのは間違いないようだった。

ふと観客席を見ると、クラリスとエリサが一緒にいるのが見えた。それに、隣にはステラも一緒にいた。まだ二人には紹介してないのだが……どこかで偶然であつたのだろうか。

その隣には変装しているようだが、オリヴィア王女もいた。彼女に会うのは少し怖いので、そっと目を逸らしておいた。

そして、アリアーヌを先頭にしてチーム：オルグレンが入場していく最中、俺に視線が注がれているのを感じ取る。

やはり、三大貴族が二人のチームに一般人がいるというのは目立つようだった。
^{オーディナリー}

明らかに嫌悪している視線も混ざっているが……こればかりは、大会で実力を示すしかないだろう。

「さて、諸君。今回の大会は急遽決まったものだが、こうしてこれだけの生徒が参加してくれたことに感謝を示したいと思う」

開会式の挨拶は、魔術剣士競技大会の時と同様にアビーさんが行う。いつものように凜とした表情と声音で、言葉を紡ぐ。

「魔術剣士競技大会とは異なり、今回は団体戦。加えて、拠点防衛と攻城戦という特殊な試合になる。この大会のために、それぞれがトレーニングを積んできたことだろう。しかし、優勝できるのは一つのチームだけ。学生たちよ。是非、その頂を目指して切磋琢磨してほしい。以上が、私からの言葉になる。素晴らしい試合を期待している」

その場で軽く頭を下げると、壇上から降りていく。

しばらく挨拶が続いて、開会式が無事に終了することになった。俺たちは初戦ということで、すぐにカフカの森へと移動しなければならない。

そして、円形闘技場を出て、早速カフカの森へと行こうとすると……パタパタと向こうから走ってくるのは、レベツカ先輩だった。

「はあ……はあ……よかったです。間に合って」
「レベツカ先輩？　どうかしましたか？」

すると、彼女はポケットから小さな何かを取り出した。

「これ。お守りです」
「お守りですか」
「はい。きっと優勝できるようにと、想いを込めました」
「それは……本当に嬉しいです。ありがとうございます」

そして、レベツカ先輩はアメリカとアリアーヌの方へも向かっていく。

「お二人もどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

アメリカは複雑そうな表情をしていたが、アリアーヌは元気よくお礼をしている。

「それでは、健闘を祈っていますね」

再び俺のところへと戻ってくると、ギュツと俺の両手を包み込んでくる。そんな先輩の瞳はわずかに潤んでいた。それにわずかに頬も赤く染まっているような気がした。

先輩は、そのまますぐに去っていく。試合が直前ということで、気を使ってくれたのだろう。

「よし！ レベツカ先輩の応援に応えるためにも、初戦は勝利を飾ろうっ！」

「……そうね」

「で、ですわね……」

空気が少し悪い気がしたが、俺たちはそのまま初戦へと臨むのだった。

第193話 それぞれの応援

「クラリスちゃん！ こっち、こっちっ！」
「エリサっ！」

人混みの中でエリサを発見すると、クラリスはパタパタとその金色のツインテールを上下に靡かせながら走っていく。

今回の大規模魔術戦は、マギクス・ウオー魔術剣士競技大会と同等か、それ以上の盛り上がりを見せている。

開会式が行われる円形闘技場にはかなりの人が溢れていた。コロッセオ開会式まで一時間以上はあると言つのに、この混雑具合。正直言つて、エリサとクラリスともにここまでとは予想していなかった。

「まじで人が多いわね」

「そうだね。私も来た時びっくりしちゃった」

「ま、それだけ注目度が高いんでしょうね。それに今回はレイは悪い意味で目立ってるから」

「うん……そうだね」

レイが悪い意味で目立っている。それは大会の直前には大きな噂になっているほどだ。

そもそも、三大貴族の令嬢が一般人であるレイとチームを組むこと自体が他の人間にしてみれば、驚きでしかない。オーディナリー

血統主義の貴族の間ではレイに対しての批判が、かなり高まっている。

そんなレイを心配しながら歩みを進めていると、二人は栗色をしたサラサラとした髪の毛をした少女に出会う。

「あの……もしかして、お兄ちゃん……じゃなくて。レイ＝ホワイトのお友達ですか？」

声かけられて振り向く二人。そこにいたのは、ステラだった。

たった一人で大会を見にきていたステラ。そんな彼女はレイのことを話している二人に声をかけた。そもそも、レイからエリサとクラリスのことは聞いている。

そこから、きっとその二人に違いないと言うことでステラは話しかけることにしたのだ。

「そうだけど？」

「やっぱり！　じゃあ、あなたがクラリスちゃんっ！！？」

「え……なんで私の名前を知っているの？」

「お兄ちゃんに聞いてるからっ！」

「まさかレイの妹？」

クラリスが驚いた表情をしながら、そう尋ねるとステラは元氣よく挨拶をするのだった。

「ステラ」ホワイトです！ お兄ちゃんの妹ですっ！ ステラって呼んでください！」

その眩しい笑顔に当てられて、エリサは微笑み返し、クラリスは少しだけたじろいでしまう。

そもそも初対面の人間は苦手なクラリス。それに、ステラからレイと同じ天然の香りがするのだ。元々、レイから妹はいると聞いていたが、もちろん、義理だと知っている。ここで出会うなど、夢にも思っていなかった。

「クラリス」クリーヴランドよ。まあ、クラリスちゃん呼びを許してあげるわ。レイの妹だしね。べ、別に勘違いしないことよ？ レイとは別になんでもないんだからねっ！」

いつものようにツンデレを発揮するが、ステラはニコツと笑みを浮かべる。

「知ってるよ！ それってツンデレっていうんでしょ！」
「ツンデレじゃないわよ！」

どうやら、二人は相性がいいようだった。

「えっと……エリサ」グリフィスです。よろしくね、ステラちゃん」
「エリサちゃんだー！」

と、ステラは思い切りエリサに抱きつき始める。そしてその大きな胸に顔を埋めるのだった。

「うん！　今まで会ってきた人の中で、一番おっぱいが大きいねっ！」

「あはは……色々と困ることもあるけどね」

「それにとってもいい匂いがするねっ！　エリサちゃんは天使みたいな人だよ」

そこは兄妹なのか、レイとステラはエリサに対して同じような印象を抱いた。

「なんというか、暴走列車みたいな子ね……レイの妹って、納得できるわ……」

そんな様子を茫然と眺めているクラリスだが、彼女はじっと自分の胸を見る。

平坦。

そこには、なんの起伏もない。そして改めて、じっとエリサの双丘を見つめる。

悔しくなどはない。人には人の良さがあるのだから。

決して羨ましいわけでは……ない、とクラリスは自分になんとか言い聞かせるのであった。

三人でそのまま騒いでいると、そこにもう一人の女性がやってくる。

大きな眼鏡をかけて、純白のコートを羽織り、銀色の艶やかな髪を靡かせながらやってくるのはオリヴィアだった。

「ステラ！ 久しぶりだねっ！」

「あ！ オリヴィアちゃんだー！」

と、今度はオリヴィアの方へと走っていき、思い切り抱きつく。

ステラとオリヴィアの出会いは文化祭だった。もともとは、レイの妹ということで打算的に仲良くなっておこうと思っていたのだが、ステラの純真無垢な美しさに心を惹かれ、今はすっかり普通の友人となっている。

オリヴィアのことを王女と知っているが、友人として接して欲しいと言われているので、ステラは彼女と親睦を深めている。

今回の大規模魔術戦も、二人で一緒に観戦しようと約束をしていたのだ。
マギクス・ウォー

「オリヴィアちゃんに会えて嬉しいよっ！」

「ふふ。ボクもステラに会えて嬉しいよ……っと、こちらの二人は？」

「お兄ちゃんのお友達だよっ！」

「へえ……」

怪しく目を光らせるオリヴィアを見て、ビクッと体が反応してしまふ二人。

「ボクはオリヴィア・アーノルド。第二王女だよ。よろしくね」

「えー！？」

その反応は無理もなかった。こんなところに王族、それも第二王

女がやってくるなど予想もしていなかったのだから。

「えっと……その、クラリス＝クリーヴランドです……」

「なるほど。上流貴族のクリーヴランド家の人か。こうして会うのは初めてだね」

「は、はいっ！」

完全に緊張しているクラリスだが、一方でエリサの方は比較的落ち着いていた。というのも、二人は面識があるからだ。それは、文化祭の準備をしているときにレイがオリヴィアを寮に連れ込んだときの話だが、特に仲が悪いということはなかった。

「あ……その。お久しぶりです」

「そうだね。あのとき以来かな？」

「はい。で、あの約束は大丈夫だよね？」

「も、もちろんですっ！」

吟味するようにじっと見つめるオリヴィアだが、それはレイとどのような関係なのか見定めるためだった。しかし、今回のオリヴィアの検査では白、ということで友好の証として握手を求める。

「ボクのことは、オリヴィアで構わないよ。二人とも、先輩なんだからね。よろしくね」

レイの前では落ち着きのない少女のように見えるが、普段はこのように落ちついているオリヴィア。伊達に、第二王女ではない。

「よ、よろしく……！」

「こちらこそ、よろしく願います！」

そうして合流した四人で、会場へと向かうことになるのだった。

「マリア！ 早くいきましよう！」

「ちょっと待ってお姉ちゃん！」

その人混みの中には、レベッカとマリアもいた。二人は今回の大会と一緒に見ようと約束していたので、こうして合流したのだが……レベッカのテンションがいつも以上に高いのだ。

流石にこれは、マリアも辟易してしまう。

「もう。ちょっと張り切りすぎじゃない？」

「だ、だってレイさんが初戦なんだから！ 当たり前でしょう？」

当然でしょう、という表情をする。そんな姉の姿を見て、はあとため息をつくマリアは軽く肩を竦める。

「まあ……お姉ちゃんが楽しそうならいいけど。でも、レイってライバル多くない？ 最近はなんかアリアーヌちゃんとも仲がいいみたいだし」

マリアはアリアーヌとは面識がある。三大貴族の繋がりということで、昔馴染みなのだ。

「あれ？ それは知っていますけど、マリアはその話を誰に聞いたの？」

「言ってなかったけ。この前レイと会ったときに、アリアーヌとの訓練が、とか言ってたから」

「へえ……そういえば、マリアもレイさんと仲がいいわよねえ……」

じりじりと近寄ってくるその姿は、悪鬼羅刹が如く。否、それはまさに修羅。

その変貌を遂げた姉を、恐怖の目で見る。マリアのその両足は、まるで生まれたての小鹿のように震えていた。

「ちょ！？　べ、別に違うって！　街で偶然あったただだからっ！」

「他意はないと？」

「ないよっ！」

「でも、仲がいいわよね？」

「ま、まあ……仲が悪いとは思ってないけど……」

と、その真つ白な頬に軽く朱色が差すのをレベッカは見逃さなかった。

「マリア。仮に妹とは言え、私は手を抜くことはありません」

「だーからー！　誤解だつてば！」

「ま、そういうことにしておきましょう」

打って変わって、すぐに落ち着くレベッカ。彼女としては、最近ライバルが多く、マークするのも一苦労だと思っている。その中で、妹までライバルになってしまうと、流石にキャパオーバーだと思つて牽制したのだが……どうやら杞憂なようだった。

「はあ……お姉ちゃんって、レイのことになるとちょっとアレだね」

「アレって？」

「周りが見えなくなるといつか。ぶっちゃけ、お姉ちゃんは重いタイプの女だよな」

「が、がーん！ ま、まさかレイさんは重い女はき、嫌いとか……？」

「分からないけど、レイならなんでも受け止めると思うよ。きっと大丈夫！」

割と雑に姉を励ますマリアだったが、すぐにレベツカは元気を取り戻す。

「そ、そうよね！ よし。絶対にお守りを渡しましょう。絶対に！」

そうして二人もまた、会場入りを果たすのだった。

「ふんふんふん」

「とても上機嫌ですね」

「当たり前だろう！ レイの活躍を見ることができからなっ！」

カーラとリディア。この二人もまた、コロッセオ円形闘技場にやって来ていた。

もちろんその目当ては、レイだ。

今まではただストーカーをするだけだったが、こうして合法的にレイを見ることができるといことで、リディアはいつになく嬉し

そんな声をあげる。

「それにしても、レイの悪い噂をよく聞くな」

車椅子を進めてもらいながら、そう漏らす。

「はい。しかし、血統主義の貴族内では当たり前なのでしょうね」

「ああ。本当はレイのことを悪く言ったやつを全て抹殺したいが…

…まあ、いいだろう。きっと今回の大会の活躍で、レイのことを認めるしかなくなるからな。ククク……アホ貴族どもの顔が目に見え
ぶ」

「……」

主人が明らかに貴族を馬鹿にしているが、カーラも特にいうことはなかった。彼女もまた、行き過ぎた血統主義には辟易しているからだ。

と、二人の視線の先に一際目立つ人物を発見する。

真っ赤なロングコートを羽織り、その純白の髪を微かに揺らしている女性。まるでこの世のものとは思えない純白さは、間違いなく彼女だった。

「リーゼ。お前も来ていたのか」

後ろから声をかけると、その場で踵を返す。

「リディア先輩。それにカーラさんも。どうも」

「で、どうしてここに来たんだ？」

リーゼの中で、色々心境の変化があったのは知っている。しかし、まさかこのような場所に彼女がくるとは思っていなかったので、リディアは少しだけ驚いてしまう。

「試合を見に来ました。レイ＝ホワイトとアメリカが出るということで」

「おお！ お前もレイの良さを分かっているようだなっ！」

しまった、という表情をするが時はすでに遅かった。

リーゼの目的は実際は、アメリカの成長を見ること、それにレイの実力はどの程度なのか知りたい……というものだった。

レイのことになるとリディアが暴走するのは以前経験している。

しかし、ついぼろっと漏らしてしまってから、怒涛の勢いでレイのことを語り続けるリディアに流石にリーゼも辟易してしまうのだった。

ちなみに、カーラはすでに慣れているので今更何を思うところはないかった。

ただし、二人の心境は間違いなく一致していた。

ああ。早く終わってくれないかな。

と、内心で思っただった。

「それでその時、レイが」

その後、一時間以上に渡って、リディアの話は続いた。

第194話 初戦へ

マギクス・ウォー
大規模魔術戦。

予選はA～Gリーグに分かれ、各リーグでは6チームが存在している。そこでリーグ戦を行い、上位2チームが本戦へと駒を進めることができる。

本戦からはリーグ戦ではなく、トーナメント形式になるため敗北すればそこで終了。一方で、予選は敗北したとしてもまだ挽回の余地がある。

しかしもちろん、俺たちは全戦全勝を目標にして予選を抜けるつもりだ。

Aリーグ第一試合。それが、俺たちの初戦であり、この大会の始まりでもある。

そして、カフカの森への移動の途中で、俺たちは学院に向かう。そこで着替えて、準備を済ませる。今回は森での戦闘ということで、軍で採用されている訓練着を配給されている。

色合いはカーキを基調としており、森の中では保護色になるだろう。それを踏まえた上で、戦闘を繰り広げていく必要がある。

それは訓練の際にも、アメリカとアリアーヌと共有している。

袖を通す。

そして、姿見で自分の姿をじっと見つめる。

軽く柔軟をしてから、試合のイメージを組み立てる。勝利への道筋は、すでに見えている。だが、試合は何が起こるのか分からない。

臨機応変に対応していく必要があるだろう。

「よし」

パンパンと頬を軽く叩く。準備は完了だ。

体調も悪くはない。コンディションは完璧。

だが、自分の手を見ると、軽く震えていた。それはきっと……何かを恐れているからではない。

思えば、このような舞台に立つのは初めてだった。今までは外から見ていただけだった。しかし、俺もついに表舞台に立つことになった。

初めはアリアヌに誘われて……やってみようと思ったからだ、今は違う。

二人の気持ちを背負って、俺は戦う。

「いくか」

自分の部屋を去っていく。振り返らず、ただまっすぐに進んでいくのだった。

「二人とも、準備はできているか？」

カフカの森の前に集合ということで、俺たちは集まっていた。現在の時刻は、十一時三十分。あと三十分も経過すれば、試合が始まる。

この場は緊張感に包まれていた。

基本的には、試合の様子は円形闘技場「コロッセオ」での中継。さらには、学院の中にも投影魔術で転写される予定らしい。

だが、今は周りには数多くの人間が見にきていた。

その中で俺は彼たちと視線が合うので、そちらへと向かう。

「アルバート。エヴィ」

「レイ。初戦だな。負けるなよ」

「期待してるぜ！ 決勝リーグに絶対に来いよっ！」

「もちろんだ。決勝で会おう」

それ以上の言葉は必要なかった。俺たちはライバルなのだから。二人のその立ち振る舞いを見て、きつとかなりの努力を積んできたことがわかる。

俺たちとはリーグが違うので、当たるとすれば本戦。

そこでの戦いを渴望しながら、俺は二人とがっしりと握手を交わすのだった。

背を向けて、アメリカたちの方へと戻っていく。

周囲からは大きな声援も聞こえてくるが……やはり、声援の量としてはチーム：ハートネットの方が大きい気がする。

と、その瞬間。俺たちを応援する声も聞こえてくる。

「ホワイトーっ！ 勝てよーっ！」

「ローズさん！ 頑張ってー！」

「オルグレン様ー！ 期待してますーっ！」

その声援はアメリカとアリアーヌのものが多かった。しかし、クラスメイトたちは俺の名前もあげてくれる。

その声に応えるようにして、軽く手を振るう。決して俺の存在は、この貴族社会では望まれたものではないことは知っている。

貴族社会は未だに、血統主義の人間が多い。

それ自体は否定はしない。

だが、そのような中でも認めてくる人間は存在している。

ならばその人たちのためにも全力を尽くそう。

「レイは人気ありますのね」

「クラスメイトだな。といっても、二人の声援には負けるが」

「わたくしたちは、貴族ですから。幼い頃から、慣れていますわ」

アリアーヌがそう言うと、アメリカもそれに反応する。

「そうね。でも、今回は悪い気分じゃないわ」

「そうですわね。レイも一緒ですから」

「？ それはどう言う」

意味だろうか。と、聞き返そうとした瞬間。ハートネット先輩が再び俺の方へとやってくる。

「おーっほっほっほっ！ ついにやってきましたわよっ！ 華麗なる登場ですっ！」

「そうですね。お嬢様」

「お嬢様。いつもよりも目立っていますね」

後ろに控えるメイドのお二人は、なぜか後ろから紙吹雪を撒き散らしていた。本人曰く、華麗なる登場らしいが……やはり目立ちたいと言うことだろうか。

貴族の中でもある意味最も貴族らしい人ということで、ある種の感嘆を覚えていた。

しかし、どこか憎むことができない。それが俺のハートネット先輩に対する印象だった。

「レイ！ ホワイト！ それに、三大貴族のお二人も！ 私たちは、絶対にあなた方に勝ちますっ！」

「お嬢様。ご立派です」

「いよっ！ 世界一っ！」

再び舞い散る紙吹雪。それを呆然と見つめる俺たち。

アメリカとアリアー又は完全にポカンとした表情を浮かべている。

「ということで、負けることを楽しみにしていなさいっ!」

「お嬢様。美しいです」

「いつもよりも、目立っていますね」

と、撒き散らした紙吹雪をささっと集めると撒収していく三人。

本当に嵐のような人たちだ。

「……なんというか、レイは余程気に入られているみたいですね」

「そうか?」

「ええ」

そして、隣からはアメリカの鋭い視線が俺を射抜く。

「どうしたアメリカ。そんな怖い顔をして」

「なーんか、嫌な予感がするのよね」

「何? 相手に関して感じるものがあるのか?」

流石はアメリカというべきだろうか。今の接触で、あの三人に対して何かを感じ取ったようだ。

俺もまた、ハートネット先輩からはただならぬ何かを感じ取っている。それをまさか、アメリカも分かるとは……。

だが、なぜかアメリカは依然として俺のことを睨みつけている。

「いや。そうじゃないんだけど……なんか。同じ匂いがするとい
うかね……」

「アメリカ。まさか、それはこういうことですか？」

その後、アメリカとアリアーヌがコソコソと話を始める。どうや
ら、俺には聞かれたくない話のようだ。

そうしていると、審判である教諭たちが到着する。

今回はどうやら、キャロルとアビーさん、それに他の学院の教諭
も審判として参加してくれるらしい。

「レイ。久しぶりだな」

「はい。お久しぶりです」

「これは今回の試合の拠点だ。全五箇所に設定してある」
「頂戴いたします」

アビーさんからいただく資料。それは、今回の試合の拠点を示し
たものだ。

ハートネット先輩たちも、キャロルからその資料をもらっている。

マギクス・ウォー
大規模魔術戦の予選である拠点占有では、拠点は試合の前に設定
され、選手は事前に知らされることになる。

「あまりこついうのは良くないと分かっているが……」

すると、コソツとアビーさんが耳打ちをしってくる。

「応援している。頑張れよ、レイ」

「はい……ありがとうございます」

その場で頭を下げると、すぐにその資料を持って二人と合流する。

「二人とも。最後のミーティングだ」

「分かったわ」

「了解ですわ」

その資料をもとに、最後の打ち合わせをする。もともと作戦は事前に頭に入っている。しかし、拠点はこの段階にならないと分からない。

そのため、もともとこの時間は設ける予定だった。

「意外とバランスよく距離感が設定されているわね……」

「そうですね。ただし、最後の拠点は少し遠いようですが……」

アメリカとアリアーヌの指摘のとおり、今回の拠点設定は距離感自体はそれほど変化はない。

五つある拠点は、それぞれ六分間だけ継続される。そして、合計三十分の中で魔道具に第一質料を蓄積した方の勝ちとなる。

拠点防衛に関しては、俺とアリアーヌが前衛。アメリカが後衛で、拠点で魔道具を所持して蓄積する、というフォーメーションになっている。

おそらくは、初めの三つのポイントを全て維持できれば、早期に勝利は確定するだろう。

しかし、相手の実力を考えても拮抗するのは間違いない。それに、オリジンまだ固有魔術を使うには早すぎる。今回の試合は、オリジン固有魔術を使用することなく勝利することが大前提だ。

何も試合は、これだけではない。リーグ戦は続く上に、決勝トーナメントも待っている。

できるだけ、手の内は晒しておきたくはない。

「二人とも拠点は覚えたな？」

「ええ」

「もちろんですわ」

「基本的に拠点を捨てるかどうかの判断は俺がする。後は作戦通りに行こう」

俺はスッと手を差し出す。

すると、二人の手が俺に重なる。

いま一度、三人で視線を交わす。

「絶対勝つぞッ」

「「お　　っ!!」」

気合を入れて、声を上げる。

ここにくるまで、俺たちは努力を積んできた。

その成果を発揮する時が、今なのだ。

俺たちならできる。絶対に勝利することができる。

そう心を込めて、ついに初戦に臨むのだった。

第195話 初戦開始

「それでは、両チームともに準備はいいな」

試合開始五分钟前。

ついにこの時がやってきた。

向かい合う互いのチーム。

視線が交わるが、ハートネット先輩は見下すようにして俺のことをじっと見つめる。彼女のその目は、負ける気など毛頭ないのだから。

しかし、それは当たり前のことだ。試合をする前から、負けることを想定する選手はいないだろう。

俺たちだって同様だ。

そう。この試合は伏線でもある。何も、ただ勝てば良いというものではない。この初戦に関しては、全てのチームが観戦するだろう。そして、チームのことを分析するに違いない。

「おーっほっほっほっ！ 完封して差し上げますわっ！」

ハートネット先輩は、高らかに笑う。二人のメイドもそれを肯定するように、紙吹雪を撒き散らしている。この様子は中継されてお

り、目立つことを目的としているのだろうか。

一方で俺たちは、淡々とその様子を見つめる。

そして、互いにアイコンタクトを交わして頷く。もう言葉はいらない。後は戦いに集中するだけだ。

今回の試合の審判であるアビーさんは、そうして互いのチームから了承を取ると、ついに試合開始を告げる。

「それでは大規模魔術戦、予選第一試合　開始ッ！！」

その声を認識したと同時に、一気に体内に内部コードインサイドを走らせる。

次々と駆けていく六人の魔術師。

その中でも、トップに躍り出るのは俺とハートネット先輩。後ろには、それぞれのチームメンバーが帯同している。

「ふふふっ！　どうやら、内部コードインサイドの扱いは中々みたいねっ！」

その言葉に答えることなく、俺は後ろの二人に告げる。

「アメリカ。アリアーヌ。さらに上げる」

「了解よ」

「了解ですわ」

加速。

さらに森の中を駆け抜けていく。

後ろからは、「なあっ!？」という声が聞こえてきたが、もはや置き去りにしてしまったので、声は遠くなっている。

第一拠点は絶対に全て取り切ると決めているのだ。そのため、ほぼ全力で向かうその拠点へと疾走している。

今回の試合に際して、相手チームのデータは全て揃っている。

シャーロット＝ハートネット

ケイシー＝シャーリエ

キャシー＝シャーリエ

三人ともに魔術に特化した魔術師だ。

しかし、いくら魔術が得意だろうとこの森の中を単純に駆け抜けることに関しては、俺たちの方が上だ。それに、先ほどの併走した時に理解できたが、どうやら森での戦闘は不慣れなようだ。

十分な演習を積んでいないのは、間違いない。

予選の拠点占有では、三つの拠点を全て占有できれば勝利を確定させることができる。

互いの実力が拮抗している場合は、時間切れの後に、どちらの方が第一質料の保有量が多いかで決まる。
プリママテリア

俺たちは、今回は最後の第五拠点まで試合を展開するつもりはない。

つまりは、三十分以内で試合を決めるつもりだ。

「よし。着いたな。二人とも、配置に」

「ええ」

「よし！ やってやりますわっ！」

そうしてアメリカが胸から下げている魔道具を保持したまま、拠点の中へと入る。すると、その透明な筒状になっている魔道具の中に、真つ赤な第一質料が蓄積されていく。

第一拠点は俺たちが先にたどり着いた。

ここから先は、防衛戦。

俺とアリアーヌが前衛で、アメリカは後衛からのサポートになる。

「おーっほっほっほっ！ どうやら、逃げ足だけは早いみたいねっ
！！」

視線が交差する。

敵チームの三人が到着して、睨み合いとなるが……すぐに戦いが幕を開けた。

「ケイシー！ キャシー！ やるわよっ！」

「はい。お嬢様」

すぐに魔術を発動しようとする三人。だが、そこには絶対的に魔術を構築する時間が存在する。それを逃す俺とアリアーヌでは無い。

互いに言葉などいらなかった。

すぐに森の中を疾走していくと、そのまま超近接距離へと持っていく。
クロスレンジ

木々の間を縫うようにして、互いにカフカの森の中を駆け抜けていく。

この拠点では、俺の相手はシャーリエ姉妹の二人。

アリアーヌの相手はハートネット先輩。これは、試合の前から決めていたことだ。そして、アメリカのサポートのメインはアリアーヌの方に指定してもらっている。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセッシング＝減速＝固定マテリアル》
ディセレーション

《エンボディメント＝物質マテリアル》

脳内で一気にコードを走らせる。

そして俺が発動する魔術は、氷壁。アイスウォール

分断するようにして、そびえ立つ氷の壁を生成。

自分にかけていた、体内時間固定はすでにレベルカ先輩に譲渡している。そのため、今はまだ完全では無いが簡単な魔術はこうして使うことができる。

「魔術……？」

「しかも、高速魔術クイックでこの精度？」

シャーリエ姉妹は、訝しそくに俺のことを見つめてくる。相手も情報を集めていたのだろうが、おそらく俺が満足に魔術を使えないという情報は掴んでいたはず。

だというのに、高速魔術クイックでこの規模の氷壁アイスウォールを使用する。

これは、他のチームへのアピールという側面もあった。

レイ・ホワイトは魔術も使える。そのことを焼き付けておく必要があるからだ。

「さて。先輩方。ここから先は、自分と戦ってもらいます」

久しぶりの感覚だ。こうして誰かと一緒に戦うというのは。

極東戦役。

あの頃をどうしても思い出してしまふ。あれは、まさに地獄と形容すべき戦場だった。

だが、今は違う。

これは互いに切磋琢磨する試合であり、仲間と協力することで勝利を掴むことが目的だ。

「レイ＝ホワイト」

「あなたの实力は」

「どうやら、私たちの」

「情報を上回っている」

「ようですね」

シャーリエ姉妹は、指を絡ませるようにして互いの手を握りしめる。そうして、高速魔術クイックで発動するのは……暴風ストームだった。

しかも、俺を囲むようにして発動している。

おそらく動きを封じるつもりなのだろうが、まだ甘い。

すぐにその場から飛び立つと、木から木へと跳躍していく。そうしてそのまま、木々の上を高速で疾走していくと二人の背後へと降り立つ。

「申し訳ありません。少し、覚悟してください」

「「え……？」」

声が重なる。それと同時に、俺は二人の腕を掴むとのそのまま乱暴に投げ飛ばす。

森の中を転がっていく先輩たちだが、どうやらしっかりと受け身

を取ることはできているようだった。

今回の試合は、今後のことも考えてあまり力は出したくはない。そのため、ある程度は加減しているが……どうやら、こちらを見る視線に明らかな敵意が込められていることに気がついた。

「これは」

「どうやら本気を出して」

「いくしか無いようですね」

相手もまた、様子見。しかし、俺の今の行動を見てしっかりと敵と認識したのだろう。それで良い。フォーカスは常に俺に集中させてもらう。

今回の試合は早期に勝利することも目的だが、試合という緊張感の中でアメリカとアリアーヌに慣れてもらいたいという側面もある。

その後、二人から発動する目まぐるしい魔術の雨。

それを掻い潜りながら、接近を図るが……流石にもう懐に入れてくれることはないようだった。

しかし、消耗だけでいえば俺ではなく相手の方が大きいだろう。こちらといえば、ただ動き回っているだけ。

一方で、シェーリエ姉妹は魔術を発動し続けている。

そして手元の時計を見ると、すでに時間は四分半ほど経過している。

後三十秒もすれば、移動開始だ。

相手もまた、どうやら第一拠点は捨てたようで、すぐに移動を開始する。

どうやら最低限、判断できるだけのリソースは残っているようだ。決して熱くなりすぎているわけではなく、冷静に戦局を眺めているみたいだ。

俺たちは合流してから、すぐに次のポイントに向かう。

「二人とも。まだいけるか？」

「もちろん！ 次のポイントも全部とるわっ！」

「わたくしもいけますわっ！ このまま作戦通りにいきましょうっ！」

気合十分。

どうやら二人の連携で、ハートネット先輩を抑え込むことができたようだ。

そうして俺たちは、次のポイントへと疾走していくのだった。

勝利まで油断することはできない。

しかし、俺は確かな手応えを感じ取っていた。

第196話 翠玉の庭

「強い。というか、強かしたたですね。彼は」

「ふふふ。私が手塩にかけて育てたからな。当然だろう」

「ロッセオ」
円形闘技場。モニターが最もよく見える最前席にいるのは、リディア、カーラ、そしてリーゼロッテだった。

カーラが三人分だけの席を用意し、こうして今は試合を観戦している。

現在は第一拠点をレイたちが全て抑えて、次の第二拠点へと移動している最中だ。

「おそらくレイは、この試合を早期に決めるつもりだろう。それも、完璧な戦術の上でな」

「そうなのですか？」

「ああ。本当に、私によく似ているな。ふふ」

笑みが溢れる。

しかし、それもそうだろう。リディアはずっと、レイが活躍している姿を渴望していたのだ。今まではストーカー紛いの行為で、覗き見るだけだったが今はこうしてしっかりと見ることができる。

それに、戦い方が自分に似ていることもリディアは嬉しかった。

流石は親バカ……というべきなのだが、誰もそんなツツコミはもはやしない。

「お。次のポイントに入りましたね。それにしても、彼のチームは練度が高い。森での戦いを熟知している感じですね」

「そうだな。レイは当然だが、アメリカンローズもアリアヌールグレンもかなり仕上がっているな。おそらく、レイの指導が良いんだろう」

と、冷静に現状を分析する。といっても、レイに対しての評価は依然として高いままだが。

「そういえば、アメリカンローズはリーゼも少し面倒をみたんだろう？」

「はい。レインホワイトに頼まれて、魔術を指導しました」

「……どうだった？」

その声音は真剣なものだった。

アメリカンローズ。おそらく、七大魔術師に最も近い魔術師は彼女だろう。

あまりにも強大すぎる、因果に干渉する魔術。

それをどのように指導したのか、リディアは興味があったのだ。

「そうですね。所感ですが、おそらく次の七大魔術師になるかと」

「やはりそうか」

「ええ。私もそろそろ引退を考えていましたね」

「……もつ、来ているのか？」

「はい。先輩方も同じでしょう？ リディア先輩は早かったようですが」

視線が交錯する。

その言葉が何を意味しているのか。二人にとってそれは、暗黙の了解だった。

「やはり、仮説は正しいようだな」

「はい。七大魔術師は、巡るのです。同じ周期を持って。例外は存在しますが、基本的な構造は同じでしょう」

「しかし、その原因は不明。分かっているのは、周期だけ……か」
アーカーシャ
「世界真理に意志でもあるのでしょうか」

リーゼがそう尋ねるが、リディアは軽く肩を竦める。

「さあ、な。あれを知覚できるのはレイだけだ。それも、あの状態の時にしか知覚できないらしい」

「そうですか。それはあまりにも危険ですね」

「ああ。あれは触れてはならない。私も、全てを失いかけたからな」

その話題はそこで打ち切り、二人は試合に意識を変える。

「……この試合。レイたちの勝利だな」

「そうですか？ 相手もかなり肉薄しているようですが」

「レイがそうさせているだけだな。おそらくは、第四拠点で決着がつく」

「第四？ 第三ではなく？」

「ああ。早期に決めるといっても、相手に一ポイントも与えないつもりではない。おそらくは、今後のことも見据えているんだろうな」

本当にレイのチームは練度が高い。おそらく相手になるのは、ルーカス＝フォルストのチームだけだろうな」

「【絶刀】ですか……」

【絶刀の魔術師】が引き継がれているのは、すでに二人とも知っている。そして、先代からの因縁ももちろん理解している。

それが今の【絶刀の魔術師】まで引き継がれているかどうかまでは知らないが……確実にルーカス＝フォルストはレイに対して何かしら思うところがあるだろうと考えていた。

「さて、状況が動くぞ」

リディアの言葉と同時に、試合はさらに大きく展開していくことになる。

第二拠点。先に移動されてしまったが、俺たちはすぐに追いつくとそのままポイントを占拠。

その後は、作戦通りに行動を推移させて三人の動きを完璧に封じた。

俺とアリアーヌが前線で掻き乱して、後方からアメリカがそのサポートをする。シンプルだが、かなり強力なこの戦法に相手は何もできないままだった。

そもそも、高速魔術クイックに頼り切っていては攻撃力が足りない。そこで、他の魔術を選択しようにも俺たちがその時間を許さないだろう。大規模な魔術を発動するには、前衛による時間稼ぎが必要だからだ。

そのため、全員が魔術に特化しているチーム：ハートネットは俺たちにとって最も相性の良いチームと言っても良いだろう。

すでに、相手も焦り始めているのか魔術に乱れが見えている。

おそらくは焦るあまり、コードの構築が雑になっている。そんな魔術は俺たちには通用しない。

そして、第二拠点にあっさりと見切りを付けると、チーム：ハートネットはすぐに第三拠点へと移動して行った。

「順調ですわね」

「ああ。かなり焦ってるようだな」

アリアーヌと現状を話し合う。そして、アメリアの元へと移動する。残り時間は一分。おそらくは、この拠点のポイントも全て占拠出来るだろう。

アメリアの胸から下げられている魔道具には、三分の二ほど真っ赤な第一質料プリママテリアが蓄積されていた。

「アメリア。次も作戦通りに行こう」

「ええ。分かったわ」

そして、俺たちもまた次の拠点へと疾走していく。

第三拠点へと到着すると、すでに拠点を占拠している三人が俺たちをじっと睨みつける。

じつと目を凝らすと、周囲には遅延魔術ディレイが敷かれているようだった。しかし、この行動はすでに予想できている。

「いくぞ。二人とも」

「ええ」

「分かりましたわ」

そう。俺たちは、元々第三拠点を全て相手に与えるつもりだったのだ。そうして、そのまま無視して過ぎ去ろうとすると、ハートネット先輩が苦悶の表情を浮かべている。

すでに試合は、俺たちが支配していると過言ではない。

その中でポイントをもたらえるのならば、ここは獲得しておいた方がいい。

しかし、第四拠点では俺たちが彼女たちのように十分に準備が出来てしまう。

それを阻止するかどうか、それとも第三拠点を全て取り切るべきか……ハートネット先輩たちが悩み切った末に出した結論は、ポイントを取り切ることだった。

それもすでに予想していた。

そうして俺たちは、すぐに第四拠点へと到着するとアリアーヌとアメリカに指示を出して遅延魔術^{デレイ}を設置していく。

この試合は、おそらくこの拠点で終わる。

まだ油断はできないが、その気概で俺たちは三度目の戦いに臨む。

「……やってくれましたね」

ギリッと歯を食いしばってやってきたハートネット先輩は、その目に怒りが宿っていた。美しい顔を歪めながら、ギュッと拳を握っている。

「よくもこんな真似を……恥をかかせてくれましたねっ!!」

その怒りの声に向かい合う俺たち。この反応は、アメリカとアリアーヌから聞いていた。

おそらく、彼女は怒りに支配されるだろうと……これも予想通りとは。

本当に、真っ直ぐな人なのだと思う。

「いいでしょう。ここまで我慢してきましたが、本気を出してあげます。光栄に思いなさい?」

瞬間。大量の第一質料プリママテリアが彼女の元へと収束していく。

発動する魔術は、おそらくは大規模魔術エクステンシブが大規模連鎖魔術エクステンシブチェーンだろう。

それを阻止しようとするのに動き始めていた俺たちだが、その前にはシャーリエ姉妹が立ちはだかる。顕現するのは、分厚い氷の壁。おそらくは、ここで力を使い切るつもりで、ハートネット先輩の魔術を発動させようとする気なのだろう。

絶対に守り切るという意志を持ったシャーリエ姉妹の魔術は、俺とアリーヌを以てしてもすぐに突破することはできなかった。

そうして、攻めあぐねている間にも……彼女の魔術構築が終了する。

「さあ。私の庭で踊りなさい」

その言葉の後に出現したのは、見渡す限りのどこまでも透き通るような深緑の世界だった。

「
エメラルドガーデン
翠玉の庭」

第196話 翠玉の庭（後書き）

試合も大詰め！ 次回もお楽しみに！

【皆様へのお願い】

下にスクロールすると「
5つまで入れることができます。」という欄があり、最大で
を

『面白かった！』『続きが気になる！』『更新早く！』……などな
ど思われた方は、是非 での評価にて応援して頂ければ幸いです。
皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければ
お願いいたします

第197話 決着の時

「
エメラルドガーデン
翠玉の庭」

展開される固有魔術は翠玉の庭。その名の通り、目の前には深い緑色の世界が広がっていく。

この固有魔術の特徴は広域干渉系であり、指定した範囲の第一質料^{リア}を操作することにある。

また、変幻自在に伸びる植物の蔦^{ツタ}を触手のように操ることもできる。

珍しい固有魔術^{オリジン}ではあるが、まさか学生がこの規模の固有魔術^{オリジン}を保有しているとは想定しておらず、わずかに呆けてしまう。

しかし、すぐに思考を切り替えると二人に指示を下す。

「アメリカッ！ アリアーヌッ！！ 拠点^{ポイント}を死守しろッ！ 最前線は俺一人で行くッ！！」

「レイ！ わたくしも加勢にいきますわっ！」

「俺一人でもいいッ！ アリアーヌはアメリカのサポートだッ！」

「……了解ですわっ！」

有無を言わせないような勢いで、俺は声を荒げる。

この翠玉の庭の厄介なところは、第一質料^{プリママテリア}を操作するという一点

にある。

ルール上、拠点内の第一質料プリママテリアを操作することは禁止されているが、それ以外であればハートネット先輩は自分の意志で第一質料プリママテリアを操作できる。

詰まるところ、自分に十分な第一質料プリママテリアを収束させ、俺たちには極力第一質料を与えない。
リママテリア

そうすることで、相手は自由に魔術を使用でき、こちらは十分な魔術を使えないことになる。

バフとデバフという二つの効果を持ち合わせたそれは、厄介極まりない固有魔術オリジンである。

だが、この局面で使用したということは追い詰められているのは間違いない。

それに、シェーリエ姉妹は完全に戦闘不能になっている。過度の魔術行使で、その場に倒れ込んでいる。その様子からも動くことは叶わないようだ。

「……やるしかないか」

ボソリと呟く。

この局面を予想していなかったとはいえ、あと四分持ち堪えればポイントは全て取得することができる。

その瞬間、こちらの勝利は確定。

現在は、アメリカとアリアーヌに向かって無数のツタがまるで意志を持っているかのようになっている。今の様子であれば、なんとか二人で耐え切れるだろう。

その間に俺は、この^{エメラルドガーデン}翠玉の庭を生み出しているハートネット先輩に相對するしかない。

「おーっほっほっほっ！ これを出したからには、私たちの勝利は確定よっ！」

この領域内の中央で、高らかに笑い声を響かせる。

彼女の周りには、囲むようにして大きな花のようなものが生まれていた。それは防御壁でもあり、核でもある。その花を破壊できれば、この固有魔術^{オリジン}は止まる。

今はリソースを使い分けているようで、ポイントに入っているアメリカとそれをカバーしているアリアーヌを狙いつつ……俺に対しても意識を向けている。

これだけの固有魔術^{オリジン}を使えるだけあって、リソースの分配もしっかりとできるようだった。

その自信は、伊達ではないといことが。

「さあ。私の庭で踊りなさいっ！」

瞬間。

突出している俺を捕獲するようにして、一気に無数の触手のように蠢くツタが頭上から迫ってくる。

それを知覚して、すぐに躲す。しかし、その攻撃はさらに物量を増していく。

この森という地形も相俟って、彼女の翠玉の庭は最大限の威力を発揮している。
エメラルドガーデン

周囲にあふれる、可視化しているほどの淡い翠色をした第一質料。
みどり プリママテリア
それは一気に彼女を覆っていき、その花はさらに大きく肥大していく。

一方で、俺たちの方には第一質料が流れてこない。
プリママテリア

決してなくなるわけではないが、循環が悪い。このままでは、ろくに魔術は使用できない。

しかし、不幸中の幸いなのか……俺とアリアーヌは内部コードを
インサイド
主軸として戦っている。

アメリアの戦力は大幅ダウンだが、外部コードを使用する普通の
アウトサイド
魔術よりは影響は少ない。

そして俺は、一気にコードを走らせる。

《第一資料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセシング＝減速＝固定マテリアル》

《エンボディメント＝物質マテリアル》

生み出すのは、氷剣。

といっても、アイシクルブレイズ氷千剣戟で無数の氷剣を生み出すのではなく、たった一本。それを右手に握り締めると、一気に大地を駆け抜けていく。

周囲の景色が一気に流れていく。

疾走。

この森の中を駆け抜けていく。すると、絡めとるように再びツタが俺に襲いかかってくるが……その全てをこの氷剣で切り裂いていく。

「……くっ！！？　あまり私を舐めないことねっ！！」

さらに生み出されるのは、粉塵。おそらくは花粉の類なのだろうが、視界が一気に悪くなる。

だが俺は戦闘に関しては、この視界だけに頼ってしているわけではない。

一瞬だけになるが、絶対不可侵領域を展開。
アンチマテリアルフィールド

流石にこの粉塵の中では、中継にも映ることはないだろう。そして、その粉塵を掻き消すと同時に、花の核を知覚。

触手の位置とハートネット先輩を覆っている花の核を発見した。

「……」

冷静に、ただただ冷淡に、行動を開始する。

深く意識を落とすように、地面を踏み締める。そうしてついに、
キリングレンジ射程距離へと入る。

すると、彼女も焦っているのだろう。今までの比ではない攻撃が俺を襲う。おそらくは、リソースを全て俺に割いたのだろう。

ここまで来れば決着はついたも同然。

あとはアメリカが拠点ポイントに居続ければ、俺たちの勝利。

しかし、ここで終わらせる気はなかった。

これからの布石のためにも、この翠玉の庭は俺一人^{エメラルドガーデン}で対処する。

「お嬢様っ!!」

「危ないですっ!!」

と、その花に近づいていくと倒れていたはずのシャーリエ姉妹が庇うようにして、現れた。魔術はもう使えないというのに、その身

一つで庇う姿には感嘆を覚えるが、今はそれをあしらうしかない。

俺は乱暴に二人を蹴りで弾き飛ばすと、そのまま苦悶の表情を浮かべているハートネット先輩の元へと駆け抜けていく。

すでに俺のスピードについてこれなくなったようで、ただ後を追いかけるだけになっている。

「ひっ!」

そうしてついにたどり着いた。

その花卉を切り裂くと、中央にある先輩の元へと到着。

そして、地面に埋め込まれている緑の大きな塊に氷剣を突き刺した。

瞬間。

展開されていた翠玉の庭が綺麗な翠の第一質料へと戻っていく。
エメラルドガーデン プリママテリア

そうして、森の中に大きなサイレンの音が響き渡る。

「勝者はチーム：オルグレン」

アビーさんの声が、魔術によって森の中で反響する。

目の前にいるハートネット先輩は、呆然とした表情でその場にぺたんと座り込む。

一方で俺は自分の流れている汗を拭う。

どうやら、試合は決着。完勝したといってもいいだろう。

エメラルドガーデン
流石に翠玉の庭ほどの魔術が出てくるとは予想していなかったが、
しっかりと臨機応変に対処することができただろう。

「あ……ま、負け？ 私たちの、負け……？」

ボソリと呟く。その姿は、まだ自分の敗北を受け入れることができていないようだった。

俺はそんな彼女の元に歩みを進めると、スッと腰を低くして握手を求める。

「ハートネット先輩。素晴らしい魔術でした。それに、とても楽しい試合でした。ありがとうございました」

握手には応じない。だが、彼女の目には何か今までとは違う別の意志が宿っていた気がした。

「あ、あなたは何者なの……？ 本当に一般^{オーディナリー}人なの？」

「はい。しかし、魔術師の技量とは血統だけで決まるものではありません」

「そう……そうなのね……」

俯く。そして、スッと手を伸ばしてくる。

「レイ＝ホワイト。認めましょう。今回は、私の完敗であると」

グッとその手を握る。

その言葉が出て来たのは、意外だった。彼女はこうして真正面から打ち破っても、決して俺のことは認めてくれないと思っていた。それは今までの接し方からそう思っていたのだが……どうやら、その顔は少しだけ晴れやかなものになっていた。

「……失礼な言葉になりますが、認めてくれるのですか？」

エメラルドガーデン

「翠玉の庭を真正面から打ち破られて、あなたを否定するほど……私は落ちぶれてはいません。世界は広い。そういうことにしておきましょう。私も熱くなりましたが、いい試合でした。ありがとう」「こちらこそ」

「そ……その、あなたの戦っている姿はちょっと」

言葉の最後はあまり聞こえなかった。しかし、顔が少しだけ試合中よりも赤くなっているような気がした。

「？ すみません。聞き取れなかったのですが」

「な、なんでもないですっ！ とりあえずは、認めてあげますっ！」

握手を交わす。

貴族としての矜持はあるのだろうか、こうして認める器を兼ね備えているのは流石の上流貴族の令嬢と言ったところだろうか。

すると、後ろからアメリカとアリアーヌがやってくる。

「レイ！ 勝ったわ！ やったわねっ！」

「レイ！ やりましたわねっ！」
「うおっ……！」

アメリカが飛びついてくると、続いてアリアーヌもまた思い切り抱きついてくる。興奮が止まないのか、二人とも今回の勝利を讃える。

「すごいわっ！ 私たち、勝ったのよ！」

「訓練の成果が出ましたわっ！」

「ああ。三人で勝ち取った勝利だ」

マギクス・ウォー
大規模魔術戦、予選。第一試合は、チーム・オルグレンが快勝することになるのだった。

第198話 反省と展望

無事に第一試合が終了。

そこから勝利の余韻に浸る間もなく、次の試合が開始となる。俺たちがカフカの森から出ていくと、中継をこの場で見ていた人たちから拍手が送られる。

それは主に、アメリカとアリアーヌを賛辞したものだった。一方で、クラスメイトたちからはより大きな拍手が一斉に送られる。

「ホワイトー！ お前すごすぎるー！」

「おめでとう！ すごい試合だったよー！」

「やばすぎるだろ！ ホワイト！ お前は何者だよっ！」

と、明るい声が周囲から集まってくる。それを聞いて、俺は微かに笑いながら軽く手を振るう。

「流石に周りもレイの凄さが分かってきたみたいね」

「ええ。そうですわね」

二人は頷きながら、そう語る。

俺としては、今回の試合で色々その他のチームに示すことができたらしいと思っている。

そうすれば、俺に警戒してくれるおかげでアリアーヌとアメリカ

が自由に動くことができるからだ。

「さて。次の試合は俺が見ておく。二人はシャワーにでも行つてくるといい」

「でも、悪いような」

「そうですねっ！　悪いですわっ！」

「しかし、汚れは気になるだろう。試合の後だ。気にすることはない。俺はすぐに円形闘技場コロッセオで次の試合を見る」

「レイがそういうなら……」

「ここはお言葉に甘えておきましょう。アメリカ」

二人とはここで別れることになった。もちろんシャワーが終わり次第合流する予定だ。今日はAリーグからGリーグまでの試合がかなり消費される予定だ。

今後のためにも、一試合たりとも見逃すわけにはいかない。

俺はその足で円形闘技場コロッセオに向かうと、すでに用意してもらっている席へと向かう。

「師匠。カーラさん。それに、リーゼさんも、ご無沙汰しております」

「おお！　レイか！　早かったな！」

「次の試合もすぐに始まるので」

「それはいい心がけだな。うんうん」

そう。俺たちは、師匠の近くに席を取ってもらっていたのだ。今後の試合を観戦する為にカーラさんに用意してもらっており、非常に助かっている。

席に着くと、師匠が先ほどの試合のことを尋ねてくる。

「レイ。どうやら、試合はうまくいっているみたいだな」

「そうですね。しかし、流石に翠玉の庭までは予想していませんでした」

「ああ。あれは確か、ハートネット家の令嬢か。魔術に長けているとは聞いていたが、まさか固有魔術オリジンとはな。しかし、あれは攻撃に特化しているものではない。攻略は容易だっただろう？」

「容易……とまではいいませんが、それなりに対処はしやすいものでした。それに、自分は基本的に内部コードインサイドを使用するので、それほど影響は出なかったのも大きいですね」

試合のことを振り返っていると、その会話にリーゼさんも混ぜてくる。

「レイ＝ホワイト。私も見ていたよ。勝利、おめでとう」

スツと握手を求めてくるので、彼女の薄い手をしっかりと握る。

「ありがとうございます」

「それにしても、君は試合運びが上手だね。第三拠点は、初めから捨てる作戦だったのかな？」

「はい。第一拠点と第二拠点を全て取り切れば、相手は確実に焦ります。そこで、今回は第一、第二、第四拠点を全て取り切って早期に試合を決めるつもりでした。翠玉の庭などの予期しない事態もありましたが、概ね試合はうまく勝利することができたと思います」

欲を言えば、エメラルドガーデン翠玉の庭を出される前に決着をつけたかった。そも、エメラルドガーデンあそこで翠玉の庭を発動させる間を与えるべきではなかった。

しかし、シャーリエ姉妹の魔術に妨げられてしまい、発動を許してしまった。

攻撃的な固有魔術オリジンではないことが幸いして、なんとか勝利することができたが、これは今後の反省点になるだろう。

俺としても固有魔術オリジンを使えるという想定をしていなかった、その詰めの甘さが出てしまった。

「ふふ。確かに、レイは私の弟子だからな！ あれくらい当然だった！」

師匠は妙に上機嫌だった。会った時もずっとニコニコとしており、とても嬉しそうだった。

しかし、すぐにその視線は鋭いものになる。

「しかし、レイよ。今回の試合。反省点が多いようだが、分かっているな？」

「はい。もちろんです」

反省点はもちろん理解している。そして、師匠はその話を広げる。

「まず、拠点を全て取り切って早期に試合を決着するのはいい。だが、固有魔術オリジンを出させる余裕を与えたのはよくなかったな」

「返す言葉ありません」

「ま、お前のことだからよく分かっているだろうが、あの試合を真の意味で完封するならば、あそこで固有魔術オリジンの発動は封じておきべきだった」

「自分の失態です。シャーリエ姉妹の底力を見誤っていました。そ

れに、魔術に長けている上流貴族の令嬢ということで、固有魔術オリジンの可能性も考慮しておくべきでした」

「そうだな」

そこからは、師匠にさらに試合のダメ出しがされていく。

なんだか昔を思い出して懐かしい気持ちに浸る。しかし、そこは真剣にその言葉を受け止めなければならない。

師匠の言つとおり、先ほどの試合は反省点が多い。

俺は現在、体内時間固定クロノスロックがない為、魔術を自由に使える。

しかし、それはある程度自分でセーブしなければならない。ふとした拍子に、魔術領域暴走オーバーヒートが悪化する可能性もあるのだから。

それを踏まえた上でも、あの試合は完璧に運ぶのならばもっと相手の分析に時間を割くべきだった。

先の試合も見据えているため、わずかに意識が試合に向いていなかったのだろうか……俺もまだまだである。

今回はそれが、悪い形で出てしまったようだ。

そうして師匠との反省会が終わると、リーゼさんがニコリと微笑む。

「なるほど。師弟というのは、このような感じなのですね」

「ふふ。私とレイの付き合いは長いからな。それにしても、久しぶりだったな。レイと戦術について話したのは」

「そうですね。自分もあの頃を思い出したようでした」

「しかし、今回の大会。分かっているとは思いますが、ルーカス・フォレストが必ず最大の障害になるだろうな」

「心得ています」

「レイはどう考えている？」

そこで、自分の所感を述べる。

おそらく当たるとすれば、本戦の攻城戦。そこで、チームでの戦いになれば、どのようになるのか。

予想される展開。それを複数提示した上で、どのように攻略していくべきか。

自分がいま考えていることを、ありのままに話した。

すると師匠は、ふつと微笑みを浮かべる。

「なるほど。私と同じ考えだ。勝敗はきっと、そこになるだろう」

「はい。しかし、まだ予選も通過していません。今は、目の前の試合にしっかりと集中したいと思います」

「いい心がけだ」

と、そんな話をしているとちょうど試合が始める時刻の直前。

目の前に映るモニターには、次の試合の様子が映し出されていた。

それと同時に、アメリカとアリアーヌも到着する。

「失礼します」

ペコリと頭を下げると、俺の隣に座るアメリア。

一方でアリアーヌは師匠とは初対面だったので、その場で自己紹介をする。

「アリアーヌ〓オルグレン。三大貴族、オルグレン家の長女でございます」

「リディア〓エインズワースだ。レイの師匠に当たる存在だ。先ほどの、試合。いいものだった」

「あ、ありがとうございます」

「それにしても……」

じつと師匠がアリアーヌのことを見つめる。それは何かを調べているような、探っているような、そんなものだった。

「ふむ。まあ、いいだろう」

「そ、そうですね？」

そして視線を切ると、アリアーヌはアメリアの隣に腰を下ろす。

次の試合が開始になる。俺たちは、それをただ集中して見つめるのだった。

ついに始まった大規模魔術戦。
マギクス・ウォー

俺たちの戦いはまだ始まったばかり。

この先に一体何が待ち受けているのか。果たして、優勝できるのかどうか。そのことはまだ分かりはしない。

これから試合は続いていく。

しかし、一つ一つの試合を全力で取り組んでいく。

そのことだけは、変わりはしなかった。

第199話 優勝候補

ついに大規模魔術戦が開幕となった。試合も順調に消化されていき、まもなく各リーグの上位チームが確定する。

そんな中で、この大会で優勝候補と言われているチームが一つあった。

それはチーム：フォルストだ。

全戦全勝。また、試合もこれまで一つも時間切れまで戦ったことはない。ほとんどの試合を、第三ポイントで終わらせている。つまりは、完封試合ということだ。

ルーカス・フォルストとエヴィの前線。さらには、アルバートは後方からの魔術支援に特化しているが、超近接距離での徒手格闘戦も難なくこなす。

全てのバランスがかなりの高水準で整っている。

それが、チーム：フォルストであった。

「よし。今回も完勝だね」

静かに納刀。そして、カフカの森の中にサイレンの音が響き渡る。

「勝者はチーム：フォルスト」

そのアナウンスを聞いて、ルーカスの周りにエヴィとアルバートがやってくる。

「やったな」

「おう！　今回も完勝だなっ！」

二人はコツンと互いの拳を合わせると、ルーカスとも同じことをする。

今回の試合もまた完封。全ての拠点でポイントを取り切った。相手には、一ポイントも与えていない。

そもそも今回の予選はその性質上、完封試合をすることは限りなく難しい。それは、次の拠点へのローテーションがあるからだ。

そのため、どれだけ戦力がかけ離れていても、ゼロポイントということはほぼあり得ない。

だが、拠点ではアルバートが待機して、そのサポートをエヴィがする。

一方のルーカスはたった一人でローテーションをして、次の拠点を一人で防衛。そこから二人が合流して、同じように試合を展開していく。

一見すれば、ルーカスの実力が目立つが、大会ではチームとしての完成度も高く評価されていた。決してルーカスだけのワンマンチームではない。

エヴィとアルバートもまた、今回の大会でその評価を確実に上げていたのだ。

「さて、戻ろうか。今日も反省会だ」

「分かりました」

「反省会か……今回は俺がちょっとやらかしたからなあ」

エヴィが頭を掻きながら、そう言葉にする。

確かに完封試合ではあるが、まだまだ改善点は存在する。今回の試合では、エヴィが前に出過ぎたせいで、ルークスがサポートに回るしかない場面があった。

彼はその性格もあって、つい熱くなってしまう。

頭では冷静に努めるべきだとはわかっているのだが、インサイド内部コードで強化した身体は止まることはなかった。

「そうだね。エヴィが前に出過ぎたせいで、僕がサポートするハメになった」

「う……」

「それも含めて、色々と反省点を上げよう」

三人はそのまま、カフカの森の外へと向かっていく。

その風格は、もはや王者のもの。

常勝のチームとして、彼らはこれから先も戦い続けるのだった。

「終わったか」

チーム：フォルストの試合を、三人で観戦していた。モニター越しにはなるが、その卓越したチームワークはよく理解できる。

俺たちと同様に、森での戦いをしっかりと熟知している。

それは三人の立ち回りを見れば明らかだった。

おそらくは、間違いなく本戦へと駒を進めるだろう。

「強いわね」

「ええ。でも、わたくしたちも負けてませんわっ！」

アリアーヌはそういうが、実際のところは……五分五分といったところだろうか。いや、ルーカス「フォルスト」だけならばまだしも、アルバートとエヴィの完成度がかなり高い。

チーム：オルグレンには欠点はない……と言及したいが、実際ネットクになるのは俺の存在だろう。それは全力を出すことができないからだ。

厳密に言えば、全力を出すことは不可能ではない。しかしそれは、かなりのリスクを伴ってしまう。できれば、基本的な魔術の使用は控えて、内部コードを主軸にして戦っていきたい。

予選ではそれで通じると思っている。しかし、本戦ではさらなる

猛者たちが待っている。チームとしての連携も、予選の相手とは比較にならない。

それに、本戦はリーグ戦ではなく、トーナメント形式だ。敗北してしまえば、そこで大会は終了となってしまう。

力を使うにしても、限定的な場面にしたい。

それこそ、自分の能力が遺憾なく発揮できるような……と、考えていると目の前にアメリカの顔が映る。

「レイ。どうかしたの？ 考え込んでいるみたいだけど」
「そうだな。二人には共有しておこう」

そして俺は、その場で自分が考えている懸念について話した。すると、声を上げたのはアリアーヌだった。

「大丈夫ですわっ！ 私たち二人でサポートしますわっ！ それに、いつまでもレイに頼ってばかりはダメだと思いますの」
「アリアーヌの言う通りね」

アメリカもまた、その場で軽く頷く。

「レイはいつも抱え過ぎだと思うの。今回の大会は、レイは確かに頼りになるわ。私とアリアーヌはあなたのことを信じてる。でもね、人を頼るって恥ずかしいことじゃないと思うの。それは、レイがあの時に教えてくれたのよ」

少しだけ顔を赤く染めながら、アメリカは恥ずかしそうに言葉にした。彼女が言っているのは、魔術剣士競技大会マギクス・シュバリエの時のことだろう。

あの時は俺も、色々と葛藤していた。

こんな自分が人の心に触れていいのかと。

誰かに寄り添って生きてもいいのかと。

そう思っていたからだ。

しかし、アメリカと出会い、みんなと出会い、少しずつ変わってきていると……思っている。

あの時の行動で、アメリカにそう言ってもらえるとは……本当に俺は、人に恵まれている。

「ありがとう。アメリカ」

微笑む。

きっと今は自然な笑みを浮かべることができているだろう。

「そうですわよ、レイ。あなたは私にだって、たくさんのもを与えてくれました。けれど、レイも何か思うところがあるのでしたら、教えてくださいまし。わたくしたちは、チームなのですから」

アリアーヌもまた真剣な表情でそのように語る。

そして、隣に座っているアメリカがそつと俺の手に触れてきた。

「レイ。大丈夫よ。私たちが、あなたを支えるから。だから、絶対

に優勝しましょう」

「そうですわっ！ わたくしたち乙女に任せてくださいましっ！」

「あはは…… アリアーヌの言う乙女は、ちょっとよく分からないけどね」

いつものようなやりとり。そんな些細な会話に俺は、幸福を感じていた。

そして、モニターを見据える。そこには、エヴィ、アルバート、ルーカス、フォルストが映っていた。

あの三人に勝つためにはどうすればいいのか。きっと真正面からぶつかれば、拮抗は徐々に崩れていくだろう。

だがきつと、俺たちなら勝つことができる。

アメリア。アリアーヌ。

二人ともに、その成長をずっと間近で見てきた。

さらに成長しているのは二人だけではない。俺もまた、成長している。それは精神的な面だけでなく、魔術的な面でも。

オーバーヒート
魔術領域暴走は現状この上なくくらいに良くなってきている。俺の魔術領域は、まだ制限されている部分はあるが、以前と比較すればかなり魔術を問題なく使えるようになっていた。

氷剣も数を制限すれば、問題なく使用できるほどには。

「……そうか。いや、二人には助けられてばかりだな」

「そんなことないわよ。レイだって、いつも私を助けてくれるわ」
「そうですわ！ でも、わたくしたちを頼ってもいいんですわよ。
だって、仲間なのですからっ！」

「ああ。そうだな。では、今後の話をしよう」

そうして俺たちは、今後の試合についてミーティングを開くことにした。

間もなく予選も終了する。

やってくるのは本選。そこでは、試合のルールも大幅に変わり、戦い方も変化していくだろう。

だがきつと、やり遂げることができる。

俺はそう、信じている。

第200話 二人きりの時間

ついに俺たちの予選での試合が終わろうとしていた。今までの試合は全戦全勝。やはり、一番の障害はチーム：ハートネットだったようで、残りの試合はスムーズに進行することができた。

初戦のように見せつけるような試合をするのではなく、ただ手堅く勝ちにこだわる。最悪、一ポイント差でも勝利は勝利。

安全マージンを保ちながら、俺たちは予選の最終戦に臨んでいた。

「アリアーヌ！ カバーするッ！！」

「分かりましたわっ！」

第五拠点での最後の攻防。ここで俺たちがポイントを取り切ってしまうえば、この試合は終了する。

それを相手もわかっているようで、果敢に攻めてくる。いや、それはもはや捨て身にも等しい攻撃だった。

抑えることなく、残りのことも考えずに魔術を行使している。

俺たちのチームはすでに二位以上が確定。そのため、この試合を仮に落としてしまっても問題は無い。一方で相手チームはここで負けてしまえば、予選敗退が確定。

後のことを考えるよりも、いま目の前の勝利の方が大事というの

は当たり前だろう。

そしてその猛攻を、アリアーヌと共に前線で捌いていく。

相手は魔術主体のチーム。そのため、木々でうまく射線を切りながら、時間を稼ぐ。

アメリアは拠点から魔術でサポートをしてくれているが、それでも俺たち二人で目の前の三人を相手にすることに変わりはない。

「……本当に成長したな」

ボソリとだが、試合の最中にそんなことを言ってしまう。

俺は後ろからアリアーヌのサポートをしている。今回の試合は、アリアーヌを主軸にして戦うと元から決めてあったのだ。

それは経験を積ませるためという側面もあるが、一方で俺の戦力を隠すという意味合いもある。

良くも悪くも、どうやら俺たちのチームはマークされているらしい。

本戦通過が確定したので当たり前なのだが、その中でも優勝候補と言われるくらいにはチーム：オルグレンはその頭角を現している。

チーム：フォルストとチーム：オルグレン。

その二つのチームが優勝候補だろうと、囁かれているのは耳に入っていた

そうしてしばらく時間が経過し、森の中に大きなサイレンの音が響き渡る。

「勝者は、チーム：オルグレン」

そのアナウンスを聞いて、パアツと顔を綻ばせたアリアーヌが俺のもとに走ってくると、そのまま思い切り抱きついてきた。

それをしっかりと受け止めると、彼女は嬉しそうに声を上げる。

「やった！ やりましたわっ！ 勝ちましたわっ！」

「ああ。そうだな」

「しかも、全勝ですわっ！ わたくしたちは、すごいですわっ！」

「俺たちのチームワークはかなりの高水準に達している。当然だな」

「レイ！ 本当にやりましたわねっ！」

と、二人で試合の結果を喜んでいると後ろからアメリカがやってくる。

「……アリアーヌ。嬉しいのはわかるけど、レイに抱きつきすぎじゃない？」

凜とした声が、俺たちの耳に入る。すると、アリアーヌは顔を真っ赤に染めて、すぐにバツと俺から離れる。

「あ……っ！ も、申し訳ないですわ。つい、感極まってしまっ
て……」
「……ふん。ま、気持ちは分からないでもないけど」

そうして俺たちはアメリカとも拳をコツンと合わせる。

「やったわね。レイ」

「目標通り、全戦全勝だな」

「ええ。始まる前は不安もあったけど、こうして無事に達成するこ
とができたわね」

「ああ。それにしても、アメリカは魔術の精度がかなり向上したな」
「そう？」

「間違いない」

「えへへ。そう言ってもらえて、ちょっと嬉しい……」

嬉しそうにはにかむアメリカだが、決してそれはお世辞などでは
ない。

おそらくは、因果律蝶々の制御に際して全体的な魔術の技量が底
上げされているのだろう。

バタフライエフェクト
因果律蝶々は膨大な魔術領域の中に、精密なコードの構築を必要
とする。

先天的に持っている莫大な魔術領域。そして、後天的に獲得した
精密なコード構築の技術。

今までは、その魔術領域をフルに活用できていなかったのだろう。
しかし今は、その性能をしっかりと発揮して魔術を行使してい

る。

アメリカ本人はピンときていないようだが、その成長は目覚ましいものがある。

「アリアーヌも、連携がよくなって来たな。俺との相性もバッチリだ」

「相性がバッチリっ!!?」

「? 今までの試合を通じて、俺はそう思ったが」

「あ……試合のことですね。それはもちろんですわっ!」

その大きな胸を張って、アリアーヌは高らかに声を上げる。

アリアーヌもまた、試合を通じて成長を果たしていた。何よりも状況を俯瞰的に観ることができるようになっている。

俺とアメリカの位置を俯瞰的に把握して、自分はどうのように立ち回るべきなのか。それに、基本的な魔術の技能も向上している。

前線で俺と戦い続けた経験が生きてきているようで、本当によかった。

「ついに本戦だな」

「そうですね」

「本戦か……攻城戦だよな。それに、休憩できる時間も少ないみたいだし厳しい戦いになりそうね」

「そうだ。二日ほど休暇を挟むが、そこから先はノンストップで一気に決勝戦まで試合がある。ここですっかりと休息をとっておこう」

「分かりましたわっ!」

「そうね」

こうして俺たちの予選は、無事に全戦全勝という形で幕を閉じるのだった。

「な、なんだか緊張しますわね……」

「？ 何かあるのか？」

「い、いえっ！ 別になんでもないですわっ！」

現在は、中央区のレストランに二人でやって来ている。本当はアメリカも含めて三人で食事でも取りながら、次の試合についてミーティングをしようと思っていたのだが、急な用事が入ったらしい。

三大貴族の令嬢ということで、アメリカもなかなか大変らしい。一方でアリアーヌは特に用事はないということで、仕方なく二人でくることにしたのだ。

そして、今は二人でステーキに舌鼓を打ちながら、今までの試合を振り返っている。

「それにしても、全てレイの予想通りでしたわね」

「大まかな予測は、相手チームの総合力から判断できるからな」

「それも、昔の経験からですよ？」

「そうだな。軍人時代は主に前線で戦っていたが、キャロルやアビィさん。それに師匠に、前線で戦うからこそ最低限の知識は持って

おけと言われていたからな」

「……何だか、レイの知識は最低限ではない気がしますけど。まあ、今更ですわね」

アリアー又ははあ、と軽くため息をつく。彼女のこの反応にも少し慣れてきた。

どうやら、俺が非常識な側面を持っているとかで、「わたくしがしっかりと教えて差し上げますわっ！」と豪語していたのだ。

思えば、アリアー又はティアナ嬢の姉ということでも面倒見がいい。

駄々をこねるアメリアを説得したり、このチームをまとめるために色々と尽力してくれている。「全く、レイはわたくしがいないとダメですわねっ！」とも言っていたのは記憶に新しい。

「本戦はどうなるのでしょうかね」

「おそらくは、予選以上に厳しい戦いになるだろう。相手チームの強さも桁違いになるが、何よりも過密なスケジュールの中で行われる試合だ。それに攻城戦は、試合時間が長い。カフカの森での戦闘と異なり、古城の戦い方にも慣れていく必要があるだろう」

「レイは経験がありますの？」

「いや、城での戦いはないな。魔術でのゲリラ戦が多かったからな。しかし、やりようはあるさ」

ニヤリと笑う。それは色々と策略を脳内で巡らせて、自然と出たものだった。

それを見ると、アリアー又は口元に手を持っていき軽く笑う。

「ふふ。何だか、レイのその笑い方は何度見ても面白いですわ」

「そうか？」

「ええ。いつもは冷静沈着なのに、今はとってもおかしな顔をしていますわよ？」

「おかしな顔、か。言い得て妙かもしれないな」

「でも」

しばらく間を置くと、彼女はじっと俺の双眸を見つめながらこのように言葉にした。

「笑っているレイは、とっても魅力的ですわ」

その声色は、今まで聞いてきたものとは少しだけ何かが違う気がした。アリアーヌの表情もまた、いつもとは違う。

しかしそれは、とても美しいと。

心からそう思った。

「そうか、恐縮だ。しかし、アリアーヌも魅力的な女性だ」

「もうっ！ いつも同じようなことを言わないでくださいまし！」

と、抗議の声を上げるがそれはどこか嬉しそうだった。

そうして俺たちは、ささやかな時間を二人で過ごすのだった。

第201話 恋する乙女……ですの？

無事に予選が終了しましたの。

わたくしたちのチームはなんと、全ての試合で勝利を収めてAリーグの予選を一位で通過することに！

レイとアメリアがいるので当然のことですが、それでもやはり嬉しいものは嬉しいものです。

今回の予選では、全てのリーグを総合して上位二チームがシード権を獲得することができます。わたくしたちのチームは一位のチーム：フォルストと僅差の二位ということで、無事にシード権を獲得。

そのため、本戦は二回戦からの参戦となります。

「はぁ……今日も疲れましたわぁ……」

現在は実家に帰ってきており、お父様に報告をしました。すると、全試合を観戦していたようで、とても褒めていただきました。

曰く、「筋肉の輝きが素晴らしかったなっ！」だとか。

確かに、わたくしたちのチームは素晴らしい連携と筋肉を兼ね備えていましたわ。

それは自他共に認めます。

レイは言わずもがなですが、アメリカも最近では訓練の成果で素晴らしい筋肉がついています。

本人は、「最近ちょっと筋肉質になってきて、嫌なんだけど……」
と書いていましたが、きっといつかはその筋肉の素晴らしさに気がつくことでしょう。

もちろん、レイの筋肉の素晴らしさは今更語ることはないですわ。
あれこそ、至高にして頂点の筋肉なのですから。

それにわたくしの筋肉も最近はとても良いものに仕上がっております。これも全て、レイのおかげですわ。

「お姉ちゃん！　一緒にお風呂はいろーっ！」

と、一人で入浴をしようと思っていると、妹のティアナがやって来ました。まだ幼いですが、最近はその美しさに磨きがかかっているような気がします。きっと将来は、とても美人になるでしょう。

「ええ。もちろんですわ」

「わーいっ！　やったーっ！」

しかし、おてんばなところは変わらず、家のメイドたちをよく困らせているとか。

また話を聞くと、お父様と一緒に大会を観戦していたようでそれ

はもうはしゃいでいたとか。

家族が観にきているとは知りませんでした。オルグレン家の長女に恥じない試合ができたと思っていますわ。

「ふう……今日も疲れましたわあ」

「おつかれさまだよーっ！ お姉ちゃん！ わたしがお背中ながしてあげるねー！」

「それはとても助かりますわ」

そして、ティアナがたくしの背中を流してくれます。その後は入れ替わりで、ティアナの背中を流してあげて二人で一緒に浴槽に浸かります。

まだ体が小さいので、ちょうど膝の上に納まります。しかし、昔に比べればとても大きくなったと思います。

「ねえねえ、大会はゆうしょうできそうなのっ！！？」

キラキラした瞳でそう尋ねてきますが、もちろん思っている事を素直に話します。

「ええ！ もちろんですわっ！ アメリアとレイもいるので、わたくしたちは無敵ですわっ！」

「無敵っ！？ すごーい！ でも、アメリアちゃんは知っているけど……レイって誰のこと？」

「あ……そ、それは……」

確か、ティアナはレイが女装した姿であるリリーのことは本当の女性だと思っただままのはず。

正直に伝えてもいいのですが、ここは夢を壊さないためにもいうべきではないと判断しました。

ということで、レイのことは別に話すことにしました。今までレイとどのように過ごしてきたのか、ありのままに伝えました。

「もしかして、お姉ちゃんって……そのお兄ちゃんのことが好きなの？」

ニヤニヤと笑いながらティアナがそう言うてきますが、ここは姉として毅然とした態度を貫き通すべきです。

しかし、その言葉を聞いた瞬間、顔が真っ赤になるのが自分でもわかってしまいました。

「なあっ！？　ち、違いますわっ！　レイとはその……同じチームで、仲の良い友人というかつ！」

「でも、お話してるとき、とってもうれしそうだったよ？」
「う……」

最近はおてんばなのに加えて、ちょっとマセてきているティアナ。それも相まって、わたくしの事をじーっと見つめて追及してきます。

「そ、それとこれとは話が別ですわっ！」

「……そうなの？」

「ええ。これはティアナも成長すれば、分かりますわ」

「へえ〜。そうなんだ〜」

どうやら納得してくれているようですが、わたくしの胸中にはある違和感が残ります。

そうしてティアナとお風呂から上がって、しばらくしてから自室へと戻ります。

簡素な部屋ではありますが、自分の部屋というものは落ち着くものです。

「はあ……やつと落ち着きましたわ……」

ティアナはお風呂から上がると、今度は家中を走り回ってわたくしと鬼ごっこをしました。もちろん、叱りつけるのですが、言う事を聞くことはなくそのまま笑いながら走る始末。

わたくしも、本来ならもっと強く出なければいけないのですが、やはり妹は可愛いものなのです。

「それにしても……」

ティアナに言われて、改めて考えますが……わたくしはその……レイのことが気になっていますの？

い、いえ！

別にアメリカやレベツカ先輩のようにはなっていませんわ。でも、その……レイのことを知れば知るほど、放って置けないと言つか。

いつも毅然としていて、冷静沈着。でも、どこか常識に欠けてい

て抜けているところも多いです。その経歴からそれは当然とも思えるのですが、どうしてこんなにも気になってしまうのでしょうか。

「もしかして……？」

と、心の中にある懸念を少しだけ意識してみます。すると、自分でも分かってしまうくらいには顔が赤く染まっています。

初めての出会いは、女装姿でした。それはもう、啞然としました。が……そのクオリティは普通の女性よりも美人で本当に驚きました。

そこから先は、アメリカの仲の良い友人という印象の方が強かったですわ。学院が違うということで、会う機会も少なかったですし。

しかし、アメリカが変わったのを見て、わたくしも変わりたいと。

だからレイに今回の大会に、同じチームとして参加して欲しいと誘ったのです。そこから、レイと同じ時間を過ごすことが多く彼のことを知る機会が多くなりました。

わたくしとしては、アメリカの邪魔をするつもりではないので、もちろんサポートに徹するつもりでした。もともとは、アメリカの恋は応援するつもりだったのです。

ですが、レイのことを知れば知るほど、アメリカがレイに惹かれてしまう気持ちが理解できてしまうのです。

「ん？ 理解できる……？」

ベッドで横になって、天井を見つめます。

そして自分の思考が、徐々に明瞭になっていきます。

「まさか？ まさか、まさか、まさか？」

そ、そんなことはありませんわっ！

わたくしは初恋もまだですし、この気持ちをどのように定義するのはまだ分かりません。

しかし、レイのことを考えるとどうにも自分の胸が暖かくなるのを感じてしまうのです。

か、仮に……仮の話ですが……もし、もしもの話ですわよ？

レイと恋人になったら、わたくしはどう思うのでしょうか？

「ッ！！！」

おそらく今までの中で、一番顔が赤くなっていることでしょう。いえ、顔だけではありません。全身が今は、とても熱いです。

この気持ちはきつと……その、一時の気の迷いですわっ！

決してわたくしが、【恋する乙女】ということではありませんわっ！！

「も、もう寝ましょう……考え過ぎは良くないですわっ！」

ということで、もう寝ることに決めましたの。これ以上余計なことを考えるのは良くないですわ。

しかし、寝よう寝ようと思っていても思い出してしまうのはレイとの思い出ばかり。

特に最近のレイは妙に輝いて見えるというか、魅力的に見えるというか、ふと見えるその筋肉に目が引きつけられるというか……っで！ わたくしはまた何を考えていますのっ！！？

あーっ！ もーっ！

わたくしは決して【恋する乙女】ではありませんことよ！

今のわたくしは、【戦う乙女】なのですからっ！

しかし、結局のところ眠ることができたのは、それから数時間後のお話でした……。

第202話 その覚悟

ついに大規模魔術戦の予選が終了。そして、一日だけ休みを挟んで本戦が開始される。

予選を勝ち抜いたのは、全十四チーム。その中で、総ポイント獲得数の多い二チームはシード権を獲得することになる。そのため、その二チームは必然的に別の山となる。

今回は、チーム：フォルストが予選での総ポイント獲得数のトップ。続いて僅差で、チーム：オルグレンとなる。

そのため、図らずとも優勝候補と言われているチームがぶつかる
とすれば、それは決勝戦になる。

現状では、チーム：フォルストが優勢との声が大きい。しかしそれは、レイが一般人出身ということであり声を大にしてチーム：オルグレンを応援できないからだ。

もつとも、アメリカとアリアーナが三大貴族ということもあり、
応援はそれなりにあるのだが。

「順当に上がって来たか……」

アルバートは、自室でくつろいでいた。

今日はせつかくの休日。ということでは今後の大会のためにも、今日はゆつくりと休むことにしている。本当はトレーニングを少しでもしたかったのだが、ルーカスにきつく言われているため本日は何もしないことにしたのだ。

休むこともトレーニングの一環だと言われ、こうして自室で資料を眺めている。

本戦のトーナメント表はすでに出ている。

そして、彼がただ見つめるは……チーム：オルグレンの名前。

レイには決闘で、アメリカには魔術剣士競技大会の予選で、魔術
剣士競技大会の本戦ではアリアーヌに敗北を喫した。
マギクス・シュバリエ

この学院に入るまでは自分の才能に見切りはつけていた。三大貴族の血に敵うことは決まっていたのだ。そう思っていたからだ。

だが、レイと出会うことでアルバートは変わりつつあった。

自己を省みて、魔術師として成長するためには何をすればいいのか。まだ彼は、変わろうと思ってからそれほど時間は経っていない。

すぐに結果が出るとは思っていない。

しかし、この大会でその三人に以前のように敗北を喫することはもうしたくないと……そう思うほどには、彼は成長していた。

確かに、才能は足りないのかもしれない。

その中でも努力によってアルバートはまた別の道を模索していた。
あの頂にたどり着くためには、努力は欠かせないのだから。

才能に見切りはつけていても、努力にも見切りをつけているわけではない。必ず報われるとは限らないが、自分自身にできることはそれしかないことをアルバートはよく理解していた。

「ふう……」

グツと背もたれに体を預けて、アルバートは窓越しに外の風景を見つめる。

本格的に冬が到来し、そろそろ雪が降ってもおかしくはない季節になって来た。今日は少しだけ曇っており、微かにしんと雨が降っていた。

といっても、これからの日程では天気は晴れとなるらしい。

つまりは天候的なハンデは存在しないことになる。

万全な状態で本戦に挑めるということだ。

そして、一人で読書でもしようかと思っていると彼の部屋にノックの音が響く。

「入って構わない」

「失礼します」

上流貴族ということで、アリウム家は在中のメイドを複数雇っている。その中で、メイド長と呼ばれる年配の女性がやってくる。

彼女が来ることは滅多にない。ただの呼び出しであれば、他のメイドを使うだろう。つまり今回は、何か特別な用事で呼び出しがあるのだとアルバートはすぐに察した。

「当主様がお呼びになっております。書斎へいらして欲しいのとです」

「父上が、自分を？」

「はい」

「分かった……」

釈然としなかった。

アルバート家の当主は父親であるが、実質的には彼の母が支配していると言っても過言ではない。

母の方は、血統主義であり教育の際にもその血がどれほど高潔なのか、ということを行い聞かせられていた。

一方の当主である父親はアルバートには無関心に等しかった。

そのため、彼は実の父親には苦手意識を抱いていた。

別段、仲が良いわけでも、悪いわけでもない。

だが、アルバートの印象を語るとすれば、血の繋がった他人。そう形容してしまうほどには、親子間の関係性は離れきっていた。

そんな父親が、自分を呼び出すとは……一体なんの用事だろうか。

そして、アルバートは書斎の扉を丁寧にノックする。

「アルバートです」

「入れ」

「……失礼します」

室内に入る。彼の目の前には、父親が座っていた。メガネをかけて、灰色になった髪を掻き上げている。今日はいつものように書類作業をしていたようで、机の上には紙が積み上げられていた。

歩みを進めて、父親の前に立つ。

久しぶりに顔を合わせたが、やはりアルバートは父親のことがよく分らない……そう思った。

「大規模魔術戦。マギクス・ウォー 出場しているらしいな」

「はい。無事に予選を通過しました」

「そうか。チームメイトは、同級生にあのルーカス・フォルストらしいな」

「二人とも、素晴らしい魔術師です」

「私も中継を見たが、確かにそうだな」

啞然とする。

自分には全く興味のない父親が、こうして自分の試合をわざわざ観戦しているなどとは夢にも思っていなかったからだ。

そもそも、大規模魔術戦マギクス・ウォーに出場することは直接伝えてはいない。

それは、魔術剣士競技大会でも同様。マギクス・シュバリエ

母親はその才能を示すべきだと豪語しており、魔術剣士競技大会でアリアーヌに肉薄し、敗北したときには大層褒めてくれた。

あの三大貴族のアリアーヌとオルグレンにあそこまで迫るとは、本当に才能のある息子だと。嬉しそうに語っていた。

そう。母親でさえ、三大貴族の前には敵わないと思っていたのだ。アルバートはその言葉を受け取った時、その胸中は複雑な気持ちで支配された。

一方で父親からは、特に言葉はもらっていない。

だというのに、どのような心境の変化なのだろうか。

「学院に入ってから、雰囲気が変わったな。アルバート」

「そう……でしょうか」

「ああ。間違いない。自分でも、心当たりがあるだろうか？」

「それは」

じつとアルバートの目を射抜く。そこで言い訳をする理由など、彼にはなかった。ただ素直に、話すことにした。

「……大切な友人ができたからだと思います」

「ほう……お前は、周囲の人間は貴族で固めていたようだが？ その言い分だと、貴族ではないと？」

「はい。その通りです」

どうやらアルバートが思っているよりも、父親は無関心ではないのかもしれない。彼の心には、そんな考えが浮かび始めていた。

「レイ、ホワイト。決闘で一般人に敗北し、自己を省みるようになったか？」

それは、核心をつく言葉だった。あの時のことは、公にはされていない。だがおそらく、何かの手段を使ってその情報を入手したのだろう。

つまりは、レイに敗北した自分に説教でもしたいのか。

と、詰問されるのを覚悟していると思いがけない言葉が耳に入る。

「……そうです。レイと出会って、決闘に敗北し、自分は変わりました……」

「そうか。それは」

しばらく間を置いて、さらに言葉を続ける。

「とてもいいことだな」

「……え？」

予想外の言葉に、啞然とする。

そして、彼の父はどこか遠くを見据えるようにして語る。

「血統主義にはもともと私は、昔から懸念を抱いていた。それは今回の大規模魔術戦に反映されている。私も推進した一人だからな」
「……そうなのですか？」

「ああ。三大貴族、それに上流貴族、さらには七大魔術師の意見が合わさって今回の大会は実現した。目指すべきは変革であり、この旧態依然とした魔術師の世界を変えるために」

「そんなことが……」

初めて知る事実。それに、自分の父親が保守的な人間ではないことに何よりも驚いた。母親の教育に口を出さないものだから、父も同じと思っていたのだ。

「父上は、血統主義ではないのですか？」

「……才能は確かにあるだろう。それは、三大貴族、上流貴族、そのほかの貴族を見れば、一目瞭然。だが、魔術師とはそれだけではない。構成する要素は多岐に渡る。だが私も迷っていた。この世界でその考えを推進してもいいのか。その中で、上から提案があつてな。それに乗ることにした」

「なるほど……そのような背景が」

すると、父は顔を少しだけ綻ばせる。それは今までに見たことのない、表情だった。

「足掻いていたのは、もともと知っていた。才能に悩んでいたことも。しかし、お前は彼に出会ったことで変わったようだな」

「はい。レイのおかげで、前に進みつつあります」

「そうか。ならばもつと精進するがいい。このアリウム家を任せることのできる、立派な魔術師になることを期待している」

「はいっ！」

今までにはただ惰性で、この家を継ぐのだと思っていた。長男だから仕方がない、と。

しかし今は違う。

アルバートは改めて、魔術師として大成し、上流貴族に恥じることはない人間になると……そう、誓うのだった。

第203話 不器用な親子

本戦。

ついにこの時がやって来た。本戦はトーナメント形式になっており、予選で勝ち抜いた全十四チームが競い合う。

その中でも、予選の獲得ポイントの上位二チームはシード権を獲得することができる。今回の大規模魔術戦では俺たちのチームが二位。僅差でチーム：フォルストが一位となっている。

そのため、チーム：フォルストと当たることがあるとすれば決勝戦になるだろう。

基本的には予選の総獲得ポイントが上位のチームほど優遇されることになっているのが、大規模魔術戦である。
マギクス・ウォー

「……朝か」

ボソリと呟く。朝になり、心地よい日差しが室内に入り込んでくる。だが俺は、ある違和感を覚えていた。

それはなんてことはないのだが、エヴィの大きないびきが聞こえてこないのだ。

俺は基本的に朝五時には目が覚めるように習慣付けてあるのだが、エヴィは割と朝が苦手である。

だというのに、今日は彼のいびきは聞こえてこない。

つまりは、もう起きているのだろう。

そうしてリビングに向かうと、そこでは冬だというのに大量の汗を流しながら筋トレに励んでいるエヴィの姿があった。

俺もまた、彼と同じように上半身裸になるとそこで筋トレを開始する。

あくまで今日の試合の負担にならないように、軽く汗を流す。するとエヴィがニカツと笑いながら、プロテインを差し出してくれる。

「ほらよ。レイ」

「助かる」

もらったプロテインを飲み干すと、テーブルの上にコンとそのコップを置く。

「レイ。とうとうここまで来たな」

「ああ。そうだな」

互いに視線を交わす。今回に限って俺たちは、敵チーム同士。そして、当たるとすれば決勝戦になる。

これほど滾ることはないだろう。

「もしレイたちと当たるとすれば、決勝戦だな」

「決勝戦か……そちらは大丈夫なのか？」

「おそらく順当に進めば、チーム：ハートネットと当たることになるだろうな」

「チーム：ハートネットか。手強いぞ」

「それは試合を見て思ったさ。でも、俺たちは勝つぜ」

それは虚栄の類などではなかった。最近思うが、エヴィは今までよりもさらに魔術師としての技能が向上している。

筋トレもそうだが、ほぼ毎日欠かさずに訓練に励んでいたようだからな。

また、俺たちAリーグに関しては一位はチーム：オルグレン。二位はチーム：ハートネットになっている。

俺たちは予選のリーグ戦では全戦全勝。トップで通過を決めた。そして、チーム：ハートネットは俺たち以外のチームに負けることなく二位確定となった。

彼女たちの試合は他にも観戦していたが、やはり魔術での攻防戦は一級品。

そもそも、森での戦い方に慣れている生徒が少ないため、魔術戦になることが多く、チーム：ハートネットは圧倒している試合が多かった。

「このことは、いつ聞こうか迷っていたんだが……」

エヴィは少しだけ間を置くと、俺にある質問を投げかけて来た。

「レイは親父と知り合いなのか？」

「もしかして、見ていたのか……？」

「ああ。遠目からだが、チラッと見えてな。いや、元々はそうなんじゃねえかな」とはずっと思ってたんだ」

それはいつしか来るだろうと思っていた。そして、いつか話すべきだと思っていた。

そう。俺はエヴィの父親とは知り合いだ。それも、同じ隊に所属していた。師匠の元で同じように訓練を受けて、同じ飯を食べ、同じ戦場を経験した。

彼の名前は、デルク＝アームストロング。

デルクは極東戦役の最中に、こう言っていた。

自分にも、俺と同じ歳の子供がいて、距離感を図りかねていると。

軍人であるがゆえに、家に帰ることは極端に少なかった。それに俺たちの隊は極東戦役の中でも、最前線。

俺とは違って帰る場所のある人は多い。

そして彼もまた、なかなか家に帰ることができずに俺に向かって言っていたのだ。

いつか息子と、友達になって欲しいと。自分はもう嫌われているから、と。

一目見た時に、デルクの息子がエヴィということはわかっていて、それは容姿が酷似しているからだ。その圧倒的な体の大きさも、二カッと笑った時に見える白い歯も、彼を想起せずにはいられなかった。

そんなデルクは、まだ軍人だ。

俺たちとは違って、退役することはなかった。そのためおそらく、エヴィとはまだ距離感があるのだろう。

そのような背景もあって、俺は躊躇していたが……時が来たようだ。

「デルク＝アームストロング。俺はデルクと呼んでいたが、彼とは同じ部隊に所属していた。戦友だな」

そういつと、エヴィは少しだけ顔を歪めるのだった。

「そうか……レイが極東戦役に参加したって、聞いた時から思ってたんだ。それに試合を見て思った。レイは、親父に似ているところがあるってな」

「そうなのか？」

「なんとなく……になるが、直感的にそう思ってたんだ」
「そうか」

そうして再び、彼は黙り込む。その後、少しだけ不安そうに言葉を紡いだ。

「親父は、俺のことを何か言っていたりしたか？」
「……」

正直に話すべきなのか。親子間の問題に、他人である俺が口を挟んでいいのか。

迷う。

しかし、これも運命だと思って俺は素直に話すことにした。

「デルクは時折言っていた。俺と同じ歳の息子がいて、距離感を覚えていると。それは、あまり家に帰ることができない自分のせいだと言っていた。しかし、その話を聞いて思った。デルクは確かに、エヴィを愛していると……」

「そっか……」

エヴィの落ち込んでいるような、迷っているような顔は初めて見た。

そして俺はさらに言葉を続ける。

「極東戦役が終われば息子と妻に会いたいと言っていたが、会ったのか？」

「一度だけ……入学祝いでことで、家族で食事をした」

「どうだったんだ？」

「やっぱり、俺はずっと母さんをほったらかしにしてた親父に思うところがある。それが、俺の勝手なエゴだと分かっているもな。今は定期的に実家に戻っているみたいだが……俺と入れ違いになったな」

「なるほど。これは余計なお世話だと思っているが……」

実は俺は、先日デルクに出会っている。それは、試合を観戦するために円形闘技場コロンセオに向かっていた時の話だ。

おそらくエヴィは、その時に目撃したのだろう。俺とデルクが話している姿を。

「レイ？ レイなのか！！」

「……デルクか？ 久しぶりだな」

「ああ！ 本当に、久しぶりだなっ！」

エヴィと同じようにその髪を刈り上げ、圧倒的な巨軀を有したデルクはとても元気そうだった。数年ぶりの再会になるが、以前と変わらないようだ。

「極東戦役ぶりか？」

「そうだな。最後に会ったのは、終戦後だな」

「そうか。大きくなったな。それに、レイが学生をしているのか……何だか感慨深いぜ」

二カつと白い歯を見せて笑うその表情は、やはりエヴィに似ていた。

「で、デルクは何をしに？ 観戦か？」

「ま、まあ……そんなところ、か？」

「もしかして、エヴィの試合を見にきたのか」

「えっ！！？」

分かりやすい男である。眉をあげて、驚いた表情をいとも簡単に

晒してしまう。師匠には、「デルクは良くも悪くも、まっすぐだな。ま、単純馬鹿は嫌いじゃないがな」と言われていた。

その言葉は幼い頃はよく分からなかったが、今は本当にそれがよく理解できる。

「まあ……その。息子が出るんだから、見にきたくなってな。へへ」

照れながら鼻を擦る動作もまた、同じ。本当に似たもの親子だと思う。

そして俺は、単刀直入に話をすることにした。

「デルク。俺は今、エヴィと同じ寮の部屋で過ごしている」

「……は？ まじか？」

「ああ。どうやら、聞いてないみたいだな」

「そう……だな。息子とは、まだ仲が悪いからな。ははは！」

大きな声で笑うが、明らかに元氣のない笑い方だった。どうやら、その確執はまだ残っているようだった。しかし、デルクは歩み寄ろうとしている……そんな様子が窺えた。

「で、その……あいつは元氣にやっているのか？」

「俺と同じで、筋トレによく励んでいる」

「そっかあ……まだやってるのか。あいつ」

しみじみと呟く。それは少しだけ嬉しそうな、感情のこもった言葉だった。

俺は、その言葉には何か他の意味があるのだと感じ取る。

「もしかして、エヴィが筋トレに励んでいるのはデルクの影響なのか？」

「ん？ ああ。小さい頃に、母さんを守るためにはどうすればいい？ って聞かれてな。そこは筋トレをしとけ！ とアドバイスしていたんだ。筋肉があれば、どうにかなるってな。魔術は後からついてくるって、言ってたが……そうか。それは嬉しいな」

顔を少しだけ綻ばせながら、デルクは嬉しそうに微笑む。

彼のそんな顔を見ることができた俺は嬉しかった。互いに数多くの死線をくぐって来た。こうして五体満足でこの場に立っているのが、奇跡と思えるほどの戦場を戦い抜いていた。

よくデルクは、「俺、この戦いが終わったら息子と妻に会った……」と茶化した様子で不吉なことを言っていたが、それが実現できたようで本当に良かったと思う。

この手のジョークは俺たちの部隊ではよくあった話だが、極東戦役の最終戦ではそんなことを言う余裕がないほどに俺たちは追い詰められていた。

そのことを考えると、よくこうしてここに立っているものだと感慨深くなるものだ。

「そういえば、レイの試合も見たがアレは大丈夫なのか？」

「オーバーヒート魔術領域暴走なら、改善に向かっている」

「そうかあ……でも、今は隊長じゃなくてレイが【氷剣】なんだろう？ それに学生もやっているとは……時が経つのは本当に早いものだ」

と、少しだけ過去の話に花を咲かせると、俺は率直に言ってみることにした。きっとそれは成長した証。過去の俺だったならば、言うことができない言葉だった。

「デルク。エヴィは確実に成長している。そして、俺が言うのもなんだが……もう少し歩み寄ってもいいと思うぞ。エヴィはそれを受け止めてくれると思う。」

「……」

するとデルクは、ポカンとした表情を浮かべる。よく顔に出る男だが、今回ばかりは心底驚いていると言う表情をしていた。

「どうした。そんなに驚いた顔をして」

「いや、驚いてんだよ。レイからそんな言葉が出るなんてな。もしかして、学院に入って変わったか？」

「そう、だな。多くの友人ができて、俺は少しだけ変わりつつあると思う」

「そうか……レイにも、同じ歳の友人ができたか」

「エヴィもその一人だ」

「それは本当に嬉しいぜ。レイ。エヴィと今後も仲良くしてくれよ」
「もちろんだ」

というやりとりをしたのだ。

そのことを軽く話すと、エヴィもまた驚いた顔をしていた。

本当に似たもの親子だと思う。そして、二人ともまだ生きているのだ。今はそれを喜ぶべきだろう。それはきっと、エヴィも分かっ

ている。極東戦役では、数多くの死者が出た。俺たちの部隊からも、この世を去っていく者は多かった。

その後、エヴィから話を聞いた。父親に対して、思うところはあ
る。しかし、極東戦役から無事に帰ってきてくれて嬉しかったと…
…まだ言葉にはできていないと、そう彼は俯きがちに話した。

俺はそんな彼に、こう告げた。

「エヴィ。きつとデルクは試合を見ている。だから、不甲斐ない試
合はできないな？」

そう口にする、エヴィは打って変わってニヤリと笑う。

「へへ。そうだな！ 親父が見てるんなら、無様なところは晒せな
いぜっ！」

それはとても嬉しそうな顔だった。デルクと同じように。

いつか二人の距離感がもっと縮まってくれたらいいと、そう思っ
た。

第203話 不器用な親子（後書き）

重要なお知らせ

【氷剣の魔術師が世界を統べる】ですが、講談社ラノベ文庫様より、7/1（水）に書籍版第1巻、発売です！

すでにAmazonほか、ネット書店での予約も開始しております！

是非とも、よろしく願いますー！（小説家になろうの規約により直接リンクを貼ることができないので、お手数ですが検索かけていただければ幸いです）

そしてページ最下部に、表紙を公開いたしました。表紙はアメリカとレイになっております。いやー、本当に梱枝先生のイラストは素晴らしいですね！ もちろん、書籍の中のイラストも素晴らしいものばかりなので、ご期待ください！

肝心の内容ですが、加筆修正をした上で、書き下ろしを多数掲載しております。書籍でしか読むことのできないエピソードなど、Web版を既読の方も楽しめるような内容になっておりますので、是非ともよろしく願います！

また、読者の皆様には改めて謝辞を。皆様の応援のおかげでこまでくることができました。本当にありがとうございます。Web版

だけでなく、書籍版の方でも本作をお楽しみいただければ幸いです。
あ、もちろんWeb版の毎日更新は続けていきます。

おそらくは、書籍が発売するときにはWeb版は五章の過去編に突入している予定で、五章を読むとさらに書籍版も楽しめるような内容になっております！

今後のさらなる情報は、私のTwitterにて随時公開していきますので、もし良ければまだの方はフォローしていただければ幸いです。Twitterアカウント名【御子柴奈々（みこしばなな）】

【@mikoshibanana】

第204話 本戦へ

エヴィとの会話の後、集合場所へと向かっていた。

本戦では、すでに使用されていない古城での戦いとなる。もともと早期に破棄しようという案も出ていたのだが、今回の大規模魔術戦に際して使用されることになったらしい。

古城はアーノルド魔術学院のさらに北に位置している。今回、俺たちはシード権を得ているため二回戦から始まる。そのため、今日は円形闘技場での観戦となる。

そして、学院の前の正門で待ち合わせをしていると、そこには車椅子に座った金色の髪をした女性がいた。それに後ろには、メイド服をきた女性もいる。

遠目からなので、まだ確信は持てないが……まさか。と思うと、それはどうやら予想通り師匠のようだった。

「師匠。どうしたのですか？」

「レイ。いや少し話があつてな」

師匠はじつと俺を見つめると、すぐに本題に入った。

「今日から本戦だな」

「はい。優勝まで後少しです」

「こんなに朝早く来たのは、レイの調子が知りたくてな」

「なるほど……」

師匠がわざわざやって来てくれたのは、どうやら俺の調子が気になったから……というものだった。

今までの試合は、そこまで全力を出すことなく難なく勝つことが出来ていた。しかしおそらく、これからの試合はもっと過酷なものになるだろう。

現在の状態としては、体内時間固定を完全にレベルカ先輩に譲渡している形となる。そのため、魔術は問題なく使用できるが……やはり、魔術領域暴走という危険性は付きまとう。

その中で今までは試合をしてきたが、これから先はどうなるのか分からない。

もしかすれば……という心配もあって、師匠は来てくれたのだらう。

「自分の調子は、そうですね。悪くはありません」

「そうだな。試合を見る限り、魔術は問題なく使えているようだ」

「はい。違和感ありません」

「そうか。それなら良かった。しかし、アレは使うなよ？ たとえ、

【絶刀】との一騎討ちになったとしてもだ」

「心得ております。自分には、まだ早いと分かっているので」

「それならいいが」

どうやら、師匠が言いたいことはこれだったようだ。俺にはまだ、秘められた能力がある。それは極東戦役の最終戦で手に入れたものだ。

その能力はまさに諸刃の剣。

感情に支配され、激動にその身を任せ、あの時の俺は文字通りこの世界でおそらくは最強の魔術師となっていただろう。

コード理論の先へとたどり着いた魔術師は、おそらくは俺が史上初だからだ。

しかし、反動はあった。

俺の脳には未だにその後遺症が残っている。四年近く経過しているにもかかわらず。

「さて、では私はこれで失礼する。レイ、試合楽しみにしているぞ」「ありがとうございます。師匠のためにも、優勝してみせます。見ていてください」

「ふふ。そうだな。きつと優勝してくれ」

とても優しい笑みを浮かべると、師匠はそのままカラーさんに押されて校門から消えていく。

その後ろ姿が見えるまでずっと、その場で師匠の姿を見る。

師匠が車椅子で生活を余儀なくされているのは、俺のせいだ。

あの最終戦で、俺がもつとしつかりと判断ができていれば……なんなことにはならなかった。

それに、ある誓約があるために師匠の脚の治療は進まない。もう

少し時が経てば、その誓約も破棄できる。そうすればきっと、師匠は自分の足で立つことができるようになるだろう。

もし師匠の足が回復すれば……またいつかのように、森の中を二人きりで散歩をしたいと思う。

ささやかな時間を、その当たり前の日常を享受できることの幸せを、師匠と共有できたらいいと思っている。

そんなことを考えながら、俺はアメリカとアリアーヌをこの場で待つのだった。

「レイ！ おはよう！」

「おはよう。アメリカ。体調はどうだ？」

「バッチリよっ！」

「それは良かった。今日からはついに本戦だ。心して試合に臨もう」「ええ！」

アメリカはいつもよりも元気な様子だった。肌の色艶もよく、しっかりと休息を取ることが出来たみたいだ。

しばらくアメリカと話していると、次にはアリアーヌが早足にこちらに向かってるのが見えた。

「おはようございます！ お二人ともっ！」

「おはよ、アリアーヌ！」

「おはよう。アリアーヌも調子は良さそうだな」

「もちろんですわっ！ 乙女たるもの、体調管理は万全ですわっ！」

アリアーヌもまた、どうやら準備はバツチりなようだった。

そして俺たちは三人で、円形闘技場へと歩みを進めていく。今回は歩きながらミーティングをする予定だ。

「さて、ついに本戦だな」

「そうね。作戦は前に話した通りでしょ？」

「ああ。基本はアメリアとアリアーヌのペアで行動してもらおう。攻撃と防衛。どちらの場合になっても、俺は基本的に前衛で戦う。それと、固有魔術オリジンの使用は限定的にだが許可しよう。自分の裁量で使ってほしいが、決して無理はしないでほしい」

「ええ。もちろんよ」

「分かりましたわ」

オリジン
固有魔術。

アメリアの因果律蝶々も相当な負担になる魔術だが、アリアーヌが獲得した魔術も同様だ。

無理をして使い続けてしまえば、魔術領域暴走に至ってしまう可能性がある。そうなってしまうば、ろくに魔術は使えない上に、地獄のような苦しみに苛まれることになる。

それは、経験したことがある人間にしか分からない苦しみ。

あのような経験は決して二人にはして欲しくはない。だから、たとえこのまま押し切れるという場合であっても、無理はしないでほ

しいと伝えてあるのだ。

「それにしても、チーム：フォルストは順当に上がってくるのでしょうか」

アリアーヌがそういうので、俺は自分の所感を交えて今後の展開を述べる。

「こう言つと失礼かもしれないが、他のチームでは相手にならないだろう。ルーカスⅡフォルストだけではない。エヴィとアルバートもかなりの練度で仕上がっている。それに、俺たちと同様にしっかりと分担ができている。おそらく、決勝へと順当に上がってくるだろうな」

「そうですよ……まあ、それはそうでしょうね」

「ルーカスⅡフォルストか。レイはどうかできるの？」

と、アメリカが尋ねてくる。もちろん、すでに対策は考えてある。俺と一対一になった時の想定もしてある。

しかし、俺と同じ思考をしているのならば、ルーカスⅡフォルストは俺との一対一は望まないだろう。

はつきりと言ってしまえば、俺とルーカスⅡフォルストの戦いになればどちらに軍配が上がるかは不明だ。負けるかもしれないし、勝てるかもしれない。

一方で、アメリカとアリアーヌ対エヴィとアルバートでは、こちらのチームに軍配が上がるだろう。エヴィとアルバートも筋は悪くないが、こちらの二人には固有魔術^{オリジン}がある。

中でも、アメリカの因果律蝶々は仮に七大魔術師が相手になっても太刀打ちできるとは限らない代物だ。

おそろくは、俺、キャロル、リーゼさんの三人しかその圧倒的な固有魔術には立ち向かえないだろう。

アメリカが持っている固有魔術はそういうものなのだ。

おそらく、数年以内にアメリカは七大魔術師になると思っている。そろそろ周期的にもいい頃合いだ。予想としては、リーゼさんが引退したその席にアメリカがつくことになるだろうと思っている。

だが本人にはそのことは伝えていない。きっと今伝えてしまえば、大きなプレッシャーになってしまうからだ。

話が逸れてしまったが、そのような背景があるため可能性としては、俺がエヴィとアルバートの相手をして、ルーカス・フォルストがアメリカとアリアーヌの相手をする。

必然的に、勝利を求めるのならば相手はこうしてくるだろう。

もちろん俺が無理やりルーカス・フォルストと対峙してもいいのだが、相手はもそれは理解している。おそらくは、そのような状況には持ち込ませてくれないだろう。

それを踏まえて、アメリカとアリアーヌには対ルーカス・フォルストのために様々な想定をした訓練をこなしてもらった。

後はそれを実戦に活かすだけだ。

「ルーカス」フォルストは俺一人ならば、どうにかできる、しかし、以前話したようにおそらくはアメリカとアリアーヌで対処することになるだろう。後は、訓練の時に伝えたように戦ってくれたらいい」

「やっぱ、そうなるのよね」

「相手があのルーカス」フォルストですか……乙女の血が滾りますわねっ！」

そうして俺たちは、ついに本戦を迎えることになるのだった。

第205話 攻城戦

本戦第一試合。

俺たちは、シード権を獲得しているのでしばらくは試合の観戦だ。そして、一回戦を全て消化した後の二回戦からの登場となる。

そのため、ほぼ全ての試合を事前に見ることが出来るためかなり有利だ。

攻城戦は攻めと守りに分かれての試合となる。

攻め側は城の中に置かれているフラッグを奪って、外の所定の位置に持っていけば勝利。守り側は、制限時間内で守り切れれば勝ち。

攻めと守りの順序は、コイントスで決める。そして、試合は全て合わせて3ラウンド制。先に二勝した方の勝利となる。理想を言えば、先に二勝を獲得したいところだ。

もつれてしまえば、3ラウンドに突入してしまう。各ラウンドは一時間。最速で決めれば試合は二時間だが、3ラウンドまでいけば試合時間が長引く。つまりは、それだけ疲労が蓄積する。

過密な日程な上に、トーナメント方式ということで各チームは早期に試合を決めにくるだろう。

また、フラッグの位置は防衛側が自由に設置できる。防衛側は、

10分だけになるが事前の準備フェーズが与えられる。その時間で、古城内にフラッグを設置。

そして、遅延魔術ディレイの設置も可能だ。

防衛側が有利なのか、攻撃側が有利なのか、それは一概には言えない。

もちろん、それはチームメンバーの構成次第となってくる。

俺たちのチームとしては、攻撃と防御どちらにも対応できるようになっている。

その中で一番強力なのは、因果律蝶々バタフライエフェクトだろう。相手がフラッグを持って外に出る場合は、相手を外に逃さなければいい。逆に攻撃側では逃げ切ってしまうばいい。

そのように因果を操作すれば、戦いは容易になってくるだろう。

問題は、アメリカの限界値。

本戦のトーナメントはかなりの連戦になる。そのため、十分なインターバルが取ることができない。出すとすれば、決勝戦にして欲しいが果たしてそこまで無事に試合をすることができるかどうか。

「ついに始まるわね」

「わたくしがちよつと緊張して来ましたわ……」

「さて。お手並み拝見といこうか」

三人で円形闘技場にて観戦を行う。今回の試合は、ディオム魔術コロッセオ

学院の生徒三人と、メルクロス魔術学院の生徒三人で構成されているチームだ。

予選の時からその試合を見ているが、やはり互いの魔術学院の特性がよく出ていると思う。

ディオム魔術学院は近接戦闘に特化しており、メルクロス魔術学院は魔術に特化している。

一見すれば、近接戦闘に特化しているディオム魔術のチームが有利と思われるが、防衛となれば有利になるのはメルクロス魔術学院のチームだろう。

一概にはどちらが有利かというのは判断がし難い。

流石に、この試合の行方はどうなるのか分からない。

また、連続で最大三試合することになるので、早期にどちらも勝ちを決めたいだろう。

そして、両チームが並び合うと早速コイントスによって攻撃と防衛の選択が始まる。まずはディオム魔術学院側が、選択権を獲得。

選んだのは、攻撃側だ。

「攻撃を選んだな。予想通りだな」

「ええ。そうみたいね」

「確かにうちの学院は近接格闘に特化していますから、当然ですね」

そうしてついに開始となった試合。

俺たち三人はその試合の行方を最後まで見続けるのだった。

「勝負あつたな」

「そうね。でも、意外というか……」

「一概に近接戦闘に特化していればいい、というわけではないようですわね」

そう。今回の試合は、どうやらメルクロス魔術学院側が間もなく勝利を収めるだろう。

一試合目は、防衛。二試合目は攻撃。三試合目は防衛。という順番になったメルクロス魔術学院側だが、彼らは遅延魔術^{ディレイ}を巧みに使用して完全なる防御陣を構築。

それを崩すことができなかったディオム魔術学院側の敗北はもはや自明。

そして、残り時間が一分を切り……大きなサイレンがこちらの会場にも響き渡る。

本戦一回戦が無事に終了。

この試合を見ることで、非常に勉強になった。今回は事前に古城

を調査することは許されなかった。どのチームもその構造を知るのは一試合目の後になる。

俺は、手元のメモにモニターでみた構造を立体的に展開させ、それをペンで書き記しておいた。

「ねえ、レイ。今の試合どう思うって……なにそれ？ メモ書き？」

「ん？ ああ。古城の構造をメモしていたんだ」

「え……そんなことができますの？」

と、アリアーヌがそう尋ねて来てアメリカも不思議そうな顔をしている。俺は素直に、自分の感覚を伝えることにした。

「今の試合では全ての位置が見えたわけではないが、おおよその構造は理解できた。おそらく、もう一試合を見れば完全に把握できるだろう。こればかりはシード権に感謝だな。数多くの試合を見て、準備に時間を割くことができる」

「……」

「どうした？」

二人ともに、口をポカンと開けて呆然としていた。

「レイが規格外なのは知っていたけど、ここまでくるとちょっと凄いを通り越しているというか……」

「そ、そうですね……あの断片的なモニターの情報で、そこまで立体的な構造を理解しているなんて……とんでもない空間把握能力ですね」

「まあ、これは師匠に色々と鍛えられたからな。活かすことができ、嬉しい限りだ」

極東戦役の経験を経て、俺は類まれなる空間把握能力を手にした。元々それは、才能があるということ。で師匠が後天的に伸ばしてくれた能力でもある。

それは俺の絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドという能力にも繋がっているものだ。

「さて、大体は把握できた。あとは実戦に向けて、作戦を立てていくだけだな」

「レイの作戦なら完璧ね！」

「そうですわねっ！」

と、二人は賞賛してくれるが俺はそこで注意をする。なに俺の意見が正しいとは限らない。俺だって、数多くの間違いをしてきたのだから。

今後間違いをしないという保証はない。

「いや、そうとも限らない。俺だって、数多くの間違いをしてきた。二人も、何か意見があるのなら遠慮なく言って欲しい。あくまで提案だからな」

「……そうね。分かったわ」

「分かりましたわ。レイはやっぱり、とても素晴らしい人ですわね」

「そうか？」

「ええ。そう思いますわ」

すると、アメリカがじつとアリアヌの方を見つめる。それは明らかに探っているというか、詰問しているというか、何かを責めているような視線だった。

「アリアーヌ？ まさか？」

「い、今のは普通のことでしょうっ！ アメリアは気にし過ぎですわっ！」

「でも、レイの実家にお泊まりした時の話は詳しく聞いてないけど？ 私、概要は聞いてるんだからね？」

「そ、それはっ！ べ、別に何もなかったんですのよ！」

「その焦り方が怪しいんだけど……」

その後、アメリアとアリアーヌは二人で騒ぎ始めてしまった。その会話に特に混ざることにはなかったのだが、アメリアがアリアーヌを詰問しているのだけはよく分かった。

二人は、「アリアーヌもライバルになるとか、嫌だからね……」

「そ、そんなことはありませんのよっ！ ええ！ 私は【戦う乙女】ですよ！」「でも顔が赤いんだけど……？」「勘違いですわっ！」と、なにやらやりとりをしているようだった。

一方の俺は、これからの試合について思考を潜らせる。

確実に勝ちを拾うには、決勝までは早期に試合を決着させるべきだろう。先に二勝すればそこで勝ちとなる。しかし、１ラウンドでも取られてしまえば最後まで戦う必要が出てくる。

それが決勝戦まで続くとなると、かなりの疲労になるだろう。間違はなく、蓄積した疲労によって負けにつながる。

つまり予選よりも、ここから先の戦いは慎重になっていくべきだろう。

ここまで来てしまえば、優勝を見据えるのは当然。

だが立ちはだかるのはルーカスⅡフォースト率いるチームだ。エヴィとアルバートもまた、かなりの実力がある。

おそらくはかなり鍛えられたのだろう。中でもアルバートの成長は著しいものがある。魔術と近接戦闘、どちらもバランスよくこなすことができる。戦うとすれば、先にアルバートをどうにかしたいと思っている。

だが相手もそれは分かっているはず。

どのような試合になるのか……色々と策を巡らせるが、きっと最高の試合ができるに違いない。

そんなことを俺は思っていた。

第206話 本戦二回戦

本戦一回戦が無事に終了した。

そしてついに、本日より本戦二回戦が開始となる。今日の第一試合は、シード権を獲得している俺たちと一回戦を突破したチームとの戦いになる。

相手は、メルクロス魔術学院の三年生と四年生で構成したチームだ。一回戦ではその卓越した魔術により相手を圧倒した。

特に防衛側での力はかなりのものであり、仮に防衛戦で勝ち取ることができれば3ラウンドまで突入することは確実になってしまうだろう。

「よし。いくか」

今日もまた、いつものように早朝に起床。自身の体調をよく確認するが、問題は全くない。

そうして俺は一人で、集合場所である古城の前へと向かうのであった。

「ついに本戦だな」

「ええ。ついにここまできたわね」

「そうですねっ！ 今日勝ちますわよっ！」

アメリカとアリアーヌと合流したが、二人とも体調は万全。気概も十分である。今回の試合に際して、作戦はかなり練ってきた。

といっても、何か特殊な戦術があるわけではない。

早期に試合を決めるためには、防衛と攻撃の両方で勝利をするしかない。そのため、どちらに特化していても試合が泥沼化するのは自明。

ここから先は、総合力の高いチームの勝利となる。

「レイ」ホワイトくん……だね？」

相手のチームは、チーム：アスターという名前だ。リーダーのアスター先輩はメルクロス魔術学院の四年生で、その実力は三つの学院の中でも最上位に位置していると言われている。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会ではその試合の性質上、出てくることはなかったが、今回の大会では前線の二人がカバーすることでその魔術に特化した実力を最大限に活かしている。

「はい。今回の試合、よろしくお願いします」

握手を求める。すると彼は、じつと俺の瞳を見つめながらグツと強い力を込めて握手を返してくる。それはとても分厚く、よく鍛錬していることが分かる掌だった。

「正直いって、君のチームがここまでくるなんて思ってたよ。

それに、一番の敵は三大貴族の二人と想っていたけど……このチームの心臓は君だね」

「そんなことは、ありません。三人揃ったのチームですから」

オーディナリー

「謙遜も美德だけど、君の実力には非常に興味がある。一般人ということで見下している魔術師も多いが、僕は違う。君のような立派な魔術師に相対できることを、誇りに思うよ」

「恐縮です」

その場で頭を下げると、彼は軽く微笑んでから手を振りながら去って行く。

実際に話したのは初めてだったが、とても紳士な方だった。

それはおそらく、彼が苦勞人ということが起因しているかもしれない。

出身は貴族の家系ではなく、一般的な魔術師の家系。しかし彼は優秀だった。そのため、学院では他の貴族にあまりいい印象を抱かれていない、という噂は聞いていた。

そんな彼だからこそ、俺のことを認めているのだろうか。

ふとそんなことを考えてしまう。

「話してたの？」

「ああ。挨拶程度だが」

オリジン

「コーディ・アスター。魔術に特化した、魔術師ね。固有魔術を保
有しているのは有名な話ね。貴族の家で、婿養子に取ろって話も
あったりするほどよ」

「そうなのか」

アメリカからそう話を聞くが、それも納得がいく。

今までのチームで、固有魔術オリジンを使用したのはハートネット先輩だけである。その一方で、今回の参加チームの中でコーディ・アスタオリジンは固有魔術持ちの魔術師として有名なのだ。そして、互いのチームが整列。

この試合の審判はキャロルで、彼女がコイントスを開始する。

「コイントス、始めちゃうよ」 二人とも、どっちを選ぶのかなあ〜？」

甲高い猫撫で声で、いつものようにキャロルはそう言うてくる。俺としてはどちらでもいいのだが……とっていると、アスター先輩が選択権を譲ってくれる。

「そちらの好きなようにしていいよ。後輩に譲るのも、先輩の役目だからね」

「では、裏で」

「はいはい！ では、始めちゃいますっ！」

キイイインと音が軽く響くと、宙をクルクルとコインが舞う。キャロルがそれを、手の甲でしっかりと受け止めて、手を退けると……そこには、表の表示になったコインがあった。

「では、僕たちは防衛を選択します」

「はい！ では、今回の試合はチーム：アスターは防衛、攻撃、防衛の順番で〜すっ！ チーム：オルグレンは、攻撃、防衛、攻撃の順番になりま〜す キャピ」

「……」

どうやら天は俺たちに味方をしてくれなかったようだ。欲を言えば、防衛、攻撃、防衛の順番にしたかったが……どうやらラウンド1は、相手の有利な盤面で戦わざるを得ないようだ。

出鼻を挫いておきたかったが、こればかりは仕方がないだろう。

「それでは、準備フェーズに入りますっ！ レイちゃんたちは、十分待ってね」

「おい。ここでそんな風に呼ぶな。中継されているんだろう」

と、耳打ちをするとキャロルは大袈裟に謝罪をしてくる。

「あ、ごめん レイちゃんといるのが楽しくて、ついねっ！」
「……」

腹立たしいこと、この上ない。

だが、キャロルは不意にその表情を真剣なものにかえる。

「ねえ、レイちゃん」

「おいさつきも言っただろう。不用意な会話は」

「今は準備しているチームの方に向けてるから」

そういえば、モニターの管理はキャロルがしているんだっただか。審判もこなしながらするとは、本当に器用なものだと感心していると、さらにキャロルは言葉を続ける。

「レイちゃん。楽しそうだね」

その言葉は、やけに感情のこもったものだった。ふと、その顔を見るととても優しくそうにキャロルは俺に微笑みかけていた。

いつもは戯けたりしているが、この時のキャロルは年相応の大人の女性に思える。

真面目な時のキャロルは嫌いではない。それに、その表情もとても綺麗に思える。

「そうだな。きつと俺は、楽しんでいると思う」

「大切なものが見つかったよかったね」

「確かに友人たちができて、それはきつとかけがえのない大切なものだ。しかし、俺は師匠やアビーさん、それにキャロルなどの大人たちに出会ったことも、大切だと思っている」

「レイちゃん……」

と、思ったことを口にとするとキャロルは瞳を潤ませながら、思い切り抱きついてくるのだった。

「もう大好きーっ！ 絶対に童貞^{はじめて}はキャロキヤロが貰^{もら}ってあげるからねえーっ！ チューしてあげるっ！ ちゅー」

暴走を始めたキャロルは、顔を思い切り近づけてくる。それに性質^ちが悪いのは、まだ頼^{たの}みならば理解できるのだが、思い切り俺の唇に向かつて顔を近づけてくるのだ。

もちろん、俺はすぐにキャロルを組み伏せる。だがこいつも七太

魔術師の一人、難なくそれは躲されてしまう。

そして、まるで絡みつく触手のようにべったりとしがみついてくる。

「ちよっ！ おいつ！ 離せ！ 試合前に戯れてくるなっ！」

「じゃあ、試合の後ならいいのっ？」

「よくないっ！」

そのように問答をしていると、近くに寄っていったアメリアとアリアーヌがじつと俺たちのこと射抜いてくる。

「思ってたけど、レイってキャロル先生と仲良いよね……昔からの知り合いなのは知ってるけど」

「ですわね……しかしこれは、ちよっといき過ぎなような？」

その後、問答無用でキャロルを一本背負いでその場に叩きつけると、試合の準備が終わったよう打って変わったようにキャロルは試合開始のコールをするのだった。

「それでは、本戦第二回戦。チーム：オルグレン対チーム：アスタールの試合を開始しますっ！ 制限時間は一時間。それでは 始めっ！」

その掛け声と同時に、俺たちは古城内へとさっそく侵入して行く。

すでに城の中の立体的な構造は把握している。またおおよそにはなるが、相手がフラッグを置いている位置もまた把握している。

そうして三人で疾走していると、地面から眩い光が発生。

どうやらいきなり仕掛けてきたようだった。

「レイ！」

「レイ、このままだと分断されますわっ！」

そう。その光はちょうど俺たちを分断するようにして現れると、そのままアメリカとアリアーヌの姿が霞んでいく。

おそらくは、俺を一人にして相手をしたいのだろう。

「二人とも、作戦は継続だッ！」

「分かったわ！」

「分かりましたわ！」

そうして二人は、眩い光の中に包まれて消えていった。それと同時に、コツコツと地面を踏み締める音が反響する。

そこに現れるのは、彼一人だった。

「さて、と。邪魔者はいなくなったね」

「アスター先輩」

「これで、一対一だ。君にはとても興味がある。今回は勝ちにもこだわるけど、君とはこうして正面から戦いたかったんだ。シャーロットハートネットとは一緒にしないでくれよ？ 僕は慢心などはない」

優しい笑顔を浮かべているが、それは宣戦布告。

こうしていきなり分断されてしまった俺たちは、攻城戦を戦い抜

く
の
だ
っ
た。

第207話 彼の幸せを願う

「さて、ついにレイの出番か」

本戦二回戦がついに開始。二回戦の始まりは、レイたちの試合からだった。シード権を獲得しているため、一回戦は参加せずここまできている。

フレッシュな状態で戦闘はできるが、一回戦を勝ち抜いている相手と比較して経験という点では劣るだろう。

だが、レイに限ってはそれは無いにも等しいだろう。

「レイ」ホワイトたちの初戦ですが、先輩はどう見ますか？ 私は一回戦を経験していないという点で、立ち上がりは厳しいとは思うのですが」

いつものように、リディア、カール、リーゼの三人で観戦をしていた。その中で、試合の前にリーゼはリディアにそう尋ねてみる。

「その点は大丈夫だろう」

「そうなのですか？」

「ああ。おそらく、モニターからの観戦だけで古城の立体的な構造は把握しているだろう。それに、レイには絶対不可侵領域がある。アンチマテリアルフィールドおそらくはすぐに展開して、構造は完璧に把握できるだろう」

「……確かあれば、知覚領域と還元領域の二つに分かれているものですよね」

「そうだ。もともと私は、知覚領域だけを使用していたのだが、レイは私と違って二重展開できるからな。どうだ、やるだろう？」

と、まるで自分のことのように自慢げに語り、ニヤリと笑うリディア。

すでに親バカであることは把握しているので、リーゼは特にいうことはなかった。

いつも通りだな、と思う程度には辟易しているのだが。

「そうですね。流石というべきですね」

「そういえば思ったのだが、リーゼは妙にレイのことを知っているな……どこで話を聞いた？」

ふとりディアは疑問に思ったのだが、リーゼはレイのことをよく知っている気がするのだ。

能力に関しても、絶対不可侵領域のことはすでに知っているような口ぶりだったからだ。

「【比翼】ですよ。会ったびに、彼のことを口に出しているので」

「くそ……あのロリババアか。レイの熱心なファンのようだが、絶対にレイは渡さんぞ……！」

【比翼の魔術師】。それは、七大魔術師の一人なのだが以前レイにあった時、それはもう彼に執着していたのだ。

曰く、レイこそが至高の魔術師であると。

それ以来、リディアはずっとレイのことを大切に守ってきたのだが、どうやら【比翼】は彼の情報を独自に収集しているようだっ

「レイは最高傑作なのじゃ！ 我のものにしたい！ と、以前の学会で豪語していましたね」

いつものように無表情で、声真似をするリーゼだがそれはかなり酷似していた。何気に、人の特徴を掴むのが彼女は得意である。

「あんのロリババアめ……絶対にレイのことは渡さん！」

「そうそう。リディアさんのことも言っていましたよ」

「ほう……なんて言っていたんだ？」

「リディアのやつは親バカでかなわん。レイはもつと自由に生きるべきなのじゃ！ とかなんとか」

「……殺す」

その瞳は完全に殺意に染まりきっていた。リディアは何かとその性格から相性の悪い人間というものが存在するのだが、その中でも【比翼】は最も相性の悪い魔術師と言ってもいいだろう。

キャロルに関しては、喧嘩するほど仲がいいという範疇で収まっているのだが、【比翼】に対してはリディアは心から彼女を嫌っている。

それはレイに対する執着心があまりにも異常だからだ。それに、その能天気な性格も気に入らないらしい。

「しかし、【比翼】が彼にご執心なもの、理解できないことではありません」

「なに？ リーゼもレイを狙っているのか？」

完全に血走っている殺意の込められた目を、リーゼに向ける。しかしそれをまるで意に介していないかのようになり、彼女は話を続ける。

「いえ、別に。それに、先輩こそレイ＝ホワイトとお似合いだと思いますが」

「なあっ！！？ 私とレイはそんな関係では無いっ！！」

その言葉にして否定するが、顔は真つ赤に染まっていた。そんなリディアの心情を慮るおもんばかことなく、リーゼは淡々と思っていることを口にする。

「彼は確か、まだ十五歳。先輩は二十九歳。十四歳差など普通のことでは？」

「はあっ！！！？」

さらに声を上げる。しかし、リーゼはそんなことは全く気にしない。ただただ、思っていることを良くも悪くも話し続けるのだった。

「周りには、もっと歳の離れた夫婦もいることですし。別に意外なことでも無いと思いますが」

「私の愛情は、親のものであって！ そ、その！ 異性に抱くいだようなものではないっ！」

「そうなのですか？ しかし、私には愛情の違いの差というものがない理解できません。つまるところ、何が違うのですか？」

「そ、それは……」

愛情というものを言葉にするが、明確な定義はない。

それは人間に宿っている不確かな感情。それを明確に言語化でき

るほど、リディアはまだ歳を重ねてはいない。そもそも、彼女は学生時代も、卒業してからの軍人時代もずっと魔術と向き合ってきた。

そのような感情は、全く経験がないのだ。

「これは所感なのですが……私が思うに、重要なのは」
「な、なのは？」

じつとリーゼの横顔を見つめて、その言葉を待つ。

しかし返ってきたのは、予想外の回答だった。

「やはり、性欲の有無では無いかと」

「は？」

「生物と性欲は切っても切れない関係です。やはり生殖には、性が絡んできます。そもそも、愛情や性欲も生物の種を保存するシステムの一つ。結局のところ、我々はこの遺伝子を運ぶための器に過ぎないと、そう思っていましたか、どう思いますか？」

「そ、それは……た、確かに一理はあるが……っ！」

「リディア先輩は、経験があるのですか？」

「えっ……！」

今度はさらに声を上げる。顔もすでに朱色に染まり上がっており、恥ずかしいどころの騒ぎではなかった。

長年の付き合いのアビーとキャロルですら、このような話を真面目にしたことはないからだ。

「いや、別に私はそういうのは……っ！」

「なるほど。経験がないと。では、私の方が先に進んでいますね」

「はあ！？ お前は経験があるのかっ！？」

驚きを隠せない。

あのリーゼが誰かとそのようなことをするなどとは、予想もできない。そう思つての驚きの声だった。

「まだキス止まりですが、学生時代にエヴァンとしたのが最後ですね」

「な、なるほど。そういうことか……」

「それで、先輩はどうなんですか？」

「わ、私はその……べ、別にまだ経験がないというか……」

後半にいくにつれて、声が小さくなっていく。まだ経験がないことを実は恥じているのだが、実際のところリディアは全くの未経験というわけではない。

「なるほど。そうなのですね」

「ただまあ……レイとはその、キスぐらいはしたことがあるというか……あれをカウントしていいのか、わからないが……」

「もしかして、戦場での話ですか？」

「ああ。レイと初めて出会った時、あいつは瀕死だった。その時に人工呼吸をしたが、あれはそういうものではない！ ということ、私はまだ未経験だ！ なんだ、悪いのかっ！！？」

ついには逆ギレしてしまう始末。アビーとキャロルがリディアに對してこの話題は振るものの、あまり深く追求しないのはこれが理由だった。

彼女は最後にはどうしてもキレてしまう。そして、魔術を使って

まで暴れ出してしまっ。

だがこの話題に関しては、リーゼとは相性が良かった。

「いえ。私も先輩と同じなので。一緒に頑張っていきましょう」

「ば、馬鹿にしないのか？」

「馬鹿にする？ 年齢も一つしか違いませんし。それに、人には人のペースがあるでしょう。子どものことを考えると遅いかもしれませんが、まだ二十代。焦る必要はないと思いますよ」

「そ、そうだよな！！ いやー、リーゼはよく分かっている！！

どうだ？ 今日は飲みにつれて行ってやろう！ もちろん私の奢りだっ！」

「では、遠慮なくそうさせていただきます」

そして二人は、視線をモニターに移す。

それと同時に、試合が開始される。

リディアはレイが戦う姿を見て、彼と出会った時を思い出していた。

まだ幼い少年が、戦場でたった一人、蹲ひざまづっていた時の事を。

世界に絶望し、人間に絶望し、魔術師としての運命に振り回され続け、人生を彷徨い続けていた少年。

初めはただ、同情していた。しかし、彼の成長を見るたびにリディアは自分の心も成長していくような気がした。

そんなレイが今は、学生になった。新しい仲間もできた。

そして、戦っている。仲間と共に、切磋琢磨している。

彼の姿を見続けてきて、思うところがあるのか一筋だけリディアの瞳から涙が零れ落ちる。

「レイ。お前の幸せを、心から願っているよ」

それは自然と出た言葉だった。それに対して、リーゼもカーラも反応することはなかった。

その言葉はあまりにも、慈愛に満ちていたのだから。

第208話 二人きりの攻防

ついに始まった攻城戦。

だが、レイたちの思惑とは裏腹に三人は綺麗に分断されることになってしまった。予想してないわけではなかったが、相手の仕掛けが思ったよりも早く、レイと別れてしまったアメリカとアリアス。

すでに、レイの姿は見えない。

魔術が発動した兆候は感じ取ったが、魔術師の気配はしない。発動したのは、遅延魔術だ。そのため、術者は近くに潜伏する必要もない。

また今までの試合を見てきた上で判断するが、魔術に特化したチームは防衛という一点においてかなりの有利になる。

こうして彷徨っている間にも、場内には大量の遅延魔術が構築されているからだ。

「逸れましたわね」

「ええ。でも、レイなら一人でも大丈夫よ。先を急ぎましょう」
「分かりましたわ」

二人ともに、冷静だった。

それはもちろん、今回の試合に当たってこのようなケースはすで

に想定の一つだったからだ。もともとレイがかなりマークされているのは、周知の事実だった。

噂でもまた、白兵戦という点に限ればあの三大貴族を凌ぐのではないかと言われているほどだ。

そのためレイを一人に分断するのは、作戦としてはあり得ることだと聞いていたのだ。さらに、アメリカとアリアー又はレイのことを誰よりも信じている。

たった一人になろうとも、絶対に大丈夫だと。

レイと分断された時は、各自でフラッグを探すことになっている。といっても、今回の試合に限ってはすでにおおよその目星はついているのだが。

古城全体の構造はそれほど広いものではない。もともとは、解体工事が進んでおりすでになくなっていく箇所も多い。

全体としては、地下、一階、二階、三階の全四フロアに別れている。

その中でも、レイの予想は地下だった。相手のチームの防衛戦では、今までは地下を選択した事はない。あえて裏をかくて、同じところにフラッグを設置することもあり得るが、その線は消していた。

レイ曰く、ただの直感に過ぎないがそれは的を射ていた。

まずは、アメリカとアリアー又はすぐに地下へと向かう。入り口自体は二箇所あり、近い方を選択。するとそこには大量の遅延魔術^{ディレイ}

が敷かれていた。

逆にこれが囿の可能性もある。遅延魔術ディレイが大量にあることで、この先にフラッグがあると思わせる作戦も、他の試合で見られた。

だが、アメリカには確信があつた。

「この先にあるわね」

「分かりますの？」

「まあ、なんとなくだけど」

「アメリカはかなり感覚が鋭くなっていますわね」

「そう？」

「はい。そう思いますわ」

アリアーヌの言葉は、強ち間違いあながではなかった。アメリカの魔術的な感覚はかなり鋭くなっている。

それは、リーゼとの特訓の副産物のようなもの。もともとアメリカには、膨大な魔術領域と魔術に対する感覚の鋭さという才能があった。

今まではそれが、眠っていただけ。それが今では、顕在化するようになったのだ。

リーゼに次期七大魔術師の候補になると言われるだけあって、彼女の能力はここにきてさらに伸びていた。

「……止まって」

「ええ。わたくしにも分かりますわ。ここから先は」

二人の視線の先には、フラッグが設置されていた。それは一見すれば、容易に取ることができるように見える。しかし、そう思い込むことこそが罠である。

今までの試合を観戦してきたこと、さらにはレイから伝達されている情報。それらを踏まえた上で、あっさりとフラッグを奪うことができるとは思えない。

そして、その場に屈んだアメリカは地面に右手をそつと添える。

「……かなりの数の遅延魔術ディレイが設置されているわ」

「巧妙ですね。側から見れば、第一質料プリママテリアを感じる事はほとんどありませんのに」

自身の保有する第一質料プリママテリアをソナーのようにして広げると、この場に展開されている魔術を把握する。もちろん、遅延魔術ディレイが発動しないように出力は最低限にしてある。

これは、レイから教えられた技術である。レイ本人は、そんなことをせずとも遅延魔術ディレイを知覚出来るのだが、万全を期するためにアメリカはこの魔術も習得していた。

「さて、出てきなさい。いるのは分かっているのよ」

凜とした綺麗なアメリカの声が、室内に響き渡る。すると、この空間の外側が不自然に揺らぐ。現れるのは、相手チームの残り二人。

相手もまた、アメリカとアリアーヌを最大限に警戒している。

ここまでは相手の作戦の通りだ。

レイをアスター一人で相手をして、残りは二対二の戦いに持ち込む。

そして、二回戦ではまだ固有魔術オリジンを使用するとは相手も考えてはいない。ここから先はスケジュールが過密な戦いになる。

そのため、出来るだけ温存して勝利したいはずだ。それこそ、3ラウンドの中で先に二勝してストレートで終わらせたい、と。

その予想は的中していた。

今回の試合では、レイから固有魔術オリジンの使用は許可されていない。厳密に言えば、それは命令ではなく懇願に近いもののだが、アメリカとアリアーヌともに固有魔術オリジンを使用するつもりはなかった。

ただ真正面からねじ伏せると、決めているのだから。

「アメリカ。いきますわよ。遅れないように、お気をつけて」

「任せて。完璧に合わせてみせるわ」

「ふふ。それは頼もしいですわ」

瞬間。

アリアーヌは大量に敷かれている遅延魔術ディレイなどお構いなしに、単独で突撃。

腰を低くして、そのまま疾走していく。それと同時に、発動する遅延魔術。^{デレイ}

今回の遅延魔術^{デレイ}で発現された魔術は、氷結領域^{グレイスフィールド}。

魔術の分類でいえば、大規模魔術^{エクステンシブ}とされている魔術。

起点となる場所から、点と点を繋ぐようにして地面の上を第一質^{リア}料が走っていく。そして、繋がった瞬間に顕現するのは見渡す限りの氷の世界。

アリアー又はそれに足を取られてしまうかに思えたが、自分の足に触れる間隙で宙に飛翔。

しかしそれは、相手の思う壺。宙に浮いてしまえば、ただの的。あとは、狙い撃ちをするだけ。

そう思われたが、戦っているのはアリアーヌだけではない。

《第一質料^{プリママテリア}⇨エンコーディング⇨物資コード^{マテリアル}》

《物資コード⇨デコーディング^{マテリアル}》

《物質コード⇨プロセッシング⇨加速^{マテリアル}》^{アクセラレーション}

《エンボディメント⇨現象^{フエノメノン}》

「^{イクニスフィールド}灼熱領域」

対抗するのは、氷結領域の真逆の魔術である灼熱領域。イグニスフィールド

展開される氷結領域を一瞬でアメリカは打ち消した。グレイスフィールド

何よりも感嘆すべきは、その調整力。出力を上げ過ぎれば、アリーヌもまたこの灼熱の世界に飲み込まれてしまう。

だがアメリカは相殺するために、相手が時間をかけて生み出した氷結領域の全てを一瞬で把握。グレイスフィールド

そして、綺麗に相殺できるだけの出力で上から被せるようにして灼熱領域を展開。イグニスフィールド

そこからさらに、アメリカは生まれた熱波を利用して魔術を重ねる。

「ストーム
暴風」

クイック 高速魔術で暴風を発動すると、アリーヌの背中を押すようにして彼女を宙で加速させる。

そして、相手は完全に照準を定めることができずに、魔術はアリーヌの後ろを通り過ぎていく。

「なあ……っ!?!」

「う、嘘っ!?! 一気に二つの魔術を重ねる!?! しかも、この規模でっ!?!?」

相手の女子生徒二人は、魔術師としてかなりの練度にあるために

理解できてしまった。

その魔術の異質さに。

アイスフィールド
氷結領域を完璧に相殺した後に、
クイック
高速魔術で暴風を発動したその
技量はすでに学生の域を超えている。

普通は必ず、大規模な魔術の後にはインターバルが必要となる。

それは、魔術領域が圧迫されてしまい十分な威力の魔術を発動できないからだ。

しかし、アメリカの魔術領域は七大魔術師をも超える容量だ。
こな
この程度の魔術は、熟せて当然というほどにはすでに魔術師として完成されていた。

「お二人とも、呆けていてはダメですわよ？」

眼前に迫るアリアヌ。アメリカとは違い、
クロスレンジ
超近接距離での魔術戦に特化している。

相手はそれを分かっているため、懐に入れないためにもあらゆる魔術を凝らしていたというのに、アメリカに全て無力化されてしまった。

そうして、迫るアリアヌをどうすることもできずに、フラッグはアリアヌの手に渡る。

こうしてアメリカとアリアーヌの二人は、すぐに地下から外へと出ようと試みるのだった。

第209話 魔術戦の真髄

アメリカ、アリアーヌの二人と分断された俺はたった一人、アスター先輩と対峙していた。

試合前は人の良さそうな笑みを浮かべてはいたが、今は別人のように鋭い雰囲気纏っている。

メルクロス魔術学院の中でも、トップの魔術師と謳われている彼に対して、俺はどのように攻めるべきなのか。

いや、元々はこの可能性も検討はしていた。そもそも、俺という存在を予選であれだけ見せつけたのだ。

孤立する可能性については、二人にも伝えてあった。その場合、相手は二人がかりで来ると思っていた。しかし、いま目の前にはアスター先輩が立ちはだかっている。

つまりはたった一人で俺の相手をしようということか。

相性で言えば、俺の方が有利なのは自明だろう。アスター先輩は魔術師の中でも、遠距離での魔術戦を得意としている。一方で、俺は超近接距離クロスレンジでの戦闘を得意としている。

彼が俺と一対一で戦うには、圧倒的に条件が悪すぎる。それでも俺を狙い撃ちしてくるという事は、何か固執しているというよりは、勝算があると見るべきだろう。

それは、彼が感情に身を任せて一般人である俺という存在に固執するタイプとは思えないからだ。

「さて、君の力……見せてもらおうよ」

その言葉が、戦いの始まりの合図だった。

この勝負は俺が超近接距離に潜り込んでしまえば、決着がつく。
一方で彼は、懷に入れないように俺を無力化する必要がある。

そして、アスター先輩に向かっていくと見せかけて、俺はすぐに後方へと走っていく。ここで馬鹿正直に、一対一をする必要などはない。

彼の目的は俺の足止め。最高でここで無力化するのが目的だろう。

俺たちはフラッグを外の所定の位置に持っていけば勝利となる。

各個撃破など、二の次である。だが、どうやら……すでにこの領域が彼が展開した広域干涉系の魔術によって支配されていた。

俺たちをぐるっと囲むようにして顕現するのは、紅蓮の炎。おそらくは、灼熱領域イグニスフィールドを元から展開していたのだろう。その炎の壁は、優に数メートルを超えている。

本質である、【還元】レストレーションを使えばこれを突破する事は容易い。しかし、この能力をここで晒してしまうのは後の試合に影響が出てしまう。

それに、三つの本質を使うとなると魔術領域をそれなりに酷使することになる。

できれば消耗の少ない、内部コード^{インサート}だけでまだ戦いたい。試合はまだこの先も続いていく。後の試合も考慮すると、ここで本質を出すのは避けておくべきだろう。

「やりますね」

「君がその選択に出る事は考慮していたからね。先に、遅延魔術^{ディレイ}で展開させてもらっていたよ」

「……」

その技量には、ただただ感嘆を覚える。俺は別に、ただ無用心に彼の領域に入ったわけではない。

彼は魔術に特化したメルクロス魔術学院のトップの魔術師。その實力は、予選の時から目撃していた。

しかし、知覚されないように張り巡らせていた灼熱領域^{イグニスフィールド}に俺は気がつかなかった。

用心して、知覚領域を展開していれば良かったが……すでに時は遅い。こればかりは、俺の予想を彼が上回ったということだろう。

「君は勘が鋭い。いや、第一質料^{プリママテリア}に対する感覚が抜き出ている。それは今までの試合も見えて思ったよ。面白い。非常に面白い。君のよきな魔術師は、初めて見たからね」

「……饒舌ですね」

対峙する。時間が惜しいため、すぐにでも戦いを始めたいがアスター先輩は雄弁に語る。

「そうだね。僕自身も驚いているよ。でも、君と戦うことを楽しみにしていた。レイ＝ホワイトくん。君はどうだい？」

「そうですね。光栄なお話です。しかし、勝利するのは自分です」

「ははは！ いいよ、その殺気。やはり君は、ただの一般入出身の魔術師とは考えない方が良さそうだ」

認められているのは嬉しいことだが、すでに時間は確実に経過している。

ここで彼を撃破して、すぐにでも二人に合流すべきだろう。それに、試合は最低でも二回は続く。

できるだけ消耗は抑えておきたい。

そもそも、一対一を強いるという事は最悪の場合、ここで辞退することになりかねない。本戦一回戦でもあったことだが、初戦であまりのダメージを負って、二試合目ができないケースは稀にだが、存在した。

そのリスクを取ってまで俺と戦う。

それは、自信の現れだろう。ならば、真っ向から立ち向かうしかないだろう。

「さあ、最高の戦いを始めようッ！」

彼がバツと両手を掲げると、俺を取り囲むようにして氷の壁が迫ってくる。

すぐにそれを知覚して、氷の壁に対して垂直になって疾走する。自身の相対位置は、魔術によって固定することでそれは可能となる。

「やるね！ でも、これはどうかなッ！」

その氷の壁を走っていくのは、蛇の雷撃。

蛇の形を模したそれは、俺を狙って大量に迫ってくる。両方ともに、クイック高速魔術で発動された魔術。

アイスウオーサングースネーク
氷壁。電撃蛇。

どちらともに、中級魔術ではあるが威力と魔術の発動プロセスを考えれば、バランスの良い魔術だろう。

それに何よりも、アスター先輩は魔術の発動が早い。

遠距離での魔術戦に特化している魔術師は大まかにいって、二種類に分かれる。

まずは、膨大な魔術領域を保有している魔術師。これは、魔術領域が大きいために一度の魔術で多くのコードを書き込むことができる。アメリカなどは、このタイプの魔術師だろう。

その膨大な魔術領域をフルに使って、発動するのがバタフライエフェクト因果律蝶々だ。

一方で、魔術領域は大きくはないが、コードの書き込みが早い魔

術師がいる。おそらく、アスター先輩はこちらのタイプだろう。アメリアもまた、コードの書き込みは早い^{クイック}が、高速魔術はまだ発展途上。

俺と比較すれば、その技量はまだまだだ。俺もどちらかといえば、能力をフルに発揮してない今は、後者のタイプである。

それを内部コード^{インサイド}と掛け合わせて、超近接距離^{クロスレンジ}での戦闘を得意としている。

「……くッ!! 数が多いッ!!」

声を漏らす。

目の前に広がる電撃蛇^{サンダーズネーク}の数は、時間が経てば経つほど増えていく。俺はそれを、氷礫^{アイシクルピアス}で削っていくがそれでも彼の方が速度は上。

純粋な魔術戦という点では、今の俺では劣るだろう。

ここは森ではないということもあって遮蔽物が少なく、真正面から対峙するしかない。ここがカフカの森であれば、射線を切るように動くことができるのだが、それは叶わない。

しかし、それならば自分で射線を切る物体を生み出してしまえばいい。

そして俺は、別の魔術を発動する。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセシング＝減速＝固定マテリアル》

《エンボディメント＝物質マテリアル》

「アイスピラー
氷柱」

彼との間に等間隔に展開するのは、アイスピラー氷柱だ。

これは下級魔術だが、魔術とは使い方次第である。今回は、射線を切るといふ目的のためだけにこの氷柱を生み出した。アイスピラー

次々とこの場に、氷の柱が形成されていく。

そして、迫りくるサンダーズネーク電撃蛇をその氷柱を使って躲していく。それと同時に、各個撃破も忘れていない。アイスピラー

先ほどよりは圧倒的に戦いやすくなっている。

環境が自分に合っていないのならば、自分に合うようにすればいい。

これは、師匠の教えの一つでもある。

何も魔術戦は、エクステンション聖級魔術や大規模連鎖魔術、さらには固有魔術オリジンを使うことができれば勝てるというものではない。

何事も、ものは使いようなのだ。

そうしていると、アスター先輩も焦っている様子が窺える。彼ほどの技量があれば、この氷柱をアイスピラー一気に溶かし切るのはわけがないだろう。

それこそ、外側に展開している灼熱領域をこの中にまで展開すればいいだけのことなのだから。イクネスフィールド

しかし、それができないのは……そうしてしまえば、俺が懐に入ってしまう時間を与えてしまうからだ。攻め切る事はできないが、彼にできるのは現状維持だろう。

一方の俺は、虎視眈々とこの状況が動くのを待っているのだった。

第210話 迫る視線

《第一資料プリママテリア〓エンコーディングマテリアル〓物資コード》

《物資コードマテリアル〓デコーディング》

《物質コードマテリアル〓プロセッシングディセレーション〓減速ロック〓固定》

《エンボディメントマテリアル〓物質》

コードを一気に走らせて、魔術を展開していく。俺がいま十分に使用できる魔術は、高速魔術クイックだけだ。その他の魔術となると、コードが複雑になってしまふからだ。

今の俺に、複雑なコードを構築するだけの魔術領域はない。そのためなんとか高速魔術クイックで対応しているが、この戦闘においては高速魔術ツクだけでもはや十分だった。

発動し続けるのは、氷柱アイスピラー。それはアスター先輩によって破壊され続けてしまふが、それで良かった。

重要なのは射線を切りつつ、先輩に迫っていくということだけ。

そして、俺はわずかにその距離を詰めていく。もちろん先輩も、超近接距離での戦闘は分が悪いと理解しているようで、さらに魔術は激しくなっていく。

絡みとるようにサンダーズネーク電撃蛇を展開しながら、氷礫で牽制。アイシクルピアスその間にも、俺が生み出した氷柱を溶かし続ける。アイスビラー

また、地面に散った氷礫の残骸を物質変化の応用により、氷壁を生み出して俺の退路を塞いでくる。アイシクルピアス マテリアルシフト アイスウォール

圧倒的なまでの魔術の技量。

やはり、メルクロス魔術学院のトップというのは伊達ではない。

これほどの数の魔術を同時並行に展開し、威力も十分だ。アメリカとは異なり、魔術領域はそれほど大きくないと思っていたが……どうやら、それは俺の見当違いだったみたいだ。

先天的な魔術領域。さらには、これだけの魔術を同時に使用できるコード構築の技術。間違いなく、アスター先輩は現時点で魔術師の中でも上位に位置するだろう。

その定義は、学生という括りではない。この世界に存在する魔術師、という意味合いだ。

だが、すでに彼の底は見えた。魔術傾向もそろそろ分析が完了する。

俺は何も、ただ氷柱を生み出して逃げ回っているだけではない。アイスビラー

これは時間稼ぎでもあった。

魔術師は必ずといっていいほど、魔術に癖が出てしまう。同じ魔術を発動しても、それは魔術師によって様々な変化をする。

そして、この両眼だけでなく、感覚でもこの場に展開されている
第一質料プリママテリアを感じとる。

突き詰めてしまえば、この第一質料プリママテリアの流れを理解すれば、魔術の
発動兆候は理解できる。

「そろそろか……」

ついに痺れを切らしたのか、彼はついに俺に対する攻撃の手を緩
める。だがそれは、諦めたわけではない。

彼が発動しようとしているのは、間違いなく固有魔術オリジンである。

元々予想はしていた。彼が俺にこだわる以上、劣勢になれば切り
札を出してくるであろうと。

だがそれは、俺が誘導したという側面もある。敢えて防御に徹し
て、相手を追い詰めるようにして戦っていたのはこのためだ。

だが、固有魔術オリジンの唯一の弱点といえば、その発動時間の長さだろ
う。

例えば、アメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトはかなり強力な固有魔術オリジンであるが、
問題はあまりにも複雑なコードをしているため発動に時間がかかっ
てしまう。

それこそ、一瞬で固有魔術オリジンを発動できる魔術師は七大魔術師、ま
たはそれに匹敵する魔術師だけだ。

アスター先輩は固有魔術オリジンを発動する時間を稼ぐため、最低限の牽制だけをしてくる。さらには、遅延魔術デレイも次々と発動していく。

遅延魔術デレイによって発動するのは、氷壁アイスウォール。

おそらくは、時間を稼ぐには最も適した魔術だろう。

「使っしかないか……」

俺の周囲は、見渡す限りの氷の壁に覆われてしまう。普通ならば、ここで取れる選択肢はこの氷を破壊することだけ。対抗する魔術で、どうにかするしかないだろう。

だが俺には、本質の一つである【還元】がある。

それは、魔術を第一質料プリママテリアへと戻す能力。一時的にだが、俺はその能力を開放することにした。

《対物質コード：還元》
アンチマテリア レストレーション

《物質Ⅱ対物質コード》
マテリアル アンチマテリアル

《物質・還元Ⅱ第一質料》
マテリアル レストレーション プリママテリア

対象とするのは、目の前にそびえ立つ氷の壁。座標を指定した後、俺一人が通れる程度の穴を作るようにして、対物質コードアンチマテリアルを発動。

「
アンチマテリアル アクティベート
対物質コード、起動」

すると、目の前の氷の壁に穴が一瞬で生まれる。周囲には還元したことで生まれた、第一質料の残滓がパラパラと舞う。

そして、視線の先に見据えるのは固有魔術^{オリジン}を発動しようとしているアスター先輩。

彼の周りには、可視化されるほどの濃密な第一質料^{プリママテリア}の空間が生まれている。

その発動を阻止するべく、俺は疾走する。

地面の氷を踏みつけながら、この城の中を駆け抜けていく。ハー
トネット先輩との戦いでは、固有魔術^{オリジン}を発動する暇を与えてしまっ
たが、今回はその反省を生かして、絶対に発動させないようにと試
合前から決めていたのだ。

「
やはり、君なら突破してくると思ったよ」

微かに聞こえたその言葉。

それと同時に、地面が青白く発光する。この兆候は、遅延魔術^{ディレイ}。

なるほど。おそらくは、俺が絶対に固有魔術^{オリジン}の発動を防いでくる
と考えて、遅延魔術^{ディレイ}をまた別に構築していたのだろう。

「さあ、ここで終わりだよ」

だが、彼の言葉の通りになることは……なかった。

アンチマテリアル レストレーション
《対物質コード：還元》

マテリアル アンチマテリアル
《物質Ⅱ対物質コード》

マテリアル レストレーション プリママテリア
《物質・還元Ⅱ第一質料》

アンチマテリアル
対物質コードは、発動している魔術だけに対して有効なものではない。これは、あらゆる物質または現象をプリママテリア第一質料へと還元する能力。

ディレイ
発動しつつある遅延魔術にもそれは有効。さらに俺は、ディレイ遅延魔術を敷いているこの城の床の表面ごとプリママテリア第一質料へと還元する。

刹那。

プリママテリア
パツと青白い第一質料が溢れ出す。それは、俺が一瞬で発動した対物質コードの残滓。

「……そ、そんなことがありえるのかッ!？」

驚愕に染まりきった表情。アスター先輩は、完全に呆けてしまい

俺の超近接距離への侵入を許してしまう。
クロスレンジ

「先輩。覚悟を」

そう呟くと、思い切り力を込めた拳を先輩の腹部へと思い切り叩き込んだ。

感触として、俺の言葉で我に返ったのか、防御する暇はなんとかできたようだ。

といつても、完全に意識を刈り取るつもりで放った拳だ。防御はできたとはいえ、直撃には変わらない。

先輩はなんとか、意識を保っていたが苦しそうな表情で俺のことを見つめていた。

「ぐ……うう……」

「では、失礼します」

その場で一礼をすると、アメリアとアリアーヌと合流すべくこの場を去ろうとするが……それと同時に、サイレンの音が響き渡る。

どうやら、俺たちの攻めは成功したようだ。

まずは一勝。後もう一勝すれば、無事に勝利を収める事ができるが……アスター先輩はよろよと立ち上がると、こちらへと近づいてくる。

「どうやら、僕たちが戦っている間に……そちらの二人がフラッグを取ったみたいだね……」

「はい。次もよろしくお願いします」

「いや、僕らはここで棄権するよ」

「……そうなのですか？」

意外だった。まだ戦えそうな気力は感じ取っているが、彼はそう語る。

「思ったよりも、魔術を使いすぎだよ。それに、君を引き付けるために固有魔術を本気で発動する素振りも見せる必要があった。僕の
オリジン
プリママテリア第一質料はもう限界に近い」

「そうでしたか」

「他の二人には、しっかりと謝っておくことにするよ」

軽く肩を竦める。そんな彼の顔は、とても清々しいものに見えた。

そして、アスター先輩は俺に向かってスッと手を伸ばしてくる。

「ありがとう。いい試合だった」

「こちらこそ、素晴らしい魔術でした」

「君はやはり……普通ではないね。いや、予選の時点で分かっていた事だけだね。本当にすごいよ」

「恐縮です」

「僕も君に負けないように、これからも魔術を磨くよ。ありがとう。とてもいい戦いだった」

「はい。ありがとうございました」

その後、チーム：アスターは棄権を宣告。そうして俺たち、チーム：オルグレンの準決勝進出が確定するのだった。

ふと、自分の手を見つめる。

本質を出さざるを得ない試合だったが……どうやら、大丈夫そうだった。自分の魔術領域に異常はない。

そんな時、俺は視線を感じる。

その場でバツとその視線に対して振り返るが、そこには誰もいなかった。確かに誰かに見られているような、感覚があった。

気のせいかな、それとも……？

そして俺はとりあえず、アメリカとアリアーヌに合流するのだった。

第211話 リディアの想い

「ふう……」

レイの試合を観戦した後、リディアはカーラと共に自宅に戻ってきていた。現在は夕食をカーラと一緒に取って、自室でくつろいでいる最中だった。

くつろぐといっても、彼女は自分の最近執筆した論文を眺めていた。

元々、研究者になるつもりはなかった。だが、リディアがこうして研究者としての道を歩もうと思ったのはレイのおかげだった。

レイは、リディアに多くのものを与えてもらったと思っている。

いつもレイは彼女のことを尊敬の念を込めて、師匠と呼んでいる。その一方で、リディアもレイに感謝している。彼女にとって、レイとの出会いは運命だったと言わざるを得ない。

本当に、出会うことができてよかったと。

そう思うほどには、リディアはレイのことを愛している。

「なあ、レイ。お前は……」

と、ふと窓越しに空を見上げる。

月明かりが室内を照らす。その光の下で、彼女は軽くワインを呷る。いつもはそれほど深酒はしないのだが、今日はいつもよりも多くアルコールを取っている。

それはやはり、嬉しいからだ。

レイが活躍していることも、もちろん嬉しい。彼をストーカーするほどに愛しているので、こうして表舞台での活躍を見るだけでも頬が緩むのを止められない。

その一方で、やはり一番嬉しいのは……レイが幸せそうに笑っていることだった。

レイとの出会いは、今でもリディアは昨日のことのように思い出せる。作戦の最中に、偶然出会った子ども。それがレイだった。

彼が自然に笑う事ができるようになるまで、それこそ数年の時間を要した。

「思えば、もうそんなに時間が経つのか」

レイと出会って、もう十年近く経つ。ふと過去を思い出して、リディアはそんなことを考える。

彼女としては、ずっとレイと一緒にいたいという思いがあった。だが、彼を学院に入学するように勧めたのは最後の親心だった。

レイはこれ以上、自分とはいえない。

リディアは極東戦役を経て、そう考えるようになった。ずっと一緒に暮らしてきた。しかし、これ以上は自分のためにも、レイのためにもならないと。

それはやはり、距離感が近くなり過ぎたという一点に尽きる。

レイは良くも悪くも大人　軍人たち　の中で育ってきた。それは友人というよりは、戦友。共に戦場を戦ってきた仲間という意味合いが強いだろう。

同じ歳の友人など、いるはずがなかった。

リディアは極東戦役が終わって、思ったのだ。レイに必要なのは、もう導く大人ではない。

必要なのは共に歩みを進んでいく友人である　そう思ったのだ。

本当ならば、リディアがその立場にありたいと思っている。けれど、やはり年齢差というものは覆しようがない。それにレイは、リディアのことを対等な存在と見ることはないだろう。

だからこそ、別れることにしたのだ。

といってもやはりレイとの別れは辛いので、たびたびストーカーはしているのだが……。

またリディアには別の目的もあった。それは、リディアだけの意志ではない。魔術協会の上層部。その中でも、限られた魔術師だけが知る事実。

レイが学院に入学することになったのは、別の思惑もあった。もちろん、リディアもそれは了承している。自分の愛情だけで、レイを縛ることはできないと分かっているからだ。

「失礼します」

室内に凜とした声が響く。

「カーラか。どうした？」

元々は必ずソックをしていたのだが、リディアがしなくてもいいというので、今は声をかけるだけで室内に入るようにしている。

「お夜食になります」

「ああ。そういえば、頼んでいたか」

ゆつくりと歩みを進めると、カーラは夜食をテーブルに置く。

最近はいいじゃがいもが手に入ったので、彼女はポテトサラダを作った。

彼女は料理に対して並々ならぬこだわりがあり、こうしてリディアには自慢の料理を振るまっている。

「ポテトサラダか」

「はい。とても良いじゃがいもが手に入ったので」

「おお、それは美味そうだな」

「ええ。自信作です」

いつもは無表情で、淡々としているカーラだが、こうしてリディアと二人で過ごす時には優しい笑顔を浮かべる。

今日は酒に合わせる料理ということで、ポテトサラダはちょうどいいものだった。

「いただきます」

「はい」

フォークで温かいポテトサラダを掬うと、ゆっくりと口に運ぶ。するとリディアは微かに笑みを浮かべるのだった。

「美味い。流石はカーラだな」

「恐縮です」

その場で頭を下げ、出ていこうとするカーラだがリディアはそんな彼女に声をかける。

「一杯どうだ？」

と、ワインボトルをコンコンと軽く叩く。

「では、少しだけ」

そして、新しいコップをもう一つ持ってくるとソファアに座ってリディアと向かい合ってワインを呷る。

「美味しいですね」

「だろ？ 久しぶりにいいものを開けた」

「……貰い物ですか？ 私は知りませんが」

「ああ。キャロルにもらつてな」

「そうですか」

カーラは基本的には、この家にあるものはすべて把握している。そんな彼女が知らないということは、貰い物だろうと考えたのだ。その予想は的を射ていた。

「最近はレイの活躍が嬉しくてな。酒も美味いもんだ」

「そうですね。最近は、とても活躍していますね」

「ふふ。そうだな。レイは本当に大きくなった」

感慨深いようで、リディアは感情を込めてそう言葉にした。カーラにはレイのことはいつも語っているだが、今日ばかりは真面目なトーンで話をする。

「大会はうまくいっているようですね」

「そうだな。レイも十分に活躍しているみたいで、嬉しいかぎりだ」

「……魔術領域暴走は大丈夫なのですか？」

「誓約の件は覚えているな？」

「はい」

「あの誓約を解除しない限り、レイの暴走はこちらで止める事ができる。まあ、その代わり私の治療は進まないが……仕方のないことだろう」

誓約を交わしたのは、極東戦役が終了した後のことだ。あの時は、オーバーヒートレイが魔術領域暴走で毎日苦しんでいた。その時、リディアが取った選択肢は……自分の体を犠牲にすることだった。

レイはリディアの足が動かないのは、自分のせいだと思っている。

一方でリディアは、自分の未熟さのせいだと思っている。

最終局面での判断。あそこは、リディアが判断を誤ってしまった最初で最後の瞬間でもあった。

そしてレイを守るために、自分を犠牲にして……その結果、レイは覚醒することになった。

あの時のことをリディアはよく覚えているが、それこそ魔術師の到達点を垣間見た瞬間でもあった。

それを目の当たりにしたこともあって、リディアはレイのために自身の身を捧げようと思ったのだ。だがそれももう……時間の問題だろうと思っている。

レイの症状は限りなく良くなってきている。それはリディアも感じ取っていることだった。

もう少し時間が経過すれば、誓約は解除できるだろう。

そうすれば、彼女は自分の治療に専念できる。そうすれば、この両脚で立つこともできるようにはなるだろう。もう、カーラに世話になる必要もなくなる。

それを悟ったのか、カーラは少しだけ寂しそうに声を紡いだ。

「足が治れば、私は必要ありませんか？」

唐突に告げるその言葉に、リディアは少しだけ啞然としてしまう。

「そう、だな。足が元に戻れば、もう誰かの手は必要ないだろう。カーラも、好きなことをしてもいい」

「もし許してくれるのであれば、私はまだ側にいてはダメですか？」

それはリディアにとって意外だった。カーラとは仲がいいと思っているが、いつまでもこの関係ではいられない。足が元に戻れば、別れると思っていたからだ。

「いいのか？ 私としては、非常に助かるが」

「はい。そもそも、リディア様はご自分のことはできませんよね」

「う……それは……」

苦虫を噛み潰したような顔になるリディアだが、それは間違いなかった。魔術に関しては非凡だが、彼女はそれ以外は並以下だろう。

レイには、将来のためだと言って色々家事などを押し付けていたのだが、実際は自分でできないのでやってもらっていたという方が正しいだろう。

「お料理も、お洗濯も、そのほかの家事も。私が来るまで、悲惨だったのはついこの前のことのように思い出せます」

「……まあ、人には得手不得手があつてだな」

「はい。だから、私がお側にいます」

ただ紹介で、メイドとしてやってきたカーラ。初めて出会った時は、特に仲がいいわけでもなかった。

だが二人は徐々に距離を詰めていき、今となっては確かな信頼関係を築いている。

それに、カーラとしてもリディアを放っておくことはできなかった。

彼女は魔術に関して天才的だろう。その頭脳も明晰だ。ただ、家事全般となると途端に平均以下になる。そんな彼女をこのまま放っておくのも、心苦しかった。それに、カーラもまた今の生活に満足していた。

レイに対するストーカーは、そろそろやめて欲しいと思っているのだが……。

「ふう……さて、私はそろそろ寝る。付き合ってくれて、感謝する」
「いえ。こちらこそ、有意義な時間でした。それでは、おやすみなさい」

「ああ。おやすみ」

そして、カーラが室内から出ていくとリディアは背もたれにグッと体重を預ける。

その後、リディアはしばらく論文の執筆を続けると、就寝する。

その日は珍しく、過去のレイとの日々を夢にみるのだった。

第212話 観戦と比翼

「レイ＝ホワイト。こうして戦いを見るのは、この大会が初めてだけど……やはり、彼は凄まじいね」

ルーカス＝フォルストはエヴィとアルバートと共に、レイたちの試合を観戦していた。

そして、彼の言葉の通りルーカスはレイの実力を伝聞でしか知らない。出会ったのも、魔術剣士競技大会の時が初めて。
マギクス・シュバリエ

元々は噂では聞いていた。当代の【氷剣の魔術師】は今までの魔術師の中でも頂点に位置していると。オーバーヒート魔術領域暴走の後遺症は残っているが、それを踏まえても彼は七大魔術師になるだけの実力がある。

そのような認識をルーカスも持っていたが、やはりこうしてレイの戦いを見るとその噂も嘘ではないとはつきりと分かる。

何よりも、レイはまだまだ本気を出していない。その中で、あのパフォーマンスを発揮しているのはもはや学生レベルではない。

匹敵するのは、自分しかないだろう……と考えるが、レイと一対一になるのは得策ではない。そうなってしまうえば、エヴィとアルバートが相対するのはアメリカとアリアーヌになってしまう。

ルーカスは、二人のことを高く評価している。魔術師としての技

量はすでになりのものだろう。だが、三大貴族の二人は流石に分が悪い。

しかし、レイの戦いを見る中でその意識も少しずつ変わってきている様子だった。

また、その中でも彼が警戒しているのはレイだけではなかった。

「アメリカ^{バタフライエフェクト}ローズは、どうやらまだ因果律蝶々を使わないようだね」

「そうみたいです」

「因果律蝶々^{バタフライエフェクト}かあ……あれは、俺も見たが凄かったよなあ……」

この話はすでに、三人で共有している。

チーム：オルグレンで一番の敵になるのはレイ^オホワイトだけではない。もちろん、レイが全力を出せば話は別なのだろうが、魔術^{バビト}領域暴走のこともあるからだ。

それを考慮すると、最大に警戒すべきは ^{バタフライエフェ}アメリカの因果律蝶々^{クト}だろう。

因果に干渉し、因果を接続することも、切除することも可能な魔術。ルーカスが知る魔術の中でも、トップクラスの性能を誇るそれを無視などとはできない。

「……ルーカス先輩。やはり、相手は先輩一人で？」

「そうだね。あれは僕じゃないと相手にできないだろう。いや、僕でも厳しいかもね」

「先輩がそこまでいうほどですか……」

アルバートはそう声を漏らす。

元々、七大魔術師とはいえルーカスが特化しているのは超近接距離^{クローズレ}での戦闘。保有する秘剣を使えば、肉薄できるかもしれないが……【攻撃が当たらない】という結果を接続されてしまえば、そこまでだろう。

アメリカ＝ローズ。

他の七大魔術師もすでに認めているが、彼女のもつ因果に干渉する魔術はそれだけ厄介なのだ。

「勝ち筋があるとすれば、やはり僕があの一二人と戦って、君たちがレイと戦うことだろう。きっと相手もそれは理解している。決勝戦で彼らと当たることになれば、そうなるのは自明だろう」

「分かりました。レイと戦い、勝利してみせます」

「おうっ！ 俺とアルバートなら、レイに届くぜっ！！」

「といっても、状況は刻一刻と変化する。初めは少し、奇襲を考えてもいいかもしれないね……」

二人の言葉を聞いて、ルーカスは微かに笑みを浮かべる。レイと同様に、彼の過去は普通ではない。そもそも、七大魔術師に至る魔術師は全てが何かしらの過去を持っている。

ルーカスもまた、その一人。

学院に入学はしたが、ずっと一人だった。彼はそれを受け入れていた。自分に匹敵する魔術師は、ここにはいない。学院に入っただけは、ただそうした方がいいと魔術協会の会長に言われたからだ。

レイと同じように、ルーカスもまた彷徨っている魔術師の一人だった。

しかし、エヴィとアルバートという後輩二人に出会って、彼もまた変わろうとしていた。

仲間と戦うことも悪くないと……そう思うほどには、彼は今の大会を楽しんでいるのだった。

「では、先輩。私はこれで失礼します」

「ああ。また夜に」

「はい」

レイたちの試合が終わったということで、リディアとリーゼはいったん別れることにした。夜は飲みに行くという約束だが、まだ時間はある。リーゼは自宅で少し論文を読み直しておきたいらしい。

そして、カーラに車椅子を押してもらって会場の外に出ると……そこでは仁王立ちしている小さな子どもがいた。

肩まで伸びる艶やかな赤色の髪。しかし、周囲の長さと比較すると、前髪は極端に短い。服装もまた、子ども用の小さな黒のコートを羽織っている。

その少女は、リディアを見つけると大きな声を上げる。

「リディア！ 待っておったぞっ！！」

高らかに声を上げる少女を見て、リディアは苦虫を噛み潰したような顔をする。その歪んだ顔は、出会いたくない人間に出会ってしまった……といったところか。

そして、リディアは忌々しそうに彼女の名前を告げる。

「……フラン、どうしてここにいるんだ？」

彼女の名前は、フランソワーズ・クレール。

二つ名は 【比翼の魔術師】 である。

「それはもちろん、レイがいるからじゃ！ もう試合は終わってしまったようじゃが……」

「そうか。では、私はこれで失礼する。カーラ、出してくれ」

「はい」

と、フランを無視してリディアは通り過ぎようとするが、彼女は思い切りリディアの襟首を掴むのだった。

「おい！ 我がこうして来てやったのじゃ！ 労いの言葉はないのかっ！？」

「ない。ロリババアに払う敬意など、ない」

「むきーっ！ お前はいつも生意気じゃ！！ 年上にもっと尊敬の念を抱くがいいっ！」

その場でバタバタと暴れるフラン。その言動を見ても、間違いなく誰もがただの子どもと思うだろう。いや、そう思わざるを得ない幼い容姿に、幼い言動。言葉遣いはどこか奇妙だが、それも子どもゆえにと考えるのが普通だろう。

「……はあ」

わざとらしく、ため息を漏らす。

そう。目の前にいるのは、一見すればただの子ども。その言動からも、完璧に駄々をこねる子どもにしか見えないだろう。

だが、フランの実年齢は 六十二歳。

現七大魔術師の中でも、最年長である。本人曰く、容姿が幼いまま変化しないのは謎であると。おそらく、魔術的な影響だと本人は言っているがその真相はまだ説明されていない。

しかし、フランは自分の容姿が幼いことはそれほど気にしてはいない。むしろ、「若いままでもいいではないかつ！ ガハハっ！」という始末。

七大魔術師は変わった人間が多いが、その中でもフランはトップクラスに異常だろう。リディアの中では、キャロルよりもフランの方が嫌いなのだ。キャロルはまだギリギリ、ムカつく範囲で収まるがフランは普通に殺意を覚える。

何よりも、このうつとうしい性格に苛ついてしまうからだ。

「で、いつ帰ってきたんだ？ お前はいつも世界中を旅しているだろう？ 学会もまだ先のはずだが」

「さつき帰ってきたのじゃっ！ ふはは！ レイに早く会いたくてなっ！」

「ああ……まあ、お前の魔術は便利だからな。で、レイに何のようだ？」

「噂で聞いたのじゃ！ レイが学生になっているとな！ お祝いを持ってきたぞっ！」

背負っている大きなバックパックから取り出すのは、何やらよく分からない土偶。それに謎の骨董品の数々。出すところに出せば、それなりの値段になるのだろうが、どうやらフランはその全てをレイへのお土産として持って帰って来たらしい。

それを大量に取り出すと、その小さな胸を張って自慢げに語る。

「どうじゃ！ すごいじゃろっつ！」

「……すごいが、レイが喜ぶとでも？」

「何っ！？ レイは骨董品は嫌いなのかっ！？」

「ああ。もちろんだ」

嘘である。

レイは基本的には芸術品は好きである。骨董品も例外ではない。きつと、このお土産を見れば目を輝かせていたに違いない。昔からこの手の芸術品に対して、レイは理解がある。

だがフランを近寄せたくないリディアは、とっさに嘘をついた

のだ。

「そうかあ……残念じゃのお……」

頭をだらんと下げて、悲しそうに骨董品をバックパックにしまっていく。寂しそうに、少しずつその品を戻していく様子は哀愁が漂っていた。

そんな様子を見て少しだけ心の痛むリディアだが、こればかりは仕方がない。

このフランという魔術師はレイに対して異常なまでに固執しているからだ。帰ってきて、リディアが会うことになったのは不幸中の幸いである。

問題は、このまま野放しにしておく……きっとレイのところに行ってしまう。

大会の最中だけでも、このアホロリババアは確保しておきたいと考え、彼女は苦肉の策に出る。

「フラン。夜にリーゼと飲みに行くんだ。お前も来るか？」

「何っ！？ 飲み会じゃと！ それにリーゼも来るのかっ！？」

「ああ。お前はリーゼのことが好きだっただろう？」

「うむ！ リーゼは学会で唯一仲良くしてくれるからなっ！」

それは完全に本人の勘違いである。リーゼはただ、話しかけてくるので適当に相手をしているだけなのだ……リディアは皆までということはない。

そんな悲しい現実を直接伝えたとしても、フランはそれを頑なに認めないだろう。

基本的には脳内で自分の都合の良いことしか受け付けないので、フランはリーゼととても仲良しだと勝手に思い込んでいる。

実際のところ、リーゼにフランと仲が良いのか、と尋ねると……
「いえ。別に」と言葉が返ってくるだろう。

「よし。じゃあ、ついて来い」
「分かったのじゃっ！」

そうして、フランを確保すると、リディアたちはそのまま進んでいくのだった。

第212話 観戦と比翼（後書き）

改めて整理しておきます。

- | | | |
|---|----------|--------------|
| 1 | 【氷剣の魔術師】 | レイ＝ホワイト |
| 2 | 【灼熱の魔術師】 | アビー＝ガーネット |
| 3 | 【幻惑の魔術師】 | キャロル＝キャロライン |
| 4 | 【絶刀の魔術師】 | ルーカス＝フォルスト |
| 5 | 【虚構の魔術師】 | リーゼロッテ＝エーデン |
| 6 | 【比翼の魔術師】 | フランソワーズ＝クレール |
| 7 | 現時点では不明 | |

第213話 恋する乙女たちの戦い

無事にわたくしたちは本戦の二回戦を突破。次の試合は準決勝、そして決勝へと続きます。

正直いって、とても嬉しいのは間違いありませんわ。それはもう、毎試合勝つたびに歓喜に震えています。

けれどやはり……レイとアメリアは、魔術師として完成されているのだと思うてしまうのです。レイはいうまでもなく、規格外の存在。一方でアメリアは、堅実にその実力を伸ばしています。

基本的には、攻城戦では二人で戦うことが多いのですが彼女の魔術の技量はすでに学生の中でもトップクラスでしょう。

おそらくは将来は七大魔術師になると思っていますわ。

そんな二人を見ていると、やはり自分と比較してしまいます。

努力はしてきました。才能も、間違いなくあるのでしょうか。三大貴族の血統というのは、そういうものですか。

では、わたくしに足りないものは何なのでしょう。

大会の最中だというのに、そんなことをふと考えてしまいます。

「はぁ……すっかりしめんど」

と、ため息混じりにそう言葉にすると隣に座っているレイがチラッとこちらを向いて話しかけてきます。

「どうしたアリアヌ。体調でも悪いのか？」

「い、いえ！ 大丈夫ですわよっ！」

今はちょうどレイと二人きりで、本戦の二回戦を観戦しているところです。アメリカというと、今回も席を外しています。

ローズ家は数週間後に行われる聖歌祭で色々と準備をしているとかで、アメリカも大会の最中とはいえ、その手伝いに追われているとか。

わたくしの実家では特に何かをするとは聞いていないので、こうしてレイと二人で観戦していますわ。

けれど、アメリカと別れる際にこのように釘を刺されました。

「いいこと、アリアヌ。レイと二人きりだからって、変なことを考えちゃだめよ？」

「当たり前ですわっ！ そもそも、わたくしは別にレイのことは何とも思っていないとあれほど……っ！」

「まあ、何回も聞いているけど念のためっていうかね。それと、レベツカ先輩がどこかで干渉してくるかもしれないから、何かあったら教えてね」

「ええ。分かりましたわ」

「はあ……レイってば、本当に鈍感だから大変なのよねえ」

「それは同意しますわ。確かに、ものすごく鈍感ですが……そんな

ところが」

と、自分で何かを言いかけそうになって、すぐに口を噤みます。

「ん？ いま何か言った？」

「な、何でもありませんわっ！」

そんなやりとりをして、今に至ります。

レイとアメリカに対して、わたくしは少なからず劣等感のようなものを抱いています。しかし、それと同じかそれ以上にきつと……わたくしは、二人に憧れているのだと思います。

才能だけではない。努力も重ねた上で、二人は今の場所に立っているのですから。

そんな二人が友人で、わたくしはとても誇らしいと思いますの。

だからこそ、レイとアメリカに並び立つために……わたくしは、この大会で自分自身を証明したいと、そう思っているのですが。

「なるほど……なかなかいいチームだな。バランスがいい」

ボソボソと呟きながら、レイはメモを取っています。この大会の間は、彼と過ごすことが多いのですが、彼のこともよく分かってきました。

レイは没頭すると、周りのことが見えなくなります。その集中力は感嘆すべきものですが、逆にいえばそれしか見えていないので危なっかしいところもあります。

「レイってば、前のめりになり過ぎですわ。姿勢が悪いですわよ」
「ああ。すまない」

「それと、水分も取っておくべきですわ。ちょっと没頭しすぎみた
いなので」
「助かる」

レイと二人きりになるということで、彼をサポートするために色々
と準備しておいたのです。

彼はおそらく、魔術師の中でも史上最高の天才なのでしょう。そ
れは今まで一緒に過ごしてきて、その片鱗をわずかにですが理解し
てきました。

そもそも、固有魔術^{オリジン}を真正面から打ち破るだけでも異常。

だというのに、おそらくは本気をまだ見せてはいない。

七大魔術師とは本当に恐ろしいものだと思います。それに、その
領域に同じ歳でたどり着いていることにも。

一方で魔術には長けていますが、その他の面では心配なところも
多々あります。

でもだからこそ、彼をしつかりと支える人間が必要なのでしょう。

べ、別にわたくしがそれになりたい……とは思っていませんが、
少なくともこの大会中くらいはわたくしがしつかりとしませんとっ！

アメリカは実家のことや、自分の魔術のことで大変なようですし。

もちろん、わたくしも自分のことで手一杯なのですが、レイと過ごすことで見えてくるものも多いです。決して、嫌ということはありませんのよ。

「終わったな。いい試合だった」

「ですわね。流石にここまでくると、練度が高いですわね」

「そうだね。学生の中でもトップクラスだな」

「では、行きましょうか」

「ああ」

そうして今日の試合は終了したということで、二人で立ち上がって円形闘技場から出ていきます。「ロッセオ」

すると……アメリカの予想が当たったのか、ちょうどパタパタとレベッカ先輩がこちらに向かって走ってきました。後ろにはマリアもいるようです。

そして、レベッカ先輩の顔はそれはもう……とびきりの笑顔でした。

「レイさん!」

「レベッカ先輩」

「準決勝進出、おめでとうございますっ!」

「ありがとうございます」

すでにレベッカ先輩はレイしか見えてないようですわ。彼の手をギュッと握ると、嬉しそうに微笑みかけています。なんというか……ちよつと妖艶な印象を、同性の私でも抱いてしまいますわ。

後ろでそんな二人の様子を見ると、マリアがコソツとこちらに近寄ってきます。

「やほ、アリアーヌちゃん。久しぶり。大会、順調そうだね」

「マリア。お久しぶりですわ。そうですね。大会は無事に準決勝まで来ましたわ」

マリア「ブラッドリィ。」

彼女とは特別仲が良いわけでも、悪いわけでもありません。けれど、その距離感がたくしは好きでした。

マリアはレベッカ先輩と比較されることでその容姿を変貌させ、ちよつとグレてしまっていたのですが……最近はどうにも、明るくなったような気がします。

相変わらず、前髪は斜めに切り揃えられていて、後ろは刈り上げと奇抜な髪型をしています。よくお似合いですわ。それに、両耳にあるピアスも綺麗だと思います。

逆にここまで徹底できるマリアが、少し羨ましいですわ。

「それにしても、見てよアレ」

「ええ……ものすごく、ハートが飛んでますわね」

「ね。お姉ちゃんもよっぽどだけど、あれに気がつかないで冷静に対応してるレイも相当よね」

「ですわねえ……」

二人で、レイとレベッカ先輩の様子を見つめますが……ものすごくハートが飛んでいますわ。

もちろんそれは、比喩的なものですが、あれだけ好意を示されて気がつかないのはレイの凄いいところですね。

彼の過去を考えるとそれも仕方のないことだと思いますが、いつかレイは刺されてもおかしくないですね……。

まあ、レイに刃物はきつと通用しませんが、色々と大変なことになる未来が見えますわ。

「それにしても、マリアはレイと仲が良いんですの？」
「えっ！！？」

急にマリアの表情が驚いたものに変わります。

ん？ これはもしかして……？

彼女は慌てた様子で、わたくしの肩をグイッと掴むとそのまま後ろに無理やり連れて行かれます。

「ちょ、ちょっと……！ そのことはあんまり大きな声で言わないでよねっ！」

「な、何かあるんですの？」

二人から距離を取ると、マリアが耳打ちをしてくれます。

あまりにも真剣な様子なので、少しだけ身構えてしまいますの。

「……お姉ちゃんがね、私とレイが仲が良いのを、ちょっと心配しているみたいだから」

「ああ。そういうことですね。でも、仲が良いのは否定しませんのね」

「う……ま、まあ……別に悪いわけでもないし？ それに、あいつとは意外と話が合うし？」

あら？ あらあらあら？

何ということでしょう。わたくしは内心でため息をつきます。

全くレイは、どれだけの乙女を魅了すれば気が済むのでしょうか。まあ……彼が魅力的なのはわからなくもないのですけれど……。

って、わたくしは何を考えていますのっ！！？

「う~~~~~っ！！」

「うわっ！ どうしたの、アリアーヌちゃん！？」

わたくしはその場に思い切りしゃがみ込みます。

決してこれは、そのような感情ではありませんわ！

そう心の中でわたくしは、否定し続けるのです。

試合、試合に集中しますわよっ！！

第214話 すれ違ふ意志

「アメリカそのまま駆け抜けるッ！ カバーは俺たちがするッ！」
「分かったわッ！」

準決勝、第三ラウンド。

攻城戦も大詰め。この試合は流石に準決勝ということで、第二ラウンドで試合を決めることはできなかった。

第一ラウンドは俺たちの攻撃で、無事に勝利。だが、第二ラウンドの防衛では惜しくも敗北。そのため、最終戦の第三ラウンドまで突入している。

現在はフラッグを獲得して、古城の外にある所定の位置にフラッグを運んでいる最中だ。

もちろん相手は、それを阻止するべく全力で魔法を行使してくる。

俺たちとしては、まだ固有魔術オリジンを使用していないので、このまま勝ち切りたいところだ。

決勝戦は、一日だけ休みを挟んで明後日から開始となる。

それを踏まえても、固有魔術オリジン使用後のインターバルが一日というのはかなり厳しいだろう。

はつきりいつて、この場でアメリカとアリアーヌが固有魔術オリジンを發動すれば勝利は確定するだろう。

しかしそれは疲労を蓄積してしまう上に、こちらの切り札を晒してしまうことになる。

また、もう一つの山の準決勝はすでに終了している。

決勝に上がってくるのは、順当にチーム：フォルストだった。

その試合は観戦していたが、やはり優勝候補と評されるだけあって、完成度はこの大会の中でも屈指。

総合力だけでいえば、俺たちのチームを上回っているのは間違い無いだろう。

そんな相手と戦うのだ。この試合はできるだけ温存しておきたい。ということで、俺が最前線に出てアメリカがフラッグを運ぶ時間を稼ぐ。

「アリアーヌ、カバーを頼むッ!!」

「分かりましたわっ!!」

相対するのは三人の魔術師。この準決勝まで上がってきたということもあって、その実力は学生の中でもトップレベル。

加えて、メルクロス魔術学院の女子生徒が一人、ディオム魔術学院の男子生徒が二人と攻撃的なチームになっている。

何よりも、相手のチームは前線の二人がかなりタフだ。それは今までの試合を通じて感じたが、俺たちと同じかそれ以上に試合に慣れている。

前線で二人が戦い、後ろからもう一人が魔術でカバーをする。

俺たちのチームと同じ構成。

その中を、俺とアリアーヌだけで戦う。つまりはアメリカのカバーはない。だが、集団戦はすでに心得ている。ここは少し無理をしても、全力で止めるしかない。

「挟み込むぞッ！ 時間がないッ！」

「ああ！ 分かってるッ！！」

焦っている。それは相手のその声色から理解できるが、このような状況下でも魔術の精度が落ちることはない。

冷静にただ、俺とアリアーヌを強引に突破しようと大地を駆け抜ける。

しかし、それを許しはしない。

インサイド

内部コードをさらに走らせると、一気に加速。相手の後ろに回り込むと、その勢いのまま一本背負いをする。

「う……わッ！！」

まずは一人をその場に叩きつけて、身動きを封じる。

「この……ッ!」

そしてその間に、隙ができた俺に対してもう一人がその場から駆け抜けようとする。流石にそれは追いつくことができないが……そこは、アリアーヌが立ち塞がる。

「絶対に通しませんわッ!」

だが、俺たちはこれでも二対二の状況。こうして状況が動く前に、後方からの魔術支援が行われようとしていた。

その魔術兆候は、元々理解していた。俺は相手の魔術が発動すると同時に、アンチマテリアル対物質コードを一気に走らせるのだった。

アンチマテリアル
《対物質コード・還元》レストレーション

マテリアル アンチマテリアル
《物質Ⅱ対物質コード》

マテリアル レストレーション ブリママテリアル
《物質・還元Ⅱ第一質料》

そこからさらに重なるようにして、魔術を発動。

ブリママテリアル
《第一質料ⅡエンコーディングⅡ物資コード》マテリアル

マテリアル
《物資コードⅡデコーディング》

マテリアル
《物質コードⅡプロセッシングⅡ減速Ⅱ固定》ディセレーション

《エンボディメントⅡ物質》
マテリアル

一見すれば、相手の発動した魔術が全く別のものに变化したように見えるだろう。できるだけ、俺が魔術を還元することができるといふ事実は伏せておきたい。

そのため、一連の流れを一瞬で行うことで相手の魔術を別の魔術に変換したように錯覚させる。

俺が展開したのは、氷壁^{アイスウォール}。それは周囲に大きく展開して、ここから先の通路を通ることができないようにする。そして、それと同時にアリアーヌもまた相手をその場で戦闘不能にすることに成功。

瞬間。

大きなサイレンが、耳に入ってくる。

「勝者は、チーム：オルグレン」

勝利した。俺たちが時間を稼いでいる間にも、なんとかアメリカがフラッグを所定の位置に持って行ってくれたのだろう。

そして、後ろにいるアリアーヌと勝利を喜ぼうとすると、彼女はいつものように思い切り抱きついてくるのだった。

「やった！ やりましたわっ！ ついに決勝ですわっ！」

歓喜の声を上げて抱きついてくるアリアーヌを真正面から受け止

める。

その豊かな胸と、柔らかい体が思いきり触れるが……ここでそれを指摘するのは野暮というものだろう。

俺は彼女を受け止めながら、その言葉に応じる。

「ああ。ついに決勝だな」

「ええ！ わたくしたちはやりましたわっ！」

その満面の笑顔を見て、俺もまた同じように微笑む。アリアーヌの喜びも非常によくわかる。この試合は今までの中でも一番ギリギリの試合だった。

だからこそ、勝利したときの喜びも一際大きいというものだろう。

「ふう。無事に勝ったわね」

と、しばらくしてアメリアと合流。彼女はアリアーヌとは異なり、冷静なようだった。

コツンとアメリアと拳を合わせる。

「最後はアメリアが逃げ切ってくれたからな。助かった」

「レイとアリアーヌがなんとか耐えてくれたからよ。無事に勝つことができて良かったわ」

「わたくしとレイならば当然ですわっ！」

三人で喜びを分かち合う。その一方で、俺は自分に注がれる視線を感じ取った。それは、俺たちの前に試合を終えたチーム：フォル

ストの三人だった。

どうやら、円形闘技場コロッセオで観戦をするのではなく、こちらに用意されているモニターで試合を観戦していたようだった。

ルーカスⅡ フォルスト。

エヴィⅡ アームストロング

アルバートⅡ アリウム。

決勝戦で当たるとすれば、彼らだと思っていたが……その予想は的中。そして、決勝戦のカードがついに揃った。

チーム：オルグレン対チーム：フォルスト。

決勝がこうなるのは、元々予想していたことだ。予選での各チームの戦いを見れば、こうなることは高い確率で予想できる。

決勝戦は異次元の戦いになるだろう。

俺たちも出し惜しみをすることはできない。元より決勝戦なので、もう後のことを考える必要はない。おそらくは、固有魔術オリジンも出る試合となるだろう。

そして、ルーカスⅡ フォルストには【秘剣】がある。

それは魔術を組み込んだ剣技。分類としては、固有魔術オリジンに匹敵するということ。固有魔術に指定されている稀有なものだ。

それをどうにしないことには、勝利することは不可能だろう。

さらに、アルバートとエヴィもそれに加わるとなると……この試合は早期に決めるのは望まないほうがいいだろう。むしろ、劣勢になったときは1ラウンドを捨てる覚悟をした方がいいかもしれない。そう考えてしまうほどには、チーム：フォルストは強敵であつた。「二人とも。決勝戦はおそらく、今までの中で最も厳しい戦いになる。こうして勝利した後に言うのは心苦しいが、気を引き締める必要があるだろう」

すると、二人ともに鋭い顔つきになる。

「ええ。もちろんよ」

「分かっていますわ。相手は今大会でも屈指のチームだと。しかし、もちろん勝つのはわたくしたちですわっ！」

いつものように、その豊満な胸を張ってアリアー又は高らかに宣言する。そんな様子を俺とアメリカは、じっと見つめる。

決してそれは虚勢の類ではない。

俺たちならば、優勝できる。あと一勝すれば、優勝が確定。

今までは誰かとこうして戦うことはあつたが、それでもこのような気持ちになったのは初めてだった。それはなんと言えいいのだろうか。

この高揚感を、言葉で表すのは難しい。だが決して、悪い気分ではなかった。

その後、俺たちは解散するとそれぞれが帰路に就く。

「おっと……これはこれは、申し訳ありません」

目の前の男性に軽く触れてしまう。しかし今は、奇妙な感覚だった。決して相手が意図してぶつかってきたわけではない。

だがまるで俺の意識に潜り込むようにして、こちらに向かってきたかのような感覚。

いや、きっと考え事をして歩いていたからだろう。

視線を、ぶつかってしまった男性へと改めて向ける。

長身で細身。さらには、艶やかな白い髪ではあるが、男性にしては長い。それは腰まで伸びていた。

また服装は真っ黒なスーツということもあり、全体的にとっても映える。

肌もかなり白いため、おそらくはアルビノの方なのだろう。

また、一見すれば、女性のようにも見えるが低めの声から俺は男性と判断したのだ。

「いえ。こちらこそ、ボートとしていたので。申し訳ありません」
「いえいえ。私のほうも、スーツに気を取られていて。実は下ろし立てで、歩きながらチェックしていたのですが、本当に申し訳ない

ことをしてしまった」

「大丈夫です。こちらには、なんの被害もありませんので」

「そう言ってもらえると、非常に助かります。これはほんのお詫びです」

彼がそう言っでポケットから取り出したのは、四角い包に包まれた小さなものだった。

「キャラメルです。甘いものはお嫌いですか？」

「いえ」

「それでは、どうぞ」

「ありがとうございます」

素直にそのキャラメルを受け取る。すると彼は、ニコリと微笑みながら俺の横を通り過ぎていく。

「レイ＝ホワイトさん。またいずれ、お会いしましょう」

その言葉を聞いて、振り返る。

だが、すでにそこに彼の姿はなかった。俺は自分の名前を告げてはいない。

もしかして、大会を観戦しているから知っていたのか？

そう考えるのが、道理だろうか……。

ふと、手の中にあるキャラメルを見つめる。そこには確かに、先

ほどもらったキャラメルがあった。念のため、キャラメルに何か細工がされていないか確認するが……問題は無い。

魔術的な兆候は、何一つ感じ取ることはなかった。

「……考えすぎか」

この出会いは、一体なんだったのか。奇妙な何かを感じるが……。

そして俺はもう一度振り返ると、まっすぐ進んでいくのだった。

いただいたキャラメルはとても甘くて、美味しいものだった。

第215話 優生機関

ユーゼニクス
優生機関。

それは倫理の枷を外し、魔術の真髄に至ろうとする組織。だがその組織の全貌を知る者はほとんどいない。

ユーゼニクス
優生機関の所属とはいっても、ただ研究施設を与えられるだけ、または手術によって魔術領域を強引に拡張させられる　ダークトライアドシステム　など、組織の真の目的を知る者は限られている。

「レイ＝ホワイトですが、無事に決勝への進出を決めたようです」
「みたいだね」

とある施設の地下室。

空気の通りが悪く、薄暗い空間。明かりは最低限で、それこそ日の光などは全く存在しない。

そこには、一人の男性と女性がいた。男性の方は漆黒のスーツに身を包み、彼の前には大量の資料が積み上がっていた。

肩まである真っ白な髪を後ろに軽く流すと、彼は女性から渡された資料を眺める。

「今までの戦いから分析すると、全盛期に戻りつつあるようです」

「……確かに、そのようだ。今日は偶然彼に会ったけど、やはりいいものだね」

「そうなのですか？」

「ああ。遠目から見ているつもりだったのだけれど、ちょうどぼったり出会ってね。やはり彼とは運命を感じずにはいられないよ」

「そうですか。では、引き続き彼の現状をお話いたします」

「頼むよ」

女性もまた、彼と同様にスーツを着用し、細いフレームの角張ったメガネをかけている。一見しただけでも、彼女が聡明であると思われる。

もつとも、容姿だけで人の知性は測ることはできないのだが、彼女に至ってはその中身もまた優秀そのもの。研究者でもある彼女は、それだけの知性を兼ね備えていた。

「ヘレナ^{グリムリーパー} 그레이ディ。死神^{バトロコ}。そして、暴食。それぞれを打ち破っ

ていますが、間違いなくその能力は戻っているかと」

「どうやら、彼の魔術領域^{オーバーヒート}暴走はただ暴走しているだけではないようだね」

「流石のご慧眼です。こちらでも、無理やり魔術領域^{オーバーヒート}暴走させることで被験者をかなり調査しましたが、彼のケースとは異なっているかと」

「そうになると、問題はやはり ^{アーカーシャ} 真理世界か」

^{アーカーシャ}
真理世界。

その存在が明確に確認されたのは、四年前。極東戦役の最終戦で、レイ^{ホワイ}トが至ることのできた領域。

その領域に至る魔術師は、この世の全ての魔術を統べることができると言われている。もともと魔術は、全て真理世界アーカシヤに保存されていると提唱する学者もいる。

魔術は生み出すものではない。

それは全て真理世界アーカシヤに保存されており、引き出すものである。

そのため、魔術師の技量とは真理世界アーカシヤにどれだけ干渉できるか次第である。

それが優生機関ユゼニクス上層部の結論。

その事実には、上位の魔術師は気がついていない。それは理屈ではない。

感覚的な問題であり、魔術を使えば使うほど、どこから自分が魔術を引き出しているような感覚があるのだ。

曰く、コード理論とは真理世界アーカシヤから魔術を引き出すための暗号コードである。

そもそも、コード理論を提唱した学者は、そのことを理解した上でコード理論という名称にしたのではないか、と言われているほどである。

「レイエングラム＝ホワイトの記憶痕跡を入手したいが、それはかなり困難だろうね」

「はい。レイ＝ホワイトの周りには、高位の魔術師が多すぎます。」

中でも、リディア⇨エインズワースとリーゼロッテ⇨エーデンが厄介かと」

「元【氷剣】に【虚構】か」

「中でも【虚構】はかなり厄介でしょう。リディア⇨エインズワースは真理世界アーカーシヤに至る存在ではありませんが、今はその能力は全盛期に比べるとかなり落ちています。一方で、リーゼロッテ⇨エーデンはまだ底が見えません」

「七大魔術師か……周期はそろそろかい？」

「はい。あと少しで、次の周期がやってくるかと。現在は、アメリカ⇨ローズが次の候補かと」

そう言っ て女性は、一枚の資料を取り出すとそれを彼に渡した。

その資料はアメリカの能力をまとめたものであった。

バタフライエフェクト
因果律蝶々。

リーゼロッテとは異なり、その因果に干渉する力はかなり強力。因果を接続することも可能であれば、切除することも可能。

因果という概念そのものを操るそれは、研究対象にしては素晴らしいものだった。

バタフライエフェクト
「因果律蝶々。やはり、その能力は素晴らしいものようだ。彼女もまた、調べてみたいね」

「まだ制御は難しいようですが、因果に干渉する能力だけでいえば【虚構】を凌ぐかと。おそらくは、二十代に入る頃には七大魔術師に至るかと思われます」

「アメリカ⇨ローズだけでなく、最近は学生にして固有魔術オリジンを保有している魔術師が多い。やはりあの仮説は正しいようだな」

「レイ＝ホワイトを起点にして、次の魔術革命が起きている。間違いないでしょう」

ユージェニクス
優生機関の上層部は、そのように結論付けていた。

レイ＝ホワイトという存在が起点になって、周囲の魔術師がさらなる能力に覚醒している。

それはリディアたちが隠している事実でもあった。

リディアがレイに幸せになってほしいという思いで学院に入れたのは間違いない。しかしそれと同時に、別の目的もあった。それはレイが知ることのない、裏の事情。

それを知っているのは、リディア、アビー、キャロル、リーゼ、その他の魔術協会に所属している七大魔術師を含む上位の魔術師のみ。

しかし、魔術協会の中には優生機関ユージェニクスの手が既に伸びている。そのためレイ＝ホワイトに関する情報は優生機関ユージェニクスもまた保有している。

そもそも、その情報がなくとも優生機関ユージェニクスは彼が特別な魔術師であるということを理解している。

おそらくは、長い魔術の歴史の中でももっとも完成された魔術師であると……。

「アメリカ＝ローズ。アリアヌ＝オルグレン。レベッカ＝ブラッドリィ。その三人への影響は、なかなか大きいようだ」

「レベツカ」ブラッドリイに関しては、聖人^{クローイツ}としての能力は封じられました。彼女も二十代になる頃にはその能力を制御できるよう。アリアーヌ「オルグレンも覚醒の兆候があります」
「向こうもどうやら、こちらに対応するために次世代の魔術師を育てているということか。血統主義に縋るだけしかない、能無しばかりと思っていたが……やはり、リディア「エインズワースの功績は偉大だな」

トントンと人差し指で、机の上にある資料を叩く。

血統主義に対して疑問を提唱し始めたのはリディアが初めてだった。厳密に言えば、今までも疑問の声はあったのだが、それは他の貴族によって全て封じられてきた。

リディアは、当時の史上最年少の七大魔術師に至った天才。

だからこそ、貴族では無いとしても、そんな彼女の言葉はかなりの影響力を持っていた。

そこから、魔術師とは血統だけではなく、後天的な要素も重要であると理解され始めた。

優生機関^{ユーゼニクス}はもとも、そんな血統主義に辟易した研究者が始めた組織である。そのため、既存の研究者よりも進んでいる面が多い。

その研究結果は、ダークトライアドシステムなどにも反映されている。

だがそれに対抗するようにして現れたリディアの存在。そこから、レイ「ホワイトが現れ、彼を起点にしてさらに優秀な魔術師が登場

している。

優生機関ユーゼニクスとしては、レイの記憶痕跡エングラムを調査したくてたまらない…
…というのが本音だろう。

「大会への介入はどうしますか？ 準備はできていますが」
「いや。今回はいいだろう。魔術剣士競技大会マギクス・シユバリエと同様に、相手は準備をしているだろう。それに、七大魔術師が六人もいるんだ。介入するのは流石にこちらとしても、難しいだろう」

【氷剣】、【灼熱】、【幻惑】、【絶刀】、【虚構】、【比翼】
の六人が今は同じ場所に集まっている。

もともと七大魔術師は世界に散っていることが多かったが、こうして集まるようになったのは、魔術協会がそのように手配しているからである。

リディアとリーゼが観戦に来ているのも、ただレイを見たいだけというわけではなかった。

全ては大会を無事に運営するという目的のもと、七大魔術師は集結していたのだ。

「さて、彼はどのように戦うのか。楽しみにしていよう」

ニヤリと笑う男性。

その表情は、まるで何かを楽しみにしている子どものようだった。

優生機関ユーゼニクスの台頭は、まだ本格的にはなっていない。

。だが、近い将来レイたちとぶつかることになるのは、間違いない

第216話 決勝戦前夜

決勝戦の前夜、俺は一人で宿舎の一室にいた。今回は明日の試合のために、円形闘技場の隣にある宿舎に泊まることにしたのだ。

そして、先ほどこようど最後のミーティングを終えたところだった。

決勝戦は間違いなく死闘になる。2ラウンドで試合が決着すればいいが、それも希望的観測に過ぎない。むしろ、1ラウンド落としても平静を保つように二人には伝えてある。

また、この攻城戦というルールの性質上、先に1ラウンドを取った方が有利になる。こちらが先に取れば、残り1ラウンド取れば優勝できるという心理状態になれる上に、相手は後がないということに焦ってしまう。

今までの試合を見ても、先に1ラウンドを取った方が勝率は高い。

魔術師の実力とは、精神という観点も重要な要素になる。その点においては、俺たちのチームは大丈夫だと思っている。俺は少々なことでは動じない自負があるし、アメリカとアリアーヌにもしっかりとこのことは伝えてある。

あとは、しっかりと睡眠を取って明日の試合に備えるだけだ。

現在の時刻は二十一時を回ったところ。まだ寝るには早いですが、そ

ろそろ準備をしようと思っていると、コンコンコンと丁寧なノックが三回ほど室内に響いた。

「はい。どちら様でしょうか」

俺は椅子から立ち上がると、ドアへと歩を進める。そして、ゆっくりとドアを開けると、そこにいたのはアリアーヌだった。

「あ……その、お邪魔でしたでしょうか？」

「何か用事か？ 明日の試合のことか？」

「えっと。その……そのこともありますけど……」

要領を得ない。

彼女はいつもハキハキとしているのだが、今は顔を桜色に染めて、忙しなく髪を触っている。

どうやら風呂上がりのようで、髪はわずかに湿っていた。

おそらく、頬がわずかに赤いのはそのせいだろう。

「とりあえず、入るか？」

「あ、ありがとうございます。失礼しますわ」

おずおずとした様子で、彼女は室内に入ってくる。ここは宿舎の一室ということで、十分にもてなすことはできない。

しかし、ちょうど俺は寝る前にホットミルクでも飲もうと思っていたので、それをアリアーヌに渡す。

「ホットミルクだ」

「いいんですの？ これはレイが飲むはずでは……」

「構わない。すぐにもう一つ作る」

そして俺は、自分の分のホットミルクも準備をして、椅子に座る。

アリアーヌと机を挟んで向かい合うように座ると、さっそく用件を伺うのだった。

「それで、何かあったのか？ もしかして、体調が悪い、または魔術領域に問題が？」

「い、いえっ！ 体は大丈夫ですわっ！ それに魔術領域も正常ですわっ！」

「それは良かった。では、他に何か？」

そう尋ねると、彼女は少しだけ俯いてしまう。ここで焦って迫るような真似をしてはいけない。それは、なんとなくアリアーヌの雰囲気から察していた。

しばらく時間をおいて、アリアーヌはバツと顔を上げるとその口を開いた。

「試合が終わってしまつたら……わたくしはきっと平静を保つことができないと思いますの。だから、先に言いに来たんですの」

「何をだ？」

「お礼、ですわ」

じつと上目使いで俺を見つめると、アリアーヌはその場で深く頭を下げた。

「今まで、ありがとうございましたわっ！」

それは、今までになく感情のこもった言葉だった。なんと形容していいのかわからないが、俺はそんなアリアーヌの言葉に心を打たれる。

「どういたしまして、と言いたところだが……そうだな。俺もアリアーヌには伝えておきたいことがある」

「な、なんですかの……？」

ポカンとした表情を浮かべる。それは少し驚いているようで、その先の言葉を恐れているようなものでもあった。

俺はそして、自分の思っていることを吐露するのだった。

「こちらこそ、ここまでついてきてくれてありがとう」

「そ、そんな！ わたくしにそんなことを言ってもらう資格はありませんわっ！ レイのおかげで、わたくしはここまでこれたのですからっ！」

それはきつと本心なのだろう。慌てて否定するが、アリアーヌの瞳はわずかに潤んでいた。感極まっているのか、いつもよりも声が大きい上に、声色も違う。

だからこそ俺は、さらに言葉を紡ぐ。

「少しだけ、俺の話をしよう。俺は今まで、人の心に触れることが

怖かった」

「……」

打って変わって、アリアーヌは話を黙って真剣に聞いてくれる。

アメリカの時もそうだったが、こうして心から思っていることを打ち明けるのはまだ怖いという気持ちもある。しかし、ここまで一緒に戦ってきたアリアーヌには素直に言葉にすることができた。

「学院に入ることと多くの友人と出会うことができた。その中で、人と心を通い合わせることの重要性を学んだ。俺は極東戦役で数々の功績を挙げ、今では七大魔術師が一人、【氷剣の魔術師】に至った。それは確かに、側から見れば偉大な功績なのかもしれない。しかし、まだ俺は人間として途上だった」

「レイが途上、ですの？」

「ああ。俺はまだ十五歳。アリアーヌと同じだ。境遇は違えど、俺もずっと迷い続けていた。君と同じように」

「それは……」

そうだ。俺はずっと迷っていた。

だが、みんなと出会うことで変わることができた。

魔術剣士競技大会ではアメリカと、文化祭ではレベルカ先輩と、そしてこの大規模魔術戦ではアリアーヌと心を通い合わせることができたと思っている。

人は一人では生きていけない。

その事実を俺は学院に入ること、改めて学ぶことができたのだ。

俺は確かに、何かを与えることができたのかもしれない。その一方で、俺はみんなにそれ以上の大切なものを与えてもらった気がする。

そんな思いを、アリアーヌに晒した。彼女には伝えておきたかった。

本当は、決勝戦の後に話そうと思っていたのだが、今でないといけない気がしたのだ。

「レイ……あなたは、そんなことを思っていたんですね」

「ああ。やはりこうして言葉にしないと、伝わらないからな」

アリアーヌの手にそつと触れる。

彼女の手は、とても温かい。この温もりこそが、人との関係だと俺は思っている。

「ありがとう。アリアーヌ。君のおかげで、俺はさらに成長できたと思っている。この大規模魔術戦に誘ってくれたのは、君だ。俺は元々、出る予定ではなかったからな。しかし、こうして決勝戦まで来て一緒に戦うことができて、本当に楽しかった。それに、同じ喜びを共有することができて嬉しかった。だから」

少しだけ間を置くと、俺は自然に微笑みを浮かべた。

「ありがとう、俺を誘ってくれて。アリアーヌと出会うことが

できて、本当によかった」

すると感極まったのか、ツーツと一筋の涙が零れ落ちるが彼女はそれをすぐに拭った。

きっと、彼女が求める乙女はここでは泣かないのだろう。

いつも理想の自分を求め続け、それは言葉にしているのは知っていた。

彼女なりの、理想の乙女というものがきつとあるのだろう。

「わ、わたくしこそっ！ レイと出会うことができ、とても幸せですね。ありがとうございます。本当に、ありがとうございますわっ！」

もう、涙は必要なかった。彼女もまた、ニコリと微笑む。その笑みは今までの中で見たことないほどに、とても魅力に溢れた笑顔だった。

血に染まり続け、奪うことしかできなかった俺がこうしてまた、誰かに何かを与えることができたのなら……きっと、これ以上の幸せはないのだろう。

扉を開け、アリアー又は自室へと戻っていた。最後にこちらの方をチラッと向くと、軽く手を振ってから彼女はその先へとパタパタ

と走っていった。

俺はその姿を見えなくなるまで見続けていた。

「　　アメリカ。いるんだろう?」

と、声を上げると廊下の角の方から赤い髪が一房だけ出てくるのが見えた。

「……わかってたの?」

「ああ。扉の前に誰かいる気配は、気がついていた」

「そっか。まあ、でも……入れる雰囲気じゃなかったし。盗み聞きする気はなかったのよ?」

「もちろん分かってる」

そして、アメリカにも室内に入るかと伺ったが彼女は首を横に振った。

「私はいいわ。実は、アリアーヌの様子が変わだから、追いかけて来ただけなの」

「そうだったのか」

「ええ。でも、あの調子なら大丈夫そうね」

「ああ」

「それにしても」

アメリカはどこか虚空を見つめるようにして、凜とした声でその心情を語る。

「アリアーヌも、私と同じだったのね。ずっと思ってた。アリアーヌは私と違って、強い子だって。けどやっぱり、人は言葉にしない

と分からないものね」

「ああ。そのことを教えてくれたのは、アメリア。君だった」

「……懐かしいわね」

「そうだな。もう冬になった」

「私もね、アリアーヌと同じよ。レイと出会うことができて、幸せだから、この決勝戦は絶対に勝つわ。私も、あなたに多くのものを与えてもらったのだから」

強い意志が宿った言葉。それに、その双眸には絶対に勝つという意志も垣間見えた。

素直に変わったな、と思う。

マギクス・シュバリエ

プレッシャー

魔術剣士競技大会では、その圧力に押し潰されそうになっていた彼女が、こうして決勝戦に立ち向かおうとしている。

その姿を見て、俺はやはり……嬉しいと感じる。

「絶対に勝とう」

「ええ」

コツンと拳を合わせる。

そして俺たちは、そこで別れる。

去っていく彼女の姿をじっと見つめていたが、アメリアが振り返ることは、もうなかった。

その背中はいつも以上に、大きく見えた。

それぞれの想いを抱いて、俺たちは決勝戦へと臨むのだった。

第217話 大規模魔術戦、決勝戦

「ついに決勝だな」

「ええ。先輩も楽しそうですね」

「もちろんだ。レイの活躍を、また見ることができるようになった！」

マギクス・ウォー
大規模魔術戦、決勝戦当日。

今日は今まで開催された試合の中でも、最も観客の動員数が多い。もつとも、ほぼ毎日満員なのだが、今日に限ってはかなりの数の立ち見も出ている。

やはり、皆が気になるのは決勝戦の対戦カードだろう。

チーム：フォルスト。

構成メンバーは、ルーカスⅡフォルスト。アルバートⅡアリウム。エヴィⅡアームストロング。

常勝のチームと予選の時から評され、ここまでの試合はほぼ完封。全く危なげなく、決勝戦まで勝ち上がっている。

その中でも一番の注目は、やはりルーカスⅡフォルストだろう。

魔術師にしては珍しく、剣ではなく刀を使うその戦闘スタイル。
また彼には、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会優勝という実績がある。

多くの人間はよく覚えている。

彼がたった一振りで決勝戦まで勝ち抜き、圧倒的な実力で優勝したことを。

そんなルーカスにはファンも多い。中性的な容姿も相まって、彼は女性人気が高い。それはこの大規模魔術戦でファンクラブができるほどだ。

アルバートとエヴィの評価も、目立つわけではないがしっかりと高まっている。

この大規模魔術戦はチーム戦。つまりは、ルーカスだけでは成立はしない。ルーカスについていけるだけでも、二人は魔術師として卓越していた。

「ふむ。やはり、レイたちの評価は意外と高いようだな。ふふ」

観客席でリディアはニヤリと笑う。

彼女は円形闘技場の観戦席に着くまでに、チーム：オルグレンの噂を聞いていた。

三大貴族である、アメリカとアリアーヌの評価が高いのは当たり前のことだ。

むしろ血統主義である魔術師は、さすが三大貴族の令嬢だと褒め称えている。

だがやはり、今までの試合の中でチーム：オルグレンで一番目立

っているのは彼しかいなかった。

レイ＝ホワイト。

上流貴族の令嬢であるシャーロットを予選で打ち破り、本戦ではメルクロス魔術学院のトップであるアスターも真正面から打ち破っている。

その実力は、誰の目にも明らか。オーディナリー一般人だからといって、侮ることはできない。そのような声上がるのは、もはや当然だった。

むしろ、オーディナリー一般人ではなく貴族の隠し子ではないか、という噂が広まるほどだ。

それほどまでに、レイの評価は高まっていた。

「早く、レイが見たいのじゃー！ 試合はまだなのかっ！！？」

フランソワーズ＝クレール。

一見すればただの幼い少女にしか見えないが、彼女の実年齢は六十二歳。さらに、七大魔術師の一人である 【比翼の魔術師】だ。

そんな彼女はレイに会いに行くと言えないので、リディアが確保して嫌々ながらこうして一緒に観戦することにしたのだ。

「フランさん。もう少しですよ」

「そうなのかっ！？ いやー、リーゼはいつも親切でとても礼儀正

しい子じゃっ！」

「恐縮です」

フランは七大魔術師の中でも、もっとも敬遠されている魔術師だ。それは主に、その性格のせいなのだが。

「おい。もう少し黙って、待てないのか」

「リディアよ。レイの試合を見れるんじゃないぞっ！？ もっと喜びの声を上げるのが当然じゃろっつ！」

「……」

もはや会話にならない、そう思って彼女は頭に手を当てながら天を仰ぐ。

相性が悪いのは重々承知しているのだが、やはりこうして会話をすると氷漬けにしたくなる。それをリディアは、なんとか堪えているのだった。

「にしても、レイは今はどうなんじゃ？」

と、先ほどまで騒ぎが嘘のようにフランは冷静になる。その声音は、いつになく真剣味を帯びていた。

そして、リディアは今のレイについて語るのだった。

「魔術領域暴走は完治しつつある。それに、もう体内時間固定は必要なくなっている」
オーバーヒート

「なんと！ あのレベルの魔術領域暴走から、もう完治しつつあるのか……！ やはりレイは特別じゃのおっ！」
オーバーヒート

「ああ。レイは特別な魔術師だ。私たちなど、比較にならないほど

のな」

その言葉に対して、異論を唱える者はいなかった。

リディア「エインズワース。

リーゼロッテ「エーデン。

フランソワーズ「クレール。

世界の魔術師の中でも頂点に立つ三人ですら、レイには届きはしないと理解しているからだ。いや、彼女たちは魔術師の頂点にいるからこそ、分かってしまうのだ。

レイ「ホワイトという魔術師はある種の究極の存在であると。

「さて、試合が始まるぞ」

そしてついに、マギクス・ウォー大規模魔術戦の決勝戦が開始されるのだった。

決勝戦。ついにこの時がやってきた。

すでに互いのチームは整列している。現在は、コイントスを待っている状態である。今回の決勝戦は、アビーさんが審判をしてくれるらしく、彼女が俺たちの前に出てくる。

「では、試合前のコイントスだ。両チーム、どちらを選ぶ?」

そうして、チーム：オルグレンは表を選択。チーム：フォルストは裏を選択。

キイインと音を鳴らして、アビーさんは手の甲で飛翔したコインを受け止めた。その手を退けると、コインは表となっていた。

「では、わたくしたちは攻撃を選択します」

「では、チーム：オルグレンは攻撃、防衛、攻撃の順になる。チーム：フォルストは防衛、攻撃、防衛の順だ」

攻撃と防衛の順番が決まったところで、さっそく防衛側のチームは準備フェーズに入る。

だがその前に、チーム：フォルストの三人がこちらに歩みを進めてくるのだった。

「レイ＝ホワイト。ここまでできたようだね」

「はい。よろしく願います」

「はは。まあ、楽しみにしているよ」

ルーカス＝フォルストはその後、アメリカとアリアーヌとも握手をして颯爽と古城へとその姿を消して行った。

次にやってきたのは、エヴィだった。

「レイ。ついに決勝だな！」

「エヴィ。そうだな。戦えることを、楽しみにしている」

「おう！俺も楽しみにしているぜ！」

エヴィもまた、アメリカとアリアーヌと軽く挨拶をすると同じよ

うに古城へと歩みを進めていく。

最後にやってきたのは、アルバートだった。その顔つきは、以前のものとは違う。彼は努力に努力を重ねてきた。それは、今までの試合を見れば明らかだった。

「レイ。今日はよろしく頼む」

「アルバート。そうだな。ついに、この時が来たな」

「ああ。あの頃の俺とは、もう違う……と言いたいところだが、まだ発展途上だ。しかし、勝つのは俺たちだ」

グツと力強く握手を交わす。

互いに表情は晴れやかだった。むしろ、早く試合がしたくてたまらない。そんな感覚だった。

アルバートはアメリカとアリアーヌにも、同じような言葉をかけると古城へと姿を消していく。

そんな彼を見て、アリアーヌはこのように口にするのだった。

「アルバート。本当に変わりましたね」

「そうよね。昔はもつと、刺々しいっていうか、才能こそ全てだ、みたいな感じだったのに。でも、レイと出会って変わるものよね」

「ええ。そうですね」

と、なぜか納得している二人。

思えばアルバートとの出会いは決まっていたものではなかった。だが彼は、自分を見つめ直して、ここまでたどり着いた。その姿勢は

素直に称賛すべきものだろう。

だがもちろん、俺たちもまた負けるわけにはいかない。

「アメリア。アリアーヌ。ついに決勝戦だな」

「ええ。ここまで来たわね」

「あとは優勝あるのみですわっ！」

三人で肩を組んで円陣を組む。これも、今日で終わってしまうと少し寂しく思ってしまうが、無事に勝利を飾って　優勝しようではないか。

俺もまた、仲間と共に何かを果たせるのだと……そう思いたい。

「絶対勝つぞ　　ッ！！」

「「お　　ッ！！」」

三人で大きな声を上げる。

絶対に優勝してみせる。

アメリア、アリアーヌ、そして俺という三人で成し遂げてみせるのだと。

そうしてついに、マギクス・ウォー大規模魔術戦決勝戦が幕を上げた。

第218話 氷剣 VS 絶刀

ついに開始となった決勝戦。

ここから先の戦いは、良くも悪くも後のことを考えなくともいい。つまりは、正真正銘の全力で立ち向かうことができる。

すでにアメリアとアリアーナにも伝えてある。この決勝戦ではきつと、固有魔術オリジンを使うことになるだろうと。

それは相手があのかス・フォルスト率いるチームだからだ。もちろん、エヴィとアルバートにも注意すべきだろうが……七大魔術師というのはその存在だけでも破格だ。

二人が対抗できる手段があるとすれば、固有魔術オリジンに頼らざるを得ないだろう。

それも考慮した上で、この決勝戦がついに幕をあげた。

「さて、どこに向かうか」

三人で疾走して、とりあえずは古城の大広間へとたどり着く。ここから先は、ルート分岐を考える必要がある。

どこに向かうべきなのか。ここから手分けして探すべきか、それとも三人でまとまって行動すべきなのか。

今までのチーム：フォルストの傾向を考えてみたが、フラッグの設置する場所は完全にランダム。おそらくは設置する場所自体は初めから決めていないのだろう。

むしろ、設置した場所を起点として試合を展開しているようにも思える。それはきっと、この決勝戦への布石でもある。

ある程度傾向が出てしまえば、対策されてしまうからだ。

一方でその戦略を取ることができるのは強者の証。どこにフラッグを設置しても、対抗できるだけの实力があるからこそ成り立つ。

そして俺は、この場で知覚領域を展開。知覚領域では、指定した範囲内の第一質料プリママテリアを察知することができる。

フラッグには、第一質料プリママテリアが漏れないように細工が施されているので、それを発見することはできないが、相手がどのような配置で並んでいるかはすぐに理解できる。

「三階に二人。それに、この一階の先に一人……だな」

「考えるとすれば、二人はエヴィとアルバート。一人はフォルスト先輩かしら？」

「そうですね。わたくしもそう思いますが、レイはどう考えていますの？」

「……どうやら、誘っているようだな」

この先にいる、たった一人の人間。

そこからわずかに漏れる殺気と第一質料プリママテリア。この尋常ではない圧は、間違いなくルークスⅡフォルスト。

誘っているのは、すぐに分かった。

「どうやら、俺が一人で行くしかないようだな」

「レイ、大丈夫なの？」

アメリカが心配そうな声を上げるが、この展開も予期していた。といっても、俺とルーカスⅡフォルストが一对一で対面するのは、もつと先であると思ったが……どうやら、彼なりに俺に対するこだわりでもあるのか。

それとも、別の策略だろうか。

ともかく待っているからには、誰かが相手をするしかないだろう。

「ああ。おそらくフラッグは、三階にある可能性が高い。二人はそちらに向かってくれ」

「分かりましたわ。レイ、御武運を」

「レイ。負けないでね」

「もちろんだ」

そうしてアメリカとアリアー又は颯爽と階段を駆け上がっていく。

たった一人でこの場に残った俺は、そのままずっと一本道を進んでいく。すると……その先に見えたのは、やはり彼だった。

長い黒髪を後ろで一本にまとめ、静謐な雰囲気^{せいひつ}を纏いながらその美しい顔をじつとこちらに向けてくる。

リーゼさんよりは人間味のない感じではないが、それでも精巧な

人形という印象は抱いてしまう。

異質な雰囲気を纏い、刀に手を伸ばしている彼はどこか達観して見える。

「やあ。気がついてくれたみたいだね」

「……正直いって、予想外でした。ここで一対一を望んでくるとは」
「ん？ まあ、まだ第1ラウンドだしね。それほど意外なことではないと思うけど」

「初めから堅実にいくのならば、エヴィとアルバートは俺にぶつけるべきだと思いますが」

「それだと面白くないだろう？ 予想通りすぎて」

ただ冷静に、そして淡々とそう述べる彼はやはり、七大魔術師なのだと悟る。

その雰囲気、その言動が、纏っている第1質料プリママテリアがどうにもヒリついていくような感覚。

これは懐かしいと思うと同時に、危うさのようなものも感じる。

「僕としても、堅実にいきたい気持ちはあった。けどやっぱり、始めは盛り上げた方がいいたろう？ きつと今頃、観客たちは湧いているよ」

「……そうでしょうね」

「しかし、やはり……君に興味があると言った方がいいかな。今までの試合を見てきて思ったよ。レイオーバーヒートホワイトの技量は尋常ならざるものだってね。それに、どうやら魔術領域暴走も良くなっているみたいだしね」

「……」

そこから先は、もう言葉など必要なかった。

彼は腰に下げている刀をゆっくりと抜くと、深呼吸をする。

刹那。

その場で体がブレたと思った矢先、その鋭い刀は俺の眼前へと迫っていた。

「さて、見せてもらおうか。当代の【氷剣】の力とやらを」

俺はすぐに、コードを走らせる。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセッシング＝減速＝固定マテリアル
ディセレーション》

《エンボディメント＝物質マテリアル》

発動するのは、氷剣。ただし、相手の刀の質量も考えて今回はその強度をかなり高めておいた。

キィィィンという音が、この空間に響き渡る。

刀と剣が交差することで、甲高い音を広げていく。

「はははっ！　今の間に合わせるのかっ！　面白いね！」

その後、始まるのは縦横無尽の剣戟だった。互いに魔術師としての特性は、超近接距離クロスレンジでの戦闘に特化している。

といっても、【氷剣】である俺は別に他の距離レンジでも十分に対応できるだけの魔術は保有している。

その一方で、【絶刀】は違う。

元々、【絶刀の魔術師】という名称ではあるがその本質は魔術師というよりも、剣士に近い。

いや確か、語源はサムライというものだった気がする。それは師匠に昔聞いた話だが、【絶刀の魔術師】のベースはその圧倒的な剣技。

あくまで魔術は身体強化をサポートするものに過ぎない。

その剣技があまりにも真に迫り過ぎ、やがては魔術を超え、その剣技の果てにたどり着いたのが【秘剣】という話だ。

【秘剣】は、全部で十に分かれているらしい。またその一つ一つが、固有魔術オリジンに匹敵する。厳密に言えば、固有魔術オリジンを超えているとも考えていいだろう。

七大魔術師が持つ、固有魔術オリジン。

しかもそれが、十も存在する。それだけでも厄介過ぎる存在だ。

「……クッ!」

「……ハアアアアアアッ!」

互いに息をする暇もないほど、戦闘に没頭する。意識を潜り込ませるようにして、ただただ集中力を切らさないように剣戟にのめり込んでいく。

この感覚は久しぶりだった。自分の感覚を研ぎ澄ませる。

今の自分は魔術師であると同時に、剣士でもある。魔術はあくまで補佐的なものに過ぎない。この体を使って、凌ぎを削る。それが、この剣戟の本質。

しかし、どうやら痺れを切らしたのか、彼は一旦後ろに大きく後退するのだった。

「……すうつうつうつ、はあああああああ」

納刀。

さらに深呼吸。

隙があるように、見えるがそれは錯覚。納刀したということは、抜刀術に切り替えたということだろう。

一撃必殺の抜刀術。それは、マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の決勝でレベッカ先輩に使った【秘剣】を想起させる。

俺もまた、自身の手に持っている氷剣を新しいものに変化させる。大体の攻防で理解したが、氷剣の強度はそれほど高くなってもいい。どうやら、あの刀は軽いようでもどちらかというとスピードに特化させているようだった。

睨み合う。

適性の距離を保ちながら、円を描くようにして俺たちは互いの様子を見つめる。

一挙手一投足。その全ての動きを逃さないようにして、神経を集中させる。握る氷剣を軽く動かしながら、自分の感覚をさらに研ぎ澄ませていく。

そして、彼がボソリと呟いた瞬間。

俺の視界は 暗転した。

「第八秘剣

残照暗転」
ざんしやうあんてん

第219話 まさかの幕切れ（前書き）

あとがきにて、お知らせがあります。

第219話 まさかの幕切れ

レイがルーカスの元へと向かい、アメリカとアリアーヌはレイの言う通りに三階へと向かっていた。

しかし、三階にエヴィとアルバートがいるからといってそこにフラグがあるとも限らない。今までの試合でも、それをフェイクにして時間を稼いだケースもあった。

そのような点も考慮しつつ、二人はまっすぐ三階の踊り場へと駆けている最中だった。

すでにレイともその件は話し合っているが、攻撃の場合は時間との勝負になる。

あらゆる可能性を考慮することも重要なのだが、その一方で可能性に時間を取られてはいけない。

そして階段を駆け上がり、しばらく疾走すると……たどり着いた。

三階にあるこの踊り場は、かなり広い空間だ。元々はパーティーなどの催し物のために使用されていた場所である。

もつとも、今はその面影は全くないのだが。

「いたわね」

「ですわね。二人とも、待ち受けているようですわ」

視線の先には、エヴィとアルバートが待ち受けていた。だが、アメリカとアリーヌは疑問に思っていた。それは、この場に来るまで遅延魔術ディレイが設置されていなかったのだ。

「アメリカ。どう思います？　ここまで、遅延魔術ディレイが無かったことを」

「さあ……その真意までは分からないわね。ただ今は、真正面からぶつかるしかなさそうね」

「ええ。そうですね」

今までの試合で、遅延魔術ディレイが設置されていない試合はなかった。

それは間違いなくこの攻城戦での定石セオリー。それを無視するということは、何か別の意図があるのか、それとも……。

と、考えるがすぐに二人は思考を切り替える。

柔軟に、臨機応変に対応する。レイの教えを思い出すと、臨戦態勢に入る。

「おつ、らああああああああッ!!」

先に動いたのは、エヴィだった。内部コードインサイドを纏わせると、そのまま疾走。そして、思い切りその拳を振るう。

構成としては、エヴィとアリーヌが前線で、後衛での魔術支援はアルバートとアメリカ。一見すれば、三大貴族の二人に届くわけがないと多くのものと思うだろうが……実際のところは、違った。

「くっくっくっくッ!」

エヴィの拳を避けることなく、そのまま真正面から受け止めるアリアーヌ。元々は避けるつもりだったが、そうすると後ろのアメリカに攻撃がいつてしまう可能性がある。

そう考えて、受け止めたのだが……やはり、重い。

エヴィはアリアーヌほど、インサイド内部コードをうまく使えるわけではない。魔術師としての技量ならば、学生の中でも上位に位置するのだが、流石に三大貴族に届くものではない。

だが、彼には極限まで鍛え抜いた肉体があった。圧倒的な筋肉量を誇る体を存分に使って振るう拳は、アリアーヌにも匹敵する威力を発揮していた。

「アメリカ。アレでいきますわよっ!」

「了解っ!」

そして、すぐに展開されるのは氷結領域。グレイスフィールド周囲に氷が一気に張り付くようにして展開される。その瞬間、アリアーヌは地面を滑るようにして一気に加速。

氷上での戦闘も訓練している彼女は、そのまま綺麗に滑りながらエヴィの背後へと回り込む。

彼はアリアーヌの移動速度についていけずに、咄嗟にその場でなんとか防御体制に入ろうとする。

しかしアリアーヌはそのガードを避けるようにして、思い切り拳

を叩き込もうとするが、次の瞬間には突風が二人を襲った。

「くっ……！！ 仕留め損ないましたわっ！」

鳩尾にガードの上から全力の拳を叩き込もうと思ったのだが、そこは流石にアルバートの魔術である暴風^{ストーム}によって妨害されてしまう。

先手必勝。今のスピードならば、間違いなくアリアーヌの攻撃は間に合っていた。

並の魔術師の高速魔術^{クイック}であれば、今は必中の間合いだった。エヴィは攻撃を受けていただろう。

しかし、アルバートはそれを間に合わせた。

今の攻防は、相手の实力を見極めるといふ側面もあった。今まで、相手の試合は全て観戦してきたアリアーヌだが、こうして実戦で戦うのでは、やはり感覚は異なる。

そして、どうやら一筋縄ではいかないと理解するのだった。

「アルバート。やりますわね」

「ええ。高速魔術^{クイック}だけど、威力も申し分ないわ」

アルバートの实力を見誤っていたわけではない。彼女たち二人は、幼少期からアルバートのことを知っている。そんな彼の实力もある程度は知っているつもりだった。

元々は血統主義で、才能にずっと固執していた。努力を怠り、才能だけに縋っていた存在。

それが、過去のアルバートだった。

しかしそれが今や、こうして自分たちの前に脅威として立ち塞がるとは……人の成長とは、分らないものである。

アルバートだけではない。この場にいる四人は、レイから大きな影響を受けている。それだけは、変えようのない事実だった。

「さて、どうします？ 無理やりにも突破してみましようか？」
「できるの？」

「ええ。不可能ではないですわ」

「まさか、固有魔術オリジンを？」

「いえ。まだ使いませんわ」

と、二人で会話をしている間も待つてくれるわけもなく、アルバ

ートは遠距離から魔術を発動。

アイシクルピアス

チェイン

発動したのは、氷礫。それを連鎖魔術によって、コードを重ねる。

アイシクルピアス

そして、まるで雨が降るかのように二人迫る氷礫だが、アメリカはそれを軽く一蹴する。

発動したのは、炎壁。フレイムウォール

それと同時に、アリアー又は地面を駆け抜けていた。まだ凍りついているこの領域内をまるでスケートリンクを滑るかのように、駆け抜けていく。

インサイド

さらに内部コードを重ねて加速をしているため、そのスピードは計り知れない。

といつても、流石に何かの妨害があると思つていたが、まるで彼女が通り過ぎるのを全く気にしていないかのように、アルバートとエヴィはそのまま彼女を見過ごしたのだ。

何を考えていますの？ まさか、この先に遅延魔術^{デレイ}が？

そう考えるが、目の前には設置されたフラッグがあるだけ。そのままアリアーヌはフラッグを奪い取ると、先ほどの踊り場へと戻っていく。

そこには、ポツンと一人で呆然としているアメリアがいたのだ。

「アメリア？ あの二人は？」

「消えたの」

「え……？」

「アリアーヌが駆け抜けた瞬間に、一気に水蒸気が溢れ出して……それが晴れた時には消えていたわ」

「まさか、先回りしてフラッグの防衛を？」

「そう考えるのが妥当でしょうね。それよりも、早く移動しないと、レイはきつと今も、戦っているわ」

「そうですね」

そして、来た道をそのまま戻っていく二人だが……やはり違和感を拭い去ることはできない。

まるで誰もいないかのような雰囲気。今までの試合ならば、フラッグを奪い取った瞬間には激しい魔術戦が繰り広げられていた。

だというのに、この静けさ。自分たち以外には、誰もいないかのような静寂。レイが戦っているはずの、一階からも大きな音は聞こ

えてこない。さらに、第一質料が大きく変動している兆候もない。

何かおかしい、と思うのが普通だろう。

「ついにここまで来ましたわね」

「考えても仕方ないわ。このまま、終わらせましょう」

なんの妨害もなく、一階の踊り場までやってきたアメリカとアリ
アーン。その後、彼女たちは外の所定の位置にフラッグを置いた。

その瞬間。大きなサイレンの音が響き渡る。

「第1ラウンド。勝者は、チーム：オルグレン」

そのアナウンスを聞いていると、城の中からレイがゆっくりと歩
きながら出てくるのだった。

「レイ！ どうだったのっ！？」

「大丈夫でしたの！？」

パツと見るに外傷はない。歩き方も、異常はなさそうだった。服
に汚れも一切付着していない。

しかし彼の表情は、まるで苦虫を噛み潰したかのようなものにな
っていた。

「戦っている最中に、相手が消えた。そうして二人に合流しようと
思っていると、勝利していた……というところだな」

「レイもそうだったの？」

「ということはやはり、そちらもそうだったか。終わるのがやけに

早すぎると思っていたが……」

チーム：オルグレンは、第1ラウンドでは無事に勝利を飾った。

しかし、三人の胸中は複雑なままであった。

そしてしっかりと考える間もなく、すぐに第2ラウンドが開始されようとしていた。

第219話 まさかの幕切れ（後書き）

私のT w i t t e rでは先に宣伝しましたが、こちらでもお伝えしておきます。

氷剣のコミカライズの連載開始ですが、6 / 2 4（水）に決定いたしました！ ちょうど書籍発売の一週間前になります。作画を担当してくださるのは【佐々木宣人（ささき のりひと）先生になります。

マガポケ（少年マガジン公式漫画アプリ）での連載になりますので、アプリのダウンロードなどよろしくお願いしますー！

また新しい情報がありましたら、共有しようと思います。

第220話 束の間の休息

「ふう……」

インターバル。休憩時間は十五分となっている。その間で、次のラウンドについての話し合いを始める。

「レイはどう思いますの？」

「……もとより、第1ラウンドは捨てるつもりだったと考えるのが妥当だろう」

「決勝戦で、捨てるなんて判断をしますの？」

「何か目的があるんだろうな。それははっきりとしないが、これで王手だ」

そして、アメリカもまた会話の中に入ってくる。

「そうね。次勝てば、優勝よ」

「そうですね！ 後はいつも通りにやるだけですわっ！」

その後、三人で改めて次のラウンドでの立ち回り方を話し合った。次は防衛になる。どこにフラッグを設置するのか、またはそれを踏まえた上でどのように守っていくのか。

さらには、俺は先ほど受けた【秘剣】についても二人に伝える。

「最後に、ルーカス・フォルストの秘剣についてだが」

「先ほどの戦いで出してきましたの？」

「ああ」

そして俺は、彼との戦いを思い出す。

「第八秘剣

残照暗転ざんしょうあんてん」

瞬間。俺の視界が一気に暗闇に落ちる。

だが、戦闘において視界だけに頼ることは、あまりにも危険だと師匠に教えられている。俺はすでに知覚領域を展開しているため、感覚のみでその動きを把握していた。

居合い抜き。それも、超高速の抜刀術。

第八秘剣

残照暗転ざんしょうあんてんはシンプルな技だった。まずは魔術で、光を発生させる。その光量はおそらく、自分の目を考慮していないためにかなりのものになる。

そして、その光を受けた瞬間、相手は一気にその明暗により、視界が暗転する。

その間に持ち前のスピードを生かして、抜刀。それがこの技の力ラクリだろう。

ルーカス＝フォルストはこの秘剣を発動している間は、おそらくは目を瞑っている。視界に全く頼っていないと考えて良いだろう。

つまりは、俺と同じように周囲を知覚する魔術を保有していると考えるのが自然だ。

「……どうやら、受け切ったみたいだね」

その抜刀を真正面から受け止めた。俺の氷剣はそれによって、粉々に砕け散ってしまったがルーカス「フォルスト」の刀は傷一つついていない。

おそらくは、かなりの業物。

それを無傷で受け切っただけでも、十分だろう。

「さて、と。じゃあ、今回はここまでにしておこうか」

「それはどういう」

意味でしょうか。と、尋ねる前にサイレンがこの城内に響き渡った。

そして彼はそのまま、姿を消していたのだ。元々、この展開は予想していたというばかりに、あっさりと引いていたのだ。

「第八秘剣 残照暗転。ざんしょうあんてん」その正体は、簡単にいうと目眩しだな。

特に剣技自体に魔術的な要因があったわけでもなかった。しかし問題は、知覚系の魔術を保有していないと厳しいだろうな

「なるほどね。でも、私とアリアーヌにはないわね」

「ああ。だからこそ、おそらく鍵になるのはアメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトだろう」

すでに話はしていた。

ルークス・フォルストの【秘剣】に対抗するならば、アメリカの
バタフライエフェクト
因果律蝶々しかあり得ないだろうと。

【秘剣】をまともに正面から受けてしまえば、アメリカとアリア
ー又に対抗する手段はないだろう。超近接距離クロスレンジでの戦闘が得意なア
リアー又であっても、【秘剣】の前には為す術は無い。

だからこそ、【秘剣】を発動させないということが何よりも重要
になってくるのだ。

「さて、そろそろ時間だ。行こう」

「ええ。次で勝ちましょう」

「わたくしたちの優勝までもう少しですわよっ！」

優勝まで残り一勝。

精神的な意味では、こちらにアドバンテージがあるのは間違いない。
だがなぜだろう。この胸中に存在する、焦燥感のようなものは。

俺は一体、何を気にしている？

そしてついに、決勝戦第2ラウンドが始まるうとしていた。

「第1ラウンドが終わりましたが、意外とあっさりでしたね」

「ああ。もう少し長引くと思っていたが、早い展開だったな」

リーゼの言葉に、リディアもまた同意する。

この決勝戦もまた、一緒に観戦している。この中にはフランもいるのだが、ぺちやくちゃと話がつるさいので今はカーラに用意してもらった手作りのドーナツを無限に与え続けている。

フランの口を黙らせる方法は容易で、それは酒または食べ物を与え続けられ良い。今回に限っては、酒を与えると大惨事になりかねないので、こうしてドーナツを与えているのだ。

「それにしても、『秘剣』が出ましたね」

「ああ。久しぶりに見たが、アレは残照暗転だな。うまく使えている」

「【絶刀】の保有する、十の秘剣ですか。先輩は全て知っているのですか？」

「いや、全ては知らない。知っているのは、せいぜい四つだな」

「そうですか。それで、この試合はどう見えますか？」

その問いに対して、リディアは少しだけ思案する。

本来ならば、無条件でレイたちが勝利すると口にしたいところだが……やはり、七大魔術師の存在というのはあまりにも大き過ぎる。

まだ若いため、未熟な面はあるだろうが、この学生レベルではそんなものは些事にすぎないだろう。経験不足に付け入りたいところではあるが、それは不可能。

だとすれば、真正面から相手をするしかない。

「良くも悪くも、この試合はアメリカ^{バタフライエフェクト}ローズの因果律蝶々にかかっているだろう。それをアリア^{バタフライエフェクト}ヌ^{バタフライエフェクト}オルグレンとレイがどのように活かすか、だな。きつとそれは、相手も分かっているだろうが」

「因果律蝶々ですか。アメリカはまだ使っていないようですが……」

「リーゼの見立てでは、どうなんだ？」

リーゼは短い期間になるが、アメリカの因果律蝶々を指導した経験がある。その話を改めて詳しく聞こうと、思っていたが返ってきたのは予想外の言葉だった。

「さあ。私には分かりません」

「それは、お前でも理解できないということか？」

「そうですね、端的に言えば。そもそも、コード構築が複雑過ぎます。私を知る中でも、一番複雑な魔術かもしれません。それをあの年齢で発現して、魔術領域暴走を起こさずに使っているアメリカはある種の化け物ですね。本人には言ってませんけど」

モニターに映るアメリカの横顔をじつと見つめながら、リーゼは淡々と語る。

アメリカの能力は、七大魔術師であるリーゼから見てもあまりにも異質な能力であると。

「おそらくは、彼の関与があるのでしょうか」

「……奇しくも、上の思惑通りになったということか」

「そうですね。仮説は正しいかもしれませんが。ただ、まだ伝えない方がいいと思いますけど」

「レイはおそらく、勘付いていると思うがな」

「そうなのですか？」

レイ＝ホワイトの存在をどのように利用するのか。それは魔術協会にとっても、一番の課題といってもいいかもしれない。何もレイが学院に入ることになったのは、リディアの一存だけでは無い。

魔術協会で数多くの議論が交わされた後に、決まったことなのだから。

「あいつはいつもそうだ。とても聡いやつだ。しかし、それを決して表に出そうとしない。自分の宿命を理解しているんだろう。それとどう向き合っていくのかは、私たちにはわからない。それはレイの問題だからな」

「そうですか。それでも、この試合には影響は出ないのでしょうか？」

「私のこれがあるからな。問題はない」

そう言って、リディアは自分の頭をトントンと人差し指で軽く叩く。すると、リーゼは「ああ……」と得心したかのような声を漏らす。

「なるほどのお……レイはまだ、お前に縛られているのか」

と、食事を終えたフランが会話に入ってくるが、その声色は真剣さを帯びていた。

「なんだ、フラン。悪いのか？」

「いや。全く。レイには枷が必要なのは、当然じゃろう。しかし、それも後少しで開放するべきじゃろうな」

「……分かっているさ。きっと、レイが進級する頃には……」

そして、三人は改めてモニターを見つめる。

そこにはちょうどレイが映り込んでいた。

一体彼はどこに進んでいくのか。それはおそらく、レイしか知り得ないのだろう。

第221話 予想外の展開

「では、準備フェーズに移行だ」

第二ラウンド。今回は俺たちが防衛であり、フラッグを設置する時間となった。もちろん、遅延魔術^{デレイ}を構築する時間も十分にあるだろう。

遅延魔術^{デレイ}に至っては、俺は十分な準備ができないためにこの時間は特^ににすることはない。

アメリカとアリアーヌには申し訳ないが、こればかりは俺にできることはない。

今回、設置するフラッグの場所は奇抜なところなどにはしない。

ここまでできてしまえば、優勝を狙うまで。そのため、設置する場所は最上階の最奥の部屋だ。この攻城戦の中でも度々使用されていたが、やはりここは入り口から最も時間がかかる。

それに加えて、フラッグを奪取をしたとしても同じように外に持つていくまでは時間がかかる。

防衛であれば、定石^{セオリー}であるここを選択するのは当然だろう。

だがどうしてだろうか。この胸の中に渦巻く、不安は。

「レイ。準備が終わりましたわ」

「どうかしたの？　なんか様子がおかしいけど」

アリアーヌとアメリカが戻ってくると、二人は心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。あくまで予感なのでいう必要はないかもしれないが、意見の共有は重要だろう。

ということで、俺は自分の不安を素直に伝えることにした。

「特に何かあるわけではない。だが、妙な不安があつてな……」

「不安、ですの？」

「不安ねえ。でも私も、さっきの試合が引つかかるのよねえ……もしかして、この第二ラウンドへの布石とか？」

「かもしれない。だが、考えていても仕方がないな」

すでに時間がない。考えていてばかりでも、仕方がないだろう。

そうして、俺たちは所定の位置につく。

今回の配置は、アメリカとアリアーヌは三階に、そして俺は一人で四階の踊り場で待機していた。

まずはルーカス・フォルスト、またはエヴィとアルバートのどちらかを足止めする必要があるだろう。

正直いって、ルーカス・フォルストとの戦いは避けておきたいところではあるが、こればかりはどうしようもない。

それにここで勝利してしまえば優勝は確定。

多少の無理はしてでも、足止めをするべきだろう。

また今回は一階と二階に重点的に遅延魔術^{ディレイ}を展開してもらっている。すでに後のことをそれほど意識しなくてもいいので、今までの試合の中でも最も強力に遅延魔術^{ディレイ}を敷いている。

中でも、アメリカには大規模連鎖魔術^{エクステンシブチェイン}も用意してもらっている。

これでかなりの時間を稼ぐことができるだろう。

流れとしては、できるだけ一階と二階で時間を稼ぐ。そして、三階でアメリカとアリアーヌの二人が対処して、それを潜り抜けてきた相手を俺が対処する……というオーソドックスな展開を用意している。

今までの試合でも幾度となく使用してきた作戦ではあるが、シンブルゆえに刺さることが多かった。何も、奇抜な作戦を採用すればいいというものではない。

もつとも確率の高い選択肢を、確実に選択することが重要なのだ。

「……始まったか」

大きなサイレンが耳に入る。

ついに始まった決勝戦第二ラウンド。ここを凌ぎ切れれば、優勝は確定。

そして、俺はこの場で待機しているだが……様子がおかしいと感じる。

本来ならば、一階と二階で遅延魔術ディレイに対処するためにもっと魔術的な兆候が現れていてもおかしくはない。

具体的にいえば、第一質料が溢れかえり、この階まで感じ取ることができるのは今までの試合でも当然のことだった。

しかし、現在は静寂しかない。

まるでこの城内には誰もいないかのような静けさ。

一体何が起きているのか……ここは、絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドを展開して確認しておくべきか？

だが、今の俺は……ルークス＝フォレストとの戦いによって、魔術領域をそれなりに酷使している。後の戦いを考えれば、温存しておきたいが……ここはやむを得ないだろう。

そして、俺は絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドを展開。

それと同時に、あり得ないものを感じ取るのだった。

「やっぱり、君は優秀だね。だからこそ今回は、僕たちの勝ちだ」

バツと後ろを振り返る。すると、そこにいたのはルークス＝フォレストその人だった。全く気配を感じ取ることができなかった。

いや、絶対不可侵領域アンチマテリアルフィールドを展開してやっとな気がつくことができたのだ。

彼の手にはすでにフラッグが握られていた。しかし、あり得ない。通路は、俺の正面にある階段しかないはずだ。

どうやって、この場にやってきた？

まさか……先ほどの試合は、そういうことだったのか？

確認すると、彼の後ろには人が一人だけ通ることのできる穴が空いていた。

つまりは、一階からここに通じるように穴を開けてそれを通過してきたということか？

それは俺も一度は考えたが下りるのはまだしも、登ることは魔術を使っても厳しいだろう。それこそ、空中を浮遊する、または瞬間移動の類の魔術を使用できなければならぬ。だが現代魔術では、その領域に到達している魔術師は俺が知る限りいない。

インサイド
内部コードを使用して跳躍しても、届きはしないと思っていたが……抜かっていた。

ルールにも特に触れることはないのだが、それは誰もそんなことを実行できないという側面の方が強い。

相手は七大魔術師が一人　【絶刀の魔術師】なのだ。

おそらく、先ほどの試合は全てこれを実行するための準備だった

のだろう。わざわざ一ラウンド捨てたのは、ここで勝利できると確信していたため。

しかしこれは、俺たちがここにフラッグを設置するという条件が成立しなければ、実行できないはずだ。

いやおそらくは、余裕で第一ラウンドを取らせて、セオリー定石通りにこの最奥に設置すると見越していたんだろう。

俺の予想を超えてくることも、予想しておくべきだった。

こうなってしまうば、あとはそのフラッグを持っていかれないようにするか、相手を戦闘不能にするしか手段はない。

「では、失礼するよ」

そういつて彼は、そのままその穴から降りていく。下りる際は、着地だけを制御すればいいのでおそらくは上ってくるよりも時間がかからない。

そして、俺は後を追うようにして彼と同じ穴を通過していく。

間に合うか？ いや、間に合わせるッ！！

降りていく際、俺は自分の声を魔術で拡張するとアメリカとアリーヌ現状を端的に伝える。

「フラッグが奪取されたッ！！ 二人とも、降りて来てくれッ！！」

そう言葉を残すと、一階の踊り場へと到着。着地する際に、勢いをそのまま流し切ると見据える。

ルーカス＝フォルストは全力疾走で、そのまま城の外へと走り抜けていた。まだこの距離ならば、本気を出せば間に合うだろう。だがもちろん、俺が疾走するのを邪魔するように、アルバートとエヴィが目の前に現れる。

「レイ。ここは通さないぜ？」

「しかし、もう……手遅れだろうな」

二人の間を一気に駆け抜けて、そのままフラッグを持っている彼を追いかけるべきだろうが……もうすでに、時は遅かった。

一瞬だけ、二人に気を取られて足を止めてしまった瞬間には、ルーカス＝フォルストは城の外へと出ていくのが見えた。

おそらく、その全力の速度は俺に匹敵するか、それ以上。

フラッグを奪取されてしまった時点で、このラウンドの勝敗は決まっていたのだ。

そして無情にも、サイレンの音が響き渡るのだった。

「勝者は、チーム：フォルスト」

やられた。おそらく、完全にこれを狙っていたのだろう。

そうして俺は、その場で呆然と立ち尽くすと同時に思考を巡らせ

る。わざわざ奇襲を使つてまで、最終ラウンドまで持つてきた意味はなんだ？

もしかすると、相手は……。

「レイっ！？ 一体何が起こりましたのっ！？」

「え……もう、終わり？ 何かの間違いじゃないの……？」

二人ともに呆然とした様子で、俺の方に近寄ってくるが……すでに第二ラウンドは終了してしまった。

「おそらく、第一ラウンドは今回のための準備をしていたんだろう。しかし、思えば俺たちがあゝの位置にフラッグを設置すると予想しないと成り立たない戦術だ……第一ラウンドをあつさり捨てて、こちらに余裕を持たせる。そうすれば、きっと一番安全な場所にフラッグを置いて、このラウンドを確実に取りに来ると考えていたのだらう……」

「そんな……全部相手の思惑通りだった、てこと？」

「そのようだな」

こちらの心理状態まで把握した上での、行動。この奇襲は、一度使つてしまえばあとは通用することはない。だが、一度であれば通用する。

こうして第三ラウンドまで持ち込まれることになったが……おそらくは、一番の目的は互いの条件を同じにすることか？

チーム：オルグレン。チーム：フォルスト。

互いにほとんど消耗しないままに、最終ラウンドまで進むことに

なった。第一ラウンド、第二ラウンドを真正面から戦えば、どちらも消耗したままになる。

つまりは、イーブンの条件ならば負けることはないだろうと……そう思っているのかもしれない。または、消耗戦になれば不利だと初めから考えていたのか。

また、アメリカの因果律蝶々を嫌ったのもあるだろう。限定的とはいえ、彼女のそれは断続的に発動できる。

ラウンドを跨ぐことも考えていたが、因果律蝶々に対応するものも最低限にしておきたいということか……つまりは、こちらの切り札を最終ラウンドまで封じておきたい、ということか……。

と、脳内で反省をするが、もはや全てが後の祭り。

残りのラウンドは、真正面からぶつかり合うしかない。

「……二人とも。どうやら、最終ラウンドは真正面からぶつかり合うしかないようだ」

「みたいですわね」

「そうね。ここで引きずっていても、仕方がないわ」

そして、城の外にいるチーム：フォルストの三人と視線が交差する。

作戦を成功させて喜んでいる様子は全くなかった。むしろ、戦いはこれからと言わんばかりの雰囲気。油断など、微塵も感じ取ることとはできない。

気を引き締めて、最終ラウンドに臨むのは間違い無いだろう。

ならば、受けて立つしか無いだろう。

こうして決勝戦はまさかの展開で、最終ラウンドまで進むことになるのだった。

第222話 最終決戦

決勝戦、最終ラウンド。

正直いって、完全にここまで相手の手の上だっただろう。しかしそれはきつと、こちらを最大限警戒した上での奇襲のようなもの。

最後の最後に、互いに全力でぶつかるようにしたい為に、前々からしっかりと準備していたに違いない。

おそらく、ここから先は大きな奇襲はない。真っ向からぶつかるのは、三人の雰囲気を見ればわかった。

すでにチーム：フォルストは準備フェーズに入っている。設置する場所は、俺たちが先ほど設置した場所と同じと予想している。

完全に守り切って、安全に勝ち切る為には最上階、最奥がベスト。そしてルーカス・フォルストが使用した奇襲は俺たちは使えない。俺としても、やろうと思えばできないことはないのだが、おそらくはその対策も講じているだろう。

作戦らしい作戦など、もはやありはしなかった。

ただ真正面からぶつかるしかない、そうアメリカとアリアーヌにも話してある。

「それでは、最終ラウンド 開始ッ!!」

アビーさんの声を知覚したと同時に、俺たちは城の中へと駆け抜けていく。予想通り、一階の踊り場には誰もいない。

「二人とも、このまま駆け上がるッ！」

「了解ッ！！」

瞬間。^{アンチマテリアルフィールド}絶対不可侵領域を展開。そして、目の前に展開されている^{デレイ}遅延魔術を一気に、還元領域によって第一質料へと還元する。

それによって、パラパラと舞う第一質料の残滓がこの場に溢れかえる。

そのまま全ての^{デレイ}遅延魔術を還元していくと、辿り着いたのは三階の踊り場。

そこには、たった一人で立ち尽くしているルーカスⅡフォルストがいた。^{プリママテリア}纏っている第一質料の圧は、ここからでも感じ取ることができる。

悠然と、冷然と、その場でじっと佇^{たたず}んでいる彼はその^{まぶた}瞼を^{つむ}瞑っていた。

「予想より早い。やはり、魔術を無効化できる手段を持っているようだね」

瞼をゆつくりと開ける。

^{プリママテリア}圧倒的な第一質料。それをまるで幾重にも重ねるようにして、纏っている。

質料領域の構築が桁違い。この圧倒的な雰囲気の前にして、やはり俺が対処するしかないか……という思考が過ぎる。

だがきつと、ルーカス＝フォルストはアメリカとアリアーヌが通り抜けるのを絶対に死守するだろう。

最終戦では、俺との一対一は臨んでいない。そんなことはとうに分かりきっている……だが、二人に任せてもいいのだろうか。

そう思案していると、両肩に柔らかい手の感触を覚える。

「レイ、行って。ここは私とアリアーヌでどうにかするわ」

「そうですわ。元々、そのような段取りだったでしょう？」

「しかし……」

俺の懸念を理解しているのか、二人はじつと俺の双眸を射抜いてくる。

「私たちのこと、もっと信じて。大丈夫よ。レイが教えてくれたんだから」

「そうですわ。レイ、行ってくださいまし。ここは私たちに任せてください」

「……そうか。いや、すまなかった。健闘を祈る」

そうして、ルーカス＝フォルストに向き合っていると彼はずっと道を開ける。

「終わったかい？ レイ＝ホワイト。君と真正面から戦うことは、今回の大会ではもう叶わないようだ。勝ちに拘りたいからね」

「……勝つのは、俺たちだ」

「ふふ。まあ、最終決戦だ。色々と期待しているよ」

どうやら相手もまた、俺と同じ思考をしていたらしく素直に道を通してくれる。相手の勝ち筋は、これしかないし、俺たちも同様だ。

また、俺もここで無理やりルーカス＝フォルストと戦おうとしても、アメリカとアリアーヌを通過させることはないだろう。

そうなってしまうば、不利なのは向こう側。三人で消耗戦を強いるよりは、素直に予想していた盤面で戦う方が効率的とみていいだろう。

「健闘を祈る」

ボソリと呟くと、踊り場の先にある階段を駆け上がり、たった一人で最上階へと向かっていくのだった。

「……レイ。どうやら、予想通りの展開になったようだな」

「へへ。やっとこの時がきたか」

最上階。その最奥の部屋へと通じる踊り場に、アルバートとエヴィは立っていた。二人ともに、すでに臨戦態勢に入っている。それは、纏っている雰囲気からすぐに理解できた。

「すまないが、二人にはここで倒れてもらう。そして勝つのは俺たちだ」

そう言葉にすると、アルバートとエヴィはさらに表情を引き締め

た。俺もまた、腰を低く下ろして臨戦態勢へと移行する。

瞬間。前衛であるエヴィが一気に加速して、俺の懐へと入ってくる。

疾^{はや}いッ！！

エヴィとこうして真正面から相對するのは初めてだったが、予想以上に敏捷性が高い。そして、彼はその圧倒的な筋肉量を持って徒手格闘戦へと持ち込んでくる。

互いに内部^{インサイド}コードを一気に流して、トップスピードでの戦闘を開始する。

「……おっ、らああああああッ！！」
「ぐっぐっぐッ！！」

すでに後のことを考えていていないのか、エヴィのその攻撃は初めから全力であった。

駆け引きなど、存在しない。

ただ真正面からねじ伏せてやるという気概を持って、その拳を降り続ける。

だが、それは決して自棄になっているわけではない。

しっかりとした基礎という土台があつてこそ、全力。おそらくは、この大会へ向けてかなり訓練を積んだのだらう。それは、エヴィとずっと同室で暮らしてきたからこそ、よく分かった。

しかし、まだ俺からすれば甘い点はある。

大振りになった瞬間を見計らって、俺は鳩尾に手刀を叩き込もうとする。

「……やらせはしないさ」

そういつて後ろから割り込んできたのは、アルバートだった。

今までは後衛で魔術によるサポートをメインとしていたが、今回の戦いに限っては初めからエヴィと同様に超近接距離クロスレンジでの戦闘を繰り広げるつもりようだ。

後ろを振り向くことなく、感覚のみで彼の上段への蹴りを躲すと、そのまま体をぐっとその場に屈める。

そして、一気に二人の間を抜けるようにして離脱を試みる。

しかし、エヴィとアルバート共に、俺を逃す気は全くないのか、そのまま果敢に攻めてくる。

すぐにでも氷剣を使用したいのだが、あまりのスピードにその暇を与えてくれることはない。

なるほど。俺の対策は、すでに考えてあるのか。

と、この攻防で二人の狙いを理解するが、氷剣の発動速度はそれこそ本気を出せば一秒も必要ない。

二人の攻撃を捌きながら、俺は自身の両手に一気に氷剣を生み出す。

《プリママテリア第一質料〓エンコーディング〓マテリアル物資コード》

《マテリアル物資コード〓デコーディング》

《マテリアル物質コード〓プロセシング〓ディセレーション減速〓固定》

《エンボディメント〓マテリアル物質》

そこから先、二人も流石に俺に氷剣を使わせることは仕方ないと悟ったのか、距離を取ると一気に魔術戦へと切り替えてきた。

エヴィは依然として前衛だ。彼は両腕に分厚い^{マテリアフィールド}質料領域を纏うようにして展開。

すると、俺の氷剣に対してその腕のみで対応してくる。

少しでも油断すれば、皮膚は切り裂かれてしまう。そのような恐怖心に打ち勝って、エヴィは先ほど同じようにこの^{クロスレンジ}超近接距離で俺と対面する。

その一方で、アルバートは魔術支援に切り替えたようで、俺の死角から次々と魔術を発動してくる。

その全ては、^{クイック}高速魔術によるものだが威力は十分。

さらにはエヴィも巻き添えになりかねないというのに、俺と同様にアルバートの魔術を避けながら戦闘を続けている。

その連携の練度は、やはり今大会でも屈指。

伊達に、この決勝まで上がってきたわけではないということか。

だが、そろそろ二人の攻撃も見切った。どうやら全力を出さずとも、無事に突破できることができそうだ。

そう思っていると、アルバートの周囲に濃密な第一質料が収束している。デイレイ遅延魔術も含めて、巧妙に隠していたのだろう。

あつという間にこの空間は、大量の第一質料で満たされていく。プリママテリア

間違いない。

あの兆候は オリジン固有魔術。それも、広域干涉系のものだろう。

「おっと。ここから先は行かせねえぜッ!!」

エヴィがその巨軀を大きく広げて、俺の前に立ち塞がる。

しかし、一気に自分の体をトップスピードまで持っていくと、ギリギリのところでエヴィを掻い潜り、アルバートの元へと疾走していく。

考えていないわけではなかった。

しかし、流石にアルバートの遅延魔術デイレイを含めた発動速度とエヴィ

が立ち塞がったことによって、反応は僅かに遅れる。

アルバートの元にたどり着く前に、彼はその固有魔術オリジンを発動した。

おそらくは、俺が固有魔術オリジンを発動させないように行動することも含めて、立ち回りを考えていたのだろう。

この戦術は、防衛側でしっかりと準備する時間があるからこそ成り立つ。

アンチマテリアル
対物質コードの発動も考えたが、魔術領域への負担と、あれだけの第一質料を還元するには、今の俺には厳しいだろう。

この決勝戦に向けて、全て考えた上での行動。彼らが防衛になった時点で、この固有魔術オリジンの発動は避けることはできなかっただろう。

瞬間。アルバートを中心にして、白銀の世界が目の前に顕現した。

「
ホワイトリバーズ
白夜反転」

第223話 彼女たちの行末

レイと別れた二人は、ルーカスⅡフォルストと対峙していた。このような状況がいつかやってくることは、すでに予測していた。

だからこそ、二人はレイに先に行くように促したのだ。

たとえ七大魔術師であろうとも、絶対にここで食い止めてみせると。

そう思っているのだから。

「アリアーヌ……時間を稼いで」

「まさか、アメリア。もう使う気ですか？」

「もうなり振りがまっついていられる状況じゃないわ。分かるでしょ、あの圧倒的な質料領域を」
マテリアフィールド

「……分かりましたわ。わたくしが食い止めます」

その瞬間。アリアーヌは、固有魔術である鬼化^{オーガ}を即座に発動させた。

彼女のその綺麗に伸びるしなやかな四肢には、赤黒いコードが可視化されるようにして、一気に走っていく。

そして、アリアーヌはそのまま思い切り地面を踏み締めて駆け抜けていく。初めからトップスピードで迫り、ルーカスⅡフォルストの鳩尾に拳を叩き込もうとするが……。

「疾い。それに、威力も申し分ない。やはり素晴らしいね」

その言葉を聞いた瞬間に、啞然とする。

そう。アリアーヌが必中と思って放った拳は、いともたやすく避けられてしまったのだ。しかし、そこで諦めるような彼女ではない。

今までのレイとの訓練を通じて、格上と戦うことには慣れている。むしろ、ここで諦めてしまっただけは全てが終わってしまう。

これくらいで、折れたりはいしませんわっ！！

その後。アリアーヌは果敢に攻める。それこそ、ルーカスが【秘剣】を発動する余裕を与えないように。

まだ、【秘剣】は発動させてはならない。また、アメリカが因果^{バタフラ}律^{イエフエクト}蝶々を発動するまでの時間を稼ぐ必要がある。

その想いから、アリアーヌは自身の体の性能を限界まで引き出して、ルーカスに相對する。

だが、相手も伊達に七大魔術師ではない。アリアーヌの発動している魔術は、固有^{オリジン}魔術。

さらには、それは内部^{インサイド}コードを極めた先にたどり着くものだといふのに、彼はアリアーヌの攻撃をただ淡々と捌いていく。

「そろそろか……」

ボソリと呟いた瞬間、ルーカスの姿が目の前から消え去った。

「　　アメリカッ！！」

すぐに追いつけないと悟った彼女は、後方のアメリカに向かって大声を上げる。

ルーカスは虎視眈々と狙っていたのだ。アメリカが因果律蝶々をバタフライエフェクトを発生させるその瞬間を。おそらくはもつとも、警戒が緩んでしまうその刹那。

発動させる直前の、わずかな硬直。その瞬間は、他の魔術へと切り替えることはできない。またアリアヌの意識が僅かに緩んだ隙をついた、一瞬の攻防。

「　　大丈夫よ。もう、因果は成立してるから」

《第一質料^{プリママテリア}＝エンコーディング^{マテリアル}＝物資コード》

《物資コード^{マテリアル}＝デコーディング》

《物資コード^{マテリアル}＝プロセッシング^{アイディア}＝四原因説^{ヒュレー}＝質量因^{エイドス}＝形相因^{エフィシエン}＝目的^{テロス}因》

《エンボディメント^{コーザリテイ}＝因果律》

「
バタフライエフェクト
因果律蝶々」

ルーカスが迫る直前。

アメリカの背中から、瞬く間に大量の紅蓮の蝶が舞い上がる。それはまるで、蝶たちの炎舞。パラパラと舞い散るのは、真紅の第一
プリマ
マテリア
質料。

ルーカスはアメリカの魔術術式の構築を、完全に読み取っていた。だからこそ、タイミングだった。狙いは必中。

確実にここで沈めることができると、そう予想していたのだ。

だというのに、目の前に顕現するのは無限の紅蓮の蝶たち。螺旋を描きながら、溢れ出るその蝶は間違いなく因果律蝶々が発動した証拠。
バタフライエフェクト

今の一連の攻防でルーカスは悟った。これは、罠であったと。

アメリカは最後の最後で、一気にコード構築を加速させたのだ。そもそも、コードを走らせることに速くしたり、または遅くしたりなど普通はしない。

最後まで最高速でコードを走らせるのが普通の魔術の考えである。

それは七大魔術師であつても、例外ではない。だがアメリカは自分のコード構築の速度を罠に使ったのだ。

それはリーゼとの訓練で獲得した、彼女の成果でもあった。

すでにアメリアのコードを構築する技術は、七大魔術師に迫るものであった。

「……やむを得ないか」

ルーカスの足は、止まることはなかった。バタフライエフェクト因果律蝶々が発動してしまったのならば、それを考慮した上で戦えばいい。

彼は刀を納刀。そして、アメリアに向かって躊躇なく【秘剣】を放つ。

「第八秘剣 さんしゅうあんてん
残照暗転」

眩い光がこの空間を支配すると、一気に視界が暗転する。

ルーカスはその視界の封じられた世界で、アメリアの元へと潜り込むと……そのまま一閃。

確実にその刃をアメリアに直撃させたが……。

「無駄よ。もう、この世界の因果は成立しているもの」

悠然と佇むアメリアの周囲には、さらに真紅の蝶が溢れ出てくる。

すでに、アメリアは因果律を成立させている。

それは、【ルーカスの攻撃が当たらない】という結果を生み出し

ているのだ。そのため、必中であつたはずの彼の【秘剣】はその因果を狂わされてしまった。

必中であつた。しかし、それはアメリカに届きはしない。まるで意図的に自分から避けているように、刀はアメリカの直前で歪む。

彼は一旦、二人から距離を取ると、再び納刀してじりじりと睨むつけることで二人に牽制をかける。

バタフライエフェクト

因果律蝶々。やはり、あまりにも厄介な能力だ。発動されてしまったからには、もう僕にはあれを突破するだけの能力はない。しかし、問題はおそらく……時間だろう。

ルーカスⅡ フォルスト。

彼はただ戦闘能力が高いだけではない。その頭脳もまた、こと戦闘においてはキレるのは間違いない。

バタフライエフェクト

今の攻防は、ただアメリカの因果律蝶々の性能を測りたいと思っただけである。何も無駄に、【秘剣】を放ったわけではない。

その結果、【秘剣】であつてもあの因果律を統べる蝶の前では、全てが無効だと理解する。

バタフライエフェクト

仮に、アメリカが攻撃に因果律蝶々を使用しているのならば、まだ活路はあつた。ダメージをもらいつつも、圧倒的なスピードと【秘剣】によつて切り捨てればいいのだから。

バタフライエフェクト

しかし、アメリカはそのことを理解していた。因果律蝶々の能力の成立上、戦闘で使用するならば防御をするために構築したほうが

いいと。

絶対防御。

物理的な防御ではなく、因果律を支配した完全なる防御。それは、【絶刀の魔術師】であるルーカスでさえ、突破できるものではなかった。

因果の接続。今、この世界の、この場所の因果律は全てアメリカの支配下にあった。

「……フッ」

肺から一気に空気を吐き出すと、彼が次に狙うのはアリアーヌだった。

因果の成立は、おそらくは一箇所にしかな結びつけることはできない。今であれば、アメリカ＝ローズという対象に攻撃が当たらない。

ならば、単純にアリアーヌ＝オルグレンを狙えばいい。そう考えるが、彼の攻撃はアリアーヌにも届くことはなかった。

空を切り裂いた刀をじつと見つめると、ルーカスはボソリと呟く。

「因果律は、同時に二箇所発動できる？ いや、それはあまりにも強力すぎる。考えられる仮説は」

アメリカは、因果律を同時に発動させることはできない。しかし、瞬間的に切り替えることはできる。

相手が複数であれば、この戦法は通用しないが、今はルーカス一人。彼一人であれば、原因だけを固定して、結果を操作すれば原理上は可能だった。

そのルーカスの推測は的を射ていた。

そして、ヒュッとその場で刀を振るうと上段に構える。

「やっぱり、僕の予想通りだ。ここから先は 我慢比べだ」

持久戦。

ここに持ってくるのは、ルーカスの様子通り。しかしそれは、アメリカの思惑通りでもあった。

このような展開になれば、必ずルーカス＝フォールストは持久戦を強いてくると分かっていた。

互いに読み合う。その全ての攻防には、意味があった。

冷静に分析するルーカスと、それを全て読み切っているアメリカ。

ルーカスは、この一連の戦闘で確信に迫っていた。

それは因果律蝶々の弱点だ。

因果律蝶々の唯一の弱点 それは発動時間。

以前よりも伸びているとはいえ、長時間発動できるものではない。

ここから先の戦いは、アメリアだけではない。一見すれば、アメリアがいなければ成立しない戦いだ、ここから先は彼女だけでは凌ぎ切ることは不可能だろう。

この戦いは、アリアーヌにかかっているといっても過言ではないだろう。

「アリアーヌ。私ができるのは、ここまでよ。あなたには絶対に攻撃を当てさせはしないわ。だから、思う存分に戦って」

「ええ。分かりましたわ」

すでにアメリアの鼻からはツーツと血が垂れ始めていた。オーバー魔術領域暴走に限りなく近づいている兆候。

しかし、アリアーヌはそれを心配する素振りは見せない。

ただ、アメリアに任されたという事実を抱いて、彼女はたった一人で【絶刀の魔術師】に挑む。

制限時間はごくわずか。その間で、アリアーヌが決着をつけることができればそこで優勝は確定したのも同然だろう。

互いに時間との戦い。

バタフライエフェクト因果律蝶々が解除される前に、バタフライエフェクトアリアーヌがルーカスを倒すのか。それとも、ルーカスが因果律蝶々の解除まで耐え忍ぶ事ができるのか。

最後の戦いは、アリアーヌに託された。

「行ってきますわ。アメリカ」

そうして彼女は、幾重にも重なるようにして新しいコードを走らせる。

《第一質料^{プリママテリア}＝エンコーディング^{マテリアル}＝物資コード^{マテリアル}》

《物資コード^{マテリアル}＝デコーディング^{マテリアル}》

《物資コード^{マテリアル}＝プロセシング^{マテリアル}＝内部コード^{インサイド}＝操作^{アニメーション}》

《エンボディメント^{フエノメノン}＝現象^{マテリアル}》

「^{インパルス}紫黒雷光」

バチッ、バチッ、バチッ、と音を立てながらアリアーヌはその体に紫黒^{しじく}の電撃を纏っていた。

周囲に広がるその電撃は、彼女が今まで保有していた固有魔術^{オリジン}の比ではない。圧倒的な第一質料^{プリママテリア}の密度。さらには、展開されている質料領域は全て、紫黒^{しじく}の電撃へと変換されていた。

改めて、彼女は腰を下ろして構えるとルーカスと対峙するのだっ

た。

「さあ、わたくしと踊ってくださいまし」

雷撃の戦乙女は戦場にて、舞う。

第224話 たどり着いた、その場所で

俺は自分の才能というものに見切りをつけていた。

その一方で、幼い頃は周りから褒められることが多かった。

「流石はアリウム家の長男だ」

「ええ。魔術適性は、かなり高いようですわね」

「アルバート様は優秀ですね。上流貴族の血筋は、やはり素晴らしい」

そんな言葉を聞いて育ってきた俺は、勘違いをした。

アルバート「アリウムには才能があり、素晴らしい魔術師になるのだと。それこそ、七大魔術師に至ることも夢ではない。そんな不遜な考えを幼い頃は抱いていた。」

しかし、俺はさらなる才能の存在を知ることになる。

三大貴族。その長女たちと、同世代の俺は同じ学園に通うことになった。周りは貴族が多く、その中でも俺は突出した存在だった。しかし……三大貴族は才能があるなんてレベルのものではなかった。

「すごい！ 流石はローズ様よ！」

「オルグレン様も負けてはいないわっ！」

「やっぱり、三大貴族は違うなあ」

「ああ。間違いなく、才能が違うよ。才能が」

その時の衝撃を、なんて言い表すべきなのか。当時はただ、彼女たちの才能に嫉妬した。一目見て、わかってしまう。

自分なんかとは魔術の質が違つと。俺もまた、ある程度の才能があつたからこそ、理解できてしまったのだ。そのあまりの巨大な才能に。

そこから先、努力を怠るようになるまでそれほど時間はかからなかつた。

才能を信じ、努力を怠り、才能がないものを見下す。この世界は、血統で決まる。そのように教育され、そのように生きるようになった。血統こそが、自分の生きる理由になった。

その中でやはり、レイとの出会いは運命的なものだったと言わざるを得ない。

レイ＝ホワイト。

オーディナリー
一般人出身の魔術師。初めは、ただその存在が鬱陶しくて仕方がなかつた。レイを見ると、過去の自分を思い出してしまつからだ。

無知で、自分の可能性を信じ切っている、ただの愚か者。俺は彼が愚者にしか見えなかつた。虚勢を張って、冷静なふりをしているのだと思い込んでいた。

しかし、彼は七大魔術師が一人　【氷剣の魔術師】だった。

そんな彼は、こう言った。

才能は確かに重要だろう。しかし、才能だけでなく、努力も環境も必要な要素だ。俺たちにできることは、適切な環境に身を置いて、愚直に努力を重ねることしかできない。

その言葉を聞いた時、俺は知った。いや、元々分かっていたんだ。俺は、才能を言い訳にして努力を怠っていたんだと。

努力をした先に、挫折しか待っていないのなら、可能性の中に生きてたいと。

俺だってやればできる、俺だって三大貴族ほどの才能があれば、俺だって……。

そんな幻想に囚われ、可能性に囚われ、自分で自分を雁字搦め^{がんじがら}に縛りつけていた。

まさにそれは、自縄自縛^{じじくじくばく}。

自らが生み出した鎖に縛りつけられ、それを良しとしていた。いや、せざるを得なかった。

そうしなければ、自分を保つ事ができなかったから。

正直いって、レイの存在は未だに謎だ。彼は一般人^{オーディナリー}だというのに、

七大魔術師という最高の地位に俺と同じ歳で至っている。その過去は聞いているが、努力だけではたどり着けない頂であると分かっている。

でも、どうしてだろうか。レイを見てみると、才能に言い訳している自分がどうにも恥ずかしくなる。矮小に思える。

しかしだからこそ、俺もまた進むべきではないかと……前向きに思えたのだ。

レイに負けることで、俺は前に進むきっかけを手に入れた。自分の足でやっと、立ち上がる事ができたんだ。

そして、その集大成が今だった。

まだ俺は、未熟な魔術師だ。まだまだ、頂には届かない。いやきつと、一生かけてもレイの領域に届くことはないのかもしれない。

しかし、もう才能に言い訳するのも、可能性の中に生きるのも、嫌だった。

俺の人生は 才能でも、可能性でも ない。

自分の人生は、自分自身で切り開いていくんだ。他でもない、自分自身のために。

だから、立ち向かおう。目の前の最強の存在に。

これまでは、上手く立ち回ることができた。しかしその奇襲はもう通用しない。これはルーカス先輩が作ってくれた舞台だった。

俺とエヴィが、レイに立ち向かうという状況を作り上げることができたが……ここから先は、真正面からぶつかるしかない。優勝するには、最強に勝たなければならない。

ああ。分かっているとも。

レイは強い。こうして、再び相対するがその存在感は圧倒的だ。

震えるとも。

恐怖するとも。

その圧倒的な存在の前に、俺はただ打ち震えるしかない矮小な存在だと、分かっている。

でもな、レイ。お前がいたからこそ、俺はここまでたどり着くことができた。

だから見せてやるよ。俺の、俺のこの努力の足跡を。たどり着いた、この場所を今こそ……見せる時なんだ。

「
ホワイトリバース
白夜反転」

エヴィが稼いでくれた時間を使って、俺が展開するのは固有魔術^{オリジン}。訓練の際に、偶然発動したこの魔術は俺にとっても奇跡のようなものだった。

そして、展開されるのは見渡す限りの真っ白な世界。

広域干涉系のこの固有魔術は、指定した空間から一時的に第一質料^{リア}を消失させるものだ。といっても、物質の中などには存在しているが、それを魔術的に引き出すことはできない。厳密に言えば、これは抑制。

魔術師が第一質料^{プリママテリア}を引き出せないように、抑制した空間を生み出しているに過ぎない。

もちろんこの空間の中では、コード理論は適応されない。

つまりここから先は、この肉体で決着をつけるしかないということだ。

「白夜反転。^{ホワイトリバー}広域干涉系の固有魔術^{オリジン}だな。なるほど……今までの戦いは、全てここに持つてくるためのものだったのか」
「そうだ。レイ、ここから先は肉体で語り合うしかない」
「そのようだな」

彼が持っていた氷剣はすでに消失していた。

この空間ではあらゆる魔術が無に還る。一時的とは言え、この世界は魔術の無い世界。

あとは、己が肉体同士で語り合うしかない。

これが俺たちの描いた、勝ちへの道筋。魔術戦では、勝ち目は無いのは分かりきっていた。

「へへへ。ついにこの時がきたかっ！ レイ、俺たちの筋肉でお前

を凌駕してやるぜツ!!」
「やってみるといい」

レイと戦うにあたって、魔術戦ではこちらの方が不利だということとすでに話し合った結論から出ていた。

ルーカス先輩に聞いた話ではあるが、レイ＝ホワイトという魔術師はたとえ能力が封じられていたとしても、規格外であると。

しかし、魔術を互いに使えない状況であれば肉薄できるかもしれない。

俺とエヴィでは、今の状態でも届くかどうかは分からない。しかし、大きな隔たりは確かに小さくなっているのは間違い無いだろう。

「う、おおおおおおおおおおおッ!!!」

駆ける。駆け抜ける。

全ての想いを、この体に、この拳に乗せて　俺たちはレイへと立ち向かう。

エヴィと共に、レイに迫る。今までの訓練で、仮想レイとしてルーカス先輩とかなりの戦いを重ねてきた。

その成果を見せる時が、今なんだッ!!

挟み込むようにして、俺たちは分散する。そしてエヴィの拳がレ

イへと迫る。その瞬間、俺は上段に蹴りを放つ。レイからすれば、完全に死角。

これは流石に入っただろうと思うが……やはり、そう簡単にいくわけもない。

レイは右腕でエヴィの拳を受け止め、左肘で俺の蹴りを止めていた。それも、どちらも力が乗り切る前できつちりと止めていたのだ。

魔術で知覚しているのではない。それはおそらく、今までの膨大な経験。それこそ　レイの努力の足跡。

この世界に、魔術という才能はない。だからこそ、レイの異質さがさらに際立つ。ここまでしても、レイの頂が見えることはない。

だが、ここで止まるわけにはいかない。

この^{ホワイトリバー}白夜反転が発動している間に、レイを抑えなければ敗北は必至だろう。俺とエヴィがここで倒れてしまえば、おそらくはルーカス先輩で三人を相手にすることになる。

そうなってしまうば、流石の先輩でも厳しいと言葉にしていた。

だからこそ、ここで絶対に　止めてみせるッ！！

そこから先は、ただ我武者羅に己の肉体を信じて戦っただけだった。

すでにどれだけ殴られ、蹴りを受け、ダメージを負ったのかも覚えていない。ただ食らいつくんだと、絶対にここを通すわけにはいかない。

その想いが、この限界の体を動かしていた。

魔術領域も、すでに限界に近い。しかし、ここで解いてしまえば、全てが無駄になってしまう。それに、わずかにだがレイにもダメージを入れることができていた。

俺とエヴィはすでにボロボロだった。唇を切ったのか、ツーツと血が流れてくる。それに先ほど叩きつけられたことで、額からも血が滴る。

だが止まることはない。

この想いが、負けを認めないのだ。

どうしてだろう。俺は今　とても楽しいと感じている。

死闘を繰り広げ、肉体は痛みで悲鳴を上げ、視界も僅かに霞んできた。

それなのに、俺は、俺たちは、この状況を心から楽しんでいる。

「ははは……ッー！」

「へへへ……笑えるぜ。なあ、アルバートォー！」

「ああ！　間違いない。最高に、笑えるさッー！」

体は限界。この魔術領域もすでに、限界だ。

しかし、俺たちはいま笑っている。

心から、おそらくは今までの人生の中で、一番最高の笑顔を浮かべている。ドロドロになり、グチャグチャになり、自分の血に塗れているというのに、どうして笑えるんだ？

レイもまた、肩で息をしながら微笑を浮かべている。

ああ。そうだ。

俺たちは同じだ。俺たち三人は、楽しんでいるんだ。

この戦いを、この肉体で戦っている今を。

この世界で見えているのは互いの姿しかない。それ以外はもう、目に入らない。試合のことも、忘れてしまっている。敗北はすでに見えている、見えているというのに、楽しいんだ。

ただ、目の前に立っている史上最高の魔術師に相對していることが、何よりも楽しかった。嬉しかった。

溢れ出る感情が止めることはない。

この足は止まらない。立ち向かい続ける。

ただまっすぐ、進み続ける。

なあ、レイ。俺は、お前と出会うことで変わることができたのだろうか。まっすぐ進むことができているのだろうか。

いや、レイだけじゃない。

数多くの友人たちと出会って、俺は……今、進めているのだろうか。

その問いの答えは、とっくにあっただ。

俺の心の中に。

だから、こうして戦えている。圧倒的な存在を前にして、体を動かすことができています。

全てがスローモーションのように過ぎ去っていく。

互いの拳が、交わる。

何度も地面を転がる。エヴィと入れ替わるようにして、俺は何度だって立ち上がる。立ち向かい続ける。

我武者羅に、ただ真っ直ぐに、まるで自分の存在を証明するかのよう。

「はあ……はあ……はあ……ごほっ……う……う……」
「へへへ……アルバート……あとは、頼んだ……ぜ……」

二人して大の字になって、転がる。

エヴィは最後にそう言葉にすると、気絶してしまった。彼は、俺が固有魔術オリジンを発動するためにずっとレイと戦っていた。

白夜反転が展開された後も、俺を何度も庇ってくれた。その大きな体で、レイの攻撃を受け続けたのだ。

だから、意識を失ってしまうのも無理はなかった。

ありがとう、エヴィ。お前と一緒に戦う事ができて、俺は嬉しかった。最高に楽しかった。きっとエヴィがいなければ、ここまで戦うことは絶対にできなかった。

だからお前の分も、俺はまだ　立ち上がって見せる。

「はあ……はあ……はあ……レイ、俺は……負けない。負けるわけには……はあ……はあ……いけない」

見据える。レイもまた、額から血を流していた。ダメージは確実に入っている。

それでも彼はその場に悠然と佇んでいる。じつとこちらを、静かに見据えている。その闘気が衰えることはない。依然として、臨戦態勢で俺のことを捉えている。

ああ。もう、分かっている。結局レイに届くことはなかった。

俺とエヴィの二人がかりでも、レイは圧倒的だった。

「アルバート。心してかかってこい　その気概、真正面から受け止めよう」

ふ、と笑いが漏れる。

俺はもう、死に体だ。間違いなく、次の攻防で敗北を喫する。そんな分かりきっている未来に、死の淵に、自ら進もうとしているんだ。

笑えるさ。ああ、どうしようもなく……俺は愚かだな。

でも、ありがとう。

レイがいなければきっと、ここまで来ることはできなかったから。

「はあ……はあ……う……う……」

よろよろと歩みを進める。もう肉体は活動を停止しろと、言っている。言っているが、この 最後の一撃だけは、全力で叩き込むッ！！

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

そうしてレイの目の前まで全力で駆け抜けると、パンツ！！と弾けたような音が響き渡った。レイは俺の拳を、その右手でしっかりと受け止めたのだ。

ビリビリと電流が走るかのような痛み。そこから先は、感覚がなくなっていくかのように……その場にズルズルと倒れ込んでいく。

その際に、俺は自分の想いを吐露した。

「なあ……レイ」

「ああ」

「俺は……強くなれただろうか？ あの時よりも……成長できただろうか？」

「アルバート。君は間違いなく、強くなった。成長した。それは、俺が証明しよう」

「ああ……そうか……俺は、そうか……」

一筋だけ涙を零す。

それは、嬉しさもあった。しかしやはり、悔しいものは悔しい。敗北してばかりだ。俺は、負けてばかりだ。

でも、それは当然だろう？

今まで俺が努力を怠って、才能に傲り、他者を見下して悦に浸っている間にもレイは努力していたのだから。

敗北には慣れない。きっと、これは一生慣れることはないのだろう。

でもそれがきつと、俺をさらに成長させてくれる。

倒れる。その場に受け身を取ることも叶わずに、ぐらりと体はまるで糸が切れたかのように、倒れ込む。

「はあ……はあ……はあ……」

天井を見つめる。

敗北だ。その現実を受け入れると、ホワイトリバー白夜反転は解除され、元の世界が戻ってくる。

そうして俺は最後に、レイに言葉を投げかけた。

「レイ。ありがとう。レイの……おかげで俺は……ここまで、来ることが……できた」

「……アルバート、俺だって同じさ。君には、友人たちには本当に感謝しかない。戦う事ができて、よかった」

「ああ……そうか。レイも……そうだったのか……」

「ああ。それでは、失礼する」

「……」

駆け抜けていく音が、響く。

この場から徐々に遠ざかっていくと、レイはおそらくフラッグを奪取して最後の戦いに向かうのだろう。

その戦いに俺がいないのは、本当に残念でしかない。

しかし、後悔はなかった。俺は、俺たちは全力で戦い抜いたのだから。

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会の時のように、悔しさから涙を流すことはなかった。ただ、自分の敗北を冷静に受け入れる。

徐々に視界が霞んでくる。

おそらく、意識がそろそろ無くなる。

はは、どうやらかなり無茶をしたみたいだからな。

ああ。どうしてだろう。今日はやけに、世界が美しく見えるな。
もう視界はほとんど何も見えないというのに、この瞼の裏には美しい世界が写っているのだ。

レイ、ありがとう。本当に心から、感謝しかない。

この敗北を糧に俺は何度だって、その先に進んでいくとしよう。
たとえその先に、何もなかったとしても。為すべきことは、進み続けることなのだから。

レイと再び戦うことができて……俺は……本当……に……楽しかった。

そうして俺は、その瞬間。

意識を手放すのだった。

第224話 たどり着いた、その場所で（後書き）

氷剣の情報についてですが、メロンブックス様での予約が開始されました。なんとメロンブックス様の限定版特典は、【アメリカのB2タペストリー】がついてきます！ さらに他にも予約特典がついたり、とても豪華になっています！

規約の関係上、URLを載せることはできないので、検索して確認していただければと思います。（または、私のTwitterで確認してもらえればと！）

タペストリーのイラストは、それはもう凄いものになっていますので……（笑）

第225話 恋する戦乙女

「
インパルス
紫黒雷光」

発動するのは、わたくしが獲得した新しい固有魔術。
オリジン

体にまわりつくのは、紫黒の電撃。
しんく

それは体内の生体電流を第一質料と混ぜるようにして、内部コー
プリママテリア
ドへと変換させる魔術。

今のわたくしは、変換させた電撃を操作することが可能になっています。神経系による電気信号の反応速度を上げる、またはこの纏
っている紫黒の電撃を自由自在に操ることができるのです。

これが、レイとの訓練によって獲得した新しい固有魔術。
オリジン
わたくしは元々、アメリカのような魔術師らしい魔術に憧れていました。

それこそ、因果律蝶々のような魔術を発現できたら……なんてこ
バタフライエフェクト
とも思っていました。

しかし、そのことを相談するとレイは言っのです。

「魔術師らしい、魔術か」

「はい……わたくしには難しいでしょうか？」

「難しいだろうな。アリアー又は、内部コードに適している魔術師
インサイド
だ。こればかりは、才能と割り切るしかない」

「そうですの……」

「だが、魔術らしいというのはおかしい表現だと思わないか？」

「……え？」

少しだけ落ち込んでみると、レイはその真っ直ぐな瞳で私の双眸を射抜いてきました。

そこには純粋な彼の瞳が写っていました。

「内部コードインサイドだろうが、外部コードアウトサイドだろうが、魔術は魔術だ。そこ
に変わりなど、ありはしない。それに、俺はアリアーヌの魔術が好
きだ。その真っ直ぐな性格を反映したかのように、内部コードインサイドを扱
う技量は素晴らしいものだ」

「そ、そう思いますの？」

「ああ。だから、自信を持ってもいいと俺は思う」

「そうですわねっ！ レイの言う通りですわっ！」

彼はわたくしに本当に数多くのものを与えてくれました。

その集大成が、今なのです。

「さあ、わたくしと踊ってくださいまし」

紫黒の電撃を纏って、相対するのはルーカス・マギクス・シュバリエ。その
実力は、魔術剣士競技大会の時から見てきました。卓越したその剣
技に、圧倒的な超近接距離での戦闘力。どれを取っても、一級品の
実力。

真の姿は、七大魔術師が一人　【絶刀の魔術師】。

七大魔術師はわたくしとは格が違うというのは、レイを見てきてよく分かっています。彼曰く、【絶刀の魔術師】はレイにも匹敵するのだと。

現在は、アメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトでその攻撃が当たらないという結果を生み出してもらっています。

しかし、アメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトも万能ではありません。

「もし、ルーカス〃フォルストと二人で対峙することになったら、私はアリアーヌを優先的に守るわね」

「でも、それだとアメリカに危険が……っ！」

試合前。アメリカとの会話を思い出しますが、この話はすでにレイも含めて何度もしていました。それでも、わたくしを守るために彼女を危険に晒すのは自分の心が許さないので。

でも、アメリカは冷静にわたくしを落ち着かせるように淡々と話を続けるのです。

因果律蝶々バタフライエフェクトは、まだ一つの因果律しか操作できない。なら、アリアーヌを守るべきだわ。私は、あなたと違って超近接距離クロスレンジでの戦闘は苦手だから。きっと、ルーカス〃フォルストとは勝負にもならない」

「それは……」

それは事実だとわかっています。アメリカは確かに、魔術師とし

すでに完成されつつあります。しかし、超近接距離での魔術戦となれば厳しいのは彼女も理解しているのです。

わたくしもそれを否定できないから、言い淀んでします。

「だからさ、アリアーヌ」

その表情と瞳は、まるで試合前のこの大空のように澄み渡っていました。もうアメリアは以前の彼女ではありません。悩み、葛藤し、彷徨い続けている彼女は、レイとの出会いで変わったようですから。そして、アメリアは凜とした美しい声で、わたくしにこう告げるのです。

「アリアーヌが、私を守ってよね」

ニコリと微笑むアメリアに、見惚れてしまいます。

その言葉は信頼の証。わたくしならきつと、アメリアを守り切った上で勝利できると……そう信じてくれた上での言葉。

その瞬間。この心は言葉にできないような感情でいっぱいになります。

ああ。本当に、本当に心から思いますわ。

大切な友人たちと共に、ここまで進むことができてよかったと。

「……いいよ。踊ってあげるよ」

彼がわたくしの言葉に応えると同時に、戦闘がついに幕を上げました。今回の戦闘において、圧倒的なアドバンテージがあるのはこちら。

相手は全ての攻撃を封じられているのです。

わたくしが為すべきことは、ルーカス＝フォルストを戦闘不能にすること。加えて、絶対にアメリカに攻撃を与えさせないこと。

彼とわたくしの間には、膨大な数の紅蓮の蝶が舞っています。パラパラと舞う焼けるように赤い第一質料の残滓。それに伴い、周囲は紅蓮の燐光^{りんこう}で満たされます。

この紅蓮の蝶が全て消えた時、タイムリミットはやってきます。

その間に、決着を付けないといけません。

この戦いは、時間との勝負。

アメリカの因果律蝶々^{バタフライエフェクト}が残っている間に、わたくしが彼を倒せるかどうか。

または、因果律蝶々^{バタフライエフェクト}の効果が切れて、アメリカと一緒にこの場で為す術^{すべ}なく倒れてしまうか。

最後の最後は、フラッグを奪取しに行ったレイに任せるしかありませんが、ここは絶対にアメリカと二人で死守しますわっ！！

インパルス

紫黒雷光によって、わたくしの反応速度はおそらく今だけに限定すれば、人間の限界を突破しています。

それは脳からの信号で筋肉を動かしているのではなく、プリママテリアによって直接、生体電流を操作しているから。

さらに、溢れ出るこの紫黒の雷撃は自由自在に操ることができるということは……この拳の射程は、通常の倍はあるということ。

触れるだけで、相手に雷撃を当てることのできるこの固有魔術はクロスレンジこの超近接距離で最高の威力を発揮するのです。

「はあああああああッ！！！！」

とっかん
呐喊。

もちろん、この拳はあっさりと躲されてしまいます。反応速度を極限まで高めているというのに、これを避ける技量にはただただ感嘆するしかありません。

しかし、この纏っている電撃がまるで意志を持っているように彼に絡みついていきます。

この変幻自在の距離感レンジには、流石の彼も慣れていないようでそれは諸に直撃。

「くッ………！」

そう声を漏らすのを見て、攻めることを止めるわけにはいきません。

わたくしの攻撃は確実に効いているようでした。僅かに表情を曇らせて、痺れる腕を何とか落ち着かせようとわたくしから距離を取っていきます。

「逃しませんわっ!!」

絶好の好機。これを逃すわけにはいきません。しかし、やはり…この心には付き纏うのです。

正直いって、彼とこうして対峙するのは……怖いすわ。

体が震えて、竦^{すく}みます。

相手はそれだけの圧倒的な質料領域^{マテリアフィールド}を纏っているのです。

レイにもすでに忠告されていましたが、この超近接距離^{クロスレンジ}での戦闘はレイと同等か、それ以上だと思った方がいいと。

レイと訓練の時に対峙した時ですら、彼の実力の前に為す術なく、恐怖していたというのに、それを上回る可能性のある【絶刀の魔術師】の技量を、恐怖心なしで立ち向かうなど不可能ですわ。

けれど、レイは言いました。「恐怖心を打ち消すのではなく、受け入れるのべきだ」と。

その言葉が今こうして蘇ってきます。

そう。大丈夫。わたくしは、ちゃんと戦えていますわ。アメリカが支えてくれ、レイが教えてくれたことが、この心には確かに刻まれているのですから。

周囲に飛んでいる、アメリカの因果律蝶々バタフライエフェクトによって顕現している蝶は、確実に数を減らしていきます。

彼女曰く、干渉する相手の第一質料と質料領域が膨大であるほど、因果律を制御するのは難しいと。

因果律を操作するといっても、それは万能ではない。

魔術師としての力量が高ければ高いほど、その存在を含めて因果を操作するのは困難とアメリカは言っていました。

そのため、ルーカス＝フォルスト相手には長くは保たないだろう……と。

それでもアメリカは、そんな無理を通してまで限界までわたくしを守ってくれているのです。

「はああああああああああああッ！」

奮い立たせる。

わたくしは止まってはいけないんですの。この拳には、全てがかかっているのです。

レイには多くのものを与えてもらいました。そして、アメリカに

もわたくしはたくさんのをいただきました。

そんな二人に報いるためにも、そして何よりも自分自身のために……ここは、負けてはいけないんですわっ！！

「わたくしは、絶対に負けませんわあああああッ！！」

迫るその鋭い刀が当たることはないと分かっている、怖いものは怖い。その鋭い剣戟を目の前で見れば見るほど、その卓越した技量が分かってしまいます。

おそらくは、まともに相対すれば負けてしまうのはわたくしでしょう。

だからこそ、ここは攻めるしかないんですわっ！

溢れ出る電撃の量を増やすと、そのまま一気に放出。残存する紫黒の電撃も操作して、彼に向かっていきます。地面を走るようにして、紫黒の線が一気に走っていき、それを追隨するようにしてわたくしも姿勢を低くして、この場を駆け抜けていきます。

流石に、このスピードと自由自在に動き回る電撃には対応できないのか、なんとか攻撃が当たっていきます。

しかし、そこは流石の七大魔術師。体は間違いなく、電撃によって痺れているというのに、パフォーマンスが落ちる気配は全くありません。

その雷撃を刀に纏めると、綺麗に円を描くようにしてそれを振り払っていくのです。おそらくは、そろそろ相手も対応できるようになってきた……というところでしょう。

ならば、ここは 切り札を出さないようですわ。

「
インバルス
紫黒電撃：流星」
メテオ

体全体ではなく、四肢にこの電撃を集中させます。まさにそれは、一撃必殺の拳。この体に残っている第一質料を一気に解放すると、それを全て固有魔術へと変換させます。
オリジン

もう、出し惜しみは必要ないですわ。

後は、この一撃を持って彼を沈めるだけ。

それこそが、この紫黒電撃：流星。
インバルス
メテオ

瞬間。体は悲鳴をあげているのか、鼻からは血がドクドクと溢れ出していきます。さらには皮膚にはヒビが入って、そこからも出血。視界も赤く染まり、おそらくは眼球内の毛細血管が切れ始めているのでしょう。

「うう……ぐ……うううう……っ!!」

後方からはアメリカの苦しむ声が聞こえてきます。おそらくは、かなり厳しい状況なのでしょう。わたくし以上に、アメリカはもう限界に近い。それは、周囲に飛んでいる蝶の数を数えれば分かりまし

た。

ルーカス＝フォルストの放つ必中の攻撃を、全て因果律を操作することで守ってくれていたのです。

限界を迎えるのは、至極当然のことでしょう。

アメリカは、たとえそのような状況になっても自分のことは気にしなくてもいいと言いました。本当ならば、もう止めて欲しいところです。わたくしのために、無茶はして欲しくはない。

しかし、それでは意味がないのです。

ここまでアメリカにしてもらったのに、それを無駄してはいけない。

駆ける。

駆け出す。

駆け抜ける。

全てがスローモーションに見えますわ。

わたくしのこの攻撃は、謂^いわば諸刃の剣。

限界を超えて、その先でこそ成り立つ固有魔術^{マジック}。これを当てることができれば、おそらくは勝利することができるのです。

ああ。どうしてでしょう。

わたくしは、目の前の戦いに集中しないといけませんのに……思い出すのは、レイとの特訓の日々です。

冷静沈着で、いつもクールな表情をしていますが、とても心の熱い人。それに、世間知らずなところもあって、放って置けないというか。

加えて、レイの笑顔は少しぎこちないのですが、とても魅力的なのです。本当に心から嬉しそうに笑う彼の表情が、大好きなのです。とても愛おしいと、そう思うのです。

そうしてこの時が止まったかのような世界の中で、わたくしは気がつきます。

ああ。そうでしたか。

ずっと否定してきました。この大会に集中するために、ずっと忘れようと否定してきた感情。

きつと認めてしまえば、自分が揺らいでしまうような気がしたから。その感情はきつと、わたくしを弱くしてしまうと思っていたから。

けれど、認めてみるとさらに力が湧いてくるのです。

そう。ずっと前からわたくしは、レイに恋していたのです。彼を、愛していたのです。

わたくしはもうずっと前から、恋する乙女だったのです。それと

同時に、戦う乙女でもあるので、差し詰め【恋する戦乙女】といったところでしょうか。

ふふ。自分でそう思うと、何だか腑に落ちる気がしますね。

ああ、今ならきつと自由にこの世界を飛び回ることができるような……そんな、感覚に陥ります。

ドクン、ドクン、ドクン。

心臓が鼓動を打って、目の前の景色が過ぎ去っていきます。

そうでしたのね。

きつと、わたくしのこの成長の原点は、レイに対する恋心だったのかもしれない。

刹那。世界が色鮮やかに、美しいものに見えてきました。今まで灰色だったものが、カラフルに彩られるていく。それは、わたくしの世界を反映したものでしょうか。

もうとつくに、音は聞こえません。ただただ、自分の体を懸命に動かして、最強の存在である【絶刀の魔術師】に立ち向かいます。

彼の視線は確実にわたくしを捉えています。

怖い。怖いですけど、わたくしの心にはレイがいるんですの。彼への恋心が、わたくしをさらに加速させていきます。

そして、彼は咄嗟に刀でガードを試みようとしますが……。

転瞬。それを一瞬で躲すと、わたくしはこの一撃必殺の電撃を纏った拳を彼の胸元へと叩き込みました。紫黒

刀の上から叩きつけるようにして、思い切りこの拳を思い切り振り抜いたのです。

それと同時に、壁へと転がっていた彼は受け身を取ることなく、その場に伏せています。

「はあ……はあ……ああ……あ……はあ……」

まるで糸が切れたかのように、その場に倒れ込みます。出血も酷いようで、自分の血でズルツとその場に滑って転んでしまします。

まともに受け身を取ることも叶わずに、叩きつけられるようにしてわたくしも地面に伏せます。

それと同時に、わたくしの周囲に舞っていた紅蓮の蝶は姿を消します。

アメリカも限界を迎えたのでしょうか。本当にギリギリ、ギリギリの戦闘でした。

しかし、わたくしはやったのです。あの【絶刀の魔術師】を戦闘不能に追い込んだのです。

あとはレイに、レイがなんとかしてくれれば……！

と、地面に横たわりながらそう思っていました。後方に吹っ飛んで行った彼が……刀を杖のようにして突き立てると、その場にふらふらと立ち上がるのです。

「はあ……はあ……はあ……危なかったけど、僕の……勝ちだね。秘剣は何も、攻撃するだけが秘剣じゃないから……ね……」

額から血を滴らせながらそう言いますが、まだまだ戦う意志がある姿。

まだ、まだ終わっていない。ならば、わたくしも立ち上がらないと……まだ、戦わないと……っ！

「うわあああああああッ！！」

痛む体を無理やり引き起こすと、わたくしは彼と対峙します。

すると後ろからふらふらとアメリカがやってきます。

「あ、アリアーヌ……まだ、やれるの……？」

「はあ……はあ……もちろんですわっ！」

アメリカも、出血が酷いようで両目からも夥おびただしい量の血が流れてしました。

おそらくは、わたくしのためにかなりの無理をしてくれたのでしよう。

しかし、いま言ったのは虚勢。

もう、彼をどうにかする手段などわたくしたちには残されていません。

そうしていると、階段から誰かが駆け下りてくる音が聞こえてきました。

「二人とも、フラッグは奪取したッ！あとは駆け下りるだけだッー！」

信じていました。レイならきっと、フラッグを奪取してここにたどり着いてくれると。

レイの声を聞いた瞬間、アメリカはその場に倒れ込みます。緊張の糸が切れたのか、レイの姿見て安心したのか。きっと、もう本当に限界だったのでしょうか。

ここまで本当に、本当によくやってくれましたわ。

「あ……アリアーヌ……後はレイと、二人で頑張っ……私はもう、ダメみたい……」

その言葉を受け止めると、流れている血を乱暴に拭くとアメリカの頬に優しく触れます。

「アメリカ。本当に、ありがとうございますわ……ここから先は、わたく

したちに任せてくださいまし」

「うん……頑張って……ね……絶対に……優勝するって、信じてる……から……っ！」

その言葉を最後に、アメリアは気を失ってしまいました。

彼女の意志も継いで、わたくしはまだ戦います。実は、もうわたくしも限界を迎えています。体は悲鳴をあげ、確実に蝕まれているような感覚に陥っています。すでに、痛覚もなくなりつつあるので

す。

しかし、ここで止めることは許されません。

アメリアはここまで、わたくしを守るために……頑張ってくれたのですから。

こうしてついに、最後の戦いが幕を上げました。

第225話 恋する戦乙女（後書き）

お伝えしたメロンブックス様の特典ですが、店舗で限定版をご予約するとすでに【書き下ろしSS付きカード】がもらえるようです。通販だと、おそらくは発売日になると思います。

SSの内容は見てからの楽しみということで、気になる方はよろしく願いますー！ また、限定版の予約特典は発売日までとなっておりますので、ご予約はお早めに！

第226話 大規模魔術戦、決着

「はあ……はあ……はあ……」

真っ白な世界は、徐々にその色を取り戻していく。

地面に伏せっている二人。エヴィとアルバートとの戦いは、無事に決着した。

アルバートの固有魔術であるオリジン白夜反転には、ホワイトリバース流石に驚きを隠すことはできなかったが、それでもまだ俺の方が上手だった。

確かに、理解はできる。

魔術を使用できない状況の方が、俺たちの実力の差はさらに縮まるだろう。それを考えて、きつとここまで試合を展開してきたのだろう。確かに、これを第1ラウンドなどで見せてしまっただけは意味がない。

この最終ラウンドで使っただけ、その切り札は意味があるものだろう。

互いにただ拳で殴り合うだけ。その戦いは、純粹に心躍るものだった。本当に二人には、感謝しかない。

「
ありがとう。楽しい戦いだった」

そうして俺は、そのまま疾走すると予想通りの場所にフラッグを発見。それをすぐに掴み取ると、あとはこれを外に持っていくだけ。残り時間は、すでに十五分を切っている。

まだ時間にある程度の余裕があるとはいえ、アメリカとアリアーヌの戦いの状況次第では、勝てるかどうかわからない。

そのまま階段を降りて行こうと、進もうとするが……目の前にはなんとか立ち上がっているアルバートがいた。

完全に気絶したと思っていたのに、よろよろとその場に立ち上がるのだ。

ここでアルバートが立ち上がってくるとは流石に予想外だった。

完全に肉体は悲鳴をあげているはずだ。それに、ホワイトリバーを使用したことで、魔術領域をかなり酷使しているはずだ。それに、間違いなく気力はなくなり、意識を断ったはずだった。

それは、しっかりと確認した。

肉体も、精神もすでに擦り切れている。限界も限界。

だというのに、アルバートは気力だけで立ち上がっている。

ボロボロのその姿を見て、俺は油断などしない。ただ先ほどと同じように、腰を下ろして構えるが……どうにも、様子がおかしい。

「立ったまま、気絶しているのか……」

そう。アルバートは、立ち上がると同時にその意識を手放していた。

たとえ意識を手放すことになっても、彼の肉体は敗北を認めることはなかったのだらう。

ここまでくると、その不屈の意志には素直に感嘆する外ない。

ただじつと、その場で石像のように立ち尽くすその姿は、彼の努力と執念の結晶だ。

アルバートに対して、俺は情けなどかけることはなかった。ただ以前の決闘と同じように、勝利を淡々と積み重ねただけだった。

以前は特に思うことはなかった。しかし、今はどうしてだらうか。

アルバートのその成長が素直に嬉しいと思ってしまう自分もいる。

互いに切磋琢磨して、たどり着いた決勝の場。そこで、俺たちは互いに全力を出して戦った。だから、もう後悔などありはしなかった。それはきっと、エヴィとアルバートも同じだと俺は思っている。

本当に、俺は友人に恵まれている。こうして本気で切磋琢磨できる仲になるとは、思ってもみなかった。

その場で、二人に対して一礼をする。それは、ここまで戦ってく

れた尊敬の念を込めてのものだった。

そうして俺は、下の階へと歩みを進めるのだった。

「二人とも、フラッグは奪取したッ！ あとは駆け下りるだけだッ
！！」

レイの声が響き渡ります。それを聞いて、わたくしとアメリカは
すぐに行動に移そうと思いますが……アメリカはその場で、倒れ込
んでいました。

助けたい……と思いますが、彼女はなんとか顔を上げると、かす
れた声で最後にこう言ったのです。

「わ……私のことは、いいから……レイと……行って」

その言葉を聞いて、すでに覚悟は決まりました。

すぐにアメリカの元に駆け寄りたい。わたくしがこうして立って
いるのは、アメリカのおかげなのですから。でも、彼女は進めとい
うのです。ならば、その意志を継ぐのが仲間というものでしょう。

パッと見て把握するに、現状はこちらの方が有利。

ルーカス＝フォルストは満身創痍。わたくしの攻撃を防ぐことはできたようですが、ダメージはかなり入っている様子。

一方で、わたくしは彼と同じか、それ以上にダメージを負っています。

レイといえば、彼もそれなりに負傷はしているようですが、まだ動ける様子でした。おそらくは、この中で一番レイが動くことができるでしょう。

「アリアーヌッ！！ あとは任せるッ！！」

レイはそういうと、わたくしの側にやってきてフラッグを譲渡します。それと同時に、彼は端的に伝えてきました。

「俺が、彼を抑える。なんとかアリアーヌは、フラッグを運び出してくれ」

「……分かりましたわ」

本当は、わたくしも一緒に戦いますわッ！　と言いたいところでした。

しかし、レイの言葉が理解できないほどわたくしは愚かではありません。

彼は信じてくれているのです。わたくしならばきっと、フラッグを外まで持ち出して優勝を勝ち取ってくれるのだと。

このような状況になった以上、誰かがルーカス＝フォルストを抑

えるしかありません。きつとそれは、わたくしでは不可能。ここはレイに任せるしか、選択肢はありません。

そして、この戦いの勝敗は　わたくしに任されたのです。

「　行けッ！！　走れッ！！」

レイの背中をチラッと見ると、そのまま見捨てるようにして疾走していきます。残り時間はすでに十分を切っています。

ギリギリ、本当にギリギリ間に合うかどうか。

そして、後ろからはわたくしをなんとか止めようと、ルーカスⅡ
フォルストが追いかけてきているのは、その圧倒的な圧力プレッシャーだけで分かりました。

レイがなんとか、そんな彼の攻撃を防いでくれているのも分かっています。

後ろを振り向いて、レイと一緒に戦いたい。

その気持ちをぐつと飲み込んで、走るしかないのです。今のわたくしは、ただ走ることしかできません。おそらくは、レイと一緒に戦っても足手まといになるのは間違い無いでしょう。

「　絶対に逃さないよ」

「…………ぐつぐつぐつぐつぐつぐつッ！！！」

どうやら、その場で完璧に足止めすることは、流石のレイでも難しいようで後ろの声が聞こえるほどには近づいています。

そんな中、わたくしはレイを信じてただただこの城内を疾走し続けます。

走って、走って、駆け抜けて、疾走し続けるのですッ！！

「はぁ…………はぁ…………はぁ…………はぁ…………ッ！！！」

痛い。痛い。痛い。

体が悲鳴を上げていますの。

もう、止まってしまいたい。

もう、諦めてしまいたい。

わたくしはすでに、全力で固有魔術オリジンを使ったあとなので正直いつて……もう限界をとつくの前に迎えていました。限界を超えて、今はただ走り続けています。

軋む体に、灼けているかのように熱い魔術領域。体も僅かに自壊をはじめ、血が止まることはありません。流れ出る血を拭うこともなく、ただただ疾走していきます。

心の弱い部分は、囁いてきます。

ここまでくれば、諦めても誰も文句は言わないと。むしろ、よくやったと褒め称えてくれると。

ここで諦めてしまっても、いいのではないか。

ここで立ち止まっても、きっと誰も責めることはない。

けれど、わたくしは

「はぁ……はぁ……わたくしは……わたくしは、絶対に負けませんわぁぁぁぁぁぁぁぁッ……！」

咆哮。

自分に負けないように、必死に声を荒げます。もうすでにこれは、自分との戦いなのです。

レイが抑えてくれている間に、あとはわたくしが制限時間ないにフラッグを外に持っていけばいいだけ。そうすれば、優勝できる。

それだけのことなのに、この弱い心は揺れてしまうのです。

弱い。わたくしはとても弱い人間ですわ。

理想の乙女を求めて、自分を強く見せ続けて、気高くあろうとしているのに、追い詰められてしまえばその化けの皮があっさりと剥がれてしまうのです。

けれどッ！！ 弱い自分を受け入れて、前に進むことの方が重要なのですわッ！

ええ。知っていますとも。わたくしは、ただの弱い人間であるとしてもそれと同時に、強いわたくしも存在しているのですわ。強く在ろうとするわたくしも、確かに存在しているのですわ。

表裏一体。

理想の乙女とは、きっとその両方を兼ね備えて、全てを受け入れている人間のことを指すのでしょう。それはきっと、レイだって例外ではない。彼だって、その弱さをわたくしに見せてくれました。

人間は誰だって、弱いんですわ。けれど、強く在ろうとすることはできるのです。

それこそがきっと、わたくしが求める【乙女】なのですからッ！！

「はあ……はあ……はあ……あと、少しッ！ もう少しッ！！」

見えた。一階の踊り場にたどり着くと、その視線の先に外の景色が目に入りました。

あと、時間がどれだけ残っているのか、そんなことは気にする余

裕はありません。

ただ、あの場所にフラッグを突き立てれば、わたくしたちの優勝が確定するのです。

駆けるッ！

駆け出すッ！！

駆け抜けるッ！！！！

勝った、勝ちましたわッ！！　ここまでくれば、間違いなく優勝はわたくしたちですわッ！！

と、勝利を確信したその瞬間。

ぐらり、と体が倒れ込みます。

「あ……え……う……ぐう……ああ……あ……」

限界。

いくら心で前に進もうと思っても、この体は無慈悲にも限界を迎えてしまいます。レイは依然として後ろでなんとか戦っています。本当にギリギリのところ、押し留めてくれます。

レイもかなり消耗しているのは分かります。それは、聞こえてくる彼の懸命な声で分かってしまうのです。

アメリカをあ場に置いてきて、レイに守ってもらって、ここで……わたくしが諦めるわけには いかないですわッ……！

まだ……進むしか無いのですわッ……！

「ぐ、うううううううッ……！ うわああああああああああああああああああッ……！！」

フラッグを口で咥えると、それを思い切り歯で噛み締めました。

そうして、なんとか這いずるようにして進んでいきます。

ここまでできてしまえば、外聞など全く気になりません。

ただ勝利するだけ。

あと少しで、優勝は目の前なのですから。

全ての想いを、みんなの意志をわたくしは継いでいるのです。たかが、脚が動かなくなった程度、諦めるわたくしではないのですわッ……！！

乙女たるわたくしは、絶対に諦めることはないんですわッ……！！

「ぐ、うううううううッ……！！」

這いずって、這いずって、這いずって なんとか所定の位置に、

やっと、やっと……たどり着きました。

「これで、優勝ですわッ！！！」

啜えているフラッグを右手に移動させると、そのまま勢いよくその場に突き立てました。

その瞬間、大きなサイレンがこの場に響き渡りました。

「勝者は、チーム：オルグレン」

勝った……？ 勝ちましたの……？ わたくしは間に合ったんですの……？

それは聞き間違いなどではありません。この耳には間違いなく、わたくしたちのチームが勝利したというアナウンスが聞こえてきました。

わたくしは、わたくしたちは勝ったのです。勝利したのです。

優勝。優勝したのです。

「うつ……うつ……ぐう……うつうつ……」

涙が、大量の涙が滴ります。もう動くことのできないわたくしは、その場で大の字になってただただ無心に涙を流します。

体はとつくに限界を迎えています。もう、動くことはできません。それでも、わたくしはたった一人でたどり着いたのです。

でもそれは、アメリカとレイが支えてくれたから。二人がいなかったら、絶対に諦めていました。二人の想いが、わたくしを前に押し進めてくれたのです。

断言できますわ。絶対に一人だけでは、この場所にたどり着くことはできなかったと。

そうして一人で泣いていると、ボロボロになったレイが近寄ってきました。本当にここまで懸命に戦ってくれたのでしょうか。わたくしと同じか、それ以上にレイは傷ついていました。

右腕から血を流しながら、それを抑えるようにして彼はそつと側に腰を下ろしてくれます。

「アリアーヌ」

「レイ……勝ちました……わたくしは、わたくしたちは、やりました……」

「ああ。本当に最後まで頑張ってくれて、ありがとう」

その瞬間。もう、体は動かないと思っていたのに、レイに思い切り抱きつくことができました。それはきつと、内なる恋心がそうさせてくれたのでしょう。

彼の体に触れると、さらに涙が溢れてきます。

「うん……！ うん……！ わたくし、頑張りましたのよ……っ！」
「知っているとも。頑張ったさ。ありがとう、アリアーヌ」
「う、う……うわああああああああああッ……！」

レイに優しく抱きしめられ、とめどなく涙が零れ落ちていきます。

ああ。やっぱりわたくしは、改めて思うのです。

この恋心こそが、大きな原動力であつたと。

ありがとう、レイ。

あなたに恋をして、あなたに憧れたからこそ、わたくしはこうして成し遂げることができたのです。

レイがいなければきっと、わたくしはずっと一人のままでした。
アメリカに追いつくこともできずに、ただ強いフリをしているだけ
だったと思います。

そんなわたくしが、こうしてこの場にいるのは……本当に、レイ
のおかげなのです。レイと出会うことができたから、たくさんのもの
のわたくしに与えてくれたから、最後まで諦めることなく戦うこと
ができたのです。

ありがとう、レイ。あなたに出会えて、本当に幸せですね。

そして、あなたのことを……心から、愛していますわ。

第227話 友情の果てに

マギクス・ウォー
大規模魔術戦が無事に終わりを迎えた。優勝チームは、俺たちチーム：オルグレンとなった。

本当にギリギリの戦いだった。

最後の攻防。ルーカス・フォルストの攻撃を凌いでいる時は、アリアーヌを守ることと精一杯だったので時間を意識する余裕すらなかったのだが……残り時間は二秒だったらしい。

アリアーヌがなんとか這いつくばって、フラッグを突き立てたあの瞬間。

あと二秒遅れていれば、俺たちは優勝を逃していた。正直なところ、アリアーヌが限界を迎えて倒れてしまった時には、覚悟をしていた。

このまま敗北する可能性も あるかもしれないと。

最後は俺がなんとか、フラッグを持っていくかどうか。アリアーヌに任せるのではなく、俺が無理をしてもフラッグを突き立てるべきか。

そんな一瞬の錯綜があったが、チラリと視界に入ったアリアーヌは自身の口にフラッグを咥えると、そのまま這いつくばるようにして進んでいたのだ。

懸命に、ただ真っ直ぐに、その先を見据えていた。
負ける気など毛頭ない。

どんな姿になろうとも、絶対に勝ってやるのだという意志が感じ
取れた。

その姿を見て、確信した。

この最後の攻防は、どのような結果になっても彼女を守り切ろう
と。その懸命な姿を見て、俺は全力でルーカスⅡフォルストに対峙
することに決めたのだ。

そして彼女は自力でフラッグを突き立てると、大きなサイレンが
響き渡るのだった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……う……ごほっ……」

その場に膝をつく。どうやら、アリアーヌの固有魔術オリジンのおかげで
ルーカスⅡフォルストはかなり消耗していたようだった。

しかし、最後の執念の宿った剣戟は、それを感じさせないほどに
圧倒的なものだった。

俺はダメージを負っていたとはいえ、魔術領域は無事だった。そ
のため、氷剣を複数展開してギリギリ防御することができた。おそ
らくは、彼が本領だったならば突破されていたに違いない。

様々な要因が絡み合うようにして、勝利を勝ち取ったのだ。

また、アメリカがあの場合で倒れ込んでいるのも、俺は視界に捉えていた。おそらくは作戦通り、ルーカスⅡフォルストの【秘剣】を封じるために、限界を超えて因果律蝶々バタフライエフェクトを使用したのだろう。

彼女のその努力もあって、この優勝を勝ち取った。

全員の努力があつてこそ、優勝にたどり着くことができたのだ。

「……負け、だね」

ゆっくりと近づいてくる。そんな彼の表情は負けたというのに、どこか晴れやかなものだった。

「本当にいい試合でした」

言葉を紡ぐ。それは、心から思ったことだった。

「そうだね。僕も、最後まで本気で戦ったけど……そちらの方が一枚上手だったようだ。君も含めて、本当にいいチームだった」

「恐縮です。しかし、それはそちらも同じだと思います。エヴィにアルバートオリジン。二人とも、よく鍛えられていました。それに、アルバートの固有魔術には驚きました」

「こちらとしては、それでどうにか君を戦闘不能にしたかったけど、難しいのは分かってた。二人もそれを承知の上で、時間稼ぎのために全力を投じてくれた。本当に感謝しかないよ」

今までの印象は、機械的で冷静沈着な人だと思っていた。しかし、

エヴィとアルバートに向けるその言葉は、本当に心からの感謝の念がこもっている気がした。

優しそくに微笑むと、彼はこちらに手を伸ばしてきた。

「ありがとう。チームで戦うことができて、いい経験になったよ」
「こちらこそ」

握手を交わす。大きな手ではないが、それは分厚く硬いものだった。彼の努力の足跡が、少しだけ理解できた瞬間であった。

「でも、僕はやっぱり一対一の戦いを望んでいる。改めて、来年の魔術剣士競技大会を楽しみにしているよ」
マギクス・シュバリエ

「はい。自分も、楽しみにしています」

そういつて彼は、颯爽とその場から去っていった。

すでに城内には、救護班が駆け込んでいるようで、倒れている三人の元に改めて向かう必要はないようだ。

そうして俺は、その場で倒れ込んでいるアリアーヌの元に向かう。

「アリアーヌ」

声をかける。すでに涙を流しているようで、その顔は嬉しさと感動に満ちているようだった。

「レイ……勝ちました……わたくしたちは、やりました……」

なんとかその場に起き上がった彼女を、俺は優しく抱きしめるの

だった。たった一人で、最後は頑張ってくれた。

本当に、俺はアリアーヌのそんな頑張りに感謝をしていた。

「ああ。ありがとう。本当に最後まで頑張ってくれて、ありがとう」

「うん……！ うん……！ わたくし、頑張りましたのよ……っ！」

「知っているとも。頑張ったさ」

「う、う……うわああああああああああッ……！」

涙をさらに流すアリアーヌを、ギュッと抱きしめる。ここまで、本当に過酷な道のりだったに違いない。

最後の攻防では、這いつくばってくれてまで、フラッグを運んでくれた。

きつと、辛かっただろう。諦めたい瞬間も、あっただろう。

けれど、アリアーヌは最後まで成し遂げてくれた。俺を信じて、戦ってくれた。諦めることなく、進んでくれた。

そのことが、俺は何よりも嬉しかった。

この優勝は、三人で成し遂げたものなのだから。

閉会式。そこでは、この大会に出場した全チームが並んでいた。そうして、準優勝のチーム：フォレストが表彰され、最後に優勝したチームである俺たちが壇上へと昇る。

アメリカは見た目よりも負傷は軽いようで、今は自分の足でしっ

かりと歩いている。一方でアリアー又は本当に全てを使い切ったように、自分の足で立つことはできない。

だが、絶対に閉会式には出たいということで、俺とアメリカが左右から支える形でこの場に立っている。

頭と体には包帯を巻いて、痛々しい姿だがそれでも彼女はとても嬉しそうに微笑んでいた。

「マギクス・ウォー
大規模魔術戦、優勝はチーム：オルグレンだ。改めて優勝おめでとう」

アビーさんがニコリと微笑みながら、俺たちにそれぞれ優勝の証であるバッジを送ってくれる。それを受け取ると、その後はトロフィーを受け取ることになった。

もちろん受け取るのは、チームのリーダーであるアリアーだ。

「謹んでいただきますわ」

腕はなんとか上がるようで、彼女はそれを受け取る。

そしてそれを天に掲げるようにして持ち上げると、観客たちから莫大な数の拍手をもらうのだった。

「おめでとー！」

「すごかったぞー！」

「おめでとー！　すごかったわよー！」

「本当に最高の試合だったー！　ありがとうー！」

数多くの拍手、さらには声援をもらってアリアーヌは微かに涙ぐむが、グッとそれを堪えて手を振ってそれに応える。

俺とアメリカもまた、手を振るうことでそれに応えるのだった。

「さて。本日の大会は、初めての試みであり、色々と難しいこともあっただろう。しかし、こうして無事に終わることができて本当に良かったと思う。また、参加してくれたチームは非常に練度の高いものばかりだった。この調子で、切磋琢磨していつて欲しい。私からは以上だ」

その言葉を最後に、マギクス・ウオー大規模魔術戦は無事に終了することになるのだった。

「あれは……」

「ロイヤル」円形闘技場から外に出て行こうとすると、そこにはエヴィとアルバートが待っていた。今は、アリアーヌが病院で治療するということで、それにはアメリカが付き添っていた。

俺も行くといったのだが、「一人で大丈夫よ。レイは、まだ話すべき人がいるでしょう?」と言ってくれたので、こうして二人の元へとやってきた。

所々に包帯はしているようだが、二人ともしっかりと自分の足で立つことはできるようだった。

「レイ。ありがとう、いい試合だった。負けてはしまったが、後悔はない」

「アルバート。そうか……こちらこそ、本当にありがとう。いい試合だった」

握手を交わす。次は、エヴィは二カつといつものように白い歯を見せて、その大きな分厚い手で握手を求めてくる。

「レイ！ やっぱお前は強えなあ……本当に凄かったぜ！ 俺とアルバートなら、勝てるかもって思ったが……まだまだみたいだな！ 次はもっと、筋肉をさらに鍛えてから試合に臨むことにするぜ！」
「ああ。そうだな。二人ともに、素晴らしい筋肉だった」

ガシツとその大きな手を握る。エヴィの筋肉は依然として素晴らしいものだった。しかし、まだ高みを目指すとは……本当にその向上心には驚いてしまう。

そして俺は、自分の想いを伝える。

「二人とも、改めて礼を言わせてくれ。決勝戦で、戦うことができて本当によかった。友人たちとこうして切磋琢磨する機会など、今までの俺にはなかった。だから、この大会はずっと楽しかった。心が躍っていた。二人と友人になることができて、俺は本当に良かった。ありがとう。エヴィ、アルバート」

心から思ったことを伝える。

今まではずっと、友人というよりは戦友たちが側にいた。もちろん、戦友のみんなも大切な人たちである。

だが、こうして同じ歳の友人と一緒に切磋琢磨することも、俺にとっては本当にかげがえのないものだった。

だから、素直に自分の心情を吐露した。

「いや、俺こそ……礼を言わせてくれ」

アルバートは少しだけ俯きながら、話を続ける。

「俺がここまでくることができたのは、レイと出会うことができたからだ。いや、レイだけじゃない。他の友人たちにも、俺は出会えたからこそ……自己を見つめ直して、前に進むことができた。二人とも、ありがとう」

晴れやかな表情だった。思えば、アルバートとの出会いはいいものではなかった。しかし、今の彼は本当に自己を省みて大きく成長したのだろう。

それは、あの決死に戦う姿を見て分かった。

そうだ。俺たちはこれからきつと、互いに高め合ってゆける。

「俺だってそうだぜ！ 二人に出会えたからこそ、この筋肉もさらにデカくなったからなっ！ へへ、ちょっと照れるがありがとなっ！」

そうだ。俺たちは、決して一人だけでは生きていけない。大切な人たちが、友人たちがいるからこそ、こうして前に進めるのだから。

「よし！ じゃあまたみんなで筋トレでもすつか！ 行こうぜ、レイ！ アルバート！」

「「おうつー!!」」

そして俺たちは、会場を後にするのだった。

きっとそれは、今までの中でも一番心から笑えた瞬間なのかもしれない。

「アメリカ。わざわざ付き添ってくださり、ありがとうございますわ」

「いいのよ。私も、病院には行くつもりだったし」

今はちょうど検査入院をするということで、わたくしはベッドに寝ていました。アメリカが付き添ってくれたのは、本当に嬉しいのですが……欲を言えば。

「レイにも来て欲しいって、思ったでしょ今」

と、アメリカがまるでわたくしの心を読んだかのようなことを言ってきます。奇しくもそれは的中しているので、思いっきり動揺してしまいます。

なんとか隠そうとしますが、やはり自覚した今となってはそれも難しいようです。

「え……っ！？　べ、別にそ、そ、そんなことはありませんよっ……！」

「ふん。まあ……いいけど。アリアーヌがレイに惹かれてたのは、ずっと前から分かってたし」

「は……っ……っ！？」

ずっと前から分かっていたっ……！？

わたくしがこの気持ちに気がつく前から、アメリアは気がついてたというんですのっ……！？

「やっぱり、ね。でも、自分の気持ちにやっと気がついたみたいね」
「そ……それは……っ！」

否定したい気持ちもあります。だって、わたくしはアメリアがレイのことを好きだということを、知っていたのですから。

それをこんな風に、後から好きになるなんて……何だか、反則のような気がしてなりませんの。

でも、それでもやはり……わたくしは、レイのことが好きですの。彼に惹かれていることは事実。ですから、はつきりとアメリアに話すことにしました。

「そう……ですわ。わたくしは、レイのことが好きですわ。それだけ、はつきりとしていますの」

「そっか。なら私たちは、恋のライバルね」

「恋のライバル……？」

「ええ。だって、同じ人を好きになっちゃんだもの」

「アメリア、あなたは……」

彼女は優しく微笑みかけると、わたくしの方へと手を伸ばしてきました。それを握ってもいいのか、わずかに迷いますが……アメリカが無理やり引き寄せるようにしてこの手に触れてきます。

「アリアーヌ。別に私に引け目を感じなくたって、いいのよ。だってレイはとっても魅力的な人だから。きっとこうなるのは、分かってたの。あなたも、レイに触れてもらったんでしょ？ その心に、さ」

「……お見通しみたいですわね。ええ。認めますわ。そして、そうですわね。これからは恋のライバルとして、アメリカと競っていくことにしますわっ!!」

「ふふ。そうこないと、アリアーヌらしくないわね」

と、二人で笑い合っていると、扉の方から声が聞こえてきました。

「あらあら。とても面白いお話をしていますね」

それはなんと……レベツカ先輩でしたの。彼女もまた、レイのことが好きということは知っています。そして何よりも、その本気度合いはアメリカと同等か……いえ、それ以上の執念があるというか。

ともかく、今の話を聞かれたのは非常にまずいと思ってしまいました。すが……。

「やっぱり、私も思っていたんですよ。レイさんとあれだけ近い距離にいれば、いずれこうなってしまうって」

「うんうん。私もずっとそう思っていました」

どうやら二人は完全に同調しているようで、その場で意気投合します。

「それなのですが、レイさんの実家に行った話を詳しく聞かせていただきましょうか？」

レベツカ先輩のことは、昔から知っています。歳こそ二つ上ですが、幼なじみのようなものです。

そんな彼女はとても麗しくて、美しい笑顔を浮かべます。それは、ずっと前から変わらない。

け、けれど……何故でしょうか。

今はこの笑顔がとても怖いんですわっ！

笑ってはいます。確かに、目を細めてニコリと微笑んでいます。しかし、その目は決して笑っていないのです。まるで、深淵でも覗き込んでいるような……。

ひ、ひひひひひひひひ！

一人であまりの恐怖に震えていると、さらにアメリカが追撃してきます。

「あ、そうよ！ 私もちやんと聞かないと！ アリアーヌ、しっかり話してよねっ！」

「あ、あはは……」

もう、どうにでもなれですわ。こうなったら、全部話すしかないですわ。

その後、わたくしたちはまるで昔のように、三人で仲睦まじく話をしました。

レイのどこが魅力的なのか、逆にレイはあまりにも鈍感すぎて先に進むことができない、などなど。たくさん話をしました。

ああ。やっぱり、そうですわ。

レイのおかげで、わたくしたちは成長できたのだと。レイが側にいてくれたから、わたくしたちは再びこうして笑い合うことができるのだと。

彼の存在は、わたくしだけではいいのです。きっと多くの人間を変えているでしょう。

「だーかーらー！ レイさんは私のことを想ってくれているのです！ アメリカさんには負けてませんよっ！」

「ふーんだっ！ 私なんて、レイと一緒に生きていくんだもんっ！ 実質夫婦みたいなものだもんっ！」

「またその話ですかっ！ いつまで同じこと言っんですかっ！」
「ずっと言っもんっ！」

どうやら、気がつけばアメリカとレベツカ先輩は年甲斐もなく、二人で口喧嘩をしていました。

本当に二人とも変わりました。今までわたくしたちは、貴族の宿命に囚われていた。そしてそれをまるで呪いのように、受け入れていました。

今はどうでしょうか。

確かに、状況は変わりません。わたくしたちは、どこまでいっても三大貴族の令嬢であることに変わりはありません。

しかし、レイがいるだけでもこんなにも世界は鮮やかに、美しく見えるなんて。

ああ。本当に全く彼は、不思議な人間ですわ。

「ふふ……」

微笑を浮かべます。

おかしい。ええ、とってもおかしいですわ。

どうしてわたくしたちは、そんな些細な日常を今まで楽しむことができなかったのでしょうか。彼一人がいるだけでも、こんなにも変わるなんて。

本当に、おかしい話ですわ。

「む……アリアー又つてば、余裕の笑顔ねっ！」

「むむむっ！ まさか、私とアメリカさんが知らないリードがあるとかですか……っ！！？」

「ふふ。実は、レイに手料理を目の前で振る舞ってもらいまして…

…」
「く、詳しくっ！！」

そうですわね。

お話をしましょう。もっと、もっと、わたくしたちは語り合うべきなのでしょう。お互いの心に、こうして触れ合っていくのです。う。

わたくしたちは、友人。かけがえのない、友人ですわ。

この友情の果てには、何が待っているのでしょうか。

それはきっと……これから、この先の未来の中で知っていくのでしょう。

チラリと窓越しに外を見ると、深々と雪しんしんが降ってきていました。

雪景色。まるで、雪化粧をしていくかのように、世界は白く染まっています。

もうすぐ、聖歌祭が近づいてきます。

真っ白な世界の中で、わたくしは何を思っているのでしょうか。レイと共に、進んでいくことができるのでしょうか。

いえ。きっと、そうですわね。

一歩乱起きるのは、間違い無いでしょう。

でもそれもきつと、青春には付き物なのでしょう。

進んでいきましょう。

これからも、大切な人たちと共に　　。

第227話 友情の果てに（後書き）

・追記

ページ最下部にて、書籍版の情報を公開しています。イラストの担当は【梱枝りこ先生】になります。講談社ラノベ文庫様より、書籍2巻が11月2日（月）に発売です！ また、コミックス第1巻は11月9日（月）に発売です！

文庫サイズでお求めやすいお値段となっておりますので、よろしく願いたいします！

・あとがき

ということで、四章無事に終了いたしました！ 始まったのは、3/21なので二ヶ月ちよつとですね。いつものように、冗長な面があったとは思いますが、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。実は四章は毎日更新の中で辛い時もあったのですが、皆様の応援のおかげで無事に駆け抜けることができました。

改めて感謝を。本当に、ありがとうございます。

さて、続きですが……番外編（冬休み編）を挟みます。明日の更新は、四章の設定資料集を予定しているので、明後日からですね。

五章は私のTwitter（フォローよろしくです！）でも告知しましたが、レイの過去編です。タイトルは、【追憶の空】でいく予定です。レイがどのようにリディアたちと出会い、極東戦役を経験

し、学院に行くことになったのか。その軌跡を追いかけるような感じですかね。基本は三人称メインで、レイの一人称をそこに混ぜていこうかなと。

また、ここまでお読みいただいて評価がまだの方は、是非ともページ下から を入れていただければと思います！ 今後の執筆の大きなモチベーションになりますので、もし良ければお願いしますー！

最後は宣伝になります。

・講談社ラノベ文庫様より、7/1（水）に書籍第1巻（書き下ろし収録）発売です。イラスト担当は【榎枝りこ先生】で、すでに予約開始してます。メロンブックス様では、B2タペストリーがつく限定版も予約が開始しております。榎枝先生のイラストはそれはもう、素晴らしく可愛いものになっておりますので、ご期待ください！

・コミカライズは、マガポケ（少年マガジン公式漫画アプリ）にて、6/24（水）より連載開始予定です。アプリのダウンロードをよろしくですー！

Web版の更新も続けていきますが、書籍版とコミカライズの方も是非とも、よろしく願います！（……本当に、何卒よろしくお願いいたしますー！）

それでは、また五章で！

第228話 第四章 登場人物とその他設定

第四章 登場人物

・シャーロットⅡハートネット

年齢：17歳。三年生。

容姿：綺麗な色素の薄い青色の髪。スタイルは抜群で、胸はしっかりと出ており腰はキュツと引き締まっている。身長は175センチ。プロフィール：上流貴族、ハートネット家の長女。初めはレイに対して、嫌悪感しかなかったが大会を経て彼の実力を認めるように。また、レイの見た目がドンピシャなため色々と淡い想いを抱いていた……？ 冬休みは一緒に本屋に行けたらいいなあと考えているが、メイドのケイシーとキャシーにはすでに見抜かれている。

・ケイシーⅡシャーリエ（姉）

・キャシーⅡシャーリエ（妹）

年齢：17歳。三年生

容姿：栗色をした茶髪でロングヘア。それを後ろで綺麗にまとめている。身長は165センチ、胸の大きさ、体重、全体の体のバランスは全く同じ。

プロフィール：一卵性双生児であり、その見た目は完全に酷似している。唯一の違いといえば、ケイシーは右目のしたに泣き黒子ほくろがあり、キャシーは左目のしたに泣き黒子がある。シャーロットの専属のメイドであり、幼なじみでもある。最近、レイのことが気になっているシャーロットのことをニヤニヤと見つめるのが楽しいらしい。

・コーディⅡアスター

年齢：18歳。四年生。

容姿：茶髪で髪は少し長め。身長は174センチで、線は細めだが脱ぐとそれなりに筋肉はある。

プロフィール：メルクロス魔術学院の四年生。現在の学生の中でも、もつとも魔術が優れていると言われている。すでに、いくつかの貴族からは婿養子に声がかかっているとか。魔術師の家系としては、下の方ではある。そのため、他の貴族の生徒に疎まれていたりもする。そのような背景があり、レイのことは始めから認めていた。

・フランソワーズ・クレール

年齢：62歳

容姿：肩まで伸びる艶やかな赤色の髪。周囲の髪の長さと比較すると、前髪は極端に短い。服装もまた、子ども用の小さな黒のコートを羽織っている。

プロフィール：七大魔術師が一人、【比翼の魔術師】。現在の七大魔術師の中でも、最年長。見た目は完全に子どもだが、それは謎のまま。魔術的な要因と本人は分析している。基本的には世界を放浪し、たまに学会にふらっと現れる。一応研究者の端くれではあるが、あまり精力的には活動をしていない。レイに対して並々ならぬ思い入れがあるが、リディアにいつも妨害されている。またリーゼとは仲がいいと思っているが、実際は本人がそう思っているだけ。性格的には、自由奔放であり、七大魔術師の中でも一番性格に難がある。

七大魔術師について

- | | |
|------------|-------------|
| 1 【氷剣の魔術師】 | レイ・ホワイト |
| 2 【灼熱の魔術師】 | アビー・ガーネット |
| 3 【幻惑の魔術師】 | キャロル・キャロライン |
| 4 【絶刀の魔術師】 | ルーカス・フォレスト |
| 5 【虚構の魔術師】 | リーゼロッテ・エーデン |

6 【比翼の魔術師】

フランソワーズ＝クレール

7 現時点では不明

第四章 魔術に関して（固有魔術^{オリジン}）

・ ^{エメラルドガーデン}翠玉の庭。

深い緑色の世界を構築する、広域干渉系の固有魔術^{オリジン}。特徴としては、指定した範囲の第一質料^{プリママテリア}を操作することにある。具体的には、自分の周囲には第一質料を集め、一方で相手には第一質料^{プリママテリア}をあまり渡さないという使い方ができる。また、変幻自在に伸びる植物のツタを触手のように操ることもできる。

・ ^{ホワイトリバー}白夜反転。

広域干渉系の固有魔術^{オリジン}。展開した範囲での、第一質料^{プリママテリア}を消失させる。ただし、あくまで第一質料^{プリママテリア}を抑制するだけであり、完全に無くすわけではない。その点では、レイの対物質コード^{アンチマテリアル}とは完全に別物である。展開した際には、すでに発動している魔術は全て無効化できる。しかし、自分自身も魔術が使えなくなるという弱点も存在する。

・ ^{インパルス}紫黒雷光

内部コード系の固有魔術^{オリジン}。体内の生体電流を操作して、それを末梢神経に流すことで反応速度をさらに高めることができる。また、溢れ出る紫黒の電撃は自由自在に操ることができる。色合いが、紫黒なのはアリアヌの生来の第一質料^{プリママテリア}から起因しているものである。完全に近接戦闘に特化した固有魔術^{オリジン}であり、反応速度、一撃の威力は魔術の中でも最上位に位置する。ただし、消耗はかなり激しい。

第229話 悲しきすれ違い

マギクス・ウォー
大規模魔術戦が無事に終わりを迎えた。それに伴って、学院も同時に終了式を行い、ついに冬休みがやってくることになった。

冬休みの予定といえば、夏休みほど予定は入っていない。というのも、それは冬休みの方が期間が短いからだ。そんな中、おそらくは一番のメインとなるのは聖歌祭だろう。

毎年、十二月二十五日に催される祭り。

起源は王国の聖堂で、聖歌を歌うことから始まったらしい。そこから徐々に発展していき、今ではこのアーノルド王国の中でも一番のイベントとなっている。

昔は家族と過ごすことが多かったようだが、今は恋人と過ごすのもこの聖歌祭の醍醐味でもあるとか。

今までは、聖歌祭に参加したことはない。療養期間中に家族で行こうかという話もあったが、その時期は両親も仕事で忙しく、俺とステラだけでは心許ない……ということに参加したことはなかった。

しかし、今年は違う。

それはなんと聖歌祭のパーティーに俺が招待されているからだ。それは魔術協会主催で、【氷剣の魔術師】として招待されているのだが、今年はいいい機会だから行ってみようと思っている。

それに貴族も多く来るということで、知り合いがゼロというわけではないしな。

「レイさんっ！ 優勝おめでとうございますっ！」

優勝した後、レベツカ先輩はとても嬉しそうに微笑みながら俺の元へとやってきた。その日はちょうど、アルバートとエヴィと別れてアメリカたちのもとに向かおうとしていたのだが、その途中でレベツカ先輩に偶然出会ったのだ。

「ありがとうございます。ギリギリの戦いでしたが、なんとか優勝することができました」

「ほんつとくに、すごい戦いでしたっ！ レイさん、とってもカッコよかったですよっ！」

「それは恐縮です」

レベツカ先輩との距離感がグツと近づく。最近思うのだが、先輩は話すときに妙に近いというか、上目遣いを意識してるような……？ 気がするのだ。

まあ、俺の考えすぎかもしれないので、特に言及することはないのだが。

「あの……実は、ちょっとお話しがありまして……」
「何でしょうか」

俯くと、髪をくるくると指に巻きつけるような仕草を見せる。何かを言い澀んでいるようだった。

「今日はその……十二月、二十三日ですよ？」

「そうですね」

「レイさんは、その……聖歌祭を誰かと参加するのですか？」

「いえ特に予定はないです。魔術協会へのパーティーに出るくらいですかね」

レベツカ先輩は潤む瞳で俺のことを見上げてきた。

なるほど。聖歌祭についてか。聖歌祭に関して、俺は特に今年は予定は入っていない。確か夜には、師匠と一緒に食事でもしようかと話していたが、それまではフリーだ。

それに、聖歌祭の前日もまた近年ではかなり盛り上がるらしい。

十二月、二十四と二十五日はこの王国民にとって重要な祭事だとか。

「そ、それでしたらっ！ 明日はだ、大丈夫ですかっ！！？」

顔を赤く染めて、グイツとさらに近寄ってくる。少しだけ息も荒くて、どうやら緊張している様子が窺える。もちろん、二十五日の夜以外は特に用事はないので、すぐに返答をする。

「はい。時間は大丈夫です」

「ほ、本当ですか……？」

手をギュッと胸の前で組むと、改めてそう尋ねてくる。

「はい。特に予定はありませんので」

すると、「やったっ……！」とレベツカ先輩は小さくガッツポーズをする。どうやら、余程誰かと遊びに行きたかったようだ。先輩も色々とおっただろうし、きっと羽を伸ばしたいのだろう。

「で、ではっ！ 明日の十時に中央区の噴水の前に集まりましょうっ！」

「はい。わかりました」

彼女はその場で何度も頭を下げて大きく手を振ると、まるでスキップでもしそうな感じでそのまま去っていった。去り際には、少しだけ鼻歌も聞こえた。

そうして俺は、改めてアメリカとアリアーヌのいる病院に向かうのだった。

「それで、明日はみんなで遊びに行かないか？」

現在はちょうど、アメリカとアリアーヌが入院している部屋にやってきていた。入院といってもすぐに退院できるらしい。今日の夜には、二人とも実家に戻ると聞いている。

「えっとその……レイ」

「どうしたアメリカ」

「レベツカ先輩に、誘われたのよね？」

「ああ。でも、遊ぶといったら数は多い方がいいだろう。この後も、みんなに声をかけようと思っている」

「……」

頭に手を当てて、その場でじっと静止するアメリカ。そうしていると、アリアーもまた「はぁ……」と大きな嘆息をつく。

「レイってば……はぁ……。まあ、分かっていましたけど。その…アメリカとレベッカ先輩の今までの苦労がわかるようすわ」

「でしょ？ いや、いいんだけどね。こうして先んじて、話をしてもらったのは、ね。きつと、そうすると思ってたし。でもちよっと先輩には同情するかも」

「ですわねえ……」

虚空を見つめるようにして、二人は呆然とした様子ながら、今度は揃ってため息をついた。

む。もしかして俺は、何か間違ってしまったのだろうか。

しかし、せつかくの聖歌祭なのだ。みんなで楽しもうという気持ち、ちは、間違っていないと思うのだが……。

「ま、レベッカ先輩には悪いけど……」

「そうですわね」

二人でどうやら何かを合意したらしく、そのまま了承してくれた。最後まで俺のことを可哀想な人を見つめるような視線を送っていたが、あれは何だったのだろうか……。

そうして病院から去ろうとしていると、久しぶりに金色のツインテールが靡いているのが目に入った。

「あつ！ レイじゃないっ！」

「本当だ！ レイクんだね……っ！」

そう。そこにいたのは、クラリスとエリサだった。どうやら二人とも、アメリカたちの見舞いに来てくれたのだから。

「あんた、試合凄かったわよっ！」

「うんうんっ！ 手に汗にぎる試合だったねっ！ 優勝おめでとう！」

「ふん！ 特別に祝ってあげるわっ！ おめでとっ！」

と、その場で飛び跳ねそうな勢いで喜んでいる二人。俺はそんな二人に対して、改めて感謝を述べるのだった。

「二人とも、ありがとう。今回の優勝は、みんなの応援があったからこそだ。本当に感謝する」

その後、俺は元々エリサとクラリスも誘う気だったので、明日の予定を尋ねてみることにした。すると、アメリカたちと同じように顔を曇らせるのだった。

「うーん。いや、私は別にいいけどねえ」

「わ、私も大丈夫だよっ……！ でも……」

同じような反応。一体何が問題なのか。気になったので、詳しく聞いてみることにした。

「何か問題があるのだろうか。アメリカとアリアーヌも同じ反応でな。詳しく教えてもらえると助かる」

「えっと。じゃあ言うけどさ」

クラリスがじつと半眼で睨むようにして、俺のことを見上げてくる。

「あんだ、その誘いつて……二人きりって言われなかったの？」
「……」

あの時、レベッカ先輩とした話を思い出す。しかし、二人きりで行こうという話は聞いていないはずだ。

「いや、特に言われていないな」

「はぁ……言われてないとしても、そこは察してあげなさいよ。まあ、レイはいつも通りなのかもしれないけど」

「う、うん……そうだねえ……」

その後は、クラリスとエリサも渋々了承してくれた。元々、優勝祝いでみんなどこかに行きたいという話は出ていたようだったが……妙に歯切れが悪いのは、謎のままだった。

そして、一人で帰路へと着く。

もう完全に冬だ。時間もまた夜ではないが、完全に日は暮れようとしている。街灯も点灯し始めて、そんな薄暗闇の中を一人で進んでいく。

「雪、か？」

顔に冷たい感触を覚える。

空を見上げると、雪が降り始めていた。

そうか。もう……そんな季節なんだな。

冬。雪。そして、この冷たい感触。

否応なく、過去を想起させる。極東戦役に巻き込まれた、あの日のことを。

だが俺はもう、一人ではない。

数多くの大切な人たちが、俺にはたくさんいるのだから。

明日、みんなで遊びに行くのが本当に楽しみだ。

第230話 修羅場へようこそ

「ふんふんふん」

早朝、ブラッドリイ家。

現在は朝の五時前。レベッカは朝早く起きると、さっそく準備を始めていた。

前日に着る服は決めていたので、今は髪を綺麗に整えている。

また聖歌祭が近づいているということもあり、レベッカは今実家に戻ってきているのだった。

「……ふわぁゝあ。って、お姉ちゃんどうしたの。こんな朝早くに」

その場にマリアがやってくる。彼女は朝は弱く、だいたい休日は昼近くまで寝ている。今もちよっとトイレに行こうかと思っていたときに、レベッカの姿が目に入ったので声をかけたのだ。

「えへへ……その、実は」

レベッカは少しだけ顔を緩めると、今日はレイと二人きりでデートに行くのだと言った。それはもう、心から幸せそうに。

そんな姉の様子を見て、マリアは嘆息を漏らす。

「はあ。それは楽しそうでしたね」

「じ、実はその……今日は下着にも気合を入れてるの……っ！」

「え……下着？　つまり、勝負下着ってこと……？」

マリアは啞然とした表情を浮かべる。彼女としても、レベツカが下着にこだわる理由が分からないわけではなかった。

「ま、まあその……。な、何があるか分からないし？」

その艶やかな真つ黒な髪をくるくると人差し指に巻きつけると、顔を桜色に染める。

その話を聞いて、思わずマリアは声を荒げるのだった。

「ええええええええええええええええ！？」　レイとそいつのことするってことっ……！！？」

「べ、別に決まったわけではないけど！でもその……ね、念のためっていうかっ！」

「ええ……マジで？ いやでも……レイがそういうことするなんて、思えないんだけど」

⋮

スツと顔が真っ白に変わるレベル。元々は、可能性として準備していただけだった。

そんなこともあれば、いいかなあ。または、そうなったらどうしよう、と
思っているだけだったのだが、いざマリアに指摘されると、
レイがそんなことをしてくるとは思えないのだ。

「……まあ、一応の準備よつ！」

「お姉ちゃんさ。変わったよね」

ボソリと呟くそうにして、マリアは思ったことを口にする。

「そ、そう？」

「うん。でも、今のお姉ちゃんも好きだよ。頑張つてね」

そうしてマリアはスタスタと、その場から去っていく。

「よし！ 準備頑張らなくちゃっ！」

と、自分を奮い立たせるとレベツカはさらに入念に準備を始める。まずは、髪の毛をアップにまとめると、サイドの髪をわずかに垂らす。また髪には少しだけオイルを塗ってある。

艶やかに光るその髪は、どこか妖艶に見える。

顔にも軽く化粧をするが、それは最低限の範疇に収める。清楚な姿をレイには見せたいということもあって、レベツカはそうすることにしたのだ。

その後、再び下着を入念に確認する。今日は勝負下着ということもあって、上下共にお揃いの、下ろし立ての真っ白な下着である。

服装もまた真っ白なブラウスに、この季節には寒いが黒のミニスカート。上に羽織るコートは純白のものを選択した。

明らかに気合の入っているその容姿は、おそらく街に出れば十人中十人が振り向くものだろう。

三大貴族の令嬢、ということを知らない人間でもその美しさには目を引かれてしまう。

「よし。今日は頑張ろっ！」

自分を奮い立たせると、レベツカは予定よりも一時間早く集合場所へと向かうのだった。

どうやら昨晚はかなり雪が降ったようで、外に出ると見渡す限りの白銀の世界が広がっていた。

シャク、シャク、と雪を踏み締める音が鳴る。レベツカは転倒しないように最大限に注意を払いながら、まっすぐ歩みを進める。

マフラーに手袋。防寒対策はしっかりとしているが、このミニスカートから伸びるしなやかな脚は、あまりの寒さに少しだけ赤くなっていた。

だが、美は我慢である。

レイに最も美しい姿を見てもらいたい彼女にとって、この程度の寒さは余裕を持って我慢できる範疇であった。

「……」

忙しなく髪を触り、手元にある小さな鏡を見て何度も自分の姿を

確認する。

うん。おかしいところはないはず。大丈夫、ちゃんと大丈夫……っ！

そう自分を落着かせていると、その視界の中に捉えたのは……レイではなかった。

「アメリカさん？ それに、アリアーヌさんも……？」

ポカンとするレベッカだが、それはそうだろう。この場にはレイがやってきて、今日は二人きりでデートをする予定だったのだから。

「えっとその……お二人とも、どうしてここに？」

笑顔。いつものように、とても美しい魅力的な顔を作り上げるがそれは圧倒的な威圧感を放っていた。わずかにだが、プリママテリア第一質料も漏れ始めていた。

「はぁ……この様子だと、全く知らないみたいね」

「そうですね。レイってば、本当に罪人ですわ」

二人ともにため息をつく。

その様子を見て、レベッカはある一つの真実にたどり着いてしまった。

そう。レベッカは二人きりで遊びに行こうとは、一言も口にして

いないのだ。

この聖歌祭の期間に男女で遊びに行くということは、ある種の暗黙の了解。

レベッカの唯一の失敗は、しっかりと念入りに確認をしなかったことだ。

というのも、彼女はかなり緊張して、相当の覚悟を持ってレイを誘ったのだ。その時は、正直なところかなり慌てていた。

だから、レイに大丈夫と言われてすっかりと抜けて落ちてしまったのだ。

二人きりでいくなれば、きっとレイはそれに応じていたというのに……。

「も、もしかして……お二人ともレイさんに誘われて？」

震えるような声で確認を取る。

そんなレベッカに同情しているのか、アメリカは悲しそうにそれに応えるのだった。

「はい。ちなみに、私たちだけじゃなくて他にも大勢来ますよ」

「あ……ああ……ああ……っ！」

わなわなと震える。

あの時の自分の決死の覚悟は何だったのか。今日の早朝の努力は何だったのか。この勝負下着を揃えた自分は何だったのか。

レイのことを愛しているにもかかわらず、恋は盲目ということで重要なことが抜け落ちていたのだ。

レイは……それはもう、筋金入りの朴念仁だということが。

「レベツカ先輩。一人だけ、抜け駆けしようとしたってダメですよ？」

それは宣戦布告。こうしてアメリカがやってきたのは牽制の意味合いがあった。もちろん、それはアリアーヌも同様である。

「そうですわっ！　お一人だけ、先に行かせるわけにはいきませんわっ！」

二人にそう言われて、もちろん黙っておくレベツカではない。彼女はすぐに顔をあげると、二人の顔を半眼でじつと見つめる。

「……こほん。どうやら、今日の件は悲しい事故みたいですわ。いいでしょう。レイさんの美德でもありますし。きっと彼のことから、みんなと一緒に遊びに行った方がいいと思ったのですわ。本当に、【お友達】想いな方です」

その言葉の中で、敢えて【友達】を強調した理由をアメリカとアリアーヌも気がついていないわけではない。

「へえ……まあ、そうですね。レイは確かに、【友達】想いですねえ……」

「わ、わたくしは友人よりも先に行ってみせますわっ！」

そうして三人は互いを睨み合うようにして、その場で静止する。

「「「……」」」

互いに絶対に譲らないという気概を持って、その視線に力を込める。今日はこのような形になってしまったが、特別な日であることには変わりはない。

ここで大きくリードすることができれば、今後の展開は大きく変わってくるかもしれない。

三大貴族の令嬢たちによる、ある種の戦争が　幕を上げようとした。

「早めに出たつもりだったが、一番乗りではなかったか」

やってきたのは、レイだった。いつもとは違って、今日は私服だ。紺色のパンツスタイルに、真っ黒なロングコートを羽織っている。コートの下にはジャケットを着ているようで、いつもよりも大人っぽく見える。

そんな彼の姿を捉えると、ついに戦いが始まるのだった。

果たしてレイは無事に、帰宅することができるのだろうか。

第231話 乙女の戦い！

俺とエヴィは集合場所へとやってきた。

そこにはすでに、アメリカ、アリアーヌ、レベッカ先輩がその場に
いるようだった。

しかし、睨み合っているというか、牽制をしているというか……
あまりいい雰囲気ではなさそうだった。

もしかして、ケンカの類か？

この三人が特に仲が悪いという話は聞いていないが　むしろ、
ここ最近はいいと思っている　人間関係は色々とあるだろう。

ここは仲介すべきだな。

「三人とも、喧嘩はよくない。まずは冷静に話し合ってたな」

俺の言葉を合図にするかのように三人は俺の方を見てくるが、そ
れは半眼でじっと見上げるような形だった。

う……流石に三人同時だと圧があるな……。

「レ・イ・さーん」

その中でもニコニコと笑いながら近づいてくるのは、レベッカ先

輩だった。今日も先輩は、とても美しい。髪型もアップにして、それに少し化粧もしているみたいだ。服装も、とてもよく似合っている。

少し短めのスカートは寒そうだが、キャロル曰く　美は我慢らしいからな。

それに羽織っている純白のコートもよく似合っている。

「今日は他の方も誘いいただいたみたいですね」

「はい。大人数の方が楽しいと思ひまして」

「うんうん。それは私も、そう思ひます。ありがとうございますね」
「いえ……恐縮ですが……」

なんだ……この圧倒的な圧力は。
プレッシャー

プレッシャー以前にも感じたことがあるのだが、レベルカ先輩は時折、圧倒的な圧力を放つことがある。

それもちろん、魔術的な意味合ひではない。
プリママテリア第一質料も質料領域も、正常である。

だが、この圧力はなぜだろうか。
プレッシャー

妙に寒気がするのだ　それこそ、からだの芯から震えるような。

極東戦役において、幾度なく極限の状態に迫ることはあった。それこそ、死を覚悟したことは数えきれない。

そのような状況下でも相手の圧力に吞まれることはなかった。
プレッシャー

しかし、レベツカ先輩のそれは質が違うのだ。

笑っている。一見すれば、いつものように美しい笑顔を浮かべているが、その後ろには何か巨大な意志を感じるのだ。

それに、笑うことで薄くなっている目がこちらをじっと見つめているようにも思える。

恐怖。

俺は今、圧倒的な恐怖に支配されているとでもいうのか……？
幾多もの戦場を駆け抜けてきた、この俺が……？

お、落ち着け。まずはいつものように、会話をするんだ……。

ここは師匠の教えに従うべきだっ！

「それにしても、先輩。今日はとても綺麗ですね。髪型もアップにまとめて、いつもと印象が違います、とても可愛らしいです。それに、その羽織っている純白のコートもよくお似合いです。先輩は黒くて美しい髪と相まって、白がとてもよく似合いますね」

と、いつものように褒めると顔が徐々に赤く染まっていく。

「えっと……っ！ その……！ あ、ありがとうございますっ！」

途端にその圧力は完全に消失。
フレッシャー

とりあえず、事なきを得たようでホツとするが、本当にあれは何だったのだろうか。

「ふん。レベツカ先輩を先に褒めるんだ……」

「なるほど。レイは本当に、いつも通りのようすわね。うふふ」

依然として、アメリアとアリアー又は半眼で俺を見つめている。いや、睨み付けていると言った方が適切だろう。

「もちろん、アメリアとアリアーもよく似合っている。この雪景色によく映えていると思うぞ」

「う……っ！」

「こ、これが天然の技ですね……っ！ 凄い効果ですわっ……！」

と、何やらザワザワと騒いでいる二人だったが、その一方で残りのメンバーたちが到着する。

クラリスとエリサがやってくると、最後にはアルバートがやってくる。

「ふふんっ！ 特別に来てあげたわよっ！」

「えっと……今日は誘ってくれて、ありがと。レイくん」

「いや、こちらこそ来てくれて感謝する。最近は大会で会うことがあまりできなかったからな。今日は存分に楽しもう」

エリサとクラリスにそう言葉をかけると、アルバートはエヴィと互いの筋肉をすでに見せてあつてるようだった。

「エヴィ。服の上からでも良く分かるその筋肉は、やはり素晴らし

いな」

「へへ。そうか？ でも、アルバートもガタイ良くなったよなあ。入学当初とは見違えるほどだぜ」

「ふ。俺も、筋肉に目覚めたからな」

どうやら、二人は決勝戦でそれなりに負傷していたようだったが、すでに完治しているようだった。というのも、治療はアビーさんとキャロルがしっかりと対処してくれたからだ。

大会に際して入念に準備していたため、対応も早かったとか。

「よし。では、向かうか」

今日の予定としては、全員で遊びに行くといっても、どこに行くかを明確に決めているわけではない。

しかし、女性が五人、男性が三人ということではまずウインドウショッピングをしようという話になった。

もちろん男性陣は、荷物持ちである。

「……では、レイさんのお隣は私が失礼しますね」

「構いませんが、その少し近くありませんか？」

「え？ そうですか？」

「いえ。レベルカ先輩が気にしないのでしたら、構いませんが」

「はい。私は別に普通と思うので、このまま側にいますね」

その言葉はとても物腰柔らかいものだが、有無を言わせない気迫があったような……。すると、俺の左隣にはアメリカがスツと並ぶのだった。

「じゃあ、私はこっちで」

アメリカと先輩に挟まれるようにして、俺達はとりあえずまっすぐ進んでいく。

そして後ろからは、「あれって……やばくない？」「しっ！ クラリスちゃん！ それは黙っておかないと……！」「わたくしは……ちよつと後ろで観察しておきますわ……」「ふむ……やはり、上腕二頭筋の調子が良くなってな」「それなら、俺のおすすめのトレーニングがあるぜ？」という声が聞こえたきた。

アリアー又はこのメンバーの中に混じるのは初めてだが、エリサとクラリスとは別に初対面というわけでもないので、普通に話しているようだった。

「うふふ……」

「ふんっ！ 負けないもんっ！」

気がつけば、俺の両腕にはアメリカとレベルカ先輩が絡みつくようにして、ぴったりとくっついていた。

流石に動きづらいので、離れるように促そうとするが……本能が告げているのだ。

この場では余計なことはしないほうがいい、と。

コート越しにはなるが、二人のその豊満な胸の感触が腕に残ってしまう。流石の俺でも、これはまずいのでは……？ と思うがこの圧倒的な雰囲気俺に発言を許さない。

師匠の教えでも、このようなケースでは下手に事を荒立てないほうがいいと言われている。ここは静観しておくべきだろう。

その後、全員で買い物を楽しむと、公園で食事を取ることにした。今日は俺が誘ったということで、実は昨晩から仕込みをして弁当を持ってきていたのだ。

寒さもあるが、そこは魔術で温めれば大丈夫だろう。

「ということで、サンドイッチを持参している。後は唐揚げと、サラダ各種だな。是非、堪能してほしい」

『おおおおおっ！！！』

全員が声を揃える。

それぞれが並んでいるベンチに座ると、早速その弁当の中身をそれぞれ取り分けていく。今日はかなりの自信作であり、腕によりをかけて作った。

きつと、みんなの口に合うことは間違い無いだろう。

「うまつ！ レイつてば、本当になんでもできるわね！」

「う……うん！ 美味しいね……っ！」

クラリスはその金色のツインテールをぴよこぴよこと動かし、エリサはハーフェルフ特有の長い耳が忙しく動いていた。

男性陣といえば……。

「む……っ！ これは、ローカロリー、高タンパク質の素晴らしい料理だな！ 特にこのサンドイッチ……ささみを使っているというのに、このジューシーな感じ……やるな」

「レイの手料理はたまに食べるが、いつも通り美味しいな」

アルバートとエヴィも大満足なようだった。そうして、俺はちょうど席の空いているところに座る。そこで、アリアーヌが一人ではむはむとサンドイッチを頬張っていた。

アメリアとレベツカ先輩といえば、よほど仲がいいのか二人でじつと互いの顔を見つめ合いながら食事を取っていた。

「あ……えっと……その。レイ、とっても美味しいですわ」

「そうか。それならよかった」

アリアーヌの様子は、なんだか大会を経て少しだけ変わったような気がする。俺と話すときには妙にソワソワとしているし、顔もいつも赤い。それに視線を頑なに合わせようとしてこないのだ。

「もしかして、俺は何か気に触ることをしてしまっただろうか？」

「え……っ！！？ べ、別に何もありませんのよっ！？」

「そうか？」

「ええ。ちよつとまだ感情が追いつかないというか、色々と困惑しているだけなのでっ！」

「よく分らないが、大丈夫なのか？」

「ええ！ 時間が経てば大丈夫だと思いますわ！」

ドンツとその胸を軽く叩き、大丈夫だということをアピールしてくれる。

どうやら、杞憂だったみたいだな。

「それにしても、アリアーヌに手料理を振る舞うのはこの前ぶりだな。あの時は、後ろから支えてやったな」

「も、もう……っ！ あの時のことは恥ずかしいので、忘れてくださいましっ！」

プイっとわざとらしく、顔を背ける。そんな仕草も、どこか可愛らしいと思ったが……俺たちの後ろには、気がつけばヌツとアメリカとレベツカ先輩が立っていた。

「へえ……その話、詳しく聞いてないんだけど？」

「アリアーヌさんは一番リードしているように、思いますねえ……ええ。これは、仲良くお話をする必要がありますねえ……」

「あ……これはその……っ！ い、いやあああああ！ わたくしは無実ですわあああああっ！」

断末魔の声とともに、アリアーヌは鬼気迫った二人に連れ去られてしまった。よく分からないが、そつとして置くのが吉だろう。

師匠にも、女性のいざこざには下手に首を突っ込まないほうがいいと言われているしな。

アリアーヌ。よく分からないが、君の犠牲は忘れない。

第232話 雪合戦をしよう！

「ふう……」

食事を取ったところで、何をしようかと思っていたところ、ちょうど目の前ではクラリスがツインテールを靡かせながらコロコロと雪玉を転がしていた。

「クラリス。何をしているんだ？」

「見ればわかるでしょっ！」

と、鼻を真つ赤にしながら彼女は大きな声でそう言うてくる。俺は見ても分からないので、詳しく聞いてみることにした。

「すまない。見ても分からないんだが」

「ふふん！ 雪だるまよっ！」

「雪だるま？」

雪だるま。確か、話には聞いたことがある気がする。大きな雪玉を二つ重ねて、成形するものとか。ちょうどエリサもまた、隣で小さな雪玉を一生懸命に転がしていた。

「エリサも作っているのか？」

「う……うんっ！ クラリスちゃんが大きいのを作りたいからって！」

「なるほど……」

雪だるまか。

冬に雪遊びをすることはあまりなかったのだが、これもいい機会だろう。

ということで、俺もまたその雪だるまを作ることにした。

「おお！ 雪だるまかつ！」

「ふむ。では、俺たちはアレをやってみるか」

エヴィとアルバートもまた、かなりやる気があるようだった。ちようど食事を取り終わったので、腹ごなしにはちようどいい。

そうして俺たちは手分けして、複数の雪だるまを作ってみることにした。

今日は幸いなことに、昨夜かなり雪が降ったようなので十分に雪だるまを作るだけの雪は残っている。

まずは手で小さな雪玉を作ると、それを腰を低くしながら器用に転がしていく。転がせば転がすほど、雪玉は徐々に大きくなっていき、その作業を淡々と続ける。

気がつけば、エリサとクラリスは二人で大きな雪だるまを作り上げていた。

バランスを整えるために、上下の雪の量は調整しているようだった。上の方は小さく、下の方はどっしりとしている。

「よし！ こんなものね！」

「うん……可愛いねっ！」

その隣で、エヴィとアルバートは大きなかまくらを作り上げていた。

かまくらから……極東戦役の頃は、氷を整形して魔術によって壁を作って戦闘をしていた時もあった。

かまくらはそれに近いようなものに感じた。俺は、ひとまず作っている雪玉をそつとその場に置くと、二人の元へと近づいていくのだった。

「二人とも、なかなかいいかまくらだな」

「へへ！ 昔から、これを作るのは得意でな！」

「ふ。俺も久しぶりに、心が踊っている」

その中を見ると、しつかりと大きな空間が作られていた。そこにエリサとクラリスを呼ぶと、ちょうど二人はすっぽりと入るほどには、大きな空間だった。

「うわ……っ！ すっごい、広いわね！」

「そうだね……っ！ すごいね……っ！」

と、二人ともにはしゃいでいるようだった。こうして雪遊びをするのは、意外と楽しいものだったと思った。

いやきつとそれは、雪遊びが楽しいのではなく、みんなで遊ぶのが楽しいに違いない。

その後。俺は一人で、淡々と雪玉を転がし続けた。ころころ、こ

るころ、ころころ、と一心不乱に雪玉を転がしていく。

すると、ちょうどいい大きさになったので次は上の部分を作っていく。

下よりも大きくなる必要はないので、意外とあっさりと終了。それを上に乗せると、ちょうど自分の身長くらいの大きな雪だるまが完成するのだった。

「よし……っ！」

すると、完成した俺の雪だるまをみんなも見にくるのだった。

「うわ！ でかつ！ レイ、あんたやりすぎよっ！」

「うわぁ……大きいねえ……」

クラリスは俺に向かってそういうが、興奮しているのか、ツインテールはぴよぴよこと上下に激しく動いていた。

エリサもまた、この大きさに唖然としているようだった。

「ふふふ。レイ、どうやら……俺の方が大きいみたいだな！」

「む……エヴィ。やるな」

気がつけば、さらに隣にはエヴィの作った巨大な雪だるまが生まれていた。しかし、その隣には……。

「ふ。雪だるまには、自信がある。俺のものが一番大きいな」

そう。アルバートが作った雪だるまは、その中でも一番巨大なも

のだった。それこそ、俺たちの身長を僅かに超えるほどには。

没頭して作業していたので気がつかなかったが、いつの間に……
こんなものを……。

「むむむ！ 私だって、負けないわよっ！」

「あ。待ってよー！ クラリスちゃんっ！」

パタパタと走っていく二人。そうして俺たちは、さらに雪だるま作りに没頭するのだった。

「え……」

「何これ」

「でっかい！ でっかいですわっ！」

アリアーヌを連れ去ってどこかへ消えていたアメリカとレベッカ先輩だが、ちょうど三人ともに帰ってきた。

もちろん、三人はかなり驚いているようだった。しかしそれも無理はない。

この場にはすでに十を超える雪だるまがあるのだから。それに、そのサイズも徐々に大きくなっている。

すでに人の体を優に超えるものまで、できていたのだ。

最後には個別ではなく、全員で協力しようということになって五人で一番大きな雪だるまを作った。

少々汗をかいてしまったが、とてもいいものができたと思う。

「ええ……普通にちよつと凄すぎて、引くんだけど……」

アメリカは驚いているというよりも、少しだけ引いていた。その一方で、レベツカ先輩とアリアーヌはテンションが上がっていた。

「すごい！　すごい！　とっても大きいですね！」

「ワンダフルですわっ！　みんな、やりますわねっ！」

大きな雪だるまの周りをパタパタと走って眺める様子は、どこか微笑ましかった。

そしてちよつど、三人が帰ってきたところでアレをしようと思っていたのだ。

「よし。では、雪合戦をしようっ！」

俺はそう、高らかに宣言をする。

「雪合戦！　それは滾^{たぎ}りますわねっ！」

すでにこの場に残っていたメンバーには伝えてあったので、あとはアメリカ、アリアーヌ、レベツカ先輩の許可を取るだけだ。

「雪合戦ですかっ！　それは楽しそうですねっ！」

「ふん。雪合戦かあ……やってもいいけど。ふふふ」

ということで、俺たちはさっそくチーム分けをすることになった。グーとパーで別れると、ちよつど二回目で四人ずつに別れることに

なつた。

俺、クラリス、アルバート、アリアーヌ。

エヴィ、アメリカ、レベツカ先輩、エリサ。

このチーム構成になつたので、俺たちはとりあえずは雪の壁をいくつか作ると、それをギユツと固めていく。

魔術の使用は不可だが、こうして準備をする時には魔術を使って時間を短縮する。

ルールとしては、一度当たれば終了。先に全員当てられた方が、負けである。

「では、スタートだッ!」

そう声をあげたと同時に、相手側からこれでもか雪玉が飛んで来る。それはまさに、雪の弾幕。

おそらくは、生成するにあたってプロ級の人材がいるに違いない。俺の予想だが、それはきつとエリサだろう。彼女は細かな作業が得意だ。きつとあの壁の後ろで、せつせと雪玉を作っているのだろう。

「レイ、どうするの?」

クラリスが指示を待っている。アルバートとアリアーヌもまた、俺の言葉を待っているようだった。

「まずはエリサを狙うべきだろう。きつとあの火力は、エリサが根

幹になっている」

「「了解（よ！）（ですわ！）！」「」

そうして俺たちは徐々に前線を上げていく。向こうのチームとは違って、弾幕で押すのではなく、じりじりと前線を上げる。

そして、手元にある数少ない雪玉を的確に狙っていく。

「ふははは！ 俺の筋肉の前には、雪玉なんか効かないぜ！！」

エヴィがその巨体を見せつけるようにして出てくるが、ぽいっとクラリスが雪玉を投げると直撃。

「エヴィ。退場だ」

「し、しまった！ つい、やっちゃったぜ！」

そうして残りのメンバーはレベッカ先輩、アメリア、エリサの三人だ。一箇所から狙うのではなく、複数の方向から狙いを定める。俗にいう、クロスを組むというやつだ。

ハンドサインで指示を送ると、颯爽と雪玉が次々と放たれていく。

「あらら。当たっちゃいましたね……」

レベッカ先輩は退場となった。しかし、あちらの根幹であるエリサはその姿をなかなか見せようとはしない。

アメリアは、なんとかエリサと二人で耐え切っているようだった。

「さて、どうするか……」

と、思考しているとクラリスの声が聞こえてくる。

「いたっ！ うう……当たったみたい……でもどこから？」

とぼとぼとこの場から離脱するクラリス。どうやら、こちらのチームの残りは俺、アルバート、アリアーヌだけになったが……次の瞬間。

アルバートが雪玉に当たってしまうのだった。

「む。当たってしまったか。しかし、全く見えなかったな」

そうしてついに、状況は二対二になった。ここでどう動くべきか、果たして……。

それにしても、クラリスとアルバートを狙い撃ちにしたのはなかなかすごいな。

しっかりと壁の後ろに隠れていたというのに、いつの間にか前線を上げてきていたのだろうか。

「うわっ！！」

「おっと……大丈夫か？」

ズルツとアリアーヌが足を滑らしたようなので、俺はしっかりと彼女を支える。完全に抱き合うような形になってしまったが、仕方がない。彼女はコートを脱いで薄着になっていたので、色々と柔らかな部分が否応なしに押し付けられる。

「あ！ も、申し訳ありませんわっ！」
「いや。怪我がないのなら、良かった」

二人でそう話していると、再びレベルカ先輩からブワツと圧倒的な圧力が放たれる。先輩は、「うふふ。レイさんとアリアーヌさんってば……うふふ……」と笑っているのだが、目が完全に笑っていないかった。

それに驚いた俺たちは、とりあえずすぐにこの戦いに意識を切り替える。

「あれは……もしかして……」

見えてしまった。

それは絶対に、見間違いではないだろう。

そう。一番奥の壁から、真つ赤な第一質料プリママテリアの残滓が見えたのだ。それに、蝶の羽のようなものもチラリと見えた気がしたのだ。

赤い燐光りんこうがわずかに漏れている。

「レイ、アレは……」

「ああ。どうやら……」

と、呆れた顔をしながらアリアーヌと共に、二人が隠れているであろう壁へと颯爽と向かう。

「へっ……！！？ い、いつの間につ……！！？」

アメリカは明らかに慌てているようだった。それに後ろには、間違いない……因果律蝶々の兆候が残っていた。
バタフライエフェクト

エリサはアメリカに口を封じられ、「んんんんっ！」と助けを求めているようだった。どうやらエリサは教えてくれようとしていたんだな。

「アメリカ。魔術の使用は、反則だと言ったが？」

「あ、あはは……べ、別に負けそうになったから使ったとか、今の私なら完璧に制御できるから、バレるわけない、とか思っていないのよ?」

アリアーヌと共に、その場で辟易するようにして首を横に振るう。

「はあ……アメリカは昔から狡賢い人でしたから。まあ、今回はちよつと間抜けですけれど」

なるほど。アメリカは昔からこうなのか、と思うと同時にすぐに彼女に告げる。

「アメリカ。退場だ」

「い、いやだああああっ！ もっとみんなと遊びたいiiiiiiiiっ！ うわああああああんっ!!」

その後、有無を言わずアメリカを本質の一つである【固定】で動けなくしておいた。流石の反則は許すことはできないので、これも仕方ない処置だろう。

俺たちといえ、人数は半分にはならないが、改めて全員で雪合

戦を楽しむのだった。

本当に今日は楽しい一日だった。

第233話 前に進む、その瞬間

早朝。

リディアは朝が弱い上に、特に冬はベッドから出たくはない。

この温もりを絶対に手放したくないと思い、昼前にならないと起きてこないのが普通だった。

カーラもまた、そんな彼女を起こすのに苦労しているのだが……今日のリディアは違う。

「……」

パチリと目を開ける。覚醒。

この寒い早朝だというのに、彼女はすぐにベッドから出ようとす。すでに隣にはカーラが控えていたので、車椅子へと座る。

リビングへと車椅子を押してもらうとすでに朝食が用意されていた。普段は朝食などは取らないが、今日は違う。彼女には、確かな目的があるのだから。

「レイたちは何時に集合予定なんだ？」

「十時です。余裕で間に合つと思います」
「そうか」

そして、朝食を取ると洗面所に向かって顔を洗い、歯を磨く。

その後は、私服に着替える。今日はパンツスタイルであり、その上に真っ黒なコートを羽織る。

「よし。行くか」

「はい」

車椅子を押して、出発した二人。

雪が少し積もっているので進みにくい、そこはリディアが魔術によって路面を軽く溶かしていく。

彼女もまた、レイと同様に最近魔術に関してはあまり不自由を感じなくなっていた。

「ここらへんにするか」

「もう少し離れた方がいいかと」

「そうか？」

「はい。レイ様の姿を見たいのも分かりますが、気がつかれては意味がありません」

「そうだな」

その言葉を素直に受け止めると、少しだけ後方へと下がっていく。

この二人が何をしているのか。

それはもちろん、ストーキングである。

とある筋の情報によると、今日はレイは友人たちと遊びに行くら

しい。

もっとも、ただ遊びにいくだけならば今回は見逃していただろう。

リディアの懸念はレイの周囲にいる女性陣だった。

その中でも、アメリカ・ローズ。レベッカ・ブラッドリィ。アリーヌ・オルグレンの三人をかなり警戒しているのだ。

すでに、アメリカとレベッカがレイのことを好きなのは把握していた。それに加えて、あの大会を経てアリーヌの様子がわずかに変化しているのも、リディアは知っている。

そのようなこともあり、今回はわざわざこの寒い中、外に出てきたというところなのだが……。

「ふむ。カーラはどう思う？ レイの交友関係について」

「とても素晴らしい友情を育んでいると思います。ただ、最近ではアメリカ・ローズ嬢とレベッカ・ブラッドリィ嬢のアプローチが激しくなっているかと」

「ほう……やはり、あの二人は要注意のようだな」
「……」

カーラは思う。わざわざこんなことをしなくても、レイ本人に聞けばいいのではないかと。あの二人をどう思っているのか、と軽く尋ねればいい。

しかし、そのことをリディアに聞くと……「ばっか！ そんなことできるわけがないだろうっ！ その……恥ずかしいし……」と言うのだ。

年甲斐もなく照れている姿は、確かに可愛いものではあるのだが、調査をするカーラも罪悪感が生まれていた。

早くこんなことは終わってくれないだろうか、そう思っているのが最近の彼女であった。

そうして二人でじっと待っていると、ちょうどキャロルとばったりと出くわすのだった。

「あー！ リディアちゃんとカーラちゃん！ こんなところで何しているの〜 って、ああ……そっか。いつものやつなんだね」

ペコリと頭を下げるカーラだが、キャロルの登場はありがたいと思っていた。このままずっと、リディアのレイに対する談義を聞くのも億劫だと考えていたからだ。

「ああ？ なんだ、文句でもあるのか？」

ギロつと殺意を込めて睨みつけるが、もちろんキャロルはそんなものには屈しない。

「いや でも、レイちゃんのことを付け回すのはどうかと思うな〜」

「ま、まだレイとは分からないだろうがっ！」

苦しい言い訳をするが、それは全くの無意味だった。

「え。じゃあ、違うの?」

「う……うぐ。ぐぬぬ……」

半眼で睨みつけるが、全く威圧感がない。今回に関しては完全にキャロルに軍配が上がっていた。

「もう、ダメだよりディアちゃん。レイちゃんはお友達と遊びに行くでしょ? 親が同伴するものじゃないよ」

その声音はいつになく真剣なものだった。

彼女は人差し指をピツと立てると、リディアに対して説教を開始する。

「そもそも、レイちゃんが独り立ちするのはリディアちゃんが願ったことでしょ? まあ入学当初は分かるけど、もう冬だし今年も終わるんだよ? そろそろレイちゃんもかわいそうだよ。そんな信じられないの……?」

「いや、それは……」

キャロルは分かっていた。リディアがストーキングをしているのは、何も彼の恋模様だけが気になっているだけではない。

やはりその一番の根幹にあるのは レイが心配なのだ。

独り立ちしてほしいと思って、送り出したのはリディアである。だが、過去のレイを知っているからこそ。その凄惨な過去と一緒に過ごしてきたからこそ、心配なのだ。

いつまで経っても、レイはリディアにとっては子供のようなもの

なのだから。

「リディアちゃん。ちょっとお茶しようよっ！ キャロキャラが奢ってあげるからさ」

ニパツと快活な笑顔を浮かべるキャラルを見て、内心で思う。

全く、キャラルには敵わないな……。

昔からそうだった。キャラルは戯けているように見えて、しっかりと周りが見えている。軍人時代も、よく仲間の相談に乗っていた。

そして、戦友が死ぬたびに一番涙を流していた。

誰よりも情に厚いのはリディアも知るところだった。

「分かった。奢られてやるさ」

そう言つと、今日はストーキングを止めて、改めてキャラルと話すことにするのだった。

注文したのはケーキセットだった。紅茶からは湯気が立ち、ケーキからは甘美な香りが鼻腔を抜ける。

「それで、リディアちゃんはまだ心配なの？」

依然としてキャラルは真面目なトーンで話しかけてくる。それには、彼女も同じように応えるのだった。

「きつと、心配なんだと思う……けれど、一番はきつと」
言い淀む。

ずっと前から分かっていた気持ちであり、感情だった。

それは決してレイを想っているわけではない。

ただの自分勝手な、矮小な想いだった。

「私はきつと、レイが成長していくのが怖いんだ。自分が捨てられるような感じがして、レイにとって私が不必要だと突きつけられているような気がして……ならないんだ」

それは言葉にすると、意外と呆気ないものだと思っただ。

ああ。そうだ。今までのそれは、私の身勝手。分かっていたさ……。

自由に飛び立ったレイを見て、思うのだ。もう……自分はいらないのではないかと。リディアが感じている焦燥感の正体はそれだった。

それを聞いたキャロルは、そっと優しくその手を包み込むのだった。

「リディアちゃん。大丈夫だよ。レイちゃんにとって、リディアちゃんはいつまでも必要な存在だよ。覚えてるでしょ？ 出会った時

のこと。やっぱりリディアちゃんは特別だよ」

「……そうだろうか」

「うん！ 私が保証するよ。それに……リディアちゃんも、もう進んでいい時じゃないかな」

キャロルは知っていた。いや、キャロルだけではない。アビーも知っていた。

リディアが停滞していることは。敢えて前に進むことはなく、隠居するように王国の隅に住んでいるのはそのような理由もあった。

しかしもう……戦争は終わりを迎えた。

リディアにはある想いがあった。それは、数多くの仲間の死を背負って生きるべきなのは分かっているが、私にはその価値があるのか？ と言うことだった。

仲間が死んでいく中で、自分だけが生き残っていく。その想いを託される。

戦争が終わった時、彼女は思った。

私は、何かを成し遂げることができたのか？ ただいたずらに、失うばかりじゃなかったか？

と。

「ねえ。リディアちゃん、提案なんだけど……」

それは前々から考えていたことだった。それを伝えると、彼女は

大きく目を見開くのだった。

「それは……」

「ね？ どう、リディアちゃん」

「そうだな……」

ふと、窓越しに空を見つめる。

変わった。いつまでも変わるはずのないと思っていた世界は、大きく変化してしまった。

ずっと魔術師として生きていくものだと思っていた。このまま魔術の真髄を極めて、その真理にたどり着けると思っていた。そうすれば、自分の人生に意味を見出せると思っていたから。

だが、リディアに必要なのはそんなものではなかった。

彼女に必要なだったのは

「分かった。前向きに考えよう」

「うん。応援してるよ、リディアちゃん」

互いに微笑みを浮かべる。

きつと、そうなのだろう。

世界は移りゆく。そして人もまた、変わらずにはいられない。

リディアも進む時がやってきたのだ。

第234話 聖歌祭当日

十二月二十五日。

本日は聖歌祭の日だ。俺はまだ寮に残っているが、すでに実家に帰省している生徒も多い。俺と同室であるエヴィは、昨日の夜には実家に帰って行った。

それはやはり、聖歌祭は家族と過ごすものだからだ。

俺といえば、夜には師匠の家に集まることになっている。毎年そうなのだが、実は今日は師匠の誕生日なのだ。

師匠の存在は、家族に最も近いのかもしれない。母親、ということまた違う感じがするが……やはり師匠と形容するのが一番ピッタリとくる気がする。

「ふう……」

深呼吸。

カーテンをシャツと開けると、そこには相変わらずの雪景色が広がっていた。昨夜にはさらに雪が降ったのか、昨日よりも積もっているみたいだった。

そうして俺は、いつものようにルーティーンをこなす。たとえ聖歌祭であっても、トレーニングを欠かすことはない。

一人で淡々とトレーニングをこなし、シャワーを浴びる。

今日の予定としては夕方から魔術協会のパーティーに招待されている。夏休みの時と同様だが、聖歌祭ということもあってかなり盛大なものになるらしい。

もちろん、三大貴族の令嬢である、アメリア、アリアーヌ、レベツカ先輩も来るとの事だ。クラリスも来ると言っていたな、確か。

「さて、と。どうするか」

時間を持て余す。現在はまだ朝で、魔術協会に向かうことを考慮してもまだ時間は十分に残っている。

読書でもするか、と考えているとコンコンコンと扉が三回ほどノックされた。

珍しいな、と思って扉を開けに向かう。

そして、ゆっくりと扉を開けると……そこにいたのは……。

「やつほー！ 来ちゃったー！」

オリヴィア王女が、そこにいた。

銀色の髪がさらさらと流れ、マフラーを巻いているため少しだけそれが溢れている。彼女は寒がりなのか、防寒はしっかりとしていた。マフラーに耳当て、それに手袋もしっかりと装備。

全体的にもふもふとしており、見てるだけでも暖かそうだった。

「えっと。オリヴィア王女。何かご用事でも？」

「遊びに来たんだよーっ！ 今日はいはこの時間なら暇と思ったからねっ！」

「まあ……その。暇ですけど」

まるで俺のスケジュールを完璧に把握しているかのような……いや、きつと考え過ぎだろう。

そもそも、俺の予定を把握するなど不可能だからな。タイミングが良かったただけだろう。

「それにしても、お一人できたのですか？」

「いいや。護衛もついてたよ。今もどこから見てるんじゃない？」

「そうですか」

確かに、この周囲には数人の気配が感じとられる。流石に一国の王女ということもあって、一人で外出するわけではないか。

「ふふーん。今日は他の三大貴族は準備で忙しいと思ったからね。タイミングとしては、今だと思ったんだよっ！ どう？ ボクって賢くない？」

「はあ。三大貴族は準備で忙しいですか？」

「うん。そうみたいだよっ！ ふっふっふっ！ だからこそ、ボクがここで出し抜くというわけさっ！」

胸を張って、高らかに宣言するその姿はやはり可愛らしいと思ってしまう。

それがすべて計算づくであっても、やはり俺はどうやら年下には弱いようだった。

「入りますか？ お茶でも入れますよ」

「やったー！ 入るーっ！」

ということで、止む無くオリヴィア王女を室内に入れることにした。

「ズズズ……ふう。やっぱりレイの淹れる紅茶は美味しいねえ。あったまるよぉ」

「恐縮です」

正直いって、俺は別に紅茶を淹れることは上手いわけではないと思うのだが……まあ、気に入ってくれたのならよしとするか。

「あ！ そういえば、大規模魔術戦。マギクス・ウォー優勝おめでとう！」

「ありがとうございます」

「いや、アレは手に汗握る戦いだっただねっ！」

「そうですね。本当にギリギリの戦いでした」

「ボクはちゃんとレイの試合は全部見たけど、やっぱりレイは強いねっ！」

「恐縮です」

その後、オリヴィア王女は今まで会えなかったことから、積もる話でもあったのか怒涛の勢いで話を続けた。

流石の俺も面食らってしまうが、ある程度は慣れているのでさっと聞き流しつつ、相槌を打っておいた。

「あ、そういえば……お尋ねしたいことがあるんですけど」
「何っ！？　ボクに聞きたいことがあるのっ！？」

ニコニコと笑いながら、ズイッと体を寄せてくる。

俺はそうして、思ったことを聞いてみることにした。

「ステラのことなのですが、仲がよろしいんですか？」

「ああ！　ステラか！　あの子はそうだねえ……すっごくいい子だよ。なんというか、裏表がなくて天使みたいな感じ？」

「おお！　それは自分も同意見です。ステラは本当に愛らしくて、素晴らしい存在ですね」

ステラが天使。言い得て妙だ。確かにあの愛らしさは、もはや天使に匹敵するだろう。

「うんうん。出会った時も、ボクが王女だって言っても物怖じせず話してくれてね」

「なるほど。流石はステラですね」

「今となつては、とっても仲のいいお友達さっ！　来年はステラもアーノルド魔術学院に入学するって聞いたから、楽しみだね！」

「それは間違いありません」

と、談笑に花を咲かせているところで、時刻は正午を回った。そろそろ、外に出る準備をしようかと考える。

話を聞けば、元々俺と一緒にパーティー会場に向かおうと思っていたらしい。王族としての仕事は無いのかと尋ねたが、もうやることはすべてやった……という話らしい。

嘘か本当かわからないが、護衛の人が特に何も言わないのでおそらくは本当なのだろう。

王族の仕事は俺には分からないが、それでもしつかりとやっているのだろう。俺としては、オリヴィア王女は小悪魔的な存在ではあるが、やはりステラと同じで年下には甘くしてしまう。

そして、二人で街に出る。

僅かにだが、深々と雪が降っていた。傘をさす必要もない程度なので、特に気にすることなく俺たちは歩を進める。

するとちょうどぼったりと、彼女と出会ったのだった。

「あ……レイじゃん。やつほ」

オリヴィア王女と同じように、防寒具をこれでもかと着用している。マリアももふもふの状態になっていた。

「マリア、どうしてここに。ブラッドリイ家の方で準備があるんじゃないか？」

「私は面倒だから逃げてきたの。ま、お姉ちゃんが頑張ってくれるでしょ」

「そ、そうなのか……」

レベツカ先輩。頑張ってください……と内心で思っていると、オリヴィア王女が後ろから前に出てくる。

「ふん。またレイの知り合い？」

「えっと……その……まあ、はい。そうですね……」

打って変わって、マリアはまるで人が変わったかのように萎縮する。確か、初対面の人間は苦手と言っていたな。ここは俺がフオロ―すべきだろう。

「マリア」ブラッドリィ。レベツカ先輩の妹ですよ」

「あー！ マリアって、確かパーティーでも目立ってたよねー！ 真っ白な髪で、ピアスもすごくてさーっ！」

「うっ……ま、まあそうかもですけど……って、あれ？」

マリアはその大きな目を見開くと、オリヴィア王女のことをじっと見つめる。

「防寒具で気が付かなかったけど、もしかして？」

「ふふん！ ボクはオリヴィア」アーノルド第二王女だよ！ 敬いたまえ」

と、冗談めいた言葉を言って、その場で「ふふんっ！」といつものように胸を張る。

そんな彼女を見つめると、マリアはわなわなと震えていた。

「えっと……レイってば、王女様と知り合いなの？」

「ちよっとした縁だな」

「ボクたちは将来を誓い合った仲間なんだよーっ！」

「ちょ、勘違いするでしょう！」

「勘違いじゃないもーん。確定事項だもーん」

「……」

その場で俺の腕に絡みついてくると、さらに戯れてくるオリヴィア王女を俺はなんとか引き剥がそうとするが、思ったよりも力が強い。

ぐ……どこでこんな技術をつ！？

それはどうしてだろうか。キャロルを想起させるようなものだった。

マリアといえば、その場で震えていた。よっぽど寒いのだろうか。

「う、うわああ……レイってば、本当に罪な男ね。お姉ちゃん、がんば……」

と、死んだような目で何かを囁いていた。

その後、マリアも含めて三人で行動することになった。

第235話 ダンスパーティー

「じゃあ、レイ。また後でねっ！ ボクの勇姿、見ててよねっ！」

「私もお姉ちゃんと合流するわ。バイバイ」

「ああ。二人とも、また会場で」

オリヴィア王女とマリアとはしばらく一緒に過ごした後、そこで別れることにした。

オリヴィア王女は、パーティーに際して着替える必要がある上に、別の準備もあるとかでそのまま戻って行った。

マリアもまた、レベッカ先輩と一度合流してから行くということで、ここで別れた。

一人になった俺だが、このまま魔術協会に向かおうと思っている。

開場は十六時で、パーティーが開始されるのは十七時から。現在は十五時を回ったところなので、ちょうどいいだろう。

そして、一人でこの雪景色の中を通り過ぎるようにして、魔術協会へと向かっていく。今日は晴れており、ここ数日のように雪は降っていない。

といっても、まだ雪は積もってはいるが。

シャク、シャクと雪を踏み締める音を鳴らしながら、ふと空を見

上げる。

「もう、こんな時期になったのか」

思えば、本当に早いものである。ついこの前入学したばかりな気がするのに、気がつけばもう本格的な冬を迎えた。それに、二学期も終了したばかりだ。

残すところは三学期だけ。それを超えれば、俺は二年生になる。

学院に入る前は、今の状況を予想などしていなかった。大切な友人ができて、満足な学生生活が送ることができている。はじめは、師匠に言われたから入学するか……という希薄なものだった。

しかし、いま言える確かなことは……本当に、この場所に来て良かったということだ。

「レイ。一人か？」

魔術協会に向かっていると、ばったりと出会う。今日は金色の髪を後ろで綺麗にまとめて、いつもよりも艶やかに見える。

そこにいたのは、師匠だった。もちろん後ろには、カーラさんが車椅子を押している。

「師匠。カーラさんも。ご無沙汰しております」

すぐに近づいて頭を下げる。

「ああ。そうだな」

「お久しぶりでございます」

そのまま俺たちは、並んで歩みを進める。夏に魔術協会のパーティーに行った時も、確かこうしてばったりと師匠たちと出会った気がする。

振り返ると、学院に入ってから師匠と街などで偶然出会う確率が高い気もするのだが……まあ、きっと気のせいだろう。

「大会。全部見たぞ」

「ありがとうございます」

「いい試合だった。それに、最後は手に汗握る展開だったな」

「そうですね……本当に、ギリギリの戦いでした」

「レイ。もう学院に入学して、長くなるが……どうだ？　楽しいか？」

その声音はいつになく真剣なものだった。並んで歩いているので、その顔は見えないのだが、きっと師匠は真面目に俺の身を案じてくれているのだろう。

「はい。今回の大会を通じて、改めて思いました。本当に学院に入って良かった、と。大切な友人たちが、たくさんできましたから」

「そうか。それは良かった」

師匠が微笑んだような……そんな気がした。

そして俺たちは、魔術協会に到着し、中へと入っていく。すでに準備はある程度できているようで、中には人もそれなりにいた。

「レイ。私はまた挨拶回りがあるからな。また後で」

「はい。夜にお伺いします」

「ああ、楽しみにしている」

ひらひらと手を仰ぐと、師匠たちは会場の奥へと進んでいった。

師匠は昔はこうしたパーティーに来ることは少なかったが、今は心境の変化でもあったのだろうか。

「あら？ あなたは……」

一人でポツンと立っていると、そこにいたのはシャーロット＝ハートネット先輩。それに後ろには、メイドの二人も控えていた。

「ハートネット先輩。ご無沙汰しております」

その場で丁寧に一礼をする。

一見すれば、髪型を整えて化粧をしているため、この前と印象がかなり違う。それに背中が大胆に開いたドレスを着ているので、本当に大人っぽく見える。

「あ、えつと……そ、その。久しぶりねっ……！」

「見て、お嬢様が照れているわ」

「ええ。そうね。照れているわね」

「もう……っ！ ふたりは黙っていなさいっ！」

と、何やらやりとりをした後、こちらの方を向くと「こほん」と軽く咳払いをした。

「大会。最後まで見ていましたよ。優勝おめでとございますわ」

「ありがとうございます」

「それにしても……あなた、噂になっていますよ？」

「噂、ですか？」

「ええ。大会であれだけの功績を残したのです。注目されるのも当然でしょう。今もほら」

チラツと視線だけで後ろの方を見るように促されると、確かに俺の方に視線が集まっているようだった。ヒソヒソと囁いているようだが、俺の名前が確かに聞こえた。

オーディナリ

「一般人でありながら、あれだけの戦闘センス。それに、魔術の使い方も素晴らしいものでした。狙っている貴族も、少なからずいるとか」

「そうですか。それは光栄なことですが」

「そ、それでのんだけど……こ、この後……っ」

何かを言おうとしたのは、理解できた。しかしその声は、ある人によって遮られてしまう。

「レイさん。それに、シャーロットさんも。二人とも、仲がよろしいみたいですわ。ええ、とつても……ね」

ニコニコといつものように笑って、この場にやって来たのはレベツカ先輩だった。

髪を三つ編みにして、それをアップにして止め、さらにはその髪はわずかに艶やかに光っている。

着ているドレスは純白のものであり、胸元が大胆に開いており、いつもとは印象が違う。

しかしやはり、レベツカ先輩が美しいことに変わりはない。

「レベツカ先輩。どうも」

「はい。それで、シャーロットさんとはお知り合いなのですか？」

「そうですね。街の本屋でばったりと出会って、本の趣味が合いまして。大会でも、いい試合をさせていただきました」

「へえ。そうなんですなえ……」

レベツカ先輩がくるつと翻って、ハートネット先輩の方を見つめる。その途端、ハートネット先輩の表情が引きつる。

そして、レベツカ先輩が耳元で何かを呟くと、彼女は慌てた様子でこの場から離れていくのだった。

「わ、私はちよつと他にも挨拶まわりがありますので……っ！　これで失礼します……っ！」

メイドの二人を引き連れて、ハートネット先輩は会場の奥の方へと消えて行ってしまった。

「慌てていましたね。何か急な用事でもあったのでしょうか」

「さあ。どうなんでしょうねえ……」

レベツカ先輩も、どうやらその理由は分からないようだった。

先輩は改めてこちらを向くと、少しだけ俯きながら話しかけてき

た。

「あ、えっと……その……レイさん。今日はとても大人っぽいですね」

「そうですか？」

「はいっ！ とてもかっこいいですよ！」

「恐縮です」

といっても、別になにか特別なことをしているわけでもなく、黒のスーツを着て、髪型を少し整えているだけだ。

褒めてもらったので、俺はすぐにレベッカ先輩にも同じような言葉を向ける。

「しかし、レベッカ先輩こそ今日はとても美しいです」

「え……っ！？ そ、そうですか？」

ビクツと体を少しだけ震わせると、忙しなく指先を動かす。そしてチラッと上目遣いで反応を見るようにして、俺を見つめてくる。

「はい。髪も綺麗にまとまっていますし、そのドレスもよくお似合いです。先輩はやはり、白がよく似合いますね。化粧をしていることもあって、とても綺麗です」

「あ……その……あ、ありがとうございますっ」

先輩は顔を俯かせて、顔を真っ赤にしていた。それは耳まで赤くなっていたので、少々言いすぎただろうか……？ そう思っているとともに、聴き慣れた声が耳に入ってくるのだった。

「む……！ ちょっと遅れちゃったかぁ……っ！ まあいいわっ！」

軽く走って来るのはアメリカだった。彼女もまた、今日のパーティーに際してしっかりと準備をして来たらしい。髪をまとめ、真っ赤なドレスに身を包んでいる。

その後ろからは、アリアーヌもやって来る。

「はぁ……はぁ……アメリカってば、急ぎ過ぎですわ……」

アリアーヌといえば、髪はアップではなく下ろしているままだが、それが逆にドレスと相まって綺麗に見える。彼女は黄色のドレスを着ており、それはとてもよく似合っていた。

「はぁ……アメリカさんですか」

「ちよっ！ あからさまにため息つくなんて、酷いですよっ！」

その後、ふたりは何やら言い合いを始めてしまった。そんな様子を、アリアーヌと二人で呆然と見つめるのだった。

「なんだか、アメリカとレベッカ先輩は距離感が近くなったな」

「まあ……そうですね。原因はたった一つですが……」

「たった一つ？ それは？」

「レイもいつか、知る時が来ますわよ」

そうして俺たちは、パーティーが始まるのを心待ちにするのだった。

第236話 踊り踊る、そして

しばらく時間が経過すると、まずは立食から始まる。今日の予定としては、立食で様々な人と挨拶を交わして交流。その後は、ダンスパーティーに移行するというものだ。

先ほどまではレベツカ先輩、アメリカ、アリアーヌがいたが三人ともに色々と挨拶があるということですのでにこの場にはいない。

三大貴族の令嬢というのは、やはり特別なんだな……と思っていたと、とぼとぼと一人で歩いているクラリスを見かけた。

「クラリス。どうした？　なんだか疲れているな」

「あ……レイじゃない……」

クラリスもまた、ドレスを身につけ少しだけ化粧をしている。ツインテールは相変わらずいつものままだが、今日は毛先だけかくると緩く巻かれてあった。

しかし、ツインテールが萎びていることから、俺は彼女の体調をすぐに把握するのだった。

「大丈夫か……？　調子が悪いのなら、無理はしないほうがいいと思うが」

「うつん。別に、その……挨拶が多すぎて疲れたっただけよ」

「そうか。貴族の令嬢も大変なようだな」

「まあね……って、それよりもっ！」

急に大きな声をあげると、クラリスは俺の手を引いて会場の隅の方へと移動する。

一体、何かあったのだろうか。

「レイってば、噂になってるわよ……っ！」

「もしかして、大会の件だろうか」

「そうそう。いまだに一般人はオーディナリー気に食わないっ！　とか言っている貴族もいるけど、意外とレイに対して好意的な人もいるのよ。さっき、もしよかったらレイのことを紹介してくれないかって言われてさあ」

「なんと。そんなことになっているのか」

「でもその……あんたが、アレなのはみんな知らないじゃない？」

アレ、と言うのはおそらくは、【氷剣の魔術師】のことを指しているのだろう。確かに、俺が【氷剣】と言うことを知っているのは限られている。

しかし、薄々と感じている人間もいるのかもしれない。

あの大会では少なからず氷剣を使用して戦ったからな。

「ともかく！　色々と気をつけなさいよっ！　貴族に目をつけられると、本当に面倒だからね」

「忠告、感謝する。わざわざ教えてくれるとは、相変わらずクラリスは優しいな」

「なっ……っ！」

ピイインとツインテールが上を向く。それは明らかに動揺して

いる反応だった。

「べ、別にそんなんじゃないわよっ！ 勘違いしないでよねっ！
ふんっ！」

プイッと顔を背けるとスタスタとクラリスは去って行ってしまった。久しぶりに見たな……と懐かしく思っていると、俺が今いる会場の隅には小さくなるようにして彼女が立っていた。

「マリア。どうした、隠れるようにして立って」

「しっ！ 隠れているのよっ！ 挨拶って、めんどいし……」

「なるほど。しかし、いいのか？ 貴族にとって挨拶まわりは重要だと聞くが……」

「私はいいの。お姉ちゃんが全部してくれるし。それに、私ってこんな見た目じゃない？ 貴族の中には敬遠する人もいるのよ」

「なるほど。やはり貴族社会とは大変なものだな」

そして、俺はスツとマリアの側に立つと、そのまま軽く食事をする。流石、聖歌祭当日の魔術協会主催のパーティーである。料理はその全てが極上のものであった。

「で、レイはいいの？ 私なんかと一緒にいて」

「いいに決まっているだろう。俺に関しては、それほど挨拶をする人はいないしな」

「ふーん。でも、七大魔術師の方で集まりとかってないの？」

「ないな。そもそも、全員が集まることはほとんどない。俺も全員揃ったのは見たことはないな」

「え……そう言うものなの？」

「ああ」

師匠も昔言っていたが、七大魔術師が一斉に集まることなどほとんどない。確か、師匠の世代の時には一度だけあったらしいが、俺はまだ経験していない。

そもそも、パーティーに招待されても来ないことのほうが普通らしい。

そう思っていたのだが、視線の先にはなんと……あの二人がいたのだ。

「ふははは！ うまい、美味いぞっ！」

「そうですね。とても美味しいですね」

そこにいたのは、フランさんにリーゼさん。さらにその後ろには、師匠、アビーさん、キャロルがいたのだ。

まさかそのメンバーが揃うことなど夢にも思っていなかったもので、俺は自分の目を擦ってみることにした。

「どうしたの？ 目でも痒いの？」

「いや……なんでもない。そっとしておこつ……」

「そう？」

あのメンバー、特にフランさんに見つかってしまったては、大変なことになるのは目に見えている。師匠も俺の方をチラリとみると、コクンと頷く。

そして、素早く俺にハンドサインを送ってくる。

なるほど。フランさんには大量に食べ物と酒を入れて、早めに潰す作戦なのか。

それは完璧な作戦だ。俺はとりあえず、よろしくお願いしますと返事をしておいた。

そうして時間が経過すると、ついにダンスパーティーの時間となった。テーブルは素早く片付けられ、軽く清掃が入る。

また、明かりが一斉に落ちると、壇上にスポットライトが灯される。

そこにいたのは、オリヴィア王女だった。確か、彼女はその美声で人気でもあるとか。

俺はまだ聞いたことはないが、毎年聖歌祭では彼女の歌声と演奏を元に、ダンスをするらしい。

「……すごいな」

「ああ。レイは初めてなんだっけ。あの歌声聞くの」

「ああ」

「すごいよね、本当に歌姫って感じ」

壇上でその美声を響かせているオリヴィア王女に目を向ける。

それはまさに、歌姫と形容するのに相応しい姿だった。基本的には、俺の前では戯けていることが多いので、印象がかなり違う。

伊達に、一国の姫ではないということか。

「よし。では、踊るか。マリア」

「……はっ！？ 私とレイが踊るのっ！？」

「ああ。ダメか？」

「だ、ダメじゃないけどっ。その、私はある程度踊れるけど……レイはいけるの？」

「ああ。教養として、ダンスは教え込まれている」

「そうなんだ……まあ、今日くらいはいいか」

ボソツと最後に何かを呟くと、恭しく頭を下げてマリアは俺に手を差し伸べてきた。

「リードしてよね」

「もちろん」

颯爽と俺たちもまた、踊り始める。くると、世界が回るように、俺たちもまたこの場で回り続ける。

その後は、代わる代わる色々な人と踊ることにした。

「レイさん。私も、いいですか？」

「はい」

次にやってきたのはレベッカ先輩だった。多くは語らず、ただこの音楽の元で二人で踊り続けた。それはまるで、あの文化祭の時のように。でも今は、二人だけではない。

多くの人たちの中で、そこに混ざるようにして踊っていた。

「レイ。わたくしのダンスは情熱的ですよ？」

「望むところだ」

アリアーヌはその性格を反映しているのか、とても激しいものだった。しかし、それについていけない俺ではない。

そのまま流れるように、グイツと彼女を胸元に寄せると、リードして踊り続けるのだった。

その後は、クラリス、ハートネット先輩などともダンスをした。

そうしてついに、最後の時がやってきた。視線の先からやってくるのは、紅蓮の髪を揺らして軽く走ってきているアメリアだった。

「レイ。最後に私と踊ってくれる？」

「もちろん。こちらこそ、よろしく頼む」

踊る。

その視線は、すでにアメリアしか見えていない。彼女も流石に三大貴族の令嬢と言うことで、ダンスはかなり熟達していた。

きつと毎年ここで、踊り続けているのだろう。

「ねえ、レイ」

踊っている最中、アメリアは尋ねてきた。

「どうした？」

「来年もさ」

「ああ」

「一緒にこうして、踊れたらいいね」

「そうだな。きっと、踊ることができるさ」

グイツとリードを奪うと、アメリアを胸元へと寄せてから激しいテンポでダンスを続ける。

くるくるくると、回り続ける。

俺たちは巡る。

踊り続ける。

ふと、アメリアの瞳を見るとどこか潤んでいるような……そんな気がした。

そして、ついに終わりを迎えることになった。その場で丁寧に礼をすると、彼女はニコリと微笑むのだった。

「いつもはパーティーって嫌いだったけど、レイのおかげで楽しかったわ」

「そう言ってもらえて、俺としても嬉しい。踊ってくれてありがとう。アメリア」

「ううん。パーティーだけじゃないの。レイと出会えて、本当に楽しいことばかり」

「アメリア……」

視線が交差する。

それは、何か意志を伝えようとしているような……そんな瞳。それに吸い込まれるようにじっと見つめていると。

「はいはい。そこまでですよー」

と、間に割って入ってきたのはレベツカ先輩だった。後ろには、アリアーヌとクラリス、それにハートネット先輩も立っていた。三人ともに、なぜか苦笑いを浮かべているが。

「む……邪魔しないでくださいっ！」

「ふふ。抜け駆けは、ダメですよー？」

流石にパーティーの場ということで、言い争いはしなかったようだが、二人はそのまま睨み合っている。

ともかく、今日のパーティーはどうやら無事に終わることができたようだ。今日はこのあとは、師匠の家に向かうだけだ。

実は、レベツカ先輩、アメリア、アリアーヌにはうちに来てはどうか……と誘われたのだが、断っておいた。

この先の時間は、俺にとって特別なことから。

第237話 最愛の師弟

魔術協会から一人で出ていく。

向かう先は、師匠の自宅だ。元々、誰かと合流してから行こうと思っただが、一人になりたい気分だったので歩いて向かうことに。

深々と雪が降り続ける夜。はぁ、と息を吐き出せばそれは真っ白になる程、もう寒くなっている。

グイッとマフラーを口元まで上げる。

たった一人、わずかな街灯に照らされる。

「もう一年か……」

ボソッと呟く。

今日は師匠の誕生日だ。昨年お祝いしたのが、ついこの前のように思い出せる。

いつも、聖歌祭の日に誕生日なんて柄じゃないな……とぼやいてるのだが、俺はとてもよくお似合いだと思っている。

そして、中央区の花屋へと向かうと予約注文していた薔薇の花束を受け取る。

「以上でよろしかったですか？」

「はい。ありがとうございます」

丁寧に一礼をしてから、その薔薇を受け取る。シーズンではないのだが、品種改良が施され冬でも咲き誇っている薔薇。

それに、その色は赤ではなく青色だった。なんでも、最近入荷したばかりでとても珍しいものらしい。

俺は数日前にこの花屋を訪れて色々話を聞いたのだが、結局はこの真っ青な薔薇を選ぶことにした。

師匠は別に贈り物などいらん、と言っているのだがそれでも毎年何かしら渡すようにしている。

「着いたか」

少しだけ歩きたい気分だったので、遠回りしてきてしまった。時間も遅刻というわけではないが、きつともうみんな集まっているのだろう。

そして、コンコンコンと扉をノックすると、いつものようにカラさんが出迎えてくれるのだった。

「レイ様。ようこそ、いらつしゃいました」

「失礼します。もう集まっているのですか？」

「はい。すでに、お食事とお酒を嗜んでおります」

「ははは。そうですね……」

と、苦笑いを浮かべる。すでに酒が入っているということは、割

と大変なことになっていそうなものだが……。

リビングに通されると、そこには聞いていた人以外の方もいるようだった。今日の予定では、例年通り、アビーさんと、キャロルが来ると思っていたのだが……そこには、リーゼさんと、フランさんもいたのだ。

「おー！ レイが来たぞー！ あははーっ！」

すでに酒が入っているらしく、顔を真っ赤にしたフランさんがドタドタと走ってくると俺の腰に抱きついてくるようにして突撃してきた。

ステラをどこか想起させるが、彼女の年齢は六十二歳。しかし見た目はやはり、年下にしか見えない。

「お久しぶりです。フランさん」

「おー！ 久しぶりなのじゃ！」

「いつ帰ってきたのですか？」

「ふむ……よく覚えてらんが、レイの大会は見ておったぞ！ 優勝おめでとうなのじゃっ！」

「ありがとうございます」

すると、彼女は「あははー！」と笑いながら再びドタドタと走り去っていく。

「レイ。来たか」

いつものように車椅子に座って、ニコリと微笑みかけてくる師匠は変わらず美しいままだった。今日の師匠は本当に天使のように美

しい。

「ちょっと遅れてしまいましたね」

「別に時間は決めていたわけではない。こうしてきてくれただけでも、私は嬉しいさ」

「恐縮です」

そして俺は、自分の後ろに隠していた真っ青な薔薇を師匠に渡すのだった。

「師匠。お誕生日、おめでとうございます」

「え……つと、その。薔薇か？」

「はい。品種改良で青くなったものらしいです。花言葉は、夢叶うだとか。とても美しいので、師匠に是非プレゼントしたいと思っています」

「ははは。これは、その……柄にもなく、嬉しいな。レイが私に花をプレゼントする時がくるなんてな」

そう言っただけで微笑む師匠の顔は、アルコールで赤くなっているのか、それとも照れて赤くなっているのか、判別はつかない。

でも、そんなことは些事に過ぎない。師匠が喜んでくれているのなら、俺はそれだけで十分なのだから。

「あー！ リディアちゃんいいなー！ そんなお花もらってー！
ねね。キャロキアには何かないの？」

「ない。お前は誕生日でもなんでもないだろうが」

「えー。レイちゃんてば、ひどーい！」

「う……ちょっと、離れてくれ。酔いそうだ……」

「いやだもーんっ！ ずっとこうするもーん」

酔っているのか、キャロルはべったりと俺に抱きついてくる。

それに酒の匂いと、香水。さらにはキャロル特有の女性のフェロモンの匂いが混ざって、それはもうなんとも言えない香りが漂っていた。決して悪臭ではないのだが、なんというか……酔う。

そう形容するのが正しいだろう。

流石にこれは、まずいということが無理やり引き剥がそうとするが……こいつは意外に柔術などを学んでいるので、なかなか引き剥がすことができない。

伊達に元軍人ではないのだ。

「ねね。チューしょ？ いいよね？ ちゅ……っ」

「う、うわあああああつ！ た、助けてくださいっ！」

と、トラウマがフラッシュバックして思わず助けを求めると、キャロルは思い切り後ろに飛んでいく。受け身を取ることもできず、むぎゃ……っ！と声を漏らして壁に激突した。

「はぁ……全く、キャロルはいつも通りだな」

「アビーさん。本当に助かりました」

「どういたしまして、と言いたところだが。あいつの管理は私の義務だからな。任せておけ」

「あ、アビーさん……っ！」

尊敬の眼差しで見つめる。思えば、俺が出会ってきた大人の中で一番の常識人はアビーさんだった。彼女がいなければきっと、俺は

色々大変なことになっているのはもはや間違いないだろう。

その後、俺も席について食事でもただこうと思っていると、ただ淡々と食事を取っているリーゼさんがいた。

いつものように無表情で、精巧な人形のようにその場にいるのだが……彼女の頭には、いつか見たあの猫耳があった。

「リーゼさん。お久しぶりです」

「レイ＝ホワイト。そうだね。久しぶりになるのかな。大会、全部見ていたよ。いい試合だった」

「ありがとうございます。それで、その猫耳は？」

「ん？ 今日のリディア先輩の誕生日だろう？ 催し物にはぴったりだと思っ
てね」

「そうですか……」

どうやら気に入っている様子で、本当に僅かにだが微笑んだ気がした。そして、急にスツと立ち上がるとリーゼさんは驚くことを口にしたのだ。

「不肖、このリーゼロット＝エーデン。リディア先輩の誕生日のために、芸を磨いてきました」

その言葉を聞いて、全員が固まる。それは、給仕をしているカーラさん、それに暴れ回っているフランさんも含めて。全員ともに、リーゼさんのことはよく知っている。

感情に乏しく、芸などするような人間ではないと。

そのまま時が止まったかのような静寂が訪れると、リーゼさんが

放った芸は……アレだった。

「ご主人様へ　　にゃんにゃんしてあげるにゃへ　　にゃん、にゃんっへ」

その台詞はどこで覚えたのだろうか。しかし、今とったポーズは俺が教えたものをさらにブラッシュアップしたものだった。手の角度、足の上げる位置、全てにおいて完璧だ。

それに、その猫なで声も到底リーゼさんのものとは思えないが、完璧だった。

そう。その表情が、無表情だったことを除けば……。

「どうでしょうか。頑張ってみました」

その言葉には、どうやらやり切った感が出ていた。

どうですか。褒めてくれてもいいんですよ、と言わんばかりの雰囲気漂っていたのだ。

「か、可愛いへ　　ねね、みんな！　超可愛いよねへっへ」

キャロルもまた顔が引きつっているようだが、今回はかりはそのフォーローがちょうど良かった。全員ともに、うんうんと頷くとリーゼさんはどうやら満足げにニヤッと笑う。

「な、なあ……リーゼはどこに行っているんだ？」

「リディア。お前が何かクエストしたんじゃないのか？」

「ばっか、アビー。そんなことするわけないだろ」

「あ、あれは流石の我でも驚いたのじゃ……酔いが一気に醒めたのじゃ……」

と、どうやら周りの反応は俺と同じようだった。

その後。みんなでさまざまなことを話し合いながら、飲み明かした。もちろん俺は未成年なので、アルコールは飲んでいないが、それはもうかなり盛り上がった。

例年になく、今日は人が多い。そんなこともあって、師匠はいつもよりもよく笑っていた気がする。

「全員潰れましたね」

「ああ。ま、私が一番強いのは当然だな」

その場に出来上がったのは、酒で完全に意識を飛ばしてしまった人たちだった。もともと師匠が酒に強いのは知っていたが、ここまでは……。

そして、カラさんがこの場を処理してくれるというようで、俺と師匠は二人で外に出ていくことにした。

少しだけ火照った体には、ちょうどいい寒さだった。

車椅子を押して、この暗闇の中を進んでいく。先ほどまで軽く雪が降っていたのだが、今は晴れていた。

月明かりが差ししており、俺たちを照らすようにして輝いていた。

「レイ。今日は来てくれて、楽しかった。ありがとう」

「いえ、毎年のことなので。それに今年は、たくさんの人が来て楽しかったです」

「そうだな。人はこの季節のように、移りゆくものだ。私たちも、変わらずにはいられないということだな」

「そうですね……」

もう師匠と出会って、十年が経過しようとしている。幼い頃は、変わることもなんてないと思っていた。しかし、人は変化する。

師匠の言うように、不変のものなどありはしないのかもしれない。

「師匠。自分は学院に入って、本当に良かったと思います」

「そうか……それは、私としても嬉しいな」

「だからもう、師匠は自分のために無理をしなくてもいいと思います。魔術領域暴走^{オーバーヒート}も、もっと時間がかかると思っていました。もう大丈夫なようです」

「そうか……レイ。お前はいつも、私の予想を上回っていくな」

優しい声。昔の過激だった師匠からは、考えられないものだ。

その笑みは今まで見てきた中でも、一番慈愛に満ちているものだった気がする。

「師匠はもう、自分に縛られる必要はないのです。その足で、立っていくべきだと思います」

「……ふう。レイがそんなことを言うようになったのか。いや、そ

うだな。やっぱり人の成長とは、本当に嬉しいものだ」

車椅子を止めると、俺は地面に膝をついて師匠と視線を合わせる。

よく見ると、師匠は静かに涙を流していた。

「レイ。私はレイが愛おしくてたまらなかった。でも、お前の言う通りだ。もう枷はいらないのだろう」

「……はい。今までありがとうございます」

「そうだな。時期は、三学期の終わりにしよう。三学期の終業式の日、私の元を訪れるといい。その時に、この誓約は破棄することしよう」

「分かりました」

師匠は、スッと顔をあげると月をじっと見つめる。

「なあ、レイ。私は間違っていなかったか？ お前はいつも私を慕ってくれる。師匠と呼んで、尊敬してくれているのは分かる。しかし、間違いがなかったと言われれば……私には、自信がない。お前にもっと良くしてやれたのではないか、そう思ってしまう時があるんだ……」

それは初めて聞いた師匠の言葉だった。弱音を吐くなどと、今まで夢にも思ったことはない。

しかし俺は知った。本当の意味で、強い人などいるわけがなのだと。

皆、自分の弱さと向き合って、強く在ろうとしているのだ。

「師匠、大丈夫です。自分は、師匠に本当に素晴らしいものを送ってもらいました。本当に今まで、ありがとうございました」

優しく、彼女を包み込むようにして抱擁を交わす。すると、ギュッと俺に思い切り抱きついてくる。

痛いほどの抱擁。それはきっと、互いの想いを反映しているものだろう。

「ああ。そうか。ありがとう、レイ。私はレイに会えて、幸せだ。本当に……心からそう思うよ」

「自分も同じです。師匠に会えて、本当に良かったです。感謝しありがとうございます」

昔よくしてもらったように、俺たちはそのまましばらく抱擁を交わす。

もう俺の体も、師匠よりも大きくなってしまった。

けれど、師匠が師匠であることに変わりはない。

そのことだけは、変わりはないのだから。

第238話 実家へ帰ろう？

聖歌祭も無事に終了し、師匠の誕生日も祝うことができた。今年も残すところ、あと僅かだ。今後の予定は、特に残っていない。すでに寮も閑散としており、ほとんどの生徒が実家に帰っているようだった。

「よし……こんなものか」

俺といえば、一人で実家に戻る準備をしていた。エヴィはすでに実家に帰ったので、今この部屋には俺しかない。

二人でいると感じないことだが、いざこうして一人になると意外とこの部屋は広かったのかと思う。

バックパックに持って帰るものを詰め込んでいく。それほど多くはないのだが、念のためにバックパックでこの冬も帰る予定だ。大きくて困ることなどないからな。

そして準備を終えると、俺は待ち合わせ場所である学校の正門へと向かうのだった。

「レイさんっ！ す、すみません……ちょっと遅れてしまったようで……」

「いえ。全然大丈夫ですよ。自分も今来たところなので」

どうしてレベッカ先輩と待ち合わせをしているのか。それは、先

輩がどうしてもうちの実家に遊びに行きたいという話を以前から聞いており、聖歌祭が終わった後に改めてそのことについて話し合ったのだ。

俺としては、別に構わない。家族もきっと、歓迎してくれるのは間違いないからな。

しかし問題は、レベツカ先輩の実家の方だ。三大貴族は年末年始もそれなりに忙しいと聞いていたのだが、先輩は大丈夫だと言っている。

「レベツカ先輩」

「はい。なんでしょうか？」

いつものようにニコツと微笑みながら、俺の方をじっと見つめてくる。

「改めてお伺いしますが、予定は大丈夫なのですか？ 三大貴族の方で、ご予約もあるのでは？」

「大丈夫ですっ！ それに、家族も応援してくれているのでっ！ 私の代わりはきっと、マリアが務めてくれます」

「そ、そうですか」

こう言うっては失礼かもしれないが、マリアにレベツカ先輩の後がつとまるのだろうか。マリアはパーティーの時でも、隅っこの方にいてあまりコミュニケーションを取ろうとはしない。

そんな彼女に任せることができるということは、俺が思っているのとは別の予定なのだろうか。

先輩と二人で話していると、最後の一人であるアメリカがパタパタと走ってくるのが見えた。

「ご、ごめんなさーいっ！ はあ……はあ……ちょっと、準備に手間取って……はあ……」

「大丈夫だ。まだ予定の時刻もそれほど過ぎてないしな」

「アメリカさん、気にしなくても大丈夫ですよ。でも、もうちょっと遅れてもよかったかもですね？」

レベツカ先輩とアメリカは、正直なところ仲がいいのか、悪いのか最近をよく分らない。しかしまあ……二人とも、以前よりも明るくなった気がするのでもいいことなのかもしれないな。

最悪、喧嘩をすることになったとしても俺が全力で止めようと思っっている。

「ふう……」

アメリカは軽く額を拭って、一息つく。

今回、実家に戻るにあたってレベツカ先輩だけでなく、アメリカも一緒である。どこから話を聞きつけたのかは知らないが、レベツカ先輩と話している最中に「私も行くわっ！」と言ったのだ。

アメリカもまた、三大貴族の長女として責務があるはずなのだが……大丈夫なのだろうか。

「アメリカ。家の方はいいのか？」

「うん！ 家族も応援してくれてるわっ！」

ふむ。レベツカ先輩も、アメリアの方も家族が応援してくれている……とは何かの暗示なのだろうか。それとも、暗号の類なのか？

人の家に遊びに行くのに、家族からの応援が必要なのか？

謎である。やはり、こうして普通に学生をしているつもりだが、まだまだその普通とやりに慣れることはないようだ。

「実はアリアーヌにも声をかけてみたけど、まだ時間があるみたいで」

「まあ。でも、気持ちは分かります。自分の気持ちを整理するのは、大変でしょうから」

「ええ。そうですね」

一人で没頭してその謎について考えていると、二人はうんうんと頷いて何かを理解し合っていた。

ともかく、そろそろ出発するか。

「では、行きましょうか」

そうして俺たちは、今度は三人で実家へと向かうのだった。

ここ数日は晴れの日が続いて、雪が微かに溶け始めていた。といっても、まだ積もっていることに変わりはないのでゆっくりと歩みを進める。

ひまわり畑の横にある獣道までやってきたが、あの夏とは違って風景は少しだけ物足りなさを感じる。しかしそれはきっと、この冬特有の醍醐味というもののだろう。

「ふう。結構歩くわねえ」

「え……ええ。ちょっと、大変ですね」

俺を先頭にして後ろには二人がついてきているが、どうやらレベツカ先輩は少しだけ辛そうな顔をしていた。

「少し休憩をしましょうか」

「あ。べ、別に大丈夫ですよっ！」

先輩は慌ててそうは言うが、疲れているのは間違い無いだろう。

「そうですよ。ここは休憩をしておきましょう。レイもそう言ってますし」

「……う。では、すみませんが……」

アメリカもそう促すので、ひとまず足を止める。俺はこの時のために持参していた水筒をスツと取り出すと、それを渡す。

「先輩。どうぞ。冬場でも、水分補給は重要です」

「あ、ありがとうございます」

髪の毛を耳にかけると、水筒を受け取ってからごくごくと音を鳴らして水分補給をする。どうやら、念のために準備していたよかった。

「それにしても、レイさんはともかく……アメリカさんはすごいですね。体力がとでもあるようで」

それは純粹に感心して出た言葉のようだった。その一方で、アメリカはどこか虚空を見つめるようにして、ボソリと語る。

「あ、あはは……私は、その。レイと訓練を二度もしているので、体力が付きましたね。うう……もう、思い出したくない」

頭を抑えてブルブルと震えているアメリカだが、またいつかきくと、エインズワース式ブートキャンプに取り組む日は来るだろう。

それに、いつも何かと文句を言っではいるが、アメリカは最後までついてきてくれるからな。

「あ……そういえば、そうでしたね。あれは傍から見ても、過酷そうに思えました……」

「そうですよっ！　もうっ！　レイってば容赦しないんですよ！」

二人での会話が盛り上がっていく。俺としては、それに入る余地もないようなのでじっと空を見つめる。

冬の空は、あまり好きではない。

それは忘れたい記憶をどうしても、思い出してしまうから。

でも今は、アメリカとレベツカ先輩がいる。いや二人だけではない。俺には大切な人がたくさんできた。だからもう、大丈夫だ。

そう思索に耽っていると、視線の先から誰かが物凄い勢いで走っ

てきていた。

栗色の髪を揺らしながら、彼女は疾走。そして、宙へ飛翔するとくるくると回転しながら、俺に向かって飛び込んできた。

「わーいっ！ お兄ちゃんだーっ！ 帰ってきたーっ！」

「ステラ。相変わらず、元気そうだな」

「うん！ めっちゃ元気だよ！ 今回はいつまでいるの？」

「年が明けたら、帰ろうと思っている」

「うっ……お兄ちゃんとお別れするのは寂しいけど、後少しで私も学院に入学するからね！ 待っててね！」

「ああ」

よしよし、と頭を撫でるとステラはニコニコといつのようにな笑顔を浮かべる。この寒く厳しい冬であっても、ステラはとても元気なようだった。

「って、あれ？ また別の人と一緒なの？ アリアーヌちゃん……」

「じゃないよね」

「紹介しよう」

その言葉を言い切る前に、レベッカ先輩はいつの間にかステラの目線に合わせて少しだけ屈んでいた。

「レベッカ＝ブラッドリイと申します。アーノルド魔術学院の三年生で、レイさんの先輩になります」

「先輩！ お兄ちゃんの先輩ですか！ それにとっても美人ですね！」

「ふふ。素直でいい子ですね」

俺と同じように、先輩はよしとステラの頭を撫でる。すると

次は、アメリカが自己紹介をするのだった。

「えっと、アメリカ・ローズよ。レイとはクラスメイトね」

「あ！　一緒に大会に出てた人だね！？」

「そうね。レイにはとてもお世話になっているわ」

「おお！　流石はお兄ちゃん！　それにしても、あなたも美人ですね！　いや、可愛い系ですねっ！」

「あはは。ありがとう、ステラちゃん」

打ち解けたようで、そのまま実家へと向かおうとするのだが……
そこでステラがあることを口にしたのだ。

「で、お兄ちゃんの彼女さんはどっちなの？　二人とも？　もしかして、アリアーヌちゃんがそうとか？」

「ッ……！」

その発言をもとに、再びここで一悶着が始まってしまっただった。

第239話 満天の空の下で

ステラの発言により一悶着あったのだが、とりあえずは収束することになった。

結局は二人とも俺の恋人ではないとステラには理解してもらった。

二人ともに尊敬できる友人と先輩として見ているので、恋人などは夢にも考えたことはない。

アメリカは同じクラスの友人であり、レベツカ先輩は俺にとって本当に心から尊敬できる先輩だ。また、二人は三大貴族の令嬢である。おそらく将来は、家の決めた人間と婚約するのだろう。

レベツカ先輩はエヴァン・ベルンシュタインの件が表向きには続いているが、近いうちに解消すると聞いている。

さらには、彼女たちは三大貴族の令嬢であるのに対して、俺は一般^{ディナリー}人だ。

その立場の違いというものは大きい。

それに俺に誰かを愛する資格があるかどうか……そんなことも考えてしまうのだ。

しかしいつか、俺もまた恋に落ちる日が来るのだろうか。

「あらあら。レイつてば、お友達？　を二人も連れてきたのねえ……それにしても、美人さんばかりだけど」

「アメリカ＝ローズと申します」

「レベツカ＝ブラッドリイと申します、お母様」

アメリカとレベツカ先輩がその場でスカートを軽く持ち上げて一礼をする。その所作を見て、改めて二人は貴族の令嬢なのだと理解する。

「えっと。もしかして三大貴族の……？」

「はい。レイとは仲良くさせていただいてます」

「そうですね。レイさんには本当に、とってもお世話になっております」

二人の言葉を聞いて、母さんはその場でわなわなと震える。そして、俺の首をがっとう掴むとコソツと耳打ちをしてくる。

「……ちょ、ちよつとどういうことっ！？　年末には友達を連れて帰るかも、って前に聞いていたけど、それって三大貴族の御令嬢だったのっ！？」

「ああ。言ってなかったらどうか？」

「聞いてないわよ！　もう、驚いちゃったじゃないっ！」

そんなやりとりをしたのち、二人をリビングに通してから、泊まる部屋へと案内をした。うちの家は田舎にあるので、なにぶん広い。

部屋も余っているということで、アメリカとレベツカ先輩にはそれぞれ一部屋ずつ用意してもらっていた。

「おお！ レイ！ 帰ってきていたのか！」
「父さん。久しぶり」

ガシツとその場で抱擁を交わす。そして、リビングからは女性陣の声がこちらまで響き渡ってくる。今は絶賛、晩ご飯を作っている最中だ。

もちろんステラに触れさせるわけにはいかないのです、ステラの相手はアメリカにもらっている。料理のほうは母さんと、レベツカ先輩にもらっている。

そして俺は、父さんが帰ってきたので一人で出迎えにきたというわけだ。

「む？ 友達を連れてくると聞いていたが、もしかして女の子なのか？」

「アメリカとレベツカ先輩だ。二人とも、三大貴族の長女」

最後まで言葉を言い切る前に、遮るようにして大声をあげる。

「は、はああああああっ！？ も、もしかして二人と交際しているのかっ！？」

そんな突拍子もないことを言うてくるので、すぐに否定する。

「そんなわけがないだろう」

「だ、だよなあ……でもレイは天然だしなあ。相手はどう思っていることやら……」

後半はボソボソと呟くので、あまりよく聞こえなかった。

そうして父さんも無事に合流すると、俺たちは六人で食事を取ることにした。会話は存外盛り上がり、とても楽しい会話だった。

中でも、アメリカとレベッカ先輩が俺が学院ではどうしているのか、と聞かれて二人の俺に対する印象を聞くことができて新鮮だった。

その時にはやはり、天然だけどもいい人と評されていた。

自分ではよく分からないのだが天然……というのはきっと、人の心をつまく察することができないからそのように言われてしまうのだろう。

俺はまだ、普通の学生のように振る舞っているがそれは表面的なものではない。きっと普通の学生ならば、こうなのだろう。そんなものを考えて過ごしてきた。

といつてもそんなに器用に振る舞うことはできないので、結局は自然体で過ごしているのだが。

「よし！今日はアメリカちゃんとレベッカちゃんと一緒にお風呂に入りまーすっ！」

食事が終わった後、ステラは二人を半ば無理やり連れていくと一緒に浴室へと向かった。

俺は特にすることもないので、どうしようかと考える。

そんな時に思ったのは 星が見たい、ということだった。

確か今日は晴れていて、星が綺麗に見えるはずだ。冬の空は、また夏とは違った星空を見ることができる。ちょうど一人で暇を持て余しているの、いい機会だ。

「父さん、母さん。ちょっと星を見てくるよ。すぐに戻るから」

そういうと、俺は軽装で外へと向かうのだった。

はあ、と息を漏らすとそれが一気に真っ白に変化していく。

しかし、今日は妙に熱い気がした。決して熱があるわけではない。それは心情の変化とでもいべきだろうか。

空を見上げる。ここ数日は雪が降っていたということもあって、曇りの日々が続いていた。しかし今は、晴れている。

この煌びやかに輝く星々を、俺はじっと見つめる。

家の近くにある土手にやってくると、そこに腰を下ろす。

そうして一人でこの空を見上げていると、後ろから足音が聞こえてきた。

「レイさん。軽装で出ていくななんて、ダメですよ?」

やってきたのはレベッカ先輩だった。風呂上がりなので、微かに

顔が赤くなっていた。それにこの寒さもあって、鼻の先も赤くなっている。

先輩はしっかりと防寒しており、さらには俺のためにコートを持ってきたくれたようだった。

本当は別に必要ないのだが、せっかく持って来てくれたのだ。素直に感謝すべきだろう。

「ありがとうございます。そういえば、ステラとアメリカは？」

「二人は一緒に遊んでいますよ。なんでも、アメリカさんの因果律
フェクト
蝶々にすごい関心があるとかで」

「そうなのですか」

ステラは魔術に対してそこまで熱心なわけではないと思っていたが……今となっては、会わない時間の方が長い。色々と心境の変化があったのかもしれない。

「空。綺麗ですね」

「はい」

先輩も隣に腰を下ろすと、並んで空を見上げた。

「えっとその……もう少し近寄ってもいいですか？」

「はい。構いませんよ」

ピタリと肩が触れ合う。服越しにはなるが、先輩の暖かさを感じる。

「その食事のことですが……レイさん、何か悩み事でもあるので

すか？ 時折、上の空になっていたので」
「……よくわかりましたね」

純粹に驚く。それほど呆然としていたわけではないはずだが、先輩はしっかりと見ていたようだった。

「そうですね……この一年を軽く振り返っていました」

「この一年を？」

「はい。先輩には軽くしか言っていますが、自分は極東戦役で軍人として戦っていました。そこで数多くの仲間を失い、この体だけではなく心にも多くの傷が残りました。もちろん、それは俺だけに限った話ではないですけど」

なぜかその話は、スツと心から出てきた。先輩は俺の横顔をじっと見つめて、その話を真剣に聞いてくれる。

「それと以前、リーゼさんと話したことを思い出していました。彼女も、自分も結局のところ、人の心は理解できないと。だからこそ、想像して少しでも近づこうとする。けれど、思うのです。自分は、人として成長することができたのか……と」

きつとそう思ってしまうのは、この寒さが突きつけてくるからだ。あの凄惨な過去のこと。極東戦役が終わりを迎えたのは、ちょうど今と同じ冬だった。最後の戦いでは、数多くの仲間を失った。

この冬という季節だけで、俺はそれを思い出してしまうのだ。

「レイさん……」

そつと、先輩の薄い手が触れる。それは確かな熱を帯びていた。

「その……レイさんの過去のことに関しては、私は何も言うことはできません。けれど、あなたに出会ったこの一年は私にとってかけがえのない瞬間でした。レイさんのような人と出会うことができて私は幸せですよ」

「……先輩」

その微笑みは、無理をして作っているものではないとすぐに分かった。先輩は心からそう思ってくれているのだ。

それは純粹に、嬉しいことだった。

そして、先輩がそつと俺の方へと体重を預けてくる。さらにぴつたりと触れ合う。だが、それはどこか心地よい瞬間でもあった。

言葉を多く交わすだけでなく、こうして触れ合うだけでもなんらか人を理解できるような気がした。

今日の星は、今までの中でも……どうしてだろうか。

とても煌びやかに輝いているように見えた。

「ねえ、レイさん」

「はい」

「また来年も、こうして遊びに来てもいいですか？」

その瞳を見つめる。じつと覗き込むような漆黒の双眸。微かに香る甘い匂いは、鼻腔を抜けていく。

「もちろんです。これから先も、よろしく願いします」

「はいっ！　こちらこそですっ！」

ドキリと心臓が高鳴った気がした。それは今まで感じ取ることとはなかったものだ。もしかして、俺はさらに変わり続けているのかもしれない。

第240話 みんなで森へ

残り数日もすれば、年が明ける。俺たちは特に何かをする予定もないので、家にいるのだが……流石にちょっとだらけすぎではないだろうか。

「ハアゝ。この、炬燵こたつってやつ……すごいわねえ……あつたまるわあ」

「そうだねえ。アメリカちゃんもハマっちゃったねえ……」
「えへへ。そうねえ……」

なんでも東の方から輸入された品物らしい。それを実験的にうちで預かって、利用しているのだとか。両親の仕事の伝手で手に入れたものらしいが、すっかりハマってしまっている。

ちょうど朝起きると、すでにアメリカとステラがその炬燵こたつに入ってたつたりとしていたのだ。

だらしなく緩んでいる顔は、きっと余程その暖かさが気持ちいいのだろつ。最近は特に寒くなってきたいるからな。

「ささ。レイも入りなよゝ」

アメリカに促されるので炬燵こたつに入ることにした。中はかなり暖かくなっており、確かにこれはまったりするのも理解できる。

「あら。皆さん、朝からくつろいでますね」

レベツカ先輩も合流。そして彼女もまた、空いている箇所から炬燵に入るのだった。

「ふう……ものすごくあつたまりますねえ」

どうやらレベツカ先輩もお気に召してくれたようだった。

しかし、きっとこの展開は長く続くことはないだろう。なぜならば……。

「よし！　ということで今日は、みんなで外に遊びに行こう！」

急にガバツと立ち上がると、ステラは小さな胸を張ってそう声をあげる。基本的には、冬でも外に出て遊びたがるステラのことだ。

こうなることはすでに予想はついていた。

「よし。いくか」

炬燵から出ると、早速準備を始めようとする。レベツカ先輩も一緒に炬燵から出て、準備をしてくれようとするが……。

アメリカだけは、じっと炬燵の机にあごを乗せてまったりとしていた。

「ええー。寒いからやめとこうよおー。私はこの温もりが手放せな

いわあゝ。ぬくぬくなのに……」

そう言うので仕方はないが、三人で行こうとするが先輩はアメリカに少しだけ近寄る。

「ええ。それが良いですね。アメリカさんは、たった一人でこの炬燵にずっといる良いですよ。ねえ、レイさん」

と、話しかけられるのでとりあえず同意しておくことにした。

「まあ、無理やりというわけではないしな。アメリカ、ではまた」

そして去ろうとすると、袖がギュツと掴まれる。振り向くと、いつの間にか炬燵から出てきていたアメリカがじっと見上げてきていた。

「……行く。私も、行くからっ！」

結局、四人で外に遊びに行くことにした。外に出ると、ここ数日は晴れが続いていたこともあって、積もった雪は消えつつあった。

眩い光が、照らしつけ消えつつある雪がキラキラと輝いて見える。

とりあえず目的もないまま、俺たちは歩き始めたがステラは先頭をタタタと走っていくと、あの場所に向かおうとしていた。

「みんなで森に行こうよっ！」

どうやら、ステラはドグマの森に行きたいようだった。しかし…

：俺とステラだけならばまだしも、アメリカと先輩は大丈夫だろうか。いや、アメリカはなんとかギリギリついてこれるだろう。

だが先輩は、少し厳しいかもしれない。しかし、俺がしっかりとそばにいてあげれば良いだけか。

「そうだな。行ってみるか。アメリカとレベッカ先輩もいいですか？」

「私はいいけど。森って、ドグマの森のことでしょ？ 危険じゃないの？」

「俺とステラにとっては庭のようなものだ。それに、アメリカはインスワース式ブートキャンプを完全なものではないとはいえ、修めている。十分についてこれるだろう」

「そっか。ならいいけど」

アメリカの許可はすぐに取りやすかったが、果たしてレベッカ先輩は了承してくれるだろうか。そう思っていると、先輩が俺の袖をギュッと握りしめていた。

「レイさん……私、ちょっと怖いです」

潤む瞳で、じっと見上げてくる。

「先輩が怖いのでしたら、今回はやめておいた方がいいでしょう」

「そんな！ 皆さんの邪魔をするわけには……っ！ そ、その。レイさんが側で守ってくれるのでしたら、私は大丈夫ですっ……」

そっとその柔らかい体を寄せてくる。その際に、フワッと先輩特有の優しい香りが鼻腔を抜ける。なんだか芝居がかっているような

気もするが、流石に考えすぎだろう。

「大丈夫です。レベツカ先輩を守ることなど、容易いことです」
「レイさん……っ！」

そんなやりとりを、アメリアとステラはジトつと見つめていた。

「はあ……なんだか、相変わらずって感じよね」
「うわあ。お兄ちゃんてば、罪な男なんだねっ！」

とりあえず全員の許可が取れたことで、ドグマの森へと進んでいく。俺とステラがいるということで、今回もほぼ顔パスで通過することができた。もっとも、ちゃんと書類にはライセンスと名前を書き記しているが。

「うわあ……カフカの森と違って、緑がすごいわねえ」
「ですね。冬だというのに、とても生い茂っています」

アメリアとレベツカ先輩を挟むようにして、俺たちは移動する。先頭はステラに任せて、その後ろにアメリアとレベツカ先輩。一番後方に俺、という配置になっている。

そして、四人で歩みを進めるとさっそく魔物を発見した。

「おっ！ こんな冬に巨大蛇ヒュージスネークがいるなんて！ それにかなり大きいし！ 亜種かな、お兄ちゃんっ！？」

「そうみたいだな。通常の、1.5倍くらいはあるな」
「ふふ〜ん。これは美味しくいただくよっ！」

瞬間。ステラは大地を思い切り踏み締めると、内部コードインサイドを発動。
ドンッ、という鈍い音がした時にはすでに、目の前の巨大蛇ヒュージスネークをその拳一つでその場に沈めていた。

ドオオオオン、と巨体が地面へと倒れていく。

ふむ。流石のステラだな。急所に一撃。

どうやら、腕はさらに磨きがかかっているようだ。

「え……？」

「へ……？」

呆然としている二人だが、無理もないだろう。ステラは一見すれば、愛らしたただの少女にしか見えない。だが、俺と師匠により教育を受けた彼女はまさにサラブレッド。

この森の魔物ですら、ステラならばたった一人で相手にできるほどだ。

「へへーん！ どう、すごいでしょっ！」

俺たちに向かってニコツと笑って、ピースをするので親指をぐつと立ててその功績を称える。

流石は我が妹だ。惚れ惚れする技量だ。どうやら、日頃の鍛錬は怠っていないようだな。

「レイとは血の繋がりは無いって聞いてたけど……」

「ええ。正真正銘、レイさんの妹さんみたいですわねえ」

半ば呆れるような感じで話していたが、ステラの強さを知った人の反応はこんなものだ。仕方ないだろう。

「よし。では、食べてみるか」

持ってきていたポーチからナイフを取り出すと、調理に入ることにした。いつものように蒲焼きにして、エインズワース式秘伝のタレをかけて焼けば完成だ。

「わーいっ！ いただきまーすっ！」

ガブリと一口。すると、その頬を抑えてあまりの旨さに震えているようだった。

「うーん！ 美味しいね！ 流石はお兄ちゃんの料理だよ！」

「ふふ。褒めても何も出ないぞ？」

アメリカとレベッカ先輩にも渡したのだが、二人はじっとそれを見つめていた。

「……ごくり。せ、先輩。先にどうぞ？」

「いえいえ。ここはアメリカさんが」

「う。でも、ステラは美味しそうに食べてたし……はぐっ！」

思い切って食べてみるアメリカ。もちろん、その反応は分かっているとも。

「おっ、美味しいiiiiiiiiっ！ 何これ、すっごく美味しいわっ

「！」

「……！ 本当です！ 野生の魔物なんて食べたことはありませんが、とても美味しいですねっ！」

どうやら二人の口にもあつたみたいだ。

その後、俺たちは森の中を色々と探検するのだった。

冬ということもあつて、生態系は夏に比べて変化している。そのような中でも、俺とステラが対応できない魔物などいない。

「きゃ……っ！」

と、歩いている最中、アメリアが足をつまづかせて転びそうになる。

「おっと。大丈夫か？」

「あ。えつとその……あ、ありがとうレイ。でもその……あの、当たってるから……」

「す、すまないっ！」

アメリアが転びそうになったので、後ろから思い切り抱きかかえるようにして受け止めたのだが、手が少しだけ彼女の胸に触れてしまっていた。

すぐパツと離すと、アメリアはその髪をくるくると弄り始める。

俺の方も、チラチラと見ているようだ。照れているのは間違いない。

しかし、不慮の事故とはいえ……俺が悪いのは明白だ。

「う……本当に申し訳ない」

そう謝罪すると、レベツカ先輩がニコニコと笑いながらアメリカに近づいていく。

「ふーん。アメリカさんも、大胆ですねえ……」

「ち、ちがつ！今のわざとじゃないし！」

「まあ、そういうことにしておいてあげましょう」

二人がいつものように口論を始めるので、呆然とそれを見つめているとステラがくいくいつと裾を引っ張ってくる。

「ねね。お兄ちゃん」

「どうした？」

「アメリカちゃんとレベツカちゃんて、仲がいいね」

「……そうだな」

喧嘩するほど仲がいい。きっとこの二人に関しては、それは正しいのだろう。

今日もまた充実した一日を過ごすことができた。

第241話 初めての感情

夜。

あれから数日が経過して、ついに明後日には年が明けることになった。俺たちは家で各々過ごしているが、ステラがアメリカとレベツカ先輩のことをとても気に入ったようだ。

何をして遊ぶにも二人を誘って、本当に嬉しそうに笑っている。

兄として俺も嬉しいのだが、実際のところステラが二人に夢中なので少し寂しかったりもするのだが。

「さて、と」

自室。すでに入浴も済ませたので、寝る前に読書でもしようかとランプの明かりをつける。今回読むのは、リーゼさんの新刊だ。

マギクス・ウォー

大規模魔術戦や聖歌祭などもあって、まとまった時間が取れなかったので年末の時間はちょうどよかった。

そして三十分くらいだろうか。俺が読書を始めてそれくらい時間が経った頃に、扉がノックされた。

「……アメリカ？ どうしたんだ？」

扉を開けると、そこにはアメリカがいた。髪はまだ微かに濡れて

おり、頬も赤くなっている。確か、ステラと先輩と一緒に風呂に入ると聞いていたが。

「えっと……その。私は早く上がって時間もあるから、レイとちょっとお話ししたいかな……なんて。ダメかな？」

不安そうにじっと見上げてくる。

だが、断る理由もない。すぐに彼女を室内に入れる。

「いや。構わない。入ってくれ」

「う、うん！　ありがとっ！」

この部屋は比較的簡素だ。そもそも、俺はあまり派手な装飾は好まない。テーブルとイス、それにベッドがあれば家具は十分だった。

「あれ。本でも読んだの？」

「ああ。リーゼさんの新刊だ」

「そういえば、リーゼさんってすごく有名な小説家なのよね」

「みたいだな。初めて聞いたときは、驚いたものだった」

「へえ……私もベストセラーになってたから、読んだことあるけど、すごく面白いよね」

「登場人物の描写が素晴らしいな。それぞれの葛藤が本当にありありと描かれている気がする」

テーブルに置いていた本をチラッと見て、そんな話で盛り上がった。アメリカもまた、読書は割とする方で本の趣味も意外と合う。

「でも意外。レイってば、恋愛小説を読むのね」

「そうだな。小説は基本的に、恋愛モノが多いな」

「も、もしかしてその……興味ある、とか？」

その瞳は、何かを期待しているようなものだった。

ただじつと窺うように俺の瞳を覗いてくる。

興味があるかどうか。それは、読むくらいなのだからあるに決まっている。

しかし、きつと根幹の理由は別にある。

「……興味はあるんだと思う。ただ、昔読ませてもらった本が恋愛系が多かったのもあるな。それに俺はきつと、探しているんだ」
「探している？」

「……人の心のその機微を、知りたいと思っている」
「人の心、か」

暫しの沈黙。そして俺は、再び口を開いた。

「ああ。俺は生まれ育った環境が特殊だ。おおよそ、普通の人生と呼ぶことはできないだろう。人が死ぬことは当たり前だった。いつかその戦場で、自分も死ぬんだと思っていた。仲間が散っていくたびに、心には大きな穴が開いていく気がした」
「……」

アメリカは真剣な表情で、話を聞いてくれる。

「きつと読書とは、代償行為なのかもしれない。この心の隙間を埋めるための、な。まあ色々和大袈裟なことは言ったが、純粹に好きという理由もあるって……どうした、アメリカ？」

「う……ぐすつ……その。」「ごめんなさい」

よく見ると彼女は泣いていた。流れ出る涙を拭って、なぜか謝罪をするのだ。

「すまない。何か不快なことをしてしまっただろうか？」

「うん。逆よ。レイのことを思うと、ちょっと感情移入しちゃって」

「そうなのか？」

「うん。でも、私も同じような気持ちは分かるわ。私だってまだ、探し続けているんだもの」

「そうか……」

あの日。マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会の新人戦決勝戦の直前。俺はアメリカとその心を通い合わせた。

きっと、大きな分岐点はあそこだったと思う。

あの場で自分の心を曝け出すことができたからこそ、俺はあれからまっすぐ進むことができたのだ思っている。

「ねえ。そろそろ、年が明けるね」

「そうだな」

打って変わって、話の内容は学院のものへと移る。

「今年は色々なことがあったなあ……」

「俺もたくさんを経験した」

「友達もたくさんできて、それに大会も優勝できたしね」

「そうだ。アメリカはマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会と大規模魔術戦で両方優勝マギクス・ウォー

したことになるのか」

「ええ。聖歌祭のパーティーでは、それはもう褒められたわ。嫌になるくらいにね」

ニヤツと笑って、肩を竦めながら冗談めいた口調で彼女はそう言った。

「はは。褒められるだけ、いいんじゃないか？」

「まさか。本当になんていうのかな？ 褒めちぎるって、感じ？」

「なるほど。なんでもやりすぎるのは、考えものだな」

「うん。間違いないわね」

思えば、二人きりでこうして他愛のない話をするのは久しぶりなのかもしれない。昔から考えると、本当にあり得ないことだと思う。

「それでなんだけど、じ、実は……婚約の話とかも、出たり、出なかつたり？」

「そうか。貴族は婚約が重要だと聞く。アメリカの時は、盛大にお祝いをしよう。オーディナリー一般人である俺が出席できるか分からないが、もしよかつたら招待してくれ」

「むう……っ！」

頬を膨らませるアメリカは、明らかに不機嫌な様子だった。

もしかして俺はまた何か間違えてしまったのだろうか。

「レイはその、私が他の人と婚約しても……いいの？」

「いや、俺に何かを言う権利はないだろう。貴族、その中でも三大貴族の話に一般人である俺が介入できることはない。それがたとえ、オーディナリー七大魔術師であつてもだ」

「そーゆーことじゃなくてーっ！　レイ本人の気持ちが聞きたいのっ！」

俺の気持ち？

いや、アメリカが婚約することは決まっていることだろう。それはレベツカ先輩の時も、思ったことだ。貴族の令嬢は婚約することが早い。

それこそ、二十代前半には正式に結婚することが多いと聞く。

アメリカは確か、長男であるお兄さんがいるので、後継の関係はそこまで気にしてなくもいいなど、以前は言っていた気もするが。

「……ねえ、レイはどう思うの？」

優しくその手が触れる。暖かい、アメリカの優しい手だ。

どう思うか……？　アメリカが婚約したらきつと、今まで以上に会うことは少なくなるだろう。学院を卒業すればそれこそ、会う機会などほとんどなくなるのかもしれない。

そんな時、俺は何を思うのだろうか？

新しい環境で今までのように慣れていくのだろうか？

それとも

「そう、だな。これは大きな声ではいえないが、きつと寂しく感じ
ると思う」

「　　っ！..!」

ビクツと体を震わせるアメリア。そして、さらに強く手を握って
くる。

「いや、こんなことは思っではいけないのだろう。しかし、もし学
院を卒業してアメリアとあまり会うことができなくなるのは……寂
しい、と感じるんだ」

「そ、そうなんだ。へ、へえ……」

今までこのような感情に陥ったことはあまりない。師匠と離れる
時も、寂しいと感じたが今回のそれは何か違う気がした。

「しかし、大丈夫だ。俺のそんなわがままに付き合う必要はない。
アメリアが婚約すれば、心から祝福しよう」

改めてそう言葉にすると、アメリアは優しく微笑むのだった。

「そっか。レイはそういう人だもんね。でも、レイの気持ちを知れ
て嬉しかった。ごめんね、変なこと聞いて」

「いや。構わないさ」

「じゃ、私はそろそろ寝るね」

立ち上がる。

アメリアを見送ると、最後に再び彼女はこう尋ねてきた。

「レイ。今年はいっぱいありがとう。本当に、あなたには多くのものを与えてもらったわ」

「こちらこそ、だ。俺もアメリカにはかけがえのないものをもらった」

「ふふ。じゃあ、また明日」

「ああ」

紅蓮の髪を靡かせて、彼女は去っていった。

この胸中に渦巻く感情は、何なのだろうか。

俺はまだこの時は、それを全く理解していないのだった。

しかしそれはいつか向き合う日が来る。

そんな気がした。

第242話 新しい年

「うーん。炬燵こたつにオレンジって、妙に合う気がするのよねえ……」

大晦日。俺たちは後は年明けを待つだけとなった。

今後の予定としては、年が明けた当日には向こうに戻ることになっている。アメリカもレベツカ先輩も新年早々、貴族での集まりがあるとのことらしい。

一方の俺は特に予定もなく、もう少し実家にいてもいいのだが二人を送っていくついでに戻る予定である。

この話をしたとき、ステラが少し悲しむと思いきや……そうではなかった。

今は晩ご飯も終わり、四人で炬燵に入っているのだがステラは来年の入試に向けて勉強をしていた。隣にはレベツカ先輩がいて、付きっきりで勉強を教えてくれている。

ステラは体を動かすことが得意で、勉強などは苦手そう、と思われることが多い。しかし実際には、それなりに勉学もできる。

師匠の教えで、その辺りは徹底されているからだ。曰く、「バカにはろくな魔術も使えはしない」とのことだった。

「それで、ここが」

「ふんふん。なるほど」

と、真面目にやりとりをしているので俺とアメリカは邪魔をしないように各々好きなことをしている。

といつてもアメリカは体をだらしく伸ばしながら、机の上に置いてあるオレンジをパクパクと食べ続けている。

そんなに食べたら太るのでは？ と言いたい気持ちもあるが女性に対して年齢と体重の話は決してしてはならないという事を俺は知っている。

ここ数日。アメリカとレベツカ先輩と一緒にいて思ったのだが、レベツカ先輩はそれほど変化はない。

いつものようにお淑やかで、気配りのできる素晴らしい先輩だ。

アメリカといえば、家ではいつもこうなのだろうか。それともこの炬燵の魔力にやられてしまっているのか、ものすごくリラックスしている。

それはそれでいい事なのだが、そのようなアメリカを見るのは新鮮だったので少しか面白かった。

「……」

そして俺といえば、一人で読書をしている。本当は自室で一人で読もうと思っていたのだが、年越しの瞬間はみんなと一緒にいようという事でここにいる。

「ふう」

声を漏らして、本をパタンと閉じる。

「レイ。読み終わったの？」

「ああ」

「はい。じゃあ、オレンジあげる」

スツと差し出してくれるオレンジ。うちの実家には、貰い物という事で山のようなオレンジがあった。それを今は、アメリカが消費している最中。

彼女は一つ一つのオレンジを丁寧に剥いて、それを皿の上に置いている。

それはまさに職人技ともいうべき技量。

というよりも、いつも間にこんなにも大量のオレンジが？

よく見るとステラとレベッカ先輩にも配られているようで、二人は勉強をしながらパクリとそれを口に使っていた。

「ありがとう。それにしても、意外だな」

「え、何が？」

「アメリカは家だとそんな感じなんだな」

そう言葉にすると、ポトリとオレンジを落とす。よく見ると、顔はサアーっと真っ青になっていた。

「どうした？」

「えっと……違うのよ？　いつもはこんなにまったりしてないというか、もっと威厳のある姿なのよ？」

「いや、家にいる時に威厳は必要なのか」

「必要なんだもん！　だ、だからその……別に……。そう、炬燵！　炬燵が悪いのよ！」

支離滅裂な事を言い始めるが、照れているのだろうか。俺としてはそんな姿も可愛らしいのでいいと思うのだが。

「あらあら。面白いお話をしてますね」

どうやら二人の勉強は終わったようで、レベッカ先輩が会話に入ってくる。ステラといえば、「疲れたよお……」と呟いて頭を机につけていた。

「レベッカ先輩は割といつも通りですよ」

「そうですね。家でもこんな感じです」

「う……何だか私だけが、だらけてるみたいじゃない……っ！」

ブスッと頬を膨らませて、拗ねてしまう。別に悪い、と言っているわけではないのだが……。

「アメリカ。別に悪いと言っているんじゃない、新鮮というか。そんな姿も可愛らしいというか」

「……か、可愛らしいっ！……？」

なぜか二人の声が重なる。アメリカは分かるのだが、どうしてレベッカ先輩もそんなに慌てているのだろう。

「も、もしかしてレイさんはちょっとお世話したくなるようなお人

が好きなのですか？」

「いえ別に。今までと違う姿が見れて、良かったという意味合いです」

「そうでしたか」

ホッとしたのか、胸を撫で下ろすレベツカ先輩。

アメリカは対照的に勝ち誇ったような顔をしている。それを見て、レベツカ先輩はじつとアメリカを見つめるが、彼女は「ふふん！」と胸を張っていた。

その後。

四人で炬燵で暖まりながら、オレンジを食べ続ける。それはもう、一心不乱に。

「ねね。私、来年は絶対に学院に入るからねっ！」

ステラはニコツと笑うと、そんな事を言ってくる。もちろんそれは確定事項に決まっている。ステラが不合格になるなど、あり得るわけではない。

「ああ。ステラが入学するのは、もはや当然だからな」

「えへへ。これでお兄ちゃんといつでも会えるねっ！」

「ふふ。俺も楽しみだな」

よしよしとステラの頭を撫でる。

「思ったけど、レイのそんな姿って意外かも」

「そうですね。レイさんはいつもクールな印象なので」

「もしかして、年下に弱いとか？」

「ぐ……それでしたら、私たちはかなりの不利になるのでは？」

「わ、私は同じ年だからセーフ！ レベッカ先輩はアウト！」

「ちょ！？ それは言い過ぎでしょうっ！」

どうやらまた二人で仲良く話をしているようだった。ステラを撫でるのに夢中で、あまり声は聞こえていなかったが、仲がいいのはいい事だ。

そして、ついに時刻は二十三時五十分。

後十分もすれば、年が明ける。

「改めて。みんなには今年は色々とお世話になった。ありがとう」

頭を下げる。

それは素直な思いだった。本当に今年はいろいろな人にお世話になった。そして、一緒に年越しができるのを嬉しく思っている。

「私もレイにはお世話になったわ。またよろしくね」

「私もそうですね。レイさんには本当に、色々とお世話になりました」

「ふふん！ 来年は私もいっぱいお世話になるもんね！ よろしくね、お兄ちゃんっ！」

その言葉に微笑を浮かべる。

そうしてついにカウントダウンに入る。ステラは机に時計を持ってきて、それをじっと見つめてカウントダウンに入っていた。

「5、4、3、2、1 明けて、おめでとう！」
『明けて、おめでとう！』

改めて全員の声が重なる。

ついに明けた。さて、今年はどのような年になるのだろうか。

ステラが入学し、俺たちは二年生へと進級。そしてレベツカ先輩は最上級生である四年生となる。

きっと今年は、去年以上に楽しい生活になるに違いない。

「今年もよろしく願いますね。皆さん」

「今年もよろしくね」

「よろしくー！！ いえーいっ！」

三人の笑顔が視界に入る。それに、リビングにいる両親も微笑ましいのか、こちらの様子を楽しそうに窺っていた。

「ああ。改めて、今年もよろしく頼む」

年が明けた。今までは、別にそんな事を特別に思ったことなどなかった。軍人時代も、療養している期間も特に意識したことはない。

ただ時間が過ぎているだけ。そんな感覚でしかなかった。

だというのにどうしてだろう。今年は、こんなにも特別に感じるのは。

それはきつと、俺が変わったという証……なのだろうか。

変わる事などないと思っていた。

この世界は醜いまま、俺はずっとその世界にいたと思っていた。

けど世界が変わるように、人も変わっていく。そんな当たり前の変化と言うものを、俺はこの一年間で学んだ気がする。

今年はどのような一年になるのか。

辛いこと、楽しいこと、色々あるのかもしれない。

だがたった一つだけ思うのは……俺は間違いなく、今年の学院での生活も期待しているということだ。

第243話 まさかのデート？

実家から戻り、俺は寮で一人で過ごしていた。まだ学院が始まるまで時間があるので、寮は未だに閑散としている。確か、エヴィは五日に帰ってくると言っていたな。

一月二日。

今は年が明けたということで、街はかなり賑わっている。特に、一日からの三日間は出店なども出てかなり盛り上げるらしい。

そして俺は、朝から外に出る準備をしていた。

今日はあの人と二人で出かける約束をしていたからだ。年末、俺が実家に帰る前にある手紙が届いたのだ。

レイへ。聖歌祭はレイと踊ろうと思ったのに、歌とダンスで時間がなかったよー！ もう、全く！ 王族も大変なんだよねっ！ まあ文句を言っても仕方ないけどね。その代わり、一月二日はボクと二人きりでデートしてくれない？ 時間が何とかその日は取れそうなんだ！ 午前中から昼過ぎくらいまでしか、時間はないけど。その、ダメ……かな？ 追記 このことは二人の秘密だよっ！ 誰にも言っちゃダメだよ！

そう書かれた手紙が寮へと届いた。それは読んだ時には、返事をどうしようか迷ったが別に予定もないので了承しておいた。

それにオリヴィア王女とはあまり会う機会がなく、ちゃんとまとまった時間を一緒に過ごしたことは少ない。

相手が王族なので仕方がない、という側面もあるが俺は彼女が求めるのなら応じたいと思っている。

自分がやはり年下に甘いのは、間違いないのだろう。

コンコンコン、とノックの音がした。すぐに扉に向かって、開けるとそこには以前のようにオリヴィア王女が立っていた。

「やつぽー！ 今日ではよろしくね！」

元気よく挨拶をする彼女だが、今日はこの前と装いが違う。相変わらず防寒具でもふもふとしているのは同じだが、化粧でもしているのか大人っぽく見える。

それに髪も編み込みをして、それがさらに魅力をぐっと引き立てる。今まではステラと同じで妹のような感覚だったが、こうしてみると改めて一国の姫なのだと実感する。

「どうしたの？ あ……っ！」

何かに気がついたのか、ニヤニヤと笑い始める。

「もしかして、今日のボクが可愛いからじつと見つめちゃったとか？」

「おおよそ、当たっている。ということで素直に感想を述べることにした。」

「はい。化粧は最低限ですが、少し大人っぽく見えますね。それに髪の毛も綺麗な編み込みで可愛いです。それに、防寒具で隠れているとはいえ服装もとても似合っているかと」

「う……ぐっ……！」

急に胸を押さえて、その場にしゃがんでしまう。

「だ、大丈夫ですかっ……！？」

「ふふ。あと少しで、萌え死ぬところだったよ……レイ、やるね」

ニヤツと笑いながらぐつと親指を立てて、謎の賛辞を送ってくるのだが……やはり、謎である。

ただ、元気であることに変わりはないので良かったのだが。

「それにしても、レイこそ大人っぽいというか……大人そのものというか」

「そうですか？」

「うん。真っ黒なロングコートにブーツは映えるね。それにレイは背筋がシャキッ！としてるから大きく見えるのもあるよね」

「なるほど。そうでしたか」

「うんうん。素晴らしいカップルだね！　じゃあレッツゴーだよっ！」

「はい。行きましょう」

他愛のない会話もそこそこにして、俺たちはさっそく街へと繰り出すのだった。

「うわぁ……人が多いねえ」

「そうですね。自分も来るのは初めてですが、多いですね」

中央区。そこにやってくると、いつもの倍は人がいるだろうか。この人混みの中を抜けていくのは、なかなか大変そうだ。

流石は新年が明けたばかりといったところ。

「では、オリヴィア王女」

「ん？ どうしたの。手なんか出して」

「逸れてしまうので、手を繋ぎましょう」

「手を繋ぎましょう……っ！！？」

明らかに驚いている様子だが、この人混みの中を普通に進んでしまえば逸れてしまうのは間違いない。

だからこそ、手を繋ごうと提案したのだが……。

「はい。このままだと逸れてしまいますよ」

「ふ、ふん。まあ、ボクは余裕だけどね！ もともとボクから言うつもりだったしねっ！」

ギュッとその小さな手を握る。とても冷たい手だった。しかしそれも、この寒さでは無理はないだろう。

「思ったのですが、バレるとまずいのでは？」

「ふふ〜ん。冬はこのもふもふがあるから、大丈夫なんだよっ！」
「ああ。確かにそうですね」

グイッとマフラーを上にあげる。マフラーに耳当てをつけている彼女は、確かに一見すれば誰だか分からないだろう。特にマフラーは大きめものをあえてつけているのか、顔が隠れてしまっほどには長さがある。

「さて、何か食べものでも買いますか」

「お！ いいねえ……！ ボクも今日はお小遣いを持ってきているんだっ！」

「いえ。自分が全部出しますよ」

「……え、でもその。悪いっていうか、ボクから誘ったんだし」

チラッと俺の顔を窺うようにして見上げてくるが、ここはしっかりと伝えておくべきだろう。

「こういうことは、年長者のいうことに従っておけばいいんですよ」
「リディアにそう教えられたの？」

「はい。だから、遠慮しなくてもいいです。お金は十分にありますので」

「……そっか。なら、お言葉に甘えようかなっ！」

一瞬だけ、寂しそうな表情を見せた。彼女は知っているのだ。俺の過去に何があったのか。それを踏まえた上で、笑ってくれる。

本当によくできたお方だ。

そんな風に思うと、俺たちは手を繋いで人混みの中を進んでいく

のだった。

その後。

色々と買い食いをしたり、普通に買い物をしたりして、休憩ということで公園のベンチに座っていた。

「ふう……いっぱい食べたねえ」

「そうですね。思ったよりも、食べましたね」

「う……新年はいっぱい食べなくなるんだもん！ 太ったりしてないからね？」

じつと半眼で見上げてくるが、もちろん別にそんなことは思ったりはしていない。

「はは。大丈夫ですよ。そんな風に思ったりはしません」

「……」

今度は打って変わって、どこか遠くを見つめるようにして彼女はボソリと呟いた。

「レイも、そんな風に笑うようになったんだね。出会った時は、ちよつと怖かったけど」

「学院に入ること、変わったのかもしれない」

「そっか。時間が経つのは早いね」

「そうですね」

「ボクも来年度は学院に入学するよ。もちろん、ちゃんと試験を受けてね」

「王族は免除されることもあるのでは？」

その横顔を見つめる。

それは一歳年下とは思えない、真剣な表情だった。

「あるけど、ボクはちゃんと試験を受けるよ。だってそうじゃないと、みんなに失礼だよ。ボクは王族で特別な存在だってことは分かっている。でも、学院に行くのなら少しは普通に過ごしてみたいんだ。ありふれた日常ってやつを、経験してみたい」

それはきつと、ずっと思っていたことなのだろう。王族の苦勞は、俺には全く理解できない。しかし、オリヴィア王女は自分なりに懸命に考えて、ちゃんと試験を受けることにしたのだろう。

「そ・れ・に！」

勢いよく立ち上がると、俺の方を向いて快活な笑顔を浮かべる。

「レイの後輩になるんだからね。それがすつごく楽しみなんだ。これからよろしくね、先輩？」

悪戯めいた顔で、ニヤツと笑う。その姿はやはり、オリヴィア王女らしいと思った。来年度は、彼女だけではない。ステラも、マリアも入学する予定らしい。

そうか。俺は先輩になるのか。

彼女にそう言われて、改めて自覚する。

「先輩ですか？」

「うん！ 入学したら、こうやって呼ぼうかなって。ボクだけの特権じゃない？」

「そうですね。新鮮でいいかと思います」

「ふふ。だよね。これでもっとリードを広げちゃうぞーっ！」

そういつて、一人で「おー！」と拳を突き上げる。

相変わらず元気なお人だ。

そうして俺たちは束の間の時間を共に過ごすのだった。

第244話 ああ、愛しきお姉様……？

一月四日。

明日になれば、エヴィも戻ってくる。この広々とした部屋は、俺一人では流石に持て余してしまう。

今日は特に予定はないので、いつものように読書をしようと思っているとノックの音が聞こえてくる。

最近はやけに来訪が多い気がする。といってもそれは、ほとんどがオリヴィア王女のものだ。アポなしでやってくるのは彼女くらいだからな。

そして今回も、同じだろうと思っていると……その予想は外れることになった。

「レイ！ ちょっと話があるんだけどっ！」

純白の髪に、耳には大量のピアス。そう、そこにいたのはまさかのマリアだった。街でばったりと出会うことなどは多々あったが、こうして彼女が尋ねてくるのは初めてである。

「どうした。そんなに慌てて」

「話があるの。入れてくれない？」

鋭い雰囲気を纏っている。有無を言わせないその態度に、とりあえずは応じる。

室内へと案内すると、彼女と向かい合うようにしてテーブルに着く。

「単刀直入に聞くけど」

「ああ」

「リリーーお姉様って、何者なの？」

「……」

まだ慌てるような時間ではない。

そうだ。落ち着け。

しかし、直面することになるのは分かりきっていた。そもそもこのアーノルド魔術学院にマリアが入学してしまえば、バレてしまうことは考慮していた。

それも含めて、先延ばしにしていたのが現状だ。

じつと、真剣な眼差しで見つめてくる。俺と言えば、冷や汗が止まることはなかった。

「ねえ。私さ、気になって調べたの。来年入学するし、ちょうど良いかなんて思っで。この学院にお姉様がどのクラスにいるのか」

「あ、ああ……」

「いないの。それで、別の学院なのかなって調べてもないし。ねえ、お姉様って本当に学生なの？　そもそも、本当にレイの妹なの

……？」

スッと天井を見上げる。

目を瞑り、覚悟を決める。きっとマリアの追及から逃れることはできないだろう。ここは、誠心誠意謝罪をすべきだろう。

きっとマリアはショックを受ける。彼女がリリーのことを尊敬しているのは、その態度から察していた。

だがこれ以上、嘘を重ねてしまうのは……大きな罪になってしま
う。

覚悟を決めるべきだ。

「マリア。すまなかった」

「え、ど……どうしたの？ 頭なんか下げてさ」

テーブルに額をつけて、謝罪をする。決して頭を上げることなく、俺は真実を告げる。

「リリーー」ホワイトは架空の人物なんだ？」

「架空の人物……？ でも、私は何度も会ってるけど……？」

顔を上げる。すると、彼女は戸惑っているのか大きく目を見開いていた。

「証拠を見せたほうがいいだろうな。少し待っていてくれ」

覚悟を決める。

そして俺は持参している女装セットを使って、手短かにリリィへと変貌を遂げる。この姿を見せるのは心苦しい。しかし、ここで誤魔化してしまうのはマリアに申し訳ない。

しっかりと、真摯に向き合うべきだろう。

「え……っ！！？ お、お姉様っ！！？ どうしてここに……っ！？」

「マリアさん……」

声は女性のもので変えておいた。そして、彼女の肩にそっと両手を置く。

「レイがいなくなっ、お姉様が出てきた……？ 待って。もしかして……」

状況を理解しつつある。狼狽しているようだが、マリアはもう分かっているのかもしれない。

「マリアさん。心して聞いてください」

「はい……お姉様」

「私は レイ＝ホワイトなのです」

その言葉を聞いた瞬間、マリアは黙り込んでしまう。

そして、五分は経過しただろうか。マリアはなんとか口を開くのだった。

「えっと。もう一度いいですか？」

「私は　レイ＝ホワイトなのです」

「れ、レイ？　でも体つきも、声も違いますけど……？」

「両方とも、魔術で操作しているのです」

「ま、魔術で……っ！！？」

「今まで、騙してしまい申し訳ありませんでした。本当に、本当にすみませんでした……」

頭を下げる。こればかりは、彼女の気が済むまで謝るしかないだろう。

「えっと……じゃあ、いつもの声も出せるってこと？」

期待しているような、恐怖しているような瞳。

マリアが望むのならば、この姿でいつもの声を出すのは仕方ない。

「そうだ。こちらの声も、普通に出すことができる」

「あ……ああ……ほ、本当レイなの？」

「すまない。真正正銘、俺はレイ＝ホワイトだ」

「……きゅ」

変な声を上げると、マリアは意識を失って倒れてしまうのだった。

「マリアっ！？　大丈夫かっ！！？」

その後。

とりあえず、自分のベッドにマリアを寝かしておく。彼女が起きるまで、ずっと隣にいるつもりだ。しかし……あまりのシヨックに

気絶してしまったか。

本当にそれほど衝撃的だったんだろうな。

また、彼女が気絶している間に男性の姿に戻っておいた。あの姿を見るのは、あまりにも酷だろう。

「う……ううう……お姉様あ……」

「マリア。目が覚めたか？」

「あ、レイ……ということは、夢じゃないのね」

「すまない……」

マリアが目を覚ました。上半身だけで起き上がると、俺たちは再び向き合う。

「……お姉様はレイだったんだ」

「ああ。昔、潜入任務のために女装したことがあってな。その延長のようなものだ」

「そっか。そういうことか」

「すまない……なんと謝罪すればいいのか。とりあえず、あの姿で二度とマリアの前には現れないと約束する」

と、そのように言葉にするとマリアはポカンとした表情を浮かべる。

「え。それだとお姉さまにもう会えないってこと？」

「そうなるな」

「それはダメよっ!!」

バンっと思い切りベッドを叩く。その怒りは、俺に対してという

よりもリリーに会えないことに対する怒りだった。

「ちょっと待って。整理するから」

「あ……ああ」

額に手を当て、眉間にシワを寄せながら何かを考え込んでいるマリア。そして彼女は、目を瞑ったまま口を開く。

「思ったんだけど、私がリクエストすればお姉様になってくるの？」

「それは構わないが……嫌ではないのか？」

「……それはそれ、これはこれ、よ。やっぱりレイと分かっているも、お姉様には変わりはないわ。それに、お姉様にはたくさんお世話になったし。この学院に入るのも、お姉さまのためですと頑張ってきたし……」

「申し訳ない……」

「もうっ！ 謝らないで！ いいのよ、別に。勝手に私が盛り上がってただけだし。まあ、流石に女装なのは夢にも思っただけだ」

いつものマリアだった。彼女は、俺に怒りを向けることなくそのように言ってくれる。

俺は今まで嘘を重ねていたというのに……本当に素晴らしい人だな、マリアは。

と、内心で思う。

「分かった！ レイはこれから、私が頼んだらお姉様になってね」

「それは別に構わないが」

「それと、お姉様の時は男の声を出さないこと。徹底して、お姉様

でいることに努めて」

「あ、ああ……」

彼女は口元に手を持っていくと、何やらボソボソと呟き始める。

「うん……うん……。いける、いけるわ。むしろ会いたい時にお姉様に会えるなんて、素晴らしいことじゃない。それに、これは男の娘っていうの？ お姉ちゃんが持つてる本にもあったけど。そう考えると、一度で二度美味しい的な？ ふふ。ふふふ。これは逆にいいかもしれないわ……」

と鬼気迫る様子で、彼女は何かを語っていた。

独り言のようだったので、よく聞き取れなかったがどうやらマリアは切り替えてくれるのだろうか。

「よしっ！」

パンっと思い切り手を叩くと、マリアは俺の瞳をじっと見つめてくる。

「これからは、私が言ったらお姉様になってね。そんなに高頻度では要求しないから」

「あ、ああ……」

「あとは、ちゃんと私を可愛がってね。お姉様の時は」

「えっと……それでいいのか？」

「いいのよ！ 逆になんかいい気がしてきたわっ！ じゃ、私はお姉様に似合う服を買ってくるから！ またねっ！」

颯爽と去っていくその姿を見て、呆然と立ち尽くす。

まるで嵐のような出来事だった。しかし、怒られることはなかったとはいえ、これでよかったのか……？

この時、俺は自分が軽率に承諾してしまったことを 二年生になった時に後悔するとは思ってもみなかった。

第245話 冬休みの終わり

冬休みも終わりを迎えることになった。

明日からはついに三学期が開始となる。流石に三学期には、魔術^{マジック}・シュバリエ^{シュバリエ} 剣士競技大会や大規模魔術戦などの大きな催し物はない予定だ。

大規模魔術戦自体は、割とギリギリに通知されたものだったが今回も同じようなことがあるとは思えないだろう。

そして今はエヴィが帰ってきたので、二人で筋トレに励んでいる最中だった。

「ふっ……ふっ……！」

「はっ……はっ……！」

室内にて、汗が滴る。ポタリポタリと溜まっていくその汗。それを拭うことなく、俺たちは互いに自分の筋トレメニューをこなしていく。

もちろん、上半身は裸だ。この真冬ではあるが、筋トレをすれば全てを超越できるのだ。

寒さなど些事^{さじ}でしかない。

「よしっ……こんなものか」

「ああ」

俺たちは筋トレを終えると、すぐにタンパク質の摂取に入る。その途中で俺はエヴィにあのことを聞いてみることにした。

「エヴィ。実家はとうだったんだ？」

「……ああ。そのことか」

向き合う。

エヴィは少しだけ恥ずかしそうに鼻をかくと、実家であった話をしてくれた。

「その、レイに話を聞いただろう？」

「ああ」

「で、俺も色々両親にも苦労があったんじゃないかって……思ってたな」

「話してみたのか」

「久しぶりに……そうだな。数年ぶりに、まともに話をしたぜ」

その声音はとても落ち着いたものだった。久しぶりに見たエヴィのその顔は、とても清々しいものに見えた。

「そうか」

「親父とは、仲直りとまではいかなえが……前よりも関係はよくなった気がする。それに大会の話とか、レイの話で盛り上がったんだぜ？ レイの昔の話も少し聞いたが……」

その言葉を聞いて、少しだけ身構えてしまう。

「デルクは……何か言っていたか？」

探るように、そう尋ねる。この冬ということもあって、否応なく思い出してしまう自分の過去。しかし、エヴィの顔は先ほどと変わることはなかった。

「レイは今のレイと、ちつとも変わらないってことだな」

「変わらない……？」

「ああ。レイはいつだって、真剣で誰かのために努力できる男だ。不器用なところはあるが、俺も親父も同じ意見だったぜ？」

ニカツと白い歯を見せて、エヴィは笑う。

自分の中では昔の自分と今の自分が同じだとは決して思えない。だが、きつと根幹の部分は同じなのかもしれない。

真剣で誰かのために努力できる男、か。

そう。俺はいつだって、懸命に生きることしかできなかった。未来を見据えることなく、ただ目の前にある圧倒的な現実に向かう。

極東戦役の時も、ここで学生として過ごしている時も、ずっとそうだったのだ。

俺はただ、懸命に生きているんだ。

そのことを改めて、エヴィの言葉で自覚する。

「エヴィ。ありがとう。そう言ってもらえて、本当に嬉しい」

「へへ。ちょっと恥ずいけど、レイはいつだってそうだと思うぜ？」

だからきつとお前の周りにはたくさんの人間が集まるんだ」

「そうだろうか？」

「俺を信じられないか？」

その双眸をじつと見据える。それは決して嘘をついているものではない。エヴィは真剣にそう考えてくれているのだ。

「……信じるさ。改めて、これからもよろしく頼む」

「もちろんだぜっ！」

グツと思い切り握手をする。それは痛いくらいの握手。しかし今はその痛みがどこか、心地よいと感じた。

その日の夜。俺はアビーさんからの呼び出しに応じることになった。急な話ではあるが、別に夜には予定もない。

明日からはいつも通り学院が始まるだけなので、大丈夫だろう。

薄暗い校舎の中を進んでいく。

向かうのは学院長室だ。この学院に入学したときに一度だけ呼ばれたのだが、今回でそれは二度目。

そして俺はついに、目的地へとたどり着いた。

軽くノックをすると室内からアビーさんの声が聞こえてくる。

「入ってくれ」

「失礼します」

扉を開けて、丁寧に一礼をする。そして顔を上げると、俺は少しだけ驚いてしまう。そこにいたのは、アビーさんだけではなかった。

車椅子に座った師匠、それにキャロルだった。カーラさんがいないということは、アビーさんかキャロルが師匠をここまで連れてきたのだろうか。

またいつもと雰囲気が違う気がした。ここに張り詰めているのは、あの時の……軍人だった時代を思い出す。そんな、雰囲気が漂っていた。

「何かあったのですか？」

開口一番。そう尋ねてみることにした。ここは単刀直入に聞いてしまった方が早いだろう。

「レイ。リディアの件だが……」

と、アビーさんがその話をしようとするが師匠がスッと手を横に伸ばすと、それを静止する。

「アビー。ここは、私から言っておくべきだろう」

「……そうだな」

そして、師匠が車椅子を自分の手で押して俺の元までやって来る。

「レイ。そんなに気を張らなくてもいい。重い話じゃないさ」

「そうなのですか？」

「ああ。単刀直入に言うが、私は来年度からここで教師をすることになったんだ」

「師匠が教師……ですか？」

驚く。師匠は別に、研究者としても十分に実績があるのでそちらの道でも生活をしていくことができる。だというのに、どうして今になってここで教師をするのだろうか。

「元々、その話は一年前から出ていたんだ」

「それは……初めて知りました」

「はは。言っていないからな」

微笑を浮かべる。

師匠は髪を後ろへと流してから、さらに話を続けた。

「前も言ったが……私は、レイに対して間違いを教えてしまったと思っていた。もう私には、レイに何かを教える資格はないのではないか、とな」

「そんなことは」

あるわけがない、と言おうとするもそれは遮られてしまう。

「ああ。分かっているさ。レイがそんなことを言うわけがないってな。しかし、それは私の気持ちの問題なんだ。それに整理がつかない限り、私は前に進むことはできない」

「……」

「だから、あの誕生日の日に決めたんだ。前に進むと」

「……誓約の破棄も、それに合わせると言うことですか？」

「そうだな。きっと、車椅子でなくとも杖があれば大丈夫な程度にはなるだろう」

「そうですね……」

師匠がこの学院で教師をする、か。軍人時代から軍事教練などを任せられていたこともあって、師匠は人にものを教えるのが上手い。

昔に少しだけ疑問に感じたことあった。アビーさんがこの学院の学院長となり、キャロルもやってきた。

そこに師匠がいてもおかしくはない。いや、むしろどうしていないのだろうか……と思った時もあった。

師匠は迷っていたのだ。俺と同じように、自分の行き先を。

そしてついに決めた。だからこうして、俺をこの場に呼んだのだろう。

「レイには先に話しておこうと思ってな。学院での手続きのついでにな。どうだ、驚いたか？」

ニヤツと人の悪そうな笑みを浮かべる。その顔を見て、俺はフツと軽く笑いを浮かべた。

「はい。とても驚きました」

「そうか。それならよかった」

久しぶりに見た、師匠の快活な笑顔。やはり彼女はとても美しく、美しい人だ。改めて、そう思った。

「しかし、もう十年近くも経つのか……」

ふと感慨深そうにそう声を漏らす。

「はい。師匠と……他の人たちとも出会って、十年が経とうとしています」

「早いものだ。私たちはずっと、軍人として生きていくと思っていたからな。それが今はこうして学院で教師として生きている。不思議なものだ」

その言葉には、アビーさんとキャロルもまた頷いて同意をする。

それと同時に思い出す。

あの時の、十年前に出会ったあの瞬間を。

第245話 冬休みの終わり（後書き）

・追記

ページ最下部にて、書籍版の情報を公開しています。イラストの担当は【梱枝りこ先生】になります。講談社ラノベ文庫様より、書籍2巻が11月2日（月）に発売です！ また、コミックス第1巻は11月9日（月）に発売です！

文庫サイズでお求めやすいお値段となっておりますので、よろしく願います！

・あとがき

番外編2 Winter Vacation 終

第五章 追憶の空 続

次回より過去編です。是非、お楽しみください！

第246話 紅蓮の空

暗闇。

俺はただ、暗闇の中にいた。

ずっとそうだった。別に変哲もない村に生まれて、家族と一緒に過ごしていたはずだった。当時はまだ四歳で、家族との記憶がしっかりと残っているわけではない。

そんな中、後に極東戦役と呼ばれる戦争に巻き込まれることになった。

明確に覚えているのは 怒号と悲鳴。そして、見渡す限りの真っ赤な世界。

人々が逃げる中、俺もただ無心に逃げることにした。最後に両親は俺を助けて目の前で死んでいった気がする。

その記憶も、もはや曖昧だった。

いやそれはきっと、俺の深層心理がそうさせているのだ。あの時の記憶は決して思い出しはならないと。

そこから先、一人になった。村の人間はどこに行ったのかも、誰が生き残っているのかも、分からなかった。

ただ一人、生きること懸命になっていた。幼いながらも生存本能はあるのか、我武者羅に生きていた気がする。

呆然と歩き続ける日々。そして、至る所が戦場となる。当時はまだ理解していなかった。一体何が起きているのか。

それは魔術を使用した初めての大規模な戦争だったのだ。今までのように、ただ剣などで戦う戦争とは比べものにはならない。

無慈悲に人の命が散っていくのは、当たり前だった。

目の前で人が消えていくのも、当たり前だった。

その時思ったのだ。

この世界はあまりにも醜いと。そして俺は生きるために心を閉ざすしかなかった。そうしなければ、自分が自分でなくなってしまう気がしたから。

「あ……うう……ああ……」

周囲は紅蓮に染まりきっていた。それに、そこにはたくさんの人だったものがあつた。酷い場所。

あまりにも酷く、凄惨な場所にたどり着いた。

やっと辿り着いた果てが、こんな場所なのか。

当時はなんとなくそう思った。その時は五歳になっているかどうか、そんな時期だった気がする。

まだ自我も明確でない頃に、人の死を経験し過ぎた俺は全てに疲れ切っていた。

ただ一人、空を見上げるようにして大地に寝転ぶ。

隣にいる人はすでに息をしてない。いや、隣だけではない。この場にいる人間は、俺を除いて全員が息を引き取っていた。

どうして自分が生き残っているのか。そんなことも分からなかった。

思っのは、疲れた……ということだった。

空を見上げると広がっているのは紅蓮の空。真っ赤な空の光が照らしつけてくる。地面もまた、真紅に染まっている。

ああ。そうか。世界はこんなにも、赤く染まっているのか。

まるで世界の全てが深紅に染まっているかと勘違いするほどに、凄惨な場所しか見てこなかったのだ。

もう、楽になりたい。生きていても、仕方がない。

生存本能でただ進むしかなかった俺は、ついに諦めるということ

を学んだ。もう体がどうなっているのかも分からない。

熱いのか、冷たいのか、痛いのか、痛くないのか、そんな感覚すらも消失していた。

「ああ……うう……う……」

呻き声を漏らすことで精一杯だった。それだけが今の自分に許されたことだった。

この空の果てに何があるのか。

当時の俺は、まだ知る由もなかった。

氷剣の魔術師が世界を統べる 過去編 追憶の空

「あゝあ。またお前たちと同じとはなあ……」

不満を言うように声を漏らすのはリディア「エインズワースその人だった。

腰まである長い金色の髪を後ろに流しながら、彼女はそう口にする。またその隣には、あの二人もいた。

「ま、腐れ縁ってやつか」

「キャロキヤロは嬉しいよぉー みんなまた一緒だねっ！」

アビー「ガーネット。

キャロル「キャロライン。

アビーはこの日のために髪を短く切りそろえ、長さは肩に届かない程度。一方のキャロルは、桃色の髪を高い位置でツインテールにまとめていた。

三人ともに年齢はまだ十五歳。飛び級で入学したアーノルド魔術学院を卒業したばかりだった。

そんな三人は同じ服装をしていた。それは、決して私服でも学生服でもない。紺こんを基調とした、装飾の多い服装。縁ふちのラインは金色となっており、その豪華さは一見ただけでも理解できる。

そう。それは軍服だった。

三人が大学に進むことはなかった。もともと期待はされていたのだが、なんの因果か三人ともにアーノルド王国軍に進むことになった。

もつともそれは、軍の上層部が三人の力を欲しいと思って誘った結果なのだが。この若さで軍に進むことは、あり得ないことである。しかし、その才能故にこうしてこの場に立っているのだ。

リディア「エインズワース
アビー」ガーネット
キャロル「キャロライン」

この三人は魔術の歴史が始まって以来の天才だと謳われていた。それこそ、数百年に一人の逸材が同時期に現れたと評されている。

その中でもすでに頭角を現していたのは、彼女だった。

「はあ……それにしても、もう学生じゃないのか。色々と時間が経つのは早いよなあ」

感慨深そうに呟くのはリディアだった。

リディア「エインズワース。魔術師の中で、その存在を知らない者はいない。当時はまだ、血統主義が主流であり貴族こそが至高とされていた時代に現れた天才中の天才。」

魔術理論に関して造詣が深いだけではない。その実践技術もまたすでに一級品。彼女は、現在は聖級グランドの地位にたどり着いている魔術師だ。それも、学院に在学中に。

アビーとキャロルであっても、今はまだその下の白金級プラチナの魔術師である。

もっとも、学生で金級ゴールドに至ればかなり優秀な方なので、この三人は異常すぎるのだが。

「だよねー　キャラキヤロも、そう思うよぉー」

「はぁ……アビーはともかく、このアホピンクも一緒とはな。こんなふざけた見た目に、ふざけた言動をしているのに魔術師として優秀とは世界がおかしいんじゃないか？」

「もうっ！　リディアちゃんってば、相変わらずキャラキヤロに敵しんだからっ！　ぶんぶんがおーっだぞっ！」

猫撫で声で、人差し指を立てるとそれを頭へと持っていく。自分は怒っているということをアピールするにしても、この言動は流石に……と思うのは、もう昔のことだ。

すでにキャラロルに対して慣れてしまった二人は、ただ嘆息を漏らすだけだった。

「まあ、いいだろう。キャラロも大切な仲間だろう？」

アビーはこの二人の中間的な存在だ。リディアは大雑把であり、キャラロルは言動に難あり。その中でアビーの存在は大きい。

三人の中で唯一の常識人であり、二人の間にいることでこの三人は成り立っていると言ってもいいだろう。

リディアとキャラロルを放っておけば、二人はすぐに喧嘩を初めてしまうからだ。

「ま、そういうことにしてやるよ」

ニヤツと笑うリディアのその顔は、どこか人の悪い笑みを浮かべているようなものだった。

そして、三人がなぜ一緒にいるのか。それも軍服を着て。

当時は魔術による大規模な戦いが確認され始めた頃だった。そこで立ち上げられたのは特殊部隊。

王国の中でも腕の立つ魔術師を集めた精鋭部隊。その設立に際して、この三人は学生を卒業して間も無いというのに抜擢しよう、という試みがあったのだ。もちろんそれに際して、士官学校へ入校はするのだが。

今日はその説明があるということで、ある少佐の執務室に呼ばれていたのだ。

まだその少佐が来ていないということで雑談を繰り広げていた三人だが、扉がノックされると入ってきたのは秘書の女性と少しだけ歳を重ねている男性の姿だった。

「すまない。少し会議が立て込んでしまつてね」

物腰柔らかい人だった。

そんな彼の名前は、ヘンリック・ファーレンハイト。真つ黒な髪を刈り込んでおり、その体軀はそれなりの厚みがある。佐官ではあるが、その肉体は依然として保たれているままだった。

「いえ。私たちも先ほど到着したところであります」

冷静に答えるのはアビーだった。

「さて。君たち三人には、改めて話がある」

これはきつと運命だったのだろう。後に三人はそう思うようになる。王国が用意した特殊部隊。そこに配属されることになる三人。

それこそが、レイとの出会いの始まりでもあったのだ。

第247話 彼女たちの行末

「さて、まずは君たちの今後について話をしよう」

改めて、ヘンリックは三人に向かって彼女たちの今後についての話をする。秘書が渡してきた書類を受け取ると、彼はそれに軽く目を通した後、口を開いた。

「まずは士官学校だが、通常の在学期間は四年。しかし君たちには、それを一年で修了してもらう。半年間はこちらで士官学校で、残り半年は実地での演習となる。実地の方は新しい特殊部隊の立ち上げとなるだろう」

その話は初めて聞くものだった。だが、誰一人として表情を崩すことはなく、真剣に立ち続ける。

「特殊部隊の正式な設立は一年後。君たち三人は、士官学校を卒業後そこに配属されることが決定されている。つまり、君たちは特別扱いでかなり期待されているということかな」

そして、それに対してアビーが発言をする。

「発言。よろしいでしょうか」

「構わないよ」

「三人ともに同じ部隊に配属、という認識でよろしいのでしょうか？」

「うん。そうだね」

「なるほど。了解いたしました」

彼女はそれに対して異論を唱えることはなかった。しかし、隣にいるリディアはどうやらそうではないようだった。

「はっ。私たちがあまりにも異常だから、一箇所に集めておこう……って話じゃないのか？ 普通の部隊に配属されると、軋轢あつれきを生むのは間違い無いからな」

「おい。口を慎め。少佐の前だぞ」

「アビー。お前もそう思っているんだろう？」

「……思っているのと、口に出すのはまた違う話だろう」

その真剣な雰囲気はどうにかしようと、キャロルもまた会話に入ってくる。

「もうっ！ 二人とも、そんな怖い顔しちゃダメだよ」 笑顔、笑顔っ！

人差し指を唇の端に持っていて、ニコツと笑顔を作り出すキャロル。しかし、それでこの場の空気が和むわけもなかった。

「はぁ……少佐殿。あの三人は本当に大丈夫なのでしょう？」

「もちろん。将来を期待されているのは、間違いない。この王国始まって以来の、天才たちなのだから」

ヘンリックは軽く手を叩いて注意を自分の方へと向ける。

「エインズワースの言うことはもちろん分かっている。これは体ていよ

く君たちを一箇所に集めて、隔離しようとしているのでは無いかと思うのは。それに対して、答えを教えよう。答えは　イエスだ」

隣にいる秘書がギョツと驚いたような顔をするが、彼は話を続ける。

「はつきり言おう。私たち王国軍は、君たち三人のことを多少持て余していると言ってもいいだろう。もともとは士官学校にすら入れずに、すぐに特殊部隊に配属すべきと言う声もあったくらいだ。ま、そこはなんとか士官学校で学ぶ機会は与えることができたけどね」

先ほどとは雰囲気が違う。

それは張り詰めたものが少しだけ弛緩していくような。

ヘンリックもまた若い軍人であり、今回の件に関して一任されている。そのように言うと言えはいいのだが、実際のところは押しつけられた……と言ったほうが正しいだろう。

「それで少佐殿。私たちは、ただの実験動物にされるわけですか？」

最低限の礼節は弁えているのか、リディアは上官に接する口調で話しかける。もっともそれは口調だけであって、その態度はあまりにも横柄なのだが。

「はははっ！　実験動物かつ！　いやいや、君たち三人をそんな風に扱うなんてことはしないよ。それに私からすればまだ幼い少女たちだ。ちゃんとした対応はする。けれど、覚えていて欲しい。君たちの魔術師としての才能は、すでに世界トップレベルであると言うことを」

「ふんつ。まあ、当然ですね」

ニヤツと笑うリディア。アビーはそんな彼女の態度に、「はあ……」と嘆息を漏らし、キャロルはニコニコと笑っているままだった。

リディアは自分の才能に疑いなど持っているはずがなかった。

アーノルド魔術学院には飛び級で入学。そこで収めた成績はおそらくは、歴代でも最高。座学に関してはアビーとキャロルと競り合っていたが、魔術の実践的な技術に関しては追隨を許しはしない。

その圧倒的な才能はすでに学生レベルでは無い。

いや、学生の域を超えて世界トップレベルなのは間違いなかった。

「特にエインズワース。君は十五歳にして次期七大魔術師候補として、すでに名前が上がっているほどだ」

「七大魔術師ですか。別にそんな肩書に興味はありませんけど」

「ほう……では、君の興味は何かな？」

その問いに関して、彼女はその豊満な胸を張って自慢気に応える。

「さあ。どうでしょう。でも、真理探究といえは聞こえが良く無いですか？」

「はははっ！ それは魔術師らしい回答だね」

「でしょう？」

笑いが起こる。それに笑っているのは、ヘンリックとキャロルだけだった。アビーと秘書はただ呆れたような顔をしているだけだった。

「ふう……いやはや、流石は王国始まって以来の天才魔術師だ。面白い人材だ」

「恐縮です」

ニヤツと笑うリディアは、一体何を考えているのか。いやきつと何も考えていないのだろうとアビーは思っていた。

「さて、話はここまでだ。一応、士官学校に関する資料を渡しておこう。また何か進展があれば伝えよう」

「はっ。それでは、失礼いたします」

アビーに続いて、リディアはだるそうに、キャロルは面白そうに敬礼をすると三人はこの部屋を去っていくのだった。

パタン、とドアが閉じてからヘンリックはグツと椅子の背もたれに体重を預ける。

「ふう……」

「お疲れ様です」

「助かるよ」

いつ間に淹れたのか、彼の目の前には紅茶が置かれていた。

「あの三人ですが、大丈夫でしょうか？」

「ああ。アビー、ガーネットは真面目な人間だ。それこそ、軍人気質と言ってもいいだろう。あの二人を引っ張っていつてくれるに違いない」

ズズズと紅茶を飲むと、彼は少しだけリラックスした表情になる。

ヘンリックとしても、実は今の邂逅かいこうはそれなりに緊張するものだったのだ。

「それにしても、あれが稀代の天才魔術師リディア・エインズワースですか。印象は最悪ですけど」

秘書の女性は吐き捨てるようにそう言った。

「性格に難があるのは学生時代から有名な話だ。気性が荒いのも、ね」

「あれが世界最高の魔術師なのですか？」

「……そうか。君はまだ、彼女の実力を見ていないのか？」

「マギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会では見ていますが、実際は違うと？」

リディアがマギクス・シュバリエ魔術剣士競技大会を四連覇したのは有名な話だった。彼女はその類稀なる魔術戦闘のセンスで、圧倒的な強さを誇っていた。

飛び級で入学したにもかかわらず、その圧倒的なセンスで年上の魔術師を凌駕していたのだ。

「あの程度じゃ、彼女の本当の実力は見えないよ。所詮は学生レベルだ」

「あれが本気ではないと？」

「本人曰く、半分の力も出していないとか」

「……あれで半分だと言うのですか？」

「彼女の本気は、一度だけ見せてもらったことがある。それはまさに、世界最高の魔術師に相応しいものだった。おそらく、来年には七大魔術師になっているだろう。ということは、十代でその地位に至るのか。ははは、本当に規格外の天才だ」

笑う。

それは純粹にリディアの才能を評価してのものだった。軍の中には、彼女の才能を頑なに認めない者もいる。特にそれは保守的な人間に多い。

しかし、ヘンリックは違う。彼は決して保守的ではなく、革新的な思想の持ち主だった。むしろ変化に対しては喜ぶべきことだと思っている。

「嬉しそうですね」

「ああ。嬉しいとも。あれほどの才能が王国に在ることを感謝しなければならぬ。しかし逆を言えば、彼女の力ほどの国も欲しがる」

「王国に叛逆すると？」

「そこまで大袈裟なものではないが、あらゆる可能性は考慮しておくべきだろう」

「何か策が？」

「ん？ 別にないけど？ これから考えていくさ」

秘書はその言葉に対して、「はあ……」とため息をつく。これはいつものことなのだが、ヘンリックは物事を考えてそうにみえてそうではない時があるのだ。

全く、思わせぶりな態度はやめてほしいと彼女はずっと思っている。

「さて。彼女たちは、一体どのような道を歩んでいくんだろうね」

リディアたちがレイと出会うまで、後二年を切っていた。

第248話 士官学校

リディアたちはメデイカルチェックなど、所定の手続きを終えると正式に士官学校へと入校することになった。

もちろん、そのことはすでに噂になっている。

なんでもアーノルド魔術学院で名を馳せた天才たちがやってくると。

その話を聞いて歓迎するものは多くない。どの時代であっても、目立つものはやはり疎まれてしまう。出る杭は打たれると言うが、まさに彼女たちもそれに直面することになるのだった。

「結局、私たちは同じ部屋か。あ、私はこっちのベッドを一人で使うからな！ お前たちは二人で仲良く上と下を分けて使え」

「キャロキャロは嬉しいよ　　よろしくね、リディアちゃん！
アビーちゃん！」

「……はあ」

前途多難である。

士官学校の寮では四人一部屋になっているのだが、彼女たちは特別扱いということでその部屋に三人で暮らすことになった。

元々三人ともにここには、半年しかいない予定なのだ。半年の課程が終了すれば、その後は現地での実地訓練となる。その特別な過

程をこなすことで、この三人は晴れて士官学校を卒業すると言っ段取りになっている。

その話は、すでにこの士官学校では広まっている。

自分たちが苦勞しているのに、一年で修了など馬鹿げている……
そう思っている者もどうやら存在しているようだが。

「さて、さっそく訓練だ。遅れないようにしよう」

「おう」

「はいはいっ！！」

アビーが先導して、三人はそのまま外の演習場へと向かうのだった。

演習場に到着すると、そこではやはり厳しい目線が三人に注がれる。ここにいるのはすでに士官学校を三年間過ごしてきた人間であり、残り一年で卒業となる。

そこに飛び級のような形で混ざってくる、三人。しかも、つい数ヶ月前までは学生だったのだ。それを面白くない、と思うのはある種、当然だった。

「ほお……お前らが、スーパーエリートか」

圧倒的な巨軀の男が、近寄ってくる。茶色の髪を刈り込んで、その双眸で鋭く睨み付ける。

「は？ お前は誰だ？」

それに臆することなく、リディアは言葉を発した。今までも自分よりも大きな体の魔術師は相手にしてきた。

それに彼女は知っている。何も、体の大きさだけが全てではないのだと。

「どうやら、テメエがリディア」エインズワースのようだな」

「そうだが。ふふ。どうやら、私も有名人のようだな」

「ほざけ。ま、この訓練についてこれると思うなよ？」

緊張感の張り詰めた雰囲気だったが、男はそう言って去っていった。

「おいリディア。あまりことを大きくするなよ？」

「あ？ 別に私からは何もしていないだろうが」

「お前、返り討ちにする気だっただろ？」

「へへ。わかるか？ いやー、学生の方は生半可なやつしかいなかったからな。こうして骨のある奴がいそうで、嬉しいよ。ククク……」

人の悪い笑みを浮かべる。

そう。リディアに関しては、学生の方は相手になる人間がほとんどいなかった。魔術戦において肉薄できるとすれば、アビーくらいだろうか。

キャロルは顔と髪が汚れると言う理由で、あまり魔術戦は好まない。

「よし。揃ったな、お前たち。今日も訓練を開始する」

教官と思われる人間がやってくると、整列する士官候補生たち。その顔には確かな緊張感が宿っていた。

「お前たちも知っているように、新入りがいる。しかし私は特別扱いなどはしない。今日も同じように、訓練を行う」

それはリディアたちを特別扱いしないということを明示するための言葉。

流石に訓練においてまで、特別扱いはされないようだった。そのことは三人も当たり前のように承知している。

「では、そうだな。まずは十キロ走のタイムを測る。魔術による身体強化はなしだ。では、全員所定の位置に並べ」

そう促されると、全員がトラックのラインに並び始める。そんな中、リディアは一人で嬉しそうに笑っていた。

「いきなりのランニングか。滾ってきたな、これは……ふふ」

一人で笑っているその様子は、明らかに異常者そのものである。この訓練をこなすことを当たり前と思っても、楽しんでいるものなどいるはずがない。

そう。リディアは「エインズワースを除いては」。

「では 始めッ……!」

教官の言葉と同時に、全員が全力で走り始める。

そして先頭を爆走しているのは、リディアだった。

「はははっ！ 私は風になるっ！ ワハハっ！！」

体を動かすことが大好きである彼女は、ペース配分など考えずに疾走する。

それについていく者など一人もいるはずはないと思うが……先ほどリディアに絡んできた男性はぴったりと彼女の横に並走する。

「おい。あんまり調子に乗るなよ？」

「おお！ このペースについてこれるのかっ！？」

「ほざけ。どうせ、目立ちたいから全力で飛ばしてんだろっ？ すぐにバテるに決まっている。女の限界を知るんだな」

「ククク……お前みたいなのがついて、私は嬉しいよ」

だが、リディアのペースが落ちることは決してなかった。綺麗なフォームでトラックを一周するが、依然としてペースは保たれている。

「……くっ！ くそっ！ どうなってやがるっ！？」

男の方はギリギリくらいについているが、明らかに彼の方が苦しそうな顔をしていた。一方のリディアといえば、未だに満面の笑みで走り続けているのだ。

「ワハハ！ どうだ、この王国の隼^{はやぶさ}についてこれるかっ！？ ガハハっ！」

そしてついに、リディアは独走の態勢に入る。流石の彼も、異常なペースにはついて行けずに離されることになってしまう。

彼女はペースを落とすことないどころか、さらに上がっていく。久しぶりにタイムを測って走るということで、テンションが上がっていたのだ。

「……よし。こんなものか」

ぶつちぎりの一位で、リディアは十キロ走を終えた。

軽く荒れている息を整えながら、額から流れでる汗を拭う。

「エインズワース」

「は。なんでしょうか、教官殿」

教官に対しては、礼節を持って接するリディア。一見すれば無法者のようにも思えるが、彼女はある程度の常識は兼ね備えている。

「お前、魔術は本当に使ってないよな？」

「それは教官殿が一番お分かりでは？　すぐに魔術の兆候を知覚できるように、広域干涉系の魔術を展開していましたよね」

彼女のいうとおり、不正がないように教官は広域干涉系の知覚魔術を展開していた。誰かが第一質料プリママテリアを操作した瞬間、分かるように。

「……分かるのか」

「はい。走り出したと同時に、感じ取りました」

「なるほど。どうやら、噂以上の存在のようだな」

「恐縮です」

丁寧に頭を下げる。

その後。次々とゴールを迎える。アビーは順調に上位でゴール。キャロルもまた、そのツインテールを揺らしながら中位でゴールした。

はつきり言って、このメンバーの中で下位にならないだけ彼女たちは優れている。

ここにいるのはすでに三年も訓練を続けている猛者たちばかり。

その中でも完全にそれについて行けている三人は、魔術的な面だけでなく、肉体的な面でも突出しているのは間違いなかった。

「はあ……はあ……はあ……」

「おお！ お前は上位でゴールしたようだな。ま、私には到底届いていないがな！」

ぽんぽんとその肩を叩く。

「くそ……エインズワース。あまり調子に乗ると、痛い目を見るぞ？」

「ははは！ それは私に勝ってからいうんだな。っと………そういえば、名前はなんていうんだ？」

「……ニック・アーデルだ」

「なるほど。私はお前のことが気に入った。よろしくな、ニック」

スッと手を差し伸ばす。だがニックはそれをパンツと叩くのだっ

た。

「は。馴れ合いはしねえ。覚えてろよ」

そうしてリディアの前から去っていくが、その視線には明らかな敵意が込められていた。

「リディア。さっそく目をつけられているじゃないか」

「アビーか。いいじゃないか。あいつきつと、私に決闘でも吹っかけてくるぞ？」

「……そう仕向けたんだろ？」

「分かるか？」

「血気盛んなお前のことだ。軽く煽ったんだろ？」

リディアのやり口を理解しているアビーは、肩を竦めながらそう言った。そしてそれは、まさにその通りだった。

「ククク……あいつはどうやら、この士官学校で幅をきかせているようだからな。まずはボスを倒して、どちらが上か教えてやるべきだろう……腕がなるぜ……」

その顔は間違い無く、何かを企んでいる悪人の顔だった。

「はあ……」

アビーはため息をつく。

どうやらリディアは全く変わることはないのだと、内心で思っていた。

第249話 圧倒的な力（前書き）

ついに本日よりコミカライズ開始です！ よろしくお願いします！

第249話 圧倒的な力

入校して一ヶ月が経過。

その中でもやはり、一番目立つのはリディアだった。訓練においても、座学においてもトップの成績を収める。それも、圧倒的な差をつけて。

現在は魔術を使用した戦闘訓練も始まっているのだが、彼女は魔術が使えるとなるとさらに圧倒的だった。

「リディア。調子良さそうだな」

「まあな。最近はさらに感覚が良くなっている気がする」

「ふんふんふん」

寮の一室。

就寝時間の前に、二人は話をしていた。キャロルといえば、肌のケアと髪の手入れをしている最中。曰く、「一日でも怠ると、十年後に響いてくるんだからっ!」とのこと。

最悪保湿だけでもして欲しいとのこと、リディアとアビーも最低限のことはするようにしている。

「それにしても、そろそろ来るんじゃないか？」

「アビーも分かるか」

「もちろんだ。ここ一ヶ月はあまり絡んでこなかったようだが、人

数を集めていると他の先輩に聞いた」

アビーといえば、リディアのように大きく目立つわけでもなく、キャロルのように容姿的な意味で目立っているわけではないので、他の先輩に気に入られている。

彼女は何より、謙虚な上に年上を敬う精神があった。といってもそれは、ある種当たり前のことなのだが、リディアにそんな精神はあるわけがない。キャロルは常に自分中心で、周りのことなど見えてない。

だからこそ、この三人の中でも唯一の常識人ということで彼女は相対的に大きく評価されているのが現状だ。

「お前は人間関係に関しては、卒なくこなすよな」

「おそらく、こちらの方が普通だ。お前は傍若無人が過ぎる」

「ははは！ でも、それが私らしいだろ？」

「まあな……」

それは、アビーも認める点ではある。リディアは一見すれば、ただ何も考えていないだけで暴走する人間に見えるだろう。しかし、学生の頃からの付き合いの彼女は知っている。

リディアの周りにはなぜか人が集まるのだ。初めは敵対していたとしても、気がつけば仲良くなっている。そんなことが学院にいた頃は多々あった。

「さて。そろそろ就寝時間だ。寝るぞ」

「ああ。おやすみ」

リディアはすでに寝息を立てており、瞬間的に寝てしまった。

「キャロル。もう手入れはいいだろう？ 明かりを落とすぞ」

「はいはい アビーちゃん、おやすみっ！」

「おやすみ」

そして三人は、すぐに就寝するのだった。

翌日。午前中の戦闘訓練が終わり、食事の時間となった。いつものように食堂にやってきて、同じメニューを頼む。大体はカレーが多く、ここでは一番の人気メニューだ。

三人で席を取り、先にリディアが席についてカレーを頼張る。彼女は体を動かすのも好きだが、こうして食事をする時間も楽しみにしている。

「うん。美味いなっ！」

と、味わって食べていると通り過ぎた人間の体が皿にぶつかってしまい、それが地面に落ちる。

「なあ……！？ 私のカレーがっ！」

声を上げるが、時すでに遅し。彼女のカレーは無残にも地面に落ちてしまった。

「は。すまねえな。でも、お前が悪いんだぜ？ 俺の体が当たるような位置に皿があったんだからな」

「なに……？」

目の前に立っていたのは、ニックだった。それに後ろには取り巻きの人間もいた。一目見て分かるが、全員が圧倒的な肉体を有している。

士官学校で何年も訓練を重ねているので当たり前ではあるのだが、ここにいるメンバーは中でも特に優秀な者ばかりだった。

それぞれがリディアのことを気に入っていない。それだけは間違いなかった。

ニヤニヤと笑って、彼女を見下すような視線を送る。もちろんそれに我慢するようなリディアではない。

「ふふ……フハハ！ お前、私の食事を台無しにした罪は重いぞ？」
「はっ。ならどうするんだよ」

一触即発。この雰囲気は確実に、暴力沙汰になると周りの人間は理解していた。そして気がつけば、周りの机と椅子は片付けられリディアとニックたちが対面する形になっていた。

このようなことは、士官学校では珍しいことではない。流石に流血沙汰になる問題だが、このような小競り合いはよくあることだ。特に教官の介入などないことが普通である。

「どうやら、私とやりたいようだな」

「この一ヶ月。お前のことを見てきたが、お前の弱点はすでに見抜いている」

「ククク……それなら、やってみろ。ハンデだ。先に手を出してこいよ」

クイクイと手招きをするようにして、彼女はニックを煽る。それに対して彼は、顔を少しだけ歪めると一気にリディアにタツクルをして寝技に持ち込もうとする。

「お前は寝技が苦手だよなあ？ 知ってるぜ？ はははっ！」

笑う。

そう。リディアは訓練の中でも、寝技をあまり得意としない……ように見せかけていたのだ。いつかこの日が来ると分かっていたので、あえて得意なものを苦手なように見せかける。

そして、腰にタツクルをくらい床に押し倒された瞬間。彼女はニヤアと笑みを浮かべるのだった。

「おいどうした。私は寝技が苦手なんだろう？ 早くキメてこいよ」

「ぐ……っ！？ こ、こいつ……っ！」

ニックはリディアをなんとか封じ込めて、関節をキメようとするのだが上手くいかない。それは彼女が圧倒的な腕力でそれを阻害しているからだ。

「はっ。こんなものか」

スツとその拘束から逃げ出すと、立ち上がる二人。流石にニックの顔には、焦りのようなものが生まれていた。

「おい。もういいぞ。後ろの取り巻きもそろってかかって来い。それでも私には届かないがな」

その声に対して、後ろに控えていた五人の人間がリディアに襲いかかる。流石にここまで舐められるのは、納得がいかない。そう思っ
て思い切り殴り、蹴り、あらゆる攻撃をするが彼女に当たることは決してなかった。

そして、一人の鳩尾に思い切り彼女は拳を叩き込んだ。

「まずは、一人だな」

「この……っ!!」

間髪入れず、相手はさらに攻撃を加える。上段に蹴りを放つが、
リディアはそれを片手で受け止めるとそのまま投げ捨てる。

その要領で、相手をしていくと気がつけばニック以外の五人は呻
き声を上げながら地面に這いつくばっていた。

一方のリディアは息ひとつ乱れていない。ただニヤニヤと笑いなが
ら、ただ一人残っているニックを見つめる。

「はははっ！ いいなあ、お前らは骨があるよ。私の攻撃を喰らっ
て、まだ意識があるんだからなあ！」

嬉しそうに声を出す。それは心から思っていることだった。学院
生徒ならばすぐに失神していたが、軍事教練を受けている彼らは気
絶することはなかった。

「エインズワース……どうやら、本気でやるしかないようだな」

「お。魔術か？ いいぞ。上手く使えよ？ 私もちよっとだけ本気
を出してやるよ」

「ほざけ……」

転瞬。

ニツクの体が消える。それは魔術的な要因で消えたのではなく、圧倒的な速度。インサイド内部コードを発動して、一気に加速したのだ。

彼は魔術戦闘においては、この士官学校でも歴代トップに食い込む成績を収めている。だからこそ、本気。自分が本気を出せば、リディアなど造作もない。

そう思っていたが

「ほいよつと」

あろうことが、彼女はその速度を利用してニツクを一本背負して地面に叩きつけたのだ。

「カハッ……!!」

あまりの唐突の出来事に対応できず、受け身を取ることもできないまま彼は地面に叩きつけられた。

「うーん。狙いは悪くないが、直線的すぎだな。もっとフェイントを混ぜろよ。それに魔術戦闘。インサイド特に内部コードでの格闘戦は、結局は普通の格闘戦の延長線だ。魔術に頼り切るのは、危険だな。基本を思い出せ、基本を」

なぜかアドバイスを始める。それに対して、ニツクはさらに怒りを燃やす。彼は本気で、今まで出したことのないような出力で内部インサイド

コードを走らせる。

しかし、その全てが尽く彼女に打ち返される。

リディアはほとんど本気を出していない。それは、傍から見ている人間でもよく分かった。そして彼女の圧倒的な強さも。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ニックは大の字になって、寝そべる。正真正銘、全てを使い果たした。だというのに、リディアは息ひとつ乱していない。

この現実がわからないほど、彼は愚かではなかった。

「ニック。お前、根性あるな。ここまで私に食らいついてきたのは、お前が初めてだ」

「はあ……はあ……くそっ……テメエ、一体何もんだ？」

「私か？ 私は」

いつものようにニヤツと笑うと、彼女はその胸を張って告げた。

「天才魔術師だ。覚えておけ、きっと私はこの世界の真理にたどり着くぞ？」

それは夢物語ではない。リディアは心からそう思って、この言葉を発している。そう思うと、ニックはどこか笑えてくるのだった。

「ははは……こりゃあ、敵うわけもねえか」

こうして彼女は実質的にこの士官学校でトップの存在になるのだ
った。

第249話 圧倒的な力（後書き）

Web版だけでなく、コミカライズもよろしく願いします！

【皆様へのお願い】

・ページ最下部にて、書籍版の情報を公開しています。イラストの担当は【榎枝りこ先生】になります。講談社ラノベ文庫様より、7/1（水）に書籍第1巻（書き下ろし収録）発売です！

Amazonほか、ネット書店での予約も開始しております。また、コミカライズはマガポケ（アプリ）にて、書籍発売の一週間前の6/24（水）から開始となります。

書籍版、コミカライズ共によろしく願いいたします。

・下にスクロールすると「**」という欄があり、最大で5つまで入れることができます。**

『面白かった！』『続きが気になる！』『更新早く！』……などなど
と思われた方は、是非 での評価にて応援して頂ければ幸いです。
皆様の応援が大きなモチベーションになりますので、もし良ければ
お願いいたします

第250話 キャロルの実力

「おい。私は焼きそばパンな―」
「は、はいっ！」

入校して二ヶ月が経過。

リディアに関する揉め事は、無事に収束することになったのだが……。

「おいリディア。今のはなんだ？」

食堂。そこでリディアが座っている所にやってくるアビー。彼女はそこで、信じられないものを目撃する。

「いや、焼きそばパン買ってこいって言ったんだよ」
「……どうしてお前が先輩をパシってるんだ？」

じつと半眼で睨みつける。

「なんか前の戦いで、私の実力に惚れたっ！ とかいう輩が多くてな。稽古をつけてやっているついでに、なんかパシリまで勝手にあいつらが始めたんだ」

それは誇張でもなく、事実だった。

確かに血気盛んで新入りのくせに顔の大きいリディアに対して不

満はあった。だが、真正面から打ち破られた上にアドバイスまでされたのだ。そこまでいくと、彼女のことを認めざるを得なかった。

そうして今は、ニックを中心にして彼女の周りには取り巻きのよ
うなものが出来上がっていた。

「姐さん^{ねえ}。買ってきました」

「おう。これは金な。多めにやるよ」

「はい。ありがとうございますっ！」

その一連のやり取りを見て、アビーは呆然とする。

「……なあ、リディア。お前はどこに向かっているんだ？」

「決まっているだろうそんなものは。私は、この世界の真理にたどり着くのさ」

それは彼女の口癖でもあり、目標でもあった。ずっと高みを目指してきた。彼女は自分が天才だということを理解している。そして、天才故にその才能には責任が付き纏うことも。

そんなリディアが目指すのは、真理探究。魔術師が過去からずっと掲げてきた目標。しかしそれは、すでに形骸化しており真面目に目指す者などいない。

その中で、リディア「エインスワース」という天才が現れた。

皆は期待している。彼女ならばきっと、この魔術の真理を解き明かしてくれるのではないかと。

「真理探究が目的なら、研究者の道に進めばいいだろう」

「私に似合うと思うか？」
「それは……」

白衣を着て、部屋にこもって研究をするリディアを想像してみろが、それは全く似合っていなかった。むしろ部屋の中で筋トレを始めてしまいそうだった。

「似合わないな」

「だろう？ 軍で活動しつつ、魔術を高める。きっとその先に、たどり着ける場所があると思ってるのさ。それに、私は天才だからな。国防のために力を使うのは、当然だろう」

「……そう、だな」

時折、リディアはふつとどこか遠くを見るような表情をする。いつもは傍若無人なようにも見えるのだが、決してそうではない。彼女も彼女なりに、考えて今に至るということだ。

「それにしても、あのアホピンクはどうした？」

「先輩たちに絡まれるから、先にこっちに行ってくれと言われた」

「ああ。あいつの場合は、男よりも女に嫌われそうだからな」

「そうだな。でも、キャロルならば大丈夫だろう」

「間違いない。私だって、あいつを本気で相手にしたくないからな。キャロルの相手は、億劫になる」

リディアは苦虫を噛み潰したような顔をする。それはキャロル自体を嫌っているというよりも、彼女が保有している魔術が厄介というか……。

そして二人が昼食を取る一方で、キャロルは

「ちょっと、あんたさあ……調子乗りすぎじゃない？」

キャロルはパンツと壁際に追い込まれていた。人通りの少ない廊下の曲がり角。その薄暗いところで、彼女は複数人の女性に囲まれていた。

「別にいゝ？ キャロキャロは普通に過ごしてるだけだよ」

その口調はいつも通り。しかしそれが逆に、相手を苛立たせる。

「は？ ならそのツインテールはなんなんだよ。それに、爪もいつもマニキュアを塗っている。顔も化粧をしているだろ？ 調子に乗っているとしたか考えられないんだよ」
「それは個人の自由じゃないかな？ 別に禁止されているわけでもないだし」

爪をやすりで綺麗に研ぎながら、キャロルは相手の話をテキトーにあしらう。実は元々の原因は、キャロルが男性に人気があるということだった。

士官学校では、普通は男性も女性も髪を短く切り揃えるのが普通だ。その中で、リディアとキャロルだけは自由にしている。しかし、別に絶対にそうしななければならないルールがあるわけでもない。

伝統的にそうなっているだけなのだ。

それを無視して、さらには男にも人気がある。端的に言ってしまう、彼女たちはキャロルに嫉妬していたのだ。もちろんそのこと

は、キャロルも分かっていた。

「おい。あんまり調子に乗ってると、ボコるぞ?」

低い声で、一番の肉体を誇る女性が前に出てくる。その筋肉は男性にも引けを取らないほど。格闘の訓練ではいつも上位に食い込んでいる猛者である。

キャロルはチラツと視線を向けるが、まるで興味がなさそうに呟く。

「ふゝん。思うけど、目立ってるなら私よりもリディアちゃんじゃない? なんで私なの?」

「ぐ……そ、それは……」

なぜリディアに同じように問い詰めないのか。それは決まっている。

彼女たちも、リディアの實力は自分たちよりも遙か上だと分かっているからだ。だからこそ、弱そうなキャロルをこうして追い詰めている。

当の本人は、全く意に介していないのだが。

「はあ……なんだかなあ。いつかこんな日も来るかなあ、って思ってたけど。本当に女の嫉妬って醜いよねえ……」

いつものように戯けている様子はなく、ただ呆れたと言わんばかりに彼女はそう言った。

「な……っ！ て、テメエっ……！」

流石にキレたのか、相手はキャロルの胸ぐらを掴みかかろうとするが……。

「い、いてててっ……！」

その腕を掴み上げて捻ると、「はぁ……」とため息を漏らす。

「やっぱりこうなっちゃうかぁ。でも、みんな勘違いしてるよ」

その雰囲気はなんと形容すればいいのか。圧倒的な圧に、揺らめく禍々しいオーラとでもいうべきか。

その異様な雰囲気に全員が飲まれる。

「私はね、強いんだよ？ これ以上来るなら、潰しちゃうよ？」

ぺろつと舌を出して、じっと鋭い眼光で睨み付ける。そしてパツとその手を離すと、相手はビビってしまったのかすぐに去っていく。

それから午後の訓練も終了し、寮の自室へと戻ってきた三人。そこでリディアは、キャロルに話を振る。

「おいキャロル。昼はどうだったんだ？」

「大丈夫だよ　ちゃんと、【お話】したらぁ　みんな分かってくれたよぉ？」

ニコツと笑みを浮かべる。もちろんその意味を、文字通りに受け取るわけではない。

「ははは！ キャロルを狙うとは、馬鹿な奴らだなあ。こいつはキレるとまじで怖ええからな。それにやたら強いしな」

「もうっ！ キャロキヤロはいたいけな乙女なんだよ？ そんな風に言わないでよねっ！ ぶんぶんだよっ！」

と、怒っている素振りを見せるが、リディアもアビーもキャロルのことをいたいけな乙女だとは思っていない。むしろ、一番厄介なのはキャロルだと思っている。

いつものギャップもあるのだろうか、彼女の冷め切ったその表情はこの二人であつてもゾツとするほどのだから。

「それにしても、二ヶ月でどうやらこの士官学校も征服できたようだな。ククク……」

人の悪い笑みを浮かべる。リディアはそんなことを言うが、もちろんアビーはそれに苦言を呈する。

「征服つて……お前はここに何をしにきているんだ？」

「もちろん訓練課程を終えるためだが、上下関係ははっきりとさせておくべきだろ？」

「はあ。そう思うのは、お前だけだ」

「ふふふ。来年、特殊部隊に入隊した時も同じようになるからな。期待しとけよっ！」

「はあ……」

と、いつものように笑うリディアを見てアビーはため息をつき、

キャロルはニコニコと笑っているのだった。

第251話 慕われる存在

「行くぞ、おらああああああっ！」

今日は休日だった。

士官学校の休日では、主に部屋で読書をする者や、ゆっくりとリラックスする人間が多い。というのも、日頃の訓練の過酷さもあり休める時には休みたいというのが普通の人間の思考である。

そう。普通の人間の。

だが、リディアは違う。彼女は、もはや自分の後輩のような存在となった男性陣を集めてサッカーをして遊んでいた。

彼女としては休日も体を動かさないと落ち着かないということで、メンバーを集め始めるとすぐにその数は揃う。

現在、士官学校でリディアのことを慕っている者は多い。

特にそれは男性に多い傾向にある。

ある種のカリスマ性ともいうべきだろうか。ともかく、リディアは周りに人を集める存在だった。

「オラオラっ！ 私のドリブルが火を吹くぞ！！！」

サッカーボールを巧みに操りながら、彼女はドリブルをしていく。六対六で、演習場のスペースを使ってサッカーに興じている。

サッカーゴールは倉庫に置いてあったので、全員で協力して運んできたのだ。

「ぐっ……！？」

「はえええっ！」

「流石、姐さんだ。追いつけねえ！！」

あつという間にごぼう抜きすると、そのまま彼女はバイタルエリアへと侵入。すでにディフェンスは全て抜き去った。あとはゴールを決めるだけだが……。

「くらえッ！！ 私のシュートをッ！！」

瞬間。

おおよそ、サッカーボールを蹴っているとは思えないような音が響き渡る。バゴオオオオオオオッ！！ という音が鳴った瞬間にはボールはすでにキーパーの真正面へと迫っていた。

「う、うわああああああッ！！」

その悲鳴と共に、サッカーボールはキーパーごとネットを揺らす。

「うし！ これで一点だなッ！！」

快活な笑顔である。

その一方で、他の人間は引きつった笑みを浮かべていた。そもそも、リディアの提案で魔術による身体強化はなしということになっている。

つまりは、素の身体能力で今のシュートを放ったのだ。その圧倒的な規格外の存在に、彼女以外の全員は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「い、いててて……」

相手のキーパーはニツクだった。彼のその圧倒的な巨軀を吹っ飛ばすほどの、ボールの威力。

裏では、「実はゴリラ」「マジでそうだよな」「同じ人類とは思えない」

「ゴリディアだな」「ああ。それは良いかもな」と言われているほどである。

おおよそ、女性として見られていないのは間違いなかった。

彼女の容姿はそれこそ、一見すれば天使と形容されるほどには端麗である。だが、その性格と立ち振る舞いからゴリラのようにしか見えないのも無理はなかった。

「ニツク。お前、根性あるな。あのボールに真正面から食らいつくとは」

「姐さんのボールを止めようとしたが、ダメでしたね」

「はははっ！ その根性があるだけ、お前はまだまだ伸びるぞ！ ガハハ！」

そして、倒れているニツクに手を貸すとグツと後ろに引っ張って立ち上がらせる。リディアの憎めないところは、やはり優しさがあるということだろう。

一見すれば、傍若無人の暴れん坊。そう思えるかもしれない。だが彼女は、確かな優しさを持っていた。それこそがきっと、人を集める理由なのかもしれない。

「よし。じゃあ、まだまだやるぞ！」
『おうっ！』

凜としたリディアの声と、野太い声が響く。

「ふー。良い汗かいたぜえ……」

シャワーを浴びて、自室へと戻ってきた。

彼女は持参しているニリツトルのボトルにそのまま口をつけてゴクゴクと喉を鳴らしながら、一気に飲んでいく。

「リディア……それはなんだ？」

「は？ 水だよ。水」

「まあ、そうにしか見えないが、外で運動でもしてきたのか？」

「ああ。あいつらとサッカーしてきたぜっ！」

「……なるほどな」

机では、アビーが一人で読書をしていた。メガネをかけて、読書に耽っている彼女はやはり知的に見える。

「キャロルは？」

「さあ。街に買い物でも行ってるんじゃないか？　美は我慢だよ、とかいいながら出て行っただな」

「そうか」

リディアもまた、アビーの対面に座る。そして、その二リットルのボトルをドンと机に置く。

「それ、買ったのか？」

「貰った」

「誰に？」

「舍弟たちに。姐さん、お疲れ様でした！　って笑いながらくれたぜ？」

ニヤツと笑う。

その様子を見て、アビーは嘆息をもらす。

「はあ……お前はまじで、どこに向かうんだ……」

「別に良いだろー。あいつらの面倒を見てやってるんだし」

それは事実だった。

教官による訓練よりも、今はリディアによる指導の方が一部では人気だったりする。彼女は感覚派に思えるが、意外と理論派であり論理的な思考が得意である。

何よりも重要視するのが、再現性。

どうやって今の魔術を再現するのか、どうやって今の動きを再現するのか。それを論理的に考えて、何度も反復して体に刻み付ける。

もちろん天才的な感覚もあるのだが、彼女は努力もできる天才だった。

「ああ。それか。リディアの教えはいいと、評判らしいな」

「お、まじか？ それは嬉しいな。あいつらも骨のある奴らばかりでな。いくらしごいても立ち上がってくるんだぜ？　すごいだろ」
「それは確かに……すごいな……」

アビーは顔を歪ませながら、そう口にする。リディアが教えている様子を見たことがあるが、あれはもはや拷問に近い何かではないだろうか。そう思ったほどだった。

しかし、その訓練を受けている男性陣は辛い顔をしながらも、懸命に食らいついていた。

彼女もまた、リディアには特殊なカリスマ性があることは理解していた。といっても、アビーも参加したいとは思わないが。

「そろそろ四ヶ月だな。リディアも調子は良さそうに見える」

「ああ。なんだか最近はさらに魔術的な感覚が鋭くなっている気がするな」

「はは。もうすぐ七大魔術師になれるんじゃないか？」

それは正直な感想だった。むしろアビーは、学生時代の頃からその資格があると思っている。彼女の本気を見たことある数少ない人

間。それが、アビー＝ガーネットである。

アビーもまた、天才なのは間違いない。百年に一人の逸材とも言われている。きつと、自分もいつかは七大魔術師に辿り着けると冷静に分析していた。

そんな彼女であっても、リディアには決して届きはしないと分かっている。その壁はあまりにも険しく、高い。もはや別の生き物ではないかと錯覚するほどの、実力。

それこそが、リディア＝エインズワースという存在なのだ。

「氷剣……最近、上手く扱うことが出来る気がしている」

「お前は昔から氷系統の魔術が得意だったな」

「ああ。氷、というよりもコードの中に減速の工程を書き込むのが得意と言った方が正しいかもな。アビーとは逆だな」

「そうだな」

減速。

それはリディアが最も得意としているコードの一つである。

「減速と固定。この二つを極めれば、氷剣はさらに進化できる。魔術戦、特に超近接距離クロスレンジでの戦いになれば、負けることはないと思っている」

「固定、か。今はどうなんだ？」

リディアは氷剣こそが自分に最も適した魔術だと思っている。確かに生み出さなければすでに出来るのだが、彼女は満足のいくクオリティではまだ生み出すことはできていない。

「うん……まだ感覚が慣れていないな。減速はおそらく、生まれ持った才能だ。しかし、固定のコードに関しては後天的に身につけようとしているからな。もう少し時間がかかると思う」

「そうか。いつか、完全なる氷剣が生まれることを楽しみにしている」

「ははは！ そうだな！ いつか、私はこう呼ばれるかもな」

どこか冗談めいた顔で、彼女はこう言った。

「氷剣の魔術師、とな」

第252話 圧倒的、存在感

入校から半年が経過した。

リディアたちは実質的にこの半年で士官学校の内容を修了したことになる。残り半年は、立ち上がる特殊部隊の前段階の部隊に配属される。

そこで半年間の実地訓練を終えて、彼女たちは正式に訓練の期間が終了する。

「ハハハハハ！ いいぞ、逃げる逃げろお！！」

士官学校での最後の訓練。それはシンプルに鬼ごっこをするというものだった。それはもちろん、ただの鬼ごっこではない。

元々、この訓練では教官が鬼役をする予定だった。そして捕まっていく順番が早ければ早いほど、課されるペナルティが大きくなる。

そんな中、リディアは自分で申し出たのだ。自分が鬼役をやりたいと。

その話を聞いて考え込む教官だが、面白いと思ってその話を採用することに。そもそも、彼女の能力を以てすれば鬼役になるのは十分だろう。

弱冠十五歳にして、すでに並の軍人以上の身体能力を持つ彼女ならば。

「オラオラ！！ そんな逃げ方で、私から逃げられるとおもつなよ
おツー！！」

圧倒的な圧力プレッシャーを放ちながら、リディアは迫っていく。それに対して、逃げる人間たちは恐れるしかなかった。その圧倒的な、存在感に。

まさにそれはゴリラと形容するに相応しいものだった。

「ひ、ひひひひひひひひひひ！！」

「ヤベエっ！ めっちゃ怖ええええええっ！」

「姐さんのプレッシャー、ヤバイって！！」

「う、うわあああああ置いて行かないでくれええええええ！！」

制限時間は二時間。その間で、この森の中で自由に逃げ回ればいい。現在は始まってから十分しか経過していない。そして、リディアが見つけたのはいつも取り巻きにしているメンバーだった。

狙っているわけではなく、目についた人間を追いかけているだけなのだが、彼女は嬉々とした顔で笑いながら疾走してくるのだ。

すでにリディアの怖さを知っている連中は、ただ震えるようにし

て逃げるだけ。その距離は確実に縮まっている。

この森に足を踏み入れた経験は、彼女にはあまりない。しかし、類稀なるセンスによってすでにこの地形を把握しつつあるリディア。

追い詰めているのは間違いなかった。

「よっしやあああああ！　まずは一人いいいいいい！！　ふははははっ！」

一番後ろにいる人間の首元を掴むと、地面に投げ捨てるようにして確保する。その後、他のメンバーは散り散りになって逃走。

一旦、立ち止まると誰を狙うのか冷静に考える。

「ふ。ふふふ。フハハハハハ！　イイぞ！　滾^{たぎ}ってきたあ！！！」

そして、リディアはそのまま笑いながらこの森の中を疾走していくのだった。

残り時間三十分。

すでにほとんどのメンバーはリディアによって確保されてしまった。その圧倒的な圧力^{プレッシャー}に、類稀なる戦闘センス。森の中の立ち回りも圧倒的だった。

今回の訓練に際しては、魔術による身体強化はアリとなっている。

そのため、内部コードをうまく使えるほど有利になる。そのような理由があるため、リディアはたった一人で次々と確保していく。

もつとも、森の中に響く彼女の笑い声は畏怖の象徴でしかなかったのだが。

そんな中、まだ生き残っている人間が二人だけいた。

アビー＝ガーネット。

キャロル＝キャロライン。

アビーに関してはそこまでの意外性はない。彼女はこの半年間、リディアほどではないが、かなりの成績を収めている。

きつとリディアがいなければ、アビーこそが一番の存在として讃えられていただろう。

その中で意外なのはキャロルだった。彼女は体を動かすのは得意ではないと思われているが、そうではない。彼女は魔術センスも抜群だが、体を動かすのも同様だった。

すでにこの三人は士官学校での訓練を修了できるほどの実力を、この半年で培っている。

「ははは！ あとは、アビーとキャロルだけだなっ！！」

疾走。森の中を進み続けるリディア。そんな彼女をチラッと後ろを見て確認する二人。

「……さて、と。キャロル、どうする？」

「うーん。ここは二手に分かれるべきだろうねえ」

「そうなる狙われるのはお前になるが？」

「ま、キャロキャロに任せてよ」

散開。

アビーは右に、キャロルは左へと進行方向を変更。そこでリディアが狙うのは、どちらか……。

それはアビーの予想通り、キャロルだった。二人のどちらかを狙うとなれば、捕まえやすいのはキャロルの方だろう。だからこそ、リディアはノータイムでその判断を下すとさらにスピードを上げていく。

「はあ……はあ……はあ……っ!!」

呼吸を乱し、ツインテールを揺らしながらキャロルは全力疾走していく。彼女はその言動から、いつもはふざけていると思われる。しかし、訓練に際して手を抜いたことなど一度もない。

むしろ、真剣に取り組むことが当たり前であり、周りからは意外と思われる。

キャロルとしても別に訓練を軽視しているわけではなく、公私を分けているだけなのだ。とはいえ、その差が明らかに激しすぎるのだが。

「キャロル!! お前もなかなかやるなあ!! しかし! この私からは逃げられんぞッ!! ふははははははは!!」

加速。

彼女はずっと走り続けているにもかかわらず、依然として加速し続ける。それに対して、アビーとキャロルは隠れている時間もあつた。

体力の消耗だけを考えれば、リディアの方が消費しているというのに彼女はこの段階でさらに加速する。

「うにゃああああああああつー!!」

虚しくも、リディアの手はキャロルの背中に触れる。そして彼女はすぐに、アビーを追いかけ始めるのだった。

「はぁ……はぁ……はぁ……ッ!!」

疾走するアビー。残り時間は十分。あと少しで逃げ切れることのできる彼女は、逃げ続けていた。

正直言つて、アビーはリディアのその才能を認めている。しかし、負けることを容易に許容することはない。

学生マギクス・シュバリエの時の魔術剣士競技大会では、全て決勝戦でリディアに敗退している。

だからこそ、この訓練くらいでは勝つてみたいという想いがあつた。

「ワハハ！ 見つけたぞ、アビー！ お前で最後だ！！」

気がつけば、キャロルを確保するために十分な距離が開いていたというのにリディアは真後ろまで迫っていた。

それはもはや本能的な嗅覚ともいふべきだろうか。

リディアは人から漏れる第一質料を直感的に理解できるのだ。
プリママテリア

そして、確実に詰まっていく距離。

「アビー！ 覚悟しろッ！！」

リディアは叫びながらさらに加速する。今までの流れならば、ここで確保できていたが……。

「むっ……！！？」

と、声を漏らすリディアは違和感を覚える。それはほとんどアビーの背中が離れていくのだ。

加速。それを得意としているのは、アビーの方だった。リディアといえば天才的な魔術センスを有してはいるが、その本質は【減速】。

逆にアビーの本質は【加速】。

彼女はここにきて、さらに魔術師として覚醒しつつあったのだ。そして、そのままアビーは逃げ切ることと訓練は無事に終了。

リディアは結局、その背中に届くことはなかったのだ。

「ぐ……く、クソォ……まさかアビーに逃げ切られるとは……」

全員絶対に捕まえることができると思っていたリディアは、悔しさを見せる。そしてアビーがそっと歩いて近づいてくる。

「ふ。どうやら今回は私の方が上手だったようだな」

彼女にしては珍しく、ニヤツと笑いながらリディアにその事実を突きつける。

「ぐ……お前、いつの間にあんなに速くなったんだ？」

「そうだな。ここに入校してから、私も成長しているということだ。ふふ。リディアに勝ったのは久しぶりだから気持ちいいな」

「く、くそおおおおおおおっ！」

ということ森での訓練はアビーの一人勝ちということになるのだった。

第253話 半年終了

士官学校に入校して、ちょうど半年が経過した。彼女たち三人は、そこで無事に課せられたカリキュラムをこなすことができた。

軍の上層部には、三人に関して懐疑的な人間ももちろんいた。この半年という短い期間で士官学校のカリキュラムを修了できるわけがないと。

残りの半年は実地での訓練になるので、実質的にはこのたった半年だけで士官学校のカリキュラムを終えた。

座学、身体能力、魔術。その三点において、三人は基準を十分に上回っていたのだ。

「……なるほど。三人とも、無事に士官学校でのカリキュラムは終えることができそうか」

ヘンリックは自分の書斎で送られてきた資料を眺めていた。その隣にはいつものように秘書の女性が立っているが、かなり驚いたような表情をしている。

「……驚きました。本当にこれがあの三人の成績なのですか？」

「ああ。教官たちにも話を聞いているが、嘘はないはずだよ」

驚くのも無理はない。彼女たち三人は、予想の遥か上をいく成績を収めていたのだ。リディアに関して言えば、そのほとんどが満点

と記録されている。

にわかには信じ難いことである。

「座学、身体能力、特に魔術に関しては完全に満点ではないですか。このようなことがあり得るのですか？」

秘書の彼女もまた、士官学校を経験して今の地位にたどり着いている。だからこそ分かるのだ。リディアのその異常性が。

弱冠弱冠十五歳。その若さで士官学校の訓練についていけるだけでも、破格。それだというのに、彼女はその中でトップの成績を収めている。おそらくは、王国始まって以来である。

「僕としては、ある種当然のことと知っているけどね。リディア」
「エインズワース。やはり彼女はこちらの見込み通り、最高の天才であることに間違いはなさそうだ。それに、他の二人も十分すぎるほどだ。きっと三人ともに次期七大魔術師になるだろう」

アビーとキャロルもまたリディアには少しだけ劣るが、基準を十分に上回る成績を収めている。リディアの存在によって霞んでしまっているが、この二人もまた天才であることに変わりはないのだ。

「正直言って、アビー」
「ガーネットに関しては驚きはありません。彼女はそもそも、性格が真面目で軍人氣質です。しかし、キャロル」
「キャロラインは……」

言い淀む。

キャロルの存在は士官学校では有名だった。女性はほとんどが髪を短く切りそろえ、軍の規律を保とうとしている。その中で、彼女は依然として髪を高い位置でツインテールまとめている。

それに訓練の時は薄く化粧もしており、ネイルをしている時もあるとか。

その自由奔放な存在が色々と反感を買うのは当然なのだが、教官側はすでに注意するのも諦めている。それは、一向に態度を変えることはないからだ。

しかし、キャロルはそれを跳ね返すだけの成績を収めている。特に座学に至っては、かなりの成績だ。ほとんど満点であり、それに関してはリディアを上回ることもあるほどだ。

「キャロラインは色々と言動に難ありだが、彼女は聡明だ。将来的には作戦指揮を任せようかと思っている」

「それは新部隊の話ですか？」

「ああ。すでに人員は集められている。後はこれから合流して、半年後の正式な発足を目指すことになる」

「確かにメンバーはかなり豪華ですが……軋轢を生むことはないのでしょうか」

「ま、そこは僕がフォローしよう。それでも少佐だからね」

ニコリと微笑みを浮かべる。体よく押し付けられてしまったのだが、実際のところヘンリックは楽しみにしていた。

リディアたち三人と他の精鋭たちが加わることによって、新部隊がどうなっていくのかを。

こうしてついに、リディアたちは実地訓練に挑むことになるのだ
った。

「これでここでの生活も終わりかあ……意外と早かったな」
「そうだな。しかし、経験を積む意味では十分に有意義だった」

リディアとアビーは寮の荷物の整理をしていた。すでにここでの
やるべきことは終えた。課せられた訓練は全てこなし、これから
実地訓練に入る。

キャロルといえば、部屋の隅で化粧をしている途中であった。

「おい、アホピンク。化粧していないで、少しは手伝えよ」
「えーっ！　だって今日はお別れ会があるんだよぉ？　しっかりと
お化粧しないと！」

そう。今日はリディアを慕っているメンバーたちが送別会を開い
てくれることになっていたのだ。

彼女は別にいいと言ったのだが、どうしてもということで招待さ
れることになった。

もちろんそこには、アビーとキャロルも招待されていた。リディ
アの近くにいることが多いので、二人もそのメンバーとはそれなり
に交流があったからだ。

「はぁ……しかし、化粧が長すぎるだろう？　もう三十分は経過してるだろうが」

「もう、三十分は必要かも」　終わったらちゃんと手伝うから、よろしくね」

猫撫で声を出してそういうキャロルだが、リディアは「はぁ……」とため息をつく。

学生の頃だったならば、普通にキレて喧嘩になっていたのだが今は呆れてしまったのか、もう何かを言うことも億劫になっている。

「はぁ……アビー。こいつのこれは直せないのか？」

「無理だろうな。こいつはずっと前からこうだろう」

「そうだよなあ……」

出会いを思い出す。キャロルは同時期に飛び級してきたと言うことで、リディアはすぐに声をかけたのだ。しかしその見た目はあまりにも派手で、優秀な魔術師とは思えなかったほど。

それが今や、こうして軍人として同じキャリアを進んでいるのだから人生とは分らないものだとしリディアは思っていた。

「そういえば、リディアはどうなんだ？」

「ああ。あれのことか」

そう言われてニヤツと笑いを浮かべる。

その話は氷剣についてだった。リディアが取り組んでいる新しい魔術。それについてアビーは尋ねてきたのだ。

「氷剣に関しては、そうだな。もう少しで完成すると言ったところか」

「【固定】のコードはうまくいつているのか？」

「ああ。もう少しで私の求めるものが完成するな」

「……これはいつも思うが、お前はやはり天才なんだな」

アビーのその感想は素直に思ったものだった。彼女は今まで自分が天才とは思ったことは一度としてありはしない。それは全て自分の努力の上に成り立っていると思っているからだ。

そして、彼女は知った。本当の天才とはリディアのような存在をいうのだと。

自分で新しいコードを生み出し、それを元に新しい魔術を創造する。既存の魔術に対して改良をするというアプローチはよく行われていることだが、新しい魔術を創造するとなると話が違ってくる。

だというのに、リディアは革新的な魔術を生み出し続けた。その実績もあって彼女は学生にして聖級グランドの魔術師に至っているのだ。

そんな彼女が求める新しい魔術。本人曰く、それは最高の魔術になるという話だった。

「天才？ ふふ。そうだな、私は正真正銘の天才だなっ！」

嬉しそうな顔をして、彼女は笑みを浮かべる。リディアには自覚があった。自分が天才であるという、その自覚が。

それは純粋な事実であり、そのことに驕りはしない。ただあるがままを受け止め、自分の進みたいように進む。

それこそがリディアの進む道だった。

「そういえば、新しい部隊ではかなりの精鋭が来るらしいな」

「私もすでに聞いたが、それなりに優秀な人材が抜擢されているそうだ」

「ほう……それは、本当に楽しみだなあ……」

その顔を見て、アビーは思った。きっとこの士官学校の初めにあったと同じようなことが起こるに違いないと。

第254話 実地訓練へ

リディアたちは無事に士官学校でのカリキュラムを修了。本日より、実地での訓練が開始となる。現在は東の方で紛争が起きていることが多い。さらにそれは、魔術を使用しての紛争。

魔術を使用した大規模な戦争はまだ行われていない。コード理論が生まれ、魔術が体系化され、才能のある者ならば魔術教育を受けただけである程度の魔術行使が出来る。

それは魔術をさらなる進歩をもたらすことではあるのだが、何事にもメリットとデメリットは存在する。

そう。魔術は人を殺す手段としても非常に有用だったのだ。

人間が殺人に魔術を使用する。それはすでに、実際に行われていることであつた。

「王国の東のキャンプ地か。ここにはあまり来たことがないな」

背中にバックパックを背負って、リディアが先頭になって進んでいる。現在は王国の国境沿いで争いが起こっているとのことだった。

彼女たちの残りの半年の実地訓練は、主に国境沿いで防衛を主軸とした訓練になっている。

「リディアは意外と外出しないよな。たまに森に走りに行ったりは

するが、本を読んでいることが多いし、魔術実験をしていることもあるな」

アビーがそう言葉にする。

彼女のいうとおり、リディアは活発ではあるのだが、いつも外にいるのが好きというわけではない。

彼女は読書をして知識を吸収する時間、さらには新しい魔術を生み出すために実験をしたりなど、意外と室内での活動もよくしているのだ。

「そうだなあ……確かに、言われてみればそうかもしれん。しかし、いつも思うがこいつはどうなっているんだ？」

リディアとアビーの後ろには、スキップをしながらキャラルが進んでいた。それに鼻歌も歌いながら。いつものように高い位置で桃色の髪をツインテールにしてまとめている。

そんな彼女は全く疲れなど出ていないようだった。かなりを距離を歩いているというのに。

「え？　もしかして、キャラロキャラロのこと？」

ポカンとした表情を浮かべる。そしてリディアは思ったことをそのまま口にする。

「そうだ。正直言って、お前は士官学校の段階で脱落すると思っていた」

「えー！　リディアちゃんってばひーどーいーっ！　キャラロキャラロ

だつて、やればできるんだよっ！」

えっへん、と胸を張って自分のことをアピールする。確かにキャラルは頭脳明晰であるし、身体能力も悪くはない。

しかし流石に大人たちに混ざつての士官学校の中では劣るだろう………ついてこれるのはアビーだけだな、と思つていたのだが、キャラルも無事にこの実地訓練までやってきているのだ。

リディアとしては驚きを隠すことはできなかった。

「キャラル。お前は基本はアホピンクだが、もしかしてやれるやつなのか？」

「むきーっ！ もう四年目の付き合いだよっ！ リディアちゃんは本当にキャラロキャラロのことを分かってないんだからっ！ この脳筋ゴリラっ！ー！」

「……あ？」

ドサッとバックパックを下ろすと、キャラルの方へとじりじりと近づいていく。流石にこれはやばいと思つたのか、アビーはリディアを羽交締めで静止させる。

「おいっ！ 離せっ！ こいつから喧嘩を売ってきたんだ！ー！」

「売り言葉に買い言葉だろう。落ち着け、リディア」

と、アビーがなんとか宥めているにもかかわらず、さらにキャラルは煽ってくる。

「へへーんっ！ 士官学校でもリディアちゃんは、ゴリラだって有名だったよお」

「……殺す」

その後。本気でブチ切れそうになるリディアをなんとかアビーが静め、さらにはキャロルにもそれはもうきつい説教を彼女はするのだった。

喧嘩するほど仲がいい、といえは聞こえはいいのだが仲裁するアビーの心労はそれなりに大変なものだったらしい……。

「よしついたな」

無事に落ちついた三人は、さらに歩みを進めて簡易的に設立されたキャンプ地へと辿り着いた。そこには複数のテントが設立されており、すでに人の気配がするようだった。

「お、三人ともに来たようだね」

リディアたちがやってきたのを感じ取ったのか、中から出てくるのはヘンリックだった。

「フアーレンハイト少佐。お久しぶりであります」

敬礼をして、そう声を出すのはもちろんアビーだった。

「三人とも、半年ぶりだね。無事にこちらまでくることができて、とりあえずホッとしてるよ」

「ふん。私にとって、士官学校の訓練など造作もなかったですがね」

ニヤツといつものようにリディアは笑みを浮かべる。それに対し

てアビーは「はぁ……」と嘆息を漏らす。

上官に対する接し方は何度も改めさせようと思っているのだが、一向に治る気配は無い。

「わーいっ！ 少佐だあ！もしかして前よりもおつきくなりました？」

ニコニコと笑いながら、キャロルは近づいていくとその筋肉を許可もなく触り始める。すると彼はグツと上腕に思い切り力を入れる。

「ははは！ キャロライン、君はどうやら見る目があるようだね。

私の筋肉はさらに成長中だよっ！」

「おお！ おつきいですねっ！」

ヘンリックもそれを注意することなく、まるで子どもと接するかのようにはしゃぎと話をしている。いやきつと、彼にしてみれば彼女たちは子どもも同然。

ただしその振る舞いは計算ではなく、天然ではあるのだが……。

「「はぁ……」」

ため息が重なる。

アビーが横を向くと、そこにはいつもヘンリックの側にいる秘書がいた。もちろん軍服を着ているので、彼女も軍人である。

「申し遅れました。アビー＝ガーネットであります」

敬礼をして、自己紹介をする。以前会ったことはあるのだが、正式な挨拶はまだだったからだ。

「あなたは本当に常識人なようね。本当に助かるわ」

「恐縮です」

「私は、フロール」コーレイン。階級は中尉よ」

「は。よろしく願いいたします、コーレイン中尉」

互いに敬礼を交わしてから、視線を三人の方へと向ける。そこでは、リディア、キャロル、ヘンリックが楽しそうに会話をしていた。

それだけを見ればただの微笑ましい光景なのだが、二人はいつかきつとまた大変なことが起こると予想していた。

「……お互い、苦労するわね」

「いえ。自分はそんなことは」

「分かっているのよ。エインズワースとキャロライン。二人とも、かなりクセがあるでしょう？」

「……う。はい、そうですね。実際のところは本当に苦労しています……ここにくる途中でも喧嘩をしそうになったので、仲裁するのが大変でした」

すると、フロールはアビーの肩に両手を置いた。

「大丈夫よ。今後は二人で、頑張っていきましょう」

「……コーレイン中尉っ!!」

感極まった声を上げる。それは初めて同族を見つけたときの喜び。今までずっとたった一人でリディアとキャロルの間にいたが、それを分かってくれる上官がいる。

それだけでも、アビーは少しだけ泣きそうになっていた。

もっともフロールの方はすでにこの部隊のメンバーを把握している。一方でアビーは知らない。フロールのその言葉の意味を、アビーは後に嫌というほど痛感することになるのだが……。

「お？ 新入りか？」

テントの中から出てくるのは、ヘンリックよりもさらに一回り大きい男性だった。圧倒的な筋肉を兼ね備え、その巨軀はあまりにも威圧的だ。

「む……でかいな」

リディアはすぐにその筋肉の質を理解する。どうやら、士官学校にいた連中とは格が違うようだ。

「お前がエインズワースか？ 噂には聞いてるぜ？」

ニカッと白い歯を輝かせながら、握手を求めるので彼女はそれに応じる。

「リディア」エインズワースだ。よろしくな」

「はははっ！ 俺は、デルク」アームストロング。階級は軍曹だ。よろしくな」

視線を交わす。

リディアは握手をしているのだが、その大きな手に対してグツと

思い切り力を込める。普通の人間ならば悶絶してしまう強さなのだが、デルクは全く動じることはなかった。

「おお！ なかなか、力は強いみたいだな？」

余裕そうな笑みを見て、リディアは思う。

どうやらここは面白い場所になりそうだと。

第255話 実地訓練開始

「でかいっ！ めっちゃでかいなっ！」

士官学校に入って、圧倒的な巨躯を有する人間は見てきたつもりだった。しかし、リディアの前に立っているデルクは彼女が出会ってきた中でも一番の肉体を誇っている。

身長が高いのは生まれつきだろうが、この鋼のような筋肉は間違いない。後天的な努力によるもの。彼の努力の足跡を見て、リディアは感嘆の声を上げる。

「ふふ。この筋肉の良さがわかるのか？」

デルクはニカツとトレードマークの白い歯を輝かせると、上腕に思い切り力を入れる。するとその部分は非常に大きな力こぶが出来る上がる。

リディアはそれを見て、さらに目をキラキラと輝かせるのだった。

「うおおおっ！！？ スゲエ！ なんてやばい筋肉なんだっ！」

「ふ。しかし、エインズワース。お前もいい筋肉をしているようだな」

「何？ わかるのか？」

「もちろんだ。女性にしては非常に鍛え抜かれている」

「ふふふ。よく分かっているな。私も男だったら、筋肉モリモリのマッチョマンになりたかったんだけどなあ」

筋肉談義に花が咲く。

この二人はどうやら相性がよく、すぐに打ち解ける。

「俺のことはデルクで構わねえ。筋肉を愛する者同士、よろしくな」
「私もリディアでいいぞ！ よろしくな、デルク！」

再び握手を交わす。リディアとしては、彼のような存在を見るのは初めてだったので非常に嬉しそうに笑っていた。

そして現在ここにいるメンバーが召集され、ヘンリックの前に部隊のメンバーが集まるのだが……。

「あれ？ 残りのメンバーはいないのかな？」
「少佐。もう一人の合流は今日ではないですよ。昨日一応、お伝えしましたが」

「あ、そうだったね。あはは！ うっかりしていたよっ！」

恥ずかしそうに頭をかきながら、笑って誤魔化す。その様子を見て、リディアたちも笑っているが、アビーとフロールの二人はじつと半眼で彼を見つめる。

「う……何だか、視線が厳しいね。とりあえずすぐに概要に入ろう」

こほん、と軽く咳払いをするとヘンリックは説明を始めた。

「僕たちの部隊は王国軍の中でも精鋭たちが集まる、特殊部隊になっている。半年後の正式な設立に向けて、これからは準備期間となる。ただこれは、エインズワース、ガーネット、キャロラインの三

人に合わせてのものだ。他のメンバーはすでに士官学校などは卒業している」

特殊部隊の設立に際して、問題なのはその三人だった。いかに早く士官学校を卒業させるのか。そのために作られたカリキュラムであつたが、三人は何の問題もなくこの実地訓練まで進んできた。

ヘンリックとしても特に問題はないと考えている。そもそも、魔術師としての素質だけならばこの部隊の中でもトップクラスなのは間違いない。

あとは軍人としての経験を積んでいけば、将来的にはかなりの人材になると考えている。

「この半年間だが、実地訓練ということで実戦もあり得るだろう。最近は特に魔術を使用した紛争が多い。ゲリラのような存在も、王国の周辺では確認されている。ただし、ここは最前線ではない。まだ三人は訓練を終えていないからね。しばらくはここで訓練を重ねつつ、実戦に向けて準備をする。もちろんチームワークも含めてね。よろしく」

その言葉で彼は締めくくった。

本来少佐の地位である彼は、このようなことをする立場ではない。実際に現場に出て指導をするなど、佐官になってからはしていない。しかし、今回の場合はケースが特殊だ。

将来的に七大魔術師に至る可能性のある三人。その指導を任されたのは半ば押しつけられたようなものだが、彼としては楽しみな側面ももちろんあつた。

百年に一人の逸材が同時期に現れる。そんな彼女たち三人がどのように成長していくのか、純粹にそれが楽しみなのだ。

「では、今日はここまで。一週間はここで生活することになるから、よろしく頼むよ」

その言葉を最後に、解散することに。

リディアたち三人はまたも同じテントで暮らすことになった。ここまで来てしまえば、一蓮托生。

アビーは色々と気苦労が絶えないのだが、慣れとは恐ろしいもので彼女も徐々に適応しつつあった。

「おっしやーっ！　なら今日は俺が飯を作るぜっ！　新人の入隊祝いみたいなもんだなっ！」

と、デルクが一人で大声を上げる。そしてリディアはすぐに彼に近づいていく。

「デルク。面白そうなことをしているなっ！　何を作るんだっ！！？」

目を輝かせてそう尋ねる。彼女はアウトドアも好きなので、こうして外で食事を作ることは興味津々である。そして、デルクはニヤツと笑うと自信満々に答える。

「決まってるだろ？ カレーだぜ……」

「カレー、だとっ！？ 鉄板じゃないかつ！」

「ふふふ……今日は完璧に準備してきたらかな。カレーの材料も、
はんこうすいはん飯盒炊飯も準備完了だぜ」

ズラツと並ぶ調理器具。それを見ると、彼女はさらに嬉しそうに
声を上げるが……。

「おお！ なら私も手伝うぞっ！」

「おいやめろ。お前が作る側になると、ろくなことになるない」

「はあく？ 私だって成長しているんだぞ……っ！」

アビーが止めようとするが、リディアが譲ることはない。そして
そこにはキャロルもまたやってくる。

「……リディアちゃん。絶対にやめておいた方がいいよ……あの時
の惨劇を忘れたの……？」

「う……」

いつになく真剣なキャロルの表情。口調はいつもよりもしっかり
としており、その表情も深刻な様子だ。

それだけでリディアが料理を作ることがいかにまずいのかよく分
かる。

時は数年前。学生の時に、リディアは何を思ったのか手料理を作
ったことがある。

それをアビーとキャロルに振る舞ったのだが、二人は食べた瞬間
失神した。その後、味見をしたリディアも失神してある種の地獄を

作り上げたのだ。

そのようなことが過去にあったので、流石に二人は彼女が料理に絡むことを阻止する。

「リディア、大丈夫だぜ。お前はそうだな……飯盒炊飯を頼む！
水を入れて、加熱するだけだからな」

「デルク……っ！　うう……なんていい奴なんだ」

そして全員で調理を開始する。気が付けば、ヘンリックとフロールも合流して全員でカレーを作っていた。大量に持ってきた野菜の皮を剥いたり、カレールーを作ったりなど全員で力を合わせて調理をしていた。

そんな中、アビーは飯盒炊飯を担当しているリディアのことを野菜の皮を剥きながらじっと監視していた。

「アビー。私なら一人でできる。任せておけっ！」

「いや無理だ。お前は絶対にやらかす。私が最後まで付き添っ」

「……そ、そうか」

いつものリディアならば絶対に反対して口論になっていたはずだが、アビーのその瞳があまりにも鬼気迫っているために、何も言えなかった。

初めてみるアビーのあまりにも真剣な表情。こればかりは前科がある、仕方ないと思いつつ彼女の監視の元、リディアは飯盒炊飯を進めていくが……。

「ばかつ！　そんな火力を強くするなっ！」

「だって早くできるだろ？ 効率いいだろ」
「そんなに強いと焦げるに決まっているっ！ もっと火力を落とせっ！」

案の定、リディアはやらかしそうになっていたのでアビーの懸念は正解だった。そして渋々とアビーのいうことに従うと無事に炊き立てのご飯が出来上がった。

「おお！ 私でもできたぞっ！」

嬉しそうな声を上げるが、アビーといえば疲れたような表情をしてボソリと声を漏らす……。

「私がいなかったら、絶対に失敗してたがな……」

そうしてカレーの方も出来上がり、全員でそのカレーをさっそく食べるようになった。

「うまい！ うまいぞっ！」

リディアは嬉々としてカレーをほお張る。他のメンバーもまた、それを食べて美味しそうな表情を浮かべる。

どうやらあの惨劇は避けることができたようだった。

こうして特殊部隊としての活動は、まだ正式なものではないが始まるのだった。

第255話 実地訓練開始（後書き）

ということ、ついに本日からは書籍が並ぶと思います！！
都内以外の方は、あと1日か2日お待ちいただければと。

本当に読者の皆様のおかげでここまですることができました。改めて、感謝を述べたいと思います。

内容は一章を加筆修正をしたものになります。既読の方も楽しめるように、新規エピソードを入れてあります！（あのキャラの意外な面が見られるかも……？）

またここまで読んでいる方だからこそ楽しめる部分も入れてあります。

各店舗での特典は、このページ下部の宣伝の文章にリンクを貼っていますのでご確認下さい！

文庫サイズでお求めやすくなっておりますので、本当に何卒、書籍版の方もよろしく願います！！

第256話 リディアの軌跡

リディア「エインズワース。

彼女がその頭角を現し始めたのは、まだ幼少の頃だった。エインズワース家は魔術師の家系ではあるが、貴族でもなければ有力な家柄でもない。

魔術師の家系の中では、平凡と形容するのが正しいだろう。

そんなリディアの存在は突然変異とも呼ぶべきものだった。

「わはははっ！ あははははっ！」

幼い頃から体を動かすのが大好きで、それはもう至る所を走り回る。彼女の中にある選択肢は、走るか止まるか。それだけだった。

両親もそんな彼女には困っていたのだが、とても元気だと言うことで喜んでいいる部分もあった。

ある日。庭でいつものように走り回っていたリディアが、氷柱ヒョウジュを作っていることに気がついた両親。

「リディア。それはどうやったんだ？」

「なんかぐつと力込めたらできたっ！！」

「魔術……？ この年齢で？」

「あなた、もしかしたらリディアは天才なのかもっ！」

リディアには姉がいた。姉の方は彼女ほどの才能はない。エインズワース家の中では当たり前前の存在。しかし、リディアは幼い頃から魔術を使用することができた。

本来ならば魔術を使用できるとしても、もう少し時間がかかるのが普通。加えてここまで精巧な氷柱を作ることなど不可能。彼女の才能の片鱗はこの時から現れていた。

「むむ……むむむっ！」

いつものように庭で氷を作って遊んでいるリディアだが、それはもはや遊びと言っているのか分からないものだった。

彼女はどうかやら氷魔術に対する適性が高いようで、毎日毎日氷を作ってはそれを成型していく。

最近ハマっているのは動物の形を模した氷を作ること、庭には多くの動物の形をした氷があった。一見すれば、何かのイベントごとでもあるのだろうかと思うほどだ。

「ぐぬぬ……ぬぬっ！」

両手を掲げて、ピキピキと音を立てながら氷を延長させる。今作っているのは、昨日本で読んだユニコーン。

特に角の部分を作り出すのが難しく、唸りながら魔術を使っているが……数十分後。

リディアは満足のいくものが完成して、すぐに母親を呼びに向かうのだった。

「おかーさん！！ 見て、見てこれっ！」

「まあ……これは全部リディアがやったの？」

「うんっ！」

母親はあまりにも現実離れた光景に、驚きを隠せなかった。目を見開き、手を口に当て呆然としていた。

それも無理はないだろう。この庭いっぱいに、氷のアー트가生み出されていたのだから。

その日の夜。両親は彼女の今後について考え始めた。

リディアの才能は間違いなく破格。もしかすれば、白金級プラチナまたは聖級の魔術師に至ることができるかもしれない。いや、もしかすれば七大魔術師に届く可能性も……。

そして月日は巡り、リディアは十一歳になった。

「リディア。飛び級だけど、ちゃんと友達はできる？」

「ははは！ 大丈夫だ！ 母さんは心配しすぎ」

「……うむ。まさかこの年である名門であるアーノルド魔術学院に入学とは。リディア、本当にすごいな」

「へへへ。父さんも大袈裟だけど……私は天才魔術師だからな！ 当然だ！」

男勝りな性格に育った彼女は飛び級制度を用いて、この世界の中でも名門であるアーノルド魔術学院に入学することになった。

もちろん、正規の試験に合格した上での入学。

アーノルド魔術学院は飛び級を採用しているが、実際にする者はかなり少ない。あの三大貴族でさえ、飛び級を利用するものがほとんどいないことから、それはもはやあってないようなものだった。

しかし今年に限って言えば、リディアを含めて三人も飛び級がいるらしいのだ。彼女は残り二人がどんな人間か楽しみにしていた。

「お前も飛び級なのかつ！」

「ああ。そうだが」

リディアとアビーの出会いはい入学式の時だった。二人は真反対の性格をしていたが、意外と話が合うようにすぐに友人になった。そして、その中に入ってくるのは……ものすごく目立つ一人の少女だった。

髪の毛をポニーテールにまとめ、髪飾りをこれでもかと付けている。その目立つ容姿に二人は驚くが、それこそがキャロルだった。

「やつほー キャロル」キャロラインですっ！ 気安くキャロキヤロって呼んでね！ キヤピっ」

と、初めての出会いは色々あったのだが三人は友人として一緒に過ごすようになった。

また飛び級ということで色々大変なこともあったが、それは全てリディアが蹴散らしていった。

上級生の男子生徒に決闘を申し込まれたこともあった。「お前みたいなのが来ていい場所じゃねえんだよ」と言われ、彼女の怒りは最高潮に達する。

そして問答無用で叩き潰し、その存在は学院の中でもかなり目立つものとなった。

座学でさえも、魔術でさえも学年でトップの成績を取り続ける。しかしそれは、決して努力して頑張っているという感覚ではなかった。

「リディア。まだ寝ないのか？」

「ああ。もう少しな……」

最上級生になった時でさえ、彼女は変わることはなかった。ただ毎晩、本を読み漁る。中でも魔術に関する読書量は、読書家のアビーでさえ叶わないと思っている。

努力を呼吸のようにする存在。天才であり、努力もできる。そして、その努力を努力と思っていない。アビーはその時、やはりリディアは真の天才だと思った。

「うーん。むにゃむにゃ……もう食べられないよお……えへへ」

キャロルといえば、何か幸せそうな夢を見ているようだった。

「私は先に寝るぞ」

「ああ。灯りは自分の分だけ灯しておく。いつもすまないな」

「いや、構わない。リディアのそんな部分は尊敬しているからな」

その言葉に対して返答を返すことはなかった。

ただただ没頭する。その本の世界に潜り込み、新しい魔術を創造する。すでにリディアは魔術を学ぶという立場にはない。彼女は新しい魔術を創造するという立場に至っているのだ。

その中でも、氷魔術が得意とはどのようなことなのか。

学院に入学してからそのことを突き詰めた。そこでたどり着いたのは、【減速】と【固定】というコードだった。そもそも今までただ感覚的に使用してその魔術を、より深いコードで理解しようとしたのが始まりだった。

彼女は氷魔術が得意のではなく、あくまで【減速】と【固定】という二つに適性が高いことに気がついた。

そこから先は氷魔術ではなく、【減速】と【固定】に絞って新しい魔術を生み出し続けた。

しかし、学院在学中には満足のいく結果を出すことができなかった。

その後。三人の進路は王国軍へと進むことになる。

「リディア。またやっているのか？」

「ん？ ああ、すまない。起こしたか？」

実地訓練が明日から本格的に始まるというのに、リディアはテントの中で魔術を使って実験をしていた。

求めるべきは、氷剣。それをどうやって成型していくのか、ずっと考え込んでいたのだ。

「ちょっと音がしたからな」

「没頭してたみたいだな。気がつかなかった。すまない」

「ま、学生の頃からリディアはそうだったからな。で、何か掴めたのか？」

「いや。まだ時間はかかりそうだ。そもそもコード自体はしっかりと走っているはずなんだ。きつとどこかに、この魔術に綻びがあるに違いない……と思っている」

いつになく真剣な様子だった。リディアの様子を見て、アビーは微笑みを浮かべる。

「どうした？ 急に笑って」

「いや。本当に昔から変わらないな、と思っただけ」

「そうか？ 私としては成長したと思っただけ」

自慢気に胸を張ってそうアピールするが、そのようなところが変わっていない……と言いたところだが、アビーは何もいうことなく再び床につく。

「寝不足にならない程度にしておけよ？」

「ああ。そうするよ」

そしてリディアは今日もまた、新しい魔術の開発に挑むのだった。

第256話 リディアの軌跡（後書き）

ついに明日が発売日です！ といっても都会ですと、今日には並んでいると思いますが（笑）。

さて、改めて書籍の宣伝になります！

今日は特典に関して再度お知らせをしておきます。

・アニメイト様特典：【榎枝りこ先生描き下ろし&御子柴奈々書き下ろし4pリーフレット】 こちらは【アメリカ】メインのイラストとSSになります！（SS＝書き下ろしのショートストーリーのことです）

・ゲームーズ様特典：【榎枝りこ先生描き下ろし&御子柴奈々書き下ろしリーフレット】 こちらは【レベッカ】メインのイラストとSSになります！

・メロンブックス様特典：【御子柴奈々書き下ろし特製ブックカバー】 こちらは特製ブックカバーと【リディア】メインのSSになります！

・とらのあな様特典：【榎枝りこ先生描き下ろし&御子柴奈々書き下ろし両面イラストカード】 こちらは【エリサ】メインのイラストとSSになります！

・電子書籍特典：【榎枝りこ先生描き下ろしイラスト&御子柴書き

下ろし小説】　こちらは【アメリカ】メインのイラストと【レイとエヴィ】メインのSSになります！

ということで、推しキャラクターのいる店舗で買うこともできますのでよろしく願いします！！（レベツカが一番人気そうですね……！）

ネット通販もやっているようなので、遠方の方でも大丈夫ですよ！改めて特典のイラストの確認をしたい方は、下記のリンクよりお願いいたします。

ついに発売直前です！（都内ではもう発売していると思いますが）書籍版の方も、何卒よろしく願いいたします！

第257話 手合わせ（前書き）

ついに本日が一巻の発売日となります！！
あとがきでも宣伝しておりますので、よろしく願いします！

第257話 手合わせ

夜が明けた。

本格的に実地訓練が開始されることになった。訓練内容としてはすぐに実戦形式で魔術戦をするわけではなく、目の前に広がる広大な森の中での立ち回り方を学ぶことになる。

「よっしゃー！ 今日もやるぜっ！」

早朝。リディアは入念に柔軟体操をする。

その後は軽く腕立て伏せなどをして、体を動きやすくするために調整していく。

続々と部隊のメンバーが集まってくるのだが、その中でもキャロルだけは訓練開始時間のギリギリまで準備をしていた。

「おーい、キャロル。そろそろ時間だ。大丈夫なのか？」

アビーが声をかけにいく。するとそこでは、入念に鏡を見て化粧をしている彼女がいた。

気合を入れて化粧をしているわけではないのだが、すっぴんでいることは何よりも嫌がるということで彼女はこの訓練であっても化粧を欠かすことはない。

「よし！ 今終わったよ　　すぐに行くねっ！」

キャロルも無事にやってきて、全員がその場に揃うことになった。

「全員揃ったようだね」

ヘンリックがその場にやってくると、少しだけ緊張感が漂う。いつもは穏やかな性格をしているが、彼は苛烈さも兼ね備えている人間だ。伊達に若い内に、佐官になったわけではない。

「まずは、デルクに先導してもらって森の中を20キロほど走ってもらおうかな。僕たち魔術師は魔術に頼りがちになるけど、基本的な身体能力はいざという時に必要だからね。基礎体力は基本中の基本だ。それと返事はレンジャーだ。別にレンジャー訓練ではないけど、その方が雰囲気が出るだろう？」

『レンジャー……！』

と、全員で声を揃える。その中でフロールだけは少しだけ辟易したような表情をしていたが、彼の思いつきの発言は今更なので特に何もいうことはなかった。

そもそもこの訓練ではリディアたちがメインでやる予定なのだが、デルクとフロールも指導という形で参加することになっている。

「では、僕はテントの中で事務作業をしているからあとはよろしく頼むよ。デルク、フロール」

そう言って彼はテントの中へと消えて行く。そして、三人の前にはその二人が立つのだった。

「軍曹。あなたが先頭で、私が最後尾につきます。ペース配分は考えてくださいね」

「了解であります」

ビシッと敬礼をして、フロールは最後尾についてデルクが先導して森の中へと進んで行くことになった。

もともとこの森はカフカの森よりもさらに深い位置にある森だ。軍事教練ではたびたび使用されており、士官候補生や訓練生であった者は大体がこの場での訓練をすることになる。

そのため、この森の構造はデルクもフロールもすでに頭に入っている。

今回の訓練に際して、身体強化はしないように伝えられている。

貴族や、その他の血統主義の魔術師は魔術さえあれば身体能力を鍛えるようなことはしなくても良い、と考えているものが多い。

しかし、軍の中ではここ最近特に、身体強化を重点的に行うことが多い。それは魔術戦といえど、最後に重要になってくるのは基礎体力だからだ。

何も華やかな魔術などには必要はない。必要なのは生き残る力なのだから。

「はっ……はっ……はっ……」

全員が呼吸を揃えるようにして、森の中を駆け抜けて行く。デル

クは一切容赦などせずに、非常に早いペースで森の中を駆け抜けて行く。

リディアとアビーはそれについて行くことができたが、キャロルはわずかに前と距離が離れつつあった。

「キャロライン。大丈夫？」

「はっ……はっ……はっ……だ、大丈夫ですっ!!」

後方からフロールに声をかけられる。キャロルはすぐにペースを戻すと、そのままぴったりとアビーの後ろへとついて行く。

キャロルは確かに身体能力は高い。士官学校での訓練の際も、それなりの成績を残している。

しかし、この部隊の中に限定してしまえば彼女が劣ってしまうのも無理はなかった。そもそも彼女は前衛で戦う魔術師ではない。

後方支援に特化しており、また頭脳明晰なため作戦指揮なども今後の視野に入れている。

だが、あくまでこれは訓練。士官学校を卒業するためには最低限こなすべきカリキュラムの一環である。

化粧も崩れ始め、髪も乱れていくがキャロルはなんとか懸命に歩いて行く。

そんな中、目の前を走ってアビーがチラッと後ろを見ると彼女に声をかける。

「キャロル。ペースを落としてもらうか？」

「はっ……はっ……だ、大丈夫……だよっ！ 絶対について行くからっ！」

「分かった」

短く返事をするアビーはすぐに正面を向いてしまう。別に彼女はキャロルに対して冷たいわけではない。

それは信頼の証でもあった。キャロルは自分ができると思ったことは、すべて自分でやってきた。

今までもキャロルが辛そうな時は、アビーやリディアが心配して声をかけたりしたこともあったのだが、キャロルは自分で乗り越えてきた。

いつもは戯けており、ふざけているような印象が強い彼女だが、実際はしっかりと確固たる自分を持っている責任感の強い人間なのだ。

そして無事に森の中を20キロほど走り終わると、全員がキャンブ地へと戻ってくる。

キャロル以外の全員はあまり疲れている様子ではなく、まだまだ体力が余ってそうであった。

「キャロライン。よくついてきたなっ！」

水を差し出すのは、デルクだった。彼はペース配分を任されていたということもあって、キャロルのことは先頭から感じ取っていた。

息の乱れが多いのは彼女だけだったからだ。

その中でもペースを落とすことはなかった。

それはリディアもアビーも、ぴったりと後ろについてきてキャロルに情をかけたりしなかったからだ。

学生時代からずっと共にいて、友人であることは彼も知っていた。その友情はどうやら、優しさだけではないということを理解するのだった。

「はぁ……はぁ……はぁ……あ、ありがとうございます……っ！」

肩で息をしながら、もらった水を一気に飲み干していく。ごくごく喉を鳴らしながら、キャロルはあつという間に飲み干してしまっていた。

「よっしゃー！ 軽いランニングで体もほぐれてきたな」

「……今のが軽いランニングと思うのは、きっとお前だけだ」

その言葉の通り、まだ体力はあっても他のメンバーはそれなりに疲労している。一方のリディアといえば、むしろ今のが準備運動だったと言わんばかりの発言をする。

それにはデルクもフロールも苦笑いを浮かべるのだった。

「ははは！ 流石はあのリディア」エインズワースだな！」

「ええ。本当にどうやら規格外の存在のようですね……」

そうして話していると、テントの中からヘンリックがやってくる。

「どうやら割と早く終わったようだね。デルクはペースを落とさなかったのかい？」

「はい。全員ついてこれると判断しましたので」

「そうか。基本的な部分は三人ともに行ける、ということか」

冷静に状況を見極める。

三人の扱いに関しては、ヘンリックに一任されており 半ば押し付けられたようなものではあるが まずは基本的な部分を把握したようだ。

「よし。次は魔術戦でもしてみようか。デルク、早速エインズワースとやってみてほしい」

「レンジャー！」

その言葉を聞いた瞬間。リディアは満面の笑みを浮かべるのだった。

「おお！ ついにこの時が来たのか……っ！ ふふふ……デルクは強そうだから期待できるなっ！」

そして二人は対峙することになるのだった。

第257話 手合わせ（後書き）

ついに本日、7月2日【氷剣の魔術師が世界を統べる】が発売となりました！！ 今日からは全国の書店に並んでいると思います！

ここまで毎日更新かつ8ヶ月で100万字も超えるほど書くことができたのは、読者の皆様のおかげです。毎日更新をする中で辛い時もありましたが、皆様の応援があったからこそ書き続けることができました。

本当に、応援ありがとうございました。

一卷の内容は一章に当たりますが、遥か昔のような気がしますね（笑。梱枝先生のイラストや新規描きろしエピソードなど加えておりますので、お楽しみいただけたらと思います。

アメリアやレベッカのちよつとアレなシーンもありますので、ご期待いただければと（笑。

また五章の過去編をここまで読んでいるからこそ、楽しめる書き下ろしシーンも入れております。

改めて既読の方々も楽しんでいただけるように仕上げましたので、書籍版も何卒よろしく願います！！（文庫サイズでお求め安いお値段になっておりますので！）

それでは、読者の皆様。今後とも本作をよろしく願います。

第258話 訓練修了（前書き）

【氷剣の魔術師が世界を統べる】、第1巻好評発売中です！！
書籍版も是非是非、よろしくお願いしますー！

また、あとがきにて大事なお知らせがあります。

第258話 訓練修了

「では、審判は私が務めますね」

フロールがそういうと、リディアとデルクは向かい合う。互いに二十キロ走ってきたというのに、まだまだ気力に満ちていた。

「ふふ。こんなでかいやつとやるのは初めてだな」

ニヤリと笑う。彼女は今までそれなりに巨躯を有する人間と戦ってきたという自負はあるのだが、デルクに限っては違う。彼の身長はおおよそ二メートル近く。

百九十センチ後半もあるその身長は、流石のリディアでも圧を感じてしまう。

それに加えてデルクは軍人として訓練を続けている。筋肉を蓄えているのはもちろん、ただの脳筋ではないことはすでに彼女も分かっていた。

「では……始めッ!!」

フロールの声がしたと同時に、デルクは姿勢を低くして突っ込んできた。今回の模擬戦において魔術で身体強化をすることは許可されている。

つまりはリディアに有利と思われるが……。

「うおッ……！ めっちゃ疾えなッ！！」

グッと腰を落として身構える彼女は、思わずそのような声を上げてしまった。

その圧倒的な肉体にもかかわらず、その俊敏性。

この部隊に抜擢されたのはどうやら伊達ではない。

「おらああああああッ！！」

デルクは真正面から突っ込んでいく。彼は分かっていた。魔術があるうとも、自分とリディアの体重の差は明白。ならば、この筋肉を持って正面から向かっていくのが最善であると。

「ふんっ……！！」

「むっ……！！」

そして、互いの肉体がぶつかり合う。ドンッ、と鈍い音がしてそこから二人は膠着状態に陥る。

「ぐぬっっっっっっ」

「う、うおおおおおおおッ！！」

魔術の技量はリディアの方が上、体重と筋肉に関してはデルクの方が上。互いのそのパワーはもはや同等であった。

その二人の様子を見て、フロールはあり得ないものを見ていると

いう表情を浮かべる。

「……えっと。あの軍曹とパワーが同じ？」

それに対してはアビーがすぐに答える。

「はい。リディアは昔から異常なまでの筋肉量と魔術センスを持っています。むしろ自分は、リディアとパワーが同じ軍曹に驚いています」

「あはは……もう、この部隊ってなんなのかしら」

そう話している間にも、二人の戦いは進行していく。

「唸るぜ、私の筋肉があああああつ！ 轟き、叫べええええつ！！ うおおおおおおおつ！！」

リディアはさらに内部コードを流し込むと、そのままデルクの体をあろうことが一本背負いをして地面に叩きつけたのだ。

彼に比べれば小さな体である彼女がまさか一本背負いをするのは、あまりにも現実離れした光景だった。

しかし、ここでデルクが終わることはない。

戦いは寝技に持ち込まれたが、デルクはグツと腰を固定してその場から動かないようにする。リディアもまた、すぐに関節をキメにいききたいのだがそうもいかない。

「ふははは！ いいぞ！ その圧倒的な筋肉に私は感服したぞ！！」
「へへ……リディアもやるじゃねえか！ 俺は今まで一度だって、

吹っ飛ばされたことはなかったんだぜ!!」

「ふふ……あはははははは!!」

互いに互いの筋肉を褒め称えつつているようで、その光景はもはや異質。アビーはまあ、いつも通りだなと思い、フールドは頭に手を当てて首を横に振っていた。

ヘンリックはニコニコと笑みを浮かべ、キャロルは興奮しているのかその場でぴよぴよと飛び跳ねていた。

そして二人の戦いはしばらく続き……最終的にはリディアが勝利することになった。

「はあ……はあ……はあ……おえっ……マジでヤベエ。デルク、マジで強かった……吐きそ……」

地面に手をついたまま、リディアは呼吸を整えようとしている。デルクは完全に意気消沈しており、彼も同じように肩で呼吸をしていた。

「くそー。後もうちょっとだったんだがなあ……」

「ふふ。いや、誇ってもいいぞ。この私をここまで苦しめたんだからなっ!!」

リディアとしては魔術による身体強化があれば、もっと楽に勝つことができると思っていたが、実際はそうではなかった。

何よりもデルクは粘る。泥臭く、負けないように。それに体の使い方もうまく、リディアの攻撃をうまくいなしていた。

彼は士官学校上がりではなく訓練校出身なのだが、この部隊に抜擢される技量を見せつけた。

「リディア。お前の筋肉、最高だったぜ？」

ニカッと白い歯を見せて、快活な笑みをもって握手を求める。そしてリディアもまた、それに応じる。

「ふ。デルクも最高の筋肉だったな！ 今度は一緒に筋トレしようぜ！」

「もちろんだ！」

こうしてこの部隊で二人の筋肉信者が生まれてしまふのだった。

それから時が過ぎるのはあっという間だった。

その訓練課程の中で、全員が脱落することなく順調に訓練を消費していく。雨の日も風の日も、嵐の日もあったがそれでも彼女たちは懸命に励み続けた。

そして、半年が経過。

ついに本日を持って無事に訓練課程が終了。彼女たちは無事に士官学校を卒業することになった。

現在は一年前にやってきたヘンリックの書斎へと足を運んでいた。

そこで三人はあの時のように、彼がくるのを待っている。

「なんだか早かったなあ……」

「リディアは毎日楽しそうだったな。私は割と、大変な時もあったんだがな」

「キヤロキヤロも大変だったよぉ。二人がいなかったら、危なかったかも」

リディアといえば余裕で訓練課程を終えた。頭脳明晰であり、基本的な身体能力も高く、魔術に関して言うまでもない。そしてリディアはこの一年でさらに、魔術師として成長していた。

もちろんアビーもキヤロルも成長はしているのだが、彼女の成長速度はもはや異常である。

すでに七大魔術師に抜擢しようという話も出ているほどには、彼女の魔術は極まりつつあった。

「いつもすまないね。遅れてしまったようだ」

ヘンリックは申し訳なさそうに謝罪をすると、椅子に腰を下ろす。

「さて、すでに知っていると思うが君たち三人は無事に士官学校を卒業することになった。訓練課程も無事に修了。前代未聞の一年という期間でかなりハードだったと思うが、よくやってくれた」

それは世辞などではなく、純粋な事実であった。そもそも四年間の過程を一年に凝縮するなどあり得ない話。それを十五歳の少女たちが　今もう、十六歳だが　こなすことは本当に前代未聞であった。

百年に一人の逸材が、同時期に三人も現れた。その噂以上に彼女たちは優秀だった。

「さて、士官学校を卒業したということは君たちの階級は少尉になる。十六歳で少尉など前例はないが、君たちならばふさわしいだろう。きっと輝かしい経歴を進んでいくことは間違い無いだろう」

その言葉を聞いて、リディアは自慢気に胸を張る。褒められることは決して嫌いでは無いので、素直に反応しているようだった。

「また、君たちの配属は特殊部隊
アストラル 特殊選抜部隊になる」
「特殊選抜部隊、ですか？」

それはアビーによる問いかけだった。名称に関しては初めて聞くので、思わずそう声に出した。

「そうだね。星を意味するものだ。僕が考えたんだ、カッコいいだろう？」

「あ、あはは……そうですね」

苦笑いをするアビーだが、リディアとキャロルは違った。

「特殊選抜部隊アストラルッ!? やばい、マジでカッコいいぞ! まるで輝く私のようなっ!!」

「うんうん! 私たちにはぴったりの名前だねっ!」

どうやら根本的にこの二人とは価値観が合わないのだと、アビーは再認識する。

「ふふ。気に入ってもらえて何よりだ。正式な活動開始は一週間後。つまり君たちは、一週間の休暇に入る。この一年は相当ハードだったからね。これくらいは当然だろう。では、また一週間後に」

そして話はそこで打ち切られ、解散することに。

リディアたちがレイと出会うまで、残り一年を切っていた。

第258話 訓練修了（後書き）

少し長いですが、最後までお読みいただければ幸いです。

氷剣1巻が発売して1日が経過しました。もう購入していただいた方、これから購入予定の方などいると思いますが、是非書籍版でもレイたちの物語を楽しんでいただければ幸いです。

少し話は変わりますが、本作の個人的な目標だったのが【100万字以上書く】こと、さらには【毎日更新を書籍の発売日まで続ける】ことでした。

ということで大変申し訳無いのですが、氷剣の毎日更新は明日で最後にしようと思います。今後は更新しないわけではなく、毎週土曜日の更新にする予定なのでそこはご安心を。

ここまで続けることができたのは、読者の皆様のおかげです。今までありがとうございます。皆様の応援がなければ、きっと私はここまで書くことはできなかったと断言できます。本当に皆様には感謝しかありません。

改めて本当に今までありがとうございます！ あ、もちろん物語はまだまだ続きますよ……！（笑）

第259話 新メンバー（前書き）

本日で毎日更新は最後になります。今後は毎週土曜日更新になりますので、よろしくお願いいたします。

第259話 新メンバー

新部隊設立。

アストラル 特殊選抜部隊は軍の中でも特別な立ち位置になる。正規の部隊にはなるが、独立組織のような側面がある。基本的には上層部からの命令に従う形だが、独自に動けることも多い。

アストラル そして、なぜ特殊選抜部隊が設立されたのか。それはやはり、これからの時代において魔術を使用した大規模な戦争が行われると予想しているからだ。

コード理論。

今まで魔術とは、ルールのない無秩序なものだった。それは魔法、超能力などと呼ばれそこに理論などありはしなかった。ただ漠然と才能のある人間だけが使える特別なもの。

しかし、コード理論の体系化によってその無秩序なものが台頭することになった。もちろん才能は必要ではあるが、今まで以上に魔術を使用できる者が増えたの事実。

それをインフラの整理など生活に役立てるのは当然だが……やはり、人間の業を避けることはできない。

闘争。

それはどの時代であつても、起こり得るものである。人は常に戦いを求めているわけでは無いが、火種はどの時代であつても存在する。そしてそれは、現代で言えば魔術……ということが出来るだろう。

今まで特別なものだった魔術が、多くのものが使えるようになり、さらには魔術は進歩した。それこそ、一人で百人、いや千人を相手にできるほどの魔術師がいるほどに。

だからこそ軍は、来たるべき時に備えて準備をしていたのだ。

「正式に特殊選抜部隊が発足することになった。まだメンバーは少ないが、これからよろしく頼むよ」

特殊選抜部隊アストラルのメンバーが、ヘンリックの執務室に全員揃うことになった。今日は顔合わせということで、このあと全員で食事に行く予定になっている。

「さて、今後はメンバーも増えていく予定だがしばらくはここにいらる人間たちでこの部隊は構成される。そこで最後のメンバーを紹介しよう。少尉自己紹介を」

「はい」

促されて全員の前によってくるのは、精悍な顔つきをした男性だった。その甘いマスクから女性に人気はかなりある。実際に、軍の中には彼のファンがいるとかいないとか。

全体的に爽やかな印象であり、彼は前に出てくると自己紹介を始める。

「ハワード＝ケネット少尉であります。と、堅いのはここまでだな。俺のことは気安く、ハワードと呼んでくれ。その天才三人も、それで良いぜ？」

微笑を浮かべて、その白い歯が輝く。

この部隊にはヘンリックとデルクがいるが、その中でもハワードは爽やかという一点に尽きる。その顔立ちも女性受けするのは当然。

キャロルは彼の笑みを見ると、その場でぴよんぴよんと飛び跳ねる。

「うわっ！　めっちゃイケメンだねえ　私はキャロキャロだよ　よろしくね、ハワードちゃんっ！」
「ははは……十六歳の子供に、ちゃんづけされるのか。しかし、それもよし！　ははは！！！」

ハワード＝ケネット。年齢は二十三歳。士官学校を卒業して一年が経過している。そんな彼がどうしてこの部隊に配属されることになったのか。それはもちろん決まっている。

彼が軍人として優秀だからだ。

「ふふ。すげーイケメンがきたが、どうやら魔術の腕は立つようだな」

「リディア。こそこそと休暇中に情報収集をしていたようだが、まさか……」

「そのまさかだっ！！　ハワード！　私はお前に決闘を申し込むぞ！　この部隊で誰が最強なのか、教えてやろう！！！」

急な展開ではあるが、この場に驚きはなかった。アビーとフロールはため息を漏らす、その他の人間は面白そうだなと思ってニヤリと笑う。

「お、お前があのだ天才魔術師か」

「どうやら、私の噂は聞いているようだな？」

歩を進めていくと彼の目の前に立つのだが、視線は明らかに挑発しているようなものだ。

「もちろん。魔術の歴史が始まって以来の、超天才魔術師だろ？」

「……超天才魔術師？」

「ああ。ただの天才じゃ無いって聞いているぜ？」

爽やかな笑顔でそう言われるので、リディアはニヤアと笑った。

「ふふ。ふはは！！！よく分かってるじゃないか！それで、私と戦う準備はいいのか？」

「もちろん。エインズワース。お前が仕掛けてくるのは、俺も分かっていたからな」

バツと急に軍服を脱ぎ去ると上半身裸になる。それはまさに、鋼の肉体。弛まぬ訓練によって構築されたその体は、圧倒的な筋肉を有していた。

まるで彫刻のように深く刻まれたその筋肉は、彼の努力を反映している。

「おお！ 流石だな、ハワード！」

「デルク……お前には負けるが、俺だって努力してるんだぜ？」

ハワードとデルク。階級は違うが、二人は友人であり筋肉によって結ばれたソウルメイトである。その筋肉は互いに共鳴しているのか、大胸筋が反応していた。

「ほう……どうやら、この部隊に入るだけの筋肉は有しているようだな……」

じつとその筋肉を見つめる。

決してこの部隊の採用基準は筋肉などではないが、リディアもまた筋肉を愛する人間の一人。ハワードの努力を認めているようで、ゴクリと喉を鳴らす。

「お二人とも、執務室で暴れるのはおやめくだ」

と、フロールの言葉を聞くことなくリディアは一気に加速。そのまま勢いをつけて、ハワードへと向かって行った。

あまりの速度に全員が彼女の移動に気がつくことができなかった。そう……ハワードを除いては。

「おっと。スゲエスピードだな」

「な……っ！！？ 私のスピードを見切っているだっ！！？」

それはリディアにとって初めての経験だった。彼女が胸板に目掛けて放った拳は、ハワードの右手の中に包み込まれていた。

インサイド

内部コードによって身体強化をしているにもかかわらず、彼はリディアの攻撃を受け止めたのだ。

「ふふ。俺だって、伊達にこの部隊の所属じゃない。近接戦は得意だぜ？」

リディアを煽る。しかし流石にそれからは、ヘンリックが静止するように声をかける。

「二人とも。熱くなりすぎだ。そこまでしておきなさい。それと、エインズワースはもう少し落ち着くといい」

「ちえー。くそ、また今度やるしかないかー」

「俺はいつだって受けて立つぜ？」

上腕二頭筋と大胸筋をパンプアップさせると、彼は再び爽やかな笑顔を浮かべる。

「はあ……この部隊には変人しかいないのかしら」

「中尉。それには自分も同感です」

この部隊の良心であり、常識人でもあるのはフロールとアビーだけだった。彼女たちはこれからもっと大変なことになるのだろとすでに予想している。

「うんうん。しかし、相変わらずいい筋肉だね」

「恐縮です。少佐殿」

この部隊の男性陣は全員が筋肉の虜であり、そこにリディアも加わるとなれば收拾をつけるのはフロールとアビーしかない。

キャロルに至っては、「うわー！ 筋肉すごいねーっ！」と騒いでいただけだった。

こうしてついに、アストラル特殊選抜部隊が正式に発足することになる。

第259話 新メンバー（後書き）

改めてお伝えしておきます。

本日で毎日更新は終了になります。今までお付き合いいただき、本当にありがとうございます。

また書籍版第1巻が発売中なので、続刊のためにも是非ともよろしくお願いします！！

第260話 アストラル始動

アストラル
特殊選抜部隊が本格的に始動となったが、この部隊はいつも最前線に出て戦うような部隊ではない。

そのため、訓練に当てている時間の方が長いこともある。あれから三人は、一応王国軍の寮を借りることになった。部屋は流石にここまでくると別々になったのだが……実際のところ、リディアの部屋にはアビーとキャロルがよく集まる。

アビーがいる理由としては、リディアは自分で家事ができない上に朝も彼女が起こさなければ寝坊してしまうからだ。キャロルがよくいるのは純粹に寂しいから、という理由らしい。

「おい、リディア。朝だぞ」

「ううん……あと五時間……」

「ばか。そんな寝ていいわけがないだろう。遅刻は絶対に許さないからな。もう私たちは、正規の軍人なんだ」

士官学校を卒業したということで、それぞれの階級は少尉になっていた。その中でもアビーの優秀さは目立ち、すぐにも階級が上がる噂されているほどだ。

性格も真面目で、しっかりとしている。それに加えて魔術師としての力量も高く、聡明だ。彼女のことを軍が高く評価するのは、ある種当然のことだった。

一方のリディアとキャロルの存在は完全に持て余しているのが実情。その手綱を握っているのはアビーということもあって、彼女の階級はすぐに上がりそうというのは軍の上層部の判断である。

「ほら、起きろッ!」

「うわ……っ!」

布団を剥がされて、リディアは一気に目が覚める。

「うう……まだ少し肌寒いんだぞ! 布団を奪うなんて、横暴だっ!」

「はぁ……リディア。いい加減成長してくれ……」

と、いつものようなやりとりをして彼女達は今日も今日とて部隊での活動を続ける。

現在の世界情勢としては、エイウェル帝国が主導となって世界へ魔術の技術を広めてる。それはもちろん、魔術の発展という観点において重要なことだろう。

アーノルド王国でもまた、魔術学院が盛んになっているおかげで、魔術の進歩はコード理論が生まれてから目覚ましいものになっている。

しかし、王国はまだしも帝国には黒い噂があった。それは魔術を殺人の道具として利用しているのではないか……ということだった。

魔術の技術のある組織に流しているという噂もある。また帝国に存在している暗殺組織が暗躍しているなど。おおよそ、エイウェル

帝国にはいい噂も、悪い噂も存在した。

現在はまだ確証がないため、あくまで噂程度の話でしかないのだ
が。

そうしてリディア達が特殊選抜部隊アストラルに配属になって、半年が経過
した。

そこでの部隊編成も固まってきており、キャロルとヘンリックは
後方支援。全体の状況を見て、作戦を立てそれを伝達する。

他のメンバーは前線に出て戦う。

また相手は人間だけではなく、魔物が活性化したときには駆り出
される時もあった。そのような生活を続けていく中でついに実戦を
経験する時がやってきてしまった。

「今日の作戦になるが、特殊選抜部隊アストラルが主導で行う。対象はこの人
間だ」

作戦司令室ブリーフィングルーム。そこで特殊選抜部隊の全員が集まり、作戦を共有し
ている最中。

ヘンリックが告げる内容は、ある人物の暗殺を含めた内容だった。
決して殺すことが目的ではないが、それも視野に入れている。

魔術を使用して世界を混乱に貶めようとしている。そんな組織の
台頭を事前に潰すために、今回の作戦が立案された。

「ついに実戦か……」

ボソリと呟くリディアは、真剣な表情をして対象の自画像をじっと見つめる。

今まで魔術を使用して戦うことはあったが、実戦の経験はない。実戦になれば、相手を殺すことも視野に入れなければならない。

彼女は天才ではあるが、まだ若い人間であることに変わりはない。今回の作戦でも、リディアとアビーには任せられないという話だったが……。

「いざとなったら、私がやろう。デルクとハワードだけに任せるのは危ないだろう。いざというときの覚悟はすでに決まっている」

淡々とリディアはそう言葉にした。

いつかこんな日がやってくるのは分かっていることだった。

躊躇がないといえは嘘になる。しかし、リディアのその双眸を見つめれば確かな覚悟が宿っていることは間違いなかった。

相手もまた武装している。今回の襲撃で、完全に無力化するのは困難である可能性もある。

むしろ、殺してしまったほうが早い。軍からそのような状況になることもあり得ると言われているからだ。

そしてついに作戦が開始することになった。

この王国の東を根城にしているらしく、そこには武装している集団が地下空間に集まっていた。そこを襲撃。全員で強襲を開始すると、あっという間に占拠していく。

ここにいる全員はその全てが熟達した技量アストラルを持っている。一方の相手は武装しており、数も多いが完全に特殊選抜部隊の方が上だった。

あっという間に制圧してしまうと、奥に逃げているボスらしい人間を発見。

「見つけたな」

「ああ。こいつを確保すればいいんだな？」

リディアとアビーはすぐに移動すると、小太りの男を捉えた。共有していた男で間違いはないので、とりあえずは魔術によって動きを封じておく。

「ふふ……フハハ！」

嗤う。

すでに詰まっているというのは、相手の男は急に高笑いを始める。

「お前達がくることは分かっていたんだよお……！ お前ら、やれッ……！」

その言葉を合図にして、上から新しい人間達が降りてくる。

奇襲。今回のそれは、リディア達が誘い込まれてしまっただけ。

あくまで先ほどまでの戦闘は、自分たちが不利だということを知らしめるためのものだった。

降ってきた人間は魔術に長け、殺しとしての魔術を極めている魔術師ばかりだった。

咄嗟のことで反応が遅れてしまったのは、アビーだった。それを相手も分かっているのか、彼女へと凶刃が迫る。

「アビーッ！！！」

リディアが声を上げる。今は他のメンバーはちょうど外の相手と戦っている。つまりは、ここにいる二人だけで戦うしかなかった。

リディアは一気にコードを走らせると、魔術を展開する。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセシング＝減速＝固定マテリアル＝ディセレーションディセレーション》

《エンボディメント＝物質マテリアル》

「アイシクルブレイズ
冰千剣戟」

その手に出現するのは一本の冰剣。それを躊躇なく振り抜くと、相手の右腕が弾け飛んだ。血が舞い、返り血がリディアの頬と髪に

飛び散る。

躊躇など、ありはしなかった。

このタイミングで腕を刎ねることができなければ、死んでいたのはアビーだったからだ。

そこから先は蹂躪とも呼ぶべき戦闘だった。冰剣を両手にしてリディアは、相手を容赦なく戦闘不能に追い込む。

これはすでに殺し合い。それが分かっている彼女はまるで機械のように舞い続ける。その中でアビーは、ただ見ていることしかできなかった。

「……」

血溜まりができていた。立ち尽くすリディアの姿は、今までとは違って明らかな殺意に満たされていた。

誰一人として死んでいる様子はないが、それでもこの血の匂いに満ちた空間はアビーにとってはあまりにも強烈すぎた。

リディアは振り返り血を拭くと、冰剣をボスへと向ける。

「ひ、ヒイiiiiiiiiiiiiiiii！　な、なんだお前は！？
私の部下は魔術戦を極めた人間ばかりだぞッ！　お前みたいなガキがどうしてっ！！？」

「ガキ、か。ああ、確かに私はまだガキだ。でもな、おっさん。私

は天才なんだ。だからこそ、責任が付き纏う。この才能は私が私利私欲で使っていいものじゃない」

才能には責任が付きまとう。

それはリディアの口癖でもあった。彼女は分かっていた。自分の才能の使い道を。どうすればその才能を有効に活用できるのか。

それは人を守ることだった。誰かを守るために、誰かの笑顔を守るために、その覚悟を持って彼女はここに立っているのだ。

冷然と言葉を告げ、その冰剣で相手の腕を軽く切り裂く。

「う、うぎゃあああああつ！！！」

まるでなんの意志も宿っていないかのような瞳で、逃げ惑う相手を追いかける。血に塗れた冰剣を振るうと、地面に血が残る。

そうして殺してしまうか、と思っていると後ろからワードとデルクが彼女の腕をおさえた。

「リディア。もういい。あとはこちらでやる。よくやった」

「ああ。あとは俺たちに任せておけ」

「……分かった」

後の処理は、二人に任せることにした。

この日、アビーは知った。

リディア＝エインズワースの残酷さを兼ね備えた、その天才性を

o

第260話 アストラル始動（後書き）

一週間ぶりの更新です。今後もお楽しみにしていただけだと思います！（時間に余裕ができれば、更新頻度上げるかもです！）

また、書籍版1巻が好評発売中です！

まだ購入していない方は、何卒よろしく願います！（ラノベの続刊は発売の1、2週間で決まるので、未長く本作を続けるためにもよろしく願います……！）

それでは引き続き本作をよろしく願います！

第261話 レイとの出会い

極東戦役。

当時はまだその名称ではなかったが、徐々に魔術による紛争が増えつつあり、世界では魔術による大規模な戦争が行われるのではないかという懸念が囁かれていた。

そんな中で特殊急襲部隊アストラルの活動は活発になりつつあった。現在は東での紛争が多くなってきたおり、王国にも出撃要請が他国からあるほどに。

現在の世界で台頭している国は、エイウェル帝国とアーノルド王国。その二つの国を中心に魔術は進化し続けている。

そもそもコード理論の発祥自体は、アーノルド王国である。そのため、魔術に関しては王国こそが大元と言われている。エイウェル帝国もまたそれを追いかけるようにして、発展しつつあった。

だが勢いだけでいえば、エイウェル帝国の方が上。そのような声もあるほどだった。

「ふう……今回も無事に終わったな」

汗を拭う。

今回も無事に任務を終えることができた。すでにリディアとアビー達は、実戦を経験し始めていた。この部隊での編成も固まってきたおり、作戦の立案に関してはキャロル。そして、全体の指揮はヘンリック。

残りのメンバーは部隊を率いて戦う、ということを経験となく繰り返していた。

「そうだな……しかし、ここに派遣されて一ヶ月が経つが、いつになったら終わるものかと思うな」

そんな彼女に寄り添ってくるのは、アビーだった。彼女もまた初めての实戦では呆然としているだけできなかったが、今は十分に慣れてきつつあった。

ヘンリックの懸念は二人のメンタル面だった。実戦では人を魔術で傷つけることも含めて、殺めてしまう可能性も出てくる。しかし、それは杞憂に過ぎなかった。

天才はメンタルが脆い^{もろ}。そう言われることは昔からよくあることだ。エリート気質で育ってきているために、自分の予期しない事態が起こると対応できない。

むしろ早熟の天才にはよくありがちな話ではあるが、それも含めてその二人に問題はなかった。

アビーは初めての实戦で苦い思いをしたが、すぐに切り替えていた。

「ガーネット少尉。大丈夫なのかい？」

「はい。問題ありません」

念のためのヒアリングということで、ヘンリックはアビーを呼び寄せてそう尋ねてみた。

彼女はいつものように真面目な顔で、淡々と返答をする。

「もし厳しいようだったら、こちらでも作戦指揮に加わるように手配することはできるけど？」

「いえ。そちらはキャロルとファールンハイト少佐がおりますので、私はそちらに行くわけにはいきません」

「そうか……もし何かあれば、遠慮なく言って欲しい」

「私の精神面のことをご心配しているようですが、私も覚悟を持ってこの場にあります。それはご理解いただけますと、幸いです」

それは虚勢ではなかった。あの時はただ初めてのことに面食らってしまったが、彼女はもう一度戦うのが怖い……ということはなかった。

あれから帰還したアビーはリディアにも心配されていたが、メンタル面で大きな問題はなかった。むしろ、不甲斐ない自分を恥じてさらなる躍進に努めるべきだと考えている。

「そうか。余計なことを聞いて、申し訳ない」

「いえ。ご懸念に関してはもつともかと。自分の不甲斐なさが露呈してしまっただけで。以後、注意したいと思います」

「分かった。下がって良い」

「は。失礼します」

敬礼をして、下がっていくアビー。そんな彼女の様子を見て、「はあ……」とため息を漏らすヘンリック。

「どうかしましたか？」

隣に立っていたフロールはやっと口を開く。彼女としても今回の件で自分が口を挟むことではないと思い、今まで黙っていたのだ。

「あれが十六歳に見えるかい？」

「……見えませんね。軍人にしては模範的な人間ではありますが、おおよそ少女の立ち振る舞いではありません。私も初めての实战のあとは、もつと心身にダメージを負っていました」

「そうだ。それこそが普通だ。ただ、まだガーネットはギリギリ正常な方だ。問題は、エインズワースだろう」

リディア「エインズワース」。

その存在は、特殊選抜部隊アストラルの中でも際立っている。あらゆる技能が全て高水準。そして、初めての实战でも問題なく魔術を行使して無事に相手を鎮圧。

その実績にはヘンリックを含めて、軍の上層部も驚きを示す外ない。ほか

たった十六歳の少女が实战に物怖じせず、無事に任務を完了した。相手を殺してはいないが、その氷剣で四肢を刎ねとばすことに躊躇はしなかった。

その実績に関して二人は驚くしかなかった。

「……そうですね。流石にあれば、私も驚きました」

「ああ。それも含めて、彼女に関してはしっかりと面倒を見ていく必要がある。それには天才にはアレが付き纏う」

「……オーバーヒート魔術領域暴走ですか」

「そうだ」

オーバーヒート
魔術領域暴走。

それは高位の魔術師によく確認されている現象。魔術領域が暴走し、焼き切れてしまう現象。その痛みは想像を絶するものだと言われている。

今まで天才と謳われてきた魔術師の中でも、オーバーヒート魔術領域暴走により引退せざるを得ない魔術師はいた。

彼女達三人、特にリディアに関してはオーバーヒート魔術領域暴走は今の一番の懸念事項と言っても過言ではないだろう。

「そこは様子を見ていこう。彼女を失うわけにもいかないという理由はあるが、私は彼女の前向きさが好きなんだ。失うのは惜しい。部隊も明るい方がいいからね」

「……ロリコンですか？」

フロールがジトーっ見つめるが、彼は慌ててそれを否定する。

「違うに決まっているだろうっ！ あくまで部下としてだっ！」
「ま、そういうことにしておきましょう」

そのようなやりとりがありつつも、特殊選抜部隊アストラの活動は問題なく進んでいった。

そして彼女達は最も紛争の激しい、極東へとやって来た。極東にある小さな国。現在はそこでなぜか魔術による紛争が激しく行われているという。彼女達は正式に依頼を受けて、入国。

場合によっては武力行使によって鎮圧するという話にもなっていたが、そこにあつたのは見渡す限りの焼け野原だった。

「酷いなこれは……」

「ああ。炎系統の魔術か……完全に焼け野原だ」

その焼け野原を見ていれば、魔術の兆候は理解できた。誰がしたのかわからないが、そこには焼け焦げた人間も転がっていた。すでに絶命しているのは間違いない。

近くにあつた村にも向かったが、そこも同様だった。この規模の被害はリディア達も見るのは初めてなので、ただ呆然とするしかなかった。

だがそんな中、リディアは急に駆け出したのだ。

「おい、リディア！！ どうしたんだっ！！？」

アビーの声を無視して、彼女はそのままこの焼け野原を疾走していく。他の隊員の声も聞くこともなく、一心不乱に進んでいく。

間違いないッ！ 生きている人間がいるッ！！

駆け抜ける。リディアが微かに感じた兆候。それは、確実に生きている人間から漏れ出した第一質料プリママテリアだった。

それを追いかけるようにして進んでいくと、そこには呻き声を漏らしている小さな子どもを発見した。

「おいッ！？ 大丈夫かッ！！？」

その場に倒れ込んでいる子どもを発見する。体はボロボロで、今にも死にそうな状態であるのは一目見て理解できた。

彼女はすぐに、治癒魔術を施す。外傷は酷いが、ここで治癒魔術をかければ間に合う。

そんな思いから、リディアは懸命に魔術を施す。すると少年は呼吸が安定してきたのか、一命は取り止めたようだった。

「リディア。その子どもは？」

「唯一の生き残りらしい。ここにいる気配がしてな。間に合ってたかった」

その後、部隊の全員が集まりその少年を保護することになった。

これこそがリディア達とレイの出会いだった。

第261話 レイとの出会い（後書き）

ついにレイの登場です……！

果たしてリディアとレイはどのような道を歩んでいくのでしょうか。
ご期待ください。

また更新についてですが、早くて8月から遅くとも9月からは隔日更新（二日に一回）にしようかなと検討中です。絶対のお約束はできませんが、そうして欲しい方が多いのでしたらまた頑張ろうかなと思います。実際、週一更新だと物語の進行が遅いので私も忘れそうになっているので……（汗）

是非、感想欄で教えてください！

それと現在は絶賛2巻の準備をしております。書籍版の方も是非とも楽しみに待っていただければと！

最後に。改めて、書籍版一巻が好評発売中です！ まだ購入していない方は、是非ともよろしくお願いいたします……！（ページ下部に書籍の情報があります）

第262話 少年の道筋

「なにに？ 保護ができないだと？ そんなバカな話があるのか」
「あるみたいだ。どうやら今回の件、こちらが思っているよりも根が深いようだ」

少年を助けた特殊選抜部隊^{アストラル}たちは、ある問題に直面していた。

それはこの国では助けた少年を保護しないというのだ。そんなことがあり得るわけがないとリディアは言うが、それは実際に相手の国から伝えられた真実であった。

「なんでも、少年がいた村は特殊な環境だったらしい」
「特殊な環境？」

現在は他の隊員は別の任務でいないため、この国が用意した駐屯^{すゐちん}基地でアビーの話を訊くりディア。

少年を助けてからすでに一週間が経過しており、あの紛争の後処理を手伝っている最中でもあった。

「ああ。なんでも、この小国の中に存在はしているがもともとは独立した村を形成していたらしい。それはずっと変わることなく、この国に所属はしているがそれは形式的なものだったようだ」

「しかし、それだけじゃないだろう。国民を見捨てる国が存在するのか？」

「……呪われた村」

アビーはボソリとその名称を呟く。

「呪われた村だと？」

「ああ。なんでも、儀式を行って神を下ろすとか何とか」

「神ねえ……この時代にそんなことを言う奴がいるとは」

「しかし、一概には否定できない。昔から儀式的なものは行われてきた。その歴史も王国にはある」

「分かつてはいるが、今はコード理論により魔術そのものが暴かれつつある。今更、神の存在をどうとか言う奴がいるのか？」

それは率直な感想だった。

リディアの言うとおり、そもそも世界はコード理論の体系化によって技術的な躍進を遂げた。今までは神の御技みわざと言われていたものが、論理的に暴かれたのだ。

もちろん未だに神の存在を信仰する人間はいるが、現代に於いてその数はかなり少なくなってきた。

また信じるだけならばまだしも、閉鎖的な村で儀式を伝統的にやっているなどという話は聞いたこともなかった。

「そこは私たちが魔術大国出身だからそう思うのだろう。現実として、こうしてそんな村が存在しているのは間違いない」

「もしかして、今回の紛争はそれに関連しているのか」

「ああ。この資料に目を通して欲しい」

すでにヘンリックから資料を受け取っていたアビーは、それをリ

ディアに共有する。

「……村の秘宝を手に入れるために、ゲリラが襲撃。しかし、実際は共倒れ……ということか」

「村の秘宝。それが何かは私たちはまだ把握していない。そして、ゲリラの存在も遺体を確認したがこの出身かも分からない。あまりにも損傷が激しすぎたからな。それに、あの少年だが彼はずっとあの場所にいたようではないようだ」

「は？ それはどういう意味だ？」

「今回の紛争が起きたのは、二週間前だ。つまり彼は一週間ほど自力で彷徨っていたらしい。あの場所にたどり着いたのは偶然、と判断している」

その言葉を聞いて、リディアは考える。彼女があプリママディアの少年の存在に気がついたのは、溢れ出る第一質料を感じ取ったからだ。

しかし、後で話を聞くと誰も第一質料プリママディアを知覚できなかったと言う。

彼が特別なのか。それともリディアが特別なのか。

どちらにせよ、リディアはあの少年には何かあると感じ取っていたのだ。

「で、結局のところあの少年はどうするんだ？」

「こちらで引き取る手続きはすでに終了している。どうにも、彼は疎まれているようだったからな。王国の孤児院への手配も進行している最中だが、状況が状況だな。すぐに向こうに送るのは難しいだろう」

「そうなるよな。ということは、しばらくは私たちで保護するのか

「？」

「そうなるな。幸いなことに、この周囲の紛争自体は鎮火しつつある。それに、前線にでないキャロルや少佐も面倒を見てくれるという話だ」

その話を聞いて、リディアはホッと胸を撫で下ろす。魔術による紛争が広がっていく中で、助けることのできない命は数多く見てきた。

その中で救うことのできた命があつて、彼女は嬉しく思っていた。自分もまた誰かを救うことができてよかったと。

だが心の中にある違和感は拭い切れていなかった。

「よし。じゃあ、あの子ども様子でも見るか」

「言うのが遅れたが、意識は戻っているそうだ」

「何？ それを早く言えよっ！」

と、軽く怒鳴りつけるリディアだがアビーの表情が暗いことに気が付く。

「何かあつたのか……？」

真剣な声音でそう尋ねる。

「きっとあの少年はあまりにも凄惨な光景を目の当たりにしたに違いない。あの現場は見ただろう？ あそこに二週間も一人でいたんだ。心を閉ざすのは、無理もないだろう」

「……分かった。とりあえず、様子を見に行く」

そして彼女は部屋を出ていくと、その少年が休んでいるという場所へと向かった。距離はそれほど遠くなく、この基地の中にある一室。

そこに到着すると、すでにキャロルが彼に話しかけていた。

「あのね。お名前はなんていうのかな？」

「……」

「自分が何歳とか、分かるかな？」

「……」

ベッドから体を上半身だけ起こして、彼は呆然としていた。目は開いているし、呼吸もしているようだ。容体自体は安定している。

キャロルは優しい声で、ゆっくりとそう尋ねる。彼と目線を合わせて、じっくりと対話をするを試みているようだった。

「キャロル」

「リディアちゃん」

振り返ると、少しだけ目に隈くまがあるキャロルがそこにいた。ここ最近はあまりの忙しさに眠ることができず、キャロルは心身ともに限界に近かった。それでも、彼の相手をするのだと思ってこうしてこの場にいる。

彼女は誰よりも、情に厚い人間だからだ。

「容体は？」

「安定してるよ」

「じゃあ……」

「うん。私の声だけじゃない。他の人の声にも、全く反応がないの」
近づいていく。

その少年はあまりにも痛々しい姿をしていた。その瞳にはまるで暗闇しか映っていない。体からも生気を感じることはできず、ただじつと虚空を見つめているだけだった。

「お前、名前はなんて言うんだ？」

尋ねる。

リディアもまた、自分の声に反応がないことは分かっていた。しばらくしても、彼から返事が返ってくることはない。

「……どうやら、ダメみたいだな」

「うん。でも、私がちゃんと面倒を見るよ。だって、この国にも見捨てられるなんて……あんまりだよ」

涙ぐんでいるのか、キャロルは少しだけ涙声になっていた。きつとそれは彼の境遇に同情しているからだ。

「今のところ、私にできることはないな。キャロル、あとは任せた」
「うん。またね、リディアちゃん」

と、少年のもとを去ろうとした瞬間だった。リディアは後ろから軍服を掴まれた感触を覚える。始めはキャロルかと思ったが、流石にそんなことをするはずはない。

呼び止めるのならば、声をかければいいからだ。

ならば彼女を静止させたのは誰なのか……それは。

「……レイ」

小さな声が二人の耳には届いた。リディアはすぐに腰を下ろして少年と目を合わせると、もう一度尋ねることにした。

「名前、レイっていうのか？」

「……うん」

依然として表情は暗い。それにその瞳も闇に染まり切っている。しかし、リディアに対してはなぜか答えたのだ。

「年齢は分かるか？」

「……五歳」

「そうか。ありがとう」

ギュッと優しく包み込む。そうすると彼は疲れが残っているのか、眠りについてしまった。

「……名前はレイ。年齢は五歳、か」

「リディアちゃんのこと覚えていたのかな？」

「助けた時の記憶か？」

「うん。だから、答えてくれたのになって」

キャロルの問いに明確な答えなど持ち合わせてはいないが、彼女はその可能性もあると思っている。

ともかく、彼の名前と年齢が分かった。それだけでも大きな進歩なのは間違いない。

「そうかもしれないな。ともかく、このことは報告していこう。それにしばらくはうちの部隊にいるんだろう？ 色々と準備しないとな」

「うんっ！」

レイが心を開くまで、まだまだ時間はかかりそうであった。

第262話 少年の道筋（後書き）

ついにここまでできましたね。レイとどのように接していくのか、ご期待ください。

また隔日更新できるように書き溜めをしているので、更新頻度も近いうちに上げていこうと思います！！

書籍版第1巻も好評発売中なので、まだの方は是非ともよろしくお願いたしますー！

第263話 思わぬ方向へ

「おい、レイ。遊びに来てやったぞー！」

そう言って室内に入ってくるのはリディアだった。

彼の名前はレイ。年齢は五歳。それしか情報は分らなかった。ファミリーネームの方を聞いても、覚えてないとボソリと呟くだけだったからだ。

それ以外の情報はあえて訊かないようにしている。それはやはり、彼のメンタル面を考えてのことだった。あの時のことを思い出し、は、辛い思いをするだけ。

すでに調べはついているが、あの村の人間は全員が死んでいた。つまりは彼の親族も全員死に絶えているということだ。その事実をすでに理解しているのかは分からないが、今はそっとしておくべきだろうという判断になった。

現在はこの小国への派遣任務も終わりに近づき、彼を連れて王国に戻る予定である。その後は孤児院に預けるのか、または養子を欲しがっている家に渡すのか、そこはまだ決めかねている段階だ。

「ん？ キャロル。何してたんだ？」

「ふふんっ！ キャロキヤロだって、レイちゃんに好かれてるもんねっ！ 今日は絵本の読み聞かせをしてたんだよっ！」

「……そうか」

ふっと優しい笑みを浮かべる。

この部隊において一番レイのことを親身に面倒を見ているのはキヤロルだった。もちろん他のメンバーもやってきて、彼の様子を窺っている。しかし、今はあまり人は多くない方がいいだろうということ、キヤロルが主に彼の相手をしている。

もちろんそれは、キヤロルに押し付けられたというわけではなく、彼女がそう申し出たのと一番適性が高いからだ。

始めはリディアにしか反応を示さなかったのだが、今はキヤロルの声にも反応するようになっていた。

「ねね。レイちゃん。私の名前、言えるかな？」

と、突然そんなことを尋ねてみる。ニコツと微笑みかけて、彼に自分の名前をいってもらうように促してみる。

するとレイは、ボソリと小さな声でその名前を告げた。

「……キヤロル」

「あ、あれ？ お、おかしいな？ キヤロキヤロって呼んでもいいよ、って言ったのにな？ ねね。レイちゃん。キヤロキヤロって呼んでみて？」

その愛称を自分でも気に入っているのか、キヤロルはもう一度レイにそう念押ししてみる。だがレイは同じ返答をするだけだった。

「……キャラル」

それを見て、リディアは腹を抱えて笑い始める。

「ククク……くはははははっ！ レイ、キャラルの扱いを分かっているじゃないかつ！」

その笑い声はこの室内に響き渡る。キャラルとしては面白くないのか、ぷくーと頬を膨らませる。

「もうっ！ リディアちゃんは笑すぎだよっ！ 全くもうっ！」

怒っているようなそぶりを見せているが、キャラルもこの雰囲気が好きだった。そして、二人はふと気が付く。

レイが微笑んでいるような気がしたのだ。

「あ、今笑ったよねっ！？」

「ああ。私にもそう見えな」

「……」

しかし、表情はすぐにいつものように暗いものに戻ってしまう。心を開くのはもっと時間がかかる。それは全員で共有していることだった。

「よし、レイ。今日は私の武勇伝を聞かせてやろっ」

リディアは椅子を持ってくると、彼の側に座る。

ここ数日。リディアはずっと自分の武勇伝を語っている。それは

自分が話せる面白いことはそれしかない、という理由もあるのだが……レイはリディアに関しては反応がいいのだ。

そして今日もまた、リディアは自分の武勇伝を語るのだった。

「リディア。どうだった？」

食事を取っていると、近づいてきたのはアビーだった。リディアはチラッと彼女の顔を見ると、ニヤツといったものように笑う。

「ふふ。今日はレイが少しだけ微笑んだ気がしてな。それに、あいつはキャロルの扱いをよく分かっている。実は」

先ほどあつた出来事を語る。

すると滅多に笑わないアビーだが、彼女も声を出して笑い始める。

「あははははっ！ それは傑作だなっ！」

「だろう？ 最高に面白かったさ……ククク」

思い出し笑いをして再び声を漏らすリディア。そして二人は、今後について話し合う。

「リディア。今後の予定だが、二週間後には王国に戻る予定だ」

「……そうか」

「で、レイの処遇だが」

「見つかったのか？ 引き取り先が」

「いやまだ見つかっていない。そもそも、今回は状況が特殊だからな。それに彼の場合は少し気になることがある」

「もしかして、あのことが？」
「ああ」

気になること。

それはあの村で行われていたという儀式。その内容は神を下ろすというものだったが、調べれば調べるほど謎に包まれていく実態。

レイという少年はその村の生き残り。さらにはどうやら特殊な第一質料プリママテリアを保有しているのは間違いない。彼女たちとしても、今後の扱いは慎重にするべきだと分かっている。

「可能性の話にはなるが、あの村での儀式とやらを受けているのか
もしれない」

「それがあの第一質料プリママテリアの正体だと？」

「憶測だがな。少佐とも話し合ってみたが、まだ真実は不明だ」

「これはあくまで感じたことだが、レイの第一質料プリママテリアは間違はなく特殊だ。それはきっと、私のものに近いのかもしれない」

「リディアは普通の魔術師とは違うような」

「ああ。私の場合はどうやら、コードに対する適性が高いようだ」

第一質料プリママテリアは個人によって異なるのは有名な話だ。それはコード理論で使用される時に顕著に現れる。リディアの場合は、異常なまでのコード適性を示している。

一方のレイは、リディアに近い形質を持っているのは調べた結果分かった。だからこそ、部隊では彼の処遇について考えている最中だった。

このまま彼を孤児院に入れてもいいのか、それともこのまま彼の

世話をするべきなのか。

いや全員分かっていた。正しい判断は、レイを孤児院などに預けることが正解だと。いくら能力があろうとも、不思議な点があろうとも、任務の妨げになる存在になるのは間違いない。

しかし、リディアはレイを見て思っただ。彼がどうにも他人には思えないと。それはいわば、同情のようなもの……と思われるが、実際のところはシンパシーのようなものを感じる。

あの時の出会い。

それが偶然だとはリディアは思えなかったのだ。

「レイは……どうするべきだと思う。アビー」

「それは王国に戻って孤児院か、それとも養子として引き取ってもらうべきだろう」

「だよな……」

分かっている。理解している。

自分はまだ十六歳の子どもであることに変わりはない。いくら魔術師としては完成の域に達しつつあるとはいえ、子どもの面倒を見ることはできない。

それはあくまで感情ではない、論理的な話である。その一方で、彼女の感情は訴えている。このまま彼を、誰かの手に渡してはいけないと。

それは予感。

リディアの心の中ある違和感。

「まさか、引き取ろうと考えているんじゃないだろうな？」

「流石の私も、そこまで考えてないさ……」

そうは言っているが、表情はそうは言っていない。何か悩んでるような顔をしているが、アビーは何もいうことはなかった。

それは彼女も同じような気持ちだったからだ。またきつと、そうなってしまうえばキャロルが荒れてしまうのは自明。しかし、そこまです感情的になってしまう方がおかしいのだ。

彼はただの赤の他人。いくら可哀想だと思っても、それだけはどうも変わりようがない事実。

二人はそう自分に言い聞かせる。

しかし事態は、思わぬ方向へと進んでいくのだった。

第263話 思わぬ方向へ（後書き）

本日より隔日更新（二日に一回）にしていきます。基本的に更新時間はお昼の12時ごろです。それでは今後とも本作をよろしく願います！

第264話 王国への帰還

ついに王国へと戻ることになった。

その中で一番の懸念といえば……もちろん、レイのことだった。

「さて、彼の件がどうでしょうか」

特殊選抜部隊アストラルの全員が、一同に集まる。彼の扱いをどうすべきか。王国に帰るとなった今、その選択を決めるべき時がきた。

「決まっています。孤児院に預ける、または養子として引き取ってもらうのがベストでしょう」

淡々と答えるのはフロールだった。彼女はレイに対して情はあるが、それでもここは合理的な判断をするべきだと考えている。そもそも、今回の件は話し合いをする余地もない。

初めから決まっていることなのに、どうしてここまで揉めているのか。それはある一人の存在のせいだった。

「やだああああっ！！ レイちゃんは絶対に一緒にいるもんつ！！」

その場で駄々をこねているのは、キャロルだった。彼女はレイと

出会ってから今までずっと、彼の面倒を見ていた。それで母性でも芽生えてしまったのか、レイを引き取ると言って聞かないのだ。

もちろんそれには、フロールが反対の声を上げる。

「キャロライン。そんなことは無理だって、分かっているでしょう？」

「できるもんっ！ お金だってあるし、レイちゃんを養うことできるもんっ！」

「それはそうかもしれないけど、私たちには任務もあるでしょう」

「その時は私の家族に預けるからいいもんっ！ 絶対にレイちゃんは私と一緒にいるんだもんっ！！」

「はぁ……」

肩を竦めて、ため息を漏らす。そしてそれには、デルクとハワードも言及するのだった。

「まぁ、キャロルの気持ちも分からんでは無いがなー」

「……あぁ。しかし、こればかりは仕方がないだろう」

と、男性陣二人もフロールの意見に賛成だった。疑うべきもなく合理的な選択だ。そもそも誰かが引き取る、という選択肢が出る時点でおかしいのだから。

「ガーネット。それに、エインスワース。二人はどうだい？」

ヘンリックの問いに対して、先に答えるのはアビーだった。

「少佐の言う通り、孤児院または養子として引き取ってもらうべきかと思います」

「それが普通の判断だ。で、エインズワースは？」

今までの会話の中で、リディアはずっと考え込んでいた。彼女もすでに理解はしている。誰かが引き取るなど、ありえない話だと。キャロルの言う通り、世話自体はきつとできるのだと思う。

しかし問題は、それが枷になってしまう可能性があると言ったことだ。

それに特殊選抜部隊は発足したばかりの部隊。アストラルそんなことをして
いては、キリがないのは分かっている。

「……」

リディアはレイとの出会いを思い出していた。それはまさに、運命的なものだったと言わざるを得ない。彼女は誰にも感じ取れないレイの兆候を理解していたのだ。

リディアはレイには何かがあると勘付いている。そしてレイもまた、リディアにはよく懐いている。

この二人の間には言語化できない何かがある、それは自明だった。

「私は」

だが、流石に理性が勝ったリディアはアビーと同じことを告げようとすると、彼女の視界の端にはレイの姿が映る。

扉の影からじっと、リディアのことを見つめている。最近はずっと寝ていることが多かったのだが、歩けるようになってるのは知っている。

た。

きっと、誰もいないから一人で歩いてここまできたのだろう。

「レイ……」

リディアはゆっくりと歩いて、彼の元へと近づいていく。レイもまたそんなリディアの姿をただじっと見つめていた。

他のメンバーもそれに対して何かいうことはなかった。その雰囲気は決して邪魔できるものではなかったからだ。

「レイ。お前はこれからどうしたい？」

「……」

レイと視線を合わせるようにして腰を下ろすと、そう尋ねる。だが返答がすぐに返ってくることはなかった。

「話、聞いてたんだろ？ お前はこれから孤児院に入るか、誰かの養子になる選択肢がある」

「……あ」

微かな声が漏れる。そして、彼はギュッとリディアの袖を掴む。

「……いっしょにいたい」

それは初めて彼が言った自分の思いだった。今まではただ呆然としているだけだったが、ここにきて自分の意志を示したのだ。

リディアにとって、理由はそれだけで十分だった。

「少佐。彼の面倒は、私が見ることにします」

「エインズワース。分かっているのかい。その意味を？」

ヘンリックは鋭い視線でじつとリディアのことを射抜く。しかし、彼女の覚悟に変化はなかった。

「私の家族、それに姉もいます。そちらに手伝ってもらいつつ、彼の面倒を私がみます」

「……それだけの価値が彼にあると？」

彼もすでに気がついていた。

レイという子どもがただの少年では無いことに。その体には異質な第一質料が宿っているのは、部隊の中で共有されていることだった。

「あります。だからこそ、私が正しく導く必要があると思っています」

いつになく真剣な様子で彼女は話を続ける。

その瞳は決して揺らぎはしない。元々、レイが求めるのならば覚悟は決まっていたのだ。その意志が示されたのならば、それに報いるしか無いと。

彼女は基本的に感覚よりも論理的なものを好むが、今回ばかりはそうではなかった。直感が告げているのだ。レイを正しく導くべきである。

「分かった。任務の影響に出ない範囲であれば、引き取ることを許可しよう」

その言葉と同時に、キャロルは大声を出して泣き始めた。

じっとしているレイの元へと近づいていくと、思い切り抱きしめる。

「うわああああああん！ よかったよおおおおおっ！ レイちゃんはずっと一緒だからねええええっ！！」

涙を流し、はなみず湧水を垂らしながらキャロルは泣き続けた。彼女にとつて、レイはもう自分の子どものような存在でもあった。いや、厳密に言えば親戚の子どものようなものだろうか。

ともかく、キャロルはこれからもレイと一緒にいることができてほっとしていた。

「レイ」

キャロルの泣いている姿を見せて、リディアは再びレイに話しかける。

「お前はこれから、私と　いや。私たちと一緒にだ」

「……いつしょ？」

「ああ」

「うん……」

ニコリと優しい笑みを浮かべるレイの姿を見て、ここにいる隊員

全員が心を打たれる。過酷な戦場でただ一人だけ生き残った少年。

心を開くことは、もっと先だと。いや、もう開くことはないのか
もしれないと思っていた。

しかし彼は、笑ったのだ。その事実こそが、何よりも全員が嬉し
く感じた。

「よし！ ということで、私は今日からお前の師匠だなっ！！」

「……ししよう？」

「ああ。そうだ。レイは弟子、だな！！ これから私の全てをお前
に教えてやろう！！」

「……うん。わかった、ししよう」

コクリと頷く。

これこそがリディアとレイの師弟関係の始まりであった。

第265話 レイとの日々

あれからリディアたちは王国へと戻ることになった。レイの面倒は主にリディアが見ることになり、それには他の隊員も付き合うことになった。

ちょうど現在は、紛争も少しだけ収まってきたということもあって休暇が与えられることになった。

今まではずっと紛争地帯に赴いての実戦が多かったのだが、ちょうどいい機会ということでレイとの生活を本格的に始めることにした。

しかしそれは、あくまで表向きの理由。

彼の背景には何かがあるに違いない。それもあつて軍の上層部はレイを監視下に置くためにも、特殊選抜部隊で面倒を見ることを許可したのである。

そのような打算的な理由もあるが、純粹にリディアたちは彼を歓迎していた。

「レイ。これからよろしくな」
「……」

新しい家。

軍から用意された寮ではなく、新しく家を借りることにしたリディア。しかしそこには彼女とレイだけが住んでいるわけではない。すぐ隣の部屋には、キャロルとアビーもいる。

彼女たちもレイが気にかかるということで、すぐ隣に部屋を借りたのだ。中でもキャロルは分かるのだが、アビーがそうするとは意外だとリディアは思っていた。

「……うん」

現在はリディアとレイの二人きり。しかしリディアは子育てなどしたことがないし、レイに至ってはそれなりに自我はある。

そのような特殊な状況でどのようにすべきなのか。

リディアはあれから、子育てや教育に関しての書籍を読み込んだり、姉の話を聞いていた。リディアの姉にもまた近い歳の子どもがいた。

彼女に取っては姪に当たる存在で、名前はステラという。そんな姉の話を聞いてみるが、やはり色々と勝手が違つとリディアは思った。

そこで彼女が選択したのは。

「そうだな。まずは体を動かす事だなっ!!」

そう結論付けた。

体を動かすことは彼女が何よりも好きなことではあるが、気分を上げるためにはもってこいだろう。そう思って、リディアはレイの手を引いて外へと出ていく。

「レイ。外に行こう」

「……うん」

相変わらず「……うん」としか返事をしないレイではあるが、彼女の前ではかなり話すようになってきた。それは互いに惹かれ合っているのか、それとも別の要因があるのか。

ともかく、リディアはこの子どもは自分が導くべきだという使命感に駆られていた。それは本能的なものなのか、それとも義務感なのか、彼女には分かっていない。

しかし唯一わかるのは、レイをこのままにしていはいはずがない……ということだった。

「それにしても、暑いな」

「……」

手を引いて歩いていく。二人が目指しているのは、西の森だった。そこはリディアがよく遊び場に使っていた場所であり、色々な思い出がある。また魔物も少ないということでもその場所を選んだのだ。

もっともリディアならばカフカの森だろうがドグマの森だろうが大丈夫なのだが、流石にレイの安全を考慮してそこを選択した。

森の中に入ると、木漏れ日が二人を照らしつける。真夏というこ

ともあって、汗ばむが森の中はそれなりに涼しい。

「よし、レイ。キャッチボールをするぞ」

「……？」

きよとんと首を傾げる。その様子からするにキャッチボールが何か理解していない様子だった。

リディアは背負っていたバックパックから二人分のグローブとボールを取り出す。片方は大人用でそれなり使い込んであるのが分かる。脂を塗り込んで、しっかりと型がついている。

それは彼女専用のグローブだ。その一方で子ども用の方は新しいものだったが、リディアが手入れをしてそれなりに使えるようになっていた。

型もしっかりとではないが、ついている。

「キャッチボールは、相手にボールを投げて受け取る。それで今度は逆に受け取った奴が投げる。簡単だろ？」

「……うん」

コクリと頷く。

レイはその手に小さなグローブをはめて、ジッとそれを見つめる。不思議そうな顔をしていたが以前よりも気力に満ちているような雰囲気だった。

「よし。ちょっと離れるぞ」

リディアはレイから距離を取ると、ボールを持っている手を掲げる。

「よし！ 投げるぞー！」

いつもは全力で豪速球を放るリディアだが、今回は軽くレイに向かってボールを投げた。そして彼は難なくそれをキャッチすると、すぐにポイツとボールを投げ返した。

「……レイ。キャッチボールしたことあるのか？」

「……」

顔を横に振る。レイはスポーツの類の経験は一切ない。だということに今の一連の動作はかなりスムーズだった。それは彼の年齢を考慮しなくても、あまりにも綺麗な動作だった。

特にボールを投げるフォームにその球威。

軽く投げているようだが、レイは球はそれなりの球速が出ていた。

「よし！ もうちょっと強く投げてこい！」

レイにボールを返すと、彼はそれをキャッチする。そしてリディアの言葉通り、強くボールを投げてみることにする。

経験はない。しかし彼の本能は学習しつつあった。それはリディアの完成された投球フォームを一度見ただけで、学習した内容だ。

そしてレイは左脚を高く上げると、右腕を思い切り振り抜いた。

次の瞬間にはバンッ！と音を立てて彼女のグローブにはレイの球が収まっていた。

「…………まじか？」

グローブをじっと見つめて、その後にレイを見つめる。

彼はただいつものように無表情でその場に立ち尽くしていた。その様子からするに自分が何をしたのか、全く理解していないようだった。

「いや……………今のは百キロ超えていたような……………」

そう。レイの投げたボール完全に百キロを超えていたのだ。この年の子どもが投げるような球ではない。間違いなくそれは異常である。しかし、ある懸念が頭の中に過ぎる。

もしかして、魔術による身体強化を無意識にしているのか？

と、ある仮説が脳内に浮かぶ。そう考えなければ、今の投球はあり得ない。元々魔術に対する適性はあるだろうと思っていた。

もちろん、その才覚がこのキャッチボールで分かるとは、夢にも思っていなかったのだが。

「よし。レイ、今度は私がちょっと速い球を投げる。取れるか？」
「…………うん」

コクリと頷く。そして、リディアは少しだけ球を速くして投げた。レイはそれを難なくキャッチ。それから幾度となく繰り返し、気がつけばほぼ本気でリディアはレイに球を投げ込んでいた。

「うおりゃああああああああっ！！」

その雄叫びが森に響いた瞬間、バンツ！！という音がレイのグローブから聞こえてくる。今の球速は百四十キロを超えていた。身体強化なしでリディアにできる最高の球速。

それをレイはまるで当たり前かのようにキャッチした。そしてポイツとリディアに返球をするともう一度グローブを構える。

その表情は無表情ではあるのだが、どこか楽しそうなものだった。

「はははっ！ よし、次は変化球をいくぞっ！」

「……うん」

その後。二人は日が暮れるまでキャッチボールをするのだった。いや、途中からそれは間違いなくリディアのピッチングになっていたのだが。

「ふう……いい汗かいたなあ」

「……」

持ってきていた水筒の水をゴクゴクの飲むリディアだが、一方のレイはただじっと彼女のことを見つめていた。

「レイ。お前も飲むか？」

「……うん」

そしてリディアが飲みかけの水を渡すと、レイも少しだけそれを飲んだ。そんな様子を見て微かに彼女は笑みを浮かべた。

「レイ。今日は楽しかったか？」

「……」

その場にしゃがみ込んでレイと視線を合わせる。そしてレイは少しだけ頷く。

「そうか。それはよかった」

頭を撫でる。依然としてその表情に大きな変化はないのだが、レイは前よりはしっかりと反応してきている。

その事実が何よりもリディアは嬉しかった。彼女もレイと出会う前とは違って、少しずつ変わりつつあった。

「帰るか、レイ」

「……うん」

ギュッとその小さな手をリディアは握る。

そして二人は黄昏時の淡い光に照らされながら、帰路へと着くのだった。

第266話 新しい日々

「おい、リディア！？ その姿はどうしたっ！？」

「え……いや、べ、別になんでもないぞ？」

明らかに追及されて動揺しているリディア。そう、彼女は自宅に戻ってくるとちょうどアビーとばったりと出くわしてしまったのだ。

レイとリディアは汗でドロドロであり、それに少しだけ土で汚れている。特にレイには無茶な捕球をさせていたので彼の方はかなり汚れている。

まだ心の傷が治っていないというのに、この扱いには流石にアビーも怒ってしまうのだった。

「明らかにおかしいだろうっ！ まさか、レイに何かしたのかっ！
！？」

「いや……その、一緒に遊んだだけだぞ？」

「遊んだだけだと！？ 本当なのかつ！？」

ギュッとレイを抱きしめると、アビーはリディアをきつく睨みつける。元々レイと外に出るという話は聞いていた。今日は彼女は軍の方で用事があったので、ちょうど出ていたのだが……帰ってくるに泥だらけのリディアとレイがいたのだ。

流石のアビーもそれには驚いてしまう。そうして二人で話をして

いると、キャロルもやってくる。

「やほやほ　　キャロキャロが来たよって……あれ？　　どうかしたの？」

いつもの調子で室内に入ってくるキャロル。そんな彼女もまた、室内の異変に気が付く。今はリディアは正座をさせられており、アビーが怒りの形相でリディアを睨んでいる最中。

レイといえばただ無表情のまま、その様子を見ていた。

「キャロル。ついにリディアがやらかした。どうやらレイに無茶なことをさせたらしい」

「だからっ！　　レイも楽しんでたんだぞ！　　ほら、本人に聞いてみるっ！」

あまりにも迫真な様子でそう声をあげるので、アビーはレイに話を聞いてみることにした。といってもまだ十分に話すことはできないので、試しに聞いてみるか……という程度のもだったか。

そしてアビーはレイと視線を合わせると、彼に問いかける。

「レイ。リディアと遊んだのか？」

「……うん」

コクリと頷く。その様子を見て、アビーは無茶はしていないのかも……と認識を改める。

「泥だらけだが、何かあったのか？　　大丈夫なのか？」

「……」

ボソリと呟く。聞こえなかったので、アビーはもう一度尋ねてみることにした。

「レイ。もう一度言ってもらっていいか？」

「……キャッチボール」

「キャッチボールをしたのか？」

「……うん」

レイはそう答えるだけで、あとはいつものように話さなくなってしまった。

「どうやらリディアの話は本当のようだな」

「嘘は言ってないって！ だから早く解放してくれ！」

「……で、どんなキャッチボールをしたんだ？」

「……えっと。それは……」

アビーは長年の付き合いだからこそ分かっている。リディアとキャッチボールをするということが、どんなものになるのか。彼女の基準で考えれば、そのスポーツはまさに異次元になる。

それに互いに泥だらけなところを見るに、尋常ではないキャッチボールをしたことはすでに自明だった。

「いや、別に普通だぞ？」

「お前まさか……本気で投げてないだろうな？」

「いやちゃんとセーブしたぞ！ まあ……最後には八割くらいで投げていたが……」

「八割っ！？ お前の八割をレイに取らせていたのかっ!？」

「だ、だって！ レイの身体能力はすごいんだぞ！ 私のボールを

難なくキャッチするんだ！ そりゃあ試したくもなるだろうっ！？」
「は、はああああああああっ！！！！？」

リディアの八割でキャッチボールをするなど、死に行くようなものだ。それを幼い子どもに強いるなど、あつてはならない。そうしてアビーがさらに説教をしようとすると、袖がくいくいと引かれる。

アビーを見上げるようにして、レイがその場にいた。彼はアビーの袖を引っ張ると、ボソリと呟いた。

「……ししう。わるくない、よ……いっばいあそんでくれた……」

ぎこちない言葉だった。それに表情も淡々としていた。しかしその言葉を聞いて、アビーは胸が強く打たれたような感覚に陥る。

「レイちゃんっ！ うわああああ、もうっ！ 本当に可愛いんだからっ！」

と、そんなレイの様子を見たキャロルはギュッとレイに抱きつく。その豊満な胸で彼の顔を包み込む。レイは特にそれを反応を示すことはなかったが、ただじつとアビーのことを見つめていた。

それはまるで もうリディアのことは怒らないでほしい と訴えているような瞳だった。

「ふう……リディア」

「な、なんだ？」

本気でキレルアビーには頭が上がらないので、正座のまま彼女の様子を窺うリディア。

リディアは場の空気が少しだけ弛緩していくのを感じ取っていた。

「レイに免じて、今日は許してやろう」

「そ、そうか……それは助かる」

「ただしっ！ 今後は私も付いていくからなっ！」

ビシッと人差し指を立てると、リディアの胸にそれを押し付ける。どうやら今日は無事に説教を終えることができそうだと、リディアは思った。

そしてレイといえば、ただずっとキャロルのおもちゃにされているのだが……その視線はリディアのことをずっと見つめていた。

「レイちゃん。痒いところはない？」

「……うん」

浴室。そこにはキャロルと一緒に風呂に入っているレイがいた。特に恥ずかしいという気持ちもないので、彼はなされるがままだった。

キャロルはニコニコと微笑みながら、レイの体を綺麗にしていく。彼女としても母性本能が刺激されるのか、レイの面倒をみるのを本当に心から楽しんでいるようだった。

「よし！　じゃあ、お湯に浸かるっか」
「……うん」

そして浴槽へと入る二人。レイはキャロルの膝に乗るような形で、ゆっくりとお湯に浸かる。そして彼女は優しく彼の頭を撫でるのだった。

「レイちゃん。今日は楽しかった？」

「……うん」

「キャッチボールしたの？」

「……うん」

「そっか。それはよかったね」

それ以上、キャロルが何かを聞くことはなかった。ただ優しくレイのことを撫で続ける。そんな時間がレイもまた落ち着くようで嫌がる素振りを見せることはない。

もつとも数年後には、レイはキャロルのことが本当に苦手になるのだが……それはまた別の話である。

「よし。レイ、今日はちょっと勉強をしよう」
「……うん」

風呂から上がると、待っていたのはアビーだった。メガネをかけて髪の毛をポニーテールにしてまとめていた。

そんな彼女の手には書籍があった。彼女はそれをテーブルに広げると、レイに座るように促す。

「レイ。読み書きはできるのか？」
「……」

首を横にふる。

彼は自分の意思をよく示すようになっていた。

「よし。では私が今後は教えよう。大丈夫だ。リディアと違って、私は優しいからな」

「……うん」

そしてレイはアビーに読み書きを教えてもらうことになった。そこで彼女は驚いたのだが、レイは異様に飲み込みが早いのだ。

身体技能の高さはリディアの話である程度は把握しているが、こんなにも賢い子どもだとは思ってもみなかった。

「レイ……すごいな。全部正解だ」

「……これ、かんたん」

鉛筆でトントンとページを叩く。レイは直ぐにある程度の読み書きを覚えてしまった。そしてアビーは優しい声で、彼に告げる。

「次は算術でもしようか。計算は大人になるには必要だぞ？ 計算ができないと簡単に騙されてしまうからな」

「……がんばる」

その際に、レイは微かに笑った。本当にわずかだが、笑ったのだ。そんなレイの様子を見てアビーは本当に彼のことを愛おしく思っ

しまう。

ああ。きっと、親心というのはこのような感情を言うのだろ
うな。

そして彼女はレイに丁寧に勉強を教えていくのだった。

第267話 二人の時間

レイに対する教育。

それに関して特殊選抜部隊アストラルのメンバーで話し合いが行われた。学校に行かせるべきでは？ という話も出たのだが、まだレイの心は完全に癒えてはいない。

そもそも彼が戦場で何を見て、心を閉ざすようになってしまったのか。それすらもまだ分からない。唯一分かることは、レイがまだ心を閉ざしているということだけ。

しかし最近は反応も多くなり、少しではあるが会話もできるようになっていた。

任務が入るときはリディアの姉や他の人間にレイの世話を任せる時間もあった。といっても、レイを世話すると言っても彼は全くと言っていいほど手がかからない。

まだ幼いというのに聡明であり、しっかりとしている。リディアの姉もレイの話を聞いて何かしようと思っていたが、特にすることはなかった……というほどだ。

そしてリディアたちは任務から戻ってくると、レイに対しての教育を本格的に開始することにした。

「レイ！ 元気だったか？」
「……うん」

帰宅。リディアは自宅に戻ってくると、レイに話しかける。元気というには明らかに覇気がないが、それでも彼女はニコリと微笑みかける。

そしてリディアは一息つこうとソファ―に身を投げると、近くにいたレイがテキパキと彼女の衣服や荷物を片付け始めるのだ。

「？ どうした。急にそんなことをして」

「……だめ？」

「いや。非常に助かるが……」

はつきり言ってリディアは家事などに関しては絶望的だ。天才ではあるが、非凡なのは魔術、身体能力、頭脳であり基本的な人間が備えるべき常識というものが欠如している。

だからこそ、この家も散らかっている……はずだったのだが、妙に綺麗になっているのだ。リディアは姉がきつと掃除してくれたと思っていたのだが、ふと疑問に思ってレイに尋ねてみることにした。

「レイ。もしかして、家の掃除とかしてるのか？」
「……うん」

コクリと小さく頷く。

それを聞いて、彼女は諭すように話を続ける。

「レイ。別に無理しなくてもいいんだぞ？ 私がやる……のはまあ、ちよつと大変だがアビーや姉さんがやってくれる。お前が無理にやる必要は」

と、言いかけるとレイはリディアの袖を軽くつまんで首を横に振った。そしてボソリと小さな声で自分の意見を述べる。

「……師匠に迷惑かけてるから。これぐらいは、したい……」
「レイ……」

まさかそんなことを思っているとは夢にも思っていなかった。リディアは分かっていた。レイはとても聡明で、年齢以上に色々なことを理解しているのだと。

しかし、まさか迷惑をかけているという認識があるとは思っていなかった。その言葉を聞いて彼女は自分の胸が締め付けられる感覚に陥る。

「レイ……よし！ 今日は一緒に風呂に入るかつ！」
「……うん」

そうしてリディアはレイを連れて一緒に浴室へ向かうことに。レイはもう女性と一緒に入るのは慣れてしまったのか、特にリディアやキャロルの裸を見ても特に思うところはないようだった。

「って、あれ。風呂にお湯でも張ろうと持っていたが、もしかしてレイがやってくれたのか？」

「……うん」
「そうか。ありがとう、レイ」

わしわしと頭を撫でる。レイは特に表情を変化させることはなかったが、少しだけ満足そうに微笑んでいるような気がした。

「……師匠。せなか、流す」

「レイが流してくれるのか？」

「……うん」

「そうか。ありがとう」

レイはタオルをぐしぐしとリディアの背中に擦り付ける。程よい強さであり、リディアはそのままそれを受け入れる。

一生懸命に何かをしてくるレイに対して、彼女は感慨深いのか少しだけ遠くを見据える。

初めて出会ったときは同情している側面の方が多かった。

しかし、それからレイと過ごすようになって彼のことが少しずつ分かってきた。

レイは聡明で、とてもいい子どもだと。いやそれはもはや、出来過ぎだと思っていた。リディアが同じ年齢の時は走り回って、自由に過ごしているだけだった。

だというのにレイはこうして一生懸命に生きている。恩を返そうと思っているのかはまだ分からないが、リディアはそんなレイの行動がとても嬉しかった。

「レイ。しばらくはこっちにいるが、何かしたいことはあるか？」

一緒にお湯に浸かる。小さなレイを膝に乗せると、リディアはそ

う尋ねた。するとレイは、しばらく間を置いてこう……答えた。

「また……一緒に、遊びたい……」

「そうか。そうかつ!!」

再びレイの濡れている頭をわしわしと撫でる。リディアはそれを聞いて、何故だかとても嬉しかった。

そして翌日。早速リディアはレイを連れて、外へと向かった。前はキャッチボールをしたので、今回選んだのはサッカーだった。

リディアはボールを器用に両足でリフティングすると、レイに同じようにするように促す。

「レイ。こうやって、ボールを両足で上げ続けるんだ」

「……うん」

話を聞くとレイは特に何かスポーツをしたという経験はないらしい。それである運動センスなのだから、リディアは素直に驚いているのだが……今回のサッカーはどうだろうかと思っていると。

「……レイ。本当にサッカーはしたことないんだよな?」

「? うん……」

レイはチラッとリディアの顔を見上げて、そう答える中でも器用にボールをリフティングし続けていた。それに両足を器用に使って、しっかりとやっているのだ。

落ちる様子は全くなかった。

「レイ。お前、利き足はどっちなんだ？」

「……分かんない」

手に関しては右手をよく使っているのは見えている。しかし、足に関しては今のところはわからない。ということで、後ろに用意していたゴールで構えるリディア。

「レイ！ 好きに蹴ってこいっ！」

「……うん」

何をすればいいのか理解した彼は、助走をつけるとそのまま思い切りボールを蹴った。

それは綺麗な放物線を描くと、ゴールの右隅へと突き刺さった。それは縦に回転がかかっており、いわゆるドライブシュートの類だった。まさかボールに変化をつけてくるとは思ってなかったもので、リディアは普通に見逃してしまう。

「あ……は？ 私が動けない、だと？」

リディアはただ呆然とその場に立ち尽くしているだけだった。レイの蹴ったボールのシュートコースは完璧だった。しかしそれ以上に、ボールにスピードがあったのだ。そのため、リディアは一步も動くことができなかった。

「レイ！ もう一度だっ！」

「……うん」

コクリと頷くと、もう一度レイはシュートモーションへと入る。リディアとしては負けたままなのは絶対に嫌なので、全神経を集中してレイと向き合う。

彼がどこにボールを蹴るのか、どのコースに、どれくらいのスピードで蹴るのか。

それをギリギリまで見極めようとしたが……。

「なあ……！！？ 左足、だと……っ！！？」

無残にもボールはネットに突き刺さる。しかし今回はリディアが言ったように、レイは左足を使って蹴ったのだ。先ほど右足で描いた放物線を全く逆の軌道で描くようにして。

レイはただじっと、悔しがっているリディアのことを眺めていた。そして彼女はボールを拾うと、もう一度レイに蹴るように促すのだった。

「レイ。もう一度だっ！ ただそうだな……次は距離と角度を変えてみよう」

「……分かった。師匠」

その後、二人は数時間に渡ってサッカーを楽しむのだった。

「ふう……いい汗かいたな」

「……うん」

夕焼けの光が二人を包み込む。そろそろ日が完全に暮れてしまう

ので、帰ろうという話になった。

「レイ。今日はどうだった？」

小さな手を握る。レイの表情は見えないが、彼は少しだけ大きな声でこう告げるのだった。

「……楽しかった。またやりたい」

彼は顔を上げると、じっとリディアの瞳を見つめる。そんなレイの様子を見て、彼女はニコリと笑みを浮かべる。

「そうか。じゃあ、またやろうなっ！」

「……うん」

そうして二人は夕焼けに包まれるようにして進んでいくのだった。

第268話 動向

「それでガーネット少尉。レイの調子はどうなのかな？」

「は。資料にまとめましたので、報告いたします」

ヘンリックの書斎へとやってきていたアビー。どうして彼女がここにいるのか。

それは、レイの動向を知らせるためだった。

軍の方も彼をただ善意で保護するという目的はない。それならば、元々あった案である孤児院に入れる、または養子として引き取ってもらうなど選択肢はいくつかあった。

それを特殊選抜部隊 アストラ 中でもリディアに面倒を見させているのは、別の目的があるからだ。

「お手元の資料にあるように、運動センスは抜群のようです。リディアはレイの能力を測るためにそうしているわけではないようです。おそらくは、無意識のうちに内部コード インサイト を働かせていると」

「……ふむ。ん？ これは全て事実なのかい？」

「は。私も初めはリディアが誇張しているだけと思っていましたが、実際にこの目で見えてきた事実を報告書にまとめております」

「……これは、なんというか」

ヘンリックは改めて資料に目を通す。そこにはおおよそ、あり得ないことが書かれている。そうしてアビーはここ数日であった、リ

ディアとレイについて語り始めるのだった。

「リディア。また行くのか？」

「ああ。レイはまじで、天才だぞ！？ 今日にはテニスを教えるつもりだ。私の百八ある秘儀を伝授してやろうと思っただけ！」

ニコニコと笑いを浮かべる。リディアは基本的に機嫌が悪い時は少ない。むしろ笑っている時の方が多い。

しかし今は、なんというべきか……とても印象が柔らかくなっているような、そんな感覚をアビーは覚えていた。

今までは孤高の天才ということで、張り詰めた雰囲気をしていることが多かった。笑っているとは言っても、それは自分の実力に対する自信をひけらかしているようなものだった。

しかし、レイと過ごしているリディアは変化してきている。

彼のために色々と教えてあげようという意味を感じ取れるのだ。

「……私も行ってもいいか？」

「ん？ 今日仕事はないのか？」

「ああ。昨日のうちに全て仕上げている」

「そうか。なら、アビーも来るかっ！」

昨日、アビーにはレイの動向を探るように軍の上層部より直々に命令が降りていた。それを実行するためにも、彼女はリディアとレイに同伴することが決定。

「……くるの？」

レイはいつもリディアと二人だったので、どうやら一緒に来るアビーに対して不思議に思っているようだった。

アビーは腰を下ろすとレイと視線を合わせる。

「ああ。今日は私も一緒だが、いいか？」
「……うん。いいよ」

まだ視線を合わせてはくれないが、会話はできるようになってきた。そしてアビーはそんなレイに笑顔を浮かべると、三人でテニスコートへと向かうのだった。

「よし、レイ。今日はテニスをするぞっ！」
「……うん」

その小さな体には大きすぎるラケットを抱えているレイ。一方のリディアはぼんぼんとラケットでボールを弾ませるとそれを器用にラケットの淵で受け止める。

アビーといえば二人の様子をベンチで見守っていた。

「まずはちよつと実演しよう」
「……わかった」

そしてリディアは自分でボールを弾ませると、タイミングよくラケットを振り抜いた。するとボールは綺麗な縦のスピンのかかって、

向こう側のコートでバウンドする。

綺麗にコーナーをついたそのボールの軌道を見れば、リディアの技量がかなりのものなのは明白。

レイはその一連の動作を見てコクリと頷いた。

「理解したか？」

「……うん」

アビーはそれを見て、内心で思う。

いや、理解したか？　じゃないだろう。今のだけで打てるようになるわけがないだろう。全くリディアは教える方は才能はないようだな。

そう彼女は考えていたが、次の瞬間。

その目にあり得ないものが映るのだった。

「おお！　流石はレイだな！　いいスピンだ！」
「……」

レイはその小さな体で、向こう側のコートにボールを入れた。スピンも綺麗にかかり、それはもう美しい軌道を描いていた。それに特筆すべきなのは、しっかりとコートの四隅にボールを狙って打っていることだった。

それはリディアの真似をただけなのだが、あまりの素晴らしい技量にアビーは大きな声をあげて立ち上がる。

「……はあっ！！？　おい、リディア！　レイはテニス初心者だよな！！？」

「そうだが？　基本的にスポーツの類はしたことがないらしい」

「いやいやいや、なら今のはおかしいだろう！！」

「はあ……？　お前は何を言っているんだ？」

訝しげな瞳でアビーのことを見つめる。それはまるで、こいつは何を言っているんだ？　と言わんばかりの瞳だった。

しかしそれはきつと、リディアがレイの運動神経に慣れてしまっているからだろう。普通の人間ならばアビーのような反応が当然である。

「テニスの初心者が、お前と同じ軌道でボールを打ったんだぞ！！」

「そうだな」

「おかしいと思わないのかっ！！」

「ふふ……ふふふ！　レイは、才能があるんだ！　ははは！　師匠に似たのかもなっ！！」

「……」

いや、まだレイと出会ってそれほど時間は経っていないだろう、というツツコミが出ることはなかった。

アビーはリディアに聞いてはいた。レイはかなり運動神経がいいと。でもそれはきつと、子どもの範疇の話だと思っていた。きつとリディアが誇張して話しているのだろうと。

しかし今の一連の動きだけでも、レイが只者ではないということを理解した。

「よし、レイ。次は私の必殺ショットを教えてやろう。相手を場外まで吹っ飛ばしたり、バウンドしないドロップショットもお前ならできるはずだ」

「……うん」

テニスラケットを両手で抱えながら、レイはそう返事をした。そこから先、アビーが見た光景はおおよそ異次元な世界であった。

元々リディアはイカれた運動神経をしているので、異常なショットを打てるのは知っていた。それは学生の頃からずっと知っていることだった。

だが目の前ではリディアのそのイカれたものを再現している小さな少年がいるのだ。まだ背丈も筋肉も足りていないというのに、レイはその小さな体でリディアの超次元のショットを再現しているのだ。

「おお！ レイも零式ゼロシキを打てるようになったか！ 一瞬だな！」

「……かんたん」

「なら次は、波動球だな！」

「……まかせて」

そしてレイは次々と超次元のショットを放っていく。その様子を見てアビーはただ、呆然とするしかなかった。

今まで彼女は自分は冷静な人間であると思っていた。いやその評

価は間違いない。しかし今はおそらく、人生の中で一番動揺しているのは間違いなかった。

「よし、レイ。次はトリプルカウンターを教えてやろう。これはどんなボールでも返せる最強の技だぞ？」

「……がんばる」

繰り広げられる異次元テニス。そしてしばらくして、二人は休憩をしにベンチにやってきた。

「……リディア」

「ん？ どうした？」

「レイは何者なんだ？」

「はあ？ そんなのお前も知ってるだろ」

「いやそう意味ではなく、あの運動神経は何だと聞いている」

「前からレイが凄いのは話していただろう？ 報告書にもまとめていたし」

アビーは頭に手を当てて、今までの自分の言動を省みる。きっとリディアのことだから盛っているのだと思っていた。

ヘンリックもそう思い、今回正式にアビーに依頼したのだ。

だが、アビーが目の前で見たのはリディアの報告書通りの内容だった。彼女は全く話を盛っていない上に、正確に情報を伝えていたのだ。

「……リディア。今回はかりはすまない」

「は？ 何のことだ？」

頭を下げるアビーを見て、不思議そうな表情を浮かべる。そうしているとき、レイがアビーの前に立っていた。

「レイ。お前はすごいな」

「……すごい？」

「ああ。このアホに連れ回されて、可哀想などと思っていた私が間違っていた」

その後ろからは「おいっ！ そんなことを思っていたのかっ！」という声が聞こえたが、無視するアビー。そうして三人で談笑していると、その場にはキャロルがやってくるのだった。

「やほやほ」

キャロルがご飯作ってきたよ」

今日も派手な髪型に派手な服装。大胆にも胸元は溢れそうな大きな双丘の谷間が、ありありと見えていた。

そんなキャロルは右腕にバスケットを抱えていた。

そうして四人で昼食を取るようになるのだった。

第269話 超次元テニス

「レイちゃん。はい、あーん」
「……あーん」

キャラルは自分で作ったサンドイッチをレイの口元へと運ぶ。そして彼はそれをパクリと食べるが、特に表情に変化はなかった。

「美味しい？」
「……うん」
「そっかー！ うんうん。レイちゃんのために作ってきたからねっ！ よかったよっ！」
「……ありがとう」

レイはボソリと感謝を述べた。そのあまりにも愛らしい様子にキャラルは感極まってレイに抱きつくのだった。

「もう、本当に可愛いんだからっ！ 食べちゃいたいくらいだよっ！！」

と、キャラルがそういうとリディアはジロリと睨みつける。

「おい。あんまりにレイに触れるなよ。お前は色々と危険だからな」
「えーっ！？ もしかして、リディアちゃんては嫉妬かな？ かなかな？」

煽るようにして言葉を返すキャラル。それに対して、リディアは

頬をピクリと動かして答える。

「お前が変なことをしないか心配なだけだ。レイはまだ幼いからな。変はことを考えるなよ？」

じつと半眼で睨みつけるが、どうやらキャロルは全く気にしていないようだった。

「もちろん、わかってるよっ！」

ニコニコと笑っているが、キャロルがどのような動きをするのかしっかりと見極める必要があるな……とリディアは内心で考える。

思えばきつと、この時からリディアの親バカは始まっていたのかもしれない。

四人で仲良く昼食を取った後、リディアとレイは試合をすることになった。その二人の様子をベンチで見守るアビーとキャロル。

「ねね。アビーちゃん」

「どうした？」

「レイちゃんって、運動神経いいんだよね？」

「キャロルはリディアの報告書には目を通したか？」

「うん。でもあれってちょっと盛りすぎだよねえ……」

と、キャロルがその先の言葉を続けようとした瞬間。彼女はあり得ないものを目にした。

そう。レイはその小さな体でリディアとともに打ち合っているのだ。

「ふふ！ ふはは！ いいぞ、レイ！ この私と真正面から打ち合えるとはな！！」

「……まけない」

はつきり言つてそのボールの軌跡を追いかけるのがやつと。二人のボールの速度はすでに常人の域を超えている。互いにコーナーを狙つて打ち合うが、それを器用に返していく。

驚べきなのはレイの敏捷性だろう。リディアは身長も高く、四肢も長い。だからこそテニスはかなり向いているのだが、レイはそんな彼女とほぼ互角に打ち合っているのだ。

そしてあるうことが、レイは緩急をつけてドロップショットを放った。

「……ぐっ！！ レイ、やるな……っ！」

そのポイントはレイが取った。彼の放ったドロップショットはバウンドすることはなかった。まるで地面に張り付くかのように、ボールはツーっと転がっていく。

リディアが得意としている技であるが、それをレイは使用したのだ。それもリディアの隙をつくような形で。

「……まけない」

「ふふ。その瞳、お前も分かっているようだな。いいだろう、レイ。

久しぶりに本気で相手をしてやろう。フハハ！」

その二人の様子を見て、キャロルはポカーンと口を開けたままだった。

「えっと……レイちゃんって、もしかしてテニスのジュニア王者とか？」

「いや。スポーツは初めてらしい」

「ということは、あの報告書は？」

「全て事実だろう。リディアにしてはよくまとまっているな。レイの運動センスは疑いようがないだろう」

その後。テニスコートで起きた出来事はまさに超次元テニスと形容すべきものだった。至る所で爆発のようなものが起きるが、二人はそんな戦場のようなコートを縦横無尽に駆け抜ける。

「ふははは！ 私のカウンターは実は六つあるんだっ！」

「……ぐっ！」

本気を出したリディアはもはや圧倒的……と思いきや、レイは徐々にくraithけるようになっていた。そして気がつけば、リディアの死角をつくようにしてエースを決める。

「なあ……！？ まさか、私の死角が見えているのかっ！！？」

「……ししうはすきが多い。すけすけ」

「ククク……アハハハハハハ！！ ああ、レイ。お前は最高だよっ！」

そうして終盤戦へと入ったのだが、そこはもはやテニスをしているとは言い難い世界だった。コートにはクレーターができて、土煙

が舞い散る。その煙の中を縫うようにして互いに本気のショットを放つ。

完全に有利なのはリディアだが、それでもレイは食らいつく。そして気がつけば、レイはその土埃の中で大の字に寝転がっていた。

「はぁ……はぁ……私の勝利だなっ!!」

と、高らかに宣言しているが、流石にまずいと思ったのかキャロルとアビーはすぐにレイの元へと近寄っていく。

「レイちゃんっ!」

「レイ、大丈夫か!？」

そう声をかけると、レイはその場にバツと飛び上がるようにして起き上がる。

そして、パンパンと土埃を払うと小さな声で呟いた。

「……つぎはまけない」

そんなレイの様子を見てアビーとキャロルは安心したのか、それともレイの様子がおかしいのか少しだけ笑ってしまう。

そしてリディアが近寄ってくると、優しくレイの頭を撫でるのだった。

「ああ。いつでも挑戦を受けよう。私はレイの師匠だからなっ!」

四人で帰宅すると、レイをお風呂に入れると言ってキャロルは二人で浴室へと向かってしまった。残ったリディアとアビーは夕食を作ることにした。といってもリディアは味見をするだけで、何もすることはしないのだが。

トントントンと包丁の音が響く。そんな中、アビーはリディアに話しかける。

「リディア。レイは本当にすごいな」

「だろ？ あいつはすごいやつになるぞ？」

ニヤツと笑う。それはどうやら、心からそう思っているようだった。

「思うに無意識に内部コードインサイドを使っているようだな」

「お、アビーにも分かるか？」

「そうでないとの動きに説明がつかない。子どもが無意識に魔術を使っている事例は多々ある。しかしレイの場合は異常だな。あれは子どもの領域ではない。それこそ、並の魔術師の技量はすでに超えているだろう」

「ああ。だからこそ、だ」

リディアはコップの水をグイッと一気に呷ると自分の考えを述べる。

「まずはスポーツで感覚を慣らそうと思ってな。その後に本格的に魔術を教えるべきだろう」

「まさかそこまで考えていたのか？」

「当たり前だろう。私はレイの師匠だぞ？ 弟子のことを考えるの

は当たり前だろう」

「……」

目を見開く。長い付き合いのアビーは知っている。リディアは他人のことを慮るおもてんばかような人間ではないことを。しかし、どうやらリディアは少しずつ変わってきているようだった。

「変わったな、リディア」

ボソリと呟くその声は、リディアに届くことはなかった。

「？　今なんて言ったんだ？」

「なんでもないさ。で、レイに魔術を教えることはいいだろう。しかし、その先に繋がっているのは……」

「分かっている。あの才能は規格外だ。おそらくは現時点で私を超える魔術師になる可能性がある」

「お前がそこまでいうほどか？」

「ああ。きっと私は今、限りなく全盛期に近いだろう。魔術師は十代後半から二十代前半にピークを迎える。例外もあるが、私もきつとそうだろう。それを踏まえても、レイの魔術師としての才能はすでに今の私に迫りつつある」

それは忌憚のない感想だった。レイと過ごすようになったからこそわかる事実。彼がどのような軌跡を歩んできたのかは、まだよく分かっていない。しかしだからこそ、その才能に押しつぶされないように導くべきとリディアは考えていた。

「才能には責任が付きまとう。レイはすでに軍の上層部に存在を知られてしまった。でもだからこそ、自分の能力との付き合い方は覚

えるべきだろう。この先、あいつがどんな人生を歩んでもいいようにな」

「……そう、だな」

アビーはどこか遠くを見つめるようにして、リディアを見つめる。

天才は天才を知る、ということか。

そんなことを思いながら、アビーは夕食の準備を進めるのだった。

第270話 キャロルの教育

「んにゃ……!」

奇妙な声を上げて起床するキャロル。現在は一人暮らしをしているが、隣にはアビーとリディアが住んでいるのは厳密には一人暮らしとは言い難い。

軍人になってすでに一年が経過した。士官学校を早期に卒業し、特殊部隊での活動にも精力的に取り組んでいる。

軍の評価としては、キャロルは決して低くはない。特に俯瞰的に状況を把握する能力は高く、実際にヘンリックと共に部隊の作戦の立案などもしているほどだ。

その言動には難ありだが、その能力の高さは評価されている。

「ふんふんふん」

今日も今日とて美を追求することに妥協などしない。それがたとえ軍の中であっても、キャロルはいつものようにメイクをしていく。

と、ここまでいけばいつもの日常なのだが、最近キャロルはある楽しみがあった。それはレイの存在だった。

元々人の世話をするのが好きであり、もともと、その重さゆえに男性にはよく逃げられているのだが、レイの世話をするのが、

ここ最近のメインの活動になっている。

今日は休日。

リディアとアビーとはちょうど入れ替わるようにして休みになってしまったので、今日はキャロル一人でレイの世話をすることになっている。

そしてリディアの部屋へと入っていく。合鍵を持っているのでそれを使って室内に入る。

リビングに向かうと誰もいないので、キャロルはレイのために用意された部屋にいますと思つてそこに歩みを進める。

すると、レイは椅子に座つて書物に向き合つていた。その小さな右手には鉛筆が握られていた。

「レイちゃん。おはよう」

「……おはよ」

「何してるの？」

「……かだい」

「あー！ アビーちゃんが出してる課題ねっ！」

レイの教育に関してはリディアが運動面、アビーが勉強面、キャロルがその他諸々を担当している。特殊選抜部隊アストラルの他のメンバーはまだ時期ではない、ということとレイとの面識はない。

「ふむふむ。キャロルも教えてあげようかなーってあれ……」

じつとレイが書いている数式を見つめる。それを見て、レイがし

ているのは子どもが取り組むような算数ではないことを理解する。
むしろそれは、中等部レベルの数式だった。

「え。レイちゃん、これ分かるの？」

「……うん。教えてもらった」

「ふうん。そ、そうなんだあ……」

実際のところ、キャロルは内心では焦っていた。

アビーちゃん！？ まだ報告書見てないけどっ！ レイちゃんめっちゃ勉強できるのっ！！？

運動ができるのはその目で見ていたので知っているが、まさか勉強の方もここまで優秀とは思っていなかったので焦ってしまう。

が、それを表に出すことなくキャロルはレイの隣に寄り添う。

「じゃ、キャロキヤロは隣にいるから。頑張って課題を終わらせよっか？」

「……うん」

小さな頭を前に揺らして、レイは再び問題に取り組む。

そんな彼の様子をキャロルはとても嬉しそうに見つめる。

そして時刻が正午になった頃、キャロルはレイのために昼食を作る。リディアの部屋の冷蔵庫はもはやキャロルが管理していると言ってもいいので、そこには十分な食料が入っていた。

キャロルは手際良く調理を開始すると、あっという間にカレーを

作り上げてしまった。レイが一人の時でも大丈夫なように、多めに作っておく。

「はい！じゃあ、レイちゃんどうぞ」

「……いただきます」

しっかりとそのように言葉にして、レイはスプーンを使ってキャラルの作ったカレーを頼張る。

「美味しい？」

「……うん。おいしい」

「うんうん。いっぱい食べてね？」

「……うん」

レイは前よりは食欲が出てきたのか、三食しっかりと取るようになっていた。といってもその量はまだ少ないのだが。

「……ごちそうさま」

「はい。お粗末様でした」

そしてキャラルはその食器を持って行こうとするが、レイがその皿をパツと取ると椅子から飛び降りた。

「あれ？　どうかしたの？」

思わぬ行動にそう尋ねてみる。するとレイはキャラルのくりくりとした大きな双眸をじっと見つめてこう言った。

「……もつてく。いつもつくってくれて、ありがとう」

「ッ！ー！」

声にならない悲鳴を上げる。キャロルはあまりのレイの尊さに、その場に崩れ落ちそうになる。改めて、その愛らしい姿に完全にキャロルは虜になってしまっていた。

「？　どうかしたの……？」

心配そうにレイが覗き込んでくるので、キャロルは平静を装って彼に感謝を告げる。

「レイちゃん。ありがとうね」

「……うん」

その後。

キャロルとレイは二人で街に買い物をしに向かった。元々レイをあまり外に連れ出すのは良くないのではないか、という話も出ていたが最近はずいぶん調子も良さそうなのでこうして外に出る機会は多くなっている。

手を繋いで二人で歩いていく。

特に会話があるわけではないが、この時間はキャロルにとって本当に特別なものだった。そして食料の買い出しを済ませると、近くの公園にやってくる。

二人で並んでベンチに座ると、キャロルはレイに話しかける。

「レイちゃん。今日は晴れてて気持ちいいね」

「……うん」

「そういえば、リディアちゃんとまた新しいスポーツするの？」

「……うん」

「そっかあ。レイちゃんはどうしても運動が得意だもんね！ キャロ
キャロ驚いたよっ！」

「……運動は好き」

と、些細なやりとりにはなるがレイとキャロルはそんな話を続ける。そしてちょうど日も暮れようかとしている時間になったので、二人で手を繋いで自宅へと戻っていく。

眩い夕方特有の光に照らされながら、家に戻ると夕食の前に一緒に入浴しようという話になった。

レイはリディアやアビーとも一緒に入浴している経験があるが、三人の中でおそらくキャロルが一番レイと一緒に入浴している。

「レイちゃん。痒いところはない？」

「……うん」

わしゃわしゃとシャンプーを使ってレイの頭を洗う。そしてその体も綺麗にすると、次にキャロルは自分の体を洗おうとするが……。

「？ レイちゃん。どうしたの？」

レイがじつとキャロルのことを見つめている。そして彼は思いがけないことを口にする。

「……背中、あらう」

「ッ！ー！」

再びキャロルは言葉で表せない感情に支配される。今まで献身的にレイに接してきたが、今日はどうにもレイが積極的なのだ。その事実には彼女はただただ喜んでいた。

「えつとじゃあ、お願いしようかな？」

「……まかせて」

そうしてレイがキャロルの背中を流した後に、二人で一緒にお湯に浸かる。

「ふう〜。気持ちいいね〜」

「……うん」

その小さな背中を見つめて彼女はふと思案に耽る。レイが見てきた凄惨な光景はきつと、彼の心に大きな傷を残している。それはきつと一生消えるものではない。

でもだからこそ、それに負けない強い心を育てることができるよう支えていくべきだと……そう考えていた。

「ねえレイちゃん。今日はどうしてキャロキャロに色々してくれたの？」

「……」

レイは答えない。

ただじつとお湯に浸かっているだけ。キャロルも別に無理して返事しなくてもいいよ、と告げるとレイは小さな声でこう言った。

「……いつもいろいろとしてくれるから。おかえしに……」

「レイちゃん……」

その言葉を聞いて、胸の前でギュッと手を握りしめる。

思う。きっとレイはまだ慣れない環境で精一杯なのだろうと。全く知らない女性三人に囲まれて成り行きで暮らすことになったが、色々と彼なりに考えているのだろうと。

そんなレイの言葉を聞いて、キャロルは思い切りレイに抱きつく。その豊満な胸で彼を包み込むと、彼女はこう言った。

「レイちゃん。レイちゃんはきっと、とってもいい男性になるよ！」

「……そう？」

「うんうん。きっとたくさんの女の子にモテモテになるよーっ！キャロキャロが保証してあげる。それにいつかキャロキャロが初めてをもらってあげるね」

「……うん」

レイはその言葉の意味をよく分かっているようだが、彼の言葉は少しだけ明るいような……そんな気がした。

第270話 キャロルの教育（後書き）

キャロルの最後の言葉は、あの事件へのフラグですね……（笑。

第271話 アビーの教育

「……よし」

早朝。アビーの目覚めは早い。

彼女は朝が強く、リディアと違ってすぐに起きる。今日の予定は休日なので特にはないが、ちょうど入れ替わるようにしてリディアとキャロルは仕事が入っているので、今日は彼女がレイの世話をする予定である。

すぐに浴室に向かうとシャワーを浴びる。そして、準備がある程度整えるとリディアの部屋へと向かう。部屋は隣なのですぐに到着し、合鍵を使って室内にはいる。

するとリビングではレイが一人で歩いている姿が見えた。

「？ レイ、何をしているんだ？」

と、その声をかけながら近づくとテーブルにはカップが置かれていた。そのカップからは、淹れたての紅茶のいい香りが鼻腔を抜けていく。

明らかにこれはリディアが準備したものではない。そもそも、紅茶の茶葉はキャロルが買っているものであり、淹れるのはキャロルかアビーしかない。

その中でこれが準備されているということは……。

「レイ。私のために準備してくれたのか？」

「……うん。来るってきいてたから」

「そうか。では、いただきこう」

席についてアビーはレイの淹れてくれた紅茶を飲むことにした。レイといえば、対面の席にちょこんと座ってじっと彼女の様子を窺っていた。

「うん。美味しい。レイは紅茶を淹れるのが美味しいな。キャロルに教えてもらったのか？」

「……うん」

首を横に振る。ということは、レイは誰に習ったのか……と考えるがアビーは思い出す。彼はすぐになんでも真似ができてしまう。その再現性はリディアとテニスをしているときにしっかりとその目でみた。

ということはアビーやキャロルが淹れているのを見て学習したということだろうか。

「もしかして、見て覚えたのか？」

「……うん」

頷く。その様子を見て、彼女は「そうか」と微笑みながら声を漏らす。

はっきり言ってアビーはリディアほどレイに何かを感じ取っているわけでもないし、キャロルほどレイを愛おしいと思っているわけ

でもない。初めはレイが孤児院やどこかの家の養子になることを勧めていたほどだ。

いや、その考えは今もあまり変化はない。自分たちのような存在と一緒にいるべきではない……と考えるが、レイには才能がある。

それはアビーには推し量ることのできないものだが、リディアは分かっているようだ。そのため彼女もレイのことに關してはリディアに任せている。

レイが弟子となったことでリディアにもいい影響が出ているのは見ていてよく分かるからだ。

「よし、レイ。今日も勉強するか」

「……うん」

そしてレイのために用意された部屋に向かうと、アビーはメガネをかける。彼女は持参した教科書をレイに渡すと、まるで教師のように授業を開始する。

教員としての資格を持っているわけではないが、アビーは部隊の中でも一般教養は飛び抜けて優れている。魔術の知識は言うまでもないが、総合的な知識量ではおそらくアビーがトップだろう。

秀才の中の秀才。それこそが、アビー＝ガーネットだからだ。

「この数式は」

「……やってみる」

一通り解法を教えると、レイは黙々と問題に取り組む。そんな様

子をじっと見つめるアビー。

初め教えたときは、それはもう驚いたものだった。レイの学力は同年代よりも少し劣るぐらい。詳しい話は聞いていないが、おそらくは学力的な意味での教育を受けていないようだった。

だからこそ、少しずつペースを考えていこうと思っていた。だがレイは異常なまでの飲み込みの早さと理解力を兼ね備えていた。

それだけならばまだ秀才で済まされるが、彼は数日後に復習をしなくても絶対に同じ問題は正解する。

理解力だけではない。記憶力もまたレイは抜群だった。しかしそれは、考えてみれば領けることだった。そもそも運動にせよ何にせよ、再現性というのは自身の記憶から想起されるものである。

スポーツの場合は手本となる存在　この場合は、リディアを指す　を見て、それを真似ることから始める。それは自分の記憶から、相手のした行動を思い起こして再現しているのだ。

因果関係があるわけではないが、レイの総合的な能力の高さはある程度の相関関係があるとアビーは考えている。

「……おわった」

「よし。採点をしよう」

赤ペンを持って採点をしていくが、全て正解。すでに学習内容は中等部の領域にまで近くなっている。義務教育の範囲を終えるのは科目の数にもよるが　もうすぐだとアビーは思っていた。

「よし、よくできたな」

「……うん」

「昼食を取ろう。何か食べたいものはあるか？」

「いっしょに……」

彼は小さな声で何かを主張しようとする。それを感じ取ったアビは優しい表情で再び問いかける。

「何かしたいことでもあるのか？」

「……一緒に作りたい。料理も勉強したい」

「そうか。それはいいことだ。よし、レイ。今日は料理も教えよう」
「……ありがとう」

その瞬間、アビは言葉にできないような感情に苛まれる。キャロルがレイのことをずっと愛らしいと連呼していた時は理解できなかったが、彼女は知った。

きつとこの感情こそが、母性と呼ぶべきものなのだと。

もちろんアビの自制心はかなり高いので、グツと抑制してレイを台所へと連れていく。

そこでまずは包丁の扱い方を教える。

「いいか。食材を切る時は、こうやって手を丸めるんだ」

「……こう？」

「そうだ。それで、こうやって切っていく」

手際良くアビは千切りキャベツを作っていく。今日の昼食は唐揚げでも作るうと思っていたので、その付け合わせの野菜だ。

それをじつと見つめると、レイは「……やってみる」と呟いて包丁を恐る恐るキャベツに当てる。また今は、レイは椅子の上に立って調理をしている。

「……う、むずかしい」

「こればかりは慣れの要素が大きい。まずはゆっくり、手を切らないように注意するといい」

「……うん」

流石のレイも包丁捌きは普通の子どもと同じようだった。

その後、アビーは鳥も肉を一口大に捌くとそれを油で揚げている。流石に揚げ物は危ないので、レイにはテーブルで待ってもらっている。

今回は夜に帰ってくるリディアとキャロルの分も先に作っておく予定だ。そして、全ての鳥も肉を揚げ終わるとそれをレイの元へと持っていく。

「では、いただきます」

「……いただきます」

朝と同じように、対面に座って食事を開始する。レイはパクリと揚げたての唐揚げを食べると、少しだけ笑みを零した。

「……美味しい」

「それは良かった。さ、たくさん食べてくれ」

「……うん」

特に口数が多いわけではない。コミュニケーションも問題なく取れているが、何か特別な縁を感じているわけでもない。

しかしどうしてだろうか。アビーはレイの様子を見ているだけで、心が落ちつくような気がしている。

アストラル
特殊選抜部隊の活動は今は落ち着いているが、それまでは紛争地帯に介入したりなど過酷な任務が多かった。

そんな中で出会った少年とこうして食事を共にしているなど不思議なものだ、と彼女は思う。

「……ごちそうさま」

「よく食べたな。こちらとしても、嬉しい限りだ」

残った食器を台所へと運ぼうとすると、レイもまたアビーと同じようにその食器を運んでいく。

「レイ。別に私がやるからいいぞ」

「……お礼。お手伝い、したい」

「ッー!!」

先ほどとは比較にならないほどに、その胸中がある感情によって満たされる。今回はあまりにも強烈だったので、アビーは思わずバランスを崩してしまいそうになる。

「……? だいじょうぶ?」

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとう、レイ」

アビーは思った。

ああ、きっとレイは将来数多くの女性を泣かせるような存在になるかもしれない……と。

第272話 史上最年少の七大魔術師

氷剣。

それはリディアが生み出した魔術の一つ。氷魔術を剣という形に昇華させ、より実践的なものに高めた魔術。軍人になる前から、彼女は自分が氷魔術に対する適性が高いことには気がついていた。

そこに着目して、彼女は氷剣という魔術を生み出すことにした。それは決して、ただの氷の剣ではない。彼女の本質である【減速】と【固定】というコードを緻密に織り込んだものだ。

その差別化を図るからこそ、名称は氷剣ではなく氷剣としている。唯一無二の魔術。それこそがリディアの求める氷剣であった。

「……ふう」

氷剣を振るう。

目の前には数多くの魔物が転がっていた。魔物による大暴走^{スタンビード}に対処するために、今回は特殊選抜部隊^{アストラル}は駆り出されていた。その中でリディアは、氷剣を使った。

《第一質料^{プリママテリア}⇨エンコーディング⇨物資コード^{マテリアル}》

《物資コード⇨ディコーディング^{マテリアル}》

《物質コードⅡプロセシングⅡ減速Ⅱ固定》
マテリアル ディセラーシヨック

《エンボディメントⅡ物質》
マテリアル

コードの中に組み込まれるその二つの本質。それによって生み出される氷剣はリディアの周りに顕現していた。両手に氷剣を握み、彼女の後ろに控えるようにして他の氷剣は宙に浮かんでいた。

もはや彼女は並の魔術師の領域にはいない。文字通り、次元が違うと言っていていいだろう。今回の戦闘を見ていたアビーは、ただ呆然とするしかなかった。

アビーやキャロルもまた、すでに七大魔術師候補と言われているほどには卓越した魔術師であることに変わりはない。

しかしやはり、稀代の天才であるリディアⅡエインズワースの前ではそれも霞んでしまう。

「リディア……ついに完成したのか」

「ああ。妙な感覚だ。今まで見えていないものが、全て見える気がするんだ」

よく見ると、リディアの金色の瞳は紺碧こんぺきの宝石のような色に変化していた。

「お前、その目は……」

そう言われてリディアはボソリと呟く。

「新しい能力が覚醒したらしい。今の私には、プリママテリア第一質料が可視化されて見える。真っ青な粒子としてな」

絶句する。

プリママテリア今まで第一質料を知覚する魔術師は存在はしていた。しかし、それを視界に映すことの出来る異能を持っている魔術師などいるわけがない。

神に愛された少女。

その敬称でも呼ばれているリディアのことを茫然と見つめる。間違はなくそれは、後天的なものではないだろう。先天的に持っているものが違いすぎる。

まさに彼女は 神に愛された才能を持っている。

だが、アビーは知っている。強大な力を持っていることが、必ずしも幸せに繋がっているわけではないことを。

「アビー。帰ろう。任務は終了した」

「あ、ああ……そうだな」

そうして二人は任務を終えて、王国の基地へと戻っていく。

翌日。リディアは魔術協会の本部に呼ばれることになった。すでに事前通達があった。彼女のもとに、正式に七大魔術師に指名したという手紙がやってきていたのだ。

リディアの性格ならば、無視してもおかしくはない。だが今回ばかりは、事情が違う。彼女は思っている。自分のこの莫大な才能には、それ相応の責任があるのだと。

だからこそ、彼女は一人で魔術協会へとやってきていた。

「……ここも久しぶりだな」

リディアは天才ということで魔術協会のパーティーにはよく招待されていた。だが彼女は面倒という理由でそれを拒否していた。もっとも、豪華な料理が出ると分かっているときはやってくる時も稀にあるのだが。

そんな彼女が協会内に入ろうとした瞬間、そこではったりと見知った人間と出会うのだった。

「リディアさんですか？」

「マリウス……奇遇だな」

そこにいたのは長髪の男性だった。胸まである栗色の髪をそのまま下ろしている。いつもは後ろでまとめているのだが、今日に限っては結んではいない。

また、その顔つきは男性にも女性にも思えるが実際は男性である。それは百八十センチある身長からも明らかではあるし、肩幅や筋肉量からも分かる。

そんな彼の名前は、マリウス・バセット。

別名

「で、^{りんごう}燐煌の魔術師がどうしてこんなところに？ 暇なのか？」

「リディアさんを迎えにきたんですよ。会長に頼まれたので。ここ
で出会えたので、その仕事ももうありませんが」

「……そんなことをしなくても、私はやってくるといのに」

「そうは言いますが、今までは誘いを無視するのが普通でしたよね
？」

「う……うぐ。そうだな」

マリウスはリディアの苦々しい表情を見て、微かに笑みを浮かべる。

二人の付き合いは割と長い。マリウスの年齢はリディアよりも十
ほど上。そして彼は、アーノルド魔術学院の教師でもあった。そこ
で彼は四年間リディアたちの担任をしていた。

リディアとの付き合いはその四年間の中で、かなり濃いものとな
った。

彼女としてもマリウスは数ある知り合いの中でも、頭の上がらな
い人間なのである。

「いいですか。あなたももう、七大魔術師の一人になるのです。学
生のような言動では、ダメですよ？ それに最近軍の方では落ち
着いたと聞きましたが、リディアさんはいつも」

「うがああああああっ！ やめろおおおおおっ！ こんな
ところでお前の説教を聞いている場合じゃないんだあああああ
ああっ！」

地団駄を踏んで暴れるリディアを見て、じっとその様子を見るマリウスは依然として笑みを浮かべたままだった。

「ふふ。冗談ですよ。ちょっと懐かしくて、からかっただけです」
「……はあ。お前は昔からそんなやつだったな」

りんこう
燐煌の魔術師。

七大魔術師の一人であり、教師でもあるマリウス。そんな彼は当時から分かっていた。リディア「エンズワースは史上最年少で七大魔術師になる存在であると。」

そしていつかきつと、自分すら超えていく魔術師になるであろうと。

ここでリディアと出会ったのは偶然ではない。彼は手向けの言葉を送るために、この場所にやってきたのだ。彼にとって卒業したとはいえ、リディアは大切な生徒の一人なのだから。

「リディアさん」

澄んだ声が響く。その声色から彼女はマリウスの真剣な雰囲気を感じとる。

「七大魔術師に抜擢されたようで、私も嬉しいです。しかし、ここから先に待っているのはきっと非情な現実でしょう。あなたほどの人間ならば分かっているはずです。魔術の真髄を極めるということは、狂気です。この領域は私を含めて、狂人の世界です。けれど、

私は祝福します。あなたのこの先の人生に幸があらんことを」

そしてどこからともなく、マリウスは一輪の花を取り出した。それをリディアに手渡すと、軽く一礼をする。

「マリウス。忠告感謝する。私は魔術の真理にたどり着く。それが、この才能を与えられた私の意味だからな」

「ええ。応援しています。あなたは誰よりも気高く、神に愛された魔術師だ。それでは、またお会いしましょう」

「ああ。またな」

マリウスは手を振って、その場から去っていった。そんな彼の様子をリディアはじつと見つめる。

彼女は分かっていた。

七大魔術師という地位にたどり着くことができたのは、決して自分一人の力だけではないと。マリウスのような教師だけではない。アビーやキャロル、それに様々な人間と交流を持つことで、彼女は魔術師としてだけではなく人間として成長していった。

その果てにたどり着いたのが、今だった。

踵を返す。

リディアはギュッと自分の手を握り締めると、それを胸に当てる。その瞳には確かな意志が宿っていた。

「行くっ」

進む。

リディアは歩を進める。彼女のこの先の人生には何が待っているのか。七大魔術師として生きていく覚悟を持っているが、それでもリディアはまだ若い。十代後半にして、七大魔術師となった天才の中の天才。

彼女には確かな意志がある。誰かに強制されたわけでもなく、それは彼女自身が後天的に獲得してきたものである。

学生時代からずっと言われてきた。

才能があつて羨ましいと。神に愛されて、努力もできて、リディアのような魔術師になりたかった。そんな言葉は幾度となく送られてきた。

羨望だけではない。そこには嫉妬も混ざっていた。リディアの強大な才能を前にして、潰れてしまった魔術師もいる。それは、それまでの才能と割り切ってしまうばそれまでだ。

だが、リディアはそんな人生を歩んできて思った。ずっと最前線を走り続けてきた人生。年齢など関係なく、すでに世界の頂点に至る魔術師である自分が生まれた意味はなんだ、と。

その答えはまだ得ていない。でもだからこそ、自分には進む必要がある。この才能には数多くの人間の意志が宿っているのだから、そう思っているからだ。

それは果たして彼女をどんな未来に導くのか。

栄光の道を進んでいくのか。または、それが呪縛となつて破滅の道を歩んでいくのか。

リディアの行く末は、まだ誰にも分からない。

そうして彼女が史上最年少の七大魔術師になつて
三年の月日
が経過した。

第272話 史上最年少の七大魔術師（後書き）

最後の七大魔術師が現れました。過去編ではありますが、彼は現代でもまだ七大魔術師です。ということで、改めてまとめておきます。

- | | | |
|---|----------|--------------|
| 1 | 【氷剣の魔術師】 | レイ・ホワイト |
| 2 | 【灼熱の魔術師】 | アビー・ガーネット |
| 3 | 【幻惑の魔術師】 | キャロル・キャロライン |
| 4 | 【絶刀の魔術師】 | ルーカス・フォルスト |
| 5 | 【虚構の魔術師】 | リーゼロッテ・エーデン |
| 6 | 【比翼の魔術師】 | フランソワーズ・クレール |
| 7 | 【燐煌の魔術師】 | マリウス・バセット |

次回からは三年後の話になります。五章もそろそろ折り返しです。是非とも、今後もお楽しみください！

第273話 三年の月日を経て

「師匠。起きてください」

「う……うん……」

「今日は朝から一緒に訓練をする予定ですよ」

「ああ……分かってているが」

春。

気温はちょうどよく、過ごしやすい日々となっている。そんな中、リディアはベッドで寝ている。現在の時刻は朝の六時。今日は朝からレイに稽古をつけてやると昨夜意気込んでいたのだが、やはり彼女は朝が弱いということもあってこうして駄々をこねている。

「師匠。起きてください」

体を揺する。

その少年はリディアの体を懸命に揺すっていた。

それは他でもない、レイだった。彼はあれからリディアや特殊選抜部隊トラルの面々と接することで、人間らしい心を取り戻していった。アス

出会ったときのような暗い表情を覗かせることはなく、こうして普通に話することができるほどには回復していた。

「うん……あと三時間」

「それは長すぎますよ」

「レイ……」

「うわ……っ！！」

と、あるうことかりディアはレイの小さな体を抱き締めるとベッドの中へと引きずり込んでいく。

そしてギュツとまるで抱き枕のように抱きしめるのだった。

「あつたかいなあ……」

「師匠！ 寝惚けないでください！」

そんなやりとりをしていると、室内にはキャロルとアビーもやってきた。今日は部隊のメンバーで花見でもしようという話が出ているのだ。

アストラル

特殊選抜部隊の活動も順調に進行しており、リディアとキャロルは大尉に昇進。そしてすでにアビーは二十代に入る直前に少佐になるという偉業を成し遂げた。

それは軍の中でも史上最年少。さらには女性の佐官はほとんどいないというのに、成し遂げた偉業。アビーの地位はすでに軍の中でもかなりのものになっている。

「……リディア。何してるんだ？」

「あーっ！ レイちゃんにえっちなことしてるーっ！！」

その声を聞いてリディアは目を覚ます。

「……ん？ あれ、どうしてレイがベッドにいるんだ？」

「師匠が抱きついてきたんですよ」

「はあ？ 私がそんなことするわけないだろう」

「……まあ、そういうならいいですけど」

レイは半ば呆れたような顔でベッドから出ていく。そうして彼は、やってきた二人に挨拶をするのだった。

「ガーネット少佐。いつも師匠がすみません」

「いや、いいんだ。昔からの付き合いだしな」

二人で会話をしていると、あることがキャロルはレイに思い切り抱きつこうとするが……。

「うわーん！ キャロキャロもレイちゃんを抱きしめたいよーっ！」

「ダメに決まっているだろ」

レイはキャロルの頭を押さえると、冷静に呟く。最近レイは思っている。どうにも、キャロルのスキンシップが激しい気がする。いや元々そうなのだが、ここ数ヶ月はやけに距離感が近い気がするのだ。

それに時折、キャロルの獰猛な獣のような視線に晒されて、ぞくりとした感覚を覚えている。いつかキャロルに食べられてしまうのではないかと、レイは実は恐怖していたりする。

もっとも、彼は今はまだそれは気のせいの範疇だと思っているのだが。

あの悲劇が起こるまで時間はあまりに残されていないとは、レイはまだ知らない。

「よつと。ふう、相変わらず朝は気持ちいいな」

爽やかな表情でそういうリディアだが、それにはアビーがツッコミを入れる。

「いや、思いつきりあと数時間は寝そうだったが？」

「ふ。私は起きればその時がいつでも最高の瞬間なんだ。ただ、起きるまでが大変だな！ ガハハ！」

「そんな誇ることじゃないだろう……」

リディアはベッドから出ると、すぐに身支度を整え始める。レイといえばすでに準備は終わっているのだが、彼はなんとリディアの服などもすでに準備していたのだ。

「おお！ レイ、いつも気が利くな」

「いえ」

その様子を見て、アビーはボソリと呟く。

「なあキャロル。私はレイの育て方を間違えた気がするんだが……」

「ん？ いや、レイちゃんはおつてもしっかりしてるけど？」

「いや……しっかりし過ぎなんだ。このままではリディアがダメ人間に……」

「もうっ！ いまさらでしょー！！ アビーちゃんは心配性なんだからっ！」

「いや、しかし……」

クスクスと笑いながらキャロルはそんなことを言うが、アビーは依然として苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

レイは元々、片鱗は見せていた。

彼はとても情に厚く、受けた恩をしっかりと返そうとしている。それは出会った当初から変わっていない。むしろ彼は、引き取ってくれた恩義を感じているようでリディアのことは特に尊敬している。

その一方で、面倒見が良すぎると言うか……色々と英才教育を施しすぎたのではないか？ という懸念がアビーにあった。

魔術面、体力面、勉強面では言うまでもなく優秀。その実力はすでに大人顔負けなほどだ。それは三人が彼に対して情熱的に教育を施してきたからだ。

また、特殊選抜部隊の他のメンバーもまたレイには色々と教え込んだ。その結果、生まれたのが今のレイだった。

「よし。準備できたな」

「師匠。今日もお綺麗です」

「ふふ。そうか？」

「はい」

レイは平静にリディアのことを褒める。そして次には、アビーの方にも顔を向けると何の躊躇もなく同じような発言をするのだった。

「ガーネット少佐も私服はとてもお綺麗なようで。よく似合ってますよ」

「そ、そうか……？」

「はい」

流石に真正面からこうして褒められてしまうと、アビーも照れてしまうのだった。

それがたとえ幼い子供であつたとしても、こうして褒められるのは恥ずかしいようだった。

「あー！ 私も、私も！！ ねね、レイちゃん。キャロキャロには？」

「……キャロルも似合ってるよ」
「わーい！ ありがとうーっ！」

それは明らかに棒読みだったのだが、キャロルは満面の笑みを浮かべるとレイに思い切り抱きつくこうとする。

「……ちょー！ や、やめろ……っ！！」

そんな二人の様子を見て、リディアとアビーはふっと微笑みを浮かべる。

「もう三年か。早かったな」

「そうだな。しかし、リディアの教育でこんなにも素晴らしい人間が出来上がるとはな。反面教師か？」

「はあ？ 天才の私に育てられたんだ。レイは天才になるに決まっているだろう？」

「……そう言うことにしておくか」

ニヤツと笑うリディアを見て、変わらないところは変わらないものだと思うアビー。

その後、三人は待ち合わせ場所である公園へと向かう。

レイはすでに特殊選抜部隊^{アストラル}のメンバーと面識があるので、特に緊張している様子はなかった。また彼は右手にバスケットを抱えていた。

「レイ。今日は何を作ったんだ？」

「サンドイッチです。師匠の好きなマスタード多めのものも用意してますよ」

「おお！ それは楽しみだな！ レイのサンドイッチはめっちゃくちゃ美味いからな！」

「はい。料理はガーネット少佐に叩き込まれましたので」

「やはりアビーの教育は優秀だな！ ま、私には届かないがな！」

そんなやりとりを繰り返す師弟。距離感もかなり近くなった。それに何よりも、レイはよく笑うようになった。あの時の記憶は確かに彼の中に残っている。

しかし本人曰く、当時のことはよく覚えていないとのことだった。現在はそろそろ学校に行ってもいいのでは？ という話も出ているのが……やはり問題なのはレイの魔術師としての適性だった。

これはリディアが報告している内容だが、すでにレイは氷剣に手が届きつつあるという。彼の魔術師としての才能は、リディア「エインズワース」を超えているのだと。

それは決してレイには伝えることはないのだが、リディアはすでにそう考えていた。

レイと同じ年の頃を考えても、彼はリディアの先を進んでいる。すでにその領域は魔術師の中でも上位に食い込むほど。

だからこそ彼の扱いは慎重にしなければならない……と考えられている。

「中佐！ やってきたぜー！」

と、リディアが声をかけるとそこにはヘンリックを含めて部隊のメンバーが揃っていた。

こうして特殊選抜部隊アストラルの全員で花見をするのだった。

第273話 三年の月日を経て（後書き）

三年後になりました。

五章もそろそろ折り返しです。今後とも是非、お付き合いください！

第274話 花見

「レイ、久しぶりだな！」

「おお。少し大きくなったか？」

レイに声をかけるのは、デルクとハワードだった。二人ともにその分厚い筋肉がよく分かる服装、つまりはシンプルにシャツにパンツスタイルだった。

そしてレイはそんな二人に対して、軽く一礼をする。

「デルク。それにハワードも。久しぶり。身長は多分伸びてないと思うけど」

レイはデルクとハワードに対して呼び捨てで呼ぶ。それはレイが勝手にそうしているのではなく、そうしているのは、キャロルだけである。デルクとハワードがそう言ったのだ。

呼び捨てにして友人のように接していきたいと。

その要望もありこの三人の距離感はかなり近くなっている。レイの交友関係は特殊選抜部隊アストラルに限られてくるのだが、全員ともにすでにそれなりに打ち解けてきている。

その中でリディアは特別なのだが、デルクとハワードにはある一点において特にレイと繋がっている部分があった。

「それにしても、レイも筋肉に目覚めてきたようだな。ハワードから話を聞いたぜ？」

ニヤツと笑うデルク。

そう。この三人に共通しているのは誰もが筋肉を愛しているということだった。レイが肉体のトレーニングに真剣に励んでいるのは、やはり環境的な要因が大きいだろう。

部隊の中でもリディア、デルク、ハワードはもはや筋肉狂信者といっても過言ではない。家ではリディア、外ではデルクとハワード。その圧倒的な肉体に囲まれ、目の前でトレーニングを重ねている人間が多くいる。

それだけでレイが筋肉を愛し始めるのは十分だった。もともと成長期も考慮してトレーニングはある程度はリディア達に制限されているのだが。

「うーん。師匠にもよく言われるけど、自分だとよくわからないんだよなあ……」

ボソリと呟くレイを言葉を、ハワードが補足する。

「いや、レイは間違いなくかなりデカくなってきている。成長期もあるだろうが、かなり質のいい筋肉に仕上がってきているぞ！ レイ、自信を持て！」

「あはは……ハワードがそういうなら、そうなのかもね」

と、レイは苦笑いを浮かべる。

三人がそうして談笑しているのを、他のメンバー達はじっと見つめていた。

「レイは明るくなったね」

「はい。三年でよくここまで変わったかと」

ヘンリックの隣にはフロールがいた。彼女もまた今回の花見には参加している。彼女は昔から孤立して、一人でいることが多かったのだがこの特殊選抜部隊アストラルに入ったことで大きく変化し始めていた。

当初はレイを引き取ることはかなり反対していたのだが、今となつては影からレイのことを観察したり、リディアに忙しく教育について教えているほどだ。

リディアは色々と辟易しているが、それでもフロールは心配せずにはいられないようだ。

「よし！ 今日めっちゃ食うぞー！」

リディアのその声を合図に、全員でさつそく花見を開始する。もともと王国には花見という文化はない。そのため、公園にはほとんど人はいないのでぼ貸し切り状態だ。

今回の花見を提案したのは、キャロルだった。

せっかくこんなにも綺麗な春なのだから、みんなで花を見ながら食事でもしよう」と。

「今日はみなさんのためにたくさん作ってきました」

そう言葉にするのはレイだった。彼は昨晚から仕込みをして、早朝から全員の分の食事を作っていた。今回は特殊選抜部隊は前日^{アストラル}まで任務があつたので、レイ一人で準備することになった。

流石にそれは悪いと思うメンバーもいたが、レイは遠慮しないで欲しいと言った。

彼は当時のことをあまりよく覚えていない。しかしそれでも、自分の境遇のことは理解している。それに引き取ってくれたリディアに感謝しているし、部隊の全員もレイのことを気にかけてくれる。

それは決して軍の上層部に彼のことを監視している、と言われただけではない。

そこには確かな人としての愛情があつたからだ。

「ん！ 美味しいなあ！ 流石は私の弟子だな！！」

「まあ……師匠が料理を作らないので、自分でやることに慣れたというか……」

「あ？ 今何か言ったか？」

「いえ、何も！」

その声音、視線は明らかに殺意を含んだものだつた。レイはもちろなりディアには色々な意味で頭が上がらないのですぐに否定する。すでに経験していることだが、リディアを怒らせると本当に大変なことになると彼は知っているからだ。

「レイ。料理上手くなったな」

「ガーネット少佐がいつも教えてくれたからこそです」

「いや、レイもしつかりと努力したからな。料理に関してはリディアは全くダメでな。その点、レイはもうその歳で十分な技量だ」
「ありがとうございます」

と、アビーに褒められているとレイの隣にはズイッとキャロルが近寄ってくる。

「レイちゃんっ!」
「うわ……っ!」

ギュと抱きつくと、キャロルは自分の頬をレイに擦り付ける。レイは「キャロル、離せっ!」というのだが、なぜか完璧に動けなくなっている。彼はどうすることもできなかった。

「キャロキャロも教えてあげたもんね? ね?」
「ま、まあ……そうだが……」
「キャロキャロにはお礼はないの?」

まるで小動物が甘えるような視線。レイはキャロルの扱いは割とぞんざいだ、感謝していることも多い。何かと世話をされている自覚が彼にもある。

そしてレイはボソツと小さな声で礼を述べる。

「……ありがとう、キャロル」
「もうっ!! 本当に可愛い!!!!!! ねね、ちゅーしてあげるっ!」
「う、うわああああ! 助けてええええええっ!」

あろうことかキャロルがレイの頬ではなく、口に直接キスしよう

とした瞬間。キャロルの頭はガシツと掴まれる。

「キャーローラー？ お前、最近レイへのスキンシップが激しいよなあ？ そのことは注意したはずだよなあ？」

鬼の形相、とまではいかないが明らかに怒気を漏らしているリディアがそこにいた。彼女は右手で思い切りキャロルの頭を掴んでいるが、キャロルは全くそれを気にしていないようだった。

常人ならばその痛みで叫びをあげそうなものなのだが……。

「えー？ 何のことおー？ キャロキャロは常識の範囲内でスキンシップをしてるだけだよおー？」

「お前の常識の中にはキスも含まれているのかっ！」

「うん！ レイちゃんのファーストキスはキャロキャロがもらうもんねっ！」

「ほう……今日こそ決着をつけるべきだな。表に出ろ、キャロル」
「望むところだよっ！ ふふんっ！」

そして二人は立ち上がると、そのまま魔術を使って喧嘩を初めてしまった。もうすでに部隊のメンバーも慣れているので特に止めることはない。

ああ、またやってるな……と思う程度だ。

「あの。いいんでしょうか」

「ほっとけ、ほっとけ。あの二人はいつもだろ？」

ハワードはアルコールを飲んでいるようだが、酔っている様子はなかった。そしてその会話にはヘンリックも参加する。

「ああ。きつと、時間が経てば落ち着くだろう」
「そうですか……まあ、いつもそうですよね」

その後。

キャロルとリディアの喧嘩はアビーによって止められた。現在はアビーに説教をされており、二人とも頭を下げて正座をしている。

そんな様子をレイは苦笑いをしながら見つめていた。

「はは。本当にいつも通りですね」
「全く。あの二人は本当に……」

そうレイの隣で声を漏らすのはフロールだった。やれやれと言わんばかりに、頭を左右に振る。

「レイ。あなたが望むなら、私の家に来てもいいのよ？」
「フロールさんの申し出はありがたいですけど……やっぱり、師匠には恩がありますので」
「そ。ま、また今度遊びに来なさい」
「はい。また伺わさせていただきます」

そう言ってフロールはレイの頭を優しく撫でる。

その様子をニヤニヤとしながら三人の男性陣がじっと見つめていたのに、フロールはハツとしてから気がついた。

「ふむ。やはり人は変わるものだね」
「ええ。あのお堅いフロールがここまでになるとは」

「ははは！ やっぱレイは人気だな！」

そう言われて、フロールはかあ……と自分の顔が真っ赤に染まっ
ていくのを感じた。

「べ、別に私はそんなつもりはっ！！」

アストラル
特殊選抜部隊。この部隊でレイは人としての心のあり方を取り戻
しつつあった。だが、この平穏な日々は決して長くは続かなかっ
た。

第275話 偶然の出会い

早朝。

レイはいつも通りに目を覚ます。いつもならばすぐにリディアを起こすのだが、今日の予定は昼からなのでそれは後回しにする。

彼は一人で朝食の準備をすると、手早く着替えを済ませて外出する。実はリディアに頼まれていたのだが、今日はある作家の本が出版されることになっている。

レイはよく知らないが、なんでも王国の中でもっとも有名な小説の大賞を受賞したとか。そのため本屋はきっと混雑すると予想されるため、レイはこうして早朝に一人で準備をしている。

「……よし」

背中に小さなリュックを背負うと、彼は玄関から出ていくのだった。

王国は現在、春真っ盛りである。気温もちょうどよく、過ごしやすい時期である。そろそろ夏も近づいてくることもあり、中には半袖で歩いている人もいる。

そんな中、レイは一人で歩みを進める。

すでに王国内の構造はある程度は把握しているので、一人で買い物に行くこともできるようになっていた。そして、目的の本屋へと向かうとすでに少しだけ列ができていた。

間違いなく、今日発売される本の列だろう。

その作者の名前はルナ・エテル。本のタイトルは、【人と心】。なんでも群像劇になっており、登場人物の心理描写が新人とは思えないほど……という噂が立っている。

そしてレイは一人で大人の中に紛れて、列に並ぶ。彼はリディアやアビーなどの教育の中で読書はしっかりとしておくように言われていた。それはジャンルは問われない。

好きなもの、気になるものならば好きなだけ読むといい。と、二人には言われている。レイもまた特に小説は好きだった。そこには彼自身が知りもしない、広大な世界が広がっているからだ。

「開店でーす！ 押さないでくださーい！」

店員の声を合図についに書店が開店。レイは早朝に起きてすぐに来たということもあって、列の前の方にいる。

その波にのまれながらも、彼はお目当ての書籍を二冊手にとった。それを持ってカウンターに向かうとした瞬間。彼は誰かにぶつかってしまい、転んでしまいそうになる。

ここにいるのは大人ばかりだ。身長の高い彼は、周りの人間の視線にあまり入らないのでぶつかってしまったようだ。

「うわ……っ！」

「おっと。大丈夫かい？」

と、彼が転ぶ手前で助けてくれたのは女性だった。

綺麗な栗色の髪を後ろに流して、彼女はレイの体をしっかりと受け止めてくれた。

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げる。

「いや、別に構わないよ。それにしても、君もその本を楽しみに？」

相手の顔をじっと見つめる。レイはその女性の顔を見て思った。とても愛嬌があつて、可愛らしい人だというのに……どこか無機質な印象を受ける。まるで人形のようなのだ、と。

「はい。それに師匠にも買ってくるように言われたので」

「師匠？」

「えっと……その、お世話してもらっている人です」

「そうか。しかし、壮観だね。こうして本が並ぶというのは」

「？　そうですか？」

レイは彼女が何を言っているのか、いまいち理解できなかった。しかし、人としてどこか惹かれるようなそんな雰囲気が目の中の女性にはあった。

「少年。是非、その本を楽しんで欲しい。では失礼するよ」

「楽しんでほしい？　それって」

どういう意味ですか、と尋ねる前にその女性はいなくなってしまった。レイが別に目を逸らしたわけではない。だというのに、その人はまるで忽然と消えてしまったのだ。

魔術の類だろうか……とレイは考えるも、分かったところでどうしようもない。

そして彼は目的の本を購入すると、自宅に戻っていくのだった。

レイはまだ知らない。その時出会った女性が、その本の作者であるルナ＝エテルであるということ。

さらには、彼女の本当の名前はリーゼロッテ＝エーデンであるということ。

二人の次の邂逅は数年の時を有するのだった。

「アメリカ、行きますわよー！」
「ま、待ってよーっ！」

帰路。

レイの隣を麗しい二人の少女が走り抜けていく。一人の少女は真っ赤に燃え上がるような紅蓮の髪を靡かせながら、走っていた。もう一人の少女はいかにも活発そうな見た目であり、その麗しい白金の髪の毛をポニーテールにまとめていた。

何故だろうか。

すれ違った際に、レイは後ろを振り返った。その二人は互いに笑い合いながら走り去っていく。

その様子を見て思う。

自分はやっぱり、一人なのかもしれない。

レイがなんとなく孤独感を覚えてしまうのはきっと、彼の周りに同じ歳の友人がないからだろう。彼の環境は特殊だ。そのことをなんとなくレイも理解している。

た
た
ず
佇む。

胸に本を抱えながら、彼はまるで虚空でも見つめるかのようにその二人の少女を見つめていた。

きっといつか自分も、友人と呼べる存在ができるのだろうか……そんなことを思いながら。

「師匠。買ってきましたよ」

流石にこの時間になれば起きているだろうと思っていたレイだが、リディアの寝室からは大きなびきが聞こえてくる。

「はあ……まだ寝ているんですか」

一人、その声を漏らしてレイは寝室へと向かう。

「師匠。起きてください。今日はお昼から予定があるという話でしたよね」

「ううん……あと五時間」

「それだと夕方になりますよ。軍の方の用事ですよね？ 遅れるとまずいのでは？」

「レイ……代わりに行ってくれ……」

リディアはベッドから出ようとしない。このような時、どうすればいいのかレイはすでに心得ている。

「うおっ……！！」

レイは思い切り布団を剥がしとった。そしてその中で縮こまっているリディアに改めて声をかける。

「師匠。起きてください」

「仕方ねえなあ……」

ベッドから出ると、「ふわぁ」とあくびをする。髪もボサボサでラフな格好なのでその豊満な胸がしっかりと強調されてしまう。

レイは特にそれに気を留めることもなく、朝食を温め直す。

「サンドイッチです。卵とハムにしておきました」

「おお！ それは助かる！」

テーブルにつくとサンドイッチとミルクがすでに用意されていた。

それは全てレイが準備したもののだが、リディアは当たり前のようにそれを享受する。

アビーには色々と言を呈されているが、こればかりは適材適所ということであビーもすでにこの件は諦めている。

「む……！ 美味しいな……っ！」

「お口にあったようで何よりです。それでなのですが、先ほど買ってきましたよ」

「あの本か？」

「はい。すでに行列ができていたようですが、早めに行ったので普通に買えました」

「ありがとう。これ、金だ」

と、ポケットから取り出した金銭は明らかにレイが消費したものよりも多い金額だった。

「師匠。これだと多いのですが」

「いいんだよ。子どもは黙ってもらっておけば」

「……分かりました」

コクリと頷く。レイはこうしてよく金銭をリディアから受け取るのだが、その全ては豚の形をした貯金箱にコツコツと貯めている。生活費などはアビーが管理しているので、それとは全く別のレイが持っている金銭。

それは今後のために大事にとってあるのだ。

「さて、と。今日は基地に向かうか」

「自分は待ってますので」

「何言ってるんだ。レイも行くぞ」

「え？ そのような話ではなかったはずですが」

「あ？ 言ってなかったか？ すまん、すまん。ガハハ！！」

頭を掻きながらリディアはそう笑い飛ばす。レイとしては全く笑えないのだが、どうせこの後の予定もないのでいいだろうと……彼は内心で思う。

「それで、何をしに行くんですか？」

「それは私の考案したあるトレーニングを来週から導入しようと思っ
つてな。その件だ」

「トレーニング、ですか？」

「ああ。その名称は」

一息置くと、リディアはニヤツと笑ってこう告げた。

「エインズワース式ブートキャンプ、だな」

こうしてついに王国軍にある種の革命がやってくるのだった。

第276話 エインズワース式ブートキャンプ

王国軍ではもちろん、訓練校や士官学校でしっかりとトレーニングを積んできたものが軍人として採用されている。だがしかし、リディアはまだそのトレーニングが甘いと常々考えていた。

それはやはり魔術先進国であるが故のものだろう。

トレーニングをするにしても、魔術による身体強化に重きを置いている。基本のすべては魔術から始まり、魔術に終わる。そのように教育されているのだからある種当然である。

また現在は貴族の血統主義も台頭しているので、なおさら魔術に依存する傾向は軍の方でも強くなっている。

そんな中、リディアが提案したのはまさかのトレーニングだった。

まさにそれは青天の霹靂。いや、考えてみれば当然のことなのだが固まってしまった思想を切り裂くのを厭わない彼女は、軍の上層部に掛け合っていたのだ。

自分が考えたトレーニング、その名も エインズワース式ブートキャンプを。

「師匠。今日は何をしに行くんですか？」

「ふふふ。実は前からレイに試していたあのトレーニングを正式に軍に採用してもらおうと思ってな」

「ということは、ついに……ですか」
「ああ。そうだな」

リディアとレイは隣り合わせにして歩いている最中だった。目指す場所は王国軍の基地、その中でもヘンリックの書斎である。

レイは軍に出入りすることは初めてではない。周りからはリディアの親戚の子ども程度に思われている。本来ならば子供が出入りするような場所ではないのだが、リディアの規格外な性格から何も言われないのが現状だ。

「失礼します」

ノックをすると室内に入っていくリディアたち。そこでは書類に目を通しているヘンリックの姿があった。

「中佐殿。あの件でやって参りました」

「エインズワースか。あの件だね。少し待ってほしい」

そう言っただけは書類の束から目的のものを探し出すとする。ヘンリックもまた、この三年間の間で昇進を果たしていた。現在は中佐であり、もう少しで大佐に届きそうな位置まで来た。

それはやはり、特殊選抜部隊アストラルを導いてきた実績が大きい。リディアたち三人の天才を一箇所にまとめ、それを組織として機能させている。その功績によって彼は順調に昇進を果たしていた。

「これだ。上層部からの許可はすでにおりているよ」
「は。ありがとうございます」

その場で一礼をするリディア。

彼女もまた昇進しているのは当然なのだが、礼儀作法が一通りは身についてきている。もちろん自分にとって気に入らない存在には雑に接するのだが、ヘンリックは尊敬すべき上司として彼女は見なしているからこそその態度だ。

「レイのサンプルも非常に役に立った。後は実行するだけだね」

「はい。やっとここまでできました」

「しばらく特殊選抜部隊アストラでの任務はない予定だ。その間、エインズワースはその計画を進めてほしい。すでに人員は訓練校から集めてある」

「ははは！　そうですかっ！！　いやあ……嬉しいものですねえ……
…ククク」

明らかにその表情は悪党そのもの。レイもチラッとリディアの顔を見て、思わず苦言を呈する。

「師匠。物凄い人の悪い顔をしていますよ」

「ククク……いや、これからのことを考えるとついな」

「師匠は色々と向いていると思いますよ。教官にはびっくりかとお！　レイも分かっているじゃないか？」

ワシワシとレイの頭を撫でるリディアだが、それは間違いなく皮肉で言ったもの。しかし、彼女がそれに気がつくことはなかった。

「本来ならば君のような階級では教官などはする必要はないのだが、今回は特例だ。是非、訓練校の人間を導いてほしい。エインズワースなら私はやれると思っているよ」

「ははは！　当然ですね！　何せ私は天才ですから！！」

と、笑いながらそういうリディアだがその評価は誰もが認めるところだ。すでに史上最年少で七大魔術師に至った天才。歴史の中でも彼女の右に出る魔術師はいないと評されているほどだ。

「では、来週から始めるための準備をしますので。これで失礼します」

「ああ。頑張ってくれたまえ」

「もちろんです」

ニヤツと笑いながらリディアたちはその場所を後にするのだった。

「よし。今日は外食でもするか！ 祝いだな！」

「お金は大丈夫なんですか？ 最近はちよつと外食が多いので心配なのですが……」

「おいおい。お前は私の母親か？ そんなことは心配しなくて、子どもは美味しいものでも食べておけばいいんだよっ！」

「はあ……そうですか」

リディアの金遣いは決して荒いわけではないが、レイは色々と心配していた。時折、彼女は骨董品や美術品。それに珍しい食べ物などに莫大な金を消費することがあるからだ。

もちろん破産することはないのだろうが、レイは少しだけ思うところがあるようだった。リディアが自由奔放すぎるので、それを見て育ったレイは反面教師なのか年齢以上に大人びている。

それを危惧しているアビーだったが、もはやこれはどうしようもない……ということすでに彼女は諦めてしまっている。それにレイがいれば大丈夫だろうと思っっているほどだ。

「よし。今日は肉だな！ 肉に決定だ！」

「分かりました」

ということで食事は高級レストランでステーキを食べることに決定した。彼女はここの常連かつ、七大魔術師として顔も知られているということもありもはやVIP待遇と言っていいほどの接客を受けている。

そこの店員ともすでに顔馴染みである。

そして最高ランクのステーキを注文すると、ナイフとフォークを使つてそれを食べ始める二人。

「師匠。あのトレーニングですが、割と急いで提案しましたよね。

何かあるんですか？」

「ん？ ああ……そうだな。レイには言っておくか」

食べる手を一旦留めると、ナプキンで口元を綺麗に拭う。

リディアは先ほどとは打って変わって真剣な目つきになると、その想いを吐露する。

「最近、紛争が多いのは知っているだろう？」

「そうですね。近いうちに魔術を使用した大規模な戦争が起きるかもしれない、と」

「そうだ。王国軍は魔術先進国ということもあって、優秀な人材が多い。だがまだ足りない。最前線で実戦を積んでいる私たちだからこそ分かることだが、根本的に教育を変え必要があると思った。

戦場で生き残るためには、魔術だけでは足りないからな」
「なるほど……」

何も彼女はただの思いつきでエインズワース式ブートキャンプを提案したわけではなかった。

しっかりとした理由があり、そのために彼女は計画を進めていたのだ。

「レイ。お前にも一つ言っておこう」

「为什么呢うか」

リディアは一息置くと、静謐な雰囲気を纏いながら冷然と告げる。

「才能には、それ相応の責任が伴う」

その言葉を聞いて、レイはまだ実感が湧かなかった。

「責任、ですか」

「そうだ。才能とは無遠慮に振るい、浪費していいものではない。才能があるからこそ献身的に努力を重ね、それを活かすために努力が必要がある。私もそれに従って生きている」

「……師匠はやはり、素晴らしいお人ですね」

「いや、そんなものじゃないさ。私はただ、自分の いやここから先は今のお前に言うことじゃないな」

ふう、と声を漏らす。

時折真面目な話をするときのリディアの雰囲気は、どこか危うさをレイは覚えている。まるで同じ世界に立っていないような感覚。浮世離れしているといえればそれまでだが、彼はリディアに何かを感じ取っていた。

「ともかく、お前もまた才能のある人間の一人だ。私の弟子だから当然だが、きつと将来は七大魔術師になるだけの能力を身につけるだろう。だからこそ、その責任を忘れてはならない。私たちの力はそれだけの重みがあるということだ」

「はい。胸に留めておきます」

「おう。じゃ、食べるか。早くしないと冷めてしまうからな」

「はい」

そうしてその後は、他愛のない話をしながら二人は食事を楽しむのだった。

第276話 エインズワース式ブートキャンプ（後書き）

私のTwitterでは既に言ったのですが（フォローよろしくです！）、氷剣五章かなり長くなるので、どこかの段階で毎日更新かつ1日2、3話更新で一気に終了させる予定です。隔日更新だともまだ時間かかりそうなので。10月半ばには六章の二年生編に入りたいところ……！

ということで、改めてよろしくです！

第277話 訓練開始

早朝の四時。

訓練校の人間の全員ではなく、その中でも選りすぐりのメンバーだけが今回のエインズワース式ブートキャンプに参加することになった。といっても、彼らはまだその名称を知らない。

知っているのは、史上最年少で七大魔術師に至った天才　リデ
イア＝エインズワース自らが教官として訓練をするということだけ。
彼らは思った。

自分たちは選ばれた存在であり、栄光の道を進んでいくのだと。
だからこそ、こうした英才教育を受けることができるのだと……そ
う思い込んでいた。

緊張感が漂う中、演習場に整列しているメンバーたち。その数は
二十人。たった二十人が今回のエインズワース式ブートキャンプに
抜擢された。

筋骨隆々な男だけではなく、全員がそれなりの体躯を有している。
数は少ないが女性もあり、彼女たちもまたかなりの筋肉を有してい
る。今回の件でリディアが選んだのは過酷な訓練にも耐えることが
できそうな人間だった。

エインズワース式ブートキャンプの実態を知らない彼、彼女らは

その先に地獄が待っていることを……まだ知らない。

「……来た」

「あれが……」

「ああ。史上最年少で七大魔術師にたどり着いた、天才だ……」

尊敬の眼差しでリディアの姿を見つめる。

その艶やかな麗しい金色の髪を揺らしながら、彼女はその前に姿を現したのだが……。

「子ども？」

「え？」

「大尉の子どもなのか？」

「いやそんなはずは……」

ざわめきがまるで水面の波紋のように広がっていく。

彼らが言及しているのは、レイのことだった。彼は特注の小さな訓練着　キャロルが作ったもの　を着用してキリツとした表情をしている。

「まず先に、一つ言っておこう」

凜とした声が通る。

リディアのその声を聞いて、全員がしんと静まる。

「私のまあ……親戚のような子どもだ。彼も今回の訓練に参加する。よろしくな」

あの子どもが今回の訓練に参加する……？

全員が思う。それは聞き間違いでは無いだろうか、と。しかし彼は真顔で丁寧に一礼をすると、列の一番後ろに何食わぬ顔で待機する。

その様子を見て怪訝な表情を浮かべるものが多いが、あまりのことに混乱してしまい言及する者は一人もいなかった。

「では諸君。私自らが、この二ヶ月という短い期間になるが訓練をみることにした。よろしく頼む。それと、返事はレンジャーだ。いいな？」

『レンジャー！！』

野太い声が響き渡る。それを聞いて、リディアはニヤツと笑いを浮かべる。

「さて訓練の概要だ。今回の訓練の名称は、私が立案したこともありエインズワース式ブートキャンプという。新兵訓練のために考案したものだが、まずは試してみようと思つてな。諸君等はその実験台になる。ま、ある程度の覚悟をしておいてくれ」

ゴクリと喉を鳴らす。

エインズワース式ブートキャンプ。

その名称を聞いて思つのはやはり、自分たちは選ばれた存在であるということだ。それをこなすことができれば、スペシャルな存在になることができる。

きつと自分のキャリアは輝かしいものになると思い、ある程度の覚悟という言葉の意味を彼らは理解していなかった。

そしてついに 地獄が幕を開けることになった。

「どうした、どうしたあああああッ！！ お前たちはそんなものかあああああああああッ！！」

リディアの怒号が響き渡る。ついに始まったエインズワース式ブートキャンプ。それは今までの訓練校のメニューとは一線を画するものだった。

まず課された内容はこの一ヶ月は魔術の使用は禁止。それは内部インサイドコードを含めてだ。その言葉を聞いて、彼らには動揺が広がる。

従来の訓練では内部インサイドコードを使用してより高度なトレーニングをしていたというのに、それをすると言われてたのだ。動揺するものも無理はないだろう。

そして、リディアはストップウォッチを取り出すと彼らにこう告げた。

「いいか。全力でこのトラックを三十秒でいい、本気で走れ。その後は十五秒だけ歩いていい。そして再び三十秒の全力疾走だ。これをワンセットと考えて、まずは十セット行っ。理解したな？」

『レンジャー！』

聞いたことのない訓練内容だった。もっぱら体力トレーニングに

関しては長距離走がメインだったからだ。それに、途中で休憩が挟まるなどこれはもしや楽なのでは……？

と思うのはリディアの思惑の一つ。

すでに彼女は自分の体験に加えて、レイにも課しているのだが……この高強度インターバルトレーニングというものはかなりキツイ。

彼女は長年考えていた。より効率的にトレーニングをするためには、どうすればいいのか。

そこでたどり着いたのがこれだった。この高強度インターバルトレーニングを組み込んだものこそが、エインズワース式ブートキャンプ。

まずは一ヶ月で徹底して身体強化を図る。その後は魔術強化を同様の手法で行っていく。すでに軍の上層部にもデータとして提出しており、効果があると認められている。

これはいわば、汎用性があるのかという実験でもあったのだ。

「はあ……はあ……はあ……おえっ……死ぬ……」

「やばい……まじでつらい……」

「私、もうダメかも……」

わずかな休憩時間。そこで歩いて体力の回復を図っているが、全員がその辛さを実感しているところだった。その表情はすでに完全に死んでいる者もいた。

「よし。次行くぞーっ！ 手を抜いたら罰としてさらに追加して

いくからなー！　ぶっ倒れてもいいから、本気でやれよーっ！」

その声を聞いて、彼らは知った。

ああ……自分たちがやってきたのは地獄なのだと。

そんな中たった一人の少年は悠然と歩みを進めていた。呼吸は乱しているようだが、それほど辛そうには見えない。大人たちに混ざっているにもかかわらず、その風格。まるでこれがいつものトレーニングと言わんばかりの表情だ。

それに加えて特筆すべきは、彼が毎回先頭を走っているのだ。大人としても子どもに負けるわけにはいかない、という心理でも働いているのかレイの存在はいい具合に刺激になっていた。

「よし。よし。全員無事に終わったな。では水分補給をしろ。十分後に次のトレーニングに移行するからな」

リディアの目の前にはまるで死体の山が広がっているようだった。全員が激しく呼吸を乱して、その場に伏せている。

だというのに次のトレーニングがある？　その事実から逃げ出したい者はほとんど全員と言ってもいいだろう。

リディアといえばカルテをボードに挟んで全員のタイムなどのデータを取っていた。彼女は理論的に考える人間であり、まずは何よりもデータを重視する。今回のこれも、同様にタイムを取って全員の体力をデータとして保存するつもりだ。

そして彼女の隣にはレイがその小さな足で近寄ってくる。

「レイ。お前はまだやれるな」

「は。もちろんです」

「じゃあ、こいつらが休んでいる間にもう数セット行くか」

「了解いたしました」

目の前でありえない光景が広がっている。大の大人が根をあげているというのに、小さな子どもはさらにトレーニングを続けているのだ。

「はあ……はあ……おい、あの子どもはなんなんだ？」

「知らないわよ……はあ……はあ……本当に大尉の子どもなんじゃないの？」

「はあ……はあ……だよなあ、でもそう考えるには若すぎるし……」

「それにしても……はあ……はあ、まだできるとか化物すぎるだろう」

どうしてこんなにも彼らが疲れているのか。それはやはり、常日頃から魔術に頼り切って訓練をしているから。素の身体能力が低下しているわけではないが、伸び代はまだまだ残っているのだ。

その一方でレイはリディアの教育を三年前から受けている。すぐに魔術の訓練に移行せずに、徹底してその肉体を鍛えられた。その教育もあつて、彼の身体能力はすでに軍人でさえも凌駕するものになっていた。

といつてもそれはレイの規格外の才能あつてこそではあるが。

「よし。レイ、そこまでいい」

「は。了解いたしました」

そうして、レイは軽く汗を拭いながら呼吸を整える。

「さて。次のトレーニングに移行しよう。同じようにインターバルトレーニングになる。心してかれよ」

『……』

「返事はどうしたッ！……！」

『れ、レンジャー……！……！』

まだ地獄は始まったばかりである　。

第278話 規格外の少年

レイはエインズワース式ブートキャンプを始めたことを機に、その才能が開花することになった。今まではそこまで本気で教育をすることはなかったのだが、彼の才能の片鱗を見抜いたリディアはその才能を育てることにした。

現在は身体能力強化週間が終了した当日の夜。自宅に戻ってきた二人は、夕食の準備をしていた。といってもリディアは食器を並べるだけで、調理はレイがするのだが。

「師匠。今日もお疲れ様でした。何か食べたいものはありますか？」
「そうだな。今日はオムライスがいいな。レイのやつは卵がとろとろで美味いからなあ」

「分かりました」

そう言っただけでレイは手早く調理を始める。今日も今日とて厳しい訓練があったのだが、レイはすでにすっかりと慣れてしまったのか、かなり元気な様子だった。それはこうして料理をしていることから明らかだろう。

エインズワース式ブートキャンプに取り組んでいた他のメンバーといえば、すでに訓練校の寮に戻って動けない程になっている。これはリディアが元々予想していたのだが、この一ヶ月で脱走する人間が出ていた。

それはリディアとレイが協力して、無事に捕獲。厳しい罰則を科

すかと思いきや、彼女は真剣に話を聞いた。どのような点で辛いのか、これからどうしたいのか。

彼女は選択肢として、ここで離脱することも許可していた。訓練中は苛烈な姿を見せているが、彼女は一人一人に真摯に向き合っている。

きっと今までリディアならば問答無用で切り捨てていただろう。そんな彼女がどうして、変わったのか。

それはやはり。

「レイ。すまないな、お前の方が疲れているだろうに」

「いえ。師匠が料理をしたら、きっと酷いことになりますから」

「あ？ それはどういう意味だ……と言いたいところだが事実だからな。その失言は許してやろう」

「あはは……ありがとうございます」

レイは内心で思う。事実を述べてしまったが、師匠が怒ることがなくてよかった……と。

レイとリディアの関係はまさに師弟と形容すべきものになっていた。親子でもなく、恋人でもない。その特殊な関係性は、師弟という他ないだろう。

「最近はどうだ？ 訓練も慣れてきたか？」

「そうですね」

「そうか……」

そしてリディアは顎に手を当てて、思索に耽る。レイは気がつい

ていない。自分自身のその異質な才能に。

周りの軍人たちよりも優れた身体能力に、魔術領域だけでいえばすでにリディアに迫っているほどだ。

彼自身はそれほど自分の能力に関心がないのか、ただリディアの言う通りにこなしているだけだ。

だが軍の上層部を含めてその才能には気がついている。上からは次の七大魔術師候補として育てるように言われているのだが、彼女としてはその才能に吞まれないようにするために教育している側面の方が強かった。

「師匠できましたよ」

「おお！ いい匂いだな！」

テーブルに二人分のオムライスを置くレイ。片方はかなりの大盛りで、もう片方は普通の量である。もちろん大盛りの方はリディアのものだ。

「では、いただきます」

「はい。召し上がれ」

彼女はニコニコと笑いながら食事をとる。そんな様子を見て、レイもまた少しだけ笑みを浮かべる。

この生活もすっかりと慣れてしまった。けれど、このささやかな時間だけはいつまでたってもお互いにとってかけがえのないものだった。

「うん！ いつも通り美味しいな！」

「ありがとうございます。師匠の好みは完全に把握していますからね」

「ふふ。そうだな。それにしても、もう三年も経つのか。時間が経つのはあつという間だな」

「そうですね。自分もそう思います」

そして二人は、その時間を享受するのだった。

「よしっ！ 今回は終わった者から上がっていいぞー！」

リディアは演習場で声をかける。あれから訓練はついに魔術の方へと移行した。今まで二十人ほどいた訓練兵は誰も欠けることなく、リディアの過酷な訓練についてきている。

初めは彼女に恐怖をする人間が多かった。

史上最年少で七大魔術師に至った天才。それに加えて、彼女の性格は色々と難があるのは有名な話だ。初めはリディアの訓練を受けることができて喜んでいたが、蓋を開けてみると今まで受けてきたの中でも最も過酷な訓練が待ち受けていた。

それに根を上げるのも当然だった。

だが彼女の真摯な姿勢が訓練兵たちも届いているのか、まだ離脱する者は一人としていなかった。

「う……ぐうつ」

「む、難しい……」

「この細さを保つのが……っ！」

演習で現在行っているのは、細い氷柱を一定の高さまで整形するという訓練だった。

これに関してはより緻密なコード構成が必要となる。リディアは大雑把な性格から魔術も豪快なものを大胆に使うと思われるが、実際は違う。魔術の基礎は、コード構築。それをより緻密にコントロールできることが、魔術全体の向上に繋がるのだ。

「レイ。終わったのか？」

「は。ただいま終了いたしました」

訓練の間では二人の関係は師弟ではなく、教官と訓練兵である。レイは特例で今回の訓練に参加することを認められている。

「……問題ないな」

じつとレイが作りあげた氷柱をみる。そこには、かなり細く仕上がった氷柱が、天高くそびえ立っていた。

「まじかよ……」

「本当に彼は何者なのかしら……」

「ああ。まじでやばいよな」

と、他の人間の注意が逸れているのでリディアは大声を上げて注意する。

「おいッ！ 自分の作業に集中しろッ！」
『レンジャーッ！』

そうして注意を促すと、リディアは改めてレイと向き合う。

「レイ。もう少し難易度を上げるが、いけるか？」
「もちろんです」

リディアが課した課題は、このようなものだった。氷柱の細さはさらに、鋭く。また高さは先ほどの倍。本来ならば、上位の魔術師しかできないような課題だった。

そしてリディアは片手をスツと振るうと、お手本となる氷柱をその場に成形する。

「こんな感じだ」

「……凄まじいですね」

「まあ、私レベルになるとこの程度は朝飯前だ。今日中にできる必要はない。しっかりと取り組むといい」

「分かりました」

コクリと頷く。レイとしても、流石にこのレベルの氷柱を一瞬で成形することはまだできないので、彼女のその技量にただただ驚くばかりだった。

「おい。調子はどうだ？」

「えっと……途中で折れてしまうことが多い」

「それはだな」

レイにはかなり高難度の課題を課したので、リディアはとりあえずは他に手こずっている訓練兵のもとに訪れて指導に入る。

全員がかなり苦戦しているようなので、今回の訓練も時間がかかりそうだな……そうリディアが思っていると、レイの目の前にはリディアが指定したものと全く同じ氷柱が立っていた。

「……レイ。今の短時間でできたのか？」

「いえ。少し時間がかかってしまいました。次の課題は、どうしましょうか？」

「……」

顎に手を当てて、考え込む。

なんだこの魔術適性は……。これではまるで天才というよりも……。

その先の言葉を敢えて考えないようにするが、やはり思ってしまう。その卓越した学習能力に、異常なまでの魔術適性。

これではまるで　化け物ではないかと。

その実力はすでにリディアにかなり迫っていると言ってもいいだろう。だがこの規格外の才能を、ただの天才と言ってしまってもいいのか。

思っつのは、あの時のアビーの言葉だった。

曰く、レイの出身である村は神を下そうとしていた……とか。

まさかレイはその結果に生まれた存在だともいうのか？

「師匠。どうかしましたか？」

「いや……なんでもない。今日は上がっていい。私は最後まで訓練に残る」

「分かりました。先に家に戻って食事の準備をしておきます」

「あ、ああ……」

敬礼をすると、レイは去っていった。リディアは去り際、その背中をじっと見つめるのだった。まるで、異質な存在をみるかのよう

第279話 七賢人

アーノルド王国が西の大国とすれば、東の大国といえはエイウェル帝国である。世界の東を実質的に支配している巨大な国であり、その魔術の台頭はアーノルド王国に劣らないほどである。

だが、エイウェル帝国には常に黒い噂が付き纏う。

魔術による人体実験。その他には、魔術を殺人の道具として高めている集団がいる……など。そして実際には、その噂は真実ではないが限りなく近いのは間違いないかった。

エイウェル帝国、帝都。そこにそびえ立つ城の地下にはある集団が集まっていた。そしてその中でも一際目立つ一人の男性がいた。

艶やかな真っ黒な髪を後ろで一つにまとめ、それを前に流している。男性にしては髪は長く、一見すれば女性にも見える容姿。中性的ではあるが、そのスーツの上からでも確認できる筋肉を見れば男性と理解できる。

「さて、集まってくれたな諸君」

円卓に着席すると、男性が凜とした澄んだ声を響かせる。人工的な光に照らされた地下空間。集まった人間は、全てで六人。

ここで彼らは、一体何を話すというのか。

「まずは現状の報告だ。現在、戦火は確実に広がっている。だが問題は……王国に生まれた特殊部隊だ。名称は アストラ 特殊選抜部隊。その中にあのリディア・エインズワースがいる」

その言葉を聞いた瞬間、髪を左右にまとめている小さな少女が口を開いた。その髪の色は金色に染まっており、キラキラと光を反射していた。

「殺せばいいだけでしょ？」

「フィア。君の言う通りだ。計画の支障になる連中は殺してしまえばいい。それこそが、確実なのだから。だがリディア・エインズワースは覚醒者の一人だ。殺すのは限りなく難しいだろう」

「……そうなの？」

「すでに資料を配布しているはずだが」

「ごめん、アインス。読んでない」

と、サラツと言うのでアインスと呼ばれている彼は少しだけ嘆息を漏らす。

「はあ……ま、お前のそれは美德でもある。後で私が詳しく共有しておこう」

「ありがとう」

そうしてアインスは一息つくと、改めて全員に向かって現状を説明する。

「話を戻そう。今まで言ってきたが、今回の計画の最大の支障になるのはアーノルド王国だ。そこで相手側も理解しているのか、特殊選抜部隊アストラという組織を作り上げた。少数精鋭。中でも、王国の中でも選りすぐりのメンバーが揃っている。正直言って、リディア・エ

インズワース以外は雑魚だと言いたいが……油断はできないだろう」

すでに特殊選抜部隊のことは調べ上げていた。アストラル特殊選抜部隊の存在は王国内でも公になっていないのだが、彼たちはその情報を確実に収集している。

目下の敵はリディアと語るが、その真の狙いは決して彼女ではない。

「やつはどくなっているんだ？　どうしてこちらで回収できてねえんだ？」

乱雑な口調で問い詰める男性。刈り上げた赤い短髪に、横柄な態度。だがそれを指摘するものは一人としていない。

「ドライ。その件は前も言ったが……タイミングが悪いとしか言いようがなかった。あの村での儀式は、こちらでも把握できていなかった」

その男性はアインスにドライと呼ばれているようだった。

「は。それで、三年も経っているってか？」

「そうだ。だが心配はない。彼の教育はどうやら、リディア「エインズワースが行っているらしい。彼女もまた、彼の特異性に気がついているのだろう」

「なるほど、な。で、育てたところを奪う……ってか？」

「生死は重要ではないからな。必要なのは彼の魂だ」

真剣な口調でそう語り続ける。

彼、というのは一体誰を指しているのか。それは他でもないレイのことだった。レイという少年の出自。リディアたちはまだその真相に辿りついていないが、すでにエイウェル帝国側は把握していた。

彼の存在こそが、世界に变革を齎^{もたら}すものであると。

「それでー？ これからどうするのー？」

わずかな静寂を切り裂くようにして、発されたその声。女性のものであったが、どこか気怠いような声音である。そんな彼女は爪先を丁寧にヤスリで研いでいた。今までの話も、話半分に聞いているようだ。

「ツヴァイの指摘ももっともだが、まずは戦火を広めることに努めるべきだろう。レイはまだ育つのに時間がかかる」

「果実が熟れたところで、奪い取るってわけ？」

「その通りだ」

「ふーん。ま、あたしは今後もこの楽な生活を送れるならどうでもいいけどねー」

「そのためにも彼の存在はどうにかするべきだ」

「はいはい。協力はしますよー！」

オレンジ色の髪を軽く後ろに流すと、彼女はそれ以降は関心を示さなくなってしまった。

そうしてアインスは再び話題を別のものに変える。

「さて、改めてまずはあの村を詳しく調査すべきだろう」

「そのことですが、あの情報は確定なのでしょうか？」

メガネをかけた利発的な男性が口を開いた。

「ゼクス。その件はすでに共有しているはずだが？」

「しかし、百聞は一見に如かず。この目で見るまでは、信じることはできません。何事も全て自分の経験を優先しているのです」

「では後日、視察に向かうといい。軍の方にはそう伝えておく」

「助かります。しかし、本当に彼が零番目の存在なのでしょうか」

と、再び疑問を呈するゼクス。それに対して、アインスはまるで虚空を見つめているかのような瞳で答える。

「こればかりは、感覚的な問題だ。しかし間違いない。私の本能がそう告げている。彼こそがあの世界からの終着点であると……」

その言葉を聞いて、それ以上に言及するものはいなかった。ここにいる六人は、すでに気がついていていいる。

レイという少年の存在の異質さに。まだ出会ったことのない存在ではあるが、ここにいる六人は確かに彼と繋がっているのだから。

「それでは本日の会議はここまでにしておく。軍の方には私から今後の展望を伝えておこう」

立ち上がる。

そしてその場にいた六人の人間たちは、地下空間から出ていく。

その中で最後まで残っていたのは、アインスだった。結んでいる髪を解くと、グツと背もたれに体重を預ける。

パラパラと長い髪の毛が微かに舞う。

それを一気に掻き上げると、彼はふと声を漏らす。

「ついにここまできた……ついに、だ」

それは宿願。

今まで長年待ち望んでいた光景。それがついに目の前までやってきていたのだ。先ほどの会議では興奮を抑えていたが、彼は一人になった今だからこそ笑みを浮かべる。

それは決して何かを楽しみにしているような純粹な笑みでは無い。

自身の欲望が叶うという邪悪な笑み。もつとも、本人はそれを決して邪悪などとは思っていないのだが。

エイウェル帝国の重鎮にまで上り詰め、軍の中でもトップクラスのポストに位置している。アーノルド王国などとは違い、彼らには明確な目標があった。

それはこの世界を統べること。

世界全てを支配してこそ、この帝国は帝国たり得るのだと。そのためには手段など選んではいけない。たとえどれほどの人間が犠牲になろうとも、どれほどの血が流れようとも、関係などない。

全ては世界を手中に治めるために。

「ああ、零^{レイ}。君に会えるのを、楽しみにしているよ」

エイウェル帝国の中にある組織　七賢人^{セブンセイジ}。その頂点に君臨する
アインスは、まるで恋人の名前を呼ぶようにしてレイの名前を呟く
のだった。

第279話 七賢人（後書き）

物語も少しずつ核心に迫りつつあります。是非、お楽しみください！

最後にお知らせになります。氷剣の2巻ですが、年内にはお届けできそうです。また、現在書籍版第1巻が発売中ですので、まだ購入していない方はよろしく願いますー！ このページ下部より書籍版の情報は見れますので。

第280話 進撃のキャロル

キャロルⅡ キャロライン。

彼女を一言で説明するならば、変人という言葉に尽きるだろう。美貌はかなりのものであり、化粧でそれが引き立てられているものがあるが彼女は元々の容姿が整っている。

大きく開いた両目に加えて、高い鼻に厚みのある唇。それをキャロルの極上の化粧によって、魅力はさらに高まる。プロポーションも抜群であり、溢れんばかりの双丘に加えて、腰は綺麗に締まっている。

一見すれば絶世の美女のようにも思えるが、やはり問題なのはその性格だった。

常にマイペースで、言動に難あり。

そのため異性にはモテるものの、その性格から敬遠する者は多かった。しかしその美貌に惹かれる人間も少なからず存在している。

「キャロルちゃん。どう？ 俺たちと食事に行かない？」

「そぞ。どう？ 奢るよ」

基地内でキャロルは二人の男性に話しかけられる。軍の中ではあるが、やはりそこには男性と女性がいるということで交際をしている

る軍人はもちろんいる。

そして、ナンパまがいのようなことをする輩も。

キャロルはじつと二人の男性を見つめる。軍人ということでは鍛えているので悪くはない。それに顔つきも、ナンパをするくらいには整っている。おそらくは自分に自信があるのだろう。

冷静に相手のことを分析しながらも、キャロルの視線は厳しいものだった。

「興味ないの。ごめんね」

と、踵を返してその誘いを断る。しかし、相手の方も引くに引けないのかキャロルの肩を掴もうとするが。

「おい。ちょっと待て」

そう言いかけた瞬間。キャロルはその男の手首を掴むと、そのまま地面に叩きつけたのだ。手加減はしているが、相手はいきなりの行動に面食らってしまう。

「レディに乱暴しちゃダメだよ?」

妖艶に微笑むが、その雰囲気はあまりにも危うい。普段は明るいキャロルではあるが、非情な面も兼ね備えており興味の無い相手には容赦がない。

「お、おい行こうぜ」

「あ、ああ……」

二人はまるで異質なものを見るような目つきをしながら、この場から去っていく。一方のキャロルといえば、鼻歌を歌いながらあることを考えていた。

「ふふ。レイちゃん、今日は一人なんだよねえ。うふ。ふふふ……」

そう。今日はリディアもアビーも別件で任務が入っており、レイは自宅に一人という情報を仕入れていた。すでに三年前とは違って、レイは一人でいることには慣れている。

実際にリディアがいない日は今までも幾度となくあり、普通に一人で過ごすことに慣れてしまっている。

そのためキャロルがレイのもとに向かう必要はないだが、彼女にはある計画があった。

それは　レイの童貞はじめてをもらうこと。

最近は成長期なのかさらに男らしくなって来ている。魔術師としての適性が高いことも相まって、レイは早熟だった。徐々に変化していく精悍な顔つきにキャロルは惹かれていた。

元々は母性のようなものが芽生えていたのだが、それが最近行き過ぎてしまい……ついにレイの体を求めるようになってしまっていた。

軽そうに見えるが、実際は身持ちの固いキャロル。そんな彼女がレイを襲うようになるまで、そう時間は掛からなかった。

そうしてついに、今晚。その作戦が実行されようとしていた。

「レイちゃん。いる？」

ドアを軽くノックする。すると、中からレイが出て来たが……キヤロルと分かった途端に苦虫を噛み潰したような顔つきになる。

「げ……キヤロル……」

明らかにキヤロルの来訪を嫌がっている様子。ドアを開けたのだが、レイはそれを後ろに戻してわずかな隙間からキヤロルのことを見つめる。

「何のようだ？」

「一緒に晩ご飯でもどうかなーって！ 今日は一人でしょー！」

「そうだが……」

「ねね。入ってもいい？」

「……まあ、いいが」

特に他意はないと思ったのか、レイはすんなりとキヤロルを室内に入れてしまう。そこそが彼のトラウマが植え付けられる出来事の始まりだとも知らずに。

「今日はキヤロキヤロが作ってあげるねー！」

「俺も手伝おうか？」

「うっん。レイちゃんはいつもリディアちゃんのお世話で大変ですよ。こんな時くらいは頼ってよっ！」

「そうか。助かる」

「うんうん！」

微かに浮かべるレイの笑み。それを見て、キャロルの内心は色々
と大変なことになっていた。

もうつ！ レイちゃんつてば可愛すぎっ！ はあ……はあ……
…今日こそは、今晚こそは……はあ……はあ……はじめてレイちゃんの童貞
をつっ！

すでに覚悟は決まっているようだった。脳内ではレイとのピンク
な妄想で満たされているのだが、それを欠けらも出さずにキャロル
は手早く調理を進めていく。

現在作っているのは、ハンバーグと付け合わせだった。それにコ
ーンスープなども用意している。キャロルはレイに料理を教えてい
たこともあって、かなり腕が立つ。

そのような背景もあってレイは素直にキャロルに任せることにし
ていた。

「……」

チラッと台所からレイの様子を伺う。彼はソファ―に座って読書
をしていた。

とても様になっており、キャロルの心臓はさらに高まるばかりだ
った。

恋をしているわけではないが、この破裂しそうな愛おしい感情を
収めるにはもう身体を重ねるしかない。きっとレイも受け入れてく

れるだろうと、キャロルは勝手に思っていた。

「ん？ キャロル。今日はどこか出かけていたのか？」

「え、どうして？」

「いつもより綺麗だからな。髪の毛には艶があるし、それに香水もいつもとは別のものをつけているだろう？」

「ッ！」

ギュツと胸を押さえつける。もちろんレイが指摘した外見的なものだけではなく、体は隅々まで洗って来ているし、下着は今日のために用意した真っ赤な勝負下着をつけている。

見られて困らないようにしていたが、こうして指摘されるとは思っていなかった。そんな些細なことではあるが、何よりも嬉しかった。

それはレイがいつも、キャロルのことを見ているという証拠に他ならないのからだ。

といつてもそれはリディアの教育もあるだが、天性のたらしであるレイだからこそその自然と出る言葉でもあった。

「え、えへへ？ 分かる？」

「ああ。それで、何かあったのか？」

作った料理を並べていきながら、二人は会話を続ける。キャロルはいつも以上にニコニコと笑っていた。

そして、レイの質問に対してはぐらかして答える。

「うん。厳密にはこれからって感じかな？」

「夜に予定でもあるのか？」

「うんっ！」

「そうか」

レイはそれを聞いて、どうやら早く帰ってくれそうだなと喜んで
いた。それが全くの勘違いだとも知らずに……。

そろそろ就寝する時間になったということで、レイは自室のベッ
ドで横になる。すでにキャロルは帰宅しており、後は寝るだけだっ
た。

ただレイは疑問に思っていたのだが、妙にキャロルの目がギラギ
ラと輝いているような気がしたのだ。それはまるで猛禽類もっぎんるいが如く。

そしてキャロルは改めて、「心の準備をしてくるねっ！」と言っ
て去っていった。疑問には思ったが特に気にすることもないだろう
と思っまぶたて、レイは目蓋をそつと下ろす。

寝つきは良い方なので、レイはすぐに意識を手放した。

「……ちゃん。レイちゃん……」

「ん？」

誰かが呼んでいるような声がするので、レイは目を開ける。する
と彼の上には……キャロルが乗り掛かっていた。

「……キャロル？ どうしてこんな時間に……？」

まだ覚醒しない意識のまま、ボソリと呟く。そしてレイはキャロルの外見や様子がおかしいことに気がつく。

裸とまではいかないが、完全にそれは下着が透けていた。ネグリジェという名前とは知らないが、妙な色気があるのは流石に彼も理解できる。それに呼吸を乱しているのだ。

体調でもおかしいのかと思って、レイは心配そうに声をかけた。

「どうした？ 体調でも悪いのか？」

「レイちゃん……」

さらに体重をかけてくる。そしてその豊満な双丘がグツと体に押しつけられる。

爛々とまるで光り輝いてるような瞳。今まで幾度となく見て来たが、今に限っては完全にそれは……捕食者の目をしていた。

「キャ、キャロル……？ ど、どうしたんだ？」

ずるずると後ろに這いずっていくレイだが、ベッドということもあって逃げることは許されない。そして気がつけばレイはがっしりと身体を押さえ込まれていた。

恐怖。それも、圧倒的な。

今までは恐怖心などとは無縁だった。過去の記憶は薄れ、今の生活で何かを恐れることなどない。しかし、キャロルのその吸い込まれそうな瞳を見ていると……彼は背筋が凍りつくのを感じる。

性に関してまだしっかりと理解している年頃ではないが、直感的にこれは不味いことであると分かっていた。

しかし、今は助けを求めようにもリディアはいない。

「レイちゃん……いいよね？」

「な、何がだ……？」

敢えて明確にしないので、レイは聞いてみることにした。一体何をしようと言うのか。

キャロルは妖艶な微笑みを浮かべた。

あまりにも恍惚とした表情であり、頬には朱色が差していた。部屋の明かりも気がつけば、なぜか桃色のものになっていた。

そして、レイの右手に自分の右手を指までしっかりと絡めるとキャロルはこう言った。

「私と、シよ？」

それは今まで見たことのないキャロルの表情だった。ぺろりと唇を舐めるその姿はまさにサキュバスと形容してもおかしくはないだろう。

それに加えて、香水の匂いとキャロル自身のフェロモンの匂いが混ざり合って、それがレイの鼻腔を抜けていく。

何だかぼーっとしてしまうが、ここで意識を手放すのはダメだと分かっているレイはキャロルと真剣に向き合う。

「ま、待て……何をッ!? 何をするんだ!？」

はらりと肩紐が落ちる。それに伴って、キャロルの豊満な胸の上半分が見えてしまう。彼女はさらにグイッと近寄ると、ボソリと呟いた。

「大丈夫だよ。優しくするから。ね、レイちゃん……二人でいっぱい気持ちよくなるうね?」

「う、うわあああああああああああああっ!!」

もはや叫ぶしかなかった。

ただただ泣き叫ぶしかないレイ。一体これから何が始まって、どうなるというのか。それは分からない。大人びている彼はではあるが、今はあまりの色香をまとっているキャロルが恐怖の塊にしか見えなかった。

そうして、ついにキャロルの唇がレイの唇と重なるうとした瞬間バンッ!! と扉が乱暴に蹴破られた。

室内に転がっていく扉。

そして、そこには金色の長髪をさらさらと流しているリディアが立っていた。

「このアホピンクッ！ ついにやりやがったなっ！！！！ 前から怪しいとは思っていたんだっ！！！」

怒髪天を突くとはまさにこのことか。

リディアの髪は比喻などではなく、溢れ出る第一質料^{フニニメデニリア}によってパラと舞い上がっていた。

「……リディアちゃん。もう、タイミング悪いようっ！ 今からが楽しみなのにさー！！ ぶんぶん！！！」

悪びれる様子もなく、キャロルはそう言った。もちろんそれに対して、リディアが怒り狂うのは当然である。

「今日こそ決着をつけてやるっ！！！」

「ぶん！ キャロキャロの実力、見せてあげるよっ！！！」

レイの部屋は戦場と化した。

その一方でレイは一緒に来ていたアビーに保護されるのだった。彼はあまりにも怖かったのか、アビーにギュッと震えながら抱きつくのだった。

「うっう……た、助けに来てくれて……ありがとうございますっ……」

「いいんだ。前々からキャロルのやつは怪しいと思っていたからな」

実は泊まりがけの任務というのは嘘だった。それはキャロルを誘き出すための罠。実際に任務はあったのだが、それをすぐに終わらせる二人はすぐに帰宅。

何とか間に合ったというのが、今回の顛末である。

「う、うう……」

「よしよし。怖かったな」

レイは涙を流していた。よほど怖かったと思い、アビーは優しくレイの頭を撫でるのだった。

そもそも、年端もいかない子どもに夜這いしようなどとはキャロルにはほとほと呆れるものだ……と思うアビー。実際には彼女もそれなりに怒ってはいたのだが、それは目の前で怒り狂うリディアを見て逆に冷めてしまう。

「よし。こんなもんだな」

決着。

クロスレンジ
超近接距離で流石にリディアに敵うわけもなく、キャロルはベッドに頭を突き刺したまま気絶していた。

足はだらしなく開いており、一見すれば奇怪な光景にしか思えない。

「レイ！ 大丈夫か！？」

「し、師匠おおおおおっ!!」

事が済んだリディアはレイの元へと駆け寄っていくと、ギュッと優しくその小さな身体を包み込む。

アビーはそんな二人の様子を黙って見守っていた。

「ぐすっ……怖かったです……キャロルに食べられるのかと思いました……」

「よしよし。大丈夫だ。私がいるからな」

「はい。ありがとうございます、師匠」

美しい師弟愛である。

だが、ここまでリディアが感情的になるのは珍しい。そう思ってアビーは尋ねてみることにした。

「なありディア。今回の件、キャロルのアホが暴走したせいだが……いつかレイもそういう時が来るだろう？ その時はどうするんだ？」

すると、キッとまるで誰かを殺しそうな目つきでリディアはこう答えた。

「レイは私が認めるやつ以外にはやらんぞッ!! 絶対にだッ!!」
「そ、そうか……」

あまりにも迫真な態度なので、アビーはそれ以上何かを言うことはなかった。

これを機にリディアの親バカはさらに加速していくことになるの
だが、それはまだ誰も知る由はない。

第281話 愛と覚悟

「レイちゃん。本当にごめんなさい」

数日後。キャロルは正式にレイに謝罪をしにきていた。部屋の修理費用も全てキャロルが負担し、今は彼の目の前で額を地面につけて謝罪をしていた。いわゆる、土下座の形である。

流石に今回の蛮行はキャロルもやり過ぎたと思ったのか、こうして誠心誠意頭を下げているようだ。

「……」

レイとしてはあの時の恐怖感は拭えていない。しかし、キャロルは苦手であっても彼女が悪い人間ではないということは理解している。

本人曰く、あまりにも愛おし過ぎて感情が暴走してしまったと。

可愛がられるのは恥ずかしい側面もあるが、嫌というわけではない。問題はその程度である。あまりにも行き過ぎるのは、レイとしても許容はできない。

彼は少しだけ思案した後、地面に額を擦り付けているキャロルを改めて見つめる。

「本当に怖かった」

「えっと……ごめんなさいっ!」

「今後はあんなことはやめるように。他人^{ひと}の気持ちも考えて欲しい」
「分かりました。はい……」

そして、レイの隣にはリディアが立っていた。まだ怒りは収まっていなかったのか、キャロルのことを睨みつけている。

「いいか。キャロル。今回は未遂、といっても私が止めたんだが……レイの寛大な対応に感謝しろ。私としてはまだ我慢ならんが、レイがもういいと言っているからな。今後は気をつけるよ? 距離感も考えろ」

「はい。分かりました。本当にすみませんでした……」

ここから数年キャロルは大人しくなるのだが、またいずれその感情が爆発してしまうことはまだ誰も予想していなかった……。

極東戦役。

ついに極東で行われている戦争がその名称で呼ばれ始めた。

もともと極東戦役は小国同士の小規模の紛争であり、大規模な戦争にまで発展することはない。それが当初のアーノルド王国や各国の見方であった。しかし、ここ最近……どうにもその紛争による死者の数が莫大に増えているという。

そこで特殊選抜部隊^{アストラル}は調査のために派遣されることになったのだ

が、そこで一つ問題が発生した。

「どういうことだ、これは？」

リディアの声が室内に響く。しかしそれはいつものような軽快な声ではない。

明らかに怒りが含まれているものだった。

「上からの命令だ。逆らうことは許されない」

ヘンリックは淡々と事実を告げる。他の隊員たちも、その様子を淡々と見つめている。

「ファールンハイト中佐のことは尊敬している。今までもずっとこの部隊を率いてくれたことには感謝している。だが、これだけは…許せるわけがないだろうッ！！」

ダンッ！　と思いきり拳を机に叩きつける。その机はリディアの拳に耐え切ることはできず、縦に大きなヒビが入ってしまう。

その言動からして彼女の怒りは相当なものだと理解できる。

リディアがどうしてこんなにも怒りを露わにしているのか。それは特殊選抜部隊アストラルに追加招集されたあるメンバーが原因だった。

「レイがこの部隊に参加するだッ！！？　ふざけるのも大概にしるッ！！」

その怒号は室内に響く。そしてそれには、キャロルもまた同意するのだった。

「そうだよッ！ レイちゃんをそんな風に利用するなんて、まるで……ッ！！」

全員が分かっていた。

まるで 初めから軍人として利用するために引き取ったかのようではないか、と。

元々才能のある少年だとは分かっていた。しかしだからこそ、その才能を軍事利用するような形になるのは許せることはできなかった。

リディアもレイを軍人にするために育ててきたわけではない。しかし、軍上層部の判断はそうもいかなかった。

「分かっていただろう。いずれはこのような日が来ると。彼の存在が上に知られており、便宜が図られていたのは当然。そんな彼を戦力として数える時は避けては通れないと」

「ッ！！」

リディアの握る拳からは血が滴っていた。あまりにも強く握りしめるため、爪が食い込んでしまったのだ。だが血を流したおかげか、彼女は少しだけ冷静になった。

「特殊選抜部隊には追加の戦力が必要だという話は前々から出ていた。しかし、基準に達する者はいなかった。そう 彼を除いて」

ヘンリックが告げる彼とはレイのことだった。

今まで沈黙を貫いていたアビーもまた、口を開いた。

「中佐。もしかして、前にレイを連れ出していたのは……」

「そうだ。彼の適性検査をしていた。基準をすべてを圧倒的に突破している。頭脳明晰、運動能力も抜群。さらにはその卓越した魔術魔術による実戦もこなすことができるだろう。そんな彼を軍が放っておくわけには、いかなかった」

その表情には悔しさが滲んでいた。ヘンリックもまたいずれこうなることは三年前から分かっていた。

その間にレイをどうかして、軍から離れるように手配したかったのだが……彼の能力はあまりにも強大過ぎた。

その才能に飲み込まれない為に教育を施してきたというのに、それはまるで初めからこうして軍のために力を搾取するだけのような形になってしまったのだ。

リディアにそんな意図はないとはいえ、彼女は心のうちに宿る葛藤に苛まれていた。

どうするべきだったのか。あのまま見捨てておくべきだったのか。

魔術適性が高いとはいえ、リディアによる教育がなければレイは巨大な才能に吞まれてしまう可能性もあった。そしてそれは同じ才能を持つリディアしか、教えることはできない。

だがリディアの近くにいるということは、いずれこのような未来もあり得たのは彼女も分かっていた。前々から別の道を模索していたが、予想よりも軍の介入が早かった。

リディアは思う。

一体、何が正解だったのか……私は……。

そんな風に考えていると、扉からノックの音が室内に響いた。

「入って構わない」

「失礼します」

そう。その場にやってきたのはレイだった。彼は特注サイズの軍服に袖を通して、真剣な表情でこの場にやってきた。

怒り狂っているリディアの雰囲気や机の惨状を見れば、何が起きているのかは聡明なレイならば理解できた。

「師匠。いえ、エインズワース大尉。これからよろしくお願いいたします」

「レイ……お前、自分が何をしているのか分かっているのかッ！？」

詰め寄る。

今までレイに厳しく指導することはあったが、それと比較すれば今のリディアはまるで憤怒の権化のようなものだった。その双眸は怒りに染まりきっている。

今回ばかりは、自制する気など毛頭ないようだ。

「分かっております」

「……分かつているのかッ!? 軍人になるという覚悟が、この部隊にしていることの重大さがッ!!!?」

「はい」

「……分かつているわけがないだろッ!!」

ダンッ、ともう一度机を叩く。今度ばかりはその机は完全に真ッ二つになってしまった。その怒りを見ても、レイは冷静だった。

「レイ……この部隊がするのは特殊工作。その中には実戦も含まれる。魔術による戦闘。相手を殺すことも任務に含まれていることがある」

「はい。すでに全ての説明は受けております。その上で自分はここに立っています」

「どうしてだッ!? お前に才能があるのは私が認めるッ! だがそれを、血で汚す必要などないんだッ! 分かつてくれ、レイ……どうか、どうか分かつてくれ……」

懇願する。

頭をずるずると下げて、レイの体に触れる。

リディアは自分の力は国防に絶対的に必要だと自覚している。おそらくは単独の魔術師としての戦力ならばすでにアーノルド王国内でも屈指。相手にもよるが、その力は一度で千人以上の敵を相手にできると評価されている。

だからこそ、彼女は自分の手を血で汚すことに躊躇いなどなかった。その流れ出る血の果てには、国の平和があるのだから。しかしそれは、自分で覚悟して選んだことだった。

レイに限っていえば、まるでそれしか選択肢がないような環境。

リディアとしてもそろそろ学院に入れて普通の学生として生活を送るべきだと思っていたのだ。学費はもちろん自分で出すし、正式に後見人になろうと……。

そう考えていた矢先に、この仕打ちだ。リディアが怒り狂うのも、無理はなかった。

「……師匠。あなたの教えは自分の中に生きています。その中でもある言葉がずっと頭に焼きついて離れません」
「……」

じつとレイを見つめる。

一方のレイはリディアと視線を合わせると話を続けた。

「結局人間は、自分で決めたことにしか従えないと」
「それは……」

その言葉はリディアが送ったものだった。誰かに何を言われようとも、何を矯正されても、最終的には自分の心に従うしかないのだと。

「自分の能力の異常さはすでに自覚しています。だからこそ、自分は恩返しをしたい。この部隊は家族のような……いえ、自分は家族だと思っています。その家族によって構成されているものが国というのならば、自分は国のために戦えます。もう、師匠の辛い姿を見るだけはできません」

「レイ……お前は」

そんなことを考えていたのか、そう思う。ずっと子どものままだと思っていた。

歳の割には聡明で魔術師としての実力は折り紙付き。それでも、子どもだと……そう思っていたというのに、今のレイの覚悟は子どもそのそれではない。

理解する。

それはきっと自分の傲慢でしかないのだと。レイがそのような環境にあったとしても、最終的に選択したのはレイなのだ。勝手に騒ぎ立てているだけと、分かってしまった。

そしてリディアは、そつと頬に触れる。

「レイ。いいんだな？」

「はい。すでに覚悟はできております」

彼女は翻るとヘンリックに告げる。

「中佐。取り乱してしまい、申し訳ありませんでした。謝罪いたします」

「いや、いいんだ。私も心苦しいことに変わりはない」

「ただ」

告げる。彼女は絶対の覚悟を心に灯して、その言葉を表に出した。

「レイの作戦参加は受諾します。きつとかなりの戦力になるでしょう。しかし、レイに過度な負担を強いることは許容できません。その場合は私が代わりに任務を果たします」

「いいだろう」

「ありがとうございます」

一礼をする。

リディアはレイと向き合う。すでに身長も伸びてきており、それほど下を見なくてもよくなっていた。改めてリディアはレイの成長を実感する。

「レイ。改めて私のもとで鍛錬に励めるか？」

「もちろんです。師匠」

「いいだろう。ここから先は本気で指導する。私のすべてをお前に教えよう」

「はい。よろしくお願いいたします」

こうしてついにレイは特殊選抜部隊アストラルの所属となる。それと同時に、世界は大きく動き始めるのだった。

運命の歯車は少しずつ加速していく。

第282話 ようこそ、女装の世界へ

レイが加入した特殊選抜部隊アストラルの戦力は大幅に上昇した。元々、軍人として教育をしていたわけではない。その教育は全て、彼の今後のためを思っ
てしてきたものだった。

しかしレイに限っていえば、おそらくは教育方針は重要ではなかったの
だろう。彼の場合は異常なまでの適応能力があった。その時の最適解を出す
のが、得意というべきだろうか。

ともかく、レイは特殊選抜部隊アストラルの任務についていくどころか、むしろ
かなりの戦力になっていた。

「エインズワース大尉。爆弾を発見しました。おそらく術式は遅延ディ
魔術が組み込まれているかと。コードも複雑に絡み合っています」

「よし。解除しろ」

「は。了解いたしました」

現在は任務の最中。王国内部で不穏な動きがあると言っ
ことで、ある貴族の屋敷を調査していたのだが、そこで爆弾を発見。なん
でもこの貴族はエイウェル帝国のスパイであり、王国の情報を密かに
流していたらしい。

そこで特殊選抜部隊アストラルが介入することになったのだが、そこはす
でもぬけの殻。唯一あるものといえば、時限爆弾だった。

それを解除するように命じるリディア。他のメンバーは別の部屋

を搜索している最中だった。

「終わりました」

「よし。回収して戻るぞ」

「は」

レイが爆弾を解除するまでにかかった時間はおよそ二十秒。すでに彼はそこに展開されていた術式を理解していた。後はそれを解くようにして、全く逆の魔術を展開すればいい。

この手の訓練を専門に受けたわけではないが、魔術が絡むのであればレイに出来ないことはない……そう言ってしまうほどには、彼の技量は熟達していた。

そうして今日もまた、無事に任務を終えるのだった。

「レイ。次の任務だが、潜入任務になる」

「は。了解いたしました」

ヘンリックの元にやってきたレイ。彼はそこで、なぜかたった一人で呼び出されていた。今までは全員で集合して、ブリーフィングをするのが当たり前だったというのに。

「さてそこで何だが……」

ヘンリックは何やら言い淀んでいる様子だった。レイは少しだけ訝しく思うが、特にそれについて言及することはなかった。

「今回の任務もまた、相手はどうやら貴族であり、王国を裏切って情報を流しているらしい。もちろん相手も狡猾であり、かなりの対策をしている。だが一点……その貴族にはある趣向がある」

「ある趣向ですか？」

「ああ。その貴族はどうやら幼い少女が好きらしい」

「はあ……？　なるほど……？」

どうやらレイは全くピンときていないようである。そもそも、少女が好きだからという意味はわかるが、それで自分がここに呼ばれた意味が分からない。

レイは誰かもしかして少女でも潜入させるのかと思っていると、全く理解できない言葉が聞こえてきた。

「そこでだ。レイに女装して潜入してほしい」

「は。って……え？」

初めはとりあえず了解の返事をしたが、理解した瞬間にポカンとした表情を浮かべる。それは無理もないことだった。

自分が女装するなど夢にも思っていないのだから。

「大丈夫だ。今回の任務に関して、すでにプロを呼んである」

「ぶ、プロ……？」

全く意味の分からない状況なので、レイはただ動揺するしかなかった。今までどんな任務も淡々とこなし、特殊選抜部隊アストラルの中でもかなりの戦力になっている彼ではあるが……今回ばかりは、流石に狼狽してしまう。

「キャロライン。入って構わない」
「はいはいはい！」

ヘンリックがその声をかけると、入ってきたのはキャロルだった。今日も今日とて、しっかりと化粧をしており髪の毛も綺麗に巻いている。

そんな彼女はなぜかいつも以上にニコニコと笑っていた。レイはそんなキャロルを見て、最悪の可能性を考えてしまう。それは以前襲われかけた時のものとは、また別の恐怖であった。

「中佐……もしかして、キャロルに女装を手伝ってもらえ……と？」
「流石はレイだ。よく分かっている」
「レイちゃん！ よろしくね！」

間髪入れずにキャロルはそう言った。その一方でレイは流れる冷や汗を止めることはできなかった。

「今回の作戦の立案はキャロラインだ。私も少し考えたが、有用と思ったので採用することにした。まずはレイが女装して侵入し、そのあとはこちらが外から侵入する予定だ」

あまりの驚きにレイは声が出なかった。そもそも彼の性自認は男性だ。それに女装という言葉の意味は理解できても、それを自分が実際にするなどとは全く理解できない。

むしろこれは夢なのでは……？ と思うほどだ。そう思ってレイは思い切り自分の頬をつねってみる。

しかし

「ゆ、夢じゃない……?」

「ふふ。ふふふ!」

キャロルは後ろに手を組んで、まるでスキップをするかのようにレイの側に近寄ってくる。その際にふわっとした香水の香りがレイの鼻腔を抜けていくが、今はそんなものも気にならなかった。

「きゃ、キャロル……そんな……嘘だろう……?」

「うふふ。前からずっと思ってたんだよねー! レイちゃんは絶対に女の子になっても可愛いつて!」

「お、お前! これは公私混同じゃないのかっ!?! 前の約束を忘れたのか……っ!?!」

「もう正式に採用されちゃったもんねーっ! 大丈夫。約束はちゃんと守るし、しっかりと可愛い女の子にするよっ!」

「か、壁が……っ!?!?」

と、後ろにずりずりと下がっていくとすでに壁際まで追い込まれてしまっていた。その威圧感レイが今まで経験してきた中でもトップクラスだった。

キャロルはいつもニコニコと笑っている。しかし今は……目が笑っていないのだ。それに段々と呼吸も荒くなってきた。

「はあ……はあ……合法だから、いいよね?」

「ちゅ、中佐ああああああ! 助けてくださいっ!」

「レイ、すまない。今回はこれが最善なんだ」

「中佐あああああああああああああああっ!」

その叫び声虚しく、レイはずるずると引きずられるようにして部

屋を出て行く。本気で抵抗すれば逃げることは出来るのだが、作戦と言われてしまえば拒否することなど出来なかった。

「レイ。期待しているよ」

ヘンリックといえば天に祈るようにしてレイの検討を祈るのだった。

「リディアちゃん！ アビーちゃん！」

バンツ！ と扉を勢いよく開けて室内に入ってくるキャロル。今日は全員で集まって晩ご飯を食べようということになっていたが、キャロルは用事で遅れるという話だった。

そしてレイもまた、ヘンリックに呼び出されているのでこの部屋にはリディアとアビーが待っている最中だった。

「お、帰ってきたか！ よし、アビー。飯にしようぜ！」

「はいはいって……おいキャロル。その女の子はどこから連れてきたんだ？ 誘拐は洒落にならんぞ」

「ふっ、ふっ、ふっ」

ニヤリと笑いを受かべるキャロルは自分の胸を抱えるようにして腕を組む。その言動を見て、二人ともまたいつものやつか……と思うが、どうにもその少女には見覚えがあるような気がしていた。

「かなりの美少女だが、全くキャロルはどこから連れ込んできたんだ……」

やれやれと言わんばかりにアビーはその少女の元へと向かう。

「大丈夫か？ すまない。うちのアホが迷惑をかけたようで……」

少女は何も言わない。ただじつとアビーの瞳を見つめて、泣きそうな顔をするだけだった。その様子を不思議に思っていると、リディアがあり得ないことを口にした。

「ん？ もしかして、レイなのか？」

それはまさに青天の霹靂。アビーはその馬鹿げた主張を一蹴する。

「リディア。そんなわけがないだろう。レイがこんなに可愛い女の子になるわけが……」

「……レイです……すみません……本当になんて言っているのか……」

「は？」

ポカンとした表情を浮かべる。そう、間違いなくその少女からレイの声が聞こえてきたのだ。少し華奢な体に、整った容姿。目はぱつちりと開いて、まつ毛は綺麗に上を向いている。唇も血色がよく、厚さもちょうど良い。

それに茶色い髪はまるで絹ように艶やかだ。そんな彼女を見て、百人中百人が美少女と評するだろう。

「あ……これ、レイ……だと？」

「実は次の潜入任務で、レイちゃんは女装で潜入するの！ そこで

キャロキャロが手伝ったけど……やっぱりレイちゃんは女装も天才だったよっ！」

キャロルはかなり喜んでいようだが、レイはただただ泣きたかった。いや、すでに少しだけ涙を流しているようだった。ぐすつと涙を噉る音が聞こえる。

「レイ」

「し、師匠……」

真剣な顔つきでリディアがやってくる。それはきつと、自分を助ける言葉をかけてくれるに違いないと……そう期待のこもった瞳で見つめる。

だがそれは無残にも裏切られてしまう。

「まじで可愛いな！ よし。その姿の時はコードネーム：リリイーを名乗るがいい。ははは！ これは本当に傑作だな！ やっぱお前は天才だなっ！！」

リディアはぽんぽんと肩を軽く叩く。どうやら、心から楽しんでいる様子である。

「し、師匠おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ……」

その悲痛な叫び声は、レイの人生の中でもっとも大きな声量だったという……。

第283話 リリィー誕生

「なあ……っ!? レイだと!？」

「これは、美少女にしか見えないな!」

驚いているのはデルクとハワードだった。今回の作戦に当たって、事前のブリーフィングをすることになったのだがレイはすぐに作戦に入ることができるように女装姿でやってきていた。

初めは二人ともに、なんでここに関係のない美少女が? と思っていた。

真っ白なワンピースに胸まで届く艶やかな黒髪、それに加えてその顔つきは美少女にしか見えなかった。

しかしヘンリックからレイだと告げられることで、それは驚愕に変化した。

「ま、まさか……ほ、本当に?」

最後に驚きの声を漏らすのはフロールだった。彼女はその場でわなわなと震えながら、レイにそっと手を伸ばそうとする。

「はい。間違いありません」

その声音はいつものレイではない。完全に少女のものになっていた。完全になりきっているのか、未だに彼女がレイであるとは信じ

られないほどだ。

「レイ……どうして、こんな美少女に？」

「作戦のためです」

「それにしても……」

じつとレイの姿を見つめる。化粧をしているのだろうが、それをおぼろげなような綺麗な顔。その肌はまるで雪のように真っ白だった。それにまつ毛もいつもよりも上を向いていて、とても綺麗な目をしている。

それこそ、吸い込まれそうなほど。

「レイ。あなた、すごい才能があるのね……」

「恐縮です」

「うん。これは私も驚いたわ……ええ」

フロールの言葉に対してレイは冷静に受け止める。そもそも、この前は狼狽えていたレイがどうしてここまで冷静に努めることができるのか。

それは少しだけ時間を遡る。

「……もうダメだ。俺はもう、ダメなんだ……」

自分の部屋で女装姿のまま引きこもるレイ。いつものように四人で一緒に食事をしたが、味が全くしなかった。

レイは天才だ。抜群の魔術センスと聡明な頭脳を持っている。だ

がまだ精神面では年相応な部分がある。

女装という現状にただただ頭が追いつかなくなっていた。

明かりもつけずに部屋の隅でただじっと、足を抱えて座っていた。

今回の作戦は女装姿を見せるだけではなく、実際に女の子として振る舞う必要もある。残り時間は一週間しかないが、その間に子どもとはいえ女性の知識を入れる必要がある。

そのことも相まってレイは絶賛、落ち込んでいた。

「レイ。大丈夫か？」

「師匠……」

室内に入ってくるのはリディアだった。彼女は長い金色の髪を揺らしながら、レイの側にやってくる。

「……師匠。自分はこの姿で任務を完遂できる気がしません」

「レイ。安心しろ」

「何をでしょうか？」

顔を上げる。その瞳はまだ少しだけ濡れていた。

「お前は最高の美少女だ。それは師匠の私が保証する。今後、女装という技術は大いに役立つだろう。軍人として持つておいて損のない技術だ」

「技術……ですか？」

「その通りだ」

リディアはレイを説得することがうまくいった。それに加えて、レイはリディアのことを心から尊敬している。そのこともあって、レイの瞳には僅かに輝きが戻ってくる。

「魔術も技術だ。そして、女装もまた同様だ。決して恥ずかしいことなんかじゃないさ。お前は全てにおいて天才だ。だからこそ、女装も天才的なのは当然だろう?」

「し、師匠……!」

魔術において天才だからといって、女装も天才的という理論は完全に破綻しているのだがレイはそれを感激して受け入れてしまった。

ああ。師匠はやっぱり、凄い人なんだ! と心の内で納得してしまったのだ。

もう彼が涙を流す必要などありはしなかった。

「お前の女装技術はキャロルに任せる。いいな? あいつはいつもは頭のおかしいやつだが、優秀な人間だ。きっとレイに女性の全てを教えてくれるだろう。お前はプロであり、スペシャリストなんだからな!」

「……はいっ!」

ものはいいようである。

こうしてレイに偏った女性知識が植え付けられ、それが将来的に色々と問題を起こすことになるのだが……それはまだ、先の話である。

「レイちゃん。お化粧は自分でできるようになるからね」
「もちろんだ」

翌日。レイは張り切ってキャロルから女性についての教育を受けていた。まずは化粧からだ。

「お化粧はそうだね。レイちゃんは素材がいいからあまり派手にしないほうがいいね」

「そうなのか？ キャロルみたいに派手にしたほうがバレないんじゃないのか？」

「うーん。こればかりはその人の顔つきとか骨格もあるからねえ……レイちゃんは清楚系でいった方がいいよ。今は幼いからっていう理由もあるけど、素材的な意味でもね」
「なるほど」

ノートにまとめる。その姿は真剣そのもの。レイは女装に対して全く嫌悪感を覚えていなかった。むしろ、師匠に言われたのだからしっかりとしないといけない……！ という気持ちの方が強かった。

「まつ毛をあげて、唇も少しだけ血色よくして、それから肌には軽くファンデを塗って、あとは眉毛も軽く整える。ウィッグはしっかりとずれないようにつけてね」
「了解した」

キャロルの指導のもと、レイは自分で女装の手順を踏んでいく。そこは流石のレイであり、昨日キャロルが行った手順を完全に暗記していたので再現性は抜群。

完全に同じといって過言ではないだろう。

「うん！ 流石はレイちゃんだね！」

「もちろんだ。俺はプロであり、スペシャリストだからな」

ニヤツと笑いを浮かべるその姿は、師匠であるリディアにそっくりだった。キャロルもレイが乗り気になってくれて嬉しいのかニコニコと笑っていた。

そしてレイは用意されたワンピースタイプの服を着る。白を基調としており、フリルがポイントで飾ってある。まさに清楚と形容すべき容姿だ。

レイの女装姿 リリィがここに誕生した。

それはまるで人形のように精巧で美しい。仮に今のレイを人形と言っても、信じてしまう人間は多々いるだろう。それほどまでにその姿は美しいものだった。

「じゃあ、まずは口調から勉強しようかな」

「師匠やアビーさんは少し男性的だから、キャロルをコピーすれば良いんだろう？」

「うーん。一応、お嬢様って設定だから清楚な感じにしたいけど……」

「これで良いでしょうか？」

「うわっ！ レイちゃんてば、そんな声も出せるのっ！？」

「はい。魔術で少しだけ声を弄っていますが」

そう。レイは一瞬で女性の声を出した。それに声を出すだけではなく、抑揚なども完璧だった。
インターネット

まだ声変わりはしていないので、口調だけに気をつければ良いと

思っていたが、レイは念には念を入れて魔術で自分の声をチューニングしていた。

「レイちゃん……！ やっぱ天才だよ！！」

「ふふ。私はプロであり、スペシャリストですから」

ニコリと微笑みを浮かべるその姿は、まさに深窓の令嬢。レイの女装はすでに、完璧の域に高まりつつあった。

「じゃあ後は歩き方とかだね」

「ええ。任せてください」

そうしてレイは完全に女性としての姿をトレースする。そこで生み出されたのは……紛れもなく、正真正銘の美少女だった。

「皆さん。これからよろしくお願いいたします」

隊員全員の前でペコリと頭を下げて、軽く微笑みを浮かべる。その様子を見て、キャロル以外の全員がざわめき始める。

「おい……どんな教育をすれば、こんな美少女になるんだ？」

リディアのその問いはもつともだった。二人の勉強の時間は誰も見ていないので、完成したリリーを見るのは彼女も初めてだった。

そんなリディアはただただ啞然としていた。アビーもまた、完全に口をポカーンと開いているほどだ。

「ふふふっ！ レイちゃんの天才的なセンスと、キャロキャラの天才的な教育が噛み合ったからこそだよっ！！」

その言い分は今回に限っては間違っていない。レイのセンスとキャロルの教育。特にキャロルは美の追求に対して余念がない。その知識を全てレイに叩き込んだのだ。

男性受けするような完璧な美少女。

それこそが、リリーだった。

「……キャロライン。ここまでやるとは……」

命令を下したヘンリックもまた、まさかここまでのクオリティで出てくるとは思っていなかったので驚くしかなかった。

「ちゅ、中佐……これはこれで大丈夫なのでしょうか？」

フロールが心配の声を上げる。あまりにも高すぎるクオリティにキャラル以外は恐怖心すら覚えていた。ここにいるレイはあまりにも美しいので、逆にそれが問題になるのではないかと。

「も、問題ないだろう。よし、では改めて作戦会議に入る」

そうしてついにリリーの初陣が幕を開けるのだった。

第284話 潜入任務（女装）

アストラル
特殊選抜部隊の任務は多岐にわたる。王国には諜報部なども存在はしているのだが、任務の中には諜報活動なども含まれる。

今回の任務は諜報活動の一環でもあるが、相手が武力行使をしてくる可能性も考慮して今回は特殊選抜部隊に任務が依頼された。アストラル

全てに関してスペシャリストが揃っている集団。

それこそが、特殊選抜部隊。アストラル

それは 女装に関してもスペシャルなのである。

「なあ、レイは大丈夫なのか？ なんか憑依しているような気がするんだが……」

「ふふーん！ レイちゃんなら大丈夫だよっ！ キャロキヤロの全てを教えたからね！」

「このアホピンク……私はそれが心配なんだ」

気配を殺してリディアとキャロルは、レイの様子を窺っていた。まるでストーカーのように壁に張り付きながら、薄暗い道を進んでいくレイを見つめる。

今回の目標は上流貴族の男。彼は密かに少女を愛玩する趣味があるらしく、迷子になっている子どもや、時には非合法な方法で少女

を集めているという噂がある。

帝国に情報を流しているだけではなく、そのような非倫理的な行動もしているということ。今回は特殊選抜部隊アストラルが対処することになっている。

もちろん彼にはボディガードである魔術師がついており、その階級は白金級プラチナで揃えられているらしい。

並の魔術師では太刀打ちできないということで、依頼が来たのだ……やはり心配なものは心配だった。そもそも、レイが先陣を切るだけでも心配だというのに、それが女装姿なのだ。

今は綺麗なワンピースではなく、少しみすばらしい服装をしている。それも顔も煤すすなどで汚れていて、令嬢に見えることはない。

しかし見るものが見ればわかってしまう。

そのあまりの愛らしさと美しさに。

すでに相手の好みは把握している。だからこそ、レイが連れて行かれるのは間違いないだろう。この一角に物乞いをしている子どもは流しておいた。だからこそ、やってくるのは時間の問題だった。

「き、来たぞ」

「……レイちゃん。頑張つて」

その路地裏に図ったかのように恰幅な男性がやってきた。いかにも貴族という豪華な装いをしており、そっとレイに向かって手を差

し伸べる。

「大丈夫かな。お嬢さん」

「あ、えっと……その私は……」

「大丈夫だよ。私の家に来るといい。暖かいものを用意してあげよう」

「でもそんな……貴族様のお世話になるわけには。私はただの、物乞いですから……」

上目遣いで潤んだ瞳によって、相手の目をじっと射抜くレイ。それは同性のリディアとキャロルでさえも、ドキッとしてしまうほどには愛らしい所作だった。

もちろん男もまた平静を保っているがそれは表面的なもの。内面では下賤な笑みを浮かべていた。

「ふふふ。いや、気にしないでいいんだよ。私は貧しい子どもを助けるために活動しているんだからね」

「……そう、なのですか？」

その言葉を聞いて、まるで希望が宿ったかのような相貌になる美少女。煤や泥に汚れていても、その一輪の花のような輝きは隠すことはできなかった。

それはまさに大輪の花。レイの美しさはもはやその次元にまで高められているのだ。

「や、やばい……このままだとうまくいくぞっ！？ いいのかっ！？」

「い、いいんだよ！ でもなんだか、キャロキャロもドキドキして

きちゃった……！」

物陰からそんな話をしながら、二人はレイの様子を見ていた。おそらくレイが女装していると知らなければ、儂げな美少女がそこにいると勘違いしてしまうほどだ。

そうしてレイはその男の後についていく。彼はチラッと後ろを見ると、ハンドサインによって二人に伝える。

作戦は、滞りなく進行していると。

「リディアちゃん」

「分かってる。すぐに行こう」

「うん」

レイからの情報を受け取ると、早速、特殊選抜部隊は動き始めるのだった。
アストラル

「さあ、なんでも食べるといい」

「本当にいいのですか？　こんな綺麗なお召し物までいただいて……」

屋敷にやってきたレイは、依然として麗しい姿のまま相手の男の相手をしていた。すぐに体の汚れなどを拭き取ってもらい、新しく黒を基調としたドレスを彼女（彼）は与えられた。

そのドレスは男の趣味である。あしらわれているフリルは白く、黒とのコントラストがよく映えている。まるで人形のような姿になったレイにチラッと視線を向ける。

それは明らかに色欲が混ざったものだった。

「もちろん。君のような子どものために、私のような人間がいるのだから」

「あ、ありがとうございます！」

ギョツと両手を握りしめて、大袈裟に感激の声を上げる。

そんな様子を見て、相手の男はニヤツと笑う顔をなんとか抑え込むが……レイはしっかりとそんな彼のことを見ていた。

「さて、茶菓子でも食べるといい」

「ありがとうございます。では、いただきます……え？」

儂い声をもらす。

レイは出されたクッキーにそのまま手を出した。しかしそれは、薬が入っているものであり彼女（彼）の意識は徐々に薄れていく。

「ふ。ふふふ。さあ、おやすみ」

最後にそんな声がレイの耳に届くのだった。

「う……ここは？」

目を覚ますと天蓋付きのベッドにレイは寝ていた。そして彼の正面には、ニヤニヤと笑いながら男が覆いかぶさっていたのだ。

両手と両足は完全に縛られてしまい、身動きを満足に取ることは

できない。そして、相手は下賤な笑みを浮かべたままレイに問いかける。

「ふふ。安心しなさい。悪いことはしないから」

「い、いやあ……！」

嫌がる素振りを見せるが、それがさらに相手の嗜虐心を高める。ソクソクと背筋を駆け抜けていく高揚感。

「大丈夫。痛いのは始めだけさ。すぐに良くなるからねえ……」

乱暴に洋服を引き剥がしていく相手に、まるで恐怖しているような素振りを見せるがレイのそれは演技だった。

瞬間。

部屋の扉が乱暴に開かれた。いや、それは開かれたというよりも扉が吹っ飛んだと形容した方が正しいだろう。

「おっと。お楽しみのところ悪いが、終わりだよ。お前」

室内に入ってきたのは、金色の髪を靡かせたリディアだった。彼女はまるで相手を殺しそうな瞳で男の無様な姿を見下す。

「な、なあ……！？ どうしてだッ！？ この屋敷には高位の魔術師を配置していたはずだッ！！」

「高位の魔術師？ ああ、確かに強かったな。でも私たちの前では雑魚でしかないが。お前、王国で派手に動きすぎたな。観念しろ」
「ま、まさか……っ！！？」

相手の男はハメられたと理解した時には、すでに遅かった。

「ふう。これでお役御免ですね」

レイはすでに相手の拘束を完全に解いていた。手首を軽く動かすと、自分の体の状態を確認する。完全に薬にやられていたわけではないが、影響は受けてしまっているからだ。

「あ、ああ……っ！　こ、このガキもお前たちが用意したのかっ！？」

「当たり前だろう。どこの世界にそんな美少女が物乞いをしているんだ。ま、そいつは男だな」

「あ……はあ？　男？　そんなわけが……」

と、くるつと翻ってレイのことを見つめる。いや間違いなくそれは少女だった。それも、極上に美しい。

しかしレイは、残酷な真実を突きつけるのだった。

「自分は男ですよ」

「はあああああああああああッ！！？」

男はハメられてしまったことよりも、その事実に対して一番の驚愕を見せた。

しかしその鋭い雰囲気、精悍な顔つきは男性と言われてしまえば確かに納得できるような……いや、できないのかもしれない……。

「ばかな！？　そんな嘘をついてどうするッ！？　私を狼狽させる

作戦なのか!!?」

「だから嘘じゃねえんだよ。ま、とりあえずお前は終わりだ」

「う……ぐ……あ……あ……」

魔術によって相手の意識を完全に断つ。すでにこの屋敷は特殊選^{アス}抜部隊^{トラル}のメンバーが完全に包囲しており、リディアがこの場にやってきたということは全てが終わっていることを示していた。

「レイよくやったな」

「いえ。今回、自分は何もしておりませんので」

「謙遜するな。お前のおかげで相手の注意を引くことができた」

「は。恐縮です」

いつものように振る舞うレイを見て、リディアは思う。本当にこいつはどこに向かっているのかと。

キリッとした顔つきではあるが、女装したままのレイは完全に深窓の令嬢にしか見えないからだ。

「さて、と。戻るか」

「は。後処理はお任せください」

「ああ。頼んだ」

そうしてレイの初めての女装任務は無事に成功することになった。ただし、レイの女装任務は……まだまだ始まりであることを、彼はまだ知らない。

第285話 極東戦役、開幕

極東戦役。

ついに極東での紛争はその名称で呼ばれるようになっていた。王国は西に位置しているため、今回の極東戦役には参加しないものと思われたいた。しかし、事態は思わぬ方向へと進行していくのだった。

「今回集まってもらったのは、他でもない」

ブリーフィングルーム。そこでヘンリックは緊急会議を開くことにした。全ては現在行われている極東戦役のために。

「すでに知っていると思うが、東で行われている紛争の被害がかなり拡大している。私たちもすでに何度か介入に入ったが、その時よりも被害の拡大は著しく早い」

その言葉に対して、リディアがある一つの懸念を投げかける。

「 エイウエル帝国。裏にいるんでしょう、中佐」

エイウエル帝国。今回の極東戦役は小さな国同士の紛争から始まったものであり、エイウエル帝国ほどの大国が参加しているものではない。しかし、あまりの被害の拡大スピードから軍の上層部は考

え始めていた。

裏で意図的に、戦争を長引かせている、または戦争を拡大させているものがあると。

「……すでに軍の上層部はそうに考えている。そこで、特殊選^{アス}抜部隊に帝国への潜入任務が課された^{トラル}」

ヘンリックから告げられる言葉は、全員にとって意外なものだった。

「レイとエインズワース。主にこの二人に潜入してもらう。残りのメンバーはバックアップだ」

リディアはまだ分かるが、流石にレイはどうかと思いアビーが懸念の声を上げる。

「中佐。流石にレイには早計すぎるのではないでしょうか」

「その懸念はもつともだ。ガーネットの言い分は分かっている。だが、レイは何よりも優秀だ。うちの部隊でも主力と言っているほどに。それに他のメンバーにはやることがある。あとは二人に任せることにしよう」

「……分かりました」

そう言われてしまえば、それまで。確かにレイの優秀さはアビーも認めるところだった。それにリディアとレイのコンビネーションはすでに完璧に等しい。それは、アビー以上にレイはリディアに合わせるのが優れているからこそ、認めているのだ。

レイは何事も真似るのが上手い。相手の呼吸に合わせてサポート

をする技能、それに命をかけた戦いであつても冷静に対処できるだけの胆力。おおよそ、年齢にそぐわないその技量をアビーは誰よりも高く評価していた。

「バックアップがあるとはいえ、レイと二人か……」

「師匠は色々と問題がありますから。自分がしっかりとサポートします」

「あ？　ずいぶんと生意気な口を聞くようになったなあ……？」
「いたっ！」

と、レイは気がつけばリディアから頭に拳をもらっていた。最近
は避けることもできるようになっていたのだが、流石にリディアが
本気で振るう速度にはまだ対応できないようだった。

アストラル
特殊選抜部隊のメンバーもまた、気がついていた。リディアとレイは特別な存在であると。それはもちろん、魔術師としての意味で。

特にここ最近のレイの成長は目覚ましい。それはおそらく、この
部隊でも屈指の魔術の技能を誇っているからだろ。リディアからの
英才教育の影響もあるだろうが、彼にはそれだけでは済ませること
ができない何かがあった。

そうしてレイとリディアは先にエイウェル帝国へと潜入すること
になるのだった。

「見えましたね」

「ああ。やっとだな」

馬車に揺られてやってきたのは、エイウェル帝国。王国とは真逆

の東に位置している大国。ここ数十年では、各国との交流を盛んとしており貿易なども積極的に取り組んでいる。そのため、国内に侵入すること自体は容易ではある。

しかしそれは、エイウエル帝国側も把握していることだ。おそらくは仮に敵対する人間や組織が侵入したとしても撃退できるだけの實力を持っているからこそだろう。

この国はアーノルド王国に次ぐ魔術大国だ。いや、実際のところどちらの方が上なのか……という議論に決着はついていない。アーノルド王国は魔術発祥の地ということもあって世界最大の魔術大国と謳われているが、その真相はまだ誰も知ることはない。

「ついたな」

「はい」

リディアとレイは無事に入国審査を済ませて、エイウエル帝国に入国。入国目的は観光であり、滞在期間は一週間ほど。二人はいいこと言う設定にして、特に深く尋ねられることもなく無事にその巨大な門を通り過ぎる。

王国にはない巨大な真っ白な外壁。それは外敵から国を守るために設立されたものらしいが、伝聞で知っていると実際に見るのは訳が違った。

「大きいですね」

「ああ。私も初めてきたが、かなりのものだな」

それはある種のアピールでもある。我が国はこれだけの国力がある。暗にそう示している側面もあるのは事実だった。

「それにしても、人が多いですね」

「そうだな。人口はうちの国よりも多い。それにここは帝都だ。一番人の集まる区画だ。無理もないだろう」

二人はそう話しながら、歩を進める。まずは宿の確保から始めるべきだとリディアは言って、二人で帝都を進んでいく。

レンガ作りの建物に、道は綺麗に舗装されている。アーノルド王国もインフラなどはかなり進んでいる方だが、このエイウエル帝国はそれと同等かそれ以上。

レイの主観的な感想からすれば、ここは王国よりも進んでいるよな……そんな気がしていた。

街ゆく人は、このメインストリートで開かれている出店で品物を吟味している。それに家族連れもいるのか、笑いが溢れている国だった。

おおよそ、この光景だけ見れば平和な国と思うだろう。それこそ、極東戦役に加担しているなどとは思えないほどに。

「レイ。どうした？」

立ち止まってその光景を見つめていたレイに、彼女は声をかける。

レイがこうして王国の外にやって来たのは初めてだった。そもそも彼は、自分の過去のことをそれほど鮮明に覚えていない。だといふのに、この景色には既視感があった。

どこかで見たような……そんな感覚。

しかしそれはきっと気のせいだと思って、すぐにリディアの言葉に答える。

「いえ。なんでもありません」

彼はリディアの後を追いかけるようにして、人混みの中に消えていくのだった。

「レイ。宿の手続きをしてくる。待っていてくれ」
「はい」

帝都でも最も有名な宿に泊まることにした二人。現在は色々と時期などの関係もあって、宿には数多くの人間がいた。

そして、リディアが手続きをしている間、レイは呆然と後ろの席に座って荷物番をしていた。特にすることもないが、何かをする時間もない。

「あ……っ」

ブーツをしていると、目の前で少女が派手に転んでしまうのを目撃した。地面にぶつかってしまうその瞬間、レイはすぐに駆け出していた。

そして彼は小さな少女の体を受け止めた。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ……ありがとう。本当に転んだと思ったから」

「いえ。ご無事でしたら何よりです」

少女は真つ赤なワンピースを着ており、銀色の髪がサラサラと流れる。しかし帽子を深く被っているようで、全体的にあまり顔はよく見えない。

「改めてお礼を。助けていただき、ありがとうございました」

スカートを軽く持ち上げると、彼女は礼を述べた。

「いえ自分は。当然のことをしたまでです」

そう対応していると、リディアが部屋を取ったと声をかけてくる。レイはすぐに荷物を持つと、移動しようとする。

「では、自分はこれで」

「ええ。またね　レイ」

レイ、と言われた瞬間……振り向いた。自分の名前は教えてないはずだった。しかし彼女は確かに、レイと名前を言ったのだ。

喧騒の中でただ一人、佇む。まるで世界の時間が止まったかのような瞬間だった。

一体今の少女は何者だったのか。ただの白昼夢だったのか。

それにしてもあまりにも現実感があつたが……とレイは思うが、

すぐにリディアに呼ばれてしまうので思考を切り替える。

「レイ。行くぞー！」

「はい」

この出会いが後にどのような影響をもたらすことになるのか。

第286話 夢想

夢。

夢を見ていた。

俺は一人、真っ白な空間に立っていた。そこには何も存在しない。ただただ、白い世界が広がっているだけ。その世界に自分一人が立っている。いや、一人だけではない。

自分の視線の先には、師匠が立っていた。

リディア・エインスワース。史上最年少で七大魔術師にたどり着いた、天才中の天才。しかし、師匠の才能よりも俺の才能の方が上だと言う話を聞いたことがある。

「……レイはおそらく、私を凌駕する魔術師になるだろう」

「リディア。お前がそこまで言うほどなのか？ 確かにレイは優秀だ。しかし、今の私にはリディアを超えていくなど予想もできない」

「アビー。その言い分もわかる。だがこれは、直感的なものだ。あくまでレイの潜在能力を感じ取っているだけだが……きっとレイは世界を統べるほどの魔術師になるだろう」

深夜。二人がそんな話をしているのを、俺は聞いてしまった。俺が師匠を凌駕する魔術師になる？ そんなバカな話があるわけがな

い。

と、そう思った瞬間……脳内に鋭い痛みが走る。

それはまるで走馬灯。幾多もの映像がまるで一つのシーンのよう流れていく。

そうだ、俺はどうして師匠に拾われることになった？
どうして俺はここにいます？

あの時どうして俺は一人でいた？

そう問いかけると、自分の過去の扉が開きそうになる。今までずっと、それは封印してきた。目を背けて、決して見ないようにしてきた。きっとそうしていたのは、本能的に俺は知っていたからかもしれない。

自分の存在が何者であるか。それを知ってしまえば。

「師匠？」

真っ白な世界で、立っていた師匠はニコリと微笑んだ。そして右手を上げると、先に進んでいく。

「師匠！」

何故だか追いかけないといけない気がした。もう、師匠には会えないような気がしたからだ。

走る。

走る、走る、走る。ただ懸命に、その姿を追いかける。けれど、師匠に追いつくことはない。金色の髪を靡かせながら、師匠はまるで溶けていくようにして消えてしまった。

そんな世界で一人佇む。

いや、これは夢だろうか？ そうだろうか？

しかしどうしてだろうか。この世界は妙に現実感がある。今日もそうだ。宿で出会った少女と会った時から、いや……このエイウェル帝国に入国した瞬間から、どこかおかしくなっている。

自分の手をふと見る。

するとそこからは、大量の血液が溢れ出していた。あまりに出来事に驚くと、後ろには大量の屍が積み上がっていた。ぼたぼたと血を流し、何も話すことはない。

ああ……知っているとも。俺はこの光景をどこかで見たことがある。

瞬間。自分の前の前には器のようなものが現れた。その器の後ろには、巨大な赤黒い異形の手があり、蠢いている。

器の中にある液体を飲めと言わんばかりに、差し出してくるのだった。

「お、俺は……」

「……はっ！？ ゆ、夢……？」

現実に戻ってくる。

夢。そうだ、今は間違いなく夢。

レイの体からは大量の汗が滴っていた。しかし、先ほどの夢のように血に塗れてはいない。

レイが飛び起きたことで、いつもは熟睡しているリディアも目を覚ます。

「おー。どうした、レイ？ 嫌な夢でもみたのか？」

「いえ……その。大丈夫です」

「そうかー。時間まではもう少しあるな。私は寝るぞー」

「はい」

そう言っリディアは再び眠る。現在の時刻は朝の四時半。こんな早朝に起きてしまうのは、レイとしてもほとんどない。呆然と彼は、虚空を見つめる。

あまりにも現実感の伴った夢だった。それはまるで、本当に現実に起きたかのような……。

彼は今更眠ることもできないので、そのまま起きることにした。備え付けてある簡素な浴室へと向かうと、そこで意識をリセットする。

今まで過去のことを意識したことはなかった。それはもう、忘れてしまえばいいことだと思っていたからだ。両親はいない。友人も、あの村であったことは全て忘れている。

しかし、レイは思う。

「思い出せない……？」

そう。今のレイは昔のことを完全に忘れてしまっていた。いや、あの時の出来事があったという事実は覚えている。

しかし、あの時に何があったのか。自分が今まで過ごしてきて、両親が誰であったのか。それが完全に抜け落ちてしまっているのだ。

「……」

浴室から出てくる。

レイはすぐにタオルで体を拭くと、衣服を着てから目を閉じて昔のことを考えてみる。だがどれだけ考えてみても、その記憶は途中で止まっているのだ。

リディアと出会ったその瞬間からしか、記憶を思い出すことはできないのだ。

「レイ……？ もう起きているのか？」

「師匠。おはようございます」

その後、リディアのためにいつも通り朝食を用意する。今回は宿に泊まっていると言うことで、昨晚のうちに買い物を済ませて簡素にはなるが、朝食を準備していたのだ。

リディアは珍しくスツと起きると、レイの様子がどこかおかしいことに気が付く。

「レイ。何かあったのか？」

尋ねる。彼はそう言われた瞬間に、すぐにこう答えた。

「いえ特には。ちょっと寝不足だけです」

「……そうか」

レイは成長するにつれて、良くも悪くも自分の感情を隠すのが上手くなってしまっていた。いくら長年の付き合いであったとしても、彼が完全に隠そうと思えばリディアもその真意は分からない。

だからこそ、微かな違和感を覚えはしたがそれ以上リディアが言及することはなかった。

「今日の予定は、まずは帝都を回ってみる。核心的な部分の調査は夜になるだろう」

「分かりました」

「日中はそうだな。色々と見て回ってみるか」

「観光ですか？」

「ああ。元々、この帝国を見て回る機会を作ろうと思っていたな」

「ありがとうございます」

レイは自分のためにそうしてくれているのだと思って感謝の言葉を述べるが、彼女はそれを少しだけ否定する。

「いや……レイのためもあるが、私のためでもある」

「それはどう言う意味でしょうか？」

「私は王国から出たことがなかったからな。純粹に別の国に興味があるだけさ」

ニヤツと笑うリディアを見て、レイは「はあ……」とため息をつく。

「師匠。今回は任務できているんですよ。しっかりしてください」

「レイ。何事もメリハリが大事なんだ！ わかるか？」

「それはまあ……一理ありますけど」

「とりあえず今日は帝国の美味しいものでも食うぞ！ よし、早速出発だ！」

「……分かりました」

少し釈然としないようだが、レイは意気揚々と進んでいくリディアの後を追いかけていくのだった。

その違和感を決して意識しないようにして。

瞬間、二人が出ていった後方で床がピシリと音を立てた。
。

第287話 謎の少女

エイウエル帝国。

その歴史はアーノルド王国よりは短いが、その発展はめざましいものがある。度重なる諸外国との戦争を重ねて、急激に成長していき今となつては世界有数の大国。

それこそがエイウエル帝国。

国が発展するためならば、尽力を惜しむことはなくそのおかげで世界でも最大と言われるほどの大国となった。

アーノルド王国はどちらかといえば伝統と歴史を重んじる国ではあるが、こちらは全くの真逆と言ってもいいだろう。革新的な国であり、帝国の門はいつでも開かれている。

他国からヘッドハンティングをすることもあるが、それでもこの帝国には夢を求めてやってくる若者などが多いのはやはり……それだけ、この国に魅力があるからだろう。

そうして様々な人間たちが競い合い、国力を高めていくことで今のエイウエル帝国が完成したと言っても過言ではない。

しかしそれは……あくまで表の向きの話である。

「そういえば、師匠は帝国から誘いがあつたとか言っていましたよね？」

「ん？ ああ……かなり昔の話だが、そんなこともあつたな」

出店で食事をしている二人。テラス席で朝食をとっていると、レイがそんなことを尋ねる。また現在は二人ともに国籍などを偽装して潜入している。本名で潜入するには、リディアの名前はあまりにも大き過ぎるからだ。

幸いにも、彼女が有名なのはその名前だけである。容姿まで知っているものは、限られてくる。それは特殊選抜部隊アストラルに入隊して、舞台上で活動をしてこなかったおかげもある。

もちろんそれは軍の上層部の狙いでもあるのだが。

「その時はこちらに来ようと思わなかったのですか？」

「確かに、帝国の提案は魅力的なものだったな。金は一生困ることはないぐらい出すというし、その他生活に必要なものは全て無料ただ。その代わり、魔術師として後進の育成を頼みたいと。研究なども自由にしてもらっていいとな。環境だけでいうなら、王国よりも破格だっただろう」

それはちょうど、リディアが七大魔術師になる直前の話だった。

彼女宛にやってきた一通の手紙。それを見て、リディアはエイウェル帝国の提案を一瞬だけ考えたが……。

「どうして拒否したのですか？」

そう。リディアがここにいるということは、その提案を拒否したということになる。どうしてその選択をしたのか。レイは純粹に気

になっていた。当時は、そのことは気になっていなかったが、今になると知りたいと思ったようだ。

「どうして、か。それはやはり、私の追い求めるものは環境などで左右されるものではないからな。金は大事だ。環境もな。しかし、魔術真理にたどり着くためには……もっと大切な何かがある気がする」

「それはなんですか？」

じつと真剣な眼差しでレイは尋ねる。リディアはそれに対して、真剣に答えようかと迷う。

今までの人生は魔術を極め、そのために全てを捧げるためだけに存在しているのだと。そう思い込んでいた。

孤独な天才。それこそが、リディア「エインズワース」だった。

学生の時も、軍人となった時も、彼女はどこかで孤独感を覚えていた。しかしそれは当然だった。魔術真理にたどり着くために、馴れ合いなど必要はないからだ。そんな半端な覚悟ではたどり付ける領域などでは無い。

でもどうしてだろうか。リディアはレイと出会ったことで、大きく変わった。それは性格的な意味で、魔術的な意味でも。

成長したのだ。孤独を覚えていた時よりも、ずっと。

大切なものとは何か。その明確な答えを得ているわけではない。だが、目の前のレイの存在を見てリディアが考えるのは。

「ま、それもいつか話してやるよ」

「……分かりました」

いまいち釈然としないようだが、レイはそう答えておいた。

彼がその答えを知ることになるのは、もう少し先のことである。

夜の帳が下りた。

ついに、ここから本格的に任務が開始することになる。二人が潜入するのは帝都の中央に存在している中央管理塔だ。エイウエル帝国の中心であり、これこそが帝国の心臓でもあると言われている。

そびえ立つそのタワーの大きさには、圧倒されてしまうのも無理はない。

もちろん二人が真正面から侵入することはできない。ならば、別のアプローチを試みるのは当然だった。

「師匠。どうしました？」

「……これは予想以上だな。しかし」

早速、侵入を試みようとする二人だがリディアの足が途中で止まる。中央管理塔へと通じる地下通路。ここからの侵入を予定していたのだが、予め調べた時と地形が変化しているのだ。

流石に相手も侵入に関しては対策を講じているとは思っていたが、たった数時間で地形を変化させてくるなどとは流石の彼女でも予想

していない。そもそも、どのような理屈でそれが起きているのか。それすらも分からないのだ。

そうしてどうすべきか考えていると、コツコツと足音が響いてくる。反響するその音は不気味そのもの。

リディアとレイは音のする方へと視線を向ける。

やって来たのは一人の少女だった。

少女は真っ赤なワンピースを着ており、銀色の髪がサラサラと後ろに流れている。そんな彼女のことをレイは知っている。なぜならば、昨日偶然にも宿で出会っていたからだ。

「あれは……」

「レイ。知っているのか？」

「はい。宿で偶然出会いました。しかし、その時はただ少しだけ会話をしただけです……」

「なるほど。どうやら、すでにこっちの目論見はお見通しというわけか」

あの時とは違って、帽子を被ってはいない。またこの暗闇の中と
いうこともあって、相手の少女の表情はよく見えない。

「ようこそ、エイウェル帝国へ。でもあなたたちの戦場はここじゃない。ちゃんとした舞台は用意してあげるわ。だから、国へ戻りなさい？」

少女にしてはしっかりとした口調。凜とした声がこの地下空間へと広がっていく。ニコリと微笑んでいるようだが、それはどこか恐ろしさを覚えるようなものだった。

それにレイとリディアは気がついていた。溢れ出るその第一質料プリママテリアの異質さに。あまりにもドス黒い第一質料に、レイは僅かにたじろいでしまう。

じり、と後ろに一步だけ体が動いてしまう。本能的に悟っているのだ。目の間にいるこの少女とともに戦ってはいけないと。

それを庇うようにして、リディアは一步前にでる。

すでに臨戦体制。右手にはいつの間にか一本の冰剣が握られていた。

「あら？ 私は戦う気は無いのだけれど？」

「 問答無用ッ！！ 」

流石に殺す気までは無いが、確保して情報を聞き出そうと思っっているリディアは一気に地面を蹴って駆け抜けていった。

そのスピードは並の魔術師、いや高位の魔術師でも反応できないほど。

転瞬。一気に駆け抜けていくと、低い姿勢のまま彼女は相手の首元へと冰剣を向ける。

すでに魔術師として全盛期を迎えているリディアに敵うものなどいない　だが、世界の広さを彼女は知ることになる。

「……なっ!？」

「ふふ。流石の氷剣ね。並の魔術師とは格が違うわ」

リディアは首元への狙いをフェイクにして、氷剣を袈裟を裂くようにして振り下ろした。その一撃は必中であると、そう思っていたのだが彼女の攻撃は見えない壁によって阻まれていた。

ガキンッ!　と甲高い音をたててその場には折れてしまった氷剣がパラパラと散っていく。

流石の彼女も一筋縄ではいかないと理解して、いったん後方へと下がる。

「自分も行きましょうか?」

「いや……私がやる。レイは見ておけ」

「……分かりました」

と、そう会話をしている間にその少女の姿はまるで霧のようにして消えていく。パラパラと流れる粒子は、彼女を構成していたものだ。

どのような原理か理解はできないが、油断はできないと改めて氷剣を構える。

「また会いましょう。バイバイ二人とも」

そんな声が聞こえてくると同時に、頭上から大きな音が鳴る。この地下空間自体が大きな唸り声を上げ、ボロボロと瓦礫が落下している。このような状況では流石に先に進むことはできない。

「くそっ……逃げるしか無いな」

氷剣を解除すると、リディアは諦めたような声を漏らす。

「レイ。戻るぞ」

「はい」

二人は難なく来た道を戻って、地上へと戻ってきていた。今回の騒動は自然な地盤沈下として処理されることになった。レイとリディアがやって来ていたという情報は帝国に届くことはなかった。

そのことは彼女としてはどうでもいい。そもそも、あの少女の存在は何なのか。

帝国側の魔法師、それとも全く別の何かなのか……。

リディア顎に手を当てて、しばらく思索に耽るが答えを得るにはあまりにも情報が少な過ぎた。

「すぐに王国に戻るぞ」

「はい。しかし、あの少女は……」

「帝国の魔法師にはおかしい。私たちが来ることが分かっているのならば、たった一人で待ち受けているのは変だ。それにあれではまるで、逃しているようにも思えたな」

「……単独で行動をしていた、または全く別の勢力とか？」

「そう考えると、帝国の目的が分からない。だがとりあえずは存在を知ることができた。それだけで十分だろう」

「……はい」

そうしてリディアとレイはすぐに帝国を後にするのだった。

あの少女の存在が何だったのか。二人はまたいずれ、彼女と会うことになるのだった。

第287話 謎の少女（後書き）

そろそろ本格的に極東戦役編に突入です。
今後もしっかり期待していただければ幸いです……！

第288話 王国への帰還

揺れる馬車。

レイとリディアは黙っていた。特に会話もなく。ただただ流されていくように進んでいくだけ。その中でレイは考える。

あの少女は何だったのか。それに彼には既視感があつた。そこはいつか訪れたかのような感覚。

そしてレイは小さな口を開くのだつた。

「師匠。先ほどは」

「その話は戻ってからする。今は休んでいる」

「……分かりました」

釈然としない。リディアもまた何かを真剣に考えているようだった。本来ならばもっと情報を持って帰るはずだった。だというのに、ほぼ何もすることはできなかった。逃げるようにして帝国を出ていくことに対して、悔しさを覚えているのか。

それとも全く別のことを考えているのか。

無事に二人は王国に戻った。そこでレイは、一人で自宅に戻るように命じられた。報告は自分一人で行くとなるとリディアに言われてしまったからだ。

とぼとぼと歩みを進める。だが、レイはそのまま真っ直ぐ家に戻る気になどならなかった。そこで近所の公園に行つて、少し冷静になろうと思つた。

「ふう……」

一息つく。

帝国から真っ直ぐ帰つて来てロクに休憩をとることはなかった。それはレイとリディアは互いに早く王国に戻つて来たいと思つていたからだ。

レイはベンチに腰掛ける。ふと空を見上げると、黄昏時になつていた。夕焼けの光をぼーっと見つめる。

「おや？ お主は……」

「え？」

公園の中を颯爽と走っている少女がいた。肩まで伸びる艶やかな赤色の髪。しかし、周囲の長さと比較すると、前髪は極端に短い。真っ白なワンピースを着て、彼女はレイの顔を覗き込むようにしてジロジロと見つめてくる。

「お主がリディアの弟子というやつかの？」

「師匠をご存知なのですか？」

相手は自分よりも幼い相手だ。しかし、その口調と雰囲気から思わず敬語で返事をしてしまった。

「ふむふむ。もちろん、知っておるぞ。リディアとは昔からの付き合いじゃからの」

「昔からの……？ 失礼ですが、もしかしてお年は」

レイは尋ねてみた。女性に年齢を尋ねるのはご法度と言われているが、今回はかりはそうしてしまった。

「ご、五十を超えているんですかっ！！？」

「うむ。そうじゃな。見た目は幼いがなっ！ ガハハっ！」

よく見るとその少女は一升瓶を右手に掴んでいた。それをゴクゴクと飲むと、「ぷはぁ」と声を漏らして自分の名前を告げた。

「フランソワーズ＝クレール。【比翼の魔術師】じゃ。よろしくの、レイ」

「はい………よろしく願いします。クレールさん」

「いやいや。フランで良いぞ」

「えっと………フランさんでいいでしょうか？」

「うむ。で、お主はレイでいいのか？」

「はい」

レイは辿々しい口調でそう呼んだ。すると、フランはニコツと快活な笑顔を浮かべた。

「で、一人で何をしておる？」

「えっと………」

何を話すのか迷ってしまう。今、彼の前にいるのは七大魔術師の一人である【比翼の魔術師】だ。リディアと同格に相手を目の前に

して、圧倒されてしまう。

名前だけは知っていた。七大魔術師の中でも最年長であり、有名な存在である。

また、フランは確かに圧倒的な雰囲気纏っている。見た目は幼い少女ではあるが、言動からは魔術師としての厚みを感じる。

それに、今レイが悩んでいることは アストラル 特殊選抜部隊の機密情報に当たるものだ。それを吐露してしまってもいいのか。いや、ダメだろうと内心で思う。

「お主は確か、王国で軍人をしているらしいの」
「……知っているんですか？」

驚きを隠せない。そもそも、アストラル 特殊選抜部隊の存在は極秘にされている。王国軍の中でも知っている者は限られている組織だ。

だが、七大魔術師ならば知っていてもおかしくないのだろうか……とレイは思った。

「あそこにはリディアが所属しておる。それに、アビーやキャロルもおるじやろ？ もちろん知っておるとも」
「そうですか……少し特殊な環境ではありますが自分は気に入ります」

「……お主、自分の魔術師としての技量はどうか考えておる？」
「え？」

それは真剣な眼差しだった。それに対して何と答えるべきなのか。

自分の魔術師としての技量……？ それは……。

確かに才能はあるのだろう。この年齢で軍人として難なくやっていけるほどには才能があると自覚はしている。そしてその才能の天井もまだ見えることはない。

成長はしている。それと同時に、レイは目を背けていた。自分は魔術師としてどこまで成長していけるのか。

リディア＝エインズワースは史上最高の天才だ。それは自他ともに認める話である。

だが……レイはここ最近、リディアの魔術師としての底が完全に見えてしまっていた。いつまでも届くはずはないと思っていたその才能が、レイにはたどり着けるモノとして見えているのだ。

師匠はいつまでも師匠のままだ。絶対に追いつけることはなく、その背中を追い抜くことはできない。だからこそ、安心して満足していた。今の現状が、心地よかった。

しかし、ここ最近のおかしな現象。帝国に向かった際の感覚に、謎の既視感。自分がどうにも異質なものに思えて仕方がない。

それはレイがずっと悩んでいることだった。それを見抜いているか、フランはさらに問いかけてくる。

「……自分の技量は、師匠にはまだまだ届かないと思います」

嘘をついた。

レイはすでにリディアを射程圏内に捉えている。あと一年も必要はないだろう。もうすぐレイはリディアを超える魔術師になる。それは確かな事実だった。

彼が目を背けたい……事実であった。

「嘘じゃな」

さらっとフランはそう言った。まるで自分は何でも知っているかのような、そんな態度だった。彼女はベンチから降りると、レイの前に立つ。

「お主、すでにリディアよりも第一^{プリムイア}質料の保有量が多いじゃろう？」
「ど、どうしてそれを……？」

隠してきた事実を暴かれてしまった。部隊の誰にもバレないように隠していたことだった。リディアすら、まだその真実にはたどり着いてはいないというのに、フランはそれを見抜いたのだ。

「ま、これはわしの能力じゃな。明かすことはできんが」

「そう……そうですか」

「で、悩んでおるのか。自分の才能に関して」

「悩んでいる……そうですね。悩んでいるんだと思います。正直なところ、自分の存在が何者なのか……この恐ろしい才能の源泉は何なのか。そうずっと思っています」

決して明かすことのない悩み。それはリディアを含めて部隊の誰

にも話すことができないものだった。

自分は一体何者なのか。日に日に増していく、この才能の源泉は何なのか。努力をしなくとも魔術に関してはあらゆることでできてしまう。すでに氷剣も完成の域に入った。

リディアが長年をかけてたどり着いたその領域に、レイはすでに踏み込んでいる。

初めはその才能に喜んだ。リディアに褒められることが嬉しかった。しかし今はただ、恐怖しかなかった。成長し続ける自分が怖かった。

「……才能、か。有能な魔術師は誰もがその壁にぶち当たる」

「そうなのですか？」

「うむ。特に七大魔術師になる連中は普通ではないからの。その才能との向き合い方に迷う時が必ずくるじやろう。しかし、それは自分で向き合うしかない。結局人間とは孤独な生き物じやからの。魔術師も同様じゃ」

「……孤独に、そして向き合うですか」

「ま、年寄りの他愛のない話と思っておけ。今日は偶然お前とあったが、実はリディアが色々と気にしておる話を聞いている。つい声をかけてしまった」

「師匠が？」

バツと顔を上げる。それは初めて聞く話だった。

「リディアもまたお主のことを気にかけておる。だから大いに悩むといい。きつとあいつは待っている。お主が自分でたどり着くのを」
「そうですか……」

フランは大きく手を振ると、公園を去っていた。レイはポツンとその場に残されてしまうが、すぐに帰路へと着く。

ギュツと拳を握る。この先に待っているのは、一体何なのか。

レイが自分自身と向き合おうとしている時期に重なるようにして、ついに極東戦役が本格化するのだった。

第289話 極東戦役、前線へ

「今日集まってもらったのは、極東戦役の件だ」

ブリーフィングルーム。そこに特殊選抜部隊のメンバーが全員集合していた。全員ともに神妙な面持ち。それは予め伝えられていたからだ。

今回の件は極東戦役の件であると。

すでに王国だけではなく世界的にも一大ニュースとなつて報じられている。魔術が体系化され、そのおかげで世界は大きな発展を遂げた。その世界で初めて起きた魔術を使用した大規模な戦争。

すでにその規模はかなりのものとなっており、死傷者は千人を超えている。しかしそれはあくまで報じられている人数であり、実際の数はそれを優に上回っていると言われている。

王国もまた今回の件に対して同盟を結んでいる国から要請があった。今回の戦争は魔術大国であるアーノルド王国が出るしかないというのは、すでに周知の事実だった。

また今回の戦争は小国同士の宗教問題と言われているが、実際のところその背後に帝国の影があるのは間違いなかった。

実質的に言えばこれは、王国と帝国の戦争。世界で最も栄えてい

る二国による大規模戦争。そう捉えても、過言ではない。それほどまでに極東戦役は混沌を極めていた。

「フロール。概要を」
「は」

ボードの前に立つと、フロールは極東における戦場の状況を描いていく。そして彼女は現在の戦場について語る。

「敵兵の戦力は千から二千。これだけの兵力であればすぐに鎮火できと思いますが、厄介なのは手練れの魔術師が混ざっているということ。一人で大隊を圧倒できる魔術師も出ているとか。その真偽は不明ですが、暴走している兵士もあり戦場はまさに地獄と化しています」

王国の諜報機関が集めた情報を、彼女は冷静に説明した。現在の戦場では死傷者の数かなり多い、特に暴走している兵士がそれを荒らすことでさらに混沌とかせていた。

「フロールの説明の通り、兵士の中には魔術領域暴走を引き起こしている者もいる。それが敵味方問わずに暴れ回り、戦場は地獄と化している」

「……魔術領域暴走か」

ボソリと呟くのはリディアだった。彼女は知っている、魔術領域暴走の危険性を。誰よりも才能に溢れ、神に愛された少女と謳われているが何のリスクもなしにここまで来たわけではない。

実際にリディアは魔術領域暴走ギリギリまで魔術領域を酷使したことがある。

また魔術領域暴走に関しては現代魔術によって引き起こされた病とも言われており、原因としては魔術の過度の使用だけではなく、精神的なものも原因になると言われている。

魔術を使わざるを得ない戦場。さらには、人を殺すしかないという戦場では過度のストレスが魔術師を襲う。それらが相まって戦場では数多くの兵士が魔術領域暴走を引き起こしている。

「質問よろしいでしょうか？」

「エインズワースか。構わない」

「魔術領域暴走している兵士の数は把握できているのでしょうか？」
「いや、それはできていない。ただ魔術領域暴走しているのは、若い兵士に多いそうだ」

「若い人間……なるほど」

「何か分かったのか？」

「いえ。まだ憶測の域を出ません。明確に判明すれば、共有しようと思います」

そこで一旦、話は打ち切られた。

「それでレイについてなのだが……」

ヘンリックはそこで話題をレイのものへと移す。もちろん、特殊選抜部隊が極東戦役へ出動するのは決定事項。それは全員ともに覚悟はできていいいた。

だが問題は、レイを参加させるべきなのか。それだった。

ヘンリックとしてはレイの参加を熱望している。単純に戦力とし

てみれば彼の代わりは王国にはいないだろう。それにレイのいないメンバーとなれば、総合力は一段と落ちてしまう。

すでに全員が認めている。今のレイは、すでにリディアに迫りつつあると。キャロルやアビーすらも超えて、彼は天才のさらなる先の領域にたどり着こうとしている。

「私はレイが望むのならば連れて行ってもいいと思っている。皆わかってるように、レイの戦力はかなりのものだ。エインズワースに匹敵する彼をここで投入しないわけにはいかない。上にも彼を連れていくように言われている。しかし、敢えて問いたい。レイ、君は参戦するつもりはあるか？」

全員の視線がレイに降り注ぐ。彼のその瞳にはすでに確かな覚悟があった。まだレイは実戦で人を殺めたことはない。しかし、戦場に行くということはその可能性を考慮しなければならない。

いくら強くとも、彼はまだ子どもなのだから。

「レイ。どうする　？」

凜とした声が室内に響き渡る。リディアは視線を下げると、見上げるレイと視線を交わす。その交差する視線だけで十分だった。レイは戦場に行くつもりであると。

「自分は……戦いたいと思います。この部隊は自分にとって家族のような……いえ、家族そのものです。だからこそみんなと共に進んでいきたい。それに、呼ばれているような気がするんです」

「呼ばれている？　どういう意味だ？」

「師匠……それは、具体的には言えません。ただの感覚的なものですが、行くべきだと思つのです」

「覚悟はいいのか？」

「はい。才能には責任が伴う。それを果たす時でしょう」

「そうか……そうだな」

大きくなった。

それは肉体的な面よりも精神的な面で。大人びたレイを見て、リディアは感慨深そうに彼を見つめる。

あの時の面影はなくなっている。今日の前に立っているのは、覚悟を持っている軍人だ。しかし、疑問に思ってしまう。一体何が、レイをそこまで駆り立てるのか。

レイのことならば何でも知っていると。何でも把握していると思っていた。だが実際のところ、その真意は理解できていない。結局のところ、完璧に他者を理解することなど不可能であるとリディアは悟った。

いつも近くにいるというのに、どこか遠くに行ってしまったような……そんな感覚を覚える。

「レイの了承も取れたようだな。では具体的な話をしていこう」

ヘンリックによる話は、二時間ほど続いた。

ブリーフィングが終了し、各々は解散となった。王国を出発する

のは一週間後。それまでは準備期間となった。

「レイ。筋トレしていかねえか？」

「ああ。俺もちょうど誘おうと思っていたところだ」

レイの前に立つのはデルクとハワードだった。彼はそのままリディアと一緒に帰宅しようと思っていたのだが……。

「行つてこい。私は先に帰ってる」

「分かりました」

リディアの許可ももらったことで、レイはいつものようにデルクとハワードと共に筋トレすることになった。筋肉に関してはこの二人の右に出るものはいないだろう。リディアも鍛えてはいるが、やはりそれは女性ということがあつて男性には届かない。

だからこそ、彼女も二人にレイを任せることを許しているのだ。

「レイ。最近、かなりいい筋肉になつたんじゃないか？」

三人で歩みを進める。基地内にあるトレーニングルームに向かっている最中、デルクがそうレイに言葉をかける。

「そう？」

「ああ。それに身長もめっちゃ伸びたな！ 昔からは考えられねえぜ」

「俺もそう思う。レイは色々とでかくなつたな」

デルクの言葉には、ハワードもまた同調する。レイは成長した。大人びているのは当然だが、その肉体もすでに大人のものに近づき

つつあった。内部コードインサイドの影響もあって、彼の肉体の成長は早い。

「よしっ！今日はアレいつてみるか？」

「アレか……しかし、一週間後には国を出ることになる。大丈夫なのか？」

「大丈夫だぜっ！多分……？」

「はあ。デルクは本当に大雑把すぎるよ。今日は軽めにしておきなよ」

と、レイが嘆息を漏らす。これではどちらが大人なのかかったものでは無いが、三人ともにこの空気が好きだった。

それこそ戦友と呼ぶのだろう。

そうして三人は筋トレに励むのだった。

第290話 二人での食事

「ふう……終わりだな。レイ、デルク。飯でも行かないか？」

筋トレも終わり、ハワードがそう声をかける。しかしデルクは申し訳なさそうに頭を下げるのだった。

「すまんっ！ 今日妻と息子と会う日なんだっ！」

「そっか。家族は大事だな。すまん、無理いつて」

「いやこちらこそ、悪い。また埋め合わせはするからよーっ！」

そう言いながらデルクは足早に去って行った。もともとはすぐに向かう予定だったが、予想以上に時間に余裕があったのでレイたちと筋トレをしていたのだ。

「ハワード。デルクの家族って……」

「ああ。あいつ結婚して子どももいるんだよ。確かレイと同年だったな」

「そっか……」

去っていくデルクの大きな背中を見つめる。それを見て、家族と一体なんなのか……とふとレイは思ってしまう。

家族。それは血のつながりのある人間で構成された集団。その意味自体は知っている。もちろん、家族になるのは血のつながりが必須ではないことなど分かり切っている。

レイは特殊選抜部隊の全員のことを家族のように思っている。しかしそれはあくまで、ように……という話に過ぎない。

本当の家族の意味を彼は知らないのだから。

そして、ふと考えてしまう。自分にも家族ができれば、どのような感じなのかと。普通の子どもとして生きていればどのような人生を歩んでいたのか。

決して自分のことを不幸だとは思っていない。しかし、そんな夢想をしてしまうほどには彼もまた迷っているようだった。

「どうするレイ？ エインズワースと帰って食べるのか？」

「いや……師匠の食事は家に用意してあるし。それに、久しぶりにハワードとご飯も食べたいから。行くよ」

「おっ！ 嬉しいこと言ってくれるねえ！」

わしわしと頭を乱雑に撫でるが、それを受け入れる。リディアはいつも力任せにするのだが、ハワードのそれはちょうどいい力加減だった。

ハワードと二人きりになるのは初めてであったが、なんだか彼と真正面から話してみたいと レイはそう思っていた。

「今日は俺の奢りだ。いくらでも食っていいぜ？」

「それ、師匠の前でも同じこと言える？」

「う、うぐ……それは無理だな……実は昔、かなりやられたな。あの時はビビったぜ……」

「ははは！ それもそうだよな。師匠は本当によく食べるから」

「ああ。あの食いつぷりは尋常じゃねえからなあ……」

そんな会話を繰り返しながら、レイとハワードは二人で街へと繰り出していくのだった。

夜の帳が降りた。街灯がわずかに灯りつつある道を進んでいく。多くの店は閉まっているが、飲食店はむしろここからが始まりということで王国の繁華街には結構な明かりが点っている。

伊達に世界でも有数の大国ではない。繁華街の盛り上がりはそれこそ、世界の中でも最高峰である。道ゆく人々は笑い声を上げながら、二人の横を通り過ぎていく。

「レイ。何が食べたい？」

「なんでもいいよ。それはハワードはお酒飲みたいでしょ？ 付き合うよ」

「お。それは助かるな。でも、レイは飲むなよ？」

「分かってるよ。酔っ払った師匠には何度も勧められているけど」

「ははは！ あいつらしいなあ。じゃ、居酒屋にでもいくか」

そうして二人が向かう先は居酒屋だった。そこはハワードが行きつけにしている店で、店主とも知り合いである。

「ハワード！ 久しぶりだな！」

「おやっさん。ども！」

「あ？ まさか……子どもか？」

「いやいや。親戚の子どもですよ！」

笑いながらそう誤魔化す。本当のことを言うわけにもいかないの
で、言い訳は親戚の子どもしておくように部隊内では共有されて

いる。

「なるほどな。席は空いてる。好きに座ってくれや」

「ありがとうございます」

ハワードが向かう先は、奥の方にある座席だった。ちょうど外から死角になるポジションだ。念のためを考えてレイと二人でいることをあまり見られたくはないという配慮でもあった。

「レイ。ここでいいか？」

「うん」

席に着くと店員がやってきて、水を置いていく。そして、机に置いてあるメニュー表を見て何を注文するか考えるのだった。

「レイ何にする？」

「ハワードに任せるよ」

「そうか。苦手なものとかないよな？」

「うん。なんでも食べれる」

「オッケー」

ハワードは自分の好きなものや、レイの好きそうなものを注文することにした。その前にドリンクがやってきたので、とりあえず乾杯していくことにした。ハワードはもちろんアルコールであり、レイはソフトドリンクだ。

「じゃ、乾杯ってことで」

「うん。乾杯」

カン、とグラスをぶつけると互いにゴクゴクと喉を鳴らして流し

込んでいく。

「かあーっ！ やっぱ仕事終わりはこれだよなあ」

「美味しいの？ 師匠も美味しいって言ってるけど」

「まあ美味しいな。レイも飲めるようになったら、改めて連れて行ってやるよ」

「それは楽しみだね」

その後。続々と届く注文した品々。それを食べながら、二人は今後のことについて話すのだった。

「レイ。改めて、大丈夫なのか？」

「極東戦役のこと？」

「ああ。はつきり言ってる俺はレイのことはかなり評価してる。もう魔術師としての実力は俺じゃあ届かないしな。でもやっぱり、お前はまだ子どもだ。いくら強いからと言って」

と、そのまま言葉を続けようとするがレイは被せるようにして口を開いた。

「大丈夫だよ」

ぞくりと背筋が凍るような感覚。レイの瞳にはなんの光も宿っていないように感じ取れた。この圧倒的な圧迫感。それをこの年齢にして身につけている事実にも驚くが……ハワードは初めてレイの底の见えない恐怖というものを感じ取った。

それと同時に悟る。

リディアとレイはやはり、魔術師として自分とは別の領域に立っているのだと。ハワードもまた幼少期から天才として育ってきた。魔術学院も、軍の中でも、突出していた。

彼は自分は天才だと思っていた。この二人に出会うまでは。

リディア「エインズワース。
レイ。」

この二人が明らかに格が違う。努力で追いつける領域だとか、そんなものではない。明らかに才能という大きな壁によって、隔てられているのだ。

それを改めてハワードは痛感する。

「そっか。杞憂だったな」

「実戦は初めてだけど、やれるよ。それに特殊選抜部隊はみんな強い。負けるわけがないと思うけど」

「そりゃ、そうだな！俺たちは最強だからな！あはは！」

「もしかしてもう酔ってる……？」

「いや、酔ってねえさ。酔ってなんか……」

キョトンと首を傾げるレイのことをじっと見つめる。レイの存在は特殊選抜部隊の人間を大きく変えてきた。それはハワードも含まれていた。

今まではずっと、天才であると同時にどこか調子に乗っていた部分もあった。この特殊選抜部隊に抜擢されて自分はこのまま栄光の道を駆け抜けていくのだと。

リディアの存在は知っていたがそれでも自分は引けを取らない。
そんなプライドがあった。

しかし、リディアに届くことはなく、レイにすらもう魔術師としての技量は追いつけない。

レイのような子どもに追い抜かれて、自分は魔術師として大成できるわけがない。そんな風に思ってしまう時もあった。レイのことを疎ましいと思うことも、ないわけではなかった。

しかしやはり、ハワードはレイのことが好きだった。いつもどうしてか、彼に声をかけてしまう。

一緒にトレーニングをしよう、一緒に飯に行こう、一緒に買い物に行こう。

そういうとレイは少しだけ笑って、ついてきてくれる。彼にとってレイの存在は、とても大きなものになっていた。それに謙虚に生きることができた。

自分などまだまだであると。レイに比べれば、まだ自分は下の存在である。でもだからこそ、届かないからこそ、まだ進めると。

ハワードは自分の力を過信していたが、決して愚者ではなかった。己が間違いを省みて、それを糧にして進める意志を持っていた。だから彼はレイに感謝していた。

自分に世界の広さを教えてくれて、ありがとうと　そう感謝していた。

「レイ。極東戦役が終われば、きっと長い休暇がもらえる。隊のみんな旅行にでもいかないか？」

「旅行？」

「ああ。レイは王国の外はあんまり知らないだろ？ 実は俺は旅行が好きでな。いい場所をたくさん知ってるんだぜ？」

「そうなんだ。それはいいね。今から楽しみだよ」

ニコリと笑みを浮かべる。そんなレイを見て、ハワードは思う。

これから始める極東戦役。きっと最前線に送られるだろう。地獄のような戦場かもしれない上に、生きて帰ることのできる保証もない。

でもだからこそ、みんなを守れるように戦っていこうと 彼はそう思った。

第291話 戦場へ

早朝。

ついにこの日がやってきた。早朝に出発するということで、^{スーパ}特殊
選抜部隊のメンバーが集まっていた。

現在は集合時間の十分前。普段ならば、全員揃っているところなのだが今はレイとリディアが遅れていた。もっとも遅れている原因がリディアにあると全員ともに分かっているのだが。

「リディアのやつ……本当にしょうがないやつだな」
「でもレイちゃんがいるから大丈夫だよーっ！」

と、アビーとキャロルが話していると二人は慌てて集合場所にやってくるのだった。

「すまない。ギリギリだったか？」

飄々とした様子で現れたのはリディアだった。その後ろにはレイが着いてきているが、その顔には疲労が滲んでいた。

「師匠……本当に勘弁してください。全く起きる気配がなかったの
で、焦りましたよ」

「すまんすまん。この時間に起きるのは久しぶりでな！」

謝罪をしているようだが、全く反省の色が見られない。そんな様

子を見て、はあとため息を漏らすレイ。今に始まったことではないが、今日のような日でもマイペースなリディアには少しだけ辟易してしまう。

「リディア。お前というやつは本当に……」

「アビー、そんなに怒るなよ。ちゃんと時間内には来ただろう?」

「レイに起こしてもらったんだろう?」

「まあそうだな。でもいつものことだからな!」

「……全く。レイがいないとゾツとするな」

頭に手を当てて、やれやれと首を横に振る。アビーの懸念は的中していたが、レイが大丈夫ということで任せていたおかげでどうにかなってホッとしていた。

本格的に極東戦役に参加するというのに、この意識で本当に大丈夫なのかと思うが……今更リディアに関していうことはほとんどないだろう。

すでに七大魔術師として大成しており、魔術師としての实力は抜きん出ている。すでに七大魔術師の中でも最強ではないか、と謳われているほどの実力だ。

もつとも性格的な面や生活習慣は決して褒められたものではないのだが。

「よし。全員揃ったね」

改めて声をかけるのはヘンリックだった。その隣にいるフロールはじつとリディアのことを見つめるが、今は特に何もいうことはなかった。

「改めて本日より極東戦役にうちの部隊も参加することになった。担当するのは最前線だ。特殊選抜部隊は独自に動くことも多いだろうが、他の部隊と連携を取る機会もゼロではないだろう。心してかかって欲しい」

『了解』

全員で声を揃えて返事をする、ついに極東戦役の戦場となっている場所へと向かうことになった。

現在は他国の要請により出陣しているということで、戦場の近くに簡易的な王国軍の基地が出来上がっている。極東戦役を押さえ込んでいる隣国はすでに疲弊しきっており、戦力は大幅に低下。

そこで王国と正式に同盟を結ぶことで、こうして特殊選抜部隊も派遣されることになった。

極東の地形としては山岳部が多く、それに今は雨も多い時期になっている。戦場になっているのは、主に山岳地帯であり位置としてはエイウェル帝国の隣になっている。

もともとは小さな火種だった。それが広がり、今は完全に暴徒になってしまった兵士を鎮めることが目的。エイウェル帝国もまた、軍を派遣して鎮火に努めると発表しているが未だに戦火が広がり続ける現状を見て王国軍もまた派遣されることに。

すでに気がついていて人間も多い。この戦場の全てを操っているのはエイウェル帝国であると。小国同士の戦いではあるが、この戦場は初めての魔術を用いた戦争。そこで魔術を兵器として輸出して、巨万の富を得ている。

それはすでに確かな筋から手に入れている情報である。それは、表には発表されていない情報だ。軍の中でも一部の人間だけが知っている。

もちろんその中には、アストラル特殊選抜部隊も含まれている。

「今回の紛争……いや、戦争だな。妙にきな臭い気がしないか？」

移動中の馬車の中。そこで声を発するのはリディアだった。今回は長旅になるということで、交代制で睡眠を取ることになっている。

現在はリディアとアビーが起床している時間ということで、他のメンバーの邪魔にならないように密やかに会話をしていた。

「どうしてそう思う？」

「裏にエイウエル帝国がいるのはわかる。そして、魔術の技術を流通させ戦火を広げている。そこで巨額の富が動いているのも分かっている。しかし、本当の目的はそれだけなのか？」

「……私も思っていることがある。エイウエル帝国はすでに世界最大の大国と言われている。王国はその歴史があるからこそ、大きく見られているがすでに経済的な面ではかの国には追い抜かれているだろう。だからこそ、どうして今更その先の利益を求めるのだろうか……と」

「純粹に欲望が加速しているだけ、とも考え難いよな？」

「ああ。その程度の国ならば、あそこまでの発展はあり得ない」

議論を交わす。

リディアとアビーはこの戦いに別の目的があるのではないかと思
い始めていた。

アビーが言及しているように、エイウェル帝国は経済面で見れば
すでに世界トップだろう。そこからさらに利益を追求するのは理解
できるが、戦争に介入するのはあまりにリスクが大き過ぎる。

どうしてそこまでするのか。

リスクと利益の天秤をかけた時に、純粹にさらに利益追求を優先
したいというだけではリスクに釣り合わない。万が一、戦火を広げ
ている事実が公になってしまえば各国からの批判は避けられない。

貿易が停止するなどの経済的な制裁もあり得る。その上でどうし
て極東戦役に介入するのか。その答え 核心にはまだたどり着い
ていないが、何かあるのは間違いないと考えている二人だった。

「やはり魔術に関連することなのか？」

「リディア。何か分かってしているのか？」

「いや、ただの予感さ。でも……レイが言っていただろう。呼ばれ
ているような気がする」と

「ああ」

「私も同じ感覚を覚えている。それに、以前帝国に向かった時の少
女の話はしただろう？」

「……あの地下で出会ったという少女か？」

「そうだ」

リディアは改めてあの時の話をする。それは決してレイには聞か
せてはならない情報だった。

彼女はちらりと寝ているレイの方に視線を送る。そして、一枚の紙を用意するとそれにスラスラとペンを走らせていく。

「……」

受け取った紙を確認すると、そこにはこう書いてあった。

あの少女はレイと同質の第一質料プリママテリアを保有していた。

「これ、本当なのか？」

「おそらくだが……いや、私程度の能力ではそこまでは見えなかった。報告書にも書くか迷ってた」

「どうして共有しない。重要なことだろう？」

「……どうしてだろうな。重要な情報なのは分かっている。しかし私はそれと同時に、パンドラの匣はこを覗いているような気がしてな……」

気がつくとしディアの手は震えていた。その様子を見てただ事ではないと理解するアビーはそれ以上言及することはなかった。

「仮に何かあれば、すぐに報告しよう。しかし今回の戦争、私はただでは終わらないと思っている」

「それも予感か？」

「ああ。馬鹿にするか？」

「いや。リディアの直感は昔からよく当たる。信じているぞ」

「願わくば、無事に終わってくれたらいいんだがな」

「そうだな……」

そこで話は打ち切られた。

馬車に揺られながら、進んでいく。その先には何が待っているのか。そんなことに想いを馳せながら、二人はじつと空を見上げた。

「……」

その一方で、レイは寝ているように見せかけて……決して寝てはいなかった。横を向いて寝息を立てていようだが、実際には意識は覚醒していた。

彼は今の会話を聴いて思った。レイもまた、この先には何かあると思っている。それは何か根拠があるわけではない。ただの予感に過ぎない。

そうしてついに、世界に大きな爪痕を残す極東戦役が幕を開けた。

第292話 最前線

ついに特殊選抜部隊は戦場となっており、メルス共和国へとたどり着いた。
アストラル

現在は戦場も以前よりは落ち着いているという話になっているが、それでも死傷者の数が減ることはない。

「状況は？」

「こちらでお伝えいたします」

前線に簡易的に作られている基地。そこでは野戦病棟も兼ねているようで、呻き声のようなものが聞こえてくる。血の匂いと消毒液の匂い。さらには、治癒魔術をかなり使っているようで周囲には第^{リマテリア}一質料が大量に溢れていた。

「……」

その様子をレイはチラッと視界に入れる。特に何か思うわけではないが、彼の心臓は一瞬だけ高なつた。まるで何かを思い出すかのように。

「まず戦場ですが、敵国の兵士の様子がおかしいのです」
「おかしい、とは？」

ヘンリックがそう尋ねる。すると指揮官と思わしき男性は、次のように答えた。

「あれはもはや……化け物と形容すべきでしょう。理性を失って、敵味方問わずに魔術を暴発させ続ける」

「魔術領域暴走だけではないと？」
オーバーヒート

「はい。魔術領域暴走によって暴れていると思いますが、実際は理性もある兵士もいるようです。またそれをまとめている指揮官もいるのです。こちらとしては、何が何だか……」

その男性は完全に疲弊しきっているようだった。同じ王国軍所属であり、ヘンリックは顔見知りでもある。そんな彼が、こうした顔を見せることにヘンリックはことの重大さを理解した。

どうやら今の戦場は思ったよりも酷い状況になっていると。

「最前線はどうなっている？」

「……最前線は、すでに派遣した兵士達はかなりの数が亡くなっています。優秀な者もいたのですが、無残にも」

そこから先の言葉を聞くことはなかった。泣きそうな表情と、あまりにも悲壮感の漂う雰囲気から全てを察したのだ。

「現在は最前線は落ち着いています。何人か見張りを立てていますが、森の中ということもあって、すぐに察知するのは厳しい状況です」

「森の中……魔術で察知できないということか？」
プリママテリア

「森の中は第一質料が乱れているのです。魔術的な感知は厳しいかと。そのため相手の音だけで察知しないといけないため、対応が遅れているのが現状です」

「ふむ……」

顎に手を当てて考え込む。決して楽観的に戦況を見ていたわけではない。しかし、状況は思ったよりも悪化していた。だからこそ、この戦況をどのように覆していくのか。

それを考えつつ、ヘンリックは改めてこう告げた。

「分かった。最前線の方はこちらの部隊で対処しよう」

「……っ！　ありがとうございますっ……！」

頭を下げる。それは心からの感謝の意を示したものだ。ここにいる軍人で、実戦を経験したものは少ない。それに相手は同じ人間。殺すことを躊躇するのは、人間として当然だ。その一方で、敵はそんな理性を備えていない。

殺すことに躊躇いがないということは、戦場において何よりの強みであつた。

夜。すでに日は完全に落ちてしまい、薄暗い光がこの場を照らしつける。特殊選抜部隊のメンバーは別のテントに集まると、早速作戦の立案を開始する。

「私が考えるに、厄介なのはこの森だね。相手もそれを分かってここで戦っているんだと思うよ」

いつも以上に真面目な声でキャロルは自分の所感を述べる。特殊選抜部隊の作戦の立案は現在はキャロルが担っている。それをヘンリックと話し合い、最終的な作戦を決定する。

もちろん今は他のメンバーも揃っている。

「森ですか……魔術による探知を意図的にできないようにしている
と?。」

フロールの言葉に対して、キャロルはコクリと頷く。

「そうだと思う……一応、理論的には可能な技術だし。でもそれも
きつと周期があるはず。絶対に弱まる時があると思うの。」

神妙な面持ちで地図を見つめるキャロル。そんな雰囲気の中、レ
イはスツと手を挙げる。

「レイちゃん? どうかしたの?。」

「森の状況なら、俺が把握できる。」

「どういうこと?。」

「すでにこの位置から森に潜伏している相手の位置はある程度把握
できている。」

ざわめきが広がる。それは、思ってもみないことだった。この基
地から最前線までは優に数キロを超えている。それを知覚するなど
あり得ないが、レイならば納得できてしまう。

「私もおおよその位置は把握できている。どうにも、相手の兵士は
妙な第一質料を纏っている。プリママテリア私とレイの前ではそれも無意味だがな。」

リディアもまたすでに完全に把握できているようで、キャロルは
本当に頼りになる二人だと思うのだった。

「じゃあ、正確な位置を教えてもらって改めてこんな作戦に」

作戦会議はさらに三時間を要するのだった。

深夜になった。空を見上げれば、数々の綺麗な星々を見ることができる。レイはただ一人、岩場に腰掛けるとブーツと空を見上げる。

現在は就寝時間になっているのだが、目が冴えてしまつて寝ることができないので彼はたった一人でこの場にやって来ていたのだ。

「レイ。一人か？」

「ハワード。どうかした？」

後ろから人の気配がすると、そこに立っていたのはハワードだった。そのまま近づいてくると彼はレイの隣に腰を下ろした。

「ついに明日からだな」

その声音はいつも通りの彼の声だった。緊張している様子もなく、ただただ平静な様子のハワードだがそれはレイも同じだった。

「うん。そうだね」

「……落ち着いてるな」

「そうかな？」

誰がどう見ても今のレイは落ち着いてるとしか言えないだろう。その雰囲気はおおよそ子どものものとは思えない。明日からは敵国の兵士との戦いが始める。それに、向かうのは最前線だ。

間違いなく殺し合いになる。だというのに、レイはいつものよう

に冷静だった。

「実はレイがビビってないかと思って、様子を見に来たんだぜ？」

「そうなの？」

「ああ。でも大丈夫みたいだな」

そう言ってハワードは地面に寝そべって、空を見上げる。今日の夜は雲ひとつなく、綺麗な星々をはっきりと見ることができた。別に珍しいわけではないのだが、ハワードはふと声を漏らす。

「星。綺麗だな」

「うん。今日はすごく晴れてるよ」

「レイは実戦は初めてだったよな」

「そうだね」

「一つ忠告しておくが、躊躇はしないことだ」

「躊躇いが自分の死に繋がるからでしょ？」

「流石にエインズワースに教えられているか」

「うん。でも、やっぱり実感はないよ。百聞は一見に如かず、っていうしね」

「それはそうだな。俺も実戦を経験する前と後じゃ、その言葉がよく理解できる」

ハワードの言葉は妙に重みがあった。彼は優秀な魔術師であり、天才だ。しかしその反面、実戦を経験する機会も多かった。すでに魔術によって人を殺めたことは数えきれない。いくら紛争であり、敵がいたとしてもその記憶はずっと残り続けている。

実際にそれが国を守ることに繋がるとしても。

「レイ。お前は何か探しているのか？」

それは唐突な言葉だった。それを聞いた瞬間、レイは目を見張る。なぜならば、それは的を射ていたからだ。

「それは……そう、かもしれない」

「かもしれない？」

「うん。自分でもよく分かっていないんだ。どうして自分は何かを探しているんだろうって……昔の記憶が最近は思い出せない。けれど、妙な既視感を覚えている自分もいる。一体自分は何者なのか……その答えを探しているのかもしれない。戦場に向かうのも、それがあるからだと思う」

「……」

具体性に乏しく、抽象的な言葉だった。しかし、レイは確かにこの戦場に何かを感じ取っている。何かを探して、ここにたどり着いた。まるでそう言っているようだった。

「そっか。見つかるといいな」

「うん」

話はそこで打ち切られた。そうして二人は立ち上がると、基地の方へと向かうのだった。

ついに極東戦役に本格的に参加することになる。

全員が確かな使命を抱いてついに作戦は開始されることになった。

第292話 最前線（後書き）

【氷剣の魔術師が世界を統べる】原作小説第2巻とコミカライズ版第1巻の発売日が決定いたしました。原作小説第2巻の方は11月2日（月）、コミカライズ第1巻の方は11月9日（月）になります！ ちょうど一週間差ですね。書影などはまだですが、そちらも公開され次第共有しようと思います。

それでは、引き続き本作をよろしく願いますー！

第293話 実戦

まだ夜も明けない朝方。すでに特殊選抜部隊アストラルのメンバーたちは配置についていた。前線の中でも最も過酷な戦場。それこそが、最前線である。

その中で緊張感を保ちつつ、特殊選抜部隊アストラルは進む。前衛はリディアとアビー。中衛はデルク、ハワード。後衛はフロールとレイという構成になっている。

ヘンリックとキャロルは作戦指揮官ということで、基地に待機して戦況を見守っている。

今まで幾度となくこのメンバーで作戦をこなしてきた。どんな任務であつても確実に果たしてきた。しかし今いる場所は他でも無い戦場である。

人間が平然と死んでしまうような場所に彼、彼女たちは立っているのだ。

そしてまずは、森の入り口へと進んでいく。

「これは……」

「なかなか酷いな……」

リディアとアビーが森の中に入る手前で感じ取るのは、死の匂いだった。実戦経験のある二人ではあるが、ここまでの死臭が漂って

いる場所には来たことなどない。

そうして特殊選抜部隊は森の中へと入っていく。まだ夜明け前と言っことで、薄暗いがりディアは広域干涉系の魔術を發動していた。

魔術名称は、パーセプションフィールド知覚領域。りディアが得意としている魔術でもあり、レイもまた同じ魔術を使用できる。

前方はりディアが、後方はレイが知覚領域を展開することで周囲の様子を把握する。地面に転がっている死体は、人間の原型を留めているものの方が少なかった。

それでも気に留めることなく進まなければならない。どうして、基地にいた兵士たちがあそこまで疲弊していたのか……それは全員ともに理解してしまう。

こんな凄惨な場所で戦い続け、隣で仲間が無残にも死んでいく光景を目にすれば精神的に参ってしまうことは自明。

それでも特殊選抜部隊アストラルが到着するまで持ち堪えたその胆力は讃えるべきものだろう。

「……」

レイもまた知覚領域を広げているため、りディアと同様にこの惨状を理解している。ふと視線を下に向けると、死体と目があっつまう。大人であつてもこの光景は耐え難いと言っのに、レイはただ無心にその瞳を見つめる。

何も宿ることはない虚空。

吸い込まれるようなその眼窩がんかを見てもレイは取り乱すことはなかった。ただ彼は内心で思っていた。どこかこの光景は、既視感がある……と。

「前方二十メートル先。敵影だ。待ち伏せをしている。こちらから仕掛ける」

『了解』

接敵。

相手が知覚するよりも早くリディアは相手の存在を知覚した。そうしてその言葉を合図にして、一気に全員は大地を駆け抜けていく。

疾走。

先頭にいるリディアはすぐに魔術を展開した。

《第一質料プリママテリア〓エンコーディング〓物資コードマテリアル》

《物資コードマテリアル〓デコーディング》

《物質コードマテリアル〓プロセッシング〓減速ディセラーシヨック〓固定》

《エンボディメントマテリアル〓物質》

「
アイシクルブレイズ
冰千剣戟」

両手に顕現するのは冰剣。

リディア＝エインズワースの代名詞でもあり、象徴でもあるそれは アトリビュートとも呼ばれている。

彼女は姿勢をグッと落として低くしたまま加速していくと、一閃。相手の首を狙って容赦無く冰剣を振るったが、首を落とすことは叶わない。どうやら敵もまた一筋縄ではないようだった。

「どうやらかなりの手練れのような。しかし……」

分析する。今の一瞬の攻防でリディアの攻撃を避けるのは至難の技のはず。そもそも、先手はこちらが取ったというのに避けたという事実には違和感を覚える。

それは決して傲りなどではなく、純粹なる疑問だった。それ加えて異常なのは、リディアは切り裂いたというのに相手は悲鳴の一つもあげない上に治療する素振りもない。

苦悶の表情すら浮かべていない。

じつとこちらの様子を窺うだけで、まるで切り裂かれてしまった腕のことなど意識していないかのような。

「全員。いつも通りいく。ついてこい」
『了解』

その後。リディアを先頭にして、とりあえずはこの場での戦闘を終えるのだった。

「こんなものか」

ヒュツと冰剣を振るうと、地面には付着した血が勢いよく落とされていく。戦闘はそれほど時間は掛からなかった。主に前線でリディアとアビーが敵を殲滅し、残りは中衛と後衛で処理をした。

レイといえば氷で足止めをするだけで、相手に直接手を下してはいない。それは自分の役目だからとリディアにいい聞かされているからだ。

「しかし、奇妙だ。まるで恐怖心などなかった様子だった。それに怪我の治療も優先しようとはしない。どうなっているのか……」

アビーの言葉に対して、フロールもまた自分の考察を述べる。

「確におかしいわね……人間としての機能が欠落していると言うか、なんと言うか。そもそも魔術領域暴走^{オーバーヒート}によって壊れている、という見方もできるけれどこれではまるで」

と、その言葉の続きはレイがボソリと呟くのだった。

「まるで傀儡のようだった。自分はそう思います」

そう。レイだけではなく、リディアも感じ取っていた。今の戦闘において第三者における介入があったことを。

「レイの言う通り、相手は操られていたな。微かな別人の第一質料^{プリママテリア}が漏れ出していた」

リディアは分析した結果を雄弁に語り始める。

「そもそも、痛覚を遮断している。さらには恐怖心もない、と言うのは人間としてありえない。おそらくは何者かにそのように操作されている可能性があるな」

「精神干渉系の魔術か？」

ハワードが軽く首を傾げながら、そう言うがリディアの表情は陰しいままだった。

「ああ……そうかもしれないな」

まだあくまで可能性でしかないため、彼女が詳しく述べることはなかった。しかし、精神干渉系の魔術^{プリママテリア}にしては第一質料の量が少ないと彼女は思っている。

その一方でレイは先ほどまで戦っていた相手のことをじっと見つめている。顔色一つかえずただ静かに。まるで何かを感じ取っているかのように。

「レイ。大丈夫か？」

「はい。問題ありません」

「そうか……」

リディアとしては複雑な胸中だった。レイがここで取り乱してしまえば、作戦の参加を取りやめることができる。しかしレイは確実に戦力になるのは間違いない。

もはや、レイなしの特殊選抜部隊^{アストラル}は考えられないほど、彼は中心

的な存在になりつつあった。

相反する感情。

それをグツと飲み込むとリディアはそつとレイの頭を撫でる。それはいつものように、とても優しい手つきだった。

「戻るか」

「はい」

それを合図にして特殊選抜部隊は最前線から引いていく。現状、他に近くには敵がいらないと言うことで引いていくのだが……レイだけがその瞬間　微かな兆候を感じ取って後ろを振り向いた。

「レイ？　どうかしたのか？」

「いえ……なんでもありません」

気のせいだろう。それにリディアが感じ取っていないのだ、きつと気のせいに違いない。そう思って特殊選抜部隊は無事に最前線から引いていくのだった。

敵対する存在が近くにいるとは知らずに……。

「あつぶな。今の私の隠密、完璧だったよね？」

「ええ。間違いなく完璧でしたが、どうやら彼は本当に規格外のようです。かのリディア」エインズワースを超えていると言うのは本当かもしれません」

「ふう……焦ったあ。でも大体の戦力は把握できたよね？」

少女がそう尋ねると、男性の方はメガネを軽くあげてそれに応じる。

「はい。おおそのメンバーの实力は把握できましたが、やはりあの二人の底を見ることはできませんね」

「そっかー。七大魔術師は私たちに匹敵する奴もいるけど、あいつらは特別だね」

「リディア」エインズワース。彼女はある種の特異点でもあります。殺すには慎重を期するべきでしょう」

「そうだね。じゃ、戻ろうか」

「ええ」

そうして二人の存在は森の暗闇の中に溶けるようにして、消えていくのだった。

第293話 実戦（後書き）

現在は12時に投稿していましたが、次回から投稿時間をランダムにしてみようと思います（特に深い意味はありません！）

まだブックマーク登録していない方は、登録すれば通知が来るので是非ブックマークをよろしく願いします（更新頻度に変更はありません！）

第294話 ハワードの軌跡

ハワード＝ケネット。

特殊選抜部隊ではムードメーカーのような存在であり、彼の陽気さアストラルのおかげで隊はいつも明るい。たまにフロールに苦言を呈されることもあるが、概ね彼の存在は特殊選抜部隊に欠かせない。アストラル

そんな彼の出身は中流貴族である。

上流貴族になろうと目論んでいる貴族もいる中、ケネット家は特にそんな野心もなく穏やかな一族であった。

ハワードは三男であるため、家を継ぐことは無い。そのため自分の好きなことができる喜びと、兄に対する後ろめたさもあった。しかし、彼の兄はこう言うのだ。

「ハワード。お前には魔術の才能がある。俺よりもっと、大きな才が。本当ならきつと、俺じゃなくてハワードが継いだ方がいいと思うが……俺は兄貴だ。こればかりは仕方ないな」

年齢は九つほど離れている。そのため、幼いハワードは当時の兄の言葉を理解できていなかった。ただ漠然と、兄の言葉を聞いているだけだった。

「兄さん……」

頭を撫でられる。その言葉の意味を彼は全くわからなかったが、優しい兄が何か大切なことを言っているのだけは理解できた。

しかし、そんな優しい兄との時間は長くは続かなかった。

「……」

曇天。

空からはこれでもかと雨が降り注ぐ。その雨に打たれながら、ハワードは墓地に立っていた。喪服に身を包み、ただ一人じっとその場に立ち尽くす。

すでに葬式は終わった。

親族たちもまたすでに帰路についている。

ハワードは兄の墓標の前で何を思っているのか。

あれから数年。彼はディオム魔術学院の二年生になっていた。魔術師としての才能も開花し、今では学院一の天才と謳われている。

その行末は七大魔術師に到達するのでは無いか、と言われているほどだ。

そんな中、兄が死んだ。死因は他殺だった。彼はケネット家次期当主として、他国への挨拶回りに向かっていた。そこを運悪く、夜盗に襲われてしまい死亡。

心臓をナイフでひと突きだったと言う。

棺桶に入っている兄の顔を見て、涙を流すことはなかった。まるで眠っているかのような兄の顔を見た時、ハワードは本当に死んでしまったのか……と思うと同時に、何もできない自分に苛立ちを覚えていた。

もちろん、今回の件に関してハワードにできることなどない。

死は唐突であり、そこに意味などない。ただ偶然にも殺されてしまった。その偶然こそが、全てだった。

しかし、人間はその偶然だけで納得できる生き物ではない。そこに何かの必然性を見出そうとする。だからこそ神と言う概念を人は信じ、その虚構に意味を見出そうとするのかもしれない。

それこそが人間の強みなのだから。

「兄さん……」

やっと溢れ出る涙。それはツーンとハワードの頬を伝っていく。

空を見上げる。この日は土砂降りで、まるでその慟哭を表しているかのような空模様だった。

この日。ハワードは誓った。

誰かを守れるような存在になろう。いつか自分の力が誰かのために役立ち、その命を救うことができればいいと……そう願った。

そこから先、彼は迷いなく軍人へのキャリアへと進むことになった。士官学校での成績はトップ。それに陽気な性格もあって、周りからは賛辞の声をもらう。しかし彼はそれで満足できる人間ではなかった。

いつか誰かを守れるように。大切な人を失わないように。

偶然というものに抗えるだけの力を　　ハワードは欲していた。

「自分が新設の部隊に、ですか？」
「そうだ」

上官の部屋に呼び出されていたハワード。士官学校を卒業し、少尉としてのキャリアをスタートさせた。優秀なのはいうまでもなく、同期の中で一番の出世頭と言われている。

そんな彼は早期に別の部隊に行ってみないか、という誘いを受けていた。

「新設の部隊。そこにはリディア」エインズワース。アビー」ガーネット。キャロル」キャロラインの三名に加えて、ヘンリック」フアーレンハイト少佐が指揮を取る。興味はあるか？」
「……」

顎に手を当てて考え込む。

普通に考えればこれはいい誘いだろう。流石にハワードもその三人の名前は知っている。アーノルド王国始まって以来の天才、リデ

イア「エインズワース。」

またそれに追隨する二人の天才。

三傑と呼ばれ、その三人が飛び級のような形で軍に入りちようど士官学校をたった一年で卒業するという。おそらく、その三人のために設立された部隊なのだろう。

それだけの天才ならば一箇所に集めていた方が管理もしやすい。それに、リディアとキャロルの性格に関しては耳に入っていた。曰く、かなりの曲者であると。

興味があるかどうかと問われれば、ある……とハワードは答える。

彼はすでに自分の才能を見切っていた。天井はすでに見えた。周りは天才だと持て囃すが、それは七大魔術師に届くことは無いだろうと。

「そうですね。自分は……」

上官もまた絶対にそこに行けと言っているわけではない。ただ候補の一人としてハワードをあげているだけに過ぎない。

「これは余計な話になるが、今後のキャリアを考えれば行かない方がいいだろう。三人の天才、特にエインズワースは異質すぎる。お前が潰されてしまう可能性もある。順調に出世したいのならば、勧めはしない」

「……」

そう言われてしまえば、そうなのだろう。圧倒的な天才を前にし

て、その才能に嫉妬して狂ってしまう魔術師は今までも数多くみえた。

きっとハワードも自分がその一人になってしまおうと思われているのだろう。

だが、彼が出した答えは

「いえ。行きます。行かせてください」

「いいのか？」

「はい。構いません」

「分かった。お前の意志を尊重しよう」

特に何か大きな理由があったわけではない。それはいわば、純粋な興味だろうか。ハワードは知りたかった。どうしてまだ幼い少女が軍人になることを選んだのか。

史上最高の天才、リディア・エインズワース。

傍若無人、自由奔放。そんな彼女の未来は明るいというのに、どうしてその中でも過酷な軍人を選択したのか。そして、自分よりも圧倒的な才能の集まる部隊。今まではずっと先頭を走ってきた。

だからこそ、自分よりも大きな存在と出会ってみたい。

彼はそう……考えていた。

「エインズワース。ちょっといいか？」

「ん？ お前は確か……ハワードだったな」

「ああ」

「私のことはリディアでいいぞ？」

「じゃあ、リディアと呼ばせてもらおうか」

アストラル

特殊選抜部隊が設立され、ハワードの加入が正式に決まったその日の夜。彼はリディアのもとを訪れていた。

「で、飯でも行かないか？」

「私と二人でか？」

「ああ」

「なんだあゝ？ 私のことが気になるのかあゝ？」

ニヤアとした笑いを浮かべる。リディアは確かに容姿は優れている。その性格に目を瞑れば嫁にしたい男は数多くいるだろう。もっともあまりにも苛烈なその性格は、目を瞑ることなど不可能ではあるが。

「ああ。お前のことが気になってな。どうだ？」

爽やかな顔つきで、あっさりと肯定するハワード。どうやらリディアはその瞳に邪念などなく純粋に誘っているだけだと理解した。

そして彼女はその誘いを許可するのだった。

「いいだろう。で、もちろんハワードの奢りだろうな？」

「任せておけ。好きなだけ食っていいぞ？」

「ふふ。その言葉、後悔するなよ？」

まだリディアのことをよく知らないハワードは、この時は思ってもみなかった。

まさかりディアが想像を優に上回る大食漢であることを。

「……………」

隣で歩いているリディアにチラッと目を向ける。そこにいるのはただの幼い少女に過ぎない。本来ならばまだ魔術学院にいるはずだというのに、飛び級で入学して早期に卒業。さらには士官学校をたった一年で卒業。

天才中の天才であることは疑いようがない。

だからこそハワードは知りたかった。自分などとは比較にならない、本物の天才は……何を考えているのか。

第294話 ハワードの軌跡（後書き）

遅くとも過去編は、11月中旬までには終わらせようかなと。 10
月中は……なんとか頑張ります……！

第295話 天才の覚悟

二人で食事にやってきたが、そこでハワードは色々と後悔することになるのだった。

「エインズワース……」

「ん？ どうかしたのか？」

「それ、全部食べれるのか？」

「ああ！ もちろん！」

ニカッと快活な笑顔を浮かべるが、ハワードといえば冷や汗が滴っていた。

テーブルにはこれでもかといっぱいの料理が所狭しと並んでいた。それはすべてリディアが注文したものだった。ハワードはまだ若い少女だから、食べる量はそれほどでもないだろうと思って、「いくらでも食べていいぞ。先輩だからな！」と言ってしまった。

リディアがその言葉に対して、遠慮することなどあり得なかった。彼女はメニュー表からありったけの料理を注文すると、それをとっても美味しそうに頬張っていく。

ハワードもそれを摘むようにして食べるが、実際には食べている心地などしなかった。彼はまずは財布の中にある残金を確認すると、ギリギリ足りるか……とホツとするのだった。

「ハワード！ お前、いいやつだな！」

リディアはまさかここまで自由に奢ってくれるとは思っていなかったの。それはある種の勘違いなのだが　ハワードに対する好感度がかなり上がっていた。

いわば、親戚のお兄さんのような感じだろうか。

彼としてはここまで食べるとは予想していなかったの、冷や汗ものだが初めくらいはいいだろうと思って受け入れるのだった。

といつてもかなりの出費に変わりはないので、彼の今月の生活はそれになりに厳しいものになってしまふのだが。

「ふう。食べたなー!!」

「ああ……そうだな。いつもこれだけ食べるのか？」

「ん？　いや、いつもは普通くらいだぞ？　ただ好きなだけと言われると、好きなだけ食べなくなるもんだろ？」

「……そうかもな」

好きなだけ食べるというが、流石に限度があるだろうとハーワードは思う。それほどまでにリディアが平らげた料理の量は異常だった。途中では、料理をもってくる店員ですら訝しげな表情を浮かべていたのだから。

「で、話ってなんだ？」

やっと本題に入れるようだが、リディアは満腹なのか少し眠そう

だった。しかし彼もここまで来て遠慮することはなかった。

「まあ大したことじゃないが……まずはそうだな。軍に入っただろうだ？」

「……うーん。まあ、思った通りだな」

「思った通り？」

「ああ。面白そうなやつがたくさんいた。お前も含めてな」

「俺も？」

ハワードは首を傾げる。彼の自己評価としては、決して何かに突出しているわけではない。天才と言われていたが、軍の中では特別な存在ではなかった。

別にリディアが気にする要素など持っていないと彼は思い込んでいたからだ。

「ああ。天才魔術師だって、聞いてるぞ？」

「それは……どうだろうな」

「ん？ 誇らしくはないのか？」

「ははは。それをお前がいうのか？」

と、首を傾げながらハワードはそう言った。それはきっと、皮肉も含んでいたのだろう。確かに彼は天才と謳われている魔術師だ。しかし、それはリディア「エインズワースの前では霞んでしまっだろう」。

彼女は、魔術師の歴史が始まって以来の天才中の天才なのだから。

「ああ。なるほど。お前は才能のことを聞きたかったのか」

リディアはハワードがどうして自分のことを呼び出したのか。そのことを一連のやり取りですぐに理解した。現在はデザートを食べているのだが、スプーンをおくと口元をナプキンで拭う。

「おおよそどうしてこの若さで軍に進むことを希望したのか、とか聞きたいんだろ？」

「お見通しだな」

参ったと言わんばかりに両手をあげる。そしてリディアは打って変わって、真剣な表情になる。

「私は昔から思っていた。いや、お前も思ったことがあるだろう？」

「何のことだ？」

「自分は天才で、誰もが羨む才能を持っていると。自覚はあるだろう？ 才能がある側の人間であると」

「それは……まあ、そうだが」

ハワードもまた才能のある人間の一人だ。おそらく魔術師の中でもすでに上位に位置しているのは間違いない。軍人としての能力も高く、伊達に若くして特殊選抜部隊に抜擢されているわけではない。

リディアだけではなく、それはハワードもまた共感できることだった。

「努力だけでは辿り着けない領域が存在する。そのことに気がついたのは、幼少期だった。思ったさ。どうして周りの人間は同じことができるいんだらうかと。そして、理解した。自分には誰もが持っていない才能とやらを持っていると」

まるで遠い過去を想起するように彼女は語り始める。

「私の出身は大した家庭じゃない。両親は魔術師だが、それでも普通の範疇に収まる。姉も普通だ。しかし私は魔術師の歴史の中でも最高と言っているほどの才能があった。学院では貴族どもがケンカをよく吹っかけてきた。その度に、私は返り討ちにしていたがな」

ニヤツとした表情をして語るその姿は、リディアらしいとハワードは思った。彼女の武勇伝は有名であり、一人で二十人の貴族を相手にして無傷で返り討ちにしたという話もある。

しかし、彼女は途端にその表情から感情が抜け落ちたように、無表情になる。

「初めは痛快だった。でもな、私はやはり孤独だった。周りにはアビーとキャロルという天才がいたが、やはり私に届き得る人間は一人としていなかった。ただただ私は怖くなった。この才能は私をどこに連れて行くんだろうと思ったさ」

「……」

ハワードは純粹に驚いていた。リディア「エインズワース」といえば天才の中の天才であり、将来を約束されている魔術師だ。だからこそ、そのような悩みを抱えているなどとは夢にも思っていなかった。

だがリディアは自分の心情を吐露し続ける。

「私の才能を前に潰れていった人間は多い。それこそ、私に会わなければ魔術師として大成していたかもしれない。その可能性を摘んで、私は前に進み続けた。そして分かったことが一つある」

「それは……？」

恐る恐る尋ねる。返ってきた答えは、リディアは自分の人生の指針としていたものだ。

「才能にはそれ相応の責任が伴う」

ハツとする。自分の才能についての責任など考えたことはなかった。ハワードはただ、知りたいだけでしかなかった。自分よりはるか上の天才が何を考えて特殊選抜部隊に辿り着いたのか。

「才能には責任が伴う、か」

「ああ。私の才能には、この能力には多大な責任がある。だからこそこの力を大衆のために使うべきだと、そう思っただけさ。ま、きつとこれは自己満足にすぎないだろうがな。それでも私はそれを信条に生きて行くことを自ら選択し、ここに辿り着いた」

「……純粹に思う。お前は凄いやつなんだな」

「ははは！ 当たり前だろう？ 私は史上最高の天才なんだからなっ！」

その顔に先程のような陰りなどありはしなかった。

彼は知った。自分よりも遙か年下の天才魔術師は、自分の才能との向き合い方を理解しているのだと。いや理解しているというよりは、自分の生きる道を自分自身で決めているのだ。

その姿に憧れた。

尊敬をするのに年齢など関係はない。ハワードは心からリディア

のことを尊敬していた。あまりにもその姿が眩しかったからだ。

こうして彼はリディアとの出会いを機に、さらに成長していくことになるのだった。

「ふう。今日は奢ってくれてありがとな!!」

「いやいいさ。値段以上に大切なものを教えてもらったからな」

「お！　なら、今後私に奢るか？」

それは冗談めいた声に聞こえるが、実際のところリディアは半分本気だった。

「いや遠慮しておく。このままだと俺が破産するからな」

「ははは！　それが賢明だな！　じゃ、ハワード。改めてよろしくな」

「ああ」

握手を交わす。

こうしてハワードは本格的に特殊選抜部隊アストラルでの活動を始めていくのだった。

第296話 最前線からの帰還

最前線での戦闘を終えて戻ってきた特殊選抜部隊アストラの面々。無事に相手の戦力を削ることに成功はしたのだが、その表情に安堵感などはなかった。

全員ともに張り詰めたような雰囲気のまま、簡易的に作られている基地へと戻ってきた。

そこは野戦病棟も兼ねており、消毒液の匂いに満ちていた。魔術によって治療はできるものの、魔術も万能ではない。そこでは依然として懸命に治療に当たっている人間が数多くいた。

最前線の壮絶さは想像を絶するものだった。

しかし、特殊選抜部隊アストラのメンバーの役目はこの中で最前線を維持すること。勝利条件などは明確にはなっていないが、相手の進行を防がなければならぬのは自明。

そのためにも全員ともに休息することが必須である。いくら優れた人間であろうとも、休まなければ十分なパフォーマンスを発揮することはできないのだから。

「レイ。大丈夫か？」

「はい。問題ありません」

「そうか……」

戻ってきたレイは冷静だった。あの森での惨状を見たというのに、彼は平静を保っていた。

「とりあえずは休むことにしよう。まだ戦いは始まったばかりだ」
「了解です」

極東戦役が本格的に幕を開けることになったが、これはまだ序章に過ぎなかった。

「レイ！　あまり行き過ぎるなッ！！」
「分かっていますッ！！！！」

一週間後。

再び特殊選抜部隊は最前線へと赴いて、敵と戦っていた。現在は前線の負傷した兵士を後方へと送るための時間稼ぎをしている最中だった。

そのため、今回の作戦では敵の兵力をできるだけ削り、時間を稼げばいいだけだった。

しかし問題になっているのは、敵が魔物を使役してきたということだった。周囲にあふれている魔物の群れ。さらにはそれと連携を取るようにして、敵は魔術を使用してくる。

流石の特殊選抜部隊といえども、苦戦は免れないと思っていたが……。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コードマテリアル＝ディコーディング》

《物質コードマテリアル＝プロセシング＝減速ディセレーション＝固定ロック》

《エンボディメント＝物質マテリアル》

「……」

最前線を主に支えているのは、リディアだった。彼女が先陣を切って、次々と敵を屠っていく。

使用しているのは氷剣。それに加えて、遠隔錬成リモート、連鎖錬成チェインと複合させて氷の壁を生成し続けている。

それによって相手を一箇所に集めていくと、両手に握っている氷剣によって敵をなぎ払っていく。魔物と敵兵をまとめて沈め、返り血を拭うことなく進んでいく。

その後ろにはぴったりとレイが張り付いていた。現在はリディアとレイの二人でこの最前線を維持している。残りのメンバーは別の場所で漏れ出した敵の足止めをしており、戦闘も佳境だった。

「はあああああああああッ!!」

迷いなどなかった。

ただ懸命に己が命をかけて進み続けた。幾多もの敵を屠り、それ

でも前に進み続ける。それをサポートするようにしてレイもまた併走し始める。

森の中を縦横無尽に駆け抜け、レイは氷によって敵の足止めを図る。また彼はすでにこの周辺に遅延魔術^{ディレイ}によって氷の領域を作り上げていた。

「師匠ッ!!」

「分かっているッ!!」

レイが合図をした瞬間、周囲には一気に氷の世界が展開されていく。パキパキと音をたてながら、この場は一瞬にして凍り付いていた。

そうして敵の足止めをしながら、容赦無く敵を屠っていく。あくまでレイはリディアのサポートにはなるが、この活躍の裏にいるレイの存在は何よりも大きい物だった。

おそらくは他の人間では代替できないだろう。

それがたとえ長年の付き合いであり、天才の中の天才であるアビ―であったとしても。

レイとリディアのコンビネーションはそれほどまでに極まっていた。

「終わったな」

「はい。敵は撤退して行ったようです」

ヒュツと氷剣を振るうと、地面に血が滴っていく。今回の作戦、おそらく敵側はチャンスと思ってかなりの物量をぶつけてきた。しかしそれは、リディアとレイのたった二人によって妨げられてしまった。

王国側としては、現在は負傷している兵士が多いためあまり前線に戦力を割くことが出来なかった。そこで無理を言って、リディアとレイの二人でこうして最前線にやってきて無事に任務を完了した。

まだ戦いは終わっていないが、時間を稼ぐことは十分にすることが出来た。

「レイ。戻るぞ」

「はい」

翻る。血に塗れた長い金色の髪を靡かせながら、二人は来た道を戻っていくのだった。

リディア「エインスワース。その存在が敵の中で畏怖の存在として初めて刻まれた戦闘はこうして幕を閉じることになった。

「エインスワース。よくやってくれた」

「いえ。自分は当然のことをしただけです。中佐」

基地に戻ると、そこにはヘンリックが待っていた。どうやら負傷した兵士達はほぼ全てが後方へと戻ることが出来たようだった。そ

して、彼女は一人で報告にやってきていた。

レイには休めと言ってあるので、彼は大人しくすでに就寝している。

現在の時刻は深夜三時。長く続いた戦いも、とりあえずは落ち着いたようだった。

「戦況はどうなっていますか？」

「……どうやら、こちらが思っているよりも被害は拡大してないようだ。この場ではとりあえずは前線を維持することが出来たが、また他の箇所での戦火が拡大しているらしい」

「では、次はそちらに赴くと？」

「そうなるだろう。特殊選抜部隊は拠点防衛を目的とした部隊では無い。おそらくは今後も移動が多くなる」

「了解いたしました」

今後の方針を受諾し、リディアは敬礼をした。今まではただ傍若無人に生きているだけの人間と評されていたが、今の彼女は違う。

確かな意志と使命を持って、この戦場に身を投じているのをヘンリックは理解していた。

「正直なところ、エインズワースとレイの二人には感謝している。最小限の戦力で最大の成果を上げてくれる。今回の件もまた、本来ならば撤退にもっと時間がかかるはずだった。それはやはり、後方からの支援を必要とするからだ。しかし、その役割をたった二人でこなしてくれることで、こうして無事に撤退は成功。後はさらなる兵力の増強を待つだけでいい」

「自分の力が役に立っているなら、いいのですが……」

と、なぜカリディアの顔には影が差す。それをヘンリックは訝しく思い、追求するのだった。

「どうかしたのか？」

「レイのことです」

「もしかして、何かあったのか？」

「いえ。逆に何も無いのが問題なのです」

リディアは思っていた。今回の作戦では、レイが厳しいようならば自分一人で任務をこなしてしまおうと。あくまでレイはサポートに過ぎず、たった一人で敵を撃退するだけの自信が今のリディアにはあったのだ。

「正直なところ、今回の戦闘ではレイの尽力が大きかった。おかげで私もかなり動きやすかったのです」

「あの年齢で、すでにその領域に至っているのか。本当にレイは何者なんだろうか」

ふと、空を見上げるようにして彼は頭上を見上げた。レイの存在は一体何なのか。それはまだ誰にも分かっていない。

「レイが何者なのか。それは私にも分かりません。しかし、中佐。レイのことはどうか自分に任せていただければと」

「……それに関してはエインズワースに一任する予定だ。今の君について行けるのは、レイしかないからな。どのみちそうなる予定だ」

「は。了解いたしました」

改めて敬礼をすると、下がっていいと言われたのでリディアはデ

ントから出ていくのだった。

「さて、この戦争はいつまで続くのか……」

ボソリと呟くヘンリック。彼には予感があった。それはある種の直感なのかもしれない。この戦争は長引いてしまいそうだと。さらには、自分たちが考えてもいない別の思惑があるのでは無いかと。

こうして特殊選抜部隊は次なる戦場へと、身を投じるのだった。

第296話 最前線からの帰還（後書き）

お知らせになります。

氷剣の魔術師が世界を統べる、書籍版第二巻がAmazon様にて予約が開始されました！表紙もすでにそちらで公開されておりますので、お楽しみに！（Amazon様の検索欄で『氷剣』と検索すれば、すぐに出ると思います）

二巻は二章の内容になっており、大量に書籍版オリジナルエピソードを追加しております。ちなみに約400ページありますので、かなりの大ボリュームです……（汗）

既読の方でも絶対に楽しめるかつ、文量的にも満足できる仕上がりになっておりますので、何卒よろしく願いいたします。

また二巻の売り上げは、今後の続刊のためにも非常に重要になってきます。今後とも書籍版だけでなく、このWeb版を継続していくためにも是非とも書籍版第二巻をよろしく願いいたします……！皆様の一人一人のご協力が何よりも、誇張抜きで非常に大きな力になります。末長く本作を続けていくためにも何卒、ご協力をお願いできれば幸いです。

第一巻も発売中（こちらにも大量に新規エピソードがあります！）ですので、まだ購入していない方はそちらも是非ともよろしく願いいたします。

それでは今後とも本作をお楽しみください！
過去編も終盤に近づいてきましたので、頑張ります……っ！

第297話 七大魔術師を超える者

「うふふ！ あはははっ！ あはははハハハハッ！！ あーあ。
七大魔術師って言っても、この程度なの？」

笑う。

少女はこの戦場において、たった一人で笑っていた。その笑みはまるで玩具おもちゃを楽しんでいるような子どもようだった。

そしてその少女の目の前には莫大な数の死体の山が築き上げられていた。その血溜まりを見れば、誰もが嫌悪感を抱いてしまうであろう。しかし、彼女はそんなものを見ても動じることはない。ただニコニコと笑いながら、目の前に残っている一人の魔術師を睨み付けていた。

「……これほど、とは」

なんとか声を絞り出す。

この戦場を率いていたのは七大魔術師が一人、紺碧こんぺきの魔術師だった。すでに年齢は四十代に突入しているが、それでも最強の魔術師の一人であることに変わりはない。

七大魔術師の中でも戦闘に特化している彼は、たった一人であっても百人程度の相手とは対峙できるだけの能力があった。

過去には五百人を相手にしても引くことなく、一人だけで戦線を維持したという逸話もあるほどだ。そんな彼は誰からも羨望を集めていた。

全戦全勝。常勝の部隊を率いている紺碧の魔術師。

しかし　今の現状を見れば、そんな彼の実績も霞んでしまう。

相手の少女は依然として笑っている。まるでこの戦場を楽しんでいるかのように。またこの惨劇を生み出したのはその少女ではあるが、後ろではもう一人女性が控えていた。

彼女は手を出すことはなく、手鏡で自分の前髪を整えたり、やすりで爪を整えたりしていた。それはこの戦況を全く気にしていないかのような仕草である。

「終わった？」

「もうちょっとかな。罠り殺してもいいけど、もう少し遊ぼうと思っ
つて」

「はぁ……早くしてよ。私、バックアップできたのにフィーアが全
部やっちゃうし」

「ごめんごめんって！　今度おごるからさ！　ね、ツヴァイ。機嫌
直してよ」

「……まあ、それならいいけど」

この場にいる二人は七賢人の内の二人。名前はツヴァイとフィーア。ツヴァイはオレンジ色の髪をくるくると弄った後、再び自分の

爪を丁寧によすりて整え始める。

一方のフィアは金色の髪を高い位置でツインテールにしており、その笑顔を見ればとても陽気な少女に見える。だがこの地獄のような戦場を生み出したのは、他でもない彼女なのである。

相手を殺すことに躊躇などない。彼女は笑いながら、その命を次々と刈り取っていく。そんな様子を見て、紺碧の魔術師である彼が何も思わないわけではないが……感情に支配されてしまったのは、魔術は正常に作動しない。

だからこそ、内なる憤怒を噛み殺しながら彼はその双眸でフィアのことを射抜く。

「あはははっ！ そんな目をして、あなたは負けるんだよ？ そもそも、もう一人いた七大魔術師は瞬殺。あなたはそいつよりはちよつとだけ強いけど、もう時間の問題だよ？」

「ッ！！」

声にならないような怒り。紺碧の魔術師の部隊にはもう一人、七大魔術師がいた。彼と同期であり、長年の付き合いだった。

雷鳴の魔術師。電撃系統の魔術を極めた彼は、この戦闘が始まった瞬間フィアにより殺されてしまった。どうして自分が死んだのかも理解できずに、雷鳴の魔術師はこの世から去ってしまったのだ。

その衝撃もあつたのか、部隊はバラバラになってしまい……こうして最後に残っているのは紺碧の魔術師ただ一人だった。

「いいよ。出しなよ、固有魔術^{オリジン}。期を窺ってるのは分かるけど、あ

からさま過ぎ」

「……その言葉、後悔するなよ」

オリジン
固有魔術。

紺碧の魔術師の代名詞にもなっている固有魔術。オリジンその魔術名称は、アジュールフィールド紺碧領域。一定領域の中を真つ青な第一質料で支配し、その領域内に入った生物は内側から第一質料を攪乱され、最後には生命活動が停止する。

プリママテリアそれは第一質料の保有量に関係なく、その領域内に入れば体内から壊されてしまう魔術。

いわゆる、即死魔術とも言われるこの世界で最も危険な魔術に分類されているものだ。

「アジュールフィールド
紺碧領域」

領域展開。

見渡す限りの青がこの世界を覆い尽くしていく。それはまるで、大津波がいきなりやって来たような……そんな光景。この領域内で彼に逆らえたものなどいない。今は魔術師としての全盛期を過ぎているが、それでも七大魔術師の称号は伊達ではない。

そうして彼はこの領域内に入ったフィアとツヴィアに対して、魔術を発動。容赦無く、瞬殺するつもりで彼は相手の体内の第一質料プリママテリアを攪乱し、そのまま内側から壊し尽くそうとするが……。

「はあ……やっぱりこんなものか。七大魔術師って言っても、この程度なんだ。でもこっちの調べだと貴方たちは七大魔術師の中でも一番の雑魚。これで最強格だったら、私は泣いてたよ」

「な、何が起こった……？ いやそもそもお前たちのその体は、どうなっている……？」

魔術領域は完全に展開されている。

間違いなく紺碧領域は発動しているというのに、^{アジュールフィールド}第一質料を操作することは叶わない。魔術を相殺するのでもなく、無効化するのでもない。

ただただ、相手に通用しないのだ。彼の魔術が。

「はあ……未だにコード理論。それに^{プリママテリア}第一質料なんてものを使っているから、そうなるんだよ。ま、貴方にはこの世界の真理なんて理解できないと思うけど」

「何を……ぐツ……！！？ こ、れは……」

気がつけば彼は自分の胸から氷柱が貫通しているのに気がついた。全く理解できなかった。魔術的な兆候を理解できなかった。七大魔術師に至るほどの魔術師が、何もできずに地面に沈んでいく。

血溜まりがじわじわと広がっていく。

それによって悟る。自分はもう長くはないのだと。

しかし彼が諦めることはなかった。最後に、一矢報いようとなんとか魔術を絞り出そうとするが、伸ばした手には再び氷柱が突き刺さっていた。

「ぐ、ぐあああああああッ！！！」

あまりの痛みに悶絶した声を上げるが、それでも抵抗する意志は決して折れることはない。

七大魔術師である自分の責務。

この戦場で戦うことの意味。

民を守るために戦っていることの誇り。

しかし、その全ては無に還る。圧倒的な強者の前では、そんな肩書きも意志も無慈悲に刈り取られてしまう。

「ふーん。根性あるんだね。そこはちょっと見直したよ。でも、これまで。バイバイ、おじさん」

心臓に一突き。

彼女は地面に転がっていた剣を拾うと、それを彼の心臓に突き立てた。

「王国の……未来に、えい……こつ……あ、れ……」

最期の最期に絞り出した言葉。それが紺碧の魔術師である、アーサー・オルストレインの最期の言葉だった。

絶命した死体を見て、フィアーはまるで何も反射しないかのような漆黒の瞳で彼を射抜く。その雰囲気はおおよそ、普通の魔術師ではない。

そうして後ろからはツヴィアが歩みを進めてくる。

「終わった？」

「うん。終わったよ」

「じゃ、帰ろ。でもやっぱ、フィアー一人で良かったね」

「そうだね。一応、七大魔術師が二人も出てくるから警戒したけど、全然大したことなかったよ」

踵を返す。

二人は敢えて、その場に残っている死体には何もしなかった。それは上からの命令でそうするように言われているからだ。

これは宣戦布告。

帝国側には七大魔術師を上回るほどの実力があるという見せしめでもあった。

こうして、紺碧の魔術師が率いる部隊は全滅した。

それも二人の七大魔術師を失って。それは王国軍を震撼させるものだった。

百戦錬磨。全戦全勝の部隊が全滅してしまったという事実。

極東戦役はまだ始まったばかりである。しかし、王国軍の戦力が大きく低下してしまうことになった。

こうして七賢人と七大魔術師の衝突はさらに激化していくのだった。

第297話 七大魔術師を超える者（後書き）

ついに大きな転換期がやって来た、かつ極東戦役もやっと本格化してきました。無事にここまで来れてよかったです。今後も楽しみください！

改めて告知になります。

氷剣の魔術師が世界を統べる2巻の予約がAmazonさんなどで開始しております。是非とも、書籍版の方もよろしく願います……！（Web版継続、書籍版を続刊するためにも、ご協力何卒よろしくです……！）

第298話 希望のある未来を抱いて

極東戦役が開始して、ついに半年が経過した。その戦火は止まる
ところを知らず、さらに広まっていくばかり。

王国の介入によりすぐに鎮火すると思われた戦争は、完全に泥沼
化していた。

「紺碧と雷鳴が、同時にやられた……だと？」

「はい。どうやら間違いない情報のようです……」

アストラル
特殊選抜部隊はこの半年、様々な戦場に赴いていた。もちろんそ
の全てが前線であり、最前線を維持するために特殊選抜部隊は活動
を続けていた。

「なるほど……それは、非常にまずいな……」

ヘンリックはその情報を受け取った。現在は通信魔術も発達して
おり、一定の範囲ならば第一質料を介して音声を伝えることができ
るようになっていた。そのような情報伝達システムが完成しつつあ
る中、その速報は彼を動揺させるには十分すぎるほどだった。

アストラル
特殊選抜部隊としての活動によって忙殺されつつある日々。休み
を取る暇などは、ほとんどない。もちろん睡眠はある程度は取って
いるのだが、それでも必要最低限。

その表情に疲労が滲んでいるのは、隣でずっとヘンリックを支え

ているフロールは気がついてた。しかし、彼を止めることはできない。それほどまでに今の戦場は酷い状況だった。

殺している数だけで言えば、王国軍の方が多いかもれないが問題は相手は自爆も辞さない攻撃を仕掛けてくることだった。その特攻によって無残にも死んでしまった兵士は数多くいる。

それに対処しながらも前線を維持し続ける。確かに最前線にいる兵士も過酷なのだが、後方で作戦指揮をしているヘンリックもまた過酷な状況に晒されている。この極東戦役において、過酷ではない状況などは存在しない。

それぞれが心を押し殺し、精神を磨耗しながら戦っているのだ。

ヘンリックとて毎日毎日、死亡する人数を報告されるたびに後悔に苛まれる。本当にこれで良かったのか、この作戦で本当に良かったのか。そんなことを考えながら毎日を過ごしていく。

加齢もあるが、彼の頭髮は以前よりもずっと白髪が目立つようになっていた。

それはきつと、ストレスが表面化しているのだろう。

「中佐……」

「そんな表情をしないでくれ。私は大丈夫だよ」

フロールが心配そうに、ヘンリックのことを見上げる。ギュツと両手を胸の前で握り締めて、彼女は震えていた。

ヘンリックといえどそんな彼女の頭を優しく撫でる。

「……中佐。あまり無理はなさらないでください」

「それは無理な相談だ。今の戦況、分かっているだろう？ 特殊選
抜部隊のメンバーを各部隊に配置して、なんとか保っているのが現
状だ。それに七大魔術師である二人がやられてしまった。相手の情
報は何もなく、ただこちらには尋常ではない損害が残っただけ。対
処するには、こちらも動くしかないだろう」

「しかし……それは……」

分かっていた。

フロールは以前から聞いていた。この戦況を大きく変えることが
できるとすればそれは……七大魔術師しかあり得ないと。

氷剣の魔術師	リディア・エインズワース
絶刀の魔術師	バルトルト・アイスラー
虚構の魔術師	リーゼロッテ・エーデン
燐煌の魔術師	マリウス・バセット
比翼の魔術師	フランソワーズ・クレール

現在残っている七大魔術師は、以上五名。その中でも軍人である
のは氷剣のリディアだけ。その他の魔術師は軍人ではない。そのた
め、今回の極東戦役に参加する義務も義理もないのだが……実際の
ところ、すでに協力関係を築いていた。

それはヘンリックの尽力もあり、なんとか交渉に成功したとい
うところだろうか。しかし、実際にそれぞれの七大魔術師は口を揃え
てこう言った。

来るべき時がやって来た、と。

それは予感、直感の類なのかもしれないが、全員ともに二つ返事で了承してくれた。

七大魔術師はそれぞれが一癖も二癖もあり、容易に何かを協力することなどできない。特に^{りんこう}燐煌の魔術師　マリウスⅡバセットを除けば、それこそ変人しかいない七大魔術師。

だが、ついに七大魔術師が戦場に赴くという事態が現実になろうとしていた。

「七大魔術師の加勢は大きな戦力になるでしょう。しかし、全員が戦闘に特化しているわけではないのでは？」

「それは当然の疑問だろう。だが世界は七大魔術師を過小評価している。それは王国民であつても同様だ」

「か、過小評価……ですか？」

「そうだ」

俄かには信じられない。それこそ、フロールは七大魔術師のことを十分に評価しているつもりだった。だが全員が全員、戦闘に特化しているわけではないのも事実。中には研究者や教師を本業としている魔術師もいるのだから。

「強大な魔術は戦闘という次元に囚われない」

どこか遠くを見ながら、ヘンリックは語る。彼は知っているのだ。七大魔術師のその真髄というものを。彼もまたその片鱗に触れている魔術師だったから。だが、彼はその領域に踏み込むことを躊躇した。

恐れてしまったのだ。先に進むことを。

だからこそヘンリックは尊敬と畏怖の念を込めて七大魔術師のことを語る。

「戦闘という次元……ですか？」

「ああ。七大魔術師の領域に至れば、それこそ魔術の次元は通常のものとは違う。戦闘や研究などという人間が定義している枠になど収まることはない」

「しかし……紺碧と雷鳴の二人は……」

そう。すでにその二人は絶命している。

無残にも殺されてしまい、死体はすでに回収されている。七大魔術師を屠れるだけの戦力が向こうにはあるという事実が変わりはない。

ならばその他の七大魔術師でも同じではないかと。

この戦場を変えることができるほどの戦力が彼、彼女たちにはあるのか。フーローは純粹に不安だった。

「分かっている。でもだからこそ、信じるしかないだろう。彼らが十分に戦うことのできる戦場を整えるべきだ。それにきつとこれは

……巡っているのかもしれないな」

「そう……そうですね……」

ヘンリックは依然として活発に振る舞っている。決して空元気などではない。確かにその表情には疲労が滲んでいるが、彼には確かな使命があつた。

今まで死んでいった仲間たちのためにも、戦い続けなければならぬ。

その覚悟を抱いているヘンリックのことがフロールには輝いて見えた。

「フロール」

なぜかヘンリックは彼女のことを呼び捨てで呼んだ。日頃は大尉と呼ぶことが多いのだが、今だけはフロールと……。

そう。プライベートで二人きりである時の呼び方で、彼女の名前を告げた。

特殊選抜部隊の中には気がついて人間もいるが、主にハワードだが、ヘンリックとフロールは交際をしていた。年齢差はそれなりにあるものの、フロールが告白してそれをヘンリックは許可した。

もちろん互いに公私混同などしない。

軍の中では中佐と大尉として振る舞っている。だというのに、ヘンリックはこの場で彼女の名前を告げたのだ。それにはもちろん、意味がある。

「この戦争が終わったら、結婚しよう」

青天の霹靂。

今の彼女の感情を表現するならば、それがきつと一番正しいだろう。顔を真っ赤にして、わなわなと震える。彼女もまたゆくゆくは結婚をしたいと思っていた。交際期間は五年にもわたり、互いの年齢を考えても結婚を考える時期だった。

しかし、今は極東戦役の真っ最中。

そんなことを今のこの場で言うなどとは、信じられなかった。だがこのような状況だからこそ、フロールはその言葉の重さを理解する。

「ど、どうして今……なんですか？」

「さあどうしてだろうか。でも、この戦争を乗り越えた先に君との未来が待っているのならば、私はいつまでも戦える」

「ばか……本当にあなたはいつも……バカです……」

「返事は、どうだろうか？」

「いいに決まっています。それくらい、分かってください……っ！」
「……ありがとう」

寄り添う。

そして二人は抱擁を交わした。フロールは静かに涙を流し、あまりの高揚感に打ちひしがれる。そんな彼女をヘンリックは包み込む。

互いに生きて帰ることできる保証などない。

でもだからこそ、確かな未来を求めるのだろう。その先に待つている未来のためならば戦い続けることができる。どれだけ折れそうになっても、前に進むことができる。

二人はそうして見つめあった後に、優しく唇を交わした。それはとても優しく、柔らかい口付けだった。

互いの存在を刻み込むように、二人はそのまま抱擁を続けた。

きっと この先に確かな未来が待っているのだと、信じて。

第298話 希望のある未来を抱いて（後書き）

お知らせです。

今回は氷剣の魔術師が世界を統べるのコミカライズの件です。こちら、書籍二巻発売日の一週間後に発売となります！ 書籍二巻が1月2日（月）なので、コミックは11月9日（月）に発売になります。Amazonさんの方では予約が開始しておりますので、是非ともよろしく願いますー！！

第299話 最凶との邂逅

極東戦役は大きく変化しつつあった。

今まではアーノルド王国側が完全に押されてしまい、後手に回っていることが多かったのだが現在はそれを持ち直している。いや、勢いだけでいえば王国軍に分があるとさえ言われている。

それは何も楽観的な視点からの物言いではない。王国軍は相手の動きを完全に分析し、各個撃破し続けている。その中心となっている人物は徐々に頭角を表しつつあった。

氷剣の魔術師 リディア・エインズワース。

すでにその才能は覚醒し、彼女のおかげで戦況が大きく良い方向に変化したと言っても過言ではないだろう。今のリディアは特殊^{アス}選抜部隊での活動を維持しつつも、王国軍の別の部隊に入ることでは戦力を示し続けていた。

戦争には英雄が必要だった。

それは言わば王国軍の象徴とも言つべき存在。明らかにリディアが最前線の中で目立つようになってからは、他の兵士の動きも良く

なつていった。

幸か不幸か、リディアを含めて最前線で戦っている魔術師たちは戦いを経て進化していた。互いに命掛け戦いを一年近く続けている。そこで弱い者は淘汰され、強い物は生き残る。

そんな弱肉強食の世界で、今のリディアは戦線を引っ張り続けている。

「進めええええええええッ！！！！！」

『うおおおおおおおおおおッ！！！！！』

紺碧の魔術師と雷鳴の魔術師が死亡した件を経て、士気は大きく低下したと思われていた。しかしリディアはそれを契機に、大きく躍進。味方の士気を上げつつ、自らも戦場に赴き圧倒的な戦果を上げる。

すでに氷剣の魔術師の名前は敵に畏怖の対象として刻み込まれている。相手もなんとか応戦しようとするが、今のリディアに敵うものは少なくとも現段階では表舞台には現れていなかった。

「レイ。どうやらエインズワースは派手にやっているようだな」

「ハワードか。そうだね、師匠は凄まじいよ」

作戦基地本部。そこでレイは一人で報告書をまとめていた。彼女と共に最前線に赴いては、そのサポートをし続ける。といっても彼の場合は戦線に表立って加わっているわけではない。いわゆる、斥候せうこうの役割を担っておりリディアを陰ながら支えていると言ったところ

ろである。

特殊選抜部隊は解散したわけではないが、この戦況では集まって活動はしていない。今はさらに押すべき時だと考えて、リディアを中心に新しい部隊が編成されている。

その中にはデルクやハワードも加わっているが、他のメンバーは別の戦場で戦っている。しかしそれは良い傾向の現れだった。

特殊選抜部隊が分散しても、軍は十分に機能している。むしろ優秀な人材をそれぞれに配置できることでさらに王国軍の攻めと守りは盤石なものになりつつあった。

あと少しもすれば、完全に勝利することができるだろう。それが王国軍上層部の予想であった。

「レイはどうだ？」

「今は主に斥候を担当してるよ。フロールさんと二人で敵の情報を集めてる」

「そうか。お前たちは、相性良かったよな」

「そうだね」

レイは一人だけではなく、フロールと共に相手の情報をかき集めていた。そもそも、データ分析などはフロールの得意分野。しかし彼女は一人で最前線に向かわせるには、少々戦力として乏しい。だからこそ、そこにはレイがサポート役として入り込んでいる。

リディアほどの目立った活躍を見せているわけではないが、彼の存在は王国軍にとって欠かせないものになっていた。

「で、戦況はどうだ？」

ハワードがそう尋ねるが、彼としては返ってくる答えはある程度予想していた。兵士たちの士気も高く、全戦全勝。改めて聞くことでもないのだが、それを確実なものにするために敢えてハワードはレイに尋ねた。

「戦況は悪くないよ」

「悪くない……？ 良いとは言わないのか」

「自分としては、どうにもまだ怪しい部分があると思ってる」

「まさか紺碧と雷鳴の件か？」

「うん。相手はあの部隊を壊滅させるだけの戦力を持っているはず。でもここ数ヶ月は全くそれを投入する素振りがない。ずっと警戒しているけど、どこかで仕掛けてくると思ってる」

「流石だな、レイ……」

レイは深く考え込んでいるのか、ぶつぶつと呟きながら情報を改めてノートに整理しているようだった。もともと聡明ではあった。それに実戦能力も抜群。

この戦場において全く物怖じしていない。むしろ完全に慣れきっているのか、レイはこの地獄のような極東戦役においても非常に高い適応能力を見せていた。

「明日も最前線か？」

「うん。ハワードは？」

「俺は後方でのバックアップ支援だな」

「そっか。またいつか特殊選抜部隊で集まる時があると思う。その時は頼りにしてるよ」

「ああ。じゃ、またなレイ」

拳をコツンと合わせる。どれだけ苦しん戦場であつたとしても、二人は明確に目の前にある任務をこなす気概があつた。

そして言葉にはしないが、信じ合つていた。きっとこの先も同じ道を歩み続けるのだと。

しかし、現実の非情さと言うものをレイは後に知ることになる。

山岳部を抜けた先、見渡す限りの森林地帯が広がつていた。そこには川も流れており、現在は大雨によつてその川が完全に氾濫していた。

翌日、ハワードは昨日言つたように後方でのバックアップ支援をしていた。最前線よりもかなり距離があるが、この場所を守るのもまた重要である。いくら危険度が低いとはいえ、油断はできない。

そうして前線から漏れてきた敵国の兵士を淡々と相手をしていく。けれど川が氾濫し、大雨ということもあつて視界は十分に見えない。相手はこの中でも戦闘になれているのか少しずつ押され始めていた。

「押されるなッ！！ 十分に返せるぞッ！！」

この部隊を指揮しているハワードが、大きな声を上げる。それに

伴って、兵士たちの士気もまたさらに高まっていく。

今回の戦闘もまた無事に終わるだろう……この時は、そう思っていた。

「え……？」

「は……？」

「ど、どうして……？」

ハワードの後ろで声が聞こえてきた。バツと後ろを振り向く。彼の視界には、今まで後ろで戦っていた仲間たちの姿はほとんどなくなっていた。

地面にはこれでもかと深紅が広がっていた。赤く流れる血液は、雨と混ざり合うように流れていく。そして、先ほどまでそこにいた仲間は内側から破裂するような……壮絶な死に方をしていた。

叫ぶ暇もなかった。

「はぁ……こんなもんか。今回も楽そうかな」

立っている一人の少女。

金色の髪を左右の高い位置でまとめてツインテールにして結っている。服装はなぜか真っ赤なドレスを着ており、それは雨を完全に反射していた。濡れている様子は全くない。

おそらくは魔術でそうしているのだろうが、ハワードはその少女を見た瞬間……人生の中でも最大限の危機迫る声を上げた。

「逃げろおおおおッ！！！！！！ 後方へ下がれええええええええええええええええええええええッ！！！！」

一瞬の錯綜。

ハワードの判断は、彼女よりもわずかに早かった。そしてその声を知覚した兵士たちはそのまますぐに脱兎の如く逃走。今回のようなケースに陥った場合を想定し、部隊で共有しているおかげだった。

「あら。判断早いわね。ま、いつか。あなたを殺した後に、あいつらも皆殺しだから」

おおよそ少女の言葉とは思えない。いや、目の前に立っているのはただの少女ではないのはハワードも理解していた。

見据える。

一瞬の拳動も見逃さないようにハワードは少女 七賢人のフィアのことを見つめていた。

ここは完全に食い止める必要がある。

覚悟。そして、彼は時間を稼ぐ必要であると理解した。すでに逃げた仲間たちは作戦本部に今の事態を伝えてくれるだろう。そして、あとは応援がやってくるのを待つしかない。

対応できるとすれば、リディアたちの部隊。またはレイでも良い。ともかく、十分な戦力が来るまでここはたった一人で戦線を維持し

なければならぬ。

今までだって、幾度となく死線はあった。そのこと如くを乗り越えてきたハワードには自信があった。必ず、必ずここは死守するのだと。

「ふーん。良い顔ね、でも……」

刹那。

魔術的な兆候を完全に理解しているわけではない。相手の魔術の原理は全くわからない。そもそもどうやって人間を内側から炸裂されるなどと言う神業をやったのか、わからない。

だがそこには原理があり、術式がある。

ハワードは直感で自分に座標を指定されるのを感じ取ると、それを慌てて前転することで躲した。すると、彼が一秒前までいた空間が歪むと一気に弾けた。

「どうやら人体に直接作用させているわけではないな……」

冷静に分析。

まずは敵の能力を分析し、自分の手札でどうやって戦うべきか。それを考える。ハワードはクレバーだった。このような状況であっても、臆することなく自分にできることを冷静に考える。

「あつは。もしかして、あなた強い？」

「さあ……それはどうかな？」

嗤^{わら}う。

フィアの歪んだ表情には寒気を覚えるが、ハワードは改めて思考を深く潜らせる。

直感的に理解していた。おそらくは、相手は紺碧と雷鳴を屠った敵であると。その時の死体の状況や戦闘の痕跡。それをデータとして蓄積していた彼は、すぐに相手との戦い方を練り始める。

この戦闘において相手を必ずしも撃破することは勝利条件ではない。

時間を稼ぎ、仲間が到着するのを待つことこそが勝利条件である。それを改めて理解すると、彼は笑った。

「さ、二人でダンスでも踊ろうぜ？」

「あなたとっても気に入ったわ。良いわよ、踊ってあげるわ」

こうしてハワードの生涯をかけた戦いが幕をあげた。

第300話　ありがとう

俺はただずっと特別な何者になりたかった。

才能があると褒められ続けてきた。もちろん俺には才能ってやつがあるんだろう。

でもきつとそれは、俺が努力して獲得してきたものだと思じたかった。そしてだからこそ、特別な人間になりたかった。才能だけではない、特別な存在　　七大魔術師になりたかった。

そこにたどり着くことができれば俺は、特別になれる。才能を超えた存在になることができる。そう信じてきた。

ずっと迷っていた。迷って迷って、その末にたどり着いたのが特殊選抜部隊^{アストラル}だった。

そこで俺は本物の天才たちに出会った。俺なんか届くわけのない領域というものを見せつけられた。

リディアⅡエインスワース。

アビーⅡガーネット。

キャロルⅡキャロライン。

三人ともに天才の中の天才。俺も天才だと持て囃されていたが、分かってしまった。なまじ才能があるからこそ、この三人の領域に触れることがないのだと。

初めは嫉妬もした。

どうして俺じゃなくて、こんな若い女たちに才能があるのかと。神はどうして、俺を特別な存在にしてくれないのかと。表面上では取り繕っていた。その嫉妬を隠して、部隊で過ごしていた。

だが過ごしていくうちに、俺は純粹に彼女たちのことを人間として好ましいように思い始めていた。

キャロラインはいつも明るくて部隊のムードメーカーだ。よくふざけているし、周りのことを全く気にせず自由奔放。そんな彼女のことを敬遠している人間もいる。でも俺は知っていた。キャロラインは仲間思いのいいやつだと。

「キャロライン。一人でどうした？」

「ん？ あれね。ハワードちゃんじゃん！」

基地内のある一室。そこで彼女は一人で大量の書類を前にして作業をしていた。以前からずっと気になっていたので、実はその後を追いかけてきてしまった。

「一人でやっているのか？」

「そうだよーっ！ ふふふ！ キャロキャロは裏方も実は頑張っているのですー！」

「……そうか」

優しい少女だと意識したのはこの時が初めてだった。キャロラインは戯けているようにも見える。それもきつと彼女の一面なのだろう。

う。しかし、それ以上に仲間思いであることに変わりはない。本来ならばその仕事は、俺たちもやるべきもののに、負担にならないようにと率先してやってくれているのだ。

それを隠していつものように振る舞っている。全く、敵わないな
と思っただけだ。

「ありがとうな」

「……え？」

頭をそつと撫でる。年齢がそれなりに離れていることもあり、妹のような存在と思っていたのかもしれない。するとキャララインはポツと顔を赤らめるのだった。

「も、もう……っ！ 突然なんだから！ でも、キャララインがもつと大人になったらお付き合いしてあげてもいいよ？」

妖艶な笑み。それは本気で言っているわけではなく、俺をからかっているような表情だった。

「抜かせ。俺はもつと年上が好きなんだ」

「ふふ。私が綺麗なお姉さんになっても知らないよ？」

「はは。期待しておくさ」

そんなやりとりをした。今となっては懐かしい思い出だった。

アビー＝ガーネットは、はつきり言っただけで真面目すぎると思った。いやもちろんそれは美徳なのだが、どうにも肩肘を貼り過ぎているような……そんな印象を抱いていた。

「ガーネット。調子はどうだ？」

「は。自分は万全であります。ケネット少尉」

「……ちよつと堅くないか？ 俺たち、同じ部隊の仲間だろう？」

「しかし……」

「終わった後、付き合えよ。奢ってやるよ」

「あ、ありがとうございます」

彼女はエインズワースとキャロラインとは同い年とは思えないほどに、大人びていた。しかし、実際の年齢のことを考えると、あの二人の方が普通なのかもしれない。

ガーネットは良くも悪くも肩肘を張りすぎている。いつもピリピリしているというか、俺は彼女が笑ったことを見たことがなかった。そこで食事にも誘ってみたが、思っていた以上に饒舌なやつだった。

「それでリディアが」

「ほうほう」

「キャロルも学生時代は本当に大変で」

「苦労しているな」

「うっ……理解してもらって、本当に嬉しいです……」

「お、おい！ 泣くなよって……って、これ俺の酒かっ！！？」

どうにも饒舌に語るなあと思っていたら、俺の酒を間違えて飲酒していたようだった。顔も真っ赤になりつつ、ニコニコと笑いながら語り続ける。

「自分はその、堅すぎでしょうか？」

と、そんなことを尋ねてくるので俺は正直に答えることにした。

「そうだな。少し無理をしているようにも見える。何かあるのか？」
「それは……」

少しだけ躊躇したようだが、意を決して彼女は自分の思いを吐露した。

「私たちは天才と言われ続けてきました。しかしやはり、まだ十代の少女に変わりはありません。だからこそ周りを認めさせるには、厳格であるべきでは……」と思ってまして。リディアとキャロルはあの調子ですし……」
「なるほど、な」

どうやらガーネットは二人のことも考えて厳格に振る舞っているようだった。軍の中ではあまりにも若い才能に嫉妬しているやつがいる。直接何かをしてくるわけがないが、きつと耳によくない噂でも入ってしまったのだろう。

俺くらいの歳になればさっさと流せるのだが、十代といえば多感な時期だ。色々と気になるのも無理はないだろう。

それと同時に本音を打ち明けてくれたことで、グッと距離が近くなったような気がした。

「大丈夫だ。いざとなれば、俺たちが守ってやるさ。そんなに背負うことはない。ここには仲間がいる。そうだろう？」
「ケネット少尉……ありがとうございます」

これを機にガーネットは少しだけ柔らかい雰囲気を纏うようにな

った。もつとも、フロールと同じでこの部隊のまとめ役には変わりはないがな。それによく俺に話しかけてくるようになった。

その視線に少しだけ色が混ざっているのは分かっていたが、俺は気がつかないふりをして接していた。いつかその感情に向き合う時がくるのかもしれないと、思いながら。

エインズワースには本当に世話になった気がする。いや、俺が世話をしたこと多い気もするが、あいつの生き様は俺に眩しくて尊敬すべき人間だった。

「ハワード！ 筋トレ行こうぜ！」

「ハワード！ 飯行こうぜ！ お前の奢りな！」

「ハワード！ 買い物行こうぜ！ お前、荷物持ちな！」

と言ったやりとりは日常茶飯事だった。でも俺は妹ができたようで、文句を言いながらもそれに付き合っていた。その他にも以前話した時のように、エインズワースは真面目なことも語っていた。

「ハワード。私は思ったんだが、幸せ者だな」

「は？ どうしたんだ、突然」

いつものように飯を食べていると、ふと彼女はそんなことを言うてきた。しかしそれは真剣な雰囲気だったので、茶化すことはなかった。

「私はずっと一人だった。孤独感を覚えていた。でも、この部隊に」と落ち着くんだ

「……それは良かった」

「だから今後も奢ってくれよ？」

いつものようにニヤツと笑う。しかし、今日は奢ることはないがな。

「今日は割り勘だ」

「はあ！！？　なんでだっ！」

「食べ過ぎなんだよっ！！」

こんな風に怒鳴り合うのもどこか楽しかった。その他にも、デルクやフロール。それに中佐にも本当に世話になった。感謝してもしきれない。俺はこの部隊のことを本当の家族のように思い始めている。

その中でもやはり特別だったのは、レイの存在だろう。

「レイ。筋トレしようぜ！」

「筋トレ……？」

出会った頃のレイは、この世界全てに絶望しているような人間だった。でもだからこそ、俺は根気強くレイに接し続けていた。俺だけじゃない。隊のみんながレイのことを愛していた。

そして気がつけばレイは大きく育ち、俺を超える魔術師になっていた。でもレイは決して驕ることなく愚直に努力を続けていた。

ただ淡々と努力する姿勢を俺は尊敬していた。

自分よりもずっと年下の相手だが、尊敬するのに年齢なんか関係ないだろう？

自分が尊敬に値すると認めれば、それはたとえ子どもであっても変わりはない。

「レイ。今日も頑張ってるな」

「ハワード。まあ、日課だからね」

魔術適性が高いこともあり、レイは成長が早かった。今はちょうど筋トレをしている最中で、俺はレイにタオルを持ってきたところだった。

「どうだ、調子は？」

「悪くないよ」

「そうか。よし！俺も頑張るかっ！！」

レイとはかなり年齢が離れていたが、弟のように思っていた。その才能に嫉妬することもあったが、それでもやはりレイはしっかりと努力をしていた。才能があつて、努力もできる。愚直に、冷静に、進んでいる姿を見て俺も負けられないという気持ちになった。

レイの存在には、本当に大きく励まされた気がする。直接言葉にするのは恥ずかしいが、いつか伝えることができたらいと思っている。

俺は、レイに出会うことができて本当に幸せだった。

第300話 ありがとう（後書き）

ついに300話です。ここまで続けることができたのも、読者の皆様のおかげです。改めて感謝を。本当にありがとうございます！！

第301話 別れの時

「はあ……はあ……はあ……」

意識が戻ってくる。

くそ、呆けていたわけじゃないのに一気に過去がイメージとして流れ込んできやがった。

これが走馬灯つてやつか？ ははは、笑えるな……でも俺は死ぬわけにはいかない。

こんなところで、死んでいいわけがないんだ……。

だが、現実是非常である。すでに左腕の感覚がなかった。

それは……肘から先が無くなっているからだ。痛みは一瞬で、そこから血止めはしたが徐々に腕全体の感覚がなくなってきた。

右目もすでに、よく見えない。眼球を潰されたわけではないが、致命的な一撃をもらっている。霞む視界の中で俺は敵をしっかりと見据える。

「あなた、強いね。あの雑魚の七大魔術師よりもやるんじゃない？」

ペロリと自分の手に付着している俺の返り血を舐めとる。一見すれば、ただの愛らしい少女にしか見えないが……その実力はまさにこの世界の頂点に位置しているのではないか、と思うほどだった。

もしかすれば、エインズワースやレイを超える存在なのか？

そんなことも考えてしまう。報告で紺碧と雷鳴がやられたと聞いていたが、この実力ならばそれも理解できてしまう。

「うつ……ごほっ……っ!!」

咳き込む。と同時に、大量に血が溢れ出てくる。どうやら内臓もやられてしまったようだ。

そもそも相手の使う魔術の兆候が全く理解できない。第一資料の
流れを知覚できないし、そもそも本当に魔術を使っているのかも分からない。

しかし、確実に魔術は発動しており俺を攻撃してくる。全く理解できない攻撃に為す術なしだが、まだやれる……。俺はまだ戦える。心が負けを認めることはない。理性ではわかっている。これ以上戦うのは危険だと。すでに失血量は致死量に迫っているだろう。感覚がなくなってきたのがその証拠だ。

でもここで俺が諦めてしまえば、もっと被害が増えるかもしれない。時間を……時間を稼ぐんだ。

「う、うおおおおおおおおおおッ！！！！！！」

己を振り立たせる。俺にはまだやれるだけの力が残っている。そう自分に言い聞かせて、地面を疾走していく。魔術も発動する。

俺はまだ、まだ戦うことがで……き……る？

「い、いつの間……に……？」

涼しい。

風が俺の体を通り過ぎていく。

そう。今の一瞬。何かの兆候は感覚で理解していた。でも、それを知覚した瞬間に自分の胸に大きな穴が開いていた。

心臓を直接やられたわけではないが、間違いなく致命傷。

それを理解すると同時に俺は地面に倒れ込む。もう……感覚は完全になくなっていた。

ヒューヒューと喉がなる。

ああ。そうか。

ここまでか。俺の人生はどうやらここまでのようだ。強力な存在

の前では、あっけなく散ってしまつ。どうやらこれが俺の人生最後の瞬間らしい。

微かに足音が聞こえる。

ぺたぺたと聞こえるのはきつと俺から流れている血を踏み締めているからだろう。

「驚いた……まだ生きてる」

その声音から、どうやら心から本当に驚いているのはわかった。そして、その少女は思っても見ないことを口にする。

「ねえ 私と一緒に来ない？ あんたのこと気に入ったよ」

一緒に来ない……だと？

「……あ……は？」

「今なら助けてあげるって言うてんの。左腕もくつつけるし、目も治す。もちろんその胸の穴もね。ね、裏切れば長生きできるのよ？ 私も強い手駒が必要だったし」

「俺は……たすか……る……のか？」

「ええ。さ、手を取って」

そつと差し伸べられる小さな手。

これを握れば、俺はまだ生きることができる、俺はまだ死にたく

はない。生きていたい。まだまだやりたいことがたくさんある。そうだな、この戦争が終わればみんなと旅行に行く約束をしていたからな。

それを果たしたいな。

でもこの手をとれば、俺は裏切り者だ。もうみんなとは会うことはできない。しかし、この手を拒絶すれば俺はここで死ぬ。

どうせみんなに会えないんだ。

当然、生きる方を選択するだろう？

それが合理的な判断だ。それが大人ってやつだ。賢明に生きるべきだ。

何も戦争において、裏切り行為ってやつは珍しいわけじゃない。誰だって死にたくない。そうだろう？ だから俺がこれからすることとは、間違いじゃないだろう？俺はいつだって正しい選択をする決めているからな。

「はは……」

でも俺ってやつは本当に馬鹿みたいだな。ああ、本当俺は馬鹿でどうしようもないな。

愚かで馬鹿で、どうしようもない大馬鹿ものだ。

「はは……ははは……ははははっ！ 誰が手を取るかよ 俺は仲

間は売らない」

と、相手も油断していたのか俺が咄嗟に発動した魔術 アイスヒール 氷柱が少女の右手を貫いた。どうやらここから俺が反撃してくると思っていなかったようで、攻撃を当てることができた……が、どうやら意味はなかったようだな。

横目で見ると、その貫通した掌は瞬く間に治癒していた。全く、こういう仕組みなんだよ、それ。

あーあ。本当に俺ってやつは馬鹿だな。本当に大馬鹿ものだ。この選択肢で、死ぬことを選ぶ奴がいるか、普通？

でもきつとそうだな……やっぱり俺は、国を愛していた。そして誰よりもきつと、特殊選抜部隊 アストラル のみんなことを愛していた。

俺の死がこの先の未来に繋がっていると思えば死ぬことなんて怖くはなかった。だから俺は選択することができた。

ここで死ぬのは受け入れた。もう運命に抗う事はない。

最初に考えていた時間稼ぎも十分に果たすことができただろう。

目的は果たした。覚悟も決まった。

心残りがあるとすればそうだな……みんなの未来を近くで見えていなかったな……。

俺は知っているが中佐とフロールは付き合っている。みんな気が

ついてないがな。近いうちに結婚するだろう。その時の式は盛大に祝ってやろう。

デルクは家族のことをずっと気にしていたな。でも大丈夫だ。お前は本当にいい父親になるよ。俺が保証する。

キャロラインはそうだな……あいつに男ができる日が来るんだろうか？ いや、あいつが本当にいい女って事は分かってる。けど、個性が強すぎるからなあ……いいやつ見つければいいな。

ガーネットはきっと大丈夫だろう。あいつはメリハリをつけられるし、何よりも真面目だ。彼女はきつとすぐに大佐になるんじゃないか？ あの三人の天才の中じゃ、一番の出世頭だろう。それと……あいつが俺に気があるのは知っていた。明らかに視線の中に色が混ざっているのは、分かっていた。

でも答えるべきかどうか……この戦争が終わった時に話でもするかと思っていたが……どうやら、それもできないな。きつとガーネットもいいやつが見つかるさ。俺なんかじゃなくて、もつといい奴がな。

エインズワースは言うまでもないだろう。あいつは俺なんか予想できないほどの偉大な魔術師になる。けどな、いつも人の金で飯を食おうとするな。買い物も自分で荷物を持て。それと……っと、まあ後のことはみんながいるから大丈夫だろう。

「レイ……レイは……」

と、ふと心の中で思っていることを口にしていたみたいだ。だが、俺は殺されない。あの時に覚悟した死がやってこない。どうしてな

んだ？

もう感覚は無くなりかけている。視界も霞んでよく見えない。けれど意識だけははっきりとある。

すると隣にはあいつが……レイがいた。

「ハワードッ！！ 大丈夫ッ！！ まだ助かるッ！！」

かなり切羽詰まっているようだった。それもそうだ。今の俺は、胸に大きな穴がいているし、左腕も切断されている。目も片方は完全に潰されている。

こんな状態でまだ助かるなんて、レイのやつは本当に……本当に……。

「レイ……」

「ハワードッ！！ 喋るなッ！！ 絶対に、絶対に助けるッ！！」

懸命に魔術をかけてくれるが、血を流しすぎた。完全に俺の体は終わっている。

それは誰よりも俺が理解している。

でもそうだな……俺は神ってやつに感謝すべきなのかな。だって、自分の死ぬ間際にレイが来てくれたんだぜ？ これ以上の幸運はないだろう？

「れ、レイ……」

俺は最後の力を振り絞って、告げる。

自分の心の内を曝け出して、託すんだ。レイになら任せることができる。

そうして俺は、人生最後の言葉を紡ぐ。

第301話 別れの時（後書き）

ついにここまで来ました。果たしてハワードは最期に何を語るのでしょうか。次回もご期待ください。

感想ですが現在かなり多忙でお返事ができていません。しかし、全て目を通してあるので今後ともお気軽に感想を書いていただければ嬉しいです。

またこのページの下部にて、書籍版第二巻の表紙を公開しております。

表紙の画像をタップすれば、書籍の情報ページに飛べるので是非ともご予約お願いいたします。（本当に何卒、お願いします……！！）

コミックの方も予約開始しておりますので、そちらもご予約していただければ幸いです。

ここまでお読みの方は分かっていると思いますが、二巻の表紙は二章のあのシーンをモチーフにしております……！！

第302話　さらば、愛しい仲間たちよ

嫌な予感がする。

レイが前線から戻ってきて、ハワードの件を聞いた時に初めにそう思った。決して特別な何かを感じ取ったわけではない。

しかし、今までの敵との戦闘を経てハワードが戦っている相手は普通ではないのだと理解した。曰く、魔術の兆候もなく次々と味方が死んでいったとか。

そしてハワードは時間を稼ぐためにたった一人で戦っている。

その話をした兵士は震えていた。それは生き残った安堵感とハワードへの罪悪感からだと言咽を漏らしながら語っていた。逃げるべきか、それとも一緒に戦うべきだったのか。

そんな後悔を漏らしていた。

「師匠ッ！！　先に行きますッ！！」

「レイッ！！　待て」

レイは話を全て聞くと、すぐに基地を飛び出していった。先ほど任務が終わって疲労も残っているというのに、彼は全速力でハワードのいる場所へと向かう。

身体強化をフルに発動して、疾走していく。

すでにリディアの声は聞こえなくなっていた。今まで、リディアに逆らったことなどない。文句を言う時もあつたが、それでも師匠の言うことは絶対だからと思い、レイは彼女に従ってきた。

だが今は違う。

このまま悠長に救出部隊を組んでいては時間がないと思ったのだ。レイはその直感はおおよそ的を射ていた。ハワードは現在、ギリギリの状態で戦っている。

また彼は報告を分析することで、今回の敵は七大魔術師を二人も屠った相手であろうと予想していた。そろそろ出てくる頃だろうとは思っていたが、まさか後方に出現するとは思ってもみなかった。

「……ハワードッ……!!」

脳内に過ぎる最悪の可能性を拭い去るようにして、ハワードの名前を告げる。

どうして、どうしてこんな時にこんなことを思ってしまうんだッ……!!

内心で吐き捨てるように呟くレイ。

彼はどうしても、脳内で勝手に今までのハワードとの思い出が過ぎっていくのだ。ずっと気にかけてくれていた。レイが自分というものはつきりと持つ前から、彼は優しく接してくれた。

一緒にご飯を食べ、筋トレをして、遊んだりもした。数多くの任務もこなしてきた。

極東戦役が終われば、みんなで旅行に行こうという話もした。

ハワードは強い。だから絶対に死ぬわけがない。特殊選抜部隊は誰一人として欠けることはない。アストラル

そんな希望的観測を抱きながら、レイは疾走していき ついに捕捉した。

「ハワードオオオオオオオオオオッ！！！」

ハワードの姿を視界に捉えた瞬間、レイは思い切り叫んだ。

なぜならばもう、ハワードは死にかかっていたから。右目は潰れ、左腕は肘から先がない。それに加えて、胸にも大きな穴が開いていた。

しかしレイはまだ間に合うと思っていた。いや、絶対に間に合わせてみせると。こんなところで大切な仲間を失うわけにはいかない。そんな想いからレイはすぐさまハワードに駆けつけようとした矢先、ちょうど敵であるフィーアを捕捉。

「……ッチ。ここでこいつが来るのか。ここは」

ボソリと呟くとフィアはまるで姿を消すようにして、去っていった。レイの右手にはすでに冰剣が握られていたが、彼は外敵の存在が確認できないと分かるとすぐにハワードへと寄り添う。

「ハワード！ 大丈夫だ！ 絶対に間に合わせるッ！！」

レイはすでに分かっていた。

もうハワードが間に合うことはないのだと。すでに死の淵にいる彼を見て諦めないのはやはり……レイにとって、ハワードが大切な人だったから。

今まで数多くの死を見てきた。だが、彼が心から愛する人が死にかけているのを目撃するのは初めてだった。

「レイ……」

「ハワードッ！！ 喋るなッ！！ 絶対に、絶対に助けるッ！！」

まずは状態を確認。欠損している箇所からの出血が激しい。血止めはしているようだが、すでに力の抜けているハワードは自分の力で血を止めることはできない。

とめどなく溢れる血溜まりの中で、レイは懸命に治癒魔術をかける。

「止まれッ！！ 止まれッ！ 止まれよおおおおおおおおお
おおッ！！」

レイは魔術に長けている。その技量はすでに七大魔術師の中でも最強と謳われているリディアに匹敵するほど。そんな彼は治癒魔術も苦手としていない。今まで数多くの戦場で、傷を負った兵士たちを治療してきた。

慣れている。

そう慣れてしまっている。

だからこそ、間に合うかどうか……その判断もついてしまう。

分かってしまうのだ。

「ハワードッ！！ 大丈夫ッ！！ 絶対に大丈夫だからッ！！！」

ポタポタと滴るのは、レイの涙だった。もう分かっている。悟ってしまっている。決して間に合うことはない。

魔術は万能ではない。

全てを救うことなど、できはしない。

それでもレイは諦めることなどできなかった。そんなことなど、できるわけが……ない。それは誰よりもハワードを大切に思っているから。

「レイ……もう、いい……」

残っている右手をなんとか動かして、ハワードはレイの小さな手に触れる。レイもまた、そんなハワードを見て自分の手を止める。

彼はぐしゃぐしゃの顔でハワードと視線を交わす。

「ハワード……そんな、だつてッ！！　だつてッ！！」

そしてハワードは最期の言葉を紡ぐ。

どうやら、ここまでみたいだな。

完全に感覚は無くなっている。さっきまであつた激痛も嘘みたいに無くなっている。でもこれは、レイが治癒魔術をかけてくれたおかげじゃないことも分かっていた。

これは死が迫っているから。

あまりに血を流し過ぎて、感覚が無くなってきているんだろう。でも……それはもう、受け入れた。

だつていうのによぉ……レイが泣くんだよ。

レイが泣いた姿は一度だつて見たことはない。ずっと気丈に振る舞って、俺よりも大人みたいなやつだと思っていた。魔術だって、頭脳だって、その全てが圧倒的で天才の中の天才ってやつはレイみたいなやつだと思っていた。

そんなレイは、まるで子どものように泣いているんだぜ？

信じられるか？

と、そんなことを思った瞬間。俺は悟る。

そうだ。レイはまだ、子どもなんだ。そんな子どもが泣くのは当たり前だろう。この時俺は、初めてレイの素顔のようなものを見た気がした。それに、ここまで涙を流してくれるのが嬉しかった。

神ってやつは、本当に粹なことをしてくれる。

最後にレイと話をできる機会を与えてくれたんだからな。

「レイ……」

「ハワード……俺が、俺がもつと早くきていけば……ッ……」

「そんなことは……ない。これは……俺が未熟だったからだ……」

「違う、違う、違うッ……全部俺が、俺が悪いんだッ……」

「レイ」

ギュッと最後の力を振り絞って、俺はレイの手を握る。

「そんなことは……ない。お前は最善を尽くしている。だから……
そんなに自分を責めるな……」

「だって……だってッ……」

「今のお前に聞き分けると言っても……難しい話だが……いつか、
分かる日が来る……いつかきつと……」

「う、うう……うわああああああああああああああああああああ
ああああああああああああッ……」

レイの慟哭がはつきりと感じる事ができる。

おいおい。そんなに泣いたら、涙が枯れちまうぞ？ 全く。レイは本当にこんな一面もあったんだな…… ああ。そうか…… 最後に俺はそんなことを思い始めていた。

「レイ……」

「……」

涙を流しながら、レイは俺と視線を合わせる。といっても、俺は片目が潰れているから残っている目でなんとかレイの姿を見つめる。

「今まで…… 本当に、本当に…… ありがとう……」

「…… ハワード。俺だって、ハワードにはたくさんのことを教えてもらった…… 俺だって、感謝してるよ…… ありがとう。ありがとう……」

…… ハワード…… 本当に……」

「ああ…… そう言ってもらえると嬉しいなあ……」

そして俺は残っている力を振り絞って、過去の話をした。レイと出会って、馬鹿なことたくさんした。エインズワースや他のメンバーに怒られるようなこともしたな。

それでもそこには笑顔があった。

俺はレイの家族になりたかった。家族は別に血がつながってなくてもいい。ただお互いが家族だと思えば、俺たちは…… 家族になれるのだから。

「なあ…… レイ…… 俺は、お前の家族になれたか……？」

「当たり前だ…… ハワードはかけがえのない…… 家族だ…… ツー！」
「そうか…… そうだったか……」

意識が徐々に遠のいていく。

今は確か曇天だったはずなのに、俺の視界には青空が映っている。ははは、ついにお迎えが来たってわけか？

そうして俺は最期の言葉を紡いだ。

「レイ……お前は生きる。俺は先に、この空の果てでお前の成長を見守っているさ。達者でな。お前と会うことができて、俺は本当に幸せだった。ありがとう、レイ」

ああ……言うことができた。やっと言うことができた。

そうだ。俺はレイと会うことができ、幸せだったんだ。今まで灰色の世界を見ていた。ずっと彷徨っていた。どこか自分の居場所があるような気がしていた。

でも、俺の居場所は自分で見つけるものだったんだ。その中心にレイがやってきたおかげで、俺は……今までの人生が幸せだったと知ることができた。

「
ッ！！」

レイが叫んでいるのは分かる。それはその顔を見れば分かることだが……ついに聴覚が無くなったな。そして徐々に見えている青空

もまた、暗くなっていく。

死ぬのが怖いか？

そう問われれば、俺ははっきりとこつ答えることができるだろう。

レイが側にいるんだ。

死は怖くない。

心残りはある。

けど、それはレイが引き継いでくれるだろう。

レイ。きつとお前はこれからもつとたくさんの死を経験するだろう。辛いことも、悲しいことも、数多くの困難が待ち受けているだろう。でもな、俺はずつとお前を見守っているよ。

この空の果てからずっと、レイの成長を楽しみにしている。

なあ……レイ。

お前はどんな大人になるんだ？ どんな人間になっていくんだ？
もしかして、俺の知らない誰かと恋をして結婚するのかな。レイの子どもができたらしつと、俺はめっちゃくちゃ嬉しく思うだろうな。レイ、お前はこれからどんな道を進んでいくんだろうな？

俺はそれが楽しみで仕方がないよ。

きっと俺なんかが予想できないほどの大きな人間になるんだろうな。

おっと。そろそろ、迎えがきたようだな。

気がつけば俺は真っ白な空間に立っていた。正面にはちょうど橋のようなものがかかっていた。この先に行けば俺は……もう戻ることとはできない。

だが、見守ることはできる。

レイ。達者でな。

レイのおかげで、俺は最高の人生を過ごすことができた。後悔など、ありはしない。

きっと俺の死で心が壊れてしまうのかもしれない。あの時のように、心を閉ざしてしまうのかもしれない。でも絶対にお前なら乗り越えることができる。周りには仲間がいる。俺だっているさ。ずっとお前の中にいる。それだけは間違いない。

なあ……だからレイ。

お前は、お前の進む道を信じる。

じゃあな、レイ。

じゃあな。愛しい仲間たち……。

そうして俺の意識はそこで途絶えた。

第302話 さらに、愛しい仲間たちよ（後書き）

気がついた方もいると思いますが、書籍版第一巻のあのシーンがこの話だったわけですね。再度お読みいただければ、さらに発見があるかもしれません。

それでは今後とも本作をお楽しみいただければ幸いです。

第303話 慟哭

「治れッ！ 早く、早く治れッ！！」

ハワードは全く動かなくなってしまった。

けど、まだ間に合う。絶対に間に合わせて見せるッ！！

俺は懸命に治癒魔術をかけ続ける。血は徐々に止まりつつある。確かに、止まっているんだ……でも、でも……もう、ハワードは……。

「そんなことはないッ！！ 絶対に、絶対に助けるからッ、ハワードッ！」

「……」

声をかける。

だが反応などない。あるわけがない。

ああ。分かっているとも。

分かっているさ。

もう……ハワードはこの世にはいない。ここに残っているのは亡骸だ。その魂は、その心はすでに無くなっている。今まで幾度となく見てきた死の兆候。

脈拍は停止し、瞳孔は完全に散大している。人間の死の兆候を俺は嫌というほど見てきた。だからこそ、理性では分かっている。

ハワードはもう……死んでいるのだと。

けれど感情がそれを認めない。認めるわけにはいかない。

俺がそれを認めてしまったら、この手を止めてしまったらハワードの死を認めたことになってしまうから。

ああ……分かってるよ。

こんなものは現実逃避でしかない。でも、でも……俺はッ！！

「う……ぐすつ……ハワードお……ハワードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

叫ばずにはいらなかった。

もう目の前は涙でぐしゃぐしゃになり、ろくに見えない。ぼやける視界の中で、横たわっているハワードを見る。

なあ……ハワード。

最後の言葉、しっかりと受け取ったよ。

ハワードが最期に俺に託して逝ってしまったのは分かっている。

でも、俺はどうしたらいいんだ？

ハワードのいない世界でどうやって生きていけばいいんだ？

どんな顔で笑えばいい？

どんな顔で過ごせばいい？

分からない……分からないよ、ハワード。

そう嘆いていると、後ろから足音が聞こえてくる。

「レイ」

それは師匠の声だった。しかし、俺は振り向くことはなくただ懸命に治癒魔術を続ける。それがもう間に合わないと分かっている、この手を止めることなどできなかったから。

「レイ」

「……まだ、まだ間に合うはずですよッ！」

「レイ。やめろ」

師匠が俺の手を取って、魔術を使うのを止めてくる。そんな彼女の行動に対して、俺は怒りを込めた視線で師匠のことを射抜いた。

さらに、俺は師匠に怒鳴りつける。行き場のない怒りを、彼女にぶつけるようにして。

「どうして、止めるんですかッ！」

「もう……分かっているんだろう？」

「ッ」

その時になつてやっと師匠の顔をはつきりと見ることができた。その美しい紺碧の双眸をじっと見つめる。その顔はただただ無表情だった。まるで何も感じていないかのような、人形みたいな顔だった。

「レイ。行くぞ」

よく見ると、師匠の部下である兵士たちが数多くやってきていた。そして彼達はハワードだけでなく、すでに絶命している遺体を麻袋へと詰めていく。

そんな光景を見て、やっと理性が理解した。

ここでの戦闘は終わった。数多くの犠牲を残して。

「そんなッ！」

声を上げる。けど、どうしてまだ抗いたかった。その死を受けいることはあまりにも過酷だったから。

「まだ今回の任務は終わりではない」
「でもッ！」

パシン、と乾いた音が耳に入った。どうやら俺は、師匠に頬をぶたれたみたいだ。俺は呆然としながら、師匠のことを見つめる。

「聞き分ける。分かっているだろう。ここは戦場だ。私たちの行動が遅れると、さらに死者が出る」

ああ……そうだ。

正しいのはいつだって師匠だ。

俺はただ、聞き分けのできない子どもだった。無力なただの……一人の人間だった。

いい気になっていたのかもしれない。調子に乗っていたのかもしれない。楽観的に考えていたのかもしれない。

戦場で戦うということは、こういうことなのだ。

俺はどこかそれを他人事のように思っていた。そしてそれを、ハワードが死んだことによって初めて自覚した。この地獄のような戦場の凄惨さをやっと理解できたような気がした。

「行くぞ。レイ」

「……はい」

師匠に手を取られて、俺は進んでいく。ハワードの死体はすでに仲間達が袋に詰めていた。そんな様子を俺は、顔を歪めながら見つめていた。

そして、気がついた。

師匠の手もまた震えていることに。そうだ。

師匠だつて何も思っていないわけではない。ずっと一緒に戦ってきた仲間が死んで、何も感じないわけではない。俺が動揺しているのを見て、気丈に振る舞っていただけなんだ。

そのことを理解すると自分の矮小さに嫌気が差してくる。

けれどまだ戦いは終わっていない。まだ俺たちは、戦い続ける必要がある。

「……レイ。慣れる。そうしないと、次に死ぬのはお前だ」
「……はいっ！」

零れ落ちる涙。

ああ。どうして俺は、また何も守れないのだろうか。

どうして俺はこんなにも無力なのだろうか。

そう考えていると、心の内でピキッと何かが音を立てた気がした。

戦況は大きく変化した。

今までは王国軍が優勢と思われていたが、七大魔術師を二人も屠った相手が前線ではなく後方に出たということで新しく後衛の防御

を固めることになった。

そして、レイとリディアが戻ってくるとちょうどそこには、ハワードの危機を聞きつけた特殊選抜部隊アストラのメンバーが揃っていた。

「リディアちゃん！ どうだったの！？」

基地に戻ってきたリディアを見て、キャロルは真っ先に尋ねた。すると彼女は冷静に、今回の戦闘における死者の数を報告した。

「死者の数は十二名だ」

「そう……なんだ……」

「その中には……」

と、言葉が続けようとしたがリディアは迷ってしまう。このままハワードの死を伝えてもいいのかと。

だがキャロルはリディアの隣で絶望に叩き落とされたようなレイの顔を見て悟る。彼の体が血に塗れていた。しかしそれはレイに外傷があるのではなく、仲間の血であると分かってしまったのだ。

すでにかかりの時間が経過して異様で、その血は黒く凝固していた。

「まさか……」

「ハワードは殉職した」

その言葉に反応したのは、キャロルよりもアビーの方が早かった。彼女はハワードが帰ってくると思って、タオルと温かい飲み物を準備

備している最中だった。

リディア達が帰ってきたということで、すぐにカップに入れた温かい飲み物を渡そうと思っていたのだ。

しかし、その報告が耳に入ってアビーはカップを地面に落とす。

パリンと音を立てて砕け散る陶器など気にせずに、アビーは思い切りリディアに詰め寄る。

「リディアッ！！ 本当なのかッ！ い、いや……嘘だよな？ お前はそうやって、いつも私をからかうんだ……はは、ははは！ なあ……嘘だろ？ 嘘……なんだろ？」
「……………」

視線を逸らす。

あまりにも痛々しい親友の様子をリディアは直視できなかった。その一方でレイは、アビーの前に出ていくと涙の後も拭わず彼女に告げる。

「ハワードの最期は自分が看取りました」
「あ……ああ……っ。れ、レイ……お前まで、そんな冗談を言うのか？」

黙って首を横に振る。

アビーはそれでも信じることはできなかった。

ずっとハワードはアビーのことを心配してくれていた。ずっと相

談に乗ってくれていた。食事には何度も行っだし、一緒に遊びに行くこともあった。その中でわずかな淡い恋心が芽生えているのはアビーも分かっていた。

この戦争が終われば、関係を前に進めたいと……そう願っていた。

「ハワードは最後まで勇敢に……勇敢に戦っていました。どれだけボロボロになろうとも、仲間のために……戦っていました……」

涙などとうに枯れ果てている。

だからこそ、レイはそのことを伝えることができた。それこそが自分できるハワードへの最大限の恩返しだと思って。

「ああ……ああ……ああ……」

フラフラと後方へ下がっていく。

そしてアビーは膝を崩して、その場にしゃがみ込むと両手で顔を覆って声を上げて泣き始めた。

「う、う……うわああああああああああああああああああああああああああああああああッ……」

決して珍しい光景ではない。仲間が死んだ時にはこうして誰かが涙を流すのは、普通のことになってしまっていた。

泣き叫びアビーに寄り添うようにして、キャロルは彼女を包み込みながら静かに涙を流した。

その場にはちょうど、ヘンリック、フロール、デルクもやってきていた。

「バカやろう……ハワード……お前ってやつはッ!!」

グツと拳を握りしめるデルク。嫌な予感はしていたが、それが当たってしまい彼もまた静かに涙を流していた。

「エインズワース。戦況は？」

「は。後方は現在は沈下しております」

ヘンリックに対して冷静に戦況を報告する。しかし、ヘンリックの拳は微かに震えていた。隣にいるフロールもまた、涙が止まることはなかった。

ハワードは特殊選抜部隊のムードメーカー^{アストラル}でいつだって中心にいた。そんな彼が戦死したと聞いて冷静でいることのできる者など一人だっていなかった。

「……ハワード。絶対に俺が、この戦争を終わらせるよ」

レイは空を見上げる。

曇天から打って変わって、気持ちの良いくらいに空は晴れ渡っていた。しかし、そんな空とは裏腹に基地は慟哭で満ちていた。

あまりの悲しみに打ち拉がれる者。

その死を、その想いを引き継いで前に進もうとする者。

ハワードの死をきっかけにした、アストラル特殊選抜部隊は大きく変化していくことになるのだった。

そうしてついに……極東戦役は最終戦へと突入しようとしていた。

第303話 慟哭（後書き）

極東戦役編。ついに次回より、終盤に突入です。

ハワードの死を経てアストラルはどんなになっていくのか。また七賢人との戦いはどうなるのか。ご期待していただければ幸いです。

第304話 七大魔術師の軌跡

「ルーカス」

「はい。師匠」

まだ幼いルーカス・フォルスト。彼は師匠である絶刀の魔術師バルトルト・アイスラーの内弟子として生活を送っていた。家族はいなく、孤児として育ったルーカスは剣の才能を見抜かれ、バルトルトの弟子として剣技の習得に励んでいた。

王国の最北端の山の中で、小屋を構えて二人は生活をしていた。

バルトルト・アイスラー。別名、絶刀の魔術師。

彼は確かに魔術を使い、その剣技を高めてきた。しかし実際のところ、彼にとって魔術とは補助的なものに過ぎない。彼の本質は、ただ純粹なまでの圧倒的な剣技のみ。

その刀剣の領域は、すでに魔術の域を超えて神域とも言われている。

彼に師事したいと思っている人間は数多くいる。しかし、バルトルトの剣技はたった一人にしか伝えることはできない。それはその流派による掟だからだ。

そして、次の世代として選ばれたのがルーカスだったのだ。

すでに頭角を現し、秘剣を複数習得している。バルトルトは初老であり、引退も考える年齢になった。けれど彼は生涯現役を掲げており、見た目に反してその体は研ぎ澄まされている。

一切無駄のない筋肉。もちろん、贅肉などあるはずもない。

剣に全てを捧げ、その人生を費やしてきた。

たとえ全盛期から遠のいても、彼にはまだ野心が残っていた。

「王国軍から招集があった」

「もしかして、出兵するのですか？」

「うむ。だが決して一兵士として戦場に参加するわけではない」

「……以前お言葉にしていた、導きのことでしょうか？」

「そうだ。これはすでに運命であり、避けることはできない」

導き。

バルトルトはルーカスに対してそう語っていた。いずれ近い未来、敵対する存在と戦う時がやってくると。それこそがこの世界の巡りであり、避けることはできな因果でもあると。

「どうやら他の七大魔術師もやってくるようだが、俺は協力するつもりなど毛頭ない。王国軍からの依頼は、強力な敵対存在を一人屠ってくれたらいいと言うものだ」

「……行くのですか？」

「うむ。この刀が鈍っていないか、試すのもいい頃合いだろう」

光り輝く刀身を見つめながら彼はそう言葉にした。

「さらに、ついにあの天才が動き出したらしい」

「リディア・エインズワース、ですか」

「そうだ。あの天才中の天才。この世の特異点とも言つべき存在。だが、まだ七大魔術師最強の座を譲るわけには行くまい」

「……お供します」

それは本心から出た言葉だった。

ルーカスは極東戦役の行方など知りはない。ただ遠く離れた地で王国軍が戦っていることだけは耳に入っていた。

彼が付いていくと言ったのは、師匠であるバルトルトの姿を灼きつけるためだ。

「……手出しはするなよ。敵は俺が一人で殺す」
「分かりました」

ルーカスは恭しくその場で頭を下げた。

そうしてついに絶刀の魔術師が極東戦役に参戦することになるのだった。

「先生！　どうかお元気で！」

「マリウス先生。さようなら……！」

「先生。私、もっと魔術が上手くなるように頑張ります!」
「先生のいない学院なんて、本当に寂しいです……!」

数多くの生徒に囲まれている男性がいた。

校門の前ではこれでもかと人で溢れ、その中心で花束を持って笑顔浮かべている男性がいた。

燐煌^{りんこう}の魔術師 マリウスⅡバセット。

胸まである栗色の艶やかな髪を、今日は後ろで一つにまとめた。

そしてどうしてマリウスがこんなにも大勢の生徒に囲まれているのか、それは。

「皆さん。今まで本当にありがとうございました。皆さんがいたからこそ、私も多く成長することができました」

そう。マリウスがアーノルド魔術学院の教師を辞めるからだ。

今まで数多くの生徒を育て、その中には七大魔術師であるリディアⅡ、エインズワースやリーゼロッテⅡ、エーデンも含まれている。魔術に長けているものが、教えることも長けているとは限らないが彼の場合は例外だった。

彼がいるからこそ、アーノルド魔術学院に進学する生徒も少なくはない。むしろ、彼に教授してほしいからと進学するのは一種の常識でもあった。

そんなマリウスが教師を辞職すると言ったのは一ヶ月前のことである。その際には、学院中に大きなニュースとなって悲劇の声が上がった。

その理由は一身上の都合。

ニコリと笑いながらも、彼がその理由を明かすことはなかった。

そして今日が最後の日だった。彼は授業を終えると、すぐに送別会を開いてもらった。そこで花束を渡され、彼のファンクラブの会長である女子生徒には千羽鶴を渡された。その他にも彼に世話になった生徒から数多くのものを受け取っていた。

それに全て笑顔で応え、両手にはこれでもかと言うほどの荷物で溢れていた。

きっと彼以上に愛された教師は王国にはいないだろう。

「それでは、皆さんにどうか幸せがあらんことを」

校門の前で丁寧な礼をすると、彼は後ろを振り向くことなく歩みを進めていく。後ろからはまだ彼を呼ぶ声が聞こえてくる。それだけマリウスは愛されていたのだ。

数多くの生徒たちに。

そしてちょうど曲がり角を曲がって、生徒たちの姿が見えなくなった時、小さな少女がぴょんと飛び出してきた。

「マリウス！ 遅いぞ！ 遅刻じゃぞ……っ！」

現れたのは比翼の魔術師 フランソワーズ・クレール。

幼い容姿をしているが、実年齢は六十歳に迫っている。そんな彼女の言葉に対して、マリウスは丁寧に謝罪をする。

「申し訳ありません。フランさん。生徒たちのお見送りが、予想以上でして」

「まあ……それは仕方ないの。マリウスは愛されておったからの」
「はい。ありがたい話です」

一見、この場には二人しかいるように思えないが、フランの後ろにはもう一人女性が立っていた。

「リーゼさん。お久しぶりです」
「……先生。お久しぶりです」

もう一人の女性。それは、虚構の魔術師 リーゼロッテ・エーデン。真っ黒なコートにロングブーツ。それに真っ白な髪を靡かせて彼女はそこに立っていた。緋色の双眸でじっとマリウスのことを見つめていた。

そんなリーゼを見て、マリウスはニコニコと微笑みながら捲し立てるように話し始めた。

「どうですか？ 研究者として上手くやっていますか？ それに、

七大魔術師に任命されたようですね。改めておめでとうございます。でも、リーゼさんはいつかきっとそうなると思ってました。私が見てきた教え子の中でも、あなたはとても優秀でしたから。それと

「

……先生。相変わらずですね」

リーゼの冷たい声音を聞いて、マリウスはハツとしてから照れたような仕草で頭を掻き始める。これは彼の悪い癖なのだが、昔の教え子に会うとどうにも饒舌になってしまうのである。

「マリウス。絶刀もすでに向かっているようじゃ」

「……そうですか」

打って変わって真剣な表情になるマリウスは、前に流している髪を後ろへと持っていく。そして、三人揃って歩き始めるのだった。

「……マリウス。これはお節介じやが、良かったのか？ 何も教師を辞める必要は、あったのかの？」

「そうですね。戻ってくるといふ選択肢もありました。休職という形にして。でも、これから為すことを考えれば、もう私に教師の資格はないでしょう。そうですね。全てのことが終われば、世界中でも旅をしたいと思います。そこで、色々なものをみたいですね」

「……そうか。やはりお前は優しい子じゃな」
「恐縮です」

マリウスがどうして教師を辞めることにしたのか。

それは 極東戦役に参加することになったからだ。もっとも、参加する七大魔術師は軍人になるわけではない。彼、彼女たちはある運命の元、進むと決めたのだ。

「ついに、ですね」

「そうじゃの」

「……相手の組織名は、七賢人。^{セブンセイジ}すでに紺碧と雷鳴を殺している」

リーゼは淡々とした様子で戦況を語る。彼女は情報収集を得意としており、この戦争に背後にある七賢人^{セブンセイジ}にまで辿り着いていた。

その言葉を聞いて、マリウスは天を見上げる。

「そうですか。それでは改めて向かいましょうか。その存在を殺すために」

こうしてついに、七大魔術師が極東戦役に本格的に参戦することになるのだった。

第304話 七大魔術師の軌跡（後書き）

極東戦役編、ついに終盤に突入です。最後までお楽しみいただければ幸いです……！

第305話 静かな怒り

「……」

滴る血液。

それを拭うことなく、レイはひたすら戦場を走り続けていた。リディアの後方にぴったりと張り付くような形で、二人は戦場を駆け抜ける。

互いに使用するのは冰剣。

それはすでにこの極東戦役の象徴にもなっている。

冰剣の魔術師 リディア「エインズワース」。

すでに彼女は英雄と呼ばれ始めていた。幾多もの敵を屠り、血に塗れながら前線を支え続ける。たとえ千人の敵に囲まれようとも、リディアはたった一人で圧勝できる。単機において戦術兵器にも匹敵する彼女は、もはや敵など存在しない……そう思われている。

「レイ。終わったか？」

「はい」

周囲の世界は一面、氷の世界と化していた。氷の中に閉じ込められている敵は、すでに絶命している。レイはそんな死体を見ても、もう何も思うことはなかった。

ただただ、この戦争が早く終わればいいと。

殺している数と殺されている数を比較すれば、きっと王国軍の方が勝っているのだろう。しかしそんなものに意味はない。どちらかが降伏し無ければ、この戦争が終わることはないのだから。

ハワードの死を経てレイはさらに研ぎ澄まされていった。その心が完全に壊れることはなかった。ハワードの意志を受け継ぎ、彼は進んでいる。リディアもまた同様だった。

二人は数々の死に触れてきた。

それは敵だけでなく、仲間の死も含まれる。

すでに心は擦り切れている。

二人とも分かっていた。この過酷な戦場ではまともな心など、感情など持つことは許されない。ただ自分を押し殺して、まるで機械のように作業をこなしていく。それこそが正解であると。そうしなければ、自分を保つことなどできなかった。

「レイ。戻るぞ」

「はい」

レイの存在は仲間の一部には知られている。だが、敵国にはまだ彼の存在がはつきりとは伝わっていない。それはレイと接敵した兵士は、全てが死んでいるからだ。

英雄の裏には、また別の強敵が存在していることを……まだ敵は

知らなかった。そう、七賢人セブンセイジを除いて。

そうしてレイは今日も進む。

揺るがない決意を心に刻みながら。

国境にある森林。

ここでは今まで数多くの戦闘が繰り広げられている。無造作に転がっている死体など珍しいことではない。

その中を一人の男性が歩いていた。

軍人ではないようで彼は真っ黒なスーツを身に纏っていた。一見ただけでも、それが上質なものであるというのは理解できる。

長い茶色い髪を後ろでまとめ、彼は無表情のまま進んでいく。

するとちょうど視線の先に少女を発見した。金色の髪を左右の高い位置でまとめているのは、フィアだった。あれから彼女は単独で王国の兵士を殺し続けていた。

しかし、リディアやレイと接敵することはない。まるで二人から隠れるようにして、台頭していたのだ。

そして、互いに視線を交わすと彼は　マリウスは口を開いた。

「あなたが七賢人^{セブンセイジ}ですか？」

尋ねる。すると正面にいたフィーアはそれに答える。

「あら、知っているの？ どうやらそちらも無能な集団ではないようね」

「はい。優秀な教え子がいますので」

「あつそ。で、七大魔術師よね。あなた」

「はい。まずは自己紹介を。七大魔術師が一人　マリウスⅡバセツトと申します。一応、燐煌の魔術師とも呼ばれています」

「……燐煌。予想通り、この戦場に他の七大魔術師も来ているんですよ？」

「さあ。どうでしょうか？」

肩を竦めるようにしてマリウスはとぼける仕草を見せる。その様子をフィーアはじっと見つめる。一挙手一投足を見逃さないように。

「あなた分かっているんでしょう？ どうしてこの戦争が起きているのか？」

「そうですね。あなたも私もある種の到達点だ。そして、世界真理を開くためには犠牲が必要になる……でしょうか？」

「……ふふ。ふふふ！ そう！ これは、私たちのための戦場なのよ！ ああ……やつと。やつと雑魚を狩る時間が終わった。ねえ、あなたは私を楽しませてくれるの？」

嗤う。

不適に笑いながら、彼女は両手を広げてその歓喜を表現する。目的のためならば、どれだけの人間を殺しても構うことなどない。フイーアはそう言っているのだ。今までの戦闘は全て前座に過ぎない。

セブンセイジ

七賢人と七大魔術師が衝突するために、この極東戦役は開始されたのだから。

「私はこれでも元教師でして。楽しませることは分かりませんが、教えることはできますよ?」

「何? 私に授業でもしてくれるの?」

「残念ながら、あなたにお教えることはありません。これから先は、殺し合いになりますから」

ブリママテリア
溢れ出る第一質料。

マリウスの体からは金色の粒子が溢れ出していた。それを見てフイーアはニヤリと笑みを浮かべる。

「ああ……あなた、とっても強いねえ……いいよ。最高だよっ!」

歪む。

マリウスがいた空間がぐしゃりと歪む。

今まで数多くの人間がこれによって殺されてきた。しかし、マリウスはそれを難なく打ち消した。

「なるほど。とても凶悪な魔術をお持ちのようですね」

「……お前、何者だ?」

フィアの余裕が一気に消え去る。今の攻撃で確実に一本、腕を持っていくつもりだった。だというのにマリウスはその攻撃を無効化したのだ。

「ただの元教師ですよ」

「ほざけ。私の攻撃を防げるなんて、あり得ない」

「そうでしょうか？ 全ての現象には理屈があります。それを辿っていけば、たどり着ける場所があるのです。一見すれば、私たちが使用する魔術は無秩序に見えます。しかし、コード理論の体系化によってそれは暴かれました。世界はある法則によって成り立っているのです。しかし、コード理論とは真理を遠ざける理論に過ぎません。その本質は別のところにある、というのが私の結論です」

「……お前、まさか知っているのか？」

「さて。何のことでしょうか？」

マリウスはスツと右腕を上げる。

そして、人差し指と親指で虚空を掴むとそれをスツと右に引いた。

瞬間。淡い閃光がフィアの左手を貫通した。

「ッ」

ボタボタと零れ落ちる血液。彼女はすでにマリウスをただの標的として捉えていない。自分と同格か、それ以上の存在だと思っている。

一瞬の出来事。しかし、この一瞬でフィアはマリウスの底知れなさを理解する。燐煌の魔術師は、明らかに他の七大魔術師とは一線を画していると。

「……燐煌の魔術師。お前の情報が一番掴むことが出来なかったが……一番近い位置にいるな？」

「果てさて。何を言っているのやら、私には分かりません。でもあなたはここで死にます。それが私がこの場にやってきた意味です」

繰り広げられる魔術戦。

フィーアもマリウスの魔術の兆候を理解したのか、直撃は避けるようになっていた。一方でマリウスは無傷のままだった。空間は確実に歪曲している。だというのに、まるでそこに実体がないかのようになり抜けていくのだ。

流石にこれにはフィーアも焦り始めていた。

「魔術を使う際は冷静に。これは基本ですよ。どうにもあなたは焦っているように見えますね」

「うるさいッ　！」

感情のままに吠える。

一見すればまだ致命的な攻撃は互いに当たっていないため、互角にも見える。

けれどマリウスは余裕の表情を浮かべ、フィーアは焦っているのか額には汗が滲み始めていた。

「人の死とは、何なのでしょうか？」

マリウスは歩みを進める。

「どうして我々は死を恐れるのでしょうか。その問いの答えは本能的な部分に帰結すると私は思います。しかし、人は死に意味を見出します。その意味を、踏みにじるかのような今までのあなたの行いは許せるものではありません。いたずらに命を奪い続けることを許容するわけにはいけないのです。これ以上、慟哭を広げるわけにはいかない」

悠然と、そして優雅に。まるで午後のひと時を楽しむかのように、彼はゆつくりと歩みを進めていく。歪曲する空間をまるですり抜けるように。

「さて、あなたはどうかやら恐怖しているようですね。今まで数多くの命を奪ってきて、自分がその立場になってやっとその重さが理解できましたか？ でも安心してください。いたぶるような真似はしません。あなたには償ってもらうだけです。その罪を。そして私も罪人になりましょう。あなたを殺すことで」

それは静かな怒りだった。

マリウスは戦死した教え子の名前を全て記憶している。そのリストを見て、彼は一人一人との思い出に浸り、静かに涙を流していた。

その中にはハワードもまた含まれていた。

最後まで勇敢に戦い、散っていった教え子。学生時から優秀であり、将来は偉大な魔術師になるとマリウスは思っていた。しかし、もうこの世界にハワードはいない。

その慟哭を背負い、彼はフィーアと向かい合う。

「……くそッ！」

彼女は不利だと悟ったのか、逃げる動作を見せる。しかし、それを見逃すようなマリウスではない。

彼は両手を広げると、それを点と点を結びつけるようにして交差する。まるでそこには一つの線が描かれていくようだった。

「
アイソレーションスファイア
完全隔離領域」

瞬間。

世界は真っ白な領域に侵食されていく。

第306話 戦いの火蓋

俺は確実に成長していた。

この極東戦役を経て確実に魔術師として、大成しつつあった。自分でも不思議な感覚だが、何かの領域に届きそうな気配がしていた。皮肉なことに、この戦場で戦う内に俺はさらなる飛躍を遂げていたようだ。

魔術を使うことはもはや呼吸に等しく、どれほど難しいコードであつても複雑に操作することができる。固有魔術ですら、今の俺にとっては些事に等しい。師匠もまた全盛期を迎えているようだが、俺もまたそれを追いかけるようにして確実に師匠に迫りつつあった。

「……レイちゃん。大丈夫？」

「キャロル。俺は大丈夫だよ」

今日も任務を終えて基地に戻ってきた。本日は単独任務であり、斥候も兼ねて前線に向かうことになった。しかし、そこで運悪く接敵。戦闘をすることになったが……今の俺が負けることなどありはしなかった。

屠っていく相手の顔を見ることなく、目の前には死体の山が出来上がっていた。今更人を手にかけることに躊躇などなかった。

ただただ作業のように俺は冷静にそれを行なっていく。

なあ、ハワード。

俺はハワードのために戦えているのか？ この道で正しいのか？

そんなことをふと思ってしまう。彼のために戦争を終わらせる。いや、それだけじゃない。今まで死んでいった数多くの仲間のために、俺は戦争を終わらせたい。たとえそれが、どれほどの苦しみと悲しみを伴ったとしても。

俺は成し遂げるつもりだった。今更引くわけにもいかない状況。だが、この血に塗れた手を見るとそう思ってしまうのだ。

自分の進んでいる道が正しいのか……と。

「レイ。戻ってきたのか」

キャロルと会話をしていると、そこにはちょうど彼女もやってきた。

「大佐。はい、先ほど戻ってきました」

「そうか。レイ。ゆっくりと休むがいい」

アビー＝ガーネット。

師匠の親友であり、誰よりも厳格で優秀な人だ。彼女はハワードの死をきっかけにして、さらに戦場へと向かうようになっていたが元々戦況を対極的に見極める能力が高かったのだろう。

今は後方で作戦指揮官として活動をしている。そんな彼女は極東戦役での活躍を認められ、大佐にまで昇進していた。曰く、史上最

年少であると。けれど師匠は言っていた。それはある意味見せしめのようなものであると。

優秀な指揮官として彼女は選ばれた。それを象徴するような形で大佐という地位を与えられただけだと。

この戦場には象徴が必要だった。

師匠はすでに英雄として名を馳せている。そしてそれに対して大佐は作戦指揮官としての象徴になりつつあった。

特殊選抜部隊は、アストラルヘンリック・ファールンハイト中佐が取り仕切っているのは間違いないが階級だけでいえば彼女の方が上になってしまっていた。

別にそれによって軋轢が生まれたわけではない。

と思っているが、やはり特殊選抜部隊アストラルとしての活動は少なくなりつつあった。きっとそれは感情的な面もあるのだろう。集まってしまうば、ハワードのことを思い出してしまうから。

「ね、レイちゃん。一緒にご飯でも食べない？ このあと時間あるでしょ？」

「すまないキャロル。今日はすぐに休みたいんだ」

「あ……そ、そうだよ。ごめんね無理言っ」

「いや構わない。それでは、失礼します」

二人に頭を下げると、俺は扉に向かって歩みを進めていく。去り際、キャロルの悲しそうな顔が目に入ったが……今の俺はまだキャロルの感情を読み取れるほど余裕などなかった。

この心のうちに宿る暗い感情。

これを持ったまま誰かと笑い合うことなど、もうできなくなっていた。

「リーゼ。別についてこなくてもいいんじゃないぞ？」

「……心配なので」

「おお！ リーゼは本当に優しい子じやのう……！」

「……いえ。別に」

リーゼとフランの二人は戦場の中で悠然と歩みを進めていた。至るところに血が飛び散り、四肢も転がっているような戦場。最前線は苛烈を極めていた。

二人の目的はある敵と接触すること。

今回はフランが一人で行くと言ったのだが、リーゼもついていくと言ったのだ。それは純粹にフランの力をこの目で観察してみたいというものからきたものだった。

だがそれを説明するのはなかなか面倒なので、リーゼはフランに都合のいいように解釈をさせていた。

「さて、と。そろそろ来る頃かの？」

「……そうですね。ちょうどきた頃だと思いますよ」

立ち止まる

そこは何もないただの荒野だった。目の前には水平線が広がり、一見すれば何もないような空間に思える。しかし、二人の目の前にはちょうど同じように二人の人間が歩みを進めてきていた。

黒髪短髪で眼鏡をかけた利発そうな男性。その隣にはオレンジ色の髪をくるくると指先に巻き付けながら、気怠そうな雰囲気をもっている女性もいた。

「ふむ。どうやら、虚構と比翼がきたようですね」

「はあ……だる。早く殺して帰りたいんだけど？」

「ツヴァイ。これは任務ですよ。気を引き締めてかかりなさい」

「はいはい。分かったよ、ゼクス」

男性の方はゼクス。女性の方はツヴァイと呼ばれているのを、リーゼとフランはしっかりと耳にした。

そして二人と対峙するようにしてフランが先頭に出ていく。

「こほん。お主たちが、七賢人セブンセイジじゃな？」

「どうやらこちらのこと調べているようですね」

「もちろんじゃない。うちには優秀な人間がおるからの。このわしも含めての」

「そうですか」

まずはゼクスとフランが軽く会話を開始する。それはまるで世間

話のような軽い雰囲気ではあるが、確実に何かがひりつくような感覚を全員が味わっていた。

まさに一触即発の状況。

この雰囲気の中であっても、フランは冷静に話を続ける。

「七大魔術師は巡る。そして、お主たちも同様。こうしてぶつかり合う時がくるのは運命で決まっておる」

「……そうですね。あなたはとても聡明ですね。気に入りましたよ、比翼」

「ふん。ま、どうでもいいがの。さて」

フランは小さな体を軽く揺らしながら、ボソリと呟く。すると周囲には真つ赤な第一質料プリママテリアが弾けるようにして顕在化していく。すでに戦闘態勢に入りつつあるフランを見て、ゼクスはニヤリと笑う。

「ああ……僥倖ですよ。ここまでゴミのような人間たちを殺してきてよかった。あなたのような存在と出会えて、私は幸せですよ」

「……抜かせ小僧。その罪、ここで償わせてやる」

二人が完全に臨戦態勢入っている一方、リーゼは淡々とその様子を見つめていた。そんな彼女の正面には、ツヴァイがゆっくりと歩みを進めていた。依然として気怠げな様子で。

「ねえ、あんたが虚構でしょ？」

「はい」

「殺してもいい？」

「どうぞ。ご勝手に」

「はあ……？ もうちよつと恐怖心とかないわけ？」

「どうでしょうか。人の感情というものを私はもつと知りたいたいと思っているのですが、あなたがそれを教えてくれるのでしょうか？」
「きつも。何？ その話し方は素なの？」

吐き捨てるようにして、ツヴァイは声を漏らす。それは純粹な感想だった。今までのような普通な人間ならば、彼女の漏らしている
ブリママテリア
第一質料に当てられて恐怖に顔を歪ませているはずだった。

しかし、リーゼはまるで意に介していないかのように話を続けていた。

「はい。私という人間の本質はきつとそうなのでしょう。誰にも理解されず、誰も理解できない。しかし、あなたたちの存在は非常に興味深いです。私の知らないものを教えてくれるかもしれない」

「ははは……っ！ いいよ、お前。最高にム力ついてきた。久しぶりにやる気が出てきたかも」

戦いの火蓋が切られた。

第306話 戦いの火蓋（後書き）

ついに連載開始から一年が経過しました。一年でここまでの作品になるとは、公開する前は思ってもみませんでした。これも全て読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます……！
またちよつど一週間後には書籍版二巻も発売いたします。是非、よろしく願ひいたします！

今後とも、本作をお楽しみいただければ嬉しいです！

第307話 第零質料

「……ここは」

ボソリと声を漏らすフィア。彼女の目の前には見渡す限りの真っ白な世界が広がっていた。それは文字通りの意味であり、水平線の彼方まで全てが特殊な領域で構築されていた。

彼女はこの領域の全てを理解しているわけではない。

だが、ここが先ほどいた世界から完全に隔離された別の空間であることは理解していた。

「どうやら、ここがどこか理解しているような顔ですね」

アーカーシャ
「真理世界と現実の狭間。どうしてもこの領域をお前たち程度の魔術で辿り着ける……？」

ギリツと歯を食いしばりながらフィアはマリウスのことを忌々しそうに凝視する。フィアは特に、マリウスに対して憎しみなどという感情は持っていない。けれど、その視線は明らかに憎しみが含まれたものだった。

自分たちしか知らない領域に土足で踏み込んできたからこそその怒りなのだろうか。

彼はフィアのそんな視線も気にせず、ゆつくりと手を伸ばして虚空にある微かな第一質料をその手に掴み取る。

「そう。私は分かっていました。第一質料とコード理論を使用した
プリママテリア
現代魔術は確かに素晴らしいものです。汎用性が高く、それほど魔
術の素質がなくとも簡単な魔術なら意識して使うことができる。し
かし、ある領域にたどり着くとその先に進むことができません」

まるでマリウスは独り言のように語り始める。そんな彼の言葉に
フィーアは耳を貸していた。彼女は知っていたからだ。

この世界の仕組みとそして、現代魔術の本当の意味というものを。

「お前……魔術を使う身でありながら、たどり着いたというのか？」
「いえ。この世界は決して真理世界ではありません。アーカシヤ言うならば、
狭間です。不完全な領域ではありますが、限りなく真理世界に近い
空間……」

と、マリウスが人差し指と親指を閉じて横にすつと線を引くよう
に手を横に滑らせた。

すると眩い光が輝いたと思ったら、フィーアの右足は閃光によつ
て貫かれていた。知覚する時間などありはしない。

マリウスが使用する魔術の速度は光速に達している。それこそ、
彼はこの空間における全ての第一質料を支配下に置いている。
プリママテリア

溢れ出る燐光はアトリビュートに過ぎない。

彼の本質は、【接続】に他ならない。だがフィーアはまだそのこ
とに気がつくことはない上に、徐々に焦り始めていた。

まだ足は動くし、思考もはつきりとすることができる。だが間違
いなくこの場に於いて上なのはマリウスだった。

「う、うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああ！！！」

狂ったかのように叫ぶと彼女は両手を掲げ、空間の歪みを一気に
生成していく。それはマリウス一人を飲み込むには十分すぎるほど
の領域。並の魔術師であればその空間に触れた瞬間、原型を残すこ
となどなくバラバラになってしまうだろう。

しかし、マリウスに彼女の魔術 否、魔法が通じることとはなか
った。

溢れ出る燐光に、眩いまでの光の軌跡。

それらが宙を駆け巡ると一気にその歪曲した空間を元の通常の空
間へと戻していく。いや、それは厳密に言えば破壊そのものである。
マリウスは彼女の魔法に介入して、全てを破壊尽くしているのだ。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コードマテリアル＝デコーディング》

《物質コードマテリアル＝プロセシング＝接続コネクト》

《エンボディメント＝現象フェノメノン》

この空間には大量の第一質料^{プリママテリア}が溢れ出していた。それこそ、その量は通常ではあり得ないほどに。これはマリウスが生み出した、擬^ブレアカーシャ^{レアカーシャ}似真理空間だからこそ為せる技である。

彼の本気を見たものはまだこの世界一人としていない。

それはマリウスが一度も本気を出したことはなかったから。

彼にとって人生の全ては生徒のためにあるものだった。教師は天職であり、子どもたちに知識を教えることこそが彼の人生そのものだった。だが、彼は知ってしまった。この世界が脅かされていることに。

このままでは世界は終わってしまうかのしれないと。

だから自分に為せることを為す。

それがたとえ、相手を殺すことになったとしても。

教師という天職を捨て、彼は前に進み始めた。自分が犠牲になった上で世界を守ることができるのなら、それでもいいと。決して死ぬことを許容しているわけではないが、死を覚悟しているのは間違いないかった。

いつもは柔和に微笑み、人の良さそうな雰囲気を纏っているマリウスだが今のこの時だけはまるで全ての感情が抜け落ちたかのような表情をしていた。

その顔を見てフィーアはゾツとすると同時に、彼女の視界は無限の光に包み込まれるのだった。

「キアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

絶叫。

耳を塞ぎたくなるほどの絶叫がこの空間に響き渡った。

マリウスの放った無限の燐光たちは全ての点と点を繋ぐようにして、幾多もの光の軌跡を作り上げた。その光の線を避けること、防ぐことは不可能。光よりも早く知覚できる魔術師など、この世界に存在しないのだから。

「
ア坎シクマテリア
第零質料。過去、魔法と呼ばれていたものに明確な法則など
存在していなかった。そこには根元とも呼ぶべき第零質料という物
質と、それに適応する体……厳密には脳があれば十分だった。だが
あまりにも強大すぎる力は封じられ、魔術の始祖であるフリージア
「ローゼンクロイツによって魔法は魔術に変わった」

歩みを進める。

目の前に転がっているフィアはまだかろうじて息をしているようだった。ヒュー、ヒューと喉の慣らしながら、マリウスのことを見つめている。

恐怖。

彼女は初めて自分が死ぬかもしれないという恐怖を味わっている。

体の震えが止まることはない。溢れ出る血液も止まることはない。

だというのにマリウスは何の慈悲もなく、まるで授業でもしているかのように雄弁に語り始める。

この世界の仕組みを暴くために。

「魔法はコード理論によって体系化され、魔術に進化したのではない。魔法はコード理論という余計な不純物によって退化した。というのが私の仮説になります。けれど、別にモノは使いようです。魔法と魔術。どちらかが優れているなど、今となってはそこまで変わりはありません。といっても、それはある種の到達点にたどり着いた者に限られますが」

「う……ああ……う……」

地面に這いつくばりながら、フィアはマリウスのことを見つめて……こう呟いた。

「た……助けて！ 殺さないで……っ！ 死にたく、私は死にたくない……っ！」

涙を流し、鼻水を流し、なりふり構わず命乞いをした。もちろんそんな彼女に対してマリウスが今更慈悲の手を差し伸べるなどありはしなかった。

「あなたは今まで、そうやって命乞いをした人間をどうしてきましたか？ 私が入手した話によると、嬉々として殺したそうですね。まるで殺戮を楽しんでいるかのように。自分がその立場になって、命乞いですか？ それは……美しくない。とても醜い。でも、私は人殺しに悦など憶えません。たとえどれだけの人間を、私の教え子

「を殺したあなたであつても私も殺すのは感情では嫌なのです」

その目はわずかに輝きを見せる。マリウスの言葉を聞いて、フィアはまだ生きることができるかもしれない、と思ったからだ。

そして、右手をスツと差し出した。溢れ出る燐光はフィアの頭部に集中している。この燐光が全て接続されれば、彼女は確実に死ぬだろう。

「大丈夫です。一瞬で終わらせますよ」

嫌だ。嫌だ。嫌だああああああアアアアアアアア
「ああああああああアアアアアア」

⌈
⋮
⌋

「どうか、安らかに」

第307話 第零質料（後書き）

感想、返せていませんが全て読ませていただいております。いつも本当にありがとうございます。

それでは今後とも本作をお楽しみください。そろそろ五章も大詰めです。

また来週の月曜日には書籍版第二巻の発売日です。是非、ページ下部からご予約お願いしますー！

第308話 歪曲

虚構の魔術師 リーゼロッテⅡエーデン。

七大魔術師に指名されてまだ一年も経過していないが、彼女の實力……というよりもその本質である魔術の性質はあまりにも強力過ぎる。

因果に干渉し、それを歪曲させる魔術。

彼女の能力の真の能力を知っている者は少なく、もちろん向かい合っているツヴァイもそれを知ることはない。

「ハハハハ！ いつまでその余裕の顔が持つのか、楽しみにしてるよ！―」

迫る。

ツヴァイはオレンジ色の長い髪を靡かせながら、彼女は一気に加速する。その速度は知覚できるようなものではなかった。ツヴァイは基本的にやる気がなく、今回の作戦に対しても意識は希薄だった。

しかし、一度火がつくと一番手がつけられないのは七賢人セブンセイジの中でもツヴァイが筆頭に上がる。

激情すると止めることはできずにただ感情のままに殺戮を続ける。フィーアのように殺戮そのものに悦を覚えているわけではないが、

忌避しているわけでもない。特に今は、リーゼが気に入らないというだけで全力で彼女を殺しにかかっていた。

「どうやら、身体強化に特化した能力のようですね。魔術的な兆候が一切見られません。第一質料プリママテリアに揺らぎがないようですからね」

空振り。

ツヴァイの大振りの攻撃はリーゼを捉えることはなかった。その細い腕から繰り出される攻撃は受け止めることさえ不可能。彼女は素手で人間を肉塊にすることすらできてしまうのだから。

この戦場において血に塗れ、その豪腕によって築き上げられた死体は数えることすらできない。まさに戦場に現れた鬼とでもいうべきか。

リーゼは相手の情報を明確に知っていたわけではないが、一連の攻防によって理解した。相手の本質にあるのは圧倒的なまでの物理的な暴力であると。

魔術ではない存在。

それを使用する集団こそが七賢人セブンセイジ。知的探究心から彼女はその存在のことをよく調べていた。

もちろんリーゼもまた第零質料アカシックマテリアの存在は知っている。第一質料プリママテリアではない、根元的な物質。それを使用して相手は戦っているのだと。

「フフ……フハハハ！ やっぱりそうこないと、楽しくないよなあ
あああああああああああああー！」

全てが必中。

一度でもその手につかまれてしまえば、簡単に四肢は挽ぎ取られてしまうだろう。頭部ならばそれこそ、まるで人形のように簡単に弾かれてしまう。

だが、リーゼはその全てを避けている。否、厳密に言えば彼女の实体はそこにあるのだが、そこには存在しない。

歪曲。

この世界の事象にすら干渉するリーゼの本質。

今の彼女は相手の認識を歪めることによって、必中である攻撃を避け続けているのだ。

「……なるほど。おおよそ、理解しました」

黒いロングコートを靡かせながら、彼女は自分の位置をゆっくりと歩きながら変えていく。ツヴァイが捉えているのは全てが幻影。認知を歪め、現実を歪め、世界をも歪めることのできる魔術師。

それこそが、虚構の魔術師　リーゼロッテ＝エーデン。

一方のツヴァイは徐々に焦りが見えていた。今までの戦闘ならば、相手に触れた瞬間に決着していた。だというのにリーゼは決してその実態をつかませることはない。圧倒的な暴力ならば完全にツヴァイが上だろう。

「第零質料を使用した魔法と呼ばれるものは、コード理論のように余計な手間がありません。つまりは心的イメージをそのまま反映できる。だからこそ魔法とは私はいうならば純粋な力、という点では現代魔術よりも優れていると思います」

黒いコートを翻し、真つ白な髪をサラサラと靡かせながらリーゼはツヴァイの攻撃を避け続け、そして語り続ける。

その表情は一切の感情など宿っていない。

軍人としての訓練を受けたこともなければ、誰かとして命をかけた戦いをした経験もない。ツヴァイが百戦錬磨とすれば、リーゼはただの一般人と遜色がないだろう。

けれど彼女の魔術はすでに戦闘という次元に囚われることはない。

世界を歪めるその力は、確実にツヴァイを追い詰めていた。

「では、現代魔術の優れている点はどこか？　コード理論は確かに余計な手間かもしれない。しかしそのおかげで魔術は体系化され、人類の欠かせない技術として浸透するようになった。やはりその根幹にあるのは創意工夫。人は望むものを歴史の中で数多く作ってきました。それはやはり魔術も同様。先生は退化と定義しているようですが、私は変化と言いたいところですね」

「死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。
死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ねええええ
えええええええええッ！！！」

リーゼの言葉など届いているわけがなかった。もちろん彼女もま

た、ツヴァイに対して話かけているわけではない。これは自分の仮説を確認している作業に過ぎない。こうして第零質料アクシックマテリアを使用する人間と対峙して、分析し研究しているのだ。

さらに今までの自分の持っていた研究データと照らし合わせて、リーゼはおおよそその答えを得ていた。そしてもうすでに、この戦闘は終わりを迎えようとしていた。

「さて、もう十分ですね。殺しますね」

リーゼは今までは逃げに徹していたが、ついに攻撃に打って出ることにした。それはこの戦闘のリーゼにおいて最初で最後の攻撃魔術であった。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセシング＝歪曲マテリアル＝歪曲ディストーション》

《エンボディメント＝現象フェノメノン》

「質料歪曲ディストラクション」

指先をツヴァイの心臓に目掛けて向ける。瞬間、彼女はドクンと体が跳ねたかと思いきや、地面に叩きつけられていた。

「う……ごほっ……血……？　今、何が……？」

理解できない。

そんな顔をしていた。口からは止めどなく血液が溢れ、胸には小さな穴が開いていた。

リーゼはただ冷静にゆっくりと歩みを近づけていく。

「心臓を潰しました。後は時間の問題でしょう」

「な……なに……何を、したんだ……？」

「それを答える義理はありません。今回はとても勉強になりました。ありがとうございます。では、私はこれで」

翻る。

リーゼが使用した魔法。それは純粹に相手の心臓を歪曲によって握りつぶしたただけであった。しかし、本来人体に直接魔術を作用させることは不可能とされている。それは人には質料領域マテリアフィールドというものが存在しており、無意識のうちに魔術が自分の体に作用しないように守っているからだ。

それはたとえ七大魔術師でも介入できるものではない……と今まではされていた。

リーゼが行なったのは、質料領域マテリアフィールドに介入しわずかにその領域を歪め、穴を開ける。後は心臓に対して穴を縫うようにして歪曲を発動させるだけ。

この戦闘の全ては彼女の掌の上だった。

「わ……わ、私……は……」

そうしてツヴァイはゆっくりと息を引き取っていた。一方のリーゼは、自分の手をじっと見つめて最後にこう呟いた。

「人を殺したというのに、やはり感情は動きませんね。ああ　本
当に私は度し難い生き物だ」

虚構の魔術師は、人になることをいつまでも求め続ける　。

第308話 歪曲（後書き）

ページ最下部にコミックス第一巻の書影を公開しております！ 画像をタップ（クリック）すれば、書籍情報のページから予約などが出来ますので是非ともよろしく願いますー！ また原作小説第二巻の発売日も近づいてきました。是非、小説第二巻とコミックス第一巻の両方をお楽しみいただければと思います。

第309話 比翼連理（前書き）

あとかきにて大切なお知らせがあります。最後までお読みいただければ幸いです。

第309話 比翼連理

「どうやら、リーゼの方は終わったようじゃの」

戦いを繰り広げながら、フランは自分の後方で行われていたリーゼの戦闘が終了したのを感じ取った。彼女はリーゼの本質を知る数少ない人間であり、たとえ相手が戦闘に長けていようと負けることは全く思っていなかった。

だからこそ、リーゼに任せただが……どうやらフランが思っていた以上に戦闘は圧勝だったようだ。

「バカな……あのツヴァイが負ける、だと？」

ゼクスもまた決着の瞬間を目撃していた。現在は二人とも距離感を取りながら魔術戦を繰り広げていたのだが、彼はまさかツヴァイが敗北するわけがないと思っていた。

それはやはり、自分たちが^{アカシックマテリア}第零質料を有する特別な人間だと思っていたからだろう。神に選ばれし、特別な存在。それがたかが普通の人間に敗北したことが彼は信じられなかった。

「お主たちはどうやら、変な勘違いをしているようじゃの」
「勘違い……だと？」

フランは真つ赤な双眸でゼクスのことを射抜く。彼の脳内には嫌な予感が過ぎっていた。あり得ない事実ではあるが、間違いなく目

の前で起きたのはツヴァイの敗北。

さらにリーゼがこの戦闘に加わることも考えなければならない。
七大魔術師二人に対してどうやって立ち回っていくのか。そう思考を巡らせていると、フランの後ろにはリーゼがゆっくりとやってきていた。

リーゼの頬にはツヴァイの返り血が散っていたが、それを拭うことなく淡々と言葉を告げる。

「フランさん。終わりましたよ」

「うむ。見事じゃな」

「手伝いましょうか？」

「いいや。一人で十分じゃ」

「分かりました。では、私は後ろで控えていますので」

「うむ」

リーゼはそう言うと、少しだけ離れたところに位置を取る。どうやら本当に戦闘に参加するつもりはないようで、フランとゼクスの戦いを見守るようだった。

「舐めているんですか……？」

「いや。これは事実じゃ、小僧。お前はこの我には勝てぬよ」

「いいでしょう。これは最後までとっておこうと思ってましたが…

…認識を改めます。あなたたちは確実に殺します」

瞬間。

ゼクスの体からは、大量のドス黒い粒子が溢れ出てくる。それは
第一質料ではなく、ブリママテリア アカシックマテリア 第零質料と呼ばれているものだ。それが一気に

この周辺の領域を覆っていくと、世界は暗黒に支配されてしまった。

フランはそれを妨害することなく、ただじっと見つめていた。その様子にさすがのゼクスは苛立ちを覚えてしまうのだった。

「……邪魔をしてこないとは、本当に私のことを舐めているようですね」

「さっきから言っておるじゃろう。ただの事実であると。小僧、御託はいい。さっさとかかってこい」

「……殺す」

静かな怒りを灯しながらゼクスは両手を天に掲げると、彼の手中には黒い塊が生成されていく。その中には紅蓮の炎も混ざっており、赤と黒の禍々しい球体が生み出されていた。

瞬間。

それが弾け飛んだ。

「
グラスブ
精神掌握」

弾け飛んだ粒子が一気にフランへと流れ込んでいく。それは不可避の攻撃であり、どうやっても避けることはできない。

ゼクスの本質は第零質料アカシックマテリアを使用した精神掌握である。この極東戦役で数多くの兵士の心を操り、同士打ちをさせるなど非人道的な魔法を使い続けていた。彼は決して殺戮に悦を覚えるタイプではない。その根幹にあるのは、既存の人類を徹底的に見下していると言う精神だった。

セレンセイジ

七賢人こそが至高であり、いわば神の代理人とすら彼は思っていた。そんな自分たちがただの人間に敗北していいわけがない。

それこそが彼を支えている全てだった。

「……狂って、死ね」

すでにゼクスはフランの精神を掌握している。彼女は先ほどの態度とは打って変わって、だらんと腕を下げてその場に茫然と立ち尽くしている。その瞳にも生気が宿っているようには見えず、まるで死人のようだった。

ゼクスは右手をスツと掲げると、握り潰すような動作を見せた。

それは人間の根幹にある精神を握り潰すと言う動作の現れ。今まで数多くの人間の精神を破壊して、戦場に混乱を招いてきた。

しかし フランは一向に発狂する様子にはなかった。

「……あ、は？ どう言うことだ？ 私の魔法は発動しているはずだッー！」

大声を上げる。

それもそうだろう。彼の魔法を逃れることのできる人間など存在はしない。だが目の前にいるフランは依然として先ほどと同じようにだらんと腕を下げてままだった。

「ねえ。あなた、私たちをどうにかできると本当に思っているの？」

女性の声だった。

声音だけ聞けばそれは若い女性の声だと分かるだろう。だが、ここにいるのはフランだけのはず。どうして別の人間がいるのかと思って、彼はバツと声のする方に振り向いた。するとそこにいたのは、フランと全く同じ容姿をした人間が立っていた。

「ふむ。なかなかいい攻撃じゃったが、やはり我には届かんの」

前後にいるのは、どちらもフランだった。

比翼の魔術師。七賢人^{セブンセイジ}であつても、七大魔術師の本質を全て知っているわけではない。その中でも比翼の魔術師はかなりの謎に包まれている。

七大魔術師としては最も長く活動が続けているが、その本質を知る人間は殆どいない。否、殆ど会ったことがないと形容すべきだろう。

なぜ彼女の名前が比翼の魔術師なのか。それはフランという人間が二人存在しているからだった。

「フラン。あなた、私を出すのならもうちょっと前から相談してくれない？」

「そうは言っても、ララン。お主はいつも表に出るのは嫌がるじゃろ」

「まあね。今回はどうしてもって言うから出てきたけど、この雑魚なに？」

ゼクスを挟むようにして二人は会話を続ける。まるでそこに彼が存在していないかのように。

「私の攻撃が、効かない……だと？」

「この雑魚、殺すの？」

「うむ。致し方ないことじゃ」

二人は前後で挟む混むような形で魔術を発動した。

《第一質料プリママテリア＝エンコーディング＝物資コードマテリアル》

《物資コード＝ディコーディングマテリアル》

《物質コード＝プロセシング＝分裂マテリアル＝ディバイド》

《エンボディメント＝現象フェノメノン》

「マテリアルディバイド
質料分裂」

ゼクスは魔術の発動の兆候を感じ取った瞬間に防御障壁を展開。自分の攻撃が通用しないからと言って、まだ決して負けたわけではない。まずは相手の攻撃を見て、反撃を窺うべきだと思っていたが……彼の体は既に縦に綺麗に裂かれてしまっていた。

「な……これほど……と……は……」

最期の言葉を残してゼクスは絶命。

すると周囲に展開された領域も綺麗に晴れてて無くなる。それと

同時に、リーゼはもう一人の彼女に挨拶をするのだった。

「ラランさん。お久しぶりです」

「ああ。リーゼじゃない。元気してた？」

「はい」

「そう。それは良かったわ。あなたも力を使ったみたいね」

「はい。といつても相手は取るに足らない実力でしたが」

「ふふ。流石はリーゼね」

フランの本質は分裂。彼女は幼少期に気がついたのだ。自分の中に、もう一人の自分が存在していることに。そして成長するにつれて、魔術の本質が分裂にあることに気がついた。容姿は魔術の影響でほぼ変化せず、彼女の中にはラランというもう一人の人格が宿るようになった。

互いに本質は同じだが、性格はまるで逆。またラランが表に出ることは殆どない。彼女を知る者はそれこそ、リーゼなどの親しい人間に限られてくる。

「ふう。終わったようじゃの」

「私を呼ぶなんて、よっぽどの相手と思ったけど……こいつ、魔術を使ってなかったわね。前からあなたが研究していたやつ？」

「そうじゃな。ただこれはまだ前座じゃろう。相手の真の目的は別にあると我は思っており」

「それは？」

ラランがそう尋ねるが、フランは首を横に振る。

「核心には届いておらん。しかし、これで極東戦役が無事に終わるとは毛頭思えないの」

「　　レイという少年。彼が特異点になるのではないだろうか」

リーゼのその言葉に対して、フランは腕組みをしながら難しい顔で答える。

「……リディアの弟子、か。あの二人が中心になっているのは間違いないじゃろうな。さて、とりあえずは我たちのやることは終わった。帰るかの」

「もう戻ってもいい？」

「いいぞ、ララン」

「はい」

そうしてフランの元にラランが戻ると、その場にはフランとリーゼだけが残された。

一見すれば戦いは王国側が優勢であり、七賢人^{セブンセイジ}を三人も屠った七大魔術師の方が圧倒的に見えるだろう。

だが戦況はさらに思わぬ方向へと進むことになるのだった。

第309話 比翼連理（後書き）

この度は、読者の皆様に大切なお知らせがあります（今回は特に重要な内容なので、最後までお付き合いいただければ幸いです）

正直なお話をする……氷剣の魔術師が世界を統べるですが、2巻の売り上げと1巻の動き方（もう一度売れるかどうか）次第では今後も書籍版を出していくのは難しい……というのが現状です。

そうなると、おそらくこのWeb版も続けていくことが難しくなっています。だからこそ、いつもお読みいただいている皆様に特にご協力していただきたいと思っています。

Web版を既読の方も楽しめるように2巻も仕上げておりますので（新規エピソード盛り沢山です！）、是非書籍版第2巻をお手にとっていただければ幸いです。2巻の発売日は11月2日（月）になっております（既に都内などは書店に並んでいるようです）。

特に発売して1、2週間が特に重要でして……早めにお手にとっていただけると非常に嬉しいです。

またこれを機会に1巻がまだの方は、1巻も是非手に取っていただければと思います！（実際、1巻の伸びも続刊にはかなり重要になります……こちらもよろしく願います！）

1巻も既読の方が楽しめるように、大量に加筆修正（書籍版オリジ

ナルエピソード多数収録）しておりますので。

またコミックの方は11月9日（月）発売です。約一週間後に発売になりますので、コミックもよろしく願います！

最後になりますが、本作を長く続けるためにも皆様一人一人のご協力が、誇張抜きで本当にとっても大きな力になります。

この作品をここまで書くことができたのは、読者の皆様の力があつたからこそです。是非、今後とも一緒に本作をさらに育てていくことが出来れば、これ以上嬉しいことはありません。

長々となりましたが……それでは何卒、原作小説第2巻をよろしく願います。1巻がまだの方は、是非1巻2巻ともによろしく願います！（このページ下部の書影からご予約のページに進むことができます）

第310話 極限の領域

深夜。

夜の帳が下り、森の中は完全なる静寂に包み込まれていた。猛禽類の鳴き声と、虫の鳴き声。さらには周囲にはまだ回収されていない死体もあつた。そんな不気味な森の中に二人の人間が入っていく。

一人は少年であり、もう一人は初老の男性だった。

しかし、初老とは言ってもその体躯は一般の人間のそれとは段違いである。鋭く研ぎ澄まされた雰囲気と眼光。腰に差している刀を軽く握りながら、彼は歩みを進める。

絶刀の魔術師 バルトルト「アイスラー」。

剣のために人生の全てを捧げ、その刀剣の扱いにおいてこの世界で右に出る者は存在しない。

また絶刀の魔術師という名称ではあるが、その本質は圧倒的なまでの剣戟である。バルトルトは柔軟な思考の持ち主であり、自分が強くなるためならばどんなことでも実行していきたく。現代魔術に対する造詣も深く、もちろん魔術師としても優秀である。

だが、やはりその全ては己が剣を研ぎ澄ませるための手段に過ぎない。魔術師という名称は正しくなく、彼は純粋なまでの剣客である。

魔術を応用するのはあくまで身体強化の範疇のみ。その先にある秘剣の使用においては魔術を頼ることなど決してない。何十年もの修行の末にたどり着いた領域。

魔術を何も使用しない、純粋な剣技だというのに代々引き継いでいる秘剣は既に魔術の領域を超えていると言われているほどだ。

そんな彼は王国軍の依頼もあつてこの戦場にやってきたのだが、一番の理由としては強い相手を求めている……それが彼の動機だった。

「……どうやら、俺の相手は絶刀か。しかし全盛期はとうに過ぎている爺さんかよ。興が削がれるぜ」

暗闇の中から出てくるのは、真っ赤な髪を刈り込んでいる男性だった。年齢は二十代くらいに見え全体的にかなり厚みのある体である。それこそ、いくら鍛錬を続けているとはいえ初老のバルトルトとは比較にならないほどの体躯だ。

どれほど強くても年齢に逆らうことはできない。

それは全人類において共通するある種の宿命である。

「ルーカス。下がっておれ」

「はい。師匠」

静かな声でバルトルトはルーカスにそう告げた。彼もまた師匠で

あるバルトルトのことは理解しており、そのまま後ろへと下がっていく。

「は、子連れかよ。全く俺の相手はハズレときた。なあ、爺さん。せいぜい楽しませてくれよ?」

-
-
-
-
-
-

セブンセージ
七賢人の一人であるドライは横柄な口調でバルトルトに語りかけるが、既にその声は彼には届いていない。極限まで集中力を高めているのか、彼の視界にはドライの姿しか映っていない。

不必要な情報は完全に削ぎ落とされているようだった。

「爺さん。俺は、たとえ誰であつても容赦することはねえ」

■
 ■
 ■
 ■
 ■
 ■
 L

「は。だんまりかよ。じゃあ、大人しく死ねやああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
あッ！！」

溢れ出る暗黒の粒子。それが一気に収束していくと、バルトルトは炎の海によって囲まれてしまう。徐々に温度も上がってきているのか、地面がドロドロと溶け出して融解するほどにまで高まっている。

そんな中、バルトルトは目を瞑りじっと刀を握っている。

着ている服は焼け爛れ、皮膚が完全に見えてしまっている。おそらく一分もしない内に骨ごと焼き尽くされてしまうのは自明だろう。そんな様子をドライは口元を歪めながら不適に嗤わらっていた。

今までの戦場で数多くの人間を焼き殺してきた。そんな彼に今更慈悲の心など存在しない。今日も今日とて、いつものように敵を殺す。

そう思っていたのだが、次の瞬間。

ドライは信じられないものを目にするのだった。

「第一秘剣、瞬雷^{しゅんらい}」

抜刀。

それは居合い抜きの一撃だった。真横に抜いたことで生まれたその斬撃は炎の海を貫通し、そのままドライの上半身と下半身を分けるようにして切断した。

「あ……は？　おい……これは、どうなってや……が……る？」

ドライは何が起きたのか分からないまま、血溜まりの中へと沈んでいく。それと同時に炎の海も掻き消えるようして、この場から消失していった。

バルトルトは刀を納刀すると、丁寧に一礼をした。

その所作は一挙手一投足が滑らかであり、彼の研鑽の歴史が窺えるようだった。

「師匠。お見事でした」

「うむ。相手もなかなかの手練れではあったが、油断は禁物。ルーカス。それは心しておけ」

「はい。もちろんです」

そうして二人は森から去っていくのだった。

「……四人死んだ」

セブンセイジ 帝国の地下空間。そのある一室でアインスはワインを傾けながら、七賢人の一人であるフンフの声を聞いた。

「フンフ。それはどちらの話だ？」

尋ねる。既にアインスは分かっていることではあるが、敢えてフンフに尋ねてみることにした。

セブンセイジ 「七賢人の四人。ツヴァイ、ドライ、フィア、ゼクス」

「なるほど。まあ……元々あの四人は残っている七大魔術師には届かないと思っていた。予想の範疇だろう」

そう。

アインスはフンフ以外のセブンセイジ七賢人に対して決して本音で語り合ったことなど一度もなかった。彼にとって同じ仲間ですらただの駒に過ぎない。自分が思い描くシナリオにおいて、いつかどこかで死ぬのは確定事項だった。

彼は自分たちならば、特別な存在である七賢人^{セブンセイジ}は決して七大魔術師などに劣る存在ではないと言いつけていた。その裏で、アインスは決して七大魔術師のことを過小評価していなかった。

厳密に言えば、現代魔術のことを彼は正當に評価していたのだ。

たとえ^{アカシックマテリア}第一質料^{プリママテリア}を使用できるとしても、それは絶対のものではない。第一質料とコード理論を駆使した現代魔術よりも、完全に優れているなどアインスは考えていないのだから。

「……アインス。次はどうするの？」

「戦況はかなり大詰めだ。あの四人がいなくなったことで、王国軍はかなり優勢になる。しかしこれは勝敗などはどうでもいい戦争だ。必要なのは数多くの血と私たちと、彼という存在。だがあの女が目障りだな」

「……リディア「エインズワース」？」

「そうだ。何の突然変異か知らないが、彼女の存在はこの盤面においてもう必要はない。いや、現在はこちらが四人殺され、あと一人の魂が欲しいところだった……使うか」

「……リディア「エインズワース」を最後の駒にするの？」

「ああ。当初の計画とは異なるが、それがいいだろう」

「……分かった」

コクリと頷くフンフ。まだ幼い少年であり、一見すれば何も理解できるような年齢ではない。その外見とは裏腹に、彼は全てを理解している。これからの戦況において自分がどのように振る舞うべきなのか……ということ。

「フンフ。やってくれるか？」

「……もちろん。僕は刺し違えてでも、あの女を殺すよ」

「ふふ。それは助かる。大丈夫だ。お前の魂はしっかりとこちらで回収する予定だ」

「……うん」

不適に微笑む。

ワイングラスをゆっくりと傾けると、中の液体を喉へと流し込んでいく。アルコール特有の感覚が体を抜けていく。いつてもどれだけ摂取してもアインスが酔うことなど決してないのだが。

ここまで長いようで短い道だったと、アインスは考える。この戦場を生み出し、仲間を騙し、全てを計画通りに進めてきた。どれだけの血が戦場で流れようとも、彼によってそれは手段の一つに過ぎない。

人の尊厳など踏みにじるのが当然と考えているため、その心が痛むことなど決してない。全ては真理世界^{アーカーシャ}に到達するための軌跡ではないのだから。

そして彼は、独り言のようにどこか遠くを見ながら話し始める。

「ああ……レイ。もう少しだ。もう少しで、君に会うことができる」

極東戦役はついに大詰めを迎えるのであった。

第310話 極限の領域（後書き）

改めて、氷剣の魔術師が世界を統べる第二巻が発売中です！ 既にお伝えしましたが、続刊するためだけでなくこのWeb版を続けていくためにも、是非読者の皆さま一人一人にご協力いただければ幸いです。

既読の方でも楽しめるように仕上げておりますので、何卒書籍版二巻をよろしく願います！

まだ購入していない方は、一巻と二巻ともによろしく願います！

第311話 最後の戦いへ

俺は走り続けていた。

たった一人で戦場の中をひたすらに走り続けていた。一体どれほどの時間が経過したのだろうか。一体どれほどの数の人間を殺したのだろうか。この手は完全に血に塗れている。

それでも、止まることなどできはしない。

俺たちが止めることができるのはこの戦争が終わった時だけ。今まで散っていった仲間のためにも俺は進み続けるしかなかった。

あれからさらに、数多くの仲間の死を経験した。昨日まで仲良く話していた人間が隣で無残にも死んでいく光景など当たり前のような戦場。その度に心の奥底で何かが擦り切れていくような感覚があった。

でも、それに対して向き合うことなどない。それはおそらく、無意識の防衛本能だったのだろう。仲間の死に、敵の死に向き合ってしまうえば自分が壊れてしまう事は当然だったから。

そうして俺は今日もいつものように戦場で大量の返り血を浴びて、基地へと戻っていくのだった。

あと少しで極東戦役は終了するという。それは七大魔術師の介入によって、敵の主力を倒すことができたからだという。しかし、今

更そんな事はどうでもよかった。ただただ早く、この地獄が終わればいいと　そう願った。

「レイちゃん！　お帰りなさい！　今日は大丈夫だった？」

「ああ、キャロル。俺は大丈夫だよ」

敵の血に塗れているというのに、キャロルはこうして基地に戻ってくるというも抱きしめてくる。それが心から心配してのものだと分かっている俺は、拒否はしないが心に響いてくるものなどありはしなかった。

ただいつもと同じ事だと、そう思っていた。

「レイちゃん……その。本当に辛かったら、いつでも私を頼ってくれていいからね？」

「ああ。そうする。じゃあ、シャワーで流してくる」

「……うん」

ギュツと胸の前で両手を握り締めているキャロルに対して、俺はそんな言葉しかかけることができなかった。他人の心を押し量ることなど、今の俺にはできなかった。

いつものように作業とも呼べる戦闘をこなし、寝て、起きて、殺しに向かう。それだけが今の人生における全てだった。

そして一人でシャワーを浴びていると、少女の声が聞こえてきた。それは現実存在している少女ではなく、幻聴の類だ。いつからこの声が聞こえてきたのかわからない。だが、ここ最近は特に酷い。

「レイ。もうすぐよ」
「……」

この声に対して返答をした事はない。たかが幻聴に向かい合う必要など、ありはしないから。でもこれは本当に幻聴なのか？ そう思う時がある。やけに現実味があつて、生々しい肉声。

「もうすぐ出会うことになるわ。覚悟しておいて」

「……」

「あなたならきっと、辿り着けるわ。きっと」

「……」

「バイバイ。レイ」

スーッと声が遠のいていく。

俺はこの声がただの幻聴だとは思えなかったが、それと同時に全てのことに對して向き合うことを放棄していた。

今はただ、戦うだけでいい。

それだけが俺の成すべきことだ。

「……ハワード。俺は」

ボソリと呟くその名前。

戦場で心を殺して戦っていても、どうしても思い出してしまう彼との記憶。完全に断ち切ることなど、出来はしなかった。それでも戦い続ける自分の心が完全に壊れてしまうまで、俺は自分が異常な状態になっていることに全く気が付かなかった。

「……」

深夜。

俺は一人で外に出てきていた。先ほど作戦会議室において次の作戦が下された。おそらくは最後の戦いになるだろうと。王国軍が一斉に仕掛け、相手が降伏するしかない状況を作り上げる。すでに勝利までは目前。だが、そこに喜びなどない。安堵感もない。

無機質なまでに、凍てつくように俺の感情は揺れることはない。

「……星が」

今日は快晴だった。夜の空には雲一つなく、そこには煌く星々が輝いていた。そんな綺麗な星空を見つめつつ、ふと今までことを思い出してしまう。

膨大な数の死を経験し、それでも前に進んできた。けれど、この先に待っているのは何なのか。今の俺には全く予想もつかなかった。

「レイ。どうした、こんなところで」

「……師匠」

そう。やってきたのは師匠だった。

長い金色の髪を靡かせながら、彼女は俺の方へと歩みを進めてくる。師匠とこうして二人きりになるのは何だか久しぶりだった。

「レイ。ついに最後の戦いだ」
「はい」

英雄、リディア・エインズワース。

師匠はこの極東戦役での活躍により、少佐へと昇進。そして周りからは英雄と称えられていた。百戦錬磨の魔術師であり、彼女が出陣する戦場で敗北などありはしない。

王国軍の士気が高く維持されているのは、師匠のおかげだろう。

皆が思っている。この戦場は英雄である師匠さえいれば勝つことができる。その希望に思いを馳せて、仲間たちは戦っている。

「ついに終わろうとしているな」
「そうですね。やっと……終わるのかもしれませんが」

会話という会話にもなっていない。ただ俺たちは、静かにその場に立ち尽くしていた。

「身長。伸びたな」
「そうですね？」
「ああ。もう少しで私を追い抜きそうだ」
「……確かに、もう同じくらいになりましたね。昔は見上げていることが普通だったのに」

身長は師匠と同じくらいまで伸び始めていた。魔術適性が高い人間は、早熟な傾向にある。そのため俺はこの戦争の中で肉体的になり成長していた。それこそ、もう師匠を見上げる必要がないくらいに。

改めて師匠の顔をじつと見つめる。とても美しいと思うが、そこにはやはり哀愁が漂っていた。師匠は俺以上に、戦場で戦っている敵を屠っている数も、おそらくは一番だろう。

そんな師匠はいつもと同じように、俺に話しかけてくれる。

いつもと同じように……と思うが、師匠は本当に何も思っていないのだろうか。傷付いてはいないのだろうか。そんなことを考えるが、きつと無意味なのだろう。彼女が俺に対して弱みを見せることなど、絶対にありはしないのだから。

俺はこの時、思っていた。

師匠は俺なんかが思うよりもずっと強くて、この戦争において英雄として輝き続けるのだと。

だが、彼女も同じ人間だということに俺は後に知ることになる。

「レイ。この戦いが終わったら、どうする？」

「どうする……ですか？」

「ああ、そうだ。美味しいものでも食いにいくか？」

「……師匠はいつも食べ過ぎるので、程々にしてください。それに、大佐にも怒られますよ」

「アビーはうるさいからなあ……ま、どうにかなるだろ。ははは！」

笑う。

師匠は快活な笑顔を浮かべているので、俺も少しだけ笑みを浮かべる。こんな日々がずっと続けばいい。そう願っているけれど、俺

たちは明日からも戦場に赴かなければならない。

「レイ」

「何でしょうか？」

「キャロルが心配している。戦いが終わったら、デートにでも行ってやれ」

「しかし……」

「お前が今、余裕がないのは分かっている。でもこの戦争が終われば、それもどうにかなる。いやこれ以上は詮ないことだな。すまない」

「……」

顔を背けて空を見上げる。

師匠の横顔を見つめていると、微かに涙が流れてような……そんな気がしたがすぐに俺に背を向けると、師匠は基地へと戻っていつてしまう。

「レイ。お前も早く戻れよ」

「……分かりました」

師匠が去って行く背中を俺はじつと見つめ続けていた。

互いに心などとうに壊れている。だからこそ、俺は師匠にもっとかけるべき声があったのではないか。もっと会話をするべきではないのか。

そんな後悔に苛まれる未来など、今の俺は予想していなかった。

こうして極東戦役はついに最終戦へと突入するのだった。

第311話 最後の戦いへ（後書き）

度々の宣伝、失礼します。

氷剣の魔術師が世界を統べる第二巻が発売中です！ 既にお伝えしましたが、続刊するためだけでなくこのWeb版を続けていくためにも、是非読者の皆さま一人一人にご協力いただければ幸いです。

既読の方でも楽しめるように仕上げておりますので、何卒書籍版二巻をよろしく願います！

まだ購入していない方は、一巻と二巻ともによろしく願います！

またすでにお買い上げくださった方、感想をツイッターなどで書いてくれた方など本当にありがとうございます。全て目を通させていたいております。このWeb版の方にも購入報告などを書いてくださり、本当に感謝しかありません。それでは今後とも、本作を楽しんでいただければ幸いです！

第312話 英雄のなりそこない

レイと会話をしていると、涙腺が緩んでしまったので私は踵を返して去っていく。この涙を決してレイに見せることなどできない。

私はこの極東戦役で英雄と呼ばれていた。

英雄になりたかったわけではない。私は誰かに認められたいから、褒められたいから戦っているわけではない。承認欲求などは二の次で、全ては王国民のために戦っている。

才能には責任が伴う。

それは自分自身に対する戒めでもあった。そう考えることで私は、自分自身を縛り続けて前を向くことができたから。

自分はずっと強い人間だと思っていた。

周りからの評価は傍若無人の天才と言ったところだろうか。でもそれは、虚像でしかない。いやきつと……本当の自分や嘘の自分などはないのかもしれない。

人間はただ、その時に応じて自分の顔を使い分けているに過ぎない。他人にとってはよく見えている顔だが、他人に見せることのない顔だって決して偽物ではないだろう。

その顔を全て含めて、私を構成しているのだから。

「ふう……」

息を漏らして、ベッド倒れ込むようにして休みをとる。

先ほどはちょうど気分転換をしたいということで、外に出ていた。ここ最近をよくそうしている。

眠ろうとしてるとどうしても思い出してしまうからだ。

仲間の悲鳴、怒号。それに飛び散る四肢に溢れ出る血液。最前線はまさに地獄と形容していいだろう。だが、その中を誰かが進んでいかなければならない。

いわゆる、人柱と形容してもいいのかもしれない。

私の才能は人柱になるには十分すぎるほどの才能だ。敵との戦闘で負ける気など全くしない。戦えば戦うほど、自分の感覚が研ぎ澄まされていく。己の心を削り、魂を削り、それに比例してさらに強くなっていく。

それが英雄、リディア「エインズワース」だった。

そう。私はそれでいい。

全ての慟哭はこの私が引き受けよう。それがきつと、私が戦っている意味なのだから。仲間の死には慣れてしまった。人間という生き物は適応してしまう。それがたとえ、大切な人たちが翌日に隣で無残にも死んでしまおうとしても。

そんな自分のことを薄情だと思った時もあった。けれど、そうしないと自分を保てる気などしなかった。

ずっと暗闇の中を進んでいるみたいだった。

ただひたすら光のない空間を走り続ける。

その隣にはレイがいた。レイはずっと私の側にいてくれた。正直なところ、最前線はレイと私がいなければとくに崩壊しているだろう。私一人でも、レイ一人でもダメだった。二人がいるからこそ、ここまで戦うことができた。

「……」

手をスツと頭上にかざす。

考えるのはレイの未来のことだ。

結果的にレイを軍事的に利用してしまっている罪悪感が拭えなかった。もし、私と出会うことなく普通の家庭で育っていればもっと幸せになることができたんじゃないか？

こんな英雄のなりそこないの私ではなく、しっかりとした人間の元に預けるべきだったのではないか？

レイに対して何か魔術的に惹かれるものはあった。心の中ではあの能力を制御するために、私の教えは正しかった……と思っていた自分もいる。それこそ、自分の才能に飲み込まれて死んでしまう魔術師もいるから。

それと同時に別の可能性も考えてしまう。

普通の家庭で、普通に育って、普通のありふれた幸せを享受する。

レイにはそんな未来だってありえたはずだ。

レイが決定的に変わってしまったのは、ハワードの死を経験してからだ。

ハワードは……特殊選抜部隊のムードメーカーだった。いつも隊のみんなを気にかけてくれて、私だって幾度となく世話になった。ハワードが死んだ時は、レイにきつい言葉を浴びせた。そうしなければ、もうレイが立つことはできないと思ったからだ。

だが、私だって目の前でハワードが死んで何も思わないわけではない。その日の夜は、涙が枯れるまでずっと泣いていた。決して誰にも見られることのないように、声を押し殺して彼の死を嘆いた。

それに、ハワードだけじゃない。この戦場で仲良くなった戦友が死ぬたびに、私は涙を一人で隠しながら流していた。この涙が枯れることはきつと、永遠にないのだろう。そんなことを思いながら、私は次の日には新しい戦場に赴いていた。

悲しくも戦場で戦っている時は、余計なことを考えないで済むから。

「なあ……私は、本当に正しいのか？ この道は正しいのか？ 私は……私は……」

ボソリと呟くが、それ対して誰も返答はない。

分
か
っ
て
い
る。

正しさを決めるのは過程ではない。全ては結果だ。結果が逆説的に、その過程を決めるのだ。一見すれば私は大量殺戮者だ。平時にそれをしていれば、ただの畜生に過ぎない。

しかし、戦争という大義名分があれば敵を殺した数だけ英雄になれる。

でも英雄とはこんなものなんか？

こんな私が英雄だと？

「は……ハハハハハ！ アハハハハハハハハ！！！！！」

壊れてしまったかのように笑う。

ああ……おかしい。何でかって？

私が英雄になれるなんて、ありえないからだ。いうならば英雄のなりそこない。人を殺すことを戦争という大義名分で割り切ることのできない、ただの愚かな女。それが私だ。

感情に流されてはいけない。理性的に動き、論理的に考え、全てを理性で制御する。それが英雄に課された条件だ。英雄に感情はいらない。必要なのは実績だけだ。

なあ……私よ。

私は、この戦争が終わった時どんな顔をしているんだ？

どんな顔で毎日を送ればいい？

戦いのない日常など、すでに私の日常ではない。この異常な環境に染まり切った私はどこに向かうんだ？

なあ……教えてくれ。レイ。

レイ……私はもう、何もわからないよ。

「……休もう。明日の戦いだ……」

そうして明日の最終決戦に向けて、睡眠を取ることにした。

こんな自分がどこに辿り着くのか、それはきっとこの戦争が終われば分かるのかもしれない。

才能には責任が伴う。

なあ、私は一体どんな責任を伴っているんだ？

第312話 英雄のなりそこない（後書き）

明後日の11月9日（月）は、コミカライズ第1巻の発売日になります！ 現在は原作小説は第1巻と第2巻が発売中なので、是非ともそちらもよろしく願いますー！

この にある原作小説とコミックスの書影から購入（予約）ができますので、何卒よろしく願いますー！ 今後ともこのWebを含めて作品を継続していくためにも、皆様にご協力していただければ幸いです。

第313話 最終戦

ついに作戦開始の早朝となった。

今日でやっと俺たちの戦いが終わると思うと、全ての苦勞が報われるような気がする。しかし油断してはならない。あくまで最終戦というのは、王国軍側が予想している話であり、最後の戦いにならない可能性もある。

そして、俺は一人で外に涼みに来ていた。

今はどうしても基地にいる気にはなれなかった。そこではどうしても考えてしまうからだ。隣に座っている人が、視界に入る人がこの後すぐに死んでしまうかもしれないから。

居場所はずっと、特殊選抜部隊アストラルの中にあると思っていた。いやそれは間違いないというのに、今は自分の居場所などどこにもないように思ってしまう。

決してそれは今の自分のことを不幸だとか、もう嫌だとか思っているわけではない。ただ純粹に分からないのだ。

自分がどうしていいのか。

どうして俺は戦っている？ どうして俺は生きている？

そんなことをどうしても問いかけてしまうのだ。

「レイ。もうすぐね」

「……」

「もうすぐあなたに会うことができるわ」

「……」

その問いかけに応えることはない。最近ずっと語りかけてくる謎の少女。これは幻聴だ。幻聴に違いない。そう自分に言い聞かせても本能ではそれは違う、と否定してくる。

本能と理性の乖離。

この極東戦役によって俺は完全に迷ってしまっていた。

けれどやるべきことは明確だ。俺の感情など、どうでもいい。やるべきことはできるだけ多くの敵を屠るだけ。それだけが続けていれば、いつかこの戦争は終わる。そして俺は自分の居場所へと戻ることができる。

自分の居場所……？

居場所。そうだ。

俺の居場所は特殊選抜部隊アストラルしかない。でももう……ハワードはいない。本当に彼のいない場所が、俺の居場所と言ってもいいのか？

なあハワード。

お前のいない世界で俺はどうやって生きればいいんだ？

あの時みたいに、笑って過ごせる時が来るのか？

と、そう考えていると後ろから足音が二つ聞こえてきた。

「レイちゃん……」

「レイ。ついに今日で最後だな」

やってきたのはキャロルと大佐だった。

二人とも戦闘に参加することはないが、作戦司令部から適宜指示を伝えてくれる。俺からしてみれば、作戦司令部の人間の方が辛い思いをしている気がする。戦場では戦うだけでいい。余計なことなど、考える必要はない。

けれど、作戦を指示して戦況を常に考え続ける側の人間にできることは、安全地帯から指示することだけ。

仲間が死ぬたびにアナウンスをし、そして目紛しい状況に適応できるように考える必要がある。

目の前にいる二人は俺よりもずっとやつれているように見えたが、この時の俺はそんな二人を思いやるほどの余裕などありはしなかった。

「……レイちゃん。今回の作戦の立案は私がしたけど、無理なら言っ
てね。ちゃんと比較的安全なところでも戦えるように手配もできるから」

「キャロル。俺は大丈夫だ。最前線で最後まで戦う」

「……うん。気をつけてね」

キャロルは多くは語らなかった。

目の下には化粧で隠してるようだが、物凄い隈くまが残っていた。それはいつもお得意の化粧では隠し切れないほどに。それにニコリと微笑みかけているが、心から笑っているわけではない。無理をして俺に笑いかけている、そんな印象だった。

「レイ」

次に声をかけてくるのはガーネット大佐だった。

アビー「ガーネット大佐。

おそらくこの極東戦役で一番昇進したのは彼女だろう。大佐はハワードの死を経験して大きく変わった。後で聞いた話なのだが、大佐はハワードのことを愛していたらしい。

愛していた人が死んだ戦場で戦う気持ちとは、どのようなものなのだろうか？

普通は心が折れてしまってもおかしくはないというのに、彼女はこうして毅然と振る舞っている。そんな大佐の強さにはただただ尊敬の念を覚えるばかりだ。

「……大きくなったな」

「そうですね。昨日の夜、師匠にも同じことを言われましたよ」

「……そうか。レイ、改めて覚悟は変わらないんだな？」

「はい。自分は最後まで戦います」

「分かった。これ以上は無粋だろう。頼んだぞ」

「は。了解いたしました」

肩を優しくポンと叩かれるので、敬礼をしてそれに応える。そうして二人の横を通り過ぎて、俺は去って行く。

この後、どんな戦いが待っているかも知らずに俺は進んでいくのだった。

戦況は大きく変化していた。それも、王国軍がかなり優勢である。師匠が最前線を切り開き、他の兵士たちがそれに続いて流れ込んでいく。最後の戦いは丘での戦いだった。下には平地が広がっており、敵はちょうど丘の上を陣取っている。地形的には相手の方が有利ではあるが、そこは師匠によって切り開かれて行く。

仲間の士気も確実に上がって行く。

このままだと勝てる。

そんな意識が全員の中に芽生えはじめた頃だろうか。この戦場が更なる地獄へと変貌していったのは。

「これは……」

「師匠……これは、なんなのですか？」

俺と師匠は最前線を走っていた。他の仲間のためにも、全てを切り開くために猛然と戦っていた。しかし、真後ろで真っ白な光が上

がったかと思うと……後ろにいた仲間たちは全てが死体に成り下がってしまった。

呆然として後ろを見つめる。

また、巨大な光の柱に吞まれていったのは仲間だけではない。敵の兵士もまた同じ光に包めれると地面にひれ伏していた。体は完全に焼け焦げており、苦しんでいる声が聞こえてくる。

それと同時に前方から一人の男と、幼い少年がやってきていた。

雰囲気だけで分かる。この二人は……只者ではないと。

「ああ……レイ。やっとだ。やっと会うことができた」

髪は長く、顔の造形は限りなく中性的。この戦場の中だというのは微笑みを浮かべ、スーツを着ている姿もどこか異質だ。そんな彼は俺のことを注視している。師匠のことなど、眼中にないようだった。

「レイ。下がれ」

「……師匠。しかし」

師匠が前に出てくる。俺の姿を隠すようにして、相手のことを睨み付けているようだった。

「リディア＝エインズワースか。あなたはこの場所に必要ない。しかし、レイをここまで連れてきてくれたことに対しては、感謝して

いますよ？」

「……お前がやったのか？」

「ん？ ああ。先程の魔法でしたら、私ですよ。といっても非常に簡単なものですけどね」

「……お前の仲間たちも死んでいる。無差別攻撃のつもりか？」

「はあ……分かっていない。本当に、本質を理解していない」

やれやれと言わんばかりに首を横にふる。

こんな会話をしている場合ではない。すぐにでも戦うべきだということとは分かっている。しかし、相手の言葉を聞くたびに体が震えているのが分かる。本能的に敵を恐怖しているとでもいうのだろうか？

「といっても、ただの人間でその領域にたどり着いたのはある種の究極。リディア＝エインズワース。あなたの魂も連れていって差し上げましょう」

「……ほう。一体私をどこに連れていってくれるのかな？」

「アーカーシヤ 真理世界ですよ」

俺は完全に気が付いていなかった。

真後ろから先程いた少年が俺に近づいてきていることに。体には漆黒の第一質料を身に纏って突撃してきている。これは……知っている。この戦場で幾度となく見てきた。

この攻撃は自爆だ。

自分の第一質料を^{プリママテリア}最大限に出力させて、相手もろとも跡形も残らないほどに爆発するという極悪な魔術だ。

俺は自分の失態に今更気が付いてしまったが、もう……遅かった。

これは死だ。今まで何度も感じてきた、死の感覚を感じる。

だが……その覚悟していた死はいつまで経ってもやってこなかった。

「……レイ。大丈夫か？」

「師匠……！？ どうして……！？ どうしてですか……？」

「ごほっ……ああ……どうしてだろうな。勝手に体が動いていたんだ」

俺を抱きかかえるような形で師匠は蹲っていた。咄嗟に俺を庇うと全身をありつたけの第一質料プリママテリアで覆ったのだらう。即死することは互いになかった。

けれど……。

「でも……師匠の腕と足が……っ！！」

「……はは。こんなものはどうともでも……なる……さ……」

倒れ込む。

いくら師匠であつたとしても、先程の自爆を完全に防ぐことはできなかった。それは俺を守るために十分な準備ができなかったからだ。俺は惚けるしかできなかった。その一方で師匠は俺を守る為に、動いてくれた。

左腕は肘から先が弾け飛び、右脚は太腿の根元から完全にちぎれ

ていた。下半身は焼け焦げ、血が止まることはない。ドクドクと溢れ出る血液は師匠の死が迫っていることを如実に物語っている。

「ふふ。ふははは！ ああ……分かつているとも。この攻撃をこのタイミングで仕掛ければ、必ずリディア「エインズワースは庇うとな。レイ。とても美しい師弟愛じゃないか？」

「ああ……あ……っ……ああ……ッ！！！」

こんなところで俺は師匠を失うのか？

戦場とは無慈悲だと分かっているつもりだった。

人が死ぬときは、何も劇的なことなどありはしない。

無慈悲に冷酷に、まるで一つの作業のように人の死というものに直面してきた。

でも……俺のせいで……俺のせいで師匠が死ぬのか？

治療しているが間に合うことはないのは分かっている。分かっているとこのに、俺はこの手を止めることはできない。ハワードの時の記憶が否応なく呼び起こされる。

それと同時に、少女の声が聞こえてくる。それはもう幻聴の類などではなかった。目の間に本当に少女がいたのだ。

真っ白な髪を靡かせながら、彼女は俺に問いかけてくる。

「レイ……助きたい？」

「なんでもするッ！！ 師匠が助かるのなら、俺はなんだって犠牲

「にできる！」

「そう……いいわ。レイ、一緒に行きましょう?」

瞬間。

心の中にある小さな器が弾け飛ぶような感覚を覚えた。

「あ…… ああ…… うわああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああアアアアアアッ！！！」
「ははは！ レイ、流石だ！ お前ならきつとたどり着くことがで
きると思っていた。 ああ…… 愛しい私の弟よ。 この世界の全てを零
に返してくれッ！！！」

第313話 最終戦（後書き）

ついに本日、氷剣の魔術師が世界を統べるのコミックス第一巻が発売となりました！ 皆様是非とも、コミックスの方もよろしく願いますー！

第314話 愛おしい弟子

私はレイの師匠として相応しかったのか？

そんなことをどうしても考えてしまう。レイとの出会いは今でも覚えている。数多くの人間が死んでいる中で、レイの気配を感じ取ったのはきつと運命だったのだらう。

その瞬間から私は無意識の内に理解していたのかもしれない。この子どもは私と同じであると。

才能があるのはひと目見て分かった。アストラル特殊選抜部隊の他のメンバーは気が付かなかったようだが、私はレイに自分に近いものを感じ取っていた。

全く同質の第一質料プリママテリアとまでは言わないが、限りなく私たちは似ていた。

だから私はレイを引き取った。

その才能に吞まれないように、そして心を閉ざした少年に何かしてあげたいと願って。

初めは全く話してくれなかった。話しかけても一言二言で会話は終わる。それでも、一生懸命何かを伝えようとしていることだけはよく分かった。

私はレイに色々なことを教えた。スポーツだってそうだし、勉強だって教えた。レイはまるでスポンジのように、あらゆることを吸収していった。

そのことが堪らなく嬉しかった。

きっと、自分の子どもの成長を喜ぶ親の気持ちというのはこんなものなのだろう。

レイとの出会いをきっかけにして私は大きく変わることになった。今まではただ自由奔放に生きてきた。学生時代はそれはもう、暴れたものだった。

けれどレイの師匠になったことで、もっと模範的な人間になる必要があると自覚するようになった。それは意識しての行動ではなく、おそらくレイに格好つけたいという些細な理由から始まったものだった。

でもその小さな動機が私を変えてくれた。

それからレイは成長して、素晴らしい人間に育っていった。ぐーたらな私と違って家事もできるし、社交性も身についた。

それは私ではなく、キャロルやアビー。それに他の特殊選抜部隊アストラルのメンバーがレイに沢山のことを教えてくれたからだ。

笑顔が溢れていた。

そんな日々がずっと続けばいいと私は願っていた。それと同時に、

レイのこれからの行先も考えるべき時になってしまった。

レイはそのままこの部隊にいと、軍人としての道を否応なく歩むことになってしまいかもしれない。

選択肢など決まっている。レイのことはずっと面倒をみたいと思っている。まあ、今となつては私の方が面倒をみてもらっているとアビーにはため息混じりに言われているのだが。

だが、このままではダメなのは分かりきっている。すでに王国軍の上層部は気がついていて。

レイのあまりにも大きな才能に。

もうすでにレイには自分の力を抑えるだけのことは教えてある。魔術に関して言えば、このまま順調にいけば私を超える魔術師になるかもしれない。

そう思うほどにはレイの才能はズバ抜けていた。

そんな時だった。

レイが正式に特殊選抜部隊アストラルに配属されることになったのは。

当時は怒り狂ったものだった。どうしてこんなに若い少年が軍人になる必要がある？

そんな人間を出さないためにも、私は自分の才能を王国民のために使っているんじゃないのか？

それに実戦を経験することだってあり得る。あの凄惨な世界にレイを連れていくことなど出来ない。

そう思っていたのに、レイはこう言うのだ。

結局人間は自分で決めたことにしか従えないと。

それは私が教えた言葉だった。そう言われてしまえば、どうすることもできない。けど、本当にそうなのか？ そう思い込むように私が導いたんじゃないのか？

自己嫌悪に陥るが、もう止まることなどできなかった。そこから先はさらにレイに魔術や様々な技能を教えていった。

レイはさらに成長していく。伸び代があるのは間違い無いが、本当にどこまでいくのだろうか。私は内心でレイのことを恐れ始めていた。

この少年は本当に人間なのか……と。

そしてついに極東戦役が開幕した。そこから先は私は英雄になるために戦場を駆け抜けていた。

後ろを振り向くことはない。

仲間の死を悼んでいる時間などありはしない。

そんな時間があるのなら、その分だけ敵を屠る必要があるからだ。

徐々に精神が磨耗していき、擦り切れるほどに戦い続けた。

これこそが私の才能の責任なのだと信じて、最前線を走り続けた。そんな中、レイは淡々とこの戦場で戦っていた。

人の死に慣れてしまったのか、レイはその表情を失っていく。私はきつと、その時にもっとレイに寄り添うべきだったと今では思う。

だが、私にはそんな余裕はなかった。今はただ目の前のことにしか集中出来なかった。

既に英雄と謳われていたが、私はただの一人の人間だ。普通の人と同じ感情を持ち、心が折れそうになることだって一度や二度ではない。

それでも私は英雄で在り続ける必要がある。弱みなど決して見せてはいけない。特にレイには、レイだけには見られるわけにはいかない。

一人で静かに涙を流し続けるのはもう嫌だった。レイと一緒にどこか静かな場所で暮らしたいと現実逃避するようにもなっていた。

それほどまでに私は追い詰められていたのだ。

「師匠」

「レイ……」

大きくなった。本当に、よくここまで成長したと喜びたいところ

だ。だというのに、今の私にかけることのできる言葉があるのか？

なあ、私は正しいのか？

そんなことを考えながら、ついに最終戦を迎えた。

戦況は明らかにこちらが有利だった。あと少しで終わる。この長い、長い戦いもついに終わりが見えて来た。敵は明らかに疲弊している。間違いない、私たちの勝利で終わるだろう……そんなことをこの時は思っていた。

しかし後ろで眩い光が現れた瞬間に、戦況は大きく変わることになった。

敵味方問わず光に吞まれた人間は全て絶命。焼け焦げたような跡だけがそこには残った。

そして、現れたのは異質な雰囲気をもった男性と少年だった。相手の話していることの全てが理解できたわけではないが、私はこいつこそがこの極東戦役を引き起こした人物だとすぐに分かった。

どうやらレイに執着しているようだが……やはり、レイは特別な存在なのか？

私が知らないような何かを、レイは持っているのか？

そう思案している時、私は背後から爆発的な第一質料を宿した少年が突撃してくるのを感じ取った。今の私であっても反応は遅れてしまい、おそらくはその少年は気配を消すことに長けているのだらう。

プリマテリア

だがそれは……自爆といって遜色のない攻撃だった。

この戦場で幾度となく見て来た光景だが、それがまさかこんな少年にすらやらせるなんて……と考えている間にも、相手は迫って来ていた。

どうやらレイを狙っているようだった。

この距離感、相手のスピードから考えて魔術で完璧に防御することはできないだろう。でもレイの命を守ることはできる。

私はとっさにレイの体を庇うと全身をありったけの第一質料で覆うが……ダメージを軽減することは少ししかできなかった。
プリママテリア

爆発した瞬間、私は自分の四肢が千切れていくのを感じていた。今となっては、感覚は残っていない。ふと、微かに残っている意識で周囲を見渡すと自分の左腕と右脚が無くなっていた。

「……レイ。大丈夫か？」

「師匠……！？ どうして……！？ どうしてですか……？」

「ごほっ……ああ……どうしてだろうな。勝手に体が動いていたんだ」

そうだ。

勝手に動いたんだ。

あの時。あの瞬間。

私は間違いなく、自分の命よりもレイの命を優先した。だってそれは当然だろう？ 私はレイの師匠なんだから。

「でも……師匠の腕と足が……っ！」

「……はは。こんなものはどうともでも……なる……さ……」

最後まで痩せ我慢をするが……ははは。どうやら、ここまでみただな。

スーッと意識が遠のいていく。

ああ。これが死というやつなのだろうか。

私は泣き喚いているレイの表情を見て、思う。

お前にそんな顔をして欲しいために、出会ったわけじゃない……と。

けどな、レイ。

私の命がこうしてお前のために役に立ったのなら、これ以上嬉しいことはないよ。

だからお前は自由に生きてくれ。私という枷から解放されて自由に進んでいって良いんだ。

意識が途切れていく刹那。

レイから溢れ出る第一質料^{プリミティブ}が私の体を包んでいった。

ああ……そうか。レイ。お前はやっぱり……そうだったのか……。

全てを悟ったと同時に、私の意識はそこで途絶えるのだった。

第314話 愛おしい弟子（後書き）

改めて、ついにコミックス第1巻が発売となりました！ 何卒、こちらの方もよろしく願いますー！

髪色は色が抜けるようにして、白髪へと変化していく。それに溢れ出る第一質料は徐々に収束していく。暴走している……と思っていたが、どうやらこの力を俺はなんとか制御できているようだ。

「……師匠」

横たわっている師匠を見つめる。

四肢が弾け飛び、溢れ出る血液が止まることはない。俺は今の自分の状態を分かっていたからこそ、彼女にずっと手をかざす。

するとまるで何事もなかったかのように、手足がもとに戻り血も止まっていく。完璧に力を使っているわけではないが、なんとか師匠は一命をとりとめる。

「う……う……」

血を吐き出す。

意識は戻っていないが、呼吸が徐々に安定してくる。

「ハハハハ！ アハハハハハハ！ やはりレイ、お前が最高傑作だ！ リディア！ エインズワースなどという紛い物ではない！ お前こそがこの世界の到達点なのだ！」

笑っている。

ああ。知っていると。

俺は彼との記憶を思い出していた。

名前はアインス。実の兄であり、幼少期は色々と教えてもらったこともあった。しかし彼は……この世界の全てを破壊しようとしている。

「兄さん……久しぶりです」

声をかける。

すると、高らかに笑いながら彼は両手を広げる。

「ああ！ 久しぶりだとも！ やっと、やっとだ！ 記憶が戻り、力が戻ったレイと出会うことをずっと求めていたんだ！！」

歡喜。

彼は歡喜に満ち溢れていた。この真つ白な世界において、存在しているのは俺たちだけ。師匠はかろうじて存在を許されており、なんとかこの世界に残ることができている。

アーカーシャ
真理世界。

ここは真理世界アーカーシャそのものではなく、その入り口にあたる場所だ。かの場所に至るには強力な魂が必要となる。すでに兄がいくつもの魂を所有しているのは、見るだけで分かった。内在しているのは一人の魂だけではないからだ。

そして、彼が最後に求めているのは俺の魂。

腑に落ちる。

納得する。
理解する。

どうしてこの極東戦役が行われることになったのか。その答えは
アーカーシャ
真理世界に辿り着くため。それこそが、兄が求める唯一のもの
だった。

兄のことはよく知っている。

俺の出身は極東の小さな村だった。そこはずっと平和であり、皆
が笑い合っている場所だった。ただし、この村の人間は……その一
族は特殊な存在でもあった。

魔法。

魔術が台頭している中で、俺たちの村の人間は魔法を使うことが
できた。コード理論を使用することなく、心的イメージをそのまま
具現化できる異能。すでに魔法は淘汰され、人々は魔術に適応した
とされたがその中で唯一魔法使いの末裔として生き残っているのが
俺たちだった。

しかし、その魔法を使って何かをしようなどということは誰も思
っていないかった。そう……兄が生まれるまでは。

兄は俺のことをずっと連れ回していた。何事にも好奇心旺盛で、
全てのことを突き詰めなければ納得がいかない。そんな性格だった。

「レイ。この世界をどう思う？」

「兄さん……？」

ふと、兄がそんなことを尋ねてきた。

幼い俺は意味が全くわからなかった。この世界の仕組みなど、当時は理解できるわけがなかったのだから。

「やつぱり、世界には根源的な場所が存在する。そこにたどり着けばきっと……世界の全てを理解できるのかもしれない……」

「……そうなんだ」

翌日。

村は火の海に飲み込まれることになった。

兄は数人の仲間を引き連れて村を火の海にし、家族ですら殺して行った。全ては神の領域に辿り着く布石に過ぎないと。俺はそんな中、両親に逃げるように促されてただ呆然と走り去るしかなかった。

焼け焦げた家に潰され父はすぐに絶命。母はなんとか生きていたが、小さな俺が家に押し潰されそんな母を助けることなど不可能だった。

「お母さん……！」

喚く。

幼いながらも異常事態は理解できていた。このままでは母が死んでしまう。だから手を差し伸べようとするが、彼女は大きな声で語りかけてくる。

「レイ！ 逃げて……！ どこか遠くに逃げるのよ……っ！」

「でも……っ！」

「このままだと、あなたも死んでしまうわ！」

分からない。分からない。分からない。

周囲には火の海になっており、悲鳴と怒号が聞こえてくる。昨日までは平和な村だったというのに、全てが地獄と化していた。

「行って！ レイ、お願いだから……！」

その瞬間。

俺と母を分断するように、家がさらに崩れていった。その時、母がどうなったのか俺は知らない。でもきつと死んでしまったのだと、思った。

「ああ……あ……うわああああああああああああああ
ああああああアアアアアアアア！」

それから先のことはよく覚えていない。

ただ夢中になって、無我夢中に走るしかなかった。そして俺は当時の記憶を封じ、無意識に自分に宿っている能力も封じて師匠たちと出会い……今に至ることになる。

「ああ……レイ。本当はお前も、こちら側に迎え入れるつもりだったんだ。でも、お前は運良く逃げてしまった。後に、お前こそがこの世界の鍵だと知って嘆いたものさ。どうにかして、お前を手に入れることができないかと思って。しかし！ それもやっと、終わりを迎えることができる！ レイを殺して、私は真理世界に辿り着く

「！」

そう。

俺という存在は魔法使いの末裔の伝説にある、特殊な存在だった。曰く、一族の中に千年に一人、真理世界アーカシヤに干渉できる魔法使いが生まれるという。それは聖人クロイツと呼ばれ、世界を支配する能力を保有しているというものだ。

ずっと村では大事にされてきた。過保護な親に、村の人たちも俺のことをなぜか尊敬と畏怖の視線を送っていた。当時はどうして自分のことをそんなに見つめるのだろう、と思っていたが今ならばはっきりと理解できる。

村の人たちは俺が聖人クロイツであることを理解していたのだ。

でもみんな、俺を利用しようなどとは思っていなかった。平和に、慎ましやかに暮らしていくものだと思っていたが……それを全て兄が壊した。

「どうして……どうして家族を、村のみんなを殺したんだ？」

静かな怒り。

ギョツと血が出るほど拳を握りしめると、兄にそう尋ねる。すると彼は、まるで理解できない……という表情を作る。

「崇高な目標の前に犠牲は付き物だろう？ それに村の連中は魔法使いの末裔であり、真理世界アーカシヤに辿り着けることを分かっているはずだ。だから利用してやったのさ。家族、村の連中などの命など

私の目標の糧になるべきだろう？」

ああ。

そうか。

そうだったのか。

きっと兄と自分は根本的に違う生き物なのだ。

それがやっと分かった。

このままでは兄は世界を壊し尽くすだろう。自分の好奇心を満たすために、どれだけの人間が犠牲になったとしても関係ないと言いつけるのだろう。

それは……ダメだ。ここで俺が引導を渡さないといけない。

「……兄さん。俺があなたを止めるよ」

「ああ！ そうだ！ 存分に殺し合おう！ 俺はお前の全てを凌駕して、真理世界に辿り着くのだから！」

笑っている。

今から殺し合いをするというのに、歡喜に満ちて笑っている。

アーカーシャ
真理世界は全ての始まりである。そこから世界は構築されていった。そして、逆にその世界に辿り着くためにはその流れを逆転していかなければならない。

そうだ。聖人とは真理世界から零れ落ちた存在であり、そこに戻る引力のようなものを保有している。

それこそが逆転という能力であり、俺の本質である。

「アンチマテリアル
対物質コード、起動」

世界は純白に染まる。

第315話 覚醒・To the truth・（後書き）

ついに最終戦です。

最後までどうか、お楽しみください。

第316話 魔術は世界を模倣する

「さあ、レイ！ 私を楽しませてくれ！」

溢れ出る漆黒の領域。兄は体全てに暗黒の質料をまとっていた。
それは、魔法を使用するのには不可欠と言われているアカシックマテリア第零質料だ。

そもそも魔法とはイメージをそのまま具現化するというものである。そこにコード理論のようなプロセスはなく、圧倒的な速度と圧倒的な力を保有しているのが魔法と呼ばれる現象である。

俺はどうしてこの世界にコード理論が生まれ、魔法ではなく魔術が今の世界に定着しているのかなど知りはしない。

ただ、この悲劇を生み出している兄を止めなければならないということだけは、この胸に刻まれている。

「アンチマテリアル
対物質コード」

発動するのは俺の本質に眠っている還元という能力。

これは第一質料プリママテリアだけではなく、第零質料アカシックマテリアでさえも使用できる。そもそもコードとは情報の形態、内部表現形式でありアカシックマテリア第零質料はコード理論を適用する必要はないが、確かにそこに情報は存在している。

そして俺は、迫りくる漆黒の奔流を全て還元していく。

「ハハハハハ！ 流石だ！ 流石はレイだ！ これほどの能力、そしてそれを実行できるだけの処理速度！ やはりお前こそが世界最高傑作だッ！！」

兄は狂氣的に笑い続けている。

俺には何が楽しいのか全く理解できない。どうしてあんな悲劇を生み出しておいて、そんなに笑うことができる？ どうして、どうしてなんだ……と考えるが、それはきつと無駄なのだろう。

そもそも生き物として違っている。

兄のことをそのように思ってしまうのも無理はなかった。生まれか育ちか、という議論はすでに無駄である。俺たちはその結果としてここに立って、戦っているのだから。

「バンドラ
赫冰封印」

自身の血液と第零質料アカシックマテリアを媒介として、生み出す幾多もの氷の結晶。パキパキと音を立てながら、真っ赤な氷が周囲に展開されていく。

右手に握るのは冰剣。

俺は師匠から減速と固定という二つの本質を教えてもらい、それを完璧にマスターしている。さらに、今は還元という能力もある上にコード理論を適用しなくとも発動することができる。

全ての攻撃がノータイムであり、俺はそこから怒涛の連続攻撃を仕掛けていく。兄に攻撃する暇など与えはしない。生み出し続ける緋色の氷が、際限なく襲い続ける。

彼は第零質料を質料領域へと変換して俺の攻撃を防ぎ続けている。だが、防御にも限界は存在する。徐々に出血し始めているというのに、兄は喜びの声を上げる。

「ああ……レイ！ どうしてこんなにもお前は最高なんだ！ その能力が手に入り、私がこの世界の真理に辿り着くことがこの人生の意味なんだッ！！」

瞬間。

俺の攻撃は圧倒的な暗闇の中へと飲み込まれていつてしまったが、兄もかなりの力を使い果たしているようで肩で息をしていた。相手としては、今まで戦ってきた敵の中でも一番強いといって過言ではないだろう。

そもそも、魔術とは発動スピードが段違いに異なる上に、威力も桁違い。おそらくは師匠であっても兄に届くことはないのかもしれない。

「……どうして、そんなにも固執するんだ」

そう言わざるを得なかった。

人生の意味とはなんだ？

兄をそこまで駆り立てるものが俺には全く理解できなかった。

「魔術は世界を模倣する」

凜とした声が耳に入る。

「レイ。お前は疑問に思ったことがないのか？ この世界の成り立ちのおかしさについて」

「……」

「どうやら、思っているところはあるそうだな」

世界の成り立ちについて。違和感はずっと付き纏っていた。そもそも、どうして魔術というものが世界に定着しているのか。コード理論とは、元々自然界に存在していたものを人間が暴くことで体系化したと言われている。

しかしその一方で、疑問に思っていることもあった。

本当に魔術とは自然界に存在しているものなのか……。と。違和感を覚えたのはコード理論を使って魔術を使う中で、使えば使うほど魔術の質が変わっていくような感覚を覚えていた時だ。

おそらくそれは、俺だけではない。他の七大魔術師たちもまた感じていることなのだろう。

「世界真理^{アーカーシャ}にとって、この世界は擬似仮想空間に過ぎない。いわば実験をしているようなものだ。人間というサンプルを使って、どうやって魔法や魔術が作動しているのか、確かめているに過ぎない」

「たとえそれが本当だったとしても、これだけの悲劇を生み出す必要はあったとは思えない」

「おそらくレイは、私が魂を収集していると勘違いしているだろう。人々の魂、そしてお前の魂を集めることで世界真理^{アーカーシャ}に到達できるのだと」

違う……のか。

確かにそれは、俺のただの憶測に過ぎない。兄の体の中に複数の人間の魂が入り込んでいるのは分かっていることだ。俺はそこまでアーカーシヤ世界真理について詳しいわけではない。

ただこの世界の何か空間のようなものが存在していることは、分かっているだけだ。

「冥土の土産に教えてやろう。必要なのは、揺らぎだ」
「……揺らぎ？」

会話をしているが、決して油断はしない。両手には緋色の冰剣を握り、後方には複数の冰剣を展開している。すぐに戦闘になってもいいように。本来ならば、ここで耳をかすような真似をすべきではないのかもしれない。

俺はそれでも気になってしまった。

この会話には何か本質的なものがあるような気がしたから。

「そう揺らぎ。この擬似仮想空間とも言える世界は、情報の揺らぎによって成り立っている。歪曲ともいっていいかもしれない。魔法、魔術、それらを使用する際には必ず第零質料、アカシックマテリア または第一質料を消費する。そこで生まれるのが、揺らぎ。おそらくは、わずかな時間ではあるが世界真理に接続しているのだろう」

「……」

揺らぎ。

歪曲。

歪み。

それらはずっと俺が感じてきた違和感の一つだ。魔術を使用するたびに、ここではないどこかの存在を感じる。それが揺らぎによって生じていると言う話は、理解できないものではない。

「レイ。どうして理解できない？ この世界は異常なのだ。私は幼い頃から思っていた。どうして魔術が存在する？ どうして魔法が存在する？ 超常的な現象が生じているこの世界を異常だとは思わなのか？」

「……思わないし、思えない。それが当たり前の世界で生きてきたから」

「そうだ。それが普通だ。それこそが、当たり前の感覚だ。だが、私はッ！ たまらなく恐ろしいのだッ！！」

震えている。

表情からしても本当に恐怖しているのだろう。両手で自分の体を抱きしめながら、兄は心の内を曝け出す。

「私たちは、超常的な現象によって何に干渉している？ 物質、現象、そして概念に干渉する魔術まで生まれ始めた。そして魔法はさらにその上をいく。それがたまらなく恐ろしいと同時に、知る必要があるのだ。この知的好奇心が止まることはない。私はただ、平和に安寧に生きたいだけなのだッ！！ 全てを知り、全てを理解して、その上で生きていくッ！ 自分自身の存在を証明できなければ、生

きている意味などない！ レイ、お前はどうして生きているッ！」

問いかけられる。

兄の言い分は理解できる。でもきつと俺たちは、永遠に平行線なのだろう。彼のことを異常者と割り切ってしまうえば楽だっただろうに。俺はそう思えなかった。ただ蹴き苦しんでいる一人の人間に過ぎないと分かってしまったから。

しかし、それで今までしてきたことが正当化されると言えばそうではない。

自分が生きていくために、他人を犠牲にしてもいいと言う理屈など存在してはいけない。俺は、今まで死んでいった仲間のためにも兄を倒さなければならぬ。

俺たちにあるのは、別々の想いだ。

兄は自己の存在証明のために。

俺は仲間のために、大切な人のために戦う。

正しさなど自分で決めるしかない。そして、この戦いに勝利した方こそが正しくなるのだ。自己を肯定するために、俺たちは戦う。

「俺は仲間のために、生きる。これから先も……きつとそう在りたいと願っている」

「他者に自己を委ねるのかッ！！？ それは弱者の思考だッ！ レイ、お前はこちら側に来れる器だッ！！ 私と共に来いッ！！」

手を差し伸べてくるが、手を取るわけにはいかない。

首を横に振る。

俺は淡々と告げる。この決別は確定事項であると。

「兄さん。俺たちはどうあっても、交わることはない」

「そうか……ああ。そうだ。私はいつだって一人だった。そうだ……レイならば理解できると思ったが、それも弱者の思考……ああ……そうだ……！！ 私はレイを殺して、世界の全てを殺し尽くして自分を証明するのだッ！！ 安寧の世界を、私が手に入れるのだッ……！！」

溢れ出る漆黒の粒子。

それが天へ、天へと昇っていく。

第317話 原点回帰

この世界が不思議でたまらなかった。

私は物心ついた時から、魔術や魔法というものが全く理解できなかった。いや、構造としては理解しているし、どうして発動しているのかも分かっている。元々、そのような超常的な能力に関しては適性が高かった。

私が生まれた村は魔法使いの末裔であるということが分かった。

世界に定着している魔術とはコード理論を使用して、論理的にこの世界にイメージを具現化するものである。

一方のこの村で伝わっている魔法とは、プリママテリアの根幹に存在している^{アカシックマテリア}第零質料を使い、イメージを直接具現化するものである。

その違いは明白であり、魔法は発動プロセスが少ないため高速かつ、高威力で発動できる。逆に魔術は発動プロセスが多いのだが扱えるものが多く、それこそ適性のある人間ならば誰もが一定のレベルに達することができる。

そもそもその違いとは、^{プリママテリア}第一質料と^{アカシックマテリア}第零質料のどちらにアクセスできるのかというものと私は後に知った。魔法使いの末裔である私たちは、そのどちらにもアクセスすることができる。

要するに、どれだけ世界の事象に改変できるだけの能力があるのか……ということである。この世界は全て^{アカシックマテリア}第零質料で構成されている

る。世間では第一質料こそ、万物の根幹と説明されているようだが、
アカシックマテリア本当は第零質料こそが世界の根幹である。

しかし、歴史を遡っても分からない。どうして魔法が淘汰されつつあり、魔術が世界に定着しているのだろうか……と。

そもそも、どうしてそんな現象が存在する？

それが始まりだった。

知的好奇心、または自身の存在証明。それこそが、私が私になるための原点だった。

「兄さん。何を読んでいるの？」

自宅にある物置部屋で、小さな明かりを灯して読書をしていた。ここ最近はずっと様々な書物を読み漁り、魔術と魔法の歴史について学んでいた。世界には何か秘密がある。それは絶対的な予感であり、確定事項である。

それは、目の前にいる弟。レイが証明しているのだから。

レイ。

どうして弟がその名前になったのか。

レイというのは、零^{ゼロ}という意味を表しているらしい。曰く、彼は千年に一人現れるという聖人^{クロイツ}なのだとか。聖人とは超常的な存在であり、魔法に対する適性がズバ抜けているのは言うまでもなく、
こことは別の世界に干渉できる何かを持っているらしい。

村の人々はレイを特別扱いする。それは私にとって、些事に過ぎない。弟のことをどう思っているのか、と問われれば私は好ましいと答えるだろう。だが、それまでだ。家族としての情はあるが、その先にまでは届かない。

きっと自分が人間として破綻している片鱗に気がついたのは、この時だったと思っている。

「本を読んでいるんだ」

「本？」

「ああ。レイは魔法に興味はないのか？」

「うーん……よくわからないや」

「そうか。まだレイは幼いからな」

ニコリと笑みを浮かべる弟を見て、私は思う。どうして彼が真理に近い存在であるのか。どうして私ではなく、弟だったのか。そんな感情が芽生えていることに気がつかず、私は日に日に自分の疑問が積もっていくことになる。

どうして、世界は今の状態になったのか？

魔法とは？

魔術とは？

そして、アーカーシャ世界真理とはなんだ？

どうして世界が複数存在している？ いや、もしかすると今いる現実と世界真理以外にも世界は存在しているのか？

考えれば考えるほど、頭がおかしくなりそうだった。

そして私はついに、ある計画を実行することにした。

アーカーシャ
世界真理に干渉するために必要なのは、揺らぎであることが判明した。日々の研鑽によりたどり着いたその結論。世界は魔術を使用した際に、わずかに揺らぐ。それは人の感情であっても同様だった。

ならば、より大きな揺らぎを　混沌を生み出すことができれば、
アーカーシャ
私は世界真理に辿り着くことができると確信した。

その後。自分の生まれ育った村を焼き尽くし、殺し尽くすことに疑問など覚えなかった。元々、私以外に同じような思想を持った人間がいたので、協力して計画を実行することにした。

そこで一つ。問題が起こった。

それはレイがいなくなっていたと言うことだ。いくら死体を探しても、出てくることはない。レイはまだ幼く、逃げることはできないと考えていたが……そこは甘く考えていたのかもしれない。

私たちは、セブンセイジ
七賢人と言う組織を作り上げ、エイウエル帝国の中核に入り込むことに成功した。必要なのはより大きな揺らぎである。そのため、必然的に求めるのは　戦争である。

戦禍による人間の感情の揺らぎは尋常ではない。それは、過去の歴史から分かる明らかなことである。そうして着々と戦争の準備を進めていく一方で、レイはどうやら王国のある組織に保護されたらしい。

「……レイ。そうか……いや、これはいい機会だ」

そう。それはいい機会だった。レイは世界最高の天才と表されている、リディア「Eインズワース」に保護されたい。彼女ならば、レイの能力を開花させてくれるだろう。そしていつか、戦場で相見えることができる。

何故だが、私にはそんな確信があった。

それから数年。

ついに極東戦役が開幕することになった。

第318話 根源へと還る

極東戦役が始まった。

この戦争こそが私にとって大きな役割を果たすのは間違いなかった。人々の感情の揺らぎ。そしてそこから生まれる混沌。それこそが、アーカーシヤ世界真理に辿り着く全て。

私は知りたい。

自分の生まれた意味を。

どうして、この世界に存在しているのかを。

そのためならばどんな犠牲も厭わない。

セブンセイジ七賢人としての活動を本格的に始め、それぞれの戦地に彼らを送った。中でもフィーアなどは殺戮に悦を覚えるタイプらしく、より巨大な混沌を生み出してくれた。

セブンセイジ私以外の七賢人は自分のことを特別な存在だと思っている。だが、私は自分のことが特別だとは思うことができなかった。いや表面上は選ばれた存在であることは理解している。それは何よりも、私の魔法の本質が教えてくれる。

本質は、事象の改変。この世界に存在するあらゆる物理現象、概念などに干渉して全てを意のままに操ることができる。戦場で殺戮

をするだけの人間を生み出すのも、造作もなかった。全ての理想をそのまま実現できる。

それこそが私の能力だった。

この能力があっても私は自分に恐怖を覚えていた。どうして、こんな異形の力を使うことができるのか。どうして、周りの人間は当たり前かのように魔術を使うのか。

疑問の尽きないまま、私は戦場を見つめていた。そこでやはり台頭してきたのは、リディア・エインズワースだった。すでに英雄と呼ばれ始め、縦横無尽の活躍をしているらしい、私としては、この戦争の行末などはどうでもいい。どちらが勝ち、どちらが負けるなど些事に過ぎないのだから。

必要なのは世界真理^{アーカーシャ}に辿り着けるだけの揺らぎを生み出すことなのだから。

その中でレイの存在も確認できた。成長したレイは圧倒的だった。彼の存在は、まさに私にとって興味の対象でしかなかった。聖人^{クロイツ}であり、千年に一人生まれると言われる稀有な存在。

そんな彼が圧倒的な実力を持っているのはもはや当たり前。驚くことなど、なかった。それと同時にレイにいつか会えることを待ち望んでいた。世界真理^{アーカーシャ}に向かうためには、レイの存在も必要である。

彼はこの世界に存在しながら、世界真理^{アーカーシャ}に干渉できる唯一の存在なのだから。

そして、極東戦役が進んでいく中で仲間たちが死んでいった。七^{セブ}ン^{セイジ}

賢人は魔法を使う集団であり、魔術を使う七大魔術師に劣るなどあり得ない。きつと、そんなことを考えていたのだろ。その程度の浅い思考だから敗北し、死んでいくのだ。

特に思うことなどなかった。

仲間とは言っても私にとってそれは表面的なもの。この世界に揺らぎを生み出し、混沌をさらに極めてくれるのならばそれは誰でもよかった。

ついに私は、レイと邂逅することになった。

極東戦役により生み出した揺らぎでは、ギリギリ世界真理に届くことはなかった。しかし、限りなく近い位置にまでは到達している。後はレイを殺せば……殺すことさえできれば、その聖人^{クロイツ}としての能力を奪うことができれば……私は世界の全てを知ることができる。

もはや実の弟を殺すことに、躊躇いなどありはしなかった。

「そうか……ああ。そうだ。私はいつだって一人だった。そうだ……レイならば理解できると思ったが、それも弱者の思考……ああ……そうだ……！！私はレイを殺して、世界の全てを殺し尽くして自分を証明するのだッ！！安寧の世界を、私が手に入れるのだッ……！！」

溢れ出る漆黒の奔流。

それは全て第零質料で構成されている。俺は兄の能力の本質を今までの戦いで見抜いていた。兄の本質は、事象の改変だ。全ての事象を自分の思いのままに操ることができる。しかしそれはもともとの魔法や魔術のあり方なのかもしれない。

彼の場合はその全てに特化しているというべきか。

七大魔術師のようにどれか一つに特化しているのではない。兄はその全てを内包しているのだ。俺の還元とは逆にあると言ってもいいだろう。そもそも、魔法や魔術とは人のイメージを具現化するものだ。そこにプロセスはあれど、結果は同じ。

しかし、その魔法と魔術の全ては世界真理に全て保存されている
アーカーシャ
と言われている。俺たち魔術師は無から有を生み出しているのではない。もともと存在しているものを、生み出しているに過ぎない。

「ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああアアアアアアッ！！
！！！！！！」

頭を押さえながら彼は狂ったような奇声を発する。溢れ出る第零
クマテリア
質料が止まることはない。その全てが兄の周りに溢れ出すと、この
真つ白な世界が徐々に暗黒に支配されていく。

それは全てが俺を殺すための殺意で構成されている。おそらくは、あの粒子の一つにでも触れてしまえば呆気なく死んでしまうのだろ

う。それだけの圧倒的な質料がそこには存在した。

「レイツ！！！！ 私は絶対にお前を殺すツ！！！！」

ついに明確な殺意が俺を襲う。溢れ出る粒子はまるで意思を持っているかのように、迫ってくる。いうならば、アカシックマテリア第零質料の波とでもいべきか。

しかし、たとえアカシックマテリア第零質料でさえも対物質コードは存在している。アンチマテリアルこの世界に存在している物質だけではない。世界真理には物質コードと対物質コードの二つが存在し、それがこの世界にも反映されているのだ。

超常的な現象に関する違和感。それは師匠も言及していたが、そういうことだったのだ。世界は表裏一体である。

生み出すものと、還るもの。

それがもしかすると世界の本質なのかもしれない。

「……もう、終わりにしよう」

どれだけの魔法であっても、もう俺に届くことはない。俺は全てを還す存在。逆転させ、元の状態に戻すことがクロイツ聖人として与えられた能力だった。

還元。

おそらく世界真理に干渉できるということは、アーカーシャ世界を逆転させるということの意味しているのだろう。アーカーシャ世界真理が今の世界を生み出

した。ならば、アーカーシャ世界真理に至るにはその逆転が必要。

兄は揺らぎと言っていたが、根幹にあるのは戻るということである。

「レイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイレイッ！！！」

襲いかかる暗黒の世界。

吞まれてしまえば終わりであるが、還元的能力を手にしている俺は全てを元の状態へと戻していく。

右手をスツとかざす。対象にするべき座標を確定させ、構成しているアカシックマテリア第零質料の流れを把握。今の俺は見るだけでこの世界の全てを知覚することができる。

そして、俺の根源たる魔法を発動した。

「オリジン・レストレーション
原点還元」

瞬間。

暗黒に支配されていた世界は徐々に純白へと染まっていく。いや、それだけではない。純白の世界はさらに戻っていき、俺たちはあの戦場へと戻ってきていた。周囲は悲鳴と怒号で満ちていた。

世界はただただ狂氣的なまでの、黒と赤に支配されていた。現実に戻ってきた俺は、目の前で倒れ込んでいる兄のもとへとゆっくりと歩みを進めていく。

歩みを進めていくたびにパラパラと粒子が舞っていく。それと同時に、体からはヒビが入ったような跡が発生し出血する。両目からも血が溢れ出し、視界は赤く染まっている。おそらくは自分の限界を超えた能力を使ったため、自壊^{じかい}が始まっているのだろう。

還元。

それを限りなく全力で発動した。兄が今までの戦場で生み出した混沌を全て還したのだ。そこには人の意思があつた。悲しみ、慟哭、怒り、殺意、様々な負の感情によって構成されていた世界に干渉したのだ。

何万人もの人間の意思に介入した俺は、おそらくは……もう今後とはともに魔法だけではなく魔術も使えないのかもしれない。

だがそれでいい。

この悲しみに満ちた戦争が終焉を迎えるのなら、俺がどうなるうとどうだっていい。

「兄さん」

地面に伏せている兄は俺よりも状態が酷かった。俺とは桁違いに自壊が進んでいる。俺を殺すつもりで放った魔法だったが、それは全てもとに戻された。その反動が全て一気にやってきたのだろう。

こうなることを分かっていて、俺は兄の世界を壊した。

心は冷めたままだった。実の兄が死に直面しているというのに、俺は冷静なままだった。もしかすると俺はもう……まともな人間として生きることができないのかもしれない。

「レ……イ……」

ヒューヒューと鳴る喉をなんとか震わせながら、彼は俺の名前を呼んだ。

「兄さん。もう、終わりにしましょう」

「あ……ああ……やはり……私は、届くことが……なかった……のか」

だらりと手を伸ばし、ごぼつと声を漏らすたびに出血が増していく。もう助かることはない。

全てを求め、あらゆるものを犠牲にしてたどり着いた先が兄の今だった。

「ああ……でもそうか……私は、今……安心している……」

「安心？」

どうしてもうすぐ死ぬというのに、安心などしているのだろうか。すると兄は思いがけないことを口にする。

「……もう、何にも怯えなくても……いい。死は救いにも……なり得るの……だ。全てを求め、世界を知ろうとした……が、その一方

で私は……この結末にも……満足している……」

「死は救いになると？」

「そうだ……全てを知りたいと同時に……私は死も許容していた……お前に殺されるのなら……本望だ……」

俺を殺して世界真理^{アーカーシャ}に辿り着くのか、または俺に殺されることで全てを終えるのか。兄にとって今回の戦いはどちらでもよかったと言うことが……。

本当にズルい人だ。

そつと兄のそばに膝をつける。すると彼は俺の頬に血塗れの手を伸ばしてきた。

「さらばだ……レイ……先に、逝っている……」

だらりと手が下がる。脈拍は停止し、瞳孔は完全に散大している。俺はスツと手をかざすと兄の^{まぶた}瞼を下ろした。

ああ。

全てが、全てが終わりを告げた。

もうこれ以上戦火が広がることはない。終わった。終わったと言
うのに……俺の心はまるで空虚でがらんどろ。

何もなく、何にも満たされることはない。

ふと立ち上がって後ろを振り返る。

至る所で紅蓮の炎が燃え上がる。

さらに地面には大量の真紅。

その景色にコントラストはない。

ただただ狂氣的なまでの薔薇のような、そして灼けるような紅蓮が世界を侵食していた。

幾多もの屍の上に立っていないければ、この光景は単純に美しく、どこか神秘的なまでに感じられる……。

そう思ってしまうほどに幻想的で禍々しい光景だった。

地獄のような戦場は終わりを迎えた。

俺たちに数多くの傷痕を残して　　。

第318話 根源へと還る（後書き）

極東戦役編、終了になります。半年近くお付き合いいただき、ありがとうございました。ただ後日譚と言うか、エピソードのような形でレイが魔術学院に入学するまでの三年間（極東戦役後のエピソード）も描きますので、もう少し過去編は続きます。

ここまで書くことができたのも、読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます（なんかこう書くと、連載終了みたいです……汗。ちなみに二年生編も考えておりますので、お楽しみに！）

それでは、どうか今後とも本作をお楽しみいただければ幸いです。

第319話 終焉のその後

夢。

夢を見ている気がする。

真っ暗な世界の中で沈んでいくように、俺は意識を保っていた。暗闇。まるで深海の底に落ちていくような感覚。

ああ。

俺は全てをやり切ることができたのだろうか。

仲間を守ることができたのだろうか。

幾多もの死を見てきた。血に塗れ、あらゆるものを犠牲にして戦い続けてきた。それがやっと終わりを迎えることができた。仲間の顔は今でもしっかりと覚えている。戦場で散っていく姿も数多く見えた。

昨日まで隣で笑い合っていたというのに、次の日には居なくなってしまう。そんな日々を送ってきた。そして最後には、兄と戦うことになった。俺たちはどこまで行っても平行線で、殺し合うことしかできなかった。

ああ。どうして俺は、殺すことしかできなかったのだろうか。もつとできることがあったのではないだろうか。

そんな後悔をどうしてもしてしまう。

光が見える。

上からの光をスツと見上げると、自分の体も上へ浮いていく。

俺はこれから、どうやって生きていけば　　いいのだろう。

「……」

目が覚めた。

パチリと目を開くとまずは天井が目に入った。いつも見ている紅蓮の空ではなく、真っ白な天井だった。それに消毒液の匂いもする。そうか、俺は確かあの後……意識を失ったのだった。

自分の能力を全て解放し、兄が構築した世界を還元することで消失させた。

あまりにも大きな力を使ったので、そこで意識を手放したが……
どうやら病院に運ばれたようだった。

「……レイちゃん？」

声が聞こえる方に、顔を動かす。するとそこにはキャロルがいた。目の下にはかなり濃い隈くまがある。それにいつも化粧をしているのに、今は完全にすっぴんだった。キャロルの化粧をしていない姿は、久

しぶりに見たなと思った。

「……キャロル。化粧してないのか？」

「……レイちゃんッ！！！」

ガバツと思い切り抱きついてくる。痛いほどに抱きしめながら、キャロルは涙を流す。溢れ出る涙が、止まることはない。嗚咽を漏らし、声を上げるキャロルの姿を見て俺は改めて戻ってきたのだと理解する。

「う……ぐすつ……良かったあ……良かったよお……っ！　レイちゃんもいなくなったら、本当にどうしようかと思ったよお……っ！」

「あれからどれくらい時間が経った？」

「う……ぐすつ……一ヶ月、経ったよ……」

「そんなに……」

一ヶ月。

極東戦役が終了してから、もう一ヶ月も経っているのか。俺としては、それほど長い時間が経過したという感覚はない。眠って起きたら一ヶ月も経っていたという感覚だ。

「レイちゃん。体は大丈夫？」

「ん？　ああ。痛みはないが……」

「？　別に何かあるの？　お医者さんが言うには、命に別状はないって言ってたけど……」

キャロルは涙を拭ってから、そう尋ねてくる。

感覚的に理解できていた。俺は、あの最後の戦いで大切なものを

失ってしまったのだと。手を何度か開いたり閉じたりして、感覚を確かめる。間違いないな。俺はもう……満足に魔術を使うことはできないだろう。

「魔術はもう、満足に使えないだろうな」

「そんな……」

キャロルは顔をハツとさせて、口元に手を持っていく。

「どうやら、魔術領域暴走オーバーヒートを起こしているようだ。ただ無意識のうちに固定でそれを抑えていたようだ」

そう。

どうやら眠っている間の俺は自分の能力を無意識の内に押さえ込んでいたらしい。それはおそらく、生存本能がしたことだろう。また一つ気になる事がある。俺にずっと語りかけてきた少女は、どこにいったのだろうか。

今となつては、存在を感じることはできなくなってしまったようだ。

「魔術が、使えない……か。でもその……もう、レイちゃんは無理しなくていいってことだよな？」

「無理はできないな。おそらくは、使えるようになるとしても年単位の時間が必要になるだろう」

「……そっか」

なぜか俺は冷静だった。

今まで魔術を使い、戦い続けてきた。きっと極東戦役中に力を失っていれば、ショックを受けていたかもしれないが。しかし、もう戦争は終わった。俺が魔術を使えるかどうかなど、些事に過ぎないだろう。それに、魔法は言うまでもなく使うことはできない。

おおよそ、なんとかかろうじて使うことのできる魔術のリソースは自分の魔術領域暴走を抑え込むために今後は使わなければならぬだろう。

でも、俺はこれからどうやって生きていけばいいのだろう。

今までは戦場に向かって、敵を殺すことだけが生きる道だった。それはもう、する必要はない。魔術をまともに使えなくなった今、軍人として生きることができない。

果たしてこれから、俺はどんな人生を歩んでいけばいいのだろうか。

「……師匠は、どうしていますか？」

最後の戦い。

師匠を助けたという記憶だけは残っているが、その先に何があったのかは知らない。俺は思い切ってキャロルに聞いてみることにした。

すると彼女は視線を少しだけ逸らして、その疑問に答えてくれた。

「……リディアちゃんは、意識がもう戻ってるよ。会話もできるし、元気だよ……」

「本当にそうなのか？」

生きているのは本当だし、会話もできるのは本当なのだろう。しかし、キャロルの声音は明らかに弱々しいものだった。

そして彼女は再び涙を流す。

「リディアちゃんは……その……下半身が……」

ああ。

なるほど。

全てを理解してしまった。

最後の自爆をなんとか防ぎ、俺の力によって四肢は繋ぐことはできた。それでも、傷跡は確に残っていたのだ。俺の還元力も万能ではない。それを今、嫌というほど思い知ることになってしまった。

「師匠に会いに行く」

体を起こす。

痛みはないので、すぐにベッドから降りようとするがキャロルがそれを止めてくる。

「ダメだよレイちゃん！ まだ安静にしていなとっ！」
「でも……」

師匠に会いたかった。

たとえ俺のせいで動けなくなつたとしても、今はただただ謝りたかつた。会つて話がしたかつた。でもキャロルが俺の体を懸命に止めてくる。そんな姿を見て、俺も無理をする事はできなかった。

「分かつた。しばらく安静にしている」

「うん。ずっとお世話するからね」

儚げな笑みを浮かべる。

そうして俺は数日後、師匠のもとに向かうのだった。

第320話 これからの人生

数日後。

俺は師匠のもとに向かうことになった。師匠と会う前には、^ア特殊
^{ストラル}選抜部隊のメンバーの人が見舞いに来てくれた。

「レイ。調子はどうだ？」

「そうですね。概ね、あまり問題はないかと」

ヘンリック・フアーレンハイト中佐。今回の戦いで数多くの戦場で指揮を取って、数々の功績を上げてきた英傑だと言われている。
俺たち^{アストラル}特殊選抜部隊の指揮をしながらも、彼は他の部隊でも活躍していたのだ。

そして後ろにはフロールさんとデルクも立っていた。

「レイ」

「フロールさん。どうも」

「……魔術が使えないそうね」

「そうですね。でも、もう必要ないですから。戦争は終わりました。俺が魔術を使う必要は、もうないでしょう」

「……そう、だけれども」

歯切れが悪いようだったが、それ以上は追求してこなかった。彼女はフルーツの盛り合わせを持ってきてくれており、俺が他の人と話している間にリングの皮を剥いてくれていた。

「レイ。少し細くなっただか？」

「デルク。まあ、そうかもしれない。今は筋トレもできないし」

「すぐに良くなるのか？」

「外傷はないしほとんど問題はない。魔術が使えない以外は、普通だ」

「そうか。まあ、また会いにくるぜ。しっかりと養生しろよ。それで一緒に筋トレでもしようぜ」

「ああ」

ガシツと握手を交わすと、デルクを含めてやってきていた人たちは帰っていった。その後は入れ替わるようにして、ガーネット大佐がやってきた。

「レイ。何だか久しぶりだな」

「大佐。そうですね。自分はずっと眠っていましたので」

腰まである長い髪を後ろに流し、ニコリと微笑みかけてくる。戦場にいる時はいつも張り詰めたような表情をしていたが、今はすっかりと落ち着いている。

「魔術が使えないそうだな」

「厳密には、オーバーヒート魔術領域暴走を抑えるために他の魔術を使えないという感じですが」

「オーバーヒート魔術領域暴走か……完治するのは数年かかるらしいな」

「はい。数年か、それとも十年以上かかるのか。それは分かりません」

「そうか。レイ、それでこれからの話だが」

「これから、ですか？」

これから先の話。

それは俺も全くわからない。軍人として生きていくことはもうできないので退役する手続きはキャロルに頼んである。軍の上層部はあっさりとそれを了承してくれたらしい。

キャロル曰く、少し揉めることになるかもしれない……とのことだったが、きつと彼女が上手くやってくれたのだろう。また近い内に礼をしないと。戦争が終わってからには世話になりっぱなしだからな。

「私、キャロル、それにリディアも軍を辞めることになった」

「え……師匠と俺はともかく、どうしてお二人も？」

「私は軍人には向いていない」

「そうは思えませんが……」

戦場ではハーレンハイト中佐以上に、指揮官として活躍していた彼女が軍に向いていないと思う人間はいないだろう。どうして大佐はそんなことを言うのだろうか。

「いや、向いていないさ。それにあの戦場はあまりにも過酷すぎた。もう……大切な人を失う恐怖を私は経験したくはない」

「そう……ですか」

ハワードのことを言っているのはすぐに分かった。後になって分かったことだが、大佐はハワードのことを好きだったらしい。俺は全く気がつかなかったが、特殊選抜部隊アストラルの活動が活発な時はよく一緒にいたのを目にしていた。

言われてみると、なるほどと肯けるものだった。

「これからは後進の育成に人生を費やすことにしたよ」

「後進の育成、ですか？」

「ああ。今はアーノルド魔術学院の学院長のポストが空くらしくてな。近い内に正式に就任する予定だ」

「それはおめでとうございます」

「ありがとう」

優しい笑みを浮かべるようになったと思うが、こちらが本来の姿なのだろう。それにしても魔術学院か。俺には全く縁のない場所だな。学校にろくに通ったことのない俺が、今更学院に行くことはできないだろうし、それに……この手はあまりにも血に染まりすぎている。

普通に学生として生きていくなど、俺には無理だろう。

「レイのこれからの話はリディアに聞くといい」

「師匠にですか？」

「ああ。私の口から言つべきことではないだろう」

スツと立ち上がる。

そして、軽く手をあげると彼女は病室の外に出て行った。

それから数日後。俺はついに師匠のもとに自分の足で向かうことになるのだった。

病院内を歩いていく。

現在は早朝であり、師匠にしては珍しい時間を指定してきたものだ……と思った。今は時間帯もあって人は閑散としている。自分の足音が反響する音だけが聞こえてくる。

「レイです」

「おお。入っていいぞ」

ノックをするとすぐに返事が返ってきた。声色も明るいもので、いつもの師匠のように思っていたが……ベッドにいる彼女を見て俺は改めてキャロルに伝えられた現実を知ることになる。

「……車椅子、置いてあるんですね」

「ああ。キャロルに聞いたと思うが、もうこれ無しでは移動できないからな」

「……」

俯く。

師匠の下半身は動かなくなってしまった。その事実を決して変わることはない。

「どうやらレイに治療してもらったようだが、完全には治らなかったみたいだ。しかし、生きているだけでもありがたいさ。本当にありがとうレイ」

「そんな……自分は……」

涙が溢れそうになる。

それをぐつと堪えるが、どうしてもポロポロと滴が勝手に溢れてしまふのを止めることはできなかった。

「自分の……あの時、呆けていた自分のせいです……師匠が俺を庇ったから……俺のせいで師匠は……」

そうだ。

あの時のことを鮮明に思い出す。俺がもっとしつかりとしていれば、師匠は下半身が不自由になることなんてなかった。俺のせいでこれからの人生を生きていくのが困難になってしまう。自分の足でもう歩く事ができない。

全ては俺の失態だ。

「レイ」

声が聞こえる。ふと師匠の方を見ると、真剣な顔つきをしていた。

「……師匠」

「ちよつとこつちに来い」

「……はい」

近寄っていくと、師匠は俺のことを強く、とても強く抱きしめてくれた。

「私はお前が生きてくれているだけで、それだけでいいんだ」

「……師匠」

「あの時の選択は間違ってたなどない。それだけは、断言できる。レイがこうして生きてくれているだけで、私は十分に幸せだ」

「……うつ……師匠、自分は……そんな……」

「だから、ありがとう。お前が生きて、私もこうしてレイの熱を、暖かさを感じ取る事ができる。それだけで十分過ぎる。下半身が動かないことなど些細なことだ」

「師匠……うつ……ぐすつ……自分も、師匠が生きてくれていてよかったです……っ」

とうに涙など枯れ果てたものだと思っていた。しかし、師匠の胸に抱かれながら俺は涙を流し続けた。今まで溜まっていた全てを吐き出すような感覚だった。

ずっと我慢をしてきた。自分の心を押し殺してきた。それが、自分の為すべきことだったから。仲間の死を嘆く暇などない。そんな時間があるなら、前に進む必要があったからだ。

でも、もう前に進む必要はない。

仲間の死を嘆いてもいい。その死を悼んでもいい。

またよく見ると、師匠も静かに涙を流していた。そうだ。お互いにこうして、生きているだけで十分なんだ。互いの熱を感じて、話ができるだけで十分だ。きっと師匠も同じ気持ちなのだろう。

しばらくした後、俺は師匠から離れて彼女と向かい合っていた。

「レイ。それで、これからの話だが」

「はい」

これからの話。

大佐に師匠から聞くといいと言われていたので、それを待つ。今まで一緒に暮らしていた家に戻る話だろうが、俺が師匠のお世話をしていこう。それが俺のこれからのやるべきことだから。

しかし、彼女は全く予想もしていないことを口にするのだった。

「お前は私の姉夫婦の養子になれ。これからはレイ・ホワイトとして生きていくんだ。もう、私の近くにいるべきじゃない」

「え……？」

師匠の言葉を俺は全く理解できなかった。

第320話 これからの人生（後書き）

これから先は、魔術学院に入学するまでの三年間の話になります。レイがこれからの人生をどうやって向き合っていくのか。お楽しみしていただければ幸いです。オリヴィア王女との出会いも描く予定です！

第321話 彼に問いかける

「師匠……それは、どういう意味ですか？」

全く意味がわからなかった。

いや、言葉の意味自体は理解できている。師匠には姉がいて、その人が結婚して子どもがいる事も話に聞いている。その子どもは俺よりも一歳年下で、とても愛らしい女の子だという。

師匠も会ったたびに可愛がっているらしく、俺もいつか顔を合わせるという話もあった。

そんな場所で俺がこれから暮らしていく、ということの意味が分からなかった。

俺はこれから自分の罪を償うためにも師匠のそばにずっといるつもりだったのに、突然予想もしていないことを言われてしまい呆然とする。

「言葉通りの意味だ。私たちはしばらく近い場所にいるべきじゃないだろう」

「……どうしてですか？ 俺は……ずっと師匠のそばにいたい、思っていたのに……」

か細い声を漏らす。

昔の時のように、師匠のお世話をしようと思っていたけれど……その未来はやってこないということなのか？

じゃあ、俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ？

「レイも私も、あの戦争であまりにも多くの死に触れすぎた。それに私の下半身は動かなくなってしまった。レイが私を世話をする度、お前は自分の責任だと思い続けるだろう。私がそうではない、と言葉にしてもな」

「それは……」

確かにその通りだった。

師匠がどれだけ俺の責任ではない、と言葉にしても俺はきつと自分の罪だと思い続けるだろう。彼女の世話をしていくことこそが、贖罪になると信じて。

「私に対して贖罪などしなくてもいい。これは私の意思で行動した結果であり、お前の責任ではない。だからこそ、私たちは一度離れて自分自身を見つめ直す必要があるだろう」

「……はい」

完全に納得したわけではない。

でも、確かにそうなのかもしれない。俺は特殊選抜部隊アストラのメンバーと一緒にいると、否応なく思い出してしまうのだろう。そして後悔し続ける日々を送るのだろう。自分がもっと強ければ、自分ももっと活躍できれば、仲間を失う必要もないと……。

「これから先は、メイドを雇おうと思っている。ちょうど伝手があ

ってな。それに私も軍を辞めて研究者として生きていくつもりだ」

「……研究者、ですか？」

「ああ。お前がレポートにまとめたこれを、しっかりと体系化しようと思っただけ。これに関しては私も昔から思っていたことだからな」

「……そう、ですか」

俺は師匠と会う前に、自分の体験したことや新しい魔術などに関してレポートにまとめて提出していた。おそらく師匠が言及しているのは、アンチマテリアル対物質コードのことだろう。

マテリアルこの世界に存在している物質や現象には、物質コードだけではなくアンチマテリアル対物質コードが潜在化している。それを発見した俺は、一応そのことをレポートにしてまとめていたのだ。

何かの役に立つかもしれないと思って。

「レイ」

凜とした声が耳に入る。今は泣いてはいないが、この感情をどう表現していいかわからなかった。ただ、自分の未来がわからないのだ。俺はこれから、どうやって生きていけばいい？

師匠のいない世界でどうやって生きていけばいい？

しかし、少しだけ理解できてしまう。こうやって思考する事が、きつと良くない事なのだろう。ずっと師匠に寄りかかって生きていくべきではない。

だから彼女は俺のことを想って、提案をしてくれたのだろう。

「別にずっと会えないわけじゃない。私も定期的に、会いにくさ」
「……はい」

「これが今生の別れではないし、私たちにはこれから歩いていく人生がある」

「……はい」

「自分の未来をどうやって生きていくのか、それをゆっくりと考えるといい」

「……分かりました」

ペコリと頭を下げると、俺は病室を後にした。

この形容できない感情にどうやって向き合っていけばいいのか、今の俺には全くと言っていいほど分からなかった。

翌日。

もう一週間は様子を見て入院するということだが、外出許可が下りたので俺はある場所にやってきていた。王国の中でも綺麗な夕焼けを一望できる丘であり、そこには数多くの墓石があった。

右手には花を持って、俺はたった一人で彼の……ハワードの墓にやってきていたのだ。

すでに彼の葬式には出席しているし、それに……時間も経過した。ハワードの死に対して冷静に向き合う事もできている。

「……ハワード。戦争が、終わったよ」

そっと花を添える。

他にもそこには数多くの花や彼の好きだった品物がたくさん置いてあった。おそらくは、特殊選抜部隊のメンバーたちもやってきていたのだろう。

俺は夕焼けに照らされながら、ハワードに語りかける。

「ハワード。俺は……たくさん人を殺したよ。救える命もあつたけれど、救えない命もたくさんあつた。ハワードの死も……完全には受け止め切れていない。いつものように、一緒に筋トレしている日々がやってくると……そんな妄想もしてしまう……」

返事がないのは分かっているが、俺は話を続ける。

「俺はこれから、師匠の姉の家でお世話になるらしい。これからレイ・ホワイトとして生きていくらしいが……俺には全く分からない。戦う事しかできなかった自分の道が、これからどうなっていくのか予想もできない」

ハワードが仮に生きていれば、どんなアドバイスをくれただろうか。

笑って送り出してくれただろうか？

それとも。

「戦うことしかできなかった人間が戦えなくなった時、どんな道を歩むのか……俺にはまだ分からない。師匠は研究者として生きていくらしい。ハワードはいつも師匠に奢っていたけど、きっと師匠は偉大な研究者になるよ。その時は、ハワードが奢ってもらう番だな」

軽く笑いを浮かべる。

きつとハワードなら笑ってくれてに違いない。俺もぎこちない笑みにはなるが、軽口を言えるほどには回復していた。

「……ハワード。また来るよ。自分のことを、ちゃんと定期的に報告しようと思う。ハワードはいつも、俺のことを心配してくれていたから」

彼の墓に向かってしゃがんで話しかけていたが、俺はその場にスツと立ち上がる。

風が吹く。

俺は靡く髪の毛を押さえながら、目の前にある夕焼けをじっと見つめる。

極東戦役は終わりを告げた。

仲間の死を悼み、自分自身を見つめる時間をもらえることになった。

でも、俺はまだ……自分の生き方が分からない。

特殊選抜部隊アストラルのメンバーが誰もいない、それこそ……師匠も側にはもついない。新しい日々がやってくる。

願わくば、どうか自分の進むべきが見つかりますように。

第321話 彼に問いかける（後書き）

次回より、レイ＝ホワイトとしての人生が始まります。まずはステラと出会うところからですネ。
あまり長くするつもりはないので、今後ともお楽しみいただければ幸いです。

第322話 惜別のとき

無事に俺は退院することになった。

師匠はもう少し入院するようだが、退院祝いということで見送りに来てくれていた。また彼女だけではなく、アストラル特殊選抜部隊のメンバーもそこには残っている。

アストラルいや、特殊選抜部隊というのは正しくないのかもしれない。ア特殊選抜部隊は極東戦役が終了したことで解体されることになった。軍に残るのはヘンリック・ファレンハイト中佐とデルクのみで残りのメンバーは退役するらしい。

「レイ。今まで本当にありがとう」

「中佐。自分こそ、大変お世話になりました」

別れを告げる。

俺は今日、このままホワイト家に向かってこれからそこで暮らすことになっている。既に相手の了承は取ってあるようで、心待ちにしているとか。

「レイ」

「フロールさん」

中佐の次には、フロールさんが俺の前にやってくる。彼女は手に紙袋を持っており、それを渡してくれる。

「これは？」

「これからの生活に必要なものとお礼よ」

「そんな、自分は……」

「いいから。本当は私もあなたの側にいたいけど……こればかりは仕方がないわね」

「いえ。お見送りに来てくれただけでも、十分過ぎるほんです」

改めて握手を交わす。フロールさんにはとてもお世話になった。俺が幼い時から必要な常識などは彼女が率先して教えてくれたからだ。

「あ。中佐と拳式するとき、是非自分も招待してください」

「……誰にそのこと聞いたの？」

有無を言わせない視線だった。彼女が真剣な眼差しで見つめてくるので、正直に話すことにした。

「噂にはなってましたが、昨日デルクに詳細を聞きました」

すると人を殺してしまいそうな視線でデルクのことを睨みつける。彼は思わずたじろぐが、すぐに弁明の言葉を紡ぐ。

「だ、だってよお……！ もうみんな知っているし、めでたいことだろ！ それに……戦争はもう終わったんだ。明るい話題も必要だろ？」

その通りだと思ったようで、フロールさんは嘆息を漏らす。

「はあ……まあ、時間の問題よね。レイ。まだ時期は未定だけど、

いつか籍を入れる予定よ。その時は絶対にあなたも招待するから」
「はい。楽しみにしています」

フロールさんはいつものままだったが、中佐は「ははは……バレているとは……」と赤い顔で声を漏らしていた。

「レイ。筋肉、衰えさせるなよ？」

「デルク。当たり前だろ？ 魔術は使えなくても、このバルクが衰えることはない。それにきつと、ハワードも生きていたら同じことを言ってるさ」

「へへ。違いねえな！」

デルクとガシツと上腕二頭筋を組み合わせる。そうだ。魔術は使えないが、俺にはみんなに貰った大切なものが残っている。

「レイ。達者でな」

「大佐。今まで本当にお世話になりました」

頭を深く下げる。

ガーネット大佐にも本当にお世話になった。師匠の親友ということもあり、大佐とは接する機会が多かった。彼女にも色々多くのものを与えてもらった。

「はは。もう、大佐ではないがな」

「そうですね。学院でのお仕事、頑張ってください。月並みな言葉になりますか」

「ああ。ありがとう」

そして、キャロルが遠慮しがちな様子でこちらに近づいてきた。

他の人たちと違って、俺に対して申し訳ない……と思ってるのが、容易に理解できた。

「……レイちゃん」

「どうした、キャラル。いつもの元気がないな」

「……だって。私、レイちゃんのために何もできなかったし……」

俯いて、ポロポロと涙を零し始める。初めは陽気で頭が空っぽの変人だと思っていたが、それだけではない。キャラルは大切な人から思いやれるとても優しい人間だ。

仲間が死ぬたびに誰よりも涙を流し、犠牲を少なくするために奔走していたのは知っている。気丈に振る舞っていたが、優しいキャラルだからこそ無理をしていたのだろう。

極東戦役の時に、俺に何もできないと言っているがそんなことはない。キャラルはいつも俺のことを心配してくれていた。それだけで十分だった。

「キャラル。もう、泣くなよ」

「う……ぐすつ……だってえ……」

涙だけではなく、鼻水も流れてしまっている。俺はポケットにあるティッシュを取り出すと、キャラルの鼻にそれを押し付ける。

立場としては逆になるかもしれないが、優しくキャラルの頭を撫でる。

「落ち着いたか？」

「……うん」

まだ目は真っ赤だが、少しは落ち着いたようだった。化粧もすっかり流れてしまい素の状態になったが、十分にキャロルの美貌は保たれていた。

「キャロル。俺は、まだ自分の進むべき道が分からない。でも、特殊選抜部隊で過ごした日々はかけがえのない時間だった。それだけは間違いない。キャロルとも出会えて、本当に良かった」

「……うん。私もとっても楽しかったよ。それに、レイちゃんに会えて幸せだよ？」

「俺も同じだ。それに、今生の別れじゃない。またいつか、キャロルの笑っている綺麗で美しい顔を俺に見せてくれ」

「……全く。レイちゃんってば、本当に良い男の子になったね。うん、またいつか会おうね」

「ああ。では、またいつか」

そして、最後に師匠と向き合う。車椅子に座っている師匠を見るのは辛い、それでも俺は彼女としっかりと向き合う。

「レイ。姉さんは素晴らしい人だ。心配することはない」

「はい。今まで本当にお世話になりました。師匠にはかけがえのないものを貰いました。ありがとうございました」

頭を下げる。すると、師匠は優しく俺の頭を撫でてくれた。

「大きくなったな。もう、レイを見上げる事が普通になってしまった」

「そうですね。時間が経つのは、早いものです」

「また近いうちに会いに行く。元気だな」

「はい。それでは、失礼します」

そうして俺は、改めてみんなに別れを告げると病院から去っていく。

デルク。

ファールンハイト中佐。

フロールさん。

ガーネット大佐。

キャロル。

師匠。

そして、ハワード。

俺はたくさん大切な人と別れることになった。しかしこれは、決して悲観的なものではない。これからの自分の人生を、自分で見つけるためにも……俺は……。

そんなことを考えつつ、俺はホワイト家へと歩みを進めていくのだった。

第323話 ホワイト家へようこそ

たった一人で歩みを進める。

完全に一人だけの時間というものは、なんだか新鮮だった。師匠たちと出会ってから、周りには大人たちがいた。いつもずっと側にいてくれたが、今は一人になってしまった。

俺はもらった地図を見つつ、ホワイト家を目指していた。

馬車から降りると、田舎道を進んでいく。王国の一番東に住んでいるという師匠の姉の家族。周囲は森と山が多く、王国の中央区に比べればかなり田舎だ。といっても、別に田舎が嫌というわけではない。むしろ、今の心理状態であれば田舎の空気の方が俺に合っているだろう。

きつと、師匠はその点も含めてホワイト家の養子になれと言ったのだろう。

また既に養子の手続きは完了している。俺としては……別にどうにでもなれ、という感じだった。今の俺に生きる気力はそれほど残っていない。師匠たちとずっと一緒にいると思っていた。

極東戦役が終われば、またあの騒がしい日々を送ると思っていた。

でも、師匠はそれをやめた方がいいと言った。俺たちが近い場所にいると、凄惨な戦争のことを思い出してしまうから。俺としては

それでも師匠の側にいたかったが……距離を取るべきというのは、理性の方では理解していた。

新しい環境に身を置くべき時なのだろう。

左右を見渡すと、大きな畑のようなものが広がっていた。今はちようど春前ということで、芽が出ていない花々も多いのだろう。

澄んだ空気に、真っ青な空。

微かに漂っている白い雲を見つめる。

こんな綺麗な空をはつきりと見たのはいつ以来だろうか。極東戦役の最中は、空を見る余裕などありはしなかった。あつたとしても、そこは赤黒い世界が広がっているだけだった。

「……行くか」

ボソリと呟いて、リュックを背負い直す。自分の持ち物はほとんどないが、ある程度はあるのでリュックに詰めている。右手にはフロールさんからもらった紙袋を下げている。

「ん？ これは……」

紙袋の中には日用雑貨が入っているのだが、紙の束のようなものがまとめられていた。もしかしてこれは……。

と思つて取り出してみると、どうやらみんなからの手紙がまとめられているようだった。全員分の名前を見て、俺は少しだけ涙ぐんでしまう。が、何とか涙を流さないように止まる。

時間がある時に読ませてもらう。

そうして俺はついにホワイト家の前に辿り着くのだった。

白を基調とした建物であり二階建てではあるが、かなりの大きさである。おそらくは田舎ということもあって、土地代が安いことが関係しているのだろう。

「すみません」

ノックをする。するとすぐに扉は開いた。出てきたのは、師匠にそっくりな女性だった。金髪碧眼に加えて、女性にしては身長が高い。さらさらと流れる金色の髪は、師匠のものとそっくりだった。

一目見ただけで分かる。彼女こそが、師匠の姉であるサーシャ＝ホワイト。書類の上では、既に俺の母親となっている人だ。

「あらあら。よく来てくれたわね」

「いえ。歩くのは苦にしておりますので」

「そう。リディアから話は聞いているわ」

「はい。これからよろしくお願いいたします」

頭を深く下げる。

俺の存在はホワイト家にとって異質な存在である。だから礼節を弁えるべきだ。家族の邪魔をしないように、ひっそりと過ごさせてもらう。そして時が過ぎれば、俺はどこかで一人暮らしでもしよ

うと思っている。

それだけのスキルは十分に持っているからな。

「おお！ やって来たのか！」

もう一人、奥から男性がやってくる。茶色の髪をしており、見た目も若く見える。年齢は詳しくは聞いていないが、三十代前半に見える。

さらにとても人の良さそうな笑みを浮かべている。話し方や挙動、加えて声色からとても快活な人であると察した。

「レイと申します」

「ルーサー」ホワイトだ。君の話はよく聞いているよ」

「これからよろしくお願いいたします」

彼にもまた、丁寧に頭を下げる。顔を上げると、二人とも困ったような顔をしていた。

俺の対応に何か問題でもあったのだろうか……？

「レイ。少しいいかしら」

「はい」

サーシャさんはじつと俺の瞳を見つめてくる。

「私たちはもう家族なの」

「はい。理解しています」

「いいえ。あなたは分かっているわ。リディアに聞いた通りね」

「え……と。それはどういう意味でしょうか？」

「それはこれから、一緒に探していきましょう」

ルーサーさんもうんうんと頷きながら、その話を肯定する。

「ああ。その通りだ。レイ。私たちは、家族なんだ。いやこれから本当の家族になっていこう。君の事情は知っている。だからこここの家でゆつくりと休んでほしい」

「……はい。分かりました」

この場では理解を示しておくが、俺には分からなかった。そもそも、どうして俺なんかを引き取るうとしたのだろうか。いくら師匠の頼みとは言え、断る選択肢もあったはずというのに。

この手は血に塗れている。戦場で数多くの命をこの手で奪ってきた。そんな子どもを、家に置くことを許容する事が今の俺には全く理解できなかった。

それから室内に案内されると、一房だけ小さな茶色い髪が扉からはみ出しているのが見えた。

俺の姿を捉えると、ビクツと少しだけはみ出している体が反応する。

「ステラ。今日からあなたのお兄ちゃんになる人よ。お話ししたでしょう？」

「……う、うん」

俺よりも一歳年下という女の子。名前はステラ＝ホワイト。艶々とした茶色い髪に、ぱっちりとした目に高い鼻。将来はきっと、

美人になるのだらうと思わせるほどの綺麗な容姿だ。

どうやら俺に対して驚いているのか、それとも畏怖しているのか視線を俺と合わせることはない。

これが普通の反応だらうと思って、俺はなんだか落ち着いていた。

「え……っと。ステラ〓ホワイトです」

「レイだ。これからよろしく頼む」

スツと握手を求めるが、ビクツと体を揺らしてからおずおずと手を伸ばしてくる。とても小さくて薄い手だった。一歳年下の女の子ということを考えても、体は小さい気がする。

彼女はアーノルド魔術学院の初等部に通っているらしく、今は五年生で春から六年生になるという。その情報は頭に入っているので普通の子どもはこんな感じなのか……と心の中で納得する。

こうして俺はホワイト家に正式に所属することになった。この時はまだ、俺は知らなかった。ただホワイト家は師匠に勧められたからやって来た程度の認識しかなかった。

しかし、俺はこの家で数多くの大切なものを学んでいくことになるのだった。

第324話 ステラとの日々

春がやって来た。

ホワイト家でお世話になるようになり、一ヶ月が経過した。

サーシャさんとルーサーさんは父と母と呼んでもいいと言われるが、俺はまだその言葉をはつきりと言うことができない。お二人も、時間はたくさんあるからと言ってくれているが……やはり、俺の存在は邪魔ではないだろうか、とどうしても考えてしまうのだ。

といっても、生活自体は慣れて来たもので四人で食事を取ったりすることを苦に思ったりはしない。また、サーシャさんとルーサーさんは二人ともに王国の中央区にある魔術協会で働いている。

そして、この一ヶ月の間はステラは魔術学院が休みということと一緒にいる機会が多かったのだが……。

「じーっ」

「……」

昼頃。

今は家には、俺とステラしかない。サーシャさんとルーサーさんはいつも通り、仕事に行っている。俺がこの一ヶ月の間に何をしていたのかというと、日中は主に家事をしていた。

サーシャさんには家政婦として迎え入れたわけではない、と苦言を呈されてしまったのだが、好きでやっているのだからやらせて欲しいと俺は頼んだ。

師匠のお世話をしていたこともあり、家事のスキルはそれなりにある。そんなことを話すとサーシャさんは「リディアにきつく言っておくわね」とニコリと微笑んでいた。

その時、俺は背筋がぞくりとしたのをよく覚えている。流石は師匠のお姉さんである……と、心の中で彼女は怒らせないでおいと誓った。

そして、家中を掃除していると、後ろからステラがトコトコとついてくるのだ。じつと半眼で俺のことを見つめてくる。

くるつと翻って彼女の様子を見ると、陰にささつと隠れてしまう。一房の茶色の髪がはみ出ているのだが、微笑ましい様子だった。

「……じーっ」
「ふむ」

どうして彼女が俺のことを見つめているのか。もしかして、俺のことを監視しているのだろうか？ 確かに両親から急に兄になる人間がやってくると聞かされて、戸惑っているのかもしれない。

やはりここですべきは、対話だろう。

俺は無害な存在であり、ホワイト家に害をなす存在ではないと知ってもらえればステラも安心するのではないだろうか。

そう思って彼女の方へ近づいてみる。

「……………」

驚いたのか、体全体を隠しているが俺はそれでも彼女の方へと歩みを進める。そして、膝を曲げて彼女の視線に合わせると声をかけてみることにした。

「俺に何か用があるのだろうか？」

「……………あ、え……………」

もじもじとして、目を合わせてはくれない。じっと床を見つめながら、忙しく髪の毛を触っている。

「急に知らない人間が来て驚くのも無理はない。ただ、俺はこのホワイト家に害を及ぼす存在でないことは、分かって欲しい」

「が、がいをおよぼす……………」

ポカンとした表情を浮かべる。

む……………自分よりも年下の人間と接したことがないので、距離感がうまく掴めない。言葉遣いももしかして、難しかったのかもしれない。

「……………悪いことをするつもりはない、ということだ」

「う、うん……………」

話はそこで途切れてしまう。一歳年下の女の子が好むような話題を俺は知らない。それに、ずっと大人たちがいる環境で育って来た俺は同世代の人間とコミュニケーションを取る機会などなかった。

ここでのような選択肢を取るべきなのが最善なのか、俺には分からなかった。

その後は掃除を続けて、洗濯物を洗ってから一気に干す。家事を一通り進めている間もステラはトコトコと俺の後ろをつけてくる。

何かいうことはないのだが、彼女は目的でもあるのか？ 俺の言葉を信じず、監視を続けている……とも考えることができるが、そんな感じでもないような。

俺のそんな疑問はすぐに晴れることになるのだった。

「まあ……！ 全部レイが作ったの！？」

「おお！ これは美味しそうだな！」

「……ごくり」

今日はサーシャさんの帰りが遅くなるということで、俺が夕食を作ることにした。無理はしなくてもいい、と言われているが別に家事全般は好きなので何の問題もない。

家には色々と材料があつたのでビーフシチューを作ってみた。それにパンも自分で作ってみた。時間があつたのでちょうど良かった。その他、野菜の付け合わせなども用意した。

自分ですでに味見をしているが、かなり美味しくできたと思う。

「お、美味しいわ……！」

「……こ、これはっ！ 母さんの作ったものより美味いんじゃないかっ……!?」

その瞬間、ルーサーさんの顔が歪む。俺から死角になっているが、きつと太腿をつねられたに違いない。俺はそんな様子を見て、苦笑いを浮かべながらも感謝の言葉を述べていた。

「ありがとうございます」

一方のステラといえば、一心不乱に食事を進めていた。特に言葉を発することなく、黙々と食べていたのだ。

「おかわりっ!!」

元気な声が室内に響き渡る。

彼女は大人しめの女の子と思っていたが、今はとても快活な笑顔を浮かべている。もしかして、俺がいることで萎縮していたのかも知らない。

「ああ。すぐに持ってこよう」

量が多めに作ってあるので、俺はすぐに彼女の皿を取ると追加のビーフシチューを入れていく。ステラも我に帰ったのか、恥ずかしいのか小さな声で「……ありがとうございます」と言ってくれた。

俺だけではなく、サーシャさんもルーサーさんも彼女のことを微笑ましく見つめるのだった。

ホワイト家での日常は概ね、平和に進んでいる。しかし、この心の奥に宿る寂寥感のようなものは決して晴れることはない。

そして、次の日もその次の日もステラは俺の後ろをトコトコとついてくる。もはやそれは日課になりつつあった。後ろをチラッとみると、慌てて陰に隠れてしまう。

友達もいるだろうに、遊びに行かないのかと思ってそのことを尋ねてみる。

「ステラ」

「……っ！」

ビクッと体を震わせ、俺のことをチラッと見てくる。前までは視線をこちらにも向けてはくれなかったので、少しは進歩しているのかもしれない。

「せっかくの長期休暇だろう？ 友達と遊びに行ってもいいんだぞ

？ 家には俺がいるから」

「……あ、えつと……その……」

彼女が俺に対して何か言いたいのだとわかったのは、ここ数日の話だ。監視をしているわけではなく、話しかける機会を窺っていると言ったところだ。

ただ、このままで埒が明かないということで俺から促してみることにした。

するとステラはギュッと服の裾を握ると、バツと顔をあげた。

「あ、遊びに行きたい……っ！」

「ああ。行つてくるといい」

「お……お、おお、おお……」
「お？」

お、とはどういうことだ？

そう思っているとステラは大きな声を張り上げるのだった。

「お兄ちゃんと一緒に遊びたい……っ！」

胸を打たれるような感覚を覚える。何と形容すればいいのだろうか。ステラのそんな様子を見て、俺は感動を覚えていた。お兄ちゃんと言ってくれたのもそうだが、ずっと俺と遊びたくて様子を窺っていたのか……そうか……。

こんな俺を兄と呼んでくれ、遊びたいと言ってくれる。本当に嬉しかった。

「そうか。いいよ。何して遊ぶ？」

ステラは俺の言葉を聞くと、まるで向日葵のような明るい笑顔を浮かべるのだった。

「森！ 森に行きたい！」

「森？ そうか……」

あれから色々調べたのだが、女の子は内向的な遊びなどが好きという情報を得た。人形遊びやおままごとが好まれる傾向にあると。

が、ステラはどうやら外で遊ぶことの方が好きらしい。

「よし。じゃあ、行くか。俺はジャングルでの経験もある。森に関してはある程度詳しい。期待してくれていいぞ」

「ジャングル……！？　すごい、すごい！」

ということで俺たちは、近くにあるという森に向かうのだった。

第324話 ステラとの日々（後書き）

書いていて思ったのですが、やはりステラが一番最強に可愛いのは？ と……。

さて、これからどのような関係を二人は築いていくのでしょうか。まあレイがシスコンになるのは、確定事項なのですが（笑）。

第325話 お兄ちゃんの日々

私の名前はステラⅡホワイト。

アーノルド魔術学院初等部の五年生で、来年から六年生になります。ちょうど学校もそろそろ終わり、春休みがやってくる前にお父さんとお母さんに話があると言われました。

「ステラ」

「何、お母さん？」

お父さんとお母さんが並んで、私の前に座っています。いつもよりも真剣な様子で何か悪いことでもしてしまったのか……とと思ってしまいます。まさか、こっそりとお菓子を食べたのがバレしてしまったのでしょうか？

「お兄ちゃんが出来るってお話なんだけど……」

「お兄ちゃん……？」

私に兄妹はいない。ずっと一人っ子で、過ごしてきたのだからそんなことは分かりきっている。もしかして、実は本当のお兄ちゃんがいたとか……？　と思いますがそのような話ではありませんでした。

曰く、お母さんの妹であるリディアさんがお世話していた人が養子？　になるらしい。養子というのはよく分からないけど、ともかく私に血は繋がっていないけれどお兄ちゃんが出来るとい話だけ

は理解できました。

お兄ちゃんか……。お父さんとお母さんは働いているので、家に一人でいることが今まで多かったです。二人のことは大好きだけど、一人でいるときはやっぱり寂しく思っています。お友達と遊んだりもしますが、家が遠いので春休みの間は頻繁に遊ぶこともできません。

でも、お兄ちゃんができたら、もしかして一緒にいっぱい遊べるのかな？

私はそんなことを思いつつ、お兄ちゃんになる人に出会うことになりました。

「ステラ。今日からあなたのお兄ちゃんになる人よ。お話ししたでしょ？」

「……う、うん」

扉から少しだけ体を出して、様子を窺います。名前は、レイ＝ホワイトというらしいです。詳しくは知らないけど、手続き？ はもう終わっていて正式にホワイト家の一員になっているとか。

お兄ちゃん。この人が私のお兄ちゃんになるんだ……。

身長は高く、顔も凛々しいです。年はお兄ちゃんの方が一つだけ歳上という話ですが、私にはそうは思えませんでした。無表情、というわけではないけど……どこか寂しそうな雰囲気を感じていました。そんな印象でした。

「え……っと。ステラ」ホワイトです」
「レイだ。これからよろしく頼む」

お母さんに軽く背中を押され、私は自己紹介をしました。まだ緊張しているので、私はなんとか握手をしようと手を差し出します。ギュッと握るお兄ちゃんの手は分厚くてとても硬かったです。

その時、お母さんから聞いたお話を思い出しました。

お兄ちゃんはずっと大変な思いをしてきたと。辛い思いをして、彷徨い続けてここにやってきたと。だから私にも歓迎して欲しいと言っていました。

お母さんには分かった、と言いましたが内心で察していました。リディアさん（一度、リディアおばさんと呼んだら本気で睨まれたのでそう呼んでいます）は軍人です。そして、東の果てであった戦争で英雄になったすごい人だと。

ということは、お兄ちゃんももしかしたら戦っていたのかもしれない。私には戦争なんて全く分からないけど、とても大変なものだという認識はありました。

私にも何かできることがあるかな……そんなことを、お兄ちゃんと出会って思うようになりました。

春休みがやってきました。お父さんとお母さんは平日はお仕事に行っているのです、お兄ちゃんと二人きりです。

「じーっ……」

様子を窺います。

お兄ちゃん家事をしてくれました。驚くことに、家事のスキルは完璧で母さんよりもテキパキしていました。お兄ちゃんは何者なんだろう……と思うと同時に、どうやって話そうかとソワソワしています。

実は、一緒に外で遊びたいのですがなかなか誘う勇気が出てきません。お兄ちゃんの後をトコトコとついていくと、くるっと翻りました。

「俺に何か用があるのだろうか？」

「……あ、え……と」

一緒に遊びたい、と口にすればいいだけなのに出来ません。やっぱり、どうしてもまだ緊張してしまうのです。

「急に知らない人間が来て驚くのも無理はない。ただ、俺はこのホワイト家に害を及ぼす存在でないことは、分かって欲しい」

「が、がいをおよぼす……？」

お兄ちゃんはとても頭がいい人なのだと思います。言葉遣いも私なんかよりもずっとしつかりとっていて、まるで大人とお話しているようでした。

そして、私がよく理解していないのが分かったのか、言葉を言い換えてくれます。

「……悪いことをするつもりはない、ということだ」
「う、うん……」

悪いことをするつもりがないのは分かっていました。まだよく知っているわけではないけれど、みんなのことを思いやってくれているのはみて取れたから。その後も私は、機会を窺うようにしてトコトコと後ろについていきます。

大きな背中を見つめ、一緒に遊びたいと声をかける勇気が持てるように祈りながらお兄ちゃんの姿を追います。

「ステラ」
「……っ！」

急に声をかけられるので、体がビクッと反応してしまいます。お兄ちゃんは私のほうにやってくると膝について目線を合わせる。そんな些細な心遣いからも、良い人だということはもう分かってました。

「せっかくの長期休暇だろう？ 友達と遊びに行ってもいいんだぞ？ 家には俺がいるから」
「……あ、えっと……その……」

今しかない。春休みだって、ずっと続くわけじゃない。どこか勇気を出さないと、絶対にダメな気がする。

私はギュツと服の裾を握りしめると、何とか言葉を発します。

「あ、遊びに行きたい……っ！」
「ああ。行ってくるといい」

「お……お、おお、おお……」
「お？」

言っただっ……！ 今ここで、ちゃんと言葉にするんだっ……！

「お兄ちゃんと一緒に遊びたい……っ！」

心の中ではずっとお兄ちゃんと呼んでいたけれど、言葉にするのは初めてでした。嫌がってないかな？ 困ってないかな？ と思っていると、目を大きく見開いた後に優しい笑顔を浮かべてくれました。

それが私の見た、お兄ちゃんの初めての笑顔でした。

「そうか。いいよ。何して遊ぶ？」

私もまた、いっぱいの笑顔を浮かべて何をしたいのか伝えます。

「森！ 森に行きたい！」
「森？ そうか……」

家の近くの森は近づいたらダメだとずっと小さい時から言われて来ました。でも、お兄ちゃんと一緒なら行ってもいいわよとお母さんに言われたので、早速お願いすることにしたのです。

「よし。じゃあ、行くか。俺はジャングルでの経験もある。森に閉してはある程度詳しい。期待してくれていいぞ」

「ジャングル……！？ すごい、すごい！」

ぴょんぴょんとその場で飛び跳ねます。やっぱり、お兄ちゃんは
とっても凄い人なんだ！と思いました。そして私たちは二人一緒
に、森へと向かうのでした。

第326話 兄妹の絆

「ふんふんふんっ！」

「……」

俺たち二人は、森へと向かっていた。もともと、ここに越してくる前から情報として知っていたのだが、ここはドグマの森が近くにかなり危険な森に指定されている。

指定難易度はSランクであり、最高峰に危険な森とされている。といっても俺は師匠の弟子として色々と教えてもらう中でハンターとしての資格もすでに所有している。一番高ランクのプラチナのハンターにはまだ到達していないが、ゴールドのハンターの資格は取っている。

当時は、魔術師たるものハンターとしての素養も養わなければならない……と言われたので、地獄の訓練をこなしながらハンターの資格を取ったのだが、まさかここで役に立つとは思ってもなかった。

また、サーシャさんからはもしかしたらステラが森に行きたいと言いかもしれないので、その時はよろしくお願いするわね、と聞かれている。俺としては、ステラはきつと俺なんかと一緒に外に出たいなど思っているわけもない……と考えていたのだが、どうやら違ったようだ。

鼻歌を交えながらステラは跳ねるようにして歩みを進めていく。時折、後ろにいる俺の姿をチラッとみると、ニコリと笑みを浮かべ

る。

今までは可愛い、愛らしいなどと言うキャラルの言葉が分からなかったのだが……もしかして、これがその感情なのだろうか？

そして、森の前にたどり着くと検問所で手続きを始める。

「ん？ ステラちゃん。今日はどうしたんだい？ 入りたいっていつも言うけど、ダメだよ」

「トムおじさん！ 今日は大丈夫なんだよっ！」

どうやらステラは検問所の人と知り合いのようだった。彼女は大きな声をあげると、俺のことを紹介してくれる。

「お兄ちゃんがいるからっ！！」

と、ぐいぐいと俺の背中を押してくるステラ。俺も自己紹介を兼ねて、トムおじさん？ と呼ばれている人に挨拶をする。

「初めまして。レイ＝ホワイトと申します」

「ああ！ ホワイト家に人がやってきた話は聞いていたが、君だったのか！」

「はい。それで、入れてもらえないでしょうか？」

「いやいや。ここはゴールド以上のハンターが同伴していないと入れないよ？ 二人ともまだ子どもだし無理だよ」

優しい声音だが、キツパリと断れてしまう。しかし、ゴールドのハンター^{ライセンス}免許はこんなこともあるのかと、持ってきているのでそれ

を彼に見せることにした。

「これでどうでしょうか？」

「……へ？」

驚いているのか、変な声を漏らしている。それも無理はないのかもしれない。十代、しかも俺のような子どもがまさかゴールドのハンターであるなど思う人間はいないだろうから。

「……ほ、本物？」

「はい。数年前にゴールドのハンターになりました」

「待つてほしい。今はこれを見るに、十二歳だろう？」

「はい」

「ということは、もっと子供の時に取ったのか？」

「そうですね」

「信じられん……」

いくら証拠があつたとしても、信じられないということでは彼もまた俺たちに同伴すると言ってきた。

「よし。君の実力をこの目で見て、本当に信じられるのならこれ以上は何も言わない。二人で好きにこの森の中を回るといい」

「わーいっ！ ふふふ……お兄ちゃんはとっても強いから、絶対に大丈夫だよ！ ねっ！」

ステラにそう言われると何故だかいつも以上にやる気が湧いてくる気がした。そして俺は、その言葉にしっかりと答えるのだった。

「ああ。もちろんだ」

ということで俺たち三人は、ドグマの森の中へと入っていくのだ
った。

薄暗い雰囲気漂っている。生い茂っている森の中では、日の光
がしっかりと入ってこない。夏ならば違ってくるのだろうが、今は
春ということで光はまだ弱い。

話を聞くと、トムおじさんはプラチナのハンターでこの森のこと
は熟知しているらしい。伊達にこの森を管理していないということ
だな。

「む……あれは」

魔物を発見。

そこには巨大蛇^{ヒュージスネーク}が三匹ほど蠢いていた。他の魔物でも捕食してい
るのか、お腹がぼっこりと大きく出ている。この森では巨大系^{ヒュージ}の魔
物はごく当たり前に出てくる上に、かなり獰猛らしく常に魔物同士
で争っているとか。

まさに弱肉強食の世界である。

「トムさん。俺一人でやってきます」

「……本当にいけるのか？」

「はい。あの程度でしたら、問題ありません」

と、俺は自信満々に言葉にしているが今はもう魔術をまともに使
うことはできない。厳密に言えば、使えることには使えるのだが魔^オ
術領域暴走を抑え込むことに魔術領域のリソースはほぼ全て割いて

いる。

仮に使えとしても、それは軽微な内部コードインサイドによる身体強化になるだろう。だが、それだけで十分だった。

俺は腰に差していた小さなナイフを取り出すと、巨大蛇の方へとゆっくりと近づいていく。すると相手も俺の存在に気がついたのか、明確な殺意を向けてくる。

きつと新しい餌がやってきたとでも思い込んでいるのだろう。

巨大蛇は基本的^{ヒュージスネーク}に、牙から漏れている毒で相手を麻痺させて一気に丸呑みにしてしまう。または、巨大な体を活かして相手を絞め殺した後に丸呑みにしてしまうことで有名だ。

それにこの三匹はおそらくは、群れとして活動しているのだろう。じりじりと近づいてくると、三方向から一気に襲いかかってきた。

「……なるほど」

相手の動きをすぐに把握して俺は上空に飛翔。そして、落下する重力を利用して一匹の巨大蛇の眼球にナイフを突き刺して、そこから一気に縦に切り裂いた。

一瞬だけ悶絶していたが、すぐに絶命。残り二匹もまた、果敢に攻めてくるがやはり俺からすればスピードはかなり遅く感じる。軽くしゃがむだけで相手の噛み付きを交わすと、一気にナイフを喉元に突き立てる。

その後は、同じ要領でもう一匹を屠って無事に終了。

一分もかかっていないだろう。

ヒュツとナイフを振るって血を地面に落とす。

「……」

「……」

ポカンとした表情で俺のことを見つめている二人だったが、ステラは先に我に帰ったのか俺のもとにものすごい勢いで走ってくる。

「すごい、すごい、すごいっ……！」

思い切り俺に抱きついてくるので、ステラの小さな体を受け止める。ステラは興奮しているのか、とても口調が荒くなっていた。

「お兄ちゃんってば、本当にすごいね！！ シュシュ！ ビューンって倒しちゃったよっ……！」

「まああの程度は余裕だな」

「よゆうっ……！ やっぱりすごいや……！！」

ぎゅーっと思い切り抱きついてくるのを拒むわけにもいかないの
で、俺はステラに好きにさせておいた。そして、後ろからはトム
さんが俺の方に向かってくる。

ヒュージスネーク

巨大蛇の死体をチラリと見て、俺の顔を改めてじっと見てくる。

「……凄いな。本当にゴールド、いや……実力的にはプラチナの
ハンターだろう。その若さで、凄いな」

「いえ。まだまだですよ」

「抜かせ」

と、トムさんは笑顔を浮かべてから握手を求めてくる。

「お前になら……いや、レイになら任せることができるな」

「そう言ってもらえて嬉しいです」

「ステラのことよろしく頼むぞ」

「はい」

無事に認めてもらえることになった俺は、ステラと一緒にさらに森の奥へと進んでいく。

「いいか。魔物の生態系は」

「ふんふん」

「まず、魔物と出会ったときの対処法は」

「ふんふん」

「森での立ち回りで重要なのは」

「ふんふん」

「それに、食べることでできる草やキノコなども覚える必要が」

「ふんふん」

ステラはどうやらこの手の話題には興味津々なのか、俺の後ろをついてきながら真剣に話を聞いてくれていた。それに、ちよつと実力を見てみたいということであまり強くない魔物と戦ってもらったが……その潜在能力は、あまりにも大きなものが宿っていた。

流石は、師匠の家の血筋ということだろうか……。

「ステラ」

「何、お兄ちゃん」

「ステラは才能がある。きっと、もっと努力すれば凄い魔術師になれる」

「本当っ！！？」

「ああ。間違いない」

「わーいつ！ それじゃあ、さ……」

じつと上目遣いで俺のこゝを見つめると、ステラは少しだけ照れるような素振りを見せてこう言葉にした。

「お兄ちゃんが、いっぱい教えてくれる……？ 私、お兄ちゃんともっと一緒に過ごしたい……」

ステラはそれから、今まで秘めていた事を教えてくれた。

「私ね。ずっとお家で一人だったの。お父さんとお母さんはお仕事があるから、あんまりわがまま言っちゃダメなのは分かったの。だからね、お兄ちゃんが家に来るって分かってとっても嬉しかったの」

「……ステラ」

「でも、もうお家に一人でいなくてもいい。お兄ちゃんと、もっと一緒に遊びたい……」

俯いているのは、照れ隠しなどではなく心配しているのかもしれない。その言葉に指定して、俺がどうやって答えるのかを。

膝をつく。

ステラと目線を合わせる。

「ステラ。俺も、もっとステラのことを知りたい」

「本当……？」

「ああ。だから、もっとわがママを言ってもいい。俺は側にいるから」

「うんっ……！」

二人でお互いのことをギュッと抱きしめ合う。

ああ。

そうか。そうだったのか。どうやら天使はここにいたらしい。今までずっと、この世界はあまりにも醜くて、汚らわしいものだと思っていた。人間の業はどこまで行っても変わらず、人は闘争を求める。

あの戦争で嫌というほど人間の醜さを見てきた俺だが、世界はそれだけではない。

そんなごく当たり前のことを、目の前の少女に教えてもらった気がする。

師匠がどうしてホワイト家に行くように言ったのか、それが少しだけ分かったような気がした。

「よし。今日は帰るか」

「うんっ……！！！」

二人仲良くしっかりと手を繋いで、俺たちは帰路へとつくのだった。

第326話 兄妹の絆（後書き）

次回からは一年後の話で、オリヴィアとの出会いを描いていこうと思います。

もちろんステラの可愛さは今後も全力で押していきますので、ご期待ください！

第327話 帰路での出会い

「お兄ちゃん！ 一緒にお風呂はいろっ！」

「ああ。行こうか」

「うん！」

あれから一年が経過した。俺とステラはもはや本当の兄妹以上に仲良くなっていると言っても過言ではないだろう。いつもどこに行く時も一緒に、サーシャさんとルーサーさんには温かい目で見つめられている。

その中で、サーシャさんが「うふふ。このままいけば……」と怪しそうな声音で何かを呟いていたのだが、その真相は謎である。

「ふう……気持ちいいねえ」

「そうだな」

一緒に浴槽に入る。ステラは俺の膝の上に座って、ゆったりとしている。俺はそんな彼女の頭を優しく撫でるのだった。

「今日も疲れたよお」

「よく頑張ったな」

「うん……っ！」

ステラはこの一年間、俺に魔術の稽古をつけてほしいということで色々と教えている。魔術の使い方だけではなく、森での過ごし方

や戦い方など。俺は今特に何もすることはないので、主に家事とステラに教えることに時間のほとんどを費やしている。

俺が誰かにものを教える日が来るなんて……夢にも思っていないかった。今まではずっと、俺は教えてもらう立場だったから。もしかしたら、師匠のこんな気持ちだったのかもしれない……。

師匠とはこの一年会っていない。

手紙でのやりとりはしているのだが、直接会ってはいない。手紙では元気にやっていると書いてあるし、新しくメイドを雇って身の回りのお世話はその人にやってもらっているらしい。

だが、明日……やっと師匠と会うことができる。新しい家を買って、そこで今は生活をしている師匠に誘われたので、俺は師匠の家に向かう予定だ。

「お兄ちゃん！一緒に寝よう！」

「ああ。いいよ」

ステラと一緒に風呂に入って、一緒に寝る。これはいつものルーティーンの一つだ。俺の部屋にトコトコとやってくると、ベッドにやってくる。そして、俺の体をギュッと抱きしめながら眠りに入る。

「お兄ちゃん……」

「ん？ どうした？」

「明日。リディアさんのところに行くんだよね」

「そうだが」

「気をつけてね」

「ああ。大丈夫だよ。ちゃんと帰ってくるから」

よしよしと頭を撫でる。すると、ニコリと笑みを浮かべた後にスヤスヤと寝息を立て始めた。ステラのそんな様子を微笑ましく見つめながら、俺もまた眠りにつくのだった。

翌日。

俺は早速、師匠の家に向かうことに。前回の手紙のやり取りで地図はもらっているの、それをもとにして進んでいく。西の果てに居を構えているらしく、かなり距離としては遠い。馬車での移動を複数回してから、徒歩で向かう形になるだろう。

こうして外に出てくるのは珍しい感じだった。

この一年は、一人で長距離を移動することなどなかったからな。

師匠の家があるという森の前にたどり着いた。緑が生い茂っており、微かに木漏れ日が差し込んでいる。その中を俺は迷わず進んでいく。

師匠は元気になっているだろうか。どんな生活を送っているのだろうか。会った時、どんな顔をして話せばいいのだろうか。

そんなことばかりを考えてしまう。

「ここか」

たどり着いた。

大きな洋館だった。ここで師匠とメイドの人が一緒に暮らしているらしいが、二人で暮らしているにしてはかなり大きい。

ノックをする。時間通りにやって来たので、すぐに出てくると思うが……。

「レイ＝ホワイトです」

と、言葉を発した瞬間。扉がギイイイと音を立てて開いた。

「お初にお目にかかります。カーラ＝ヘイルと申します」

出て聞いたのはメイド服を着た女性だった。真っ黒な長い髪を三つ編みにして、後ろでまとめている。限りなく無表情であり、俺のことをじつと見つめている。

「レイ＝ホワイトです」

「レイ様。お話は伺っております。主人のもとへ案内します」
「ありがとうございます」

カーラさんに案内されて俺は室内へと進んでいく。外観はかなり年季の入っている感じだが、中は内装がそれなりに豪華だった。シヤンデリアが輝いており、それにホコリーつない綺麗な空間だった。

そして、俺は一年ぶりに師匠と会うことになるのだった。

「レイ！ 元気にしていたか！」

軽く摩く髪。師匠の腰まであった長い金色の髪は、肩下にまで短くなっていた。それに表情もどこか晴れやかだ。最後にあった時とは、印象がだいぶ違う。

「師匠。はい。元気にしていましたよ」

「姉さんに話は聞いていたが、ステラとは仲良くなったようだな」
「そうですね。いつも一緒にいます」

「ははは。それはよかったよ」

「髪……」

「ああ」

師匠は軽く自分の髪に触れる。俺が何を言いたいのか、分かっているのだろう。

「短くしたよ。心機一転ってやつか？」

「そうですね。とてもよくお似合いだと思います」

「お、そうか？」

「はい。髪が短いと、まるでお淑やかで清楚に見えますね」

「あ？ まるでってなんだ？」

背筋が凍りつく感覚を覚える。師匠はギロツと俺のことを見つめてくるが、それは明らかに殺意の籠ったものだった。

「い……いえ。とてもお綺麗ですよ？」

「だよなー。そうだよなー！」

「あはは……」

愛想笑いを浮かべる。

師匠は変わった。以前よりもとても明るくなったような気がする。極東戦役が始まった時からずっと張り詰めていたから。それに今は……車椅子に座っている。その事実是否応なく、自分の不甲斐なさを思い出してしまふ。

「脚……どうなんですか？」

「ん？ まあ、まだ動けることはないが、それでも大丈夫だ。カーラもいるしな」

すると、カーラさんが俺と師匠の分の紅茶を運んで来てくれた。

「いえ。メイドですので」

淡々と言葉にする彼女のことが俺はイマイチ分からないが、師匠が信頼しているようなので特に言及することはなかった。

「レイは姉さんの家で元気にやっているのか？」

「ええ。実は」

俺はこの一年であつた出来事を全て師匠に話す。すると、師匠は徐々に顔をしかめていく。何か悪いことでも言ってしまったのだろうか？

「なあレイ」

「なんでしょうか」

「ちよつとステラと距離が近くないか？」

ステラと距離が近い？ 俺としては、当たり前前の兄妹としての距

離感で接しているつもりだが……俺の基準はおかしいのかもしれない。まだ分からないことが多いからな。

「まあ……いいだろう。あくまで兄妹だからな」

「そうですか？」

「ああ」

ということで、そのあとは一緒に食事を取って俺は帰ることになった。

「レイ。泊まってもいいんだぞ？」

「いえ。今日は帰ります。馬車もギリギリ間に合うと思いますので」

「そうか……また、元気な姿を見せてくれ」

「はい。それでは失礼します」

師匠の家を後にする。すでに夕暮れ時は過ぎて、外は真っ暗になっていた。馬車の時間もギリギリになってしまっているので、俺は走って森の外へと出ていこうとしていた。

そんな時だった。

銀色の髪をした少女が手足を縛られて、口には猿轡さるべつわを噛まされていた。意識はあるのか、瞳にはまだ力があるような気がした。周りには黒のローブを着た男が何人もおり、何かを話しているようだった。

「んーーーーーっ!!」

目が合った。

刹那、すぐに彼女が助けを求めているのだと俺は理解した。

これが俺とオリヴィア王女の邂逅の瞬間だった。

第328話 おてんばな王女さま

疾走。

俺は捕らわれている少女を助けるために、行動を起こしていた。間違いなくこれは誘拐の類だろう。少女の浮世離れした容姿からして、貴族のお嬢様と言ったところだろうか。

ローブを羽織っている人間は全部で五人。後方には馬車が控えていた。察するに、ここで彼女を降ろして別の手段で移動させようとしている……といったところだろうか。

ともかく武力行使も辞さないと考えた俺は、相手の懐に潜り込むようにして疾走していく。姿勢を低くして、相手に気がつかれてもすぐに攻撃ができるようにと。

「なんだ……！？」

「追手か……！？」

「いや、さっき撒いた^まだろうっ……！」

「ならこいつは誰なんだよっ……！」

と、俺の存在に気がついたようでそれぞれが慌て始める。会話の内容から分かったが、俺の推測は当たっていたようだ。少女を誘拐して、追手を撒いたばかりといったところだろうか。

「こいつ……っ……！」

魔術。

基本的に魔術の使用というものは、特定の区域を除いて禁止されている。緊急時には使用しても咎められることはないのだが、その中でも攻撃的な魔術の使用は大きな罪に問われる。

だというのに、躊躇なく俺に向かってファイヤーボール火球を放ってくるということはやはり、相手は普通の人間ではないのだと悟る。アストラ特殊選抜部隊にいた時もあったが、貴族の令嬢などをさらって高値で売りつける人身売買などは、裏で非合法に行われている。

すでに人身売買の巨大組織は壊滅したと聞いていたが……その残党だろうか。

「……遅いな」

俺は魔術を使っていないが、相手の攻撃を避けることなど造作もなかった。見ただけではつきりと分かる。相手と俺の間に存在する、絶対的な実力の差というものを。

あの極東戦役の経験は伊達ではなく、魔術を使わずとも相手を圧倒するのは容易だった。

「ぐっ……！！！」

まずは一人。

鳩尾に拳を叩き込んで、意識を刈り取る。それを見て俺が普通ではないことを理解したようだが、もう遅い。魔術の発動は高速魔術クイックであつても、この程度の魔術師ならば一秒以上かかるだろう。

それだけあれば十分だ。

俺は相手の間を縫うようして移動すると、一瞬で意識を刈り取っていく。暴力行為を働くのは些か抵抗はあるが、今回ばかりは仕方がないだろう。

「ふう。こんなものか」

普通の人間よりは明らかに、人に向けて魔術を使うのに躊躇はなかった。それに攻撃的な魔術もいくつか持っていたようだ。手練れも中には混ざっていたので、俺が対処することができてよかったと思った。

そして、震えている少女のもとへと近づいていく。

「大丈夫ですか？」

猿轡と彼女を縛っている縄を相手が持っていたナイフで切り裂く。

「……怖かったっ！！　ありがとう……本当にありがとうございませうっ！！」

少女を解放した瞬間、思い切り抱きつかれる。静かに涙を流しながら、俺のことをギュッと抱きしめてくる。

怖い思いをしたのだろう。幸いなことに、外傷はないようだった。商品価値が高いと判断されて、傷がつかないようにされていたのだろう。皮肉な話ではあるが。

「大丈夫です。自分がついていますので」

優しく背中をさする。嗚咽も止まったところで、彼女の名前を聞くことにした。憲兵に今回の件を通報するにしても、彼女の名前を知っていた方がスムーズに進むと思ったからだ。

「申し遅れました。ボク……じゃない。私は、オリヴィア・アーノルド第二王女。この度は窮地を救っていただき、本当にありがとうございます」

「お、王女さま……？」

「この度は本当にありがとうございました。感謝状に金一封。ぜひとも、お受け取りいただきたいのですが」

「いえ……自分はそんな」

あの後、俺は街に向かうと憲兵に今回の件を伝えた。気絶している誘拐犯たちは、馬車にあった縄で俺が捕縛しておいた。それから事情聴取が行われ、俺が行ったことを伝えた。

暴力行為を働いてしまったが、オリヴィア王女の目撃証言もあり正当防衛ということで話は進んだ。そして、俺は全てが終わったので今から自宅に戻ろうとしたが……流石に、時間はもう遅い。

二十一時を回っており、サーシャさんにはもしかしたら泊まりになるかもしれない……と伝えてあったので別にここで一夜を過ごしてもいいのだが、問題は場所だった。

そう。

俺は今、王城にいる。

アーノルド王国に在るとはいえ王族とは全くの無関係の生活を送ってきた。それこそ、王族の方々の名前を知らないほどには。しかし、オリヴィア王女を迎えにきたメイドと執事の方々にどうしても……と促されて、ついに行く王城で破格の待遇を受けることになった。

そうして今は、謝礼をどうしても受け取って欲しいと言われているのだが、俺はそれを拒否していた。別に助けることは当然である上に、メイドが持つてきている金一封の量が尋常ではないのだ。

それにぜひ、王に謁見して欲しいという話まで出るのだから俺は面喰らっていた。最終的に王城の一室で泊めていただくこと、感謝状は受け取って金銭は受け取らないこと、でまとまった。

のはずだったのだが……。

「レイ！ 本当にありがとう！ ボクは感激だったよっ！」

「あ、あはは……」

オリヴィア王女は俺にぴったりとくっついて離れないのだ。ギュッと腕を絡ませてきて、女性特有の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

どうやら今話している方が素のようで、とても明るいお方だと思っ

「もうねっ！ 凄かったよ！ ギューン！ ビューンって！ レイ
は物凄く強いんだねっ！！」

「えっと……まあ、そうですね。鍛えてきましたので」

「ふふ。あー、本当にかつこよかったなあ……」

うつとりとした表情で俺の一連の戦いを語るオリヴィア王女。王女さまということで無碍にもできず、愛想笑いを浮かべるしかない。またあるうことが、彼女は絶対に一緒に寝るといつて聞かないのだ。

「だめ？」

「自分はその……王族の方と同衾するのは、流石にまずいと思いま
すが……」

ステラと一緒に寝るのは訳が違うのも俺は分かっている。相手
は王女殿下なのだ。一緒に寝るのは流石にまずいのだが……言うこ
とを聞いてくれそうにないようだった。

「大丈夫！ ボクが良いって言ってるから！」

「そうなのですか？」

「うん。その実は……まだ怖くてさ……震えが止まらないんだ。今
日だけで良い。レイと一緒にいてくれると、嬉しいな……」

上目遣いでじつと見上げてくる。その揺れている瞳を見て拒否す
るわけにもいかず、俺は了承することにした。

「ボクはね。よく脱走してたんだ」

二人で横になると、彼女は急に何かを語り始めた。俺は静かに耳
を傾ける。

「王族であることは誇りだけど、窮屈なことも多くてね。それで街に逃げるのが多々あったんだけど……おそらく、誘拐犯はそれを知ってボクが一人で街中で歩いているときに襲ってきたんだ」

「……そうだったのですか」

「うん。縛られて、何もできなくなった時はどうしようかと思ったよ。でもね。レイが助けてくれた。本当の本当に、レイがあの場合にいてくれて良かった」

ギュツと抱きしめられ、背中に暖かさが伝わってくる。オリヴィア王女の体は、まだ少しだけ震えていた。

俺はその時、少しだけ思った。

奪うばかりの人生だった。仲間を守るために、必要以上の命を奪ってきたこの手は誰かを助けることはできないのだと。救いなどないのだと思っていた。

でも、誰かのために行動することはできた。

もしかしたら今までの人生も無駄ではなかったのかもしれない。そんなことを、俺は思った。

「ありがとう。レイ」

感謝の言葉を聞いて思うのは、ハワードの最期の瞬間だ。あの時も俺は感謝の言葉をもらった。俺は誰かに感謝されるような存在になることができているのだろうか。

もしそうなら、俺の人生は　。

翌朝。

俺は自宅に戻ることになった。手厚いお見送りをいただき、最後にはオリヴィア王女が俺の方に近寄ってくる。

「レイ。もう行っちゃうの？」

「はい。帰るべき場所が……あるので」

少しだけ間を空ける。そうだ、今の俺には帰るべき場所がある。自然と出た言葉だが、それは心から思っていることだった。みんな待ってくれているに違いない。

「……また、会えるかな？」

「そうですね。生きていれば、いつかまた会う日はあるかもしれませんが」

敢えて否定はしなかった。

俺が王族と接する機会など今後はないに違いない。しかし、寂しそうに俯いているオリヴィア王女に真実を告げるのは憚^{はた}かられた。

「それでは失礼します」

踵を返す。

「レイっ!!」

大きな声が聞こえたので、振り向いた。すると自分の頬に暖かい感触を感じる。理解するのに一瞬だけ時間を要したが……どうやら、彼女の唇が俺の頬に触れているようだった。

「えっと……その、これは……」

「ふふ。レイはこれでお別れのつもりだけど、絶対にボクはレイとまた会おうよ。これは運命だから」

「運命、ですか」

「うん！ だから、バイバイ。またね」

小さく手を振る。

照れているのか顔に朱色が差していた。

またね、という言葉に対して俺はこう答えるのだった。

「はい。では、また」

自分の心の中の空白が少しだけ埋まったような気がした。

第328話 おてんばな王女さま（後書き）

五章（過去編）ですが、残り四話で終了になります。六章からは二年生編を予定しておりますので、お楽しみにしていただければ幸いです。五章が終了した後は、おそらく春休み編を挟んでから六章（二年生編）に入ります。

また年内の更新は過去編でストップし、年明けからまた再開する予定です。少しだけ（二週間ほど）おやすみをいただければ幸いです。それでは今後とも本作をよろしく願いいたします！

第329話 家族の想い

夏がやってきた。

陽射しはかなり強く、ずっと外にいれば真っ黒になってしまふことだろう。といっても、俺とステラは二人でドグマの森に行くことが多いので日焼けの跡がよく目立つ。

「見てみて、お兄ちゃん！ セミ！ でっかいよ！！」
「おお！すごいサイズだな！」

ステラがわしつと掴んでいるのは巨大なセミだった。ドグマの森の生態系がどうなっているのか詳しくは知らないが、ここは巨大系ヒュージの生物が多い。

魔物だけではなく、昆虫などにも影響はいつているようでステラは自分の手よりも遥かに大きなセミを驚掴みにしていた。ステラとここ一年過ごしてきて分かったのだが、彼女はとても活発で外で遊ぶのを好む。

人形遊びやままごとの類には興味がないらしい。曰く、「やつぱりお外で遊ぶのが一番最高だね！」とのことらしい。俺もサバイバルなどの知識があることに加えて、体を動かすのは好きなので二人で森にこもっている。

サーシャさんには「あまり無理はしないようにね」と言われているので、危険なこととはしない。ステラは魔物と戦いたがっているが、

それは最低限にしてドグマの森をフィールドにして二人で格闘戦をしている。

ステラも色々と技術を学びたい、とのことだった。たので森での戦い方を教えている。それに基本的な体の動かし方や内部コードインサイドの使い方。俺が知っている全てをステラには教えている。

「ふう。今日もいっぱい教えてくれありがとう。お兄ちゃん！」

「ステラもやる気があるからな」

「ふふん！ 私はもつと強くなるもんね！」

胸を張る。

話を聞くと同世代の中では小さい方だが、将来は絶対に大きくなると信じて疑っていないようだ。実際にサーシャさんもルーサーさんも平均身長を優に超えているので、ステラはきっと大きくなるだろう。

「はい」

「ああ」

スツと手を出してくるので、ステラの小さな手を握る。そして俺たちは、今日も帰路へとつくのだった。

自宅に戻るとサーシャさんとルーサーさんが晩ご飯の準備をしてくれていた。今日から二人とも夏期の長期休暇で一週間ほど休みらしい。

全員で同じテーブルについて食事を取っていると、サーシャさん

がパンと手を叩く。

「ステラ。レイ。明日から、旅行に行こうと思うの」

「旅行！ どこに行くのっ！！？」

「……旅行、ですか？」

旅行か。

この四人で揃って遠くに行ったことはまだない。思えば、ステラとはすっかり仲良くなったと自負しているがサーシャさんとルーサーさんとはまだ距離感がある。二人はもちろん、俺に歩み寄ってくれている。問題は俺にあると……それは自覚していた。

「ええ。夏だし、キャンプでもしようかと話していたの」

「ああ。ちょうど母さんも僕も休みだからね。ちょうど良い機会だと思って」

「わーい！ わーい！ みんなで旅行だー！」

ステラはぴんぴんと飛び跳ねて喜びを表現していた。一方の俺といえば、少しだけ考える。せっかくの旅行だというのに、俺も一緒に行つて良いのかと。未だに思ってしまうのは、俺はこの家族……ホワイト家の邪魔をしていないか、ということだった。

みんなは俺のことを家族だと思ってくれている。

しかし、俺はまだ本当の意味で家族だとは思えていない。接し方が分からないと言ったほうがいいのかもれない。ステラとは個人的に仲は良いが、家族全体としての振る舞い方が俺には分からない。

そもそも、振る舞い方を考えている時点でダメなのだと思う。家

族というものは、そんな余計なことを考えて生活はしないだろうから。俺の中にあるのは、自分の思い描く家族ならばこう振る舞うだろう……という予測に過ぎない。

でも、これは良い機会なのかもしれない。いや……もしかして、そのことを考えて今回の旅行を提案してくれたのだろうか。

「レイも大丈夫かしら？」

「はい。問題ありません」

翌日。俺たちは早速、四人で旅立つのだった。

向かう場所はガルディア滝がある森。そこでキャンプでもしようという話になった。旅行といっても王国内なので、それほど遠くはない。俺とルーサーさんが主に大きな荷物を運び、ステラとサーシヤさんは他の荷物を持ってくれている。

この四人で外に出るのは新鮮というよりも……初めてだろう。果たして、ただ旅行をしたいだけなのか、それとも……。

そうして俺たちはしばらく歩を進めて、たどり着いた。目の前にはガルディア滝があり、王国でも最大級と言われている滝はかなりの迫力がある。幸いなことに、他に人はいないようで貸し切り状態だ。

「わーいっ！ おっきな滝だっ！」

「ステラ。父さんと一緒に、テントを組み立てる約束だろ？」

「あ！ そうだった！」

と、ステラがトコトコとルーサーさんの方へと歩いていく。俺もそれを手伝おうと思ったが、肩をトントンと叩かれる。

「レイ。私たちは、枯れ木でも集めましょう？ テントは二人に任せて」

「……サーシャさん。分かりました」

彼女の後をついていく。

サラサラと流れる長い金色の髪を見ると、否応なく師匠のことを思い出してしまう。サーシャさんはとても師匠に似ている。師匠から苛烈さを取り除き、温和な感じを強調すればサーシャさんになると言っても過言ではない。

前を歩いているサーシャさんがくるつと翻る。

「どう？ 家族旅行は？」

「そうですね。新鮮でとても楽しいです」

「ちよつと、真面目な話でもしましょうか」

ふと空を見上げる。木漏れ日が彼女の髪を照らしつける。反射する光はまるで天使の輪のようなものを、サーシャさんの頭に作り出していた。なんだかその光景は、少しだけ幻想的に思えた。

「昔話、聞いてくれる？」

「昔話ですか？」

「ええ。私とリディアの話よ」

「師匠と……」

サーシャさんは後ろに手を組んで、じつと虚空を見つめる。

「私はリディアの姉であることが、ものすごく嫌だったの」

「え……」

「だって、分かるでしょう？ リディアは幼い頃から才能があった。私なんかよりも。ううん。この世界の魔術師の中でも、リディアは最高の才能を持っていた」

「それは……」

肯定するしかなかった。師匠は天才の中の天才。伊達に、史上最年少で七大魔術師に到達していない。

「初めは嫉妬していたわ。それに中等部までは仲も良かったけど、明確に才能の差が出るようになってからは、私はリディアを無視し続けた」

「……」

黙ってその話を聞く。今の優しい雰囲気纏っているサーシャさんからは、考えもつかない行動だった。しかし、彼女も当時は色々と葛藤を抱いていたのだろう。

「飛び級して、拳句には史上最年少で七大魔術師よ？ もう……本当に笑っちゃうわね」

「師匠は本当に凄い人です。自分はずっとそばで見てきましたから」

「ええ。そうね。私は結局、表面的な部分しか見れていなかった。才能が人を幸福にするわけじゃない。そんな当たり前のことに気がつくまで、ものすごく時間がかかってしまった。もちろん、才能は幸福につながるかもしれない。けど……リディアほどの大きな才能は、本人を潰してしまう可能性もあった」

「そう、ですね」

「軍人になってから、リディアはもっと苛烈になった。私と話すと

きは大きな声で大丈夫だと豪快に笑っていたけど、思えばあの時から歯車は狂い始めていた」

サーシャさんの視線は遠い空を見つめているようだった。過去を省みて自分の想いを吐露している……そんな感じた。

「リディアの話は、アビーからずっと聞いていたわ」

「お知り合いなのですか？」

「ええ。割と仲がいいのよ？」

「そうでしたか……」

まさか大佐とも面識があったとは。流石に知らない情報だった。

「そして、あなたを引き取るという話が出たとき、私は思ったの。

絶対に上手くいくわけがないって。当時は私も結婚して、ステラを育てている最中だった。私でも上手くいかないのに、軍人であるリディアに人を育てることなんて、できるわけがない。いやきつと、そう思いたかったのね」

「……」

「戦争が始まってから、やっと私は気がついたわ。リディアが最前線に立って、英雄と呼ばれ始めて、いつか妹が死んでしまうのかもしれない。年齢を重ねて、結婚して、親になった私は途端に死が怖くなった。けど、リディアは帰ってきたわ。たくさん傷を抱えて」

「それは……」

俺も師匠も、あの戦争を経験した人間は全員が心に傷を負った。決して消えることのない傷跡が残っている。それは未だに、癒えることはない。

「私はリディアが生きているだけで嬉しかった。でも、もう歩くこ

とはできないかもしれない。車椅子姿の妹を見て、私は才能の恐ろしさを知った。そしてリディアはずっとそれに向き合ってきたこともわかった」

「あの傷は……俺が……」

「ううん。そんなことないわ」

サーシャさんがゆっくりと俺の方へと近づいてくる。否応なく思いついてしまふ、あの時の記憶。師匠が目の前で弾け飛ぶ姿は、悪夢としてまだ見てしまふ。

「リディアからレイの話はたくさん聞いたわ。引き取ることも、躊躇なんてなかった。妹が守ったあなたを、大切にしないはずがない。そして、一緒に過ごして一年が経過した。レイはやっぱ、とても優しい人ね。ステラともいっぱい遊んでくれて、ありがとう」

「自分は……別に……」

抱きしめられる。暖かさが確かに伝わってくるようだった。サーシャさんは優しく頭を撫でてくれた。

「家族って難しいわね。こんなにも近くにいるのに、分からないことがたくさんある。夫のことだって、ステラのことだって、まだまだ完璧に理解できない。レイのことだって、私は表面上のことしか知らないわ」

「……」

「だから、教えて欲しいの。あなたが何を感じて、どう思っているのか。もう私は後悔はしたくないから」

ふと顔を上げる。サーシャさんは一筋の涙を零していた。それを見て、俺は今までのことを語り始めた。

「迷って、彷徨って、いつか自分の場所があるかもしれないと思って、進んできました。でも、自分は結局何も見つけることはできない。師匠に言われるがままに、進みましたが……まだ分からない。ホワイト家の家族の邪魔をしているのではないか、そんな不安もありました」

「まだ難しいかもしれない。家族になるって、とても難しい。血が繋がっているからと言って円満な家庭になる訳じゃない。でもね。だからこそ、理解しあって、家族になろうとするの。私たちは一人では生きることが、できないから」

ああ。そうだ。ずっと分かっていた。俺は、俺たち人間は一人で生きていくことなど出来はしないと。その言葉をサーシャさんから聞いて、なんだかスツと腑に落ちたような気がした。

家族になろうとする。

俺は結局、逃げていただけだ。相手の気持ちを勝手に分かった気になって、邪魔をしていると思い込んで、逃げ道を作っていた。ホワイト家の一員になるという気持ちが俺には足りていなかったのだ。すぐに家族になることはできない。でも、なろうとすることはできる。たとえそれが、どれだけの時間がかかったとしても。

「……呼び方を、変えてもいいですか？」

小さな声だった。その提案をするのは、あまりにも怖かったから。

「ええ。いいわよ、もちろん」

「では、母さんと」

「ええ。あ、敬語も取ってね？」

「それは……いや。分かったよ、母さん」

「うん。これから改めてよろしくね、レイ」

距離を取ると、握手を交わす。

師匠がどうして俺のことを遠ざけて、ホワイト家に行くように言ったのか。少しだけ分かったような気がした。

深夜。

あれから四人でキャンプを楽しんだ。心も軽くなって、存分に楽しむことができたと思う。川で魚をとったり、みんなで一緒に泳いだりと色々なことをした。

今は深夜になって、全員でテントで寝ているのだが寝付けないので一人で星を見にきていた。

今日は夜も晴れており、満天の空が広がっていた。

「レイ。寝れないのか？」

「……そう、ですね」

やってきたのはルーサーさんだった。やはり、この旅行は俺のためにくれたということが、はっきりと分かった。

「俺のため、ですか？」

「ん？」

「この旅行のことです」

「そうか。やっぱり、サーシャとは話げできたのか」

「はい」

近くにある岩場に腰を下ろすと、ルーサーさんは隣をトントンと叩く素振りを見せてくる。隣に座れ、ということだろう。

「正直な話、僕は初めは反対していた」

「……自分を引き取ること、ですか？」

「そうだ。ステラを授かって、家を買って、仕事をして、これからという時に養子を取ってもお互いに不幸になると思っていたからだ。でも、妻がどうしてもというから了承した」

「……理解はできます」

「けど、あの時の自分の判断は間違っていた」

「え？」

顔を上げる。じつと下を向いていたのだが、予想外の言葉が出たからだ。

「僕はレイに会えて良かったと思っている」

「それは、どうして……？」

「息子が欲しかったんだ。実は、一緒に息子とキャッチボールするのが夢でね」

「えっと……それは、関係ある話なのですか？」

「ああ。君はとても優しい男の子だった。それに、私たちは共働きだろう？ 妻には家でステラのそばにいて欲しいが、私一人の収入ではどうしようもなくてね。恥ずかしい話だ」

苦笑いを浮かべ、鼻を軽く掻いている姿をみて、初めてルーサー「ホワイトという人間を知ることができたような気がした。そうか。こんな風な表情もするのか、と。」

「そんな時に、レイがやってきた。ステラは元気な子だけど、人見知りだね。それにずっと寂しがっているのは知っていた。そんな時に、レイと出会ったステラは大きく成長した。もう陰りも見えない」

「自分もステラには、色々と与えてもらっています」

「うん。この一年、二人を見て思った。兄妹になるのに、血の繋がりは必要じゃない。なら、家族だって同じだろう？ 家族は何を持って家族になり得るのか。答えは簡単さ」

「簡単、なのですか？」

「ああ」

簡単、というのが今の俺には全くその答えなど分かりはしなかった。

「お互いが家族と思えばいいだけ。それだけ。でも、それが難しい」
「そうですね。それは……その通りだと思います」

「妻は言っていたよ。レイと家族になりたいと。今回の旅行も、レイと話す機会を設けるためだった」

「なんとなく、察してはいました」

「ああ。レイ。これから教えて欲しい。何が好きで、何が嫌いなのか。私たちには、歩み寄りが必要だったんだ。もう距離感を持つて接するのはやめよう。まずはそうだな、キャッチボールでもしようか」

なぜか腰の後ろからスツとグローブが出てきた。ボールもある。まさか、準備していたのだから。

「暗いので、夜はできないと思いますが」

「はははっ！ それもそうだ！」

ルーサーさんはスツと立ち上がる。そして、俺にも手を伸ばしてくる。

「サーシャのこと、母さんと呼ぶことにしたんだろう？　なら僕も
そうして欲しい」

「父さん、ですか？」

「敬語はいらない」

「同じことを言われました」

「ははは。夫婦だからね。では改めて、よろしくレイ」

「父さん。うん。これから、よろしく」

握手をする。

形だけなのかもしれない。偽物なのかもしれない。形式的に呼び
方を変えただけで、大きく劇的に変わるわけではない。

でも、俺に必要なだったのは変わる気持ちだったんだ。

そのことを父さんと母さんに教えてもらった。

心にある空虚さが、また満たされたような　そんな気がした。

「楽しかったね！」

「そうだな」

「お兄ちゃん。ちょっと変わった？」

「え……」

帰り道。ステラがそんなことを言ってきた。人の変化の機微には

敏感ということだろうか。

「そうね。レイは変わったわ」

「ああ。そうに違いない」

後ろから母さんとお父さんが俺の肩に手を置いてくる。ステラはその姿をみて、ぷくと顔を膨らませていた。

「あ！ 三人で何か内緒にしてるんでしょ！ 私にも教えて！」

「それはできないわね」

「ああ。できないな」

ギュツと拳を握りしめて、胸に当てる。この感情をなんと呼べばいいのか、まだ分からない。けれど俺は、前に進むことができていた。それだけは間違いなかった。

それと同時に、あの覚悟も決まった。

俺は師匠の跡を継ぐ。

ずっと前から考えていたことだった。師匠はまだ氷剣の魔術師ではあるが……もう満足に動けない。

そうだ。

家族のことと同じだ。俺は自分で前に進んでいくべきなのだ。

そうして俺は覚悟を抱いて帰路へとつくのだった。家族の笑顔と共に。

第329話 家族の想い（後書き）

過去編、残り3話です。最後までお楽しみください！

第330話 新たなる冰剣

「師匠。今日はお話があつて伺いました」

「……その顔、もしかしてあのことが？」

「お察しの通りです。自分は師匠の跡を正式に継ぎたいと思っています」

旅行から帰ってきた翌日。

俺はすぐに師匠のもとへ向かった。冰剣の魔術師を俺が引き継ぐために、師匠の許可を貰おうと思ったからだ。

ただし、簡単に許可をもらえるとは思っていないが。

「魔術領域暴走はどうする？」
オーバーヒート

「時間が経てば回復するかと」

「能力が完全に使える訳じゃないだろう」

「しかし、自分はそれでも冰剣の魔術師として師匠の跡を継ぎたいのです。それが自分のやるべきことだと思います」

じつと師匠が俺の瞳を見つめてくる。テーブルを挟んで座っており、目の前にある紅茶の香りが鼻腔に抜ける。紅茶の香りを楽しむことなく、俺は師匠と向き合う。

これから先の人生がどうなるかなんて分からない。俺はまだ迷ってばかりだ。でも、前に進むことはできる。冰剣の跡を継ぐのは、その初めの段階だった。

「……協会の方からも言われていた。私がこうなってしまった以上、新しい七大魔術師候補を紹介して欲しいとな。それに極東戦役で二人の七大魔術師を失い、その後釜も必要だった」

師匠は軽く紅茶に手をつけながら話を続ける。

「二人の穴埋めは、アビーとキャロルがすることになっている」

「そうだったのですか。初耳です」

「ああ。まだ公表されていないからな。そして、私の抜けた穴をどうするの……という話がちょうど上がっていた。もちろん、レイのことは頭にあった。魔術領域暴走があるとはいえ、魔術そのものを失ったわけではないからな」

「はい。限定的ならば力は使えるかと」

「そうだな。いや、結果的にお前がこうして自分の意思で求めるのなら、認めるつもりだった。どうやら姉さんのところでうまくやっているようだな」

「そう……ですね。少しずつですが、家族というものが分かってきたような気がする」

「そうか。それは良かった」

笑みを浮かべる。

もう苛烈な師匠の姿はない。とても優しい笑顔を俺に向けてくる。

そして俺は師匠から推薦状を受け取った。魔術協会の方にも話を通しておいてくれるらしい。

「レイ」

帰る間際。師匠に呼び止められる。

「はい。なんでしょうか」

「七大魔術師になるとはどういうことか。それは、お前自身が見つけていけ」

「はい」

「私の跡を継いでくれるのは素直に嬉しい。でも、これからは自分で考えて生きていくといい」

「分かりました。それでは、失礼します」

ペコリと頭を下げ去っていく。

それから一週間後。俺は魔術協会に呼び出されることになった。

「ここか……」

到着した。魔術協会の存在は知っていたが、こうしてやってくるのは初めてだった。確か今日は、新しい七大魔術師の顔合わせも兼ねて全員が集まることになっているとか。

目の前にそびえ立つ大きな白い建物に入っていく。まずは受付で会長に会いたい旨を伝える。案内されたのは最上階だった。俺は一人で階段を上がっていくと、なぜか最上階には彼女が立っていた。

「レイ？」

「オリヴィア王女……？ どうしてここに？」

「やっぱり。そっか、新しい人ってレイだったのか」

絹のように滑らかな銀色の髪を靡かせ、目を見開いていた。相変わらず、とても美しい人だと思うが……どうしてオリヴィア王女がここに？

「七大魔術師が入れ替わる。そこで調印式も兼ねるから、ボクが代理でやってきたんだ。お父様とお母様、それに他の兄妹たちは別で用事があってね」

「……そうだったんですか」
「それにしても」

半眼でじーっと見つめてくると思いきや、彼女は思い切り右腕に抱きついてきた。

「これって運命でしょっ！」

「えっと……」

「ねね。だよね？ ね？」

「その……偶然かと」

「いいや、偶然じゃないよ！ それにレイがどうしてもあんなにも強かったのか。はつきりとしたよ。新しい冰剣はレイなんだね」

「それは……そう、ですね」

言い淀む。改めて俺が新しい冰剣になるということの重さを感じ取る。師匠は獅子奮迅の活躍をして、七大魔術師最強と歌われていた。その功績を背負うことの大変さを、今更になって痛感する。

「実はレイのことちょっと調べちゃったんだ」

打って変わって雰囲気が落ち着く。スツと俺の右腕から離れると、オリヴィア王女は後ろに手を組む。

「リディアの弟子だったんだね。それにあの戦争で活躍したことも聞いたよ」

「はい。その通りです」

毅然とした態度で肯定する。俺の過去は決してなくなることはない。だからこそ、それに向き合う必要があると今は思っている。もう逃げるのはやめにしたいから。

「……うん。レイ、月並みな言葉になるけど頑張ってね。じゃ、一緒に走ろうか！」

「分かりました」

そして会長の執務室に入るとすでにそこには、二人の人間が立っていた。

「レイちゃん！？ どうしてここにっ!？」

「キャロルか。久しぶり」

「久しぶりだけど、まさか……」

「ああ。師匠の跡は俺が継ぐことになった。推薦状もある」

「そっか……レイちゃんは、そっちの道を選んだんだね」

寂しそうな顔をするキャロルだが、すぐに切り替える。

「うん！ 分かった。レイちゃん、これから一緒に頑張っていこうね！」

「ああ。よろしく頼む」

キャロルと軽く話をすると、その隣にはガーネット大佐も立っていた。

「大佐もお久しぶりです」

「もう大佐ではないがな。元気にやっているか？」

「はい」

「リディアに聞いたが、レイが継ぐことになったか」

「これからよろしく願います」

頭を下げる。少しは反対されると思ったが、そんなことはないだようだった。

二人の間を抜けていき、俺は机に座っている男性と向かい合う。彼こそが、この魔術協会の会長なのだろう。

「さて、リディアから話は聞いているが……君がレイ・ホワイトか」

「はい。レイ・ホワイトと申します」

「私はグレッグ・アイムストーン。魔術協会の会長をしている。それで、君の経歴は確認した。使用できる魔術もまた、リディアに教えられている」

「そうでしたか」

「正直なところ、私は心配している。たとえ七大魔術師になる能力があっても、君のような子どもに任せてもいいのかと。が……今はそうも言ってられないのが、現状だ」

「というと……？」

会長は見ている資料からパツと目を離すと、顔の目で両手を組む。

「極東戦役で失われた七大魔術師は早急に補充しなければならないからだ。七大魔術師とは象徴であり、抑止力でもある。各国にその存在を示さなければならぬのだ」

「……なるほど」

「だからこそ、ガーネットとキャララインを七大魔術師にするのは至極当然のことだった。二人ともに能力は十分になる。ただリディア・エインズワースの穴を埋める魔術師は、私には心当たりはなかった。そこで彼女に君を紹介された。極東戦役でリディアの弟子が活躍しているとは聞いていたが……」

背に腹は変えられない、と言ったところだろうか。会長は顔をしかめていた。組んでいた両手をギュッと強く握りしめると、彼は力強い視線を送ってくる。

「私の個人的な感情では、認めたくはない側面もある。だがそうも言ってられない状況になっている。だから新しい冰剣としてレイ・ホワイト。君を認めよう」

「ありがとうございます」

「存在は公表しないが、それでも七大魔術師としての責任と矜持を持つて欲しい」

「はい」

それから調印式が執り行われることになった。それぞれ、新しい七大魔術師になる人間が血判を押していく。オリヴィア王女もまた、同様に。無事に書類上の手続きは完了した。

だが、まだ全員が集まっていないのでどうしたのだろう……と思っていると、バンツと扉が勢いよく開いた。

「すまんの！ 遅れてしまったわ！」

幼い少女だった。真っ赤な髪に真っ黒なコートを羽織ってやって来たのは、七大魔術師が一人。比翼の魔術師だ。その存在だけは師匠に聞いていたが、改めて実際に見るとにわかには信じられない。

「おお！ お前がリディアの弟子か！」

「はい」

「フランソワーズ・クレールじゃ。フランで良いぞ。よろしくの」
「よろしくお願いします。自分もレイで構いません」

俺の右手を握るとそれを上下に思い切りブンブンと振る。師匠曰く「あいつは何をするか分からない……気を付けろよ」と言われていたが、今のところは普通だった。

「グレッグ。他のやつはどうしたんじゃ？」

「……燐煌、絶刀、虚構は来ないでしょう」

「む？ マリウスが時間通りに来ないのは珍しいの」

「どうやら極東戦役が終わってからは、世界中を旅しているようで今はどこにいるのか、不明ですよ」

「そうか！ ま、あいつはしっかりとした人間じゃからな。大丈夫じゃろう」

ガハハ！ と大きな笑い声が室内に響く。

今の話を聞くに他の七大魔術師には今回は会うことはできないようだった。全員集合とは聞いていたが、師匠もよく集会をサボっていたしよくあることなのだろう。

その後、フランさんはキャロルとガーネット大佐の二人に挨拶をすると颯爽といなくなってしまった。本当に嵐のような人だった。

「それでは、新しい七大魔術師として三人を正式に認めよう」

「はい」

「はいはい！」

「分かりました」

会長の前に、並んで改めてお言葉をいただく。

「キャロラインは幻惑。ガーネットは灼熱。そして、レイ＝ホワイ
ト。君は氷剣を継ぐ形になる」

「はい」

「また定期的に招集などはするが……まあ、ご覧の通りサボりが多
くてね。君たちはしっかりと来てくれることを祈るよ」

と、苦笑いを浮かべる会長を見て、なかなか苦勞しているのだな
と俺は思った。そして全員で部屋を出ていくと、ずっと黙っていた
オリヴィア王女が右腕にギュッと抱きついてくる。

「レイ！　ねね！　今日暇！？」

「まあ……今後の予定はありませんが」

「やった！　遊びにいこ！　ね？」

まあ……別に時間的な余裕はあるので、了承してもいいのだが。
そう思っていると、キャロルがその会話に入ってくる。

「オリヴィア様、ダメですよ？　この後も、予定がありますよ
ね？」

「げ……キャロル。まさか……」

「はい。王城に連れて戻るように、言われていますので」

ニコリと笑みを浮かべるが、目は完全に笑っていない。キャロル
が王族と繋がりがあるのは初めて知ったが、顔はかなり広いからな
おそらくは七大魔術師関連で、何か伝手のようなものがあるのかも
しれない。

「いーやーだー！ レイと遊びたいー！」

「うふふ。だめですよ。レイちゃんとは今日はお別れしてください」
「うわああああああっ！」

キャロルがヒョイツとオリヴィア王女を抱えて、俺たちにウインクを送ってくる。そして軽く手を振ってから二人は消えていった。

ここに残されたのは俺と大佐だけだった。いや、もう大佐ではないのだが……なかなか抜けきらないな。

「レイ。帰るか」

「はい」

「リディアから色々と聞いているよ」

「そうなのですか？」

「ああ。あいつもレイのことを心配しているからな」

二人で話をしながら階段を降りていくが、魔術協会の前で別れることになった。まだ魔術学院の方で仕事が残っているらしい。

「では、私はここで」

「はい。失礼します」

踵を返す。今日は俺が晩ご飯を作る日なので、どうしようかと考えながら歩いていると後ろから大きな声が聞こえてきた。

「レイ！」

振り向くと大佐が俺に向かって手を振ってくれていた。きっと、彼女なりの激励のようなものだろうか。

改めて俺は深く頭を下げる。彼女は満足そうに笑みを浮かべると、俺とは逆方向に進んでいった。

氷剣の魔術師。

今の俺にとってはあまりにも重すぎる称号だ。しかしいつか……その重さを全てを背負うことができるような人間になることができたらいいと。

そう願った。

第331話 アーノルド魔術学院へ

また一年が経過して、新しい春がやってきた。

家族とは上手くやれていると思う。今となつては、父さんと母さんと呼ぶことに違和感を覚えない。ステラも俺によく懐いてくれ、いつも学校であつた話をたくさん聞かせてくれる。

ステラは中等部に上がり、体も成長期ということで成長しつつあった。胸が大きくならない、と一緒に風呂に入つた時に相談を受けたがきつと大丈夫だと言つておいた。

女性は何かと胸の大きさを気にするようだが、ステラは遺伝的に大丈夫だからと言うととても喜んでいた。

いつか魅力的な大人な女性になるのが夢らしい。でも、体つきなど些事に過ぎないだろう。ステラは今のままでもとても魅力的な女の子なのだから。

生活にも慣れてきた。家族とも良い関係を築くことができる。

不満などない。

あるわけがない。

だが、どうしてだろうか。この心にある空虚でがらんどうな空白は、決して埋まることはない。俺に足りないものは何か、そんなこ

とを考えるが答えが出るわけもない。

空虚な日々を送っていた。表面上は明るく振る舞っているが、気力も徐々に落ちていった。自分の行先がまた見えなくなってしまうた。

そんな時、俺は師匠に呼び出された。手紙が家に届いてそれを読むと、大切な話があるから家に来て欲しいとのことだった。

師匠に会うのは久しぶりだが、活躍はもちろん耳にしている。研究者としての活動を本格的に始めた師匠は、二重コード理論を発表した。もとは俺の報告書をもとにしたものではあるが、万物に二つのコードがあると提唱し体系化したのは師匠の功績である。

俺の存在はきっかけに過ぎない。

他にも発表する論文は高い評価を受け、今となっては研究の世界でも有名になってしまった。やっぱり師匠は天才だ。その事実がなんだか俺はとても嬉しかった。

「春か……」

森の中を歩いていく。

師匠の家の前までやってくると徒歩で移動する。なんだかこの森の景色が懐かしと思う。まだそれほど、時間は経っていないというのに。

「レイです」

「レイ様。ご無沙汰しております。どうぞ、中へ」

カーラさんに案内されるとリビングには師匠がいた。車椅子に座っている姿には未だに慣れない。

「レイ！ また大きくなっただか？」

「どうでしょうか。身長は伸びたかもしれませんが」

笑顔で迎えてくれる。そして対面に座ると、カーラさんが二人分の紅茶とパウンドケーキを持ってきてくれた。話を聞くにこの家では家事の全てをカーラさんがしているそう。

紅茶だけでなく、ケーキもとても美味しい。王国の一流の店にも匹敵するほどだろう。

初めは他愛のない話をしていた。俺の日常や師匠の研究者としての活動。笑いが溢れ、俺もそれに合わせていた。しかし、どこか自分の笑いを偽物のように感じてしまっていた。

「レイ。本題に入る」

「はい」

真剣な表情になる師匠。

どうして彼女が俺をここに呼んだのか。その話を聞くために、俺も気を引き締める。

「レイ。学院に行け」

「学院、ですか？」

その提案の意味が分からなかった。どうして俺が今更、学院など

に行く必要があるのか。

「そうだ。この王国にある、アーノルド魔術学院だ」

「学生になれと？」

「そうだ」

「どうして？」

学生？

俺が学生になるのか。どうして今更、学校に行くのか全く理解できない。勉強に関していえば、幼少期からの師匠たちの教えもあり、今更学院で学ぶことなどない。

それに魔術は言うまでもないだろう。確かに、魔術領域暴走あるとはいえ、全く使えないわけではない。学院に入学する最低基準は超えることはできるだろう。

そんなことは師匠も分かっているだろう。だというのに、学院に行けと言ってくる。俺の手は血に塗れている。極東戦役で敵と仲間の血を浴び続けてきた。そんな俺が、普通の人間の中に混ざって学生になる？

そんなことが許されて良いのか？

「行けばわかる。言葉だけでは、理解できないことだ」

「そう……そうですか」

言葉だけでは理解できない何かがあるということなのだろうか。師匠の言うことは、いつも正しいと思っている。たまに突拍子もないおかしいこと言ったりもするが、真面目な時は正しいこと

しか言わない。

けれど俺には今の師匠の言葉が正しいとは思えなかったが……今更何をするにしても、俺は行先などない。もしかして師匠の言う通り行けばわかるのかもしれないのなら、行ってみても良いかもしれない。

師匠はふと窓越しに空を見上げると、こう言った。

「レイ。お前はきつと　そこで自分自身を見つめ直すことができるだろう。私のもとを離れられるからこそ、見える景色がある」

呆然と師匠の言葉を聞いていた。

最後に分かりました、と告げてから俺は家に戻って行った。諸々の手続きは師匠がしてくれるらしい。来年の二月にある入試に備えて今年一年は勉強するといったとも言われた。

帰宅する途中。

馬車から降りると、幾度となく通った獣道を進んでいく。

もっ日も暮れつつあり、星が微かに見える。

今の俺は、師匠の言葉の意味が全く分からなかった。

「レイのやつ、ボーツとしてたな」

「はい。心ここにあらず、という感じでしたね」

レイが去った後、リディアとカーラは先ほどの話をしていた。そもそも、どうしてリディアが学院に行くように提案したのか。実は彼女の一存で、そのように判断したわけではない。

「姉さんの言う通りだったな」

そう。レイが来る数日前に、リディアの姉であるサーシャがこの家にやって来ていたのだ。相談内容はレイの今後について。

最近では家でもぼーっとしていることが多く、笑う時も無理をしているようだ。

そこで二人で話し合った結果、レイには同い年の友人が必要なのではないか。学生としての時間が必要なのではないか、と言う結論に至った。

「さて、アビーに頭でも下げてくるか」

「今からですか？」

「ああ。準備をしてもらえるか？」

「かしこまりました」

そしてリディアは、アビーに話をするために家を出ていくのだった。全てはレイの将来のために。

入試は無事に突破することができた。一年近く準備する時間があったので、十分すぎるほどだった。魔術の試験の方はギリギリだったが、そこは筆記試験でカバーしておいた。

父さんと母さんは俺が全寮制の魔術学院に入学することを了承してくれた。俺としては、やっと本当の家族になれつつあったのだから、家を出ることは心苦しかった。

しかし、家族はみんな俺の合格を喜んでくれた。たとえ離れることになっても、家族であることには変わりはないと……そう言うてくれた。

一方でステラはものすごく不機嫌になっていた。

「ステラ。喜んであげないと」

「そうだぞ。レイが無事に合格したんだから」

「……うん」

俺としては兄冥利に尽きる話なのだが、どうやらステラは俺と離れ離れになることが寂しいらしい。

「お兄ちゃん。合格おめでとつ」

「ああ。ありがとう」

「……ぐすつ。本当に行っちゃうの？」

「……俺も心苦しいが、行くよ」
「そっか。お兄ちゃん、休みには帰って来てね」
「もちろんだ」

ギュツと小さなステラの体を抱きしめる。

この時は何か予感があった。確かに俺は空虚な日々を送っていたが、学院に入ることですっかり新しい何かを見つけることができるかもしれないという予感。

その後、師匠に制服姿を披露するととても喜んでくれた。師匠の笑っている顔を見て俺も嬉しく思った。

今までの人生。紆余曲折あった。

流されるままに進んできた人生だった。与えてもらっただけだった。今回の入学の件だってそうだ。でも俺は、自分の意志で決めた。前に進みたいと、願っていたから。

いつかどこかで、自分の居場所を見つけられるかもしれないかもしれないと思っていたから。

また入学に際して俺が一般人であるということが問題になるかもしれないとガーネット大佐と師匠に言われた。俺の戸籍自体は師匠に引き取られた時のままで、その時に一般人として登録したものが残ってしまっていたらしい。

後になって色々とうにかしようにしたらしいが、気がつけば貴族の間で噂になりどうしようもなくなってしまうた。

貴族至上主義の学院。そこに飛び込むのは辛いこともあるかもしれないとも言われたが、別に良かった。

他人にどう思われようとも、俺の存在が変わることなどないから。

「よし」

早朝。

すでに荷物は寮へと送った。あとはこの家を出ていくだけだった。

制服に着替えてからリビングに向かうと、すでに家族のみんなは起きていた。

いつものように朝食を取って、いつものように雑談をする。

そして、玄関へと向かう。

俺はゆっくりと靴紐を結ぶと立ち上がった。

「いいことレイ。つらい時は、無理をしなくてもいいのよ」

「母さん。ありがとう、心配してくれて」

「レイ。色々もあるかもしれない。でもお前にはもう、家族がいる。それだけは覚えていて欲しい」

「父さんも……ありがとう」

「お兄ちゃん！ 来年には私が行くから！ 待っててね！」

「もちろんだ」

家族の言葉を受け取って俺は、ドアを開ける。

「行ってきます」

この先、どんな出会いがあるのだろうか。

同い年の友人など俺にはいない。でももしかしたら、これからできるのかもしれない。ずっと一人で孤独な学生生活を送る可能性もある。逆に、かけがえのない友人たちがこんな俺にもできるのかもしれない。

可能性は無限大だ。今はまだ空虚な人間だが、どうせ考えるのなら素晴らしい未来を想像しよう。自分の居場所が見つかると思じて進んで行こう。

そうして俺は、眩い光に包まれていくのだった。

第331話 アーノルド魔術学院へ（後書き）

ということとで過去編の過去の話はここで終了です。

次回は時間軸をもとに戻してのエピローグになります。五章は半年もかかってしまいましたが、ここまでお付き合いいただき本当にありがとうございます。

第332話 旅立ち

「レイ。改めて、これからよろしく頼む」

「いえ。こちらこそ、師匠に会えることを楽しみにしています。それでは失礼します」

一礼をする。

師匠が学院にやってくることになった。今思えば、とても不思議な感覚だ。過去、俺たちは同じ部隊にいる仲間だった。極東戦役を経て、大切なものを手に入れたと同時に失うものも多かった。

自分の行く末など分なくなるほど、心も体も傷ついてしまった。

一瞬のようで長い時間。俺は過去のことを思い出していた。人生は長いようで短い、という話を聞いたりするがそんな感覚だろうか。

師匠たちと出会ってから十年が経過した。十年といえばそれなりの時間になるが、今の俺にとってはとても短く感じた。

そして俺は師匠たちに別れを告げて一人で寮の自室へと戻っていく。

「……久しぶりに、行くか」

ボソリと呟く。

新しい日々がこれからまたやってこようとしている。この一年は本当に充実した一年だった。魔術学院に入学して不安に思っていることもあった。しかし、かけがえのない仲間と出会うことができた。人は一人では決して生きていくことはできない。

当たり前のことを俺は友人たちから改めて教えてもらった。師匠たち大人にもとても感謝している。そして、この学院で知り合った全ての人にも感謝している。きっと俺一人では、何もできなかっただろうから。

俺は学院で経験したことを伝えたい人がいた。今日はもう遅いが、明日からは三学期が始まってしまふ。行くとしたら、今しかないだろう。

俺は慌てて自室に戻ると、準備をしてから出ていく。

「エヴィ。少し出てくる」

「おい、レイ。もう門限は……いや、俺が誤魔化しとく。行つてこい」

「助かる」

エヴィは詳しく聞いてこなかった。俺の雰囲気から察してくれたのだろうか。本当にいい友人を持ったものだ。

学院から抜け出すようにして出ていく。時間はそれほど遅くはないので、街灯はまだ点灯している。まず向かうのは花屋だった。今ならばギリギリ間に合うかもしれない、と思って走っていくとギリギリ間に合った。

そこで真っ白な花を複数購入。それを持って向かう先は……墓場だ。

そう。俺がいま会いたい人は、ハワードだった。

ハワードの墓には極東戦役が終わってから一度だけ行ったきり。そこから先は、自分の過去に向き合うことが怖いと思ってしまい、行くことができていなかった。

でも今なら大丈夫だと思って俺はハワードの墓へと向かっていく。

墓場についてハワードの墓へと歩みを進めっていると、一人の男性とすれ違った。会釈をされるので、俺も丁寧に頭を下げる。長い栗色の髪を後ろでまとめ、真っ黒なロングコートを羽織っていた。

夜ということもあって顔はよく見えなかったが、どこかで会ったような気もしたが……気のせいかもしれない。

そして、ついにハワードの墓の前にやってきた。まずは持ってきた花を置こうとすると、すでに新しい花がそこにあった。まさか、さっきすれ違った人が置いた花だろうか？

それに重ねるようにして白い花を飾る。

「ハワード。定期的に報告に来るって言ったけど、申し訳ない。ここに来るのに、また長い時間がかかった……」

この場所にやってくるのは、約四年ぶりだった。ここ最近の夜は曇っていることが多かったのだが、今日はタイミングよく晴れてい

た。月明かりに照らされながら、俺はハワードに語りかける。

「俺、学生になったよ。アーノルド魔術学院の一年生になった。想像できるか？俺が学生だなんて……戦争で数多くの命を奪った俺に学生になる資格なんてない……そう思ってたよ」

どうしてだろうか。

ハワードの前だったらいつともよりも自然に自分の弱さを言葉にすることができた。

「特殊選抜部隊アストラルでの時間もかけがえないものだった。みんな大切な仲間だった。もちろん、今もその気持ちに変わりはない。あれから俺は彷徨い続けていたよ。血に塗れた俺が、どこにたどり着くのか。自分でも分からなかった。そんな時、師匠にアーノルド魔術学院に行くように言われた」

ハワードはもしかして喜んでくれているのかもしれない。いやきつと、ハワードなら俺の新しい旅立ちを祝福してくれるに違いない。あいつは本当に仲間思いの人間だったから。

「初めは周りの人に合わせる事ができなかった。普通の学生つてやつが分からなかった。改めて思うが、浮いていたと思う。俺にとって、普通のありふれた世界は浮世離れた場所だった。けど……そんな俺を受け入れてくる人たちがたくさんいた。同い年の友人にとてもよくしてくれる先輩たち」

一人一人、俺は出会ったきた人たちを紹介していく。どんな人間で、俺にとってどれだけ大切な人なのかを。

触れ合ってきた心と心。

俺は戦場では学ぶことのできなかった、大切なものを学ぶことができた。ハワードに伝えていった。

「ハワード。多分俺はきつと、勝手に壁を作っていたんだと思う。どうせ自分なんて、こんな俺にまともに生きる価値なんてない。自暴自棄になつていたのかもしれないが、学院で友人ができて改めて思ったよ。特殊選抜部隊アストラルのみんなと出会えたからこそ、友人たちの大切さが理解できた。ハワードはいつも俺に色々教えてくれたよな。あ、筋トレもちやんと継続してるよ。それから」

俺とハワードの空白の四年間を埋めるようにして、たくさんのことと語った。目の前に彼がいるなら笑ってくれるに違いない。

なあ、ハワード。

俺はやつと前に進むことができたよ。

たくさん傷ついて、たくさん泣いて、たくさん後悔した。

生きる理由なんてない。それはきつと絶望だと思っていた。

理由なき人生で、人の命を奪うだけの俺の存在は罪だと思っていたよ。でも、それでも、周りの人のおかげで自分の罪とも向き合える気がしている。命を奪い続けた俺が何をすべきなのか。

その答えも見つかった気がする。

「フロールさんと大佐は結婚したよ。結婚式は凄かった。俺もいつ

か、あんな風に結婚できたらいいなと思うほどには、素晴らしい式だった。でも、笑えるのは大佐はフロールさんの尻にしかれているらしいとか。またその話も、仕入れとくよ」

今度は特殊選抜部隊の話に入る。ハワードはみんなの動向も気にしているだろうから。

「デルクは……エヴィと少しは向き合えることができたらしい。実は今、俺はデルクの息子と同じ寮で暮らしてる。人生どうなるか、分かったもんじゃないよな？」

微かに笑いを浮かべる。

そして、最後に師匠たちの話をすることにした。

「師匠、アビーさん、キャロルは軍を辞めたよ。アビーさんは学院長、キャロルは俺の担任。まあ……キャロルはいつも通りうるさいけど、いいやつだよ。たまに俺のことを襲ってくるけどな。師匠も来年度から学院に来るらしい。アビーさんは……ハワードのことをまだ想っている、俺は考えてる。なあ、ハワードはアビーさんのことをどう思ってたんだ？俺は恋愛のことがまだよく分からない。そのことをハワードにも教えてもらいたかったな」

語ることは、全て言葉にしたと思う。

俺はふと空を見上げた。

眩い星々が煌めいていた。昔は星空を楽しむ余裕なんてなかった。世界の美しさを理解する暇などなかった。

しかし今は、少しだけ分かる気がする。

「また来るよ。今度はそうだな……近いうちに。じゃあ、また」
踵を返す。

と、その瞬間。肩に微かな重みを感じた。トン、と誰かが俺の肩を優しく叩いた気がしたのだ。

振り返る。

そこには誰もいない。誰もいないが、人の気配を感じたような気がした。

もしかして、ハワードが祝福してくれているのかもしれないな。

「……よし」

進んでいく。

明日から三学期だ。それが終われば短い春休みがやってきて、ついに俺は二年生になる。二年生になればステラやマリア、それにオリヴィア王女も入学するという話を聞いている。

新しい日常に想いを馳せながら、俺はハワードのもとを後にするのだった。

もう迷いなどありはしなかった。

第332話 旅立ち（後書き）

第五章 追憶の空 終

第六章 新しい世代 続

・あとがき

以下長文になります。ご容赦ください。

ということ、ついに過去編が終了しました。いかがでしたでしょうか？

過去編は半年に及ぶ長期間の連載になりました。冗長なところは相変わらずで、今回は設定が矛盾しているところ（年齢やその他諸々）もあり、大変申し訳ありませんでした（時間あるときに修正します……）。

過去編ではレイがどのような人生を歩んできたのかという話をメインにしましたが、まだ明かされていない設定もありつつ……今後はその点も含めて大きく展開していけたらなと思っております。

また、実は10月の頭からストックが尽きておりました更新する日に更新する話を書くという暴挙を続けておりました。本業の仕事に加え、複数の書籍化作業、漫画が発売するに伴い特典を書いたりなど多忙を極めておりましたが、読者の皆様が待っていることを思っただけでなんとか頑張らせていただきました。本当につらくて大変でしたが、皆様のおかげで最後まで過去編を書くことができました。拙い点もありますが、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

氷剣の今後についてですが年内の更新はこれでストップし、年が明

けてから二年生編を開始したいと思います。少しでも休みをください。春休み編はやろうと思いましたが、過去編が長かったのですぐに六章に入らせていただきます。

それに伴い、本日から年内までにいただく感想には返信させていただきます。ちなみに返信はしておりませんが、いつも感想には目を通しております。本当にありがとうございます！

約二週間と短い期間ですが、過去編の感想などをいただければ幸いです。今後は章の終わりに数日間感想を返信する時間が出来ればなーと思っております。

次は書籍の宣伝になります。

【氷剣の魔術師が世界を統べる】ですが、原作小説は「講談社ラノベ文庫様」より1巻と2巻が発売中です。是非、このWeb版を長く続けていくためにもよろしくお願いいたします。売り上げが本作を継続するのに（書籍版、Web版含めて）切実に関わってきますので、まだ未購入の方は是非ともよろしくお願いいたします……！既読の方でも楽しめるように仕上げておりますので、この年末にでもお読みいただければ幸いです。

コミックスは現在、第1巻が発売中です。迫力のある素晴らしい作画で描かれる漫画の方も、是非ともよろしくお願いいたします。

また実は……コミックス2巻は年明けの1月8日（金）発売予定です！Amazonさんなどでは予約も始まっておりますので、よろしく願いますー！

その他の情報は適宜、Twitterなどで共有できればと！是非、フォローお願いします！

Twitterアカウント名【御子柴奈々】【@mikoshibanana】

それと、非常に恐縮ですが……下にスクロールすると」
という欄があり、最大で を5つまで入れることができます。

『過去編面白かった!』『二年生編も期待してる!』……などなど
思われて、まだ評価していない方は、是非 での評価にて応援して
頂ければ幸いです。ブックマーク登録もお待ちしております!

皆様の応援が、執筆への大きなモチベーションになりますので、も
し良ければお願いいたします!

それではまた二年生の六章でお会いしましょう。

第333話 春の訪れ

春。

無事に春休みも終わり、ついに春がやってきた。俺はいつものように早朝に目が覚めると、すぐに準備をしてからランニングへと向かう。

ここ最近はずっと肌寒かったのだが、徐々に暖かくなってきている気がする。

「ふっ……ふっ……」
「はっ……はっ……」

いつものように朝からエヴィと二人で軽く筋トレに励む。もちろん、寝起きなのでそこまで激しい筋トレはしない。あくまで肉体の覚醒を促す程度だ。

「レイ。今日から二年生だな」

「そうだな。しかし、あつという間だった」

「そうか？　俺は意外と長く感じたぜ？」

「ま、人それぞれだな」

そう。

俺たちは本日をもって二年生になった。アーノルド魔術学院の二年生。卒業まであと三年と考えると長いように思えるが、どうなの

だろうか。

また春休みの前には卒業式があった。俺たちは、四年生の卒業を見送った。四年生の先輩と関わるのは、主に部活だけだった。といっても、環境調査部と園芸部の先輩たちにはとてもよくしてもらったので、俺は両方の卒業を喜んで祝福した。

「部長。今まで大変お世話になりました」

「レイ。こちらこそ楽しい一年間だった」

「また遊びに来てください」

「ああ。もちろんだ。お前たちの筋肉、どれほど成長するのか楽しみにしている」

ガシッと握手を交わす。

部長には本当にお世話になった。環境調査部での活動は過酷な面もあったが、俺たちは筋肉によってつながっていた。俺もいつか部長のように大きな人間になりたいと思う。

それに氷剣の件も含めて部長にはサポートしてもらった面もある。本当に頭が上がらない。

最後には全員で上半身の服を脱ぎ去り、筋肉による対話を行っていた。もう部長とこれできないと思うと寂しいが、先輩たちの門出を心から祝福すべきだろう。

次は園芸部での見送りに行ったのだが、そこではディーナ先輩が号泣していた。

「うつ……うつ……本当に、本当にお世話になりましたあ……ぐす
っ……」

なんでもディーナ先輩は四年生の先輩たちには特にお世話になったとか。ここまで感情的になった先輩を見るのは初めてなので、少しだけ驚く。いつもは毅然として模範的な人だったから。

「ディーナ。園芸部、頼んだわよ」

「ええ。あなたになら任せられるわ」

「そうね。レベツカ様も……それに、彼もいることだし」

と、なぜか全員の視線が俺に集まる。

園芸部の中では異質な存在だった。レベツカ先輩とディーナ先輩に認められなんとか入部することはできたが、それでも初めは男が一人ということで敬遠されていた。

変わったのは俺が女装してからだろうか。それ以降、部員のみんなは俺に話しかけてくれたり一緒に買い物に行ったりもした。先輩たちには、俺もとてもお世話になった。

「先輩たち。自分のような異質な存在を受け入れてくれて、本当にありがとうございます。また会える日を楽しみにしております」

俺がそう言葉にした瞬間。先輩たちの涙腺が崩壊。

しかし、溢れる涙は決して悲しみの涙ではない。これから先の未来、先輩たちには明るい世界が待っているのだから。

「レイさん。私からもお礼を」

「レベツカ先輩」

艶やかな黒髪を揺らしながらレベツカ先輩が近寄ってくる。

「園芸部はレイさんの入部で大きく変わることができました。やはりあなたは、周りに大きな影響を与える人ですね」

「そうでしょうか……？」

「ええ。先輩たちも、そして他の部員たちもそう思っているはずですよ」

周囲を見渡す。

うんうんと頷いているみんなを見て、俺は改めて園芸部に入って良かったと心から思えた。

そうしてお世話になった先輩たちを無事に見送って、春休みに入った。それからは特に何か大きな変化があるわけでもなく、日々が過ぎていき……ついに新学期となった。

「エヴィ。俺は先に行ってる」

「確か、妹ちゃんに会いにいくんだよね？」

「ああ。ステラと約束をしているからな」

「俺にも紹介してくれよ」

「もちろんだ」

手早く準備を整えると、俺は寮の自室から出ていく。

すっかり暖かくなった。咲き誇る花々を見て、春の訪れを実感する。また視線の先には新入生たちが登校してきているのが目に入る。緊張している人、楽しみにしている人、それぞれが表情から窺うこ

とができた。

また、入学式は講堂で行われるので、みんなそこに向かっている最中だ。

「おにーちゃんー！ー！ー！んっ！！！」

人の波を縫うようして駆けてくるのは愛しい我が妹。

ステラだった。

「ドーンっ！！」

ステラは十メートル手前から思い切り足を踏み込むと、そのまま飛翔。天を舞いながら俺に思い切り抱きついてくる。それはまさに、天使が如く。

ガシッとしっかりと掴むと、思い切りステラのことを抱きしめる。

「ステラ。入学おめでとう」

「お兄ちゃん！　ありがとう！！」

ぎゅーっ！と俺の体を抱きしめて、顔を胸に埋めてくる。周囲の視線がかなり集まっているようだが、俺たち兄妹は全く気にしていなかった。なぜならば、それが俺とステラだから。

感動の再会を喜ぶのは当然のことだった。

そして、パツと離れるステラのことをじっと見つめる。

「ステラ」

「何、お兄ちゃん？」

「制服、とてもよく似合っている。お前が一番可愛いな」

間違いない。我が妹こそが、一番可愛いだろう。こればかりは異論を認めることはできない。ステラこそが世界で最高に可愛いのは、すでに自明である。

「えへへ……そうかな？ そうかな？」

「ああ。間違いない。こんなに可愛いと、心配になってしまっただ」

「じゃあ、お兄ちゃんが守ってくれるよね？」

「任せておけ」

二人でそう話していると、後ろから「げ……」という声が聞こえてくる。そちらに視線を向けると、そこにはレベツカ先輩とマリアがやってきていた。

「もうっ！ マリアってば、制服を着崩しちゃダメでしょっ！」

「もう、お姉ちゃんは口うるさい。ホントに」

「む……！」

「それにほら、レイが見てるよ」

「え……？」

レベツカ先輩もこちらに気がついたようだ。先輩は慌てて髪の毛を整えると、俺に挨拶をしてくる。

「あ、えっと……レイさん。おはようございます」

「おはようございます。レベツカ先輩。今日は実家から登校したのですか？」

「ええ。マリアが心配だったので」

マリアは先輩の言葉が気に入らないのか、悪態をつく。

「別に必要ないのに……」

マリア「ブラッドリイ。彼女の容姿は否応なく目立つものだ。両耳には大量のピアスに、真っ白な髪の毛。それに加えて、その双眸はまるでルビーの宝石のように緋色に染まっている。

レベツカ先輩と同様に美しいのは間違いないが、人目をより一層引きつけるのはマリアの方だろう。

また制服は着崩しており、シャツのボタンも大胆に開いているしスカートも折りたたんでいるのか短めだ。でも俺はマリアらしい装いでとてもいいと思っている。

「な、何？ レイも文句あるの？」

「いや、制服姿よく似合っている。可愛いよ」

「かわ……っ！ もう！ 変なこと言わないでっ！！」

白い肌をしているので顔が赤く染まるのが目立つ。マリアもこうして照れることがあるのだと思うと、なんだか新鮮だった。

「レイさんはいつも通りですね」

ニコリと微笑んでいるレベツカ先輩だが……この圧倒的な圧力^{プレッシャー}はなんだ……？ 時折漏れだす圧力^{プレッシャー}。

笑っている。笑っているのだが、大きな圧を感じるのだ。

「ねね。お兄ちゃん」

くいくいつと俺の袖を引っ張ってくる。

「お兄ちゃんのお友達？」

ステラはどうやら同じ学年らしいマリアのことが気になっているようだった。レベツカ先輩とはすでに面識があるからな。

「ああ。紹介しよう。マリア＝ブラッドリィ。レベツカ先輩の妹だ」
「はじめまして！ ステラ＝ホワイトです！！」

ペコリと元気よく頭を下げると、ステラはすぐに手をずいっとマリアの方に伸ばす。一方のマリアといえば、ステラの元気な態度にたじろいでいた。

「う……ま、マリア＝ブラッドリィ……よ、よろしく……」

おずおずと出した手をステラが思い切り握ると、ぶんぶんと上下に振ってから思い切り近づいていく。

「マリアちゃん！ とっても可愛いねっ！！」

「そ、そう……？」

「うん！ 大人の女性って感じっ！ スラーっとしてて、かつこいいよー！」

「ま、まあ……そう言われて悪い気はしないけど……」

どうやら二人はいい友人になれそうだな、と温かい目線を二人に送っていると背後から耳元に誰かが囁いてきた。

「レイ。久しぶりだね」

振り向く。そこにいたのは、オリヴィア王女だった。アーノルド魔術学院の制服に身を包んでいる彼女はとても新鮮だった。いつもは豪華な装いをしている彼女を見るのが普通だったから。

「オリヴィア……王女。ご無沙汰しております」

「うん！ 久しぶりだね！ あ、そうだ。レイのことは、新しくこう呼ばないとね」

身嗜みを整えて、こほんと咳払いをするとオリヴィア王女は満面の笑みで俺に対してこう言ってきた。

「よろしくね。先輩……？」

第333話 春の訪れ（後書き）

明けましておめでとございます！ 今年もよろしく願いいたします！

ということで、『六章 新しい世代』が開始となりました。二年生編ですね。二年生編ではレイが表舞台に登場する、というテーマでやっていこうかなと思っております。もちろん、彼の学生生活が平穏なまま進むわけもなく……二年生編もまた、お楽しみにしていたければ幸いです。おそらく、二年生編も長くなりそうですが（笑）。

それでは、今年も本作をよろしくお願いいたします！！

また1月8日（金）に氷剣コミックス第2巻が発売となります。表紙はレイ、エヴィ、エリサの三人になります。

このページの下にある書影をタップすれば、ご予約などできますので是非ともよろしく願いしますー！

第334話 新しい世代

「先輩、ですか？」

「うん！」

「なんだか新鮮ですね」

「でしょ！！ えへへ」

べつたりと寄り添ってくると思いきや、右腕に絡みついてくる。周りの視線もあるので、乱暴に振り払うわけにもいかない。それを分かりつつ、やっているのだろう。ニヤツと笑っている顔が何よりの証拠だ。

「オリヴィア王女。ご無沙汰しております」

「レベツカ！ 久しぶりだね！！」

「ええ。しかし、今は公衆の面前。あまり目立つ行動は控えたほうがいいかと」

「そうかな？ ボクとしては、もっと先輩との親睦を深めたいんだけど」

「それはまた後ほどではいかがですか？」

オリヴィア王女の『先輩』という言葉はやけに強調されたものだった。それに、レベツカ先輩も優しい声音で話しているが再び圧倒的な圧力プレッシャーを放っている。

俺は二人の間に挟まれて完全に動けなくなっている。震えている右手の理由も、自分でも分かっていない。一体これは、なんなんだ……？

と、そこで手を差し伸べてくれたのは最愛の妹であるステラだった。

「あー！ オリヴィアちゃんだ！！」

「あ、ステラ。久しぶり」

「オリヴィアちゃんも入学したんだね！」

「うん。これからよろしくね」

「うん！」

すっかり雰囲気は柔らかいものになり、打ち解ける二人。確か、ステラとオリヴィア王女は文化祭の時に知り合って仲が良いとか。

そこにはマリアも加わって、三人で講堂へと歩いて行つた。

そして、この場に残されたのは俺とレベッカ先輩だけだった。

「ふう。今年の新入生はとても元気ですね」

「はい。いいことだと思います」

「そうですね。マリアも多分、大丈夫でしょうし」

俺たちもまた、別れることになった。

新一年生の姿を見るとなんだか一年前の自分を思い出す。ちょうど一年前の今頃。俺は右も左も分からなかった。ただ呆然と学院にやってきただけだった。

しかし今はかけがえのない友人たちができた。きっと今年も良い年になるに違いない。そんなことを思いながら、俺は新しい教室へと歩を進めていくのだった。

「クラリスじゃないか」

クラス替えが行われ、新しいクラスが掲示板に貼り出されていた。俺が確認すると、今年はいつものメンバーはもちろんクラリスもまた同じクラスになっていた。

新しい教室に向かうと、クラリスが一人でじつと扉の前で立ち止まっていた。

「うわっ！ レイじゃない！ 驚かせないでよー!!」

金色のツインテールが上に跳ね上がる。どうやら、後ろから声をかけたので驚いてしまったようだ。といっても、俺としてはなぜ教室の前で立ち止まっているのか謎なのだが。

「すまない。それで入らないのか？」

「う……いや、入るけどさ」

「どうかしたのか？」

自身の髪の毛をくるくると指先に巻きつける。どうやら、何か言いたいことがあるようだ。

「その。新しいクラスって緊張して……って！ そんなこと言わせないでよっ!!」

怒髪天を衝くとはこのことか。クラリスのツインテールが再びピンと天に上がる。クラリスはいつものように怒っているが、そんな姿もどこか微笑ましかった。

「まあその……みんなと同じクラスになれて、嬉しかったけど……」
「そうだな。さ、教室に入ろう」
「う、うん……」

教室に入るとエヴィが手をあげて声をかけてくる。

「レイ！ 妹ちゃんとは会えたのか？」
「ああ。間違いなく、うちの妹が一番可愛いな」
「レイって……シスコンだったな、そういえば」
「シスコン？」
「妹のことが好きって意味だよ」
「なるほど。なら、俺はシスコンで間違いはないな」

と、そんなやりとりをしていると隣に立っているアメリカがじーっと俺のことを見つめてくる。

「レイって、ステラちゃんと血は繋がってないのよねえ……」
「そうだが、ステラは俺にとって最愛の妹であることに間違いはない」
「はあ……別にそういう意味じゃないんだけど、ま……そこがレイらしいというか」
「そうか？」
「ええ」

そして雑談を繰り広げていると、教室の扉が勢いよく開いた。

「ヤッホー！ キャロキヤロだよーっ！ そろそろ入学式が始めるから、移動してねーっ！」
「……」

キャロル「キャロライン。」

桃色の髪をこれでもかと巻いており、それに大胆に胸元が開いている服装はいつも通りではあるが……。まさか、キャロルがまた俺たちの担任になるのか？

俺は思っていた。いや、願っていた。

どうか、どうかキャロルが来年度は担任になりませんようにと。あいつは何かと俺に絡んでくるから、これ以上は接する機会が減るようようにと……。願っていたのだが……。

どうして、またキャロルが俺たちの担任に……？

「レイちゃんレイちゃん」

俺の方に近寄ってくると、キャロルが抱きついてこようとするので俺は腰を低くして一定の距離を保つ。

「待て。これ以上距離を詰めてくるのなら、俺は逃げる」

「えーっ！　なんでーっ！！？」

「自分のこれまでの行動を省みるといい」

「ぶう……分かったよー」

諦めたのかキャロルは少しだけ距離を取る。

彼女の表情はスツと切り替わる。それは真面目な話をするときのキャロルの表情だった。

「レイちゃん。改めて今年度もよろしくね、って言いたいだけだよ。何かあったら私になんでも相談してね」

なるほど。色々と得心がいった。キャロルはどうやら俺のことを心配しているらしい。まだ完璧に魔術領域暴走が治ったわけではないしな。キャロルはふざけている反面、こうして真面目な側面をたまに見せてくる。

本気で嫌いになれないのは、キャロルのそんなところを俺も好ましいと思っているからだ。

「ありがとう、キャロル。俺はもう大丈夫だよ」

そうしてみんなで講堂へと移動している最中、俺は視線の隅にある人の姿を捉える。短めに切りそろえた金髪の女性と、その後ろに控えているメイド服を着た女性。

それは師匠とカーラさんだった。

「みんなすまない。先に行っていてくれ」

俺はみんなにそう言うってから、師匠の方へと駆け寄っていく。

「師匠！」

「おお。レイじゃないか」

リディア＝エインズワース。魔術師の世界で彼女の名前を知らないものはいないだろう。七大魔術師の中でも最強と謳われ、史上最

高の天才魔術師の称号は未だに色褪^{いろあ}せることはない。

「大丈夫ですか、脚の方は」

「ああ。杖があればなんとかな」

師匠はついに車椅子を必要としなくなり、歩けるようになった。もともと、師匠は俺の能力を封じるために自分の魔術領域を使っていたのだが、今となってはそれも必要なくなった。

そのため、こうして杖をついて歩いているわけだが……やはりまだ慣れていないようだ。

「カーラさんもお久しぶりです」

「はい。ご無沙汰しております。レイ様」

ペコリと頭を下げる。カーラさんがついてくれているので安心ではあるが、やはり師匠のことが心配だった。

「レイの制服姿を見るのはなんだか新鮮だな」

「そうですね。この姿では、あまり会う機会はなかったですから」

「そうだな」

「そういえば、今日は新任の教師としての挨拶があるのですか？」

師匠はアーノルド魔術学院の教師として、この場所にやってきたあの時のメンバーの多くが学院にいるのは不思議な感じだが、俺は純粹に嬉しかった。師匠が元気でいてくれるだけで、俺は十分なのだから。

「ああ。アビーにもそう話を聞いている」

「楽しみにしています」

「ふふ。そうだな。じゃ、また後でな」
「はいっ!!」

元気よく返事をする、師匠と別れて講堂へと向かうのだった。

中に入るとすでにほとんどの学生が揃っているようだった。その中でも目立つのは、オリヴィア王女の一角だろう。浮世離れた容姿に加えて、高貴なオーラがあるためそこだけ人があまりいない。

オリヴィア王女のそばにいるのは、ステラとマリアだけだった。ステラはニコニコと笑いながら話をしているが、マリアは周りをキョロキョロと見て少しだけ拳動不審だった。

「それでは入学式を開始する」

学院長であるアビーさんの声と共に、ついに入学式が始まることになるのだった。

第335話 敵対する新入生

入学式が開始された。新入生は前方に集まり、二年生以上の生徒はその後ろに集まるような形になっている。改めて、一年前の自分があそこに立っていたと思うとなんだか感慨深い。

入学式は問題なく進行していき、新入生代表の挨拶となった。この挨拶は入学試験（筆記と魔術実技）における成績の最も良い生徒が務めることになっている。去年はアメリカだったが、今年は……男子生徒だった。

壇上に歩みを進めていく彼の姿を見つめる。

俺は彼のことを伝聞にはなるが、知っている。というのも、アルバートに話を聞いたからだ。曰く、今の上流貴族の中でも最も勢いのある貴族だとか。

名前はネイト＝ホスキンス。

ホスキンス家の長男であり、魔術の技量も知識量もズバ抜けているとか。三大貴族に匹敵する、またはすでに超えているのではという呼び声も高いと言う。

「この度は歴史あるアーノルド魔術学院の新入生代表として挨拶できることを、心から誇りに思います。魔術学院の中でも最も優れた、優秀な生徒たちを排出しているこの場所が、自分の母校になるなど

夢のようです」

凜とした声で彼は挨拶を始める。

容姿は遠目からにはなるが、かなり整っていると思う。全体的に少し長めの金色の髪を緩やかにまとめ、鼻も非常に高く全体的な顔のバランスが非常に整っている。

身長は男子の平均よりは高そうだ。それに姿勢がいいのか、雰囲気もかなりある。流石は上流貴族といったところだろうか。

「それでは、以上になります」

拍手が起こる。

特に一年生のある一角からの拍手の音が非常に響いている。もしかすると、もう派閥のようなものが固まっているのかもしれないな。

「アメリカは知っているのか？ 彼のことを」

隣にいるアメリカに話を聞いてみることにした。

「ええ、もちろん知っているわよ。普通に優秀な人だと思うけど」

「そうか……」

「気になるの？」

「気になるというか……」

壇上を降りる際に彼が俺のことを、視線で射抜いてきたからこそ
の質問だった。

それも明らかな敵対の意識をもって。あの視線は間違いなく俺に
対して送られたものだろう。

といった話をアメリカにすると彼女は顔を少しだけしかめる。

「ホスキンス家は三大貴族に食い込みそうな勢いを持っている。特に、周りの貴族との親交を広げているって話は聞くわ。貴族の中でも一大勢力になるとか。それに加えて、血統主義なの。だからこそ、レイのことが気に食わないのかもね」
「なるほど、な」

血統主義。

確かに血統によって生まれる才能とは必要な要素であり、重要ではあるだろう。理解はできる話だが……それだけでもないのも、真実だ。果たして彼は俺に対して、どんな心情を抱いているのか。

いや、もしかすれば俺の気のせいかもしれないな……と思っていたが、俺とホスキンスはすぐに出会うことになるのだった。

入学式は無事に終了した。その中でも師匠が教師として紹介された時は、おそらく一番の盛り上がりを見せただろう。師匠は魔術師の世界では有名人であるものの、表舞台にはほとんど姿を見せないからな。

また、師匠が教員として働く情報は今まで隠されていた。そのこともあって、驚いている生徒がほとんどだった。

俺は師匠の挨拶を見守る最中、^{さなか}少しだけ泣きそうになってしまった。今までは車椅子に座っていたが、今はもう杖があればなんとか歩ける。また「自分の経験や知識を、後続を育てるために使いたい」という言葉には感動を覚えた。

ああ。やっぱり師匠は師匠なんだな、と。

教室に戻りながら、みんなでそのことで盛り上がっていると後ろから声をかけられた。

「おい」

振り返ると、その場にいたのはナイトⅡホスキンスだった。後ろには十人程度の生徒も控えているようだった。貴族の派閥と見て、間違い無いだろう。

「レイⅡホワイトか？」

「そうだ。君は、ナイトⅡホスキンスだったな？」

「ああ。それにしても……」

軽んじている視線。明らかな軽蔑の視線を受け取って、俺はなんだか懐かしいような気がしていた。ちょうど一年前もこんなことがあったからな。アルバートとの出会いも、同じような感じだったからな。

今となつては同じ筋肉を愛する親友だが。

「お前が何か不正をしているのは、分かっている」

「不正？」

「ああ」

ホスキンスは俺に向かって指を刺してくると、その不正とやらについて言及してくる。

「一般人という劣等な存在だというのに、この学院に足を踏み入れた。それにお前の周りには三大貴族や上流貴族も揃っている。それに去年の大規模魔術戦ではチームを優勝に導いた。おおよそ、一般人の功績じゃない。何か不正をしていると考えるのが、普通だろう」
「……ふむ。一理あるな」

顎に手を持つていき、考える。客観的に見れば俺の境遇というか、存在は異質なものは同感だ。しかし、ここで俺の出自の話や氷剣の魔術師であることを話しても仕方がないだろう。

どうせ信じてもらえるわけがないだろうしな。

「特に三大貴族のアメリカ・ローズと仲が良いとか？」

「アメリカとはそうだな。友人だ」

「友人……か」

ギョツと拳を握りしめて俺のことを忌々しく睨みつけてくる。アメリカの話をした途端、急に憎悪が膨れ上がったような気がした。ギリツと歯を食いしばり、忌々しそうに睨みつけてくる。

「ちょ、ちよつとレイ……！」

「どうしたアメリカ」

アメリカが後ろから小さな声で話しかけてくる。

「あんまり相手のことを怒らせちゃダメよ？」

「む……もしかして、怒らせるようなことをしたか？」

「うーん。まあ……ね。でも難しい話よね。私が間に入るうか？」

「いいのか？」

「貴族のいざごさは、慣れてるしね」

と、彼女は軽く咳払いをすると俺の前に出ていく。

「えっと。ネイト君、話すのは初めてじゃないわよね？」

「アメリカさん！ はい！ ご無沙汰しております」

打って変わって彼の態度は変化する。丁寧に頭を下げると、嬉しそうに笑っている。ふむ。よほどアメリカのことが気に入っているのかもしれないな。貴族社会についてはよく分からないが、アメリカならば円滑にコミュニケーションが取れると信じている。

「その、ね。レイはちょっと特別だから……あんまり気にしない方がいいよ？」

「特別……ですか？」

「うん。だからあんまり敵対しなくてもいいかなーって」

「やはり、本当だったのか……」

ホスキンスはだらりと肩を落とす。まるで何かに絶望したかのような素振りだった。そして、目の前にいるアメリカではなく俺の方をキッと睨みつけてくる。

「やはり、お前が誑たぶらかしているようだなっ！！！」
「む……？」

誑かしている？ いや、俺はアメリカに対して何か騙すようなことなどしていない。自分の心当たりを探してみても、そんなものはない。だが、ホスキンスは絶対的な確信があるようだった。

「お前が、三大貴族の中でも一番の才能を持っているアメリカさんに近づけるわけがない……やはり、何かしているのは間違いないッ！！ これは決定的だッ！！」

「いや、そんなことはしていないが。普通に友人だが」

真実を伝えると隣にいるアメリカが、「そっかー。まあ……友人だよ。うん……」と小さな声で呟いてた。がっかりしているようだが、そんなことよりも今は彼を落ち着かせるべきだろう。

「そこまでにしておけ」

次に間に入ってきたのは、アルバートだった。この一年で遥かに成長した体躯は今やエヴィに迫るほどだ。現時点で二年生の中で、二を争う筋肉の持ち主だろう。

流石のホスキンスもアルバートの圧には腰が引けるようだった。

「つく。アルバート」アリウム。上流貴族の誇りはどうしたッ！！
オーディナリィ
一般人と一緒にいて、恥ずかしくはないのかッ！！」

ホスキンスの言葉に対して、アルバートは毅然として答える。

「お前は一年前の俺だ。世界の広さをまだ知っていない。まあいづれ分かることだ。今は引いておけ。そろそろ、目立ってきたぞ。入学初日に問題行動はまずいだろう」

アルバートが諭すように促すと、彼はグツと唇を噛み締めて翻る。

「覚えておけ。お前の不正は、絶対に正す」

吐き捨てる仲間を連れ去って移動していくホスキンスたち。

「なーんか、典型的な貴族って感じね」

「ああ。ま、レイは大丈夫だと思うがな」

「う……うん！ レイくんは不正なんかしてない……よっ！」

クラリス、エヴィ、エリサも近寄ってくる。そうだ。今の俺には、信頼できる仲間がいる。大丈夫だろう。

「レイ。あいつとの件は俺がどうかしておこう」

「いいのか。アルバート」

「ああ。それに、きな臭い噂もあるしな」

第335話 敵対する新入生（後書き）

改めて、三日後の1月8日（金）に氷剣コミックスの2巻が発売となります！

このページの下にある書影をタップ（クリック）すれば、Amazonさんなどご予約できますので何卒よろしくお願いしますー！

第336話 マリアの友達

マリア「ブラッドリィ。」

姉であるレベッカとの確執を乗り越え、彼女はついにアーノルド魔術学院に入学することになった。去年の文化祭の時の騒動を経て、互いに長年抱いてい心の内を曝け出した。

それによって幼少期と同じ、とまではいかないが前よりはずっと距離感が近くなった。もともとマリアはそれをかなり鬱陶しく思っているのだが……。

「マリア。起きて、マリア」

「うん……うん……」

マリアは朝が弱い。いつも登校するギリギリの時間まで寝ている。今日も入学式ではあるが、いつものように限界まで寝ようと思っていたのだがレベッカの声によって覚醒を促される。

「マリア。そろそろ準備しないと」

「あと五分……」

「もうっ！ 早く起きてっ！ー！」

ベッドから放り出されるような形でマリアは起床する。眠気はまだ完全には取れてはいないが、仕方なく起床するマリア。

マリアがどうして鬱陶しいと思っているのか。

その理由はレベツカの世話焼きが限度を超えているからだ。今までは互いにいいものとして接してきた。その反動でもきてしまったのか、レベツカは過剰にマリアに愛情を注ぐようになった。それこそ、今までの時間を埋めるかのように。

だがしかし、何事にも限度はある。

マリアの入学式当日だからと言って実家に帰って来るのはやり過ぎだろう……とマリアは思っていた。

「お姉ちゃん。過保護すぎ……」

「む。これもマリアのことを思って」

聞き流す。最近はウンウンと適当に頷いていれば、いいことを覚えたらしい。うるさいのに変わりはないが、これが最善と判断しようだ。

朝食を取ってから、制服に着替える。すでに試着は済ませているので、スムーズに着替える。もちろん、マリアは制服を着崩している。三大貴族らしくお淑やかに、というのはマリアには当てはまらない。

我が道をいく彼女は、派手な格好をするようになったのは周りへの当て付けなども含まれていたが、どうやら愛着が湧いて来たのか今は気に入っている。

「むむ……っ！ マリア！ そんなに着崩したらダメっ！！」

「いいじゃん別に」

「ダメです。妹でも容赦はしないわよ？」

「でもお姉ちゃん……最近スカート短いよね？」
「……」

視線を逸らす。

マリアは知っている。レベッカがレイに対して特別な想いを抱いていることを。去年騒動を経て、マリアもまたレイのことを知ることになった。

一見すれば、ただの一般人でオーディナリー三大貴族であるレベッカに釣り合うことなどない。その実、レイは氷剣の魔術師だった。七大魔術師の中でも最強と謳われる氷剣。彼の實力を目の前で見たマリアは、レイが特別な存在だと分かっている。

それに愚直で真摯な性格も嫌いではない。レベッカが恋に落ちるのも無理はない、と思っている。

「それに、ソックスも短くしてるし。綺麗な脚がよく見えるね？」
「ベ……別にそんなことは……」
「レイはどう思ってるんだろうね」
「今はレイさんは関係ないでしょうっ！！？」

顔を赤くして否定しているが、丸わかりである。少しでもレイによく見せたいと思って、レベッカも色々と努力をしているのだ。薄く化粧もしているし、髪の毛も前よりもずっと綺麗になった。姉のそんな努力を馬鹿にするわけではないが、利用するにはちょうどよかった。

「はいはい。じゃ、行こっか」
「ちよっと……っ！！」

照れているレベルツカを置いて、マリアは家を出ていくのだった。

「ふう……やっと終わった」

入学式が無事に終了し、クラスでのガイダンスも終わった。クラスメイトにはステラにオリヴィア。加えて主席のホスキンスも一緒になった。もちろんマリアに友人などいなく一人である。と、本人は思っていたが……どうやらそうもいかないようである。

「あ！ マリアちゃんだっ！！」

「ステラじゃない……もしかして、同じ部屋？」

「うん！ やったー！ マリアちゃんと一緒に嬉しいよ！」

ステラ「ホワイト。」

レイに妹がいることは知っていた。その妹が義理であることも。

顔つきは似ていないし、髪色も全く違うが二人はとても仲が良かった。登校する時に抱き合っている姿を見たが、誰が見ても本物の兄妹にしか見えなかった。

あのレイがあそこまではしゃいでいるのは初めて見たので、マリアも驚いたほどだ。

「そっか。ステラと一緒になのか……」

入寮に際して、過度な期待はしていなかった。貴族、中でも三大貴族は一人部屋を選択することもできるのだが、マリアはそうしな

かった。

元々友人もいなく、孤独には慣れているが……もしかしたら彼女は期待していたのかもしれない。新しい出会いというものを。

マリアもまた少しずつ変化しているのである。

「マリアちゃん！」

ステラはズイッと近寄ってくると、マリアにあることを尋ねた。

「な、何……？」

「お兄ちゃんと仲良いよね！」

「まあ……別に。普通だけど」

「そうなの？」

「そうよ」

「へえ……でも、お兄ちゃん言ってたよ」

「な、何を……？」

ステラは年末年始に帰って来た時の話をマリアに伝える。純粹な笑みで、何の他意もないかのように。

「レベツカちゃんの妹はとっても可愛いつて！」

「は、はあ……！？」

別にレイのことは知っているので、今更照れたりはしないと思っていた。だが、本人に直接言われるのと伝聞で聞くのはかなり違ったようだ。

「それにお兄ちゃんは仲が良いつて言ってたよ。とっても話しやすい

いつて。だから私も、一緒の部屋になれてとっても嬉しいよ!!」
「……う。眩しい……」

眩しい笑み。根本的に性格が違う。マリアはそう思った。

例えるならば、ステラが太陽でマリアが月と言ったところか。容姿と性格もあって、マリアは部屋に閉じこもっていることが多かった。それに話し相手もほとんどいない。

そんな彼女と同じ部屋になったのは、眩しいくらいに明るい性格のステラだった。天然なところはレイに似ているし、笑った顔もどことなく似ている気がする……と思ってしまふほどには、マリアはステラとレイを重ねていた。

「まあその……よろしく」

手を差し出す。

顔は横を向いており、赤くなっている。

「よろしくね!!」

「……うわっ!!」

握手をすると思いきや、ステラは思い切りマリアに抱きついて来た。すりすり頬を寄せると、ぎゅーっと力強く抱きしめる。

「ちょっと、離れなさいっ!!」

「えー。だってマリアちゃん、可愛いから!」

「可愛い……? 気味が悪いの間違いじゃないの?」

「へ?」

マリアはまだ自分の見た目に関して受け入れているわけではない。真っ白な髪と肌、加えて緋色に染まる双眸。入学式の時だって、クラスにいる時だって観察されているような視線は感じていた。

それに三大貴族である上に、両耳にあるピアスと着崩した制服は何よりも目立つ。普通の人間は近寄ろうとはしないだろう。もっとも、マリアの雰囲気もあって近寄りがたいのもあるのだが。

だというのにステラはそんなことは全く気にしないで接してくるのだ。

「なんで?? 可愛いよ。真っ白な髪と目もルビーの宝石みたいで綺麗だよ! それにカッコいい!! マリアちゃんはスラッとして、脚が長いよね!」

「まあ……身長は高い方だけど……」

マリアの身長は男子の平均身長をわずかに超える。レベッカよりも優に高い。遺伝的には身長が高くなることないのだが、突然変異的なものとマリアは思っている。

「モデルさんみたいだよ! 私の憧れ! でも……おっぱいはもうちよつと欲しいかも……」

ポカンとした表情でステラのことを見つめる。

ああ。そうか。こんなところまでレイに似ているのか、とマリアは納得した。そして彼女はニヤツと笑うとステラにこういうのだった。

「ふふ。ステラには難しいかもね？」

「えー！？　なんで！？　一緒にお風呂に入った時、お兄ちゃんは絶対に大丈夫って言ってたよ！」

「うん？　一緒にお風呂に入った？」

「うん。家にいるときは、いつも一緒にお風呂に入るよ」

「なるほどね……あいつらしいというか……」

マリアは実は入学に対して少し心配している部分があったが、どうやらそれは杞憂に終わりそうだと思い微かに笑みを浮かべる。

「どうしたの？」

「なんでもないわよ。さ、荷物を解きましょう」

「うん！」

アーノルド魔術学院の四年間が、マリアの人生においてかけがえない時間になることを彼女はまだ知らない。

第336話 マリアの友達（後書き）

再度、宣伝になります。

明日の1月8日（金）に『氷剣の魔術師が世界を統べる』のコミックス第2巻が発売します！！ ぜひぜひ、よろしく願いますー！！ 2巻はかなり面白い内容になっておりますのでご期待ください！ 環境調査部の筋肉シーンは圧巻ですよ（笑）。それにレベツカも登場しますので！（めちゃくちゃ可愛いですー！）

第337話 新・部活動開始！

早朝。

朝五時に起きるのはもはや習慣であり、それは休日でも変わることはない。軽くストレッチをした後に、俺はランニングへと出かける。学院のコースも完全に把握しており、この一年で色々と自分のコースも開拓してみたりもした。

外に出るとすぐに走り出すのではなく、校門の前でじつと立ち尽くす。

「お兄ちゃん！」

そう。

俺はステラを待っていたのだ。俺がランニングを毎朝している、という話をするステラもぜひ付き合いたいというので一緒に走ることにした。それにしても、やはりステラは今日も美しい。

最近は少し身長も伸びてきたようで、以前よりも大きく見える。体に厚みはそれほどないが、きっと大人になる頃にはもっと美しい女性になっているだろう。

「行こうか。ステラ」

「うん！」

走り出す。もちろん魔術による身体強化などはしない。己が肉体を鍛えることこそ、史上の喜びなのだから。

「学院はどうだ？」

「楽しいよ！ お友達もできたし！」

軽くランニングをしながら俺はステラの話を聞く。ペースを徐々
に上げていくが、息が激しく乱れることはない。流石は我が妹だ。
しっかりと鍛錬は続いているようだった。

「マリアちゃんとオリヴィアちゃんは特に仲がいいよっ！」

「そうか。それはよかった」

笑みを浮かべる。とても楽しそうな学院生活を送っているようで
何よりだった。ステラが元気に笑っている姿を見れるだけでも、俺
は本当に嬉しかった。

「あ。でもね」

「どうした？」

「オリヴィアちゃんがお兄ちゃんのこと、すごく聞いてくるの」
「……」

一瞬だけ黙ってしまう。正直なところ、オリヴィア王女のこととは
嫌いではないが苦手である。何を考えているのかよく分からないし、
俺に対するアプローチも積極的だ。

キャロルは直球的なのだがオリヴィア王女は狡猾、とさえいい
のだろうか。気がつけば彼女のシナリオ通りに進んでいるなんてこ
とにもなりかねない。師匠にも相談したことがあるのだが、オリヴ
ィア王女にはくれぐれも気をつけるように言われている。

そんな彼女がステラに何を聞いているというのだろうか。

「……な、何を聞いてくるんだ？」

「昔の話とか、好きなものとか、いつぱいだよ！ オリヴィアちゃんはお兄ちゃんのことが好きなんだね！」

「あ、ああ……そうかもな」

ステラが考えているような好きではないことはもちろん分かっている。相手は王族で俺は一般^{オーディナリー}人だが、気がつけば婚約させられていることもあり得ると師匠には言われている。

彼女に対しては細心の注意を払う必要があるだろう。

「それでね、マリアちゃんもね」

「マリアもあるのか？」

マリアがステラに俺のことを尋ねるとはあまり考え難い。彼女は別に俺のことなどそれほど興味ないと思っているからだ。

「なんかお姉さまがどうか、言っただような」

「……」

リリーのことが……。

マリアはすでにリリーの正体を知っている。初め知ったときは驚いて失神してしまったが、なぜかその後は逆に嬉しがっていたような気もする。それにまだ彼女から呼び出しなどはされていない。

曰く、「私が呼んだらちゃんと来なさいよ。分かってる？」と真

剣な目つきで言われたのは記憶に新しい。

「マリアちゃんと同じ部屋だから、たまに独り言が聞こえてくるんだけど。お兄ちゃんの名前とお姉様って単語がよく聞こえてくるよ？」

「分かったステラ。もういい。大丈夫だ」

「そう？」

「ああ……」

どうやら二年生も色々と大変なことになりそうだと俺は思っていた。

放課後になった。今日から部活動もまた開始されることになっている。俺は本日は環境調査部の方に顔を出すことになっている。いつものように、エヴィ、アルバート、クラリスの四人で部室へと向かう。

「ねね。レイ」

「どうしたクラリス」

ツインテールを揺らしながら彼女はあることを尋ねて来た。

「あんたの妹が来るって、本当？」

「ああ。義理の妹ではあるが、俺はステラのことを本当の妹のように思っている。それにステラは世界で一番可愛い。これだけは譲れない」

「いや、別にあんたのシスコン話はいいのよ」

最近ステラと一緒にいることよく目撃されているようで、シス

コンと呼ばれることが多い。厳密な意味は知らないが、おおよそ妹を愛しているという意味らしいので正直嫌ではない。

「なんかめっちゃ強いって噂なんだけど……」

「ああ。そのことが」

一年生の噂は二年生の俺たちの方にも届いている。早速、一年生たちは魔術演習が行われカフカの森に向けて準備をしていることだろう。

そんな中、一番目立っているのは主席のホスキンスではなくステラだった。曰く、男子生徒を優にこえるフィジカルを持っており、身体能力だけでいえば一年生の中でもぶっちぎりのトップだとか。

別にそのことに対して驚きはない。

俺が今まで教えて来たことを愚直にこなし、才能もあるステラが一年生の中でもズバ抜けているのは当然のことだろう。そんなステラのことを俺は誇らしく思っている。

「ステラは俺がみっちり鍛えたからな。それに師匠もステラには色々と教えている。才能もあるし、努力もできる。当然の結果だな」

「え……二人の七大魔術師に教えてもらった、ってこと？」

「まあそうなるな」

「……なるほど。義理とはいえ、あんたの妹なのね」

神妙な面持ちでクラリスは呟いた。そしてエヴィとアルバートもまた、会話に入ってくる。

「レイの妹か楽しみだな！」

「ああ。俺も会うのが楽しみだ」

俺たちは部室でそれぞれ着替えると、改めて集合。そこには新入部員の一年生たちも並んでいた。ほとんどは男性生徒であるが、その中に一人だけステラが混ざっている。

「あ。お兄ちゃん!」

「ステラ。準備は万端か?」

「もちろんだよ!!」

ニコツと快活な笑みを浮かべる。うむ。やはりステラは世界一だな。

「……あんたがレイの妹?」

「はい! ステラ!! ホワイトです!」

「私はクラリス!! クリーヴランド。レイのお友達よ」

「あなたがクラリスさんですか!?!」

「え、ええ……何、この食いつき……」

ステラは颯爽とクラリスの方へと近づいていくと、彼女の両手をギュツと握りしめる。

「実は環境調査部は女の子があまりいないって話だったので、クラリスさんがいてくれて嬉しいです!」

「ふ、ふん……そう?」

「はい! これからよろしくお願いします、先輩!」

「……先輩っ!?!」

「はい。そうですよね?」

「そ、そうだけど……」

ツインテールが激しく上下に動いている。この動きの時は感情が昂っている時のものだ。この一年で俺はクラリスのツインテールの動きを把握しているからこそ分かることだった。

「やっぱりレイの妹って感じね。よろしくね」
「はい！」

ぶんぶんと上下には激しく手を揺らして握手を交わす。

ふむ。すぐにクラリスとステラは仲良くなったな。いいことだ。

そしてステラは一人一人、先輩たちに頭を下げていく。それに伴って、他の一年生も同様に挨拶をしていく。はからずとも、これで一通りの自己紹介が終わることになった。

「ふむ……今年的一年も粒揃いのようだな」

新部長は顎に手を当てながら声を漏らす。圧倒的な巨躯を有しているのはもちろんだが、新部長はメガネをかけておりとても聡明な人だ。何事にも合理的な判断を下し、トレーニングを効率的に行う。

前部長から指名されただけあって、すでに貫禄も出て来ている。

「それでは例年と同じように、トレーニングを開始する。全員、準備はいいな？」

『おう！』
『おー！』

男たちの野太い声と、クラリスとステラの高い声が混ざり合って

響く。そして俺たちはついに新しい世代での部活動を開始するのだ
った。

第337話 新・部活動開始！（後書き）

部活の話はまだ続きます。園芸部の話もやる予定です！

宣伝になります。

『氷剣の魔術師が世界を統べる』コミックス第二巻、発売中です！
ぜひともよろしく願いますー！！

第338話 園芸部へようこそ……？

翌日。今度は園芸部へと向かうことになった。学内にある部室に向かうと、すでになり多くの新入生が扉の前で待っているようだった。俺は軽く一礼をして室内へと入っていく。

その際に微かに新入生たちが囁く声が聞こえてきた。

「見た？」

「うん」

「あれが花園唯一の男、レイ＝ホワイトよね」

「意外とカッコよくない？」

ふむ。どうやらすでに新入生の女子たちは見定めを始めているようだ。しかし、それも理解できる話だ。園芸部の男子生徒は俺しかない。この一年で分かったことだが、園芸部の先輩たちは男性と接することがほとんどなかったと言う。

初めは先輩たちなども俺に対してはよそよそしいものだったからな。懐かしいものである。

「失礼します」

「レイ。ちようどよかったわ」

「ディーナ先輩。どう言う意味でしょうか？」

ディーナ＝セラ。

おそらくは園芸部の中に限って言えば一番お世話になっている先輩だ。もちろんレベツカ先輩にもお世話になっているのだが、ディーナ先輩にはこの園芸部のことを一から全て教えてもらった。一緒に買い物に行ったり、新しい花を育てたりなど色々と面倒を見てもらった。

俺はいつものように席に着くと、ディーナ先輩と向かい合う。

「これからレベツカ様がやってくるわ」

「はい。そうだと思いますが」

「問題なのは……今年の一年生の部員にオリヴィア王女がいる、と言うことなの」

「そ……そうですか」

やはり、か。

いや想像していたことではあった。環境調査部には全く姿を見せないで、どこかで俺に対して接触してくるとは思っていた。そう考えると、園芸部が一番確率が高いと考えるのは至極当然のことだろう。

しかし、レベツカ先輩とオリヴィア王女に何か関連性があるのだろうか。ディーナ先輩の表情からしてかなり深刻そうではあるが。

「実は……昔からあまり仲が良くないのよ、あの二人」

「それは初耳です」

「それに最近は、あんたのこともあるみたいだし……レベツカ様から相談も受けてるしね……」

「自分のこと、ですか？」

「うつん。それは忘れて。まあ、あの二人の仲をなんとか取り持つ

て欲しいの」

「……分かりました。最善を尽くしましょう」

コクリと頷く。本来ならば、俺は了承したくない気持ちで一杯だった。触らぬ神に祟りなし。オリヴィア王女とはできるだけ接触しないことが最重要ではあるが、ディーナ先輩にお願いされたのなら無碍にできるわけもない。

そしてついにレベツカ先輩も到着。

新入生たちを迎え入れることになった。

「それでは新入部員の皆さん。どうぞ」

レベツカ先輩の美しい声が響くと、新入生たちは続々と室内に入ってくる。一見しては、十名程度。ほんの少しだけ男性生徒の入部も期待していたのだが、いないようだった。仕方あるまい。今年も男性生徒は俺一人だがなんとかやっていこう。

その中にはもちろん圧倒的に高貴なオーラを身に纏っているオリヴィア王女も立っていた。

全員と同じ制服を身につけているというのに、この神々しさは何なのだろう……。やけに気合も入っているような気がする。

「それでは、お一人ずつ自己紹介をお願いします」

一年生たちが緊張しながらも自己紹介をしていく。話を聞くにほぼ全員が貴族出身。中流貴族から、上流貴族まで揃っている。花園は伝統的に貴族のお嬢様が集まる。それは今年も変わりはない。

去年やってきた俺が特殊だったのだ。男子生徒かつ一般人である俺はその伝統を打ち壊す存在。今となつては去年のディーナ先輩の反発も理解できる。

全員ともにチラツと俺のことを視界に入れてくる。敵意を感じることなく、純粹に好奇心から見つめているのだろつ。俺としても後輩たちには優しくありたいと思っている。

「オリヴィア・アーノルドです。一応、王女ではありますががこの学院では皆さんと同じ一人の学生。よろしく願いますね？」

柔和な笑みを浮かべる。オリヴィア王女は、やはり伊達に王女ではなく自分の立ち振る舞い方ということをしつかりと理解しているようだった。

「ああ。そうそう。園芸部は伝統的に貴族の女性が多いと聞いていましたが、去年はレイ・ホワイト先輩が入部したとか。私、とても先輩に興味があります」

ゆつくりと近寄つてくると彼女は握手を求めてきた。

他の先輩たちはそれに対して驚きの声を上げていた。俺の存在は受け入れてもらつてはいるが、一般人であることに変わりはない。オーディナリーだからこそ、王女である彼女がどんな接し方をするのか気になっていたのかもしれない。

なるほど。

園芸部ではあくまで先輩と後輩という役割で接して欲しい、とい

う彼女なりの意思表示なのだろう。流石に俺が氷剣の魔術師であることを口外するわけにもいかないからな。

「こちらこそ、オリヴィア王女にそのように言っただけで光栄です。これからよろしくお願いいたします」

彼女の手を優しく握る。すると、にこりと笑みを浮かべながら指先を俺に絡めてくるようにしてギュツと一瞬だけ握ってくる。他の人にバレやしないかとヒヤツとするが、どうやら大丈夫……ではなかった。

「ふふ。うふふ……」

レベツカ先輩から漏れ出しているのは第一^{プリママテリア}質料ではない。魔術的な兆候は全く感じないからだ。だというのは、時折生じるこの^{プレッシャー}圧力はなんだというんだ……。

「ちょ、ちよつとレイ……！」

ディーナ先輩がこそつと耳打ちをしてくる。ちようど今は、オリヴィア王女が他の先輩たちにも挨拶をしているので目立つことはない。

「あんだ！ なに指を絡めてんのよ！ こつちからは見えてたわよっ！ まあ……私とレベツカ様しか気がついてないと思うけど……」
「すみません……本当に」

謝ることしかできなかった。オリヴィア王女は俺にとって天敵と云っていいだろう。彼女の行動を全て把握するのは無理だった。く……俺はこの先、やっていけるのか？ と不安になってしまふ。

これは後で正直にディーナ先輩に伝えるべきだろう。

「それでは本日はここまでということ。また明日から本格的に開始していきましょう」

『はい!』

そうしているうちに部活動は終了。一年生たちと先輩たちは部室を去っていく。その中で俺も後から出て行くとするのだが、レベツカ先輩に強く肩を掴まれる。

レベツカ先輩がここまで強い力を持っているとは驚きではあるが……。

「レイさん。ちょっといいですか?」

「え……と。はい。なんでしょう?」

ビシッと背筋を伸ばしてレベツカ先輩と向き合う。その際にチラッとオリヴィア王女が扉を出ていくのが見えた。彼女はあろうことなく、俺にウインクと投げキッスをしてきたのだ。全く、本当に自由なお方だな……と思う。

「オリヴィア王女ととても仲がいいようですね?」

「いや……そ、それは」

「仲がいいですよ?」

「はい! そうです!」

正直に答えないと死ぬ。こんな感覚を味わったのは師匠以来だった。レベツカ先輩は笑っているのに、笑ってはいなかった。そんな様子を部屋の隅に残っているディーナ先輩もまた見ているのだが、

彼女は「はあ……」とため息をついてこちらに近寄ってくる。

「レベツカ様。そこまでにしてください。レイがかわいそうです」

ポンと優しくレベツカ先輩の肩に手を置く。

「あ。これはこれは、別に他意があるわけではないんですよ。彼女は王族の方なので、接し方を気をつけてくださいと伝えただけです」

「なるほど。わかりました。では、自分はこれで失礼します」

一刻も早く部室から出ていきかけたので、颯爽と去っていく。

「さて……どうしましょうか」

何か声が聞こえてきたが、俺はそれを最後まで聞くことなく自室へと戻っていくのだった。

第339話 驚愕の新入生

今年のアーノルド魔術学院の新入生で一番目立つのは、ネイト・ホスキンスである。上流貴族の中でもかなり力を伸ばしてきている背景もあり、周りには常に取り巻きができています。もちろん、ネイト 彼自体の実力も折り紙付きだ。

魔術学院の入学試験は筆記試験と実技試験の二つの合計点から合否が決まる。

ネイトは首席ではあるが、彼は知らない。筆記試験では一位を獲得しているが、実技試験では二位だったことを。では誰が実技試験でトップを取ったのか。

それは 。

「マリアちゃん！ 今日から魔術の授業だね！」

「そうね。ま、私は魔術苦手なんだけど」

「そうなの？」

「ええ。三大貴族のくせについて思うでしょ？」

「ううん。人には得て不得手があるんだよ。苦手なことがあるのは、普通だよ？」

「……」

マリアは黙って驚いた表情を浮かべる。彼女のステラの評価はいつも元気で頭が空っぽそうな人間、である。しかしこうして目が覚めるようなことも言うてくるので、認識を改める。

「……ステラって、レイに似てるわね」

「本当!?!」

「嬉しそうね」

演習場に移動しながら二人は会話を続ける。

「ふふふっ……! だって私はお兄ちゃんのこと大好きだからね
!」

「もしかして本当に好きなの?」

「本当って何?」

「あ。今ので分かったわ。大丈夫よ」

どうやらステラの好きはあくまで兄妹としての好きだと理解する。
これでもし、異性として好きだと分かっってしまうばマリアはどうす
れば良いのか分からなかった。

姉であるレベツカを応援すべきなのか、それとも友人であるステ
ラを応援すべきなのか。そんなことを一瞬だけ考えていたからだ。

杞憂だと分かってマリアはホッと胸を撫で下ろす。

「お二人とも、楽しそうね?」

「げ……オリヴィア王女……」

「げ、とは失礼ね。マリア。仮にも王女なのよ?」

「いや仮にをつける必要はないと思いますけど……」

ふふん、と胸を張るオリヴィア。今はクラスの中では、ステラ、
マリア、オリヴィアの三人でいることが多い。食事と一緒に取るし、
移動教室の時も一緒だ。マリアとしては、別に一人でも良いと思っ

ていたが意外にも友人と過ごすのも悪くないと思っていた。

「オリヴィアちゃん。今日も可愛いね」

「ステラ！ ふふ。やっぱりあなたは天使のように可愛いわねえ…
…ボクの癒しだよ」

「うわっ！」

ギョツと抱擁を交わす。ステラとオリヴィアは特に仲がよく、オリヴィアのことをちゃんづけで呼ぶのはステラぐらいだろう。もっとも、オリヴィアが許可しているのはもちろんのことだが。

演習場に集合すると、一人の女性が杖をついてやってくる。足取りは遅いが誰もそれを咎めることはない。魔術師であるものならば、誰もが知っている稀代の天才魔術師。

リディア「エインズワース。

表向きはまだ彼女が氷剣の魔術師として認知されている。裏ではレイが正式に引き継いでいることになっているが、レイのことは少なくとも在学中は公表しないことになっている。

「見て……」

「あれが氷剣……」

「世界最高の天才魔術師……っ！」

生徒たちのテンションは否応なく上がる。

リディアは教師として働いているが、今はクラスを担当してはいない。アビーと相談した結果、今年度は主に一年生の魔術実技を担

当することになったのだ。

「おし。揃っているな」

数をさつと確認してからリディアはすぐに授業に入る。

「じゃ、そうだな。まずは氷柱でも作るか。これで基本の実力はすぐに分かるからな」

氷柱を作る課題。

リディアは生徒たちに指定時間と氷柱の形まで細かく伝えて、魔術で作るように伝えた。生徒たちは一斉に課題に取り組むが、流石に彼女が驚くようなレベルの生徒はいない。

「なんだが、昔レイに教えていたことを思い出すな。まあ……レイはもつと幼い頃から規格外だったが。」

と、リディアは視線の先ですでに課題を終わらせている生徒を見つけた。

「えーっと。確か、ホスキンスズであっているよな？」

「はい！ ネイト」ホスキンスズです！」

ビシッと背筋を伸ばしてネイトはリディアに向かい合う。血統主義であり、誰よりも才能を重んじる彼に取ってリディアは英雄だった。尊敬、いやそれは崇拜に近い感情かもしれない。

リディアがこの授業を担当すると分かって、一番喜んでいたのはネイトだろう。

「ふむ……悪くないな」

コンコンと氷柱を叩く。軽く触ってから魔術の兆候を確認する。

「だが、まだコードが荒いな。早く作ることに集中しすぎている。もつとバランス良くすべきだ」

「えっと……お言葉ですが、分かるのですか？」

「ん？ まあ魔術が絡んでいれば私に分析できないものはない」

「な………なんという………流石は史上最高の天才魔術師………っ！！」

キラキラと目を輝かせながらナイトはリディアに質問をぶつける。それに対してリディアは的確に答える。そうしていると、リディアはちょうどナイトの後ろであり得ないものを目にするのだった。

「あれは………はあ。やっぱりステラか………」

そう。そこには氷柱ではなく氷のアーチがあった。動物を模した氷がステラの前に顕現していたのだ。中でもユニコーンと思われる氷はかなり完成度が高いようだった。

「あ！ リディアおばさん………じゃない。リディアさん！ 見てみて！」

「学校では先生と呼べ」

「はい、先生！」

「それにしても………また腕を上げたな」

「お兄ちゃんにまたいっぱい教えてもらったの」

「はあ………あいつの妹バカは治らん………」

周囲は一気にざわつく。

ステラの魔術の技量に対しての驚くもあつたが、一番の驚きはステラがリディアと親しそうに話していることだろう。生徒たちは姪と叔母の関係を知らないので、驚くのは無理はなかった。

その中でも一番の衝撃を受けていたのは……ネイトだろう。

「な……なんだあいつは……っ!!?」

レイの妹であることは知っている。だからこそ取るに足らない存在だと思っていた。だというのに、一見しただけで分かる。あの氷は緻密なコードにより生まれた魔術。自分よりも数段上にいることは、ネイトほどの実力者だから分かってしまう。

噂があつた。

曰く、レイ・ホワイトの妹であるステラ・ホワイトもまた規格外オーディナリーの存在ではないかと。レイの評判自体は、一般人ではあるが大規模マギクス魔術戦で優勝した実績があるのでかなり高いものになっている。

ネイトはそれを不正だと信じていたが、ステラが魔術に長けていることを知って揺らいでしまう。

まさか、まさか……本当にレイ・ホワイトは規格外の存在ではないかと。

「そんなわけではない……あの人も、そう言っていた!!」

拳を握りしめるとネイトはステラのもとへと歩みを進めていく。彼の瞳には確かな怒りが宿っていた。

「ステラ」ホワイト」

「えっと……ホスキンスくん、だよな？　どうかしたの？」

きょとんした表情で尋ねるステラに、彼は人差し指を向けてこう告げた。

「僕は君との決闘を望むッ！！」

瞬間。

周囲に一気にざわめきが広がっていく。別に決闘自体は珍しいことではない。むしろ、新しい年度では恒例行事と言ってもいいだろう。魔術師同士が切磋琢磨する環境では衝突することは常なのだから。

「ふむ……面白そうだが、ステラやってみるか？」

リディアは乗り気なようで、ステラに尋ねる。彼女は一瞬、躊躇ったような表情を見せる。

「どうした、怖気付いたのか？」

ナイトの煽りに対してステラは申し訳なさそうに呟いた。

「いやだって……その。お兄ちゃんには本気を出さなって言われてて……」

「本気を出すな？　どういうことだ？」

そしてステラはナイトにとって最大の屈辱とも取れる言葉を口にした。

「私が強すぎるから、相手の人がショックを受けるって。だから決闘とかは控えたほうがいいって……」

「ッ……!」

声にならない怒りとはこのことか。ナイトは血が出るほどに拳を握り締めて、大声を上げる。

「いいだろう！ 僕にショックとやらを与えることができるのなら、やってみるといいッ……!」

「……うーん。でもなあ……」

洪っているとステラにこそつと耳打ちをするリディア。

「ステラ。やってもいいぞ。私が許可する」

「本当にいいの？」

「ああ。でも手加減はしてやれよ？ バレないようにな」

「うん！ じゃあ、やろっか」

こうして規格外の天才 ステラⅡホワイトの伝説が幕を上げるのだった。

第339話 驚愕の新生（後書き）

次回、ステラVSネイト！ さて彼はどくなってしまうのでしょうか……（笑）。

第340話 ステラⅡホワイトの真髄

「よし。じゃあ審判は私がする。どちらかが負けを認めるまで、または私の判断で決める。危ない時は介入するからな。指定範囲はこの円の内側だ」

リディアがスツと手を振ると円状の第一質料が青白く発光する。
プリママテリア
大きさとしては二人の人間が戦うには十分な広さだった。

周りの生徒たちはゾロゾロと集まって二人の様子を見守っている。

ナイトⅡホスキンス。言うまでもなく優秀なのは間違いない。今一番勢いのある上流貴族であり、学年首席。先ほど見せた魔術の技量もまた疑いようがない。おおよそ、ほとんどの生徒がナイトの勝利を当然だと思っていた。

だが、中にはステラのことを不思議に思っている人間もいる。後方には先ほどステラが生み出した氷のアートがそびえ立っている。どれほど複雑なコードを入れているのか分からないが、あれが尋常ではない物だとは思っている。

もしかしたら、もしかするのかもしれない……。

その一方でステラの絶対的な勝利を確信している二人がいた。

「あらまあ。これは勝負になるのかな」

「オリヴィア王女はステラの実力を知っているのですか？」

マリアとオリヴィアは隣り合って今回の決闘の様子を見つめていた。

「ボクはレイからステラの話は聞いているからね。家の近所はドグマの森の近くでよく二人で狩りに出かけているらしいよ」

「え……ドグマの森って、最高難度ですよ？ ハンターもあまり近寄らないとか」

「うん。でもレイたち兄妹だと何でもアリだと思わない？」

「……そうですね」

認めざるを得なかった。それにレイは氷剣の魔術師だ。義理とはいえステラはレイの妹でありとても愛されている。彼の手によって英才教育を施されているのは、何となくマリアも予想はできていた。

「それでは 始めッ!!」

ステラとナイトは互いに模擬戦用の木剣ぼうけんを握って疾走する。と、その瞬間。ステラはあろうことか木剣を思い切り投擲。美しいフォームで投げられるそれは直進してナイト目がけて放たれた。

「はあ!？」

「え……!!？」

「投げちゃうのっ!？」

生徒たちが驚くのも無理はない。今回の決闘は木剣と魔術の使用が認められているが、木剣を手放すメリットなど存在しない。近接戦闘になったときに圧倒的に不利になってしまうからだ。

しかし、ステラはそんなことはお構いなしに木剣を投げってしまった。

「ふっ……バカがッ！！！」

もちろんナイトも防御して、後方に投擲された木剣を受け流した。動体視力も抜群の彼は見てからでも十分に反応することができた。さて、ここからどうやって調理していこうか。まずは……と勝利する道筋を脳内で描いている彼だが、目の前に突然出現したステラにギョツとする。

「ちゃんと防いでね？」

微かに聞こえた声。

刹那。

ナイトは圧倒的なプレッシャーが放たれるのを感じると、とつさに木剣を魔術で強化して防御に回す。咄嗟に出た行動だった。そして、ステラの拳はナイトの木剣を捉えて、彼を力任せに吹っ飛ばした。

「おお。よく飛んだなあ」

リディアは驚くことなく、空を舞っているナイトの姿をニヤツと笑いながら見つめる。生徒たちはぽかんとしており、もはや何が起きたのか分かっていないようだった。

「え……どゆこと？」

マリアがボソリと呟くと、オリヴィアが今の一連の攻防の解説をする。

「まずステラは木剣を投げたよね？ あれは多分、相手の意識を木剣に向けたかったんだろっね」

「いや、それはそうでしょうけど……ステラの動き、残像が残ってたんですけど……」

「うん。おそらくは投げた木剣以上の速度で移動したんだね。相手も流石にこの動きは予想できなかった。それでステラの渾身の拳を何とか受け止めて、今は空を舞っている。って感じかな？」

「……意味不明なんですけど。木剣と同じ速度で移動って……ステラって何者よ……」

「レイの妹だよ」

「ああ。どうしてその言葉だけで納得できてしまうのかしら」

はあ……とため息を漏らすマリア。オリヴィアは魔術師としては優秀な方であり、分析する力はかなりずば抜けている。一連の攻防の意味を一瞬で理解できたのは、リディアとオリヴィアだけだっただろう。

そして戦闘は続いていく。

「……なッ！！！？」

ナイトはそこまで大きなダメージは受けていない。本能的に防御したおかげで、ただ空に飛ばされただけになっている。が、彼の内心は驚愕で満ち溢れていた。

そもそも、投擲した物体を超える移動速度など規格外過ぎる、も

ちろん世界的な魔術師になれば移動速度もその領域にたどり着くのだろうが、おおよそ学生のレベルではない。

少なくともネイトにはできない芸当だ。

「次、いくよ？」

後ろから声が聞こえてきた。先ほどまでは地面にいたというのに、ステラは宙を舞っているネイトの後方に回り込んできていたのだ。そして、再び放たれる拳。圧倒的な強化を施された放った拳は次こそネイトの木剣を粉々に打ち砕いた。

彼はそのまま地面に叩き落とされると、何とか受け身をとってゴロゴロと転がっていく。いつも丁寧に整えている髪の毛はボサボサになっていた。それに打撲もしているのか、身体中から痛みが走る。

まだ戦うことはできる。できるが、ネイトの心には間違いなく恐怖心が植え付けられてしまった。

「な……何なんだお前はッ！！？」

意味不明な拳動を繰り返すステラに問いかける。

地面にスタツと降り立ったステラはゆっくりと歩みを進めながら、答えた。

「レイ＝ホワイト　お兄ちゃんの妹だよ。それ以上でもそれ以下でもない。それでまだ続けるの？」

「ぐっぐっぐっ……っ！！」

恐怖はあるがそれ以上に貴族のプライドがここでの後退を許しはしなかった。それにレイの名前を出されて引くことなどできない。彼は自分の心のうちにある恐怖心を押さえ込むと立ち上がった。

もう木剣はない。魔術戦に持ち込みたいところが、ステラの移動速度からして遠距離戦は難しいだろう。ならば、真正面からの格闘戦。受けて立つしかない、と覚悟を決める。

「行くぞッ!!」

「うん……っ!……!」

そこから先、行われたのはあまりにも一方的な蹂躪だった。

「はあ……はあ……ごぼっ……あり得ない……こんなこと、あり得ない……」

「ふう。いい汗かいたね!」

決着。リディアが止めるまでもなく、ナイトはもう完全に動けなくなっていた。ボロボロのまま地面に横たわるナイトと軽く汗を拭うステラ。まるで彼女にとっては今の戦闘は準備運動だったかのようだ。

ナイトは格闘戦では不利だと分かっていたので、あらゆる魔術を行使した。火、水、氷、電気。とっておきの上級魔術もぶつけた。

しかし、ステラは小さな拳で全てを打ち消していった。

決してレイのように対物質コードアンチマテリアルが使えるわけではない。彼女は純粹に物理的に全てを拳だけで叩き伏せたのだ。身体強化の一点に

限っていえば、ステラはすでに七大魔術師の領域に届きそうな勢いである。

完全なる物理特化のゴリ押し魔術師。それこそが、ステラの真髓だった。

レイとリディアはすでにステラの内部コードの才能に気がついていた。莫大な第一質料プリママテリアにそれを制御できるコード操作技術と類稀なる格闘センス。ステラⅡホワイトの名前はここにいる生徒にとって忘れられないものになっただろう。

「ふむ。まあまあだな、ステラ」

「ごめんなさい……ちょっと本気出しちゃった」

「いや。これは相手が強かったな。ホスキنز、お前は強い。誇つていいぞ」

リディアからの賛辞の言葉。きっとナイトはこの戦闘の後でなければ手放して喜んでいただことだろう。しかし、今は全く喜ぶ気力もはなかった。

精根尽き果てる。

今のナイトを表すのにぴったりの言葉だ。

全てを見届けたマリアは思ったままの感想を口にする。

「ははは……魔術師って何だろう……」

「さあ？ でもボクは嬉しいよ。ステラが楽しそうで」

ステラⅡホワイトの伝説はまだ始まったばかりである

第340話 ステラⅡホワイトの真髄（後書き）

ネイト散る！

ということでステラの魔術師としての本質が分かった回でした。彼女は格闘戦に限れば、三章で登場した暴食と同じレベルです。ただ彼女の場合は普通の魔術はそこまで得意ではないので、限界はありますが。今はまだ……。

ということで今後のステラの活躍にご期待ください！

第341話 レイの婚約……？

俺の耳にステラの噂が入ってきた。

曰く一年生に最強の戦士が現れたと。実際に目撃したのはステラと同じクラスの生徒たちだが、噂はさらに誇張されてしまいステラは素手で全てを粉砕する化物と言われていた。

いや、厳密には間違っていない。だがステラが不満を漏らすのも無理はなかった。どんな業績を残そうともステラは世界で一番可愛いのは変わりようがないからな。

「お兄ちゃああああああん！！」

早朝。いつものように一緒にランニングをしようとしているとステラが思い切り泣き叫んでいた。

「おっと。どうかしたのか？」

「ぐすっ……みんな私が化物だって言うんだよー！」

「大丈夫だ。ステラは世界で一番可愛いよ」

「本当？」

「ああ。でも、一応そう言った人間の名前は覚えているのか？ 少し話し合いがしたいと思ってな」

「ダメだよ！ お兄ちゃんってば酷い事するつもりでしょ！？」

「い、いや……そんなことは……」

視線を逸らす。実際にはステラがどれだけ愛らしいのかというこ

とを半日ほど語ろうと思っただけだ。去年の俺の時は別に気にしていなかったで、俺は放置していたがステラがどうしても鬼になるというのなら、何か対策をしようと思っただけが……止められてしまった。

「いいもん。お兄ちゃんが分かってくれば、大丈夫だもん」

と言いながら、俺の胸に顔を埋めている。全く、甘えんぼうなところは昔から全く変わらないなと感慨深く思う。そして俺たちは、今日も二人でランニングを始めるのだった。

「ねえレイ」

「どうしたアメリカ」

教室にいつもより早く到着するとアメリカがすでに席についていた。彼女は紅蓮の髪をさらっと後ろに流しながら、俺に尋ねてきた。

「ステラちゃんのことだけど……」

「ああ。そのことが。大丈夫だ。さっきちょうど、ステラ本人から話を聞いておいた」

「あ……そうなんだ。まあ、いじめとかはないと思うけどちょっと大変なことになったかもね」

「どういうことだ？」

詳細な話をアメリカから聞くことにした。俺はステラからはどうやって戦ったのかなどの戦闘記録しか聞いていないからだ。

「その……相手がナイトIIホスキンスだったのよ」

「ホスキンスか。首席である彼だが、ステラに敵わないのは仕方ないだろう。ステラの内部コードインサイドはすでに世界レベルだ。たとえどれ

ほど魔術が優れていようと、ステラの拳の前では全てが無意味だ。対抗するならば聖級魔術、または固有魔術^{オリジン}レベルは欲しいところだ。ステラレベルの物理特化型の魔術師には真正面から戦わないほうがいいだろう。幸いなことに、ステラはまだ戦闘においての戦術の理解は浅い。ま、そのうち俺が鍛えるが……」

雄弁にステラのことを語っていると、気がつけばアメリカが半眼でじつと俺のことを見ていた。彼女の視線に抗議が混ざっていることにはすぐに気がついた。

「レイ……話過ぎ。それとステラちゃんのこと好き過ぎ……」

「おっと。すまない。それで、相手がホスキンスだったんだな？もしかして貴族的な意味でまずいのか？」

「そう。彼は今一番勢いのある、ホスキンス家の長男。それが決闘で敗れるなどあつてはいけない。実は貴族の間でも話題になつてゐる。ステラちゃんは何者かつて」

「別に調べても普通の家系しか出てこないがな。まあ……師匠の姪とバレたら面倒だが、そこはカーラさんたちが情報統制してくれているだろう」

「実はレイの話も出てるのよ」

「そうなのか？」

まさかステラ繋がりで俺の話も出ているとは。でもしかし、俺とステラは兄妹だ。そこから紐付けて調べるのは道理ということか。

「ええ。去年のレイの活躍をみて疑問に思った人も少しはいるからそれで実はホワイト家はかなり有力な貴族の末裔とか、色々新しい話が出てきて……」

「貴族の末裔？」

「昔から貴族が不祥事とかの理由で追放されることがあったの。そ

の流れでホワイト家には貴族の血が流れているから、あの強さも同然なのかもって……」

「ほお……なかなか面白い考察だな」

顎に手を当てて思案する。

そもそも、俺の存在は魔法使い末裔であり魔術師とは関連性はない。それこそ、貴族などとは縁の遠い存在だ。おおもとのホワイト家もまた別に特別なものはないだろう。強いていえば、突然変異的に生まれた師匠の才能がステラにも流れているのは間違い無いだろうが……。

「そ、それでその……」

アメリカは顔を赤く染めながらくると指先に自分の髪の毛を巻きつけている。チラッと俺の顔を見ってくる。挙動不審な様子に対して、俺はどうしたのだろうと疑問に思う。

「どうした？」

「えっと……その。別に、これは他意はないのよ！」

「ふむ」

「そ……その。優秀な魔術師ならば、貴族にしてもいいんじゃない？ って話があつて。言い方は悪くなるけど、貴族に取り込みたいって層も出てきているのよ」

「……血統主義的な考え方だな。しかし、理解できないわけではない」

「そ、それで。貴族の娘の誰かと婚約させれば、なんて話も。あはは……。まあ三大貴族は難しいかもだけど、レイの本当の姿が分かればもしかして……？ な、なんてねー！」

アメリカが言いたいのは俺が貴族の誰かと婚約すれば、自動的に俺の存在が貴族になるということだろう。流石に三大貴族レベルは厳しいが、氷剣の魔術師と公表すればそれも不可能ではない。

婚約か……俺には全く縁のない話だが、まさかこうなってくるとは。

「……………」

「れ、レイ？ どうしたの？」

「俺がアメリカと婚約する可能性があるということか」

「へー！？ ま、まあそうなのかな！？ あくまで可能性！ 可能性の話だから！ うん！」

「そうなるとレベツカ先輩とアリアーヌともあり得るのか。そうか

……………」

「……………」

婚約。

俺は誰かと結婚して家族を作るということか。改めて自分の過去を思い出す。今までの俺ならば、自分にはそんな資格はないと考えているだろう。しかし今は、少しだけ違う。自分の未来も少しずつ考えている最中だった。

ハワードのことをふと思い出す。

なあ、ハワード。俺は誰かと家族になってもいいのか？ そんな未来があつていいのだろうか。と、一人で考えていると目の前のアメリカは明らかに不機嫌になっていた。

ぶすつとした顔に頬は少しだけ膨らんでいる。視線もわざと合わ

せないようにしている。

「ど、どうしたアメリカ……？」

「ふんっ！ 別になんでもないわよっ！！」

椅子から乱暴に立ち上がり、アメリカは教室内から去っていつてしまった。乙女心というものは、相変わらず完全には理解できないものだ。

「レイ。おはよ」

「クラリス。おはよう」

「なんかアメリカが凄い不機嫌な顔で出て行っただけ。なんかした？」

「実は」

クラリスに先程の話をしてみた。するとクラリスは「はあ……」とため息を漏らした。

「その話。私のところにもきてるわよ。でもまさか……はあ。まあこればかりは、仕方ないというか。アメリカには同情するけど」

「どういうことだ？ 教えて欲しいのだが」

「これはあんたの問題よ。いつか向き合うことになるから、ちゃんと考えなさい。自分で考えるのが大切なのよ！」

ツインテールがビシツと高い位置に上がる。「冗談で言っているのではなく、真剣なのはツインテールの動きから理解できた。いまいちよく分らないが、そうだな。頑張って考えてみよう。」

「ありがとうクラリス。考えることにする。しかし、そうすると上流貴族のクラリスとも婚約の可能性があるのか？」

「……ばっ！！！！ 変なことに気がつかなくていいのよ、ばか！
」

バシン、と顔にクラリスのツインテールがぶつかる。別に避けてもよかったのだが、怒っているようなので甘んじて受け止めることにした。

そして彼女もアメリカのように出て行ってしまった。

乙女心は……難しいものだな……。

この裏で進んでいる思惑を、俺はまだ知らなかった。

第342話 レイの行先

いつものように授業を受けている最中のことだった。

俺は去年からずっと魔術が上手く使えなかった。魔術領域暴走のオーバーヒート後遺症を自分で封じるために魔術領域のほとんどを消費してしまっていたからだ。

それに加えて師匠との誓約もあったので、一時的に解放できるとはいえ満足に魔術を使えるのはかなり先になる……そう思っていたが今現在はかなり調子がいい。

完全に完治したわけではないが、魔術領域暴走は限りなく治まって来ている。そして今日の授業ではアメリカと肉薄するほどには良い魔術を使うことが出来たと思う。

「レイ。調子良さそうね」

「アメリカ」

今はちょうど演習場で実践魔術の授業中。課題である魔術をこなしていくのだが、俺とアメリカはかなり早く終わってしまった。

「そうだな。自分が思ったよりも、感覚が戻って来てるのかもしれない」

「それなら今年は出れそうじゃない？」

「もしかして魔術剣士競技大会のことか？」
マギクス・シュバリエ

「ええ。私たちはもう二年生だから新人戦には出れないけど、本戦

にレイなら挑戦できると思うけど」
「そうか……そうかもしれないな」

マギクス・シュバリエ

魔術剣士競技大会がもうすぐやってくる。まだ代表選手を決める校内予選は始まっていないが、すでに学院内で噂されている。今年は誰が出て、誰が優勝するのか。

去年の新人戦の覇者はアメリカ、本戦はルーカス・フォルスト。

俺が仮に本戦に出るとなると、アメリカ、アリアーヌ、ルーカス・フォルストと戦う可能性は大いにある。思い出す。去年の魔術剣士競技大会終了時に、マギクス・シュバリエ絶刀の魔術師であるルーカスに言われたことを。

彼は俺と戦いたい、と言っていた。決して殺し合いをした上で優劣を決めたいのではなく、あくまで大会のルール内で優劣を決めたいということだろう。

でもそうか。俺にもそんな選択肢があるのか。

「レイ。今年はお前も出るのか？」
「アルバート」

アルバートもまた課題を終わらせたようで、こちらにやってくる。

「そうだな。もしかしたら、出るかもしれない」
「それは楽しみだな。俺ももちろん今年も出場する。去年はアリアーヌ・オルグレンに敗北したが、今年こそは勝ち切ってみせる。それにレイとももう一度戦いたいしな」
「アルバート。そうだな、俺もまた戦いたい」

出た言葉は純粹に思つてのことだった。アルバートとは去年のグレイ教諭の事件の時に戦い、次は大規模魔術戦で戦った。ちょうど一年前に出会ったアルバートは全てを血統で決まると思い込み、才能こそが世界の全てだと思つていた。

しかし、改めて自分自身を見つめ直し一から努力しているアルバートはすでに学内でも屈指の魔術師。アメリカに次ぐ実力者として評価されているのは知っている。

「レイ。私もよ」

「アメリカ」

「私もレイと戦つてみたい。去年はあなたに支えてもらつことが出来なければ、優勝なんて出来なかった。でもだからこそレイも少しは表舞台に出てもいいんじゃないかって……もちろん、戦うからには負けないけど！」

アルバートだけではない。アメリカもまた、俺にそんな言葉をかけてくれる。そうだな……今年は出場してみようか。魔術剣士競技大会に。マギクス・シュバリエ

「そつえば、レイの妹も出るんじゃないのか？」

アルバートが尋ねてくるがステラが魔術剣士競技大会に参加するという話は聞いていない。最近は主に学院での話しか聞いてないからな。これからの行事についての話は特にしていない。

しかし、ステラが出るとなると優勝する確率はかなり高いだろう。むしろ本戦に出てもかなり良い成績を残すに違いない。

「その話は聞いていないが、そうだな。ステラが出ればかなりいい線に行くと思う」

「ステラちゃんの噂聞いてるけど……あれって本当なの？」

「本当だ。ステラは近接格闘戦ならば俺に匹敵するほどだ。もちろん総合的な魔術戦になればまだまだだが、物理的な戦闘能力だけでいえば学生レベルではない」

「あ……あはは……あんなに小さくて可愛いのに、えげつないのねえ……」

「ステラは俺と師匠の教育を受けているし、素直な性格だからこそ愚直に努力できる。当然だな」

「はいはい。レイのシスコンはいいから」

と、軽くあしらわれてしまう。

そう話している間にも授業は終了。俺たちは校舎へと戻っていくのだった。

それにしても魔術剣士競技大会か。マジクス・シュバリエこれは師匠に相談した方がいいのかもしれない。一応だが確認は取っておいた方がいいだろう。

ということで放課後になってから俺は師匠のもとへと向かうのだった。

「エインズワース先生」

「ん？ ああ。レイか。どうした、そんな改まって」

「一応、周りの目があるので」

「おっと……そうだったな。で、話があるのか？」

「はい」

「じゃあ学院長室でも使つか」

「分かりました」

廊下で出会った師匠とともに学院長室へと向かう。ノックをすることもなく、師匠は豪快に扉を開けて室内にズカズカと入っていく。

「おい。リディア。何度も言っているが、ノックもなしに入ってくるな。それとここはお前の部屋じゃないとあれほど」

「今日はレイが相談があるらしくてな」

「レイが？」

「はい。申し訳ありません」

「そうならそうと早く言え」

アビーさんは立ち上げるってから紅茶の準備をしてくれた。どうやらアビーさんも話を聞いてくれるらしく、テーブルには三人分の紅茶が置かれた。

「それでどうしたんだ？」

師匠は一気に紅茶を飲み干した後にそう言って来た。隣ではアビーさんが師匠のことを睨んでいるが、全く気にしていないようだ。た。

「マギクス・シュバリエ
魔術剣士競技大会のことなのですが」

「ああ。出たいなら出ればいい」

「え……いいんですか？」

「別にいいだろう。なあ、アビー」

「そうだな。私も別に良いと思うぞ。今いる学生はかなりの粒揃い。レイであっても簡単には勝てないだろう」

意外だった。

いや、別に反対されると決めつけていたわけではないのだが、あっさりとは許可されたので拍子抜けしたというのが正しいだろうか。

「ただし、完全に本気は出すなよ？　氷剣は使って良いが、赫^{バンド}冰封^ラ印は無しだぞ？」

「もちろんです。では……今年はお場してみようかなと思います」

「ああ。学生時代の思い出は大切なからな。ただ私は魔術^{マギクス・シュ}剣士競技大会で四連覇だったが、レイはそれは無理なのが残念だな」

「はは。そうですね。四連覇はステラがしてくれるんじゃないんですか？」

「ステラか……あいつの実力なら十分にあり得るな……」

そこでアビーさんは思い出したかのように「あ……」と声を漏らした。

「リディア。そう言えば、ステラとホスキンズに決闘をさせたな？」

「ああ。悪いのか？　別に珍しいものじゃないだろう」

「はあ……もつと先に言っておくべきだったか。ホスキンズ家は上流貴族の中でも、かなりの力をつけてきている。無駄にプライドを傷つける行為は控えるように、先に注意しておくべきだったか……」

「別にいいだろう。貴族だからって、私の教育には関係ない」

「まあそこは雇ってしまった私の責任だな。今後はもう少し、生徒の事情も考えてくれ」

「はいはい」

「はいは一回でいい」

「はいよ」

二人のそんなやりとりを見て、どこか懐かしく思う。あの時、一緒に同じ部隊で戦っていた人たちが同じ学院で談笑しているのを見

るとなんだか嬉しく思う。

俺だけではない。師匠もアビーさんもたくさん傷ついてきたからこそ、こうして二人が普通に話しているだけでも俺は感慨深いと感じる。

「それでは自分は失礼します」

「ああ。レイ、頑張れよ」

「はい。師匠」

立ち上がったから扉を開ける。するとそこには、ギョツとした顔のキャロルが気まずそうな顔をしていた。

「あ、あははー！ 別に盗み聞きをする気はなかったんだよね？」

「ちよつとタイミングがねー！ ねね？」

「別にいいよ。キャロルも聞いたと思うが、今年は魔術剣士競技大会^{マギクス・シュバ}に出ることにするよ」

「そっか。頑張ってるね、レイちゃん」

「ああ」

キャロルは真剣な顔つきで応援してくれた。

そうして俺は改めて学園生活を送っていくのだった。

第343話 ホスキンス家の思惑

ホスキンス家ではナイトが父親に呼び出されていた。

ちょうど深夜にも差し掛かろうという時間にもかかわらず、呼び出されたのだがナイトが文句を言うことはない。

ナイトが向かうのは父親の書斎。

ラルドⅡホスキンス。

ホスキンス家の当主であり現在は貴族界では彼の影響力を無視できる人間はいないだろう。三大貴族は別にして、それ以外の血統主義を掲げている貴族を束ねている。

「父上。ナイトです」

「入っている」

「失礼します」

丁寧に深く一礼をしてからナイトは書斎に入っていく。部屋の左右には大量の本が並んでいる。壁全体が本棚になっているのはラルドの趣味だ。ただし、彼はただの読書家ではない。より高みへと登るための研鑽は怠らない。

「さて、どうして呼んだのか分かっているな？」

顎髭を軽く撫でながらナイトに問いかける。

髪の毛は短く切りそろえられていて爽やかな印象だ。その一方で顔つきは陰しく、鋭い眼光でネイトを睨み付ける。まるで猛禽類のような視線にネイトは一瞬だけ怯える。

しかし、グツと拳を握るこむとラルドの問いに答える。

「学院での決闘の件です」

「そうだ。ステラⅡ ホワイト。こちらで調べたが、ただの普通の魔術師の家系の人間だ」

「……はい。分かっております……」

言い訳をするつもりはなかった。自分の行動もまた、ホスキンス家に少なからずとも影響を与えることは自覚している。学院でステラと決闘をしたのは、ホスキンス家の力を示すためだった。

だというのにステラの圧倒的な力の前に敗北し、今ではネイトよりもステラの方が評価が高い。むしろ魔術剣士競技大会ではステラが優勝するのでは？ と声上がるほどだ。

ネイトは辛酸を嘗める日々を送っていた。

「ネイト。本来ならば、厳しく叱責するところだが今回は違う」
「違う……ですか？」

ネイトは驚きの表情を浮かべる。いつものように厳しく説教をされるものだと思っていた。だというのに、ラルドはそうしない。いつもとは違う展開に彼は驚く。

「ステラⅡ ホワイト。一見すれば、普通の魔術師の家系出身。しか

し、彼女の母親の妹はリディア「エインズワースだ」

「リディア」エインズワース！？ 氷剣ですかっ！！？」

「そうだ。現在は学院で教師をしているようだ」

「そうか……そうだったのか……」

ネイトは独り言を呟く。

腑に落ちたという顔だった。

「何かあったのか？」

「はい。親しそくに話をしているのを目撃したので。納得しました」
「なるほど。リディア」エインズワース自体は突然変異のような存在だ。三大貴族でもなく、普通の貴族ですらない。だが確実に才能という名の血は継がれている」

「父上。確かにステラ」ホワイトは才能があるのかもしれませんが。
しかし、このまま負けておくわけにもいきません。それにレイ」ホワイトの件もあります」

「レイ」ホワイトか……」

レイ」ホワイト。

現在、貴族の間ではレイとステラの存在がかなり注目されていた。普通に兄妹共に才能があるのならば血統で説明がつく。だが、少し調べれば義理の兄妹ということは分かる。

それにレイは引き取られたとはいえ、もともとは小さな村出身の
一般^{オーディナリー}人。一般^{オーディナリー}人が魔術を使えるようになるのは、かなり稀にあるがそれが魔術学院に入ることができる水準に達したのはレイだけ。

それに去年の大規模魔術戦を観戦すれば、レイがただの一般^{オーディナリー}人と
マギクス・ウォー

思う人間はいないだろう。

今となつては本当は有力な貴族の隠し子説があるほどには、レイは有名になりつつあった。

しかしもちろん、そんな噂にホスキンス家が流されることはない。

必要なのは血統であり、才能。それを悉く否定するホワイト兄妹はホスキンス家にとって目障りなのは間違いないかった。

「レイ〓ホワイトにステラ〓ホワイト。確かに強さは認めよう。だが、才能はお前の方が上だ。自覚しろ。そして、二度と油断するな。お前が本気を出せばあの二人など造作もないことを示せ。それが才能がある人間の務めだ」

「はい。父上のおっしゃる通りです。あの二人とはいずれ決着をつけます」

「よろしい。その意気だ。では、下がっていい」

「失礼します」

ナイトは再び深く一礼をするとラルドの書斎を去っていく。

鋭い目つきでナイトは歩みを進める。

ステラが強い理由は理解できた。才能がある人間だと分かった上で戦えば、負けることはない。あの時はまだ本気を出すことができなかった。それに、レイに負けることは絶対にありえない。

なぜならば……。

「ナイト。彼に呼ばれたの？」

「ああ。しかし、ステラ」ホワイトの件は聞いた。もう油断しない」
「ふふふ。その意気よ。あなたは強い。それを自覚すればもう負け
ないわ」

「もちろんだ」

妖艶に笑う女性が彼の部屋にいた。

ビアンカ「ラルフォード。ホスキンス家と懇意にしている貴族の
一つであり、その中でもビアンカは優秀な魔術師として名を馳せて
いた。彼女はネイトの魔術指導をしている。

「あなたは強い。ホワイト兄妹なんて、目じゃないほどに」

「ああ。そうだ」

「ふふ。ネイト。あなたはいずれ、七大魔術師になる器よ。それを
自覚しなさい」

「もちろん分かっている」

ビアンカは耳元で囁く。まるでそれは暗示のようにネイトに刷り
込まれていくのだった。

第344話 幕間・優生機関（前書き）

今回は少し短めです。ご容赦ください。

第344話 幕間：優生機関

「それで首尾はどうだい？」

円卓を囲むようにして並んでいる面々。ちょうど七人の人間がそこにいた。人種、性別、趣味嗜好、容姿は多種多様。ただし、七人の中で共通しているものがあつた。

それは、真理を追求すること。

この世界の高次元に存在している真理世界アーカーシャを突き止めることこそが彼らの悲願である。そのために人間をどれだけ使い捨てにしようが、欲望が止まることはない。

際限なく続く実験など些事に過ぎないのだから。

「現在は貴族側も十分に取り込めているかと」

メガネをかけた女性が男性の問いに対して答える。手元には資料のようなものを持っていた。そこには数多くのデータが書き込まれているようだった。

「なるほど。ホスキンス家は？」

「こちらの勧誘にはまだ乗ってきていません。現在は貴族たちの中でも一番の勢いがあるようですが、渋っている側面があるかと」

「ふむ。分かっている。分かっている。倫理と言う人間が枷にはめた世界で生きているから、その程度で納まる。私たちの研究

成果を見て怖気付くのなら、その程度だ」

「では切り捨てると？」

「いや。確か、ビアンカが潜入しているはずだ。あそこの息子はなかなか優秀だ。才能もある。記憶痕跡が熟成するのを待ち、回収してもらおう予定だ」

「分かりました」

恭しく頭を下げる。

「で、レイ＝ホワイトにはいつ仕掛けるの？」

また別の女性が口を開く。リーダーと思われる男性はニコリと微笑みを浮かべると、それに答える。

「レイ＝ホワイト。どうやら魔術領域暴走はかなり良くなっている。早計に仕掛けるのは危険だ」

「私は知らないんだけど、そんなに強いのか？」

「世界を統べるだけの能力を彼は持っているよ。おそらくは、生存している聖人クロイツの中ではもっとも真理世界アーカシヤに近い。そもそも魔術、魔法とは真理世界にどれだけ干渉して情報を引き出すことができるか……というものだ。真理世界アーカシヤの干渉力が魔術の力と同義になっている。レイ＝ホワイトの場合はそれが異常なまでに優れていると思う。いい」

女性は腰まである長い髪の毛の先を軽く触り、思索に耽る。

「なるほど……ね。七大魔術師の記憶痕跡は回収できないの？」

「現在は燐煌がこちらの存在に気がついたようだね。表立った動きはかなり制限されている。去年のヘレナ＝グレイディとエヴァン＝ベルンシュタインは派手にやってくれたようだが、それも今後は難

しいだろう。ま、どうにかするけどね」

男性はじつと虚空を見つめる。

優生機関ユーゼニクスの中でも上層部と言われる存在。その中でもトップの七人がこうして集まることは自体は珍しかった。ただそれが意味するのは、これから大きく動き出していく……というものだった。

全てはレイを中心にして生じる出来事である。

「それでは早速、本題に入ろうか」

不敵に笑う。

優生機関ユーゼニクスが本格的に台頭するまであまり時間は残されていなかった。

第345話　かくれんぼ？

休日がやって来た。

俺はここ最近はずっとステラと一緒に過ごすことや、いつものメンバーで集まったりすることなどが多かったのだが、今日は違う。

俺はある人物に呼び出されていたのだ。

閑散としている校舎の中を進んでいく。全寮制ということもあって、生徒が休みの時に校舎にやって来ることは別に珍しくはない。部活動や課外活動、その他自習などのために開放されているからだ。

「……よし」

ある教室の前で立ち止まる。ここは学院の中でも一番端に位置していて、空き教室となっている。生徒があまり近づくことはなく、ごく稀に男女の密会に使われているのはある種の伝統だとか。

扉の前で立ち止まってから、俺は意を決して扉を開けることにした。

「レイ。来たわね」

着崩した制服を着用している彼女。胸のほとんどのボタンはしっかりと留めていないし、スカートは普通の生徒に比べると短めだ。それに、両耳にはピアスがかなり目立つ。顔つきはいつも少し怒ってい

るようにも見えるが、ここ半年の付き合いで別に怒っていないことは分かっている。

マリア「ブラッドリィ。

ブラッドリィ家の次女であり、レベルカ先輩の妹。去年の魔術協会のパーティーで知り合い、文化祭の時には色々と迷惑をかけてしまった。その中でも特に……彼女とはある因縁のようなものが存在する。

「よつと」

マリアは椅子に座った状態から立ち上がると、俺の方へと近づいて来る。

「持って来たの？」

「ああ」

事前にマリアにはあるものを持って来るように言われていた。右手には小さな袋を俺は持っている。その中にあるのは リリィー
「ホワイトになるための女装道具だ。」

どうして今日、俺がマリアに呼び出されたのか。

女装道具を持って来ると言われたことから、内容は察している。マリアは多くは語りはしなかった。ただ女装道具を持って来て、指定の時間と場所を指定してきたのだ。

「今回レイを呼んだのは他でもないわ」
「それは？」

一応、尋ね返してみる。

そしてマリアは、ビシッと俺に向かって人差し指をさす。

「私の目の前で、お姉様になっ**て**みなさい!!」

とのことだった。

マリアは以前、リリーアの正体を知ったときにあまりの驚きに気絶してしまった過去がある。それから特に音沙汰もなく、今まで過ごしてきたのだが……ついにか。

というのが俺の感想だった。

いつかマリアはリリーの件について言及するだろうとは思っていた。それが今になった、ということである。

「いいのか？ 目の前で着替える様子を見せても」

「いいのよ。それに私もいつか、現実に向き合う必要があるし。お姉ちゃんとの件もあったしね……」

少しだけ寂しそうな表情でマリアは言葉にした。マリアとレベッカ先輩の確執はまだ完全になくなったわけではない。学院に入った今でも、マリアがレベッカ先輩の妹だと知ると驚く人間は多い。

それは肌と髪が真っ白で、瞳が赤いという稀有な容姿をしていることが起因している。それに、マリアは派手な見た目をしている。レベッカ先輩は学院の中でも一番の清楚な女性と呼ばれていること

もあって、ギャップは大きい。

そんなマリアがこうして覚悟を決めたのなら、俺もまたしっかりと向き合う必要がある。

「分かった」

「ええ。お願い」

と、リリーになるうとした瞬間だった。廊下から他の生徒の声が聞こえてきた。

「本当なのレベツカ。あの二人がここにいて」

「ええ。私の直感が告げているのです。それに、マリアは前から怪しいと思っていたので、一度お灸を据える必要があると思うのです」

「へえ……でも確かに、マリアとレイって妙に仲がいいよね。ボクも前からマリアは怪しいと思っていたんだよ」

マリアはサーツと顔を青くする。そして彼女は俺に抱きつくような形で近づいて、慌てた様子で耳打ちをする。

「ま、ままま……まずいわっ！ レイ早く隠れないと！」

「どうしてだ？」

「お姉ちゃんにバレたらやばいのよ！」

「ふむ……」

言わんとすることはいまいち理解できないが、マリアが真剣な様子から俺は教室内のあるものを見つめる。

マリアの手を取ると俺たち二人はそこに隠れることにした。

「ドーン！ ボクが来たよ！ って……あれ。誰もいないけど？」
「あら？ おかしいですね。確か、ここのような気がしたんですけど」

レベツカ先輩とオリヴィア王女の二人が教室内に入るが、俺たちの存在に気がつくことはない。

「ちょっと……レイ！ 近い、近いわ……！」
「我慢して欲しい。少しの辛抱だ」
「あう……」

俺とマリアは教室内にあったロッカーに隠れることにしたのだ。しかしもちろん、ロッカーは人が入るようにはできていない。一人でも入るのが大変なのに、二人となれば無理もたたる。

体はぴったりと密着して微かにマリアからいい匂いがして来る。もちろん、そんなことは口にしないのだが。

「むむ……ボクの直感はまだ二人が近くにいと告げているよ！」
「そうなのですか？」
「うん！ もう少し探してみない？」
「そうですね。それがいいでしょう」

果たして俺とマリアは無事に隠れることができるのだろうか……。

第346話 マリアのボーイフレンド？

「うつうつ……」

「すまない。大丈夫か？」

小声でマリアに話しかける。ロッカーの中にいるということ、かなり距離が近くなっている。それに、マリアは緊張しているのか分からないが顔を赤くして呼吸も少しだけ荒い。否応なく抱き合うような形になっているのは申し訳ないが、ここは二人が出ていくまでじっとしておくべきだろう。

「うーん。本当にいないっぽいけどな」

「どうでしょう。もしかしたら、ベタにロッカーの中に二人で隠れている可能性もありますよ？」

ビクツとマリアの体が震える。俺は体は震えはしなかったが、内心ではヒヤヒヤだった。思えば、レベツカ先輩は時折異常な圧力を発することがある。俺はなぜだか、今はその前触れのような気がしていた。

「あははー。レベツカってば、流石にそんなことはないでしょー」

「ええ。そうですね」

と、二人は笑い合っている様子。流石に冗談で言ったようだが、非常に心臓に悪い。

「あ……んっ……」

マリアから漏れる色っぽい吐息。

「ど、どうした？」

「そ、その……胸が当たって……ごめん、変な声出して」

胸が当たって？ 確かに真正面から抱きついていてる形にはなっているが、胸の感触はない……と思っていたが、確かに微かな膨らみが当たっている。俺が軽く動いてしまったので、擦れてしまったようだ。

「ねえ、今……失礼なこと考えなかった？」

「いや。別に……」

視線を逸らす。だが、マリアは半眼でじーっと俺の顔を見つめていた。

「胸が当たるほどないって、思ったでしょ？」

「いや。そんなことは」

「いいもん。私だって、遺伝的に絶対に大きくなるもん……お母さんも、お姉ちゃんも大きいし……」

最後の方は少しだけ涙声になっていた。俺は女性の胸事情には疎いが（逆に詳しい男はいないだろう）、キャロル曰くあまりにもデリケートな問題なので特に胸が小さな女性には細心の注意を払うように言われたのを思い出した。

ここですぐにフォローしたいが、これ以上声を出すと流石にまずい。マリアも徐々に周りのことを気にしなくなったのか、声を大きくなっているようだった。

「いいもん……絶対に大きくなるもん……！」
「静かに……っ！ そろそろまずい！」

その瞬間だった。

俺はマリアの口元に手を持っていったのだが、唇に触れた瞬間驚いてしまったのか足がロッカーに思い切りぶつかってしまふ。カン、と小さな音ではあるが室内に響くわたる金属音。

「あら？」

「アレ？ 今、何か聞こえたような」

「ええ。ロッカーから聞こえたような気がしますが」

マリアは「あわわわ……」と微かに声を漏らして、慌てていた。まずい、このままでは絶対にバレてしまふ。どうするべきか、と思考している間にも二人の足音が徐々にこちらの方に近づいてくる。

「一応、確認してみますか？」

「そうだね！ ありえないとは思うけど、一応ね！」

どうやらオリヴィア王女とレベッカ先輩の間ではロッカーを開けることが決まってしまったようだ。

あまりこの手は使いたくはなかったが……。

「はい。ドーン！」

オリヴィア王女は思い切りロッカーも戸を開ける。しかし、彼女が目撃したのは俺とマリアの姿などではなかった。

「にゃーん」

「にゃん。にゃん」

猫である。今、オリヴィア王女とレベッカ先輩の前には小さな子猫二匹見えているはずだ。

「あれ。猫だね」

「そうですね。二人でじゃれていたのでしょうか？」

そしてその猫二匹が教室の外に出ていくと、二人もまたこれ以上この空き教室にいる必要はないと思ってやっと外に出ていくようだった。

「一応、他の教室も探してみましようか」

「そうだね！ 近くにいてもいいかもしれないし！」

そうして二人は教室の外へと去っていくのだった。

「はあ……はあ……はあ……あ、危なかった」

「そ、そうだな……」

ロッカーから出てくる俺とマリア。

そう。実は先ほど、俺は魔術を使って二人に幻影を見せていたのだ。

知人に魔術を使うのは憚られたので最終手段として取っておいたのだが、ここは仕方ないだろう。レベッカ先輩はともかく、ロッカーの中で抱き合っている姿をオリヴィア王女に見られてしまっ

色々と問題になっていただろうからな。

やむなしというやつだ。

「えっと……バレなかったの？」

「ああ。幻影魔術を使って二人にはロッカーから猫が出て来るように見せかけた」

「え……それって結構難しい魔術よね？」

「そうだな。上級魔術だが、限りなく聖級に近いだろう」

「本当にあんたって何者よ……」

軽く制服を叩くとマリアはしっかりと背筋を伸ばした。

「うん。学院で会うのはまずいわね。これは勉強になったわ」

「しかし、どうするんだ？」

「私のうちに行くわ」

「……いいのか？」

そう尋ねると、マリアは俺から少しだけ視線を逸らした。

「ま、まあ……背に腹は変えられないってやつよ！　今更引けないし……！……」

ということで俺たちはオリヴィア王女とレベッカ先輩に見つからないように学院を出ていくと、ブラッドリイ家へ向かうのだった。

「うん。今はお父様もお母様もないみたいね」

「一応、挨拶しておきたいのだが。特に母上には会ったことがないからな」

「べ、別にいいわよ……っ！　ともかく行くわよ」
「ああ」

早速到着したブラッドリイ家だが、両親に見つかると色々とまずいとの話なのでマリアが先導する背中の後が続く。俺としては挨拶をしておきたかったのだが、まあ……いつか機会もあるだろう。

「マリア様？　お帰りになったのですか？」

後ろから声が聞こえて来たので振り返ると、そこにはメイド服を来た女性が立っていた。銀色の髪を後ろでまとめ、顔立ちは可愛いというよりは美人な人だった。それに、年齢は若そうだった。二十代前半くらいだろうか……？

「フェリス……」

マリアは苦虫を噛み潰したような顔で彼女の名前を呟いた。

「本日はお帰りの予定でしたか？」

「いや……そうじゃないけど」

そしてメイドの方は俺の顔をじっと見ると、挨拶をしてきた。

「申し遅れました。メイドのフェリス＝ティリーと申します」

「ご丁寧にありがとうございます、ティリーさん。自分はレイ＝ホワイトと言います」

「あら？　確かレベツカ様の……　っとこれは余計なことでした。も

しかして、マリア様のボーイフレンドですか？」

「ちっ！ 違うから！ 友達よ、友達！ ほらレイ、行くわよ！！」
「あ、ああ……」

強引に手を引っ張られたので、俺はマリアについていくようにして彼女の自室へと向かうのだった。その際、メイドのティリーさんがニヤリと笑っていたのは気のせいだったのだろうか……。

「フェリスはその、昔から私たちの世話をしてくれる人なの」

「そうなのか。それにしては、かなり若いが」

「……あれで四十手前よ」

「えっ……完全に二十代前半にしか見えないが」

二人でそんな話をしていると扉からノックをする音が聞こえて来た。
た。

「はあ……来ると思った。入っていいわよ」

「失礼します」

ペコリと頭を下げると、持って来てくれたのは紅茶と茶菓子だった。紅茶のとてもいい香りが鼻腔をくすぐる。茶菓子はパンケーキのようで、こちらもとても美味しそうだった。

「それでは、私は失礼します。あ。思い出しましたが、私はちょうど出かける用事がありまして。他のメイドもこの部屋にはしばらく近づかないと思います」

「どういう意味よ」

「いえ。私の予定をお伝えただけです。それでは、失礼します」

手早く紅茶と茶菓子を置くと去っていく。マリアはどうしてか、

不満そうな顔をしていた。

「はぁ……絶対に勘違いしてる」

「何をだ？」

「レイは気にしなくていいのよ」

「……分かった」

釈然としないが、マリアがそこまで言うのならば追及するべきではないのだろう。

そしてついに、リリーへと装いを変える時がやって来た。

「私は後ろを見てるから、その……着替えていいわよ」

「分かった」

紙袋に入っている制服を取り出すと、早速着替えていく。もちろん、今の俺の体格には合っていないので変態でリリー用メタモルフォーゼの体に変化する。身長に変化はないが、骨格に丸みが生まれ全体的に細くなる。

最後に茶色のロングヘアをかぶるとしっかりと固定する。

準備もできたところでマリアに話しかける。

「マリアさん」

来るつと振り返る。

「ああ……！ やっぱり、お姉様はお姉様なんだわ！！」

感極まったのか MARIA がギュツと俺の体に抱きついて来る。俺は拒絶することなく、MARIA の体を受け止める。

「お姉様……今はこの至福の時間を享受させてください……」

「ええ。もちろんですよ」

いわゆるロールプレイのようなものだが、MARIA はそれでもいいと了承してくれた。むしろ、二度とリリーに会えない方が苦しいと言っていた。そして、しばらくの間 MARIA を抱きしめっているとドアがゆっくりと開いた。

「あ……」

「え？」

どうやらティリーさんは覗き見していたようで、完全に MARIA と目が合っているようだった。

「えっと。その…… MARIA 様の性癖に文句を言つつもりはないですよ？ 高度なご趣味を持っている貴族の方がいるのは知っています。しかしこれは……なかなか……すみません。少し、整理させていただきます」

「ち、違っのよおおおおおおおっ！！！」

後日譚。

今後はもっと人目のつかない場所で会おうと言っ話になった。場所が決まっていないが、MARIA が探しておくらしい。

また、ティリーさんにはなんとか誤解を解くことができたようだ

が、マリアとしては色々と思うところがあるのかしばらく俺と会うと顔を真っ赤にして逃げ去ってしまう始末。

ステラから聞いたが、夜な夜な唸っている声が聞こえるとか……。

第347話 世界七大魔術師

世界七大魔術師。

数多く存在する魔術師の中でも頂点の存在。ただし、七大魔術師とは魔術協会に所属している魔術師から選ばれる存在である。すでに魔術協会は世界各国に存在しているが、現時点で七大魔術師は全員がアーノルド王国出身である。

そのことが意味しているのはアーノルド王国が依然として魔術大国として君臨しているということだ。

過去には他の国の七大魔術師も存在していたが、アーノルド王国がもつとも七大魔術師を輩出していると言っても過言ではない。

氷剣の魔術師。
灼熱の魔術師。
幻惑の魔術師。
絶刀の魔術師。
虚構の魔術師。
比翼の魔術師。
燐煌の魔術師。

現在登録されている七人の魔術師には二つ名がある。だがもちろん、意味しているのはアトリビュートでしかない。その本質を知る

者はほとんどいない。

世界の頂点に君臨する魔術師たち。

世界中にいる魔術師たちはその高みを目指して、研鑽を重ねる。努力に努力を続け、至高の領域に至ろうと幼い頃から夢を見る。

が、立ちほだかるのは圧倒的な才能の壁である。

努力ではどうしようもない領域。そして、ただの天才では決してたどり着くことのできない領域。

それこそが 七大魔術師。

氷剣、灼熱、幻惑、絶刀の四人は王国で生活を送っているが、残りの三人は違う。虚構であるリーゼは研究者だが、フラツと旅に出ることが多い。

比翼のフランに至っては王国に籍を置いているが、王国にいること自体が珍しい。世界中を飛び回って彼女は旅をしている。彼女曰く、死ぬまでに世界を全て見るのが夢だとか。

そして、燐煌の魔術師 マリウスⅡバセット。

彼もまた現在は王国にはいない。

もともとはアーノルド魔術学院の教師であり、リディアたちの恩師でもある。マリウスの人気は未だに伝説として語り継がれていて、彼の教えを受けた生徒の多くは魔術師として大成している。

決して魔術が卓越しているからといって、魔術を教えることが上手いとは限らない。むしろ、七大魔術師ほどになる存在はあまりの規格外の才能故に教えることには向いていない。

その中で例外がマリウスだった。

誰でも理解できる魔術理論に実践。彼が辞めると言った時は、当時のアーノルド魔術学院の学院長は土下座までしたという噂もあるが……そんなものでは済まなかった。

一生困ることのない金を積まれ、地位と名誉すらも約束されると言われていたのだ。マリウスの存在はそれほどまでに学院にとって欠かせないものだった。もとは下流貴族のなかで最底辺の出身だったマリウス。

辛酸を舐めさせられることが日常だった。しかし、マリウスには圧倒的な才能があった。そして当時の史上最年少の二十歳で七大魔術師に到達。その後はリディアに塗り替えられることになるが、彼が規格外の天才であることに変わりはない。

「大丈夫ですか？」

「うん！　ありがとう、お兄さん！」

走り回っていた子どもが後ろからぶつかって転んでしまう前に、魔術で子どもの体を静止させる。ちょうど一ヶ月前は墓参りをするためにアーノルド王国に一時的に帰国していたが、今はまた世界に旅立っている。

彼はフランとは違い旅をしているわけではない。

マリウスは慈善活動として貧しい国に赴いていた。貧困に困っている村に井戸を引く、または金銭的な寄付。教会で行われている炊き出しなどを先導したりなど、彼は様々な活動をしていた。

「お兄さん。これってなんて読むの？」

小さな少女がトコトコと歩いて本を持って来る。文字を読める、というのはアーノルド王国では至極当たり前のことである。識字率は8割を超えているほどには、教育というものが浸透しているからだ。

だが、まだまだ世界的には浸透していないのが事実。文字が読めることで仕事にありつけることがあるほどには、識字率は低いところもある。

「世界には様々な魔術が存在します。まず魔術とは、プリママテリア第一質料をコード理論によって変換する技術のことを指します。かな？」

「凄い凄い！」

女の子はぴょんぴょんと飛び跳ねる。

青空教室という名前をつけてこの国では貧しい子どもにボランティアで教育をしている。そこにちょうどやって来たマリウスは子どもたちに大人気だった。そもそも、魔術を使える人間がほとんどいない小さな国。

そこで七大魔術師がやって来るのは、子どもだけではなく大人にとっても驚愕のことだった。

「ねね。お兄さんは魔術師なんですよ？」

「はい。そうですよ」

「どんな魔術が使えるの？」

「そうですね……分かりやすいものだ」と

スツと手をかざす。

するとマリウスたちの目の前には氷柱が出現したと思いきや、形を変えて様々な動物に変化していく。さらには、それが水になってからいきなり蒸発して水蒸気になる。蒸気を操って螺旋を描くように天に登っていく。

と、上を見ていると落雷のようなものが軽く落ちて来たが……その中央には先ほどまで存在しなかった一輪の花がいつの間にか存在していた。

マリウスはそれを拾うと、女の子の髪の毛に花を差す。

「はい。どうぞ」

にこりと笑みを浮かべる。マリウスは中性的な容姿も相まって、笑うと女性のように見える。

「す………凄い！ お兄さんは凄い魔術師なの……！」

女の子はマリウスに尋ねる。もちろん、彼が世界の頂点に君臨する七大魔術師とは知らない。先ほど見た魔術はマリウスにとっては些事に過ぎないが、並の魔術師ではできないことだ。

「いえ。私はそれほどのものではないですよ」

「そうなの？」

「ええ。世界は広いですから」

「へえ……私にも使えるかな？」

「そうですね。しっかりと努力すれば、きっと大丈夫ですよ」

「うん！」

笑みを浮かべる女の子の頭を優しく撫でるとマリウスは他の子どもにも色々なことを教える。魔術だけではなく、文字や算術。歴史の話や経済の話まで彼の教育には子どもだけではなく、近くにいた大人も真剣に耳を貸していた。

「あ……あの。すみません、みすばらしい宿で……」

「いえ。雨をしのげる屋根があるだけで十分です。それにこの村はとてもいい場所です。ご飯もとても美味しかったです」

「あ、ありがとうございます！」

夜になってマリウスは宿に泊まっていた。滅多に観光客は来ない国ではあるが、宿屋は存在している。そこで受付をしていた女性に謝罪をされるが、マリウスは全く気にしていなかった。

彼はもちろん、王国での暮らしが長いので豊かな暮らしの快適さを知っている。しかし彼はそれを全てだとは思っていなかった。

人が笑い合える場所があつて、心が豊かならばそれでいいと理解しているからだ。

「それでは、何かあつたらおっしゃってください」

「はい。わざわざありがとうございます」

「いえ……！」

明らかに女性は照れている様子だった。かなりの美形の男性と話

をするだけで緊張してしまうのは仕方ないだろう。女性がマリウスの部屋から去って行くと、外からは「きゃー！」という女性の声が聞こえて来る。

彼を一目見ようと思っっている女性がどうやらかなりいるようだ。

「……さて」

マリウスはただ慈善活動だけのために世界中を巡っている訳ではない。彼にはある仮説があった。

「ここでもないようですな」

極東戦役。

アーカーシャ
真理世界に強制的に接続しようとした大規模な戦争。マリウスは途中参戦し、そこで七賢人^{セブンセイジ}の一人を屠った。

だが彼は思っていた。まだあの戦争の真の目的は終わっていない。七賢人^{セブンセイジ}ではなく、別に極東戦役に介入していた存在があることを彼は突き止めた。

そこで世界各国を旅する中で聞く名前があった。

ユーゼニクス
優生機関。

魔術真理を追求するために倫理の枷を取り払った集団。優秀な魔術師は破格の待遇で招待される。そこでダークトライアドシステムが存在することをマリウスは知った。

彼もまた、世界を巡る中で優生機関ユージェニクスの刺客と戦ったことがあるからだ。人間の暗黒面を利用して、魔術領域を強制的に暴走させる技術。

優生機関ユージェニクスが生み出したものではあるが、マリウスは腑に落ちないことがあった。そもそもどうして、人間の魔術領域エンケラムを研究しているのか。記憶痕跡エンケラムのことも理解している。

が、真理世界アーカシヤの接続に必要なのは人間の魂のはずだ。どうして研究テーマを人間の脳エンケラムにしているのか。それがいまだにわからなかった。

「そろそろ寝ますか」

床に就く。

マリウスがその真相にたどり着くのはまだ時間がかかりそうだった。

第348話 最愛の主従関係

リディア「エインスワース。

極東戦役が終わってから洋館に引きこもるような形で研究者として活動が続いていた。発表する論文はどれも革新的な内容が多く、彼女の動向を常に窺っている人間は多い。

しかし、彼女にとって研究はあくまで二次的なものに過ぎない。

では今のリディアの一番の興味関心は何か。それは。

「リディア様。朝でございます」

「う……うっうん……」

早朝。カーラがリディアの部屋に入ってくると、彼女の体を揺する。もう長い付き合いでカーラはリディアが朝が弱いことは承知している。伊達に毎日起こしてはいないからだ。

「あと三十分……」

「遅刻してしまいます。それに、レイ様のお姿を見るのでしょうか？」

「はっ！ そうだった！」

ガバツと布団を退けるようにして起床するリディア。

そう。彼女にとって、一番の関心は　レイのことだった。

オーバーヒート
魔術領域暴走はほぼ完治し、自分の魔術領域を使ってレイの魔術
領域暴走を抑え込んでいたリディアの役目はもう必要はなかった。

時間的な要因もあるが、魔術領域が自由に使えることで治癒魔術の通りも良くなり、リディアは杖があれば立てるようになっていた。車椅子を使うこともまだあるが、今はリハビリも兼ねて歩くことが多くなった。

「うん！ やっぱりカーラの飯は美味しいな！」
「ありがとうございます」

二人での生活ももう四年近く経過する。初めは距離感のあった二人だが、今となっては本当の姉妹のように仲が良い。もともと、リディアが車椅子を必要としなくなる時点でカーラの役目は終わろうとしていた。

彼女の家系は王国の諜報機関に所属していて、そちらに帰ることも考えていた。だが、カーラは自ら志願してリディアのもとに残ることになったのだ。

「よし。今日も行くか」
「はい。お供いたします」

屋敷を出て行く。

二人が向かうのはアーノルド魔術学院。

リディアは今年度より教員として学院で働くようになっていた。まだ新任ということでクラスの担任にはなっていない。主に魔術の授業、その中でも一年生の実践魔術を教えている。

加えて、リディアのそばにはずっとカーラがついている。杖があれば歩くことができるとはいえ、まだサポートは必要だからだ。

「ふむ……今日もレイとステラは元気だな」

「そうですね」

リディアたちは学院に到着すると、朝からランニングをしているホワイト兄妹を眺める。すでにこれは日課になっている。そもそも、普通に学院に来るのなら早朝に起きる必要はないのだが、レイとステラが心配ということで早く起きているのだ。

もっとも心配というレベルで済ませて良いのか……？ とカーラは思っている。特にレイに対する執着は異常と言っても過言ではない気がしているカーラ。

逐一、レイの様子を尋ねられることはもはや日課である。

学院での様子はずっとカーラを通して話を聞いていたが、今となつては自分の目で直接見ることができる。流石に少しは緩和するだろうと思っていたが、そんなことはなかった。

「リディア様。そろそろ授業の準備をしなくては」

「待て……今、レイが何かを話している。マリア……と聞こえるな。もしかして、マリア＝ブラッドリイのことか？」

「ブラッドリイ家の次女であるマリア様は確か、レイ様とても仲が良いですね。他の令嬢とは違って、不思議な仲の良さがあると思います」

「だよな……やはり警戒すべきは、マリア＝ブラッドリイなのか？ しかし、他の三大貴族も……特にレベッカ＝ブラッドリイはかな

りの手練れだ。その中に、オリヴィアも入って来ると……むむむ……」

無表情を貫く。

が、内心では呆れ果てているカーラだった。

レイがモテることは彼女も知っている。容姿も悪くないし、筋トレを愛しているということとで体つきも素晴らしい。それに天然な部分や察しの悪いところもあるが、彼の性格は真っ直ぐで好感の持てるもの。

複数の女性からアプローチされるのも理解できる話である。

理解できないのは、姑気取りで厳選をしているリディアの言動である。いや、厳選といえば理屈は通っているように思えるが、実際はただの嫉妬なのでは……？　と知っているがそんなことは口にしたくない。

彼女は弁えているし、余計なことに首を突っ込みたくないのだ。

間違いなくこれから先に起こるのは修羅場。それに加えて、三大貴族の令嬢たちには婚約が待っている。レベッカはまだ表ではエヴァン・ベルンシュタインと婚約していることになっているが、あくまで形式的なもの。

レイの争奪戦がすでに始まっていることは、誰よりも客観的に見ることのできるカーラが理解していることである。

そこでリディアのサポートに全力を注いでもいいのだが、面倒なことになりそうなので最近はさらっと流すことが多い。

「リディア様。流石に移動しましょう」

「うむ。仕方ないな」

ついに移動してくれるリディア。歩けるようになったとはいえ、まだ杖をつきながらの歩行速度は遅い。あまり長居しては、授業に遅れてしまう。

リディア本人は「授業なんて少しくらい遅れていいだろう」というのだが、カーラは「絶対にダメです」と怖いぐらいの無表情で詰め寄ってきたのでリディアは彼女のいうことを聞いている。

今となつては、リディアの手綱を握っているのはカーラといっても過言ではないだろう。

「美味い！ やっぱ、昼飯はカーラの弁当に限るな！」

「ありがとうございます」

昼食。

本当はレイと一緒に食事を取りたいと駄々をこねていたリディアだが、レイの学園生活を邪魔してはいけないと自覚はあるようで流石にそこまではしない。

閑散としている屋上で二人は食事を取っていた。

リディアはいつもとても嬉しそうに食事を取る。すでに何年も経過して、カーラの食事の味など覚え切っているのにいつも言葉にす

る。カーラはそれがとても嬉しかった。

面倒なところもあるが、やはり自分の主人はリディアしかない
と思っている。

「ふう。今日も終わったな」

「はい。帰りましょうか」

「レイは確か今日部活だよな？」

「はい。環境調査部の方です」

「なら帰っても大丈夫か。園芸部じゃないなら、いいだろう」

「ええ」

園芸部の部活の時はリディアは軽く監視をしている。というよりも、最近は部活の顧問になろうとアビーに掛け合っているのだ。流石にレイのためだけという理由を許すアビーではないので、却下されているのだが。

早朝は馬車を使って学院に行くのだが、帰り道はリハビリも兼ねて歩いて帰ることが多い。

黄昏の光に包まれながら二人は歩みを進める。

リディアは杖について歩いているので、かなりゆっくりなペースだ。カーラはぴったりとリディアの横に寄り添っている。前に出ることも、後ろに下がることもなくただ横にいる。

「カーラ」

「どうかいたしましたか？」

突然、リディアがその場に立ち止まる。足を痛めたのか、と思っ

て鞆の中にある痛み止めを取り出そうとしたがそうではなかった。

「改めて、ありがとう。ずっと私の側にいてくれて」

感謝の言葉を言われるのは初めてではない。だがどうしてだろうか。今のリディアの言葉は予想以上にカーラの心に響くものだった。

「私はずっと甘えてばかりだな。カーラに与えるものなんて給料くらのものだ」

「いえ……そんなことは。それに、お給料も普通の倍以上はいただいているので……」

「まあ、私にはこれくらいしかできなからな。済まないな」

「そつ、そんなことは……」

給料しか与えてもらっていない、なんて思っていなかった。カーラは幼少期からずっと諜報機関の中枢を担えるような人材として教育されてきた。いわば、スパイ教育のようなものである。過酷な幼少期だった。

今まで笑うことも、泣くこともなく、ただ感情を殺して生きてきた。

そんな中でリディアがメイドを探しているという話が降りてきた。かの氷剣のメイドならば、ということで組織からの許可が下りた。初めはただ、氷剣であるリディアに興味があるだけだった。

史上最高の天才魔術師。

極東戦役での戦果は一般人よりも耳に入っている。

どんな傑物と会うことになるのか……と思っていたが、リディアはカーラが思っていたよりも良い意味で普通だった。

よく笑うし、不機嫌にもなる。朝は弱いし、自分では家事もロクにできない。魔術師としては優秀すぎるが、それだけ。おおよそ、普通の人間以下の生活しかできない。

放っておけばゴミ屋敷になっているのは間違いないだろう。

しかし、リディアの世話をたくさん会話をする些細な日常はカーラにとって幸せだった。何も与えられていないわけではない。

この日常こそが彼女にとっての宝物だからだ。

「わ……私は、その。リディア様にたくさんものを与えてもらっています……」

「そうなのか？」

「はい。だから、そんなことをおっしゃらないでください。ずっとお側に居させて下さい」

カーラからの言葉を聞いて、リディアはいつものように快活な笑みを浮かべる。

「そうだな。私はもう、カーラがいないとダメだからな」

「はい。朝も起きれませんし、お食事も作れない。掃除はもつての外ですしね」

「う……それはそうだが……」

くすりと笑い声を漏らす。口元に手を持っていき、カーラは微笑んでいた。きつと心から笑ったのは今が初めてなのかもしれない。

リディアは苦笑いを浮かべながら、頬を掻いていた。

「ふふ。だから私が側にいないとダメですね？」

「ああ。その通りだ」

そして二人は黄昏の光に包まれるようにして帰路へとつくのだった。

第348話 最愛の主従関係（後書き）

掘り下げたいキャラが多すぎて……いつかカーラの話もしっかりとやりたいですねー。

ご要望があれば番外編などで大人の話をやろうと思います。お気軽にご意見ください！（リディアがいい、カーラがいい、アビーやキヤロルだけではなくリーゼがいいなど）

第349話 三校合同演習

「はいはい！ 今日ちょっと新しいことについて説明するよー
！！」

キャロルがいつものように教壇の前で甲高い声を上げている。今となつてはもう慣れてしまったが、改めて見るとよく教師が務まっているものだ。

それにしても新しいこと、とはなんだろうか？

確かそろそろ一年生はカフカの森での演習、そして二年生もまた演習があるはずだが……そのことに関してかもしれない。

「実は、今年は三校合同演習をすることが決定しましたっ！ キャ
ピッ
」

なぜか顔の横でピースを決めているキャロルだが、今はそんなことはどうでもいい。今、言った三校合同演習とは……文字通りに受け取るならば、うちの学院だけではなく他の二つの学院も含めて今年は演習をするということだろう。

「アーノルド魔術学院、ディオム魔術学院、メルクロス魔術学院。
マギクス・ウォー
去年の大規模魔術戦でも三校が混ざるような形で大会があったけど、
今年は演習にも取り入れようって話になったんだよー」

と、キャロルがどうしてそうなったのかという理由を説明してく

れる。確かに、去年の大規模魔術戦は記憶に新しい。今まではそれ
その学院が交わることなどなかった。

互いに切磋琢磨しているが、どちらかといえばライバルに近い関係だ。敵対意識を燃やしている生徒もいると聞く。

もしかすると、新しい風を取り込みたいという意図もあるのかもしれない。

「三校合同演習は来週の月曜日から水曜日までの三日間！ お泊まりになるから準備はしっかりとね。そ・れ・と……！ 今回は二年生だけの演習になるからね！ 他の学院の生徒とも仲良くするように……！ キャピ」

相変わらず途中で挟む謎の言動をどうにかして欲しいのだが……
ともかく、三校合同演習はさっそく来週から開始されるようだった。

果たしてどうなるのだろうか。

「ふっ……ふっ……！」

「はっ……はっ……！」

「ふん！ ふん！」

俺、エヴィ、アルバートの三人は筋トレに励んでいた。今となつては、俺たちの部屋にアルバートもやってきて三人で筋トレをすることは当たり前だ。学内にあるジムを利用することもあるが、実はリビングのスペースを思い切って筋トレ専用に変えてみたのだ。

俺たちトレーニーにとって筋トレができる場所はあればあるほど

いいからな。

そして、上半身裸で三人で汗を流す。今となつてはアルバートの筋肉もかなりのものに仕上がってきている。一年前とは比べ物にならない。魔術の方もかなり伸びてきており、今となつては学内でも屈指の魔術師と言つても過言ではないだろう。

「ふう。終わったな」

「ああ」

「今日もいい筋トレだったぜ！」

俺たちは筋トレ後、タンパク質をすぐに摂取する。三人でクールダウンをしながら、来週月曜日に行われる三校合同演習について話をするのだった。

「三校合同演習だが、二人はどう思う？」

俺が話題を振ってみる。すると先にエヴィが答える。

「うーん。どうなんだろうなあ……去年の大規模魔術戦から色々^{マギクス・ウォー}と風向きは変わっているような気もするけど、大胆なことするよなーとは思うぜ？　今までは他の学院とは敵対しているような感じがあったし」

エヴィの言っていることは一理ある。

そもそも毎年夏に開催されている魔術剣士競技大会の影響もあつて、三校はライバル意識が強い。といつても俺は詳しくは知らないのだが、そのことはある種当然のことであり入学する時にもそれは意識するのだとか。

そして、次はアルバートが口を開いた。

「最近、貴族の方でも風向きが変わってきていてな。今までは血統主義がほとんどだったが、他の主張をする貴族も増えてきた。才能だけではなくその他の要因もまた必要不可欠だと。だからこそ、血に固執し過ぎるのは良くないのではないか、とな」

「そうなのか？」

マギクス・ウォー

「ああ。去年の大規模魔術戦も三大貴族の助力が大きいと聞く。もとも三大貴族はスポンサーのような側面があるからな。今となつては、昔と比べるとかなり柔軟になった印象だが……今回の三校合同演習もその一環かもしれない」

「なるほど……」

三大貴族の意向も汲まれている、ということか。それぞれの当主にも考えがあつての今回の合同演習が実行されることになった。ただ俺は一点だけ気になることがあつた。

「アルバート。ホスキンスの件は関係ないのか？」

「ああ。その件だが、ずっと探っていたんだが一つ噂があつてな」

「それは？」

アルバートは一息置くとその噂について話をしてくれた。

「ホスキンス家は何か裏の組織と繋がっているというものだ」

「裏の組織？」

「詳しい名前は知らないが、そこからのサポートによって一大勢力になったかもしれないな。例えば、ホスキンス家はそこまで突出していなかった。急な成長には何かあるのかもな」

「ふむ……」

流石に演習に大きく介入してくることはないだろうが、去年の件もある。それにきつと、アルバートが言っている組織とは優生機関ユースエニクスの可能性がある。

去年の演習ではグレイ教諭が干渉してきたが、今年もどうなるのか分からない。まあ、流石にアビーさんが何の対策もしないわけではないが……一応、気をつけておくに越したことはないだろう。

そうして俺たちは三校合同演習を迎えることになるのだった。

第350話 久しぶりの再会

三校合同演習の日がついにやってきた。集合場所はディオム魔術学院の演習場である。三大魔術学院の中でも最も魔術戦に力を入れているディオム魔術学院は、軍事演習に使用する巨大な演習場を持っているからだ。

もともと、俺はディオム魔術学院に行くのは初めてではない。去年はアリアーヌに会うために女装姿で乗り込んだからだが……まあ、そのことは極秘事項であるのだが。

俺たちはいつものメンバーで学院へと向かう。

「うう……緊張するよお……」

エリサはずっと怯えているような声を出していた。曰く、三校合同演習なんて大それたものに緊張しているのだとか。確かに、エリサは身体能力は高くない。しかし、彼女には魔術の知識がある。最近は魔術の精度も上がってきているので、それほど緊張しなくてもいいと思うのだが……。

「エリサ。大丈夫だ」

「レイくん……?」

「君には膨大な魔術の知識がある。それに最近、魔術もうまく使えるだろう? きつと役に立つ時が来る。去年のカフカの森の演習の時のようにな」

「うう……うん。ありがとう、レイくん」

微かに笑みを浮かべる。決してお世辞で言っているのではなく、俺は心からそう思っている。エリサの緊張を少しでも緩和できるのなら本当によかった。

「ふん！ 私は緊張なんてしてないけどね！」

と、声をあげるのはクラリスだった。しかし、ツインテールは微かに震えている。これは緊張している時の兆候なのでクラリスも口ではそう言っても、思うところがあるのだろう。

「クラリス。大丈夫だ。今まで環境調査部で培ったものを思い出せば、きつと無事に演習を終えることができる」

「そ……そう？ いや、別に緊張はしてないけど！ そ、そう思う？」

「ああ。男子たちほどではないが、しっかりとトレーニングをしているんじゃないか。それにステラのトレーニングにも付き合っているとか」

「あ……まあ、ステラはそうね。うん。あれを思い出すとなんだかできるような気がしてきたわ……！」

ステラと一緒に極秘のトレーニングをしているらしいクラリス。実はステラに話を聞いているのだが、「秘密だよ、お兄ちゃん！」と言って教えてくれない。でもだからこそ、クラリスも確実に成長しているのだろうと思う。

「ねね。レイ」

アメリカが隣からツンツンと肩を触ってくるので、顔をそちらに向ける。

「私にはその、何かないのかなあ、とか？」

「アメリカは大丈夫だろう」

「えっと……！ 実は緊張しているような？」

緊張している様子は全く見えない。むしろ、何かを心待ちにしているようだった。ともかく、アメリカにも声をかけておくべきか。

「そうだな。アメリカは去年の魔術剣士競技大会から成長が著しい。マギクス・シュバリエ

二度のエインズワース式ブートキャンプをこなしたことで、身体能力は抜群になった。もはや、自信を持たない要素がないだろう」

「えへへ……そうかな？」

「ああ」

そう二人で話していると、こそこそと話しているのが聞こえてくる。

「結構露骨よね、アメリカ」

「しっ……クラリスちゃん！ 乙女の戦いなんだよ！」

そう話しているクラリスとエリサ。

「あはは。いつも通りだな」

「そうだな。まあレイのいいところでもあるが」

エヴィとアルバートも何か話をしているようだった。

そしてたどり着いたディオム魔術学院。すでに生徒たちはかなり揃っているようで、賑わっている様子だった。今回、三校合同演習に参加するのは二年生だけである。

しかし、三校も揃うということで人数は百人近くなってくる。

「あ！ みんな、お久しぶりですわ！！」

艶やかなロールヘアをしている一人の女子生徒。女性にしてはしつかりとした肉体を持っている彼女は　　アリアーヌ「オルグレン」。

会うのは久しぶりだが、どうやら元気そうだった。

「アリアーヌ。久しぶりだな」

「ええ。レイもお元気でしたの？」

「もちろんだ」

「ふふ。そうでしたか」

口元に手を持っていき笑うアリアーヌ。なんだか、初めて会った時よりも和らいかい雰囲気になったような気がする。

「アリアーヌ。久しぶり……でもないか」

「アメリカ。そうですね。春休みは一緒にお買い物に行ったりもしましたので」

次はアメリカとアリアーヌが会話をする。今までは距離感のあった二人だが、話を聞くに今となつては昔のように仲がいいとか。俺としては春休みは筋トレに勤しんでいたので、初めて聞く話だった。

「それにしても、今回の三校合同演習ですが思い切ったことをしますわね」

「ん？ それは誰のことを言っているんだ？」

「おそらくはアビー」ガートネット学院長なのでしょうが……今は貴族間で派閥争いもありますし、色々と面倒なんですわ」
「そうなのか……」

その時思い出すのはホスキンズの話だった。

曰く、裏の組織とつながっていると。アメリカにはすでに話を聞いているが、あくまで噂の域を出ないと言っていた。それに、ホスキンズ家の派閥をよく思っていない貴族が流しているデマの可能性もあると。

今回の三校合同演習、無事に終わってくれたらいいのだが……。

第351話 三校合同演習、概要

「では、まず初めに今回の合同演習の概要を説明する」

早速始まるガイダンス。俺たち二年生は黙って教員の話聞くのだが、何故だか俺に対してかなり視線が集まっているような気がした。

また、今回のガイダンスの説明をしているのはアビーさんだった。なんでもこの三校合同演習を立案したのは彼女だとか。革新的なことをするのに驚きはないが、去年のこともある。

去年はグレイ元教諭が裏で暗躍していたこともあった。そのことを生徒側で知っているのは俺を含めてごく少数だ。その件もあるのか、今回は教員の数かなり多い。それによく見ると、教員ではない人間もこの中には混ざっているようだ。

おそらくは軍人。アビーさんの伝手で呼んだのだろう。

「今回の演習。基本的には一年生の時と同じ、サバイバル形式になっている。しかし、同じことばかりではない。今回の演習では三校合同演習ということで、基本的には他の学院の生徒と組んでもらうことになる」

説明を聞くに演習内容は去年から大きな変更はない。ただし、四人一組でのパーティは基本的には別の学院の生徒と同じになるようだ。

新しい出会いに心が躍るのもあるが、やはり俺はどこか気になる点があった……。

「君たちには三日間、ジャングルを抜けた先にある目的地を目指してもらおう。もちろん必要なものはすでにこちらで準備はしてある。ただし、去年の森での演習とは異なり今回はジャングル。人の管理はほぼなく、密生した木や草などで覆われている。魔物の種類も多種多様だ。そこは十分、気をつけて欲しい。万が一の時は、魔術で知らせればすぐに駆けつけよう」

今回の演習は森ではなく、ジャングル。違いはあまりなさそうに思えるが、森は基本的に人間による管理がなされている。カフカの森やドグマの森なども、ハンターによる管理下に置かれている。

ただしジャングルはそうではない。今回の演習、かなり過酷なものになりそうだ。それに加えて、今までとは違うパーティーで取り組む必要がある。確か今回の演習で使用するジャングルはそこまですてきなところではないが、新しい人間と一緒に進んでいくとなると……また話は変わってくる。

人間関係というものはかなり重要だ。相手の性格や得意な魔術。それを知った上で立ち回りができるというのに、今回は一から人間関係を構築していく必要がある。

しかもすでにパーティーメンバーは決めてあるという。おそらくは教員間でかなりの議論を交わした上で決めたのだろうが、それを踏まえても今回の演習は一筋縄ではいかないな。

「それでは、パーティーメンバーを発表していく。名前を呼ばれた

ものから、前に出て来てくれ」

そして次々と呼ばれていく生徒の名前。アメリア、エヴィ、アルバート、クラリス。いつものメンバーはそれぞれ別のパーティーになったようだ。エリサの名前はまだ呼ばれていないようだ。

そして最後の方になって俺の名前が呼ばれた。

「……レイ＝ホワイト」

「はい」

軽く声を上げると俺は立ち上がって前の方へと歩みを進める。

その後、俺と同じパーティーメンバーの名前が呼ばれることになったが、それは意外なものだった。

そう。俺と同じパーティーになったのは、アリアーヌとエリサ。加えて、メルクロス魔術学院の男子生徒だった。四人で集まるとまづは自己紹介をする。

「こほん。それでは自己紹介でもしましょうか。あまり時間がないようですしね」

アリアーヌがそう口にするとまずは彼女から自己紹介をしていく。

「知っているかもしれませんが、三大貴族が一人。アリアーヌ＝オルグレンですわ。以後お見知り置きを」

さらっと自身の髪を流しながら自己紹介をするアリアーヌ。今日もいつも通り美しい。その立ち振る舞いは流石の三大貴族といった

ところか。

次はエリサの番だった。

「あ……えっと……エリサ＝グリフィスです！　よろしく願います！」

ペコリを頭を下げる。緊張しているのか、エリサの声は少しだけ震えていた。知り合いである俺がいるとはいえ、アリアーヌとはほぼ初対面に近いし、もう一人の男性生徒は全く知らない。無理もないだろう。

「レイ＝ホワイトだ。よろしく頼む」

簡素な感じで自己紹介を済ませる。そして最後の彼が自己紹介をするのだった。

「僕の名前はザック＝グライムス。気軽にザックと呼んでほしい」

茶色い髪は少しだけウェーブがかかっている。基本的に顔立ちは目立つ方ではないが、話し方とかけている眼鏡から彼は利発そうな印象を受けた。

「よろしく頼む。ザック」

「おお！　君がああのレイ＝ホワイトだね！！」

彼はグイツと俺の近くに寄ってくると、メガネをクイツと持ち上げる。

「あの……？」

「ああ！ 君は去年の大規模魔術戦で素晴らしい戦いを見せただろう？ 僕の専攻分野は内部コードインサイドでね！ 君の魔術には非常に興味があつたんだ！ まず内部コードインサイドを扱うにはそれなりの筋力が必要になってくる。現代魔術には基本的に内部コードインサイドを使って身体強化を使うけど、君の場合は…… まず基本的な筋力があつてこそその身体強化って感じがするね。それこそ、軍人に近い形かな。戦闘データをみても、レイ＝ホワイトくんは何か特殊な訓練をしていたと、僕は分析するけど？」

早口で一気に語っていくザック。なるほど……メルクロス魔術学院は基本的には魔術理論で有名な学院だ。俺が抱いた印象は間違っていないかつたようだ。

しかし、去年のあの戦いからそこまで分析しているのか……。あの程度は抑えていたとはいえ、決勝戦ではかなり本気を出して戦った。見る人間が見れば分かるのだろうが、同い年の人間にそれが分かるとは。

彼はやはりとても聡明なようだ。

「そう……だな。一応、特別な訓練は受けている」

「やつぱり！！ うんうん。やはり僕の分析は間違いないようだね……！」

キラキラと目を輝かせて彼は自分の推論を語ってくる。俺も魔術理論に関しては興味があるので、彼とは話が弾んだ。と、二人で語り合っているとアリアーヌがパンパンと手を叩いた。

「お二人とも。そこまでですわ。まずは、このパーティーでどうやってこの演習をクリアしていくのか。話し合いませんか」

「おっと……僕としたことが。つい熱くなっちゃって。でも、アリーヌ」オルグレンさんにも僕は興味があるんだよ」

「その話はまた後でしましょう」

「それもそうだね。僕としては、この四人パーティーになったことは意外じゃないかな？」

「意外じゃない、ですの？」

「ああ」

ザックはすでにどうしてこの4人になったのか分かっているようだった。いや、俺としてもある程度は分かっているが……自分で言う必要はないようだ。

「まず僕はかなり運動音痴だ。正直言って、去年の演習では苦労したよ。いかにメルクロス魔術学院とはいっても、実技は避けられないからね。学年では一番下といっても過言ではない。そして、エリサ」グリフィスさん。僕は君のことも知っているよ」

「え……ど、どうして私のことを？」

「君、頭が良いだろう？ それに将来は僕と同じ研究者を目指している。違つかい？」

「あ、合ってます……！」

「ふふ。同年代の優秀な人間はすでにデータとして集めているからね」

彼は満足そうに微笑みながら再びクイツと眼鏡を持ち上げる。

ふむ。やはり彼も将来は研究者志望なのか。

「僕が持つデータを照らし合わせれば簡単さ。おそらく、レイ」ホワイト君とアリーヌ」オルグレンさんはこの二年生の中でトップクラスの身体能力を持っている。一方で僕とエリサ」グリフィスは

一番底辺の身体能力。上と下が組むことでバランスをとっているのさ！！」

このパーティーのメンバーを見れば、おおそそうではないかと俺も思っていた。まず、俺とアリアーヌがパーティーになるのは正直あまり考えていなかった。共に身体能力はかなり高いからな。となると、残りのメンバーは体を動かすのが苦手と思うのが至極当然だろう。

「う……やっぱり、そうだね……」

「エリサ。落ち込むことはない。人間には適材適所がある」

「う……うん！　ありがとうレイくん」

エリサは去年はかなり緊張もしていたし、落ち込んでいた。足を引く張るかもしれないとずっと考えていたからだ。しかし、一年が経ってエリサも成長している。身体能力という観点で見れば、まだまだかもしれないが彼女は精神的に大きく成長した。

きつと大丈夫だろう。

「ふふ。僕としては色々な意味で面白いメンバーになったと思うよ。さあ、この演習をもっと華麗に、そして美しくクリアしようじゃないか！！　はっ、はっ、はっ！」

一人で高笑いをあげるザックを見て、アリアーヌがこそっと耳打ちをしてくる。

「どうやらかなり濃いメンツになったようですわね……」

「そうだな。でも、俺も楽しみにしている。それにアリアーヌと会うのは久しぶりで、こうして同じパーティーになれて嬉しく思う」

「も、もう……！　レイはいつも……！！！」

顔を赤くしてバシッと背中を思い切り叩かれる。何か気に触るようなことでもしてしまったのだろうか……。

ともかく、俺たちはこの四人で演習に取り組むことになるのだった。

第351話 三校合同演習、概要（後書き）

すみません……原稿作業が忙しくて、更新が滞ってました……。いや、本当に修羅場で……（今も絶賛そうですが……汗）
今後はもう少し定期的に更新しますので、よろしくお願いします！

第352話 演習開始

ついに始まった三校合同演習。

眩い日差しが照らしつける中、俺たちは話しながら歩みを進めていた。

「さて、まずはどうしたものか」

俺は顎に手を当てて、思考をする。今回の演習において、いろいろとやるべきことは多い。水の確保や、食料の確保。その他、必要なものは適宜回収しておきたい。

また、演習ということもあって楽に突破できることはないと考えている。仲間での連携、それに体調管理なども重要だ。

「レイ。まずはどうしますの？」

アリアーヌが尋ねてくる。

「ともかく、進むしかないだろう。水などは魔術で生成できるとしても、食料の確保が必要になってくる」

「うんうん。僕もその意見には賛成だね」

ザックが俺の意見に同調してくれる。体を動かすことは得意ではないらしいが、彼の頭脳は頼りにしている。

「レイ。君はいま、僕の頭脳を頼りにしていると思っただね？」

「よく分かったな」

「ああ。しかし残念なことに、僕にサバイバルの知識はないっ！足を引っ張らないように、頑張るとするさ！　ははは！！」

高らかに笑う。

いや、笑うところではないと思うのだが、ザックの表情はとても晴れやかなものだった。

「レイくん！　私も頑張るからねっ！！」

「エリサ。そうだな。一緒に頑張ろう」

「うん！　去年はレイくんにたくさんお世話になったけど、今年はそうならないように頑張るよ」

「ああ。その意気だ」

と、つい頭をエリサの頭を撫でてしまう。ステラによくしているので、背丈の似ているエリサに同様のことをしてしまった。

「は、はう……」

「レイ！　何をしているんですの！」

「す、すまない……つい」

「ステラにしている癖が抜けていない。そんなところでしょう？」

「よく分かったな」

ザックといい、アリアーヌといい。どうして俺のことがそこまで分かるのだろうか。

「べ、別に他意はありませんわよっ！」

プイッと顔を背ける。

「ふむ……アリアーヌ嬢。顔が赤くなっているようだ？」

「これは日差しのせいですわっ！」

「いや明らかに照れて」

次の瞬間。アリアーヌはザックの肩を強く叩くのだった。

「ザック。乙女には、触れてはいけない部分がありますの。理解しましたか？」

「あ……ああ！ 僕は聡明だからね！ これ以上は追及しないでおくよ！」

「ええ。ザックはとても聡明ですわよね？」

「ああ！」

何やら問答をして、無事に収まったようだ。

「さて、進むに当たってたが……俺が先頭。後ろにはエリサとザック。後方はアリアーヌがいいだろう。近接戦闘は任せて欲しい」

「ふむ。それが最適解だろうね。去年の大会の実績から見ると、レイとアリアーヌ嬢は非常に近接戦闘が得意だ。おそらくは、学生の中でも屈指と言えるだろう。一方で僕とエリサ嬢は、近接戦闘はかきし。後方からの魔術支援をすればいい。だろう？」

「ああ。流石はザックだ」

「ふふ。それほどでもないさ」

くいつと眼鏡をあげて、得意げそうな顔をするザック。どうやら全員のことはしっかりと頭に入っているようだな。

そうして四人で進んでいく最中、魔物と遭遇したりもしたが、全

員の力を合わせて無事に突破していく。

アリアーヌは去年よりも体のキレが良くなっているし、エリサも成長している。ザックのことはよく知らなかったが、とても綺麗なコード構築をしている。

「ふう。すまないね。僕はコード構築が遅くて」

「いや、非常に綺麗だと思う。誰かに習ったのか？」

「いや独学だよ。魔術のことを考えるあまり、気がつけばクセが抜けてね。魔術は面白い。とってもね」

にこりと微笑むザックは本当に魔術のことが好きらしい。これはきつと、将来は偉大な研究者になるのかもしれないな。

「僕のことよりも、レイ。君だよ！」

「うおっ！」

ザックがグイッと詰め寄ってくる。

「君、本当に一般人オーディナリーなのかい！？」

「まあ……一応そうだが」

「ふむふむ。しかし！ 内部コードインサイドの扱いは、学生の中でも随一。

いやそれ以上だね！ ただ君の場合は、魔術というよりも戦うことに慣れているような？ 去年の大会でも思ったけどね」

「……」

的を射ている。

どう返答しようかと迷っていると、アリアーヌが助け舟を出してくれる。

「ザック。あまり追及するのは良くないですよ」

「おっと……これは失敬。悪い癖だね。すまない、レイ。君もいろいろと事情があるのだろう。ただやはり君は、素晴らしい魔術師だね。そのことだけは、間違いないね！」

「恐縮だ」

「良ければ、少し僕に内部コードインサイドを教えてくれないかい？」

その瞳は俺の過去を探ろうとしているものではない。純粹に、魔術そのものに興味があるという顔だった。

「ああ。構わない」

「あ！ わたくしも聞いておきたいですわ！」

「私も……！」

俺たちは休憩がてら、魔術談義に入る。全員ともに魔術に対する造形が深く、とても有意義な話をする事ができた。

特にザックは魔術に対する知識量がかなり多い。俺もそれなりに詳しい自負はあるのだが、ザックは俺と同等かそれ以上。

そうしてしばらくの間、魔術談義を続けるのであった。

第353話 突然の雪

演習が開始されてから、しばらくの時間が経過した。ジャングルを進んでいく中、俺たちはあり得ないものを目にする。

「……雪？」

空から降り注ぐ雪。

深々と降る雪は、この季節にはそぐわないものだ。

何かこの演習の意図があるものなのか、それとも……。

そろそろ時間的にも日が暮れる時間帯になってくる。雪が降り積もる可能性も出てくる。できるだけ、前に進んでおきたい。

「できるだけ前に進もう」

俺がそういうと、ザックは眼鏡を上げて今の状況を語る。

「うん。僕もその方がいいと思う。この雪、原因は不明だけど、積もる可能性が高い。明日以降は、もしかしたら雪の中で進行しないといけない」

「その通りだ。行こう」

「分かりましたわ！」

「……うんっ！」

全員で進んでいく中、俺はこの異常気象について考えていた。

別段、騒ぐことの程でもない。世界的に見れば、異常気象は稀ではあるが、存在している現象。

王国の春に雪が降るということは聞いたことがないが、今はあまり考えても仕方がないだろう。

一晩休むのなら、川の近くがいい。そしてしばらく進むと、ちょうど川辺にたどり着いた。まだ日も登っているので、ちょうどよかった。

「川辺で今日は休もう」

そう言っただけで全員で荷物を下ろしてから、指示を出していく。ザックとエリサにはベースキャンプを作ってもらい、俺とアリアーヌは川で魚を取ろうという話になった。

「で、魚はどうやって取りますの？」

アリアーヌが訊いているので、俺は段取りと伝える。

「雷系統の魔術は使えるか？」

「ええ。問題なく」

「川に軽く流してくれ。俺がこの串で、飛び出てきた魚を取る」

「串で取る？ 素手ではなく？」

「ああ。まあ、見てもらった方が早い」

アリアーヌが川に手をつけて、魔術を発動する。

スパーク
「雷撃」

瞬間。川で泳いでいた魚たちが、宙へ飛び跳ねる。俺はといえば、飛び出てきたところを的確に串で突き刺していく。

一点を見極める。一つの串で、五匹の魚を確保し、残りの串も同時に使ったので全部で十匹程度の魚を捕まえることができた。

「……」

「どうした？」

アリアー又はぼかんとした表情を浮かべている。

「えっと。レイは達人芸でも見極めていますの？」

「いや。これくらいはできて当たり前だと、師匠に教えられた。戦闘の際にも、一点を見極めるのは重要だからな」

「色々とレイのことを知ってきたつもりでしたが、まだまだ底は深そうですね……」

その後、俺は魚を捌いてから、魚を焼いていく。塩があれば十分に美味しいので、余計な調味料など必要ない。

火を囲むようにして、俺たちは座って魚が焼けるのを待つ。

「それにして、かなりの雪だね。明日には積もっているかもしれない」

ザックの言うとおり、まだ雪は降り続けている。これはやはり、明日は積もっている可能性が高いな。まさか、ジャングルの中での演習で雪が降ることになるとは。

演習の初めは暑いくらいだったが、今は少し寒くなってきている。

「しかし、雪はまずいな」

「そうですの？」

「寒冷地方じゃないから大丈夫だと思うが、低体温症、凍傷の可能性が出てくる。特に汗はできるだけかかないようにしたい。一気に体温を持っていかれて、低体温症になるからな」

「おお！ 流石はレイだね！ 博士だ！！」

「ああ。一応、雪の中での行軍訓練も経験している」

「？ 行軍訓練？」

と、俺はザックに自分の素性を話していないことに気がついた。アリアーヌとエリサは知っているが、彼は何も知らない。余計なことを言ってしまったな。

「もしかしてレイ……」

「なんだ？」

ザックは真剣な表情で俺のことを見つめてくる。

「君、かなりの軍事オタクなのかい？ その物腰といい、まさに軍人そのものじゃないか！」

「……ああ。そうだ」

肯定しておくことにした。まあ、普通に考えて過去に軍人だったことがあるとは思わないか。

アリアーヌとエリサはホッとしたのか、胸を撫で下ろしていた。

「そろそろ焼けたぞ」

全員に焼けた魚を配る。臓物はしっかりと抜いてあるし、食べやすいように大きな骨も取ってある。師匠は昔から、色々とうるさかったからな。

「うん！ うまいね！」

「美味しいですわね……！」

「……うん。とっても美味しい」

全員ともに口にあったようで良かった。

「人間、塩味があれば基本的にはうまいと感じるものだ」

「いやそれでも、レイのサバイバル技術には驚きだよ！ かなり年季の入っている、軍事オタクだね！」

「……まあな」

褒められるのは悪い気分ではないのだが、嘘をついているのでやはり心のどこかで申し訳ない気持ちになる。

ザックは非常に明るくて、好奇心旺盛な性格でこの場のムードを盛り上げてくれている。

「よし。夜は早く寝て、早朝から行動を開始しよう。男女に分かれて寝ることにしよう」

「分かりましたわ」

「うん！」

俺はザックと一緒にテントで横になる。そして、ザックが小さな声でボソリと呟いた。

「レイ。起きているかい？」

「ああ」

「君の過去は詮索しないよ」

「……気がついていたのか？」

どうやら、ザックは敢えてあの場はとぼけてくれていたと言うつことか。

「レイは只者じゃない。卓越した魔術に、圧倒的な身体能力、その他の知識もズバ抜けている。僕とは違って、机上の空論のようなものではなく、実践に裏付けされているのは見ればわかるさ」

互いに背中を向けて、話を続ける。顔を合わせないからこそ、ザックは話してくれているのかもしれない。

「未だにレイのことを一般人と侮っている人間もいるが、君は別次元にいる存在に思える。だから、今に至るまでに想像を絶する経験をしているのは、なんとなく察したよ」
「……」

ザックの指摘は的を射ていた。

極東戦役を経験して今に至る俺は、やはり普通の人生ではないだろう。

「僕は、自分の知っているものが全てではなくて、世界はもっと広いと知っている。だからこそ、何も聞かない。レイ。一緒に、演習を乗り越えよう」

「ああ。そうだな」

しばらくして、ザックの方から寝息が聞こえてきた。

ザックは、雰囲気を崩さないために俺を軍事オタクということにして話を進めていた。

やはり、俺は仲間にもまれてるな。改めてそう思った。

第353話 突然の雪（後書き）

お久しぶりです。御子柴奈々です。

この半年本当にいろいろと忙殺されていたのですが、やっと12月から時間が取れたので更新できました。お待たせしてしまい、申し訳ございません……。

それでは、引き続きよろしく願いいたします！

第354話 白銀の世界

「やはり、積もったか……」

早朝に目が覚め、テントの外に出るとすでにそこには白銀の世界が広がっていた。

「おお。これは、かなり積もったね」

後ろからザックが声をかけてくる。

「そうだな」

「なかなか、進むのが大変そうだ」

「そのことも含めて、全員で話をしよう」

俺はエリサとアリアーヌの寝ているテントに向かい、外から声をかける。

「エリサ。アリアーヌ。起きているか？」

「ううん……一応、起きていますわぁ。ふわぁ」

「エリサはどうした？」

「隣でスヤスヤと寝ていますわ。起こしたら、そちらに向かいますので」

「分かった」

しばらくして、身なりを整えた二人がこちらにやってきた。

「真っ白ですわね」
「うん。すごいね」

二人の反応も、俺たちとほど同じだった。

「まさかの雪になったが、気をつけて進めば問題はない。ただし、今は気温も下がっているし、一番は低体温症に気をつけることだな」
「低体温症か……確か、雪国などでは一番の死因になるとか」

流石は博識のザックだった。俺は、彼の言葉に深く頷く。

「そうだ。やはり問題なのは、汗をかくことだ。低気温で濡れることによって、一気に体温が持っていかれる。凍傷にも注意だが、まずは濡れることを避けよう」

「なるほど。ためになりますわね」
「う、うん！ 気をつける！」

アリアーヌとエリサも理解してくれたようである。

今言ったように、濡れるということが一番避けたい。他にも雪眼炎なども注意したほうがいいが、現在はそれほど雪は降っていない。

低体温症に注意していれば、それほど問題はないだろう。

それにこの先、気温が回復することもあり得る。この場所は雪国ではない。一時的な異常気象なので、まずは地に足をつけてしっかりと進んでいくべきだろう。

そして、俺を先頭にして進み始めた。

「レイ。魔物はどうするんですの？」

「戦闘になったら、俺が先陣を切る」

「分かりましたわ。でも、戦闘をしたら汗が出てしまうのでは？」

「そこは割り切るしかないだろう。俺とアリアー又ならば、逃げることも可能だが今回は仲間もいる。全員で協力し合っていこう」

「ふふ」

アリアー又は微かに笑みをこぼす。

「どうかしたか？」

「いえ。なんだか、昔のことを思い出して」

「昔？」

マギクス・ウォー
「大規模魔術戦の時ですわ」

「ああ。あの時か」

マギクス・ウォー
大規模魔術戦といえば、去年俺とアリアー又とアメリカで優勝した大会である。

あの時も訓練をこなし、全員で協力して勝利を勝ち取った。

でも言われてみれば、似ているのか？

マギクス・ウォー
「大規模魔術戦！　そういえば、あの時の試合も見ていたよ！　アリアー又嬢も素晴らしい活躍を見せていたね！　最後のフラッグを突き立てたところは、僕も痺れたよ！　でも、僕がレイのただならぬ力に気がついたのはあの時だった！　戦闘技術が素人な僕でも、レイの力はすぐに分かった。心技体の全てが揃っている一年生。いやあ、本当のあの時は興奮したものだよ！」

と、後ろからザックが非常に早口でそう言うてくる。

「そうですね。レイが導いてくれたからこそ、です」
「私も見てたけど、すごかったね！」

全員で談笑をしながら、歩を進める。これは訓練的な側面のある試験ではあるが、こうした雰囲気は大切である。

過去、俺が軍人だった頃にはみんなが支えてくれた。

ファールンハイト大佐、フロールさん、デルク、アビーさん、キヤロル、師匠……そして、ハワード。みんなのおかげで、俺は今も前を進むことができています。

なあ、ハワード。

今の俺を見たら、お前は何て言ってくれるんだろうな。きっと、笑ってくれるのかもしれない。いや、もっと別の反応かな？ ともかく、俺は元気でやっているよ。

ふと、空を見上げながらそんなことを思った。

「レイ。空を見上げて、どうかしましたの？」
「いや。なんでもないさ」

しばらく進んでいくと、ちょうど目の前に魔物が現れた。

「あれは、ホワイトウルフか。しかし、妙だな」

視線の先にはホワイトウルフが待っていた。人間を容赦なく咬み殺し、非常に危険な魔物である。

「妙？ どうしてだい」

ザックの質問に対して、俺は答える。

「寒冷地方ならば理解できるが、本来はホワイトウルフは王国には生息してない魔物だ」

「もしかして、人為的に出現している可能性がある？ 召喚魔術の類だろうか？」

「それか物理的に確保してきているかだが、召喚魔術の方が可能性としては高いな」

「教員たちは僕らを試しているってことかな？ 積雪の件も含めて」「そうだいいが……」

脳内によぎる可能性は、ユージェニクス優生機関のことである。去年の演習でも、介入があつたし……可能性としてはゼロじゃない。

しかし、雪を降らせてホワイトウルフをけしかける理由はなんだ？

もしかすれば、考えすぎなのかもしれないが、とりあえずは戦うしかないだろう。

「俺が先頭に行く！ アリアー又は俺のサポートで、ザックとエリサは後方から支援だ！」

『了解！』

事前に打ち合わせた通りに、俺たちは戦いを始める。

ウルフ系の魔物との戦闘では、群れのリーダーを早急に叩くことが重要である。そうすれば、相手の指揮系統は乱れ、一気敵の戦力

は落ちる。

そして俺は先陣を切って加速していく。

第354話 白銀の世界（後書き）

あけましておめでとございます！
今年も何卒、よろしくお願いいたしますー！

第355話 蠢く優生機関

俺は単独でホワイトウルフの群れに突っ込んでいく。

まずはリーダー格のウルフを認識することが重要ではあるが、今の所分らない。相手もかなり狡猾のようで、俺がどれがリーダーか探しているのに気がついていようだ。

次々と襲いかかってくるホワイトウルフたち。

俺は冰剣を使うことなく、内部^{インサイト}コードを使用することで身体強化をする。そして、相手の攻撃を躲してから腹部に致命的な攻撃を入れていく。

『キャン！』

と、鳴き声が聞こえてくるが、他のホワイトウルフたちは果敢に攻めてくる。どうやら、数匹削ったくらいで引くことはなさそうだった。

「アリアーヌ！ ^{ストーム}暴風を頼む！ ザックとエリサもだ！」

「ええ！」

「分かったよ！」

「うん！」

そして、三人の魔術が発動する。暴風によって次々とホワイトウルフたちが吹き飛ばされていく。その中で一匹だけ、逃げようとし

ている個体がいた。

よく見ると、他のホワイトウルフよりも毛並みが良く体も大きい。

「こいつか」

俺は一気に距離を詰めていくと、リーダー格のホワイトウルフが喉元に噛み付いてくるのをサッと躲してから打撃で吹き飛ばした。

静寂。

残りのホワイトウルフたちは統率を失い、綺麗に散開していく。どうやら、戦闘はスムーズに終わることができたようである。

「レイ。流石ですね」

「うん！」

「いやあ、やっぱりレイは凄いね！ 僕の記憶にまた素晴らしい１ページが追加されたよっ！」

三人が近寄ってくる最中、俺は一人で思案していた。

このホワイトウルフたち。微かな第一質料が残っているが、誰かに操られていたような気がする。
プリママテリア

普通に考えるならば、これも演習の一環と考えるのが道理。

ただ、この雪という異常気候に加えて、人為的な魔物の操作。何か、大きな意志が後ろで蠢いているような気がした。

去年はグレイ教諭による干渉があった。今年もまた干渉してくる

のは、流石にアビーさんが許しはしないだろうが……学院側だって万能ではない。

どんな異常事態にも備えておくべきだろう。

いざとなれば氷剣の力を使うことも辞さない。

ザックに見られることになったとしても、構わない。

仲間の命以上に大切なものなどありはしないのだから。

「レイ。どうかしましたの？」

アリアーヌが心配になったのか、声をかけてくる。エリサとザックも俺のことをじっと見つめていた。

ここでいたずらにみんなを心配させても仕方がないだろう。俺は今回の演習はどこかおかしいかもしれない、という点を胸に留めておく。

「いやなんでもない。戦闘も終わった。今のうちに、先に進んでおこう」

そして俺たちは、さらに先へと進んでいくのだった。

「あらま。一瞬で終わったみたいね」

ビアンカ＝ラルフォードは単独でレイの様子を見ていた。厳密に言えば、鳥の視覚を魔術で支配して見ている、というのが正しい。

今回の演習はビアンカたち優生機関ユージェニクスにとって、またとない機会だった。

既に優生機関ユージェニクスの研究はかなり進んでいる。今更、過去のように優秀な学生を確保するという手段は必要ない。

優生機関ユージェニクスにとって最終的に欲しているのは、レイ＝ホワイトに他ならない。

現状、世界で唯一、真理世界アーカシヤに接続できる存在。

レイの兄のしてきたことは、優生機関ユージェニクスたちが引き継いでいたのだ。ただし、目的は異なるが。

「さて、さて。どれほど力が戻っているのか、試して見ましょうかね。あ……でも、取り巻きを狙ってみるのも面白そうね」

ニヤリとビアンカは笑みを浮かべる。

優生機関ユージェニクスの幹部の一人であるビアンカは、既に貴族の中枢にまで入り込んでいる。

確実に魔の手は迫りつつあった。

「うーん。貴族の女が、エルフの女が。どっちにしましょうか」

ビアンカの性格を端的に表すならば、残虐非道。ホスキンス家とも懇意にしているが、全てはただ利用するためである。

ナイトⅡホスキンスに過度に干渉しているのも、全てはステラⅡホワイトとの確執を生み出すためである。

常にあらゆる可能性を考慮して種を蒔いておく。それが、ビアンカの手法である。

「うーん。やっぱり、三大貴族が良いかしらね」

じつとアリアーヌのことを見つめる。

アリアーヌⅡオルグレンのことともまた既に調べはついている。レイを中心にして起きている魔術革命とも言つべき現象に、アリアーヌもまた絡んでいる。

今後の可能性を考えるならば、ここでアリアーヌを消しておくのも悪くはない。

ビアンカはニヤリと笑って、そう決めた。

「さて、まずは準備からね」

ポケットから紙を取り出すと、器用にそれを人の形に整形していく。その姿はまるでアリアーヌのようだった。

ビアンカの魔術は他者を操作するというものである。

もちろん、無条件に発動できる魔術ではなく、しっかりと一定の

条件をクリアしなければならない。

しかし、一度発動してしまえば、かなりの猛威を振るうことになる。今まで、他者を操作することによって幾度となく惨劇を繰り返してきたのだ。

「さあ、て。レイ＝ホワイトはどんな行動に出るのかしら」

優生機関による悪意は確実に迫りつつあった。
ユルゼニクス

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n2501fv/>

【WEB版】氷剣の魔術師が世界を統べる～世界最強の
魔術師である少年は、魔術学院に入学する～

2024年6月27日13時11分発行